電脳コイル 春

川島奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電脳コイル　春

【Ｎコード】
Ｎ８９２８Ｈ

【作者名】
川島奏

【あらすじ】
舞台はアニメ『電脳コイル』で描かれた”あの事件”から半年後の大黒市。そして、金沢市。「春」という季節の中、出会いと別れを経て成長していく子供たちは、また新たなる事件に巻き込まれてゆく。電脳空間というステージで戦う子供たち、ビジネスというステージで戦う大人たち。それぞれの存在意義をかけた争いの先に何があるのか。”あの事件”で残された謎にも迫る、『電脳コイル』の第二幕が始まる――。

#1　メガネからの卒業　part1

春。それは別れの季節であり、出会いの季節でもある。咲き乱れる桜の花びらは、別れの悲しみを再会の喜びと変える道しるべとなり、また、新たな出会いを彩る結晶となる。巡りゆく季節の中で最も美しく、そして最も儚い。それが春。凍てつく寒さを耐え忍び、ゆっくりと地面に姿をあらわした、小さいながらも「生きる」というエネルギーに満ちた新芽を見ると、短いながらも様々な冒険をはらんだこの季節が訪れたことを実感する。心地よい風に願いをのせて、それが叶うことを心で思い描きながら、また新たな一歩を踏み出す。

「夏のあの事件から半年、古い空間やメタバグを見ることはなくなりました。最近では大黒市の子ども達も、メガネで遊ぶことは少なくなっています。」

小此木優子、小学校六年生は、この学校での思い出を丁寧に振り返った。この大黒市に引っ越してきたのは去年の夏休み前。それから約九ヶ月あまりが経とうとしていた。それほど長くはない時間の中で、数えきれないほどの思い出が生まれた。絶対忘れることのできないあの夏。手と手を取り合った友達。それはその記憶のほとんどと言っていいのかもしれない。あの夏の事件は、一回りも二回りも「ヤサコ」を成長させた。人と人との繋がりの中で自分を見つめること。そして相手を理解すること。苦しいけれど何故だか無くしたくない気持ち。あの夏は様々なものを与えてくれた。そしてそれは「ヤサコ」だけにではない。あの事件に関わったすべての人の心に刻まれている。

ヤサコの通う大黒小学校（夏休み明けの九月に一小と三小が合併

して創設されたもので、ヤサコは合併前の大黒第三小に転校してきた。）では明日卒業式が行われる。大黒小は高層ビルの最上階に作られているので、卒業式は近くの市民体育館で行われることになっており、今ちょうどその最後の予行練習が終了したところだった。

「ヤサコ！ねえ、明日はどんな服装にするの？」

ぽんとヤサコの肩をたたいて声をかけてきたのは、この学校での一番の仲良しで、あの事件を共に乗り越えた親友の橋本文恵、通称「フミエ」だ。

「別に普通の格好で行くと思うけど、フミエちゃんはどんな服装にするの？」

ヤサコが問い返すと、フミエは「はあ？」と息をつき、やる気あるの？と言いたげな目をしてまくしたてた。

「あのねえ、私たちは一小の子とは違って服装の自由が許されているのよ！しかも小学校の卒業式なんて、一生に一度のビッグイベントじゃない！そんないつもと同じでいいなんて思っちゃダメよ！私は十二単よ！十二単！アイコちゃんも面白そうとか言って、キャビンアテンダントの制服にするって言ってるんだから！」

ヤサコはぎょっとして思わず「えっ！」と口にした。

「きゃびんあてんだんと～！アイコちゃんが！？それに十二単って、アンタいつの時代の人よ！さすがにそんな格好で来たら先生に怒られるだろうし、そもそも十二単ってどっから手に入れたのよ？」

ヤサコのリアクションを見て、フミエは「あっ、そうか！」と我に返った。

「そういえばヤサコは去年の夏に転校してきたから知らないのよね。あのね、私たちのいた三小ではメガネを使ったいろいろなおもしろ演出をして、卒業式を盛り上げることが決まりのようになっているの。例年はさっきも言ったように豪華な衣装やコスプレを着たり、歌の途中で桜吹雪を飛ばしたり、退場のシーンで花火を打ち上げたりしているわ。もちろんそれはメガネをかけてないと見えないの。厳粛な大人達は式の最中にメガネをかけないからばれる心配はない

し、メガネをかけていた外来者や下級生からは面白かったとか、感動的でしたとか、評判は高いのよ。それを毎年三小の卒業生達が手伝うことになっていて、もはや伝統行事になっているわ！今年は合併で一小の子と一緒に式を行うから、どうしようということになっていたんだけど、三小の伝統を終わらせないって先輩達が奮起しちゃって、例年通りやることになったわ。一小の子の何人かは一緒に参加するって言ってるし、今年は例年以上に面白くなりそうよ。」

フミエはそんな壮大な計画を裏でこそこそ進めていたのか、とヤサコは半ば呆れ、そしてワクワクしてきた。一小の皆は大概制服だけど、三小の皆は思い思いの衣装を身にまとう。服装の自由が許されてるってそういうことかとヤサコは納得した。金沢の小学校は皆制服を着た厳かな卒業式だったから、そんな卒業式を想像すらしていなかった。

「それで、ヤサコはどんな服装にするの？私が決めてあげよっか？いろいろサンプルは用意してあるのよ！」

とフミエはまた一方的にしゃべりだした。

#1　メガネからの卒業　part2

ヤサコはある人のことを思い浮かべた。あの事件以来一度も会っていないけど、あの時最後には繋がり合うことができた天沢勇子のことを。彼女はあの後しばらく入院し、いつの間にか彼女の母親と金沢に行ってしまった。だからさよならも言えなかった。もちろんお互いに連絡を取り合ったりもしていない。それは前の冷えきった関係に戻ったからじゃない。いつまでも誰かに頼って生きていてはいけないと思えたからだ。親しい友達と思い出話に浸るのはいいけれど、「イサコ」の場合は違うと思った。手と手を取り合ったあの瞬間がすべて。あの時に生きていく勇気を分かち合えた。それ以上は必要ないと思った。でも本当に声を聞きたくなったら、連絡するかもしれない。それまではあの瞬間の輝きを大切にしようと思う。でももし彼女がこの学校にまだいたら、明日の卒業式でいったいどんな服にするんだろうと想像した。そんなキャラじゃないことはわかっているけれど、それだけにそんなイサコの姿を思い浮かべると可笑しくなった。

そのままヤサコとフミエが談笑していると突然ブザー音が鳴り始め、胸につけていたバッチが光り出した。コイル探偵局のバッチだ。コイル探偵局とはヤサコの祖母、通称「メガばあ」が組織した電脳トラブルを解決するクラブのようなものだ。それに所属する探偵達はその証であるバッチを常に身に付けなければならない。バッチといっても電脳物質で、さらに普段身につけている状態のときはメガネをかけていても見えないようになっている。必要なときだけ可視状態になるというわけだ。このバッチが鳴り出すのはメガばあが探偵達を招集している時である。招集を受けたのは久しぶりだ。

「何かあったのかしら?」

ヤサコがフミエを見て言うと、

「わからないわ。まったくメガばあったら、忙しい時に限って招集

するんだから。」

と、フミエはため息をつくように言った。とりあえずメガシ屋、コイル探偵局の本拠地に急ぐことにした二人は、体育館の出口に向かった。

体育館を出たところで、靴を履き替えながら襟の裏を気にしている少年がいた。少年の襟の裏にはヤサコ達と同じバッチがつけられている。彼はコイル探偵局の一員であり、去年のあの事件にヤサコ達と一緒に立ち向かったハラケンだ。普段はぼーっとして何を考えているのか分からないが、いざというときに頼りになるし、そしてどこかもの憂げな瞳をもっている。そしてヤサコはハラケンに恋心を抱いていた。あの事件で一度告白もしている。それはフォーマット開始直前の「あっち」と呼ばれた空間の中に入り込んだハラケンを、ヤサコが助けにいった時だ。ハラケンはあの夏、事故死してしまった幼なじみの葦原カンナが「あっち」の世界でまだ生きていると信じていて、その世界への入り口を探していた。ハラケンはその中でついにカンナとの再会を果たし、カンナとさよならを交わすことができた。ヤサコはその空間から現実世界にハラケンの電脳体を送るため、イサコからもらった暗号をハラケンにあてた。ハラケンの電脳体が消えていくなかで、ヤサコはハラケンのことが好きだと伝えた。しかしその言葉はハラケンの耳には届かなかった。もしくはその時の記憶が飛んでしまっているのかもしれない。いずれにせよヤサコの気持ちはハラケンに伝わっていないということになる。ヤサコは事件の後改めて告白しようか悩んだ。人間とは不思議なもので、ああいう切羽詰まった状況になると、言いたいことが勢いで言えてしまう。でももとの平穏な日々の中では、それがとても勇気のいることに感じるのだ。ヤサコの友達で、ヤサコのその気持ちを知っているアイコは、何度もヤサコに告白をけしかけた。それでもヤサコは言えずにここまできた。ハラケンとは同じ中学校に通うことになっているし、小学校を卒業すると言っても、まだハラケンとは近くにいられるという安心感がそうさせるのかもしれない。

フミエはハラケンを見つけるなり、ハラケンの肩に手をまわして言った。

「ハラケン、あんたもメガばあから呼び出されたんでしょ。あんたいっつもメガばあが招集かけても来ないんだから。それでもコイル探偵局の一員なの？今日は私たちと一緒に来てもらうわ。どうせ今日はやることないんでしょ？」

フミエに圧倒されたハラケンは、細く低い声で、

「うん。今日は行こうと思ったよ。メガばあからの招集は久しぶりだしね。」

と返した。それならいいわ、と満足そうな顔でフミエはハラケンの背中を叩いた。

「急ぐわよ。」

と言って、フミエは小走りになった。ヤサコとハラケンもそれについていくように小走りになった。

フミエがハラケンにどんなスキンシップをしても、ヤサコに嫉妬心は生まれない。フミエはハラケンの事を未だにぼーっとしてて、頼りないヤツだと思っているようだし、フミエはヤサコがハラケンの事を好きだということも知らない。それにフミエにはお似合いの相手がいる。三小のガキ大将ダイチだ。ダイチはコイル探偵局と対立するクラブ、大黒市黒客クラブのリーダーで、フミエとは口喧嘩のみならず電脳戦争まで日常茶飯事に起こしており、フミエにとっては永遠のライバルでもある。しかし誰の目から見ても、ダイチのフミエに対する嫌がらせは、好きの裏返しだということがわかる。それに気付いてないのはおそらく基本そういうことに鈍感なフミエだけだ。一度ダイチはフミエがいじめられているところを助けたことがあったが、誰もが期待する関係にはなっていない。たとえフミエにダイチと同じ気持ちがあったとしても、それを素直に表現できないだろう。二人はどこまでも似た者同士だからだ。

#1　メガネからの卒業　ｐａｒｔ３

三人はメガシ屋に到着した。メガシ屋とはメガばあが経営する、違法電脳グッズの店である。ヤサコやフミエはいつもこの店で電脳グッズを仕入れている。一方ダイチは通販で電脳グッズを仕入れている為、メガシ屋には冷やかし以外でほとんどやって来ない。メガシ屋の中に入るとメガばあは店のカウンターに座っており、三人を見ると、

「おう、よく来た。久しぶりじゃのう。」

とまるで至急で呼び出したことを感じさせない、のほほんとした口調で言った。

「久しぶりねメガばあ。で、用って何なの？」

と腕を組みながらいぶかしげにフミエが返す。

「まあ、奥でゆっくり話そう。遠慮なく上がるのじゃ。」

とメガばあは立ち上がりながら言うと、奥にある、メガばあの電脳工房とも言うべき畳の部屋に向かった。遠慮なく上がれと言うが、メガばあはヤサコの実の祖母であり、さらにこの建物とヤサコの家はつながっているから、ヤサコにとっては自分の家同然である。

三人は導かれるままメガばあの部屋に向かった。フミエとハラケンが来ていることを知ったヤサコの母は、四人分のお茶を持ってきてくれた。メガばあはそのお茶をぐいっと飲むと「実はな：。」と、あからさまに重大なことを今から発表するぞ、という間を作った。ヤサコとフミエは座りながら前に身を乗り出した。ハラケンは冷静である。

「驚かずに聞いてほしいのじゃ：：。うえええっ！？。」

場がしらけた。フミエがあきれ顔で言う。

「メガばあ。まさかその一人コントを私たちに見せたくて呼び出したんじゃないでしょうね？帰るわよ。」

メガばあが怒って返す。

「まったくノリの悪いヤツらじゃ。おぬし達があまりに神妙な顔つきで聞いとるもんだから、解きほぐしてやろうと思ったのに。」
「わかった。わかった。肩の力を抜けばいいのね。で、話って何？」
フミエは手が畳につくほど肩の力を抜き、上の空のポケーっとした顔で話を聞くことにした。
「では言うぞ。メガシ屋は本日を持って閉店。コイル探偵局も今ここで解散じゃ。」
少し間があった。ヤサコとフミエは話の内容を理解すると同時に、
「うえええっ！？」と声をあげた。ハラケンはそれでも平静を装っている。
「メガシ屋閉店って何よ？コイル探偵局を解散するのはともかく、メガシ屋閉店は納得できないわ！これから私たちどこから電脳グッズ仕入れたらいいの？そんなの困るわ！」
フミエが反論すると、
「困っとるのはこっちじゃ。あの夏の事件で古い空間がほとんど消去されて以来、メタバグもついぞ出なくなったのじゃぞ。蓄えてあったメタバグは底をつきたし、そういうおぬし達もあの事件以来めっきりこの店に来る回数が減ったではないか。」
フミエは言葉が詰まった。そこにハラケンが割り込んだ。
「古い空間が消えて、ペットの行方不明事件とかがほとんど無くなったから、コイル探偵局も解散するの？」
「その通りじゃ。メタバグが出なくなったのも、ペットの行方不明事件が無くなったのも、古い空間が消えたせいじゃ。むしろこれはありがたい事なのじゃ。」
ちなみにメタバグとは、違法電脳ツールを作る際の原料となる結晶のことである。基本的に古い空間の近くで見つかっていたが、あの事件以来メタバグが落ちていることもなくなった。
しばらく口論が続いたが、フミエはまだ納得できない。
「確かにあの事件以来町は平和で、最近はサッチーすら見かけなくなったわ。でもそれじゃダメなの！私たち子どもの好奇心や知的欲

求を満足させるには冒険、そう！冒険が必要なの！それには電脳グッズがなくちゃいけないの！大黒市だって今はひと時の平穏な時間を過ごしているけれど、またどこかで空間の崩壊が起こらないとは限らないじゃない！メタバグがないなら、暗号を使って作ることだってできるんでしょ！？イサコが使っていたようにさ！」

メガばあはため息をつきながら答える。

「確かに暗号を使えばメタタグぐらいは作れよう。もともと暗号とメタタグは同じ技術を使っておるからな。もっともわしの『オフダ』は古流と呼ばれとるらしいが。しかし、あれだけの電脳力を持っていて暗号も使いこなしていた天沢勇子が、あの事件でどれほどつらい思いをしたのかはおぬしらもよく知っておろう。」

そうだった。強力すぎる力を持っていたが故に誰かに利用され、自分の無力さに打ちひしがれて苦しんでいたイサコ。それを思うと軽率に冒険がしたいなどとは言えない。

あの事件のすべてを知っているのは、大黒小学校の中ではヤサコ、イサコ、ハラケンだけだった。あの時、イサコはミチコさんを呼び出し、子どもの生け贄を差し出そうとしていたという噂が大黒小学校の中で流れていた。それゆえイサコはみんなからバッシングを受けた。フミエもイサコを敬遠していた。でもイサコを古い空間から助け出したヤサコと、その時一緒にいたハラケンは真相をすべて知っていた。イサコはあの事件の後、姿を見せることはなかったが、ヤサコ達はイサコがそんな悪い子ではない、むしろ自分の弱さゆえ人を受け入れられない純粋な子であるということをみんなに伝えたかった。ヤサコは事件の真相は時が来るまで口外するなと、メガマスの内部監査を受け持っていた父、小此木一郎に言われていたが、みんなのイサコに対する誤解を解きたいという思いを打ち明けると、一郎は学校にまで赴いて学年集会を開き、その真相を打ち明け、イサコに対する誤解を解いた。だから大黒小学校に通う六年生はみんな事件の概要を知っていることになる。もちろん一郎はそのことを口外しないように固くみんなを口止めした。事件の重みを痛感した

のか、みんな誰にもそのことを口外していないようだった。もちろんネット上でも書き込みもされていなかった。

メガばあは黙り込んだ三人を見てきり出した。

「ことに、おぬしらは明日小学校を卒業するんじゃろう？ならばそろそろメガネ遊びからも卒業する時じゃないのかえ？まあ確かにメガネの中には大切な思い出や夢が詰まっとるから、すぐにやめろと言っても難しいじゃろう。少しずつ離れていけばいいのじゃ。どのみち中学校に入学して何かクラブ活動に参加するんじゃったら、メガネにかまう時間もなくなるわい。もし大黒でまた空間が壊れたり、おかしな事件が起き始めたらメガシ屋もコイル探偵局も復活させるかもしれんが、まあ当分その心配はなかろう。わしはまた、しがない駄菓子屋でも始めるとするわい。明日の卒業式はメガネでパーッとやるんじゃろう？ならば明日は最後のメガネフェスティバルになるかもしれん。存分に楽しむがええ。」

そういうとメガばあは家の奥の方へ消えていった。

#1　メガネからの卒業　part4

三人は顔を合わせた。何か唐突にメガネからの卒業ということを言われて戸惑いを隠せない。考え込んでいたハラケンが誰とも目を合わせずに言った。

「メガネからの卒業…。確かにそんな時期が来てるのかもしれない。でも僕は、メガネから離れられないのは過去に縛られているからだと思うんだ。メガネを通じてあまりにもたくさんのことが起こったから、未だにそれが整理されない。整理されないままメガネから離れたら、この記憶はどこにいくんだろう?この心に刻み付けられた記憶のはずなのに、メガネをはずすとふっとなくしてしまいそうな不安にかられる。何故だろう?明日小学校の卒業式だっていうのに、そんな卒業なんて実感していなかった。でも今メガネからの卒業を考えた瞬間、言い表すことのできない切ない気持ち、お別れっていうのを急に意識するようになった。」

ハラケンは目に涙を浮かべているようだった。その気持ちはヤサコもフミエも感じとれた、カンナがメガネによって事故死してしまったのこと。それを一人背負い込んでずっと苦悩していたこと。そして去年の夏カンナと「あっち」で再会を果たしたこと。ハラケンのメガネには誰よりも多くの記憶がある。それはヤサコたちが想像する「卒業」とは次元が違う。もっとも、ヤサコとフミエもメガネを通じて楽しいことや悲しいこと、ツライことを体験してきた。ヤサコは祖父からもらった電脳犬デンスケを、フミエはラットの電脳ペットをそれぞれ亡くしている。それはヤサコ達に限ったことではなく、メガネの子どもみんなが体験するお別れなのだ。その記憶はやはりメガネの中にある。メガネを卒業すると言っても、メガネは電話やメールの役割も果たすからまったく使わなくなるわけじゃない。その記憶だってメガネを立ち上げるたびに見ることができる。それでもハラケンが言うように、メガネを外してしまうと言いようがな

く不安になる。心に刻まれている記憶もなくすのではないかと。メガネからの卒業はそれだけに難しいことなのだ。

ヤサコはフミエの方を見て問いかけた。

「フミエちゃんはどうするの？メガネやめちゃう？」

フミエはしばらく考え込んだ。

「そうね。確かにメガばあの言う通りだわ。どのみち皆もメガネをやめていくだろうし、メガネがなくたって友達がいなくなるわけじゃないしね。」

「そっか。」

ヤサコの声のトーンが下がった。フミエはそれに気付いたらしい。

「どうしたの？メガネを卒業するのがそんなに寂しい？」

「寂しくないって言ったら嘘になるけどさ、それとはなんか違うの。私はなにかまだメガネでやり残したことがある気がするの。それが何なのかわからないけど、大事なことのような気がする。」

「デンスケのこと？それともイサコ？」

フミエがヤサコの顔を覗き込みながら訪ねる。

「わからない。その両方かもしれないし、そのどちらでもないかもしれない。」

「うーん。ならヤサコはこの春休みで、それが何なのかじっくり考えてみたら？私も手伝うよ。なんかこうやり残したまま終わるのってすっごく気持ち悪いもんね。」

「ありがとうフミエちゃん。」

ヤサコは心から感謝した。こんな抽象的なことを言っているのに、それを必死で応援してくれる友達がいるって本当に幸せなことだとヤサコは感じた。

「そのかわり、中学校でどんな風に過ごしていくかも考えていこう。クラブ活動とか生徒会活動とかね。」

フミエちゃんは笑顔で言った。ヤサコも笑顔で返した。メガネがなくても楽しい中学校生活にできるはず。そう二人は心の中で確認し合った。

フミエがおもむろに立ち上がった。
「さてと、そろそろ私は行くわ。明日の卒業式の演出の段取りのことで最終確認があるから、体育館に戻らないといけないの。今何時かしら：ってもう四時まわってるじゃない！急がなくちゃ！ハラケン、あんたは帰るの？」
ハラケンはまだ考え事をしているようだった。するとヤサコの方を向いて言った。
「ねえ、ヤサコのおじさんは今日何時頃帰ってくる？」
唐突な質問にヤサコは少し驚いた。
「お父さん？そうねえ：最近は七時頃に帰ってくることが多いかな。それがどうかしたの？」
「うん、ちょっと相談したいことがあって。ならおじさんが帰ってくるまでここに居させてもらっていい？」
ヤサコはドキッとした。フミエが行ってしまうとこの部屋にハラケンと二人っきりになる。「いいよ。今日はもう用事はないし。夕飯も一緒に食べる？食べるならお母さんに言ってくるけど：」
恥ずかしいと思いながら、それでもハラケンを食事に誘う自分の大胆さに困惑しながら、できるだけ自然な口調で言った。
「いや、気を使わなくていいよ。おじさんに会ったらすぐに帰るから。」
ハラケンがいつもの調子で返して、ヤサコは少しがっかりした。フミエは事の成り行きを確認して、
「じゃあ私は行くね。明日は思いっきり楽しみましょう。」
と言うと部屋を出て行った。
部屋には少し沈黙が流れた。ヤサコは色々話題を考えようとしたが浮かばない。いっそここで告白してしまおうかとも考えた。しかしハラケンは相変わらず眉間に皺をよせて何かを考えている。こんな時のハラケンは何だか近寄りがたい。間が長くなるほど話しかけづらくなる。すると部屋の襖が突然開いた。
「ん？いつの間に二人になったのじゃ？探偵バッチを回収しようと

思うたのに。」

メガばあはトイレに行っていただけのようだった。おかげでヤサコにとっては二人っきりの少し気まずい、それでいて嫌じゃないひと時が終わった。

#1　メガネからの卒業　ｐａｒｔ5

メガばあと三人で最近の出来事などを話していると、時刻は七時前になっていた。するとヤサコの住まいの玄関の方から「ただいま。」という声がした。ヤサコの父、一郎が帰ってきたのである。ヤサコとハラケンはリビングの方へ向かった。ハラケンは一郎を見ると明るい口調で、

「こんばんはおじさん。お邪魔してます。」

と挨拶した。

「お研一君！来てたのか。久しぶりだねえ。元気そうでなによりだ。」

と一郎は当たり障りのない言葉で返した。ヤサコはそんな気を使っている一郎に少し違和感を覚えた。

「おじさん、ちょっと聞きたいことがあるんですけどいいですか？。」

「ああ、いいよ。なんでも聞いてくれ。」

一郎はあくまで明るく振る舞っている。

「：あの事件のすべてを、メガマスはいつ公表するんですか？」

ハラケンの声が小さくなった。その真剣さを感じ取った一郎も、さっきとは違う引き締まった顔で答える。

「：公表が遅れて申し訳ない。あの事件について我々内部監査担当は今真相を探っているところだ。あの事件にはまだ謎が多く残っている。例えばイマーゴを発見した猫目技師の研究などはすべて明らかになっていないし、そもそもイマーゴの仕組みすらわかっていない。その手がかりを知っているであろう猫目宗助は未だに失踪中だ。それを含めたすべての真相を明らかにした上で公表したいというのが我々の方針なんだ。決して隠蔽を企んでいるわけじゃないというのは理解してくれ。」

ハラケンが少し困ったような顔になった。

「いや、おじさん。僕は公表が遅れている事を責めようとしているわけじゃないんだ。ちょっと考えがあって：カンナの事件のことで。」

「カンナ君のこと？君も知っているように、あの事件の原因は電脳ナビの誤作動で、カンナ君に何の落ち度もないことは君の集めたデータによって実証された。もちろんそのことも公表時に明らかにし、メガマスの責任だったとしてしっかり謝罪するということは社長も約束されている。」

ハラケンはうつむいた。言いにくそうに言葉を絞り出した。

「：それじゃダメなんだ。一般社会に向けられた経営トップの形だけの謝罪じゃ不十分なんだ。カンナの肉体がはねられた後、カンナの意識は一年以上あの空間で彷徨っていたんだ。それがどれほど苦しくて、寂しかったことか、僕には想像すらできない。そのことを知っていながら事故をカンナの不注意として処理させて、自分たちの権益のためにもみ消そうとした人達がいるんでしょう？僕はその人達を許せない。その人達にちゃんとカンナやカンナの両親に謝ってもらわないと、あの事件は解決しない：おじさん！その人達はあの後どうしていて、この後どうなるの？」

ハラケンの目から雫がつたい落ちた。一郎は視線を合わせ続けることもつらかった。ヤサコもそれを感じた。

「確かに、当初あの事故の原因はメガマス内でもカンナ君の不注意によるものだと認識されていた。しかし調べてみたところ、君の言う通り、メガネの不具合の発覚を恐れる少数の幹部が、事故の真相を知りながらそれをもみ消した可能性があるとわかったんだ。事故の隠蔽を行った疑いのある人達は無期謹慎処分：解雇に等しい処分を受けているよ。じつは彼らの隠蔽した真実についても調査を尽くしているんだが、なかなか進んでいないんだ。証拠がかなり消されているからね。メガマスとしても彼らの今後の処遇について検討していたんだが、やはり解雇というだけでは裁ききれない罪を犯しているだけに、法廷闘争という手も考えていた。」

一郎が感じている後ろめたさは、自分と同じメガマスの社員がここまで人を傷つけ、自分たちの保身を考えていたという罪悪感と、それにすぐ気付けなかった自分の責任感によるものだった。

「裁判にかけるの？」

ハラケンが涙を拭いて言った。いつの間にかヤサコの母も固唾をのんで見守っていた。

「君やカンナ君のご両親が了解してくれればの話だ。またあの事件を掘り返す事ことは君にとってもつらいこと…。」

「そんなことない！」

ハラケンが一郎の話を遮って言った。

「僕も、カンナの両親も、そしてカンナも、その人達の謝罪を望んでいる。それができるなら僕は喜んで協力する。」

「…いいのかい？裁判にかけるということは、もう一度あの事件と向き合わなければならないということだ。それに十分な証拠がでなければ負ける可能性だってある。カンナ君の両親の了承もいる…でももし、君がそれを望んで、訴訟が成立したなら、僕たちもできるだけ協力する。真実を明らかにする。」

一郎はハラケンの肩に両手をのせて言った。ハラケンの顔が明るくなった。

「ありがとう、おじさん。僕はあの事件の真相を改めて追いたかったんだ。あの日カンナの身に起こった事をちゃんと知りたいんだ。僕は去年の夏、同じ気持ちだった。でもあの時は事件の真相を知りたいというよりも、カンナに会いたいという思いの方が強かった。事故の原因を知れば、カンナに会える方法もわかるんじゃないかって。でも今は違う。あの事件のすべてを心に刻み付けたいんだ。絶対に消えない記憶として。」

「わかった。カンナ君のご両親には僕が連絡する。君の気持ちも伝える。会社にもきちんと報告しておくよ。」

一郎が約束した。ハラケンはもう一度流れた雫を拭った。

「よろしくお願いします…じゃあ僕はこれでおいとまします。」

ヤサコの母に向かって会釈するとハラケンは玄関に向かった。一郎とヤサコも見送りに玄関に向かった。靴を履き替えているハラケンに向かってヤサコは声をかけた。

「ハラケン。私にもできることがあったら言ってね。協力するわ。フミエちゃんにもそう言っとく。」

「ありがとうヤサコ。じゃあ今日はありがとうございました。」

ハラケンはドアを開けながら一郎に向かって言った。

「研一君。一日早いが卒業おめでとう。けっしていい思い出ばかりじゃなかっただろうけど、この小学校生活の経験はきっと君を強くしてくれるよ。過去を振り返るのもいいけど、未来もしっかり見つめるんだ。明日の卒業式は僕も行く。君の明るい笑顔や卒業の歌。カンナ君にも届けてあげてくれ。」

一郎はキザな台詞を言った自分が恥ずかしくなって、頭をぽりぽり掻いた。ハラケンはそれに笑顔でうなずいて行ってしまった。ヤサコは父の意外な一面を見て少し困惑した。

玄関の鍵を閉めているヤサコに向かって、一郎がさっきと同じ真剣な声で聞いた。

「彼、何かあったのか？」

ヤサコは「えっ？」と一郎の方を振り返る。

「いや、彼はカンナ君の事故の事は胸にしまい込んで、やっと普通の小学生として過ごしていたのだと思っていたから。あまり彼の前でカンナ君のことに触れたくはなかったのに、彼からあんなことを持ちかけてくるなんて。」

やっとヤサコは、はじめ一郎がハラケンにとっていた違和感のある態度について理解した。一郎はカンナの話題にならないよう、わざと当たり障りのない会話に持っていこうとしていたのだ。

「実は：」

ヤサコは先ほどメガばあに言われた、メガネからの卒業について一郎に話した。

「なるほど。お袋がそういうことを：。」

メガばあは一郎の実の母親である。そのため昔から弱みを握られており、無理矢理コイル探偵局の会員ナンバー一にしたてあげられた。

「メガネでやり残した事。メガネから離れる前にやらなければいけない事：僕もメガマスで働いているから、そういう子どもは何人も見てきたよ。そうやって皆メガネの中の記憶を心の記憶として刻み付けるんだろう。優子は?何かやり残した事を考えたかい?」

一郎はやさしい口調になった。

「うん。あると思うんだけど、それが何なのかはっきりしないの。」

ヤサコがうつむきながら答える。

「まあ、お袋の言う通り焦らないでじっくり考えるんだな。お前は転校してきたから両方の思い出を整理しなければならないし、大変だと思うけど。」

一郎が言うとリビングから「ご飯できたわよ。」とヤサコの母の呼ぶ声がした。一郎はいつもの調子に戻って「あー腹減った。」とリビングに消えていった。

ヤサコは玄関を見つめ、家路に急ぐハラケンを想像し、告白できるのはまだ先のことかなと思った。

#1　メガネからの卒業　part6

卒業式当日。華やかな音楽とともに卒業生が体育館に入場する。出席者はそれを拍手で迎えていた。メガネをかけている人達からは特に大歓声と笑いが起こった。それは元三小の子ども達の仮装に対してのものだ。といっても厳粛な場なので顔を手で覆いながらさりげなくだが。ヤサコはあれこれ悩んだあげく、レディースーツをまとうことにした。フミエからは「やっぱり地味ねえ。」と言われたが。そのフミエは言っていた通り十二単を着ている。豪華なんだけど小さいフミエが着ていると何だかかわいく見える。そしてアイコはキャビンアテンダントだ。それを見たときヤサコは思わず「カッコいい～。」と言ってしまった。そのくらいアイコにはそれが似合っていた。もちろん黒客のメンバーも仮装していた。ガチャギリは迷彩姿の軍人。ナメッチはなぜかドラキュラ。デンパは怪獣の着ぐるみを着ており、それなりにウケていたが、なんと言ってもダイチが一番笑いをとった。最初は威風堂々とした武士の鎧を身にまとっていたが、仕掛人のいたずらなのか、入場行進中に無数の矢が飛んできて鎧に刺さり、落ち武者のようないでたちになると、兜まで矢で飛ばされ、しかもむき出しになった頭はハゲちらかしているという無惨な姿になった。ダイチはこんなの段取りになかったぞ、とおおいに慌てた。

「ふっふっふ、いい気味よ。まあ一番の盛り上げ役はアイツってことね。」

ヤサコのそばにいたフミエが小さい声で言う。

「まさかフミエちゃん、あれあなたが仕組んだ事なの？」

ヤサコもしゃべっているのがわからないように言った。

「当然でしょ。場を盛り上げる為に私が先輩達に頼んでやってもらったのよ。まあアイツはばかでプラス思考だから、自分のことをおいしいとでも思ってるんじゃない。」

「フミエちゃん、む、むごい。」と思いながらヤサコがダイチの方へ目を向けると、そこにはもう気を取り直して、むしろ面白い自分の姿をアピールするように胸を張るダイチがいた。フミエちゃんの言う通りだったとヤサコは左手で頭を抱えた。

和やかな雰囲気だった入場シーンも急に空気がしんと張りつめた。列の最後のハラケンが入場してきた時である。ハラケンは元三小の中で唯一仮装をしなかった。みんなの視線がハラケンに注がれる。そしてその手には大事そうに抱えられたカンナの遺影があった。担任のマイコ先生は入場中、今日卒業する者を読み上げていた。

「：原川研一。そして：葦原カンナ。」

そうマイクを通したマイコ先生の声が体育館に響いた後、出席者は皆胸に手を当て、目を閉じた。涙を流す人もいる。本当ならここに並んでみんなと一緒に卒業するはずだった彼女の冥福を祈るために。大黒市から引っ越していったカンナの両親の姿もそこにはあった。目を閉じながら涙を流しているカンナの母の肩を、カンナの父は手で支えている。それを近くで見ていた一郎も、他の人とは少し違う、涙を流した。

式は滞りなく進んで行く。卒業証書授与が終われば最後の歌。そしてハラケンによる卒業生答辞だった。ハラケンは普段のキャラなら絶対そんなみんなの代表としての役目は引き受けないだろう。でもマイコ先生にいち早く答辞をしたいと言っていたのはハラケンだった。マイコ先生はその気持ちを察し、今日まで何回もその内容をハラケンとともに推敲していた。卒業の歌、『旅立ちの日に』のメロディーが流れる。この時はさすがにみんな仮装を解いて、まじめな普段着に戻していた。そのやさしくも切ない旋律は聴く人の涙を誘った。同時にひとひら、ふたひらと桜の花びらが落ちてくる。卒業式の演出の一つだった。どこからともなく落ちてくる花びらを、ヤサコが見る。フミエが見る。アイコもダイチも黒客のみんなも、そしてハラケンも。みんな小学校での思い出が走馬灯のように蘇る。ヤサコは泣かないと思っていたが、やはり自然と涙が流れていた。

舞落ちる花びらが、イサコと手を取り合ったあの瞬間の光の波に似ていたから。ヤサコが顔を上げて歌い出しに入ると、ふと保護者席に見覚えのある姿がみえたような気がした。「天沢さん?」と心の中でつぶやく。その少女もこの桜の花びらを見て、うつむいているようだった。涙を見せないために。

最後のサビに入ると花びらは桜吹雪となって、体育館中を吹き抜けていくようだった。涙でかすれてしまった声で、みんな歌いきった。そして曲のアウトロに入ると、ハラケンが前のマイクに進んだ。遺影はダイチに渡されている。

「今日、僕達は大黒小学校を卒業します。僕達をここまで育ててくれた先生、お父さん、お母さん、クラスメート、後輩達、みんな本当にありがとう。僕達はきっと待っている明るい未来に向かって一歩ずつ歩んで行きます。そして、残念ながら今日一緒に卒業できなくなってしまった友達の分まで、精一杯生きてゆきます。まだまだ幼い僕達ですが、暖かく見守っていてください。」

ハラケンの晴れやかな笑顔に出席者達は拍手を惜しまない。ヤサコは最後の暖かく見守っていてくださいというのは、本当はカンナに向けられたメッセージなんだろうと思った。昨日のハラケンの涙を見ているだけに、ヤサコや一郎も余計に心を打たれ、涙を流した。もちろんフミエやアイコ、ダイチやデンパもそれを汲み取ったのか、涙が止まらなかった。

最後の退場。演出では体育館が暗くなり、花火が打ち上がっている。ヤサコは涙で滲む視界の中で、イサコを探した。しかし彼女の姿は見当たらなかった。彼女がいたであろう席は空席になっている。

体育館の外ではみんなの雑談が始まっていた。

「本当に涙が止まらなかったわ。ハラケンの答辞のところは感動的だったものね。」

アイコがヤサコやフミエに同意を求めた。

「そうね。普段何も考えてなさそうなくせに、あんな台詞を言うなんて反則よ。私はあのギャップにやられたわ。」

とその時いつもの威勢のいい声が割って入った。
「あれえ?フミエもしかして泣いてるのか?鬼の目にも涙ってまさにこのことだな!」
ダイチだった。フミエも負けじと返す。
「何よ、あんただって答辞のとき泣いてたじゃない。」
「俺は泣いてたんじゃねえ。寝不足であくびしてただけだ。」
「自分のことは棚に上げて、口だけは立派なようねこのハゲ武者!」
そういうとフミエはメガネのキーボードを叩き出した。するとボワンという音と煙が出て、
ダイチが先ほどのハゲた落武者姿になった。
「こらブスエ!なおせえ!」
ダイチが叫ぶ。どうやらダイチには特殊なメタタグが貼られているらしい。しかしダイチはそれに気付いていない。二人が騒いでいるとマイコ先生がやって来た。
「二人とも。卒業してもけんかはやめないのね。ほんとに、君たちがこのまま中学校に行ったら先生心配だわ。」
二人は黙った。元三小のマイコ先生のクラスの子が集まってくる。
アイコが代表して言う。
「先生。これみんなで書いた寄せ書き。そしてこれはみんなでちょっとずつお金を出し合って買ったお花よ。先生、私たちのこと忘れないでね。」
マイコ先生は目に涙を浮かべ、笑いながら答えた。
「忘れるもんですか。あなた達こそ先生のこと忘れんなよ。」
ヤサコには風に揺れる先生の髪が何とも綺麗に見えた「・さっきの原川君の答辞じゃないけれど、精一杯生きるのよ。この世界には生きたくても生きられない子ども達がたくさんいるの。まずは生きる喜びを感じること。記憶というのは喜びを感じるために刻まれるの。つらい記憶だってそう。それはいつか感じられる喜びをより大きくするためにある。だからつらいことがあっても決して逃げてはダメ。でも、どうしても逃げたくなったら私のところに来なさい。私はあ

なた達の不安や心配事も少しは取り除けるかもしれない。それまでは、さよならよ。真っ白な未来に、好きなだけ夢を描いてらっしゃい。」

みんなマイコ先生の言葉を聞くと、涙を流しながらうなずいた。

見上げた空の青さ。頬を撫でる風の心地よさを、みんな胸に刻んだ。

#2　犯人、沢口ダイチ　part1

「キラバグに関する都市伝説を聞くことはなくなりました。でも大黒市の外では、今でもそういう噂がささやかれているそうです。」

卒業式から三日が過ぎた。ヤサコはまだあの桜吹雪の中のハラケンの答辞がことあるごとに思い浮かんだ。そしてあの後みんなに聞いてみたけど、誰一人として姿を見なかったというイサコ。何だか夢の中の出来事だったような気がした。でも勉強机の上に置いてある卒業証書を入れた筒が誇らしげに立っている。それを見ると、小学校を卒業したんだっていう実感が少し湧いた。そして次はメガネからの卒業。ヤサコはメガネでやり残した事をずっと考えていたがどうしても思いつかなかった。どうしたらそれが見えてくるんだろう、もしそれを見つけたとしても、果たしてそれを心の中の記憶に昇華できるのだろうかと不安になった。もしかしたらこの大黒市にそれはないのかもしれないと思い、金沢にいた頃の思い出も振り返った。転校する時みんなが書いてくれた寄せ書きを眺めながら。

金沢にいた時に一番仲が良かったのは、マユミだった。少なくともヤサコの中では。あの事件の真相を突き止めるためにヤサコが金沢に向かった時、マユミはヤサコの目の前に現れた。ヤサコはその時マユミの協力が必要だった。でもマユミはヤサコを突き放した。マユミはヤサコの事を嫌っていた。表面上は優しい女の子を演じているけど、裏では人のことを呼び捨てにしたりする、本当のヤサコの自分勝手な性格を。ヤサコが転校する前、二人は金沢の古い空間を探っていた。そしてマユミは古い空間への入り口、はざま交差点を見つけだした。しかしヤサコは怖くなってマユミから離れていった。ほどなくして学校の中ではこんな噂が流れ出した。マユミはミチコさんを呼び出そうとしていたのだと。マユミといつも一緒にい

たヤサコは、クラスメートにその噂は本当なのか聞かれた。その時ヤサコは自分の身を守るために、マユミをかばおうとはしなかった。そのためマユミはみんなからのバッシングを受けることになる。あの時のイサコと同じように。それはヤサコにとって金沢での一番つらい記憶だった。それがあったからイサコの時に、一人かばおうとしたのかもしれない。

マユミとはあれから一度だけ連絡を取った。あの事件の直後のことだった。マユミから電話がかかってきたのだ。

「あの時はごめん。私はあなたから電話が来た時、今更なんの用なの？って思った。私はあの時、友達を助けたいって言うあなたを、心の中で笑ったわ。また自分勝手な友情を押し付けてるんじゃないのかって。でもあなたは本当に友達を守りたかったんだね。事件のことは私もメガマスの人から聞いたわ。はざま交差点をよく知ってる女の子だからって、事情聴取を受けたから。あなたが本当に友達を思うようになったのは、私のことがあったから？私はもう北海道に引っ越してしまったけど、もしあなたともう一度会えたなら、あなたが救い出した子と同じように、私もあなたと友達になれる？」

その時のマユミは心持ち優しい声だった。ヤサコはそれに答えた。

「もちろんよ。私の方こそ謝らなくちゃいけない。マユミちゃんを一人にしてしまった事。・・・あの時の私は本当に自分勝手だったよね。金沢を離れてからもずっと気になってた。でもあろうことか、私はマユミちゃんにいじめられていたなんて思っていたわ。私が近づこうとしても、マユミちゃんは私を無視していたから。金沢で再会したとき、自分の力でやったらどうなの？って言われて目が覚めたの。私はどこまで都合がいいんだろうって。それでもあの子、天沢勇子を助けなくちゃいけないって気持ちに偽りはなかった。確かにあなたの言う通り、マユミちゃんっていう一番仲の良かった子を失っていたから、今度は誰も失うまいって思いもあったわ。でもそれって自分の都合だよね。本当の友達っていうのはそういう自分の都合とかで助けるんじゃない。困っている時はどんな事があっても、

真っ先に手を差し伸べられないといけないって思った。・・・だから今度は絶対手を離さない。あなたが何処に居ようと、困ったときは真っ先に手を差し伸べる。この言葉だけは信じてほしいの。」

ヤサコは自然と言葉が流れていた。それは心でただ思った事を素直に伝えたからだ。マユミもそれを感じ取った。

「ええ。もうあなたはあの時のヤサコじゃない。本当に友達を思える優しい子。そのあなたの言葉を疑いはしない。今までよりもっと離ればなれになったけど、ずっと友達でいよう。そしてあなたも私の言葉を信じて。困ったときは真っ先に手を差し伸べる。」

「うん。約束する。北海道に行っても頑張ってね。」

「ええ。」

そう言うと電話が切れた。

あの時の電話でのやり取りを思い出していたヤサコは涙が落ちそうになった。自分が苦しめてしまったマユミと和解できた事。少しでも友達を思えるようになったこと。それを改めて実感したからだ。その涙は金沢での記憶を心に刻みつけることができた証なのかもしれないと思った。やはり、やり残したとことはこの大黒市にあるような気がした。

明日はフミエとアイコと一緒に中学校のクラブ見学に行く予定だった。中学校も休みに入ってクラブ活動が活発になっており、三人はどのクラブに入ろうかじっくり考えようと思ったのだ。ちなみに中学校には（電脳）生物部はなかった。ヤサコとフミエは日頃サッチーに追いかけまわされて培った体力を武器に、運動部に入ろうと思っていた。どのクラブに入ろうか想像しながら、ヤサコは眠りについた。

#2　犯人、沢口ダイチ　part2

ヤサコは朝食を食べ終えて出かける準備をしていた。今日は長丁場になるだろうから、色々つまめるものや飲み物をカバンの中に入れた。朝の十時にフミエの家に集合ということになっている。中学校はフミエの家が一番近いのだ。

すると妹の京子が「おねえちゃーん。」とよって来た。京子はこの春から小学生になる。最近は買ってもらったランドセルを背負って走り回っていた。しかし今日はそんなテンションじゃないようだ。

「何？どうかしたの？」

ヤサコが訪ねると、

「変なメールが来たよ。」

と少し不安げな表情で答えた。

「変なメール？迷惑メールなら無視すればいいって言ったでしょ。」

「ううん。何かいつものやつと違うの。」

と京子が曖昧な言い方をするので、「どれどれ。」とヤサコは京子のメガネを預かり、メールを開くと、そのメールに目を通した。

（いつも弊社の製品をご利用いただき誠に有難うございます。さて、先日お客様がご利用された、メガネの有償自動修復ダウンロード費用の振込が、再三の請求にも関わらず確認されておりません。つきましては至急、下記の銀行口座に当該費用の振込を行ってください。なお、期限までに振り込みが確認できない場合、法的手続きをとらせて頂く可能性があります。）

その下には未払いとなっている金額と、大黒銀行の口座番号が添えられており、送信元はメガマスの関連会社になっていた。

ヤサコは全ての漢字が読めたわけではなかったが、内容はだいたい理解できた。

「やだっ。何これ？」

これは一昔前に流行った架空請求メールだった。基本的にメガネに

かかる費用はすべて銀行口座からの引き落としとなっているが、もし振込が滞った場合でも、このようにメールで督促が来ることはなく、メガマスからの郵便で届くことになっている。架空請求を企む人間は、ネット上に溢れる個人情報を集め、その手に入れたメールアドレスに向かって無作為にこのようなメールを一斉送信するという手口をとる。もちろんサーバーや送信者は偽装されている。大体の人は引っかかることはないのだが、メガネのことにあまり詳しくないお年寄りの被害が相次いだ。しかし架空請求は大黒市ではあまり流行らなかった。大黒市は古い空間やメタバグが多く、犯罪行為に走らなくとも金儲けの手段はいくらでもあったからだ。ちなみにメガばあは、大黒市で架空請求被害が少なかったのはひとえに、メガばあが大黒市のお年寄りに注意を喚起したからだと豪語していた。

ヤサコは本物の架空請求メールを初めて見た。とりあえずメガマスに勤める父、一郎に相談しようとしたがとうに一郎は出勤した後だった。次にメガばあに相談しようと思ったが、メガばあは昨日から町内会の旅行に行っていたことに気付いた。ことあるごとに旅行に出かけ肝心な時にいないメガばあを、ヤサコは恨めしく思った。ヤサコの母はメガネに詳しくないし、相談しても仕方ないとヤサコは考え、

「いい？お父さんが帰って来たらこのことは相談するから、それまではこのメールを開かない事！わかった？」

と京子に言いつけた。京子は深刻であることを感じ取ったのか、しおらしく、「はあい。」と返事をしただけだった。ヤサコは気を取り直して、約束の時間に間に合うようにフミエの家に向かうことにした。

フミエの家に着いたのは約束の時間ちょうどだった。フミエの家はマンションの三階にある。ヤサコはフミエがマンションの下まで出て来ていなかったので、直接呼びに行くことにした。チャイムを鳴らすと応対に出たのはフミエの母だった。フミエの母は結構威圧感のある人で、きっとフミエはこの母親に似たのだろうとヤサコは

思っていた。フミエの母はヤサコを見ると柔らかい声で言った。
「あら、小此木さんいらっしゃい。ちょっと待ってね、フミエは奥にいるから。」
そう言うと少しドアを閉め、奥にいるフミエに向かって言った。
「フミエ！小此木さんが来たわよ！」
すると奥の方からフミエの声がした。
「上がってもらって！ちょっと今手が離せないの！」
手が離せない？フミエちゃんは何をしているんだろう、とヤサコは思った。
「今日は中学校に行くんじゃなかったの？」
フミエの母が問い直す。
「行くよ！でもあともう一人一緒に行く予定だから、その子が来るまでヤサコには上がってもらって。」
そのやり取りが終わるとまた完全にドアが開いた。
「上がって小此木さん。フミエなら奥の部屋に居るわ。なにか手が離せないみたいなの。」
とフミエの母が言うのでヤサコは軽く頭を下げ、「おじゃまします。」と言うと家の中に上がって行った。
奥にある六畳部屋にフミエとその弟のアキラがいた。珍しくアキラがなにかメガネで作業している脇で、フミエがそれを手伝っているという様子だった。。
「おはようフミエちゃん。何をしているの？」
ヤサコが二人を覗き込みながら訪ねた。
「おはようヤサコ。それがね、コイツのメガネに昔懐かしい架空請求メールが届いたのよ。」
フミエが横目でヤサコを見ながら言った。それも皮肉めいた言葉を使って。ヤサコはそれを聞いてどきりとした。
「そのメール。京子のメガネにも届いたわ。」
ヤサコが不安げに言うと、フミエはヤサコの方に振り向いた。
「京子ちゃんにも？そのまま何もしてないよね？」

「うん。お父さんが帰って来たら言おうと思って、京子にはメールを開かないように言ってあるし、何もしてないわ。」
フミエは少し安心したように息をついて、またアキラの作業に目を戻した。
「そのメールの解析でもしているの?」
ヤサコはアキラに向かって聞いた。
「あ、はい。ちょっと僕も見るのは初めてなんですが、このメール、少し妙な点がありまして。」
「妙な点?」
ヤサコが聞き返した。
「ええ。こういったメールは普通、完全に送信者が偽装されているはずなんですが、このメールの発信元を少し辿ってみると、すぐに本物の送信者が割り出せたんです。」
フミエが横でうなずいている。しかしフミエは口をとがらせていた。
「・・・つまり、すこし調べたらすぐ化けの皮がはがれたってことね。」
ヤサコが頭の中でアキラの言ったことを整理しながら聞きなおした。
「そういうこと。そしてその送信者って言うのが、ダイチだったのよ。沢口ダイチ。」
フミエがあっさりと言った。しかしヤサコは大いに驚いた。
「ダイチ君が!まさかダイチ君、最近大黒市でメタバグ集めができなくてお金に困ったから、こんなことをしてしまったの?」
「ばかね。いくらお金に困っているとはいえ、アイツはこんな犯罪行為に走るようなヤツじゃないわ。仮にアイツが犯人なら、こんな素人みたいなミスはしないはずだし。」
フミエが冷静に言う。それはダイチのことを誰よりも知っているからできる分析だった。
「ダイチさんは真犯人に送信者として偽装され、罪をなすりつけられるところだったんです。でも架空請求メールの場合、このような事例は珍しくありません。送信者の偽装なんて無作為に集めた個人

情報を使うからです。送信者に偽装された人は、自分の情報が使われていることに気付きません。だから偽装された人が罪に問われることはまずないのです。しかし今回は状況が少し違います。」

ヤサコはアキラの言っていることを何となく理解して、「どういうこと?」と聞いた。

「これ以上調べようとしても、真犯人のところへ辿り着けないからです。真犯人は相当な手練のようで、僕や姉がハッキングしようとしても、その痕跡をまったく掴めないのです。これははたから見れば、ダイチさんがメールの発信者で、発信元を偽装したがプログラムミスか何かでうまく偽装しきれなかった、ということになります。そうなればダイチさんが罪に問われる可能性は大いにあります。さらに問題なのは、狙われたのがダイチさんだった、ということです。」

ヤサコはダイチがピンチなのだということは理解した。

「何? 何が問題なの?」

と言うとフミエがそれに答えた。

「アイツ、大黒黒客で色々ないたずらをしていたでしょう? それで各方面から怒りをかっていたんでしょうね。一度ダイチに恨みを持つ子が、ダイチを送信者に偽装して、クラスの子の誹謗中傷メールをばらまいた事件が起こったの。アイツ先生や親に引っ張られたんだけど、結局潔白が証明されて冤罪だということがわかったわ。それに懲りてアイツ、メルアドとメガネ番号を変えて以来、ほんとに信頼できるヤツとしか連絡を取り合わなくなったし、個人情報漏洩対策に厳重にプロテクトをかけたの。だからアイツの情報をハッキングして送信者に偽装しようなんて、はっきり言って不可能よ。唯一ハッキングできるとすれば、アイツのプロテクトが甘くなっている、アイツと情報を共有しているメガネから。もしくはダイチが本当に信頼してるヤツが、メルアドを真犯人にリークした。それしか考えられないわ。」

「つまり、それができるのは・・・例えば大黒黒客のメンバーとか

？」

ヤサコが恐る恐る聞いた。それが事実ならば大黒黒客の他のメンバー。ガチャギリ、ナメッチ、デンパ、アキラの中の誰かがダイチをはめようとした、もしくは真犯人にダイチを売った、そういうことになる。

「まさか、そんな、ねえ？」

フミエが黙っているので、ヤサコはアキラの方を見ながら言った。

アキラは焦って、

「い、言っときますけど、僕じゃありませんよ！僕はダイチさんに何の恨みもありません！」

とヤサコの方を振り向いて叫んだ。

「何もアキラ君がやったなんて言ってないじゃない。」

ヤサコは少し笑いながらアキラをなだめた。アキラの顔が少し赤くなった。

「私もそうは思いたくないけど、黒客の誰かが絡んでる可能性は否定できないわ。デンパはともかく、ガチャギリは実利主義的なところがあるし、ナメッチは脅されたらノーとは言えないタチだしね。」

考え込んでいたフミエが口を開いた。

「そんな．．．ダイチ君は自分がはめられていること知っているの？」

ヤサコが必死に問いかける。

「知らないんじゃない？誰とも接触がなかったら知りようのないことだし。」

あくまで冷静だが、いつもの調子とは違うフミエの声だった。多分心の中では心配しているんだろうとヤサコは思った。

「じゃあ電話かメールで教えてあげたらいいじゃない！」

「言ったでしょう。ダイチのメルアドとメガネ番号を知ってるのは、アイツが信用している人間だけだって。このアキラでさえダイチからの連絡はガチャギリ経由で送られてきてたんだもの。そのガチャギリは真犯人との関わりを持っているかもしれないから、こっちか

ら接触するのはリスキーだしね。」
難しい顔をしながらフミエが言った。
「フミエちゃんは知らないの？」
ヤサコが不思議そうに訪ねる。
「前は知ってたけど、消したわ。」
「なんで？」
「アイツと連絡をとることなんてないからよ。」
きっぱりとフミエが言った。
「だったら直接ダイチ君に言ってあげましょう。このままほっとくなんてかわいそうだよ！」
ヤサコがそう訴えかけると、ため息をついてフミエの表情が柔らかくなった。
「まあ、仕方ないわね。自分が事件に巻き込まれていることに気付いてないで、今ものんきにマンガでも読んでいるアイツのマヌケな姿を想像すると、哀れみすら感じるし。中学校見学の前に、一仕事しますか！」
ピンポーン。ちょうどその時にチャイムが鳴った。家から飛び出した三人は、玄関の前にいたアイコの手を引っ張って、急いで階段を下りていった。

#2　犯人、沢口ダイチ　ｐａｒｔ３

一郎はハラケンの家のリビングのソファーに座った。一郎と同じくスーツ姿の男もその隣に腰を下ろした。テーブルを挟んで反対側のソファーにはハラケンとハラケンの母が座っている。本当はハラケンの叔母、原川玉子も同席するはずだったが、アルバイトが忙しいため来ることができなかった。一郎が初めに口を開いた。

「初めてお目にかかります、原川さん。私は株式会社メガマスで内部監査を担当しています、小此木と申します。彼は私と同じ内部監査の香川といいます。」

一郎は、隣に座る中背でひげをたくわえた男を手で指しながら言った。

「今日お伺いしたのは他でもありません。研一君からも聞いていると思いますが、葦原カンナさんの事件の訴訟に関することで、確認してもらいたいことがありまして。」

空気が張りつめた。ハラケンも緊張して顔がこわばっている。

「・・・私たちは研一君の思いを実現するために、できるかぎりの協力をしようと思っています。先日社長にこの訴訟に関して報告しましたが、裁判に持ち込むならできるかぎりの支援をすると社長は約束されました。もし訴訟を起こす場合、それにかかる費用はすべてメガマスが負担します。またメガマスからのサポート役として私とこの香川が研一君を補佐します。検察官の斡旋もいたします。我々メガマスは真実を明らかにすることに全力を尽くす所存であります。」

一郎が一気に言った。そこから少し間があった。

「そうですか。本当にありがとうございます。息子がご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。」

頭を下げながらハラケンの母が言った。ハラケンも一緒に頭を下げた。

「いえいえ。私は卒業式での研一君の答辞にいたく心を打たれました。だから彼に恩返しがしたいだけなんです。ところで研一君。葦原さんに君の気持ちを伝えてきたよ。」

ハラケンは身を乗り出した。

「カンナのおじさんやおばさんは、何と言っていましたか？」

「・・・私達は事件を隠蔽していた人達が裁かれることは望みますが、損害賠償を請求するつもりはありません。私たちは彼らに、私たちよりも、カンナや研一君に対して謝ってもらいたいのです。彼らが何度謝ったところでカンナは帰って来ません。だから、今を生きている研一君を傷つけ苦悩させたことの方が重要なのです。何よりもまずそれを優先して頂きたい・・・と。」

ハラケンは考え込んだ。しばらくして重い口を開いた。

「カンナのおじさんやおばさんは、また事件が掘り返されることを望んでいなかった・・・僕のわがままでまた事件と向き合わなくちゃいけなくなって、そんなことを言ったんじゃないんですか？もう事件のことは忘れたいから謝罪もいらないって・・・だとしたら僕のせいでおじさんやおばさんに嫌な思いをさせることになる。」

「そんなことはないよ。」

優しい声で一郎が遮った。

「葦原さんは言葉通りの気持ちなんだと思うよ。小学生である君の気持ちを傷つけた罪は、決して軽いものじゃない。むしろ感謝されているんじゃないかな。そこまでカンナ君のことを思う、君の気持ちに対して。」

ハラケンが少し安心したような表情になって、一郎もホッとした。

「君も手一杯になるだろうから、君の叔母さんで以前は僕の部下だった、原川玉子さんにも協力を頼みました。彼女は強引なところがあるけれど、思ったことは必ず実現させようとする強い意志をもっているから、きっと君の力になってくれると思う。」

ハラケンは強くうなずいた。

「では今後の流れの確認と、スケジュールを合わせたいと思います。

」

一郎の隣にいた香川がおもむろにファイルを取り出し、身を乗り出して言った。

#2　犯人、沢口ダイチ　part4

ヤサコとフミエとアイコとアキラの四人は鹿屋野神社に向かっていた。ダイチの家に行ったもののダイチは不在だったので、ダイチが行きそうな場所を推測して鹿屋野神社に行くことにしたのだ。石段をのぼると鳥居の下でひなたぼっこをしているダイチと、その横でぼーっと立っているデンパがいた。まだ桜が咲くには早いが、日なたは心地よい暖かさで、空は卒業式の日と同じように澄み渡っていた。ダイチはその心地よい気候の下でデンパと思い出話をしていた。四人が息を切らしながら石段をのぼりきると、ダイチは起き上がりながら言った。

「よお。お前ら何してるんだ?体力トレか?」

それを聞いてフミエは怒ったようにダイチに近づいて行き、

「ちょっとあんた!メガネ貸しなさい!」

と言うとダイチからメガネを奪い取った。

「おい!何すんだフミエ!返せよ!プライバシーの侵害だぞ!」

ダイチが怒って詰め寄ったが、それにかまわずフミエは何やら調べている。

「ちょっと!何よこれ!」

フミエが叫ぶと、ウィンドウをみんなに見せるように出した。そこにはダイチのメガネのメールのアプリケーションが開かれており、送信済みボックスと下書きボックスのところに、京子やアキラに送られてきたものと同じ架空請求メールが作成され、送信された形跡が残っていた。

「これって。まさか・・・」

ヤサコがつぶやいた。

「ええ。そのまさかよ!犯人はこいつ!ダイチだったのよ!あー!少しでもこいつをかばった私がばかだったわ!意味わかんない!なんでこんなことをしたのよ!さあ、こいつを警察に突き出すわよ!」

フミエに圧倒されたダイチは状況をイマイチ把握できていない様子で、目をまん丸に開いていた。
「意味がわからんのはこっちだ！一体何のことだ犯人って？それにこんなメール作った覚えはねえぞ！」
ダイチは気を取り直して言った。デンパは横で呆然としている。
「何？こんな証拠が揃っているのにしらばっくれる気？このばか！いい加減にしなさいよ！」
今にもダイチに飛びかかろうとするフミエをヤサコとアイコは必死で押さえた。そこにアキラが出て来て言った。
「ダイチさん。今あなたは架空請求の実行犯に仕立て上げられているのですよ。」
「何！？オレが？」
きょとんとした顔でダイチが言った。
「それってメールの送信者がオレに偽装されているってことか？」
ダイチが続けた。さすがに事態を飲み込むのは早い。
「かいつまんで言うとそういうことです。」
アキラがさばさばと答える。
「んなばかな！オレからそんなハッキングができる奴なんているわけねえ。オレメガネのプロテクトは完璧なはずだ！」
「だからアンタが犯人なんでしょ。メールを作った痕跡もあることだし。」
フミエはさっきより落ち着いた声で言った。
「ほんとにダイチ君がやったの？」
ヤサコが心配そうに問いかけた。
「濃厚よ！」
とフミエがそれに返した。
「だから違うって言ってんだろ！しっかし犯人どうやってハッキングしたんだ？送信者の偽装も、メール作成の痕跡を残すのも、不可能に近いはずなのに。」
ダイチが考え込んだ。

「まあ、仮にアンタが犯人じゃなくても、このままじゃアンタが逮捕されるわよ。証拠が揃い過ぎてるもの。」
またフミエが口を開いた。
「そんな・・・何かダイチの潔白を証明する方法はないの？」
デンパが泣きそうな声で言った。
「真犯人を見つけたらいいのよ。もっとも、私やアキラが情報をハッキングしようとしたけど何も掴めなかったわ。真犯人の電脳力はきっと相当なものに違いないわ。」
フミエが今度は深刻な顔つきで言った。
「じゃあどうすりゃいいんだよ？」
ダイチが聞き返す。状況は圧倒的にダイチが不利だった。
「私には真犯人の目星はついているけど。アンタのメガネからハッキングするなんてどんな腕の良いハッカーでも至難の業だわ。でもアンタのプロテクトが甘い、例えば情報を共有している人間なら、それほど難しくない・・・」
一瞬の静寂があった。
「お前、黒客のメンバーを疑ってるのか？」
ダイチがフミエをにらみつけた。
「私だってそう思いたくはないわ。でも可能性としては考えられるってことよ。デンパやアキラはともかく、ガチャやナメッチの性格を考えたらね。」
「ふざけるな！アイツらはオレの友達なんだぞ！そんなことするはずがねえ！」
ダイチが叫んだ。本当に怒っているようだった。ダイチは大黒黒客の初代リーダーだったのだが、去年の夏はイサコに乗っ取られ、それにガチャギリとナメッチが引っ付いていた形だった。あの事件の後、イサコが引っ越していったためダイチがリーダーに返り咲いたのだが、クラブの資金源となるメタバグがとれなくなったため、事実上の活動休止状態になっていた。そうは言っても、いつもダイチと一緒にいるのは黒客のメンバーだった。

「まあ、もし黒客のメンバーが絡んでないとしても、それはそれで厄介よ。こんな手の込んだことをするなんて、真犯人の狙いはお金じゃない、アンタってことだからね。相当ツケがまわってきてるんじゃない？」

今度は少し笑いながらフミエは言った。

「とにかくこのままじっとしていてもラチがあかん。しかしオレのメガネは完全に犯人に掌握されてるみたいだし、お前らが何一つ情報を掴めない相手じゃ手の打ちようがない。一体どうすればいいんだー！？」

ダイチが頭を抱えて叫んだ。

「もっと僕らよりメガネに長けた人に相談するしか方法はないんじゃないですか？」

そこにアキラが口を挟んだ。

「うーん。そうだ！メガバアならなんとかしてくれるんじゃないか？」

ダイチはヤサコの方を見て言った。しかしヤサコは首を横に振った。

「ダメ。オババは昨日から町内会の旅行に行ってるの。帰ってくるのはあさってよ。」

その場の全員が黙り込んだ。しばらくしてヤサコが叫んだ。

「ああ！いい人思いついたわ。メガネに詳しくて、そして私たちと知り合いの人。」

「誰だそいつは？」

首を突き出してダイチが言った。ヤサコが説明するとみんな納得して、ゾロゾロと鹿屋野神社の石段を下りて行った。

#2　犯人、沢口ダイチ　part5

一郎と香川はハラケンの家での打ち合わせを終え、本社へと戻るところだった。一郎の運転で大黒市内を車で走って行く途中、助手席にいた香川が切り出した。

「しっかし社長も気前がいい。もし裁判でメガマス職員が有罪になったら、引責辞任は免れないっていうのに。」

「まあまあ。メガマスの責任者としては当然のことだと思うけどね。大体イマーゴを含めたメガネの不具合と、これまでの事件を公表すれば世間の風当たりも強くなる。どっちにしろ辞任は覚悟していたんだろう。」

一郎が香川に言い聞かすように言った。今回の訴訟は実質的にメガマス主導で運ぶことになっている。メガマス社長の考えは、隠蔽工作を行った幹部達をメガマスとしての独自の基準で裁くのではなく、社会の基準で裁くことによって、社会に対する責任、そして遺族に対する責任を果たせるというもので、一郎もその考えに同感だった。

「でも、僕たちの仕事もつらいですよねえ。僕たちが働けば働くほど、我が社を不利にしていくんですから。もしこれでメガマスがつぶれるなんてことになったら、ああ、この年で再就職先を探さないといけないし、会社の同僚からは憎まれるし。」

ため息をつきながら香川が言った。

「おいおい。人生には仕事より大切なものがあるだろう。保身派の連中の隠蔽は許されるものではないし、それで小学生の子どもが心に深い傷を負ったんだ。君にだって子どもがいるじゃないか。メガネは子ども達を中心に愛されている。メガマスに勤める以上、子どもの安全を守ることを考えないとな。」

保身派の連中というのはメガネに関する都合の悪い情報を隠蔽し、自分たちの権益を守ろうとしていた幹部のことである。もちろんこれにはカンナの事件を隠蔽した人間も含まれる。一連の隠蔽がメガ

マス社長の指示によるものかどうかは定かではないが、一郎は社長の関与はないものと信じている。そうでなければ、訴訟に対してこれほど積極的な支援なんてできないだろうと考えるからだ。

「もちろんそうですよ。しかし自分が職を失ったら、妻も子どももどうやって養っていけるのだろうって、ふと考えてしまいません？小此木さんだってそうでしょう？」

一郎が横目で香川を見た。

「…どうした？酒でも入ってるのか？まあ、僕はあんまりそんなこと考えないな。家族といる時間は幸せだし、家族のことを考えるだけで勇気がわいてくる。そうやって悪い方へ悪い方へと考えるのは、ある意味不幸なことだと思うけど。」

「小此木さんはプラス思考ですね。」

「まあ、そうかもしれないね。大体メガマスがつぶれるなんて有り得ないだろ。今や全世界に広がるメガネネットワークに関する権利を握っているんだからな。メガマスが無くなれば、全世界の社会機能が停止すると言ってもいい。」

「よくよく考えてみればすごい会社ですよね。世界を操っているんですから…ところで妙な噂を耳にしたんですが。」

香川が急に小声になった。

「妙な噂？」

信号待ちで車を止めた一郎が香川の目を見た。

「ええ。メガマスがつぶれるっていうのは言い過ぎでしたけど、メガマスが買収されるっていう話があるみたいです。ちょうど、メガマスがコイルスを買収したように。」

「ええ？そんなことをできる企業があるのかい？メガマスを買収だなんて、どれほど資金が必要なのか想像すらできないけど。」

一郎はハナから信じる気はなかった。それほどメガマスの資本は巨大化しているのである。

「それがですね。メガネの不具合や事件に関する情報を知っている連中が外部にいるみたいでして、それをメガマスが公表した際、暴

落すると思われる株を買い集めようとしているみたいなんです。」
「何だそれ?インサイダー取引じゃないか。それでもメガマスを傘下に収めるのに必要な資金力を持っている企業なんて・・」
「もちろん外資です。世界的に有名なコンピューター会社がその噂の筆頭なんですが、他にも色々名前があがっているみたいです。それに株価の下落は今に始まったことじゃないのは小此木さんだって知っているでしょう?」
車はメガマスの本社がある丘の上に続く上り坂に入っていた。
「ああ、去年の夏の2・0による強制フォーマットを引き金に、メガマスへの信頼が揺らいでいるのは知っているよ。それに古い空間が完全に消去されてメタバグもでなくなったから、子どもたちのメガネへの関心が下がったのもあるだろうね。つまりメガマスは今下火ってわけだ。このまま経営状態が悪化すれば、大量リストラならあるかもしれないねえ。」
一郎がため息まじりに言った。
「ええ。でも今まで他のコンピューター会社がメガネより優れる代替ハードウェアの開発に着手していましたが、いっこうに成果がでないところを見ると、まだまだメガマスも安泰だと思いますが。ちょっと気になる話だったんで。」
一郎は車をメガマスの地下駐車場に入れるところだった。
「その話、誰に聞いた?」
「誰だったっけなー?酒の席で聞いた話ということは覚えているんですが、誰から聞いたのかはちょっと覚えてません。」
「そうか。」
車を停めて二人は車を降りた。今からカンナの事件の捜査資料に目を通さなければならなかった。
「まあ、所詮噂ですよ。忘れてください。」
香川がそう言うと二人は奥にあるエレベーターに向かって歩き出した。

#2　犯人、沢口ダイチ　ｐａｒｔ6

ヤサコ達は商店街に到着した。目的地は郵便局の隣にある花屋である。以前ハラケンがカンナに供える花を買いに来ていた店だ。全員入ると邪魔になるのでヤサコとフミエとダイチだけが店の中に入って行った。

「オバちゃん！」

ヤサコが店の中で花の手入れをしていた女の人に呼びかけた。美人でスタイルが良く、エプロン姿が似合うその女性は、ヤサコ達を見ると笑顔で歩み寄った。

「あら、アンタ達久しぶりじゃない。今日はどうしたの？って言うかアンタ達が一緒にいるなんて珍しいわね。卒業を期に仲直りでもしたの？」

その女性、原川玉子、通称オバちゃんは元空間管理室の顧問で、フミエやダイチを追い回していた。空間管理室とは違法な空間やウィルスから市民を守る役目を負っており、玉子は持ち前の行動力でどんどん古い空間を消去していったが、同時に違法なソフトウェアをインストールしているメガネの取り締まりを行っていたので、大黒市のメガネ使いの子ども達には恐れられていた。しかしあの事件で玉子はサッチーを違法改造したあげく暴走させ、空間管理室を解雇された。玉子はあの一連の事件に深く関わっており、事件を終結させることが自分の使命だと思っていた。事件が解決した後は空間管理室に未練はないらしく、普通の高校生として過ごしており、このように花屋でアルバイトにいそしんでいるという話を、ヤサコ達はハラケンから聞いていた。

「そんなんじゃねえよ。それより今はそれどころじゃねえんだ。元空間管理室顧問のオバちゃんにどうしても解決してほしい問題があるんだ。今時間とれねえかな？」

ダイチが必死な表情で訪ねた。玉子もただ事じゃないことを悟った。

「…今はちょっと忙しいからムリね。でもあと一時間もすれば昼休みだからその時に聞いてあげてもいいけど。」
玉子が言うとダイチの表情が明るくなった。
「おおし、頼むぜ！じゃあ一時間後また来るぜ！」
そう言うとダイチは店の外に出て行った。残ったヤサコとフミエに玉子が聞いた。
「ねえ、アイツに何があったの？」
「…詳しいことは後で話すけど、今朝架空請求メールがばらまかれて、送信者がアイツに偽装されていたのよ。しかもタチが悪いことに、こっちから情報を引き出そうとしても何の痕跡も見つからなかったわ。このままじゃアイツが犯人として逮捕されてしまうってわけ。」
フミエが説明した。もうダイチを疑っているわけじゃないようだ。
「…なるほど、そういうことか。それでアンタとしてはダイチがほっとけなくて、協力してあげてると。」
玉子が笑いながらからかうように言った。
「そんなんじゃないわよ！ダイチが泣きついてきたから協力してあげてるだけ！第一ダイチを助けようって言い出したのはヤサコよ。ヤサコがダイチのところに行くってきかないから私もついていっただけよ。」
顔を赤くしながらフミエが一気にまくしたてた。言い終わると怒ったように店を出て行った。
「相変わらずなのね、アンタ達。ところで、ケンちゃんとアンタのお父さんが協力して訴訟を起こすって話、聞いてるわよね？」
玉子が残ったヤサコに向かって言った。
「ええ。今日はハラケン、そのことで用事があるって言ってたけど。」
「まあ、今日は打ち合わせみたいなものね。私も行く予定だったけど、今日はどうしてもバイト休めなかったから。多分アンタにも協力をお願いするかもしれないから、その時はよろしくね。じゃあま

た後でね。」
「うん。」
ヤサコはうなずくと店を出て行った。

一時間後、ヤサコ達は花屋の近くのファミレスにいた。玉子が昼休みに入って、昼食にちょうどいい時間になったからだ。全員ひととおり注文を終えると、ダイチが改めて頭を下げた。
「今日はご協力ありがとうございます。ぜひあなたの力をもってして、僕の窮地をお救いください。お願いします。」
玉子がびっくりした顔でダイチを見た。玉子がこんな改まったダイチを見るのは初めてだったからだ。ダイチは割と柔軟な性格で、必要とあらば下からものを頼むこともいとわない。
「まあいいってことよ。あの事件の時、私はアンタに協力してもらっているからね。それで、話はさっき簡単に聞かせてもらったけど、アンタは厳重にプロテクトをしていたのに情報を盗まれて、送信者偽装に利用されてしまった。しかもその犯人の情報は全く掴めない。そういうことね？」
ダイチが大きくうなずいた。
「そうです。ハッキングに詳しい玉子さんなら、犯人やその方法もわかると思いましてお願いしている次第であります。」
頭を下げながらダイチがそういうと、玉子はダイチからメガネを預かって色々調べてみた。しかしダイチを潔白にするような証拠は何も見つからなかった。その間におのおのが頼んだ料理が来た。
「確かにアンタのメガネからハッキングするのは難しそうね。しかも犯人の痕跡もまったく残っていないし、アンタが気付かないのもムリはないわ。そういえば口座番号は確認したの？あんた電脳口座持っているんでしょう？」
電脳口座とは電脳世界で流通している電子マネーが収められている口座のことである。例えばメガネの有償自動修復ダウンロード費用もここから引き出されるし、メタバグを換金したときもここに電子

マネーがたまる。基本的にメガネユーザーは最低一つ以上の電脳口座を有している。それを統括しているのが、メガマス傘下の大黒銀行である。

「いや、確認してなかったぜ。ええと、さっきのメールに載っていた口座番号がこれで、これがオレの口座番号で……やっぱオレの口座番号がメールに載せられてやがる！」

「決まりね。犯人の目的はお金じゃなくてアンタ。日頃の行いが悪かったんだからしょうがないじゃない。」

フミエがスパゲッティをほおばりながらさらっと言った。

「しょうがなくねえ！おいオバちゃん！なんとかそいつを突き止められねえかな？」

ダイチが玉子の肩をつかんで涙目ですがりついた。

「しかしこれは私でも突き止められないわ。こんな完璧なハッキングは見たことがない。残念だけど……」

ダイチは今度は怒った顔で玉子に詰め寄った。

「何だよ！それなら空間管理室のコネでよ、ブラックリストでも他人の個人情報でも使って、手当り次第に探してくれや！」

「あのねえ！空間管理室のブラックリストにはアンタ達しか載っていないし、他人の個人情報を盗み見るとかそんな違法な手段を使って、管理室は治安を維持しようとしてるわけじゃないわ！私は合法的な理念に基づいて活動していたのよ。」

今度は玉子が怒った。玉子の言葉を聞いたヤサコは「どこが？」と思って吹き出しそうになった。

「とにかく、大黒銀行に事情を説明して、アンタの電脳口座を一時的に停止させないと。これ以上被害者を出さないことに努めなくちゃ。これまでで既に被害者がいるかもしれないし。」

玉子は腕時計を確認した。その時メールが送信されて三時間以上が経過していた。

「その心配はいらねえ。」

ダイチが右手を開いて突き出した。

「どうして？」
玉子が不思議そうに訪ねる。
「今残高を確認したが、オレの愛しいお小遣いちゃんは一円たりとも増えていなかった。」
「ああ、そう。」
全員からため息がもれた。その後玉子が大黒銀行に電話し、ダイチが本人確認の証明書を送信して、ダイチの電脳口座をシャットアウトした。
「これで被害者が出る心配はなくなったと。あとはこの被害者をどうするかね。」
玉子はダイチを見ながら言った。
「警察に連れて行きましょう。オバちゃんが説明してくれれば警察の人も信じてくれるかもしれないし。」
フミエが提案した。今の状況は客観的に見ればダイチが犯人にされるのが濃厚で、小学生ばかり警察にかけこんで事情を説明しても、罪を犯してしまった友達をかばっていると思われるだけである。そこで玉子のような大人（まだ十七歳だが）がきちんと説明してくれれば警察も取りあってくれるだろうということだった。
「そうね。それが最善の方法だわ。アンタもそれで異存はないでしょう？」
「わーったよ。オバちゃんが警察を説き伏せてくれるのなら行ってやるよ。」
黙っていたダイチが小さい声でつぶやく。一同は警察署へと向かうことになった。

#2　犯人、沢口ダイチ　ｐａｒｔ7

ヤサコ達は大黒警察署に到着した。玉子が受付で事情を話すと一同は会議室に通された。しばらくすると二十代半ばぐらいのさわやかな青年が会議室に入って来た。

「どうも、はじめまして。僕は大黒警察電脳犯罪対策係の竹下直樹と申します。話は聞きましたが、架空請求メールが出回っているということで、今他の者が確認を急いでいますが、ご通報いただきまして感謝いたします。」

全員頭を下げて会釈した。

「ふーん。警察に電脳犯罪対策係なんてもんがあったのか。」

ダイチが興味津々な様子で訪ねた。他の子ども達もそんな部署が警察内にあることを初めて知った。

「そうだね。メガネを取り締まる組織なら、君たちには空間管理室の方がおなじみかもしれないね。空間管理室は主に空間の乱れを直したり、危険なコンピューターウィルスから市民を守るのが仕事だけど、僕達電脳犯罪対策係は、ハッキングやこのような架空請求などの犯罪から市民を守ることが仕事なんだ。と言っても、大黒市ではそんな犯罪は少ないし、空間がよく乱れるから、空間管理室の方が忙しいんだけどね。でも最近古い空間がなくなってしまったからか、僕達が扱うような犯罪が増えてきてはいるんだ。それに空間管理室もサッチーを暴走させたりして批判を浴びたからか、最近は活動を制限しているみたいだけど。」

直樹の話を聞いた玉子は肩身の狭い思いをしてうつむいた。それを見ていたヤサコは少し可笑しくなった。空間管理室のサッチーを違法改造して暴走させたのは玉子である。それが原因で玉子は空間管理室を追われる形になったのだが、間違ったことをしたとは思っていなかった。

「問題は彼が犯人に狙われているということなのですが。」

気を取り直した玉子がダイチの方を指しながら言った。その後直樹にこれまでの経過と推理を子ども達それぞれが説明し、直樹はそれをメモしていった。

「…大体事情はわかりました。銀行口座の件も感謝しなくてはいけませんね。おかげで被害は出ていないと思いますが、念のため大黒銀行さんにも連絡を入れておきます。ダイチ君、ちょっとメガネを貸してもらえるかな？君が罪を犯すようには見えないし、話を聞くかぎり君は被害者のようだけど、一応確認をさせてほしいんだ。僕なら真犯人の痕跡を見つけられるかもしれない。」

直樹はダイチからメガネを受け取ると、手際よく起動させて何やら調べ始めた。

「…ところで、電脳犯罪対策係というのはどのくらいの規模でやっているんでしょうか？」

玉子が作業中の直樹に話しかけた。玉子は空間管理室と同じくメガネを取り締まる組織としての電脳犯罪対策係が気になった。玉子が空間管理室にいた頃はこの部署との関わりはほとんどなかったのだ。

「僕を含めて五人です。ただ僕以外の捜査員はメガネにあまり精通していません。コンピューターには強く、ハッキングなどは結構詳しいのですが、いわゆるメガネ世代ではないんです。この部署の中でメガネで遊んでいたのは僕ぐらいのものなんですよ。だから僕は君たちのように、メガネで遊ぶ子ども達の気持ちもよくわかる。わかるよ。ダイチ君は本当に無実だということは。僕だってよくメガネを使っていたずらをしたけど、法に触れるようなことはしなかった。メガネで遊ぶ子どもって自然とそういう線引きができるんだよね。僭越ながらそういう経験が評価されて、この部署では僕がまとめ役になっています。」

「それって係長っていうことですか？」

ヤサコが訪ねた。他の子ども達もみんな直樹に好感を持った。ダイチも自分を理解してくれる数少ない大人として直樹に感謝し、それでいて子どもを守ってくれるという頼もしさを感じ、あこがれの目

で見つめていた。
「一応そうなるね。でもこの部署には特別顧問を招いていまして、僕達の手に負えないような事件の捜査にはご協力いただいております。電脳科学の専門家で、ハッキングにも詳しい小野先生という方なんですけど。」
「…小野先生というと確か、このあたりの大学で電脳科学に関する講義をしている教授じゃありませんでしたか?それに確か、有名な論文も発表されていたような…」
玉子が思い出しながら言った。
「ええ、そうです。結構テレビにも出演していらっしゃって、目にされる機会も多いと思います。今日はあいにく来られてませんが。」
そう答えて直樹は作業に集中した。しばらくするとその手が止まった。
「ん?ダイチ君。このメガネ、ウイルスが潜んでいるみたいだよ。」
直樹がウィンドウを示した。
「ウイルス?」
ダイチがきょとんとした顔でそれを眺めながら言った。
「心当たりは?」
直樹がダイチを見ながら訪ねる。
「いや、わからねえ。いつからこんなものが入っていたんだ?」
腕を組み、考え込みながらダイチがつぶやいた。
「でもセキュリティソフトは万全のようだね。となると、このウイルスはネットワーク経由で侵入したとは考えにくいね。」
直樹も考えこむように言った。
「どんなウイルスなんスか?」
ダイチが訪ねる。
「今は潜伏しているだけだから詳しく調べてみないとわからない。でもこれは、このメガネがハッキングされた時に注入されたものと考えるべきだろうね。」
直樹が再びメガネを操作しはじめた。

「と、いうことはつまり・・・」
「このウイルスに、真犯人への手がかりが残されているかもしれないということだ。」
直樹がそういうと、ダイチは「よっしゃー」とガッツポーズした。
その場にいた全員もほっと息をついた。これでダイチの無実は証明されたわけだ。
「ダイチ君。このメガネ少しの間預かってもいいかな?さっき言った特別顧問の先生に解析してもらおうと思うんだ。そしたら真犯人も割り出せるかもしれない。」
直樹が言うとダイチはしばらく考えこんだ。
「・・・いいぜ。ただし条件がある。」
「条件?」
直樹が聞き返す。他の子ども達もきょとんとしている。
「この一件。オレの親には内緒にしていてほしいんだ。またメガネが原因でいざこざに巻き込まれたと知ったら、今度こそメガネ取り上げられるかもしれねえんだ。」
ダイチが真剣に言った。そこにフミエが口を挟んだ。
「何よそれ?アンタ、誰かに狙われているのかもしれないのよ。そんなこと警察の人が認めるわけないじゃない。いっそのことメガネ遊びをやめた方がいいんじゃない?」
「いいや、その条件飲もう。もし犯人が君を狙っているとしても、本当に恨みがあるならもっと手っ取り早い方法でくるはずだ。君はもっとメガネで遊びたいんだろう?むしろ君にとってはメガネを取り上げられる方が恐怖なんじゃないか?」
直樹はすんなりとダイチの言い分を認めた。
「その通りだ。さすがオレらの気持ちをよく理解していらっしゃる。」
ダイチがふんぞり返った。フミエは直樹の予想外の言葉にあんぐりしている。
「しかし本当にいいんですか?親御さんにも知らせておかないと、

後々大事になった時にあなたが責任をとることになるんじゃ・・」
玉子が心配そうな声で直樹に言った。
「大丈夫ですよ。親御さんの世代はほとんどメガネのことを知らない人達なので、お知らせしなくてもあまり変わらないと思います。むしろそのことで子ども達の遊びが制限されてしまう方が大事ですよ。幸い詐欺メールの被害者も出ていませんし、僕達が責任をもって犯人を捜しますので。」
直樹の言葉に玉子も反論できなかった。確かに親の世代はメガマスに勤めている人以外、メガネに関する知識をほとんど持っていない。あの事件のでイサコがあっちに行ってしまった時、事実隠蔽のためにメガマスが流した欺瞞情報を親達はすっかり信じて、子ども達からメガネを取り上げてしまったこともあった。それで子ども達が不幸になるというのは、ある意味正論だった。実際ダイチは何の罪を犯したわけではない。
「銀行口座の方は、落ち着いたら僕が大黒銀行に連絡して元に戻してもらいましょう。後は君との連絡手段なんだけど、君のメガネは預かってしまうからなあ。家電じゃまずいよね?」
直樹がダイチに相談した。
「それはスッゲーまずい。ならこのデンパのメガネにかけてくれよ。いいだろ、デンパ?」
「うん。別にいいよ。」
デンパがのんびりとした声で答えた。その後デンパのメガネ番号を直樹に渡した。
「よし、これでひとまずオッケーだね。解析が終わったらまた連絡するから、悪いけど警察署まで来てください。」
直樹が会議室の扉を開けながら言った。
「今日はありごとうございました。」
一同頭を下げて警察署を後にした。
「良かったわね。あんな理解のある人に担当してもらえて。」
玉子がそう声をかけると、ダイチも「おう!」と上機嫌で返した。

「ねえオバちゃん。さっきこいつのメガネを調べた時、ウイルスなんていたの？」
不思議そうにフミエが玉子に訪ねる。
「私が見た時は見つからなかったわ。でも潜伏中のコンピューターウイルスって、得てして見つけにくいものよ。それをあの短時間で見つけ出すなんて、あの直樹って人、さすがに係長を任されているだけあるわ。」
玉子がそう答えると、フミエも「ふーん」と納得したようだった。
「じゃあ、私はバイトに戻るわ。また困ったことがあったら相談してね。」
そう言うと玉子は小走りなった。
「オバちゃん！ありがとう！」
全員で言うと玉子は振り返り手を振ったあと、角を曲がっていった。
子ども達だけになると微妙な静けさに包まれた。
「…おい。今日はありがとな。お前らが来なかったら、オレはどうなっていたかわからなかったぜ。」
沈黙を破ってダイチが小さな声でつぶやいた。ヤサコは多分フミエに向かって言っているんだろうと思った。
「…まあ、今日のことは貸しってことにしとくわ。今度何かおごってよね。」
フミエが言った。ダイチはまた小さな声で「おう。」といだけ言うとデンパとアキラと一緒に鹿屋野神社の方に曲がっていった。
「ねえ？中学校見学はどうするの？」
三人になるとアイコが言った。
「ああ！すっかり忘れてたわ！今は…二時を回ったところね。今からならまだまだ見られるわ！行きましょう！」
そう言うとフミエは小走りになった。ヤサコとアイコも小さく息をついて一緒に小走りになり、中学校に向かった。その横を黒いスポーツカーが走り抜けていったことなど気にも留めずに…

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ1

「新たな都市伝説によると、枯渇したはずのメタバグを異空間から引き出す暗号屋があらわれたそうです。」

ヤサコは一郎とともにハラケンの家に行くことになった。事の経過は架空請求事件の夜の小此木家の食卓の会話までさかのぼる。

「‥それでダイチ君のメガネを警察の人に見てもらったら、真犯人のハッキングがした痕が見つかって、ダイチ君の無実が証明されたの。でも真犯人はまだ割り出せていないけど。」

ヤサコは一郎に架空請求メールのことを話していくうちダイチのことまでしゃべってしまい、しまったと思った。ダイチは警察に口止めを願うほど事件に巻き込まれたことを親に知られたくはなかったのに、あっさり自分が親にしゃべってしまったからだ。ヤサコの両親とダイチの両親は面識もないのだが、噂が広まるのは意外と早い。人づてでダイチの両親の耳に入るのではないかとヤサコは心配した。

「まあ、何もなくて済んで良かったじゃないか。被害者がでたわけでもないんだろう?メガマスにも一応警察から連絡が来たみたいだけど、大きな混乱はなかったようだ。しかし今時架空請求メールなんて珍しいなあ。」

一郎がビールを片手に懐かしいようにつぶやいた。感心するポイントが違ってるとヤサコは思った。ここは冷静に対処した子ども達や玉子を評価するところだろうと思っていたからだ。

「それって二、三年前に流行ったんじゃなかった?」

ヤサコの母、静江が一郎に問いかけた。静江はメガネをを使わないので、メガネの世界の事件もうっすらとしか記憶にない。

「ああ。金沢支社に勤めていた時だった。毎日のようにメールが出回って、注意を呼びかけているにも関わらず被害者が続出した。しかも優子の言うような送信者の偽装が行われていたから、なかなか

犯人に辿り着かなかった。金沢支社は事件の対応でパンク状態にもなったよ。大黒市ではおばあちゃんが一役買ってくれたからそんなに被害はでなかったけど。」

ヤサコはそれを聞いて、メガばあが豪語していたことはあながち嘘でないことを知り、もうちょっとリスペクトしようと思った。

「でも途端に聞かくなったわね。架空請求なんて。」

静江が一郎のビールをつぎながら言った。

「ああ。お年寄りの意識が上がったっていうのもあるけど、メガマスが新しい検閲ソフトを開発したからね。そのソフトのおかげで、送信者やサーバーを偽装しても一発で元の作成者を突き止められるようになったんだ。今回もそのソフトを使えば真犯人だってわかるんじゃないかなあ？」

一郎が軽い調子で言った。しかしヤサコは腑に落ちなかった。そんな簡単に真犯人がわかるなら、直樹ならすぐにそれを使って割り出せたはずだと思ったからだ。

「まあそれはともかく、優子。今日研一君の訴訟のことで検察の先生に連絡をとったんだが、あさってに研一君の家で打ち合わせをすることになった。」

「うん。」

一郎の話を聞きながらヤサコは相づちを打った。

「検察の先生はぜひとも優子にも来てほしいそうだ。」

「あら、どうして？」

ヤサコではなく静江が言った。

「検察の先生にもカンナ君の事件の概要は伝えてあるんだけど、まずは電脳コイル現象というものがどのようなものなのか明らかにしたいみたいで、優子ならそれについて詳しくわかるだろうと思ったそうだ。あの時のことを振り返るのはお前も嫌だろうからムリにとは言わないけど。」

電脳コイル現象と聞いて、ヤサコはヌル達に襲われた時のことを思い出し、ハラケンを助けに電脳体を分離させたことも鮮明に甦って

きた。あの出来事がつらいものだったとは思っていなかったが、なんとなく切ない気持ちになった。それはあの時のハラケンへの告白が伝わっていなかったことが原因かもしれない。そしてそれをハラケンの前で思い出すことも気まずいような気がした。しかしヤサコはハラケンにいつでも協力していいと言っていたので、断るわけにもいかなかった。それに何より、それでハラケンを救えるなら、という思いがあった。

「いいわ。私のできることならどんなことでも協力する。」

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ2

かくしてハラケンの家の前まで一郎とやって来たヤサコだったが、ハラケンの家に入るのはこれが初めてだったのでドキドキしていた。そんなことを知る由もない一郎がチャイムを鳴らすと、ハラケンが応対に出て来た。

「おはようございます、おじさん。それにヤサコ、来てくれてありがとう。」

優しいハラケンの声を久しぶりに聞いたヤサコも笑顔で返した。

「もう検察の先生は見えていますので、どうぞあがってください。」

ハラケンが丁寧にうながし、二人はリビングに向かった。リビングに入るとソファーに腰掛けていた男の人がおもむろに立ち上がった。

「はじめまして。検事の桜井です。よろしくお願いします。」

その挨拶に対し一郎も頭を下げた。

「メガマス内部監査の小此木です。こちらは娘の優子です。よろしくお願いします。」

一郎と桜井は顔を合わせるのは初めてだった。ヤサコも桜井に対し会釈した。桜井はスーツこそ着ているものの、目つきが鋭く、無精ひげを生やしており、どこかぶっきらぼうで、一歩間違えるとそっち系の人にも見える。検察や弁護士というとスマートで知的なイメージがあったヤサコは、それを壊されてがっかりした。

「おじさんはあちらにどうぞ。」

ハラケンが部屋の上座にあたる桜井の隣を指しながら一郎に言った。今日は香川が来ていない。ヤサコがハラケンの方を見るとそこには玉子が立っており、ヤサコと目が合うと「よっ」と言うように片手をあげた。ハラケンの両親は不在のようだった。

「えーっと。では打ち合わせを始めたいのですが、ではまず桜井さんからどうぞ。」

全員が席についたところで一郎が切り出した。

「えーっ。このたびはご依頼いただきありがとうございます。先に前置きをさせていただいますと、我々検察は裁判所が罪人をそれ相応の刑罰でもって裁くための証拠を提示するのが役目です。弁護士と違うのは絶対に裁判に負けてはいけないことです。罪人が裁かれない世の中ほどばかなものはありませんから。さて今回の事件ですが、聞いたところによると被告であるメガマス旧幹部が隠蔽工作を行ったというのは疑いのない事実でしょう。」

桜井の声はいかついが威厳があった。そこには絶対に罪人を見逃すまいという執念もにじみ出ており、それが彼のポリシーでもあるかのようだった。

「では、裁判で勝つ見込みは高いと。」

玉子が桜井に負けないくらいの厳かな声で言った。ハラケンやヤサコも桜井が隠蔽工作は事実であると断言したので少し安心した。

「問題は、事実はそうだとしても裁判というものは出て来た証拠だけで勝負しなければならないところです。そこに推測や情の入る余地はありません。子どもたちの前なんで難しい話は置いておきますが、状況はあまり有利とは言えないですね。そもそも連中は逮捕、あるいは書類送検すらされていません。聞くところによると警察の幹部も一枚噛んでいるようで。このまま検察官送致が行われなければ、私としても正式に動くことができません。まずは警察の協力のもと、逮捕や書類送検が可能なほどの証拠を集める必要があります。そうして初めて、我々が勝負できるのです。研一君の集めたデータは貴重な証拠になりますが、まだまだ初歩的な段階ですね。」

桜井が両手を組んで一点を見つめながら言った。その言葉にハラケンとヤサコは厳しい現実を思い知った。

「先生は電脳コイル現象に着目されていると伺いましたが、それを解明することで裁判は有利に運べるんですか？」

玉子が再度桜井に迫った。

「これがわかったからといって裁判をうまく運べるとは言い切れません。しかしこの現象が葦原カンナさんの交通事故の原因となった

ということは鍵となるでしょう。警察の捜査資料にそんなこと一言も書いていませんからね。つまり、あの交通事故の真相を明らかにすることが大きな前進につながると僕は考えています。事件の真相は研一君のメガネのデータによって実証されたということですが、それだけでは裁判で勝つには少し弱い。実はメガネのデータというのは裁判であまり重要視されていないんです。ねつ造が可能なものですから。電脳コイル現象というものが世間に知られないまま終息した今となっては、再現、シミュレーションが必要なんです。」

それを聞いた玉子、ハラケン、ヤサコの三人ははっと顔をあげた。電脳コイル現象を再現するということは、もう一度あっちと呼ばれた空間や電脳体と肉体を分離させる装置であるヌルを作り出さなければならないということだ。

「シミュレーションって、そんなことが可能なんですか？」

玉子が少しうわずった声で訪ねた。

「可能だ。メガマスにはあの事件の時に収集されたデータと、調査によって発見されたコイルス社の機密文書がある。それらとメガマスの技術を使えば、あの空間とまったく同じものが作れる。そして既にその大部分はもう完成している。メガマスは今回の訴訟を立ち上げる以前から、コイルドメインの研究をしようとしていたんだ。もちろん再び暴走しないように最高レベルのセキュリティを敷いてね。ちなみにこのことは機密事項だから、他言はしないようにお願いしたい。」

桜井の隣の一郎が説明した。このことに玉子は驚いた。コイルドメインの暴走があの事件の原因だったわけだが、再びそれと同じことが起きないとはいくらメガマスがセキュリティを敷いているとはいえ言い切れない。玉子は自分が空間管理室にいればそれに断固として反対しただろうと思った。

「小此木さんはその研究に賛成だったんですか？」

玉子は一郎に迫った。玉子は、あの事件の真相をよく知る一郎は自分と同じ考えだっただろうと思ったからだ。

「…僕は正直あんまり乗り気じゃなかったな。君の言いたいことはわかるよ。あの空間を再現するのは危険がつきまとうって。僕もそう考えていた。しかしこれは社長命令だった。あの事件の真相を明らかにするためには、あの空間の再現と研究が必要だとね。もちろんメガマスとしても、あの空間の有効的な活用法を見いだしたいっていうのもあるけど。」

一郎が申し訳なさそうに言った。空間管理室で上司と部下の関係だった二人は、お互いのことを多少なりとも理解していた。だからこそ玉子は、一郎がその研究の片棒担ぐことが信じられなかった。

「話を戻しましょう。僕としてはその研究中の空間を使って電脳コイル現象の実験を行いたいと思っています。そこで優子さん、あなたに協力をお願いしたいのです。聞くところによるとあなたは葦原カンナさんと同じく、イマーゴを持っているそうで…」

桜井がヤサコを見ながら言った。ヤサコはイマーゴと言う言葉自体、久しぶりに耳にした。確かにあの事件で自分がイマーゴを持っていることにヤサコは気付いた。しかしあの事件以来古い空間がほとんど消去されたので、イマーゴを使うこともなくなった。イマーゴとは自分の頭で考えたことを電脳世界に反映させる能力のことである。ヤサコは古い空間を感じ、探し当てる能力を持っていた。他にもイマーゴを持った人は頭で考えるだけでメガネを操作することができ、イサコがそれの使い手だった。しかしその技を会得するにはそれなりの訓練が必要なようで、ヤサコにはそれができなかった。

「おじさん、イマーゴを知ってるの？」

ヤサコが桜井に訪ねた。桜井が電脳関係に詳しそうに見えなかったからだ。

「ええ。こう見えてもメガネや電脳世界に関しては精通しているつもりです。最近はメガネが関わる事件がよく起こりますから。もちろんイマーゴが身体に負担をかけるものだということもわかっています。君のような子どもにそういう危険な実験に協力してくれというのは大変心苦しいのですが、真実を明らかにするためには誰かが

やらなければならないことなので。幸い君のお父さんが責任を持って実験を取り仕切るとおっしゃられているので、君も幾分やりやすいとは思います。もちろんムリにとは言いませんが。」　ヤサコはハラケンにどんなことでも協力すると決めていたので、覚悟はもうできていた。父がついてくれていたら大丈夫という安心感もあった。

「…私やります。私の能力が役に立つのなら。」

ヤサコがはっきりと言った。

「いいの、ヤサコ？あの時のことを思い出すのはつらいんじゃ…」

ハラケンが心配そうな声で言った。そうやってハラケンに気にかけられるだけでも、ヤサコはたまらなくうれしかった。

「大丈夫。あの時の体験を恐ろしいものだったなんて思ってない。何よりみんなのためだもん。」

「そう。ありがとうヤサコ。それにおじさん、僕も実験に協力させてください。僕のあの空間での体験が、何か役に立つかもしれない。」

ハラケンが一郎を見ながら訴えた。

「ああ。もちろんそのつもりだよ。みんなで力を合わせて実験を成功させよう。玉子君も来てくれるかな？」

「もちろん自分もそのつもりです。それにメガマスの研究にも興味がありますし。」

皮肉っぽく玉子が言ったので、一郎は少し苦笑した。

「では実験の詳しいやり方ですが…」

桜井が実験の概要について話はじめた。

#3　暗号と謎のハッカー　Part3

ダイチはデンパと共に大黒警察署に出向いていた。二日前に預けたダイチのメガネの解析が終わったという知らせがデンパに伝えられたのだ。それを聞いたダイチは早速メガネを取りにいこうと思った。たった一日でもメガネがないと落ち着かない。メタバグが出なくなって以来、ダイチは個人的にハッキングの訓練を行っていた。それは二度とイサコのような強力な使い手に、黒客を乗っ取られることのないようにするためだ。だからダイチにとっては未だにメガネは手放せないアイテムであり、ヤサコ達のようにメガネからの卒業など考えた事もない。もっとも、コイル探偵局のメンバーがメガネからの卒業を考えていることなど、ダイチは知らないが。

「竹下さんならもうすぐ来られると思うので、ここで少し待っててね。」

受付の女性に案内されたのはこの前の会議室ではなく、六畳ぐらいの個室だった。二人がソファーに腰掛けると、しばらくして婦人警官がオレンジジュースを持って来てくれた。女の警察官なんて憧れるよなあ、などと会話していると直樹が部屋に入って来た。

「お待たせ、解析終わったよ。それにしても来るのが早いねえ。さっき連絡したところなのに。」

「ちゃーす。いやーメガネがないと落ち着かないんすよ。」

そう言いながらダイチは直樹に軽く会釈し、デンパも頭を下げた。直樹の腕にはダイチのメガネと書類を挟んだファイルがある。

「早速本題に入ろうか。昨日、専門家の先生立ち会いのもとこのメガネの解析を行ったんだけど、残念ながらウイルスの正体も犯人への手がかりも掴むことはできなかった。」

ソファーに腰を下ろして直樹が言った。ダイチはそれを聞いて「そうっすか。」とため息をもらした。

「そういえば二、三年前の架空請求メールが流行った時に、メガマ

スがその対策としてメールの検閲ソフトを開発して、検挙率が上がったって聞いたことがあるけど、そのソフトを使ってもダメなんですか？」

デンパが直樹に聞いた。それを聞いたダイチも、確かにそんな話聞いたことがあるな、と思った。

「よく知ってるね。もちろんそのソフトを使ってみたんだけどダメだったんだ。犯罪っていうのはどんどん進化していくからね。新しい対策を講じれば、それを上回る手口が生み出されていくんだ。今回の手口がまねされれば、また架空請求が増えるかもしれないけど、まあ、それを防ぐのが僕達の仕事だからね。対策は色々考えているよ。」

「それで、そのー。ハッキングの手口はわかったんスか？」

ダイチが身を乗り出して訪ねた。できればそのハッキング方法を会得したいと考えていたのだ。

「それがねえ、どういうルートで君のメガネに侵入したのかまったく見当がつかないんだ。おそらく手口はルートクラック・・・君のアカウントで内部に侵入し、情報を盗んだり、アプリケーションを行使したと思うけど、ネットワーク上のセキュリティは万全だったから、別の侵入経路を使ったんだと思う。とても素人の成せる技だとは思えなかったよ。」

感心したように直樹が言った。その方法が聞けなくてダイチはがっかりした。

「とにかく犯人は僕達が引き続き調査して追うことにするよ。とりあえずこのメガネの手がかりになりそうな部分はバックアップをとったし、ウイルスは死滅したから君に返すね。あと、前のアカウントを使用するのは危険だから、メガマスに新しいアカウントを無料で交付してもらえるように申請しておいた。電脳口座の方も元に戻してもらったよ。」

「どうも～。」とお礼をいいながらダイチはメガネを受け取った。

「ところで問題は、どうして君があんな狙われ方をしたのかだ。み

んなの推理通り、犯人の狙いはお金じゃなく、君をはめることだったろうからね。」

直樹が自分のメガネを操作しながら言った。

「うーん。誰かに恨まれるようなことはしてないんスけどね～。」

直樹も警察官なので、ダイチは自分が今までしてきたことをあまり知られたくないと思いそう言ったが、もちろん心当たりはあった。と言うより、黒客ではあまりに多くのいたずらをしていたので、誰に何をやったかなどいちいち覚えてもいなかった。

「そこで勝手ながら君の素性を調べさせてもらったよ。君はなかなか面白い経歴をもっているね。」

「ゲッ！？」

しかし直樹にはとうにばれているようだった。観念してダイチは直樹の前では正直になろうと思った。

「大黒市内の小学校の中でもトップクラスの電脳力を持つ大黒市黒客クラブ。君はそのリーダーとして今まで数々の騒ぎを起こしているね。これは僕が子どもの時にやっていたいたずらとは次元が違うなあ。本当は君に恨みを持つ人なんて、心当たりが多すぎてわからないぐらいじゃない？」

「・・・おっしゃる通りです。」

ダイチは直樹の顔色をうかがいながら言った。しかし直樹は怒るでもなく、逆に面白がっているようにも見えた。

「空間管理室にもマークされていたみたいだね。しかも去年空間管理室でサッチーの違法改造によって解雇された破天荒な職員が、君をかばって警察署まで来てくれたあの原川さんだったとはね。あの騒ぎの中心も君たちだったとは。」

直樹はウインドウに、巨大魚イリーガルの写真や、街中の人の顔がひげだらけになっている写真を出しながら言った。さらにそこにはダイチが玉子のバイクで連行されている写真もあった。それを見たダイチはもう笑うしかなかった。

「・・・そして、去年の夏の事件にも関わっているね。」

去年の夏の事件と言われて思い当たるのは一つしかない。しかしダイチは深く関わっていたわけではない。真相はヤサコの父が学年集会で明かしたので知ってはいるものの、鍵穴やヌルを見たわけでもなかったし、ましてや電脳体が分離するようなこともダイチやデンパは体験しなかった。

「・・・あの事件を知ってるんスか？」

ダイチがまじめな目つきになって訪ねた。

「ああ。僕はこれでも警察官だし、大黒市で起きた電脳関係の事件なら把握しているよ。知り合いのメガマスの人から聞いたんだけどね。」

直樹は一番このことが気になっているようだった。つまり直樹にとってはダイチが起こして来た騒ぎは問題じゃなく、ダイチ達があの事件の中心にいたことこそが重要なようだった。ダイチも直樹の目を見ていて何となくそう感じた。

「でもオレたち、あの事件に深く関わったわけじゃないぜ。あのＣドメインとかいう空間に入ったわけじゃないし。オレにとってあの事件の一番の思い出は、２・０とかいう新型サーチマトンに追い回されたことぐらいだ。」

ダイチがそう言うと直樹は考え込んだ。

「しかしあの事件の一番の被害者、天沢勇子は、黒客の仲間だったんじゃ・・・」

直樹があの事件のすべてを正確に把握していないことを知ったダイチは、事件の真実を直樹に伝えようか迷った。

「ああ。アイツは訳あってしばらく黒客の仲間に加わっていただけだ。オレはアイツがキラバグを集めていたのは知ってたけど、それであんな危険なことをしようとしていたとは、その時は想像もつかなかったぜ。」

ダイチは黒客が一時イサコに乗っ取られたとは、プライドがあるので口が裂けても言えない。

「天沢勇子は暗号を使っていたんだろう？君たちもそれが使えるの

かい？」
ダイチは、直樹がイサコについて知りたがっているんだろうと感じた。それが何故なのかはわからなかったが、直樹が執拗に黒客とイサコの関係を持ち出すことに違和感があった。
「確かにアイツは暗号を使っていたけど、オレたちに教えてくれたのはほんの一部だったぜ。オレはああいうの趣味じゃねえから使ってねえけど。それより、あの事件のことやイサコのことが気になるんスか？それだったらこの前オレたちと一緒にここに来た、元空間管理室の破天荒な職員に聞いた方が早いと思うけど。」
ダイチは少し牽制を入れてみた。
「いや。ただあの事件と、君が嵌められそうになった今回の架空請求事件が無関係のように思えなかったんだ。」
少し間をおいて直樹が答える。
「どういうことっスか？」
ダイチは意外な直樹の答えに虚をつかれた気分だった。ダイチはこの二つの事件に何の関連性があるのかと思った。
「・・・キラバグを探していたのは天沢勇子だけじゃなかった。あの事件の時、大黒市内や市外からやってきた腕の立つメガネユーザーがキラバグを狙っていたんだ。それこそ都市伝説に聞くような方法を使ってね。しかし天沢以外の誰もがその姿すら見る事なく、古い空間やイリーガルは消えていった。そして事件の真相はメガマスからまだ正式に公表されてもいない。その中の多くの人は未だにキラバグがあると信じて疑わず、彷徨い続けているんだ。」
直樹が自分の開いたウインドウを眺めながら淡々としゃべった。
「それがこの事件と、どうつながるんスか？」
ダイチは何となく嫌な予感がしていた。両手を組み合わせながら、一筋の汗が頬を伝い落ちたことにも気がつかなかった。
「これはメガネに関する都市伝説が紹介されている有名なサイトなんだけど。」
直樹がウインドウを差し出しながら言った。それはダイチやデンパ

にも見覚えがあった。しかしそれはあの事件の時に、猫目兄弟が利用したサイトとは別の物だった。

「このサイトの掲示板に、少し前にある書き込みがされたみたいなんだ。『天沢勇子は大黒小学校の大黒市黒客クラブの一員で、キラバグを集めることに成功した。そしてそのキラバグは今もその黒客が握っている』とね。」

ダイチとデンパはそれを見て驚いた。

「おいおいマジかよ。なんだよこの書き込みは。誰がこんなガセネタばらまいてんだ?って言うか、こんなもん今更誰も相手にしないだろ。」

そう言いつつダイチは内心ヤバイとも思っていた。この街の中でのネットの書き込みは、結構貴重な情報源だったりするからだ。

「それがまんざらでもないことを裏付けるように、ここ最近メタバグの目撃例が増えているんだ。」

「メタバグの!?」

ダイチが飛び上がった。

「大黒市内のいたる所でね。このサイトの掲示板にも色々書き込まれているみたいだ」

直樹がウインドウで示した。

「古い空間も消去されたのに、いったいどこから?」

ダイチが不思議そうにつぶやく。

「わからない。でもこれだけメタバグの目撃例があるなら、君たちがキラバグを握っているという書き込みの信憑性も必然的に増してくるよね。」

「じゃあ、オレが狙われたのは?」

ダイチが再び考え込んだ。

「僕は、この書き込みを見たキラバグを狙っている謎のハッカーが、どんな手を使ったのかはわからないけど、黒客のリーダーである君のメガネに忍び込み、色々情報をあさったんだと思う。でも結局キラバグに関する情報は得られず。その後何らかの理由があって、盗

み出した君の個人情報を使い、今回の架空請求メールをばらまいたんじゃないかな?」
直樹が冷静に分析した。
「なるほど。うーん。それにしても、そのハッカーも謎ならこの書き込みをしたヤツの目的もわからんな。」
天井を仰ぎながらダイチがつぶやいた。
「確かに。こんな根拠のない話をでっち上げるなんて。」
直樹もため息をついた。
「でもダイチ・・・」
デンパがダイチの方を見て何か言いかけた。
「ああ。イサコと黒客の関係を知っている人間は大黒小の六年だけだ。その中でこういうことをするヤツは大体検討がつくが、まあとにかくそれは置いておこう。こうなった以上、他のハッカー達もオレを狙ってくるかもしれんからな。問題はそれをどうするかだ。」
ダイチは目の前のオレンジジュースをぐいっ飲み干し、ソファーの上であぐらをかき、腕を組んだ。
「メガマスが早く事件を公表すれば、もはやキラバグが存在しないことも公にできるんだけど、いつになったら公表するのか目処も立っていないね。ちょっと今回のことはメガマスにも報告しておくよ。そうしたら彼らも考えを改めるかもしれないしね。」
「よろしくお願いします!」
ダイチは深々と頭を下げた。それをみたデンパも同じくらい頭を下げた。
「ところで提案があるんだけど。実はさっき言っていた専門家の先生の研究チームが、新しいハッキング対策ソフトの開発をしているんだ。」
「ハッキング対策ソフト?オレがインストールしていたようなやつッスか?」
そう言ってダイチは自分がインストールしているソフトを確かめた。
「君の使っているソフトとはすこし性格が違うかな。このソフトは

ハッカーが自分のメガネに侵入するのを防ぐことはできないんだ。」
「それじゃ意味ないじゃないッスかー。」
ダイチはがっかりした。そもそもあれだけのプロテクトをしていたのに、いとも簡単にハッキングされては、どんなソフトを使ってもハッキングを防ぐことなんてできないと思った。
「防ぐことはできないけど、侵入したハッカーを追跡して逆に情報を盗めるんだ。言ってみれば逆探知ソフトだね。」
直樹がそう言うと途端にダイチの目の色が変わった。
「なぬ!?・・・それは使えるなー。てことは今回オレを嵌めようとした犯人も、もう一回侵入してきたら正体がつかめるってことっスね!」
「うまくいけばね。実はこのソフトはまだ実験段階なんだ。でも今までの実験ではうまく機能しているらしいから、インストールしといて損はないと思う。まあ、ソフトの実地試験ということで協力してくれないかな?」
直樹が柔らかい声で言った。その優しさがダイチの身体中を満たしていった。
「もちろんインストールするぜ!あと、黒客の他のメンバーにもインストールさせてやりたいんスけど。オレみたいに狙われる可能性もあるわけだし。」
ダイチが訪ねてみた。デンパもうなずいている。
「もちろんいいよ。ただ僕の方もお願いがあるんだ。このソフト、コイル探偵局のみんなにもインストールさせてあげてほしいんだ。」
ダイチとデンパは顔を合わせた。どうやらコイル探偵局の活動も直樹は知っているようだった。
「アイツらにも?別にいいッスけど、基本的にオレたちとアイツらは敵同士なんスよ。アイツらに恩を売るって言うのは、ちょっとシャクだな~。」
頭をかきながらダイチが言った。
「そんなこと言わずにさ。この前はあの子達が君を助けてくれたん

だろう？コイル探偵局もあの事件に深く関わっているようだから、君みたいに狙われる可能性がある。この前の借りを返すつもりでさ。お願いするよ。」

親切にしてくれている直樹がそこまで言うので、ダイチは折れるしかなかった。

「わかった！直樹さんがそこまで言うならアイツらにもインストールさせるぜ。で、どうやってインストールすればいいんスか？」

直樹が新しいウインドウを出した。

「このＵＲＬにアクセスしてパスワードを打ち込めばダウンロードが始まる。パスワードは今から言うからメモしてね。あとさっきも言ったように、このソフトは実験段階だから、悪いけど他の子達に教えないようにしてほしいんだ。あと時々君に連絡するから、そのソフトの具合なんか定期的に聞かせて。」

「オッケーっス。」

ダイチは即答した。そのあと直樹からパスワードを聞き出し、とりあえず話は落ち着いた。

「じゃあ何かあれば連絡してね。気をつけて帰るんだよ。」

「うぃーす。今日はどうもありがとうございました。」

ダイチとデンパは満足して警察署を後にした。

「ダイチ。いつみんなにインストールさせてあげるの？」

デンパが訪ねた。既に二人はソフトをインストールさせていた。

「早い方がいいからな。よし、今からみんな呼び出すぜ。」

そう言うとダイチはメールを開き、呼び出しメールを作ることにした。

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ4

一通りの打ち合わせが終わり、桜井は別件でハラケン宅を後にしていた。残った四人で話をしていたところ、ヤサコとハラケンのメガネにメールが届いた。

「あっ。ダイチ君からだわ。」

メールを開いたヤサコが驚いたように声を上げた。ダイチからメールが来るなんてほとんどなく、ひょっとしたら初めてかもしれなかった。

「ダイチから？てことはアイツ、もうメガネを返してもらったのか。」

玉子がつぶやいた。ハラケンも一応ダイチが事件に巻き込まれたことは玉子から聞いていたので、玉子が言っていることはわかった。

「大黒黒客とコイル探偵局のメンバーは至急鹿屋野神社に集合！用件は集まり次第伝える。また関係者以外の同伴を禁じる。」

ハラケンが淡々とそのメールを読み上げた。

「用件っていうのはきっとこの前の事件のことね。でもどうして黒客のメンバーだけでなくコイル探偵局のメンバーも呼び出すのかしら？しかも関係者以外の同伴を禁じるって。」

ヤサコはこの文面を少し疑問に思った。もしかするとややこしい事態になっているのかも、とヤサコは嫌な予感がした。

「とにかく至急って書いてあるから急いで行ってみよう。おじさん、僕達行ってもいいですか？」

「ああ。今日はもう話し合うことは煮詰まったからね。」

すんなりと一郎が答えたので、ヤサコとハラケンは急いで家を飛び出し、鹿屋野神社に向かっていった。

「小此木さんは、ダイチ君の事件のことを御存知でしたか？」

一郎と二人になり、玉子が口を開いた。玉子は一郎のことを「小此木さん」と言うことに少し違和感がある。

「ああ。優子から話は聞いたよ。君が一役買ってくれたみたいだね。なによりおかげで被害者がでなくて済んだ。感謝するよ。・・・ちなみに呼びにくいなら室長でもいいよ。」
一郎は照れ笑いしながら言った。相変わらずお茶目なところがあるんだなと、玉子は可笑しくなった。
「現在も空間管理室の方へ出向かれるのですか？」
「いや。今は代行の人がいるから、僕は事件の調査に集中している。なかなか成果はあがらないけどね。君の方はもう空間管理室に戻るつもりはないのかい？」
意外な質問に玉子は少し驚いた。
「冗談で言っているんですか？室長。私はサッチーを違法改造して解雇されたあげく、勝手に金沢までサッチーを持ち出したんですよ。メガマスが私をまた雇ってくれるはずないじゃないですか。」
一郎は笑みを浮かべながら玉子の話を聞いていた。
「でも君の行動が、一度ならず二度までも優子の命を救った。そのことには本当に感謝している。僕がそのことを上層部に話したら、彼らは君の評価を変えたよ。色々なトラブルを起こしてくれたけど、一番大切なもの・・・子どもの命を守ることができたってね。だから金沢に勝手にサッチーを持ち出して破壊してしまったことに、何のお咎めもなかったんだよ。」
玉子は「あっ」と思った。確かに何の肩書きもない元職員が、サッチーを勝手に持ち出して破壊してしまったのに、後で弁償を迫られてはいなかった。それが事実なら自分こそ一郎に感謝しなくてはならないと、玉子は思った。
「君にその気があるんなら、僕が推薦しようか？それでおそらく前の仕事に戻れるよ。」
一郎が玉子に問いかける。しかし玉子はその気持ちを受け取っておくだけにした。
「いえ。せっかくですが今は管理室に戻るつもりはありません。もう古い空間もほとんど消滅しましたし、私のせいで管理室は活動を

制限しているんでしょう?そこに私が戻るのは少し悪いと思うんです。それに私はあの事件が終結したことで、私の役割は果たせたと思ってますので。今の仕事にも十分満足していますし。」

それを聞いた一郎も納得した様子だった。

「そうか。勤勉なのはいいことだけど、君はまだ十七歳なんだ。もっともっと遊んでいいと思うよ。まあ、君が必要な事態になったら、管理室の方に戻って来てもらおうかな。」

一郎が笑いながら言った。玉子も一緒に笑った。

「そんな日が来ないように、お祈りしておきます。」

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ5

ヤサコとハラケンは鹿屋野神社に到着した。そこにはダイチとデンパが待っており、まだ他には誰も来ていなかった。ダイチは神妙な顔つきで腕を組みながら、鳥居の下で仁王立ちしている。それを見てヤサコは、やっぱり良くない事が起こっているのかなと感じた。しばらくするとアイコがやって来て、次にガチャギリとナメッチ、最後にフミエとアキラが到着した。

「お疲れッス。これで全員揃ったな。」

全員を見渡すようにダイチが言った。表情も意識して柔らかくしているようだった。

「それで、用件は何なの？この前の事件のことなんでしょ。」

フミエが腰に手をあてて訪ねた。この前ダイチを助けているだけに、フミエが上からの目線になっていると、ヤサコは感じた。

「この前の事件ってなんだ？」

ガチャギリが問いかける。この中でガチャギリとナメッチは事件のことを知らない。もちろん、当初自分たちが犯人として疑われていたことなど知る由もなかった。ダイチは事件の経緯を二人に説明した。

「そんなことがあったのか。それで、なんでお前が狙われたんだ？犯人はどこのどいつだ？」

ガチャギリが考え込みながら訪ねた。ナメッチは若干ビビっている様子だ。

「そのことなんだが、さっき警察に行って来た。警察の話によるとオレのメガネに残った情報から犯人を特定することはできなかった。」

「それじゃなんでアンタが狙われたのかわからないわね。それでも恨みかなんかなんでしょ。」

フミエが口を挟んだ。まるで危機感はなく、自分たちには関係ない

というような感じだ。
「話を最後まで聞け。それがちょっとややこしいことになっている。」
ダイチの声が細くなり、全員の顔つきも変わった。ダイチは警察署で直樹が言っていた話をした。
「・・・つまりイサコとオレたち黒客の関係を知っているヤツが、そのサイトに書き込みをしたんだろ。それなら怪しいのはやっぱり大黒小の誰かだな。」
ダイチの話を聞いたガチャギリがつぶやいた。あの事件の全容を知っているのはごく少数だが、大黒小の六年なら誰もが知っている。それを疑うのはごく当たり前のことだった。
「ああ、そう考えられるな。しかし問題は・・・」
「黒客はキラバグを狙うすべてのメガネユーザーの標的になったこと。仮に大黒小にその書き込みをしたヤツがいたとしても、そいつを見つけることは問題じゃない。大変なのは、今回のように得体も知れないハッカーが、黒客を狙ってくるかもしれないってことでしょ？」
フミエがダイチの話を遮ってまとめた。ダイチが言いたかったのも大方そういうことである。ガチャギリもそれにうなずいた。
「どうするんスかオヤビ～ん？オレ，そんな狙われるながら生きていくのは嫌ッスよ～。いっそのことメガネやめようかな。」
話を聞いて顔面蒼白になったナメッチが、情けない声でダイチに聞いた。
「慌てるな、対策はある。実は警察の人から実験段階のハッキング対策ソフトを紹介されたんだ。このソフトはハッキングを防ぐことはできないが、ハッカーの情報を逆に盗み出し、その犯人を特定できる。言ってみれば逆探知ソフトだ。」
ダイチがウインドウに出しながら説明すると、みんなが「おお～っ」と声を上げた。
「そいつを使えば、たとえハッキングをされてもすぐに警察に言え

ば、被害をこうむることはないということか。そんな便利なモンがあったとはな。」

ガチャギリがうすく笑みを浮かべながら言った。ヤサコにはその笑みが不気味に見えた。

「でもそれって大丈夫なの?実験段階なんでしょそのソフト。誤作動とか起こしたらそれこそ取り返しのつかないことになりそうじゃない。」

フミエが口を挟むと、ダイチは少しムッとした。

「余計な心配はいらねえ。このソフトは、テレビにも出ているかの有名な、電脳科学の権威、小野先生の研究チームが開発したもので、さらに実験ではうまく機能していたそうだ。オレたちには最終の実地試験として提供してくれたらしい。だからもう一般に普及させても問題ないくらいに仕上がっているんだよ。素人が口をだすんじゃねえ。」

ダイチの言葉を聞いて、今度はフミエの方がムッとした。

「けどオヤび~ん。それでハッキングは防げるけど、違法ツールや暗号で攻撃してきたらどうするんスか~?」

ナメッチが相変わらずの物腰で問いかける。

「確かに最近メタバグの目撃例が増えているらしいからな。その恐れもあるが、まだそういった武器を持ったヤツは見たことがない。逆にオレたちがメタバグを見つけ出せばいいんだよ。それに暗号使いに関してはなんてイサコ以外に見たことねえし、生身で襲いかかってきたらオレが投げてやらあ。それで心配ねえだろ?」

この日のダイチは妙に頼もしかった。ナメッチもその言葉を聞いて安心したようだった。

「でもどうして私たちまで呼び出したの?狙われたのが黒客なら、私たちを呼び出してその話をする必要はないし、ダイチ君らしくないじゃない。」

ヤサコがダイチに訪ねた。確かにこれまでのダイチなら黒客とコイル探偵局は敵同士と考え、敵に弱みを見せないように振る舞うはず

だった。だからヤサコには、このダイチの行動はいつもと違うと感じられたのだ。

「ああ。実は警察の人に頼まれたんだ。ネットの掲示板にはオレ達とイサコの関係が書かれていたが、このさきコイル探偵局とイサコの関係もネットで流されたら、お前たちだって狙われる可能性もある。だからお前達にもソフトをインストールさせてやって欲しいってな。・・・それにオレはお前らに借りがあるしな。」

最後の方は照れくさそうにダイチが言った。

「なるほど、そういうことか。じゃああありがたくそのソフト、使わせていただきまーす。」

手を合わせながらフミエが言った。

「しっかし、その書き込みをしたヤツはどういう目的何なんスかねえ?」

ナメッチがダイチやガチャギリを見ながら言った。他のメンバーも難しい顔をしている。

「ネットに書き込んだヤツと、ダイチからハッキングしたヤツは同一犯だって可能性もあるぜ。オレたちをじわじわと追いつめようとしてるんじゃ・・・」

「ひーっ!」

ガチャギリが不気味に言ったので、隣にいたナメッチが奇声を上げた。

「天沢さんだって被害者よ。もしかしたら金沢の学校でトラブルがあって、あの事件の時の大黒小と同じように、みんなに敬遠されてるんじゃ・・・」

ヤサコが心配そうな声でつぶやいた。他のメンバーもイサコも被害者であることに気がつき、申し訳なさそうな顔つきになった。

「確かにその可能性もある。しかし金沢のヤツがイサコとオレたちとの関係を知るはずがねえ。この書き込みのおかげで、イサコが学校に居づらくなっているかもしれねえが、金沢のヤツが書き込んだとは考えにくいな。」

ダイチが冷静に分析した。ヤサコは心配になったが、イサコから何の連絡もないということは、少なくともそのことがイサコの耳に入っていないとも考えられた。イサコはその後、メガネに縛られることなく、普通の女の子として暮らしているんだろうと思った。というより自分に言い聞かせた。

「とにかくそのソフトをインストールさせてよ。犯人探しは後でじっくりやったら？それにヤサコ、イサコが心配なら連絡してみたらいいじゃない。番号は知ってるんでしょう？」

フミエがそう言うので、ダイチは直樹に言われたＵＲＬとパスワードをみんなに送る準備をした。

「多分大丈夫だと思う。もしもこの書き込みに巻き込まれているなら、天沢さんの方から連絡がくると思うの。」

ヤサコがフミエに答えると、フミエは納得したようだった。この中でイサコのことを一番理解しているのはヤサコだからだ。

「おし、みんなオレの言う手順通りにこれをインストールしてくれ。あと、さっきも言ったようにこのソフトは実験段階だからな。オレたち以外のヤツにインストールさせたらダメだぞ。」

ダイチの説明で全員のインストールが終わった。とりあえず全員メガネに異常はないようだった。

「なあ。事件の早期解決のためにオレたちに協力してくれねえかな。何か事件に関係ありそうな情報を手に入れたら、ささいなことでもいいからオレたちに言ってくれ。オレたちも何かわかったら報告するからよ。」

ダイチがフミエに打診した。黒客とコイル探偵局は敵対関係にあるわけだが、今までみたいにプライドとか言っている場合じゃないことは、実際に狙われたダイチが一番わかっている。

「情報を共有するってことね。いいわ。こっちが狙われる可能性もあるわけだし、それにイサコが巻き込まれたっていうのも、あの事件を知る者としてはほっておけないしね。ならこの騒ぎが落ち着くまで同盟を結ぶってことで。」

フミエがダイチに同意した。他のメンバーもそれで異存はなかった。
「あんまり一人でいると、いくら対策ソフトを入れているとはいえ、何かと危ないからな。これからはなるべく集まって行動することにしようぜ。」
ダイチが黒客のメンバーに言った。それを聞いたフミエも、ヤサコやアイコに同じことを提案した。
「ハラケン。あんたはずっと訴訟のことで忙しいのよね。一人じゃ危ないから気をつけなさいよ。」
フミエがハラケンに言った。
「大丈夫。ハラケンにはオバちゃんがついてるじゃない。」
ヤサコがフミエに言い聞かせるように言うと、フミエもそれで十分安全だと思った。
「うん。とりあえず今日のことはオバちゃんにも言っておくよ。それに毎日訴訟のことをしてるわけじゃないから、遠慮せずに呼んでくれていいよ。」
ハラケンがヤサコたちに言った。ハラケンにしてはコイル探偵局の活動に積極的な姿勢だ。それはヤサコが訴訟の証拠集めに協力しているからでもあった。
「ハラケン。そう言えば訴訟の方はどうなってるんだ?勝てそうなのか?」
ガチャギリが訪ねた。訴訟のことは卒業式の日にハラケンがこのメンバーとマイコ先生にだけ言っておいたのだ。
「とりあえず証拠集めの段階なんだ。勝てるかどうかはまだわからないけど、ヤサコのおじさんが全力で証拠を集めてくれているから大丈夫。」
決して有利とは言えないが、ハラケンは確信に満ちた声で言った。
ヤサコもそう願った。
「そうか。オレたちに協力できることがあったら何でも言ってくれよ。」
ダイチが自分の胸を叩きながら言った。ハラケンは古い空間のシミ

ュレーションをすることを言おうかと思ったが、一郎に口止めされていたので黙っておくことにした。
「ありがとう。じゃあ困った時はお願いするよ。」
ハラケンがそう言うと、ダイチは親指を突き上げた。
「じゃあ今日は解散すっか。」
ダイチの号令で、それぞれ神社を後にしていった。

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ6

その後ヤサコは、公園でフミエとアイコと一緒に、この前見た中学校のクラブの話をして、夕方家に帰った。リビングでテレビを見ていると、メガばあが町内会の旅行から帰って来た。ヤサコは母の静江と一緒に玄関で出迎えた。

「お疲れさまでしたお義母さん。どうでしたか温泉は？」

静江がメガばあに問いかけた。メガばあも疲れた様子だった。

「ああ。まあまあだったぞえ。優子、これはお土産のまんじゅうじゃ。京子と仲良く食べるがええ。」

メガばあはヤサコに紙袋を渡した。メガばあがタダで物をあげるなんて珍しい。

「ありがとうおババ。あと、ちょっと相談があるんだけど。後でおババの部屋に行くね。」

「ああ。別にかまわんが。」

少し不思議そうにメガばあが答えた。ヤサコがメガばあに相談することなんて、最近はほとんどなかったからだ。

しばらくしてヤサコがメガばあの部屋を訪れると、メガばあは静江の入れたお茶で一息ついていた。

「やっぱり我が家が一番落ち着くわい。して、相談とはなんじゃ？メガネから卒業するのは難しいかえ？」

ヤサコはメガばあの前に正座した。

「そうじゃないの。おババがいない間にこっちで色々あったんだ。相談というより報告かな。」

ヤサコはダイチの巻き込まれた事件について話した。メガばあは黙ってヤサコの話を聞いているが、時々居眠りしそうだった。

「ふーん。それは大変じゃったの。しかしあのダイチが犯罪に走るとはな。」

「・・・ちゃんと聞いてたのおババ！？」
「冗談じゃ。しかしややこしい状況になっておるの。今頃になって去年の事件がまた掘り返されたか。」
笑っていたメガばあが真剣な顔つきになった。
「ほんと、誰なんだろう？目的もわからないしね。」
ヤサコがつぶやいた。自分達だけならともかく、イサコまで巻き込まれることも考えると、ヤサコはネットに情報を書き込んだ犯人が許せなかった。
「ところでそのハッキング対策ソフト。ワシにもインストールさせてくれんか？」
メガばあがねだるように言った。
「でもこのソフト、黒客やコイル探偵局のメンバー以外にインストールさせちゃダメだって言われてるし・・・」
「何言ってるんじゃ。ワシもコイル探偵局のメンバーじゃぞ。と言うより、コイル探偵局はこの前解散したではないか。」
メガばあに言われてヤサコはようやく気付いた。そう言えば卒業式の前の日にそんな話をしていた。
「いいじゃない。便利なくくりなんだからさ。コイル探偵局が解散したと言うより、コイル探偵局を解放したっていう方が正しいよ。おババの無理難題からね。」
皮肉をこめてヤサコが言った。メガばあはそれを聞いて「しゅん」となった。
「まあそのことは好きにしたらええが、早くソフトをインストールさせてくれい。」
ヤサコは仕方なくソフトをインストールさせた。ここで断ると後々何を言われるかわからないからだ。
「・・・ちょっと今回のことで気になったんだけど、暗号って一体何なの？」
キラバグを探す人間にとって、暗号は必要不可欠なスキルだ。ヤサコはずっとそれが引っかかっていた。暗号っていうのはどのくらい

の人が使えて、どんなことができるのか。
「今更なんじゃ？暗号はイサコが使っていたようなやつのことじゃ。その効果は色々あるが、お主だって見ていたじゃろう。」
「そうじゃなくて。暗号のルーツはおババのメタタグなんでしょう？オバちゃんから聞いたわ。つまりおババは暗号にも詳しいってことよね。それはどういうものだったの？」
ヤサコがうつむき加減で言った。メガばあもヤサコが言いたいことは何となくわかった。
「メタタグが持つ空間に影響を及ぼすプログラム。それを直接空間に反映させることができる記号に置き換えたのが暗号なのじゃ。実はその暗号を考案したのはおジジの研究チームなのじゃ。彼らはコイルスの空間の調査と同時進行でメタバグの研究も行っていてな。まず、メタバグが持つ空間に影響を及ぼすプログラム。それを直接空間に反映させることができる記号に置き換えたのが暗号なのじゃ。実はその暗号を考案したのはおジジの研究チームなのじゃ。彼らはコイルスの空間の調査と同時進行でメタバグの研究も行っていてな。まず、メタバグが持つ空間に影響を及ぼすプログラムができることを発見したのじゃ。そのプログラムが記号に置き換えられることを知り、数々の暗号が生まれた。メタバグが持つ特殊効果のプログラムも、元を辿れば数列じゃ。その数列を直接図式化したら、あんないびつな図形の集合体になるのじゃ。当時はメタバグの種類も量も、去年の事件の時より格段に多かったから、今ではお目にかかれない効果を持った暗号も作られた。ワシはおジジからその研究を聞き、自分で暗号をつくるようになった。おジジが死んだ後もじゃ。ワシは暗号を作ると同時に、メタバグが手に入るとメタタグを自分で練る訓練もした。同じ効果を持つものでも、暗号よりメタタグを作る方が効率もいいし、効果も大きいのじゃ。そんなことをやっとる間、ワシは弟子を増やした。玉子と宗助じゃ。そして四年半前、玉子は暗号を使ってキラバグを集めようとした。本人は都市伝説に聞く方法を使っていたと思っとったようじゃが、その暗号はワシが組んだものじゃった。それを玉子に教えていたのが宗助じゃ。宗助はよくワシから暗号を教わっていた。それを自分なりに研究して発展させていったんじゃ。そしてお主も知っている通り、玉子の開いた通路が暴走し、取り返しのつかないことになった。ワシ

は対応におわれてぶっ倒れ、記憶を失った。その時にワシの記憶から暗号のことも消えていったんじゃ。ワシの息子の一郎、お主の父は暗号を封印するため、家にあった暗号の研究資料をどこかにしまいこんだ。だからワシはそこからメタバグしか作らんようになったのじゃ。すべて、去年の事件で思い出したことじゃよ。」

メガばあから出てくる一語一語がヤサコの胸に響いた。一連の事件の原因は自分にあったというメガばあの思いがヤサコに伝わってきたのだ。自分以上にメガばあの方が事件で苦しんだんじゃないかと、ヤサコは思った。

「・・・そういう過程があったのね。と言うことは、暗号が使えるのはメガばあがそうやって教え込んだ人だけなの？」

「そうじゃな・・・ワシが直接暗号を教えたのは宗助ぐらいじゃ。そして宗助がイサコに暗号を教えた。宗助が発信源となっておるなら、今どのくらいの人間が暗号を使えるのかはわからん。それにおジジの研究に関わった人も、暗号を知り得る。そう考えると、暗号がどのくらい広がっているのかは見当もつかんわい。」

メガばあがあごに手をあて、考え込みながら言った。

「じゃあ暗号ってどんなことができるの？例えばメガビーやミサイルみたいに、人を攻撃できる暗号もあるの？」

メガビーやミサイルはメタバグでのみ作り出せる。これらの武器で攻撃されればメガネは壊され、有償自動修復ダウンロードが必要となり、それにはお年玉換算で二年分の費用がかかる。

「暗号はもともと空間に作用するものだけじゃった。それをうまく利用して電脳体にも影響を及ぼせるようになったのが物理結界じゃな。しかし物理結界は、サッチーのように電脳体しかもたない物体にしか効果がない。あとイサコはキューちゃんを一瞬だけフリーズさせる暗号を使っておったが、あの程度でメガネが壊されることはないじゃろう。それにイサコは暗号炉を持っていた。暗号炉があればメタタグをインストールするだけで、無尽蔵にそのメタタグと同じプログラムが使える。しかしそれは・・・」

「イマーゴを消費するから、身体に悪影響を及ぼす。それに暗号炉と互換性があるメタタグじゃないと効果を発揮しないのよね。」
ヤサコはあの事件の時にそれを経験していた。無尽蔵に暗号を使えると言っても、何回も使用できるほど身体が耐えうる苦しさではなかった。
「そうじゃ。だからワシの経験上、それだけでメガネを壊せるほどの暗号は存在しない。もちろん、誰かが研究し発展させていれば話は別じゃが。」
「じゃあ、ネットワークに影響を及ぼす暗号はないの？ハッキングとかに使えるような。」
ヤサコがさらに訪ねてみた。もしダイチをハッキングした犯人が暗号使いなら、そのような暗号も存在するのかもしれないと思ったからだ。
「ある。おジジの研究で作られた暗号のうち、一番凶悪だとされたのがその暗号じゃ。その暗号を使えば自分のアクセスをステルス化し、セキュリティソフトに検知されずに他人のハードウエアに侵入できる。じゃから誰にも気付かれることなくハッキングが可能だったのじゃ。そして用が済んだらその痕跡は消えてなくなる。研究チームはその暗号をＩＬコードと名付け、世に出回ることのないように封印したんじゃ。その実体は暗号と言えどウイルスに近いものではあるな。」
「・・・それってダイチ君がハッキングされた状況と同じじゃない！」
ヤサコはメガばあの話を聞いて確信した。犯人は暗号使いで、なおかつ封印された暗号をも知り得る人物だと。
「そうじゃ。ワシもお主の話を聞いておった時からよもやと思ったが。厄介な状況になってきたな。しかし、ダイチが警察から紹介されたというハッキング対策の逆探知ソフトはよくできておる。どんなハードウエアにも侵入できるＩＬコードを逆手にとっておるし、どんな手のハッキングにも対応できる。さすがは小野隆の研究チー

ムよ。」
誇らしげにメガばあが言った。
「まさかその先生、おババの知り合いとか？」
ヤサコは、まさかメガばとそんな偉い先生に繋がりなんてあるわけないだろうと思いつつ聞いた。
「おジジの後輩なのじゃ。おジジが大学院生の時に同じ大学に入ってきて、色々世話をしたそうじゃ。その時から優秀だったとは言っておった。ワシも二、三度会ったことがある。」
「へえ～。おジジってほんとにすごい研究者だったのね。そんな偉い先生の世話をしていたなんて。」
ヤサコは既に亡くなっている祖父の宏文を思った。宏文はイサコ救うために自分の命を犠牲にしてしまった。ヤサコは立派な最期だと思っていたが、ここにきてさらにヤサコの中の宏文のポイントが上がった。
「二人とも、ご飯ですよ～。」
キッチンから静江の呼ぶ声がした。気付いてみればかなり時間が経っている。するとメガばあが「よっこらせ。」と言いながら立ち上がった。
「まあ。そういうことじゃ。この調子なら、お主がメガネから卒業できる日もまだまだ遠いの。でもまあ、それでもええがな。」
そう言うと、「ふぉっふぉっ」と笑いながらキッチンに消えていった。ヤサコもそのことを少し考えた後、立ち上がってキッチンに向かった。ヤサコは今無理にメガネをやめる必要はないと思った。そうすればまた、イサコに会えるかもしれないという気がした。

#3　暗号と謎のハッカー　ｐａｒｔ7

その日の深夜、黒いスポーツカーが大黒市の暗闇の中に紛れ込んでいた。大黒市は最新の電脳インフラが整備された都市でありながら、夜は異様に静かで灯りも少ない。それだけに夜になるとこの街が古都であったことを思い起こさせる。その空気に不相応なエンジン音をしずませながら、スポーツカーは中津交差点付近で停車し、二人の男が降りて来た。

「・・・やはりこの場所の空気は特別だな。まるでこの街の陰鬱な空気が掃き溜められているかのようだ。」

黒い革ジャンに黒いＴシャツ、さらに黒いジーンズをまとった男が独り言のようにつぶやいた。外灯が無ければ、すぐに闇にとけ込んでゆきそうな雰囲気を出している。

「ここは、サーバーの境目が集中しているようですね。だから空間がこんな不安定なんだ。」

もう一人の、紺色のスーツを着た男がメガネを操作しながら言った。どちらの男も二十歳そこそこで、共にメガネをかけている。

「そういうことだ。まず手をつけるにはこういう場所の方がいい。サーチマトンにかぎまわられても、この空間の不安定さでごまかせるからな。それにこの辺りは大黒市の真ん中にあたる。最深部にするにはちょうどいい。」

私服の男が言った。どうやらこの男の方が上司らしい。そこから二人は何かを探しまわるように歩を進めた。すると交差点から一本入った路地にある、６階建ての廃ビルに目をつけた。中に入りしばらく見回ると私服の男が口を開いた。

「よし、このビルにしよう。とりあえずこの空間をスキャンしておいてくれ。」

「わかりました。」

スーツの男がメガネで何か操作をし始めた。その間に私服の男の方

はタバコに火をつけた。
「しかしほんとに近いのか?本社に言われてここまで来たが、メガマスがこんなに早くあの空間を起動させるなんて。」
私服の男が煙を吐き出して言った。
「内通者の話によると、例の交通事故の隠蔽に関する訴訟が起こされることになったそうで、あの空間はその証拠集めのために一時的に起動させるようです。今日もそのテェックが行われたとか。」
スーツの男がウインドウに集中しながら言った。
「葦原カンナの一件か。これでメガマス現幹部は邪魔者を始末できるわけだな。すべてはヤツらの思惑通りというところか。」
灰を地面に落としながら私服の男が言う。
「こちらとしても思惑通りですね。まだメガマスの新しい組織が固まる前に計画を実行した方が効果的ですからね。あっ、スキャン終わりました。」
スーツの男の手が止まる。私服の男の方はそれを一瞥して建物の北側にあるガラスのない窓枠に歩み寄った。四階にあたるそこからは大黒市北東の丘の上にあるメガマス本社ビルの灯りが見えた。
「本社の考えはどうでもいい。僕は、僕の戦いにケリをつけるだけだ。欺瞞に満ちたあの会社から真実を引き出し、ヤツらの信用を地に堕とす。今度こそ、メガマスへの復讐を果たしてやる。」
私服の男は持っていたタバコを無意識のうちにへし折っていた。
「いや、しかし。本社の意に背くことは・・・」
スーツの男は、自分の上司である私服の男が何か良からぬことを考えてるのではないかと思い、止めるように言った。
「わかっている。そういう意味で言ったんじゃない。本社と僕は、思惑は違えど目的は同じなんだ。裏切る理由はない。それに半年前、路頭に迷っていた僕を拾ってくれたんだからな。それについては感謝している。」
私服の男がへし折ったタバコを足下に捨て、踏みにじって火を消しながら言った。

「思惑が違うとは？」
スーツの男が訪ねた。
「別に。個人的なことだ。君にしゃべることでもない。ただ一つ言えるのは、今のメガマスは本社が考えている以上に狡猾だということだ。本社の思惑通りにいくとは、僕は思わない。」
私服の男がメガマスのビルを眺めながら言った。
「そうお考えなら、本社に進言してみては？」
スーツの男が問いかける。
「必要ない。会議室にいる連中に、いちいちお伺いを立てていては正確な判断が下せない。何かが起こればこっちで臨機応変に対応する。そういうことをこそこそと逐一本社に報告するなんて真似、勘弁してくれよ。君はそのために僕の補佐を任されているんだろ。」
その言葉にスーツの男の方は一瞬どきりとした。
「・・・行くぞ。」
それを鼻で笑い、私服の男はその場を去っていった。

#4　黒い電脳霧　part1

「あの事件以来、旧コイルス社の技術情報がネット上に流れ出したそうですが、メガマスによると、その情報はガセネタだったそうです。」

あくる日、緊急会議の名目でフミエとハラケンがヤサコの家に来ていた。アイコも今となってはコイル探偵局の準メンバーとなっているが、この日から里帰りでしばらく大黒市から離れるという。ヤサコやフミエはダイチを狙った謎のハッカーがコイル探偵局にも目を付けた時、電脳力に乏しいアイコに何かあったらどうしようかと心配していた。

「ほんと、厄介なことになったわね。どこの誰だか知らないけど、どうしてあんな書き込みをするのかしら。おかげでこっちはまたメガネから離れられなくなった上、アイコみたいな素人を巻き込むことになってしまったしね。」

フミエが怒ったように言った。メガばあの言うメガネからの卒業をするにしても、メガネは電話やメール、パソコンの役割を果たす上、学校の授業でも必要になってくるので手放すことはできない。しかしいくらハッキング対策のセキュリティソフトを入れているとはいえ、得体の知れないハッカーにメガネの中の情報を狙われるかもしれないというのは、何とも気持ちの悪い話である。ヤサコ達にとっても、早くそのハッカーの正体を突き止め、キラバグが存在しないことをすべてのユーザーに理解させたいところであった。

「でも気になるのはメタバグの目撃例がでてきたってことだね。もしそれが本当ならキラバグはもう存在しないって言っても、そっちの方が相手にされないだろうね。」

ハラケンがつぶやく。ヤサコもうなずいた。

「あるわけないじゃん。古い空間はとっくに消去されたのよ。どう

せこの噂もどっかの誰かが、何かの目的があって煽っているだけなのよ。とにかくこんなガセネタに踊らされてる連中の目を早く覚まさせないと、第二、第三のハッカーが生まれるかもしれないわ。私たちだけでなく、他の大黒校の子にも危害が加わる恐れもあるしね。」

フミエはもうこんなネットの噂など信じていなかった。フミエの口調からは、未だにこのような噂を信じて踊らされているメガネユーザーへの哀れみすら感じ取れる。

「フミエちゃん。実はお父さんから口止めされて昨日は言えなかったんだけど、あの事件の原因となったコイルスの空間と同じものを、メガマスが研究のために作り出したそうなの。それに今度、私たちはその空間を使ってイマーゴの実験を行うことになっているの。カンナちゃんの事故の原因を立証するために。」

「ほんとに!?」

ヤサコの話を聞いたフミエが驚き叫んだ。

「かつてのキラバグは、コイルスの実験によって生まれた異常空間のかけら・・・そしてその化石がメタバグだった・・・そしてメガマスがコイルスと同じ空間を作るために同じ実験を行ったとすれば、新たなキラバグやメタバグが生まれた可能性もある。だからメタバグがまた目撃されたっていうのも、可能性としては否定できない。」

ハラケンがうつむきながら言った。一郎は最高度のセキュリティを敷いているから、コイルスの空間の時のような暴走は有り得ないという。しかしこの世界に「絶対」は存在しない。絶対に事故は起きないと言われた電脳ナビシステムが、一人の少女の命を奪ったように。

「ますますややこしいじゃない。ということは未だにメタバグやキラバグは存在するかもしれないってことでしょ。じゃああの書き込みを否定するなんてムリだわ。」

フミエはお手上げだと思った。今現在どれほどの人間がキラバグの存在を信じているかわからないが、もし本当にメタバグがまた発見

されれば、大黒市はまた以前のような状態に戻るだろう。その中で生き残るためには、この街で一番の電脳力を持つことが必要であり、それが唯一の方法だった。つまり黒客はとにかくメタバグが存在する場合どの勢力よりも力を持っていないといけないことになる。さもなければ、キラバグを狙うユーザー達にメガネを破壊されてしまう。

「そのことで昨日お父さんに相談したの。メタバグがまた目撃されているらしいけど、メガマスが研究している空間と関係があるんじゃないのって。」

「そしたら?」

「そんな話は聞いていないって。空間の方にも異常はないし、空間管理室からもそんな報告は上がってきてないって。」

ヤサコは父の言葉を信じたかった。しかし心のどこかにある一抹の不安も拭いきれなかった。

「ふーん。じゃあやっぱりただのガセネタなのかしら。」

フミエが腕を組んで考え込んだ。

「あと、昨日帰って来たオババから暗号の話を聞いたの。多分ダイチ君のメガネをハッキングした犯人が使っていたのは、昔オジジの研究チームが発見したＩＬコードっていう暗号みたいなの。」

ヤサコは昨日のメガばあの話を二人に話した。その話をしていくうちに部屋の雰囲気はしんみりとしたものになっていった。

「そう。メガばあにそんな過去があったなんてね。」

話を聞いたフミエが壁によりかかりながら言った。

「確かに考えてみれば、イサコの暗号は猫目さんが、猫目さんの暗号はメガばあが教えたもの。事件の真相が明らかになった時、本当はメガばあが一番辛かったのかもしれない。すべての始まりは自分という罪悪感があっただろうからね。」

ハラケンがどこか一点に視線を置いて言った。

「ほんと、普段あんな感じだから全然気を遣わないけど、オババも本当はデリケートなのかもしれない。記憶が飛んでしまうのは、自

分自身をつらい過去からを守るためだって言うし。」
ヤサコはその話を聞いてから、メガばあが遠く、触れてはいけないような空気を感じるようになった。三人とも今も自分の電脳工房の宏文の仏壇で手を合わせているであろうメガばあを思った。
「とにかく、同盟にのっとって今のメタバグの話や暗号の話を黒客に教えてあげましょう。それにダイチの事件を担当した直樹さんだっけ・・・にも伝えた方がいいわね。」
フミエが提案した。
「それならオバちゃんが直通の電話番号を聞いたって言ってたから、とりあえずオバちゃんに言ってみるよ。」
ハラケンはそう言って玉子に電話をかけ、ヤサコはダイチにメールを送信した。

#4　黒い電脳霧　part2

大黒警察署電脳犯罪対策係長室の電話が鳴り響く。メガネの電話ではなく、警察署で使われるワイヤレスの内線電話である。出勤して間もないこの時間に誰だろうと思いつつ、直樹は机の上のデスクトップパソコンの電源を入れながら受話器をとった。

「はい。」

「竹下さん。県警の野村という刑事さんからお電話が入っていますが。」

受付の女性が言った。直樹はそんな刑事と知り合いだったかなあと思いつつ「繋いでください。」と伝えた。

「もしもし、いきなりお電話して申し訳ありません。私は県警交通課の野村明彦というものです。電脳犯罪対策係の竹下さんですよね。」

電話の主は中年か、あるいはそれ以上のベテランの刑事のようだった。

「はい、竹下です。大変失礼ですが初めましてですよね。県警の刑事さんが何の御用でしょうか?」

直樹はいすを引き出して座り込んだ。

「ああ、実は人に聞かれたくない話なんです。できれば周りに人がいないか確認して、あなたのメガネ番号を教えていただけますか。この電話の内容も警察署内の記録に残るんで。」

「ええ、かまいませんが。では番号を申し上げますのでメモしてください・・・」

なんとぎょうぎょうしいことをするのかと思いつつ自分のメガネ番号を伝えた。部屋には直樹しかおらず、聞き耳を立てられる心配もなかった。すぐに今度は直樹のメガネに電話がかかって来た。

「お手数をかけました。」

野村刑事が謝る。

「一体どういう内容なんですか?警察の内部にも聞かれたくないなんて。」
直樹が率直に訪ねてみる。
「警察の内部にこそ聞かれたくない話なんです。単刀直入に言えば、この件は警察の組織として正式に要請するものではありません。私個人の独断によりとり行う、ある調査への協力のお願いです。」
「ある調査?」
直樹はますます何のことだろうと思った。
「昨日私の顔なじみの検事さんから電話がありまして、一年半前の夏に大黒市中津交差点で発生した交通事故の再調査を依頼すると。」
一年半前の中津交差点での事故。それを聞いて直樹の脳裏にはよぎるものがあった。
「葦原カンナさんの事故ですね。」
すぐに直樹が返すと、野村刑事は少し驚いたようだった。
「そうですそうです。よく御存知ですね。」
「電脳を扱う者にとっては少し有名な事故ですので。」
直樹がメガネを指で直しながら答える。直樹はメガマス職員ともつながりを持っており、事故の真相については把握していた。
「実は検事さんの話によると、この事故は大黒警察の交通課が担当したそうですが、その時にメガマスからの圧力があって、捜査資料が書き換えられた可能性が強いそうなんです。ですので事故の再調査を実施して、資料改ざんの有無を確認するとともに、真実を突き止めてもらいたいということなんです。」
野村刑事が説明した。
「話はわかりましたが何故僕なんですか?僕は交通については電脳ナビシステム以外の知識は薄弱です。とてもそちらのご期待にそえるとは思いませんが。」
直樹はそう謙遜したが、あの事件の真相を知る数少ない人間ではあった。
「さっきも言ったように、この事故はメガマスからの圧力がかかっ

ている可能性があるゆえ、当時事故を担当した大黒警察の交通課には依頼できないのです。君はあの事故の時、他の所轄にいましたよね。つまりメガマスの息がかかっていないということになります。そして電脳ナビがらみの事故というなら、逆に君以外の人間が見あたらないのです。」

こんな話を聞かされる時点で、断ることはできないなと直樹は思い始めていた。

「確かにそうかもしれませんが…しかしあなたは最初から僕のことを信用してこの話を持ちかけたんですよね。一体誰から僕のことを？」

野村刑事は直樹のことを知っている口ぶりだった。直樹はそれを不思議に思い訪ねてみた。

「小野隆からです。そちらの特別顧問をやっている。私と彼は高校時代の同級生なんですよ。今回のことも彼に相談したところ、君のことを強く推されてね。」

「先生の？そうとは知らず大変失礼しました。」

小野隆は電脳犯罪対策係の特別顧問というだけでなく、直樹の大学時代の恩師でもある。直樹がこの道に入ったのも、小野の薦めがあったからである。

「それに私の部下を一人、研修という名目で一時そちらの電脳犯罪対策係に送ります。それなら君が交通事故捜査に関する知識がなくても、調査に支障はないと思います。」

もう直樹がこの話を断る言い訳ができなくなった。

「わかりました。それでは引き受けさせてもらいます。」

いすにもたれながら直樹が言う。

「ありがとうございます。さらにお手数をかけますが、打ち合わせのために明日県警に出向いてくれませんか？できれば昼休みの頃に。こちらから出向くと色々面倒なこともあるので。」

「わかりました。明日ですね。それではお昼頃伺うことにさせていただきます。失礼します。」

そう言って直樹は電話を切るとすこし小さく息をついた。すると同時にコンコンと誰かが部屋のドアをノックした。

「どうぞ。」

直樹がそう言うと、「おはようございます。」と今話題にのぼった小野隆が入ってきた。小野は五十代も後半だが、容姿としては十歳ほど若く見える。スーツの着こなしかた一つをとっても、とても研究者とは思えないいでたちであった。

「ああ先生。おはようございます。今日はどうされましたか?おとい来ていただいたばかりなのに。」

直樹が応接用のソファーに小野をうながし、お茶を入れる用意をした。

「ここの近くに用事があったので寄ったんです。あと君にお話がありまして。」

ソファーに腰掛けながら小野が言った。

「例の交通事故の再調査に僕のことを推薦したので、要請があった際には是非とも前向きな返事をお願いします・・・ってところですか?」

ポットの電源をいれながら、笑みを含んだように直樹が言った。

「もう知っていましたか。」

小野が少し驚いたように返す。

「ちょうど今県警の野村さんという方からお電話をいただきました。先生の同級生らしいですね。」

「ええ。昨日彼から珍しく飲みに行こうなんて誘われたもんですから、なにかあるのだろうなとは思って行きましたが、案の定その相談をもちかけられたもので。で、返事の方はどうしました?」

小野が向かいのソファーに座った直樹に問いかけた。

「いやいや。あんな重大な話を聞かされて断れるわけないじゃないですか。先生も僕が多忙なことくらいわかってるでしょう。人が悪いですよ。」

半分本気、半分冗談で直樹が小野に言った。

「すいませんねえ。でも僕がこの署内で自信を持って推薦できるのは君だけですし、やっぱり事故の真相を知る人が担当した方が話も早いと思ってですね。」
頭をかきながら小野が言う。
「まあ、かまわないですよ。確かに真実をひた隠しにして子供たちを傷つけた旧メガマス幹部達を許すことはできませんからね。」
正義感に溢れる直樹のコメントだった。
「ありがとうございます。ところで、例の少年はこちらに来ましたか？」
小野が直樹に訪ねた。ダイチのことらしかった。
「昨日、電話したらすぐに取りに来ましたよ。」
直樹はダイチの顔を思い出して少し頬がほころんだ。
「あのソフトのインストールは？」
「少年と、その友達にもインストールさせました。おそらくこれで、このふたつのクラブにも行き届くと思います。」
直樹が示したウインドウには、大黒黒客とコイル探偵局の情報が書かれている。
「ではこれからが実験本格始動というわけですね。万が一のことがあった時のために、くれぐれも注意を怠らないようにしてください。」
「はい。わかっています。」
直樹がそう言うと、今度は直樹のメガネに電話がかかってきた。今日は何か忙しないなと思いつつ、直樹は席を立って受話器をとった。
「あ、もしもし。朝早くに申し訳ございません。先日はどうもお世話になりました。原川です。」
電話の主は、ハラケンから情報を聞いた玉子であった。
「おはようございます。竹下です。今日はどうなさいましたか？」
「先日のハッキングの手口のことなんですけど、私の知り合いに暗号やメタバグに詳しい人がいまして、その人の話では犯人はＩＬコードという暗号を使ったのではないかということなんです。」

玉子のいう暗号やメタバグに詳しい人というのは、メガばあのことである。

「ＩＬコード？それはどういうものなんでしょうか？」

直樹が聞き返す。

「ネットワーク上で使われる暗号だそうで、他人のハードウェアに侵入する時のアクセスをステルスにできるそうです。つまりその暗号を使えば、ハッキングの際にセキュリティソフトの検知システムを欺き、メガネやメガネ所有者が気付かないうちにハッキングができるというものらしいんです。」

それを聞いて直樹は考え込んだ。

「なるほど、確かにその話が事実ならあのハッキングの状況とぴったりと重なりますね。そういえばダイチ君のメガネからは正体不明のウイルスが見つかりましたが、あれはどのように考えればいいでしょうか？」

直樹はついでに訪ねてみた。

「おそらくそのウイルス自体がＩＬコードなんじゃないでしょうか。ターゲットへの侵入経路を開いた後、そのハードウェアに残り死滅していくようなプログラミングがされていたんだと思います。」

玉子が聞いた話をふまえ推理してみた。

「うーん。なるほど。」

直樹は確かにつじつまは合っていると思った。セキュリティソフトに引っかからない新種のウイルスなら、そういうこともできなくはない。

「つまり犯人はその高度な暗号技術を持っているということですね。わかりました。こちらの方でも探してみますが、そういう人物に心当たりはありませんか？」

直樹が訪ねると、玉子はしばらく沈黙した。「もしもし？」と直樹が確認すると玉子は重い口を開いた。

「私の知っている限り、このような高度な暗号技術を使える人間はふたりいます。一人目はこの話のソースとなっている人物。その人

は、暗号を発見した故小此木宏文医師の妻で、私達はメガばあと呼んでいます。そしてもう一人がそのメガばあの弟子で、あの事件で暗躍し、今は行方不明となっている猫目宗助です。」

それを聞いた直樹は、デスクトップパソコンの中にあるファイルを開いた。そこにはあの事件に関する情報が記されている。

「猫目宗助・・・家族の復讐のために天沢勇子とミチコを利用し、メガマスの信用を地に堕とそうとした男。さらにCドメイン内に入り込んだ小此木優子さんの電脳体をも消し去ろうとした。危険な人物ですね。」

直樹の声がこわばった。小野も心配そうに直樹を注視している。

「ええ。しかし彼にはダイチのメガネをハッキングする動機がありません。ましてや彼が『キラバグは大黒黒客が握っている』などという書き込みを真に受けるはずもない。今回の犯人ではないと思いますが、一応・・・」

「わかりました。情報提供ありがとうございます。その線で捜査していきますので。では、失礼します。」

直樹が電話を切ると、ちょうどポットのお湯が沸いた。

#4　黒い電脳霧　part3

昼頃、ダイチ、ガチャギリ、ナメッチ、デンパの四人は中津交差点の近くに来ていた。もともとは今後の対策を話し合うために集まったのだが、ヤサコからのメールでメタバグが今も存在する可能性があることを知り、早速発掘に乗り出したのである。

「たとえキラバグを狙うヤツらがオレたちに攻撃を仕掛けてきても、メタバグさえありゃこっちのもんだ。あのセキュリティソフトも確かに機能するしな。」

ガチャギリがメンバーに言い聞かせた。直樹からもらったセキュリティソフトの効力を確かめるため、先刻ガチャギリがダイチのメガネに侵入するという実験を行ったのだが、ソフトは見事にガチャギリの情報をかすめとり、直樹が言っていたように有効なことがわかっていた。

「ハッキングに対してはこのソフトで万全。となるとあとは違法ツールによる実力行使だけを気をつければいいわけだからな。」

ダイチがガチャギリに続いて言った。

「ああ。それどころかこっちから犯人を探すことだってできるぜ。メタバグをえさに情報提供者を募るんだ。おそらく謎のハッカーも、ネットの書き込みをしたヤツも、大黒市のどこかのクラブとつながっているはずだからな。」

考え込みながらガチャギリが言った。大黒市には一小と三小の合併があったものの、十を越える小学校があり、それぞれに黒客やコイル探偵局のようなクラブが二、三は存在すると言われている。以前の大黒市はその三十近い電脳クラブが日常茶飯事に電脳戦争を行い、メタバグやテリトリーを奪いあっていた。その中でも黒客は名の通った存在だったので、ただでさえ黒客を狙う人間は多かった。

「おい、デンパどうした?早く来いよ。」

ダイチがふと振り返ると、一緒にいるはずのデンパが少し離されて

いたので大きく声をかけた。
「ごめん。なんかしんどいんだ。風邪ひいたのかもしれない。」
ダイチ達に追いつくとデンパが申し訳なさそうに言った。確かに顔色もさえなかった。
「おいおい。だったら今日は帰っていいぞ。こっちにうつされるのはかなわんからな。」
ガチャギリがしれっとひどいことを言ったので、ダイチは「そんな言い方ねえだろ。」と目でうったえた。
「わかった。ならオレがお前ん家まで送っていってやるよ。ガチャとナメは先に色々探しといてくれ。」
ダイチがメンバーに言った。デンパはうれしそうな顔をしたが、ガチャギリは「このお人好しめ」と言いたげな顔を隠すように、帽子のひさしを下げて了承した。
「じゃあ後でな。」
そう言って別れた場所は中津交差点の横断歩道だった。長い信号が変わるのを待っていると、先ほどまでうつむき加減だったデンパが、顔を上げ何かを探すように辺りを見回しているのにダイチは気付いた。
「どうした?」
歩行者用信号が青に変わる。
「ダイチ。何か妙な気配を感じない?」
デンパが辺りを見回しながら言う。
「気配?まさか、メタバグの音がするのか?」
ダイチが興奮気味に言った。デンパは普通の人では聞こえないメタバグが発する音を聞くことができる。以前にデンパとメタバグを探していた時は、デンパがその気配からメタバグを探し当てたことが何度かあった。
「いや。音じゃない。ダイチも感じない?この辺りの空気が妙にひんやりしてるのを。」
これは今までにないパターンだった。しかしダイチはデンパのそば

にいるのだが、そんな感じはまったくしない。
「全然わからん。だいたい三月にして強すぎるぐらいの日差しじゃねえか。お前風邪ひいてるから多少の風も涼しく思えるんじゃねえか？・・・っておい！」
ダイチがしゃべっている間にデンパがふらふらと横断歩道を渡り始めた。それを見たダイチも慌ててデンパに駆け寄った。
「なんだよ。あっちに何かあるのか？」
ダイチがデンパに問いかける。しかしデンパは集中力を研ぎ澄ませるかのように何も反応しないまま黙々と歩を進めるので、ダイチは黙ってついてゆくしかなかった。いつしか二人は横断歩道を渡りきり、そこから一本入った路地の中にある廃ビルに辿り着いた。
「ここだ。」
立ち止まったデンパがつぶやく。ビルの入り口の前には三台分ほどの駐車場があり、これまた廃車が一台止まっていた。路地の真向かいの建物が日光を遮り、ビル全体は影に覆われて陰鬱な雰囲気をかもしだしている。
「何がここなんだ？」
ダイチがデンパの顔を見ながら言った。
「さっき言ったひんやりとした空気・・・ここから流れてる。」
二人はゆっくり敷地内に入って辺りを見回した。
「オレは何も感じないけどなあ。ん？おいデンパ。このビルの中から何か煙のようなものがでてないか？」
ビルの中を探るように眺めていたダイチが言った。確かに中には黒い煙のようなものが立ちこめている。
「ほんとだ。まさか、かっ、火事？」
デンパが驚いて声を上げた。
「落ち着け。これは火事じゃない。焦げ臭くもないし、熱くもないだろ。それによーく見てみろ。あの煙のような気体。ありゃ霧じゃねえか。」
ダイチに言われてデンパは正気に戻った。そしてよく見てみるとそ

れが空間損傷の時にでる霧だということがわかった。二人はビルの中に入って行った。黒い霧のせいで足元が見えないぐらいである。

「こんな黒い霧見たことある？」

デンパがダイチに訪ねた。

「いや、見たこともなけりゃ、こんな黒い電脳霧があるなんて聞いたこともない。だがお前の感じたひんやりした空気のことを考えると、ここは古い空間の一種なのかもしれねえな。イマーゴを持ってると古い空間の近くでヒソヒソ声が聞こえることと、同じたぐいの現象が起きたということも考えられる。」

そう言うとダイチはメガネを操作してこの空間のプロパティを調べてみた。確かに廃ビルなので新しくはないが、古い空間と呼べるほどバージョンは古くもなかった。

「んー。よくわからん。ガチャギリに聞いてみるか。」

ダイチはガチャギリに電話をかけた。

「ダイチ！あれ！」

すると急にデンパが霧の深い方を指しながら叫んだ。ダイチもその方向を見てあぜんとした。

「ダイチか、なんだ？」

ちょうどそこでガチャギリに電話がつながり、ぶっきらぼうな声が左親指の方から聞こえた。そしてダイチは魂の抜けたような声で言う。

「・・・あった。」

#4　黒い電脳霧　part4

「おーい、優子はいるかえ？」
そう言ってメガバアはノックもしないでヤサコの部屋に入って来た。
そこにはまだ会議中だったためフミエとハケンがいた。
「なんじゃ、お主ら来とったのかい。」
その二人を見てメガばあが言う。
「や、やあ、メガばあ。いいお天気ね。」
フミエがどこかぎこちない感じの挨拶をした。メガばあの過去の話を聞いてから、どう接していいのかわからなくなった様子だ。
「なんかよそよそしいのう。まあええ、ちょうど良かった。せっかくのいい天気じゃからわしのおつかいを頼まれてくれんか？」
「おつかい？」
三人が口をそろえて言った。
「このチラシを街のあちこちにある掲示板に張ってきてほしいのじゃ。」
メガばあが十枚ほど重ねてある紙を差し出して言った。
「チラシ？なになに。『誠に勝手ながら、メガシ屋は三月いっぱいを持ちまして閉店させていただきます。長らくのご愛好ありがとうございました』・・・わざわざこんなもの張りに行かなくても、メガシ屋に来る人なんてもういないじゃない。ただ働きなんて面倒だわ。」
チラシを見たフミエが言う。早くもメガばあへの気遣いも元に戻った。
「こういうものは最後まで礼節を忘れてはならないのじゃ。はるばる遠くから来て、いつの間にか閉店しておったとあらば申し訳なかろう。これはコイル探偵局最後のミッションじゃ。それとも何か、ヒミツをばらされてもいいというのじゃな、フミちゃん？」
メガばあがフミエに詰め寄った。

「ヒミツ？」
ヤサコとハラケンがそれに反応した。おそらくメガばあがフミエを探偵局に引き入れるために握った、フミエの弱みのことだろう。
「おーっほっほっほ。さあ二人とも、こんな天気のいい日に外で太陽を浴びないなんて、子どもらしくないわよ。早く行きましょう！」
フミエはメガばあの一言で俄然やる気になった。どうやら相当人に知られたくないことらしい。
「そうねえ、私はフミエちゃんのヒミツを知りたいから行かない。」
微笑みながらヤサコが言う。ハラケンもそれを聞いて吹き出してしまった。
「ヤサコぉぉぉ！」
しかしフミエはすごい形相でヤサコをにらみつけ、メガビーのかまえをとっている。
「じょ、冗談。」

こうして三人は強い日差しの中を歩き回ることになった。
「ねえ、ヒミツって何なの？」
どうしてもそれを聞きたいヤサコがフミエをのぞきこんで訪ねる。
「言えるわけないでしょ。にしても、このままじゃメガばあのいいパシリだわ。コイル探偵局が解散するとはいっても、今後もなにかと面倒かけられそうね。」
フミエがため息をつきながら言う。ヤサコも同感だったが、こうやって親しい友達と一緒ならこれも悪くないとも思った。
「ところで、ハラケンはどういう経緯でもって探偵局に入れられたの？今まで聞いたことなかったよね？」
今度はフミエがハラケンに訪ねた。
「うん。・・・昔、クロエに何かバグが入って病気のような症状がでたことがあったんだ。色々調べたんだけど治療法は見つからず。その時ダイチの紹介で始めてメガばあのところに行ったんだ。メタバグもお金もそれほど持っていなかったんだけど、メガばあはコイ

ル探偵局に入ることを条件に薬を練ってくれた。その時カンナと一緒に・・・」

懐かしいようにハラケンが話した。クロエとはカンナの飼っていた電脳犬のことである。当時はハラケンもクロエをまるで自分のペットのようにかわいがっていた。だからメガばあの出した条件も甘んじて受けた。しかしクロエの死後、その現実を受け止められないカンナは中津交差点にクロエを探しに行き、あの交通事故に遭ってしまう。その悲しい運命を思い、ヤサコとフミエはまたしんみりとしてしまった。

「あっ、いや。そんなに深刻な顔をしないでよ。僕はもう、いい思い出として心に刻んでるんだ。気を使わなくても大丈夫だよ。」

その二人を見たハラケンが言った。もうカンナのことは引きずっていない、むしろ周りの人にそのことを気にさせるのは申し訳ないともハラケンは思っていた。

「そう。よかった。しっかり立ち直っているわけね。」

フミエがハラケンに言った。ヤサコももちろんうれしかったが、反面ハラケンが少し遠く見えた。ノスタルジックに思われる人の方が、何倍も素敵な感じがするからだ。

鹿屋野神社前、旧第三小の正門近くの掲示板に張り紙をして、三人は中津交差点に向かった。旧第三小正門前の道をそのまま西に進めば辿り着く。その道を進む途中、ヤサコは妙な感覚がして立ち止まった。

「どうしたの?」

それに気付いたフミエが声をかける。

「…ねえ。二人ともこっちに来て。この辺りの空気が妙に冷たいの。」

ヤサコはデンパが感じたものと同じような気配を感じたのだ。

「なに?冷たい?そんなわけないじゃない。こんな日なたの真ん中なのに。」

そう言いながらフミエはヤサコのいる方に歩み寄った。実際なにも感じないようだ。

「ほんとだ。かすかだけど、ここだけ冷気がたまっている…いや、流れてきているんだ。」

しかしハラケンはヤサコの言っていることがわかったらしい。イマーゴに関しては、ハラケンもヤサコほどのものではないが持っている。もちろん、この感覚がイマーゴによるものかどうかはわからないが。

「なに？じゃあ私がニブいっていうの？っていうかアンタ達がおかしいんじゃないの？」

なにも感じないフミエが卑屈になって言った。

「こっちよ。」

そんなフミエの言葉も聞かずヤサコは歩み始めた。風上に何かあると感じたのだ。

「まったく。」

フミエは不満げに腕を組んで、ヤサコやハラケンについてゆく。中津交差点手前の横断歩道を渡ってまっすぐ歩き、一本目の角を左に曲がると人気の無い通りに入った。太陽がほぼ真上にあるにもかかわらず、左手に並ぶ建物のため通りの半分は影に覆われている。

「何なの？この静かな通りは。」

不気味に感じたのか、フミエはいつのまにか両手をヤサコの肩にのせて歩いていた。

「交通量の多い中津交差点の裏に、こんな通りがあったなんてね。この辺はビジネスビルが多いから今まで全然来なかったけど、こんなにさびれていたんだね。」

辺りを見回していたハラケンが言った。確かに中津交差点から北東にあるこのブロックはビジネス関係のビルが中心で、しかも電波状態の悪い地区なので子ども達が近づくことはほとんどなかった。

「このビル…」

ヤサコの足が止まった。四階建ての横長のビルで、今も使われてい

る感じはない。
「大黒ビジネスホテル？」
ビルの屋上にある立方体にそう書かれていた。通りに面したところにある出入り口は固く閉じられており、ヤサコ達の立っているビルの東の端のくぼんだところに勝手口とおぼしき扉があった。しかしその前にはフェンスがかけられている。
「ここからアンタの言う、冷たい空気がでているのね？」
フミエがビルを見上げて言った。「うん。」とそれにヤサコもうなずいた。
「ねえ、窓のところを見て。なにか黒い煙みたいなものがたちこめてない？」
目をこらしていたハラケンが言った。二人もよーく見てみるとそれを確認した。
「火事…じゃなそそうね。こんな人気のない場所から出火するとは思えないし、なによりアンタ達が感じた冷たい空気…ちょっと中に入って調べてみる必要がありそうね。」
フミエがそう言うとヤサコとハラケンもうなずいた。目の前のフェンスをよじのぼり、勝手口に手をかけると鍵はかかっていなかった。
「おっじゃまっしまーす。」
フミエがそう言って扉をあけ、黒い霧のたちこめる建物内へ入っていった。

#４　黒い電脳霧　ｐａｒｔ５

ヤサコ達は勝手口から入ったものの、廊下を少し歩くとまたドアにぶちあたった。そのドアは鍵がかけられており、ちょうど落ちていた針金で、フミエがピッキングの要領であけようとしているところだった。

「大黒ビジネスホテル…あった。１９８０年代、当時の大黒市の商業地区の中心である中津に建てられたビジネスホテル。開業以来経営は順調で２０００年代に増築、七年前には改修工事が行われるはずだった。しかし当時行われていたメガマスの電脳インフラの整備とともに、中津地区の電波状態は著しく悪化。多くの企業が中津から撤退し、ビジネスホテルも経営の目処が立たず改修は頓挫。土地を売りに出すも買い手は見つからなかった。今は内側がすべて取り壊された建物だけが残り、中津地区荒廃の象徴となっている。」

このビルについて調べていたハラケンは、大黒市の地理情報が書かれているサイトを閲覧していた。

「ふーん。じゃあここもバスの墓場と同じような場所なのね。この黒い霧の正体はわからないけど。」

手を動かしながらフミエが言う。

「でも別に古い空間というほどでもなさそうよ。」

空間のプロパティを調べていたヤサコが言った。これはダイチ達と同じ結論だった。

「中津交差点の近くだからね。何が起こっても不思議はないような感じもするけど。」

ハラケンがそう言うとカチャッという音がした。

「あいたわ。」

フミエがそう言って持っていた針金を投げ捨てた。

「すごい、フミエちゃん。」

ヤサコが賞賛する。

「へへん。ハッキングとピッキングは任せとけい。」
得意そうにフミエが言い、そしてゆっくりとそのドアを開いた。その中のフロアはがらんどうで、改修工事の時に中身をすべて取り払ってから何も手を付けていないような状態だった。フロアの東側と西側に階段があり、南側には封鎖された出入り口、東の端にヤサコ達が入って来た勝手口に通ずる扉、西の端にもう一つの出入り口があった。南北よりも東西に奥行きのあるつくりとなっている。中は昼間にも関わらず薄暗かったが、雲の隙間から太陽が顔を出したのか窓から光が射し込んできた。するとフロアの中が何やら鮮やかに光り出した。
「メ、メ、メタバグだわ!それも大量の!あの噂は本当だったのよ!すごい!これだけあれば、またメガシ屋が営業できるわ!拾ってメガバアのところに持っていきましょう!」
フミエが叫ぶように言って目の色が変わった。黒い霧の中に、今まで見たこともないような量のメタバグがころがっていたのだ。それが窓からの光に照らされて無数の星のように輝いている。
「まだ、こんな場所があったなんて……。そうだ、オバちゃんに。」
あぜんとしたハラケンが独り言のようにつぶやき、玉子に電話をかけようと指電話をつくった。
「待ちなさい。これだけのメタバグよ。どうしてオバちゃんに報告なんかするの?そしたらオバちゃんの伝言で空間管理室が飛んでくるじゃない!」
フミエがハラケンのもとに寄り、指電話をつくった手を押さえつけて言った。
「決まってる。こんな空間、フォーマットしなくちゃいけないんだ!」
珍しくハラケンが大声を出し、フミエの手を振り払った。
「だからなんでっ!?」
よろけた足を踏ん張ってフミエがハラケンをにらみつけた。ヤサコはその様子を怯えながら見守っていた。

「これだけのメタバグがあれば、大黒市はまた無秩序に帰る。こんなものが高値で取引され、街のいたるところで電脳戦争が起こる。それに大黒市がまた元の状態に戻れば、新たな都市伝説が生まれ、あっちに迷い込んでしまう子どもが出るかもしれない。何よりこんなものとキラバグが存在したためにあの事件が起こってしまったんだ。あの事件を知る僕達が成すべきことは、二度とあのようなことを繰り返さないようにすることなんだ。」

ハラケンが片手で落ちていたメタバグを拾いながら言った。その手に握られたメタバグを見つめる目は憎しみをはらんでいた。

「…アンタの気持ちはわからなくもないけど、あっちと呼ばれた空間も、ミチコさんもヌルも、すべて消滅したのよ。もうどんな都市伝説も意味を成さないし、意識が異界に行ってしまうことはない。確かにこれは違法性もあるけど、ただ単に子ども達が楽しむものとして残したとしても、危険はないんじゃない？」

フミエが説得するように言った。しかしハラケンはフミエと目を合わさなかった。

「じゃあ聞くけど、この黒い電脳霧は一体何？これは水面下でまた空間異常が起こっている証拠じゃないのか。この場所が絶対安全だっていう保障はないだろ。」

ハラケンが問いかけた。

「それは…」

フミエは言葉が詰まった。フミエにしてもこんな黒い霧を見るのは初めてであり、これに関する情報も聞いたことがなかった。

「うひゃひゃひゃひゃひゃ。」

すると突然上の方から狂気じみた人の笑い声が聞こえてきた。三人には聞き覚えのある声だった。

「まさか。」

フミエが天井を仰いでつぶやいた。

#4　黒い電脳霧　part6

「信じられん。これも全部そうなのか？」
ガチャギリが呆然としてつぶやく。ビルの二階まで上がってきた黒客のメンバー達だったが、そこもまさにメタバグの海だった。
「あのネットの噂は本当だったんスね！」
足下にころがるメタバグを両手いっぱいにすくったナメッチが興奮して言う。すぐにズボンのポケットの中に詰め込もうとした。
「落ち着けナメッチ。まずは作戦会議だ。オレもこれほどの鉱脈があるとは思わなかったが、ひょっとしたらこの場所もとっくに誰かに知られているかもしれねえ。逆にこれだけの鉱脈が今まで見つかっていなかったっていうのが不思議なくらいだ。」
ダイチがそう言うのでメンバーは輪になって座り込み、話に耳を傾けた。
「まあな。だからと言って手を出さねえで帰るなんてありえねえ。誰かが来れば実力行使で追い返せばいいだけの話だ。」
ガチャギリが意気込んだ。金にめざといガチャギリにしてみれば、この場所は誰にも明け渡したくなかった。
「でもさ、追い払うことに成功したとして、そいつらにこの場所の存在を空間管理室にチクられたら元も子もないんじゃないっスか。だったら誰もいない間にコツコツ持って帰る方が確実だと思うけど。」
ナメッチが口を挟んだ。なるべくいざこざに巻き込まれたくないと考えている。
「バーカ。これだけのメタバグがありゃでかい金儲けができるんだ。そうやって平和にちびちびやるのは小心者のすることだろ。この場所はオレたちが占領してやるんだ。それにな、仮にオレがこの場所を追い払われてしまったとしても、空間管理室にチクったりはしねえ。オレなら逆にこの場所を奪い返そうとするだろうな。これだけ

のメタバグがみすみす消されるのはもったいねえからな。」
ガチャギリがそう言うとナメッチは言い返さなかったので、これが黒客の方針と決まった。
「まあどっちにしても先立つものは必要だからな。当面の活動資金分を拾って今日は帰るか。占領するって言っても一日中ここに居座ることはできねえからな。」
「了解。」
ダイチが話をまとめ全員が同意した。そして床に落ちているメタバグを拾ってはポケットに詰め込んでいった。
「ところでダイチ。例のハッカーのハッキングの手口だが。」
腰を屈めてメタバグを拾いながらガチャギリが言った。
「ああ。」
同様の姿勢のダイチが答える。
「ヤツはお前のメガネへのアクセスをステルスにして侵入したって話だったな。」
「ああ、ヤサコのメールにはそう書いてあったな。メガばあからの情報みたいだが、それを発見した研究者はＩＬコードと名付けて封印したらしい。そんな高等テクを使えるヤツが犯人だってことだが、まったく心当たりがないな。」
ダイチは手を止めて考えてみた。イサコに暗号を仕込んでいたという猫目宗助のことも頭によぎったが、ダイチは面識がなく、ましてや彼に狙われる理由なんてどこにもないと思っていた。
「しかし似てねえか？」
ガチャギリが唐突な質問をした。
「何に？」
ダイチがガチャギリの方を見返す。
「ホレ、イサコが転校して来たその日に、オレたちが電脳戦争を仕掛けて返り討ちにされたことがあっただろ。あの時アイツが使っていた暗号にだよ。」
ガチャギリが苦笑いを浮かべながら言った。あの時黒客にしては珍

しい完敗を喫したわけだが、その後のイサコの行動をふまえると、なんとも無謀な戦いを仕掛けたもんだと思えたのだ。

「ああ。確か、いつの間にかレーダー上には二つのマークが映っていて、オレたちはアイツが分裂したんだと思った。偶然ほんもののイサコの位置がわかってその場所に行ってみると、そこには先にヤられたナメッチがいた。その状況を飲み込む前に、既にイサコに奪われていたショートカットと直進君によって、オレたちのメガネはクラッシュさせられてしまった。その時イサコは全然違う場所にいたんだったな。」

ダイチも思い出しただけで可笑しくなり、我ながら見事にやられたもんだなあと思った。

「そうだ。レーダーにはまったくダミーを認識させて本物は検知されないまま違うドメインに入る。例のハッキングも、ネットワーク上で同じ原理を使ったとは考えられねえか？」

ガチャギリが落ちていたメタバグをマーカーの代わりにして説明した。

「確かにそれは大いに考えられるな。ということはやっぱ犯人はイサコに暗号を教えたという猫目宗助になるんかな？」

ダイチはガチャギリが同じことを考えているのか確かめるように聞いた。もちろんガチャギリも事件の真相を聞いているので、猫目宗助のことは知っていた。

「も一つ気になるのが、オレとナメがイサコのイリーガル狩りを手伝っていた時に、キューちゃんやメガネをかけた人間にはオレたちが認識できなくなるという暗号を使っていたことだ。これは割と単純な暗号でな、オレもイサコから教わっていて、一応使うことはできるんだ。もっともその暗号は空間に作用するもので、その暗号が書かれたエリアに入らないと効力を発揮しない。電脳戦争のときにイサコが使った、自らを消してしまうものとはタイプは違うが、効果は同じステルス機能だ。まあ、いっしょくたにするのは多少強引だと思うが。」

ガチャギリはその暗号をウインドウに出した。確かに構造自体は単純で、ダイチでもすぐに覚えられそうだった。
「つまり、お前が言いたいのは？」
ダイチがもう一度ガチャギリを見た。
「例のハッキングの手口も、ＩＬコードとかいうもんじゃなく、もっと単純な暗号技術の発展系を使ったっていうことも考えられる。つまりＩＬコードを知ってる人間や、猫目のように暗号を自由自在に操れる人間じゃなくても、ステルスアクセスを使うことができるかもしれねえってことだ。」
ガチャギリが話をまとめた。
「なるほど。お前の考えでは、犯人はもっとそこらへんにいるメガネユーザーかもしれねえっていうんだな。」
ダイチの声のトーンが上がった。犯人も黒客と同等レベルのユーザーなら勝負になると踏んだからだ。
「ああ。それにオレの仮説が正しければ、オレたちにだってそのステルスアクセスが使えるかもしれねえ。研究してみる価値はありそうだぜ。」
ガチャギリが笑みながら言う。
「研究資金にだって困ることはないからな。よーし、拾うぞっ！」
そう言ってさらにやる気になったダイチは、東側のフロアの奥の方にメタバグを拾いに行った。

#4　黒い電脳霧　part7

ビルの二階や上の階もフロアはがらんどうになっているが、東西のちょうど真ん中あたりは壁で仕切られており、扉一枚分ぐらいの出入り口があった。ちなみにビル自体は6階建てだが、5階に通ずる階段には、東階段も西階段にも砂袋が積み上げられており、実際には4階までしか行き来できない。メタバグを拾っていたダイチは、東西を仕切る壁の出入り口の向こうの黒い霧の中に、数人の人影がいるような気配を感じ取った。

「だ、誰だっ！」

そう叫んでダイチが身構える。他のメンバーもその声を聞いて驚いたようにダイチの方を見やった。

「ずいぶんと景気が良さそうじゃない。ダイチ！」

ダイチの前の霧が晴れる。

「フ、フミエ！それにお前ら！」

ダイチが構えを解いた。そこにはヤサコ、フミエ、ハラケンの3人が立っていたのだ。

「なんだお前ら？何しにここに来た？」

ガチャギリが立ち上がって言った。

「まあ、しいて言えばアンタ達と同じよ。これだけのメタバグ、見逃すのは惜しいでしょ？」

フミエが挑発的に、右手の手のひらを返しダイチを指差しながら言った。

「オレたちをツケてきたのか？」

ダイチがにらみつける。

「うぬぼれなさんな。私たちにストーカーの趣味はないわ。偶然自分たちで見つけたのよ。」

フミエは今度は腰に手を回して言った。

「んなこたぁどうでもいい。ここはオレたちが先に見つけたんだ。

この場所はオレたちのもんだ。いくらお前達とはいえ、これ以上ここにとどまるのは許さんからな。」
ガチャギリが歩み寄り、三人の前に立ちふさがった。
「おーおー。さっきのアンタ達の会話通りの展開ね。でも残念ね。ここに約1名、こんな場所はフォーマットした方が良いって言っている人がいるの。私たちをここで追い返したらどうなるのか、わかるわよね？」
フミエがハラケンの方を目でさしながら言った。ちなみにヤサコ達3人は、先ほどの黒客の会話を一部始終聞いていたのである。
「ああっ？おいハラケン。フォーマットされた方が良いってどういうことだ。まさかお前、この場所を空間管理室にチクるつもりじゃあるめえな！？」
ガチャギリがハラケンの方に目を移して言った。思わぬ敵の登場に珍しく慌てた様子である。
「…僕は、この場所を消したいと思っている。これだけのメタバグがあれば、大黒市はまた元の状態に戻る。都市伝説が次々と生まれ、それを信じた子ども達が危険な空間へと入りこんでしまうかもしれない。この黒い霧は何か悪いことが起こる兆候のように思えてならない。僕らの知らないところで、また空間崩壊が起こっている。そんな場所を、あの事件を知るものとして見過ごすわけにはいかないんだ。」
ハラケンがうつむきながらゆっくりと言い、それを聞いたダイチ達も一瞬考え込んだ。
「でもよ、お前だってこれだけのメタバグを失うのは惜しいとは思うだろ？こいつらにはまだまだ利用価値があるんだぜ？」
それでもガチャギリがハラケンを説得するように食い下がった。この場所に対する執念はすさまじいもので、土下座すらしてしまいそうな勢いだった。
「悪いけどガチャギリ。僕は、お金よりも大切なもの、守らなくてはならないものがあると思うんだ。」

しかしハラケンはガチャギリの目を見つめてしっかりと言った。ヤサコもハラケンの後ろでうなずいた。

「くそっ！」

ガチャギリは重い過去を背負うハラケンを責めることはできず、行き場のないいらだちを吐き出すように叫んだ。そんなガチャギリをなだめるかのように、その肩をポンポンと叩いてダイチがハラケンに歩み寄った。

「なあハラケン。少し考えてくれねえかなあ。確かにお前の気持ちはわかるし、今のガチャギリの言い方も良くないとは思う。でもよ、オレだってこのメタバグにはちゃんとした利用方法があると思うぜ。」

ダイチがやんわりとした口調で言った。表情もこころなしか柔らかかった。

「利用方法？」

ハラケンがダイチの目を見た。

「そうだ。メタバグからは武器だけじゃなく、例えば電脳ペットのバグ取り薬を作り出すこともできるだろ。つまり科学と一緒さ。科学は戦争に使われることもあるが、うまく使えば生活を豊かにしてくれる。要は使う人間のモラルによって、その価値は決まるんだ。」

ダイチは何かの本で読んだようなことをそのまま言ってみた。

「アンタにしてはしごくまっとうな意見だけど、果たして黒客にそんなモラルがあるって言うのかしら？」

腕を組みながら話を聞いていたフミエが割り込んだ。

「さあな。でも正直言って、お前もメタバグはのどから手が出るほど欲しいんじゃねえのか？」

ダイチが落ちているメタバグを示しながら言った。。

「さあ、どうだか。」

フミエははぐらかしたが、ダイチはフミエの様子を見て、完全にハラケンに肩入れしているわけでもなさそうだと判断した。そして再びハラケンの方を向き直した。

「それにハラケン。この場所はお前達のものでもなけりゃ、まだオレたちのものでもない。オレたちの都合でお前らを追い出すのはもちろん筋違いだが、お前だけの考えでこの場所を消そうっていうのも筋違いじゃねえか？」

ダイチの意見を聞き、ハラケンは少し考え込んだ。

「…確かに。僕だけの考えのために、みんなの同意を得ないでそれをやってしまうのは間違ってるね。ましてや君たちがメタバグを有効利用するための努力をするっていうのならなおさらだ。」

ハラケンに人の意見を無視するような強引さはない。ダイチはそこを突いて、じっくり説得する作戦に出た。

「さすが、ものわかりがいい。そこでもう一回話を整理するとだな、オレたち黒客はこのメタバグの鉱脈を使って一儲けしたい。多分フミエも同じ考えだろう。そしてお前はこの空間をメタバグもろともフォーマットしたいと考えている。そこで、この空間をどうするか多数決で決めるなら、数で勝るオレたち黒客の意見が通るのはわかりきっていることで、公平さに欠けるよな。そうだ、ちなみにヤサコはどう考えてるんだ？」

ダイチがいきなりヤサコにふった。ヤサコは話の間も色々考えてはいたが、ハラケンの言っていることも、ダイチが言っていることも間違いではないと感じ、はっきりとした自分の意見がまとまっていなかった。

「…ハラケンがこの空間をフォーマットしたいっていう気持ちはわかるわ。でもメタバグによって作られるバグ取り薬も必要としている人もきっといるわけで、このメタバグすべてを消してしまうのは、もったいないって言うか、違うと思う。だけど、こんな言い方するのは良くないけど、例えばみんなで協力し合って、薬の原料になるメタバグだけを集めるっていうことに決めても、お互いが常に監視し合ってないと、誰かがルールを破ってしまうと思うの。でもそんなこと実際できないし、ハラケンが言うようにここは異常空間に他ならないわけで、何かが起こってしまう前にフォーマットしておい

た方がいいとも思う。難しいところよね。」
ヤサコの話を、フミエやハラケン、ダイチもうなずきながら聞いていた。みんなが葛藤しているのはまさにその部分であり、そう簡単に答えのでるような問題じゃないと誰もが感じていた。
「そうだ。これは難しい問題だ。さっきも言ったように、ここで多数決で決めてしまうのはフェアじゃないし、たとえオレたちが一日話合っても、誰しもが納得できる妥協案ができあがるかどうかは、はなはだ疑問だ。そこでオレは誰しもが納得できる決め方を一つだけ思いついた。」
ダイチが右手人差し指一本だけ立てて言った。
「それは?」
ハラケンが聞き返す。その場にいる全員も次の言葉を待った。
「果たし合いだ。」
ダイチが一歩踏み出して力強く宣言した。
「は、果たし合い!?」
ダイチ以外の全員の声がそろう。
「そう。果たし合いに勝利したクラブこそ、電脳力は上。力があるものこそ決定権を持つ。それは古代からの習わしだ。すなわち、果たし合いに勝利したクラブに、この場所の支配権が与えられる。それを得たクラブは、メタバグを集めるなり、空間ごとフォーマットするなり、好きなようにしていい。そしてこれは消化不良に終わってしまった、夏の果たし合いの決着をつけるという意味もある。どうだ?」
ダイチが笑みを含みながら言った。
「なるほど。アンタにしては名案ね。いいわ。この際だからはっきり白黒つけようじゃないの!勝って欲にまみれたアンタ達をこの場所から追い出してやるわ!」
フミエが鼻息荒く言った。笑みを浮かべながらにらみ合うフミエとダイチは、まさに水を得た魚のようだった。
「ちょっと待って。それはいくら何でも乱暴じゃない?もっと建設

的に話し合ったら、きっといい方法が浮かぶはずよ。それに私たちは昨日、同盟を結んだばかりじゃなかった？今は手を取り合わないといけない時じゃなかったの？」

ヤサコが間に割って入った。どうしても相容れぬ方向に持っていくフミエとダイチに任せてはおけないと思った。

「甘いわよヤサコ。アイツらと建設的な話し合いをしようなんてどだい無理な話。今は下手にでているけど、いざ自分たちに悪い条件になったら、あーだこーだ文句をつけて、交渉が決裂するのは目に見えている。だったらそんな時間を無駄にするより、勝負で決めた方が手っ取り早いしわかりやすいわ。」

フミエはそう言ってヤサコの言葉に聞く耳を持たなかった。今はダイチ達をコテンパンにすることしか頭にはないようだ。

「ハラケンはどうなの？こんな決め方は乱暴だと思うでしょ？」

ヤサコはハラケンにすがった。もう自分と同じ考えを持つのは、ハラケンだけしかいないと思った。

「そうだハラケン。オレたち４人は果たし合いで決めることに異存はないぞ。あとはお前達がのるかどうかだ。」

ダイチがハラケンに向かって言った。すでに黒客の意志は果たし合いをすることに決まったようだ。ハラケンしばらく考え込み、一度大きく息をついて口を開いた。

「…電脳生物部にいた時、僕はやりたい放題をやる君たちに何も言わなかった。あの時の僕は一人でいるのが良かった。周りでなにが起きても無関心だった。だから君たちをうっとおしく思ったこともなかった。ひとり背負い込んでしまった過去を償うために、笑うことも忘れて、ただ盲目的に事件を追っていた。でも、決して一人でいるのが寂しくなかったわけじゃない。だから、ヤサコやフミエが自由研究を手伝ってくれるって言ってくれた時は素直に嬉しかった。なのに僕は、カンナの影が近づいてくるにつれ、独りよがりになった。結局は一人でなんとかしようとしたため。あの時、君たちと少しでも話し合って、同じ時間を共有していれば、苦しみを分かち合

い、僕はもっと子どもらしく、笑っていられたのかもしれない。本当は僕が悪いのに、こんなことを言うのはおかしいけれど、僕は君たちとの失われた時間ををゆっくり埋めていきたい。もちろん、ヤサコやフミエともね。僕達は同じクラブに所属した友達だから。」

ハラケンがゆっくり、過去を振り返るように言った。ダイチ達もハラケンを一人にしてしまったことを申し訳なく思った。

「わかった。ハラケンは話し合いで決めたいんだな。果たし合いもなし、ということだな。」

ダイチは仕方ないと思いながら言った。ヤサコもその言葉にホッと胸をなでおろした。

「…ただ、君たちが闘いの中に喜びを感じているのは知っている。君たちとの対話が闘いの中でできるなら、そしてそれが偽りのない本音だというのなら、この果たし合い、受けて立ってもいいよ。」

ハラケンのその意外な言葉に、その場にいた全員が驚き目を見開いた。

「ほ、ほんとか!?」

ダイチが興奮して叫ぶ。

「君たちと同じ時間を共有するには、これが一番だと思う。一番濃密を時間を過ごせるはず。もちろんやるからには手加減はしないし、そっちも手加減は無用だ。」

ハラケンが力強く言った。ガチャギリは「よーし!」とガッツポーズをし、フミエも「よう言った!」と拍手を送っている。

「ハラケン。いいの?確かにみんなと楽しみたいのはわかるけど、それとこれとは別問題じゃないの?」

ハラケンの意外な答えに困惑したヤサコが問いかけた。

「…僕もまだまだ子どもなんだ。理屈を越えることができるのは子どもの特権さ。自分の意見を通すには、勝負に勝てばいい。僕ら子どもにとってはそれだけのことなんだ。僕らはただ本当の勝負をしたいだけ。それにどっちの意見も正論じゃなければ、間違いでもない。だったらそんな水掛け論をするよりも、こっちの方が手っ取り

早い。」
ハラケンの言葉にヤサコは驚きつつも、心のどこかでは安心した。
そのハラケンをこれ以上止める理由もなかった。
「で、問題の果たし合いの内容はどうするの？」
全員の意見がまとまったところで、フミエがダイチに問いかけた。
「うーん。そうだな…そうだ！明日ついに発売される『ＶＲクエスト３』のＶＳモードで決めるっていうのはどうだ？」
ダイチが提案し、そのゲームのウェブページをウインドウに出した。
「ＶＲクエスト３？」
何だそれと思いながらヤサコがつぶやいた。
「知らないの？名前ぐらいは聞いたことがあるでしょ？」
フミエがヤサコに問いかける。かなり常識的な言葉のようだった。
「まあ、ちらっと聞いたことぐらいはあるけど、どんなものかは…」
知らないのは自分だけだとわかり、申し訳なさそうにヤサコは言った。
「『ＶＲクエスト』は、世界で累計二千万本以上は売れている、メガネゲームの代名詞といっても過言ではない人気シリーズよ。主人公は自分自身。簡単に言えば、メガネが見せる仮想空間のなかで、大冒険を繰り広げるという、リアルアクションＲＰＧね。人間の錯覚をうまく利用したシステムで、テニスコート一つ分くらいの空間があれば、そこに壮大な世界が作り出せてしまうの。さすがに痛みは感じないけど、まるで自分がその世界で戦っているような臨場感は、これまでのゲームとはまったく別もの。このゲームの登場は、ゲーム業界に革命が起きたとも言われたの。まあ、それは第一作目が発売された五年前の話。その最新作がいよいよ明日発売されるのよ。」
フミエが丁寧に説明した。確かにヤサコも、放課後に運動場でそれらしいことをやっている生徒を見たことがあった。
「このゲームには本編であるストーリーモードの他に、ＶＳモードっていうのがあるんだ。例えば、オレたちが三つのダンジョンを選

ぶとするだろ、それをお前達がプレイする。逆にお前達が三つのダンジョンを選んだなら、それをオレたちがプレイする。その三つのダンジョンで稼いだ得点が多い方が勝ちというモードだ。ダンジョンはレベルが三つあって、それぞれのレベルに十個のダンジョンが用意されている。その中から一つずつ、計三つを選ぶことになる。各ダンジョンには様々なバリエーションがあって、体力が問われるもの、知性が問われるもの、戦略性、度胸、反射神経など色々ある。ダンジョンを選ぶ時には、相手が苦手そうなジャンルのダンジョンを選ぶのが、勝利への鍵だな。」

ダイチも懇切丁寧に説明した。ヤサコも「なるほどぉ。」と相づちをうった。

「あと、私たちとしてはうれしいことにこのゲーム、ちょっと改造したらメタバグとの互換性をもたせることができるの。例えば、ゲームの中のアイテムでメガビーや鉄壁などが使用できるわけ。まあ言ってしまえば、それはチートになるんだけどね。つまりゲームオーバーになれば、メガネごと壊れてしまう。条件はかなりシビアよ。」

フミエもこのゲームに関してかなり詳しいようだとヤサコは感じた。普段絡んでいても、フミエがゲームの話をしているのを聞いたことがなかったので、少し意外な感じだった。

「じゃあここは公平に、ここに落ちているメタバグをお互い同じメタ数だけゲームで使うことにしようぜ。あと、ヤサコはこのゲーム初めてのようだからな。ここはハンデで、そっちのダンジョンの難易度は一つ下げてやらあ。」

ダイチが腕を組んで言った。ちなみにメタ数とはそのメタバグの価値を表す数値である。一般的に強力なメタタグやツールの原料となるメタバグはその価値が高い。

「あ、ありがとう。あと、明日はちょっと用事があるから都合が悪いの。果たし合いはあさってにしてくれない？」

ヤサコがダイチに言った。次の日はメガマスでイマーゴの実験があ

る。
「わかった、あさってだな。場所はここ。時間は人通りが少なくなる夕方でいいな。ソフトの方はこっちで用意する。ウェブページにダンジョンの概要が載ってるから、それを見て作戦を立てて、メガビーの素振りでもしてせいぜい備えとけよ。」
ダイチが上から目線で言った。自分達が負けるはずがないという自信の表れのようだった。
「ちょっと待って、この建物に他の誰かが出入りしてたらどうするの？その人達とトラブルになったら、果たし合いどころじゃないじゃない。」
フミエがダイチに訪ねた。
「そうだな。もしそうなったら、そいつらと話をつけなきゃならねえが、まあその時はその時だ。とりあえず明日一日オレたちが張り込んでおいてやってもいいぜ。もしこの鉱脈を知っているヤツがいるなら、そう何日も放っておくはずもねえしな。」
ダイチが胸を叩きながら言った。これだけのメタバグを手に入れるためなら、どんな苦労もいとわないらしい。
「そう言って先にトラップ仕掛けたりとか、勝手にメタバグ持って帰るとかするんじゃないでしょうね？」
フミエが疑いの目でダイチ達を見た。
「バカ言え。せっかくの真剣勝負で、そんなしょうもないことするわけねえだろ。第一お前ら相手にそこまでする必要もねえしな。それに果たし合いの決着がつくまで、勝手にメタバグをあさったりもしねえよ。それくらいのことはわきまえてるっつーの。」
フミエの言葉に怒るわけでもなく、むしろ挑発的にダイチが言った。
フミエもそれに鼻で笑って返した。すでに果たし合いの前哨戦は二人の間で始まっているようだ。
「と、とにかく、あさっての夕方にここに来ればいいのね。行きましょうフミエちゃん。」
二人のやりとりを見ていられないと思ったヤサコが割って入った。

もちろんヤサコもこれがいつものことだとはわかっていたが、どうにも放っておけない気がするのだ。
「待て。お前らは何メタ拾って帰るつもりだ?そっちの言い値に合わせるぜ。」
ダイチが向こうに行こうとするヤサコ達を呼び止めて言った。
「じゃあ５０００メタでどう?」
フミエが振り向いて言った。つまりお互いに５０００メタ分のメタバグをここで拾って帰り、メタタグなりツールなりに加工して、果たし合いの日に持参するということである。
「わかった。じゃあオレたちは４５００メタ分を拾えば十分だな。」
ダイチが黒客のメンバーに言い聞かせるように言った。
「はあ!?じゃあこっちは４０００メタ分でこと足りるわ。あんなバカどもはハンデをつけて葬り去るまでよ。」
ダイチの言葉を聞いたフミエが、同じようにヤサコとハラケンに言った。
「なに!?じゃあこっちは…」
「おい、もうそういうのいいから。じゃあ上限５０００メタでいくぜ。それ以下なら何メタ持って帰ろうとそっちの勝手だが、勝ちてえんなら上限まで拾っていくことだな。あと言うまでもねえことだが、この場所のこと誰にも言うんじゃねえぞ。」
ダイチがフミエの言葉に対抗しようとしたところを、聞いちゃおれんとばかりにガチャギリが遮って言った。そして黒客のメンバーは上の階層へと行ってしまった。

#4　黒い電脳霧　part8

夕刻、メタバグを拾い終えたヤサコ達はメガばあの元に報告に行き、三人は電脳工房に通された。
「なんと!メタバグがでた!?しかも鉱脈じゃと!?」
メタバグ再発見のニュースを聞いたメガばあの第一声がそれだった。
「ええ。中津交差点近くの廃ビルでね。メガばあが私たちにおつかいを頼まなかったら、あやうくダイチ達に占領されるところだったわ。別に感謝してるってわけでもないんだけどさ、年寄りの頼みは聞いてみるものね。」
皮肉っぽくフミエが言った。
「では、ダイチ達もその鉱脈を知っておったのか?」
メガばあが訪ねる。
「見つけたのはほぼ同時。それにあれほどの宝の山にもかかわらず、他に誰もいなかったところから判断すると、あの場所は周知のものでもなさそうね。」
考えるようにフミエが言った。メガばあは「ほう。」とうなずいている。あの後もヤサコ達は、メタバグ拾いのためにずっと廃ビルにとどまっていたのだが、結局誰も人は来なかったのである。
「あと、その場所に黒い電脳霧が出ていたのよ。おババそんなの見たことある?」
今度はヤサコがメガばあに訪ねた。
「黒い電脳霧?はて、電脳霧は普通白いものじゃろう?その場所が暗くてそう見えただけじゃないのかえ?」
メガばあが不思議そうに問い返した。
「いやいや、さすがにそれはないって。最初に外から見たときも、一瞬火事かと思ったぐらいだもん。」
フミエが手を顔の前で振りながら言った。ヤサコやハラケンもうなずいた。

「黒い電脳霧のう…悪いがわしも見たことがないからわからんわい。」
メガばあの記憶はほぼ元に戻っている。それでも見たことがないと言うのなら、本当に知らないんだなと3人は思った。
「じゃあその話は置いといて、実はおりいってメガばあに頼みがあるの。」
フミエがきちんと正座し直して言った。
「なんじゃ？」
持っていたお茶をすすり、湯のみを置きながらメガばあが言った。
「このリストに書いてあるメタタグを、ここにあるメタバグを使って作ってほしいの。」
フミエはそう言って、５０００メタ分のメタバグが入った電脳ポシェットを差し出し、『メガビー３００秒、鉄壁１０枚…』などと書かれたリストをメガばあに渡した。
「またずいぶん物騒なメタタグばかりじゃのう。サッチーもおとなしい昨今にどうしてこんなもんが必要なんじゃ？」
リストに目を通しながらメガばあが言った。
「ダイチ達を始末するためよ。」
フミエがきっぱりと言う。
「ん？お主ら手を組んだんじゃなかったのかえ？」
メガばあが訪ねた。その辺の話は昨日ヤサコから聞いていた。
「いや、実は。私たち、ほぼ同時刻にその鉱脈を見つけたんだけど、ダイチ君達はここは自分達が占領したんだって言い張ったの。でもハラケンは、空間とメタバグも一緒にフォーマットした方がいいって言って…」
ヤサコはこれ以上自分の口から語るのはどうかと思い、ハラケンの方を見やった。
「メタバグの鉱脈をフォーマットしたいと、その心は？」
メガばあもそう言ってハラケンの方を見た。
「またメタバグが流通しだして、大黒市が前の状態に戻ったら、ま

た都市伝説を信じ込んで危険な空間に入る子どもがでるかもしれないって思っただけ。あの黒い霧も、誰も正体を知らないって言うのなら、危険なことに変わりないしね。」

ハラケンがそう言うと、メガばあも「なるほどのう。」と少し考え込んだ。

「まあ結局のところ、ダイチ達とは折り合いがつかず、果たし合いで勝った方にあの鉱脈の権利が与えられるってことになったのよ。多少乱暴だとは思うけど、ハラケンだってまんざらじゃないようだしね。ちなみに私は、鉱脈は残したいと思ってるの。さっきもそのことでハラケンと話し合ったんだけど、私たちが果たし合いに勝利したあかつきには、バグ取り薬の原料となるメタバグだけをメガシ屋に卸すことにするわ。そして武器とかの原料となるメタバグは捨てる。ハラケンの意見を尊重してね。名付けて、メガシ屋電脳ドラッグストア化計画よ！」

フミエが力強く言った。これによりフミエやヤサコは収入源を確保でき、病気の電脳ペットが救え、メガばあはメガシ屋を続けることができ、ハラケンの意にも反していない。以上のことから、いいことづくめの計画だとフミエは自分で思っていた。

「あと、あの空間に何か異常が起これば、すぐに空間管理室に報告する。」

フミエの言葉に付け足すようにハラケンが言った。それを条件にハラケンはフミエに譲歩したのだ。

「忘れてないわよ。ねえ、メガばあ。それを実現するにはまず、私たちがダイチ達を倒さないといけないの。もっとまともな方法はないのかって思うかもしれないけどさ。そのためにそこに書かれているメタバグを練って。お願い。」

フミエが両手を合わせて言った。ヤサコとハラケンも一緒に頭を下げた。

「まあ、お主らが話し合って決めたことなら、わしはなにも言うことはない。ただし、メタバグを練る技術料はタダではないぞ。必ず

その勝負に勝って、メタバグを確保するのじゃ。負けた場合は後から請求するからのう。」
メガばあはそう言うと、再び湯のみを手に取りお茶をすすった。
「ありがとうメガばあ！果たし合いはあさっての夕方なの。それまでによろしくね。」
うれしそうにフミエが言った。
「あと、これはダイチ君達との約束でもあるんだけど、その空間のこと、誰にも言わないようにしてほしいの。特にお父さんの前でうっかりそういうこと言わないように注意してね。きっと空間管理室が飛んでくると思うから。」
ヤサコがメガばあにお願いした。一郎は空間管理室から離れているものの、今もって発言権を持っているのだ。
「任せておけ。わしは一郎のあらゆる弱みを握っておるのじゃ。たとえそれが一郎の耳に入っても、それをちらつかせれば大丈夫じゃ。」
「何が僕の耳に入っても大丈夫だって？」
メガばあとヤサコ達は驚いて飛び上がった。開け放たれたふすまの前に、当の一郎本人が立っていたからだ。
「お父さん！帰ってたの？」
ヤサコは目を見開き、一郎に向かって叫ぶように言った。
「帰ってたの？って　…もうこんな時間じゃないか。君たちの方こそ家に帰らなくても大丈夫なのかい？」
時計を確認した一郎が、フミエとハラケンに向かって言った。時刻は七時をまわっている。
「ああ、もうそろそろ帰るって。…ところで今の話聞いてたの？」
おそるおそるヤサコが聞いてみた。ここで一郎にばれてしまうと計画がすべて水の泡となり、ダイチ達を裏切ることになってしまう。
「いや、おふくろが僕の耳に入ったらどうこうって言ってたところしか聞いてないぞ。一体何の話だったんだ？」
一郎が訪ね返した。その様子だと本当にそこしか聞いていなかった

ようである。
「いや、なんでもないなんでもない。こっちのことよ。」
ヤサコが必死にごまかそうとした。しかしそれで一郎は納得しなかった。
「何だよつれないなあ…なあ研一君。ここは男同士、腹を割って話そうじゃないか。一体何の話をしていたんだ?」
一郎はしゃがみこんで、座っていたハラケンの両肩に手を置いて聞いてみた。
「あっ、いや、その…」
一郎に至近距離で見つめられてハラケンはどぎまぎしてしまった。ハラケンがちらっとヤサコとフミエの方へ目をやると、二人そろって首を横に振っていた。
「どうした研一君?僕に言えないようなことを隠しているのか?」
一郎がさらに詰め寄る。形相もおかしくなってきた。
「いやあ!」
ハラケンがついに断末魔の叫び声をあげた。
「そこまでじゃ!まったく良い歳こいて大人げないのう。研一は嫌がっとるではないか。誰しもヒミツにしておきたいことぐらいあろう。何なら、わしがお前のヒミツをここでばらしてもいいのじゃぞ。」
メガばあが笑むように言うと、一郎はうろたえた。
「じょ、冗談じゃないか。子ども達の前でそれは勘弁してくれよ、おふくろ!」
一郎の言葉に、フミエは思わず吹き出してしまった。ヤサコも、メガばあ強し、ということを改めて感じた。
「そうそう。明日はいよいよイマーゴの実験だ。古い空間に入るのは怖いかもしれないが、僕達がついている。ぜひとも頑張ってほしい。あと、君は…フミエ君だったかな。君もあの事件で例の空間を間近で見たんだったね。君も良かったら実験に参加しないかい?対照実験だから、イマーゴを持っていない子どもの被験者も必要なん

だ。君はイマーゴを持っているわけじゃなかったよね？」
気を取り直した一郎がフミエに訪ねた。一郎が言う例の空間とは、かつて“あっち”と呼ばれた空間のことである。
「あっ、じゃあ私も参加します。多分私はイマーゴ持ってないし、この二人が一緒なら私も安心です。」
フミエが胸に手をあてていった。ヤサコもフミエと一緒ならさらに安心だった。
「ありがとう。じゃあ明日の朝この家まで来てくれ。メガマスまで僕が送るよ。とりあえず今日はもう遅い。ご両親も心配されるかもしれないからこれで帰りなさい。話の続きはまた明日すればいい。」
一郎がそう言うので、フミエも素直に「はーい」と立ち上がり、ハラケンとともに靴を履き替えにメガシ屋の方の玄関に向かった。
「じゃあメガばあ、よろしくね。おっじゃましましたー。」
フミエがそう言って二人は帰っていった。

#4　黒い電脳霧　part9

同時刻、ダイチ達は駅前ロータリーのコンビニで飲みものを買い、近くのベンチに腰を下ろして一息ついていた。
「で、どうすんだよ？このままじゃ勝負にならんぜ。」
ホットコーヒーを飲み干したガチャギリが、隣に座っているダイチに問いかけた。
「まったく誤算だったなあ。今じゃどの通販電脳駄菓子屋も営業してないんだもんなあ。」
ダイチが困ったようにつぶやき、ココアを片手にベンチにもたれかかった。
「ったく。果たし合いで決めようとか言う前に、それぐらい気付けよな。これだけ長い間メタバグが枯渇してりゃあ、そりゃあどの電脳駄菓子屋もメタバグ換金サイトも、採算が取れなくて閉鎖しちまうわけだぜ。このメタバグにしたって、売りさばくあてもなけりゃ、ただのゴミくずだ。」
ガチャギリはそう言うと、ポケットから出したメタバグを恨めしそうに見つめた。さっきまでの情熱は何処へやらである。
「オレにばっかり言うなよな。お前が先に気付けばよかった話だろ！…まあいい、ここはケンカしてもラチがあかん。何か方法を考えないとな。」
ガチャギリをにらんで怒ったダイチだったが、ここは冷静になって考えることにした。
「オヤびーん。ここはもう恥をしのんで、メガばあにメタタグ練ってもらうしかないんじゃないっスかー？もしくはフミエ達からメタタグ半分こしてもらうとか。」
ナメッチがそこに口を挟んだ。
「バカ言うな！なんで敵方の総帥にすがりつかなきゃいけないんだ！そんなことするくらいなら、たとえ負けようと違法ツールなしで

勝負するほうがマシだ！」
ダイチが立ち上がってナメッチを怒鳴りつけた。これはもはやプライドを賭けた勝負だとダイチは思っている。
「おいおい。初心者のヤサコはともかく、フミエの実力は知っての通りで、ハラケンだって本気だしゃかなりの手練だとオレは踏んでいる。そんな相手にハンデをつけて勝てるとでも思うなよ。」
ガチャギリがダイチを戒めた。ガチャギリは最初から苦しい戦いになると思っているようだった。
「もののたとえだよ。オレだってアイツら相手に、そんだけのハンデつけて勝てるとは思ってねえよ。しかしこのままだとそうせざるを得ないっていうのも事実だ。」
ダイチがガチャギリに言い返す。だが良い方法はいっこうに思いつかなかった。
「うーっ。」
すると急に、座っていたデンパが頭を抱えてうなりだした。
「おいデンパ。大丈夫か？」
ダイチが心配そうに声をかける。ガチャギリは「またか。」というように腕と足を組み、デンパの方から目をそらした。
「ごめん。また頭が痛み出したんだ。僕はもう帰るよ。うつすと悪いし。」
そう言ってデンパは立ち上がった。
「ん、さっきまでは大丈夫だったのか？悪かったな。お前の具合が悪いことも忘れて、メタバグ拾い手伝わせちまってよ。」
ダイチも申し訳なさそうに言った。しかしデンパは首を横に振った。
「ううん。何故だかあの空間にいると、体のだるさを自分でも忘れるぐらい気分が良くなっていたんだ。でも廃ビルをでた途端、また熱がぶりかえしたみたい。」
デンパの話を聞いて、ダイチはあることに気付いた。
「ふーん。それは偶然とは思えないな。あの黒い霧に何か力があるのか？いや待てよ。確かお前、バスの墓場に行った時、風邪引いて

もなかったくせに頭痛めてたな。一体何なんだ?白い霧と黒い霧…この真逆の性質は。」

去年の夏にバスの墓場を訪れた時、デンパやイサコは頭を痛めていた。その原因も不明なら、黒い霧の中にいると気分が良くなった原因というのも想像がつかない。

「別にその話は今関係ねえだろ。風邪引いてるんだったら、早く帰してやれよ。」

ガチャギリがダイチに言った。その言葉の裏には、病人に気を遣ってる暇があるなら、さっさとメタバグのことを考えろ、という意味が含まれていた。

「おう。悪かったなデンパ。送っていかなくて大丈夫か?」

ガチャギリの言葉を聞いたダイチが言った。

「平気だよ。それよりもダイチは果たし合いのことを考えなくちゃいけないだろ。じゃあ。」

ダイチよりもデンパの方がガチャギリの心を読み取ったようだった。ガチャギリもデンパの言葉に、少し良心が痛んだ。

「デンパ、今日はありがとな。お前があの空間を見つけてくれたんだもんな。風邪なんかに負けるな。ファイトだぞ!」

そのガチャギリが背中を向けて歩き出したデンパに言った。ガラにもないことを言うんだなと、ダイチやナメッチも驚いた。

「あ、ありがとう。」

デンパも振り返って戸惑ったように言った。残った3人はデンパが見えなくなるまで手を振った。

「さてと、何かいい方法はないもんかな。」

「あれ、ダイチ君。」

再び考え込もうとしたダイチだったが、急に後ろから声をかけられて振り返った。

「な、直樹さん。」

ダイチの後ろにいたのは直樹だった。どうやら仕事帰りのようだった。

「どうしたの、こんな時間に？もう暗いんだからそろそろ家に帰った方がいいよ。」
ここは警察官らしく直樹が注意した。
「誰だ？」
座っていたガチャギリがダイチに訪ねた。ガチャギリとナメッチは直樹とは初対面だ。
「ああ。紹介するよ。この人はこないだオレが狙われた事件を担当してくださった、大黒警察電脳犯罪対策係の竹下直樹さん。なんとこの若さで、係長を務めている。例のハッキング対策ソフトも紹介してくれた、オレたち子どもの強い味方だ。」
ダイチがガチャギリとナメッチに説明した。それを聞いて「ども。」と二人は軽く頭を下げた。
「褒め過ぎだよダイチ君。そんなたいしたことはないって。ところで、君たちが大黒黒客のメンバーなのかい？」
直樹が三人に訪ねた。
「そうっス。本当はあと二人いるけど、一人は今日来てなくて、一人はすでに帰りました。ちなみにこっちがガチャギリで、こっちはナメッチと言います。」
ダイチが二人を手でさしながら説明する。直樹が黒客のことを知っているので、ダイチは何でもしゃべり過ぎだと思い、ガチャギリは小さくため息をついた。
「ということは、君たちにもハッキング対策ソフトが入ってるってことだよね？メガネの方に異常はなかったかい？」
「全然大丈夫っス。おかげで枕を高くして眠れます。」
直樹の問いに、ナメッチが答えた。その言い回しに直樹は少し笑ってしまった。
「そうかい。それは良かった。ダイチ君の方もその後、ハッカーが侵入してきたとか、そういったことはなかったかい？」
「まあ、今のところは何も起こってないっス。そうだ、ちょっと直樹さんに相談したいことが…」

ダイチが口に手を添えて小声になったので、直樹はしゃがみ込んで「何だい？」と耳を傾けた。
「…お知り合いとかに、メタバグから電脳ツールを作り出せる技術を持つ人はいませんかね？」
ダイチの言葉に、ガチャギリの方がどきっとして思わず立ち上がった。
「おいダイチ、ちょっと来い。」
ガチャギリがそう言って手招きしているので、ダイチは直樹に「ちょっと失礼。」と言って、ガチャギリの方に歩み寄った。
「血迷ったか？あいつは警察の、それも電脳犯罪の担当なんだろ。むしろ違法ツールを取り締まる立場の人間じゃねえか。そんなやつにメタバグの話をしてみろ。鉱脈はどこにあるのかって聞かれて、見つかり次第すぐに抹消されちまうのがオチだ。焦る気持ちもわかるが、もうちょっと相手を選んで相談しろよ。」
直樹に背を向け、ダイチの肩に手を回し、ひそひそ声でガチャギリがダイチに言った。
「うるせえな。お前は知らんだろうが、あの人も昔はオレたちのように、メガネで遊んでいたそうだ。つまりメガネで遊ぶ子どもの気持ちが理解できる数少ない大人だ。少々のことなら目をつむってくれるって。」
ダイチがガチャギリに言い聞かすように言った。今ダイチが頼れるのは直樹しかいないのだ。
「…本当に大丈夫なんだろうな？もし失敗したら責任はお前がとれよ。」
ガチャギリが首だけ振り返って直樹を見ながら言った。
「任せとけ、そんな非情な人じゃねえから。」
ダイチそう言って振り返り、「お待たせしましたー。」と、直樹に頭を下げた。
「ああ。僕の友人にその技術をもっている人がいることはいるんだけど、どうしてそんなこと聞くんだい？メタバグがないと、そうい

うツールも作れないと思うけど。」
直樹が不思議そうに訪ねる。
「実はオレたち、メタバグの鉱脈を見つけたんです。それでワケあってすぐにこのメタバグをツールに変えないといけないんスが、今じゃどの通販電脳駄菓子屋も閉鎖していて。」
ダイチがポケットに入れているメタバグをちらっと見せながら言った。直樹はそれを見て驚いた。
「なんだって!?メタバグの鉱脈が!じゃああのネットの噂は本当だったんだね…うーん。僕の立場としては、またメタバグが流通して、メタバグ換金サイトみたいな悪徳商売が横行するようになってしまうのは防がなくちゃいけない。」
直樹が難しそうな顔をして言うと、ダイチも「そうですよね。」とうなずいた。もちろん心の中ではきっと許してくれると思っていた。
「でも君たちだって、遊び道具が無くて寂しい思いをしているんだろうからね。僕にもその気持ちはわかる。よし、じゃあこうしよう。君たちが拾った分のメタバグは、僕の友人に頼んでツールに変えてもらう。ただし、その他の得体の知れない人には、メタバグを渡したり、売ったりはしないって約束してくれ。もちろん僕達は悪徳業者じゃない。メタバグさえ渡してくれれば、無料でツールに変えてあげるよ。こうすればメタバグが流通してしまう恐れもないし、君たちはまたツールで遊べる。」
直樹の提案は、ダイチの思惑通りだったが、それでも魅力的すぎるぐらいのものだった。ガチャギリも目を見開いてあんぐりしている。
「マジっすか!?それは僕らにとっては素晴らしすぎます!本当にいいんッスか?」
ダイチが再度確認した。
「君たちのような子どもに覇気がないと、僕達も見ていて寂しいんだ。僕の友人も、ツールを作るのが趣味みたいなもんだから協力を惜しまないと思うよ。ただ、僕が一番心配なのは、またメタバグを使って悪どい商売をする人間が現れることだ。もし君たちの周りに、

そういうところにメタバグを売りさばこうとする人達がいたら、それを止めてくれるかな?」
直樹が三人を見回しながら言った。
「もちろんだぜ!じゃあこれがメタバグで、あとこれが作ってもらいたい物のリストっス。あと、急な話で申し訳ないんスが、あさっての夕方までにできれば仕上げて欲しいんッス。」
ダイチがメタバグとリストを手渡しながら言った。
「わかった。なんとか頑張ってもらうよ。じゃあ、今日は遅いからもう帰るんだよ。」
そう言って直樹は立ち上がり、改札の方に歩を進めた。
「ありがとうございました。お疲れ様でーす。」
ダイチは直樹が見えなくなるまで手を振った。
「いやー。世の中にはあんな優しい人がいるもんなんスね。」
ナメッチが感心したように言った。しかしガチャギリはそんな嬉しそうな表情もせず、ブスーっとしていた。
「いやホントホント。まあ、これでどうにか果たし合いの方も目処が立ったな。ようし、今日は解散すっか!」
そんなガチャギリを気にも止めずにダイチが言い、上機嫌で家に向かって歩き出した。

#5　開かれし扉　part1

「父の話によると、メガマスはあの事件の時、コイルドメインの調査を行ったそうです。そのデータは、ある研究に使われるということです。」

まわりが木に囲まれている山道のような車道を抜けると、野球場一つ分ぐらいの広大な敷地に出る。その中の一角、天高くそびえるガラス張りのビルに、快晴の空から注ぐ太陽の光が反射していてまぶしい。ビルのまわりには芝生が綺麗な模様のように刈りそろえられており、水路のような池が水をたたえている。世界的大企業にして、都心に本社を構えないのは稀な例ではあるが、特別行政区としてメガマスが独自の自治を行う大黒市は、まさにメガマスの城下町であり、言い換えれば街全体がメガマスの実験空間でもある。それはメガマスにとってむしろ好都合だった。一見不便な立地のこの本社ビルにも、かなりの数の社員が勤めており、その大部分が一郎のように大黒市に住んでいて、普段は駅からでている社員専用のバスで通勤している。市政を動かしているだけあって、市役所や病院、その他の市立の施設にも多くのメガマス社員が派遣されており、市内の民間企業をとっても、メガマスの関連会社がほとんどである。また、大黒小学校が入っている駅ビルにもメガマスの支部があり、市内各施設との連絡を受け持っている。

一郎が運転し、ヤサコ、フミエ、ハラケン、玉子を乗せた車は、池にかかる橋を渡ってメガマス本社ビルの正面に停まった。先に一郎以外の四人が降り、一郎は地下駐車場に車を停めにいった。

「高っ！いつも遠くからは眺めているけど、近くでみるといっそう高く感じるわね。まわりは自然公園みたいに緑が溢れてるし、いい所ね。」

フミエが腰に手をあて、小さい体をそらしてビルのてっぺんを眺め

ながら言った。四人ともこの場所に来るのは初めてである。
「にしても、ビルが建つまでこの場所はそれこそ森だったのに、これだけの敷地の木を伐採して、ビルが建ったのはほんの一区画。あとの敷地をまた緑で埋めるなんて、無計画にもほどがあるわね。」
まわりを見渡しながら玉子が言った。このビルが建てられたのは、メガマスがコイルス社を買収し、メガネによる権益で莫大な資産を手にした頃である。森を伐採して高層ビルを建てるということで、当然のことながらその時、地域住民による反対運動が起こった。しかし既に大黒市の市政を握っていたメガマスが、強引に計画を推し進めて建てられたという。
「本当はもうひとつビルを建てて、ツインタワーにする計画だったらしいですよ。ただ、森を伐採してから調べてみたところ、地盤の問題が明らかになりまして、やむを得ず一つしかビルが建てられなかったそうです。そのために芝生のエリアがこれだけ無駄に広いんですよ。」
ビルの自動ドアからでてきた男が説明した。
「あ、あなたは？」
玉子がその男を見つめながら訪ねる。
「申し遅れました。私は小此木さんと同じく、メガマス内部監査を担当している、香川昭大（あきひろ）といいます。そちらにいる原川研一君とは打ち合わせのときに一度。」
香川がハラケンを手でさしながら言い、ハラケンも香川に向かって会釈した。
「じゃああなたが室長と一緒に今回の訴訟の手助けをしてくださる方ですね。わたくし、研一の叔母の原川玉子といいます。この子が室長の娘でイマーゴを持つと思われる小此木優子。そしてこちらの子が、イマーゴを持たない被験者として参加する、橋本文恵です。」
玉子がヤサコとフミエのことを手でさしながら紹介し、その時二人も香川に向かって会釈した。
「今後ともよろしくお願いします。ところで、小此木さんのことを

室長と呼ばれていますが、もしかしてあなたが去年のあの事件の時に、空間管理室顧問を務めていた方ですか？」

まるで街で見かけた有名人に話しかけるような、少し憧憬を込めた言い方で香川が訪ねた。

「え、ええまあ、一応。とは言っても解雇された身なので、そう言われるのは少々恥ずかしいのですが。」

玉子がうつむき加減で返す。

「いえいえ、そんなことはありません。確かにサッチーを違法改造したり、不正アカウントを行使したことには社内でも賛否両論あります。しかし私は立派だなあと思いました。権力にあらがって自分の信念を貫くことなんて、普通の人にはできません。ましてやそれで子どもの命を救っているんですから。」

「は、はあ。」

玉子は褒められながらもしっくりはこなかった。あの事件の原因を作ってしまったのが自分であるという罪悪感により、ひたすらその解決のために動いていただけであって、人から賞賛されるようなことをしたという認識は玉子にはなかった。むしろ事件に巻き込んでしまったヤサコ達を守るのは当然のことだと思っていた。

「しかし、あなたが空間管理室に復帰されないのは惜しいことだなあ。あなたぐらいの行動力のある人がいれば、大黒市はもっと住みやすい電脳都市になるのに。」

少し残念そうに香川が言った。

「褒めすぎ褒めすぎ。むしろオバちゃんが大黒市に大きな混乱をもたらしたと言ってもいいぐらいなのに。」

話し込む玉子と香川に背を向けて、フミエがヤサコに対してひそひそ声で言った。

「いや、まあ、私はオバちゃんに命を救われてるから感謝してるけど。でも、メガマスの中でもああいう評価なのね。あれだけサッチーをはちゃめちゃにしちゃったから、私はむしろ、オバちゃんは大黒市に住めないんじゃないかって思ってたぐらいなのに。」

苦笑いを浮かべながら、ヤサコもひそひそ声でフミエに返した。
「サッチーにだって結構な税金がつぎ込まれているしね。まあひょっとしたら、オバちゃんのおかげでタケル君のお兄さんの野望が打ち砕けたってことなのかもね。結局それでメガマスは助かったわけだし。」
少し考えてフミエが言う。確かに宗助の目的はメガマスの信用失墜で、そのためにミチコと取引をし、世界中のイマーゴの子どもの意識を連れ去ろうと計画していた。そのいけにえとなったイサコを助け出すためにヤサコや玉子は動いていたのだが、結果的にイサコの救出は宗助の野望を打ち砕くことにもなった。宗助を捉えきれていなかったメガマスが、それによって命拾いしたとも言える。
「なるほど。そうかもね。」
ヤサコもフミエの意見に納得した。
「おお、香川君。ここにいたのか。桜井検事は見えられているかな？」
地下駐車場に車を停めた一郎が戻ってきた。
「ええ。今分煙室のほうにおられます。もうすぐ戻られると思いますが。」
香川が一郎に返す。一郎の方が年上なので、香川は敬語を使っている。
「そうか。ところで、危機管理対策防災マニュアルには目を通したかい？何か事故が起こった時には、早急に社員に連絡できるようにしといてくれよ。社員のメガネに問題をきたすようなことがあれば大変なんだからね。」
一郎が香川に心配げに訪ねた。この実験の総指揮は一郎が執り行う。そのために何か問題が起こったときの責任は一郎が負うことになる。
「心配性ですね。三回は読み直して、緊急時には社内放送ができるように手配しております。」
香川が胸を叩きながら言った。
「本当に大丈夫なんですか？古い空間が暴走してしまうことも有り

得るんでしょう?」
今度は玉子が心配げに一郎に訪ねる。もとから玉子は、メガマスがコイルスの空間を研究していることに関しては納得していない。
「これまでのチェックでは特に問題はなかった。でも一応、昨日郵政局からサッチーを二機、電脳局から2・0を一機借りてきたんだ。それで十分対処できると思う。それに空間の有効範囲を制限しているから、たとえ古い空間が暴走しようとも、この敷地の外にまで影響が及ぶことは有り得ない。」
一郎は子ども達が不安にならないよう全員に言い聞かせた。これまでにも入念な準備をしてきたので、実験が失敗することはないと自負している。
「どうも、どうも。みなさんお集りで。」
そこに濃い紺色のスーツを身にまとった桜井がやってきた。分煙室にいたせいかタバコの匂いがする。
「うわっ。なにこのイカついおっさんは?」
初めて桜井の顔を見たフミエが、ヤサコの耳元でささやいた。それはヤサコが初めて桜井に会ったときと同じ印象だった。
「今回の訴訟を担当する検事の桜井さん。こう見えても、電脳に関してはかなり詳しいんだって。」
ヤサコがささやき声で返す。
「ふーん。電脳っていうより極道って感じがするけど。これで検事さんだなんて、私もっと知的でスマートなイメージ持ってたのに。」
「同感、同感。」
がっかりした声でフミエが言い、ヤサコも相づちをうった。
「お嬢チャン達。聞こえてるよ。」
桜井にそう言われギロっと見られたので、ヤサコとフミエは静止した。それを見て呆れた一郎が、一つ咳払いをして切り出した。
「えーっ。じゃあ今から実験室の方に移動します。地下五階になりますので、あちらの直通エレベーターに搭乗してください。」
一郎が手で示した先に、扉の開いたエレベーターが待っていた。全

員が乗り込んだところで一郎が何やらパスワードを打ち込み、扉が閉まった。

「エレベーターを動かすにもＩＤ認証が？」

それを見ていた玉子が一郎に訪ねた。エレベーターは地下５階に向かって動き出している。

「このエレベーターだけはね。今から行く地下５階には、実験室の他にも最新の技術が集約された、メガマスの研究施設がある。そこに出入りできるのはメガマスが抱える一級の研究者達と、特別な権限を持つ社員だけで、そこにつながるのはこのエレベーターと、幾重にもロックされた扉の先にある非常階段だけなんだ。」

一郎が説明した。そういう隔離された研究施設では、とかく映画やゲームでは良からぬことがよく起こるので、ヤサコ達は何となく怖い気がしてきた。

「しかしいいんですか？私たちのような一般人がそのような場所に出入りするのは、そちらにとっては不都合が多いんじゃ。」

今度は桜井が一郎に訪ねた。

「いいとは言えません。しかし訴訟の件については、我が社が責任を持って解決させなければいけないので、むしろ我が社があなた達に協力してもらっているという認識でいます。ですので検事さんが実験が必要だとお考えなら、わたくしどもはできるかぎりそれに応えなくてはいけないと考えています。ただ、恐れいりますがメガネや携帯電話などの持ち込みは認められておりません。メガネはこちらで用意した物を使っていただきます。実験の記録に関しては私どもが責任を持って致しますので、何か気にかかることがございましたら、紙などにメモしていただければと思います。ご協力のほどよろしくお願いします。」

一郎が申し訳なそうに桜井に言った。それはメガマスの機密が外部に漏れないようにするための対策の一つだった。

「なるほど、わかりました。」

桜井もそれに納得して同意した。そうしてエレベーターが地下五階

のに着いたところで扉が開くと、目の前には空港で使われるような金属探知ゲートがそびえており、二人の警備員が詰めていた。

「今申した通り、ここから先は手荷物の持ち込みは禁止となっています。またメガネはこちらで用意したものを使っていただきます。お手数ですが手荷物とメガネをあちらの警備員に預け、メモ用紙と鉛筆だけ携行してあちらのゲートをくぐってください。」

一郎がそう言うと、一郎と香川以外の全員がかけていたメガネを警備員に渡し、ゲートをくぐったところでまた別のメガネが渡された。

「このメガネ、通常のメガネと何が違うんですか？」

手渡されたメガネをかける前に玉子が一郎に訪ねた。

「そのメガネは電脳物質が見えるという機能しか持っていない。この施設にいる間は外部と連絡がとれないのは我慢してもらいたい。」

そう言って全員の準備が整ったのを確認すると、「じゃあこちらへ。」と、一郎が先頭になって通路の奥に進み始めた。

少し歩くとすぐにロックされた自動ドアが目の前にあらわれる。一郎がその横にあった装置に左手を入れると、機械音がしてドアが開いた。どうやら手の静脈パターンの照合でロックが解除される仕組みのようだった。このあとも、網膜パターン、音声認識、ＩＤカードと七桁の暗号などのロックを一郎は次々に解除していった。

「いやはや。さすがすごいセキュリティですね。」

驚きながら桜井が言った。

「もちろんです。この研究施設はメガマスの最新技術の粋が集められていますので。今からお見せするところは、その中でも充実した施設ですよ。」

一郎がそう言うと一同は細長い通路にでた。左右にはいくつものブースがあり、半透明の扉からは、白衣を着た人や、私服、スーツといろんな服装の人が忙しなくしているのが見え、そこには何台ものコンピューターが並んでいる。ヤサコ達も興味深そうに見回っていると、突き当たりの扉に辿り着いた。一郎が最後のＩＤ認証を行い、自動ドアのように左右に開いた。

#5　開かれし扉　part2

「ここが我が社最大の実験室。社員からは管制塔と呼ばれているところです。」
一同を中に招き入れ、一郎が誇らしげに言った。
「これは…映画などではよく見るような光景ですが、まさか自分がこんなところに入れるなんて。」
桜井が興奮気味につぶやく。その実験室は学校にある視聴覚室ぐらいの広さで、手前から奥にむかって傾斜し、そこに幅5メートルほどのデスクが3ブロック10列ほど並び、一つのデスクにはコンピューターが5台ほど設置されている。そして一番奥には縦5メートル、幅10メートルはあろうかという巨大な窓が据えられていた。
「まるでNASAの管制室みたいですね。」
ハラケンが一郎に言う。ヤサコ達も実験施設の規模には圧倒されていた。
「その通り。と言うより、NASAの管制室の構造を真似してデザインしたらしくて、だから社員の間では管制塔って呼ばれているんだ。」
一郎がハラケンに返す。どうやら建設当時の社長の趣味でそうなったらしいと一郎は聞かされていた。
「それであの窓の向こうが実験空間と言うことですね。それにしても、スタッフが少な過ぎませんか?これだけの規模なら100人はいてもよさそうなものですが。」
桜井が辺りを見回しながら訪ねる。数えてみると30名弱ほどしか管制塔にはいなかった。
「これで全員のはずです。ここのプログラマー達は大体1人デスク1台分のコンピューターが割り当てられていますので。」
一郎が人数を確認して言った。つまりここにいるプログラマーは、一人で5台ものコンピューターを使いこなしているということにな

る。
「さすが世界的大企業の研究施設ですなあ。設備もさることながら、人材も飛び抜けて優秀な人ばかりと。」
感嘆した桜井がつぶやく。
「じゃああの窓の所まで行きましょうか。足元に気をつけてスロープを下ってください。」
一郎が全員にうながした。スロープの足元にはコンピューター同士をつなぐコードが無造作に横切っており、一郎の言うように気をつけていないとつまずきそうだった。
「すみません、ここだけ雑然としていて。これだけのコンピューターを無線でつなぐのは電波的に安定しないんです。なので有線でこのようにつないでいます。」
「なるほど。まあ、これはこれで雰囲気が出ていていいと思いますよ。」
一郎と桜井がそんな会話をしながら一同は窓の前に集まった。窓の向こう側には小学校の体育館ぐらいの実験室が殺風景に広がっている。
「この実験室が古い空間に置き換える有効範囲ということですか？」
玉子が窓の向こうを眺め一郎に訪ねた。
「その通り。管制塔のコンピューター制御で、この実験室の中を古い空間のバージョンに置き換えたり、この中に鍵穴を出現させてヌル達を解放させることができる。もしもの時に備え、あの扉の向こうにはサッチーと２・０を待機させている。」
一郎が返した。よく見ると窓とは反対側の壁に一郎の言う扉がある。
「小此木さん、準備整いました。」
プログラマー達と最終の確認をしていた香川が言った。いよいよ実験が始まるということでヤサコ達はさっき以上に緊張しだした。
「ん？緊張してるのか？まあ、無理もないな。いきなり得体の知れない部屋に入れって言うのも酷だ。じゃあ先にこの実験室がどのように古い空間に変わるのか、デモンストレーションでもないけど、

一度見せておいたほうがいいかな。」
ヤサコ達の様子を見ていた一郎が言った。ヤサコ達や玉子もそれで異存はなかった。
「お願いできますか？」
一郎が香川と話し合っていたリードプログラマーに訪ねた。オッケーと言う風に香川が手を挙げて一郎に合図し、管制塔の照明が落とされた。今からこの実験室が「あっち」の世界に置き換わる。灯された淡い光が、少し不気味な雰囲気をかもし出していた。

#5　開かれし扉　part3

「古い空間に置き換わる瞬間は刺激の強い光が放たれます。なるべく直視しないようにしてください。」

一郎がそう言うと、薄暗い実験室の真ん中で何やら白い光の玉が踊り始めた。それはどんどん膨らんでいるように見える。するとどこからともなく声がするのにヤサコは気付いた。それはあの時と同じように、かすかに聞こえていたところから、はっきりと耳に入ってきた。

「…４２３…ぼくは…４４２３だ。」

ヤサコはどきりとした。それはかつて何度も夢で見たイサコの兄、天沢信彦の声だった。「どうして？」と思う間もなく次の声が聞こえてきた。

「…イチ。…ケンイチ。」

ハラケンを呼ぶカンナの声。走馬灯のように蘇るあの事件の記憶。ハラケンもその声を聞いたらしく、窓に張り付いてその声がする光の玉を見つめている。まるで天国にいるカンナの姿を探すかのように。

「目を閉じて！」

そのハラケンに気付いた一郎が叫ぶ。次の瞬間その光の玉が爆発したかのように、鋭い閃光が放射され管制塔に突き抜けた。光の玉を凝視していたヤサコとハラケンはしばらく視界がホワイトアウトし、衝撃のあまり後ろによろけてしまった。その中で二人は、鳥居の続く階段、デンスケを抱いて迷子になっているヤサコ、カンナの影が見えたような気がした。そして何かやわらかいクッションに体をあずけたような感覚にになった。

「…丈夫？ヤサコ？」

フミエの声が聞こえてきて、ヤサコはだんだんと正気に戻り、視界も元に戻った。後ろによろけたヤサコを支えたのはフミエだった。

ハラケンも同様に意識が遠のきそうになったのを、玉子が助けたようだった。そして2人は目の前がいつの間にか鮮やかなオレンジ色に染まっていることに気付いた。

「…これが…あっち。」

桜井が呆然としてつぶやいている。実験室の中は夕陽に染まる横断歩道と化し、歩行者用信号機が青になった時に聞こえる、『とおりゃんせ』のメロディーが流れている。ハラケンがあっちに入った時、京子がヌルに連れて行かれた時、ちょうどこのような光景が広がっていたなあと、それぞれが思った。

「大丈夫かい研一君?それに優子。光を直視しないようにって言ったのに、あんなに凝視するなんて。危なかったよ。」

一郎が心配そうに声をかけた。2人ともとりあえず自分の足で立ってはいるので大丈夫そうではあった。

「ごめんなさい。でも、あの光の玉の方からかすかに、カンナの声が聞こえたから。つい。」

「ええっ!?そんなの聞こえなかったけど。」

ハラケンの答えにフミエが驚いた。

「私も、始めに天沢さんのお兄さんの声が聞こえきて、その後にカンナちゃんの声が聞こえた。それに一瞬視界が消えた時、鳥居の並ぶ階段やデンスケの姿が見えたの。」

ヤサコも一郎に訴える。一郎は考え込んでいるようだが、まわりの反応を見ているとそれを体験したのはヤサコとハラケンだけだったようだ。

「どういうことなんでしょうか?以前にもこんなことがあったんですか?」

玉子が一郎に詰め寄った。

「いや。僕らがチェックしている時に、そんな声を聞いた人はいなかった。何より二人だけが聞いたとなると、この現象はイマーゴが関係していると見て間違いなさそうだな。リードプログラマーの吉川さんはどう思われます?」

一郎が後ろでコンピューターを操作していた、白衣で丸メガネをかけた、いかにも大学の教授のようないでたちの男性に訪ねた。どうやらその人がプログラマーのリーダーのようだった。

「そうですね。あの光の玉はこちらのコンピューターで集積したプログラムのかたまりなんで、そういう音声データも入っているでしょうな。なにより我々は事件の時に拾ったデータを参考にできるだけ忠実にプログラムを組んだだけ、と言ったらなんですが、とにかく我々の知らないうちにそういうプログラムが入っている可能性もあります。つまり事件の時にそういう声を聞いたことがある、すなわちイマーゴを持っている人なら、その声を聞いたとしても不思議ではありません。幻覚を見たというのも、プログラムとイマーゴが何らかの反応を起こしたということでしょうな。今部下が調べておりますわい。」

その吉川が分析した。この古い空間のプログラムに関しても、ここのプログラマー達が制御できるように再現したにすぎず、何が原因でイマーゴに反応するのかなどは、これから研究して明らかにしていかねばならなかった。

「知らないうちに入り込んだプログラム？大丈夫なんですか本当に？これからもそちらの想定外のことが起こる可能性があるということでしょう？」」

桜井が一郎に訪ねた。充実した施設のわりに案外ずさんなんだなと桜井は感じていた。

「そうですよ室長。だいたいメガマスは現象の再現だけはできても、その現象の根本的な性質や原因は把握していないじゃないですか。それなのに古い空間の利用法を考えるだなんてあてもないことを言って、こんな立派な施設に優秀なプログラマーを集めて、一体何をしようとしているんですか？」

玉子がさらに一郎に詰め寄った。あまりにも無責任なプログラマーの言葉に、このままではあの事件と同じ過ちを繰り返してしまうと玉子は感じた。

「・・・いや、すまない。それは企業秘密ということで他言はできないことになっている。ただ、この空間の研究は始まったばかりだということだ。それらの謎はこれから追っていくことになる。」

窓の外の夕焼けを無表情に眺めながら一郎が言った。ヤサコはその非情な父の姿を見て、自分たちとは別の世界にいるんだなと感じた。

「じゃあそんな何が起こるかもわからない空間で何故実験をしようと思ったのですか?それも被験者は娘さんですよ。」

玉子が訴えかける。ヤサコも複雑な思いで聞いている。

「空間の安全性には自信があった。もし意識があっちに行ってしまうことがあっても、元に戻せる準備もしてある。空間が暴走したときにそれを鎮める準備もね。だからこれから実験を続行することに関して何の支障もない。それにこの空間の解明は、イマーゴとの関係を明らかにすることから始まる。つまり実験はいずれ誰かがやらなければならないことだった。そして何よりこの実験は、メガマス旧幹部の隠蔽を立証するために行うもの。メガマスはその過去を償わなくてはならない。その思いから僕は実験を強行しようと思ったんだ。」

一郎がやっと玉子の方を見た。一郎にしてみればビジネスライクな理由は二の次であり、メガマスとしての罪を償うことこそが最優先事項であった。今の一郎はハラケンの思いに応えようという気持ちばかりが焦っている。

「なるほど。一番の理由はわかりました。でもメガマスがこの空間を解明したあかつきに何をしようとしているのか、それを聞かせていただかないと、子ども達をこの実験に参加させることには反対です。」

玉子が条件をだした。一番に贖罪を考えているなら、それをメガマスがひた隠しにするのは筋違いであると玉子は思った。

「それは…」

そうつぶやいて考え込むように一郎はうつむく。

「もう、いいですよ、小此木さん。」

急に後ろの方から声がしたので、全員が振り返った。すると背が高くスラっとした男性がスロープを降りてきた。

「社長！来られていたんですか！」

一郎がその男に声をかけた。

「しゃ、社長！？」

メガマス社員以外の一同が口を揃えて驚いた。目の前にいる男性はどう見てもまだ三十代で、スーツをびっちりと着こなし、一見すればばりばりのサラリーマン、あるいはその容姿端麗なビジュアルとスタイルの良さから、俳優と言っても疑われないような外見だった。

「あ、あなたがメガマスの社長さんですか？」

信じられないような目でその男性を見つめながら玉子が訪ねた。

「初めまして。わたくしが株式会社メガマスの代表取締役を務めております、桝田章太郎（ますだしょうたろう）と申します。このたびは我が社の実験にご協力していただき誠にありがとうございます。」

桝田が全員を見回しながら言った。若いながらも堂々としてへつらわず、威厳のある態度だった。

「いやー。しかしメガマスに若社長ありとは聞いていましたが、まさかこんな方だったとは。失礼ですが年齢の方は？」

桜井が感心しながら訪ねる。

「今年で３８になります。病気がちの先代に代わり、３年前に就任しました。まあ、本当に私の不徳の致す所ですが、就任後しばらくの間、幹部役員をまとめることができずに、結果秘密裏に交通事故の隠蔽が行われてしまったということで、みなさんには多大なご迷惑をおかけたしたことを、社を代表してお詫びしたいと思っております。このたびは本当に申し訳ありませんでした。」

桝田が頭を深々と下げる。自分の非を認め率直に謝罪する桝田を見て誠実な人だとその場の全員が感じた。

「どうしてこちらに？」

頭を上げた桝田に向かって一郎が訪ねた。ちなみに一郎の方が年上である。

「この実験は今後のメガマスの研究、開発に関わってゆく重要なものだと私は感じています。だからこの目で見てみようかと。それに実験にご協力される方々に一言挨拶と、あの事件の謝罪をしなければならないと思いまして。そんなことより小此木さん。メガマスが何をしようとしているのか、彼らには言ってくださって結構ですよ。」

桝田が一郎に言った。社長とはいえ年上に対する言葉遣いもきっちりとしている。

「いいんですか？これはメガマス信用回復のための最重要プロジェクトなので、くれぐれも外部に漏れないようにとのことでしたが。」

一郎が桝田に聞き返した。

「その通りですが、実験に参加していただく彼らにはそれを知る権利があります。小此木さんが十分信用されている方々なら、外部に漏れることなどないはずですし。」

少し笑むように桝田が言った。その言葉から桝田の一郎への信頼の高さが想像できる。

「わかりました。では私の方から説明させていただきます。」

一郎が桝田に軽く頭を下げて言い、桝田は「どうぞ。」とうながした。玉子は理解のある社長さんだなと感じた。

#5　開かれし扉　part4

「我々メガマスが、この空間の研究の最終的な目標として構想しているのは、私の父、小此木宏文が作り上げようとした、電脳医療を完成させることです。」

一郎がゆっくりとはっきりと言った。それが何を意味するのかヤサコにはわからなかったが、その時亡き宏文の姿が思い浮かんだ。

「え？ちょっと待ってください。電脳医療は既存技術じゃないですか。その確立もあなたのお父上の功績だと私は認識しておりますが、完成とはどういう意味なのでしょうか？」

桜井が困惑気味に訪ねる。玉子も桜井と同様の気持ちだった。

「確かに今現在も電脳医療は病院で使われています。病院でメガネが使えるのも父の功績によるものが大きいのですが、それは父が目指したもののほんの一部に過ぎません。」

「…ほんの一部？」

桜井がつぶやく。

「はい。事の発端からお話ししましょう。もともと父はメガマス病院に勤める精神科医でした。その父にメガマスがコイルス社のメガネに関する技術の調査を依頼したのです。その時メガマスは父のサポートに電脳の専門家を集め研究チームを組織しました。今ある電脳医療も、その研究チームのサポートがなければ確立されていなかったでしょう。」

少し上を見上げ、何かを思うように一郎が言った。

「えっ？でもおジジはメガネの技術者だったって、オババが言ってたけど。」

ヤサコが一郎に訪ねる。ヤサコはメガばあと去年の夏にメガマス病院に行った時、そのような話を聞いたのだ。

「メガネ技術の研究はしていたけど、正確には技術者ではないかな。メガネの技術を医療に役立てる研究は、その研究チームが中心に進

めたんだ。」

一郎がヤサコに返した。メガばあの記憶も、当時は完全なものではなかったのだ。

「何故小此木医師に依頼したのか。先代の話では、当時のメガマスは、コイルス社の技師が人間の集合無意識の研究を行っているという情報を掴んでいたそうです。その実体を探るにはどうしたら良いか。そこで精神科医として名の通った小此木医師なら、コイルス社に怪しまれずに接近できるだろうと考えたわけです。人間の集合無意識の有用性を見いだしたいコイルス社にとって、小此木医師の知識と経験は魅力でした。そうしてうまくコイルス社にとりいった小此木医師とコイルス社の技師との出会い。そこに電脳医療によるメンタルケアという発想が生まれたのです。」

桝田が補足説明をした。コイルス社買収前のメガマスは電子機器の開発・販売を主として行っていた。今の地位を確立したのは、コイルス社買収後のことである。

「そのコイルス社の主任技師の名前は、猫目。」

玉子がつぶやいた。それはあの事件の時に一郎の調査によって判明したことである。

「その通り。当時メガネはまったく普及していない代物でした。しかしコイルス社の技術も父にとっては魅力的なものだったんでしょう。そうして父と猫目技師の共同研究により、精神治療のためにイマーゴと電脳物質によって、患者の想像した物が再現できる装置を作り、肉体と電脳体を分離させることができる、電脳コイルシステムを完成させました。猫目技師も、まさか父がメガマスと契約しているなんて思わなかったのでしょう。その間コイルスの技術情報は父を介して、メガマスの研究チームのもとに届いていきました。」

そう言って一郎は桝田の方を見た。どうぞ次にしゃべってくださいという合図だった。

「コイルス社の技術情報のほとんどを手に入れたメガマスは、敵対的ＴＯＢに乗り出します。当時のコイルス社は、中小レベルとまで

は言えないかもしれませんが、決して大きな企業ではなく、メガネの生産ラインの整備も遅れていました。それに比べメガマスは電子機器メーカーとして国内でもそこそこのレベルだったので、資本という点では歴然たる差があったのです。その大企業が自分たちと同じ技術を手に入れたということで、コイルス社は買収を認めざるを得なかったでしょう。」

桝田が若干の後ろめたさを感じながら言った。自分が関与していなかったとはいえ、メガマスのやり方は不当なものだったと思っていた。

「かくして、メガマスはコイルス社の買収に成功。猫目技師の電脳医療も、さも自分たちの開発だと装って世に出した、というわけですな。」

桜井が少し意地悪く桝田に言った。しかしそれはまぎれもない事実でもあった。

「はい。先代もそのことは悔やまれております。いくら会社を発展させるためとはいえ、そこまでする必要があったのかと。特に去年の事件の全容を知ってからは、その思いを一層強くしておられます。」

桝田が桜井に返した。しかしそれで桜井は納得しなかった。

「終わってから後悔するのは容易いことです。そう思っているんなら猫目技師の名誉のため、いち早くその事実を公表すべきなんじゃないですか？」

少しドスをきかせた声で桜井が訪ねる。

「もちろん公表はします。ただしそれはこの研究が完成してからになります。先ほども小此木さんからありましたが、小此木医師、そして猫目技師の目指した研究は完成ではありませんでした。いえ、結論から言うと失敗でした。それを公表するのはそれこそ猫目技師の名誉に関わることだと思います。二人の遺志を我々メガマスが受け継ぎ、完成させたあかつきに、この研究の礎を築いたのは小此木医師と、猫目技師だったと、世間には伝えたいのです。」

桝田が質問に答えた。桝田もメガマスは過ちを償わなければならないと考えていた。

「なるほど。では、話の続きを聞きましょうか。」

桜井がそう言って一郎の方を見やった。

「では…コイルス社買収の直後父の元に、ある事故で精神的ショックを受けた少女が運ばれてきました。そしてその少女が、イマーゴによる電脳医療の最初の患者となったのです。」

「天沢さん・・・」

一郎の話を聞いたヤサコがつぶやいた。

「そう。父と猫目技師が開発した装置とイマーゴによって、天沢勇子はこの窓の向こうに広がる夕焼けに染まる街と、事故で亡くした兄である天沢信彦を作り出し、自らの意識もその空間に閉じこもりました。自分の心の傷を癒すために。」

話を聞きながら、ヤサコはイサコのことを思い、唯一の心の支えだった兄を亡くしたショックは、自分には想像もできないほど大きかったのだろうなと、改めて感じていた。

「父もつきっきりで天沢勇子を看ていましたが、回復は順調でした。父も電脳医療の有効性を学会で発表しようと準備を進めていました。しかし、その空間はあることがきっかけで突然停止してしまったのです。それはミチコの誕生です。ミチコがどのような経緯でもって生まれてしまったのかはここでは割愛しますが、とにかくミチコの誕生によって、その空間の機能は狂ってしまったのです。…あっ、優子。僕は別にお前を責めようとしているわけじゃないんだ。ミチコが生まれてしまったのも、空間自体に問題があったからで、お前がそんな思い詰めなくてもいいんだよ。」

うつむき加減のヤサコに気付いた一郎は、その頭に手をのせ、優しい口調でなぐさめた。ヤサコはミチコが生まれたのは自分にも責任があると感じていたのだ。

「…うん。」

そんな一郎に気を遣わせないように、できるだけ明るい口調でヤサ

コは返したが、やはり心の中ではくすぶる感情を消すことができなかった。

「空間自体の問題とは？」

続きが気になった桜井が訪ねる。

「あの空間の致命的な欠陥は、他人のイマーゴと干渉を起こしてしまったことでしょう。もとより治療目的の性格上、それは他人には干渉されてはいけない、非常にプライベートな空間であるべきでした。父にとって、猫目技師にとっても、干渉が起こってしまったことは想定外のことだったはずです。…それに知らなかったこととは言え、父も少し軽率でした。治療施設の一部であり、その空間に接続できるデンスケを、優子に与えたのですから。」

一郎になぐさめられたヤサコだったが、今度は一郎がデンスケのことを元凶のように言ったので、すこし悲しくなった。デンスケが事件の原因の一部になったことは間違いないことなのだが、デンスケにも悪気があったわけじゃないし、単に孫を喜ばせようとしただけの宏文のことも悪く言うのはやめてほしかった。

「責任を感じた父は、空間の停止によって身の危険にさらされた天沢勇子の電脳体を連れ戻そうと、自らの電脳体をその空間に送ることを決意します。しかしそれは大きなリスクを負っていました。大人の精神がイマーゴと適合する確証がなかったのです。コイルス社から研究を引き継いだメガマスの研究チーム員は、その父を止めようとしたそうです。しかし父は制止を振り切って一人その空間に入ってゆき、天沢勇子と引き換えに帰らぬ人となったのです。」

周りの空気は異様なほど静かだった。窓の向こうの信号機のメロディーだけが、不相応にまた流れだす。

「小此木医師の死後、その研究を知るのはメガマスの研究チームだけになり、この研究を引き継ぐのか、やめてしまうのかという話になりました。しかし、小此木医師の死という痛ましいことが起こってしまったということもありましたが、彼らが生み出した電脳医療では、イマーゴの子どもしか治療できないという短所もありました。

よってリスクを冒してまで行う研究ではないとメガマス上層部は判断し、この研究を封印することに決めたのです。一部の技術は今の電脳医療に応用されておりますが、その時の研究資料はほとんど破棄されました。研究チームもその後解散し、今は散り散りになっています。」

桝田が続いて説明した。

「…じゃああなた方は、あなた方自身が一度投げ出した研究をもう一度行おうとしているんですか？しかしそれでは同じことを繰り返すことになるんじゃ。資料も残ってないんでしょう？」

桜井が心配げに訪ねる。その時の空間を再現するだけで精一杯のメガマスに、宏文や猫目技師以上の成果を期待することはできないだろうと、桜井は感じていた。

「確かに、去年の事件が起こるまでの我々もそう感じていました。」

「…どういう意味ですか？」

桝田が意味深なことを言ったので、再度桜井が訪ねた。

「父は、メガマスの研究チームにすべての情報を伝えていたわけではありませんでした。父も猫目技師も、現状の電脳医療ではイマーゴの子どもの心しか治療できないということはわかっていたはずです。それでは本当の意味での医療とは言えないと、二人はさらに踏み込んだ研究を行っていました。それは誰もがイマーゴと同じ能力を使えるようにするという研究です。」

「えっ！？そんなことが可能なんですか？」

一郎の言葉に、玉子が驚き反応した。ヤサコ達や桜井も同じ気持ちだった。

「人の意識の抽出。つまりその人が何を考えているのかを機械によって表出化させる研究は以前から行われています。イマーゴもそれと同じ原理なので、明らかにすべきは、メガネに使われる量子回路がなぜ人の意識を引きつけるのか、という最大の疑問ですね。父と猫目技師の研究の最大の焦点もそこにあったようです。父はそれをメガマスの研究チームにも秘密にして行い、かなり核心まで迫った

みたいです。」
イマーゴは人の意識とメガネの量子回路が接続することによって起こる。その量子回路は微弱な電波をもキャッチする高性能アンテナとなっているのだが、その原理も解明されずに今に至っている。
「しかしメガマスによる買収が行われるにあたり、コイルス社は重要研究や部外秘の研究をすべてコイルスの空間の深部に封印してしまいました。父がなぜ秘密にしていたのかはわかりませんが、猫目技師の失踪後、その研究を知るのは父だけになってしまい、その父ももなくなく…なのでその研究を知る者は誰もいなくなったのです。」
何か一つの物語を話し終えたかのように、静かに一郎が締めくくった。
「じゃあどうしてあなた方がそんな話を知っているんですか?」
桜井が不思議そうに訪ねる。
「去年の事件の時に、我が家で父が残したコイルス社の資料やデバイスが見つかりまして、不幸にもそのほとんどが2・0によってフォーマットされてしまいましたが、無事だった資料の中に当時の父の日記があり、そこに今お話したすべてが書かれておりました。しかし研究資料はすべて無くなってしまったので、我々は一から始めないといけません。コイルスが封印した資料も、コイルスの空間自体がが消滅したので、ごく一部しか手に入りませんでした。」
少し残念そうに一郎が言った。
「メガマスにいた、コイルスの内通者なら手がかりを知っているんじゃないんですか?」
桜井が一郎に言った。コイルスの内通者とは、旧コイルス社の人間と結びつき、失われた技術や研究データを手に入れようとしていたメガマス社員のことである。彼らは猫目とも繋がりがあり、メガマスの内部情報をリークし、猫目のメガマスへの復讐に協力していた。その存在は一郎の内部調査によって判明し、今は隠蔽を行った旧幹部と同様に無期謹慎の処分を受けている。
「それについて彼らは何も知らないようでした。まあ知っていたと

しても、素直に言ってくれるとは思いませんけど。」
少し困った顔をして一郎が言った。
「とにかく、我々の目的は小此木医師と猫目技師の遺志を継ぎ、すべての人の心の傷を癒すことができる電脳医療を完成させることです。この空間は数少ない資料をもとに試行錯誤を繰り返して作ったものですが、これから研究が発展する見込みは十分にあります。そしてこの実験はそれを実現させるための第一歩となるのです。ご理解いただけましたでしょうか?」
桝田が玉子の方を向いて言った。一郎も玉子の方を見やった。
「…わかりました。必ず、それを実現してくださるとおっしゃるのなら、この実験に反対はしません。ただ、絶対に事故が起こらないように、それだけはお願いします。」
「もちろんです。」
玉子の言葉に、桝田が胸を張って答えた。玉子はメガマスの目的を十分に理解した。そしてそれは思っていたほどいかがわしいものでもなかった。そしてこの誠実そうな社長のもとでなら、メガマスが再びモラルを失うこともないとだろうと思った。
「話が長くなりました。では実験の方に移りましょうか。」
一郎がそう言うと部屋の明かりがつき、窓の向こうの夕焼けもいったん消えていった。

#5　開かれし扉　part5

広い実験室の真ん中に、ぽつんとヤサコ一人だけが立っている。実験室の中は元の殺風景な空間に戻っており、水色の床や壁が少し目に眩しかった。残りの全員は管制室のメインコンピューターのディスプレイを食い入るように見ている。その画面では、実験室の俯瞰図が方眼紙のようにいくつもの正方形のブロックで表示されており、ヤサコが立っているあたりには、黄色い三角形が点滅していた。

「えーっ、今からその実験室を古い空間に置き換えます。と言ってもあっちの世界を再現するわけではなく、通常空間に古い空間が重なり合っている状態をここでは作ります。その中で一番バージョンの古いと思われる場所をイマーゴを使って探索し、ここだと思った所で立ち止まって手を上げて合図を下さい。準備はよろしいでしょうか？」

香川がマイクを通して言い、それは実験室の中のスピーカーからヤサコの耳に届いた。緊張していたヤサコは一度大きく深呼吸をしてから、手を上げて了解の合図を送った。

「では始めます。」

香川がおごそかに言うと再び管制室の照明は落とされ、実験室も淡い照明だけが灯っている状態になった。するとにわかにヤサコの足元から白い電脳霧が漂い始めた。実験室の中はすでに古い空間に切り替わったのだった。

「さあ、果たしてイマーゴの力は本物なのか、見ものですね。」

桜井は興味津々だった。画面には、一番古いバージョンになっている一角が青く表示されている。それはヤサコから見て左斜め前の方向だった。

「ねえハラケン。ちょっと気になって見てたけど、ここの電脳霧は白いわね。ということは昨日見つけたあの空間は、メガマスが作った空間じゃないってことかしら？」

ひそひそ声でフミエがハラケンに訪ねる。昨日見つけた空間の電脳霧は黒かった。

「どうだろうね。でもこれだけの管理がなされている中で、あんな空間が外に生まれるなんて考えにくい。やっぱりメガマスは関係ないのかな?」

ハラケンが考え込んだ。しかしメガマスの作った空間でないとすると、一体あの空間は何なのか、ますますわからなくなる。

「あっ。動き始めた。」

画面を見ていたフミエが言った。そう言っている間にもヤサコは神経を集中させ、聞こえてくるヒソヒソ声が一番大きい場所を探していた。実験室の中を彷徨うように歩き、開始から約2分経った時、ヤサコはピタッと立ち止まり、静かに手を上げた。

「…どんぴしゃ。」

桜井があぜんとしてつぶやいた。ヤサコを示す黄色い三角形の光は、青く表示されたエリアのど真ん中で点滅していた。

「さすがね。あれだけ広い空間の中で、たかだか2メートル四方の最深部を探し当てるなんて。」

改めて感心したようにフミエが言った。

「夏休みの時も、ヤサコは古い空間を次々と見つけ出していたからね。僕なんか中途半端にそのヒソヒソ声が聞こえるから、ヤサコのイマーゴの力には驚かされるよ。」

ハラケンもしみじみと言った。その後も同様の実験が繰り返され、結果ヤサコは１０回中８回的中させた。

「はい、おつかれさまでした。実験室から出てきても結構ですよ。」

香川がマイクを通して言うと、ヤサコはフラフラと実験室のドアから出てきた。ほんのかすかに違うヒソヒソ声の音量を聞き分けるのに全神経を集中させたため、心身ともにクタクタになったのだ。それに気付いた一郎はヤサコに駆け寄り、ヤサコの肩に手を回して支えた。

「まあ、これでイマーゴの力は証明されたわけですが、一応比較対

象のデータもとっておきましょう。」
一郎に向かって桝田が言った。
「もちろんそのつもりです。フミエ君。君にも優子と同様の実験をしてもらいたいのだけど、いけるかな?イマーゴを持ってないんじゃ中にいても何も感じることはないと思うけど、その時は何となくでいいから最深部を探してみてくれ。」
ヤサコを近くにあったイスに座らせながら一郎が言った。
「あ、はい。わかりましたあ。」
そう言ってフミエは実験室の中に入っていった。実験開始後、ヤサコの時と同じように実験室は白い霧に包まれたが、フミエはヒソヒソ声を感じることもなく、感覚的にはいつもと変わることはなかった。仕方ないのでフミエは目を閉じ、昔メタバグ集めの時に実践した、古い空間を匂いで探す方法をとった。もちろん、これには何の根拠もない。言ってみれば女の勘である。
「…む。あの娘、匂いをかいでいるのか?そんなことでわかるものなんですか?」
フミエを注視していた桜井が言った。
「いやあ。メガネが嗅覚に影響を与える事なんて有り得ないんですが。」
桝田も不思議がりながら答えた。もしやさらなるハイレベルなイマーゴかとも一瞬思った。
「いや、あの仕草には多分、何の意味もないと思います。僕らが昔古い空間を探していた時にもたまにやってましたが、別に何の根拠もなく、何となくやっていると言ってましたので。」
半ば呆れ顔でハラケンが説明した。桝田や桜井も「あーそう。」と拍子抜けした。ところが結果は、１０回の試行のうち的中こそなかったが、実に5回はニアミスと、フミエは見事な勘の鋭さを見せた。ただ悲しいかな、日常生活ではその勘の鋭さが活かされていない。
「どうだった?」
終わったフミエがヤサコとは違いぴんぴんとして戻ってきた。

「…ある意味すごい。」
ヤサコの結果よりこっちの結果の方が恐ろしいと思いながらハラケンが言った。
「君、本当にイマーゴ持ってないの？中で何も感じなかった？」
桝田が驚きを隠せない様子でフミエに訪ねる。
「ええ。まあ。何も感じなかったから仕方なく匂いで探そうかとも思ったけど、それでもわかりませんでした。っていうか私、そんなにすごい結果だったんですか？」
右手で髪を掻きながらフミエが答えた。実験の結果は本人にはわからないので、フミエは自分が何をやらかしたか理解していない。
「おほん。まあ、一応結果としてははっきり出たので、イマーゴの力は確認することができたでしょう。カンナ君が事故の時になぜあの場所にいたのかも、これでおのずと見えてくるはずです。」
一郎がその場をまとめた。ハラケンも一郎の言葉にうなずいている。
あの時にカンナが中津交差点にいたのは、その少し前に死んだクロエを探していたからである。カンナは中津交差点付近でクロエの鳴き声を聞き、クロエは古い空間に入り込んだのだと信じていた。そして自分は古い空間を見つけ出す能力があるのに気付き、事故の時も夢中にそれを探していた。そう考えれば事故の真相も一本の線につながる。
「次の実験も、少々危険ですがこのままとり行いましょう。」
一郎が全員に向かって言った。
「次は何の実験なんですか？」
少々危険だという一郎の言葉が気になった玉子が訪ねた。
「…鍵穴、ヌルがイマーゴの子どもに反応するのかという実験です。去年の夏のある夜に起こった事件のように、大黒市中のいつどこで通路が開くかわからないという非常に不安定な状況を、今からこの実験室に作り出します。その中に被験者を立たせ、鍵穴がその人の近くに現れるのか、そしてヌルはその人に向かってくるのか、それを確かめます。」

一郎がそう言うと少し重苦しい空気が流れた。玉子も難しい顔をしている。

「…つまり、カンナさんのすぐ近くで通路が開いてしまったのは、必然のことだったということを検証するんですね。」

桜井が確認する。誰もがそのことを理解し、この実験の必要性を感じていた。

「そうです。実験中は被験者のすぐ近くに2・0を配置するので、安全性は問題ありません。ただ、優子やフミエ君があの時の事を思い出したくないと言うのであれば、中止もやむを得ませんが、二人とも大丈夫かな?」

一郎がヤサコとフミエに訪ねた。ヤサコもイスに座ってしばらく休んでいたので、体力は回復していた。

「私は大丈夫。あの時に比べたら、全然怖くない。」

ヤサコが力強く言った。ヤサコの家でヌルに襲われた時には死ぬほど怖い思いをしたので、このくらいのことなら平気だった。

「私もやります。ヤサコがやるって言ってるのに、私だけ逃げるなんてできません。」

フミエも一郎に訴えた。

「そうか。わかった。じゃあ優子から、また実験室に入ってくれ。」

一郎に言われ、ヤサコは再び実験室の中に入った。すると奥の方から2・0が飛んできたので、ヤサコは反射的に後ずさってしまった。

「撃つ事はないので逃げなくても大丈夫ですよ。でも一応2・0には君の電脳体を登録させておきます。実験中に誤射するのを防ぐためです。」

マイクを通して香川が言った。2・0が機械音を発して登録が完了すると、また部屋全体の照明が落とされた。

「今回は実験を始めるごとに、君の好きな所に移動してください。ただし、実験が始まった際にはその場所から絶対に動かないようにお願いします。下手に動くとヌルに触れられる恐れがありますので。2・0は君についていくようにセットしてあります。とにかく実験

中は2・0を信じて、何が起きようと動かないようにお願いします。」

香川が繰り返し警告した。それを何度も自分に言い聞かした後、ヤサコは窓のすぐ前まで移動し、手をあげた。ヤサコは管制室から見て左側を向いている。

「始めます。」

香川が宣言すると、全員が固唾を飲んで見守り、コンピューターの起動音以外はいっさいなんの音もしなくなった。漂う電脳霧も先ほどより深く、ヤサコの腰の高さ以上のところまできている。

「…何も起きませんが。」

2分以上の静寂を破って桜井が言った。以前実験室に変化はなかった。

「通路を開くには、少し時間がかかります。でももうそろそろだと思いますけど。」

一郎が答える。すると実験室の方から、うなり声のような音が鳴り出した。実験室を全員が再び注視すると、ヤサコの手前5メートルほどの所に、実験室が暗いのでわかりにくいが、確かに鍵穴のような形の大きな影がそびえているのが見えた。ヤサコが怯えるように見上げているその鍵穴は、みるみると膨んで実験室の天井に届き、今度は錆び付いた扉が開く時のような軋み音を発している。鍵穴が膨らみ終わると、その中はオレンジ色に輝き出し、黒い人影が次々と現れ始めた。

「…ヌル。」

ハラケンがつぶやく。管制室のほうにも、「ちょうだい…。ちょうだい。」というヌルの声が聞こえてきた。

「う…何とも気味の悪いヤツらだ。これもあなたの父上の作品ですか?」

少し青ざめた桜井が一郎に訪ねる。

「いえ。これはもともとヌルキャリアといって、肉体と電脳体を切り離す電脳の乗り物だったそうですが、もともとはコイルス社独自

の研究で生まれたものです。コイルス社が実験を繰り返すうちに、このヌル達のように野生化したということが、私達が手に入れたコイルス社の資料には書かれていました。私たちはこの実験のために、その資料を元にヌル達を再現したのです。ちなみに父が電脳体を分離させた時には、コイルス社に残っていた数少ない正常なヌルキャリアを使用したそうです。そちらの方の研究もおいおい進めていくつもりですが。」

一郎が説明している間にも、ヌルの群は確実にヤサコに向かって歩いていた。やはりイマーゴがヌルを引きつけるのかと一郎が考えていると、ヌル達はヤサコの手前1メートルまで迫ってきた。ヤサコは逃げたくなる衝動を必死に押さえ、目をつむった。するともうひとつのヌルの集団が、今度はヤサコの背後から迫ってきた。どうやら窓から死角になっている一角に、もうひとつ通路が開いたらしい。

「ちょ、ちょっと！新手が来ましたよ！通路は一つしか開かないんじゃないんですか？」

桜井が慌てて一郎の肩を片手で揺さぶりながら言った。しかし2・0はまったく動こうとしない。それを見ていたハラケンは「ヤサコ！」と手を伸ばしながら叫ぶ。

「2・0を！」

一郎が怒鳴るように香川に指示したその瞬間、2・0が眠りから目覚めたかのように起動し、ヤサコに手を伸ばしていたヌル達に片っ端からレーザーを浴びせた。エメラルド色のレーザーは暗い部屋では刺激が強く、一同は窓から目をそらした。そのレーザー音が鳴り止んだところで全員が実験室を見ると、ヌル達は消え、鍵穴も上部の方から黒い粉が飛散していくように消えていくところだった。それを見届けた一同は一つため息をついた。

「通路が開くのは一つだけとは限りません。あっちへの入り口は必ずしもひとつではないのです。去年の大黒市でもそうでした。」

落ち着いた口調で一郎が桜井に説明した。

「先に言ってくださいよ。それに今の、あのキューブを起動するの

があと少しでも遅れていたら、娘さんが危なかったんじゃないですか？」

今ので肝をつぶした桜井が言った。

「いやあ、ヌルが本当にイマーゴに反応しているのか確かめる必要がありましたので。しかし今のは少しスリリング過ぎたかもしれないですね。でもあと3、4回は繰り返してみましょう。」

少し苦笑しながら一郎が言った。フミエも今のを見て、自分もあれをやらされるのかと思って血の気が引いていた。

「大丈夫ですか？次を行ってもよろしいですか？よろしければご自身のタイミングで合図してください。」

マイクを通して香川が言い、ヤサコは三つ深呼吸をしたあと手をあげて了承した。ヤサコは目をつむっていたので、後ろからヌルが来ていることにも気付いていなかった。その後4回同様の実験が行われ、全5回すべてにおいて鍵穴はヤサコの半径5メートル以内に出現し、ヌルもヤサコの方に向かって歩いてきた。

「怖い？」

実験を終えて出てきたヤサコに向かってフミエが訪ねる。

「もちろん怖いわ。ヌルがこっちに来るのを見ていたら逃げ出したくなるから、目をつむって待ってる方がいいかも。」

「わかった。」

ヤサコのアドバイスを聞いて覚悟を決めたフミエは実験室の中に入っていった。しかし5回行われた実験では、通路はすべてフミエからかなり遠くに開き、ヌル達もどこに行けばいいかわからなくなっている様子だった。

「まあ、すべての人に反応して通路が開くなら、あの夜の大黒市は通路だらけになっていたでしょうからねえ。」

少々拍子抜けする結果に、一郎が笑みを浮かべて言った。フミエも楽勝ムードで帰ってきた。

「じゃあ次、研一君。」

一郎がハラケンの方を見て言った。

「えっ!?僕もやるんですか?」
打ち合わせでは自分も参加するとは言ったものの、流れ的に自分もやるとは思っていなかったので、ハラケンは少し驚き困惑した。
「僕らとしては研一君のデータもあればより心強い。君はこういうの苦手じゃなさそうだからやってくれると思って聞いたんだけど、大丈夫かな?」
ハラケンは肝が据わっていると言えば語弊があるかもしれないが、怖いものには強い。特に霊的なものに関してはむしろ興味の対象であり、去年の夏の事件でも、カンナに会うためとは言え、普通の人なら初見なら誰しもが逃げ出したくなるであろうヌルの群に飛び込んだほどである。
「わかりました。やります。」
かくしてハラケンの実験が始まった。ハラケンはヌルが目の前に迫ってきても、逆にヌルの正体を暴いてやろうとわんばかりに凝視し続け、一郎や桜井を驚愕させた。終わってみると5回のうち2回はヤサコと同様の結果が得られ、残り3回はフミエと同様の結果だった。
「なるほど。やっぱりイマーゴを持っている子どものなかでも、そのレベルの違いというものがありそうですな。」
実験結果を踏まえて桜井が一郎に言った。
「ええ、とにかく今日の結果はレポートにまとめて改めてお送り致します。えーっと、君たちには後日病院で検査を受けてもらいたいのですが。」
一郎は桜井に実験のメモを渡した後、ヤサコ達に向かって言った。
「病院?」
三人そろって聞き返す。
「そう。イマーゴの子どもとそうでない子どもとの間には、医学的にどんな違いがあるのか調べるためにね。例えばＭＲＩ検査で脳の構造を調べたり、ＤＮＡ検査で遺伝子情報を調べたりするんだ。ここでイマーゴの子どもに共通する何かがわかれば、この研究は飛躍

的に進歩すると言っていい。」
一郎が説明した。その共通性が見いだせれば、カンナがイマーゴの子どもだったという科学的な証明ができる。ヤサコ達は検査を受けることを了承した。
「検査の日程はおって連絡するよ。場所は多分メガマス病院になると思う。じゃあ今日の実験はすべて終了だから、後は社内を見学するのもいいし、昼食をとってもいいし、好きにしてくれ。では最後に社長から一言もらいましょうか。」
一郎が桝田に締めの挨拶をお願いした。
「はい。今日はみなさんおつかれさまでした。おかげで貴重な研究データがとれましたので、今後ともこれをもとに研究を発展させていきたいと思います。そのお礼と言ってはなんですが、我が社自慢の社員食堂に特製ランチと飲み放題のドリンクを用意させております。地上３０階ということで、眺めもすばらしいですよ。私はこれで失礼致しますが、この後もメガマスでゆっくりしていってください。今日はご協力ありがとうございました。」
桝田が最後に深々と頭を下げ、そこにいた一同も頭を下げた。そして特製ランチとドリンク飲み放題と聞いて、フミエが飛び上がって喜んだ。

#5　開かれし扉　part6

「あのー。私、大黒市警の竹下と申します。交通課の野村刑事に取り次いでもらいたいんですが。」

直樹は前日の電話での約束通り、正午頃に県警を訪れていた。受付の女性に自身の警察手帳を示しながらそう言うと、少しその場で待っているように言われ、近くのソファーに腰掛けた。県警は大黒市から電車で３０分ほどの場所にあり、直樹は昨日の今日でスケジュールに折り合いをつけ、指示された時間通りにやって来たのだった。その時ちょうどお昼のチャイムが県警の建物の中に響き渡った。

「他に誰もいないところを見ると、あなたが竹下君ね？」

すると突然直樹の目の前にメガネをかけたキャリアウーマン風の女性が現れて言った。その人がかなりの美人であったことに、まず直樹は驚いた。

「え？ええ。あなたは？」

どぎまぎしながら直樹が言った。その女性は年齢的には直樹よりもすこし上のような感じだった。

「私は県警交通課の川畑久美子といいます。昨日あなたに電話した野村刑事の部下です。」

その久美子も直樹が年下であると判断したのか、部下に接するような態度だった。もとよりむさくるしいオジさんが出てくるものだと思っていた直樹にとっては、こんなきれいな女性と一緒に仕事ができるなんて夢のようだった。

「で、その野村刑事はどちらに？」

直樹が訪ねた。一応まじめな仕事であることを思い出したのだ。

「今は外に聞き込みに出ていらっしゃるけど、時間までには来られると思うわ。それより昼休みね。外でランチにしましょうか。まあわざわざ来てくれたんだから、おごってあげてもいいわよ。」

久美子が外の方を眺めながら言った。その馴れ馴れしさも魅力的で、

直樹はいきなりデートできるのかと内心興奮したが、これはまじめな仕事なのだと冷静になって自分に言い聞かせた。
「でも野村刑事が戻って来られるんじゃないんですか?その時にここにいないと失礼ですし、お気持ちはうれしいですが一緒には行けないです。」
断腸の思いで直樹は久美子からの誘いを断る。
「昨日の電話で野村さんがおっしゃっていたでしょう?今回の調査は警察内部にも感づかれてはならない極秘のものだと。その大事な打ち合わせを、わざわざ警察の建物の中で行うわけないでしょう。野村さんとはあるお店で待ち合わせをしています。」
少し呆れた感じで久美子が言った。
「なるほどですね。では早速その店に向かいましょう。」
こうして久美子の案内でふたりは県警の近くのある喫茶店に入った。平日の昼時で中は結構繁盛している。
「いらっしゃいませ。あっ、久美子ちゃん。年下の彼氏なんか連れてきちゃって。昼間からお熱いですね。」
その喫茶店のマスターが茶化すように言うと、それを聞いて直樹はきょどった。
「仕事上のお付き合いよ。それより4人がけのテーブル空けといてくれました?」
慣れ親しんだ様子で久美子がマスターに訪ねた。
「はい。あそこの一番奥のテーブルを空けておきました。」
マスターが手でそのテーブルをさし示した。カウンターにも客が埋まっているにもかかわらず、そのテーブルだけが誰もいなかった。店の一番奥なので誰かに話を聞かれる心配もないなと久美子は思った。
「ありがとう、バッチリよ。じゃあこの子にこの店自慢のカツカレーを出してあげて。わたしはいつものやつを。後で野村さんと杉本さんも来るから。」
「かしこまりました。」

久美子がマスターに注文して、ふたりはそのテーブルについた。
「ここのカレーは絶品よ。一度食べたらやみつきになること間違いないわ。」
笑顔で久美子が話す。その顔に直樹は見とれてしまいそうだった。
「しかし一番奥のテーブルとはいえ、こんなにお客さんが多いお店で打ち合わせをして大丈夫なんですか?県警の方も来られるでしょう?」
店の中を見回しながら直樹が言った。
「大丈夫。ここに来る県警の刑事さんはほとんど顔見知りなの。誰かが来たらわかるし、だいたい安月給の警察官が、味はいいけどちょっと値が張るここのカレーを昼から食べにくるなんて、せいぜい給料日の後だしね。それをおごってあげるんだからちょっとは感謝しなさいよ。しかもカツまでつけて。」
「あ、ありがとうございます。」
久美子の言葉に、ぺこぺこと頭を下げながら直樹がお礼を言った。
この短時間ですっかり二人の立ち位置は決まったようだった。その時、カンカラコンと店の扉が開いた時に鳴る鐘の音がして、男性2人が入ってきた。
「いらっしゃいませ。あっ、野村さんと杉本さん。久美子ちゃんはすでにあちらにいらしてますよ。」
その男性達にマスターが応対した。
「ありがとうマスター。じゃあカレーを2つお願いします。」
年上らしき男性が注文する。声からその男性が昨日電話してきた野村刑事だと判断した。
「かしこまりました。」
マスターが頭を下げると、その男性達は直樹のテーブルの方に歩いてきた。
「来られたわよ。」
久美子が席を立ちながら言い、直樹も一緒に立ち上がった。
「はじめまして。いやあ呼び出しておきながらお待たせして申し訳

ありませんでした。僕は県警交通課の野村と申します。こっちは部下の杉本君。で、その女性が、紹介されたと思うが川畑君だ。今回の調査はこの４人で進めていくことになるので、今後ともよろしく。」

野村がそれぞれを紹介した。野村は直樹の恩師である小野と同級生ということもあって、年齢はもう５０代後半であるが、こんがりと日に焼けていて体つきもしっかりとしていた。対してその部下の杉本の方は見た目４０代で、警察官というよりは普通のサラリーマンという感じのいでたちで、体つきも細かった。杉本はメガネもしていた。

「大黒警察署電脳犯罪対策係の竹下直樹です。よろしくお願いします。」

警察官としては大先輩にあたるので、直樹は深々と頭を下げた。

「そうかたくならずに、とりあえずかけたまえ。いやあ、小野君の紹介ということもあって期待していたが、評価にたがわぬまじめで誠実そうな若者で安心しましたよ。」

結構豪快な笑い声を飛ばしながら野村が言った。これから極秘調査の打ち合わせをするというのに、大丈夫かなこの人はと直樹は思った。

「は、はあ。ありがとうございます。」

直樹がそう返すと、４人分の水とおしぼりをウエイトレスが持ってきた。

「課長。時間もないことですし早速本題に入りましょう。」

杉本が左の手首を見ながら言った。指電話と同じたぐいの機能で、メガネをかけている時に腕時計を見るように手首を動かすと、そこにデジタル時計が表示されるのである。

「ああ。じゃあ進行はまかせる。」

思いっきりおしぼりで顔をふきながら野村が杉本に言った。

#5　開かれし扉　part7

「…では第一回目の打ち合わせを始めたいと思います。我々は一年半前に中津交差点で起こった交通事故の再調査を行うわけですが、まず何故、この事故の再調査が必要なのかという点でありますが…」堅苦しく杉本が始めた。メガネを使って色々資料を取り出そうとしている。

「あのう、そのへんの経緯や事故の背景は知っていますので割愛していただいて結構ですよ。僕は大黒警察の電脳犯罪対策係なので、一連の事件については独自に調査していました。簡潔に言えば、この事故の裏側にはメガマスを揺るがす真実が隠されていたので、当時のメガマス幹部が警察に圧力をかけて捜査資料を改ざんさせてもみ消した、ということですよね？」

時間短縮のために直樹が話を遮ってまとめた。

「その通りです。そしてこのたびある検事さんの要請のもとで、我々がそのもみ消された真実を立証しようというわけです。その目的は、事故のもみ消しを指導した旧幹部達を起訴することです。」

杉本がずっとメガネを操作しながら説明する。

「それはご遺族の意志ですか？」

直樹が訪ねた。事故から時間が経っているのにもかかわらず、何故今になって遺族が事件のことを掘り返す気になったのか疑問に思ったからである。

「そうですね、確かにご遺族の意志には反しておりませんが、メガマスの意志と言うこともできると思います。原告はご遺族ですが、その裏ではメガマスがサポートするという話です。つまり訴訟が成立した場合、メガマスが旧幹部達を社会的規範でもって裁くための裁判と言うこともできるでしょう。ご遺族に隠蔽のことを伝えたのもメガマス社員だったという話です。」

杉本の話を聞いて、複雑な事情だなと直樹は思った。メガマスのし

ていることは一見正義ともとれるが、逆に言えば責任のなすりつけとも見ることができる。夏以来、事件の公表に関しても何の音沙汰もないあたりで、いまいち直樹はメガマスが信用できなかった。

「何か不服そうね。メガマスのパシリっていうのが嫌なの？確かにメガマスは謎の多い会社で、なに企んでいるのかわからない部分もあるけど、それでも私は隠蔽を行った旧幹部達を許せないわ。まあ、会社ぐるみで隠蔽が行われたっていう可能性もないわけじゃないと思うけど。」

直樹の顔色を見ていた久美子が言った。

「メガマスは3年前に社長が交代しただろ。それもかなりの若造に。経験が浅く人脈もない上に、メガマスはいわゆる院政を行っていないから先代の影響力も薄い。それをいいことに当時の幹部は好き放題やっていたらしい。噂ではな。」

野村がタバコに火をつけながら言った。野村の言う院政とは、社長を退いた者が会長、顧問、相談役などの名誉職に就き、なおも会社に影響力を持つ体制のことをいう。平安時代以降に天皇を退いた上皇が、天皇にかわって政務を執っていたところからきている。

「ふーん。つまり隠蔽は旧幹部達の暴走によるものだというのも、あながち嘘ではないかもしれないってことですね。」

久美子が野村に灰皿を渡しながら言った。

「あのう。質問していいですか？」

話を聞いていてあることに気付いた直樹が手をあげる。

「はい。竹下君。」

学校の先生が生徒をさした時のように野村が言った。

「この調査は言ってみれば、メガマスの要請によるものですよね。でも市政を動かしているメガマスなら、大黒警察にも県警にも全面的な協力を要請できるんじゃないですか？どうして僕らがこそこそと極秘裏に調査を行う必要があるんでしょうか？」

直樹が野村や杉本に訪ねる。

「非常にいい質問です。まさにその点にこそ、この調査の重大さが

あると言ってもいいぐらいです。」
意味深に野村がタバコの灰を落としながら言った。
「どういうことですか？」
直樹が訪ねると、ちょうど注文していたものが運ばれてきた。直樹はカツカレー、野村と杉本はノーマルのカレー、久美子はドライカレーだった。
「おお、君のはカツ入りか。うまそうだな。僕のと交換してくれませんか？」
真顔で野村が直樹に言った。どこか緊張感に欠ける人だなと直樹は思った。
「え？ええ。ならどうぞ。」
仕方がないので直樹は自分のカツカレーを差し出そうとした。
「課長。少ないお小遣いなのにこれを食べると、明日のお昼ご飯がなくなりますよ。それにカロリーの摂りすぎも体によくありません。」
久美子が野村に言った。上司と部下の関係でありながら、かなり親しい様子だった。
「かなわんな川畑君には。結構、結構。若いうちに食えるだけ食っておかないと、この杉本みたいにきゃしゃな男になってしまいますぞ。ハッハッハ。」
また野村が豪快に笑い飛ばした。直樹もこの人のマイペースさには慣れていくしかないなと思い始めていた。
「それでさっきの話の続きなんですけど。」
お腹がすいていたのか、すぐにパクつき始めた野村に向かって直樹が訪ねた。
「ああ…実は今のメガマスは表立って警察に干渉することができないんです。」
水をぐいっと飲んで野村が言った。
「えっ？どうしてですか？」
直樹が再度訪ねる。

「大黒市は国が特別行政区として認めており、実質的にメガマスが市政を動かしていますよね。つまり国はメガマスがもたらす経済効果を期待して、見返りに大黒市の自治を認めているということになります。何かと反官・反民の政策に目をつむっているのもそのためです。」

杉本が野村にかわって説明を始めた。

「それは知っていますが、だったらなおさら警察にモノを言えないっていうのはおかしくないですか?もしかしてメガマスの業績が右肩下がりなので、国としては自治権を与えるメリットもなくなってきたっていうことですか?」

直樹が推測を交えて言った。

「そうじゃありません。私が言いたいのはメガマスと政界はかなり密接な関係にあるということです。普通なら企業単位で行われるような政治献金も、メガマスの場合は幹部役員が個人単位で私財を投じて行い、様々な政治家にコンタクトをとっているらしいのです。例えばある幹部役員にある政治家が頼み込んで、自分の支持基盤がある地方にメガマスの関連工場を誘致させたという話などはたくさん聞こえてきますしね。」

資料に目を通しながら杉本が淡々と言った。

「それと警察がどうつながってくるのですか?」

直樹は段々と話が複雑になってきて、頭が痛くなってきた。

「政界との結びつきが強いのは、現在無期謹慎処分の身にある旧幹部達で、逆にメガマスの現幹部達はまだ若く、そのような人脈もあまりないようです。そして今のメガマスは、そういった過去の反省から若い社長のもと、裏金や賄賂等をなくしてクリーンな会社を作ろうと動いているらしいです。そしてそれは、自分たちの権益を守るために企業のトップとしてのモラルを失った旧幹部達を会社から一掃することから始まります。しかしこれは今までメガマス旧幹部の恩恵を受けてきた政治家にとっては聞き捨てならない話でしょう。彼らの望みは現社長を排除し、旧幹部達が再びメガマスの役員とし

て返り咲くことです。そのために今回の訴訟のことを嗅ぎ付けた政治家達は、その妨害のために親しい警察官僚に口利きをして、そこから真実がもれないように大黒警察やこの県警を監視させているというのが、メガマスが警察を動かせない理由なんです。」

杉本の長々とした説明が終わり、直樹は血の気が引いてきた。

「じゃっ、じゃあこの調査は警察トップの意志に反するものだということですか？」

直樹はこんな壮大な話に巻き込まれるなんて思ってもみなかった。下手をすれば自分たちの首が危なくなる。

「情けない声出さないの。逆に私たちがうまくやれば、メガマス旧幹部達やそのせこい政治家達を一掃することができるのよ。人生でこんなやりがいのある仕事なんてないわ。」

久美子が直樹を一喝した。しかし普通の人では耐えられないプレッシャーであった。

「県警の中にも大黒警察の中にも、その政治家達の手先はいるでしょうな。昨日の電話ではメガマスからの圧力と言いましたが、正確にはメガマス旧幹部達とそれに絡む政治家達の圧力ということになります。交通事故当時の大黒警察の交通課長も、今や本庁に栄転と破格の出世をしました。つまり彼らの言うことを素直に聞いていれば、出世は約束されるということです。そういう餌なんかに釣られる情けない警察官には負けられませんぞ。川畑君ぐらいの気概を持たないと。」

野村も直樹に気合いを入れた。本当にこの人は事の重大さを認識しているのかと、直樹は思った。

「水面下でメガマスと旧幹部達との戦いが既に始まっているのです。もしメガマスが我々警察と接触していることが明るみに出れば、その政治家達に付け込まれるでしょうね。メガマスは警察に圧力をかけ、捜査資料をねつ造しようとしていると。」

杉本が言った。本当は旧幹部達が捜査資料を改ざんしたわけであるが、それを覆す証拠を探し出さなければ、それが絶対的真実となる。

まったくもって立場が逆であるが、悲しいかなそれが今メガマスや直樹達が置かれている現状である。

「メガマスもその辺の事情を考慮して、検事を介して間接的にコンタクトをとってきたんでしょう。もし我々の調査が警察内部にばれても、個人的な趣味で行っているものと言ってとぼければ、まあそんな重い処分がくだることはないはずです。要は我々とメガマスの関係に気付かれなければいいわけです。」

野村がかなり楽観的に言った。もちろん直樹はそれで安心できるはずがなかった。

「…本当はここで逃げ出したいんですけど、ここまで秘密を共有してしまったからにはそういうわけにもいきませんね。それに今の話が事実なら、ますます僕は事故の隠蔽を行った人達を許す事ができなくなりました。何の罪もない少女が命を落とすという痛ましい事故だったのに、ここまでして事故は少女の不注意だったと偽装して、自分たちの利益を守ろうとするなんて。」

テーブルに置かれた直樹の右のこぶしは、震えるほど強く握りしめられていた。

「その通りです。我々も彼らを許すまいという強い信念をもって取り組みます。人として正しい道を歩んでいれば、処分なんて小さい事です。」

野村もさっきまでとは違い、本当に真剣な目つきになって直樹に言った。

「では具体的な調査方法について話していきましょう。どれだけ強い意志を持っても、やはり前途多難な調査であることは変わりません。さしあたってまず2つのグループ別れて調査を進めようと思います。まず野村課長と私は県警に残り、内部資料の捜索や情報収集などを中心に行います。」

「つまり事故当時の資料が県警にも残っていないかとか、その事故を担当した捜査員を割り出して、うまいこと真実を引き出すとかそういうことを中心に行うわけです。かなりリスクの高いことだと思

いますが。」
杉本と野村が説明した。確かにそれはある程度経験がない人じゃないと難しいなと直樹は納得した。
「そして竹下さんと川畑さんには、外への聞き込み調査を中心に行ってもらおうと思います。おそらくまだ重要な証拠を目撃した人が大黒市にいると思われます。大黒警察の中にも監視者がいるはずですが、なんとかその人に嗅ぎ付けられずに、重要参考人を見つけ出してください。そのために川畑さんを一ヶ月間の研修として大黒警察電脳犯罪対策係に赴任させる手配もとってあります。」
直樹も昨日の電話でそのようなことは既に聞いていた。
「その監視者に怪しまれないですかね？こんなばりばりの経験を持っている人が急に研修のために電脳犯罪対策係に入ってくるなんて。」
直樹は久美子を見ながら言った。
「川畑君はこう見えても、この４月で４年目とまだまだ警察官としての経験は浅い。おそらく怪しまれることもないでしょう。」
野村が説明する。
「４年目！？そうなんですか？それで県警の刑事さんとはすごいですね。」
直樹が久美子を憧れの目で見つめて言った。久美子はほめられても別に嬉しそうな顔をしなかったが、直樹はやはり久美子は仕事のできる人なんだろうなと覚悟した。
「今日は木曜日でしたね。とにかく来週付けでそちらに赴任する事になっているので、そのつもりでよろしくお願いします。」
杉本が頭を下げながら言う。
「もちろんこの土日からやるわよ。警察官に休みなんてないんだから。」
「マジですか～」
直樹が頭を抱えた。仕事が山積みになっているのに、と思った。
「まあ大体話はこれぐらいですかな。ん？竹下君。全然食べるのが

進んでいないじゃないですか。よかったら手伝いましょうか？ハッハッハッ。」

また野村が豪快に笑い飛ばす。反面直樹はこれからどうなるのかと思い、食欲すらわいてこなかった。

#5　開かれし扉　part8

メガマスの社員食堂で豪勢なランチを堪能したあと、ヤサコ達は社会見学がてら、メガマスのオフィスから、メガネの最新機能や発売前のゲームが体験できるコーナー、リラクゼーションルームまでまわり、思う存分メガマスを楽しんだ。気付いてみればきれいな夕陽が出ており、ビルの外の芝生の広場のさらに奥にある、大黒市を一望できる高台を訪れていた。

「きれいねー。」

フミエが手すりに体をあずけながら言った。

「ほんと。自分たちが何気なく住んでいる街が、こんなに美しいなんてね。」

ヤサコもしみじみと感じた。そしていつかハラケンとふたりっきりでまた訪れたいなと想像し、景色を見るふりをして、ずっとハラケンの横顔を見ていた。

「イサコが作り出した空間も、ちょうど同じような鮮やかな夕方だった。でもとても悲しいような気もする。あの夕陽は、今日一日の最後の太陽の輝きだもんね。また明日、立ち上る太陽が見られるかはわからない。人の儚い一生がいつ狂ってしまうのかわからない。ただ、失ってから気付くことは、こんな何気ない日常が、幸福に満たされていたということ。イサコにしても…そして多分、カンナにしても。」

それはハラケンにしても同じだった。カンナが事故に遭う直前にハラケンはカンナとけんかをした。それも何気ない日常の出来事だった。その時はカンナのことを少し嫌いになった。しかしカンナが死んでしまったあとは、そうやって心を傷つけ合ったことすら愛おしかった。

「こうやって友達と一緒にいる何気ないひと時を大切にしていきたい。この一分一秒を精一杯生き抜いていきたい。」

ハラケンが自分に言い聞かせるようにつぶやく。それは事件を通してハラケンが見つけた、新しい生き方だった。

「本当に大切な時間は、自然と心に刻まれるものよ。それは、幸せな日常をを失った時に、後悔するためのものとして残るんじゃない。明日は今日よりももっと楽しいことがあるかもしれないっていう積み重ねが、生きる希望へとつながるの。」

「オバちゃん…」

ハラケンの言葉を聞いた玉子が、後ろから歩いてきて言った。ヤサコやフミエの胸にも、その言葉は響き渡った。

「あの時のケンちゃんはずっと後ろ向きだった。私は、死んでしまったカンナのためにケンちゃんが心を砕き、自分の幸福を求めていないのが心配だった。今を生きている友達とつながり合うことも忘れてね。最後にはカンナと再会ができて、その心が報われたのは良かったけど、失われた時間は大きかった。でも、今ケンちゃんがそうやって前向きに生きようって思ってくれて、私は安心したわ。これからはもっともっと、たくさん時間はあるしね。これもアンタ達がいてくれたおかげかもね。本当にありがとう。」

「いやいやあ。私らはそんなたいしたことはしてないって。ハラケンが立ち直ったのも、ハラケンの心が強かっただけのことよ。」

玉子に感謝された照れ隠しに、フミエが少し大げさなリアクションで言った。

「おーい。そろそろ帰るぞー。車をとってくるから、こっちまで来てくれー。」

遠くの方から一郎の声がした。しかしヤサコ達はもう少しこの夕陽を眺めていたかった。何気ない幸せをを噛みしめていたかった。

「オバちゃん。お父さんにもう少し夕陽を見ているからって言ってきてくれる?」

ヤサコが玉子に頼んだ。

「ふう。仕方ないわね。気が済んだら早く戻ってくるのよ。」

ため息をついてそう言うと、玉子はビルの方に戻っていった。そう

してまた三人になると、少しの間静寂が流れた。
「前向きに生きるか…カンナの死も、よりよい未来につながればいいのに。二度とあんな事故が起こらない街に、そして、真実を包み隠さず公表する社会に、つながればいいのに。前向きな死なんてないんだろうけど、それが実現すれば、天国のカンナも喜んでくれるかな？」
ヤサコやフミエに向かって問いかけたわけじゃなく、ハラケンはただ沈みゆく夕陽をじっと眺めながらつぶやいた。
「そりゃあカンナだって喜ぶはずよ。でもね、それを私たちが頑張る動機にしたらいけないわ。天国のカンナを喜ばせるためにそれを実現させるんじゃない。むしろ、それを実現するのは生きている者の使命よ。未来を創造できるのは、やっぱり生きている者だけ。未来を生きる不特定多数の人達のために、私たちはそれを実現しなければならないの。そして、アンタや私たちがそう心に秘めて頑張った時、カンナは本当の意味で喜ぶと思うわ。」
カンナへの思慕をのぞかせたハラケンに、フミエが面と向かって言った。未来は死んでしまった人のために創るんじゃない。未来を生きる人のために創るんだと。そのメッセージはハラケンやヤサコの胸にもしっかり届いた。そしてそれはハラケンがカンナを思う気持ちをどうしても尊重してしまうヤサコには、言えないセリフだった。
「…フミエの言う通りだ。何でもカンナのことが先に浮かぶのは、後ろ向きな生き方なんだろうね。これからはもっともっと前向きに生きないと。もちろんカンナのことはずっと忘れずにね。」
夕陽を眺めるハラケンの顔がこころなしか明るくなった。
「まあ、その一途さがアンタのいいところでもあるんだけどね。言ってみればカンナはまだ生きているわ。アンタの心の中でね。」
少し最後は笑いながら、フミエがカッコつけたセリフを言った。その会話をヤサコは少し複雑な思いで聞いていた。
　するとフミエのメガネ電話が鳴り出した。すぐにフミエは指で形をつくって電話に出る。

「誰かしら？もしもし。」
「おう、おつかれ。」
電話の主はダイチだった。本来ダイチがフミエに電話をかけてくることはないが、一昨日同盟を結んだということで、お互いの連絡先を改めて交換していた。なのでダイチへの連絡もヤサコ達は直接とることができる。
「何の用？」
素っ気なくフミエが訪ねた。
「今日一日、例の廃ビルに張り込んでいたがついに誰もやってこなかった。それに『ＶＲクエスト３』も入手した。明日の果たし合いの開催にあたって、今のところは支障なしだ。」
「そう。それはご苦労だったわね。」
どうせ明日にはその場所は私達のものになるのに、と思い込みながら、フミエは一応労をねぎらった。
「そう言えばダイチ達はどうやってメタバグをツールに変えるつもりなんだろ？よくよく考えてみれば、今はダイチ達がよく利用していた通販電脳駄菓子屋なんて営業してないのに。」
電話の内容が聞こえていたハラケンがふと疑問に思った。
「はっ。そうよ！ダイチ！アンタ、どうやってメタバグをツールに変えるつもりなの？今時通販電脳駄菓子屋も営業してないでしょ。」
ハラケンの言葉でそのことに気付いたフミエが問いかけた。
「ああ。それならオレたち独自のルートで仕入れることになっているから心配いらねえ。それより負けた時の言い訳を考えとくんだな。」
「何言ってんだか。私にはアンタ達がひざまずく姿がまざまざと思い浮かぶわ。とにかく、いよいよ明日が積年の恨みを晴らす時ね。正々堂々と勝負よ。覚悟しなさい！」
「そっちこ…」
フミエの宣戦布告に対しダイチが言葉を返すのを待たずに、フミエはプチッと一方的に電話を切った。高台からは、明日のバトルフィ

ールドとなるその廃ビルがかろうじて見えていた。

その日の深夜のメガマスの管制室。昼間の実験で大量のプログラム処理を行った全１５０台ものコンピューターは、オーバーヒートを防ぐために明日一日起動せずに休ませられる予定だった。ところが、誰もいないはずなのに、突然一台のコンピューターが眠りから目覚めるかのように起動すると、連鎖反応を起こしたかのようにすべてのコンピューターが次々と起動し始めた。管制室に１５０台もの轟々とした機械音が響き渡るようになった時、一番最初に起動したコンピューターのディスプレイに文字が浮かび上がってきた。

「ネットワーク接続完了。データ転送開始…」

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ1

「大黒市の空間のサーバーの境目には、今でもバグがよく起こるそうです。その近くにいると、危険なことが起こると言われています。」

勝負の朝はいつもと変わらず、肌寒い空気が街全体を覆っていた。あくまでいつもと変わらない朝のように感じた。少なくともヤサコにとっては。しかしこの日のフミエの気合いの入り方は尋常ではなかった。

フミエの思いつきで、ヤサコ、ハラケンと3人は、まだ太陽がのぼり始めた頃の、朝6時に旧第三小正門前に集合していた。これから夕方の果たし合いに備えて、体をならすために大黒市内をジョギングするのだ。夏の事件までは日頃サッチーに追い回されていたので、体力には自信があった3人だが、ここのところはそんなシチュエーションに巡りあうことはなく、だいぶ体もなまっているだろうとフミエは考えたのだ。

「さあ、今から走り始めるけど、二人ともこれを頭に巻いて。」

そう言ってフミエはヤサコとハラケンにはちまきを渡した。それにはフミエの手書きで「必勝!!」、「打倒黒客!!」、「コイル魂!!」と大きく書かれている。

「ちょっとフミエちゃん。これは恥ずかしいよー。」

ヤサコが苦言を呈した。ハラケンは別にいやがらず頭に巻いている。

「あのねえ、ヤサコ。はっきり言って今回の勝負で私が不安なのはアンタなのよ。その理由は、アンタは『ＶＲクエスト』に関しては初心者であること。まあ技術的なことに関しては、私とハラケンがカバーするからいいとして、第二の理由は、アンタにはこの勝負でモチベーションが上がる動機がない。」

「うっ…」

ヤサコは図星をつかれて言葉がでなかった。そもそもフミエと黒客の因縁はヤサコが大黒市にやってくるはるか以前までさかのぼる。その長年のライバル関係に決着をつける今回の勝負で、フミエが燃えているのも十分理解していたつもりだった。しかしフミエの対抗意識はヤサコの想像をはるかに越えるものだったようだ。げんにヤサコは、暖かくなってきたとはいえ寝起きのつらいこの季節に、早朝からのトレーニングなんてフミエの言い出したことではあるが、少しだるいなと思ってしまったのだ。

「そりゃあね、ヤサコにはね、私は狂気じみているように思えるかもしれないわ。でも、この勝負は絶対に負けられないの。もちろん負けて私のプライドが傷つくのが嫌だっていうのもあるわ。でもそれ以上に、あのメタバグの鉱脈が黒客の手に渡ったらどうなると思う？私たちは黒客に一生頭が上がらなくなるのよ。つまり、私たちは黒客の“しもべ”となってしまうの。逆らえば圧倒的な武力の差で、メガネを壊されてしまうもの。」

フミエはそんな想像をしただけで寒気がしてきた。

「でもモチベーションっていうのはムリヤリ上がるものでもないよ。何かヤサコもこの勝負でのモチベーションを見つけないと。」

「え？じゃあ、ハラケンのこの勝負でのモチベーションって何？」

ヤサコが訪ねる。ハラケンがこの勝負にどんなモチベーションを持って望むのか。夏の果たし合いでも、果たしてハラケンに絶対負けないという気持ちがあったかどうかも疑問だった。

「僕の場合は、ただゲームで友達に負けたくないっていう気持ちだけかな。特に今回の勝負はダイチ達と本気の戦いができるだろうと、僕も楽しみなんだ。こんなことは初めてさ。夏の肝試しの時も、僕は他のことで頭が一杯だったしね。何より了承したこととは言え、黒客の手にあの鉱脈が渡るのはやっぱり危険だと思うんだ。ダイチ達には悪いけど、本当に強いのは僕らの方だって、この勝負で気付かせてやらなくちゃいけない。」

ちょっと今回は前回の果たし合いとは違う。すでにオーバーヒート

をしそうなほど燃えているフミエに、静かながらもメラメラと燃えているハラケン。この2人に触発され、この2人の気持ち、エネルギーをないがしろにはできないと、段々とヤサコも燃えてきた。その情熱はやがて黒客への対抗意識に変わっていく。そうしてヤサコは黙ってはちまきを頭に巻いた。

「ごめんフミエちゃん。最初はあんまり乗り気じゃなかったけど、燃えているフミエちゃんとハラケンを見て、目が覚めたわ。その気持ちに私が水をささないように、いえ、むしろ私のエネルギーが2人に伝染するほど、今日の果たし合い、強い気持ちを持っていくわ。どのみち私はゲームじゃ足を引っ張るだろうから、せめて気持ちだけでも相手を上回らないとね。そして必ず、黒客に勝ちましょう！3人力を合わせて。」

ヤサコがフミエの手を握って言った。その目の輝きは、さっきまでとはまったく違っていた。

「…そうこなくっちゃ。」

フミエが笑むように言い、ハラケンも力強くうなずいた。そうして3人は立ち上る太陽の光がさす方へ走り出した。

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ2

夕方、約束の時間。ヤサコ達はメガばあから頼んでおいたメタタグを受け取ると、戦いの舞台となる廃ビルへとやって来た。朝のトレーニングではジョギングの後もメガビー素振りや、鉄壁スローイングの練習を徹底的にこなし、削った睡眠時間の分を昼寝で補い、コンディションは万全だった。

「おう、来たな。わざわざやられるために、ご苦労なこったぜ。」

駐車場がある西側の入り口から入ると、そこに黒客のメンバーがたむろしていた。辺りも暗くなっていると光量の少ない廃ビルの中では、メタバグの輝きがより鮮明になり、幻想的な雰囲気になっている。

「ふん。その言葉そっくりそのままお返ししてやるわ。とにかく前口上よりも、さっさと勝負して決着をつけようじゃないの。」

フミエがダイチと相対して言った。決着がつけばこの二人のやりとりもこれで見納めかもしれないとヤサコは思った。

「ん？そのウインドウはなんだ？」

ヤサコ達の方を見てガチャギリがいぶかしげに訪ねた。ヤサコ達の目の前にあるウインドウには誰かが映っている。

「ええ。今大黒市にはいない私たちの同志アイコ。この勝負のジャッジもかねてモニターしてもらうの。田舎は暇なんだって。」

「ハアーい。」

フミエがそう言うと画面の向こうでアイコが手を振った。フミエとダイチの長年の因縁を知っているアイコは、果たし合いの話を聞いて飛びついてきた。そしてこの勝負を生で見られないことを悔しく思い、インターネット経由のテレビ電話でムリヤリ参加しているのだ。

「別にジャッジなんて必要ないと思うが、まあいいだろう。じゃあこっちはデンパとアキラをジャッジに残しておく。これで不公平は

ないだろう。」
ダイチが腕を組みながら言った。コイル探偵局側はプレイヤーが３人しかいないので、黒客の方もダイチ、ガチャギリ、ナメッチがプレイヤーの３人で合わせるということだった。『ＶＲクエスト３』のダンジョン内では途中で交代ができないので、実質的に勝負はこの３人対３人でつけられる。夏の果たし合いの時のように、交代で人をまわしながらということができないのだ。
「そっちの方はもうダンジョンを選んだんだろうな？」
ダイチがフミエに訪ねる。
「ええ。さっきよーく作戦を練って、アンタらの苦手そうなダンジョンを選んであげたわよ。」
コイル探偵局側が選んだダンジョンは黒客が、黒客側が選んだダンジョンはコイル探偵局がプレイするというルールである。コイル探偵局側は先ほどよく合議した上で３つのダンジョンを選んだのだ。
「よし、それなら早速始めるか。フィールドはこのビルの２階から４階。このビルはちょうど東西で別れているから、西側フロアはオレたち、東側フロアはお前らのフィールドとする。何度も言うが３つのダンジョンをクリアした時点での総得点の多い方が勝ちだ。ジャッジにはお互いが不正をしていないかモニターしておいてもらう。それでいいな？」
ダイチが確認した。それを了解したヤサコ達は、すぐに東側フロアに移動した。
「ヤサコ、ゲーム中はこれをかけるのよ。」
「…これは？」
フミエがそう言って手渡したのは、ゴーグル型のメガネだった。
「ゲーム中はどうしても動きが激しくなるから、途中ではずれないようなメガネが必要なのよ。」
フミエが説明する。ダイチ達やハラケンも、そのメガネにかけ直していた。
「なるほど。でも、フミエちゃんの分が無くなるんじゃないの？」

「私はアキラのやつを使うから大丈夫よ。」
そう言ってフミエはもう一つポケットからゴーグル型のメガネを取り出した。ヤサコもそれを聞いて安心し、ゴーグル型をかけて、自分のメガネはポケットにしまいこんだ。
「あとこれも、メガネにとりつけて。」
そう言ってフミエが取り出したのは、インカム付きのヘッドホンだった。
「これは何に使うの？」
「『ＶＲクエスト』は、視覚だけでなく、聴覚でも極限の臨場感を体感できるゲームよ。それを味わうためにはメガネの小さいスピーカーではなく、ヘッドホンの方が最適なの。あと、インカムはゲームの中で私たちが会話するために使う。近くにいる時はもちろん、お互いの距離がはなれていても、指電話を使えば会話ができるわ。それはどのダンジョンでも共通で使えるの。」
フミエがメガネにヘッドホンとインカムを取り付けながら説明した。ヤサコも納得してフミエにならってメガネにそれらを取り付けた。
「じゃあ、始めるよ。」
準備が整うと、ヘッドホンの中からデンパののほほんとした声が聞こえて来た。ゲームの進行はジャッジであるデンパが行うようで、デンパが持っているインカムからは全員に声が届くようになっていた。ヤサコ達もダイチ達も、それぞれ階段の前に立ち、デンパに合図を送るように手を高くあげた。
「それじゃあスタート。」
長年の決着をつける戦いの始まりを告げるゴングにしては少し頼りないなと、デンパに申し訳ないと思いながらヤサコは可笑しくなった。しかし微笑んだのも束の間、視界は薄暗い廃ビルのコンクリートから、いきなり３６０。水色の異空間へと切り替わった。
「うわわっ！」
思わずヤサコは声を上げて、無意識に隣にいたハラケンの肩をつかんでいた。

「ちょっとヤサコ、はしゃぎすぎ。まだロード画面よ。」
「…はしゃいでるわけじゃないんだけどな。」
そう言うとヤサコは自分がハラケンの肩をつかんでいることに気付き慌てて手を離した。ハラケンに謝りながらヤサコは顔を真っ赤にしてしまったが、ハラケンの方は「気にしなくていいよ。」と、いつもと同じ調子だった。そうしている間にも、目の前には巨大なウインドウが現れ、映画のスクリーンのようにゲーム会社のロゴや、プロダクション名が出て来て、それが終わると一瞬全体がホワイトアウトした後、今度は崖の上に3人は立っていた。その下には広大な平原、それを切り裂くように流れる川、右手の方には巨大な岩山がそびえ、奥の方には密林があり、その森を越えた地平線から朝日が昇ってくるという壮大な光景に、3人はつい見とれてしまった。強い風になびく草、始まりを告げているような鳥の鳴き声、立ち上る太陽の美しさなど、これが仮想空間とは思えないほどの臨場感だった。崖の上から一歩踏み出して下を眺めると、その高さにヤサコは一瞬震えてしまった。もう後あと一歩踏み出せば、奈落の底に落ちそうな気がした。そしてしばらくすると『VRクエスト3』のロゴが前方に現れ、テーマソングが流れて来た。どうやらそれがメニュー画面のようだった。
「すごい！これがゲームとは思えないわ。」
ヤサコはこれだけでいたく感動し、そしてこれから始まる大冒険に胸を躍らせた。
「まあ今は景色だけだけど、実際に戦いが始まったら、これの比じゃないくらいの臨場感を味わえると思うわ。心しておくのよ。」
フミエが笑みを含みながら言う。するとメニュー画面からモード選択へと移行し、VSモードが選択された。この辺の操作はすべて進行のデンパが行っている。画面は再び最初の全面水色のロード画面へと切り替わった。
「相手がプレイするダンジョンを選択してください。」
どこからともなく女の人の声が聞こえてきて、目の前に15個もの

ウインドウが現れた。ダンジョンは全部で３０存在するが、お互いが選べるのはその半分の１５個の中からであり、その１５個の詳細を慎重に吟味して相手の苦手そうなダンジョンを選ぶことになる。つまり、自分たちがプレイすることになるダンジョンの詳細は見ることができないのである。

「これとこれとこれ。」

フミエは先ほどの打ち合わせ通り、黒客が苦手そうなジャンルのダンジョンを３つ選択した。

「しばらくお待ちください。」

また女の人の声が響く。するとロード中という表示が現れたそばに、ＶＳモードのルールが一緒に表示された。

「ねえ、ダンジョンの得点って、どうなれば高得点なの？」

それを見たヤサコがハラケンに訪ねた。

「そうだな…ダンジョンの中では３人とも倒されてゲームオーバーになっても、コンテニューをすればチェックポイントからまた始められるんだけど、このコンテニュー回数は少なければ少ないほど得点は高くなる。つまりゲームオーバーにならなければ高得点ってことだね。まあ、あとはダンジョンにもよると思うんだけど、早くクリアすればそれだけ得点も高くなるとか、そんな感じかな。」

ハラケンが説明する。とにかくゲームオーバーは一番の減点対象ということだ。

「あと重要なのはレベルね。３つのダンジョンでは経験点が持ち越されていくの。最初はみんなレベル１から始まるんだけど、１つ目のダンジョンでレベル５まで上がったとすると、２つ目のダンジョンはレベル５から始まるの。もちろんレベルが高いほどステータスも上がるから、後半の戦いに備えて最初の方で少し時間を割いてでもレベルを上げるっていうのは大事な作業ね。」

「でもレベルが低いままクリアするほど高得点なんだ。つまり一番のハイスコアを狙うには、レベルをほとんど上げずに速やかにクリアすること。でもボス戦とかは逃げることもできないし、そんな方

法でクリアするのは至難の業だろうね。相手より多く得点を稼ぐことを考えると、そう時間をかけてレベルを上げてもいられないけど、とは言ってもゲームオーバーが一番の減点だから慎重に行く必要がある。この辺は相手との難しい駆け引きだね。」

フミエとハラケンが説明した。いわゆるゲームプランが勝敗を左右するということになる。

「なるほど、心理戦はもう始まっているのね。じゃあフミエちゃんは、どんな風に序盤戦を戦おうと思っているの？」

ヤサコがフミエに訪ねた。その決定権をもつのは、暗黙の了解でフミエになっている。

「私たちはコツコツレベルを上げていく。終盤戦に息切れしないようにね。逆にダイチ達のことを考えると、アイツらはバカで単純だから、自分たちの腕前を過信してなるべく速いクリアを狙って、圧倒的大差で私たちを負かして見下そうとすると思うの。それを見越して私は多少忍耐力のいるダンジョンを選んだつもりなんだけど、とにかくこのゲームは初プレイで思い通りにいくほど甘くないわ。アイツらがコケるのを狙って、私たちは慎重にゲームオーバーゼロでクリアを目指しましょう。」

フミエはこの戦いに燃えていても、頭の中は冷静だった。その確実な作戦ならヤサコもなんとかついていけそうだった。

「主人公の武器を選んでください。」

また女の人のアナウンスが聞こえ、目の前にウインドウが現れた。そこには剣、弓矢、魔法の杖、こぶしの４つが表示されていた。それぞれが主に使用する武器を決めるらしい。

「これはどれを選べばいいの？」

ヤサコがまたフミエに訪ねた。

「武器によって私たちの初期のステータスが決まるの。ＨＰ、攻撃力、防御力、機動力、魔力の項目にわかれるんだけど、順番に説明すると、剣はバランス型のステータス、弓は防御力が低く攻撃力が高いステータス、魔法の杖は魔力以外のステータスはかなり低めの

設定だけど、そのかわり魔力が高くてとにかく攻撃に特化してるし、唯一回復系の技が使えるのがポイントね。こぶしは魔力以外のステータスがやたら高いけど、そのかわりリーチがないから攻撃は当たりにくい、上級者向きってところね。ここは3人で別々の武器を選んで相互に補完し合うのがベストだと思うけど、ハラケンは何にするつもりなの？」

「僕は何だっていいよ。」

いつものハラケンらしく、まったく我を出さなかった。

「相変わらずはっきりしないわね。じゃあアンタは剣にしなさい。それでヤサコは魔法の杖にしよっか。攻撃のときは簡単に相手を蹴散らせるけど、防御力とＨＰがないから、なるべく相手の攻撃には注意して。あと、回復系の技を出すタイミングは重要よ。味方にもその技は使えるからね。」

フミエが考えて割り当てていった。と言ってもハラケンに関しては適当だった。

「できるかなあ。フミエちゃんは何にするの？」

「私は飛び道具が使える弓矢にするわ。アンタ達から少し距離をおいて、攻撃しつつアンタ達にどう動けばいいか指示を出す。いわゆる司令塔ってやつね。」

弓矢は狙いを定めるのが難しい分、他の武器に比べると上級者向けの部分がある。前作までの経験でフミエはその腕には幾分自信があった。

「それはいいアイデアだね。自分たちが戦っているとなれば、普通のテレビゲームのＲＰＧと違って正確な判断が鈍る。ここは逃げるべきだとか、攻勢をかけるべきだとか、そういう指示を出す人がいれば戦いの効率はかなり良くなるだろうね。」

ハラケンもフミエのアイデアには賛成だった。3人のそれぞれの武器を選択し、再び画面はロード中に切り替わった。

「じゃあ今からメタタグを配分するわ。メガビーとか鉄壁とかは自分の武器に関わらず使うことができるの。あと、このバグ取り薬は

回復薬に使える。とにかくメタタグ系のアイテムは強力だから、ペース配分はよく考えて。」

「了解。」

そう言ってフミエはそれぞれにメガビーを１００秒ずつ、鉄壁を３枚ずつ、レンガ壁を５枚ずつ、バグ取り薬を３つずつ配った。それでメガばあに練ってもらったメタタグすべてである。

「ロード完了。ゲームを開始します。それでは、『ＶＲクエスト３』、ＶＳモードをお楽しみください。」

女の人のアナウンスが聞こえ、目の前に白い階段が現れた。その階段は廃ビルの階段に重なっているものと思われるが、その２階への入り口は異空間への入り口として白く輝いていた。ヤサコ達は一歩ずつその階段をのぼってその入り口の手前まで来た。

「いよいよね。さあ、行くわよ！」

フミエのかけ声とともに、３人はその白い光の中に飛び込んでいった。

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ3

ヤサコ達3人が降り立ったのは、のどかな山あいの小村だった。小鳥のさえずり、畑を耕す人々の声、放牧された牛の鳴き声、川のせせらぎに回転する水車のきしみ音…ヤサコ達の１ｓｔステージは、おおよそのＲＰＧで主人公の故郷として一番始めにプレイするような、冒険の始まりとしてはおあつらえむきの場所だった。人々の服装から判断すれば、舞台は中世の西洋のようだが、まるでこの村には争いのにおいもなく、ずっとこのままのんびり過ごしていたいような気にさせる空間だった。しかしこれほどの安らぎを与えてくれる空間の中でも、すでにミッションは始まっている。

「あっ！いつの間にか服装が変わってる！っていうか、フミエちゃん似合いすぎ。」

しばらくはのどかな景色に見とれていたヤサコがいきなり声を上げて笑った。3人の服装が時代設定に合わせて変わっていたのだ。勇者の設定のハラケンは緑に白のラインが入った、ふとももまでのワンピースのようなクロスに、茶色のズボン、そして茶色いブーツ、腰には剣を帯びている。フミエはピンクと白のラインのワンピースに、白いタイツ、ひざ下まである茶色いブーツで、背中に弓と矢を背負い腰には短剣を帯びていた。。まさに少女戦士という感じの見た目が、フミエにぴったりではまり役だとヤサコは可笑しくなったのだ。

「何か、バカにしたような笑いね。ヤサコだってシンデレラの変身前みたいに、掃除とかでこき使われてそうな雑用係の格好じゃない！」

フミエが言い返した。魔法使いの設定のヤサコは、紫地に白のラインが入ったひざ下までのワンピースに、頭には紫のバンダナのようなずきんをしていた。ブーツはフミエ達と同様の色だが、つま先がとんがっている。手には魔法の杖が握られていた。

「何が雑用係の格好よ！このずきんだけ見て言ってるでしょ！もう気分を害したわ。このずきんははずしとくもん！」
そう言ってヤサコはずきんをとってすねた。フミエはそれを見て意地悪く笑っている。
「2人とも、時間はもう進んでるんだからケンカはやめて。まずは何をしたらいいか調べないと。」
勇者ハラケンが仲裁した。いきなりこんなところにやって来たのだが、何をどうすればいいのか3人には何の情報もない。
「じゃあまずは情報収集をしなければならないってことね。ミッションのスタートはそれからと。じゃあここは3人手分けして聞き込みに行くわよ。おそらくこの村の中でモンスターが出現することはないと思うから安心して。」
フミエが次の行動を考えた。ダンジョンと言えどストーリーがあり、話を進めないと先に進めない。また、ミッションをクリアすることが各ダンジョンのクリア条件であり、その辺りは通常のＲＰＧのダンジョンとは少し意味合いが違う。
「ちょっと待って。聞き込みって、相手はコンピューターでしょ。普通に話しかけて会話が成り立つの？」
一般的なゲームなら、会話はコンピューターが一方的に話しているだけである。いくらバーチャルとは言え、こちらがこんにちはと言えば相手がこんにちはと返してくるのか、ヤサコは疑問に思った。
「いいえ。私たちは相手の話を聞くだけよ。話しかけたいときは相手に近づく。すると目の前にウインドウが表示されて“話しかける”って言う選択肢が出てくるから、それを選べばいいの。ちなみにフルボイスだから、はるか昔のゲームみたいに長い文章を読む必要もないわ。じゃあ、ヤサコはあっちの畑の方に行って。ハラケンは川や牧場の方、私は家を一軒一軒まわるから。１５分後もう一度ここに戻って来て聞いてきた話を照らし合わせる。わそれでいいわね？」
「了解！」

フミエが素早く指示を出し、３人はそれぞれの場所に散っていった。

#6　いざ、決着の時　－前編－　part4

住居が集まるエリアから北にのぼっていくと、大規模な段々畑が広がっている。方角については村の立て看板で確認できた。農作業にでているのはほとんどが女性で、鍬で畑を耕したり、くんできた水をかついだりと、男顔負けの力仕事に従事している。ヤサコはこの時代の女性はたくましかったんだなあと感心しつつ、聞き込みを始めることにした。

「すみませーん。ちょっといいですか？」

一生懸命畑を耕している女性に声をかけた。しかしその女性はうんともすんとも言わず、何も聞こえていないかのように鍬を振り下ろしている。

「あっ、そうか。話す時はウインドウを使わないといけないんだった。」

ヤサコはつい普通の人に声をかけるようにしてしまった。しかし無視されてしまったかのように感じ、ほんの少し心が折れた。しかし気を取り直してその女性に近づき、表示されたウインドウの“話しかける”をタッチした。

「うん？アンタ何してるの？邪魔だからあっちに行きなさい。」

初めて話しかけたのにこの冷たい反応。またヤサコは心がすこし折れた。しかし女性の言葉はまだ続いていた。

「こっちは忙しいんだよ。男どもが倒れちまったおかげで、こうやって農作業も家事もやんなくちゃいけないし。私なんかまだマシな方で、狩猟にかり出された女もいるからねえ。ほんと、困ったもんだよ。」

愚痴るようにその女性が言う。その言葉の中にヤサコは手がかりらしいものを感じ、

「男達が倒れたってどういうことですか！？」

と、その女性に詰め寄ったが、再びそれには無反応だった。歯がゆ

いなと思いつつヤサコはもう一度ウインドウから“話かける”を選んだ。

「うん？アンタ何してるの？邪魔だからあっちに行きなさい……」

その女性は同じセリフを繰り返す。所詮ゲームね、と諦めがついたところで、ヤサコは違う女性に話を聞きに段々畑をのぼっていった。

ハラケンは村の東にある川辺に来ていた。川のせせらぎはきれいなものの、そこで洗濯をしている人や、水をくみにくる人はおらず、数人の子ども達がただちょこんと座っているだけだった。ハラケンはまずその子ども達の話を聞くことにした。

「この川の水は、ママが飲んじゃいけないって言ってたよ。」

「みんな今は井戸水を飲んで生活してる。でも井戸自体が少ないから、みんなで少しずつわけながら使っているんだ。」

「この川の上流は、北にあるエルフの森につながっているんだよ。」

ざっと話を聞いてみたところ、川の水がなんらかの理由で飲めないということと、意味ありげに提示された村の北にあるエルフの森が今のところの有力な手がかりだとハラケンは判断した。しかし子ども達からこれ以上の情報が出ることはないので、川の近くにある牛が放牧されている牧場に向かった。

「この子達もあの川の水を飲ませていたせいか、最近具合が悪いみたいなんだ。」

牛の世話係らしい女性が、牛達をなでながら言っている。その牛達の鳴き声もどことなく元気がないようにハラケンは感じた。だから村の人達は川の水を飲めないのかと考えるも、それだけでは何をすればいいのかはまだわからない。さらなる情報収集のため、牛達の様子を見に来ていたと思われる獣医に話しかけると、かなり有力な情報を聞くことができた。

「かなり昔に同じ病気が流行ったらしいんだけど、その時はある薬草が奇病を治したんだ。その薬草さえあればね…」

その頃フミエは村の家という家を訪ねまわっていた。外を出歩いているのは大半が女性達で、男性の姿はほとんど見えない。その女性達に聞くところによると、男達は謎の奇病にかかって寝込んでしまっているという。そこでフミエは村人の住居にずかずかと入っていって、その男達の様子を見るとともに、手がかりになりそうなものを物色することにした。ここはＲＰＧらしく、そういうことが許されるのである。

「あっ、こいつね。奇病にかかって寝込んでいる男っていうのは。」

フミエはある家で一人寝込んでいる男性を見つけた。かなりぐったりしているが問答無用で聞き込みを始めるために、ウインドウの“話しかける”をタッチした。

「ゴホっ！ゴホっ！ゴボッ！」

男性は豪快に咳き込んでいる。これじゃ話にならんと思い、フミエは家の中の物を物色し始めた。

「…チのウラ…」

その時男性がかすれ声でうなりながら、何かを伝えようとし始めた。

「はあ!?なんて言ってるの?」

フミエが耳に手をあてて乱暴に聞き返す。

「ガクブチのウラ…」

フミエの声に反応したわけではないだろうが、男性がさっきよりはっきりと発音した。

「額縁の裏って…これのことかな?どれどれ…あっ！これは地図だわ！」

フミエは壁にかけられていた絵をとりはずして裏返した。するとその額縁の裏に何かの地図がはさまっていたのだ。

「ねえ！これは何の地図なの?」

どこの地図なのかは記されていなかったので、もう一度フミエが男性に訪ねた。

「・・・・・グル…・」

「はあ!?もっとはっきり言って！」

歯がゆくなったフミエが男性の顔ぎりぎりまで顔を近づけて聞き取ろうとした。
「トライアンゴホっ！ゴホっ！ゴボッ！」
「…なに人の顔につば飛ばしてんのよ！」
咳き込んだ男性のつばが顔にかかり、フミエは怒って病床にある男性をビンタした。　男性はノびてしまいこれ以上情報を聞き出せなくなってしまった。

　そうこうしている間に約束の１５分が経ち、３人は最初の広場に戻って来た。
「首尾はどうだった？」
ヤサコとハラケンにフミエが訪ねる。
「この村で外を出歩いているのは私が見たかぎりでは女の人ばかりだったわ。段々畑で農作業をしていたその女の人達の話では、急に男の人達が奇病で倒れて、村は今大変らしいわ。」
まずヤサコが報告した。フミエも同じことを村の女性達から聞いていた。
「他には？」
「その奇病が流行り出したのは、ある男の人達が村の北にあるエルフの森に入っていった後らしいの。エルフの森の木には毎年段々畑の作物を枯らしてしまう胞子ができるらしいんだけど、男の人達は例年通りその胞子を燃やしたらしいわ。直後にその男の人達が次々と倒れてしまったらしいの。」
ヤサコは手に入れた情報を大体伝えた。もちろんそれだけでは次の行動を決めるには情報が乏し過ぎる。
「僕は、川の水を飲んではいけないという話と、川の上流はエルフの森につながっているという話を聞いた。そして一番有力な手がかりだと思ったのは、薬草さえあればって、村の医者が言っていたことだね。かなり昔この村で同じ病気が流行ったらしいんだけど、その薬草が奇病を治したらしい。」

「薬草？」
ヤサコとフミエが口を揃えて訪ねた。
「うん。どこに生えているかまではわからなかったけど。」
ハラケンの話で、どうやらミッションはその薬草を手に入れることだろうと、３人は見当をつけた。
「ここで私の出番ね。私は村のある家で地図を見つけたの。その家では男の人が奇病にうなされていたんだけど、黙って拝借してきたわ。」
フミエがその地図を広げて見せた。右上の方に方角、真ん中の一番下に北向きの矢印が書かれているが、普通の地図のように道が描かれているわけではなく、所々に岩のような絵や、泉の絵、蛇の絵、蜂の絵、キノコの絵などが色々とあるだけで、一見すると地図のようには見えない。
「ずいぶんアバウトな地図ね～。まるで子どもの落書きじゃない。」
ヤサコが率直な感想を述べた。
「話の流れからすると多分エルフの森の地図で、薬草もこのどこかにあるはずなんだろうけど、これだけじゃわからないね。他に手がかりはなかった？」
ハラケンがフミエに訪ねる。
「そうねえ…確かその人うなされながら…トライアンゴホっ！ゴホっ！ゴボッ！って咳き込みながら言ってたわね。」
思い出すようにフミエが言った。フミエが聞き取れたのはその部分だけである。
「トライアン？もしかしてトライアングルのことじゃないの？」
「多分。」
ヤサコが聞き直し、頼りなくフミエが返した。
「トライアングル…トライアングル…三角形…もしかしてここのことかな？」
ぶつぶつとつぶやきながらトライアングルの意味を考えていたハラケンが、地図のある場所を示した。森の北東にあたるそこには木の

幹の絵が3本描かれており、その形は三角形になっていた。その三角形の中は意味深に斜線が引かれていた。

「確かに三角形に並んでいる木が書いてあるけど、森の中でしょ？ただでさえ木がいっぱい生えてるのに、その中から三角形に並んでいる木を探すとか無理じゃない？見ようによってはすべての木が三角形に並んでいるわけだし。」

フミエがツッコミを入れて、ハラケンもその通りだと思った。もっと他の手がかりがないかと3人は考えた。

「ところでどうして木の幹の上は描いてないんだろう？せめて葉の形とかがわかると他の木との違いもわかるかもしれないのにね。」

ヤサコが知恵を絞っているフミエとハラケンに素朴な疑問をぶつけてみた。

「おそらく古い地図だから、何らかの理由で消えてしまったんだろうね。でもいつ描かれた地図なんだろう？」

ハラケンが答え、また考え込んだ。

「過去に奇病が流行したときじゃないかしら。その時に薬草をエルフの森にとりに行った人が描いたとか。」

ヤサコが推測で言ってみる。

「だとしたらあの家で寝込んでいた男の人は、その末裔？もしそう考えるなら、その斜線部分に薬草があると考えるのが妥当ね。」

フミエがその話をまとめたが、問題はその斜線部を囲む木を見つけることなので、話はまた振り出しに戻った。

「そう言えばこの二本線は、あの川の上流のことなのかしら？」

地図を眺めていたヤサコがつぶやく。川を表していると思われる二本の曲線は、問題の3本の木の近くを流れていた。

「だろうね。村の子どももあの川の上流はエルフの森につながっているって言ってたし。ん？待てよ…その川の水を飲めない理由を考えると…そうか！わかったよ！この木の特徴が！」

思考をめぐらせ今まで聞いた話をつなぎ合わせて、ハラケンがついに1つの結論に辿り着いた。

「えっ！それは一体なんなの？」
ヤサコとフミエがハラケンの答えを待った。
「まずこの村の奇病の原因。それはエルフの森にある胞子のせいだと思う。」
「えっ？でも胞子ができるのは毎年のことらしいし、その胞子は作物を枯らすことはあっても、直接人体への影響はないんじゃない？もしそうなら毎年この奇病で村の人達は倒れているはずだもの。」
ヤサコがハラケンに言った。ヤサコの言う通りこれが毎年のことなら、村中がパニックになるはずもない。
「もっと毒性の強い胞子がエルフの森の中にあるんだと思う。しかもそれができるのは毎年ではなくごく稀。それを知らずにエルフの森に入った男の人達が奇病にかかったんだろう。森の中に飛散しているその胞子を吸ってね。そしてその胞子を飛ばしているのが、この3本の木なんだ。」
ハラケンが地図の3本の木を指し示しながら断言した。
「どうしてそうわかるの？」
不思議そうにフミエが訪ねる。
「あの川の水を飲んだ牛達の体調が崩れたこと。それをふまえると、その毒性の強い胞子が川の流れにとけ込んでしまったと考えられる。いつもなら川の水は普通に飲めるということは、少なくとも川辺には作物を枯らすような胞子を飛ばす木がないということ。つまり僕らが探すべきは、森の中の川沿いで、胞子を飛ばしている木ということだ。」
ハラケンの推理を聞いてヤサコとフミエは「なるほど～」とうなり、こんな時のハラケンはすごく頼もしいなと思った。
「その推理が正しいとすれば、エルフの森には奇病の原因となった胞子が充満してるってことだよね？その中に私たちが入って行っても大丈夫なの？」
ヤサコが不安げに訪ねる。ゲームの主人公とはいえ普通の人間である以上、まったく影響がないわけではないだろうなと思った。

「そりゃあ段々とダメージが蓄積されていくだろうね。つまり森の中には長居はできない。できるかぎり急いで薬草を手に入れないといけないってことになる。」
ハラケンが難しい顔になった。
「なるほどね…始めは慎重に時間をかけてでもクリアしようと思ってたけど、こうなれば方針を変えないといけないわね。まったく、黒客のヤツら！いきなり厄介なダンジョンを選んでくれたわね！」
フミエがこぶしを握りしめながら言った。フミエとしては完全に黒客に裏をかかれた格好となり、悔しさがこみ上げて来たのだ。
「じゃあ遅れを取り戻さないといけないし、早速エルフの森に向かおう。」
珍しくハラケンが先頭に立ち、３人は北に向かって走り出した。

#6　いざ、決着の時　－前編－　Ｐａｒｔ5

「アイツらはまってるかなあ？」
ダイチが真っ青な空を見上げつぶやく。
「さあな。だが初心者のヤサコがいる時点で、アイツらはペースを落として慎重にならざるを得ないからな。オレらの思惑通り、あのダンジョンには苦労するはずだぜ。」
ガチャギリがダイチに言った。黒客はそうなることを先読みして、あのダンジョンを選んだのだ。
「じゃあ、こっちのダンジョンはどういう思惑でアイツらは選んでんスかねえ？」
ナメッチがガチャギリに訪ねた。
「それはわからんが、敵には頭のキレるハラケンがいるからな。何か理由があるんだろうが、正直今回オレが怖いのはフミエじゃなくてハラケンだぜ。」
ガチャギリはハラケンのことを高く買っている。フミエという行動力のあるリーダーにハラケンという参謀がついていれば、その手強さは何倍にも増大すると思っていた。
「にしても、暑さを感じないとはいえ、見てるだけで汗の出てきそうなダンジョンだぜ。」
汗を拭う仕草をしてダイチが言った。

黒客のプレイしている１ｓｔステージは砂漠である。一番最初に降り立ったのは砂漠の真ん中にある小さな街だったが、ダイチ達は情報収集を素早く終え、目的地に向かって砂漠の真ん中を歩いて行くところである。
「この炎天下にこの服装だもんな。それも映像とはいえお前らの顔も汗びっしょりだから余計にそう感じるぜ。」
ガチャギリがダイチやナメッチの顔を見て言う。演出上のものだが、

3人の顔にはすでに大量の汗が浮いていた。装備はダイチが弓矢、ガチャギリが剣、そしてナメッチが魔法の杖である。服装もダイチはハラケンのものと同じもので、赤と白のラインのクロス、ガチャギリは黒と白のラインのクロスをまとい、いつもの帽子の代わりにターバンを頭に巻いている。ナメッチは青色のひざ下まであるワンピースととんがった帽子だった。

「で、もう一度ミッションを確認するとだな。最近は砂漠で凶暴なモンスターが出没するから街の者はみんな外に出られなくなった。しかしどうしても中央の都市に税金を納めなければいけない。そこで勇者であるオレたちに、確実にこの金を中央に届けてほしい、ということだったな。」

ダイチが今までの話を確認した。ヤサコ達のダンジョンに比べるとシナリオは随分あっさりしている。

「まあ、いかんせんシナリオが適当だからな。もっと考えさせるようなシナリオのダンジョンでくると思ったんだが、おそらく戦闘重視のダンジョンを選んできたんだろう。戦闘においては百戦錬磨のオレたちに対して。」

少しいぶかしげにガチャギリが言った。このダンジョン選びはある意味で心理戦である。そこでバカ正直に相手の得意分野を選んでくるとはとうてい思えなかった。

「やっぱりこのダンジョンには裏があるんスかね〜?」

魔法の杖をつきながら歩いているナメッチが言った。砂漠は地平線がかすむほどどこまでも続いており、これからどのくらい進めばいいかも見当がつかなかった。ちなみにゲームの中ではずっとまっすぐ進んでいるつもりでも、実際は廃ビルのフロアー中をぐるぐるまわっているだけである。なので実際の壁にぶつかってしまうということはないのだ。

「そう言えば手に入れた地図とコンパスは持ってるんだろうな?あれをなくすとエラいことになるんだからな。」

ガチャギリがダイチを見ながら言った。村で情報収集をした際に、

街から中央の都市への地図と、砂漠の中でも方角を確かめられるコンパスを手に入れていたのだ。

「心配すんな。ちゃんと持ってるって。」

ダイチが地図とコンパスを出して見せた。地図は右下の方にスタート地点だった街が描かれ、左上に中央の都市を示す城の絵が描かれており、その2つは矢印で結ばれていた。その他には方角と、矢印の真ん中辺りにオアシスらしき絵が描かれているだけの簡素な地図である。地図によるとオアシスはスタート地点である街と、ゴールである都市とのちょうど中間地点に位置している。ダイチ達はそれを元に、まずはオアシスを目指して進んでいるのだ。

「とりあえず中間地点くらいにあるオアシスまではノンストップで行きたいな。それでだいたい所要時間もわかるだろう。」

ガチャギリが言ってダイチとナメッチも気合いを入れ直した。ゲームではあるが実際に歩いているため、疲れもたまるし体も火照ってくる。その中でモンスターと戦う際には全力で動き回らないといけないため、気力も必要になってくる。

「それにしてもさっきから風が強くないか?段々前の方も見えにくくなってきたぜ。」

ダイチの言う通り、さきほどまで見えていた地平線など見えないくらいに、砂嵐が吹き出した。それは吹雪のごとく徐々に強くなってゆき、とうとう視界がなくなってしまった。

「おーい。お前ら!大丈夫か!?」

ダイチが前に進みながら叫ぶ。しかし2人から反応はない。実際に砂が体を打ちつけているわけではないので、痛みを感じるわけではない。しかしまさに砂嵐の中のように、視界はゼロで、さらにビューと風が轟音を鳴らしているので、3人が互いを確認しあうことは難しかった。ダイチはとにかくガチャギリとナメッチがついて来ているものと信じて前に進んだ。その砂嵐は5分ほど経ってようやく収束していった。

「ふう、なんとかしのいだぜ。あんなのにこられるとたまらんな。

お前ら！ちゃんとついて来てるか？」
大きくため息をついたダイチが後ろを振り返りながら言った。
「オレはついて来てるぜ。しかしナメの姿が見当たらんな。」
ガチャギリがダイチに声をかけ、辺りを見回した。しかしナメッチの姿は見えない。
「ああっ？アイツまさかはぐれたのかよ。世話の焼けるヤツだぜ」
そう言うとダイチは、今歩いてきたであろう道を戻り始め、ナメッチの姿を探した。吹き荒れた砂嵐のせいで足跡も残っていない。
「ん？ありゃなんだ？」
そんな中ダイチは砂の中に青いクロスが埋もれているのを見つけた。ナメッチが嵐の中で埋もれてしまったのだと思い近づいていき、
「おいナメッチ大丈夫か？昼寝してる場合じゃねえぞ。」
と言ってその青いクロスを引っぱりあげた。ところがその顔を見ると白骨化しており、ダイチは驚いて飛びのいた。
「ナメッチ！お前まさか鳥に体をついばまれてしまったのか！？」
ダイチが震えながら言う。早くもナメッチがやられてしまったのだと思った。
「バカ！そいつはモンスターだ！はやくそいつから離れろ！」
後ろからダイチを追っていたガチャギリが叫んだ。するとそのガイコツは砂から飛び出して立ち上がり、持っていた剣を抜いた。それにダイチは思いっきり腰を抜かしてしまった。
「ダイチ！」
ガチャギリが素早くダイチを引き起こす。すると周りの砂からゴゴゴゴッと音がして、巨大サソリのモンスターと、ミイラ型のモンスターが現れ、２人を取り囲んだ。
「くっ！こっちは数的不利だ。どうする？」
予想外の展開に焦りながらガチャギリがダイチに訪ねた。
「…ここでなりふりかまわず逃げたなら、ナメッチとも大きく離れる可能性が高い。ここはこいつらの相手をしながら、ナメッチがオレたちを見つけ加勢してくれるのを待つ。」

ガチャギリと背中を合わしながらダイチが冷静に判断を下す。ガチャギリは持っていた剣を抜き、ダイチは背中から弓矢を装備した。

「わかった。オレはコイツらを引きつける。その隙にお前は囲みを突破して、遠巻きにして援護射撃してくれ。」

「了解！」

2人は武器を構える。まずダイチがガイコツ剣士に正面から矢を放った。しかしガイコツはそれを剣でなぎ払う。一つ舌打ちをしたダイチが次の弓を構える隙にガイコツが剣を振り下ろしてきた。しかしダイチは軽い身のこなしでそれを避けた。ガイコツがダイチに気を取られている間、ガチャギリはサソリとミイラの相手をしていた。サソリの胴体にまずガチャギリが一振りいれると、思いのほか殻は固く、剣ははじかれダメージも与えられなかった。どこを斬ればダメージを与えられるのかとサソリに気を取られていたガチャギリは、後ろから迫って来ていたミイラにまとわりつかれた。必死にもがくも、ミイラはなかなか離れてくれない。その隙にサソリは尻尾の毒針でガチャギリを刺そうとしている。それを見たガチャギリはまずいと思い、とっさにミイラにひじ打ちを入れてひるませ、体を入れ替える。毒針はミイラに当たり大ダメージとなった。さらにガチャギリが背後から思いっきりたたき斬り、ミイラはその場に倒れる。すると今度はガイコツがガチャギリの方に向かって来た。ダイチとの一対一では勝負がつかないと判断し、先にガチャギリを倒そうというつもりらしい。しかしそれでガチャギリはにやりとした。ダイチと打ち合わせ通りの形になったからである。サソリとガイコツと対峙しながら、適当な距離を置くガチャギリは無理に仕掛けようとしなかった。するとモンスターの背後で弓を構えるダイチが見えた。ガチャギリが親指を立てて合図すると、ダイチは矢を放つ。その矢は空気を切り裂きながら真っすぐ進み、ガイコツの後頭部に突き刺さった。大ダメージを被ったがそれでも倒れないガイコツは再びダイチの方を振り向く。その一瞬を狙ったガチャギリがガイコツに向かって走り、その背中に剣を突き刺した。ガイコツは叫び声をあげ

ながら倒れ、消えていった。
「ガチャギリ！後ろ！」
ダイチが叫ぶ。なんと先ほど倒れたはずのミイラがガチャギリの後ろに迫っており、そのままおおいかぶさってきたのだ。その隙を再びサソリが毒針で狙っている。
「くっ！ダイチ！オレに当たってもかまわん！とにかくコイツを倒してくれ！」
ミイラにかぶさられて身動きができないガチャギリが叫ぶ。しかし矢がガチャギリに当たれば、ガチャギリがダメージをくらうことになる。しかも倒れ込んでいるミイラは、狙うには表面積があまりにも小さい。しかしここで迷っているとどのみちガチャギリがやられてしまうと感じ、ダイチは弓を構えた。全神経を集中させながら、そして祈るような思いで弓をひく。
「当たれ！」
放たれた矢の軌道を見ながら、ダイチは小さくつぶやいた。そして矢はガチャギリの顔の辺りのギリギリを通過し、見事ミイラの肩に命中した。ミイラはそのまま消えてゆく。
「やったぜ…。でもなさそうだな。」
仰向けになったガチャギリのすぐ目の前には、サソリが毒針を構えながら迫って来ていた。起き上がる間もなく、サソリは体を反らしながら毒針を振り下ろす。しかしそれをガチャギリは剣で防ぎ受け止めた。今度はハサミで攻撃しようとしている。それを見たダイチもすぐさま矢を放ち、毒針に命中したがサソリはひるみもしなかった。これはやられたかなと2人は思った。
「ファイアー！」
その瞬間サソリの背後から声がして、ダイチが見るとサソリに火の雨が降り注いでいた。大ダメージを受けたサソリはそのまま倒れ消えてゆき、ダイチとガチャギリは大きく息をついた。
「ナメッチ！」
ぎりぎり間に合ったかと、ため息をついているナメッチにダイチが

声をかけた。ダイチの思惑通り、砂嵐ではぐれたナメッチは戦闘の気配を辿って来て2人を見つけたのだ。

「すみませんオヤビン。砂嵐の中で何かにつまづいて転んで、どの方向に進んでいたのかもわからなくなったんスよ。」

開口一番ナメッチが謝った。

「そうか。まあこうやって合流できたんだから良かった。それにガチャギリのピンチを救ったのはお前だ。お手柄だったぜ。」

ダイチがナメッチの肩をポンポンと叩きながら言った。ナメッチも貢献できてうれしくなった。

「おいコラ。ナメはおいしいところとっていっただけだろ。そもそもナメがはぐれてなけりゃ、3対3でそんなに苦労せずに倒せたところだ。1人のミスは、チームにとって命取りになる。次からは気をつけろよ。」

ガチャギリが頭のターバンを直しながら言った。それもダイチとは違い、かなり厳しい態度だった。

「ごめん、ガチャギリ。」

褒められた後に怒られて、へこみながらナメッチがガチャギリに謝った。

「まあまあ。はぐれてしまったのは、オレがしっかり砂嵐の中でも2人の存在を確認しなかったからだ。今度からはオレも十分気をつけるぜ。」

ダイチはナメッチをかばいつつ、自分のリーダーとしての責任を再確認した。個々の力はあってもそれがチームとして機能しなければ必ず苦戦する。それを思い知らされた。

「まあいい。とにかくさっきの砂嵐と戦闘で、方角がすっかりわからなくなっちまった。ダイチ、地図とコンパスを出してくれ。」

ガチャギリがダイチに言った。砂漠の中には目印もないので、それらがなければどこに向かえばいいかわからない。

「あいよ〜。えーっと地図地図…。んーと。あれ?」

ダイチがポケットを必死に探る。

「どうした？」
「悪い、なくした！」
ダイチが悪びれながら両の手のひらを返しながら言う。
「ああっ！？何してんだよ！まあ、あんな簡単な地図なら大体頭に入ってるからいいか。コンパスはなくしてないだろうな？」
呆れてため息をつきながらガチャギリが訪ねる。コンパスをなくすとそれこそ大ピンチである。
「多分砂嵐の時にどっか飛んでいったんだろうな…ホレ、コンパスはこの通り無事だぜ。」
ダイチが独りつぶやきながらコンパスを出した。やれやれひと安心しながらガチャギリがコンパスを覗き込むと、信じられないものが目に飛び込んで来た。
「お、おい。このコンパス。針がぐるんぐるんまわってるぞ！」
「アーっ！！」
ダイチがのどの奥をならすようなドスのきいた叫び声をあげた。コンパスの針はプロペラのように回転しながら止まろうとしない。要するに壊れたのだ。
「おい！どーすんだ！これじゃどの方角に行けばいいかもわからねえじゃねえか！お前！責任とって何か考えろ！」
半分泣きそうな声でガチャギリが叫んだ。ナメッチもそれを見てすっかりへたりこんでいる。
「オレのミス？待て待て。地図をなくしたのはオレのせいだと認めるが、こいつが壊れたのは不可抗力だろう。オレはモンスターから攻撃を受けたわけじゃねえしな。　むしろこの展開はシナリオ通りじゃねえのか？」
ここはひとつ落ち着きながらダイチが言った。
「…うむ、確かにな。これまでがやけに簡単だったのは、こういうイベントがあったからなのか。となるとこのダンジョンのクリアの鍵は、いかにこれから地図もコンパスもなしで、砂漠のど真ん中から、目的地の方角を導きだせるかってことだな。取り乱してすまな

かったな、ダイチ。ここは3人知恵を振り絞って、どうにか方角を知る方法を考えようぜ。」
「そうだな。」
ガチャギリの言葉にダイチが賛同して、3人その場に座り込んで考えることにした。
「よく聞くのは、太陽の方向を見たらわかるって話なんスけどねえ。」
ナメッチが1つ提案する。太陽は東からのぼって西に沈む。時間帯さえ間違えなければそれで大体の目処はつけられる。
「太陽を見るって言ってもなあ。」
ダイチが空を仰ぐ。
「真上だぜ。」
ガチャギリがつぶやく。どうやら今はちょうど正午頃のようだった。
「なあダイチ。このゲームの中でも、時間はちゃんと流れてるよな？いつまで経っても太陽があそこにあるってことないよな？」
不安そうにガチャギリが訪ねる。時間が経っても太陽が動かないとなれば、この作戦はまったくの的外れである。
「そんなことないと思うけどな。げんに最初にオレたちが降り立ったときに比べると、だいぶ日も高くなっただろう。太陽を観察することが、少し時間はかかるが一番確実な方法だと思うぜ。」
ダイチは後ろの方に手をつきながら言った。とはいえ、肉眼で太陽がどの方向に動いたか確認できるのに、どれほどの時間がかかるのかと思った。その間に、フミエ達は確実に進んでいる。
「よし、ナメッチ。お前これからオレがいいと言うまでそこを動くな。絶対だぞ。」
突然ガチャギリが立ち上がりナメッチに命じた。
「何をするつもりだ？」
ダイチが不思議そうに訪ねる。ガチャギリはナメッチの影が出ているところに目印に線を引っ張った。
「これでこの目印からナメッチの影がどっちに動いたかで、太陽の

沈む方向がはっきりとわかる。理科の授業がこんなところで役に立つとはな。」

ガチャギリがしたり顔で言う。小学校の理科の授業で、影時計を観察したことがあったのだ。

「でもガチャ。こんなところでモンスターが出たらどうするの？オレを置いて逃げるとか勘弁してくれよ。」

ナメッチが不安そうに訪ねる。

「心配すんな。そん時はオレたちが守ってやるから、お前は何が起こっても動じるなよ。」

ガチャギリが笑むように言った。するとそのタイミングで、まるで空気を読んだようにナメッチの背後にガイコツ戦士が現れた。ナメッチは後ろの気配を感じ背筋が凍り付いた。

「さっそく来たな。いくぞ。」

「おう。」

ダイチとガチャギリは早速武器を装備し、ナメッチとガイコツの後ろにまわりこむように移動した。

「ちょっと！どこ行くの！」

突然2人が視界から消えてナメッチは声を上げた。しかし動くなと言われているので振り向くことはできない。なによりすぐ後ろにモンスターの殺気を感じるので振り向けない。すると今度は正面に新手のガイコツ剣士が現れた。しかも今度は二刀流である。

「うわあ～！ヒ～ヒ～！助けて～！」

もはや金縛り状態のナメッチは泣きわめく他ない。背後のモンスターの影が段々近づいて来て、正面から刀を振りながらガイコツが近づいてくる。極限の恐怖にナメッチは魂が抜けてしまいそうだった。その時、後ろでズシーンという音がして、迫って来ていた影も消えた。どうやらダイチとガチャギリがそのモンスターを倒したようだった。続いて正面に迫って来たガイコツにガチャギリが斬れ込む。その一刀は二本の剣によって防がれた。しかしそこでできた隙を見逃さず、ダイチがガイコツの頭に矢を浴びせる。その衝撃によろけ

るガイコツの背後から再びガチャギリが斬れ込み、今回は楽勝でモンスターを倒すことができた。
「おい、どうだった？スリル満点だったろ？」
笑いながらガチャギリがナメッチに近づいた。しかし放心状態のナメッチはまともに口がきけなかった。
「ダメだ。コイツには刺激が強過ぎたようだぜ。」
ダイチとガチャギリが笑い飛ばした。そのとき空には、分厚い雲がかかろうとしているところだった。

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ6

一方のヤサコ達は地図にある3本の木を目指して、エルフの森の中に入ったところだった。森は北欧特有の針葉樹林のようで、それぞれの木は高くそびえ、葉は空を覆い隠し、全体的には薄暗い。かすかに見える空は曇りがかり、森の中は霧がかっていた。見えるかぎりは葉の緑、木の幹と土の茶色、霧の白でのみ着色された世界は、シンプルながらも荘厳で幻想的である。森の中には人がつくったような道はなく、手に入れたコンパスと地図を頼りに、木の間を縫い、倒木を乗り越えながら、3人は前に進んだ。ちなみにコンパスはエルフの森に向かう途中で、村の長老らしき人物からもらったものである。ハラケンの読み通り、森の中には毒性の強い胞子が漂っているらしく、少しずつではあるがそれぞれのＨＰは減り続けていた。

「エルフっていうのは、妖精って訳されることが多いんだけど、ここでは森の精霊っていう意味で使ってるんだろうね。つまり精霊が守る森っていうことだと思う。話の流れからすると、テーマ的にはそのエルフ達と人間がどう共存していくかっていうところだろうね。」

ほとんどＲＰＧをプレイした経験がなく、ファンタジーの世界観に関する知識が乏しいヤサコに、ハラケンが歩きながら講義をしていた。

「つまり、人間は自分たちの作物を守るためにこの森の胞子を焼き尽す。しかしその胞子はエルフ達の生活圏を形成するためには必要不可欠なものなのかもしれない。そうだとするとこれは人間の生態系への干渉に他ならない、もっと言えば立派な自然破壊になる。その報いとしてエルフ達は人間にとって猛毒の胞子を作り出し、村に奇病を流行らせた。これまでの話を総合して考えると、大体こんなストーリーになるんじゃない？」

フミエがハラケンの後を説明した。つまりこの話は現代にもつなが

る、自然破壊をテーマにした物語なのかなとヤサコは思った。
「エルフっていうのは人の形をしているんだ。妖精だけに小さいんだけどね。でもこの話の流れからすると、人間に敵対するもの、つまりモンスターとして出現すると思うんだ。もし姿を見かけても、油断は禁物だよ。」
ハラケンがそう言っている間に、ヤサコは前方の木の陰に何かが見え隠れしたような気がして、そっちの方を注視した。ガサガサと音を立てている。
「どうやら、そのモンスターが現れたようね。」
その姿を一瞬見たフミエは、背中から弓矢を装備した。ハラケンも剣を鞘から抜き、ヤサコも緊張した面持ちで魔法の杖を構えた。しかしその時、前方の木の陰からか、美しい音色が流れ出した。そのメロディーは森の中に透き通るように響き渡り、3人は武器の構えを解いて一瞬それに聞き入った。
「これは…笛の音?」
ヤサコがつぶやく。その美しいサウンドは笛の音色だった。しかし猛毒の胞子が漂う森の中に人がいるはずがない。考えられるのは今話に出てきたエルフしかいなかった。
「まさか…」
ハラケンがつぶやき、ふいに辺りを見回し始めた。するとその瞬間前方の木の陰から少年のエルフが現れた。背丈はチビのフミエのそれまた半分ほどしかない。
「か、かわいい〜。」
ヤサコは思わず声が出た。緑のクロスに緑のとんがった帽子をかぶったその少年エルフが、あまりにも愛くるしく見えたのだ。しかしそのエルフはこちら側をにらみつけながら、手には弓矢を握っている。
「何のんきなこと言ってるのよ!まわりをよく見なさい!すっかり取り囲まれてしまったわ!」
フミエがヤサコを一喝する。見回すと前方に1匹、左右両側に1匹

ずつ、後方の木の枝の上に3匹、計6匹の少年エルフが弓で3人を狙っているところだった。
「さっきの笛の音は仲間に僕らの存在を知らせる合図だったんだ！どうする？数では向こうは僕らの倍だ。」
ハラケンが司令塔であるフミエに訪ねた。
「じゃあ、アンタは前と左右にいる3匹をお願い。倒せなくてもいいから、とりあえず注意をそらしておいて。その間に私とヤサコで木の上の3匹を倒す。わかった？」
「了解！」
「わかったわ。」
それぞれが了解して、素早くその場から立ち退く。次の瞬間エルフ達の矢がその場所に集中して突き刺さった。

「ヤサコ、とりあえずそっちの木の陰に隠れて。」
木の枝にいるエルフ達は1本の木にかたまっているのではなく、3本の木の上からそれぞれ狙っている。そこでフミエはその3本からは狙えない角度にある木の陰をすぐさま見つけ出し、ヤサコに指示したのだ。その状況判断の素早さにヤサコは驚いた。
「いい？アイツらは素早いから、すぐ木と木を飛び移ることもあるわ。その時はその都度、こうやって木の角度を考えながら移動するのよ。背後からの攻撃はハラケンが注意をそらしてくれてるから考えなくてもいいわ。とりあえず私は右と真ん中の2匹の相手をする。ヤサコは左のエルフをお願い。こっちが攻撃を仕掛けるタイミングは、エルフが弓を放って、次の矢を準備している時がベストよ。それ以外の時はよけられてしまう可能性が高いからね。わかった？」
フミエが早口で指示を出し、ヤサコも「オッケー！」とうなづいた。
しかし初めての戦闘になるヤサコは、緊張から声がこわばっていた。その間にも、2人の隠れる木の裏側にはブスブスと矢が突き刺さる音がしていた。
「あと、こんな森の中で炎タイプの攻撃をしてはダメよ。木に燃え

移って大火事になる恐れもあるからね。攻撃は氷タイプか雷タイプを中心にして。」

フミエがもう一つ忠告した。氷タイプの技は相手を一定確率で氷付けにすることができ、雷タイプの技は相手をしびれさせて動きを鈍らせることができる。フミエに禁じられた炎タイプの技は相手が燃え続けている間どんどんＨＰが減らすことができ、他に風タイプの技は相手を吹き飛ばすことができる。これらの強力な技は魔法使いにしか繰り出せない。反面魔法は体力や防御力がないので注意が必要である。

「わかったわ！」

ヤサコは返事をしてウインドウから氷タイプの技を選択した。これで魔法の杖にあるスイッチを押せば、氷タイプの攻撃が繰り出せる。そうしている間に木の上のエルフ達が他の木に飛び移ったので、ヤサコとフミエはそれぞれ移動を始めた。

ハラケンはその時、前方と左右にいる３人のエルフの相手をしていた。その３匹は木の枝の上ではなく地面や倒木の上から攻撃を狙っている。ハラケンはフミエに言われた通り、この３匹を倒すことではなく、引きつけてヤサコとフミエから注意をそらすことを念頭においていた。そのため１匹を集中して狙わず、３匹から適当な距離をとりながらそれぞれの動きを慎重に観察する。３匹のエルフはまず、ハラケンに対して集中的な攻撃を仕掛けてきた。３匹はそれぞれハラケンを射程にいれた場所から同時に矢を放ってくる。その動きを察知したハラケンは、矢が放たれる直前に右側のエルフからは死角になる木の陰に入り、前方と左側からくる矢を剣でなぎ払った。それぞれのエルフとの距離は１０メートルもない。その狭い範囲で同様の攻防が２、３回繰り返されたが、ハラケンは木をうまく利用しながらエルフの攻撃をなんとかしのいでいた。するとエルフの方がラチがあかないと感じたのか、前方のエルフだけがハラケンを狙い、右のエルフはヤサコ、左のエルフはフミエを狙うかのように体の向きを変えた。予想された状況だったが、ハラケンはどう動

けばいいか迷った。とりあえずヤサコを狙っているエルフを止めようと判断し、向かって右に移動した。木を避けながら移動し、ヤサコに照準をあわせているエルフにハラケンは剣を振り下ろす。しかし寸前のところでその動きに気付いたエルフはギリギリその攻撃をかわした。しかし逆側ではフミエを狙っているエルフが今にも矢を放とうとしている。ハラケンはすぐに体を反転させ移動し、そのエルフを射程にとらえると、Vサインを額にあて、メガビーを1秒ほど照射した。その攻撃は見事命中し、そのエルフに大きなダメージを与えると同時に、フミエへの攻撃も止めさせることができた。しかしハラケンが攻撃をすぐやめたのは、残り1匹のエルフがハラケンを執拗に狙っているからである。ハラケンがすぐにそのエルフの方向を確認すると、まさにその方向から矢が放たれたところだったが、ハラケンは寸前のところでその矢をなぎ払うことができた。しかしそれで安心する暇もなかった。ヤサコを狙っているエルフがすこし離れた場所に移動して、再び弓を構えていたのだ。ハラケンは再び走りそのエルフに剣を払ったがまたしても避けられてしまった。そしてフミエを狙っているエルフを威嚇しようと、またメガビーを構えた。しかしそのエルフの姿を確認することができない。どうやらハラケンが立つ場所の辺りからは死角に入ったのだと思い、すぐに右手で指電話をつくった。右手で指電話をつくったときはフミエ、左手の時はヤサコにつながるように設定しているのだ。

「フミエ！背後からの矢に気をつけて！」

ハラケンが叫ぶように言う。その時フミエは木の枝の上の2匹のエルフと一進一退の攻防をしていたのだが、急にその指示が耳に入ってきたのでとっさに振り返ると、地上からフミエを狙っていたエルフが倒木の上から矢を放ったところだった。

「あっ！」

その次の瞬間フミエの方を見やったハラケンは声をあげた。フミエの目の前にレンガ壁が広がり、矢をギリギリ食い止めたのだ。

「ちょっと！何考えてるの？そっちのエルフを止めるのがアンタの

役目でしょ！」

直後にフミエが指電話をつくってハラケンに怒鳴った。フミエが振り返ったのは倒木の上のエルフから矢が放たれた瞬間で、矢はフミエの小さな体のど真ん中をしっかり捉えていた。フミエはそれをしゃがんでよけることもジャンプしてよけることも無理だと判断したが、横に飛びのいてよけた場合、隠れていた木の陰から出ることになり、木の上の2匹のエルフから狙われるのは必至だった。それらのことを一瞬のうちに考え、フミエは最終的な防衛手段であるレンガ壁を使ったのだ。

「そうだけど、3匹を僕1人で止めるのは難しいよ。そっちはまだ倒せないの？」

ハラケンは話しながら再び真ん中に位置取った。こうなったらメガビーを中心に攻撃を組み立てようと考えたのだ。

「こっちだって木の上のエルフを2匹も相手しているのよ！加勢ならヤサコをあてにして！」

フミエはそう言って泣き言なんて聞きたくないと、一方的に指電話を切り、木の陰から顔だけ出して木の上の2匹の様子をうかがった。そして後方のエルフにも気をつけなければならないと思い、そちらの方も見た。倒木の上にいるそのエルフは再び弓をこちらに向けて引こうとしているところだった。

「ふん、いいわ。勝負してあげようじゃないの。」

フミエは不敵な笑みを浮かべ、倒木の上に立つエルフに弓を向けた。ほんの少しの静寂を置いてエルフが先に矢を放つ。するとフミエはエルフより一瞬遅れて矢を放った。空気を切り裂いて飛んでゆくの2本の矢を、フミエはじっと見つめる。するとなんとその2本の矢は、念力をかけられたかのように途中で落ちてしまった。

「スキありっ！」

矢が落ちた瞬間、フミエは対峙していたエルフに向かってメガビーを照射した。矢が落ちてしまったことに動揺していたエルフはよけきれずメガビーが命中し、その場に倒れ消えていった。

「まさか、相手の矢を狙ったのか？」
その攻防を横目で見ていたハラケンはあぜんとしてつぶやいた。双方の矢が途中で落ちたのは、軌道上で正面衝突を起こしたからだった。フミエは正面から向き合ってエルフを射た場合、どれだけ体を捉えていてもギリギリでよけられるだろうと思い、そこでエルフの放った矢を撃ち落としエルフの動揺をさそい、速度のあるメガビーで相手を仕留めようと考えたのだ。エルフより一瞬遅れで矢を放ったのもそのためである。その神業的な弓の腕前と、一瞬でひらめくその戦術に、ハラケンは度肝を抜かれた。フミエは誰よりもこのゲームに長けているのではと感じずにはいられなかった。
「さあ、私がアンタの分を1匹仕留めてあげたんだから、もう泣き言は言わせないわよ。」
フミエが指電話でハラケンに言った。
「うん。さっきの戦法、僕も使わせてもらうよ。」
そう言ってハラケンは再びヤサコを狙っているエルフを倒すために右に動いた。フミエが左のエルフを倒す間、ハラケンはメガビーでこのエルフに釘をさしていた。そのためこのエルフはヤサコに矢を放つこともできていない。そうしてハラケンは十分近づくと、一気にそのエルフに向かって剣を振り下ろした。しかし例によってそのエルフはあしらうように飛び退いてそれをよける。そして前方のエルフが剣を振り下ろして隙ができたハラケンに向かって矢を放った。ハラケンはその動きを読み切り、すぐに体の向きをかえてその矢を剣で振り払った。
「そこだ！」
間髪入れずハラケンは矢を放ったばかりの前方のエルフにメガビーを浴びせた。3秒ほどの照射でエルフは倒れて消えていった。
「使えるな。このカウンターメガビー。」
ハラケンが感心するようにつぶやいた。敵が攻撃を仕掛けてきたあとは必ず隙ができる。その隙を狙って放つ光速のメガビーを敵がよけられるはずはない。その攻撃をハラケンはカウンターメガビーと

名付けた。もちろんメガビーは1人100秒までしか使えないので、乱用はできないが。ともあれ地上の2匹のエルフを倒したので、地上にいるのは残り1匹である。さすがにそのくらいはメガビーに頼らず倒そうとハラケンは考えた。そこで執拗にヤサコをつけ狙っているそのエルフの背後に回った。しかし近づきすぎるとまた気付かれて逃げられるので、今回は少し距離を置く。エルフはヤサコに照準を合わせることに集中して、ハラケンに気付いていなかった。

「それっ！」

ハラケンはそのエルフめがけて大胆にも剣を投げた。剣は見事そのエルフに命中して倒れ消えていく。もちろん剣を投げてしまうとそれを拾いに行くまで隙だらけになるので、敵に囲まれている時には使えない戦法ではあるが、気配に敏感なエルフを倒すには有効な手段だった。

「よし、フミエ、地上のエルフは片付いた。」

ハラケンが再びフミエに指電話をかけた。

「わかった。こっちは私1人で大丈夫だから、ヤサコの加勢をお願い。やっぱりまだ慣れないみたいだからアドバイスでもしてあげて。」

フミエもその間に木の上のエルフを1匹倒した。あともう1匹をこれから倒すところであった。

「了解。」

その時ヤサコは悪戦苦闘していた。始めから木の上の1匹しか相手にしていないが、このゲームに関してはまったくの初心者なので、なかなか要領をつかめない。相手が矢を放った直後がこちらの攻撃のチャンスと最初にフミエに言われたので、そればっかりを意識してしまい、相手が矢を放つタイミングをヤサコはつかみそこねてしまっていた。そのため敵が矢を放つ前に木の陰から飛び出して見事に矢をくらったりして、ダメージも結構蓄積している。

「ヤサコ、感じはどう?」

そこにハラケンが駆けつけ、ヤサコの隠れる木の隣の木の陰に身を

寄せた。
「ごめん。ぜんぜんダメージも与えられていないの。やっぱり難しいのね。」
申し訳なさそうにヤサコが言う。それは仕方がないことだとハラケンは思ったが、ヤサコのそばに出ているウインドウを見て驚いた。そのウインドウにはヤサコの残りＨＰなどが表示されているが、それが3分の1もないのだ。
「ちょっとヤサコ！ＨＰがあんまり残ってないじゃないか！」
ハラケンが焦りながら言う。ヤサコは自分のＨＰ残量もわかっていなかったのだ。
「うそ!?そんなにダメージもらってたの?」
ヤサコも驚き声を上げる。
「ダメージを受けるたびにそのウインドウはチェックしないと。ちなみにこれまで何回ぐらい相手の矢を受けた?」
ハラケンが訪ねる。ダメージを受けたときは目の前が一瞬赤くなって画面が揺れる。痛みを感じることがないので、背後から攻撃されても、それでダメージを負ったことがとわかるのだ。
「言っても2回ほどよ。それでもうこれだけしか残っていないなんて。」
2本の矢で残り3分の1。猛毒の胞子で少しずつ削られている分を除いても、かなりのダメージである。やはり体力、防御力のない魔法使いの難しさかとハラケンは思った。しかし魔法使いにはその弱点を補って余りある長所がある。
「よし、まずはＨＰ回復を優先させよう。魔法使いには自分や仲間の体力を回復させる技があるのは知ってるね?」
ハラケンが木の上のエルフに注意しながら説明を始めた。ヤサコが次に矢をくらってしまうとかなり危うい状態になる。
「ええ。技ウインドウから回復の魔法を選んで、杖を回復させたい人に向けて使うんでしょう?」
ヤサコが答える。そのあたりのことは森に入る前にフミエからレク

チャーされていた。
「そうだけど、その技はマジックポイント、ＭＰが５０ポイントたまっていないと使えないんだ。まずは何もせず、ＭＰがたまるのを待とう。」
ＭＰは魔法系の技を繰り出す時に必要になり、技を繰り出すごとに消費する。例えば氷の魔法を使うと１０ポイント消費してしまうという具合だ。ＭＰは時間を置けば自然とたまっていくが、５０ポイントともなると1分以上はかかってしまう。2人は木の上のエルフの動きを見ながら、５０ポイントたまるまで待った。
「ハラケン。ポイントがたまったわ！」
目の前のウインドウを見ていたヤサコが言った。今のヤサコのステータスではＭＰの最大値は５０。つまり回復の技を使うとポイントをすべて消費してしまうことになる。とは言え今は回復を優先させなければならない。
「よし、じゃあ早速それを自分に対して使うんだ。」
ハラケンが言い、ヤサコは言われた通り自分に対して回復の技を使った。すると体力は残り3分の2ぐらいまで回復し、そのウインドウを見ていたハラケンはほっと胸をなでおろした。
「よし、じゃあ次はあのエルフを倒そう。とにかくここは経験値のバランスを考えてヤサコの手で倒した方がいい。」
ハラケンがエルフの動きを見ながら言った。それぞれの経験値は自分が倒したモンスターの数によって決まる。いくら仲間がモンスターを倒しても、自分に経験値は入らずレベルアップもできないのだ。
「でも私の攻撃は全然当たらないし。」
ヤサコが少しうつむいて言う。相手の攻撃を気にしながら木の蔭を飛び出して自分が攻撃し、すぐに木の陰に隠れるという動きでは、どうしても慌ててしまってうまく狙いをつけることができなかったのだ。
「じゃあ僕があのエルフを引きつけるから、その隙をしっかり狙って攻撃して。」

ハラケンはそう言うとヤサコのＭＰがたまるのを見届けて木の陰から飛び出した。エルフは当然のごとくハラケンを狙いすます。ヤサコも急いでウインドウから氷の魔法を選び、木の陰を飛び出して狙いをつけようとするが、ハラケンに矢が放たれる前になんとか攻撃しなくてはという思いから、また慌ててしまって手がぶれていた。魔法の杖を使う時や弓を引く場合は、照準を合わせるための丸いカーソルが出てくる。焦らず落ち着いて敵の動きを見ていれば、それを合わせるのは難しいことではないのだが、ヤサコはなかなかカーソルを敵に固定できなかった。そうしている間にエルフからハラケンに矢が放たれる。

「あっ！」

と思わずヤサコは声を上げたが、ハラケンはその矢を造作もなく剣でなぎ払った。さきほどまで3匹のエルフを同時に相手にしていたハラケンにとってこのくらいは楽勝だった。

「ヤサコ！落ち着いて！アイツをキューちゃんだと思って確実に攻撃するんだ！」

ハラケンがアドバイスをする。照準のないメガビーで空を飛行するキューちゃんを撃っていたヤサコにとっては、カーソルのある杖で動かないエルフを狙う方がずっと簡単なはずだった。要はキューちゃんを相手にしたときのように、攻撃をしなければこっちが攻撃されるという意識を持って、集中力を高めることが肝心だとハラケンは考えたのだ。

「キューちゃん…」

ヤサコはその言葉を自分に言い聞かせながらエルフを見た。するとだんだん緑の服をまとったエルフが、白い球体に見えてきたような気がした。

「それっ！」

その瞬間ヤサコは反射的にＶサインを額に当てメガビーを放っていた。メガビーはしっかり命中し、エルフは倒れ消えていった。

「…何もメガビーを撃つことはないのに。というより杖で倒す練習

をしてほしかったんだけど。」
ハラケンが半ば呆れて言う。確かにエルフをキューちゃんだと思え、とアドバイスはしたが、まさかメガビーで倒すとは思わなかったのだ。ハラケンはもったいないと思いつつ、メガビーの腕は衰えてないんだなと少し感心した。
「ごめん。つい反射的に。」
ヤサコが頭をかきながら謝る。すると後方からフミエがやって来た。
「どう？片付いた？」
「まあ、なんとかね。フミエの方も片付いたんだね。」
訪ねてきたフミエにハラケンが返した。ようやく初めての戦闘が収束したのだ。
「まあね。残りの1匹エルフったら、私の腕に恐れをなして逃げて行ったのよ。少し追いかけたんだけど、深入りするとはぐれる可能性もあったから引き返して来たの。おかげで経験値を1匹分損したわ。」
ため息をつきながらフミエが言う。確かにフミエの戦闘力ならタイマンになった時点で逃げ出したくなる気持ちもわかるなと、ハラケンは可笑しくなった。
「でもいきなり苦戦だったね。動きの素早いエルフを自分たちの倍の数も相手にするなんて思った以上にやさしくはない。時間も結構かかったしね。」
ハラケンがフミエに言う。ハラケンとフミエはエルフの矢を受けることはなかったものの、毒胞子のダメージの蓄積がだんだん効いてきていた。
「そうね。まあ今のは気付かないうちに囲まれていたから、戦闘は避けられなかったにしても、時間や毒胞子のことを考えると、今みたいな戦闘を繰り返したくないわね。とにかくこれからは敵に囲まれないように、それぞれがしっかり周囲を警戒しましょう。それでも囲まれてしまった時は、何匹かを倒して囲みを突破して逃げるっていう作戦の方がいいわね。じゃないと体がもたないわ。」

フミエはＨＰや時間のことはもちろん考えていたが、それ以上に実際の体力や集中力がもつかどうかを懸念していた。ギリギリの戦いは、体力や精神力も消耗する。

「でもこの杖があれば、好きな時に回復ができるんじゃないの？毒胞子のことはそこまで気をつけなくても大丈夫なんじゃない？」

ヤサコがフミエに訪ねた。

「技を使えるのは戦闘中だけなのよ。しかもＭＰは戦闘中じゃないとたまらない。そう簡単なゲームじゃないのよこれは。まあ回復系のアイテムなら戦闘中でなくても使えるんだけどね。とにかくその技の使い時はこれから大事になるから、気をつけるのよ。」

フミエがヤサコに言い聞かせる。ただこの技をうまく使いこなせば、毒胞子によるダメージの減りもさほど怖くはないとフミエは思った。

「ちょっと待って！ステータスを確認したんだけど、今の戦いでそれぞれレベルアップしたよね？でもＨＰの最大値だけは僕達がこの森に入る前に比べると逆に下がってるんだ。」

ウインドウを見ていたハラケンがあることに気付いた。今の戦いで、エルフを１匹倒したヤサコはレベル１段階、ハラケンとフミエは２匹倒したので２段階上がっており、ＨＰ以外のステータスはそれぞれ上昇していた。しかしハラケンの言うようにＨＰの最大値だけは下がっているのである。

「えっ！？それどういうこと？」

フミエが驚いた口調でハラケンに訪ねる。

「どうやら僕達は勘違いしていたようだね。毒胞子は少しずつＨＰを削っていくものだと思ってたけど、本当はＨＰの最大値も削っていくみたいだ。つまり回復の魔法を使い続けたとしても、森の中に長居はできないってことだ。」

ハラケンが難しい顔をして言った。ＨＰの最大値自体が減り続けると、やがてＨＰが満タンでも敵の１発の攻撃だけ倒されてしまうようになる。そんな中でゲームをクリアするのは至難の業である。

「なるほどね。となるとますます急いでミッションを終わらせない

とね。しかも周りを十分に警戒して進まないと敵に囲まれてしまう可能性もある。これからは慎重かつ大胆に進んでゆきましょう。」
フミエが2人に言い聞かせる。ヤサコはこのゲームの難しさを改めて思い知った。
「あと、ヤサコは慣れるまでどっちかがサポートして戦った方がいいと思う。さっきは相手の数が多かったから仕方ない部分もあるけど、いきなり1人で戦えって言うのはちょっと厳しいんじゃないかな。」
ハラケンがフミエに提案する。ハラケンがヤサコの感じていることをそのまま代弁してくれたので、ヤサコは少しうれしくなった。
「それもそうね。ごめんねヤサコ、さっきは1人にしてしまって。次からは私たちのどちらかがきちんと戦い方を教えていくから。」
「こちらこそ、足引っ張ってごめんなさい。」
ヤサコとフミエがともに謝り合った。
「いいんだよ。最初からできる人なんていないんだからさ。ヤサコもあれだけメガビーを使いこなせるんだから、その杖だってすぐに使いこなせるようになるよ。」
ハラケンの優しい言葉が、ヤサコを満たしていった。難しいゲームに心が折れかけていたヤサコは、俄然やる気がでてきた。
「さあ、こんな所でとどまっている時間はないわよ。まずは目印になる川を探さないと。」
フミエが号令をかけて3人は前に進み出した。

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ7

ヤサコ達3人は最初の戦闘を終えかけ足で前進していた。地図とコンパスを照らし合わせ、一番の目印となる川を見つけるとそのまま北上する。森の中を流れる川は、浅く流れも緩やかで川幅も5メートルほどしかない。そこには北にある山の雪解け水が注いでいるようで水は澄んでおり、実際に手をつけてみるとかなり冷たいだろうなとヤサコ達は思った。川沿いは比較的見通しが良くいくぶん前進しやすい。その中で敵に出会ったときは、相手が少数なら確実に倒し、多数なら無理せず逃げるということをヤサコ達は繰り返した。モンスターはエルフの他にも蜂のモンスターや、蛇のモンスター、オオカミのモンスターが出てきたが、最初ほどの苦戦も強いられなかった。特にヤサコはハラケンやフミエのサポートのおかげで杖の扱いにも慣れ、前進していくうちにばっちり戦闘が上達していったのだ。

「にしても、結構遠いわね。もうかなり歩いたんじゃない？あとどれくらいか、目印になるようなものはないの？」

歩き続けて疲れてきたフミエがハラケンに聞いた。毒胞子がＨＰ最大値を削り続けているので、足を止めて休憩というわけにもいかない。

「目印？うーん。さっきやたら蜂のモンスターが出てきたエリアがあったけど、多分この蜂の絵があそこだろうね。で、それが南北のちょうど真ん中辺りだから、今は多分この辺だろ…あともう少しで着くと思うよ。」

地図を広げながらハラケンが現在位置を考え割り出した。

「それより、さっきからＨＰ最大値の減りがはやくなってきてる気がするんだけど。」

ウインドウでステータスを見ていたヤサコが言った。これまでの戦闘で、レベルは3人とも１０レベルを越えている。３つのダンジョ

ンを通してレベルの最大値が５０なので、フミエはまあまあのペースかなと思っていた。
「そうか。空気中の毒胞子が濃くなってきているのかな。となると確実に近づいていると思うけど。」
ハラケンがそう言ってまたしばらく歩くと少しひらけた場所に出た。目視で３０メートル四方の広さのその場所には木は生えていない。足元を見るとひざ下ぐらいの背丈の草があちこちに茂っている。そして何より奇怪なものがその場所に生えていた。
「ちょっと、何あれ？まさか花？」
先頭を歩いていたフミエが言った。その花はこの森の中にあって不相応な黄色と赤の暖色で、亜熱帯地域で見られるような不気味な色をしており、いわゆるラフレシアのような形だった。花は全長２メートルを越える長い茎のてっぺんに咲いており、その巨大な姿はおぞましく見えた。
「まさか、これが地図にあるこの三角形なのか？」
ハラケンがあぜんとしてつぶやく。今まで歩いてきた道のりを考えるとこの場所しか考えられなかった。げんに巨大花の三角形の中には、薬草とおぼしき草が生えていた。
「３本の木じゃなかったのね。」
「でも確かにこの茎の太さは、その辺に生えている木をなんら変わらないよ。多分地図にはもともとこの花が描かれていたんだろうね。それの花の部分が消えて、３本の木のように見えてしまったんだ。それに見てよ。花の中から花粉のようなものが出てるだろ？あれがきっと毒胞子なんだ。」
ヤサコの言葉に対し、ハラケンがそう説明しながら何気なくその花に近づいていった。
「やっとゴールに辿り着いたところで、さっさとこの薬草を拾って行きましょう。この毒をまき散らしてる花は燃やしてしまいま…！？危ないハラケン！」
フミエがハラケンの方を見て叫んだ。なんとその花がハラケンに向

かってキバをみせてかみつこうとしていたのだ。
「えっ！？うわあー！」
ハラケンはとっさに飛びのくも、倒木に倒れ込みダメージを負ってしまった。
「まさか…この花達は、モンスター！？」
ヤサコが悲鳴にも似た声を上げる。すると3本の花は地面から足のような根っこを出して、獰猛なうなり声を発しながら、ヤサコ達を取り囲むように歩いてきた。花の部分が顔のようだが目や鼻はなく、大きな口と恐ろしいキバで3人を威嚇している。
「フォッフォッフォ。愚かな人間族のくせにここまで辿り着くとはな。まだ人間族にも気骨のあるヤツがいたか。」
すると木の上の方からおじいさんの声がしてきた。背中を合わせて立っているヤサコ達が見上げると初老のエルフが杖を持ってこちらを見下ろしているのが見えた。どうやらエルフ族の長老のようだった。
「しかし、その薬草を持って帰らせるわけにはいかんな。人間族はあまりにこの森で好き勝手をしおった。自分たちの作物を守るため、森の生態系を維持するには不可欠の胞子を、毎年のように焼き尽くすのだからな。わしらはその人間に天罰を与えるためにこの花を作り出した。」
「やっぱり。ハラケンの読み通り、人間とエルフが争っている設定のようね。」
エルフの話を聞いていたフミエがつぶやく。
「何十年も前のことじゃが、わしらの先祖は同じ方法で人間達に報いを受けさせた。しかし人間族はその教訓もいかさず、再び愚行に走った。もうわしらは寛容ではおれん。お前達にはここで死んでもらう。そしてこの花をさらに作り出し、この森の近くには人間が住めないようにするのじゃ。」
「そんな。どうにかすれば末永く人間とエルフが共存することができるはずよ。こんなことをしたって、今度は人間達があなた達を滅

ぼすために森に火を放つかもしれないわ。だからお願い。こんな真似はやめて。」
ヤサコがエルフに訴えかけた。こんな報復合戦をしていても何の問題解決にならないとヤサコは思った。
「ヤサコ何言ってるの。相手はコンピューターよ。聞く耳持つわけないじゃない。ここはこの食虫植物モンスター…いや、食人植物モンスターを倒すしか人間達を救う方法がないのよ。そしてこいつらがこのミッションのボスなんだわ。」
フミエがヤサコに言い聞かせる。ここで戦闘を避けることはできなかった。
「ここは散らずに3人固まって戦うのはどう？おそらくコイツらはヤサコの炎攻撃にはめっぽう弱いと思うんだ。植物だしね。ここはヤツらへの攻撃はヤサコに任せて、僕とフミエはヤサコを守るように戦うんだ。」
ハラケンが提案した。それが手っ取り早くこの戦いを終わらせる方法だと思った。
「確かに有効そうだけど、リスクは高いわね。もし炎の攻撃がそれれば、森や大事な薬草を焼いてしまうおそれがある。そうなればゲームオーバーになってしまう。」
フミエはためらった。しかしＨＰ最大値が減り続けている中で、長期戦になると圧倒的不利にもなる。
「大丈夫。ヤサコはこれまでの戦闘でかなり上達したんだ。そんなヘマはしないさ。」
ハラケンはヤサコを信じていた。ヤサコはもちろんその言葉はうれしかったが、逆にプレッシャーにもなった。
「どう、ヤサコ？できそう？」
フミエがヤサコに確認する。しかしヤサコはここで迷って余計な時間をかけたくはなかった。
「できるかどうかじゃなくて、やるしかないじゃない！」
ヤサコが威勢よ言うと、フミエとハラケンも笑みながらうなずいた。

「やるのじゃ！」
エルフが命じると、食人植物モンスター達は一気に3人に向かって突進してきた。

#6　いざ、決着の時　－前編－　part8

３人のフォーメションは、ヤサコを真ん中にして、その両脇にフミエとハラケンが立つというものだった。それぞれが武器を構えるなか、３体の食人植物モンススターはヤサコを狙って並走しながら突進してきた。まずはハラケンが左側のモンスターに姿勢を低くしながら突っ込んでゆき、足にあたる根の部分を剣でなぎ払った。ダメージは微々たるものだったが、体が大きい食人植物モンスターはバランスを崩し、頭から転倒した。そこを見逃すまいとハラケンは攻勢をかけようと近づく。かわってフミエは右を走っていたモンスターの顔に一発矢を撃ち込んだ。しかしその矢は強力なキバで食いちぎられてしまった。そこで考えたフミエは突進してくるモンスターの目の前にレンガ壁を投げつけた。するとモンスターはレンガ壁に勢いよくぶつかって一瞬ひるんだ。するとフミエはその場でしゃがみ込み、今度はレンガ壁の下からモンスターの足を狙って矢を撃ち込んだ。見事矢は命中し、このモンスターもバランスを崩して転倒した。それを確認するとフミエは近づいていき、さらなる攻撃をしかけようとする。そして残ったヤサコは真ん中から突っ込んでくるモンスターに対し、炎の魔法をよく狙って顔の部分に浴びせた。

「ピギャー！」と奇声を発しながら倒れ込むモンスター。やはりハラケンの読み通り効果は抜群だった。

しかしヤサコ達優位に感じた戦いも、ダンジョンのボスだけに甘くはなかった。ハラケンとフミエが転倒させたモンスターはすぐに起き上がり、攻勢をかけようと接近したハラケンとフミエを、太い茎から伸びてきたツルでぐるぐる巻きにして捕らえたのだ。

「しまった！」

「キャー！」

ハラケンとフミエが声を上げて抵抗する。しかしいくらもがいてもツルはほどけない。するとモンスターは２人を引き寄せてゆき、顔

の前まで持ってくると口から得体の知れない液体を2人に浴びせた。
「うわっ！」
「もう最悪う～！」
その液体は溶解液のようで、2人は大ダメージを負った。
「ヤサコ、なんとかしてえ～…」
力なくフミエが助けを求める。しかしヤサコはすでに2人を助けようと努力していたのだが、2人を捕らえているモンスターを攻撃したら、2人にも攻撃が当たるのではないかとためらっていたのだ。
その間にも、最初に炎を浴びせた残り1体がうなり声を上げながら立ち上がろうとしている。
「ヤサコ！ここはなんでもいいから攻撃をあてるんだ！とにかくコイツらをひるませて！」
ハラケンがヤサコに叫ぶ。そこでヤサコは考え、杖よりも扱いにには慣れているメガビーをハラケンとフミエを捕らえているモンスターに対し照射した。ひるんだモンスターはハラケンとフミエをツルから解放する。そして再び真ん中の1体に炎の魔法で攻撃しようとしたが、同じ手はくわないと言わんばかりに、ハラケンとフミエに浴びせたのと同じ溶解液を吐き出して炎を相殺した。
「ヤサコ、ごめん。回復の魔法を…」
ハラケンがヤサコにお願いする。最初にモンスターに襲われて転倒した時のダメージと、今の溶解液のダメージで、ハラケンのＨＰはかなり危うい状態だった。
「わかったわ。」
ヤサコは残りのＭＰをすべて使ってハラケンを回復させた。おかげでハラケンの体力は全快したが、ＨＰ最大値が削られている中では万全の状態とは言えなかった。
「フォーメーション変更よ！コイツら相手に接近戦は危険だわ。ここは遠距離攻撃を中心にしましょう。」
今の手痛いダメージで恐れをなしたフミエが指示をだした。そこで3人は横並びになった3体のモンスターに対し、ハラケンとヤサコ

が前に出て、その2人の間の後ろにフミエが位置する、フミエ司令塔のフォーメーションに移動した。逆三角形の形になった3人は、ハラケンが左のモンスター、ヤサコが右のモンスター、フミエが真ん中のモンスターに対峙する。するとモンスター達の方は3体固まっておもむろに空を見上げ、3体同時に空気中に花粉のようなものを吐き出した。それは空から降り掛かろうとしている。

「何？毒胞子？ちょっと2人とも、あれが届かないようなところまで退くのよ。」

フミエが2人に指示をだす。3人はとりあえず葉が空を覆っている木のところまで下がった。ところがそこでヤサコ達に向かって強風が吹き、毒胞子は3人が身を潜めるところまで飛んできて思いっきり吸い込んでしまった。

「ゴホゴホッ。何でこうなるのよ！って、HPの最大値がこれまでにない速さで減っていってるんですけど！」

実際に胞子を吸い込んだわけじゃないのに咳き込んだフミエが叫んだ。3人のHP最大値はかなり少ない。体力全快でも相手の攻撃2回ほどで倒されてしまうほど危険な状態である。

「まずいねこれは。これ以上退くと森の中に入ってしまう。そうなれば僕達は戦いにくくなる。今のところヤサコの炎の魔法しかダメージらしいダメージを与えられていないからね。」

ハラケンが考え込んだ。森の中に入れば3人ばらけて戦うしかないが、1対1で勝てる相手ではない。メガビーの連続照射なら倒せないこともなさそうだが、この後の戦いを考えるとむやみやたらとメガビーを消費するのは避けたかった。

「こうなりゃ、イチかバチか森ごとアイツらを燃やすっていうのは？」

フミエがハラケンに提案する。

「森を燃やす？そんなことすれば、森火事になって僕らの退路も断たれるよ！イチかバチかでも危険すぎる。成功する見込みがない。」

ハラケンがフミエの考えを却下する。ともあれこのまま退いていて

は攻撃を仕掛けられないので3人は前に出て来た。するとモンスター達は再び毒胞子を空気中に吐き出す。徹底的にヤサコ達の攻めの手を封じる気のようだ。

「また!?今度アレをくらったら、もう絶体絶命よ。」

フミエが怒りと絶望を感じながら言った。

「アレを防ぐ手だてはないのか…また身を退いても、強風が吹けば逃げ場がない。」

ハラケンがうらめしそうな目で上空から落ちてくる毒胞子を見つめる。まるで死の灰のように降り注ぐそれは容赦なく3人に襲いかかる。ハラケンはどれだけ考えても、もうおしまいだと思った。下を向き、ゲームオーバーになってコンテニューした後の戦い方を考えていた。

「それっ!」

その時ヤサコが天に杖を掲げて叫んだ。すると杖から強力な風が巻き起こりだした。

「これは、風の…魔法?」

ハラケンもフミエもはそれは考えつかなかった。本来は相手を攻撃するために使う風の魔法で毒胞子を吹きとばす。最初は足を引っ張っていたヤサコのひらめきに救われた形になったのだ。

「よくやってくれたわヤサコ!これでうっとうしいあの攻撃を封じることができるわ!よく思いついたわね?」

フミエがヤサコに抱きつきながら喜ぶ。ハラケンもこのひらめきには恐れ入った。

「うん。実は毒胞子が飛んだ瞬間、モンスター達の後ろの方に、杖を持ったさっきのエルフの長老が見えたの。そこでピーンときたわ。さっきの強風はあのエルフの魔法だったんじゃないかって。それで同じ方法を思いついたの。」

ヤサコが得意げに言った。フミエもハラケンもなるほどと思い、その方向を見やった。するとモンスターの達の後方で、先ほどのエルフがこちらの方を見てあぜんとしているのが見えた。

「そうか、そういうことだったのか。ん、待てよ、それは使えるかもしれない…よし、アイツらを倒すいい方法を思いついた。ちょっと耳を貸して。」

ハラケンが急いで2人に耳打ちする。

「そんなにうまくいくの?それこそイチかバチかよね。失敗すれば、さっきアンタが恐れていたことが起きるけど。」

ハラケンの作戦を聞いたフミエが言う。その作戦もかなり危険が伴うようだった。

「いや、成功する見込みはある。とにかく今僕らは毒胞子を封じることができるとは言え、劣勢には違いない。この作戦で一発逆転を狙ってみよう。」

ハラケンが力強く言った。もう迷っている時間はない。

「オッケー。ならその作戦、乗ってみようじゃないの。」

フミエが了承し、ヤサコもうなずいて同意した。そしてさっそく作戦の準備に入る。フミエとハラケンはじりじりと退きながら相手を牽制し、ヤサコはなんと森の中に走って消えていった。モンスター達もこの動きが気になったようだが、ヤサコを追おうとはせず、フミエとハラケンをまずは倒そうと考えた。数的優位を活かし、2人を取り囲むように位置取った3体は、次々と中距離からツルで攻撃を仕掛けてくる。それをハラケンは剣で、フミエは短剣で必死に防ぎながらあるタイミングを待った。

「なかなかアレを仕掛けて来ないわね。」

フミエが防戦しながらハラケンに言う。

「うん。ここは一気に押し切ってくるつもりなんだろう。とりあえずここは耐えるんだ。」

ハラケンも必死に体を動かしながら相手の攻撃をかわす。次に攻撃を受けると致命的なダメージになってしまうが、絶対に攻撃を受けてはならないという緊張感の中で、それでも隙があれば2人はメガビーで応戦した。するとモンスター達の総攻撃は止み、再び3体が固まった。

「来るんじゃない、そろそろ。」
フミエがハラケンに言う。ハラケンはこのタイミングを逃すともうチャンスはないと感じ、ヤサコがうまくやってくれることを祈った。そしてモンスター達は3たび上空に毒胞子を吐き出した。ヤサコがその場にいなければまだ通用すると考えたのだろう。
「来たっ！」
フミエが叫ぶ。そこで打ち合わせ通りにハラケンとフミエは後ずさり、1回目と同じ後方の森の入り口までさがった。するとモンスター達の後方の森の中で、長老エルフが杖を天に掲げているのが見えた。また強風を巻き起こしてつもりなのだろう。そしてハラケンは急ぎ指電話をつくった。
「ヤサコ！今だ！」
強風が吹き出す前のタイミングでハラケンが叫ぶ。するとモンスター達の後方の森にいきなり火がついた。それと同時に強風が吹き出す。その火はモンスター達よりも風上に放たれている。
「うまくいったの！？」
フミエとハラケンが固唾を飲んで見守るなか、ゴウゴウと燃える炎は、強風に乗って3体のモンスターに襲いかかる。巨大な火に包まれたモンスター達は倒れもがくが、ついには3体とも灰になっていった。そして急いでフミエとハラケンはその場にレンガ壁を並べていった。風で流れてきた火が、自分たちより後方の森にうつらないようにするためである。
「さあ、ヤサコ！急いでそっちの森の火を消して！」
ハラケンが再び指電話でヤサコに指示を出した。最初に森に火を放ったのはヤサコだが、今度は氷の魔法で消火していった。火は森に燃え広がることなく、無事に消えていった。
「よし、うまくいった！」
ハラケンが珍しくガッツポーズを見せながら言った。なにもかもがハラケンの思い通りに運んだのだ。
「アンタには恐れ入ったわ。薬草もこの通り無事だしね。よくあん

な短時間でこれだけの作戦を思いついたわね。」
フミエはそう言ってハラケンとハイタッチを交わすと、生えていた薬草を摘み取り始めた。
「ちょっと前に、ある歴史マンガを読んでてね。そこに風上から火を放って風下の敵を焼くっていう戦法があったんだ。ヤサコの言葉で強風が吹く方向はわかっていたから、それをやってみようと思ったんだ。」
ハラケンが少し得意になって言う。そこにヤサコも戻って来た。
「やったわね。あんなにうまくいくなんて思わなかった。さすがハラケン。」
ヤサコはやりとげた感たっぷりだった。ようやくチームのために役に立ったかなという実感が湧いてきた。
「いや、2人とも僕の言う通りによく動いてくれたよ。そのおかげさ。」
ハラケンが少し照れて頭をかきながら言う。
「よし、じゃあ次のステージもこの調子でいきましょう！」
薬草を摘み終わったフミエが立ち上がって言った。するとそこで空間全体がホワイトアウトし、短いロードに入った。しばらく経って画面がもとに戻ると、始めに3人が降り立った村に辿り着いていた。どうやら森から脱出する場面は省略されたようだ。その場面では清らかに流れる川のせせらぎを背に、病気だった男性達も含めて村人一同が集まっている。そして村長らしき白いひげをたくわえた人物がヤサコ達に話しかけてきた。
「やはり村の奇病はエルフ達の仕業でしたか。確かに我々は森の中の生命を顧みず、自分たちの都合で胞子を焼き払っておりました。それは大いに反省しなければなりません。そしてこのようなことを2度と繰り返さないように、エルフ達とは対話をしていき、いかに共生していくか考えようと思います。そして勇者様はよく危険な森の中に入って行かれ、あの薬草を採って来てくださいました。村民一同感謝していますぞ。おそらく苦しい戦いで傷つかれたことかと

思います。村の医者があの薬草でつくりました、毒胞子に効くスープがここにございます。どうぞお召し上がりくださいませ。」
村長から差し出されたスープを3人はいただいた。するとかなり落ち込んでいたHP最大値がみるみるうちに上昇し、現在のレベルに相応する数値になった。そしてそこで、「1st STAGE CLEAR」というロゴが表示され、ゲームをクリアしたときのテーマソングが流れ出す。すると美しい村の風景は消えてゆき、空間は再び全体が水色のロード画面へと移行した。
「よかった。あのお話はこれでめでたしめでたしっていうことね。」
ヤサコがつぶやく。人間達が考えを改めたことで、ヤサコ的には話の結末としてはしっくり来た。
「時間は、思ったよりも速かったわね。その分レベルは上げられなかったから、次からは少ししんどいかも。とりあえずゲームオーバーにもなってないし、このダンジョンはかなりの高得点だと思うわ。」
フミエが時計を確認しながら言った。より速く、レベルは低く、ゲームオーバーが少ないほど高得点なので、思い通りの展開とはいかなかったものの、高得点なのは結果オーライといった感じだった。
「ダイチ達の方はどうなってるんだろう?僕の読みではかなり苦労していると思う…いや、そう思いたいけどね。」
次のダンジョンがロードされる中、ハラケンが敵であるダイチ達の動向を思った。

#6　いざ、決着の時　－前編－　ｐａｒｔ9

砂漠であるにも関わらず、空は厚い雲が埋め尽くし、日の差す気配すらない。その他に先ほどと変わったことはと言えば、空を飛んでいる鳥が妙に増えてきたことだけである。

砂漠のど真ん中で、地図もコンパスもなくしたダイチ達は途方に暮れていた。ナメッチが思いついた太陽の沈む角度から方角を割り出す方法も、影すらできないこの天候ではまったく使えない。とはいえ何の目印もないこの場所で何を手がかりに方角の見当をつければいいか、ダイチ、ガチャギリ、ナメッチの3人は座り込みながら考えるが、まったくいい案が思い浮かばない。

「最悪この雲が晴れるのを待つか。それまでにいい方法が思い浮かばなかったらな。」

考え込んでいたダイチが2人に切り出す。確認するまでもないようなことだが、ダイチはただ3人黙りこんでいるのは何となく気まずかった。というより何となくぴりぴりしている空気が嫌だった。3人がこうしている間にも、フミエ達はどんどん先に進んでいるという気持ちの焦りがそれを生んでいる。

「しかしいつ晴れるかわからねえ。それをあてにして、思考を止めるっていうのはナシだぜ。」

低い声でガチャギリがつぶやく。ダイチやナメッチから見ると、一番近寄りがたい雰囲気をだしている。

「よし、とりあえず腰を上げようぜ。」

ダイチが立ち上がりながら2人をうながした。

「なんだよ?どこに行くつもりだ?」

ガチャギリが訪ねる。まさかダイチに名案が浮かんだとは思えない。

「こうやってしんみり考え事して頭をこねくり回すのはオレらの性に合ってねえ。どうせならそこらへんのモンスター達を相手にしながら、頭も体も動かすっていうのはどうだ?レベルを上げといたほ

うが後々楽になるしな。」
ダイチが腕の筋肉を伸ばす体操をしながら2人に言った。
「…なるほど。確かにこうしていても時間の無駄になる可能性も高いしな。このストレスはモンスターにぶつけてやるか。」
ガチャギリがダイチの提案に乗る。もちろんこうなればナメッチは2人に逆らうことはできない。しぶしぶ戦闘はできるだけ避けたいナメッチも立ち上がった。
そうして30分ほどの間、3人はモンスターを見つけるとそれをひたすら倒していった。倒しながら頭にひらめきが降りてくることを願った。3人はお互いにそれぞれがいいアイデアを思いつくことを期待した。しかしそう簡単に良策が思い浮かぶはずもなく、時間とともに増してくる焦りからくる歯がゆさを、ただモンスターにぶつけるしかなかった。そこは過去のシリーズをやり込んだ3人だけあって戦い慣れしており、危なげなく次々とモンスターを倒してゆく。たちまちレベルは上昇し、いつしか1発の攻撃で出てくるモンスターを倒せるまでになっていた。そしてその繰り返しに達成感を見いだせなくなってきた。どれだけここでレベルを上げようと、次のダンジョンに進めなければ何にもならないという絶望感が3人を支配する。このまま相手の思うつぼにはまり、果たし合いにも負けてしまうのかと考えると、悔しさと自分たち自身への怒りもこみ上げてきた。ついにガチャギリは剣をその場に捨て、戦うことを放棄した。
「やってられるか!どうすればこのダンジョンはクリアできるんだ?だいたいクリアできる方法があるのかよ。そもそもコンパスが壊れちまったのもバグじゃねえのか?やめだやめ。こんなバグが起こっちまったんじゃどうしようもねえ。果たし合いは無効だ。さっさとゲームから離脱して中止にしようぜ。」
ガチャギリはクリアできない責任をゲームのせいだと押し付けた。
ダイチも気持ちはわからなくもなかったが、ガチャギリは辛抱強い方でもない。思い通りにならないからと言ってここで逃げようとす

るガチャギリには賛同できなかった。
「おい。情けねえとは思わねえのか。こんなところで逃げ出したら、それこそフミエ達にあざ笑われるぜ。だいたいここで諦めたら、お前がのどから手が出るほど欲しがってたメタバグも手に入らなくなるんだぞ。」
ダイチがガチャギリに喝を入れた。一方的に果たし合いを無効にすれば、怒ったフミエやハラケンはメタバグの鉱脈をフォーマットすることをためらわないと思った。
「ああっ!?うっせーな!リーダー面して説教かよ!だいたいお前がコンパス壊したんだろうが!そのくせにでかい口叩くんじゃねえよ!」
今の言葉が気に障ったガチャギリが、怒ってダイチの胸ぐらをつかんだ。
「だから言ってるだろ!コンパスが壊れたのは不可抗力だって。そんなに人が信用できないんならお前1人でなんとかしろよ。黒客のリーダーはオレだぞ!お前なんかオレのさじ加減一つでクビにできるんだからな!」
ダイチもガチャギリをにらみつけながら対抗する。ビビったナメッチは2人のケンカをただ傍観しているだけだった。
「はっ!イサコなんぞに一度はクラブを追われたくせに、よくそんなことが言えるぜ。だいたい実力じゃオレの方が上だからな。ただめんどくせえことはやりたくねえ性分だから、お前に花持たせてやってんだよ。ところが誰かさんはそれをいいことに何か勘違いしてるみたいで、ほんと困ったもんだぜ。」
ため息をつきながらガチャギリが挑発する。
「おもしろい!だったらここで白黒つけてやろうじゃねえの!」
そう言ってダイチはガチャギリの手を振りほどくと、後ろに下がって弓を引いた。ガチャギリもそれに負けじと先ほど捨てた剣を拾って構える。
「ちょっと、やめろよ2人とも!」

ようやくナメッチが止めに入ったが時すでに遅く、ダイチとナメッチの決闘が始まった。ところが2人の実力は拮抗しており、遠距離から狙おうとするダイチと、近距離から狙おうとするガチャギリの駆け引きが続くだけで、なかなかダメージすらもお互いに与えられなかった。しまいにはそれに耐えかねたガチャギリが、一番高価なメタバグ系武器である追跡くんを取り出した。追跡くんはホーミングミサイルで、相手に接触して爆発するまで追尾し続ける強力な武器である。もはや果たし合いのことなどどうでもよくなったガチャギリはそれをダイチに使うことをためらわなかった。ロケットランチャーのような形をした発射砲を肩に担ぎ、ダイチに照準を合わせる。

「サヨナラ。初代黒客リーダー。」

捨て台詞を言うと、ガチャギリはランチャーの引き金を引いた。発射されたミサイルは火を噴きながらものすごい速さでダイチに迫ってくる。

「くっ！ほんとに撃ってくるなんて、アイツまともじゃねえ！」

そう言ってダイチは急いで弓を構えた。ダイチは矢を放って追跡くんを撃ち落とそうとしたが、追跡くんは軌道をヒョイと変えて矢をよける。ダイチはそこでとっさに伏せてやり過ごした。ダイチのすぐ上を通過した追跡くんはブーメランのごとくUターンして再びダイチに向かってくる。もうだめだとダイチが思った瞬間、追跡くんはダイチの手前数メートルで何が起こったのか自爆した。

「い、一体何が！？」

ダイチの最後を見届けようとしていたガチャギリが叫ぶ。すると追跡くんが爆発した辺りの映像がビリビリと乱れ出した。ダイチも立ち上がっていぶかしげにそれを見つめる。そしてその場所に人影が現れた。その姿を見たダイチ、ガチャギリ、ナメッチの3人は絶句する。

「もう、遅いと思ってのぞいてみたら、なに味方同士で争ってるのよ！？」

なんと、そこに現れたのはフミエだった。仲間内でケンカをしていたダイチ達を見て、少し呆れ顔になっている。
「なにって、お前！どうやってここに来た？」
ダイチが目を疑いながら訪ねる。どんな裏技を使っても、相手のダンジョンに入り込むことなどできるはずがなかった。
「質問に答えたら？なんで味方同士で争ってるの？」
フミエがもう一度問いかける。
「いや、ただ、オレとガチャギリのどちらが実力が上か試そうと…」
ダイチが言いにくそうに答える。それを聞いたフミエがため息をついて言う。
「アンタ達、今果たし合いの途中っていうことわかってる？アンタらの敵はワタシなのよ！そんなことしてる場合じゃないでしょ！」
「わかってるよ。オレもやりたくて戦っていたわけじゃねえ。ただガチャギリが一方的に仕掛けてきたんだ。」
ダイチが釈明した。ガチャギリは「どっちが先に弓引いてきたんだよ。」とぼやいている。それを聞いたフミエはもう一度ため息をついて言った。
「はあ。じゃあアンタ達のモチベーションが上がる情報を教えてあげる。私たちはこの果たし合いに勝っても、メタバグの鉱脈はフォーマットしない。メタバグによる強大な武力を背景に、アンタ達をしもべにするつもりよ。」
「な！なにい！？」
ダイチ達が口を揃えて驚く。ダイチ達はてっきりフミエ達が勝利した場合、ハラケンの意志を尊重してメタバグの鉱脈はフォーマットするものだと思っていた。なのでダイチ達はたとえ勝負に負けても、メタバグの鉱脈なんて始めからなかったものだと思えばあきらめがつくだろうと、幾分気楽な気持ちで果たし合いにのぞんでいた。しかし今のフミエの話が本当なら、勝負に負けた場合ダイチ達には地獄が待っている。
「うおーっ！ガチャ！こんなところで争っているヒマなんてないぞ

！負ければフミエのしもべだなんて、それだけは勘弁してくれ！」
ダイチが涙目でガチャギリに訴えかける。
「ああ！オレもそれだけは絶対に避けたい！ダイチ、さっきは怒りに任せて暴言を吐いてすまなかった。これからは協力していこう！」
ガチャギリもフミエのしもべとなるのは相当イヤなようで、すぐにダイチと握手を交わし和解した。
「でも、どこに行けばいいかまったくわからないし…」
そこでポツンとナメッチがつぶやく。ダイチやガチャギリもそのことを思い出してブルーになった。
「まったく、情けない男達ね！空を見なさい！明らかにさっきと違うところがあるでしょう！」
フミエに言われるがままダイチ達は空を仰いだ。相変わらず分厚い雲のせいで太陽は見えない。
「変わったところって、そう言えば鳥が増えてないか？」
「ああ。」
ダイチが何となく気付いてガチャギリもそう思った。多くの鳥が上空を飛び回っているが、どの鳥もある一定の方向に向かっているように見える。
「言われて気付くなんて、ほんとにアンタ達には観察力がないのね。」
呆れっぱなしのフミエは、さらに失望したという感じで言った。
「ちょっと待て、明らかにさっきと違うところがあるって、お前いつからここにいるんだ？」
ダイチが気付いてフミエに問いかける。
「うっ！まあいいじゃない、そんなどうでもいいことは。とにかく私が出せるヒントはここまでよ。あとはと自分たちで考えてこんなダンジョンさっさとクリアしなさい！じゃあ。」
焦ったように言うと、フミエはそこからスーッと消えていった。ダイチ達の間に一瞬の静寂が流れる。
「一体何だったんだ？」

ガチャギリがつぶやいた。まるで砂漠の蜃気楼を見た気分だった。
「わからん。しかし今のフミエの言葉を聞いただろ。あれが本当なら、オレたちは果たし合いに負けたらヤツのしもべにされてしまう。この勝負、何が何でも負けられなくなったってことだ。」
ダイチがこぶしを強く握りしめながら言う。さらにフミエから攻略のヒントまでもらったことはこの上なくプライドが傷ついた。必ずフミエを見返してやると、ダイチは心に誓う。
「ヒントは鳥を見ろ、か…一体どういう意味だ?」
ガチャギリが再び空を仰ぎながらつぶやいた。鳥はダイチ達とは違い、行き先を知っているかのように群をなしてどこかに飛び立ってゆく。
「鳥の飛んでいく方について行けば、ゴールに辿り着くとかじゃないんスか?」
ナメッチがガチャギリに言った。
「はあ!?そんな単純なわきゃねーだろ。鳥を追っていけばゴールに辿り着くだなんて、かなり都合のいい考え方だ。もしそれが正解だとしても、それなりの根拠がないとオレは腑に落ちないな。」
ガチャギリが考え込む。鳥達が向かう先に何があるのか。鳥達は何を目指しているのか。
「そうか!わかったぞ!やっぱりナメッチの言う通り、この鳥達が飛ぶ方向に進めばいいんだ!」
するとついにダイチがひらめいて手を叩きながら言った。
「どうしてだ?この鳥達は一様にゴールに向かうって言うのか?」
ガチャギリがダイチに訪ねる。またテキトーなこと言ってるんじゃねえだろうなと思った。
「違う、ゴールにじゃない。オレたちが最初の目標地点に設定したオアシスにだよ。」
ダイチが座り込んで何やら描き出した。途中で失ってしまった地図を思い出しながら、砂の上に再現する。地図上でオアシスは、ダイチ達が出発した街とゴール地点である都市のちょうど中間地点にあ

った。とにかくオアシスまで辿り着ければとりあえず目処が立つはずだった。
「この鳥がみんなそこに行くって言うのか？どうしてそんなことがわかる？」
ガチャギリが再度ダイチに訪ねる。
「よく考えてみろよ。ここは砂漠だぜ？人間と同じで、暑い中鳥達だってどこに向かうにしても水分補給が必要だろ。この辺りで唯一水源があるのは、地図にあったこのオアシスだけだ。」
ダイチが地図を描き上げてオアシスの部分を丸でかこった。
「なるほど。時間を重ねるごとに鳥が増えて来たのは、それが攻略のヒントになっていたからか。」
地図を見てダイチの説明を聞き、ガチャギリやナメッチもようやく理解した。
「これで異論はないな？」
ダイチが2人に確認する。
「ない。やっぱりお前が黒客のリーダーだ！」
そう言うとガチャギリは早速飛んでゆく鳥の群を追いかけるように走り出した。それに遅れまいとダイチやナメッチも本気をだして走ってゆく。
　ダイチの読み通り、鳥の群はオアシスを目指していた。出現するモンスターを倒しながら3人はずっと鳥達を追って行くと、ついにヤシの木や草の生い茂り、エメラルド色の水をたたえる泉のある場所に辿り着いた。ゲームスタートからかなりの時間を要したが、ようやく道のりでいけば半分のところまで来たのだ。
「ひゃっほーい！」
ダイチ達は嬉しさのあまり泉の中に飛び込んでいった。ザブーンと電脳の水がしぶきを上げる。水辺でのどを潤していた鳥達は驚いて一斉に飛び立ってゆく。はしゃぐように水をかけあっていると、これまでの戦いで負ったダメージもみるみる回復していった。どうやら泉には傷を癒す効能があるらしい。

「ところでよ、ダイチ。ここまで辿り着いたはいいが、ここからゴールに向かうにはどの方向に行けばわかるか？もう鳥の群を追う方法も使えないだろ。」

水に濡らしたターバンを絞りながらガチャギリがダイチに訪ねた。

オアシスから飛び立つ鳥はみなバラバラの方向に飛んでゆくので、どの鳥がゴールに向かうのかは見当がつけられなかった。

「その心配はないようだぜ。」

ダイチがそう言いながら空を仰ぐ。つられてガチャギリやナメッチが空を仰ぐと、先ほどまでかかっていた厚い雲がようやく晴れ、段々空の欠片が垣間見えるようになってきた。すでにその色は水色にオレンジ色を混ぜたような色になっている。日が沈むまで時間はあまりない。

「そうか、ここからは太陽の角度で方角を確かめればいいわけだな。なら急がねえとな。太陽が沈んでしまえば、一気に方角を知る手がかりがなくなってしまう。」

ガチャギリがそう言って3人は体を休める間もなく出発することにした。時折雲の間から見える太陽の位置を確認し、北西の方角を目指す。その道のりに障害物や砂嵐などのトラップはもうなかった。

そうして太陽が地平線にかかってきた時、ついに3人はゴール地点である都市を視界に捉えた。都市は要塞のごとく高い壁に囲まれ、イスラム教の礼拝堂であるモスクのような形をした建物が多数立ち並んでいる。それを確認してあともう一息というところで、3人が小走りになったその時、急に地面が揺れるような感覚に襲われた。もちろん実際に揺れているわけではないが、視界は小刻みに上下に揺れており、まわりには不自然な砂粒が舞っている。なにかが砂の中でうごめいているのだとダイチは思った。これは今まで相手にしてきたモンスターの時にはなかった現象だった。ついにボスの登場かと3人は身構える。「ピギャー！！」と奇声を発しながらそれは砂上に顔を出した。

「な、なにこれー！！」

ナメッチがモンスターに負けないくらいの奇声をあげて驚く。姿をあらわしたモンスターの見た目の第一印象は巨大ミミズで、赤褐色の胴体の全長は１０メートルを越え、胴回りは２メートルを軽く越えていそうだった。ミミズと違うのは顔にあたる先端部分に、口と思われる黒い穴があいていることだった。

「まさか、モンゴリアン・デス・ワームか！？」

砂の中から頭をだしてこちらをうかがう姿勢は首長竜のようにも見える。それを見上げながらガチャギリが叫んだ。

「モンゴリアン…なんだって？」

ダイチがガチャギリに聞き直す。

「モンゴリアン・デス・ワーム。俗にいう未確認生物、ＵＭＡだ。こいつはあの黒い口から猛毒を吐き出したり、電撃も使えるという話も聞いたことがある。大きさはだいたい１・５メートルぐらいらしいが、こいつはハンパねえでかさだな。」

ガチャギリが少しずつ後ずさりながら言った。

「手強そうだな。しかしオレたちはさんざんレベルを上げてきたんだ。ここで苦戦するわけがねえ。いくぞ！」

ダイチが気合いの一声をかけて戦闘が開始される。ところが勝負はあっさり決した。ひたすらレベルを上げてきた３人にとっては、第１ステージのボスですら敵ではなかったのである。ダイチの号令から始まった３人の隙のない統率された総攻撃で、巨大モンスターはなす術もなく散っていった。

「なんだ、案外だったな。それともオレたちが強すぎるのか？」

戦闘を終えて一息ついてガチャギリが言う。

「そうだな。オレたちが本気だしたら、ざっとこんなもんだろう。それより急ごう。もう敵も出てこないはずだ。シナリオクリアの条件は、街から預かってきたこの金を納めることだからな。」

ダイチがそう言うと３人は都市に向かって走り出した。大きな城門の下をくぐり、街を出歩く人達に役所の場所を聞き込む。そうして見つけ出した役所の役人に預かっていたお金を手渡すと、ついに「

１ｓｔ　ＳＴＡＧＥ　ＣＬＥＡＲ」というロゴが表示され、ゲームをクリアしたときのテーマソングが流れ出した。画面は水色のロード画面の空間へと移行する。

「はあ、疲れた。」

ナメッチがその場にへたりこむ。方角を知る方法を得てからは、ほとんど走りっぱなしでゴールまで来た。まだ3分の1を消化したに過ぎないが、体力はほとんど残ってなかった。さすがのダイチやガチャギリもその場に座り込み、次のミッション開始まで休憩しようと思った。

「…かなり時間かかっちまったな。」

肩で息をしながらダイチがガチャギリに言う。

「ああ。でも正直あそこでフミエが現れなかったら、オレたちはあそこでリタイヤするしかなかっただろう。どういうつもりか知らんが、とりあえずヤツには助けられたな。」

ガチャギリが苦笑しながら返す。あの場面でまっさきに諦めたのはガチャギリだった。

「それがオレは気にくわん。仮にオレたちが果たし合いに勝ったとしても、それは敵の助けを借りた安っぽい勝利ってことになってしまう。それにオレたちにヒントを出してハンデを与えたとしても、自分たちは勝てるだろうという余裕にも腹が立つ。」

ダイチはあぐらをかき、腕を組みながら怒ったように言った。

「まあ、別にヒントはオレたちが頼んだわけじゃなく、ヤツが勝手に出したんだ。それでオレたちが勝っても安っぽい勝利にはならんだろう。それにしても、あの時点でオレたちのダンジョンに来るなんて、ヤツはよっぽど速く自分たちのダンジョンをクリアしたってことだろう。こりゃ得点はだいぶ差をつけられてるだろうな。」

ガチャギリは深刻な顔で考え込む。ゲームオーバーこそなかったものの、時間がかかり過ぎた上、レベルもかなり上がった。得点的にはかなり低いだろうなと覚悟した。

「わかってる。だから次こそはオレたちは最速クリアを目指す。レ

ベルも上がったことだしな。さて、次はどんなダンジョンでくるんだ？」

ダイチは次こそは、という思いでロード中の文字を見つめた。

#6　いざ、決着の時　－前編－　part10

すっかり日も落ち、光量が少なくなってきた廃ビルの一階。そこにはゲームの進行をモニターするデンパとアキラがおり、インターネット経由で勝負をモニターしているアイコが映るウインドウがあった。実際にゲームをプレイしているとかなり激しく動き回っているので気付かないかもしれないが、廃ビルの中は結構冷え込んできた。なのでデンパとアキラはかなり厚着をしている。

「やっぱりダイチさんも怒ってるじゃないですか。あれはさすがにまずかったんじゃないですか？姉ちゃんにもバレたら、ぼく命ないですよ。」

アキラがウインドウの向こうのアイコに困ったように訴える。

「だいじょぶ、だいじょぶ。バレるわけないって。だいたいダイチ達がとろいんだもん。ついには仲間割れまでしちゃうしさ。私はダイチとガチャギリの争いが見たいわけじゃないの。ダイチとフミエの真剣勝負が見たいのよ。」

アイコが笑いながらアキラに言う。アキラは自分のしたことを後悔していた。

砂漠のダンジョンでダイチ達の目の前に現れたフミエの正体、あれはアイコとアキラの仕業だった。砂漠の真ん中で途方に暮れ、ケンカまで始めてしまったダイチ達を見ていてアイコは歯がゆかった。ダイチにはフミエの永遠のライバルとして、そして男として、立派な戦いを期待していた。ところがフミエの方は順調に進んでいるのに、ダイチの方はともすれば第１ダンジョンでリタイヤになるかもしれない状況に陥った。そこでアイコはハッキングに強いアキラに、ゲームのプログラミングを書き換えさせてフミエの映像を出し、マイクを通してフミエの口まねをしてどうにかダイチ達をやる気にさせると同時に、攻略のヒントまで与えたのだ。ダイチの目の前まで迫っていた追跡くんを自爆させたのもアキラである。それはゲーム

内で両チームが不正をしていないか見守る立場にあるジャッジ係の禁断の介入だった。本物のフミエはその時、まだエルフの森の中をさまよっていた。作戦は存外にうまくいき、ダイチ達はそこからアイコの期待通りに第1ダンジョンをクリアする。

「それでも結構差が開いたね。フミエ達の方が得点としてはずっと上だ。ダイチ達はここから巻き返せるのかな？」

デンパが両チームの得点を見ながら言った。

「いえ、これはかなり接戦と言えるんじゃないですか。姉やヤサコさんハラケンさんの方は、当初はレベルを上げつつ慎重に進もうとしていましたが、森の中にいるとHP最大値が減っていくということで、速やかにクリアしなければなりませんでした。一方のダイチさんガチャギリさんナメッチさんのチームは、当初は戦闘の腕に自信があるので、レベルをそれほど上げることなく速やかにクリアしようとしていました。ところが結果はその逆に。お互いのチームが当初のゲームプラン通りにいかなかった。逆に言えば、お互いが選んだダンジョンで、お互いの思うつぼの展開になったということです。得点差こそ開きましたが、姉達が有利とも言えないんじゃないでしょうか。特に思ったほどレベルを上げられなかった姉達は後半不利に、レベルが思った以上に上がったダイチさん達は後半有利になりますからね。」

アキラが今の両チームの状況を分析する。この時点での大量得点差は問題じゃないという見解だった。

「つまり、フミエ達は後半息切れせずに逃げ切れるか。ダイチ達は後半で一気に差し込めるかっていうところね。」

ウインドウの向こうのアイコがアキラに確認する。

「ええ。ですので次のダンジョンはさっきよりも大事ですね。場合によってはここで勝負の大勢が決まってしまうかもしれませんしね。」

「なるほど。ところでさ、さっきから気になってたんだけど、このモニターの下の方にＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥっていうコマンドがあ

るじゃない。これは何なの？」
アイコがアキラに訪ねる。確かにモニターにはそのように表示された赤いコマンドがあった。
「えーっと、何でしょうかね？今までのシリーズにはなかったのでおそらく新要素だと思いますが。とりあえず触らないでくださいね。今調べますから。」
アキラがアイコに注意を促してヘルプを開いて調べ始めた。するとウインドウの向こうからアイコの「あっ」という声が聞こえて来た。
「どうかしましたか？」
なんとなくイヤな予感がしながらも、アキラがアイコに向かって訪ねる。
「ごめん。足滑らしちゃって、そのコマンド触っちゃった。」
アイコがウインドウの向こうで少しおどけたように舌を見せながら謝る。
「な、なんですってー！？」
アキラは天井を突き抜けるような高音で叫んだ。

ヤサコ、フミエ、ハラケンの3人はロードを終え次なるダンジョンに入るところだった。すると突然水色のロード画面が赤く点滅し始めて、緊急時のサイレンのような音も鳴り始めた。
「なに？今度は何が始まるの？」
ヤサコが不安な顔をしながら2人に訪ねる。しかしフミエやハラケンも予期していなかった事態のようで、周囲を見渡しながら戸惑っていた。
「ＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥが選択されました。以降のダンジョンを省略し、ステージを移動します。」
女性のアナウンスが聞こえてきた。
「え？エキストラステージって何なのよ？それに今、以降のダンジョンは省略しますって言わなかった？一体どうなってるの？」
フミエが慌てふためきながら言う。すると赤く点滅するロード画面

は少しずつ歪んでいき、その隙間から現れた暗闇が全体を黒く包んでゆく。3人の視界はわけのわからないままブラックアウトしていった。

#7　いざ、決着の時　－後編－　ｐａｒｔ１

「果たし合いの最中、私はずっと誰かにモニターされている気配を感じていました。それはデンパ君やアキラ君、それにアイコのものでもない、第三者のような気がしてなりませんでした。」

うすい紫色をしたベールのようなものが辺り一面を包んでいる。そしてその外側は一面の闇、その中で無数の星座が美しい形をなして輝いていた。下の方を覗き込むと、虹色をした雲が広がっている。それを見てここが宇宙空間でもない、幻想の空間なのだと思った。そこではじめて振り返る。そして圧倒された。目の前には巨大で荘厳な石造りの建造物が立ちはだかっていたのだ。それにその建造物はどこかで見たことがある。必死に記憶の中を彷徨い思い出す。少し前にテレビで特集をしていたギリシャの古代遺跡、名前は確かパルテノン神殿。そびえる何本もの巨大な支柱が印象的なその遺跡に、目の前の建造物は酷似していた。ふと横に目をやると石の彫刻で作られた神像が、こちらを見下げるように並んでいる。それも神秘的な雰囲気をかもし出していた。神殿全体のスケールは小学校のグラウンドがすっぽり入るくらいの大きさであった。

謎の空間に降り立ったヤサコ、フミエ、ハラケンの３人はまず周りを見回して唖然としていた。先ほどまでのどかな山あいの小村にいたので、一気にゲームの序盤から最終ステージにワープしたような気分だった。それに気になったのはロード画面が赤く点滅して「ＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥに移動します」というアナウンスが流れたこと。少なくともここが第２ダンジョンではないことは想像できた。ではＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥとは一体何なのか。以前のシリーズをプレイしたことのあるフミエやハラケンでさえそのことを知らなかったので、たまらずフミエはジャッジであるアキラやデンパに連絡を取ろうとした。バグが起きてこんなステージに飛ばされたのなら、

さっさと通常ステージ戻してもらわないといけないと思った。
「アキラ、デンパ！モニターしてるでしょう？一体このステージは何なの？これって私たちの第2ダンジョンじゃないでしょ？」
フミエが上のほうで輝く星座に向かって叫んだ。そうすればモニターしているアキラやデンパに声が届くはずだった。
「ちょっと待ってください。もうすぐダイチさん達もそちらに到着すると思うので説明はその時にします。」
アキラの声が天の声として空間中に響いた。
「ダイチ？なに言ってるの？果たし合いは別々のステージをプレイするんじゃなかったの？なんでダイチ達もこっちに来るのよ？」
いぶかしげにフミエがアキラに向かって叫ぶ。ヤサコとハラケンもアキラの言葉を聞いて顔を見合わせた。
「その点につきましては説明があれば納得されると思います。とりあえずダイチさん達の到着まで今しばらく待ってください。」
どこか言いにくそうにアキラが取り繕った。それを聞いたフミエはぶつぶつと何かつぶやいている。
　数分後、ダイチ達黒客のメンバーもその場所に現れた。到着してすぐにはヤサコ達と同じく状況を把握できていなくてぼーっと辺りを見回していたが、ヤサコ達3人を確認すると急にダイチのスイッチが入った。
「あーっ！お前ら！なんでこんなところにいるんだ！？ん？って言うかなんでオレたちがこんなところにいるんだ？いや待てよ、お前らさっきも出てきた幻影じゃなかろうな？」
ダイチの思考回路は混乱状態だった。いきなりわけのわからないステージに飛ばされた上、一緒になるはずもないフミエの姿がそこにはある。それにフミエは先ほど砂漠の蜃気楼のように現れたので、目の前のフミエが一体何者なのかもわかっていない。
「はあ？なにわけのわかんないこと言ってるのか知らないけど、それよりアンタ達、エキストラステージって何のことなの！？どうせアンタ達が仕組んだんでしょ！？」

フミエがダイチに詰め寄った。フミエはこのステージに飛ばされたのはダイチの仕業だと思っている。

「…えきすとらすてーじ？そうだ！オレたちはエキストラステージに飛ばされたんだった！おいフミエ！エキストラステージって一体なんだ？」

まったく整理できていない頭で、ダイチはフミエに訪ね返す。まったく噛み合っていない２人の会話にヤサコは吹き出してしまった。

「いや、だからそれを聞いてるの。まったく、もともとおかしかった頭がもっとおかしくなってるじゃない。まあいいわ。こんなパッパラパーはほっといて、ガチャギリ、このステージは一体何なの？アンタ達が仕組んだものじゃないの？」

「誰がパッパラパーやねん！」

いきなりダイチが関西弁になってフミエにツッコむ。それをフミエがさらっと受け流すとガチャギリが困ったような顔をして口を開いた。

「いや、オレたちはこんなステージ知らねえし、もちろんオレたちが仕組んだことでもねえよ。何かのバグじゃねえのか？アキラに聞いてみたらわかるんじゃねえのか？」

「真っ先に聞いたけど、アンタ達が到着してから説明するって。アイツなんか奥歯にものがはさまったように言いにくそうにしてたけど。」

ガチャギリの問いにフミエが返す。すると女の人のアナウンスが天の声として流れ始めた。

「ようこそ、ＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥへ。このステージでは特別ルールが適応され、両チームに直接戦っていただくことになります。」

「ちょ、直接たいけつぅ～！？」

その場にいた全員が口をそろえて言った。

「ただし、両チームがそれぞれ１つでもダンジョンをクリアしている時は、総得点やレベル、ステータス、残りアイテムなどは継承されます。その場合、これまで獲得した得点と、このステージで獲得

した得点を合計し最終得点を算出します。」
「それってどういうことだ?」
アナウンスを聞いてイマイチわからなかったダイチがガチャギリに訪ねた。
「だからオレたちの場合、第1ダンジョンで稼いだ得点と、このステージで稼いだ得点を合わせて最終得点にするんだとよ。つまり、オレたちにとっては第2ステージ目にしてもうファイナルステージ。これより後はないんだよ。」
ガチャギリがダイチに説明する。するとダイチが難しい顔になった。
「おいおい、それってオレたち不利じゃねえのか?さっきのステージは、絶対オレたち得点低いだろ。」
ダイチがひそひそ声になってガチャギリに言う。第1ステージの砂漠では時間がかかりすぎたので、得点も伸びないだろうとダイチは覚悟していた。
「いや、あながちそうでもねえんじゃねえか。レベルやステータスも継承されるって話だろ。オレたちはさっきのステージ、時間はかかったがその分レベルは伸ばせたからな。フミエ達がどんな戦いをしてきたのかは知らんが、戦闘においてはオレたちが有利なはずだ。直接対決で完膚なきまでに叩きのめせば、オレたちにだって逆転の芽はあると思うぜ。」
ガチャギリの言葉に、ダイチは納得して希望がでてきた。それに直接対決なら、本当の実力で勝負できるのでこっちの方がやる気も出る。
「このステージでは、相手チームのメンバーを1人倒すごとに得点が入ります。3人全員を倒した時点で勝利となり、勝利ボーナスとして高得点が獲得できます。また、このステージでは第三勢力としてモンスターが登場します。モンスターには敵味方の認識はなく、見境なく攻撃を仕掛けてきますし、もちろんダメージにもなります。また、モンスターを倒せば得点や経験点が入ります。共闘で倒して場合、モンスターに与えたダメージの割合に応じた得点や経験点が

獲得できます。共闘するか、単独で戦うか、無視するか、それはプレイヤーの自由となります。」

「なるほどね。直接対決って言っても、一筋縄ではいかなそうね。」

アナウンスを聞いたフミエがつぶやく。そうなればモンスターを相手に共闘するか、単独で戦うか、共闘すると見せかけて相手を攻撃するか、色々な戦い方が考えられる。ゲームの実力プラス心理的な駆け引きが勝負の鍵になるとそれぞれが思った。

「ちょっと待って。そもそもなんで私たちがこんなステージに飛ばされたの？せっかく第1ダンジョンを苦労クリアしたのに、結局は直接対決で勝負をつけないといけないの？」

ヤサコが全員に問いかける。しかしなんで自分たちがこんなステージに連れて来られたのか誰もわからない。

「その点についてはこちらから説明します。」

いきなりアキラの声が響いてきた。全員が今一度上空で燦然と輝く星座をふり仰ぐ。

「なんでこうなったのか、わかるようにちゃんと説明しなさいよ。」

フミエが見上げながらアキラに叱りつけるように言った。

「はい。みなさんがそのステージ送られたのは、こちらの操作ミスです。モニター端にあるＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥ発動のコマンドを誤って押してしまってこのような事態になりました。本当にすみません。」

本気で申し訳なさそうにアキラが説明した。画面越しに何度も頭を下げているのが目に浮かぶぐらい、ひきつった声だった。

「操作ミスぅ～！？なにやってんだよ！」

ダイチが呆れたような口調で言う。

「いや、操作ミスをしたのは僕じゃなくて…」

「みんな本当にごめんね。」

アキラが言い訳をしようとしたところで、急に全員の目の前にウインドウが現れた。

「アイコ？」

そのモニターを見たフミエがつぶやく。そこには申し訳なさそうな顔をして手を合わせているアイコが映っていた。
「そのコマンドを押し間違えたのはわたし。体の態勢をかえるときに足を滑らせちゃって、その足にコマンドがたまたま当たっちゃったの。キャンセルしようしたけど焦って間違えてＹＥＳを押してしまったの。ごめん。」
面目ない、と言うかのようにアイコが合わせた両手をあげて頭を下げて謝る。
「ったく。遠い所からムリヤリ参加したかと思えば、余計なことまでしおって。」
ダイチがアイコに対する不平をもらす。ガチャギリやナメッチも、はあやれやれとため息をついている。
「ねえアキラ。今からこれをキャンセルして、ステータスや得点はそのままにもう一度第2ダンジョンに戻ることはできないの？」
フミエはアキラにどうにかならないのか訪ねた。ゲームに関して何も知らなくて、別に悪気があったわけでもなくこうやって謝っているアイコを責めることはできなかった。
「それはちょっとムリみたいですね。ダンジョンに戻るには一度リセットして、また第1ダンジョンからやり直しになりますが。」
アキラの声を聞き届けて「どうする？」と全員が顔を見合わせた。
「このまま直接対決で決着をつけるか、もう一度最初からやり直すか。」
ダイチが全員に確認する。
「でももう現実世界ではもう夜よ。また今日中に一から始めるとなったら、終わるのは深夜になるんじゃない？そんなに遅くまで家に帰らないのはさすがにマズいわ。」
ヤサコが意見を出した。それにフミエやハラケンもうなずいていた。
「お前らは？」
ダイチがガチャギリとナメッチに訪ねる。
「まあ、別に家に帰る時間とかはこっちはどうでもいいんだが、問

題はまた一から始める体力が残っているかっていうことだな。それを考えると、オレはこのステージで決着をつけてもいいと思う。」
ガチャギリが答えた。実際その場にいた全員、第1ダンジョンで結構体力も消耗していたので、また1から始めるという選択肢はあんまり考えていなかった。
「ならこのステージで決着をつけるってことでいいな?」
ダイチが最終確認をし、全員がうなずいた。
「それにしても、こうなるんなら第1ダンジョンで苦労したのも、あんまり意味はなかったわね。」
フミエがふとつぶやく。確かに無駄に疲れただけだったかも、とヤサコも思った。
「いえ、あながちそうでもないですよ。」
そのフミエの言葉を聞いたアキラが入ってきた。「どういうこと?」とフミエが上を向いて訪ねる。
「両チームの勝利条件は同じじゃないってことです。現時点でコイル探偵局チームは、大黒黒客チームに大差でリードしています。黒客チームは探偵局チーム3名全員を倒してこのステージを制したとしても逆転はできません。黒客チームの勝利条件は、相手3名全員を倒してなおかつ全員生き残ることです。逆に言えば、探偵局チームは黒客チームのうち1名でも倒した時点で合計得点、つまり果たし合いでの勝利が決まります。ちなみにこれは両チームモンスターを倒さなかったとして計算しています。出現するモンスターを倒していけば、当然このへんの計算も変わってきますので覚えておいてください。」
アキラが得点状況を計算して説明する。つまり黒客は相手を全員倒すまで1人も倒されてはいけないということになる。
「それって断然こっちが有利ってことだよね?」
ヤサコが明るい顔をしてフミエに言った。しかしフミエは喜ぶような顔はしなかった。
「いえ、レベルで言えば黒客チームの方が断然平均値は上です。残

りアイテムなどもありますが、戦闘では黒客チームに部が有ると思います。それらの条件をトータルして見ても、両者の条件は五分五分ぐらいでしょう。」

アキラが分析して言った。残りアイテムは黒客の方が余裕はある。

「ねえアキラ君。これってここにいる6人全員が3対3で一度に戦うってこと?それとも両チーム1人ずつ出て行って1対1の勝負を3回繰り返すってこと?」

ハラケンがアキラに訪ねる。アナウンスはその辺のことに触れていなかった。

「3対3ですね。基本的には全員が同時にフィールドを立つことになります。ただ、例えばダイチさんがハラケンさんを倒すとしますよね。その時ハラケンさんはもちろんゲームオーバーとしてフィールド外にでることになりますが、ダイチさんもプレイ終了となってフィールドの外に出ることになります。つまり相手を倒したとしても、フィールドには両チーム同じ人数が残ることになります。」

アイキラの説明に全員が「なるほど」とうなずいた。相手を1人倒したとしても数的有利になることはない。そうなると1人も倒されてはいけない黒客チームの方がプレッシャーになる。

「わかった、アキラ。じゃあゲームを進めてくれ。」

誰にももう質問はないことを確認して、ダイチがアキラに向かって言った。

「わかりました。ではゲームをスタートします。」

アキラの声が聞こえると、ピコーンという音が響いた。

「それではゲームを開始します。両チームとも、神殿中央の光射す場所まで移動してください。」

するとアナウンスが流れて神殿の真ん中に二カ所、黄金色の光の円が現れた。6人は探偵局チーム、黒客チームと分かれてその円の中に移動した。

#7　いざ、決着の時　ー後編ー　ｐａｒｔ2

神殿の中には、直径1メートルはあろうかという支柱がだいたい縦も横も5メートル間隔で立ち並んでいた。戦闘中はこの支柱をうまく遮蔽物に利用することになる。

「両チーム分かれましたか?それでは今から3分間、それぞれのチームで戦い方の作戦会議をしてください。その後ゲームスタートとなります。」

そうアナウンスが流れると、両チーム体を寄せ合って、相手に話し声が聞こえないように静かに作戦会議を始めた。

「どう戦う?条件ではこっちが有利だけど、黒客はそれぞれの戦闘能力が高い上にステータスでも僕らより上だ。戦い慣れもしているし、まともにぶつかれば僕らに勝ち目はない。」

ハラケンが黒客の方をちらっと見ながら言う。

「そう、普通の戦い方では勝てない。だから私たちは無理せず1人だけを撃破することを考えましょう。私たちの目的はこの直接対決に勝つことじゃない。果たし合いに勝つこと。勝負に負けても試合に勝つ、大人の作戦でいく。そこでハラケン、こっちの作戦を立てるにあたって、まず向こうの出方を考える必要があると思うんだけど、そこはどう読む?」

フミエがハラケンに訪ねる。あくまでも果たし合いに勝つための、確実な作戦をとろうとフミエは考えていた。

「そうだね…まず3人固まって戦うことはないはず。向こうが3人固まって行動してくれれば、こっちも3人固まって行動できることになる。そうなればこっちは1人を狙って集中砲火をかけることができる。だからそんな危ない戦い方を黒客は選ばない。おそらく3人が分散して戦うだろうね。」

ハラケンがウインドウに表示されているマーカーを動かしながら言った。ウインドウにはレーダーが映っており、この神殿の俯瞰図と

6人を表すマーカーが点滅していた。マーカーの色はそれぞれの服の色に対応しており、ヤサコが紫、フミエがピンク、ハラケンが緑、ダイチが赤、ガチャギリが黒、ナメッチが青という具合になっている。レーダーは戦闘中には味方の位置だけが示されるだけになり、相手の位置を掴むことはできなくなる。

「じゃあこっちも3人がバラバラになって。相手のそれぞれとマッチアップする形になった方がいいかな?」

フミエもマーカーを動かしながらハラケンに訪ねる。

「仮に相手がバラバラになったとしても、こっちはあくまでも3人固まって行動して、1人を集中的に狙うっていうのは?」

ヤサコも積極的に提案してみた。

「あくまで1人を集中して狙うか…でも3人で一気に攻撃をしかけても、逃げようと思えば逃げられるんじゃないかな?これだけ遮蔽物も多いことだしね。その間残りの2人から背後から狙われ放題になるし、あんまり有効な作戦じゃないと思う。定石通りに相手と一対一で戦うのがまだ確実かな。」

ヤサコの作戦をマーカーを使ってシミュレートしながらハラケンが説明した。

「じゃあそれでいくとして、誰が誰とマッチアップするのか決めましょう。」

フミエが決断を下して次なる議題に入る。

「ここは奇をてらわないで、同じ属性同士で戦ったほうがいいと思う。見たところダイチは弓使いで、ガチャギリが剣、ナメッチが魔法使いだから、ダイチとフミエ、ガチャギリと僕、そしてナメッチとヤサコの組み合わせでいこう。」

ハラケンが言うと、2人はその方がわかりやすいとうなずいて了解した。

「あとは、誰を中心に狙うかよね。」

フミエが腕を組んで考え込んだ。ここが探偵局チームの作戦の一番のキーポイントだった。

「黒客チームの中で一番実力で劣るのは？」
ヤサコがフミエとハラケンに訪ねてみる。
「それは…」
「ナメッチじゃない？って言ってもダイチやガチャギリと比べるからそうなるだけで、ナメッチだって油断ならない存在であることは確かよ。」
フミエが話し込んでいる黒客の方を見て言う。シャクではあるがフミエもダイチ達の実力を認めており、誰を狙うにしても簡単にはいかないと覚悟していた。
「それに比較的ＨＰと防御力の低い魔法使いであるナメッチを狙うっていうのは、なんだか当たり前すぎる作戦だと思う。多分黒客もこっちの出方は読んでくるはずだから、何か対策をたてられるかもしれない。」
ハラケンが難しい顔になった。
「だったら、ダイチを狙いましょう。」
フミエが提案し、ハラケンが「その心は？」とフミエに問い返した。
「弓使いっていうのは基本的に複数人を相手にはできない。まず作戦としては、最初に決めた通りそれぞれ一対一で対峙する。例えばヤサコの場合はナメッチとマッチアップする。そこでナメッチがモンスターに気を取られた隙を狙って、ヤサコは一気にダイチのところまで走っていくの。それでダイチを複数の方向から狙うことができるから、アイツは対応できない。そしたら後ろからナメッチが追いついてくるはずだから、その時はまたヤサコはナメッチの相手をして。これを繰り返して、ダイチを撃破する。」
フミエがマーカーを使って説明した。チャンスがあれば一時的に数的有利を作り出すという、地道な作業を繰り返すという作戦だった。
「うん。それが一番確実な作戦かな。確かに弓使いなら数的不利の時の反撃は難しい。問題は後ろから追ってくる相手に無防備に背後をとられないことだね。」
ハラケンもおおむねこの作戦に賛成した。ヤサコもうなずいて了解

する。
「じゃあこんな感じでいきましょう。相手が戦い方を変えてきたら、状況に応じて無線で私が指示する。言うまでもないことだけど、モンスターにも十分気をつけて。あとヤサコ、この勝負は言ってみれば騙し合いよ。相手も色々揺さぶってくるようなことを言ってくるかもしれないけど、それをそのまま受け取らないで。その言葉の裏側まで冷静に読んで対処するのよ。」
フミエがヤサコに注意を促す。こういう心理戦も慣れていないはずのヤサコに、黒客は容赦なくつけこんでくるはずだと思った。基本的に心根が優しい人間ほど騙されやすい。
「うん。あんまりそういうの得意じゃないけど、頑張ってみる。」
ヤサコがこぶしを握りしめて返事する。その後もダイチ撃破のための作戦をいくつか相談して立てていった。

一方の黒客の作戦会議。とにかく3人全員を倒してかつ全員が生き残るというシビアな条件なので、ダイチ達は綿密な戦略を立てようとしていた。
「こっちは1人もやられてはいけない。ということでオレたちはバラバラになって戦おう。そしたら相手の戦力も分散するに違いない。逆に一対一ならステータスが上のオレたちの方に部がある。」
ダイチ達もマーカーを使って作戦をシミュレートしていた。その中でガチャギリは別のウインドウを開いて何やら作業している。
「相手が複数で1人を狙ってきたら？」
ナメッチがダイチに訪ねる。
「その時は逃げろ。反撃を試みるのはリスクが高い。こっちは1人もやられるわけにはいかないから、むこうより慎重になる必要がある。あくまで基本は相手を分散させることだ。」
ダイチが言い聞かせた。あんまり相手に背を向けるということはしたくはなかったが、この期におよんでは仕方なかった。
「もし相手が複数人で1人を狙ってくれれば、こっちの余った人間

が背後から攻撃できるからな。オレたちにとっても攻撃のチャンスだ。」
ガチャギリが言った。相手が仕掛けてきたら自分たちが仕掛けるというのが基本方針となった。
「うむ。それはそれとして、オレたちが分散して相手も1人ずつオレたちのマークについてきた場合、誰が誰とマッチアップするか、それがわかればこっちの作戦も立てやすいが。」
ダイチが腕組みして考える。
「そんなに考えることでもないんじゃね？オレは普通に同じ属性同士をぶつけてくると思うぜ。ダイチにはフミエ、ナメッチにはヤサコ、オレにはハラケンてな感じに。」
ガチャギリが探偵局チームの属性を確認しながら言った。ダイチもそれしか考えられないかとうなずく。
「一対一で戦った場合、ステータスではオレたちの方が上だから普通に各個撃破を狙っていってもかまわないと思う。ただ、オレとしては最優先に倒しておきたい人間がいる。」
ガチャギリが作業の手を止めて声を細める。ダイチとナメッチも「誰だ？」と聞き入った。
「ヤサコだ。魔法使いのヤサコは回復の魔法を使える。長期戦になった場合、仲間を回復させることができるあの能力は必ず活きてくる。だから早いうちにヤサコを押さえることを優先した方がいい。」
ガチャギリの言葉にダイチとナメッチは納得する。ただしその条件はこちらも同じということにダイチは気付いた。
「なら、アイツらが狙ってくるのは、同じ理由でナメッチってことになるかな。考えてみれば魔法使いはＨＰも防御力も低い。1人でも倒せば勝ちが決まるむこうにとっては格好の獲物になるな。」
ダイチが探偵局チームをチラ見しながら言った。ナメッチはそれを聞いてビビリ気味だ。
「おそらくそうだろうな。だからナメッチ。お前はあんまり無茶に戦闘を仕掛けるな。とりあえず攻撃を避けることを念頭に置け。必

要とあらば、オレたちの回復役に徹するんだ。」
ガチャギリがナメッチに指示する。
「でもさっきの話じゃ、オレとマッチアップするのはおそらくヤサコだろ。そのヤサコは最優先に倒さないといけないって言ったっしょ。なのにオレがそんな逃げ腰でいいんスか？」
ナメッチがガチャギリに訪ねる。それを聞いたダイチも「それもそうだな」と考え込んだ。
「いや、いい作戦がある。出現するモンスターを利用するんだ。」
ガチャギリが笑みを含みながら言う。そろそろ黒客の名参謀の本領発揮か？とダイチは期待した。
「まずお前はヤサコと対峙したら、ここは戦わないでモンスターを共闘で倒そうって持ちかけろ。ヤサコのことだ、おそらくその言葉に乗ってくれるだろう。そしたらお前はモンスターと戦うフリをして、なるべくダメージを負わないように動き回れ。そしてヤサコがピンチの場面でも手を貸すな。わかるか？要はモンスターにヤサコを攻撃させて、お前は逃げまわるんだ。」
ガチャギリが説明して、ナメッチが「ほうほう」とうなずく。
「でも、じきにヤサコもこれが罠だって気付くんじゃねえのか？平和協定を結んでおきながら自分のピンチも救ってくれないとなれば、オレならまず疑うけどな。」
ダイチが口を挟んだ。いかに人の良いヤサコでも、それだけで倒れてくれるとは思わなかった。
「そう。だからヤサコの残りＨＰとか、どれだけお前を疑っているかを考慮して、機が熟したら裏切れ。ヤサコに攻撃を仕掛けろ。ただしヤサコへのとどめはオレがさす。」
「なんで？」
ナメッチがガチャギリに訪ねる。そんな回りくどいことしなくても自分がとどめくらいさせるのに、とナメッチは思った。
「忘れたのか？このゲームは倒された方はもちろんだが、倒した方もフィールドを出なければいけない。お前がヤサコを倒してしまっ

たら、お前もヤサコと一緒にプレイ終了だ。そうなればオレたちの回復役もいなくなる。お前にはダイチのサポート役としてフィールドに残ってもらわないといけないんだよ。」
ポンポンとナメッチの頭を叩きながらガチャギリが言った。
「すげえな、どんだけ先を見通してるんだお前は。で、その後はどう戦えばいい？」
ダイチがガチャギリの作戦に感心しつつ、次なる作戦についても訪ねた。
「フミエとダイチはそのまま戦っているとして、次にナメはハラケンと対峙することになる。ハラケンは短距離攻撃中心の剣使いだから、中距離攻撃が繰り出せるナメッチの方が圧倒的有利だ。とにかくハラケンに距離を詰められないように気をつけて戦え。そうすれば普通に勝てる。」
「今度はオレッちがとどめさしてもいいわけ？」
「かまわん。最後はフミエとダイチに戦わせろ。そっちの方が盛り上がる。」
ガチャギリが笑顔で言う。最後は演出的に面白いという理由で作戦を立てていた。
「余計な配慮だな。で、最後はどう戦えばいい？」
少し呆れながらダイチがガチャギリに訪ねる。
「おいおい、もはや最後の一対一で作戦もなにもないだろう。ここは因縁の2人直接対決。正々堂々と勝負しろ。それで黒客リーダーが探偵局のリーダーに負けるっていうのなら、オレたちは所詮こんなもんだったって諦めるぜ。そう、最後はお前を絶対にフミエに負けたくないという気持ちにさせるっていうのが、オレの作戦だ。」
「へっ。」
それがダイチの返事だった。そうして言葉も交わさず、3人の輪の真ん中にそれぞれ右手を差し出して重ね合わせた。ダイチは大きく息を吸って腹に力を入れる。
「絶対勝つぜ！」

「おう！」

#7　いざ、決着の時　－後編－　Ｐａｒｔ３

作戦会議の時間が終了した。それぞれの円の中で向き合う両チーム。自分たちが立てた作戦に自信があるのか、フミエもダイチも笑みをたたえている。しかし誰も言葉を発しない。嵐の前の静けさがフィールドを包む。

「いよいよね。これで、すべてが決まるのね。」

ふいに落ち着いた口調でフミエが言った。そこには一抹の寂しさが感じられた。

「ああ。正直長かったぜ、お前の相手をするのは。どれだけオレが電脳力をつけようと、お前はすぐにオレに追いついてきた。認めてやるよ、お前はオレの良きライバルだったと。」

ダイチも静かな口調でフミエに返す。そこにいつもの威勢のいい２人の張り合いはなかった。

中学生になれば、このようにメガネで戦うようなこともない。フミエはメガばあから言われたメガネからの卒業を、この時強く意識していた。ダイチもフミエの気持ちを感じ取ったのだろうか、少し感慨深げな表情だった。そう、勝っても負けても次の試合のない、夏の甲子園の決勝戦を戦うような心境なのだろうとヤサコは思った。そしてヤサコも寂しくなった。今まで培ってきたものすべてをぶつけ合う勝負。それが終われば現実に引き戻される。現実に戻らなければならない。いつまでもメガネの幻に酔いしれていてはならない。それが大人になるということ。ここでようやくハラケンもメラメラを燃えていた理由もわかったような気がした。ハラケンだって純粋にメガネを楽しみ、メガネの腕を競っていた少年だったはず。だから最初で最後になるであろうダイチ達との真剣勝負を心から楽しみ、そして勝ちたいと思ったのだろう。もちろんそれはガチャギリやナメッチも同じ。そして、ヤサコ自身も。この儚い舞台は、ここにいる全員にとって夢のひと時になるはずだった。それを名残惜しむよ

うな時間が静かに流れる。いつまでもゲームが始まらないのも、進行役であるデンパやアキラもこの雰囲気を感じ取ったからであった。

「ふふん。本当は私がメガネを先に始めたんだけどね。そしたらアンタもメガネを始めて。むしろ私に張り合って来たのはアンタでしょ？まあ、色々バカなこともしたけど、退屈はしなかったかな、アンタのおかげで。別にアンタにライバルとして認められても嬉しくはないけどね。もともと私の方が腕は上だったんだし。」

フミエがダイチから目をそらしながら言う。ヤサコは始めてだと思った。今までとは違う意味で、ダイチを意識してるようなフミエを見たのは。すると突然ヤサコの耳にだけアイコの声が入ってきた。

「かなりいい感じじゃない。フミエとダイチ。この勝負が終わればいよいよあるかもね。あの2人がくっつく時が。」

「アイコちゃん…」

声には出さないようにヤサコは笑った。この場面を一番楽しんでいるのはアイコなのかもしれないとヤサコは思った。それにヤサコも、アイコの言うような展開もあるかもしれないと思った。

「ふん、まあいい。どうせこの勝負で白黒はっきりつく。もうそれ以上のひがみは一切なしだ。この勝負に勝った方が実力は上だと、きっぱり認めようぜ。」

いつもと違うようなフミエの態度を意識しないように、できるだけ感情を殺したような声でダイチが言う。

「ふふ、もとよりそのつもりよ。なら、そろそろ始めましょう。私たちの最終決戦。」

「ああ、お互い悔いを残さないように、全力でぶつかろうぜ。」

するとダイチがサークルを出てフミエの方に近寄った。そして右手を前に差し出す。

「しょうがないわね。」

そう言ってフミエも前に出て右手を差し出した。ダイチと堅い握手を交わし、正々堂々と戦おうということを確認しあう。惜しむらくはそれが本当に手と手を触れ合った握手ではなかったことだった。

探偵局チームと黒客チームは現実空間では違うフロアにいる。だからヤサコ達にとって黒客チームはただの映像にすぎない。フミエとダイチは感触もない握手を交わしたのだ。だからこそダイチは握手を求めたのかとヤサコは思った。

「デンパ、アキラ！始めてもいいぞ。」

ダイチが言って、フミエとダイチはまたそれぞれのサークルに戻った。

「はい。では始めます。」

アキラが返事をしてウインドウのコマンドを押す。するとアナウンスが流れ出す。

「ＥＸＴＲＡ　ＳＴＡＧＥ開幕です。両チームサークルの中に入ってください。」

神殿の中を通り抜ける風の音が、それぞれの気持ちを高揚させる。全員サークルの中で横一線になり、武器を装備して身構える。まさに今、決闘が始まろうとしていた。

「ＲＥＡＤＹ…．．ＧＯ！！」

外国人の男性のスタート合図が響き渡る。同時に探偵局チームが一斉にメガビーを照射して速攻を仕掛けた。ところがそれを読んでいた黒客チームはすぐに身を低くしながら移動し、それぞれ支柱の陰に身を隠した。照射が終わったところで黒客３人はバラバラの方向に分散する。気付けばエレキギターの速弾きのようなＢＧＭが流れ始めている。そこで全員鳥肌が立った。この最高の舞台で戦い合う主人公であることを改めて自覚して。

「やっぱり読まれてたね。」

先制攻撃は失敗に終わったが、別にがっくりしていないような口調でハラケンが言った。

「まあ、これくらいは当然よ。なら、打ち合わせ通りの形でいくわよ。レーダーでお互いの位置やモンスターの位置を常に確認しておくこと！」

「了解！」

フミエのかけ声に、ヤサコとハラケンが威勢良く返す。３人はそれぞれマークする相手を追うように移動を始めた。

#7　いざ、決着の時　－後編－　ｐａｒｔ４

長方形のレーダー上で言えば右上の端に移動したナメッチをヤサコは追いかけた。ヤサコの姿を確認したナメッチはとりあえず予想通りの展開に笑みを浮かべ、特に攻撃も仕掛けずにおびきよせるように逃げる。ヤサコも後ろから攻撃を当てようと思ったが、うまく支柱に身を隠しながらナメッチが逃げていくので狙いを定めきれない。するとレーダー右上の一角にある支柱に身を隠してナメッチが立ち止まり、顔だけをのぞかせた。ヤサコも攻撃がくるとかと思い、ナメッチから二本離れた支柱の陰に身を隠し様子をうかがう。

「オレの相手はヤサコか～。」

唐突にナメッチが言う。それには困ったようなフリをしているような芝居くさい雰囲気があった。

「私で助かったでしょ？フミエちゃんやハラケンには、私は遠く及ばないし。」

ナメッチを牽制するために、ヤサコはナメッチの本心を言い当てようとした。

「いや～、ヤサコの方が助かってるかもよ？オレだってダイチやガチャギリには遠く及ばないし。だからオレ、ガチャギリから逃げろって言われてるんだ。下手に戦うとすぐやられるから。」

来た、とヤサコは思った。ナメッチは早速心理戦を吹っかけてきた。そもそもナメッチが油断ならない実力であるということは、さきほどフミエやハラケンから聞いていた。そんなナメッチが初心者の自分相手に逃げ回るはずがないとヤサコは考える。つまりナメッチはヤサコを油断させといて総攻撃をかけるつもりなんじゃないかと、ヤサコは思った。

「じゃあさ、ナメッチが私から逃げるつもりだって言うなら、私はガチャギリの所に行くわよ。ガチャギリと戦っているハラケンに加勢を頼まれてるの。」

ヤサコも負けずに応戦する。しかし本当の作戦を言うのも気が引けたのでヤサコは嘘をついた。ヤサコ達の本命はダイチである。これでナメッチはどう出るか。

「え？ちょ、ちょっと待った。そんなことをしたらオレはヤサコを背後から攻撃するよ。」

ヤサコの反応が予想外だったのか、ナメッチが焦ったように呼び止める。

「それって私を追いかけるってことだよね？全然逃げてないじゃん。そんなことをするんなら最初から正々堂々と戦わない？一緒のことだよ。」

ヤサコは、ナメッチが自分のことを引きつけておきたいんだなと思った。考えれば当然のことで、黒客達は複数人で攻められることを恐れている。なのでヤサコは、どうにかして長い時間ナメッチを足止めする方法はないかと考えた。

「では、最初のモンスターが登場します。気をつけてください。」

ナメッチが次の言葉に詰まっていると、いきなりアナウンスが響いてきた。すると銀河の果てから何かが飛んでくるのが見えた。だんだん近づいてきたそれはウオーンと場を揺るがすような大きなうなり声を上げる。

「ド、ドラゴン！？聞いてないぞ！モンスターが出てくるって、こいつ明らかにボスレベルでしょ～！」

ナメッチが叫び、ヤサコも、そしてフィールドの全員が息をのんだ。登場したモンスターは巨大な胴体をもち凶暴な顔つきをした赤いドラゴンだった。胴体の割には小さな翼を羽ばたかせて、神殿の周りを旋回しながら獲物を探しているような目で中を見回している。その威圧感は明らかにダンジョンのボスレベルだと誰もが確信した。

「あんなモンスターを相手にしながら、黒客チームとも戦わなくちゃいけないの？」

ついヤサコも本音が出てしまった。両方を気にしながら戦うなんて、そんなことが自分にできるのかと思った。

「ちなみにモンスターによる攻撃は致命傷になることはありません。とどめをさすことができるのは、相手チームが攻撃したときだけです。」

アキラが天の声となって補足説明をする。つまりモンスターの攻撃だけで倒されることはなく、最後の一撃は必ず相手の手によって下されなければならないということだった。

「な、なあヤサコ。ここはさあ、手を組んであのドラゴンから先に倒すっていうのはどうよ？」

ガチャギリに言われた通りにナメッチがヤサコに持ちかける。ヤサコはナメッチの言葉に悩んだ。今度はどんなつもりで言ってるのか。普通に考えれば、ナメッチは一緒に戦うフリをして、頃合いを見計らって裏切って総攻撃を仕掛けてくるだろうと思う。だったら自分はナメッチよりもはやく裏切ろうか。いや、そもそもナメッチに裏切る気があるのか。黒客チームは1人も倒されてはいけない立場。彼らが果たしてそんな賭けのような作戦にでるのだろうか。普通に自分と戦えば勝てるはずなのに、自分に疑いを持たせて共闘することにメリットはない。つまりナメッチの言葉は本心から出た言葉。考えてみれば自分にとっても都合がいい。自分たちの狙いはダイチであり、ムリにナメッチを攻撃する必要もない。ナメッチがモンスターに気をとられている間に、自分はダイチを攻撃しにいけばいい。

「いいわ。その代わり絶対に裏切らないでね！私も絶対に裏切らないって誓う。」

めまぐるしく頭を動かし考え抜いて、ヤサコはナメッチの提案を受け入れることにした。

「わかってるよ。オレも絶対に裏切らない。」

ナメッチが断言し、お互い胸の内に思惑を秘めた共闘が始まる。まずは旋回していたドラゴンにまずナメッチが杖を向けて雷を撃ち込んだ。叫び声を上げて、怒りに目が吊り上がったドラゴンは、2人のいる一角に火の玉を吐き出して攻撃してきた。

「うわっ！」

ヤサコは必死に支柱の陰に身を隠してやりすごす。先ほどのダンジョンのボスよりもツライ戦いになるんじゃないかと、ヤサコは予感した。

#7　いざ、決着の時　－後編－　ｐａｒｔ5

その頃ガチャギリとハラケンも、支柱の陰に身を隠しながらお互いの出方をうかがっていた。互いに接近戦を主体とする剣使いなので、徐々にハラケンはガチャギリとの間合いを詰めようとしている。

「オレの相手をしてくれるのはハラケンか。へっ、こりゃ楽しみだぜ。お前とは一度手合わせしたいと思ってたんだ。普段のキャラとは裏腹に、お前が相当な電脳力を持ってるってことはお見通しだぜ。」

支柱の陰でガチャギリが笑みながら言った。ハラケンはその言葉を少し嬉しく思った。そう、ハラケンだってカンナの事故が起こるまで、普通に友達と電脳力を競い合っていたメガネに夢中の少年だった。目立たないキャラのため学校でもそれほど有名な存在ではなかったが、ガチャギリはそんなハラケンの実力を見抜いていたのだ。

「フフッ。僕も楽しみだよ。ダイチにも勝るとも劣らぬ実力のガチャギリと差しで対決できるなんて。でもまあ、欲を言えばイサコ率いる黒客と戦いたかったかな。って言うより、せっかくなら黒客が束になってもかなわなかったイサコと対決したかったよ。」

ハラケンもガチャギリを挑発するように言った。今までとは違うハラケンの態度に驚きつつ、すぐに笑って返した。

「へっ、言ってくれるねえ。オレたちじゃ役不足ってか？上等だ。今の言葉はちょっと聞き捨てならなかったぜハラケン。こうなりゃ全力で叩かせてもらうぜ。」

「望むところさ。でもたとえ僕がガチャギリに負けたとしても、黒客のうち1人を倒せば僕らの勝ちだからね。僕は気楽にやらせてもらうよ。」

ハラケンがガチャギリを揺さぶるように言った。

「やめようぜ、お互いポーカーフェイスなんだ。変な心理戦をしたって、オメーの心なんて読めねえよ。」

クックックと笑いながらガチャギリが言う。すでにその言葉も心理戦の一つじゃないのかとハラケンは思った。

「そうだ、ハラケン。オメー、飛び道具持ってるか？」

ガチャギリが何か思いついたように言う。

「メガビーを装備してるけど。そっちだって直進くんや追跡くんを装備してるだろ？」

ここは隠してもガチャギリにはお見通しだろうと思い、ハラケンは正直に申告した。

「もちろんしてるぜ。だがなあ、精度や威力でメガビーにはどうやったって勝てないんだよ。」

そういうとガチャギリはハラケンの方に向かって、銃のようなものを床を滑らせて渡してきた。

「これは？」

ハラケンが床に転がったそれを見ながら訪ねる。

「電脳ハンドガン、Ｏｐｅｒａｔｏｒモデルだ。一発の威力は直進くん一発程度だが、使いやすく精度も高い。それからこれも。」

ガチャギリはさらにマガジンを５～６個ハラケンによこした。ハラケンもうすうす感じてはいたが、ガチャギリはこういう武器系統に目がないように思われた。

「どういうつもりなんだ？まさかメガビーと交換してくれとでも？」

ハラケンがガチャギリに訪ねる。敵に武器を渡すなんて一体どういう思惑だろうとハラケンは思った。

「ちがうちがう。オレたちは剣使いだが、それぞれ装備している飛び道具のおかげでなかなか接近戦にならないと思うんだ。そこで今回はお互い剣とハンドガンを持って、その他の武器は封印して、正々堂々と決闘しようってことだよ。」

ガチャギリが言う。するとフィールド全体にアナウンスが流れ、ウオーンというううなり声とともに赤いドラゴンがフィールドに現れた。

「そんな…あれがモンスターなのか？あんなのが来たらこっちの勝負どころじゃないな。」

ハラケンがドラゴンを見て唖然としてつぶやいた。さすがのガチャギリもこれには驚きを隠せない様子だった。
「な？あんな空中を飛び回ってるヤツには銃の一つでもあった方が心強いだろ？メガビーだって、言うほど残ってないんじゃねえのか？」
ガチャギリが気を取り直して言う。確かにハラケンのメガビーの残量は第1ダンジョンで半分ほどまで減っていた。ドラゴンが現れたことを考えるとそれは決して安心できる残量ではなく、銃があった方が助かるということも事実だった。
「わかった。なら、ありがたく使わせてもらうよ。」
ハラケンはそう言うと銃を腰のベルトの所に挟み込み、必要な時は剣を右手で、銃を左手で構えられるようにした。
「そのかわりメガビーは封印してくれよ。まあ、オレの銃は威力の高いデザートイーグルだけどな！」
そう言うとガチャギリは支柱の陰から飛び出して、3～4発ハラケンに向かって発砲した。ハラケンはさっと身を隠すと、ガチャギリに気付かれないように接近を開始する。ドラゴンはヤサコとナメッチの攻撃に引きつけられており、当分こちらに来る心配もなかった。
「それだけ無駄撃ちができるってことは、相当弾薬にはゆとりがあるってことだろうね。」
身を低くして走りながらハラケンが言った。
「今回は使い勝手の悪い直進くんよりも、こういうハンドガンと弾薬を多めに装備したからな。それにこっちの方がオレの趣味に合う。」
ガチャギリも支柱と支柱の間を移動しながら返す。
「なるほど。ならこのまま銃撃戦を続けようか？火力の高い銃を相手に接近戦は危険だしね。」
ハラケンにとってはこのまま遠距離戦が続いた方が都合が良かった。ハラケンはガチャギリではなくダイチを攻撃することが本命であり、しかもダイチを遠くから狙えるハンドガンもガチャギリからプレゼ

ントされた。ガチャギリとの接近戦に持ち込むより遠距離戦の方がダイチも狙いやすい。そこでハラケンはこの場所からダイチを狙えるだろうかと、フィールド全体を見渡していた。すると突然ハラケンの目の前の空中に円盤のような黄色いサークルが現れる。ハラケンはそれを見たことがあったが、認識するまでに時間がかかった。それに戸惑っていると円盤からは次々と弾丸が飛び出してきた。さすがに至近距離で弾丸を浴びたハラケンはよけきることができず、その場に倒れ込んだ時には大ダメージを受けていた。

「まさか、ショートカットなんて。」

倒れてから転がるようにして隣の支柱に隠れたハラケンが言った。目の前に現れた円盤はショートカットと呼ばれる電脳のトンネルだった。空間の歪みを利用して作られたそれは、ある場所から離れた場所を電脳上でつなぐことができる。今の場合、ガチャギリの立っている場所からハラケンの立っている場所をショートカットでつなぎ、その入り口にあたる黄色い円盤の中にガチャギリが銃を打ちこんだ。その撃ち込まれた弾丸がトンネルの出口から飛び出してハラケンに命中したのだ。

「空間の設計ミスを利用して作られるショートカットが、なぜこの場所に現れるんだ?この空間はゲームのプログラム上の、言ってみれば完成された空間。歪みなんかないはず。」

ハラケンが起き上がってガチャギリに言う。ハラケンの知識ではゲームのプログラムを外から書き換えないかぎり、そんな芸当はできるはずないと思った。

「頭が固いんだよ。確かにゲーム空間のプログラミングを書き換えない限り、ショートカットは作れねえ。だがな、あることに気付けばこれぐらいのことどうってことないんだよ。」

ガチャギリが得意になって言い、再びショートカットでハラケンを狙おうと様子をうかがった。ハラケンはずっと同じ場所にいるのは危険だと思い、常に動き回りながらガチャギリの言葉の意味を考えた。

「どうした？逃げ回るだけか？ってあれ？どこ行った？」
ガチャギリはウインドウを気にするあまり、ハラケンの場所を見失った。とりあえず近くにいないことを確認して、どこかの支柱に隠れているんだろうと思いつつ、今度はショートカットを利用してヤサコやフミエを狙おうと考えた。準備が整うとダイチとナメッチにその旨を無線で伝え、もう一度ハラケンの方をうかがった。しかしまるで誰もいないように整然としており、さすがに不審に思ったガチャギリは支柱から離れて辺りを見渡す。すると突然背後からバッという音が聞こえた。その音に心当たりがあったガチャギリは振り返らずにすぐ近くの支柱の陰に飛び退く。ところが目の前にはショートカットの黄色い円盤が口を広げて待っていた。
「な、なにい！？」
ガチャギリが思わず叫ぶ。そして目の前から次から次へと弾丸が撃ち込まれる。目を開けることもできず、態勢が悪くよけることもできず、ガチャギリは８発の弾丸をもろにくらってしまった。８発撃ち込まれたところで銃撃が止んだので、ガチャギリはすぐに身を翻して別の支柱に隠れる。
「なんでショートカットが！？」
ぜいぜいと息切れしながらガチャギリがつぶやく。
「確かにゲーム空間のプログラムを書き換えないかぎりショートカットは作れない。でも実際なんてことない、現実の電脳空間を利用すればいいんだ。このゲームの空間は、廃ビルの電脳空間の上から重ねて見ている幻想空間にすぎない。だから廃ビルの電脳空間をいじればショートカットなんて造作もなく作り出せる。ショートカットの作り方はダイチに昔教わったことがあるしね。」
ハラケンがガチャギリに言う。ガチャギリの言葉からヒントを得たハラケンは、すぐにキーボードを操作して廃ビルの電脳空間を計算し、自分もショートカットを使えるようにした。ガチャギリへの攻撃が８発で止まったのは、ハラケンの持つハンドガンの装弾数を撃ち尽くしたからであり、ハラケンはマガジンを入れ替えてさらなる

攻撃にでようとしたが、その前にガチャギリが逃げたのだ。
「しかし現実の電脳空間に存在する電脳体は、ゲーム上に反映されないっていう法則が頭によぎらなかったのか？」
ガチャギリが不思議そうにハラケンに訪ねた。
「それも思ったよ。例えば現実の電脳空間に電脳ペットやサッチーやキューちゃんが存在したとしても、ゲーム中のメガネはそれを認識しないってやつだろ？そのためにゲーム中サッチーやキューちゃんが近くにいることに気付かず、メガネをフォーマットされた子どもがいるっていう話も聞いたことがあるけど。でもそれはゲームの機構として認識されないっていうことで、ショートカットみたいな違法な電脳体は、そもそもゲームに除外される電脳体として登録されていないんじゃないかと思ったんだ。メタバグ系武器が使えるのも全部そういうことだろ？」
ハラケンが説明しながらガチャギリの次の出方をうかがった。すると今度は黒いスーパーボールのようなものが目の前に投げ込まれ、たちまちそれは黒い煙幕となりハラケンの視界を奪った。
「…見事だハラケン。相手の技をすぐに自分のものにしてしまうセンス、頭の良さ。少しはやると思ってたが、まさかここまでとは思わなかったぜ。」
ガチャギリの声がしたかと思うと、今度は晴れかけた煙幕の向こうから思いっきり剣を振り上げてつっこんできた。ハラケンはとっさに剣を構え、ガチャギリの一振りをカキンという金属のぶつかり合う音を立てて防いだ。
「そっちこそ、容赦なくあの手この手を使ってくるね。こんなに緊迫した戦いは僕も初めてさ。」
ハラケンがガチャギリの剣を払いのける。２人は互いに戦いの楽しさを噛み締めながら、近距離の剣術戦を開始した。

#7　いざ、決着の時　－後編－　part6

フミエとダイチはほとんど言葉を交わさずに戦っていた。もう2人の間に余計な言葉はいらないということでもあったが、正確に言うと言葉を交わす余裕もないと言った方が正しかった。勝手知ったるお互いの手のうちはほぼ読むことができ、それを上回ろうと息つく間もない攻撃を仕掛け合う。フィールド上の3組の中で一番激しい戦いをし、ほとんど聞こえてくるのは互いの激しい息づかいだけであった。

「くっ、しつこいフミエめ！これでもくらえ！」

ダイチはとっておきの装備である追跡くんをフミエにロックオンして撃ち込んだ。その時フミエはダイチを弓で狙っていたが、すぐに構えをやめて目の前に鉄壁を投げる。追跡くんは鉄壁を上から避けてフミエを狙うが、姿勢を低くしたフミエは捉えきれず上を通過する。しかし追跡くんはUターンして再びフミエを狙う。そこでフミエはメガビーを連続照射した。向かってくるミサイルを恐れずメガビーを確実に照射し続けた結果、フミエは追跡くんを撃墜した。ところが前方に気を取られているフミエの側面にダイチは急いで回り込み、今度は装備していたハンドガンでフミエを狙う。一発目こそフミエはよけきれなかったが、ダイチの射撃に気付くとすぐに斜め下方向に倒れ込むように移動した。すぐに片膝をついて態勢を整えたフミエは、メガビーの構えをとってすぐさま発射した。狙いをつける時間もなかったが、発射されたメガビーは銃撃に集中していたダイチを正確にとらえる。カウンターが決まってフミエはすぐさま支柱に身を隠す。ダイチも急いでマガジンを入れ替えリロードすると、今度はウインドウ操作を始めた。するとダイチの様子をうかがっていたフミエの目の前にショートカットの円盤が現れる。それに気付いたフミエはとっさに身を低くして飛び出してくる弾丸をよけた。ハンドガンに装填された全弾を撃ち尽くすと、ダイチは舌打ち

をしながらウインドウを操作してショートカットを閉じようとする。すると今度はダイチがさっきまで弾丸を撃ち込んでいた目の前の円盤から、エメラルド色の光線が飛び出してきた。意表をつかれたダイチはよけきれず大ダメージを負ってしまう。

「くそっ！ショートカットを利用して反撃してくるとは！」

ダイチが唇噛み締めて悔しさをにじませながら言った。ショートカットの円盤は入り口にもなるし出口にもなる。フミエはダイチが出口として使った円盤の中にメガビーを撃ち込み反撃したのだ。

「スキがありすぎ。アンタよく今まで生き残って来れたわね。」

フミエの言葉にダイチは返す言葉がなかった。これまでのダイチの攻撃はことごとく失敗しているのに、フミエが隙をついて仕掛けてくるカウンターは鋭く、ダメージでも押されていた。悔しいがフミエの実力は認めざるをえない。しかしこの勝負で負けるわけにはいかなかった。おそらく最後になるであろうフミエとの戦いで負けるということは、一生フミエよりも下という位置づけになることを意味する。

ダイチはずっとフミエに想いを寄せていた。そしてずっとその気持ちを素直に伝えられずにここまできた。もちろんダイチだって想いを伝えようとしなかったわけじゃない。しかしことごとくそれは空回りしてしまっていた。その反動として、それを隠すためにダイチはいつもフミエと張り合ってきた。メガネに関してもそうだ。フミエと競い合っているうちに電脳力はめきめきと上がり、目立ちたがりのキャラも手伝って、いつしか大黒黒客リーダーという小学校の中でも随一の存在になっていた。そこからはフミエと戦うことを宿命づけられてしまった。フミエはコイル電脳探偵局のリーダーとなってダイチに対抗する。その敵対関係にあって、ダイチの恋は許されぬ恋となったのだ。

それを痛感したのが昨年の鹿屋野神社での夏祭りだった。あの時ダイチは果たし合いを申し込むためにフミエ達に接近した。フミエ達と戦うこと、それはイサコに従った黒客の意志だった。あの時す

でにダイチはリーダーの座をイサコに奪われていたが、それでも黒客の一員としてフミエと戦わなければならないと思っていた。勇んで果たし合いをたき付けようとした時、浴衣に袖を通したフミエが現れる。すべてがはじけるような思いだった。そして、フミエと一緒にまわる夏祭り。これが一切なんのしがらみもなく楽しめたらいいのに、とダイチは何度も思った。しかし黒客の一員としてのメンツもある。そのはざまでめまぐるしく葛藤し、そしてダイチは言わなければならなかった。

「…オレは、お前なんか、だいっきらいだ！！」

そう、あの時にダイチはフミエと戦う決意をした。甘い感傷ではなく、傷つけ合う痛みを選択した。

だからこそこの勝負には負けられない。いずれこの想いをフミエに伝えるにしても、そのフミエに負かされるような沢口ダイチにその資格はない。電脳という虚しい幻の世界だとしても、男としてこれだけは譲れなかった。いや、お互いこれだけ打ち込んだものだからこそだ。その情熱がこれしきのものだったなんて、フミエに思わせたくはない。

ダイチの脳裏に色々な思いがよぎる中でも、2人の激しい戦闘は続いた。その中で少し息を整えるために休みたいとお互い思っていた。しかしダイチもフミエも相手に弱みを見せたくはない性格である。それに自分がバテていることが相手に知れたら、畳み掛けられるかもしれない。その思いから休憩しようだなんて切り出せるはずもなかった。頭も体もフルに動かしながら、果てしない戦いが続く。モニターの向こうのアキラやデンパ、そしてアイコも食い入るように2人の戦闘を見守った。

するとダイチの目の前に意外な人物が立っていた。ぜいぜいと荒い呼吸をしながら、ダイチはごく普通に話しかける。

「…ヤサコ？なんでここに？」

ダイチの第一声にヤサコは少し驚いた。自分が敵であること自体、ダイチは忘れてるんじゃないかとヤサコは思った。

「…ごめん、ダイチ君。フミエちゃんとの戦いの邪魔をして。」
ヤサコはダイチから目を背けながら、魔法の杖だけをダイチに向ける。何だか心苦しかった。作戦とはいえ、フミエとのギリギリの戦いを楽しみ、そして疲れきっているダイチを攻撃することが。
「くっ、そういうことか！」
ダイチは探偵局チームの狙いに気付き舌打ちをする。自分はフミエを倒そうと躍起になり、とにかくフミエに攻撃を仕掛けた。しかしフミエは思った以上に手強く、隙を見せないどころか反撃までしてくる。それを上回ろうとさらなる攻撃を仕掛ける。そして体力はすぐに尽きる。すべては相手の思うつぼだったのか。自分の動きが鈍ったところで複数人で攻撃する作戦だったのか。しかもヤサコを引きつけておく役のナメッチは近くにいない。絶望にさいなまれつつダイチはヤサコから逃げようとする。しかし疲れた足はもつれ、ダイチは近くの支柱に寄りかかるしかなかった。
「なにしてるのヤサコ！早くダイチを攻撃して！」
隙だらけのダイチを目の前に、呆然と立ち尽くすヤサコに向かってフミエが叫ぶ。でもヤサコは動かない。
「…できない。」
ヤサコはうつむきながら言葉を絞り出す。
「できない？」
フミエが驚いた表情でヤサコを見つめた。
「…攻撃なんてできないよ。フミエちゃんとダイチ君は、直接決着をつけないといけない関係。それに2人とも息も上がって足が動かないぐらいの戦いを今までしけきたのに、本当に楽しそう。ダイチ君なんか私のことなんか最初は敵だと認識もしていなかったぐらいに、フミエちゃんとの戦いに集中していた。なのに私が手を下すなんて。2人の長年の因縁なんか知りもしない私なんかが踏み込める戦いじゃない。」
ヤサコが思いつめるように言う。そもそも自分がこの戦いに参加する資格なんてあるのかとも思った。ここで自分が戦闘に参加するこ

とは、ただ水を差すだけではないかと。ダイチのフミエへの想いに気付いているヤサコには、こんなダイチを攻撃することなどなおさらできなかった。

「なに言ってるのヤサコ。そんなの関係ない。これは私たちだけの戦いじゃないの。ここにいるみんなが必死で勝利を目指しているの。個人的な因縁なんか、みんなのこの戦いにかける思いに比べればなんてことない。」

歩いて乱れた呼吸を整えながらフミエがヤサコの方に寄った。その手には弓が握りしめられている。

「そうだ、ヤサコ。そんなこと気にする必要なんてねえ。これはチーム戦なんだ。複数で1人を攻撃してはいけないルールなんてない。ここでオレがやられるということは、単にオレの実力が足りなかっただけのことだ。さあ、遠慮なくこい。」

ダイチは身を隠して頭だけをヤサコ達の方に向けながら言う。ヤサコは本当に正々堂々だと思った。ヤサコは入ってこないでくれとでもここでダイチが言ったなら、まだ自分も攻撃しやすかった。しかしダイチはこの劣勢でかかってこいと言う。自分の腕に自信があるのか、逃げることはキライなのか。余計にヤサコはダイチを攻撃したくなくなった。これだけの覚悟があるなら、心行くまでフミエと2人で勝負させてあげたかった。

「ナメッチ。ここにヤサコがいるんだが、どういうことだ？お前はヤサコを引きつけておくのが役目だろ。」

ヤサコが戸惑っている間に、ダイチは指電話でナメッチに向かって話しかけた。怒っているわけでもない、ただ静かな口調だった。

「ヤサコ？ああ！いつの間に！ごめんオヤビン！すぐそっちに向かうッス！」

ナメッチはドラゴンの相手をするのに夢中で、ヤサコがその隙にダイチの所まで向かったことに気付いていなかった。

「オレも進退窮まった。すぐに来てくれ。」

諦めにも似た口調でダイチがナメッチに言う。突然フィールド内に

3発の銃声が響き渡り、ウッとダイチが声を漏らした。その弾丸が飛んで来た方向にヤサコ、フミエ、そしてダイチが顔を向ける。

「…ちっ、ハラケンか。やってくれるねえ。」

ダメージを負ったダイチは笑っているようだった。煙の上がる銃口を顔の横に上げたハラケンも、そのダイチの顔を見て笑ったようだった。

「さあ、ヤサコ！とどめをさすわよ！」

フミエがヤサコの肩を叩いて走り出そうとする。ダイチ達は回復アイテムを装備していない。自力で回復する術を持っていないダイチなら、あとは総攻撃をかけるだけで倒れるはずだった。

「ダイチ！貴様らよくもダイチを！これでもくらえー！」

ダイチがピンチになっていることに遠目から気付いたガチャギリは、両手に追跡くんを装填したランチャーを持っていた。ダイチにとどめをさそうと動き始めたヤサコとフミエをロックオンして引き金を引く。

「くっ。あとちょっとって時にややこしいもの飛ばしてくれたわね！ヤサコ！メガビー発射用意！！」

シューッと音を立てながら接近するミサイルを確認したフミエは、優先的にこちらを撃ち落とすことに決めた。追跡くんによるダメージはかなり痛い。ここでダイチを倒せなかった時のためにも、無駄なダメージを負いたくはないという判断だった。

「わ、わかった！」

ヤサコとフミエはメガビーを照射してミサイルを狙う。ところがミサイルはなかなか落ちてくれない。

「そいつは独自改良した強化版だ！耐久力は通常の倍はあるぜ！」

必死にミサイルを攻撃しているヤサコとフミエに向かってガチャギリが叫んだ。その時ヤサコは、ガチャギリのさらなる反撃を食い止めようと剣を振りかざして斬り掛かるハラケンの姿を目の端で捉えた。しかし問題は飛んでくるミサイルが落ちないことである。ヤサコはもうダメだと思ってメガビーの照射をやめた。

「ヤサコ！伏せて！」
フミエが必死に叫び、その言葉通りにヤサコはその場に倒れ込む。
ミサイルが頭上すれすれを通って行くのがわかった。
「ヤサコ！」
伏せていたフミエすぐに起き上がりヤサコの元に駆け寄った。しかし2基のミサイルは折り返して再び2人を狙う。
「どうするの？あれは全然落ちてくれる気がしないよ！」
必死にヤサコがフミエに訪ねる。フミエがめまぐるしく頭をはたらかせていた。
「もうメガビーも無駄撃ちできない。ヤサコ！ここは私を信じて、ここを動かないでくれる？」
「なにするつもりなの？」
「まあ、賭けみたいなものよ。ヤサコはもしダメージを負ったら、すぐに自分に回復の魔法をかけるのよ。」
今まで何度も自分を救ってくれたフミエの言葉を信じ、ヤサコは黙ってうなずいた。フミエは飛んでくるミサイルに面と向かって立ちはだかり、その軌道を食い入るように見つめる。どんどんと近づいてくるミサイルに、フミエの頬を一筋の汗が滴り落ちた。フミエの言葉を信じていたヤサコも、たまらず「フミエちゃん！」と声を上げる。もうミサイルとの距離は5メートルもない。ヤサコは目を背ける。すると急にフミエの手が動いた。次の瞬間豪快な爆発音が耳を貫く。
「キャー！」
ヤサコが叫んだ。黒い煙がフィールド内にのぼり、砕け散ったミサイルの破片がぱらぱらとホコリのように舞い落ちる。ゆっくりとヤサコは目を開いた。ダメージを受けたのかはわからない。でもその横でフミエはしっかりと立っていた。いつもと変わらない、頼もしいフミエの立ち姿がそこにはある。
「ふう。なんとかうまく言ったわ。」
手で汗を拭いながらフミエが言う。

「えっ？ダメージは？」
ヤサコがフミエに訪ねる。フミエは少し呆れ顔になって返した。
「もらってないわよ。ウインドウ確認したらわかるでしょ。」
ヤサコがすぐにウインドウを確認する、確かにＨＰは先ほどとは変わっていない。すると目の前に鉄壁が広がっていることにようやく気がついた。
「フミエちゃん。これって…」
「鉄壁よ。もう私のはあと1枚しか残ってないけど。」
そんなことは見たらわかる。ヤサコはどうやって鉄壁一枚でミサイルを撃ち落とせたのか疑問だった。
「まさかこの世に鉄壁で追跡くんを落とすヤツがいるなんて。鉄壁で追跡くんを落とすには、追跡くんがぎりぎり障害物を認識できないほんのわずかな瞬間に鉄壁が開かないといけない。しかも鉄壁が開くには手を離れてからタイムラグがある。今のを狙ってやってのけたって言うのなら、それはもう神業としか言いようがねえ。」
今の攻防を見ていたダイチが唖然として言う。敵ながらなんて腕前なんだと感嘆するしかなかった。
「オヤビン！大丈夫ッスか？すまなかったッス。」
その間にナメッチがダイチのもとにやって来た。全力で走ってきたようでダイチよりも息が上がっている。
「おお、助かったぜ。早速オレに回復の魔法をかけてくれ。」
ほっとした声でダイチが言う。今はナメッチの不手際に対する怒りより、無事に窮地を脱した安堵感の方が大きかった。ダイチはミサイルで時間を稼いだガチャギリに感謝した。
「それがまだＭＰがたまってないんスよ。もうちょっと待ってほしいッス。」
そう言ってナメッチは手持ちの装備からサイコロのようなブロックを目の前にいくつか並べた。直進くんである。直進くんはサイコロの5の目と同じ形をした穴から真っすぐな弾丸を発射する武器で、これを複数並べることにより弾幕を張ることができる。ダイチ達は

フィールドの角の方にいるので、しばらくはこれで近づけなくなった。

「くっ、直進くんも持ってたのね。これで時間を稼がれて、ダイチも復活してしまうわね。」

直進くんの弾丸が当たらないように支柱の陰を移動しながら、悔しそうにフミエが言った。

「ごめんフミエちゃん。私がダイチ君への攻撃をためらったばっかりに、また戦いが振り出しに戻って。」

申し訳なさそうにヤサコが言った。ハラケンといいガチャギリといい、ダイチの元にすぐに駆けつけたナメッチといい、やはりみんなこの勝負に勝ちたいんだということを、今の戦いで痛感した。ダイチとフミエとの真剣勝負を邪魔したくないなんて、そんな甘い考えは誰も持っていない。今更ながら自分が戦いというものを知らなかったことを、身にしみて思った。

「まあ、過ぎたことは仕方ないわ。ここからが本当の勝負だと思って、一瞬たりとも気を抜かないで。アイツらにはちょっとした油断も禁物よ！」

フミエが言い、それにヤサコも大きくうなずく。それと同時に今までにないくらいの大きなギャオーンという奇声がフィールド上にこだました。全員その声がした方を振り返る。

「ドラゴン…」

フミエがつぶやく。先ほどまでよりもまして恐ろしい形相をしたドラゴンは、神殿外周からヤサコ、フミエ、ダイチ、ナメッチの集まる一角に向かって飛んでくる。怒りにまかせて獰猛に振られる巨大な尻尾が神殿の支柱にぶつかり、フィールド全体を揺るがしている。

「そうか、引きつけ役だったナメッチとヤサコがこっちに来たせいで、ヤツもつられてここまで来たのか！」

ダイチが気付いて叫ぶ。しかしその声がかき消えるくらいのうなり声を上げるドラゴンは、確実に４人に狙いをつけて迫って来ていた。

#7　いざ、決着の時　－後編－　Part7

「ヤサコ、アイツにはどのくらいのダメージを与えたの？」
ドラゴンを注視していたフミエが隣の支柱にいるヤサコに訪ねる。
「ナメッチと一緒に戦って、多分ＨＰ半分以上は削ったと思う。ダメージを与えるたびにああやって凶暴になっていったわ！」
ヤサコがとっさに答える。するとヤサコとフミエがいる場所に向かってドラゴンが火炎を放射した。前からの炎、後からの直進くんの弾丸で2人は逃げ場を失ってしまう。どう動こうか迷うヤサコとフミエ。するとヤサコが思いついたように魔法の杖を炎に向かってかざした。その杖の先からは強力な吹雪が巻き起こる。氷の魔法だ。さすがに迫り来る炎を消し止めることはできなかったものの勢いは削ぐことができ、2人のダメージは軽症で済んだ。
「ナイス、ヤサコ！さっきのステージでの経験が役に立ったわね！」
フミエが親指を立ててヤサコに言う。そうしている間にドラゴンは神殿の屋根の上にのぼっていった。次は何をする気なんだと全員が身構える。するとズドーンという凄まじい音とともに、視界が縦に激しく揺れるほどの衝撃がきた。思わず全員が近くの支柱にしがみつく。何なんだと思う間にまた同じ衝撃が来る。建物のいたるところからミシミシとイヤな音がして、天井からは雪のようにホコリが舞落ちてくる。
「なに？あのドラゴン、このフィールドごとつぶそうとしてるわけ！？」
フミエが目の前にだしたウインドウを見ながら叫ぶ。そのウインドウには神殿を鳥瞰したアングルのカメラからの映像が映っていた。その中でドラゴンは神殿の上空に飛び上がっては急降下して屋根に体を叩き付けている。そして3回目の衝撃が来た時、ダイチとナメッチがいる一角の足元が割れ始め、ついには完全に床が裂けてしまった。裂けた床は支柱とともに、ガラガラと音を立てて神殿の遥か

下、虹色の雲のあかる場所に崩れ落ちてゆく。その崩壊にダイチも巻き込まれ、崩れ落ちてゆく床から神殿に飛び移り、断崖絶壁に等しくなった神殿のへりにかろうじて両手をかけた。ところがそこに４回目の衝撃が来て、ダイチが手をかけた床も崩れ落ち始める。完全に神殿のへりから手が離れ、ダイチの体は一瞬宙に浮く。その瞬間はまるで夢を見ているかのように、すべてがスローモーションになっているような気がした。このまま終わってしまうのかという絶望が脳裏をかすめた時、目の前に棒のようなものが現れる。ダイチはそれが何なのか頭が理解するよりも早く、とっさに手を伸ばしてその棒をつかみ取った。いや、感触がないのでつかみ取ったかさえも最初はわからない。思わずつぶってしまった目をゆっくりと開くと、上の方から自分をのぞき込む顔があるのがわかった。

「…ナメッチ。」

ダイチが苦しい顔を歪め、それを笑顔に変えてつぶやく。ナメッチは神殿のへりから必死に身を乗り出し、目一杯腕を伸ばし、さらにその手に握られた魔法の杖で、ダイチを首の皮一枚で救ったのだ。重さなど感じない、けれどその手でつなぎ止めているのは、チームの絆だった。

「頑張れオヤビン！すぐ引き上げるッス！」

ナメッチがダイチに向かって叫ぶ。その光景をヤサコとフミエは、ただ黙って見守っている。

「下に落ちてしまうとフィールドには戻れますが大ダメージとなります。ただダイチさんの残り体力で落ちてしまうとゲームオーバーとなってしまいます。その場合は最後にダイチさんにダメージを与えた、姉の撃墜とされます！」

アキラの天の声が補足説明をする。それを聞いてウウォーという叫び声を発しながら、ダイチを引き上げようとするナメッチ。重みはないのに、力を入れてもなかなか引き上がらないのがもどかしい。するとダイチとナメッチが奮闘しているところに、ドラゴンが降りて来た。うなり声を轟かせ、獲物を捉えたような目つきでナメッチ

とダイチをにらみつける。それでもナメッチはダイチを引き上げようとしている。

「フミエちゃん！ドラゴンはダイチくんとナメッチにとどめをさすつもりよ！」

ヤサコがフミエを見て叫ぶ。こんな時フミエはどうするのかとヤサコは思った。フミエはその光景を下唇をかみながら、ドラゴンをずっと直視している。するとドラゴンの周りにいくつか丸い円盤が現れた。ショートカットだ。その円盤からは次々と弾丸が飛び出し、ドラゴンは苦悶の表情に変わる。

「ガチャギリね。さすがに仕事は速いわね。」

フミエがガチャギリの方を見た。ウインドウを素早く操作しながら、目の前に並ぶ円盤の入り口に、次々と直進くんをセットしてゆく。するとヤサコは走ってくるハラケンを見つけた。手がふさがっているガチャギリには見向きもせずに、こちらに向かってくる。ヤサコがまさかと思った瞬間、ハラケンは額からメガビーを発射していた。放たれた光線はナメッチの頭上を通過し、ドラゴンの胴体に命中する。ヤサコはなぜかホッとしている自分に気付き、ウインドウを確認した。ドラゴンの体力はみるみるうちに減っている。

「さあ、ヤサコ！あの空気読めないモンスターにとどめをさすわよ！」

そう言ってフミエはヤサコの肩をポンと叩くと弓を構えた。ヤサコも「うん！」と大きくうなずくと魔法の杖をドラゴンに向け、強力な雷の魔法でドラゴンを攻撃する。この総攻撃でドラゴンは反撃もできず、最後にはフミエの必殺技、浄炎火矢が決まり、ドラゴンは奇声を上げながら虹色の雲の下、奈落の底まで落ちていった。その場の全員がホッと一息つく。

「ちっ、おいしいところをフミエに持ってかれちまったか。」

ガチャギリが笑みを含みながら言った。今は誰も戦闘態勢ではない。ただ敵を倒したという達成感と安堵感が場を包み、今はお互い敵同士であることさえも誰も気にしていなかった。

「別に、関係ないでしょ。経験値と得点は与えたダメージ分に応じてそれぞれに加算されるんだし。」
フミエがそう言うと、そういう意味で言ったんじゃないと、ガチャギリは珍しく聞こえるくらい声を出して笑った。
「ふい～っ。助かったあ。」
「危ないところでしたね、オヤビン。」
なんとかナメッチに引き上げられ、這い上がって来たダイチが床に手をついて生気に満ちた声でつぶやく。ナメッチも同様に床に座り込む。そこにフミエが歩み寄って行った。
「はあ。なんでオレたちを助けたりした?あのままなら、間違いなく果たし合いには勝てたっていうのによ。」
フミエを確認したダイチがため息をついてつぶやいた。
「あんな形で幕切してたら、アンタ達も、それに私達も納得できなかってしょうね。だから助けたの。アンタを倒すのはこのワタシ。いくらアンタが間抜けだからって、あんなモンスターにやられるとかナシにしてよね。この私のライバルだってうぬぼれるのなら…」
フミエが仁王立ちで腕を組みながらダイチに言う。
「へっ、後悔するぜ。ハラケンにしても…」
ダイチがゆっくり立ち上がりながらハラケンの方を見た。探偵局チームの中で、真っ先にドラゴンを攻撃してダイチとナメッチを助けようとしたのはハラケンだ。
「どうかな。僕は後悔したくないから、ダイチとナメッチを助けたまでさ。」
ハラケンが笑顔で返す。真剣勝負の先にある勝利、それを誰もが望んでいた。先ほどヤサコが自分でダイチに手を下すことをためらったこと、それはフィールドに立つ者にとって間違った迷いだった。一方でドラゴンがダイチを倒そうとして、敵味方関係なくドラゴンを倒したこと。それは誰もが自分の意志によって行動した結果だった。つまりこのゲームでチームは一心同体であり、フィールドに立つ者にとって、フミエがダイチを倒そうがヤサコが倒そうが、それ

は同じことである。全員でドラゴンを倒したのは、モンスターというそれ以外の力によって決着がついてしまうのを嫌ったのである。
「ダイチ、こりゃ期待に応えねえといけねえな。何度も敵に救われて最後も負けるとなれば、オメーのプライドは立ち直れないほど傷つくだろう。」
ガチャギリがダイチに言う。ダイチ達は第一ダンジョンでもフミエに助けられていると思い込んでいるので、これで2度フミエに救われたと思っている。
「そうだな。今回のは貸しにしといてやるぜ。もしお前らがモンスターによってピンチになったら、1度だけオレたちが手を貸してやる。それ以外はさっきと同じ真剣勝負だ。」
ダイチがフミエに向かって言った。
「別に私たちはモンスターにやられるほど抜けてはないけどね。まあいいわ。じゃあ仕切り直しってことで。ああ、あと回復はしなくていいの？アンタだいぶＨＰがピンチじゃない。」
フミエがそう言って、ダイチは一瞬見栄を張って余計なお世話だと言い返そうとしたが、やはり今のＨＰで戦い直すのはきついと思った。ガチャギリの方を見てもただうなずいているだけなので、ダイチは素直に回復することにして、ナメッチに回復の魔法をかけてもらった。それが終わり、探偵局チームと黒客チームそれぞれがゲーム開始の時のように固まって対峙する。
「アキラ！仕切り直しのゴングを頼む！」
ダイチが銀河に向かって叫ぶ。その声はモニターしていたアキラにも届いた。
「わかりました。では用意してください……スタートです！」
アキラのかけ声と同時に全員が武器を構え、先ほどまで戦っていたのと同じペアで、先ほどまで戦っていた位置まで移動を始めた。

#7　いざ、決着の時　－後編－　ｐａｒｔ8

「ナメッチ！お前はもう普通に戦え！さっきみたくヤサコから目を離すなんてヘマはするなよ！」
移動をしながらガチャギリが指電話でナメッチに指示を出す。臨時の作戦変更ということで、その声はダイチにも届くようになっている。
「いいのか？ナメッチはオレらのキーパーソンだろ。ヤツらが狙いを変えてくる可能性もあるわけだし。」
ダイチがガチャギリに確認した。先ほど探偵局チームはダイチを集中して狙ってきた。その裏をかくように相手が狙いを変えてくるとしたら、標的はガチャギリかナメッチのどちらかだが、ＨＰと防御力の低い魔法使いナメッチを狙ってくる可能性の方が高いのではとダイチは思った。
「いや、ヤツらは裏のウラをかいて狙いを変えて来ないような気がする。」
「なんでそう思う？」
ガチャギリの言葉に、再びダイチが訪ねる。
「たいした根拠はない。まあ、さっきのヤツらにはウラをかかれてダイチを狙われたわけだが、その戦法は的を得ていると思う。やっぱダイチは囲まれるとツライ弓使いだし、フミエとの死闘で体力的にも精神的にも疲労している。オレがヤツらの立場ならやっぱダイチを狙おうとするだろうな。」
ガチャギリが説明する。さきほどはウラをかかれているので、今度こそは相手の戦略を阻止しようと気持ちが入っていた。
「一理あるな。じゃあオレはどうすればいい？」
ダイチがガチャギリに聞く。次に囲まれるようなことがあれば、確実にやられると思った。
「ダイチはとにかくフミエに振り回されないように気をつけてくれ。

さっきみたいにお前がどんどん仕掛けていっても、フミエがそう隙は見せないってことはわかったろ?そんなことをしていざという時に疲れて動けないっていうのが一番厄介だ。とにかくオレとナメは、ハラケンとヤサコをしっかり引きつけながら確実に倒すよう努力する。ダイチはフミエとの勝負に負けないように、それでいて慎重に戦ってくれ。」

「次に出てくるモンスターは?」

ガチャギリが指示を出したところでナメッチが質問する。先ほどのドラゴンのように、ボス級のモンスターが現れるのは間違いない。

「ほっとけ。自分に向かってきたら多少は注意しないとダメだが、基本的にノータッチだ。ヤツらも攻撃を仕掛けてきたプレイヤーを中心に狙ってくるようだしな。」

「了解!」

ガチャギリの言葉に、ダイチとナメッチが声をそろえる。先ほど自分のピンチを救ってもらった手前、この戦いはガチャギリの仕切りでいくしかないなとダイチは思っていた。

「作戦変更についてはどう?何か意見はある?」

探偵局チームも同様、3人が指電話で連絡を取り合って作戦変更について話し合おうとして、フミエが2人に意見を聞いた。

「狙いを変えるってこと?」

ヤサコが訪ねる。先ほどは自分の迷いのせいでダイチを倒し損ねたので、今度こそ足を引っ張らないようにしようと決意していた。

「ダイチ狙いは相手にも知られてしまったし、警戒はしてくるだろうね。狙いは変えた方がいいんじゃないかな。」

ハラケンが言う。さきほどうまくいった作戦なら相手も読んでくるだろうと思った。

「じゃあガチャギリかナメッチってことね。」

フミエが確認して考え込む。

「私的にはナメッチを狙ってもらえるとありがたいけど。さっきはモンスターを一緒に攻撃してたけど、今度はどう出てくるかわから

ないし、何よりやっぱり私じゃ一対一で勝てないと思うの。」
ヤサコが心細そうに言う。先ほどのナメッチとの共闘でヤサコはナメッチの実力を思い知った。ナメッチは外見とは裏腹にかなり集中力があるらしく、戦いに入ったときは鬼気迫るものがあるとヤサコは感じていた。それをドラゴンに向けすぎた結果、ヤサコから目を離すという失態をしてしまったわけだが、その集中力が自分に向けられたらおそらく太刀打ちできないだろうとヤサコなりに思っていた。
「そうか、ならナメッチを狙う方が無難かな。確かにナメッチは集中力があって爆発力もある。一度エンジンがかかると多分僕やフミエでも手が付けられない。実際さっきのドラゴンのＨＰは大半ナメッチが削ったわけだよね？」
ハラケンがヤサコに訪ねる。ハラケンもナメッチの特徴については少なからず知っていた。
「うん。私はドラゴンからの攻撃をよけるので精一杯だったから。いつダイチ君のところに行こうかとタイミングを計ってたっていうのもあるけど。」
ヤサコが言う。その時はナメッチがほとんどドラゴンの相手をしているようなものだった。
「ナメッチの集中力は諸刃の剣。１人相手に集中しているときはめっぽう強いけど、予想外に複数人で攻められると脆い。そういうことならナメッチ狙いっていうのは僕は賛成だけど。」
ハラケンがフミエに確認した。あとはフミエがその作戦を認めるかどうかだった。
「でも、私がひっかかってるのはガチャギリなのよね。」
フミエはハラケンとヤサコに同調するでもなく、ぽろりと漏らした。
「何か気にかかることでも？」
ハラケンが訪ねる。
「まあ。私もナメッチ狙いは悪くないと思うわ。でもさっきの戦いでもわかったと思うけど、ガチャギリのバックアップ能力はかなり

侮れないと思うの。危険な武器もいっぱい装備してるようだし。ハラケン、あんたアイツと戦ってるからわかるでしょ。あとどれくらいアイツは武器を残してるの？」

「え？そうだな…多分黒客の中でアイツが一番武器を装備してると思う。接近戦中心の剣使いだしね。直進くんや追跡くんの今の相場はわからないけど、前の相場で考えるならまだ半分は残ってると思う。アイツは僕にハンドガンまで渡してきた。それは僕とアイツが同じ条件で戦えるようにするためだけど、そのことから考えてもアイツの武器装備はかなり充実していると見るべきだね。」

フミエの問いにハラケンが答える。確かにそれだけの装備を残しているガチャギリは脅威だなと、ヤサコも聞いていて思った。

「なら、ガチャギリ狙いでいきましょうか。仮に私たち全員がナメッチを狙うと、そのガチャギリとダイチが私たちを後ろから狙うことになる。下手すれば壊滅的なダメージを被るでしょうね。逆に全員でガチャギリを攻めてアイツにに攻撃させる時間さえ与えなければ、あとの2人のバックアップはそれほど怖くはない。どう？」

フミエが2人に確認する。

「確かにそっちの方が安全かもしれない。なら僕はガチャギリにできるだけ接近戦を挑む。飛び道具を使わせないために。2人はそれを見計らってガチャギリをとり囲んで。」

ハラケンはフミエの作戦にのった。おそらく相手もガチャギリ狙いは読み切れないだろうと踏んだのだ。

「ごめん、ヤサコ。やっぱりナメッチの相手は1人でしてもらうことになるわ。でもどうしてもキツいと思ったら、私のところに来るのもアリよ。ナメッチもその方が戸惑うだろうし。」

フミエがヤサコに言った。先ほどのピンチに懲りたダイチの攻撃は静かになることが予想されたので、その分フミエはヤサコのサポートにもまわろうと思っていた。

「オッケー。できるだけフミエちゃんには負担かけないようにするけど、ピンチになったらお願いね。」

「遠慮はいらないわよ。ダイチなんてへでもないんだから！」
ヤサコの言葉にフミエが力強く返した。こんなときダイチをもあしらってしまうフミエの存在は、ヤサコにとって限りなく頼もしかった。
「じゃあ、それでいこう！モンスターにも気をつけて！」
ハラケンが最後に締めくくり、それぞれ指電話を切って戦闘モードに入る。
「お～い、そっちの作戦はまとまったのかよ？」
ヤサコの前方の支柱から顔を出したナメッチが訪ねてきた。黒客の作戦会議はとっくに終わったようだったが、律儀に相手の会議が終わるまで待っていたのである。
「うん、終わった。それより待ってくれてたの？勝負なんだからそんな気を遣わなくてもいいのに。」
「いやいや、さっきはソッチに助けられてる立場なのに、そんな卑怯な真似はしないっスよ。もちろん、戦闘が始まったら手加減はしないけど。」
ヤサコの言葉にナメッチが返す。相手の作戦会議中に速攻を仕掛けるようなこすい男に思われたくはないらしい。
「ってことは、今度は本気でくるつもりなのね。わかったわ、始めましょう！」
ヤサコが気合いに満ちあふれた口調で言った。
「じゃあ遠慮なくいかせてもらうッス！」
そう言うとナメッチは支柱の陰から姿をあらわし、ヤサコにではなく天井に向かって魔法の杖をかかげた。その動きにヤサコは条件反射で支柱の陰に隠れるが、こっちに攻撃が来ないので少し拍子抜けする。しかし上空からゴロゴロと犬のうなり声のような音が聞こえたので見上げてみると、ヤサコのいる一角の上空をどす黒い雷雲が覆っていた。するといきなりバケツをひっくり返したような雨が降り出し、ヤサコは戸惑いもあって視界をほとんど失う。とにかく雷雲の下から逃げようと支柱と支柱の間を移動するが、雷雲は思って

より広範囲に広がり、またナメッチとの距離を詰めるのも危険なので横にしか移動できないこともあって、なかなかヤサコは雷雲を抜けることができなかった。とりあえずナメッチの姿だけは確認しようとして辺りを見回していると、目の前に白い糸のようなものが走った。同時に耳を貫くようなけたたましい雷鳴が轟く。

「キャー！」

ヤサコは思わずうずくまった。雷は苦手なのだ。しかしそんなことはおかまいなしに雷雲の中では至る所で落雷が発生している。雷の落ちる場所はランダムだが、直撃した場合はダメージになるようだ。しかしそんなことはわかっていてもヤサコはその場を動けなかった。ただ目を閉じて耳を塞ぎ、雷が直撃しないことを祈りながら雷雲が晴れるのを待っていた。

「それ～！！」

動けないヤサコにさらなる攻撃を仕掛けようと、ナメッチは雷雲の外から一直線上にヤサコを捉えると、今度は氷の魔法を放った。氷の結晶が次々とヤサコに直撃し大ダメージを負ったが、当のヤサコは目を閉じ耳を塞いでいるので気付いていない。雷が鳴り止んだところでようやく目を開けたヤサコは、まず自分のＨＰがごっそり減っていることに驚いた。まず満タンだったＭＰの半分を使って自分に回復の魔法をかけると、そこから周囲の様子をうかがった。まるでナメッチの気配がない。しばらく考え込んだヤサコは、ナメッチを探して慎重に歩を進め始めた。今の総攻撃でナメッチはＭＰを使い果たしたため、どこかでひっそりとＭＰの回復を待っているのだと思ったのだ。案の定ヤサコは端の方でひっそりとしているナメッチの姿を見つける。そこでヤサコは足音をたてないようにゆっくりと距離を詰めていった。

「ナメッチ！今のお返しよお～！っ？」

ヤサコがナメッチの前に飛び出し杖を向けた瞬間、目の前には炎が迫っていたのだ。

「ざ～んねんでした！こっちのＭＰが尽きたとにらんだみたいッス

けど、甘かったッスね！このくらいの駆け引き、オレッチらは慣れたもんでスからね～。」

「イヤ～」

ナメッチにしてやられたヤサコは、なす術もなく炎に包まれる。やはり戦い慣れしたナメッチと初心者のヤサコのレベルの差は歴然だった。ヤサコは結局チームの足を引っ張るだけ引っ張って、何もできずに終わるのかと悔しさをにじませた。

「いたっ！」

その時ナメッチが声を発した。このゲームで痛さは感じないが、物理的攻撃でダメージを受けるとバシッという音が聞こえ視界が一瞬赤く染まり揺れる。やり慣れたプレイヤーはダメージを受けると反射的に声が出てしまうのだ。ナメッチは今の攻撃はヤサコからのものではないとわかっていたので、とっさに後ろを振り返った。ナメッチの後方の直線上にはフミエがいたが、何事もなかったかのようにダイチと激戦を続けている。

「まさか、ダイチとあんだけやりあってる合間をぬってオレを狙ったんスか？」

ナメッチが唖然としてつぶやく。そして怖くなった。自分は常に周りからも狙われていると思い込んで。

「今度こそさっきのお返しよ！」

ヤサコのかけ声に我に帰ったナメッチはとっさに振り返ったが、すでにヤサコの放つ炎が間の前に迫っており、どうすることもできなく大ダメージを負った。しかも先ほどまでの総攻撃で今度は本当にＭＰを使い果たしてしまい、しばらく待たないと回復の魔法も使えなかった。

「次のモンスターの登場です。気をつけてください。」

死闘が繰り広げられているフィールド内に、抑揚のないアナウンスが流れる。すると今度はフィールドのど真ん中に、ダークブルーの人型の巨大モンスターが現れた。パッと見ではどこかの銅像のような姿形をしたそのモンスターは、右手に持った三叉の矛を振り回し

ウオオーと雄叫びを上げている。
「今度は海神ポセイドンっスか！？」
ナメッチがそのモンスターを見て叫ぶ。
「ポセイドン、ってなに？知ってるの？」
ヤサコがナメッチに訪ねる。見た目は口ひげが長くてごついおじいさんという印象だったが、見ていて圧倒されるような威圧感と荘厳さがあるなとヤサコは思った。
「過去シリーズのストーリーモードで、海底神殿のボスとして登場したモンスターっスよ。オレッチはこいつにどれだけ苦労したことか。」
ナメッチがとてもイヤそうな口調で言う。それだけで手強いモンスターなんだろうなとヤサコは思い知った。
「さっきのドラゴンとどっちが手強い？」
「どっちもっスよ！」
そう言ってナメッチは支柱の陰に隠れようと動いた。その動きを察知したヤサコが逃がすまいと炎の魔法で追い打ちをかけようとしたが、どこからともなく大波が発生し、ヤサコの放った炎をすべて消し去った。見ると大波を起こしたのはポセイドンのようだった。
「ちょっと！なんで私の攻撃の邪魔するの！？」
ノって来たところの攻撃を封じられて、ヤサコはポセイドンに向かってほえた。そんな言葉に聞く耳もたないポセイドンはヤサコ達のいる方に向かって走り出した。
「ヒントを言っとくとポセイドンのいる所で炎は使えないっスよ。アイツすぐ炎に反応して鎮火したがるタチらしいんスよ。今の大波も当たったら大ダメージっスから、あんまり炎は見せない方が無難っス。」
支柱の陰に隠れたナメッチが言った。さっきはヤサコ達に助けられている身であるので、モンスターの対策は教えといた方がフェアだと思ったのだ。
「そんな～。うわあ！」

ヤサコに狙いを定めたポセイドンは猛スピードで走り出し、ヤサコに向かって矛を突き刺そうとした。ヤサコはそれを間一髪で避け、床に突き刺さった矛はフィールド全体を揺るがすほどの衝撃を生んだ。

「なんてパワーなの!?あんなのが当たったらひとたまりもないわ!」

支柱の陰に身を隠したヤサコが驚愕して叫ぶ。するとヤサコの方を気付いたポセイドンは、ヤサコから見て右足を一歩引いたかと思うと、そこからおもいっきり体をひねり、ヤサコの隠れる支柱に回し蹴りを見舞った。

「え～っ!?」

轟音たてて粉砕された支柱はガラガラと崩れてゆく。予想外の攻撃に逃げ遅れたヤサコは、落ちてくる瓦礫が直撃してダメージを負いながらも、足を止めることなくなんとかポセイドンから離れた。しかし命からがら逃げ延びたヤサコを、ポセイドンの陰から不気味にナメッチが狙おうとしていた。

#7　いざ、決着の時　－後編－　ｐａｒｔ9

カキン、カキン、という金属音を放ちながら、ハラケンとガチャギリの第二幕は剣術戦が繰り広げられていた。お互い手持ちの飛び道具の装備を温存しておきたいという思惑があり、特にハラケンはガチャギリに時間を与えると何をしてくるかわからないということもあって、積極的に距離を詰めていった。しかしガチャギリも手慣れたもので、次々に振りおろされるハラケンの剣をことごとくはじいて応戦する。

「今度はやけに積極的だなハラケン。作戦を変えたのか？」

戦いながらガチャギリが訪ねた。まだ余裕があるという口ぶりである。

「まあそういうところかな。ガチャギリの武器装備は無視できないから、その手を封じようっていうことだよ。」

ハラケンも休まず剣を振り下ろしながら言った。

「じゃあそっちの作戦を当ててやるよ。オレの予想ではソッチの狙いはかわらずダイチだろ？さっきはあとちょっとの所で、オレのミサイルでダイチ撃墜は失敗したわけだからな。今度は狙いを変えると見せかけ、裏のウラをかいてもう一回ダイチを狙うんじゃねえのか？そのためにお前はこうやってオレを釘付けにすると。」

「…さすがだ。その通りだよ。やっぱりガチャギリの目は何でも見通しているんだね。こっちの小細工もこれじゃ通用しないな。」

お互いがお互いの言葉を、どこまで本心で言っているのか疑いながら聞いていた。

「次のモンスターの登場です。気をつけてください。」

するとフィールド内にアナウンスが流れ、真ん中にポセイドンが登場した。ハラケンはいったん攻撃をやめ、支柱の陰に隠れてポセイドンの様子をうかがう。ガチャギリも同様の態勢をとった。ポセイドンはハラケン達のいる一角から反対側の端、ヤサコとナメッチの

いる一角に突進していった。見るとポセイドンはヤサコに狙いを定めているらしく、矛をヤサコに向けて突き刺そうとしたり、あげくヤサコの隠れる支柱を回し蹴りで破壊するという度肝を抜かれるような行動をとっている。

「お～こえっ！今度のはドラゴンの上をいく空気の読めなさだな。あんなのに狙われたヤサコは気の毒と言うしかねえぜ。」

その様子を見ていたガチャギリが高見の余裕を見せて言う。しばらくはこっちに来ることはないから安心だと思っているらしい。ハラケンはヤサコの苦戦する姿を見て考え込んだ。ポセイドンの後ろからはナメッチが狙っている。ここで、もう初心者のヤサコのゲームオーバーは仕方ないと考えるのか。それとも自分が危険を冒して窮地の仲間を救うべきなのか。ヤサコを助けていいカッコをしたいとか、見殺しにして非情だと思われたくないとか、そういう葛藤ではない。ただ、信じ合った仲間のピンチを救いたい。しかし、勝負に勝つ確率をとるならここは危険を冒すべきではない。探偵局チームは、3人のうち1人でも倒すことができれば勝利することができる。そのはざまでハラケンは思い悩んだ。もちろん悩んでいる時間などない。手をこまねくほどにヤサコは不利になる。こちらでもガチャギリの相手をしなければならない。そして決意する。その瞬間ハラケンの体は動いた。ポセイドンを障害物のない一直線上にとらえられる場所に移動したハラケンは、躊躇なく持っていたハンドガンを構えるとポセイドンに向け発砲した。

「バカ！なにやってんだよ！」

ガチャギリの制止する声を聞きながら、それでもハラケンは発砲を止めなかった。弾丸が直撃したポセイドンは、狙いをつけていたヤサコからゆっくりとハラケンに目を移す。

「仲間を犠牲にしてでも勝つ。それも時に必要なのかもしれないけど、僕はイヤなんだ、そうもしてまで勝つなんて。フィールドにいる誰もがこのゲームを楽しむ権利を持っている。そして誰も仲間に自分の犠牲になれなんて言う権利もない。だったら今の僕にできる

のは、ヤサコを助け、ヤサコにもっと長い時間このゲームを楽しませること。仲間はそう助け合うべきなんだ。」

ハラケンが銃をおろしながら言う。次の瞬間怒りの表情をあらわにしたポセイドンが、ハラケンを目指して突進してきた。

「ごめんハラケン！モンスター引き受けてもらって。」

ヤサコからの指電話無線だった。はあ、はあと息をはずませ、かなり体力も消耗しているなとハラケンは思った。

「いいんだ。それよりナメッチには気をつけて！すぐ近くまで迫ってる！」

ハラケンはそう返すと指電話をおろし、すぐに迫り来るポセイドンから逃げるように移動を始めた。

「そんなカッコいいこと言いやがって、あんなのが来たらこっちの勝負じゃなくなるじゃねえか！とんだとばっちりだぜ！」

ガチャギリがハラケンに不平を言う。そんなガチャギリのいるすぐ隣の支柱までハラケンはやって来てポセイドンの様子をうかがった。

「来てしまったのは仕方ないじゃないか。どうせなら、２人でアイツを倒すっていうのはどう？」

ハラケンが笑みながらガチャギリに申し入れた。

「断る！自分のまいた種なら自分で処理しろよ。オレはヤツの攻撃が当たらないところまで逃げる。じゃあな！」

そう言うとガチャギリは後方に走り出してどこかに行ってしまった。

ハラケンはかまわずポセイドンの方を見て支柱の陰から飛び出した。

ポセイドンはヤサコの時と同じく右手の矛を振り上げながらこちらに向かってくる。そうしてポセイドンが矛を振り下ろした刹那ハラケンは真横に飛び退いてそれを避ける。矛は床に直撃し先ほどと同じようにフィールド全体を揺るがした。ハラケンはバランスを崩して膝をついたポセイドンの側面から、ハンドガンの発砲とメガビーの照射を繰り返しながら少しずつ後ずさり距離をあけていく。雄叫びを上げながら立ち上がったポセイドンは、今度は矛の三叉になっている先端部分をハラケンに向ける。それに反応したハラケンはと

っさに真横に飛び退いた。次の瞬間矛の先から雷が打ち出され、ハラケンの左ギリギリを抜けていく。光の速さで迫り来る雷は、放たれる前から体を動かさないととてもよけることはできない。その攻防はしばらく続いた。ポセイドンの絶え間ない攻撃にハラケンは攻撃する余裕すらない。ガチャギリから目を離してからしばらくが経った今、ハラケンはポセイドンを引き受ける作戦は失敗だったかなと思い始めた。ところが次の瞬間、ハラケンの後方でブシューという大量の水をホースでまき散らしたかのような音したかと思うと、自分の頭上をミサイルが通過していくのが見えた。そのミサイルはポセイドンめがけて一直線に飛んでゆく。ハラケンはミサイルの着弾を待たずに後ろを振り返った。するとまさにガチャギリがハラケンめがけて剣を振り下ろすところだった。ハラケンはとっさに剣を抜いてそれを受け止める。コンマ何秒の差だった。

「ちっ、やっぱミサイルなんて撃つんじゃなかったぜ。」

舌打ちをしながらガチャギリが言う。その瞬間ポセイドンに追跡くんが直撃し、ウオーンという叫びがフィールド内に響き渡った。

「来ると信じてたよ。僕と真剣勝負がしたいという最初の言葉に偽りが無いなら、僕を1人置いてどこか他の戦闘に参加するわけがない。ましてやポセイドンに気を取られた僕を、背後から距離をおいて飛び道具で攻撃するような真似もね。もちろん、これがガチャギリの戦略のうちというのならそういう攻撃もためらわないと思う。でもポセイドンを引きつけ、自分を追い込んだのはこの僕。ここで僕が大ダメージを受ければ言ってみれば自滅だ。プライドの高いガチャギリはそんな安っぽい勝利を選ばない。ガチャギリなら、僕とポセイドンとの三つどもえの戦いを制して完全な勝利を手にすることを狙う、そう思ったよ。」

ハラケンがガチャギリに言った。2人はそれぞれ側面にポセイドンを捉えられるように体を置き、激しいつばぜり合いを続けた。相手の剣の重さを感じることはできない。しかし少しでも力を緩めた方は斬られてしまう。2人は腕、そして全身の筋肉に力を入れ、なん

とかこのつばぜり合いを制しようと踏ん張った。
「つまりポセイドンに向かって発砲した時から、それを考えてたってのか？そしてオレはお前の筋書き通りに動いたっていうのか。」
人に心を読ませない、安易に人に隙を見せたくはないと考えるガチャギリにとって、ハラケンの思惑通りに動いてしまったことはこの上ない屈辱だった。絶対ハラケンは倒す。そんな憎悪にもにた感情がガチャギリの中で芽生えた。
「ガチャギリが来るまで失敗したかと思ったけどね。でも、こうやって無駄口叩いている場合でもなさそうだね。」
「何？」
2人ともまったく力を緩めないままハラケンがポセイドンの方に目をやり、ガチャギリもつられて見た。そして問題のポセイドンは怪しい動きをしていた。矛を持っていない左手の指に力を入れながら肩の辺りまで肘を引き上げ、指先には青い水晶玉のような球体が、光を吸収しながら膨らんでいる。
「おい、あれってまさか…」
ガチャギリが言うと同時に、その球体は放たれた。次の瞬間、球体は津波のような激流に変わり2人に向かって猛スピードで進み始めた。直撃すればもちろん大ダメージとなる。ところが2人はつばぜり合いをやめようとはしない。激流をよけるために動くには当然つばぜり合いをやめなければならないが、どちらか一方が先に力を緩めた瞬間、もう一方に斬られることになる。もちろん剣の一太刀と激流とでは、比べ物にならないほど激流のほうがダメージは大きい。お互いそれをわかってはいるが、譲らず剣に全身の力を込める。どちらが先に激流の恐怖に屈するか。プライドを賭けたチキンレースの様相を呈してきた。もう激流はすぐそこまで迫っている。もはやお互いが激流にのまれてでもつばぜり合いに勝つつもりなのかと思い始めた。もう付き合いきれない、勝負に勝つためにはここでの大ダメージは致命的だと思ったハラケンは下唇をかみながら剣を引く。ところが、斬られたときの衝撃はこなかった。そう、剣を引いたの

は2人ともまったく同時だったのだ。そして2人は正面の支柱を目指して走り出す。自分の後方にある支柱に逃れるより、正面にある支柱に逃れる方が速いと判断した2人は、すれ違うように動いた。

「なにっ！？」

ところがガチャギリの正面にはレンガ壁が立ちふさがっている。つばぜり合いに集中するあまり、自分の正面に壁があることに気付いていなかったのだ。レンガ壁を回り込めばなんとか激流はよけられる。しかし予想外の障害物に一瞬ひるんでしまった体は動かなかった。一瞬のパニック状態になったガチャギリに、容赦なく激流が襲いかかる。ギリギリ逃げ延びたハラケンは、振り返って激流にのまれるガチャギリを見た。ＨＰはものすごい勢いでなくなってゆく。ハラケンはここまでうまくいくとは思わなかったが、同時に気を引き締めた。ここから始まる怒り狂ったガチャギリの猛反撃を想像したからだ。

「すまなかった。」

激流が流れきったあと、その場で片膝をついて呆然としているガチャギリに支柱の陰からハラケンは謝った。ガチャギリとの差しを楽しみたいと言いながら、モンスターの力を借りてダメージを与えたことに、ハラケンは若干の後ろめたさを感じていた。ガチャギリは直前に自分との戦いを楽しむため、危険を顧みずポセイドンと戦っている自分に勝負を挑んできたのだ。

「謝られる筋合いはねえよ。お互いの戦略もひっくるめた上での差しの勝負だ。今のがお前の作戦通りだったなら、オレが甘かっただけのこと。もう、容赦はしねえぜ！」

ガチャギリは両手に装備したランチャーから、支柱の陰に隠れるハラケンに向かって追跡くんを放った。やはりガチャギリに隙はないなと思いつつ、ハラケンはなんとか逃げようと考えるが、ミサイルはハラケンを挟み撃ちするように飛来してきた。仕方なく正面から向かってくるミサイルに向かって、右手でハンドガン、左手でメガビーを放ってなんとか一基は撃ち落とすも、背後から来たミサイル

はよけられずダメージを負う。その間ポセイドンは、フミエが放った浄炎火矢に反応してそっちに動きだし、ハラケンとガチャギリのいる一角からは離れて行った。ハラケンを巻き込んだ爆発音のあと、この一角には静寂が訪れた。

「…なあ、ハラケン。ちょっと聞きたいことがあるんだが。お前、なんで廃ビルのメタバグをフォーマットしたいなんて言い出したんだ？メタバグなんて大黒市には昔から存在するものだ。そいつのおかげでオレたちはよりスリリングに、こんなゲームでも楽しむことができる。だから消すのはもったいねえっていうのもあるが、そもそもメタバグが復活したからって、大黒市が荒れるだなんて大げさだろ。まあそりゃあ違法なサイトも横行するだろうが。」

ハラケンはガチャギリの様子をうかがおうと顔をのぞかせたが、姿は確認できない。しかし近くの支柱の陰からそのような声が聞こえてきたので、おそらくそこにいるんだとハラケンは判断した。

「まあ、それもあるけど。でもそれを言うならメガばあだって違法なソフトを売りさばいているし、僕らもそれを必要としているから、何とも言えないんだけどね。でもまあ昔で言えば、古い空間は危険であるにも関わらず子ども達はメタバグを追い求めてそこに踏み込んで行った。他にも電脳ペットの行方不明事件やイリーガル…子ども達の興味をそそるもののそばに、いつも古い空間があった。そしてただの興味本位での深入りが、とりかえしのつかない事件を引き起こす。カンナの時もそうだった。まあ、興味本位という言葉はカンナには当てはまらないかな。あの時のカンナはクロエを取り戻すのに必死で、わらにもすがるような思いでイリーガルを探し中津交差点に行ったのだから。でも、確かに以前の大黒市は危険きわまりない街だったということは言える。今はそこから安全で、だからこそ退屈な街になったとも言えるけど、僕はこれで十分だと思うんだ。大黒市以外の街にはメタバグさえも存在しなかったわけだから。ところが、今度は謎の白い電脳霧とともに大量のメタバグが見つかった。この廃ビルが危険かどうかはわからない。でも、メタバグの流

出とともに、以前の大黒市に戻ってしまうことは十分考えられる。だから誰にも見つかる前に、この空間はなかったことにしようと思ったんだ。」

この言葉に偽りはない。そう思いながらハラケンは言うと、ガチャギリに気付かれないようにゆっくりと接近を開始した。

「じゃあオレらが果たし合いに勝った時はどうするんだ？その場合メタバグをどうしようがオレたちの勝手だ。もちろんオレは売りさばくことを考えているが。」

ガチャギリの声がした。まだ移動していない。じっとしてまたなにか仕込んでいるんじゃないかとハラケンは思った。

「その時はソッチの理性に任せる。この廃ビルで異常なことが起こった場合は、すぐにフォーマットして欲しいところだけどね。ただ気にかかるのは、ここと同様の性質の空間が、かつての古い空間のように増殖してしまわないかということ。そうなれば空間管理室でもすべて元通りにするのは困難だ。まあ、仮定の話をしてもしょうがないけど。」

言いながらハラケンはさらにゆっくり距離を詰めていく。ガチャギリはまだ気付いていないだろうと考えながら。

「まあそんな時はさすがのオレたちでも考えるぜ。こっちだってあの事件に深く関わったんだ。二度と同じような事件は起きてほしくはないからな。」

ガチャギリの言葉にハラケンは少し安心する。と同時にガチャギリの隠れる支柱の目の前まで迫って来た。おそらくキーボードでの作業に没頭しているであろうガチャギリを想像しながらハラケンは飛び出して剣を振りかざした。

「こ、これは！？」

ハラケンの目の前にはガチャギリはおらず、そこには大きな耳のような電脳体が支柱にくっていていた。

「きこえるくんか！」

ハラケンが叫んだ瞬間、周りを囲むように無数のショートカットの

円盤が現れる。ガチャギリのトラップだと気付いた時には、ショートカットから飛び出す直進くんの餌食となった。

「2基のミサイルを僕に撃ち込んで、その隙に場所を移動し、さらに真剣な話題で時間を稼ぐ。そして聞こえるくんのスピーカー機能を利用して離れた場所からマイクを通して会話し、さもその場所にいるように見せかけて僕をおびきよせたってわけだな！」

ハラケンはガチャギリの手の込んだトラップに見事にはまり、すべてを見抜いたが撃ち込まれる直進くんをどうすることもできなかった。逃げるにも二重三重と現れるショートカットに道を塞がれた。

「へっ、ポセイドンの激流をオレに浴びさせてくれた礼だ。倒れるまで浴びるがいい。まあ、チープな弾丸だ。ちょっとやそっと浴びたぐらいなら大丈夫だよ。」

ガチャギリはハラケンを取り囲む円盤のそばまでやって来た。直進くんの掃射が終わっても、さらにハラケンを畳み掛けるつもりらしい。ちなみにガチャギリがハラケンをおびき寄せるために使った聞こえるくんは、本来電脳ペットなどが拾った音を拡張する時に使うもので、ハラケンが見抜いたようにスピーカーにもなりうる。

「くっ、回復用のメタタグを…」

ハラケンはどうしようか考えている間に、装備していた回復用のメタタグを体にはっていき、あっという間に3つすべてを使い果たした。それで少しは延命できるが、この掃射が終わらないかぎり、ハラケンのゲームオーバーも時間の問題となった。ところが突然円盤の1つが何もしていないのに閉じたかと思うと、ハラケンの周りを囲む円盤が次々に閉じていった。

「なんだ!?」

ガチャギリは驚いて辺りを見渡す。するとはるか遠くの方でキーボードを操作しているフミエの姿を捉えた。

「アイツ、まさか?」

唖然としている間にハラケンの周りの円盤はすべてなくなった。すると次の瞬間、ダイチの攻撃に気付きフミエは反撃に出ていった。

「フミエか…ダイチとあれだけの戦闘をしながら、こっちにも気を配ってくれてたんだ…」
ハラケンもショートカットを解除したのがフミエだということに気付いた。無線で礼を言おうかと思ったが、ポセイドンも交えて死闘を繰り広げるフミエにそんな余裕はなさそうだった。
「ホント、たいしたヤツだよ。ステータスで上回るダイチと互角以上の戦いをしながら、仲間のピンチも救うんだもんな。ひょっとするとイサコ以上の逸材かもしれんぜ、アイツは。」
トラップを解除されたガチャギリはそう言いながらとりあえずハラケンの死角に入り、次なる攻撃を目論んでいた。
「ガチャ、応答せよ。こちらナメッチ。」
そこでガチャギリにナメッチからの無線が入った。
「なんだ?」
ガチャギリがハラケンの様子をうかがいながら答える。ハラケンもガチャギリ同様、死角に入って出方をうかがっていた。
「ヤサコを追いつめたッス。ヤサコは回復薬をフミエからわけてもらった分も含め使い果たし、ＭＰを消費して回復の魔法も使えない状態ッス。作戦通りガチャがヤサコにとどめをさすなら、ヤサコのＭＰが貯まるまでのこの2～3分がチャンスっスよ。」
ヤサコは敢然とナメッチに立ち向かったが、やはり力の差は大きく、あと一撃で倒されるほどまで追いつめられていた。勝負の間、回復の魔法や手持ちの回復薬だけでは足らず、心配したフミエが持っていた回復薬をすべて渡したのだが、それもあっという間に使い果たしてしまったのだ。
「わかった。オレもダメージはヤベーし、手持ち装備も無くなってきたからすぐにそっちに向かってヤサコを倒す。」
そう言ってガチャギリは無線を切ると、もう一度ハラケンの様子をうかがった。ハラケンはヤサコのピンチに気付いていないのか、そこを動く気配も見せていない。しめた、と思ったガチャギリは一気にヤサコとナメッチのいる一角に走り出した。

「なんだって!?」
その様子を見たハラケンは驚いて叫ぶ。ガチャギリがどういうつもりなのかわからなかったが、とりあえず自分も後を追うことにして、ヤサコとフミエに指電話無線をつないだ。
「ガチャギリがそっちに向かった!目的はわからない。」
ヤサコとフミエは割と近いところで戦っており、このままガチャギリとハラケンが加わると、ポセイドンを含めてその場に全員が集まることになる。もう大混戦になるだろうとハラケンは予期した。
「ホントに!?でも獲物からこっちに飛び込んでくるなんて、こんなチャンスはないわ!ならハラケンはそのまま追走。私は側面からアイツを攻撃する。ヤサコは正面から攻撃よ!」
ハラケンの無線を聞いたフミエが矢継ぎ早に指示をだした。もともと探偵局チームが狙っていたのはガチャギリだったが、それぞれの戦闘が激しく、さきほどのダイチの時のように場所を一気に移動してまで狙うことはできなかった。そのせいで全体的には劣勢だった探偵局チームだが、このガチャギリの行動は絶好のチャンスだった。
「了解!」
ヤサコとハラケンが威勢良く返す。ヤサコももう残りＨＰもＭＰも少ないが、余っているメガビーでガチャギリに少しでもダメージを与えてやろうとやる気になった。そしてフミエはダイチと対峙しているところから、ガチャギリがこっちに向かって走ってくるのを確認すると、その側面をとれるような位置に移動を始めた。ダイチはこの動きに対し「なんだ?」と思ったが、ガチャギリを後ろから追うハラケンの姿や、見るからにガチャギリの様子をうかがっているヤサコの姿を見てようやく気付いた。
「待て!ガチャギリ!罠だ!オメーは3人から狙われてるぞ!」
ダイチが思いっきり叫ぶ。もうガチャギリはダイチの声が直接届く所まで迫っていた。しかしガチャギリは足を止めない。ヤサコにあと一撃を加えればすべて作戦通りにいくと思い、なりふりかまわず突っ込んでくる。ヤサコを倒せばガチャギリもプレイ終了となるの

で、ここでのダメージはもう怖くはなかった。
「出てこい！ヤサコ！」
ガチャギリが走りながら叫ぶ。その後ろからはハラケンが、側面からははフミエが、それぞれ攻撃態勢に入る。それを確認したヤサコはゆっくり隠れていた支柱から姿を現し、ガチャギリの正面に立った。ガチャギリはようやく足を止め、持っていたハンドガンをヤサコに向け、躊躇せず引き金にかける指に力を入れた。
「お前は、終わりだ！」

#7　いざ、決着の時　－後編－　Part10

ガチャギリの決め台詞に、後ろでガチャギリに銃を向けるハラケンも、正面でメガビーの構えをとったヤサコも、一瞬遅れてしまったかと思わず片目をつむった。ところが、響き渡るはずの銃声がしない。この一瞬をただ見守るだけだったダイチとナメッチも固まっている。その視線の先、ガチャギリの右手に握られていたハンドガンが無くなっているのだ。呆然と立ち尽くすガチャギリ。そして次の瞬間、カラカラと乾いた音を立ててハンドガンが床に転がった。そのそばにあったのは、一本の矢。

「さあ、ガチャギリを撃つのよ！」

響き渡ったフミエの声に全員がハッと我に帰り、刹那のスローモーションの世界から一気に現実のスピードに引き戻された。

「これは…まずいかもな。」

ダイチがそうつぶやきながら動き出した。今起こったことが飲み込めず、ただ唖然としているガチャギリに、気を持ち直したヤサコとハラケンが攻撃態勢をとる。矢を放ったフミエも急ぎメガビーを撃とうとしていた。

「逃げろ！ガチャギリ！」

ダイチの叫び声も虚しく、ヤサコのメガビー、ハラケンの初弾が放たれた。ハラケンは続いて発砲しようとし、フミエもガチャギリにメガビーの狙いを定める。

「キャー！！」

その時フィールドに響いたのは、絹を裂くようなかん高い悲鳴だった。もちろんガチャギリの発したものではない。意外な声に、再びその場の全員がフリーズする。

「…まさか…私…やられちゃったの…？」

両の膝をついて、ただ呆然とウインドウを眺めていたのはヤサコだった。そこにはＨＰゼロと表示され、視界は赤く点滅していた。

「ナメッチ…」
つぶやいたのはガチャギリだった。全員から注視されたナメッチは、ヤサコに向けていた魔法の杖をゆっくり下ろす。
「計画を水の泡にしてすまないっス。でも、ガチャギリがあんだけのピンチに陥って、ひょっとしたらあのまま果たし合いに負けるんじゃないかって、そう思って…」
申し訳なさそうにナメッチがうつむく。ゲームオーバーとなったヤサコ、プレイ終了となったナメッチの体は段々薄くなり始めている。
「お前が謝るこたあねえよ。確かにガチャギリの作戦通りにはいかなかったが、あのままなら間違いなく果たし合いに負けていたんだからな。そうだろガチャギリ。」
ダイチがかばうように言った。もちろんダイチも、ナメッチの判断は正しかったと思っている。
「ああ。謝らなければならねえのはオレの方だ。もともとあんな作戦立てたのがまずかったな。すまねえ。お前のファインプレーは無駄にしねえ。絶対この勝負に勝つからよ。」
ガチャギリもうつむきながら言った。その言葉にナメッチもうなずく。
「ごめん、フミエちゃん、ハラケン。ついに最後まで足引っ張ってしまって。」
一方のヤサコは悔しそうだった。このステージ、自分が何の役に立ったのだろうという思った。フミエは手持ちの回復薬をすべて渡してくれたし、ハラケンは危険を顧みずに、自分に襲いかかるモンスターのおとりになってくれた。これだけチームに迷惑をかけておきながら何もできずにゲームオーバーになり、ヤサコはやりきれない思いだった。
「いいえ。初心者なのにヤサコはよくやったわ。私たちの足を引っ張ったとか、そんなこと思いつめなくてもいい。むしろ、最後までチームの役に立ちたい、そして勝負に勝ちたいと諦めなかった姿勢、情熱は私たちに十分伝わって来た。その思い、私たちが引き継ぐ。

アンタのために、絶対勝つから。」
フミエが力強く言い、ハラケンもそれにうなずいた。ヤサコはそれを聞いて笑みを返すと、ナメッチとともにスーッとフィールド内から消えてゆき、最初に全員が降り立った神殿の外に強制移動した。もうここから2人はゲームを観戦することはできても参加することはできない。
「それでは、ゲームを再開します。」
アナウンスが響き渡った。ヤサコが倒された時点でモンスターを含むすべてのプレイヤーはフリーズし、ゲームは一時停止状態になっていた。今のアナウンスから、再びゲームは動き始める。
「くそおお！」
その瞬間真っ先に動いたのはガチャギリだった。フミエの矢で銃を失ったガチャギリは、腰から剣を引き抜くと背後に立つハラケンに斬り掛かった。不意をつかれて一瞬戸惑ったが、ハラケンはすぐに剣を引き抜き、またもやガチャギリの一撃を食い止める。
「最初からオレを狙っていたのか？あの全員の迷いのない動きは、そうだったとしか考えられねえ。」
ガチャギリが激しい口調でハラケンに訪ねる。2人は再び激しいつばぜり合いを開始した。それと同時に先ほどまでおとなしかったポセイドンが雄叫びを上げてこの2人に迫って来た。
「コラ！空気読みなさい！ここはあの2人の真剣勝負よ！ジャマするなっての！」
フミエはそう叫ぶとポセイドンに対し猛攻撃を始めた。それを見ていたダイチも一緒になってポセイドンを攻撃した。
「まあ。考えたのは僕じゃなくてフミエだけど。でも今回はなかなかそれぞれの戦闘が激しくてうまくいかなかった。そんな中でガチャギリ自らみんなが集まる所に動いてくれたのはラッキーだったよ。そういうガチャギリはヤサコを狙ってたんだな。ナメッチがヤサコを倒してしまえば、同時に黒客は回復役がいなくなる。ガチャギリがどんどん武器装備を惜しまず使っていたのも、その作戦があった

からだったんだね。」
そう言いつつ、ガチャギリの表情は心なしか暗いなとハラケンは思った。
「フン、オレの作戦はほとんど裏目にでた。メガビーを大量に残すオメーと、銃をなくしミサイルも尽きたオレじゃハナから勝負にならねえ。最後の望みをかけたオレの一太刀も防がれたんじゃな…」
ガチャギリの諦めにも似た言葉が出た瞬間、勝負あった。つばぜり合いを制したハラケンはガチャギリの剣をはじいて渾身の一撃を見舞う。ガチャギリの剣は空中を舞い落ちて床に突き刺さり、ダメージを負ったガチャギリは後方によろめいた。残りＨＰは3となり、あとはどんな攻撃を受けてもゲームオーバーは免れない状態になった。その攻防を見ていたダイチは思わず「あっ！」と声が出た。その時、フミエとダイチの総攻撃を受けていたポセイドンが倒れる。登場した2体のモンスターは、いずれもフミエに倒された形になった。
「終わりにしよう。果たし合いは僕達の勝ちだ。」
ハラケンはそう言うと、ハンドガンをガチャギリに向ける。ガチャギリは一つため息をつくと、立ち上がって両手を上げた。もう抵抗はしないという合図だった。
「まいった。オレはオメーに何一つ勝つことができなかった。こんなオレに、廃ビルのメタバグをどうこうする権利はねえ。」
ガチャギリは笑っている。実際敗北を目の前にした人の心情は、こんなものなんだろうなとハラケンは思った。その様子を、ダイチとフミエ、フィールド外のヤサコとナメッチも固唾をのんで見守っていた。
「じゃあ、行くよ。」
静かに言うとハラケンは引き金にかける指に力を入れた。
「しっかし気付かなかったかなあ。」
「えっ？」
ガチャギリの突然の言葉に、ハラケンは一瞬固まる。

「なんでオレが敵であるオメーに銃を渡したと思う?」
手をあげたままのガチャギリがハラケンに問う。何が言いたいんだとハラケンは思った。
「同じ武器、装備でお互い真剣勝負するため。そう言うことによって僕にメガビーを使うのをためらわせるため。」
ハラケンが少し考えてガチャギリに返す。
「そんな口約束が守られる甘い勝負だと思ってたのか?実際オレはオメーに直進くんや、追跡くんを撃ち込んだんだぜ?にも関わらずオメーがメガビーを封印していたのは、メガビーなんか使わなくてもオレを倒せるという自信があったからなんだろうが、それでもオレがそういう攻撃をした瞬間、真剣勝負がしたいなんていう言葉は嘘だったと見抜くと思ったんだがなあ。」
確かに、とハラケンは思った。勝負に集中しすぎてそんなことすっかり忘れていたが、ガチャギリは後半戦、ミサイル系武器を自分に対して使うことをためらわなかった。正々堂々と勝負しようという言葉を、ガチャギリはあっさり自分で破ったのである。
「だったらなんで…?」
ハラケンは必死に考えた。わざわざガチャギリが自分に銃を渡した理由。それを考えるのに頭がいっぱいになり、ハラケンは引き金を引くのを忘れていた。
「それはな…」
ガチャギリが上げていた右手をゆっくり腰のところまで下ろす。
「撃つのよハラケン!」
ガチャギリの言動をいぶかしんだフミエの叫び声が響き渡った。
「その銃には、最新の超小型バクダンを仕込んでたからだよ!」
ガチャギリから腰のポシェットから取り出したスイッチのようなものを掲げた次の瞬間、ハラケンの立っていた位置を中心に、フィールド上で爆発が起こった。爆風でそれぞれの髪や衣服はなびき、一瞬の鋭い閃光で視界は白く焼き付く。しばらく経って視界が元に戻ってくると、フィールド内は黒煙に覆われていた。

「ハラケン！」
ヤサコが叫ぶ。その黒煙が晴れて来ると、ハラケンの姿が確認できた。ハラケンは片膝をついてうつむいていた。
「ウソでしょ…？」
フミエが信じられないという表情でつぶやいた。ハラケンのそばに出ているウインドウには、ＨＰゼロと表示されている。
「ごめん、フミエ。負けてしまって…」
ハラケンはそのままの態勢で顔だけ上げると、申し訳なさそうに、片目をつむり歯を食いしばりながらフミエに謝った。油断。その一言に尽きた。ハラケンはあと引き金を引けば勝利という所まで黒客を追い込んだ。もはやガチャギリに策などないと疑わなかった。その思い、後悔という波がハラケンの心の中に打ち寄せていた。
「オメーにわざわざ銃を渡すっていうのは賭けだった。オレがヤサコを倒しきれなかった時の、保険として使おうと思ったんだが、最後の最後にオレの策がはまったっていう感じだな。」
ガチャギリがハラケンに歩み寄って言った。その表情を見つめるハラケンに悔しさはあまりない。むしろハラケンにしてもガチャギリにしても、互いの健闘を称え合うような晴れやかな顔をしていた。
これまでで最高の戦いだったと２人は思った。最後はこのような形で終わったが、２人は十分やりきったと感じていた。
「さあ、舞台はいよいよ整ったな。ダイチ、本当の勝負はここからなんだぞ。なんとしてもフミエに勝つんだ。」
消え行くなか、ガチャギリがダイチに向かって笑顔で言った。
「ああ、お前とナメッチは自分の役目をしっかり果たしたんだ。ここで勝たなきゃ男じゃねえ！」
ダイチが親指を立てて威勢良くガチャギリに返す。
「力になれなくて本当にごめん。でももう僕には見守ることしかできない。必ず勝ってくれとは僕には言えない。ただ、悔いのない戦いをしてくれればいい。あと、これを渡しておく。フミエは本当は剣術が一番得意だったからね。」

ハラケンはそう言うと握っていた剣をフミエに手渡した。
「何言ってるの！アンタもヤサコも、第1ダンジョンから頑張ってくれたじゃない。見てて。絶対私は勝つから。」
フミエはハラケンから剣を受け取り力強く返した。その様子を見ていたガチャギリも、床に突き刺さっていた自分の剣をダイチに託し、ハラケンとともにフィールド外へと消えていった。
「いいものもらったな。」
2人っきりになったフィールド上で、ダイチが静かにフミエに言った。お互いこれまでの戦いでアイテムはほぼ使い果たしていた。
「そうね。最後はお互いにチームの思いを託されたこの剣で、決着をつけましょう。」
フミエが返す。ハラケンとガチャギリのゲーム終了に伴い、一時停止状態になっているなか、2人は静かに互いを見据えていた。
「それでは、ゲームを再開します。」
アナウンスが響き渡ると同時に、2人は相手に敢然と向かってゆき、託された剣を振り上げた。

#7　いざ、決着の時　－後編－　part11

フミエとダイチの一騎打ちが始まってはや5分近くが経過していた。フィールド外でヤサコ、ハラケン、ガチャグリ、ナメッチが見守るなか、2人は一歩も譲らない勝負を繰り広げている。フィールドに2人だけ残った時点で、もうモンスターも登場しないようで、正真正銘の差しの勝負を2人は楽しんでいた。剣術に関してはほぼ互角で、ダメージすら互いに与えられていない。

「なるほどな。ハラケンがお前は剣術が一番得意だって言った理由がよくわかったぜ。このオレ相手に一歩も退かずに戦えるとはな。」

剣を振り合いながら、ダイチがフミエに言った。

「そういうアンタこそ、やるわね。最初っから剣を使っとけばいいものを。」

フミエが返す。ダイチの動きは弓を使っていた時よりも段違いに良くなっていた。フミエもダイチが一番得意なのは剣術じゃないのかと思った。

「フン、このゲームは総合力だ。なんでも使いこなせるのが一流なんだよ。」

ダイチはそう言って5、6歩後ろに下がると、今度は素早く弓を構えた。そしてまさに矢継ぎ早に次から次へと矢をフミエに放つ。しかしその至近距離からもフミエは一歩も退かず、すべての矢を剣ではじいた。フィールド外からは「お～っ！」という歓声が起こる。フミエはそのまま矢を放ち終えたダイチの隙を狙って斬り込む。ところがダイチの方もその動きを見切った。フミエが腰の高さで水平に振った剣の下を、ダイチはスライディングをしてギリギリの高さでかわしたのだ。勢い余って前につんのめったフミエの背後から、再びダイチは弓を構える。

「今度のはよけられまい！」

矢を放ったのとフミエが振り返ったのは同時だった。ところが迫っ

てくるのは矢の先が燃えている浄炎火矢で、さらに先ほどよりも至近距離で放たれているため、認識した時にはすぐ顔の目の前まで来ていた。

「うわっ！」

あまりにも速い攻撃に、フミエに考える余裕はなく、反射的によけることなく剣で矢をなぎ払おうとした。ところが剣は空を切り、ダイチ必殺の浄炎火矢が体に直撃した。

「フミエちゃん！」

ヤサコが心配のあまり叫んだ。それでもフミエはダイチに立ち向かって行く。しかし先ほどまでとは違い、ダイチの攻撃にフミエが後手にまわるようなシーンが増えていた。

「疲れ始めたかな…」

「えっ？」

ハラケンの言葉に隣にいるヤサコが振り向く。スポーツの解説者が発するような抑揚のない、中立的な響きだった。

「フミエが劣勢に立たされているのは、ダイチの攻撃がさっきより鋭くなったからっていうわけだからでもない。明らかに疲れてるんだ。体力的にと言うより精神的に。」

「精神的に？」

ハラケンの冷静な分析に、ヤサコが問い返した。

「うん。フミエはこれまで自分の戦いだけでなく、僕やヤサコまで気遣いながら戦っていた。僕はガチャギリにショートカットで攻められている時、フミエがそのショートカットを解除してくれたし、ヤサコだってフミエの助けを借りたことが何度かあったんじゃない？」

「…あった。何度も。それでフミエちゃんダイチ君以上に消耗しているのね！？」

ハラケンの問いにヤサコは答え、息づかいの激しいフミエを見やった。もしそうだとすれば、自分のせいでフミエが満足な戦いもできずに敗れるのではないかと思った。

「単純に自分の戦い以外にも神経を使っていれば、人より疲れるのは当たり前だね。このゲームは高い集中力を保ち続けないとベストパフォーマンスなんかできない。でも、ヤサコはフミエに負担をかけたことを思い詰めなくてもいい。初心者なのにサポートもなしで経験豊富な黒客の相手をするのは難しいから。本当は僕がいけないんだ。自分の戦いに集中しすぎて、ヤサコやフミエに十分なサポートができなかった。ガチャギリを追いつめておきながら逆転を許したことも含めて、僕があそこまでフミエを追いつめてしまったんだ。」

ハラケンはそう言ってうつむいた。もしこの勝負に負ければ、その責任はすべて自分にあると思った。そんなヤサコはそんなハラケンに、そこまで思い詰めてほしくなかった。おそらくハラケンは責任感が人一倍強い。だからこそ失敗を1人で抱え込もうとする。そんなハラケンをいましめようかとヤサコは思ったが、さきほどまで自分も同じようなことを考えていたので、そんなこと言う資格もないんじゃないかと思った。

「とにかく、今はフミエちゃんを信じて応援しましょう！今の私たちにできることはそれだけだから。」

ヤサコはハラケンにそう言うとフミエの方を見やった。ハラケンも静かにうなずいた。

「ダイチ！相手はバテてきてるぞ！畳み掛けろ！」

ハラケンの言葉を聞いていたガチャギリやナメッチが、俄然元気になってダイチに声援を送る。

「誰がバテてるって？なめんじゃないわよ！」

今の声援に反応したフミエのスイッチが入った。ダイチと真っすぐ対峙したフミエは、弓を構えて大きなかけ声とともに矢を放つ。ある程度の距離があったのでダイチは余裕で剣でなぎ払おうとするが、放たれた矢の速度は今までにない想像を絶する速さで、ダイチが剣を振り払った時には体に直撃していた。

「は、はえー！！」

ガチャギリとナメッチが声をそろえて驚愕する。フミエにこんな力が残っているとは考えもしなかったようだ。
「ちっ、アイツら余計なこと言いやがって。」
ダイチは歯を食いしばりながら、フミエに火をつけた外野の２人をうらめしく思った。フミエは手を緩めずに次から次へと矢を放つ。ダイチはよけることしかできなかった。
「本当にすごいなフミエは。あれだけの速度の矢を放つには、もちろんギリギリまで矢を引かなきゃいけない。でもそれと同時に手がブレるから狙ったところに飛ばすのは難しい。それをあれだけ正確に飛ばすなんて。」
ハラケンもフミエの底力には驚いたようだった。このゲームの難しさを知っているからこそ、フミエのすごさも感じ取れる。
「それがフミエちゃんよ。どんな逆境でも逃げずに立ち向かう姿勢が、いつも道を切り拓くのよ！」
ヤサコは、そうやっていつもピンチを切り抜けるフミエを見て来た。あのフミエがそばにいるから、どんなことでもできそうな気がした。だから今回も、必ず勝利できるという確信が生まれた。
「うおおーっ！」
フミエの攻撃をなんとかしのいだダイチは、今度は雄叫びをあげながら持っていた剣をおもいっきり床に突き刺した。床からは衝撃波が発生し、ダイチの剣には青光る電撃が宿りはじめた。
「きたーっ！覚醒だ！」
ガチャギリとナメッチが歓声を上げる。
「かくせい？」
何やらすごいことが起こっているのはわかったが、ヤサコはハラケンにそれがどういうものか訪ねた。
「ＭＰを消費して、一定時間大幅なパワーアップができるんだ。剣の攻撃速度、与えるダメージは２倍に、剣を床に突き刺せば今みたいな３６０。を攻撃できる衝撃波が出せるようになる。さっきみたいなフミエの攻勢がくるとまずいと思ったんだろうね。ダイチはこ

こで勝負をかけてきたんだ。」
ハラケンが説明している間に、ダイチはフミエに向かって走り出した。さすがのフミエもじりじりと後ずさり、どう対処しようか考えているようだった。
「ＭＰを消費って、ＭＰが使えるのは魔法使いだけじゃなかったの？」
ヤサコが訪ねる。
「いや、ステータスとしては全員に備わっている。フミエが使っていた浄炎火矢もこれを消費する。でも魔法使い以外の属性は最大値が低い上にＭＰの自然回復スピードも遅い。だからダイチはここで勝負をかけてきたんだ。おそらくこの勝負の間に覚醒できるのはこれが最後だろうから。」
ハラケンが言った。その間ダイチはフミエに斬り掛かり、フミエも応戦した。ダイチの攻撃の速さはやはり尋常じゃなく、どんどん剣を振り下ろす。フミエはやっとの思いでそれをはじいていくが、それだけでもすごいことだった。実際その攻防を見ていたガチャギリも「なんてヤツだ…」とつぶやいている。
「フミエちゃんもその覚醒を使ったらいいじゃない！そんな防戦一方じゃやられるのは時間の問題よ！」
ヤサコがフミエに向かって叫んだ。
「無理だ。覚醒はある程度ＭＰのステータスがないと使えない。ダイチはもともとレベルが高かったから使えるんだろうけど、フミエがここまで使っていないということは、やっぱりレベルが足りないんだ。もしフミエも覚醒を使えるなら、真っ先に覚醒して、ダイチと互角以上の勝負をしただろうね。」
ハラケンの言葉にヤサコは不安そうにフミエを見た。もともと消耗していたところにこれだけの攻撃が来て、本当にツライところだろうなと思い、無意識のうちに両手を祈るように組み合わせていた。
「ダイチ、このままじゃラチがあかん！衝撃波で攻撃しろ！」
ここでガチャギリの指示がとんだ。ダイチはラッシュ攻撃を止める

と、両手で剣の柄を握り頭上に掲げた。そして雄叫びを上げながら気を剣に込め始める。そうすることによって衝撃波の攻撃範囲、ダメージが上がる。フミエはダイチから距離をとったが、それは衝撃波をかわしきれる距離じゃなかった。

「なにやってるのフミエちゃん！逃げて！いくらなんでもそれは無謀よ！」

ヤサコがそんなフミエを見て叫ぶ。フミエはそれでもそこでじっとしていて動かない。

「フミエもここで勝負をかけるつもりなんだ。何をするつもりかわからないけど、ダイチが衝撃波は放つまでのこのスキを狙ってる。だから逃げないんだ。」

ハラケンがヤサコにだけ聞こえるように言った。おそらくどちらも最後になるであろうこの攻撃にすべてをかけるつもりだとハラケンは思った。ヤサコも、そしてガチャギリとナメッチもそれを感じ取り、ただフィールド内の2人を見つめた。

「行くぜー！ここで散るんだ！フミエー！レッドウェーブ！！」

体中の全神経を使って剣に気を込めたダイチは、その力を一気に解放するように叫びながら剣を床に突き刺した。そこから高さ2メートルはあろうかというような巨大な赤い波が、フミエに向かって押し寄せた。

「アンタが攻撃をためてる間に、私のＭＰも最大にまで上がったわ！さあ、勝負よ！アンタのすべての力が込められた赤い波を切り裂いて、その赤い心臓に突き刺してあげる！行くのよ！紫電雷矢！！」

叫びながらフミエの放った矢は、紫の電撃を宿し、先ほどと同じ最高速度で一直線に向かって行った。フィールド外、そしてモニター組も固唾を飲んでこの勝負の決着を見届ける。そして、探偵局チームの願いをのせた紫の閃光と、黒客の執念をのせた赤い波が衝突した。その瞬間、神殿はこれまでで最も強烈な白い光に包まれ、ビッシャーンという雷がすぐ近くに落ちた時のような、はたまた、大波が断崖絶壁に打ち寄せた時のような、凄まじい音が発生した。誰も、

しばらくはその勝負の決着がわからなかった。視界、そしてモニターは白く焼き付き、耳、スピーカーからはキーンという耳鳴りのような高い音がするだけである。フィールド内に、勝負の決着の余韻を噛み締めるような風が吹き抜けていった。

#7　いざ、決着の時　－後編－　Ｐａｒｔ１２

しばらくして、フィールド内ではゴゴゴゴとまるで大地震が起きたときのような音が鳴りだした。視界がやっと元に戻ったダイチは、何が起こっているのか見渡す。先ほどのドラゴンの攻撃のときのように神殿が崩れているんじゃないかとダイチは思ったが、そのような気配はない。ところが奇妙な光景が目に飛び込んで来た。ダイチの真っ正面で対峙していたはずのフミエが床に両手両膝をついて、「くっ。」と何かを耐えるような声を上げているのである。ダイチが近寄ってみたが、フミエのウインドウにはまだフミエのＨＰが残っていると表示されている。つまりフミエはゲームオーバーになったわけじゃない。おかしな光景はまだあった。フィールド外で観戦していたヤサコとハラケンも、フミエと同様の態勢になって「うわああ！」と叫び声を上げ、まるでこちらの方を見上げられない様子なのである。一方その横で観戦していたガチャギリとナメッチは何事もなく、ヤサコとハラケンを戸惑いながら見つめていた。

「おい！何があった！？」

ダイチは目の前で苦しむフミエに訪ねる。

「…何って…アンタ…こんな揺れの中でよく立っていられるわね？」

フミエはどうにかダイチの方を見上げて言葉を絞り出すのが精一杯だった。

「揺れ？何のことだ？確かにさっきから地震みたいな音は聞こえてるが。」

ダイチが訪ね返す。絶え間なく地震の音は聞こえてくるものの、ダイチ達黒客に関しては揺れなど感じていない。ところがフミエ達は言葉を発するのも億劫になるほどの揺れを感じているらしく、もうほとんど床にしがみつくような態勢だった。

「キャー！」

最も大きな叫び声を上げたかと思うと、ヤサコ、フミエ、ハラケン

の3人は、その場で意識を失ったかのように倒れてしまった。その光景を見て、残る3人は呆然と立ち尽くすだけだった。そしてようやく地震の音が静まる。

「一体何なんだ?」

ダイチが倒れているフミエを見てつぶやく。何が何だかさっぱりわからないという様子だった。

「地震が起きていたのは間違いねえな。でもおかしいな。ゲーム上の演出では、せいぜい視界が揺れるだけで、立てなくなるはずがねえし、ましてや気絶なんて。しかもオレたちは感じられなかったから、本物の地震が現実に起こったとも考えにくい。」

ガチャギリが考え込むが、ゲームのバグかなにかだと思った。

「どうする?とりあえず離脱するか?」

戸惑いながらダイチがガチャギリに訪ねる。

「待てよ。果たし合いの決着はどうすんだ?」

「こんな状態で決着がどうこう言えねえだろ。」

ガチャギリの問いに、ダイチが答える。それよりもこの予想外の事態にどうしたらいいか考えるのが先だろうと、ダイチは思った。

「冷静になって考えろ。もしここで決着をつけずに終えて、また再戦でもする気か?それでオレたちが勝てる保証はないだろ。だったらここはオレたちの勝ちにしておくべきじゃねえのか。あのメタバグはもう目の前にあるんだぞ。」

ガチャギリはとにかく記録上は自分達の勝ちとして残し、メタバグを確保するための言い分に使おうと考えた。

「…わかったよ。やりゃあいいんだろ。」

ダイチは気を失っている相手を攻撃するのは気が進まなかったが、一応真剣勝負なので、仕方ないと思いつつフミエの元に向かい、手にしていた剣を振り上げた。

「すまん。」

最後の一太刀を入れてフミエのＨＰはゼロに、そしてその瞬間、ＴＥＡＭ　ＨＥＩＫＵ　ＷＩＮ!!の文字が神殿の中に踊った。ダイ

チはこれほどまでに虚しい勝利はないだろうなと思った。
「さあ、アキラ。ゲームを終了させろ。こいつらのいるフロアに行くぞ。」
「わ、わかりました。」
ダイチの言葉に、アキラはすぐゲームを終了させた。ダイチ達の視界は星座に囲まれる神殿から、暗く無機質なコンクリートにかためられた廃ビルへと戻った。

廃ビル2階の東側フロアーに、黒客のメンバーが集まって来た。そこは異様な雰囲気だった。月明かりが差し込むだけの暗い部屋に、ヤサコ、フミエ、ハラケンが倒れている。幸い全員呼吸はしているが、ほとんど動かない。その様子をモニター越しに見ていたアイコは、心配そうに3人の名前を一人一人呼んでいた。
「おい！大丈夫か？」
黒客の面々が、倒れている3人をゆすり引き起こす。
「う…うん？」
最初に目を覚ましたのはハラケンだった。うつろな目をしながら、辺りを見回している。
「気いついたか？」
ハラケンを引き起こしたガチャギリが訪ねる。
「あ、ああ。ここは？」
ハラケンの頭はまだ整理されていないようだった。長い時間ゲームの世界にいると、現実との違いがだんだんぼやけてくる。
「廃ビルの2階だよ。しっかしゲームの途中で気を失うなんて、何があったんだ？」
ガチャギリが訪ねると、ヤサコとフミエもようや目を覚まし始めた。
「えーと、そうだ。ダイチの放った衝撃波と、フミエの放った矢がぶつかり合った時、すさまじい音と強烈な光が生まれたよね。それと同時に、立っていられないほど地面が揺れたんだ。ほんと、最初は地震かと思ったぐらい。」

「それで？」
ハラケンがゆっくり思い出しながら言うなか、ガチャギリが次の言葉をうながす。
「しばらくその状態が続いた。僕はもう地面にしがみつくしかなかった。激しい揺れで体が投げ出されるかもしれないと思った。そしたら今度は、足元から床が割れ始めたんだ。」
「割れ始めた？」
「うん。僕は足元から奈落の底に落ちるんじゃないかと思って、なんとか床に手をかけた。でも最後には自分の体が落ちて行くのがわかった。それで、気がついたらここに。」
ハラケンは話し終えると自分の足で立ち上がった。ヤサコとフミエも続いて立ち上がれたので重傷ではないようだった。
「でもオレたちは一切そんな揺れなんか感じなかった。地震のような音は聞こえたけどな。となると、その地震はこのフロアーだけで起こったものだと考えられるな。しかしおんなじ建物にいるのになんでこんな違いが起こったんだ？ゲームの方のバグか？」
ダイチはそう言って考え込んだ。今まで空間崩壊といえば建物全体で起こっていたものだったので、その可能性は低いんじゃないかとダイチは思った。
「はっ！果たし合いの続きはどうするのよ！？」
フミエが気付いてダイチに訪ねた。
「・・・オレが最後にお前を倒した。果たし合いはオレたちの勝ちだ。どんな理由があろうと真剣勝負だからな。」
ダイチが多少言いづらそうに言った。ダイチは自分でも納得のいく結果とも思っていなかった。
「はあ！？バカ言わないで！私たちは気を失ってなっていたのよ！それでどう戦えって言うのよ！」
フミエが怒って詰め寄る。ダイチも当然のリアクションだと思った。
「だから言ってるじゃねえか。真剣勝負なんだからどんなことがあっても決着をつけないといけないと思ったんだよ。あきらめろ。こ

んなことが起こったのもお前らの運が悪かったからだ。運も実力のうちって言うだろ。」
ダイチがなんとかフミエにあきらめさせようとして言った。
「そんなことで納得するわけないでしょ！大体私たちが体験したのは、空間崩壊じゃないの？だったらこんな危険な空間の取り合いなんかしてないで、空間管理室とかにまかせないといけないわよ。」
フミエが言い、ヤサコやハラケンもうなずいた。これまで経験したことのない現象が起こっている以上、この空間はやはり危険なんじゃないかと3人は思っていた。
「証拠はあるのか？」
「は？」
ガチャギリの唐突な言葉に、フミエが聞き返した。
「だから、この空間でなんか異常が起きたっていう証拠でもあるのかって言ってるんだよ。」
ぶっきらぼうにガチャギリが繰り返した。その態度にフミエはムッとして返す。
「なに言ってるの？げんに私たち3人は気を失って倒れていたのよ。こんなのどう考えたって空間に異常があるとしか思えないじゃない！」
「しかし調べてみたところ、この空間に特に不審なところは見つからなかったぜ。なあ、アキラ。」
ガチャギリがアキラの方を見て確認する。
「え、ええ。確かに僕が調べてみたところ、この空間に異常は見当たりませんでした。姉やヤサコさん、ハラケンさんがゲーム内で揺れを感じていたと思われている時もです。」
アキラがウインドウを見せながら言った。確かにそこには空間の異常らしい情報は示されていなかった。
「ちょっとアンタ！ガチャギリに言いくるめられて、話し合わそうとしてウソついてるんじゃないでしょうね！？」
「いや～、ほんとうのこと言っただけです～！」

フミエがすごい形相で詰め寄ってくるので、アキラは怯えながらガチャギリの陰に隠れた。
「おい！暴力で真実をねじ曲げようとするなんて卑怯だぞ！だいたいお前らの言う地震も、本当はなかったんじゃないのか？勝負に負けそうになったら、３人でそういうウソをついて勝負を無効にしようとかいう作戦じゃないのか？」
ガチャギリの言葉に、その場は一瞬静まり返った。
「…そんな言い方ないんじゃない。フミエちゃんは、ダイチ君との真剣勝負を楽しんでいた。勝とうが負けようが、ここで決着をつけることを望んで戦っていた。フミエちゃんが、そんなことするはずないって、わかるでしょ？あれだけの戦いをしていたんだから。」
つぶやいたのはヤサコだった。ヤサコはこんな形で終わってしまったフミエの無念さを痛いほど感じていた。
「まあ、それはいいとしても。この空間で異常があったことが立証できない以上、空間管理室を呼ぶとか、そんなことするのは約束違反だぜ。お前ら敗者は、さっさとここからでていくんだな。」
ガチャギリの言葉がとがった。これ以上文句は言わせないというような雰囲気があった。
「だから！果たし合いは無効だって言ってるでしょ！私達はアンタ達がこの空間を占領するなんて認めないわよ！」
フミエも負けずに言い返す。今までにないくらい、両者の間に険悪なムードが漂っていると誰もが感じた。
「はっきりと記録にはオレたちの勝ちと残ってるんだ。それをわけのわからん言いがかりで無効にしようなんざ、端から見ればそっちの方が卑怯だと思うけどな。まあいい、じゃあ力ずくでもここから立ち去らせてやらあ。おい、アキラ。例のものを。」
「何なのよ？」
ガチャギリの言葉にフミエがいぶかしげにつぶやく。
「これ以上不平を言うんなら、痛い目を見るってことだよ。」
ガチャギリはそう言うと、ゲームで使っていた物と同じ、追跡くん

が装填されたミサイルランチャーを両手に装備してフミエ達に向けた。
「ちょっと、なんなのこれ？卑怯じゃない！アンタらはゲームでほぼアイテムを使い果たしたんでしょ？なのになんでそんな物を持ってるのよ？５０００メタ分しか使わないっていう約束違反じゃない！」
そう言ってフミエはひるまずガチャギリにかみついた。
「ゲームで使う分にはだろ？これはゲームに参加しないアキラに持たせてたんだ。約束違反にはならねえよ。」
ガチャギリが笑みを浮かべながらフミエに返した。
「くっ。じゃあ始めから果たし合いの結果なんてどうでもよかったのね！仮に私たちが勝った時は、それで脅してやっぱりこの空間を占領する気だったの？」
「バカ言え。始めからそんなつもりならオレたちが本気でしてあんだけの戦いをするわけねえだろ。もちろんオレたちも果たし合いには勝ちたかったよ。でもまあ、仮にオレたちが負けていたなら、お前らとどうにか交渉してこの空間を譲ってもらおうとは思っていたが、これは念のために用意していたんだ。しかし今は立場は逆だな。オレたちが勝者で、お前らが敗者だ。その敗者がオレたちに言いがかりをつけるんなら、こいつでお前らのメガネをぶっ飛ばすのは、別に間違ってはいないと思うがな。」
ガチャギリは威嚇するようにミサイルランチャーを突き出した。
「どうするのフミエちゃん？」
ヤサコがフミエの耳元で小声で訪ねる。
「こっちの話が通じる相手じゃない。これ以上言うと本当にアレを発射しかねないわ。悔しいけど、ここは引き下がるしかなさそうね。」
そう言うフミエの表情は悔しそうだった。しかしガチャギリは自分達のメガネを壊すことをためらわないだろうと感じたフミエは、ヤサコを守るということも考えてそのように判断した。

「決まったか？」
ガチャギリがフミエの決断を訪ねる。
「その前にアンタじゃなくてダイチと話したい。ねえダイチ！アンタはこれでいいと思っているわけ？こんな形の勝利でもアンタは満足しているの？」
フミエはダイチに訪ねた。先ほどからダイチは一連の会話をうつむきながら聞いていた。その質問はダイチにとってもっとも答えづらいものだった。
「…オレが満足しているかどうかなんてお前らには関係ない。もう、敗者がこれ以上口をだすなよ。」
ダイチはうつむいたまま答えた。その言葉をフミエが、ヤサコが、ハラケンが、アイコが、あぜんとしながら聞いていた。
「わかった。もういい。好きにすれば？」
フミエは哀れみにも似たため息をついて静かにそう言うと、廃ビルの階段に向かった。
「ちょ、ちょっと待ってよフミエちゃん！いいの？こんな形で終わってしまうなんて、あれだけの戦いをしたのに、誰も納得できないよ！」
ヤサコが歩いてゆくフミエの腕をつかんで引き止めながら言った。このままだと、中学に入学してからも、両者の間に埋めきれないしこりが残るんじゃないかとヤサコは思った。
「言ったでしょ。話の通じる相手じゃない。大事なメガネを壊されたくなかったら、アイツらにはたてつかないことよ。」
フミエはなんの感情も入っていないような冷たい声で言い放ち、腕をふりほどくと階段を下り始めた。ヤサコはこのフミエの後ろ姿と、うつむくダイチの姿を見て、この2人の距離は限りなくひろがってしまったんじゃないかと思いながら、フミエの後を追って階段を下りた。
「ガチャギリ。僕はもう何も言わない。ただ一つ聞かせてくれ。果たし合いの時に僕に言った言葉。大黒市で、もう同じような事件は

起きてほしくないっていうのは信じていいんだね？今日のことは言わないにしても、また同じような現象が起こったなら、今度はちゃんと空間管理室に届けてくれよ。もしそれが守られないなら、僕が勝手に管理室に届けることを恨みに思わないでくれ。」

「…ああ。」

ハラケンの言葉に、ガチャギリは静かにうなずいた。ハラケンは黒客がこれほどまでにこの空間に固執するのは何か理由があるんじゃないかと思った。ともかくそれは聞かないで、ハラケンは事故だけは起こってほしくないと祈りつつ、この場所を黒客の手にゆだねて帰ることにした。

「…ごめん。」

「えっ？」

黒客のメンバーとすれ違った時、かすかに誰かの謝る声がして、ハラケンは立ち止まった。しかし誰もこちらを振り返らないのでハラケンはそのまま階段を下り、ヤサコ達の後を追った。

廃ビルが面している通りに、一台の車が止まっていた。ほとんど人の通りも車の通りもない道で、その車も静かに闇にとけ込んでいる。誰かがいる気配を感じさせないよう息をできるだけ殺しながら、その車内で2人の男がじっとモニターを注視していた。そこには廃ビルの中の様子が映し出されている。

「…地割れですか。」

運転席にいた男がつぶやいた。

「ええ。もともと不安定な空間ですが、どうやらゲームの中の衝撃に触発されて起こったみたいですね。」

助手席の男が分析する。そう、この2人の男は果たし合いの一部始終をこの車内から見届けていたのだ。

「それにしても軽く気を失っただけで済んでよかったですね。あんまりひどいようだと騒ぎになって、こちらの実験どころじゃないですし。子ども達の方も、やはり大量のメタバグが惜しいでしょうか

ら、他言はしないでしょうからね。」
運転席の男が言った。
「そうですね。とりあえず子ども達が去った後、僕達も立ち入って様子を見ておきましょうか。それをふまえた上で本社に報告を。」
「ええ。わかってます。」
助手席の男の言葉に、運転席の男がうなずく。大黒市の夜は、この後何事もなかったかのように更けていった。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ１

「メガネには、メガマスが独占契約している世界的コンピューター企業のＯＳしか搭載されていません。ネットワーク環境の充実が決め手になったようですが、少数派のＯＳのユーザーからはかなり不満の声があがったようです。」

「…本社に繋いでください。実験の近況報告です。…・・僕です。指示通り例の空間の監視を続けています。予定通り数人の子供達がこの空間に入り込んでいます。」

昨日廃ビルを監視していた男が、ある場所に電話をかけていた。次に電話の向こうの声が答える。

「そうか、ご苦労だった。空間異常は見られるか？」

「昨日、子供達が遊んでいる中のひと区画で『地割れ』が起こりました。三人ほど一時意識を失ったようですが、すぐに目を覚ましたので軽症ですんだようです。」

男が淡々と言う。

「…なるほど。まあ、あの空間は通常食空間に強引にねじ込んでいるようなものだ。時には破裂する時もある。それより、空間管理室の動きは？」

電話の向こうの声が訪ねた。

「オートマトン一つ飛んで来ません。偽装はうまくいっているようですね。もちろん子供達も大量のメタバグ惜しさに、このことは黙っているでしょう。しかしこのままでは実用化は難しいのでは？」

今度は男の方が声に訪ねた。

「問題ない。計画がうまくいけば、我々は空間を管理する立場になる。そうなればその点は改善することができるだろう。他に問題は？」

「ありません。ただ事情がありまして、そろそろもう一つの方も稼

働させようと思うのですが。」
男はうかがいをたてるように聞いてみた。
「…大きな騒ぎになっていないのならそれもいいだろう。ならそちらの方も合わせて後日また報告を頼む。」
「わかりました。詳しいレポートを後ほど送ります。」
男は電話を切った。

果たし合いの翌日は春分の日だった。この日ハラケンは家族で先祖の墓参りに行っており、ヤサコとフミエは昨日行われた果たし合いの結果を報告がてら、朝からメガばあの電脳工房を訪れていた。
「もう本当に不愉快だわ！いつか必ずアイツらをぶっ飛ばしてやるんだから！」
ヤサコはそのフミエの言葉を、昨日から何回聞いただろうと思った。確かにあの黒客の行動はヤサコもひどいと思った。しかし反抗するとメガネを壊されてしまうために何も言い返すことができず、ヤサコ達はそのまま廃ビルを後にしたが、そこからフミエはためていた怒りを吐き出すようにものすごい勢いで愚痴をぶちまけていた。
「ハラケンもハラケンよ！なんでアイツらに言い返さないわけ！？アイツだったら男同士、話は通じたかもしれないのに。帰り道でも、『悔しくないの？』って聞いたら、『ダイチ達にも何か事情があるんだよ。そうでなきゃあんな強引な手段に訴えるヤツじゃない。』って、何甘いこと言ってんだっつーの！大体テメーがあの空間はフォーマットした方がいいって言って果たし合いになったんだろうが！その果たし合いでも最後の最後でアイツが油断して逆転されたし！まったくどの男もロクなヤツがいないんだから！」
「…まあまあフミエちゃん。落ち着いて。ハラケンを責めるのはやめようよ。ハラケンだってゲームでは頑張ったんだし、何か思うところがあったのかもしれないよ。それにあの空間をフォーマットした方がいいって言ったのはハラケンだよ？そのハラケンが認めたんなら、もうあの空間のことはいいじゃない。フミエちゃんだってそ

こまでお金儲けがしたかったわけじゃないでしょ？」
怒り狂って暴言連発のフミエを、ヤサコは必死になだめようとした。
「わかってないわねヤサコ。アンタはあらゆることがわかってない！」
「な、なんでしょうか？」
フミエにきっぱりと告げられ、ヤサコはまた自分が的外れなことを言ってしまったのかと萎縮した。
「私はね、あの空間を取られたことを怒ってるんじゃないの。確かに私にもお金を儲けたいっていう気持ちは1ミリぐらいはあったわ。」
「…1ミリですか。それはどのくらいのうちの1ミリ？」
ヤサコがいちいちフミエの言葉を拾って訪ねる。フミエは大きなため息をついてからまくしたてた。
「地球と月との距離のうちの1ミリよ！とにかくメタバグが手に入らなくなるとかいうことはどうでもよかったの。私はあんな勝利を勝利だと思っているダイチの安っぽい根性がムカつくのよ！」
「そ、そうなんですか？」
ヤサコはフミエの勢いに圧倒され、自然と敬語で返していた。
「確かにハラケンの言う通り、昨日のアイツらはちょっとおかしかった。何が何でもあの空間は自分たちのものにするという汚い気迫にあふれていた。」
昨日の黒客メンバーの様子を思い出しながらフミエが言う。
「そうよねえ。ダイチ君が最後あんな冷たいセリフを吐き捨てるなんて。果たし合いの最中はカッコいいくらい燃えていたのに。」
ヤサコの言葉を聞いたフミエは、少し呆れ顔になった。
「本気で言ってるのそれ？だからアンタは何もわかってないって言ってるのよ。」
「ご、ごめん。」
ヤサコは素直に謝るしかなかった。今もってフミエやダイチの性格を理解していない自分を恥ずかしく思った。

「昨日の黒客を見ていてわからない？確かに今もリーダーはダイチだけど、昨日その中心にあったのはガチャギリじゃない。言ってみればガチャギリが1人私たちを追い出そうとして、ダイチやそれ以外のメンバーはガチャギリに調子を合わせてただけでしょ？」

言われてみればそうだとヤサコは思った。フミエと張り合っていたのはガチャギリで、ダイチの方はと言うと脇でうつむいているだけだった。いつもならダイチとガチャギリの役回りは逆であるはずである。

「じゃあ、どうしてもあの空間を欲しがっていたのはガチャギリだったってことよね？それもお金儲けのため？」

ヤサコが訪ねる。

「それはそうでしょうね。確かにあの中でお金儲けに一番関心があるのはガチャギリよ。でもなんか引っかかるのよね。アイツはあれで筋を通す性格なのよ。お金儲けをするための基本、それは相手の信用を得ること。適当やってるヤツとか自己中心的なヤツじゃ、それはできない。ガチャギリは根っからの商売人だからこそ、そういうことはキッチリしている。そのガチャギリがあんな手段に訴えるなんて、よほどの理由があるんでしょうね。」

そう言ってフミエは考え込んだ。ダイチと付き合いが長いフミエは、そのダイチの連れであるガチャギリの性格も少なからず頭に入っていた。

「よほどお金に困っているのかしら？ん？でもフミエちゃん。ダイチ君はガチャギリに調子を合わせていただけなんでしょ？それって最後の言葉も本心からでたものじゃないってことだよね？なのになんでそんなに怒ってるの？」

ヤサコは純粋に疑問に思った。そこまでダイチの立場もわかっているのなら、なおさらフミエが激怒する理由もわからなかった。

「あの果たし合いは、私たちの最後の戦い。ここで決着をつけようって始めたもの。その結果には、これ以降口をださないって約束までした。そう、あの戦いは私たちの過去を清算して、未来を決する

っていう意味があったの。ちょっとおおげさかもしれないけどね。でもダイチは、それを安っぽい勝利で飾ってしまった。もちろんダイチだってあの結果には満足してないでしょうね。顔を見てればなんとなくわかるわ。」

「だったらなんで？」

「アイツらにどういう事情があるのかは知らない。でもアイツにはあそこで本心を言ってもらいたかったの。」

「最後の言葉ね？」

ヤサコはその言葉を放ったときのダイチの顔を思い出した。「オレが満足しているかどうかなんてお前らには関係ない」と言ったダイチは、今思えば本心をはぐらかしているかのように思えた。おそらく満足していると自分にウソをつくことはできず、一方で満足していないとも言えなかったダイチが、精一杯探し当てた言葉なんだろうとヤサコは思った。

「ええ。でもアイツは私たちを追い出した。もしアイツらに絶対的な自信があるのなら、今日にでも再戦してやるぜって返したはず。でもアイツはそう言わなかった。つまり勝ち逃げよ。それもかなり卑怯な勝ち方のね。私はアイツがあんな根性なしだったことを見損なったと同時に、アイツごときと互角の戦いを演じた自分にムカついているのよ。」

「そんな。だってフミエちゃんは私の方まで気にして戦っていたじゃない。そんなのダイチ君よりずっと負担がかかっていたはず。それにステータスでもダイチ君の方が上だったんだから、互角どころの戦いじゃなかったよ。フミエちゃんは勝つにふさわしかったわ。」

「気休めはいいわ。最後の矢が、赤い波を引き裂いてダイチに刺さっていれば、私たちの勝利で終われたの。あれは私の技術が拙かっただけ。」

なんて自分に厳しいんだとヤサコは思った。だからこそ、いざという時に頼りになる人になれるのかなとヤサコは感じた。

「それでメガばあ。黒い霧や地震に関する資料見つかった？」

フミエがメガばあに訪ねる。メガばあはずっと2人の会話を聞きつつ、ヤサコの祖父宏文の研究資料に目を通していた。資料自体はあの事件の時に見つかったものであり、そこに黒い霧やヤサコ達が感じた地震について書かれているかもしれないと、ヤサコが思いついて引っ張り出してきたのだ。

「うんにゃ。関係のある資料はここにはなさそうだの。この資料自体は出て来た時にワシが一度目を通しておるし、見落としもないはずじゃが。まあこれはオジジの研究の一部に過ぎんから、見つかっていない資料に書かれている可能性はあるがの。」

「そう。」

メガばあの言葉に、2人はがっかりしたように声を合わせた。

「やはり一度空間管理室に見てもろうた方がええ気はするが。げんにお主らは気を失ったんじゃろ?今回は軽症で済んだが、また誰かがおかしな空間に入り込んで戻って来れんということになる可能性もあるしな。」

メガばあにとっても未知の現象が起きているので、やはり不安ではあった。

「悪いけど、それはムリ。」

「フミエちゃ〜ん。」

ところがメガばあの忠告をきっぱり断ったフミエに、ヤサコはつい声が出た。ヤサコもメガばあの言うように、ここは管理室に任せた方がいいと思っていた。

「確かにダイチ君達とは、果たし合いの前に約束したわ。負けた方が他人にあの場所のことを教えてはいけないって。でもこれは事故につながるかもしれないことだし、何よりあんな強引な方法であっちは廃ビルを占領したんだから、私たちが約束を破ってもやむを得ないと思ってるんじゃないの?」

ヤサコがフミエを説得しようとする。ところがフミエは聞く耳をもたない。

「それならいっそアイツらが事故にあえばいいのよ。自業自得って

ものだわ。」
フミエが腕を組んでさらっと言った。
「ちょっとそれはあんまりよ。」
今のフミエの言葉は冗談にもならないとヤサコは思った。ハラケンが言うように、もう空間の事故で人が犠牲になるようなことは起きてほしくないとヤサコはせつに願っていた。
「ほんの冗談よ。怖い顔しないで。でも思ったんだけど、確かに昨日あの空間を調べても異常がなかったのは確かよ。サッチーがあの空間をフォーマットしたところで、大して変わらないと思うの。ただメタバグがなくなるだけでね。」
フミエが考え込みながら言った。アキラの示したデータとは別に、フミエは自分であの空間の異常を探ったのだが、結果は他の空間となんら変わりはなかった。
「じゃあ空間の方に原因はなかったってこと?それならゲームの方のトラブルかしら?」
「それは断言できないけど。」
ヤサコの問いにフミエが頼りなく返した。ゲームのトラブルでプレイヤーが気を失うなんて話は聞いたことがなかったからだ。
「じゃあやっぱり念のためサッチーにフォーマットさせた方がよくない?メタバグさえなければあんなビル誰も寄り付かないんだし、それなら事故が起こることもないしね。」
ヤサコはサッチーをあのビルに立ち入らせることは、根本的な解決にはならないまでも事故の予防にはなるんじゃないかと思った。
「私はそれがイヤなのよ。アイツらを早いうちに追い出すっていうのは、もちろん望むところよ。でもそれを自分の力じゃなくてサッチーなんかにやらせるっていうのが気にくわないの。そうしないとアイツらは負けを認めない。あげく私たちのメガネだって壊されるかもしれないのよ?昨日のガチャギリの様子なら、それも十分考えられるわ。」
フミエがヤサコに返す。どうしてもフミエは黒客のメンバーを一度

コテンパンにしないと気が済まないらしい。
「ガチャギリが昨日私たちのメガネを壊さなかったのは、私たちが管理室に告げ口するのを防ぐためだったてこと？」
ヤサコがフミエに訪ねる。昨日ガチャギリは自分達のメガネを壊そうと思えばできたはずだが、そうはしなかった。考えてみればフミエに挽回のチャンスを与えることで、フミエが管理室に告げ口するのをためらわせる狙いがあるんじゃないかと思えた。もしあそこでメガネを壊されていたなら、フミエは告げ口するのをためらわなかっただろう。その時点で失うものなどないからだ。
「まあ、そういうことね。アイツらは私の反撃を予想している。なら、ここは期待に応えないといけないわね。」
フミエはやる気満々のようだった。常に前向きなその姿勢には、ヤサコも恐れ入った。
「でもどうやって？あの空間を占領された時点で装備ではかなわないわよ。」
ヤサコがフミエに訪ねる。さすがのフミエでもそれはキツいだろうとヤサコは思った。
「簡単じゃ。他のメタバグの鉱脈を探せばいいのじゃ。」
そこにメガばあが割りこんで言った。
「そうは言っても、あの場所を見つけたのは奇跡に近いわ。というより、あんな場所が残っていたこと自体奇跡よ。」
ヤサコがメガばあに言い返す。あれから半年以上経っているのにまだ鉱脈が存在したことは、未だに信じがたいことだとヤサコは思っていた。
「いえ。あの廃ビルは中津交差点の近く。中津交差点の付近は空間の乱れが多くて、よくキューちゃんが飛び回っていたけど、そうなればあの廃ビルもすぐにフォーマットされるはず。そうでなくてもああいう場所は子供たちがメタバグを探しにくるから、今まで誰にも見つかっていなかったっていうのは不自然よ。つまり、あの鉱脈は夏の事件の後の古い空間の掃討からたまたま生き延びたのではな

く、ごく最近に何かの原因で自然発生したものと考えるべきね。」
フミエの推理に、ヤサコもなるほどとうなずいた。その何らかの原因というのが気になるところではあるが。
「じゃあ、あの廃ビルのようなメタバグの鉱脈がまだ他にもあるかもしれないということ？」
「その通り！」
ヤサコの言葉に、フミエが頬をほころばせながら返した。こういう逆境の中からの戦いが、フミエは本当に好きなんだなとヤサコは感じた。
「いいの、おババ？一応こういうことになったけど。」
ヤサコがメガばあに訪ねる。メガばあは管理室に届けた方がいいと言っていたので、フミエの行動に反対するかもしれないと思った。
「かまわん。フミちゃんは管理室に届けるのはイヤじゃと言うておるし、もしそうした時は、お主らのメガネが危ないんじゃろう？ダイチ達にしても、もうすぐ中学生になるんじゃから、何か起こっても自分達で責任をもたねばならん。ましてや去年の事件を経験しとるんじゃからなおさらじゃよ。」
メガばあはここは厳しかった。もう小学生の子どもじゃないので、やっていいことと悪いことの区別は自分達で判断しなければならないということだった。
「あの廃ビルは、今はもう誰の所有かもわからなくて、ほとんど人の出入りがない空間。メガばあ、そういう空間に心当たりは？」
フミエがメガばあに訪ねる。やはり鉱脈を探すならそういう場所から当たっていった方がいいと思ったのだ。
「任せるんじゃ。そういうことなら地図があるでな。とってくるからちょっと待っておれ。」
メガばあが電脳工房を飛び出して店先へ向かう。やる気満々のフミエとなぜかノリノリのメガばあに、ヤサコはついていけないなあと思い始めた。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ2

この日はどんよりとしたくもり空だった。雨は落ちていないが分厚い鉛色の雲が空を覆い、太陽の光は差し込む気配すらない。ただでさえ光量の少ない廃ビルは、この日はより鬱蒼としていた。そこに昨日この場所を勝ち取った黒客メンバーがやって来て。とりあえず眺めのいい４階までのぼって来た。

「まあまあ、やっとこの場所が手に入ったな。ここからが本番というわけだが、おいダイチ！もっとテンション上げていけよ！これからオレたちは巨万の富を手に入れるんだぞ！」

嬉しそうなガチャギリとは対照的に、ダイチはなんとなく浮かない顔をしていた。もちろんそれは昨日の果たし合いのことを引きずっていたからだった。

「あ、ああ。オレだってわくわくしてるぜ。金欠の時代が長かったわけだからな。その時の苦労が報われると、今は最高にハッピーだぜ。」

多少無理している感じはあったが、黒客のリーダーの建前としてダイチは満足しているように言った。リーダーに迷いがあると、他のメンバーにも気を遣わせてしまうと思ったからだ。

「で、どうするんすかこれから？具体的にどうやってこの大量のメタバグを売りさばくわけで？」

ナメッチがダイチに訪ねる。ナメッチは特に昨日のことを気にしている感じもなかった。

「それについてはガチャギリにいいアイデアがあるんだと。」

ダイチがガチャギリの方にふる。

「ああ。実はオレの昔のダチに、メタバグをツールにかえる技術を持ったヤツがいるんだ。いや、正確に言えばそいつの兄貴がその技術を持っているんだが。そしてこれは最近知ったことなんだが、その兄貴はかつて通販電脳駄菓子屋を運営していたんだとよ。つまり

その道のプロってわけだ。昨日そのダチに連絡を取って了承が出てな。オレたちは基本的にその兄弟にメタバグを卸す。販売はその兄弟に委託するっていう形にしようと思うんだが。」

ガチャギリが説明する。さすが金儲けのことばかり考えているだけあって、色々なコネを持っているんだなあと一同は感心した。

「昔のダチってアレか？前の小学校の友達とかか？お前は転校生だもんな。」

ダイチがガチャギリに訪ねる。あまりになじみ過ぎていて時々忘れそうになるが、ガチャギリは転校生である。大黒市西部にある小学校から3年の時に三小にやってきた。

「一応そうなるな。そいつの名前はシンヤっていうんだ。妙に大黒市の電脳クラブ事情に詳しくて情報屋とも呼ばれ、それだけで結構儲けていた。まあオレとは顔なじみとして、わりと情報交換もしていたんだが。」

「情報屋？」

ナメッチがその言葉に引っかかった。

「知らねえのか？情報屋はその名の通り情報を売り物にして商売しているヤツのことを言うんだ。大黒市にはかなりの数の電脳クラブがあるだろ？オレたちにみたいに普段学校にいるだけじゃあ、その勢力図とか情勢はイマイチわからねえ。そこで情報屋に金を払って色々聞き出すんだよ。」

ダイチが説明は始める。ナメッチやデンパはその存在自体知らなかった。

「色々って？」

ナメッチが訪ねる。

「例えばオレたちがAという電脳クラブに戦争を仕掛けようとしている。しかし戦力は互角で勝てる保証がない。そこで情報屋に、オレたちの他にそのAと敵対しているクラブはないか訪ねる。そこで情報屋はBというクラブを紹介してくれる。オレたちはそのBと結託してAを攻めるっていう、まあそんな感じの使い方かな。戦争は

情報を制する者が制する。だから情報屋っていうのはかなり貴重な存在なんだ。」

ダイチが持っていたチョークで床に図を書きながら説明する。ナメッチとデンパはなるほどとうなずきながら話を聞いていた。

「じゃあ情報屋っていうのは相当儲かるんじゃないっスか？」

「でも、あらゆるクラブが欲しがる多様な情報を握っている情報屋なんて少ない。しかも信頼できる情報を売り続けないとその地位も確立できない。それを可能にするにはかなり広いネットワークを持っていないといけないな。オレも情報屋のシンヤっていうのは耳にしたことがあったが、お前の古いダチだったんだな。」

ダイチがガチャギリの方を見る。そのシンヤは大黒市のこの世界じゃわりと名の知れた存在であった。

「ああ、信頼できるヤツだ。まあおいおいお前らにも紹介するよ。とりあえずメタバグのことはそういうことでいいか？」

ガチャギリがメンバーに確認をとる。

「異論はないぜ。あとはオレを狙ったハッカーをどう突き止めるかだな。ガチャ、この前言ってたよな。メタバグをエサに情報を集めるとかなんとか。」

ダイチがガチャギリに訪ねる。そのことはこの廃ビルを見つけたその日に話し合っていた。

「そうだな。やっぱりオメーを狙ったのはどこかの電脳クラブだと思うんだ。オレたちはイサコが集めていたキラバグを握っていると思われているみたいだしな。そういやシンヤと連絡とった時にも言われたよ。お前ら本当にキラバグ持ってんのかってな。もちろんソッコーで否定したけど。」

ガチャギリが少し笑みながら言った。あらゆる情報を網羅するシンヤでもそのように思っていたのがおかしかったようだ。

「そうか。かなりその偽情報が浸透してんだな。はあ、これからも狙われるんだろうか。」

ダイチが少し憂鬱な気分になってため息をついた。

「オレたちを狙うヤツに心当たりがないかもシンヤに聞いてみたが、正直多過ぎてわからんらしい。まあアイツにも協力してもらって地道に洗い出していこうや。もう一度向こうから接触してきたら、逆探知ソフトですぐに犯人もわかることだしな。」

「そうだな。しかっかしまあ、オレたちがそんなに有名人だなんてな。それもただ妬まれてるだけなんて、気持ちのいいことでもねえし。」

ガチャギリの言葉に、ダイチはもう一度ため息をつきながら言った。

「まあまあ、そう言うなって。この街でのオレたちの功績がでかいっていう証拠じゃねえか。とにかく、当面の目標は大黒市にメタバグを流通させることだ。需要が供給を上回るくらいな。そのついでに情報収集もしていく方向で。」

ガチャギリ言ってメンバーがうなずく。もう一度メタバグ市場を作りだせば、ほっておいても金が入るようになるというのがガチャギリの考えだった。

「でもフミエ達はこの場所のこと黙ってくれるんスかねえ?」

ナメッチが思いついたように言う。どれだけ金儲けの計画を立てても、この場所がサッチーにでも破壊されたら水の泡である。

「…負けず嫌いのフミエのことだ。空間管理室に届けてオレたちを追いだすよりも、自分でこの場所を取り返そうと考えるだろう。」

ダイチが言った。フミエの性格を知り尽くしているからこその推測だった。

「そのために昨日、ヤツのメガネを破壊しなかったんだ。むしろオレたちに挑んで来てくれないと困る。なあアキラ?お前もアイツが諦めるわけないと思うだろ?」

ガチャギリがフミエの弟のアキラに訪ねる。

「そう思います。今日も朝早くから出かけていることも考えると、やはり再起を目論んでいるんじゃないでしょうか。」

さすがに姉弟だけあって感じるところがあり、アキラもフミエが諦めたとは思っていなかった。アキラはそのとばっちりがフミエから

来ないことを祈るだけであった。
「でもオレたちを倒せる芽が残ってるんスか？諦めないとは言っても、そんなこと不可能だと感じたら、やっぱり管理室に届けるんじゃ。」
ナメッチが少し不安そうに言う。フミエが力を盛り返しても困るが、フミエに諦められても困るということもあり、何だか複雑な気分だった。
「それなんだ。フミエが再起を諦めないってことは、まだ逆転の芽があると信じているからだ。じゃあその芽っていうのを考えてみるとだな、やっぱりメタバグの鉱脈を他に見つけ出すことだと思うんだよ。」
「ダイチの言う通りだ。考えるにこの鉱脈はずっと昔からあるものじゃねえ。サッチーやキューちゃんがよく行き交う中津地区にあって、これまで見つかっていなかったっていうのは不自然だからな。つまりこの鉱脈は最近何らかの原因で自然発生したものと考えるべきだろう。フミエが同じ結論に行き着いた場合、ヤツはここと同じような空間を探しに行くはずだ。仮に大黒市内に同じような鉱脈があって、そこをフミエやあるいは他の電脳クラブに押さえられると厄介だ。オレたちはそれも押さえておかなくてはならない。」
ダイチとガチャギリが考えを述べる。広い大黒市、2人とも必ずどこかには同じような鉱脈が生まれていると踏んでいた。
「アキラ！今からお前を広域捜査隊長に任命する。大黒市のこの廃ビルと同じような空間をしらみつぶしに探すんだ。見つけ次第オレたちに報告しろ。」
ダイチがアキラに言いつけた。
「待ってください！広域捜査隊長って、他に隊員は？」
困った顔をしてアキラが訪ねる。
「隊員はお前が集めろ。同級生の友達でもなんでもいい。メタバグでもちらつかせればすぐに集まるだろう。もちろん連中の小遣いなら必要経費として出してやってもいい。武器も不自由ないよう補給

してやる。どうだ?おいしい仕事だろ?」
ガチャギリがアキラの頭をなでながら言った。アキラはもともと厄介な仕事はやりたくない性格だが、ダイチやガチャギリの言ったことは無視はできない。
「…わかりました。やります。」
渋々という表情でアキラが承諾する。「よし」と言うようにガチャギリが手を叩いた。
「じゃあこれが武器と経費のメタバグだ。無駄遣いはするなよ。でもフミエに出会ったら容赦なく一発かましてやれ。あとお前ならわかると思うが、探すのはこういう人の出入りがないような場所で今は誰の所有かもわからないような寂れた建物だからな。夕方には戻ってこいよ。」
ダイチが必要な物を渡して見送り、アキラは廃ビルを出て行った。
「オレたちも暇じゃないぜ。まずナメッチとデンパにはこの廃ビルの周辺の警備を頼みたい。」
4人になってダイチがナメッチとデンパにお願いした。
「警備って?」
ナメッチが聞き返す。
「この廃ビルに近づいてくる子どもはもちろん追い返さないといけねえが、こんなところなかなか他のヤツは来ないだろうからそれは意識しなくても大丈夫だ。それよりもキューちゃんやサッチーがここのメタバグを嗅ぎ付けてやってくることの方が怖い。まあ、ヤツらも最近おとなしいからそこまで神経使わなくてもいいかもしれないがな。とにかくヤツらが近づいて来たらこの黒バグスプレーで、注意をここからそらしてほしい。」
そう言ってダイチは2人に黒バグスプレーを渡した。黒バグスプレーは吹き付けた所にバグを発生させることができ、キューちゃんやサッチーの気を引く時に役立つ。
「了解っす。でもメガネ壊されたときの補填は頼むっすよ。」
ナメッチがダイチに念を押す。サッチー達を相手にする危険な仕事

なので、保険がないと安心できないらしい。
「おっけおっけ。ちゃんと出してやるから心配すんな。オレとガチャギリはここのメタバグの在庫状況っちゅうか、数の確認と整理をしてるから、一段落したら変わってやるぜ。とにかく気をつけてくれ。」
そう言ってダイチとガチャギリは廃ビルに残り、ナメッチとデンパは外回りに出かけていった。
「さてと、じゃあこの4階から始めるか。」
ダイチがガチャギリに声をかけ、整理用にウインドウを出した。
「ちょっと待ってくれ。このビルをどうやって守っていくか考えようぜ。昼間はオレたちが見張るからいいとしても、夜にサッチーとか誰かが来た時はどうする？フミエもそのあたりをついてくるかもしれねえし。」
ガチャギリが窓から外を覗き込みながら言った。その窓から見えるのはビルの北側で、メガマス本社も見えている。
「そうなるとセンサー類が必要だな。できればそれと連動するようなトラップがあれば理想的だが、メタバグは大量にあっても、そういうたぐいのアイテムはないからな。」
両手で後頭部を抱え、天井を見上げるようにダイチが言った。
「レーダー機能を持つ暗号なら組めるぞ。それでセンサー代わりにもなるはずだ。」
ガチャギリがダイチの方を振り向きながら言った。
「暗号？」
不思議そうにダイチがガチャギリを見返す。
「去年、イサコのイリーガル狩りを手伝った時に、アイツが使った暗号を見て盗んだんだ。その暗号のあるエリアに何かが入れば、その位置情報がメガネに転送される。トラップとの連動も工夫すればなんとかなるかもしんねえ。」
少し表情を和らげながらガチャギリが言った。
「ほんとか？すげーなお前。ならそれについては任せるぜ。あとト

ラップに使う直進くんとかも補充しておかないとな。」
ダイチの表情も明るくなった。
「あの警官か。今後どうするんだ?オレたちはもうメタバグをツールにかえる手段を確保したんだ。あの警官の力を借りなくてもいいが。」
ガチャギリがダイチの方を向いたまま訪ねる。あの警官とは果たし合いの前に黒客に武器を供給した直樹のことだ。
「いいんじゃね?たまにはあの人に武器をもらうってことで。あの人も善意でやってくれてるんだし、何よりタダだからな。お前も好きだろ?ダーター。」
ダイチが嬉しそうに言う。ダイチは直樹を尊敬しているので、少しでも直樹と絡む機会が欲しいのだ。
「わかったよ。オレはアイツがイマイチわからねえんだけどな。メタバグはこっちからわたしているとはいえ、タダでツールをくれるなんて。ただのヒマ人じゃあるまいし。」
ガチャギリが頭をかきながら言った。
「作ってるのは直樹さんの友達だろ。お前にはあの人の優しさが伝わらねえのか。寂しいヤツだぜ。」
少し哀れむような目でダイチがガチャギリを見つめる。
「悪かったな、根っからの商売人でよ。まあ、とにかく在庫確認始めようや。」
ガチャギリがそう言って、2人は落ちているメタバグの数や性質のチェックを開始した

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ3

メガマス本社ビル１５階、空間管理室本部のオフィスのデスクで、一郎は出勤早々作業に没頭していた。この日は午後から本社の幹部に向けて、先日のイマーゴの実験結果の報告をすることになっており、実験の責任者である一郎は昨日上げられた実験報告書を確認しているのである。一郎の肩書きはまだ空間管理室の所属となっているが、実験の責任者に抜擢されたのは社長桝田の直々の指名があったからだ。そのことで本来ならプロジェクト推進を取り仕切る研究開発部の人間からは、その異例の人事に批判の声が上がった。そういう経緯もあって一郎はこのプロジェクトで失敗は許されないと思っていた。自分の失敗は自分を推してくれた社長の評判も下げることになりかねないので、午後からの報告も準備万端でのぞめるよう、一字一句丁寧に確認していた。

「小此木さん！小此木さんはいらっしゃいますか？」

そこに慌ただしく一郎の部下である香川が息を切らしながらやって来た。香川は一郎とは違い研究開発部の所属で、社長からは一郎の補佐として指名された。なので普段はオフィスが違うのだが、用事があるときはいつも香川が一郎のオフィスを訪れていた。

「どうしたんだ？朝から騒々しい。」

一郎はやれやれという感じで香川の方を向いた。前から香川のことを慌て者だと感じていた一郎は忙しいのに何事だと思った。

「それが、エラいことになってるんですよ！」

香川が必要以上に大きな声で言うので、オフィスにいるほとんどの人の視線が２人に集まった。

「エラいこと？」

そう言うと、一郎は騒がしくして申し訳ないと周りに頭を下げた。

「とりあえええず、ここじゃなんですので。管制室に来てください。」

香川が気を遣って一郎の耳元で小声で言う。管制室とは先日実験が

行われた研究施設のことだ。
「…いいけど、これ午前中までにチェックしないといけないから、持って行ってもいい？」
一郎が手元にあった実験報告書を手にしながら香川に訪ねる。
「だからそれどころじゃないんですって！あ…とにかく管制室に急ぎましょう。」
香川がまた大声を出して、再びオフィスにいた社員がびっくりしたようにこちらを見た。この場所に居づらくなった香川は一郎の手を引いて廊下を飛び出す。エレベーターで一階まで降り、たくさん人の集まる玄関ロビーを抜けると、研究施設専用エレベーターに飛び乗った。ようやく人に聞かれる心配もない所までやって来て、香川は一息つくと一郎に切り出した。
「いいですか、落ち着いて聞いてくださいよ。」
「落ち着いたほうがいいのは君だ。それほどの緊急事態なのかい？」
一郎が訪ねる。イマイチ危機感がないのは、トラブルがないようにいつも管理を徹底してきたからだ。
「ええ。先ほど、リードプログラマーの吉川さんから電話がありまして。話によれば、管制室を一日閉鎖していた昨日、何者かが内部コンピューターに侵入し、空間プログラムを盗んでいった可能性があるそうです。」
香川が息を整えながらできるだけ落ち着いた口調で言う。しかし一郎はにわかにその話を信じられなかった。
「まさか。君も知っているだろ。ハッキングに備えて管制室のコンピューターはネットワークに接続していないことを。それでどうやってデータが盗めるって言うんだ？」
「いや、げんにハッキングされたからこうやって慌てているんじゃないですか。とにかく僕も詳しい話は聞いていません。管制室に行けばどのような事態かわかるはずです。」
一郎は何かの勘違いだろうと思った。というよりそう信じたかった。そうして段々不安になってきた一郎は、とにかく事実を確認しよう

と研究施設のある地下5階に降り立つと、かけ足で通路を抜け管制室へと向かった。

「吉川さん！ハッキングに遭ったというのは本当ですか！？」

一郎は管制室に入って開口一番、立ち並ぶコンピューターを確認していた吉川に向かって訪ねた。

「…やられたみたいですね。ホストコンピューターの中にネットワーク接続した形跡があります。他のコンピューターも昨日一日起動しなかったわりには熱を持っていますので、おそらく全プログラムがホストコンピューターに送られ、そこから外部に漏れたのだと思われますが。」

吉川はそう言って一郎の方にやってくると、ホストコンピューターを操作し始めた。

「データは盗まれたんじゃないんですか？」

一郎が吉川に訪ねる。

「それがどういうわけか、こちらのデータは無事なんです。どうやらそのハッカーはデータを盗んだわけではなく、そのデータをここでコピーして持っていっただけのようです。」

不思議がりながら吉川が言う。ハッキングと言えば、データを盗むのが普通である。わざわざバックアップをとって盗んでいくハッカーはまずいない。

「どういうことですか？ハッキング自体を気付かせないようにする偽装工作ですか？」

一郎も何故だろうと思いながら訪ねる。

「そうは思えないですね。そういう偽装をするならネットワーク接続をした形跡まで消すはずです。ここまで手を込んだことをしてそれを忘れるとは考えにくいですし。」

吉川が答える。

「じゃあ産業スパイの仕業っていうのもないですね。ハッキングを気付かせる証拠を残すくらいなら、データまるごと盗むはずですしね。プログラムはすべて持っていかれたんでしょうか？」

香川が考え込みながら訪ねた。
「おそらく。言ってみればコピーを持っていかれたようなもので、どれだけ盗まれたかは定かではありませんが。」
吉川はホストコンピューターのプログラム起動履歴を調べていた。それでどのくらいのプログラムがコピーされたのかわかるはずだった。
「じゃあその持っていかれたプログラムを使って、街中で古い空間を暴走させることは？」
おそるおそる一郎が訪ねる。もっとも恐れていた事態を一郎は思い浮かべた。
「…プログラムすべてを持っていかれたとしたら、可能です。あとは場所を制御するプログラムを書き換えればいいだけなんで。」
吉川のその言葉が、一郎に重くのしかかった。プロジェクトを進める中で、もっとも許されない失敗をしてしまった。なによりあの事件と同じことが起こってしまうかもしれないことに、一郎は背筋が凍り付いた。
「い、一体どうしてこんなことに。実験後のコンピューターの管理は徹底していました。それがどうして僕らの知らない間にネットワークに接続して、データが流れてしまったんですか！？一昨日管制室を閉める直前、異常がないかあなたに確認してもらったはずですよ！」
一郎がそう言いながら吉川の肩を揺さぶる。「落ち着いてください！」と香川が止め、吉川はイスから立ち上がると「ちょっとこちらに」と言って一郎を管制室の隅の方に呼んだ。
「そのことについて、大変申し上げにくいことなんですが、私はプログラマー達の中にそのハッカーの共犯者がいると思うんです。」
「共犯者！？」
一郎が驚いてプログラマー達の方に目をやり、吉川は「シーッ」と一郎をなだめた。
「それしか考えられないんですよ。ここのセキュリティで外部から

ネットワーク経由で侵入してくるなんて、こちらから扉を開いたとしか考えられない。おそらく自動的に全コンピューターが作動し、こちらからネットワークに接続するプログラムを仕込んでいたのだと思います。データのコピーと転送に費やす時間を考えれば、昨日管制室が閉鎖することを知っている人間のほうがつじつまが合いますし。」

吉川の推理に一郎はなるほどとうなずく。考えたくないことだが、ここは身内を疑うほかないようだった。

「じゃあそのハッカーの共犯は、ここにいるプログラマー３０人の誰かってことですね？」

一郎が吉川に確認する。

「プログラマーだけじゃないかもしれません。ここに出入りした人すべてにその可能性はあります。ネットワークに接続するプログラムも、一昨日の実験の日に仕込まれたものとは限りませんし。」

吉川がそう言うと、管制室の入り口が開いた。

「あっ、社長！おはようございます。」

入り口近くにいた香川が急に背筋を伸ばしながら挨拶する。社長の桝田は吉川の連絡を受けてここまでやって来たのだ。

「挨拶をしている場合ではないですよ！ここのコンピューターがハッキングに遭ったというのは本当なんですか！？」

桝田がすごい勢いで香川に訪ねる。それを見た一郎と吉川は桝田の元に向かった。

「遺憾ながら本当のようです。申し訳ありません社長。僕の管理責任の甘さでこのような事態になって。」

一郎は真っ先に桝田に頭を下げた。香川は吉川も続いて頭を下げる。

「待ってください。先に詳しい状況を聞かせてもらえますか？今責任問題の追求をやっていても仕方ありませんし。」

桝田は一郎達に頭を上げさせた。桝田も緊急で呼び出されたので事態を把握できていなかった。

「わかりました。ここでは少し話しにくいこともありますので、隣

の会議室へどうぞ。」
「話しにくいこと?わかりました。とにかく急いでください。」
そうして一郎、香川、吉川、桝田の４人は隣の会議室に場所を移し、そこで改めて桝田に現在の状況を説明した。
「そうなんですか。内部に内通者がいると…どうしましょうかね。一刻も早くそのハッカーの正体を突き止めたいところですが、そうなるとこちらの動きはそのハッカーに筒抜けということになりますし。」
桝田が考え込む。うまく内通者が見つかればすぐにハッカーに辿り着けるかもしれないが、そう簡単に尻尾を出すとも思えなかった。
「ホストコンピューターにそのハッカーの痕跡は残っていなかったんですか?ほんのささいなことでもいいのですが。」
香川が吉川に訪ねる。
「調べたかぎりそのようなものはなかったですね。それにネットワークに接続していたとはいえ、セキュリティは万全だったんです。こちらからそのセキュリティを解除した形跡もありませんでしたし、並大抵のハッカーには侵入できないはずだったんですけどねえ。」
吉川の言葉に、一郎の頭の中で引っかかるものがあった。
「あの、もしかしてホストコンピューターにウイルスのようなものが残っていませんでしたか?」
「ウイルス?そんなものが発見されていれば、真っ先に報告しますが。」
一郎の問いに、吉川はきょとんとして答える。
「そうか…ハッキングされてからかなり時間も経っているし、とっくに死滅したのか。」
一郎が考え込みながら独り言のようにつぶやいた。
「何なんです?ウイルスって?」
何の話だろうと思いながら、香川が一郎に訪ねる。
「昔、小此木医師が存命の頃、コイルスの空間を探っていた我が社の研究チームがメタバグと暗号の研究をしていた時に、偶然発見さ

れた暗号があるんです。それはＩＬコードと呼ばれています。その暗号をネットワーク上で使うと、あらゆるセキュリティを欺いて他人のコンピューターに侵入できる、いわゆるステルスアクセスができるようになります。その暗号の特徴が新種のウイルスに偽装するというもので、その侵入先には正体不明のウイルスが残るそうです。もちろん証拠隠滅のためにそのウイルスは自然消滅しますが。吉川さんが言った通り、我が社のセキィリティが万全だったとすれば、まともに侵入できる方法はそのＩＬコードを使う以外に考えられないんです。ですよね、小此木さん？」

桝田が香川と吉川に説明した。

「ええ。まさかとは思いますが、今回ＩＬコードが使われた可能性は十分あります。」

一郎が答える。元はと言えばこの暗号も宏文の資料に載っていたもので、一郎は因縁を感られずにはいられなかった。

「その暗号、どのくらいの人に広がっているんですか？」

香川が訪ねる。

「そうですね…今回のプロジェクトを進める際に、社長ほか数人の幹部の方に資料はお見せしました。あとは当時のメガマスの研究チームに参加していた人から流れていったルートも考えられますし、既存の暗号技術を誰かが発展させたとも考えられます。」

一郎が説明した。どこまでそれが広まっているのかは一郎でもわからない。

「既存の暗号技術の発展という可能性もあるわけですか。そうなってくると心当たりがないわけでもないですね。暗号を使いこなし、なおかつここをハッキングする動機のある人物というと。」

香川が言い、その場の４人が同じ人物を思い浮かべた。かつてはメガマスの信用失墜を目論み、今もって行方不明の男を。

「それについてなんですが、そのハッカーは個人単位で動いているとは考えにくいです。」

「と言うと？」

吉川が意見を出し、一郎がさらに詳しく訪ねる。
「考えてもみてください。あのプログラムはメガマス最新鋭の並列型スーパーコンピューターに蓄積された膨大なものです。あのプログラムをコピーしようというのなら、それと同じ規模のスーパーコンピューターを用意しないといけません。個人が所有できる程度のものに、プログラムの完全な再現を求めるのはムリです。」
吉川の言葉に、全員が確かにとうなずいた。
「となると、そのハッカーのバックにはどこかの企業か研究所が後ろ盾になっている可能性が高いということですね。それも並の規模じゃそんなもの用意できないですし、相手もかなり大きな組織と考えて間違いなさそうですね。」
香川が考え込みながら言った。かなり大手のコンピューター関係企業なら、そのくらいのスーパーコンピューターは準備できそうだった。
「そういうことならモールを使いましょうか。」
「モール？ああ、潜伏員のことですね。」
話を聞いていた桝田が提案し、一郎が確認する。
「ええ。先代の時にメガマスが巨大化してから、こういう事態や産業スパイに備えて、国内外を問わず大手のコンピューター企業に、何人かメガマスの息のかかった人間を送り込んでいるんです。ただ、それらのモールを雇って管轄していたのが、無期謹慎の身にある旧幹部の1人だったので、今もこちらの言う通り動いてくれるかどうか。」
桝田が少し難しい顔をして言う。桝田はあまりスパイのような真似はしたくはないのだが、巨大化しすぎたメガマスを守るためなら必要だという意見が多かったので、これまで残してきたのだ。
「そうなんですか。じゃあ今その人達を動かしているのは？」
「その旧幹部からポストを受け継いだ現幹部に任せています。後で連絡をとってみましょう。」
一郎の問いに桝田が答えた。

「お願いします。あと問題は場所を制御するプログラムを書き換えれば、どこにでも古い空間を出現することができるということなんですが。」

一郎が桝田に訪ねる。サッチーは大黒市でしか稼働していない上、空間管理室もどこの都市にあるわけではない。管理室のない都市が狙われるのが一番危険だと一郎は思った。

「そうですね。こうなった以上、サーチマトンの数を増やすしかないですね。ともすればレベル３のフォーマットも必要になるかもしれませんし。とにかく郵政局と電脳局への通達も出しておきましょう。」

桝田がすぐに対策を打ち出す。急に大都市にサーチマトンを出動させると、混乱が起きる可能性もあったが、ここはそれを気にしている場合ではなかった。

「許可がでるんですか？騒ぎになる可能性もありますし、いきなり増やしてくれと言ってもお役所仕事ですからね。」

香川が不安そうに訪ねる。夏の事件のレベル３の強制フォーマットの時に、それらの騒ぎは経験済みだった。もちろん突然屋外でのメガネの使用を禁止したことで、メガマスには嵐のようにクレームが寄せられた。大黒市でやるならまだしも、それをさらなる大都市でやってしまうとどうなるか、香川は想像しただけでもぞっとした。

「プロジェクトを立ち上げる際、郵政局と電脳局には許可をとってあるんですけどね。実験の失敗により街に古い空間が出現し、メガマスからの要請があった場合にはただちにサーチマトンを出動させると。ただ香川さんの言った通り、大都市圏でいきなりサーチマトンを出動させるのは難しいですね。その辺はとにかく考えておきましょう。とりあえず要請はしておきます。」

桝田がきっぱりと言う。大都市圏で電脳コイル現象が起こることの方が恐ろしいと思った。

「あとは内通者の問題ですね。我々の動きが向こうに筒抜けでは、こちらから捉えることなどできないでしょうし。」

考え込んでいた一郎がさらなる課題を思いつく。
「特別の内部監査役を組織しましょう。とにかく相手が次の手に出る前に正体を突き止めないといけませんし。小此木さん！今日は午後に幹部向けに実験の報告をする予定でしたよね？」
「え、ええ。」
「では今回の事態の説明と、今後の対策はその場で話し合うことにしましょう。幹部が一同に会す機会はこれぐらいしかありませんので。」
桝田が一郎に言った。この場の４人で今言ったすべてのものをこなすことは到底不可能で、ここは幹部達にも協力を仰ごうという判断だった。
「午後からでいいんですか？このような事態ですので今すぐにでも幹部の方達を集められたほうが。」
一郎が桝田に訪ねる。悠長にしている時間はないと一郎は感じていた。
「いや、幹部のスケジュールを変えてまでの緊急会議となりますと、他の社員に不安が広がります。とにかくこのことは一般業務に影響がないよう、一部の部署だけ知らせることにします。くれぐれもみなさんもこのことが外に漏れないようにお願いします。」
桝田が注意をうながす。できるかぎり隠密に処理することが最善だと桝田は考えていた。
「わかりました。では私達は詳しい状況を調査しますので。午後にまたお願いします。」
一郎と香川と吉川は立ち上がって桝田に頭を下げると会議室を後にし、再び管制室へと戻った。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ４

時刻は昼前、両親とともに家族で墓参りに出かけたハラケンは大黒市外にある先祖代々の墓を参った後、ある場所へ向かっていた。ハラケンはもともと大黒市の人ではなく、５歳の時に引っ越したきた。なので先祖の墓があるのは大黒市から離れた場所で、朝早くから出発し、一時間ほど前にようやくその墓に手を合わせてきたのである。

「ようし、もらった地図によるとこの辺にあるはずなんだが。ちょっと２人とも探してみてくれ。スカイハイツおかざきっていう建物なんだが。」

運転していたハラケンの父が、助手席にいるハラケンの母と後部座席にいるハラケンに訪ねる。目的地までもうすぐ近くまで来ているのだ。

「あ、あれじゃない？ホラ、スカイハイツＯＫＡＺＡＫＩって書いてある。」

ハラケンの母が助手席の左手の窓からその建物を見つけ指差した。

「ようし、次はパーキングを探してくれ。この前路駐して駐禁きられたところだからな。」

「ほんと、なにやってんだか。」

両親のやり取りも、ハラケンは久しぶりに聞いたような気がした。ここのところ仕事の忙しかった父とはほとんどすれ違いばかりだったが、今回の墓参りだけは家族揃って行こうと計画したものだった。

「あったよ、反対車線だけど。」

ハラケンはパーキングを見つけ、父に知らせた。

「そうか。ようし、見とけよ。次の信号で一気に反対車線に入ってやるからな！」」

「あんまり危ない真似はやめなさいよ！」

久しぶりの家族とのドライブに、父は幾分はりきっているようだっ

た。ハラケンはたまには家族と一緒っていうのも悪くないなと思いながら、車は無事駐車場に収まった。車を降りた一行はマンションのロビーまでやって来た。

「何号室だっけ？」

「えーっと、５０４号室ね。」

母から目的の部屋番号を聞き出したハラケンは、ロビーにあったインターホンを押した。

「はーい。」

「えーっと、原川です。」

インターホンから応答があり、ハラケンがマイクの所に向かって名乗る。

「はい。お待ちしていました。どうぞお入りください。」

部屋の住人からの返事があると、ロビーの自動ドアが開いた。３人は中に入ってエレベーターに乗り、５階までのぼる。そこから廊下を伝って５０４号室の前まで来た。

「なんか、緊張するなあ。」

急に父が服装を整え出す。といってもラフな格好ではあるが。

「あなたが緊張してどうするのよ。さあ、ケンちゃん。チャイムを鳴らして。」

「うん。」

母の言葉にしたがい、ハラケンはひとつ呼吸をして、部屋の玄関にあるチャイムを鳴らす。間もなくドアの向こうから人の足音が近づいて来て、ドアが開かれた。

「こんにちは。久しぶりね、ケンちゃん。原川さんも、遠い所までよくお越し下さいました。」

応対に出たのはカンナの母だった。そう、ここはカンナの両親が大黒市から引っ越して来たマンションだったのだ。

「こんにちは、オバさん。」

ハラケンが心持ち明るい声で挨拶する。

「こんにちは、葦原さん。私たちはそう久しぶりでもないわね。卒

業式の日にお会いしましたし。」
ハラケンの母も挨拶した。ハラケンとカンナが幼なじみだった関係で、お互いの両親も面識はあり、特に母同士は同世代で結構馴染みあっていた。
「さあ、お入りください。主人も待っていますので。」
カンナの母がドアを大きく開いて部屋の中に3人を招き入れる。
「どうぞこちらです。」
カンナの母の案内にしたがい、3人は廊下の突き当たりの部屋まで来た。そこはリビングで　カンナの父がそこで待っていた。
「どうも、こんにちは。いやあ、遠いところまでわざわざお越しいただいて申し訳ありません。」
白髪のもじゃもじゃ頭を掻きながら、カンナの父が挨拶した。
「いえ、こちらの方こそお邪魔して申し訳ありません。しかし私たち家族としてやはり今日は来なければならないと思いましたので。昨秋には来ることができませんでしたし。」
今度はハラケンの父がカンナの父に少し申し訳なそうに言った。昨秋の彼岸は仕事が忙しいことと、カンナの両親も引っ越して間もないということで訪問することは避けたのだ。
「どうぞ、そちらのソファーにお掛けください。今お茶を入れますので。」
カンナの母が3人にソファーに座るよう促し、キッチンへと向かおうとした。
「おばさん。それよりも先に、カンナに挨拶をしたいんだけど。」
ハラケンがカンナの母を呼び止めるように言った。
「そう。カンナの仏壇はそこのふすまを開けたところよ。ケンちゃんが来てくれて、カンナもきっと喜んでいるわ。」
「じゃあ僕が案内します。こっちです。」
カンナの父がリビングに隣接している和室のふすまを開いた。入った左手にこじんまりとした仏壇が置いてあり、カンナの遺影がそっと微笑んでいる。この遺影は卒業式の時にも使ったものだが、それ

は葬式の時に使ったものとは別に、卒業式のためにハラケンとカンナの両親が選んだものである。その写真は5年生の春の遠足の時のものだった。ハラケンはその時の思いでを振り返りながら、ゆっくり仏壇の前に正座した。

「さて、僕たちも手を合わせるかな。」

「ええ。」

ハラケンの両親も和室に入り、仏壇の前に正座する。3人はそのまま静かに手を合わし、しばらくの間目を閉じ、カンナの冥福を祈った。その光景をカンナの父はじっと見つめていた。

「カンナちゃんの制服姿、見たかったわね…さあ、戻りましょうか。」

ハラケンの母がぽつりと言い、しんみりとした空気の中立ち上がった。

「先に戻ってて。僕はちょっと、カンナにいろいろ報告することがあるから。」

ハラケンは正座したまま母に言った。その言葉を聞かれるのは恥ずかしくて、一人にしてもらいたいと思ったのだ。

「わかった。リビングで待ってるわね。」

その気持ちを察した両親とカンナの父は和室を出てふすまを閉めた。その部屋で一人になったハラケンは一つ呼吸をして再びカンナの遺影と向き合う。

「…カンナ、元気でやってるかい?まあ、元気かい?っていうのも変だけど…初めてだね。こうやって僕が君の仏壇まで会いに来るのは。今までずっと来れなくてごめん。そして、去年の夏、会いに来てくれて本当にありがとう。それまではずっとカンナの死を受け入れられずに、どこかでまで生きているカンナの心の傷を癒そうと悩んでいたけど、あの時の再会で僕は救われた。あの時に吹っ切れた。さよならを伝えることができて。これからはたびたび会いにくるから、もう安心して。学校の方はこの前卒業式があったんだ。カンナにも答辞の言葉、届いた?終わってみれば小学校の6年間はあっと

いう間だったと思う。カンナがいなくなったあとも、ヤサコっていう友達や、イサコっていう子とも知り合った。フミエやダイチ達も相変わらず元気さ。あとメガばあやオバちゃんも。いろいろ迷惑もかけたけど、いろんな人たちのおかげで去年僕はカンナと再会できた。それだけじゃない。そのヤサコやイサコ。フミエやダイチ達と一緒に立ち向かったメガネの事件を乗り越え、僕らは人と人との絆の大切さを改めて知った。といっても、フミエとダイチ達は今絶交状態にあるんだけどね。ともかく、僕はこの経験を生かして、中学に入ってももっといろんな人たちと交流したい。それを見守っていてほしいんだ。カンナが見守ってくれていると思えば、僕はなにより心強いから。あと、カンナの事故を隠蔽した人たちと法廷で戦うことになったんだ。必ず、カンナの事故の真実を世間に公表して、カンナの名誉を挽回する。そしてその隠蔽を目論んだ人たちに謝罪をさせる。今度来たときには必ずいい報告ができるように僕も頑張るよ…じゃあ、また。」

ハラケンは伝えたいことを伝え、立ち上がった。部屋を出るときにもう一度だけ遺影を見つめ、その笑顔に微笑みを返す。そうしてふすまを開けた。

「あ、戻って来たわね。ケンちゃん。ケーキもあるから食べてね。」

「あ、ありがとうおばさん。」

テーブルの上には紅茶とケーキがのせてあり、ハラケンの両親はすでに紅茶をすすっていた。

「しかしこの度は研一の思いつきで法廷闘争ということになったのですが、本当によろしかったのですか?そちらにもかなり負担になるかと思うのですが。」

ハラケンの父は、カンナの父と今回の訴訟の話をしていた。

「いえ、大丈夫ですよ。必要なお金もメガマスが負担してくれていますし、事故の調査も研一君やメガマスの人が進めてくれていますので、むしろ私たちがなにもしていないことを悪く思っているくらいです。」

カンナの父が少し申し訳なさそうに言った。裁判が成立すれば原告となる身でありながら、そのような自覚はあまりないのだ。

「ごめん、おじさんおばさん。僕の言葉でこうなって。僕はおじさんたちの気持ちを考えずに裁判のことを進めてしまった。おじさん達が協力してくれているのも、僕に気を遣っているからで、本当は事故のことを掘り返してほしくはなかったんじゃないですか？」

ハラケンは訴訟を起こすという話になってから、ずっと心の中で思っていた疑問をカンナの両親にぶつけた。自分のためにカンナの両親がつらい思いを我慢してくれているのなら、それは大変心苦しいものがあった。

「その答えはこの前メガマスの人を介して君に伝えてもらったはずだよ。僕たちは事故を掘り返されてもかまわない。それでカンナの死の真実が明らかになって、隠蔽をしていた人たちが裁かれるのは僕たちも望んでいる。でも何より、カンナの一番近くにいた君が納得いくようにしてほしいんだ。カンナの死のとき、僕たちよりも心に傷を受けたのは研一君だったろうからね。それに僕たちはメガネについて詳しくない。やはり事故の真実を明らかにするのは研一君じゃないといけないと僕たちは思っている。その研一君には僕たちもできる限りの協力をしないといけないと思うし、僕たちは感謝しているんだよ。そこまでカンナのことを思ってくれている君の心に。カンナも喜んでいるはずさ。」

カンナの父がハラケンに優しく言った。

「そうよ、ケンちゃん。今回の訴訟は私たちのためにあるんじゃない。ケンちゃんとカンナのためにあるのよ。私たちはそれでつらい思いをしていることはないし、そんな気を遣わなくてもいいの。私たちはあなたに感謝してもしきれないくらいうれしいの。だから結果を気にせず、ケンちゃんが納得いくまでやってちょうだい。私たちにできることは少ないけど、協力して欲しい時はすぐに連絡してね。」

カンナの母も続いてハラケンに言った。ハラケンはその言葉に安堵

すると同時に、必ずカンナとカンナの両親のために真実を明らかにすることに全力を尽くそうと胸に誓った。

「いや、本当に恐縮です。今後も息子がご迷惑をかけるかもしれませんが、どうかよろしくお願いします。」

ハラケンの父が頭を下げ、ハラケンも続いて少し頭を下げた。

「そんなに改まらないでください。長い付き合いなんですからこれからも助け合っていきましょう。ん?研一君。全然ケーキを食べていないじゃないか。遠慮することはないんだよ。」

カンナの父が言い、ハラケンも全然ケーキに手を付けていないことに気づいた。ハラケンは晴れやかな気持ちになり、言葉通り遠慮なくケーキを食べ始める。その光景をカンナの両親が微笑みながら見守っていた。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ5

大黒市の午後。ますます重たくなった雲に、空模様を気にしながらヤサコとフミエはメタバグの鉱脈を探して歩き回っていた。メガばあからもらった地図を参考にしながら怪しい場所を一件一件丁寧に見て回り、昼食はコンビニで買ったパンをほおばりながら、ついに駅むこうまでやって来た。

「ああ、ここここ。懐かしいわね。あのときもちょうどこんな天気だったかしらね。」

見えて来た建物を前にフミエが言った。

「そうだったかしら?もうあの時はいろんなことが起こりすぎて来る時のことは覚えてないわ。でも、ここから出て来た時のきれいな夕空は覚えているけど。」

ヤサコが記憶を辿りながらフミエに返す。

「なるほどね。アンタあの時はイサコとこの工場の中のブースに閉じ込められてたんだもんね。その閉塞した空間から解放された時なんだから、そりゃあいつもの夕陽だってきれいに見えるもんよ。」

「そういうものかな?でもあれも今となってはいい思い出ね。元はと言えばオババの友達のトメさんのペットのマンタを探しに来たのよね。しかも京子までついて来ちゃって。そのマンタを捕まえにいった京子を追って工場の奥まで行って、天沢さんと2人閉じ込められた。まだあの時は天沢さんに友達になろうって言っても、かたくなに拒否されていたわ。でもこの工場を出る時、天沢さんは『未来のことはわからない』って言っていた。今思えば、あの時から少しずつ心を開いてくれていたのかも。」

フミエの言葉に、ヤサコが懐かしむように言う。あの時、どういう気持ちで言ったのかイサコに改めて聞いてみたいと思った。

「そんなこと言ってたんだ。あの時のイサコがね〜。黒客のリーダーに収まって、ますます天狗になってただけだと思ってたけど。」

フミエが少し信じられない様子で返す。あの時イサコはキラバグ集めのためにこの工場に来ていたのだが、それを手伝わせるために黒客のメンバーも招集していた。イサコに工場内には誰も近づけるなと言われていた黒客だったが、ヤサコを探していたフミエにビームを浴びせられるということもあった。

「でもここって怪しいの？前来たときにはイリーガルはいたけど、メタバグなんてなかったわよ。」

ヤサコがフミエに訪ねる。

「まあ、ここもあの廃ビルと同じような空間だから一応調べとこうと思って。でもイリーガルいるところにメタバグありなんだから、可能性は十分あるはずよ。」

フミエがヤサコに言い聞かせる。そうして2人は唯一出入りができる工場の正門の前までやって来た。そこはロープが張られていて立入禁止と書かれているだけなので、簡単に侵入することができる。そうして敷地内に入ろうとしたとき、フミエは急に立ち止まった。

「どうしたの？」

「シッ。ちょっと聞き慣れた声が聞こえた気がして。」

ヤサコの問いに、フミエが人差し指をたてて唇に当てながら言う。

「聞き慣れた声って？」

「すぐにわかるはずよ。とりあえず隠れましょう。」

フミエが言って、2人は正門の裏側に隠れ、その声の主がやって来るのを待った。そうしてしばらくすると、誰の声なのかヤサコでもはっきりわかった。

「この建物だよ。」

「え～本当か？ここは結構みんな出入りしてるけど、鉱脈があるなんて聞いたことがないぜ。」

「そうだよ。オレだって前はよく来たけど、メタバグもそんなに見つからなかったぜ。」

声の主を含める会話が聞こえてくる。複数人で行動しているようだった。

「でも最近は来てないでしょ？ダイチさん達の話じゃ、その鉱脈は最近生まれた可能性があるらしいから、探す価値はあると思うよ。」
「そうなのか？でもまあどっちにしても探すけどな。なんたってこんな簡単な仕事で、今や貴重品のメタバグが手に入るんだからな。」
「そうとも。お前はいい先輩に目を付けられてうらやましいぜ。オレも黒客に入れてくれよお。」
そのグループが正門前までやって来た。その会話を聞いていたフミエがそっと笑う。
「なるほどね。そういうことか。ヤサコ、アイツらが入って来たらすぐに背後をつくから、気づかれないように俊敏に動いてね。」
「あんまりいじめてあげないでね。」
ヤサコは一応忠告するが、そんなこと聞く耳持たないだろうなと思った。２人は壁にへばりつき、そのグループが入ってくるのを待つ。
「そうは言うけどしんどいから。それにダイチさん達は段々今危険な方向に動いているから、トラブルが起こる前に僕はさっさと身を退きたいくらいだよ。」
アキラがため息をつきながら言った。そうしてつれて来た友達２人とともにロープをまたいで敷地内に入る。
「お前は本当にびびりなんだから。なんでダイチさん達はお前をメンバーに入れたんだ？オレの方が電脳力も度胸もあるっていうのに。」
「まったくだ。お前が黒客やめたいって言うんなら、最後にオレたちを推薦しろよ。そしてゆくゆくはオレたちが栄光の黒客を継ぐんだ。おい、聞いてるのかアキラ！あれ、アキラは？」
アキラの友達２人はすぐ近くにアキラがいるものだと思ってしゃべっていた。ところがアキラのリアクションがないので不審に思って振り返る。
「…ここだよ。」
振り返った友達にアキラは力なく返す。そのアキラは背後から忍び寄ったフミエにがっちり羽交い締めにされていた。

「ああ！アキラの姉ちゃん！」
アキラの友達がフミエを指差して叫ぶ。ダイチ達はもちろん、フミエの電脳力は学校の後輩にも知れ渡っており、特にダイチをあこがれの眼差しで見ていたこの2人にとっては、フミエはもっとも恐ろしい存在だったのだ。
「いつもこの愚弟と仲良くしてくれてありがとう。で、今日はなんでこんなところにいるのかな？」
フミエが2人を睨みつけながら訪ねる。片方がその質問に答えようと言いかけたが、もう片方が「言っちゃだめだ！メタバグの鉱脈を探してるなんて言っちゃだめだぞ！もし言ったらダイチさん達に迷惑をかけちまう！」と小声で必死に制止している。
「ほほう？メタバグの鉱脈を探してる？それもダイチの命令で？」
「ひい！もうばれてましたか！」
フミエがどすの聞いた声で脅かし、2人は声を裏返して恐れおののいた。それをヤサコは、まるでコントだなと笑いをこらえるのに必死で見ていた。
「ホラ！こんな時こそもらった武器を使うんだよ！」
片方が我に返ってもう片方に指示する。そして2人は持っていた電脳ハンドガンをフミエに向けた。
「チッ。私に銃口を向けるなんてどういうつもりなのかしら？」
舌打ちしたフミエがすごい形相で2人を威嚇する。
「ア、アキラを返せ！そしてここからすぐに出て行ってくれ！」
意を決して2人がフミエに立ち向かう。ところがフミエはまったく動じない。
「おもしろい！アンタ達がここで私を撃って、ここから追い出したらどうなると思う？明日コイツに会ったら、見るに耐えない顔になっているでしょうね。」
そう言いながら、フミエは羽交い締めの状態から左腕をアキラの首に回し持ち上げた。首を絞められ宙に浮いた状態のアキラは「ウェ」とうめき声をあげながらフミエの腕にタップしている。

「お、おい。ここで撃つのは簡単だが、そうすると今晩アキラの身が危ない！」
「わかってるよそんなこと。でもここで逃げちまったら、オレたちはダイチさん達に取り入ることができなくなるかもしれねえんだぞ。」
2人はこそこそと話し、どうしようか迷っていた。その間に首を絞められたアキラの体力はどんどん奪われてゆく。
「さあ！決まったの！？これでも私を撃つ？」
フミエが最後通告を突きつける。
「くそっ！アキラが犠牲になることをわかっていて撃つことなんてできない。降参です。今の無礼をお許しください。」
そう言うと2人は持っていたハンドガンをおろして頭を下げる。それを見たフミエはアキラを地面におろし、アキラはホッと息をついた。
「ふん。最初からおとなしくそうしとけばいいのよ。さて、とりあえずアンタ達の武器装備を全部差し出してさっさとここから立ち去りなさい。」
「ええ～っ！」
フミエの言葉に、2人は声をそろえてがっかりする。せっかく久しぶりに手に入れた武器を、あっけなくカツアゲされるのは悔しいのだ。
「何？文句でもあるわけ？」
2人の態度に怒ったフミエが再びアキラの首を絞める。泣きながらアキラは「すぐに武器を渡してくれ～」と2人に訴えた。
「わかりました。これですべてです。」
2人はフミエに持っていたハンドガンを手渡す。
「本当にこれで全部なのね？だったら早くここから立ち去りなさい。もちろんダイチ達にこのことを言ったら…わかってるわよね？」
最後まで脅かしながらフミエは2人を追い返した。続いて羽交い締めにしていたアキラからも武器を取り上げ、蹴り飛ばしながら門か

ら追い出す。
「2度と来んな！」
「うわーん！お母さんに言いつけてやるう！」
そう言いながらアキラは泣きながら逃げていく。昨日のストレスを発散したのかフミエはすっきりした表情だった。
「ほんと、あの弟だけは先が思いやられるわ。聞いた今の？今度5年にもなろうって男が、お母さんに言いつけてやるうだって。はっ。悔しかったら自分で来いっつーの。でもまあ、来たところでまた返り討ちにするだけだけどね。」
「いつもあんな感じなの？アキラ君って本当に不憫な子ね。」
こんな姉を持ったアキラに同情しながらヤサコが言う。
「どういう意味よそれ？まあ、何にしても武器を奪えたんだからラッキーだったわね。ホラ、これヤサコの分。」
フミエがヤサコにハンドガンを手渡す。こんな過激なものを持つのも気が引けるが、持っていても邪魔にはならないかなと思い、ヤサコは素直に受け取った。
「さて、中を調べましょうかね。」
フミエはそう言うと工場の敷地内を見渡した。工場の敷地は広く建物も多いので、まずは黒い霧が出ている建物がないか外からチェックしながら歩いていく。そして大きなタンクがそびえる一角に来たとき、ヤサコとフミエは1人の同年代くらいの少女を見つけた。
「誰？見たことある？」
少女からは死角にあたる壁に隠れて覗き込みながらフミエが訪ねる。
「ない。でもこんなところで1人で何してるのかしら？」
ヤサコもその少女に見覚えがなかった。ただ立ち並ぶ工場を見ているだけの少女を不審に思う。
「まさか私たちと同じメタバグハンター？んなわけないか。でもこんなところをうろちょろされて、もしメタバグを見つけたところを見られでもしたら厄介ね。ここは帰ってもらいましょう。」
そう言うとフミエは死角から出て少女のもとに歩き出した。

「あんまり乱暴なことはしないでね。」
「初対面の子にアキラと同じ振る舞いをするわけないでしょ！」
ヤサコの言葉にフミエが少し怒って返す。そうして2人は少女のすぐ近くまで歩いて来た。
「ちょっとそこのアンタ。ここで何してんのか知らないけれど、私たち今からちょっとここで調査をするの。邪魔だから出て行ってくれる？」
「調査って、あなた達は？」
振り向いた少女がささやくぐらい小さく返した。
「私たちはね、こういう者よ！」
フミエはそう言うと長方形のカードを、まるで印籠のように少女の目の前に突き出す。
「：．コイル電脳探偵局？」
少女が首をかしげて、日本人形のような細い目で書かれていた文字を読んだ。そのカードはコイル探偵局の名刺だった。ヤサコはまだそんなもの持ち歩いていたのかと、フミエを半ば呆れた顔で見た。
「そうよ。最近また空間異常がところどころで起こっているから見回っているの。とにかく素人さんは危険だからはやくこの工場から去りなさい。」
フミエが工場の出口の方を指差しながら言った。
「そうなんですか。確かに最近工場の中から人の話し声のようなものが聞こえるから、おかしいと思って今もそれを聞いていたのですが、空間異常なんですか。」
少女が少し微笑んだように言うと、フミエは「ほへっ！？」と驚きの声をあげ、「ちょっと失礼するわね。」と言ってヤサコの肩に手を回し、少女に背を向け、ひそひそ話をするようにヤサコに話しかけた。
「無人のはずの工場から人の話し声が聞こえるだなんて、あの子もイマーゴを持っているのかしら？だとしたらこの工場に古い空間があるってことだけど、そんな声聞こえる？ヤサコ。」

「ううん。そんな声は聞こえないけど。それに古い空間があるっていう気配もしないわ。」
首を振りながらヤサコが答える。
「それは妙ね。ヤサコでも聞き取れない声を、あの子は聞きとっているっていうの？」
首だけ動かして少女を見ながらフミエがさやいた。
「さあ？イマーゴの種類にもよるんじゃないかしら？」
ヤサコも少女を見ながら言った。
「ねえ。その声ってどういう風に聞こえてるの？」
少女の方に振り向いてフミエが訪ねた。
「別に、他愛もない日常会話とか。たまに笑い声とか泣き声とかも聞こえたりしますが。」
工場の中をぼんやりと眺めながら少女が言う。それを聞いたフミエはまたヤサコの肩に手を回し、少女に背を向けた。
「あんな風に言ってるけど、イマーゴであいう風に聞こえることってあるの？」
フミエがいぶかしげにささやく。
「私はそんな風に聞こえたことはないけど。いつも聞こえるのはひそひそ話みたいな声だから、会話が聞こえるとか笑い声がするとか、工場の中に誰かいるとしか考えられないよ。」
ヤサコがそう言うとフミエは一瞬身震いした。
「もう、やめてよ。今は無人の廃工場よ。私そういうのは苦手だって知ってるでしょ。」
「ご、ごめん。」
ヤサコがそう謝るとフミエは再び少女にの方に振り返った。
「とりあえず。それらを含めて調べるから、素人はあっち行ってて。」
フミエが心持ち胸を張りながら言う。
「今日はやめた方がいいと思いますが。」
少女がそう言うとフミエも「どうして？」と返した。

「今日はいつもより声が大きくきこえます。中にいる人達も活発なようです。そう言う時に場を荒らすと何が起こるかわかりません。」
少女の言葉にフミエはぎょっとする。しかしここはひるまず少女をまくしたてた。
「いい加減なこと言わないで！長い間無人の廃工場に人がいるわけないじゃない！どうせあんたも私たちの気を引こうとして言ってるんでしょ！そんな戯れ言に付き合っている暇はないわ！さっさとここから出て行って。」
「…わかりました。じゃあくれぐれも気をつけてください。」
フミエと同じくらいの小さな体の割に、長い髪を揺らしながら少女がその場から立ち去っていった。
「フミエちゃん。乱暴に言わないでって言ったはずだよ。今のはどう考えてもキツいでしょ！」
少女の後ろ姿が寂しそうに見えたヤサコがフミエに詰め寄った。
「じゃあ、ヤサコはあの子が本当のこと言ってると思ってんの？どうせ私たちのことをおどかそうとしてただけなのよ。いるのよねえ。自分は霊感が強いって言って周りの気を引こうとする子。そういうのはたいてい友達がいないんだから。だからあそこはビシっと言っておくのがベストだったのよ。」
ヤサコはひょうひょうとしているフミエに言い返そうとしたが、フミエが心霊系に滅法弱いことを考えると、あの少女は確かにフミエの一番苦手なタイプかもしれないと思った。キツい言葉はその拒否反応として出てしまったのだと考えると、ヤサコはフミエにこれ以上注意しても仕方ないと思った。
「あっ！それより見てヤサコ！あっちの建物！」
ふいにフミエが興奮してタンクの向こう側にある建物を指差した。
ヤサコは言われるままにその方向を見る。
「あれは…霧？しかも黒い。」
ヤサコも目を凝らして、かすかにフミエが指差してるのは黒い霧だと感じ取れた。

「ビンゴね。なんだ、やっぱり私がにらんだ通りここにあったわね。さっきの子もあの黒い霧が何なのかここから見てたのかもね。」
「えっ？あの子メガネかけてたっけ？」
フミエの言葉にヤサコが驚いて返す。ヤサコは注意して見ていたわけではないが、少女はメガネをかけていなかったような気がした。
「かけてなかったけ？まあいいわ、そんなこと。とりあえず行ってみましょう。」
フミエはそんなこと気にせず、問題の建物目指して小走りになった。ヤサコはどうもしっくりこなかったが、とりあえずフミエを追いかけるように走りだした。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ6

薄暗い工場の中、メタバグを探して歩き回るヤサコとフミエ。確かに工場の中には黒い電脳霧が立ちこめていた。ところが廃ビルとは違い、その中にメタバグの欠片もない。奥に進むほど霧が濃くなっているのはわかるのだが、目当てのメタバグはいっこうに見つからなかった。

「何でかしら?全然見つかる気配すらないね。」

「う…うん。」

フミエの言葉に、ヤサコは丸めた手に息を吹きかけながらあいづちをうつ。

「寒いの?確かに今日は近頃に比べると気温が低いけど。でもアンタ私より厚着してるじゃない。」

ヤサコの様子に気づいたフミエが言う。この日のヤサコは少し厚手のコートを着ていたが、フミエは長袖のパーカーだけで上着は着ていない。どっちかと言うとフミエは寒さには強い方だ。

「ちょっとね。この工場、冷気がたまってるんじゃないかな?」

ヤサコが辺りを見回しながら言う。今いるのは工場の二階で、ガラスのない窓からは冷たい風が入ってきている。

「ちょっと、おどかさないでよ!ここの入り口で会った子のおかげで、私は今ナーバスになってるのよ!」

フミエが怒ったように返す。

「その霊気じゃないよ。でもやっぱり気にしてるんだフミエちゃん。あんなキツく追い返したのに。」

工場の入り口で会った少女はこの工場内に霊がいるかのような口ぶりだった。フミエはその少女を追い返したが、ずっとその言葉が頭から離れなかったのだ。工場に入ってからは1メートル以上、ヤサコから離れてもいない。

「気にするわよ!ものすごい不気味じゃないこの工場!それで平気

でいられたらもはや心霊が苦手なのも克服したようなもんだし。」
「そだね。でもそれでもメタバグを探そうっていう執念は大したものよね。」
ヤサコが感心しながら言う。この人はメタバグのためならアマゾンの奥地でも行ってしまうんじゃないかと思った。
「まあ、それもこれもダイチのバカをやっつけるためよ。アイツを倒すっていうモチベーションがなかったら、いくら私でもこんなところに来てないって。」
「なるほど。」
ヤサコは納得する。フミエはメタバグが欲しいのではなく、ダイチを倒したいのだ。
「ところで思ったんだけど、アンタあの廃ビルを見つけた時は、なんか妙な冷気を感じたって言ってなかった?それでアンタは寒く感じてるんじゃないの?」
フミエが訪ねる。確かにあの廃ビルは、そこから流れていた冷気をたどって見つけたものだった。その冷気を感じたのはヤサコ、ハラケン、そしてデンパである。
「ああ、すっかり忘れてた。今日は元々寒かったから気づかなかったわ。確かにそうかもしれない。特に頭の辺りが冷えているような気がする。よくフミエちゃんそんな格好で平気だなって思ったもん。」
ヤサコは言われてみてそれを強く感じた。廃ビルを見つけた時と同じような冷気が身体のまわりを包んでいるような気がするのだ。
「でしょ?でもなんでこの黒い霧のあるところ、冷気を感じるのかしらね?私は感じないけど。」
「さあ?でもここに来るときは上着を持ってこないといけないわね。」
「夏場なんかいいかもね。」
そんな話をしながら通路をさらに奥へと歩いていくと、広い場所にでた。その左手には透明のガラスで仕切られたブースがあった。

「ああ、懐かしい。ここよ、ここ。私と天沢さんが閉じ込められたのは。」
ヤサコが少しうれしそうにそのブースを指差した。中はあの時とまるで変わってなく、小さなデスクとイスがいくつか並んでいる。
「ここに？ふーん。随分楽しそうな場所ね。って言うか何で扉が閉まったの？」
フミエがガラスの外からしげそげと眺めながら言う。
「なんか、バッテリーが残ってるのに気づかなかったんだって。それが偶然イリーガルを捕まえるための暗号と反応して作動したの。ホラ、ここにまだ残ってるでしょ。」
ヤサコが床を指差す。そこにはまだその時にイサコが書いた暗号がうっすらと残っていた。
「なんてマヌケなの。私ならトラップを仕掛ける前にそういうことは確認するけどね。まあ、イサコもああ見えて意外天然なところがあるからね。アンタがいてくれてアイツの方が助かったんじゃない？一人で閉じ込められたらシャレにならないところよ。」
フミエがふふんと笑いながら言った。電脳力では到底かなわなかったイサコでも、こんな初歩的なミスをするんだと思うとうれしかったのだ。
「それ自分でも言ってた。まあ、あの時はダイチ君達がいたんだから、一人で閉じ込められていても大丈夫だったんじゃない？」
ヤサコも笑いながら返す。今となるとあの時のイサコのシリアスな顔もおかしく思えてきた。
「さて、一応この中も調べますかな。結構ここだけ霧が濃いみたいだし。」
そう言うとフミエがブースの入り口に向かって歩き出した。
「なにやってるの？早く来てよ！」
その場で立ったままのヤサコにフミエが言う。まだものの２メートルしか離れていない。
「でも、ここガラスだからお互いの顔も見えるし。万が一フミエち

ゃんが閉じ込められた時には助けないといけないし。」
どれだけ怖がるんだとあきれながらヤサコが返す。
「そんなこといいからついて来てよ。寂しいじゃない！」
それでもフミエはヤサコと一緒じゃないとダメだった。
「しょうがないなあ。バッテリーの残量は？」
ため息をつきながらヤサコが訪ねる。またバッテリーが残っているのに中に入ったら閉じ込められる可能性もあると思ったのだ。
「そんなのとっくに確認済みよ。イサコの二の舞にはならないわ。」
そうして2人はブースの中に入ってメタバグを探した。フミエは電気の配線コードが通っている床下に手を突っ込んでまで探したが、結局何も見つからなかった。
「うーん、この建物にはないかもしれない。もっと他の建物も見てみましょう。」
フミエが言ってヤサコがうなずいたその瞬間、冷蔵庫のスイッチが入った時のようなブーンという音がどこからともなく鳴りだし、一瞬工場内の照明が点滅したような気もした。何事かと2人は辺りを見回す。
「まさか…ヤサコ！はやく！」
フミエがそう叫んでヤサコの手を引いて走り出そうとした瞬間は、すでにブース入り口の2枚の扉が動きだしたところだった。ガチャンという音を立てながら扉は完全に閉まる。
「え～っ！」
ヤサコがまるでお仕置きをされる子どものように叫び、扉をドンドンと叩く。
「なに？このベタな展開…」
眉間にしわをよせながら、フミエがヤサコの顔を見てつぶやくように言った。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ7

メガマスの中でも最高セキュリティが敷かれている会議室に、次々と幹部が集まっていた。その会議自体は予定通りのものだが、今朝発覚した古い空間の制御プログラムがハッキングされたことについての対応策を話合うことが会議の中心になる。幹部にもその件についてはそれとなく伝えられており、社内での混乱はないが、一様にここに集まった幹部達はそわそわしていた。そして報告を担当する一郎は、会議室の壇上で緊張した面持ちで全員が集まるのを待っていた。

「これで集まりましたかね?それでは緊急連絡していました通り、今朝方発覚したコイルドメイン制御プログラムがハッキングについて、まずはプロジェクトの担当責任者である小此木さんから詳しい状況を報告してもらいます。」

最前列の長机に座っていた社長の桝田が会議室を見渡しながら始めた。そうして一郎は1つ咳払いをして報告を始める。

「プロジェクト担当の小此木です。みなさんにも連絡が入ったことかと思いますが、我が社が進めてきた電脳医療システム補強プロジェクトにおいて、実験用として作成したコイルドメインの空間制御プログラムが、どこかのハッカーに盗まれていたことが今朝プログラマーの報告で明らかになりました。そのハッカーが第7研究室のホストコンピューターに侵入したのは、空間の実験を執り行った一昨日の深夜から、本日早朝までの間と考えられます。一昨日の実験で使用したスーパーコンピューターのオーバーヒートを防ぐため、昨日は1日第7研究室を閉鎖していたからです。リードプログラマーの見解によりますと、ホストコンピューターのネットワーク通信速度を考えた場合、すべてのプログラムを転送するには丸一日はかかるということで、つまりハッカーは我が社の内部事情に精通した人間である可能性が高いと言えます。さらにネットワークへの接続

は内部の人間にしかできないということなんで、我が社の社員の中にそのハッカーの共犯者がいると考えられます。」

一郎の言葉に、幹部達はざわつき始めた。社の内部に共犯者がいると聞いて動揺しているようだ。ちなみに一郎の言う第7研究室とは、一昨日実験を行った通称管制室のことである。

「小此木君。社の人間を疑う前に、言うことはないんですか？その管制室の危機管理体制は十分だったのですか？」

ある幹部が発言し、他の幹部達はざわつくのをやめた。桝田や会議室の脇で立っていた香川、そして他の幹部達が今発言した幹部を注視する。

「…はい。私は十分気をつけていたと自負しています。一昨日最後に研究室を点検したときにはリードプログラマーである吉川さんにも見てもらって、異常がないことを確認しました。神崎本部長。」

一郎が発言したその男、神崎の目を見ながら臆せずに言った。

「だったらどうしてハッキングに遭ったんですか？我が社のセキュリティなら、しっかり管理していればこんなことは起きないはずですが。」

しわがよりながらもするどい目つきで神崎が一郎を見返す。会議室にはぴりぴりとした緊張が走っていた。

「それは、申し上げています通り、社内に共犯者がいたからです。どんなセキュリティも内部から解除されては手のうちようがありませんので。」

「それは言い訳でしょう。あらゆる可能性を考慮してこそ危機管理と言うのです。何にせよあのプログラムは悪用されるにはうってつけのシロモノです。それでいてその程度の危機感では甘いとしか言いようがありませんね。」

一郎が釈明するも、神崎にばっさりと斬られた。香川は神崎のことをムッとした表情で見ていたが、何も言い返すことはできなかった。

「そうおっしゃられると、返す言葉がありません。確かに私の不手際だったことをここで謝罪させていただきます。」

ここで一郎は素直に頭を下げる。ここでこの神崎と言い争っても仕方がないと判断したのだ。

「困りますね社長。小此木君は社長の推薦でこのプロジェクトの責任者に抜擢されたんじゃないんですか？それをこんな平凡なミスを犯して社に不利益をもたらして、社長の責任問題にもなるところですよ。」

神崎がはるかに年下の社長桝田に問いかける。

「…まだ社が損害を被ったわけじゃありません。その発言はここでは時期尚早のはずです。今はとにかく対応策を考えましょう。」

桝田がしっかりとした口調で神崎に言う。一幹部に頭が上がらないようでは、社長は務まらないという信念が桝田にはあった。

「とにかくこうなった以上、どこの都市でそのプログラムが起動されるかわかりません。犯人が特定されるまでは、サーチマトンの稼働数を増やす必要があると思います。そのための通達を郵政局と電脳局に出すこと。それから特別の内部監査役を立てて、その共犯者を見つけ出す必要があると思います。」

一郎が先ほど桝田と話し合って決めたことをあげた。サーチマトンを増やすことは危険と隣合わせなので、幹部の中では意見が割れるだろうなと一郎は思った。

「私が考えた対応策もいいですか？」

神崎が手をあげて桝田の方に確認する。桝田は「どうぞ」と言って促した。

「まず小此木君には責任をとってこの役から降りてもらいたいのですが。」

神崎の言葉に幹部達は一瞬ざわつき、一郎や香川がドキッとして桝田の方に目をやる。社長の判断に任せるしかないというところだった。

「しかし責任をとるということは、ミスを挽回するということでもあります。それに私は今回の小此木さんには非があるとは思えません。ここは小此木さんに引き続き責任者を務めていただき、プログ

ラム起動の阻止、そして犯人の特定に全力を尽くしてもらいたいと考えていますが。」

桝田は信任を寄せる一郎を全面的に擁護した。

「しかしそれでは私の部下は納得しないのですよ。だいたい一介の空間管理質職員がいきなり社の重要プロジェクトの責任者に抜擢されたこと自体、強引だったと言うしかないところですよ。本当は私の部署の人間が務めるはずのポストですから。」

神崎がすぐに返す。神崎の肩書きは研究開発部本部長であり、それはこのプロジェクトにおいてある意味蚊帳の外に置かれた部署であった。本来なら研究開発に関するプロジェクトは神崎の部署が取り仕切る。ところが今回は一郎の父宏文の研究を引き継ぐということなので、空間管理室に属する一郎が責任者に抜擢された。この人事に研究開発部は面白いはずがなかった。

「今はそちらにへそを曲げられても困ります。ここは学校ではないのです。この緊急時に、気に入らない人事だからってやるべきことをやらないようでは、本当に社は危機に陥ります。」

桝田の神崎に対する口調が少しきつくなった。こんな時に社内が割れているようでは対策を立てるどころではない。

「ではそちらが守ろうとしているのは何ですか？会社ですか？それとも抱えていても一円にもならないプライドですか？どんな理由があれミスはミスです。ミスをした人間を罰しない社会がどこにあるんです。私には社長が功をあせっているとしか見えないですね。どういうつもりか知りませんが、こんな時こそ冷静になってもらわないと。とにかくこれが最善の人事とは私には思えません。ここは私たちに仕切らせた方が丸く収まりますよ。ねえ、平松さんもそう思いますよね？」

神崎が同じ長机にいた、白髪まじりのカリアゲの男性に同意を求めた。

「…確かに。小此木君には申し訳ないが、担当者を代えてもらった方がうちの部署としてはありがたいところというのが事実です。」

若干うつむきながら、言いづらそうにその男性が答える。一郎はそれを呆然として聞いていた。

「…わかりました。仕方ありません。では担当者を交代するということで、異論のある方はいませんか？」

社長が悔しそうに他の幹部達に訪ねる。そこからは何の異論もでなかった。

「では申し訳ありませんが、こういうことなので、小此木さんにはプロジェクト担当責任者を降りてもらうことになります。次のポストはまた折を見て考えますので。」

桝田が一郎に、ただ無念さをにじませて言った。一郎はそれを受け止め、「わかりました」と一言だけ返し、壇上を後にする。

「小此木君は空間管理室の所属なんですから、もし古い空間が現れたら地方でも海外でも飛んでいって、フォーマットしてもらえばいいんですよ。ハッハッハ。」

神崎の笑い声だけが会議室に響き渡った。

「くそっ！あの人は何様のつもりなんでしょう！社長までもないがしろにして、自分の思うように社を動かそうととするなんて！」

会議が終わり、自分達の扱いに憤慨した香川は、一郎とともにひとまず誰もいなかった分煙室に入ると不満をぶちまけた。そうして２人はソファーに座り、香川はタバコを吸い始める。一郎はもともとタバコを吸わないが、こんな時に吸えたら少しは気が楽にはなるんだろうなと思って見ていた。

「結局は最前線での仕事か。まあ僕は慣れてるけど、研究開発部の君には悪いことをしたね。本当なら僕を追いやる立場なのに。」

一郎が香川に言う。とりあえず暫定的には一郎と香川は、空間管理室の仕事に戻り、それらしい古い空間の出現があった場合には現地に行って調査、必要な場合はサーチマトンの指揮を行うことになった。

「別にそんなことはどうでもいいんですよ。僕もあの人のもとで働

くのはうんざりです。とにかく僕は、あの人がのさばっていることに腹が立っているんです。」

香川がタバコの灰を落としながら一郎に返した。

「神崎研究開発部本部長。数少ない旧幹部の生き残りの一人で、保守派の幹部の中では唯一交通事故隠蔽との関係が確認できなかった。社内ではかなりのキレ者と有名で、前は研究開発部長。今回の幹部交代で本部長という肩書きになったが、それは新しく設けた名誉職のようなものだった。ところが研究開発部の中でも旧幹部にシンパシーを持つ社員を取り込み、実質的には現部長の平松さんをしのぐ発言力を持つようになっている。社長としても、もっとも注意の必要な人物ってところだね。」

一郎が考え込みながら言う。桝田はすでに要注意人物として神崎に名誉職に就けたのだが、神崎はそこからすぐに力をつけてきた。

「ウラで何やってるかわからないですけどね。しかし目的は何なのでしょう?やはり旧幹部の返り咲きを狙って、社長を降ろすことを考えているんでしょうか?」

「さあ。でも僕の言葉もあの人のかんにさわったのかも知れない。僕は最初から社員の中に共犯者がいると決めつけて報告した。となると一番怪しいのはプログラマー達ってことになるけど、そのプログラマー達を抱えているのは研究開発部だ。つまり真っ向から神崎本部長の部下に責任を押し付けたような言い方になったかもしれないな。」

一郎はあれだけ神崎が自分を非難した理由はそれだと思った。一郎はそんな軽率に結論を急いだことを反省した。

「でもあそこで平松さんならガツンと言い返してくれると思ったんですが。」

香川が会議室での一幕を振り返りながら言う。

「まあね。平松さんと僕は金沢支社から面識があった。一口に努力の人で、現社長にその功績を認められ、遅咲きながら叩き上げで研究開発部長に就任した。歯に衣着せぬもの言いのあの人でも、神崎

本部長の権勢には逆らえないってことか。さすがに長い間幹部として人脈を作って来た人は違うのかな。」

一郎がふと弱気になって言う。世代交代をはかるメガマスにとって、その神崎とのぶつかり合いは避けられないだろうなと思った。

「とにかく、こうなった以上神崎本部長の仕切りに任せるしかないよ。僕らは言われたことをこなすしかない。それが今できる最善のことだ。」

そう言うと一郎は立ち上がった。

「そうですね。愚痴をこぼすだけじゃ始まらないですね。」

香川も吸い終わったタバコを捨て立ち上がる。戦う相手は身内ではないと言い聞かせながら。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ8

「ねえ?イサコと閉じ込められた時はどうやって扉を開けたの?」
廃工場のブースに閉じ込められたヤサコとフミエは、脱出方法を考えていた。
「ごめん。あの時は天沢さんがウインドウ操作して開けたから、私はどうやって開いたのかまったくわからないわ。あ、でも待てよ。確かあの時天沢さんは京子に、サブドメインのキーファイルを解除してとかなんとか言っていたわね。」
ヤサコがその時の記憶をたどりながら言う。あの時イサコはブースの外にいた京子にそのように指示した。しかし京子は何のことだが理解できずにどこかに行ってしまったのだ。
「サブドメインのキーファイル?そんなの見当たらないんだけど。」
フミエはウインドウを開いてこの空間について色々調べていたのだが、そのようなファイルは見つからなかった。
「あれ?おかしいな。確かに天沢さんはそんな風に言ってたけど。」
ヤサコが首をかしげながらつぶやく。
「それって、この空間の外からじゃないとアクセスできないとかじゃないの?今試してるけど、このブースの外のサブドメインにはアクセスできないわ。」
ヤサコにもっとしっかりしてほしいと思いながらフミエが言う。
「…ああ、そうそう!内からの発信は遮断されてるのよ。」
「はあ?じゃあどうやってイサコはそのキーファイルを解除したのよ?」
ヤサコの言葉に、フミエは絶望的だと思いながら訪ねた。
「思い出してきた。フミエちゃん!ちょっと私のメガネの電波状況をチェックしてて。」
そう言うとヤサコは、両手や片足をあげたり、身体を反らしたりし始めた。

「なにやってんのアンタ？」
挙動不審なヤサコに、ついに壊れたかと思いながらフミエが訪ねる。
「違うのよ。なんかこういうポーズをしているとアンテナ代わりになって、時々外と電波がつながる時があるのよ。とにかく電波状況をずっと見てて。」
ヤサコがそう言うので、フミエは半分疑いながらヤサコのウインドウで圏外と表示されている電波状況に目を凝らした。ヤサコが色々とポーズを変える中、ほんの一瞬だけ電波がつながった瞬間をフミエは見逃さなかった。
「いっ、今一瞬つながったわよ！ヤサコ、今のポーズを続けて！」
「ホント！？でも今のポーズってどんなんだっけ？」
「もっと右足も両手も高く！そう、それよ！待ってて、すぐにアクセスしてみるから。」
フミエがヤサコの手や足を持ち上げると、アンテナ1本で安定するポーズを見つけた。フミエは早速ブーズの外のサブドメインとのアクセスを試みる。ところがイサコの時のようにスムーズにいかず時間がかかり、ヤサコは無理な体勢で足をぷるぷる震えさせながら必死にこらえた。
「まだ？」
苦悶の表情を浮かべながらヤサコが訪ねる。
「もうちょっと我慢して。」
フミエはウインドウに集中していてヤサコに気を遣っていられる状態ではなかった。しばらくヤサコも耐えたが、体力の限界が訪れた。
「もう…ダメ。」
そう言うとヤサコはその場に崩れ落ちた。「あーあ」とフミエはがっくりうなだれる。
「ちょっとフミエちゃん。時間かかりすぎじゃない？フミエちゃんにかかったらこんなトラップすぐに解除できるんじゃないの？」
恨めしい目でフミエを見ながらヤサコが言う。息を切らしているヤサコはしばらく休憩しないと同じポーズはとれなかった。

「いやそれが、言っていたキーファイルなんてやっぱり見当たらないのよ。このブーズの外のサブドメインでもね。」
「え?どういうこと?」
フミエの言葉にヤサコが驚いたように訪ねる。
「これイサコのトラップが暴発して閉まったわけじゃないんじゃないの?そのキーファイルはあの時イサコが解除したから残っていない。つまり他の何らかの理由でこの扉は閉まったってこと。」
フミエが考え込みながら言う。
「何らかの理由って?」
「気になるのは閉じ込められる直前から鳴りだしたブーンっていう機械の作動音。蛍光灯が壊れているから明かりこそ点いてないけど、この工場には確実に電気が来ている。まあ、工場全体に残っていた予備電力が動き始めたってところだろうけど、つまりこの扉は閉まるべくして閉まったってことね。電気が流れていれば扉が閉まるっていう設定がされていたんだと思うわ。」
フミエが推理しながら言う。機械音は閉じ込められた時から鳴り止んでいなかった。
「じゃあ開ける方法は?」
ヤサコが訪ねる。ここはフミエの知恵に頼るしかなかった。
「こういう工場には普通、操作パネルがあると思うの。そしてそれは個人のメガネからもアクセスできる。じゃないとこの中にいる人が自由に出入りできないからね。この電源が復活したっていうのも、誰かがそのパネルを操作したものじゃないかと思うんだけど…」
「…じゃあ、私たちはその誰かに閉じ込められたってこと?言ってみれば監禁?」
ヤサコが焦りながら訪ねる。自分たちはいったいどうなってしまうのかと思った。
「さあ。私たちがここに来るなんて誰も知らないし。私たちがここにいることを知っているのはアキラ達と、あの入り口で会った女の子だけね…」

「まさか。あの子が私たちを閉じ込めたって言うの?そんなわけないじゃない。フミエちゃん、あの子に敵意を持ちすぎよ。あっ、でもあの子が言ってた、こんな日に場を荒らすと何が起こるかわからないって、まさか…」

ヤサコはあと1つの可能性を考えてしまった。そして自分で考えたことでありながら背筋が凍り付いた。

「やめて。そんなわけないでしょ。とにかく、その操作パネルにアクセスする方法を考えるか、それとも電波もつながることだし助けを呼ぶか。まあ、確実なのは誰かを呼ぶことだと思うけど。」

フミエはヤサコが考えたことをなるべく考えないように冷静に返して、脱出する手段を考えた。

「でも助けを呼ぶって誰を?今日ハラケンはお墓参りでいなくて、アイコちゃんは田舎に帰っているし、ダイチ君達はフミエちゃんが絶対に嫌がるだろうからあえて聞かないことにして、他に誰か来てくれそうな人はいる?」

ヤサコが訪ねる。この日は祝日のため、他の友達が大黒市内にいるかどうかも微妙だった。

「…メガばあは、こんなところまで来るはずないわよね。まあこうなったら手当たり次第にあたるしかないわ。日没までこんなところにいるなんて…想像もしたくない展開だわ。」

今はかろうじて外の明かりが入ってくるのでまだマシだが、日が暮れて明かりのないこの不気味な工場にいることが一瞬よぎってしまい、フミエはいよいよヤバいと思い始めた。

「じゃあ、次はフミエちゃんがアンテナ役やって。私はさっきので疲れちゃって。」

「はあ?情けないわね。日頃の鍛錬が甘いからすぐにばてるのよ。しょうがない、私がアンテナ役するから、ヤサコはとにかく誰か呼んでよ。」

こんな時に何悠長なこと言ってるんだと思いながら、フミエがアンテナ役を買って出た。ところがヤサコにあーだこーだ言われながら

ポーズをとるフミエだが、いっこうに電波がつながる気配もない。フミエがどれだけ足をあげても、どれだけ手をあげても、圏外の表示はぴくりとも変わらなかった。

「おかしいわね。さっきはこれでつながったのに…わかった！小さい人には無理なんだわ。」

「やかましいわ！」

そうして結局ヤサコがアンテナ役をすることになった。先ほどと同じように両手と片足を高くあげて電波をつなげる。

「来たわ！しばらく我慢してね。すぐに電話するから。」

フミエはヤサコにそう言うと、メガネ電話を友達につないだ。しばらくコールがあった後、相手が電話をとった音がした。

「あっ、もしもしナツミ？私よ、フミエよ！もしもし？聞こえてる？…すごいノイズね。」

電話はつながったのだが、ザーッというまるで大雨が降っている時の音のようなノイズが走っている。そのせいで相手が応答しているのかどうかわからない。

「どうしたの？」

ヤサコがフミエに訪ねる。

「いや、それがすごいノイズで相手の声が聞こえないのよ。」

「…から…」

フミエが言った瞬間、指で作った受話器の向こうから声が聞こえたような気がした。

「え？何？ナツミなの？」

もう一度電話の向こうに呼びかける。しかし相手の応答がない。フミエはしばらく受話器に集中して、ノイズの中から聞こえる相手の声を必死に聞き取ろうとした。

「……会いに、行くから……」

そしてその言葉を最後にその電話は突然切れてしまった。フミエは全身の血が引いていくのがわかった。その聞こえた声は、明らかにその友達のものとは違っていたのだ。もちろんかけ間違えたわけで

もない。またメガネ電話に他人がでることもあり得ない。
「何？」
ヤサコは呆然としているフミエを不審に思って訪ねる。とりあえず休憩のためにいったんポーズを解いた。
「何？今のは？」
フミエは身体を震わせながら静かにつぶやいた。
「え？どうしたの？電話つながったんでしょう？」
よくわからないフミエの態度に、ヤサコがさらに訪ねる。
「声。声が聞こえた。ナツミの声じゃない。大人の女の人の声が。」
フミエはヤサコにしがみつきながら言った。恐怖に駆られたその目に、ヤサコはただごとじゃないと感じた。
「大人の女の人の声？なんて言ってたの？」
動揺するフミエに、ここは自分がしっかりしないといけないと思い、ヤサコはゆっくりはっきりとした口調で訪ねる。
「…会いに、行くからって。」
「会いに行く？それってここに来るってこと？それはナツミじゃなかったのね？」
ヤサコが確認するように聞き直す。
「ええ。仮にあれがナツミでも、私はここに閉じ込められているなんて言わなかった。それを会いに行くっておかしいでしょ！？」
確かに、とヤサコは思った。じゃあフミエの電話に出たのは誰だったのか。ヤサコはフミエがおびえているわけを知り、そしてフミエ同様背筋が凍り付くような恐怖を感じた。その瞬間、ピピピピとフミエのメガネ電話が鳴りだした。
「うわあ！」
この神経質になる時に急に着信音が鳴り、２人は飛び退くように驚く。
「なんで！？なんで電波がつながっていないのに着信が！？」
フミエはもう泣きそうな声で叫んだ。
「…そう言えば、天沢さんが言ってた。受信はできるって。」

ヤサコはあの時のイサコの言葉を思い出した。それを聞いたフミエも「そ、そうなの。」と少しホッとしたようだった。

「…誰から?」

気を持ち直したヤサコは、おそるおそるフミエに訪ねる。鳴り響くコールの中、フミエも1つ息を吐いてその着信を確認する。

「…ナツミじゃない。知らない番号。それもメガネ電話じゃない。一般回線。」

フミエが一言一言、ゆっくり区切りながら言った。謎の番号からの着信。2人の恐怖はさらに増していく。

「出ないの?」

無機質なコールは、まるで早く出ろと2人をせかすように鳴り続ける。それを聞いているだけでも胸が破裂しそうな圧迫感を覚えたヤサコは、フミエに訪ねてみた。

「…ムリ。そんな勇気なんてない。こうなったら鳴り止むまで待つか、こっちから切ってやるかしかないわ。」

フミエはもうヤケになってウインドウを操作して電話を切ろうとした。

「待って。誰かが私たちに連絡をとろうとしているということは、それはここからの脱出方法を教えてくれようとしているのかもしれない。ここは私が出る。」

ヤサコが意を決した。ここで電話を切っても鳴り止むのをまっても、また電話はかかってくるだろうと思った。それなら出た方がすっきりするかもしれないと思ったのだ。

「大丈夫?なら、はい。」

フミエはつないだ電話をヤサコのメガネで取り次げるように転送した。ヤサコは指電話を耳に当て、ゆっくりと言葉を絞り出す。

「もしもし?」

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ9

耳に飛び込んできたのは激しいノイズだった。フミエが言っていたのはこれだったのかとヤサコは思った。しかし応答がないので、もう一度ヤサコは呼びかける。

「もしもし？」

「…・・もう、すぐそばまで来たわ…・」

聞こえた。３０代くらいの女性の声だった。その言葉にヤサコは恐怖でめまいがしそうになった。しかし屈せずにその声に訪ねる。

「待って！あなたは誰なの！？どこにいるの！？」

「…・・待っていて…」

そこで電話は切れる。ヤサコは固まった。その声はすぐそばまできている。しかし自分たちはここから脱出する術がない。自分たちは一体どうなってしまうのかという絶望がこみあげた。

「なんて？」

フミエが会話の内容を訪ねる。ヤサコの対応の仕方で相手は自分が聞いた声だということはわかったらしい。

「聞かない方がいいと思う。」

ヤサコはフミエを怖がらさないように気を遣って言った。するとその瞬間、建物のどこかでガシャーンという大きくて重い物が床に落ちたような音がした。

「キャー！」

２人は耳をふさいでその場にしゃがみこむ。悪い夢なら覚めてほしいと思った。しばらくは恐怖で顔を上げることもできなかったが、しかしここでじっとしているだけでは脱出することなどできないと思ったヤサコは、思い切って目を開く。すると工場の中には、無数の影がうごめいていた。弱い外からの光に映し出された影は、人の形をしている。そして話声が聞こえてきた。ざわざわとあちこちで。この工場に入る前に、少女が言っていたのはこのことだったのかと

ヤサコは思った。一方のフミエはヤサコ寄りかかるようにして、耳をふさぎ目を閉じていた。この光景や話し声が聞こえてしまうとフミエがもっと怖がってしまうと思ったヤサコは、フミエにはそのままの体勢でいてほしいと思いながら、辺りを見回して脱出する方法を考える。するといつの間にか正面のガラスの外に、白い女性の人影が移っているのに気づいた。その女性はゆっくりと歩を進めながらこちらに近づいてくる。もうヤサコは声すらもでなかった。フミエの頭を抱え込むようにして、その人影が来ないように祈った。しかしその女性の人影は一歩、また一歩と確かめるように足を進めながら、もうガラスの真ん前まで来ている。そしてとうとう白い手がガラスを通り越して中にまで入ってきた。

「…あなたたちも、こっちに来たら…？」

目を閉じ、顔をそむけたヤサコの耳に、かすかにその声は届いた。もう終わりかと思った次の瞬間、ガチャンという音とゴーッという音が2回続いた。

「…・・！」

声にもならない叫びがこぼれる。ただ目を閉じていたヤサコには何の音なのかさえもわからなかった。

「…大丈夫ですか？」

いきなり鮮明な声が聞こえたような気がした。どこかで聞いてことのある声だとも思った。

「あのー、大丈夫ですか？」

もう一度声が聞こえた。ヤサコはゆっくりと目を開け、おそるおそる声のする背後へと目をやった。

「あ、あなたは！？」

ヤサコが声を上げて驚く。2人に声をかけていたのは、工場に入る前にフミエが追い返したあの少女だった。

「…そちらの方も大丈夫ですか？」

少女がフミエを見ながら訪ねた。フミエはまだ耳をふさいで目を閉じながら震えていた。

「大丈夫じゃないと思う。相当怖い思いをしたから…あれ?でもさっきまで見えていた影や、人の話し声とかが消えてる…」
ヤサコは辺りを見回しながら気づく。それはこの少女が駆けつけてからピタッと止まったようだった。
「…あなたにも、見えたり聞こえたりしていたんですか?確かに今相当場が乱れていたように感じたんですが。」
そのように言われると、逆にこの少女の方が怖いように思えてきた。この少女はいつも今みたいな現象を感じているのかと思うと、ヤサコはもう一度寒気を感じた。
「ええ。あとはつないだ電話から変な声がしたり、ここに閉じ込められたのも怪奇現象の1つかな。でもよく私たちがここに閉じ込められてるってわかったね?」
「あなた達がここに入っていって、なんとなく嫌な予感がしたので。あとは物が落ちたようなすごい音が聞こえてきましたし。ここには変な暗号があって、いるとしたらここかなあと思って、すぐに見つけられました。あとは入り口の開閉ボタンを使って。」
ヤサコの問いに少女が答える。とにかく少女のその機転によって助かったので、ヤサコは心から少女に感謝した。
「そうだったの。ありがとう、助けてくれて。そう言えばあの音、なんだったのかしら?建物が揺れるくらいすごい音だったけど、あなたは関係ないのよね?」
「ええ。私は工場の外にいたんですが、そこからでも聞こえてきました。でも見たところ、この工場電源が入ったみたいです。もしかしたら勝手に動き出した機械のせいで何か落ちたのかも。」
少女が考え込みながら言う。
「なるほど。それより工場の電源が入っているのなら、早くここから出ましょう。また閉じ込められるかもしれないし。」
なぜ工場の電源が勝手に入ったのか気になるところではあったが、とにかく今は工場からでることが先決だとヤサコは思った。
「そうですね。じゃあ私が出口まで案内しますのでついてきてくだ

さい。」
少女もそれに同意する。
「ほら、フミエちゃん！扉が開いたわよ！早く脱出しましょう！」
ヤサコはまだ震えていたフミエを引っ張り起こした。
「…だめ。足が動かない…ア、アンタは！入り口で会った幽霊女！」
フミエは腰をぬかしていたようだが、少女の顔を確認するといきなり正気に戻ったようだった。
「ちょっとフミエちゃん、失礼よ。この子が扉を開けてくれたんだから。ごめんね。まだ幻覚から覚めてないみたい。」
ヤサコはフミエにかわり少女に謝った。
「いいんです。それよりも早くここから脱出しましょう。」
少女が首を振って気にしていないように言った。
「ちょっと待って！脱出って、この恐ろしい工場の中をまた抜けていくの？もうムリよ。」
フミエがもううんざりといった様子で言う。加えてフミエはこの少女と一緒にいるのもイヤだった。
「そんなこと言ったら一生ここにいることになるわよ。それにもう怪奇現象は起こらないわよ。ねえ？」
「ええ。かなり彼らも静まったようですが。」
ヤサコと少女がフミエを説得する。
「彼らもって、やっぱりなんかいるんだこの工場！行きたくない～！」
フミエがだだをこねる子どものようにわめく。ヤサコは普段の頼もしさはどこに行ったんだと思った。
「しょうがないわねえ。じゃあフミエちゃんは目を閉じて私の手を握ってて。私が出口まで引っ張っていくから。それで大丈夫でしょう？」
「…わかった。ちゃんと連れて行ってよね。」
そうしてようやくヤサコとフミエはブースを出ることができた。そ

して少女の案内に従い工場の中を歩いていく。
「そう言えばまだ互いの名前を紹介してなかったわね。私は小此木優子。で、こっちはフミエちゃんよ。」
ヤサコの紹介に、前を歩く少女が振り返る。
「私は、シオリ。桐野詩織。」
静かに、そしてなぜかうつむくように少女が言った。そしてよろしくというように少しだけ頭を下げる。こうやって改まって人と話すことは苦手なのかなとヤサコは思った。
「シオリちゃんか。きれいな名前ね。ねえ、どこの小学校だったの？ちなみに私たちは元三小なの。この前卒業したところ。多分シオリちゃんも私たちと同じぐらいの歳思うんだけど。」
少し内向的な雰囲気のシオリに、ヤサコはどんどん話しかけた。
「私は、大黒市に住んでいるわけじゃないので…そう、今は里帰りで来ているんです。」
シオリが相変わらずうつむき加減に言う。
「そうなんだ。じゃあ普段はどこに住んでいるの？」
「…ここからはずっと遠いところです。多分、言ってもわからないと思います。」
ヤサコの問いにシオリが答える。その曖昧な返答や、どこか遠くを見つめているような目に、謎めいた印象をヤサコは持った。自分のことをあんまり聞かれたくないのかもしれないともヤサコは思った。あっさりと途絶えた会話。工場の中には3人の足音だけがこだました。
「…ここをまっすぐ行ってください。突き当たりにあるドアを開けば外に出られます。」
急に立ち止まったシオリが進行方向を指差しながら言った。
「えっ？シオリちゃんはどうするの？」
ヤサコが戸惑いながら訪ねる。
「私は、この工場の電源を落としに行きます。電源が入ったままだと、また誰かが閉じ込められるかもしれないので。」

そう言うと少女は来た道を戻り始める。日は傾き、工場の中はかなり暗くなってきていた。

「待って。大丈夫なの？こんなに暗い中１人で探しに行くなんて。」

ヤサコが止めるように言った。

「平気です。この工場には詳しいので。優子さんはフミエさんと一緒に外に出て帰ってもらっていいですよ。」

少女はそう言い残しながら工場の闇の中に消えていった。それを不安そうにヤサコは見届けた。

「不思議な子…大黒市には住んでないって言ってたのに、この工場に詳しかったり。私たちが閉じ込められてることを知ってるかのように助けに来てくれたり。」

ヤサコが１人つぶやく。そしてなんとなく、これっきり会えないような気がした。

「ヤ、ヤサコ？出口は？まだ？」

目をつむりながらヤサコに手を引いてもらっているフミエが、おびえたように訪ねた。

「うん。もう少しよ。あとちょっとだけ頑張って。」

ヤサコはフミエのことを思い出し、出口に向かって歩き始める。そうして突き当たりのドアを開き、ようやく建物の外に出ることができた。

「ふう。フミエちゃん、着いたわよ。」

外の空気を吸ってヤサコは安心した。それと同時に先ほどまで聞こえていた話し声などはまったくしなくなった。

「やったあ～…。うっ。」

「フミエちゃん！」

フミエは飛び上がるように喜んだが、その直後ヤサコに寄りかかるように卒倒した。顔は紅潮し、額に手を当てるとかなり熱があることにヤサコは気づく。今の心労がたたったのかとヤサコは思い、フミエを肩で支える。早くフミエを家に届けなければとヤサコは思った。

#8　廃工場の少女　ｐａｒｔ１０

「何やってんだお前は！」
「す、すいません！」
夕方の廃ビルにガチャギリの怒りの声が響き渡る。怒られているのはフミエに武器をことごとく奪われ、廃工場から追い返されたアキラだった。
「まあまあ、落ち着け。コイツにフミエを追い返せなんて言うのが無理な話だ。今回は運が悪かったと思って許してやったらどうだ？」
ガチャギリをなだめるようにダイチが言った。フミエを恐れるアキラの気持ちはよくわかっていた。
「ちっ。でもあの廃工場に鉱脈があった時はどうするんだ？アイツらも武力を持つことになるぜ。」
ガチャギリがダイチに訪ねる。
「その時はオレたちが奪いに行ったらいいだけの話だ。あの広い工場を、３人で守るなんてできないからな。それよりアキラ。こんなに帰りが遅かったってことは、他の場所はちゃんと調べてきたんだろう？」
「は、はい。一応その廃工場以外の、駅向こうの怪しいエリアは調べてきました。でも鉱脈も、黒い霧も見つかりませんでした。」
アキラが報告する。アキラはあの後友達をもう一度まとめ、他の場所も探索していたのだ。
「そうか。お前の友達はどうした？まさかこの廃ビルまで連れて来てないだろうな？」
ダイチが訪ねる。騒ぎになるのを防ぐため、この場所はこのメンバー以外に知られるのは避けたいとダイチは思っていた。
「大丈夫です。今日は家に帰しました。」
アキラが言う。もちろんアキラもダイチの思惑は汲み取っていた。
「おっけ。わかった。じゃあこれが今日の分のバイト代だ。次会っ

た時にでも渡しといてくれ。」
そう言うとダイチは、小遣い代わりのメタバグをアキラに渡した。
「でもまあ、今の話じゃ廃工場にもないかもな。オレたちの取り越し苦労か、あるいは駅より北のエリアにあるのか。まあいい。ならアキラは明日も引き続き探しに行ってくれるか？そしてフミエ達出会ったらすぐにオレたちに連絡をよこせ。」
「わ、わかりました。」
ガチャギリの言葉にアキラがうなずいて承諾する。
「で、オレたちは次のステップに入る。ここにあるメタバグの量と種類は大体わかった。大黒市にある３０のクラブが、一斉に戦争を起こしてもひと月以上は続けられる量に匹敵する。」
「そんなにあるんすか？」
ガチャギリに説明にナメッチが驚く。とにかく今まででは考えられない相当な量だ。
「しかもそれは今見えている分だけの計算だ。鉱脈だからな、もっと深く掘ればまだまだ見つかるかもしれん。金に換算してもまず３０万はくだらんだろう。」
「ふへ～。」
想像もつかない額を言われ、ナメッチは魂の抜けたような声を出した。３０万という大金を少し前まで小学生だった自分たちが持つのは、なんとも怖いような気がしてきた。
「ああ、オレも正直驚いたぜ。まあとにかく、明日からはどんどんこのメタバグをシンヤの所へ卸そうと思う。そこでこれを見てくれ。」
そう言うとガチャギリはメンバーの前にウインドウを出した。
「なになに？半年ぶりに営業再開！各種電脳ツールを激安価格でそろえる『満天堂』が、近日リニューアルオープン！売り切れゴメン！予約受付開始！」
ナメッチがそのサイトに書かれてあった文字を読んだ。
「さすがシンヤだ。早速こうやって宣伝を始めて、オープン初日か

らガンガン売り飛ばすつもりらしい。その効果もあって、掲示板とかは今、この話題で持ち切りだ。」
ガチャギリが楽しそうに言う。明日から大金持ちになれるとわくわくしていた。
「おい、それからセンサーのことは言わなくていいのか？」
ダイチがガチャギリに訪ねる。
「ああ、そうだった。サッチーや部外者対策に、明日からはこの廃ビルを暗号のセンサーで取り囲むことにした。連動して直進くんが撃ち込まれるトラップも作る。お前ら、この敷地に入る時はこのパスワードを打ち込んで、サブドメインのキーファイルを解除しろ。それで暗号は無効化される。もちろん、入って来た時はもう一度キーファイルをセットするのを忘れるな。」
「なんかめんどくさいっすね。」
ナメッチがぶつぶつ文句を言いながらも、メンバーはそのパスワードを記憶した。
「じゃあ今日は遅いし、帰るとするか。」
ダイチが言って解散ということになった。とは言ってもメンバーの家はこのビルよりは南の方にあるので途中まではいつも帰りは一緒である。その帰りは何のたわいもない話をした。それが何よりリラックスしていて楽しいとダイチは思った。メタバグの鉱脈を見つけて以来、何かずっと神経をとがらせていたような気がしていた。もちろん、ダイチを狙ったハッカーなど謎が残っているし、大黒市中のクラブが黒客を狙っているので油断はできない。しかしそんなことを忘れて、ただ純粋に『ＶＲクエスト３』で遊んだり、こうやってしょーもない話で盛り上がれたら楽しいだろうなとダイチは考えた。しかし流されるようにして、明日からは大金を手に入れるという運命を背負ってしまった。もう前のように遊べなくなってしまうのではないかと、ダイチは不安になった。
「おい、あれフミエとヤサコじゃねえか？」
鹿屋野神社の近くを通りがかった時、ガチャギリが気づいて言った。

「ホントっすね。何やってんすかあの2人は?」
ナメッチが続けて言う。そのフミエはヤサコに肩を支えられ、力なく歩いているだけだった。
「おいアキラ。どう思う?」
ガチャギリがアキラに訪ねる。
「な、なんでしょうかね?姉からまったくオーラを感じません。あいう時は体調を崩したりしていることが多いんですが。」
アキラが遠目からフミエを見ながら言った。
「体調を?どういうことだ?あの工場でなんかあったのか?でもまあ、メタバグを見つけたようには見えないな。よかったよかった。これでアイツも当分おとなしいだろ。じゃあ今日はこの辺で別れるか。アデュー。」
ガチャギリがそう言って、メンバーはそこでそれぞれの家路につく。ただ1人、ダイチだけがそこに立ち尽くし、しんどそうに歩いているフミエの背中をずっと眺めていた。見えなくなるまで。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part1

「世界には、戦争に加担することによって利益を上げる、いわゆる戦争ビジネスというものがあるそうです。」

「大黒屋って知ってるか？」

ガチャギリが唐突にメンバーに訪ねてみた。

「なんだ？あの伝説の通販電脳駄菓子屋のことか？」

ダイチがそれに返す。

「なんスかそれは？」

その言葉は初耳だったナメッチが、ダイチとガチャギリの方を見て言った。

「知らねえのかよ。ほとんど都市伝説のように語られていた通販電脳駄菓子屋のことだ。」

ダイチがナメッチに説明を始める。その話を聞いたことがないデンパやアキラも耳を傾けた。

「どうして伝説なのかと言うとな、その駄菓子屋で買い物ができたヤツはほとんどいないからだ。」

「え？どういうことっスか？」

続いて説明を始めたガチャギリに、ナメッチが不思議そうに返した。

「オレの聞いた範囲で言うとな、客を選ぶんだ、その大黒屋ってのは。普段は営業していない。ところがオレたちのような電脳クラブに突然招待メールが送られてくるんだ。その招待メールを持っているクラブしか買い物ができない。しかも、そこに取り揃えられた武器は市場価格の１０％以下っていう破格の値段らしい。」

「１０％以下！？価格破壊じゃないっスか！そんなことして、その大黒屋は儲かるんすか？」

ナメッチほかデンパやアキラも驚いた。そしてそのようなおいしい話があるのかと疑った。

「儲かるわけねえよな。メタバグの仕入れ値を大きく下回る値段で売ってるんだから。だからその正体や目的は謎だった。もっと言えばその存在すら怪しいという噂も立っていた。」
ダイチが考え込みながら言った。これに限らず都市伝説というものは、とかく信憑性のないものも多い。
「どっちなんすか？それだけ具体的な話も残ってるのに、その存在は怪しいって。」
煮え切らなさそうなナメッチが訪ねる。
「それがな、大黒屋で買い物をした連中がその存在を知られたくないもんで口をつぐんでいたらしいんだ。普通に考えたらそんな夢のような店、他のクラブに知られたくはないだろ？だからその存在は噂でしかないんだ。オレの知り合いが、その招待メールの送信元に返信を試みたらしいんだが、返答はなかったらしい。大黒屋が店を開くのはあくまで招待した客だけだ。まあ、そんな店が存在していたことは間違いないと思う。ただ、その正体や目的は謎のままだ。」
「ふーん。で、その大黒屋がどうかしたんスか？」
ダイチの話を聞いたナメッチがガチャギリに訪ねた。
「わかったんだよ。その大黒屋の正体と目的がな。」
にやりとしながらガチャギリが言った。
「ほんとか？でも今更そんなことを掴んでも仕方ないと思うけどな。」
ダイチが腕を組みながらガチャギリに返す。と、言いつつもダイチはその正体をずっと気にしていた。
「それがそうでもないんだよ。大黒屋の存在のウラには、大黒市の電脳の世界を動かす巨大マネーが動いていたらしい。」
「巨大マネー？」
ガチャギリの言葉にナメッチが反応する。ガチャギリはその手の話が好きだよなあとメンバーは思った。
「まあ、その正体を明かす前に紹介するヤツがいるんだ。おい、入って来ていいぞ。」

ガチャギリがそう言うと、廃ビルの一階入り口から一人の少年が入って来た。ワックスでふわりと浮かせた髪に、メガネの奥の目つきがするどいその少年は、頭のよく切れそうな、知的な雰囲気があった。

「紹介する。コイツが昨日言っていた情報屋の三井真也。実は大黒屋の話も昨日コイツから聞いたんだ。」

「よろしく。」

紹介されたシンヤが頭を下げ、メンバーに挨拶する。

「お、おう。こちらこそよろしく。こっちも紹介する。オレが一応黒客のリーダーのダイチ。それから右からナメッチ、デンパ、アキラだ。」

次はダイチが黒客メンバーを紹介する。それぞれシンヤに対し頭を下げていった。

「まあ、仲良くしてやってくれ。」

ガチャギリが転校生を迎えたクラスの先生のように言う。

「それで、大黒屋の秘密を知っているってホントか？連中は何者なんだ？」

早速ダイチがシンヤにその疑問をぶつけた。シンヤも黒客の輪に入って、それぞれがシンヤの話に耳を傾ける。

「その前に、まず大黒市にはどれだけの通販電脳駄菓子屋が存在していたと思いますか？」

シンヤはダイチに質問で返す。通販電脳駄菓子屋は複数存在していたのだ。

「通販型の販売サイトっていうことなら、大手は3つだな。他にも小さい規模の通販サイトは見たことがあるが、どれも開店してまもなくつぶれていたような気がするな。例外的にうちの校区のメガシ屋なんて店もあったが、あそこは通販で売ってねえしな。」

ダイチが当時のことを思い出しながら言った。

「そう。大黒市におけるメタバグ市場を独占していたのは、通販型電脳駄菓子屋の大手3社。そのうちの1つが僕の兄とその友人が経

営する満天堂だったわけですが。」
シンヤは通販電脳駄菓子屋のことを1社と数える。つまり少し大きな組織で運営しているということだ。
「昔は自由競争でどの駄菓子屋も運営していたのですが、次から次へと同じようなサイトが生まれ、その度に利益を得るのが難しくなっていったそうです。そこでその3社が手を結んで、メタバグを独占していったそうなんです。」
「具体的にはどうやって？」
ダイチがシンヤに質問する。
「通販電脳駄菓子屋は今言った通り大手3社。しかしメタバグ換金サイトは大手1社のみでした。それは気づいていましたか？」
「確かに。言われてみれば換金サイトは1つしか見たことねえなあ。つまりその換金サイトはその3社が共同で運営していたと言うことか？」
シンヤの言葉にダイチが返す。話の流れではそうとしか考えられなかった。
「その通り。メタバグ換金サイトというものが生まれたのはその時です。それまではそれぞれの運営者が自分で拾ってきたメタバグをツールに加工する。それを消費者は小遣いで買うというのが一般的な形でした。しかしメタバグ換金サイトができてからというもの、メタバグが貨幣価値を持つようになります。その換金サイトを設立するには、まずはある程度の資本が必要なわけです。その3社は最初に資本を出しあったわけですね。その形ができてからというもの、メタバグはその換金サイトに集まるようになり、そこからその3社にメタバグが分配されていったわけです。その他のサイトはメタバグが手に入らず、結局のところつぶれるわけですね。」
なんだか経済の小難しい話になって来て、ダイチは頭が痛くなってきた。とりあえずここは「うーん、なるほど」と相づちを打っておいた。
「メタバグ市場を独占した3社ですが、結託したということはウラ

を返せば上げた利益も3分の1に減るってことですよね。つまりもっと武器やツールを売る必要があったわけです。そこで生まれたのが大黒屋なんです。」

「ん?ちょっと待ってくれ。そこで大黒屋が生まれたって説明になってねえよ。大黒屋は武器を原価割れの破格で売ってたわけだろ?でも今の話じゃもっと儲ける必要があったって、矛盾してねえか?」

シンヤの話を聞いていたダイチが不思議そうに訪ねた。

「わからねえかな。大黒屋の本質は市場の操作するとことにあるんだよ。」

そこにがガチャギリが口を挟む。その言葉を聞いたダイチはさらに「は?」と返した。

「大黒屋は普段は取引をしません。しかしある状況になったときに動き出すのです。」

「ある状況?」

シンヤの言葉にダイチが返す。

「例えば、あるところで電脳戦争が起こり、その戦争でAというクラブがかなり優勢に進めていたとします。そこで大黒屋が登場します。大黒屋は劣勢になっているBというクラブに招待メールを送り、格安で武器を売るのです。」

「つまり、大黒屋は弱い者の味方ってわけだな。」

シンヤとガチャギリがそれぞれ説明する。確かにダイチは大黒屋は劣勢に立った時に現れるという噂を聞いたことがあった。

「するとBは力を盛り返します。大黒屋の思惑通りに。」

「いやいや、その弱い方のクラブが盛り返したところで、大黒屋に何の得があるんだ?結局は格安で武器を売った時点で大損だろ。」

ダイチが反論する。ダイチには大黒屋の行動がまったく理解できなかった。

「大黒屋の目的は戦争の長期化です。極端に言えば大黒屋が赤字を出してもまったく問題ないのです。」

「え?」

シンヤが説明するも、ダイチには理解できる話ではなかった。
「さっきシンヤが言っただろ。大黒屋は大手通販電脳駄菓子屋の共同体だ。つまり大黒屋の運営資金はその3社が出し合う。その金は消えるようなもんだけどな。ところが大黒屋の介入で電脳戦争は長期化する。さらに言えば、まわりのクラブも巻き込んで大規模化してくる。さっきの例で言うと、力を盛り返したBはAを追いつめる。そこでAはCと同盟を結んで逆転を狙う。今度はBがDと結びつく…てな感じにな。そうなるとどうなる?ほっといても武器やツールは売れるようになるだろ。大黒屋のたった1回の介入で、市場が大きく動くんだ。結果的にその3社は自分の運営するサイトで莫大な利益を得ることになる。大黒屋の運営資金はそのための先行投資みたいなもんだ。」
「ふーん。なんとなくわかったが、なんでその話をするんだ?」
ガチャギリが丁寧に説明したおかげで、ダイチも少しはその仕組みを理解した。しかしその話が自分たちに関係あるのかとダイチは思った。
「じれったいヤツだな。オレたちはその大黒屋と同じことをして、武器の需要を作ろうってことだよ。」
ガチャギリが頭をかきながら言う。
「ああ、なるほどな。要するにそれをやれば儲かるってことだな!」
「…まあ、そういうことだ。情報屋のシンヤがいれば、どこのクラブが戦争を起こしそうかすぐにわかる。そこにつけ込むんだよ。」
ダイチが本当にわかったのか疑問だったが、ガチャギリはとりあえず話を進めることにした。
「そうか。シンヤが情報通なのも、兄貴がそういうネットワークを持っているからなのか。大黒市のリアルタイムでの情勢がわかっていないと、そういうこともできないわけだからな。」
「ええ、そんなところですね。」
ダイチの言葉にシンヤがうなずきながら返す。つまりシンヤは兄から情報をもらっていたのだ。

「んで、まずは満天堂がツールや武器を売りに出してくれる。オープンはあと３０分後ぐらいだそうだ。そして大黒屋の登場は十分大黒市内に武器が行き渡ってからにする。ちなみにオレたちの取り分は売り上げの半分だ。そこはシンヤとシンヤの兄貴に折り合いをつけておいた。」

「おっけ。わかったぜ。」

ガチャギリの言葉にダイチが返事をした。これでしばらく黒客が何もしていなくても、それなりの金は入ってくる準備は整った。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part2

昨日廃工場の帰りに発熱したフミエは、熱を測ってみると39度以上あったらしい。フミエを家まで送って帰ったヤサコに昨晩お礼のメールが届き、そこにそう書かれていた。相当疲れたんだろうなとヤサコは思い、また改めて昨日の恐怖体験を思い出すだけでもぞっとした。実際ヤサコは昨日一人でトイレにも行けなかった。

そんなわけでこの日は珍しくフミエ抜きでの会議となり、電脳工房にはヤサコとハラケンとメガばあの3人しかいなかった。ヤサコは昨日の心霊現象を覚えているかぎりで2人に説明した。

「なんか、にわかには信じられない話だね。工場に閉じ込められたっていうのは何らかの原因があったからだと思うけど、その後の電話の声とか、工場のどこからともなく聞こえてくる話し声とか、迫って来た女の人の霊とか、そういうベタな怪奇現象はあんまり電脳には関係なさそうだし、かと言って非科学的過ぎる。2人そろって同じ夢でも見てたんじゃないの？」

「ホントよ！フミエちゃんは実際それで熱まで出して寝込んじゃったわけだし、私だって鮮明に覚えてるわ。」

疑いの目で見てくるハラケンに、ヤサコは本気で訴える。別に霊を信じていないわけではないハラケンだが、話ができすぎていてどうも受け入れられなかった。

「ワシもそう思うのお。怪奇現象の中には、電脳の世界が影響して起こるものも多いが、今の話の現象はメガネに関係しているとは思えん。やはり研一の言う通り、おぬしらがそろって同じ夢を見ていたか、あるいは本物の心霊現象だったかじゃな。」

メガばあも考え込みながら言った。メガばあの経験の中でもそのような現象は聞いたこともなかった。

「むしろ、同じ夢を見ていたっていう可能性の方が高いような気がする。以前ヤサコは、イサコのお兄さんが自分は４４２３だと言っ

ている夢を何度も見たって言ってたよね。それと同じで。」
ハラケンが言う。それはコイルドメインにアクセスできるデンスケがそばにいた時によく見た夢だった。
「まさか。私はともかく、フミエちゃんはイマーゴを持ってないのよ。同じ夢を見るなんて、そんなことあるはずが…」
ヤサコはその説を否定した。ヤサコとイサコの間にそれが起きたのならまだわからなくもないが、イマーゴを持っていないことが実験で実証されたフミエとはそのようなことができるはずがないと思った。
「何にしても、鍵を握っていそうなのは工場で知り合ったっていう、シオリって女の子だね。その子が何か知っていそうな気がするけど、連絡先も交換してないんだよね？」
ハラケンが訪ねる。やはりハラケンも話を聞いた時からその少女のことが気になっていた。
「してないわ。工場の電源を落としてくるって言って別れたっきり。あの子が出てくるまで待とうと思ったけど、フミエちゃんが体調を崩したから早く帰った方がいいと思って。」
ヤサコはシオリのことを思い出した。あの少女には何か秘密があるのか。ただ遊びにあの場所にいたとは思えなかった。
「そうか…じゃあ今日行ってみようか、その廃工場に。もしかしたら今日もいるかもしれない。それに何よりあの廃ビルと同じ黒い電脳霧が出てたんだよね？何かあることは確かとは思うけど。」
「ん～、やめといた方がいいと思う。私たちみたいに軽はずみに行ったらまた何が起こるかわからないし。」
ハラケンは止めたヤサコは実を言うと工場に行きたくなかった。昨日の今日であの恐怖体験を忘れられるはずもなく、昨日と同じようにどんよりと曇っている空にデジャヴを起こしそうだった。
「そう？でもまだ朝だし、霊がいても大丈夫だと思うよ。なんなら僕一人でも見に行ってもいいけど。」
ハラケンは行く気満々だった。ハラケンは基本的に怖いものなしの

ところがある。
「ワシも改めて調査をしてきてほしいのう。原因が気になるし、行って来てくれればこの前の果たし合いで練った分のメタタグの制作費を半額にしてやるぞえ。」
メガばあが得意の条件提示をしてきた。この前の果たし合いに負けたので、メガばあが練った分のメタタグの制作費はヤサコ達が払わなくてはいけない約束だったが、まだ未納だった。と言うより誰もそんなこと覚えていなかった。
「…わかった。中には入らずに建物の周りだけを見るだけなら、私も行くわ。」
ヤサコは渋々ＯＫを出してハラケンとともに廃工場に行くことになった。こんなに気の進まないデートもないだろうなと思いながら。

「そう言えば、この前の実験でヤサコのおじさんが、今度は病院で検査を受けてもらうって言ってたけど、あれどうなったの？」
廃工場に向かう途中、ハラケンがヤサコに訪ねた。
「そう、私も昨日そのことを聞こうと思ったの。でもお父さん、昨日はほんとに夜遅くまで帰ってこなくて、私が寝ようと思った瞬間にようやく帰って来たの。それもかなり疲れきった顔して。それで聞いたら、今はちょっと他のことで忙しいからしばらく先になりそうだって言ってたわ。」
ヤサコが昨晩のことを思い出しながら言った。基本的に一郎は夜の帰りは早い。昨日にしても、土曜日と言うこともあって仕事も早く終え家族で夕飯を食べるはずだった。ところが残業で日付が変わるころに帰ってきて、今朝もヤサコがのんびり起きた時間にはとっくに出勤していたのだ。
「ふーん。忙しいって何かあったのかな？おじさん、あのプロジェクトの責任者なんでしょ？なのに他のことで忙しいって、トラブルでもあったのかな？」
心配そうにハラケンがつぶやく。

「わからないけど、今日もせわしなく出て行ったみたいだし、大丈夫かなお父さん。」
ヤサコも言われてみて不安になった。昨日の疲れた顔もそれとつながって気がかりだった。
「おい、あと３０分もすれば満天堂が開店するぞ！早くみんなを呼んで金を集めないと！」
「わかってるよ！とりあえず鹿屋野神社に集合ってことにしてあるから！」
その時ヤサコとハラケンのそばを、少年達が声を高らかにして言い合いながら通り過ぎて言った。
「満天堂？」
ヤサコが今の少年達の言葉にひっかかった。
「通販電脳駄菓子屋の１つだよ。今日の１１時にリニューアルオープンをするって、大々的に広告サイトが出てた。そのおかげで昨日の夕方あたりから大黒市の電脳関係の掲示板はその話題で持ち切りだったみたいだ。」
ハラケンが説明する。ハラケンも昨日たまたま掲示板を見て、その活況ぶりには驚いた。
「え？それってまさかダイチ君達が絡んでる？今メタバグを持っているのはダイチ君達しかいないよね？」
ヤサコが訪ねる。と同時にそれだけメタバグツールの人気は未だに高いんだ、と思った。
「多分そうだと思う。ダイチ達にはその満天堂っていう通販電脳駄菓子屋との何らかのコネがあったんだろうね。こうしてあの廃ビルのメタバグを売りさばくつもりらしい。そう言えば昨日、オバちゃんから電話をもらったんだ。オバちゃんもこの騒ぎに気づいたらしくて、僕に何か知っているか聞いてきたんだ。」
心配性の玉子からの連絡は、ハラケンにとってはある程度予想していたことだった。今でも違法ツールを見かけるとフォーマットしたくなるのかなと、ハラケンは思っていた。

「そっか、オバちゃんは廃ビルのことも知らないんだよね。なんて答えたの？」

「一応ダイチ達との約束もあるしね。そこは知らないって言っておいた。オバちゃんならあの廃ビルのことを嗅ぎ付けるのも時間の問題かもしれないけどね。」

果たし合いの時の、敗者があの廃ビルのことを告げ口してはいけないという約束にしたがってハラケンは口をつくんだ。それはダイチ達のためではなく、ダイチ達へのリベンジに燃えるフミエのためだったかもしれないと、後々になって思った。

「オバちゃん、管理室に戻るつもりなの？」

「わからないけど、でも違法ツールぐらいで戻ることはないと思う。オバちゃんが管理室にいたのは、あの事件を終結させるためだったからね。でも違法ツールを見ると血が騒ぐんじゃないかな。」

ヤサコの問いに、ハラケンは少し笑いながら答えた。ヤサコも、フォーマットを遂行する時の玉子の鬼の形相を思い出して笑った。

そうして2人は件の廃工場に到着した。昨日とまるで同じの外観にヤサコはおびえながらも、どんどんと先に進んでゆくハラケンの後ろ姿を見ながらついていく。2人はとりあえずシオリが今日も来ていないか、建物の外から探すことにした。

「シオリちゃんいる～？」

ヤサコが呼びかけながら進むも、まったく人のいる気配すらない。建物の中には黒い霧が漂っているのが見て取れるが、昨日のように誰かの話し声が聞こえるということもなく、まるで静かなのがかえって不気味なような気がした。

「工場の電源、落ちてるね。」

ハラケンが中を覗き込みながら言う。確かに昨日ヤサコが聞いた機械音のようなものもなかった。

「うん。シオリちゃんが電源を切っていったのかしら。」

「ホントに電源が入っていたらの話だけどね。ちょっと中に入って

見てみようか。」
ハラケンはさらに中が気になって来た。その電源が入るかどうかだけでも調べようと思ったのだ。
「やめとこうよそれは。何があるかわからないし、私、怖いわ。」
ヤサコは無意識にハラケンの服の袖をつかんでいた。
「大丈夫だよ。電源パネルのある部屋はこの窓から入れるし、僕一人だけでも入ってくるからヤサコはここで待ってて。」
ハラケンがそう言うので、ヤサコも引き止めることはせずつかんでいた袖から手を離した。ハラケンはガラスのない窓から建物の中に入ると電源パネルの前に腰を下ろしてそれを眺める。
「どう?」
窓越しにヤサコが訪ねた。
「うーん。予備の電力がありそうな感じなんだけど、電源パネルを操作するにはアクセスパスワードが必要みたいだ。」
調べていたハラケンがあごを手にのせながら言う。
「えっ?パスワードがいるの?じゃあシオリちゃんはどうやってパネルを操作したのかしら?」
「わからない。その子が工場の関係者っていうのなら知っているかもしれないけど、そんなわけもないしね。」
シオリは大黒市内じゃない、ずっと遠くから来たと言っていた。そんな少女がパスワードを知っているとは考えにくい。
「どういうことなのかしら?」
ヤサコはさらに深まった謎に頭が痛くなってきた。シオリは一体何者なのか。
「よっと。まあここに何回か来てみて、本人に会った時に聞けばいいよ。ん?」
立ち上がったハラケンが何かを見つけたらしい。床をしげしげと眺めている。
「どうしたの?」
「ヤサコ、これを見て。暗号っぽいんだけど。」

ハラケンが指差したところに、白いチョークで書かれたような図形があった。

「ホントだ。それ天沢さんが昔イリーガルを捕まえる時に書いたものじゃない？工場のあちこちに微妙に残ってたわ。」

ヤサコが窓から身を乗り出しながら言う。

「イサコが書いたものか。それって半年以上前のことだよね？にしてははっきり残っているな。」

ハラケンの言う通り、その図形は欠けることなく鮮明に残っている。半年もガラスのないこの部屋で風雨にさらされていたとは思えなかった。

「そう言われればそうね。この工場の他の場所に残っているのはどれも消えかかったような暗号ばかりだったわ。」

ヤサコ不自然だと思った。まるで最近誰かが書いたもののようだった。

「それにこの形…電脳に関する暗号にしては整然としている。そう、何かの儀式で使われるような魔方陣みたいだ。」

ハラケンがその形を観察しながら気づいた。電脳で使われる暗号にはいびつな形のものが多い。しかし目の前にあるのは、数学的にも均整のとれているような美しい図形だった。

「やだ、なにそれ。オカルト的ね。」

ヤサコはハラケンの言葉を聞いて一瞬寒気がした。昨日の怪奇現象とその図形が関係があるとしか思えなくなってきた。

「普通に考えれば、これはそのシオリっていう子が書いたとしか思えない。何か意味があるのか。とにかくもうしばらく来るかどうか待ってみようか。」

ハラケンは窓を乗り越えて部屋から出て来た。その後2人でシオリを待つも、ついにこの日姿を見せることはなかった。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part3

通販電脳駄菓子屋の満天堂がオープンしてから3日経った。予想以上の反響に、最初はツールの製造が追いつかないくらいであったが、買い注文はだんだんと減ってきており、また廃ビルに集まった黒客メンバーとシンヤは次なる段階に入ろうかと考えていた。

「最初はものすごい勢いで売れてたのにな。やっぱり違法ツールは飽きられてきているのかもしれないな。」

ここ3日間の満天堂の売り上げ状況を見ていたダイチがぽつりともらす。

「まあな。武器なんて持っていても仲間内で使うようなものじゃない。せいぜいオレたちみたいに『VRクエスト3』のアイテムとして使うぐらいしか需要がないだろ。そう、電脳戦争でも起きてくれないかぎりな。」

ガチャギリが顧客リストに目を通しながら返した。どこのクラブが武器をどのくらい買い付けたのか、そこには事細かに書かれている。

「その戦争にしても起きる気配がないじゃねえか。大黒屋にしても、まずはどこかで戦争が起こってくれないと始められないんじゃないか？」

ダイチがガチャギリに訪ねる。大黒屋は戦争の敗者に武器を格安で売るというところに眼目があった。今のままでは大黒屋としても動けないとダイチは思った。

「戦争が起きてくれないのは仕方ないところです。戦争を起こす理由がないですから。」

シンヤが答えた。シンヤもこの時何やらデータを洗っていた。

「理由がない？」

ダイチがその言葉に反応する。

「考えてもみてください。以前起きていた戦争は何がきっかけで起きていたのか？」

シンヤが質問で返した。ダイチはそれを聞いてしばらく考え込む。
「何がきっかけ?あれ?オレたち何がしたくてよその小学校のヤツらと戦っていたんだっけ?」
「オレはわかったっす。ズバリ、テリトリーの取り合いでしょ?」
ナメッチが手をあげてダイチの代わりに答えた。
「その通り。以前は大黒市の至る所でメタバグが採れていました。そうすると自分達の校区内でそれが見つからなかった場合、よその校区まで探しに行くわけです。そして運良くメタバグを見つけても、今度はそこをテリトリーとするクラブが黙っていません。そうして最初の戦争が起き、そこで勝者と敗者、明暗が分かれます。敗者は勝者を恨み、復讐を企てる。それは同時多発的に発生し、今度はクラブ同士が結託、あるいは離散、そして裏切りを始めます。この連鎖は複雑に絡み合ってゆき、果てには、自分たちがどうして戦っているのか、なぜこの相手と戦わなければいけないのか、それすらもわからなくなるのです。」
情報屋であるシンヤは、これらの戦争をずっと傍目から見てきた人間である。それらを見ては高いところから鼻で笑い、そしてその戦争によって一番に利益を得てきたのだ。
「…なるほどな。今は武器やツールがあっても、メタバグがその辺に転がっているわけじゃない。だからテリトリー争いも起こらないってわけか。だったらお前らの言ってた大黒屋はどうするんだ?戦争が起きる理由がないんじゃどうしようもねえだろ。」
ダイチがシンヤに訪ねた。
「戦争を起こす方法はあります。ここは手っ取り早く、大黒屋を使って戦争を起こしましょう。」
「…よくわからんが、どうやって?」
手を止めて顔を上げたシンヤに、今一度ダイチが訪ねる。その時ガチャギリも顔を上げた。
「下準備は昨日からしてあります。深川。顧客リストの中で一番買い注文が少なかったクラブはどこだった?」

シンヤがガチャギリの方を見た。深川とはガチャギリの本名である。
「えーとな。Cレックスっていう無名のクラブだ。」
「Cレックス？」
ガチャギリの言葉にダイチが聞き直す。そのようなクラブをダイチは聞いたこともなかったのだ。
「Cレックスは不動小学校の生徒で構成された、おそらく大黒でも最弱の部類のクラブです。彼らは校区の主に東側をテリトリーにしていたみたいですが、そこはわりとメタバグが見つかったエリアで、周りのクラブからは常に狙われていました。そのためCレックスはいろんなクラブから何度も襲撃され、カモのレックスなんて言われていたようです。ところがメタバグだけはあるものですから不死鳥のように何度も復活し、その度に敗れては自分たちの装備ごとカツアゲのように持って行かれたそうです。」
シンヤが知っている限りの情報を伝えた。不動小学校は大黒市の南東の山のふもとにある。
「そいつらがどうかしたのか？」
「データにも彼らはある通り、Cレックスは一番買い注文の少なかったクラブです。そこから考えられるのは、彼らは過去の経験から、自分たちの装備をカツアゲされることを一番恐れているということだと思います。それでも買っていったということは、武器やツールは欲しがっているということにもなりますが。」
シンヤの話を聞いて、ダイチは情けない連中だなと思った。カツアゲされるのがイヤなら、本気で自分達を鍛えればいいことである。何もそんな怯えながら武器を買ったところで楽しいのか、とも思った。
「それで？」
「昨日、掲示板に書き込みをしてきました。これです。」
シンヤがその掲示板をウインドウに出してダイチ達に見せた。
「なになに？『不動小校区内の東にある神社で、大量のメタバグがあるとのこと。しかしそこは不動小のクラブのテリトリーであり、

うかつには近づけない。』…なるほど。こうやってそのCレックスに危機感を持たせるってわけか。」

ダイチはその書き込みを読んで、シンヤの考えていることを理解した。

「こんな書き込みが信用されるんスか?少なくとも、これを見てどこかのクラブがCレックスに攻撃を仕掛けないといけないわけっしょ?」

ナメッチは疑問に思った。このような信憑性のない書き込みが、どこまで通じるのか。

「オレたちがキラバグを持ってるなんて書き込みが信じられてるような世界だ。どこかのバカクラブは本気で信じてCレックスを攻めに行くだろう。そして、ここで大黒屋の登場ってわけか。」

ダイチがナメッチに言い聞かせた後、シンヤの方を向いた。

「ええ。Cレックスに今から大黒屋への招待メールを送ります。すぐに食いついてくればうまくハマっているということになります。」

シンヤがそう言ってメールを送信した後、5分と経たずに注文メールが帰ってきた。

「早かったな。よっぽど向こうは切羽詰まっているんだろうよ。罠だとも知らずにな。」

ガチャギリが笑いながら言う。

「しかしすげえ数の注文だぞ。価格を10分の1に設定したとはいえ、定価ならお年玉5年分に相当する量だぜ。稼ぐ手だてのないこのご時世に。」

ダイチが注文表を見て驚きながら言った。

「あちらの求めている量には応えられませんね。こちらが赤字を出す恐れもあります。それでもここでどれだけ売ってしまうか、と言うのは重要なんですね。と言うのも、こちらが出し渋ってしまうと、Cレックスが敗れる可能性もあります。それでは身もふたもありません。しかし大量に売ったところで、Cレックスが勝ち続けてしまうのも問題です。戦いを挑むクラブが無くなります。ここは、Cレ

ックスがギリギリ2回勝てるぐらいの量がベストだと思うんですね。深川。ちょっとその辺を考慮に入れて計算を頼む。」

「あいよ～。」

シンヤが計算の得意なガチャギリに、どれだけの武器を売るかを考えさせた。

「しかし、武器がたくさんあるからって勝てるわけじゃないだろ？事実Cレックスは過去何度もそれで負けたんじゃないのか？」

ダイチがシンヤに訪ねる。武器だけが大量にあっても、使いこなせる腕がなければ宝の持ち腐れである。

「そこはまた大黒屋が手助けをするんです。かつての大黒屋は、弱いクラブに対してはハッキング方法の指南や、リアルタイムでの戦況を逐一そのクラブに流していました。そのクラブが最初の勝利を収めるまで、徹底的にサポートするということですね。」

「そこまでするのかよ…しかし金儲けってのは楽じゃねえな。」

ダイチは1つため息をついた。そこまでの打算を用いないといけないと思うと、金儲けは自分には合わないかもと思い始めた。

「まあ、そういうことだ。てなわけでダイチ。ちょっと不動小の辺りまで様子を探って来てくれ。」

ウインドウを見ながら計算をしていたガチャギリが言った。

「オレが行くのか？」

「だって、お前ヒマそうじゃねえか。」

ダイチが訪ねると、ガチャギリが笑って返した。

「アキラはまだ鉱脈探しをしないといけないだろ。だからまあナメッチとデンパと一緒に行ってきてくれよ。頼むぜ。」

「僕からもお願いします。」

ガチャギリが手を合わせて言い、シンヤも頭を下げた。

「わかった、わかった。どうせオレにはややこしい計算はできないからな。肉体労働で稼ぐことにするわ。」

そう言ってダイチは立ち上がった。

「悪いな。」

ガチャギリがもう一言詫びを入れる。
「かまわん。かまわん。稼がせてくれるんなら文句はねえぜ。ナメ、デンパ、ホラ、行くぞ。アキラも途中まで一緒に行くか。」
「へーイ。」
ダイチが声をかけるとナメッチが返事し、外回りにいくメンバーは立ち上がった。そうしてガチャギリとシンヤに見送られた一行は、久しぶりの快晴の青空の下に出て行くのだった。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part4

ガチャギリに頼まれて不動小学校の周辺の様子を探りに来たダイチ、ナメッチ、デンパ。自分たちの校区からは遠いところなので3人とも自転車に乗ってきた。不動小学校の近くに大きな建物はなく、基本的に住宅街で、その周りに畑や田んぼが広がっているという、旧三小の周りよりもかなり田舎という印象だった。ダイチ達もここまではほとんど来た事がない。

「さて、様子を探るって言ってもどうするかな。アキラからミゼットを借りてきたが、メガネの子どももあんまり見当たらねえな。とりあえずメガネかけるか。」

不動小学校前に着いたところでダイチは額に上げてあったメガネをかけ直した。メガネの子どもの交通事故が起きていたこともあって、自転車に乗っている時などにメガネをかけていると大人に厳しく注意される。

「オヤビン。あれ！」

ダイチと同様にメガネをかけ直したナメッチが30メートルほど離れている前方のT字路を指差した。

「おっと、あぶねえあぶねえ。この距離ならヤツもオレたちのメガネを感知しないだろう。」

ダイチがひとつ息をついて言う。ちょうど今そのT字路をサッチーが通り抜けて行ったのだ。ダイチ達は自分達で見つけたメタバグを材料にした武器を大量にインストールしている。サッチーに見つかれば間違いなく攻撃対象となる。

「でも最近増えたくないっスか？サッチーもキューちゃんも。あんまりうかつに出歩けないっスね。」

ナメッチがうらめしいように言う。

「まったくだ。それもここ2、3日で急に増えたよな。どういうわけか知らんが、いい迷惑だぜ。」

ダイチもうんざりして言った。しかもそれは満天堂が開店したあたりと重なる。営業妨害もはなはだしいなとダイチは思った。

「でもなんでサッチーが急に増えたのかな？違法なツールが出回ってるから？」

デンパが不思議そうに訪ねる。

「そういうわけじゃないと思うけどな。サッチー導入のの基本的なコンセプトは古い空間のフォーマットで、違法ソフトの取り締まりは言ってみればついでみたいなもんだろ。古い空間もほとんどなくなった今、あんなにサッチーを投入しているのはおかしい。」

ダイチが考え込みながら言った。もっと何か別の理由があるんじゃないかと思った。

「あの廃ビルも見つからなければいいっスね。」

「そうだな。でもあの場所はガチャギリが念を入れて、何重にも暗号を仕掛けているから大丈夫だろ。あの場所にサッチーが近づけば、トラップが連動して粉みじんになるってアイツは言ってたからな。それより、オレたちも移動するぞ。道路は危険だ。この学校は人の出入りが多くて目につく。どこか近くでこじんまりとした神社でも探すぞ。」

ダイチが言い、3人は小学校から一旦離れ、住宅街の中にあった小さな神社に入って行った。

「ガチャギリからメールが入ってた。Cレックスへの武器の売買は終わったから、後は戦争が始まるのを待つだけだ、とさ。」

神社の境内の横にあった倉のような建物の石段に腰掛けたダイチは、届いていたメールを確認した。

「戦争が始まったとしても、どこで起こるのかを掴まないといけないっスね。」

同じく石段に腰を下ろしたナメッチが言う。

「よし、じゃあミゼットに行かせるか。有力な情報を掴み次第、その場所に移動だ。」

そう言ってダイチはミゼットを放った。ミゼットにはこの辺りの地

図をインプットさせてあり、後はダイチ達の指示でいろいろな場所に行ってくれる。
「でもどこにメガネの子どもがいるかわからないよ。」
デンパがダイチに言った。
「いや、そういう連中は大体行くところが決まってる。考えてもみろ。道路や住宅街、公園は常にサッチーが巡回してるんだ。だとするとメガネの子どもの集まる場所なんて限られてくる。人ん家を除けば、神社か学校だ。それに人目につきやすい学校に集まることもないだろう。だとしたら調べるべきはこの辺の近くの神社だ。早速ミゼットに向かわせる。」
ダイチが説明しながらミゼットに指示を出した。さすがにこういう時には頭がよく回るなとデンパは感心しつつ、ミゼットの動向を見つめた。案の定、1つ目に入った神社にそれらしい子ども達が集まっているのを発見した。ミゼットは気づかれないように素早く近づき、会話が聞き取れる死角に入った。
「よし、ポジション確保。ガチャギリ達にも映像を送ろう。」
ダイチはガチャギリと回線をつなぎ、電話をかけて現在の状況を報告した。その後チューニングを調整し、モニターに映っている子ども達の会話に聞き入った。
「…ここまでは来たが、本当にこの噂は信じていいのか?」
モニターの向こうのグループのリーダー格らしき少年が仲間に訪ねた。
「有力な情報だと思うぜ。これだけの武器が売られてるってことは、どこかに大量のめたバグがあるってことだ。オレたちのテリトリーじゃ1つも見つからなかったが、この辺は昔メタバグがよく採れたからな。多分このエリアにあるはずだ。」
仲間の1人が答える。
「うん、それはわかるけどな。しかしメタバグが大量にあるって神社はどこだ?この辺も神社なんて腐るほどあるからな。しらみつぶしに探すのも骨だぞ。」

「そこはCレックスに聞こうぜ。ここをホームとしているヤツらなら何か知ってるはずだしな。」
「そのCレックスだってどこにいるんだって話だ。ちょっと他のヤツらに聞いてみてくれよ。」
「わかった。」
リーダー格の少年が指示を出すと、仲間が一斉に知り合いに電話をかけ始めた。
「アイツらもCレックスを探すのに苦労しているようだな。この調子で戦争なんか起きるのか?」
ダイチがもうひとつのモニターに出していたガチャギリに向かって訪ねた。ダイチ達とはテレビ電話でつながっている。
「まあ、そいつらに任せるしかないだろ。Cレックスは大量に武器を買っていったんだ。家に逃げているとかいうことはないだろうからな。」
ガチャギリが返す。
「シンヤ、この連中に見覚えは?」
ダイチは次はシンヤに訪ねた。情報屋のシンヤならモニターに映っているこのグループのことも知っているんじゃないかと思ったのだ。
「見た感じだと、不動小学校の隣の宝生小学校のグループみたいですね。名前は確かウイングスだったかな。以前はCレックスをよくいじめていた印象がありますね。実力は中の上といったところでしょうか。」
シンヤが送られてきた映像を見ながら言った。
「そうか、普通に戦ったらCレックスが負けるような相手なんだな。」
「そうですね。」
ダイチの問いにシンヤが答える。戦闘になったその時はひっそりとCレックスの援護をしなければならないということだった。
「リーダー。GTCクラブとの連絡が取れました。Cレックスは不動中央公園にいるそうで、今からウイングスが奇襲をかけるそうで

す。良かったらそこに参加しないかということです。」
「そうか。よし、早速オレたちも不動中央公園に向かう！」
リーダーの一声で、そのクラブのメンバー達は一斉に神社を飛びだして行った。
「ＧＴＣクラブもその付近をホームにしているクラブで、Ｃレックスと同じ不動小学校のクラブです。それも今飛び出して行った、宝生小学校のウイングスとはメンバーが友達同士でつながっています。この２クラブに一気にこられると、Ｃレックスは武器を持っているとはいえ、かなり不利な戦いになるでしょう。」
シンヤが自分の持っていたデータを整理しながら説明した。
「なんで弱小相手に２グループでタコりに行くんだよ！卑怯きわまりないヤツらだぜ。」
ダイチが焦りながら言った。自分達がひっそりと援護するとはいえ、人数差でまず勝てないと思った。
「対策はオレたちが考えておく。お前らは急いでその公園に向かってくれ！」
ガチャギリがモニターの向こうで指示を出す。ダイチ達も急いで自転車を出し、不動中央公園に向かうことにした。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part5

この日から4日前、メガマスが開発した空間制御プログラムのハッキングが明らかになったことを受けて、プロジェクトの責任者からはずされた一郎。とりあえず暫定的な処置で空間管理室に戻るようにとの辞令が下され、半年以上ぶりに大黒市役所の管理室長の任に就いていた。一郎の補佐をしていた香川は、本社の研究開発部にとどまることになっている。プロジェクトの責任者を引き継いだ神崎が、香川に責任はないと呼び戻したのだ。ハラケンとの約束を直接自分が実現できなくなったことを悔やみながらも、一郎は落ち込んでいては仕方ないと前向きに管理室の業務をこなす。折しも街には今、黒客によってばらまかれた違法ツールが氾濫しており、その出所を掴めない管理室は頭を抱えている状況だった。

「室長、またキューちゃんが一機破損して戻ってきました。」

一郎のところに駆け込んで来たのは、か細く、あまりやる気の伝わってこない、どことなく陰気な青年だった。彼が玉子の後を引き継いだ現在の管理室顧問である。

「何？この3日間で何機目なんだ。まるで最近の子ども達はサッチーやキューちゃんをいじめて遊んでいるようだな。」

一郎がため息をつきながら言った。もちろん違法ツールが横行していることは、空間制御プログラムのハッキングと無関係ではないと考え、サッチーの稼働数を増やしているのだが、メタバグ1つ見つけたという情報も入ってこない。それに問題なのは古い空間はあの事件の後完全に消滅したわけではないということで、未だにサーバーの問題で小規模ながら散発的に発生しているのだ。つまりその古い空間が制御プログラムによるものなのか、サーバーの不具合なのか知る手だてがないのである。

「はあ、そうですね。しかしオートマトンの数を増やすというのは室長のご指示でしたので。」

青年が自分の責任ではないと皮肉のように言う。
「別に君を責めているわけじゃないよ、進藤君。しかし今のままじゃ調査は一向に進まない上、今後も被害が出るおそれもある。何か策を立てないといけないな。」
一郎がいすの背もたれに寄りかかりながら言った。こんな状況がまた神崎あたりにバレると、今度こそ地方に飛ばされるかもしれないと思うと鬱になった。加えてこの青年の覇気のなさが一郎のストレスが溜まってゆく原因の1つになっている。これならあーだこーだと口うるさいがまだ仕事を任せられる玉子の方がずっと良いのにと思った。もちろん今の一郎に人事権などない。
「2．0を導入したらどうですか?」
その進藤が提案した。
「それはムリだ。君も知っているだろう?僕らには2．0を動かすことができない。それができるのは本社にある管理室本部だけだ。だいたい電脳局からも、2．0を稼働を許可するのは緊急の時だけだと通達が来ている。僕らが上申しても本部が許可をだすはずがない。」
一郎が進藤に言い聞かすように言った。2．0は一郎の一存で動かすことはできない。
「でも今は緊急の時じゃないんですか?だからわざわざ本社から室長が戻られたんじゃ。」
進藤が訪ねる。管理室の職員だけには、空間制御プログラムのハッキングのことは知らされていた。
「確かにそうだが、緊急というのは街中に古い空間が発生している時のことを指すんだ。今は確かに異常な事態だが、古い空間の有無を調査している段階だ。2．0を出せるようなところまではいってない。しかし、今のままではその調査が進まないということも事実だ。どうしたものか。しかしどうしてこれほど違法ツールが溢れているんだ。僕がこの街に来た時よりもひどいんだが、君は何か知らないのか?」

一郎が進藤に訪ねる。一郎が管理室長に就任した半年前は、もうメタバグはほとんど枯渇状態であり、ここまで違法ツールも出回っていなかった。今はその時の比にならないほど子ども達の間にはそれが浸透している。

「さあ。たった1つの販売サイトがすべてのツールを売っているみたいですが、その運営者もメタバグの入手先もわかりません。」

満天堂のことは、とうに管理室や大黒警察も掴んでいた。しかしその正体には行き着けず、手を出せないでいる。

「そうだな。そのサイトの運営者がわかれば話は早いが、そう簡単に尻尾をだすとも思えないし。とりあえず現状のまま行くしかないな。君も外回りの時にサッチーやキューちゃんを攻撃している子どもを見かけたら、厳重に注意してくれよ。」

「す、すいません。」

頭を下げているつもりなのか首を2、3回縦に振って進藤が謝る。玉子ならそういうシーンを目撃したらこっぴどく叱りつけてくれるだろうにと、一郎はまたいない人のことを思ってしまった。

「室長、レーダーを見てください。巡回に出ていたキューちゃんが古い空間を見つけた模様です。」

その時中年の職員がレーダーを指差しながら言った。別に古い空間が見つかること自体は珍しいわけではない。一郎もまたかと思って、管理室の壁にかかっている巨大なディスプレイをながめた。そこには大黒市全域の地図が出ていて、古い空間が見つかったエリアは赤く点滅している。

「また随分端っこの方に出ましたね。神代山の南のふもと、不動小学校の辺りですか。」

進藤がそれを見てつぶやく。

「うん？でもあんなところで古い空間が出るのは初めてじゃないか？以前はあまり空間も安定していなかったそうだけど、それを改善するために最近サーバーを整備したからだいぶ安定したって聞いたけど。ですよね？」

「ええ、そうですね、」
一郎が中年の職員に訪ね、その職員はうなずいた。
「なにかありそうだな。よし、ちょっと様子を見に行きます。」
一郎はその場にいた職員にそう言うと、すぐに出かける準備をし始めた。
「室長直々に行かれるんですか？」
進藤が戸惑ったようにつぶやく。外回りは進藤の仕事だ。
「どうも気になるからな。君にもついて来てもらう。管理室の仕事とはどういうものか教えておきたいからね。後のみなさんは留守を頼みます。何かあったらまた連絡お願いします。」
「わかりました。」
一郎の言葉に、中年の職員が返した。そうして室長との外出にあまり乗り気でない進藤とともに、一郎は部屋を出て階段を下りていった。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part6

不動中央公園は学校のグラウンドより敷地が広く、植樹や芝生などで緑に彩られたのどかな場所だった。その中の一角、ひらけた芝生のエリアで数人の子ども達が対峙しているのをダイチ達は発見する。おそらくその子ども達が探しているＣレックスと、先ほどモニターしていたウイングスとその知り合いのＧＴＣクラブであると確信したダイチ達は、その広場から少し離れたベンチに陣取る。見る限りＣレックス対ＧＴＣクラブ＋ウイングスという構図のようだった。木で周りを囲まれている芝生の広場からはそのベンチは死角となっていて、ダイチ達からもその子ども達の姿は見えないので、まずは急いでミゼットを現場に急行させた。

「あー疲れた。なんとか間に合った。とりあえずガチャと連絡を取るか。デンパはサッチーが来ないか周りを見といてくれ。」

「わかった。」

ダイチの指示にデンパがうなずく。そうしてダイチはガチャギリとテレビ電話をつないだ。

「見つけたぜ、Ｃレックスを。それにさっき見ていたウイングスともう１グループが対峙してたから、もう今にも戦いを始めそうな様子だ。今ミゼットに行かせている。」

ダイチがモニターの向こうのガチャギリに言った。

「そうか。お前らはどこにいるんだ？」

「そこから少し離れたベンチだ。向こうからオレたちは見えないだろうが、オレたちも肉眼ではアイツらを確認できない。戦いが始まったらどうやってＣレックスを援護すればいい？」

ダイチがガチャギリに訪ね返す。自分たちは援護するＣレックスにさえもその存在を悟られてはいけない。そんな中でどのように戦えばいいのか、ガチャギリが考えているはずだった。

「顧客情報からＣレックスのメンバーのメガネのハッキングに成功

した。これでオレたちの操作でCレックスの武器装備が勝手に使えるようになる。アイツらがどれだけぼんくらな戦いをしようと、オレたちの意志で戦えるってことだ。」

ガチャギリが説明する。つまりCレックスのメンバーのメガネを、自分たちで動かせるようにしたということだ。

「そんなことができるのか？だったらそんなまわりくどいことしないで、ウイングスとGTCクラブの武器装備を暴発させてやればいいんじゃないのか？そしてらすぐに戦いは終わるぜ。」

ダイチがガチャギリに訪ねる。相手を自滅させればわざわざ自分たちが戦うこともないんじゃないかと思った。

「バカ言えよ。武器を暴発なんかさせたら、オレたちの売っている武器が欠陥品だって思われるだろ。そうしたら買い手が減るじゃねえか。」

ガチャギリがダイチに言い聞かす。ダイチもそれもそうだと思った。その間にミゼットが芝生の広場に到着し、映像と音声が入って来た。

「だから、メタバグなんて知らないんだよ。何度言ったらわかるんだよ。」

モニターから声が届いた。今言ったのはCレックスのメンバーのようで、かなり怯えているような様子だった。まさにカツアゲの現場だなと、ダイチは思った。

「とぼけるなよ。ここにお前らが満天堂に送った武器の注文メールのコピーがある。これだけの量の武器を揃えられるってことは、お前らには資金源があるってことだ。つまり、満天堂と結びついてメタバグを卸しているのはお前らだってことだろ？」

GTCクラブのメンバーの1人がウインドウを出しながら言った。それを突きつけられたCレックスは困惑している。

「おい、あれは何だ？なんでGTCクラブのメンバーがあんなもの持っているんだ？まさか、お前が流したのか？」

ダイチも予想外の展開だったので、戸惑いながらガチャギリに訪ねた。

「ああ。さっきＧＴＣクラブの１人が、掲示板の噂のウラを取るために情報屋のシンヤにコンタクトを取ってきたんだ。そこで今日Ｃレックスが大黒屋に対して送って来た注文メールを、それを満天堂宛に書き換えて送ってやったってわけ。これくらいしないと、掲示板の噂も信じてもらえないからな。」

ガチャギリが説明する。そして思惑通りＧＴＣクラブはＣレックスに攻撃を仕掛けようとしている。ダイチはガチャギリのことを、なんて腹黒いヤツなんだと思った。

「満天堂？知らない。そんなメール送ってない。」

Ｃレックスが弁解する。確かにＣレックスは満天堂にそんなメールを送ったつもりはなかった。そのメールは大黒屋宛に送ったはずだったからである。

「しらばっくれるなよ。この送信元のメールアドレスは間違いなくお前らじゃねえか。さて、おとなしくメタバグのありかを教えてもらおうか。それともここでオレたちにメガネを壊されるか、どっちがいいんだ？」

ＧＴＣクラブの１人がＣレックスを追い込む。ほとんどのメンバーが気弱なのか、Ｃレックスはそろってビクビクしている。

「ちょっと待て。このメールが本当ならコイツらは相当な量の武器を持ってるってことだろ。まともにぶつかるのは危ないんじゃねえか？」

そのやりとりを見ていたウイングスのリーダーが、ＧＴＣクラブに訪ねた。

「カスがどれだけ武器を持っていようと、所詮カスじゃねえか。オレたちが負けるはずねえだろ。」

「それもそうだな。」

ＧＴＣクラブとウイングスは戦闘の体勢に入った。およそＣレックスの倍の人数で取り囲み、電脳銃やミサイルランチャーを構えて威嚇する。Ｃレックスも戦闘は避けられないと思ったのか、武器を手に取った。

「それ！」
モニターの向こうでガチャギリが声を出した。するとCレックスの1人が構えていたミサイルランチャーから追跡くんが発射され、GTCクラブの1人に命中した。その瞬間、場が凍り付いたようだった。
「え？え？え？」
ミサイルを持っていたCレックスの1人が戸惑いの声をだす。自分は引き金を引いたつもりはないのに、いきなりミサイルが発射されたのだからムリもなかった。
「せ、先制攻撃とは…キサマら！もう容赦しないぞ！」
ミサイルを撃たれたGTCクラブのリーダーが声を張り上げた。それと同時にCレックスを囲んでいた他のメンバーが一斉に攻撃を開始する。
「ガチャギリ！いきなり何やってんだよ！」
ダイチが叱りつけるように言う。ミサイル発射のスイッチを入れたのはガチャギリだった。
「早く戦争始めたかったんだよ。そんなことよりCレックスを守らないといけないぞ！ダイチとナメは右に動いた2人を。オレとシンヤで左に動いた2人をカバーする！」
Cレックスは全員で4人である。そのそれぞれを黒客はカバーすることになった。とにかく相手が攻撃の体勢なので、ここは防御に徹するべく、Cレックスのメガネを遠隔操作して防御壁を出現させた。
「ちっ、こいつらにしてはえらく素早い対応だったな。」
ウイングスのリーダーが舌打ちしながら言った。
「あれ？操作もしていないのに勝手に防御壁が。」
一方のCレックスはキョトンとしている。先ほどから何が起こっているのか、理解できてもいなかった。
「次はミサイル攻勢だ。Cレックスの持っている追跡くんをどんどん発射させるぞ！」
ガチャギリが黒客メンバーに指示を出す。それに従ってダイチ達も

Cレックスのメガネを操作し、防御壁越しに追跡くんを撃ち込んでいった。
「ぐわあ！ハンパねえミサイルの数だ！ここはいったん退いて体勢を立て直した方がいいんじゃねえか！？」
ウイングスのリーダーが、GTCクラブのリーダーに対して言った。
「バカ野郎！こんなザコ相手に恐れをなして逃げたら、それこそオレたちのクラブの名が廃るわ！とにかくミサイルは電脳銃で撃ち落とせ！」
GTCクラブのリーダーはかなりやけを起こしている。Cレックスとは同じ小学校で、散々コケにしてきたこともあって、負ければみんなから笑い者にされると思ったのだ。
「アイツこそバカ野郎だぜ。Cレックスの背後には、大黒市でもトップクラスの黒客がついているとも知らないで。」
不敵に笑いながらガチャギリが言う。
「おい、オレたち強いんじゃないの？さっきから勝手にミサイルが発射されるし、さっきも防御壁が現れた。ひょっとしたらオレたちの中にイマーゴの使い手がいるのかも？」
そんな中、思わぬ大健闘にCレックスのリーダーが興奮気味に言った。
「なるほど！頭で考えるだけでメガネを操作できるってやつですね！？」
「そう！だったらこんな防御壁の中からミサイルを撃ち込むなんて卑怯な真似をしなくても勝てるってこと！ここからは正々堂々と勝負だ！」
「よしきた！」
どこからともなく自信がわいてきたCレックスは、勇んで防御壁の囲みから飛び出して真っ向勝負に出て行く。それを黒客メンバーは半ばあきれた様子で見ていた。
「おい、アイツらはバカなのう？」
ダイチがモニターの向こうのガチャギリ達に問いかけた。

「弱いクラブっていうのはちょっとうまくいくとものすごく浮かれるんですよね。そこが弱い原因となっているんですが。」
シンヤも頭を抱えてつぶやく。そうしている間にCレックスは一気に窮地に陥っていた。数で勝ち目がないところに真っ向勝負を挑み、案の定取り囲まれてリンチのように総攻撃を受けている。黒客でもフォローのしようがないくらいだった。
「ガチャギリ！オレたちじゃどうしようもねえぞ！作戦は失敗だ！」
ダイチがお手上げだと思いながらガチャギリに言う。
「人選ミスです。完全に。あんな弱小クラブを勝つように仕向けるのがムリがあったんです。これはあのクラブを選んだ僕のミスです。」
シンヤもすっかり諦めモードで気落ちしている。
「ダイチ！お前直接援護しに行ってくれ！」
ガチャギリが最後の手段を取るようにダイチに言った。
「はあ？お前、それをしたら元も子もないじゃなねえか！オレたちがこの戦争に割って入ったら完全に怪しまれるだろ！」
ダイチがガチャギリに返す。もともとこの戦争をウラで操作することが狙いだったので、自分達が顔を出すのは完全にNGであった。
「そうは言うがCレックスには大黒屋でかなりの先行投資をしてるんだ。ここでアイツらが負けると大損をこく上、大黒屋の存在も明るみに出る。それならお前達がCレックスを助けて、その理由を適当にこじつける方がマシだ！」
ガチャギリはどうしてもCレックスに対して格安で武器を売った先行投資を無駄にしたくないらしい。
「しかしなあ…」
ダイチ達が悩んでいる間にもCレックスはもう壊滅状態に追い込まれていた。1人はとうに逃げ出し、残りの3人も武器は大量に残しているものの、メガネはクラッシュ寸前に痛めつけられていた。
「ボクサッチー。ヨロシクネ。」
その時、ミゼットが映像を送っているモニターのスピーカーから聞

き慣れた言葉が流れてきた。
「おい。今めまいがするほど懐かしい言葉が聞こえてきたんだが。」
ダイチがおそるおそるガチャギリに聞いてみる。
「ああ、オレもめまいがしたからお前の空耳じゃねえと思う。」
ガチャギリもその声を聞いた。ナメッチやデンパ、シンヤもしっかりと耳にしていた。
「うわあああ！サッチーだ！サッチーが来たぞ！」
同時に広場を映しているモニターから叫び声が聞こえて来た。叫んでいるのはＧＴＣクラブとウイングスのメンバーである。ぼろぼろのＣレックスは叫ぶ元気もなく、呆然と立ち尽くしている。
「くそっ！こんな公園なんかで戦いを挑んだのが間違いだったか。よし、このデクノボウからやっちまえ！」
ＧＴＣクラブのリーダーが指示を出す。そうしてウイングスのメンバーとともにサッチーに対して総攻撃を始めた。
「しめた！チャンスだ！アイツらＣレックスに背を向けたぞ！今のうちにアイツらにミサイルぶちこんでやれ！」
ガチャギリにスイッチが入る。そうしてダイチ達も我に返り、Ｃレックス装備のミサイルを撃ち込んだ。
「ああ！卑怯者！こっちは今サッチーを相手にしてるんだぞ！お前らも協力しろ！うわあ！」
ＧＴＣクラブのリーダーがＣレックスに抗議するが、そんなことおかまいなしにダイチ達はミサイルを撃ち込んだ。さらにサッチーもフォーマット光線で反撃し、ＧＴＣクラブとウイングスの面々は収拾がつかなくなっていた。
「おい！さすがにここは退いた方がいいんじゃねえか？って言うか、オレたちは退かしてもらうぜ。」
ウイングスのリーダーがＧＴＣクラブのリーダーに言う。
「…仕方ねえ。今日のところは撤退だ！おいお前ら！次に会った時は今度こそ葬ってやるからな！覚悟しとけ！」
ＧＴＣクラブのリーダーが捨て台詞を吐き、メンバーは散りじりに

なって逃げていった。Cレックスのメンバーだけがホッとした様子で広場に立ち尽くす。しかしまだサッチーは残っており、Cレックスのメンバーを狙っていた。

「かまわん。アイツも破壊するぜ。」

ガチャギリが指示を出し、黒客はミサイルをサッチーに向かって撃ち込んでいった。最後にはサッチーは爆発を起こして炎上し、修復不能の文字が現れる。

「よかった…」

Cレックスがやっと安全になったところで息をついた。モニターしているダイチ達も同様に一息つく。すると2人の大人がものすごい勢いで走って来てミゼットのモニターに映り込んできた。

「おい！君たち！何をしてくれたんだ！わかってるのか？サッチーを破壊すれば管理室の公務執行妨害にあたり、現行犯で逮捕できるんだぞ！」

空間管理室の一郎と進藤である。進藤はサッチーに駆け寄り、強制終了のパネルをだしてサッチーをその場から消した。一方の一郎は立ち尽くしていたCレックスに向かって説教モードに入っている。

「管理室直々の登場かよ。てか、なんでここで逃げないんだよアイツらは。ここでCレックスが持っている武器のこと聞かれたらまずいな。よしここはいっちょ。」

「何をする気だ？」

ガチャギリの言葉にダイチは嫌な予感がした。その予感は的中し、Cレックスのミサイルが至近距離でその説教をしている一郎に撃ち込まれた。

「うわあ！」

「ご、ごめんなさ～い！！」

恐れをなして逃げていくCレックス。一方のミサイルを浴びた一郎は予想外の展開に驚いて立ち尽くしている。

「へっ。」

ガチャギリがいい気味だと言うように鼻で笑った。

「メチャクチャするなあ、お前ってヤツは。でもこの管理室の職員、どっかで見たことがあるな。」
ダイチがモニターを注視して考え込む。
「ダイチ！この人、ヤサコのお父さんだよ！」
デンパが焦ったように叫んだ。
「ああ、そうそう。見覚えのある顔だと思ったら、１回学年集会に来た人だ…って、ええ！？これがヤサコのおっちゃん！？ガチャギリ！お前何やってんだよ！それも空間管理室職員ってことはこの人、オレたちを追ってここまで来たんじゃねえのか！？」
ダイチ達はようやく一郎を思い出した。一郎は夏の事件の後、大黒小学校の６年の学年集会で事件の真相を明かした。ダイチ達が一郎を見たのはその時以来である。
「すまん、すまん。オレもすっかり忘れてたわ。まあオレたちがミサイルを撃ったとは思わないって。それこの人もお前らを追ってきたわけじゃないだろう。ヤサコがチクるとは思えねえし、オレたちに用があるなら直接呼び出すはずだからな。多分別件でここを通りがかったんだろう。」
ガチャギリが冷静に考えて言う。まだ自分たちの素性はバレていないと思った。
「ならいいけど。ところでこの隣の覇気のないモヤシは誰だ？オバちゃんの弟か？」
ダイチが進藤を見て言う。今まで空間管理室といえば玉子というイメージがあったため、その知り合いなのかと思った。
「オバちゃんの弟はハラケンっしょ。」
ナメッチが答える。
「何言ってんだ。ハラケンはオバちゃんの甥だろ。そいつは空間管理室の新しい職員だろう。とにかくお前はヤサコのおっちゃんに見つからないようにそーっとずらかれ。」
ガチャギリが撤退命令をだす。見つかるとさすがに怪しまれると思ったのだ。

「ああ。そうするが、作戦はあれでうまくいったのか？」
ダイチが訪ねる。最後の方はサッチーの乱入でメチャクチャになってしまい、ガチャギリの思惑通りの展開だったのか疑問に思った。
「多分な。ＧＴＣクラブもウイングスも、近くＣレックスにリベンジに来るだろう。Ｃレックスもこれに懲りて、ちゃんと迎え撃つ準備もするはずだ。とにかくこの戦闘をきっかけに、もっと大規模な戦争に発展してもらわないと困る。オレたちはその方法を考えるわ。お前らは気をつけて帰還してくれ。」
「ラジャ。」
ダイチはそう言って通信を切った。ミゼットを連れ戻し、ダイチ達はホームである廃ビルに向かって自転車をこぎ始めた。

#9　アンダーグラウンドマネーゲーム　part7

「ついてないですね室長。」
不動中央公園の近くに停めてあった車に乗り込みながら、進藤が一郎に向かって言った。
「ついてないどころの騒ぎじゃないよ進藤君。空間管理室の室長が子どもに電脳ミサイルを撃ち込まれて逃げられるなんて前代未聞だよ。」
一郎は穴があったら入りたい気持ちだった。目の前で子ども達によってサッチーが破壊され、自分にもミサイルが撃ち込まれるなんて管理室職員としてナメられているとしか言いようがない。折しもやる気が感じられない進藤に、威厳のある管理室長としての仕事ぶりを示そうと考えていたのだからなおさらだった。
「にしても、子ども達の武器の威力が上がっているんじゃないですか？以前ならサッチーが子ども達によって破壊されるなんてあり得ない話だったと思うのですが。」
運転席の進藤が一郎に訪ねる。今までサッチーを破壊したことのある子どもはイサコだけである。そのイサコもキラバグの力や暗号を駆使してこそ破壊し得たわけで、普通のメガネの子どもからすればサッチーは触れてはいけない畏怖の存在だった。しかし先ほどの子ども達は、サッチーを見つけたところで進んで攻撃を仕掛けにいった。
「それは、僕も感じていたところだ。これまで何機も破壊されたキューちゃんにしたって、以前ではほとんどなかったしね。確実に子ども達の持っている武器の威力は上がっているとは思う。それが電脳駄菓子屋の技術の向上なのか、あるいは原料であるメタバグ自体が原因なのか。」
一郎は考え込んだ。後者の場合、落ちているメタバグの質が以前とは変化していることを示す。早く現在流通しているメタバグの出所

を掴まなければならないと一郎は感じた。
「でも、あれなんですか？ハッキングされたという空間制御プログラムを使えば、メタバグも古い空間と一緒に出てくるものなんですか？」
進藤が一郎に訪ねる。
「…君はメタバグが何であるのかは知っているかい？」
しばらく黙って考え事をしていた一郎が質問で返した。
「以前聞かされたことはありますけど。コイルス社の倒産後に、メガマスはコイルドメインを何度もフォーマットしようとしましたが、どうしても消滅しなかった。その時の異常空間のカケラがキラバグで、その化石がメタバグだったんですよね？」
「そう。今回ハッキングされた空間制御プログラムは、そのコイルドメインを再現することを目的としている。もちろんそれはこちらで制御できないといけないものだったから、何度も試行錯誤が繰り返され、その度に生まれた空間はフォーマットされた。あの時のメガマスがコイルドメインをフォーマットしようとしたように。そこで再びキラバグは生まれたんだ。しかしようやく制御可能な空間を作り出したところで、そのキラバグをどのように処理をするか問題になったが、結局はそのプログラムの中に組み込まれることになった。要するに、あのプログラムを起動すれば古い空間と同時にキラバグも現れる。いや、実験中にキラバグが生まれてからは少し時間が経っている。多分現在市場に流れているのはそれが化石となったメタバグだ。」
一郎はそのプロジェクトの責任者としてその様子をつぶさに見届けていた。キラバグが存在すると違法な商売が横行するという懸念もあったが、プログラムに組み込んでおけば制御も可能で通常空間に出現することもないだろうという判断だった。
「そうだったんですか。つまり、今流れているメタバグはキラバグから化石となってからの日が浅く、多分にキラバグとしての機能も含んでいる。だから子ども達の武器も強力になっているとも考えら

れますね。」
「かなりその可能性は高いだろうね。大黒市の子ども達がその武器を持っているということは、やはりメタバグも、古い空間もこの大黒市にあるということになる。とにかく古い空間が出たという神代山のふもとまで向かおう。」
進藤の言葉に、一郎が答える。２人はこの不動中央公園からさらに南東にある、神代山のふもとを目指してここまでやって来たのだ。
「しかし、ここにいたサッチーは破壊されましたし、古い空間があったとしてもフォーマットできませんよ。」
進藤の声のトーンが下がった。２人は神代山に行くのに、この近くを巡回していたサッチーを連れて行くつもりだった。ところがそのサッチーを見つけたのは良かったが、子ども達から攻撃を受けており、２人が急いで駆け寄ったその時に爆発したのだ。
「ああ、そうだったね。とりあえずキューちゃんでもいいから一機こちらに来るように要請するよ。とりあえず車を出してくれ。」
一郎はサッチーの始末書も書かないといけないと思いうんざりした。
「わかりました」と言って進藤は車を発進させる。するとすぐ近くの交差点で信号に引っかかった。その時目の前をダイチ達一行が自転車で横切って行った。ダイチ達は一郎には気づいていない。
「あれ？あの子達は確か…」
一郎はダイチ達を覚えていた。一応夏の事件に関わった子ども達のことは頭に入っているが、何よりヤサコと一緒にいることも多かったので印象に残っていた。
「どうかしましたか？」
ハンドルを握っている進藤が訪ねる。
「いや、知っている子どもが通りがかったものだから。しかしこんなところまで遊びにきているのか。」
このエリアは大黒駅の辺りからでも結構な距離にある。旧三小の子ども達にしては行動範囲が広いんだなと一郎は思った。

そうして公園から車で5分ほど走り、山が見えて来たところで舗装道路からオフロードに変わっていた。一面は畑や田んぼという風景であり、車は農家の車ぐらいしか停まっていないような場所である。そこから山沿いに少しのぼったところで車を降りた。そこには小さな池があり周りは林だった。もう少し先に行けば墓地があるということである。

「ど田舎ですねえ。ここで古い空間というのも、わからなくもない気がしますが。」

進藤がのどかな景色を見渡しながら言う。古い空間は基本的に人があまり来ない場所に現れやすい。

「でもおかしいな。確かレーダーではここに古い空間があるということだったが、霧も出ていないな。」

一郎がウインドウを見ながら確認する。レーダーで古い空間が出ていた辺りをマーキングした地図をだしているのだが、どうもその場所に異常は見当たらない。そこで一郎は管理室に連絡を取って、今のレーダーの状態について確認をとることにした。

「あ、もしもし、小此木です。いま神代山の古い空間が出ていた辺りに来ているのですが、特に異常が見られないんです。そちらのレーダーではどうなっていますか?」

一郎が電話で管理室に詰めていた職員に訪ねる。

「え?そちらの古い空間はつい先ほどフォーマットされたようで、レーダーからもすでに消えています。てっきり私達は室長がフォーマットされたものだと思っていましたが。」

不思議がった口調で職員が答えた。

「なんですって?それは何分前ぐらいのことですか?」

「つい5分ほど前だった気がしますが。」

一郎の問いに職員が返した。その時間は一郎達が公園を出発したあたりである。

「その時、サッチーがこの場所にいたんですか?」

サッチーは現在市内に4機ほど巡回している。その内の1機は先ほ

ど破壊された。
「いえ。サッチーはその場所に行ってなかったように思います。そう言えば先ほどその近辺でサッチーからの信号が途絶えましたが、その付近にいるサッチーはそれ1機だけでした。」
レーダーにはサッチーの位置も表示される。一方キューちゃんはレーダーには示されない。基本的にキューちゃんはサッチーの近くを巡回し、サッチーの探索範囲を広げている。
「ええ、そのサッチーには心当たりがあります。しかしなんですね。その5分前というのは僕らはまだ不動小学校近くの公園にいました。となるとその古い空間はひとりでに消えたということになりますか。キューちゃんがここまで飛んで来てフォーマットしたとも考えられなくもないですが。」
一郎が考え込む。古い空間が自然消滅することは通常ない。
「そ、そうですね。じゃあ室長、まさかあの空間は…」
「ええ。あの空間は空間制御プログラムによるものだったのかもしれません。もう少しこの場所を調べてみることにします。」
「わ、わかりました。」
一郎は職員との電話を切った。そして周囲を見回す。メタバグなどが落ちていないかを確認するためだ。
「聞いた通り。ここで空間制御プログラムが使われた可能性があるようだ。君もメタバグなどが落ちていないか調べてみてくれないか。」
一郎が隣で所在無さげに立っていた進藤に言う。
「メタバグが落ちていればその可能性が高いってことですか?」
「さっきも話した通り。空間制御プログラムを起動するということは、メタバグを出現させるということにもなる。逆に言えば、サーバーの不具合で現れた古い空間ならメタバグが落ちていることはないからね。」
一郎が進藤に説明する。そうして2人はこの後くまなく周囲を捜索した。が、メタバグを見つけることはなかった。徒労に終わって肩

を落として車に乗り込む2人を、林の陰からミゼットがのぞきこんでいた。

その夜。管理室の会議などですっかり遅くなって帰って来た一郎。このところはずっとこのような調子であり、ヤサコもどこかおかしいと思っていた。そのことを訪ねても、一郎はいつも「何でもない」と返すだけであった。今日も疲れきった様子の一郎を見て、メガばあと一緒に何があったんだろうと話し合う。一郎はメガばあにも、空間制御プログラムのハッキングについて話していなかった。今はメガマスでもトップシークレットとされており、家族にも話してはいけないことになっているのだ。

「あれ？お父さん。メガネから煙ふいてるけど。」

ヤサコが一郎を見ていて気づいた。メガネをかけていないと見えない、電脳の煙が一郎のメガネから上っているのだ。

「え？ああ、べつに。なんでもないよ。」

一郎はまたはぐらかす。まさか子どもにミサイルを撃ち込まれたなんて言えるはずもない。

「お前はウソをついてもすぐにわかる。昔からそうじゃ。ほれ、言うてみい。」

実の母親であるメガばあが問いつめる。

「何でもないって言ってるだろ。疲れてるんだ。頼むからそっとしておいてくれ。」

一郎はネクタイをはずしながら、少しいらだちを見せながら言った。子どもの前でそんな態度を見せてしまったが、そんなことも考えている余裕がないくらい気疲れしていた。

「そう。じゃあ私、寝るから。」

心配しているのにそんな態度をとられたヤサコが、逆にムッとして冷たく言った。「あったかくして寝るのよ」と、ヤサコの母の静江は気まずい空気をつくろうように声をかける。

「あ、ちょっと待ってくれ。優子。聞きたいことがあるんだ。」

「何？」
一郎の呼び止めに、寝室のドアノブを握りながらヤサコが振り返る。
「お前の友達に、沢口くんっていただろ。彼は今何してるんだ？」
今度はヤサコがドキッとする番だった。ヤサコも今大黒市では違法ツールが流行している事は知っている。それがダイチ達が廃ビルで手に入れたメタバグを原料に作られている事も。そのことはもちろん秘密にしなければならないという約束だった。
「何してるって何？ダイチ君が今何をしているのかって、そんなの知るわけないじゃない。」
ヤサコが逆に聞き返す。
「あ、いやあ。会わないのか？最近。」
「会ってないわ。どうしてそんなこと聞くの？」
ヤサコはどこでダイチのことを掴んだのだろうと思った。
「うん。大したことじゃないんだが、今日彼を不動中央公園で見かけてね。ちょうどそこで子ども達が違法ツールを使って遊んでいたみたいなんだが、なんでそんなところにいたのかなと思ってね。」
それはヤサコにもわからなかった。ダイチ達が何をしているのか、連絡を取り合うこともない今となってはヤサコが知る由もない。
「別にいいじゃない。それだけ遠くまで行って遊んでいるなんて元気な証拠よ。」
そこで静江が一郎に言った。なんとなく釈然としなかった一郎は、
「うーん」とうなるだけだった。
「もういいの？おやすみ。」
今度こそヤサコは寝ようと声をかけて寝室に入る。一郎がダイチに目を付けている事に、少し胸の動悸が早くなっていた。

#10　結成、コイルレジスタンス　part1

「メガマスが急成長する以前、コンピューター業界で国内トップにあった企業は、その後業績が大幅には落ち込みました。今日ではメガネ専用のソフトウェアの開発を主流に転換し、規模を縮小化したそうです。」

黒客が大黒屋なるものを開店してから3日が過ぎた。大黒市内ではガチャギリの思惑通り、電脳戦争が各地で展開されるようになっていた。かつての大黒市以上に。1週間前の果たし合いから立場がガラリと変わったコイル探偵局と大黒黒客。今、この異常とも思える大黒市を元に戻すべく、廃工場の一件で寝込んでいたフミエは復活し、再び立ち上がろうと目論んでいた。その作戦会議のため、いつものようにヤサコ宅でハラケンと3人で集まった。

「私たちがなすべきことは1つ。黒客の暴走を止めること。」

フミエがおごそかに宣言する。フミエの表情を見ても、その怒りは果たし合いに負けた時以上のものがあるとヤサコは感じていた。

「黒客の暴走って言っても、ダイチ君達はメタバグを通販サイトに卸しているだけでしょ？それを承知で果たし合いの時も、負けても口はださないっていう約束もしたし。何をそんなに怒ってるの？」

ヤサコがフミエに訪ねる。ヤサコやハラケンは、黒客はただメタバグを卸しているだけだと思っていた。今黒客のメンバーと連絡を取り合う事もないからだ。

「聞いた話なんだけど、あのバカどもは今まさに起こっている市内の電脳戦争にも一枚噛んでいるみたいなのよ。」

「え？どういうこと？」

フミエの言葉にハラケンが聞き返した。

「もともとは大黒市に電脳戦争が起こる火種なんてなかった。メタバグがどこでも採ることができないから、テリトリーの取り合いな

んかも起こるはずがないでしょ？」
「そうだね。でも実際に電脳戦争は起きている。それもかなり大きな規模で。つまりそれはダイチ達が起こしているってこと？」
ハラケンがフミエの話を聞いて言う。電脳戦争が激化し始めたのは、つい昨日や一昨日のことである。３人とも外に出かけた時、その様子を目の当たりにしていた。大人数対大人数の戦いも目についた。
「なんでダイチ君達はそんなことを？」
ヤサコがフミエに訪ねる。
「簡単なことよ。戦争が起きれば武器屋が儲かる。つまり通販電脳駄菓子屋にメタバグを卸している黒客も儲かるってこと。アイツらは己の私利私欲のために、多くの子どもを巻き込み、そのいがみ合いや憎しみを利用して何の意味もない戦争を広げているの。」
ヤサコはフミエが怒っている理由がわかった。確かにそれが事実ならすごく卑怯で、許されるようなことじゃないとヤサコは思った。
「でもどうやってそんな事ができたの？」
ハラケンがフミエに訪ねた。
「今掲示板まことしやかにその存在がささやかれている、大黒屋という通販電脳駄菓子屋を知ってる？」
「それは、以前も噂になったことがあったね。確か違法ツールを格安で売ってくれる店じゃなかった？」
ハラケンが昔を思い出しながら言った。それはヤサコが金沢にいた時のことなので、当然ヤサコにとっては初耳だった。
「ええ、そうよ。その時の大黒屋の真の目的は戦争の長期化だったらしいわ。弱い電脳クラブに力を与えることで、勢力を均衡させる。そうすれば戦争は終わることはないっていうね。そして、黒客もこれと同じ事をしたの。戦争が起こる火種もご丁寧に用意して。」
フミエが言う。３日前の不動中央公園における戦闘から、あっという間に戦火は拡大した。その戦いのきっかけを作り、戦闘をコントロールしたのは黒客だった。
「なるほど、そういうことだったのか…でも、それはダイチ達らし

いやり方じゃないね。悪い言い方だけど、ダイチ達はそこまで頭の回るヤツじゃない。ガチャギリがいるとはいえ、その計算し尽くされた作戦はどこからでたんだろう?」

ハラケンが考え込む。ダイチ達のことをわかっているからこそ、その話に違和感を覚えた。

「協力者がいるの。今の黒客にはね。もともと情報屋だったその協力者は、お兄さんが通販電脳駄菓子屋の経営にも関わっていて、そのコネでメタバグを卸すことができているの。」

「情報屋か…なるほど。だからそれだけの綿密な作戦が立てられるわけだね。」

ハラケンもそれで納得した。どうも新しい言葉が連発してヤサコにはあまり理解できていなかったが。

「でもなんでフミエちゃんはそこまで詳しいの?ダイチ君達と連絡を取ったとも思えないし、ダイチ君だってそれは陰でやっていることなんでしょう?そんな情報をどこから手に入れたの?」

ヤサコは純粋に疑問に思った。いくら黒客と付き合いが長いからといって、そこまで情報が筒抜けになるはずもない。

「ええ。今のは全部、アキラから聞いたのよ。」

フミエの言葉にヤサコとハラケンは驚いたが、そこは姉弟だけに、そのルートが一番自然なのかなと思った。

「まさかフミエちゃん。またアキラ君を締め上げて聞き出したんじゃ?」

ヤサコがアキラを心配して言う。フミエのアキラに対する蛮行は何度も見たことがあった。

「勘違いしないで。今回ばかりはそうじゃないわ。」

「じゃあ、どういうこと?」

すぐに否定したフミエに、ヤサコが半信半疑で訪ねる。

「私もね、あの廃工場の一件以来、アイツらを倒そうっていうモチベーションが下がりかけていたの。アイツらを倒すにはメタバグが必要。でもメタバグを探しに行ったらあんな目にあったんだからね。

」

フミエでも心が折れることがあるのかとヤサコは思った。そのくらい恐ろしい体験だったことは間違いなかったが。

「まあ、それで街に武器が溢れようが、戦争が起きようが勝手にしとけばいいと思っていたわけ。でも昨日、突然アキラが私に今言ったすべてを打ち明けたの。」

「どうして？」

「良心の呵責もあったと思う。自分達が電脳戦争を操作していることに対して。でも一番の理由は、怖いって言っていたわ。」

フミエはその時、アキラにもまだまともな感性が備わっていることに安心した。自分に打ち明けることは、ダイチ達を裏切ることになる。それは勇気のいることだが、そこで勇気を出して自分に言ってくれたことに、フミエは少しうれしく思った。

「怖い？」

ヤサコが訪ねる。

「今黒客は大金を手に入れようとしている。それも大黒市を覆った黒い影である通販電脳駄菓子屋と結びついて。そんなの、必ずこの先に何かトラブルが起こりそうなものじゃない。」

「そうか。アキラ君はもともと乗り気じゃなかったんだね。ダイチ達から一歩引いた目線で見ていたからそれを感じたのか。」

フミエの言葉にハラケンがつぶやく。大金が絡んでくるとロクなことがないことはここにいる3人は感じていた。黒客を止めなければならないという思いはヤサコやハラケンにも芽生えていた。しかし。

「話はわかったけど、どうやってダイチ君達を止めるの？例によってフミエちゃんは、あの廃ビルを空間管理室に知らせるっていうのは反対なんでしょ？」

ヤサコがフミエに訪ねる。その手で黒客を倒したいというフミエのこだわりがあるからこそ、わざわざメタバグを探しに出たりもしたのだ。

「まあ、この後に及んでそうも言ってはいられないとは思うけど、

それだけは避けたいわ。そこでなんとかアイツらを廃ビルから叩き出す方法を考えたんだけど、１つだけ思いついたことがあるの。」

「どんな方法？」

ヤサコとハラケンが身を乗り出した。

「今起こっている電脳戦争で、敗れたクラブを私たちに取り込む。つまり今話した裏事情を話し、すべての元凶は黒客にあると説くのよ。そうして取り込んだクラブには武器を揃えてもらいながら時が来るのを待ってもらう。そうしてある程度の勢力ができあがったところで、黒客を襲撃するの。」

「・・・まるでレジスタンス運動だね。」

フミエの話を聞いたハラケンが言った。ある権力に対する抵抗運動という意味では、その言葉がふさわしいとハラケンは思った。

「それいただき。名付けてコイルレジスタンス。黒客という腐敗した支配者を打ち砕くためのネットワークを広げるのよ。同時に、くだらない電脳戦争をやめさせるように説得する。どれだけ争っても、一番得をするのは黒客だってことを教えてあげないといけない。」

フミエはやる気に満ちていた。まるで映画のようなサクセスストーリーを頭の中に描いていた。

「電脳戦争に敗れたクラブって言っても、その人たちはどこにいるの？」

ヤサコが訪ねる。勇むのはいいが、この３人には大黒市内の電脳クラブとの人脈はほとんどない。

「アキラが１つだけ教えてくれた。不動小学校の生徒で構成されたＣレックス。ここは１番始めに黒客に目を付けられて利用されるだけ利用されたっていう話よ。コイルレジスタンスの輪を広げるには、ちょうどいい相手ね。」

フミエがアキラにもらったメモを見ながら言った。

「じゃあその相手と連絡を取る事から始めるんだね。そう言えばアキラ君はどうするの？僕たちに情報をリークした以上、ダイチ達にそのことがバレるとアキラ君もそうだし、僕らの身も危ないと思う

けど。」
ハラケンがフミエに訪ねる。
「アキラはそのまま黒客に潜伏させる。そうして時々情報は聞く事にする。アイツらも、もう私とアキラが通じ合っているなんて思わないだろうし、ボロをださなければバレることはないと思う。あとはアキラの情報を元に、私たちがどれだけネットワークを広げられるかね。」
フミエの言葉に、ヤサコとハラケンは今後の方針としてその運動を広げて行くことに同意した。早速フミエは動き出すべく、Cレックスと連絡を取った。相手はとりあえず会ってくれることになり、不動小学校の近くの神社で落ち合うことになった。3人は距離のある不動までバスで向かうことにした。

#10　結成、コイルレジスタンス　part2

「…出ない。まったくどうしたものか。」
大黒警察電脳犯罪対策係、竹下直樹はここ数日で何度もつぶやいている言葉を発した。同じ相手に何度も電話をかけているのに、その相手はいっこうに向こうは出てくれないのだ。そうして考え込む直樹のメガネは、今度は着信音を鳴らした。気を取りなおして直樹は指電話を作り応答する。
「もしもし?あっ、野村さん。」
「どうもどうも。そちらの調査の進展具合を聞いておこうと思って電話したのですが。」
電話をかけてきたのは県警の野村刑事だった。同時に直樹のいる係長室に1人の女性が入って来た。その女性は川畑久美子。元は県警の交通課に所属していた刑事だが、研修の名目で今は大黒警察で直樹の補佐役を務めている。しかしそれは表向きの話。2人は1週間前、ちょうどメガマスが古い空間の実験を行ったその日に、カンナの交通事故の再調査の要請を受けた。その調査は警察上層部に知られてはならないため、極秘裏に行う必要があった。そこで敏腕の久美子をそれとなく大黒警察に派遣することによって、調査をスムーズに進めようと県警交通課長の野村は考えたのだ。久美子は直樹が電話中であることを確認すると静かに机に向かい、自分の持っていた資料を整理し始めた。
「いや、そちらにも情報が入っていますでしょうか?現在大黒市は少々荒れておりまして、なかなか僕らの調査も進んでいないんですよ。」
直樹の言うように、大黒市に違法ツールが横行するようになってからこの部署もにわかに忙しくなってきた。
「ええ。昨日桜井検事から聞きました。1週間ほど前、メガマスが開発した空間制御プログラムなるものがハッキングされたとか。そ

れに伴って大黒市内ではメタバグによる違法ツールが氾濫していて、空間管理室も手を焼いていると。それでメガマスは非公式にそちらの部署に、そのハッカーの身元を突き止めてもらいたいと捜査を依頼したそうですね。」

「桜井検事？ああ、メガマスと僕たちの仲介役を務めていらっしゃる検事さんですね。まあ、大まかに言えばそのような状況なんですが。」

どこまで野村が電脳を理解しているかは置いといて、とりあえず直樹はそう答えた。検事の桜井はカンナの事故の再調査の依頼を野村のもとに持って来たり、メガマスの内情を伝えたりして、メガマスと警察の橋渡しをしているが、それは現在のメガマスは警察に表立って干渉できないためである。またメガマスは今回、空間制御プログラムを盗んだハッカーを追うように電脳犯罪対策係要請したのだが、これもウラでひっそりとやり取りがなされている。空間制御プログラムのことをメガマスはトップシークレットにしているので、目立った動きをみせることができないのだ。

「とりあえずですね、調査のことは二の次にしてもいいですから、今はそちらの部署の仕事に集中してください。」

野村が言う。警察官として本分をおろそかにしてはいけないということだった。

「しかし、川畑さんの研修期間は1ヶ月ということでしたよね。1ヶ月以内に有力な情報を掴まないと、再調査は手詰まりになるんじゃないんですか？」

「まあ、川畑君の研修が終わっても、君が1人で続けてくれればありがたいんですが、なかなかそうもいかないでしょう。確かに猶予は1ヶ月しかありませんな。」

何とも間の悪い時期に事件が起こってしまったんだろうと直樹は思った。今は久美子にもハッカーの捜査を手伝わせている始末である。

「なんとか、少しでも時間があれば聞き込みに回りたいと思います。ところでそちらの調査の方はどのような具合ですか？」

直樹が訪ねる。野村ともうひとりの杉本という刑事は、県警内に残っている資料をあたっていた。事故当時の大黒警察交通課にいた捜査員に、事故の隠蔽の有無をなんとか確認しようというのだ。

「当時の交通課にいた捜査員のリストはできあがりました。しかし問題なのは、すでにどの捜査員も大黒警察はおろか県警にも残っておらず、全員他府県に異動していることですね。情報を聞き出すのは難しいと思います。」

野村が少しため息をつきながら言った。さらにその見返りとして、全員が何らかの恩賞を手にしていたことも明らかになっていた。

「そうですか。わかりました。次はいい報告ができるように頑張ります。」

「あまりムリはなさらぬように。川畑君にはよろしく言っておいてください。」

直樹は電話を切った。そうしてこの再調査はうまくいくのだろうかと不安になった。

「電話、野村さんから?」

久美子が作業の手を止めて直樹に訪ねた。会話の内容から相手がわかったようだ。

「そうです。再調査は進展しましたかと。」

直樹が答える。現在肩書きでは直樹の方が久美子よりは上司になるが、年齢も上であり、警察官としてのキャリアが直樹よりも長い久美子には、自然と敬語を使っていた。久美子も2人でいる時などは言葉遣いがラフである。

「まあ、この状況じゃね。その顔を見ると、あっちの調査もうまくはいってないみたいね。」

久美子が直樹の顔を見ながら訪ねる。

「そうですね。事故当時の大黒警察交通課の捜査員は、全員他府県に異動したとのことでした。」

直樹の言葉を聞いて、久美子も少し神妙な顔つきになった。

「そう。でも、こっちの事件も片付けないといけないわけだし…竹

下君、その例のハッカーを見つけ出す手だてはあるの？」
「とは言いましても、手がかりが少なすぎます。メガマスの話によりますとハッキングの痕跡も残っていなかったらしいので、それでどうやって探せばいいという話ですよ。」
直樹にとってはお手上げ状態だった。そもそも秘密を保持したいためなのか、メガマスからの情報提供も少ない。
「メガマスは本当に事件を解決する気があるの？いくら今警察への介入が難しいとは言っても、もっと情報を上げてくれないと。」
久美子はそれを不満に思っていた。これではまるで捜査が進展する見込みがない。
「メガマスは別に僕らに事件を解決してもらおうとは思っていません。現にメガマスは独自に調査を進めていますし、確実に僕らよりも手がかりは掴んでいるはずです。」
「じゃあ、どうしてわざわざこの部署にコンタクトをとってきたの？」
直樹の言葉に、久美子が不審に思って訪ねた。
「メガマスには逮捕権がありません。メガマスが仮にハッカーを見つけ出したとしても、それは現行犯で押さえるしかないわけです。しかし僕たち警察なら不正アクセス禁止法の疑いがあれば任意同行を求めることができます。メガマスは結局そこしか僕たちをアテにしていないわけです。」
直樹の言う通り、メガマスがこの部署に協力を要請した理由はまさにそれだけだった。
「…なるほど。あくまで大黒市はメガマスの街。警察でさえも、メガマスの都合で動いているわけか。隠蔽が起こってしまうのもムリはないわね。」
久美子がため息をつきながら言う。久美子には、市政のほとんどに介入しているメガマスの姿勢こそがすべての元凶のように思えた。その中でも警察権が独立していないと、同様の隠蔽はまたいつか起こってしまうだろうと感じた。

「それがこの街なんです。僕は慣れてしまったのかもしれませんが、やはりこの体制は問題がありますよね…まあ、言っていても仕方ありませんね。」

「それでさっきの話だけど、メガマスはメガマスで独自に調査をしているんでしょう?私たちがムリに捜査していなくても、ハッカーが見つかるのは時間の問題じゃないの?」

愚痴を言っていても仕方ないので、久美子は仕事の話に戻した。

「そうであればいいのですが、少し気になる点もありまして。」

「何?最近ずっとあなたが連絡を取ろうとしている、ダイチ君って少年のこと?」

直樹の言葉に引っかかった久美子が訪ねる。ダイチは廃ビルでメタバグを見つけた日に、果たし合いに使うツールを直樹に頼んで作ってもらった。それを覚えていた直樹は、違法ツールが横行し始めたことについてダイチが何か知っているはずだと踏んでおり、久美子にもそのことを話していた。

「そうです。彼がメタバグの出所について何か知っているはずだという話はしましたよね。一方メガマスの報告は、空間制御プログラムがハッキングされてから、メタバグが出現し始めたとのことでした。しかしそれでは時間が微妙に合わないんですよ。」

そう言いながら直樹は自分の警察手帳のメモを取り出した。

「時間が合わないってどういうこと?」

久美子がいぶかしげに訪ねる。

「それがですね。ダイチ君が僕にメタバグを預けたのが先週の水曜日。この次の日に僕は県警に赴いて事故の再調査のことを打ち合わせしたので覚えています。つまりこの時点でメタバグは存在していたということですよね。しかしメガマスの報告によりますと、空間制御プログラムがハッキングされたのは木曜日の深夜から土曜日の早朝にかけてということでした。最後に起動したのが木曜日の昼間だったそうですが、その時は異常がなかったそうなので。」

「…なるほど。確かに妙な話ね。つまりメガマスの報告が正しいと

すれば、ダイチ君達が見つけたメタバグは空間制御プログラムとは関係のないもの。どうもメガマスは勘違いをしているようね。」

久美子が考え込む。一郎を筆頭に、メガマスは現在横行している違法ツールの元となっているメタバグは、空間制御プログラムによって現れたものだと思っている。しかし直樹の話が事実ならば、それとは別の理由でメタバグは現れたということになる。

「ええ。メガマスはそれらの理由でハッカーは大黒市に潜伏しているものだと決めつけていますが、結論を出すには早すぎると思います。」

ハッカーが大黒市にいない場合、解決には手間取るだろうなと直樹は思った。

「そのこと、メガマスには報告したの？」

「いやあ、言えないですよ。子どもがメタバグを持っているのを警察官が見過ごしたなんて。下手すれば処罰の対象ですから。」

直樹は頭をかきながら言った。そもそも直樹は、メタバグが現れたことを把握した時点でメガマスに報告しなければいけない立場だった。

「そんなのでいいの？まあ、メガマスもすぐにそのくらいのことは掴むか。メガマスだってこっちに情報提供する気もないみたいだし、おあいこね。となると、そのダイチ君が知っているメタバグの出所について調査が必要だってことだけど、場所も何もわからないと。本人に聞こうにも連絡がつかないんじゃ、こっちも調べようがないわね。」

久美子は直樹の言動も別段気にしていなかった。メガマスにお伺いを立てるくらいなら、自分たちで独自に調査を進めた方がやりやすいと考えていた。

「ですね…とりあえず外回りにでも出かけてみましょうか？」

「こんな時に？何しにいくの？」

「聞き込みです。部屋にいて考えているだけでは、ただ行き詰まってしまうだけです。ここは外に出て、子ども達にメタバグの出所を

知っているか聞いて回りましょう。同時に中津交差点の付近では、事故の再調査の聞き込みも行います。少ない時間を有効に使うっていうのはどうですか？」

直樹の提案に久美子はどうしようか悩むが、確かにここにいるだけでは何も始まらないかもしれないと思った。直樹も久美子も、基本的に足で捜査するタイプの警察官であり、事件が起きている大黒市という現場に足を踏み入れてみることが捜査の第一歩だと思った。

「オッケー。そうしましょう。すぐに準備するわ。」

そうして2人は後のことは残りの捜査員に任せ聞き込みに出かける。そこで2人は、ハッキング事件の真相におおいに近づく重要な情報を掴むことになる。

#10　結成、コイルレジスタンス　part3

この日の黒客は廃ビルではなく、鹿屋野神社に集まっていた。廃ビルにたまっていたメタバグのほとんどは満天堂に卸してあり、しばらくは何もしなくても、売上金の半分をもらうという約束により大金が入ってくることになっていた。そしてたまにはほの暗い廃ビルではなく、青空の下でのんびりしようという気になったのだ。

「いやあ、苦労した甲斐があったってもんだ。まさかここまで戦争が広がってくれるとは。」

拝殿近くのベンチに腰掛け、大きくのびをしながらガチャギリが言う。黒客は不動中央公園での戦闘をウラで操作した後も、大黒市の、とくに電脳クラブの活動が盛んなエリアで同様の作戦を繰り返した。そうして大黒市内全域を巻き込む戦争状態を作り上げたのである。

「本当だぜ。こんな簡単にみんな戦ってくれるなんて。なあシンヤ。オレたちが1番始めに介入したCレックスの戦いがあっただろ？あれって、あの後どう展開していったんだ？」

ダイチがふとシンヤに訪ねる。ここ最近ずっと行動を共にしているので、シンヤも黒客の一員のようになってきた。

「えーと、確かあの戦いの噂を聞きつけて、ウイングスと同じ宝生小学校のガンズというクラブがCレックスと同盟を申し入れたみたいです。あそこの電脳クラブの対立構図を整理してみますと、まず不動小学校ではCレックス対GTCクラブ、宝生小学校ではウイングス対ガンズ、といった感じだったみたいですね。あの戦いではGTCクラブとウイングスが結びついていました。」

シンヤがウインドウのメモを取り出して説明する。情報屋たるもの、そのあたりの情報はしっかりと整理していた。

「じゃあ、Cレックスがガンズを頼ったのは必然のことだったのか。簡単に言えば敵の敵は味方だからな。近いうちGTCとウイングスがリベンジに来るのは明らかだったし。」

ダイチがあの時のことを思いだしながら言う。
「ところがそうじゃありません。逆です。ガンズがＣレックスに対して同盟を申し入れたそうです。」
「え？あんなＣレックスみたいな弱小かばったところで、そのガンズになんの得があるんだ？」
シンヤの言葉に、ダイチが不思議そうに訪ねる。
「オレたちが掲示板で流した噂が効いたんだよ。ガンズは、Ｃレックスがメタバグの鉱脈を握っていると本気で信じていたようだ。げんにそれでＧＴＣとウイングスはＣレックスを攻めたんだからな。そしてガンズはその戦いでＧＴＣとウイングスが蹴散らされたことを知った。用心したガンズは、Ｃレックスに内から取り入ったんだ。」
ガチャギリがシンヤに変わって説明した。
「つまり、Ｃレックスと仲良くしておいて、それとなくメタバグの情報を聞き出そうとしたってか？」
「その通り。」
ダイチの言葉に、ガチャギリが笑顔で返した。
「で、翌日。Ｃレックス＋ガンズ対ＧＴＣ＋ウイングスのグループ戦が行われました。ガンズはこの中で一番力のあるクラブで、弱小のＣレックスと組みながら辛くもその戦いに勝利したのです。」
「おお～っ。あのＣレックスと組みながら勝つとは。」
シンヤの説明に、ダイチが感心したようにつぶやく。Ｃレックスと組んだとしても、それは足手まといになるだけで戦力的にはマイナスと思っていたのだ。
「ＧＴＣとウイングスは再びリベンジを誓って逃げて行きました。ところがかろうじて勝利したＣレックスでしたが、メタバグの鉱脈など知らないとガンズに言ったようで、それに怒ったガンズはＣレックスをボロボロにするまで痛めつけて裏切ったようです。当たり前ですよね。自分たちはこの戦いに勝利したら大量のメタバグを手にすることができると信じていたのですから。つまりこの時点で、

この2つのクラブは争うことに意味はないと感じていたのです。勝利しても得るものなどありませんので。」

「ほお。」

しかし実際は戦争が広がる一方である。彼らは何を求めて戦っているのか。

「またすぐに、今度はガンズとGTC＋ウイングスが戦っています。その戦いには意味などありません。それはもうプライドを賭けた戦いにすりかわっていたのです。彼らは抱えていても1円にもならないプライドを賭けて、金銭が尽きるまで果てしない戦いを続けていきます。」

すべてはシンヤの思惑通りだった。火種を作ることで、憎しみいがみ合う心がその戦いを連鎖的に広げていく。戦う理由があるのはほんの最初だけ。始めから誰がこの戦争で利益を得るのかは決まっているのだ。

「プライドか。オレたちがもしその戦いの中に巻き込まれていたとしても、それはそれで楽しかったかもしれないな。」

ダイチがぽつりともらす。今まで戦いの中に喜びを感じてきたダイチにとって、今の状況は退屈でしかなかった。始めから勝者の決まっている出来レースをウラで操作していたことが、一番の後悔になっている自分に気づいた。

「そんな、仲間同士で傷つけ合い最後はその虚しさしか残らないのに、よくそんなことに金を使いたいと思いますね？」

シンヤが驚きと少々の侮蔑をもってダイチを見る。金しか信じていないシンヤにとって、こういった戦争を繰り広げて金を落とす人間は愚の骨頂のように思えた。

「シンヤ。これ以上言うな。オレもダイチの気持ちはわかるし、ダイチのそういうところが気に入ってるんだ。計算し尽くされた上でリスクを最小限に抑えた金儲けも素敵だが、何が起こるか予測できない、男の勝負に身を投じるのもいいもんだぜ。しかしダイチ。今はお前の好きな勝負をする時じゃない。果たし合いの結果が不満だ

ったのもわかるが、ここは我慢してくれ。」
ガチャギリがそこに割って入る。ガチャギリはどちらの言い分も理解できた。しかし今は金儲けのため、しばらくこの退屈な時間を過ごさなければならないと考えていた。
「わかってるって。まあ、武器を大量に備えるオレたちに勝てるクラブなんかないだろうがな。」
ダイチがガチャギリに言う。廃ビルのメタバグはほとんど満天堂に卸してはいるが、護身用としての自分たちの武器は、タダで満天堂からもらっていた。その量も、その辺のクラブが装備しているのとは比べようがならないほど充実している。
「ところが、そうも言ってもいられねえかもな。」
そこにガチャギリが水を差す。ダイチは「どういうことだ?」と訪ね返した。
「忘れてねえか?お前は狙われてるんだぞ。キラバグを握っている大黒黒客のリーダーとしてな。」
ダイチはすっかり忘れていた。随分前のような気もするが、ダイチは謎のハッカーにメガネを狙われたのだ。それは少し前に掲示板で、大黒黒客はキラバグを握っていると書かれたことと無関係ではないだろうとダイチ達は考えていた。大黒市では今もその噂を信じている者がいる。そして今大黒市には武器が溢れている。自分たちがまいた種とはいえ、その武器で実力行使にくるクラブがないとも言えなかった。
「その後、例のハッカーに関する情報もないし。お前の知り合いの警察官とは連絡とってるのか?」
ガチャギリがダイチに直樹のことについて訪ねた。ダイチがハッキングにあった事件を担当しているのが直樹だ。
「いや、それがな。あの人に果たし合いの前にメタバグを渡しただろ。その時約束したじゃねえか。メタバグを悪徳商法に利用しないって。でもオレたちはこんなことに手を染めて、あの人との約束を破っちまったわけだ。多分直樹さんも満天堂のことは感づいている

んだろう。最近はオレのメガネにあの人からしょちゅう電話がかかってくるんだよ。でも、出るに出られないから着信拒否してるんだよ。」

ダイチは直樹との約束を守れなかったことを心苦しく思っていた。しかしダイチ達にはまとまった金を手に入れないといけないワケがあった。果たし合いの時、ハラケンもうすうす気がついていた部分、ダイチが本意でないながらも金儲けをしなければならない明確な理由があるのだ。

「そうか。そりゃ正解だ。警察にバレると、オレたちだけじゃなくシンヤやシンヤの兄貴にまで迷惑がかかるからな。それでさっきの話だが、オレたちは未だにそのハッカーの正体を掴めていない。加えてまだオレたちがキラバグを持っていると信じているクラブも存在する。オレたちはこんなところで安心してのんびりできる立場じゃない。」

ガチャギリが今の黒客を取り巻く状況を整理する。

「こっちから直樹さんとの連絡を断ったのはいかんともしがたいな。ハッカーの情報はあの人からぐらいしか入る見込みはないぞ。」

「まあ、この際ハッカーのことは置いておこう。仮にもう一度お前のメガネに侵入しようものなら、あの警官にもらった逆探知ソフトで正体を突き止められる。問題はオレたちがキラバグを握っていると信じているクラブが実力行使に来るかもしれないってことだ。相手の人数によってはオレたちでも危なくなるかもしれん。」

ダイチは直樹のことがどうも気になるようだが、ガチャギリは最初からアテにしていなかった。もとよりダイチがハッキングに遭ってから１０日以上経過しており、そのハッカーが未だにダイチを狙っているかどうかも疑わしかった。ガチャギリはそれよりも他の電脳クラブの動きが気になっていた。必ずまだキラバグを狙っているクラブがあるはずだと。

「そうだな。オレにとってはフミエの動きも気になるところだが、どうも最近姿を見ないな。おい、アキラ。フミエの様子はどんな感

じなんだ?」
ダイチがアキラに訪ねた時、アキラは一瞬ビクッとした。アキラは素知らぬふりで今日も黒客の会議に参加しているが、フミエに黒客の内情をリークしている。大黒市内の戦争をウラで操作して金を稼いでいる黒客の活動にアキラは嫌気がさしていたのだ。その黒客を止められるのは、姉であるフミエとコイル探偵局のヤサコとハラケンしかいないと思ったのだ。
「え?ええ。この間高熱を出してからというもの、おとなしいものですよ。」
アキラがダイチに伝える。しかしフミエはもう今朝から動き始めていた。
「そうか。あの廃工場で何があったのか知らないが、それなら安心だな。」
ダイチもそれを聞いてほっと胸をなでおろす。ダイチが一番恐れるもの、それはフミエの執念だった。
「心配し過ぎだろ。今のアイツらに何ができるんだ。アイツらから武器の買い注文が来ても絶対売らねえことにしてるから、アイツらは武器を持つこともできねえ。それに実際注文が来てないところを見ると、おとなしくしてるんだろ。」
ガチャギリはコイル探偵局の動きすら気にしていなかった。それをアキラはドキドキしながら聞いていた。
「さっきの話に戻りますが、僕たちが攻撃されて、廃ビルの鉱脈も押さえられることは1番避けなければなりません。だから今日はこうやっていつもとは違う場所に集まっているわけです。僕たちがあの廃ビルに入り浸っていることが誰かに知られたら、それこそメタバグの鉱脈の在処がバレてしまうことになりますからね。」
シンヤが話を元に戻す。今日集まる場所を代えようと提案したのはシンヤだった。あの廃ビルは人目につかないが、それでも毎日のように通っていると誰かに感づかれる危険もあった。
「なるほど。それで今日はここに集まろうって話だったんだな。そ

りゃ今後に向けてもあの廃ビルは死守しないといけない。で、オレたちを狙うクラブをどうやって撃退するかっていうことだろ？」
ダイチがガチャギリとシンヤに訪ねる。今はそういったクラブに多数で攻められることが、１番考えられる危機だった。
「ああ。せめてもう１グループ分ぐらいの手駒がほしい。それももちろん、オレたちと同レベルの電脳力を持ったヤツをな。そこで考えたんだが、今起こっている電脳戦争の中で、一番勝ち続けているクラブを味方に取り込もうと思うんだが。」
ガチャギリが提案する。要は自分達の盾となる存在が欲しかったのである。
「取り込むってどうやって？オレたちの素性を明かすのか？」
「まあ、鉱脈が廃ビルにあるとまでは明かさないまでも、オレたちが満天堂の経営に関わっていることくらいは話して、そいつらにもキャッシュを握らせる。」
ガチャギリがダイチの疑問に答える。金で買収して自分達のＳＰに仕立て上げるつもりだった。
「そうすれば裏切られる心配もないわけか。まあ、保険という意味でならいいだろ。で、問題はどこのクラブを引き入れるかってことだろ？」
ダイチも納得する。そういう存在はいてくれるに越したことはないと思った。
「それはシンヤの情報網を使う。とりあえず強くて信頼できるヤツが必要だな。」
「一応リストを作ってあるので、どうぞ見てください。」
シンヤがウインドウをダイチ達に示す。そうして黒客はさらなる力を得ようとしていた。

#10　結成、コイルレジスタンス　part4

時刻は正午をまわっていた。はるばる大黒市の中心部からバスで不動までやって来たヤサコ達一行は、不動小学校近くの神社でCレックスと落ち合う。もちろん互いに顔を合わせるのは初めてだが、どうもCレックスのメンバーは誰もうつむき加減で、陰のオーラがまざまざと出ていた。

「えーっと、私は橋本文恵。一応コイル探偵局のリーダーを務めているわ。そしてこの子が小此木優子、通称ヤサコ。で、こっちのでかいのが原川研一、通称ハラケンよ。」

フミエがCレックスのメンバーに一通り紹介する。ヤサコとハラケンも「よろしく」と声をかけたが、Cレックスは一応という感じにただ頭を軽く下げただけだった。

「…。で、アンタ達の自己紹介はないの？」

フミエは昔のハラケン以上に無愛想な態度に絶句したが、とにかく会話を盛り上げようと訪ねてみた。

「ああ、僕がリーダーの倉本。あとのメンバーは、まあおいおい紹介するよ。」

神社の石段の一番最前列に座っていた、ぼさぼさ頭の少年が言う。もう他のメンバーはヤサコ達を見向きもせずに、それぞれメガネをいじり始めている。連絡が来たのでとりあえず会うだけ会うが、別にコイル探偵局の話には興味はないというぐらいの雰囲気である。これで会話がはずむはずもない。それを感じたフミエはとっとと本題に入ろうと考えた。

「聞いた話なんだけど、アンタ達、大黒屋と取引をしたっていうのは本当？」

「ああ、その話か。したけど、大黒屋は向こうが招待した相手としか取引しないよ。僕たちに大黒屋を紹介してくれっていうのはムリな話だよ。」

フミエの質問にリーダーの倉本がうんざりした様子で答える。おそらく同様の質問を他のクラブからも受けたんだろう。
「違うのよ。私たちはその大黒屋を運営しているヤツらを知ってるの。でね、アンタ達はそいつらに思う存分利用されたんだっていう話をしに来たのよ。」
「ふーん、そうなんだ。」
フミエが事の真実を告げようとするも、倉本はまるで他人事のように返してきた。その態度にフミエは少々プチッときたが、ここは堪えた。何ともシケたこの連中をやる気にしなければならないと自分に言い聞かせた。
「悔しくないの？アンタ達はそいつらに仕返ししてやろうっていう気にはならないの？」
「…悔しいとか、悔しくないとかで、もう僕たちは生きていないよ。結局何をやってもダメだから。最初は僕たちだって電脳戦争でも負けると悔しいと思ってたけど、今更そんなこと言っていても仕方ないと感じたんだ。強いものには勝てない。世の中そういう風にできてるから、人生あきらめが肝心さ。夢なんか、最初からない方がいい。」
あまりにも子どもらしからぬマイナス思考に、フミエは今度こそ怒鳴りつけてやろうかと思った。常に壁に立ち向かうフミエにとってこのクラブのメンバーは腹立たしいものでしかなかった。もうこんなクラブなんかに同盟を持ちかけるのはやめようかとも思ったが、そこでハラケンが前に出て来た。
「じゃあ、君たちはどういう風に生きようとしているの？夢も何もないのなら、どうしてメガネなんか持っているの？」
「何言ってるんだよ。この現実社会に夢が持てないからメガネの幻が必要なんじゃないか。」
ハラケンの言葉に、倉本はムッとしたように返した。他のメンバーも今の言葉に、自分のメガネを操作する手を止めた。
「僕はそうは思わないな。メガネの見せるものって、ただの幻じゃ

ないと思う。それはまさに、子どもだからこそ見える夢なんじゃないかな。だから、みんなが夢中になってスキルを磨くんだと思う。メガネは現実逃避のための道具じゃない。」

ハラケンはゆっくりと自分の考えを言った。果たし合いの時の、何にもかえがたい充実感を思い出しながら。

「それは人それぞれ感じ方が違うだろ。自分の考えを他人に押し付けてくるなよ。」

「ごめん。でも君たちはメガネで何を感じたいと思っているの？ＲＰＧをクリアした時のような達成感？ホラーゲームをクリアした時のような解放感？」

ハラケンは強く迫った。彼らのあきらめが真実なら、彼らはなんのためにメガネをかけているのか。

「まあ、そんなところだ。それだけで十分満足できるんだからいいだろ。」

「それは夢じゃないの？自分達が行き着きたい場所が夢じゃなくて何なの？」

ハラケンがさらに訪ねる。

「違う。そういう事じゃないだろ。お前の言っている夢は、誰かを蹴落としてたどり着くものじゃないのか？僕たちはそんなものを夢とは呼ばない。」

倉本は語気を強めて否定した。

「じゃあゲームは仲間同士で共にクリアしたい？争うことはイヤだっていうんだね？」

「ああそうだ。仲間同士協力してゲームをクリアする。これに勝る喜びはない。人を傷つけても何も始まらない。」

「でも、君たちのささやかな楽しみは奪われた。君たちだって、純粋にゲームを楽しみたいから武器を買ったんだろう？」

「……。」

倉本は言葉が出なかった。確かに、始めはＣレックスもゲームをさらに楽しむために満天堂から武器を仕入れた。しかし自分達がメタ

バグを握っているという噂が立ってから、怖くなって護身用に大黒屋から武器を大量に買い付けたのだ。
「もうメガネで君の言う“幻”すら見られなくなったんじゃない？それなのにまだメガネを持っているってことは、まだ未練があるってことだろ？」
「…まあ。メガネゲームはメタバグがなくてもできる。でもそれじゃあ何か物足りない。大黒市で電脳クラブをやっている以上、メタバグがないとどうもひからびた毎日になってしまう。」
今までハラケンの言うことに反論し続けた倉本も、初めて正直な気持ちを吐露した。
「でも人を傷つけても何も始まらないというのはわかる。周りが争っていても、自分達が他人を傷つけるようなスキルは必要ないっていうことなんだろ？いくら戦いに負けてもそれは貫いていたんだね。」
「今となっては言い訳になるけど。自分達が弱いことに対しての。」
倉本は自虐的に笑ったが、ハラケンはそんなこと全く思わなかった。
「いや、そう思えた人っていうのは強いはずだよ。他人を傷つけるためにメガネはあるわけじゃない。人と人とを繋ぐためにあるんだ。安心して。僕たちもこの争いだらけの大黒市にうんざりしているんだ。ここは手を取り合って、この街を元に戻す。それを新しい夢にしたらどうかな？」
「…新しい夢か。」
ハラケンの言葉に、倉本や他のメンバー達も希望が見えたような気がした。自分達は強いなんて人から初めて言われたのだ。
「この街をおかしくしているのはたった1つの電脳クラブ。それを止めるためのネットワークを、私たちはこれからどんどん広げようと思ってるの。その記念すべき1つ目のクラブとして協力してくれないかな？」
そこでフミエも願い出た。ハラケンの説得で心を入れ替えたCレックスに、フミエの彼らに対するイメージも変わった。

「そのクラブを止めるって、それは傷つけることにはならないの？」
倉本がフミエに訪ねる。ただの傷つけ合いなら、それはその辺で起きている戦争ともなんら変わりない。
「傷つけるっちゅうか、認めさせる。自分達の過ちを、愚かさを。」
フミエは黒客を倒したいと思っていたが、それは傷つけるためではない。それは本人達のため、この街のためだと認識していた。
「わかった。僕たちは君たちに協力する。一緒にこの街を、元の平和な街に戻そう。」
「ええ。ようこそ。コイルレジスタンスへ。」
フミエと倉本はリーダー同士、がっちりと握手した。うまくいってよかったと、ヤサコは小さく手を叩きながらそれを見守っていた。
「で、アンタ達の自己紹介はないの？」
フミエが改めて他のメンバーを見ながら言った。
「うん。まあ、コイツらはおいおい。」
「せーへんのんかい！」
フミエがツッコミを入れながらずっこけた。今のは流れ的に、同盟のしるしに互いの顔と名前を覚えるところだろうと思ったのだ。
「コイツらみんな人見知りが激しいから。で、話を詳しく聞かせてよ。」
倉本が真剣な目つきになって言う。他のメンバーも自己紹介こそしないが、話を聞く体勢に入っていた。
「今大黒市をウラで動かしているのは大黒市黒客クラブ。私たちと同じ、旧大黒三小の生徒で構成されている。名前ぐらいは聞いたことがあるんじゃない？」
「黒客クラブか。確かに聞いたことはある。大黒市の中でもトップクラスの実力を持っているって。」
大黒市の辺境にあたる不動のクラブにも、黒客の評判は知れ渡っていた。
「あれがトップクラス…とは思わないけど。まあ私たちはそいつらとは勝手知ったる仲だから、弱点も何でも手に取るようにわかって

るわ。私の弟も黒客に所属していて、今回の情報も弟から聞いたの。」

フミエは黒客の評価がそんなに高いことがシャクだったが、Cレックスには自分達と一緒なら必ず勝てるというふうに思わせなければならなかった。

「なるほど。情報の信憑性は高いってことだね。それで、その人達が僕たちを利用するだけ利用したっていう話だったけど。」

「ええ。アンタ達がメタバグの鉱脈を握っているとの噂を流して、他のクラブをその気にさせる。危機感をあおられたアンタ達には大黒屋として武器を格安で売り、戦争を起こすように仕向けたの。戦争が起きれば、武器の需要は高くなる。メタバグの鉱脈を握っているのは黒客張本人。すべては自分たちの利益のために仕組んだことなのよ。」

フミエの説明に、Cレックスのメンバーは「そうだったのか」と納得したようにうなずいた。なぜ自分たちがメタバグを握っているという噂が立ったのか、そして申し合わせたように大黒屋から招待メールが来たのか。その謎が解けたのだ。

「じゃあ、あの戦いの時、勝手に僕たちのミサイルが発射されたり、防御壁が現れたりしたのも、その人達が絡んでいたんだね。」

メンバーの1人が倉本に言う。あの時の黒客は彼らのメガネを遠隔操作していた。

「なるほど。黒客はそこまでしていたのね。アンタ達のセキュリティも何もしていない無防備なメガネをハッキングして、あたかもアンタ達が自分で戦っているように見せかける。その戦いも、黒客はアンタ達が勝つように仕向けたのね。」

アキラはその場にいなかったので、フミエは黒客がそこまでしているとは知らなかった。今のCレックスの会話を聞いて推理したのだ。

「面目ない。まさか自分たちのメガネが狙われるとも思わなかったから、セキュリティも手薄になってた。けど、どうやってその人達に対抗するの?その人達はメタバグの鉱脈を握っているんだろ。も

ともと実力があるのに、それで装備も充実しているんなら、太刀打ちできないと思うけど。」
倉本がフミエに訪ねる。結局のところで戦闘になれば、自分達がかなう相手ではないと思った。
「だからこうしてネットワークを広げようとしているの。あいにく私たちに黒客は武器を売ってくれない。どうしてだかわかる？黒客は私たちを恐れているのよ。」
フミエは先ほど満天堂に武器の注文メールを送ってみた。すると「ばーか」というメールが送り返されて来たのだ。
「つまり、黒客は君達を認めている。だから武器を持たせない？」
「そういうこと。でね。まずはアンタ達に満天堂から武器を買ってほしいの。それを私たちがアンタ達から買い取る。すると黒客にばれずに私たちも武器を持つことができる。もちろん後々必要になるから、アンタ達の持つ分も買ってもらうことになるけど。」
フミエはまず武器の確保を優先した。自分達が丸腰じゃ、とても今の黒客に立ち向かうことなんてできない。
「いいけど。僕ら大黒屋から大量に仕入れたおかげで金欠なんだ。自分達の分はあまり多くは買えないよ。」
「かまわないわ。あともう1つやってもらいたいことがある。アンタ達の知り合いの電脳クラブに、今の話をしてほしいの。戦争をしても黒客が得するだけ。だから無駄な戦いはやめて、力を蓄えておいてほしいって。このネットワークを広げていって機が熟した時に黒客を攻めて、メタバグの鉱脈から追い出す。鉱脈はトラブルの元になるから、サッチーにフォーマットさせる。惜しいけど、平和な街を作るためなら仕方ないわ。」
フミエが作戦の全容を語った。もっと多くの電脳クラブと連携しないと、打倒黒客は難しかった。
「なるほど。確かにこんな街になってしまうのなら、メタバグはいらないよな。わかった。知り合いにどんどんあたってみるよ。」
倉本が了解する。Cレックスも、メタバグがあるから街がおかしく

なるのだと思っていた。
「もちろん、これは黒客にバレてしまったら元も子もないわよ。だから掲示板で呼びかけるとか、そういうことをしたらダメ。黒客に目をつけられたくないなら、ウラで慎重に事を運ぶのよ。さて、改めまして私たちはコイルレジスタンス。これを旗印に今後も頑張っていきましょう。」
「レジスタンスだって。かっけえ、映画みたいだ。」
Cレックスのメンバーの1人が言った。
「おっけ。互いに頑張っていこう。」
倉本が了解し、同盟の約束は交わされた。ようやく話が成立したとホッとしているところで、ハラケンのメガネに電話がかかってきた。
「誰からだろ?もしもし?あっ、オバちゃん。」
電話は玉子からだった。ハラケンが玉子と最後に会ったのは、メガマスで実験をした日で、久しぶりに声を聞くような気がした。
「ケンちゃん?今どこにいるの?」
少し急いでいるような様子で玉子が訪ねる。
「どこって、不動。ヤサコやフミエも一緒。」
「不動?なんでそんなとこにいるの?まあいいわ。今から大黒警察に出て来れる?」
玉子は意外な答えに驚いた。大黒市の辺境に何の用があるんだと思った。
「大黒警察?うん、急ぎなら今から向かうけど。なんでそんなところに?」
ハラケンも意外な場所に呼び出されて驚いた。ハラケンは警察なんて行ったこともない。
「私の知り合いの刑事さんが、カンナの事故の再調査をしている時に、思わぬ情報を掴んだんですって。私も詳しくは聞いてないけど、なんならヤサコ達も連れて来ていいから、できるだけ早く来て。」
「うん。わかった。」
そうしてハラケンは電話を切る。そうして玉子の言っていた思わぬ

情報というのが気になった。
「オバちゃんなんて？」
フミエが訪ねる。
「うん。なんか、今すぐ大黒警察に来てほしいって。刑事さんがカンナの事故のことで思わぬ情報を掴んだらしいんだ。」
「思わぬ情報？何かしら？まあとにかく、ここでの用事は済んだし、行ってみましょうか。じゃあ同志達よ、よろしく。」
フミエが最後にもう1度Cレックスのメンバーに声をかけ、3人はすぐに大黒市の中心に戻ることにした。

#10　結成、コイルレジスタンス　part5

ヤサコ達が不動にいる頃、相変わらず古い空間が現れたとか消えたとかで対応に追われている空間管理室に、検事の桜井がやって来た。桜井はカンナの事故の再調査において、メガマスと警察の仲介役を果たしている。メガマスの訴訟の担当は一郎だったが、プロジェクトの責任者をはずされたり、戻って来た空間管理室の仕事に忙殺されたりで、なかなか訴訟のことを考えている余裕がなかった。メガマスもそれは同様で、このことは今は据え置きにされている状態だった。そこで桜井は今後の方針を確認するために、空間管理室まで出向いたのだ。一郎も忙しい合間を縫って桜井に会う時間を作り、2人は管理室のある大黒市役所の小さな応接室で向き合った。

「どうにも、前お会いした時から状況が一気に変わりましたね。」

桜井がタバコに火をつけながら言う。2人が会うのはメガマスで古い空間の実験をした日以来である。

「面目ありません。空間制御プログラムがハッキングされてしまうとは、あの時は夢にも思っていませんでした。あなたの前でも事故は起きないと断言していただけに、今は申し訳ない持ちでいっぱいです。」

一郎が肩を落としながら言う。

「私に謝られても仕方ありませんよ。むしろ、夏の事件に巻き込まれた子ども達や、あの気丈なお嬢さんにその言葉をかけてください。彼女にはこのことを言ったのですか?」

桜井の言う気丈なお嬢さんとは玉子のことである。実験の時、事故がないように何度も年を押していた玉子の姿は桜井の印象に強く残っていた。

「言えません。彼女は元空間管理室顧問ですが、今はもう一般人と同じです。今回の事はメガマスもトップレベルの情報統制をしているので、ハッキングのことを知っているのはごく一部の関係者です。

」

一郎の言うように、このことを知っているのはメガマスの幹部やプログラマー、空間管理室職員と、仲介役の桜井、そして警察でも電脳犯罪対策係とごく少数である。

「そうですか。何にしても、事故が起こる前に解決できるよう頑張ってください。で、本題ですが、この通りの状況ですのでそちらの方は訴訟に関する進展はないですよね？」

「そうですね。すみません、こちらが依頼したことなのに。警察の方の再調査はどんな感じなんですか？」

一郎が訪ねる。警察とは直接連絡を取れないので、再調査の状況を確かめるには桜井に聞くしかない。

「いや、それがですね。僕の知り合いの刑事さんに再調査のお願いをしました。それで後日話を聞いたんですが、とりあえず大黒警察の電脳犯罪対策係の刑事が聞き込みを中心に調査をしていくという方針になったそうです。」

「え？待ってください。電脳犯罪対策係といえば、先日僕たちが追っているハッカーを逮捕するため協力を要請した部署ですよね？となるとその部署の人たちは今、再調査とハッカーの絞り出しを行ってるということですか。ああ、それはちょっとまずいことをしてしまいましたね。今頃かなり忙しくしているんじゃないでしょうか。」

一郎の想像通り、対策係の直樹や久美子は同時にいくつもの懸案事項を抱えていた。

「でしょうね。私はここで2つの選択肢があると思います。1つはこのままハッカーの絞りだしと、事故の再調査を平行して続けてもらうか。そうすると両方がおろそかになる可能性もあると思います。そしてもう1つは、再調査をしばらく中断してもらい、ハッカーの絞り出しを優先してもらうか。」

桜井が提案する。まだメガマスの訴訟担当者としての決定権がある一郎が、そのどちらかを選択しなければならなかった。

「そうですか。難しいところですね…訴訟の方も、あまり時間をか

けていられないですよね？」
一郎が考え込みながら桜井に訪ねた。
「ええ。すでに訴訟のことは旧幹部やそれと親しい政治家達も握っています。だからこそ、メガマスがダイレクトに警察に干渉できないという不自由が起こっているわけですが、あまり手をこまねいていると、さらなる妨害が仕掛けられる可能性もあります。彼らは一刻も早いメガマス幹部への返り咲きを狙っているので、こちらも迅速に動く必要があります。」
警察側の再調査の責任者である野村も、この１ヶ月でけりをつけるつもりだった。逆に長い期間に及ぶと、その動きが感知されてしまう危険もあった。
「わかりました。対策係の方には申し訳ないですが、同時進行でやってもらいましょう。僕たちに警察権はないので、どのみちハッカーを逮捕するためには彼らの力が必要になってきます。とにかく僕たちができるだけ早くハッカーを特定します。」
一郎は決断した。同時にメガマス内では滞っていた訴訟に関する活動も再開しなければならないと感じた。警察に押し付けているだけではいけないと。
「そうですか。わかりました。方針としてはその方向で行くとしましょう。しかしハッカーに関する情報はどのくらい掴んでいるんですかね？差し支えのない範囲で話してもらえるとありがたいのですが。」
「そうですね。おそらく耳にされたかと思いますが、メガマス内に共犯者がいます。そうでなければ我が社のセキュリティを突破してハッキングすることなんて不可能です。それから犯人のバックには企業か、もしくは研究所がついているはずです。あの膨大なプログラムを蓄積するスーパーコンピューターは、個人単位で所持することはできないので。」
一郎が説明し、桜井は几帳面にメモを取った。検事として協力できることはないかと思ったのだ。

「組織ぐるみってことですか？となるとハッキングしていったのも、ビジネス的な理由なんでしょうか？」

「どうでしょう。一応本社は疑いのある企業や組織をリストアップしているようです。お見せすることはできませんが。」

他のコンピューター企業には、メガマスの息のかかった社員が潜り込んでいる。そこから上がってくる情報を元に、本社はその組織の特定を急いでいた。するとそこで桜井の携帯電話が鳴り響いた。桜井は普段メガネをしていないので、携帯を持ち歩いている。

「ちょっと失礼します。もしもし？ああ野村さん。どうかしましたか？…ええ。…はい。…ほう。…．ええっ！？本当ですかそれは！？…はい！ああ、今ちょうどメガマスの方と一緒にいるんですよ！…はい。わかりました。ありがとうございます。では失礼します。」

一郎には相手の声は聞こえなかったが、桜井が興奮しながら電話を切ったので、何かいいニュースなのかなと思い、「どうしたんですか？」と訪ねてみた。

「えらいことです！ハッカーの特定は必要なくなったかもしれませんよ！」

#10　結成、コイルレジスタンス　part6

大黒警察署に到着したヤサコ達一行。入り口では玉子が待っていた。そうして受付に案内されて警察署内に入り、電脳犯罪対策係長室に通された。

「ああ、どうもどうも。お久しぶりです。お会いするのはダイチ君の一件以来ですね。」

入って来た一行に歩み寄り、直樹が挨拶した。この中でハラケン以外は、ダイチがハッキングにあった時に直樹とも会ったことがある。

「お久しぶりです。お待たせしまして申し訳ありません。ところで、こちらの方は？」

玉子が直樹の隣に立っていた久美子を見て訪ねる。

「彼女は今この部署に研修として配属されている川畑久美子さんです。」

「川畑です。よろしくお願いします。」

直樹に紹介され、久美子は丁寧に頭を下げた。玉子やヤサコ達も丁寧に頭を下げる。美人キャリアウーマン風の雰囲気に、ヤサコやフミエは憧れにも似た好感を持った。

「彼は、この子達のお友達ですか？」

直樹が初対面のハラケンの方を見て訪ねる。

「そうですね。私の甥にもあたります。この子は交通事故で亡くなったカンナさんとは幼なじみだったんです。」

「ああ、そうですか。じゃあ君が今回の訴訟を決意したという研一君ですか。僕らはカンナさんの事故の再調査を担当しているので、君のことはメガマスからも聞いていますよ。では、本題の方に入りたいと思いますので、どうぞおかけください。」

直樹はひとつ手を叩き、玉子とヤサコ達を来客用のソファーに座るように促す。そうして直樹と久美子も向かい合うように席についた。

「それで、思わぬ情報というのは何だったのでしょうか？」

早速玉子が訪ねる。
「ええ。落ち着いて聞いてくださいね。僕らは先ほど、中津交差点の付近で、聞き込み調査をしていたんです。事故を正確に記憶している目撃者を探すために。」
直樹が話を始める。直樹と久美子は、現在横行している違法ツールの原料となるメタバグの出所を調べると同時に、事故の再調査を行うため先刻まで中津交差点にいた…

大型のトラックが重低音を轟かせながら通りすぎる。その信号機の下には少ししおれかけた花束が横たわっていた。誰もかれもが見向きもしないそれは、でも確かにここで1人の少女の命が失われたことを示している。事故の再調査をするにあたって、直樹と久美子はまずその花に向かって静かに黙祷を捧げていた。
「じゃあ、始めましょうか。さしあたって事故現場の付近でお店を経営している人に聞いてみましょう。」
「わかりました。」
久美子の言葉に直樹がうなずく。交通事故捜査は久美子の方が長けている。確実に事故の時に現場の近くにいる人から聞き込みを始めるというのは定石であったので、まずは付近のコンビニや本屋の店員に話を聞くことにした。しかし事故はもう1年半も前のことであり、はっきりと一部始終を目撃した人でなければ、その記憶も鮮明には残っていない。出てくるのは、メガネをかけた少女がふらふらと赤信号の交差点に出ていき、乗用車にはねられたというものばかりだった。難しいのはその目撃者もメガネをかけていなければ、電脳コイル現象を見ることもできないことで、メガネをかけていない人が見たらただの少女の不注意にしか見えない点である。また中津交差点はもともと電波状態の芳しくない地区であり、メガネをかけている人があまり通りかけないという側面もあった。これだけの悪条件が重なると書き換えられた捜査資料を覆すほどの目撃証言が得られるかどうかは微妙で、だからこそ旧幹部達は隠蔽が成功する可

能性が高いと踏んだのだ。直樹や久美子も探しているうちにそのことを痛感してきた。限られた時間の中で、果たして真実を立証できるのか不安にもなっていた。そんな中直樹は事故現場近くの自転車屋に話を聞きに入った。

「すみません。警察の者なんですけど、この近くで起こった交通事故について少し話を聞かせてもらえますかね?」

直樹は作業服を着た店員に訪ねた。

「事故って、一昨年の夏に起こった?すみません、その時も警察の方に聞かれたんですが、私はその時、店の中で自転車の修理をしていて、事故が起こったのを知ったのは周りの人たちが騒がしいので様子を見に行った時なので、その事故の瞬間はまったく見ていないんですよ。しかしどうして今頃あの事故のことを?」

「いえ、大した理由じゃありませんが、少し気になったことがありまして。しかし見ていらっしゃらないのなら仕方ありませんね。お忙しい中お邪魔してすみません。」

直樹は自転車屋の男性に頭を下げ、メモ帳をスーツの胸ポケットにしまおうとした。するとその時、その胸ポケットから一枚の写真が落ちた。

「これ、落ちましたよ。」

「あっ、どうもすみません。」

自転車屋の男性がその写真を拾って直樹に手渡す。

「この男性は?」

「え?ああ、その交通事故に関わっていると思われる人物です。この人物も今探しているところなんですけど。」

その写真に写っていたのは猫目宗助だった。現在失踪中である猫目の情報もないものかと、直樹は写真を持ち歩いていたのだ。

「そうなんですか。あの、もう少し見てもいいですか?最近どこかで見たような気がする顔なもので。」

自転車屋の男性は写真をまじまじと見ながら考え込んだ。

「最近ですか?この人物は現在失踪中なので、この大黒市にいるは

ずがないのですが。」
直樹もその男性の言葉を半信半疑で聞いていた。
「ああ、思い出しました。この人、数日前まで頻繁にこの近辺をうろついていましたよ。スポーツカーに乗り付けて、他にもう1人若い男性を連れて。」
「え!?もしかして、そのスポーツカーというのはこんな車じゃなかったですか!?」
直樹も急展開に焦りながら、猫目の乗っていた赤いスポーツカーの写真も男性に見せた。
「ああ。色は黒でしたけど、確かにこんなデザインの車だったような気がします。」
「ほ、ほんとうですか!?となると車は塗装をし直したのか。すいません、その人物を見かけるようになったのはいつですか?その人物はこの辺で何をしていましたか?あ、そうだ!ちょっと待ってくださいね。川畑さーん、川畑さーん。ちょっと来てください!」
直樹は興奮して何から始めればいいかわからなくなった。まずは他の店を聞き込みに回っていた久美子をその自転車屋に呼びつけた。
「なに?有力な情報でも聞き出せたの?」
久美子が直樹のもとにやって来て訪ねた。
「かなり有力な情報です!実はこの自転車屋の主人が、失踪中の猫目を最近見かけたらしいんですよ!」
「猫目って、メガマスの失墜を目論んでいた?確かあの交通事故にも関わっていたんじゃなかった?」
「そうです。天沢勇子を利用してキラバグを集めさせ、あっちへの通路を開こうとした。しかし通路の位置を制御できなかったがため交差点に開いてしまい、カンナさんの身に電脳コイル現象が起こってしまったんです。その一部始終を知っている猫目の証言はかなり意味を持ってきます。もうひとりの当事者である天沢勇子はまだ小学生で、証言能力はまだ十分でないことに加えて、彼女にとっても忌まわしい記憶である交通事故について思い出させるのは彼女のメ

ンタルケアも考えるとできませんでした。しかし猫目を逮捕することができれば、この再調査もかなり前進すると言ってもいいでしょう。」

直樹が説明する。交通事故の再調査は、まず猫目の逮捕から始めるということに方針を変えようと直樹は思った。

「オッケー。わかったわ。じゃあ詳しく話を聞きましょう。」

久美子が返し、再び自転車屋の男性に話を聞くことにした。

「お待たせしました。ではまずはその男性はいつからこの場所に現れるようになりましたか?」

直樹が気持ちを落ち着かせるために、1つ静かに息をついて男性に訪ねた。

「いつでしたかねえ…確か10日前ぐらいに始めて見かけましたかねえ。最後に見たのは3日ほど前ですかね。」

男性が記憶を辿りながら言う。

「では、その男性は何をしていましたか?」

「そうですね。車をその辺に停めて、何かを探すようにふらふらと。基本的にもう一人の男と一緒でしたね。あ、そうそう。この辺からあちらの方を見上げたりもしていました。」

男性が指差した方向には、自転車屋から道路、向かいにあるマンションを隔て朽ち果てたビルが確認できた。

「なるほど。ではもう一人の男の特徴も、覚えている限りでいいのでお願いできますか…」

猫目宗助は今大黒市にいる。直樹達からの情報に一番驚いたのは玉子だった。もちろん、ヤサコやハラケンもその情報に困惑した。

「彼を目撃した人は他にいたんですか!?」

「ええ。その後も猫目宗助の写真を持って近辺に聞き込みをしました。その中で最近見たことがあるという人は半数以上にのぼります。彼がこの街にいたのはほぼ間違いないと思われます。3日ほど前から見かけなくなったというのも気になりますが。」

興奮気味に訪ねた玉子に、直樹が答える。目撃者の間でも、１０日ほど前から見かけるようになり、３日ほど前から見かけなくなった、という情報まで共通していた。

「しかし、猫目はなぜ大黒市に…自分が追われている身であることはわかっているはず。」

玉子が独り言のようにつぶやき考え込む。

「気になるのはそこです。彼に関して警察には一応捜索願いが出されていますが、その実体は指名手配に近いものでした。特に彼のターゲットとなったメガマスは、是が非でも彼の身柄を押さえようとしています。もう１度メガマスを陥れるようなことを考えているかもしれないので。」

直樹が言う。猫目の捜索を行っていたのは大黒警察の刑事課である。

「そんな彼がメガマスの膝元にあたる大黒市に戻ってきたのは、何か目的があるからだと思います。そう、それはメガマスが恐れる復讐を果たすためではないでしょうか。」

久美子が考えを述べた。何か強い意志が働かなければ、わざわざ危険を冒して大黒市にはやって来ないはず。その強い意志とは、メガマスへの復讐だというのだ。

「確かに。彼はもう、かなり前からそのことしか考えていません。そのメガマスへの憎しみが今も燃えたぎっているなら、彼は必ず復讐を果たそうとしているはずです。そして、今大黒市内で氾濫している違法ツール。それを作るにはメタバグが必要です。もしかしたらメタバグが突然現れたことと、彼がこの街に来たことは何か関係があるかもしれません。何か知っていることはないんですか？」

大黒市で起こっている異常。その原因は猫目にあるんじゃないかと考えた玉子が直樹に訪ねる。その時、ヤサコ、ハラケン、フミエはお互い顔を見合わせた。自分たちはそのメタバグの出所を知っている。そしてその場所は先ほどの直樹の話で、猫目が注目していたという廃墟は大黒ビジネスホテルである。それらが１本の線でつながった。突然出現したメタバグの鉱脈、そして果たし合いの時に起こ

った異常現象。それらはすべて、猫目が絡んでいるのだと。
「…心当たりはあります。なぜメタバグが現れたのか。しかし、我々には守秘義務があります。呼び出しておいてこのように言うのも申し訳ないのですが、我々はあなた達にそれを伝えることができません。」
直樹が神妙な顔つきで答えた。メガマスが開発した空間制御プログラム。それがハッキングに遭ったことはトップシークレットとなっている。
「そんな…では、刑事さん達は何か知っているんですね？それは私たちには言えないと。」
玉子がため息をつくように言う。部屋には重苦しい空気が流れた。
「…刑事さん。…僕たち、そのメタバグの出所を知っています。」
そこでいきなりハラケンが発言した。大人達が話をしている間、ヤサコ達3人はこのことを正直に話すべきかどうか目配せしながら考えていた。あの廃ビルのことを知られたくないフミエはハラケンが発言した瞬間、「あちゃー」という声が出た。
「ほ、ほんとうに!?知っているんなら早速案内してもらってもいいかな？」
いきなりのことに直樹も驚きながら返した。
「何で今まで黙ってたのよ!?ケンちゃんには前にも1回、メタバグの出所について心当たりがないか聞いたわよね？」
玉子が怒ったように訪ねた。あの夏の事件以来に、玉子はハラケンにウソをつかれたのだ。
「ごめん、オバちゃん。僕たち、ダイチ達と約束してて。誰にもその場所は言わないって。」
ハラケンが申し訳なさそうに言う。まさかこれほどの大事になるとはその時には思いもよらなかった。
「またあのダイチが絡んでいるのね。で、その場所はどこなの？」
「それは、ウっ。」
玉子に言われ、その場所を告げようとしたハラケンだったが、突然

隣に座っていたフミエに手で口をふさがれた。
「その場所を言うかわりに条件があります。刑事さん達が私たちに言えないっていう心当たりについて教えてください。」
ハラケンの口をふさぎながらフミエが直樹達に言う。フミエはフェアな情報交換を望んだ。直樹達が言えないことを、玉子が最も知りたがっていることだと察したのだ。
「いや、しかしだね。これは遊びじゃないんだよ。そうやすやすとこちらの秘密事項を言えるわけないじゃない。」
直樹も困ったようにフミエに返す。
「そうですか。じゃあメタバグの出所についてはあきらめてください。私たちだって、あの場所のために死力を尽くして戦ったんです。こちらこそやすやすと言えませんので。」
フミエは果たし合いのことを思い出していた。あの鉱脈を賭けてどれだけの汗が流れたのか。それを考えると簡単に人にあの鉱脈のことを教えたくはなかった。
「いや、なんの話なのかわからないんだけど。でもこれは大黒市の安全に関わる重要な問題なんです。お願いだから教えてください。」
直樹が懇願したが、フミエは譲歩するつもりはなかった。
「仕方ないわ、竹下君。ここはこの子の言う通り、情報交換ということにしましょう。」
「…川畑さん。」
直樹が久美子の顔を見る。
「ただし、これから言うことは誰にも言わないと約束できる？もちろん、友達や家族にも言ってはいけないのよ。その重みを背負う覚悟はできてる？」
久美子は鋭いまなざしでフミエに言った。
「もちろんです。私たちコイル電脳探偵局は、大黒市を守る使命を帯びていますので。」
フミエもいつになく真剣な目つきで久美子を見据えながら言った。
そうしてフミエはふさいでいたハラケンの口から手を離した。

「わかりました。では、僕たちの掴んでいる情報をすべてお話します。」

そうして直樹は、メガマスの空間制御プログラムがハッキングされたこと、その捜査の協力をしていることを打ち明けた。その報告に一番ショックを受けたのは、玉子ではなくヤサコだった。そのプログラムは父の一郎が取り仕切って管理していた。それが盗まれて悪用されている。ここ最近の一郎の異変について、ヤサコは初めて理解した。

「結論を急ぐのはまだ早いと思います。確かにそのプログラムをハッキングしたのが猫目宗助である可能性は現時点ではかなり高いです。しかしメタバグの出所を詳しく調べてみないことにはまだはっきりとしたことは言えません。どうも僕たちが調べた限りでは、メガマスがハッキングに遭った日と、メタバグが現れるようになった日の間には、どうもズレがあるみたいなので。」

直樹が玉子やヤサコ達を落ち着かせるように言った。しかし一同にそのことは耳に入っていなかった。メガマスでの実験の時、一郎は必ず事故は起こさないと約束した。ところが現在、自分たちの知らないところで危機が迫りつつある。そのプログラムをハッキングしたのが猫目である可能性が高いこともそうだが、一郎がそのことをひた隠していたことにも一同は驚きを隠せなかったのだ。

「さて、こちらからの情報は伝えました。それでは、君たちが知っているメタバグの出所について話してもらえますか？」

「わかりました。その場所は、今は廃ビルとなっている大黒ビジネスホテルです…」

ハラケンが場所を伝え、さらにメタバグを見つけた時の状況や、果たし合いでの異常現象についても事細かに話す。直樹は早速その場所を調べるために、一同を連れて大黒ビジネスホテルに向かうことにした。

#10　結成、コイルレジスタンス　part7

直樹の運転する車で廃ビルに到着した玉子とヤサコ達。久美子は警察での留守をまかされたので同行はしなかった。日が暮れ始めている夕方。相変わらずその廃ビルの近くは静かで、どうも中に人がいる気配もなかった。これでヤサコ達は果たし合いでのダイチ達との約束を破ったことになるが、大黒市で起こっていることのすべてを知った今、その判断は間違いではないと思っていた。それでもダイチ達には顔を合わせにくいので、廃ビルに人の気配がないことに、とりあえずヤサコやハラケンは安心した。そうして廃ビル脇に停めた車から、一行は中に入って行こうとした。

「ん？これは…暗号？」

廃ビル西側の入り口の前に立った直樹が、足下の暗号に気づいた。

「それは、ダイチ達がこの廃ビルを他の人から守るために仕掛けたものです。おそらく、これに触れるとアイツらのメガネの警報が鳴って、連動してトラップが発動するはず。」

フミエが直樹に言う。暗号のことはアキラから聞いていた。

「そうか…じゃあこの暗号の構造を調べてみて、解けるようなら解除してみるよ。」

直樹はそう言うと、張り巡らされている暗号を丁寧に見回り始めた。

「メガネをはずして中に入って、もう1度かけ直すだけじゃダメなんですか？」

ヤサコが直樹に訪ねる。暗号はメガネをかけている人にしか働かないので、そうしたら手っ取り早いんじゃないかと思ったのだ。

「古い空間の中で、メガネをはずしてはいけないっていう話は知ってる？その逆もアリで、古い空間の中でいきなりメガネをかけるのも危険なんだ。このビルの中が古い空間なのかどうかはまだわからないけど、何が起こるかわからないから、いきなりメガネをかけるのは避けたい。大丈夫、この手の暗号を解くのはさほど苦労しない

はずだから。」
直樹がヤサコに言い聞かせる。
「暗号にも精通しているんですか？」
玉子が直樹に訪ねた。直樹は電脳の専門家とはいえ、暗号を知っているのはごく一部の人間である。
「暗号も元を辿ればプログラムです。それに僕の恩師である小野隆は、小此木宏文医師とも知り合いでした。暗号に関する多少の知識なら、僕も小野先生を通じて学びましたので。」
直樹の言葉に、ヤサコはメガばあの話を思い出した。今や電脳科学の第一人者ともいわれる小野隆は、祖父宏文の大学の後輩であると。暗号も研究していた宏文から小野に情報が行くのも自然な流れだった。
「そうなんですか。じゃあここはお任せします。」
玉子も空間管理室の職員だった時にイサコを追っていたことから、この手の暗号は見慣れたものだった。それに玉子も、もう5年近く前の話になるが、暗号を駆使してキラバグを集めていたのだから直樹よりも詳しい自信があった。しかしここは直樹に任せること数分、青白い光を発しながら来る者を拒んでいた暗号は、その光を失い、機能を停止したようにただの落書きに戻っていった。
「できました。さあ、中に入りますよ。」
得意に先頭に立って直樹が言う。玉子達もその手際の良さに改めて感心しつつ、薄暗いビルの中へ入って行く。ところがビルの中は1週間前にヤサコ達が見た時とは様子が違っていた。あの時は夏の山の中の小川を一面に埋め尽くすホタルのようにビルの床をメタバグが照らしていたのに、今は発光しているものが見当たらない。さらに深い時は膝くらいまで覆っていた黒い電脳霧も、今日は目につかなかった。
「…えーと。メタバグはどのあたりにあったの？」
直樹が少し拍子抜けした様子でヤサコ達に訪ねた。
「いや、このビルの床一面に散らばっていたんですけど。これは僕

らがいた時とは全然様子が違います。」
ハラケンが困惑しながら言う。
「ほんとに？じゃあこの１週間の間に全部掘り起こされたのかな？でもないか。鉱脈っていうくらいなら、１週間やそこらで全部掘り起こすなんてできないだろうし、でもまったくメタバグの気配もないな。」
「全部掘り起こされたっていうのはないです。私の弟はダイチ達の仲間なんですが、昨日の時点でメタバグが全部なくなったなんて言ってませんでした。」
考え込む直樹にフミエが説明する。昨日までこの場所にメタバグがあったのは確実だった。
「そう。ということは昨日から今日にかけてこの場所で何か起こったのか。じゃあ空間についても少し調べてみるか。」
直樹はそう言うとメガネからウインドウを出し、この空間のプロパティや、その他サーバーからの情報を徹底的に洗い始めた。その間もヤサコ達はメタバグが落ちてないか見て回り、玉子も独自に調べを進めた。それは行き来できる１階から４階までくまなく調べられたが、思った結果は得られなかった。
「おかしいですね。特に空間に異常は見られませんし、メタバグが落ちてもいないですね。元空間管理室顧問としての見解はいかがですか？」
直樹が玉子に訪ねた。直樹は夏の事件のことも知っているので、玉子が元管理室職員であることも知っている。
「…そうですね。確かに何も変わったところはないと思います。空間のバージョンも古いわけではありませんし。アンタ達、本当にこの場所なの？」
不審に思った玉子がヤサコ達に訪ねる。
「間違いないわ。オバちゃんも見たでしょう？入り口にある暗号を。あんなものを作ってまでダイチ達はこの場所を守ろうとしていたのよ。」

フミエが直樹と玉子に必死に訴える。自分たちが直樹からの秘密事項を聞き出すためにウソの情報をちらつかせたのだと思われたくないからだ。

「どうなんでしょう?仮にその空間制御プログラムがこの場所で使われていたとしたら、その痕跡を残さずに元の空間に戻すというのは。」

玉子が直樹に訪ねる。それも考えられる1つの可能性であった。

「いやあ。僕もメガマスから多くを知らされているわけではないので、なんとも言いえません。」

直樹がそう言ったとき、メガネの着信音が鳴った。久美子から直樹への発信だった。

「少し失礼しますね。もしもし?」

「空間管理室に連絡をとったんだけど、今サーチマトンのメンテナンスで忙しく、すぐにその空間を調査しに行くのはムリだって話だったわ。明日なら行けるっていうことだったから、とりあえず場所だけは教えておいた。」

久美子が電話の向こうで言った。管理室は次から次へと破損したサッチーやキューちゃんを修理するのに手間取っていて、今市内を巡回しているのは虎の子の一機である。その一機も、相変わらす散発的に発生する古い空間のために振り回されている状態だった。

「そうですか。わかりました。こちらも調べた限りでは特に異常が見当たらなかったので、緊急手配する必要もないと思います。」

「わかったわ。管理室にはそう報告しておく。じゃあ気をつけて。」

久美子はそう言って電話を切った。

「みなさん。この場所は明日改めて空間管理室が調査するということなんで、今日のところは引き揚げましょう。ご足労いただきありがとうございました。」

直樹はそう言って敬礼をした。玉子もこの場所からは何も出てこないと思い、少し疲れた表情で出て行く。ヤサコ達はどうもおかしいと思ったが、ここは大人達に任せるほかなく、納得しきれない気持

ちのまま廃ビルを後にした。

「玉子か。管理室をやめたと聞いていたが、まだこんなことに首を突っ込んでいるんだな。」

同時刻、大黒市中心部にあるホテルの一室で、ミゼットから送られてくる映像を見ながら猫目宗助は独りごとのようにつぶやいた。

「見たところ、この男は警察官のようですね。大黒警察の電脳犯罪対策係でしょうか？」

もう一人、宗助とともに大黒市にやってきた若い男が言った。この男は宗助の補佐役であり、同時に宗助の監視役を務めていた。

「この子達が警察に言ったのだろう。今は警察も管理室もメタバグの鉱脈を探すのに躍起になっているからな。」

宗助は、もちろんヤサコやハラケンのことは覚えていた。あの事件の時、宗助の計画を阻止したのはヤサコ達だった。

「しかしこの街では僕らも知らないところで何が起こっているんでしょうか？この廃ビルにはメタバグの鉱脈が昨日まであったのに。」

補佐役の男は不思議がる。この場所でメタバグが出たのは自分たちでも予想外のことだった。ところがこの日廃ビルの様子を探ってみると、その鉱脈はきれいさっぱりなくなっていたのだ。

「この様子だと、僕たちと同じことを企んでいる人間が他にいるように思えるな。そのおかげで警察も管理室も、捜査が混乱しているのは思わぬ幸運だった。」

「しかしどうするんです？プログラム起動の実験はおおむねうまくいきましたので、もうそろそろ本格的な行動にうつせますが。」

補佐役の男が宗助に訪ねる。

「計画通りいく。本社は自重するように言ってくるだろうが、すでにこの廃ビルも警察に目を付けられた以上、そこから目をそらせる必要がある。明日、いくぞ。」

「わかりました。」

語気が強くなった宗助に、補佐役の男がうなずく。宗助が大黒市か

ら姿を消してから半年以上。それだけの月日をかけて練られた計画が本格始動しようとしていた。

#10　結成、コイルレジスタンス　part7（後書き）

第10話はここで終わりです。
次回第11話もお楽しみに。

#11　崩壊！大黒市　part1

「私たちが廃ビルのこと警察に言った次の日。あらゆる人が新たな一歩を踏み出す4月最初の日に、大黒市の空間は一夜にしてかつてないほどの変容を遂げていました。早朝からの喧噪とともに、私たちの長い一日は幕を開けたのです。」

「行ってきやーす。」

また例によって朝から黒客の集まりがあるため、この日もダイチはいつもとなんら変わりないサイクルで支度をし、廃ビルに向かおうとしていた。しかし家から一歩踏み出した途端、直感的な違和感を覚えた。街が騒然としている。でもそれは今に始まったことじゃない。違法ツールが出回りだして電脳戦争が起こるようになってから、この街にずっと落ち着きはなかったと言っていい。ところが今日の雰囲気はまた違う。これまでは騒いでいたのはメガネの子ども達と空間管理室職員ぐらいだった。しかしこの日は街全体の歯車が狂いだしているような、恐怖にも似た感情が渦巻いているような気がした。どこか遠くの方で鳴り響く車のクラクションや怒鳴り声。見えないところで何かが確実に起こっているはずだと思い見上げた空は、いつもより鮮やかなブルーに見えた。そこでまたダイチは思い出す。メガネをかけていなかった。正確に言えば、メガネを額に押し上げたままだった。この街で何かが起こるなら、それは電脳以外ではあり得ないと思い、急いでそのメガネを下ろす。するととんでもない光景が目に飛び込んで来た。

「な、なんじゃこりゃ〜！！」

実際ダイチに何が見えたわけでもない。いや、見えなかった。視界は白で塗りだくられており、１０メートル前も見えない。そう、視界を奪ったのはかつて空間損傷の時によく見られた白い電脳霧だった。それも温泉街のような部分的な発生ではない。満開で見頃とな

った桜の木々を隠しながら、本物の霧が街を包み込んでいるかのような大規模な発生である。ダイチもずっと大黒市に住んでいるがこれほどの現象は見たことがない。そうして呆然と立ち尽くす中、ふと足元を見てみると何かが光っている。まさかと思いダイチはそれを拾い上げた。メタバグだった。何の変哲もない、ただの道路の脇にメタバグがあるなんてにわかには信じがたい。しかし目を凝らして見てみると、道路の脇には同様に光るものが繋がるように落ちているのが確認できた。もうダイチの思考回路でこの状況を正しく整理することはできず、そこでとっさにガチャギリに電話をかけていた。

「オレだ。すげーぞ！大変なことになってる！白い霧で前が見えねえし、メタバグが普通の道路に山ほど転がってるぞ！」

電話がつながった瞬間、かなりの興奮状態でダイチが目の前の状況をガチャギリに伝えた。

「ああ。わかってる。それより早く廃ビルに来い。こっちも厄介なことが起こってる。」

ガチャギリが冷めた様子でダイチに言う。その口調には少しのいら立ちも感じられた。

「厄介なこと？なんだ？」

「会ってから詳しく話す。それより、街中には今キューちゃんやサッチーがうようよしている。視界も悪いことだし、気をつけてこい。」

ガチャギリはそう言い残して電話を切った。確かにこの状況ならメガネをかけたまま出歩くのは危険だったが、ダイチはこの街で何が起こっているのか把握しようと思い、あえてメガネをかけたまま霧の中を進むことにした。

街の様子を見ている中でダイチが一番驚いたのは、交通における電脳ナビシステムがダウンていることだった。街中を霧が包んでいるということは、言い換えれば街中が古い空間になっているという

ことである。車が走るような道路も古い空間になったとしたら、それは電脳ナビシステムが車を制御しきれないことになる。電脳ナビシステムは常時リアルタイムで障害物や信号などを感知しないといけないためだ。どうやら大きな事故は起きていないようだが、運転手はみな自動運転から手動運転に切り替え、電脳で制御されている信号も混乱しているために、警察官が手旗信号で車を誘導していた。これを見ながらただ事じゃないと感じつつ、ダイチは中津交差点から廃ビルのある裏通りに入る。ビルの西側入り口にはガチャギリとシンヤが立っていた。ナメッチやデンパ、アキラはまだ来ていない。

「おい、一体どうなってんだこの街は？この霧のためにあらゆる機能が停止してるぞ。」

開口一番、ダイチは2人に訪ねた。

「わからん。空間のバージョンはどこで測っても6．0を下回ってる。街全体が古い空間になっているのは確かだろう。とにかくこの街で何かが起こってることだけは言える。」

ガチャギリもこの事態には心の底から驚いていた。それはシンヤも、他のメガネユーザーも同様だった。

「それで、厄介なことってのは？」

ダイチは次に電話でガチャギリが言っていたことを確かめた。

「ああ。これを見てくれ。」

ガチャギリはビル入り口に書かれていた暗号をあごで示した。

「これがどうかしたのか？」

ダイチは暗号をじっと見たが、それがいつもと何が違うのかわからなかった。

「解除されてるんだ。何者かに。」

「ほ！？どうやって？」

ガチャギリの言葉に、ダイチは目を見開きながら驚いた。

「プログラムを中から書き換えられたんですよ。暗号と言えど、空間に作用するプログラムに過ぎませんからね。そこは通常のプログラミングのように、中身を書き換えられると終わりなんです。」

そこでシンヤが説明した。話ではこの暗号を解除するパスワードを破られたわけじゃなく、プログラムから解除されたということだった。

「簡単に言うが、それってある程度の知識があるヤツじゃないとできないんじゃないか？もちろん、オレみたいな暗号なんて知らないヤツにできる芸当じゃないんだろ？」

ダイチにもこれを解除したのが近所の子どもではないことはわかった。

「そうだ。ソイツはこの暗号の特徴まで正確に把握して解除している。もちろん、ソイツがこのビルの中を覗いていった可能性は高い。」

眉間にしわを寄せながらガチャギリが言う。この暗号を解除したのは他ならぬ直樹だった。もちろんダイチ達は、昨日直樹がヤサコ達とともにこの場所へやって来てビルの中を調べたことは知らない。このビルは空間管理室の手で改めて調査されることになっていたが、誰も来ていないのは今朝からの騒ぎでこちらまで手が回らないからだった。

「まずいなそれは。で？ビルの中のメタバグは？」

「まあ、ちょっと中も見てくれよ。」

ダイチの質問に、ガチャギリがビルの内部を示しながら答えた。何だろうと思いながらビルの中を覗き込んだダイチだったが、これまた奇妙な光景を見た。

「おい。白い霧で何も見えねえじゃねえか。どういうことなんだ？今までの黒い霧はどうなったんだ？」

ビルの中は今日の大黒市の中では最も濃い白い霧がかかっており、それこそ何も見えなかった。さらにダイチ達が出入りしていた一昨日まではかかっていた黒い霧がまったく見受けられないのである。

「それより、足元見てみろよ。」

「足元？おお、メタバグじゃねえか。ってか、まだこんなに残ってたか？」

ガチャギリに言われ、ダイチはメタバグを見つけた。このメタバグも、地表に出ている限りのものは満天堂に卸したはずだったが、ダイチの見つけたものもまた地表に溢れんばかりに散らばっていた。

「むしろメタバグは増えてる。しっかしここまで来ると気味が悪いな。古い空間に包まれた街。解除された暗号。増えたメタバグ。何がどうなっていやがるんだ。」

さすがのガチャギリもメタバグが増えたことを喜ぶ余裕はなく、ただただこの状況にあぜんとするばかりだった。そうしてそこにナメッチ、デンパ、アキラの3人が加わった。この3人にダイチ、ガチャギリ、シンヤは今起こっている状況を改めて説明した。

「しかし、こうなってくるとまずいですね。」

メンバーが状況を把握したところで、シンヤがふとつぶやいた。

「何がまずいんだ?」

「違法ツールの販売についてですよ。それと、黒客の身の危険もね。」

「どういうことだ?」

ダイチにはシンヤが不安がっている理由がわからなかった。暗号が破られたのはまずいと思ったが、しかしメタバグは増えているので販売について何が支障をきたすのかと思った。

「これだけメタバグが溢れているなら、再びメタバグ市場が分割されるということです。今までは僕らと満天堂が独占的に販売していました。しかしそれは僕らがメタバグを独占したからこそなし得たことです。しかし今回はかつての大黒市と状況が同じ。おそらく、満天堂と大手三社を形成していた他の二社が参戦してくることは間違いないでしょう。となると利益は単純に3分の1になる。それに他のミーハーな輩が新しく販売サイトを立ち上げる可能性もあることですし。」

「じゃあ、黒客の身の危険ってのは?」

ダイチがシンヤに訪ねるも、シンヤは何か深い考え事をしているようで、目をとじうつむきながら黙りこくった。

「昨日の話を思い出せ。オレたちはキラバグを握っていると思われている。それでオレたちを狙っているクラブも必ずある。だからこそ、オレたちは昨日から新しい仲間を探して、身を守る手段を手に入れようとしていた。しかしな、それもオレたちが市場に出回るメタバグを制御できるという前提の上で考えていたことだ。オレたちがメタバグを握っていた以上、他のクラブが持てる戦力もこちらである程度コントロールできる。でも今はどうだ?メタバグはそこら中で手に入る。販売サイトもどんどん復活する。そうなるとオレたちが関与できないところで力を手に入れるクラブがでてくるはずだ。そのクラブに狙われるとさすがのオレたちでもきついってことだ。」

ガチャギリが代わって説明した。この状況が続くなら戦力の保有制限も無いに等しい。狙われる身からすればたまったものではない。

「じゃあ、オレたちの武装を強化すればいいんじゃ。」

「どうだろうな。相手が人数でこちらをしのいでいれば、それで対応できるかは怪しい。やっぱ相手がどれだけ武器を持っているか想像がついたのはでかいな。今は正直どれだけ武装を強化しても安心できねえ。」

ガチャギリはかなりこの状況を悲観的に捉えていた。暗号を破った人物もガチャギリとしては気がかりだった。

「あっ!ってことは。フミエもこれに乗じて復活を期すかもしれねえ!アイツらにはメガばあというある意味チートな存在があるからな。」

ダイチはフミエの存在を思い出し、この状況はフミエにとっての絶好の機会になるのではないかと考えた。実際フミエは昨日から動き出していたのだが。

「ああーややこしい時に!おいアキラ!今日のフミエの様子は?」

ガチャギリがアキラに訪ねる。

「え?ああ、外の様子がおかしいものですから飛び出して行きましたよ。」

今やフミエのスパイであるアキラだが、ここはウソをつくこともで

きず正直に言った。フミエは今朝異変に気づくと真っ先に家を飛び出していったのだ。

「くっ、やっぱりめ！こうなってくるとオレたちの敵が増える！アキラ！お前、フミエの行動を監視して逐一報告しろ！」

「ええ～ッ！」

ダイチがアキラに言いつけた。アキラは自分の意志でフミエの方に寝返ったので、二重スパイのようなマネはうんざりだった。しかし黒客内での役割も果たさなければダイチ達に疑いを抱かせることにもなるし、万が一バレると何をされるかわからない。アキラはこの板挟みに心を締め付けられた。

「よし、それはそれとして、とにかく今後のことを話し合おう。」

ガチャギリの一声に、黒客は今後の対応策をじっくり話し合うことにした。

#11　崩壊！大黒市　part2

ヤサコもこの日の異常事態はいち早く察知していた。まだ街が本格的に目を覚ましていない午前6時頃、一郎は管理室に詰めていた職員からの報告に叩き起こされ、慌てて家を飛び出していった。その騒ぎにヤサコも目が覚め、家を出てみて見たら街が電脳霧に包まれていることに気がついたのである。そのまま、まだ起きていないことを承知でフミエに連絡を取った。連絡を受けたフミエも飛び起きて早々に街に出て行ったらしい。そしてある程度の時間が過ぎると今度はフミエから呼び出しがあった。鹿屋野神社で緊急会議を行うということで、ヤサコもすぐに向かう。到着した時の時刻はまだ午前9時も回っていなかったが、かなりの子ども達が鹿屋野神社にいることにヤサコは驚いた。そんな中フミエとハラケンが拝殿脇にいるのを見つけ、ヤサコはそこに合流する。

「何なの？この子ども達は？」

ヤサコはすぐ、フミエにこの場所に集まっている子ども達について訪ねた。

「メタバグを探しているのよ。ヤサコも来る途中見たでしょ？今はその辺の道路脇にでもメタバグは転がっている。サッチーの入れない神社なら、もっと多くのメタバグが安全に手に入ると思ったんでしょうね。どうやらサッチーやキューちゃんの数も増員されているようだし。」

フミエが説明する。フミエはヤサコから連絡をもらった後、街の様子をその足で調べていたのだ。

「サッチーやキューちゃんの数を増やしているのはお父さんだわ。今朝管理室からの報告があってものすごい勢いで出て行ったし。そうなるとこれは昨日直樹さんが言っていたこととは無関係じゃないと思う。」

昨日ヤサコ達は直樹から大黒市で何が起こっているのかを聞き出し

た。メガマスの開発した空間制御プログラム、それがハッキングされたこと。そして昨日直樹の聞き込みによって明らかになった、大黒市に猫目宗助がいること。

「まあ、その線で間違いはないでしょうね。おそらくこれは大黒市にいるという、タケル君のお兄さんの仕業。見て来たけど、電脳ナビシステムが落ちているみたいだからこの時点で大黒市は大混乱に陥っていると言えるわ。事故が起こっていないのは幸いだけど。」

フミエが少し小声になって言った。この事を知っているのは子どもではヤサコ達である。これ以上の混乱を避けるためにも、ヤサコ達はこのことが外部に漏れないようにしなければならなかった。それは警察で久美子にもよく言いつけられた。

「目的はあの時と同じなのかな。メガマスへの復讐。メガマスは父である猫目技師の研究成果を横取りして、そしてゴミのように捨てたから。でも、今のメガマスは猫目技師やヤサコのおじいちゃんの研究を引き継いで完成させようとしている。そして、その研究が完成したあかつきには猫目技師の功績を公表することを約束している。そのことをタケル君のお兄さんが知ったら、この復讐劇を思いとどまってくれるのかな？」

ハラケンはメガマスで実験が行われた日のことを思い出していた。今のメガマスは自分たちの過ちと向き合い、それを清算する努力をしている。そのメガマスを陥れることは、宗助にとっても意味のあることではない。

「どうでしょうね。メガマスは消息を絶っているタケル君のお兄さんにそのことを伝える手段が無いし、伝わったとしてタケル君のお兄さんがそれを信じるかどうかもわからない。」

フミエがハラケンに返した。長い間メガマスを憎み続けた宗助が、メガマスの言うことに聞く耳を持つかどうかは疑わしいというのである。

「タケル君も、このことを知ったらショックだろうね。」

ヤサコがぽつりとつぶやいた。あの事件でも、最後の最後で宗助の

メガネを壊して復讐を阻止したのは弟のタケルだった。
「そうね。そういえばタケル君ってどうしているんだっけ？」
フミエが2人に訪ねる。
「あの事件の後、タケル君は隣の弁天市に住む親戚の家に住むことになった。でも特別に卒業までは大黒小に通い続けた。お兄さんへの協力とはいえ、イサコを始め大黒小のみんなには迷惑をかけた。そんな自分が償いをしないで、他の学校へは転校できないって。一度ヤサコのお父さんが事件の真相を学年集会で説明したことがあったよね。その時タケル君はみんなの前で自分やお兄さんがしてしまったことを謝ったのは覚えてる？」
ハラケンはあの後のタケルと割と近い存在だった。兄の事で思い悩むタケルを励ましたこともあった。
「もちろん。忘れることはないわ。最後はお兄さんのメガネを壊してまで天沢さんのことを守ったのに、その責任を一身に背負うなんて。なかなかできることじゃないよね。」
ヤサコやフミエもそのことはしっかりと記憶していた。タケルのことを、本当に誠実な子なんだとその時感じた。
「あの後、タケル君の周りは何となくギクシャクしていたんだけど、そのタケル君と暖かく接していたダイチ達は印象的だった。黒客に入らないか、なんて言ったりして。あの時のダイチは、デンパの時も思ったけど本当にいいヤツだと思ったよ。」
「まあ、そういうまともな感性も持っているんだけどね。いかんせんバカだから物事がうまく運ばないのよ。今回のこともそうだけど。」
ハラケンがダイチをほめると、そこはフミエらしく茶々を入れた。
フミエにしてもダイチの人間性は認めているところがある。
「そんな感じで、タケル君は卒業までなんとか楽しくやっていけたみたいだ。中学からは弁天の中学に行くことになってる。今はもう大黒市に来ることもないみたいだから、僕は卒業式の時にお別れをして以来会ってない。多分今回のことも知らないんだろうね。」

「そう…なら今回のこと、タケル君に知らせるっていうのはどう？」
ハラケンの話を聞いたフミエが提案する。
「軽い気持ちでそんなこと伝えるのはどうかと思うけど。ヤサコも言ったように、タケル君がこのことを知ったらショックでないないはずがないだろうし。」
その意見にはハラケンは乗り気ではなかった。事件の後も近くで接していて、宗助のことでショックを引きずっているタケルを見て来たこともあって、そう簡単に決めていいことではないと思った。
「でも、タケル君もいずれ知ることになるでしょ？それよりこの騒ぎがタケル君のお兄さんの仕業だったとしたら、それを食い止められるのはタケル君しかいないと思うの。」
フミエは今回の事件を収束させることを考えていた。そのためにはタケルの力が必要だというのだ。
「確かに私もそれは思った。もし今回のことがもっと大きな事故につながったとしたら、その時こそタケル君はショックなんじゃないかな。」
ヤサコがそこで考えを言った。宗助が原因でまた大きな事故が起きてしまうこと。それこそがタケルが最も恐れることなのではないかと。
「それはそうだけど、僕たちはこのことを他人に言ったらダメだって言われてるし。」
「だったら直樹さんに電話して許可をとりましょう。あの人なら理解してくれるはずよ。電話番号も昨日聞いたでしょ？」
フミエがハラケンに言う。勝手にタケルに伝えるなら約束違反だが、許しをもらえれば大丈夫だろうと言う判断だった。そこでハラケンは直樹に電話をかけることにした。
「…もしもし？竹下さんですか？本当に忙しいところすみません。原川研一です。」
「ああ、研一君。どうしたの？今日の騒ぎのこと？」
直樹の背後ではいろいろな人が慌ただしく話している様子や、電話

のコールやブザー音などが鳴り続けていた。それだけでも対策係は今パンク状態にあるのだろうと推測できた。

「そうです。最初に質問なんですが、今日のこのことは猫目さんが絡んでいるのでしょうか?」

「…あんまり多くは言えないけど、こちらもその線で捜査を進めているよ。君たちも危険だから霧の深いところやバージョンの古い空間には近づかないようにね。サッチーやキューちゃんも今は総動員でフォーマットにかり出されているらしいし。」

「大丈夫です・・・それより電話したのは実はお願いがあって、今回の騒ぎに猫目さんが絡んでいるらしいこと、弟のタケル君に伝えてもいいですか?」

ハラケンは一つ息をついてから、直樹にそのことを訪ねた。

「え?でもこのことは誰にも言わないって約束したじゃない。それも弟のタケル君って、それはちょっとまずいんじゃないかな。メガマスも彼の精神的なショックはかなり気をつけているらしいし、何よりこれが猫目宗助の犯行だと確定したわけじゃない。もしも犯人が違っていたら、彼に余計な負担をかけることになるんだよ。」

直樹の言葉にハラケンは考え込んでしまった。それを見たフミエはハラケンと電話を代わり、直樹の説得を試みようとした。

「もしもし?電話代わりました。橋本フミエです。そこをなんとかお願いできないですか?猫目さんを止められるのはタケル君しかいないんです。警察やメガマスだって99%猫目さんの犯行だと踏んでいるんでしょう?」

「・・・確かにあの事件の時、タケル君が猫目宗助の暴走を阻止したことは聞いているよ。それに動機や目撃情報などを総合すると、やはり猫目宗助が今回の犯人でほぼ間違いない。しかしタケル君に彼を止められる保証なんてない。そもそも警察の立場として、子どもに犯人を見つけてくれなんて頼めるはずがないじゃない。この街は危険なんだ。子どもがあまり首をつっこむのはやめた方がいい。」

直樹は少し冷たいかなと思いながら、それでも子ども達を危険にさ

らすわけにはいけないとそう言い放った。
「…そうですか。直樹さんってもっと子どもに理解的な人だと思ってました。でも、これじゃあその辺の大人となんら変わりないですね。」
「え？」
フミエの突然の言葉に、直樹は一瞬戸惑った。
「前の事件だって、子どもは巻き込まれた側でありながら、最終的に子どもが解決しました。大人はいつもそうやって子どもを危険にさらすまいとしているようだけど、結局まったく守れていないじゃないですか。そもそもトラブルの種を蒔いているのはいつも大人です。なのに大人は子どもを守れないんなら、子どもである私たち自身が自分で身を守ります。大好きなこの街を守るのは、子どもである私たちの使命です。」
フミエはまくしたてるように直樹に言った。それは犯人に混乱させられてばかりいる、直樹の胸に重くのしかかった。
「すまない。僕たち大人が情けないばっかりに、君たちに迷惑をかけてばかりで。結局大人ってこの街のこと理解していないんだよね。それは本当に申し訳ないと思ってる。本当にこの街を理解しているのは、君たち子どもなんだろう。」
「って言うことは？」
「・・・仕方がない。君たちの力を借りさせてもらうよ。タケル君に今回のことを伝えて、協力してもらうことを許可します。」
直樹は渋々許可を出すことにした。あの事件を経験した子ども達なら、少しは身を守る術を持っているだろうという思いもあった。
「本当ですか？ありがとうございます。」
フミエがうれしそうに礼を言う。
「許可しなくても勝手に伝えそうな勢いだったからね。じゃあ、このことはタケル君だけに伝えること。くれぐれも危ないことはしないこと。それを約束してください。」
「はーい。言われたことはしっかり守ります！では失礼します。」

そう言ってフミエは機嫌良く電話を切った。大人を言い負かしてしまうなんてどこまですごいんだと、ヤサコはフミエのことをまた改めて感心した。

「さあ、タケル君に協力を要請するわよ。ハラケン。電話よろしく。」

「わかった。」

こうして3人はこの事態を収拾すべく、タケルに連絡をとり、とりあえず直接会って事情を話すことにした。

#11　崩壊！大黒市　part3

早朝の管理室からの衝撃的な報告に飛び起き、絶えることのない古い空間の出現に一郎はすでに疲労困憊だった。6時半に管理室に入った一郎はまず状況を確認し、管理室職員を一斉に呼び出した。すでにその時から管理室には電脳ナビシステムダウンに関する苦情が山のように寄せられていたのだ。とにかく大黒市で電脳空間に関するトラブルの苦情は、管理室に寄せられることが多い。その対応でも人手を割かれたが、同時に大黒市全域を覆い尽くした古い空間のフォーマットも行わなければならず、メガマス本社にある空間管理室本部からも応援の人員が送られて来ていた。幸いだったのは、これまで子ども達に次々と破壊されていたサッチーやキューちゃんのメンテナンスを昨日一斉に行ったので、サーチマトンの頭数だけは足りていることだった。電脳局に要請すれば2．0も出動させられる状態だったが、一郎は切り札としてそれは残している。とにかく夏の事件以来サッチーの出動台数にも制限をかけていた管理室は、この日の緊急事態に総動員態勢をとったのだった。

「…新東京？そんな場所から？」

一郎は本社からの電話を受けていた。相手は先日まで一郎の補佐役を務めていた香川だった。

「ええ。管理室本部の人間がプログラマーを連れて、今広がっている古い空間の調査に出かけたらしいんですが、やはりこの古い空間は制御プログラムによって作られたものと判明しました。そのプログラムを逆探知で辿っていくと、どうやら新東京にある企業のコンピューターが発信源になっているとわかったそうです。」

香川は本社の中で情報の取り次ぎを行っている。その中の報告にあったらしい。

「じゃあ、やっぱり産業スパイが目的なのか。新東京ならメガマスが信用を失うことで得をするような企業がひしめいてる。その企業

の特定は済んだのかい？」
「はい。正式に報告はおりてきていませんが、流れて来た話によると株式会社サイバーゲートウェイ。ＣＧＷ。インターネット事業から起業し、今やハードウェアからソフトウェアの開発まで行うコンピューター企業の国内大手です。」
「ＣＧＷ？メガマス急成長以前には国内トップのコンピューター企業だった？そうか、確か事業規模を縮小したと聞いていたが、動機は十分にあるな。」
一郎はなんとなく今回の事件の真相が見えて来た。メガマスに取って代わられた企業の逆襲。実に卑怯でこそくな手を使うなと思った。
「昨日警察から報告があった猫目宗助は彼らの手先なんでしょうかね？」
香川が一郎に訪ねる。この事件に宗助がからんでいるなら、間違いなく宗助とＣＧＷはつながっているはずだった。
「手先か…もっと対等な関係だと思うな。猫目宗助という男はプライドが高い。誰かの言いなりで動いているとも思えない。まあ、猫目とＣＧＷが目的を一にしていることは十分考えられる。となると猫目は新東京にあるＣＧＷのスーパーコンピューターから、空間制御プログラムを遠隔起動しているということか。ということは、猫目自身の発信を逆探知することはできないのか。」
一郎は考え込んだ。猫目は新東京のコンピューターにアクセスしており、そこで起動したプログラムが大黒市で反映されているということになる。猫目のアクセスを辿るにはＣＧＷのコンピューターをハッキングしなければほぼ不可能だが、さすがのメガマス本社もそこまではできないだろうと思った。
「そうですね。猫目自身がボロを出さない限り、彼を見つけるのは至難の業ですね。」
香川も一郎の考えにうなずいた。
「現行犯で捕らえるのはムリなら、とにかく制御プログラムの起動を無効化する方法を考えてほしい。こっちは古い空間のフォーマッ

トで手一杯なんだ。本社にそれは任せると報告しておいてくれ。」
「わかりました。」
一郎は香川との電話を切った。そこでまた1つため息をついた。
「…しかしキリがない。」
一郎は管理室の壁にかかっているレーダーを見た。古い空間に埋め尽くされたマップはほとんどが赤く染まり、一角の古い空間がフォーマットで消えても、また他の一角が赤く染まるといった繰り返しだった。
「室長。サッチー05号機からの信号が消えました。また破壊されたおそれがあります。」
そこで女性職員からの報告が入った。
「何?昨日のメンテナンスでサッチーは全機耐久性をあげたというのに、それでも破壊されてしまうのか。この一大事にこれは痛いな。」
一郎は頭を抱え込みたかった。街ではこんな状態でも電脳戦争が行われているようで、そこに飛び込んでいったサッチーがまた破壊されたのだ。街が古い空間となりメタバグが至る所に落ちているので、昨日までと比べても一段と争いは激しくなっているようだった。
「室長。このままは自動運転をしているサッチーはことごとく破壊されてしまうのではないでしょうか?」
その様子を見ていた中年の男性職員が一郎に訪ねる。今街には5機のサッチーが出動しており、そのうち1機が破壊された。もともとサッチーを動かすにはそれなりの訓練を受けないといけなくて、その資格を持っているのは管理室の中では一郎と現顧問の進藤、そして今朝本社から応援に来た2名の職員だけであった。その人間が付き添っているならサッチーが子ども達に攻撃されても注意できるのだが、サッチーが単独で行動している場合は攻撃を止める者がいない。実際に破壊されたサッチーも単独で自動運転をしていた。
「わかっています。しかし昨日メンテナンスとパワーアップをしたにも関わらず、根本的に子ども達の攻撃に耐えられていないですか

らね。これ以上は手の施しようがありません。」
一郎が男性職員に返す。まだ1台予備のサッチーがあるもののそれで安心はできなかった。これ以上の破壊を防ぐために自分も出動しようかと一郎は考えた。
「しかしこの緊急事態なんですから、子ども達に外出を自粛するように促すことはできないんですか？」
今度は女性職員が一郎に訪ねた。
「…難しいところだ。今本社はこの事態をどう市民に説明しようか苦慮している。おそらく事実を公表することはない。目的はどうあれ、メガマスが空間制御プログラムを開発していたなんて、世間にはマイナスイメージにしかならないからね。ましてやそれが謎のハッカーにハッキングされたなんて言えるはずもない。しかしすでに電脳ナビシステムがダウンするなど、市民生活に多大な影響を与えている。事故が起きていないのが不幸中の幸いだが、それでもマスコミは騒ぎ立てるだろう。それをごまかしてなんとか収拾をつかせられる欺瞞情報を流せるのか、本社はそれで今頭がいっぱいのはずだ。今後本社がなんらかの情報を世間に公表しない限り、子ども達に外出を自粛させることはできないだろう。」
一郎にもこの本社の対応は仕方のないところだと思えた。それでなくてもメガマスの信頼は揺らいでおり、業績は落ち始めている、このタイミングでまた信用を失うことになれば、かなり危うい状況になることは容易に想像がついた。この時点で、宗助やＣＧＷの思惑と通りになっているのかなと一郎は思った。
「ならサッチーの攻撃力をさらに強化するしかないんじゃ？子ども達はもはやサッチーに恐怖していません。だから平気で攻撃してくるんじゃないでしょうか？もっと強力な攻撃力をサッチーに与えれば、自然と子ども達も攻撃をしなくなると思うのですが。」
中年の職員が問う。
「しかしですね、これ以上サッチーの攻撃力を強化すると、電脳法１２条の違法改造にあたります。活動制限を取り払ったとはいえ、

またそのような手段にでると電脳局から厳重に注意されます。しかしこうなってくると2．0を出動させるしかないのか。」

一郎は再び考え込んだ。しかしおそらく2．0の出動は本社が許可しないだろうなと思った。本社はこれ以上騒ぎを大きくしたくないはずで、2．0による強制フォーマットは夏の事件の時も散々に苦情が寄せられた経験があるからだ。

「空間管理室室長。お客様が見えておりますが。」

そこに市役所の事務の女性が管理室に入ってきて言った。

「誰ですか?今ちょっと手が離せないのでお引き取りくださいとお伝えできませんか?」

一郎は事務の女性に言う。誰からも管理室を訪れるという連絡は来ていなかった。

「いや、それが管理室関係者だと。」

「関係者?」

一郎がいぶかしげに訪ねる。そこでその来客が管理室に入って来た。

「あ、あなたは!?」

言ったのは男性職員だった。入って来た女性、夏の事件までこの管理室の職員だった原川玉子は、半年以上ぶりに会う管理室職員達に向かって頭を下げた。

「室長。今お話できますか?」

頭をあげた玉子が一郎にするどい視線を浴びせながら訪ねる。一郎も一見して玉子の用件を察知した。

「…わかった。ここじゃなんだから別室で。」

一郎はすぐに市役所の応接室を用意し、そこで玉子と1対1で向き合うことにした。

「君が言いたいことは大体わかる。今日のこの騒ぎの真相についてだろう?」

席につくなり、一郎は玉子に訪ねた。

「想像はつきます。室長が例のプロジェクトの責任者を降りて、また空間管理室の責任者として戻っているんですから。」

その言葉に、玉子はすべて知っているんじゃないかと一郎は思った。そもそも自分が管理室にいることを見越して玉子が訪れた時点で見抜かなければならなかった。

「知っていたのか、そのことを。一体誰に?」

「昨日警察の人から呼び出しを受けて、宗助がこの大黒市にいることを聞きました。しかし宗助が何の目的もなく大黒市に戻ってくるはずがありません。さらに詳しく訪ねてみると、この前の実験に使った空間制御プログラムがハッキングされたと言うじゃないですか。そこから室長が責任者ははずされたことも、管理室に戻っていることも想像はつきました。」

玉子は昨日、ヤサコからも一郎の様子が最近おかしいことを聞いていた。ヤサコは一郎が管理室に戻っていることは知らなかったが、昨日の直樹の話を聞いた玉子は、一郎は管理室に戻っているに違いないと思い、それをヤサコにも伝えていた。

「警察が?そうか。まあ君ならいずれわかるだろうと思っていた。今まで隠していてすまない。」

一郎はそう言ってうなだれた。玉子はこのことをヤサコ達も知っていることは黙っておくことにした。

「室長が隠されていたことは何も言いません。メガマス社員としての立場もあったはずですし、警察の方もこのことはトップシークレットになっていると言っていましたので。しかしあれほど安全面には自信を持っていながら、あっさりとプログラムがハッキングされたことを私は遺憾に思います。あの実験の時の約束はなんだったんですか?」

「…言い訳になってしまうが、メガマスの中にハッカーと内通している者がいたみたいなんだ。内からセキュリティはその内通者にすべて解除された。おそらく、その人物は猫目宗助とも連絡を取り合っているはずだ。」

一郎は包み隠さず玉子に伝えた。

「その人物は?まだ明らかになっていないんですか?」

「本社の幹部が内部調査をしているが、いっこうに手がかりはないらしい。もしかすると本社の中でも内通者の仲間がいるのかもしれない。」

一郎は本社の中に、報告にあったＣＧＷの息のかかった勢力が存在するのかもしれないと思った。未だに内通者の情報がつかめないというのも、メガマス内部監査の調査能力からしても不自然な気がした。

「…そうですか。話は変わりますが、今日のこの騒ぎは落ち着きそうですか？見たところ、大きな事故は起きていないような気がしますが。」

玉子は話を今日のことに戻した。空間制御プログラムのハッキングの責任を一郎に追及しても仕方ないと思ったのだ。

「確かに事故は起きていないが、古い空間が消滅する気配がない。今回は今までと違って古い空間が自然発生しているわけではなく、あくまで人為的な要因によって発生している。もどかしいが古い空間が発生するのも消滅するのも、プログラムを起動しているハッカーの意志に基づいている。僕らのしているフォーマットは本当に応急的な気休めにすぎないかもしれない。」

一郎は管理室の業務に限界を感じ始めていた。やはりプログラムを操作しているハッカーを捕らえないかぎり、根本的な解決には至らないと思った。

「そんなはずはありません。管理室が断固として古い空間をフォーマットする姿勢を見せれば、宗助、いえ、そのハッカーの思惑通りにはならないはずです。実は私がここに来たのはこのことをお願いしようと思ったからです。どうか私を、もう一度空間管理室に戻していただけないでしょうか？」

玉子は改めて鋭利なまなざしで一郎を見た。

「…君に戻って来てもらえるのはありがたい。しかし今の僕は前とは違う。僕に君を受け入れるかどうかという決定権はない。それはもう一度本社に確認しなければいけない。」

「でも、先日室長は言ってくださったじゃないですか。私が希望すればまた空間管理室の業務に戻していただけると。」
それは実験が行われる前、大黒市に何も異常が起きていなかった時の話だった。
「しかし今は状況が違う。本社はこれ以上騒ぎが広がらないようにと考えている。もちろん僕は君のことを評価しているが、本社が以前の君の行動をふまえてどう判断するか、こればかりは僕にもわからない。」
一郎もできれば玉子を管理室に戻したかった。しかし今の一郎は本社の意向に従わざるをえなかった。
「そんな…わかりました。では本社の決定には従います。今すぐにでもそのことを確認してください。ただし1つだけお願いしてもいいですか?」
「何だ?」
「サッチーのアクセスコードをお教え願いませんか?」
訪ねた玉子は、うつむいたまま眉間にしわを寄せて何かを考えるようだった。
「な、なんのために?」
一郎は少しイヤな予感がしながらも聞き返す。
「私が空間管理室に戻ることを本社が認めなかったその時は…」
そして玉子は顔を上げた。
「私がサッチーをハッキングします。」

#11　崩壊！大黒市　part4

メガマス本社も当然のことながらこの日の騒ぎの対応に追われていた。特に電脳ナビシステムのダウンは致命的な事故につながりかねなかったが、本社の迅速な対応に大きな事故は起こることなく、交通に関してはようやく一段落ついたといった感じだった。この後は空間管理室に大黒市の安全を託し、本社はマスコミへの対応やハッカーの逮捕について話し合わなければならない。そのために社長の桝田は会議室にできるだけの幹部を集め、緊急の幹部会議を開く手配をした。

「しっかし、派手にやってくれてますね。まあ、これを大黒市でやってくれたことは不幸中の幸いだったんじゃないですか？」

会議室に一番乗りし、大きな窓から霧の立ちこめる大黒市を一望しながら神崎が言った。神崎研究開発部本部長は、一郎の後を継いでプロジェクトの責任者を務めている。会議室には神崎と社長の桝田、情報取り次ぎ役である香川の３人がいた。

「まるで他人事ですね。わかっていらっしゃるとは思いますが、あなたがプロジェクトの責任者として今回のことも収拾をつけなければいけないんですよ。」

少しムッとしながら桝田が言う。対応を誤ったり、大事故が起きれば会社の存続も危うくなるので自然と神経質にもなった。何より神崎がプロジェクトの責任者の地位を一郎から奪い取ったことに満足そうだったのが桝田は不満だった。

「わかってますよ。で、集合をかけた幹部が揃うまでにどのくらい時間がかかるんだね？」

神崎は長机に座らずに脇で立っていた香川に訪ねた。

「はい。みなさん各部署での対応もありますし、あと３０分は必要なんじゃないかと。」

「そうですか。じゃあ社長。とにかく大まかなことだけ確認してお

きましょうか。時間もないことですし。」
香川の答えを聞いた神崎は左腕の高級腕時計を確認し、桝田に提案した。
「そうですね。ではまずマスコミ対策から。」
桝田も神崎と向き合って話を始める。神崎のことを快く思っていないとはいえ、仕事に私情をはさむことはできない。
「社長はどのようにお考えですか？まさかここで真実を打ち明けようとは考えていませんよね？」
神崎が鋭い視線を向ける。メガマスはまだ夏の一連の事件の真実も公表していなかった。宗助が首謀者である可能性が高い以上、今回のことを公にするなら、それに関連してこれまでの真相を打ち明けなければならなかった。
「もちろん、いずれはそうしたいと考えています。しかし今はその時期ではありません。少なくとも犯人を捕まえるまでは真実は伏せておいた方がいいでしょう。大黒市の空間は謎のハッカーに支配されているなんて、市民を不安に陥れるだけですから。もちろん、それも大事故が起きなければの話ですが。」
桝田は以前のメガマスのように真実を隠蔽するつもりはさらさらない。しかし夏の事件以来、メガマスの不祥事を嗅ぎ付けようとしているマスコミにつけいるスキを与えてはならないとも考えていた。メガマスの信頼が揺らぐ中、次にマスコミに攻撃されればそれこそ致命傷になりかねない。
「賢明な判断だと思います。しかしそうなるとマスコミを含む世間を欺けるようなカバーストーリーを流さなければいけません。それについては？」
神崎が手を組み合わせながら言った。
「難しいところですが、サーバーの不具合とごまかすしかないのでは？」
「しかし、サーバーは大黒市だけでも無数に存在します。つまり大黒市の空間のサーバー全体が不具合を起こしたと、そういうことで

すか？」
神崎が桝田に訪ねる。
「ええ。正直この他に思いつかないのですが。」
少し困ったように頭をかきながら桝田が言う。しかし反応を見ても神崎がそれにうなずくことはないだろうなと思った。
「わかっていらっしゃるとは思いますが、電脳空間を制御するサーバーはすべて電脳局の管轄しています。それはこの大黒市とて例外ではありません。つまり社長の論法でいきますと、今回の件のすべての責任は電脳局にあると言うようなものですよ。電脳局がそんなウソに乗っかってくれるわけがないじゃないですか。」
あきれたような口調で神崎が桝田に言う。
「ですよね。しかし他に思いつかないもので。では神崎さんには他にアイデアが？」
「一応。社長は反対されるかもしれませんが話だけでも聞いてください。今回の件は、すべて謎のハッカーの仕業と公表します。」
神崎の言葉に桝田は驚いた。
「しかし、それは真実じゃないですか。神崎さんもここで真実を公表するつもりはないんでしょう？」
「もちろん真実は公表しませんよ。こちら側はあくまで、謎のハッカーが空間を歪めるプログラムを使っているとだけ公にします。もちろん、それが我々メガマスが開発したものだということは一切伏せて。」
桝田には段々神崎の思惑が見えて来た。メガマスに一切の傷をつけずに事態を収拾することを神崎が考えていることを。
「つまり、あくまで我々はただの被害者を演じるということですか？そのプログラムは犯人が組んだものとして、犯人を捕まえた時はその犯人とバックにある組織にすべての責任をなすりつけると。」
「そうです。そして我々は被害者を演じるとともに、この街の安全を守る英雄になればいいのですよ。とにかく管理室には事故の起きないようにしていただいて。」

神崎の計画がすべてうまくいけば、メガマスにとっては最良の結末を迎えられる。しかしその計画には問題点もあることに桝田は気づいた。

「今回はそれで丸く収まったとします。しかしですね、いざ我々が一連の真実を公表する時にそれでは矛盾が起こるんじゃないでしょうか？我々は過去の反省から小此木医師と猫目技師の研究を引き継ぎ、その過程としてあの空間制御プログラムを開発しました。猫目技師の功績を公のものにするなら、このことを除外はできません。つまり我々は空間制御プログラムを開発した張本人であることをその時発表しなければならないのですよ。」

神崎の計画に従えば、メガマスは空間制御プログラムとの関係を否定しなければならない。それでは真実を公表する際に食い違いが起こるというのだ。

「そこは真実の公表時に多少の脚色をすればうやむやにできるはずです。社長が真実を包み隠さず公表したいというのは理解していますが、こんな事態になった以上、理想を求めているばかりでいけないと思いますよ。」

神崎の言葉に、桝田は深く考え込んだ。もとより神崎もすぐに桝田が決断するとは思っていないらしく、眉間にしわを寄せる桝田を横目に優雅に葉巻に火をつけた。そこで2人のやりとりを聞いていた香川のメガネ電話が鳴り響いた。香川は2人に「失礼します。」と言ってその電話をとる。

「はい。あ、小此木さん？どうかしましたか？」

その名前に反応した神崎はギロっと香川の方を見た。

「神崎さんに取り次いでもらいたい。管理室の人事のことで少し相談があると。」

電話の向こうで一郎が言う。

「神崎本部長なら近くにいらっしゃいます。」

「ああ、じゃあ簡単に言うから伝えてくれ。前に管理室にいた原川玉子を管理室に戻してやりたい。今管理室は人手が足りていないし、

経験豊富な彼女なら必ず力になるはずだと。」
香川は一郎の申し出をそのまま神崎に伝えた。それを桝田も聞いていて玉子のことを思い出した。実験の時にも桝田は玉子と顔を合わせている。
「彼女ですか。いいんじゃないですか？経験もあることですし、人手が足りないのなら。それに彼女は猫目宗助と知り合いなんじゃなかったですか？今回の真相を知ったら、彼女は誰よりも燃えるんじゃないでしょうか？」
桝田が神崎に訪ねる。桝田も今回の騒ぎを落ち着かせるには玉子の力が必要だと考えた。
「待ってください。彼女は一度サーチマトンの違法改造と暴走で管理室を解雇になっているんですよ。それでマスコミにも取り上げられたこともあったじゃないですか。さっきも言ったように、これ以上マスコミにネタにされるようなことを起こしてはならないのです。プロジェクト責任者としてそれは認めることはできません。」
神崎は断固として玉子を戻すことには反対する構えだった。
「そんな悠長なことを言っても、まずはこの騒ぎを早急にしずめなければそれこそマスコミのネタになりますよ。」
「そうは言いますが、彼女の力でこの騒ぎをしずめられる保証はありません。むしろ騒ぎが大きくなるだけだと思います。人手が足りないのなら本社の管理室職員を増援にすればいいだけです。小此木君にはそう伝えてください。」
神崎は桝田の言い分も聞かずに、プロジェクト責任者としての決定を下した。桝田にもある程度の根拠が無ければ神崎の決定を覆すことはできない。桝田も確かに神崎の言い分にも一理はあると思ったのだ。
「…わかりました。小此木さん、聞こえていましたか？原川玉子さんの復帰は認められませんでした。そのかわり本社の管理室職員を増援に派遣してくれるそうです。」
少し不服そうに香川が言う。神崎に言い返すことはできないが、香

川も神崎を気に入っていない1人である。
「…わかった。では増援は頼みますと伝えてくれ。」
「了解です。神崎本部長、小此木さんが増援をお願いしますと。」
香川はそこで電話を切り、神崎に一郎の言葉を伝える。それに神崎は静かにうなずくだけであった。そうして神崎は1つため息をついて再び桝田の方を向いた。
「社長。マスコミ対策について、ご決断しましたか?」
「…もう少し考えさせてください。他の幹部の方とも慎重に協議しないといけないことだと思いますので。」
桝田はまだ自分では決めきれなかった。神崎の計画を採用すれば、真実を包み隠さないという新たなメガマスの方針を曲げてしまうことにもなる。そうして会議室に一瞬の静寂が訪れたが、それを破るように1人の男性社員がバタンと会議室のドアをものすごい勢いで開けて入って来た。
「どうした騒々しい。」
神崎がその社員に辟易したように言う。
「社長!大変です。本社のコンピューターに犯人の犯行声明と思われるメールが送られてきました。」
「なんだって!?」
その報告に桝田と香川は声を合わせて驚いた。
「内容は!?」
「こちらがそれをプリントアウトしたものです。」
桝田にその社員が一枚の紙を差し出す。神崎と香川も桝田とともにその紙をのぞきこんだ。
「今朝からの騒ぎは、すべてお前達メガマスの開発したプログラムによるものである。これ以上騒ぎを大きくしたくなければ、我々の要求を実現せよ。一つ、このプログラムを開発したのがメガマスであることをマスコミに公表せよ。一つ、メガネに搭載されている量子回路の特許権及び販売権を株式会社コイルテクノロジーに譲渡せよ。一つ、　旧コイルス社の猫目技師の研究のすべてを公表し、メ

ガマスがその研究を略奪した事実をマスコミに公表し謝罪せよ。今日中に以上の要求の実現に向けてメガマスが動きを見せない場合、この街をさらなる混沌に叩き落とす。」

桝田はその紙に書かれた犯人の要求を読み上げた。

「1つ目と3つ目はわかります。しかし2つ目の株式会社コイルテクノロジーとはなんなのでしょう?そのような企業は存在しないはずですが。」

香川が桝田と神崎に訪ねる。

「おそらく、株式会社サイバーゲートウェイが設立したダミー会社でしょう。今回の事件でCGWがウラで糸を引いていることはわかっています。その名前からしても、旧コイルス社の残党が絡んでいると見ても間違いないでしょう。」

神崎が説明する。メガマスがメガネの量子回路の特許権と販売権をコイルテクノロジーに譲渡したとき、それを実質的に経営するのはCGWであるということだった。

「これはメールで送られて来たんですよね?発信元の特定は?」

桝田がこの紙を持って来た社員に訪ねる。

「発信元は幾重にも偽装されていました。現在調査を進めていますが、特定は難しいかと。」

その報告に、桝田は「そうですか」と肩を落とす。

「しかし社長。これではっきりしたじゃないですか。3つ目の要求にもある通り、これを送って来たのは猫目宗助で間違いありません。これで警察は猫目に電脳空間法2条2項違反で逮捕状が取れます。」

神崎が桝田に言う。電脳空間法2条2項は、プログラムなどにより空間を故意に歪める事を禁止した法令である。かつてダイチも金魚のイリーガルを育てた時に、この法令違反で逮捕されそうになった。

「そうですね。では警察に要請しましょう。とにかくこの犯行声明ににもある通り、今日がタイムリミットとなりそうです。なんとか今日中に猫目を逮捕できるよう、警察には非常線を張ってもらい、こちらは猫目宗助の居所の特定を急ぎましょう。香川さん、警察へ

の連絡をお願いします。」
「わかりました！」
桝田に指示され、香川は会議室を飛び出して行った。大黒市のどこかに潜伏しているはずの宗助を捕らえるため、警察とメガマスは臨戦態勢に入ろうとしていた。

#11　崩壊！大黒市　part5

「…了解しました。はい、失礼します。」
こちらも対応に追われる大黒警察電脳犯罪対策係。たった今直樹はメガマス本社の香川からの電話を受けたところだった。
「メガマスはなんて？」
その直樹の様子を見ていた久美子が訪ねる。
「先ほどメガマスに、空間制御プログラムを暴走させているハッカーと思われる人物から犯行声明がメールで送られて来たそうです。今それと同じ物をメガマスの方にこちらにも送信してもらえるようにお願いしたんですが、その内容からハッカーはやはり猫目宗助で間違いはないとメガマス社内でも判断されたそうです。」
直樹が電話の内容を伝えた。直樹達は昨日、宗助は大黒市内にいるとメガマスにも報告しており、双方はそこから考えても間違いはないと確信した。
「そう。ならすぐに逮捕状を取るということね。」
「はい。あとメガマスは僕たちに非常線を張ってほしいと要請してきました。」
非常線とは重大な犯罪が行われたときに、一定の区域に警官を配置して通行禁止や検問を行う処置のことである。
「非常線って、この人数よ。どうするの？」
電脳犯罪対策係は研修の久美子を入れても6名しかいない。それで大黒市内にどうやって非常線を張るというのか久美子は疑問に思った。
「メガマスの方は他の部署に協力を要請してもかまわないと言っていました。今回の件は交通事故の再調査とはまた別であるので、うちの部署だけ極秘裏に捜査を行う必要はないと。なんですが僕は大黒警察の他の部署と連携するのは少し考えものだと思います。」
「どうして？」

「犯人が猫目宗助だからです。メガマスは彼のバックにある組織に目星をつけているようなんですが、こちらにはまだ教えられないということなのでそれを聞くことはできませんでした。いずれにせよ彼が何の目的で誰のために動いているのかはわかりませんよね。」

直樹達の手元には現在の猫目宗助に関する情報はほとんどなかった。メガマスは本当に必要最低限の情報しか対策係に提供しないのだ。

「だからってなんで他の部署と連携できないの？」

「僕は2つの可能性を考えます。それは、猫目は無期謹慎の身にあるメガマスの旧幹部達と関わりがあるのか、それともないのかということです。もし猫目が旧幹部との関わりを持っていて、今回の事件も旧幹部達の策略によるものだとしたらどうなります？」

直樹の考えはこうだった。旧幹部は再びメガマス幹部への返り咲きを狙っていて現在の社長や幹部達を引きずりおろそうと考えていた。そこでまだ新体制の地盤が固まる前にメガマスの信用を揺るがせる大きな事件を引き起こす。それにうまく対応できなかったメガマスはさらなる経営危機に陥り、メガマスに融資をしている銀行はその立て直しに旧幹部達を再び元の地位に戻す。そのようなシナリオの中で猫目は旧幹部達の手駒として動いているのではないかというのだ。もちろん確証はない。しかしメガマスの調査も及ばないところでそのような策略が動き始めている可能性は十分あった。

「なるほど。交通事故の再調査も自由にできないくらい、今の大黒警察には旧幹部の息のかかった人間が目を光らせている。これが旧幹部達の策略なら、私たちが猫目を逮捕するのを絶対に阻止するはず。その中で素性も知れない他の部署に下手に協力を要請しても、逆に捜査を混乱させられるかもしれないっていうのね？」

久美子が眉間にしわを寄せながら言った。警察内に猫目の逮捕を阻止しようとする勢力があるかもしれない。そう考えると捜査はかなり難しくなる。

「ええ。そしてもし今回の件に旧幹部達が絡んでいないとしても問題は残ります。昨日もお話したと思いますが、猫目は僕たちが行っ

ている交通事故再調査における重要参考人です。もし旧幹部達が今日の騒ぎを知り、そしてその首謀者が猫目であることを知ったら…」

「もうひとつの可能性と同様、猫目を逮捕させまいとする力が警察の中で生まれるかもしれない。運良く猫目を逮捕できても、その取り調べは旧幹部達の息のかかった人間が執り行うなんてことになりそうね。」

どちらに転んでも、自分たちの置かれている状況は好ましくないと久美子は思った。目の前で起こっている事件を全力で解決しにいくのか、後を考えて慎重に行動すべきなのか、ここは判断の難しいところだった。

「どうするつもりなの?」

久美子は直樹の決断を訪ねた。若いがこの部署を引っ張って行くリーダーとしての直樹の資質を確かめようとした。

「…そうですね。とにかく僕は他の部署との協力は考えていません。失礼な話かもしれませんが、旧幹部の息がかかっているかどうかわかりかねますので、協力は避けた方が無難かと思われます。その代わりメガマスの方と連携しようを考えています。この電脳犯罪対策係はおそらく旧幹部達の息のかかった人間はいないでしょう。同じ部署の人を信用しないとさすがにやっていけないので。そこでこの対策係の6名のうち1人はここで連絡係になってもらいます。後の5名はメガマス社員と組になって市内を巡回します。探すのは猫目が乗っていたという黒いスポーツカーです。検問や通行禁止をしてもこの規模では効果的ではないと思います。猫目は大黒市においては土地勘がありますので。」

直樹は対策係の警官とメガマスの社員で計5組を作ろうと考えていた。対策係の警官がいれば猫目を発見次第逮捕できる。

「メガマスがそこまで協力的になってくれるかしら?」

久美子が訪ねる、これまでのメガマスはことごとく対策係に非協力的だった。

「なってくれるでしょう。というより猫目が逮捕できなくて困るこ

とになるのはメガマスです。今言った事情を話せばわかってくれると思います。」

直樹が言って久美子もそれで納得した。

「わかったわ。それでいきましょう。でもまあ、他の部署と連携してもしなくても、どちらにせよ逮捕できる確率は高くはないでしょうね。猫目も捕まらない自信があるから大黒市に戻って来たんでしょうし、おそらくどこかで愉快犯のようにこの状況を眺めているんでしょうね。」

「そうですね。でも僕は逮捕できる可能性は捨てたものじゃないと思います。こちら側も切り札をきりましたので。」

直樹が自信ありげに言う。久美子はその言葉をいぶかしんだ。

「切り札って？」

「猫目宗助の弟、猫目タケル君です。先ほど、昨日ここに来てくれた原川君達から連絡がありまして、タケル君にも協力をあおぎたいと。それを認めたところです。」

ハラケンからの電話があった時直樹はその申し出を許可するのをしぶったが、よくよく考えれば悪くないかもしれないと考え直したのだ。

「それ竹下君の独断？いいの？またメガマスにも知らせないでそんなことをして。それに結構あの子達をアテにしてるのね。」

「ええまあ。あの子達はその辺にいるメガネの子ども達とは違うと思います。去年の夏の事件を経験していますし、そしてこんな状況にある大黒市を自分たちの手でなんとかしたいという責任感もあります。大人に対してもまったく引かない物言いは本当に子どもらしからぬしたたかさがありますしね。おそらく電脳のことを理解していない警察官よりも期待できると思います。それにタケル君は、あの事件の調書を読んだ限りでは本当に兄思い、いや家族思いな子です。その兄がまた過ちを犯そうとしていることを知ったら、必ずそれを阻止したいと思うはずです。それに誰よりも長い時間を共有した兄弟であるので、猫目宗助の考えを一番読めるのはタケル君だと

思います。」

直樹はフミエの電話を受けてから子どもだからといってその扱いを低くしてはいけないなと思い始めていた。むしろこの街の電脳においては子ども達の方がはるかに頼りになると思った。電話でフミエに言われたように、いつも事件を起こすのは大人達であり、子ども達はそれに巻き込まれている。子ども達はそれに気づいているからこそ、自分の身を自分で守ろうと考えている。フミエにいたってはこの街は自分たちで守ると宣言している。一方の大人達はというと、社の損益を考えて真実を公にしないメガマスや、自己の利益しか顧みず職務を全うしない旧幹部達の息のかかった警察官など、打算的で卑怯な人間ばかりである。それならどちらを信用するかというと、直樹は断然子ども達の方をとった。元々メガネの子どもであった直樹だからこそ、子ども達の可能性に賭けてみたいと思ったのだ。

「ふーん。でも確かに私たちがこれだけ行き詰まっている一方で、子ども達は自由に動けるしね。夏の事件を解決に持っていったっていうあの子達なら可能性もあるかもしれないわね。」

久美子も昨日ヤサコ達に会ってそれもうなずけるなと思った。正直であり、直樹の言うようにそれでいてしたたかといった印象を持っていた。

「そうなんですよ。ただ夏の事件の時も彼らはかなり危ない目にあってますからね。それを経験しているからこその強みもありますが、彼らの安全を守るのは僕たちの役目だと思います。今後は彼らとも連絡を取りながら動いていこうとも考えています。」

「そうね。じゃあ捜査方針はそんなところで。とりあえずさっき竹下君が言ってた市内巡回の件をこの部署の人たちにも話して、メガマスにも連絡をとりましょう。」

直樹の考えに久美子も同意した。その後直樹はメガマスに再度接触し、事情を考慮したメガマスは対策係との連携を認めた。そうして直樹や久美子達はメガマス社員とともに市内巡回に出向いていった。

#11　崩壊！大黒市　part6

午後に入り、直樹達の期待を背負ったヤサコ達は大黒駅前ロータリーにいた。連絡を取ったタケルは午後からなら会えるということで、それを迎えに来たのだ。タケルは今大黒市隣の弁天市に住んでおり、大黒市には電車を使ってやって来る。タケルには呼び出した時点で今回の事情を伝えていない。やはりタケルにとってもショッキングな事だろうと思い、電話ではなく直接会って様子を見ながら伝えようと思ったのだ。ヤサコ達がいる駅前ロータリーはすでにフォーマットが徹底されたのか、白い霧はほとんど上がっていない。大黒市全体でも管理室の努力の成果か古い空間はかなり減少している感じだった。

「ん？ちょっとこれ見てよ。」

昼ご飯のコンビニのおにぎりをぱくつきながらフミエはネットで今回の事件の情報を集めていたのだが、そこで何かを見つけたらしい。すぐにハラケンとヤサコにもウインドウを出して示した。

「…通販電脳駄菓子屋だね。メガシ市場？」

ハラケンはそのサイト名に引っかかった。

「うん。満天堂でも大黒屋でもない通販電脳駄菓子屋。これも以前にちょくちょく見かけたサイトだけど、おそらくこの業界の大手３社と呼ばれたうちの１つでしょうね。」

フミエは大手３社のことはアキラから聞いていた。満天堂、メガシ市場ともう１社である。かつての大黒屋はその３社の共同体がウラで運営していたということになる。

「これってダイチ君達とは関係のない駄菓子屋？」

ヤサコがフミエに訪ねる。

「おそらくね。アイツらは満天堂と組んでるし、今更新しい相手と取引をするメリットもない。だからこの駄菓子屋は今日の古い空間の大発生で出現したメタバグを原料にしてまた営業を再開するつも

りじゃないかしら?」

「手を回すのが早いね。今まではその大手3社の中から満天堂が他2社を出し抜いてダイチ達と組んで利益を上げていた。でもこの騒ぎに便乗してメガシ市場は負けじと営業を再開する。この調子だと残る1社が営業再開するのも時間の問題か。こうなると単純に営業利益は3分割。また違法ツールの値下げ競争が始まるのかな。ダイチ達も焦ってるだろうね。」

ハラケンの言う通り、これまでは満天堂に競争相手もいなかったので以前と比べても武器の値段は高く設定されていた。しかしこうなってくると満天堂も値下げに踏み切らなければならなくなる。

「でも、こうなってくると問題はダイチ達じゃなくなるわね。私たちコイルレジスタンスの目的はダイチ達を廃ビルから追っ払ってメタバグを消去すること。でも廃ビルには昨日の時点でメタバグはなくなっていた。でもまあ、今日はどうなってるかわからないけど、街全体がこの調子だからまたあの場所にもメタバグは復活してるかもしれないわね。」

フミエが考え込む。昨日廃ビルでメタバグが確認できなかったことから、昨日の夜の時点でフミエは早くもコイルレジスタンスの目的は失ったかと思っていた。

「それならアキラ君に聞いてみれば?私たちに協力してくれるんでしょ?」

ヤサコがフミエに言った。アキラは今コイルレジスタンスとのスパイとなっている。

「ああ、そうだった。アイツのこと忘れてた。じゃあハラケン、アキラにメールを送って。」

「なんで僕が?」

「さすがに私とアキラがメールをやりとりしてるのがバレたら、アイツらだってアキラを疑うかもしれない。アンタだったらまだアイツらも安心すると思うから。」

フミエの言葉に果たしてそうなのかと疑問に思いつつ、ハラケンは

言われた通りアキラに廃ビルのメタバグの有無を確認するメールを送った。そして数分後、アキラからメタバグ有りという返信があった。

「やっぱりね。ここで一度確認しとくけど、私たちの目的はダイチ達を倒してあの廃ビルのメタバグを消去し、違法ツールの流出を阻止してこの街から電脳戦争をなくすことだった。」

「うん。でも今日の事件で状況が変わったね。ダイチ達の元にもまだメタバグはあるみたいだけど、たとえ僕たちがダイチ達からあの場所を取り返しても、それは目的の一部を達成したにすぎない。また新たに出現したメタバグのおかげで、新しい通販電脳駄菓子屋も営業を始めた。こればかりは僕らに阻止できないから、この街から電脳戦争がなくすことは難しくなったね。」

フミエとハラケンがそれぞれ今の自分たちが置かれている状況を整理した。

「でもコイルレジスタンスって、半分フミエちゃんがダイチ君達に果たし合いの時の仕返しをするために始めたことだから、フミエちゃんとしてダイチ君達を倒せばオッケーなんじゃないの？」

ヤサコがフミエに訪ねる。元を辿ればそうなるのだが、フミエはそれだけを考えているわけではなかった。

「あのねえ。私は自分だけのことを考えて行動してるわけじゃないの。ちゃんとこの街のことを考えているのよ。だいたい昨日Cレックスに平和な街を作るって公約したのに、コイルレジスタンスのリーダーである私がそんな気構えでいいわけないじゃない。ダイチ達を倒すのもこの街の平和のためなの。わかった？」

「ですよね。変な質問をしてごめんなさい。」

ヤサコはフミエの崇高な考えに、愚かなことを聞いてしまったと謝った。

「でもそれを実現するには、この街で起こっている事件を根本から解決しないといけない。そうしないとこの街からメタバグがなくなることはないからね。」

メガマスや管理室、電脳犯罪対策係も総動員でこの事件の解決に努めている。逆に言えば大人がそれだけ苦労しているのに、自分達は何ができるんだろうとハラケンは思った。

「結局はそこね。とにかくタケル君の協力なくして始まらないと思うし、とりあえず詳しいことはタケル君と相談しながら決めましょう。」

フミエが2人に言った。こうしている間にもどんな調査をしていくか考えておきたかったが、なかなか妙案は浮かんでこなかった。

「そういえば私たちの武器は？昨日Cレックスの人に買い付けを頼んでなかった？」

ヤサコがフミエに訪ねる。ヤサコ達は満天堂にも武器を売ってもらうこともかなわなく、昨日までは一切武器を手に入れる手段がなかった。そこでフミエは昨日Cレックスと同盟を組んだ時に、その武器の買い付けを依頼しておいたのだ。

「ああ。それはさっきCレックスにメールして必要なくなったって伝えておいたわ。私たちには拾ったメタバグがあるし、後でメガばあのところに持って行きましょう。」

ヤサコ達は午前中、街の調査をするかたわら落ちているメタバグを拾っていた。そのメタバグを原料にまたメガばあにメタタグを練ってもらうのだ。

「んと、またメール。タケル君からだ…もうすぐ着くって。」

ハラケンはメガネに届いたメールを確認した。すると弁天市方面からの電車がちょうどホームに入って来たのが見え、それに乗っているんだろうと思った3人は改札まで迎えに行った。そして改札を出る人ごみの中にタケルを見つけたヤサコは手を振り声をかける。

「タケル君。ここよ。」

「ヤサコ。それにハラケンとフミエも、久しぶり。卒業式以来会っていないから半月ぶりくらいかな？」

タケルは最後に会った時とほぼ変わらない様子で、ヤサコ達の輪の中に加わった。ハラケンやフミエも「久しぶり」と声をかける。

「それより大黒市は今大変みたいだね。今日のニュースは大黒市のことで持ち切りだったよ。」
タケルは早速今日のことを3人に訪ねた。もちろんタケルはニュースで報道されている以外の情報は知らされていない。
「そう言えば結構テレビカメラもよく見かけたよ。これだけの騒ぎとなったらマスコミも騒ぎ立てるよね。僕たちはその報道が流れる前から街の様子を色々と調べ回っていたんだけど。」
ヤサコ達3人は報道関係者は街で見かけたが、ニュースを見ていないのでどのくらいの規模で報道されているのかわからなかった。
「そういえば3人はコイル探偵局のメンバーだったね。それで今回のことも調べてるんだ。色々大変なんだね。」
タケルが3人の労をねぎらう。タケルはまたメガばあの指示かなにかでヤサコ達が動いているのだと思った。
「…まあ、今はメガばあ傘下のコイル探偵局じゃなく、コイルレジスタンスとして活動してるんだけどね。」
「コイルレジスタンス？組織名かえたの？」
タケルがフミエに聞き返す。
「その辺はいろいろあって、またおいおい説明するよ。」
ハラケンが言った。自分たちコイルレジスタンスがダイチ達の黒客と真っ向から対立していることなど、タケルには想像もつかないだろうなと思いながら。
「そうなんだ。で、話は戻るけど、今の大黒市の様子はどうなの？君たちなら実際にその目で見て来たんだから、より詳しい事が聞けると思ったんだけど。」
タケルが真剣な表情になって3人に訪ねる。
「今はかなり落ち着いてきているみたい。幸い大きな事故も起きてないしね。」
ハラケンが大まかに現状を説明する。
「うん。事故はないっていうのはニュースでもやってたよ。でも電脳ナビシステムがダウンしたっていうのに、よく回避できたんだね。

」

タケルはそれに感心していた。それだけメガマスや管理室の対応が素早く正確であったとニュースでは流れていたのだ。

「まあ…そう褒めるところでもないんだけどね。メガマスにとってこの事態は想定の範囲内だったんだから。」

「えっ？」

フミエの言葉にタケルが不思議がった。

「タケル君。実は僕たち、今大黒市で一体何が起きているのか知ってるんだ。ニュースでも報道されることはないであろう、大黒市民のほとんどが知らないような情報をね。それを伝えるためにわざわざ来てもらったんだ。」

ハラケンが声を細めた。

「なんでそんなことを君たちが？」

「それも後できちんと説明するわ。とりあえずこの話をするにはここは人が多すぎる。場所を変えましょ。」

フミエの言葉にタケルは話の重大さを感じ静かにうなずいた。一行は駅前を離れ、鹿屋野神社に向かうことにした。

#11　崩壊！大黒市　part7

　鹿屋野神社は午前中こそメタバグ集めの子どもでにぎわっていたが、午後になってからは出尽くしたのか人もまばらになっている。ヤサコ達とタケルは拝殿前で立ち止まり、人の姿がないか確認した後に話を切り出した。

「タケル君にとっては少しショッキングな話かもしれないけど、心して聞いてね。さて、何から話したらいい？」

腰を据えて話を始めようと思ったフミエだったが、これまで数々の出来事があったのでどう順序立てて話し始めようか迷った。とにかくどの出来事がどの出来事と絡んでいるのか見当もつかないので、何を省略していいのかもわからなかった。

「とりあえず最初から始めたら？長くなるのは必至で全部タケルが理解できるかも不安だったが、自分達でももう一度整理する意味ですべてを話すことにした。

「わかった。じゃあよく聞いてね。あれは卒業式から3、４日過ぎた時のことだったわ。いや、卒業式の前の日の話もしておこうかしら。」

「そこまでさかのぼるんだ。」

タケルがヤサコ達と離れる前から事件の伏線はあったといえる。それは長くもなるなとタケルも覚悟した。

　フミエはまずハラケンとメガマスが中心になって訴訟を起こすことから話を始めた。次にダイチがハッキングに遭った事件、メガばあが話していた封印された暗号ＩＬコードのこと、廃ビルでメタバグの鉱脈を見つけたことを話していった。そしてその次の日にメガマスで実験を行ったこと。ここはタケルも思うところがあった。メガマスがヤサコの祖父宏文とタケルの父が共同で進めていた研究を今のメガマスが引き継いで完成させる。そしてかつて横取りをした

タケルの父の功績を世間に公表し、メガマスはそのことを謝罪する気があること。もちろんそれはタケルにとっては喜ばしいことでもあった。と同時にメガマスが開発した空間制御プログラムも気にかかった。

「まさか、今日の事件はそのプログラムの暴走？」

「その想像は間違っていないけど、ウラにはもっと複雑な事情が絡んでいるようなの。次の話にいくわね。」

フミエはあくまで順番に話そうとした。話がとびとびになると後で混乱するからだ。そうしてフミエはその次の日の黒客との果たし合いのこと、そしてその果たし合いで起こった事故によって負けになったこと（もちろん認めていないが）、その日からダイチ達とは完全なる敵対関係に変わったことを話した。

「それはダイチ達も悪いね。それにらしくないよ。ダイチならそこで再戦してやるって言いそうなもんなのに。」

「だしょ？まあアイツらにもなんか事情があるみたいだけど、それでも卑怯きわまりない行為であることは違いないわ。大体アイツらが再戦を望まなかったのは、内容はほとんどこっちが押していたからだけどね。」

フミエはあの時の話になり、また怒りの感情が蒸し返したようだった。タケルにしてもそれはダイチ達に非があると思った。

「話脱線してるよ。」

ハラケンが一つフミエに忠告する。気を取り直したフミエは、その次の日からダイチ達へのリベンジを考えるようになったこと、そのリベンジへの準備として廃工場にメタバグ探しに行ったときに心霊現象を体験したこと、そこからフミエが寝込んでいる間に黒客はウラで大黒屋なるものを始め、市内に電脳戦争の戦火を広げ始めたことを説明した。

「うわ。ひどい話だねそれ。ダイチ達ってそんな悪いヤツだったの？」

「元は単なるいたずらボウズだけどね。いかんせん頭が悪いから周

りに流されてここまで来たみたい。どうも今の黒客はガチャギリの仕切りになっているみたいだから、ガチャギリに何か事情があるとは思うんだけどね。まあ、そんな腐れダイチ達を打倒するために旗揚げしたのがコイルレジスタンスってわけ。」

フミエはコイルレジスタンスを、ダイチ達を倒すための大黒市内の電脳グループとの連合だと説明した。そんな活動をしている中で昨日、警察の直樹達から重要な情報を手に入れた。ここからがタケルにとって最も関係のあるところだった。

「昨日の警察の人の話では、タケル君のお兄さんは今、大黒市にいる。」

「に、にいちゃんが！？」

フミエが一つ息をついて間をおいてから静かにそのことをタケルに告げる。もちろんタケルがそれを聞いて驚かないはずがなかった。

「それだけじゃない。今日の大黒市の事件は、タケル君のお兄さんが起こしているらしいんだ。」

続いてハラケンができるだけ感情を抑えた口調で言った。

「…なるほど。それでわざわざ僕を呼び出したんだね。」

宗助のことを告げられて最初は戸惑いを隠せなかったタケルだったが、少し間をおいて落ち着いた様子でつぶやいた。

「意外と冷静なのね？」

そのタケルを見ていたヤサコが不思議そうに訪ねる。

「…まあ。ハラケンから電話があった時から何となく感じていたよ。奇しくも大黒市で事件が起こっている時に僕を呼び出すなんて偶然とは思えなかった。だから多少の覚悟はしていたんだ。」

「…そうなんだ。イヤな質問かもしれないけど、タケル君はお兄さんのこと、今はどう思ってるの？」

タケルにハラケンが訪ねる。覚悟をしていたとはいえ、タケルにとってはショッキングなことだろうとハラケンは思った。しかし自分たちに協力してもらうには、タケルにこの現実を受け止めを乗り越えてもらわなければならない。そのためにタケルの本心を聞こうと

したのだ。
「難しい質問だね。僕たちは互いに残されたたった1人の家族だった。だから僕は兄ちゃんとまた元通りの兄弟に戻りたいと思ってる。でも、兄ちゃんは夏の事件でヤサコやイサコのことを狙い、そしてどこかに逃げていった。もちろんそのことを兄ちゃんには償ってほしいと思ってる。ましてやこれ以上罪を重ねてほしくはない。だから、兄ちゃんをできることなら兄ちゃんを止めたい。君たちの話が本当なら、兄ちゃんのメガマスへの復讐なんて意味もないことだ。いや、もともと復讐なんてものが間違っていると思うけど。とにかく僕は夏の事件で、兄ちゃんと決別することになった。そしてもう一度元通りの兄弟関係を築き直すため、僕は兄ちゃんを止める。なんとしても。」
タケルの力強い言葉に、ヤサコ達はもはやこれ以上自分たちがタケルに頼みこむこともないと思った。タケルの意志とヤサコ達の意志は合致し、これから共に宗助を止めるために動いていこうという方向性が出来上がった。
「オッケー。それは私たちの目的と同じ。むしろ私たちがタケル君に協力する。これからどうにかしてお兄さんを止めに行きましょう。」
「ありがとう。よろしく頼むよ。」
フミエの言葉にタケルがうなずく。そうして改めて3人はタケルと握手を交わした。
「で、こっからが難しいわけよ。タケル君がいるなら捜査は進めやすくなったわ。だからと言って管理室や警察でさえ手をこまねいている状況で、どうタケル君のお兄さんを探しだすのか。まずはタケル君の意見を聞きましょ。」
フミエが一度仕切り直した。これからの捜査方針を決めるわけだが、タケルがいるとはいえ前途多難であることは間違いなかった。
「そうだね・・・とりあえずさっきの話から考えると、兄ちゃんは大黒市のどこかにいることは間違いない。兄ちゃんは何かを起こす

ときいつも現場にいないと気が済まないタチだから。現場にいて状況を把握することで、正確な判断が下せるって言ってたし。」

「なるほど。でも大黒市にいてくれないとさすがの私たちでも追うことはできないから、それは前提としてあるものと考えましょう。もっと場所を絞り込める？」

フミエがさらにタケルに訪ねる。

「うーん。大黒市で一番霧が深かったエリアはどこ？」

「それは…中津交差点から大黒駅にかけての一帯かな。ここはやっぱり大黒市内でも人がよく通るし、幹線道路もあるから電脳ナビシステムをダウンさせるのも好都合だ。」

タケルの質問にハラケンが答えた。それらについては午前中に集めたデータを参照にしている。

「そうか…なんだろうな。確かにそれはこの街を混乱させる上では効果的な場所なのかもしれないけど、どうも兄ちゃんらしくないな。」

「らしくないって？」

ヤサコが考え込むタケルに聞き返す。

「うん。なんか今日の事件全体についても言えると思うんだけど、手ぬるい感じがするんだ。兄ちゃんはかつてミチコさんを使って世界中のイマーゴの子どもを意識不明にさせようとしていた。メガマスを陥れるつもりなら、電脳ナビシステムをダウンさせるだけじゃなく、もっと派手なことをするはず。」

タケルの言葉に、ヤサコ達は悪い予感が頭をよぎった。これよりも大黒市を混乱させる方法がある。

「つまり、今朝から起こっていたことはほんのデモンストレーション。お兄さんの目的は他にあるってこと？」

「うん。今朝からの事件は管理室や警察の目を欺くためか、メガマスとの交渉を優位に進めるための見せしめってところかな。兄ちゃんは夏の事件の時もずっとメガマスをゆすり続けていた。目的が同じなら、今回もまたメガマスとのなんらかの接触をしているはずな

んだ。」
ヤサコ達はさすがにタケルが一緒なら心強いと思った。まるで宗助の行動を把握している。タケルの話が本当なら、誰も宗助の思惑を知らないまま大黒市はさらなる混沌へと導かれるところだった。
「じゃあその真の目的っていうのを阻止することが重要になってくるわね。その話通りになったなら、今度こそ事故が起きてしまう可能席も高いわけだし。」
「そうだね。逆に言えば兄ちゃんを確保できるチャンスはここしかないと思う。兄ちゃんがそれを行うために大黒市に来ているのだとしたらなら。」
ここで捜査方針がほぼ決まった。宗助の真の目的を探り、その実行を阻止すること。タケルにとってはその時が宗助に会える一度きりのチャンスになるかもしれなかった。
「じゃあとりあえず、今の話を直樹さんに伝えた方がいいんじゃない？そうしたら警察の方も動きやすくなると思うし。」
「そうね。じゃあハラケン、連絡よろしく。」
ハラケンの提案にフミエが了承し、ハラケンは直樹に今の話を伝えた。それは直樹にとっても有力な情報にもなり、警察の捜査方針としてもそちらに切り替えることを検討することになった。
「じゃあ、その真の目的っていうのを考えないといけないわね。とりあえず今朝からの事件の流れをもう一度整理してそこから推理してみましょうか？」
「そうだね。」
そうして４人は推理を始めることにした。ところがその時、拝殿横の茂みの中でガサガサという音が鳴った。何だろうと４人が視線をそちらに向けると、そこには黒い野球帽を深くかぶったメガネの少年が立っている。帽子のせいで表情は見えないが、こちらをじっと見ているのはわかった。
「おい。お前達はコイルレジスタンスだな？」
少年の方から声をかけてきた。その少年はよくよく見てもヤサコ達

やタケルにも見覚えがなかった。
「何なのアンタ？何でその名前を知ってるの？」
フミエが訪ね返す。コイルレジスタンスという名前は昨日から使い始めた。それを名乗ったのはCレックスだけなので、そこまで早く浸透しているとも思えなかった。
「質問しているのはこっちだ。お前らはコイルレジスタンスだな？」
少年は乱暴にまた聞き返した。
「ああ、そうだけど。何か用でもあるわけ？」
フミエも1つ舌打ちをして答える。この感じの悪い少年は何者なのかと4人は思った。
「おかしいな。話では3人のはずなんだが。まあいい。なら消えてもらおうか。」
少年はそう言うといきなりミサイルを撃って来た。いきなりの展開に一同は焦ったが、そこは電脳戦に慣れた4人だけあってギリギリのところでミサイルをかわした。どうやら撃って来たのは追跡くんではなかった。
「何なのアンタ？こっちは丸腰よ！いきなり何してくれてるの！？」
フミエの言う通り、今の4人には武器はおろか鉄壁すらなかった。
「丸腰？そうか。なら楽に片付くぜ。おいみんな、出て来てもいいぞ。」
少年がそう言うと周りの茂みからもう3人の少年が現れてヤサコ達を囲む。その計4人はいずれも色違いの野球帽を深くかぶっていて、どこか異質な集団に見えた。
「どういうこと？さてはアンタ達、ダイチのさしがねなの！？」
「ダイチ？」
最初に現れた黒い野球帽が聞き返す。どうやらその名前を知らないらしい。
「なら、黒客の仲間なのか？」
ハラケンが聞き方を変えて訪ねる。
「少し違うな。まあお前らがオレたちの正体など知る必要はない。

おい、やれっ！」
黒い野球帽が仲間に指示を出し、一斉に攻撃態勢をとった。
「まずい、話が通じる相手じゃない。しかもこっちは武器もないし、ここは逃げるしかないわ。」
フミエも素早く指示を出した。
「じゃあ僕とタケル君が引きつけてる間にヤサコとフミエは逃げて。後ですぐに追いつく。」
「逃げるってどこへ？」
「メガシ屋にしよう。ここから一番近い安全地帯はそこしかない。」
「ラジャ。」
すぐさま作戦を立てて、４人は身を低く構えた。そしてハラケンはタケルと一緒に降りる階段とは逆方向の拝殿に向かって走って囲みを突破した。野球帽４人の視線は同時にそちらに向く。そこでハラケンはたまたま今日道ばたで拾って持っていた電脳煙幕弾を４人に投げつけた。そこで４人の視界は白く覆われる。同時にヤサコとフミエは逆方向に動き鳥居をくぐって階段を下り始めた。
「タケル君。こっち。」
ハラケンもそれを見届けると、タケルに声をかけて鹿屋野神社拝殿横の茂みから隣の野槌神社へと抜けるルートに入った。
「くそっ。逃すな！」
野球帽の少年達も２手に分かれて追跡をはじめる。その時、電脳掲示板の方でも異変が起こっていた。

#11　崩壊！大黒市　part8

ヤサコ達が謎の集団に追いかけ回されている頃、ダイチ達は廃ビルにこもってメタバグの在庫確認をしていた。調べた限りではまたかなりの金額に相当するメタバグが見つかったが、ダイチ達の心中は穏やかではなかった。

「見てくださいこれ。ついに3社目も営業を再開しましたよ。」

シンヤが出したウインドウには、ウェポンワールドなる3つ目の電脳駄菓子屋のサイトが表示されていた。満天堂、メガシ市場、そしてこのウェポンワールドがかつての大手3社と言われた、いわば通販電脳駄菓子屋の御三家だ。

「く～っ。やばいな。これだけメタバグが見つかったとはいえ、さらなる値下げを考えなないとガチで売れなくなるぞ。」

ガチャギリが頭を抱え込む。約1週間の黒客のメタバグ市場独占状態は終わりを告げた。

「いや。事態はもっと深刻かもしれません。」

「どういう意味だ?」

シンヤの言葉にダイチが聞き返す。

「さっきから兄とメールをしながら今後の経営方針を確認しているんですが、どうも状況が思わしくないそうです。この前の話を思い出してほしいんですが、かつて大手3社は手を組み合ってメタバグ市場から他の勢力を排除していきました。それを可能にしたのがメタバグ換金サイトです。その大手3社がそれぞれ資金を出し合って換金サイトを設立したからこそ、メタバグ市場を独占することができました。言ってみればこの3社は運命共同体です。ところが今回、兄が中心となって経営している満天堂は他の2社を出し抜いて武器の販売を始めました。そのこと自体は問題のない行為のはずなんですが、他の2社は満天堂が暗黙のルールを破ったと認識したそうです。」

「暗黙のルール？」
メタバグ市場は半年以上も凍結していた。そこに暗黙のルールも何もないんじゃないかとダイチは思った。
「まあ、満天堂がメタバグの販売を始めるというのなら、その時は他の2社にも一声かけてもいいんじゃないかってことですよ。それをしなかったものですから、満天堂は他の2社からはかなり怒りを買ったみたいです。だから3社の同盟から満天堂をはずすと、一方的に言われたそうで。」
こんな裏ビジネスにも紳士協定というものがあるらしい。それを破った満天堂は他の2社から見放されたということだった。
「それじゃどうなるんだ？」
ダイチがシンヤに訪ねる。
「満天堂は他の2社が運営するメタバグ換金サイトからの恩恵が受けられない。つまり満天堂が手に入れられるメタバグは今まで通りオレたちが卸す分のみ。しかし後の2社は換金サイトを通じて大黒市中のメタバグを集められる。確かにここにもまだ多くのメタバグが残っているが、それは大黒市全体で手に入るメタバグと比べてらほんのちっぽけなもんだ。表もまだ白い霧が出ているしな。これでオレたちと満天堂は営業的に不利な立場になったんだよ。」
ガチャギリが代わって説明した。一同がいた4階の窓から、まだ市内に立ちこめる霧が確認できる。まだまだメタバグも見つかるはずだった。
「ど、どうすんだよ？」
ダイチが困惑してガチャギリに訪ね返すも、ガチャギリはダイチを見ずにシンヤの元へつかつかと歩いていった。
「おいシンヤ。ビジネスの話をしようじゃないか。」
「…ああ。いいとも。」
どうやら2人はこの期に及んで商談を始めるらしい。何の話を始めるのかわからなかったが、ダイチ達はそれを見守るしかなかった。
「この状況でオレたち黒客には2つの選択肢がある。1つ目、オレ

たちは満天堂との契約を打ち切り、ここにあるメタバグを他の2社が運営する換金サイトですべて現金に換える。」

「何言ってるんだ。オレたちはずっと満天堂に世話になってきたんだぞ。それを今更満天堂の旗色が悪いってんで裏切るのか？お前ら古いダチ同士でどんな話してるんだ！」

ガチャギリの交渉にダイチがツッコむ。いくら金のためとはいえ、そこまで冷徹非情になる必要があるのかとダイチは思った。

「勘違いするな。オレたちと満天堂はあくまでビジネスの関係だ。そもそもこんなことになったのは満天堂の責任じゃないのか？満天堂が他の2社にちゃんと通達しておけば、こんなことにはならなかった。その満天堂のミスでこっちが不利益を被るなら、それは契約解除におけるれっきとした理由になる。そうだろ？」

「…確かに。それはこちら側、満天堂のミスでした。それで契約解除を宣告されても文句は言えないですね。でもそれで決まったわけじゃありません。もう1つの条件は？」

一切の感情が排除され、ただ事実に即したビジネス交渉が展開される。この2人は別次元の人間だなとダイチ達は思った。

「単純だ。満天堂がメタバグ市場から他の2社を追い出すこと。それができるならオレたちは喜んで満天堂に協力するぜ。」

満天堂が他の2社をつぶして本当の意味でメタバグ市場を独占する。それが契約更新の条件だとガチャギリは言うのだ。

「ムチャ言ってやるなよ。さっきお前が言ってたように今は営業面で満天堂が不利なんだろ？そこからどうやって他2社をつぶすって言うんだよ。」

ガチャギリはもう満天堂を見限ろうとしているんじゃないのかとダイチは感じた。そうでなければ無理難題をシンヤに押しつけはしない。

「ムチャじゃねえよ。ビジネスっていうのはできることできないと負けていく。逆に言うと相手が不可能なことを要求するのはビジネス交渉じゃねえ。」

「じゃあ深川には満天堂が逆転するためのアイデアがあるとでも？」
シンヤがガチャギリに訪ねる。そこまで言うならガチャギリに秘策があるのだろうと考えた。
「あるぜ。こっちもメタバグ換金サイトを設立したらいいんだよ。」
「でも、それでこっちが逆転できる保証はないぜ。」
ガチャギリの意見にダイチは納得できなかった。無駄に換金サイトを立ち上げても、武器が売れなければこちらの資金が流出してしまうだけじゃないかと思った。
「わからねえかな。例えば換金サイトが2つあったとしたら、お前ならどっちにメタバグを売る？」
「それは、当然高く買い取ってくれる方だ。」
「だろ。つまりこっちが換金サイトを立ち上げるなら、それは他の2社の換金サイトよりも高くメタバグを買い付けないとダメということになる。そうなると当然必要になるのはこちらの資金だが…」
ガチャギリがここまでヒントを出したので、ダイチにもようやくその考えが理解できた。
「ああ！オレたちと満天堂はこの1週間でがっぽりと稼いだわけだからな。たとえ他の2社が資金を出し合ったとしても、こっちの資金力にはかなわない。」
「そうだ。オレたちが向こうより高く値をつけたなら、当然メタバグはオレたちに集まってくる。そして武器の価格は安く設定できてその分売れる。次第に他の2社は廃れていき、メタバグ市場はオレたちものになるってわけだ。」
「頭いい！」
ガチャギリのアイデアにナメッチが賞賛の声をあげる。ガチャギリの持論は、マネーゲームは金のあるヤツが勝つということだった。
「ハハハハ…見事だよ深川。実は兄も同じ結論に至ったんだ。やはり君のビジネスに関する才能は恐ろしいものがあるね。」
シンヤが笑いながら言った。どうやらシンヤはガチャギリを試していたらしい。目先の利益を取って満天堂を裏切るのか、はたまた逆

境の満天堂とともにさらに大きな利益を目指すのか。
「ということは、商談成立か。」
「こちらに選択の余地はない。また満天堂と市場の制覇を目指して頑張っていこう。」
こうしてガチャギリとシンヤの商談はまとまった。そのことをシンヤは兄にメールで報告する。そうしている間にヒマなので電脳掲示板を眺めていたナメッチがある書き込みを発見した。
「ちょ、ちょ、オヤビン！これ見てくださいよ！」
「何だ騒々しい？」
メンバー達は一斉にナメッチの方を向く。ナメッチはウインドウを拡大して表示した。
「なになに？大黒黒客クラブが出入りしている拠点が判明した。そこに彼らが握っているキラバグも保管されている模様。また彼らはそこに大量に備蓄されているメタバグにより、ここ1週間のメタバグ市場を独占していた。ついては本日その拠点である旧大黒ビジネスホテルを急襲しようと思う。ただし彼らはその場所を厳重に守っているので少数ではおそらく勝ち目がない。ついては同志を募り、総力戦で黒客に挑みたい。巨悪黒客を倒す意志のある者はコイルレジスタンスの旗の元に参じてもらいたい。時間は本日午後8時、場所は旧大黒ビジネスホテル。我々の名は、コイルレジスタンス…なんじゃこりゃ？」
ダイチがその書き込みを読み上げ、その場には一瞬の静寂が訪れた。その中でアキラだけはその書き込みに心当たりがあり、胸の鼓動はダイチ達にも聞こえそうなくらい弾んでいた。アキラはフミエが行動を開始したのかとも思ったが、自分に一言もなしにこんな書き込みをするのもおかしいと思った。
「おいおい。コイルレジスタンスってのはフミエ達のことじゃねえのか？こんな名前名乗るのはアイツら以外にないだろう。」
ガチャギリが考え込みながら言った。
「まさか、もう決起しようってのかよ。」

ダイチの頬を冷や汗が伝う。一番恐れていたフミエの逆襲が始まると思うと、いても立ってもいられなくなってきた。

「しかもだ、アイツらは有りもしねえキラバグを狙っている勢力まで取り込もうとしている。アイツら本気でオレたちを倒しに来る気だ。」

「でも、この場所のことは誰にも言わないって約束したじゃないッスか。もしフミエ達がここに大勢力を連れてくるなら、それは約束違反っしょ。きったね～。」

ガチャギリの言葉にナメッチは恨めしそうに言った。しかしこの場所を手に入れるために自分達がフミエ達に何をやったか、ダイチはそれを考えると文句もつけられないと思った。

「そんな約束あってないようなものだろ。それにその約束はこっちが絶対的武力を持っているからアイツらにも強制できたわけだからな。確かに街中にメタバグが溢れている今の状況なら、アイツらこんなが手段に出るのも十分考えられたよな。」

ガチャギリの言うように、この場所のことを誰かに告げたら、その時はフミエ達のメガネを壊すという無言の圧力が昨日までにはあった。

「どうするんスかオヤビ～ン。フミエ達は元々強いし、それに人数でも不利になるんでしょ？そんなの勝ち目なんてないじゃないッスか～。こうなったらここを捨てて逃げるしか…」

「逃げる？バカ言うなよ。ここにはまだ大量のメタバグが残ってるんだぞ。それを置いて逃げられるか！それに黒客リーダーのダイチがな、フミエにケンカ売られて逃げるなんてありえねえだろ？」

ガチャギリはダイチの方を向く。正直ダイチに勝てる自信はなかった。しかし迎撃を望むガチャギリのその言葉はダイチにとってプレッシャーになった。

「…ああ。オレたち黒客はフミエ達には絶対負けてはいけないのだ。ましてや戦わずして逃げるなんて、黒客史上に残る汚点となる。」

ダイチはリーダーとしての体面を保つために仕方なくそう言うしか

なかった。
「そうは言っても勝ち目はあるんスか？」
「落ち着け。お前は何でもネガティブに捉え過ぎなんだよ。よく考えてみろ。この廃ビルは言ってみたらオレたちの要塞だぜ？１階入り口からここにたどり着くまでにどんどん罠を仕掛けていったらそう簡単に攻められたものじゃねえ。たとえ大人数で来たとしてもな。」
暗号や武器を駆使してこの廃ビルを要塞化する。それが黒客が勝てる唯一の方法だとガチャギリは思った。
「武器が足りないようなら兄さんに言ってもっと作ってもらおうか？この場所を守れるか否かは、満天堂の経営にも大きく関わってくるから。」
「すまねえ。頼む。」
シンヤの申し出をガチャギリはありがたく受けることにした。
「じゃあさっさと罠を設計していこうぜ。８時まで、あと４時間ぐらいか…」
ダイチが時計を見ながら廃ビルの見取り図を出して言った。これが大黒市における電脳戦争史上、最大の戦いになるだろうという予感を抱きながら。

#11　崩壊！大黒市　part9

「ヤサコこっち！」
謎の電脳グループにわけもわからず襲撃されたヤサコ達コイルレジスタンス。今はヤサコとフミエ、ハラケンとタケルの2手に分かれて追っ手をまきながらメガシ屋を目指しているところだった。相手は土地勘がないと踏んでヤサコとフミエは入り組んだ住宅街や路地を縫いながら追っ手をかわそうと試みる。しかし体力的にはあちらの方が上で、なかなか振り払うことができない。ついにバテ始めたヤサコだがメガシ屋までもう少しという直線に入っていた。しかしそこで巨大な物体が道を遮っているのが見えた。
「ああ！サッチー！」
ヤサコが絶望的な声を上げる。市内巡回にかり出されていたサッチーと鉢合わせになったのだ。
「ヤサコ落ち着いて！大丈夫よ。今の私たちのメガネには違法なソフトは入ってないからサッチーは反応しない。むしろサッチーに困るのはヤツらの方よ。」
フミエの言葉にヤサコは正気を取り戻し、サッチーの横を敢然と通り抜ける。今までこんなことをしたことがなかったので、安全という保証があっても通り抜ける時にはかなりの不安が体の中で渦巻いていた。何事もなくて胸をなでおろしたところで、後方から数発の爆発音が聞こえた。振り返ってみるとサッチーから数本の煙の筋が上がっている。
「なんて威力なの！？たった3、４発でサッチーを半壊しにできるなんて！」
フミエは今の爆発を見届けたらしい。追っ手が撃ったミサイルによってサッチーは一瞬にしてボロボロなっている。その威力のミサイルを浴びせられたらメガネはひとたまりもない。障害物のない直線を走っているヤサコ達の緊張感は極限にまで達していた。そうして

ヤサコ達の予測通り相手はミサイルを放つ。そのミサイルに追いつかれる前になんとか2人はメガシ屋の入り口に到着した。
「メガばあ！開けて！！」
とうに店をたたんで閉め切っていたメガシ屋の引き戸をフミエがどんどんと叩く。そのタイミングで別方向からやって来たハラケンとタケルも合流した。
「無事？」
「なんとかね。それより早く中に！」
息を切らしながらヤサコの問いにハラケンが答えた。追っ手は目前まで迫って来ており、また新たなミサイルを放ってくる。その時引き戸が開かれた。
「なんじゃ乱暴に。どうしたんじゃ？」
メガばあが出て来た瞬間、４人は店の中になだれ込む。メガばあ何が起こっているのか理解できなかったが、フミエが中から引き戸を閉め切った瞬間、そこに立て続けにミサイルが命中し轟音を立てて爆発した。
「なんぞ！？」
あまりの急展開にさすがのメガばあもたまげた。しばらくして引き戸の画像が乱れる中、フミエは中から追っ手の様子をうかがう。
「くそっ！逃がしたか！ここにいても仕方ねえ、ずらかるぞ！」
異質な野球帽の集団がメガシ屋から離れて行く。そこで初めて一同に安堵のため息がもれた。
「どうなっとるんじゃ？あの野球帽の集団は何者じゃ？」
「さあ？私たちにもわからないのよ。アイツらが何者なのか。何で私たちを襲って来たのか。」
フミエがメガばあの質問に答える。まるでそれを考える時間も余裕もなくここまでやって来た。
「それは大変じゃったのう。」
「ところでおババ。少し話があるの。今大丈夫？」
ヤサコがメガばあに訪ねた。ヤサコ達は今日の事件の真実を、自分

たちが独自に調査した分も含めてメガばあにはきちんと報告しようと考えていた。やはりメガネに関する事件ならメガばあより頼れる人はいないと思ったからだ。

「かまわんよ。実はワシもお主らに話そうと思うていたことがあるんじゃ。」

「メガばあも？」

メガばあから話があるというのは珍しいのでフミエが聞き返した。

「うむ。しかしお主ら汗びっしょりじゃないか。ちょっと待っとれ。今タオルを持って来てやるでな…ん？お主は確か宗助の。」

メガばあがタケルのことを見つける。

「ご無沙汰しています。その節はご迷惑をおかけしました。弟のタケルです。」

タケルが丁寧にメガばあに頭を下げる。メガばあとタケルが会うのは、あの事件の最後にイサコの病室に居合わせた時以来であった。

「おう、これはご丁寧に。しかし珍しいな。確かお主は弁天に越したんじゃなかったかえ？どうしてこのメンバーとつるんでおるんじゃ？」

「それも含めて話すわ。とりあえず上がらせてもらうわね。」

タケルの代わりにフミエがメガばあの質問に答えた。そうして４人はメガばあの電脳工房に入り、メガばあはヤサコの母静江に頼み人数分のタオルと飲み物を出してもらった。久しぶりの全力疾走でカラカラにかわいたのどをお茶で潤してから、フミエは切り出した。

「今朝からの騒ぎを知ってる？」

「ワシが気づかぬわけがなかろう。長年毎朝はようから起きて大黒市を眺めておるのじゃ。ワシのバカ息子の一郎があわてて家を出て行くのも見とったよ。」

メガばあは毎朝早起きしてはまず大黒市の街並みをメガシ屋の店先から眺めるのを日課にしていた。今日の異変を誰より早く察知していたのはメガばあだった。

「バカ息子って…」

一郎はメガばあの実の息子であるが、ヤサコはメガばあが一郎のことをそのように言っているのを初めて聞いた。
「そう、バカ息子じゃ。お主らにも言おうと思っていたことじゃが、一郎が今日の事件の原因を作っているんじゃからな。」
「えっ？てことはメガばあそのこと知ってたの？」
メガばあの言葉にフミエが驚いて訪ねる。真実を知っているのは自分たち以外ならごく一部の関係者だけだと思っていたからだ。
「あ？」
「だから、メガマスでお父さんが中心になってオジジの研究を引き継ぐってプロジェクトが進められていたけど、その過程で開発された空間制御プログラムっていうのがハッキングに遭って、今日の事件はそのプログラムによって引き起こされているってことを言おうとしてたんでしょ？」
イマイチ状況がわかっていないメガばあにヤサコが確認する。
「そうじゃが、なんでお主らがそんな詳しいことまで知っておるんじゃ？」
メガばあはヤサコ達がまさかそこまで知っていたとは思っていなかったらしい。
「僕たちは昨日オバちゃんと警察に呼びだされて、タケル君のお兄さんが大黒市にいるってことを知らされた時にそのことも聞いたんだ。それで今日、そのことを伝えるためにタケル君にも来てもらったんだ。」
「警察がお主らにぺらぺらしゃべったのかい。随分口が軽いんじゃのう。」
ハラケンの言葉にメガばあが少し不満そうに返した。この事件に関して、警察が勝手に子ども達に真実を教えたことを疑問に思ったらしい。
「結構私たちがムリにお願いしたから教えてくれたんだけど。そういうオバババは誰からこのことを聞いたの？」
「ワシは一郎からじゃ。最近どうも様子がおかしいものだから昨日、

とっちめたらついに口を割ったんじゃ。会社の方針か何か知らんが、ハッキングに遭った時真っ先にワシに報告せんとはのう。」

メガばあは一郎に対して怒っているようだった。普段は温厚なメガばあの態度がいつもと全然違うので、ヤサコ達の方がどうしていいか戸惑ってしまった。

「でも、仕方ないんじゃ。やっぱり今お父さんは会社でも重要なポストにいるし、いくら家族でも簡単に言うことはできなかったんじゃ…」

ヤサコは一郎をフォローした。しかし最近は、忙しさから来る疲れといら立ちからそっけない態度をとる一郎とヤサコの間に亀裂が生じていたのも事実だった。

「じゃが、一郎が引き継ごうとしていたのはオジジの研究だった。もちろんワシとしては研究を引き継いでくれるというのはうれしかった。しかしな、オジジはこの研究のおかげで命を落としたのじゃ。それだけじゃない。お主達も経験した去年の夏の事件も、さかのぼればこの研究が発端となっておる。それだけの重みを背負う覚悟が一郎にできていたのか、こうなってはワシには甚だ疑問であるとしか言いようがないんじゃ。」

一同が静まりかえる。メガばあはすべての始まりから一連の事件をながめてきた。そして夏の事件についても罪の意識を感じていた。だから夏の事件が終結した時にピリオドを打てばそれまでだったという思いもあった。しかし一郎は危険を覚悟で研究を引き継ぐ決意をする。それはメガばあにとっても、亡き宏文にとっても喜ばしいことであったに違いない。同時に芽生えた不安はこの日現実のものとなった。それを昨日まで自分に黙っていた一郎にメガばあは失望した。「お前一人で生きているわけじゃない。お前の犯したミスでどれだけの人が被害を被るのか、それを肝に銘じて責任をとれ。」

昨日メガばあはそう一郎に言いつけたのだ。

「ごめんなさい。ぜんぶ、ぜんぶ兄ちゃんが悪いんだ。父ちゃんとヤサコのおじいちゃんの研究の重みを一番わかっていないのは兄ち

ゃんなんだ。それなのに兄ちゃんは、父ちゃんの研究を世間に知らしめようとしてこんなことをして。今のメガマスにこんなことをしても意味はないのに。ヤサコのお父さんが必死になって研究を引き継いでくれているのに。それで父ちゃんの功績も認められようとしているのに。その研究で生まれたプログラムを悪用して、メガマスの信用を落とすためにまた多くの人を犠牲にしようとしているなんて。本当に僕の兄ちゃんはバカなんだ！」

メガばあの話を聞いていたタケルは涙を流しながら謝った。誰も幸せにならないこの復讐劇。そんなものを今もどこかで進めようとしている宗助に対し、タケルの本当の気持ちが吐露された。

「お主が謝ることじゃない。元々宗助もワシが育てた弟子じゃからな。宗助が電脳は人を傷つけるための道具としか考えんようになったのも、ワシの教えが間違っておったのじゃろう。」

「そんなことはない！兄ちゃんがすべて悪いんだ。だってメガばあの弟子は、ヤサコ、フミエ、ハラケン、亡くなったカンナさん、それに一郎さんや玉子さんっていうすばらしい人達ばかりじゃないか！兄ちゃんが人の気持ちを考えないような人になってしまったのも、それはメガばあのことを利用していただけだからなんだ！兄ちゃんの気持ちはもう、メガばあと出会った時から復讐へと向いていたんだ！だから悪いのはすべて兄ちゃんなんだ！その兄ちゃんのために、誰かが悲しい思いをするのはもうイヤなんだ！」

タケルが一気にまくしたてた、メガばあがこれ以上罪の意識を感じないようにするため。

「…それで、お主達は宗助の行動を止めたいと。そのことを相談しに来たのか。」

メガばあはタケルの気持ちを汲み取り、これ以上自分を責めたりしなかった。そう、自分の過去を責めるのは簡単なことで、そこからどのような未来を紡ぎだすのかが肝心である。その１つの答えが宗助の行動を阻止すること。過去を清算するためだけではなく、未来を作るため。

「タケル君の話ではもっと強烈な何かをお兄さんは仕掛けてくるらしいの。それが何かはわからない。わからないけど必ず阻止しないといけない。」

「なるほど。ワシもニュースで見ておったが、確かに電脳ナビシステムをダウンさせたくらいじゃ宗助としては手ぬるいと思っておった…ちょっと待っとれ。」

フミエの言葉にメガばあは少し考え込むと、何かを思いついたように押し入れの中をあさり始めた。

「あったあった。お主ら、コイル探偵局のバッジはつけておるか？」

「バッジ？もう解散したんだからつけてないわ。」

フミエが何を今更という感じで言う。コイル探偵局は卒業式の前日に事実上の解散した。といっても今はコイルレジスタンスと名乗っているし、黒客と対峙している時はコイル探偵局とグループ分けされているが。

「ならホレ、お主達に新しいバッジを授ける。タケル。お主にもこれを受け取ってもらいたい。」

そうしてメガばあは新しいバッジを全員に配った。

「てことはまさか…」

「そうじゃ。コイル探偵局をたった今から復活させる。目的は元会員猫目宗助の復讐の阻止。そして新メンバーにタケルを加える。やってくれるな？」

「うん。もちろん。」

かつてはメガばあのおつかいクラブに成り下がったコイル探偵局が、崇高な目的とともに復活を遂げた。そして新メンバータケルは、その目的達成のために誰よりも意気込んでいた。

「あれ？タケル君、会員ナンバー十番？一番入った時期が遅い私が八番なのに、九番はどこに行ったの？」

「四番と九番は縁起の悪い数字だから欠番なんじゃ。」

「ああ、そうなの。」

メガばあらしいとヤサコは思った。番号を整理すると創始者のメガ

ばあは0番。一が一郎、二が玉子、三が宗助、四が欠番で五がハラケン、六はカンナ、七がフミエで、ヤサコが八、そして九が欠番で十がタケルということになる。

「それからこれもメガネに仕込んでおくとよかろう。」

「・・・これって、暗号じゃない。どうしたのこれ？」

メガばあが示したウインドウにはいくつかの暗号が載っていた。メガばあがヤサコ達に暗号を与えるのは初めてであり、フミエは不思議に思ってメガばあに訪ねてみた。

「暗号なんてもんは、過去と一緒に封印したはずじゃったんじゃがな。しかし昨日一郎にその話を聞いてから急に必要だと感じたのじゃ。暗号を操る宗助を止めるには、やはり暗号しかないと。因果なものじゃて。タケルは気を遣ってくれたが、やはり宗助に暗号を授けたのはワシじゃ。ワシには宗助を止める義務があるんじゃ。しかしワシも歳には勝てん。今のワシにアヤツを止めることはできんじゃろう。それができるのはもう、お主らしかいないのじゃ。こんな年寄りの押し付けがましい願いで悪いがな。」

いつも押しつけがましいことを言ってくるメガばあにそのように言われて、なぜだかヤサコ達は急にせつなくなってきた。メガばあは誰よりも一人だった。自分たちがいつもそばにいたのに、そこまで思い詰めていたなんて。自分ではもう責任を取ることもできない無力さを感じていたなんて。

「何を今更水臭いこと言ってるの！メガばあが押し付けがましいのは今に始まったことじゃないわ！大体メガばあは私たちの師匠なのよ！師匠が弟子に試練を与えなくてどうするの！？その苦難を乗り越えることで、私たちはメガばあという師匠に肩を並べることができるの。メガばあが責任をとることができなくても、その意志を継ぐ私たちがその責任を受け持てばいいの。メガばあはどっしりと構えておけばいい。これが終わったらゆっくりと隠居してもいい。だからもう、私たちに任せておいて。」

フミエの言葉は、メガばあの胸の内を響かせた。弟子にここまで言

われるなんて師匠としてこの上のない喜びである。それでも涙は見せずに、ひとつ鼻をすすってからメガばあは口を開いた。

「お主ら、外でメタバグを拾ったじゃろう？すぐにメタタグも練るから出すが良い。今回は特別に手数料も取らん。暗号も合わせて持ってけ。」

「わかったわ。」

今更感謝の言葉を口に出すのも恥ずかしくて、メガばあはそう言った。フミエは笑みながらうなずくと、すぐに拾って来たメタバグを預けた。メガばあは黙々とメタバグを練る作業に入った。

「問題はタケル君のお兄さんがどの場所で、どのタイミングで、何を仕掛けて来るかだね。それを考えたいけど、なかなか手がかりもないし…んと、メールが来てた。アキラ君からだ。」

ハラケンがこの後のことを考えようとしたら、メガネにアキラからのメールが届いていたことに気づいた。

「アキラ？何の用かしら？」

「えーと。今電脳掲示板で話題になっている書き込みって、姉ちゃん達が書いたものなの？だって。」

ハラケンがアキラからのメールを読む。アキラはダイチ達の目を盗んでひっそりと送ってきたらしい。

「はあ？なんのこと？」

フミエはメールの意味がわからなかった。電脳掲示板に何を書き込んだ覚えもない。

「もしかしてこれのことじゃない？」

「どれどれ。」

タケルがその書き込みを発見した。４人は身を寄せ合ってそのウインドウを注視する。それはダイチ達が見たものと同じ、コイルレジスタンスを名乗った対黒客軍招集令だった。

「なんなのこれ？一体どうなってるの？」

フミエは驚きを通り越してただあぜんとした。いつのまにか自分たちは黒客を打倒する軍の総大将になっている。これは昨日の時点で

フミエが考えていた筋書きにはあったが、今はそれどころの騒ぎではない。

「・・・この書き込み、わからないことが多すぎる。まず誰がこんな書き込みをしたのか。何が目的なのか。なぜコイルレジスタンスの名前を使ったのか。もっと言えばなぜコイルレジスタンスの目的を知っているのか…ただ1つ確実なのは、ダイチ達はこの書き込みのことを知っていて、それに備えているってこと。じゃないとアキラ君がわざわざメールを送ってこない。」

ハラケンが1つ1つ疑問をあげていった。

「コイルレジスタンスの目的を知っているのは、昨日会ったCレックスぐらい？あとCレックスがこの同盟をもっと広げていればわからないけど。」

「いや、広げるっていってもたかだか1つや2つぐらいじゃない？Cレックスがこんな大それたことをするとは思えないし、その友達のクラブの仕業とも思えない。」

ヤサコやフミエが考えるが納得できる答えは見つからない。しかしそれ以外にコイルレジスタンスのことを知っているクラブがあるとも思えない。

「もしかして、さっき僕達を襲って来た…」

「あっ！」

タケルの言葉に一同は声を上げた。どちらも目的がわからない同士、つながるのはここしかないと思った。

「じゃあこれはあの野球帽のグループが書き込んだものだと仮定しよう。おそらく目的は打倒黒客。そして廃ビルの鉱脈の占領。コイルレジスタンスの名前を使ったのはなぜかわからないけど、ああやって襲って来たということは、張本人である僕たちがその場にやってくるのはまずいっていうところなのかな。」

あの野球帽の集団は何者なのか、なぜコイルレジスタンスのことを知っているのかなど多くの疑問を残すが、とりあえずハラケンが大まかにまとめてみた。

「今日の8時。場所はあの廃ビル…どうするの？」
ヤサコがフミエの方を見る。
「無論、行くに決まってるでしょ。あの連中はコイルレジスタンスの名前を悪用して、しかも私達を消そうとした。何より私の仇であるダイチがそんな得体の知れない連中の手にかけられるなんて我慢できない。ダイチに引導渡すのは私よ。とにかく行ってあの連中をつぶす。そしてついでにダイチ達もつぶす。」
フミエはやられたらやり返さないと気が済まないタチである。いきなり自分たちを襲って来た野球帽の集団と、そしてダイチ達を許すことはできなかった。そのために今夜、この4人で廃ビルに潜り込むこととなった。
「もしかすると、これ…」
「何？タケル君。」
そこでタケルが何かを言いかけてハラケンが反応した。この後タケルが話したことは、ヤサコ達にこの戦いが行き着く穏やかならぬ事態を予感させた。

#11　崩壊！大黒市　part10

陽も暮れかけた夕方、この事態を起こしている張本人である猫目宗助は市内の様子見から自分たちの泊まる大黒市内のホテルに戻って来た。警察が市内を巡回していることはとうに気づいており、自分の車で出かけるのは危険であることを察知していた宗助はその足で色々と動き回っていた。そうして集めてきた情報を元に、次の作戦を立てようとしていたのだ。戻った部屋にはレーダーや受信機などが部屋中に雑然と置かれている。もう1人の宗助の補佐役をしている男はこれらの機械を駆使して管理室や警察の動きを監視していたのだ。

「あっ、今帰ってきました。代わります。」

その時補佐役の男は携帯電話を使って誰かと話していた。宗助にはその相手がすぐにわかった。

「猫目さん。本社から電話です。」

補佐役の男が電話を手渡す。宗助はコートを脱ぐと、イヤそうに1つため息をついて電話を受け取った。

「電話代わりました。猫目です。」

「猫目。勝手に動くんじゃないとあれほど言っただろうが。当日の朝になって報告をよこすなんてどういう了見だ?」

電話の向こうの本社の男は少々不満げに宗助に訪ねた。

「本社が大黒市の今の状況を把握しているとは思えなかったので、僕が最善と思う行動をとったまでです。本社も今日の行動が不満ならスーパーコンピューターの電源を落とせば済む話でしょう?それをしなかったということは、別に問題はなかったということですよね?」

宗助がメガマスからハッキングした空間制御プログラムは、その本社のスーパーコンピューターに収められている。宗助はそれをメガネを使って遠隔操作しているにすぎない。本社は宗助が暴走を始め

ても、そのコンピューターの電源を落とせばそれを止められるようになっている。

「別にそういうことを言っているんじゃない。もっと互いを信用しあうことが必要だということだ。無論こちらは君のことを信じとる。現場の君の意見は最大限に尊重したいと考えている。だからいくら面倒でも動き出す少し前にはこちらにその旨を報告しろ。」

「わかりました。以後気をつけます。」

どこまで本心で言ってるんだかと思いつつ、宗助は素直にうなずいておいた。

「で、首尾はどうだ?今朝からの行動はほんの小手調べだったんだろう?」

「…まあまあ、向こうもこれぐらいの事態は覚悟していたんでしょう、対応は迅速だったと思います。ただまあ、こちらの要求に応えようとするそぶりはまったくありませんけどね。」

宗助は昼間メガマスに要求をつきつけた犯行声明を送った。メガマス側はそれに対し何の反応もしていない。

「あっ、ちょっと見てください猫目さん。今日の事態についてメガマスの声明が出ていますよ!」

補佐役の男がテレビをつけて夕方のニュースのチャンネルを見ながら言った。どうやら今日の事態に関する市民向けの説明が発表されたらしい。

「何?もしもし、ニュースを見てください。今からメガマスの釈明が流れるそうです。」

宗助が電話の向こうの本社の男にも伝えた。そうしてニュースの報道に耳を傾ける。

「…メガマスは今日の事態について、原因は非合法に開発された空間を歪めるプログラムなのではないかという見解を示しました。また警察は、そのプログラムを開発したと思われる犯人の画像を公開。指名手配となったのは猫目宗助21歳。まだ大黒市に潜伏している可能性が高いということで、現在空間管理室と大黒市警察が警戒を

強めて捜査しています。大黒市にお住まいの方は外出時はメガネの使用を控えることと、大黒市内を車で運転する時は手動運転に切り替えるようにしてください。それでは今日の事態について専門家の方のお話をうかがっていこうと思います。国際情報通信技術大学教授の小野隆先生にお越しいただきました。小野先生、まず今日の大黒市の事態をどのようにご覧になっていますか…」

そこで宗助はキャスターの話から集中を切り、再び電話を耳元にやった。

「随分有名になったもんだな。指名手配で君の名前は一躍全国区だ。」

「ちゃかすのはやめてください。所詮メガマスが僕を捕まえても、もうこの呪縛から逃れられないんです。その前に名前が地に堕ちるのは彼らの方ですよ。」

宗助は犯行声明を送った時点でこうなることは予想していた。とにかく猫目は自分が捕まるまえにメガマスへの復讐を果たすことだけを考えており、それが果たせれば刑務所に入ることも致し方のないことだと考えていた。一生追われる身というのもそれはそれで考えたくはなく、だから自分が指名手配になったことなど気にもとめていない。

「そうだな。しかしメガマスがこうも強気に出るのは予想外じゃないのか?」

本社の男が言った。メガマスはもう空間制御プログラムは宗助が開発したものだと発表したので、それが自分たちの開発したものだということをひた隠しにするしかなくなった。メガマス社長の桝田は苦渋の決断で、神崎の言った案を採用したのだ。

「ですね。むしろ好都合ですよ。どうやらメガマスは自分たちが置かれている立場がわかっていないようです。その隠蔽体質が出れば出るほど、後々苦しくなるのは自分たちの方ですから。」

宗助は笑みながら言った。メガマスが自分で自分の首を締めるような決断をしたのが、宗助を優越感に浸らせた。

「…そうか。メガマスがこんな発表をしたということは、すでにこちらの要求をのむつもりはないという意思表示をしたということか。」

本社の男が宗助の出した犯行声明を確認しながら言った。その中の要求の1つが、空間制御プログラムを開発したのはメガマスであることをマスコミに公表すること。先ほどのニュース報道を見る限り、それはもう実現されないものとなった。

「そういうことです。なのでこちらは早急に次のステップに移りたいと思います。メガマスにこちらの本気度を示す必要があるので。」

「わかった。くれぐれも慎重に頼むぞ。メガマスがこれだけ強気な態度をとるということは、何か考えがあるのかもしれんからな。」

「了解です。ではまた準備ができ次第報告させていただきます。それでは失礼します。」

そう言って宗助は電話を切った。案外本社がこちら側の言葉に返事が良すぎるのも気持ち悪いなと思いながら。

「早急にって、次はいつ頃にやるんですか?」

電話の内容を聞いていた補佐役の男が訪ねる。

「今夜だ。」

宗助は即答した。

「こ、今夜!?また早いですね。何か考えがあるんですか?」

「ああ。これを見ろ。さっきたまたま見つけたんだが、使えるとは思わないか?」

宗助は補佐役の男にウインドウを出す。そこには電脳掲示板のコイルレジスタンスの書き込みが表示されていた。

「これは…」

「使えるだろ?こんなくだらない電脳掲示板の情報なんて、メガマスや管理室は見向きもしていない。こんなおあつらえ向きのイベントがあるなんて、思ってもない幸運だ…早速準備にかかるぞ。」

宗助が部屋の窓から見た大黒市を一望する。その中でひっそりと埋もれている旧大黒ビジネスホテルは、今はまだ嵐の前の静けさに包

まれていた。

#11　崩壊！大黒市　part10（後書き）

第11話は以上までです。
次回第12話もお楽しみに。

#１２　混迷のレッドゾーン　ｐａｒｔ１

「よみがえってくる夏の記憶。今日の大黒市は、あの夜と同じ重苦しい空気に覆われているような気がしました。」

４月１日、午後７時００分。早朝からの混乱は収束し、街の中の古い空間もほとんどがフォーマットされた。散発的に発生している古い空間は自動運転中のサッチーがフォーマットに回っている。夜になって子ども達が外を出歩かなくなったことで、サッチーが破壊される心配がなくなったのは管理室として安心材料だった。一郎は早朝からこの時間まで古い空間のフォーマットのために尽力した管理室職員を市役所の１階にあるサッチー格納庫に集め、労をねぎらっていた。

「みなさん。今日は朝早くから遅くまで本当にご苦労さまでした。みなさんのおかげで大きな事故もなく、古い空間を消去できたと思います。まだこの問題は根本から解決はしていませんが、みなさんはもう帰宅していただいて、今日の疲れをとってください。管理室は本部と連携し、夜に問題が起きたときは本部の職員がサッチーを出動させることになりますのでそこはご安心ください。明日からは通常業務時間に戻します。とにかく、今日は本当におつかれ様でした。」

集めた職員に一郎が深く頭を下げた。元はと言えば自分のミスからこのような事態になったことを自覚しており、迅速に対応してくれた職員にはまさに頭の下がる思いだった。そうして集められた職員は疲れた顔をして各々帰宅していく。１人一郎は残されたサッチー達の点検を行っていた。現在市内を巡回しているサッチーは２機、格納庫にあるのは全壊の１機と半壊の１機、そして正常な１機である。全壊の１機は自動運転中に破壊されたものだが、半壊の１機は顧問の進藤が目を離しているスキにやられたらしい。進藤にはちゃ

んと仕事をしてもらいたいものだと一郎は呆れていた。そうしてその時、最後の1機が格納庫に戻って来た。操縦士は玉子。そのサッチーは正式に管理室への復帰が認められなかった玉子が、一郎の公認でハッキングをしてさらった1機、通称タマだった。勝手にサッチーを動かしていることが本社にバレてはいけないので、玉子は先ほどの職員の集まりとは時間をズラして戻って来たのだ。

「お疲れのようですね。室長。もう休まれたらいかがです？」

玉子が一郎の表情を見て訪ねる。今日は半日気を張り続けたこともあって、一郎は一目見ただけでも疲労困憊であることが感じられた。

「ああ。とりあえずここにあるサッチーの点検を済ましたら一休みするよ。」

一郎はタマの元に歩み寄り、破損箇所がないか調べ始めた。

「一休みって、今夜は管理室に泊まり込むおつもりですか？」

「…ああ。まだ問題は解決していないからね。また深夜に問題が起こった時に責任者の僕が管理室にいないと迅速に対処できない。君も今日は疲れただろうから帰宅しても結構だよ。」

一郎はもちろん猫目の攻撃はこれだけで終わらないと感じており、事件解決までは管理室を離れられないと考えていた。

「…そうですか。今日は色々ムリを言って申し訳ありませんでした。サッチーがハッキングされているなんて本社に知られれば、室長は処罰の対象となるのに。」

「何を言ってるんだ。この方が僕の身のためだって言ってくれたのは君じゃないか。僕が本社の命令を無視して君を管理室に戻すより、君が勝手にサッチーをハッキングしていることにした方が僕の処罰は軽くなる。そして万が一本社に知られた場合には君が罰されることになる。最悪逮捕っていうことにもなりかねない。そこまでの覚悟をしてまで、この街を守りたいっていう君の気持ちには感謝してもしきれないくらいだよ。僕の保身なんて考えなくてもいいのに。」

玉子がサッチーをハッキングしたのは、一郎にできるかぎり迷惑をかけたくないためだった。もし本社にこのことが知られた場合、玉

子はすべての責任を受け負うつもりだった。
「いえ。室長には守るべき家族があります。斜陽のメガマスにおいて、これ以上失点を重ねれば室長の首も危なくなるんですから当然のことです。それよりそんな後ろ向きな考えをするよりも、宗助には絶対この街で事故を起こさせないように努力しましょう。」
一郎が今メガマス内で苦しい立場にあるのは玉子もわかっていた。すべての責任を受け負うといっても、高校生の自分にそこまで重い罰がくだされるとも思っていなかった。
「そうだね。街の様子はどうだった?」
一郎も玉子の言葉に気を取り直して訪ねる。
「まあ、大黒市民もここまで大規模なものは初めてだったにせよ、古い空間の発生には慣れているのか大きく混乱していた感じでもありませんでしたね。こんな時にも電脳戦争をやっている子どももいました。今日の事態で新たにメタバグが大量に湧き出て、また通販電脳駄菓子屋が次々とオープンしていますので、明日からも電脳戦争は激しくなるんじゃないでしょうか。」
「…そうか。古い空間のフォーマットに気を取られていて忘れていたが、そっちの問題もあったね。ネット上の悪徳商売においては担当は警察の電脳犯罪対策係だから、彼らはそっちにも気を遣わないといけないのか。あっちも今大変だろうな。」
対策係の直樹達は猫目宗助の逮捕状をとって市内を巡回しながら探しまわっている。さすがに直樹達もこの問題に気を遣う余裕はなかった。
「でも、宗助を逮捕できれば同時に古い空間もメタバグも消滅するんでしょう?そうなれば違法サイトは自然消滅するしかないんじゃないですか?」
「…それだけで果たして終わってくれるか。これは公にはされていないが、猫目宗助はコンピューター企業サイバーゲートウェイと手を組んでいる。空間制御プログラムもCGWのコンピューターに収められているらしい。猫目はそれを遠隔操作しているにすぎない。

たとえ猫目を逮捕できても、ＣＧＷとの関係が立証できなければ捜査のメスが入りきらない。だからこの事件を根本的に解決するには、ＣＧＷを取り押さえなければならないということだ。」

おそらく宗助が逮捕された時には、それこそＣＧＷは宗助のことをゴミのように捨てる。つまりＣＧＷは宗助との関係を一切否定するだろうということだった。もちろん宗助にしても、そのことは十分覚悟をしているはずだった。

「できるんですか？相手はメガマス急成長以前の国内最大手のコンピューター企業ですよ？かなり手強いんじゃないんですか？」

「さあ、それは僕にはわからない。僕はあくまで現場の人間だからね。そういうことは本社が必死になって考えていると思うけど、僕に何ができるわけじゃない。僕たちにできることは、目の前にある古い空間をフォーマットするだけさ。」

一郎はこれ以上ビジネスの汚い裏の部分に首をつっこみたくはなかった。それをしてしまえば、自分の持っている理想や信念をどこかで捨てなければならないだろうと思った。それが嫌で今は現場の仕事でも張り合いを持って取り組んでいる。自分よりも若いのにそのはざまで苦悩しなければならない社長の桝田の心中はどんなものなのだろうと、一郎はふと思った。

「…そうですね。私も休憩をとった後、もう一度市内を巡回しようと思います。」

「え？そんなムリしなくてもいいよ。だいぶ落ち着いてきたから、もう自動運転のサッチーだけで十分だと思うけど。」

そこまでする必要はないのにと一郎は思った。夜は人通りが少なくなり、大きな事故も起こす事は難しい。宗助が動くのは日が昇ってからのような気がしていた。

「なんですかね…どこか胸騒ぎがするんです。今日は早朝から管理室は動いていました。なのでこの時間にはもう疲れきっているはず。今の室長のように。宗助はその辺を突いてくるような気がします。」

「そういうものかな？」

「とりあえず後一回りぐらいはしようと思います。それで何も予兆が感じられなければ、今日は帰ります。」
玉子の胸騒ぎは根拠のないものではなかった。それを確かなものとして感じているのは、この日があの夏の日と酷似していたからだ。
「そこまで言うなら止めないけど。じゃあ一休みに一緒に晩ご飯でも食べないか？出前でも取ろうと思ってたんだけど。」
「あ、じゃあそれでお願いします。」
一郎は一通りサッチーを点検し終えると階段をのぼり玉子と管理室に戻った。嬉しそうに一郎は中華の出前をとろうと電話をかける。
その時玉子は管理室のレーダーを見たが、朝見たときと比べるとめっきり古い空間を示す赤い表示は減っていた。ほぼ赤一色に塗られていた中津交差点付近でさえも。

#12　混迷のレッドゾーン　part2

午後7時40分。廃ビルへの総攻撃が始まる午後8時を前に、ヤサコ、フミエ、ハラケン、そしてタケルはその廃ビルに向かってメガシ屋を出発しようとしていた。

「気をつけるんじゃぞ。」

メガばあが心配そうな声で一行を送りだす。

「安心していいわよメガばあ。何があっても、メガばあの心とともにあるかぎり私たちは倒れることはない。じゃあ行ってくるから。」

フミエはそう言ってメガシ屋の引き戸を閉めた。そうして1歩外に踏み出した瞬間、張りつめたような緊張感が漂った。

「もし僕たちを襲撃してきたあの野球帽のグループがあの書き込みをした張本人達なら、僕たちを襲った理由はおそらく、僕たちがその時間廃ビルに現れないようにするため。つまりこのメガシ屋から廃ビルへの道のりの途中で、彼らの仲間が待ち伏せしているかもしれない。」

出発前ハラケンはメンバーにそう言った。あの野球帽のグループはあたかもコイルレジスタンスになりすまして、この廃ビル総攻撃の指揮をとろうとしているのかもしれないと考えたのだ。

「でも臆することはないわ。私たちはメガばあからたんまり武器をもらった。たとえ行く途中で待ち伏せされていても対処できる。」

フミエが言い聞かせる。一行は先ほどメガばあから暗号一式と、拾って来たメタバグを原料に作ったメタタグをもらった。それに今日はいつものメンバーに、イサコにも肩を並べるであろうほどの使い手のタケルが加わっている。その辺のクラブに負けるはずがないという自信もあった。

「でもムリは禁物だよ。おそらく廃ビルの戦闘が始まれば、これまでにない厳しい戦いが待っているはず。今回は武器を蓄えに蓄えた黒客と、その謎の野球帽グループの2つの相手をしないといけない

からね。だから廃ビルに着くまではできるかぎり消耗はしたくない。無駄な戦闘はできるだけ避けるんだ。気取られないように今回も2手に分かれよう。分け方はさっきと同じ、ヤサコ、フミエチームとタケル君、僕のチームで。ルート選びも慎重にね。」

「了解。」

ハラケンがそう言うと、ヤサコチームはメガシ屋の前の道を右に、ハラケンチームはまっすぐ進んでそれぞれ廃ビルを目指すことになった。

「・・・ねえ、フミエちゃん。この戦いが危険なことはわかっているのに、なんでダイチ君達とは連絡をとらないの？そもそもこんな戦い無意味じゃない。」

ヤサコがフミエに訪ねる。ヤサコの心配の種はいくつかあった。しかし最も大きく胸にのしかかっていたことは、宗助の存在、そして玉子と同じような胸騒ぎだった。

「できるならやってる。私もこの期の及んでアイツらと決着をつけようんなんて考えていないわ。でもアイツらがあの書き込みを見た時にどう思っていると思う？コイルレジスタンス、つまり私たちがアイツらの絶対敵だと認識しているはずよ。そんな敵方の言葉なんて、今のアイツらの耳には届かないわ。たとえアイツらにメガネを壊されても、私たち自身が伝えないといけない。この戦いの真相を。そして、大黒市で今何が起こっているのかを。」

今回の目的はもう打倒黒客ではない。はじめフミエは野球帽のグループと黒客の両方を倒そうと考えていたが、しかし今はそれを考えている余裕もなかった。タケルの話では、宗助がこの戦いの存在に気づいた時そこに何かを仕掛けてくるかもしれないということで、それからフミエは自分たちの任務は一刻も早くこの戦いを終わらせることだと感じていた。

「アキラ君を通じて説得できないの？」

「ムリね。私たちとアキラが内通していたことが知れたら、アイツらはアキラを裏切り者として追放する。それだけならいいけど、い

きり立っているガチャギリがアキラのことをボコボコにしかねないかもね。別に私はかまわないんだけど、アンタにとったらその方が後味悪いでしょ？」

フミエがさらっと答える。とは言ってもフミエも情報を提供してくれているアキラがそんな目に遭うのは本心では避けたいと思っていた。

「なんだかんだ言って、やっぱりアキラ君のことは見捨ててないのね。やっぱり姉弟ね。」

ヤサコにはフミエの本心が読めて、何となくおかしくて笑ってしまった。やっぱりフミエは弟思いの姉なんだなと思った。

「シッ！声を立てないで。」

急にフミエが立ち止まってヤサコを制する。どうやら進行方向にメガネの子どもらしい影を見つけたようだった。フミエとヤサコは急いで電柱の影に隠れる。

「敵？」

ヤサコがささやき声で訪ねる。

「わからないけど、こんな時間に1人メガネの子どもがうろついているなんて不自然ね。見つからない方が無難だわ。」

近づいてくる影は手ぶらで辺りを見回しながら歩いている。見るからに怪しかった。

「でも見つからない方が無難って、どうするの？近くに曲がり角もないし、これだけ距離が近かったら来た道を戻るにしても見つかるだろうし。」

ヤサコの言うように、そこに退路はなかった。少しでも自分たちが動けば見つかるぐらいその影は近づいている。

「ここは2対1だから戦っても問題はないんだろうけど。でもハラケンに言ってた通り、無駄な戦闘は避けないとね。ここはメガばあの秘密兵器の威力を試してみましょうか。」

「秘密兵器？暗号のこと？」

ヤサコの質問にフミエは静かにうなずくと、フミエは握りしめた右

の手から砂のようなものを地面に落とし始めた。その砂は地面に触れるといびつな図形の並ぶ暗号となり、2人の周りを囲った。

「声をひそめるのよ。」

暗号をセットしたフミエはヤサコに言い聞かせる。そうして影が近づいて来た。その影がはっきりメガネの少年とわかるような距離にまで来ても、向こうはまるで気づいていない。注意深く見回しているのに、少年は何事もなかったかのよう2人の隠れる電柱を通り過ぎて行った。

「ふーっ。さすがの効力ね。」

少年が見えなくなってから、フミエは電柱の影から1歩踏み出した。

「これって…」

「ステルス暗号。こうやって地面に振りかければこの暗号が囲った一帯はメガネをかけた人からは見えなくなる。それと人の電脳体に直接振りかけると一定時間だけどその人は透明人間になれる。夏休み前の電脳戦争でイサコが使っていた暗号よ。」

そんなこともあったなと思いながらヤサコは聞いていた。駅向こうでタケルと出会った時も、これと同じ物を利用したこともあった。いざ暗号を手に入れてみるとその便利さを改めて実感する。

「もらったばかりなのに詳しいのね。」

「私を誰だと思っているのよ。自分が持っている武器の効力も知らないでこれから戦場になんか行けないわ。アンタも少しは勉強しなさいよ。」

「ど、努力します。」

フミエに叱られてヤサコはしゅんとなった。確かに基本怖いものなしのフミエが今回は厳しい戦いになると踏んでいる時点で、自分なんか下手するとすぐやられてしまうんじゃないかとヤサコは思った。そこでヤサコも反省し、メガばあからもらった暗号の説明書きに目を通す事にした。

その後は敵と遭遇することもなく、2人は無事に廃ビルのある裏

通りに入る。廃ビルの前にはすでに２０人弱の子どもが集まっているようで、ヤサコ達はビルの東側の陰に入って様子をうかがうことにした。そこには既に到着していたハラケンとタケルが待っていた。
「大丈夫だった？」
ハラケンがフミエに訪ねる。
「１人敵らしい子どもが巡回していたようだったけど、メガばあからもらった暗号でかわしたわ。そっちは？敵と遭遇した？」
「遠目で見かけたくらい。だから敵かどうかわからなかったけど、その話の通りなら多分もあれも敵だったんだろうね。」
ハラケンが言ってタケルもうなずいた。とりあえず４人は敵に存在を気取られることなくここまで辿り着くことができた。
「で、時間は７時５５分か。このビルを襲撃に来た子どもはあそこでたむろしている分で全員ぐらいね。さて、これからどうするかだけど。」
フミエがビルの陰から覗き込みながら集まっている子どもの様子をうかがった。本当なら今すぐにでも出て行って事情を説明して追い返したいところだが。
「問題はあの中に昼間の野球帽のグループが紛れ込んでいるかもしれないことだね。正直ここからじゃそれが確認できないし、さっき街を見回っていた子ども達もあの野球帽の仲間だったとしたら、一体何人いるのかもわからない。そこに飛び込んで行くと攻撃される恐れもある。あの人数を味方につけられるとさすがにかなわないだろうね。」
ハラケンが危惧するように、集まっている子ども達のほとんどはコイルレジスタンスの正体を知らない。そこに自分たちが本物を主張して飛び込んで行っても、野球帽のグループがそこにまぎれていれば敵として攻撃されるのは目に見えていた。
「ねえねえ。あそこにいるのって、昨日会ったＣレックスの人達じゃない？」
ヤサコが気づいて言った。確かに集まっている子ども達の端の方で、

所在無さげに立っているCレックスメンバーの姿が確認できた。
「本当ね。アイツらもあの書き込みが私達がしたものだと信じて、律儀に駆けつけたのかしら。」
「だったら私たちが本物のコイルレジスタンスだって知っている人がいるんだし、やっぱり事情を説明に行ったほうがいいんじゃない？」
ヤサコがフミエに訪ねる。Cレックスはコイルレジスタンスと接触した唯一のクラブである。自分たちが本物であることを証明してくれるんじゃないかとヤサコは期待した。
「やめた方がいいわ。あそこに集まっている子どもには、もう誰が本物のコイルレジスタンスだなんて関係ない。アイツらにとって問題は黒客をこのビルから追い出してメタバぐとキラバグを得ること。それを止めに入ったらCレックス共々攻撃されてメガネがクラッシュするだけよ。それに言っちゃ悪いけど、Cレックスは戦力としてアテにできないからね。」
フミエはもう平和的な解決は望めないと踏んでいた。やはり戦闘に乗じて廃ビルに潜り込み、黒客を直接説得して争いをやめさせるしかないと思った。
「リーダー見てくれよこれ！すげー数のメタバグが落ちてるぜ。やはりあの書き込みはガセネタじゃなかったみたいで。」
「ああ、そのようだな。わざわざ来たかいがあったぜ。しかしすげー霧だな。この中にはトラップもたんまりと仕掛けられてるんだろ？楽な戦いにはなりそうもねえな。」
子ども達は窓から廃ビルの中を覗き込んだりしながら、定刻の午後８時になるのを今か今かと待っていた。確かにこの状況で止めには入れないだろうなと思いながら、ヤサコは様子を見ていた。そして時計は、午後８時を示した。
「来たっ！」
その時電脳掲示板を調べていたタケルが声を上げる。８時ちょうどに新しい書き込みがされたのだった。ヤサコ達もそのウインドウを

のぞき込む。
「機は熟した。崇高なる理想を掲げる勇者達よ。今こそ巨悪大黒黒客打倒のためになだれこむべし。我々は諸君の健闘祈る。コイルレジスタンス。」
ハラケンがその書き込みを読む。同時にビルの前に集まっていた子ども達もこの書き込みに気づいたらしい。
「…何だよ。このコイルレジスタンスってのはここに現れないのか？情報提供だけかよ。」
「いいじゃねえか。この中には大量のメタバグがあることだし、コイツの情報は確かだろ。それにこれだけの人数がいれば、たとえここが黒客の砦だとしても恐れることはない。」
リーダー同士が相談をしている。コイルレジスタンスが現れないのは予想外だったらしい。その会話を聞いてフミエは果たしてこの中に野球帽のグループがいるのかと疑問に思ったが、もはやこの子ども達を止めることはできないだろうと下唇を噛んだ。
「それもそうだな。確かこのビルは西側の入り口から出入りできるんだったな。よし、早速そこから突入するぞ！おいCレックス！お前らは弱いんだから中に入ってこなくていい！ここでサッチーが来ないか終わるまで見張ってろ！絶対に逃げるんじゃないぞ！」
「…わ、わかったよ。」
どこかのクラブのリーダー格の少年に命令され、Cレックスだけがそこに残った。後の子ども達は西側入り口に殺到し、次々にビルの中に侵入する。同時に銃声音や爆発音が盛大に鳴り始める。どこぞの国でもここまで激しい戦闘なんてないだろうなとハラケンは思った。こうして大黒市史上最大規模の電脳戦争の火ぶたは切って落とされたのだった。

#１２　混迷のレッドゾーン　ｐａｒｔ３

ヤサコ達４人はほとんどの子ども達がビルの中に入って行ったのを確認すると、西側入り口前の駐車場で見張りをしていたＣレックスの元に駆け寄った。
「あれ？君たち来ていたのか。集まった人たちはみんなビルの中に入って行ったよ。」
Ｃレックスのリーダー倉本がヤサコ達に気付いて言った。
「ええ。わかってる。さっきまでビルの陰からここの様子をうがかっていたから。」
「様子をうかがってた？何でみんなの前に姿を現さなかったの？みんなコイルレジスタンスの人が来るのを待っていたのに。」
不思議そうに倉本がフミエに訪ねる。
「事情が複雑すぎて何から話せばいいかわからないんだけど。まず私から質問するわ。アンタ達、あの書き込みは私たちがしたものだと思ってここに来たのね？」
フミエは情報を整理するためにまずＣレックスに質問してみた。
「ああ。でも昨日の今日で行動を起こすのが早いなあとは思ったよ。確かに今日は朝からあんな騒ぎだったから、君たちもすぐに武器を確保したのかなあって思ってとりあえずここまで来たけど。でもその言いようだと、あの書き込みは君たちがしたんじゃないんだね？」
Ｃレックスも少しは事情を察したようだった。
「そうなのよ。どこのだれかもわからない連中が私たちに成り済まして書き込んでいるの。で、次の質問に行くわね。中に入っていった連中の中に、アンタ達がコイルレジスタンスの同盟に誘ったクラブはいた？」
「いや。僕たちも知り合いのクラブ１つにしか呼びかけられなくて、その人たちもなんか都合が悪いらしくてここには来てない。」
フミエは昨日、Ｃレックスにもできるだけ同盟の輪が広がるように

呼びかけてもらうことを頼んでいた。しかしCレックスの誘ったクラブは来ていないという。昨日から今日にかけてフミエ達も他のクラブと接触していない。なのでコイルレジスタンスの詳しい情報を知っているのは、Cレックスとここには来ていないもう1クラブだけということになる。

「じゃあ、中に入って行った連中はみんな、コイルレジスタンスのことは知らないっていうことね。つまりキラバグとかメタバグとかをちらつかしたあの書き込みに釣られて集まっただけなのね?」

「多分。」

頼りなく倉本が答える。Cレックスは端の方で所在なく立っているだけだったので、そんな会話を他のクラブとしていなかった。

「わかった。じゃあ最後の質問。アンタ達、全員野球帽をかぶった変なクラブとか知らない?」

「へ?野球帽?知らないな、そんなクラブ。そのクラブがどうかしたの?」

「実は私たち昼間、その変人集団に襲撃されたの。ここに来るときもそれらしい連中が街の中を巡回してたし。おそらくそいつらが書き込みをした犯人なの。本物のコイルレジスタンスがここに現れないように私たちのメガネを壊しに来たんだと思う。」

「うわ。随分スリリングな話だね。でもすまないけど、そんな人達に心当たりはないなあ。」

Cレックスにしてもあまり他のクラブと交友が広そうな雰囲気はなかった。やはり大きな情報は出てこないかとフミエはため息をついた。

「わかった。ありがとう。それからこのビルはかなり危険よ。アンタ達はここで待っている方がいいわ。」

フミエはCレックスに1つ忠告してビルの中に入ろうとした。

「待ってよ。このビルが危険だってことは知ってるよ。あの黒客が立てこもっているビルなんだからトラップも大量に仕掛けられているんだろ。でも君達にもそう言われるなんて思わなかったな。昨日

一緒に戦うって決めたじゃないか。そりゃ戦力にはならないかもしれないけど、結局僕たちは蚊帳の外なのかよ。」
フミエの言い方が不満だったのか倉本が言い寄った。昨日Cレックスに戦うモチベーションを与えたのはフミエ達である。それをないがしろにされるような言い方が心外だったようだ。
「あ、ごめん。そういう意味じゃないの。詳しい事情は言えないんだけど、このビルは目をつけられているかもしれないの。子ども達を付け狙う悪い大人に。」
「悪い大人？」
「そう。その人が何を企んでいるかはわからない。でも私たちは悪い予感だけは的中するの。今夜このビルで何か大きな事故が起こるかもしれないっていうね。」
さすがにCレックスに宗助のことを言うことはできなかった。事情を他の子ども達にも知れたら大きな混乱を起こしてしまうかもしれないからだ。
「じゃあ君たちはこれからどうするの？そんな予感がしてるんなら、早いとこ逃げた方がいいんじゃ？」
「私たちはここに集まったバカ達と、ここに集まったバカ達を迎え撃とうとしているバカ達を説得して、この無意味な戦争をやめさせる。なんだかんだ言ってこうなったのは私たちの責任でもあるから。アンタ達はここで待ってもらってもいい？何かビルの中で異変が起こっているのを感じたら、すぐに空間管理室に通報して。」
「…わかった。何が起こっているのかはあえて聞かないでおく。ここで待っていればいいんだね？なら、くれぐれも気をつけて。」
Cレックスはフミエの言葉を信じて待機することにした。連絡役がいればフミエにしても安心だった。
「ありがとう。すぐに終わらせてくるから。」
そうしてCレックスに見送られて４人は果てしない戦闘状態が続いているビルの中に侵入する。まるで本物の戦場にいるようなけたたましい轟音や叫び声に、４人はこれまでの電脳戦争とはまったく違

う空気を感じた。しかも立ちこめる霧のせいで視界はかなり悪い。
「ねえ、フミエちゃん。この戦争をやめさせるんなら管理室に言ったほうがいいんじゃない？わざわざダイチ君達のいる場所に向かう必要なんてあるの？」
ヤサコが不安そうに訪ねる。この雰囲気に圧倒されて果たしてそこまでたどり着けるのかと思ってしまったのだ。
「こんな混乱の中にサッチーが飛び込んでいったら、もう収拾がつかなくなるのは目に見えている。何人のメガネが犠牲になるかわからないわ。というよりそれ以前にサッチーが耐えられるのかっていうのも問題だしね。」
ここ最近破壊され続けているサッチーにこの事態を収拾させられないだろうというのがフミエの見解だった。管理室得意の力押しも、この規模の電脳戦争となると通用しない。
「それに野球帽の集団も気になるところだしね。管理室が介入すると、きっと混乱のどさくさに紛れてどこかに逃げてしまうと思う。それならダイチ達を説得して一緒に野球帽の集団を迎え撃った方がいいような気がする。」
ハラケンも黒客と接触した方がいいと思った。たとえ先にビルの中に入った子ども達の中に野球帽の集団が紛れていたとしても、幸か不幸かこの深い霧で誰が誰だか判別できない。つまり彼らと戦いながら上を目指せるということだった。
「そういうこと。さあ、早速突撃するわよ。みんな離れないようにお互いの位置を確認しながら行動しましょう。」
フミエがメンバーに声をかける。リーダーらしく先頭に立っていく覚悟を決めていた。
「待って。これを見てよ。」
出発しようとしたところでタケルがメンバーを呼び止める。
「何？何かあったの？」
「うん。この霧の深さは異常だと思ってちょっとこのビルの空間のバージョンを調べてみたんだ。それがこれだよ。」

タケルがウインドウを出して示す。深い霧の中、ヤサコ達3人は顔を寄せ合って確認する。

「5．20？」

「…ちょっとこれって。」

ハラケンがウインドウに出ていた数字を読み上げる。それに反応したのはヤサコだった。そう、ヤサコがタケルと出会った夏の日の、タケルの話を思い出したのだ。

「うん。古い空間にもいろんなバージョンがある。その中で最も危険な空間はかつて“あっち”と呼ばれたけど、その空間のバージョンは5．20を下回るんだ。このビルの空間はまさにそれ。レッドゾーンだよ。」

タケルの言葉にフミエやハラケンは一瞬背筋が凍り付いた。

「じゃあ、もうこの場所は“あっち”ってこと？」

「いや、“あっち”に行ってしまえば、肉体と電脳体はズレが生じる。メガマスの開発した空間制御プログラムがどういうものかはわからないけど、もし空間のバージョンがカウントダウンのように切り替わるものだったとしたら、今の状態はまさにこのビルが“あっち”へと切り替わる途中だと思う。あとどれだけの時間が残されているかはわからない。わからないけれどできるだけ急いだ方がいい。」

自分たちが置かれている厳しい状況に自然と胸の鼓動は速まった。通常ならこれ以上こんなところにとどまるのは危険である。しかしこの中にいる黒客を含めた子ども達を放っておくわけにもいかない。

「ならこれはもう、タケル君のお兄さんの行動が始まってるってことだね？」

「おそらくね。とにかくこのビルが丸ごと“あっち”の世界に変わると、とりかえしのつかないことになる。」

残り時間はどれほど残されているかわからない。しかしこの局面を打開する方法はただ1つ、黒客を説得しこの戦争をやめさせること。そのためには黒客が仕掛けたトラップが行く手を阻むこのビルをの

ぼりきらないといけない。
「こうなったらとにかく急ぐしかないわね。幸いこの近くにある西階段には誰もいないようだからそこからのぼって行きましょう。」
「いやダメみたいだ。西階段には砂袋が積まれていて道が塞がれている。どうやらダイチ達が４階から５階への階段の途中に積まれていた砂袋をここまで運んできたんだろう。」
西階段の様子を見たハラケンが言う。このビルは６階建てであるが、４階から５階への階段の途中に改装工事の途中に放棄されたと思われる砂袋が積まれており、実質４階から上の階へは出入りできなかった。その砂袋がここにあるということは、ダイチ達は４階から上の階にいる可能性もある。
「なるほど。ビルの東側にある裏口の鍵を閉めて、西側の入り口から入らせる。西側の階段を塞げば、私たちは自然とこのビルの１階を西から東へ横断しないといけない。そこにたんまりトラップを仕掛けているってことね。まあ仕方ないわ。あの砂袋をどかしている時間もないし、このフロアーは突っ切るわよ。」
そう言うとフミエは先頭に立ち、姿勢を低くしながら前に進んで行く。その後ろにヤサコ、ハラケン、タケルと並び、一列の隊列を作っていた。霧のせいでよく見えないが、周りでは黒客のトラップからの攻撃と、トラップを破壊しようとする子ども達の間で激しい戦闘がなお続いている。フミエは黒客のクセなどは熟知しているので、どこにどういうトラップがあるかどうかなどはある程度予想はついた。なので他のクラブよりはまだスムーズにいけるはずだったが。
「やばっ！伏せて！」
どこからともなく前方からいきなりミサイルが飛んで来た。フミエはとっさにメンバーに指示を出す。その判断のおかげで飛来した４本のミサイルをメンバーはかわすことができた。
「今ショートカットとか出てた？」
ヤサコがフミエに訪ねる。どうも今の攻撃は黄色い円盤からミサイルが出て来たものとは見えなかった。

「…いや、おそらくトラップよ。足元を見て。」
「これは、暗号?じゃあ暗号を踏んだから今のミサイルが出て来たってこと?」
フミエの足は、わずかに床に書かれていた暗号に触れていた。その暗号と連動してミサイルが発射される仕組みだったようだ。
「ええ。アイツらもここまで暗号を使いこなせるなんて。ごめんなさい、今のは足元を注意して見ていなかった私のミスだわ。これからは気をつける。」
フミエは黒客のスキルを侮っていた。かつてイサコに少し教わっただけなのに、ここまで使えるようになっているとは思わなかったのだ。
「うわああ!」
その時他のクラブの子どもがヤサコの近くにあった暗号の円に入った。その瞬間暗号の中に光の筋が走り、その次の瞬間に轟音とともに爆発を起こしたのだ。その子どものメガネはかなりのダメージを被っている。
「…どうやら地雷型のトラップもあるようだね。足元には相当注意して進んだほうがよさそうだね。」
今の光景を見ていたハラケンがフミエに言った。こうなってくるとフミエは足元を見ながら慎重に歩を進める一方で、攻撃があった時には後ろの3人がカバーする作戦の方がいいような気がした。
「そのようね。ちょっとメガネの耐性を上げるメタタグでも使っておきましょうか。トラップのダメージも怖いけど、ただでさえ古い空間の中ではメガネも壊れやすくなるからね。」
フミエの指示でメンバーはメガばあにもらった耐久力アップのメタタグを使った。
「じゃあ気を取り直して行きましょう。」
仕切り直してメンバーは慎重に前進を始める。このビルは東西の真ん中だけは壁で仕切られていて、そこには扉一枚分ほどの通り道がある。通路が急に狭まるそこだけはトラップに要注意だったが、先

行の子ども達がその場所のトラップは解除したようで、４人は案外にスルーできた。その先もトラップからの攻撃には後ろの３人がうまくカバーしながらどうにか東階段にたどり着いた。どうやら速い子ども達は既に２階へと進んでおり、この階段のトラップも解除されているのはラッキーだった。

「さて、このまま東階段を使ってのぼりたいけど、どうやら２階から３階へも行けないようね。」

メンバーは２階に着いた。フミエの言うように先に２階に到着した子ども達は東階段を使ってそのまま３階に進んでおらず、西階段を目指して２階フロアーも横断しようとしている。もちろんそこもトラップだらけで、１階よりも激しいくらいの戦闘が繰り広げられていた。

「いや、でも東階段に砂袋が積み上げられているわけじゃない。これを見てよ。」

階段の様子を見たハラケンが言う。

「なるほど、暗号ね。」

東階段の２階から３階へは、足の踏み場もないくらい暗号がびっしりと書かれていた。先に到着した子ども達は暗号への対処法を知らない。これだけの暗号があるところは危険地帯だと思って東階段を避けたのだ。

「タケル君。これくらいの暗号ならどうにかなるんじゃない？」

「そうだね…暗号はもうだいぶ忘れたんだけど、やるだけやってみるよ。」

タケルはイサコと同じで宗助に暗号の手ほどきを受けており、黒客の組んだ暗号くらいなら解除できるんじゃないかとハラケンは思った。ここはタケルの腕を信じて、危険な２階フロアーを突っ切らず、慎重に東階段の暗号を解除して上にのぼることにした。

#12　混迷のレッドゾーン　part4

一方の黒客は廃ビル5階にいた。砂袋で塞がれていた5階への通路を開いたことで、さらに6階に行くこともできるようになったが、もしものことを考えて6階は避難場所として確保し、のぼってきた子ども達はこの5階で迎え撃つ準備をしていた。

「……なるほど。ウイングスにガンズ、それに布施小のソリティアか。そこそこのメンバーが集まっているようですね。」

下の階の偵察用に送り込んだミゼットからの映像を見ながらシンヤが言う。

「どうだ？ここまでのぼって来れそうなヤツはいるか？」

ダイチが訪ねた。シンヤなら大黒市の電脳グループの実力は大体把握している。

「そうですね……まあ多分のぼって来られたとしても数人。それを迎え撃つのはわけないでしょう。しかしウイングスとガンズは同じ小学校でライバル同士。この2つのクラブが手を組んだというのは、本気でメタバグを欲しがっているってことでしょうね。」

「おいシンヤ、2階も見ておこうぜ。もう何人かは2階までたどり着いているようだ。」

ガチャギリの言葉にミゼットも反応し、2階に移動した。そこから入って来た映像にダイチは食いついた。

「お、おい！これはフミエ達じゃねえか！？やっぱ来ていたのか。それにもう2階に……うかうかしていられなくなってきたぞ！」

「落ち着けよ。こいつらにしても5階までたどり着くのは厳しいはずだ。たとえのぼることができても、ここにオレたちが控えている。負けるはずがねえだろ。しっかし、こいつら何やってんだ？」

ガチャギリはダイチに言い聞かせたが、フミエ達の行動を怪しんだ。4人は2階から3階にのぼる東階段にいるが、黒客はそこに暗号をびっしり書いておいたので通る人間はいないと踏んでいた。もし強

引に突破しようとしようものなら、その時は暗号によってトラップが作動する。無事では済まない。
「オヤビン。なんか1人多くないっスか？ヤサコ、フミエ、ハラケンは確認できるけど、この暗号を調べているようなこいつは誰なんすかねえ？」
ナメッチが訪ねる。深い霧のせいで映像の向こうの様子もわかりにくく、あと1人が誰なのか判別できない。
「暗号を調べてるってことは、ここの暗号を解除して突破するつもりなんだろうが、誰なんだろうな？」
「…？おい、こいつまさか、タケルじゃねえか！？」
考えこんだダイチに、ガチャギリがようやく気付いて言った。
「…確かによく見てみるとタケルに見えるな。って、やばいぞそれは！」
「誰なんですか？」
焦る黒客メンバーにシンヤが訪ねた。
「お前猫目タケルは知らないのかよ。まあ、確かにアイツは電脳戦争の表舞台にも顔出していないし、お前はあの事件を知らないからムリもないか。まあ手短かに説明する。こいつは暗号使いだ。オレも対決はしたことはないが、相当な手練と思っていいだろう。」
情報屋のシンヤでもタケルは知らなかった。そこでガチャギリが大まかに説明する。もちろん一郎の言いつけもあるので、大黒小の人間が夏の事件のことを部外者にすべて打ち明けることはできないが。
「それは初耳ですね。それほどのヤツがなんで今まで顔を出さなかったんですか？それになんでこの人たちと。」
「ああ、それには色々と事情があったんだが、なんでフミエの一味に加わっているのかこっちが聞きたいぐらいだ。とにかくオレたちレベルが組んだ暗号なんて、このタケル前には通用しないってことだ。」
この廃ビルに仕掛けたトラップの大半が暗号によるものだった。タケルがいるだけでそれがほぼ発動できないと言っていい。

「暗号のトラップがムリなら、直接攻撃かショートカットによる攻撃で押していくしかないんじゃ。」
「そうだな。オレもタケルと相対するなんて考えたくなかった。しかしアイツがフミエと手を組んだっていうのなら仕方ねえ。おい、急いでショートカットとミサイルの準備を。」
「ヘイ！」
ダイチが指示を出す。本当のところ、夏の事件の後タケルとはいい関係を築いただけに、それを攻撃するなんてしたくはなかった。しかしフミエ達やその他大勢のクラブを迎え撃つためにここまで準備をしてきたからにはもう引き下がれないと思いもある。
「攻撃開始！」
合図とともに黒客メンバーは４人のいるところにショートカットをつなぎ、そこからミサイルを発射し始める。ところがフミエやハラケン、ヤサコでさえもこの動きを読んでいたのか、ショートカットが開いた瞬間、鉄壁を投げてその入り口を遮った。そのおかげでことごとくミサイルは鉄壁に命中する。その間もタケルは着々と暗号を解除していた。
「ダメだ！タケルを守るように周りの３人がこちらの攻撃を読んでブロックしてきやがる。これじゃ打つ手がねえ！」
「うろたえるな！もっとショートカットを開けばアイツらも対応できねえ！攻撃の手を緩めるな！」
ガチャギリがメンバーを鼓舞する。そこでダイチはフミエ達の背後にショートカットを開こうとした。しかし開いた瞬間、フミエは待ってましたと言わんばかりにミサイルが出てくるよりも先に暗号らしいものをショートカットに投げ込んで来た。
「うわあ！暗号か！？」
ダイチの目の前のショートカットから暗号が飛び出てきたが、５階のフロアー全体に張っている電脳の防壁によってはじかれた。ダイチはイサコと初めて戦ったときのことを思い出した。
「フミエ達もタケルに暗号を教わったのか。くそ、攻撃中止だ！こ

うもこちらの攻撃が読まれていては、今みたいにカウンターをくらうおそれもある。」

ガチャギリはさすがに苦戦させてくれると思った。早くも攻撃が手詰まりになり、やはりここで迎え撃つしか方法がないんじゃないかと考える。

「でもここで止めないと、この人達はすぐここまで来てしまいますよ。」

シンヤが不安そうにガチャギリにたずねた。

「わかってるよそんなこと。だからってこうなっては他に打つ手がねえんだ。最悪コイツらはここで迎え撃つことを考えるか。その他の連中がここまで来れないよう、今のうちに徹底的に叩いた方がいいかもしれねえ。」

「それこっちの方が人数が多いことを過信して言ってないか？あんな得体の知れない暗号を駆使する人たち相手に、勝つ見込みは低いんじゃ。」

「ああっ！？だったらテメーもいい案だせよ。所詮口だけじゃねえかテメーは！」

ここに来てガチャギリとシンヤがケンカを始めた。そのくらい黒客メンバーはあの４人のプレッシャーを感じているということでもあった。

「おい！今ケンカしても始まらねえだろ。ここは冷静になって対策を話合おうぜ。」

見かねたダイチが２人を止めに入る。こうしてダイチ達があーだこーだと騒いでる間に、アキラはひっそりと行動を開始した。アキラはフミエ達のスパイとして黒客に加わっており、このままフミエ達がここまで来てくれればなんとかしてくれると信じて、その手助けをしようと考える。そのためフミエ達に連絡メールを送り、この後について相談しようとしたのだ。

「だからな、ここからはずっとアイツらを監視しといた方がいいんじゃねえかって言ってるんだよ。もしオレたちがさっきみたいに攻

撃を仕掛けようものなら、ショートカットを逆手にとられてこのフロアーの空間が攻撃されちまうからな。そもそもアイツらにオレたち得意のショートカット攻撃は全く通用しなくなってるしな。」

「監視してどうするって？」

「いや、だから。アイツらも一応ショートカットは使えるし、もしそれを使ってアイツらの方からこのフロアーに攻撃を仕掛けて来たら厄介だろ？その時はこちらも応戦して、アイツらに攻撃のスキを与えないようにしないといけねえなと思ってんだ。オレはな。」

「それは確かにわかる。しかしこっちがそんな消極的にしてると、アイツらはほぼ無傷でここまでたどり着くことになる。それでオレたちが直接戦ったとしても、向こうは暗号を使ってくるし、勝てるかどうかは微妙だ。ここはもっと今の時点で積極的に攻撃を仕掛けてもいいと思うぜ。たとえこの空間が暗号によってハッキングされても、ここを捨てて６階まで上がればいい話だからな。」

「６階もそうやってハッキングされたらどうするんだ？その時はもうオレたちに退路は残っていないことになるぜ。」

アキラがフミエ達と連絡を取ろうとしている間、ガチャギリ、シンヤ、ダイチを中心に黒客は作戦会議が開いていた。特にガチャギリは夏にイサコにコテンパンにされて以来の暗号への恐怖が残っており、いつになく慎重な姿勢だった。

「アキラはどう思うよ？」

そこで急にダイチがアキラに振った。その時アキラは少しダイチ達とは距離をおいてメールを作成するのに必死だったのでその呼び声に気付かなかった。

「おい！アキラ！聞こえねえのか！？」

「あっ！はい。なんでしょうか？」

２度目の呼びかけでアキラは飛び上がるように反応する。

「なんでしょうかじゃねえよ。今の話聞いてただろ。お前の意見を聞こうと思ったんだよ。」

「あっ、意見を。そ、そうですね…」

アキラはスパイ活動がバレないか心臓が破裂しそうなほど高鳴っていた。その動転具合をガチャギリは見逃さなかった。
「おい。お前さっきからそんなとこで何してんだ?」
「えっ?何って、トラップのチェックを。」
アキラは必死にごまかそうとした。
「は?そんな指示だしてねえだろ。大体お前はそんな気が利くヤツだったか?なら、そのウインドウは何なんだ?」
アキラが出しっぱなしにしていたウインドウにガチャギリが気付く。
「な、何でもないですよ。これでトラップのチェックをしていただけです。」
「本当か?ならオレもチェックしたいから見せてみろよ。」
そう言いながらガチャギリは腰をあげてアキラの方に歩み寄る。
「い、いや、大丈夫です。異常はありませんでした。」
「かまわねえだろ見せるぐらい。それとも何か?それは見せられないものだって言うのか?」
「い、いえ、そんなことはありません。でも見ても一緒なので閉じます。」
「見せろってんだよ!!」
ガチャギリは強引にアキラの手からそのウインドウを抜き取った。
「…チッ。このガキが。なめたマネを。」
ガチャギリはその場にいた全員に聞こえるくらいの舌打ちをし、これまでにも見せたことのない鬼の形相でアキラをにらみつけた。
「なんなんだ?」
ダイチが駆け寄ってガチャギリからウインドウを受け取った。そのウインドウには黒客がこのビルに仕掛けたトラップが記されている見取り図が表示されていた。そしてその見取り図を添付したメールの宛先はハラケンとなっていた。
「おいまさか、アキラお前。」
ダイチも信じられないという目でアキラの方を見た。
「ああ。どうもフミエ達の行動に迷いがないからおかしいと思って

いた。やっぱりこちらの情報を根こそぎ掴んでいたのか。そしてその発信元は、アキラ、お前だったんだな！」

言うと同時にガチャギリは思いっきりアキラの胸ぐらを掴んで引きあげた。「ああっ」と声を上げたのは、不安そうに事の成り行きを見守っていたデンパだ。

「言え！いつから裏切っていた！？それはまたフミエの指示か！？」

「…姉ちゃんにすべて話したのは一昨日のことです。でも、それは姉ちゃんに脅されたからじゃなくて、自分で、自分の判断で話しました。」

「なん、だと？」

アキラはこの状況下で、フミエに迷惑がかからないよう正直に申告した。その答えはダイチやガチャギリにとっては意外そのものだった。

「それはお前の意志でオレたちを裏切ったってことか？なぜだ！？」

ガチャギリはアキラの答えに怒りが沸点に達しようとしている。今までアキラは姉との距離をとりたいと黒客に加わっていた。それをガチャギリにしてもダイチにしても、アキラのことはしっかりと面倒をみてきたつもりだった。しかしここにきてその思いが裏切られたショックの方も大きかった。

「…・・・怖かったんです。こんな風にお金儲けをするなんて。そこにいるシンヤさんには悪いですけど、お金が絡むと絶対どこかでトラブルなると思っていました。それに、戦争状態を作ってお金を儲けるなんて、僕は間違っていると思います。」

アキラが黒客の中でここまで自分の本音を隠さずに言ったのは初めてだった。予想外のしたたかな言葉に、場は一瞬凍り付いた。

「うるせえ！金儲けに間違いもクソもねえ！金がないやつは負けなんだ！金がないやつは死ぬほど苦労するんだ！金がないやつは夢をあきらめないといけないんだ！世の中すべて金があるヤツが勝っているんだ！オレはそんな軟弱な考えのヤツがこのクラブにずっといたってのが不愉快極まりないんだよ！」

左手でアキラの胸ぐらを掴んだガチャギリは、右の手で思いっきりアキラを殴りつけようろした。
「やめろ！！」
寸前のところでダイチがガチャギリは取り押さえる。ガチャギリが手を離したおかげでアキラは床に思いっきり尻もちをついた。
「落ち着け。ここでアキラを殴っても何も始まらねえだろ。」
「うるせえ！じゃあお前はオレたちを裏切ったこのガキを許すっていうのかよ！」
ガチャギリはダイチの手を思いっきりふりほどいた。そしてまだ冷めやらぬ憎悪を孕んだ目でアキラをにらみつけた。
「深川。その子は黒客ないし満天堂に大きな不利益をもたらした。満天堂としてはその子が何も罰を受けないのは納得できない。暴力は望まないが、しかるべき処罰を下してもらいたい。」
シンヤはガチャギリとはまた違う冷たい視線をアキラに浴びせながら言った。
「ああ。わかってる。おいダイチ。こいつは黒客を裏切った。ここは黒客の規律を守るためにも、それ相応の罰が必要なんじゃないか？もうここは、リーダーであるお前がこいつの処遇を決めてくれ。」
シンヤの冷静な態度に目が覚めたのか、ガチャギリは落ち着いた口調でダイチの判断を任せた。ダイチもこの状況で温情処理はできないだろうとガチャギリは踏んでいた。
「…はあ、仕方ねえ。これ以上アキラに泳ぎ回られても面倒だ。ここは黒客の裏切った罪で、アキラのメガネを破壊することにする。」
ダイチは大きくため息をつきながら言った。どうしてこんなツライ判断を下さなければならなかったのか、自分の背負った運命を呪いながら。
「わかった。執行役はオレがやる。再生不可能にしてもいいか？」
「…かまうまい。」
ダイチ達の下した判断は、アキラのメガネの完全なる破壊。それは

ある意味暴力よりも重い刑かもしれなかった。今までのメガネの記憶を消し去ること。メガネはまた新しいものが手に入るとしても、それは今までアキラ手に入れて来たかけがえのないものが消えてしまうことを意味する。今までダイチ達がアキラに教え込んで来たスキルでさえも。

「うし。アキラ！そこに居直れ。ダイチに感謝しろよ。オレはお前をボロボロにするまで許すつもりはなかったんだからな。」

アキラはガチャギリの言葉に従い、その場に正座する。もう覚悟を決めていた。いや、自分の意志で黒客を裏切ると決めたその時から、こうなっても仕方ないと自分に言い聞かせていた。なのに、これまでの黒客との思い出もことごとく消されてしまうと思うと、ふいに悲しみがこみ上げて来た。それもその黒客の手にかけられるのだからなおさらである。顔をうつむけて涙を見せまいとするアキラに、ガチャギリは取り出した電脳ハンドガンの銃口をアキラのメガネに向ける。ダイチやナメッチ、デンパはつらくてその状況を見てもいられなかった。

「なら、いくぜ。」

ガチャギリが静かに厳かにアキラに告げる。ダイチは顔をそむけたまま下唇を噛みしめた。完全に再生不可能なほど破壊する必要があるのか、ダイチは自問する。確かにこの状況で敵であるフミエ側に寝返ったというのなら、これはもう完全にアキラとは決別するしかない。だからと言って、自分たちにアキラのメガネを破壊する権利があるのか。またいずれアキラと繋がり合うことはないのか。これを本当の決別としていいのか。そんな思いがダイチの頭の中に駆け巡る。そしてどのくらい時間が経っただろうか。ガチャギリが最後の言葉を告げてからかなり空白の時が流れた。いくらなんでも遅すぎる。ダイチがそう思ってガチャギリを見た時、そのガチャギリは静かに銃口を下ろしていた。

「ガチャギリ…」

自分と同じことを考えていたのだろうかと、ダイチが声をかける。

「……考えが変わった。よくよく考えるとこいつは使えるぞ。」
ガチャギリが先ほどまでとは違い、明るい表情で返した。
「何に使えるって？」
ダイチが不思議そうに訪ねる。
「ああ。フミエ達を倒すことにだよ。」

#12　混迷のレッドゾーン　part5

午後8時15分。メガマス本社ビルの最上階にある社長室のガラスから、桝田はどこか不気味な空気に包まれた大黒市を不安そうに眺めていた。既に廃ビルでは子ども達の激しい戦闘が始まっているのだが、そんなことはつゆも知らない桝田は妙な静けさを感じ取っていた。

「社長。ちょっといいですか？」

「どうぞ。」

その時神崎が社長室の扉をノックし、桝田は中に促した。

「株式会社サイバーゲートウェイに直接連絡を取ってみました。大胆な方法ですが、これで少しは情報を引き出せるかと思いまして。」

神崎が報告を始める。空間制御プログラムをハッキングし、今も本社のコンピューターにそれを収めていると思われるCGWに探りを入れてみたのだ。もちろんメガマスとしては、空間制御プログラムをハッキングし宗助を動かしているのがCGWであると確信しているからこそできることであった。

「先方の反応は？」

「はい。まず我が社の管制室のホストコンピューターに残されたハッキング痕から、CGWのコンピューターからの不正アクセスが検出されたことについて。先方は身に覚えのない事だと。しかしCGWはそのハッキングとの関わりを否定するが、社員の誰かの犯行であるという可能性は捨て切れないので、一応の調査は行いますと。」

CGWが会社ぐるみでそのハッキングを行ったということは断じてない。しかしCGWが目の届かないところで社員が勝手に行った可能性もあるので、それを一応調べてみるという極めて冷静な対応だった。

「まあ、思った通りの反応ですかね。他には？」

「ＣＧＷと猫目宗助の関係ですが、これは聞くまでもなかったです。やはりＣＧＷは猫目宗助との関係を否定しました。社員にもそんな人間はいないと。」
ＣＧＷもさすがに失踪届が出ている宗助との関係を肯定するはずがなかった。
「それも当然ですね…やはり相手もボロを出してきませんよね。」
桝田は１つため息をついた。
「ええ。最後にＣＧＷのハッキング痕を証拠として、警察に強制捜査を要請する可能性もあると揺さぶりをかけてみたんですが、それにも動じることはありませんでした。とりあえず内部調査が終わるまでは待ってほしいと。」
「…．．．なるほど。内部調査という名目でしばらくはこちらに文句は言わせないと。やはりＣＧＷも、今のメガマスが下手に警察に介入できないことを知っているんでしょうね。だからそれだけ余裕のある対応ができると。」
桝田はＣＧＷとメガマスの旧幹部達が手を組んだという可能性を考えていた。今のメガマスを貶めるという目的は一にしている。ＣＧＷがメガマスの内部事情を正確に把握しているのもそのためだとも思える。
「ただ、ＣＧＷと我が社の旧幹部達とのつながりは確認できませんでした。」
考え込んでいた桝田の頭の中を見透かしたように神崎が言う。
「では、これはＣＧＷの独自の計画ということですか？」
「ええ。考えてみてください。ＣＧＷは元国内最大手のコンピューター企業。一方の旧幹部達は世界的大企業メガマスで権勢をふるっていたんですよ。どちらも復権を目論んでいるとすれば、それは相容れない者同士であることはわかるじゃないですか。その２つの勢力が手を組むなどあり得ない。私もこの線はないだろうと思って一応調査はしてみましたが、案の定の結果でしたよ。」
「そ、そうですか。」

神崎の話に桝田はほんの少しだけホッとしたが、状況が悪いのは変わりはない。桝田はまた考え込むように1つため息をつくと、神崎に背を向けてもう1度大黒市を一望した。

「そんな気苦労なさらずに。まだあの決定を後悔しているんですか？」

桝田の丸い背中に神崎が訪ねる。あの決定とは、宗助が犯行声明として送りつけて来た要求を一切のまないということである。それはこの日の夕方のニュースで報道された、メガマスの声明からも暗に読み取る事ができる。それを見た宗助達がどのような手段で二次攻撃を仕掛けてくるか、それが桝田にとって一番気がかりだった。

「後悔はしていません。あれは幹部のみなさんともよく合議した上での決定ですし、要求をのんだ方がメガマスは苦境に立たされていたでしょうね。」

「そうです。あの時我々には実質的に選択の余地はなかったと言っていいでしょう。」

「しかしそれは、相手にとって思うつぼだったのではないでしょうか？確かに大黒市民は、今日の事態はどこかのハッカーの仕業だと思ってくれるでしょう。それで事故が起きなければいいですが、もし事故が起こってしまった場合、その責任はやはりメガマスが負うことになるんですよ。」

メガマスが無傷で済むには、今後事故が起きる前に宗助を逮捕し、さらにＣＧＷが握っている空間制御プログラムも抹消しなければならない。果たしてそれが可能なのかと桝田は不安になった。

「事故は起こさせません。そのために管理室にはいつでも出動できるように準備させてあります。」

「どうしてそう楽観できるのでしょうか？管理室の動きなど猫目には手に取るようにわかっているんじゃないですか？ＣＧＷの内通者もこのメガマスにいるというのに。」

少し語気を強めて桝田が訪ねる。空間制御プログラムのハッキングに関与したその内通者も、懸命に調査にも関わらず掴めていないの

だ。
「落ち着いてください。確かに内通者の問題もありますが、猫目に動きをすべて把握されるほど管理室は抜けてはいません。逆に言えば猫目が動き出したとき、内通者をあぶりだすこともできます。ここはあちら側が動き出すのを待つのが上策です。」
「ＣＧＷの問題はどうなります？」
「猫目さえ逮捕できれば、後はＣＧＷとの関係を吐かせるだけです。そこで彼がＣＧＷとのつながりをほのめかした時点で、警察には強制捜査を断行してもらいます。ＣＧＷの方は証拠隠滅のために空間制御プログラムを抹消するしかありません。」
神崎の見込みでは、猫目さえ逮捕できれば後は芋ずる式に事件は解決できるはずだった。
「・・・逮捕できますか？猫目を。」
「なんなら、直接こちらからＣＧＷのコンピューターをハッキングして空間制御プログラムを抹消するという手段がありますが。失敗したときのリスクは大きいですけど。」
「それではＣＧＷと同じ穴のむじなじゃないですか。リスク云々の問題じゃなく、考えるまでもなく却下ですよ。」
桝田は即座に神崎の提案を引き下げた。
「そうおっしゃると思いました。それでは引き続き市内の警備と内通者の調査を続けるということで。」
「それでお願いします。」
桝田の意志を確認したところで神崎は社長室を出ようとした。その時扉がノックされた。神崎は立ち止まり桝田が「どうぞ」と中に促す。入ってきたのは香川だった。
「失礼します！社長。猫目からまた声明が届きました。」
「本当ですか！？」
香川はその声明がプリントされた紙を桝田のデスクにのせる。神崎もそれを確認しようと桝田の隣に立った。
「お前達が我々の要求をのむつもりがないことは理解した。やがて

その決断を後悔することになるだろう。」
桝田がそれを読み上げた。この日の午前中に送られてきたものとは違ってかなり簡潔な文体である。しかし相手が再度要求を突き着けたり、その期限を延長しなかったところからみると、もう相手は次なる行動を起こしているのだと桝田は確信した。
「先方はもう要求が実現されると思ってないようですな。」
「そのようですね。すぐに次の攻撃が来るかもしれません。管理室と警察に警備の強化を要請してください。」
「はっ！」
桝田の指示を受け、香川はすぐに部屋を出て行こうとした。
「待ってください。これはブラフかもしれません。確かにいつ彼が次の行動にでるかわかりませんが、今すぐと確定したわけじゃありません。逆にこのような緊張状態を我々に続けさせて、数日様子を見て疲れてきたところを突いてくる可能性もあります。」
神崎が香川を止めて言った。この声明はメガマスを踊らせるために送りつけて来たものかもしれないというのだ。
「確かにその可能性もありますが、どのように対応すれば？」
桝田が神崎に訪ねる。
「この声明のことは念頭に置きつつ、あくまで今まで通りの警備体制を敷くよう連絡してください。たかだか1行の声明でメガマスがあわてていれば、それこそ猫目がつけあがります。」
「わ、わかりました。」
神崎の指示を管理室と警察に伝えるため、香川はそこで部屋を飛び出して行った。
「本当に、これで大丈夫ですかね。」
桝田は疲れたように独りつぶやくと、また不安そうに窓から大黒市内の様子をうかがった。

#12　混迷のレッドゾーン　part6

ひたすら上を目指して廃ビルをのぼるヤサコ達コイルレジスタンスは、ようやく3階東フロアーにたどり着いた。2階から3階への階段には暗号が敷き詰められ、黒客からもショートカットによる襲撃があったのでなかなか楽ではなかったが、このビルの中で戦う子ども達の中では最も速いペースであった。他の子ども達はまだ3階にもたどり着いておらず、フロアーには下の階から響き渡る爆発音や悲鳴がこだまするだけで、また違った不気味さがあった。

「さすがタケル君。アイツらの暗号なんてまったく苦にせず解除してみせたわね。」

「いや、それほどでも。」

暗号を解除して道を拓いたタケルをフミエがねぎらった。タケルは謙遜したが、その解除のスピードはダイチ達が思っていた以上の速さだった。

「さて、ここからどう進むかね。」

フミエが一息つくついでに腕を組んで考え込んだ。

「さっきの攻撃を見るとダイチ達はもう僕たちの動きを察知していることは間違いない。ここからはトラップとダイチ達の攻撃の両方を気にして進まないといけないね。」

ハラケンがフミエに言う。先ほどまでは先行の子ども達の様子を見てトラップの種類や位置などが知り得たが、ここからはそうもいかなかった。

「そうね…タケル君。このフロアーの暗号トラップも解除できる？」

「できるとは思うけど、かなり時間がかかると思う。時間もあまり残ってないからもっと大胆に突破するしかないんじゃ？」

タケルがフミエに返した。もうこの廃ビルは古い空間のレッドゾーンへと変わりつつある。うかうかしているとこの廃ビルごと“あっち”の世界へと飲み込まれる恐れがあった。

「確かにそうね。なら危険が伴うけど強引に突破しましょうか。それにしてもこのまま東階段をのぼるか、今度は東から西に横断するか、ルートは分かれるけど。」
「うわっ！ちょっと、東階段を見て！」
フミエの言葉に東階段の様子をうかがったヤサコが驚いたように声をあげた。
「何これ？ビー玉？」
フミエが足元に転がり落ちて来た小さなガラス玉を拾い上げる。そして4階へと通ずる東階段を見ると、そこには足の踏み場もないくらいのビー玉が敷き詰められていた。
「……今度はまた原始的なトラップだね。これだけのビー玉があると、この手すりもない階段を走って突破することなんてできない。慎重に足の踏み場を探してのぼろうものなら、ダイチ達がショートカットを使って攻撃してくるだろうね。」
ハラケンがそのトラップの意図を推理した。もしここを進むなら、先ほど暗号を解除しながらのぼったように、ビー玉を払いのけながらのぼらなければならない。スピードダウンは必至だった。
「なーるほどね。どうしたものか。でもここを横断するって言っても、西階段の様子もわからないし。ああもう、こんな時オヤジがいれば見に行かせられるのに。」
フミエが嘆くように言った。オヤジとはフミエのペットならぬしもべで、他のペットよりも耐性が強くて頭が良く、スパイ活動には最適な存在だった。
「そう言えばオヤジさん最近見ないけどどうしたの？」
ヤサコが訪ねる。ヤサコはオヤジの隠れたファンだった。
「アイツもう年だから体が言うことをきかないらしいのよ。今は高血圧症でメンテナンス中。」
「で、電脳ペットにそんな症状があるんですか？」
ヤサコはそんな話は初めて聞いた。ヒト型のマトンはそこまで忠実に再現されているのかと思った。

「ほんと、余計なギミックばっかりつけて消費者を金づるにするようなマネ、やめなさいよね。」
「ご、ごめん。」
フミエはペット会社に勤める父を持つハラケンに嫌味をぶつけた。
ハラケンはそこで素直に謝るしかなかった。
「それよりもどのルートで行くか考えないと。」
フミエは再び考えこむ。その時ハラケンのメガネに一通のメールが届いた。
「こんな時に何だろう?アキラ君からだ!」
少し驚いてハラケンは急いでそのメールを開いた。コイルレジスタンスのスパイとして黒客に潜り込んでいるアキラからの情報なら、何か使えるものがあるかもしれないと思いながら。
「アイツ…特に連絡もしないでここまで来たけど、どうするつもりなのかしら?」
フミエはアキラにこの襲撃のことを大まかに伝えただけであった。フミエ達が黒客を説得してやめさせに来るということぐらいしかアキラは知らない。このビルが今どれだけ危険な場所に変わろうかとしているのかさえも、アキラは知らなかった。
「えーと。今僕はダイチさん達と5階にいます。早くハラケンさん達がここまでたどり着けるように、トラップの場所を記したビルの見取り図を添付します。参考にしてください。」
ハラケンはメール本文を読むと添付ファイルを開いた。するとメールの内容通り3階フロアーのトラップが記された見取り図が表示された。
「やるじゃないアイツ。いつからこんな気の利くヤツになったのよ。これがあるならルート選びも迷わずに行けそうね。」
フミエが感心したように言う。アキラが役に立つなんて初めてなんじゃないかとフミエは思った。
「これによると、東階段より西階段の方が突破はしやすそうだね。それに東から西へ抜けるフロアーのトラップも、この見取り図さえ

あればなんとか避けながらいけそうだ。」
ハラケンが図を分析しながら言った。そうなれば選ぶルートは決まったも同然だった。
「じゃあ、ここから西へ抜けて西階段から4階を目指す。この図があるとはいえ、慎重に進むわよ。」
「了解！」

「かかったぞ！アイツら、西階段を目指して動き始めた。」
ミゼットからの偵察映像を見ながらダイチが言った。
「ふん、バカめ。アキラからの情報を何の疑いもなく丸呑みするなんてな。トラップの手薄な東階段より、トラップの多い西階段を通らせる。そこでオレたちがショートカットを使って一気に畳み掛ければ、アイツらはもう一網打尽だぜ。タケルには悪いが、フミエの味方をするのなら仕方ない。」
すべてはガチャギリの考えた作戦通りだった。アキラが黒客にフミエ達のスパイとして潜伏していたことを知ったガチャギリは、それを逆手に取ろうと考えた。アキラに偽の情報を流させて、自分たちが大量に罠を仕掛けたエリアに誘い込む。そこで4人を一気に殲滅しようという作戦だ。その作戦に不本意ながら従わざるを得なかったアキラは、黒客に囲まれる中で正座させられて、下手に動けないように見張られている。自分のミスでフミエ達がやられてしまうかもしれないと、うつむき悔やんでいた。
「ナメッチ。武器の準備は？」
「今やってるッス。備蓄してあった直進くんと追跡くんの半分以上をつぎこめば、アイツらもさすがに手が出せないッスよね？」
武器を準備しているナメッチがたずねる。黒客が備蓄してある武器の量はハンパじゃないので、その半分というだけでもかなりの量である。
「十分だ。早く準備を終えろ。ヤツらはもうすぐそのエリアに入る。

」
ガチャギリが親指を立ててナメッチに言った。
「頼みますよ。ここで彼らを止めないと、本気でここまでたどり着くことになるかもしれないので。」
「心配すんなよ。必ずここで沈めてやるから。」
不安そうに言ったシンヤにガチャギリが返す。黒客はコイルレジスタンス４人が西階段に入るその時を待ちわびる。

ヤサコ達４人はアキラからのメールに添付されていた見取り図を見ながら、フミエを先頭にまた一列になって慎重に前進していた。フロアーに仕掛けられているトラップは概ね見取り図に記載されている通りの配置だったので、かなりスムーズに進んで行ける。また、時々ショートカットからも攻撃が来るのだが、それも申し訳程度ぐらいのものでほとんど脅威を感じることもなかった。それも黒客の作戦通りであり、すべては西階段へと誘い込むための周到な罠だった。
「気にせいかしら？どうも攻撃がぬるい気がするんだけど。私たちが１番進むのが速いはずよね？それなのにどうしてこんな程度の攻撃しかしてこないのかしら？さっきの階段にしたって、ショートカットで攻撃してきたと思ったらすぐにやめてきたし。」
フミエはその異変に気付き始めていた。これだけトラップの間を縫いながら前進していれば、それを止めるためにもっと激しい攻撃がきてもいいだろうと思った。
「下の戦闘が激しくなってきてるんじゃないの？もしくは作戦を変えたとか。僕たちがダイチ達の５階までたどり着いても、そこで迎え撃てばいい。その代わり他の子ども達はこれより下の階で先に倒しておくみたいな。」
ハラケンが推理しながら言う。とにかく自分たちは黒客と戦う意志はなく、黒客のいる５階にのぼり事情を話してこの戦争をやめさせ

ることが目的なので、その方が都合がいいと思った。
「はっ、私達もなめられたものね。」
ハラケンの言葉にフミエは笑いながら言った。
「フミエちゃん。私たちはダイチ君達と戦うのが目的じゃないんだから。」
「わかってるわよそんなこと。」
フミエは戦いたい衝動に駆られているのだろうと思ったヤサコが諌める。フミエはすぐに否定して返した。この状況でそんなことを言っていられないというのは、さすがのフミエでもわかっていた。
そうして4人は無傷のまま西階段前に到着する。他の子ども達もこの西階段から3階へのぼって来るはずだったが、まだ誰も来ていないところを見ると2階で相当苦戦しているんだろうと思った。
「さあ、さっさと4階にのぼるわよ。」
一息つく間もなくフミエが西階段への1歩を踏み出す。階段にはいくつかの暗号がセットされているようだが、これもまた見取り図と同様の配置なので引っかかることはなかった。4人はすぐに3階から4階への中間である踊り場にたどり着く。すぐにまた階段を上がろうとフミエが見取り図を見ながら次の1歩を踏み出したその瞬間。
「あら？」
少々間の抜けた声をフミエが発した。足元を見てみると見事にフミエが暗号を踏みつけているのがわかった。
「フミエちゃん！」
「ごめんごめん。だってこれ、この見取り図と配置が違うんだもん。」
フミエは謝りながらその暗号から足をどかす。踏みつけられた暗号は青白く発光し起動しているようだが、何も起こらないのはおかしいなと思った次の瞬間、無数のショートカットが4人を囲むように一斉に開いた。360度、足先から頭の上までを隙間なく埋めるように開いた黄色いブラックホールに、4人は一瞬にして異界に飛ばされたような錯覚を起こした。

「な、なんなのこれ！？」
ヤサコが思いっきりパニックになりながら言った。
「まさか、罠！？」
「わな！？」
「ええ。どうりでさっき手ぬるい攻撃を仕掛けてくるなと思って変だと思ったら、アイツら、ここに私たちを誘い込むのが目的だったのよ。この場所の暗号を踏めば、こうやって大量のショートカットが開く仕組みになってたのよ！とにかく鉄壁を投げるのよ！」
フミエの指示で４人は一斉に自分たちを囲むように鉄壁を投げ始めた。頭から足先までもカバーするように何重にも投げ終わると、そこで持って来た鉄壁は無くなってしまった。すると次の瞬間にショートカットからの直進くん一斉掃射が始まった。
「ってことは、さっきアキラ君が送って来てくれたあの見取り図はでたらめだったの！？」
鉄壁に銃弾がはじかれるすさまじい音の中、ヤサコが聞こえるように大声でフミエに訪ねた。
「この西階段の部分だけはね！ここが本命だから、３階のフロアーは私たちを信じ込ませるためにわざと本当のトラップの位置を記したのよ！中途半端な攻撃を仕掛けてきたのもその一環！」
フミエも声を張ってヤサコに返す。
「じゃあアキラ君は利用されたってことだよね！？もうアキラ君がスパイっていうのはダイチ君達に知られたってことでしょ！？それじゃアキラ君の身が危ないんじゃないの！？」
「バカ言わないで！私たちの方が身が危ないわよ！もう鉄壁はなくなったのよ！この鉄壁が破られたら、私たちは蜂の巣になるわ！」
「なんとかならないの！？」
「ならないわ！これだけの数のショートカット、ハッキングでどうにかするなんてできない！ハラケン、なんとかして～！！」
「ムリだよ！タケル君！暗号でなんとかできないかな！？」
「できないと思う！！」

４人はもうここでやられるしかないと思った。もし、この古い空間の中でメガネが破壊されたら、その時はどうなってしまうのかという不安も頭によぎり背筋が凍り付く。救世主が現れるはずもないこの状況で、絶望だけに支配されながら幾許かの時が流れる。ところが無力感が諦めへと変わり始めた頃、予想外のことが起こった。

「と、とまった？」

「何してやがる！？おい！さっさと新しい直進くんをセットしろ！」

モニターの向こうで掃射が止まったのを確認したガチャギリが怒鳴りつけてナメッチに指示を出す。

「いや、タマ切れじゃないッス！」

「ああっ！？じゃあ何なんだ？」

「それがわからないッス！」

弾丸は残っているのに何故か発射されなくなったらしい。それもセットしていたすべての直進くんが同じ故障を起こしている。ナメッチは慌てて直進くんの発射装置を調べ始めた。

「だったら新しい直進くんをセットしろ！」

「ダメだ！どの直進くんも反応しやがらん！」

今度はダイチが悲鳴のように叫ぶ。準備していたすべての直進くんが一瞬にして使えなくなったのだ。

「バカな！どうなってるんだ……おいアキラ！お前なんかしたんじゃないだろうな！」

「ぼ、僕はここでずっとおとなしく座っていたのに、何かできるわけないじゃないですか！」

アキラは黒客メンバーに見張られているので、正座したふとももの上に置いた両の手を先ほどから動かしてもいない。

「それもそうか。じゃあなんでなんだ？」

「おい深川！連中この隙にショートカットの囲みから抜け出したぞ！」

モニターを見ていたシンヤが叫んだ。ヤサコ達4人はやっとの思いで逃げ出したのだ。

「うわっ！ちっくしょー！また逃がしたか！」

ガチャギリが床に落ちていたメタバグを思いっきり蹴りつける。

「どうするんだよ！？もうヤツらは4階に辿り着いたし、ここで倒すために大半の武器をつぎ込んだんだろ？もうヤツらを止める方法はないんじゃないか！？」

普段は言葉遣いの丁寧なシンヤも語気を荒らげた。原因不明の武器不良が起こったとはいえ、ここまで追いつめられたのは戦闘指揮を任されている黒客の責任だった。

「すまんシンヤ。今どうするか考える。」

「考える必要はない。オレがアイツらを止めてくる。」

次なる作戦を考えようとしたガチャギリを制して、ダイチは1歩前に踏み出した。

「はあ？お前1人で行くのか？やめとけよ。4対1じゃ勝ち目は無い。それも相手は暗号使いだ。」

「いや、オレが相手するのはフミエだけだ。フミエさえ倒せば、後の3人は追い返せる。お前らはショートカットから残った武器を使って後の3人を釘付けにしておいてくれ。」

直進くんがダメになったが、黒客にはまだ追跡くんとハンドガンタイプの武器が残っていた。

「それで大丈夫なんだろうな？」

「任せとけ。4階のトラップを仕掛けたのはこのオレだ。その配置ぐらい覚えてる。とにかく、ここでフミエを止めてこの5階にはアイツらに入らせない。幸い西階段の4階から5階の間には砂袋を積んであるから、アイツらはまた4階フロアーを東に横断しないといけない。そこには最後のトラップが大量に仕掛けてあるし、まだ時間はある。その間にお前らは直進くんと追跡くんの復旧を試みてくれ。」

「そうか。わかった。」

ガチャギリはダイチの覚悟を汲み取ると、そのままダイチにハンドガン系の武器をいくつか渡した。
「頼むぞ！健闘を祈る！」
「ああ、援護射撃は任せたぞ。」
「オヤビン！しっかり！」
メンバーに見送られたダイチは、東階段から４階に降りて行った。

#12　混迷のレッドゾーン　part7

やっとの思いで窮地から脱したヤサコ達は4階にたどり着いた。とにかく掃射が止まったのに気付いた後はなりふりかまわず走って逃げて来たので、4人とも息を切らしていた。

「……ほんと、危ないところだったわ。」

「そうね。なんであそこで止まったのかしら?」

ヤサコが階段の踊り場を見下ろしながら言った。まだショートカットは開かれたままだったが、そこから弾丸が飛び出す気配もなかった。

「わからないけど、とにかく助かったのは良かった。この状況下でメガネを壊されると何が起こるかわからないからね。」

ハラケンが言う。古い空間の中でメガネをはずしてはいけないという掟があるが、メガネを壊されたときも同様の危険があるのではと思った。そう考えると、下の階で戦闘している他の子ども達の身も危ない。

「そうね。とにかく4階までたどり着いたのは大きいわ。アイツらはおそらく5階でしょう。なんとかしてそこまでたどり着きたいわね。」

「でも、この西階段にはまた砂袋が積まれてるみたいだ。ここから上には行けない。となると、またフロアーを横断しないといけないね。」

ハラケンが階段を確認して言った。

「なるほど……ここからは先は今まで以上に厳しい戦いが待っているでしょうね。心していくわよ。」

「オッケー!」

そうして4階フロアーにフミエが一歩踏み出した瞬間から、黒客の総攻撃が始まった。いくつものショートカットが開き、そこから弾丸が飛び出しバクダンやかんしゃくが投げ込まれる。足元には例に

よって地雷型の暗号などが敷き詰められていて、そちらにも気を配らなければならない。そこで４人はステルス暗号を自分の電脳体に振りかけた。これでモニターの向こうの黒客には自分たちの姿は見えなくなり、ショートカットによる攻撃も封じることができる。黒客はこれに手の打ちようが無く、４人はなんとかフロアーの半分のところまでやって来た。東西の中央を仕切る壁にへばりつきながら、トラップがないか慎重にフミエが壁にへばりついて東フロアーの様子をうかがう。

「ん？誰かいるわね。」

フミエが東階段前にたたずむ人影を確認した。ちなみにもうヤサコ達のステルス暗号の効果は切れている。

「誰？」

「霧が濃くてよく見えないわ。ちょっと確認してくるから、３人はここで待ってて。」

「気をつけてね。」

フミエは後の３人をその場に残し、扉一枚分の通路を抜けて東フロアー入った。

「よくここまで来たな。正直これは予想外だった。それは讃えてやろう。しかし、ここから先は絶対に行かせねえぞ！」

「ダイチ！」

霧が少し晴れたようだった。フミエは身構えるダイチの姿をしっかり確認した。

「ダイチ君！？」

ヤサコが驚いて東フロアーをのぞき込む。

「ああ、オレが最後の砦だ。オレがお前らをここで止める！」

そう言うとダイチは有無を言わさず持っていたハンドガンでフミエを狙撃した。フミエはとっさに右斜め前に飛び込んで弾丸を避けたが、そこには暗号のトラップがあった。地雷型暗号トラップに体が入ってしまったフミエは、爆発に巻き込まれてメガネに重度の損傷を負った。

「フミエちゃん!?うわっ!」
その様子を見ていたヤサコが叫ぶ。するとその瞬間通路の出入り口を塞ぐようにショートカットが現れ、ヤサコ達の方向に弾丸を放ち始めた。
「危ないヤサコ!」
ハラケンがとっさにヤサコの手を引いて助ける。ヤサコは無事に済んだが、これでフロアーの東側と西側が完全に分断されてしまった。
「フミエちゃん!?フミエちゃん!」
ヤサコは壁を叩きながらフミエの名前を何度も叫ぶ。フミエは1人トラップだらけの東フロアーでダイチと対峙しなければならない。ヤサコは最後、トラップで重傷を負ったフミエの姿を見ていただけにその不安は大きかった。
「落ち着くんだヤサコ。フミエはもうダイチと決着をつける気なんてない。この戦争をやめさせるために、ダイチをなんとか説得するはずだ。フミエを信じてここは待とう。」
「そんな雰囲気じゃなかったわ。フミエちゃんがその気でも、ダイチ君が話を聞かないんじゃ。あのままじゃフミエちゃんのメガネも壊されるかもしれない。そうなるともう手遅れだわ。」
落ち着かせようとしたハラケンに、ヤサコが不安そうに言った。
「ダイチだって冷静さをすぐに失うヤツじゃないから大丈夫。とにかく僕たちはこの通路を塞ぐショートカットのハッキングを試みるよ。」
ハラケンがそう言ってウインドウを開いた瞬間、そうはさせまいと言うように別のショートカットが開いて攻撃を仕掛けて来た。黒客はとにかくフミエを孤立させて撃破するつもりだった。

「だから話を聞けっての!私たちはアンタ達と戦うつもりはないの!」
ダメージを負ったメガネで、ダイチの銃撃をなんとか避けながらフミエが言った。フミエはダイチに反撃をするつもりもないというよ

うに、ただ攻撃を避けることに専念していた。もちろん、足元のトラップにも注意しながら。
「ウソつけ！戦う気もないのにここまでのぼってくるはずがねえだろ！」
「わざわざここまでのぼってきたのは、アンタらを説得するためよ！」
「説得？」
不思議そうにダイチがたずねる。
「ええ。この戦争をやめさせるためにね。」
「はあ！？しらじらしいぞ！掲示板を使って偽情報ばらまいて人集めるとか、壮大な準備までしてきたくせに！何が戦争をやめさせるだ！」
ダイチはまた攻勢を強めた。それを必死にかわしなら、フミエはなんとか説得を続ける。
「それがそもそも違うのよ！私たちはそんな書き込みはしてない！誰かに名前だけ利用されたのよ！」
「名前だけ利用された？じゃああれか？コイルレジスタンスってのは、もともとお前らが名乗った組織じゃないってことか？」
「いえ、名乗ったのは私たちよ。コイルレジスタンスも私たちのことで間違いないわ。もともとは力をつけすぎたアンタ達を倒すために、私たちが大黒市の電脳クラブを引き入れて連合を作ろうとしていたのよ。」
「だからその連合でこうやって襲撃してきたんだろ！」
フミエが今までのことを正直に伝えて訴えかけようとしたが、ダイチにはどういう事情だかイマイチ理解できなかった。
「違うわ！人の話を聞きなさい！私たちがそれを名乗ったのは昨日のことだった。昨日の時点ではもっと連合を大きくしないとアンタ達に勝ち目がないことはわかっていた。だからもう少し地道に連合の輪を広げてから決起しようと考えていたわ。でも、すべてがおかしくなったのは今日の大黒市の騒ぎからよ！アンタももちろん知っ

ているでしょう?」
「今日の騒ぎってあれだろ?街中に古い空間が出現した。それと同時に現れたメタバグによって、お前達は思いがけず力を盛り返した。だから今夜決起したんだ。それでつじつまが合うじゃねえか!」
状況的にダイチがフミエの言葉を信じられる根拠がなかった。フミエは下唇を噛みながらどう説明しようか悩んだ。
「じゃあ、どうしたら私の言葉を聞いてくれるの?」
フミエは急に寂しいような口調で訪ねた。ダイチもこの急な態度の変化にドキッとして、攻撃の手を止める。
「そ、そうだな。じゃあメガネをはずせ。こちらに反撃する意志がないことを示せ。」
ダイチの指示に今度はフミエはドキッとした。今は絶対にメガネをはずせない理由がある。
「・・・悪いけど、それはできないわ。」
「ふざけるな!ならお前の話は聞けない。」
「アンタ達まだ気付いてないの?このビルの空間のバージョンを見てみなさい。」
「はあ?こんな時になんだよ。一応見てやるけど・・・5.20!?なんでこんなに古いバージョンなんだ!?」
フミエに言われてダイチはウインドウを開いてバージョンを確認したダイチが驚きの声を上げた。
「アンタ知ってる?このバージョンはかつて“あっち”と呼ばれた空間に限りなく近いものなの。この中でメガネをはずしてしまうと、下手したら肉体と精神が分離したまま戻らなくなってしまう可能性があるのよ。メガネが壊れてしまっても危険だわ。」
「・・・ふん。今更都市伝説かよ。大体あの事件の時に“あっち”とかいう空間も消滅したんだろ?見え透いたウソをつくんじゃねえよ。」
ダイチはそれを信じようとしなかった。本心を言えば信じたくはなかった。夏の時のような事件がもう起きてほしくないのは、それは

ダイチも同じだった。
「ああもう、簡単に説明するわ！あの事件の後メガマスは新しいプロジェクトのために、古い空間を再現できるプログラムを開発したの。でもそれが今度は、メガマスへの復讐を誓うタケル君のお兄さんにハッキングされてしまった。そのプログラムを使ったサイバーテロのデモンストレーションとして、今朝大黒市に古い空間を発生させた。そして今、その第2段階としてこのビルをまるごと“あっち”へと変えるつもりなのよ！」
フミエはダイチにすべてを打ち明けた。
「それほんとか？」
「こんな壮大なウソ。つけると思う？」
ダイチは難しい顔になって考え込む。ようやく事の重大さを知り、自分たちの過ちも思い知ることとなった。なぜタケルもメンバーに加わっていたのか、それもようやくわかった気がした。
「おいダイチ！そいつらの言葉には根拠はねえ！かまわずやっちまえ！」
そこでダイチの前にモニターが現れ、そこからガチャギリからの指示が飛んだ。
「黙りなさいガチャギリ！このままだとここにいる全員が危ないのよ！メタバグなんかにこだわってないで、さっさとこの戦争をやめなさい！」
「うるせえ！お前なんてここで散れ！」
モニターの向こうでガチャギリが叫んだかと思うと、フミエの前にショートカットが現れて2機の追跡くんが撃ち込まれた。フミエは1機をメガビーで撃ち落とすも、もう1機が直撃してしまう。フミエのメガネはかなり破損箇所がでてきた。
「やめろ！ここでメガネが破壊されると、下手したら命に関わってくるんだぞ！」
ダイチが激しい口調でガチャギリを止めた。自分たちのせいでフミエが命の危険にさらされるなど、もちろんダイチには耐えきれなか

った。
「なんだよ。お前はこいつの話を信じるのか？」
「…・・信じるしかねえだろ。げんにコイツは、今までのオレの攻撃に対して1度も反撃を試みなかった。本気でコイツはオレたちと話し合うためにここまでのぼってきたんだろう。それより、下にいる連中の様子はどうだ？メガネを破壊されたヤツはいるか？」
ダイチがたずねる。もしメガネが破壊されている子どもがいれば、その子どもはどうなってしまっているのかダイチは急に不安になってきた。もしそれで命の危険にさらされている子どもがいるとすれば、知らなかったこととはいえそれは自分たちの責任になる。
「わからねえ。ミゼットに行かせるか。フミエ達はどうするつもりだ？」
「とりあえずそっちに連れて行って話だけでもしてもらおう。そこからコイツらをどうするか判断する。」
ダイチがフミエの方をちらっと見ながら言った。
「わかった。ちょっと待ってくれ。一応そっちに向かう。」
ガチャギリはモニターを切ると、しばらくしてアキラとともに4階まで降りて来た。
「アキラ！」
その姿を見てフミエが叫ぶ。アキラはガチャギリに銃口を向けられたまま連れてこられたのだ。
「ごめん。お姉ちゃん。」
力なくアキラがうなだれる。アキラが黒客に捕まって利用されたおかげで、先ほどフミエ達はピンチに陥った。
「お人好しのダイチに感謝するんだな。とりあえずお前らの話だけは聞いてやる。もし下手に動くと、お前らのかわいいスパイであるこいつのメガネが壊れると思え。」
ガチャギリが念押しのように言う。その時、ショートカットで分断されていた西側フロアーとの通路も開き、ヤサコ達もこの状況を確認した。

「ア、アキラ君!?」
ヤサコも銃口を向けられているアキラの姿を見て驚いた。しかしフミエの方も無事ダイチを説得できたようなので、ひとますヤサコ、ハラケン、タケルの3人はほっと胸を撫で下ろした。
「お前らも下手に攻撃するそぶりを見せたなら、こいつのメガネを破壊するからな。さあ、ついて来てもらおうか。」
ガチャギリとアキラを先頭に、間に4人、最後尾にダイチが見張りとしてついて、まるで捕虜のように連れられてヤサコ達は念願の5階にたどり着くことになった。

#12　混迷のレッドゾーン　part8

5階に集まったヤサコ達コイルレジスタンスと黒客。ガチャギリはアキラに銃口を向けたまま4人の方を振り返った。
「まず聞こうか。さっきの話は本当なんだな？」
「ええ。このビルが狙われているのはほぼ間違いないわ。」
ガチャギリの質問にフミエが答えた。モニターを通して先ほどのフミエの話を聞いていたナメッチやデンパには、かなり冷や汗が浮いていた。
「なんでお前らがメガマスの開発したプログラムだとか、それがタケルの兄貴にハッキングされたとか、そしてこの廃ビルが狙われているかとか知ってるんだ？情報のソースは？」
「ソースっていっても色々ね。メガマスの開発したプログラムは前から知っていたわ。それを使って私たちはイマーゴの実験をしたんだから。ただそのプログラムがハッキングされたこととかは、全部警察の人に聞いた。ほら、以前アンタがハッキングに遭った時に担当してくれた人よ。」
フミエがダイチの方を見て言った。
「直樹さんにか？なんであの人がそんな重大なことをお前らに？」
「その直樹さんは昨日、この中津の近くでタケル君のお兄さんの目撃情報を得たんですって。それをオバちゃんが報告を受けるついでに私たちも同席して、その時に色々聞き出したのよ。それに、メガマスでその空間制御プログラムを使ったプロジェクトを進めていたのはヤサコのお父さんだった。最近ヤサコはお父さんの様子が変だったのも気付いていたの。その原因が空間制御プログラムのハッキングだったなんて、私たちもショックだったわ。」
「みんな、ごめんなさい。私のお父さんのミスでこんなことになって。」
ヤサコは一同に謝った。

「いや、元々は兄ちゃんが悪いんだ。本当にみんなごめん。」
今度はタケルが一同に頭を下げる。ダイチ達はそれになんと返していいか戸惑った。
「いや、オレたちに謝られてもなにも変わらないんだ。２人とも頭を上げてくれ。なるほど、それだけ証拠が揃っているってことは、タケルの兄貴がこのビルを狙っているってのは本当のようだな。普通に考えてバージョン５．２０ってのはあり得んからな。じゃあこの場所で今までメタバグが取れたのもその空間制御プログラムのせいなのか？」
「それもまた違うみたいなのよ。メガマスがそのプログラムをハッキングされたのは、ちょうど私たちがここで果たし合いをした日みたいなの。でもここのメタバグはそれより前からあったでしょ？そう考えると時間が合わないのよ。」
直樹の話を聞いてフミエ達もずっと考えていた。あのメタバグはなんなのか。果たし合いの時に感じた、あの地震にような現象はなんなのかと。
「どういうことなんだ？」
「わからないわ。あと１つだけ。これは言うとアンタ達が怒るかもしれないけど、落ち着いて聞いて。昨日の話だけど、私たちは直樹さんの話を聞いて事の重大さを思い知った。そこでこのまま黙っているのはまずいと思って、このビルのことを伝えたの。そして実際、このビルまで案内した。」
「なに！？じゃあ昨日直樹さんがここに来たのか！？それでここを調べて行ったってのか！？」
ダイチは心底驚いた。ダイチは直樹からの着信を拒否してまでこの場所のことを隠し続けようとしていたのだ。
「…なるほど。だから今朝来た時ここの入り口の暗号が解除されてたのか。あの警官の仕業だったんだな。しかし、それはこの場所のことを誰にも言わないっていう約束に反するんじゃねえか？」
面白くないという口調でガチャギリが言った。もはやここでフミエ

達のメガネを壊すつもりはないが、警察にこの場所について知られてしまった以上もう潮時かと思った。
「ガチャ。もうそれは仕方ねえんじゃねえか？オレがフミエ達の立場なら同じことをしたと思うぜ。フミエ達は責められんだろう。」
「ふん。」
ダイチが不満そうなガチャギリに言い聞かせたが、ガチャギリは鼻であしらっただけだった。
「で、直樹さんはここでメタバグを見つけて目をつけたっていうわけか？」
「違うわ。これも奇妙な話だけど、昨日夕方私たちと直樹さんがこの場所に来た時、ここにメタバグはなかった。ただの1つもね。」
「なに！？」
ダイチ達はまた驚きの声を上げた。
「アンタ達昨日はここに出入りしたの？」
「昨日は確か、してねえな。ここに入ったのは一昨日以来か。」
ダイチがガチャギリやナメッチに確認をする。その一昨日までにはメタバグがあったのは間違いなかったので、その空白の1日のどこかで1度メタバグが消えたということになる。
「なるほど。で、今朝またメタバグが見つかったのはそれこそ空間制御プログラムのおかげでしょうね。とにかくタケル君のお兄さんをどうにか押さえられたら、ここにあるメタバグも消えてしまう。もうこのビルに立てこもる理由はないのよ。」
そうしてフミエはダイチ達にこの戦争をやめさせようと説いた。これまでの話がウソだとも思えず、ダイチ達はそれを考えざる得なかった。また直樹にもこのビルの存在が知られてしまっているとなれば、たとえこの場をしのいだとしても居座ることもできなくなる。
「わかった。おとなしくこの戦争をやめてやる。お前らもそれでいいな？そう言えば、ミゼットに下の階の様子見に行かせてたな。誰かメガネが壊れたヤツはいるか？」
「…・・・いや、メガネが壊れそうなヤツはみんなリタイアして外

に逃げたみたいッス。今も中で戦っているのは入って来た人数の半分くらいッス。」
ナメッチがミゼットからの映像を確認して報告した。
「そか。なら良かった。トラップも全部解除してやれ。急いでここから退散するぞ。」
「ヘイ！」
ダイチの指示によってナメッチやデンパはトラップを解除し始めた。
アキラもようやく解放された。
「…・・・1つだけいいか？じゃあこの戦争の原因となったコイルレジスタンスの書き込みは一体なんなんだ？さっきは名前だけ利用されたって言ってたな。」
自分の野望があっけなく潰えてしまい、茫然とたたずんでいたガチャギリが静かな口調で訪ねた。
「それが私たちにもわからないのよ。実は私たち今日の昼間、謎の野球帽のグループに襲撃されたの。」
「何だそりゃ？謎の野球帽のグループ？」
その話を聞いていたダイチが反応する。
「ええ。その時は辛くも逃げきったけど、おそらくソイツらはその書き込みをしたヤツと何かつながりがあるんじゃないかと思うの。多分その書き込みをしたヤツは私たちがここに来るのを嫌ったんだと思う。それで野球帽のグループを使って私たちを襲撃させた。ここに来る道中にもそれらしい連中が見回っているのを見かけたしね。その謎のグループの正体と、その書き込みをしたヤツの目的を探るっていうのも、私たちがここに来た理由。でもまあ、この分だと正体はわからずじまいかもね。」
「野球帽のグループ…・・・」
フミエはその集団についてはまた改めて調査しようと思って、今日のところはあきらめていた。しかしガチャギリはその話を聞いて何か深く考え込んでいる。
「そうか。お前らも大変な思いしてここまで来たんだな。しかしそ

んな野球帽のグループなんて聞いたことねえしな……。そうだ！情報屋のシンヤなら何か知ってるかもな。お前らにも紹介するぜ。あれ？おいシンヤどこ行った？」

「え？オレは見てないッスよ。」

ダイチはフミエ達にもシンヤのことを紹介しようとしたが、当のシンヤの姿が見当たらない。

「呼びましたか？」

急にシンヤの声がフロアー全体に鳴り響いた。ダイチ達は驚いて辺りを見回すと、シンヤが映っているモニターが目の前に現れた。

「何やってんだ？お前今どこにいるんだ？」

ダイチがモニターの中のシンヤに訪ねる。

「今はあなた達の上。６階ですが。」

またシンヤの声はフロアー中に響き渡る。どうやらスピーカーか何かが仕込まれているようだった。

「はあ？なんでそんなところに。まあいい、さっさと降りてこい。今の話は聞いてただろ？この戦争は終わりだ。この廃ビルはそろそろヤバいらしい。」

６階で何をやっていたんだろうと思いつつ、ダイチはシンヤに戻るよう促す。

「終わり？何を言ってるんですか？これからが本番じゃないですか。」

「ああっ？」

ダイチは何を言っているんだと思った。シンヤの不可解な言葉にその場の全員がモニターを注視する。

「おいシンヤ。もうこのビルに居座るのはムリだ。この空間にこれ以上居続けると、命にも関わる事故が起きるかもしれん。」

今度はガチャギリが降りるように言った。

「はっ。たかだかメガネで命の危険だなんて大げさだな。」

「いや、お前は確かにあの事件を知らんから信じられんかもしれんがな、これはガチで危険な状態だ。オレだってこの空間はもうあき

らめるしかないと思ってる。だからお前もさっさと降りてこい。どうなっても知らんぞ。おい誰か、上まで行ってコイツを引っ張ってこい。」

ガチャギリはまだシンヤがこの場所を手放したくないという気持ちも理解できたが、フミエ達の話でそれは叶わないことだともう諦めていた。こうなったら引っ張ってでもシンヤをここから連れ出そうと考えた。

「聞けない話ですねそれは。言ったでしょう?ここからが本番だと。そのメインイベントも見届けずに帰るなんて、もったいないじゃないですか。」

「さっきから何をワケのわからんことを。ウワッ!」

その瞬間一同のいる5階フロアーを取り囲むように無数のショートカットが開いた。ヤサコ達4人と黒客メンバー5人は完全にショートカットに閉じ込められた形になった。

「なんスかこれ~!?」

ナメッチが驚いて叫び声を上げる。

「貴様!これはなんのマネだ!?」

ガチャギリは激しい言葉でモニターの向こうのシンヤに吠えた。

「今からその場所でメインイベントが始まるんですよ。そうだ、コイルレジスタンスのみなさん。僕はさっきの話の野球帽のグループっていうのを知っていますよ。」

「ほーう。あの変態どもは何者なの?」

思わぬ展開に状況が飲み込めない中で、フミエはシンヤにたずねた。

「あなた達のすぐそばにいますよ。本人達に聞いたらどうですか?」

「何!?」

一同が東階段の方を振り向くと、その野球帽のグループ4人がいつの間にかショートカットの外側からこちらを武器で狙っているのが確認できた。西階段には砂袋を積んであるので下に降りることはできない。逃げ道も完全に閉ざされてしまった。

「お、お前らまさかグランドスラムか?」

「よう。久しぶりだな。深川。」
野球帽の1人がガチャギリの方に武器を構えながら挨拶をした。
「知り合いか？」
ダイチがガチャギリにたずねる。
「ああ。こいつらはオレの前の学校、大黒市立久遠小の電脳クラブだ。それと同時に、シンヤの友達でもある。」
野球帽のクラブ、グランドスラムはガチャギリにとっても旧友だった。
「なるほど。この戦争の真相が見えてきたわ。あのコイルレジスタンスの書き込みはこのシンヤの仕業だったのよ！」
「なにっ！？」
フミエの言葉にダイチの方が驚いた。
「ハハハハッ。ご名答。」
笑いながらシンヤはフミエに拍手を送っている。
「なぜだ！？なぜそんなことを！？」
「・・・今の自分たちの状況を見てもわかりませんか？簡単なことです。あなた方黒客を消すためですよ。」
シンヤはこの1週間ほぼ毎日行動を共にした黒客メンバーに向かって冷たく言い放った。
「なぜだ！？オレたちが何をしたって言うんだ！？」
「ダイチ。コイツに向かってそれは愚問だ。答えは1つしかない。金だ。」
ガチャギリが興奮するダイチに向かって言いきかせる。
「その通り。黒客はこれまで十二分に働いてくれました。この廃ビルの鉱脈を見つけたこともしかり、大黒屋としてこの大黒市に電脳戦争の戦火を広げて武器の需要を作ったのもしかり。で、すべての下準備ができたところで、
あなた方にはここから消えてもらおうと最初から思ってましたよ。
いくらなんでも、利益がこちら満天堂と5：5じゃ割に合わないですからね。」

「……なんてヤツだ。」
ダイチは怒りを通り越して呆れるしかなかった。最初からシンヤは黒客を裏切るつもりだったのだ。
「しかし、ずっと機会をうかがってましたが、なかなかうまくいきませんでしたよ。あなた方は曲がりなりにも大黒でトップクラスの電脳クラブ。しかも武器も豊富であると。どのようにそんなあなた方をここからたたき出そうかと思案していたところに、今朝の古い空間の大量発生が起きたんですよ。」
「なるほど。これまではオレたちが用心して他の電脳クラブに売りさばく武器の量も制限していたからな。しかし今日の古い空間の大量発生で、同時にメタバグも大量に生まれた。当然他の電脳クラブが持つ武器の量も無制限になる。これで機が熟したと踏んだわけか。」
ガチャギリが納得する。確かにそれをやるなら急にメタバグが大量発生した今が絶好のチャンスだと思えた。
「コイルレジスタンスの情報はどこで掴んでいたの!?」
次はフミエがシンヤにたずねる。自分たちがコイルレジスタンスを名乗ったのは昨日ことであるし、その活動を詳細に説明したのはCレックスだけである。
「情報屋のネットワークをナメない方がいいですよ。僕が昨日その情報を聞いたのは大黒二小の電脳クラブからですが、実はそこはCレックスともつながりがあるんです。つまりCレックスからそのクラブに伝わり、そこから僕に伝わってきた。情報提供のお礼に、その二小のクラブには今夜ここに来ない方がいいとそれとなく伝えておきましたけどね。」
その言葉になるほどとフミエは思った。Cレックスが唯一コイルレジスタンスのことを話したのはその二小のクラブであり、そのクラブは都合が悪いと言う理由でこの戦争には参加していない。つじつまは合っていた。
「で、そのコイルレジスタンスの名であの書き込みをして、ここに

関係のないキラバグメタバグ狙いの電脳クラブも呼び寄せた。当のコイルレジスタンスがここに現れると話がややこしくなるから、その前にコイツらを使って私たちを始末しようしたってわけね。」

フミエが野球帽のグランドスラムの方を一瞥しながらシンヤに言う。

「ええ。コイルレジスタンスの名前を使えば、極端にあなた方を恐れている黒客も本気になると思いましたしね。その本気の電脳戦争をやってもらって、両方の勢力が疲弊したところでグランドスラムを使って両方にとどめをさすという計画でした。しかし、そこにいるグランドスラムはあなた方の始末に失敗した。ここで戦争が始まる前に、あなた方が他の電脳クラブにあの書き込みが自分たちのものではないと主張するのを恐れていたんですけどね。それをしなかったのはラッキーでした。そうして今度はあなた方を利用しようと思いつきました。」

「利用？」

「あなた方は気付いていませんか？先ほど西階段のトラップであなた方は絶体絶命のピンチに陥った。ところがその時直進くんの掃射がピタっと止まりましたよね。」

「それがどうしたの？」

確かに掃射が止まったおかげで自分たちは命拾いをした。しかそれと自分たちの利用がどう関係あるのかとフミエは思った。

「あれは僕が直進くんに細工をして掃射を止めたのです。」

「なにっ！？」

シンヤの言葉にダイチが驚いた。掃射が止まったのは故障かなにかだと思っていた。

「わかったぞ。利用っていうのはそういうことか！つまりシンヤはオレ達とフミエ達を戦わせるつもりだったんだ。そしてお互いがボロボロになってきたところで、グランドスラムを使ってオレたちにとどめをさす。そのためにはどうしてもフミエ達にはオレたちのいるこの5階までたどり着いてもらわないといけない。だからあの時直進くんの故障に見せかけてコイツらを助けたんだ！」

ガチャギリがすべてを見抜いて言った。この戦争は両者ともシンヤの手の上で踊らされていたのだ。

「さすが深川。その通りだよ。他の電脳クラブは意外にも頼りにならないから、黒客を倒す役はコイルレジスタンスに抜擢しました。しかし、最後の最後で君たちは僕の思惑通りに動かなかった。ワケのわからない理由であなた方はこの戦争を終わらせることにした。残念です。あなた方の愚かなるハイレベルな戦いをゆっくり見物しようと思ったんですけどね。ただこの戦争の仕掛人である僕が停戦を宣言するまで戦争は終わりませんよ。最後に黒客にもコイルレジスタンスにも消えてもらいましょう。これでこの場所、このメタバグの鉱脈は僕のものです。」

「くっ。」

ウインドウの向こうでシンヤがキーボードに手をかけているのが見えた。本気で自分たちを殲滅する気だと思った一同は身構えるが、抵抗のしようがない。下手に動けばグランドスラムから攻撃を受ける。

「言ったでしょう？今この状況でメガネが破壊されれば、私たちの命も危なくなるの！アンタに抵抗はしないから、メガネを壊すのだけはやめて！」

フミエがシンヤに必死に訴えかけた。

「信じられませんねそんな言葉。それにメガネで人が死ぬなんてあり得ないことだと言ってるじゃないですか。メガネのデータは完全に壊れるかもしれませんが、人体は最悪でも気絶程度で済みますよ。」

シンヤはフミエの言葉に聞く耳を持たなかった。メガネで子どもが意識不明になった事件ならシンヤは知っているが、メガネで人が死ぬなんてそれこそ都市伝説の域を出ないと思っているのだ。

「おいシンヤ！フミエの話は本当だ！もしお前の攻撃でこの中の誰かの命の危険に関わるような起こるのは、お前だって望んじゃいないだろう！それにもうオレたちを倒すことにメリットはねえ！オレ

たちはこの鉱脈はあきらめたんだ！」
「深川まで何を。ここであなた方のメガネをつぶしておかなければ、後々またリベンジに来るかもしれないじゃないですか。メガネが破壊されるのが惜しい気持ちはわからないでもないですが、ここは男らしくそろそろ覚悟を決めたらどうですか？」
懸命の説得にもシンヤはまったく応じようとしない。これは本気でヤバいと誰もが思った時、シンヤのモニターを注視していたハラケンが何かに気付いた。
「な、なんだ？」
「どうしたハラケン？」
ハラケンの仕草を見て、一同は改めてモニターを注視する。シンヤのいる６階フロアーが、うっすらと明るみ始めているのだ。
「光？まるで夕陽が差し込んでいるみたいだな。」
ダイチがふともらした。シンヤの背景は段々と鮮やかなオレンジ色に染まり始めている。そこでヤサコ、フミエ、ハラケン、タケルの４人はそこで何が起こっているのか把握した。
「ア、アンタ！すぐにその場所から逃げなさい！」
フミエがとっさに叫んだ。シンヤはまだその現象に気付いていない。
「はっ。何を。逃げるのはアンタ達の方じゃないのか？」
鼻であしらいながらシンヤが言う。その時シンヤの背後に黒い影が映りこんできた。
「うわっ！シンヤ後ろ！」
その影に驚いたダイチが叫ぶ。
「後ろ？う、うわあああ！？」
シンヤが後ろを振り返った瞬間、その両脇からも迫って来ていた無数の黒い影に完全に呑まれてしまった。シンヤからの通信はそこで途絶える。モニターは砂嵐へと変わった。
「シンヤ！？シンヤ！応答しろ！くそっ！」
グランドスラムのリーダーがシンヤに必死に呼びかけるが、まったく反応がない。ただただメンバーはそこに立ち尽くして困惑するだ

けだった。
「なんだ今の!?」
ダイチが顔面蒼白となっているフミエに訪ねる。ヤサコ達もモニターの映した最後の光景にしばらく声も出なかった。
「ヌル……」
下唇を噛みながら、険しい表情でフミエはただ一言だけ発した。
「ヌル!?あれがそうなのか!?じゃあシンヤはヌルに襲われたのか!?」
ダイチ達黒客メンバーはヌルを見るのは初めてだった。その不気味さにナメッチはもう体の震えだしていた。
「あれだけの数に囲まれたら、無事では済まないでしょうね。」
「ふん。よくある展開だ。モンスター映画でも悪いヤツから襲われる。」
フミエの言葉にガチャギリがシンヤに対する憎しみを込めながら言う。自分たちを裏切り亡き者にしようとした男など、どうなろうと自業自得だと思った。その時一同がいる5階フロアーの東階段前と西階段前にも、錆び付いた金属の軋み音を立てながら巨大な鍵穴が現れ始めた。全員が一斉にそちらの方を向く。気がつくと霧も先ほどまでより一段と濃くなっている。
「そんなこと言ってる場合!?まずいわ!ここにも鍵穴が現れたわ!」
「う、うわああ!」
自分たちのすぐ背後に鍵穴が現れたのを確認すると、グランドスラムのメンバーもなりふりかまわず黒客とコイルレジスタンスの輪の中に身を寄せた。鍵穴は天井の高さまで達すると、今度はオレンジ色の光を放ち始める。その中から無数の黒い影が現れ始めた。
「……ちょうだい……ちょうだい…」
気味の悪い声に両手を前に出しながら、ヌル達はゆっくりと歩み寄ってくる。それは西階段前に現れた鍵穴も同様で、一同は完全に挟み撃ちされる形になった。

「ぎゃあああ！！」
その瞬間廃ビル内全体にこだまするような断末魔の叫び声が聞こえて来た。その声に一同もハッとする。
「下の階からだわ！！」
「くっ！こいつら下にも現れたのか！」
この様子だと全フロアーにヌルは現れたようだった。この最悪の状況下でどうこのビルから脱出するか、メンバーは頭をフル回転させながら考える。もちろん6階でヌルに襲われたシンヤも放っておけない。
「いやだー！！死にたくない～！！」
ナメッチはもう精神的に限界地点に達したらしく、しゃがれ声で泣き叫んだ。
「静かにしなさい！死にたくないなら落ち着くことよ。そうだわ！管理室に連絡は取れないの！？」
「さっきから試しているけどダメだ。電波が遮断されているのか、まったく通じる気配がない！」
フミエの言葉にハラケンが返した。こうなればおそらくメールも送信できない、外部から誰かがこの騒ぎに気付いてくれるのを待つしかないようだった。
「これは、いよいよヤバいわね。」
迫り来るヌルの群れをにらみつけながら、フミエがぽつりともらした。

#12　混迷のレッドゾーン　part9

午後8時40分。小一時間の休憩をとった玉子は、大黒市をもう一回りするためにハッキングしたサッチー“タマ”を連れて出ていた。まだ小規模ながら新たな古い空間が次々と現れており、それを追うように玉子は中津交差点とは反対方向の大黒駅近くまで来ていた。

「おかしい。さっきから1ブロックずつ南へ南へと古い空間が現れている。何かに導かれているようだ。宗助…何か考えがあるのか。」

玉子はバイクを降りて歩道に立ち、手元に開いていた古い空間を示すレーダーを見た。大黒駅以北に古い空間は表示されていない。昼間あれだけ古い空間が大量発生した中津交差点もそうだった。

「あれ?原川さんじゃないですか?」

その時後方から来た車から声をかけられた。

「竹下さん。それに川畑さんも。巡回ですか?」

久美子の運転する車が歩道側に寄せられる。そして助手席の開いた窓から直樹が顔を出した。

「ええ。今夜は対策係が交代で夜通し市内を巡回することにしています。原川さんも管理室に戻られたんですね。」

直樹が玉子の連れていたサッチーを見ながら訪ねる。

「え?あ、いや。正式には私は管理室の職員として復帰していません。復帰を志願したんですが、メガマス本社から許可が下りなくて。それで仕方なく室長の公認でこのサッチーをハッキングして動かしています。このことはくれぐれもメガマス本社にはご内密に。」

少し言いにくそうに玉子が言う。

「は、ハッキングしてまでサッチーを動かしているんですか!それも正式な職員ではないのにこんな時間まで1人で見回りとは、感服いたしました。」

「い、いえ。そんな褒められるようなことはしていません。猫目宗

助と私は因縁がありますし、なんとしても彼の次の行動だけは阻止したいと考えているだけです。」

直樹の言葉に謙遜して玉子が返す。しかし勝手にサッチーを動かしているのが本社に知られれば処罰の対象になるのは明らかなのに、それでもこの街を守ろうとする玉子の姿勢に直樹は純粋に尊敬した。

「そう言えば原川さん。先ほどまたメガマス本社に猫目からの声明が送られたそうですね。なんでも、もう交渉が決裂したとか。」

運転席から久美子が顔をのぞかせて訪ねた。

「そうですね。その声明は先ほど管理室にいた時私も目を通しました。確かにメガマスは宗助側の要求をのむつもりはないようです。」

玉子はメガマスが宗助の要求をのむことができないのは、ある程度仕方のない事だと考えていた。

「おかげで猫目の二次攻撃がやってくるのは確定したようなものですよ。メガマスももう少しうまく立ち回ってくれないと。あくまで現場で捜査をしている僕たちのことを考えてほしいものですね。」

直樹が愚痴っぽくこぼす。メガマスは宗助と交渉する姿勢を一切見せなかった。そこはメガマスとしても時間を稼ぐために、交渉を先延ばしにするような工作ができなかったのかと直樹は思っていた。

「まあでも、メガマスが苦しいのもわかる気がします。室長の話だと、メガマスには宗助の要求だけが伝えられているそうで、その要求をのむかどうかは、メディアを通じてメガマスが意志を表示するしかありません。つまりメガマスはイエスかノーとしか言えないってことです。」

メガマス本社の情報は、香川を通して一郎に伝わっていた。玉子は一郎からその話を聞いていたのだ。

「そうなんですか・・・・・なんにせよ猫目を捕らえなければこの呪縛から大黒市は解き放たれませんよね。猫目に関して何か情報は？」

気を取り直して直樹が玉子に訪ねる。

「いえ。こちらには特に何も入って来ていません。ただ1つ気付い

たことがあるんですが、先ほどから古い空間が南へ南へと次々に現れるんですよ。」
玉子がウインドウのレーダーを示しながら説明する。
「南にですか？どういうことなんでしょう？」
「わかりませんが、これは偶然とは思えません。おそらくは南に何かがあるのを暗に宗助がこちらに知らせようとしているのか。もしくはその逆・・・・・・」
「北に何かがあるが、それを悟らせないための目くらましとして古い空間を出現させているか、ですね。なるほど。良ければここから北方向へは僕らが巡回に行きますがどうでしょうか？原川さんはこのまま古い空間を追って南に下れば、どちらの目が出ても対応できますし。」
玉子の話を聞いた直樹が提案した。
「いいんですか？そうしていただけるとこちらも助かります。」
玉子も直樹に北方向への巡回を頼んだ。どうしてもこの夜に何かが起こるという悪い予感が拭えなかったのだ。
「じゃあ早速向かいます。ああそうそう、言い忘れていました。今日の昼頃なんですが、原川研一君から電話がありました。猫目宗助のことを、その弟のタケル君に伝えて協力を頼んでもいいですかということで。」
「ケンちゃんが？協力を頼むというのは一体どういうことなのでしょうか？」
驚いて玉子が訪ねる。今日玉子はハラケンと連絡をとっていない。
「それが、子ども達の方もこの街を守りたいという意志に溢れていまして、猫目宗助を止めるにはタケル君の協力が必要だと思ったそうです。仕方ないので僕はそれを許可したんですが、勝手なことをしてしまって申し訳ありませんでした。」
「い、いえ。確かにタケル君にはこのことを知らせた方が良かったかもしれません。あの事件の後私は少しの間彼のそばにいたんですが、やはり宗助には罪を償ってほしいと思っているようです。宗助

がまた罪を重ねた後にそのことを知ることになるよりかは、彼には真実を伝えて協力をあおいだ方がいいと思います。」

玉子はタケルの件については直樹の判断は悪くないと思った。

「そうですか。良かったです。間違った判断ではなくて。実はその後も研一君から電話がありまして、タケル君の話では、猫目は今日の古い空間の大量発生よりもさらに大きなことを仕掛けてくるんじゃないかということでした。それはメガマスと猫目が交渉決裂する前の段階だったんですが、さすが兄弟だと思いましたね。誰よりも先に猫目の二次攻撃を予想していたんですから。」

直樹の話を聞いた玉子はなぜだか焦りを感じている自分に気付いた。タケルはすでに猫目の二次攻撃を予感していて、ハラケン達はそのタケルと行動を共にしているはずである。となるとハラケン達は独自に猫目の攻撃を阻止しようと動いているはずだと思った。その近況を訊くために、その場で玉子はハラケンに電話をかけようとした。しかし。

「おかけになった電話は、電波の届かないところにあるか・・・・・・」

聞こえて来たのは無機質なアナウンスだった。身体全体の血の気が引いていくのが自分でもわかった玉子の中で、この状況とあの夏の日が完全に重なり合った。

「どうしたんですか?」

玉子の様子が何かおかしいと思い直樹が訊ねる。

「・・・・・・まずいことになっているかもしれません。そう、研一を含む子ども達は今、なんらかの事件に巻き込まれている可能性があります。」

「え!?なぜそう言えるんですか!?」

直樹も驚いた表情で訪ね返す。

「おそらく子ども達はタケル君の推測から、猫目の二次攻撃がどこで起こるのかがわかっていたんじゃないでしょうか?そしてそれを阻止するために、その現場に向かった。今私がかけた電話がつなが

らなかったのは、そこで何かが起きているから・・・・・」
「し、しかしそれだけで子ども達が事件に巻き込まれたとは早計に過ぎるのではないでしょうか？それになぜ子ども達だけで危険を冒してそんな場所まで行ったのでしょう？その場合僕たちに一言ぐらいあると思うのですが。」
直樹は子ども達に危険なことはしないよう念入りに言っておいた。それを無視して勝手に危険な場所に行ったとも考えにくかった。
「子ども達に何の事情があったのかわかりません。しかしこのような悪い予感がしているのは、今日というこの日があの夏の夜、この大黒市にヌルが大量に発生した時と重なりあい過ぎているからです。」
「な、なるほど。僕もあの夜のことは話に聞きました。しかし仮にその悪い予感が事実としても、どこでそれが起こっているのでしょうか？先ほどの話にあった北か南かのどちらかでしょうか？」
直樹が訊ねた時、玉子のメガネ電話が今度は着信音を鳴らした。急いで玉子はその電話に出る。
「もしもし！？」
「玉子君？今どこに？」
電話の主は一郎だった。
「今は大黒駅近くですが、何かありましたか！？」
「う、うん。さっき管理室に妙な電話があって。子どもの声だったんだけど。中津交差点近くの旧大黒ビジネスホテルで今大変なことが起こっていると。」
報告しながら一郎は、なぜこんなに玉子の鼻息が荒いのだろうと思った。
「旧大黒ビジネスホテル！？」
「それって昨日、僕たちが調査に入ったビルじゃ・・・・・・」
玉子の電話の内容が聞こえていた直樹が考え込む。
「それで大変なことってなんなんですか？」
「ああ。それがよくわからないんだ。とにかく電話をかけて来た子

どもは興奮した様子で大変なことが起きたとだけ言ってきてね。でもレーダーを見る限り中津交差点の近くは古い空間の反応がないんだ。いたずらかもしれないんだけど、どうも気になってね。玉子君が近くにいるなら様子を見に行ってほしかったんだけど、今駅にいるんなら逆方向だね。」

玉子は話を聞いて、先ほどまでの悪い予感が確信に変わった。とうていそれがいたずらとも思えない。電話をして来た子どもは、目の前で起こっていることがうまく説明できないくらい切羽詰まっているとも考えられた。

「室長！実は先ほどから研一と連絡が取れないんです。もしかすると、そのビルの騒ぎに巻き込まれているのかもしれません。今すぐ現場に向かいます！」

「何だって！？研一君と連絡が取れない？じゃあやはり何かがあるのか・・・・・しかし、そのビルで何かが起きていると言うけど、管理室のレーダーには中津交差点の付近に古い空間は表示されていない。一体どういうことなんだ？」

話を聞いて一郎の方が混乱してきた。

「とうに管理室のレーダーは宗助にハッキングされていたのではないでしょうか？宗助がレーダーを書き換えていたから、そのビルの古い空間は表示されなかった。それに中津交差点は昼間最も古い空間が出現したエリアです。逆に言えばこちらが徹底してフォーマットを行ったからこそ、そこにまた古い空間は現れないだろうと私たちはタカをくくっていました。宗助はその油断を突いて来たのではないでしょうか？」

「まっ、まさかレーダーがハッキングされていたなんて。すぐに確認しよう。君は急いで現場に向かってくれ！」

一郎も指示を出して急いで動き出した。細心の注意を払っていたはずなのに、すでに猫目の次なる行動が始まっているとは悪夢のようだった。

「わかりました。あと、念のため２．０の出動要請もお願いします

！」

「わ、わかった。」

一郎は玉子の言葉に、現場で何が起こっているのかを想像した。そうして電話を切った玉子はすぐさま停めてあったバイクにまたがった。

「私はすぐに現場に向かいます！」

直樹に言い残すと玉子はヘルメットをかぶり、バイクのエンジンをかける。

「僕たちも向かいます！川畑さん！急いであの廃ビルまで！」

「オッケー！！」

直樹が運転席の久美子に言う。久美子もそれを了解すると、思いっきり車のアクセルを踏み、猛スピードで廃ビルを目指した。玉子もすぐにバイクで直樹達の車の後を追った。

廃ビルに到着した玉子と直樹と久美子。ビルの前には１５名ほどの子どもが不安そうにビルを見上げている姿があった。

「あなた達！ここで何があったの？」

玉子がものすごい勢いでその子ども達に訊ねる。

「わからない。でも何度も中から悲鳴が聞こえて来て、呼びかけているのにみんな降りてこないんだ。」

答えたのはＣレックス倉本だった。Ｃレックスは戦争が始まったときからフミエに言いつけられてビルの前で待機していた。フミエ達が言っていた通り、ビルの中で異変が起こっているのを察知したＣレックスはすぐに管理室に連絡した。どうやらビルの中だけメガネの電波が遮断されているようである。

「中に入って確認しなかったの？」

「はい。このビルの中はトラップだらけなので、入るのは危険だと止められてまして。」

玉子の問いに言いにくそうに倉本が返す。

「トラップだらけ？このビルの中で君たちは何をしていたの？」

今度は直樹が訊ねた。
「実は、今夜ここで大規模な電脳戦争がありまして、そのためこのビルの中はトラップだらけなんです。」
「電脳戦争？こんな時間にこんな場所で？」
「はい。この書き込みがすべての発端になっているんですが、そもそもこの書き込み自体わからないことが多くて。なんで戦争になったのかはよくわかりません。」
倉本がコイルレジスタンスの書き込みを見せながら言う。
「これ、黒客にコイルレジスタンスって、あの子達が思いっきり絡んでいるじゃない！やっぱりケンちゃん達はこの中に。」
玉子はその書き込みを見て歯を食いしばりながらビルを見上げる。その２階から上の窓からはうっすらとオレンジ色の光が漏れているのに気付いた。
「間違いない！“あっち”への通路がこの廃ビルの中で開いている！おそらくヌル達も解放されている！」
「ほ、ほんとうですか！？君たち！このビルの中には何人くらいの子どもが残っているの！？」
玉子の言葉を聞いた直樹が倉本に訊ねた。
「多分まだ２０人くらい残っているはずです。」
倉本はその場にいる子ども達を数えて逆算した。始めに入って行ったのは１５人ほど。その後コイルレジスタンス４人が入り、グランドスラムの４人も遅れて入っていった。その後リタイアした子どもが１０人ほど出て来て、始めからビルにいた黒客も合わせるとそのくらいになる。
「２０人・・・・・・見たところ２階から上のフロアーすべてに通路が開いているようですし、ヌルも相当な数がいるんじゃ。全員無事で済むでしょうか？」
「・・・・・・わからないですけど、とにかく助けにいくしかありません！」
直樹の問いに答えると、玉子は覚悟を決めた。連れていたサッチー

の“タマ”を呼びつけて、そこにメタタグを貼付ける。すると“タマ”の頭のにっこりとした顔のマークの目つきが急に鋭くなり、腹に据え付けていたキューちゃん2機がその顔の横に装着された。
「は、原川さん！それは違法改造にあたりますよ！」
改造サッチーを見て直樹が声を上げる。
「いいんです。サッチーをハッキングして連れている時点で見つかれば処罰の対象なんですから、あと少しくらい罪が重なってもどうってことありません。とにかく今は中にいる子ども達を助けないといけないので。」
そう言い残して玉子はサッチーを連れて西側入り口からビルの中へ入ろうとした。
「待ってください！中に入るなら僕も行きます！」
「じゃあ、私は付近を見回りに行ってきます！猫目もこの付近で様子を見ている可能性も高いので。原川さん！このバイク貸してもらえますか？この方が小回りが利くので。」
「わかりました。これが鍵です。じゃあ竹下さん。行きましょう！」
玉子は久美子にバイクの鍵を預け、直樹とともにビルの中に入って行っていった。

#12　混迷のレッドゾーン　part10

5階フロアーでヌルに挟み撃ちになったヤサコ達コイルレジスタンス4人と黒客、そしてグランドスラムのメンバーは身を寄せ合いながら途方に暮れていた。ヌル達が自分たちのところまで押し寄せてくるまでもう時間がない。

「こなくそっ！」

ガチャギリが突然ヌルの群れめがけて電脳ハンドガンを発砲する。しかし弾丸が直撃してもヌルは少しひるむ程度で、その足を止めようとしない。

「くそっ！おい、お前らのメガビーじゃなんとかならねえのか！？」

ガチャギリに言われてフミエはヌルにメガビーを撃ってみたが、やはり結果はハンドガンの時とあまり変わらなかった。

「やっぱりヌルはサッチーやキューちゃんのフォーマット光線しか効かないんじゃ？僕たちの武器じゃこの群れをどうにかするなんてできない！」

ハラケンの言葉はそこにいる全員を絶望させた。それでも諦めないフミエは自分の電脳ポシェットから何か使えるメタタグを急いで探す。すると1枚見慣れないメタタグが混じっているのに気付いた。

「何これ？」

フミエがそれをメンバーに見せた。

「・・・・・これって、物理結界じゃない？」

そのメタタグを確認したタケルが言った。メタタグにはそれと同じ効力を持つ暗号がプリントされている。暗号に詳しいタケルはそれを見て判別した。

「物理結界！？」

「そうだよ！確かイサコはイリーガルの動きを止める時に物理結界の暗号式を使っていた！これを使えばヌルのような電脳体を足止めするのに使えるかもしれない！」

タケルがその効果を思い出しながら言った。物理結界は宗助がイサコに授けた暗号の1つ。それをイサコは様々な形で応用し、サッチーの動きを封じる時にも使っていた。

「待って！じゃあまさかこれ！」

フミエは何か思い出したように叫ぶと、迫り来るヌルの足元にそのメタタグを放り投げた。するとヌルの目の前に結界が現れたのか、ヌル達はそこから先に進むことができなくなった。

「これって、あの時の！？」

ヤサコもその記憶がよみがえって来た。

「そう！ヤサコの家でヌルに襲われた時、メガばあの部屋に最初ヌルは入って来れなかった。その時貼られていたメタタグがこれなのよ！誰かこのメタタグもう1枚持ってない！？」

「・・・・・あった！これで後ろから来るヌルを足止めすればいいんだね！？」

ハラケンは持っていたメタタグを、フミエがやったように西側から迫り来るヌルの足元に放り投げた。ヌル達は同様に足止めをくらいそこから動けなくなる。両側のヌルが止まったのを見て、一同は大きなため息をついた。

「はあ。ひとまずこれで安心だな。」

汗で顔がびっしょり濡れているダイチが言う。

「気は抜けないわよ。このメタタグもじきにヌル達に破られてしまう。それまでに次の行動を考えないと。」

フミエはあの夏の経験から油断はしていなかった。あの時もメガばあが厄よけのように大量に貼っていたメタタグも、ヌル達はほんの少しの時間で破ってみせた。

「おい、これは物理結界なんだな？それならオレのメガネにその暗号式の構造が残ってる。メタタグが破られるまえに暗号式を完成させれば、もっと時間は稼げるんじゃないか？」

そこでガチャギリがフミエに訊ねた。

「なるほど。それもアンタがイサコの子分に成り下がっていた頃に

盗んだ技術ね。多分暗号式ならメタタグよりも耐久力があるだろうから、試してみる価値はあるかもね。」

「わかった。やってみる。」

ガチャギリは早速メガネを操作して暗号式の構造を確認し始める。

「それより、上の階のシンヤ君はどうするの？もしかしたらまだ逃げ回っているかもしれないし。誰か助けに行ってあげた方が。」

「やめとけよ。危険を冒してまで助けるようなヤツじゃねえ。それにあの最後のモニターの様子じゃ、多分助かってないだろう。」

ハラケンの言葉にガチャギリが返す。

「やめなさいガチャギリ！あんたアイツと古い友達だったんでしょ！？裏切られた怒りはわかるけど、だからって見捨てるなんてアンタも最低よ！」

フミエがガチャギリを一喝する。ガチャギリは言い返すでもなくメガネを操作しながら鼻で笑って返すだけだった。

「・・・・・もしアイツらに襲われるとどうなるの？」

その時グランドスラムのメンバーの1人がおそるおそる訊ねた。

「都市伝説で語られているように、“あっち”と呼ばれる世界に自分の魂ごと電脳体が行ってしまう。でも大丈夫。たとえそうなったとしても、あの鍵穴が開いている限りあそこから元の世界に戻ってこられるわ。」

「でも逆に言うと、あの鍵穴が閉じてしまうと戻ってこられる保証はない・・・・・・」

フミエがメンバーを安心させようと言ったが、その次のハラケンの言葉でまた場は静まりかえった。

「・・・・・仕方ねえ。オレが6階の様子を見に行く。」

その話を聞いていたダイチが名乗り出た。最悪の場合を考えて、鍵穴が閉じてしまう前にシンヤが無事かどうかを確認しないといけないと思ったのだ。

「正気かお前！？もしシンヤの電脳体が“あっち”に行っていたとしたらどうするんだ？まさかお前も電脳体を分離させて“あっち”

からシンヤを連れ戻すとか言うつもりか？」
「だったらどうだって言うんだよ！？もしそうなっていたとしたら、シンヤはあの時のイサコと同じで、半永久的に戻って来れないかもしれねえんだぞ！オレたちを裏切ったとはいえ、１週間連れ添ったヤツだ。そんな結末は後味が悪すぎる。」
ガチャギリの言葉にダイチが勢いよく返す。どこまで人が良いんだとガチャギリは思った。
「ダイチ！その意気込みはいいんだけど、“あっち”に入ってしまったら、アンタさえ戻って来られなくなるかもしれない。無理はしないで、シンヤの安否を確認するだけでいい。もし無事ならここまで誘導してあげて。万が一の場合は助けが来るのを待ちましょう。」
フミエがダイチを落ち着かせる。その言葉にはどことなく寂しさのようなものが感じられた。
「それならオレたちも行く。シンヤはオレたちのダチだ。ダチであるオレたちが行かなくてどうするんだ！」
グランドスラムリーダーも意を決し、他のメンバーにも言い聞かせた。
「わかった。ならお願いするわ。でも丸腰じゃアンタ達も危ないわね。」
「なら僕たちがメガばあからもらった投擲型の物理結界の暗号を渡せばいいんじゃない？今確認したんだけど、この暗号結構数があるみたいだ。」
タケルが提案し、コイル探偵局の４人が持っていた物理結界の暗号をダイチとグランドスラムのメンバーに託すことになった。
「この暗号はさっきのメタバグと違って、１個につきヌルを１体分くらいしか足止めできない。使いどころはよく考えるんだよ。」
「サンキュー！心得たぜ！じゃあ行くぞ！」
「おう！」
タケルからの忠告を聞き、勇んでダイチとグランドスラムメンバーはメタタグの結界から飛び出し、東階段から６階を目指して走り出

した。
「絶対戻ってこいよ！」
フミエがダイチの背中に向かって叫ぶ。ダイチ達は近づいてくるヌルには託された暗号を投げつけ、なんとか道を切り拓いていった。
「大丈夫かな？」
勢い良く送り出したフミエだが、ダイチがいなくなると急に心細いような声をだした。
「ダイチなら大丈夫だろう。グランドスラムのメンバーもこんな状況なのに自分を見失っていない。それより、下のフロアーの子ども達の様子も見といた方がいい。シンヤ君と同じで、無事かどうか確認しないと。」
ハラケンの言うように、下の階で戦闘していた子ども達もかなり危険な状況下にある。あるいはもう“あっち”へと連れて行かれてしまった子どももいるかもしれない。
「ああ！でも私たちの暗号は全部ダイチ達に渡してしまったわ。こうなるんなら折半しておいた方が良かったわね。」
フミエは下の階のことをつい忘れていて1つ舌打ちをした。さすがに丸腰で見に行くこともできない。
「・・・・・・それなら、私が行く。」
そこで名乗り出たのはヤサコだった。フミエや他のメンバーも驚きの表情でヤサコを見る。
「ア、アンタが！？だって、暗号もないのにどうやって？」
「私には、これがある。」
ヤサコはそう言うと、物理結界のメタタグの最後の1枚を取り出した。
「それ1枚あっても、この群れの中は突破できないわ！」
フミエでもそれは無謀だと思った。
「違うわ。こうするの。」
そう言うとヤサコはそのメタタグを自分の電脳体に貼付ける。するとヤサコの体に暗号式のような青白い光がほとばしった。

「ちょ、ちょ！？何してるの！？そうやって使うものじゃないわ！それ最後の1枚だったのに！」
ヤサコの行動にぎょっとしてフミエが叫ぶ。
「まさか、暗号炉を使うつもりじゃ！？」
その時タケルはヤサコのしようとしていることに気付いた。
「あんごうろ！？ってなに？」
フミエがタケルの方を見る。
「暗号炉を持つ人は、メタタグを自分の電脳体に貼付けることによって、そのメタタグと同じ効果の暗号を無尽蔵に繰り出せるようになるんだ。ヤサコはあの事件の時、イサコからもらったキラバグによって暗号炉を手に入れた・・・・・・」
それはヤサコが“あっち”に入り込んだハラケンを助ける時に、イサコからもらったキラバグの力によるものだった。イサコもまさかそのキラバグでヤサコが暗号炉を手に入れるとは思っていなかったらしい。
「無尽蔵！？それってかなりすごい能力じゃない！これなら下の階層の様子を見に行けるわ！」
「いや、暗号炉は使う度にイマーゴを消費する。つまり暗号を乱発しているとヤサコはその副作用で倒れるかもしれないってことだよ。場合によっては、命に関わる症状がでるかもしれない…」
タケルの言葉に、またその場は静まり返った。ヤサコはもちろん、そのことを知っている。自分の体も顧みず、ヤサコは下に行く覚悟をしていた。
「ダメ。ダメよ！そんなの！ヤサコが死ぬかもしれないなんて、そんなの絶対使っちゃダメ！」
フミエはヤサコの両腕を掴みながら言った。友達を失うことのツラさはフミエも痛いほどわかっている。
「行かせて、フミエちゃん。下の階には助けを待っている人がいるかもしれない。」
「・・・・・・ヤサコ」

今にも泣きそうなフミエの頭に手を置いて、ヤサコは顔を上げる。その顔は凛としていて、あの時と同じ、イサコを救いに行ったときと同じだとハラケンは思った。

「・・・・・・フミエ。ヤサコを行かせてあげよう。そして僕たちもヤサコと一緒に下に行こう。万が一ヤサコの体に異変が起こったら、その時は僕たちがヤサコを止めればいい。」

「そうだよ。ヤサコを僕たちが守ればいいんだ。」

ハラケンとタケルがフミエに言う。ヤサコもその言葉に涙が出そうになった。

「・・・・・・そうね。ヤサコには私がついていないといけないわ。」

1つ鼻をすすってフミエは顔を上げた。

「でも、もし私がダメになった時、ヌルに対抗する手段がないわ。その時はみんなどうするの？」

「なーに。たとえ“あっち”と言っても、みんなで入れば怖くないってね。私たちは運命共同体よ。その時はみんなで“あっち”の世界で暴れてやりましょう！」

フミエが力強く言う。なんだかメチャクチャなことを言っているのに、ヤサコにはとても頼もしく聞こえた。

「おい、冗談に聞こえないぞ。」

そんなフミエの言葉にガチャギリがツッコミを入れる。それにみんなの笑みがこぼれた。不思議なことに、この窮地にその場にはほんわかとした空気が生まれていた。

「ガチャギリ。アンタ達はここで待機して上の階と下の階の連絡役をお願い。物理結界の暗号式が完成したら、ここはとりあえず安全地帯になるから、その間に助けを待つのよ。」

「ああ。任せとけ。」

ガチャギリも自分の暗号に自信があるのか、親指を立ててフミエに返事をした。

「ガチャギリ！この電脳チョークを使って！」

「サンキュー！お前らも、どうか無事でな！」
ガチャギリはタケルから電脳チョークを受け取ると、そう声をかけた。
「ええ！もちろんよ！じゃあ行きましょう！」
フミエがガチャギリに返して号令をかける。そうしてコイル探偵局の４人はヤサコを先頭にメタタグの結界から飛び出した。
「おい！デンパ、アキラ、これがお前らに割り当てた暗号式だ。この残った４人で暗号式を完成させる。絶対に書き間違うなよ！おいナメ！死にたくないならちゃんと書くんだぞ！」
「へ、へイ！」
ヤサコ達が飛び出した背後ではガチャギリのげきが飛んでいた。

#12　混迷のレッドゾーン　part11

「ヤサコ、前には気をつけて。」
ヤサコの真後ろにいるフミエが前を覗き込みながら言う。結界を飛び出した4人は全速力で群がるヌルの脇を駆け抜けて東階段までたどり着いた。そして4階から5階にかけての踊り場にヌルがいないことを確認してとりあえずそこまで移動する。この距離なら5階フロアーのヌルが追ってこないはずだった。
「わかってるわ。それよりフミエちゃん、もっと私から離れた方がいいわ。ヌルは私のイマーゴに反応して近づいてくるし。」
「大丈夫よ。これでもまだメガビーを残してるし、ヌルが近づいて来たら私がこれでひるませる。その隙にヤサコは暗号を使ってヌルを封印よ。」
ヌルがヤサコのイマーゴに反応して近づいてくるのはメガマスの実験でも証明されている。その習性を利用して、フミエは連携プレイでヌルを倒すつもりだった。そのためにヤサコとの距離は近めに保とうとしている。
「ヌルはたまに僕の方にも反応するんだけど。」
フミエの後ろにいたハラケンが言った。ハラケンのイマーゴはヤサコよりも弱いためかヌルの反応も鈍い。しかしハラケンも十分注意しなければならなかった。ちなみにハラケンの後ろにいるタケルはイマーゴを持っていない。
「じゃあアンタのところにヌルが来たら、『来たーっ!!』って大声で叫びなさいよ。」
フミエがそうハラケンに言い聞かせてヤサコは4階を目指してゆっくり移動を始める。4階にもすでに通路が開いており、ヌルもかなりの数で群がっているようである。そのヌル達の様子を探るようにヤサコと後ろの3人は一段一段慎重に階段をおりてゆく。そうしてヤサコが4階に足をつけた時、フロアー中央にいたヌル達が一斉に

こちらを向いた。
「・・・ちょうだい・・・ちょうだい・・・」
ヌル達は何かをねだるようにヤサコの方に近づいてくる。
「来たわ！」
フミエが声を上げた瞬間、ヤサコは手に握りしめていた暗号をもっとも手前のヌルの足元に投げつけた。その暗号はヌルの足元を囲うように見事にはまり、そのヌルは動けなくなった。
「うまいわヤサコ！体は平気なの？」
フミエはヤサコを褒めると同時にその体を気遣う。
「まだ1つ目だし、まだまだ大丈夫よ。」
「良かった。でもここであまり乱発はできないわね。よし、ここは私に任せて。」
フミエはそう言うとヤサコの背後から飛び出し、ヤサコの横に並んでヌルと対峙した。
「フミエちゃん！危ないわ！」
「まだ距離はあるから平気よ！それより、ヤサコはここから私の言うタイミングで暗号を投げるのよ！」
するとフミエはヌルに対しメガビーを撃ち始めた。ヌルはメガビーぐらいで消滅することはないが、それでも命中したヌルは低いうなり声をあげてよろめいている。そのヌルが後ろから来ていたヌルと重なった瞬間をフミエは待っていた。
「今よ！」
フミエの声に反応するままヤサコは暗号を投げる。すると2体のヌルを1つの暗号に封じ込めることに成功した。
「やりました！ヤサコ選手見事な2枚抜き！」
フミエは興奮しながらまるでスポーツ番組の実況のように叫んだ。こうすることで暗号の節約ができ、ヤサコの体の負担を減らせる。
「よし、僕らもやろう！」
それを後ろで見ていたタケルとハラケンもフミエのようにメガビーを撃ち始める。その後もヤサコは何度か2枚抜きに成功し、なんと

か４階東フロアーにいたヌルの掃討することができた。
「よし！じゃあこのフロアーに人がいないか確認するわよ！」
フミエの号令に４人は４階西フロアーに移動する。ヤサコはこの時、長距離走の序盤戦ぐらいの軽い胸の動悸を感じていたが、まだこれなら大丈夫と自分に言い聞かせた。
「誰かいるわ！」
４階西フロアーと東フロアーのちょうど真ん中、仕切られている壁によりかかりながらうずくまっている少年の姿をフミエが発見する。フミエはその少年の元に駆け寄り、その間ヤサコとハラケンとタケルが西側フロアーのヌルと対峙することになった。
「大丈夫！？」
フミエがその少年に声をかける。幸い電脳体は飛んでいない。しっかりとした少年の姿がそこにはあった。
「お、お前達は？」
小刻みに体を震えさせながら少年が顔を上げた。
「アンタを助けに来たのよ！」
「・・・・・そうか。それはありがたい。」
少年の顔に生気が戻って来たようだった。このフロアーもかなりの数のヌルに占領されていたのに、何事もなかったのは奇跡に近かった。
「よく無事でいられたわね。このフロアー、あの黒い生き物でいっぱいだったでしょう？」
不思議そうにフミエが訊ねる。
「ああ。最初見た時は、これが都市伝説に出てくるミチコさんかと思った。でもコイツら、オレの姿は見えなかったらしい。ここでじっとしていれば襲ってくることはなかった。」
少年はヌルを攻撃すらしなかった。それが幸いしてヌルに見つからなかった。
「・・・・・そう。よくこの状況でここで耐えられたわね。えらいわ。ところでアンタの名前は？」

「オレか?オレは日比野。一応宝生ウイングスのリーダーだ。お前達は?」
その少年、日比野が立ち上がる。しっかりとした顔つきに戻ったのを見て、フミエはさすがに1電脳クラブのリーダーだと感心した、落ち着いた冷静な判断力がなければ、きっと今頃“あっち”の世界に連れ込まれていただろうと思った。
「私たちはコイルレジスタンス、とでも言っておきましょうか。」
もはや黒客との戦いは終わった。だからコイルレジスタンスの名を使う事はないのだが、一応日比野にわかるような名をフミエは使っておいた。
「何?じゃあお前らがこの戦争の仕掛け人なのか?あの黒い生き物は一体何なんだ?」
矢継ぎ早に日比野が質問を浴びせて来たが、フミエはそれを手で制した。
「ややこしい話は置いといて、まずはここを無事に出られるかが問題よ。アンタ、ここまで一緒に戦って来た仲間はどうしたの?」
「いや、ここにはオレが1番乗りでやってきた。そしたらすぐにあの黒い生き物が。だから残りのヤツらはまだこの下の階にいるはずだ。さっき叫び声も聞こえてきたしな。」
「わかったわ。私たちは今からこの下の階の様子を見に行く。アンタにも一応ついてきてもらうわ。というより、今このビルの中に安全地帯はない。だから暗号を使ってあの黒い生き物、ヌルを倒せる私たちのそばにいるのが一番安全よ。」
「暗号を使えるのか?わかった。お前らについて行く。」
そうして日比野も加えて、さらに一行は下の階に向かうことにした。
フミエはヌルと戦っていたヤサコ達の方を振り返る。
「調子はどう?」
「ここのフロアーのヌルはほぼ片付いた。でも・・・・・・」
ハラケンがフミエに返してヤサコの方を心配そうに見た。そのヤサコは顔いっぱいに汗を浮かべ、肩で息をしながら胸のあたりを押さ

えている。フミエが目を離している間にかなり消耗したらしい。
「ヤサコ!?大丈夫なの!?」
フミエはすぐにヤサコの元に駆け寄り、その肩に手を置いてうつむき加減の顔を覗き込む。
「・・・・・・大丈夫。えへへ。ちょっと胸の動悸がしただけ。すぐに良くなるよ。」
ヤサコは笑みをかえしたが、その引きつった顔にフミエは余計に不安が募った。
「無理しないで。ここから引き返して5階で休むこともできるのよ。今頃ガチャギリも物理結界の暗号を完成させているはずだしさ。」
「大丈夫だよフミエちゃん。それにあの子みたいにまだ無事な子も下にいるかもしれない。だから私たちが行ってあげないと。」
ヤサコは日比野の方を見て言う。日比野は状況がよく飲み込めていなかったが、必死の思いでこの4人が自分を助けに来てくれたことは感じた。
「・・・・・・ありがとう。助けに来てくれて。でもまだ頼みがあるんだ。下の連中も一緒に助けてやってくれないか?多分アイツらもオレみたいに震えながら待ってると思うんだ。」
日比野がうつむきながら4人に頼んだ。
「そうね。まだ助かる可能性もあるわけだからね。ヤサコ!苦しいときは必ず私に言うのよ!」
「・・・・・・オッケー!」
そうしてヤサコ達4人と日比野は西階段を使って3階まで降りてきた。しかし3階西側フロアーにたどり着いたヤサコは、その光景を見て愕然とする。
「ちょっと!ここ今まで1番ヌルが多いじゃない!」
声を上げたのはフミエだった。なぜかはわからないが、このフロアーのヌルは4階や5階に現れたヌルの数をはるかにしのいでいた。
フロアーはヌルの群れで埋め尽くされ、間を縫って進むことさえもままならない。

「でも、行くしかないわ。みんな！さっきみたいにサポートをよろしくね。」

ヤサコは暗号を握りしめながら言う。そうしてフミエ達は猛然とヌル達に向かってメガビーを発射する。ヤサコは先ほどの要領で１度に何匹ものヌルを封じ込めていった。

「うっ・・・・・・！！」

時折ヤサコは胸を押さえてうつむく。実はヤサコはすでにこの時意識が朦朧とし始めていた。激しさを増してゆく胸の動悸に加え、発熱によって全身の筋肉に慢性的な痛みが生じ始めている。頭を少しでも動かせば突き刺すような頭痛が襲い、立っているだけでもやっとという状態だった。さらに何匹封じ込めてもいっこうに減らないヌル達が、ヤサコの心を少しずつへし折っていった。

「本当に大丈夫なの！？」

「・・・・・平気よ。心配しないで。」

フミエもさすがにヤバイんじゃないかと思いながら、ヤサコに具合をたずねる。ヤサコはみんなを心配させまいと虚勢を張ったが、本音を言えば今すぐにでもしゃがみこんでうずくまりたかった。それでももう後には退けないという思いから、とにかくヤサコは暗号を投げた。投げるたびにヤサコの体はイマーゴの副作用に蝕まれていく。もはや無意識の中の作業になりつつあった。

「だ、誰かいる！」

その時タケルが少年の姿を確認した。半分くらいにまで減ったヌルの群れの奥で、倒れているような少年の影を。

「まっ、まさか！」

それを見て走り出したのは日比野だった。ヌルの間を抜けてその少年の所に駆け寄る。フミエも一緒に駆け寄り、ヤサコ、ハラケン、タケルはヌルの封じ込めを続ける。

「おい！おい！返事をしろ！」

日比野は黒ずんだその少年の影をゆすり起こし、耳元で何度も叫ぶ。その体に浮かび上がっていた”ＮＯ　ＤＡＴＡ”という文字に、フ

ミエは頬を引きつらせた。
「なんで返事しないんだよ！」
日比野は興奮しながらフミエの方を見る。
「・・・・・・残念だけど、手遅れだわ。この子の電脳体は、すでに“あっち”の世界に入り込んでいる。」
フミエはできるだけ感情を殺して、ただ事実だけを伝えようとした。
この少年が日比野と同じウイングスのメンバーであることは聞かなくともわかった。
「なん、だと・・・・・・・おい！どうやったら元に戻る！まさかこのまま死ぬなんてことはないよな！？」
日比野はフミエの肩を揺さぶりながら激しい口調でたずねた。
「落ち着いて！あの通路が開いている限り、あそこからこの子の電脳体がまたここまで戻ってくれば助かる可能性はある。でも、それは私たちじゃどうにもならないことなの。前は連れて行かれた子の電脳体に直接電話をかけて誘導するっていう力技も使ったけど・・・・」
夏の事件で京子が“あっち”に連れて行かれた時は、電話を使って京子の電脳体を帰ってこさせた。しかしあの時は半分デンスケが連れ帰ったようなものだったし、それをするにはなによりの問題があった。
「前にも同じ目に遭ったのか？まあいい。とにかく電話すりゃいいんだな？」
日比野はすぐにその少年のメガネに電話をかけようとした。ところがアンテナ状況は圏外を示し、つながる気配すらなかった。
「やっぱり・・・・・・さっきから私たちも試してるんだけど、どうしても電話はつながらないの。おそらく電波が遮断されているんだわ。」
「くそっ！じゃあどうすればコイツは助かるんだ！？」
すがるように日比野はフミエの方を見るが、フミエは考え込んでも良案が浮かばない。本当にこのまま通路が閉じてしまったら、この

少年の電脳体は一生戻ってこられないかもしれないと頭によぎる。
ところがその時、フミエの懸念とは逆のことが起こった。妙な金属の軋み音が鳴り始めたと思って西側フロアーの中央を振り返ると、また新たな鍵穴が出現しようとしていたのだ。
「なんで？なんでまた新しい通路が開くの！？」
フミエは絶望して言った。このフロアーのヌルはやっと半分以下になってきたところだったが、また新手のヌルが出現し始める。
「うわあっ！！」
ハラケンはフロアーにいたヌルと鍵穴から出現した新手のヌルに囲まれる形となった。新たな通路はなぜかハラケンのイマーゴに反応して現れたようだ。
「ハラケン！！」
ヤサコはハラケンを囲んでいたヌルのうちの１匹に暗号を投げつけた。そのおかげでハラケンはなんとかできた隙間から逃げ出し難を逃れる。しかし。
「ヤサコ！！」
叫んだのはフミエだった。今の一投で体が限界に達し、くずれ落ちるようにヤサコはその場にへたりんだのだ。胸を押さえながら大きな咳を繰り返し、もう立ち上がる気力もなかった。
「ヤサコ！！」
今度はハラケンとタケルの声が重なった。もう動くことができないヤサコに、ここぞとばかりにヌルが群ってきて、あっという間に取り囲んでしまったのだ。その様子を見ていたフミエはヌル群れの中ヤサコを助けだそうと飛び出す。しかしその腕を日比野はしっかりと掴んだ。
「何するの！？離しなさい！ヤサコを、ヤサコを助けないと！」
フミエは必死に日比野の手を振りほどこうともがいた。
「オレに落ち着けって言ったのは誰だよ！あれだけの群れの中に飛び込んでいって、無事じゃすまねえだろ！お前もアイツと一緒に“あっち”に行く気か！？」

「そんなのどうってことないわ！それよりヤサコがあんなことになってしまったのは、ヤサコの体の異変に気付かなかった私たちの責任なの！ヤサコだけが犠牲になるなんて、そんなの、絶対にイヤ！」

叫びながら抵抗するフミエを、ハラケンとタケルも押さえに入る。

そうこうするうちにヤサコを囲んでいたヌルの輪は一旦ほどけていった。その中に取り残されているヤサコの姿を見つけ、今度はフミエがへたり込んだ。

「ヤサコ・・・・・・」

その名前と一緒に、フミエの頬を雫が伝った。時間がこの一瞬で固着したかのような錯覚と、言いようのない絶望感がフミエ、ハラケン、タケルの胸に込み上げてくる。黒い影へと変わり果てたヤサコの体は、倒れ込んだままそこを微動だにしない。分離したはずの電脳体も、すでに鍵穴に入ってしまったのかフロアーを見渡しても確認できなかった。

「なんで？なんでこんなことに・・・・・・」

守りきれなかったという思いがフミエの胸の内に打ち寄せた。その波は涙へと変わってこぼれ落ちる。メガネのレンズは蒸気でくもり、床には黒いシミを作った。ハラケンとタケルも涙を必死にこらえながら、心の中でヤサコを守りきれなかった自分を責めていた。そして、この鍵穴が消滅する前になんとか戻って来てほしい、そう願うことしかできなかった。

「しんみりとしているところ悪いけど、オレたちもそろそろヤバいみたいだぜ。」

そこで日比野が周りを見回しながら言った。ヤサコを連れ去ったヌルは、今度はこの４人を連れ去るつもりらしい。完全に囲まれて窓際まで追いつめられたが、もうこの４人にヌルを倒す術はない。もはやここまでかと思った瞬間、かすかながら聞き慣れた電子音が近づいてきていることに４人は気付いた。

#12　混迷のレッドゾーン　part12

気がついてみると、夕陽の中に立っていた。まるで絵の具で色彩したような、これ以上ないぐらい鮮やかなオレンジの空。穏やかな風にかさかさと揺れる木々が、まるであの空に色をつけている筆に見える。そこはかとない懐かしさの中で、ヤサコは自分の置かれている状況、現実をゆっくりと理解していった。

今自分は“あっち”の世界にいる。自分が立つこの場所も、あの夏以来に訪れた。いや、あの時はこれほど鮮やかな世界ではなかった。今にも崩れて行きそうな、ほの暗いグレーの世界。それがあの時の“あっち”だった。そういう意味ではこの場所に来たのは7年以上ぶりということになる。ヤサコが４４２３に会った時、そして最後に宏文に会った時。ヤサコがこの地に足をつけるのはそれ以来だった。ふいにヤサコは振り返る。その先には鳥居の並ぶ階段があった。何度も何度も夢の中に出て来て、そしてイサコと心を通わせたあの舞台が、再びヤサコの前に現れたのだ。いてもたってもいられず、ヤサコはその階段を駆け上がることにした。その上に今何があるのか、それを確かめるために。

乾いた石段を1つ1つ踏みしめるたび、ヤサコは信彦のことを思い出した。デンスケがいなくなって途方に暮れていた時、一緒に探してあげると言ってくれたあの優しい声。その手をつないでこの階段をのぼったこと。思い出すだけで涙があふれてきそうだった。あの信彦がこの上にいるのではないか、ひょっとするとデンスケもいるかもしれないという期待を抱いて、ヤサコは無意識に全力で階段をのぼりだしていた。

のぼりきったところで、ヤサコは視線を一点に集中する。かつて信彦と自分が腰をかけてひとときを過ごした並んだ岩。そしてほんの一瞬、ヤサコはそこに座って語り合う2人の姿を見た。しかしそれこそ幻だった。その岩はあの時と同じように、高いものと低いも

のが並んでいる。しかしそこに信彦の姿もデンスケの小さな姿もなかった。信彦が木の枝で土の上に書いた４４２３とヤサコという文字も。半分がっかりしてヤサコが顔を上げると、その視線の先には神社の拝殿があった。それはかりは記憶に残っていない。鹿屋野神社にも似ているが違う、今までみたこともないような拝殿が５０メートル先に佇んでいる。ヤサコは石畳の上を走り出していた。そこには何かがある。根拠のない予感がヤサコを動かしていた。

予感は的中した。拝殿前に１人の人影がある。遠目で見る分には気付かなかったが、しかし拝殿が近づくにつれ、その輪郭はっきりとしたものになってくる。驚いてヤサコは急ブレーキをかけた。その人影は灰色をしている。１度自分の腕や足元を確認する。しかし自分の電脳体はカラーだ。色味のないその人影は、この鮮やかな世界では完全に浮いた存在である。そこでヤサコは確信をして、そして愕然とした。今度はおそるおそる、ゆっくりヤサコはその人影に近づく。その距離が５メートルほどに迫った時、人影はヤサコの方を振り返った。

「・・・・・・ミチコ。」

確信が現実のものとなり、ヤサコの口からは思わずその名前がこぼれ落ちた。

「・・・・・・優子。」

対するミチコもその名前をつぶやく。そこで風が走り抜けた。ヤサコにはまるでこの時が永遠に止まのではないかと感じられた。しかしミチコがこの再会を喜んでいるのかどうか、その様子からはわからない。

「・・・・・・なぜ、ここにいるの？あなたはもう、消えたんじゃなかったの？」

思い切ってヤサコはミチコの顔を見た。そして戸惑った。その顔は自分の顔に酷似していたからだ。このミチコは自分が生み出したもの、その罪悪感が再びヤサコにのしかかった。

「・・・・・・そう。私は１度消えた。もう、誰も私を必要としな

くなったから。」
ミチコは自分たちを恨んでいるのか、と思った。自分の感情から生み出しておいて、最後にはミチコを闇に封じ込めた、ヤサコとイサコを。
「なら、なぜまた現れたの?メガマスの制御プログラムは、あなたをも復活させたの?」
おそるおそるヤサコは訊ねて、まるでミチコが邪魔者のような言い方になってしまったことを少し後悔した。
「・・・・・・いえ。私はもう、この空間の住人じゃない。この空間はメガマスが生み出したものだけれど、私はまた別の場所で生まれた。」
ミチコの声の調子は変わらない。ずっと平坦。そこからは恨みなど感じられなかった。
「どういう意味なの?」
「私に生を与えてくれた人がいる。そう、私は1人の少女の願いを叶えるために再び生まれた。新しく作られた空間の中で。」
ミチコの言っていることは、ヤサコにはほとんど理解できなかった。
「何なの?あなたが生まれた新しい空間って。それならどうして今、この空間にいるの?」
ヤサコはすがるように訊ねる。ミチコの意味深な言葉に、ヤサコの中にはまた大きな事件が起こってしまうのではないかという不安が生まれていた。
「永遠に続く虚構の平行空間。そこでは現実世界の真実など通用しなくて、その虚構はやがて現実世界をも浸食する。そして世界に真実と呼べるものはなくなる・・・・・・」
「待って!意味がわからないわ!」
「あなたにもいずれわかる時が来る。あなたがあの時に手に入れたかけがえのない真実を見失った時に、あなたはその意味を知る。私が再びあなたの前に現れるのはその時。そうして私が生まれた意味も知ることになる。」

ミチコの言葉は恐ろしくて、そして信じがたいものだった。ところがその言葉に、ヤサコの中の真実が揺らいでいるのがわかった。あの事件以来、ずっとヤサコが大切にして来た気持ち、手放す事は絶対にないと確信していた気持ちが、そよ風になびく木々のようにざわめいていた。

「それを伝えるために、この空間に現れたの?」

「そう。この空間と私のいた空間は重なり合っていた。そして今日、あなたがここに来る予感があった。いえ、そうなる運命だった。だからここに来たの。」

「なら、またあなたと会うことになるっていうのも運命?」

「そう。でも、あなたがそこから逃げ出せば話は別。自分の殻に閉じこもって現実を直視しなければ私と会うこともない。」

自分の殻に閉じこもるというのは、あの時のイサコのことを言っているのかとヤサコは思った。なら今のミチコは優しい感傷の世界にはいない。そういうことだと思えた。

「・・・・・私からはもう、伝えることはない。さあ、逃げるのよ優子。この空間から。」

「待って!逃げるって、出口はどこなの?」

ミチコは今にもその場所から消えていくかのように、段々とその色が薄くなり始めていた。

「言ったはず。私はこの空間の住人じゃない。だからこの空間を動かしているのは私じゃない。でも、今この空間を支配している宗助の命運は尽き始めている。あなたも宗助の道連れにされないように気をつけて。そして、あなたと次に会える時を楽しみにしているわ。」

そう言ってミチコの影は消えていった。残されたヤサコは、何もなかったかのように静かにそびえる拝殿を見上げる。そよ風がミチコの言葉の余韻を消し去るようにヤサコを煽る。しかしヤサコの胸の中にはしっかりとその言葉は刻み込まれていた。自分が手に入れて来た真実を見失った時、ミチコは再び自分の前に現れる。ヤサコは

その言葉の意味を考えたくはなかった。ただ幻を見ただけだと思いたかった。でもミチコはその目ですべてを見通しているのだと感じずにはいられなかった。あの事件以降の、ヤサコ自身をずっと見て来たのではないかと。そして最後も気になることを言っていた。宗助の命運は尽き始めている。それはどういうことなのか。単なる予言なのだろうか。ならもしその言葉通りのことが起きれば、自分はミチコの言葉を信じざるを得ないのではないか。

ヤサコの体、もとい電脳体の中を激しく思案が駆け巡る。しばらくその場に立ち尽くしたヤサコは、ようやく重要なことを思い出した。この空間から逃げなければならない。いくらミチコの予言を気にしても、この空間で電脳体ごと意識が閉じ込められては意味をなさない。とにかく出口を探しに行かなければならない。その時ヤサコがヌルに襲われる直前の、フミエとウイングスの日比野のやりとりを思い出した。3階フロアーに倒れていた少年は、すでに意識がこの空間に入り込んでいたらしい。ならばその少年の電脳体も探して一緒に脱出しなければならない。それに1番最初にヌルに襲われたシンヤも、この空間にいる可能性が高い。さらに言うなら、自分は見ていないだけでもっと多くの子どもがこの空間にいるかもしれない。そう思ったら悩んでいる暇などなかった。とにかくまずは出口を探さないといけないと思った。

ヤサコは拝殿に背を向けてとりあえず階段を降りようと思い足を踏み出す。ところがその時地響きのようなものが鳴りだし、そして視界が揺れ始めた。ヤサコは驚いて姿勢を低くして辺りを見回す。これは果たし合いの時と同じ現象かと思った。しかしそれは違うとすぐに気付く。空が割れ始めている。鮮やかなオレンジの空は、いびつなパズルのピースがボロボロとはずれるように崩れ落ちていく。フォーマットが開始されたのだとヤサコは確信する。ついに空間管理室は廃ビルの異常を感知した。この地響きも廃ビルの古い空間の消去によって発生しているもの。フミエ達がいるので、管理室が誤ってこの空間の出入り口となる鍵穴を消去することはないだろうと

ヤサコは思った。もっとも、それはまだ鍵穴が残っていればの話であり、もし残っていたとしてもこのフォーマットの反動で閉じてしまうかもしれないと、ヤサコは地響きのなか立ち上がった。諦めなければ、まだ助かる可能性はある。

再び立ち上がった時にヤサコは拝殿の方を振り返った。その時信じられないものが目に飛び込んで来る。先ほどまで間違いなく佇んでいた拝殿が消えているのだ。そしてその場所には、この空間を飲み込まんとするような巨大な影がうごめきながらみるみる膨らんでいる。これもかつてこの空間に入った時に見たことある光景だった。あの時、その影に飲み込まれてからの記憶はない。でも逃げようにも足が動かない。もはや逃げることもかなわない。その影の向こうは完全な闇で、まるで自分の立っているその場所こそが世界の末端であるような錯覚を起こした。次の瞬間、空間を飲み込むブラックホールの中に吸い寄せられるように、ヤサコはその影に飲み込まれた。それからの記憶はとぎれてしまった。

#12　混迷のレッドゾーン　part13

「……サコ！ヤサコ！」

泥のような眠りの中に、かすかに聞き慣れた声が飛び込んで来た。

確かこれも前にあったような、眠りに落ちる自分を呼び戻そうとするフミエの声。ということは、自分は助かった、戻って来たということなのか。そう思いながら、ヤサコは重たいまぶたをゆっくりと開いていった。

「ヤサコ！気がついたのね！！」

フミエはヤサコの手を握りながら、涙を流してその帰還を歓喜した。

そこには自分を見つめる、ハラケン、タケルの姿もあった。

「フミエちゃん……っつ！」

ヤサコはそのフミエに答えるようにその名前をつぶやき、頭を上げようとした。しかしそこで痛烈な頭痛に襲われて思わず声が漏れた。

「待て！今は安静にしていろ。じきに救急車がここに来る。」

「オバちゃん……」

目の前には心配そうな表情の玉子があらわれた。ヤサコの体にはイマーゴの副作用で発熱や筋肉痛などの異常が起きていて、それは電脳体が戻った今においても続いている。だるい体を動かす気力もなく、ヤサコはそのままフロアーの隅に寄りかかることにした。しかしこの場所が先ほどまであれだけの混乱に満ちていた同じ廃ビルとは思えない。今いるのはヤサコがヌルに襲われた3階西フロアーで、そこには静かでやさしい時が流れている。窓からは教会の礼拝堂のように、おごそかで清らかな月の光が整然とさしこんでいた。気がつくと寒さをしのぐための厚手のコートがかけられている。そのコートにヤサコは見覚えがあった。

「おじさん！ヤサコが目を覚ましました！」

玉子の横にいたハラケンが、隣のフロアーの方を見て言った。

「ほんとう！？」

空間管理室本部の職員と話をしていた一郎は、すぐにヤサコの元に駆け寄ってきた。
「優子、大丈夫か？」
「うん、ちょっと体はだるいけど。」
一郎のすぐ後ろを黒いキューブが浮遊している。そう言えば、玉子の後ろにいるのはサッチーなのかと今わかった。随分と目つきの悪いサッチーと、その2．0がこの廃ビルの異常をすべてフォーマットしたのだと理解した。
「まったく、無茶をするな。」
一郎はヤサコが自分の体を顧みなかったことを怒っているわけではなく、とにかく無事にいてくれたことを安心していた。ヤサコがそのこまでしなければならなかった理由を、一郎はヤサコが眠っている間にフミエ達から聞いていたのだ。
「そう言えば、私の体……」
ヤサコは自分の体を見て気付く。完全に肉体と電脳体が重なり合っている。
「ああ。それはおばあちゃんに言って、すぐにコイルタグを練ってもらってメールで送ってもらったんだ。それも、“あっち”に連れて行かれた人数分。」
一郎が説明する。コイルタグとは分離した電脳体と肉体を再び重ね合わせることができるメタタグである。本来は貴重品であるが、街中にメタバグが大量発生していたのが幸いだった。一郎はこんな時のために材料となるメタバグを集めていたのだ。
「そうなんだ。そう言えば、私の他に“あっち”に連れて行かれた子は？電脳体は戻ってるの？」
ヤサコが気になって訊ねる。“あっち”では連れて行かれた子どもを助けようと思っていたが、どういうわけか自分の電脳体は強制帰還された。もしかすると他の子は取り残されているかもしれないと思った。
「安心しろ。電脳体が分離した他の3人の意識もしっかりと“こっ

ち”に戻って来ている。それを確認してから鍵穴の消去を行った。
もうそろそろ他の子ども達も目覚めている頃だと思うが。」
玉子が言った。ヤサコの他に“あっち”に行ったのは3人だった。
その中にはシンヤも含まれている。今はまだ目を覚ましていないが、
幸いその3人も無事に戻って来たようだった。
「小此木さん。この上の階の空間調査一通り終わりました。もうここ
こで古い空間が発生することもないと思います。」
その時西階段から直樹が降りて来て一郎に報告した。一郎と直樹は
この日初めて会ったが、共通の知り合いである玉子の紹介もあって、
一郎は直樹に管理室の調査の手伝いを頼んでいたのだ。
「ご苦労様でした。警察の方の現場検証はどうするおつもりですか
？」
一郎が直樹に訊ねる。原因ははっきりとわかっているものの、一応
子ども4人が意識を失ったということには変わりないので、警察の
方もそれ相応の捜査を行うつもりでいた。宗助が出入りしていた可
能性が高いこのビルからは、何か証拠が見つかる可能性もある。
「本来ならば今すぐにでも行いたいのですが、重要な参考人である
この子達をこんな遅い時間まで残しておくわけにもいきません。今
日のところは現場保存をして、明日の朝1番に行おうと考えていま
す。」
直樹はそう言ってメガネの腕時計を見やった。時刻は午後9時半を
指している。
「そうですか。そう言えば、6階の少年は目覚めましたか？」
「いえ。まだですね。彼の友達に今見てもらっています。」
一郎と直樹がやりとりをしている間に、黒客メンバーがぞろぞろと
上の階から降りて来た。シンヤは今グランドスラムのメンバーが見
守っている。そのメンバーとシンヤを助けに行ったダイチも、なん
とかヌル達の魔の手から逃れたのだ。
「あ～！！ヤサコ目覚めてる！大丈夫か！？」
ダイチがヤサコを見るなり叫ぶ。黒客メンバーもヤサコの安否が気

になっていたのだ。
「大きい声出すなっての！ヤサコは熱を出してる上に、頭痛もしているのよ。少しは病人を気遣いなさい！」
フミエはできるかぎりの小さい声で、ダイチを怒鳴りつけた。
「わ、悪い悪い。しかしシンヤといいヤサコといいよく戻って来られたな。“あっち”で何があったんだ？」
ダイチがヤサコに訊ねる。一郎や直樹、その場にいた全員がその時ヤサコの方を向いた。
「……なぜ戻って来れたのかはわからない。でも、そう、私は“あっち”でミチコに……うっ！」
しぼり出すようにヤサコがあの空間の記憶を振り返ろうとした。ところがミチコの名前を口にした瞬間、胸を締め付けられるような痛みに襲われる。苦悶の表情を浮かべながら、ヤサコは自分の胸を掴んでもがき始めた。
「おい！大丈夫か？」
玉子がヤサコに声をかけるが、ヤサコは答えるどころではない。一郎もヤサコの元に駆け寄るが何をすればいいか戸惑った。全員が心配そうにヤサコを見守る中、ちょうどいいタイミングでサイレン音が近くまで来て鳴り止む。一郎が呼んでいた救急車が到着したのだ。
「良かった。とりあえず1階まで僕が優子を運ぶ。」
一郎はそう言うと苦しむヤサコをゆっくりと抱きかかえた。そして涙がこぼれそうになった。ヤサコが助けを求めている時に、自分はいつもそばにいて守ってやれないこと。管理室室長として、そして父親として失格の烙印を一郎は自分に押したかった。本当の気持ちを言えば病院までずっと付き添ってやりたいが、山積みになっている職務がそれを許さない。なんてダメな男なんだろうと自分で笑いたかった。今回の失敗が本社で取り沙汰されれば、その職務すら失ってしまうかもしれない。でも今はそんなことはどうでもよかった。愛する娘が無事で済むことを願い、後先のことを考えたいとも思わなかった。

コイル探偵局、黒客、玉子や直樹もヤサコのことを心配し付き添った。一同が1階に着いた時、救急隊員が台車を滑らせてビルの中に入ってくるところだった。

「その子ですか?」

救急隊員の1人が一郎を見て言う。

「はい。よろしくお願いします。」

一郎はそう言って、台車の上にヤサコを乗せた。救急員は手際よくヤサコを台車に固定すると、「では」と言って救急車の方に引き返す。一郎はせめて救急車を見送ろうと一緒に外に出た。

「優ちゃん!!」

その時ヤサコの母、静江がビルに到着した。ヤサコが倒れたと一郎から聞いて飛んできたのだ。よほど全力で走ってきたのか、かなり息が上がっている。

「おお。来てくれたのか。僕はこの後もここで調査をしないといけなんだ。病院まで優子に付き添ってやってくれ。」

一郎は後ろめたさを感じながら、言いにくそうに静江に言った。

「わかってる。大丈夫?優ちゃん?」

静江の方も一郎の事情を察していた。ヤサコが運び込まれた救急車に同乗し、苦しんでいるヤサコを優しく包むような声でいたわる。そうして救急車の後部扉が閉められて、救急車はまた耳につくようなサイレン音を鳴らして行ってしまった。それを一同が心配そうに見送った。

「ヤサコ……大丈夫かな?」

不安そうにフミエがぽつりともらす。

「きっと大丈夫だ。1度はしっかりとした意識で私たちの問いに受け答えしていたんだからな。」

玉子が子ども達を不安がらせまいと言う。それにしても、イマーゴの副作用とは一体どういうものなんだろうと玉子は疑問に思った。

「まったく、アンタが余計なこと訊くからこうなったのよ!」

次にフミエはダイチの方を見て言った。ヤサコが苦しみだしたのは

ダイチが質問をした時だった。
「オ、オレのせいかよ?オレだってあんな風になるとは思わなかったんだから仕方ねえだろ。それより、ヤサコが苦しみだす直前によ、ミチコがどうとか言ってなかったか?」
ダイチは少し声を細めて、全員に訊ねるように言った。
「言ってたわ。やっぱり聞き間違いじゃなかったのね。じゃあ、ヤサコは“あっち”の世界でミチコに会ったってこと?」
フミエの言葉に、全員が考え込む。確かにヤサコがミチコと口にしたのはここにいる全員が耳にした。
「それはあり得ないわ。ミチコはあの事件の時に消えたの。メガマスの空間制御プログラムの中で復活したとも考えられない。ですよね、室長?」
玉子はその話を即否定して、空間制御プログラム開発の張本人にも確認を入れた。
「あ、ああ。ミチコが復活したという可能性はない。それだけは僕たちも注意しながら作っていったし、何度も確認をした。なんにしても、優子からその話を詳しく聞いてみないことにはね。」
その点については徹底的に調べる必要があると一郎は思った。宗助やCGWがミチコを復活させた可能性も捨てきれない。
「あっ。竹下くん。」
その時久美子が廃ビルの外回りから戻って来た。きっとこの近辺にいると踏んでいた宗助を包囲するために奔走していたのだ。
「川畑さん。首尾はどうでした?」
「ここで必ず猫目を逮捕するために、刑事課にも協力を要請して市内に非常線を張ってもらった。でも、猫目らしい人物はまだ発見されてない。あの黒いスポーツカーで移動しているのなら、すぐに見つかると思ったんだけど。」
警察内でも猫目を巡って複雑な利害対立があるかもしれないので、極力直樹達は他の部署との連携を避けて捜査してきた。しかし子どもも4人が意識を失った事件が発生した以上、ここで猫目を捕まえな

ければまた大変なことになるかもしれない。そう判断した久美子は刑事課とも連絡して猫目を封じ込める作戦をとったのだ。

「そうですか。少なくともこの現場付近にいたのはほぼ間違いと思うのですが。そうなると猫目はとっくに市外に逃れたという可能性もありますね。」

その場にいた全員が直樹の方を向いた。猫目を逃したということは、同じ惨劇が繰り返されるかもしれないということでもある。

「ええ、そうね。猫目はその嗅覚で、警察が動き出す前に逃げ出したのかも……」

「あるいは、警察内に内通者がいて、その動きを把握していたかですね。」

直樹の言葉に、一同は不安が募った。もしそうだとすればこのいたちごっこは永遠に終わらない。

「やっぱり、刑事課と連絡をとったのがまずかったかしら？」

久美子が少し後悔しながら言う。刑事課にその内通者がいたとしたら、自分の判断ミスで猫目を逃したことになるからだ。

「それを言っても仕方がありませんよ。川畑さんは最善だと思われる判断をしたんですから。まあ、過ぎたことを悔やんでいる暇はありません。猫目はまだこの街にいる可能性もあります。僕たちはとりあえず市内のホテルなどで聞き込みを行いましょう。」

「そうね。」

直樹と久美子のこれからの捜査方針が決まった。廃ビルの捜査は明日の朝に行うこととして、これからまた聞き込みに向かうことにした。

「みなさん。僕たちはこれにて失礼します。明日の朝またここで。」

直樹は一同に敬礼しながら言う。「ご苦労様です」と一郎は直樹をねぎらった。

「原川さん。バイク、ありがとうございました。」

久美子が借りていたバイクのキーを玉子に返して、直樹とともに乗って来た覆面パトカーで廃ビルを後にしていった。

「さあ、みんなもそろそろ家に帰りなさい。夜道は危険だから、管理室の職員を付き添わせる。あと、今日の詳しい話は明日の現場検証で聞くことにするよ。他の子ども達も目覚め次第僕たちが責任をもって家に帰すことにする。今日は朝から大変でみんなも疲れただろう。家でゆっくり休みなさい。」

「はーい。」

一郎の言葉にフミエ達は素直に返事したが、ダイチ達はため息をつくだけだった。明日の現場検証で、ここ最近の黒客の活動を洗いざらい言わなければならないのが鬱だったのだ。

「玉子君も、今日は本当にありがとう。君も帰宅して休んでくれ。明日の朝またここに。」

「わかりました。さあ、みんな帰りましょう。」

一郎の言葉にうなずき、玉子が子ども達に声をかける。途中まで玉子も子ども達に付き添うつもりだった。

「原川さん。あなたの活躍で子ども達の被害が最小限に抑えられたことは感謝します。結果的に全員の意識が戻って来て良かったです。しかし、それであなたの行為を不問にすることはできません。サッチーをハッキングし、さらに違法改造まで施した件は、本社に報告させていただきます。悪く思わないでください。」

「……わかっています。」

管理室本部の職員が玉子のもとに寄って来て言った。玉子はもちろん覚悟はしていたが、その職員の物腰が丁寧だったので少し安心した。その職員も少しは自分のことを理解してくれているのかなと思った。

「じゃあ、気をつけて。」

一郎が見送り、子ども達と玉子も廃ビルを後にしていった。

大黒市と弁天市の市境にほど近い、山沿いの国道。バスの墓場にさしかかるトンネル手前で、宗助と補佐役の男は車を一旦降りてい

た。大黒市の西端であるそこからは、中津交差点の様子もかすかに見下ろすことができる。
「なぜ失敗した?」
補佐役の男の電話の向こうで、ＣＧＷの幹部が報告を聞いて訊ねた。
「わかりません。制御プログラムの不具合としか。それでも子どもを４人ほど、“あっち”に連れていくことには成功したんです。しかしなぜか彼らの電脳体は通常空間に強制送還されて。」
言い訳がましく男は報告するが、それはウソではなかった。本来ならばその４人の子どもの電脳体を人質に、メガマスに揺さぶりをかける作戦だった。しかし全員の電脳体が元に戻ってしまったのは、宗助達にしても予想外の出来事だったのだ。
「それならこっちのコンピューターに収めてある制御プログラムを調べてみる。しかしだな、うまくいっていたとしても４人というのは少なくないか?そのビルには２０人ほどの子どもがいたんだろう?」
不満そうに幹部の男が問う。
「はい。ですが、その中の数人は暗号を使っていたようで、その子達がヌルに抵抗し続ける間に管理室に嗅ぎ付けられたんです。」
「言い訳するな。そももっと早くに通路を開いていれば、管理室が来る前にもっと多くの子どもを“あっち”に送り込めたんじゃないのか?」
「ええ。僕もそう思って猫目さんに進言したのですが、なぜか『もう少し待て』としか言わなくて。それで通路を開くタイミングが大幅に遅れてしまいました。」
補佐役の男が責任をなすりつけるように言う。
「なに?猫目はどういう了見なんだ?おい、猫目と代われ。直接話を聞く。」
「ムリです。さっきあの人はしばらく1人にしてくれと言って、街を見下ろしながら何か思うようにタバコを吸っています。ああいう時には何を言っても聞いてくれません。」

補佐役の男が少し離れたところで佇んでいる宗助を見ながら返した。
「わかったもういい。話はヤツが落ち着いてから訊くことにする。それよりこれからどうするつもりだ？これだけのことをしたんだ。警察もかなり躍起になっているんじゃないか？」
「はい。ですがそれは大黒市内においてだけです。とりあえず今日は隣の弁天市に宿をとります。今後はそこを拠点に、もう1度大黒において行動を起こせるか機会をうかがうと、猫目さんが。」
「了解した。くれぐれも足がつかんように気をつけろ。」
幹部の男はそう言って「フン」と言いながら電話を切った。補佐役の男も1つため息をつくと、再び宗助を見た。
宗助はタバコを口にくわえ、国道のガードレールに寄りかかりながら大黒市を眺めていた。夜風に桜の木々が揺れている。山の上の桜から、宗助を責めるように花びらが舞い落ちて、その背中に降りかかる。
「……タケル。許してくれ。僕は、お前を恨んでなんかはいない。お前にはお前の、僕には僕の生きる道がある。それに干渉するつもりはなかった。だが、なぜあの場所にお前が……僕のことなど忘れて、この街に戻ることなく生きていればよかったのに。ただの犯罪者の弟になる必要はなかったのに……」
そうぽつりぽつりとつぶやき、宗助はタバコをへし折った。それを地面に投げ捨て、落ちていた桜の花びらとともに踏みつける。その足で宗助はガードレールを思いっきり蹴りつけた。
「くそっ！！」
なぜ失敗したのか。行き場のないいら立ちをぶつけられたガードレールは、ほんの少しだけ歪みを作った。
「なぜまたあの娘に阻まれたんだ。」
小此木優子。そう口の奥でつぶやく。宗助の計画をことごとくつぶしていったのは他ならぬヤサコだった。そして、タケルをこの街に呼び戻したのも。激しい憎悪が胸の内でうずまく。ミチコを呼び戻したのも、ヤサコの力によるところだと宗助は思った。そして正体

不明の新しいミチコが、ヤサコ達を通常空間に逃がした。宗助はそのように捉えていた。

「猫目さん！」

ガードレールを蹴り就けたのに驚いた補佐役の男が近づいてきた。

この男や、しいてはＣＧＷの人間に自分の本音を聞かれたくないと思った宗助は冷静さを取り戻した。

「いや、取り乱して悪かった。そろそろ行くか。」

「え、ええ。」

そう言って宗助達は黒いスポーツカーに乗り込み、弁天市を目指して出発する。

大黒市の長い１日がようやく消えていこうとしていた。

#１２　混迷のレッドゾーン　ｐａｒｔ１３（後書き）

お疲れさまでした。第１２話これにて終了です。
次回第１３話は第１部の最後のお話となります。第１４話から第２部に入ります。お楽しみに。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part1

「オジいちゃんの保管していたイマーゴに関する資料は、あの夏に2．0によって消去された部分の他にも、欠落している項目があるそうです。」

懐かしい光景が広がっている。教壇横に立つヤサコと、それをまじまじと見つめる新しいクラスメート。黒板に「小此木優子」という文字を書いて振り向くと、「みんな、小此木さんと仲良くしてあげてね」とマイコ先生は言った。そして制服のヤサコは深く頭を下げた。

「じゃあ小此木さん。あそこの空いている席に座ってね。」

ヤサコは先生に言われるがまま、フミエの前の席に向かって歩いて行った。

「よろしくね。小此木さん。」

席に到着するなり、フミエがヤサコに向かって挨拶した。

「うん。よろしくね、フミエちゃん。」

ごく自然にヤサコは返したつもりだったが、フミエはそこで思いっきり怪訝そうな顔をした。

「え？なんで私の名前、知ってるの？」

「なんでって、親友の名前を忘れるはずが……」

言いかけてヤサコは戸惑った。確かに、自分は今日初めてここに来た転校生のはずだ。でも、フミエのことはちゃんと知ってる。半年以上もの間、いつも一緒にいてくれた大黒での1番の親友だ。でも、それは矛盾している。

そこで教室の中を改めて見回した。自分は全員のことを知っている。ここのみんなとも半年は共に過ごしたのだから。にやにやこちらを見ているダイチも、その後ろで同じようににやついているナメッチも、今日も艶やかな髪をかわいいゴムで留めているアイコも、

そして、こちらには興味を示さずうつろに窓の外を眺めているイサコも。

いても立ってもいられなくなったヤサコは、朝のショートホームルームが終わるとすぐにイサコのところに歩いて行った。

「あの、天沢さん……？」

おそるおそる訊ねてみた。

「なに？なんで私のこと知ってるの？」

イサコの回答はフミエとほぼ同じものだった。ただうっとうしいと言いたげな目をヤサコに向けている。

「なんでって、私のこと覚えてないの！？あの事件を一緒に乗り越えていったじゃない！それで最後にあなたは心を開いてくれたじゃない！」

不安を打ち消すように自然と強い口調になっていた。多分みんな自分のことをからかおうとしているんだと思った。

「はあ？頭おかしいんじゃない？悪いけど、あっち行っててくれる？」

足元が急に崩れて行くような気分だった。イサコは自分と出会った時のイサコのままだ。いや、そもそもこれが自分たちの出会いなのかと思った。

「天沢さん。転校生相手にもっと優しくできないの？初めてしゃべりかけた相手にそんな風に言われる、この子の気持ちにもなってみなさいよ！」

そこに後ろからフミエが歩いてきて言った。おかしい。イサコも自分と同じ転校生、しかも自分より後にこのクラスに入って来たはずなのに、なぜこれほどまでに馴染んでいるのか。でもヤサコがショックだったのはそんなことじゃない。ヤサコがショックだったのは、いつもは「イサコ」とちゃかすように呼んでいるフミエが、「天沢さん」と呼んでいることだったり、自分のことを「この子」と呼んでいるその他人行儀さだ。

「ムダムダ。天沢にそんなこと言っても聞く耳持たねえって。それ

よりも転校生、オレたちのクラブに入らないか？スッゲークールなクラブなんだぜ。」

今度はダイチが追い打ちをかけてきた。「転校生」という変数Xと同じくらい無機質で個性のない言葉が胸に突き刺さる。

「そんな男ばかりのダメクラブ、ダメに決まってるじゃないチビスケ！」

「んだとー！？チビスケ！」

「うるさい！ケンカならよそでやれ。」

茫然としているヤサコをよそに、フミエとダイチはいつもの部活を始めた。それにうんざりしたイサコが2人を怒鳴りつけている。

どうしてこんなに孤独なのか。なぜ誰も自分を「ヤサコ」と呼んでくれないのか。仲間はずれにされていじめられている時と似たような感情が生まれていた。つい昨日まではそうやって呼んでくれて、とりとめもないことで笑い合っていたのに。イサコにしても、数々の苦難を乗り越えてやっとつながりあえたのに。自分たちの関係はリセットされてしまったのか。また1から始めないといけないのか。

そう思った瞬間、絶望がこみ上げて来て、ヤサコはその場に泣き崩れていた。

目の前で起こっていることが信じられない時、または信じたくない時、人はこれが夢であってくれと念じることがある。そしてしばしば、実際にその悪夢から還ることがある。今のヤサコがまさにそれだった。じっとりと陰湿な悪夢から無事に戻って来て、ヤサコはまるで漫画の登場人物のように「夢か……」とつぶやいた。

気がついてみるとそこは個室の病室だった。前にも同じような体験をしたが、今回は自分が救急車で運ばれるところまでは意識がはっきりしていたので驚きはしなかった。意識が途絶えたのは病院に着いてからである。救急車で運ばれているあいだに、ピアノ線で締め付けられているような胸の痛みは和らぎ、それから解放された時

には突然の睡魔に襲われたのだ。今は運ばれた時と比べればかなり体調も良くなったように感じた。

そこで病室にかかっている時計を見る。時刻は朝の7時半過ぎ。気持ちのいい朝の風景が窓の外に広がっていた。昨日とは大違いの朝だ。病院の敷地の周りには桜が植樹されている。それを眺めるだけでも心が安らぎ、晴れやかな気分になる。そもそも桜が見頃のこの時期にそういう感傷にひたることがなかったのは、街中に古い空間が溢れていたからだった。歪んだ空間や大量発生する霧は、豊かな自然を味わう心の余裕を削いでゆく。それに他の理由もある。フミエも花見に行こうとか、秋に紅葉狩りに行こうとか言ったことはない（メタバグ狩りに行こうと言うことはあっても）。なぜならメガネが当たり前のこの街では、桜や紅葉など見ようと思えばいつでも見られるからだ。それはそれで面白いのだが、四季が巡るありがたみも感じなくなる。改めて不思議な街だと思った。前にいた金沢という街は、それこそ移り行く四季の表情がはっきりしていて、それを自分も毎年楽しんでいたので、大黒市のそういう味気ない部分は合わないかもとヤサコは思った。

外の風景を見て思いをめぐらしている時、突然病室の引き戸が開かれた。ヤサコはそちらに目を向ける。

「おう。目覚めていたか。」

「オババ！？」

ヤサコは驚いた。こんな朝の病室で自分のそばにいてくれるのが、母の静江でも、父の一郎でもなく祖母のメガばあだったことに。

「そろそろお主が目覚める頃だと思うてな、飲み物を買いに行っておったのじゃ。ホレ。」

メガばあはベッド横の丸イスに腰掛けると、病院の売店の袋の中からパックのリンゴジュースを取り出し、ヤサコに渡した。

「あ、ありがとう……ひょっとして、一晩中私のそばにいてくれたの？」

「ああ、そうじゃ。お主が倒れて病院に運ばれたと聞いてな。夕べ

お主のお母さんと入れ違いにここに来て、お主を見守っておったのじゃ。」

メガばあは買って来たペットボトルのお茶をすすりながら言った。

「ずっと見守ってたって、じゃあオババ、昨日から寝てないの？体大丈夫？」

「病人のお主に心配されるほどヤワな体しとらんわい。どれ、熱はもう下がったのかえ？」

メガばあはそう言うとヤサコの額に手を当てて熱を測った。

「うむ。だいぶ下がったようじゃな。気分はどうじゃ？」

「まだちょっとだけ体はだるいけど、すぐに良くなると思う。」

病院に運ばれた時点ではかなりの高熱を出していたヤサコだが、注射や解熱剤の投与ですっかり回復していた。

「そうか。そりゃ安心したわい。これでも夕べはお主に先立たれたらどうしようかと肝を冷やしたんじゃよ。」

「……そんな大げさな。」

ヤサコは苦笑いを浮かべ、メガばあからもらったジュースにストローをさして一口飲んだ。

「大げさではないわい……昨日の話はお父さんから電話で聞いたのじゃが、宗助が絡んでいたとはな。確かにワシは宗助を止めるようにお主らに頼んだ、しかしそれでお主の身に万が一の事があったら、ワシは正直どうすればよいかわからなくなっておった。本来ならば、ワシがその罰を受けなければならぬのに。」

神妙な顔つきになったメガばあに対して、ヤサコはどう接すればいいかわからなかった。ただジュースのパックを両手で抱えながら、その話を聞くことしかできなかった。

「しかしまあ、お主が倒れた理由が暗号炉の酷使によるイマーゴの副作用だったとはな。」

「ご、ごめんなさい。心配ばっかりかけて。」

すぐにヤサコは謝った。ここまでメガばあが自分のことを心配しているのに、自分の身を顧みなかったことを少しだけ後悔した。

「いや、謝らねばならぬのはワシの方じゃ。昨日お主らに暗号やらメタタグやらを渡す時に、暗号炉を使わぬようによく言い含めておくべきじゃった。もっとも、言い含めておいたところで、お主が昨日暗号炉を使わなかったかどうかはわからぬがな。」

そう言ってメガばあはホッホッと笑っている。ヤサコもそれに合わせてまた苦笑いで返した。

「どうやら、イマーゴの力は年齢を重ねるごとに衰えていくようじゃ。お主も夏の事件の時に比べて、今回は体力の消耗が早かったように感じたんじゃないかえ?」

「……確かにその通りだったわ。体が言うことを聞かなくなるのが、思いのほか早い感じだった。」

ヤサコは昨日のことを思い出して言った。もう立てなくなってヌルに囲まれたときの絶望感は、今思い出してもぞっとする。

「やはりな。たった半年でもそれだけ違うんじゃ。これから大人になるに連れてその能力も徐々に消えていくじゃろう。もう、今回みたいな無茶はできぬぞ。」

「わかってるわ。昨日で自分の限界を知ったから、もう暗号炉を使うことはないと思う。それより検査の結果はどうだったの?」

昨日倒れた原因、イマーゴの消費によって自分の体に何が起こったのか、ヤサコは知りたかった。

「症状は風邪に近いと医者は言っておったがな。胸を締め付けられるような痛みも、それに引き起こされる一過性のものだったようじゃ。他に体に異常も見つかっておらん。今日改めて精密検査を行うそうじゃ。」

「そう。とりあえずすぐには退院できるのね。」

ヤサコはほっと息をついた。症状がひどくて長期間入院ということになれば、1週間後に始まる中学校生活でも出遅れることになると心配していたのだ。

「じゃが問題もある。今のメガマスはイマーゴの仕組みや性質について知りたがっておるようじゃが、イマーゴの消費によってぶっ倒

れたお主は、そのメガマスにとっては格好の被験者じゃ。お主をそんなメガマスの実験体にされぬよう、ワシが見守るというわけじゃ。」

メガばあが自分の胸を叩きながら言う。ヤサコはメガマスの実験で父一郎が言っていたことを思い出した。イマーゴを医学的に分析するために後日病院で検査を受けてもらうと。こんな形でその検査を受けることになるとは、あの時は想像もしていなかった。

「他に聞くことはあるかえ?」

メガばあは優しい口調でヤサコに訊ねる。ヤサコしばらく考え込んだ後でやはり思い切って打ち明けることにした。

「……ねえオババ。私、イマーゴのことよりも気になることがあるの。“あっち”の世界のことで。」

昨日入りこんだ“あっち”の世界での出来事。それはおそらくこの先1人で抱えるには重すぎるようなことだった。メガばあに打ち明ければ、幾分気持ちも楽になるかもしれないと思った。

「”あっち“の世界か。聞くところによると、ミチコがどうとかいうことをお主は昨日運び込まれる前に言っておったそうじゃのう。」

「……ええ。信じられないかもしれないけど、いや、私だって今も夢の中の出来事だったんじゃないかと思うけど、昨日ミチコに会ったの。あの空間の中で。」

あの出来事を夢だと思いたいのは単なる願望だとヤサコは思った。あの時ミチコの言葉は、まだ事件は続くことを示唆していた。さらにヤサコ自身が大切なものを見失うということもミチコは予言した。

「しかし、ミチコはあの事件で消えたはずじゃろ?」

メガばあも深く考えこみながら訊ねた。

「そう。私も真っ先にそのことをミチコに訊ねた。でも、ミチコは新しい空間で、新しい生を与えられたって言っていたの。」

「新しい空間?」

メガばあが顔を上げてヤサコの方を見る。

「ええ。その空間は永遠に続く虚構がなんとかってミチコは言って

たけど、その意味はわからなかった。でも、その虚構はやがて現実世界の真実をも浸食するって。」

「……なんのことじゃろうな。しかしそんな突拍子のない言葉をを信用する根拠もない。やはりそのミチコはお主が夢の中で見たものか、もしくは“あっち”の世界で幻覚を見たかじゃと思うな。少なくともあの事件のときのミチコと同じ者ではない気がするわい。あまりそれで気に病まん方がええぞ。」

メガばあはヤサコに言い聞かせる。ヤサコもやはりこんな話信用されないだろうなと感じた。それでメガばあの言う通りあのミチコは幻だったと思いたかった。でもどうしても心の中であのミチコのことが気になって仕方ないのは、自分がミチコの生みの親だからかなと思った。自分が生み出した者が本物であるか偽物であるか、それくらいは判別できる。そう考えると、やはりあのミチコは本物のミチコだと思ってしまった。そしてその言葉も真実なのではないかと。

「まあ、少し時が経てばその答えもでるかもしれん。今は気にせず静養すればよい。そろそろ朝食の時間じゃ。顔でも洗ってくるがええ。」

「うん。」

ヤサコはどこか晴れない心のままベッドから出て窓の前に立ち、もう1度外の風景を眺めた。その時風にあおられた桜の木々から花びらが落ちてゆくのが見えた。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part2

衝撃の一夜を過ごしたメガマス本社。事件の概要が飛び込んでくるとすぐに社長の桝田は緊急の幹部会を開いて今後の対策を話し合った。その後も警察側との意見交換などもあり、桝田にとっては眠れぬ夜となった。この日も朝から現場検証があるということなので、報告を受けてまたすぐに会議を開くために会社に残らなければならず、桝田は申し訳程度の仮眠をとって今起きたところだった。時刻は午前8時前。朝のニュース報道を見るためにテレビのある場所を探していた桝田は、社員専用のリラクゼーションルームまで足を運んでいた。そこには最新式のマッサージチェアや、足湯など社員の疲れを取るための設備が充実している。

「あれ？神崎さん。ここにいたんですか。」

部屋に入ったところで桝田は神崎を見つけた。神崎もこの日は会社に泊まっており、今はマッサージチェアで体をもみほぐしながら昨日の疲れをとっているところだった。こんな時でも神崎はお気に入りの葉巻を口にくわえている。

「ああっ、社長。申し訳ありませんこんな格好で。」

神崎は桝田を見つけるとマッサージチェアから起き上がろうとした。

「いえ。お気になさらず、楽になさってください。昨日は神崎さんもかなりお疲れになったでしょうから。」

「そうですか。ではお言葉に甘えさせていただきます。この歳になると疲れもなかなかとれないもので。」

桝田の言葉を聞いた神崎はもう1度マッサージチェアに体を預け、

「ああ～」と至福の声を出した。

「社長もマッサージにいらしたのですか？」

顔を上げずにそのままの体勢で神崎が訊ねる。

「いえ。僕はたった今起きたところで、朝のニュースを見ようと思いましてここに。ちょうど社長室のテレビの具合が悪かったもので

すから、ここでコーヒーでも飲みながら見ようかと思いまして。」
そう言うと桝田は飲み物の自動販売機コーナーの前に歩み寄った。
「何か缶コーヒーでオススメってありますかね？僕は普段こういうの飲まないですから。」
桝田が神崎に訊ねる。普段桝田は秘書の入れてくれる上質なコーヒー豆から入れるコーヒーを愛飲しているのだが、今は秘書も昨日の疲れから仮眠をとっているところだった。
「……そうですね。私はモーニングブラックショットっていうのが好きですね。しかし缶コーヒーもおいしくなりましたよ。私が若い頃はわざわざ買って飲もうとも思わなかったですからね。」
しみじみという風に神崎は語る。
「ご教示ありがとうございます。」
桝田は神崎の言った銘柄の缶コーヒーを買い、プルタブを空けて１口飲んだ。確かに、自分が普段飲んでいるものとはさすがに差があるが、下手な喫茶店に行くよりは飲めるなと桝田は思った。
そうしている間に壁掛けの薄型テレビで朝８時のニュースが始まった。桝田は立ったまま片手をポケットに入れ、片手でコーヒーを持ちながら画面を注視する。神崎も顔は上げないが目と耳だけは画面に集中させた。
「……おはようございます。４月2日。午前８時のニュースをお伝えします。まず始めに、昨夜、旧バージョンの空間が大量発生した大黒市の中津交差点付近のビルで、数名の子どもが意識を失うという事件が発生しました。まずはこちらの事件から詳しくお伝えしたいと思います。現場には高橋記者が行っております。高橋さん？」
女性アナウンサーは冒頭に事件の概要だけ伝えると、現場にいる記者を呼びかけた。
「やはり。予想はしていましたが、もうマスコミには昨日の事件は筒抜けのようですね。できるだけマスコミには嗅ぎ付けられないように注意を払っていたんですが、どこから漏れたのでしょうか？」
桝田はため息をつきながら神崎に訊ねた。

「まあ、大方警察関係者からでしょうな。昨日は大黒市警も総動員で猫目を逮捕しにかかったのですから。そこから事件の概要を掴んだ旧幹部達に買収されている警官が、マスコミにリークしたと考えるのが妥当でしょう。ましてや昨日は朝からこの大黒市に報道関係者が押し寄せてきていて、夜になっても色々とかぎ回っていたみたいですから、昨夜の事件をもみ消すのは不可能だったでしょうな。」

神崎はマッサージチェアの上で1つ伸びをしながら言った。

「旧幹部の人達が絡んでいるというわけですか。しかし彼らと猫目との間につながりはないと昨日神崎さんはおっしゃっていませんでしたか？」

「確かに猫目と旧幹部がつながっている可能性は低いです。しかし旧幹部にとって猫目がメガマスへの復讐を果たそうとしていることは思わぬ幸運でしょう。これで現メガマス政権を揺るがすことができるんですから。仮に彼らが元のポジションに返り咲いたとすれば、猫目など後からどうにでもできると考えているんじゃないですか？」

「なるほど……」

そうつぶやいて考え込みながら桝田は再びテレビ画面の方を注視した。

「……こちら現場では、先ほどから警察と空間管理室による現場検証が始まっています。関係者の話では、昨夜このビルの中で子ども達20名弱が遊んでいる時に、突然電脳世界の中で鍵穴のよう物が現れ、そこから無数の黒い影が現れたということでした。その黒い影に触れられた子どもが、その場で意識を失ったということです。」

現場検証を行う鑑識が映し出される中で、記者は抑揚無く報告している。

「そんなことまで白日のもとに晒されるとは。鍵穴やヌルのことは我々が伏せて来た最重要の項目なのに。」

桝田は眉間にしわを寄せる。いずれそれらのことは公表するつもりでいたが、その前にその存在が世間に明るみになったのは手痛い失点である。しかも今回の事件の発端が自分たちが開発した空間制御

プログラムにあるのは皮肉な話だった。
「いやはや、そこまでマスコミが掴んでいるとは思わなかったですな。以前のメガマスなら、このくらいの事件など新聞のほんの小さな記事に抑えることができたんですがね。それを隠し通して来た旧幹部達が、今度はそれを利用して現メガマスを貶めることになろうとは。」
神崎はそう言って桝田の方を見たが、桝田は深い考え事をしているようだった。
「社長。これからどうするおつもりです？このままだと、今日は終日本社や管理室の電話は鳴り続けると思いますが。」
鍵穴やヌルの存在が明るみに出たので、大黒市民の不安が増大することは必至である。しかも犯人の宗助は市外に逃走した。この窮地におけるメガマスとしての次の１手は、大きな意味を持ってくる。
「どうするとおっしゃいますが、何ができますか？今の私たちに。」
桝田は困り果てた様子で神崎に訊ね返した。
「そうですね……まずこの報道については現在調査中の段階であり、真実かどうかは判断できないとして時間を稼ぐことが１つ。その間に猫目を逮捕する。できないならば、ハッキング痕をでっち上げてＣＧＷへの強制捜査を警察に要請する。」
神崎は言いながらマッサージチェアから起き上がり、近くのソファーにかけていた背広を身につけた。
「１つ目はわかります。でも猫目の逮捕は確実性がありません。その次の３つ目は難しいでしょう。確かにＣＧＷがハッキングを行ったというのは事実かもしれませんが、我々は警察とまともに干渉できません。我々の提示した証拠で警察が動くはずがないと思います。ましてやその証拠をねつ造するなど。」
「いえ。我々の提示した証拠ではなく、大黒市警電脳犯罪対策係が発見した証拠ということにするのです。」
神崎が桝田の方に歩み寄りながら言った。番組はいつの間にか次のニュースに移行している。

「どういう意味ですか？」
桝田は神崎のしわの寄った鋭い目を見た。
「わかりませんか？電脳犯罪対策係は唯一我々に忠実な部署です。その彼らに、メガマスの開発した最重要プログラムをハッキングしたのはＣＧＷだと報告してもらうのです。同じ警察の押収した証拠を否定することはできません。新東京警察はＣＧＷの強制捜査に踏み切ることになるでしょう。」
神崎が目を付けたのは電脳犯罪対策係という都合のいい存在だった。対策係がハッキング痕を証拠として認めれば警察を動かせる。無論そのハッキング痕はねつ造ということになる。ＣＧＷのハッキングはそのくらいほとんど証拠を残さない完璧なものだった。
「待ってください。もし強制捜査に踏み切ったとすれば、ＣＧＷはまず第一に保身を考えて空間制御プログラムを彼らのスパコンから抹消するんじゃないですか？いや、抹消ならまだいいです。彼らの関係先にプログラムが転送された場合、その強制捜査は無意味に終わってしまう。」
「安心してください。今のＣＧＷの関係機関に、あの膨大なプログラムを収めるスパコンは存在しません。強制捜査が執行されるなら、１００％彼らはプログラムを抹消するはずです。」
笑みをたたえながら、自信ありげに神崎が言う。
「いや、問題はそれだけではありません。結局どの目に出ても、強制捜査としては失敗に終わるというのが筋書きですよね？証拠隠滅のためにプログラムは抹消されるのですから。その時対策係はどうなります？新東京警察の権威を貶める証拠ねつ造。その罪によって彼らは裁かれることになるんですよ。」
「ええ。彼らの警察官としての人生はそこで終焉するかもしれませんね。」
何でもない日常会話のように、ごく普通に神崎は言い放った。
「あなた正気ですか？これまで我々に協力してくださった対策係の人たちをあっさり切り捨てるというのですか？」

「そうなりますね。でもこの作戦がうまくいけば、忌まわしき空間制御プログラムは抹消される。それで猫目を逮捕しようがしまいが、大黒市民、ひいてはこの国の全メガネユーザーの身を守ることができます。昨夜のようなことはもう起きてほしくないと願うならば、悪い話ではないと思いますが。」

興奮気味の桝田に対して、あくまで冷静、冷徹に神崎は言い聞かせるように言った。

「信じられません！人の人生を狂わせてまで何を守ると言うのです！あなたは時々そのようなことを平気で言う！それではまるで、猫目技師を捨てた以前のメガマスと変わりないじゃないですか！」

「会社の運営上必要な犠牲はつきものです。この世界的大企業をきれいごとで動かせるほど、世の中甘くありませんよ。社長。」

まるで子ども扱いされているようで、桝田の中には神崎に対する憎悪がわき上がって来た。そう簡単に自分の信念を曲げられない。その強い反発を胸に抱く。

「対策係の人もそのくらいわかるはずです。自分の不利になるような計画の片棒担ぐわけないじゃないですか。」

「そうですか？昨日対策係は猫目逮捕のために他の部署と連絡を取った。彼らも大黒市警にメガマスの敵がいることはわかっていたはずです。そう、これらの事実が世間に明るみになった原因は彼らにある。彼らも今それを強く感じているはずです。さらにそこまでして猫目に逃げられた。彼らの目論みはすべて裏目にでた形となった。彼らのせいで大黒市民は余計な不安を煽られ、そして実際未だにその身を危険に晒されている。そのことを対策係にちらつかせれば、強い罪悪感に打ちひしがれ、この計画に協力せざるを得ないと思いますがね。」

それは半分脅迫だと桝田は思った。そしてそんなことを真顔で言うこの神崎という男が怖くなり寒気すら感じた。

「もう結構です。あなたとは話すことはできません。今日の会議も欠席してもらってもかまいません。お疲れでしょうから今日はご帰

宅してください。」
桝田はもう神崎にうんざりし、持っていたコーヒーを飲み干して空き缶をゴミ箱に捨てながら言った。
「いいのですか？他に良案があるんでしょうか社長？」
その声の落ち着きには余裕すら感じられた。この見下された感じに桝田はさらに腹が立った。
「対策は他の幹部の方ともよく合議した上で決定します。おそらくあなたの案を議題にのぼらせることもないでしょう。今の発言は事件解決後にでもしっかり取り上げて、しかるべき処置をとらせていただきますのでそのつもりで。」
桝田はそう言うと神崎に背を向けてリラクゼーションルームから出て行こうとした。
「気分を害されましたか？申し訳ありません。昨日寝てない頭での発言ですので大目に見てやってください。」
神崎はおどけたような声で桝田の背中に向かって言う。許さない、とその時桝田は思った。人の不幸の上で会社を成り立たせようとする人間が、まだこの会社の幹部にいることが腹立たしかった。神崎は現幹部達にとっても目の上のこぶなので、そろそろ始末したほうがいいと考えた。そこで自分の中に潜む子どもっぽさに気付いて、桝田は打ちのめされる。結局神崎は桝田にとってイヤなヤツでしかなかった。それを仲間はずれにしようと考えている自分を恥じた。神崎に見下されるのもそのあたりだと思った。
　そして、もう真実を隠したくないと思った。隠すために幾重にも偽装して、そして後に戻るのが難しくなる。メガマスも後に戻るには大きな代償を払わないといけない。でも、作り直したい。真実を公表して社長の座にいられるかどうかはわからないが、それでも公表を断行すべきである。もちろん、旧幹部が返り咲くのは望まないが、それ以外なら誰が新しいメガマスのタクトを振ろうと関係ない。メガマスが1度裸になって生まれ変わることが重要だと、そう思った。

この事件が解決したあかつきに、すべての真実を公表することを
桝田は決心した。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part3

「すみませーん。警察です。ここ通ります。」
午前8時30分。電脳犯罪対策係の直樹と久美子は報道陣と野次馬で込み合う廃ビル現場に到着した。2人は昨夜子ども達を帰した後、宗助の潜伏先を突き止めるために大黒市内のホテルというホテルを聞き込みにまわった。しかしめぼしい情報も得られず、大黒警察で仮眠をとったのち、改めて現場検証が行われている廃ビルに足を運んだのだ。
「おお。やっと来たか竹下君。随分と殿様出社だったな。」
廃ビルに入るなり直樹に声をかけてきたのは、大黒市警刑事課の捜査官の矢島という刑事だった。大黒市警でも有名な熱血タイプの刑事で、直樹は1年前大黒市警に配属になってからというもの、この刑事に目をつけられ弟分のような扱いを受けていた。それでも先輩としては頼りになり、今は敵も多い大黒市警の他の部署の捜査官の中では信頼できる人物だった。
「勘弁してくださいよ矢島さん。昨夜は一晩中聞き込みにまわってましたし、昨日の朝にしても古い空間の大発生で叩き起こされたんですから。」
直樹も昨日1日の疲れはとれておらず、それは如実に表情にもあらわれていた。
「前から言ってるけど、君には体力が足りない。警察官はとにかく体力だ。見てみろ、久美子さんはそんな忙しい中でも、今日も相変わらず美しい。」
矢島が久美子の方を見て言った。矢島と久美子も直樹の紹介で顔見知りになっている。
「矢島さん。これでも私だって疲れてるの。あなたの冗談に付き合ってる暇はないです。それより状況はどんな感じですか?」
久美子が矢島の言葉を受け流しながら言う。馴れ馴れしいのは2人

とも共通していて、すでに久美子と矢島の波長は合いつつあった。年齢も矢島と久美子はあまり変わらない。

「うわ。すっごい今日ノリ悪い。まあ、まじめな話に戻しますとね、現場検証始まってますが正直僕らがやることはないです。既にもう管理室の方々が勝手に始めちゃってますしね。僕ら刑事課は子ども達の証言を聞いて、今回の事件と電脳との関係のウラをとって、後は君たちに捜査を任せると、そういう流れになると思います。」

矢島は昨夜の事件がメガネに関係あるものだと聞かされていた。そうなると電脳に関する知識が薄弱な刑事課では処理できない。そこで今回は電脳犯罪対策係の補助役としての役割を負っていた。

「わかりました。ありがとうございます。じゃあ僕たちは管理室の方のお話を伺ってきますね。」

直樹は矢島に頭を下げると、すでに建物内の調査に入っている一郎の元に歩いて行った。今日は事故の内容を把握するために、今は桝田や神崎の情報取り次ぎ役を務めている香川の姿もあった。

「おはようございます、小此木さん。」

「おお。竹下さん。お疲れさまです。昨日は一晩中聞き込みを行かれていたそうで。」

一郎が直樹に言い、久美子も一郎に対して頭を下げた。

「はい。ですが、猫目宗助の潜伏先は特定できませんでした。彼は既に大黒市にいないのではと思います。」

「そうですか。今度こそ彼の次の行動は阻止しないといけません。我々も協力いたしますが、どうにか彼を押さえられるよう願っています。」

すでに昨夜の事件がマスコミを通じて明るみになった以上、次の宗助の行動があれば今度こそ大黒市は大混乱に陥る。一郎は昨日以上に神経を尖らせていた。

「はい、わかっています。ところで子ども達の姿がありませんが。今日の現場検証に立ち合うことになっていましたよね？」

直樹が辺りを見回しながら訊ねる。

「ああ。もうすぐ来ると思いますよ。」
「室長。子ども達が到着しました。」
入口にいた香川が一郎の元に歩み寄って言った。ちょうど話をしていたタイミングで子ども達と玉子がやって来たのだ。やって来た子ども達は黒客メンバーと、入院中のヤサコを除くコイル探偵局メンバーである。
「すげえカメラの数だな。オレたちも映るのかな?」
ダイチが報道陣の多さに驚く。普段ならカメラの前でふざけるところだが、今日は自分たちが当事者であるのを自覚してか自重している。もとより今日はこれまでの黒客の悪行をも質問されることは必至だったので、黒客メンバーのテンションはかなり低い。
「みんなおはよう。朝早くから来てもらって悪かったね。」
廃ビル内に入ってきた子ども達に一郎が声をかける。一同はそれぞれ「おはようございます」と一郎ほか管理室職員や、直樹ほか警察関係者にも挨拶をした。
「おじさん、ヤサコの容態は?」
一通りの挨拶を終えるとフミエが真っ先に一郎に訊ねた。
「ああ。大したことはなかったみたいだ。今朝起きたらだいぶ回復していたっておばあちゃんから連絡があった。」
一郎は忙しくてヤサコの入院するメガマス病院に見舞いに行く暇もなかった。代わりに見舞いに行ったメガばあから先ほど連絡を受けて安心したところである。フミエ達もその話を聞いてホッとしたようだった。
「子ども達ってオレたちだけッスか?見たところ他のクラブの人は来てないみたいですけど。」
今度はダイチが一郎に訊ねる。
「ああ、うん。実は昨日ここでヌルに襲われた子ども達はみんな一様に精神的ショックを受けていてね。もちろん、ヌルに“あっち”の世界に連れて行かれた子はなおさらだと思うけど。だからその子達の話はまた日を改めて聞くことになったんだ。」

一郎の話に全員がなんとなく納得した。自分たちはあの夏の事件の真相を一郎から聞かされており、あのヌルの正体が何であるのかは理解していたのであの時落ち着いて対処できた。しかし他の学校の生徒はあのヌルの正体は何かわからず、それはまさに、得体の知れない化け物に襲われたという意識が強く残っているはずである。そう考えると自分たちは幸運だったなと一同は思った。

「なんだ。じゃあシンヤはここに来ないのか。」

それを聞いたダイチがつまらなそうにつぶやく。それはそれで良かったかもしれないと黒客メンバーは思った。自分たちを裏切ってあの状況でメガネをも壊そうとした人間であるが、いざ面と向かうと気まずい空気が流れるかもしれない。少なくとも昨日のシンヤの行動を問いつめようとは誰も思っていなかった。

「シンヤ君って、一番上の階でヌルに襲われて倒れていた？あの子は君達が帰ったしばらく後に目を覚まして友達と一緒に帰っていったよ。でも見たところ、精神的ショックという意味では彼が一番ひどかったかもしれない。目が覚めてからもしばらくその場で震えていたくらいだったから。」

ダイチの言葉を聞いた一郎が昨日のことを思い出しながら言った。それを聞いて、シンヤはその罪に対する罰を十分受けたのだろうと黒客メンバーは思った。これでもうシンヤと改めて会う必要もないと感じた。

「じゃあ、早速始めましょうか。とりあえずみんながはじめにヌルに出会ったという5階へ移動しましょう。そこから玉子君と竹下さんが助けにくるまでの状況を、思い出せる限りで説明していってください。」

「はーい。」

一同はそこから5階へ移動して、実況見分を行うことになった。まずシンヤとグランドスラムに囲まれていた状況から、シンヤがヌルに襲われたこと、その後結界を張って時間を稼いだことを説明し、その後メンバーは3グループに分かれた。グランドスラムと共にシ

ンヤを助けに6階まで行ったダイチ。5階に残って暗号式を完成させて助けを待っていたガチャギリ、ナメッチ、デンパ、アキラ。そしてヤサコと共に4階から下の階に他のグループの子ども達を助けに行ったフミエ、ハラケン、タケル。それぞれが昨日の今日でしっかりと脳裏に焼き付いている記憶を頼りに細部まで再現し、直樹達警察はそれを元に実況見分調書を作成していった。約1時間ですべての実況見分が終了した。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part4

「お疲れさまでした。これでようやく昨夜の事件の全容が見えてました。協力してくれてどうもありがとう。」

一同は再び1階に集められ、一郎からの感謝の言葉を受けた。フミエは「お安い御用で」とそれに返す。

「僕からもお礼を言います。今日はみんなありがとう。でもまだちょっとだけ聞きたいことがあるのでお付き合いください。このビルで出現したというメタバグの鉱脈についてです。一昨日ここにいる橋本さんや原川君から、このビルにメタバグの鉱脈があるという話を聞きました。そこですぐに僕はここに向かったのですが、その時メタバグはありませんでした。はい、ここで質問です。正直に答えてね。ここにメタバグの鉱脈はあったの？」

直樹の質問に、ダイチ達はついに来てしまったかと思った。ずっと直樹には口をつぐんでいたことをここで白状しなければならないのかとうなだれた。

「そう言えば、一昨日そんな報告がありましたね。あの時はサッチーがメンテナンス中だったので行けませんでしたし、昨日は古い空間の大量発生でそれどころではなかったですからね。」

一郎が直樹の言葉に反応する。

「はい。昨日ここに乗り込んだ時には確かにメタバグが落ちていました。サッチーのフォーマット前にそれは確認しています。でもそれは例の空間制御プログラムによって出現したものだと僕は考えています。でも僕が気になるのはそれより前、メガマスが制御プログラムをハッキングされる以前に、既にメタバグの鉱脈がここに存在していたという話があることです。」

「え！？それは本当ですか？」

一郎はその話を初めて聞いた。一郎が管理室に戻って以来違法ツールが横行していたが、そのツールの原料となるメタバグはずっと空

間制御プログラムによって出現したものだと思っていた。
「そうなんですよ。実は僕、このダイチ君達にメタバグをツールに変えてほしいと頼まれたことがあるんです。それは制御プログラムがハッキングされる前の話です。本来ならばその時メタバグの存在をメガマスに知らせなければならなかったのですが、このダイチ君達への同情も捨てきれなくて、黙って僕は彼らの言う通りメタバグをツールに変えてあげました。そのことはここで改めてお詫びします。勝手なことをして申し訳ありませんでした。」
直樹はそのことは素直に報告し一郎に謝罪した。
「そうだったんですか。そのメタバグの鉱脈については詳しい調査が必要ですね。」
一郎は考え込む。制御プログラム以外の要因でなぜメタバグが現れたのか。それがなぜこの廃ビルなのか。そして昨日の事件はそれとは無関係なのか。
「ええ。そのことはずっと気になっていて、ダイチ君に何度も連絡を取ろうとしたのですが、まったくつかまらず。多分その鉱脈の場所は僕にも知られたくなかったのでしょう。でも、今日は正直に申告してもらうよ。これは重要なことなんだ。あと、違法ツールを売りさばいてた通販電脳駄菓子屋と君達との関係も。」
直樹はしゃがみ込み、ダイチの目線に合わせて訊ねた。心持ち優しい目つきを作りながら。
「……わかりました。全部白状します。確かにこの廃ビルにはメタバグの鉱脈がありました。それを見つけたのは１０日ぐらい前のことです。フミエ達にすでに聞いたかもしれないですが、この鉱脈をかけて僕らはフミエ達と果たし合いをしました。それに必要なツールを直樹さんに頼んだわけです。」
ダイチはこれまでのことをすべて話すつもりだった。大勢の管理室職員や警察の視線が自分達に集まる中、ウソをついてごまかそうとも思わなかった。
「……なるほど。あの時切羽詰まったように頼んで来たのはそのた

めだったんだね。」
　直樹はその話をメモしながらダイチに言った。
「その戦いは一応オレらの勝ちということになって、オレたちは鉱脈の独占権を得ました。」
「まあ、あれは勝ちでもなんでもないけどね。」
ダイチの言葉をフミエはいちいち訂正した。
「確か、その時ゲーム中に地割れのようなものを感じたんだよね？そのために君たちはつかの間意識を失った。それが原因で橋本さん達は負けてしまった。」
確認するように直樹が言う。その話は一昨日警察署で聞いていた。
「地割れですか？それを感じたのは君だけ？」
一郎が気になってフミエに訊ねる。
「いえ。私と同じチームのヤサコとハラケンもです。その時私たちは3人とも2階の東側フロアーにいたんですけど、西側にいたダイチ達には何もなかったので、その現象はその場所だけで発生したんだと思います。」
「優子も意識を失ったのか。なんでそんな大事なこと今まで黙っていたんだ。」
一郎はここにはいないヤサコを訝しんだ。電脳空間でそのような事故があってずっと黙っていたなんて、それは説教ものだと思った。
「いや、おじさん。ヤサコもフミエもハラケンも悪くはないです。悪いのはオレたちです。その事故が大人達に知られると、メタバグの鉱脈も抹消されると思いました。だから、そのことを誰かに告げ口するようなことがあれば、お前らのメガネの安全も保証できないと脅したんです。」
さすがのダイチもうつむき加減になっていた。一郎はそれを聞いて深いため息をつく。
「その後は？僕の推理では君たちは満天堂と結びついていたと思うんだけど。」
直樹が続いて訊ねる。

「おっしゃる通りです。満天堂の経営者は、昨日6階でヌルに襲われて倒れていたシンヤの兄貴です。オレたちとシンヤは手を組んで大黒市に電脳戦争が起こるように仕向け、メタバグを原料にした違法ツールでとにかく儲けようとしていました。」

「なるほど。そういうことか。」

ダイチの言葉に玉子が納得した。他の管理室職員も、なぜ街であそこまで電脳戦争が頻発していたのかを理解する。

「結局最後、シンヤはオレたちを裏切って儲け分を独り占めしようとしました。そこでシンヤが考えたのが昨日の電脳戦争です。大勢の電脳クラブをここに集め、オレたちと勝負をさせる。お互いが疲弊したところで、シンヤの勢力が両方にとどめをさすという算段だったみたいです。」

「なんとまあ。そんな腹黒い子どももいるんですなあ。」

思わず香川は口にしてしまったが、そこにいた大人達誰もがそう感じていた。

「わかった。ありがとう。おかげでこれまでの出来事の流れが大体掴めたよ。ちなみに聞いてもいいかな?もし裏切られていなかったとして、君たちの取り分はいくらぐらいだったの?」

「30万前後になるかと。」

直樹の質問に言いにくそうにダイチは答える。周りの大人達は「30万!?」とざわめいた。この前まで小学生だった子どもがものの10日で30万円も稼いでしまうとは誰も想像していなかった。

「竹下君。これはきちんとこの子達に指導を加えた方がいいと思うよ。これだけ電脳に長けているんなら、もちろん自分たちがやっていることは悪い事だって自覚があったんだろ?」

一連の話を聞いていた直樹の先輩刑事である矢島がかがみこんでダイチ達に訊ねた。

「……もちろん、悪いと思っていました。メタバグを悪徳商売に使うなって言った直樹さんに対しても罪悪感がなかったわけでもありません。」

「そうか。じゃあ気の毒だがこの後も警察に出頭してもらって、じっくり指導を受けてもらうことになるな。竹下君は優しいからな。よし、オレが怖いベテラン刑事に頼んでおくよ。」
矢島の言葉にダイチ達は縮み上がった。とりわけナメッチのビビリ方は半端ではなかったが、対してガチャギリは先ほどからずっと下を向いていて、それに対してもノーリアクションだった。
「これは、さすがに親御さんに報告しないわけにもいかないね。まあ、社会勉強の1つだと思って、今回は諦めてね。」
直樹はあくまで優しい口調で言ったが、この事が親にバレるとメガネ取り上げは必至で、ダイチに至ってはあの親父に何をされるかわからないと思ってかなり凹んだ。
「でもさ、そんな大金稼いでどうするつもりだったのよ?これでもアンタ達のことは少しぐらい理解してるつもりだけどさ、前のアンタ達なら犯罪に近い行為なんて手を出さなかったじゃない。果たし合いの時からおかしいとは思ってたけど、一体どうしたの?」
フミエは凹むダイチ達を見て少しいい気味だと思ったが、これには何か理由があるのだろうと思った。ずっと気になっていたその疑問をここでぶつけてみた。
「それは、まあ、色々とな。」
どうも言いにくそうにダイチが答える。
「アンタに聞いてないわ。ガチャギリに聞いてるのよ。」
「なにっ?」
フミエの言葉にダイチは意表をつかれた。ここで初めて下を向いていたガチャギリの顔が上がった。
「果たし合い以来、黒客はほとんどガチャギリの意志で動いていたことぐらいわかってるわ。あのシンヤを黒客に連れて来たのもガチャギリでしょ?リーダーであるアンタが、ずっとガチャギリの言う事を聞いていたってことは、ガチャギリにお金が要る理由があったってことよね。普段からお金儲けにはめざといヤツだけど、だからってそんな大金を必死で守る理由なんて。」

フミエの言葉にダイチはさすが鋭いと思った。それでもガチャギリはかたくなに閉口している。
「何か理由があるんなら言ってみてよ。まだ情状酌量の余地はあるんだから。」
直樹もガチャギリにその理由を明かすよう促した。それをガチャギリは「ふん」と鼻であしらう。
「おいガチャ。もうそんな意地張らなくてもいいんじゃないか？それに直樹さんの言う通り、その理由を明かせばオレたちが指導を受けずに済むかもしれねえんだぞ。」
ダイチもガチャギリに言い聞かせた。黒客メンバーも一緒に責任を負うということが耐えきれなかったのか、ガチャギリの心もそれで動く。
「わかったよ。なら、お前が代わりに説明してくれ。」
渋々というようにガチャギリは帽子のひさしを下げながら了承した。
「いいのか？じゃあオレが代わりに説明します。実は、コイツの家は今ちょっと経済的に苦しい状態なんです。」
「えっ？アンタん家って、別に普通の家庭よね？」
ダイチの言葉にフミエが不思議がりながらガチャギリを見る。
「ああ。少し前まではな。実は3ヶ月ほど前に、コイツの父親が会社の出張って言って出て行って以来、音信不通らしいんだ。俗にいう蒸発ってやつだ。」
「蒸発！？」
驚いたのは一郎だった。同じ世代の子どもを持つ親としては信じられないことだったのだ。
「しかもその父親がギャンブルでこさえた借金だけが残されていたそうだ。」
今度は誰も声が出なかった。ダイチはかまわず話を続ける。
「それで今コイツの母親は働いてるんだけどな、なかなかそれだけで借金を返済して食って行けるほどの余裕もない。それにコイツには歳の離れた兄貴がいるんだ。今年高校3年になる。そう、受験の

年だ。兄貴もその事件が起こるまでは大学受験を目指してたんだが、その父親のおかげで国公立ですら目指せなくなった。高校で2年間所属していた軽音楽部もやめて、今はアルバイトで家計の足しを稼いでいる。もちろん、高校を出たら就職するつもりらしい。」

「な、なるほど。昨日ガチャギリさんが僕に『金がないヤツは夢を諦めなきゃいけないんだ』って言ったのは、このことを言ってたんですね。」

ダイチの話に反応したのはアキラだった。アキラは昨日、フミエ達と密通していることがガチャギリにバレた時にそのように怒鳴られた。

「アンタ、同じ黒客にいてその話知らなかったの?」

フミエがアキラに訊ねる。

「そう言えば、アキラがいない時にこの話を聞いたんだっけかな。オレとナメッチとデンパはそれを知っていたから、果たし合いのときも強引なコイツを止めなかったんだ。アキラ、もしお前もこの話を知っていたなら、オレたちを裏切るようなことはしなかったか?」

「……かもしれませんね。」

ダイチの質問にアキラは束の間考えて答える。デンパでさえもこの黒客の暴走の片棒担いでいた理由がフミエやハラケンにはわかった気がした。

「なんでそれを私たちに言わないの?言ってくれれば。果たし合いなんかしなくてもこの鉱脈ぐらい譲ったのに。あんな私たちに憎まれるようなことしなくても良かったのに。」

「バカ言えよ。オレは他人に同情されるのがだいっきらいなんだよ。なんで敵方のお前らの同情までひかなきゃなんねえんだよ。今だって、みんなオレのこと哀れんでるんだろ?オレをかわいそうな子と思ってるんだろ?」

口を開いたガチャギリは語気を荒らげて周りの大人達にも怒りをぶつけた。ガチャギリがかたくなに口を閉ざしていた理由はこれだった。これが、この空気が嫌だったのだ。

「しかし、今の話は本当なのかい？」
話を聞いて、どうすればいいかわからなくなった様子で直樹は訊ねた。
「今のダイチ君の話は本当です。」
不意に廃ビルの入り口の方から声がして、一同がその方を向いた。
「マ、マイコ先生！？」
子ども達が驚いて声を上げる。やってきたのは半月前まで担任だったマイコ先生だった。
「なんでここに？」
フミエが茫然として訊ねる。
「あなた達が昨日事件に巻き込まれたって聞いたから様子を見に来たのよ。もう、小学校を卒業したっていうのにいつまでも心配させないで。」
少しだけあきれたようにマイコ先生が言う。子ども達はその言葉にシュンとなった。確かにいつまで先生に迷惑かけているんだろうと反省した。
「この子達の担任の先生だった方ですか？なら先ほどの話を詳しく聞きかせてもらってもいいですかね？」
直樹がマイコ先生に訊ねる。
「はい。この深川君のお母さんからは今年の1月頃から相談を受けていました。先ほどダイチ君が言ったように、お父さんが借金を残していなくなったとを。ここで言うのも適当ではないかもしれませんが、給食費も払えないほど経済的に苦しい状態だと伺いました。」
「給食費も……」
一郎が眉間にしわを寄せる。
「だからコイツはどんな手段を使っても金が欲しかったんだ。稼いだ金は兄貴のバイト代にさりげなく紛れ込ませるつもりだった。コイツは、兄貴に大学受験を目指してほしかった。夢を追ってほしかったんだ。それにその実力もあった。でもこんな形で夢を諦めなければならない、そんな兄貴を見るのはつらかったそうだ。」

「もういいやめろダイチ。こんなカッコ悪いこと美談にできるか。」
ガチャギリはダイチを制止する。その話を聞いたフミエはもう泣きそうだった。
「直樹さん。コイツらの稼いだお金はどうなるの？」
「どうなるって、そのお金はまだ受け取ってないんだよね？ということはシンヤ君のお兄さんが握っている。とにかくお兄さんから事情を聞いて、できれば逮捕する。でも違法行為で稼いだお金は普通は戻って来ない。ガチャギリ君には悪いけど、そのお金は。」
申し訳なさそうに直樹は言った。職務上はそう言わなければならない。でも子ども達が悪いわけではないということもわかっていた。
一体この場面で何が正義なのか、直樹にはわからなくなっていた。
「そういうことか。よし。じゃあさっきの指導の話は撤回する。とりあえず警察署で詳しい話を聞いて、それから判断することにしよう。」
矢島も事情を考慮してダイチ達への指導を取り消した。
「じゃあ矢島さん。子ども達をお願いできますか？僕たちは集めたデータを集積しないといけないので。」
直樹が矢島に頼んだ。
「わかった。よし、じゃあ君たちは僕についてくるんだ。先生もご同行願えますか？」
「わかりました。じゃあ行きましょう。」
「へーイ。」
そうして黒客メンバーとマイコ先生は警察でさらに詳しい話をすることになり、大黒市警へ向かった。
「……あんなヘビーな事情があったなんてね。」
「ほんと。でも、いくら敵同士とはいえ言ってほしかったな。鉱脈を見つけたときは僕たちはまだ同盟を結んでいたしね。ひょっとしたら、僕があの鉱脈はフォーマットした方がいいっていったのがガチャギリに火をつけてしまったのかな？」
ハラケンとフミエはここで鉱脈を見つけた日のことを思い出してい

た。あの時のガチャギリのオーバーアクションから、もっと早くに事情を察しておくべきだったのかもしれないと思った。
「さあ、君たちはこれでオッケーだ。帰宅してもらってもかまわないよ。」
一郎が残ったフミエ、ハラケン、タケルに言った。
「おじさん。ヤサコはいつ頃退院できそうですか？」
「そうだな。おそらく今日1日はまだ検査のために入院すると思う。多分明日には退院できるかなと思うけど、その時は君たちに連絡するよ。優子といつも仲良くしてくれてありがとう。これからもよろしくね。」
一郎がフミエに返す。本当にヤサコがいい友達を持って良かったと思った。
「原川さんはサッチーのハッキングの件で、これから本社の管理室で諮問を受けてもらいます。」
次に香川が玉子に言った。面倒だなと思いながら玉子はうなずく。
「では僕たちこの辺で失礼します。」
「ああ。お疲れさまでした。」
直樹と久美子も廃ビルを後にしようとした。一郎達管理室職員はもう少しここで調査を行うという。そうして直樹達は西側出口から廃ビルを出た。
「すみませーん。メガマスの方ですか？今回の事故で大黒市でのメガネの使用制限はどうなさるつもりですかね？空間制御プログラムもメガマス社自身の開発だという噂がありますが、それは事実ですか？」
廃ビルの入り口付近で直樹達は茶髪で長い髪のジャーナリストとおぼしき人物に声をかけられた。ビルの周りの報道陣も少なくなっている中、1人だけしつこくつきまとってくる。
「僕たちは警察です。メガマス社の方はまだビルの中に残っていますよ。と言っても、メガマスの方がそのような質問に答えるとは思えないですけどね。失礼。」

直樹はそのジャーナリストを振り払って車に乗り込んだ。
「ねえ、今の記者の人、なんで空間制御プログラムがメガマスの開発だってこと知っているのかしら?それってメガマスでもトップシークレットで、多分警察関係者でも私たちぐらいしか知らない情報なんじゃないかしら?」
「……そう言われればそうですね。」
久美子の言葉に直樹は思い直して今の記者に話を聞こうと思ったが、その記者はいつのまにかいなくなっていた。仕方ないので大黒市警に向けて直樹は車を発進させることにした。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part5

大黒市警に戻った直樹と久美子は休む間もなく事件の調書をまとめなければならなかった。2人とも疲れた表情で対策係の部屋に入って行く。

「あっ、係長。先生がお見えになっていますよ。」

対策係の捜査員の1人が帰って来た直樹に伝える。その来客は部屋の端の方にあるソファーに座って直樹が帰ってくるのを待っていた。

「ああ、小野先生。どうも。」

直樹と久美子は小野の元に歩み寄った。久美子は初対面だが、小野が対策係の特別顧問を務めていることは聞いていた。

「お疲れさまです。お忙しくしている中、突然訪問してすみませんね。」

小野は直樹の表情を見て相当疲れているなと感じた。

「いえ、とんでもない。昨日の事件は対策係が直面したこれまでの事件の中で最も厄介なものでしたから、特別顧問である先生のお力添えをいただければ幸いです。しかし先生もかなり昨日の事件のおかげでお忙しいんじゃないですか?昨日の夕方もニュースに出演されていましたし。」

「そーですね。実は今日の朝のニュースにも1本呼ばれましたね。まあまあ、当たり障りのないことをしゃべってきましたけど。それでも昨日は徹夜で聞き込みにまわったていうあなた方と比べれば、どうってことありませんよ。」

小野は電脳科学の権威とも呼ばれており、メガネに関する事件が起きればメディアからは引っ張りだこの存在である。しかし、小野はメディアに出ても当たり障りのないことしか発言しない。それは他の専門家にも共通しているが、電脳やメガネに関する研究をしている者にとって、メガマスは絶対不可侵の存在であるからだ。メガマスは電脳やメガネに関する一切の権利を握っている。そんなメガマ

スにとって一介の専門家などは吹けば飛ぶような存在である。自分の研究を守りたいなら、電脳の専門家は滅多なことを口にしないのが暗黙のルールだった。たとえメディアがメガマスを叩き始めた現在においてもだ。

「とりあえずここではなんなので、係長室に。」

直樹と小野と久美子は係長室に入った。直樹は小野を係長室のソファーに促してお茶を入れる準備をする。

「詳しく聞かせていただけますかね？昨夜の事件について。」

小野は直樹と久美子に訊ねた。事件の概要はニュースで流れていた範囲でしか知らなかった。

「かまいませんよ。事件は昨日の午後８時４０分頃、中津交差点付近の旧大黒ビジネスホテルで起こりました。その時、約２０名ほどの子どもがビル内で電脳戦争をしていました。そのまっただ中で通路が開いたんです。通路は２階から上の各階に２つずつ現れたようで、途中で新たに開いた分も含めれば計１１もの通路がその時開きました。その中からは無数のヌルが。僕が管理室の人とビルに乗り込んだときはそこはまるで地獄のようでした。うごめく無数の黒い影の中で子ども達は泣き叫び、何人かはすでに意識を連れて行かれ黒いかたまりとなっていました。」

直樹はその時の光景を思い出して改めてぞっとする。玉子はその時、改造サッチーとともにその地獄の中を突き進んでいった。直樹は子ども達を保護するのに必死だった。

「しかし、その中で意識を失ったのが４人というのは少なかったですね。下手すればその全員が連れて行かれてもおかしくはなかったんじゃないですか？」

「ええ。僕たちの到着があと少し遅れていれば、もっと多くの子ども達が連れて行かれたかもしれません。しかし子ども達の何人かは暗号を持っていたらしくて、勇敢にもそれを駆使してヌル達と戦い、他の子ども達を助けていました。彼らの活躍がなければ、もっと大惨事になっていたと思います。」

直樹はフミエ達やダイチ達に心から感謝していた。あの状況の中で自分たちの危険を顧みず他の子ども達を助けに行くなんてなかなかできないことである。結果的にシンヤは救えず、ヤサコは倒れてしまったわけだが、その姿勢を見せてくれた子ども達を直樹は頼もしく思った。

「ほう、暗号を。最近の子ども達は本当にメガネに長けているんですね。しかしそれでも4人の子どもが意識を連れ去られたわけじゃないですか。どうやって彼らの電脳体は“あっち”の世界から戻って来たんですか?」

不思議そうに小野は訊ねた。この事件の不可解な点はそこに集約される。

「それなんですが、今のところは皆目わかっていません。実は、意識を連れ去られた子ども達なんですが、1人は体調的な問題で入院し、あとの3人は精神的ショックでしばらく事件を思い出すのもツライらしいと親御さんから連絡をいただきまして。なので、その時“あっち”の世界で何があったのかということは、しばらく時間をおかないとわからないと思います。」

「なるほど……わかりました。ありがとうございます。」

直樹の話を聞いて小野はソファーに寄りかかって何かを考え始めた。

「どうぞ。」

そこに久美子が入れたてのお茶を出した。「どうも」と小野は久美子に一礼する。

「ところで、先生の用件はそれだけですか?他に何か用事があってわざわざ忙しい中来られたんじゃ?」

訊ねながら小野の向かいに直樹は久美子と並んで腰を下ろした。事件の概要ならいつでも電話すれば直樹から聞き出せる、わざわざ訪ねて来たということは、何かもっと他の大事な用件があるのだと直樹は思った。

「さすがですね竹下君。その通りです。実は気になる話を耳にしたものですから、君に直接伝えようと思いましてですね。」

「気になる話？」
直樹は前に身を乗り出した。
「はい。２つあります。まず１つ目。メガマス社に関する情報なんですが、メガマス幹部の１人が今回の事件を解決するために、この電脳犯罪対策係を利用しようと画策しているという話です。」
「対策係を利用して事件を解決する？どういうことなんでしょうか？」
小野が直樹達に話したのは、今朝方メガマス社長の桝田が幹部の神崎から聞かされた計画だった。ＣＧＷに強制捜査のメスを入れるために、対策係がハッキング痕を証拠としてねつ造する。強制捜査が入って時点でＣＧＷは制御プログラムを抹消しなければならない。しかし直樹達は証拠ねつ造を行ったとして警察上層部から裁かれるというのが、その計画の筋書きだった。直樹達はその話をあぜんとしながら聞いていた。
「まさか、メガマスの幹部がそんな計画を立てているなんて。その幹部は僕たちを捨て駒として利用するつもりなんですか？」
「はい。ちょっと信じられない話ですよね。その幹部は半ば脅迫めいた理由を使って、この対策係をその計画に巻き込むつもりだったそうです。」
小野も直樹達に同情しながら打ち明ける。直樹の両手はその時震えるほど強く握りしめられていた。
「論外ね。まさかメガマスがそんなことを考えているなんて。私たちが危険を顧みずに行っている交通事故の再調査だって、メガマスが旧幹部達を裁くための手助けをしているようなものなのに。現在唯一メガマスに従順な部署として、彼らは私たちを骨の髄まで利用する気なのね。」
久美子もその話には怒りを通り越して呆れていた。
「しかし、先生がなんでそのような話を？誰から聞いたんですか？」
直樹が顔を上げて小野に訊ねる。
「ええ。実は今の話はすべて、メガマス社長の桝田章太郎君から聞

きました。先ほど彼から連絡があったんですよ。」
「社長からですか!?先生、メガマスの社長とも面識があったんですか!?」
直樹は驚きさらに訊ねる。その話には久美子も意表をつかれた。
「まあ一応。１５年ほど前になりますか、彼は次代のメガマス社を背負って立つ人間として、電脳に関する知識を身につけなければなりませんでした。そこで大学の私の講義に聴講生としてよく出席していたんです。その時に彼とは知り合いに。彼は一応海外の大学を卒業していますが、電脳に関する技術が一番進んでいたのはこの日本でしたからね。その中でも私の講義を聴きに来てくれた事はうれしいものでした。まだメガネが開発される前の時代の話ですが。」
少し懐かしいように小野が話す。当時はまだメガマスは大手電気機器メーカーであり、コンピューター関係もその中の一分野にしか過ぎなかった。
「そ、そうだったんですか。しかし、なぜ社長がその計画を先生に打ち明け、そして先生は僕たちに話してくれたんですか?」
「それがですね、その計画を立てた幹部は少し過激な方のようで、社長とはあまり意見が合わないそうなんです。その幹部の方が計画を社長に打ち明けたのは今朝方ですが、メガマス社では緊急の幹部会でその計画は一切認めないという結論をだしたそうです。つまりメガマス社としてはそのような不正な行為を行うつもりはない。しかし、その幹部の方が勝手に暴走しあなた方を脅迫して、ウラで計画を進めるかもしれないと社長は懸念されたそうです。そこで社長は対策係の特別顧問であり顔見知りである僕を介して、あなた方にこの話を伝えようと考えられたそうです。一切、その神崎という幹部の要求をのまないようにとのことでした。」
「なるほど。わざわざありがとうございます。おかげで事情は把握できました。もちろん私たちもその幹部に脅されて折れるつもりはありません。警察がナメられたらおしまいですから。その時は先生に連絡致しますので、社長にその旨をお伝えください。」

久美子が冷静に小野に返した。小野もそれに対して「了解です」とうなずく。

「いや、安心しました。とりあえずその計画はメガマス社の意志ではないということですね。先生が社長とお知り合いというのも心強い。これからもどうか対策係をよろしくお願いします。」

緊張がほどけたという感じで、直樹は小野に頭を下げた。

「で、お話は2つあるということでしたが、もう1つの方は?」

久美子がまた顔を引き締めて小野に訊ねる。直樹もそれを聞いてもう一度姿勢を整える。

「はい。これを見てください。」

小野はかけていたメガネを操作して、1つのウインドウを直樹達に示した。

「……これは?」

ウインドウに表示されていたのは一通のメールだった。直樹と久美子は顔を寄せ合ってそれを確認し、もう1度小野の顔を見た。

「それは今朝、社長のパソコンに送られて来たメールだそうです。実に興味深い内容でしょう?まあ、俗に言うタレコミというやつですか。」

出されたお茶をすすって、もう一度小野は口を開いた。

「社長はそれをどう対処しようか悩んだらしいんですが、さきほどの話を伝えるついでに、対策係の方に伝えてほしいと言われました。その間メガマス社の誰にもこのメールを見せていないそうです。これを知っているのは、社長と私たちだけ。」

桝田はそのメールをメガマス社の誰かに見せるよりも、直接警察に伝えて方が良いと判断したようだ。

「なるほど。確かメガマスにはCGWの内通者が……信憑性はありませんけど、でもどこか引っかかる内容ですね。」

直樹は考え込みながら久美子の方を見た。

「ええ。そもそも社長のパソコンに直接送られたという時点で、これがただのいたずらでないことはわかるわね。行ってみる?この場

所へ。」
今度は久美子が直樹の方を見て訊ねる。直樹はそれにうなずいた。
「行きましょう。先生、貴重な情報ありがとうございました。僕たちは早速この場所に向かいたいと思います。」
言いながら直樹と久美子は立ち上がった。先ほどまでのけだるさもどこかに吹き飛んだようだった。
「そうですか。くれぐれも気をつけて。私も、仕事に戻りたいと思います。」
小野も立ち上がって3人は係長室を出た。直樹は他の対策係の捜査員にその場を任せて、久美子と車に乗り込み、メールの中で書かれていたある場所を目指して出発した。

#１３　ピリオドとダ・カーポ　ｐａｒｔ６

大きな事件を乗り越えた大黒市の１日は驚くほど静かに終わって行こうとしていた。時刻は午後１０時前。空間管理室勤務の一郎はほぼ2日ぶりに帰宅した。昨日は事件の対応のため管理室に泊まり込み、この日も朝から現場検証があったためその2日は働き詰めだった。その一郎の体調を考慮して、本社管理室の部長が一郎の早退を認めたのだ。今も管理室では事故の再発防止のための打ち合わせを行っている。

朝の現場検証で一郎達が掴んだのは、あの廃ビルには少し前から空間制御プログラムが仕込まれていた形跡があったことだ。廃ビルのサーバーを徹底的に調べた結果、猫目が中津交差点で目撃されるようになった１０日ほど前から、あの廃ビル近辺では通路を解放する準備がされていたことが判明したのだ。子ども達の証言も照らし合わせると、昨日あの廃ビルで電脳戦争が行われたのはシンヤの思いつきによるところが大きかったので、管理室は昨日の事故を偶然が重なって起こったものだと結論づけた。あそこで電脳戦争が行われていなかったら、猫目の二次攻撃はもっと他の形になっていた。さらにあれだけの大規模な作戦は前々からの準備が必要であった。以上のことから管理室は、事故の再発防止は何とかなるだろうと考えた。要は大黒市内での猫目の動きを察知すればいいということで、あの廃ビルのように元々空間の不安定な空間には職員が定期的に調査に向かうことが決定されていた。

ともあれ一郎は明日からのことも考えて、疲れきった体を癒すためにこの日は早く寝ようと思っていた。ヤサコはまだ微熱が引いていないため、もう1日だけ入院することになっている。やはり家族が1人欠けるだけでも寂しいものだなと思いつつ、一郎は風呂上がりに一杯飲もうと冷蔵庫に手を伸ばそうとした。

「これ一郎。晩酌の前に、ちとワシの部屋に来てくれんかの。話し

たいことがあるんじゃ。」
その時メガばあが後ろから一郎に声をかけた。メガばあが一郎を呼び出すなんて珍しいなと、静江も少し驚いてメガばあの方を見た。
「あ、ああ。いいけど。」
一郎も何の話だろうと思いつつ、冷蔵庫を閉めてメガばあの後について行った。電気の灯された電脳工房には2人分の座布団が用意されており、一郎は疲れた顔でその上にあぐらをかいた。
「で、話って何だよ?」
一郎はメガばあの顔を見た。そう言えば一昨日もおふくろであるメガばあに呼び出された事を思い出した。あの時はメガばあに迫られて、一郎は制御プログラムがハッキングされたことを白状した。あの時のメガばあは、まさに「おふくろ」だったなと一郎は思い返した。
「ああ。今朝優子の見舞いに行って来たんじゃが、その時の話をしようと思うてな。」
「ああ、見舞いに行ってくれてありがとう。僕は管理室の仕事で席をはずせなかったから助かったよ。静江は京子のおもりもしないといけないからな。」
一郎はメガばあに感謝した。昨日あんな目にあったのだから、優子にとっては自分や妻の静江が見舞いに行くよりメガばあの方がずっと心強かっただろうなと思った。
「別にお前の代わりに行ったわけじゃない。そもそもお前がしっかりしておれば、優子があんな目に合わずに済んだのではないかえ?そのことはどう思っとるんじゃ?」
少し厳しい口調でメガばあが言った。ヤサコ達に宗助を止めるように頼んだのはメガばあだが、一郎も昨日は管理室に詰めて宗助の攻撃に細心の注意を払っていたはずだ。そういう意味ではヤサコがあんな目にあったのはこの2人の責任でもあり、メガばあは今朝真っ先にヤサコにそのことを詫びた。
「……ああ。確かに僕の注意不足だった。昨日優子がイマーゴの副

作用に苦しんでいる時も、僕は何もアイツにしてやれなかった。僕はいつもアイツに父親らしいことをしてやれていない。それは、優子にきちんと謝らないといけない。」

思い詰めるように、一郎はうつむきながら言った。

「かわいい娘1人守れんヤツが、市民の安全を守れるわけがなかろう。ま、わかっておるんならこれ以上は言わん。次は優子をしっかり守ってやるんじゃぞ。」

メガばあの言葉に一郎はうつむいてうなずくだけだった。その胸の内にはかたい決意が秘められた。

「ならば次は仕事の話じゃ。今日の現場検証では、昨日“あっち”に入り込んだ子どもは来なかったそうじゃの。現場検証のことは昼間にフミちゃんと研一とタケルがここに来てワシに聞かせてくれた。管理室としては、昨日“あっち”に行ってしまった子どもがどうやって戻って来たのか、それが知りたいはずじゃな?」

仕事の話となって一郎は顔を上げた。

「ああ。優子はともかく、他の子ども達は“あっち”の世界に入るのは初めてだったはずだ。よほど浅い空間にいたなら話は別だが、普通に考えると1人で帰ってくるのはムリだろう。」

「ワシもそう思う。で、そのことじゃが見舞いに行った時優子が断片的に話をしてくれた。言っておくがワシが聞き出そうとしたわけではないぞ。優子がその意志で話してくれた。あまり思い出したくはないであろうその時の記憶を。」

「つまり、おふくろに相談したいようなことを、優子は“あっち”の世界で体験した?」

一郎はメガばあに訊ね返す。一郎もヤサコからその時のことを聞きたいと思っていたが、他の子ども達同様、精神的なことを考えてためらっていた。そんなヤサコが自分の意志でそのことを話すとは、やはり何かがあったのだろうなと思った。

「その通りじゃ。いいか、落ち着いて聞くんじゃぞ。優子は“あっち”の世界で、ミチコに会ったそうなのじゃ。」

メガばあは少し声を細めた。
「……そうか、やはりミチコに。昨日優子が救急車で運ばれる前に、確かにミチコがどうとか言っていた。優子は“あっち”の世界でミチコに会ったっていうのか。」
一郎は神妙な顔をして考え込み始める。
「確認するまでもないことじゃと思うが、ミチコは消えたはずじゃな？あの夏の事件の時に。」
「……ああ。それは間違いない。それに僕が携わった空間制御プログラムの中で生まれたという可能性もない。ミチコのような電脳体が再び生まれないよう、僕たちは細心の注意を払って開発した。それは断言できる。」
今の自分の言葉に説得力がないだろうと思った一郎は、とにかくその可能性だけはないと念を押した。
「うむ。さすがにお前やメガマスも、知らないうちにミチコを生んでいたといういうほど抜けてはないと思っとるから、それはワシも考えとらん。実は優子の話ではな、そのミチコは新しい空間で新しい生を与えられたと言っておったそうじゃ。」
「新しい空間？新しい生？」
一郎は何のことを言っているのかさっぱりわからなかった。それはメガばあも同じである。しかし、ヤサコがミチコと会ったのは幻ではないというリアリティが、その言葉にはあると思った。
「ワシは優子にそのことで気に病むなと言っておいたが、しかしどうもその話を聞き流すこともできん。そこでワシの考えた1つの可能性として、その新しい空間とやらを開発した組織があるんじゃないかと思うんじゃが。」
「……新しい空間を開発した組織？でも何のために？仮にそういう組織があったとして、そんな空間を開発するメリットなどないはず。メガマスのように電脳医療システムの完成を目指しているって言うなら話はべつだけど。おふくろが言いたいのは、コイルドメインと同じような空間をまたどこか他の組織が作ったんじゃないかってこ

とだろ?そしてその組織がミチコを再び生み出した。」
言ってみてあり得ないことだと一郎は思った。旧コイルスや宏文の資料を豊富に抱えるメガマスでさえ、空間制御プログラムの完成には苦心した。メガマスよりも技術力で劣るその他の組織に、新しい空間を作り出すというのは不可能だと思えた。
「今回の事件で宗助の背後についている企業などはどうなんじゃ?そういう空間を生み出せば、今回の事件のように色々と悪用できると思うんじゃが。」
「ああ。それは新東京に本社を構えるサイバーゲートウェイという会社だけど、そんな新しい空間を作り出す技術なんて持ち合わせていないと思う。だからこそメガマスから制御プログラムをハッキングしたんだろう。大体メガマスを貶めることを第一に考えてそんな空間を開発する企業なんて存在しない思うよ。それだけの資金と時間があれば、もっと全うな開発を行うはずだし。」
「しかしその論法で行くと、その新しい空間とやらが開発されているとすれば、良い金儲けになるということじゃろう?お主が考えもつかんような使い道が、その空間にはあるかもしれん。」
「それはそうかもしれないけど。」
一郎はメガばあの言う事も一理あると思って再び考え込んだ。
「……新しい空間か。確かにそんな空間が存在する形跡もなかったわけじゃない。実は例の廃ビルだけど、子ども達の話では結構前から、制御プログラムがハッキングされる前からメタバグの鉱脈が存在していたらしい。僕はずっと、出回っているメタバグは制御プログラムによって出現したのだと思っていたからその情報には驚いた。それを考えると、そのメタバグの鉱脈は話に出た新空間の影響で出現したものかもしれない。」
「ああ。確かフミちゃんも昼間そんな話をしておった。その廃ビルで遊んでいた時に、優子とフミちゃんと研一が気を失ったという話もしておった。やはりあの廃ビルには他にも何かあるようじゃな。」
「よし、明日本社に報告しておくよ。今メガマスは猫目の三次攻撃

阻止に躍起になっているから、そのことが取り沙汰されるのはもう少し後になるとは思うけど。なんにせよ、まずは猫目だな。」

一郎はため息をつきながら畳の上に手をついた。様々な懸案事項を抱える今、宗助とのいたちごっこに早くケリをつけたかった。

「宗助か……ヤツにはもうこれ以上罪を重ねてほしくはないのう。ワシがヤツを育てたからというのもあるが、一番不憫なのはタケルじゃ。タケルは宗助に罪を償ってほしいと思っておるし、何より昨日はその宗助によって身の危険に晒されたのだからのう。タケルは強い子じゃて、人前でそんな弱いところを見せんが、内心は深く傷ついておるじゃろうな。」

メガばあがしみじみとつぶやき、一郎もその言葉でタケルのことを思った。残されたった1人の家族である兄の手によって自分はおろか友達も身の危険に晒された。その不条理をどう受け止めているのか。そして宗助もタケルがあのビルにいたことはわかっていたはずで、それでも攻撃を止めることはできなかったのか。一郎はもう1度自分がなすべきことを確認した。この家族を引き裂いたメガマス旧幹部を裁くこと。ずっと一郎はカンナを亡くしたハラケンに対する贖罪として訴訟のことを進めていたが、ここでそれは猫目兄弟のためでもあると再確認した。猫目兄弟の父から研究を奪いとって捨てたのは、他ならぬメガマスの旧幹部達である。彼らの犯した罪を、その判決が下った時に懺悔させる。そう一郎は胸に誓った。

「猫目宗助については、僕たちや警察が必ずなんとかする。タケル君のためにも。」

そう言って一郎は立ち上がる。もうメガばあも話すことはないようだったので、一郎はリビングに戻って今度こそ一杯やろうと思った。その時、一郎のかけていたメガネが着信音を鳴らした。一郎はこんな時間に誰だろうと思って縁側に面する廊下に出て指電話をとった。

「もしもし?」

「えーと、小此木さんですよね?夜分遅く申し訳ありません。大黒市警の竹下です。」

初めてかける番号に相手を確認しながら直樹は言った。
「ああ。竹下さん。どうかされましたか?」
一郎はこんな時間に電話をかけてくるということは、直樹達が何か重要な情報を掴んだのかなと淡い期待を抱いた。しかし次に直樹が発した言葉は、一郎の期待を大きく上回るものだった。
「それがすごいニュースがあるんです。いいですか?落ち着いて聞いてくださいね。」
もったいぶるように直樹はひと呼吸を置いて、そして一気に言った。
「猫目宗助とその共犯者の潜伏先を特定しました。」

#１３　ピリオドとダ・カーポ　ｐａｒｔ７

弁天市の大通りにあるビル街の一角、とあるホテルを正面に望む雑居ビルの一室に直樹と久美子はいた。時刻は午後１０時１５分。直樹は時計を見ながらある人の到着を待っていた。

「しかし、ホントに刑事ドラマのような展開ですね。」

直樹は今一度薄暗い部屋の小さな窓から正面のホテルを見据えながら言った。

「もしかして浮かれてるの？電脳犯罪対策係にいたらこんな場面に巡り合わないでしょうからね。と言っても、交通課の私にしたってそれは同じだけど。」

久美子もホテルの方を眺めながら言う。猫目宗助とその共犯者が潜伏しているであろうホテルを。

ことはこの日の午前中に、対策係特別顧問の小野隆が直樹達を訪ねて来たところまでさかのぼる。小野の持ち込んで来た情報の１つに、今朝メガマスに送られて来た謎のタレコミメールが含まれていた。そのメールには、宗助とその共犯者の潜伏先が詳細に記されていたのだ。ただのいたずらメールだと思えなかった直樹達は、早速その潜伏先として記載されている弁天市のホテルに向かう。しかしながら、ホテルのチェックインに指名手配半である宗助は偽名を使って入っており、その部屋までは特定できなかった。そこで直樹達はそのホテルの正面に構える雑居ビルに張り込み、宗助が出入りしていないかどうか一日中監視していたのだ。もちろん、そんなタレコミメールを完全に鵜呑みにはできないため一応ウラはとった。このホテルの近くにある大型家電量販店の駐車場に、宗助のものと思われる同車種の黒いスポーツカーが停めてあったのだ。宗助も警察がそこまでかぎつけているとは知らず、車の置き場所にはあまりこだわらなかったようだ。

そうしてあのタレコミメールの情報はあながち捨てたものじゃな

いと判断した直樹達は、対策係を総動員して２４時間体制でそのホテルを見張ることにした。そして先ほど、宗助とおぼしき人物がホテルに戻って来たのを確認したのだ。まず直樹は一郎や玉子にそのことを伝え、次に応援を要請して今に至るというわけである。

「あっ、矢島さんの車が到着しました。降りましょう。」

窓の外を注意深く見ていた直樹は、自身の先輩刑事である矢島の車が到着したのを確認した。すぐに久美子とともにビルを出て矢島と合流した。

「おう竹下君。どういうわけだ?オレだけ呼び出すなんて。他に応援は呼んでいないのか?」

車から降りるなり、矢島がいぶかしそうに訊ねた。直樹は矢島に、１人で来てくださいと頼んでいたのだ。

「すみません。これには深い事情があるんですが、簡単に説明しますね。僕らが今逮捕しようとしている猫目宗助を巡って、警察の中では複雑な利害関係が生じています。そんな中で僕たちは猫目をこの手で確保して、その取り調べを行う義務があるんです。他の部署の刑事さんがこの場にいると、その身柄をその部署に持って行かれる可能性があるので。」

「ふーん。よくわからないけど、猫目は警察の人達からモテモテだと。君たちは他の部署よりも真っ先に取り調べを行い、猫目の話を聞き出したい。他の部署が先に猫目の取り調べを行い、猫目に余計な入れ知恵をする前に。ということかな?」

矢島は眉間にしわを寄せて頭をかきながら言ったが、矢島の推測はほぼ直樹達の心中を言い当てていた。

「竹下君が矢島さんだけをここに呼んだのは、矢島さんを信用しているからです。言い換えればあなたみたいな熱血漢は、警察内での利害関係などのしがらみに無縁だろうと思ったからですが。」

「久美子さん。それ褒めてるんですか?その推測は間違ってはないですけどね。まあいいでしょう。つまり猫目を逮捕するにあたって、君たちはこういう犯人の潜伏先への突入には慣れていない。そこで

歴戦の刑事であるこの僕に協力を要請したと。」
矢島が2人に確認する。若干余計な表現があったものの、そこは素直に直樹と久美子はうなずいておいた。
「任せてください。得意中の得意です。じゃあ久美子さんはホテルの裏口を固めてください。他に対策係の人は来ているのかな?」
「はい。現在2人付近の巡回を行ってもらっています。」
「よし。じゃあその2人に連絡して正面を固めてもらって。そして僕と竹下君は、これから犯人の部屋に突入する。拳銃は携帯してるか?」
「はい。携帯するのは初めてですが。」
直樹は少し不安そうに腰に帯びていた拳銃に手をやった。警察官は拳銃を使用する可能性が少しでもある時には拳銃の携帯が義務づけられている。しかし直樹のように現場とは無縁な部署にいると、このような場面に巡り会うことも珍しいのだ。
「まあ、オレがついているんだ。安心しろ。どうせ猫目達も大した武器なんて持ってないだろ。実践デビューにはおあつらえ向きの相手だ。肩の力を抜け。」
矢島は直樹の肩をぽんぽんと叩いた。普段は直樹のことをいじめてくる先輩だが、この時ばかりはこれ以上ないほど頼もしく思えた。
そして巡回に出ていた対策係の捜査員2人が合流し、矢島はもう1度段取りを確認する。それを終えてそれぞれが配置につき、いよいよ直樹と矢島はホテルの中に入ることになった。自動ドアが開き、明るい照明が灯された絨毯のロビーに足を踏み出す。
「いらっしゃいませ。」
フロントで受付のホテルマンが頭を下げた。
「警察です。実はこのホテルに指名手配犯が潜伏しているようでして。」
直樹が警察手帳を見せながら言う。1度はやったみたいと思っていたシーンだったが、それを考える余裕もないほど直樹は緊張していた。

「ええ!?それは本当なんでしょうか?」
受付は驚いて腰を抜かし、おそるおそる訊ねた。
「はい。この男がここに宿泊していますよね?身長は１６５センチ前後、全身黒づくめで、キャップをかぶり、こんな夜なのにサングラスをしていたと思いますが。」
直樹は先ほどホテルに入っていった宗助の服装を記憶していた。それを聞いた受付もその人物にピンと来たようだ。
「え、ええ。確かに私も先ほどそのような方が戻って来られるのを見ていました。不自然な服装だったのでよく覚えています。」
「その男の部屋は?」
直樹がさらに訊ねて受付はパソコンからこの日の宿泊者名簿を確認した。
「あの方は、４２３号室で部屋を取られています。」
「ではその部屋のマスターキーをお借りしてよろしいでしょうか?」
「はい。こちらです。くれぐれも他のお客様に危害が及ばないようにお願いします。」
受付は不安そうに直樹に言いながら、カードキーを手渡した。その話を聞いて顔色もさえないままである。
「大丈夫です。相手はおそらく武器を持ち込んでいないので、その心配には及びません。」
最後に矢島が受付に言い聞かせて、２人はフロントを後にした。万が一宗助達と入れ違いにならないように、直樹は階段、矢島はエレベーターで宗助達が潜伏している部屋がある４階を目指した。
４階にたどり着いた直樹と矢島はすぐに合流し、できるだけ足音をたてないように目的の部屋である４２３号室の前に立った。
「いいか?オレがドアを開ける。その瞬間中に入って銃を構えるんだ。できるな?」
ドアを挟むように２人は立ち、矢島が静かに直樹に言い聞かせた。
直樹は緊張した面持ちのまま、腰から拳銃を取り出して「ええ」と返事をした。

「よし、じゃあ行くぞ。」
矢島は言った瞬間にカードキーを差し込んだ。反応して鍵が開いた音を確認した刹那、直樹はドアを開いて中に踏み込んでいった。
「警察だ！そこを動くな！」
中には2人の男がいる。その片方は間違いなく猫目宗助だった。2人ともその瞬間に何が起こっているのかまったく理解できていないようで、ただただ大きく見開いた目で、直樹の方を振り返った。
「猫目宗助、電脳法2条2項違反の疑いで逮捕状が出ています。おとなしく大黒警察署まで来てもらいましょう。そして共犯者、福森友喜。あなたもご同行願います。」
直樹は銃を構えたままゆっくり宗助達に近づいていく。
「くっ。」
宗助は腰掛けていたツインベッドから降りてどうにか抵抗しようと身構えたが、銃を向けられてはなす術がなかった。
「動くんじゃない。どうせお前らロクな武器を持ってないんだろ？こういう時はおとなしくホールドアップ。」
直樹の後ろから矢島が両手を上げるジェスチャーを見せながら言った。宗助は小さく舌うちをしながら矢島の指示通り両手を上げた。
「ね、猫目さん。」
困惑しながら共犯者の男も両手を上げながら宗助の方を見た。しかし宗助はそこを微動だにしない。直樹は宗助の元に歩み寄っていった。
「22時32分。猫目宗助確保。」
後ろで矢島が銃を構え、直樹は宗助の手を下ろさせてその手首に手錠をかける。2度も大企業メガマスの失墜を目論み、古い空間を暴走させた男のあっけない最期だった。
「……なぜここがわかった？」
宗助は無表情のままうつむきながら直樹に訊ねた。
「あなた達がここにいるというメールがメガマスの方に届きまして、今日1日ここに張り込んであなたが帰ってくるのを確認しただけで

す。」
直樹は共犯者の男にも手錠をかけながら言った。その共犯者の名前もそのメールに記されていたのだ。
「……そうか。福森君。これは傑作だ。僕たちはアイツに利用されるだけ利用されて、そして最後にはこうやって捨てられるらしい。」
「……アイツって、本社の幹部のことですか？」
宗助に共犯者の福森は聞き返した。
「違う。君も鈍い男だな。内通者のことだよ。本社もアイツに利用されていたってことだ。」
「ど、どういうことですか？」
共犯者の福森はさらに訊ねるが、宗助はこれ以上は口をつぐんだ。
「はいはい。そういう話は取り調べの時にじっくり聞いてあげるからね。じゃあとりあえず行こうか。」
矢島は犯人２人を部屋から出るように促す。
「その内通者に関しても、後で詳しく聞かせてもらいます。」
直樹が猫目に声をかけた。しかし猫目の口からは意外な答えが返って来た。
「それはムリな話だ。僕があんたらに語るのは１つだけだ。」
「はい？」
「空間制御プログラムを開発し、昨日大黒市においてそれを暴走させた。僕の犯した罪はそれだけ。それ以外のことを語るつもりはない。」
猫目は顔を上げて直樹の目をすっと見る。そして勝手に部屋の外に歩き出した。矢島は急いで宗助の手錠を隠すように、猫目のコートをその手にかぶせる。
「開発ではないでしょう。あなたはあの空間制御プログラムをハッキングしたんじゃないんですか？」
直樹は宗助と並び歩きながらまた訊ねる。矢島が共犯者の男も連れて４人は部屋を出た。
「何を言っている？昨日のメガマスの発表を聞いただろ？大黒市の

空間が荒れている原因は、あるハッカーが開発した空間制御プログラムであると。それを開発したのは僕。逮捕状にもそのように書かれているんじゃないのか？」

宗助は直樹を一瞥しながら言った。直樹には宗助がどういうつもりなのかわからなかった。確かにメガマスの発表はその通りで、自分が受け取った逮捕状にもそのように書かれている。しかしそれはすべて建前だ。メガマスは自分たちが開発した制御プログラムについて表沙汰にはしたくない。だから昨日はそのような欺瞞情報を流した。それを宗助はすべてを知っている。そしてこれまでメガマスを目の敵にしてきた宗助なら、たとえその声が誰の耳にも届かなかったとしても、メガマスの発表は嘘であると主張するだろうと直樹は思っていた。ところが猫目はメガマスの流した嘘を甘んじて受け入れようとしている。それはこれまでの宗助の行動をふまえると考えられないことだった。

直樹が深く考え込んでいるうちに、４人はロビーまで降りて来た。とにかくそのことは取り調べでまた聞けばいいと考えた直樹だったが、そこで表の様子がおかしいのに気付いた。

「おいおい。なんであんなにパトカーが停まってるんだ？」

矢島もその異変に気付いたらしい。外の大通りには3台ほどのパトカーが、赤いランプを回転させながらまるでこちらの到着を待ち構えているように停まっている。直樹達が立ち止まって警戒している間に、玄関の自動ドアが開いて何人かの中年の刑事がホテルの中に入って来た。

「犯人逮捕ご苦労だった。竹下君。もう君は帰ってもらってもかまわない。猫目宗助の取り調べは我々刑事課が責任をもって行う。」

直樹の前に立った刑事が言い放った時、直樹はついに来たんだなと思った。

「い、いえ。刑事課にお手間をかけるのは良くありません。ここは電脳犯罪対策係が彼を取り調べます。彼の罪状は電脳法違反。本来ならば僕たちの職分ですので。」

直樹は敢然とその刑事に反論する。直樹にはその刑事の目的はわかっていた。おそらくここに集まって来た刑事達は、メガマス旧幹部の息がかかっている者達だ。カンナの交通事故の重要参考人である猫目宗助の身柄は、絶対に他の部署に引き渡さないというところだろうと思った。

「そうですよ。刑事課のみなさんは電脳のことなんてわからないでしょう。ここはこの竹下君に任せて方がいいと思いますよ。」

直樹達の事情を知る矢島がフォローに入る。矢島は同じ刑事課なので、この刑事達とは普段から一緒に仕事をしている同僚である。

「お前は黙っとけ矢島。昨日コイツが起こした事件については聞いている。子どもが４人意識不明で倒れたんだってな。それは立派な傷害罪にあたる。我々刑事課の職分だ。」

刑事は矢島のことを怒鳴りつけてもう１度直樹に言った。その声色は先ほどよりもだいぶとがっている。

「しかし逮捕状は電脳法違反で出ているんです。まずは僕たちが取り調べを行い、彼と昨日の事件の関係をはっきりさせます。傷害罪に問うのであれば、それからでも遅くはないはずです。」

直樹も負けじと食い下がった。ここで猫目を引き渡してしまえば、また交通事故再調査は行き詰まってしまう。

「いい加減にしてください。いいですか、これは署長命令です。これ以上逆らうのならあなたにもそれ相応の処分が下ることになりますが、それでもよろしいですか？」

その刑事の言葉に、直樹は言葉を失った。署長ぐるみで旧幹部達が抱き込んでいることは想像がついたが、しかしその命令に逆らえばどのよう処分が下るかわからない。下手すれば大黒市警にいられなくなり、もちろん宗助を取り調べることも、交通事故の再調査を進めることも、一生叶わないことになる。

「ハハハハっ。こんなに人に求められるなんて、もしかしたら生まれて初めてかもしれないな。」

一連の会話を聞いていた宗助が自嘲気味に笑う。その言葉に場は一

瞬凍りついた。
「とにかく、コイツらの身柄は刑事課が引き受ける。おい、行くぞ。」
そう言い残すと刑事達は猫目と共犯者を連れて外に出た。直樹も悔しそうな表情を浮かべてその後を追って表に出る。
「猫目！」
その瞬間声が聞こえた。その場にいた全員がその声の方を向く。
「原川さん。それに小此木さんも。」
直樹は2人の元に駆け寄る。2人とも直樹がここに呼び寄せた。誰よりも猫目逮捕に執念を燃やしていたこの2人を。
「玉子か……」
猫目その方を一瞥して、車に乗り込もうとした。しかし何を思いなおしたのか、乗り込む直前に玉子達の方をもう1度見て口を開いた。
「玉子、小此木室長、そして対策係の人。これですべてが終わると思うな。本当の混沌はここから始まると言っていい。」
「待って、何を言ってるの！？」
玉子が宗助に聞き返すが、宗助は「ふん」と鼻で笑い、今度こそ車に乗り込んだ。共犯者も他のパトカーに乗せられ、刑事課のパトカーはそのまま大黒市を目指して出発する。その場には玉子、一郎、直樹、矢島、そして対策係の捜査員2人が取り残された。裏口を見張っていた久美子も、しばらくしてから直樹達の元にやって来た。
「竹下君。猫目は？」
その場に立ち尽くす直樹に久美子はいぶかしげに訊ねる。
「すみません。刑事課の刑事さん達に連行されました。僕も食い下がったんですけど、あの刑事さん達は署長命令だと言い張りまして。おそらく、メガマス旧幹部の息のかかる刑事だけでその取り調べを行おうとしているのだと思います。」
「何ですって！？」
直樹の言葉に反応したのは一郎だった。一郎は今日、玉子から大黒市警でカンナの事故の交通事故の再調査を行っているのは直樹達だ

と聞いていた。そして、直樹達が猫目宗助を重要参考人としてマークしていたことも。メガマス内で今回の訴訟を担当している一郎も、この状況が何を意味しているかわかったのだ。

「それにしてもあの刑事さん達、駆けつけるのが早過ぎます。普通に考えれば、僕らはあの人たちにすでに目を付けられていて、今日もずっと見張られていたと思うのですが。」

直樹が考え込みながら言った。猫目を逮捕するために張り込んでいた自分たちが、あの刑事達に監視されていたのだというのだ。

「それはまずいことになったわね。しかし済んだ事を悔いても仕方ないわ。なんとか私たちも猫目を取り調べる方法を考えないと。」

久美子が落ち込む直樹に言い聞かせた。

「いや、すまない竹下君。同じ刑事課の人間として僕が謝るよ。しかしあの人たちはなんであんなに猫目にこだわるんだ?」

事情を知らない矢島が直樹に訊ねる。こうなった以上隠しても仕方ないと思った直樹は、矢島に事情をすべて話した。

「なるほど。そういうことだったのか。なんて卑怯なマネをするんだ、そのメガマスの旧幹部達は。それに尻尾を振るあの人達も警察官として恥ずべきだ。よし、竹下君。なんとか僕が交渉して君たちにも取り調べができるように取りはからうよ。」

「あ、ありがとうございます。」

直樹と同じく矢島は正義感に溢れる刑事だ。警察内での不正に敢然と立ち向かうことを臆さない。直樹は先輩刑事の頼もしい言葉にただただ感謝した。

「もう1つ問題があります。宗助が最後に言い放った言葉。『本当の混沌はここから始まる。』それは一体どういう意味だと思われますか?」

玉子が直樹に訊ねる。一郎もその言葉には引っかかっていた。先ほどメガバアと話をしていた新しい空間と新しいミチコ。そのことと関係があるように思えてならなかった。

「わかりません。ただ猫目は逮捕する時にも意味深な事を言ってい

ました。自分たちは内通者に利用されて裏切られた。本社もその内通者に利用されたのだと。」

「内通者というのは、メガマスの中に潜むＣＧＷのスパイのことですか？」

一郎が直樹に訊ねた。本社が懸命な調査を行っているにも関わらず、その正体は未だに不明のままである。

「おそらくそうでしょう。猫目の口ぶりからすると、まだ一連の事件は終わっていないように思われます。そして、今回の事件の重要な鍵を握っているのがその内通者です。」

「わかりました。至急本社に連絡を取り、内部調査を強化して進めます。」

一郎はすぐに本社にこのことを連絡した。その後一郎、玉子、直樹達は今後について簡単に話し合い、各々の今後について確認し合った。

「助かりました。神崎さんのおかげで、予定通り猫目宗助は警察に逮捕されました。」

「何をおっしゃる。私は何もしていませんよ。」

携帯電話を耳と肩で挟みながら、神崎はまたお気に入りの葉巻に火をつける。

「電脳犯罪対策係を脅すつもりだったんでしょう？対策係の判断ミスで猫目が逮捕できずに、メガマスは不利益を被ったと。対策係はその話を耳にし、半信半疑ながらも自分たちのミスを重く受け止める。私のあんな信憑性もないタレコミメールを彼らが信じたのは、そのミスを挽回したいという藁にもすがるような思いがあったからでしょうからね。」

「ハッハッハ。結果そうなりましたけどね。」

「しかしその発言には他にも目的があった。社長を動かすという目的が。」

「お、さすがに勘がよろしい。そうです。あの世間を知らないお坊ちゃんをコントロールするなど、実にたやすいこと。特にああいう理想主義者ならなおさら。まあ、これでメガマスはクリーンな会社に生まれ変わることとは思いますが、同時にその経営はいっそう難しくなる。我々の計画も、もうすぐ実現することになる。」

葉巻の煙を吐きながら、神崎は自信ありげに笑った。

「そうですね。しかし、これで神崎さんは社内での立場がなくなってしまうんじゃ。」

「ご心配には及びません。私抜きで経営を立て直すことなど、今の幹部達にはできないことです。いずれ私の存在の大きさを知ることになる。社長も、また私にすがりつくことになるでしょう。」

「さすが、大した自信ですね。」

今度は電話の相手が笑った。

「しかし私にも解せぬことが1つ。他ならぬあなたのことです。なぜあなたほどの人が、こうも精力的に動きまわっているのですか？それはあなたの本社とて同じことを思っているはず。」

神崎がいぶかしげに訊ねる。

「そう勘ぐらないでください。別に大した意味はありません。しいて言えば、私は何でも自分で片を付けたい人間なんです。」

「そうですか。まあ何にせよ我々の計画も峠を越えました。お互いにまた実現に向けて尽力しましょう。くれぐれも、裏切ることのないように。あなたがＣＧＷにやったようにね。」

「もちろん、わかっております。それでは失礼します。」

神崎はその言葉を聞き届けて電話を切った。

#13　ピリオドとダ・カーポ　part8

宗助逮捕の翌日の午後。入院していたヤサコの熱もすっかり引いて、午前中の検査でも異常が見当たらなかったことから、ヤサコはめでたく退院できることになった。病室では母の静江がヤサコの荷物をまとめており、ヤサコは窓の外の景色をぼんやりと眺めていた。ヤサコが退院できると知ったフミエとハラケンが、これから病室まで迎えに来てくれることになっていている。それを待ちながら、やはりヤサコは一昨日の夜ミチコに会ったときのことを思い出していた。

「優子。」

その時扉が開き、一郎が病室に入って来た。

「あなた、どうしたの？」

急な来訪に静江が驚いて訊ねる。

「いや、ようやっと昼休みが取れるくらい管理室も落ち着いてきてね。遅ればせながら見舞いに来たんだよ。」

「もう。今から退院するっていうのに、来るのが遅いのよ！」

少し怒ったように静江が言う。一郎の仕事のことも理解しているが、それでも仕事の合間を縫って来ることもできなかったかと若干おかんむりだ。

「そうだな。悪かった優子。この通りだ。」

一郎は両手を合わせながら頭を下げて謝る。普段よりどことなくオーバーアクションだなとヤサコは感じた。

「ううん。いいの。仕事忙しいんでしょう？今日だって忙しい中来てくれたのはうれしいわ。」

言いながらヤサコも、管理室が落ち着いたということは何か一昨日の事件の捜査に進展があったのかなと思った。

「うん、まあ。実はその仕事のことでお前に報告しておくことがあるんだ。一昨日の廃ビルの事件。あのビルを古い空間に変えようと

していたのはタケル君のお兄さん、猫目宗助であることは知っているんだったな。」
確認するように一郎が言う。
「ええ。多分そうじゃなかって。警察の人から聞いた話やタケル君の話からも私たちはそう推理していたわ。でもそれがどうしたの？」
「ああ。実は昨夜、その猫目宗助が警察に逮捕された。隣の弁天市内のホテルで。」
「え！？」
ヤサコは声を上げる。あの夏の事件以来ずっと逃げ仰せていた宗助があっさりと逮捕されたことも驚きだった。しかしヤサコがそのニュースに驚いた理由はそれだけではなかった。
「これでひとまず、一昨日のように街で古い空間が暴走することもなくなるだろう。猫目とつながっていた企業も、このニュースでしばらく様子見に入ると思う。メガマスとしてはその間に今後の対策を練り、二度と一昨日のようなことが起きないよう努めている。」
一郎は饒舌だった。目下のところの不安材料だった宗助が逮捕されたことは、管理室職員の間でもガッツポーズが起こるほどだった。ところが一昨日の事件の被害者ともいえるヤサコがどこか浮かない顔をしているのに一郎は気付いた。
「どうしたんだ？これでまた安心してメガネの生活に戻れるんだぞ。」
「う、うん。これで事件が解決したのはうれしいわ。でも、何かが引っかかっているの。そう、私は“あっち”の世界に行った時にミチコと会ったの。そのことが、どうしても気になって。」
そう言ってヤサコはうつむいた。ヤサコはこの入院中、宗助のことよりもミチコの方が気にかかっていたと言っていい。
「ああ。その話は昨日の夜にオバあちゃんから聞いたよ。おそらく今後、“あっち”の世界で体験したことを、管理室として優子に聴取することになると思う。でもな、そう気にすることはないんだ。聞いた限りでは、あまり真に受けるほどの話でもない。それで気に

病むことはないんだぞ。」

一郎は優しく言い聞かせたが、一郎の方もメガばあから伝え聞いたそのミチコの発言の真意を探ろうとしていた。同時に昨日宗助が逮捕される時に放った言葉も気にかかっていた。そう、一郎も言葉とは裏腹に、まだ事件が完全に解決したわけじゃないと思っていた。しかしそれでヤサコに負担をかけるわけにはいかないと考えているのだ。

「私だってそう思いたいよ。それくらいミチコの言葉は怖かった。でも、今のお父さんの話を聞いて、また私はミチコの言葉を信じなければならなくなった。」

「どういうことだ?」

いぶかしげに一郎が訊ねる。

「ミチコは言ったの。猫目宗助さんの命運は尽き始めているって。そう、ミチコはこの未来を予言してみせた。そして、ミチコはまた私と再会することは運命だって言った。お父さんやオババは気にするなって言うけど、こうなったら忘れることはできない。ミチコは今もどこかで生きていて、私をずっと見つめている。」

ヤサコは涙が出そうだった。昨日の朝に見た夢は、もしかしたらミチコが見せたいずれ迎える未来を暗示しているのかもしれないとも思った。

「そう落ち込むなよ。猫目の命運は尽き始めているって、それも偶然的中しただけだ。たとえミチコがどこかの空間で生きているとしても、彼女は何もできない。古い空間はもう存在しない。ミチコの言う新しい空間も、メガマスとしてきちんと調査を行う。もう事故は起こさせない。」

力強く一郎は言った。ヤサコにとってはその言葉はほんの気休めにしかならなかったが、それでもそのように自分に強く言い聞かせることにした。もう、事故は起きない。管理室に勤める父の言葉だ。これ以上に信頼できる言葉はない。一郎はそれで1度失敗しているが、だからこそ2度目は絶対にないと。

「こんにちはーす。ヤサコ引き取りに来ました。」
その時元気のいい声がして、フミエとハラケンが病室に顔をのぞかせた。
「おお。わざわざありがとう。ほら、優子行きなさい。話の続きはまたおいおい。」
「うん。」
そう返事をしてヤサコは気持ちを切り替えてフミエとハラケンの元に駆け寄った。昨日1日塞ぎ込んでいただけあって、2人の顔を見たとたんホッとした気持ちになる。
「大丈夫ヤサコ?熱は下がったの?」
そう言ってフミエはヤサコの額に手をやった。
「もう平気よ。一昨日は色々と心配かけてホントにごめん!」
ヤサコは両手を合わせながら2人に本気で謝った。そして自分のリアクションが父とまったく同じことに気付き、1人で恥ずかしくなった。
「アンタねえ、そんな言葉では埋め合わせができるとでも思ってるの?どれだけ私たちが心配したか。ヌル達によって“あっち”にさらわれたり、その後一旦意識が戻って気がついたかと思えば、急に苦しみ始めて病院送り。ホントに、寿命が縮む思いをしたわ。ねえハラケン。」
呆れたように、それでも笑みを含みながらフミエが言った。
「うん。みんな心配してたんだよ。でも、ヤサコだってあの時は決死の覚悟で他の子ども達を救いに行ったんだ。あの勇気は本当に立派だったと思う。それにヤサコを守りきれなかった僕たちにも責任があるんだ。ヤサコを責めるのはやめよう。」
「うん。よう戻って来たな。」
ハラケンの言葉を聞き、フミエはヤサコを讃える意味でその両肩に手を置いた。冒険を終えて故郷に戻って来た勇者を迎える村の長老のように。
「じゃあおじさん、おばさん。ヤサコちょっと借りて行きますね。

夕方には返しますので。」
「よろしくね。」
静江がにっこりとフミエに返す。
「それでは失礼しまーす。」
フミエはそう言ってヤサコの手を引いて病室を出て行き、ハラケンは軽くヤサコの両親に頭を下げて2人の後を追った。
「引っ越して来てまだ1年も経っていないっていうのに。優子は本当にいい友達に恵まれたな。」
しみじみと一郎は静江に言った。
「本当にそうね。」
静江も晴れやかな気持ちになって一郎にうなずいた。

#13　ピリオドとダ・カーポ　Part9（前書き）

第一部最終話

#13　ピリオドとダ・カーポ　part9

「ねえ、どこに行くの？」
フミエに手を引かれるままヤサコは病院を出ていた。今日も空は気持ちよく晴れ上がっている。
「鹿屋野神社よ。」
「何しに？」
「大反省会。」
フミエの言葉にヤサコは何となくその内容が読めた。
「まあ、この半月黒客とは色々あったけど、結果的に一昨日みたいな事件が起こってしまった。お互いにその反省をするために、鹿屋野神社で集まって話し合うの。」
一昨日の事件で共に事件を乗り越えてから、コイル探偵局（コイルレジスタンス）と黒客の間の対立関係は自然となくなっていた。改めて和解をするという意味で、これから黒客メンバーと集まるのだ。
「そう言えば今日はタケル君は来てないの？」
「ええ。ヤサコもおじさんから聞いたでしょう？昨日の夜、タケル君のお兄さんが逮捕されたこと。タケル君は詳しい事情を聞くために、今日は警察に行ってる。」
ヤサコの質問にフミエが返す。タケルは宗助に罪を償ってほしいと思っていた。その意味ではこのニュースにタケルはホッとしたのだが、やはり家族が警察に逮捕されるというのはあまりいい気持ちではない。タケルはどこか複雑な心境のまま警察に出向いたのだ。
「知ってたの？タケル君のお兄さんのことを。」
「今朝一番にオバちゃんが僕に教えてくれたんだ。猫目さんを逮捕したのは直樹さんらしい。直樹さんは逮捕直前にヤサコのお父さんとオバちゃんに猫目さんの潜伏先を伝えていて、猫目さんが連行される場面にはオバちゃんとヤサコのお父さんはその場にいたらしいんだ。それを病院に行く途中に僕がフミエに伝えたってわけ。」

ハラケンがヤサコの疑問に答えた。その玉子は今日、タケルと一緒に警察に出向いている。

「そうそう、あとヤサコに伝えないといけないことが1つ。昨日の現場検証での話なんだけどね。」

フミエは思い出したように昨日の話を始めた。その中心はガチャギリの家庭の話だった。ガチャギリがなぜあそこまでメタバグの鉱脈に執着し、そして一昨日のような大規模な戦争にも逃げることなく立ち向かわないとならなかったのか。

「蒸発?ガチャギリのお父さんが?」

ヤサコはその話を聞いて驚いた。前々からガチャギリには何か事情があるのだろうかと思っていたが、まさかそんな深刻な問題を抱えていたとは思わなかった。

「うん。私たちも驚いた。その後現場にマイコ先生も来て、詳しい事情を説明したの。ガチャギリのお母さんは年明けくらいから、そのことをマイコ先生に相談していたみたい。ガチャギリも口数多い方じゃないけどさ、そんな状況の中小で学校生活の最後の3ヶ月くらいは何食わぬ顔で学校に来ていたのよね。」

なんとなくショックな話だなとヤサコは思った。ガチャギリがそんな事情を抱えていることもそうだが、それをガチャギリが長い間1人で抱え込んでいたこと。そしてそれに気付いてやれなかった自分たちの鈍さも。それはこの3人ともが感じていた。

「あの鉱脈を見つけた時に言ってほしかったよね。いくら敵同士だったとはいえ。わざわざ果たし合いまでしたのは、向こうが勝つ自信があったからなんだろうけど、それでも最後はあんな形で強引にあの場所を占拠した。僕たちに恨まれることを承知の上でね。そう素直じゃないところはガチャギリらしいけど。」

ハラケンの言葉にヤサコはうなずく。ガチャギリには昔のイサコと通じる部分がある。

「理由はどうあれ、アイツらは違法商売に手を染めた。現場検証の後、アイツらはそろって警察に行って詳しく聴取を受けたみたいだ

けどね。」
フミエ達もあの後黒客が警察で厳しい指導を受けたのかどうかまでは聞いていない。
「まあ、昨日の話はそれくらい。このことだけは頭の隅に留めておいてね。」
「わかった。」

そうしてヤサコ達は鹿屋野神社に到着した。既に黒客メンバーは拝殿脇のベンチで桜の木々を眺めながら待っていた。
「ういーす。おおヤサコ。体はもう大丈夫なのか？」
開口一番にダイチはヤサコに訊ねる。ヤサコの体調は黒客メンバーみんなも心配していた。
「ええ。もう大丈夫よ。みんな心配かけてホントにごめんね。」
ヤサコはダイチ達に、そして改めてフミエとハラケンにも謝った。
「いや、別にそんな謝らなくてもいいんだよ。もとはと言えば、オレたちがあんな所で戦争をしてたのが悪いんだからな。」
ダイチはヤサコに対して逆に謝った。他のメンバーも「無事でなにより」と声をかけ頬をほころばせた。
「そう言えば、捕まったんだってな。タケルの兄貴。」
「うん。タケル君はそのことで今日は警察に行ってる。」
ダイチの言葉にハラケンが返した。ダイチも今朝ハラケンからその話を電話で聞いていたのだ。
「まあ、これで事件は解決か。めでたし。」
明るい声で事件の解決を喜んだダイチだが、表情はどことなく物憂げだった。実の兄が逮捕されたタケルの心中を思ったのだ。
「さて、じゃあ早速始めましょうか。大反省会を。」
「待て。その前にこれをお前らに。」
始めようとしたフミエを制して、ダイチは持っていたスーパーの袋1つを差し出した。
「なにこれ？お菓子じゃない。どうしたのこれ？まさかこれをお詫

びのしるしにっていうんじゃ？」
袋の中には色々な種類のお菓子がぎっしりと詰まっていた。
「まあ、詫びのしるしには変わりないんだが、今日集まったみんなで食おうと思ってな。ほれ、こんなに桜がきれいだし天気もいいだろ？両者和睦の証に花見でもやろうぜ。ちゃんと敷物も用意してんだ。おいデンパ。」
「うん。」
ダイチに言われたデンパは、持っていた紙袋から遠足などに持って行く三色模様の敷物を出した。サイズは大きく、余裕で集まった全員が座ることができそうだ。
「あら。アンタ達にしては随分粋なはからいじゃない。どうしたの？」
「言ったろ？詫びのしるしだって。オレたちも自分達のしでかしたことを反省しているんだ。お前達や他の電脳クラブを危険に晒したこともな。しかしただの大反省会じゃ、なんか堅苦して和解した気分にゃなれないからな。ここはオレたちらしく、パーっとやろうと思ったんだよ。ホラ、ジュースも用意してるぜ。今日はオレたちのおごりだ。楽しくやろうぜ。」
ダイチが笑みながら言う。一昨日の事件を共に乗り越え、両者の間には以前よりもました絆が芽生えていた。
「うん。やろうやろう。」
ヤサコも歌うように賛同する。退院したその日にこのメンバーで花見ができるなんて、こんなにうれしいサプライズはなかった。
「よし！じゃあ心おぎなくやるわよ！もちろん、ゴミはきちんと持ち帰ること。」
「承知してるって。まあとりあえずここじゃなんだから奥に行くか。いい場所があるんだよ。」
ダイチはそう言うとメンバーを拝殿裏に案内した。そこも桜の林が続いていて、花見にはうってつけのスペースもあった。このシーズンは大人達がそこで花見をするのが多いが、この日は平日の昼間と

あって他に誰もいない。その贅沢な特等席に敷物を敷いて、全員が靴を脱いで座っていった。ジュースを紙コップに入れてまわし、全員にジュースが行き渡ったところで乾杯の音頭をとるためにダイチが1つ咳払いをする。

「ゴホン。では改めて。大黒市黒客クラブとコイル探偵局の和解を記念して、ここに祝杯を上げる。そして黒客一同これまでの悔いを改め、謝罪の意を表明する。ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

ダイチに続いて黒客メンバーは男らしく謝った。乾杯の音頭に「ごめんなさい」と言うのもどうかと、ヤサコは吹き出した。

「わかればよろしい。全部水に流してあげる。そっちにも色々事情があったみたいだしね。まあ、積もる話はあるけど、とりあえず乾杯しましょうか。はい、乾杯！」

「乾杯！」

フミエのかけ声で一同は乾杯し、ジュースを一口飲んでから色々とお菓子の袋をあけ始めた。

「ホントにすまなかったな。果たし合いの時のあの扱いは、今自分で振り返ってもひどかったと思う。」

特別神妙ではない、しかしいつもよりは引き締まった真剣な声でガチャギリはすぐにヤサコ達に謝った。

「いいのよ。アンタも苦労してたんでしょ。だからと言って、違法商売に手を出すのは良くないわよ。」

フミエは果たし合いのことよりも、そっちの方を説教した。それは黒客メンバーが昨日警察でも口酸っぱく言われたことでもある。

「私たちの方こそ、ガチャギリがそんなことになっているなんて知らなかったから。一時はホントにひどい人だと勘違いていた。そのことは謝るよ。私たちで良ければ気軽に相談してね。」

ヤサコの方もガチャギリに謝る。

「いやいや。そっちに謝ってもらうことはねえよ。全部オレが悪いんだからな。オレも今回の一件で目が覚めた。違法商売に手を出す

のはやり方が汚い。そんな手段で稼いだ金で、家庭は助けられない。悪銭身に付かずってやつだ。まあでも、オレの家庭のことは気にすんなよ。今度はまっとうな手段で儲けることをダイチ達とも相談していたところだ。電脳世界には色々とまだ金を生み出す手段が転がっているからな。」

ガチャギリらしい言葉に、ヤサコ達は安心した。自分達が同情するほど、ガチャギリ自身は家庭の問題のことで落ち込んでいるわけではないと感じたからだ。

「しかしまあ、色々あったがなかなかにスリリングな日々だったな。特に、一昨日のヌルの出現なんかは多分一生忘れねえだろうな。特にナメッチのあの絶叫。『いやだ～！！死にたくない～！！』」

ダイチが話を変えて、ちゃかすようにその時のナメッチの声真似をした。

「やめてよ。あの時はガチで死ぬかと思ったんだから。」

ヤサコもナメッチの方に同情した。初めてあんな状況に直面して平静でいられる人間はいない。ヤサコも初めてヌルに襲われたときは死ぬほど怖い思いをしたのだ。

「感謝しなさいよね。私たちみたいなヌル経験者がその場にいたことを。もし私たちがいなければ、アンタだってそう叫びながら“あっち”に連れて行かれてたでしょうね。」

「バカ言うなよ。お前がいなくたってオレたちなりにあの窮地から逃れられてたって。」

またいつも通り、フミエの言葉に対するダイチの減らず口が始まった。このやりとりがものすごく懐かしいようにヤサコには思われた。

“あっち”って言えばヤサコ。どうだったんだ？久しぶりの“あっち”の世界は？」

「そうだ。確かヤサコが病院に運ばれる前に、ミチコがどうとか言ってなかったか？」

ガチャギリが思い出したように言って、ダイチも続いてヤサコに訊ねる。全員の視線が集まる中、ヤサコはしばらく考え込んで口を開

いた。
「ごめん。その時のことはあまりよく覚えてないの。うわごとでミチコって言ったのも、多分意識が戻って来て眠りこんでいる時にミチコの夢を見たから。ミチコはもう消えているんだし、“あっち”の世界で会ったというわけじゃないわ。」
ヤサコはみんなを不安にさせまいとそう言った。たとえ真実を話しても、そのことに対しては自分達が無力であることをヤサコはわかっている。一郎にはそのことを忘れろと言われているし、みんなにミチコのことを気にさせなければ、いつの日かみんなと一緒にミチコのことを忘れられる。自分には忘れることしかできない。そう思った。
「なんだそうなのか。いやあ、ミチコが復活したのかとオレたちも心配してたところだ。それは何よりだな。」
ダイチがホッとするように、そして一方でガッカリするように言って一同はうなずいた。ダイチ達の胸の内にはどこかにまだ冒険をしたいという願望があるのかなとヤサコは思った。
「それより、ダイチ君もよく無事でいられたわね。6階のシンヤ君を助けに行ったんでしょ？」
話を変えるようにヤサコは訊ねた。
「あ、ああ。でもヌル達はイマーゴに反応するんだろ？オレや一緒に行ったグランドスラムのメンバーの中にはイマーゴ持ちはいなかったみたいで、ヌルもあんまり寄ってはこなかった。それで6階にはそんなに苦労せず辿りついたんだが、すでにシンヤは“あっち”に連れて行かれていてな。どうしようもないからそのまま5階に戻った。その時にちょうどガチャ達が暗号の結界を完成させていて、あとはその結界の中で一緒に助けを待っていたってわけだ。」
「そうなんだ。無事でなによりだったね。」
ダイチの言葉にヤサコが「お疲れさま」と言うのと同じ調子で返した。
「そう考えると、シンヤはイマーゴ持ちだったってことか。」

「だろうな。モニターでアイツが襲われるのを見たときも、ものすごい数のヌルが群がってたしな。おそらくアイツのイマーゴもヤサコレベルなんじゃねえか？」

ガチャギリとダイチの会話を聞いてナメッチが「ひいい」と声を上げる。あの時のモニターの映像はホラー映画そのものだった。

「で、その裏切り者のシンヤ君とはそれっきり？連絡を取り合ってないの？」

フミエがポテトチップスをほおばりながらダイチ達に訊ねる。

「ああ。昨日ヤサコのおっちゃんも言ってたろ。アイツは事件のショックで寝込んでいるって。わざわざ連絡を取ったりもしねえよ。こっちは裏切られたんだし、アイツもオレたちと顔を合わせたくないだろ。」

ダイチもシンヤのことはもう忘れようとしていた。

「アイツの裏切りでお前達にも危険が及んだことは申し訳ないと思ってる。アイツに代わって謝るぜ。アイツを黒客に引き入れたのはオレだからな。ダイチ、ナメッチ、デンパ、アキラ。お前らにも謝っておく。特にアキラはひどい目にあわせてしまったからな。」

ガチャギリが全員に謝った。とりわけ黒客を裏切ってフミエ方に内通していたアキラには暴行寸前までキレて危うくメガネを壊そうとしたこともあり、ガチャギリは深く謝った。

「いいんです。僕もガチャギリさんの事情を知らなかったし。また新しいスキルをどんどん教えてくださいね。」

アキラも気にしていないという風に返す。それよりまた黒客でスキルを磨けることの方が嬉しかった。

「ホント、あのシンヤのおかげでこっちも苦労したわよ。この鹿屋野神社でいきなり変な野球帽の集団に襲われたこともあったしね。」

フミエがため息をつきながら言った。あの時ヤサコ達を襲った電脳クラブ、グランドスラムはシンヤの指示で動いていた。

「そうだったな。いやまさかオレもシンヤがあんな壮大なことを考えているなんて思いもしなかったんだ。考えてみりゃ、『イサコが

集めたキラバグをオレたちが握っている』なんて書き込みは、アイツの仕業だったのかもしれねえな。」

「どうしてそう言えるの？」

ガチャギリの言葉にヤサコが訊ねた。そう言えばそんなこともあったなあと、全員がその時のことを振り返った。

「オレの推測に過ぎないけどな。あの時掲示板ではメタバグの目撃情報が頻繁に書き込まれていただろ？でも実際にメタバグを持っているヤツは見かけなかった。そこでシンヤは掲示板にその欺瞞情報を書き込んだ。キラバグを狙うユーザーや、ひいてはオレたち自身が本気でメタバグを探すように仕向けるために。この街じゃ何をするにしても、メタバグがないと始まらねえからな。」

「なるほど。シンヤは広い情報網を持っているから、誰かがメタバグを見つけたらすぐにわかる。そのメタバグ第一発見者と手を組んで、アイツは商売をするつもりだった。それが偶然オレたちだったってわけか。それにアイツの情報網ならイサコがキラバグを集めていたことも当然知っていた。そう考えると、アイツが犯人で間違いなさそうだな。」

納得したようにダイチがガチャギリにうなずく。他のメンバーもその推理に異論はなかった。

「大黒市は踊られていた。シンヤというたった1人のメガネ使いに。そこに絡んで来たタケルの兄貴。一昨日の事件はそれらが複雑に絡んで起こったものだったっていうのが真相だろうな。」

全員がガチャギリの考えにうなずく中、ヤサコだけはそれは違うと思った。大黒市で起こった一連の事件は、シンヤと宗助以外にも何かが絡んでいた。それはミチコの言葉とは別にしてもヤサコが感じていたことだ。果たし合いの時に感じた地震のような錯覚や、廃工場での心霊体験などからそう思った。

「そう言えばダイチがハッキングにあって、あやうく架空請求の犯人になりかかった事件があったじゃない？あれもシンヤの仕業なの？」

「おそらくそれは違う。シンヤにダイチのメガネをハッキングできるほどのスキルはねえ。話に出て来たＩＬコードというのもシンヤが使えるような、いや、子どもが使えるような甘いものじゃねえ。それだけは未だ謎のままだ。」

フミエの質問にガチャギリが答える。ヤサコはその話からも、一連の事件にシンヤと宗助以外の何かが絡んでいることを確信した。

「ま、つってもあれから半月経つが、オレのメガネがハッキングに遭ったことはねえ。その事件は終わったものと考えていいだろう。直樹さんからいただいたセキュリティソフトもあるしな。」

ダイチはもうハッキングのことは気にしてなかった。これでこの半月をすべて振り返ったことになり、一同はあらためて色々と濃密な時間だったなと感じた。

その後も一同はお菓子を食べながらこの半月の間に起こったことを色々と語り合った。廃工場での心霊体験。弱小クラブＣレックスのへたれ具合。ガチャギリがヤサコの父一郎をミサイルの遠隔操作で爆撃したこと（もちろんガチャギリはそのこともヤサコに謝った）。相変わらず気性の激しい玉子がサッチーをハッキングしてまで事件を収束させようとしたこと。今となっては笑い飛ばせるようなことばかりを。

そうしていつしか陽は傾き、気がついたらお菓子もすべてなくなっていた。お菓子はかなり前になくなったのだが、一同はジュースだけでを片手に延々と語り合い、笑い合っていた。かけがえのない本当に大切な時間はあっという間に過ぎてしまう。でも、それは心の中に自然と刻み込まれる。ヤサコも事件のことをすべて忘れて思いっきりこの時を楽しめた。

オレンジ色に染まった空。風に揺れる木々。ふとヤサコの胸の中で“あっち”の世界の情景が重なり合う。しかし、ずっとヤサコが感じていた怯えは消えつつあった。かたい絆。みんなの笑顔。それは確かなものとして存在している。たとえミチコが生きていようと、これを奪い取ることなんてできない。真実はミチコの手の中にはな

い。真実は今、ここにある。この真実だけは揺るがない。
「あ～。なんだかんだで1週間もすればみんな中学生よ？実感湧かないよね。」
しゃべり疲れた様子でフミエは手をついて夕空を見上げながらしみじみと言った。事件のおかげでそんなことを感じている暇はなかったのだ。
「そうだな～。ぶっちゃけオレらは中学入ったからって、何が大して変わるわけじゃないと思うが。」
「黒客を続けるってこと？」
フミエがダイチに訊き返す。
「まあ、とりあえずな。つっても、全員なんかの学校の部活に入ることは入るだろうが。お前らは？コイル探偵局続けるのか？」
「ん～、続けないかな。実は卒業式の前日にメガばあは解散指令を出したの。一昨日の事件で一時的に復活させたけど。言っても電脳ペットの行方不明事件は起こらないし、今回の事件も終結したところで、今度こそめでたく解散ね。メガばあは卒業を期に、メガネからも卒業したらどうかって言ってた。どのみち部活とかでメガネにかまう時間はなくなるだろうって。私達もそれもそうだと思って、春休みの間にメガネでやり残した事を考えようとしてた。ハラケンの場合は訴訟を起こすってことになったわけだけど。その矢先に一連の事件の幕が開けたから、それはそのままになってるわ。まあ、春休みもあと1週間あるし、またそのことについて考えましょっか、ヤサコ。」
「うん。」
フミエの言葉にヤサコは強くうなづいた。メガネからの卒業。そう考えていたことが遠い昔のようだった。少し寂しい気もしながら、ヤサコもそれについてしっかり向き合おうと思った。
「そうか。まあ、道は人それぞれだからな。お互い頑張ろうぜ。中学校生活。電脳関係で困ったことがあったらすぐに言ってくれよ。」
ダイチもどことなく寂しそうに言った。張り合う相手がいなくなれ

ばダイチはどうなるのだろうか。そう思ったヤサコは、フミエにはもうしばらくメガネを続けてほしいかもと思った。

「ハラケンも、訴訟のこととかで相談があればすぐに言ってくれよ。」

「ありがとう。」

ダイチの言葉にハラケンも笑顔で返す。

「よし。今日はここらでお開きにすっか。」

ダイチの宣言により、大反省会に名を借りたお花見は終了となった。それぞれきちんとゴミをまとめてきれいにし、最後に全員で鹿屋野神社にお参りした。いい中学校生活が送れますようにと。

1週間後。気持ちよく晴れ上がった空の下、初めて袖を通すセーラー服に少し恥じらいながら、ヤサコはこの日から小学生となる京子とともに家を出発した。新たな舞台となる中学校に向かう道を、見頃が終わった桜の花びらが祝福するように舞いながら彩っている。そう言えばあの人はこの日をどう迎えているのだろう。とあるT字路にさしかかった時、思いを巡らせていたヤサコのメガネが、その人からの着信音を鳴らした。

#13　ピリオドとダ・カーポ　Part9（後書き）

長らくお付き合いいただいてありがとうございます。ようやく第一部の終了です。
次回からは第二部に入るので、またこれからもどうぞよろしくお願い致しします。

#14　帰ってくる電脳ペット　Part1（前書き）

第2部

#14　帰ってくる電脳ペット　part1

「はい、もしもし？」
「……小此木か？私だ。誰だかわかるか？」
「天沢さん？」
「ああ。久しぶりだな。」
「久しぶりじゃない。元気にしてた？って言うかひどいよ。私たちに何も言わずに金沢に帰っちゃうなんてさ。」
「いや、あの時はそう言うのが照れくさくてな。何も言わずに帰ったのは謝る。ごめん。」
「……天沢さんが謝るのなんて初めて聞いたかも。わかった、許してあげる。みんなにも天沢さんの言葉、伝えておくね。フミエちゃんやダイチ君達も、あの事件の時に天沢さんを誤解してたこと、直接会って謝りたかったって悔やんでいたのよ。」
「ああ。あの時は私にも責任があったんだ。別にそのことは気にしてない。」
「そう……ねえ、私まだどっちだかわからないの。私たちって、友達になれたのかなあ。」
「……言っただろう。私は友達というものはよくわからないんだ。」
「……そう。」
「でも、お前は、そうだな。同じ道を迷って、同じ道を目指した、仲間だ。」
「……うん。」
「でも仲間なのは、同じ道を目指している時だけだ。私みたいな人間は、いつまでも他人と一緒にいては、自分の道が見えなくなってしまう。」
「……そうかもね。」
「また会おう。同じ道を迷った時に。」
「……うん。」

「それまでは、サヨナラだ。」
「……うん。」
「私はイサコ。名付け親はアンタだ。」

電話を切ったイサコの頬を心地よい風が撫でていった。その風に運ばれて来た桜の花びらが、長くおろしたイサコの髪を滑り落ちる。金沢の古い町並みを見据えて、イサコはまた新たな1歩を踏み出した。電話の相手、ヤサコのやわらかい声の余韻をかみしめながら。

改めて電話をして良かったと思った。今まで言えなかった、サヨナラという言葉。それを伝えるのは今しかないとイサコは思っていた。お互いが新たな舞台に進むこの日、それを口に出すことで自分は本当の意味で前に進める。イサコはそう思った。

あの事件から半年。金沢に行ってからのイサコはまるで入学したての小学生のような、人と人との距離感がうまく掴めない、どことなく危うい子どもだった。でもそれは人を拒絶していたあの事件よりも前のイサコとは違う。むしろ積極的に人と関わりたくて、でもその時にうまく言葉が紡げないような、そういうもどかしさをはらんでいた。それでも金沢の新しい学校のクラスメートは、イサコのことを快く受け入れてくれた。嫌われたくないから、言葉巧みに仲間に取り入ろうとすることはしない。ただ純粋に人とつながりたいというイサコの気持ちは、新しいクラスメートにも伝わったのだ。時には言葉が足りなくて誤解や衝突を招くことはあっても、誰もイサコと距離を置こうとしなかった。むしろイサコを理解しようと努めてくれた。そんな暖かい人間関係の中で、イサコもできるだけそのクラスメート達のことを理解していこうと努めた。

時に自分達は友達なんだろうか、と思うことがある。しかしその言葉に対する答えはいつも見つからなかった。一番自分の近くまで来てくれて、そして一番深く繋がり合ったヤサコと自分が友達なのかどうかもわからない。しかし、イサコが新しいクラスメートと近づく時、そこにはいつもヤサコの影がつきまとった。イサコにとっ

て初めての友達といえるような存在となったのは、まぎれもないヤサコだ。友達というものがわからなかったイサコの頭の中で、他の対人関係を規定する上でヤサコが必ず登場した。つまりヤサコとの関係よりも、自分たちは深いのか浅いのか。人と接する時はイサコの中でそのようなものさしができあがっていた。そしていつもイサコはその人に対して心の中でそれを申し訳ないと思っていた。

半年以上もの間、ヤサコと連絡を取らなかったのはそのためだ。どうしてもヤサコのことを考えるとのめりこんでいってしまう、甘えてしまうことにイサコは気付いていた。だからイサコはヤサコに電話をかけた。あえて決別を口に出すことで、ヤサコに甘える自分を振り払った。そうして吹っ切れたような気がしていた。今度からは、自分の力だけで人とつながり合う。そう胸に誓う。

「おはよう、イサコ。制服スッゴク似合ってるね。」

学校への道の途中、この半年の自分を思い返しながら歩いていたイサコに、1人の同じブレザーの制服の少女が歌うように声をかけた。

「ああ。ありがとう。ユイの方も制服似合っているじゃないか。」

少女の名前は秋吉結衣。ショートカットでイサコよりも一回りほど背が小さく、ちょうどフミエと同じくらいの背丈だ。あどけない顔立ちだが性格は活発で、いつもイサコと戯れるように接してくる。イサコが現在住んでいるマンションの隣のマンションに住んでいて、小学校時代には同じクラスだった。

「またそんなこと言って。お世辞だってわかってるよ。大体イサコと私じゃ背が違いすぎるもん。イサコくらいスタイルが良くないと、ブレザーって似合わないよ。」

笑いながらユイはイサコに返す。イサコは金沢でも「イサコ」と呼ばれているが、それは自分からそう呼んでほしいと頼んだのだ。それはこの名前の名付け親のことを忘れないようにするため。それに「イサコ」とみんなから呼ばれることは、少しこそばくて恥ずかしいが、それでもそう呼んでもらえるたびに自分とその人との間に確かなつながりがあるのを感じることができて、イサコはいつの間に

かこの名前が大好きになっていた。周りもこの名前が気にいっていくれているみたいで、イサコと親しい人はみんなそう呼んでくれていた。

小学校時代はイサコとユイはいつも一緒に登校していた。というより、イサコがマンションから降りると、いつもユイが下で待ってくれているのだ。今日はユイの方が遅れるということでイサコが早く出たが、電話をしている間にユイが追いついてきた。今日も春休み中の出来事などを話し合いながら学校を目指す。新たなるステージ、金沢市立夕日寺中学校へ。

2人が学校に着いた時には、もうかなりの人数が正門をくぐった近くにある掲示板を見ようと集まっていた。そう、まずは誰もが気になるクラス分けがそこに張り出されているのだ。前の小学校に来てイサコはまだほんの半年だが、それでも小学校時代の友達と一緒になれるかどうかは大きな問題となる。もちろん、イサコの隣にいたユイもこの時はそわそわしていた。この学校には近くの3つの小学校の卒業生が入学し、クラスは1学年4つに分けられる。仲のいい友達と一緒になれるかどうかは微妙だ。

「あっ、イサコ。今来たの?」

「ああ、サッチー。そうなんだ。クラス分けは見たのか?」

その時人ごみの中で同じ小学校に通っていた友達とイサコは会った。イサコはあのオートマトンと似た体型の女子を、親しみをこめて「サッチー」と呼んでいた。

「見たよ。でもアンタとは違うクラスだった。ヒナやリセともばらけたね。ああ、確かアンタとユイは同じクラスじゃなかったかなあ。」

「ホント!?やったあ!やったあ!」

サッチーの言葉に、ユイはイサコの手を取って飛び上がって喜んだ。

「おい、恥ずかしいからやめろ。わかった、サッチーありがとう。」

「いえいえ。ここでもまたよろしく頼むよ。」

サッチーは先に教室に上がり、イサコとユイは掲示板を確認した。

「ホントだ。イサコと同じクラスだ。1年1組。担任の先生は松葉先生。」
「よし、じゃあ時間もないし教室に急ごう。入学式の前に、まずは教室集合らしいからな。」
そうしてイサコとユイは自分たちの教室、1年1組に向かった。
教室にはもうほとんどの生徒が着席して先生の到着を待っていた。
イサコとユイも教室前の黒板に張り出されている座席表を見て自分の席を確認する。氏名順なのでイサコとユイは窓際の席で、ユイが一番前。その後ろがイサコという並びだった。
「ユイ。一緒のクラスになったわね。」
席につくユイのところによく日焼けしたセミロングの髪をした女子が歩いて来て言った。
「お、アサミじゃない。アサミもこのクラスなんだ。やったあ。」
「ええ。これからもよろしくね。」
ユイはイサコにもしたようにそのアサミの手をとって喜んだ。
「ああ、イサコ。この子は井上安紗美。小学校の時に私と同じ塾に通っていた友達なの。」
「そうなのか。よろしくな。」
ユイに紹介されてイサコはアサミに挨拶した。
「で、こっちがイサコ。」
「イサコ?」
アサミがユイの方を見た。
「あだ名なの。名前は天沢勇子。いさましい子って書くから、みんなにイサコって呼ばれてる。つい半年前に金沢に引っ越してきたの。」
「そうなんだ。よろしくね、天沢さん。じゃあ私もユイみたいにイサコって呼んでいい?」
「もちろんだ。」
共通の友達がいたとはいえ、こんなにすぐに新しい人と仲良くなれるなんて幸先のいいスタートだなとイサコは思った。この調子でも

っと多くの人と関わり合うこと。それが中学校生活第一の目標だ。

「はい、席についてください。」

その時スーツを来たわりと若い男性が出席簿を持って教室に入って来た。この人がこのクラスの担任なのかと最初は戸惑うくらい、例えるなら家庭教師のバイトをしているような大学生のような容姿だった。アサミは「じゃあね」と言って自分の席に戻る。イサコとユイも緊張した面持ちで前を向いた。

「はい。みなさん、いい顔してますね。ご入学おめでとうございます。今日から君たちは晴れて、この金沢市立夕日寺中学校の一員になったということで、今日この日から、おそらく波乱に満ちるであろう中学校生活に突入していくわけですね。中学校の3年間というのはね、思う以上に長いですよ。本当に様々なことが毎日起こります。君たちも思春期を迎えて、まあ色々な方に迷惑をかけていくことでしょう。僕もその1人なわけです。でも、僕たちこの学校の先生に迷惑をかけるのはいっこうに構いません。僕たちもそれを受け止める覚悟はしています。この中学校での3年間が、たとえ山あり谷ありでも、終わった時には本当に良かったなと思えるように君たちも一生懸命頑張ってください。そして僕もそれを全力でサポートします。はい。申し遅れました。僕の名前は松葉茂（まつばしげる）と言います。32歳。教科の担当は国語です。どうぞよろしく。」

松葉は非常に饒舌で、堅苦しい挨拶もそうは感じさせない、テレビ通販の販売員のようなしゃべり方で聞き心地の良い独特のテンポがあった。その松葉の話に、イサコは教室全体の緊張が解きほぐれたような気がした。そのくらい親近感を感じさせる雰囲気があった。

「では、このあとみなさんは体育館の方に移動していただいて、そこから入学式ということになります。その後はまたこの教室に戻って来ていただいて、ホームルームを行います。そこではですね、授業のこととか、クラブのこととか、中学生としての心構えとか、まあとにかく色々と僕の方から説明させていただきます。それが終われば恒例の、自己紹介の時間にしたいと思いますので、みなさん何

か一言自分をアピールする言葉を考えておいてください。そこで華々しい中学デビューを飾ってくださいね。はい、では移動。窓際の一番前の席の子から1列に並んで僕について来てください。」

松葉が言って、生徒はみんな席から立ち上がった。自己紹介があると聞いて「マジかよ～」と周りの友達と苦笑している生徒もいる。

「うわあ。イサコどうしよう。自己紹介ってまた名前順でやっていくんでしょ?そしたら私トップバッターだわ。何て言ったらいいのかな?やっぱり掴みのボケを挟んだ方がいいのかな?」

わかりやすい慌てっぷりでユイがイサコに訊ねて来た。

「別に普通でいいじゃないか。ユイは自己アピールなんて得意だろう。下手にアンタに盛り上げられても、次の私が困る。」

笑みを浮かべながらイサコがユイに返した。

「そうかな?でもイサコは落ち着いてるのね。」

「まあ私はしょっちゅう転校を繰り返していたし、自己紹介なら慣れているからな。むしろみんなで一斉に自己紹介をする今回の方が気が楽だ。」

「なるほどお。」

ユイはそれで納得した。転校生は毎回たった1人で自己紹介をしなければならない。イサコはそういう意味では場慣れはしているが、もちろんこれまでのように素っ気ない自己紹介ではいけないと思っていた。落ち着いているように見せかけて、イサコも実は内心結構焦っていた。

「はい、じゃあ行きまーす。」

廊下で一列に並んだところで、松葉が声をかけて出発した。教室のある3階から薄暗い廊下を渡り階段を下りて体育館前に出る。既に中では保護者達が席につき、新入生の入場を待っている状態だった。

この式にはイサコの母も出席している。そしてもう1人。その母の手の上には小さな額に入れられた信彦の写真がのせられていた。小学校の卒業式の時も、母と信彦はイサコを見守っていた。今日は都合で来られなかったが、大黒市にいた時にお世話になった叔父夫

妻も卒業式には駆けつけてくれた。多くの人に支えられて自分はまた新たなる日々に身を投じる。かつて手と手をとりあった仲間、そして今目の前にいる仲間。色々な人の顔が頭に浮かんでくる。人は決して1人では生きていけない。1人では背負いきれないものがあるから、人は誰しもが不完全な存在だから、人を頼るのだろう。これまでの自分は支えられる、頼るだけの人間だった。でも、これからは人に頼られるような人になりたい。誰かを支えてあげたい。あの時ヤサコが自分にそうしてくれたように。

「じゃあ、行くよ。」

松葉が声をかけて体育館の扉が開かれる。厳かで華やかな音楽が鳴り響く体育館の中を踏みしめながら、イサコは胸に誓った。自分はヤサコのように優しい人間になろう。そう、今まで心の拠り所だった、自分の支えだったヤサコを憧れの存在にしよう。それを天国から見守っていて。お兄ちゃん。

#14　帰ってくる電脳ペット　part2

入学式の翌日は日曜日で学校は休みだった。イサコはその休みを利用してある場所に訪れていた。残りわずかとなった桜の花びらが木々から舞落ちてくる。目に入るのはほとんどが葉桜だ。その場所はそんな桜の並木道を進んだ場所にあった。

柔らかな色で整えられた花束を持って、イサコは芝生の緑が豊かな霊園にたどり着く。広い園内で迷わないように、母にその墓の場所だけは聞いておいた。そうしてイサコは「天沢家代々之墓」と彫り込まれた墓石を見つけた。

本来ならば3月の彼岸にここに来たかったのだが、その時は母方の祖母の田舎に帰っていてここに来る事はできなかった。入学式を終えてようやく落ち着いたところで、ここに来て兄の信彦に小学校卒業や中学校入学の報告に訪れようと決めていたのだ。

信彦が亡くなって5年が経過しているが、実はイサコはこの場所に来るのが初めてだ。信彦が既に亡くなっているのを知ったのはあの夏の事件の時である。それまでイサコは信彦が生きていると信じて疑わなかった。病院の一室でほぼ植物状態のまま眠り込んでいる信彦の肉体を見て、魂は電脳の体ごと“あっち”の世界に行ったきり戻れなくなったのだと思い込み、必死でキラバグを集め、“あっち”への通路を開こうとしていた。母や叔母はイサコにはもちろん真実を告げていた。それでも兄が生きていると信じてやまないイサコには、時には冷たい口調でそれを否定することもあった。それは兄の幻影から離れられないイサコを心配していたからこそだった。しかしイサコはそのように言う2人とは距離を置き、唯一自分の話を真摯に受け止めてくれる叔父に心を開いていた。

だからこそ、宗助達にだまされていたことがわかった時のショックは言葉では言い尽くせないほどのものだった。今でもその時のことを思い出すと心がチクリと痛む。それでもいつかは知らなければ

ならなくて、それを受け止めなければならないことではあった。だからあの時のことで宗助のことを恨んだりもしていない。結局は自分が悪いのだとわかっていたからだ。兄の死を受け入れられなかった自分が。

さかのぼること5年。交通事故に巻き込まれながらも奇跡的に助かったイサコは、兄がその事故で他界したことを知り、重度の精神的ショックを負った。その心の治療のために立ち上がったヤサコの祖父、宏文はイマーゴによる電脳医療システムを起動させた。その治療過程でイサコは電脳空間に信彦の幻影を作り出し、自らもそこに閉じこもった。ところがミチコの誕生によりシステムは機能停止、イサコは無事生還できたものの、イサコを助けに電脳体を分離させた宏文は帰らぬ人となった。

そのすべてをあの夏の事件の後にイサコは知った。むしろ知ろうとした。自分の身に起こったすべての出来事を受け止めなければと思った。現実から逃避するあまり宗助の作り上げた虚構をまんまと信じ込んでいた過去を、繰り返したくないと。

そしてイサコにはもう1つ心にのしかかる事件があった。カンナの死だ。カンナの死は公には交通の電脳ナビシステムの誤作動だと信じられている。しかし本当の事故の原因は、イサコが開いた“あっち”への通路にあった。信彦を連れ戻そうと開いた“あっち”への通路が原因で1人の少女の命が消えていったこと。それは今でもイサコの中に大きな罪悪の1つとして存在している。

信彦も、宏文も、そしてカンナも、もう戻ってくることはない。時折イサコは、なぜこれほどまでも多くの人が自分のために命を落とさなければならなかったのか、と心を締め付けられることがある。生きて行く上でそれが重圧になる時もある。でも、今のイサコにはなぜ人が生きていくのか、という問いの答えがぼんやりと見えていた。それは、ヤサコと手と手を取り合った瞬間の中にその手がかりがあった。そのために、自分はあの空間から抜け出したのではなかったのか。この先には苦しみしか待っていない、だからこそ行かな

ければならない、そう思ったのではないか。胸の痛みが示す道を選んだのではなかったか。そして、もう戻って来れない人達の分まで、自分は一生懸命生きなければならない。そうして強い人間にならないといけない。それが自分のために命を落とした人々に対して、自分が唯一できることだとイサコは思っていた。

金沢に帰ってからもこれまで信彦の墓には参っていなかったのは、やはりまだ信彦のことで吹っ切れていない自分に気付いていたからだ。信彦にちゃんとお別れをするのは、自分の中に信彦を刻み付けて、そして自分1人の力で生きて行く自信をつけてからだとイサコは決めていた。そうじゃないと、信彦が天国で安心してくれないから。信彦とのお別れを前にした今の心境は、ヤサコにさよならを告げた時と何となく同じだった。

「お兄ちゃん。ずっと、ここに来られなくてごめん。5年前の事故で亡くなった本当のお兄ちゃんは、ずっとここで眠り続けていたんだもんね。寂しい思いをさせて、本当に悪いと思ってる。むしろ私より、お兄ちゃんの方が孤独だったのかもしれない……この5年間は本当に色々なことがあったわ。そして、私は多くの人を傷つけながら生きてきた。だけど最後には最も大切なものを、私は手に入れた。私はこれから、私にその大切なものを気付かせてくれた人のように、優しさ、思いやりを持って人とつながっていく。そして、お兄ちゃんの分まで精一杯生きる。お兄ちゃんと過ごした日々は一生忘れない。そして、私は自分の力で道を切り拓いてみせる。だから安心して、これからも安らかに眠ってください。これからもここに来て、近況を報告するから。」

持って来た花束を添えて、イサコは墓の前にしゃがみこんでたっぷり1分間黙祷を捧げた。合わせられた手には、イサコがずっと大切にしてきた信彦をかたどった人形と、自分をかたどった人形が握られている。あの事件の時に信彦の人形は壊されてしまったが、入院中にイサコの叔母が直してくれた。その人形はあれからも肌身離さず大事にしてきた。イサコがその人形を改めて眺めていると、自然

と一雫の涙が頬を伝い落ちていった。

信彦とのお別れを終えて、イサコは霊園を出ようとした。燦々と降り注ぐ太陽の下、今年最後になるであろう桜を名残惜しそうに歩いているところだった。

「髪型、とても似合ってるわね。」

突然イサコは声をかけられた。聞き覚えのある声。しかし並木道には何人かの人が立っていたので誰に声をかけられたのかわからず、イサコは辺りを見回した。

「こっちよ。天沢さん。」

振り向いたイサコはその人物と目が合った。しかしそれが意外な人過ぎて、イサコはその瞬間に名前が出て来なかった。

「……マイコ、先生？」

ようやく絞り出したその名前。その時のイサコのあっけにとられた顔を見て、マイコはくすっと微笑んだ。

「ええ。久しぶり。」

「どうしてこんなところにいるんですか？」

イサコはまだわけがわからない様子でマイコに訊ねる。

「あなたのお母さんに電話したら今日はここに来ているって聞いて、詳しく場所を教えてもらったの。突然現れてごめんなさいね。」

マイコは首をかしげながらイサコに謝った。

「いや、そうじゃなくて、なんで先生が金沢に？先生はまだ大黒小の教師をされているんじゃないんですか？」

「ええ。そうよ。でも今日は日曜日。休みを利用してここに来たのよ。明日から新学期が始まるから、今日中に帰らないといけないんだけどね。」

「どうしてそんな忙しい中わざわざ。」

イサコは自分に何か大事なことを伝えに来たのだろうと察した。それにしても、それがなぜマイコ先生なのだろうと思った。

「あなたに伝えないといけないことが２つあるの。１つ目はあなた

に謝ること。」
「先生が何を私に謝る必要があるんですか？」
イサコが慌ててマイコに返す。自分には先生に謝られる理由なんてないと思った。
「あの時のこと。あなたがミチコさんを呼び出したと学校で噂されて、嫌がらせにあっていたこと。それを私は気付いてあげられなかった。」
思い詰めたような表情に変わって、マイコは申し訳なさそうに言った。
「ああ、あれは私が悪いんです。自業自得でしたし、何より先生はメガネのことに詳しくなくて、何が起きていたのか把握することは難しかったでしょうし。」
「メガネに詳しくないとか、そんなことを言い訳にはできないわ。とにかく、あの時あなたが傷ついているのを気付かなかった私は、担任の教師として失格だった。そのことはとにかく謝らせて。ごめんなさい。」
マイコは深くイサコに対して頭を下げた。
「先生、頭を上げてください。その気持ちは十分伝わりましたから。」
イサコが困惑しながらマイコに言った。わざわざそのことを謝りに来てくれるなんて、本当に誠実な先生だったんだなとイサコは改めて感じた。
「そう。天沢さんって、ほんとはすっごく優しくて純情な子だったのね。事件のことは小此木さん達やメガマスの人から聞いたから。あなたのお兄さんを思う気持ちも、素敵だと思った。今もお兄さんのお墓参りをしてきたんでしょう？」
「ええ。まあ、来るのは今日が初めてですけど。お兄ちゃんにお別れをするのは、自分1人で生きて行ける自信がついた時だと決めていたので。」
「なるほど。つまり天沢さんはあの事件のショックを乗り越えて、

新たな気持ちで中学校生活に突入したっていうわけね。安心したわ。ねえ、私もお兄さんの挨拶してもいいかしら?」

「もちろん、いいですよ。お兄ちゃんも喜びます。」

こうしてイサコはマイコとともに、兄が眠る墓に引き返すことになった。

「私ね、あなたの事があって考えが変わったの。あれだけ子ども達の中で浸透しているメガネに、私たち大人が無関心でいてはいけないって。だから私も、最近メガネについて勉強するようになったの。」

遊歩道を歩きながら、マイコがイサコに言った。

「先生がですか?一からメガネのことを勉強するなんて大変じゃないですか?子ども達だって、何年もかけてそのスキルを身につけていくわけですから。」

「まったくその通り。よくこんな複雑なもの使いこなしているだなって、驚きの連続よ。子どもの好奇心っていうのは、想像以上にエネルギーを孕んでいるんだなってつくづく思う。」

マイコが笑いながら話を続ける。ごく自然に子どもである自分とも接してくれる先生に、イサコは温かいものを感じていた。もっとこの先生の元で学びたかったな、という後悔も共に押し寄せる。

「でも、勉強していくうちにすごく危険を伴うものだっていうこともわかってきた。今までは口先ではメガネはほどほどに、って言って来たけど、それをもっと切実に伝えていかなきゃって思った。それに私がメガネに長けているとさ、ダイチみたいな悪ガキも実力で押さえられるしね。知ってる?天沢さんが来る前、ダイチ達は学校のサーバーをダウンさせたり、それはそれは問題児だったのよ。天沢さんが来てからは何だか丸くなったような気がしてたけど。」

「ああ、その話なら深川君達からも聞きました。ダイチが丸くなったのは、私がダイチ達のクラブを乗っ取っていたからです。それに至った経緯は複雑なんですけど。」

イサコが苦笑いを浮かべながら言った。マイコもそれに笑みで返す。

「へ～。天沢さんって、意外とアグレッシブだったのね。確かに小此木さんや橋本さんからは、天沢さんが相当な使い手だったって話は聞いてたけど。」
話が弾んでいる間に、2人は天沢家の墓に到着した。
「ここです。」
「ありがとう。」
そう言ってマイコは墓の前にしゃがみこんで黙祷を捧げた。1分ほど手を合わせて、マイコは立ち上がった。
「会ってみたかったわ。あなたのお兄さんに。きっと素敵なお兄さんだったのね。今日はありがとう。じゃあ私はこれで。」
マイコはそう言ってイサコと別れようとした。
「あれ？先生。他にも私に伝えようとしてたことがあるんじゃなかったんですか？」
慌ててイサコが引き止める。
「え？ああ、そうだった。ごめんなさい肝心なこと言うの忘れてたわ。」
「先生しっかりしてくださいよ。」
笑いながら呆れたようにイサコが言った。マイコはどこか天然なところがある。
「ごめんごめん。実は小此木さんのお父さん、メガマスに勤めていらっしゃるんだけど、その方から伝言を頼まれて来たの。」
「小此木のお父さん？確か空間管理室に勤めている？」
「ええ、そうよ。天沢さん、つい1週間ほど前に大黒市で起こった事件について知ってる？」
あっ、とイサコは思った。そのニュースは全国に流れており、イサコは聞いたときからその事件が気になっていた。さらにその事件の翌日に猫目宗助が逮捕されたということも、金沢のメガマス職員からそれとなく知らされた。事件の概要等はその職員に訊ねても話してくれなかったので、イサコはなんとなく消化不良な思いを抱えていたのだ。

「事件についてはニュースで報道されていた程度の内容なら知っていますが。まさか、そのことを私に伝えると言うことは、事件に小此木達が巻き込まれたってことですか？」

「ええまあ。かいつまんで言うとそういうことになるかな。とりあえずここじゃなんだし、どこかでお茶しながら話しましょ。」

「わかりました。」

イサコはうなずいて、またマイコとともに霊園の出口に向かって歩き出す。ニュース報道ではヌルの存在もほのめかされていたが、具体的にどのような事件だったのかは報道を見る限りではわからなかった。また昨日電話した時、ヤサコは事件のことなど一言も触れなかった。その点でヤサコ達とは無関係なのかもしれないとイサコは思っていたが、そうではないようでどこかイヤな予感が漂った。とにかくマイコ先生の話を聞いてみようと、イサコは少しだけ歩くスピードが上がった。

#14　帰ってくる電脳ペット　part3

近くのカフェに入ったイサコとマイコは、桜の並木道がよく見える窓際の席に座った。中は洒落た雰囲気で、イサコはこういう店に来たことはほとんどなかった。

「私のおごりだから、好きな物頼んでもいいよ。」

「すみません、わざわざ金沢まで足を運んでくださっているのに。」

マイコの気遣いにイサコは少し大人びた口調で礼を言った。

「いいのよ。子どもが遠慮なんかするものじゃないわ。ものでカタをつけるっていうのもあれだけど、私はあなたにお詫びをしないといけないし。」

マイコがそう言うので、イサコはお言葉に甘えて遠慮しないでおこうと思った。

「そうですか。じゃあ……このスペシャルメロンパフェで。」

「ぐぐっ！」

本当に遠慮なしの注文に、マイコはメニューを見ながら思わず声がもれた。そして次に財布の中を見る。

「大丈夫なんですか？変えましょうか？」

そのマイコのリアクションを見て、やっぱりやり過ぎだったかなとイサコは思った。

「へ？なんの、たかだかパフェじゃない。すみません。このスペシャルメロンパフェとカプチーノお願いします。」

「かしこまりました。」

マイコはそのまま勢いでウェイターに注文した。そして「はあ」と小さくため息をついた。

「意外ね。天沢さん、そういうの好きなんだ。」

気をとり直してマイコが訊ねる。

「メロンが好きなんです。小さい頃から。」

「なんて贅沢な子どもなの。」

驚いた表情でマイコがイサコを見る。好きな食べ物にメロンが出てくる子どもは案外珍しいらしい。

「普段はメロンパンとかよく食べてるんですけどね。それよりさっきの話、詳しく聞かせてもらえますか？」

イサコが真剣な顔つきになって訊ねる。マイコも水を一口飲んでからうなずいた。

「うん。待ってね。色々言わないといけないことがあるから、小此木さんのお父さんにメールでその項目を送ってもらったのよ。」

マイコはそう言うとメガネを立ち上げて操作し始め、そのメールをウインドウに出した。

「えーとね。まず1番重要な項目からいくわね。この度メガマスはイマーゴを含むメガネの不具合と電脳コイル現象の存在、旧コイルス社の猫目技師の電脳医療システムに関する研究の功績を奪い取った過去を公表することを決定した。さらに、先週の事件においてその欠陥が問題視された、交通における電脳ナビシステムを全国で無期限停止にすることも併せて決定した……そうよ。」

マイコ自身がその意味をよくわかっていないんじゃないかとイサコは思った。そして短い報告の間にあまりにも多くの情報が含まれすぎていて、イサコ自身もそれをすぐに整理することはできなかった。しかしそれらを総合して、メガマスが何をしようとしているのかは察しがついた。

「つまり、今までメガマスが抱えて来た秘密事項を、すべて公表するってことですか？」

「……そうね。小此木さんのお父さんに聞いた限りではそういうことだった。」

マイコがその話を聞いたときのことを思い出しながら答える。

「色々と訊きたいことはあるんですけど、一番疑問に思うことを訊きます。なぜそれを公表するのがこのタイミングなのか。大黒で起こった先週の事件が、メガマスにそのことを公表しなければならない危機感を与えたということになるんでしょうか？」

「かいつまんで言えばそういうことね。小此木さんも、先週の事件でメガマスの上層部はかなり動揺したっておっしゃっていたわ。ごめんなさい。私もそのすべてを理解してるわけではないけど、夏の事件の真相も含めて私なりに勉強してきたつもりよ。あなたの質問にはできるだけ答えるようにするわ。」

マイコもメガネのことを学ぶかたわら、一連の事件についてもできるかぎりで把握しようとしていた。自分の担任する子ども達が巻き込まれたのだからそれが務めだと思って。

「じゃあまずは簡単な質問からいきますね。メガマス上層部をそれほど動揺させた、先週の事件っていうのは一体どういうものだったのか。」

「オッケー。事件は４月１日の午後８時４０分頃、大黒市中津交差点付近にある廃ビルで起こった。その時、ダイチ君達や小此木さん達を含めた計２０人弱の子ども達が大規模な電脳戦争をしていたの。ところがその混沌の中で、突然ビルの中に通路が開いた。現れた鍵穴は計１１個。そしてその中からは無数のヌルが現れたの。その時ビルの中にいた子ども達のうち、小此木さんを含む４人の子ども達が“あっち”と呼ばれる空間に連れて行かれた。その他の子ども達はヌル達と必死に戦って、その間に駆けつけた空間管理室によってなんとか無事だった。連れて行かれた小此木さん達も、その後どういうわけか通常空間に戻って来られたの。」

イサコにとってその話は驚きの連続だった。先ほどのメガマスの話も含め、大黒市ではとんでもないことが起こっていたのだなと痛感する。その中でも心配だったのはやはり、ヤサコのことだった。

「まさか、通路が、そしてヌルが現れて、小此木が“あっち”の世界に連れて行かれたなんて……それにどういうわけか通常空間に戻って来られたって言われましたよね。それって一体何を意味しているんですか？」

「それが未だに原因不明なの。小此木さんも他の“あっち”に連れて行かれた子ども達も、その空間がまるでブラックホールに飲み込

まれるような光景を見て気を失い、目が覚めると通常空間に戻っていたって証言しているの。」

「原因不明？そうですか。それに気になるのは通路やヌルが現れたことです。あれはあの夏の事件ですべて消え去ったはず。」

次のイサコの質問に、マイコは一呼吸おいた。

「……天沢さん。猫目タケル君のお兄さん、宗助さんを知ってるわね。」

「知ってるも何も、５年間兄を一緒に探した人です。あれは、結局嘘だったけど……あの夏の事件の後失踪し、そしてその先週の事件の後に逮捕されたんでしょう？それだけは私もメガマスの人から知らされました。つまり先週のその事件を起こした犯人は宗助？」

「そこまで知ってるなら話は早いわね。その通りよ。」

「じゃあ、その通路やヌル達も宗助がまた新たに作り出した？」

「それは違うわ。そう、先週の事件で現れた通路やヌル達を生み出したのは、小此木さんのお父さんを中心にした、メガマスのプロジェクトチームよ。」

マイコの言葉をイサコはにわかに理解できなかった。なぜメガマスが、忌まわしき存在だった“あっち”の世界をまた再び生み出したのか。

「どういうことなんですか？」

「お待たせ致しました。スペシャルメロンパフェのお客様？」

イサコが身を乗り出して訊ねたタイミングで、注文していたモノがきた。イサコも少し興奮していたのを恥ずかしく思い、乗り出した身を戻しながら「私です」と小さな声でウェイターに言ってパフェを受け取った。

「その辺の事情もきちんと説明するから、それを食べて少し落ち着きなさい。」

マイコ先生も柔らかい表情でイサコをたしなめた。イサコは話を聞くうちにだんだんと食欲がなくなってきていたが、マイコに気を遣わせないように少しずつ口にすることにした。

「……それで、どうしてメガマスがそんなものを開発したんですか？」

イサコの質問に、マイコはゆっくりと上品にカプチーノをすすってから答えた。

「実は、小此木さんのお父さんは、医師であった小此木さんの祖父の研究を継ぐつもりだったの。この話はまだ企業秘密らしいから大きい声では言えないんだけど、小此木さんの祖父とタケル君のお父さんが進めていた電脳医療に関する研究をね。」

「それってまさか……」

イサコが顔を上げる。

「そう。その2人の研究者が完成させた、イマーゴによる電脳医療で治療を受けた患者は世界でたった1人、あなたよ。でもあなたも知っての通り、結果は失敗に終わった。小此木さんの祖父もそれが原因で亡くなった。」

「ええ。その研究は一連の事件の発端となったものでした。それをどうして今更掘り返そうと？」

「確かにあなたの場合は失敗だった。でもあなたは、あの電脳医療のおかげで交通事故でお兄さんを亡くしたショックからなんとか立ち直った。」

交通事故に遭ったイサコは、生死の境をさまよって奇跡的に意識が戻って来た。しかしその事故で兄が亡くなったことを知ると、そのショックでまた意識を閉じ込めた。

「……立ち直って、いたのかどうかはわかりませんが。でも確かに、あの時の私はあの空間の中でお兄ちゃんにサヨナラをするはずだった。それができていれば、私は兄の死もなんとか受け止められたのかもしれません。ただ、あの時が失敗だっただけで。」

「ええ。電脳医療自体の治療効果は大きかったはずなの。その電脳医療はイマーゴの子どもしか治療できないけど、それでは普及は見込めない。だからメガマスは、イマーゴを持たない人でも同じ治療ができるような改良をしようとしたの。もちろん2度と同じ失敗を

しないよう、安全性も高めた上で。」
それ自体はイサコも賛成だった。しかし問題なのはそれが先週の事故の原因につながったことだ。
「なるほど。それを実現するためにメガマスはわざわざ同じ空間を作ったわけですね。私が生み出し、のちに変容をとげた空間を。俗に“あっち”と呼ばれ、ミチコが住みついた空間を。」
「その通りよ。メガマスが手に入れた旧コイルス社の資料。そして、小此木さんのお宅で見つかった小此木さんの祖父の研究資料。それらを使って。その空間を自由にコントロールできるシステムを、メガマスは空間制御プログラムと呼んでいる。」
「事情はわかりましたが、なぜヌルさえも復活させたんですか？正常なヌルならまだしも、子ども達を襲うような野生化したヌルも作り出すなんて。」
イサコが理解できないところはそこだった。この調子でミチコも復活させたんじゃないだろうなとメガマスを疑った。
「その野生化したヌルについてなんだけど、メガマスはそれらを使ってある実験を行う必要があったの。そのために正常なヌルに少し手を加えたみたい。」
「実験？なんのためのですか？」
マイコはまたそこで一呼吸おいた。どうやらそうする時は言葉を選んでいるようだとイサコは思った。つまり、自分のデリケートな部分に言及しようとしているのだと感じた。
「天沢さん。葦原カンナさんの交通事故、知ってる？」
マイコの言葉に、イサコはなるほどと思った。ひょっとしたらカンナの事故は、自分が今最も後ろめたいことかもしれないと思った。
「……もちろん。その事故には私が絡んでいるんですから。私が開いた通路が原因となって、彼女は亡くなってしまったのですから。そう言えば、私はまだ葦原さんの遺族や、原川君にもきちんと謝っていませんでした。それなのに、私は自分だけ気分を切り替えて中学校生活を送ろうとしていた。」

「そんなに思いつめないで。あれは事故。あなたに責任なんかないわ。私もあなたを責めるつもりなんかない。葦原さんも原川君も、あなたにそのことを引きずったままこの先の中学校生活を送ってほしいとは思っていない。」

うつむくイサコにマイコがいたわるように声をかける。やはりこの子は誰よりも純粋で優しい心を持っているんだなと、マイコは思った。

「話を続けるわね。その実験を行った理由は、交通事故の原因の裏付けをするため。具体的には、イマーゴと通路の開く位置の関係を立証するため。」

「何のためにですか?」

「その原川君は、メガマスの旧幹部を訴えようとしているの。小此木さんのお父さん達、メガマスのサポートを受けながら。」

「原川君が、メガマスの旧幹部を?」

どういうことなのだろうとイサコは顔を上げた。

「そう。メガマスの旧幹部達は、その交通事故の真相をすべて知っていた。イマーゴというメガネの不具合と電脳コイル現象の存在を明るみにしたくない旧幹部達は、事故をカンナさんの不注意として処理させた。事故を担当した大黒市警交通課に圧力をかけて。」

「なるほど。旧幹部達の事実隠蔽によって、カンナさんは名誉を毀損された。それが原川君には許せなかったわけですね。」

「ええ。大黒市ではその交通事故の再調査が行われている。話を戻すと、その隠蔽された事実を立証するために、メガマスの開発した空間制御プログラムを実験に使ったってわけ。野生化したヌルもその時に生み出された。」

この説明でイサコの中バラバラだった真実が1本の糸としてつながった。自分の知らないところでそれほど多くのことが動いていたのかと、改めて思った。

「そうだったんですか。そしてその空間制御プログラムに目を付けた宗助が、ハッキングか何かでそれを暴走させたというのが、先週

の事件の真相だったんですね。」
「大まかだけど、そういうことね。宗助さんは新東京を本社に置くサイバーゲートウェイという会社と協力してメガマスを貶めるつもりだったみたい。それにさっき言ったメガマス旧幹部達も、現メガマス政権の転覆を目論んでいた。旧幹部達のメディア操作によって、先週の事件で電脳コイル現象が明るみにされかかったの。それらの周辺事情に危機感を抱いたメガマスは、自ら真実を公表しようと決意したというわけね。」
今のメガマスはかつてないほどに力を失いつつある。それならば真実を隠し通すより、すべてを清算して再建の道をたどった方が得策だというのはイサコも同感だった。依然メガネの権利を手中に収めている以上、それは会社の存続に関わるような痛手ではない。
「なるほど。その電脳医療システムの完成というのが、メガマス再建の切り札ということですか。しかし、それほど重要なプログラムがなぜまんまと宗助にハッキングされたのでしょうか?」
イサコは不思議に思った。メガマスという会社は上層部が入れ替わったとはいえ、そこまで脇は甘くない。
「そう。そのことで天沢さんに聞かないといけないことがあったの。小此木さんのお父さんのお話では、そのハッキングの際にＩＬコードという暗号が使われたらしいの。」
「ＩＬコード?」
「私も詳しくはわからない。暗号の1つらしいんだけど、それを使えばあらゆるセキュリティを突破してネットワーク経由で対象のコンピューターに忍び込めるの。宗助さんはそれを使ったんじゃないかって。」
「そんなものが。」
イサコはつぶやいて考え込んだ。暗号には詳しいイサコだが、そんな暗号を聞くのは初めてだった。
「その様子だと、あなたも知らなかったみたいね。あなたが宗助さんと協力関係にあった時、宗助さんがそれを使っていたのかどうか

を聞こうと思ったんだけど。どうやらその線はなさそうね。弟のタケル君に聞いても知らないって言ってたから。」

「ええ。私も宗助がそんな暗号を使っていたという記憶はありません。それは宗助が失踪してから会得した暗号だと思います。そのサイバーゲートウェイの人に教わったとか。」

「なるほど。わかったわ、ありがとう。小此木さんのお父さんにはそう伝えておく。とりあえず、私があなたに話さなければならないのはこのくらいかな。お疲れさま。」

マイコの言葉に、本当に疲れたとイサコは思った。この短い間に様々な情報を整理しないといけなかったので、頭が痛いぐらいだった。

「あら、全然パフェが減ってないわ。話に集中しすぎたわね。溶けないうちに食べないと。」

「あっ、そうですね。」

話し終えて疲れた2人は、この後カフェの窓から散りゆく桜を眺めながらゆったりとした時間を過ごすことにした。メガネとは関係のない世間話なども挟みながら。

#１４　帰ってくる電脳ペット　ｐａｒｔ４

おだやかな午後のひとときを過ごしたイサコとマイコ。マイコはイサコに伝えるべきことを伝え役目を終えたので、これからまた大黒に戻るという。イサコは最寄りの駅までマイコを見送ることにした。

「そう言えば、聞いてませんでしたね。」

「何が？」

いきなりの言葉に、マイコがイサコの方を見た。

「どうして大黒市で起こった事件を私に伝えに来られたのが先生だったのか。話を聞いていて疑問に思ってたんですけど。」

「ああ。まあ色々あるんだけどね。大きな理由の１つはあなたに会ってあの時のことを謝りたかったこと。もう１つあげるとすれば、たまたま今日私が空いてただけなのよ。」

「そうなんですか？」

まるでバイトのシフトのようにマイコが言うので、イサコは少しおかしくて笑ってしまった。

「言い換えると、小此木さんのお父さんや原川君のオバさんが忙しかったってこと。そこで小此木さんのお父さんに頼まれちゃってさ。小此木さんのお父さんも、メガマスの金沢支社が気を利かして事件のことをあなたに伝えることはしないだろうと思われたみたいで、でもやっぱりこのことは早めにあなたの耳に入れた方がいいということでね。それで私も小此木さんのお父さんから事件の概要を聞いた時に、金沢に行くことを承諾したのよ。メガマスは事件の処理で忙しいらしいわ。」

「そうだったんですか。そう言えば、原川君のオバさんって今何をしているんですか？」

イサコは玉子のことを思い出していた。あの事件では追いかけ回されたり、“あっち”に入り込んだハラケンを助け出すために協力し

たりした。とにかく落ち着きのない人だったという印象がある。
「ああ。玉子さんはね、今は小此木さんのお父さんと同じ、空間管理室に勤めているわ。もっとも、今度はメガマス本社の空間管理室本部っていうところが職場らしいけど。」
「え？確かあの事件の時にクビになったんじゃないんですか？サッチーを色々と暴走させて破壊したことが咎められて。」
イサコはあの事件の後も、入院中に玉子と何度か会っていた。その時に玉子から自分が知らなかった事件の真相などを聞いたのだ。
「そうなんだけど、実は先週の事件の時にね、古い空間が大量発生する大黒市を見て玉子さんは復職を望まれたの。でも今回はメガマス上層部がそれを許さなかったみたい。ところが玉子さんはその命令を無視して、サッチーをハッキングしてまでフォーマットを遂行したの。」
「ハ、ハッキングですか？相変わらずメチャクチャですね。」
でもあの人ならやりかねないと、イサコ自身はその行動に納得した。
「そうね。でもその時は、小此木さんのお父さんが協力してあげていたみたい。小此木さんのお父さんも玉子さんの手腕は買っていたそうで、どうしても玉子さんを復帰させてあげたかったって。でも結果的に、廃ビルの異変にいち早く気付いて子ども達を助けたのは玉子さんだった。」
「漫画みたいな話ですね。あの事件の時は本当に破天荒な人だと思っていましたけど。でもそこからどういう経緯で管理室に復帰したんですか？」
「うん。これは小此木さんのお父さんの話だけど、メガマスもこのまま玉子さんを野放しにしておくと同じことをやりかねないと思ったらしいの。だからメガマスに復帰させて、その管理下に置きたかったらしいわ。言ってみればメガマスの最終兵器になったってことなんだけど。」
マイコの話に、イサコは声を出して笑った。メガマスの気持ちがよくわかったからだ。そんな理由があってメガマスは玉子を管理室本

部という現場からは少し離れた部署に置いた。しかし空間を管理するという点では同じなので、玉子の経験はそこでも役立つ。そして本当に大黒市が窮地に陥った時には、満を持して空間フォーマットに乗り出す切り札となる。ある意味2．0を越えたな、とイサコは思った。

「すごいですね。メガマスの最終兵器ですか。しかし玉子さんもそれをよく承諾しましたね。本当は現場にいたかったんじゃないですか？」

「ええ。でも何かね、メガマスでちょっと調べたいことがあるって言ってたわ。とりあえずしばらくはそのまま管理室本部にいるって。学校にも通いつつね。」

玉子はあれでもまだ今年で高校3年生だ。正直高校を卒業しなくても、メガマス社員としての将来は約束されているのだが。

「調べたいことってなんですか？」

「さあ。そこまでは聞いてない。たまに金沢に出張になるかもしれないって言ってたから、直接会って聞くといいわ。」

「金沢に？じゃあその時に武勇伝を聞きたいと思います。」

イサコとマイコは笑い合いながら坂道をおりて行く。その下りきったところに駅が見えて来た。

「そう言えば、天沢さんってこれからメガネとどう向き合っていくの？」

マイコが思い出したように訊ねた。

「どう向き合うっていうのは？」

「いや。この前小此木さんや橋本さんにも会って話してたんだけど、彼女達、そろそろメガネを卒業しようと思うって。ほら、中学生になるとクラブ活動とか色々忙しくなるじゃない？そうなるとメガネで遊んでいる時間もなくなるって。だから、あの2人は春休みの間にメガネでやり残したことを考えるんだって言ってたわ。天沢さんは？最近メガネのこととか考えたりする？」

その質問にイサコは少し戸惑った。実際それを考えたこともなかっ

たし、クラブ活動も何かに入ろうとは考えていたが、それもぼんやりとしか考えていなかった。

金沢に来た当初はまだメガネも手放せないツールだったのだが、ここ最近は本当に電話ぐらいしか使った記憶がない。自分の場合は、気付かないうちに卒業してしまっていたのかもとイサコは思った。イサコは過去を胸に刻み付け、自分の力で新たな生活に飛び込んでいこうと考えていた。過去はもちろんメガネの中にある。つまり、メガネの子どもがメガネ遊びから卒業するための手順を、イサコは自然とこなしていたことになる。

「私は、もうすでにメガネを卒業したんだと思います。おそらく今日お兄ちゃんのお墓に来て、お兄ちゃんとお別れをしたその時に。卒業したと言っても、まだ電話などで使うと思いますが、メガネで周りとつながっていくってことはないのかなと思います。」

イサコがマイコの質問に答える。人を拒絶していたときの自分も、人とつながりを求めていた自分も、メガネを必要としていた。それなら、メガネに頼らないこれからの生活は一体どうなるのだろうかとイサコは思った。その時に初めて自分が新たな1歩を踏み出したことを実感した。

「そう。まあ、みんなそうやって大人になっていくからね。そういう意味じゃ、私は子どもになっていくわけだけど。でも、卒業って言ってもそのタイミングは学校とかと違って人それぞれなわけじゃない？あなたほどのメガネ使いなら、ひょっとすると周りがそれを許してくれないかもね。」

「確かに、そうかもしれないですね。」

マイコの言葉にも一理あると思った。結局は周りの人に振り回されて、自分の中の考えも少しずつ変わっていく。かつての自分ならそれを拒否していただろうと思ったが、そう思わないのは自分が変わった証だと思えた。人に振り回され、良い意味で人に翻弄されて生きていくのも、それは人と人とのつながりがあればこそだ。そんな人生もそれはそれで楽しい。少なくとも1人で生きていた時よりは。

「メガネを勉強していて思うの。メガネには人を惹き付ける不思議な力があるって。だから小此木さんや橋本さんも口ではああ言ってたけど、簡単には卒業できないと思う。メガネを卒業したあなたでさえも、また引き戻される可能性もある。でもそれはネガティブなことじゃない。むしろ、メガネは私たちの人生を豊かに彩ってくれるアイテム。時には危険なことにつながるけれど、適度に付き合っている分には心配はいらない、って、あなたに改めて言うことじゃないのかもしれないけど。」

「いえ、そんなこと。心に染み渡るありがたいお言葉です。」

イサコが笑顔でマイコに返す。本当にその通りだとしみじみ思った。

「まあ私が言いたいことは、メガネがあろうとなかろうと、友達をいっぱい作って、楽しい中学校生活を送れってことだ。」

マイコはそう言ってイサコの背中をパンパンと叩いた。

「はい。私も頑張っていこうと思います。小此木達にも負けないくらい、色んな友達を作りたいと思います。」

「うん。よろしい。私もそうなるように影で応援してるぞ。」

いつの間にか2人は駅に着いていた。今日は本当に先生と話ができて良かったとイサコは思えた。マイコの底抜けの明るさは一緒にいるだけで元気が分けてもらえる気がする。自分では前向きに生きていこうと言い聞かせても、どこかに一抹の不安を抱えていた明日からの中学校生活も楽しく送っていけそうな気がした。

「最後になったけど、これ。私の連絡先よ。何か相談があったら遠慮なく電話してきてね。」

マイコはそう言うとウインドウを出してイサコに渡した。イサコはそれをすぐにメガネに取り込む。

「じゃあ。今日はありがとう。楽しかったわ。勉強にクラブ活動、精一杯頑張るのよ。」

「はい。こちらこそありがとうございました。またいらしてください。また大黒に行った時にはよろしくお願いします。」

マイコはイサコの言葉にうなずくと、手を振りながら駅の構内に去

って行った。イサコも見えなくなるまで手を振って、そして夕空を見上げた。明日からまた頑張っていこう。その時の雲一つないオレンジ色の空と同じくらい、イサコは晴れやかな気持ちになっていた

#１４　帰ってくる電脳ペット　ｐａｒｔ５

翌日からは授業も始まり、本格的な中学校生活へと突入する。この日もイサコは例によってユイと一緒に登校し、まだ慣れない校舎に緊張しながら教室へとやって来た。小学校時代は転校を何度か経験したイサコだったが、やはりそれとは別物の雰囲気を感じる。休み時間もまだ誰もが緊張を保ったまま、基本的には同じ小学校の友達と固まって話をしていることが多い。イサコもユイと入学式の時に知り合ったアサミと3人で話をしていた。授業とそんな休み時間を繰り返しながら、なんとか昼休みにこぎつけたという印象だ。

「なんかさ、すっごく肩がこるよね。休み時間もこう知らない人が多いと。色々話しかけようかな、なんて思うけど、みんな小学校の時の友達と一緒にしゃべってるから声もかけづらいしね。」

昼休みもイサコとユイとアサミで机を寄せ合って持って来た弁当を食べていた。そんな中でユイが少し声を細めて言った。

「ああ、わかるう。隣のクラスまでしゃべりに行ってる子もいるしね。こんな調子で、みんなと仲良くなれるのかなあ。」

アサミの言葉に、やっぱりみんなそう思っているのかとイサコは少し安心した。今まで自分1人がクラスに打ち解けないというのは経験したことがあるが、クラス全員が、ということはイサコにとっても初めてだった。こういう時には積極的に声をかけるべきだろうかと悩み、やはりキャラにもないことをするとかえって失敗するような気がして、イサコもユイとアサミとの関係だけに甘んじているところがあった。

「ユイとかはすぐに誰とでも打ち解けそうじゃないか。うらやましいよ、そういうキャラって。」

イサコは母が作ってくれた卵焼きを口に入れながらユイに言った。

中学校では毎日弁当を作らなければならないと、イサコの母も初日で少し気合いを入れて作ってくれた。

「そんなことないよ。私なんかダメ。人見知りだから。」
ユイが首を振って否定する。
「そうは思わないけどな。私に話しかけてきてくれた時も、ものすごいニコニコしながらやって来た気がするが。」
「それは、隣のマンションにイサコが住んでいるって気付いたから。ずっと一緒に学校に行く人がいなかったからよ。私達のマンションって、校区の端の方だったし。」
イサコはその時のことを思い出していた。いつも通り1人で学校に行く途中で、後ろからいきなり声をかけられて驚いたが、その時のユイのニコニコした表情を見て朝から今日は何かいい日になりそうだと思った記憶がある。雰囲気はマイコ先生に近いのかなとイサコは思った。
「でも、イサコってすっごく落ち着いてるよね。大人っていうか、人と人との距離のとり方はわかってるみたいな。」
「そ、そうか?」
アサミの言葉にイサコは驚いた。内心はその真逆だ。自分から声をかけることとが苦手だから、どうしようか迷いながらなす術もなく立ち尽くしているだけ。なのに、自分の事を何も知らない人から見ればそう思われるのかとイサコは戸惑った。
「そう。この子は本当に大人。そして美人。いずれこの学年でも男子の憧れの的になるんだから。」
ユイが本気で言ってるのか、ちゃかしているのかわからないような言い方でイサコを褒めた。
「おいユイ。いい加減なこと吹き込まないでくれ。私は大人でもないし、ましてや美人でもない。それに人と人との距離感なんて、私にはまったくわからない。」
「またまた〜。この奥ゆかしさも大人の余裕ってやつ?あ〜あ。私もイサコみたいになりたいよ。」
どうやら本気で言ってるらしい。前から気付いていたが、このユイはかなり天然だ。その辺もユイとマイコが同じ空気を持つように思

える要因の1つだった。
「ああ。もう好きにしてくれ。」
イサコはユイに自分は大人ではないと言い聞かすのに疲れた。3ヶ月以上一緒にいるのに気付いていないということは、多分これからもそう思ってくれるんだろうなとイサコは諦めた。
「仲いいね、2人って。とても3ヶ月の付き合いじゃないみたい。」
アサミが少しうらやましそうに言った。ユイにはいくつも勘違いされているとはいえ、傍目から見てそう思ってもらえるのはうれしいなとイサコは思った。
「まあね。人の絆は時間では決して計れないってことよ。」
「でも、ユイが1番大切にしている電脳犬はもう7年も連れ添っているんだろ?その絆は、時間を抜きにして語れないはずだ。」
「きびダンゴのこと?あの子は別よ。私の5歳のときのお父さんからのプレゼントだもん。小学生の間いつも近くにいてくれた。たくさんの思い出があるからね。」
きびダンゴとはユイの飼っている柴犬の電脳犬だ。ユイがその犬と散歩しているのをイサコは何度か見かけたことがある。
「そう言えば、きびダンゴってまだ元気なの?」
「年のわりには元気よ。そう言えばアサミちゃん、この前ネコの電脳ペットのセナ、亡くしたんだってね。」
急にユイがトーンダウンした。それを聞いたイサコもこの話題は触れてはいけなかったのかと、少し申し訳なく思った。
「そう。そのことで言おうと思ってたことがあるの。実は5日くらい前、セナが帰って来たのよ。どこからともなく。」
「えっ!?」
イサコとユイの声が重なった。
「でも、この前私には亡くなったって言ってなかった?」
「うん。メモリアルも届いたから、行方不明だったわけでもないことは確かなの。」
そんなことがあるのか、とイサコは思った。死んだペットが帰って

くるなど。
「それ本当にセナなの？」
ユイがいぶかしげに訊ねる。
「うん。私も5年間飼っていたんだもの。間違えるはずがないわ。今も家でひなたぼっこでもしているはずよ。でも、何で帰って来たのかなあって。そりゃうれしいけど、なんとなく気味が悪いの。もしかしたら、セナが戻って来た日の辺りに起こった電脳事故が原因なのかもって。」
「ああ、そんな事故があったらしいね。」
ユイが相づちを打つ。しかしイサコにとってそれは初耳だった。
「おい。その事故ってなんだ？」
「え？イサコ知らなかったの？イサコはメガネにすごく詳しいのに。」
ユイが不思議そうにイサコを見る。まさか先週の大黒市の事件のことを言っているわけではないはずで、もしかしたらそのことに気をとられるあまり、自分が見落としていたのかもしれないとイサコは思った。それにこの頃はメガネを使うこともあまりなかったのでなおさらだ。
「そうなの？」
アサミもイサコの方を見た。
「何がだ？」
「いや、イサコがメガネにすごく詳しいって。なんかとっても意外。」
「本当よ。イサコは金沢に来る前はメガネの本場、大黒市にいたの。その辺のメガネ使いなんか、イサコの足元にも及ばないんだから。」
ユイが自慢げに紹介した。実はイサコが金沢に来てからも、メガネに関するちょっとした出来事があり、その時にイサコはその腕を金沢のクラスメートに見せたことがあった。それ以来同じ小学校の生徒からは、イサコのメガネの実力は認知されていた。
「いや、そんな大したものじゃない。それより、その事故について

聞かせてくれないか。」
イサコはこの時、教室全体の話し声のボリュームが下がっていたような気がした。まるで誰もが自分達の話に耳を傾けているような、そんな錯覚を覚えた。イサコは少し警戒して声を細めて訊ねる。
「私も詳しくはわからないけど、友達から聞いた限りで話すわ。この学校の北に、黒井交差点ってあるでしょ？そこで空間の不具合が起こったらしいの。」
「空間の不具合？」
「うん。具体的には何が起こったのかわからない。でもその時、その周辺にいた子ども達のメガネが何らかの原因で壊れてしまったらしいわ。」
「メガネが壊れたの？うわ、おっそろしい。」
アサミの話にユイがぶるっと震える。イサコはその話を聞いて深く考え込んでいた。
「それに死んだペットが戻って来たのは私だけじゃないの。実は、私の友達も何ヶ月か前に亡くしたペットが、やっぱり同じ日に帰って来たって言ってて。」
「ほう。それはやっぱり事故と何らかの関係がありそうですな。どうだね、天沢君。何かわかったことはあるかね。」
2時間ドラマの刑事か何かのマネをしながら、ユイがイサコに訊ねた。
「いや、悪いがさっぱりだ。実は私もメガネに関する事故にはしょっちゅう遭遇しているんだが、これは初めてのケースだ。」
「そう。まあ、セナが戻ってきたんだし、私としてはそれはそれでいいんだけど。」
どうもイサコにもわからないみたいなので、アサミは話を終えようとした。
「いや。このままじゃどうも消化不良で気持ち悪いわ。かくなる上は、私たちでその事故を調べて、セナがどうして戻って来たのか調べましょう。」

そこで好奇心おう盛なユイが宣言した。
「おい。私は別にいいんだが、危険が伴うんじゃないか？実際その事故でメガネが壊れた子どももいるんだろう？」
イサコが心配げに言う。ユイは特別メガネに詳しくないし、話に聞く限りではアサミもメガネには疎そうなので、できるだけ巻き込まない方がいいんじゃないかとイサコは思った。もちろん、イサコもその事故には興味があり、言われなくても調べてみようと考えていた。
「大丈夫よ。私たちにはイサコがついているんだから。危ない時はイサコに守ってもらうつもりだし。」
「おいおい。あんまりアテにされると困る。言っただろう、私も初めてのケースだって。正直何が起こっても責任は負いかねるぞ。」
「何を水臭い。だからこそ私達の助けも必要になるかもしれないじゃない。言ってもイサコはここに来て半年。ずっとここに住んでいる私達だからこそ、何かわかることもあるかもしれないでしょ。」
ユイの言葉に、確かにそれもあるなとイサコは思った。それにどれだけ断っても、ユイなら何が何でもついてくるだろうなとイサコは考えた。
「仕方ない。じゃあこの3人で調べようか。言ったように、万が一メガネが壊れるような事故が起こっても、責任は負いかねるからな。」
諦めたようにため息をつきながらイサコが言う。
「よし。じゃあ今日の放課後に早速調べよう。アサミ、セナも連れて来てよ。何かに反応するかもしれないしさ。」
「わかったわ。よろしくね、イサコ。」
こうして3人はこの日の放課後に、その事故について調べることになった。

#１４　帰ってくる電脳ペット　ｐａｒｔ６

放課後、学校近くの公園で待ち合わせすることにしてイサコ、ユイ、アサミは一旦家に帰った。この日から5日ほど前に学校から北にある黒井地区で起こった電脳事故、そしてその日を境に起こり始めた、死んだはずの電脳ペットが戻ってくるという怪奇現象の真相を突き止めること。それが3人の目標だ。

イサコは昼休みにその話を聞いて、気になっていたことがあった。イサコには、大黒市でキラバグを集める際に電脳ペットをイリーガルのおとりに使い、多くの電脳ペットを行方不明にしてきた過去がある。もちろん、ペットの行方不明事件の全てがイサコのせいだというわけではないが、とにかく電脳ペットに関しては後ろめたい罪悪感にかられる時があった。ヤサコのペットであるデンスケを、あの事件の時に救えなかったという苦い思い出もある。そういったことがあったので、電脳ペットに関するトラブルをこれから積極的に解決していきたいとイサコは思っていた。ユイの提案をすぐに受け入れたのもそのためだ。

そう考えると自分は、メガネから全然卒業できていないなとイサコは思った。もちろんマイコ先生の言う通り、ムリに卒業しなくてもいいし、周りの人からメガネで頼られればそれに応えられたらいい。こうやってメガネとは切っても切れない人生を歩んで行くんだろうなと、この時イサコは意識した。

「お待たせイサコ。じゃあ行こっか。」

イサコは帰ってからカバンを置いて着替えてすぐに準備が整っていた。なので先にユイの住む隣のマンションの下でユイが出てくるのを待っていたのだ。

「おい。きびダンゴも連れて行くのか？」

イサコはユイの足元を見て言う。すると若干太り気味の柴犬がくうーんと鼻を鳴らしながらイサコにすり寄ってきた。イサコはこのき

びダンゴに妙になつかれていた。
「いいじゃない。散歩がてらよ。そういうイサコはあの子連れて来てないの？」
「モジョ？」
ユイの言葉に反応したのか、今度はイサコの胸ポケットから、イサコのペットであるモジョが顔をのぞかせた。
「あっ、いたいた。なんだ、ちゃんと連れて来てるんじゃない。」
どこかうれしそうにユイが言う。どうやらユイもこのモジョが気に入っているみたいだった。
「コイツはまあ色々と調査に使えるから連れて来たんだ。でも今日はアサミと3人でペットの見せ合いっこをするために集まるんじゃないだろう？仮にも空間の事故が起こった現場に行くんだから、大事なペットは連れて来ない方がいいと思うが。」
「大丈夫よ。逆に普段散歩する時にそんな危険な空間があれば察知できるように、きびダンゴにもその事故現場がどんなものか見せておいた方がいいと思ったの。ねえ、きびダンゴ！」
ユイの言葉に息がぴったりあった感じで、きびダンゴもワンと返事をした。
「……なるほど。ユイがなんでこの調査に乗り気だったのか、読めたぞ。」
「げげ！」
くすっと笑いながらイサコが言った。ユイはバレたか、というように顔を引きつらせた。
「死んだはずなのに帰ってくる電脳ペット。ということは死んだ電脳ペットを蘇生させる方法があるのかもしれない。それならその方法を知りたい。このきびダンゴのために。そう思ったんだろ？」
さすがにイサコだと思ったのか、ユイは否定せずにそのまま静かに「うん」とうなずいた。
「気持ちはわからなくもないが、電脳ペットでも生のペットでも、いつか死んでしまうのは避けられないんだ。そのお別れはつらいか

もしれないが、それでまた飼い主も強くなれる。それに電脳のペットでも死んでしまうということは、その分疲れたということだろう。それを無理矢理蘇生させるなんて、それはそのペットのためにもならないはずだ。まあ、そんな方法があると決まったわけじゃないが。」

イサコはユイに言い聞かせながら、また誰かさんのことを思い出していた。その誰かさんは、そのお別れをどう受け止めて乗り越えていったのだろうかと思いながら。

「そんなことないよ。ねえ、きびダンゴ。年は取ったけど、別に疲れてなんかないもんね？私やイサコともっと一緒にいたいもんね？」

またきびダンゴは威勢良くワンと返した。この犬もユイとずっと一緒にいたら疲れるだろうにとイサコは思ったが、年の割には元気がいい。それにイサコはどうも自分もそういったペットとの別れを体験したことがないので、この先ユイを説き伏せる自信はなかった。何よりこの相性ぴったりのユイときびダンゴに、そんな現実的な話をするのは気が引けた。

「わかった。まあそんな方法は存在しないと思うが、調べるだけ調べてみよう。とりあえずアサミも待たせていることだし、夕日寺公園に急ぐか。」

「うん。じゃあきびダンゴ行くぞ！レッツゴー！」

ワンワンと嬉しそうにとび跳ねながら、きびダンゴは飛び出し、ユイも後を追った。あの年であの運動量、それなのに若干太り気味と、一体あの犬はどういう食生活を送っているんだとイサコは思った。そして、ユイと一緒にいて自分が一番疲れているのだろうと思った。

待ち合わせ場所の夕日寺公園は坂を上ったところにあり、そこからは自分たちが住む街が見晴らせるようになっている。ユイときびダンゴがその坂を無駄に走ってくれたので、ついた時にはイサコも息を切らしていた。すでに公園にはアサミが電脳ネコを抱いて待っていた。

「お待たせアサミ。」
「ううん、私もついさっき来たところ。そんなに急いで来なくても良かったのに。」
アサミの言葉に、イサコはまったくその通りだと思った。それに自分の体力も気付かないうちに落ちたなあと感じた。確かにここ最近はメガネを使って走り回ることはしていない。おそらくいつもきびダンゴと今のような追いかけっこをしているユイの方が、遥かに体力はあるだろうなと思った。小さくてすばしっこくて体力がある、まるでフミエのようだとイサコはユイを見た。
「セナも久しぶり。よく戻ってこれたね。」
セナは白と茶色と黒の三毛猫だ。アサミに抱かれたままのセナはユイに、にゃあと返した。それは明らかに見覚えがあるという反応だった。本当に1度は死んでしまったとは思えない。一方でセナはイサコを見る時には、若干警戒した目つきに変わった。
「なあ、ちょっとセナを見てもいいかな。データの異常がないかどうかだけ確認したいんだ。」
「いいよ。でもこの子結構人見知りするから、初めての人に抱かれると暴れだすの。だから私が抱いたままでいい?」
「別にかまわない。」
そう言ってイサコはアサミに抱かれたままのセナにタッチして情報を開く。いくつもウインドウを出して、それを見比べるように詳しく目で辿っていった。
「どうかねイサコ先生? 何か変わったところでもあったかね?」
「うん。どうも見たところ、完全オリジナルのペットのようだ。コピーしたものだと思ってたんだが、その線もないみたいだ。」
「コピー? 電脳ペットをコピーするってこと?」
イサコの言葉にアサミが訊ねる。ユイもイサコの方を向いた。
「ああ。だから、亡くなったっていうのは元々飼っていたセナで、ここにいるセナはオリジナルのコピーじゃないかと推理したんだが、どうも違うようだ。これはオリジナルで間違いない。」

「ちょっと待って。電脳ペットのコピーってそんなことできるの？」
ユイがすごい食いつき方でイサコに訊ねた。
「やろうと思えばできる。聞いたことないか？空間のサーバーの境目を利用する方法を。まず交差点などのサーバーとサーバーの境目に増やしたいペットを置く。そのサーバーをそれぞれＡとＢとし、そのペットは今Ａの地点にいるとする。そのＡのサーバーがデータを更新するぎりぎりのタイミングでペットをＢ地点に移動させるんだ。するとペットが移ったＢの地点にペットがいるのはもちろんのこと、Ａの地点のサーバーもまだペットがいると誤認し、この時点でペットは２匹に増えているんだ。この方法を使えば、電脳ペットは何匹でも増やせる。」
イサコはしゃがみこんで、土の上に木の棒で図を書きながら２人に説明した。
「……よくわからないけど、すごいよこれ。こんな裏技知ってる人なんて周りでいないよ。」
「ほんと、イサコがメガネに詳しいっていうのが納得できた。でも、なんでちょっと見ただけでこのセナがコピー品じゃないってわかったの？」
ユイとアサミはイサコの知識に驚いた。メガネユーザーのレベルが大黒ほど高くはないここ金沢では、イサコの電脳に関する知識はずば抜けている。
「ああ。この方法は結構強引なやり方で、完全にデータがコピーできるわけじゃないんだ。見た目には同じペットでも、オリジナルと違ってデータの中に小さな欠損が見つかることが多いんだが、このセナにはそれがなかった。間違いなくオリジナルと見ていいだろう。」
「じゃあ、やっぱり誰かが生き返らせたってこと？」
「生き返ったと言うべきか。電脳ペットはプログラムだからな。死んだということは、１度そのデータは消えてなくなっている。むしろ生まれ変わったと考えた方が自然かもしれない。ちょっとペット

会社に確認しよう。アサミ、セナのペットＩＤを覚えているか？」
「ペットＩＤね。確か……これだったかな。」
アサミはイサコに言われてセナのペットＩＤが記されたウインドウを出した。イサコはこれを使って、ペット会社にセナの現在の状態はどうなっているのか確認を入れるのだ。
「お電話ありがとうございます。こちら、オンロード・ペットマトン社サポートセンターです。ご用件は？」
「はい。ペットマトンの健康状態の確認をしたいのですが。」
「それではそのペットマトンのＩＤをお教え願えますか？」
イサコはアサミに教えてもらったペットＩＤを女性オペレーターに伝えた。
「少々お待ちください……はい。確認できました。ミケネコ型タイプ０６９のペットマトンですね？」
「はい。」
「おかしいですね。こちらのデータではそのペットマトンは既に亡くなったことになっています。メモリアルもお送りしたはずですが。」
「え、ええ。すみません何かの勘違いだったようです。失礼します。」
「あっ、ちょっと……」
イサコはそのまま電話を切った。セナが生きていることがペット会社に知られると、それは違法電脳体、イリーガルと同等の扱いでフォーマットの対象になるおそれもあるからだ。
「やはりペット会社では死亡扱いだ。これでわかったのは、やはりこのセナはコピーではないということだな。コピーしたものだと、ペット会社にも形跡が残る。だからユイ。さっきの方法できびダンゴを増やそうとしてもダメだぞ。ペットをコピーしたことはすぐにペット会社に知られ、違法電脳体所持の罪に問われる。そしたら一生電脳ペットを飼うことができなくなるかもしれないからな。」
「誰もきびダンゴをコピーするって言ってないじゃない。でも、コ

ピーができるって聞いて一瞬やろうかと思ったけど、イサコの言った方法ややこしくてわからなかったし。何よりきびダンゴは1匹で十分だし。」

ユイの言葉にうれしそうにきびダンゴが吠えている。

「・・・・・でも、この子は一体。今までの話だと、完全なオリジナルで間違いない。でも、そのオリジナルはペット会社も言ってる通り、既に亡くなったことになってる。残る可能性は幽霊としか。」

アサミが少し不安そうな表情で言った。

「幽霊？おいセナ！お前幽霊なのか？」

ユイはそんなセナに必死に訊ねるが、セナはにゃあとあくびするように鳴くだけだった。

「電脳ペットに幽霊も何もないと思うんだが。まあこの謎を解くためにも、とりあえず5日前に事件があったっていう黒井交差点に行ってみよう。そこで何かがわかるかもしれない。」

「わかったわ。行きましょう。」

「よし、きびダンゴ！レッツゴー！」

こうして3人は黒井交差点を目指して出発する。イサコでさえも見当がつかない謎を抱えて。

#14　帰ってくる電脳ペット　part7

黒井交差点はこの近辺でも最も交通量の多い幹線道路の中にある。なおかつ電波状態が良くなく、大黒でいう中津交差点と酷似している。唯一違う点は、それなりに人通りがあるということだ。この辺りには大型スーパーや家電量販店などがあり、幹線道路に面した道には常に人が行き交っていると言っていい。

「とりあえず到着したが、例の事故がどの辺で起こったのかわかるか？」

「私も人づてで聞いた話だから、どこで起こったのかまでは。」

アサミが首を横に振る。黒井交差点の辺りだと言っても、結構範囲は広い。やみくもに探すのは骨が折れるとイサコは思った。

「セナは反応しているか？」

「うーん。いつもと変わらない感じがするけど。とりあえず一回放してみて、セナがどこに行くのか見てみる？」

「大丈夫か？交差点だぞ。」

「大丈夫。ちゃんと首輪とリードを持ってきたから。」

そう言うとアサミは抱いていたセナにリードのついた首輪をかけて、アスファルトの地面に放した。するとセナはどこか行きたい場所があるかのように、アサミの持つリードを引っ張るように歩き始めた。

「おお。ビンゴだね。しばらくついて行ってみましょう。」

ユイが言って、３人はセナの行き先を追った。交差点を渡り、さらにそのまま真っすぐ行って次の曲がり角を左に折れる。そこは大型スーパーの裏にあたる場所で、住宅街に挟まれたその道はきれいに並木で整えられているが人通りは少なかった。

「あれ？セナ、どうしたの？」

その道を少し歩いたところでセナが急に立ち止まった。不思議に思うアサミの方を振り返りながら、何かを知らせようとしているかのように鳴いている。

「あっ、きびダンゴ。」
その時きびダンゴもセナが何かに反応しているのと同じ場所で、ユイに向かって合図するように吠えた。においを嗅ぎながら、まるでここを掘れとでもいうように。
「何かあるのかな?」
「どれ、調べてみよう。」
イサコはその場所にしゃがみ込み、アスファルトを念入りに調べ始めた。しかしそこには見る限りでは不審な点は見当たらない。そこでモジョを胸ポケットから出して、その辺りを調べさせてみた。すると地面を探るようにかぎ回っていたモジョが、何かを見つけたように飛び跳ね始めた。
「なにか反応してるよ。」
「まさか、これは。」
イサコはウインドウを開き猛スピードでキーボードを打ち始める。空間のサーバーへとアクセスし、情報を確かめているのだ。
「やはりな。見てろ。」
何かに気付いたイサコは2人にその場所を注視するように言って、そのままキーボードを打ち続けた。そしてイサコが最後のエンターキーを押した瞬間、その場所に青白く発光する暗号式のようなものが浮かび上がってきた。
「うわ!なにこれ?」
ユイがその暗号式から飛びのくようにして言う。外枠の円の中にいくつもの星形の図形が整然と描かれている、魔方陣のような暗号だった。
「暗号式のようだ。しかしこんな暗号式は見たことがない。少なくとも古流の暗号ではないな。」
「古流?」
何の話だろうとアサミがイサコに訊ねる。
「暗号式にも色々な型があるが、ほとんどがその古流の暗号を原型として発展させたものだ。しかしこの暗号式はそもそもの構造が違

う。私にも解読はできない。」
「暗号式って、暗号屋が使うってヤツだよね。そう言えばイサコも暗号が使えるんだっけ？」
今度はユイがイサコに訊ねた。
「まあ一応な。しかし言ったように、私が使えるのも古流の発展系だ。こんな新種の暗号は初めて見る。でも、これで少し見えてきたな。この地区で起こった事故は、空間の不具合なんかの偶発的な事故ではなく、あくまで人為的に起こされたものだったのかもしれないということだ。この暗号を使ってな。」
「マジっすか。じゃあこんなところにいると危ないよ。きびダンゴ！逃げるぞ。」
ユイはこの暗号の力によってメガネが壊れると思ったらしく、そこから逃げ出そうとした。
「落ち着け。見たところまだこの暗号は機能していない。すぐに何かが起こるというわけでもなさそうだ。」
初めて見るとはいえ、長年暗号を見て来たイサコの経験からそう判断した。機能し始める前にこの暗号の効果を確かめる必要もある。
「でも、なんでこれ最初は見えなかったの？」
「ああ。それはこの空間を管理するサーバーの情報が書き換えられていたからだ。この暗号の部分だけは過去のデータ、つまり古い情報となっていたんだ。私はそれを解除して、リアルタイムの情報に更新したんだ。」
「はあ。」
イサコの説明に2人は生返事で返した。おそらく2人ともその原理を理解していない。それも無理ないかとイサコは話を続けることにした。
「とにかくこの暗号を書いた誰かさんは、巧妙に偽装しながらこの暗号式を完成させようとしている。メガネの技術もこの金沢にしては高い。そいつが例の事故の真相を知っている可能性が高い。」
「なるほど。じゃあその子を見つけ出せばいいってことね。」

「そうだ。ついでに他の暗号も探そう。今調べてみたが、このすぐ近くには同様の暗号はないみたいだ。しかし暗号式はこれ1つだけじゃおそらく機能しない。ここから少し離れた場所に、同じ形の暗号があるはずなんだ。」

「そういうことなら手分けして探しましょう。私達のペットはみんなその暗号があるところには何らかの反応を示すってことでしょう？それを注意深く見ていれば、暗号の位置もわかるってことだよね。」

「その通りだ。じゃあそうしよう。暗号を見つけたら、とりあえず私に連絡してくれ。それとその誰かがこの暗号を書いている場面に遭遇した時もだ。くれぐれも気をつけて。」

「オッケー！」

3人は周辺を手分けして探索することになった。ユイとアサミが暗号を見つけたら、イサコがそこに向かい暗号を確かめる。機能していないことを確認して、その暗号の位置を地図に書き込む。この作業を繰り返して小1時間。とりあえず最初に見つけた位置から半径100メートルほどのエリアはしらみつぶしに調べた。結果、最初に見つけたものを含めて合計5個の暗号式が見つかった。

「暗号を書いた主は見つからずか。さて、これからどうするか。おそらく暗号はこの5つですべてだろう。それぞれが連結していると考えれば、この範囲から外には存在しないはず。」

イサコが地図に書き込んだ暗号の位置を見ながら言った。

「ねえ、この暗号の配置ってさ、暗号式にもあるような星形にならない？」

そこでアサミが気付いたように言って、その地図の角度を変えてみた。そうすると確かにその暗号はそれぞれを線で結べば星形になるように配置されていた。

「本当だ。この配置にも何か意味がありそうだな。」

イサコは言われてみてさらに考え込む。その星形は何を示している

のか。
「この星形の真ん中で何かを起こそうとしているんじゃない？何かさ、魔方陣とかの儀式って、そういう星形の真ん中から何かを召還するようなイメージあるんだけど。」
「それだ！じゃあこの暗号式を線でつないでみよう。その星形の真ん中にある場所で何かが起こるのかもしれない。」
イサコはユイの言葉通りかもしれないと思い、地図上でその暗号を線で結んでみた。
「星形の中心にあるのは……公園？黒井北公園だ。」
「じゃあ、その黒井北公園に何かがあるってこと？」
「その可能性が高い。行ってみよう。」
3人は急いでその公園に移動する。そしてその読みは当たった。陽が傾きかけて小さい子どもがいなくなった公園の真ん中に、1人佇んでいる少女の姿がある。メガネを操作しているのだろうか、その少女は時々地面を確認しながらキーボードを打つように手を動かしている。イサコ達は公園の外から遠目でその動きを観察していた。
「何してるんだろうあの子？小学生？」
少女はユイと同じくらい低い背のわりには髪が長い。イサコは日本人形みたいだなと思った。
「でもあの子、学校で見たことがあるような。私も長い髪の子だなあと思ってみてたから、記憶に残ってるわ。」
「ぎょ！？じゃあ、あの子も中学生？全然そう見えないね。」
アサミの言葉にユイは驚きながらまたその少女を注視した。
「ユイも人のこと言えないだろ。でも、同じ中学校だと言うのなら話は早い。声もかけやすいしな。ユイ。ちょっとあの子に話しかけて来てくれるか？」
「何気に失礼な発言ね。それになんで私が行かなくちゃならないの？行くなら一緒に行こうよ。」
イサコの言葉に少しムッとしてユイが返す。ユイも子どもっぽいとか、背が低いとか言われるとスイッチが入るらしい。

「3人で行くと相手に威圧感を与える。それにユイには相手にとっては打ち解けやすい柔らかい空気があるからな。相手も警戒しないだろう。ここは犬の散歩で偶然通りかかった風を装って、学校で1度見かけたことがある顔だから声をかけたって言い繕いながら近づいてくれないか。」

「言ったじゃん。私は人見知りするって。苦手なのそういうこと。」

「そんなことないよ。ユイは自分で思ってる以上に相手に対してオープンだから。相手も警戒しないっていうのはイサコの言う通りよ。」

イサコとアサミに説得されて、ユイは渋々それを承知した。イサコとユイは公園周りに植樹された木に隠れてその様子を見ながら、ユイはきびダンゴの散歩を装って公園の中に入って行く。ユイとイサコは回線をつないでおり、ユイの会話はイサコ達に届くようになっている。そしてイサコからの指示は、ユイのメガネのスピーカーを通じて耳元に届くように調整されている。

「うまく情報を聞き出してくれよ。ユイ。」

イサコはそうつぶやきながら公園の様子を見守る。ユイがきびダンゴと公園の中に入った途端、例の少女はあからさまにそちらを気にしているような素振りを見せた。

「ユイ。少し警戒されているから、ちょっと鼻歌でも歌いながらわざとらしくなく自然体で近づいていってくれ。」

「簡単に言ってくれる。」

イサコの指示にユイはぼやきで返してきた。とりあえずユイは少女のいる方とは逆の方向に行って、きびダンゴと植えられている花などを眺めた。適当に時間をおいてそこから引き返す。そこでユイが少女の方に目をやると、ユイを警戒して見ていた少女と目があった。

「フッフフーフン♪あっ、どうもこんにちは。」

ユイはとりあえず挨拶することにした。少女はそれに会釈で返す。

「近づいてくれ。」

チャンスと見たイサコが指示を出す。

「あれ、あなたもしかして、夕日寺中学校の1年生じゃない？私もそうなんだけど、1回廊下で見かけたような。」
「……いえ、違いますけど。」
少女は目を泳がせながら答える。ユイはそれを聞いてずっこけた。
「違うって言ってるぞ。本当に学校で見かけたのか？」
イサコが隣のアサミに向かって訊ねた。
「いえ、確かに見たわ。間違いない。あの子だった。」
アサミがメガネの望遠機能を使って少女の顔をよく確認して言った。
「つまり、あの少女が嘘をついているということか。ユイ、押してくれ。」
「いや、絶対見かけたことある。その長いさらさらな髪は見間違えないよ。」
イサコの指示通りユイが強引に押し込む。少女は困った顔をしてため息をついた。
「……ええ、そうです。いきなり声をかけられたのに驚いて、適当に答えてしまいました。」
「やっぱり。そんなにこわばらなくてもいいんだよ。私もね、まだ中学校に入ったばっかりで他の小学校出身の友達がいなくて。あなたはどこの小学校から来たの？」
ユイはまずその少女との距離を縮めようと考えた。イサコは「うまいぞユイ」と心の中で思った。
「私は、この春に他の学区から引っ越して来たんです。だから夕日寺中学校に私の知り合いはいないんです。」
少女の答えにイサコとアサミは顔を向き合わせた。
「つまり、夕日寺中にはこの近辺の3つの公立小の生徒が基本的に進学してくるが、あの少女はその3つの小学校のいずれの出身でもないってことか。かいつまんで言えば、中学校入学からの転校生ってことになるな。」
「そうね。どおりであの子も廊下を1人で歩いていたんだね。知り合いがまだいないんだ。」

イサコとアサミは納得して再びユイと少女の方を見た。
「じゃあちょうど良かったじゃん。私とお友達になりましょう。」
ユイが笑顔でその少女に言った。イサコはその言葉に、大黒第三小に転校した日のことを思い出す。その言葉をかけたのはヤサコ、かけられたのはイサコだ。その時のイサコはかたくなにヤサコを拒絶した。2人のエネルギーがぶつかり合った初めての瞬間、これから先も忘れることはないだろうなとイサコはこんな時に関係ないことを思った。
「……でも。」
少女はその言葉に戸惑うようにつぶやく。何を葛藤しているのだろうとイサコは思った。その言葉を受け入れるでもなく、自分のように拒絶もしない。その曖昧な返事にどんな感情が込められているのか。
「まあね。いきなり出会った人に急にそんなことを言われても驚くよね。その答えはまた学校で聞かせてくれればいいの。それよりさ、今何をしていたの?」
ユイが気分をかえていきなり本題に話をふった。少女は驚いた表情になってさらに困惑している。
「質問がダイレクト過ぎるぞユイ。」
イサコも驚いてユイに言い聞かせる。
「じゃあどうすればいいのよ?」
ユイもささやき声でイサコに訊ねた。
「例の事故のことを知っているかどうかをまず訊ねるんだ。そこから話を暗号の方へ持って行け。」
「はいはい。了解した。」
ユイはイサコに返すと、また警戒心を強めたように思われる少女の方を向いた。
「ここってメガネに危ないみたいだよ。5日ぐらい前にこの近くで事故があったらしいの。それでメガネが壊れた人もいるって。知ってる?その話。」

「……いえ。」
ユイの質問に少女が首を横に振る。
「あくまでもシラを切るつもりか。ユイ。どんどん押してくれ。」
「そう言えばここに来る途中にも、道端に暗号式みたいなのがあってさ。それも事故と関係しているのかなって。」
その言葉にイサコ達からでも少女の動揺が見てとれた。それもそうだとイサコは思った。少女は暗号を隠すために、わざわざ空間のサーバーに細工をして偽装をしていたのだから。暗号が見られるはずがないと思ってるに違いなかった。
「あなた……一体何者なの？」
じりじりと後ずさりながら、少女がユイに訊ねる。
「何者って、別に普通の中学生だけど。」
「違う。あなたに指示を出してあなたを操ってる人のことよ。」
とうにユイが自分の意志でしゃべっていないことは少女は気付いていたようだ。勘のいい女だなとイサコは思った。こうも警戒されては話を聞き出すのは不可能かもしれない。
「なんの話？私は１人でこの子の散歩に来たのよ。」
ユイはばっくれるのが下手だった。１人で来たのを強調すれば、近くに仲間がいることを教えているのと同じだ。
「私には近づかないで。これ以上詮索すると、あなたのメガネを攻撃することになる。」
「うわっ！ごめんなさい！」
少女が身構えるのでユイは両手を上げてホールドアップした。これはまずいなとイサコが思ったその時、懐かしくて、そして久しぶりに聞くような電子音が近づいてくるのに気がついた。
「何？あれ？」
ホールドアップ中のユイはその球体を視界に捉えたようだ。少女もユイにつられるようにその方を見る。少女はハッとしてすぐにそこから逃げるように走りだした。
「ユイ！逃げるんだ！」

イサコは大声で叫んだ。
「そんな大声出されると鼓膜が破れる！」
ユイがびっくりしたように返してきた。イサコのささやき声でもユイの耳に届くようにスピーカーを調整していたので、ユイには今のイサコの叫びが音割れのしまくった爆音に聞こえたらしい。その間にキューちゃんは獲物を見つけたかのように飛来し、少女が立っていた辺りにフォーマット光線を放った。
「うわああ！」
ユイがその攻撃に腰を抜かす。イサコは無我夢中に公園の中に飛び出した。キューちゃんが狙ったのはおそらく少女がその場所に組み立てていた暗号だ。そのフォーマットが終われば何を狙いにするかわからない。もしユイのそばにいるきびダンゴにバグでも混入していれば、きびダンゴを狙ってくる可能性もある。
「ユイ！」
駆け寄ったイサコは腰を抜かしていたユイを引き起こす。しかしキューちゃんはイサコの予想通り今度はきびダンゴを狙いにつけている。イサコは必死にキーボードを打ち込み、昔使っていた暗号を手元に取り出した。
「危ないきびダンゴ！」
キューちゃんの次の攻撃が照射され、ひゃあんという鳴き声を上げながらなんとかきびダンゴもそれをかわす。ようやくイサコも暗号の準備が整った。
「それっ！」
イサコに暗号をぶつけられたキューちゃんは束の間フリーズする。
「さあ！逃げるぞ。」
「うん。」
体勢を立て直したユイはきびダンゴと共に急いで公園を出た。アサミも公園の外で待っている。イサコは最後にもう1度少女の方を見る。少女はキューちゃんから少し離れた安全な場所からイサコの方を注視していた。暗号を使うところを見られてしまったか、と下唇

を噛みながら、イサコもその場から退散することにした。その様子を、公園の茂みの中から注視している影があったことに、イサコもその少女も気付いていなかった。

#14　帰ってくる電脳ペット　part8

「ひどい目に遭った～。イサコ、何あの変な未確認飛行物体は？」
ユイがほっとしたようにつむやきイサコに訊ねる。イサコ達3人は走って黒井交差点も渡り、最初に集まった夕日寺公園に向かって歩いていた。
「あれはキューちゃん。大黒市ではよく見かけた空間管理室所属のオートマトンだ。空間に潜む危険なバグをフォーマットするために飛び回っている。でもまさか、こんなところで見かけることになるとは。」
「どういうこと？」
イサコにアサミが訊ねる。
「おそらくあのキューちゃんの狙いはあの暗号式だろう。ユイとのやり取りを見ても、それはあの少女が組み立てたものと見て間違いない。黒井地区の空間の事故。それを含めて考えると、あのキューちゃんは事故の再発を防ぐためにこの金沢で導入されたと見るべきだろう。」
「つまり、やっぱり黒井地区の事故はあの暗号が原因だった可能性が高い？」
「そういうことだ。」
ユイが確認するように言って、イサコがうなずいた。しかし少女の目的もわからなければ、少女の組んだあの暗号で何が起こるのかさえもわからない。メガマスはそれをどこまで掴んでいるのか。金沢支社のメガマス職員は何が起きてもイサコには多くの情報を与えてくれない。聞き出すことはできないだろうなとイサコは思った。
「あと、1つ忠告しておく。今はどうか知らないが、キューちゃんはああ見えてもかなり頭が悪いから、ほんのちょっとしたバグでも見境なしに攻撃してくる。事実さっきキューちゃんはきびダンゴを撃とうとしたからな。きびダンゴも年だから色々とバグも抱えてる

だろう。」
「なんでそんな危険なオートマトンが普通に飛んでるの！これじゃ危なくてきびダンゴを散歩にも連れて行けないじゃない！」
怒ったようにユイが詰め寄る。きびダンゴも怒ったように吠えた。
「私に言われてもな。大黒市にあのオートマトンを導入したのも、ちょっと頭のおかしい強引な人だったし、そのおかげで私も大黒では色々と迷惑を被ったからな。まあとにかく、あの少女のいるところに暗号があるということは、キューちゃんもそこにしか飛んで来ないということだ。あの少女は黒井交差点の近くを行動範囲にしているようだし、こっちの夕日寺地区で散歩する分には安全なんじゃないか？」
イサコは玉子との攻防を思い出し、苦笑するように言った。玉子は今大黒市のメガマス本社にある管理室本部で勤めているとマイコ先生から聞いているので、まさか金沢でキューちゃんを導入したのは彼女ではないだろうとイサコは思った。
「でもあの子だって夕日寺中の生徒なわけでしょ。ならこの近くで暗号を組み立てることもあるわけじゃない。その時はやっぱりあのキューちゃんっていうのも飛んで来るってことでしょ？ねえ、それならさっきイサコが使った暗号を私達にも教えてよ。」
「暗号を？」
「うん。キューちゃんをフリーズさせるやつだけでいいからさ。じゃないときびダンゴの散歩の時は毎回イサコを呼ぶことになるよ。」
それはかなわないなとイサコは思った。ここは折れるしかなさそうだ。
「わかった。じゃあ今晩その暗号を組んでおくから、明日2人に渡そう。でもくれぐれもそれを見せびらかしたり、私からもらったなんて言いふらしたりしないでくれよ。暗号屋は常に狙われる存在だからな。」
イサコはこれからのことも考えて、また色々と暗号を練っておかないといけないなと思っていた。いずれあの少女とは一戦交えること

になるかもしれない。今日も自分が暗号を使っているところを少女にはしっかりと見られていた。

「ありがとうイサコ。じゃあ今日はもう遅いし、ここで解散ってことにする？」

アサミが時計を見ながら言った。時刻は夕方6時半を指しており、陽はほとんどくれている。3人はちょうど夕日寺公園に着いたところだった。

「そうね。じゃあアサミちゃん。また明日。」

「うん。今日はありがとう。また明日。」

アサミはそのまま自分の家のに向かって角を曲がって行った。イサコとユイは家が近いのでそのまま一緒に帰ることになるはずだった。しかしユイがそこで何かを思い出した。

「いっけない。お母さんに卵買って来てって言われてたんだった。ごめんイサコ。私これからスーパーに寄るわ。もう遅いし、イサコはそのまま帰って。」

「そうか。確かにあまり遅くなると私の母さんも心配するからな。じゃあ悪いがここで。」

「うん。ごめんね。また明日学校で。行くぞきびダンゴ！」

ユイもそう言い残して慌ただしく走って行った。イサコもさっさと帰ろうと思い足を踏み出す。そこからしばらく1人で歩いていたイサコは、どうも後ろからつけられているような気配を感じた。

「誰かいるのか？」

イサコは胸ポケットから飛び出したモジョに後ろの様子を見させた。するとモジョは何かを見つけたようにイサコに合図する。イサコはまた厄介事かとため息をつき振り向くことにした。イサコの背後には3人の少年が立っていた。

「何か用か？」

イサコはその少年達を見据えて訊ねた。真ん中に立っているのはソフトモヒカンで端正な顔立ちのスポーツマンのような少年。左に立っていたのは攻撃的なオーラが出ている真ん中とは対照的に、細く

て少したれた目をした雰囲気のやわらかい少年。そして右に立っているのは妙に体格がいい、第一印象は筋肉バカのような少年だった、3人ともメガネはしっかりと装備している。
「お前、夕日寺中の1年だな。」
真ん中のソフトモヒカンの少年が訊ねる。この少年がおそらくリーダー格だろうとイサコは思った。
「違う。」
イサコは面倒なので否定することにした。
「とぼけてもムダだ。このシュウとお前は同じクラスなんだろ?」
「シュウ?」
ソフトモヒカンの少年に言われ、イサコはシュウと呼ばれた雰囲気のやわらかい少年を見た。
「ああ。確かに同じクラスにいたな。悪いが名前はまだ覚えてないんだが。」
イサコはその少年を確かにクラスの中で見た記憶があった。
「いいんだよ。僕もまだ君の名前を覚えてないから。ここは自己紹介し合おうよ。」
少し馴れ馴れしいが、それでいて顔のイメージの通りやわらかく包むような声でイサコに訊ねる。この空気感が誰かに似ているなと思いつつ、しかしイサコはその手にはのらないぞと思った。
「必要ない。自己紹介なんて入学式の日にやったんだ。どうせ同じクラスならイヤでも覚えることになる。それより最初の質問に戻るぞ。私に何の用だ?」
「ふん、さすがだな。暗号屋は自分の素性を明かさないと?」
再び真ん中のソフトモヒカンが訊ねる。その問いにイサコは驚いた。
「暗号屋?私がか?」
「使ってただろ。さっき黒井北公園でサーチマトン相手に。」
イサコはそこで、さきほどの公園での一部始終をこの少年達に見られていたことを知った。やはり不用意に暗号を使うのは良くないなとイサコは反省する。

「男3人でのぞきとはな。趣味が悪いとしか言いようがない。」
「うるせえ。お前らに先を越されなきゃ、オレたちがあの女に色々と吐かせるつもりだったんだ。」
鼻で笑うように言ったイサコに、今度は筋肉バカの少年が強い口調で言った。
「……あの女っていうのは、あの髪の長い少女のことか。彼女を調べているってことは、お前らも黒井地区の事故を調べているってことか。」
「そうだ。はっきり言ってお前らが邪魔なんだよ。今日もあのサーチマトンの騒ぎであの女を取り逃してしまった。お前もお前だ。暗号技を使えるくせに、あんなズブの素人2人も連れて、何をしようとしているんだ?」
ソフトモヒカンが訊ねる。
「私も黒井地区の事故について調べていた。連れのうちの1人が、死んだはずのペットが帰って来たって言うし、それが事故のあった日と偶然重なり合っているから何か関係があるのかと思ってな。」
「ああ。井上安紗美のペットだろ、帰って来たっていうのは。オレたちの友達にも死んだペットが帰って来たっていうヤツは確かにいる。」
「アサミを知っているのか?」
「同じ小学校だからな。」
なるほどとイサコは思った。この3人はアサミと同じ小学校出身の電脳クラブだ。素性はアサミに詳しく聞いた方が良さそうだとイサコは思った。
「なら、お前らもそのペットの事が気になって事故について調べていたのか?」
「まあそれもあるが、もっと切実な理由だ。実は黒井地区の事故でオレたちの仲間の1人がやられたんだ。」
「やられたって、メガネをか?」
「ああ。オレたちはその仇をとるために動いてるんだよ。」

アサミ達の話は本当だったんだなとイサコは思った。その事故で本当にメガネがクラッシュした子どもがいる。金沢の空間管理室も動き出しているほどの事故のようだし、その真相をもっとイサコは聞き出したいと思った。

「その事故があの少女の仕業だったと？」

「それを調べようとしていたところを、お前らに邪魔されたんだ。最近事故のあったあの辺りでよく見かけるからな。オレたちもあの女から1度話を聞こうと思っていた。」

どうやらこの少年達は、あの少女が魔方陣型の暗号を組んでいるのは間違いないだろう。ところで、その事故ってどんなものだったんだ？」

イサコは最も気になっていることを訊ねてみた。

「……まあ、あの女について教えてくれたから一応教えといてやる。被害に遭ったオレたちの仲間によると、何もないごく普通の空間に突然大穴が開いたらしいぜ。そこからはそいつもよく覚えていないって。まあその瞬間にその場にいたら、メガネはかばいようがなく壊れるってことだろう。お前も興味本位だけで調べているんなら、今のうちに手を引いた方がいいぜ。」

そう言い残して3人は立ち去ろうとした。そこでイサコは迷う。事故のことを調べるにはユイ達じゃなくこの少年達と一緒の方が効率は良さそうだ。しかし自分にとっても、相手にとってもお互い今は素性の知れない同士。協力しようとも言いにくい。イサコもここはまず、この少年達の様子見から入ろうと思った。

「ああ。じゃあ事故の調査はよろしく頼む。なんで死んだペットが帰って来るのかだけわかったら教えてくれ。」

イサコは背を向けて歩いて行く3人にそう声をかけた。ソフトモヒカンだけが振り返って、「ふん」と了解したのかしていないのかわ

からないような返事を返し行ってしまった。
　ややこしいことになりそうな予感がしながらも、イサコはどっぷりと陽のくれた街の中、家を目指して歩き始めた。1人自分の帰りを待っているであろう母を思い浮かべて。

＃１４　帰ってくる電脳ペット　Ｐａｒｔ８（後書き）

第１４話はここまでです。
次回第１５話もお楽しみに。

#15　金沢市黒客クラブ　part1

「メガネに搭載されているOSのアプリケーションソフトは、地域ごとによってバージョンが異なるらしい。それはソフトウェアの自動更新の際に、そのメガネのユーザーの現住所によって反映されるそうだ。」

　黒井地区で起こったという事故を調べ始めた次の日、イサコは学校である生徒に注意を払っていた。1人は昨日黒井北公園で出会った髪の長い少女。アサミの目撃情報やユイの聞き出した話によると、彼女も同じ夕日寺中の生徒ということだった。さすがにクラスまではわからないので、イサコは休み時間になると少し冒険して1年の教室他の3クラスをのぞいてまわった。この学校は1学年に4クラスあり、イサコは1年1組である。そんな調子で1年3組をのぞいた時だった。イサコは探していた少女を見つける。教室の窓側から2列目の一番後ろの席で、少女はまた何やらメガネをいじっていた。
「あれ、イサコ？何してるのこんなところで？」
「ああ、ヒナか。いやちょっと人を探していたんだ。」
イサコに声をかけたのは、イサコと同じ神通小学校でクラスメートだったヒナという女の子だ。
「誰を探してるの？」
「あの窓際の席でメガネをいじっている髪の長い少女だ。名前はわかるか？」
ヒナもその少女の方を見たが。首を振った。
「ごめん。まだクラスの子の全員の顔と名前が一致しないの。あの子神通小じゃないよね？名前聞いて来てあげよっか？」
「いや、いい。また怪しまれるかもしれないからな。」
「怪しまれる？」
ヒナは少し不思議そうな顔をする。またイサコは人に怪しまれるよ

うなことをしたのかと思った。
「ああ、こっちの話だ。ありがとなヒナ。」
「うん。」
ちょうど休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴ったところで、イサコは自分の教室に撤退することにした。

イサコには自分のクラスにも1人マークしなければならない人物がいた。昨日の帰りしな突然絡んで来た電脳クラブの構成員、柔和な顔つきのシュウと呼ばれていた少年だ。あの電脳クラブについても多少調べをいれておこうとイサコは思っており、アサミは彼らと同じ小学校だったという話も聞いていたので、後で詳しく訊ねてみようと考えていた。
「はい。じゃあ次のところ、井上安紗美さん。読んでもらえるかな？」
「はい。」
授業は国語だったが、イサコは色々と考え込んでいて集中できていなかった。担当教員でこのクラスの担任でもある松葉先生は、生徒の顔と名前を早く覚えるためか、生徒をあてるときはフルネームで呼んでいる。イサコもいきなりあてられてどこを読めばわからなくなるような失態を犯さないよう、少しだけ授業に集中しようと思ったときだった。
「はい。井上さん、非常に良かったですよ。じゃあこの次を、酒井君、酒井修一君。読んでください。」
「はい。」
返事をした声に聞き覚えがあったイサコは、少しだけ後ろを振り返って見た。それはあの少年だった。酒井修一。確かに他のメンバーからはシュウと呼ばれていたので間違いないとイサコは思い、忘れないようにノートの隅にメモしておいた。

昼休み、イサコはユイとアサミと机をくっつけあって弁当を食べ

ていた。まずイサコは昨日ユイに頼まれていたものを渡す。
「ほら、これが昨日言っていたキューちゃんをフリーズさせる暗号だ。アサミの分もある。」
「ありがとうイサコ。さすが仕事が早いね。ところでこれ、どうやって使うの？」
電脳に関してはほとんど素人の2人に、イサコは懇切丁寧に暗号の使い方をレクチャーする。それもきびダンゴやセナをかわいがる2人のためなので面倒だとは思わなかった。キラバグを集めていた時は平気で人のペットを犠牲にするようなことをしているので、今はそのペット達を守るのが自分にとっての贖罪になるとイサコは思っていた。
「でも、この街もメガネをするにはなんだか危なくなってきたね。黒井地区での事故といい、その再発を防ぐために導入されたオートマトンがペットを襲うなんてさ。聞いた話なんだけど、大黒って前からそんな街だったらしいね。この前も何か事故があったって。」
ユイが不安そうに言ってイサコに訊ねた。
「まあ、確かに。私はこれに慣れてしまっているが、普通に考えればメガネで遊ぶには危ないな。ところでアサミ、あの酒井修一っていうのと同じ小学校だったらしいな。どんなヤツなんだ？」
「え、酒井君？イサコも隅に置けないわね。酒井君を狙ってるんだ？」
アサミはイサコの質問の意味を少し取り違えたようだった。
「あの真ん中の列の人でしょ？確かに優しそうで笑顔もなんか癒し系って感じで、このクラスの中ではかなり良さげだよね。」
「まあ、小学校時代から女子人気があったからね。イサコも狙うんだったら早めに手を打った方がいいわよ。」
ユイとアサミが急に楽しそうにしゃべり始める。やっぱり普通の女の子はこういう話題が好きなんだなとイサコは少しため息をついた。
「おい。勝手に恋バナに持って行くな。違うんだ。実は昨日の帰りしな、アイツを含めた3人の男子グループに絡まれたんだ。かいつ

まんで言うと、アイツらは黒井北公園で私たちがあの髪の長い少女と接触しているのを見ていたらしい。実はアイツらも黒井地区の電脳事故について調べているらしくて、あの少女にも目をつけていたそうだ。しかし昨日は私たちが先に接触してあんなことになって、少女にも逃げられた形になったからな。興味本位ならこれ以上事故について調べるのをやめろって言われたんだ。」

「あー、なるほどね。その3人って1人は酒井君で、1人はソフトモヒカンのイケメンで、もう1人がやけに体つきのいい人だったでしょ？」

イサコの話を聞いて、アサミも事情が大体読めたらしい。イサコはアサミにさらに訊ねてみた。

「ああ、その通りだ。その電脳クラブについて知っている限りで教えてくれるか？」

「いいわよ。名前は確か金沢市黒客クラブっていったかな。中国語でハッカーっていう意味だそうよ。」

「黒客！？」

その言葉を聞いてイサコは真っ先にダイチのマヌケな顔を思い出した。しかしアサミがダイチ達のことを知っているはずはないし、何かの間違いじゃないのかと思った。

「何驚いてるの？」

結構教室中に聞こえるような声でイサコが驚いたので、アサミは不思議そうに訊ねた。もちろんその声は同じ教室で弁当を食べていたシュウイチにも聞こえたはずだった。

「いや、何でもない。続けてくれ。」

「うん。まあ、知っての通りメンバーは全員私と同じ神通西小の出身よ。本当はもう1人いるんだけど、その子は勉強も秀才で私立の中学校に入ったの。」

確かに昨日3人は黒井地区の事故で仲間がやられたと言っていた。となると被害に遭ったその仲間というのは唯一この中学校の生徒ではないその秀才のことかとイサコは納得した。

「ちなみに聞くが、その金沢黒客はやたらとメガネに詳しくて、小学校でも電脳のいたずらをしょっちゅう仕掛けて、先生からは問題児扱いにされているような存在じゃなかったか？」

イサコは黒客と聞くともうそういうイメージしか浮かばなかった。偶然かどうかはわからないが同じ名前を名乗っているだけあって、金沢の方も似たような連中なのかと疑問に思った。

「えっ？いや、メガネにはすごく詳しいけど、そういうことはまったくなかったわ。むしろその逆。」

「逆？」

「うん。みんなの電脳上でのトラブルを解決してくれる、とっても良心的なクラブだったわ。例えば、私も1回セナが2日くらい行方不明になったことがあったんだけど、その時も黒客が見つけてくれたの。メガネが調子悪い時なんかはメンテナンスとかもしてくれたし、他校との電脳トラブルも仲介役になって解決してくれる。それも代金は一切要求しないで。その上外見もいいし、西小での女子人気は黒客に集中していたわ。それに黒客はメガネだけじゃない。モヒカンの岩渕君は野球でも有名だし、体のごつい平尾君は柔道の小学生の大会で全国まで行ったこともある。あの酒井君は小学生に入った時からギターをやっているそうよ。」

アサミの話を聞けば聞くほど、同じ名前なのに大黒の黒客とはまるで性格が違うなとイサコは可笑しくなった。大黒の黒客はと言えばただの問題児で、そのくせメガネしかとりえのないような、どうしようもない連中だったという印象が強い。もちろんからの女子人気とは無縁であることは疑う余地もなかった。

「そりゃモテるわけだ。私もこのメガネ壊して酒井君のところに持って行こうかな。『酒井君、これ直せる？』『いいよ。君は、秋吉さんだったね』『え？名前覚えてくれてるんだ。うれしい。今度からはユイでいいよ』みたいな会話になったりして。」

勝手に妄想を始めたユイは置いておいて、イサコは話を進めることにした。

「アイツら、黒井地区の事故で仲間がやられたって言ってたんだ。随分躍起になってその事故について調べているらしい。だからこそ、私に邪魔するなんて言ってきたんだろうが。」

「まあ、あまり関係ない人は巻き込みたくないんじゃない？それも黒客の優しさだと思うよ。ましてや仲間の子がやられてるんだから。黒客が動いているんなら、その事故の調査やセナが帰って来た理由なんかは彼らに任せて、私たちはあまり危ないことに首を突っ込むのはやめた方がいいんじゃない？イサコはメガネに詳しいから大丈夫だとは思うけど。」

「賛成。変なオートマトンも飛んでるし、私たち一般ピープーはおとなしくする。イサコはせっかくだしその黒客と一緒に調査したらいいじゃない。あっ、ほら。噂をすればその酒井君がこっちに来たわよ。」

ユイが少し興奮しながらイサコに言う。別にこっちに用事はないだろうとイサコは冷めた表情で見ていたが、シュウイチは本当にイサコ達がくっつけ合っている机のところまでやってきた。

「イサコ。ちょっと話があるんだけど。」

シュウイチの言葉にイサコは少しどきっとした。それはシュウイチに声をかけられたからではなく、“イサコ”と呼ばれたからだ。確かに自分たちの会話に聞き耳を立てていたなら自分がそう呼ばれている事くらいはわかるだろうが、いきなりやってきて許可もしてないのにその名前で呼ばれてイサコは少しムッとした。

「何？なんでそんな風に呼ぶわけ？そう呼んでいいのはこの2人と、ごく一部の私と仲良くしてくれている人たちだけなんだけど。」

気にくわないというのがありありと感じられる口調でイサコは言い放った。

「ちょっとイサコ！ごめんね酒井君。この子は日本で十指に入るツンデレ、いや、激ツンなの。急にその名前で呼ばれたもんだから、ちょっと戸惑ってるのよ。」

そこでユイが焦りながらフォローに入った。若干死語が混じってい

るが、それもあながちはずれていないのが悲しいなとイサコは思った。

「お気遣いありがとう、秋吉さん。じゃあ改めて天沢さん。ちょっと話があるから出て来てくれないかな？」

ユイはシュウイチに名前を覚えてもらっていたことに舞い上がってしまった。そんなことは置いといて、ちゃんと名字で言い直したことだし、イサコも一応この黒客と話があったので、ちょうどいいと思って「仕方ないな」と立ち上がった。

「それからアサミ。会話が丸聞こえだったんけど、天沢さんに黒客の概要を話してくれてありがとう。おかげでこっちから説明する手間が省けたよ。」

「いえいえどういたしまして。」

知り合い同士で仲も良さそうなシュウイチとアサミが挨拶程度に会話を交わして、シュウイチはイサコと一緒に教室を出た。廊下には昨日会ったソフトモヒカンの岩渕と、体つきのいい平尾が待っていた。

#15　金沢市黒客クラブ　part2

イサコと金沢黒客の3人は、話を人に聞かれるのはまずいと思って学校の屋上まで上がった。昼休みだったがそこには誰も生徒はいなくて、今日もクリアな青空が広がっていた。

「とりあえず話があるのなら、きちんと名乗ったら？」

先にイサコが金沢黒客に釘をさす。昨日彼らはは名乗りもせずに邪魔するなとだけ言って来た。

「ああ、そうだな。オレが一応この金沢黒客のリーダー、岩渕玲音（いわぶちれいん）だ。」

「レイン？ハーフかなにかか？」

リーダーのレインは端正な顔立ちでハーフとも思えるような感じだった。

「いや、レイは生粋の日本人だよ。名前と顔がこんなだから、よく間違われるんだけどね。」

そこでシュウイチが代わって説明する。その時のレインの顔を見ると、そう間違われるのはあまり快く思ってないようだった。

「で、僕が酒井修一。みんなからはシュウって呼ばれてる。」

「おれは平尾一馬（ヒラオカズマ）。おれは普通にカズマって呼ばれてるし、気兼ねなくそう呼んでくれよ。」

シュウイチとカズマがそれぞれ自己紹介した。イサコはそこでしっかり顔と名前を覚える。この金沢黒客とは長い付き合いになるような予感がしたからだ。

「じゃあ私から最初の質問をしていいか？」

「ああ。その代わり後でこっちの質問にも答えてもらうぞ。」

レインがうなずいて、イサコはまず1番気になっていたことを聞くことにした。

「なぜ黒客なんだ？」

「なに？」

「だからなぜ名前が黒客なのかと聞いているんだ。お前達のオリジナルの名前じゃないだろう?まさかお前達、大黒黒客のことを知っているのか?」

金沢黒客の3人は顔を見合わた。そしてレインは少し微笑んで答えた。

「ああ、知ってるよ。大黒黒客だろ。まあ、知ってるって言っても知り合いというわけじゃない。大黒市の電脳のレベルはえげつないって聞いている。その中でもトップクラスの実力を持つって言われる大黒黒客は、この世界では名の通った存在だからな。」

「僕たちが黒客と名乗っているのは、その人達へのリスペクトがあったからなんだ。と言っても、こっちが勝手に名前を使わせてもらっているだけ。向こうは僕らのことを知りもしないだろうね。」

レインやシュウイチの話を聞いて、こんな遠い金沢でもあのダイチ達が知れ渡っていることにイサコは驚く。確かにメガネの実力だけで言えば、大黒黒客も全国でトップクラスなのは事実だった。

「それでやってることは、行方不明の電脳ペット探しや、故障したメガネのメンテナンスみたいな慈善活動か?」

「まあね。真に強い電脳クラブっていうのは、人から信頼されるような優しさを持ち合わせてないといけないと思うんだ。多分その大黒黒客も、強さとそういう優しさを兼ね備えているはずだし、だから僕たちも見習ってるんだよ。」

イサコは吹き出しそうになった。この3人が考えている大黒黒客像は美化されすぎている。他人には迷惑しかかけていないダイチ達が、むしろ金沢黒客をリスペクトしなければいけない方だとイサコは思った。知らぬが仏という言葉をイサコは思い出す。

「まあ1つ忠告しておくと、本物の大黒黒客はお前達が考えているほどいい連中じゃないぞ。むしろ人間的にはお前達の方がよくできている。」

「……そうか。さすが大黒黒客と一時期は行動をともにした“イサコ”だけあるな。大黒黒客の性格もちゃんと知っているってわけだ。

」

レインが笑みを含みながら言って、イサコはその内容が色々とおかしいことに気付いた。

「イサコって呼ぶな。それになぜ私が大黒黒客と行動を共にしていたことを知っている？」

「有名な話じゃないか。お前、天沢勇子はキラバグを集めるのに成功した。そしてそのキラバグは今も大黒黒客が握っているんだろ？」

「い、一体何を言っているんだ？」

動揺を見せながらもイサコは、一方でレインの言葉の意味がよくわからなかった。自分がキラバグを集めていたことを、なぜレイン達が知っているのか。そしてまたその次の情報がまったくのでたらめであることも気になった。

「これはつい１ヶ月ほど前に、大黒市のメガネユーザーがよく利用する掲示板で書き込まれた情報だ。この天沢勇子というのは前々から気になっていた。そしたら昨日会ったお前が、その天沢勇子だってことをシュウが帰ってから気がついたんだ。まさかこんな近くにいたとはな。」

「クラスの名簿をよく見てみたら、天沢勇子ってあったから驚いたよ。」

レインもシュウも昨日帰ってから自分が天沢勇子だと気付いたらしい。そしてレインが言っているのは大黒市でヤサコやダイチ達も気にしていた書き込みだった。しかしイサコはその書き込みについてはまったく知らなかった。

「なぜそんな書き込みが？誰がそれを書き込んだ？」

イサコは焦って訊ねる。

「そんなことはオレたちに聞かれてもわからねえよ。でもな。これがガセネタだってこともオレたちは知ってるぜ。」

「どういう意味だ？」

さらなる事情を知っているかのようなレインの口ぶりに、イサコは段々と胸の鼓動が速くなっていた。

「そのキラバグは、“あっち”への通路を開くために使ったんだろ？だから、もうキラバグが存在しているはずがない。」
レインの言葉に、イサコは茫然とするしかなかった。なぜ自分の過去がここまで筒抜けなのか。イサコは顔を隠すために被っていた仮面を一枚一枚強引に引きはがされているような気持ちだった。
「なぜ、そこまで……」
「もっと言ってやろうか？お前はそれである人を助け出すつもりだったんだな。」
レインはさらにイサコに追い打ちをかけようとしたが、それをシュウイチが制した。
「レイン。もうこれ以上は口に出さないでおこう。それは天沢さんの核の部分に関わることだし。他人に過去を暴露されるのは天沢さんだって気持ちのいいことじゃないだろうし。」
「……そうだな。天沢。昨日お前に会ってからこっちで勝手ながら調べさせてもらったよ。お前の過去についても。」
イサコは目を泳がせて戸惑いながらも、はっきりそれはおかしいと思えた。自分の過去についてなど、今となってはどんな手段をとっても知る由のないことで、ネットで検索したところでそこまでの情報が出てくるはずがない。となると、考えられるのは自分の過去を知る者からそれを聞いたという可能性だけだった。
「お前達それを誰から聞いた？」
「誰からって聞かれても困るんだけど。そうだな。小此木優子に酒井修一で検索かけてみたらすべてわかると思うよ。」
シュウイチの口からでてきた意外な人物に、イサコはまた驚かされた。
「お前、なんで小此木のことまで知ってる！？」
「だから本人に聞けば事情は大体わかるって。」
シュウイチがはぐらかすように言った。これはヤサコ本人に確認を入れないといけないとイサコは思った。
「まあ、オレたちはこのネタを使ってお前を脅すつもりはねえ。調

べているうちにお前が凄腕のメガネ使いだってことを知ったってだけだ。さあ、今度はこちらが質問する番だ。なぜお前ほどのメガネ使いが黒井地区の事故を調べている？」

レインがまだ気持ちの整理がつかない様子のイサコに訊ねた。

「・・・・・昨日も言ったはずだ。私は死んだはずのアサミのペットがなぜ戻って来たのかを調べていただけだ。そのつながりで黒井地区の事故を調べていたんだ。」

「本当にそれだけか？」

いぶかしげにレインがイサコを見る。

「それだけだとしか言いようがない。私だって成り行きであの場所にいたんだからな。」

イサコは本当のことを包み隠さず言っているつもりだった。金沢黒客の3人はイサコの話を聞いて互いにうなずきあっている。

「そうか。実は黒井地区の事故に関して色々と妙な噂が流れるから、その事故もお前も無関係なはずがないと踏んでいたんだが。」

「妙な噂？」

「ああ。その事故で空間に大穴が開いたって話は昨日したな。その大穴は死後の世界に通じているって噂なんだが。」

イサコはどきっとした。死後の世界というのは“あっち”の世界とは別ものなのだろうか。確かにアサミの死んだはずのペットがその事故のあった日に戻って来たのだから、そのような噂が出るのも納得はできるが。

「なるほど。私が以前“あっち”への扉を開いたことを知ったお前らは、その事故に私が一枚噛んでいると思ったわけか。残念ながら見込みはずれだ。お前らが私のことをどこまで知っているのかは知らないが、もう私は“あっち”の世界などを追いかけてはいない。」

「そうか。本当にお前がその事故に無関係だっていうのなら、オレたちと一緒にそれを調べねえか？その事故が気になってるんだろ？こちらとしてもお前ほどのメガネ使いがいると心強いんだが。」

今日レイン達がイサコを呼び出した理由がそれだった。調べるうち

にイサコの力が必要だと感じるようになったのだ。
「そのことについては、私も考えていたことだ。でも返事は待ってくれないか。お前達が私の過去についてなぜそれほどまで知っているのか。それがわからないかぎり私もお前達に協力する気が起きない。」
「……まあ当然か。こんなに他人の過去について調べるなんて悪趣味もいいところだからな。オレもお前ならそうするだろう。」
レインはそこは潔く待つことにした。そこでちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。
「じゃあ、明日返事をしてもらうってことで。急に呼び出して色々失礼なこと言ってごめんね、イサコ。」
シュウイチが手を合わせるようにして謝ったが、そのイサコと呼ぶ事が1番失礼なことじゃないのかとイサコは思った。
「じゃあまた。」
レインがそう言い残し、金沢黒客の3人は屋上を後にした。イサコはそこで青い空を見上げる。急に自分の過去が他人に明かされたのは驚いたが、なぜかそれに対して戸惑いや怒りが湧いてくるというわけでもない。どことなく不思議な気持ちを抱いたまま、イサコも屋上を後にすることにした。

#15　金沢市黒客クラブ　part3

イサコはやはりシュウイチの言葉が気になって、その日の夜にヤサコに電話をかけて確認をすることに決めた。つい先日サヨナラを言ったばかりで、こんなにも早くもう1度声を聞くことになるとは思わなかったが、事情が事情だけに仕方ないと自分に言い聞かせる。

「……もしもし?」

5回ほどのコールでヤサコは出た。その声を聞いてイサコもいくらか心が和む。

「私だ。天沢だ。」

「天沢さん?どうしたの?この前の様子だとしばらく連絡は来ないのかなって思ってたんだけど。」

ヤサコはびっくりしたように、そして嬉しそうに返して来た。

「ああ。私もそのつもりだったんだがな。ちょっと今日は聞きたいことがあって電話した。夜分にすまないな。」

「大丈夫よ。それより聞きたいことって何?」

ヤサコの問いに一呼吸おいて言った。

「ああ。酒井修一って名前を知っているか?」

「えっ!?シュウイチ君?」

ヤサコの反応は思いのほか早かった。やはりヤサコと近しい人物なのだろうかという直感がイサコによぎる。

「知り合いなのか?」

「え、ええ。知り合いもなにも、私のいとこよ。」

「いとこ?」

意外な答えにイサコは少し間の抜けたような声が出た。

「うん。私のお父さんの妹さんの子どもがシュウイチ君。」

「……つまり、小此木家の血を引いているってわけか。名字が違うってことは、アンタのバアさんの外孫にあたるわけだな。」

どおりでどことなく柔らかいような雰囲気がヤサコに似ているのか

とイサコは納得する。小此木家にはそういう血が流れているのかと思った。
「そうなるね。それより、なんで天沢さんがシュウイチ君のことを知ってるの？」
今度はヤサコが不思議がって訊ねてきた。
「ああ。実は、中学校で同じクラスなんだ。」
なぜか恥ずかしいなと思いながらイサコが返す。
「へ～っ。すごい偶然。ねえねえお父さん。天沢さんとシュウイチ君は同じ中学校、同じクラスなんだって。」
ヤサコは何やら近くにいたらしい父の一郎に嬉しそうに報告する。
「ほう。それは確かにすごい偶然だな。じゃあ天沢君にシュウイチ君をよろしく頼むと伝えておいてくれよ。」
「うん。聞こえた天沢さん？お父さんがシュウイチ君をよろしく頼むだって。」
イサコにはしっかりと一郎の言葉も聞こえていた。
「あ、ああ。それよりどんなヤツなのか教えてくれないか？」
「どんな？そうねえ。まあ、見た目通りって感じよ。雰囲気優しい感じでしょ？」
それはお前もな、というツッコミをイサコは心の中だけで入れておいた。
「そうそう。下に2人妹がいて、すごく面倒見がいいの。良いお兄さんって感じ。下の方の妹さんは京子と同い年なんだけど、親戚で集まった時なんかは一緒に面倒を見てくれたりしたわ。京子もシュウイチ君のファンなの。」
ヤサコの言葉だけでイサコは情景が目に浮かんできた。シュウイチには確かにそのような雰囲気があった。
「そうなのか。教えてくれてありがとな。」
「どういたしまして。それよりどうしてわざわざ私に電話してまでシュウイチ君のことを知りたがってたの？もしかして、天沢さん……」

訊ねて来たヤサコは若干ちゃかしているかのような口調だった。やっぱりそういう方向に持って行かれるのかとイサコは思った。

「勘違いするな。アイツのことは別に意識していない。私がアイツのことをお前に訊ねたのは、アイツがいきなり私に絡んできたからだ。」

イサコはぴしゃりと言い放って、ヤサコにそれ以上勘ぐらせないようにした。イサコは悪口を言われるのは慣れているつもりだったが、こと恋愛方面で冷やかされるのには慣れていない。それは今までそういう場面に巡り会わなかったからという理由もあった。

「シュウイチ君が天沢さんに？なんて？」

「ああ。金沢でちょっとした事故があったんだ。私はそれを調べていたんだが、酒井が所属している電脳クラブも同じ事故を調べていてな。邪魔してくれるなって言われたんだ。そのクラブは金沢黒客と名乗っているんだが。」

「金沢黒客？」

驚いたようにヤサコが反復する。

「その様子だとそれも知らなかったようだな。」

「知らなかった。シュウイチ君達ってダイチ君とも知り合いなの？」

「いや、おそらく違う。酒井達はダイチ達と面識はないと言っていた。なぜか歪んだ大黒黒客像を持っていて、名前を使っているのはリスペクトしているからだって言っていた。笑える話だろ？」

イサコの話がヤサコには微笑ましかった。話の内容以上に、イサコがそうやって自分の周りの出来事を楽しそうに語ることが。イサコは変わったんだなとヤサコは改めて思った。

「シュウイチ君がダイチ君達を尊敬してるんだ。確かに面白いね。その話、ダイチ君達にも伝えておくわ。」

「それからついでに酒井にもダイチ達の本性を教えてやってくれよ。」

イサコも笑いながら返した。どんどん話がつながっていき、自分でも驚くぐらい饒舌になっている。やはりヤサコと話がしたかった自

分がいたんだな、とイサコは感じた。
「シュウイチ君に?どうかな、最近会わないから。」
「そうなのか?」
「うん。金沢にいた時はよく会っていたんだけど。シュウイチ君のお父さんもメガマス金沢支社に勤めていて、私のお父さんとも仕事の同僚だったしね。でも私がこっちに来てからは1度も会ってないかな。」
シュウイチの母の実家もメガばあの家となるので、ごくたまに大黒に来ることもあるのだが、なかなか父の都合がつかないらしい。メガばあもしばらくシュウイチの顔を見ていないのを寂しがっている節がある。
「まあ、会った時でいい。それから忘れるところだった。一番アンタに訊かなければならないことがあったんだ。」
イサコは話が弾むうちに本題を忘れていた。これを訊くためにわざわざヤサコに電話したのだ。
「なに?」
「その酒井だが、私の過去を知っているみたいなんだ。私が大黒市でしていたこと。キラバグを集めて“あっち”への扉を開き、お兄ちゃんを助けようとしていたことを。」
「え?なんでシュウイチ君がそんなこと知ってるの?」
ヤサコも驚いたような口ぶりだったが、イサコはかまわず続けた。
「それが訊きたいから電話したんだ。まさかアンタが酒井に言ったとは思わないが。」
「言わないわよ。第一会ってないし電話もしないし、したとしてもそんな大事なことぺらぺら言わないよ。ちょっと待ってね……お父さん?お父さんさ、シュウイチ君に天沢さんがキラバグを集めていたこととかしゃべってないよね?」
ヤサコが電話口を押さえて一郎にそのことを確認しているようだったが、イサコには会話がすべて聞こえていた。
「しゃべるわけないじゃないか。社内の守秘義務があるっていうの

に。」
「やっぱりそうよね。ごめん天沢さん。こっちもその話の出所はわからないわ。」
「そうか……」
イサコが少し落胆した時だった。ヤサコが「あっ」と何かをひらめいたような声を出したのだ。
「どうした？」
「うん。ちょっと心当たりがあって。少し待っててね。」
ヤサコがそう言うと電話からはドアを開ける音や廊下を走るような音が聞こえて来た。最後に聞こえたのは障子の襖を開ける音だった。
「どうしたんじゃ？」
「オババさ、つかぬことを訊くけど、最近シュウイチ君と話したりした？」
どうやらヤサコによるメガばあの取り調べが始まったようなので、イサコは黙ってその会話を聞くことにした。
「ふへ？お主なぜそんなことを知っておるのじゃ？」
「したのね？それいつよ？」
「……昨日じゃったかのう。」
会話を訊く限りではメガばあがとぼけようとしているのか、本当に記憶が曖昧なのかよくわからない。
「その時さ、シュウイチ君にイサコのことしゃべったでしょ？」
「イサコのこと？」
「だから、イサコがキラバグを集めていたとか、“あっち”への扉を開いたこととか。」
「ムムムム。確かにそのような話もしたかもしれんの。でも名前は出さなかったはずじゃが。」
そこに名前を出さなくても、大黒市の電脳界に精通している者なら掲示板で天沢勇子の名前は目にしたことがあるはずである。金沢黒客も大黒黒客に憧憬を抱いているだけあって、その情報も確認していたに違いないとイサコは思った。間違いなくシュウイチの一番の

情報源はメガばあだった。
「名前を出さなくても一緒よ。なんでオババがそんな大事なこと簡単にしゃべっちゃうのよ？」
「そりゃあ、久しぶりにかわいい孫であるシュウイチから電話が来てな、おばあちゃんの大黒での武勇伝を聞きたいっていうからの、ワシもうれしくなってついついしゃべり過ぎてしまったのじゃ。でもなんでお主がそのことをえらい剣幕で問いただすのじゃ？」
それはシュウイチの話の引き出し方が上手だとイサコは思った。シュウイチも祖母であるメガばあが大黒の事件の真相にあたる部分を知っていることはわかっていたのだ。
「今天沢さんから電話で、シュウイチ君と天沢さんは同じ学校、同じクラスだって聞いたの。しかもシュウイチ君が天沢さんの過去を暴いてみせたそうよ。それで天沢さんはすごく迷惑しているの！」
「おい、小此木。私はそこまで迷惑はしてないが。」
ヤサコがすごい勢いで年寄りを叱りつけているので、イサコはそこまで大げさな話ではないとなだめる。しかしヤサコの耳にその言葉は入らなかった。
「ほっ！？イサコがシュウイチと？こりゃまあすごい偶然もあるんだの。」
「感心している場合じゃないよオババ。ほら、今ちょうど天沢さんかと電話中だから、ちゃんと謝った方がいいよ。」
そう言ってヤサコはメガばあともイサコとの電話をつないだ。
「おおイサコと電話中じゃったのか。へろーへろー。元気じゃったかのイサコ。」
「年寄りのくせに、随分ノリが軽いんだな。」
イサコはつい本音が出てしまった。しかしメガばあの方もまるで反省の色が見えない。
「誰が年寄りじゃ。お主しばらく見ないうちに口が達者になったのう。」
「アンタは私に突っかかれる立場なのか？」

「そうよオババ。天沢さんの過去を勝手にシュウイチ君にしゃべったことをちゃんと謝って。」
メガばあは2人に問いつめられて珍しくぐうの音も出なかった。
「そうじゃの。勝手にしゃべってごめんなさいじゃ。」
「聞こえた?天沢さん。オババもこうして謝ってるし、許してあげて。」
イサコは孫に謝らされるメガばあの姿を想像して笑いがこぼれた。
本当におめでたくて、そしてうらやましい家庭だなと思った。
「ああ。これで酒井が私の過去について知っている理由もわかってすっきりした。悪かったな。時間をとらせて。」
「ううん。こっちもオババのせいで天沢さんに迷惑をかけたこと謝るわ。ごめんね。」
「いいんだ。じゃあ、学校頑張れよ。今日はこれで。」
「うん。天沢さんも学校頑張って。シュウイチ君とは仲良くしてあげてね。」
短い時間だったが、心が安らいだなと思いながらイサコは電話を切る。そしてシュウイチに関する思わぬ情報も得て、彼への言動に関する謎も解けた。おそらくシュウイチは、メガばあの口から自分に関してそこまでの情報が出て来るとは思わなかったのだろうとイサコは想像した。昼休みの時にそのことをレインが口に出そうとしたのを、シュウイチは少し申し訳なさそうに止めている。きっとシュウイチを筆頭に金沢黒客も悪い連中じゃない。そう思ったイサコは、明日もう1度きちんと金沢黒客と話合おうと考えた。

#15　金沢市黒客クラブ　part4

翌日の休み時間、イサコはシュウイチの席に歩み寄って声をかけた。
「あのさ、昨日の話の続きがしたいんだけど、昼休みにあの2人を集めてくれる？」
いきなりイサコに話しかけられてシュウイチも少し驚いたような表情だった。しかしその用件を聞いてうなずいて返した。
「うん、いいよ。また屋上でいいよね？」
「ああ、かまわない。とりあえず人に聞かれたくはないからな。」
シュウイチは「了解」と言いながら早速メガネでメールを開き、レインとカズマにその旨を送ろうとした。
「それと、昨日小此木に電話して聞いた。お前、小此木のいとこらしいな。」
イサコはその話を聞いてから、なんとなくシュウイチとの距離も近くにとれるようになった。その話を聞かないままだったなら、おそらくこうやって声をかけることもできなかっただろう。
「ああ。優子ちゃんに聞いたんだ。そうだよ。」
「なぜ黙っていたんだ？最初からそう言えば、お前が私の過去について知っていることを、私もとりあえず納得できたのに。」
「だって、自分の口から言うのもどうなのかなと思って。君たち2人は大きな事件を乗り越えてつながり合った1番の親友なんだろ？そこへ持って来て、僕は優子ちゃんのいとこだから仲良くしよう、っていきなり君に言うのも変だしね。」
イサコはシュウイチの言った、「親友」という言葉に引っかかる。未だに自分はヤサコのことを友達になれたのかどうかわからないし、ましてや1番の親友だと思うのは自惚れだと思った。もちろんそうでありたいとは願うところだが、自分たち2人の関係を見て来たわけでもないシュウイチにそう言われるのは少し違う気がした。

「余計な配慮だ。それに私と小此木の関係を軽々しく口にするのはやめてくれないか？あの事件を知らない人間に、私たちの関係がどうなのかわかるはずもない。私だって、まだよくわかってないのだから。」

その言葉に、シュウイチはイサコの表情を見て少し考えるような顔つきになった。

「……わかった。気をつけるよ。」

「それで、お前のバアさんに私の過去について聞いたんだろう？どのくらいのことまで聞いたんだ？」

「そのことも聞いたんだね。」

イサコが少し声を細めて訊ね、シュウイチがもう1度イサコの方を見上げた。

「ああ。小此木がそのことに気付いてメガばあに問いただしたら白状した。」

「メガばあ？」

「お前のバアさんのことだ。大黒ではそう呼ばれている。」

イサコの言葉に、シュウイチが笑い出した。

「メガばあか。確かにそうだね。うちのおばあちゃんはメガネにやたら詳しいし……そうか、おばあちゃんは僕に口止めしていたんだけど、自分から白状したんだ。」

「それで？どこまで私の話を聞いたんだ？」

イサコはシュウイチの机に手を載せながらもう1度訊ねた。

「おそらく一部始終だと思うよ。大黒市で起こった夏の事件について話を聞かせてって頼んだら、2時間ぐらいぶっ通しで話してくれたから。」

シュウイチの話を聞いて、イサコはメガばあのことを少し恨めしく思った。メガばあのことだからその話のほとんどは自分が英雄になるようにかなり脚色されているはずである。その自己満足ショーのおかげで自分はいい迷惑を被っていると思うと、昨日謝られたとはいえそれでは足りないのではないかとイサコは思った。

「それ、あの2人にすべて話したのか？」
「レインとカズマのこと？まあ一応同じクラブで、しかも一昨日は君について3人で調べていたからね。僕の覚えている限りの情報は2人にも伝えた。ごめん。」
今更謝られてもな、とイサコは思った。
「まあ、いいさ。2人にも会ってから話をつける。」
「うん。アイツらだって良いヤツらなんだ。昨日も言ってたように、君の過去を握っているからって、そのことでゆするつもりはないんだ。」
シュウイチがイサコに訴えかける。イサコも昨日の様子などを見ていてそれが嘘ではないことくらい察していた。
「ああ。わかっている。にしてもその“君”、って呼ぶのもやめてくれない？」
おそらく同じ年の、それも異性にそう呼ばれるのはイサコは初めてだった。シュウイチは別に意識して使っているわけではないのだろうが、イサコは少し恥ずかしい気がしていた。
「じゃあなんて呼べばいいの？やっぱり“天沢さん”？」
“イサコ”でいい。」
即答だったのでシュウイチの方が驚いた。
「わかった。じゃあ、イサコ。昼休みにまた屋上で。」
シュウイチがそう言うと同時に、次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

昼休み。イサコはまたユイとアサミと一緒に昼ご飯を食べていたが、金沢黒客との約束もあるので今日は早めに食べ終えて席を立った。
「すまない。今から行くところがあるから。」
「また酒井君とどこか行くの？いいなあイサコ。ひゅーひゅー。」
ユイがクラスのみんなに聞こえるような声で冷やかすので、イサコはそそくさと教室を出て行った。そのシュウイチはその時教室には

いなかったので、すでに屋上にいるはずだった。イサコも急いで屋上にのぼってドアを開ける。
「あれ？お前1人か？」
屋上に待っていたのはシュウイチ1人だった。フェンスに寄りかかるように座り校庭を見下ろしている。急いで来たイサコは少し拍子抜けした。
「ごめん。あの2人は同じクラス、1年4組なんだけどさ、前の時間が体育だったらしくて、着替える時間とかで遅くなってるんだ。それにカズマが……」
「あのゴリラがどうかしたのか？」
イサコはカズマに会った時からそんな印象を抱いていた。顔はそこまで野性的ではないのだが、体つきはシュウイチ達と同じ学年とは思えないほど立派だった。外見からの判断だが、カズマがそこまでメガネに詳しいのかとイサコは疑っていた。
「昼ご飯を買いに購買部に行ったらしいんだけど、オカズパンを選ぶのに時間がかかったらしいんだ。いつものことなんだけどね。オカズパンが大好きで、それに名前もヒラオカズマだから、小学校時代には“オカズ”って呼ばれてたんだ。僕らは普通に“カズマ”って呼んでるけどね。」
シュウイチが笑顔で楽しそうに話す。イサコはシュウイチの座っている場所とは少し離れた位置に立ってその話を聞いていた。パンに悩んで約束に遅刻するくらいなら、メロンパンを選べばいいのにと思った。
「……なあ、1つ聞いていいか？」
「ん、なに？」
イサコはシュウイチに聞いてみようかと思って悩んでいたことがあった。ちょうど2人だけで他に誰もいない今しかチャンスはないと思って意を決した口を開いた。
「お前、私の過去について聞いた時に…何て言えばいいか、引かなかったのか？」

「引く？」
言ってる意味がよくわからないという様子でシュウイチがイサコを見る。
「私は“あっち”への通路を開いて兄を助けようとした。金沢でも“あっち”の存在は色々と噂されているな？“あっち”の世界にはミチコがいる。そのミチコは存在は恐怖の象徴とされている風に思うんだが。」
金沢にも旧コイルス社の実験空間があったこともあり、“あっち”やミチコの噂が都市伝説として広まっていた。イサコは知らないが、大黒に転校する前のヤサコがそれを調べていたりもした。その時ヤサコの友達だったマユミは、ミチコを呼び出そうとしたと噂されバッシングを受けた。
「その通りだよ。昔は優子ちゃんもそれについて調べていたみたいだけどね。つまりイサコの言う“引く”っていうのは、僕がイサコの過去を知って、イサコはちょっとヤバイ子だという目で見ていたんじゃないかってこと？」
「まあ、そういうことだ。」
イサコはうなずいた。大黒小での夏休み明け、宗助の弟のタケルが煽動して、“あっち”への通路を開いたイサコに対する嫌がらせが行われた。それまで人を拒んで来たイサコだったが、その出来事がショックでないはずがなく、今でも心に大きく傷跡を残していた。実は事件の後にタケルはそのことをイサコにちゃんと謝っており、タケルに対しての恨みはない。しかし金沢で同じことを味わいたくはなかった。今はかつての自分とは違い、人との絆を大切にしている。もし金沢で自分の過去が周りに知られでもしたら、それらをすべて失うかもしれないとイサコは不安に思っていた。だから昨日シュウイチやレインに過去を言い当てられた時は本当に焦った。
「いや。だって僕はイサコがお兄さんを思って行動していたことを聞いていたから、全然そんなことは思わなかったよ。イサコなら同情してほしいとは思わないかもしれないけど、本当に辛い思いをし

てきたんだね。」
イサコはシュウイチの言葉に安心するとともに、なぜか胸が少しだけ痛むような不思議な気分になった。このシュウイチを筆頭に、金沢黒客の3人は自分の過去を知っているのにも関わらず、それでも自分を必要としている。まるでイサコが恐れていたこととは逆だ。イサコが自分の過去を暴いてみせた金沢黒客に対して怒りが湧いてこないのはそのためだった。とりわけこのシュウイチには、金沢へ来て初めてもっと自分のことを知ってほしいと思える存在となっていた。イサコはユイ達にも自分の過去をなかなか言い出せずにいたのだ。
「……うははははっ。おいバカ、やめろ。これは、オレの！」
その時屋内の階段の方から豪快な笑い声が聞こえて来た。イサコもシュウイチも声でその主がわかった。
「いいじゃねえか。1口くらい味見させろよ。」
「オレはちょっとちょうだい、が1番キライなんだよ！食いたかったら自分で買ってこい！もっとも、コロッケパンはこれが最後の1つだったけどな、ガハハッ！」
「お前が店に残ってた残りのコロッケパン3つ買い占めたんだろうが！お前でかいのは体だけか？もっと器の大きい人間になったらどうなんだ？」
そんな口論をしながら金沢黒客のレインとカズマが屋上に現れた。なるほど、これがいつものコイツらのテンションなのかとイサコは理解する。
「おす。2人とも来るのがはええな。」
レインと取り合っていたコロッケパンをほおばりながら、「よっ」と手を突き出してカズマが言った。
「来るのがはええなじゃないだろ。前が体育だったから少し遅れるのはわかるけど、約束があるんだからパンぐらいさっさと選んでこいよ。しかも悩んだあげく買ったのはコロッケパンだけかよ。」
「わかってねえな、シュウ。ここの購買部にはノーマルコロッケパ

ンの他にカレーコロッケ、クリームコロッケパンがあるんだ。今日はその食べ比べをしたんだよ。」
呆れたように言ったシュウイチに、威張るようにカズマが返した。
「で、その中でもコイツが1番のヒットって言うカレーコロッケパンを1口味見させてもらおうとしたら、断固拒否されてな。まったく、このゴリラだけは食べる知能しかないらしい。人に少し分けてあげようっていうまるで発想がない。」
レインも憮然とした態度でシュウイチに言った。このレインも外見や昨日までの態度から、もっとクールを気取っているものだと思っていたが、案外そういうわけでもないらしいなとイサコは思った。
「お取り込み中失礼するが、昨日の話の返事をしていいか？」
イサコが3人の話に割り込んで言った。
「ああ、悪い悪い。で、協力してくれるのか？」
レインもイサコの方を向いて訊ねる。昨日は金沢黒客の黒井地区の事故の調査にイサコが協力するかどうか、というところで話が終わった。
「結論から言う。協力するのはかまわない。やはり私もその事故が気にはなっているからな。大黒での事件を体験した者として。」
「そうか、助かる。これからよろしくな。それとお前の過去は昨日も言ったように誰にも言わねえよ。結構周りには知られたくはない話だろうからな。」
レインはイサコの不安を見通しているようだった。それでもイサコがイヤな感じがしないのは、このレインに自分を支配しようとしているという気持ちがないと感じ取れたからだ。どうもこの3人組は信用してもいいと思える不思議な雰囲気をまとっている。小学校時代にも周りから慕われていたというアサミの話もわかるような気がした。
「その言葉も信用していいんだな。」
「ああ、オレたちは約束を破ったことがないというのが取り柄だ。で、早速だが、どう調査を進めて行く？」

レインがイサコに訊ねる。それはイサコもどうしようか色々と考えているところだった。
「そうだな。やはり昨日黒井北公園にいた少女を調べるのが手っ取り早いと思う。あの少女は必ず事故に関係しているはずだからな。」
「ああ。あの女、この学校の生徒だろ？聞いた話では1年3組だった気がするが。」
「ああ。それは私も確認した。」
レインとイサコが確認し合っている最中にシュウイチが思い出すように言った。
「あ、イサコ。次は僕たちのクラスが体育だよね。そろそろ準備した方がいいんじゃない？」
「え？ああ、もうそんな時間か。」
イサコはメガネで時計を確認した。授業開始10分ほど前だった。
「そうか。悪かったな、オレたちが遅れたせいで短い時間しか話し合えなくて。今日の放課後空いてるか？もし良かったら話の続きはその時でもいいが。」
「ああ、かまわない。放課後だな。じゃあお先に。」
イサコと金沢黒客は放課後にまた集まることになった。それまでに少女を調べるいい方法を考えておかなければならないなと、イサコは思いながら先に屋上を後にしていった。
「おいシュウ。お前いつのまにイサコって呼べるぐらいアイツと仲良しになったんだ？」
屋上には金沢黒客の3人が残り、少し意地悪そうな言い方でレインがシュウイチに訊ねた。
「いや、それが僕もよくわからないんだ。いきなり“イサコ”って呼んでもいいって言うもんだから。」
「いきなり？まあいいか。じゃあこれからオレたちも“イサコ”って呼ぶか。」
レインがイサコが駆け下りて行った階段の方を見ながら言った。
「じゃあオレは“女王”って呼ぼうかな。」

「なんで？」
いきなりのカズマの言葉にシュウイチが訊ねる。
「なんか、女王っぽくね？アイツ。」
「おい、周りに変な勘違いされそうだからそれだけはやめてくれよ。」
レインが笑ってカズマをたしなめながら、金沢黒客も屋上を後にした。

#15　金沢市黒客クラブ　part5

この日の授業が終わり、イサコの1年1組は担任の松葉のショートホームルームを待つだけとなった。先生が来るまでの間に、シュウイチがイサコの元に歩み寄って声をかけた。

「レインがこの前の黒井北公園での話を聞きたいって言ってるからさ、その時一緒にいた2人も連れて放課後に屋上に来てくれる？」

一昨日黒井北公園にいたのはイサコとユイとアサミである。レインはその2人からも詳しい話を聞きたいと思ったのだ。

「わかった。私が2人を誘っておく。」

「頼んだよ。」

そうしてショートホームルームが終わり、イサコはユイとアサミに声をかけてシュウイチを加えた4人で屋上に向かった。アサミは金沢黒客とは小学校も同じで顔見知りだが、ユイはメンバーと会うのが初めてなので緊張しているのかと思ったら、学年内でも女子人気の高いレイン達に会えると、逆にテンションが上がっているように見えた。

「おう。わざわざ来てくれてありがとな。」

屋上には先にショートホームルームが終わったレインとカズマが待っていた。まずレインはユイとアサミに呼び出しに応じてくれたことを感謝した。

「いいのよ。金沢黒客とイサコは協力しあって黒井地区の事故を調べるんでしょ？それなら私たちもできるかぎりの協力はするわよ。それからこの子は秋吉ユイ。イサコとは同じ小学校に通っていたの。私とは同じ塾に通っていた。」

「よ、よろしくお願いします。」

アサミに紹介されたユイが、やはり本人達を前にして緊張気味に頭を下げた。その仕草がかわいらしかったので、金沢黒客の3人は思わず笑みがこぼれた。

「ああ、よろしく頼むよ。話はイサコから聞いてると思う。3人はこの前、黒井北公園にいただろ。そこには一応オレたちもいたんだが、その時の話を聞かせてもらおうと思ってな。」
「いいわよ。じゃあどこから話そうか。」
レインの言葉にアサミが返す。とりあえずイサコ達はアサミのペットのセナがなぜ戻って来たのかを調べに黒井交差点に行ったというところまで話を進めた。
「交差点に着いてどうしようかと言う時に、セナがどこかに行きたがっているような仕草を見せてな。私たちはセナの後を追うようについて行った。すると黒井交差点の裏通りに出て、そこでセナが何かに反応したんだ。その時連れていたユイのペットも同じところに反応した。そこで私が調べてみたところ、その道端に暗号式が書かれていたんだ。」
「暗号式?そんなものはオレたち見なかったが。」
不思議そうにレインが返す。
「ああ。その暗号式なんだが、空間偽装によって隠されていたんだ。だから、普通にメガネを通して見ているだけではその暗号は見つからない。私達が見つけたのも偶然だった。」
その暗号は、サーバーの時間軸をずらすという手の込んだ偽装によって隠されていた。それだけで暗号を書いた者のレベルの高さがうかがえる。
「なるほど。で、その暗号はイサコがかつて使っていた暗号式と同じものなのか?」
「いや。私もまったく見たことのない暗号式だった。その暗号は魔方陣に見えるのが特徴だ。それも同じものを5つ見つけてな。その配置が地図上で星形になっていたんだ。その真ん中に位置していたのが、あの黒井北公園だったんだ。」
イサコが暗号の位置をマーキングした地図を出しながら説明した。
「なるほどね。そこでその黒井北公園に行ってみたところ、あの女の子を見つけたってわけだね。」

シュウイチが納得したように言った。
「ああ。ところで、お前達はなんであの場所に?」
「オレたちはあの女を探していた。その前の数日の間、オレたちは黒井地区に行って事故について調べてたんだが、いつもあの女を見かけたんだ。最初はオレたちと同じように事故を調べているのかなと思ってたんだが、どうも様子がおかしい。だからあの日は、あの女を見つけ次第話を聞くつもりだった。最近ここで何をしてるのかってな。そこであの時は黒井北公園であの女を見つけたわけだが、先にお前達が接触してたんで影で様子をうかがってたんだよ。」
イサコの問いに、レインが詳しく説明した。
「そうか。あの時キューちゃんがやって来てそのどさくさであの少女に逃げられたものだから、そのあと私の後をつけたっていうわけか。」
「キューちゃんって言うのは、あの丸いサーチマトンのことか?困るんだよなあれ。黒井地区周辺にあれが飛んでるおかげで調査がやりにくいったらない。あれ導入したのメガマスだろ?どうにかならねえのかよシュウ。」
困ったような顔をしてレインがシュウイチに訊ねた。シュウイチの父親はメガマスの金沢支社に勤めている。しかもヤサコの父一郎とは以前同僚だったという話を、イサコはヤサコから電話で聞いていた。
「わからないよ。父さんと仕事の話なんかしないからね。」
「そりゃそうだよな。で、話を戻すと、あの女と直接話をしたっていうのは、秋吉さんだけってことだろ。どうだった?あの子の印象は?」
レインがユイの方を見て訊ねた。
「うーん……うそはつけない子っていう感じ。適当にごまかそうとしている時や、何か痛いところを突かれた時は顔にわかりやすく出るかな。多分正直な子なんだと思うよ。」
「そう言えばユイ、キューちゃんが来る直前にあの少女に攻撃の構

えをされていたな。その時あっちに攻撃の意志があったように思えたか？」

イサコがユイに訊ねる。少女はユイが1人だけで公園に来ていたわけではないことを見抜いていた。それを知った少女はユイにこれ以上詮索しないよう攻撃の素振りを見せた。

「いや、攻撃するつもりはなかったと思うよ。あれは多分威嚇だったと思う。本気で私をうっとうしいと思うならあの場で攻撃してきたはずだよ。それにその時の目は人を傷つけようとしている目じゃなかった。むしろ、自分を守ろうとしている、そんな目だった。」

なるほどとイサコはうなずく。話を聞く限りでは少女は根は優しいが、何かの事情があって他者を拒もうとしている、そんな風に思えた。ならば根気よく少女に近づいて呼びかけていけば、いつかは心を開いてくれるのではないだろうかとイサコは考えた。

「なあ。あの少女、まだ学校にいるかな？」

「うん？そうだな。確かあの子のいる3組は最後の授業が体育で、まだショートホームルームが終わってないんじゃないか？どうする気だイサコ？」

答えたレインがイサコの方を見た。他のメンバーやユイ達もイサコの考えを聞こうとそちらを向いた。

「ユイ。もう1度あの少女と話をしに行ってくれないか？この前は失敗したが、お前があの少女と仲良くなりたいという思いが伝われば、あちらも心を開いてくれると思うんだ。」

「え？でもこの前はもうちょっとで攻撃されそうになったんだよ。そりゃあの子にその意志はないとしても、それ以上踏み込まれたくない領域があるからあんな行動をとったんじゃないかな？それを無理矢理聞き出そうなんて。」

ユイはあまり乗り気じゃないという顔をした。

「いや、無理矢理聞き出すというわけじゃない。まずは互いの距離を縮めることが目標だ。ユイもあの少女をほおっておけないだろ？何か危ないことをしているのかもしれないし。」

「そりゃそうだけど、うまく行くかな。今度こそ攻撃されないかな。」
「いや、まだ生徒の大勢残っている学校でそんな派手なことはできないだろう。ここはイサコの言う通り、もう1度会ってくれないか？1度話したことのある秋吉さんの方が、相手もまだ話しやすいと思う。」
イサコと一緒になってレインもユイに頼んだ。さすがにレインの頼みとあっては断れないなとユイは思った。
「わかった、やってみる。万が一攻撃された時はイサコが守ってよ。」
「ああ。それならモジョを連れて行け。コイツのカメラ機能で映像と音声がこっちに飛ばせる。危なくなったら、コイツが暗号で反撃してくれる。私達はここでそれをモニタリングしながら、この前のように指示を出す。いけ、モジョ。」
「モジョ！」
嬉しそうにイサコのブレザーの胸ポケットから現れたモジョが、ユイの手のひらに飛び込んで行った。
「わかったわイサコ。それから、私のことはユイって呼んで。イサコもアサミも下の名前で呼んでるのに、私だけ名字じゃ寂しいから。」
去り際少し恥ずかしそうにユイが金沢黒客メンバーに言った。
「ああ。じゃあユイ、頑張って来てくれ。」
レインが笑顔でユイを見送る。それを見てユイは気合いが入ったのか、勇んで階段を降りて行った。

ユイが1年3組の教室にやって来た時には、ちょうどショートホームルームが終わって生徒達が帰ろうとしているところだった。いいタイミングだと思ったユイはそのまま帰り支度をしている少女の元に歩み寄る。ユイのバッグの隙間からはモジョが顔をのぞかせており、そこから送られてくる映像をイサコや金沢黒客は屋上でモニ

タリングしていた。
「こんにちは。あなた、1年3組だったんだね。」
ユイが少女にそう声をかけると、少女は驚いたようにユイの方を向いた。
「……ええ。あなたは一昨日の。」
にらみ返すわけでもなく、ただ目を丸く見開いたまま少女がユイに言った。
「驚いてるようだね。」
その様子をモニタリングしていたシュウイチが漏らす。
「ああ。この前自分が攻撃しようとした相手が、また声をかけてくるなんて普通思わないだろう。」
シュウイチにイサコが返した。それでも距離を縮めようとする気持ちを見せることによって、少女に心を開いてもらおうというのがイサコの考えだった。
「ええ。この前は少し驚かせてごめんね。そう言えば、名前まだ紹介してなかったね。私は秋吉結衣。1年1組よ。よろしくね。」
ユイはそのまま少女に自己紹介をした。少女は戸惑いながらも、どこか周囲を気にしている素振りを見せた。
「よろしく。私の方こそこの前はごめんなさい。少し興奮しちゃって。」
少女は意外にもユイにこの前のことを謝った。ユイはとりあえず、少女に攻撃の意志がないことに安心した。
「別にいいよ。でも、もうこの前みたいなことはしないでね。それより、あなたのお名前は?」
どこかで聞いたようなセリフだなと思いながら、イサコはモニターの向こうの少女の返事を待った。
「沙織……桐野沙織(きりのさおり)です。」
「サオリちゃんか。良い名前だね。じゃあ今度からはサオリって呼んでいい?」
「え?ええ。いいですけど。」

どんどんユイのペースで話が進んでゆき、イサコはいい調子だと思えた。

「ねえ、イサコ。今日のこの子、どうしたのかしら？この前と違ってやけに正直だし、それにさっきからしきりに周りを気にしてるように見えるんだけど。」

その様子を見ていたアサミがイサコに言った。確かに少女の受け答え方は黒井北公園で会った時とは別人のように違っている。

「どうしてだろう。周りをしきりに気にしているのは、影でこの様子を伺っている人間がいるかどうか確かめてるんじゃないか？この前は、ユイに誰かが指示を出していることに気付いていたようだしな。今日はその気配が感じられないから、安心してしゃべってるんだと思うが。」

イサコが考え込んで言った。裏を返せば、このサオリはユイだけとなら正直に本心を話してくれそうだとイサコは思った。

「それは、ちょっと違う気がするが。」

そこに口を挟んだのはレインだった。イサコの解釈が違うというらしい。

「どういうことだ？」

イサコがレインの方を見る。

「ああ。このサオリって子、ただ声をかけられて嬉しいんだと思うぜ。それだけじゃない。しきりに周りを気にしているのは、１人じゃない自分をアピールしたいからだろう。」

「１人じゃない自分をアピール？」

イサコはもう１度モニターの方を注視した。

「少なくともオレにはそう見える。聞くところによるとこのサオリは、同じ小学校の友達がいないそうだな。それに性格も少し内気みたいだから、今までクラスの中では１人ぼっちだったんだと思うぜ。でも、そうじゃない。こうやって自分に話しかけてきてくれる人がいるんだってことを、周りに見せたいんだろう。」

レインの言葉に、イサコやその場にいた全員が妙に納得してしまっ

た。確かにその通りだと思えたからだ。このレインは、人の気持ちを読む能力に長けているらしい。だからこそリーダーを任されているのかと、イサコは思った。

「じゃあこの子は、今すごく葛藤しているのかな。自分と仲良くしてくれる人がいて、でも秘密を守らないといけないからどこかで一線を引かなければならなくて。内心はとても喜んでいるはずなのに。」

シュウイチがレインに訊ねた。

「かもしれないな。守りたい秘密もあるのだとしたら、どれだけユイと親密になってもそれを言ってくれるかどうかはわからない。イサコ。お前がユイやアサミに自分の過去をなかなか話せなかったことと同じだ。」

レインの言葉にイサコはどきりとし、自分の都合の良さが恥ずかしくなった。確かにレインの言う通りだと思った。親密になるほど、どうしてもその相手に言いにくくなることもある。イサコの場合、自分の過去をユイが知ることになれば、ユイは自分から離れて行ってしまうかもしれないという恐怖が拭えないから、今まで自分の過去を打ち明けることはできなかった。なのにイサコはユイとサオリが親密になるほど、サオリが心を開いてくれるとばかり思い込んでいた。こんな作戦、レインから言わせれば最初からうまくいかないとわかっていたのだろう。

「ねえ、イサコの過去って何のこと？」

その時アサミがシュウイチに声を細めて訊ねた。

「それは、いずれイサコ自身が話してくれると思うよ。」

シュウイチがそう答え、2人は再びイサコとレインの方を向いた。

「そうだな。確かに私の見通しが甘かった。それでも、ユイはサオリのことを気にかけていたようだし、私もサオリのことをもっと知りたいから良かれと思ってやったんだ。正直、これ以外にサオリのことを知る方法もないと思ったしな。」

うなだれながらイサコがレインに返す。

「まあな。でもこれでわかったこともある。このサオリは人を拒んでいるわけではない。でもどうしても他人と一線を引かなければならない理由がある。それは誰かに命令されてやっているのかもしれない。少なくとも本人は1人でいることを良いとは思っていないようだ。」

「なるほど。サオリと親密になったとしても、その秘密を聞き出すことは難しい。よっぽど時間をかけて、サオリがユイのことをかけがえのない友達だと思えるくらいになったら、話は別かもしれないけど。でも今の僕たちにそんな時間はない。手をこまねいていたら、第二の事故が起きかねない。」

レインが話をまとめた後、シュウイチが問題をあげた。要は、別のアプローチでもって事故のことを調べる必要があるということだ。

イサコもそれを思った。

「そうだな。とりあえずユイは撤退させる。私たちは他の方法で事故のことをどう調べられるか検討しよう。」

イサコはそう言うと、ユイに戻ってくるように指示をだした。この間もユイは、サオリと当たり障りのない会話を続けてどうにかサオリの心を開かせようとしていた。

「あっ、私そろそろ行かないといけないの。また今度ゆっくり話しましょう。」

ユイが申し訳なさそうにサオリに言う。

「ええ。私もそろそろ帰らないといけなかったから、また今度。」

サオリもユイに少しだけ頭を下げると、そこからそそくさと教室を出て行った。ユイはもう少しだったのにと悔やみながら、イサコ達のいる屋上に引き揚げていった。

#15　金沢市黒客クラブ　part6

全クラスの授業が終わり、校内ではクラブ活動が始まろうとしている。この1週間1年生は自由にそれぞれのクラブの見学に行くことができる。よくよく吟味した上で自分の入りたいクラブに入れるようにするためだ。しかしイサコと金沢黒客の3人、そしてユイとアサミはそれには行かず、引き続き屋上で事故の調査の方法について話し合っていた。

「ネットで事故のことは噂されてないのか？」

「多少はそういう話もある。でもオレたちには直接の事故の被害者がいるんだ。事故の詳細はそいつの話を聞いた方が早いし、何よりその原因なんて誰も知らない。あのサオリって子以外にはな。いや、そのサオリだって知っているかどうか。」」

イサコの質問にレインが返した。被害に遭った金沢黒客のあと1人のメンバーは、イサコ達と同じ中学校の生徒ではない。そもそもメガネを壊してしまって以来、この3人ともにほとんど会っていないとレインは話した。

「もうさ、この前みたく黒井交差点の近くで張り込むしかないんじゃね？サオリはどうしてもあそこで何かを起こしたいんじゃないのか？」

今度は体のごついカズマがレインに訊ねた。

「どうだろうな。黒井北公園でオートマトンに襲われて以来、アイツもあの辺で行動しにくくなってるだろう。場所を変える可能性もある。もっとも、なんでアイツがあの地区にこだわっているのかもわからんが。」

「そうなると、1度サオリを尾けるしかないな。今日もそそくさと帰って行ったということは、どこかでまた暗号を発動させるつもりなのかもしれない。モジョに監視させれば良かったかな。」

一刻も早くサオリが何をしようとしているのかを突き止めたいイサ

コは、この時間も惜しい気がした。そんな危機感を抱くのは、サオリがかつての自分と重なり合って見えるからだった。その自分が開いた通路のせいで起こってしまった交通事故のことが、イサコの心のどこかで引っかかっているのかもしれない。

「仕方ねえ。それは明日することにするか。どのみち事故の調査って言っても、実際にはサオリを調査するしか方法がないわけだからな。じゃあ、ネットとかで調べられる範囲は各自で調べると。アサミとユイは別にそこまでしなくてもいいぞ。シュウイチ、お前の親父はメガマスに勤めてるんだから、事故のこと何か知らないか聞いといてくれないか？」

「どうかな。父さんはいつも帰ってくるのが遅いし、朝出るのも早いから。家で顔を合わせた時でいいなら。」

シュウイチがレインに返し、とりあえず今日の会議はお開きとなった。これから金沢黒客はクラブ活動の見学に行くという。イサコもユイとアサミと一緒にどこかのクラブ見学に行こうかと話し合いながら、とりあえず屋上から1階の下足までぞろぞろと降りて行くことにした。そうして全員が1階まで降りて来たその時だった。

「モジョ！」

イサコの胸ポケットから顔をのぞかせるようにしていたモジョが何かに反応するように鳴いた。

「どうしたんだ？」

イサコが不審に思ってモジョが指差している方向を見る。うす暗い廊下の奥、３０メートルほど離れた場所に少女が佇んでいる。その少女は人目を気にするように辺りを注意深く見回しているようだった。

「おい、あれサオリじゃねえか？」

とりあえず全員が階段横の壁に隠れてそちらの方を向く。廊下は驚くほど静かだ。その廊下の1番奥でサオリは何やら作業を始めた。ウインドウを出してキーボードを打っているように見える。

「帰ったんじゃなかったんだ。でもサオリが帰るって言ってから3

0分ぐらい経つよ。今まで何をしていたんだろう？それはもちろん今もだけど。」

「おいおい。まさか学校の中で暗号を発動させようっていうんじゃないだろうな？」

シュウイチが不思議そうに言って、続いてカズマがまさかなという口調でレインに訊ねた。さすがにレインもそれはないだろうとうなっているようだが、イサコにはカズマの読みもはずれていないように思えた。

「いや、そうかもしれない。この前公園でサオリやユイを襲ったオートマトンは、学校の中には入れない仕様になっている。サオリがそのことを知っているとしたら、学校の中で暗号を発動させることも考えるかもしれない。」

「でも、人の出入りが多いクラブ活動の時間の学校の中でそんなことするかな。」

イサコの言葉に、ユイが疑問を持った。実際サオリはかなり人目を気にしているようで、しきりに周りを確認している。それでもイサコ達が監視していることは気付いていない。

「人気の多いところは避けてるんだろう。サオリは暗号を完成させても、それを隠すように偽装することができる。暗号を発動させるのは学校の中でもやろうと思えばできるはずだ。」

「むしろ、オレたちにとっては好都合ってか。ストーキングする手間が省けたぜ。で、どうする？ここはあえてサオリに暗号を発動させるか？それとも、サオリが発動させる前にそれを食い止めるか？」

レインの言葉にイサコはどうするか迷った。確かにここは交差点ではないので、何が起こっても最悪の事態は避けられる。しかし黒井地区の事故では現場近くにいた人のメガネが壊れるほどの異常が発生した。学校でそれをやられると、学校の管理するコンピューターにも危険が及ぶ。もちろんまだ校内に残っている生徒のメガネも危ない。かと言って暗号が発動する前にサオリを取り押さえてしまうと、結局彼女が何をしようとしているのかわからずに終わってしま

う可能性が高い。そして以降もサオリに警戒され続けることになりかねない。

「難しいところだが、やはりサオリには何も起こさせない方がいい。私たちはサオリがセットしている暗号を確かめて、それが発動するギリギリのタイミングまで観察する。何か危険なことが起きそうになれば、すぐにサオリを取り押さえる。」

「そんなうまくいくか？」

「やるしかないだろ。」

レインが少し不安そうな表情を見せたが、イサコはそれしか方法はないと思った。

「あっ、見て！移動したよ。」

サオリの動きを見ていたシュウイチが言った。サオリはその場所に暗号をセットし終えたのか、廊下奥から左手にある下駄箱方向に走り去って行った。

「よし、モジョ。サオリを追って見つけ次第監視体勢にはいれ。」

「モジョ！」

そう言うとモジョはサオリを追うように廊下を飛び跳ねて行った。

「前の話だと、暗号は星形に５つセットされていたってことだったな。そしてその５つを線で結んだときの真ん中の位置で何かが起きるかもしれないんだったな？」

「ああ。黒井北公園の位置はちょうどその真ん中に位置していた。」

レインの質問にイサコがすぐに答える。

「よし、ここは２手に分かれよう。例の暗号がどの位置にセットされたのか探す必要がある。サオリが帰るって言ってから３０分経ったってことだったな。その間にサオリが校舎のどこかに暗号を仕掛けた可能性もある。オレとカズマは北校舎、シュウとイサコは南校舎を重点的に探すっていうのはどうだ？アサミとユイは危険が伴うから、屋上でモジョからの映像を見ながらサオリがどこにいるのかを伝えてくれ。」

レインが機敏にそれぞれ指示を出した。暗号が発動する前にどうに

かすべての暗号を見つけ出し、さらにそこから何かが起こるポイント、X地点を探し出さなければならない。時間はどれほど残っているのかわからなかった。

「了解した。こちらは南校舎だな。」

イサコが学校の見取り図を出しながら確認する。この学校の校舎はコの字型になっており、それぞれ北校舎、東校舎、南校舎と呼ばれていた。イサコ達が今いるのは東校舎の南側。先ほどまでサオリが暗号を仕掛けていたのは東校舎の北側ということになる。

「ああそうだ。東校舎はお前らに任せていいか？サオリが屋外に暗号を仕掛けた可能背もあるからな。それはオレたちが探しに行く。」

スポーツマンのレインとカズマは機動力には自信があった。どのみち学校敷地内にあることはわかっているので、すぐに見つけられるだろうと思った。

「それも了解した。暗号を隠している空間偽装を解く方法はわかるな？サーバーにアクセスして情報を更新するだけだ。」

「わかった。暗号を見つけたらすぐにお互いを連絡を取り合うこと。よし、行くぞカズマ。」

「おうよ！」

レインとカズマは颯爽と北校舎に向かって走って行った。

「そういうことだ。ユイとアサミは屋上でモニターの監視を頼む。サオリの様子がおかしかったらすぐに言ってくれ。」

「わかった。気をつけてね、イサコ、シュウイチ君。」

「ああ。イサコと一緒なら大丈夫だよ。」

心配げに言ったユイにシュウイチが笑みで返した。シュウイチはイサコの実力をこの中の誰よりもよく知っている。

「行くぞ酒井。」

そうしてイサコとシュウイチは南校舎へ、ユイとアサミは屋上を駆け出して行った。

＃１５　金沢市黒客クラブ　ｐａｒｔ７

１階南校舎と東校舎の境目にやってきたイサコとシュウイチは早速念入りに暗号の有無を調べ始めた。
「ちょっとこの辺を歩いてみてくれないか？」
イサコがシュウイチに指示を出す。
「歩く？いいけどそれで何かわかるの？」
「言ったはずだ。暗号の偽装は空間の時間軸を置き換えることによって行われている。つまりお前がこの廊下を歩くと、暗号のあるその一区画だけはお前の足が少しだけ欠けて見えることになるんだ。偽装されている部分はリアルタイムの情報が反映されないからな。」
イサコがそう説明して、シュウイチもわかったようにうなずき廊下を１歩１歩確認するように歩いてみる。それをイサコは片膝をついて注視していた。
「そこだ！見てみろお前の足を。上履きの底の部分だけが消えているように見えるだろ？」
「ほ、ほんとだ。」
シュウイチが足元を見て確認する。横からはシュウイチがほんの少しだけ宙に浮いているように見える。つまりシュウイチの上履きの底にあたるほんの数ミリの部分だけが情報が古いままだということになる。イサコはすぐにキーボードを操作してサーバーにアクセスして情報を更新する。すると前に黒井地区で見かけたものとほぼ同形の暗号が現れた。暗号は鼓動しているかのように、青白い光が緩やかな間隔で点滅している。
「これが言っていた暗号か。イサコすらも見たことがなかったっていうものなんだね？」
「ああ。暗号は本来いびつな図形の集合体なんだ。しかしこいつは円形の枠の中に、星型の図形がいくつも描かれているだろ。これはあの一連の事件を通してもお目にかけなかったものだ。」

「僕のおばあちゃんに聞いてもわからないって言うかな?」
シュウイチの母方の祖母はメガばあだ。メガばあが昔暗号を使っていたという話もシュウイチは聞いていた。
「おそらくな。メガばあの暗号は古流と呼ばれるものだからな。私の使っていたものも、古流の発展系に過ぎない。この暗号はそれらとは一線を画すものだ。おそらくルーツも古流とは異なるんだろう。」
イサコはそう言いながら暗号をスキャンしてメガネの中に画像を保存した。先日の暗号も一応保存してあるが、その時とは形が違うかを後で確認するのだ。
「おーい。そっちも見つけたのか?」
イサコ達がいる南校舎から東校舎の廊下をずっと渡った端、北校舎にいたカズマが訊ねて来た。距離にしては４０メートルほど離れているのだが、他に人もいない校舎ではそれほど大きな声でなくても耳に届いた。
「ああ。そっちもあったんだろ?」
シュウイチがそこからカズマに返す。
「あったぜ。これで2つだな。オレたちはこのまま下駄箱の方を見て来るから、南は頼んだぞ。」
「わかった!」
シュウイチが言うと、レインとカズマはそのまま下駄箱の方に向かった。下駄箱は北校舎の西側方向にある。
「じゃあ私たちも引き続き南校舎を探すぞ。方向的にはこの南校舎の廊下にあるような気がする。」
イサコは学校の見取り図に見つけた暗号の位置をマーキングして言った。暗号はそれ自体が星形に並べられるという特性があるので、次の暗号の位置も読み取りやすい。
「わかった。急ごう。」
そうしてイサコとシュウイチは同様の方法で南校舎を調べてみた。ところがそこからは念入りに探したにも関わらず暗号が発見されな

かった。1階南校舎には美術室や木工室があるのだが、いずれもクラブ活動が行われていて中に仕掛けられた可能性は考えられない。
「どういうことだ？読みが外れたか。」
「あの2人に聞いてみようか？」
シュウイチはそう言ってレイン達に電話してみた。レイン達が下駄箱で見つけたなら、対称に位置することも考えてこの近くにある可能性が高いが。
「レイン？どうだった？下駄箱の方にはあった？」
「それがねえんだよ。そもそも下駄箱は人の出入りが多いからサオリも避けるんじゃないかと思ってな。今カズマがグラウンドの方を見に行ってくれてるよ。オレは今中庭を探してる。」
レインの報告を聞いてイサコは考え込んだ。下駄箱にはないということは、東校舎の両端で見つけた2つの暗号は星形のどの位置にあたるのか。そもそも星形にこだわるのが間違っているのか、色々と思案が駆け巡った。
「どこにあるんだろう？レインもカズマも外を探してくれてるけど、果たしてそこにあるかどうか。ひょっとしたら、他の暗号は学校の敷地よりも外にあるんじゃないかな？」
モニターを見て考え込むイサコにシュウイチが訊ねる。
「まさか。キューちゃんが入ってこれないからサオリも学校に暗号をセットしてるんだろう。だから学校の敷地の外にある可能性はない。そうだ、サオリの今の位置を確認すればいいのか。」
イサコはそう考えてサオリの監視役につけたモジョの位置を確かめようとした。ところが電波状態が悪いのか、モジョの位置はイサコのモニター上に表示されなかった。
「くそっ、こういう時に限って。ユイ達に聞いてみるか。」
「イサコさ、女の子なんだから『くそっ』とか言うのやめた方がいいと思うよ。」
その時シュウイチが少しのんびりとした声でイサコに注意した。
「うるさい。そんなこと言ってる時じゃないだろ。」

イサコも少しムっとして返す。なんでシュウイチに女の子っぽくしろと言われなければならないのかと思った。
「イサコ？どうしたの？」
その時屋上でモジョから送られて来る映像をモニターしているはずのユイと回線がつながった。イサコは気を取り直してユイに訊ねる。
「モジョからの映像は途切れてないか？」
「いや、大丈夫よ。と言っても、さっきから映像の乱れがひどくて、サオリの様子がよくわからないんだけど。」
イサコはとりあえずほっとした。やはり電波不良が原因だった。モジョが壊されてモニターに位置情報が表示されなくなったわけではなかった。
「サオリが今どこにいるかわかるか？」
「ちょっと待ってね。アサミちゃんどう？何か見える？」
ユイが隣にいるであろうアサミに訊ねる。
「これ、家庭科室って読めない？少なくとも日の辺りからからしても東校舎だよね？」
アサミがユイと念入りに映像を確認しているようだ。東校舎の２階から上の階は遮るものがないので、この時間は西陽が強く差し込んでいる。
「ああ、見える見える。てことは、ここは東校舎の２階かな。」
「東校舎の２階だな？わかった。」
イサコは回線を切ってまた考え込む。サオリの位置はイサコの考えていたところとはまるで違った。
「東校舎の２階って、全然暗号の位置とは関係なくない？なんでそんな所にいるんだろう？」
「わからない。とりあえず行ってみよう。」
イサコは暗号の位置を確認するより先に、サオリがその場所で何をするのかを確かめようと思った。もしかしたら暗号は既に仕掛け終わっていて、最後の段階に入っているのかもしれない。
「わかった。急ごう。」

シュウイチがうなずいて2人は南校舎1階の廊下を駆け抜け、東校舎の階段をのぼった。2階に到着したところで慎重にイサコが廊下の様子をうかがう。ユイ達の話ではサオリは家庭科室の近くにいるという話だったが。

「いないな。もう移動したのか。ユイ、サオリは今どこにいる。」

再び回線をつないでイサコがユイに確認する。

「ごめんイサコ。ちょっと移動したみたいなんだけど、映像が乱れてはっきりそこがどこだか見えないの。」

先ほどよりもさらに電波状態が悪くなっているのだとイサコは思った。それは明らかに学校の空間が正常ではないことを示している。

「どこだ。サオリはどこに行ったんだ。」

イサコは強く握りしめた手を壁に押し付けながら考え込む。このままでは、サオリの近くにいるモジョの身も危ないと感じていた。

「イサコ、上の階から何か聞こえない?」

突然シュウイチが辺りの気配をうかがうようにして言った。

「なんだ?何か聞こえるのか?どんな音だ?」

イサコがすぐに訊ね返す。イサコは一瞬イマーゴのことを思い浮かべたが、それなら自分にも聞こえているはずだと思った。

「シーっ。イサコもよく耳を済ませれば聞こえるはずだよ。そう、どこか遠くの方で雷がうなっているような音。」

「雷?」

イサコは窓の方を見た。東校舎の廊下の窓からは眩しいほどの西陽が差し込んできている。

「多分本物の雷じゃない。おそらく電脳上で何かが起きているんだ。」

シュウイチが静かに言った瞬間、今度はその音がイサコの耳にもはっきりと聞こえてきた。遠くで犬がうなっているような、鈍い雷鳴が。

「今の音か!上の方だったな?」

「間違いない!行こう!」

今度はシュウイチが先頭をきって、階段を3階へ駆け上がった。のぼりきったところでシュウイチは廊下に飛び出し右、左と辺りを見回す。しかし何も目に見えるところで異常は見当たらない。

「何もない。何かの聞き間違いだったのかも。それとも4階かな。」

遅れて階段を上がってきたイサコにシュウイチが言った。その時イサコはある異変に気付いた。

「待て！そこを動くな。お前の足、底の部分だけが消えかかっている。」

「え？ホントだ！まさかここにも暗号が。」

シュウイチが確認している間にイサコが猛スピードでキーボードを打ち込む。すると先ほど同じように、魔方陣式の暗号が浮かび上がってきた。

「ここに暗号……ということは……」

イサコが学校の見取り図に暗号の位置をマーキングして、シュウイチがそれをのぞきこんだ。

「これもしかして、平面上に星形じゃなくて、立体的に並んでいるってこと？」

イサコはシュウチの言葉を聞いて、モニター上に予想される残りの暗号の位置をマーキングしてみた。これまでイサコ達は平面上に、つまり1階で暗号が2つ見つかったので同じ高さの場所に残りの暗号があると考えていた。しかしこの3階で暗号が見つかったということは話が変わってくる。

「おそらく暗号は4階東校舎廊下の中央に1つ。そしてこの3階東校舎廊下に2つ。そして最初に見つけた2つと。これらを線でつないでみると星形になる。そして、その図形のちょうど真ん中に位置するのは、さっきまでサオリがいたという2階東校舎の廊下だ。」

イサコはやっと答えを導きだした。暗号は平面上に並ぶものという固定観念のおかげで、そこにたどり着くにはかなりの時間を要した。

「なるほど。じゃあすぐにレイン達にも知らせて、2階の東廊下に……ん？」

シュウイチは言いかけて何かに気付いたように北校舎の方を見た。
イサコもつられてそちらの方を向く。すると東校舎の廊下の奥、北校舎の境にレインとカズマが立っているのが見えた。
「アイツら、いつの間にここまで来てたんだ?まあ、ちょうど良かった。あの2人を呼んでくれ。」
イサコは2人に連絡する手間が省けたと思いながらシュウイチに言った。
「うん。おーい!レイン、カズマ!ちょっとこっちに来てくれ!」
シュウイチが手を振りながら2人に呼びかける。ところがレイン達はイサコ達の方を向いたかと思うと、そそくさと北校舎の方に戻っていった。
「ええっ!?アイツら素無視かよ。」
「一体何考えてるんだ?まさかアイツら、お前がキライだとか。」
あっけにとられるシュウイチにイサコが冗談っぽく言う。シュウイチが「そんなわけないだろ」と返しているところに、そのレインからの着信がきた。シュウイチは慌てて電話をつなぐ。
「おいレイン!何考えてんだよ。今お前のことを呼んだのに無視してどっか行くなんて。聞こえてなかったのか?」
電話がつながってすぐ、少し怒ったようにシュウイチが言った。
「ああっ!?呼びかけたってどこからだよ?」
いきなりシュウイチが噛み付いてきたので、レインも少し尖った声で返す。
「どこからって、東校舎の3階からだよ。聞こえただろ。てか、こっち見てただろ?」
「はあ?聞こえるわけねえじゃねえか。オレたちはグランド前にいたんだぞ。こっち見てただろってなんだよ。」
噛み合ない会話に、シュウイチは首をかしげる。イサコも向こうの声が聞こえていたが、そんな冗談言っている場合かとレイン達に言ってやりたかった。
「いやいや。今お前らも3階の東校舎まで来てただろ。それで僕や

イサコと目も合っただろ?」
「何寝ぼけたこと言ってんだよ。オレたちはずっと校舎の外で暗号を探してたんだ。でもどうも見つかりそうにないから、そっちの進み具合を聞こうと思って電話したんだよ。」
レイン達にとっては、シュウイチの言っている意味がわからないらしい。それは声色だけでシュウイチもイサコも感じ取れた。そして2人はきょとんと顔を合わせた。
「本当にこっちに来てない?ずっと校舎の外を探しまわっていたの?」
「しつこいな。そう言ってるだろ。お前さっきからおかしいぞ。イサコはどうしたイサコは?」
「イサコはここにいるけど。」
そう言ってシュウイチはイサコと電話を代わることにした。といってもイサコにもこの状況をうまく説明できる自信はなかったが。
「私だ。お前達にとっては嘘のように思えるかもしれないがちゃんと聞いてくれ。たった今、私と酒井はこの東校舎3階でお前達を見たんだ。酒井がそのお前達に呼びかけたら、そそくさと逃げて行ったんだ。」
「おいおい大丈夫か?2人そろって疲れてるんじゃないのか?とにかくオレたちはさっきから校舎には1歩も入ってないぜ。幻覚でも見たんじゃねえの?」
レインの言葉を聞いたイサコは、あるいはレイン達が電脳体分離でもしたのかと頭をよぎったが、まさかそんなはずもないかと思った。ならレインの言う通り2人そろって幻覚を見たのだろうかと考えるが、それもしっくりこない。
「まあ、そのことは置いておこう。それよりこっちは新たな暗号を見つけた。その暗号の位置からX地点の特定もできた。」
「なにっ!?それを早く言え。どこだ!?」
「東校舎2階廊下だ。私たちは今からそちらに向かう。」
「了解した。オレたちも急いでそっちに行く。」

そうしてレインは電話を切った。おかしな謎を残したが、とにかくイサコとシュウイチも再び2階に向かって階段を駆け下りる。すると2階の廊下から先ほどと同じ、雷鳴のような低い音が轟いた。イサコはシュウイチとともに、階段フロアの影から廊下の様子をうかがった。

「見てみろ。サオリだ。この雷のような妙な音は、やはりサオリの仕業だったようだ。」

「みたいだね。にしても、さっきはここにいなかったのにいつのまに。」

声を細めながら、2人はサオリの動きを注視する。窓から差し込む西陽に照らされているサオリは猛然とキーボードを叩いているようだが、まだその辺りに空間の異常は見られない。ただ雷鳴に似た音が不気味にうなっているだけだった。

「おそらく、私達がさっきここにいた時は3階にいたんだろう。3階でこの音と同じ音が鳴っていたからな。そして、入れ替わるようにサオリは北校舎の階段からここに降りて来たんだ。」

言いながらイサコはここからどうしようか迷った。このままここでサオリの様子を見守っていれば、彼女が暗号を使って何を起こそうとしているのか知ることができる。しかしサオリとの距離はかなり近く、もし黒井地区で起こったという現象と同じものが起きたなら、自分たちのメガネがかなり危ない。ここは止めに入るべきなのか、イサコは激しく頭の中を回転させながら考えた。

「ねえ、ちょっとあれ！」

イサコがうつむいて次の1手を考えている間にサオリの近くで異常が起こった。シュウイチはサオリに気付かれてはいけないことをも忘れたかのように、大きな声でイサコに呼びかけた。

「な、なんだあれは……」

サオリの目の前に現れたのは黒い穴だった。しかし空間の不具合が起これば黒い穴が開くのは珍しいことではない。しかしその黒い穴が今まで見たものと決定的に違っていたのは、その内部に稲光が走

っていることだった。先ほどから聞こえていた雷鳴が、今度は稲妻が落ちたときのような轟音へと変わる。

「うわっ！なんなんだよこれ！ヤバいってイサコ！このままじゃ黒井地区の事故のように、僕らのメガネも壊れる！」

黒井地区の事故でメガネが壊れたという仲間から、シュウイチはその事故の詳細を聞いていた。話によれば突然何もない空間に大穴が空いたということで、それは今の状況ともぴたりと重なった。

「わかってる！サオリを止めにいくぞ！」

そうしてイサコは廊下に1歩踏み出そうとした。その次の瞬間、今度は大きく地面が揺れ始めた。

「うわっ！」

イサコはそこでバランスを崩して倒れそうになる。

「イサコ！」

そこでシュウイチがイサコの肩を支えるようにつかんだ。しかし揺れはどんどん強くなっていく。もう2人は立ってもいられなくなってその場にかがみ込むしかなかった。

「ど、どうなってるんだ！？まさか、本物の地震が？」

これまでの人生の中でも最も強いであろう揺れの中、シュウイチは辺りを見回す。

「まずいぞ。こんな時に地震だなんて。」

イサコはこんな状況でもサオリのことが気になった。しかしまだ続く強い揺れのおかげで廊下の方を確認することもできない。それどころか、さらに揺れは強くなってきている気がした。建物が崩壊するのではないかと思うほど。

「いやあ！！」

イサコは恐怖のあまり声を張り上げ、そして雷の音も恐ろしくて両の耳を塞ぐようにうずくまった。そのうち建物が崩れて、何かの下敷きになってしまうのではないかと頭をよぎった。天井からは白い埃が舞落ちて来る。

「大丈夫だ。イサコ、落ち着いて。」

シュウイチはイサコの頭を守るように抱え込みながら、イサコの耳もとでなんとか元気づける。しかし今度は自分たちの足元が割れていくようなイヤな感じがした。それでもどうしようもない2人は、早くこの揺れがおさまってくれるのを祈るしかなかった。そして最後には、自分たちの足元がはっきり割れていくのをイサコは感じた。次の瞬間2人の悲鳴をかき消すように、稲妻が落ちる音がした。

#15　金沢市黒客クラブ　part8

「何やってんだお前ら？」
その言葉でイサコの意識は戻って来た。束の間気を失っていたようだが、それがなぜなのかよくわからない。記憶にあるのは稲妻の耳を貫くような凄まじい音と、そして足元から割れるように崩れていった床。おそらく錯覚だったのだろうとイサコは思った。
「ん？」
イサコは目を覚ました。ところが目の前は真っ暗だ。しかも顔の辺りを温かいものが包んでいるようだった。
「お、おい！離れろ！」
イサコは今の自分の状況に気付いた。あまりに激しい地震と雷の轟音に恐怖しうずくまった自分の頭を守るように、シュウイチがその体で包んでいる。そしてその状況を、駆けつけたレイン達に見られたのだ。そしてイサコは瞬時に、必死にもがいてシュウイチの腕の中から頭を抜き出した。イサコに突き飛ばされたシュウイチは壁に体をぶつけようやく気がついたらしい。
「あれ？お前ら、もうそんな関係だったの？」
カズマがちゃかすように言う。イサコは顔を真っ赤にしてあわてた。
「違う！今の地震で私が倒れたところを、コイツがかばうように頭を守ってくれただけだ！他意はない！」
イサコはそう言うと、そのすぐそばでモジョがしっかりと待機していることに気付いた。モジョはサオリの後をつけさせて彼女を監視していた。それをモニタリングしていたのは屋上にいるユイとアサミだ。つまりモジョは今のシーンをしっかりとユイとアサミに届けていたことになる。
「おい！ユイ、アサミ！まさか、今の見てたのか！？」
イサコはすぐに回線をつないでユイ達に確認する。
「……うん、まあ。」

「イサコ、良くやったわ。」
どこか恥ずかしそうなユイと、なぜか楽しそうなアサミから返事が帰ってくる。イサコは恥ずかしさのあまり自分から湯気が立っているんじゃないかと思った。
「お前というヤツは！肝心なところを映さずに、余計なところだけ押さえるなんて！」
イサコは怒りのあまりモジョのほっぺたを両手で思いっきり引っ張った。
「モジョモジョ！」
お仕置きを受けたモジョは情けない鳴き声で許しを請う。モニタリングしているユイやアサミには、イサコの両手でのびたり縮んだりする画面が見えたに違いない。
「おい。ちょっと今おかしなこと言ったな？地震？なんだそりゃ？」
1つ咳払いをしてレインがまじめな顔つきになって訊ねた。
「なんだそりゃじゃないだろ。震度6は確実にあったぞ。お前らこそよくすぐに駆けつけられたな。」
「おいおい。また変な体験でもしたのか？地震なんて起きてねえよ。そんなでかい地震があったら、オレたちも学校中も大騒ぎになってるはずだろ。」
イサコの言葉に、レインがため息をついて返す。先ほどもイサコ達はレイン達の幻を見たところだった。
「いや、確実に地震はあったよ。僕も立っていられないほどの揺れを感じたんだ。じゃないとあんな体勢になってるわけないだろ。」
シュウイチもイサコと同調して反論する。またこのような体験をしたのがこの2人だけのようなのが、説得力に欠けるところだろうなと思いながら。
「んなわけねえって。なあアサミ。地震なんてなかっただろ？」
「うん。揺れなんて全然感じなかったけど。」
アサミもユイもそれは感じていないらしい。やはり揺れを感じたのはこの2人だけのようだった。そしてこの2人だけというのが、お

互い何とも気まずかった。
「さっきもオレたちの幻を見たとか言ってたしな。なんかお前らのメガネに不具合でもあるんじゃねえの？」
「バカ言うな。幻を見たっていうのはまだしも、地震だぞ。電脳上で地震があったって言うのならたかだか視界が揺れるだけだ。その点私達は本当の揺れを感じたんだぞ。メガネに原因があるわけがない。」
ヌルなどの例外を除いて、メガネが人体に影響を及ぼすのは視覚と聴覚だけだ。電脳上の地震を肌で感じることなどできない。それは電脳ペットに触れられないのと同じ原理だ。
「でも、こうして実際に揺れを感じていない人間の方が多いからな。お前らが視覚情報に惑わされて、地面が揺れているという錯覚を起こしたという可能性だってある。」
レインの見解はないとも言い切れないが、2人そろってそんな錯覚を起こしたというのもイサコにとっては考えづらかった。
「じゃあ音は？地震が起きている途中、稲妻の落ちるような音が鳴ってたんだけど。」
シュウイチが訊ねる。サオリが突然2階の廊下で大きな黒穴を開けた時にも、そこから稲光のようなものを見た。揺れが始まったのはその直後だった。
「ああ。音は確かにうっすらとだが、この校舎の1階廊下を走ってる時に聞いたな。なんか、遠くの方で雷が落ちたみたいな音。」
「そうだな。それでオレたち急いで階段をのぼったら、あんな体勢のお2人さんを見つけたんだよ。」
レインとカズマが返す。とりあえず雷の音だけは聞こえていたようなので、イサコもシュウイチもどこか安心した。
「けど、この廊下に雷が落ちたぐらいの凄まじい音だったよ。」
「まあ、電脳上の音は空気震動で伝わるわけじゃないからな。ましてやこの学校の空間はどういうわけか荒れていたようだし、音の伝わり方の違い自体は問題じゃない。」

シュウイチにイサコが説明する。モジョの位置もわからないほど、学校の中は電波不良だった。音の伝わり方もいびつになるのは考えられることだった。

「それよりサオリは？」

イサコが思い出したようにレイン達に訊ねる。しかしレイン達は首を振った。

「オレたちが駆けつけた時にはいなかった。サオリはここにいたんだろう？お前らも見てないのか？」

「さっき説明した状況だったからな。サオリを追うどころじゃなかった。サオリが空間上に大穴を開けたところまでは確認したんだが。」

「そうか。やっぱりアイツの言っていたのは本当だったんだな。」

レインがカズマに確認して、カズマもうなずいている。

「アイツって、お前らの仲間で黒井地区の事故の時にメガネが壊れたヤツのことだな？」

「ああ。言ったよな？アイツの話では、事故の時に空間に大穴があいたってな。お前らも見たって言うのなら、その穴はサオリが開けたものって見て間違いない。あの暗号を使ってな。」

イサコの質問にレインが返す。そしてサオリと事故との関係を確信した。

「でも良かったねイサコ。その話が本当なら、イサコもあそこでメガネ壊れていたのかもしれなかったわけだもんね。」

「ああ。どうやら悪運は強いらしい。酒井も、メガネに異常はないな？」

ユイに言われて、イサコは一応メガネをチェックした。しかし異常は見当たらなかった。シュウイチもそれは同じだった。

「まあ、一応その黒い穴があいたって言う場所を調べてみるか？」

レインの提案により、イサコ達は廊下に出てその場所の空間を調べてみた。しかし空間自体に変わったところはなく、すでに暗号による反応は収束したのだとイサコは判断した。

「仕方ない、引き揚げるか。今日は色々あったが、わかったことも多い。私達の体験したことは、そのまま黒井地区の事故と同じようなものだったことは間違いない。」
「それはとびきり危険なことだったってわけだな？」
イサコにレインが訊ねるように言った。
「ああ。束の間とは言え、私も酒井も気を失ったからな。メガネが壊れなかっただけ幸いだった。サオリは、やはり止めなければならないということだな。」
「でも、結局サオリが何をしたいのかはわからないままだったね。」
イサコの言葉にシュウイチが息をつくように言った。サオリは空間に大穴をあけて、何をしようとしているのか。イサコは、まさかメガネの破壊が目的ではないだろうとは思ったが。
「それはこれから調べていくしかないな。聞き出すのも失敗したわけだしな。調査は私達だけで行おう。ユイやアサミを巻き込むのは危険すぎる。」
「それは了解した。でも、どうやって調べていくかだな。」
レインが考え込む。サオリが何をしようとしているのかを見届けようとして、イサコともあろうメガネ使いが失敗した。
「こうなったら脅して聞き出すしかないんじゃね？」
カズマがイサコに訊ねる。
「乱暴だな。それで私たちのメガネが壊されないという保障はない。下策だろう。」
そうカズマに返したものの、イサコに何か良い案があるわけでもなかった。とりあえずそれを考えることから始めないといけないなと思った。
「まあ、今日はこんなところで。また家に帰って頭冷やして、調査についてはまたおいおい話合おう。解散だ。」
レインが宣言し、金沢黒客の3人は疲れた顔をして去っていった。
イサコもユイやアサミとともにそのまま学校を後にすることにした。
そして帰り道、もう1度サオリのことを思い出す。彼女がかつての

自分と重なりあって見えることに気付いたイサコの耳元で、誰かがこうささやくような気がした。
「・・・・・・イサコ・・・・・・彼女を止めてあげて」

同日夜。
「金沢について報告が1つ。例の黒穴が、本日も現れたみたいですよ。」
「またですか?困りましたね、こんな大事な時期に。前のように犠牲が出ましたか?神崎さん。」
「いえ。今回はメガネが壊れたものもいませんでしたし、騒ぎにもなっていません。それは不幸中の幸いでした……やはりこれは彼女が原因なんですか?」
「おそらく。私もこうなるとは思っていませんでした。神崎さんには色々とご迷惑をおかけします。」
「べつにかまいませんよ。私の方も手は打ってありますので。次が起こったとしても、なんとか被害は最小限に抑えられると思います。それよりあなたにも何か策を講じてもらいたいのですが。」
「わかっています。とりあえず応急処置的に”あれ”を停止状態にしようかと。」
「ほう?」
「そこで異常があれば元に戻すしかありませんが、時間は稼ぐ事ができます。その間に例のプログラムを完成させます。」
「そうですか。頼もしいですね。では期待していますよ。」
「はい。よろしくお願いします。それでは失礼します。」
神崎は電話を切って、お気に入りの葉巻をふかしながら金沢の市街地の夜景を一瞥した。

＃１５　金沢市黒客クラブ　ｐａｒｔ８（後書き）

第１５話はここまでです。
第１６話もお楽しみに。

#16　雨が続けば　part1

「電脳ナビシステムの無期限停止措置がメガマス内で正式に決定された。その措置について、最近は各所で色々と憶測が飛び交っているようだ」

手動運転でひた走る車は北を目指していた。建物が少なくなってきて、畑や田んぼが景色の大部分を占めていた風景にも、少しずつ都会めいた建物が見えて来る。空はどんよりと重い。

「しかし、今度は金沢ですか」

玉子は渡されていた資料に目を通して、つぶやくように言う。

「あの夏の事件とも似ているね。大黒市で“あっち”への入り口を見失った優子は、かすかな望みを抱いて金沢へと訪れた。今の僕たちも、あの時の優子と同じ気持ちなのかもしれない」

運転席の一郎が思いにふけるように返す。この2人が今調べていること、それは廃ビルの事件の時に“あっち”に入り込んだヤサコがミチコから聞いた言葉、“新しい空間”について。ところが大黒市は宗助の逮捕後、驚くほど平和になった。それはそれでもちろん結構なことだ。しかし一郎や玉子はあることが引っかかっていた。宗助が逮捕される時に放った言葉を。

「『これですべてが終わると思うな。本当の混沌はここから始まると言っていい』。あの時の宗助の言葉、室長はどう思われますか？」

玉子のその質問はすでに何度か一郎にぶつけたことがあった。その言葉には、1人で考えるには恐ろしいほどのウラの意味が込められているのではないかと玉子は思っていた。

「まあ、少なくとも嘘ではないだろうな。あの時の彼の立場からすると、僕たちを踊らせるような余裕があったとは考えにくい。だからあれは、あそこで僕たちが居合わせたから、僕たちに伝えなければならないという思いで出た言葉。僕はそう思う」

「つまり、警告ですか？私達に対する」
おそるおそる玉子は確認した。玉子の中では、一郎の想像ははずれていてほしいというのが本音だった。宗助はあくまで自分たちをからかうような、そういうつもりで言ったのだと思いたかった。つまり事件はすべてが収束した。これ以上の混乱は起きない。それは自分の中の淡い希望でしかないということも玉子はわかっていた。
「そうだ。彼は何か秘密を知っているのは間違いない。ウラで起こっているその何かを、僕たちに止めさせようとしている。僕にはそう思えてならない」
一郎は玉子とは違って現実を見据えようとしていた。空間制御プログラムの件では大きな失敗を犯して、子ども達を危険に晒してしまったということもあり、２度と事故は起こさせないという決意は誰よりも固かった。もしそれが骨折り損で終わったとしても、後で笑い飛ばせばいいと思っていた。だから今は最悪の事態を想定して動かなければならない。
「その宗助ですが、どうなんですか？取り調べの情報は入ってきていますか？」
宗助逮捕からすでに２週間近く経過している。拘置所にいる宗助の取り調べは進んでいて、不正アクセス禁止法及び電脳空間法２条２項違反で送検されることが決まっていた。
「ああ。その話は空間管理室本部長から聞いたよ。まあ色々あるんだが、妙な点が多くてね」
「妙な点ですか？それは警察の取り調べのねつ造とかそういうものですか？」
玉子が気にしているのは、宗助に対する取り調べが厳正に執行されているかどうかだ。宗助の身柄を確保した大黒市警刑事課は、メガマス旧幹部達の息がかかっている可能性が高い。つまり現メガマスに対して不利になる証言を強要されているのではないか、という点が玉子としては不安だった。
「いや、君も知っているとは思うけど、今は警察も取り調べの透明

化を徹底しなければならない。自白の強要を防ぐためにね。確かに大黒市警の刑事課は旧幹部達の息がかかっているかもしれない。だけど、取り調べに関する情報も求められればきちんと公開しないといけないんだよ。メガマスも警察に申し入れて、彼の取り調べが録音されたものを警察から手に入れた。その際には桜井検事にも協力してもらった。声紋鑑定からもそれが彼のもので間違いはなかったらしい。それに外圧によるストレスが声にも感じられなかった点からも、彼が自白を強要されたものではないそうだ」

一郎の言うように、最新の技術を駆使すれば録音されたものがねつ造かどうかは一瞬で判定できる。さすがの大黒市警刑事課も、本物の録音メディアをメガマスに送らなければならなかった。

「そうなんですか。では妙な点とは一体どういう？」

玉子もその点は安心して一郎に訊ねる。

「うん。彼の証言を要約する。自分は空間制御プログラムを自らの手で作り出し、それを使って大黒市の空間を歪めさせた。プログラム組む際には、参考となる資料をメガマスのコンピューターからハッキングで抜き取ってきた。すべては自分ともう1人の共犯者で行ったことである」

一郎は淡々と答えた。宗助の真意をはかりかねるという点では、おそらく初めてこの話を聞いたときの一郎も、今の玉子と同じだった。

「どういうことなんですか？それじゃまるで、宗助は自分1人で罪をかぶろうとしているということになります。今までの彼の行動を考えるとそれは」

「らしくない、か？」

玉子の言葉を一郎がつないだ。玉子の言いたいことはわかっているという合図だった。

「ええ。人一倍プライドの強い彼です。彼が父の研究を世間に認めさせようとしたのも、それは父のためを思っていたわけじゃない。自分の自尊心を保とうとしたから。私はそう思っています。父を捨てたメガマスを倒す自分に酔いしれる。彼の行動はそこに規定され

ていたのではないでしょうか。結局は父の研究を最も理解していたタケル君によって阻止されてしまいますが」

「そういう一面も確かにあっただろう。だからこそ、今回の証言は理解できない。彼なら空間制御プログラムを開発したのはメガマスで、それをCGWに強要されてハッキングしたと答えると思っていた。誰かに罪をなすりつけて、みずからの罪には見向きもしない。厳しいかもしれないが、彼ならそうすると思っていた」

「私もそう思っていました。ましてや嘘をついてまで自分に不利になるようなことを言うとは考えられません……それについてメガマス上層部の反応はどうだったのでしょうか？」

玉子は一郎を見た。メガマスは恐れていたはずである。宗助の口から空間制御プログラムの開発元を明かされることが。メガマスはすでに、プログラムは謎のハッカーによる開発だと大々的に告知してしまった。その部分の食い違いは、メディアが噛み付く格好のネタとなるはずだった。

「猫目宗助の証言はメガマスにも、そしてCGWにも好都合だった。CGWは宗助との関係を一切否定するだろう。そして、メガマスは空間制御プログラムの開発を否定するつもりだった。お互いに猫目宗助の証言を固唾を飲んで見守っていたというところか」

「じゃあ、それに甘んじて宗助の証言通りだったと事件を片付けるのですか？メガマスはCGWを追及しないのですか？」

玉子の問いに、一郎は1つため息をついて答える。

「しない。メガマスにも空間制御プログラム開発の負い目がある。おそらくCGWを追及すれば、メガマスも道連れにされる。もはや事件は収束したのだと考えるメガマス上層部が、密かにCGWとの協定を持ちかけたという話もある。この件については水に流すから、お互いにもうこのことには触れないと。つまりこれが、両者の望みうる最良の結果だった言ってもいい」

「すべての罪は宗助に、ですか」

果たしてこれが宗助に課せられる罰として適当なのかどうか、それ

は玉子にはわからなかった。宗助はあの夏の事件で、ヤサコやイサコの命すら犠牲にしようとしていた。その罪は決して軽くはないと玉子は思っていた。今回の一件で、希代のサイバーテロリストと言えばどこか聞こえがいいのだが、とにかく犯罪史上でも最も狂人的な電脳犯罪者として認知されるのは間違いない。そしてメガマスがあの夏の事件のすべてを公表すれば、彼はまたその上からも重い罪を背負うことになる。もちろん自業自得であると言えばそれまで。しかし宗助の更生した後の社会的立場としては、本当に苦しい状況が待っていると言わざるを得ない。そして何より、その犯罪者の弟として生きなければならないタケルが1番辛いことも玉子はわかっていた。

「やりきれないと思うかもしれない。でもメガマスもこうせざるを得なかったんだ。現時点で不祥事を出すということは、会社全体を揺るがす危機につながる。旧幹部達の復帰を防ぐためにも、ここは彼の証言に乗っかるしかなかったんだ。社長もそれを悔やんでいたけどね。君も心配しているであろうタケル君についても、できるかぎりの支援をしていきたいと社長は考えられている」

「メガマスの事情はわかります。私も再就職して、今のメガマスがかつてのメガマスと違っているのは肌で感じていますので。それより、なぜ宗助がそんな証言をしたかという点についてですが」

宗助が自分の意志によってその証言をしたというのが理解できないというのは、玉子も一郎も同じだった。なら宗助にはそうしなければならない事情があったに違いない。

「確かに彼には何か理由があるはずだ。でも、それを僕たちが知る術はない。彼が僕たちに直接話してくれない限り」

「ＣＧＷが何か宗助の弱みを握っているというのは？今回の件で結果的にほぼ無傷で済んだＣＧＷは、最初から宗助にそうさせるつもりだったんじゃないんですか？」

宗助と協力関係にあったＣＧＷが、保険として宗助を脅していたのではないか。玉子はそう思った。ＣＧＷはその点したたかだったと。

「どうだろうね。ＣＧＷにとって猫目宗助はメガマスを追い落とせる唯一の人物として切り札のような存在だったから、彼をＣＧＷがぞんざいな扱いにできないと思うんだ。あくまで彼とＣＧＷは対等の関係だったと思う。むしろ僕が気になるのは、彼が内通者に裏切られたと言っていたことだ」

一郎の言う内通者とは、メガマスに潜り込んでいたＣＧＷのスパイだ。そのスパイの暗躍によって空間制御プログラムがまんまとハッキングされた。

「確かにそんなことを言っていたそうですね、竹下さんの話だと。つまり宗助はＣＧＷを恐れているのではなく、彼とＣＧＷもろともを裏切ったその内通者を恐れているということですか？」

「うん。どうもそんな気がするんだよ。」

少し頼りなく一郎が返す。根拠などは何もなかった。

「その内通者に関する調査は進んでいるんですか？その存在が知られるようになってから、かれこれひと月近く経過しますが」

「それがいっこうに捕まる気配がない。おそらくメガマス内でもその存在を隠そうとする勢力があるのだろう。それに、内通者はメガマス社員だとも限らないしね」

「そうなんですか？ですが、管制室のコンピューターを操作できるのは、やはり内部の人間なんじゃ」

「管制室コンピューターへの直接のハッキングは確かに不可能だ。だから最初は内部の人間と見て間違いないと思っていた。でも、メガマス内のネットワークを経由していくと、外部からでも管制室のコンピューターにアクセスできる可能性があるということが判明した。例のＩＬコードを使えばね。と言っても、それは猫目宗助にさえできる芸当じゃない。というのも、メガマス内部事情を熟知していなければならないからだ。だから内通者は少なくともメガマスに近しい人間の中に確実に存在する」

と言ってもそういう人間は膨大に存在する。メガマスの調査はその可能性が浮上した時点で暗礁に乗り上げたのだ。

「そうですか。気になりますが、これについてはどうしようもないですね。せめて、私たちがこれから調べる事故が、大黒の事件との何らかの関係性があれば道は開けるんですけどね」
「まあ、どうだろうね。おかしな事故がこれ以上広がらないように僕は願っているけど」
一郎は複雑な思いで答える。金沢での事故が本当に単なる空間不良なのか、それとも何か別の原因によるものなのか、それを調べに行くのだった。

一郎の運転する車は、金沢市内に入った。そのまま市街中心部を抜けて、少し片田舎のような雰囲気の場所に出る。景色の印象は大黒にも似ていた。メガマス金沢支社は、本社と同じような小高い丘に構えられている。本社と同様に金沢支社も空間の実験施設を持っているので、やはり街の中心部にそそり立つことはできないのだ。
「そういえば、天沢君が引っ越して来たのもこの辺だったかな。例の空間事故現場も近いんだ」
一郎が行き先案内の青い道路標識を見ながら言う。西に折れるところに黒井、夕日寺といった地名が示されていた。金沢支社はその道路をさらに北に行ったところにある。
「彼女は今何をしているんでしょうね。まさか、事故に巻き込まれたなんてことはないと思いますが。彼女の住む近くで事故が起こったというのも、どこか因縁のようなものを感じますね」
何気なく言った玉子だが、果たしてそれは偶然なのだろうかと思った。大黒ではヤサコが事件に巻き込まれたし、この2つの都市の事故がつながっているとしたら、あるいはと感じずにはいられなかった。
「そう言えば、一昨日だったかな。天沢君から優子に電話がかかってきたな。とりあえず元気そうだったよ」
「そうですか。彼女ともまた話をしてみたいですね」
一郎の話を聞いて玉子は一安心する。元気そうに電話をかけてきた

ということは、少なくとも事故に巻き込まれたということはないだろうと思ったからだ。
　2人がそうしてイサコに関する会話をしていると、やっと車は金沢支社に到着した。駐車場に入れた車から玉子は降りてひとつ伸びをすると、一郎に向かって頭を下げた。
「ありがとうございました。わざわざここまで乗せていただいて」
「いや、いいんだよ。僕が君をこの出張に誘ったんだから。それに今だから言うけど、君を車で送るという条件を出したのは管理室本部長なんだ」
一郎が少しだけ言いづらそうに明かした。
「本部長の指示なんですか？それってどういう？」
「うん。まあ、管理室が君を当分現場に出さないという方針なのは知ってるね。君を連れて行くことは僕が無理から頼んで実現したことで、本部長もかなり金沢での君の動向を気にかけている。特に、勝手に現場に飛び出していくんじゃないかとね」
管理室本部長は玉子の経験と腕は認めているが、その破天荒さはかなり警戒している。自分の監視下にない金沢で玉子が暴走するのはなんとしてでも防ぎたかった。
「なるほど、わかりました。室長が車で私を送ってくださったのは、私の足を封じるため。つまりバイクに乗って来させないという目的があったわけですね」
玉子の相棒である大型バイクは大黒に残したままだ。まさか管理室本部長がそこまで考えているとは玉子は夢にも思わなかった。
「ああ、その通りだ。君は今回あくまで管理室の内部から事故の原因を調査してもらいたい。金沢支社も事故があってからというもの、実験的にではあるがキューちゃんを動員している。君も血が騒ぐと思うが、それらを勝手に持ち出して市内を走り回るようなことはしないでくれよ」
「大丈夫ですよ。私はバイクがなければ、外を走りまわろうとも思いませんし」

玉子は苦笑いで返した。まるで一郎からも信用がないのも仕方がないところで、もうこの時点からどうやって足を確保しようかと思案を巡らせていた。

「わかった。じゃあ行こうか」

一郎の案内でビルの中に入って行く玉子。ビルは本社の半分くらいの高さしかないが、内部は本社と同じくらい立派な作りになっている。一郎は入社してから本社に栄転するまでこの金沢支社に勤めてきた。

「君に入ってもらうのは正確に言うと空間管理室じゃない。空間管理室というのは大黒特有の呼び方で、こっちでは空間設計室という部署になる。設計室は文字通り空間の設計を行うんだけど、そこでは空間の管理も合わせて行われている。事故の少ない大黒以外の地域ではこれで事足りるんだ」

一郎がエレベーターに乗り込みながら説明した。空間設計とは例えば街頭カメラの配置を決めたり、それぞれのメガネから送られて来る情報から空間のプログラムを最適化するという仕事をすることである。空間設計室はこれらと合わせて空間のバグを直したりしているのだ。

「ここが空間設計室だ」

一郎が手慣れた感じで、エレベーターから降りてすぐの扉を開いた。中は大学のコンピュータールームのように、いくつものパソコンやモニターが等間隔に配置されているデスクが列ほど並んでいた。そこには１０名ほどの職員が詰めていて、常にいくつものモニターを注視しながらキーボードを打つという作業をしている。

「んと、いたいた。あの人がここのチーフで、これからしばらく君の上司になる人だよ」

部屋の最前列で、すべてのコンピューターや職員と向き合うようにデスクを構えている人物を指差しながら一郎が言った。２人は部屋の脇を通りながらその人の元に向かう。

「よう、久しぶりだな小此木」

その人物、一郎と見た目は同じくらいの年齢の、ダンディという表現がぴったりあてはまるような男性が、一郎に気付くと親しそうに声をかけた。
「久しぶりだな、友和。これからしばらく世話になるよ。玉子君、紹介する。ここのチーフで僕と同期入社の同僚、酒井友和だ」
「よろしくお願いします。原川玉子です」
一郎に紹介されて玉子はまず頭を下げた。
「おいおい。1つ大事なことを紹介し忘れてるぞアニキ」
笑いながら友和が一郎にツッコんだ。
「アニキ?ではひょっとしてお2人はご兄弟なんですか?ですが、さっきは同期入社だと」
驚いた表情で玉子が一郎を見る。
「まあ、義理のね。僕の妹のダンナが彼なんだ。それよりも同僚であり良きライバルであったから、そう呼ばれるのは慣れていないんだけどね」
一郎が照れくさそうに笑う。どっちかというと、玉子には一郎の方が弟のように見えた。
「良きライバルだなんてよく言うな。今や出世街道をひた走る男が。まあ積もる話はおいおいすることにしよう。それより原川君だったかな。君のことは本社からも聞かされている。まあ現場に出すこともないと思うが、事故の調査よろしく頼むよ。君の仕事は簡単だ。あそこのモニターに金沢市の空間のサーバーからリアルタイムの情報が送られて来る。その中で異常が発生していないかを監視すること。それから異常が発生した場合には、そのサーバーの情報からそれがどういう類の異常なのかを測定すること。君には特に事故の発生した黒井地区とその隣の夕日寺地区を中心にモニターを頼みたい」
友和は矢継ぎ早に指示を出してくる。これも玉子が空間管理についての知識には長けているからこそだった。
「わかりました。では早速取りかかりたいと思います」
「きびきびしているな」

友和が感心するように言った。この後、一郎は友和と今回の事故の詳細について打ち合わせをしなければならない。その後しばらく一郎はここで友和のサポートをして、近日中に大きな事故がなければ玉子より先に大黒に戻ることになっている。こうして2人の金沢支社での仕事が始まった。

#16　雨が続けば　part2

イサコが学校で空間の黒い大穴と遭遇してから3日、そして玉子が金沢入りしてから2日が経った。この日は土曜日だったのだが、授業は午前中までであり、イサコと金沢黒客の3人、そしてユイとアサミはこの1週間の動きを整理するために、放課後の教室に集まっていた。どんよりとして、そして油断のできない北陸地方の天気がここのところは続いていたが、この日は本格的に雨が降っていて屋上が使えなかったからだ。

「静かだな。あの1件以来実に静かになった」

レインが開口一番にしみじみとした口調で言った。あの1件とは、イサコとシュウイチが黒い穴を見つけ、その直後に地震を感じて束の間意識を失った出来事のことだ。

「サオリに動きがなくなったのは、やはりこちらを警戒しているからかな？」

イサコが考え込む。その後、この2日間は手分けしてサオリの動向に気を配っていた。時にはモジョにサオリを尾けさせたり、その時はモジョの方がサオリを見失ったが、他には直接イサコ達が黒井地区に出向いてサオリの姿を探したりもした。しかし収穫はなかった。モジョがサオリを見失ったのは、サオリが尾行を警戒していたからだとも考えられるし、サオリが黒井地区に現れなかったのも、イサコ達が待ち伏せているのを読んでいたとも考えられる。

「そうだろうな。天気のせいもあると思うが、まあ、こうやってオレたちが目を光らせている間はサオリは行動できないってことだな。これでいいんじゃねえの？要は事故が起こらなければいいわけだし」

そこでカズマが楽観的に言った。

「サオリが暗号を設置するのは、何も学校や黒井地区だけとも限らない。私たちがサオリの行動を制御できるのも限界がある」

イサコがカズマに言い聞かせた。今のままではどうにも状況は良く

ないというところだった。
「イサコの言う通りだよ。何より僕たち自身がずっとこんなことを続けられないから。来週から1年のクラブ活動への参加も認められて、レインとカズマはそっちの方に行くんだろ？」
シュウイチが2人に訊ねる。レインとカズマは小学校時代からの体育会系なので、部活には積極的に参加しようと考えている。イサコやシュウイチ、ユイやアサミはまだ自分の入るクラブを決めかねているところだった。イサコは何より、事故のことで頭がいっぱいだったが。
「そうだけどよ。だいたい気になっていたんだが、暗号を設置しているサオリを見つけたところで、じゃあオレたちは何をするんだよ？この前のお2人さんみたく、暗号の力で意識を失ってたんじゃ追ってる意味がなくね？」
カズマの言っていることは、イサコにとっては頭の痛いところだった。それはその通りで、サオリの使う暗号を解読できない以上、その暗号が自分たちの身に及ぼす効果を防ぐ手だては見つからないのだ。
「だから今度は、サオリが暗号を完成させる前に取り押さえて、その暗号の正体を聞き出すんだ。前に私たちが意識を失ったのも含めて、それが危険な事故につながることを言い聞かせて暗号の設置をやめさせる。これぐらいしか方法がない」
「そんなにうまくいくのか？この前は学校だったが、街に出ると暗号の位置関係からサオリの場所を特定するのは一苦労だぞ。もうサオリが学校にいる時に、お願いだから暗号を置くのはやめてくれ、って言ったらいいんじゃねえのか？」
イサコの言葉にカズマが質問で返した。少なくともカズマは、サオリを追うことによる自分のメガネへのリスクを考えているらしい。事故で仲間がメガネを失っているというのもある。カズマ自身はそれにビビっているという様子でもないのだが、要は犬死にはイヤだということだった。

「できるならやってる。実は昨日か、ユイがそのことでサオリに話しに行ってくれた。校舎で私や酒井が気を失ったこと。そして、現場の近くでサオリがいたこと。それらを打ち明けた上で、危ないことをしようとしているのならやめてほしいってな」

「そしたら?」

「自分は何もしていないって。イサコやシュウイチ君が倒れたのは、学校の空間に不具合があったからだろうって」

イサコからユイが説明を引き継いだ。あからさまにサオリを調べようとしているイサコや金沢黒客はサオリから警戒されているが、ユイだけは話しかければ答えてくれる。イサコ達にとってはユイがサオリとのつなぎ役になっていた。

「あくまでとぼけるつもりか。暗号についても」

レインがため息をつくように漏らす。

「ああ。実際私達は、サオリが暗号を設置しているという確たる証拠をサオリに提示していないからな。私がサオリを追う理由はそこにもある。サオリが暗号を起動しようとしているところに飛びこんで行くしか、彼女をやり込める方法はない」

「起動するところに飛び込む必要はないだろ。そしたら前と同じことを繰り返すだけじゃないのか?サオリが暗号を設置しているところを押さえるだけでいいんじゃないか?」

レインがイサコに訊ねた。サオリの暗号は設置と起動の手順があるらしいというのは、今まで調べてきてわかった。まずサオリは適当な範囲に、魔方陣型の暗号を星形の形に並べる。それが設置だ。そしてその星形のちょうど中心部部に最後の暗号を置く。これが起動スイッチとなっている。その最後の暗号を仕掛けてからしばらくすれば、例の黒い穴が現れるという寸法になっている。

「いや、私は起動の瞬間を押さえたい。暗号の解読のために」

「解読のため?」

シュウイチがイサコにどういうことか訊ねた。

「設置された暗号はそのままでは解読できない。暗号は起動してい

ないと、外観からそのプログラムを解読することはできないんだ」
「なるほど。イサコは是が非でもサオリが暗号を起動させたその一瞬を狙いたいわけだな」
「そうだ。暗号を解読さえできれば、それらを解除することは簡単なことだ。以降のサオリの行動を封じることができるようになる。強引なやり方だけどな」
イサコの説明に金沢黒客は納得した。
「でも、やっぱりサオリ自身の意志でそれをやめさせるのが1番だと思うわ。サオリにだって事情があるんだろうし、それを強制的に封じるのは順番が違うんじゃ」
そこでユイがイサコに言った。何より先にイサコとサオリの話し合いが大事だとユイは思っていた。そのためにはまず、サオリが暗号を使っていることをイサコが立証する必要があるわけだ。
「ああ。その通りだユイ。暗号の強制解除はあくまでサオリが私達の話を無視して起動をやめなかった時だけにしようと考えている」
イサコもユイとは同じ考えだった。かつては自分が“あっち”への通路を開くという危険な行為に及んでいたこともあり、サオリにはそれ相応の事情があることはイサコもわかっていた。なによりまずサオリとのちゃんとした対話が必要であり、場合によっては自分の経験を語るということも考えていた。
「よし、じゃあサオリについてはそんな感じでいいだろう。ところでちょっとみんなに相談があるんだ」
とりあえず話をまとめたレインが改まって言った。
「なんだ?」
「ああ。オレたち最近黒井地区によく通ってるだろ。その動きがどうも監視されてるような気がしてならないんだ」
この1週間でほぼ毎日黒井地区に通っていたメンバー達だが、レインの言っていることはなんとなく理解した。
「ああ、確かに。あのキューちゃんとかいうオートマトンの他にも、なにか誰かに見られているような感じがするような」

シュウイチが同意する。カズマも、そしてイサコもそれにうなずいた。

「その視線の正体だが、これだと思うんだ」

レインがウインドウである画像を示した。そこにはシルバーのスポーツセダンが映っていた。

「ああ、はいはい。確かによく見かける気がするな。なんかオレたの周りというより、黒井地区全体の様子をうかがっているみたいな」

カズマがその画像を見ながら言った。イサコやメンバー達は、その車を少なからず目撃していた。

「何者だろうか？まさか管理室だとは思えないが」

イサコが考え込む。仮に管理室なら、キューちゃんも飛んでいるその地区をうろついている子どもに、危ないの一声くらいかけるだろうなと思った。

「どうかな。こいつはイサコ達が黒井北公園でサオリと接触していた日からオレたちの周りにいた。とりあえず用心にこしたことはない」

「わかった」

レインの言葉にイサコやメンバー達はうなずいて了解した。サオリの他にも注意を払わなければならない存在があるということだった。

「じゃあ今日はこの後どうする？」

「ああ。この天気だからな。サオリも動いてはいないだろう。今日は解散でいいと思う。明日は？」

イサコが窓の外を見ながらレインに訊ね返した。

「明日はオレたちはダメだな。オレとカズマはジムでトレーニングがあるから。シュウは？」

「ごめん。僕も明日は用事があって行けないんだ」

金沢黒客のメンバーは全員明日は空いていないらしい。しかしサオリが動く可能性も捨てきれないので、イサコは1人でもいいから黒井地区に行こうかと思った。

「わかった。じゃあ明日は私が黒井地区に様子を見に行く」

「おいおい。1人で大丈夫か？せめてユイかアサミでも連れて行けばいいだろ」
心配そうにレインが言う。それはサオリよりも、スポーツセダンを警戒して言っていた。
「大丈夫だ。この2人を危ない目に遭わせられないからな。行くのは私だけでいい。サオリがいるかどうか、それだけを確認する程度にする。何にしても、この雨が続いてくれればそんな苦労もしなくて済むんだけどな」
イサコは窓の外で降りつづく雨を見る。サオリが行動できずに時間を稼げるという意味では、恵みの雨ではあった。
「そう。じゃあ気をつけろよイサコ」
シュウイチがイサコに言って、イサコがうなずく。こうしてこの日は解散という運びになった。

#16　雨が続けば　part3

翌日曜日も、天気は芳しくなかった。鉛色の雲が空を覆っていて、降水確率は５０％ほどあるらしい。しかし雨がまだ降ってない以上、サオリが動かないとも限らないので、イサコはやはり外に出ることにした。逆に言えば、このような微妙な天気の時こそ、人通りが少なくてサオリも行動は起こしやすいとも思われる。とりあえず折りたたみの傘をバッグに入れて、イサコは相棒のモジョと黒井地区を目指して家を出た。

イサコは向かう途中、サオリがなぜ暗号を使い、そして空間に大穴をあけようとしているのか、その理由を今一度考えていた。

まずはサオリの使う暗号について。そもそもサオリの使う暗号は、イサコ自身が使っていた暗号とはまったくタイプが異なる。まずはビジュアル的な違いが１つ。また、イサコの使っていた暗号は広域に起動させるには暗号同士を連結させるという手間が必要であるのに対し、サオリの暗号は直接連結していなくても、離れた場所の暗号とつなげることができるらしいというのが１つ。だからこそ暗号を星形に並べるというオカルト的な配置ができるのだろう。

そこで考えられるのは、そもそもサオリの暗号は広域での使用を想定されて作られたものではないかということだった。逆に言えば、広域に暗号を設置しているにも関わらず、その効果が星形の真ん中のほんの一区画で空間に穴があくだけというのは奇妙でもある。だったら穴をあけたい一角に暗号を集めれば済むだけの話だ。おそらくサオリには暗号を広域に配置しなければならない理由があるのだろうとイサコは思った。

そしてその暗号の出所も謎の１つだ。イサコ自身の暗号は、かつて宗助から教わったものだ。宗助はメガばあの弟子だったこともあって古流の暗号には長けていた。さらに宗助と協力体制にあった、コイルスの残党の存在も絡んでくる。コイルスの人間は、当然なが

ら自社が開発したドメインにアクセスできる暗号を知っていた。古流に対置される暗号はそのコイルスの人間が宗助に伝えたものだ。宗助はそこにメガばあから学んだ暗号技術も取り入れて独自の暗号を組み、それをイサコに伝えたのだ。つまりイサコの暗号は古流と当流の組み合わせであり、古流の使い手であるメガばあや玉子にもなんとか解読が可能だったのだ。

ではサオリの暗号はどうか。少なくとも今まで見てきた暗号の流れを汲まないのは間違いなかった。サオリの使っている暗号には、宗助がコイルスの人間から授かった暗号の片鱗も見ることができない。古流となれば言わずもがなだ。つまり今まで暗号を生み出してきた、メガばあ、そしてコイルスにも解読できない暗号であるはずだった。サオリのはまったく新しい勢力に作られた暗号と見るのが無難だろうとイサコは考えた。

そしてサオリはそれを使って何をしようとしているのか。イサコにとって最も気になるポイントだった。今までの情報や出来事でわかっているのは、その暗号で空間に大穴があくこと。そしてその大穴はメガネを破壊するなんらかの力を宿していること。イサコが体験したのは雷鳴と地震だ。しかし黒井地区で起こった事故では、近くにいた子どものメガネは壊れたという話はあったが、雷鳴や地震を感じたという話は出て来ていない。一様に聞くのはその時のことはよく覚えていないという、イマイチ的を得ない答えだ。つまりイサコとシュウイチが体験したのは、よくよく考えてみれば黒井地区の事故とは異なるものだという可能性の方が高い。実際、イサコとシュウイチのメガネは破壊されずに済んでいる。

また気になるのは、その空間にあいた大穴は死後の世界に通じているのではないかという噂が出ていることだ。それにはもちろん理由がある。黒井地区の事故の後、死んだはずの電脳ペットが戻って来たという話が絶えないのだ。それもまたこの事故の謎を深くしている問題の1つでもある。電脳ペットの死後についてはこれまでも

都市伝説で噂されてきていた。例えばイリーガルになるというのもその1つだ。しかしそもそも電脳ペットは死ぬとプログラム自体が消滅する。それが復活するなんてあり得ない。ところがアサミのペットを例にとっても、ペット会社には既に死亡しているという記録が残っているにも関わらず、見た目にはごく健康そうに生きているように見えた。今のアサミのペットは、ペット会社にその存在が認知されていないイリーガルに近い存在だ。となるとあながちあの都市伝説も的を外していないということにもなる。

ともあれその話を総合すると、サオリは大穴の先にある空間から死んだペットを連れ戻そうとしているという1つの可能性が浮かんで来る。しかしそれなら黒井地区の事故の時に多数のペットが帰って来ていることからも、目的は既に果たされているように思われる。もしくは黒井の時に自分のペットは帰って来られなかったから、続けて同じ手段を講じているとも考えられる。

また、もっと考えを飛躍させると、サオリが連れ戻そうとしているのは電脳ペットではなく、“人”であるという可能性も浮上する。正直イサコにとってはもっとも考えたくない可能性だ。かつての自分と同じことをしようとしているという可能性。万が一そうだとしたら、イサコはサオリを止めることが果たしてできるのか不安に思った。

そもそも死後の世界などあり得ない。イサコ自身はそう思う。しかしかつて自分は兄の魂が“あっち”の世界を彷徨っていることを信じてキラバグを集め続けた。1度はそれで少女が命を落とすという悲しい事故が起こったにも関わらず。そしてかつての自分自身も、兄を思うが故に周りの言葉を受け入れなかった。信彦はもう死んでいるという冷たい現実を。

サオリは今自分と同じ道を歩もうとしているのではないか。イサコはそう思えてならなかった。そしてその可能性だけはないようにと信じるだけだった。自分に彼女を止める資格はないのだから、と。

すべてはサオリの行動を押さえた上で聞き出せばいい。そして真

実を聞き出した時に、その後のことは考えればいい。そう自分に言い聞かせつつ、イサコは黒井北公園に到着した。まずイサコは、周辺の街頭カメラの映像をできるだけ集めてみた。オンロードドメインの街頭カメラは、許可されているものだけなら一般人もアクセスして見ることができる。黒井地区の様子をうかがうだけならそれで事足りる。そこでイサコは、雨が降り出した時に備えるために、公園の一角にあった木製の屋根が建てられている休憩所にある、これも木製のベンチに腰掛けた。そこにはテーブルもあった。何かの作業をするにはうってつけで、さらに天気の悪さから周りに人は誰もいなかった。イサコは安心して監視体勢に入った。

イサコが作業を開始してからしばらくすると、空からは小雨が降り始めた。今日の天気はこんな雨が降ったりやんだりするらしい。さすがにサオリもこんな天気の日を選んで行動を起こさないだろうなとイサコは思った。ともあれイサコは、せっかく来たのだからせめて1時間ほどはここで待ってみようと考えた。雨もすぐにやむかもしれない。

その時だった。イサコは公園の外に、昨日レインが言っていたシルバーのスポーツセダンが停車するのを見た。イサコはまた自分の行動を監視しているのだろうかと注意をそちらに向ける。すると今日は、その車の中から若い男性が1人降りて来た。メガネをかけた男性はそれが濡れないように小雨の中を傘さしながら、まっすぐにイサコのいる休憩所の方に歩を進める。さすがに周りに誰もいない中、見知らぬ男が近づいているその状況はまずいとイサコは思ったが、ここで逃げるのもどこか怖じ気づいたようでためらった。イサコはとりあえずメガネのウインドウを閉じると、持って来ていた1冊の小説を取り出して、さも読書をしていたかのように装う。誰かが自分に近づく理由があるとすれば、それはメガネに関することだというのは明白だった。

「天沢勇子さんだね？」

男はイサコのいる休憩所の屋根の下に入って傘を閉じながら訊ねた。
イサコはまたか、と思った。また自分の知らない人間が、自分のことを知っているかのように話しかけてくる。この街でそんなに自分が有名人であることに、イサコは辟易した。
「……ええ、そうですけど。」
イサコはとぼけても無駄だろうと思いつつ、ため息をつくように答えた。そして小説から目を離して男を一瞥する。パーマをあててチリチリとさせた長い茶色の髪をなびかせている男は、しかし顔の皺や肌の質感から判断するとどうも２０代には思えなかった。おそらく３０代前半の外見からは、胡散臭さしかその男から感じ取れなかった。
「やっぱりそうか。いきなり声をかけて悪かった」
話し方もぶっきらぼうなヤツだとイサコは思った。イサコは男を思いっきり怪しんだが、自分の名前を知っている大人というのはだいぶ限られてくる。
「アンタ、メガマスの関係者か？」
イサコは小説の方に目を戻しながら訊ねる。
「いや、メガマスの人間ではない。まあメガマスに近い人間ではあるが」
男は欧米人のように両手を広げて胸の前にあげながら返した。イサコはその答えにもう1度男の方を見やった。
「……だろうな。よく考えてみれば、こんなチャラいヤツがメガマスに雇ってもらえるわけがないものな」
皮肉を交えたようにイサコが言う。
「ハッハッハ。それはその通りだ。なかなか手厳しいな」
笑って返す男を、イサコはにらみつけるように見る。
「メガマス関係者ではないなら、なぜ私の名前を知っている？お前は何者なんだ？」
「そう怖い顔をするんじゃない。美人が台無しだ。オレは決して怪しい者ではない。オレは大谷英夫（おおたにひでお）。雑誌のライターをしている」

男はそう言うと、胸ポケットから名刺を一枚取り出してイサコに渡した。そこにはある雑誌出版社が確かに記されている。なるほどとイサコは思った。メガマスを追っている雑誌記者なら、調べようと思えば自分のことは調べられる。

「雑誌記者が一体なんのようだ?最近この辺りをよく徘徊しているようだが、それじゃあ商売にならないだろう」

「ふん。そこは君と同じだよ。オレもこの黒井地区で起こった空間事故について調べている」

大谷は何も包み隠そうとせずに言う。

「どうしてだ?雑誌記者がそんな事故を調べて何になる?」

黒井地区の事故は、よくある空間不良の事故の1つように公表されていた。そんな事故を調べようとしているなどよっぽどヒマなのだとしか思えない。

「まあ、それにはいろいろ事情があるんだ」

「そうか。それより、君と同じだと言ったな。私はアンタと違って、空間事故を調べているわけじゃない。残念だったな」

イサコはここは一応とぼけておいた。一緒に調査をしている金沢黒客のためにも、この自称雑誌記者に情報だけを聞き出されるなどというのはごめんだった。

「おいおい、とぼけてもムダだ。この1週間で君の姿は何度も見ている。この何もない黒井地区に通って来るのは不自然だろう?それに今日も何か調べに来たんじゃないのか?」

「見たらわかるだろ。今日は外に出て読書をしようと思っただけだ」

イサコは大谷に小説を見せながら言った。

「ウソを言え。こんな天気の日に外で読書をしたいと思う人間がどこにいる。あ、わかった。君はオレを信用してないんだな。雑誌記者として、君から体よく情報だけかすめ取って逃げて行くだけだと思ってるんだろ?」

大谷が笑いながら訊ねる。イサコは自分の演技の下手さにため息をついた。

「ああ、そうだ。いきなり雑誌記者だって名乗る男が現れて、警戒しない人間などいない。私たちが調べている相手は、私たちと同じ中学生だ。やすやすと知らない大人にしゃべるわけにはいかない」
イサコにとってそれはサオリを守るという意味合いもあった。
「立派な心がけだな。でも君の言う中学生、あの少女についてはわからないことも多いだろう?」
「アンタは彼女について何か知っていることがあるっていうのか?」
イサコは少しだけすがるような目になって大谷に訊ねていた。
「確定ではないが、彼女に関わっているかもしれない気になる情報を耳にした。知りたくないか?」
大谷もイサコの心情を察したようだ。
「しかし雑誌記者がうかつに情報をしゃべるわけにもいかないんだろう?」
「まあな。だからここは交換条件だ。僕は君が知りたがっているであろう情報を提供する。その代わり君はあの少女と僕との窓口になってほしい」
「私と彼女もそんな親しい間柄じゃない。私も彼女から情報を訊きあぐねているからこうして地道に待ち伏せしているんだ。アンタの期待に添えそうにはないが?」
大谷はそれを聞いて少し考え込んだようだった。しかし何かを決心したように口を開いた。
「わかった。それでもいい。何にせよ、僕よりは彼女に近づきやすい存在であることは間違いないわけだからな。君を天沢勇子だと見込んで、ここは協力体制をとりたい」
「……なら、まずはアンタ自身のことをちゃんと紹介しろ。どうして私のことを知っているのか、そしてどうして黒井地区の事故について調べているのか」
「喜んで」
大谷が商談成立とでもいうように返す。イサコも協力するなら、まずは相手のことを知らなければと思った。イサコはかつて、年上の

男性と組んで失敗した経験がある。初めて宗助と出会ったのはそれこそ小学校に入った頃だったので、あの時イサコは疑うということをしなかった。それを教訓とするなら、今回はとにかく疑いの目で相手を見なければならないと思った。しかも相手は見るからに胡散臭い。警戒するに越したことはないと思いつつ、この大谷と向き合うことにした。

#16　雨が続けば　part4

雨はいつのまのか本降りになっていた。おそらくこれでサオリが動くこともないだろうと思ったイサコは、雑誌記者と自称する大谷の話に集中できるなと思った。相手は素性の知れない怪しい人物で、イサコはもちろん油断してはいなかった。とにかく話を聞くだけ聞いて、信用できないようならそのまま逃げ出すことも考えていた。その大谷はこの雨の中どこかに行ってしまったかと思えば、傘をさしていない方の手に缶コーヒーと紅茶を持って戻って来た。

「ほれ、お近づきのしるしだ。好きな方をどうぞ」

大谷がイサコの前のテーブルに缶を置いた。

「あ、ああ。すまないな」

イサコは少し戸惑いながら紅茶の方を手に取った。もので買収される気はないが、相手もそんなつもりでおごってくれたわけではないと感じた。

「女の子にしてはなかなか珍しいしゃべり方だな」

大谷は缶コーヒーの方を手に取り、テーブルを挟んでイサコの向かいに座りながら言う。

「仕方ない。私はこれまで女の子らしい生き方なんてしてこなかったんだ」

イサコはプルタブをあけて、ミルクティーを1口飲んだ。甘い風味が口の中いっぱいに広がりホッとする。この甘いものが好きだという点だけは、唯一自分が女の子らしいところなのかなとイサコは思った。

「そうか。随分苦労してきたみたいだけど」

大谷もどこか納得したように答える。自分のことをわかっているというその態度が少し気に障って、イサコは口調がとがった。

「さあ、なんでアンタが私のことを知っているのか説明しろ」

「ああ、そうだな。オレがこの道に入ったのは10年前のことだ。

ウェアラブルコンピューターとしてのメガネが普及し始めた頃だな」
大谷が缶コーヒーを片手に懐かしそうに話しだす。
「その頃は、コイルス社がメガネの権利を握っていた？」
「いやいや、ウェアラブルコンピューターとしてのメガネは、当時世界中の企業で開発されていたんだ。それはあくまで、ノートパソコンよりも手軽なハード形態としての利便性を持っているに過ぎなかった。拡張現実という世界を確立させたのが、コイルス社のメガネだっただけさ」
「コイルス社の技師が発見した量子回路の特殊な基盤パターンが、過去に例を見ないほど高性能なアンテナになることが判明した。それによって微弱な電磁波でも高速通信ができるようになり、今の電脳メガネと、革命的な通信インフラが実現した。拡張現実という概念が定着したのも、この通信インフラの拡充なくしてあり得なかった」
コイルス社によるその量子回路の発見は、ウェアラブルコンピューターしてのメガネ業界でも革命的な出来事だった。それが6年ほど前の出来事ということになる。
「よく知ってるな。その通りだ。当時のコイルス社はあくまでメガネの部品の開発、製造を主軸に展開していた、言ってみれば規模のそれほど大きくはない企業だった。しかしその量子回路の発見のおかげで、一躍ウェアラブルコンピューター業界の時の企業になった。Cドメインと呼ばれるようになる実験空間を作り、またメガネを医療に活かそうという研究も行われるようになった。あの時オレは、めきめきと発展していく技術に驚き、憧れたものだ。自ら進んでコイルスへの取材を繰り返して、電脳科学に関する雑誌の記事をよく書いた」
「なるほど。つまりあの事件の発端以前からメガネに関する記事を書いていたのか」
イサコが納得したように言う。口調からして、大谷がウソを言っているとも思えなかった。

「ああ。そしてメガマスによる買収、主任技師の失踪と立て続けに事件が起こった。あの時はかなりショックだった。金沢のような地方にある中規模の企業が、たった1つの発見で世界の中でどこまでのぼりつめられるかを見てみたかった。おまけに主任技師が失踪し、買収された相手がメガマスとは」

「当時からメガマスというのは評判が良くなかったのか？」

大谷のうなだれ方を見てイサコが訊ねてみた。

「察しの通りだ。これまでのメガマスがやってきたことを見てみろ。メガネの不具合を公表しなかったために、いくつ事故を生んだ？」

大谷の声が急に低くなった。その数あるメガネの事故の1つは自分にも罪があるということを、この男は知っているのだろうかとイサコは思った。

「メガネの不具合を知っていたのか？」

「当たり前だ。そんなことメガネに詳しい子どもでもわかることだ。ましてやあれ以来メガマスの不正を追って来たオレは、もしかすると一般人で一番早くにメガネの不具合に気付いていたと言っても過言じゃない」

少し興奮気味に大谷が返す。それだけの長い期間、メガマスの不正を追っていたという情熱は感じられた。

「おい。それならアンタはコイルス復活のために動いていたのか？」

大谷はコイルスに愛着を持ち、メガマスを憎んでいるようだった。メガマスの不正を暴くこと、そしてコイルス社について調べる事。それはコイルス社の残党がメガマス内で策動していたのと無関係ではないと思えた。そしてその動きに連携していたのが宗助だ。

「オレは政治に利用されるのはごめんだ。確かにメガネの不具合などを調べているうちに、旧コイルス社の残党から接触されたこともあった。元々コイルス社には仲良くしてくれていた社員もいたからな。でも断ったよ。自分の信念のために真実を追いたかったからな。一方でメガマスからは、今で言う旧幹部からは圧力をかけられることもあった。オレのいた雑誌出版社に対してな」

「ありそうなことだな」
イサコは妙に納得してしまった。メガマスほど力をつけた企業相手では、その圧力に対抗できる企業の方が少ない。
「だから、オレはその会社を辞めた。フリーライターとしてメガマスの不正、メガネの不具合を調べようとした。もちろんそれでも、ヤツらはいやがらせをふっかけてきたけどな。大黒にいたんじゃ、警察もまともに取り合ってくれない」
当時の大黒市警は、メガマスの言いなりだった。その圧力でカンナの事故の資料を改ざんしたくらいだ。
「そこまでしたのか。で、成果は出たのか？」
「消されたと記録上には残されていたCドメインの存在、通路の存在、イリーガルの存在、そしてイマーゴの存在。メガマスがひた隠しにしている不都合の存在はあらかた掴んでいた。でも、ここでまたヤツらの妨害が入った」
「メディア操作か？」
大谷のいた出版社に圧力をかけてきたメガマスにとって、大谷の記事を世に出させないというのは朝飯前だった。
「そうだ。予想はしていたけどな。だからオレは海外にその記事を売り込みにも行った。外国でもこの国と同じ手法でメガネは製造されているから、事故が起こる可能性というのも同様だった。外国でメガネが危ないという機運が高まれば、この国でもメガネを疑う声が高まるはずだった」
「しかし外国もメガマスに依存しているのは同じじゃないのか？」
日本ではメガマスを批判するのはある種タブー化されていた。外国でも事情はあまり変わらないのではとイサコは思った。
「いや、特に米国などはメガマスに対抗するコンピューター企業が根を張っている。そこならかろうじて記事に載せることもできた。だが見通しは甘かった。知名度の低い日本人が書いた記事に共鳴してくれたのは、ごくわずかな人間だった。もちろん、メガマスを揺るがすことなんてできない」

「……そうか」
イサコはこの大谷に同情していた。メガマスからのいやがらせにも屈せず調査を続け、ようやく苦労が報われるはずだったのに、その成果はあまりにも小さかった。並の人間ならそこで挫折するだろうなとイサコは思った。
「だが、オレはあきらめなかった。ちょうどその頃、大黒で例の交通事故が起こった。君もよく知っているだろう。葦原カンナの事故さ。世間はメガネを信じきっていたから、それが少女の不注意だと片付けられても疑いもしなかった。オレにとっては、あれが最初のメガネが原因の死亡事故だった。あの事故の真相を掴むことこそが、メガマスを追い込むことだと思い始めた」
「その時すでにCドメインや通路の存在を知っていた?」
「ああ。その昔、ある暗号使いの少女が通路を開いたという話は聞いていたからな。しかも、あの事故が起きる少し前まではたまに街で暗号を見かけるようになっていた。注意を払っていたんだが、持っていた手がかりの少ないオレにはどうしようもなかった。あれが君の書いたものだと知ったのは去年の夏だ」
やはり大谷はカンナの事故の原因がイサコであることも知っていた。そして玉子のことも知っているようだった。その時この男と出会っていれば自分は通路を開かなかっただろうかと、イサコは考え込んだ。
「気にするな。君はあの事故に負い目を感じているんだろうが、あれは誰にも責任などない、れっきとした事故だった」
イサコの様子を見て、その時のことを思い詰めているのだろうかと思った大谷が言った。
「……ああ。それで、去年の夏の事件についてはどこまで調べた?」
「まあ、正直な話、あの時はあまりに短い期間に次々と事件が起こったから、すべてを追うことは叶わなかった。不自然に増加する古い空間、巨大イリーガルの出現、そして再び開いた通路。1つ1つ調べていたが、結局はそれを調べ尽くす前に事件は収束していたん

だ」
あの時はメガマスも2．0を導入するなど、もみ消しに躍起になっていた。個人で調べるには限界があったのだ。
「じゃあ、事件の真相は誰から？」
「あの事件の後に無期謹慎の処分を受けた、メガマス旧幹部の1人からさ」
「なんだって？」
イサコは思わず聞き返した。これまで必死に大谷を妨害していた旧幹部が、一転して大谷に真実をリークしたというのだ。
「そう驚くことでもない。旧幹部は現メガマス政権を妬んでいる。オレに真実を伝え、オレの手でそれを暴露させることによって現政権に復讐しようという魂胆であることは見え見えだった」
「政治に利用される気はないから、そこで真実を掴んだにも関わらず黙っていた」
イサコが大谷の気持ちを察した。
「そうだ。仮にオレが真実を暴露して旧幹部がもう一度復帰することになったら、今度はオレがヤツらに抹殺されるところだったろうな。大人の世界とは、かくも汚いものだ。結局食い扶持を探さなければならなかったオレは、すべてが終わった後に別の雑誌出版社に再就職した」
言い終わった大谷がため息をついた。結局この長年の努力が、結果に結びつかなかったことを改めて思い知ったかのように。
「なるほど。アンタが私のことを知っている理由はよくわかった。それが壮大なウソである可能性もあるが、とりあえず信じてみる価値はありそうだ」
「ああ良かった～。ここで信じてもらえなかったらどうしようかと思ったぜ」
イサコの言葉に、大谷はいちいち大きなリアクションで安心した。
それが演技に見えないのが、この男のどこか不思議なところだなとイサコは思った。

「じゃあ本題だ。今の話だと、アンタのメガマスの不正の追及はそれで完結したはずだ。今度は何が目的で黒井地区の事故を調べている？」

「……そうか。どうやら、もう少しメガマスのことを教えた方がいいな」

大谷はイサコの言葉を聞いて独り言のようにつぶやいた。

「何のことだ？今月初めの大黒市の事件のことか？」

「ああ、それもある。君がその事件についてどこまで知っているのかわからないが、ここはそれと関係してオレなりに調べたこともある。もう少し話しを進めよう」

大谷はそこから声を細めた。そして雨が屋根を叩き付ける音がさらに激しくなって、イサコは大谷の言葉を聞き漏らさないようにさらに神経を集中させた。

#16　雨が続けば　part5

「あの夏の事件やそれまでの事故を反省したメガマスは、自ら再建の道を選んだ。これまでの膿をすべて出すということだな。近くメガネの不具合や過去の事故についての公表があるだろう。同時に電脳ナビシステムの無期限停止も正式決定された」

大谷の話した内容は、先日イサコがマイコ先生から聞いた話と同じだった。

「それも例の旧幹部から訊いたのか？」

「いや、これはまた別の社員から訊いたものだ。どのみち公表することになる事実なら、しゃべっても構わないということだな。旧幹部がオレに情報をリークすることはもうないだろう。オレがヤツらの思惑通りには動かないことを、ヤツらも知っただろうからな」

「なるほど。で、もう少しメガマスを知った方がいいというのはどういう意味だ？」

イサコは先ほどの大谷の意味深な言葉について訊ねてみた。

「メガマス再建の方法について、考えてみる必要があるということだ。夏の事件後のオレの調査の最大のテーマでもある」

「経営学には興味はないが」

メガマス再建の方法と、黒井地区の事故。それらに何の関係があるのか、イサコにはわからなかった。

「難しく考える必要はない。メガマスがすべての真実を公表すればどうなると思う？イマーゴという不具合が、死亡事故の原因になったことが世間に伝われば」

「それは、もちろんメガネの信頼はガタ落ちだ。でもその原因の１つである電脳ナビシステムの停止も決定されるんだろう？気をつけてさえいれば、メガネを扱う上で大きな危険はない。電脳コイル現象は、もう起こることはないはずだからな」

「問題はそこじゃない。電脳ナビシステムの停止。それが果たして

事故の抑止につながると思うか？逆だろう。電脳ナビシステム導入以降、飛躍的に交通事故は減ったんだ。長らく車を運転していないドライバーにハンドルを握らせることと、電脳ナビを稼働させながら不具合のあるメガネをばらまくこと。どちらの方が事故が少ないか考えてみればわかるだろう」

「確かにそうだな」

イサコは考え込んだ。電脳ナビシステム導入以降は、子どもの不注意ぐらいしか交通事故は起きなかった。その中の1つとしてカンナの事故は片付けられたわけだが、事故が起きる確率を考えれば、どちらの方が安全なのかは一目瞭然だ。

「しかも電脳ナビ搭載車は割高だ。それでも消費者が購入するのは、ひとえに楽で安全であるからに過ぎない。自動車メーカーもこのシステムのおかげで潤っている。こんな中でシステムの停止を誰が望むと思う？自動車メーカー及び、電脳ナビ搭載車の購入者から、嵐のようなブーイングが起こるのは目に見えている」

「しかし、イマーゴの仕組みがわからない以上、イマーゴを廃したメガネなど製造できない。しかもメガマスは電脳医療の補強プロジェクトを進めている。イマーゴを持たない人でも電脳精神医療が受けられるシステム、言い換えれば万人がイマーゴを使えるようにする研究。メガマスのやろうとしていることは逆行だ」

つぶやいてからイサコはしまったと思った。マイコ先生から聞かされたこれらの話は、メガマスにとって秘密事項だったはずだ。それを雑誌記者にペラペラとしゃべってしまった。

「ああ、その通りだ。メガマスはそのプロジェクトのために古い空間を生み出すプログラムを組んだみたいだからな。どうやらそれが今月初めに大黒市で起こった事故の原因だったみたいだし、それすらも世間に知られるとプロジェクトは中断に追い込まれるかもしれん」

イサコはいらない心配をしたようだった。大谷は電脳医療補強プロジェクトのことも、空間制御プログラムのことも知っているらしい。

「そんなことも知っていたのか？メガマスはあの時、空間制御プログラムはあるハッカーの開発だと公表した。不正の追及に情熱を燃やすアンタなら、これは記事にしてもいいネタなんじゃないか？」

イサコは言いながら自分でも何を言っているのだろうと思った。イサコ自身は今のメガマスを憎んではいない。

「確証がなかったからな。それにその事実を暴露することは、結局旧幹部が一番得をすることになる。プロジェクト自体の趣旨はオレも悪くないと思ったから、そこは伏せておいた」

大谷も今のメガマスを憎んでいるわけではないようだった。むしろ正しい方向に向かっているメガマスを見守ろうとしている節すらある。

「それで、話はメガマスの再建についてだったな」

イサコはもう1度話を振り出しに戻した。

「ああ。メガマスはその電脳医療プロジェクトを再建の切り札にしようとしているようだ。正直、これは甘いとしか言いようがない」

「どう甘いんだ？」

「電脳医療を受ける患者なんて、人口の何%だと思う？もちろん、プロジェクトが成功し、万人が電脳医療を受けられるようになったと仮定しての話だ。それでもごく少数に過ぎないだろう。医療の進歩も大切だし、それがコイルスの技師の名誉回復という意味があるんだろう。しかしそれは再建の切り札にはならない。少なくとも電脳ナビシステムの停止と引き換えにするほどの利益が見込めるとも思えない」

電脳医療の完成はメガマスの名誉も回復させ、広く受け入れられるはずである。しかし完成する見込みすらないこのプロジェクトを切り札にするのは、ある意味で無謀だった。

「だからこう考えることもできると思う。電脳ナビシステムは、メガマスにとって邪魔な存在だった」

「どういう意味だ？」

大谷のまた意味深な言葉に、イサコは顔を上げた。

「それはオレにもわからないし、オレの推測でしかない。しかしこう考えないとメガマスの行動に説明がつかない。しかしそのヒントは、金沢支社にあった」

「メガマスの金沢支社か？」

「そうだ。知っているか？メガマスの現社長は４０にも満たない若社長だ。彼が社長に就任したのも、旧幹部達の策動があったからだ。つまり社のトップを自分たちの傀儡にするためだったということだな。しかし旧幹部はその社長によって無期謹慎処分になった。メガマスの会長クラスのお偉方も、旧幹部の政治に見切りをつけた形だ。ところがそんないざこざとは無縁だったのが、この金沢支社だった。メガマス金沢支社長は、その現社長の妻の父にあたる。外戚というやつだ」

「そういう内部抗争の小難しい話は苦手なんだが」

イサコは頭が痛くなってきていた。何の関係があってそんな話をするのかと思った。

「まあ聞くだけ聞いてくれ。その金沢支社長は、もともとメガマス社員ではなく、有名な経営コンサルタントの先生だった。大学でも教授をしているほどのな。つまりメガマスにとっては外様だ」

「だから何だって言うんだ？」

「平安時代の摂関政治を知っているか？当時権勢を握っていた藤原氏は、天皇に娘を嫁がせてその地位を固めていた。金沢支社長も血縁は現社長の義父。現社長ですらモノを言えない存在なんだ。経営の手腕だってある」

「そんな人間が何で金沢支社長なんか務めている？もっと良い場所で働けるはずだ」

「そう思うだろ？メガマスの幹部達もそう思ったはずだ。だから外様である現社長の義父にメガマスを握らせまいと画策した。ところが金沢支社長は中央の権力になんら興味を示さなかった。彼の出した条件は、金沢支社の舵取りを一任してほしいということだった」

「その支社長がしたたかだっただけじゃないのか？中央の権力争い

に絡んでもろくなことがないと」
イサコの言葉を聞いて、大谷は鼻で笑った。
「違うな。だったらわざわざ娘を社長の嫁に出したりしない。あの結婚は明らかに政略結婚だったろうから、金沢支社長に野心がないはずがないんだ」
「だったらどうして、金沢支社長は金沢の治外法権を要求した？この地に閉じこもると宣言したようなものじゃないか」
「その答えは1つ。金沢支社の力でメガマスを動かすだけの自信があるからだ。現在金沢支社はメガマス内でも独自のプロジェクトを進めている。そしてそのプロジェクトこそが、メガマス再建の本当の切り札だ」
大谷はこれまでの調査からその答えを導きだした。本社の意志とは関係のない、金沢支社独自のプロジェクト。それが斜陽のメガマスを復活させる鍵を握っていると。
「そう言い切れる根拠は？」
「独自プロジェクトについては、前々から動きがあった。金沢支社はある外資系コンピューター企業との業務提携を結ぼうとしている」
「どこの企業だ？」
「米国資本のアプリコット社だ」
イサコはその名前を聞いて少し考え込んだ。
「アプリコット社というと、メガネが開発される以前、音楽プレーヤーやスマートフォン、タブレット型コンピューターなどで業績をあげた企業じゃないのか？」
「ほう、よく知っているな。その通りだ。君の生まれる少し前の時代の話だ」
感心するように大谷が言う。
「確かメガネ型コンピューターにも手を出していたはず。しかしメガマスがメガネの権利を手中に収め、その搭載ＯＳも他社との独占契約を結んだ……アプリコット社はメガマスとは反目し合う関係にあるんじゃないのか？」

「だからこの動きが見るからに怪しいんだ。メガマスにとっても今更アプリコット社と手を結んだところで大きなメリットがあるわけではない。そのウラには何かがあるはずなんだ」
大谷は確信しているようだった。メガマス金沢支社とアプリコット社の共同プロジェクトについて、いち早く明らかにしたいと大谷は考えていた。
「なるほど。さっきに話とつなげると、その金沢支社とアプリコット社のプロジェクトは、電脳ナビシステムを邪魔とみなしている。そして黒井地区の空間事故とも何らかの関係がある。こう言いたいわけだな?少し荒唐無稽だと思うが」
イサコがこれまでの話を整理した。プロジェクトの話は理解できたが、それが黒井地区の事故と関わりがあると考えるのはまだ手がかりが少ないと思った。
「いや、十分考えられることだ。これまでただの空間の不具合で、メガネが壊れるほどの事故が起こったことがあるか?」
「……いや、記憶にない」
大谷の質問にイサコは考え込みながら返した。
「だろう?明らかにこの街では何かが起こっている。おまけに謎の少女がこの辺りで暗号を設置しているとなると、こちらから調べない手はないということだな」
大谷が黒井地区での事故やサオリのことを追っているのはそのためだった。それらは金沢支社のプロジェクトを調べる手段だったのだ。
「で、何かわかったのか?私が知りたがっているであろう情報っていうのは何だ?」
「ああ。その前に、君はあの少女の名前を知っているな?それを教えてくれないか?」
大谷が急に鋭い目つきに変わった。イサコはそれをこの男に言っていいものかどうか考えた。
「いや、知っていることは知っている。しかし、私の口からそれを言うのはまずいんじゃないかな。さっきも言ったように、彼女も私

と同じ中学1年生だ。見ず知らずの男に、名前を知られるのは決していいことではないはずだし……」

「言いたくないか？オレは君にできるかぎりの情報提供をしようとしているつもりだが」

「……その情報を聞いてから判断する」

大谷はさらに迫ったが、イサコはそこから目をそらしながら返した。自分は本当に都合が良い、それで相手が情報をくれなくなるかもしれないのに、とイサコは言ってから少しだけ後悔した。大谷はこれにため息をついた。

「……まあ、いいだろう。今月の初めに大黒で事故が起こった。その数日後、黒井交差点で空間の不具合が起こって、近くにいた人のメガネのデータが破損した。オレはこの情報を聞いた時、あることがどうしても気になった」

「あることとは？」

話始めた大谷に安心して、イサコも顔を上げて訊ねた。

「場所が黒井交差点だったことだ。実は金沢市黒井交差点というのは、少し聞き覚えがある地名だった。気になって黒井交差点について調べてみた。君は、この交差点について思い当たることはなかったのか？」

「……いや、なかった。私も引っ越してきて、そんなに長くはないからな」

イサコは振り返ったが、今回の事故調査以外で黒井交差点にはほとんど行かなかったこともあり、思い当たるものはなかった。

「そうか。まあ、オレも検索をかけてみて驚いた。２０２６年、去年の7月３１日。黒井交差点で、電脳ナビ搭載車による人身事故があったんだ。オレはこの地名を、その時流れていたニュースでちらりと耳にしたのだろう」

「人身事故だって？黒井交差点で？」

イサコは驚いてしばらくの間フリーズした。

「君はおそらくその時は大黒でキラバグ集めに必死だったから耳に

も入ってこなかったのだろう。これがその時の新聞記事だ」
大谷はウインドウに小さく扱われている事故についての記事を出した。
「被害者は2人。信号待ちで横断歩道の前に立っていた母と娘だ。記事によると、電脳ナビ制御の車が、突然この親子の立っている場所に突っ込んできたんだそうな。親子も電脳制御の車が突っ込んでくるとは夢にも思わなかったのだろう、よそ見をしていてよけきれなかった。2人はアスファルトの地面に頭を打ちつけて意識不明の重体。死亡事故にならなかったのが、不幸中の幸いだった」
いたましいという風に大谷が説明する。イサコはそれを聞いてある可能性を考えずにはいられなかった。
「なぜ電脳ナビ制御の車が突然歩道に？まさか、その時通路が開いたとでもいうのか？」
「それはないはずだ。通路を開くことができる人間なんて、君ぐらいのものだろう。それに黒井交差点は大黒市の中津交差点と違って人通りも多い。もしそうだとしたら、通路を見た人がいるはずだ。それに記事には、原因はタイヤのパンクと運転手の操作ミスとある」
「パンクと操作ミス？自動運転中の事故じゃなかったのか？」
「少しややこしいことが書いてある。その車は自動運転中、道路に落ちていた釘かなにかを踏んだらしく、四輪あるうちの前輪左のタイヤがパンクした。そうなると車は一瞬姿勢が崩れるよな」
「そういえば、自動運転中にパンクを起こした場合、車は姿勢保持できるようになっているのか？」
電脳上で管理しているものは、思わぬトラブルには弱い。そのための事故なら、過失は電脳ナビにあるが。
「電脳ナビはよくできている。姿勢保持ぐらいはできるさ。じゃないと絶対事故が起きないなんてお墨付きはもらえない」
「だったらなぜ事故が起きた？」
「自動運転中に車が姿勢を崩した。普通の人間ならそこでパニックを起こすだろう。放っておけば車は自動で姿勢を戻すことができた。

ところが運転手はそこで手動運転に切り替えてハンドルを切ろうとした。それが逆に仇となって歩道に突っ込んだ。記事にはそうある」

大谷は少し懐疑的な目をして言った。それが事実かどうかも、まだ決まったわけではないというように。

「そしたら、事故の責任はどうなる？」

「一応、運転手は逮捕されたよ。そんでもって今公判中だ。焦点は君の言う通り、事故の責任は誰にあるのか。少なくともこの話では電脳ナビに責任はないよな。かと言って、運転手にも非があったとは言えない。自分の手で事故を防ごうとしたわけだからな。結果が悪かっただけだ。この公判では誰も裁かれない可能性だってある。だが逆に、メガマスにとってみれば最良の結果ではあるな」

ストーリーとしてはよく出来ているが、それを完全に鵜呑みにはできない。メガマスがカンナの事故の原因を隠蔽したように、この事故についても何かを隠している可能性もある。メガマスが運転手すら買収しているとすれば、この事故には何かウラがあるかもしれない。そうだとしたら、あの場所に通路が開いたという可能性も否定できない。そう考えながらイサコは、目を通していた記事の中に気になる一文を見つけた。

「被害に遭った桐野恵（きりのめぐみ）さんと、その長女の詩織（しおり）さんはいずれも意識不明の重体となっている……」

イサコはそれを見て確信するしかなかった。この事故の被害者は同じ桐野という姓を持つサオリの家族。そしてサオリの目的はおそらく、あの時の自分と同じだと。

「被害者親子の名前だな。どうかしたのか？」

明らかにイサコの様子がおかしいと見抜いた大谷が訊ねた。

「……これは、もうアンタに言うしかないか。私たちが追っているあの少女の名前は、桐野沙織」

「そうか！うすうすそうじゃないかと思っていたが、やはりこの事故の被害者の家族だったか」

大谷は大きくうなづきながらメモを取った。

「この恵さんと詩織さんの容態はわからないのか？」
イサコがすごい勢いで訊ねた。
「それがわからない。この事故についてもっと調べてみようかと思ったが、情報はみんなプロテクトされている。この記事ぐらいしか手に入らなかった」
「どういうことだ？まさかメガマスが？」
「その可能性は高いだろうな。君の時と同じか……ああ、あと気になる情報が１つ」
考えこんだ大谷が、何かを思い出すように言った。
「なんだ？」
「この事故の数日後、金沢支社空間設計室のチーフが辞職している。絶対この事故には何かウラがあるはずだ。しかしこうなってくると、ますますあの少女に話を訊かなくてはならなくなったな」
大谷はこれ見よがしにイサコの方を見た。
「こんなヘビーな過去を問いつめるなんて。彼女が話してくれるはずが……」
「なら、君と同じ過ちを彼女にも繰り返させるか？」
「……」
大谷の一言に、イサコは言葉を詰まらせる。いっそう降りが強くなった雨粒が、したたかに休憩所の屋根を叩く音がしばらく響き渡った。

#16　雨が続けば　part6

翌日月曜日の昼休み。イサコは金沢黒客とユイ、アサミを屋上に集めて前日に会った大谷記者の話をしていた。

「正直話で聞くだけでは、そいつが信用できる人間なのか判断するのは難しいな。そもそも情報を教えると言ってイサコに近づいてくるのが怪しい。オレたちも1度会う必要があるな」

レインが考え込みながら言う。話を聞くだけではその人物像がイマイチ把握できない。突然イサコの前に現れ、かなりの情報を残していく。その目的がサオリとの接点を作るため、サオリと接触できる人間を確保するためだけだというのなら、あまりに手が込んでいるとも言える。

「大谷の正体はどうあれ、調査に行き詰まっている私たちにとってはかなりの手がかりを与えてくれた。正直なところ、私たちは大谷の情報を頼りにするしかない」

「その人の話はウソではないんだね？」

イサコがぽつりと言ったところに、シュウイチが訊ねて来た。

「それだって確実かどうかはわからない。しかしウソをついているにしては、話が出来過ぎている。そもそも、大谷がウソをついてまで私に接触してくる意図がわからない。だから大谷が私に接触してきたのは、本人が言っていた通りの目的があったからだと私は踏んでいる」

「つまり、イサコをサオリとの窓口にしようとしていると。イサコをウラで操って、サオリに何らかの情報を出させようとしている。そういうことだな？」

「その通りだ」

レインが確認した。イサコはそれを聞いて、まるでユイを操ってサオリから情報を出させようとしていた自分と同じだなと思った。

「そのサオリの家族は、あの黒井交差点の事故で意識不明の重体か

……本当に気の毒なことだね」
ふとつぶやくようにシュウイチが言う。その話を聞いた時は全員が一様にショックを受けた。
「“あの事故”って言ったな？その交通事故については知っていたんだな？」
シュウイチの言葉に引っかかったイサコが訊ねた。
「そりゃ知ってるさ。地元で起こった事故だからな。と言っても被害者の名前まで知っていたわけじゃない。あの交差点はよく事故が起こるんだ。それこそ、電脳ナビシステム導入以前からな。あの時はまた事故が起こったのか、っていうぐらいの認識だったな。多分この学校の生徒のほとんどが知っていることだと思うぜ。イサコが引っ越してきたのは秋だろ。それなら知ってなくても無理はないが」
レインがイサコに言う。そこでイサコはあることを思った。
「おい。だったらこの学校の先生は、サオリがその事故の被害者の家族だってことぐらいは知っているんじゃないのか？サオリのような特殊な家庭事情の場合は、学校だってそれを把握しているはずだ」
「確かにそうだね。その大谷って人もわからなかったサオリのお母さんや姉妹の容態も、学校ならわかるかもしれない」
イサコの意見にシュウイチが同調した。
「だが仮に学校側がそれを知っていたとしても、それをオレたちみたいなのに話してくれないだろう。サオリ本人に聞けって言われればおしまいだぞ」
レインが冷静に言った。そもそも自分たちとサオリをつないでいるものはない。かろうじてユイがサオリに声をかけることができるが、友達というのにはほど遠い関係であることは否めない。先生にそこを突っ込まれれば、返す言葉もなくなるだろう。
「そうか。岩渕の言う通りだ。やはりサオリ本人から詳しいことを聞かないことには始まらないか」
「そうだな。って言うかお前、名字で呼ぶのはいい加減やめろよ。みんな下の名前やあだ名で呼び合っているのに、１人だけツンツン

するんじゃねえぞ」
レインはイサコに怒った。金沢黒客とイサコはそんな堅苦しい関係ではない、もっとオープンな関係だということを知らせるために。話が段々とシリアスになってきて、イサコが1人悩まないようにするという、レインなりの気遣いだった。
「ああ！下の名前で呼んだらいいんだろレイン」
そんなレインの気遣いには気付かず、イサコは半ばやけくそで返した。
「やればできるじゃねえか。で、話を戻そう。サオリの家族はその事故で意識不明の重体。そして、当のサオリは暗号を使って何やら黒穴を出現させようとしている。イサコの頭の中は、もうそのことでいっぱいのはずだな。サオリは自分と同じことをしようとしているのではないか、と」
イサコはそこまで話さなかったが、レインは交通事故の話を聞いた時からピンと来ていた。それはイサコの過去を聞いているシュウイチ、カズマも同じことだった。
「自分と同じこと？」
その言葉に引っかかったのはユイだ。ユイとアサミは、まだイサコの過去を知らない。イサコは誰にもそのことを話していないのだ。金沢黒客がそのことを知ったのは、シュウイチがヤサコのいとこだという奇跡が起こったからであった。
「まだ2人はそのことを知らないんだ。イサコ。この2人には話しておいた方がいいんじゃないかな。この2人は、イサコを誤解したりしないだろうし」
シュウイチがイサコに言い聞かせる。イサコがあまり自分の過去を話したがらないのは、それで自分という人間が誤解され、見放されるのを恐れているからだということを、シュウイチはイサコ本人から聞いていた。しかしそんなこと、今のイサコを知っている人間からすれば杞憂に過ぎないと思えるし、ユイやアサミもそのくらいのことでイサコから離れていく人間じゃないこともシュウイチはわか

っていた。
「そうだな。私がそのことをひた隠しにすることこそが、この2人に対する裏切りか。じゃあユイ、アサミ。あまり気持ちのいい話ではないかもしれないが聞いてくれないか」
イサコはそうして自分の過去について2人に打ち明け始めた。交通事故で死んだ兄をまだ生きていると思って助けようとしていたこと。暗号を駆使して通路を開こうとしたこと。その通路の先には“あっち”と呼ばれる空間があり、ミチコがそこにはいたこと。そしてその開いた通路のせいで人が亡くなってしまうような事故が起こったこと。ユイやアサミにとってはその話がショックでないはずがない。しかし2人は心を痛めながらもしっかりとイサコの話を聞き届けた。
「……そんな、そんなツライことを経験してきたなんて。私はイサコからは、お兄さんが亡くなったことぐらいしか聞いてなかった。それだけでも十分ツライことなのに、そんな残酷な、生きていると信じていたお兄さんが、それが心の支えだったのに、亡くなっていたことを知ってしまうなんて」
ユイはたどたどしく言うと、涙を流し始めた。アサミも同様にうつむいてしまっている。
「ああ、やっぱりショックが大きかったか」
イサコは少し後悔したようにつぶやいた。
「そりゃそうだ。オレたちも初めてイサコ自身の口からそのことを聞いたからな。伝え聞くより重みが違う。実際オレも涙が出てきそうだ。イサコ。初めてこの場所でお前と向かい合った日、オレ達はお前の過去を知っているような口を利いたな。それは間違っていた。あの時のことは謝るよ。すまなかった」
レインが謝って、シュウイチもカズマも神妙な顔つきになっていた。イサコも戸惑いとともに、心のどこかでは喜びのような感情があることに気付く。ここまで自分のことを思ってくれていて、それを自分のことのように感じて涙を流している人がいる。金沢黒客のメンバーも、改めてその出来事の重みを知った。同情をひくことなどあ

まり美しいものだとはイサコは思ってこなかったが、やはりそれは正直に嬉しいものだと思った。一方で、だからと言ってこれからずっと気を遣ってもらうような関係にはなりたくない。

「ユイ、アサミ。顔を上げてイサコを見なよ。これが今のイサコなんだ。前を向いていて、人に対して優しい。一連の事件で成長したのかどうかは僕にはわからないけど、僕には、天沢勇子は、強い人間に見える。イサコの過去がショックなのはわかるけど、それを引きずる必要はないよ」

イサコの気持ちを代弁したのは、シュウイチだった。シュウイチの言葉に一同は大きくうなずいた。そしてイサコは、ユイ達が涙を流してくれたことよりも、レインが謝ってくれたことよりも、そのシュウイチの言葉が一番嬉しいかもしれなかった。

「シュウイチの言う通りだな。イサコ自身はそのツライ過去をとうに乗り越えているようだ。オレたちが必要以上の心配をすることはない」

「うん」

レインがユイとアサミに言い聞かせて、2人は涙を拭いながらうなずいた。

「……ありがとう。みんな」

イサコからは自然とその言葉がこぼれていた。どこか、今のやり取りで全員が結束したような雰囲気が生まれていた。

「話を戻そう。サオリの目的はその時のイサコと同じなのかもしれない。どこかの空間にサオリの家族の意識があって、それを助けようとしている。黒井地区の空間事故で現れ、前に学校でも現れたという黒い穴は、かつての通路の入り口に近い存在なのかもしれない」

レインが話を進める。レインの言うどこかの空間というその曖昧な存在も、大谷の話の中にヒントがあるのかもしれないとイサコは思った。

「さっきも話した、メガマスとアプリコット社の共同プロジェクトが、そのどこかの空間というものと関係しているのかもしれない」

「ああ。だがそれは大谷の調べることだろう。オレたちは、やっぱサオリにアプローチするしかないんじゃないか？」
レインがイサコの言葉に返す。
「なあ。黒井の交通事故の被害者の家族がサオリだってことはわかったが、結局オレたちのやろうとしていることは変わらないんじゃないか？ようは、サオリを止めるってことだろ？」
カズマがイサコに訊ねる。土曜日の時点で考えていたのは、サオリの使っている暗号を解読し、いつでもサオリの行動を封じることができるようにする、というものだった。
「その通りだが、交通事故のことを知ってから、それより他の方法はないものかと思うようになったのも事実だ」
イサコの中には迷いが生じていた。それについてはみんな理解できるところだったが、それではいけないとレインは思っているようだった。
「他の方法っていうのはなんだ？一緒にサオリの家族を救う手伝いをして、みんなで空間に黒穴をあけるってか？それとも、サオリには家族は助からないと残酷に告げて、あきらめさせるっていうのか？」
「レイン！そんなキツい言い方しなくてもいいだろ。イサコだって今一生懸命に最善の方法を考えてるんだ」
シュウイチがレインを咎めた。レインのことをよく知っているシュウイチは、その言葉もレインの中で何か考えがあってのものだということもわかっていたが。
「時間がないんだ。次にいつサオリが黒穴を出現させるかわからん。早々にオレたちの次の一手を考える必要がある。加えて今回の件は、もはや金沢黒客の調査ではなくなっている。イサコなしでは進められないものになったんだ。そのイサコの意志によってオレたちは動く。だからイサコが迷っているのはあまりいい状態ではない」
レインの言っていることはもっともだった。金沢黒客はイサコの意に反して動くつもりはない。だから、イサコには速やかに決断をし

てもらわなければならなかった。
「……わかった。サオリと話してみる」
イサコはとりあえず今はそれしかないと思った。
「ああ。それがいいだろうな。今度はイサコが行くんだぞ。サオリの気持ちを一番理解できるのはイサコ、おまえなんだからな」
レインもそれに同意する。この2人が向き合わないことには始まらないことだと思った。
「もし、サオリが何も話してくれなかったら？」
シュウイチがイサコに訊ねる。
「……その時は前も話していた通り、サオリの暗号を解読して、いつでもサオリを止められるようにする。手荒な方法だが、この前シュウイチと私が体験した地震が交通量の多い交差点で起こるかもしれないと思うとぞっとするからな」
「わかった。じゃあそれでいこう」
レインがまとめて、今日の昼休みの会議はここまでとなった。各々が教室へと戻る途中で、シュウイチが何かを思い出したように言った。
「そう言えばイサコ。今日はメガマスの緊急記者会見があるんだってね」
「緊急記者会見？それって、メガマスがメガネの不具合をついに公表するってことか？」
ついにその事実を公にするのか、とイサコは思った。
「多分そうだと思う。僕も父さんからその話を聞いたんだ」
「そうか。お前の父は、メガマスに勤めているんだったな」
「ああ。今日の夕方のニュースで生中継されるみたいだ」
「わかった。教えてくれてありがとう」
イサコはシュウイチに礼を言って、それは見ないといけないなと思った。そして明日からの世界がどう変わるのかも。

#16　雨が続けば　part7

同じ月曜日の昼頃。メガマス金沢支社で空間事故の調査をしていた玉子は、あまりにやることがなくて空間設計室の雑用を手伝っていた。

玉子が調査に入ってからこの日で5日目。その間金沢市は平和そのもので、空間の乱れなどは玉子がモニタリングしている限りでは観測されなかった。空間の異変はこの4月で2回起こったのだが、こうも何も起きないと調べようがない。設計室にいるのも退屈になった玉子は、最近の運動不足の解消のために書類運びなどをしていた。そうして山のような書類を抱えて、社員の休憩室の前を通った時だった。

「お前、何が目的で金沢に来た?」

そこから聞こえてきたのは現在の玉子の上司、酒井友和の声だった。その言葉に引っかかった玉子は休憩室を覗いてみる。すると中では一郎と友和がソファに腰掛けて缶コーヒーをすすっていた。部屋の中に他に社員はいない。

「おいおい。いきなり何だよ?空間不良の原因調査のために決まっているじゃないか」

一郎が笑って返す。一郎と友和は同期入社の同僚。さらに友和は一郎の義弟にあたるが、2人だけの会話の時はお互いラフに話すようだった。

「ウソをつけ、バレバレだ。なんで空間不良の本場大黒で管理室長やってるお前が、わざわざその席を空けて金沢まで来る?こっちの調査なんて原川君に任せれば良かっただけの話だ。ウチだって絶対的に人手不足ってわけじゃないし、優秀な彼女だけで十分に務めは果たせるだろう?」

友和は最初から一郎の出張については何かウラがあると感じていたようだ。玉子はその話を聞いて初めてそのことを疑問に思った。

「はあ。お前は相変わらず勘がいいな。その通りだ。この出張、僕にはもう1つ目的があった」
「差し支えなければ教えてくれないか？」
観念したような一郎に友和が迫る。玉子も書類を足元に置いて聞き耳を立てる。
「絶対誰にも言うなよ」
「水臭いな。オレたち義兄弟じゃねえか」
友和が一郎の肩をポンポンと叩く。玉子は前にも思ったが、どうしても一郎の方が弟のように見えた。
「この金沢支社で、色々と怪しからん動きがあるのは知ってるな？」
「金沢支社長の独自プロジェクトってやつか？最近米国のアプリコット社の人間が社内を出入りしているのをよく見るが、それは怪しいのか？」
「ああ、まあ怪しいとまでは言えないけど、金沢支社が本社にも手が出せない治外法権を持っているのは知っているだろ？それについて先日、空間管理室本部長から呼び出しを受けたんだ」
「本部長？ほう、オレたちのボスから」
一郎はその時の様子を克明に話し始めた。

一郎が本部長の呼び出しを受けたのは出張の2日前、イサコがヤサコに電話をかけて来た日のことだった。ちなみに2回目の空間不良が学校で起こったのがその翌日だ。
「金沢で空間不良が起こったそうだ。君には調査に行ってもらいたい。金沢の管理室では原因が掴めないらしくてな。経験と実績のある君を派遣させるというのが、社長からのお達しだ」
管理室本部長は開口一番にそう言った。
「空間不良ですか？しかし、僕は大黒の事件の調査を続けないといけません。申し訳ありませんが金沢に行くのは他の人を立ててもらえないですか？市役所の管理室にも、ある程度経験のある人はいますし」

一郎はただの空間の事故のために金沢にわざわざ出向くのは避けたいと思った。その時は誰か代役を立ててもらいたいと願い出た。
「君が例の事件の真相を調べているのはわかっている。だからこそ社長は君を金沢に送ろうと決断されたのだ」
「どういうことですか？まさか、金沢での事故がさきの大黒市での事件と何か関係があるということですか？」
本部長の言葉に、一郎の食いつき方が変わる。
「うむ。その可能性があるんだ。実は最近、金沢支社で妙な動きがあるみたいでな」
「妙な動き？」
一郎は驚いた。メガマス内部の動きがその事故とやらに関わっているらしいことに。
「妙って言っても、そうあからさまに怪しい動きというわけじゃない。最近金沢支社が独自に進めているプロジェクトについて知っているか？」
「そう言えば聞いたことがあります。このたびメガマスは外資系コンピューター企業アプリコット社との業務提携を検討しているとか。その関係者ですか？」
管理室に勤めている一郎でもちらっと小耳にはさんだ情報だった。
「そうだ。その業務提携の話も、金沢支社長の発案によるものなんだ」
「金沢支社長というと、僕もよく知っていますが、確か現社長の義父にあたる方ですよね」
一郎が確認するように言う。
「ああ。その業務提携に関するプロジェクトも金沢支社長が中心となって進めてきた。ところが、それが現メガマスの経営において必ずしも有効な手だとも思えない。それは社長も言っておられた」
「ですが、金沢は実質その支社長の勢力下にありますよね。社長も支社長には金沢の全権をゆだねられておりますし、それを社長が止めることもできない」

「そうだ。金沢支社長は敏腕の経営コンサルタントだったことは知ってるな？だからこそこの業務提携の話には疑問符がつく。表向きの理由以上に何かウラがありあそうなんだ」

「表向きの理由は、メガネに搭載するＯＳの種類を増やして、新規ユーザーを獲得するということですよね。でも確かにそれをするのはリスクが伴いますし、そのリスクほどの見返りがあるとは思えません。ＯＳを増やすということは、空間のインフラも再整備が必要だということにもなりますし」

一郎は訝しみながら考え込んだ。経営には素人の一郎でもその提携のリスクは想像できる。少なくても現時点で打つ手ではないなと思った。

「ああ。その空間インフラの実験が金沢でも行われているらしい」

「なら、その金沢の事故というのは、その実験の失敗によって起こったものということが考えられますね」

一郎はむしろ、その可能性しかないんじゃないかと思った。そしてヤサコが、ミチコの口から新しい空間というキーワードを聞いたことも思い出した。

「そうなんだが断定はできないんだ。金沢支社の研究開発部は、この件について一切情報を公開していない。だからそこで何か失敗があったとしても、本社にも管理室にも伝わってこない。向こうの研究開発部が送ってきた資料には、やはり実験が失敗したという記録がなかった」

「なら、資料が改ざんされている？」

「その可能性もある。何よりこちら本社が金沢を疑いの目で見るのは他にも理由がある。実は神崎前研究開発部本部長が金沢入りしている」

空間管理室本部長の声色が少しだけとがった。神崎は大黒の事件の後、研究開発部本部長の肩書きをはずされ、幹部としての列席から落とされた。今は研究開発部の相談役として、前以上に影響力の少ない役職に就いている。

「神崎さんですか……本社が一番危険視しているのはあの人なんですね」
「ああ。ヤツがなにかを企んでるのは現幹部達が総じて思っていることだ。もしかすると金沢支社を使って何かを始めるつもりなのかもしれない。とにかく神崎の目的を探るのも君の仕事の1つとなる」
管理室本部長は、まっすぐ一郎を見据えながら言った。

「つまりはまた内部監査か。おまさんはよっぽど信頼されとるんだねえ。よっ、未来の幹部候補！」
ちゃかすように友和が言った。一郎はあの夏の事件の時も内部監査として金沢で旧コイルス社の残党の動きを調べていた。今回で内部監査は2回目だ。
「ふざけている場合か。これは大黒で起こった事故とも関連させて、なんとしても僕が明らかにしなければならないことなんだ。空間不良も含めて、これ以上事故を起こすえわけにはいかない」
一郎は持っていた缶コーヒーを飲み干すと、ゴミ箱に勢いよくそれを捨てた。
「その様子なら、あんまりうまくいってないようだな」
友和がその一郎の仕草を見てぽつりと言った。
「……ああ。プロジェクトの裏事情を知っているのはごくわずかな人間らしい。僕はそれを知っているらしい人に会うこともできていない。と言っても、僕はその神崎さんに嫌われているみたいだから、逆に僕が監視されているのかもしれないけど」
「まあ、金沢支社長や神崎さんが本気で何かをウラで進めようとしてるんなら、本社から来た人間は小此木じゃなくても警戒すると思うが。なんなら本社にはそう報告したらいい。『僕が何も掴めなかったということは、金沢支社はやはり情報を秘匿している可能性が高い。本腰を入れて金沢支社を調べてください』とな」
友和の言葉に一郎はため息をついた。
「そんな報告できるわけないじゃないか。社長は金沢支社長を信用

しておられる」
「そりゃまあ義父だからな。オレが小此木のおふくろに頭が上がらないのと同じことか」
笑って友和は言うが、一郎はここで引き合いに出す話じゃないだろうと思った。
「それに今日、ついに本社がメガネの不具合を公表する。これからは小さな事故だって起きることは許されなくなる。メガネは危険だというイメージが先行するだろうからな」
「確かにな。もともと本社はもっと前にそれを公表するつもりだったんだろ？だが金沢での空間不良の事故を受けて少し様子を見ながら延期していた」
友和が一郎に確認する。
「そうだ。しかし他の地域で同様の事故が起きなかったことや、こしばらくは金沢でも空間に異常が見られなかったことから、本社は今日不具合の公表を行うことを決定した」
「本社にその報告を送ったのはオレだ。もしここで事故が起こってメガネのイメージがさらに下がったら、オレの責任になるんだろ？たまらないな。だいたいこっちの空間事故を根本的に解決してから公表しても遅くはないのに、本社は何を焦ってる？」
「友和の責任にはならない。本社だって十分それは承知している。本社が公表を焦っているのは、今月初めの大黒市での事件以来、メガマスの不正をかぎ回る人間が急に増えたからだ。旧幹部達の動きもある。他人に暴露されるよりも、潔く自分から告白した方がまだイメージは良いだろう」
「潔くねえ……」
友和が足を組みながら鼻で笑った。
「それに言ったように、他の地域で空間不良が起こらなかったことを考えると、やはりそれら事故は金沢支社のプロジェクトと何か関係があると考えるほかない。同じメガマス内なら、連携を取れば事故は未然に防げる。しかし金沢支社が本社の催促を無視している今

の状態では次の事故も起きかねない。僕は金沢支社にきちんとした説明をしてもらえるように努力するだけだ」

「内輪で揉めるのだけはやめてほしいよな。わかった。お前の調査がうまく行くように祈ってるよ」

「ありがとう。休憩を取り過ぎたな。そろそろ行こう」

そうして2人は立ち上がった。玉子はその話を終始聞いていて驚くこともあったが、この規模の話になると自分は介入できないなと諦め、その場を去ろうと床に置いていた書類の束を持ち上げようとした。ところが書類の山はバランスを崩して床に散らばってしまった。

「ああっ」

玉子はやっちまったと思うと同時につい声が出てしまった。そしてその方がやっちまったと思った。

「誰だ?」

驚いた一郎が休憩室の入り口に駆け寄る。今の話はもちろん極秘事項であり、一般社員に聞かれるのはとんでもないことだった。

「なんだ君か」

「す、すみません室長……」

一郎は安心のため息をついて書類を拾う玉子を見る。そして一緒に書類を拾いながら一応確認した。

「聞いていたのか?」

「……ええ、バッチリと」

聞き耳を立てていたという意味も含めて、玉子は申しわけなさそうに返した。一郎はまたため息をついた。

「まあ、本来なら一緒に調べてくれている君にも言わなければならないことだったかもしれないけど、本部長命令で君に伝えるのは禁じられていたんだ」

「そうだったんですか……じゃあ、聞かなかったことにします。室長の調査がうまくいくことを私も祈っています」

玉子は書類を拾い終わると、一郎に頭を下げて行こうとした。

「待ちなさい。金沢で起こった空間不良の事故の調査については君

の仕事だ。それが金沢支社と何らかの関係があるということを掴んだのなら、君にも金沢支社を調べる義務がある。その時はこの友和と協力して、君なりのアプローチで調べてみてくれ。このことに首を突っ込むなとは言わない」

「え、ええ。わかりました」

驚いたように玉子が返す。てっきり逆のことを言われるのかと思ったが、もともとこの調査は2人で始めたこともあり、一郎も玉子には内緒でメガマスの内部監査をしていたことを少し申し訳なく思っているようだった。そこで玉子はもう1度、金沢での事故をしっかりと調べ直そうと思った。

「じゃあ僕はこれで。友和、彼女を頼んだぞ」

そう言って一郎はその場から立ち去っていった。

「原川君、なんだその書類の束は？」

ずっと不審に思っていたのか、一郎を見送るなり友和が玉子に訊ねた。

「これは、故障の疑いがあった北陸地方の空間サーバーの点検記録です。後でチーフに確認してもらおうと思って」

「おいおい、仕事を増やさないでくれ。小此木はどうか知らんが、ウチは事なかれ主義なんだ。頼んでもいない仕事をされても困る」

半分冗談のように友和が笑いながら言った。

「も、申し訳ありません」

「いいよ。やったっていうんなら後で見ておく。とりあえず重そうだからその書類半分渡しなさい」

「とんでもない。チーフにそんなことを」

「いいんだ。それより設計室に戻って、本社のメガネの不具合の公表の会見を一緒に見よう。それが終わったらもう1度金沢での空間不良の事故について、原因を考えるぞ」

友和は玉子から書類を半分受け取ると、設計室に向かって歩き始めた。

「わ、わかりました」

事なかれ主義と言っているが、やっぱり友和も一郎に協力したいんだなと思いながら、玉子は後を追うようについていった。

#16　雨が続けば　part8

メガマスによるメガネの不具合の公表は、この日の夕方のワイドショーのトップニュースとして取り扱われていた。設計室に戻った玉子は、友和や他の設計室職員らとともに食い入るようにテレビを見つめていた。

「まず、各報道機関に送られたメガマスの声明はこちらです。これは、メガマスの公式ホームページでも確認することができます。それを見ながらメガネの不具合に関する項目を1つずつ確認していきましょう。まずイマーゴと呼ばれる隠し機能の存在。そのイマーゴの力による、電脳体分離という現象の存在。そして、電脳体分離が交通における電脳ナビの事故を引き起こしたという事実。大きく分けるとその3項目が、メガマス社によって本日公表されました。これについて間もなく、メガマス本社での記者会見が行われる予定です。では中継をつなぎたいと思います」

キャスターが大きなディスプレイに映されたメガマスの声明を示しながら説明し、映像は記者会見の始まるメガマス本社の1室に切り替えられた。すでに多くの報道陣が詰めかけ、会見が始まるのを今か今かと待ち構えている。しばらくして大量のフラッシュに迎えられながら、代表取締役社長、桝田章太郎や幹部達が会場に入り、1度深々と頭を下げてから席についた。

「株式会社メガマス代表取締役、桝田章太郎です。既に各報道機関にお送りした声明にもある通り、本日はこの場で、メガマス社が製造・販売を致しております“電脳メガネ”の不具合について説明させていただきたいと思います」

桝田が記者達に初めの挨拶をすると、不具合の説明は桝田の隣にいる広報が事細かに説明し始めた。

「社長自ら出席する必要はないだろうに。正直世間には、こんな若い人が社長でメガマスは果たして大丈夫なんだろうかという印象し

か残らないぞ」
中継を見ていた友和がつぶやいた。
「でも、社長が出席するとしないとでは世間に伝わる誠実さというのが違ってくると思います。世間に新しいメガマスのありようを伝えるというという意味もあるのではないでしょうか」
玉子の意見に、友和は「なるほどな」とうなずく。しかし世間がメガマスに抱くイメージは、どうしても友和の言ったようなものになるのだろうと玉子は思った。
広報による長々とした説明が終わると、今度は質疑応答の時間に入る。桝田はこの時にできる限りの答えを返せるようにと、会見に出席したのだった。
「ではそちらの方」
一斉に手を上げた記者の中から、広報は手前に座っていた1人を指した。
「東海新聞です。社長、その不具合についてはメガマス内ではいつから掴んでいたのでしょうか?」
「そうですね。少なくとも私がそのことを知ったのは昨年の9月頃です。大黒市でこれらの不具合にまつわるある事件がありまして、その時に知りました。ただ私の管理が不徹底だったということもあったのか、既に一部の幹部達はその事実を掴んでいたようでだったのですが、私に報告は届いておりませんでした。なので社として正確にいつから不具合のことを掴んでいたのか、という点に関しましてはお答えできません」
「その幹部達というのは、社長が不具合についてお知りになったという昨年9月頃に無期謹慎の処分が下されていますね。やはり社長に報告を怠ったというのが、彼らを処分した理由なんですか?」
「ご想像にお任せします」
「では最後に1つだけ。不具合を隠蔽しようとしたのは社長の意志ではなかったということですね?あくまで一部の幹部が社長に報告を怠ったと、そういうことでよろしいですか?」

「すべてを彼らの責任に押し付けるつもりはありませんが、事実はそうです。もちろんそれには私が幹部達をまとめられなかったということもあり、1番の責任は私にあります。それに関しては心からお詫び申し上げます」

桝田が再び頭を下げた時、他の記者から質問が飛んできた。

「社長！この件での引責辞任は考えておられますか？」

「辞任は考えていません。私は不具合を知ってからは、それを世間に公表し、そしてメガマスをどう立て直すかを考えてきましたので」

桝田はそれについてはきっぱりと否定した。メガマスの幹部ＯＢらの意見も章太郎の続投で固まっている。

「では次に質問のある方。ではそちらの女性の方」

「はい。週刊文冬です。大黒市ではこれまで、子どもが集団で意識を失う事件がありました。それも全員がメガネの子どもだったことが判明しています。この事件の原因は、電脳体分離である可能性があると思うのですが、それについては？」

「その事件については私も聞いています。おっしゃる通り電脳体分離である可能性が高いと、そう考えています」

「さきほどの説明では、電脳体分離の原因はヌルという電脳生物であるということでした。その生物が今後出現する可能性はあるんですか？また、その集団意識不明事件の時も、ヌルがその場に出現したということにもなりますか？」

「まず、集団意識不明事件の時にヌルが出現したのはほぼ間違いありません。その時の子どもが残した絵に、ヌルに酷似した生物が描かれていましたので。しかし、今後ヌルが通常空間に出現する可能性はありません。ヌル達の住むＣドメインは既に消滅しています」

「しかし今月初め、大黒市のあるビルで４人の子どもが意識を失うという事件が起きましたよね？コイルス社のＣドメインが消滅しているのに、なぜまたこのような事が起こったのですか？」

それはメガマスにとって1番突っ込まれたくないところだった。事件の時には怪我をしないようにメガマスは大ウソを宣伝した。ここ

でも章太郎はそのウソに乗っかってつじつまを合わせなければならなかった。

「はい。それはあるハッカーがCドメインと同じ物を開発し、さらにはヌルをも生み出したからです」

「それはその事件で電脳法2条2項違反で逮捕され送検された猫目宗助容疑者のことですね？Cドメインが彼のように個人で開発できるものならば、今後もそのヌルが出現する可能性がないと断言できないのではないですか？」

「彼はメガマスと旧コイルス社の両方に精通している非常に特殊な人間です。あのプログラムは彼でなければ作り得なかったでしょう。彼はそのために我が社にハッキングまで仕掛けてきました。それによって我が社の資料が盗まれてしまったのは問題ですが、今後はこれを反省し、セキュリティの見直しを進めていきたいと考えています。今後同じプログラムが再現される可能性はありません」

章太郎の言葉に記者達はざわついている。どこまで本当のことを言っているのか測っているようだった。

「あとメガネに関する事故でもう1つお聞きしたいことがあります。一昨年この大黒市で起こった、メガネをかけていた少女が電脳ナビ搭載車にはねられ死亡した事故について。こちらの事故は先ほど説明にもありましたが、原因は電脳体分離であり、それが明らかになったところで電脳ナビシステムの欠陥が浮き彫りになった。そこで検討を重ねた結果、システムの無期限停止措置を決定した。そういうことでしたね？」

「はい」

「しかし大黒市警の捜査資料には、事故の原因は少女の不注意だったと記録されています。この時メガマスは電脳対分離の存在について知らなかったのか、それとも知っていて警察に資料を改ざんさせたのか。どちらなのかお答え願えますか？」

「先ほども申しました通り、私はその時点でメガネの不具合については把握していませんでした。その問題については、現在慎重に調

査を行っています」
「もし後者であった場合、メガマスが無期謹慎処分を下した旧幹部は、死亡事故の真相を隠蔽したということになりますが」
「そうなりますが、まだ結論は出てないので彼らの今後等に関する質問にはこれ以上お答えすることはできません」
ここで旧幹部達にすべての責任を押し付けるようなことを言えば、カンナの事故の再調査がうまく行かなかった時に桝田が糾弾されるのは必至だった。
「次に質問のある方。ではそこの赤いネクタイの方」
「はい。中陽新聞の者です。メガマスは電脳ナビシステムの無期限停止措置を正式に決定したということでしたね？しかし先ほど社長は、電脳体分離の原因となったヌルはもう存在しない、つまり言い換えると電脳体分離は起きないということを宣言されました。これは一昨年の夏のような死亡事故は起きないということにもなりますが、なぜ、システムを停止する必要があるんですか？」
「ヌル以外にも電脳体分離を起こす原因となるものが存在する可能性も考えられます。そのわずかな可能性でも、この大黒市で起こった痛ましい事故を2度と起こさないために、電脳ナビシステムを改良が必要であるという結論を下しただけです」
「では、今度こそ絶対事故の起きないシステムを構築する自信があるということですか？今回の決定は自動車メーカーからも激しい批判が集まっていますし、それは電脳ナビ搭載車の所有者も同じことだと思います。交通局も、絶対的事故の少なさを考えればシステムの停止措置は好ましくないという見解を示していますが」
「しかし、より安全なシステム構築のためには今回の措置は避けて通れないものだと我々は考えています。自動車メーカー側や交通局とは歩み寄りも必要になるとは思いますが、是非ご理解いただきたいと、そう思っています」
「では次の質問のある方……」
会見は続いているが、その中継を見ていた友和はため息をついて自

分のデスクに向かった。それに呼応して、設計室職員達もテレビの前から離れ自分の持ち場に戻って行く。

「少し苦しく聞こえるが、社長のおっしゃることはもっともだ。これからメガマスは電脳体分離を利用した電脳医療についてのプロジェクトを進める。それに対応して、電脳ナビシステムも電脳体分離では事故らないようにする必要があるからな」

「そうですね。しかしこの会見で、メガネユーザーのメガネに対する信頼は落ちてしまうのは避けられないでしょうね」

玉子が不安そうに言った。

「そこまで心配することはないだろう。メガネは多くの人にとって生活必需品だからな。むしろ、この会見で交差点などでメガネを操作する危険を喚起できれば良いだろう。じゃあ、みんな集まってくれ。この間の黒井交差点の空間事故についてもう1度資料を見直したい。

「わかりました」

職員達が自分の席に着いて資料を取り出していく。玉子もそこに加わって会議に参加することになった。

玉子が窓の外に目をやれば、この数日間降り続いていた雨がやんでいた。玉子は久しぶりに青い空を見たような気がした。

#16　雨が続けば　part9

イサコは会見の様子を家のテレビで見届けていた。メガマスが今後、メガネの販売方針をどのように変えていくか。不具合のあるメガネをこのままばらまき続け、そして現在も流通し使用されているそのメガネを回収するつもりはないのか。そういった話に及んできたところで、イサコは時計を確認して立ち上がった。

メガネを回収することなど到底できないし、かと言って不具合のあるとわかっているメガネの製造を止めることもできない。そしてなにより、イマーゴの仕組みがわからない以上、イマーゴを廃したメガネを作ることもできない。イサコもそれはわかっていた。メガマスがメガネの販売において何か手を打つということは考えにくいことである。その話をそれ以上聞いても仕方ないとイサコは思ったのだ。まだ日が落ちるまで時間はある。イサコはどうしてもサオリのことが気になっていて、今から黒井交差点に行こうとしていた。

数日間降り続いた雨は、午後に入ってから上がっていた。

イサコが急ぎ足でマンションの下に降りると、そこにはきびダンゴを連れたユイが待っていた。

「ユイ、どうしたんだ?」

「イサコ、今から黒井交差点に行くんでしょ?」

ユイにはイサコの考えがわかっているようだった。

「ああ。サオリがいるかもしれないからな。本当は今日の放課後すぐ会いたかったが、私たちのホームルームが終わった時点でサオリはもう帰っていたからな。雨も上がったことだし、黒井交差点に行ったのかもしれないと思って」

「うん。私もそう思う。だからこうしてイサコを待っていたの。私もサオリと話がしたいし」

「わかった、一緒に行こう。それより、またきびダンゴを連れて行くのか?あの辺はキューちゃんも飛んでいることだし、やめた方が」

イサコは尻尾を振っているきびダンゴを不安そうな目で見つめる。なぜだかわからないが、きびダンゴを連れて行くのに今日は妙に悪い予感がした。

「大丈夫。イサコと一緒なら。きびダンゴもサオリに会いたがっているから。ね?きびダンゴ!」

「わん!」と、きびダンゴが威勢良く返す。注意しても聞かないこのコンビだ。イサコは仕方ないと思い、とりあえず黒井交差点に急ぐことにした。

まだ黒く湿っている道を走り、2人ときびダンゴは黒井交差点を越えて黒井地区に到着した。イサコが辺りを見回すとやはり今日もシルバーのスポーツセダンが停まっていた。乗っていた大谷もイサコに気付いたのか、車を降りると手を上げながらイサコ達に近づいて来た。

「イサコ、あれが今日言っていた雑誌記者の人?」

ユイは大谷を怪しんでいる目で見つめていた。

「そうだ。人相は悪いが、まあ一応信用できる人間だと思う」

今日もチリチリの長い茶髪をなびかせて走って来るその姿に、イサコは会うのが昨日に続いて2回目であったが、やはり外見からは胡散臭さしか漂ってこなかった。

「やっぱり今日も来たのか。ご苦労なことだな」

大谷がイサコに声をかける。その瞬間、なぜかものすごい勢いできびダンゴが大谷に向かって吠え始めた。おそらく外見が気に入らなかったのだろうとイサコは思った。

「きびダンゴ!静かにしなさい!」

ユイがそのきびダンゴをなだめようとするが、きびダンゴは吠えるのをやめない。

「いいよ、慣れてるから。なぜか知らんが電脳犬によく吠えられるんだよなオレ。なんでだろ」

困ったように大谷が頭を掻く。

「見た目が悪いんだろ。犬は正直だからな。誰だってアンタを初めて見た時は警戒する。それともアンタのフレグランスが悪いのか」
「おいおい相変わらず厳しいな。まあ、いいか。そっちの子はお友達？」
大谷がユイを見る。ユイはぺこりと頭を下げた。
「ああ。それよりアンタ、今日の記者会見に行かなくてよかったのか？聞きたいことはいくらでもあっただろ？」
ここにいるということは、先ほどまで大黒で行われていた記者会見には大谷は行ってなかったということになる。
「メガマスがほとんど知っていることしか受け答えしないとわかっていたからな。それよりもこっちの方が気になった。それより例の彼女、今日は来ているみたいだぞ。オレも君に連絡しようかと思ったところだ」
「本当か？暗号は置いていたか？」
「いや、それは未確認だ。とりあえず今からオレは車で周辺を走りながら空間に異常がないかチェックする。君たちは直接彼女に接触してみてくれ。いい報告を待っている」
「わかった」
イサコが了解すると、大谷はまた車に戻っていった。そこでようやくきびダンゴが吠えるのをやめた。
「なんか意外かも」
走って行く大谷とイサコを見ながらユイがぽつりと言った。
「なにが意外なんだ？」
「いや、イサコがあんな年上の男の人と普通にしゃべっていることがね。イサコにしてみたら1番苦手そうなタイプに見えるんだけど」
イサコは年上の男と話すのは慣れていることだったが、大谷はまた宗助とはタイプが違う。考えてみれば、なぜあれほど大谷とは自然に話ができるのか、イサコもよくわからなかった。
「そうだな。アイツの術中にはまっているのかもしれない。アイツは雑誌記者だ。取材で相手の話を聞き出す術を知っている」

そして何より自分が無防備なのかもしれないとイサコは思った。前までの自分なら、あの感じの男は絶対に無視していた。ところがあの大谷の話を信じようと思っているということは、やはり自分が変わったのだろうなとイサコは思った。

「まあ、それは置いといてサオリを探しに行くか。そう言えば今日はきびダンゴが何も反応していないな」

以前この場所で暗号を見つけたときは、きびダンゴやアサミのペットのセナが反応してくれた。今のところきびダンゴにその反応は見られない。

「そうだね。きびダンゴにその辺を走り回らせてみる?」

「いや、とりあえず黒井北公園に行ってみよう。そこにサオリがいれば、手間が省ける」

サオリを探すならまず公園に行くのがいいとイサコは思った。

そして実際向かってみると、イサコの予想は当たっていた。サオリは昨日イサコが大谷と話していた休憩所のベンチに腰掛けて、なにやらウインドウを食い入るように見つめていた。イサコは意を決してサオリと話をするために、ユイと一緒にゆっくりと近づいて行く。

「こんにちは」

一番最初にユイがサオリに声をかける。よっぽどウインドウに集中していたのか、サオリは声をかけられるまで2人に気付いていないようだった。

「あっ、秋吉さん。それにあなたは……」

サオリは驚いたようにユイを見てから、イサコの方を見た。

「はじめまして、天沢勇子です」

「ええ、天沢さん。いつも秋吉さんと一緒にいる人ですよね。確か初めてここで秋吉さんと会った時にもいましたよね?あの時あなたは、暗号を使っていた」

サオリの口調は穏やかだった。初めてイサコがサオリの言葉を聞いた時にはそこには警戒感がにじみ出ていたが、今日はそんな印象が

まったくない。
「やはり見ていたのか……あの日、このユイにアンタが何をしているのかを聞きに行かせたのは私だ。その後も、ユイがアンタと接触する時はウラで見守っていた。そのことについては謝る。これまですまなかった」
イサコの言葉に、サオリは少しだけ微笑んだようだった。
「かまいません。とりあえずかけて下さい。今日はどうしてここへ？」
サオリに言われてイサコとユイはテーブルを挟んで向かい側のベンチに腰掛けた。
「アンタには色々聞きたいことがあるんだ。正直、あまりアンタにとっては気持ちのいい話ではないかもしれないが話だけは聞いてくれ」
「その、話ってなんですか？」
「ああ。前もこのユイが言ったと思うんだが、アンタ、暗号を使ってるな？」
「暗号使いは天沢さんの方じゃないですか」
サオリにはおどおどした様子は無く、毅然とした態度ではっきり否定しようという意志が感じられた。イサコの話をしっかりと聞こうとしている姿勢も、その現れのようだった。
「私も暗号は使うが、アンタのものとはまったくタイプが違う。教えてくれないか。アンタがこの暗号を使って何をしようとしているのか」
イサコはウインドウにこれまで見つけた魔方陣型の暗号を出して言った。
「前にも秋吉さんに言ったはずです。私はこんな暗号なんて知りません。他の誰かが置いたものなんじゃないですか？」
「そんなはずはない。前に学校でアンタが暗号を設置しているのを見たんだ。ウソをつかなくてもいい」
イサコの言葉にサオリは黙って考え込む。

「仮に、この暗号が私のものだったとして、天沢さんは私が何をしようとしているのか、それを知ってどうするんですか？」
このまま突っぱねるのはムリだと思ったのか、サオリは暗号については認めたようだった。
「それが危険なことなら、私はアンタを止める。私は学校で、あの暗号のおかげで意識を束の間失った」
「じゃあもし、私のやろうとしていることが危険なものじゃないなら、手伝ってくれるんですか？」
サオリの言葉に、イサコは1つため息をついた。やはり言わなければならないかと腹をくくる。
「いや、私にはアンタのやろうとしていることは大体わかる。私もかつて、アンタと同じ事をしようとしていたのだからな」
「ど、どういう意味？」
サオリの顔色がだんだんと変わってくるのがイサコは感じられた。丁寧口調がいきなり変わったのも動揺の現れだと思った。本当に言っていいのかどうか、イサコはユイに目配せするが、ユイも静かにうなずくだけだった。
「私の勘違いかもしれないが、とにかく聞いてくれ。去年の夏、この近くの黒井交差点で交通事故があった。その被害者親子の名前は桐野。アンタと同じ姓だ。その被害者はアンタの家族なのか？」
サオリの顔がすっかり蒼ざめているようにイサコには見えた。
「……はい。確かに事故に遭ったのは、私の母と姉です。この件については事故に詳しい人ならわかることですし、学校側も把握しています。だから隠すつもりはありませんでした」
イサコとユイは顔を見合わせた。正直イサコは、この答えが返って来てどうリアクションをすればいいのかわからなかった。自分は今まで同情される側だったが、それが他人のこういった話を聞くことは今までなかったのだ。
「サオリちゃん。それは本当に気の毒だったね」
言葉が出ないイサコに変わってユイがサオリに声をかけた。サオリ

はうつむいて静かにうなずく。
「その母と姉の容態はどうなんだ?」
イサコは聞いていいものか迷いもあったが、どうしてもそのことが聞きたかった。
「……今も意識不明です。いつ回復するのか、わかりません」
サオリの言葉にイサコは考え込む。それならあるいは、ということも考えられた。
「ここからは私の推測なんだが、今も意識不明ということは、もう半年以上も意識が戻っていないことになる。もしかしてアンタの母と姉の意識は、電脳空間を彷徨っているんじゃないか?」
「な、なぜ、そのことを?いえ、そんな突拍子もない話を思いついたんですか?」
サオリは心底驚いているようで、イサコの思った通りだった。サオリがごまかすように取り繕っても、もう遅かった。
「やはりな……私にも似たような経験があるんだ。アンタのやろうとしていることなら大体わかると言ったのもそういう意味だ」
「似たような経験……あなたは、一体!?」
サオリはそう言うとふいに立ち上がった。そしてそのままイサコ達に背を向けて走りだそうとした。
「待ってくれ!せめて、私の話だけでも聞いてくれ!」
イサコもサオリを引き止めようと立ち上がる。
「いえ、あなたとはもうお話できません。これ以上、私に近づかないようにしてください」
サオリは背中を向けながら言って、そのまま走り去る。イサコはサオリを追おうとしたが、ユイに止められた。
「ユイ!」
「イサコ!今日はサオリをそのままにしてあげて。サオリだってずっと1人で抱え込んできたことを、いきなり他人に明かされて驚いているのよ。それで気持ちの整理がついていないのよ、きっと」
ユイもツラそうな顔をしていた。イサコの話を聞いた時も涙を流し

たように、ユイは人の感情に敏感だった。
「あの様子なら、おそらくそれだけじゃないだろう。私にはますますサオリのことがわからなくなった」
「いや。でも、わかったこともあるだろう」
そこに大谷が歩いて来て言った。
「アンタ、聞いていたのか」
「そこの木の陰に隠れてな。これでわかったのは、彼女の母と姉は今も意識不明、そしてその意識は電脳空間を彷徨っていること。あの反応を見る限りはその可能性が最も高い」
大谷も神妙な面持ちで言った
「ああ。でも私が似たような経験をしていると言っただけで、なぜあれほど敏感に反応して逃げて行った？」
「引き止められると思ったんじゃないか？」
大谷の言葉にイサコは考え込んだ。それがどうも腑に落ちなかった。
「そうだとしても、あの反応は何なんだ・・・・・・いずれにしてもサオリとはもっと話しかけないといけないな。あっちが心を開いてくれるまで我慢強くな」
「うん。それしかないよ。また学校とかこの場所で話合えばいいじゃない。連絡先も聞いといてあげるよ」
「そうだな。ありがとうユイ。まあ、こういうことだ。今日は大した話が聞けなくて残念だったな」
イサコが苦笑しながら大谷に言った。
「いいさ。あの子から話を聞くには時間がかかることは十分承知だ。まあ、また頑張ってくれよ」
大谷は手を振りながらそう言うと車に戻って行った。
「じゃあ、私達も帰るぞ、ユイ。あの様子なら、今日はサオリも暗号を置いてないだろうし」
「そだね」
イサコとユイも今日は引き揚げようと、きびダンゴと一緒に黒井北公園を後にした。

#16　雨が続けば　part10

雨は上がったといっても、空にはまだ分厚い雲がかかっていて、この日は暗くなるのが早かった。日が沈みはじめて薄暗い黒井地区を、イサコとユイ、そしてきびダンゴはとぼとぼと歩いて行く。考えていたのはもちろんサオリのことだ。

「イサコ、どうするのこれから？」

「どうするって、さっき言った通りだ。辛抱強くサオリとは歩み寄りをはかるしかない」

イサコは苦い顔をサオリに向けて言った。あの様子なら、サオリが今後イサコの話を聞いてくれるかどうかもわからない。口ではそう返したが、イサコの心の中は先行き不安だらけだった。

「じゃなくてさ、サオリがイサコと同じことをしようとしているとしたら、イサコはどうするのかなと思って」

ユイもイサコとは目を合わせないでうつむきながら言った。

「……そうだな。正直、私自身も自分の中で整理がつかない。サオリと話し合ううちに自分のすべきことを見つけられたら、と思っていたが、今日のあの様子ではな。私はすっかり嫌われたみたいだし」

「そんなことはないよ。サオリはすぐ人を嫌いになるような子じゃない。サオリには何か事情があるんだよ。絶対に人を頼りにはできない事情が」

「そうだな。それはわかる。だから余計に放っておけない。１人ですべてを背負い込むことのツラさは、私もよくわかっている。そしてすべてを失ったときのショックも」

「だよね。私がどうこう口を挟める問題じゃないよね」

どこか寂しそうにユイがうつむくので、イサコはしっかりとユイの目を見た。

「いや。サオリのことを思っているのは、ユイも同じ。あるいは私以上だ。私の時もそうだった。自分のことを知ろうして、そして理

解してくれようとする人の存在がどれほど大きいか、それも私は身にしみてわかっている。サオリもユイのことを、必要としているはずだ」

「ありがとう。まあ、私がくよくよしたってしょうがないよね。ツラいのはサオリやイサコなんだから。今日シュウイチ君が言ってたように、私もイサコみたいに前を向くよ」

ユイの言葉に、イサコは照れくさそうに笑った。シュウイチが自分のことをそう言ってくれたことは、素直に嬉しく思っている。そう言った生き方をできるように、兄にそう誓ったのだから。

「とりあえずまた明日、サオリのところに行こう。その時は、私が会いたがっているとユイがまず伝えてくれ。いきなり行くと、またサオリが拒絶するかもしれないし」

「そ、そうだね」

苦笑いで言ったイサコに、ユイも苦笑いで返す。２人の前方には轟々と車の通る黒井交差点が見えてきた。その時、２人に寄り添って歩いていたきびダンゴが、急にものすごい勢いで吠え始めた。

「どうしたきびダンゴ？」

ユイがいぶかしげにきびダンゴを見る。そして周囲を見渡しても、大谷のようなきびダンゴが反応しそうなものはなかった。

「何に反応しているんだ？まさか暗号か？」

イサコも不審に思い、きびダンゴの近くの地面を調べようとウインドウを出した時だった。きびダンゴが走り始めた。

「あっ！」

ユイもその行動に一瞬あっけをとられてしまった。

「待って！きびダンゴ！」

ユイの制止にも関わらず、きびダンゴは何かを追うようにただ走り去って行く。

「おい、まずいぞ！この先は交差点だ！きびダンゴを止めるんだ！」

「わかってるよ！待ちなさいきびダンゴ！」

イサコとユイは猛然と駆け出す。イサコは直感的にまずいと思った。

いつか大黒市の都市伝説で聞いたことがあった、ミチコさんの飼い犬が突然交差点に走りだして消えてしまった話を思い出す。イサコはそんな都市伝説を信じてはいなかったが、今この金沢では自分の予想もできないことが起きている。何が起こっても不思議ではない。

「きびダンゴ！」

これまで出したことがないくらいの大声でユイがきびダンゴを止める。するときびダンゴは、横断歩道の手前で立ち止まった。歩行者用の信号はまだ赤だ。

「と、止まった」

ユイとイサコが胸を撫で下ろす。ところが、そのままでいてくれと2人が念じた次の瞬間、きびダンゴは辺りを見回したあと車道に出ようとした。

「だ、だめ！！止まって！！」

悲鳴にも似たユイの声がこだまする。イサコはこのままでは取り返しがつかなくなると思い、無我夢中で暗号を取り出していた。イリーガルを捕まえる時にも使用した、物理結界の暗号だ。とにかくどんな乱暴な形であれ、きびダンゴを止めないといけないと思い、イサコは大きく振りかぶって暗号を投げつけた。

「きび、ダンゴ？」

ユイが目を丸くする。イサコの投げた暗号は見事にきびダンゴに命中した。きびダンゴは車道に2、3歩飛び出したところで止まった。地面にはり付いた暗号式を見て、ユイも何が起こったのかを理解する。

「イサコ……」

「悪い。きびダンゴを止めるにはああするしかなかった。大丈夫だ。あの暗号で傷つくことはない……なっ！」

イサコは止まっていた時間が再び動き出すような錯覚をした。止まったきびダンゴは、車に触れるような位置ではなかったが、車道の脇を通るバイクが近づいてくるのが見えたのだ。これにユイも気付いたのか、もう1度悲鳴のような声を上げて駆け出す。

「危ない！きびダンゴ！」
「待つんだ！ユイ！」
歩道に飛び出そうとしたユイの腕をイサコが掴む。その目の前を若者が乗った2台の自転車が走り抜けて行った。イサコが止めなかったら、ユイが自転車にひかれていた。
「ああっ！きびダンゴ！」
物理結界の暗号が足枷となって、きびダンゴはその場から身動きできない。バイクのライダーはおそらくきびダンゴのことが見えていない。そのまま突っ込んで来る。ユイも、イサコも、その瞬間は直視ができなかった。
「ひゃあん！！」
痛々しいような老犬の叫びが上がる。きびダンゴはあのバイクに・・・・そんな悪いイメージがイサコの脳裏をかすめる。ユイはそんなイサコよりも先に動きだしていた。そのタイミングでちょうど歩行者用の信号が青に変わる。
「きびダンゴ！」
泣きそうな声でユイが駆け寄る。きびダンゴは、まだその場所にいた。最悪の事態は避けられた。イサコもとりあえずホッとして駆け寄った。
「大丈夫か？」
きびダンゴはかなり痛がっていた。大量の汗が皺と皺の山を伝い落ちていく。しかし目立った外傷はない、そう思った時だった。
「イサコ……」
サオリが涙声できびダンゴの右の前足を示す。そこだけは胴体よりも車道側にほんの少し踏み出していたらしい。
「これは……」
きびダンゴのその右前足は、激しく文字化けを起こしていた。まだ文字化けだけなら良い。イサコはそう思った。下手したらその足の画像だけがバイクの画像と入り交じって、きびダンゴはその右前足を失うところだった。

「大丈夫。文字化けを起こしているだけだ。しばらくすれば治る」
「ほんとうに？」
「ああ。とりあえず、この暗号を解除する」
イサコは急いで暗号を解除した。ロックがはずれたきびダンゴを、ユイが抱き上げる。そしてその顔に頬をすり寄せた。
「よかった。本当によかった。きびダンゴ。痛かったね」
ユイの涙がきびダンゴにも伝っていく。ぐったりとしたきびダンゴだったが、その涙の雫をぺろっとなめたようだった。
「はあ。とにかく無事でよかった」
イサコも疲れたようにため息をつく。
「うん。ありがとう、イサコ。本当にありがとう」
「礼はいい。私もきびダンゴを失ってうつむくユイの顔なんて見たくないからな」
そう言ってイサコは周囲を見回した。そしてその場所がどこか異様な雰囲気に包まれていることにようやく気がついた。遠吠えのようなうなり声があちこちでする。おそらく電脳犬だ。なのに近くに犬は見当たらない。どこからともなく、まるで街全体から聞こえてくるようなそんな気がした。
「な、なんなんだ一体？」
異変はまだあった。信号の変わりがやけに早い。歩行者用の信号は、イサコがきびダンゴの暗号を解除していた時には点滅し始めていた。ところが、見てみるともうその信号は青に変わっている。車が轟々と通るこの交差点ではあり得ない周期で変わったことになる。
日が沈み、もう周囲には外灯以外の明かりはない。この異変は一体なんなのだろうか、イサコは考え込んだ。きびダンゴを抱きかかえるユイも、この雰囲気に息をのんでいた。何かが起きている。サオリのことも頭に浮かんだ。
その時ひときわ大きい鳴き声が聞こえたと思い、イサコは顔を上げた。交差点の向こう側に犬がいた。ホワイトシェパードだ。おそらく電脳犬だろうが、首輪をつけている。イサコはまさかと思った。

歩行者用の信号は赤に変わっている。しかしそのホワイトシェパードは何かを見つけたように駆け出した。

「ああっ！！」

ユイもその光景を見ていたのか、思わず顔を背ける。イサコもこの距離では暗号を使えない。その時向こう側の車線を巨大なトラックが横切っていった。ホワイトシェパードの叫び声もその轟音にかき消された。そして、その姿までも。何事もなかったかのように、何台もの車がまた横切って行く。イサコも、ユイも、茫然とその場に立ち尽くすしかなかった。

きびダンゴの文字化けは、まだ治まりそうになかった。

＃１６　雨が続けば　ｐａｒｔ１０（後書き）

第１６話はここまでです。
次回第１７話もお楽しみに。

#17　イサコとサオリ　part1

「先日のメガマスの公表で、メガネの不具合等の真実は白日のもとに晒された。しかし、それで都市伝説がすぐに消滅するということはなかった」

サオリはある人物へと電話をかけていた。

「もしもし？私です。沙織です。少し聞きたいことがあるのですが」

「ほう、いいですよ。私の答えられる範囲でならお答えしましょう」

サオリはそこで一呼吸おいて訊ねた。

「夕日寺中学校に天沢勇子という生徒がいるのは御存知ですか？」

「え？聞きたいというのは彼女についてですか？」

「知っているんですね？」

「一応。彼女はこの筋では有名人ですから。彼女がどうかしましたか？」

電話の相手は、どこか笑みを含んだように訊ねてきた。その口調に、サオリもやはり何かがあると思った。

「昨日私に話しかけてきたのですが、私の家族は電脳空間を彷徨っているのかと彼女は訊ねてきました」

「なるほどなるほど。彼女も気付いたんですか。アナタと彼女が同じ中学校の生徒ととなったのは、何か運命的なものを感じますね」

「どういう意味ですか？彼女は一体何者なんですか？」

サオリは自然と早口になっていた。

「そういうことならいいでしょう。彼女についてお話します。もしかすると彼女は、鍵を握る人物かもしれませんから」

「鍵を握る……？」

そこから電話の相手は、サオリに懇切丁寧にイサコについて説明していった。

メガマスがメガネの不具合についての公表を行った翌日、火曜日。空は久しぶりの抜けるような青空だった。しかし、家を出たイサコの心の内は決して空模様と同期していなかった。昨日の夕方に起こった出来事。それは、イサコの中に影を落としていた。

まずはサオリのことだ。イサコは昨日、初めてサオリと面と向き合って話し合うことができた。その話もサオリが暗号を使っているのを認めるところまでは順調だった。しかし問題はそこからだ。イサコがサオリの家族の話をすると、サオリの態度は急変したのだ。もしかして交通事故に遭ったサオリの家族の意識は電脳空間を彷徨っているのか、ということを訊ねた瞬間、ついに彼女は席を立った。イサコから見ればそれは図星以外の何でもなかったが、同時にイサコの中の戸惑いがよりはっきりとしたものになったのも事実だ。サオリの境遇は、自分と酷似している。自分は彼女を止めるべきか、否か。

そんなやりきれない思いを抱える中で第2の事件が起こった。ユイのペットであるきびダンゴが暴走し、あやうく車に轢かれそうになったのだ。幸い、イサコの暗号のおかげできびダンゴは右前足の文字化け程度で済んだ。しかしどう考えても不自然なのは、現場周囲にいた電脳ペットも一様に奇怪な行動をとっていた点だ。遠吠えをあげたりうなり続けるペットもいた。最もショッキングだったのは、きびダンゴと同じように交差点に突っ込んできた電脳ペットがいたことだ。そしてそのペットは、不幸にも助からなかった。それを目の前で見ていたイサコとユイは、心を引き裂かれそうな思いだった。きびダンゴも、イサコが暗号を投げるタイミングがあと少しだけ遅れていればあの犬と同じ運命を辿っていた。軽い文字化けで済んだことは、良かったと思わなければならない。しかし、消えて行ったあの犬も誰かのペットだったのだ。飼い主はおそらく現場にはいなかった。その飼い主は今もその犬の帰りを祈っているかもしれない。そう思い、ユイは帰り道にはずっと泣きじゃくっていた。

一方のイサコのペットのモジョは、その騒ぎの中でも正常そのも

のだった。もともと正規のペットではないからだと、それについてイサコはある程度納得していた。しかし昨日の出来事は明らかに異常だった。電脳ペットの集団奇怪行動。死んだペットが帰って来たことも含め、これらの異常が黒井地区での空間事故、そしてサオリと無関係だとは思えなかった。サオリに関する謎が、もう1つ増えてしまった。

イサコが晴れない表情のままマンションの下に降りると、そこにはいつも通りユイが待っていた。いつもと違うのは、ユイもうつむき加減であることだった。いつもの底抜けの明るさがないのは仕方ないとイサコは思った。昨日、あんな事故を目の当たりにしたショックをまだ引きずっている。こういう時は、できるだけ自分が励ましてやらないといけないとイサコは感じた。

「おはよう、ユイ。きびダンゴの様子はどうだ?」

イサコのあいさつにも軽くうなずいただけで、ユイはか細い声で返した。

「それが、まだ文字化けが治らないの。その足もすごく痛そうにしていたし、昨日は夜もきびダンゴがうめいていたから私も眠れなかった」

「まだ治らないのか。そういうことなら、私を呼んでくれれば診たのに」

「ううん。イサコのおかげできびダンゴの命は助かった。でも、本当は私がきびダンゴを守らなくちゃいけない。イサコばかり頼れない。だから、私も色々とサイトを調べてみて治療法を探したの」

確かにユイは疲れきった顔をしていた。ユイはきびダンゴのうめき声が心配で眠れなかったのではなくて、きびダンゴ文字化けを治すための方法をネットで一晩中探していたのだ。それでも、まだ文字化けは治っていない。

「文字化けなんてほっといても普通は治るものだ。それが一晩しても治っていない……どうやら、ペット会社も昨日の騒ぎで機能が止

まっているのかもしれない」
文字化けのようなわかりやすいバグは、ペット会社が自動で修復する。それがなされていないということは、今ペット会社はペットを管理できていない状態だということだった。
「そんな、どうすればいいの？」
「……待つしかないな。調べればニュースで出ているかもしれない。まあ、ペット会社の方もすぐに機能回復するだろう。学校から帰る時には治っているはずだ。治っていなかったら、私がなんとかしてやる」
「うん、ありがとう」
ユイの顔も少しだけ生気が戻ったようだった。
そうして2人は学校に着いた。
教室に入るなり、そこがいつもの雰囲気でないことはイサコもユイもすぐに感じ取った。まるで自分たちと同じで、どこか表情のさえない生徒ばかりだ。
「あっ、イサコ」
2人に気付いたシュウイチがすぐに歩み寄って来た。シュウイチの表情も例外ではなく、心なしか不安をまとっているように見えた。
「どうしたんだ？今日は教室の空気がいつもと違うようだが」
「うん、そうなんだ。そのことで相談が。あれ？ユイ、大丈夫？だいぶ顔色が良くないけど」
シュウイチも疲れきったユイの顔を見て心配そうに訊ねた。
「ああ。ユイも昨日色々あったから」
「もしかして、電脳ペット絡みで？」
その言葉でイサコは確信した。このシュウイチも、そして他のクラスメイトの表情がさえないのは、みんな昨日電脳ペットのことで何がトラブルがあったからだと。
「そうなんだ。昨日私達は黒井北公園でサオリに会った。その時のことは後で話すが、その帰りにユイの電脳犬が赤信号の黒井交差点に突っ込んでいくっていう異常な行動を起こしたんだ。なんとか助

かったが、右前足に文字化けを起こしてしまった。それが今朝になっても治っていなかったらしい」
「そ、そんなことが。でも、ペットが無事で良かったねユイ」
シュウイチはかなり驚きの表情を見せたが、なんとか無事だとわかってホッとした。
「うん。イサコが暗号を使ってきびダンゴを止めてくれた。イサコがいなかったらきびダンゴは助からなかったかもしれない」
「きびダンゴ？」
「ユイの電脳犬の名前だ。危ないところだった。しかしこの教室の様子を見ると、少なからず私達と同じようなことを目の当たりにした生徒がいるようだな？」
「ああ。この教室の中は、今朝からその話で持ち切りだよ。何人かから話を聞いたけど、電脳ペットが何もない方向に向かって吠え続けたり、あるいはいきなり家を飛び出したり、他の電脳ペットを襲うなんていう話もあった。かくいう僕の家でも、妹が大事にしていたハムスターのペットがいなくなったんだ。まあハムスターなら行動範囲も狭いし、本気で探せばすぐに見つかると思う。金沢黒客は行方不明のペットを見つけ出すプロだしね」
話を聞いてイサコはじっと考え込んだ。その電脳ペットの奇怪行動は、かなり広範囲に及んでいたようだ。
「どういうことなんだ？前は死んだペットが戻って来たなんて話もあったな。今回のことも黒井地区の空間事故と関係があるのだろうか」
「さあ、わからない。あっ、アサミ。昨日さ、セナに何か異常はなかった？」
シュウイチが今登校して来たアサミに訊ねてみた。アサミのペットのセナには、死んだはずなのに戻って来たという経緯がある。
「えっ？別に何もなかったけど、いつも通り庭でのんびりしていたわ。それよりユイ！どうしたの？顔死んでるよ！」
どうやらこの異変には気付いていないアサミに、イサコとシュウイ

チはこれまでの話を簡単に説明した。
「……そうなの。だから今日は教室がこんなに暗い感じなのね」
「ああ。どうも、私達の知らないところで何かが起こっているらしい。ここは、アイツに相談した方が良さそうだな」
「アイツって？」
シュウイチがイサコに訊ねる。
「昨日話した雑誌記者さ。実は昨日の夕方も私とユイはそいつに会ったんだ。何かと胡散臭いヤツだが、あの情報量は信頼できる」
「なるほど。連絡も取り合えるんだね？」
「一応。番号はもらっておいた」
初めて大谷と会った一昨日、いつでも相談してくれと大谷はイサコに電話番号を渡していた。
「じゃあ早速会えるように手配してくれないかな？僕も1度会っておきたいし、レインやカズマも会ってみる必要があると言っていたから」
「わかった。後で聞いてみる」
イサコはその後、大谷と連絡を取り合った。そして今日の放課後に会う約束をとりつけ、金沢黒客とともに黒井北公園で落ち合うことになった。

#17　イサコとサオリ　part2

「チーフ！一体何が起こっているんですか！！？」
この日出勤した玉子はまわりの職員が忙しくしている中、早々に空間設計室チーフの友和のもとに行ってすごい勢いで訊ねた。
「こっちが聞きたいくらいだよ。昨日ウチでも娘のペットのハムスターがいなくなったとかで大騒ぎだった」
友和は朝からうるさいなというように顔をしかめながら、少しうんざりするように返した。
「電脳ペットの集団奇怪行動。私がここに来る前も、電脳ペット絡みで不審なことがあったんですよね？」
「ああ。死んだはずのペットが戻って来たなんていう話があちこちで聞かれた」
「例の黒井地区での空間事故と関係はあると思いますか？」
「あると考えざるを得ない。黒井地区で空間の事故が起きる以前は、こんなに電脳ペット絡みでトラブルなんてなかったからな」
この街はその日を境にすべてが変わってしまったかのようだった。
空間の安定という意味では大黒市よりもはるかに平和だったこの街に、今何が起こっているのか。それを調べるのが空間設計室の仕事だ。しかしあまりに起こることが突拍子もないこと過ぎて、どう手を打つべきかわからないというのが現状だ。
「死んだはずのペットが戻って来たという報告を受けて、何かそのことについて調査はしたんですか？」
「調査と言ってもな。冷静に考えてくれよ。電脳ペットの飼い主は大概が子ども達だ。１度死んだペットが蘇って帰ってきたとして、それをいちいちペット会社に報告すると思うか？」
友和に訊ねられて玉子は少し落ち着いて考えてみた。
「……ペット会社に登録されていないペットは違法、イリーガルと同じ扱いになる。１度死んでメモリアルまで届いていたとしたら、

そのペットは登録からはずれることは子ども達も知っている」
「そうだ。ペット会社に知らせればそのペットは消されるかもしれない。小さな子どもでもその辺の勘は働くらしい。報告なんかするはずがないだろう」
「じゃあなぜ、チーフはその事実を知ったのですか？」
子ども達からの自己申告がないとすれば、友和がそのことを知っているのもおかしいと玉子は思った。
「ここの知り合いの社員から聞いた。子どもを持っている社員からな。彼らは子どもが飼っている電脳ペットについてもちゃんと知っているから異変があれば気付く」
「なるほど。そのペットを調べようとはしなかったのですか？」
「ペット会社にデータが残っているかどうかぐらいは調べたよ。でもそれ以上は踏み込んでいない。詳しく調べれば、その社員の子どものペットが消されてしまう可能性もあるからな。さすがにそれはやめてほしいと頼まれた。ペット会社もその事実は知っていたようだが、どのペットが戻って来たペットかを特定することはできなかったらしい。向こうもこの件にはノータッチになっていた。そのことについては、出張してくる小此木への報告書にオレが書いておいたんだよ。そして君もそれを読んだ。だから、ペットの蘇りの件について知っている者は少ない」
玉子はなるほどとうなずく。どおりで未だに空間事故の原因も解明できないわけだと思った。調査すべきところは徹底的にしないといけないと玉子は感じた。
「ペット会社にそのペットのデータは残っていたんですか？」
「いや、死亡扱いだ。なのにそのペットは生きている。まるで本当にイリーガルだな」
「そうか。じゃあまずそのイリーガルから調べる必要があるんじゃないか？」
いきなり玉子以外の声がしたので友和は驚いてそちらを向いた。
「なんだ小此木か。びっくりしたなあもう」

「友和。こんな事態になった以上、そのことはきちんと調べるべきだ。ペットが突然いなくなったっていう報告は、昨日から何件も届いている。生きているペットを失って悲しんでいる子ども達がいるんだぞ。原因究明のためにも、その社員のペットはしっかりと調べないといけない。それでそのペットが消されることになっても」

一郎が鋭い眼差しを向けながら友和に言う。

「おい、いつからそんな冷淡な人間になったんだよ」

「話をそらすな」

「……はあ。わかった。その社員には頼んでおく。で、内部監査で多忙な御身がどういう用件でここに？」

「管理室本部からの指示を持って来た。お前も確認ぐらいしておけ」

一郎がそう言って友和に書類を渡した。

「悪かったな。ウチはお前んとこと違って本部と連絡なんか取り合うことなんて滅多にないから忘れてたんだよ」

そう皮肉を言いつつ友和は受け取った書類に目を通す。

「僕も今日から空間設計室の仕事を手伝うように言われている。本社も昨日の件は憂慮していて、早急に解決してほしいということだった」

「簡単に言ってくれる。でも待て。お前の内部監査の仕事はどうするんだ？ほっぽり出すのか？」

「近々、社長が金沢に来て支社長に例のプロジェクトの説明を再度求めるということになった。その際支社長が極秘裏に行っていると言われているプロジェクトについても追及すると。とにかく情報が遮断され過ぎていて、僕なんかじゃとても真実に行き着けないと本社は判断したんだ」

「社長が来たとしてもたいして変わらないと思うがな」

息をつきながら友和が言う。いくら社長でも義父に向かってそんなに厳しく追及などできないだろうと思っていた。だから金沢支社長が好き放題できる。今回の件もそのしわ寄せだろうと友和は思っていた。

「まあ、とにかく電脳ペット絡みのトラブルと、黒井地区での空間事故は無関係ではないはずだ。空間事故の真相を知るには電脳ペットのトラブルの原因も併せて調べる必要がある。それに、電脳ペットの件ばかりが大きく騒がれてはいるが、昨日夕刻に黒井交差点近で衝突事故が発生している。それについても確認が必要だ」

「衝突事故？」

一郎の言葉に玉子が反応する。その話はまだ聞いていなかったのだ。

「ああ。あの辺は夕方から夜にかけてよく車が渋滞するんだ。そこに、低スピードだが乗用車が1台突っ込んで行ったらしい。けが人はなかったらしいけどな」

友和が玉子にその事故の資料を渡しながら言った。

「ちょっと待ってください。それってまさか」

「そう。事故を起こした車は電脳ナビ搭載車だ。そして、運転手は事故の時も自動運転モードにしていたと証言している」

「今度こそ言い訳は出来ないな。初めて電脳ナビの過失が問われる事故になるだろう。それが折しも、電脳ナビシステムの無期限停止措置が発表された日に起こるというのは、運がよかったのか悪かったのか」

一郎と友和の話を聞いて、玉子は何気にそちらの方が問題としては大きいのではないかと思えた。

「本社は電脳ペットよりも、衝突事故の方に過敏に反応した。本社から事故原因の調査に人が何人か送られてくるらしい」

「そうか。と言っても、うちは電脳ナビは管轄外だ。基本的にあれは交通局の出先機関が管理しているからな。もちろん、そこにもメガマスから職員が出向しているわけだが」

友和が玉子に向かって説明する。ナビシステムの調査は自分たちが介入できないということだった。

「その調査はそっちに任せることにしよう。もちろん、彼らには情報の交換も求める。昨日の事故は、黒井地区全体の電脳インフラトラブルと言えるからな。僕たちは電脳ペットの奇怪行動を中心に調

べよう」
「でもなあ。電脳ペットもオレたちの管轄外の代物だからな。そいつを調べるにはペット会社の協力が必要だ」
空間設計室も電脳ペットは基本的に管理の対象にしていない。対象にしているのはそのペットの中に存在しているバグだ。だから電脳ペットについては、一郎も友和も玉子も詳しい知識はないのだ。
「その通りだ。だからこれから僕は、ペット会社に出向こうと思っている」
「わざわざご苦労なことだな。オレは職員達からの報告を受けないといけないから、ここにいなければならないが」
友和は一郎のことを本当に勤勉なヤツだと思いながら言う。わざわざ出向かなくても、ペット会社の報告を待っていればいいものをと思った。
「ああ。それはわかっている。連絡役は頼む」
「じゃあ、私は室長にお供します」
玉子もペット会社の方に言って直接そのトラブルについて調べようと思った。
「おお、それがいい。じゃあ、その調査がうまくいくよう祈ってるよ」
友和はそう言って2人を見送った。一郎と玉子は、ペット会社に行くために一郎の車が停めてある社の駐車場を目指した。
「しかし、本当に恐れていたようなことが起こり始めたな」
エレベーターに乗りこんだところで、一郎は息をつくようにつぶやいた。
「ええ。電脳ペットの件もそうですが、やはり電脳ナビの誤作動はまずいですよね。システム停止が決まったと言っても、いつからそれが始まるかはまだ具体的には決まっていないですし。その間にもっと大きな事故も起きかねません」
「まさか、メガマス幹部はこうなることを予想していた?」
ふと一郎が考え込む。冷静に考えて、電脳ナビシステムの停止は適

切な処置だったのかは一郎でも引っかかっていた。
「予想していたのなら、事故が起きる前に手を打つことができたんじゃないですか？それは考え過ぎだと思いますが」
「それならこうも考えられる。金沢支社がそれを強く本社に要求した」
「昨日の話ですね。金沢支社は本社にも内密にして、新しい空間インフラの開発をしようとしている。室長はその実態を調べにここへ来たんですよね」
玉子が確認するように訊ねた。黒井地区の事故は、その新しい空間インフラが原因なのではないかという仮定のもとで現在は調査している。しかし、玉子や友和でも明らかな証拠は掴みそこねている。
「そうだ。もしかするとその空間インフラが、電脳ナビや電脳ペットに干渉したということも考えられる。そして金沢支社は、それが起こる可能性を恐れて電脳ナビシステムの停止を主張した。もちろん、ナビのさらなる安全化が必要だという口実をつけて。本社もその考えには同意し、システムの停止が決まった……あくまで想像だけど、そんなストーリーがあったんじゃないかと思う。後で本社に確認してみる」
「もしそうだとすると、今回のことは空間インフラを開発しているという金沢支社にしても痛手ということになりませんか？彼らにしてみれば、最も恐れていたことが起こったということにもなります」
もし金沢支社が新しい空間インフラを内密に開発しているとすれば、ちょっとした事故も許されないということになる。逆に玉子や一郎からすれば、この事故から真実をたぐり寄せることもできるというところだった。
「それはその通りだろう。黒井地区の空間事故の時もそうだったんじゃないかな。要するに金沢支社でも制御できない何かが起こっているということになる。金沢支社がそれらをもみ消そうと動けば、逆にこっちのツケ入る隙にもなる」
「そうですね。何にせよ、私たちが事故の状況を把握しないと始ま

りませんよね」

玉子の言葉に一郎もうなずく。複雑に絡む事故と、錯綜する情報。それらを1つ1つ整理していかなければ、到底真実には辿りつけそうにない。その中の1つの懸案事項である電脳ペットの奇怪行動について調べるために、2人は車に乗り込んで金沢のペット会社に向かった。

#17　イサコとサオリ　part3

イサコ達はその日の放課後、大谷と取り付けた約束通り、彼に会うために黒井北公園に来ていた。今日は金沢黒客のメンバーも同行している。待ち合わせ場所をここに設定しているのも、サオリが動き出した場合に備えて迅速に動けるようにするためだ。これまでの事故は、学校で黒穴が開いた一件以外は黒井地区周辺で起きている。イサコは常にここにいないと不安を感じるようにまでなっていた。

「おう。遅れてすまなんだな」

先に到着して待っていたイサコ達の元に、今日の大谷は自転車をこぎながらやってきた。彼がいつも乗り回しているシルバーのスポーツセダンは見当たらない。

「どうしたんだ？それ、観光用の格安のレンタサイクルじゃないのか？」

イサコもそれを不審に思って見た。オールグリーンの田舎臭いデザインのその自転車と、おしゃれが大好きそうな大谷との組み合わせはなんとも滑稽だった。

「ああ。聞いてくれるか？昨日帰り道、黒井交差点で信号待ちしている時にオレのＨＩＤＥＯ２号がカマ掘られてな。おかげでテールランプ破損で修理に出した。当分オレの足はコイツに頼るしかない」

「それは、不運だったな」

イサコはとりあえず大谷をなぐさめておいた。その事を引きずっているのか、今日の大谷は明らかにテンションが低い。

「まあ、この事故にも色々とウラがありそうなんだがな。ところでこの野郎どもはなんだ？」

大谷が金沢黒客を見ながらイサコに訊ねた。

「イサコと一緒に調査をしている者だ。イサコからも聞いていたが、なるほど。見るからに胡散臭いオッサンだな」

大谷の問いにクールな笑みを浮かべながらレインが返す。

「イサコ？ああ、君のあだ名か。じゃあオレもそう呼ばせてもらうか。それにしてもオッサン呼ばわりとは生意気なガキだな。イサコのボディガード気取りか？」
「ああ、そうだ。イサコに指１本触れてみろ。オレたちがお前を締め上げてやるからな」
レインがあまりに真剣な表情で言うので、イサコはツッコむことすらできずに顔を真っ赤にしていた。
「あのなあ。オレは年下興味ないの。大体お前らみたいなガキに締め上げられるほどヤワなボディじゃねえし」
「だってよ、カズマ」
「面白いオッサンだな」
カズマがイスから立ち上がると、３０過ぎの大谷と同じほどの背丈になった。
「お、おいおい。誰が高校生のお兄さん連れて来いっつったよ。卑怯だぞ」
「そいつは高校生じゃない。オレたちと同い年だ」
「同い年？じゃあついこの前まで小学生だったてのか？んなアホな。体つきも身長も、いい大人と変わらねえじゃねえか」
「ああ。カズマは柔道でも全国レベルだからな。オッサンの細腕でかなう相手じゃない」
「ええっ！？」
大谷は正直カズマにびびった。
「おい、そんなことはいいから早く席に着け。それよりさっきの話の続きだ。アンタの車がカマを掘られた事故に、なんのウラがあるんだ？」
イサコが息をついて仕切り直し、各々ベンチに着席する。金沢黒客は切り替えが早くすぐに真剣モードに入った。
「なんだ聞いてないのか？オレの巻き込まれた追突事故は、電脳ナビで自動運転中の車の誤作動が原因になっているらしい」
「追突事故？誰か聞いたか？その話？」

「そういえば父さんが言ってたかも。昨日黒井交差点で事故があったって。僕は妹のハムスター探しでそれどころじゃなかったけど」
イサコの言葉に、シュウイチが思い出しながら答えた。
「そう言えばシュウイチの父はメガマス社員だったな。それで知っていたのか」
「うん。詳しくは聞かなかったけど」
「おい。君のお父さんはどこの部署だ？」
大谷がその会話に反応する。
「え、と。確か空間設計室だったかな？」
「空間設計室か。そりゃいいや。後で君のお父さんを紹介してくれよ」
「ええっ」
シュウイチが嫌そうな顔をする。正直、こんな得体の知れない人と関わっていること自体親には知られたくなかった。
「アンタの仕事のことは後にしろ。それよりも、その追突事故についてもっと聞かせてくれ」
「はっ。オレはお前らのパシリか？なんでそんな一方的に情報提供しなきゃいけないんだよ」
随分と自分の扱いがひどいことに、大谷がへそを曲げる。
「カズマ。やっていいぞ」
その大谷を見てレインが指示を出す。すると隣にいたカズマが大谷の腕をつかんで背中にまわした。
「痛いたい！わかった！ギブギブ！言うよ！言うから離してくれ！」
大谷が泣きそうな顔をして訴える。イサコはこんな手荒なマネをしていいものかと思ったが、レインもこうして大谷のことを測っているような節があるので何も言わなかった。
「さあ、その追突事故について話してくれ」
「まったくもう・・・・・・昨日君が帰った後、だから夕暮れだな。黒井交差点で信号待ちをしていたオレの車に乗用車が突っ込んでき

た。その車スピードは出ていなかったけどな。その運転手は自動運転だったと主張しているし、オレもどさくさに紛れてその車を見てみたが、確かにその証言通りだった」

大谷が細かく説明を始め、イサコと金沢黒客は今度こそマジメに聞き始めた。

「なんで電脳ナビが誤作動を？念のために訊くが、その時交差点には通路も黒穴も出現していなかったんだな？」

「残念ながらその線はない。原因は不明だ。しかも同時刻に電脳ペットが一斉に狂いだすなんてことも起こった。君達が今日オレを呼び出したのも、それを訊くためだろう？」

「そうだ。今日はクラスでもその話で持ち切りだったし、実際ペットが行方不明になったって生徒もいた。このシュウイチの家でもハムスターのペットがいなくなった。アンタなら、何か知ってるんじゃないかと思ってな」

イサコの言葉を聞いて、大谷は何かを考えるように足を組み直した。

「それを訊いてどうするんだ？君達の目的は電脳ペットの捜索か？」

「アンタも知っているだろう。私達は黒井地区で起こった空間事故と、サオリについて調べている。アンタとは同じはずだ」

「だったら昨日の電脳ペットの奇怪行動や、追突事故のことを知る必要はないだろう。君たちは、あの少女を手がかりにそれを調べるんじゃなかったのか？」

「それもサオリと関係あるかもしれない。だからこうしてアンタの意見も聞こうと思ってだな……」

イサコが言い切る前に大谷はかぶりを振った。

「その可能性はないな」

「なんでそう言い切れる？」

鋭いまなざしですぐに返したのはレインだった。

「この数日間、この地区に暗号はおろかあの少女の姿も見ることはなかった。あ、いや。少女は昨日ここにいたな。しかし暗号は発見されなかった。昨日の事故をあの少女と結びつけるのはムリがある」

「だったら別の場所にサオリは暗号を設置していたんじゃないのか？」

レインがさらに訊ねる。

「そうだとしたら黒井交差点で電脳ナビの誤作動が起こった説明がつかない。電脳ペットの場合は広範に及んでいたらしいから何とも言えないが、少なくとも電脳ナビの誤動作にあの少女が関わっているとは思えないな」

「もとより、サオリの家族は交通事故に遭っている。同じような事が起こるかもしれないような危険なことには手を出さないか……」

イサコの言葉に、金沢黒客のメンバーは納得するようにうなずいた。

「それはあの少女自身が、自分が起こしていることをちゃんと理解していればの話だけどな。なんにせよ、昨日の騒ぎとは無関係というのがオレの推理だ」

「わかった。それでアンタは、その電脳ペットや電脳ナビの誤作動について調べをいれたはずだな。何か有力な情報はあったのか？」

イサコは大谷にさらなる情報を求める。その図太さに大谷も大きくため息をついた。

「おいおい。どこまで教えたら気が済むんだよ。君たちはあの少女のことを追っている。その少女と昨日の騒ぎは関係ない。だったら昨日の話なんて聞かないでいいだろう」

「アンタが私に言ったんだぞ。黒井地区の空間事故は、メガマス金沢支社が進めていると言われている新しい空間インフラとも密接な関わりがあると。昨日の騒ぎも、その空間インフラと無関係ではないはずだ。それについて何かわかったことは？」

「……君と初めて会った時にしゃべり過ぎたかもな。言っても仕方ないか。電脳ナビについては、詳しい誤作動の原因はわからなかった。情報がプロテクトされているからな」

「じゃあ、電脳ペットについては何かわかったんだな？」

大谷の口ぶりに素早くレインが反応した。

「知り合いにペット会社の人間がいるからな。昨日の電脳ペットの

奇怪行動は、ペット会社の管理コンピューターに原因はなかった。
原因は、サーバーの方にあったらしい」
「サーバーに？」
「電脳ペットの生体情報を管理しているのは管理コンピューターだ。そのコンピューターには異常はなし。となると残る可能性は、サーバーの電脳ペットの情報を管理する部分に異常があったということ。それしか考えられない」
「結局それはどういうことなんですか？」
シュウイチが訊ねる。いなくなった妹のハムスターは帰ってくるのかどうかがシュウイチは気になっていた。
「こんな事故、他の都市で起こったという事例はない。そうなるとさっきの話だ。金沢支社が開発している空間インフラが金沢市の空間のサーバーに干渉し、それが原因でサーバーは誤作動を起こしている。そう仮定すると合点がいく。電脳ナビの誤作動も説明がつく。なぜメガマスが電脳ナビシステムを廃止にしたのか、それも今なら何となくわかる」
「結局、謎はそこに集約されるということか。となると、サオリもその空間インフラについて何か知っている可能性がある」
「聞いてみる？イサコ？」
「当然だ」
シュウイチにイサコは強くうなずいて見せた。サオリは大谷以上に一連の事故に関係していると思われる、金沢支社の新しい空間インフラについて知っているかもしれない。
「話してくれればこっちとしても苦労はないんだがな。昨日の様子を見る限り、それは難しいんじゃないか？」
大谷は昨日イサコがサオリと話し合うのを見ていた。サオリがイサコの言葉に反応して席を立ったのも知っている。
「これもアンタが私にやれと言ってきたんだろう。アンタの情報の見返りに、私もサオリから何か聞き出してみせるさ」
「頼もしいな。まあ、期待せずに待ってるよ」

こうしてイサコ達は大谷との話を終えて別れた。イサコは明日、改めてサオリに一連の事故について知っていることがあるか訊ねることを決意する。サオリが正直に何かを話してくれることをイサコは祈るばかりだった。

#17　イサコとサオリ　part4

翌日水曜日の放課後、イサコ達は急いでサオリのいる3組に向かった。しかしその時にはすでに3組はホームルームが終わっており、サオリはすでにいなかった。そこでまた走って下足まで行くと、靴を履き替えてまさに今帰るところだったサオリを見つけた。

「いいか。私とユイだけで行ってくるから、お前達は見えないところに隠れてるんだぞ」

「わかったよ。早く行けって」

レインがイサコ達を促し、金沢黒客のメンバーとアサミは近く下駄箱の影に隠れた。

「待ってくれサオリ」

それを確認したイサコがサオリに声をかける。振り向いたサオリは少し驚いた表情をしていた。

「あ、天沢さん」

「ああ。この前は、すまなかったな。私もいきなり失礼なことを言った。あれでアンタの気分を害したというなら謝る」

イサコは一昨日サオリに会った時のことをまず謝った。

「え、あ、いや。私こそいきなり席を立ってすみませんでした。天沢さんの言葉にちょっと驚いたもので」

ユイはそのサオリの言葉に、改めて不思議な子だと思った。サオリが冷静さを失ったのはあれで2度目だが、いずれも次に会った時にはそのことを忘れているかのように穏やかになっている。前はもうイサコと話すことはできないとまで言ったのに、今日はこうして話を聞こうとしてくれている。何かあったのだろうかとユイは思った。

「そうなのか。今日も少しばかりアンタに聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「……まあ、私の答えられることなら答えますが」

そこで人の出入りの多い下足から、話を聞かれないように3人は中

庭まで足を運んだ。レイン達も気付かれないようにその動きについて行く。
「ここならいいだろう。本当はアンタの家族のことを聞きたいのはヤマヤマなんだが、それは置いておこう。聞きたいのは、一昨日に起こった電脳ペットの異常行動や電脳ナビシステムの誤作動についてだ」
「教室でも話題になってましたね」
「ああ。この事について知っていることはないか？何でもいいんだ」
イサコはすがるようにサオリの方を見る。しかしサオリはうつむいたままイサコと視線を合わせようとしない。
「私は何も知りません」
「本当か？一昨日の事故では、このユイのペットもけがをしたんだ。同じことは2度と起きてほしくない。だから、ささいなことでもいいから知っていることを何か話してくれないか？」
「ユイさんのペットって、私達が初めて会った時に連れていた？」
サオリはユイの方を見て確認した、ユイもそれにうなずく。
「うん。きびダンゴっていうの。交差点に飛び出して、右の前足の先をバイクにはねられたんだけどね。その文字化けが治らなかったんだけど、1日経ったら良くなってた」
「そう、だったんですか……」
サオリはそれを聞いて考え込むような表情になった。
「なあ、サオリ。アンタの暗号は見るからに新しい。それに聞いた話によるとメガマスはこの金沢で新しい空間インフラを実験しているという。この2つがどうしても無関係だと思えないんだ。アンタは、一体誰からあの暗号を？」
イサコは質問の仕方を変えた。暗号のことから、サオリの秘密を聞き出すつもりだった。
「天沢さんは、まだあの暗号が私のものだと思っているんですね」
「当たり前だ。アンタ以外に考えられない。なあ、アンタの暗号と一連の事故。どういう関係があるんだ？」

レインはその言葉を聞いていて、訊ね方が下手だなと思った。サオリが何も答えてくれないことにイサコはどうも焦っている。このままでは、また何も聞き出せずに終わるんじゃないかとレインは思った。

「関係なんか、ありません。それより天沢さん」

「な、なんだ?」

今日初めてサオリが凛としてイサコの方を見据えたので、イサコは気圧されたようになってしまった。

「もう、この事に関わらないでください。天沢さんは、この学校の中で気を失ったそうですね。今度はメガネを失うことになるかもしれません。アナタのお友達もそうです」

一昨日公園で会ったときよりも強い拒絶だとイサコは思った。あの時は、サオリも冷静さを欠いていたが、今日は落ち着いた口調で、そしてこの目をはっきりと捉えながらサオリは言い放った。

「いや、そうはいかない。アンタが危険なことをしようとしているのはわかっている」

「それは、かつての天沢さん同じことでしょうか?」

「そうだ。そのことも、アンタには言っておかなければならないと思った」

「同じだったとしたら、アナタは、かつてのアナタを止める事はできるんですか?私の気持ちは、アナタならよくわかっているはず」

イサコにとっては、これが一番恐れていた場面だったかもしれない。まだイサコの中でもはっきりと答えは見つかっていないのだ。果たして自分のしようとしていることが正解なのかもわからなかった。

「わかる。わかるさ。家族を失った悲しみも、そして過ぎ去った日々を取り戻したいと思う気持ちも。でも、私の時は、私のこの身勝手な感情のせいで、人が1人亡くなったんだ!」

イサコは無意識に声を張り上げていた。自分の中で正解を導きだすよりも、先に口の方が動いていた。同じ過ちを繰り返していけない。これはきっと正解ではない。しかし、過ちを繰り返すよりは、と。

「……私の場合、人は亡くなりません」
そう言ってサオリは、イサコと視線を合わすのもツラそうな顔をしながら、イサコの脇を抜けて帰ろうと踏み出す。
「待って！サオリちゃん……イサコの、イサコの話も聞いてあげて」
泣きそうな声を上げてユイはサオリを引き止めようとした。
「……天沢さん。私の気持ちがわかるなら、もう関わらないでください。いえ、アナタには私を止める義務も資格もないんです。思い上がりもほどほどにしてください。今度私を邪魔するようなことがあれば、メガネを破壊されても恨みに思わないでください」
サオリは振り返らずに言い、そのままの足取りで正門を抜けて行った。
「イサコ……」
ユイも今のサオリの言葉はイサコはショックだっただろうなと思った。イサコもうつむいたまま顔を上げることができなかった。
この時イサコの胸の中にこみ上げて来たのは自分の無力さだった。自分の中でこのことにどう向き合うか云々の問題ではない。根本的に、イサコには言葉でサオリを止めることができない。それはサオリの気持ちを理解することだけではかなわない。人はそれぞれ背負っているものがある。人を思うだけではそれは共有し得ない。イサコはいつの間にか人のことを考えているという偽善面をしていたのかもしれないと思った。いや、むしろ自分のことしか考えていなかったのではと思った。人のことを考えているように自分でも思っていたが、それは自分のものさしで人をはかっていたに過ぎなかった。
今ここで、イサコはあの時のヤサコの強さを改めて思い知った気がした。イサコはサオリと同じような言葉を何度となくヤサコに吐き捨てた。しかしヤサコはそれでも自分を見捨てはしなかった。こんなことで心が折れていては、自分はヤサコのような存在にはなれない。イサコの心の中には、あの柔らかい笑顔が浮かんでいた。
「イサコ、大丈夫？」
うつむくイサコの肩に手を置いてシュウイチが心配そうに声をかけ

た。シュウイチはサオリが去った後すぐにイサコの元に駆け寄ったのだ。
「ああ、大丈夫だ」
イサコも気丈に微笑んで返す。
「しかし妙だな。サオリはイサコの過去を何もかも知っているかのような口ぶりだった」
そこでいつの間にか歩み寄ってきていたレインが不思議そうに言った。
「うん。イサコのあの言葉には誰しもが衝撃を受けるはずだよ。なのにサオリは、その言葉を一蹴して去って行った……どんな子なのかはまだよくわからないけど、あんな冷たい言葉を残して去って行くような子じゃないと思うよ」
レインの意見にはシュウイチも同調した。今の場面を目撃した誰もがその違和感を覚えていた。
「つまりどういうことだ？なんでサオリがイサコの過去を知ってる？」
カズマがレインに訊ねた。
「サオリには協力者がいるんだろう。それもイサコの過去にも精通しているような人間だ。暗号をサオリに与えたのもその人物だろうな」
「サオリは今の言葉を言わされたんだね。その人物に」
サオリの抱える事情はわからないが、あの言葉も本心から出たものではないと一同は思った。だとしたら、サオリもまた不幸な運命を背負っているのかもしれない。イサコはそう思えてならなかった。
「イサコ。その協力者に心当たりは？」
「容疑者は多い。私の過去を知っている人物なんて、今となってはどれほどいるのかわからない。お前達の時も、大谷の時も私は戸惑ったんだ」
サオリもただ誰かに利用されているだけなのかもしれない。イサコはどうしてもサオリを助けなければならないと思った。そのために

は、サオリがその人物と接触するところを押さえるしかない。
「そうか。サオリが答えてくれないなら、その協力者から当たった方が良さそうだな。それならサオリを尾けるべきだったな。イサコを突き放したところで、サオリがまたその協力者と連絡を取る可能性もある」
「それならすでにモジョに尾けさせている。あの様子ならまた暗号を置きに行くかもしれないと思ったからな」
「さすがだイサコ。そのサオリの向かっている方向は？」
「どうやら黒井交差点のようだ。そのまま直行するルートだ」
イサコはレーダーを見ながら言った。もしかするとその場所に協力者がいるのかもしれないとイサコは思った。
「じゃあオレとカズマで公園まで先回りしようか？」
レインはイサコの考えていることがわかったようだ。学校からそのまま向かうほど急いでいるということは、何かがあるとしか思えない。
「頼む。こっちはそのままサオリを尾けるルートに入る。後で合流しよう」
イサコとシュウイチ、ユイとアサミはサオリを後ろから追跡することにした。
「よし、じゃあ行って来る」
スポーツマンのレインとカズマは、来ていたブレザーを脱いでカッターシャツ姿になると、そこから黒井北公園に向かって走り始めた。

#17　イサコとサオリ　part5

「なあ、シュウってイサコのこと好きなのかな?」
黒井北公園に向かう途中、レインと並んで走っていたカズマが訊ねた。
「どうだろうな。でも、誰より気にかけているのは確かだろう。さっきの様子を見ていてもそれはわかる」
ずっとイサコについているシュウイチの様子が普通ではないことはレインもとっくにわかっていた。だからいつもレインは2手に分かれる際、いつもシュウイチにイサコを見させていた。
「しかしシュウもどこかクセのある女に惹かれるみたいだな。前もそうだったろ?ほれ、なんていう子だったかな?お前、シュウとその子と同じ塾に通ってたんだろう?」
「マユミのことか?確かにイサコと雰囲気は似てるっちゃ似てるな」
学校は違っていたが、同じ塾に通っていた同じ年の少女をシュウイチが気にかけていたのはレインも知っていた。
「そうそう、マユミだ」
「まあ、何て言うのか。そのマユミもイサコも、少し危なっかしくて放っておけないタイプの人間だ。シュウイチが惹かれるのもなんとなくわかる。アイツも少し歳の離れた妹がいるからな」
「ああ、なるほど。その子、なんか学校でトラブルがあったんじゃなかったけ?それが原因で転校したって」
カズマが誰かから伝聞したようなことをレインに訊ねた。
「転校した理由がそれだったわけじゃないだろうが、確かにトラブルは抱えていたようだな。何でも、ミチコを呼び出したとかいう噂が立ってクラスの中でバッシングされていたらしい。オレもマユミと同じ学校に通う塾の友達から話だけ聞いた。シュウはそんなはずないって言ってたけど」
「シュウは助けられなかったのか、その子を」

「マユミもなかなか心を開いてくれなかったからな。いや、そのトラブルがあるまではマユミとシュウは仲良くしてたんだ。マユミの親友が、シュウのいとこっていう縁もあってな」
「じゃあそのいとこにマユミとの仲を取り持ってもらえば良かったのに」
「そうなんだが、そのシュウのいとこもミチコの一件があってマユミとは疎遠になったらしい。何か2人の間でトラブルがあったのかもな。結局シュウはマユミの心を支えてやることができなかった。そのうちマユミは塾にも来なくなった。それで去年の9月、北海道に転校したらしい」
「北海道か。遠いな」
2人は交差点の信号に引っかかった。走り続けた上しゃべり続けていたのでかなり息は上がっていた。それを整えるように2人は息をゆっくりと吐き出す。
「おそらくシュウの中でもマユミのことは踏ん切りがついていると思う。オレもお前の責任じゃねえから気にするなって声をかけた。だからこそシュウはイサコのことを絶対に守りたいと思ってるだろうな。しかも、イサコはミチコに関係する過去を持っている。シュウもどこか縁のようなものを感じているに違いない」
「そうか。そのイサコが自分の過去と重なり合うサオリを止めようとしているっていうなら、シュウも放ってはおけないわな。で、オレたちもそれに協力していると」
「オレも純粋にイサコの戦いを支えてやりたい気持ちもある。誰よりサオリのことを思っているイサコだ。サオリにあんな言葉をかけさせたまま終わらせたくはないだろう。いつか2人が手を取り合うことを、オレも願っている」
「そうだな。イサコ、アイツはいいヤツだよ。あんなに人のことを思えるヤツはいない」
「ああ。シュウの思いも、今度こそ成就してほしいからな」
交差点の信号が青に変わる。かけがえのない仲間のために、2人は

また走り出した。

一方のイサコ、シュウイチ、ユイ、アサミもレーダーを見ながらサオリの後を追っていた。やはりサオリはそのまま黒井交差点方面に向かっているようだった。

「本当にサオリの協力者に心当たりはないの？」

歩きながらシュウイチがイサコに訊ねる。

「心当たりがあったならすぐに私も動いているさ」

「あの大谷って人はどうなんだろ？イサコの過去には詳しそうだけど」

イサコはシュウイチの言葉にかぶりを振った。

「可能性がないわけじゃないが、私は違うと思う。アイツがサオリも影で動かしているなら、私達にあれだけの情報を残して行くことはない」

「そっか。一体誰なんだろう？その目的もわからないしね」

シュウイチが空を見上げながらつぶやく。イサコはこの時宗助のことを思い出していたが、宗助はすでに大黒で逮捕されている。今回の首謀者は彼であるはずがない。しかしそのやり方があの時の宗助と酷似しているのがどうしても気になった。

「それにしても、なんでサオリがその人に協力してるの？事故に遭った家族を救うため？」

アサミがふとイサコに訊ねた。

「その協力者が、家族を救う方法を教えるとでも言ってサオリに近づいたんだろう。私の時もそうだった……」

「じゃあ、やっぱりサオリの家族の意識は電脳空間を彷徨ってるってこと？」

ここまで境遇が重なっているとそう考えざるを得ないとシュウイチは思った。イサコもそれにうなずいた。

「問題は、どんな空間にその意識が取り残されているのかということだ。かつての私が、お兄ちゃんが取り残されていると信じ込んで

いたコイルドメインという空間はもう存在しない。そうなると今まで存在しなかった新しい空間に、そこにサオリの家族の意識があるとしか考えられない。通常存在し得ないと思われている空間に。それが大谷の言っていたメガマスの新しい空間インフラなのかもしれない。と言うより、そう結びつけるのが自然だ」

「そう言えば、サオリの家族が入院している病院って」

シュウイチが確認するようにイサコの顔を見る。

「ああ。大谷の話によると、金沢市のメガマス病院だそうだ。電脳医療の設備も揃っている。私も引っ越してきた直後は定期的に診察に行っていた病院だ」

「イマーゴにも副作用があるんだってね。オバあちゃんから聞いたよ」

シュウイチはもっとあの夏の事件の出来事を知るために最近はよくメガばあに電話をかけるようになっていた。イサコから多くの話を聞き出すことは、イサコにも負担になると思っていたからだ。

「ああ。サオリの家族のことは情報がプロテクトされていて多くを掴めなかったと大谷は言っていた。メガマスがサオリの家族を使って何か実験めいたことをしているのかもしれない」

「それって、まさか人体実験？そんな、非人道的だよ」

ユイが恐ろしいという様子で少し強い口調で言った。

「ユイが想像しているようなおぞましいものじゃない。もっと電脳的な実験だ。そういう意味では私も被験者になったことがある。私は電脳医療によるメンタルケアの最初の患者らしいからな」

「そうなんだ」

驚きの声をアサミがあげた。

「ああ。電脳医療も色んな分野がある。私の受けたメンタルケアとか精神治療の分野は、まだ未完成の分野なんだ。これは大谷とは別の人から聞いた話なんだが、メガマスはこの電脳医療による精神治療システムを完成させようとしているらしい。そう考えると、サオリの家族のこともある程度納得できる」

「なるほど。確かイサコの受けた治療は、その傷ついた心を癒すための空間に入ることだったんだよね。心を埋めるものをイマーゴを通じて通じて電脳物質の形で生み出す空間。そこでイサコのお兄さんも幻影として蘇った」

シュウイチの言葉に、イサコ静かにうなずいた。

「そうだ。同じ性質の空間をメガマスが開発したというなら、サオリの家族置かれている状況はある程度想像できる。しかし、その解釈ではまだ多くの謎を残すことになる」

「どんな？」

「メガマスの金沢支社は、独自のプロジェクトで新空間インフラを開発しているらしいこと。それが1つ。本来ならばそれは本社が進めているプロジェクトのはずだ」

「なるほど。金沢支社が秘密裏に実験を行う必然性はないわけだね」

シュウイチが考えこんで頭で整理をしながら返した。

「次に問題になるのがサオリだ。もしさっき話したことが真実なら、サオリが家族を救おうとしている説明がつかない。メガマスも実験で情報をプロテクトしているとはいえ、サオリには家族の置かれている状況を説明しないはずがない。待っていれば、必ず家族は戻ってくる。そう説明するはずだ」

「だから空間異常を起こしてまで奔走しているサオリの行動は不可解ということだね。それならこうも考えられない？サオリはメガマスのその説明を信じていない。それどころか、サオリの協力者はサオリにウソを吹き込んでいて、サオリはそちらを信じている。だから、自分がその空間に何らかのアクセスをしないと家族は戻って来ないと思っている。その思いを利用して、協力者は何かを企んでいる」

「……ああ。あり得る話だ。まるっきり、私の時と重なっている」

イサコはシュウイチのその推理通りなんじゃないかと思った。それならなおさらサオリは止めなければいけない。宗助のような協力者がいるのだとしたら、何か大きな事故につながりかねない。

「推測の域を出ないけど、サオリには今の話をしてみる価値はあるんじゃないかな？」
「そうだな。やってみよう」
イサコがシュウイチに返したその時、メガネに着信があった。レインからだ。
「もしもし？」
「ああ、オレだ。今黒井北公園に到着したぜ」
「速かったな。サオリはまだそこに向かう途中のようだ。まわりに怪しい人物はいるか？サオリの協力者が来ているかもしれない」
「いないな。今日はあのチリチリ頭のオッサンも来ていない。まあ、しばらく茂みにでも隠れながらサオリが来るのを待つことにするわ」
「了解だ」
イサコは電話を切った。さすがに白昼堂々と協力者に会うようなマネはしないかとイサコは思う。なにはともあれサオリが黒井まで来たということは何らかの理由があるはずなので、メンバー総出で見守ることにした。
　そうしてイサコ達も黒井交差点を過ぎ、黒井地区に入った時だった。イサコの見ていたレーダー上に反応があった。
「なに？」
「モジョの知らせだ。このポイントにおそらくサオリが暗号を仕掛けたようだ。行ってみよう」
イサコ達は駆け出してそのレーダーのポイントまで移動した。そこを調べてみるとやはりサオリの暗号が浮かび上がった。
「やはりサオリは暗号を。これを見るのは1週間ぶりくらいだな。学校で見た時以来か」
「他の暗号に位置は？」
シュウイチがイサコに訊ねる。
「まだここしか仕掛けてないんだろう。仕掛けた時はモジョが知らせてくれる。この前見たく振り回されることはない」
イサコがそう言った時、頭上の方でＵＦＯのような電子音がいくつ

も鳴っているのに気付いた。イサコはそれに気付くとすぐに電脳チョークを取り出し、サオリの暗号ごと鳥居のマークを描いて円で囲み、シュウイチ達をその中に入れた。

「サーチマトンか。随分数が多いね。空間設計室もこの地区をかなり警戒しているんだね」

シュウイチが浮遊するいくつもの球体を見据えて言う。一昨日にも電脳ペットや電脳ナビで異常があったので仕方ないところかと思った。

「にしても、この暗号便利だね。見つからないんだ」

ユイが息をつきながら言う。前にきびダンゴがキューちゃんに襲われるということもあった。

「ああ。緊急用に使える。危ないときは、これを描くといい。と、そう言っている間に次の暗号をサオリが仕掛けたようだ。私はこの暗号を少し分析してみるから、このままシュウイチ達はサオリを追跡してくれるか？」

「わかった。じゃあ行って来る」

シュウイチとユイとアサミははキューちゃんが飛び去って行くのを確認すると鳥居の暗号の円から飛び出した。イサコは設置されたサオリの暗号をじっくりと見据えて分析を開始する。

#17　イサコとサオリ　part6

空間設計室は一昨日の事故があってからというもの、黒井交差点の警戒を強化するため多くのキューちゃんを派遣していた。一方で調査の方は、ペット会社からも電脳ナビシステムの管理局からも一昨日の事故のはっきりとした原因は掴めず、設計室は今手詰まり状態にあった。そこで残る手がかりである暗号からヒントを得ようと、玉子は以前キューちゃんが撮影した暗号の画像とにらめっこをしていた。もちろん外見だけではその暗号の機能を推し量るのも難しい。何しろこれまでまったく見たことのない暗号の形だからだ。

「チーフ。他に暗号の画像ってないんですか？って、あれ？」

玉子は気分転換に別室で画像の解析をしていたが、手がかりが何も見つからず設計室に戻って来たところだった。しかし設計室チーフの友和の机には一郎が座っており、友和の姿はなかった。

「友和なら会議だと言って僕に設計室を任せてどこかに行ったよ。それよりちょうど良かった。君を呼ぼうとしていたところだった」

「何かあったんですか？」

一郎の言葉に玉子がすぐに食いついた。今はほんの些細な手がかりでも欲しいところだった。

「これは、たった今巡回に出ているキューちゃんが撮影したものだ。見えるだろう？例の暗号だよ」

「ほ、ほんとですね。今これが仕掛けられているってことですか？」

暗号の他には数人の人影が映っている。画像が粗くてその顔は判別できないが。

「そうだ。それにここに映り込んでいる人影。気になって画像の解像度を上げてみたよ。それがこれだ」

一郎は別の画像をウインドウに出した。そこに映りこんでいた顔に玉子は仰天した。

「え！？これは、イサコ！？」

「そうとしか思えないね。髪型は大黒にいた頃とは変わっているが、どう見ても彼女だ」
「しかもイサコ、例の暗号を囲むように鳥居の暗号を……キューちゃんに見つからないようにするための偽装まで。この暗号はイサコの仕業だったってことですか!?」
玉子は驚きのあまりウインドウを一郎からふんだくり、なめるようにその人物の顔を見た。しかしどれだけ見ても、イサコにしか見えなかった。
「それはわからないけど、暗号を使える人物ってそうはいないからね」
一郎も、信じられないがあり得ないことではないという気持ちで言う。
「おう、小此木。悪いな、まだ会議続きそうなんだ。ちょっと資料を取りに戻ってきたんだが」
2人が神妙な顔をしているところに友和が戻って来た。そして友和も2人の様子がおかしいことに気付いた。
「どうかしたのか?」
「ああ。この画像を見てくれ。この子が今まで暗号を仕掛けていたらしいんだけど、この子、去年の夏の大黒市の事件の関係者なんだ」
一郎が友和に画像を渡しながら言った。
「例の子か。しかもこれ、ついさっきの画像じゃないか。なんでまた……ん?おい、小此木。この部分をもっと拡大してくれ」
友和も何かに気付いたようで、一郎に画像のある部分を指して迫った。一郎もすぐにその部分の拡大画像を表示する。
「やっぱりな。修一」
「シュウイチ君もいたのか?」
友和が息をつくように言い、一郎もまた驚くように声を上げた。
「あの、シュウイチ君って言うのは?」
玉子が2人に訊ねる。
「友和の息子で、僕の甥っ子だ。そうだ、この前優子に彼女から電

話があったな。その時に、彼女はシュウイチ君と同じクラスだって話を聞いた。この2人が一緒に行動していても不思議じゃない」

「不思議じゃないどころの騒ぎじゃない。設計室チーフの息子が、暗号使いのお手伝いか。なんてこった。そんなこと修一は一言も言ってなかった。よし、すぐに確認に行く」

友和はいてもたってもいられず設計室を飛び出そうとした。

「待て。会議はどうするんだ？お前は落ち着いて自分の仕事を片付けるんだ」

一郎が友和を止める。友和もさすがに会議をほっぽり出すこともできず、「どうすりゃいいんだ？」と一郎に訊ね返す。

「じゃあ、私が彼女とシュウイチ君の話を聞きにいきます」

「いや、玉子くん。君は本社から外回り禁止令が出ている。僕が代わりに行って来るよ」

一郎が玉子を止めて行こうとした。それを今度は友和が制止した。

「いや、オレが外出を許可する。小此木はオレが会議の間ここを見てもらわないといけないからな。今は暗号が仕掛けられてるんだろう？何かあった時にお前がいないと困る」

「しかし、本社の命令背けば今後の活動に支障をきたすおそれもあるし」

「バレやしないって。今彼女にサーチマトンの指揮権はないんだ。その暗号使いの子に話し合いに行くだけなら問題はない」

友和の言葉に、一郎は折れるしかなかった。この2人は本社の言いつけなど何とも思っていないところがある。

「……わかった。玉子くん。行って話を聞いてきてくれ」

「ありがとうございます室長。しかし、ここは黒井交差点付近ですよね？何か移動手段がないと少々時間がかかりますが」

玉子はその足である愛車の大型バイクを大黒に残して来たままだった。玉子に今回の出張でバイクを持ち込ませないようにと一郎も本社に言いつけられていたのだ。

「それならタクシーか何かで」

「おっと、君たち出張組も経費削減に協力してくれ。オレのバイクを貸してやるよ。４００だが乗れるか？」
友和が玉子に提案する。設計室のようにたまに外を巡回しなければならない部署の人間は、バイクで出勤するのも認められている。
「バイクは４００しか乗りません」
「上等だ。オレの暴れ馬を乗りこなせるか見物だな。じゃあこれが鍵だ。地下駐車場に止めてある。メットのサイズが合わないのは我慢してくれ」
「大丈夫です、ありがとうございます。では行ってきます」
玉子は友和に頭を下げると、水を得た魚のように飛び出して行った。
「あまり彼女に火をつけないでくれ」
一郎が苦笑しながら友和に言う。
「オレに火をつけたのはアンタだ。アニキ」

その５分後、猛スピードで飛ばした玉子は黒井交差点付近に到着した。キューちゃんがイサコを撮影したポイントを確かめ、さらに路地の中に入っていく。するとまだ同じポイントで暗号をいじくっているイサコを遠目で発見した。そこには画像で見た、シュウイチの姿もあるようだった。
「何か反応はある？」
サオリ追跡をユイ達に任せ戻って来たシュウイチが暗号を覗き込みながらイサコに訊ねる。
「いや、ないな。やはり私の暗号とは互換性がないのかもしれない」
イサコはチョークを手に持って、サオリの暗号の上から自分の暗号を書き足しながら何か反応がないか調べていたのだ。少なくともこの暗号を無力化できればサオリの行動も阻止できるということで、淡い期待を抱いて試行錯誤を繰り返したのだが、サオリの暗号はうんともすんともいわなかった。
「イサコ……やはり暗号を」
その様子を遠目で見た玉子はイサコが暗号設置の犯人だと確信する。

バイクから降りた玉子は急いでイサコの元に駆け寄って叫んだ。
「おい！何をしている！イサコ！」
イサコは聞いたことのある声に驚き顔を上げる。
「ア、アンタは！？」
「誰？」
イサコも思ってもみなかった再会にしばらく声が出なかった。取り残されたシュウイチが玉子の顔を見て訊ねる。
「久しぶりね、なんて、悠長なあいさつ交わしている場合じゃないわ。イサコ！アンタには任意同行してもらう。なぜかはわかっているだろうな？」
玉子はそう言うとイサコの腕を掴んで引っぱろうとした。
「おい！何を勘違いしている！離せ！」
問答無用の展開にイサコも思いっきり抵抗を試みるが、玉子の腕力は凄まじかった。
「何だよアンタ！イサコを離せ！」
そこにシュウイチが割って入って玉子からイサコを引き離す。
「ジャマしないで！アンタも逃走幇助の罪で逮捕するぞ！」
「逃走幇助ってなんだよ！イサコが何をしたって言うんだ。そもそもアンタ誰だよ！？あーっ！？あのバイクは父さんの！アンタこそバイク泥棒か何かだろう！」
シュウイチは玉子の乗って来たバイクを見つけて言った。シュウイチも見慣れた友和の愛車だ。そして玉子のことは頭のおかしい人か何かだと思った。
「私は空間設計室の者よ！そう言うアナタはチーフの息子なんでしょ！？私は酒井友和の部下よ」
「と、父さんの名前を。じゃあ本当に空間設計室の人？その人がなんでイサコを連れ去ろうとするんだよ！」
「連れ去りじゃないわ！事情聴取よ。最近この辺りで見かける暗号。イサコ、あれはアンタの仕業だったんでしょ！」
玉子はシュウイチからイサコに視線を移し、またその腕を掴もうと

した。
「おい。ただ勢いだけの任務遂行は相変わらずか？あれは私の仕業じゃない。私もあの暗号を調べていたんだ」
イサコは初めて玉子と対峙した時のことを思い出した。あれは古い空間が街に大発生して、ハラケンがヌルに連れて行かれた夜のことだった。まるで人の話を聞こうとしないこの姿勢は変わっていないのかと思った。
「見え透いたウソを。たった今暗号に何か書き足していたじゃないか！」
「あの暗号と私の暗号の互換性を確かめていたんだ。アンタも調べているんならわかるだろう。あれは新種の暗号だ。私が使えるようなものじゃない」
イサコの言葉に少し納得し、玉子はようやくその腕を離して落ち着いて話を聞こうとした。
「それ本当なのね？」
「なんでそんなに私の信用がないんだ。考えたらわかるだろう。もう私がそんなことするはずがないって」
半分呆れながらイサコが言う。玉子も少し考え込むようにしてため息をついた。
「……そうね。アンタが今更そんなことするはずがないって思った。だからこそ暗号を書き足していたアンタを見て、その思いが裏切られたのかと思って熱くなっちゃったわ。ごめんなさい。謝る」
「まったく。アンタが熱いのはいつものことだろう。設計室職員ならもっと冷静になれ」
とりあえず玉子の誤解がとけてイサコはホッとする。
「で、イサコ？この人とはどういう関係？」
所在無さげに立っていたシュウイチがイサコに訊ねる。
「ああ。私が大黒にいた時に色んな意味で世話になった空間管理室の職員だ。名前は原川玉子っていうんだが、まあ、通称“オバちゃん”だな」

「“オバちゃん”？それは失礼だよ。どう見てもお姉さんじゃない」
「私が付けたんじゃない。まわりがみんなそう呼んでいたんだ」
玉子はシュウイチのその言葉に上機嫌になった。そしてシュウイチのことがかわいく見えてきた。
「あらあ、さすがチーフの息子さんね。さすがにわかってるじゃない。これからも、“お姉さん”って呼んでね」
そんな玉子の態度に、イサコは少しだけまずいと思った。
「おいシュウイチ。アイツには気をつけろよ」
イサコが玉子に聞こえないようにシュウイチに耳打ちする。
「どうして？」
「アイツには妙な噂がある。私達と同じ年の甥っ子の写真をいつも持ち歩いてるようなヤツだ。アイツに従順にしていると狙われるぞ」
「うっそマジで？わかった、気をつける」
その言葉でシュウイチは玉子への警戒心を強めることにした。
「おい、さっきから何をこそこそと話している？」
「いや、なんでもない。それよりあの暗号を書いた人間を探しているんだろ？私はその人物を知っている」
イサコが話を元に戻す。今は冗談言っている場合ではなかった。
「何だと？それを早く言え！」
「その人物も今この近くに来ている。話を聞きに行くか？」
「もちろんだ。そいつの元まで案内しろ」
玉子がすごい勢いで食いついてきたところで、ちょうどイサコの電話が着信した。
「もしもし？レイン？」
「たった今サオリが公園に現れた。どうやら仕上げ段階のようだ。早く来い」
「わかった。すぐに向かう」
イサコは電話を切って玉子を見据えた。
「この近くに黒井北公園っていう公園があるのは知っているか？今その人物はそこにいるらしい。私達もすぐに向かう」

「待て、それなら私の後ろに乗って案内しろ。シュウイチ君も乗ったらいい。どうせすぐ近くなんだろ？3ケツになるが、アンタ達の体格だったらこのバイクでぎりぎりいける」
そう言って玉子はバイクを出す準備をし始めた。
「おい、3人乗りなんてムチャクチャなことできるか」
「いいから急げ。お前達も早く行かないといけないんだろう？」
たった1つのヘルメットを玉子はイサコに渡す。イサコが被れということだった。
「仕方ない。イサコは真ん中、僕は後ろにつかまる。早くこれをかぶって乗るんだ」
シュウイチはイサコを真ん中に乗せるとヘルメットをかぶせた。そして素早くその後ろにまたがった。
「おい、なんだこのヘルメット！サイズが違い過ぎる！前が見えない！」
ヘルメットを被ったのは良かったが、大き過ぎてイサコの視界はほとんど隠れてしまった。そのまま行くのはある意味恐怖だったが、そんな言葉は聞かずに玉子をバイクのエンジンを入れた。
「行くぞ！しっかりつかまれ！」
「イサコ！大丈夫だ。僕が後ろから支えるから！」
シュウイチの言葉を最後に、イサコの悲鳴はエンジン音にかき消されていった。

#17　イサコとサオリ　part7

「マジお前らどういう登場の仕方すんの？」
玉子の運転する3人乗りのバイクで黒井北公園に駆けつけたイサコとシュウイチ。その2人に、公園まわりの植樹の影に隠れて待機しながらその様子を見ていたレインが驚いたように訊ねた。
「……わ、私にもよくわからん」
イサコは恐怖のライディングのおかげで半ば放心状態になっていた。
「大丈夫？」とシュウイチがイサコに声をかける。
「で、このオバさん誰？」
カズマが一緒に駆けつけた玉子の方を見て言った。
「オバさん！？」
玉子はヤサコ達ならともかく、初対面の相手にそう呼ばれたことに激しくショックを受けた。先ほどはシュウイチにお姉さんと呼ばれて、上機嫌になっていたところだったのでなおさらだった。
「ああ。大黒にいた時に世話になった知り合いだ。大黒の空間管理室に所属していて、今は出張でこっちの空間設計室に入っているらしい」
「じゃあ、アンタもサオリの行動を阻止しに？設計室もこの件を本腰入れて解決しようとしているのか」
イサコの言葉を聞いて、レインが玉子に訊ねた。
「まあ、そんなところだ。最初はこのイサコが暗号設置の犯人かと思って来たんけど、こうして真犯人を見つけることが出来たのは幸運だった」
玉子も遠くでキーボードを叩いているサオリを見据えながら言う。
「ところでアンタ、今日はサッチーもキューちゃんも連れてないのか？」
イサコがそのことに気付いて訊ねた。
「あ、ああ。管理室の本部は、私に外回りの許可を出していない。

今日もチーフに願い出てやって来たんだ。だからサッチーやキューちゃんの指揮権は今の私にはない」
「おいおい、大丈夫か？じゃあアンタはどうやって暗号起動を阻止するつもりなんだ？」
玉子の言葉を聞いて不安に感じたレインが訊ねる。
「あの暗号を設置している少女に直接掛け合うしかない」
「それならイサコが何度もやってるよ。しかしアイツは聞く耳もたないんだ。大体アンタ、あの子がどんな事情抱えてるか知ってんの？」
「事情？」
レインの言葉に玉子は引っかかった。
「今はそれを話している時間はない。仕方ないな。とりあえずアンタが設計室の権限でサオリに事情聴取を求めてくれ。それならサオリも折れるかもしれない。最悪逃げられても、暗号の起動を阻止できれば御の字だ」
「……そうだな。なんでアンタ達にこんな仕切られなきゃいけないのかわからないけど、とりあえずその方法しかないか」
イサコに言われ、玉子はこの少年達は何なのだろうと思いつつ、それでもまずは暗号起動の阻止が先決だと考えてサオリと話合うことにした。玉子はサオリの元に駆け寄り、イサコ達も隠れながら近くまで移動した。
「そこのアンタ、止まりなさい」
「……私ですか？」
玉子が声をかけた瞬間、新手の登場に驚いたのかサオリが困惑したような表情になった。
「アンタ以外に誰がいるの。私は空間設計室の者よ。最近この辺で見かける暗号の調査をしていたの。アンタ今ここで暗号を設置しようとしてたわね？」
玉子は空間管理室のＩＤカードを示しながら高圧的な態度で話しかける。それがサオリの神経を逆撫でしなければいいが、とイサコは

思った。
「何のことですか?私はそんなことしていません。証拠でもあるんですか?」
「アンタが暗号を仕掛けているという目撃談があるの。別に怒らないから正直に話して、ね?」
「目撃談って、それは一部の人が勝手に言っていることでしょう?私は何もしていません。解放してください」
サオリの語気が強まる。今日はどこか焦っているようだった。
「そうはいかないわ。仕方ないわね。とりあえず同行しなさい」
玉子もサオリをこの場所から引きはがそうと、腕を掴んで同行を求めた。
「ちょっと、やめてください!やめないと手を下すことになりますよ!」
「手を下す?アンタ、設計室職員にそんなことしたらどうなるかわかってるの!?」
玉子もその言葉にはプチっと来て、サオリの腕を掴む手に力が入る。ところがサオリの言葉は単なる脅しではなかった。空いている方の手で玉子のメガネに暗号を投げつけたのだ。
「なっ!?」
玉子もそうだったが、それを見ていたイサコ達も驚いた。全員初めてサオリが人を攻撃したのを見た。
「なんだ?この暗号は?」
玉子のメガネの映像では、投げつけられた魔方陣型の暗号が明滅していた。さらにメガネを動かそうにもキーボードもウインドウも出ず、完全にフリーズしている。
「なんてことだ!」
「おい待てイサコ!お前もやられるぞ!」
イサコはレインの制止も聞かず、サオリの前に飛び出していた。今の行動にイサコも失望し、サオリのことが許せなくなっていたのだ。
「おいサオリ!今何をしたんだ?」

「天沢さん?やっぱり来てたんですか。この人はアナタの知り合い?」
サオリはため息をつくようにイサコを見た。さきほど辛辣な言葉を投げかけたというのに、よくここまで追って来るなと辟易したように。
「ああ、そうだ。さっきのはまた違う暗号だな?メガネを壊したのか?」
「壊してはいません。少しの間フリーズするだけです。邪魔するのなら、天沢さんにも同じ暗号を見舞うことになりますよ」
「ふざけるな!こんなことまでして一体何をしようとしているんだ?」
サオリは怒鳴るイサコから目をそらした。
「天沢さん。気付いてないんですか?」
「何のことだ?」
サオリの言葉の冷たいトーンに、イサコは少し悪い予感がした。
「これは、アナタのペットでしょう?」
サオリが差し出した左手の上にはモジョが乗っていた。それも壊れたかのようにモジョは微動だにしない。
「モジョ!」
「この子に私を追わせたんでしょう?なのに、レーダーが途絶えたことに気付かないなんて」
イサコは唇を噛んだ。玉子と会って騒いでいるうちに、モジョの動きをチェックするのを忘れていたのだ。
「くっ、モジョに何をした?」
「あの人のメガネと同じでフリーズしているだけです。しばらくすれば元に戻ります。それに私は人のペットを傷つけるつもりなんかありません。この子は返します。早くここを立ち去ってください」
サオリは固まったもののモジョをイサコに手渡し、そのまま背中を向けた。イサコは受け取ったモジョを撫でるように異常がないかを確認した。サオリの言う通りただフリーズしているだけのようだっ

たので安心し、制服の胸ポケットの中に入れてやる。そしてもう1度サオリを見据えた。
「だからと言ってアンタをこのまま放っておくわけにはいかない。アンタだって、モジョを人質にとれば私たちをここから追い出すことはできたはずだ。それをしなかったということは、アンタにもまだ良心が残っているってことだろう?」
イサコの言葉に、サオリはうつむいたまま振り返った。
「勘違いしないでください。私はアナタの大事にしているペットに傷を負わせたくなかっただけです。早く立ち去らないと、あの人のようにメガネをフリーズさせます」
「聞けない話だ。せめて立ち去る前にアンタが何をしようとしているのか、それだけ教えてくれないか?」
「しつこいですね!」
サオリはいきなり怒ったように叫ぶと、玉子に投げつけた暗号をイサコにも投げつけた。イサコも不意をつかれて体が動かない。
「危ない!」
そこでシュウイチの声が聞こえたかと思った次の瞬間、イサコの目の前には鉄壁が広がっていた。ギリギリのところでサオリの暗号は食い止められた。
「鉄壁?なんでアンタがそんなものを?」
イサコとともに、驚いて目を見開いたのは玉子だった。フリーズしていた玉子のメガネも少しずつ視界が回復し始めている。
「僕のオバあちゃんに半ば強制的に押し売られたんだ。空間事故の調査をするなら、この先何があるかわからない。キューちゃんが巡回しているというのなら、護身用に持っとけって」
「オバあちゃん?メガばあのことか!そうかアンタは室長の甥、メガばあの孫にあたるのか」
「室長っていうのは、一郎おじさんのこと?」
「そうだ。室長も今出張で金沢に来ている」
「おい、世間話をしている場合じゃないだろう!シュウ!その装備

オレたちにも分けろ！」
玉子とシュウイチが話しているところにレインが割り込んだ。サオリも鉄壁に阻まれたのは予想外だったようで驚いていたようだが、もうイサコや金沢黒客のメガネを攻撃することにためらいはなくなったようだった。
「設計室のオバさん。こうなった以上、もうアイツのメガネは壊してもいいな？」
レインも相手がそうくるなら受けて立つつもりだった。
「仕方ない。あの子をそのままにしておくと、何か事故が起きかねないからな」
メガネ復旧中の玉子もそれを認める。こんな時キューちゃんを使えればと思い、玉子は急いで設計室に許可を求めようとした。ところが電話しようにもメガネはフリーズしているし、近くに公衆電話も見当たらない。その間にシュウイチはレインとカズマに持って来ていた装備品を渡した。と言ってもメガビーと鉄壁しかないが、人数では有利だ。
「待て！攻撃はやめろ！それをするともうサオリとは平和的解決が望めなくなる！」
イサコは金沢黒客を止めようとした。何としてでも話し合いで解決できないものかとイサコは思っていたのだ。
「待てじゃねえよ！こっちはあのオバさんと言い、お前だって攻撃された。このまま黙ってられるか。それにこれまでも散々話し合いを持とうとしたが、アイツはことごとく応じなかったんだ。もう平和的解決も何もないだろ！」
レインも珍しく冷静さを失ったように言った。イサコが攻撃されたのがよっぽど怒りに触れたようだった。
「落ち着け！これではただの報復合戦になるだけだ！」
「お前も冷静に考えてみろ！ここで攻撃しなければ全員のメガネがやられる。それだけならまだいい。暗号が起動して空間事故につながれば付近の人のメガネさえも壊れる恐れもあるんだぞ！ここはど

んな手を使っても、暗号起動を阻止するんだ！」
「そうだ！オレたちの仲間も空間事故でメガネを失った。これはそれに対する報復でもあるんだ！」
レインとカズマはそう言うとサオリの方に向かって行った。イサコもさすがにこうなると腕力のあるあの2人を止めることはできなかった。
「イサコ。乱暴な方法だけどもうこれしかないんだ。それにこの予想外の展開に、サオリの協力者も姿を現すかもしれない。何より事故を起こさせないのが、僕たちの1番の目的なんだから」
シュウイチも唇を噛むイサコにそう言い聞かせた。
「くっ、仕方ない」
イサコもシュウイチの言葉に、これしか方法はないかと諦めてメタタグを受け取ろうとした。
「イサコ！お前はサオリを攻撃するな！」
その時レインがイサコに向かって叫んだ。
「どっちなんだ！？攻撃しないといけないとかやめろとか！」
一貫性のないレインの発言にイサコも口調がとがる。
「手を汚すのはオレたちだけでいいってことだ。お前が攻撃してしまえば、サオリと繋がることなんてできなくなるかもしれない！」
「バカな！お前達も私と共に行動している以上同じことだ」
レインはそのイサコの言葉に少し間を置いて返した。
「……これは、オレたち金沢黒客の暴走だ。イサコはオレたちを止めようとした。イサコに罪はない。オバさん！サオリのメガネはオレたちがパンクさせる。その後アンタは事情聴取に引っ張って行くってことでいいな？」
「できるならそうしてくれ。アンタ達、メガビーはちゃんと扱えるんでしょうね？」
「大丈夫です。僕たち以前からオバあちゃんのメタタグは使ってましたから」
シュウイチが玉子に説明する。金沢黒客は以前から質のいいメガシ

屋製品をシュウイチルートで仕入れて使っていたのだ。
「そうか、それならなんとしてでもあの子を止めてくれ！」
玉子がそう頼んだ時、ユイとアサミも公園意到着した。
「ごめんイサコ！急にレーダーがから反応が消えて、サオリがどこに行ったのかわからなくなったの！」
「それでとりあえずこの公園に行ってみようってことになって、遅れてごめんなさい。それより、どうなってるのこれ？」
アサミと一緒に謝ったユイも公園内の様子がおかしいことに気付いた。レインとカズマがサオリと対峙している。今にも戦いが始まりそうな殺伐とした雰囲気だ。
「ああ、サオリがこっちの話を聞かない上に暗号で攻撃を仕掛けてきたから、こっちも強硬策に出ようとしているところだ。ユイとアサミは危ないから下がってろ！」
「ちょっと待って！強硬策ってどういうこと！？あっ……」
ユイの問いかけの途中に、レインがサオリに攻撃を仕掛けていった。
金沢黒客とサオリの戦いを、ユイ達はわけのわからないまま見守る。
そしてイサコも、いまだにどうしたら良いのかわからないという思いの中、金沢黒客の戦いを見届けることしかできなかった。

#17　イサコとサオリ　part8

金沢黒客が3人に対し、サオリは1人。しかもレインとカズマはスポーツマンで、シュウイチも人並み以上に運動神経は良い。決着はすぐにつくかとイサコは思ったが、サオリも思った以上に手強かった。サオリのまわりには物理結界が張られており、金沢黒客の攻撃はことごとくはじかれる。一方のサオリの攻撃は玉子にもくらわせた暗号で、物理結界の内側からショートカットをつないで攻撃してくる。大黒ではあり得る戦法だが、そこまでレベルの高くない金沢のメガネ使いにとってはとんでもない技術である。金沢黒客は数的有利に関わらず防戦一方になった。イサコも金沢黒客のメガネを傷つけたくはなく、何かアドバイスが出来ればと思ったが、サオリの暗号はすべてが未知で、物理結界においてもその構造はまったく新しいものであり、イサコでさえ破るのは難しかった。

「なんでこれほどの使い手が金沢に……それにあの子、見る限りイマーゴ使いではなさそうね」

固唾を飲んで戦いを見守っていた玉子がつぶやく。

「確かに、すべて手作業か。じゃああの暗号は暗号炉によるものではない？」

イサコもそのことには気付いていた。そもそも暗号の型が違うのでイマーゴを必要とするのかどうかもわからないが。

「暗号炉がなくても無尽蔵で使えるのかもしれない。もしくはコピーが容易なのかもしれないな。いずれにせよ、こうなってくるとこちら側の勝ち目は薄い」

「そうだな。しかしこれだけ騒いでいればアンタに指揮権はなくてもキューちゃん達が気付くはずだ。違法なソフトを満載しているサオリのメガネに反応してくれれば、サオリもここを撤退せざるを得なくなる」

どうにか金沢黒客に時間を稼いでもらうことをイサコは考えていた。

その時、自転車のベルの音が鳴った気がしてイサコと玉子は公園の入り口の方を振り返った。
「なになになに？今日は随分と楽しげじゃないか。どうしたんだ一体？」
現れたのは大谷だった。自慢の車を衝突事故で傷つけられて修理に出してから、大谷はこのように自転車でまわりを徘徊している。こんな時にややこしい男が来てしまったとイサコはため息をついた。
「おいイサコ。このチャラい男とは知り合いか何かか？」
玉子も驚いたようにイサコに訊ねる。
「……ああ、一応。この大谷は自称雑誌記者で、メガマスの不正について調べていたらしい。今回は空間事故の調査でここにいる。その調査のために私に情報を与え、かわりに私にサオリに接触させて、サオリから情報を聞き出そうとしてしている」
「まあ、かいつまんで言うとそんなところだな。で、このお嬢さんは？」
自転車から降りて大谷がイサコに訊ねる。大谷から見れば玉子はお嬢さんらしい。
「私は大黒の空間管理室の者です。ここで起きたという空間事故の調査のために出張で来ています」
「大黒の？なるほど、じゃあ君もあの事件の関係者か。だからイサコとも顔見知り」
大谷が納得するようにうなずいて戦いの方を見やった。
「で、何でアイツらあんなことしてるんだ？君がサオリとの戦いを望んでいるとは思えないが」
「確かに戦いは望んでいないが、ああでもしないとサオリを止められない。実際このオバちゃんはサオリに暗号で攻撃されたんだ」
イサコが大谷に早口に説明する。
「そんな凶行に及んでまで今日は暗号を起動させようとしたのか。絶対今日じゃなくてはならない理由でもあるのか」
「今日のサオリは学校から直行でここに向かったから、私も何かあ

るんじゃないかと思った。それにサオリには協力者がいるはずだ。その正体も合わせて探ろうと思っていた」

「協力者か。それはいるだろうな。あの子が1人であの暗号を開発したとも思えない。そうか、その協力者から何か手がかりが掴めるかもしれないな」

「納得しているが、その協力者だってそう簡単に尻尾を出すとは思えない。サオリを攻撃しているのも、この展開に焦った協力者がボロを出すかもしれないという淡い望みもあるからだ」

協力者はどこかでこの状況を見ているはずで、それをどうにかおびき出したいところでもあった。金沢黒客とサオリ、両者のメガネが壊れる前に。

「それは良い考えかもしれないが、見ているとあのボウズ達の方が劣勢だぞ。あれじゃ協力者も焦らないんじゃないか？」

「そうなんだが、サオリも暗号を駆使してなかなか攻撃することができない。特にあの物理結界が厄介だ」

「物理結界ぐらい君も使えるはずだろう。暗号の型が違うが、こっちの技術でなんとかならないか試してみようか」

大谷はそう言うとウインドウを開いて何やら作業を始めた。サオリの物理結界の暗号をスキャンし、それを元に結界を無効化するプログラムを考える。

「そんな簡単にできるものなら私だって試しているさ。大体アンタ、新型じゃなくても暗号を使えるのか？」

「オレを侮ってるな。見とけよ、こんな結界2分で破ってやるぜ」

大谷のキーボードを打つ力にも熱が入る。その間に玉子がイサコに寄って耳打ちした。

「おい、この男は信じていいのか？メガマスの不正について調べているなんてウソで、実際はアンタ達の動きを妨害して、サオリって子を助けようとしているんじゃ」

「もちろん私も疑いの目で入った。しかしコイツがそのつもりならとっくに私達のメガネを破壊しているはずだ。今までコイツは私達

にかなり多くの情報を提供してくれている。それも信憑性の高い情報を。だからコイツが敵だと考える理由はないんだ」
イサコは大谷を頼りながらも警戒は怠っていなかった。それでも大谷が敵ではないかと疑うような行動を取ったことはなかった。
「そうなの。私も改めてこの人の話を聞いてみることにするけど、アンタも決して気を許すなよ」
「わかってるさ。オバちゃんも、コイツから話を聞くというのなら機密情報を盗られないように注意してくれ。コイツは一応雑誌記者らしいからな」
玉子とイサコが相談している間に、大谷の方も結界破りの暗号を組むことに成功したらしい。
「できたぞ！これを彼女の結界に向かって投げるんだ」
「これは、私が使っていた型と同じ暗号か。見たことはないが構造は似ている。こんなものであの新型暗号の結界を破れるのか？」
「いいから試してみろって」
言われるがままイサコは、サオリの結界に向かって大谷から受け取った暗号を投げつけた。すると大谷の言った通り効果はあった。サオリの結界は砂埃のように舞い散っていったのだ。これにはサオリも驚愕したようだった。
「ちっ、あんなオッサンに助けられるとはな」
レインもこれには大谷を認めざるを得ず、少し悔しくて舌打ちをした。金沢黒客の攻撃はこれを機に俄然強いものとなった。
「どういうこと？こんな短時間でイサコや私にも解けなかった暗号を解いてしまうなんて！」
「オバちゃんの言う通りだ。アンタ、一体何者なんだ？」
玉子もイサコも、大谷のスキルの高さに舌を巻いていた。
「少しはオレのこと見直したか？まあ、暗号って言っても元を辿れば0と1の数列だ。物理結界のように効果が明らかにわかっている場合は、それを無効にするプログラムを組んでやればいい。もちろん、相手の使っている暗号の構造を見極めて多少アレンジする必要

はあるけどな」
確かに大谷の言う通りだったが、それだってイサコにできる芸当ではない。イサコはこの大谷のこともますますわからなくなっていた。
「口で言うのは簡単だが、それをやってのける人間なんてそうはいない。改めて聞く。アンタ一体何者だ？少なくとも雑誌記者ではないだろう！」
「いずれ君にもわかる時がくる。そんなことより、来たぞ」
大谷は上空を見上げていた。高い機械音を鳴らしながら、４体のキューちゃんが公園に現れた。
「空間設計室のお嬢さん。長いな、名前を聞くついでに聞いておく。大黒で導入されていたサッチーは巡回していないのか？」
大谷が玉子の方を見て訊ねる。
「原川玉子です。金沢にサッチーは導入されていません。元々キューちゃんも空間事故の原因と考えられていた例の暗号を見つけて削除するためだけに導入されたものです。フォーマットの威力より索敵能力を優先させたと上司は」
「そうか。正直、例の暗号はキューちゃんのフォーマットくらいじゃびくともしないと思うんだよな。試してみないとわからないが。ん？」
大谷はキューちゃんのおかしな行動に気付いた。玉子の話ではキューちゃんの第一目標は例の暗号だ。その暗号をサオリはこの公園にも１つ仕掛けており、玉子が駆けつけた時には空間偽装で隠していたのだが、戦いが始まってからイサコがサーバーにアクセスして偽装を解いて今はむき出しの状態にあった。ところがキューちゃんはその暗号には目もくれず、金沢黒客の方に向かってきたのだ。
「おいおい、なんだよ？」
レイン達もこのキューちゃんの動きに身構える。イサコもまさかとは思ったが、悪い予感は的中し、キューちゃんは金沢黒客に向けて一斉掃射を始めた。
「うわっ！！どうなってるんだ！」

シュウイチが叫びながらビームをかわす。金沢黒客はこの攻撃で総崩れとなった。

「オバちゃん！どうなっている！なんでキューちゃんがアイツらを襲うんだ！」

「私にもわからない！言ったでしょう、私に指揮権はない。それでも優先目標はあの暗号のはず。何かトラブルが起きているのかもしれない！」

玉子もこんな時にキューちゃんを指揮できないのはもどかしいと思った。イサコは急いで金沢黒客のために鳥居の暗号を地面に描く。

「おいおい。まさかこれは、協力者の仕業なんじゃないだろうな」

「協力者！？」

大谷のつぶやきがイサコにも聞こえた。その間に金沢黒客のメンバーはイサコの描いた鳥居の暗号に避難する。その時、ようやく復旧した玉子のメガネ電話が着信した。

「もしもし！室長？」

電話は今友和に代わって設計室を預かっている一郎からだった。

「たった今自動運転中のキューちゃんが何者かにハッキングされてしまったという情報が入った。原因を調べてもらっているが、まさか君の仕業じゃないよね？」

一郎はまた玉子が暴走してキューちゃんのアクセスコードを盗んで、勝手に指揮しているものと思ったらしい。

「違います！そのことで私も確認しようと思ったところです。今私はそのキューちゃん達の目の前にいますが、キューちゃんは最優先目標である暗号に反応せず、なぜか子ども達に狙いをつけています！」

「いよいよ、サオリの協力者によるハッキングっていう可能性が高まってきたな」

玉子の電話の内容を聞いた大谷がつぶやく。

「くっ！じゃあ誰がこんなマネを！わかった、君は子ども達と一緒なんだね？こうなった以上そこは危ない！急いで安全な場所に退避

させてくれ！」
「わ、わかりました」
一郎の命により、玉子はとりあえず子ども達を避難させなければならなくなった。その時サオリの方は安全になったところで暗号の確認をしているようだった。
「おい、オバちゃん！もうアンタのメガネは直ったのか？」
「え？あ、ああ。気付いたら復旧していた。あの子の言う通りただフリーズしていたらしい」
イサコの唐突な問いかけに玉子が答える。
「そうか。それなら、やってみる価値はあるな」
「何をだ？おいイサコ！」
イサコは1人納得したようにうなずくと、サオリの元に向かって駆け出した。それに驚いたシュウイチが急いで後を追う。
「サオリ！頼むからその暗号を起動させないでくれ！」
「来ないで！」
イサコが走り近づきながらそう叫んだ瞬間、サオリはイサコのメガネに先ほどと同じ暗号を投げつけた。イサコはそれを避けずにもろにメガネに受けてしまった。
「うわっ！何やってんだイサコ！そんな無防備に突っ込んだら攻撃されるに決まってるだろ！」
シュウイチがイサコの軽卒な行動を叱りつけながら、メガネをやられたイサコを引っ張って行く。サオリの頭の上に浮かんでいたキューちゃんも反応しようとしたが、サオリが「待て」と制した。
「何がしたかったんだ君は？」
大谷も今のイサコの行動に呆れたように声をかけた。イサコのメガネは先ほどの玉子同様、魔方陣型の暗号が明滅を繰り返し、一切の操作ができなくなったしまっていた。
「いや、これでいいんだ」
「ど、どういうことだよ？」
イサコの言葉にレインが問いかける。それには答えずにイサコはサ

オリの方を振り返る。
「……反応が、終わってる!?」
その時暗号を確認していたサオリから声が漏れた。小さな声だったが、イサコはそれを聞き逃さなかった。その言葉で、なぜかはわからないが暗号の起動は阻止できたのだとイサコは確信する。直後にサオリは周囲を見回すと、身を翻してキューちゃんとともに撤退しようと走り始めた。
「あ！逃げるぞ！」
レインが叫ぶ。しかしサオリにはキューちゃんもついており、さらにイサコのメガネもやられた状態では追うこともかなわない。
「よし、それならオレが自転車であの子を追う！原川さんだったな。君はこの達を安全な場所に避難させてくれ」
大谷が急いで置いてあった自転車にまたがって言う。
「しかし、あなたにそんなことを。やはりあの子のことは設計室の職員として私が」
「いいんだ。君はさっき上司に子ども達を任されただろう。設計室も、キューちゃんを追跡してあの子のことはきちんと追っているはずだ。それよりまたあの暗号が起動しだすかもわからない。早く安全な場所に行ってくれ」
「わ、わかりました」
玉子はそれが自分の任務だと思い直し、イサコや金沢黒客、隅の方で戦況を見守っていたユイとアサミを連れて、とりあえず夕日寺地区に向かうことにした。
「あのオッサン、へたれのくせに今日はかっこ良かったな」
公園を後にする直前、また悔しそうにレインがつぶやいた。

#17　イサコとサオリ　part9

　イサコ達は玉子とともに、とりあえず夕日寺公園まで退いてきた。
イサコは黒井北公園で何かが起こることを心配したが、すでにあの場所も玉子の報告によって空間設計室に警戒されており、事故が起これればすぐに対処できるはずだと玉子に言い聞かされていた。
「あーあ。今日は疲れたぜ。イサコ、お前メガネは無事なのか？」
言葉の通り疲労困憊の表情でレインは並んでいるベンチの1つに腰掛けた。他の金沢黒客メンバーやユイ達も今日は疲れたようで、空いていたベンチにそれぞれ腰掛けた。高台にある夕日寺公園からは、鮮やかな夕陽に染まる市街を一望できる。
「ああ。オバちゃんのメガネと症状は同じだったようだ。もう操作できるぐらいには復旧している。サオリも本気でこっちのメガネを壊すつもりはなかったようだ」
イサコがメガネの動作を確認しながら返す。
「でもなんでわざわざ暗号をくらいに行ったんだよ？こっちはびっくりしたんだから」
イサコの隣に座ったシュウイチが言った。その後の「これでいいんだ」というイサコの言葉も気になっていた。
「ああ。サオリの暗号を調べるために、このメガネに暗号を染み込ませようと思ったんだ。オバちゃんのメガネはフリーズこそしたものの損傷はしなかったみたいだったからな。データ損傷のリスクはないと思った」
「やり方が大胆過ぎるぜ。そんな賭けみたいな方法とるのなら、オレたちに一声かけろよな」
「それは悪かった」
イサコは素直にレインに謝った。元々レイン達はイサコが攻撃されたのを見て頭に血が上ったのだ。あの行動は自分を必死に守ろうとしてくれた金沢黒客に対する裏切りだったなと、今になって反省し

た。
「で、サオリの暗号をメガネに刷り込んだんだろ？何か対策はできそうか？」
「それはまだわからない。もっと時間をかけて調べてみる必要がある。その意味で言うなら、大谷がサオリの暗号をいとも簡単に破ったのは謎でしかないな」
レインの質問に答え、イサコは大谷のことを思い出す。雑誌記者以外のウラの顔を持つことは間違いなさそうだが、あれだけの技術を持っているのに自分たちに接触して協力を仰いでいるのも腑に落ちない。
「そうだな。ただのへたれだと思っていたが、あんな力を持っていたとは。今度会ったらまたカズマの腕力で吐かせようか？」
「それはやめとけ。アイツの力ならおそらく私達のメガネを破壊するなんて造作もないことだ。冗談の範囲でならアイツもノってくれるかもしれんが、あまりナメてかかって調子に乗ると痛い目に遭うぞ」
イサコは大谷が味方にいることは幸運なことかもしれないと思い始めていた。あれだけのメガネ使いなら、サオリの暗号を完全に破ることができるのも時間の問題だと感じた。
「もしもし？室長、子ども達の避難は終わりました」
「そうか。ご苦労だった。子ども達というのは、天沢くんやシュウイチ君達のことだよね？」
その時玉子は一郎に報告がてら状況の確認の電話を入れていた。状況によってはすぐにまた黒井地区の方に引き返すことも玉子は考えていた。
「ええ、そうです。私とイサコは例の少女から暗号をもらって一時フリーズしたんですが、なんとか持ち直しました。少女の追跡の方はどうなりましたか？」
「失敗した。申し訳ない。少女を守るハッキングされたキューちゃんはそれぞれ四方に散ってしまってね。すべてを追ったんだが、少

女はそのどこにもいなかった。キューちゃんはおとりに使われたようだ」

「そうですか。おい、イサコ。さっきあの少女を追って行った大谷とかいう記者から何か連絡は来てないか？」

設計室からの報告に玉子は息をつき、頼みの綱である大谷はどうなったかを訊ねた。

「待ってくれ。今ちょうどメールが来た。なになに？」

「『ごめん、見失ったわさ』だってよ！何やってんだあのオッサン！」

イサコに届いた大谷からのメールを口に出して読んだレインが怒る。やっぱり役立たずだと思った。

「もしかしたら協力者が近くにいて、サオリも逃げる途中で拾われたんじゃないか？」

イサコが推理する。大谷がまじめに追っていたとしたら、自転車なのに徒歩のサオリを見失うとは考えにくい。そうなると協力者の車か何かで逃亡した可能性が高いとイサコは思った。

「どうも完全にまかれたようですね。今からどうしましょうか？」

「黒井地区の方は職員を派遣して引き続き警戒を続ける。キューちゃんのハッキングに関しても調査を続けるよ。君はとりあえず、天沢くんから事情を聞いてくれないか？」

「わかりました。その後私も設計室に戻ります。では失礼します」

玉子は電話を切った。大黒の空間管理室ほどセキュリティが厳しくないとはいえ、キューちゃんをハッキングできるその協力者もかなり手強い存在だと玉子は思った。サオリといい大谷といい協力者といい、金沢に来てこんなハイレベルなメガネの使い手に会えるとは思っていなかった。

「じゃあイサコ。とりあえずあの少女について知っていることを聞かせてくれないか？私もできるだけアンタには情報を渡すようにする。さっきもアンタ達が言っていた、あの少女の抱える事情についても詳しく聞かせてくれ」

「わかった。とりあえず、アンタも座ったらどうだ?」
イサコは疲れているであろう玉子をとなりに座るように促し、サオリに関する話を始める。サオリの母と姉が黒井交差点で事故に遭ったことをかいつまんで説明すると、玉子は驚くとともに深刻な表情に変わった。
「まさか、あの子も前のアンタと目的が同じだってこと?そんな事故の話なんて、聞かされてなかったわ」
玉子は一郎や友和から交通事故の話を一言も聞いたことがなかった。空間不良が起きた地点である黒井交差点で起こったという事故のなら、少しくらい知らせてもいいはずだ。それがなかったということは、何か彼らが秘密にしたいことでもあるのかもしれないと玉子は思った。
「あの大谷も事故にはウラがありそうだと言っていた。できれば、それについても上司から聞き出してくれないか?」
「わかった。口止めされたらアンタに話すことはできないかもしれないが」
玉子の言葉に、イサコはそれも仕方ないとうなずく。玉子もメガマス社員として、社の機密をおいそれと部外者に話すことはできない。
「ああ、わかった。それよりアンタは今月初めに起こった空間事故の調査に来たんだろう?私達の聞いた話では、事故の原因はメガマス金沢支社が独自に開発している新しい空間インフラだということだったが、本当にそうなのか?」
玉子はまた驚かされた。イサコが掴んでいるのは、自分がそっくりそのまま一郎や友和から聞かされていた情報だった。
「どうしてお前がそんなことまで知っている?まさか、またあの記者か?」
「私の情報はあらかたあの大谷がソースになっている。詳しい話はアイツに聞いてくれ。しかしその様子だと、今の話も本当なんだな」
イサコは答えを聞かなくても玉子のリアクションで悟った。
「ああ、私もそれより詳しい話は知らない。しかしあの記者は何者

なんだ？」
「わからない。ただああ見えて結構情報網が広いことは確かだ。でも大谷もアンタと同様、それより詳しい話は掴んでいないみたいだ。アンタは同じメガマスに勤めていて、金沢支社の動きを掴みきれていないのか？」
「金沢支社は厳しく情報をシャットアウトしている。本社にだってその動きは掴めない」
「まるで別の会社だな。いや、もはやライバル会社か」
玉子の言葉にレインが皮肉っぽく言う。しかし玉子もその見立ては間違っていないように思えた。金沢支社はどうしても本社と協調するつもりがないと見ざるを得ない。
「私達の推理はこうだ。サオリの家族の意識は事故の後、電脳空間を彷徨っている。あるいは私の時と同様、治療目的でそこにいるのかもしれない。その電脳空間こそ金沢支社が開発しているという新しい空間だ。情報がオープンになっていないのも、そこに実験的な目的があるからかもしれない」
「なるほど、あり得る話だな。しかしそれではあの子が通路を開こうとしている説明になっていない。あの子の家族がその空間にいるのが治療目的だったとしたら、わざわざあの子がその空間をこじ開けようとする必然性がない」
イサコの推理に玉子が疑問を投げかけた。
「サオリが家族の置かれている状況を把握していないということも考えられる。サオリは、家族を電脳空間から連れ戻すには自分が直接その空間にアクセスしなければならないと思い込んだ。あるいは、協力者にそう思い込まされた。それならサオリの行動にも説明がつく」
「なるほど。アンタが宗助にされたこととまったく同じってことね。そうすると、その協力者が新しい空間インフラを利用して何かを企んでいると考えられるわ。今月初めの黒井地区の空間事故も、もしかすると協力者の陰謀だったのかもしれない」

「ああ。キューちゃんをハッキングしたところから見ても、メガマスに恨みがある者の犯行のような気がするな。やり口は宗助と酷似しているが、宗助は逮捕されたんだろう？今月初めに大黒市で起きた事故の犯人として」

イサコはこれが宗助の仕業のように思えてならなかった。あるいは、その模倣犯か。とにかくその協力者も大黒市の去年の一連の事故を知っている人物であろうとイサコは思った。

「宗助は逮捕、送検された。彼が協力者であるはずがない。しかし、そいつがもし宗助の模倣犯だったとしたら、その目的は……ミチコ。そう、ミチコだ！」

玉子が思いついたように言う。去年の事件での宗助の最終的な目的は、ミチコと契約して世界中のイマーゴの子どもを意識不明にすることだった。

「ミチコ？何を言っている？ミチコは消えたはずだろう」

玉子は妙なことを言うなとイサコは思った。イサコはとっくにミチコは消えてしまったのだと思い込んでいた。

「そうか、お前はその話を聞いていないのか。イサコお前、今月初めに大黒市で起こった事故について聞いているな？」

「それは聞いている。アンタや小此木の父がマイコ先生に伝言を頼んだんだろう。先生はわざわざ金沢までやって来て丁寧に説明してくれた。事故では小此木ほか数人の子どもが“あっち”に連れて行かれて意識を失ったんだろう？」

「ええっ？小此木って、優子ちゃんのことだろ？」

イサコの話に驚いたのはシュウイチだった。シュウイチは今月の事故のことはメガばあからも聞いていないらしく、いとこであるヤサコが事故に巻き込まれたことを初めて知ったようだった。

「大丈夫だ。聞いたところによると、小此木もほかの子ども達も無事だったようだ」

イサコがシュウイチに言い聞かせる。シュウイチは「そう」と安心のため息をついた。

「ことの真相はそれだけじゃない。いや、私もそこまではマイコ先生には伝えなかったんだ。室長にはこのことについては内密にしておくべきだと言われたからな」

「どういうことだ？その時小此木の身に何が起こった？」

イサコは鋭い視線で玉子の目を見た。玉子は少し間をおいて自分の言葉を確かめるようにゆっくりと打ち明ける。

「……ヤサコは、あの時“あっち”でミチコに会ったらしい」

「なん、だと？」

その瞬間、脳天を突き抜けるような衝撃がイサコの体中に走り、体全体の力が抜けて行くような気がした。ミチコは生きていた。なぜ、と思う前にその事実だけがイサコを困惑させる。自分はミチコに打ち勝ち、ミチコを生んでしまった過ちをも乗り越えたと信じて疑っていなかった。ところがそれは違ったらしい。イサコはまたミチコに足を引っ張られて闇に引きずりこまれるような気がした。

「ヤサコの話では、ミチコは新しい空間とともに、新しい生を受けたと言っていたらしい。その新しい空間が金沢支社の開発したものだとすれば、ミチコはそこにいる可能性が高い。あの少女の協力者は、そのミチコに何か用があるのかもしれない」

「・・・・・まさか、その怪物がまだ生きていたとはな。シュウ。どうやらお前の呪縛もまだ解かれていないらしいな」

そこでレインがシュウイチの方を見て言った。シュウイチが守りたいと思った少女には、いつもミチコの影がつきまとっている。その呪縛をふりほどき、なんとしてでもイサコのことは守らなければならないと、シュウイチも静かにうなずいた。

「おい。シュウイチの呪縛っていうのはなんだ？」

「こっちの話だ。イサコと比べればその呪縛も小さいものだから気にするな」

レインがイサコに言う。イサコは気になったが、それよりもミチコが生きていたというショックで頭がいっぱいだった。

「小此木が言っていたのはそれだけか？」

イサコは再び玉子の方を向いて訊ねた。
「ああ、ヤサコが言っていたのはそこまでだった。しかし、他にもヤサコは何かをミチコから聞いたようだ。そのことは思い出したくないと言っていた」
「思い出したくない……なんなんだ？小此木、そこでミチコから何を聞いた？なぜミチコに会ったことを私に言ってくれなかった」
ヤサコのことが心配で心配でたまらなくなったイサコは、小刻みに震えながらうつむいた。ヤサコは自分の知らないところで孤独の戦いをしているのかと思うと、胸が張り裂けそうになる。自分はヤサコに助けてもらった、でも、自分はヤサコを助けることはできないのかと。
「アンタにはなおさら言えないはずよ。ヤサコはアンタに新しい未来を歩んでほしいと願っている。過去に引き戻すようなことなんて言えるはずがない。それにヤサコみ、アンタが思っているほどこのことで気に病んでなんかいないわ。アンタも知っている通り、あの子も強い心を持っている」
「顔を上げて。あの強いイサコはどこに行ったんだよ？イサコがそんな状態で、サオリは止められない。僕たちはイサコを頼りにしているんだ。決して自分が無力だなんて思わないで」
玉子に続いてシュウイチが励ますようにイサコに言い聞かせる。優しさゆえの弱さを孕むイサコに、それを包容してくれる仲間。玉子はこの関係を見て安心し、そして少しうらやましく思った。
「ああ、そうだな。ありがとう。大黒の方では最近事故は起きてない。となると、今度は私がミチコと戦う番か」
「そうだな。あの少女からミチコのことを耳にしたことはあるか？」
顔を上げたイサコに玉子が訊ねる。
「ミチコという言葉は聞いたことはないな。しかしこれまでの話を総合すると、サオリがミチコに会おうとしている可能性は高い。サオリの家族はミチコの元にいる可能性も」
「ああ。とにかくその線であたってみよう。室長やチーフにもそう

報告する。アンタ達も、動く時はくれぐれも注意するんだ。私に連絡してくれてもかまわない」
「了解だ。これからよろしくな、“オバさん”」
レインが親指を立てて言った。
「せめて“オバちゃん”にしてくれ」
玉子もやれやれと息をつきながら返した。

その頃、サオリも協力者と会って話をしていた。
「また邪魔が入りました。メガネをフリーズさせるだけの暗号では抑止できません。彼女の行動を封じる手はないんでしょうか？」
「ないことはないですが、おそらくアナタの意に沿うものではないでしょう。しかし、彼女をこれ以上泳がせるのも考えものです。後でその方法については連絡しますので手を打ってください」
協力者の言葉に、サオリはどのような方法だろうかと首をかしげた。しかしイサコを止めなければならないというところでは、方法を選んでいられる場合ではなかった。
「それに空間設計室も私の動きを感知しています。今日みたいにサーチマトンのハッキングという力技はもう通用しないはずですし」
「それについても考えがあります。任せてください。空間設計室の動きを封じるのは、天沢勇子を封じるより簡単なことです」
協力者は不敵に笑った。とにかく邪魔な勢力の動きを封じ、自分たちの計画の障害を取り除くこと。そのためにサオリの協力者は奥の手を打とうとしていた。

#17　イサコとサオリ　part10

翌日木曜日の放課後、イサコは1人屋上で作業していた。ここ最近はやたらと動き回っていることもあり、少しリラックスした状態で状況の整理もしておきたかった。きれいに晴れ上がったこの日の天気は、鬱屈としていたイサコの心を少しだけ晴れやかにしてくれた。おそらくこれからはサオリとの戦いも続く。そのために今日は十分に充電をしておきたかった。レインやカズマも今日はクラブ活動の方に顔を出し、ユイ達もクラブのことも考えた方がいいと見学に行かせていた。残ったシュウイチには校内の見回りを任せていたが、その役目を終えてシュウイチも屋上に戻って来た。

「サオリはもう帰ったみたいだ。くまなく探してみたけど姿はなかった。靴もなくなっていたしね」

「そうか、ありがとう。ご苦労だった」

声をかけたイサコの隣にシュウイチも腰を下ろした。フェンスに背中を預けてイサコはずっと作業をしていたらしい。そこを振り返れば校庭でレインのいる野球部やサッカー部の練習しているのが見えた。

「今日は、黒井の方を見回らなくても良かったの？」

「ああ。昨日会ったオバちゃん達、空間設計室の職員がしっかりと巡回しているはずだからな。それを見越して、職員が踏み込めない学校内を少し警戒してくれと昨日頼まれた。だからアンタに見回ってもらったんだ」

「そうか。それじゃサオリも動けないね」

シュウイチも納得する。これで少し落ち着くことができるなとシュウイチも思った。

「ユイ達も今日はクラブ活動の見学に行った。シュウイチはクラブ活動に興味はないのか？」

イサコがふと訊ねる。今日くらいは調査のことを考えずに好きなこ

とをしてもらってもいいと思っていた。
「う〜ん。僕がギターをしているのは知ってる？帰ったら大概練習しているんだどね。この学校に軽音楽部はないし、他のクラブにはあんまり興味はないかな。運動は苦手じゃないけど球技はあまり得意じゃないし、強いて言えば陸上部かな。まあ、そこまで脚力も体力もないからついて行けるかどうかだけど」
「やればいいじゃないか。これからが成長期だろ。練習次第で伸びる可能性もある。ギターも一緒にっていうのなら少ししんどいかもしれないが」
「まあ、そうだね。考えてみる。それよりイサコはクラブに入らないの？」
シュウイチにしてみればイサコの方こそそれを考えるべきじゃないかと思った。メガネだけが趣味というのも中学生としては寂しすぎる。
「入学前はどこかに入ろうと考えていたんだけどな。今はこっちの問題でそれを考えていられる余裕もなくなった。これが片付いたら改めて考えてみる」
「じゃあさ、一緒に陸上部に入るっていうのはどう？」
「は？私が陸上部？」
イサコは思っても見ないクラブが出て来て思わず顔を上げてシュウイチを見た。陸上部と言えばバリバリの運動部だ。
「イサコ見てるとさ、女子とは思えないほど体力があるなって思うんだけど。小学生の時からメガネやってると自然と体力もつくじゃない。僕もそうだったんだけど。でもあんまり女子でメガネしてる人もいないし、イサコぐらいのメガネ使いとなるとそれこそ毎日走りっぱなしだったんだろ？多分女子の中では学年でもトップクラスの体力があると思うよ。それを活かさないのはもったいないって」
「陸上部か……ただ走り続けるってどんな気分なんだろうな」
イサコは少しそのことを想像した。何も考えずに風を切っていく。ただ走る。今の自分には望むべくもない解放感がそこにはあるよう

な気がした。
「走りたくなった?」
「ん?ああ、まあそれも悪くないな。考えておく。ただこの問題が片付けるのが先だ。レインやカズマ達にもクラブに専念させてやりたいからな」
イサコは表情を引き締めて言った。
「そうだね。その後、サオリの暗号の解析の調子はどう?」
「それなりに順調だ。とりあえずサオリの暗号をプログラム単位にまで分解することには成功した。ここまでするのに、暗号にやたら詳しい大谷のアドバイスも役に立っている」
イサコはメールでやり取りしながら大谷から暗号を分析するコツなども教わっている。大谷もこれには協力的だった。
「それならあの人に分析を任せれば」
「いや、これは私の問題なんだ。大谷にも暗号の構造を送っているからアイツも独自に研究しているだろう。それらを突き合わせながら、サオリの暗号をコピーし、解除できるようにならなければな」
サオリの暗号をすべて無効化できれば彼女の動きを完全に封じることができる。イサコは大谷と共同でその解除暗号を完成させていくつもりだった。
「さすがにそのレベルになると僕は首を突っ込めないな。代わりにエールを送るよ」
「それだけで十分だ。シュウイチには私が迷惑をかけっぱなしだからな。昨日だって、サオリの暗号をくらった私をすごい勢いで引っ張っていってくれたしな」
少し笑いながらイサコが言う。
「あ、あれは体が先に動いていたっていうか、とにかくびっくりして無我夢中だっただけさ。あんな危ない行動に出るのなら先に言ってくれよ」
「ああ。あれは悪かった……でも、守ってもらえるのは嬉しいが、それでもしアンタのメガネが壊れることになる方が私は忍びない」

「今更何言ってるんだよ。イサコについて行くことを決めてから、僕はもちろんレインやカズマも玉砕覚悟だって。そんなことで思い詰めて、1人で危険なことをするのはやめてくれよ。僕たちはチームなんだから」

「ああ、そうだな」

イサコはウインドウの方に視線を戻した。その表情がどこかもの憂げに見えたシュウイチは、思い切ってそのことに踏み込んでみた。

「ひょっとして、ミチコのことが頭に引っかかってる？」

シュウイチの言葉にイサコは小さく息をついた。

「わかるか？」

「顔を見ていればね。だんだんイサコも表情が硬くなってきてると思う。サオリの家族が事故に遭ったことを知り、今度はミチコがまだ生きていることを知ったわけだからね」

「そうか……これでも明るく振る舞おうと努力しているんだけどな」

「それもなんとなくわかる。でも、あんまりムリして表情を作るのも良くないからね。僕たちにはそれで気を遣わなくてもいいよ」

「うん」

イサコは静かにうなずいた。

「でも、ミチコのことだけど、気にするなっていう方が難しいだろうね。イサコにとってみれば」

「そうだ。アイツは私が生み出した怪物だ。どうして再び現れたのかはわからないが、彼女の罪は私の罪でもある。ミチコ絡みでまた事故が起きてしまうのはご免だ。サオリの行動を封じることには多少迷いがあったんだが、そこにミチコが絡んでいるなら話は別だ。私はミチコを止めるために動く」

イサコの迷いは昨日玉子からその話を聞いてから消えていた。サオリの罪がどうこうではない、これは自分自身の罪を増やさないための戦いだった。

「そう言えば、昨日レインが言っていたな。シュウイチのミチコに関する呪縛ってなんだ？」

「えっ？」
シュウイチはそのことを聞かれるとは思っていなかった。かつてシュウイチが好きだった女の子が、ミチコに会おうとしていると噂が立っただけでバッシングに遭ったこと。それがシュウイチの心にも傷として残っていたのだが、そんなものイサコの呪縛に比べれば何のことはないことだとシュウイチは思った。
「なんでもない。気にしないで」
「気にしないでと言われると余計に気になる」
イサコも知りたがったが、シュウイチは断固として話そうとは思はなかった。それを言うと、自分がイサコのことを……ということが伝わってしまう。今はそのタイミングじゃないとシュウイチも思っていた。
「それよりさ、驚いたのは優子ちゃんがつい最近そのミチコと会ったってことだよ」
シュウイチは話をそらした。イサコもヤサコのことが出て来てそっちの方に気が行く。
「ああ。私も今月に入って2度ほど話したが、そんな思い詰めた様子はなかった。小此木の性格を考えると、それを私に悟らせまいとするのはわかるんだが。シュウイチは、小此木と話さないのか？」
「普段は話さないな。もちろん、今月に入ってからなんて1度も連絡を取り合ったこともない。オバあちゃんとは最近よく話はするけど、そのことには触れたことはなかった」
「そうか……」
2人してヤサコのことを思った。その時ミチコから何を聞いたのか。今回の件の手がかりも掴めるかもしれないが、しかしイサコはヤサコは頼れないと思った。
「なんなら、僕が聞いてみてもいいよ。金沢でミチコ絡みで少しややこしい事件が起こっているから、その時のことを詳しく聞かせてほしいって」
「いや、そこまでしなくていい。小此木だってその時のことは思い

出したくないって言っているそうだし、アイツに余計な心配をかけさせたくない」
「そう。イサコがそう言うんならやめとくよ。こっちの事件は僕たちの力で解決すると」
「ああ。そのために、とりあえずこれの解析だ」
イサコは作業に戻った。シュウイチの言うように、今回の事件は、必ず自分たちの力で解決させる。そう胸に誓う。
「じゃあ、僕は邪魔にならないように陸上部の見学にでも行こうかな」
「ああ。今日はゆっくり休んでくれ。解除暗号ができあがったら、またアンタ達を引っ張り回すことになる」
イサコの言葉に微笑みながらシュウイチは立ち上がった。そうして屋上を後にしようとしたタイミングで、イサコのメガネが着信した。その音にシュウイチも立ち止まった。
「もしもし？」
「オレだ。大谷だ」
「アンタか。どうしたんだいきなり？暗号の解析は順調だ」
イサコが訝しみながら返す。シュウイチはイサコの返事の仕方で相手が大谷であることがわかり、もう1度イサコの元に歩み寄って内容を聞くことにした。
「暗号のことじゃない。イサコお前、金沢のメガネにまつわる都市伝説が書き込まれている掲示板を知っているか？」
「都市伝説？」
「ああ、多分あのサイトのことだな」
大谷の声を聞いたシュウイチがメガネを操作して言われたサイトにアクセスしてみる。
「その掲示板に何かめぼしい情報でもあったのか？今更そんなサイトの情報なんてアテにできないと思うが」
「いいからアクセスしてみろ。ちょっとヤバいことになってるぞ」
イサコは何のことだと思いながら、シュウイチがサイトにアクセス

するのを待った。ようやく開いたその掲示板の一番新しいカキコミに目をやる。そしてシュウイチの方が愕然とした声を上げた。

「こ、これは……」

そこには次のように書かれていた。

「夕日寺中学校の生徒である天沢勇子は、黒井地区で最近よく目撃されている暗号を駆使し、“あっち”への通路を開いてミチコに会おうとしている。先日起こった電脳ペットの集団奇怪行動も、この暗号の影響である可能性が高い。彼女は大黒でも同様の行為に及んでおり、先日メガマスから公表された大黒市中津交差点の交通事故の原因でもあると言われている」

そしてそのカキコミの信憑性を高めるかのように、昨日キューちゃんが撮影した、イサコがサオリの暗号をチョークでいじっている画像が掲載されていた。

#17　イサコとサオリ　Part10（後書き）

第17話はここまでです。
第2部も残すところあと2話となりました。
次回第18話もお楽しみに。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part1

「一度は崩れかけた世界を、再び元に戻したのはミチコだったそうだ」

イサコは不安で不安で仕方なかった。金曜日の朝、晴れ渡る空とは裏腹に重苦しい思いを胸に秘めながらマンションを降りる。

「おはよう、イサコ。どうかしたの？」

今日もいつものようにユイが待ってくれていた。その様子を見ると、ユイはまだそのことに気がついていないらしい。昨日も放課後に別れてから、イサコはシュウイチ以外のメンバーに会っていない。

「ああ、少し事情があってな。ユイ、今日はもしかしたら、私のそばにいない方がいいかもしれない」

「え？どういうこと？風邪でもひいた？」

少し心配そうな声でユイが訊ねる。

「いや、そういう意味じゃない……まあ、言っておいた方がいいか」

「な、なに？」

ユイは神妙な顔つきになってイサコの話に耳を傾ける。イサコは昨日の夕方のことを話した。金沢市のメガネに関する都市伝説のサイトの掲示板に、イサコがミチコを呼び出そうとしていると書き込まれたこと。それもご丁寧に、そこにはイサコが暗号をいじっている画像まで掲載されていた。真実を知らない者達がそれを見れば、イサコが暗号を仕掛けている犯人で、黒井地区周辺の一連の事故の直接的な原因となっていると思うだろう。そして何より、未だにこの街ではその名前が忌み嫌われているらしい、ミチコとの関係も問いつめられることになるかもしれない。かつて大黒市でも味わったあの苦い経験を、ここでも味わうことになるのかもしれない。イサコはそれを思い、夕べは鬱屈としてなかなか眠りにつくことができなかった。しかし、ここで逃げるわけにはいかない。イサコにはその

書き込みをした人物と、その目的にはある程度目星をつけていた。
「誰がそんな嫌がらせみたいなことをするの？なんでまたイサコがツライ思いをしなくちゃいけないの？」
ユイは話を聞いているうちに自分が泣きそうになっていた。
「考えたくないことだが、おそらくその書き込みをしたのはサオリだ」
「どうして？あの子はそんなことするような子じゃないはずだよ。この前はレイン君達と戦争になったけど、だからってそんな卑怯で陰湿なことをするはずが」
ユイはイサコの推理を信じたくはなかった。サオリは根は優しい子であると信じていたかった。
「私もサオリがそんなことをするとは信じたくない。しかし、サオリには協力者がいるんだ。それがソイツの指示で、サオリも逆らえなかったのだとしたら、可能性はある」
「そんな……」
ユイは黙り込んでしまった。もしそれが本当だとすれば、両者にとっても不幸なことである。ユイはそれを噛み締め、そして自分の無力さを感じる。２人はそのまま無言で学校に向かった。

正門を抜けて、下足室に入ったところでシュウイチが待っていた。
「イサコ」
シュウイチが駆け寄って声をかける。
「教室の雰囲気はどうだった？」
イサコもここでシュウイチが待っていた意図を察して訊ねた。
「なんとも、居心地が悪かったよ。やっぱり昨日の書き込みの噂が広がっているみたいだ」
「そうか。でも行かなければな。ここで逃げることはできない。たとえそのことを問われても、私は黒井地区の暗号とは関係ないということをはっきりと言わないと」
前と同じようなシチュエーションだが、イサコはしっかりと立ち向

かう覚悟をしていた。
「そう。僕も今日はイサコのそばにずっといるよ。何言われるかわからないし、下手したらメガネを攻撃されるかもしれない。ユイはどうする？イサコから聞いてると思うけど、今日はイサコのそばにいると、少しツラい思いをするかもしれない」
「ううん。そんなことどうってことない。私もイサコが無実だってことを一緒に訴える」
「……ありがとう。２人とも」
イサコは２人の気持ちに本当に感謝した。そして、どんなツラい思いをしても絶対に逃げはしないと決意し、シュウイチとユイとともに教室に向かった。

３人が１年１組の教室の扉をくぐった時、そこにいた生徒全員が息をのんだ。あの時と同じ感覚だった。イサコは黒板に目をやるが、そこには何も書かれていない。そのまま自分の席に向かうが、誰もイサコ達には近づこうとはしない。むしろイサコ達を避けるようにしながらも、視線は３人の方に向けている、そんな感じだった。シュウイチはまわりを警戒し、　ユイはうつむき加減にイサコの前の席に鞄を置く。この３人だけが別の空間にいるような空気だが、誰も言葉を発しなかった。ひそひそ声があちらこちらで聞こえるが、そんなことは気にしないという風に、イサコはいつものように鞄から教科書を出して授業の準備を始めた。
「いなくなればよかったのに」
ふとそこで、教室のどこかでそんな声がした。声はイサコに向けられたものではない。あくまで友達同士のひそひそとした会話の一部分として発せられたらしかった。しかし、その声はイサコを含む教室全員の耳に届いた。その場にいた全員がそちらに視線を移した。
「天沢さんがいなくなればよかったのにね」
声の主は視線が集中したと悟るや、これ見よがしに音量を上げて繰り返した。明らかに確信犯だと思ったシュウイチは、その声の主の

方に向かっていった。
「それ、どういう意味だよ?」
声の主は教室の隅にいた女子グループの中心的な存在の少女だった。少し茶色のような、ウェーブをかけた髪。丈の短いスカート。おおよそイサコとは対極に位置するタイプの女子だった。
「人の話、勝手に聞いてたの?穏やかな顔に似合わず、いやらしいのね。酒井君」
腕を組み、目を細めながらその女子が言った。
「わざとみんなに聞こえるように言ったんだろ。それよりどういう意味だって聞いてんだよ」
「別に。そのまんま。天沢さんがこの街からいなくなればいいのに、って思っただけ」
その女子は人目をはばからずに平然として言い放った。
「お前、イサコに何の恨みがあるんだよ。どうせ掲示板に書き込まれた根拠のない噂話を使って、お前のグループに興味を示さないイサコをはぶろうとしてるだけだろ」
「アンタこそ何様のつもりよ。随分な言い草じゃない。エリナのペットがいなくなってどれだけこの子がショックを受けたのか知ってるの?」
グループの中の女子の1人がシュウイチに突っかかってきた。
「いなくなった?それはこの前のペットの集団異常行動の時に?」
「そうよ。エリナは小学校に入る前からあの子とずっと一緒だった。ホワイトシェパードのサブローと」
「ホワイトシェパード!?」
エリナのグループの女子の言葉に反応したのは、イサコと一緒に成り行きを見守っていたユイだった。
「あれ?秋吉さん、もしかしてサブローのこと知ってるの?」
茶髪のウェーブをなびかせてユイの方を向いたエリナが訊ねる。
「う、うん。多分見たことはある……」
ユイはそう言うとうつむいて黙ってしまった。

「本当に!?じゃあ、サブローがどこに行ったかわかる!?」
エリナはユイの元に歩いてきて訊ねた。しかしその残酷な事実を伝えられないユイはずっと黙りこくった。
「なんなの?はっきりしなさいよ!それとも天沢さんに口止めされてることでもあるわけ?」
ものすごい勢いでエリナがユイに迫る。シュウイチがそれを止めようとした時、イサコが口を開いた。
「その犬なら、消えてしまった。黒井交差点で」
その言葉にエリナが今度はゆっくりとイサコの方を振り返る。イサコも立ち上がって向かい合った。
「・・・・・・消えた?」
「ああ。私とユイの目の前で大型トラックにひかれてしまったんだ」
イサコもツラそうに事実を伝えた。それを聞いたエリナの方は震えだしていた。
「そんな、サブローが……」
そこに駆け寄ってきた同じグループの女子にエリナは慰められる。
そして女子達の怒りの矛先はイサコに向けられた。
「なんで?なんで助けなかったの?天沢さんはサブローを見殺しにしたっていうの?」
「その犬が突っ込んできたのは交差点の逆側からだった。だからどうしようもなかったんだ」
「そんなこと言って、アナタが殺したようなものじゃない!助ける気なんてなかったんでしょ!?アナタが変な暗号を使ってミチコを呼び出そうとしなければこんなことにはならなかった。一体どうしてくれるのよ!サブローを返して!」
ヒステリーを起こしたように、泣き叫びながらエリナがイサコに詰め寄った。
「暗号は私の仕業じゃないし、ましてやミチコを呼び出そうともしていない。掲示板に載せられた記事はすべてデタラメだ」
「ウソだ!」

その時丸いメガネの少年が進みでた。
「な、なんなんだよお前」
シュウイチがその少年の方を見やる。
「この掲示板に掲載された暗号をいじっている天沢の写真。これは調べたけど合成じゃない。だからこの記事はねつ造ではないってことだ。この記事にあることは真実だ」
「あの写真は、私もあの暗号を調べていたところをサーチマトンに撮られただけだ」
イサコが丸メガネの少年に訴える。
「そんなのはデタラメだ！いい加減に本当のことを吐いて責任をとれ！天沢！」
丸メガネの少年はそのままイサコにつかみかかろうとした。それをシュウイチが取り押さえながら言った。
「デタラメなんかじゃない！お前もどうしてイサコにそんな恨みを持ってるんだ？お前もペットがいなくなったのか？」
「ペットじゃない。友達のメガネが壊れたんだ。黒井で起こった空間事故の時に！天沢がミチコなんかに会おうとしなければ、こんなことにはならなかったんだ！」
丸メガネの少年も興奮気味にシュウイチの腕の中でもがく。同様のイサコに対する憎悪を孕む目は、この教室の中に溢れているようだった。
「天沢さん。アナタ、大黒市にいた時に、1人の女の子を殺したそうね」
続いてエリナが鋭い視線を向けながらイサコに言った。その言葉にまた教室全体がざわめく。
「それは違う！大黒市で起きたのはただの事故だ！イサコには何の関係もない！」
そこでシュウイチが必死に否定した。しかしエリナはそれを無視して続ける。
「私にも大黒に知り合いがいるの。大黒では天沢さんが事故の直接

の原因だって言われていたそうだけど?」
「それもただの噂話だ」
エリナはもうシュウイチのことなど眼中にもないようだった。さげずむような目でイサコを見つめる。
「向こうでは人殺し扱いされたんですって?でも事実なんだからそれを受け入れたら?アナタはそのバッシングから逃げるために転校してきたんでしょ?ここに来れば安全地帯。心置きなくミチコへの扉が開けるってね」
「いい加減にしろ!すべてがデタラメだって言ってるんだ!どう言ったら信じてくれるんだ!」
シュウイチはその言葉にもう抑えきれずエリナの肩を掴んだ。
「やめろ!手は出すな!」
そこでイサコがやっと口を開いた。冷静さを失ったシュウイチをエリナから引きはがす。
「手を出したら最後、本当にお前にも私にもここでの居場所がなくなる」
「フン。居場所があるとでも思ってるの?私は一生許すつもりはない。サブローを殺された恨みを晴らすまではね」
イサコのセリフに、鼻で笑いながらエリナが言う。
「私のことをどう思おうと構わない。だが、これだけは言う。あの暗号は私の仕業じゃない。空間事故も、ペットの異常行動も、私には無関係だ。私がお前達に謝る筋合いはない」
イサコは決然と言った。甘んじてすべてを受け入れるつもりはなかった。ただ真実を伝えた。しかしエリナはその言葉に逆上してイサコにもう1度詰め寄ると、今度はその右手でイサコの頬をはたいた。乾いた音が、教室に響き渡った。
「まだしらばっくれるつもりなの!?わかる?長い間ずっと一緒だったペットを殺された私の気持ちを!友達のメガネが壊されたっていうアイツの気持ちを!こうなったらバケツで水をかけてそのメガネを壊してあげましょうか?この教室に居場所がないってことを、

その机を燃やしてわからせてあげましょうか！？」
エリナの言葉は止まることを知らなかった。そう罵倒され続けるイサコに耐えきれなくなったユイは、ついに大声をあげてエリナを止めた。
「もうやめて！」
ユイの言葉に再び教室は静まり返った。
「アナタにはわからないの？イサコがそんな子じゃないってこと。このイサコの澄んだ目を見ても。ペットを亡くしたのは気の毒だと思うよ、本当に。でも、それはイサコの責任じゃない。お願い。もうイサコを責めるのはやめてあげて……」
ユイは泣きじゃくりながらエリナに言った。その言葉に、シュウイチは教室の中の生徒全員がうつむいたような気がした。それでも顔を下げなかったのはエリナだ。
「なんなの？泣いたら勝ちだって思ってるわけ？それも天沢さんに言いつけられたの？多分そうなんでしょうね。アナタはウラでなんて呼ばれてるか知ってる？天沢さんのペットって呼ばれているのよ。いつも何かにつけてイサコイサコ。そうやって小学校から飼いならされていたんだ。そうやって人のペット殺しのお手伝い？ほんと、忠実ね。今時そんな忠実なペット、電脳ペットにもいないわ。考える能力は言ってしまえば機械以下。アナタにも存在する価値なんてない」
「なっ！！」
エリナのその辛辣な言葉に反応したのはイサコとシュウイチだった。
「おい、本当にいい加減にしとけよ。人の心を傷つけることを何とも思わない、お前にそんなことを言われる筋合いはユイにもイサコにもない！」
シュウイチはもうブチ切れていた。イサコに止められるので手は出さないが、それでも掴みかかるのをグッと堪えて、普段の穏やかな表情からは想像もつかない形相でエリナをにらみつける。
「フン。そんなアナタは天沢さんのストーカーじゃない。ずっと天

沢さんのこと付け回してさ。この人殺しの何がそんなに素敵なの？」
「人殺しなんかじゃない。お前の腐った脳天には一生かかっても理解できないさ。イサコの優しさ、純粋さは」
シュウイチはもうなりふりかまわず言い放っていた。自分がイサコのことを思っているということは、クラスの全員に知れ渡ってもいいというつもりで。
「頭のおかしい者同士、随分とお熱いことね。でも、私はこんな情報も知ってるんだけどな。酒井君が小学校時代に気にかけていた人って、ミチコを呼び出そうとした人で、その人も学校でこんな風にバッシングを受けていたんですってね」
「なっ！」
シュウイチは意表をつかれる。なぜこのエリナがそんな話を知っているのかと思った。エリナはシュウイチと同じ小学校の出身でもないし、ましてやマユミとも同じ小学校でもなかった。
「ミチコに近い人に近づこうとしてるんだ。つまり、酒井君が惚れているのってミチコさん？なに？ミチコさんのどこがいいのか逆に教えて？」
エリナの挑発するような言葉に、教室の中には静かな笑い声があちらこちらで聞かれた。シュウイチは顔を紅潮させながら下唇を噛んでじっと耐えるしかなかった。
「もうやめてくれ！」
その時イサコが叫び、エリナの元にもう1度歩み寄った。
「もう、これ以上私の仲間を傷つけないでくれ。責めるのなら私を責めろ。ユイにもシュウイチにも関係のないことだ」
「ふーん。てことは、認めるんだ。天沢さん。自分の罪を」
少し満足げにエリナはイサコに訊ねる。
「何度でも言う。暗号は私の仕業じゃない」
「まだ言うつもりなの？アナタが暗号を使ってるのを見たって子もいるのよ！」
そう言うとエリナは教室の隅の方でうつむいていた女子を見た。そ

れはアサミだった。エリナに急に振られたアサミも、困惑した表情になった。

「アサミ？」

不思議そうな目でシュウイチがアサミの方を見る。なぜアサミがエリナに話を振られたのか、それがわからなかった。

「確かに、天沢さんが暗号を使ってたのは本当」

アサミは伏し目がちにエリナにうなずいた。

「何言ってるんだ。アサミも知ってるだろ。確かにイサコは暗号を使うけど、それは黒井地区に仕掛けられているものとは別物だって」

シュウイチが驚いてアサミに向かって言った。しかしアサミは首を振った。

「そんなこと、私にはよくわからない。でも、天沢さんが暗号を使っているっていうのは本当」

アサミの言葉に、ユイとシュウイチは事情を察した。アサミはイサコをかばうつもりはない。アサミはイサコから手を離したのだ。イサコも表情は変えなかったものの、ここでさらに自分の苦しい立場を思い知った。

「ほら。アサミは天沢さんとも行動を共にしたことがあるの。その子が言うのなら間違いはないはずよね。それに、アサミ。天沢さんと手を切ったのは正解よ」

エリナがまるで教室にいる生徒全員に訴えかけるように言った。教室中からイサコを罵倒する声が一斉に上がり始める。

「もういい！」

イサコはすべての声をかき消すように怒鳴りあげた。教室がまた一瞬にして静まりかえる。

「そこまで私に恨みがあるなら、このメガネを壊せばいい。私がメガネをもたなくなれば、お前達にとってはすべてが丸く収まるんだろう？」

イサコが額にかけていたメガネをかけ直す。その動きに教室が凪いだような気がした。

「何言ってるんだ！やめろイサコ！イサコは自分の過去にケリをつけるんじゃなかったのか？ここでこんなヤツらにメガネを差し出して、それが達成できるとでも思ってるのか？」
シュウイチが驚いてイサコを止める。イサコの戦いを、こんな形で終わらせることはできない。何よりイサコがメガネを置くということは、更なる事故、更なる悲劇を招く可能性にもつながる。
「これ以上は耐えられない。私だけが責められるならともかく、お前やユイが傷つくところを、私は見ていられない」
イサコはうつむきながら返す。その顔をのぞきこんだシュウイチは、メガネのレンズの下から一筋の雫が流れ落ちるのが見えた。
「メガネを壊すのは当たり前。でもなにより、私達の望みはアナタがこの学校からいなくなることよ。誰か、バケツに水を汲んできて。天沢さんのメガネはそこに沈める。アサミ！ちょっと行ってきて」
「わ、わたしが？」
またいきなり振られ、アサミは気が進まないという表情でエリナに訊ね返した。
「なに？前まで天沢さん側にいたからって彼女の肩をもつつもりなの？いいよ。じゃあ他の子に持って来させるから」
「ううん。大丈夫。私が行く」
そう言ってアサミが教室を出ようとした時、１年１組の担任の松葉と鉢合わせになった。
「あれ？どうしたんですか井上さん。今から授業ですよ」
いつしかチャイムも鳴って１時間目が始まる時間になっていた。その１時間目は松葉の国語で、ちょうど今教室までやって来たところだった。
「い、いえ、なんでもありません」
「そうですか。じゃあ着席してください。教室のみんなも、早く席に着きなさい」
松葉はアサミに声をかけると、教室の後ろの扉から立ち上がっていた生徒達に声をかける。エリナはこれに舌打ちをしながら自分の席

に戻る直前、イサコの耳元で言った。
「これで終わりじゃないから」
その言葉にイサコは目を閉じて静かに息を吐き出す。それでも松葉のおかげで、ユイやシュウイチ、そしてアサミがひとまず助かったと思った。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part2

「すまなかったな、シュウ。昨日のお前からのメールで掲示板での書き込みのことはオレたちも確認していた。今朝のお前達のクラスの様子も気になっていたんだが、今日はオレもカズマも朝練が抜けられなくてな。で、心配した通り一悶着あったってわけだ」

1時間目の後の休み時間に、シュウイチは非常階段でレインとカズマに会って今朝の出来事について説明していた。

「イサコはどうした？1人にして大丈夫なのか？」

カズマがシュウイチに訊ねた。

「イサコとユイは松葉先生のところに行って授業の質問をしている。僕が行かせたんだ。さすがに教室の中にいるのはまずいから」

「そうか。先生に今朝のことは相談しないのか？」

「相談したところでなんにもならないだろ。先生もメガネの中の出来事をいちいち把握していない。それに学校が始まってまだ2週間程度で、そんな問題が起こっているなんて夢にも思わないさ。せいぜいホームルームでみんなをたしなめるくらいのことしかしないって」

シュウイチは先生に相談することで解決することは考えていなかった。これは自分達自身で解決すべき問題だと思っていた。

「まあな。マユミの時もそうだったみたいだな」

レインも息をつきながら言った。

「あいつ、エリナはマユミのことまで知っていた」

シュウイチが両の拳を握り締めながら言う。イサコやマユミのことまでバカにしたようなあの時のエリナの言葉は、シュウイチの心を深くえぐっていた。

「速水エリナか。聞いてるぜウワサは。1組女子の中のボス猿だろ。夕日寺小学校時代からそういうキャラだったみたいだな。いかにも、情報網は広そうなタイプだ」

レインが確認するように言う。たった2週間で他のクラスにもそのような噂が流れているほど、速水エリナは1組の中では強烈なキャラを誇っていた。

「しっかし、女子っていうのはなんでみんな派閥作りたがるんだろうね」

「まったくだ」

しみじみと言ったカズマに、レインが大きくうなずいて同意する。エリナの中には、エリナのグループに興味を示さないイサコへの憎悪も少なからずあったのだろうと想像していた。

「アサミもあっさりとイサコから手を離してエリナ側についたみたいだった。僕もそうだったけど、イサコやユイにとってショックは大きかったと思う。確かにあの空気の中でイサコに味方するのは相当な勇気がいるんだけど」

「アサミもあれで結構立ち回りは器用なヤツだったじゃないか。小学校時代から長いものには巻かれるタイプだったな。悪いヤツじゃないんだけどな」

レインが言った。この3人はアサミと同じ小学校の出身だ。イサコやユイより、アサミの性格については知っているつもりだった。

「アサミのことは置いておこう。もしアサミがイサコに本当に申し訳なく思っているのなら、オレたちに何かコンタクトがあるはずだ。それより問題は、イサコがメガネをおとなしく差し出そうとしたことだ」

レインが話をイサコに戻す。レインはそのイサコの行動が腑に落ちなかったようだった。

「……あれは、僕たちを気遣ってのイサコの決断だった」

その時の、メガネが壊されるのを覚悟した時の、イサコの涙を思い出しながらシュウイチが絞り出す。

「そうだろうな。イサコは大黒でも同じような経験をしたことがあるんだろ。こんな言い方するのはなんだが、自分への誹謗中傷には慣れてるのかもしれない。でも、仲間であるお前やユイが傷つけら

れるのには耐えきれなかった。だからメガネを、すべてを代償に差し出そうとした」

「はあっ。なんであんな良いヤツがそんなひどい目に遭わなきゃいけねえんだよ」

カズマがイサコに同情してぽつりともらした。

「でも、イサコのしようとしたことは間違ってる。イサコは自ら戦うと決めたんだ。メガネを捨てようとしたことは、その戦いを放棄しようとしたことと同じだ」

レインは感情を押し殺したような、少し冷たい口調で言った。

「そんなことイサコもわかってるって。でもイサコは、僕たちのことを思って」

「それもイサコの弱さの1つだ。イサコはそうやってお前やユイをつなぎ止めようとしたんだ。イサコだって心のどこかで思ってるはずだ。今回の件にもミチコが絡んでいるということは、少なからず自分にも責任があるって。メガネを壊すことで、イサコはミチコの呪縛から逃れようとした」

「それは……僕だってわかってたけど、でも、僕もあんなイサコを見たくはなかった」

「その時松葉が来なければ、お前はイサコのメガネが壊されるのを黙認したのか？いや、お前なら自分のメガネを代わりに差し出すだろうな。それはイサコが1番望まないことだと知りながら」

レインの言葉にシュウイチは何も返せなかった。その通りだった。

「誰のメガネも壊されることはない。イサコの潔白は、結局メガネでしか証明できないからな。それをサポートするシュウのメガネだって、絶対に必要なんだ」

カズマがシュウイチの肩に手を置いて言い聞かせる。

「イサコのメガネは破壊させない。もし破壊しようとするようなヤツがいたら、僕が許さない。そいつのメガネを壊してでも、僕が一身に憎まれ役を買ってでも、イサコのことは守る」

悲壮感をも漂わせながら、シュウイチはうつむきながら言った。

「違う。そうじゃない。これはイサコの戦いだ。お前がそうやってしゃしゃり出たらダメんなんだよ」
「だったらイサコを見殺しにしろっていうのか！」
シュウイチがレインに吠える。「落ち着け」とシュウイチはカズマにたしなめられた。
「この状況を野球に例えるなら、イサコは今、マウンド上で絶体絶命のピンチを迎えているんだ。オレたちのチームは劣勢。これ以上点は絶対にやれないっていう場面だ。しかし、オレたちのチームに控えピッチャーはいない。イサコは、マウンドを降りることは許されない。イサコはそのボールを、シュウが構えるキャッチャーミットに投げ込むしかない」
「僕には、打たれて動揺しているイサコをただ信じることしかできないっていうのか？」
シュウイチがレインの目を真っすぐ見つめながら訊ねた。そのくらい自分は無力な存在なのか、その思いがシュウイチの中を駆け巡る。
「いや、キャッチャーはマウンドに行ってピッチャーを励すことができる。１度心が折れかけたピッチャーを奮い立たせられるのは、ずっとそのピッチャーの球を受け続けているキャッチャーしかいない。もちろん、オレやカズマ、ユイもそのバックで守っている。イサコはオレたちを信じて力一杯に投げ込むしかない」
「僕がイサコの代わりに投げることはできない。イサコの力を、強さを信じればこそ。それが、チームだから」
「そうだ」
レインは静かにうなずいた。野球少年であり金沢黒客リーダーでもあるレインの言葉はさすがに重いものがあった。
「僕が、１度心の折れかけたイサコを奮い立たせる……」
「ああ。もうこれはお前の過去云々の問題じゃない。お前がどれだけイサコのことを思っているかにかかっている」
レインは微笑みながらシュウイチの肩をたたいた。カズマもその言葉に大きくうなずいている。

「わかった。もう1度、イサコに戦う気持ちを取り戻させてみせるよ」
シュウイチもレインとカズマに微笑んで返した。絶対にイサコにこの壁を乗り越えさせ、そのために自分がイサコの支えになる。シュウイチはそう決意した。
「話は変わるが、書き込みの犯人はサオリと見て間違いないな？」
レインがまた引き締まった表情で訊ねた。
「ああ、おそらく。イサコもそう思ってる。他に考えられないしね」
「じゃあ、ちょっと話をつけてくるわ。オレとカズマで」
意外な言葉にシュウイチは顔を上げた。
「さっきはしゃしゃり出るなって言ったじゃないか。これもイサコとサオリで話をつけさせるべきなんじゃないか？」
「今のイサコにその気力があるならな。前にも言ったと思うが、オレたちに時間は残ってないんだ。今回の書き込みがサオリによるもので、その目的がイサコの妨害を食い止めることだったとしたら、イサコが凹んでいる今のうちにアイツも行動を起こすはずだ」
確かにレインの言う通りだとシュウイチは思った。今回のことがサオリの耳に入れば、すぐにでも行動を起こす可能性もある。
「イサコを励ますのは僕。サオリから情報を聞き出すのはレインとカズマの仕事ってわけか」
「ああ。またとぼけられるのは目に見えているが、サオリも根は優しい人間であることもわかっている。オレたちは一戦交えたわけだからな。そこでなんとなくユイがそう主張するのもわかる気がした。イサコがどれだけ傷ついているか、それを伝えればサオリも知らないふりをしてもいられないだろう」
戦いは人間の本性が出る。さきの戦いで誰のメガネも壊さなかったサオリが冷たい人間でないことは、この3人とも肌で感じていたことだった。
「それなら頼む。できれば、あの書き込みがすべてウソだったってことをサオリに証明させてほしい」

「難しいな。サオリが今さらあれはウソだったと主張しても、生徒達には相手にされないかもしれない。とにかくオレたちはサオリから事実を確認して、そこからサオリの次の行動の手がかりを得ることを最優先にする」
「わかった。じゃあ頑張ってくれ」
「シュウイチも、イサコのことは絶対に守ってやるんだぞ」
カズマがシュウイチに声をかけたところで、休み時間の終了のチャイムが鳴った。それぞれの使命を帯びて、金沢黒客は一旦解散した。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part3

メガマス金沢支社の玉子は、あることを聞くために出勤早々に友和の元に詰め寄っていた。本当なら昨日聞きに行きたいところだったが、一昨日のキューちゃんのハッキングの件の調査で友和も一郎も忙殺されていて、それを聞いても素っ気なく「後にしてくれ」とあしらわれただけだった。

「チーフ。今日は答えてもらいます。去年の夏に黒井交差点で起こったという交通事故の真相を」

玉子はその話を一昨日イサコに会った時に耳にしたのだが、イサコの口から聞くまでその事故のことは認知さえもしていなかった。そこで、ずっと金沢支社の設計室に勤めている友和なら何か知っているだろうと思って詳しい話を聞こうとしたのだ。

「またその話か。別にいいだろう。今回の件には関係のないことだ」

うんざりしたように友和が返す。玉子はその反応を見て何か隠しているのではないかと勘ぐった。

「関係ないかどうかなんてわからないじゃないですか。私は黒井地区で起こった空間事故を調べに来たんです。そこと同じ場所で起こった電脳ナビ搭載車が原因となった事故なら、何かしら電脳的な原因があったはずです。この2つの事故に、因果関係がないとは言い切れないでしょう」

「しかし、2つの事故の間には8ヶ月もの時間が空いている。共通した原因があるとするなら、この時間の空白は説明がつかないんじゃないか？」

友和が厳しく言い放った。早く玉子にはその8ヶ月前の事故のことを忘れてほしい、友和にはそんな気持ちあるのではないかと玉子は思った。

「仮にそうだとしても、参考までに聞きたいんです。ひょっとしてチーフは何か隠されているんじゃないですか？」

「バカを言うな。オレは何も隠してなどいない。そんなに気になるなら君が1人で調べてみたらどうなんだ?オレは忙しいんだ。どこかのわけのわからんハッカーを突き止めないといけないからな」

そう言って友和は席を立とうとした。玉子は逃がすものかと思って友和の前に立ちふさがる。その時一郎が設計室の扉を開いて入って来た。

「どうかしたのか?」

一郎が様子のおかしい2人を見て訊ねた。

「ああ、ちょっとな。この原川君がしつこくてかなわないんだ」

「なにか友和に用があるんじゃないのか?」

一郎が玉子の方を見た。

「ええ。私はただ、去年の7月の終わりに黒井交差点で起こった交通事故の真相をチーフに聞こうとしただけです。でもチーフはそれと私の調べている空間事故は無関係だと言い張ってそそくさと逃げようとするんです。おかしいと思いませんか室長?」

玉子はすがるような目で一郎を見た。しかしその話を聞いた瞬間、一郎の表情が曇るのがわかった。

「去年7月の黒井交差点での交通事故……おい友和。それってまさか」

一郎はわけ知り顔になって友和の方を見た。

「お前もやっぱり聞いていたか。確かお前は去年の9月の頭に出張で金沢に戻ってきてたんだもんな。その時に聞かされていたのか」

友和も事情を察したように一郎に言った。玉子は2人だけで秘密を共有してずるいという思いで2人を見比べる。

「室長も知っているんですね。それなら教えてください。その時に何が起こったのかを」

「……いや、僕たちはその件については何も知らないんだ。正確に言えば、知らされなかった。そして詮索もできなかったと言った方がいいかもしれない」

静かにため息をつきながら一郎が言った。

「ど、どういうことなんですか？」
「金沢支社の治外法権は、前にオレたちの会話聞いていたと言うのなら知ってるよな。それに従って、この事故の調査は金沢支社が独自に行った。ただ当時はまだ本社も旧幹部が仕切っていたから、その判断は間違いではなかったと思う。それでも金沢支社は何か都合の悪い事実を掴んだんだろうな。証拠に、設計室の前のチーフ、オレの前任者はその事故の直後に退職している。彼が何か知っていた可能性もある。その彼はすでに買収されていて、どこか別のメガマス関連会社で面倒を見てもらっているという噂もある。代わりに、何も知らないオレがチーフに据えられた。その方が安全だと上は踏んだんだろう。だからこの設計室には、事故の真相を知ってる者はいない。知ろうとすれば、怖い監査役の人達に取り調べを受ける羽目になる」
　かなり声を細めて友和が玉子に説明した。その人事にどういう意図があったのかはわからないが、とにかく現チーフの友和にしてみればさわらぬ神にたたりなしというところだった。一郎もその話を上から聞かされていたのだ。
「それで何も話そうとしてくれなかったんですね」
「そう言わないと、オレはもちろん君も目をつけられることになるからな。確かに空間事故と交通事故の関連性は否定できない。しかし交通事故のルートから調査できない以上、オレたちは別のアプローチで空間事故を探るしかないんだ。それはわかってくれ」
　少し申し訳なさそうに友和が言った。それなら自分の方が友和や一郎より情報を握っているのではないかと玉子は思った。
「あ、あの、チーフ。それに室長。それについてなんですが、イサコから興味深い話を聞いたんですね。今回の一連の事件の本質にも関わるような話を」
「天沢くんから？どんな話だったんだ？」
　一郎が不思議そうな顔をして玉子に訊ねる。玉子はまわりに人がいないことを確認してから説明を始めた。

「例の暗号使いの少女は、その交通事故の被害者の家族らしいんです」

「なんだって？それは本当なのか？」

一郎が驚いてさらに確認する。そこから玉子は、サオリ本人のこと、サオリの家族がどこかの電脳空間を彷徨っているかもしれないということ、そしてサオリの協力者の存在のことなど、一昨日イサコから聞いた話をあらかた2人に打ち明けた。

「にわかに信じられない話だな。例の交通事故の被害者を、電脳医療の実験台にしているなんて」

友和が考え込みながらつぶやく。

「しかし、メガマスには似たような過去がある、というか、僕の父が天沢くんを診た時と状況はまるっきり同じだ。あり得ない話じゃない」

「でもそれなら、まっとうなプロジェクトじゃないか。わざわざ本社に漏れないように情報をシャットアウトする必要もない。やはり金沢支社がやろうとしていることは、もっといかがわしいものだと考えるべきだろう。これで交通事故に関する情報が遮断されていることにもある程度納得できる」

「となると、金沢支社は去年の7月の時点でこのプロジェクトを推進していた？」

「準備期間を考慮に入れても、それで間違いないんじゃないか？」

一郎と友和がそれぞれ推理する。交通事故の原因はそのプロジェクトによるものなのか、否か。それを知ることがどうしても鍵になってくる。

「それにしても、どうして天沢くんがそんな話を知っているんだ？」

そこで一郎は純粋な疑問をぶつけてみた。

「それなんですが、イサコのまわりをうろついている雑誌記者を名乗る男がいまして、イサコはその人から今の話を聞いたと。私もその人と一昨日会ったんですが、どうにもよくわからない人でした。なぜかその人、暗号のスキルは私やイサコ以上のものを持っていま

す」

玉子は大谷のことを思い出していた。チャラチャラとしたキャラの裏に何か大きな秘密を隠していそうな大谷のたたずまいを、玉子もはっきりと記憶している。

「暗号？それは金沢で発見された新暗号のこと？」

「いえ、新暗号は彼も使えないようでしたが、既存の暗号技術の応用から、新暗号を無効にする暗号をその場で組んでみせたんです。あれは暗号のすべてを知っている人間じゃないとできない芸当だと思います」

玉子が大谷の驚くべき暗号技術について説明する。ひょっとしたら大谷は、暗号の起源からそのすべてを知り尽くしているのではないかとさえ思った。

「わからないことだらけだな。なぜそこまで暗号に精通している人間が一般人として紛れているのか、そしてなぜその人物が天沢くんのまわりをうろついているのか。何より、なぜそこまで金沢支社の秘密を知っているのか。玉子くん、その人とコンタクトはとれるかい？」

「イサコ経由でならとれると思います。先方も設計室職員の私の話を聞きたがっていたので」

「よし、早速その人物に会って事情を聞いてくれないか？」

「わかりました」

玉子は一郎の指示によりすぐにイサコに連絡をとろうと思ったが、今彼女が授業中であることに気付いた。連絡は後でとろうとあきらめたその時、また設計室の扉が開いた。入って来たのは見たことのない背の高い背広の２人組の男だった。

「何か用ですか？」

友和が無愛想にこちらを見ている２人に応対する。

「設計室長の酒井友和君か。話があるので我々と一緒に来ていただきたい」

冷たく低い声でそのうちの１人が言った。何事かと設計室の他の

職員も釘付けになる。
「話ってなんですか?そもそもお宅らは一体何者なんです?」
友和が少しいらだった様子で問い返した。
「私たちは内部監査の者だ。用件についてはここでは言えない。とにかくついて来てくれ」
男達が友和に詰め寄る。これは抵抗できないと踏んだ友和はおとなしくついて行くことにした。
「わかったわかった。だが手短に頼むぞ。今設計室の仕事は山積みだからな。じゃあ、小此木。後はよろしく」
そう言い残すと友和は2人の男と共に部屋を出て行こうとした。どことなくイヤな予感がした玉子は、隠し持っていたメタタグの中から一枚を取り出すと、それを友和の足に投げつけて染み込ませた。メガネをかけていない監査役の男2人は気付かれなかった。

友和が去ってからしばらくして、玉子は目の前にウインドウを広げた。それを見た一郎は玉子が何をしようとしているのか気がつく。
「玉子くん、まさか盗聴するつもりじゃないだろうな?」
「さすが、室長の前では悪いことできませんね」
そう言いつつも玉子はウインドウを見ながらキーボードを打ち込んでチューニング調整を始めた。
「さっき投げたメタタグは、君が作ったものかい?」
「そうです。前に大黒市で大量発生したメタタグを拾って、色々と仕込んでいました。今のはメタタグを貼付けた人のメガネの音声を拾うメタタグです」
「まったく、君は油断も隙もないな」
と言いつつ、一郎も玉子のウインドウから漏れる音声に聞き入った。
「室長も気になるんじゃないですか」
「当たり前だ。今更友和が監査役に連行される理由がわからない。何か上の方で動きがあったに違いない」

一郎がそう言うとはっきりとした音声が飛び込んで来た。友和もどこかの部屋で先ほどの男達に取り調べを受けているようだった。
「……今朝『週刊ゴールド』のＷＥＢページ掲載されたトップ記事は見たかね？」
先ほど友和を連れて行った男の声だった。
「いや、今そんなゴシップ記事を相手にしているヒマなんてないんだ。アンタらも考えたらわかるだろ」
友和がぶすーっとした声で返す。玉子はすぐに話に出ている『週刊ゴールド』のホームページにアクセスした。
「見ていないならここで見るといい。とんでもない事が書いてある」
「どんな？」
友和はそこからしばらく黙った。その記事に目を通しているようだった。すぐに玉子達もその記事を発見した。
「『２０２６年７月３１日　金沢市黒井交差点で発生した交通事故の原因となった電脳ナビの誤作動について』」
玉子が記事のタイトル読み上げる。続いて本文にも目を通した。そこに書かれていたものを要約すると次のような内容だった。

件の交通事故の原因は、左前輪タイヤのパンクによって事故車両がバランスを失ったことと、その時に判断を誤った運転手が突然手動運転に切り替えたことによると警察は発表している。そのため裁判では運転手の過失の有無が問われており、電脳ナビの責任は問われることはなかった。しかし、筆者が手に入れた黒井交差点のサーバーの点検資料によると、この警察の発表が虚構であることがうかがい知れる。結論から言えば事故の原因はサーバーの故障による電脳ナビシステムの誤作動であり、運転手が手動運転に切り替えたのは、突然車両が歩道の方に向かって走り出したことによる。ともすればサーバーの点検を怠ったメガマスの過失ともとれる事故である。さらに事故の調査を行った警察、そして電脳ナビを管理する電脳局の出先機関にはメガマス金沢支社の人間が多く派遣されており、世

間向けの公表との食い違いを考えると、メガマス金沢支社が隠蔽工作を行った可能性が浮上する。先日メガネの不具合の公表で世間に大きな衝撃を与えたメガマスだったが、あの会見で発表されたメガマスの不都合は、まだ氷山の一角だったのではないだろうか。

記事を読み終えた玉子は、あぜんとしながらもその記事の筆者の欄に目を向けた。

「文責在記者、大谷英夫」

その名前にも驚きながら玉子が口に出す。フルネームまで聞いていなかったが、あの男だと玉子は確信する。そして友和の取り調べの方からも、監査役の男の声が聞こえてきた。

「この事故のもみ消しを指導したのは、空間設計室だろう？」

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part4

3時間目が終わり、4時間目までの休み時間。1年3組のサオリは次の授業が音楽だったため、クラスメート達の輪から離れて、1人音楽室に向かって歩いていた。とそこに、待ち伏せていたようにレインが現れた。

「よう、サオリ。ちょっとツラ貸せよ」

一昔前の不良のような言葉で、レインはサオリをひとけのない廊下の隅に呼び出した。サオリは何も言わず、黙ってついて行った。

「呼び出された理由は、わかるよな?」

サオリと1対1で向き合ったレインが仁王立ちしながら訊ねた。サオリも周囲をうかがったが、レインの他に誰もいないようだった。

「わかっています。掲示板の書き込みのことですよね」

どこか諦めたようにサオリがつぶやくように言う。

「てっきりまたとぼけるのかと思った。その口ぶりなら、認めるということだな?」

少し驚いたようにレインが返した。サオリもイサコと対峙している時とはまた雰囲気が違って見える。

「あなたはそう決めつけているからわざわざ呼び出した。私が否定する意味なんて、もうないですから」

「ふーん。なんか、思っていたリアクションとは違うな。でもまあ、話は進めやすい。だったらこっちも単刀直入に訊く。なんであんな書き込みをした?」

レインが真っすぐサオリを見つめる。今日のサオリはうつむき加減だ。先日イサコと対峙した時の相手に立ち向かうような姿勢ではなかった。

「……彼女が邪魔だったから」

ぼそっとサオリが言った。

「だったらイサコのメガネを攻撃するなり、他に何かしらの手段が

あるだろう。ネットを使って他の人間にイサコのメガネを壊させるなんて、お前最低だな」

レインは思ったことをためらわずにそのまま口に出した。その言葉でサオリの瞳が一瞬揺らいだのも見逃さなかった。

「彼女の力なら、その辺の素人にメガネを壊される心配なんてないと思って」

「てことはお前、最初から精神攻撃が目的だったってことだな」

サオリは黙った。それが肯定のしるしだった。

「……事情はわからなくもない。イサコほどのメガネ使いと本気でやり合ったら、お前にどれだけの力があっても共倒れする可能性がある。だったら、イサコがメガネを使いにくくさせる状況を作ろうと考えた。違うか？」

「そんなところです」

今度はサオリもうなずいた。このレインという少年の洞察力にも内心驚きながら。

「でもイサコのクラスメートはお前の思っている以上にその書き込みに過敏に反応した。理由はこの前のペットの異常行動、それに黒井地区での空間事故だ。この２つの事故で不条理な思いをした連中は、一斉にイサコに怒りの矛先を向けた。いちいち説明してやろうか？今朝イサコが連中から受けた仕打ちを」

「それは……」

サオリはレインから顔を背けた。それを見てレインはサオリの本当の気持ちを察した。

「全部お前が撒いた種だろう。なんでそこから目をそらそうとするんだ？耳を塞ごうとするんだ？」

レインの質問にサオリは答えない。

「やっぱりお前、イサコを嫌ってなんかいないんだろう？」

サオリは細かく震えているようだった。顔をうつむけて、ひょっとしたら泣いているのかとレインは思った。

「お前の家族は交通事故に遭った、そして今も電脳空間の中で生き

ている。この話が本当だったとすれば、かつて同じ境遇にあったイサコが手を差し伸べようとしてくれたことは、嬉しくないはずがないよな。もちろんお前が、そのイサコの過去を知っていればの話だが」

「……知ってます」

サオリはすすり泣きながら言葉を絞りだす。

「天沢さんの過去は、私も知っています」

「……そうか」

思っていた以上にストレートに返ってくる言葉に、レインは少しだけ後悔した。レインは、いつも思っていることをはっきりと口に出してしまう。その言葉でその人がどれだけ傷つくかも、どれだけの思いを抱えているかも考えずに。そうして傷ついた人が目の前にいることに気付くと、無神経な自分を恥じる時がある。

「気にしないでください。あなたの言うことはもっともですから」

一瞬たじろいだレインの心中を察したかのように、サオリが鼻をすすって声をかけた。

「だったらなんで」

レインも言いかけて1度言葉を止めた。そして自分の言葉を1つ1つ確かめよるようにゆっくりと訊ねなおす。

「だったらなんで、イサコが1番傷つくようなことをした?」

サオリは黙った。しかしレインは聞かなくても事情はだいたいわかっていた。

「協力者の指示か」

サオリは顔を上げた。協力者がいることを、なぜレインが知っているのかという表情だった。

「ばかやろう、まるわかりだ。お前が独自であの暗号を組んだとは思えない。前に黒井北公園で対決した時もそうだ。サーチマトンをハッキングしてお前を護衛させたのは、その協力者だろう?」

その話になってから、サオリの表情が変わって行くのがわかった。レインはやっとイサコと対峙している時の表情に戻ったと思った。

頭の中で何かを計算し、当たり障りのない言葉を紡ぎだそうとする時の、あるいは、強引に話を切ってしまおうかと悩んでいる時の表情に。

「もういいでしょう」

サオリはレインに背を向けて歩き出そうとした。しかしレインはその肩を掴んでサオリを止めた。

「よかねえんだよ。オレはそれを聞きにきたんだ。イサコが傷つくのを嫌がっているお前に、それでもあの書き込みをさせた協力者。一体何者だ?そいつはお前が信用するに足るヤツなのか?」

「関係ありません。あなたには」

サオリはレインの手を振りほどこうとする。しかしレインは離さなかった。

「冷静になれよ。お前はそいつのために、これからもずっと1人のままで良いのか?他人には自分の素性を隠して、工作員のようにずっと生きて行くつもりなのか?」

サオリは振り返ってレインの目を見た。もっとも触れられたくないところを突かれたような、そんな戸惑いと怒りがにじみ出た眼差しで。

「あなたに何がわかるんですか」

サオリがそのままの表情でレインに返す。

「オレには何もわからない。そっちの事情なんてな。でも、イサコが深く傷ついているのはわかっているつもりだ。オレはイサコのために行動している」

「それなら、私のことは放っておいてください」

「そうはいかないんだ。オレたちが惚れ込んだイサコは、お前との間に横たわっている細い細い道の存在を信じようとしている。あの書き込みが、ほぼお前の仕業だと諦めなければならない今この時でもな。本当はイサコがお前に歩み寄り続けないといけないこともわかっている。オレがしゃしゃり出ることが決して良いことだとも思ってない。でも、こうせずにはいられないくらい、イサコは今傷つ

いているんだよ」
　その言葉に、サオリはまた顔をそらした。
「こんなに人を傷つけてまで、何を取り戻そうっていうんだ。そうやって大事なものを失い続けて、かつてのイサコは自分の無力さに気がついた時、オレなんかには言葉にはできないほど打ちのめされたらしい。お前が同じ道を歩んでいるとは決めつけられない。でも、お前は本当にこのままでいいと思ってるのか？失った日々を取り戻すのは、死ぬほどエネルギーを使うんだろう。今のお前を見ていればなんとなくわかる」
　その言葉に、顔をそむけたままサオリは何かを思い詰めているようだった。サオリ自身ももそのことはわかっているはずだが、レインはそう口に出さずにはいられなかった。
「誰かの操り人形なんかはやめて、イサコの手を取ってくれ。オレたちにも変に情報通な雑誌記者や、空間設計室のオバさんなんかが味方についている。お前が取り戻したいものがあるというのなら、オレたちだって協力するさ。もちろん、事故につながるようなことには手は貸せないけどな」
　サオリの目が泳いでいるようにレインには見えた。きっと今、彼女の中に激しい思案が巡っている。レインはじっとその答えを待つことにした。そして、しばらく黙っていたサオリが絞り出すように言った。
「……裏切れません。母さんや、姉さんのためにも」
　サオリはそのままレインに背を向けて今度こそ走り去って行った。結局それが答えだったのかと、レインは深いため息をついてその場に立ち尽くした。
「おいレイン。追わなくてもいいのか？」
　その時レインとサオリがいた廊下に面する教室の中からカズマが出て来た。カズマはそこに隠れて、じっと2人の会話を聞いていたのだ。
「オレにはあれ以上の言葉が思いつかなかった。所詮オレなんかじ

や、サオリの決意を変えることはできなかっただろう」
「そうか。結構いいところまで行った気がしたんだがなあ」
自嘲気味に言ったレインに、悔しそうにカズマがつぶやく。
「で、そっちはうまくいったのか？」
レインが気を取り直してカズマに訊ねた。
「もうちょっとお前が引き延ばしてくれれば、もっと情報を得られたと思うんだが、まあまあ首尾は上々だな。シュウのバアちゃんが練ったっていうメタタグ、さすがに質がいいわ。プロテクトの甘い情報ならうまく抜き出せた」
カズマは教室に隠れながらシュウイチからもらったメタタグを使って、レインの話に集中しているサオリのメガネから情報を引き出そうとしていたのだ。かつてフミエがイサコの情報を盗み取るために使ったメタタグと同じ種類のものだ。
「よし、でかした。サオリには悪いが、こっちは手段を選んでいられないんだ。次のサオリの行動は、なんとかしてオレたちが阻止しないといけないからな」
そう言いながらレインは早速抜き出した情報を拝見することにした。残念ながらそこにはサオリの暗号に関する情報が含まれていなかったものの、興味深い資料をレインは見つけた。
「なあこれ、どう思う？」
そこにはとあるホームページのＵＲＬが記されていた。レインはすぐにそこにアクセスしてカズマに示した。
「なになに？イベントの告知か。フェニックススクエア×メガマス共同主催、『ＶＲクエスト３』ＶＳモード全国大会北陸予選、参加チーム募集中……日時は次の日曜だから、あさってか。場所はメガマスの丘公園」
そのページではこのイベントについて大々的に告知されていた。メガマスの丘公園とは、メガマス金沢支社が立地する丘にある緑地公園のことである。
「確かにこんなイベントがあるってクラスのヤツが騒いでたな。『

VRクエスト3』は発売1ヶ月で150万ダウンロードを突破したモンスタータイトルだ」

「なんでサオリがこんなページを見てたんだ？これに参加しようとするキャラでもないだろ」

カズマが不思議そうにつぶやく。

「だな。こんな大勢の子どもが集まる場所に何の用だ。イヤな予感がするが、とりあえず後でイサコに報告だ」

そのとき次の時間のチャイムが鳴った。ひとまずこの場はここまでにして、イサコを立ち直らせることを考えながら、レイン達は自分たちの教室に戻って行った。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part5

昼休みになり、校舎の中は一段とにぎやかになってきた。しかし、イサコはそんな喧噪の中に身を置きたくはなかった。この日の朝のイサコへの攻撃は、その後の休み時間も一部の生徒から繰り返された。それでもイサコはじっと耐えるしかなかった。でも耐えられなかった。自分が傷つくことは恐れてはいない。しかし、自分の仲間が自分のせいで傷つけられること、それが何よりイサコの心を傷つけた。破裂しそうな感情を押し殺して、でもそれがせき止められなくなって、イサコは4時間目の授業が終わるとすぐに、1人になるために屋上にのぼってきた。その心の中とは裏腹に、今日は雲一つない青空が広がっていた。

「それでああやってここで忍び泣いていたのか……」

屋上の入り口の扉の裏に隠れて、その様子をレイン、カズマ、ユイが見守っていた。

「うん。ちょっと1人にしてくれって言って、ふらふらと教室を出て行ったんだけど、やっぱりここしかないかなって様子を見に来たの」

ユイがレインとカズマに説明する。イサコを心配したユイがここに気付き、レインとカズマも呼んだのだ。

「ここは人も来ないしな。なあユイ。朝の騒ぎの後も、イサコいじめは終わらなかったのか？」

レインがユイの方を見て訊ねた。

「う、うん。みんなはもうイサコに近づきたくないって感じだったけど、一部の人はまた言葉で攻撃してきた」

「速水エリナか？」

「うん、そう。彼女と彼女のグループの人達はイサコを許してくれないみたい」

言いづらそうにユイが答える。そのグループの端っこにはアサミ

もいた。
「それはユイもツラかっただろう。それにしてもしつこい女だな。今度そいつらがイサコに絡んできたらオレたちを呼んでくれ。ガツンと言ってやるから」
「私なんて、イサコの気持ちを考えたらどうってことない。それにそんなことをしても、あの人達は攻撃をやめないと思う。速水さんの気持ちもわからなくもないよ。ずっと連れ添っていたペットが亡くなったわけだし、それがショックだったはずだから」
ユイの内心は複雑だった。イサコや自分が責められるのはツラいが、ペットを亡くしたエリナのツラさもよくわかる。しかもそのペットは自分たちの目の前で車に轢かれたとうこともあり、その時の自分の無力さも噛み締めてユイは何も言い返すことはできなかった。
「お前もイサコと同じで優しすぎるんだよ。エリナのペットが死んだからって、それはイサコのせいでも何でもない。あの女はペットが亡くなった理不尽を、行き場のない怒りをイサコという無抵抗な獲物に向けているだけだ。もともとエリナのグループに興味を示さないイサコを、エリナも気に入っていなかったはずだからな」
レインの言葉にユイは黙ってしまった。それでもユイには、レインのようにエリナを否定することはできなかった。
「ごめん……やっぱり私も弱いんだよ。速水さんの気持ちがわかるって言うのは、それはきちんと彼女に言い返す勇気のない自分への言い訳だったのかもしれない。悪いのは私。いつもイサコに守られているのに、いざという時にイサコを守ってあげられない自分が、情けなくて……」
思い詰めたユイまで泣き出してしまった。そういうつもりじゃなかったのにと、レインも困惑した表情になった。
「ああ、ユイ。別にお前を責めているわけじゃないんだ。こういう時こそな、イサコを支えるオレたちがしっかり気を持たないといけないんだよ。そうやって涙を流して後悔するより、この先どうやってイサコのことを守っていくのか、それを考えよう」

「……うん。ごめん。ホント、みんなの足引っ張ってばかりで」
ユイも涙を拭いて上を向こうとした。今一番ツラいのはイサコなのだと自分に言い聞かせて。
「そんなことねえって。ユイの底抜けの明るさはオレたちの中じゃ必要不可欠だからな。だからお前が泣いてると、オレたちまで悲しくなるんだ」
カズマがおどけたように言った。
「そう、なんだ。わかった。みんなのためにも、私は泣かない。それよりシュウイチ君はどこに行ったの？」
笑顔を見せて返したユイがレインに訊ねる。
「アイツもちょっと1人にしてくれって言ってどこかに行ったんだ。オレたちがここにいることは知らせたから、じきに来ると思うんだが……つったら来たな」
レインが階段の方を見下げながら言って、ユイとカズマもそちらを向く。そこには重い足取りでのぼってくるシュウイチの姿があった。
「何してたんだよ？」
カズマが訊ねる。
「うん。さっきお前らに言われたこと、ちょっと考えてたんだ。イサコに、なんて声をかけたらいいものかと思って」
シュウイチは先ほど、レインとカズマにイサコを立ち直らせられるのはお前しかいないと言われたところだった。それはレインがシュウイチの胸の中にある気持ちを察して言ったことだったが、シュウイチはそれをプレッシャーに感じていたのだ。シュウイチにはかつて、好きだったマユミを守れなかったという過去もある。
「そんなことうだうだ考えても仕方ねえよ。そんな飾り付けた言葉なんていらないんだ。もう、お前の心の中にある正直な気持ちを伝えたらいいんじゃないか？」
「え？それって」
レインの言葉にシュウイチが問い返した。その場でこの思いを伝

えろということなのか。
「別にそういう意味じゃねえって。イサコに立ち直ってほしいっていうお前の気持ちをそのまま伝えろってことだよ」
そう言うとレインはシュウイチの背中を押した。シュウイチはレイン達に見守られながら、1人で涙を流しているイサコの元に歩み寄っていった。
「イサコ、大丈夫？」
そうシュウイチが声を絞り出したところで、イサコはようやくシュウイチがいることに気がついた。そしてすぐに頬を伝っていた涙を制服の袖で拭った。
「ああ。大丈夫だが、しばらく1人にしてくれないか？」
イサコはシュウイチから目を背けながら言う。
「……いや。1人にはしない」
「え？」
そう言うとシュウイチはイサコの隣に腰を下ろした。驚いたような表情でイサコはそれを見つめた。
「放っておけないんだ。僕は。そうやって傷ついている人のことを」
シュウイチも高い空を見上げて言う。少しだけのんびりとしたその口調は、イサコに誰かを思い起こさせた。
「……でも、私の涙なんか見たくないだろう」
「そんなこと気にしないよ。泣きたい時は泣いた方がスッキリするし。それにさ、イサコは今までずっと泣きたい時は人目をはばかって泣いてきたんじゃない？たまには、そんな無防備な自分を晒してもいいんじゃないかな。その方が、気が楽になることもあるし」
シュウイチの言葉に、イサコはまた涙が溢れてきた。そうやって自分のことを考えてくれている人が、自分のために傷つけられたことが悔しくて。
「でも、そうやってイサコが悔やむことはないと思う。イサコは何ひとつ間違ってないんだからさ」
再び涙を流し始めたイサコにシュウイチが柔らかい口調で問いか

けた。空にふんわりと吸い込まれていきそうな声だった。
「……私のために、あんたやユイが傷つけられた。私は何ひとつ、あんた達を助けることができなかった。自分のメガネを差し出すこと以外に」
イサコは打ちのめされていた。シュウイチ達が傷つけられたこともそうだが、メガネを手放すことで解決しようとした自分に。シュウイチ達を信じることができなかった自分に。
「ユイも言ってたけど、僕たちはそんなこと全然気にしてないよ。イサコが間違ったことをしていないってわかってるから。それで僕たちが離れて行くなんて恐れなくてもいいんだ」
「……でも、そうやってあんたに強がられるのが私はツラいんだ。私からあんた達が離れて行くことも怖い。でも、あんた達が傷つけられるのが一番怖いんだ」
イサコは絞り出すような小さな声で言った。
「そう。良かった。そう思ってくれているんだね」
「え？」
イサコは涙で充血した目でシュウイチを見た。
「僕達のことを気遣ってくれていることは、もちろんうれしい。でも、イサコ自身も自分が1人じゃないって思ってくれているんだね。その涙はその証なんだね」
シュウイチはずっとイサコが孤独を感じていたんじゃないかと思っていた。最後にはイサコが自分1人だけの場所に行ってしまうのではないかという不安もあった。だから、そんなイサコの心の中に自分達が存在したことがうれしかった。
「あんたやユイ、それにレイン達には感謝してもしきれないくらいだ。こんな無力な私に付き合ってくれて、いつも申し訳なく思っている。あんた達のおかげで私は1人じゃないと思えるようになったんだ。私に詰め寄る人達から守ってくれて、本当にありがとう」
イサコがまっすぐシュウイチの目を見つめて言った。シュウイチはそのまま顔を赤らめて下を向いてしまった。

「だったら、もうメガネを手放すようなマネはしないでくれ。僕たちをつなぎ止めているのはメガネじゃない。それに、イサコにはまだメガネを使ってやらなくちゃいけないことがある。僕たちはそのイサコの戦いを支えることしかできないけど、でも、イサコはそこから逃げたらいけないんだろ。だからメガネは捨てないで、もう1度立ち上がろう。イサコのことを誤解している人達のことはいい。いずれその人達もわかってくれるはずだよ。イサコがそんなことするような人じゃないって」

シュウイチは、最も伝えたい言葉をぶつけた。

「……ああ。メガネを捨てようとしたのは、正直自分でも後悔している。私は、この前あんたが言ってくれたように強い人間じゃなかった」

「イサコ……」

「でも、私は強くあらなければならない。私をこの世界に導いてくれた人のためにも、私のために命を落とした人のためにも、そして、天国で見守ってくれているお兄ちゃんのためにも。あんた達といれば強くなれる気がする。私は、孤独じゃない」

イサコは顔を上げたもうその瞳に涙は浮いていなかった。しっかりと明日を見つめる、希望の光がそこに宿っていた。

「いい感じだな。シュウ、よくやったな」

扉の裏から隠れてその様子を見守っていたレインが言った。そしてユイとカズマも、良かったとうなずいている。

「……イサコ」

イサコの笑顔に安心して、そして何かを心に決めたようにシュウイチがもう1度その名前を呼んだ。

「なんだ?」

照れたようにうつむくシュウイチをイサコが見る。

「この一件が片付いたら、どこかおいしいものでも食べに行かないか?」

これじゃいけないと、シュウイチはイサコの顔を見た。真っ赤に

染まった顔は自分でもわかっていたが、それでも目をそらさずに。
「おいしいもの？」
イサコはいきなりの質問に驚いた表情に変わった。そうしてしばらく考え込むような顔つきになった。
「いや、そんな気分じゃなかったらいいんだ」
やはり早過ぎたかと、シュウイチが慌てて言った。ドアの裏のレイン達はそのやり取りを先ほど以上に固唾をのんで見守っている。
「……スペシャルメロンパフェ」
「え？」
出て来た意外な答えにシュウイチは間の抜けた声が出た。
「前に行ったカフェのスペシャルメロンパフェがおいしかったんだ。それならもう1度食べたいなと思って」
イサコもシュウイチのことを意識してか、正面を見ながら言った。
「そうなんだ。イサコがそういうの好きだったなんて知らなかったよ。じゃあそこに行こう」
はずむような声でシュウイチが言った。レインも扉の裏で大きくうなずいている。
「なあ、ちょっと野暮なこと聞いていいか？」
イサコはそのまま視線を合わさずに顔だけシュウイチに向けて言った。
「なに？」
「それは、私達ふたりっきりでってこと？」
イサコも少し恥ずかしそうだった。しかしわざわざそれを聞くってことは、まだそういうのに抵抗があるのかなとシュウイチは思ってしまった。
「……う～ん。どっちでもいいよ。レイン達を呼んでもいいし、イサコはユイも連れてきても」
それを聞いたレインは扉の裏で思いっきりずっこける。
「あのバカ。そこで押さなくてどうすんだよ」
何かもどかしそうにレインがシュウイチを見る。それはカズマと

ユイも同じ思いだった。
「……いや」
その時イサコが考え直した。
「やっぱりふたりで行くか」
「え？」
シュウイチはまた驚いたように顔を上げる。
「ユイはいいんだが、レインとカズマのスポーツバカ2人は店の雰囲気に合わない」
「どういう理由やねん！」
今度はそれを聞いていたカズマがずっこけた。
「そうなると女2人に男1人になる。そうなるとあんたも話を合わせるのに苦労するだろう。だから、ふたりで行こう」
イサコは空を見上げながら言った。その言葉にユイは思わず笑顔になった。
「うん、行こう。ちゃんと覚えとけよ。この件が片付いたら絶対に行くからな」
「そっちこそ。あんたのおごりだぞ」
テンションが上がったシュウイチが歌うように言って、それにイサコも笑顔で返した。2人はそうして流れる雲を見ながらしばらくの間笑い合っていた。

「よし。行くぞカズマ」
シュウイチはそれを見届けて安心し、階段を降りようとした。
「どこに行くんだ？」
「さっきサオリからかっさらった情報のウラを取りに聞き込みにまわる。日曜日のイベントについてだ。そしてあわよくば、そのイベントの日にすべてのケリをつける。サオリもこの日に勝負をかけているに違いない。シュウとイサコをさっさとデートに行かせるために、オレたちも本気だすぞ」
「なに？サオリからかっさらった情報って？」

ユイが階段を降りて行くレインに訊ねた。
「さっきちょっとサオリと色々話合ったんだが、そこで気になる情報を掴んだんだ。ユイも来るか？その時のことも詳しく話す」
「わかった。私にも協力させて」
ユイはレインとカズマについて行くことにした。３人は屋上にイサコとシュウイチを残して階段を降りて行った。

「よし、そろそろ戻るか。昼食も食べずにここに来たから、ちょっとお腹がすいた」
「ああ、僕もだよ。じゃあランチにしようか。次の時間が音楽だから、教室にはそんなに人も残っていないだろうし」
イサコとシュウイチも立ち上がり、教室に戻るために屋上を出た。
「あれ？」
その時扉の裏に誰もいないことに気付いてシュウイチが訝しんだ。
「どうかしたのか？」
「いや、なんでもない」
シュウイチはずっとレイン達がここからイサコを見守っていたことは黙っておくことにした。
その時イサコのメガネに着信が入った。
「誰からだ？オバちゃん？もしもし？」
イサコは相手をウインドウで確認してから電話に出た。
「イサコ、今学校か？」
「そうだ。何か用事でも？」
「例の雑誌記者、大谷さんと連絡を取ってくれないか？」
玉子の声が少し切実なのをイサコは感じ取った。
「何かあったのか？」
「詳しい事情は会ってから話す。とにかく今日中にでもあの人と話がしたいんだ。なんとか頼んでくれないか？」
「わかった。大谷には伝えておく。なんでそんなに焦っているのかも後できちんと説明してくれ」

そうしてイサコは電話を切る。何かまた厄介事が増えたんじゃないかと訝しんだ。

「何があったんだろう。普通じゃなかったよね。今の焦りようは」

玉子の声を聞いていたシュウイチが考え込む。

「多分良くないニュースだろう。とにかく、大谷と連絡が取れるかどうかだ」

そうしてイサコはすぐに大谷に電話した。すると大谷は放課後会ってくれることになった。イサコは時間と場所をセッティングして、折り返し玉子にその旨を伝えた。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part6

午後に入ったところで、メガマス金沢支社に1台の高級車が訪れた。乗っていたのはメガマス社長、桝田章太郎だった。桝田はどうも怪しい動きを見せている金沢支社を調べるためにわざわざその足で視察に来たのだ。桝田は入り口で出迎えた支社長秘書に案内され、自分の義父にあたる金沢支社長と面会した。

「いやあ、わざわざ遠いところをご苦労だったな、章太郎君」

四角いフレームの老眼用のメガネをかけた白髪で初老の男性、金沢支社長が桝田に声をかけた。すぐに支社長室のソファーに促す。

「お久しぶりです支社長。と、挨拶はこのくらいでいでしょう。すでに今朝の話は聞いています。まずはそれについてお聞きしたいことが」

「今朝?あのゴシップ記事のことかな?」

すぐに秘書も出て行って、部屋には2人だけになった。

「あの記事にあることは本当ですか?僕は金沢での交通事故は、電脳ナビが原因ではないと聞かされてきました。先日メガネの不具合についても公表を行ったばかりです。あの記事がもっと取り沙汰されれば、メガマスの信用は完全に失われます」

「それについては現在調査中だ。私もその事故については君と同じ報告を受けていた。今朝の記事には随分と驚かされたよ。記事自体がかなりの眉唾だけどもね」

桝田は嘘くさいなと思った。支社長はこの件で焦ったり動揺している素振りが一切ない。

「本当のことを言ってください支社長。記事と一緒に公開されていたサーバーの点検資料は、あれは本物なんじゃないですか?ねつ造されたものとは思えないと、管理室本部長も言っていました」

「調査中だと言ったはずだ。資料が本物だったとしたら、それは下からの報告がウソだっただけのこと。その空間設計室には業務停止

命令を出した。この調査が終わるまでな」
　支社長はこの事態を受けて、事故の隠蔽を行った疑いのある設計室の機能を停止させた。それには設計室チーフの友和も反抗したが、支社長はこれを強行した。おかげで設計室に入っている玉子も表立って動けなくなってしまった。
「こんな時にですか？現在金沢では正体不明の暗号が目撃されていて、おかしな空間事故も相次いでいます。今設計室の業務を止めて、誰がその代わりを」
「監査役の人間に代わりをさせている。設計室はあってもなくても一緒だ。彼らはせっかく導入したサーチマトンを何者かにハッキングされて、ただ慌てていただけだからな」
　支社長はその言葉を友和にも浴びせて黙らせたのだ。
「それで本当に大丈夫なんですか？もし事故が起きれば、もう釈明できませんよ」
「心配は無用だ。少なくとも交通事故を隠蔽した疑いのある設計室に任せるよりはマシだ。この件については決定事項なんだ。いくら社長とはいえ、これを覆すことはできない」
　支社長がぴしゃりと言い放ったところで桝田は黙ってしまった。ここでは支社長の勢力が大きく、口を出してもムダだということはわかっていた。
「わかりました。それではその件についてはくれぐれも事故の起きないようにお願いします。それよりも、今日の本題に入ってもいいですか？」
「どうぞ」
　余裕の表情で支社長が次の言葉を促す。
「金沢支社がアプリコット社と進めている新しい空間インフラのプロジェクトについて、もう少し詳しい報告をお聞かせ願います」
「報告書はしっかりと本社に通達しているはずだが」
　とぼけていることが見え見えの口調で支社長が返す。
「確かに報告書は届いていますが、あれでは不十分なんです。と言

うより、はっきり言いますが報告書自体がデタラメであることはわかっているんです」

「おやおや。それで内部監査役をわざわざ送ってきているのかね」

支社長も一郎のことはとっくに認識していた。

「やっぱりわかっていたんですか。その方からまったく情報が届いて来ないのでおかしいと思っていました」

「やめようじゃないか、身内同士でスパイ活動のようなマネは。こちらも出来る限りの情報は公開しているつもりだが、何が不満なのかね？」

「報告書がきれいにまとまり過ぎているんです。実験を行ったが何も問題はない。万事順調。その実験というのも、実際に行われたかどうかさえも怪しいものです。実際はこの地でもっと他の危険な実験を行っているのではないかというのが、本社の幹部達の総意です。現在発生している空間不良も、その実験が原因なのではないかと言われているくらいですから」

「単なる推測に過ぎないな。それだけのことでわざわざ金沢まで出向いたのか君は。本社はそんなにヒマなのかね？」

支社長はどこか挑発的だった。確かに桝田の言っていることはあやふやで確たるものがなかったが、それをあざ笑うかのような態度だった。

「お望みならもっと明確な証拠を示しましょうか。実は例の報告書を、小野隆先生にお見せしたんです。あの方ならどこがウソなのかを見抜けるはずだと思いました。空間インフラについては、あの方の専門分野ですから」

「君も昔世話になったという電脳科学者のことかね。彼はメガマストとは関係のない人間だ。彼の言うことをいちいち真に受けない方がいい」

小さく息をついて支社長が言った。

「第三者の意見だからこそ参考になるんです。あの方の出した結論は、やはり報告書の記載はウソであるということでした。行われた

という実験にしても、果たしてこの設備でこれだけの成果があげられるのか、それが疑問だとおっしゃっていました」

「その人の言っていることは机上の空論だろう。実際に実験でそのように結果が出たのだから」

「もう1つ気になることもおっしゃっています。この金沢支社に出入りしているアプリコット社の研究員のリストについて」

「それも報告書に載せてあった通りだ。何か気になることでも？」

支社長はうっとうしそうな顔をして足を組み直した。桝田はその仕草に少しだけ動揺が見え隠れしたような気がした。

「そのリストに載っている研究員以外にも、現在金沢支社に出入りしている人がいますね？それについては社員のＩＤをくまなくチェックして確かめました」

「それは、研究員の頭数が足りなくなったから新たに補充したんだ」

「違いますね。そのＩＤのない研究員についても調べを入れさせてもらいました。その方達はアプリコット社員じゃありません。驚くべきことにその方達はみな、海外で人工知能の研究を行っている研究者だとわかりました」

その言葉に支社長は固い表情のまま顔を桝田から背けた。

「新しい空間インフラと人工知能の関連性。これが今本社の中では最もホットな話題です。ここまで明らかになっている中で、もうとぼけることはできませんよね？」

桝田が支社長に迫る。桝田にとっての切り札をきったのだ。

「……人工知能、俗に言うＡＩは電脳ペットにも使われている。今更真新しいものではない。新しい空間インフラの中での電脳ペットの耐久性を調べる実験の準備を進めていたんだ」

「そのためにわざわざその筋で世界的に有名な研究者を、名前を変えてまで出入りさせていたというんですか？腑に落ちない話ですね」

「そんなに疑うのなら、研究室を視察すればいい。その目で確かめるのが一番手っ取り早いだろう。私も今朝のことで色々忙しくてね」

そう言うと支社長はソファーから立ち上がった。

「もちろんそのつもりです。でも、うわべだけ見せられたのでは来た意味がありません。これから本社の研究員とともに、この金沢支社の研究施設をくまなく調べさせていただきます。社長権限で全施設への出入りを強行しますが、よろしいですか？」

「ご勝手に。見るものを見て満足したなら、これ以上言いがかりをつけないように」

支社長が言うと桝田は頭を下げて部屋から出て行った。支社長は1つため息をつくと電話を取り出した。すると申し合わせたかのようにその電話が着信した。

「私だ」

「聞いていましたよ。最新鋭の電脳盗聴器だけあって音声が驚くほどクリアでした」

「後で回収しておけよ神崎」

「もちろんそのつもりです」

老眼用のメガネでは見えないが、さきほどまで腰掛けていたソファーの前にあった机の裏に、その盗聴器が仕掛けられているはずだった。もちろん、支社長がその使用を神崎に認めていたのだ。

「本社があそこまで掴んでいたとはな」

「なんと言っても、本社の情報機関を鍛え上げたのはこの私ですから。しかし、私にもまだ彼らを動かすことだってできます。社長が連れて来た研究員というのも、すでにこちら側に取り込んでおります」

神崎の報告に支社長は小さく笑う。結局桝田の努力は徒労に終わることになっているのだ。その辺は詰めが甘いと思った。

「そうか。本社に真実を掴まれる心配はひとまずなさそうだな。それより、例のプログラムはまだなのか？」

支社長の余裕を含んだ声色が変わった。

「まだもう少しかかるそうで。この間にまた彼女が動き出すと厄介ですね」

「急がせるんだ。ここに来て空間に変質をきたすようなことがあっ

てはならん」
「わかりました」
神崎が言うのを聞き届けて支社長は電話を切った。

#１８　分かち合えない痛みを抱いて　ｐａｒｔ７

その日の放課後、イサコとユイ、そして金沢黒客メンバーは夕日寺公園に集まっていた。そこで玉子と大谷が話す機会をセッティングしていたからだ。場所はいつも通り黒井北公園にしようと思っていたのだが、玉子の希望でそれは変更した。それには何か理由があるらしかったが、まだイサコは聞いていない。ともあれ、今日の出来事を報告するついでに、大谷と玉子の会話を聞かせてもらおうというのが今日のイサコ達の目的だった。

「お疲れーす」

イサコ達が待っていたところで、玉子よりも先に自転車にまたがった大谷が現れた。もはや愛車となっているその観光用のレンタサイクルを、イサコ達の座るベンチの横に停めた。

「あれ？設計室の人は？」

大谷が辺りを見回しながらイサコに訊ねる。

「今しがた少し遅れると連絡があった。もう少し待ってくれ」

「なんだ。呼び出しておいて遅れるなんてどういうつもりだ」

そうぼやくと大谷は、イサコとシュウイチとユイが座っているベンチの隣のベンチに腰を下ろした。そして胸元を探ってタバコを取り出すと、ライターで火をつけて吸い始めた。

「そう言えば、今日学校は大丈夫だったのか？掲示板にあんなニセ情報が書き込まれて、周りの連中も過敏に反応したんじゃないかと心配したんだが」

「ああ、それは」

大谷に訊ねられてイサコはうつむいてしまった。今朝のことを思い出すのはツラかった。そこでレインが大谷の隣に座り、小声で今日のことをイサコに代わって説明した。

「オッサンの心配している通りのことがあった。今朝、イサコのクラスメートがそのことで次々に詰め寄ってきたらしい。言われもな

いことで誹謗中傷されて、イサコもかなり傷ついている」
「本当か？お前、それでちゃんとこの子を守ってやったんだろうな？」
「守ったのはイサコと同じクラスのシュウイチやユイだ。２人とも自分に攻撃が向けられることも顧みないでイサコをかばったんだ。それで２人もかなり傷つけられた。でも大丈夫だ。イサコもシュウイチもユイもそんなことで心が折れたりしていない。必ず今回のことは解決してみせるって」
「そうか。えらいぞ君たち。そういう陰湿ないじめには毅然とした態度で立ち向かうことが大切だからな」
レインの話を聞いておおいに感心した大谷がイサコとシュウイチとユイに声をかけた。仲間のためにいじめに立ち向かうのは、なかなかできることじゃない。
「ああ。本当に２人には助けられた。それに、サオリから話を聞き出してくれたレインとカズマも良い仕事をしてくれた」
イサコは先ほど、レインがサオリと会った時の話を聞いていた。朝の出来事で落ち込んでいる自分に代わって話を聞いてくれたことに、イサコは感謝していた。
「お前が彼女から話を聞いたのか？で、彼女はなんて？」
興味津々な様子で大谷がレインに訊ねる。
「あの掲示板の書き込みをしたのは自分だと」
「彼女自身が認めたのか？確かに彼女以外にあり得ないと思っていたが、それでも前までの様子からするとそれも知らんぷりするもんだと思っていた」
大谷が考え込む。サオリに何か心境の変化があったのだろうかと思った。
「オレもそれを覚悟で話を聞いたんだが、案外あっさりしていた。と言うのも、サオリには今回の件に関しては罪悪感があったみたいだ。おそらくあの書き込みをサオリに強要したのは例の協力者だ。しかしサオリはイサコを傷つけたくはなかったんだろうが、それで

も協力者を裏切ることはできなかった。サオリはその意識から、オレに問いつめられた時にあっさりとそれを白状したんだろう」
「やはり、彼女もイサコのことを嫌っているわけじゃないと？」
「そうじゃなければそこまで話してくれない。でもまあ、協力者の話になるといつもの感じに戻って、何も話してくれなくなったけど。だからオレたちも、ちょっと強引な方法でサオリから情報をかすめ取ろうと考えた」
「強引な方法？」
「ああ、それで面白い情報を掴んだんだが、それはまた後でだな」
レインが公園の入り口の方を見て言うので、大谷やイサコ達もそちらを向いた。ちょうどその時玉子がタクシーから降りてこちらに駆け寄ってくるのが見えた。
「すみません、呼び出しておいて遅れてしまって」
玉子は真っ先に大谷に謝った。今日の目的は大谷の話を聞くことであり、大谷の機嫌を損ねるのはまずいと思っていたのだ。
「ああ、別にかまわない。今この子達から興味深い話を聞いていたところだ」
大谷が軽いノリで気にしてないという風に返す。
「で、どうしたんだ？今日は前みたいにバイクに乗ってきたわけでもなさそうだし、それになんで黒井北公園じゃなくて、こっちの公園を指定したんだ？」
イサコが玉子に訊ねた。大谷を呼び出させた理由も含めて、イサコは玉子に聞きたいことが山ほどあった。
「ああ。言いにくいことなんだが、実は空間設計室に業務停止命令が降りてきてな、うかつに動けなくなったんだ。今も上の監視から抜け出して来ている。それで遅れたんだ」
「はあ？何でこのタイミングで業務停止命令なんだよ？おかしいだろ」
レインが驚いた一同を代表して玉子に言った。
「設計室がそんな処分を受けた直接の原因は、この人だ」

「オレ！？」
玉子が大谷の方を見ながら言うので、大谷も驚いた。
「おい、また何か変なことでもやらかしたのか？」
イサコが少し呆れた様子で大谷に訊ねる。
「またってなんだ！？オレが今まで変なことやらかしたことでもあったか？ないだろ！アンタもいきなり何を言い出すんだ」
大谷が自分の潔白を主張するように返し、玉子の方を見た。
「今朝『週刊ゴールド』のＷＥＢページ版に掲載された記事。去年の黒井交差点の事故における電脳ナビの誤作動について。あれはあなたが書いたものですよね？」
「去年の黒井交差点の事故って、サオリの家族が巻き込まれた事故のことか？」
玉子の言葉を聞いてイサコが大谷に確認した。
「ああ、そうだ。その事故について調べているうちに新事実を掴んだからな。それを記事にさせてもらったんだ。気になるなら君たちも読めばいい」
大谷はそれについては認め、ウインドウに記事の掲載ページを出してイサコ達に渡した。
「おい。ここに書いてある事は本当なのか？」
イサコは記事を読んで、玉子の方に確認した。
「私にはわからない。私の上司でも、この事故については上から詳しいことを聞かされていないらしいんだ」
「上司って言うのは、シュウイチの父や小此木の父のことだろう？」
「ああ。２人とも事故についての詳しい説明を求められたそうなんだが、上層部は逆に圧力をかけたらしい。この事故についてはもう掘り返すことのないようにって」
玉子の説明とこの記事の内容から、メガマス金沢支社上層部がこの事実を隠蔽しようとしたことは、イサコ達にも容易に想像できた。
「で、上層部が設計室の業務停止を命令した理由は？」
そこで確認するように大谷が玉子に訊ねた。

「設計室はこの事故の真相を隠蔽した疑いがある。そんな部署に、空間不良の調査を任せることはできない。また事故を隠蔽されかねないからだと。それにこの記事の根拠としてあげられていた資料をリークした人間が設計室にいるはず。その取り調べを行う必要もあると上は言ってきました」

「とんだ言いがかりだな」

かなり呆れた様子でレインがつぶやいた。レインもシュウイチの父のことは知っており、隠蔽などするはずがないと信じていた。

「まあ、これでわかっただろう。金沢支社の上層部は、この件で設計室をスケープゴートにするつもりだ。アンタも気をつけるんだな」

大谷は玉子の話をメモに取りながら言った。今の話で事故の真実を金沢支社が掴んでいたのは間違いないと確認できた。

「シュウイチの父はどうなる？処分の対象にならないのか？」

イサコが心配そうに大谷に訊ねた。

「今のままでは危ないな。当時の設計室のチーフはその事故の直後に辞職している。その行動の意味を考えれば、事故の真実を上層部に告げる代わりに自身の今後の保障を要求したというところだろう。上層部は下手に彼を処分すれば、彼から真実が漏れて道づれにされる危険性を考えた。調べてみると彼はその後、メガマスの関連会社にそれなりのポストで雇われている。代わりに何も知らない君の父が設計室のチーフに就任した。こういう時のために責任をなすりつけられる都合のいい存在として」

「そんな……父さん……」

大谷の言葉にシュウイチはかなりショックを受けた。そうしてシュウイチはうつむいてしまった。

「おい！シュウイチのことも考えろ。なんでそんなストレートな言い方をするんだ！言葉をもっと慎重に選べ」

イサコが怒って大谷に詰め寄った。

「悪い悪い。しかしそれが事実なんだから仕方ないじゃないか」

「アンタなら設計室や上層部の事情もわかっていたはずだろう。設

計室にしわ寄せがいくことを知っていながら、なんであんな記事を書いたんだ?」
イサコは大谷の行動はちょっと無神経なんじゃないかと思いながら言った。
「あのなあ。オレはそれが仕事なんだよ。設計室がどうなろうと、それはオレの仕事とは関係のないことだ。だいたいオレだってこの前の追突事故で車壊されてるんだよ。あの事故も同じ原因かもしれないだろ。オレは車の修理代を稼がせてもらっただけだよ。車両保険にも入ってなかったしな」
大谷も開き直ってイサコに反論した。大谷もイサコ達に協力をしているものの、本来の雑誌記者として仕事をまっとうしなければならない。今回のネタは、放っておく手はないほどおいしいものだったのだ。
「だいたいアナタ、どこからあの資料を手に入れたんですか?設計室でさえあの資料は手に入れることができなかったっていうのに」
玉子が大谷にその最大の疑問をぶつけた。一体誰が大谷にリークしたのか、それも大きな謎だ。
「ふん。記者がおいそれと貴重な情報源を明かすと思ってんのか?いくらこの街の空間不良を一緒に調べているアンタ達にも、それは言えないな」
鼻で笑って大谷が返した。
「何を!だったら腕づくで聞き出してやるまでじゃ!」
シュウイチがしょんぼりとしている中、けろっとしている大谷の態度に怒り狂ったカズマが立ち上がって言った。
「よせカズマ。言っただろう、コイツの電脳力は計り知れないって。下手をするとここにいる全員のメガネが壊されるかもしれないんだ。あまりコイツに歯向かうな」
イサコがいきり立つカズマに言い聞かせる。カズマも悔しそうな顔をして腰をおろした。
「でも、今のメガマスでアンタとつながりのある人間っていうのは

限られてくる。アンタにリークしたのは、旧コイルス一派じゃないか？」

イサコは大谷と出会った時の話を思い出して訊ねた。

「旧コイルス一派だと？この人と一体何の関係があるんだ？」

玉子は驚いてイサコに食いついた。

「コイツは昔、科学雑誌を書いていたそうだ。その取材にコイルス社に何度も出入りしたらしい。そのつながりがまだ残っているはずなんだ」

「……そういうことか。まだメガマスの中に旧コイルスの残党が残っていて、メガマス現政権の転覆を狙っているとすれば、今回の資料をこの人に提供し、メディアからの攻撃に晒したという筋書きも考えられるな」

イサコが説明して、玉子が考え込んだ。そう仮定すると大谷の目的が空間不良の真実を知ることだという話も納得できる。

「ふーん。なかなか面白い推理だな。さあ、果たしてそれが真実なんでしょうかねえ」

大谷はとぼけるようにおどけて言った。しかし目的を一にしていて、これまでも多くの情報をもたらしてきた以上、この大谷と手を切るという選択肢は考えられない。イサコ達は少し不本意ながらも、この大谷とまだ協力体制をとらなければならないと思った。

「でもな。オレも金沢支社の上層部は許せないと思う。こんなことがまかり通ってはいけない。だからいずれ、オレがすべての真実を公表してやる。君の父の潔白を証明して、上層部に罪を認めさせてやるよ」

大谷も改まってまじめな顔つきになり、シュウイチにそう声をかけた。シュウイチは顔を上げて、少し安心した表情を見せた。この大谷もかつてはメガネの不具合の真実を掴むために奔走した男だ。その正義感を、少しは信用してもいいかなとイサコは思った。

「でも問題は、これから設計室をアテにできなくなったことだな」

そこでレインがつぶやいた。

「ああ。黒井交差点の警備も、上層部が代わりに派遣した社員があたっている。今日の場所をこの公園に指定したのもそのためだ。今は設計室職員がうろうろと外を出歩いていてはいけないことになっているから」

玉子が申し訳なさそうに言う。専門外である社員が警備したところで、事故を防ぐことができるかどうかも不安だ。

「どうするイサコ？あさっての例のイベントで、極秘裏に設計室職員を忍ばせておく作戦は使えなくなったぞ」

「あさってのイベント？」

レインがイサコに耳打ちした言葉に大谷が引っかかった。

「ああ。さっきアンタにした話の続きになるんだが、オレ達はサオリから強引に情報をかっさらったんだ。その時サオリのメガネから引き抜いた情報の中に、これが混じっていた」

そう説明するとレインは、イベントの告知がされているＷＥＢページを表示し、大谷と玉子に見せた。

「ふーん。『ＶＲクエスト３』の大会があさってに開催されるのか。これが彼女のメガネの中にあったって？」

大谷がレインに確認する。

「そうだ。どう考えても怪しいだろ。サオリはこんなイベントに参加するキャラじゃない」

「サオリがこのイベントで何らかのアクションを起こす可能性があると考えた私たちは、オバちゃんに頼んで設計室にこのイベントを警戒してもらおうと話していたんだ」

レインとイサコが順に説明した。そこで玉子はＷＥＢページを見ながら考え込んだ。

「このイベント、かなりの数の子どもが集まるという話を聞いてるけど、なんでこのイベントに彼女が？場所だってこれまで黒井交差点や学校だったのに、いきなりメガマスの丘って……」

「それに、そんな人数が集まるところで黒井地区での空間不良と同じことが引き起こされた場合、恐ろしいことになるぞ。彼女は一体

何がしたいんだ？」
　玉子に続いて大谷が言った。これまでは人目を避けるように行動してきたサオリにとって、今回のこの狙いが本当なら、明らかに今までと違う行動となる。あるいはこれが本命なのかもしれないという思いも玉子や大谷にはよぎった。
「サオリの目的も何もわからないが、放っておくと危険だってことは間違いない。念には念を入れて、このイベントを警戒しないといけないと思う。でも設計室が動けないと言うのなら、もう私たちだけでそれをするしか」
　イサコはそれ以外の選択肢はもうないと思いつつ提案する。イサコはどうしても悪い予感が拭えなかった。玉子が暗号使いだった時代には、通路の暴走から子どもの集団意識不明事件も起こっている。
「確かに見過ごすわけにはいかない。設計室も動けないとなれば、上層部にこのことを報告するしかないけど、取り合ってくれるかどうかもわからないわ。だから、イサコの言う通りここにいる私たちだけでなんとか警備するしかないと思う」
「彼女はメガネをフリーズさせる暗号を使える。物理結界も使えるが、それはオレの暗号でどうにかなるからいいか。でも、このメンバーでどうやって彼女を止める？この前は惨敗だったからな」
　玉子の言葉を聞いて、大谷がそれが可能なのかという疑問を投げかけた。先日黒井北公園でサオリと対峙した時も、結局彼女を追いつめることはできなかった。あの時は幸運だったのか事故はなかったが、今回はどう転ぶかわからない。
「アンタと私で解析しているサオリの暗号式。これの解除暗号をどうにかあさってまでに仕上げるしかない。これがサオリを止められる唯一の方法だ」
　イサコが大谷に言った。サオリがいつも設置している暗号を無効化する暗号を、イサコは昨日あたりから大谷と相談しながら組もうとしていた。それこそが切り札であり、最後の希望だった。
「そういうことなら、オレも本腰入れて暗号の解析に取りかかると

するが、もし出来なかった場合はどうするんだ？」
　大谷が鋭い目つきでイサコを見た。
「その時はその時だ。出来なかった時のことを考えるくらいなら、その暗号の完成に全力を尽くすべきだ。必ず暗号は完成させる」
　イサコが力強く言った。自分の戦いにケリをつけなければならないという思いもある。サオリがミチコと何か関係があるのだとしたら、その暗号は両者を分つためのものだ。
「わかったイサコ。私も協力しよう。メガばあからもアドバイスを聞くことにするわ」
「ありがとう、オバちゃん」
　玉子は業務停止になった設計室より、こちらの協力に全力を尽くすことに決めた。電脳力に長けているこのメンバーなら、上層部の派遣した職員よりもよっぽど頼もしい。
「で、イサコ。オレたちはこれからあさってまで何をしていればいいんだ？」
　そこでカズマがイサコに訊ねた。
「簡単だ。エネルギーを充電しておいてくれ。暗号が完成したら、おそらくあさってがサオリとの最終決戦となる。下手をすればサオリの協力者も絡んでの総力戦になるかもしれない。とにかく今は、ゆっくり休んでくれ」
「へっ。了解！」
　カズマもレインも、そしてシュウイチやユイも気合いが入ったようだった。その日にすべてを終わらせようと、メンバー達は意気込んだ。
「暗号が完成したら、あさっての段取りの確認のために。もう1度確認のメールをまわす。それでいいな？」
「それも了解だ。とにかく暗号の完成に向けて頑張ってくれ、イサコ」
　レインが威勢良く返し、大谷や玉子も表情を引き締めた。あさっての決戦日に備え、各々の準備をするためにこの日は解散となった。

#18　分かち合えない痛みを抱いて　part8

翌日の土曜日、イサコは解除暗号の完成まであと少しまでこぎつけた。そして最後の仕上げを玉子と大谷と詰めるために、3人はまた夕日寺公園に集まることになっていた。昼過ぎに家を出たイサコだったが、その道中でメガネ電話が鳴り始めた。発信元は知らない番号からだった。

「もしもし?」

「あっ、イサコ?誰だかわかる?」

電話の相手は少し軽い感じで訊ねて来た。イサコも聞き覚えのある声だった。

「その声……橋本か?」

「良かったあ。忘れられてるんじゃないかと不安だったからさ」

「忘れるわけないだろう。大黒のメンバー達は、私にとっても特別な存在だからな」

ホッとした様子のフミエに、イサコも少し尖っていた気分が和らいだような気分だった。大黒のメンバーの記憶の中にも、自分が存在していることがうれしくもあった。

「うれしいこと言ってくれるわね。やっぱり変わったわねえ、あんた。ヤサコやマイコ先生の言っていた通り」

「ああ、よく言われる。それで、何の用だ?それにこの番号教えてたっけ?」

フミエの言葉に冗談っぽく返したところでイサコは用件を訊ねた。わざわざ電話をかけてきたということは、何か大事な用があるのだろうとイサコは思った。

「ああ、この番号はヤサコから聞いたの。電話したのは、あんたにちょっと聞きたいことがあってね」

「聞きたいこと?」

イサコが聞き返してから少し間があった。

「……あんた、そっちで変な噂が立ってるみたいじゃない。ミチコを呼び出そうとしているとか、暗号を使っているとかどうとかで。それに実際金沢では変な事故が起きているんでしょ？」

フミエは少し言いにくそうだった。もちろんイサコを疑っているわけじゃないというのはわかったが、かなり不安そうな声色だった。

「……知っていたのか。その噂が書き込まれている掲示板を見たとか？」

「うん。初めに気付いたのはダイチ達。私やヤサコは最近メガネで遊んでないからさ。黒客がまたしょうもない金儲けの話を探しているところで、たまたまその書き込みを見つけたんだって。それで昨日、私達に相談して来たの」

黒客は1ヶ月前にイサコがキラバグを集めていたという書き込みがなされた時にも、ヤサコやフミエ達とも相談を持った。メンバー達はまだイサコのことが心配なのだ。今回のことは書き込まれたのがかなり具体的な情報だっただけに、メンバーの不安も大きかった。

「そう、だったのか。すまないな、あんた達には心配ばかりかけて」

イサコはメンバー達みんなに対して謝りたかった。自分が危なっかしいばかりに、不安にばかりさせてしまっていることを。

「別にそんなことはいいの。でも実際、あんたがまたひどい目に遭っていないかが気がかりで」

「ひどい目か……確かに昨日学校でちょっとイヤなことがあった。その書き込みで」

イサコは正直に答えた。ここで何もないとか強がっても、また余計に心配をかけることになるかもしれないと思ったからだ。

「それって、あんたが大黒にいた時にもあったようなこと？ごめん。あの時は、私もあんたのことを信じてあげられなかった。あの時のことは本当に反省してるの。ダイチ達もそう言ってたわ。だから金沢でも同じ目に遭っていないかと思うと心配で心配で」

「あの時のことはいい。私にも責任があったからな。逆にあんたにそうやってしんみりされると、私の気分も暗くなる。私は大丈夫だ。

今の私には頼もしい仲間がいるんだ。痛みを分け合える仲間が」
トーンダウンしたフミエを、逆にイサコがたしなめるように言った。フミエはそれに驚いたようだった。
「……何てこった。あんたにそう言われる日が来るなんて。全然私の知ってるイサコじゃない」
「そう言われると面映いが」
イサコがそう返してフミエは笑った。イサコもつられるようにして笑い返した。
「そのあんたの仲間っていうのは、金沢黒客っていうらしいじゃない。しかもメンバーの1人がヤサコのいとこだって？」
話を変えるようにフミエが言った。そのことは少し前にヤサコと電話で話していた。
「そうなんだ。小此木のいとこもそうだが、メンバー全員がまあまあ気の良い連中で、時々暴走したりもするけど本家の黒客よりはずっと頼もしい」
「いいなあ。中学に入っても相変わらずバカなダイチ達と交換してよ」
「私もダイチ達は願い下げだ。そっちはそっちで仲良くやってくれ」
イサコが返してフミエがまた吹き出した。
「そうね。あんたもヤサコのいとことか、おいしい男の子ゲットしたじゃない。京子ちゃんの話によると、その人かなりのイケメンらしいね」
フミエがちゃかすように言った。
「バカ言うな。京子って小此木のあの幼い妹だろ。まあ確かに小此木のいとこは平均点以上だが、別にそんな親密な関係じゃない」
イサコは何を勢いでべらべらとしゃべっているのだろうと思った。それ以上にこの話題で胸の鼓動が速くなっている自分に戸惑った。
「ふーん。まあ、仲良くしてくださいな」
フミエも今のイサコの反応で色々なことを察したようだった。恥ずかしいのでイサコは話題を変えることにした。

「話は変わるが、なぜあんたなんだ？」
「あい？」
　質問の意味がわからないという風にフミエが訊ね返す。
「なぜあんたが私に電話をかけてきたのか聞いてるんだ。あの夏以来、大黒の連中とは小此木以外とご無沙汰だったからな。あんたから電話がかかってきたのが意外だった」
「うん。まあ、ちょっと理由は色々あるんだけどね。私が声を聞きたかったのもある。でも大きいのは、あんたがヤサコにばかり依存しないようにするためかな」
　イサコは心の中にあるもっとも柔らかい部分をいきなりつつかれたような気分になった。
「あんたも、それがわかっていたのか。あの夏から会ってもいないっていうのに」
「なんとなくだけどね。厳密に言うなら、ヤサコに依存しようとしまいとするあんたなら、ヤサコに電話をかけさせたところでただ強がるだけだと思ったからよ」
　次から次へと本質を突いているような言葉がフミエから飛び出す。やはり自分は単純な人間なのだということを、イサコは噛み締めた。
「あんたの言う通りかもしれない。これが小此木なら私はこんなに正直に話せていなかったかもな。なんだろう。繋がり合うことができたのはうれしいんだが、これ以上アイツに迷惑をかけたくないっていう思いもあるんだ。これって、関係としてはどうなんだろうな。やっぱり友達って、どんな悩みでも気兼ねなく話せる関係のことを言うんじゃないのかな」
　イサコの迷いもうかがえる言葉に、フミエはしばらく黙って考え込んだようだった。
「……友達ってそういう風に一概に言えないんじゃない？あんたは現状の悩みを正直に私に話してくれたけど、でもあんたの中では私よりヤサコの存在の方が大きいわけでしょ？もちろん、私もあんたとは友達でありたいと思ってるけど」

「ありがとう。ひょっとすると私は小此木にさよならを告げたことで、友達というものがさらにわからなくなったのかもしれない。私にはあんたみたいに、友達とは何なのか気にしないで生きていくことはできないんだ」

「それも人それぞれ。あんたがさっき痛みを分かち合える仲間って言った金沢黒客も、友達かどうかはわからないんでしょ。それを悩むのは仕方ないけど、でもそういう存在があるっていうことが1番大切なことじゃない。あんたは絶対にその人達の手を離したらだめよ」

フミエの言った言葉はイサコも思っていることだった。絶対に手を離してはいけないということはわかっている。お互い信頼もしている。それでもイサコの中に不安があるのも事実だった。友達というものがわからない、そのある種の怯えを呼び起こしている弱さがまだ自分の心の中に存在していること。それが何より不安だった。

「離しはしない。こんな私を支えてくれた人達は、私の宝物だからな」

それでもイサコはそう答えた。それは自分に言い聞かせるための言葉だったのかもしれない。

「うん、絶対よ。それより、こっちにも友達に悩みを打ち明けられない人がいるみたいなの」

「何？誰だ？」

唐突なフミエの言葉にイサコは驚くように訊ねた。

「ヤサコ。なんかね、昨日例の掲示板を見てから様子がおかしいの」

「・・・・・自分で言うのもおかしいが、それは私を心配してくれているからじゃないのか？」

イサコは申し訳なく思った。結局ヤサコにも心配をかけっぱなしだ。

「いや、もちろんそれもあるんだけど、どうにもそれだけじゃない様子なのね。ヤサコのことだもん、見てればわかる。そこでヤサコがあんたには何か相談してないかなって聞こうと思ったのも、私が

電話した理由の1つ」
　フミエは確信しているようだった。ヤサコが自分たちに何か隠し事をしていることを。イサコはそれを聞いて心辺りを考えてみた。そして1つだけその理由を思いついた。
「……ひょっとしてあの事かな」
「あの事？何か聞いてるのね？」
　フミエがやっぱりと言う風に食いついてきた。
「いや、別に連絡しあったわけじゃない。むしろ、あんた達が知らない方が不思議な気がするんだが」
「なに？どういうこと？」
「あんた達は今月の初めに事件に巻き込まれたんだろ。あれは宗助の陰謀だったらしいな」
　イサコは確認するようにゆっくりと訊ねた。
「ああ、あの事件？でもあれは解決しているようなものよ。問題のタケル君のお兄さんも逮捕されたしね」
「その時小此木の身に何かあったんだろう？」
「あったあった。ヌルに“あっち”に連れて行かれたのよ。でもあんたもそのことはマイコ先生を通じて聞いたんでしょ？」
「聞いた。それで今こっちに出張で来ているオバちゃんから、その事件についてもっと詳しい話を聞いたんだ。多分小此木が悩んでいるのはそれだと思う」
「一体何？」
　フミエはかなり答えを急いでいるようだったが、イサコはここで口をつぐんだ。ヤサコが何に怯えているのかはこれまでの話を総合すれば見当がつく。ひとえにミチコのことだ。ヤサコはその事件でミチコに会ったという話をしていたと、イサコは玉子から聞いていた。そしてミチコのことはあまり思い出したくないとまで言っていたことも。そこから察するにヤサコは、ミチコにあまり良い言葉をかけてもらえなかったのだろうとイサコは思った。そしてヤサコはそのことをフミエ達にも相談しなかった。もちろんイサコにも。そ

れはヤサコ自身がそのことを忘れたがっているということでもあり、周りに余計な心配をかけさせたくないというヤサコらしい配慮があるはずだった。

ところが金沢の掲示板ではイサコとミチコの関係が書き込まれた。もちろんヤサコはイサコがまだミチコと会おうとしているとは思っていないだろう。しかし金沢でもいくつか不審な事故が起こっており、それはミチコが関係しているとヤサコは思ったに違いない。掲示板を見ておかしなリアクションをしたというのも、それに起因しているはずだった。

そこでイサコには2つ選択肢があった。それはこの話をフミエに正直に伝えるか、伝えないか。もしこのことを伝えてしまえばヤサコの思いを裏切ることになる。ヤサコは誰にも心配をかけたくないと思っている。イサコ自身はそれを知ってしまったが、フミエ達はまだそれを知らない。一方でフミエ達に伝えればヤサコを1人で悩ませずに済むということになる。イサコはその方がいいのではないだろうかと思った。

しかしそれでいいのかという思いもイサコにはあった。今のヤサコが抱えている悩みは、今の自分が抱えている悩みと似ている。そこでイサコは自分と置き換えて考えてみた。自分がミチコのことで悩んでいることをヤサコに知られてもいいか。答えはノーだった。今はお互いにミチコに関する悩みを持っていて、それを共有することもできる。今は2人同じ道に迷っていると言えるかもしれない。

しかし、今イサコは自分の力でミチコとの戦いにケリをつけようとしている。ミチコとの何らかの接触を試みようとしているサオリの手を封じること。それがイサコの勝利条件だ。そして自分がこの戦いに勝利するということは、ミチコを再び闇に閉じ込めるということだ。要は勝てばいい話だとイサコは思った。ここで自分が勝利すればミチコは消え、ヤサコが安心する報告ができる。フミエ達にも余計な心配をかけずに済む。

「……長いんだけど」

しびれをきらしたようにフミエがつぶやいた。イサコは考え込むあまり、ずっと押し黙っていたのだ。
「悪い悪い。やっぱり私が思ってたのは違うかもしれない。ごめん忘れてくれ」
「はあ？あれだけ引っ張っといて何それ？」
フミエは怒ったように返してきた。フミエのヤサコを心配する気持ちも十分わかるのだが、イサコは申し訳ないと思いながら告げた。
「おそらく小此木が悩んでいるのも、金沢の事故に関係のあることだろう。私はこれからオバちゃんとも協力して事故の真相を明らかにして、それを解決させる。あんた達は何も心配しなくていい。小此木にもそう伝えてくれ」
「ちょっと、わけわかんない。そう言ってあんたも何か危ないことしようとしてるんじゃないでしょうね？」
「だとしてもあんたに私は止められない。私は私の戦いにケリをつけるだけだ。大丈夫。さっきも言ったように私には心強い仲間がいる。必ず事件は解決させる」
そう言ったイサコの強い意志に、フミエも何かを感じ取ったようだった。
「……何か考えがあるのね。わかった。私は何も言わないわ。あんたほどのメガネ使いの言葉なら、信用してもいいわね。じゃあ、くれぐれも気をつけて。子ども達を助けようとしてヌルに連れて行かれた、ヤサコみたいなことには絶対にならないで！」
フミエの言葉はかなり切実な響きを持っていた。イサコは礼を言うよりも謝りたい気分だった。また心配ばかりかけてしまうことに対して。それでもイサコは心を決めて言った。
「ああ、約束する。事件が解決したら、金沢にも遊びに来ればいい。その時はもてなしてやる」
フミエはその言葉に少し安心したように小さく笑った。
「何かおごりなさいよ」
そうして電話は切れた。見上げた空は雲1つない、まるで遠く離

れた大黒までつながっているのではないかと思えるような青が広がっていた。

電話をしながら歩いていたので、約束の時間より少し遅れてイサコは夕日寺公園に到着した。すでにそこには玉子と大谷が待っていた。

「遅かったな」

「悪い。少し電話をしながら歩いていたものだから」

イサコは2人に謝った。しかし2人は気にした様子もなかった。

「喜べイサコ。今解除暗号の最後の1ピースが出来上がったぞ。玉子さんの師匠とやらのアドバイスが役立った」

大谷がハイテンションでイサコに告げる。

「本当か?それって小此木の祖母のことか?」

イサコは大谷の話を聞いて、メガばあの協力があったのだと思った。

「ええ。メガばあにあんたと大谷さんが組んだ暗号を見せて、最後の仕上げをしてくれたんだ。でもメガばあはあんたの暗号技術を褒めていたぞ。これを半分以上組んだのはあんたの功績だからな」

玉子もイサコを讃えるように言った。しかしイサコはさすがに暗号に精通しているメガばあの知識にも感謝したいと思った。

「いや、別に大したことはしていない。それより完成したのは大きいな。これで明日の目処も立ったってことか」

「そうだ。これで彼女の手を封じることができる。後はそれに焦った協力者が尻尾を出してくれるといいんだが」

「そうだな。協力してくれてありがとう。とりあえず明日は最終決戦のつもりで望む。またよろしく頼む」

イサコは2人に礼を言ってもう1度空を見上げた。そしてこの暗号が、自分とサオリを繋ぐ道になってくれることを切に願った。

#１８　分かち合えない痛みを抱いて　ｐａｒｔ８（後書き）

第１８話はここまでです。
次回第１９話にて金沢事件の真相がすべて明らかになり、第２部が完結します。
そして第２０話からはいよいよ最終章の第３部が始まります。乞うご期待。

#19　徒花の咲く庭　part1

「メガマスのある資料によると、イマーゴを持つ子どもの割り合いは1クラスに1人程度だという。しかしイマーゴにもレベルの差があり、私ほどのイマーゴ保持者は学校全体で1人いるかいないかだろう。しかしそれもよく考えてみるとあながち小さな数ではない。世界の不安定をもたらす因子は、思った以上に多いということだ」

　不気味なほどに晴れ上がった日曜日の朝。天気の変わりやすい金沢の街では珍しいほど、この日は雨の気配がなかった。

　イベント会場となるメガマスの丘に続く道は、すでに多くの子ども達でごった返している。会場はメガマス金沢支社の敷地の隣にある、広大な芝生の広場となる。子ども達は一様に上気し、ふもとから丘の上へと続く遊歩道をのぼっていく。その様子を遊歩道の入り口脇の林の中からチェックしていた玉子は、現在設計室で待機している一郎と連絡を取り合っていた。

「……やはりこれだけ多くの子ども達の中で、彼女を見つけるのは難しいかもしれません。そちらのモニタリングの方に頼ることになりそうです」

　玉子はサオリの容姿をしっかりと頭の中に刻み付けていた。しかし大勢の子ども達の中に紛れている可能性もあり、丘の入り口で取り押さえるという方法はムリがあると感じ始めていた。

「そうか。聞くところによると今日のイベントには１０００人以上の子どもが集まるらしい。設計室の窓からも会場に集まる子ども達の姿を確認できるが、なかなか壮観だ」

　一郎はまるで高校の体育祭を校舎から見ているようだと思った。

「どうしてもイベントを中止にしてもらうことはできないんですか？」

「昨日も話したようにそれは不可能だ。このイベントはメガマスが

協賛しているゲーム会社の一大イベントとして定着している。メガマスから中止を申し入れること自体がムリだし、何より今の僕らの発言権の弱さは君も知っての通りだ」

玉子はため息をついた。設計室の業務停止が言い渡されたのは一昨日のことだ。設計室はサオリの家族が巻き込まれた交通事故の隠蔽を行った疑いがあるとして、金沢市内で頻発していた空間異常の調査からもはずされた。しかし今日は休日で社内に人が少ないのが幸いだった。昨日玉子からサオリのことを聞かされた一郎と友和は設計室に潜り込み、イベント会場に空間異常が起きないかモニタリングをする段取りになっていた。

「上層部にこのことを報告されたんですか？」

玉子が流れる子ども達にも集中しながら訊ねる。

「一応はした。しかし上はあまり取り合うつもりはなかったようだ。そもそも話が漠然とし過ぎているからね。金沢市内で暗号を仕掛けていた疑いのある少女が、このイベントに現れる可能性がある。ソースが曖昧だっただけに、上もどう処理するかも困ったはずだ。それに今回のイベントで表立って警備が強化できない理由もある」

一郎が答えると次に友和の声が聞こえてきた。

「このイベントはあくまでメガマスの協賛だ。場所を貸してまでゲーム会社のプロモーションに協力している。このイベントで使用される『ＶＲクエスト』シリーズはメガネゲームの看板タイトルだからな。メガネの不具合の公表で今後売り上げが落ち込むと見込まれているだけあって、今回の力の入れようは半端じゃないと聞く。その一大イベントを成功させるために、ゲーム会社もこう要望を出したはずだ。今回のテーマは、メガネは安全で楽しいアイテムだということをアピールすること。そんなところでキューちゃんのような危険分子を飛ばすわけにはいかないだろう。上も事故には備えているが、警備は手薄だ」

「……なるほど。彼女が今日という日を選んだ理由もなんとなくわかりますね。これだけの人に紛れれば、人のいないところでコソコ

ソと暗号を置くよりも目立たない」
　サオリがメガマス側の事情もすべて見通しているかのように動いているのは、協力者の存在が大きいのだろうと玉子は思った。
「やはり今日は君たちに頼らざるを得ないようだ。そこに設計室職員がうろうろしていてもいけない。となると大黒からの出張で顔を覚えられていない君と、イサコ君達に頑張ってもらうしかない」
「もう1人いますけどね。設計室を業務停止に追い込んだ張本人が、これは自分の責任でもあるからって張り切っています」
　一郎からに言葉に、玉子が丘の上を見上げながら言った。そこで待機しているのは大谷だ。ちゃっかり今日のイベントの取材をゲーム会社に取り付けて、素知らぬ顔でイベント会場を警戒している。スキルがあるだけに頼りになることは間違いないが。
「その彼もよくわからないところがあるが、事故を起こさせないという思いは共有しているんだろう?そちらとも協力してなんとか事故を未然に防いでくれ。こちらのモニタリングにも動きがあればすぐに連絡する」
「シュウイチに伝えてくれ。絶対に無茶はするなって」
　一郎が電話を切ろうとした刹那、友和が玉子に伝言を残した。
「わかりました。子ども達は任せてください」
　友和もここに息子であるシュウイチが来ることを知っている。大人の都合で警備に入れない自分を、シュウイチが気遣っていることも知っていた。しかし親としては子どもにこの危険な任務を任せるというのは、やはり複雑なものがあったらしい。イサコ達を含めて会場に集まった子ども達を守ることが、自分の任務なのだと玉子は改めて認識した。
「遅くなってすまなかった」
　玉子が電話を切った時、イサコとユイ、そして金沢黒客メンバーが姿を見せた。
「ああ。おはようみんな。とまあ挨拶はそこそこにして、見ての通りだ。これでは彼女が会場に来ているかどうかもわからない」

玉子が遊歩道を行く子ども達を示しながら言った。
「わかっている。私たちもさっきまで遊歩道の真ん中辺りが見えるところで張っていたが、これじゃたとえサオリを見つけても声もかけられないと思った。それで仕方なく降りて来たんだ」
「そうか。仕方ないな。あまり気が進まないが、現行犯で押さえるしかなさそうだな」
「ああ。あんたの得意なパターンだな」
イサコの言葉は皮肉なのかと玉子は思った。大黒市にいた時はイサコを現行犯で捕らえようとした玉子だったが、イサコに通路を開かれるというミスを犯した。
「ところで、今日はこれだけか。この前公園で会った時にはもう1人女の子がいなかったか？」
玉子が何気なく訊ねたところで、イサコ達が苦い顔になった。
「ああ。彼女は来れないらしい。だから今日はこれで全員だ」
そう取り繕ったものの、イサコ自身はあの後アサミとは話もしていない。別にイサコはアサミに失望したとも思っていないし、できればまた一緒に話をしたいとも思っている。しかしお互いに気まずいのだ。イサコがそんなことで気を遣う必要はないとレインは言うのだが、アサミの本当の気持ちもわからないところで、どう声をかけたらいいのかイサコにはわからなかった。
「実は、昨日アサミは誘ってみたの」
その時ユイが思い詰めたような顔で口を開いた。
「そうだったのか。それは直接？」
レインがユイに詳しく訊ねる。
「うん、直接。私に会うのも気が進まないっていう感じだったんだけど、結構ムリヤリ連れ出したの。このままじゃいけないって思ったし」
「それは、ご苦労だったな」
レインは簡単な言葉で返したが、ユイ自身がムリしてアサミを誘いに行ったことはその場の全員が想像できた。直接ケンカをした後

の仲直りとは違って、アサミとの間にはお互いに言葉には表現しにくいわだかまりが横たわっている。声をかけに行ったユイも言葉の選び方に気を遣った。

「それでも、断られたんだね」

シュウイチがユイに訊ねる。

「うん。本当は申し訳ないと思っているし、イサコに謝りたいとも思っているって。それはウソじゃないと思う。アサミだってそんな悪い子じゃないから。でも、アサミが今のクラスの中でどう振る舞えば良いのか悩んでいるのもわかった。本当は自分が攻撃されるのが恐かったって、正直に話してもくれた」

「人ならそう思うのは当然だ」

イサコはアサミをかばうように言った。

「でもそう思っているんなら、どうしてここに来なかったんだ？」

「今日ここに速水さん達も来るんだって。ゲームに参加はしないらしいんだけど、小学校時代の男の子のグループが出場するから、その応援に」

レインの質問に対するユイの説明で、今日アサミが来ない理由も全員が何となくわかった。アサミは本当に今の自分の立ち位置で迷っているのだ。両方のグループが鉢合わせになる可能性もあるこのイベントに来たくないというのは、当然考えられることだった。

「アイツも来るのかよ。またイサコを見つけてギャースカ騒がれるのもめんどくさいな」

カズマが心底イヤそうな顔をして言った。メガネ使いが多く集まるこのイベントで、掲示板のことを言いふらされるのは任務に支障をきたす恐れもある。

「やっぱりイサコは変装した方がいいんじゃねえか？掲示板にも粗くてわかりにくいとはいえ画像が載せられたからな。エリナでなくても気付かれる可能性もある」

「とは言っても、そんな変装道具なんて持って来てないぞ」

困ったようにイサコが言ったところで、玉子が良い方法を思いつ

いた。
「よし、じゃあ髪型を変えましょ。その特徴的な長い髪を、大黒の時みたいなツインテールに」
「それで大丈夫かな？」
イサコが後ろ髪を気にしながら返す。
「大丈夫だろう。これだけ人が多い中でちょっと印象が変われば、誰も気付くことはないはずだ」
「ゴムなら持ってるよ」
レインも玉子の案に賛同し、ユイも持ち歩いているゴムをイサコに渡した。もう昔の自分に帰るしかないのかと、イサコは諦めた。
「よし、それなら私が結んでやる」
そうして玉子がイサコの前に進み出たところでレインがそれを遮った。
「空気読んでくれよオバちゃん。シュウにやらせてやってくれ」
「僕？」
レインの言葉にシュウイチは驚き戸惑った。
「シュウはいつも幼い妹達の髪を結んでやってるから慣れてんだろ？」
レインも少しいじわる顔になっていた。余計な配慮だとシュウイチは息をつく。
「それはそうだけど、イサコはいいの？」
「……べつに私は構わないんだが」
信彦以外の男子に髪の毛を結んでもらうのは、もちろんイサコにとっては初めてのことだった。自分でも緊張しているつもりはないと思っているし、時間もないので早くしなければならないとも思っている。しかしなぜだか心拍数は上がっているし、ものすごく恥ずかしい気がしてならない。少なくともこんな視線が集まっているところで結ばれるのは抵抗があった。
「ああ、わかったわかった。待ってるからさっさとあっちの方で結んでもらって来い」

レインもイサコの気持ちを読んだように2人に言った。心の中を見透かされたようでますます顔を赤らめたイサコは、「早くしてくれ」とシュウイチを急かすように林の中に入って行った。
「なあ、あの2人ってそういうあれなのか？」
待っている間に玉子がレインに訊ねた。
「見たらわかるだろ。少なくともシュウの方は本気。今日はどんなことがあってもシュウがイサコを守るだろうから安心していい」
「ふ～ん。イサコが、ヤサコのいとことねえ」
玉子も面白くなってきたなというようにつぶやいた。

しばらくして戻って来たイサコは、キレイなツインテール姿になっていた。
「イサコかわいい！」
それを見るなり歓声を上げたのはユイだった。ユイをはじめ、玉子以外のメンバーはイサコのツインテール姿を初めて見た。
「似合う似合う」
「やっぱりあんたはそうじゃないとな」
レインや玉子が口々に褒めるのだが、顔は髪型以外のところでにやついているのが丸わかりだった。
「どうだった、シュウの手際は？」
レインがこれ見よがしに訊ねてきた。
「ああ……すごく良かった。引っ張られたり絡まったりしない、お前達の言う通り毎日妹の髪を結ってあげているのは本当らしいな」
イサコは正直に答えた。一方で実は結ってもらっている時に、とびきり懐かしい気持ちになったというのは内緒にておいた。
「これから毎日シュウに結ってもらえば？」
カズマが面白半分で言う。
「調子に乗るなゴリラ」
イサコはカズマの腹部にパンチをお見舞いしてやった。そうして場が和んだところで、イベント会場に張っている大谷からイサコに

着信が入る。
「もしもし？」
「今サオリを見かけたぞ。すぐに見失ったが、ここに来ているのは間違いなさそうだ。入り口封鎖作戦は失敗だな。君たちも早くのぼってこい」
「了解だ」
イサコは今の大谷からの電話の内容をメンバーに伝え、すでに人で溢れる遊歩道の脇の林から会場を目指して斜面をのぼることにした。

#19　徒花の咲く庭　part2

遊歩道をのぼりきったところに建てられたゲートをくぐり、子ども達の流れに沿ってイサコ達は会場に入った。そこはちょうど自分たちの通う夕日寺中学校のグラウンドと同じぐらいの広さの、ひらけた芝生の広場だった。正面の一番奥にはメインステージとなるオブジェがあり、その脇に目をやるとガラス張りのメガマス金沢支社がそびえているのが見えた。メインステージではすでにイベントが始まっており、マイクを通して今日の司会を務めるタレントがイベントの説明をしている。メインステージには左右に巨大なディスプレイがあり、まるで大物ミュージシャンのライブでも始まりそうな雰囲気で、このイベントの本気度がうかがえた。

「こんな大勢いる中で、本当にサオリを見つけ出せるのか？」

イサコが隣にいた玉子に大声で訊ねた。音響や周りのざわめきから、そのくらいの声を出さないと隣にまで伝わらないくらいだ。

「室長とチーフがあそこにある支社の設計室から、この会場の空間異常をモニタリングしている。少しでも乱れがあった場合はすぐに連絡が入る」

「おい。ちょっと1回人ごみを抜けよう。こんなところで相談も何もできない」

今の2人の会話でさえ聞き取れなかったレインがイサコと玉子に提案した。2人はそれに賛同し、メンバー達は子ども達の波を抜けて脇にある林の木陰に入った。そこは人ごみからもはずれて、イベントの様子を落ち着いて見ることができる。

「覚悟はしていたが、やっぱすげえな。で、さっきの相談は何だったんだ？」

イサコはそこでレイン達にサオリの見つけ方の説明をした。

「それで大丈夫なのかオバちゃん？空間異常が始まってからじゃ遅いと思うんだが」

「とはいえ、あとは歩き回って彼女を直接探すしか方法はない」
「暗号を1つでも見つけられれば、後の位置も推測できないことはないけど」
イサコはそう言うとこの会場の俯瞰図を出して考えてみることにした。
「よっ」
その時メンバー達の前に大谷が現れた。記者証明のカードを首からぶら下げ、手には大きなカメラを持っている。
「あんたか。サオリを見たって言うのは本当だろうな?」
イサコは一番にそのことを確認した。
「写真撮ったから見るか?これはデジカメで、メガネを通した画像も撮れる優れものだ」
大谷はそう言うとすぐにカメラを操作し始めた。電脳ペットと飼い主が一緒に写真を撮ることができるそのカメラは、今一番の売れ筋のカメラである。そしてちょっとした改造で色々な機能を追加できるという噂話もある。
「写真撮ってるヒマがあったならサオリを捕まえれば良かったのに」
カズマが何やってんだ言いたげな目で大谷を見た。
「遠かったからそんなヒマはなかったんだ」
大谷は言いながらカメラに画像を出してイサコ達にも見せた。人の陰に少し隠れてはいるが、その画像で確かにサオリと判別できた。
「で、このカメラで一体何ができるんだ?追いかけもせずに写真を撮ったってことは、この写真をいじれば何らかのことはできるんだろう?」
レインは訳を知ったように大谷に訊ねた。チャラチャラしているように見えて、かなり抜け目のない男だというのはレインもすでに理解している。
「さすがオレの弟子だな。そうだ。この改造カメラは色んな局面で役に立つ、ジャーナリストの必須アイテムだ」
「弟子入りした覚えはない」

「照れるなって。まずこの画像を映像のデータレベルに分解する。そして彼女の網膜パターンのプログラムを割り出すんだ」
「この小さい画像から、サオリの網膜まで分析することができるのか？」
かなり驚いたようにカズマが反応した。しかしそれに度肝を抜かれているのはカズマやユイだけであり、他のメンバー達は大体の仕組みを理解していた。
「カズマあのな、メガネを通した画像はプログラムの塊なんだ。映り込んでいる対象がどんなに小さくても、解析すればすぐにプログラムは割れる。そこを抽出すれば米粒ほどの対象物も鮮明に拡大できる。このカメラはそういった違法行為を手際よく行うために改造されているんだ」
「じゃあなんでわざわざ網膜パターンを調べるんだ？」
カズマの質問はまだ続いた。今度はレインに代わってイサコが答える。
「人の表情は一瞬一瞬変わるものだ。当然表情のプログラムも変わる。同じ表情のプログラムなど存在しないと言っていい。しかし、通常目に見えるところで個々の人間を決定的に分つ身体的特徴は２つある。指紋と網膜だ。指紋は手を握っていればカメラに映り込まないが、網膜だけは常に捉えられる。目を閉じて歩くわけにはいかないからな。つまり網膜のプログラムだけは不変であり恒常的。このプログラムを追っていけばレーダーにサオリが表示されているも同然なんだ」
網膜パターンのプログラムは、電脳上で個々の人間を見分けるＩＤと言い換えられる。イサコもそこから大谷のしようとしていることは大体予想できた。
「レベルが高くてやりがいがある。つまり彼女の網膜パターンのプログラムを割り出し、今度はそれを違法物質としてサーバーに送って覚えさせる。ちょうどウイルスを特定するためのワクチンのようにな」

「サオリはウイルスなんかじゃないよ」
大谷の説明にユイが食いつく。
「いやそうじゃない。かわいいね、君は。これは仕組みの話をしているんだ。イリーガルの位置を特定する時と同じ。これで彼女の網膜パターンは違法物質としてサーバーに登録される。今頃設計室でモニタリングしている人のレーダーには彼女の位置が表示されているはずだ」
大谷の話を聞いて、玉子はすぐに一郎と連絡を取った。そしてすぐにそのレーダーを自分のメガネでも表示できるように転送してもらった。
「来たわ。確かに赤いマーカーが1つ点滅してるわね」
「本当だ……これさ、なんでこんな数秒に1回、不定期に点滅してるわけ？」
気になったカズマが訊ねてみた。確かに赤いマーカーは壊れた外灯のように一瞬消えてはまた点いたりしている。
「これはサオリのまばたきだ。その一瞬だけは網膜パターンのプログラムが消えてしまうから、レーダーも反応できないんだ」
「すげーな電脳って」
メガネに疎いカズマとユイはその技術の高さに感心するばかりだった。
「確かにこれで任務遂行はかなり楽になった。あんたのメカニック技術の高さには脱帽するしかない」
イサコもここまで手際よく準備をしてくれる大谷には感謝するしかなかった。
「ま、このくらいゴシップ記事を求める記者なら誰でも身につけている技術だけどな。電脳インフラが整備されたおかげで、プライバシーは消滅した。今回はそれの有効活用ってことで見逃してくれよ。空間設計室のお姉さん」
一連の作業を複雑な気持ちで見守っていた玉子に大谷も気付いていた。1歩間違えば悪用も可能な技術が横行しているのに、管理室

ではこれを取り締まろうとする動きはほとんどない。果たしてこれを見逃していいものかと思案するが、任務遂行にはかえられない。
「仕方ありません。私もこれは専門外ですし、取り締まりのためには根本的な管理体制の見直しが必要でしょう。怖い世の中です」
「これを見逃している節もあるだろう。警察なんかがこの技術を使って重要参考人を監視しているという噂もある。事情がわかっている者は、サングラスをかけたりと気を配っているからな。猫目宗助もその1人だったんだろう」
「そういう込み入った話はまたの機会にしてくれ。とにかくサオリの位置が特定できた。暗号の位置もこれで大方の予測がつく」
イサコが玉子と大谷の話を遮って言った。
「そうだな。もっと良いものを見せてやろうか？これは彼女がここに現れた20分ほど前から今に至るまでのサーバーの更新記録だ。これをさっきのレーダーに落とし込むと」
大谷は大量のプログラムで埋められたウインドウをコピーし、レーダーのプログラム上にペーストした。するとレーダー上には現在点滅しているサオリの赤いマーカーに連なるように、サオリの足跡が浮かび上がって来た。
「これがこの20分の間にサオリが辿った道ということか？」
レインの質問に大谷がうなずいてみせた。足跡はイベント会場の周囲を囲うように残っている。現在位置はメインステージの裏側。ちょうど街を見下ろす高台になっている場所を目指しているようだった。
「これを見る限り、暗号は8割設置し終わっているように思える。星形に当てはめると中心に来るのはこのイベント会場のど真ん中。おそらく今彼女が向かっている高台に最後の暗号を設置するつもりだ。もう時間がないぞ」
大谷がレーダーを見て推理しながら言った。
「これだけ手がかりがあるならわかりやすい。機動力のあるレイン達から、ここから遠いポイントに向かってくれ。ユイやオバちゃん

は、ここから近いポイントを頼む」
「了解だがイサコ、お前は？」
手早く指示を出したイサコにレインが訊ねる。
「私はサオリのいるポイントに向かう」
「1人で大丈夫か？」
「最後にサオリと2人で話をしたいんだ。なぜこんな場所で暗号を使うのか。何を起こすつもりなのか。こんなことでサオリの願いは叶うのか。おそらく暗号は5つ揃わなければ効力を発揮しないはずだ。私がサオリにやられても、他のポイントさえ潰していれば最悪の事態は免れる」
イサコは自分達が持った抑止力をサオリに見せつけるつもりだった。サオリがこれ以上暗号を設置するようなマネをしてもムダだと諭し、自分たちの仲間に引き入れ、サオリの家族を取り戻すための安全な方法を一緒に考える。それがイサコの描く最良のシナリオだった。
「いいんだな？これはサオリが家族を救う最後の方法なのかもしれないんだぞ」
イサコの覚悟を確認するようにレインが訊ねた。
「何をいまさら。こんな場所で例の空間の入り口を開くのは、どれだけ危険なことかわかるだろう。こんな方法は絶対に許さない。そこにミチコが絡んでいるというのならなおさら」
「わかった。愚問だったな。みんな昨日イサコが完成させた暗号はメガネに入ってるな？これをサオリの暗号の上から重ねるんだ」
点呼をとるようにレインがメンバーに確認した。サオリの暗号を無効にする暗号はすでに朝集まった時にイサコから配られている。イマーゴの技術がなくても使えるタイプなので、誰でも装備することができる。
「準備万端だ。さっさと行こうぜ、シュウ、レイン！」
待ちきれないようにしてカズマが言う。
「よし！イサコ達もくれぐれも気をつけて」

シュウイチがイサコを振り返って引き締まった表情で言った。レインとカズマもイサコ達の方にうなづいて見せると、そのまま全速力で駆け出して行った。

「じゃあ、ユイとオバちゃんはこの近くを」

「わかったわ、イサコ。あの子が攻撃してきた場合はすぐに連絡して」

玉子もイサコに任せたという思いで言い残すと、ユイを連れて暗号を探しに行った。

「アンタは万が一に備えてイベント会場の中心を警戒してくれ」

「何かあったら、ここは危ないって示せばいいんだろ。そんな時のために、電脳爆竹とかも用意してある。君もさっさと行け。彼女との戦いにピリオドを打ってこい」

イサコは口に出さず、ただわかったとうなずいて大谷に背を向けて走り始めた。見送った大谷がメインステージに目を向けると、ちょうどゲーム開始の花火が打ち上がっていた。

#１９　徒花の咲く庭　ｐａｒｔ３

イベント会場はロープで１０区画ほどに分割されようとしていた。イベントで使用されるメガネゲーム『ＶＲクエスト３』は、テニスコートほどの面積の開けた場所さえあれば、そこに無限の世界が作り出せる。先月大黒市でコイル探偵局と大黒黒客がぶつかりあった時と同じルールで、「ＶＳモード」の全国大会予選が今から行われるのだ。集まった子ども達の中でも、とりわけ１ラウンド目に参加する子ども達の目の色はすでに変わっていた。全国大会で優勝すれば豪華賞品が進呈される上に、全国でもトップクラスのメガネゲーマーとしても認知される。違法物質が転がっていない大黒以外の都市では、『ＶＲクエスト』の実力をメガネの実力とみなしているくらいだ。そのために毎年行われているこのイベントも、年々熱さが増している。

そんな意気上がる子ども達の間を縫って、イサコは最短距離を走ってサオリのいる場所まで向かおうとしていた。時々人とぶつかって怒鳴られるがそんなことは構っていられない。メインステージの裏にまわり、ようやく人がいなくなったところで林の中に入る。そこを抜けると街を見下ろす展望台のような場所に出た。丘の入り口の遊歩道に沿って歩けば、この場所に出るようになっている。そのため足元はきれいに整備され、いくつか休憩のために腰を下ろすベンチもある。そんな穏やかな空気が流れる場所に彼女はいた。

「サオリ！」

乱れた息を少し整え、意を決してイサコは呼びかける。彼女はイサコから背を向けていたが、そこに立ち止まり何をしていたのかはすぐに理解できた。

「天沢さん……？」

サオリのリアクションはわかりやすかった。なぜここにいるのかという戸惑いの目。イサコはこの瞬間にサオリの行動の阻止が達せ

られることを確信した。
「なんでいるのかって聞きたげな顔だな」
イサコは笑みながら言った。自分でも驚くくらいに落ち着いている。これまでサオリに対してこんな余裕を持って話しかけることはできなかった。
「なら、それを訊いていいですか？」
サオリも最後の最後で邪魔が入ったわりに冷静な口調だった。
「気付いてないのか？金曜日にレインがアンタを呼び出して話をしただろ。その時にこっそりとアンタのメガネから情報を抜き取っていたんだ。高性能な古流のアイテムを使ってな。その情報の中に、今日のこのイベントの告知が含まれていた。念のために張っていたんだが、読み通りアンタが現れたってところだ」
イサコの説明の途中からサオリはかなり苦い顔つきになっていた。致命的なミスを犯した人間がリアクションを隠し通すのは難しい。
「私はアナタ達を侮っていたみたいですね」
「それだけじゃない。これを見ろ」
イサコは先ほど大谷がプログラムを施したレーダーをウインドウに出した。
「赤く塗られている道筋はここに着いてからのアンタの足取りだ。これを分析すればアンタがどこに暗号を置いたのかはすぐにわかる。すでに仲間がポイントに向かった」
「行ったところで暗号は解除できないはずです」
その言葉をイサコは待っていた。
「できるさ。私達がアンタの暗号を解析して組み上げた解除暗号なら」
「なんですって？」
イサコはその暗号をサオリに向かって投げつけた。足元に貼り付いたそれを、サオリはまじまじと見つめる。
「……どうしてこんなものが組めるんですか？アナタは一体？」
「私は半分しか貢献していない。こっちには妙に暗号通の味方がい

るんだ。詳しい話はそいつから聞いてくれ。その前に、これでアンタの行動は完全に封じたんだ。もう大人しくしていてくれないか？」

サオリはうつむき黙った。絶望しているというよりも、必死に次の手を考えているような表情だった。

「天沢さん。アナタ達の力はわかりました。私も負けを認めます」

「別にアンタと勝負をしていたつもりはない」

サオリはその言葉にくすりと笑う。

「そうですね。私もそのつもりはありませんでしたが、悔しいものですね。でも、そんなことはどうでもいいんです。天沢さん。敗者からのただ1つのお願いを聞いてもらってもいいですか？」

「内容によるな」

「私を見逃して、この件から手を引いてください」

イサコはさすがに言葉を失った。勝負に勝ったことを讃えて機嫌を取る作戦など見え透いている。

「全然筋が通っていない！私はここでアンタが新空間への入り口を開くのを阻止しに来たんだ。苦労して解除暗号まで組んで、最後の最後で見逃すことなんてできない」

「私にはここに暗号を置くという義務があるんです。そうしなければならない切実な理由もあるんです。アナタにそれを邪魔されるわけにはいきません」

お互いにヒートアップするが、イサコはこうやって真っ向から対立するのは初めてじゃないかと思った。都合が悪くなると逃げて行くのがサオリの常套手段だ。こうして立ち向かって来ることは、サオリが追いつめられている何よりの証拠だった。

「そんな理由があるなら聞いてもいい」

「……それはムリです。人においそれと話してはいけないことになっていますので」

ほとんど予想通りの反応にイサコはため息をついた。

「それで見逃してくれとは虫が良すぎるんじゃないか？私だってアンタの家族のことは気の毒に思っている。できればその救出に力を

貸したい。でもこんなやり方は間違っている。大勢のメガネを犠牲にするようなマネを、見過ごすわけにはいかないんだ」

「そうですか……そう言われると私には返す言葉がないのですが、1つだけ。天沢さんは何1つ私のことをわかっていません」

「それは認める。何せアンタは協力者の言いなりだからな。まるで自分がないじゃないか。そんなアンタを理解するなんてできるはずがない」

サオリはイサコをひるませようと言ったはずだった。しかしイサコからは意外な言葉が返ってきた。案の定サオリは顔を上げてイサコをじっと見た。

「アンタからは自分の力で家族を救いたいという意志が伝わってこないんだ。ほとんど盲目的に協力者の言うことを聞いて、そこを突っ込まれると逃げて行って。あげくの果てに、こんな大勢の子どもが集まるイベントで新空間の入り口を開こうとしている。家族を救う前に、大量の子ども達が犠牲になることぐらいわかるだろう。協力者の狙いも家族の救出ではなくて、テロにあるんじゃないのか？」

「言うのはそちらの勝手ですが、それが真実かどうかなんてアナタにはわからないでしょう？アナタは私のことも、その協力者のことも何1つわかっていないんですから。なのに自分の正義だけを押し付けるなんておかしくはありませんか？」

イサコの言葉を遮るようにサオリが返した。決して強くはないが、相手の間違いをただすような大人の口調で。

「真実はもう関係ない。事実だけを踏まえて言っている。アンタの仕掛けた暗号で黒井地区や学校で謎のブラックホールが開いた。そのおかげでいくつものメガネが破壊された。それと同じ暗号をこの場所に仕掛けようとしているなら、その起動を阻止するのが当然の流れだ」

「その事実でさえ見誤っているとしたら、アナタの元に正義はないんですよ」

イサコは思わぬ言葉が返って来た気がした。サオリは何が言いた

いのか、先ほどからサオリという輪郭が段々とぼやけてきたように思えた。
「……そんなものは詭弁だ。アンタがどれだけ自己正当化しようとしても、やろうとしていることは間違っている」
イサコはもう1度自分のなすべきことを確認するように言った。
その時レインからの着信が入った。
「イサコ、サオリの暗号を発見した。すでにオレとシュウとカズマで3つ潰しておいた」
「そうか。ご苦労だった」
「サオリの方はどうだ?」
「今交渉中だ。とりあえずさっき集まったところに戻っておいてくれ」
「了解」
イサコが電話を切ると、続いて玉子からも着信が入った。内容は同じく、サオリの暗号を発見して解除したという知らせだった。
「アンタの暗号もすでに4つは解除させてもらった。もうアンタがこんなところで粘る必要もない」
「……いいえ、まだです。見たところアナタ達の組んだ解除暗号は完全ではありません。確かに4つ解除されましたが、まだ微弱ながら空間への影響力は残っています。最後の1つさえ起動すれば、効果は期待できるはずです」
サオリは自分の目の前に広げたウインドウを分析しながら言った。
「なるほど。最後の1つが起動の鍵ということだな。アンタの後ろで光っているヤツか。それを解除すれば、完全に暗号の空間への影響力はなくなると。さっきから落ち着き払ってしゃべっていたのは、話を引き延ばして起動のための時間を稼ぐためだろう」
イサコはすでにその暗号を見つけていた。サオリが立ちはだかって隠しているが、暗号はにわかに青白く発光し始めている。
「解除などさせません!」
サオリはいきなり暗号をイサコに投げつけた。ところがイサコは

それを避けようとはせず、そのまま命中した。
「……フリーズ暗号か。これはもう私達には効かない」
暗号はイサコのメガネに貼り付いたかと思うと、そのまま氷のように溶けてすべり落ちていった。
「どうして……」
茫然としてサオリがつぶやく。
「この前公園で戦った時に、同じものを私はアンタにもらいに行った。ただフリーズするだけの暗号なら、データに影響はないという判断だった。その時メガネに残った暗号を解析して、解除暗号を組み立てたんだ。ついでにフリーズ暗号を無効化するプログラムもな」
「あの時無防備に突っ込んできたのはそのため？」
「アンタはやっぱり素人だ。かつて大黒で戦い抜いてきた私からすれば、アンタは駆け引きも何も知らない、ただ暗号という飛び道具を手に入れたメガネ使いの少女だ」
サオリはムッとした表情でイサコを見た。まだ手詰まりになったわけではないというのが、そこからは感じ取れる。
「……仕方ありません。使いたくはなかったんですけど、もっと強力な暗号を出すしかないみたいですね」
「やっぱり持ってはいるんだな。でも、アンタに私は倒せない」
「そんなことありません！もうそのメガネを破壊されても仕方ないと覚悟してください！」
言葉とは裏腹に、サオリからは緊張の色がにじみ出ていた。まるで初めて握った銃を相手に向けた人間と同じだなとイサコは思った。
「倒せない、断言する。これは技術的にではなくて精神的な問題だ。そもそもアンタが私のメガネを壊そうという覚悟が出来たのなら、あんな書き込みをする必要はないじゃないか。直接私のメガネを壊せばいい。他人を使って壊そうとしなくても」
「……あの書き込みについては私を恨んでいますか？」
サオリはできるだけ表情を変えないように努めながら訊ねた。
「あれもアンタの意志じゃないことはわかっている。傷ついたのは

事実だが、アンタを恨もうとは思わなかった」
「それなら、ここで私にメガネを壊されれば恨みますか？」
「暗号起動を阻止できずに空間に穴が開いてしまったら、それは恨むだろうな」
そうして一呼吸を置いてからイサコは続けた。
「でもアンタがそこまでしないと信じている。アンタは私の過去を知っているんだろう？私のメガネの中にどれだけの記憶が残されているかも。自分で言うのもなんだが、根は優しいアンタならそれを奪ったりはしないと思う。掲示板の書かれたミチコの噂だっていずれ消えて忘れ去られる。ほんのひととき、私がメガネから離れればアンタとしては良かったんだろう？」
サオリは答えなかった。じっと思いつめたようにうつむいている。
「それを考えると、アンタとしてはこのイベントが山だということは容易に察しがつく。今更見逃してくれなんて願い出たのも、切羽詰まっている証拠だ」
「ええ、そうです。なら天沢さん。これが私の家族を助けられる可能性がある、最後の手段だと言えば思い直してくれますか？」
「サオリ！」
その呼びかけではっとしたようにサオリは顔を上げた。その顔をじっと見据えながら、イサコはゆっくりと言葉を選ぶように切り出した。
「私も事情はよくわからない。でも、可能性を捨てるのは早すぎる。アンタが信じ続ければ、必ずアンタの家族につながる道が拓けるはずだ。その道の存在を信じられなくなった時、本当にその道はなくなってしまう」
「……交渉は決裂のようですね」
その言葉を聞いた途端、イサコは肩を落とした。最後まで自分の願いはサオリに届かなかった。なぜここまで通じ合えないのか、大きな声で叫びたいような気持ちを抑え、イサコは心を鬼にする。
「なら仕方ない。こうなればその暗号の起動を阻止するだけだ」

「させません。もうアナタの過去のこととか、恨まれるとか、そんなことは関係ありません。私は私の務めを果たすまでです」

そう言うとサオリは先ほどとは異なる構造の暗号をイサコに投げつけた。イサコは身を低くしてそれを避けるが、間髪入れずにサオリはまた新しい暗号を繰り出す。イサコはしばらく使っていなかった力、イマーゴの能力を呼び出すために強く念じる。すると目の前に鉄壁が現れ、サオリの暗号を食い止めた。

「ムダだ。私にダメージを与えることなんてアンタにはできない」

「さすがにイマーゴを持っているだけあります。でも、私はこの暗号を起動できればそれでいいんです。逃げ回るだけのアナタには阻止できません」

サオリは言いながらすぐに鉄壁に向かって暗号を投げつける。なんと鉄壁はその1発で脆くも崩れ落ちてしまった。

「どういうことだ?アンタの暗号でこの古流のプログラムを破るなんて」

「アナタが古流の使い手だと知って、私の協力者も改良した暗号を提供してくれたんです」

サオリは戦いの優位を感じていた。装備もサオリの方が強力な上に、イサコに防御手段はない。気が進まないものの、イサコのメガネを破壊しなければならない時が来てしまったとサオリは思った。その時だった。

「それも宝の持ち腐れだ。すでに暗号の起動は阻止させてもらった」

イサコの吐き捨てた言葉の意味がサオリにはイマイチわからなかった。揺さぶりの可能性も頭に入れつつ、サオリは隙を見せないように背後にある暗号を見やる。

「えっ!?」

サオリは思わず声を上げた。イサコの言った通り、起動しかけていた暗号の上にイサコの解除暗号が重なっており、青白い光も急速に失われ始めていた。

「ショートカットを使わせてもらった。元々金沢の空間は大黒と違

って整然としているから、つなぐには少し苦労したが」
「ショートカットって、そんなものいつの間に？」
言いながらサオリは気付いた。イサコが鉄壁を出現させたあの一瞬だけ、イサコの姿は完全に隠れていたことを。
「まさか鉄壁は防御だけでなくブラインドに？」
「ああ。アンタは守るべき暗号を背後に置いてしまった。やはり戦い慣れていないな。アンタにこんな戦いは向いてない」
イサコの言葉と同時に、暗号の最後の輝きも小さくしぼんでいってしまった。サオリは片膝をついたまま抜け殻のように茫然とした。
「なんて、こと。このままだと、ここは……」
うわごとのように意味深な言葉をサオリはつぶやく。片膝をついたまま立ち上がれない様子の彼女に、イサコは歩み寄って手を差し伸べた。
「さあ、もう終わったんだ。今は私の言葉など入ってこないかもしれないが、いずれアンタの家族を助けるために協力したい。落ち着いてそういう気になった時は、また相談してくれ」
それでもサオリはイサコを見なかった。むしろイサコの言葉が耳に入っていない様子で、何かに怯えるように小刻みに震えている。さすがにおかしいと思ったイサコがもう1度声をかけようとした時、サオリが消え入るような声で絞り出した。
「……逃げて」
「えっ？」
イサコは聞き違いかと一瞬思った。
「逃げて、天沢さん」
サオリはイサコを見ずに繰り返す。まるで壊れてしまった玩具のようだった。
「逃げる？私が？」
「ええ」
「どうして？」
「とにかく、逃げて」

サオリはそれでも事情を説明する気はないようだった。
「ちゃんと理由を聞かせてくれ。どうして私が逃げなければならない？アンタの暗号の起動は阻止した。この空間で異常が起こることはないはずだ」
サオリは何かを決心したかのように、そこでようやく立ち上がった。
「逆です。これから始まるからです」
振り向いたサオリの顔は青ざめている。それはすべてが終わってしまった虚無感ではなく、これから始まることに対する絶望感がサオリを支配しているからのように感じられた。
「……逆？」
ただならぬ雰囲気にイサコがおそるおそる訊ねる。
「こうなった以上、アナタにはすべて打ち明けます」
諦めたように言ってから、サオリは顔を上げイサコをじっと見据えた。
「天沢さん。アナタはミチコに狙われているんです」

#19　徒花の咲く庭　part4

「私がミチコに狙われているだと？」
思いがけない言葉だった。何をもってサオリがそんなことを言っているのか、イサコには理解できなかった。
「ええ。今まで黙っていて、本当に申し訳なく思ってます」
神妙な顔つきでサオリが言う。少なくとも芝居をしているようには見えない。
「ちょっと待ってくれ。話がまったく見えない。確かにミチコの復活については私も聞かされていた。だがミチコは新しい空間にいて、アンタがそこに通じる扉を開こうとしていたんじゃないのか？」
「それは完全に先入観から出来上がった虚構ですね。はっきり言います。私の暗号は新空間に通じる入り口を封じるためのものです」
「入り口を封じる？」
「さっき逆だと言ったのはそういうことです」
急に冷たい春の風が2人の間を抜けていった。気付くとイサコは全身に汗をかいていた。
「それなら、今まで色々な場所で暗号を仕掛けていたのは？」
「入り口が開かないようにするためです」
「今日ここに暗号を置いていたのも？」
「ええ」
「暗号を星形の五角形に、それも広範囲においていたのは、その囲みのなかで入り口が開かないようにするため？」
「その通りです。五角形というのは少しオカルト的な要素も含みますが、新暗号としては最も安定をもたらす形でした。新空間の反応が強い場所を中心に、暗号を星形に5つ仕掛けること。それが入り口の出現を封じる儀式です」
イサコは信じられないという気持ちを抑え、ここは冷静になろうと努めた。そして状況を整理するために1つ1つサオリに質問して

いくことにした。
「なぜそんなことを今までずっと押し黙っていた？そうやって一言説明してくれれば、私達も考え直したのに」
「……できません。上からの命令ですから」
サオリはため息をつくように言った。
「上？協力者のことを言っているのか？」
「そんなところです」
「その協力者は何者だ？」
イサコはサオリに詰め寄るように訊ねていた。落ち着けと言わんばかりに、サオリがイサコの両腕を優しく掴む。
「このこと、誰にも言わないでください」
「わかっている。事情があるから今まで黙っていたんだろう？」
イサコはサオリの立場もなんなくわかりはじめていた。サオリは安心したような顔になって慎重に切り出した。
「……私はメガマスのあるプロジェクトチームの責任者の指示で動いていました。その人を協力者というのは適切ではないかもしれません。言うなれば指示者とでも」
「メガマス？アンタに指示を出していたのはメガマスの人間なのか？」
にわかに信じがたい話に、イサコもあぜんとする。
「そうです。そのプロジェクトチームは極秘裏に新空間計画というものを進めています。私の任務もそれに関係するものでした」
「新空間計画……それなら私も聞いた。情報が錯綜しているから実体はわからないが、かつて私が精神治療目的で入っていた空間に近いものだと想像していたが」
「私も詳しくは知りませんが、概ねそんなところかと」
やはりとイサコは思いながら、あることを思い出した。
「その空間にはアンタの家族がいるのか？」
サオリは顔をうつむけた。
「……はい。その通りです」

「じゃあ、アンタの家族の身柄はそのプロジェクトチームが押さえているってことだな。だからアンタはその指示者には逆らうことができなかった」

「……」

サオリは答えなかったが、その沈黙が肯定であることはイサコも察した。これまでサオリが本意でないながらも、掲示板に書き込みをしたり、先ほど強力な暗号で攻撃してきた理由も理解できた。おそらくサオリは家族のことで半ば脅されて、プロジェクトチームの責任者の指示に従わざるをえなかったのだ。

「わからないな。今までの話からすると、アンタはその新空間の入り口が通常空間に口を開けるのを防ごうとしていたんだろう？それは放っておけばひとりでに口が開いてしまうということなのか？どうしてその新空間はそんな暴走をしているんだ？」

まるで通路が暴走した大黒市の夏の夜と同じ状況じゃないかとイサコは思いながら訊ねる。

「その原因はミチコにあります。新空間と通常空間をつなごうとしているのは他ならぬ彼女です」

その言葉で言いようのない不安がイサコを包み込んだ。その意識は自身の心のどこかで存在している罪悪感から発せられていた。

「ミチコが……私が狙われてるって言ってたな」

「はい。最初はどうしてミチコが通常空間との道をつなごうとしているのか、私の指示者にもわからなかったようです。それを確信に変えたのは、学校で入り口が開いた時だったと言っていました」

イサコはその時のことを思い出した。学校の廊下に開いた黒穴。あれはサオリの暗号によって現出したものだとずっと信じ込んできた。

「あの黒い穴が新空間への入り口というのは間違いなかったわけか。あの時アンタは学校で暗号を仕掛けていた。それはあの黒い穴の出現を抑えるため？」

「ええ。本当は現れる前に抑えてしまいたかったのですが」

「つまり、あの時アンタが暗号を仕掛けていなければ、私はその空間に飲み込まれていた可能性が高いということだな？」
「そうなりますね」
イサコは愕然とする。
「でも待ってくれ。最初に黒い穴が開いたのは黒井地区の空間事故の時じゃなかったか？あの時、私はあの場所にいなかったが」
「はい。話をややこしくしているのはそこです」
「詳しく聞かせてくれ」
イサコは真実を知りたいという衝動を抑えきれずに訊ねた。
「かつては“あっち”に近い場所っていうのが通常空間にもありましたよね。大黒でいうなら中津交差点という場所がそれにあたるという話を聞きました。もともとあの手の空間はサーバーを違法に占拠しています。今回メガマスが開発した新空間も、現段階では極秘プロジェクトなので扱いは同じ、違法空間です」
「“あっち”と同質の空間ということか」
「はい。中津交差点のようにもともと空間が不安定な場所にはサーバーの欠陥が多い。つまり違法空間が存在しやすいとも言い換えられます」
「それが金沢では黒井交差点だった？」
イサコが確認する。違法空間がそこに存在するから不安定になるのではなく、空間が不安定だから違法空間が存在しやすくなるという理屈だった。
「夕日寺中学校もそうです。空間が不安定になるのは様々な理由がありますが、学校の場合はたまに電脳戦争の舞台になったりもしますからね。とにかく黒井交差点と学校は新空間に近い空間ということだけ押さえてください」
「ここはどうなんだ？メガマスの近くでもあるから空間が不安定な様子はないが」
イサコが辺りを見回しながら訊ねた。
「この緑地の地下に、メガマスの実験施設があります。そこで新空

間に関わる実験が行われているという話です。その意味では、ここは最も新空間に近い空間とも言えますね」
「なるほど……しかしミチコが通路を開こうとしたのは、単に黒井交差点や学校が新空間に近いという理由だけではなかったんだろう？」
それだけの理由なら、黒井交差点や学校は穴だらけになるはずだった。
「ええ。さっきも言ったようにミチコの狙いは天沢さん、アナタです。アナタのいる場所をミチコが目指しているのは間違いありません」
「でも最初の黒井地区の事故の時私はそこにいなかった」
「聞いてください。ミチコはアナタの気配を追っているにすぎないと指示者は言っていました」
「気配？」
漠然とし過ぎていてイサコにはイマイチピンとこなかった。
「イマーゴです。アナタはイマーゴを持っていますよね。ミチコはイマーゴに反応しているんです。でも、新空間におけるイマーゴはかつての“あっち”ほど影響を及ぼす能力はありません」
「どういうことだ？」
「かつての“あっち”は、イマーゴ保持者の意識に多大なる影響を受けて変質し続けていました。しかしそれでは空間が安定しません。プロジェクトチームは新空間においては通常空間からのイマーゴとの接続を断ち切るように調整しました」
それはイマーゴ保持者の意識は新空間では反映されないことを意味していた。ハラケンの意識が“あっち”でカンナを生み出したようなことは起きないということだった。
「そうするとミチコは何を頼りに私を探している？私の思念を辿りようがないんじゃ、私がいる場所もわからないはずだが」
「だから気配と表現したんです。ミチコは限りなく通常空間に近い新空間のエリアに居着き、通常空間から発せられるイマーゴ保持者

の気配を探っています」
「それじゃ私を特定できていないのか？つまり最初の黒井地区での空間事故は……」
イサコにもようやくその真相が見えてきた。
「はい。ミチコは天沢さんに準ずるイマーゴ能力の保持者を天沢さんと間違えて入り口を開いたようです。さすがにこの事態にはプロジェクトチームも困惑したみたいです」
黒井地区で黒い穴が開いてしまったのは、そこにイサコと同じレベルのイマーゴ保持者がいたからだった。
「そんなはた迷惑な。私のせいでそこにいた人達はメガネを失ったというのか」
イサコの中にある罪の意識は確実に膨らみつつあった。
「これはアナタの責任ではありません。そんな気に病まないでください」
サオリもイサコの気持ちを察して声をかける。
「しかし子どもが新空間に飲み込まれるわけじゃないのか。その時は何人かがメガネを失ったと聞いていたが」
「ミチコも天沢さんがそこにいないことに気付いたんじゃないでしょうか。しかし新空間と通常空間がつながる時には、空間同士の干渉で多大なエネルギーが発生します。ムリヤリこじ開けようというならなおさら。そこで発生した行き場のないエネルギーがメガネに吸い寄せられ、メガネはパンクしてしまうのです。ちょうど避雷針が雷に打たれるようなものだと考えてください」
イサコは再び学校で開いた黒い穴について思い出す。確かにあの時稲光が黒い穴の中でほとばしっていた。サオリの暗号がなければ、あの雷に打たれてメガネが壊される可能性もあったのだ。
「でもミチコはすぐに天沢さんを見つけ出しました。学校での1件以来、ミチコの反応は天沢さんがいる場所で観測されていましたから」
「黒井交差点にアンタが何度も姿を見せたのは、私がしょっちゅう

あの場所に行くからか。それなら学校は？」
　サオリのおかげで事故が未然に防がれていたのは理解できたが、学校でも同様のことをしていたのかイサコは気になった。
「学校で入り口が開いた日から毎朝、誰もいない時間に登校して暗号を置いていました。あの暗号の効果は無限に続くわけじゃありません。１日しか空間異常を抑える効果しかないんです。同じ理由で黒井交差点付近も毎朝通っていました。その効果が続いているのか、放課後に確認しに行ったりしたことが逆に仇になったようですが」
「この場所には朝から仕掛けなかったのか？」
「ええ。今日は早朝からイベントスタッフが準備にかかっていて子どもがいれば怪しまれましたから。一応私のことはメガマスの一般社員にも知られてはいけないことになっていましたので」
　まるで本当の工作員だなと、イサコはこんな時に的外れなことを思った。
「今日この場所を警戒していたのは、私が来る来ないに関係なく、またミチコが高度のイマーゴ保持者を私と取り違えて入り口を開かないようにするためか」
「その通りです。イマーゴの能力の保持者は１クラスに少なくとも１人はいると言われています。もちろんアナタほど強いイマーゴを持った人は滅多にいません。ですが今日ここに集まる子どもは１００人を超えるといいます。そうなるとかなりの確率でその高度なイマーゴ保持者が紛れていると考えざるをえません。指示者が私に警戒させていたのも、そういう理由でした。ですが天沢さん。ミチコがアナタの気配を掴んでいる以上、アナタがここにいれば１００％入り口は開くはずです。逃げてと言ったのはそういうことです」
「私がここから逃げたとしても、高確率で入り口は開く。このイベントに集まった子どものほとんどのメガネが破壊される」
　どちらの転んでもほぼ最悪の結果しか待っていないことがわかった。しかしイサコは自らのあらゆる罪が積み重なってこのような事態になったことを自覚している。逃げるという選択肢が許されると

は思っていなかった。
「聞いてもいいか？なぜ私がミチコに狙われているのか、その指示者は何か言っていなかったか？」
ミチコが執拗に自分を狙う理由をイサコは知りたかった。
「なぜなのかまではわからないと言っていました。しかしミチコの活動がにわかに盛んになったきっかけとなる出来事があったと」
「それは？」
「今月初めに大黒市で空間事故があったのは知っていますか？そこではかつての“あっち”と同じものが暴走したのですが、その時に“あっち”に乗り移ったミチコが、ある女の子と会したそうです」
ヤサコのことだとイサコはすぐにわかった。その瞬間に自分の罪悪とはまた違うところで心苦しい思いが溢れていることに気付いた。
「その出来事なら聞いた。その女の子というのは、私のかけがえのない仲間だ。そして、私とともにミチコを生み出した張本人でもある」
「えっ！？」
イサコの告白にはサオリも驚いたようだった。
「つまりその“再会”が今回の一連の事件の引き金となっているわけだな？」
「……そういうことになります。実は新空間の実験は金沢が本場なんですけど、大黒市でも行われていました。その時ミチコは大黒の新空間にいたそうです。プロジェクトチームはその方との再会で刺激を受けたミチコを危険視し、金沢に移したそうです」
イサコはそこで素朴な疑問が１つ浮かんだ。
「そもそもなぜミチコが再び生まれた？そんな新空間の中で」
「ミチコを生んだのはそのプロジェクトチームです」
薄々わかってはいたが、あきれたようにイサコは訊ねた
「どうしてだ？」
「その理由まで教えてはもらえませんでした」
サオリも悔しそうにイサコに告げる。サオリも利用されただけの

1人なのだ。

　するとその時、イサコはふと地面が揺らいだような気がした。
「地震？今の揺れを感じたか？そういえば学校で入り口に遭遇した時も」
　思い出したように言ったイサコにサオリもうなずいてみせた。
「ええ。ミチコの反応が近づいて来ているようです。新空間は視覚だけでなく脳にも直接の影響を与えます。メガネをかけていれば、反応が起こった時に地震のような揺れを感じることがあるんです。これも個人差ありますが」
「今のは震度２くらいの揺れだったな。あの時のように、もっと大きな揺れもくるのか？」
　学校でイサコが体感したのは、震度６ぐらいの立っていられないほどの大きな揺れだった。
「はい。ですが、今イベントで動き回っている子ども達が揺れを感じることはまずないはずです。おそらく震度４くらいの揺れがくれば気付くと思いますが、その時このイベント会場にいたならもう手遅れかと」
　メガネゲームで遊ぶ子ども達や、それを必死に応援している子ども達が小さな揺れに気付くことはまずない。はっきりと体感できる揺れが来た時には、そのメガネは終焉を迎える。
「……まずいぞ。今からこの反応を止める方法はないのか！？確実にミチコは近づいてきているんだろう？」
　イサコはサオリに掴み掛かるように訊ねていた。
「ムリです！それができるならこんな悠長にアナタとおしゃべりはしていません！」
　サオリも冷静さを失ったかのようにイサコを突き放した。イサコはその口調の強さに改めて絶望を感じた。
「私の暗号は基本的に予防しかできません。さらに問題なのは、アナタ達が仕掛けた暗号です」

「……私達の暗号はアンタの暗号を無効化しただけのはずだ。もう1度アンタの暗号を仕掛ければ、なんとかなるかもしれないだろ」
言いながらなんて都合のいい甘い考えなんだろうとイサコは思った。
「いえ。こんなことを言うのも気が引けますが、はっきり言わせてもらいます。アナタ達の組んだ暗号は、確かに私の暗号を無効化する効果があります。しかしそれは言い換えると、通常空間と新空間をつなぐプログラムが含まれていることを意味します」
「……つまり、その新空間にアクセスしたのは私達ということだな。そこにミチコを誘ったのも私。さっきアンタも言ったように、私は勝手な正義を振りかざして、悪魔を呼び出そうとしていたんだな……傑作だ」
笑うしかなかった。人間どう感情を表現していいかわからなくなると、笑うしかなくなる。すべての罪を受け止めるまえに、天沢勇子という愚かで無意味で害悪な存在を笑っておきたかった。結局自分は人の役になど立てない。そう思うとおかしくてたまらないのに、目の奥からは涙が溢れ出ていた。
「しっかりしてください！念のため聞きます。その解除暗号に解除プログラムを仕込みましたか？」
サオリがイサコの肩を掴んで正気を戻そうとするように訴えかけた。イサコも現実に戻ってきたかのように息をついて答えた。
「……まさか。解除暗号に解除プログラムを仕込むなんて、そんなこと誰も考えない。起動したら止まらないはずだ」
イサコはもちろんそのつもりで暗号を組んだわけじゃない。新しい暗号についてはよくわからないので、とにかくサオリの暗号を無効化することを考えてプログラムを組んだのだ。そこに意図せず新空間へのアクセスプログラムが混入してしまった。サオリもその辺の事情は察していた。
「わかりました。とにかくアナタだけでも逃げてください。アナタが逃げれば、わずかでもミチコが入り口を開く可能性が減ります」

「私が逃げたとして、入り口が開く確率はどのくらいだ？」
「……おそらく9割強」
絶望的な数字だった。逃げたとしても大差はない。どうすればいいのか気が動転しながらメガネをチェックすると、シュウイチからの着信が入っていることに気付いた。イサコは急いでかけ直す。
「何やってんだよイサコ？うまくいったのか？」
シュウイチも心なしか不安に駆られているような声だった。
「……ああ、それが、とんでもないことになった」
「とんでもないこと？何があったんだ！？」
「会って話す。みんなを私のいる高台まで集めてくれ」
「わかった。すぐに行く！」
これでシュウイチはメンバーを集めて飛んでくるのだろうなとイサコは思った。しかし立っていることもままならなくなったイサコは、電話を切るとその場にへたり込んでしまった。この失態の収拾をどうつけるのか。イサコは覚悟を決めなければならないと思った。

#19　徒花の咲く庭　part5

この日金沢支社長と神崎は支社長室で今後の方針を話し合っていた。ビルの最上階にある支社長室からもイベント会場を眺めることができる。支社長はそこからイベントの様子を見物し、先ほどかかってきた電話で長く席をはずしている神崎の帰りを待っていた。

「申し訳ありません。遅くなりまして」

神崎は悪びれながら支社長室に戻って来た。

「電話はモニタールームからか？」

「はい。大変申し上げにくいことですが、あの空間の反応が始まったという報告でした。おそらく彼女が動きだしたのだと思います」

支社長はその報告に目を吊り上がらせた。

「何だと！それはあの娘が失敗したということか？」

「そのようですね」

神崎は落ち着き払っていた。まるでこうなることを望んでいたかのような、不気味な笑みをたたえている。

「……それで？制御はできそうか？」

支社長も大げさにリアクションをするのがバカらしくなり、鼻であしらうように訊ねた。

「最善を尽くしますが、難しいと言っていました。ムリヤリ制御しようものなら、新空間の方に悪影響がでると。まあ、そもそもこちらで制御できるのなら、最初からあの娘を使うことはないですよ」

開き直ったかのように言いながら、神崎はソファー腰掛ける。

「随分とお気楽だな。何か打つ手を考えているのか？」

「まさか。なるようにしかならないと諦めているんです」

冗談抜きの真顔で神崎は答える。そしてテーブルに置いてあった飲みかけの緑茶を口に運んだ。

「なあ神崎。今回のプロジェクトはお前に任せてきたが、私にはどうもお前の考えが理解できない。どうして最後まで秘密を保持する

ことを考えていないんだ?このイベントで事故が起きれば、マスコミは一斉に食らいつき、このプロジェクトの件も明るみに……」

「マスコミが食いついてくれるのは後々のことを考えると好都合です。プロジェクトの良い宣伝になりますからね。それに例の交通事故の件、マスコミにリークしても良いと許可してくれたのは支社長じゃないですか」

サオリの家族が巻き込まれた交通事故の真相を大谷にリークしたのは神崎だった。大谷自身は旧コイルス社の人間からの情報と思い込んでいたようだが、それも神崎が巧妙に仕組んだ偽装だった。

「過去の事故の真相を小さな雑誌社にリークするだけなら問題はない。雑誌自体が眉唾で、世間への影響力も少ないからな。あのネタを振りかざして空間設計室を粛正できたから良しとしているんだ」

「設計室は本社の犬でしたからね」

「ああ。そもそも設計室チーフの酒井は、本社で社長のお気に入りとして飼われている小此木とは同期入社で義弟。小此木も内部監査として色々かぎ回っていて目障りだった。お前も彼のことは好きじゃないだろう?」

「ハッハッハ。そんな話しましたか?」

神崎には大黒で一郎を電脳医療プロジェクトから引きずりおろした過去がある。支社長もその話を聞いていたのだった。

「小此木自身も、そして章太郎自身もおそらく気付いてないだろう。本社に私の台頭を快く思っていない勢力が存在し、私達のプロジェクトを暴いて阻止しようという力が強く働いていることを」

「その急先鋒が空間管理室本部長」

神崎が確認するように訊ねた。

「そうだ。設計室にもヤツの息のかかった職員が紛れ、ウラでプロジェクトの真相を突き止めようとしているのはわかっていた。小此木の派遣が陽動であることもな。ナメられたものだ」

「例の交通事故の時に、保険として設計室チーフの首をすげ替えておいて正解でしたね。おかげで解体も楽に終わります」

まったくその通りだという風に、支社長は息をつきながらうなずいた。

「話を戻す。このプロジェクトに関する秘密保持のためにどれだけ手を回して来たかわかっているのか？事故が起きればマスコミだけではなく、本社のその勢力にも付け入る隙を与えることになるんだぞ」

「今更秘密を嗅ぎ付けられたところで、プロジェクトを止めることなどできないと思いますよ。現在最終段階まで来ていますので」

「お前は最後の最後まで貫こうとは思わないんだな」

「まあ、そうですね」

神崎は本社をナメきっている。しかし神崎自身は長らく本社で地歩を築いていただけあって、支社長は彼の言葉は信頼していた。

「前からおかしいと思っていたんだ。プロジェクトの秘密を守るための重要な任務を、どうしてあんな娘に押し付けていたのか。はじめから事故を防ぐつもりはなかったのか？」

「いえ。正直に言いますとどちらでも良かったんです。もちろん最初のうちはこちらも原因の調査をしなければならなかったわけですし、彼女の頑張りには助けられました。しかし彼女を使ったそもそもの狙いは、事故を防ぐことではなく本社の陽動にありましたから」

サオリを利用したのは本社との諜報合戦における作戦の１つだと神崎は主張する。

「つまり、本社でプロジェクトの内容を暴こうとする連中への目くらましだったわけだな。確かに設計室もあの娘の行動にはかなり頭を悩ませていたようだった。彼女が我々にとっての敵か味方かもわからなかっただろうな」

「ええ。沙織さんには口酸っぱく正体を明かさないように言い含めておきましたしね」

「家族の身柄も私たちが押さえているので、彼女も逆らえないか」

腹黒い男だと思い支社長は神崎の方を見た。サオリを使おうと言い出したのは神崎である。

「で、今日の彼女の任務は失敗した。ミチコは間違いなく入り口を開く。お前のここからの筋書きはどういうものなんだ?」

支社長が訊ねた。

「入り口が開いて多くの子ども達のメガネは破壊される。もし空間の中に引きずり込まれる子がいたなら、詩織さんと同じ処置を施します」

「ああ、それで?当然イベントは中止。メガネの信頼はまたガタ落ちになるが」

「メガネの信頼が落ちることは、メガマスの業績悪化を意味します。本社は早急に建て直しの手を打たなければなりません。そこで我々が正式にこのプロジェクトのプレゼンを行い、既成事実として本社にそれを認めさせるのです」

始めからそういう算段になっていた。本社にメガネの不具合の公表や電脳ナビシステムの停止をしつこく要求したのは金沢支社である。本社も大黒市での事故を考慮して公表に踏み切った。

「このプロジェクトをメガマス再建の切り札に仕立て上げること。それにより私達の発言力が増大する」

「はい。このプロジェクトの成否は世間のメガマスへのマイナスイメージに影響されないはずですからね。だからここで事故が起こるかどうかはあまり問題ではありません。私としてはむしろ、ミチコが入り口を開くことによって新空間の中にどのような変化が観測されるのか、そのデータを採集したいと思っているくらいです」

神崎がこの事態に及んでも冷静でいることに、支社長は納得した。

「データ収集は必要ないだろう。例のプログラムが完成すれば、ミチコが今後暴走することはなくなる」

「念のためですよ。とにかく、私としてはどちらに転んでもいいということです」

どっしりと構えとけと言わんばかりに、神崎はソファーに深く腰掛けてお気に入りの葉巻を取り出した。

「しかしまあ、ミチコを我々も手で生み出したのは果たして正解だ

ったのかね」
　ため息をつくように、支社長も神崎の向かいに腰掛けた。
「ミチコの力は絶対に必要です。これは実証実験でも結果が出ています。ミチコの存在は、新空間の世界に安定をもたらすのです」
「世界の安定ね……」
　そのメリットがデメリットを上回っているのか、疑問であるように支社長はつぶやいた。ミチコの創造も神崎の指示で行われたのだ。
「ミチコは、かつて不安定だった“あっち”という空間を長い間保持していました。普通ならとっくに消滅しているはずのあの空間が、あれほど長く存在しえたのはひとえにミチコの能力のおかげです。新空間も構造が“あっち”と共通しているので、その力を利用しない手はありませんでした」
「現段階では新空間もかつての“あっち”となんら変わらない、サーバーの隙間にねじ込まれた違法空間に過ぎないからな」
　新空間の秘密を保ちつつ実地試験を行うために、プロジェクトチームはあえて新空間を“あっち”と同じ仕様にしたのだ。
「ええ。しかしミチコという電脳体を生んだだけでは、その能力が発揮されるとは限りません。かつて“あっち”を保持しようと考えた彼女の強い思念がそこに宿っていないと、彼女の存在は無意味だという結論に至りました。そのためにすでに消滅したミチコの記憶の断片をかき集め、それを人工知能ＡＩに流し込み、ミチコを完全に再現したのです」
　神崎が確認するように支社長に説明した。消え失せたミチコの記憶を集めるのは楽な作業ではなかったが、夏の事件の資料をすべて洗い直してピースを埋めていった。
「ところがそのＡＩを我々はうまく制御できなかった」
　自嘲するように支社長がつぶやく。
「はい。かつてのミチコは実体のない曖昧な存在であり、天沢勇子の幸福の実現だけを考えるという、単純な思考回路しか持っていませんでした。ところが今のミチコはメガマスのコンピューターに収

められた、れっきとした実体を持つ知能に成長しています。人間にたとえると年頃の娘ですからね。パパの言うことを聞いてくれないんですよ」

神崎も苦笑いを浮かべて言った。そこで思い出したように支社長も身を乗り出した。

「ミチコの暴走を止めるために、１度そのＡＩをシャットダウンさせたことがあったな」

「ええ。あの時はひどい有り様でした。完全にミチコの力に依存していた新空間は瞬く間に変質を始めた。ところが新空間自体は崩壊せず、他方でサーバーを共有している通常空間にそのしわ寄せが行ってしまったのです。通常空間の電脳ペットが一斉に狂ってしまったり、電脳ナビも誤作動を起こしたり。あれには参りましたよ」

電脳ペットの奇怪行動や大谷の車も巻き込まれた電脳ナビの誤動作事故。それらはすべてミチコを１度封印したことに起因していた。

「それに懲りてミチコを復活させた。すると新空間も元通り。プロジェクトはミチコ抜きでは成り立たなくなった。まるで麻薬だ」

「彼女の意志をコントロールできる例のプログラムさえ完成すれば問題はなくなります。それもあと少しのところまで来ています。今日はミチコにわがままさせてあげましょう」

「ああ。ミチコは母親に会いたがっているのか？」

支社長が思いついたように訊ねた。ミチコを新空間で復活させたプログラマーを父親とするならば、母親はあの２人だ。

「かもしれません。男親は娘に嫌われますからね。それに母親の１人、天沢勇子もここに来ているみたいですよ」

神崎はすでにイベント会場を見張っている部下からの情報でイサコのことを確認していた。

「そうか。今日入り口が開くのは避けられないかもな」

「賭けてみますか？」

冗談っぽく神崎が提案する。

「なら私は“開く”に１００万賭けよう。確率を考慮してお前が勝

った時には１０００万くれてやる」
「ああ残念。私も“開く”に賭けようと思っていました。なら、賭けはなしですね。とにかくじっくりと事の成り行き見物しようじゃありませんか」
神崎の言葉を背に、支社長はもう1度立ち上がってイベント会場の様子を見た。まだ浮かれはしゃいでいる子ども達の姿がそこにはあった。

#19　徒花の咲く庭　part6

イサコに呼び出された金沢黒客メンバーとユイ、そして玉子と大谷は急いでイサコとサオリの元に駆けつけていた。茫然とその場に立ち尽くしている2人を見て、レインが開口一番に訊ねた。
「どうしたんだ？2人揃ってお通夜みたいな顔して」
むしろイサコの顔の方が病人のように白くなってしまっている。シュウイチはただ事じゃないと思ってイサコに駆け寄る。
「大丈夫イサコ！？何があった？サオリにやられたのか？」
シュウイチはサオリと順番に視線を移しながら訊ねた。
「……サオリは悪くない。すべて私が悪いんだ」
イサコは地に足がついていない様子で、うわごとのようにつぶやいた。
「どういうことだよ？」
話が見えないという様子でレインが訊ねる。
「天沢さんの代わりに私が説明します。こうなってしまったのも私に責任があるので」
そこでサオリが1歩出て来て言った。今までと違うサオリの態度にも一同は驚く。
「ああ。一体何がとんでもないことなのか、詳しく説明してくれ」
レインが先を促すように言った。そこからサオリは手短にこれまでの経緯について打ち明けた。自分がメガマス金沢支社のプロジェクトチーム責任者の指示で動いていたことや、これまでの事故は新空間に棲むミチコの仕業であること、そしてイサコ達の組んだ暗号の力によって、今日ここで新空間への入り口が開いてしまう可能性が高いこと。今まで隠して来たすべてをサオリは洗いざらい告白した。この秘密をイサコと共有しただけではどうしようもないとサオリも感じていたのだ。
「それ、本当なの？」

シュウイチも何もかもが信じられなくて、月並みな言葉しか出て来なかった。

「ここで私がウソをつくメリットはありませんから」

「興味深い話だな。メガマスの幹部が君を使っていたというのは」

うつむき加減のメンバーをよそに、大谷だけは記者の顔つきになって興味を惹かれているようだった。実際サオリの説明をしっかりとレコーダーに録音していたぐらいだ。

「オッサン。問題はそこじゃねえし、何よりサオリの立場を考えろ。サオリは家族のことで半ば脅されて指示されていたんだぞ。そのおかげで楽しい学校生活も取り上げられて、本意じゃないのにイサコを傷つけさせられて。そこまでして守っていた秘密を今になって打ち明けるということは、かなり切羽詰まってる状況だってことだろ。今は詮索してる場合じゃねえし、ましてや今の話を記事にするなんて許さねえからな」

レインが大谷に釘を刺すように言った。この話を記事にするということは、サオリが秘密を打ち明けたことを指示者に知られてしまうということになる。そうなるとサオリの家族の身が危ない。

「わかってるよ。記事にするつもりはない。そもそもオレが記者なんかやってるのは、真実を知りたいという好奇心のためだ。メガマスという会社がどれだけ汚いマネをしているのか、それを掴んだだけでも収穫だ」

「念のために後で一筆書いてもらうからな」

「用心深いことだ」

大谷と話をつけたところで、レインが話を元に戻すようにサオリに訊ねた。

「でもどうする？今のままじゃ間違いなくこの場所に新空間への入り口が開くんだろ？それを防ぐ手だてはないのかよ？」

「いえ、残念ながら」

サオリは首を横に振る。

「その指示者からは何も言ってこないの？」

今度はシュウイチが訊ねた。
「はい。プロジェクトチームはこの場所をモニターしているはずなので、私が失敗したことはわかっているはずなんです。でも、先ほどから何も言ってきません。もしかしたら私はもう捨てられたのかも……」
サオリもかなり追い込まれているようだった。その様子を見て苦い顔になったのはイサコだ。自分のせいでサオリの努力を台無しにして、サオリの家族の安全も今はあやふやな状態にあるのがわかっているからだ。
「そいつらは事故を防ぐ気がないのか？」
「あの人達の考えることは、私には理解できません」
サオリもただ使われていただけの存在だ。そのために最低限のことしか知らされていない。レインは野暮なこと聞いてしまったなと少し後悔した。
「おいオッサン！あの暗号はアンタが中心になって考えたんだろう。起動し始めているあの暗号を止める方法はないのか？」
半ば大谷に当たるようにレインが訊ねた。むしろ、大谷がイサコを使って新空間への入り口を開くように仕向けたのではないかという疑念も抱いた。
「すぐにはムリだな。また例の暗号の構造を解析して、それを解除する暗号を組み立てろってことだろ。今回使ったやつも、一昨日と昨日とで2日かけて組み立てたものだからな。ちなみに聞くけど、ミチコが来るまで残り時間はどのくらいかわかるか？」
「反応を見ていますと、あと２０分ほどで来そうな感じです」
大谷の質問にサオリが答えたところでメンバーは絶望した。時間が十分残っているとは言えない。
「おい！元々オッサンがあんな暗号組んだのが悪いんだろ！責任とってなんとかしろ！」
焦ったカズマが大谷に詰め寄った。
「落ち着け！焦ったところでどうにもならないことは頭の悪いお前

達でもわかるだろ！暗号を使う方法は諦めた方がいい。それより別の方法で事故を防ぐことを考えろ！」

大谷もぴしゃりと言い放った。怒号のようなその声からも、大谷の中の焦りの色が見える。普段は何考えてるのかわからない男だが、今は事故を防ぐことしか考えていないようだということは伝わって来た。レインも先ほど大谷に抱いた疑いも捨てることにした。

「じゃあ本気でどうする？オバちゃんの方は何かないかな？」

レインは玉子に訊ねてみた。大黒で修羅場くぐってきた空間管理室職員なら、何か良い方法を思いついてくれるだろうという藁にもすがる思いだった。

「……入り口が開いてしまうのを防げないなら、子ども達を避難させることを考えた方がいいわね。今の話だと、この緑地公園の敷地の外なら安全ってことなんでしょ？」

ミチコが入り口を開く可能性がある範囲は、この緑地公園の敷地内である。

「しかしどうやって避難させる？」

それが可能なのかどうかという含みをもって大谷が訊ねた。

「大会主催者に申し入れて、一時的にイベントを中断させる。ミチコが入り口を開くチャンスがあるのはその1回だけよね？それさえやり過ごせれば」

「はい。新空間を開くには膨大なエネルギーを必要としますので、その1回を回避できれば今日ここで事故が起こることはないかと思います」

サオリもその作戦が良いと思った。その瞬間さえしのぐことができれば、また新しく制御暗号を設置すればいい話でもある。

「オレが疑問なのはそういうことじゃない。このイベントを中断させることなんて、アンタみたいな一介の、しかも今は謹慎中であるはずの設計室の職員ができるのかって訊いているんだ。今回のイベントはメガネの信頼回復のためにかなりの力が注ぎ込まれていると聞くしな。だいたい、どういう理由でイベントの中断を申し入れる

つもりだ。今の話をそこいらの一般のメガマス社員に打ち明けるのか？オレもコイツらに言われたように、それをするのはこの子のためにもならないんだぞ」

大谷はかなり現実的な問題を突きつけて来た。確かに理由も明かさずにこのビッグイベントを中断させることは、かなり無理があると一同は思った。

「じゃあどうすれば？」

玉子もこれ以上の良案は持ち合わせていなかった。するとその時だった。

「そう悩むことでもない。私が、囮になればいいだけの話だ」

妙にドライで、体温の低い声でイサコが言った。それはまるで他人事のような響きを持っていた。

「囮？」

レインが訝しみながら返す。

「……サオリの話では、私がこの公園にいる限り確実に新空間への入り口は開いてしまうという。ウラを返せば私は入り口が開く位置を誘導できるということになる。イベント会場からは少し離れたこの場所で入り口が開いてくれれば、他の子ども達に影響はない」

その場には一瞬の静寂が訪れた。イベント会場での歓声が奇妙な緊張感を生む。

「イサコ！それは囮とかじゃないだろ！それじゃもう生け贄じゃないか！」

にわかに声を張り上げたのはシュウイチだった。

「天沢さん！それは危険過ぎます。アナタにそんなマネは絶対にさせられません」

「でも、その反応を見るとできるんだな？ミチコを誘導してイベント会場の子ども達を傷つけずに済むことが」

サオリはイサコの言葉に黙り込んでしまった。最終的な手段としてその方法が選択肢として残っているのは事実だった。

「オレたちは誰一人傷つけずにこの危機を回避する方法を模索して

いるんだ。君がそう諦めてどうするんだよ」
「それにイサコ。ヤサコの時を想定しているのかもしれないが、廃ビルの事件でヤサコが“あっち”から戻って来たのは偶然だし、その理由も未だわかっていない。アンタが今ミチコに連れて行かれることになれば、通常空間に帰ってくることは叶わないかもしれないんだぞ」
大谷と玉子がそれぞれイサコを諭すように言った。しかしイサコは首を横に振った。
「理想を言っていても仕方ない。大勢の子どものメガネが壊れ、なおかつ得体の知れない空間に引き込まれる危険性と、たった1人私が犠牲になるのと、天秤にかけてみればどちらが良いかなんて考えなくてもわかることだ」
「聞けない話だ。オレたちはお前を守るためにずっと行動してきた。ここへ来てお前を1人行かせるなんてできない。羽交い締めにしてでもオレたちがこの場所から引っ張りだしてやる」
イサコの覚悟にレインも押し負けないように厳しい口調で言った。
「お前達は私さえ無事ならそれでいいのか？私が逃げれば多くの子ども達が犠牲になり、私はまた罪を重ねるだけだ。それを私のためだとでも思っているのか？」
イサコも怒りをにじませた眼差しを向けながらレインに詰め寄る。
「罪？こうなったことはお前の罪だなんて誰も思っていない。すべてはお前のあずかり知らぬところで偶然が重なった事故でしかない。贖罪の意識なんて捨てろ。その心が誰を幸せにするっていうんだ？」
「ミチコを生んだこと。それがそもそも始まりであって、私のすべての罪が集約されている。私も今日、ミチコへとつながる道を断絶し、すべてを清算するつもりでここにやって来た。それが真逆の結果を招いた。私には責任をとる義務があるんだ。もう私には逃げることは許されない。ミチコに連れて行かれることが罰だというんなら甘んじて受けるしかない。そもそも私と出会ってほんの2週間の人間が、軽々しく私の背負っているものを否定すること自体がおか

しいだろう」
「そんなの自己満足だ」
イサコの言葉をせき止めるように、シュウイチが割り込んだ。
「イサコ。この前、学校の屋上で泣いていた時に言ってくれたじゃないか。自分はもう1人じゃないって。なのにどうしてそういうことを言うんだよ。ぜんぶ自己満足じゃないか。取り残される僕たちのことなんて考えていないじゃないか」
シュウイチは涙を堪えるのに必死だった。
「それは……もちろんアンタ達には悪いと思ってる。でもな、自分の始末は自分でつけないといけないと思うんだ。私はかつて、自分の力じゃどうしても抜け出せない場所に迷い込んだ。そこに何度も手を差し伸べてくれた手があったから今ここにいる。今度は私がそういう存在になりたい。だからこそ私は強くならないといけない。自分の罪ぐらい自分で償わないといけない」
「だから誰の手も借りずに生きることを決めたのか？おかしいだろう。自分が1人じゃないって思えたのは、学校で責められた時にシュウイチやユイの助けを借りたからじゃないのか？言ってることが矛盾してる。そうやって今度は自分から仲間の手を離すのかよ。オレたちを巻き込みたくないだけなのか知らないが、結局お前は1人じゃないか。仲間のことを考えられない人間がそんなに強いとは思えないな」
イサコにしてもレインの言い分は痛いほどわかっていた。それでも自分のためにこの仲間達と大勢の子どもが巻き込まれることと比べれば、自分がどう思われるかなど問題じゃない気がした。
「じゃあ私にどうしろって？お前達の言う通り逃げてしまえば一生の罪を背負うだけだ。もう私は解き放たれたいだけだ」
これは本音だと思いながらイサコは言った。
「罪、罪、罪ってうるせえんだよ。お前は神の存在でも信じているのか？誰に許しを求めてるんだ？すべて自分の中で作り上げた幻想に過ぎない。そんなバカらしいものさえ捨てれば、とっくにお前は

解き放たれているんだよ」
「さっきも言っただろう！お前に何がわかるんだ。私が背負って来たものなんて、出会って2週間のお前にわかるはずがない。お前こそ私を救うことで報われると思って、自己満足に浸っているじゃないか」
イサコの言葉の後、少しだけ間ができた。レインはそこで深くため息をついた。
「なんかなあ。オレはイサコがもっと頭の良い人間だと思ったてたよ。でも違うみたいだな。そんな言葉でしかオレたちを突き放せないなんて」
レインは笑みさえたたえている。イサコはずるいと思った。とっくに自分の心なんて見透かしているはずなのに、そうやってじわじわと自分を追い込んで来るやり方が。たった2週間の間に出来上がったこのメンバーとの絆をイサコはなめてしまっていた。
「仲間が傷つくことを恐れ、罪を言い訳にしてすべてを自分1人で背負いこもうとする。学校でクラスメートに責められた時に、メガネを捨てようとしたのと同じことを繰り返しているだけじゃないか。お前の思考パターンなんて単純過ぎて困る。張り合いがない」
言われたイサコは自分でも可笑しかった。確かに考えてみれば同じことを繰り返しているだけだ。そしてレインも含めた全員がそのことに気付いているようだった。
「お前の好きな罪を引き合いに出してやり込めてやろうか？さっきから言ってるが、お前の背負っている罪はすべて幻想だ。でも、お前はこの前シュウイチと約束したな？この一件が終われば、おいしいもの食べに行こうって」
イサコはこんな局面にも関わらずわかりやすく動揺した。イサコはあの場にはシュウイチしかいなかったと思い込んでいた。
「お前がミチコに連れて行かれれば、その約束は果たせなくなる。その方が罪だとオレは思うんだけどな」
レインが笑みを含みながら言って、イサコはうなだれた。ここで

も言い逃れができなくなったことと、自分を追いつめるあまりその約束を忘れてしまっていたことに打ちのめされた。あの時シュウイチがどんな気持ちで誘ってくれたのか、イサコ自身はよくわかっていない。と言うより恥ずかしくてそれを考えようとしなかった。それでもこの約束だけは何があっても破ってはいけない。そのことだけはわかっていた。これまで自分をそばで支えてくれた、シュウイチの気持ちを踏みにじりたくはない。それが偽らざる気持ちだった。

「……確かに私はどうかしていた。罪の意識を自分の中でふくれあがらせて、悲劇のヒロインを演じていた。お前達の言う通り自己満足だった。お前達のことなんて考えていなかった。でも贖罪の意識はウソじゃない。いずれ私はミチコとはカタをつけるつもりだった」

「だからこそ、ここで逃げ出すのは気が引けるか。まあ、お前をここから連れ出すのは元から難しいと思ったよ」

レインもそれは諦めているようだった。散々厳しい言葉を浴びせたが、イサコがミチコとの決着を望んでいることはわかっていた。

「それなら何1つ話は前に進んでいないことになるぞ。お前達はイサコをここから逃がすためにさっきから説教してきたんじゃないのか？」

大谷が訝しみながらレインに訊ねる。

「オレたちはイサコの戦いを支えようと努力してきた。そんなオレたちが、イサコをここから逃げろなんて言えた義理じゃない」

「じゃあ今のやり取りは何だったんだ？」

レインは大谷に笑って返した。記者のくせに案外鈍いんだなという笑みだった。

「イサコは自分1人でなんとかしなければいけないっていう思いが強すぎる。ここまで一緒に戦って来て、結局オレたちを出し抜いて自分1人で戦おうとする心が気に食わなかったんだよ」

「……そう言われると、返す言葉がない」

痛いところを突かれたイサコは申し訳なさそうに返すだけだった。

「だから、オレたちが頑張らないとなあって思っただけだ。イサコ

の信頼を勝ち取るためにはまだまだ努力が足りないらしい」
「漠然と頑張るって言っても、なにか具体的な方法はないのかよ？」
歯がゆいように大谷が言った、その時だった。
「あります。１つだけ。イサコの意志にも反しないで、この危機を回避する方法が」
顔を上げて確かな口調で言ったのはシュウイチだった。全員がその凛々しい表情に釘付けになる。
「おう、シュウも同じこと考えていたみたいだな」
レインも待ってましたと言わんばかりに乗ってきた。
「やっぱレインも？カズマはどうだった？」
さすがに同じクラブで長らく苦楽を共にしてきただけあって、以心伝心しているのだろうかと思った。
「まあ、オレもさっきのオバちゃんの話を聞いてから何となくお前らの目の色が変わったような気がして、イヤな予感はしてた」
半分冗談っぽくカズマも返す。やはりこの３人は同じ考えを持っていた。
「じゃあちなみに、ユイは？」
「えっ？ごめん。私には全然何のことだかわからないけど」
シュウイチの質問にユイは困ったように答える。
「まあな。多分こんなこと考えるヤツはバカだけだろうから、ユイはまともな感性を持ってるってことだな。オレたちの仲間入りはするんじゃねえぞ」
「おい、さっきから３人で何を楽しそうにしているんだ？その方法っていうのは何だ？」
金沢黒客の３人だけで妙な一体感を持っているところに、大谷が割り込んできて訊ねた。シュウイチとカズマは目配せしてリーダーであるレインにしゃべらせることにした。
「ああ、ひどい作戦だ。オレたちの手でこのイベントをぶっ壊すんだ」
「ぶっ壊す？」

金沢黒客メンバー以外はきょとんとした。
「さっきオバちゃんの話にあったろ。このイベントを今から1時間でも中断させることができれば、当面の危機は回避できるって。でも大会主催者に申し入れたところで、まともに取り合ってもらえないのは目に見えている。だったらオレたちがこの場所で暴れて、イベントをぶち壊しにすればいいと思ったんだよ」
「暴れるってどうやって？この公園の敷地から子どもを1人残らず追い出さないと問題は解決しないはずだが」
正気だと思えないという表情で大谷が訊ねる。
「そこでサオリに訊きたいことがある」
「な、なんでしょうか？」
サオリもかしこまってレインの言葉を待った。
「この前お前が使っていた、一時的にメガネをフリーズさせる暗号。あれまだ持ってるか？」
「えっ！あ、はい。持っていますが、まさかそれを使うんですか？」
サオリもレインの考えがわかったようだ。そこで大谷も確認するように訊ねてきた。
「おい。あの暗号でメガネをフリーズさせれば、メガネの一切の機能が停止するんだよな？ということは、仮にイベント会場の真ん中で入り口が開いたとしても、メガネ自体が死んでいる状態だから新空間からの干渉を受けないってことになるのか？」
「オレもそれが訊きたかった」
レインと大谷がサオリに詰め寄る。
「はい。おそらくそれなら十分回避できます。フリーズ暗号の場合はイマーゴを持っていなくても複製が容易ですので、私がフル回転で作り出せばある程度の数は用意できるかと。しかしこのイベントには１０００人近い子ども達が集まっています。とてもその時間で全員分を作り出すことは……」
「いいんだよ。オレたちが狂ったように得体の知れない暗号をばらまき始めたら、たいていの子どもは恐れをなして逃げて行くだろう。

全員分は必要ない」
　要するに、フリーズ暗号を浴びせられたメガネはたとえ入り口が開いたとしてもその影響を受けないということである。その暗号をばらまきながら、一方でそれを使って脅しながら、イベント会場の子ども達を全員敷地外に逃げさせようとレイン達は考えていた。暴れるというのはそういう意味だった。
「おい！黙って聞いていればメチャクチャなことを。わかってるのか？お前らはそれで大会主催者に妨害者として捕まる可能性もあるし、大会を壊した責任で弁償しないといけないかもしれない。何よりこの街のメガネユーザーには、これから狂人のレッテルを貼られて生きることになるんだぞ」
　イサコは怒っていた。自分のためにそこまでするのは思い上がりも甚だしいし、望んでもいない。何より自分がそこまでして守る価値のある人間なのか、イサコには自信がなかった。
「オレたちのことは考えるな。そんなの小さいことだしな。大会をぶっ壊すとは言ってるが、ほんの小1時間中断させるだけだ。後でメガマスに怒られるかもしれないが、そんな弁償とか大げさな問題に発展しないだろう。それにオレたちの体面も気にしているようだが、そんなオレたちのことを1ミリもわかっていない連中にどう思われたって構わないんだよ」
「構わないことないだろう！今まで金沢黒客として積み上げてきた功績はどうなるんだ？」
　イサコが言ったところで一瞬の間があいた。すると金沢黒客の面々はその言葉に笑い始めた。
「功績とか、はじめっからそんな目に見えるもの残そうとか思ってないし」
　カズマが言った。
「オレたちはその時々で困ってる人を助けて、その人の心に残ればいいって思ってるからな」
　レインが言った。

「今回はイサコの心の中でだけ僕たちが輝いていればいいんだよ。今まで僕たちが助けて来た人もそう。どれだけ時間が経っても、その人には鮮明なイメージとして僕たちが残ってくれていればいい。その時の僕たちの周りからの評価なんて関係ない」

シュウイチが言った。

何だコイツらとイサコは思った。

「まあ、1つだけ教えといてやるよ。金沢黒客の『黒客』は確かに大黒黒客からもらった。中国語でハッカーっていう意味だが、オレたちが盗むのはデータやプログラムじゃない。それは“人の心”だっていう思いを込めてるんだよ」

レインの歯の浮くようなセリフに、イサコは笑ってやろうと思った。こんなナルシストでおめでたいバカ達を心の底から。なのに涙の方が溢れていた。そして震えていた。なんでこのバカ達がこんなに頼もしいと思えるのか、イサコにはわからなくなっていた。そしてその理由もなんとなくわかった。無防備にも自分はこのバカ達にハッキングされていたようだ。

「私という人間は、お前達の目撃者たる資格があるのか？」

流れ落ちそうになった涙を指で拭きながらイサコが訊ねた。

「当たり前だ。そうじゃなければここまで言わねえよ。サオリ。お前もだぞ」

「えっ？」

レインにいきなり振られてサオリは顔を上げた。

「元々オレたちがイサコに協力していたのは、イサコがお前を思う気持ちが本物だと思ったからだ。こんなことになってしまったが、もうお前も秘密を打ち明けて身軽になったんだ。無事にこの危機を乗り越えることが出来たら、イサコの手をとってやってくれ」

「……はい」

言われたサオリの目からも涙がこぼれていた。やっとぬくもりのある世界に戻って来れた喜び、柔らかい感情が心の中に溢れる。

「話はついたな。じゃあ段取りだ。今回はガチのチーム戦になると

思う。敵はミチコだ」

レインが改まって姿勢を低くして切り出した。まるで試合前にベンチ前で円陣を組む野球選手のような体勢だった。つられてその場にいた全員も輪になる。

「状況を整理しておきます。今この場所にはミチコが新空間への入り口を開くことができる条件がすべて整っています。そして入り口が開く可能性があるのは天沢さんの居る場所。天沢さんがこの会場から避難した場合には、天沢さんと同等のレベルのイマーゴを持つ人の居る場所。この2つのどちらかです。今イベント会場に集まっている子ども達の中で、その条件を満たす子どもが紛れている可能性は9割以上。どちらに転んでも入り口が開く可能性は圧倒的に高いと思います。残り時間は多く見積もっても15分ほどです」

サオリが確認するように全員に今一度説明した。

「入り口が開いてしまうのを回避する方法はただ1つ。この場所に集まっている子どもを全員敷地外に追いやること。だからオレたちはイベントをぶち壊してここに集まっている連中を全員逃げさせる。しかしミチコが入り口を開くまでにそれができない可能性だってある」

レインはそこでちらりとイサコの方を見た。それでイサコは自分の成すべきことを確認した。

「だから、私はここに残る。そういうことだな。お前達が子ども達を逃がすことに失敗したとしても、私がここにいれば入り口はここに開くわけだからイベント会場に影響はない。もし、入り口が開く前に晴れてお前達が子ども達を全員逃がすことができたなら……」

「イサコもこの会場から避難する。これで入り口が開くことはない。これが誰の意志にも反しないでこの危機を乗り越える唯一の方法だと思う」

シュウイチが複雑な表情で言った。シュウイチもイサコをここに残すのは本意ではない。しかし自分1人で逃げたくないというイサコの意志を尊重するなら、この方法しか残っていない。

「……15分以内に1000人以上の子どもを公園敷地外に追いやる。できなければイサコがミチコに連れて行かれる。壮大なゲームだな。限りなく成功率の低いギャンブルとも言える。それでイサコもお前達も納得しているのか？」

大谷はこれだけの作戦を思いつくメンバー達に唖然としながら、確認するように訊ねた。

「何言ってんだ。全員が納得できるような作戦を考えたらこうなったんじゃないか」

レインが決然と言った。

「……成功への鍵はチームの信頼関係ね。イサコはたった1人で仲間を信じてここで待たなければならない。他の子は必ずイサコを助けるという気持ちで、自分のすべてを投げ捨ててでも戦わなければいけない。そしてもし失敗したとしても、イサコのいる場所に戻って来ることも許されない。もしイサコのいる場所で入り口が開きかかっているところに戻って来たら、その子もイサコの巻き添えになる可能性もある。アンタ達に、それができるの？」

今度は玉子がメンバー達の覚悟を確認するように訊ねた。

「……絶対に成功させてみせます。でも、もし失敗したとしても戻ったりはしません。もし戻ったりしたその時には、イサコに死ぬほど怒られると思うので」

シュウイチは険しい表情で言った。イサコの気持ちをないがしろにするような行為も許されないということは、全員が肝に銘じていた。

「イサコは？こんな孤独な戦いに耐えられる？」

心配げに玉子はイサコの方も見た。

「……これのどこが孤独だと言うんだ？私はコイツらを信じている。待つことなんてどうってことはない」

イサコも覚悟を決めていた。これが初めて本当に自分が1人じゃないと思えた瞬間だったかもしれない。これまで仲間達に励まされるほどに大きくなる孤独への不安にイサコは戸惑ったこともあった。

しかしそこから1歩踏み出すのに必要だったのは自分が仲間を信頼することだった。それを気付かせてくれた仲間達に、イサコは自分のすべてを預けてもいいと思えた。
「わかったわ。アンタがその気なら、私もすべてを投げ捨てるつもりで戦う」
「なんとか空間設計室職員の力も見せてくれよ」
レインが要求していることは玉子も察していた。
「任せなさい。子ども達をビビらせて逃げ回らせるという点においては、私はプロよ！」
「頼みます！じゃあサオリはメインステージのウラでフリーズ暗号をできるだけ多く量産して」
「わかりました！」
シュウイチはサオリは目につかないところにいた方がいいと思った。
「ユイは、サクラ頼めるか？」
「サクラ？」
「オレたちの方を見て、『あの人達にメガネ壊された～！』ってわめいてくれないか？そしたら他の連中もオレたちに恐れおののくと思うから」
「うん。わかった！」
ユイも一緒に暴れさせるわけにはいかないなとレインは思い、被害者を演じてもらうことにした。
「オッサンも協力してくれよな」
「まあ面白そうだから、やるよ。じゃあ時間もねえし、行くか野郎ども」
大谷も案外乗り気のようだった。メンバー達の諦めない姿勢に感化されたのかもしれない。
「イサコ！必ず迎えに来るから、安心して待ってろよ」
去り際シュウイチはイサコに駆け寄って言葉をかけた。イサコはその時心の中で何かがはじけたような気がした。

「……アンタとの約束を果たせるかどうかは、アンタにかかっているんだからな」

イサコはその眼差しを直視することはできなかった。それでもシュウイチが最後に笑いかけてくれたのはわかった。その笑顔は迎えに来た時のためにとっておいてほしかったとイサコは思った。その笑顔が永遠の自分の思い出になってしまうかもしれない、そんな思いさえ頭によぎった。でも今自分にできることは、信じることだけだ。

イサコを残して全員が戦いの場に去って行った。イサコは絶対に泣かないと心に決めていたのに、涙は瞼の裏に津波のように押し寄せていた。その理由は、自分でもよくわからなかった。

#19　徒花の咲く庭　part7

「一体何が起こっている？詳しく状況を説明してくれないか？」
イベント会場に向かう途中、玉子はあるお願いをするために設計室でモニターしている一郎に電話をかけていた。一郎と友和も空間異常が観測されているのは掴んでいたが、それがどういう理由なのかはわかっていなかった。
「手短に言います。空間異常の原因はミチコです。彼女はこれから間違いなく新空間への入り口を開きます。私達はこれからそれを防ぐ為にこれから行動を起こします」
「それは君たちが失敗したということか？例の暗号使いの少女を止められなかったということなのか？」
「私たちは真実を誤認していました。少女の目的はミチコを呼び出すことではなく、ミチコを封じることにあったようです。私達がそれを阻止したおかげで、ミチコへの道は開かれてしまったことになります」
「なに？それは本当なのか？少女が自らそれを打ち明けたのか？」
一郎の反応も、玉子がサオリから真実を伝え聞いた時と同じものだった。にわかに信じろという方が難しい。
「はい。時間がないので彼女の素性などは後で報告します。重要なのはミチコが入り口を開いてしまうとイベント会場にいる多くの子ども達と、そしてイサコの身が危ないということです」
「どうして天沢君だけなんだ？」
「ミチコが狙っているのはイサコのようです。そしてミチコはイマーゴを頼りにイサコを探していると。しかし金沢市で起こったこれまでの空間異常の中には、ミチコが他のイマーゴ保持者をイサコと取り違えて入り口を開いてしまったことが原因のものもあるようなんです」
こんな簡単な説明で果たして一郎が納得してくれるかどうかは不

安だったが、玉子はとにかく信じてもらうしかないという思いだった。

「だからこのイベントでもミチコが入り口を開く可能性が高いって？」

一郎はそこからしばしの間考え込んだようだった。間を置いて玉子に訊ねた。

「仮にそうだとして、どうやって事故を防ぐつもりなんだ？このイベントを中断させることは僕たちの力じゃ難しいと思うけど」

「はい。その点は同じ結論に至りました。だから私達は、しばらくの間イベントが中断するように暴れ回ることにしました」

「暴れ回るってどういうことだ？」

またとんでもないことを言い出したなと一郎は焦り始めた。

「文字通りです。イベントをぶち壊しにして、子ども達を一旦敷地の外に逃がします。イマーゴ保持者さえこの敷地からいなくなれば、ミチコが入り口を開くことはありません」

「天沢君は？」

「彼女は公園の一番端にあたる高台にいます。ミチコの狙いは彼女ですから、彼女がそこにいるかぎりミチコが入り口を開くのはそこになるはずです」

これは叱られるだろうなと思いつつ、玉子は正直に申告する。案の定一郎は声を張り上げた。

「なぜ彼女をそこに残した！そういう事情なら最優先に彼女をこの公園から逃がすべきだろう！」

「しかし、彼女はミチコに対する罪悪を背負っています。すべての責任を自分にあると。だからここで逃げることなどできないという強い意志を持っていて、とても私には彼女を逃がすことはできませんでした」

それでも逃がすべきだと一郎には怒鳴られそうだったが、玉子にはどうしてもそれはできなかった。イサコの気持ちは痛いほどよくわかったからだ。玉子はかつて通路を暴走させたことがあり、その

罪悪感から、一連の事件を解決させるために空間管理室に志願した過去がある。

「できませんでしたって、彼女がどうなってもいいのか！」

一郎はまだ怒りが収まらない様子だったが、そこで会話の内容を自分のメガネでも拾って聞いていた友和が割って入った。

「わかったぞ。君たちは天沢君という保険をかけて事故を阻止するつもりだな。ミチコがその入り口を開くまでにイベント会場の子ども達を全員避難させれば、最後に天沢君を逃がせばいい。もしそれに失敗したとしても、入り口は天沢君のところに開くわけだから被害は最小限に抑えられる」

「はい。その通りです」

友和の方が話はわかってくれそうだと玉子は少し安心した。

「それにしても、そんな作戦で……」

「小此木！これは本人達が悩んだ末に決断したことだろう。今更オレたちに止めることはできない。だったら、彼女達に最大限の協力をするのがオレたちの仕事じゃないのか？」

まだ納得しきれていない一郎諭すように友和は言った。時間が残されていないということも友和は自覚しているようだった。

「お願いです室長！私たちに協力してください。もちろん設計室にご迷惑はおかけしません。すべての責任は私が一身に請け負いますので」

「事情はわかった。小此木がどう言おうと、オレは協力してやるからな。上から言われもないことで怒られてちょうどむしゃくしゃしてたところだ。後は処分を待つだけのオレに、失うものは何もないからな」

一郎とは違って友和は乗り気のようだが、それはさすがにまずいのではないかと玉子は思った。

「友和！本当にお前は、３人の子どもを持つ親の言葉とは思えないな……わかった。協力しよう。どんな処分よりも、子ども達が事故に遭う方がよっぽど恐ろしいからな」

一郎も認めざるを得なかった。今から別の手段を考えている時間などない。

「ありがとうございます。それでお願いというのはですね……」

「わかっている。キューちゃんをこちらで操作できるようにしてほしいってことだろう？少し時間をくれないか？今僕たちにキューちゃんの指揮権はない。上層部が管理しているものをハッキングしないといけないんだ」

こんなことが上に知られてしまったらどうなってしまうのかを考えるとぞっとするが、やるしかないかと一郎は諦めた。そもそも謹慎中の身でありながら平然と設計室を占拠している時点でバレたら処分の対象だ。

「ご手数おかけします。もしそのハッキングが明るみに出た場合には、その責任はすべて私が負いますので」

「また例の手を使うのか？もういいよ。自分の保身を考えてこんな反逆行為に踏み切るというのは筋が通ってない。自分の始末は自分でつける。僕も友和もいい大人だ。君にすべてを押し付けるのは忍びない」

「でも……」

やはりそれは家族を守る義務がある人に押し付けるべきじゃないと玉子は思った。元々言い出したのも自分だ。

「いいんだ。いやらしい話、僕には本社の後ろ盾があるからね。事情を説明すれば処分が軽くなるかもしれない。君はそんなことは考えなくてもいいから、事故を防ぐことだけを考えてくれ」

「……わかりました。ありがとうございます」

「修一も一緒に戦うんだろう？よろしく頼む」

「はい！」

玉子は電話を切った。

先にイベント会場の中心に到着した金沢黒客メンバーと大谷は、改めてその数の多さに気圧されていた。勇んでやって来たのはいい

ものの、果たしてこの数を１５分できれいに掃除できるのかと考えるとできなさそうな気がしてくるので、あえて考えないようにした。
「さあ、どのタイミングで仕掛ける？」
レインが大谷に確認する。すでにメンバー達はサオリから１０個ずつフリーズ暗号を預かっていた。残りはサオリが量産するごとにメールに添付されて送られてくることになっている。
「ちょっと待て。あと２分もすればこの第２ラウンドが終了する。その瞬間を狙おう」
大谷は時計を確認して言った。現在イベント会場では１０ブロック分かれて『ＶＲクエスト３』ＶＳモードのトーナメント戦が行われており、それぞれのチームが視覚的な仮想空間に入り込んで自分たちの戦いに熱中している。そんな中で暴れても効果は薄い。全員がこの現実に戻ってきてから行動を起こそうというのが大谷の狙いだった。
「合図はどうする？」
「こんな時のために電脳爆竹持って来た。これを爆発させて合図にする」
用意がいいなあと金沢黒客メンバーは思った。しかし都合が良い。これでおかしな集団が突然現れたという演出もできる。
そこからしばらく待機すると、第２ラウンド終了のアナウンスが流れた。会場ではそれぞれのブロックで応援者も含めて歓喜の声や落胆の声が上がっている。試合が終わって勝者と敗者の明暗が分かれ、ゲーム参加者が現実世界の眩しい陽光に目を細めたその瞬間、イベント会場に激しい炸裂音が轟いた。
「な、なんだ！？」
そこにいたほぼ全員の視線がその音源に集まった。メガネをかけていれば、立ちこめる煙の中に４人ほどの影が確認できたはずだ。イベント会場には恐ろしく奇妙な静寂が訪れた。
「さあ、オッサン。オレたちのショーの開会宣言を頼むぜ」
レインが隣にいた大谷に小さな声で言った。

「何て言えばいいんだよ？」
「狂ったような言葉なら何でもいい！」
仕方ねえなあと大谷は笑う。その時大谷は小さい時に見た特撮ヒーロードラマに登場する怪人の言葉を思い出した。
「ヒャッハッハッハ！オレたちは地獄からの使者だ！ここにいる全員オレたちの世界に引きずり込んでやる！」
思いっきり声を裏返しながら叫び、大谷は持って行った残りの爆竹を空に投げた。それらが爆ぜた瞬間に、レイン達も動き出した。
「うわあああ！なんか変なヤツがいるぞ！」
大谷の狂人ぶりに近くにいた子どもは逃げ始めた。作戦通りの展開だった。
「名演技だな」
「あー。いい歳こいて何言ってんだかオレ」
凹んでいる大谷を尻目に、カズマが先陣を切って1番近くにいた子どもにフリーズ暗号を浴びせた。
「はい！君地獄行き！」
暗号を浴びせられた少年は何がなんだかわかっていない様子だった。そのうちメガネの映像がホワイトアウトしていくことに気付き、何が起こったのか理解したようだった。
「メガネが！僕のメガネが！」
少年は仲間にすがりついた。仲間の少年達はその光景に怯み、それを目撃した少年達も怖じ気づいた。
「やべえ！こいつら本気でやべえって！」
少年達はなりふりかまわず逃げ始めた。しかし学校の体育館に全校生徒を集めたような密度を誇るイベント会場で、しかもロープで区画分けがなされている中で身動きをとることさえままならず、今に押し合いへし合いが始まった。
「ふざけんなよこの野郎！」
逆にその光景を見て金沢黒客に攻撃を仕掛けてくる勇敢な少年も現れる。

「散れ！」
しかしレイン達は暗号1発でその少年達も始末する。今度は応援者として駆けつけていた女子達も断末魔の叫び声を上げ始めた。会場は阿鼻叫喚の巷と化している。
一方会場の外周にいた子ども達は中心で何が起こっているのかイマイチわかっていなかった。その野次馬達が様子をうかがっているおかげで、中心にいる子ども達が逃げられないという事態になっていた、その時だった。
「みんな逃げて！あの人達は危ない。メガネを破壊する暗号をばらまいてる。近づくとアナタ達のメガネも壊されるわよ！」
ホワイトアウトしたメガネをかけたユイが、その場にいた子ども達に言い聞かせるように叫んだ。もちろんこれは自演だ。
「メガネを破壊される？」
半信半疑で1人の少年がユイに確認しようとしたところで、最初に暗号をくらった少年とその仲間達が命からがらという様子で逃げて来た。
「アイツら、マジでやばい。早く逃げろ。さもなきゃお前達もメガネぶっこわされるぞ！」
ホワイトアウトしたメガネをかける少年を抱えるようにして歩いて来た1人がその場にいた子ども達に言う。それを聞いてようやく外周の子ども達も避難を始めた。それを見て安心したユイは、また反対方向で立ち止まっている子ども達の元に向かった。
外周が移動を始めてくれたおかげで中心の子ども達の移動もスムーズになった。一方でそのならず者を退治しようと勇んだ少年達がメンバー達の元に歩いて来る。会場には中心から逃げる流れと中心に向かって来る流れの2つが出来上がっていた。
「おい、大量のバカ達がこっちに向かって来るぞ。暗号の供給は足りるのか？」
カズマが不安そうな表情で言った。
「わからない！カズマ！ここはお前の得意な1本で威圧してくれよ」

レインが頼むように言う。カズマは柔道の達人だ。
「あんまり素人さん相手に技かけるのは良くないんだがな」
「仕方ねえさ。オレたちは英雄になり損ねたんだ。だったら、堕ちるところまで堕ちても大差ない。むしろイサコの中の英雄であるために、オレたちは地獄へ堕ちるんだ」
「なるほど。それもそうだな」
そう納得するとカズマは手近にいた少年の腕を持ち、軽く足を払って見事に転倒させた。もちろん受け身をとる訓練もロクにされていない少年のために、掴んだ腕は離さなかった。
「は～い、ご苦労さん」
レインはその少年に暗号を浴びせた。その光景を目の当たりにした少年達はやはり怯んだ。もとより体躯が違いすぎるカズマの威圧感に圧倒されたようで、メンバー達に挑もうとする子ども達はいなくなった。
ところが今度は、大会主催者側の警備員達が目を吊り上がらせながら子ども達の流れに逆らって突き進んで来るのが見えた。
「おい、あのごっつい人達はどう処理するんだ？」
手を休めることなく少年達に暗号を浴びせるメンバー達に大谷が訊ねる。
「知らん！そこまで考えてなかった」
「はあ？あんな怖いおじさんたち相手には得意の柔道も効かないし、メガネをフリーズさせてもあんまり意味がないぞ。それに捕まったら連行されてスンゲー説教されそうだ……オレがな」
大谷が情けない声で言う。数で言えば１０人ほどだが、プロの警備員はさすがに相手にすることはできないなとレインは思った。
「仕方ねえ。ここは分散して逃げ回ろう。あんなのに捕まったら身もフタもねえからな」
「子ども達の掃除はどうすんだ？」
「大丈夫です。そろそろオバちゃんが行動を起こすかと」
シュウイチが言ったまさにその瞬間だった。メガマス本社ビルか

ら夕刻を舞う鳥のようにキレイな隊列を作って、８機のキューちゃんがイベント会場に向かって来るのが見えた。
「サーチマトンだ！」
それに気付いた子ども達が叫んでいる。金沢ではキューちゃんという愛称は一般的ではなく、正式名称でそのまま呼ばれている。抵抗する術を持たない金沢のメガネユーザーにとって、キューちゃんは畏怖の存在だ。
「よーし。間に合ったな。後はオバちゃんに任せよう。オレたちはとりあえず逃げる！」
「ラジャー！」
そこで４人は散り散りになった。警備員達も慌てて分散して追い込みにかかる。
「待たんか！」
警備員達も分散したメンバー達を追うように分かれた。警備員達は２人で１人を追い込むように動く。
その間に会場に到着した８機のキューちゃんは、中央から全方向に散開するように動き出し、子ども達をフォーマット光線で威嚇して外へかき出していった。それを客観していれば、襲来した宇宙人から地球人が逃げ惑うような光景に見えたかもしれない。まさにゲームでしかお目にかかれないような景色だった。
「酒井君！こっちです」
キューちゃんが暴れて警備員達もそちらに気を引かれている間に、シュウイチはなんとか彼らを撒いてステージ裏の林に逃げてきた。その時そこで待っていたサオリに声をかけられた。
「どうしたの？まさかミチコの反応が始まった？」
「はい確実に反応は強くなってきています。おそらくあと５分もないかと」
シュウイチはその報告を聞いて苦い表情になった。メンバーが思っていたよりも反応が早い。
「まずいな。今はキューちゃんが子ども達を追い回してるけど、後

5分で全員を敷地外にというのは」
　シュウイチが見た限りではまだ大半の子どもは会場の中にいた。
これではイサコを避難させることはできない。
「そのことですが、妙なんです。ミチコの反応はイベント会場の中心から観測されています。このままだとそちらの方に入り口が開いてしまう可能性が」
「なんだって？でもさっきはイサコが居る場所に通路は開くって」
　シュウイチはまたどうも複雑な気分になって訊ねた。どこかでイサコが助けるかもしれないという淡い希望も消しきれなかったのだ。
「もしかすると私の勘違いだったのかもしれません。私はミチコが天沢さんの発する気配を既に感知していると思っていました。でもこの反応を見ると、彼女が絶対的に天沢さんを捕捉しているわけではないかもしれません。ミチコは単に、イマーゴ能力の強い子どもに反応しているのかも。天沢さんよりも強いレベルのイマーゴ保持者がイベント会場に紛れていた為に、このような事態になってのかもしれません」
「でも、イサコよりも強いイマーゴ保持者なんているの？」
　シュウイチは以前メガばあから、イサコほどの強いイマーゴ保持者は本当に稀な存在であると聞いていた。ヤサコにも同様のことが言えて、2人が出会ったことが運命的なものだったという言い方をしていた。
「なるほど。だいたい事情はわかったぞ」
「オバちゃん！」
　いつの間にかその場所に玉子が立っていた。
「キューちゃんの方はいいんですか？」
「今は室長とあなたのお父さんに制御してもらってる。でも、そろそろ会場は危ないんでしょう？」
　玉子も深刻な表情でサオリに訊ねた。
「はい、その通りです。それでその、事情がわかったというのは？」
「ああ。今月の初めに起こった大黒市の事件でわかったことなんだ

が、イマーゴの能力は年齢を重ねるごとに薄れていくようだ。それは夏の事件から半年ほどしか経っていないにも関わらず顕著に確認された。あなたのいとこでイサコと同レベルのイマーゴの持ち主、小此木優子の場合だけど」

ヤサコもその時にイマーゴ能力の衰えを肌身に感じた。おそらくそれはイサコ自身も何らかの形で実感しているはずだった。

「そうなんですか……」

「もう1つ理由をあげるとすれば、ミチコ自身の認識の問題ね。ミチコが昔のままの記憶しか持っていないとしたら、イサコのイマーゴの力はもっと強力なものと思ってるに違いない。イサコの能力が衰えているのを知らないということね。会場には多くの小学生が詰めかけているし、今のイサコより強いイマーゴ保持者がいたとしても不思議じゃない」

なるほどとシュウイチとサオリはうなずいた。しかし問題は事故を防げるかどうかだ。

「イサコはどうしますか？このまま放っておけばイサコは助かって、下手をすれば会場の中心で事故が起きることになりますが」

「いや、イサコには知らせない方がいい。彼女のことだ。責任を感じてノコノコと犠牲になりにやって来るかもしれないし、そもそもイサコがやって来たところで何の解決にもならない。イサコには悪いが、ここは知らせない方がいい。アナタもイサコが生け贄になるなんて耐えられないでしょう？」

玉子はシュウイチの目を見据えて訊ねた。そしてシュウイチも静かにうなずいた。シュウイチ自身はイサコに伝えた言葉とは裏腹に、やはりイサコがいなくなってしまうことの不安の方が大きかった。

その時だった。3人は足元にほんのちょっとした違和感を覚えた。次の瞬間、はっきりと感じられるほど地面が揺れ始めた。震度でいえば4ぐらい。立っていればバランスを崩してしまいそうな規模だ。

「これはミチコが来た予兆か！？」

玉子は片膝をついてその揺れの大きさを確認するようにサオリに

訊ねた。同時に会場の中心からも明らかにキューちゃんで追い回される子ども以外の悲鳴も上がっていた。

「いけません！もう既に会場中心では入り口が開きかけているのかも！」

ステージのオブジェが邪魔で会場中心の様子は確認できない。

「とにかく、様子を見に行こう！」

3人は揺れがおさまると同時に駆け出した。紙のような白い顔をした大会関係者達の間をすり抜けながら。

しかし3人は、ステージ裏の茂みの中でモジョが今の会話を聞いていたことに気付いていなかった。

#19　徒花の咲く庭　part8

警備員達の追跡から逃れ、大谷はひと息ついて変装を始めた。再び警備員達に見つかってもバレないようにするためだ。雑誌記者として目当ての人物を尾行をする時のために、大谷はこのようなグッズをいつも携行している。長髪を隠すようにニット帽をかぶり、メガネはゴーグル型から黒い太ぶちメガネへとかけかえると、これで普段のチャラい印象が消える。そうしてもう1度会場の方に戻ろうとした時に大谷は足元の揺れを感じた。

しかし問題はそれだけではなかった。子ども達は先ほど以上に騒然としているが、その視線は足元よりも会場中心の上空に集まっている。大谷もつられてその方を見た。するとメインステージのオブジェを背景に、ビルの3階ぐらいの高さのところにブラックホールが浮いていた。それは周囲の空気を巻き込むように画像を歪め、徐々にその口を広げている。将来タイムマシンが実現したなら、未来人はこうして時空から穴を空けて飛来するんだろうなと、大谷はこんな時に頓珍漢なことを思った。

あまりに奇怪な光景過ぎて目を奪われるあまり、大谷は先ほどはずしたゴーグル型のメガネが着信しているのにしばらく気付かなかった。すぐにかけなおして電話に出る。

「もしもし?イサコか?」

「ああ、私だ。アンタに協力してほしいことがある」

冷静に状況を整理しようとしたら大谷は逆に混乱した。そもそもイサコは高台の方で待機する手はずになっていなかったか。いやそもそも、イサコが高台にいるのになぜに会場の中心に例の入り口が出現しているのか。

「待てイサコ!確認させてくれ。お前は今どこにいる?」

「今高台から会場の方に向かっているところだ!」

「作戦を忘れたのか?君はそこから1歩も動いてはいけないんだぞ。

早く戻れ！」
「お前は聞いてないのか？例の入り口は会場の中心に開いてしまうんだ！」
それは見たらわかる、と大谷は思った。とにかくこの状況で深くは考えない方がいいと大谷は判断する。
「みたいだな！で、君は一体何をしに会場に来る？」
「野暮なことを訊くな！私の代わりに誰かが犠牲になるのを阻止するためだ！まだ子ども達は全員敷地外に追い出せていないだろう！」
敷地外と言うよりも、芝生の広場の外周によりかたまって野次馬のように怖いもの見たさで騒いでいるだけのように大谷には見えた。これで果たして目的は果たせたのかは微妙だ。既に直径1メートルに達しようとしているブラックホールとの距離を考えれば、安全な位置ではないだろうなと思った。
「バカ言うなって。こうなりゃ何も起こらずに済むことを神に祈るしかねえぞ。わざわざ犠牲になりにくるなんて正気か？」
大谷は今の言葉はおかしいなと自分でも思った。あんな作戦を立てた時点でイサコ達が正気だったとは思えない。
「犬死にはしない。そのためにアンタに電話したんだ」
「ああ？」
大谷はとりあえず話だけは聞くことにした。

その頃レインとカズマは、黒い穴の出現にある種の期待感を膨らませて沸き立っている子ども達をなんとかもっと遠くに追い出そうとしていた。
「お前ら逃げろって言ってるのがわからねえのか？その大事なメガネをぶっ壊されても知らねえぞ！」
なぜこの会場に入り口が開こうとしているのか、すでにレイン達はシュウイチから連絡を受けて知っていた。本当のところここでもフリーズ暗号を使いたかったのだが、すでに手持ちにあった分は使い果たし、サオリもこの事態に駆け回っていたので供給は望むべく

もなかった。
「ダメだ。こいつらオレたちなんか眼中にねえ。これじゃまるでアイドルの出待ちを整理してる警備員だ」
カズマが疲れたような口調で言う。神秘を目の前にした子ども達には、たとえあのブラックホールがメガネを破壊したという噂を知っている者でも、ほとばしる好奇心を抑えることができないようだった。キューちゃんもブラックホールの方をなんとかしようと動いており、これ以上子ども達を外に出すのは叶わないと2人は思った。
「ちょっと！これ一体どういうことなの！？」
そんな時に野次馬の中からひときわ耳につく高音のわめきが聞こえてきたと思って2人が振り返ってみると、そこにはイサコと同じ1年1組の速水エリナとその一味の女子軍団が立っていた。
「何だお前か。今忙しいから後にしてくれ」
うんざりしたようにカズマが返す。
「随分な言いようじゃない。アナタ達、いつも天沢さんとつるんでいる人達よね？その人達がなに？さっきはイベントをあんなにメチャクチャにして。おまけに私が応援していた男の子のメガネを破壊してくれて。タダで済むと思ってんの？」
「うるせえな。メガネはしばらくしたら何事もなかったかのように復旧するから安心しろ。それよりそこでギャースカわめくだけなら、さっさと遠い向こうの方に消えてくれねえかな？」
レインが冷たい口調で言い放つと、エリナも逆上した。
「なんなの？あのブラックホールの出現もどうせ天沢さんの仕業なんでしょ？これだけ大勢の人を巻き込んで、どこまで無神経なの彼女は？」
「違う！イサコとオレたちはあれが出現しないように全力を尽くしてきたんだ。ここでオレたちが暴れたのも、この場所が危険だと知らせるためだ」
カズマはイサコが勘違いされることが我慢ならなかった。エリナのような人間にまじめに張り合おうとするのはあほらしいことだと

思いつつも、それでも言わずにはいられなかった。
「ああ、そう?だったら天沢さんやアナタ達はそれを阻止できなかった無能だってことね。今から何が起こるのか知らないけど、その責任はどうやってとるつもりなのかしら?」
かまわずエリナは楽しそうに続ける。それにはレインもカズマも言葉がでなかった。確かにこうなってしまったのは自分たちの責任でもあり、そして今は何も起こらずに済んでくれることを祈ることしかできない無力さを痛感しているからだ。
ちょうどその時、遠くの方で雷がうなるような音が聞こえた。その場にいた子ども達は一斉に空を見上げるが、雲1つない青空が広がっている。すぐにそれがブラックホールから発せられたものだと理解する。
「上空のブラックホールの近くにいる人はすぐに逃げてください!最悪の場合メガネが破壊される恐れがあります!繰り返します。外周で見物している人達も直ちにここから逃げてください!」
その時玉子がどこから借りたのか拡声器を使って呼びかけ始めた。さすがにブラックホールの迫力に圧倒されたのか、会場の中心近くに子ども達はいなくなったが、外周で状況を見守っている子ども達も依然危険な状態にあるのは変わりない。しかしそうやって危険を呼びかけるほどに子ども達が上気していくようだった。
そこでまた人ごみのざわめきが起こった。子ども達は今度はメインステージの方を指差して騒ぎ始めている。つられてレインとカズマもそちらの方を向いた。
メインステージの真ん中にいたのはイサコだった。
「アイツ!あそこで何しているんだ!」
カズマが自分の目を疑いながら叫んだ。
「オレにはわかった。わかったけどもうどうすることもできねえな。あれがイサコが選んだ道だ。結局オレたちにはアイツを守ることなんてできなかったんだよ」
淡々とした口調とは裏腹に、レインは悔しそうに息をついた。そ

してこの場面をシュウイチはどんな気持ちで見ているのだろうかと、会場を見渡してその姿を探した。

「これから彼女のショーが始まるようね。だったらとくと見せてもらおうじゃない」

一方のエリナは皮肉るように、そのイサコの勇姿を見届けようとしていた。もうレインとカズマは彼女の相手をする気力も残っていなかった。

「イサコそこで何をしている！早くそこから降りろ！」

その姿を見て玉子は拡声器ごしに怒鳴りつけていた。玉子もなぜイサコが出しゃばりに来たのかわかっていない。

「犠牲になるのは私だけで十分だ！近づくな！」

イサコも思いっきり声を張り上げた。その声は玉子と、玉子の近くにいたシュウイチとサオリの耳にやっと届くぐらいだった。

「イサコ！いい加減にしてくれ！その舞台で観客に看取られながらミチコに連れて行かれるつもりかよ！」

シュウイチはメインステージに走りだし、イサコを引っ張って行くつもりだった。しかしその動きをイサコに一喝された。

「私にも考えがあるんだ！もうここは私に任せてくれ！お前達は早く離れろ！」

イサコはそう言うと右の手の平を顔の前に掲げ、そこでイマーゴを使って暗号を刻みつけた。右手には黄金色の暗号がびっしりと浮かび、ほんの一瞬陽光に晒すと会場全体に反射して鋭利な輝きを放った。

「何をするつもりだ！」

なおも制止しようとするシュウイチの叫びには応えず、次にイサコはその手を心臓の位置まで持っていった。そこでイサコが何をしようとしているのか、玉子はようやく気付いた。

「よせ！それをするとお前はヤサコのようにいつぶっ倒れてもおかしくない体になってしまうぞ！」

イサコは玉子の叫びには反応した。玉子達の方に顔を向けると、ほんの一瞬微笑んだような表情を作った。そして次の刹那、意を決したように、まるで武士が自らの腹を切り裂く瞬間と似たような表情で、イサコはその暗号を自らの暗号炉に撃ち込んだ。

暗号炉は長い眠りから覚めて起動し始める。イサコの全身を青白い光がほとばしると、観衆からはまたどよめきが起こった。

「あのバカ……なんてことを」

玉子が茫然としてつぶやく。そもそもイサコは暗号炉を起動させるようなイマーゴを消費する暗号を持っていなかったはずだ。なぜという思いが次に玉子の中でわき上がって来た。

「すまない。オレがあの暗号を授けた」

その時いきなり現れた大谷が、そんな玉子の気持ちを察したように言った。大谷が変装していたので最初は驚いたが、すぐに事情を飲み込んだ玉子は怒りを孕んだ目で大谷を見返した。

「アンタは今あの子が何をしたのかわかってるのか！彼女の体はすでにボロボロなんだぞ！ミチコに連れて行かれる云々の前に、彼女の体がもたなくなる！」

「仕方ねえだろ！こうなった以上、ここでの事故を防ぐには彼女にああさせるしかなかったんだから」

大谷も強い口調で反論した。大谷もイサコの暗号炉を起動させるリスクはわかっているという口ぶりだった。

「天沢さんにどうさせるつもりなんですか？」

サオリが大谷を見上げて訊ねる。

「最終手段だ。あのブラックホールを物理結界で封印する。そのためには物理結界暗号の増殖のために暗号炉を起動するしかなかった。以前公園で君が使っていた物理結界をオレが暗号で破ったことがあったよな？その時の暗号を参考にして2分で組み上げたものだが、おそらくあの新空間の産物にも効果があるはずだ」

先ほどの電話でイサコが大谷に頼んだのはこのことだった。そういうことなら玉子もイサコに最後の淡い希望を抱かざるを得ず、止

めることはもとよりできないのでただ見守る覚悟を決めた。さきほどからキューちゃんがブラックホールに向かって光線を発射し続けているものの、光線は穴を貫通するだけでまったく効果がない。やはり新空間とはそもそものバージョンが異なるためか、キューちゃんのような旧式には手に負えない状態だった。これが最後の希望だ。

そんなイサコは暗号炉の起動から激しい頭痛とめまいに襲われていた。じっとこめかみを押さえるだけでその場から動くこともできない。それでも体全体が徐々に温まってきているような感覚はあった。後はこの針金で締められたような頭痛だけを取り除けば、研ぎすまされた五感でミチコと戦えるはずだった。ただその痛みは治まる気配すらなかった。

「なにやってるんだよイサコ！僕との約束破るつもりか！」

シュウイチの声が聞こえた。人の気も知らないで気楽なもんだとイサコは思った。この期に及んでまだあの約束を持ち出すとは、案外根に持つタイプなんだなとイサコは可笑しくなった。

だからイサコは心の中ではあの約束は諦めかけていた。なのにどういうわけかそう思った瞬間に頭痛は少しずつ引いていった。どこにそんな未練があったのだろうとイサコはまた笑いたくなった。

目を開いた瞬間に真っ先に飛び込んできたのがシュウイチだったのがまた悔しかった。これまでミチコという存在を忘れきれなかったように、小此木優子を思いつづけたように、今度はその心の核の部分にシュウイチが割り込んできたような、そんな気分だった。むしろシュウイチのことを思うときの方が心は痛み、これまで感じたことのなかったような苦い気持ちになる。イサコはもう誰かに支配されたくなかった。なのにその支配だけにはどうしても勝てないのではないかという気もした。

「来いミチコ！私はお前なんかに屈するわけにはいかないんだ」

イサコが見上げた上空には、直径3メートルほどの漆黒の真円が浮いていた。そしてその中に灰色に揺れる人影を確認する。

「ユウコ……」
　メガネに直接語りかけてくるように彼女は言った。陰湿でまとわりつくような、そしてリバーブでもかけているのか思いたくなるような、機械的な音声だった。
　その時観衆のざわめきのリズムが変化したのをイサコは感じた。ひょっとしたら今の声は自分だけではなく、ここに集まった全員に聞こえたのではないかと推測する。理由を考える前に、なおさらここでミチコは封印しなければならないと強く思った。ミチコは自分以外の人間にも干渉しようとしていると直感的に思った。
「邪魔しないで……」
　再びミチコの声がした。イサコはその言葉が誰に向けられているのか束の間イサコにはわからなかったが、その次の瞬間だった。上空に浮かぶブラックホールは雷雲よろしく耳をつんざくけたたましい轟音を発し、その周りを旋回していたキューちゃん8機を稲妻で黒こげにしてしまった。観衆のほとんどがその音に体が跳ねるように反応し、何が起こったのかを認識した途端、一部は悲鳴を上げながら公園の敷地の外に逃げて行った。
「ちょっと、あれはどういう仕掛けなの？キューちゃんの光線は当たりもしなかったのに、こちらは全機破損なんて」
　玉子が信じられないという表情で茫然としてつぶやいた。そして今の光景そのままが、この金沢における一連の事件の発端である黒井地区の空間事故であると確信した。ミチコがあの稲妻をも制御できるのだとしたら、もしかするとその事故の時に大勢の子どものメガネを破壊したのは、イサコ以外のユーザーを抹殺し、今後のイサコ発見率を高めようとしたからではないか。玉子にはそう思えた。
「観客を喜ばせるようなマネはいい！とにかくアンタはここから消えてくれ！」
　イサコはブラックホールの中に揺らめくグレーの影に向かって叫んだ。
「そうはいかない。あなたを連れて行くまでは……」

その瞬間、影が動いたようにイサコは見えた。すぐにイサコは身構える。

穴の中から光の奔流が押し寄せて来た。イサコはふいに懐かしい気持ちになる。それはかつて自分がキラバグを集めていた時に、それを体内に取り込む時に流れ来る光の束に酷似していたからだ。しかし思い出に浸ったのはほんの一瞬だった。イサコは両の腕を突き出し、手のひらをしっかりと開き、そして強く念じた。今度はその両手から物理結界のいびつな記号が半透明の壁となって現れ、エメラルド色の光の波を食い止めた。

しかし食い止めたというのは適切な表現ではない。ミチコの魔の手となった光は確実に物理結界を突き破ってきている。イサコは結界を連続に出し続けているに過ぎない。それはこれまでのイマーゴ消費から考えると桁違いの体力の消耗をもたらした。ほんの5秒集中しただけで、イサコの意識は限りなく遠のいていた。

観衆はそれを驚きと興奮を持って見守っていた。彼らの目にはまるで漫画のように、迫り来る強力な光の波動をちっぽけな人間の波動が互角に防ぎ止めたように見えた。彼らからは拍手さえわき起こっていた。

しかしイサコの無事を祈る側からすればこの時間はまるで永遠だった。いつまでこの攻防は続くのか、ただじっと見守るしかない。だがイサコの体力の消耗は顕著だ。もうイサコはミチコを見ていない。ただじっと下を向いて、この短時間で信じられないような汗を垂らして、その拷問の終焉を望んでいる。いや、望んでいるのかさえも傍目からでは不明瞭だ。その体に意識が宿っているかもわからない。

「やはりムリがあったか……」

下唇を噛みながら苦い顔で大谷がつぶやく。だからと言ってこの戦いから目をそらすわけにはいかないとシュウイチは思った。そしてイサコの勝利を願った。

しかし思いは届かなかった。イサコが膝を折って前のめりに倒れ

たシーンは、本当にスローモーションのように見えた。シュウイチは自分が叫んでいることに気付かなかった。脳が指令を出すよりまえに、足は勝手にメインステージの方に動いていた。

エメラルド色の光の束はうつぶせに倒れたイサコの頭から襲いかかる。シュウイチも玉子もサオリも大谷も、その光景を見て吐き気を催しそうだった。光を浴びた部分からイサコの体がその色味を失っていくのだ。それはまるで、大量生産用の機械が小さなフィギュアに色付けをする時の行程を逆再生しているように見えた。まさに魂の抜かれたイサコの肉体は“モノ”でしかなかった。

ブラックホールから光が放たれてからそこまで、時間にしては15秒ほどだった。まるで1人の人間の最期に立ち合ったかのような、そんな空気が会場に漂う。それがパチンとはじけた瞬間に、会場はこの日1番の混乱を起こしたと言ってもいい。本気でこの場所が危険だと察知した子ども達は他の子どもを押し倒し、我先にと公園から逃げ出して行く。

「そんな……あんなことが……」

エリナも一部始終を目撃していた。グロテスクにもイサコの魂が奪われた光景を目の当たりにし、そしてピクリとも動かないイサコに本当に何も言葉が出なかった。その時のイサコの覚悟を思い、もしかすると自分の言動が彼女にそうさせてしまったのではないかという重圧に、エリナは耐えきれなかった。

「イサコが消えてくれて、お前は満足か？こんなことで、お前のペットが報われたのか？」

温度の低いレインの言葉がエリナに追い打ちをかける。エリナはその場に座り込んで立てなくなっていた。

「シュウ……1番かわいそうなのはアイツだよ」

メインステージにのぼって真っ先にイサコに駆け寄り、応えるはずのない灰色のイサコを抱き上げて必死に何かを叫んでいるシュウイチを見てカズマはつぶやいた。そしてレインとカズマも、無意識のうちにメインステージの方に駆け出していた。

ブラックホールはいつしかきれいに消えてしまっていた。

#19　徒花の咲く庭　part9

イサコが目を覚ますと、真っ先に抜けるような青空が視界に飛び込んで来た。メガマスの丘の広場の端で倒れていたイサコはゆっくりとその身を起こし、周囲を見回しながら記憶の糸を手繰っていった。

最後の記憶はブラックホールから押し寄せる光の奔流だった。その先は無我夢中で自分がどうしたのかさえも曖昧で覚えていない。しかしこんなところで1人で気絶していたということは、少なくともここが通常空間なのではないことは推測できた。自分はミチコに連れ去られたのだと、そこで確信する。

しかし絶望を感じるにはその光景があまりに平凡過ぎた。正確に言うなら先ほどとあまり大差ない光景が広がっていたので、ここが異空間ということを実感できなかったのだ。広場ではしゃぎまわる子ども達。豊かな人工の緑。もしかするとここは通常空間で、自分は無事に済んだのかと勘違いしそうなほどにギャップは存在しない。これがメガマスのプロジェクトチームが開発したという新空間なのか、と思った。

ところがよく見てみると強烈な違和感を覚えた、というようやくそこで気がついた。集まった子ども達は静止していて微動だにしていない。まるで3Dテレビの映像を一時停止にしたようだった。イサコは自分の手足の動作を確認したが、何のことはなく普通に動かせる。自分はこの空間の時間の流れから疎外されているのだろうかと思った。

さらによく見てみると、イベントは開催されていないように見えた。よっぽど自分に観察力がないのか、それともここが通常空間であってほしいという願いが錯覚させたのか、イベントのために建設されたメインステージのオブジェすらないことも今になって気付く。子ども達の数もイベントに比べればまばらである。

しばらくはこの空間の特徴について考えていたイサコだったが、次に頭に降りて来たのは「どうしたものか」というものだった。見回したところ出口のようなものは存在しない。自分をこの空間に連れてきた当の本人であるミチコの姿さえもない。出口を探す前に、ここは空気を読んで彼女を探して一声かけておくべきなのかとも思った。自分をここにつれてきた理由や、ヤサコと会った時に何を話したのかなど、聞きたいこともある。

ちょうどその時、ブラックホールと対峙していた時に聞いたものと同質の声が耳の中に飛び込んできた。声のした方を向くと、それはより鮮明になる。「こっちよ」と明らかに誘っている。彼女はそちらにいるのだとイサコは確信した。

林の中を進めば高台に出た。先ほどサオリと向かい合ったその場所で、灰色の彼女は待っていた。広場で静止していた子ども達はカラーだったのになあと思いながら、イサコはその高台から金沢と似た街並を見下ろしているミチコに声をかけた。

「おい。人を招待しておきながら1人で何をしている?」

イサコの中には怖いという感情はなかった。むしろそこそこ親しい人に話しかける時ぐらいの、言ってみれば“慣れ”のようなものさえ心の中にはあった。

「この街、きれいでしょう?アナタの住む金沢の街と同じよ」

質問に答えなかったミチコにため息をつきながら、イサコは少しばかり付き合うことにした。

「お前がいるということはここは異空間なんだろう?なぜここまで通常空間と酷似している?まるでパラレルワールドだ。不自然に静止している会場の子ども達は奇妙だったが」

ようやくミチコは振り返った。その時イサコの心に浮かんだのは「こんな顔だったかなあ」という、久しぶりに会う人に抱くありきたりな感情だった。むしろ自分よりヤサコに似ているのはどうなんだろうと、不思議な気分にさえなった。

「そう、ここはパラレルワールド。メガマスのある勢力が作り出し

た虚構」

どうやらここはかつての”あっち”のように、誰かのイメージを体現した空間というわけではなさそうだった。意図的に現実世界と似せて作り上げたもの。プロジェクトチームはその新空間の中でミチコを生み出したとサオリは言っていた。

「ここはかつての”あっち”のように、誰かの心の傷を癒すために作られた空間なのか？」

「そうよ」

それなら自分がこんな場所に呼ばれたのはおかしいとイサコは思う。いや、それを言うなら危険分子であるミチコがいることもおかしい。

「ここでお前は何をしている？そのメガマスのある勢力がお前を生み出した意図は？」

その時ミチコが一瞬だけ悲しげな顔をしたようイサコには見えた。鉄仮面のミチコのそんな表情を見たのはもちろん初めてだ。

「私はこの世界を守るために、そして、ある女の子を守るために生まれたの」

言っていることが矛盾しているような気がしたが、そもそも自分とミチコとの間に認識の違いがあるのかもしれないとイサコは思った。かまわず質問を続ける。

「それは私というわけじゃないのか？」

かつてのミチコの存在理由はイサコの幸せを守るということに集約されていた。

「アナタもまだ私に守ってもらいたいの？」

「いや、私じゃなければいいんだ」

イサコは自分が世話を焼かれているわけじゃないことに安心しつつ、その女の子というのが気になった。

「まさか、その女の子というのは事故に遭ったというサオリの……」

「その女の子とは、桐野詩織」

やはりそうだとイサコは思った。その名前は大谷から去年の黒井

交差点での事故の話を聞かされたときに耳にした。そしてその事故にはもう1人被害者がいるはずだった。

「待ってくれ。たしかサオリの母親も事故に遭ったと聞いていたが」

そこでミチコは少しだけ考える顔になった。実体のない電脳上の存在が長考していることに、イサコは少々首をかしげる。ミチコはそんなイサコの疑問に気付いていないように口を開いた。

「詩織の母、桐野恵さんは最先端の技術で懸命の処置を行ったのにも関わらず、現在は脳死状態にある。延命装置がかろうじてその命をつないでいる」

イサコは何とも言えない苦い気持ちになった。電脳体である自分の体がそんな症状を起こすはずがないと思ったのだが、しかしはっきり気分が悪くなった気がした。これも新空間という環境がかつての“あっち”とは異なることを思わせた。

しかし心に重くのしかかったのはそんなことではなく、すでにサオリの母親が脳死状態であるというその事実だ。それもかつての自分の境遇とぴったり重なる。信彦のような肉体的な死も、サオリの母のような脳死も、そこに大きな違いはない。最先端の医療技術は限りなく死に近づいた命を救った数よりも、脳死というグレーゾーンの領域を飛躍的に押し広げたという点で功績を残している。もし信彦の死の時に同じ技術が存在したとしても、それはイサコの母親を余計に苦しませることにしかならなかったはずなのだ。

「その、桐野詩織さんの意識はこの空間にあるということなんだな？」

ようやく言葉が絞り出せた。おそらく母のことは知らないであろうサオリに、この先どう接すればいいのだろうか。そのことばかりが頭によぎる。

「そうよ。現実世界とほぼ同じ人々の暮らしが存在するこの空間も、彼女のために作られたもの」

「……おかしくないか？メガマスがたった1人の少女のために、これだけの空間を生み出すとは思えないな。人助けにしては壮大過ぎ

る」

「そうね。メガマスが、というわけではない。メガマスはその人の意志や私を利用しているに過ぎないのかもしれない」

「その人？」

話が見えないなとイサコは思ったが、もしかするとミチコのいう“その人”こそが、この空間や、ひいてはミチコの生みの親なのだろうと察した。

「”その人”が誰であるかは問題じゃない。重要なのは”その人”がメガマスへの復讐を企み、現実世界、そして自分の手で作り出したこの空間さえも破壊しようとしていること。それが悪い意味で今後のアナタ達に深く関わってくる」

話が急展開過ぎるので、イサコはミチコを制止した。

「なんだと？少し、整理させてくれ。“その人”というのはこの空間の生みの親なのか？」

「そう言ったはずよ」

「”その人”はメガマスに従ってこの空間を作り上げた。しかし今度はメガマスへの復讐のためにこの空間を壊そうとしているというのか？」

ミチコは今度は言葉に詰まった。

「なら、”その人”が何者なのか知ることに意味はないのか？」

イサコは続けて訊ねた。

「すでに計画は動き始めている。”その人”を突き止めたとしても止めることはできない」

ミチコは必要のない情報を切り捨てているというよりも、自分の口でそれを告げることができないようだった。おそらくミチコの生みの親である”その人”が、ミチコから情報が漏れないように設定しているのだろう。それなら単純に考えようとイサコは思った。サオリの姉の詩織のためにメガマスに協力して新空間を作り出し、今度はメガマスへの復讐のためにこの空間とミチコを利用しようとしている人物。そう考えると絞り込みやすい。例の黒井交差点の交通

事故の原因がメガマス側の不手際にあったことを知っていたとしたなら。

「“その人”っていうのも、サオリの家族だろう」

ミチコはまた沈黙した。それは図星ととって良さそうだとイサコは思う。そうなると考えうる最も高い可能性は父。他には親戚の類も考えられるし、歳の離れた兄もしくは姉という可能性もないわけではない。家族構成についてはまたサオリに聞かなければならないなと思った。

「じゃあそれについてはいい。しかしどうして“その人”は自分で作り出したこの空間をも破壊しようとしているんだ?それがメガマスへの復讐にどうつながる?」

ミチコはあくまでサオリの家族について答える気がなさそうなので、イサコは質問を変えた。

「その人は現実世界を破壊しようとしているに過ぎない。でもそれがこの新空間をも破壊してしまうことに気付いていないだけ」

現実世界の破壊はわからないでもないとイサコは思った。要は宗助と同じようなことを考えているのだろうということだ。それが新空間をも破壊することにつながるというのは、少し理解できなかった。

「よくわからないが、この空間を守る使命を帯びているアンタも大変だな」

皮肉るようにイサコが言った。

「私はやがて死神になる。この空間を守る為に余計な人物達を消していく」

それはまるで自分の運命を呪うような言い方だった。

「それが私達の直面する危機と関係があるというわけか。まさか、それを伝えるために私をここへ?」

ミチコがまた無言を貫いたので、イサコはその通りなんだなと思った。「なぜ」と聞いても答えてくれそうにないので、またイサコは別のことを訊ねる。

「小此木にも同じ話をしたのか？」
今度は少し考え込んでからミチコは答えた。
「伝えたことは違うけど、内容は同じ。でも、彼女に会った時の私は今の私とは違った。いいえ。彼女に会ったから私という人格が芽生えた。そう言えるかもしれない」
「どういうことだ？つまり、小此木との再会でお前は自我を獲得した？」
それまで実体も感情もない曖昧な存在だったミチコが、このようにまるで1つの人格となったのはその再会がきっかけだったというらしい。確かにイサコは前までの冷徹さは消え失せたような気もしないでもなかった。
「生みの親に対する愛おしさと、私を捨てた憎しみが自我を目覚めさせたのかもしれない」
「だったらお前は何者だ？ただ同じことを繰り返すだけのプログラムではないのか？」
「自分が何者であるかなんて、アナタ自身は説明できるの？」
今度はイサコの方が言葉を詰まらせた。突き詰めて考えるなら、それは誰にも答えられないことだ。つまりそれを訊ねるのは愚かな事なのだ。
「私のことより、小此木優子の心配はしないでいいの？彼女は私との再会で不安に駆られているはずだけど」
畳み掛けるようにミチコが言う。そのことについてはイサコもフミエから話に聞いていた。ヤサコはミチコの復活、ミチコの言葉で思い悩んでいる。
「自分の生みの親に伝えたいことがさっきの話か。憎しみと愛おしさ、それは私にも抱いているのか？」
「そうかもしれない。私がアナタにこの話をするのは、ひとえにアナタを試そうとしているからよ」
「試す？」
何のことだろうとイサコは思った。

「アナタは私を捨てて小此木優子の手を握った。それがアナタにとっての最上の幸福なのだとしたら、アナタは彼女が助けを求めている時には彼女を守らなければならない。アナタにそれほどの勇気と力があるのかを試すの。もしアナタにその力がないというのなら、やはりアナタの幸福は私の元にしか存在しないことになる」

そんなこと勝手に決めるなと反論したなら、それは自分がヤサコを守る自信がないことになるのだろうかとイサコは思った。自分の幸福に執着しているという点では、ミチコは昔とあまり変わっていない。

「それを言い換えるのなら、小此木の元に不幸が訪れるということだな？」

「“その人”が企てている計画は、近いうちに大黒市で決行される。その時にまた私はアナタ達の前に現れる。そしてアナタには最後の審判が訪れるはず」

「私のことなどどうでもいい！それなら小此木をお前の魔の手から守り通すだけだ。お前との最終決着もそこでつけてやる」

イサコはミチコの言葉を遮るように力強く言った。ミチコもそこで薄ら笑いを浮かべたようだった。

「楽しみにしているわ。アナタと、そして小此木優子との再会を」

「待て。それなら私を早く通常空間に戻してくれ。金沢にも私のことを心配してくれている人がいるんだ」

ミチコがそのままスッと消えていきそうになったので、イサコは慌てて呼び止めた。

「もちろん。アナタに関わったすべての人の思いを背負って生きていけるかどうか、じっくり見させてもらうわ」

そう言うと突然イサコの目の前に例のブラックホールが現れた。

「これからが、本当のゲームのはじまりよ」

ミチコのその言葉から、イサコの新空間での記憶は途絶えた。

#19　徒花の咲く庭　part10

蛍光灯の強い刺激がまぶたの裏を赤く染めるので、イサコは再び覚醒した。目覚めるということは、これまで気を失っていたということだ。次に目に飛び込んで来る景色はどういうものか、イサコは少し不安になりながらもおそるおそるその目を開いていった。

「イサコ？イサコ！気がついたのか？」

真っ先に耳に飛び込んで来たのはシュウイチの声だった。

「……ここは？」

イサコはベッドに寝かされていた。部屋の中にいたのはシュウイチともう1人、玉子だった。

「金沢市のメガマス病院だ。イベント会場で倒れたアンタだったが、その電脳体はすぐに戻って来た。でもしばらくしても目覚めなかったから、そのまま救急車でここまで運ばれて検査されたんだ。どこにも異常はなかったけどな」

玉子が安堵の表情で説明する。

「なんだと？今は何時だ？どのくらい眠っていた？」

イサコはベッドから身を起こして窓の外を見やった。そこからは日の暮れた金沢市街が見えた。

「今は夕方の6時前。イサコが倒れたのが10時過ぎだったから、8時間ぐらい眠ってたのかな」

「8時間？そうか。今日は夜眠れないな……みんなはどうした？イベントの方はそれからどうなった？」

イサコは矢継ぎ早に質問を浴びせたが、玉子はまずは落ち着くように言った。

「アンタそれより自分のことを心配しなさい。曲がりなりにもミチコに異空間に連れ去られたんだから。戻って来れたのが奇跡だったのよ」

「ミチコ、か……いや、そんな奇跡というわけでもなさそうだ。ミ

チコははじめから私をあの空間に閉じ込めようなんて思っていなかったみたいだ」

ミチコが新空間への入り口を開くのをどうやって防ごうかと慌てていた時には、ミチコに連れ去られたら最後、今生の別れになるだろうと皆が本気で思っていた。ところが何のことはなく、すんなりとミチコはイサコを通常空間に返してくれた。電脳体が元に戻ってから時間が経っているので、シュウイチもイサコはすぐに目覚めるものだと確信していたようだ。イサコは心のどこかで、無事に生還したことをシュウイチに泣いて喜ばれるのを期待していたが、リアクションは意外に小さかった。おそらくそれまで何度も玉子に諭されてきたのだろう。

「じゃあ一体なぜミチコはあそこまでしてアンタを連れ去ったんだ？ミチコのアンタへの執着は消えたのか？」

「……少し待ってくれ。まるでミチコに会ったのは夢の中での出来事だったみたいに記憶が曖昧になってる。頭の中を整理させてくれ」

イサコは長時間眠っていたせいで記憶が混線しているかのようだった。もちろんミチコの話は重要なところは断片的に覚えているが、それを筋を通して説明するには少し時間が欲しかった。

「そうか。まあ、ゆっくりと思い出してくれ。アンタは今日念のために1日だけ入院することになっている。まずは休養だ」

「ああ。母さんは？私が倒れたことは知っているのか？」

「もちろん知らせた。包み隠さず、今日起こったことのありのままを。私も頭を下げたけどな。アンタにあんな危険なマネをさせたのは、保護者として責任がある」

イサコの母もイサコの体のことについては知らされている。

「いや、母さんに謝らないといけないのは私の方だ。すべて私の暴走が招いた結果だからな。アンタに頭を下げさせて悪かった。その母さんは？」

「休憩室で休まれてるわ。後で呼びに行く。それより今はここだけの込み入った話があるから、もう少し私たちと付き合ってくれ」

「ああ。わかった」
　玉子は顔つきを変えて声を細めるように言って、シュウイチも病室の外に誰もいないか1度確認した。イサコも気持ちを引き締める。
「さっきのアンタの質問に答えるわ。みんなは今、メガマス職員に事情聴取をされている」
「そのメガマス職員はどういう立場の人間だ?イベント主催者側の何も知らされていない人間か?それともサオリの言っていたプロジェクトに関わっている人間か?」
「そのどちらでもない。室長とつながりの深い本社の方よ。言ってみればそうね……そのプロジェクトについては断片的には知っているけど、プロジェクトチームとは敵対関係にある人ってところね」
　玉子はそこから金沢支社のそのプロジェクトチームと本社の対立関係について説明した。今回派遣された職員は社長桝田の側近で、プロジェクトのことを調査している人物だった。本社側の人間は総じてプロジェクトの全容を把握していない。
「サオリはどうしたんだ?彼女はプロジェクトチームに渋々従っていただけとはいえ、そちら側の人間に間違いはない。それをおいそれと対立している相手に引き合わせたのか?それをプロジェクトチームの人間が知ったら裏切り者として扱われる。そうなるとプロジェクトチームが身柄を押さえているサオリの家族が危ない」
　言いながらイサコはミチコのセリフを思い出した。サオリの母親はすでに脳死状態にある。しかし言い換えれば、サオリの姉である詩織の命はまだ確かに存在するということでもある。その詩織の安全を守ることが重要だ。
「その危険は考慮した。でも本社が真実を掴むためには彼女の協力が必要なんだ。仮に彼女をその本社の人と引き合わせなかったからと言って、彼女の家族が安全である保障はない。すでに彼女は私達に真実を告げて行動を共にした。プロジェクトチームもそのくらい把握しているはずだ。だとすると彼女を本社の庇護の元に置いた方がまだ安全でもある。彼女自身の安全を考えればな」

確かにそれもそうだとイサコは思った。自分たちのせいでサオリは任務に失敗した。プロジェクトチームが彼女をそのまま放っておくとは考えられない。それならいっそ本社側に保護された方が良いというのはイサコも納得できた。

「それについてはわかった。本社側とすれば、サオリからの情報を頼りにプロジェクトの全容を把握しようというところなんだな」

「彼女もツライ立場だと思うが、これが1番安全だという判断だ。ちなみにアンタにも本社側がボディガードをつけてくれるらしい。新空間に入り込んだアンタから情報が漏れるのを恐れたプロジェクトチーム側の人間が、アンタを誘拐してサオリの家族と同じように新空間に閉じ込めるぐらいのことをしないとも限らないからな」

しかしその部屋にいたシュウイチは、イサコに指1本でも触れるヤツは許さんというぐらいのオーラを出していた。そんなシュウイチの表情を見て、イサコは少しだけ張りつめた気持ちが和らいだ。

「それは大げさだろう。何にせよ身の安全が保障されているのはありがたいが、それが長期化するのは困る。私やサオリだって普通の中学生として生きたいんだ」

「わかってる。でも少しだけ辛抱してくれ。本社もこの件については早急にカタをつけるつもりらしい」

そこでまたイサコはミチコの言葉を思い出した。ミチコによれば近いうちに何かとんでもないことが起こるということだった。それもまた早急に突き止めなければならないことの1つでもある。

「その本社の人も、私の話を聞きたがっているだろう?」

「それはもちろんだ。でもできるだけアンタの事情聴取の時は、私や室長が同席することにする。アンタにとってもあまり良い思い出じゃないだろうし、あまりほじくり回されるのはかわいそうだからな」

イサコはそれを聞いてまた安心する。そもそも本社の人間が決して正義の味方であるとは限らないのだ。

「その交換条件でもないんだが、本社は今回の一件についてはかな

り私たちをかばってくれている。イベントをメチャクチャにしたのも不問になった。アンタのことはニュースにも流れないし、ネット検閲がされて掲示板にも書かれることはないだろう」

「得意の隠蔽ということか。あれだけの目撃者がいて、そんなことができるのか？そもそもイベントは中止にならなかったのか？」

「もちろん、あれだけの惨事になって続行はできなかった。隠蔽はあの状況で物理的に不可能だ。しっかりと今日の空間事故はニュースに流れている。その時にアンタが意識を失ったことが報道されないだけだ。幸い、メガネを壊した子どもはいなかったから大きな混乱にはなっていない」

イサコはそれで納得した。一応今回の件で被害者はいないことになっているのだ。

「それでもまたメガネの信用はがた落ちだろうな」

「仕方ない。本社が調査に躍起になっているのは、これだけの事故が起きてもまだ金沢支社がプロジェクトについてかたくなに口を閉ざしているからだ。こうなってしまえば、金沢支社がメガマスグループ全体の足を引っ張っているのは明らかなことだからな。本社としては、さっさと金沢支社を処分したいんだろう。旧幹部のことといい、メガマスは今ガタガタだ」

ため息をつくように玉子が言った。しかし金沢支社はあくまでプロジェクトにこだわり、新空間を切り札にしている。その新空間は、現実世界と瓜二つのパラレルワールドだった。

「事情はわかった。私もあの時のことをだいぶ思い出してきた。事情聴取をとるなら早い方がいいだろう。その人を連れてきてもいい」

「わかったわ。その前に、お母さんに元気なところを見せてあげなさい。事情聴取ならその後でもかまわないから」

「じゃあ僕呼んでくるよ」

シュウイチは病室を飛び出してイサコの母を呼びに行った。イサコはそこここで明かりのつき始めた金沢市街を窓越しに見て思う。あの空間も今は日が暮れているのだろうか、こんな人々の暮らしが

本当に存在するのだろうかと。

#19　徒花の咲く庭　part11

惨事になったイベント翌日の月曜日。メガマス金沢支社の新空間プロジェクトチームの幹部達が、ある一室に集まって緊急会議を始めようとしていた。もちろん議題は昨日の空間事故についてだ。そこには金沢支社長や神崎も出席していた。

「さて、みなさんお集りになったようなので、始めていきたいと思います。みなさん議題については聞いておりますね？それではまずは新空間管理班の責任者から、昨日の事故が新空間に与えた影響についてご説明いただきましょう」

神崎が進行を務めながら会議は始まった。

「はい。結論から申し上げます。昨日の事故で新空間における変質は見当たりませんでした。この点につきましては、ミチコの力に依るところがやはり大きかったと思います」

「よく何事もなく済んだな。私は正しい手順を踏まないで通常空間から電脳体が入り込んだ場合、新空間にパラドックスが起きると聞いていたが」

報告を受けて支社長がつぶやいた。

「その点については改めて説明をしておいた方がいいんじゃないですか？」

神崎も報告者に促す。計画を確認するという意味で、報告者はもう少し詳しく説明を始める。

「では。新空間は現実世界のパラレルワールドというのは、プロジェクトに関わる方なら聞いていると思います。新空間は第2金沢市と言い換えられ、そこでは現実の金沢市とまったく同じ人々が生活しています。そこに通常空間からおかしな手順で電脳体が入り込んだ場合どうなるとご想像されますか？もちろん、金沢市民としてお考えください」

報告者が支社長に振るが、考える間でもないことだと思った。

「新空間に同じ人物が2人存在することになる。昨日の例で言うと、天沢勇子が新空間に2人同時に存在していたことになるな。これがパラドックスなのか？」

「ええ。複雑な仕組みについて割愛させていただきますが、新空間という電脳世界で生きるドッペルゲンガーの思考は、そのご本人の思考を再現できるＡＩによって決定されます。つまり容姿、仕草、思考。すべてが本人と同じゆえ、同一人物はプログラム上ほぼ同じになります。そうなるとコンピューターは本人とドッペルゲンガーの見分けがつかなくなり、誤動作の要因になるのです。それを我々はパラドックスと呼んでいます」

報告者が説明したことをかいつまんで言えば、同じ空間に同じ人物が2人も存在してはいけないのだ。

「なるほど。ところでもう1度確認したい。どのようにして金沢市民約４５万人もの思考の再現が可能だったのか。詳しく聞いてなかった気がする」

支社長はプロジェクト以外にも多忙を極めていたので細部まで説明を受けていなかった。ほとんどプロジェクトは神崎に一任してきたのだ。

「わかりました。人の思考の再現については、まずはイマーゴ技術の分析から研究を始めました」

報告者が説明を再開したところで、神崎が割り込んだ。

「それについては猫目技師と故小此木医師がかつて封印した研究資料にこと細かく記されています。あの方達の最大の目的は誰もがイマーゴを使うことができるようにすることでした。今回のこの新空間の着想も、この研究から得たと言っても過言ではありません」

「去年の夏にコイルスの空間がねじ曲がり口を広げた時に、せっせと資料を漁ったかいがあるというものだな」

この研究は2人がコイルスの空間の深いところに封印していた。それは一郎をはじめとする本社の人間も欲していたものだったが、一郎がその存在を知ったのが事件収束後、宏文の部屋にあった隠し

資料から当時の日記を見つけてからのことだった。つまり神崎と金沢支社は、一郎がその存在を知る前にそれを引きずりだしていたのだ。

「旧コイルス社の人間がまことしやかに噂していましたからね。金沢のコイルス実験空間にあるとは思いませんでしたが、苦労した甲斐があったというものです。もっとも、そのおふたりがどうしてこんな有用な研究を封印したのか、私には理解できませんでしたがね」

「まあ、それは置いておこう。話が脱線したな。続けてくれ」

支社長が報告者を見て言った。

「イマーゴ適用範囲の拡大にはまず、空間の改良が必要でした。かつて存在した”あっち”と呼ばれる空間は、とかく人体への影響や負担が大きいものでした。小此木医師が電脳体分離でお亡くなりになったことでもお分かりいただけると思います」

大人のイマーゴが危険なのはそういうことだ。急な環境の変化に柔軟に耐えられるのは子どもで、年齢を重ねていくごとにイマーゴの能力が薄れて行くのはそこに起因している。

「空間の改良はおふたりの残した資料を反面教師にしつつ試行錯誤を繰り返して成功しました。反面教師とは言いましたが、おふたりは”あっち”の欠陥である人体への負担についてはわかっていたようで、それも改良を試みたと資料にはあります。それをふまえて作り上げた新空間は、それゆえ現実空間へは一切の干渉をしません。ミチコが空間に穴をあけたのは彼女の能力に依るところが大きいので例外と考えてください」

現実世界と新空間は、つながり合うことのない独立し合った関係であると報告者は言いたかった。彼はさらに続ける。

「さて、人の思考の再現についてですが、その前に我々が開発した人工知能ＡＩについて説明しなければなりません」

「まあ、手短に頼む」

話が長くなると理解しがたくなるので支社長は釘を刺す。

「はい。我々が開発した人工知能ＡＩ、ミチコもこれに属しますが、

これはある人の思考を完全にコピーできるという特徴があります。そのコピーのやり方は簡単です。コピーしたい人の使用しているメガネにあるプログラムを混入させます。そのプログラムは量子回路のキャッチしたその人の意識、それこそ思考をプログラム化して、ＡＩに送信します。まる一週間ほど、逐一その人の意識をそのＡＩに流し込めば、完全な思考のコピーが完了するのです。これは我々と提携しているアプリコット社が紹介してくださった、世界でも一線級の技師達の手によって完成しました」

「そのプログラムをいかにして金沢市民すべてのメガネに落とし込んだ？まさかメガネをいちいち回収したわけではあるまい」

支社長がそう言うので、報告者はさらに続けた。

「メガネに搭載されているＯＳのアプリケーションは地域毎に微妙にバージョンが異なることは御存知ですよね。磁場やその他の環境的影響を考慮して、その土地に最適化されたバージョンが作成されているということですが、我々は金沢市のバージョンにのみ、このプログラムを混入してアップデートしました。市民がソフトウェアの更新をした時に、自動的にプログラムもそのメガネに落とし込まれるという仕組みです」

「以上の手順を踏んで、金沢市民約４５万人の完全コピーが完了しました」

神崎が説明を締めくくったところで支社長がぼそっと言う。

「予算の大部分を使ってな」

支社長は不満げに漏らす。予算の管理は彼が直々に行っていた。さらに言うとプロジェクトを極秘裏にプレゼンしてまわり、資金を調達していたのも支社長だ。

「よくわかった。話を戻そう。新空間の中に同じ人間が存在すれば本来ならパラドックスが起きていた。ところが昨日問題は起きなかった。それをミチコの力だと言ったな？」

「さすがは新空間全知全能の神ですよ。彼女のやり方はとてもシンプルでした。天沢勇子が新空間に入った瞬間に、新空間の時間進行

を止めてみせたのです。そうすれば、今説明された矛盾は起こりえないですから」

それこそミチコを生んだメリットであると強調するかのように、神崎が若干興奮気味に話した。しかし昨日の事故はミチコの暴走が原因なので、プラスマイナスはゼロではないかと支社長は思った。

「すべてが静止した世界か。天沢勇子の目には奇怪に映っただろうな」

「それも今頃本社の調査員にせっせと説明していることでしょう。では、そのことについては私から」

神崎が1つ咳払いをして場を仕切り直した。

「昨日の事件を本社がどう処理したのかを説明いたします。みなさんもちろん御存知だと思いますが、イベント自体は中止となり、空間事故についてはそのままマスコミにも報道されました。しかし今回の件で身体的な不良を訴えた人間はいなかったことになっています。メガマス得意の隠蔽なわけですが、同時に本社は天沢勇子と私達の同志である桐野沙織を囲い込みました」

「同志って、彼女についてよくそんな言い方ができるな。昨日の事件の後、彼女の秘密を聞いてひっくり返りそうなったんだぞ。よく平気でそんな大事なことを私に内緒でいられたものだ」

少し支社長はご立腹のようだった。昨日沙織が本社に囲い込まれたことを知り、支社長はそこから情報が漏れないかひどく心配していた。しかし神崎はその心配に及ばないと余裕の表情を見せた。それには支社長の言う彼女の秘密が関わっている。そして支社長はその秘密を昨日の事件の後の時点で神崎から知らされたのだ。

「申し訳ありません。これについてはおそらく反対されるだろうと思いましたので、手前どもで勝手に進めさせてもらいました。しかし彼女から秘密が漏れる心配がないということなら、それはそれでいいじゃないですか」

神崎が言い訳したがそれでも支社長は憮然としていた。

「そうなると本社唯一の手がかりは天沢勇子の証言となります。彼

女は新空間がどんなものかを細部まで説明しているはずです。もちろんさっきの話にもあったように、彼女が見た新空間はすべてが静止した姿、それは真の姿ではありませんでした。本社がそれを踏まえてどう判断するか見物です」

「しかし、こっちとしての問題はミチコだろう。ミチコが天沢勇子に何を伝えたのか、知る術はないのか？」

続けて説明していた神崎に支社長が訊ねた。

「それがいかんともしがたいことにわからないんですよ。彼女の発言は、まあ彼女は神ですからほとんどしゃべることはないんですけども、すべて記録されるようになっていました。ところがミチコの方がそれに気付いていたのか、昨日の天沢勇子との会話は自分でプロテクトをかけて、私達でモニターできないようにしていました」

それを聞いて支社長が手を組んで唸った。

「となると、ミチコの発言は天沢勇子を介して本社側には伝わった。しかし私達にはそれを知る術が無いと」

「もちろん、本社側に忍ばせているモールを使って最大限の努力はしてみます」

本社もそろそろ誰が敵で誰が味方なのかわかり始めているだろうなと支社長は思っていた。これまでは先手を取って来たスパイ活動でも、あちら側から情報を抜き出すのは難しいかもしれないと覚悟する。

「またミチコに関する質問だが、彼女は一体我々のどこまでを知っているんだ？それによって本社に伝わった情報というのもおのずと見えて来る」

「それについては、ミチコに命を吹き込んだ天才技師のあの方にしかわからないんじゃないですか？」

「彼は今大黒か？」

「ええ。引き続き大黒市での最終演習に向けての準備を。後ほどその件については訊いてみます。それから良いニュースもあります。その方がついにミチコの思考を制御するプログラムを完成させまし

た」

それはずっと神崎や支社長が待ち望んでいたものだった。そのプログラムによってミチコの暴走は止まり、新空間には真の安定がもたらされるとその技師から聞かされていたのだ。

「ようやくか。これでミチコとのいたちごっこも終わるな。計画の実現に向けての、最後の一手になるわけか」

「そうですね」

やっと憂い事がなくなったという表情の支社長に対し、神崎はどことなく冷めているような感じがした。

「なにか問題があるのか？」

「いやあ、プログラムが正常に作動してくれるかどうかが不安だっただけですよ」

気になった訊ねてみた支社長だったが、神崎はけろっとした表情で言った。

「まあ、また問題が起きればお前の手腕でどうにか収めてくれ。私はプロジェクトの各国へのプレゼンの準備で忙しいんだ」

「わかりました。それではプロジェクトの今後の流れを確認しましょうか」

緊急会議は引き続き薄暗い一室で続けられた。

＃１９　徒花の咲く庭　ｐａｒｔ１２（前書き）

第二部最終話

#19　徒花の咲く庭　part12

月曜日の朝には退院したイサコは、午後からは学校に顔を出していた。昼休みに到着したイサコだったが、教室の空気は先週とはまた違った奇妙さを孕んでいた。

掲示板の偽情報を信じたクラスメートからイサコが責められたのはさきの金曜日。その時はイサコにとってはツライことに、ここに居場所がないような空気が漂っていた。しかしこの日はそんな殺伐としたムードではなかった。

これは昨日のイベントに参加していたクラスメートのほとんどが抱えている思いがそのまま場の空気に反映されていると言ってもいい。彼らはあんな事故に遭ったにも関わらず今日も学校に現れたイサコを不思議がっている。だからイサコが教室に入ってきた時はしんと静かになった。その後彼らは、イサコに対する半分の心配と半分の引いた気持ちを整理できずに、ただ黙って見守るしかできなかったのだ。あれだけイサコを責めた速水エリナでさえも。

そんな事情を察しているシュウイチとユイはそのままイサコの所に歩み寄り、ごく普通の調子で話を始めた。そしてもう1人、イサコに声をかける生徒がいた。

「あの、イサコ？」

遠慮がちに声をかけたのはアサミだ。その表情は絵に描いたようにわかりやすく謝意に満ちていた。

「ああ、アサミ」

イサコはそんな顔をされるとこっちも話かけづらいなと思いながら、努力してできるだけ自然な調子で返す。

「この前はごめん。責められてるイサコを助けてあげられなくて、イサコを追いつめるようなことして。私もイサコを信じてなかったわけじゃないの」

頭を下げたアサミに、今度は自然な笑顔で言った。

「いいんだ。あれは私の方にも責任があった。でもあのままアサミとの溝を埋められなかったらどうしようかと不安にも思っていた。こうしてまた声をかけてきてくれて私も嬉しい。ありがとう。こういうのは私も苦手だから」

「そんな、私にお礼を言うことなんてないのに」

アサミは驚きと恥ずかしさで赤面した。目は充血しているように見える。しかしイサコはその言葉をかけるのは間違ってはいないと思っていた。こんなクラスメートの視線が集まる中で、そして誰も声を発しないような空間で、真っ先に謝るなんてなかなかできることじゃない。そしてこれはイサコを快く思っていないエリナへの裏切り行為でもある。本人の眼前でそれをしたのは、暗にエリナにも謝罪を促しているのかもしれないとシュウイチは思った。シュウイチがちらりとエリナの方を見てみると、口を真一文字に結んで視線は下に落としている。罪悪を感じているのかどうかはわからないが、アサミに怒っているわけでもなさそうだ。

「昨日の話はユイから聞いた。よく無事だったね。イサコが帰ってこなかったら、私は一生この前の自分の行為を後悔してたと思う」

「それは大げさだな」

イサコは苦笑いを浮かべた。しかしミチコに連れて行かれた時には数々の未練がよぎったことも事実だ。ミチコの言葉を信じるなら、こうして帰って来られた喜びを噛み締めている場合ではないが、それでもこの束の間の平穏を大事にしたいと思った。ここでアサミと和解できたのは良かった。今後の自分の運命を考えると、いつこの学校に戻って来られなくなるかはわからない。

「それでも、私たちをつないでくれたのはユイだ。ユイには感謝してもしきれない」

「そうね。こんな私に何度も連絡をくれて、ユイがいなかったら私はイサコと仲直りできなかったかもしれない。本当にありがとう」

イサコとアサミをあのまま終わらせるわけにはいかなと尽力したユイは、照れたように笑みを返した。

「そんな、私は何もしてないよ。イサコの強さと、アサミの勇気がお互いを引き戻しただけのことだから。ま、なんにせよまた3人で仲良くしようよ」

「あれ?僕は入ってないの?」

取り残されたような顔でシュウイチが言う。3人それには笑った。

「もちろんアンタもそうだし、金沢黒客のあの2人も入っている。だが女だけの会話だってあるんだ。それに首を突っ込むのはほどほどにな」

それもそうだとシュウイチもひとしきり笑ったところで、話を移した。

「イサコ。昨日のことで大谷さんが話を聞きたいから、今日の放課後に黒井北公園にできれば来てほしいって。イサコが来てくれるなら僕たちやサオリも行くことになってる」

「大谷が?そういえばアイツ、私が病院に運ばれた時にバッくれたらしいな。昨日事情聴取が終わった後、オバちゃんからそう聞いた」

シュウイチがうなずく。

「そうなんだ。自分がいるとややこしくなるって言って。だからあの人、イサコが異空間に入ったときの話を聞きたいらしい。それについては僕たちも興味があるわけだけど、大丈夫かな?あの人に会って話しても」

「私としては構わないが、メガマス的にどうなのかというのがあるな。それはオバちゃんに確認しておこう。まあ、会うだけ会うのはかまわない。私がアイツにどこまで話すかはその時決める。と言っても、アイツも昨日は本気で事故を防ぎにいこうとしてくれたみたいだからな。これでアイツを信頼しないのは、かわいそうだ」

イサコはメガマスにボディガードをつけられているので、誰かに会えばメガマスに知られる。向こうがそれを承知なら、別にイサコとしては会うのに問題はなかった。

「じゃあそういうことで。アサミはどうする?」

「ううん、私ははずすわ。昨日現場にいなかった人間がいても仕方

ないことだし」
　アサミはかぶりを振りながら言った。
「そうか。なら行くのは昨日のメンバーということか。アサミ。この件は早くケリをつけるつもりだから、それまでは少し待っていてくれ」
「うん、わかってる。みんなも気をつけてね」
　アサミがそう言ったところで授業のチャイムが鳴った。

　放課後にイサコとユイと金沢黒客メンバーにサオリを加えた一行は、始まりの場所と言っても良い黒井北公園に向かっていた。
「なんでアイツはわざわざあの場所を指定したんだ？」
　少し不満げにレインが言う。学校から近場の夕日寺公園で事は足りるというのはではないかという思いもあった。
「さあ。まあ、サオリから詳しい話でも聞くつもりなんじゃない？前まで黒井地区はサオリのホームグラウンドみたいなものだったから」
　シュウイチが首をかしげながら返す。
「サオリ。あの雑誌記者は悪いヤツではないと思う。だから少々突っ込んだ質問をされても、気を悪くしないでほしい。まあもちろん、答えたくない時は答えなくてもいい」
「お気遣いありがとうございます。でも構いません。私もできるだけ協力はしたいと思っていますので」
　イサコは心配することはないかなと思った。何より大谷がサオリを不快にさせるような質問をした日には、脇に控える男達が黙っていないはずだ。
「しっかし、他人行儀だなサオリ。もう同期なのに敬語使う必要もねえって。オレたちは昨日の危機に共に立ち向かった戦友じゃないか」
　そういうことが気になって仕方ないのか、レインがサオリに言った。

「そ、そうですね。でもこれが私の癖というか、普段からこういう話し方なので矯正できないかもしれません」
　サオリはおしとやかな雰囲気をまとっており、ひょっとするといいとこのお嬢様なのかもしれないとイサコは思う。それならこの話し方も納得できるが、そもそもサオリの家族のことは謎が多く、それを訊くのはデリカシーに欠けるような思いがしてなかなか切り出すことができなかった。しかし訊ねたいことは山ほどある。特にミチコが暗に語っていたサオリの他の家族については、どうしても確認しておきたい事項の1つだった。それもこの日の話し合いでチャンスがあればさりげなく訊ねようとイサコは思っていた。
「まあまあレイン。サオリがこう言ってるんだから、本人が1番話しやすいようにさせてあげようよ」
　シュウイチが言い聞かせるように言うと、レインもあっさりと折れた。
「そうだな。それよりも気になるのは、後ろから尾けてくる連中だな」
　今度はもっと不満そうにレインは後ろを振り返りながら言った。
「すまない。あれは私とサオリを守ってくれるボディガードだ。メガマス内部の対立の影響で、私もサオリも安全な立場じゃなくなったらしいからな」
「ったく。何のためにオレらがいるのか言って来てやろうか？ありゃボディガードってよりも監視役って感じだな。正直うっとうしいだろ？」
「不平を言っても仕方ない。四六時中アンタ達についてもらうことはできないしな。とにかく一連の事件が解決するまでの辛抱だ」
　イサコは諦めたように言った。
「オレ達だって本気だぞ。そうだ、今日はイサコん家で帰還祝いに宴会しようぜ。後ろの連中は今日はもういいからって追い返す」
「いいなそれ。やろうぜやろうぜ」
　レインとカズマが勝手に盛り上がり始める。確かに鬱屈とした気

分を晴らすにはそれも悪くないという思いもよぎったが、しかしイサコはそれはまだ早いと思った。
「祝宴なら事件が解決してからにしよう。こんな中途半端な状態なら盛り上がりに欠けるだろう。すべてが終わった時なら盛大にやってもいい。その時はアサミも、もちろんサオリも呼んでの無礼講だ」
イサコにしては珍しく乗り気な提案に、レインもカズマも「おおっ！」と声を上げた。
「うし！それならとっとと事件は解決させるぜ！ところでイサコ。シュウとの約束は忘れてねえだろうな？」
声を細めてレインが確認した。
「ああ、忘れてない。事件が片付いたらその約束も果たすつもりだ」
「よし。もう勢いで乗り切ろうぜ」
こっちも珍しくほとんどノリでしゃべっているようなレインだが、イサコはそう簡単にいくとは思っていなかった。まだこのメンバーにもミチコの言葉を伝えていない。むしろミチコはこれからが本当のゲームの幕開けだという言い方をしていた。それはこの金沢で起こることはないようだが、イサコはもちろんそれを看過しようとは考えていない。すべてを終わらせるというのは、今度こそミチコとの戦いに決着をつけるという意味だ。

そうして一行は黒井北公園に到着する。今日の話し合いの言い出しっぺである大谷はすでに休憩用ベンチに陣取っており、メンバー達を見つけると手を上げて合図した。
「昨日の今日で呼び出してすまなかったな。体はもう大丈夫なのか？」
大谷の第一声はそれだった。病院には帯同しなかった大谷だが、その後に玉子と連絡をとってイサコの病状を一応確認はしていた。
「ああ、心配をかけたな。アンタもあの後、オバちゃんにこっぴどく怒られたそうだな？」
イサコが返答する間に各々ベンチに腰掛けた。

「まあな。君に暗号を授けたばっかりに、君の暗号炉は起動してしまった。とにかくそのせいで体を壊さなかったのは何よりだ」
玉子に怒られたことは気にしていないという様子で大谷は言う。
「しかし、オバちゃんから聞いてなかったのか？私には今メガマスのボディガードがついている。私と接触すれば、アンタもメガマスから事情を聞かれることになる。それを嫌って昨日は姿を消したんじゃなかったのか？」
「その点については解決済みだ。何せ今朝、オレはあの怖いメガマスのおじさん達に連行されて尋問されてたんだからな」
大谷は参ったというような表情で言った。
「そうなのか。それは災難だったな。メガマスはとうにアンタに目をつけてたってことか？」
「甘く見てたよ。今朝ホテルから出るなり両脇をがっちり固められたからな。でもまあまあ収穫はあった。尋問はされたが、その情報を引き換えにメガマス側の話も聞いてきてからな」
さすがにその辺りの駆け引きには一日の長があるのかとイサコは思った。もしくはメガマスは大谷に協力を要請したのかもしれない。でなければ自分と大谷がこうやって接触しているのを彼らが見過ごすわけはないからだ。
「アンタの方の事情はわかった。私の話を聞きたいということだったが、それは今朝メガマスから聞かなかったのか？」
「ああ、大まかには聞いた。しかし伝聞情報をそのまま信じるつもりはないんでね。当事者たる君の情報を聞かないと、オレとしても自分で納得ができないんだ。さて、じゃあ君が昨日例の新空間で何を見て、ミチコから何を聞いたのか、説明してもらいたい」
「わかった。はじめよう」
イサコが話したのはメガマスの事情聴取の時に話したこととほぼ同じ内容だ。しかし、サオリの家族に言及したところだけは本人を目の前にして口にするのは憚った。サオリの母はすでに脳死状態にあること、そして新空間とミチコの生みの親もサオリの家族である

可能性が高いこと。それはここでは口をつぐんだ。
「ふむう。オレの印象では、ミチコはこれから大黒市で起きる何らかの事故について、君に予告するためにわざわざ例の空間に連れ去ったという感じだな」
「あれだけミチコが来る来ないで騒いだのに、最初からミチコの狙いはイサコへの警告だったわけか。何とも拍子抜けする話だな」
レインの言葉には全員がうなずいた。そのミチコの思いつきのせいで、サオリはミチコ封じに奔走しなければならなかったし、ここ黒井地区ではミチコのためにメガネが破壊された子どももいた。
「でも矛盾はしていません。昨日話したように、新空間と通常空間はイマーゴの接続が断ち切られています。ミチコが天沢さんへのメッセージを抱えているなら、それは新空間に連れてくるしか伝える方法はないわけです」
サオリが付け加える。ミチコの行動は決して大げさなデモンストレーションんではなかったということだ。
「新空間をパラレルワールドって言ったよね。そこには金沢市と同じ街並が広がっていたけど、イベントは開催されていなかった。それはどういうことなんだろう?」
シュウイチが気になったことを訊ねてみた。
「考えられるのは向こうとこっちの時間軸がずれているのか、そもそも向こうではイベントが開催されていなかったのか、その2つのいずれかだな。そこにいた子ども達が静止していたのも大きな謎の1つなんだが」
「そこに僕たちはいなかったんだね?」
「見かけたのなら真っ先に言ってる。どこかにはいたのか、あの空間で生きている私たちは元から広場に来ていなかったか。いずれにせよミチコの言葉を考慮すると、あの空間には通常空間と同一人物が存在していることになるな」
ミチコ自身も新空間がパラレルワールドであることを認めていた。その話を聞いてしばらく考え込んでいたシュウイチは、かなりその

真実に近づくようなことを口にした。
「イサコ覚えてる?学校で入り口が開いた日のこと。あの時僕たちは確か3階にいたと思うんだけど、そこで遠目にレインとカズマを見つけて声をかけたよね。でも2人は僕たちを無視してどこかに行ってしまった。そんなところで当のレインから電話がかかってきたけど、本人達はその時グラウンドの近くにいた」
イサコも話を聞きながらその時のことを鮮明に思い出して来た。そして今なら、その怪奇現象を説明することもできる。
「まさか、その時は新空間の方のレインとカズマが、通常空間に入って来ていたってことか?そうなると新空間が通常空間の完全なパラレルワールドだっていうのは真実になるな。サオリ。あの時もしかして、入り口は開いたんじゃないのか?」
イサコが確認するように訊ねると、サオリも眉間にしわを寄せて過去の失敗を思い出すかのように言った。
「確かに、あの時ほんの少しだけ新空間とつながりました。天沢さん達は校舎の2階でブラックホールを見たと思うのですが、実際は先に4階でも開いていたんです」
「2カ所で?」
「もちろん同時ではありません。学校がよほど不安定だったのか、短時間で2つ開いたんです。おそらくその幻影と言えばよろしいのか、レインさんとカズマさんは4階で開いた入り口から通常空間に侵入したのではないでしょうか」
「サオリは2人を校舎で見てないのか?」
「ちょっと覚えてないと言いますか、あの時私は人目につかないように行動していたので、おふたりの気配があれば私から逃げていました。なのでどうとも判断できないですね」
サオリは少し申し訳なさそうに言った。
「でも入り口を閉じた時にはその2人はいなかった。彼らは私たちの知らないところで新空間の方に戻っていったのか」
サオリが見ていないというのなら、そう考えるしかないとイサコ

は思った。
「もしくは、通常空間では生存できずに消えてしまったか」
今度はサオリがぽつりと言う。妙に現実味のあるような言葉にメンバーは感じた。
「だ、そうだぞ。つまり新空間で生きていたデジタル上のお前達は既に死んでるということだな」
大谷が冷やかすようにレインとカズマに言う。
「つまり、新空間ではオレとカズマの葬式がしめやかに営まれたってことか」
「わははは。マジで？オレたちって死んでるの？うわあ、レインと一緒に死ねるなんて本望だったろうな」
何がそんなに楽しいのかイサコにはわからなかったが、とりあえずカズマは今の話に大ウケだった。
「どういう意味だ気持ち悪い」
「ジョーダンだって。てことは向こうのシュウイチはオレたちが死んで、さぞ寂しい思いをしてるんじゃないか？」
「いやいや。コイツは案外けろっとしてるから、３日も経てば元通りで新しい友達でも作ってるって」
「バカ言うなよ。お前らが死んだら、ショックで１ヶ月は学校休むよ。誰がそんな薄情者なんだよ」
その話で金沢黒客メンバーの３人は盛り上がり始めた。しかしイサコはその話を聞いてひらめくものがあった。
「そう言えば、黒井地区での空間事故の直後に死んだ電脳ペットが戻ってきたという話があったな。それも今の話と同じことが起こったんじゃないか？」
「……なるほど。新空間がパラレルワールドだというのなら、同一の電脳ペットも存在している可能性も大いにあるわけか。黒井地区の事故の時に開いた入り口から、そのペット達が侵入してきた。でもイサコ、新空間がパラレルワールドというのなら、通常空間で死んだ電脳ペットが存在してるのはおかしくないか？通常空間で死ん

だというのなら、当然新空間にも反映されているはずだと思うんだけど」

シュウイチは納得しつつも疑問をあげてきた。

「それもさっきの話だ。新空間でイベントが開催されていなかったことも考えると、通常空間と新空間では時間的なズレが横たわっているんだ。それは思ったよりも長いかもしれない。例えばアサミのペットのセナが亡くなったのは1ヶ月前だろう？しかし戻って来たセナはまだ生きている。セナが寿命で亡くなったのだとしたら、そして同じ寿命が設定されているのだとしたら、少なくとも1ヶ月のギャップは存在しているはずだ」

「名推理だな。しかしそれを言うと死んだペットだけが新空間からやって来て、通常空間でまだ生きているペットについては侵入してこなかったという点に疑問が残るな。もしその推理通りなら、ペットが2匹に増えたっていう飼い主が出て来るはずなんだが」

大谷も感心したようにイサコに言った。

「それは問題じゃないだろう。ペットが2匹に増えるバグは色々と確認されているからな。それが特別騒ぎになることはなかった。でも既に亡くなっていてメモリアルまでも届いたペットが蘇生したかのように戻って来たから騒ぎになったんだ」

これで概ね金沢で起きた怪奇現象については説明がつくと思った。しかし大谷がそこに口を挟んできた。

「なら電脳ペットの集団奇怪行動事件についてはどう説明する？ついでにオレの愛車が凹んでしまった同日の電脳ナビの誤作動についても」

それにはイサコも答えられなかった。確認のためにサオリの方を見ても首を横に振っている。

「それはまたアンタの方で調べておいてくれないか？」

「わかった。それについてはやっておこう。で、問題はここからだな。新空間がパラレルワールドだということはわかった。そこからミチコの言う“その人”の決起がどのように行われるのかを推理す

るのは難しそうだな」
“その人”がミチコの生みの親で新空間の設計者であることはメンバーにも説明している。それがサオリの家族である可能性もメガマスには伝えており、おそらく大谷はそれについても把握しているはずである。今の言葉は暗にイサコに、そのことをサオリ本人に確認しないのかということを訊いているのではないかと思った。
「ああ、そうだな。それが私達や、ひいてはメガマスの力で防ぐことができるのかどうかも疑問だ。ミチコの口ぶりからして、それはサオリが使っていた暗号で封じきれるようなものじゃないと思う」
イサコは大谷にはかぶりを振って答えた。少なくともこんなところでサオリには訊けないと思ったのだ。それは近いうち、サオリと1対1になった時に訊こうと思った。
「うむ。少なくとも場所は大黒市と決まってるということだな。その話を信じて、オレもそろそろ軸足をそちらに移すか。君はどうするんだ？」
大谷がイサコの方を見て訊ねる。
「私には学業がある。ずっと何かが起こるのを大黒市で待つわけにはいかない。少なくとも、そうだな、何らかの異変が大黒市で観測されれば飛んで行くつもりだ。ミチコはそれも間近に迫っていると言っていた。そう遠い日ではないはずだ」
今は4月の最終週で、祝日である29日からは学校の創立記念日も挟んでまるまる1週間は世間で言うゴールデンウィークに突入する。その間に大黒市に戻って彼ら、今月初めにも事故に巻き込まれて何かと不運を持っているかつての仲間達に、金沢でのすべてを打ち明けるというのも考えた。
「なるほど。オレたちもできれば大黒に行ってやりたいが、あいにく向こうで世話になるツテもねえからな。その点シュウは問題がないな」
レインが残念そうに言ったが、その分をシュウイチに託すという様子だった。

「ああ。もしそういうことになったら、僕も大黒市に行くよ。何せ大黒市は僕の田舎だから」
　そう言えばそうだったとイサコは思い出す。それも実家というのはメガばあの家で、そしてヤサコが暮らしている住宅と隣接している。
「それなら私は連休中に1度戻ろうと思う。大黒の仲間達にも今回の事件について伝えたい。シュウイチも大黒に戻るつもりなら一緒に行こう。もちろん、大黒市で何も起こらないのが最上だ。そのためにメガマスには頑張ってもらわないとな」
「おそらく大黒ではサーチマトンによる警備が強化されているだろう。それがどこまで通用するかはわからないが、何にせよ事故の予防には細心の注意を払ってほしいものだ」
　そう言ったところでそろそろ日も傾いてきた。イサコの体のことも考えて今日の話し合いはお開きにしようと大谷は思った。
「んじゃまあ、オレの方でも色々調べておく。何かわかったら連絡する。オレが大黒に旅立つ時も一応知らせておこう」
「了解だ。私も大黒に向かう準備をしておく。シュウイチもそのつもりでいろよ」
「わかった」
　この連休で大黒に向かうメンバーはイサコトシュウイチと大谷ということになった。それも後で玉子に連絡しておこうと思った。
「それなら、これがこのメンバーで集まれる最後かもしれねえな。じゃあ残るオレたちからは一言だけ。大黒で何が起こっても絶対に無事に戻ってこいよ。オッサン以外はな」
　金沢居残り組のレインがイサコとシュウイチに向けて言った。大谷は「おいおい」と苦笑している。
「事件解決後の祝宴、忘れんなよ」
　今度はカズマが言った。
「2人の約束も忘れないでね」
　次にユイがほんの少しちゃかすように言ったので、イサコとシュ

ウイチはお互い照れてしまった。
「いいよなあ若いって」
大谷が恨めしそうな目で2人を見ている。
「みなさん。繰り返しになりますが何が起こってもどうかご無事に帰って来てください。私も大黒にはおそらく行けませんが、みなさんのご健闘を祈っています」
最後にサオリが言った。その言葉には大谷も含まれていたようだったので、大谷は満足げだった。
「ああ。事件は必ず解決させる。アンタもその後の祝宴には参加してくれよ」
イサコはサオリの目をしっかりと見据えて言った。サオリは笑顔でうなずく。彼女とは解決後でも、家族のことなどで話たいことは山ほどある。彼女の心の隙間を埋められるのは自分だとイサコは信じていた。
そうして夕焼け空の下に、戦友達はまたいつものように明日の再会を疑わず、手を振りながらそれぞれ家路についた。

イサコが玉子に電話したのはその日の夜だった。
「もしもし?天沢だ」
『イサコか。どうしたんだ?体の方はもうすっかり良くなったのか?』
「ああ。実は今日大谷と会って、メンバーと今後について話し合ったんだ。そのことでちょっと」
『ああ。大谷さんもメガマスの人に捕まったみたいね。でもメガマスは彼に協力を要請したっていう話だったわ』
「そういうことだろうと思った。今夜電話したのは、今度の連休中に1度大黒に戻ることを報告しようと思ったからだ。ミチコの話ではこれから大黒で事件が起こるって話だったからな。その事件が起こる起きないに関わらず、まずは金沢での事件をアイツらに伝えておこうと思うんだ」

『アイツらっていうのはヤサコ達ね』
「そうだ。大谷も近いうちに大黒に行くらしいし、シュウイチも一緒に大黒に行く」
『なるほど、了解した。私もアンタの話を聞いていてもたってもいられなくなってね。昨日の事件の処理を済ませたらすぐに大黒に戻ろうと思っていたところだ。室長も本社の要請で近いうちに戻ることになったらしいし、まあそれなら向こうでまた会うことになりそうだな』
「ああ。その時はよろしく頼む」
用件は済んだのでイサコは電話を切ろうとした。その時玉子の声の調子が変わったように訊ねて来た。
『ねえ、イサコ。ちょっと妙な話を耳にしたんだけど。あのサオリのことで』
「彼女がどうかしたのか？」
『ああ。昨日の事情聴取で、みんなが終わった後も彼女は1人だけ残されて事情を訊かれていたんだが、その時にアンタの話も照らし合わせて、質問者は彼女の他の家族のことも訊いたらしいの』
イサコは驚いたが、さすがに事実確認を急いでいるメガマスなら当然のことだと思った。自分がそんな気を遣わなくても、すでにサオリはそのことについて訊かれていたのだ。
「彼女はなんて答えたんだ？」
『それが、その事情聴取を通していきなり閉口したらしいの。1人になってからはその質問はもちろん、他の質問にもほとんど答えなかったらしいわ』
「大方メガマス側が高圧的な態度をとったんだろう。彼女も悪い大人に利用されて心は傷ついている」
『それはもちろんわかっていた。だからメガマスは心理カウンセラーまで用意して丁寧に事情聴取を行ったそうよ。彼女の家族のことだってそんなダイレクトな聞き方はしなかったらしいわ。仕方なく昨日はそこで断念されて、後日改めて事情を訊くことになったって』

それが本当ならおかしな話だなとイサコは思った。サオリは自分たちにはかなり突っ込んだことまで話してくれたのだ。

「どういうことなんだ？彼女はまだ自分を利用していた人間のことを恐れているのか？」

『わからない。そのことに対する不安もできるかぎり取り除いてから聴取に入ったらしいし、それが原因じゃないのかもしれない。彼女はまだ何か他人には打ち明けられないものを抱えているのかも』

「そうか……でも彼女には事件を解決させると約束した。私も彼女の込み入った話はすべてが終わってから少しずつ訊こうと思っている。あんまり彼女にムリはさせないでくれ」

『それはわかってる。じゃあ、アンタが大黒に行く時は一言ちょうだいね』

「ああ。わかった」

イサコは今度こそ電話を切った。しかしその後もなんだか自分の中に割り切れなさが残っているように思えた。サオリがまだ自身のすべてを打ち明けていないかもしれないこと。それがショックであり、そして信じたくはないことでもあった。しかしそれが本当ならそこにどういう意味があるのかと、イサコはしばらく考えていた。漠然とした不安は、やがて現実のものへと変わる。

翌日の早朝。イサコの元に再び玉子から電話がかかってきた。その内容は信じられないものだった。

桐野沙織が姿を消したのだ。

＃１９　徒花の咲く庭　ｐａｒｔ１２（後書き）

これにて第二部完結です。本当にお待たせいたしました。次回より最終章である第三部が始まります。ここまでお読みくださった皆様、是非とも完結までお付き合いいただければ幸いです。

舞台は再び大黒市へと戻りますが、ヤサコ達の中学校入学から金沢での事故が起こるまでの学園生活を、ブログにてショートストーリーとして連載しております。第三部の予習にもなるかと思いますので、是非こちらものぞいてみてください。

#２０　幻の第三小学校　Ｐａｒｔ１（前書き）

第三部

２０２７年　４月２８日（水）

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ１

「メガマス金沢支社のプロジェクトチームが最新技術の粋を結集して作り上げたその空間も、元々は医療目的で設計されたものだったそうです」

春らしいと呼べる気候は本当に短い。

陽光はうららかとはもう表現できそうになかった。外に出て動けば汗がにじみ出るような、夏日一歩手前の気温がここのところ続いている。たったひと月前まではコートが手放せなかったのに。

大黒中学校指定のセーラー服は通気性が良いのでこの気温でも快適に着ていられる。一方で男子の詰め襟は早くも厳しくなってきたらしい。教室でも昼間は長袖のカッターシャツ姿になっている男子が目についた。夏服の解禁が早くも待ち遠しいという雰囲気だ。

時期的にも、もうすぐで5月に入る。あと1日学校に行けば1週間に及ぶ大型連休がスタートするのだ。そして入学したての1年生にとってはようやく学校に慣れてきたところでの連休となる。そのタイミングは微妙とも言えるし、自身のクラブ活動の決定など、短い期間で様々なイベントをこなしてきた身を休めるには絶妙なタイミングとも言える。ともあれ、学校での生徒達の表情は一様に浮かれているように見えた。

以上は昨日の夕方のヤサコとフミエによる下校の際の会話の一部だ。２人は気候に文句をつけつつ、その間は何をするか、どこかに遊びに行くか、大型連休を迎える生徒の様式美に則ったような会話を交わした。一方で２人は手放しで喜びながら大型連休に突入できそうになかった。その原因は金沢での事故だ。

金沢の事故、と言えばおそらく大黒中の生徒ならほぼ内容は把握しているはずである。報道も被害者が出なかった割には大きかった。しかしこの事件における大黒中の生徒の反応が大きかった理由は、

その空間事故が起きた場所が『ＶＲクエスト3』のイベント会場だったからだろう。これは近く大黒市でも行われるはずのものだったが、事故を受けて延期となってしまったのだ。事故そのものより、大黒市ではイベントの延期が話題になった感がある。大黒中でそれは金沢イベント事故と呼ばれていた。

しかしヤサコ達、そして『黒客』メンバーが気にかけているのはやはり事故そのものだった。これには理由がある。

話は先週の金曜日にさかのぼる。金沢のメガネに関する都市伝説が書き込まれる掲示板に、イサコに関するイヤな書き込みがなされていることを『黒客』メンバーが気付いたのだ。それを真っ先に『黒客』はヤサコ達『コイル探偵局』メンバーに伝えた。その日まさに金沢では、ヤサコ達が心配した通りイサコへのバッシングが行われていた。ともかく、金沢では最近おかしな事故が続いていること。そこにはイサコが絡んでいるかもしれないこと。その会議ではその仮定を元に、イサコに直接電話をかけて確かめようということになった。そこで名乗りをあげたフミエは、翌日土曜日にイサコに電話をかけて話を聞いた。金沢イベント事故が起こったのはその次の日だった。

そこで週が明けた月曜日には、大黒のメンバーの間ではその事故についてできるかぎりで調べてみようという話になっていた。イサコがそこにどう関わったのか気になるというのは皆同じだ。

そこでフミエは事故の後もう1度イサコと連絡をとった。また、ヤサコとハラケンは一連の事件の調査のために金沢に出張している一郎と玉子からそれぞれ話を聞き、『黒客』メンバーはネットでの噂を辿って事故の真相に迫ろうとした。

そうこうして水曜日。連休前最後の授業日を迎えたのだ。

「おはようヤサコ。早速連絡事項1点。今日の昼休み空いてる?」

いつものように更地になった旧第三小学校前で待っていたフミエは開口一番、ヤサコに訊ねた。

「大丈夫よ。そのお昼休みに、金沢の事故の調査結果の報告会をや

るってところ？」

「そう。とりあえず昨日一昨日で集めた情報をつき合わせるの。連休が始まると皆で集まれるかどうかわからないから。クラブ活動もあるしね」

フミエの言うように、先週のクラブ体験期間を経て、今週から1年生も正式入部でクラブ活動に本格的に参加できるようになった。メンバー達もみんな初日に入部届けを出しに行ったのだ。

それぞれの所属クラブとクラス分けもまとめておくと、まずヤサコは1年4組、クラブは吹奏楽部。ヤサコの母の静江が学生時代に吹奏楽部に在籍していたという話を聞いて見学に行き、雰囲気が気に入ったのでそのまま入部したという格好だった。

フミエは1年2組、クラブは誰もが予想もしなかった文芸部だ。フミエはクラスの学級委員を務めており、将来的には生徒会に入ろうと考えていた。だからクラブは忙しい生徒会活動に備えて軽めのものを選ぼうとした。入部の経緯は4組の学級委員を務める女子から誘われたというものだったが、その文芸部には色々と秘密が隠されていた。その秘密を知ってしまったので退くに退けなくなったというのが正しいだろう。

「おはよう。今日の昼休みにイベント事故のことで話し合うんだって？」

次にやって来たのはハラケンだった。彼は1年3組。所属クラブは中学校では珍しいロボット研究部だ。ハラケンがこの部を選択したのはいくつか理由はあるが、この部の前身が生物部だったというのがまずあげられる。動物型のロボットを制作するには、やはりその動物の体の仕組みを理解しなければいけない。小学校時代はもっぱらイリーガルなどの電脳ペットの研究をしていたハラケンだが、その経験を生かせることのできるクラブはどうやらそのロボット研究部だけだったのだ。

「そうよ。とりあえず場所は文芸部の部室になると思うから。あ、アイコも来た来た」

フミエの視線の方向に目をやるとテニスラケットを持ったアイコが手を振った。
「おはよ。いつもいつも私が1番遅くて申し訳ない」
「遅刻しなければ私たちは別にいいのよ」
フミエがそう言って4人は歩き出す。中津交差点をさらに西に行ったところにある中学校には基本的にこの『探偵局』メンバー4人で一緒に通っている。途中で『黒客』メンバーを見かけた時には合流するという具合だ。
一番遅く到着したアイコは1年1組。ラケットを持っているようにクラブは女子テニス部に入った。運動神経は割と良い方なので、女子の運動部の中では花形と本人は言っているテニス部を迷わず選んだのだ。
中津交差点を通る通学路には、同じく旧三小に通っていた生徒がちらほらと見受けられる。そんな中でこの日は2人でのんびりと歩いていたナメッチとデンパに出会った。
「やあ、おはよう」
ハラケンがその2人の元に歩み寄って声をかける。
「おはようハラケン」
「うい～っす」
デンパとナメッチもそれぞれの挨拶で返す。
デンパはヤサコと同じ1年4組で、クラブは美術部に入った。デンパの独特の感性は特に芸術向きであることは皆が思っていたところで、その選択も驚くものではなかったと言える。デンパは絵を描くことよりも、粘土細工や彫刻の方に興味があるらしい。
ナメッチのクラスはアイコと同じ1年1組。本人はこのクラス分けを非常に喜んだが、周りはそれに気付いていない。そしてクラブは調理研究部に入った。元々料理好きのナメッチなので、この選択も皆が妥当だと思った。その点ではクラスの中でも、ナメッチは女子から尊敬されているところがある。
今日はそのまま6人で登校することになった一行。中津交差点を

過ぎると今度は坂道にさしかかる。南北に交通量の多い中津交差点とは違って、その道幅の割りに車はあまり通らない。そしてここまで来ると今度は旧一小や二小出身の生徒が増えてくる。その坂をのぼりきったところにあるのが大黒市立大黒中学校だ。

学校の正門をくぐったところから、昇降口まで距離があるのがこの学校の難点の1つである。そこに行くには、グラウンドに平行する並木道を通り抜けなければならない。つまりグラウンドの端から端までと同じ距離を歩かなければならないということだ。だから遅刻気味に来るとえらい目に遭う。時には上履きに履き替えずに、靴を手にもったまま靴下で1限目に臨む生徒もいる。

しかし毎日定刻通りに到着するヤサコ達には無縁な話だ。今日も時間的に余裕を持って昇降口にやって来た。ところがなんと珍しいことかそこにダイチがお出ましになった。しかも彼はどういうわけか汗だくで、学校指定の制服でも体操服ではなく長袖半パンの上下セットのジャージを着ていた。

「どしたの？こんな時間に学校にいるなんて。もしかして早くも補習？」

フミエは世にも奇妙な光景を目の当たりにしたかのような表情で訊ねた。

「部活の朝練だバカやろ。あ～、しかしやべえな。こりゃ1限2限は完全ノックアウトだな」

ダイチはぶっきらぼうに言うと、持っていたエナメルの大きなバッグを昇降口の床に投げ出した。そこには学校指定のリュックも入っているようだったが、部活のセットはこのサイズのバッグじゃないと入らないらしい。

「それにしてもすごい汗だね」

ヤサコがワイルドだなあと思いながら訊ねる。

「サッカー部じゃ1年坊はとにかく体力トレばっかだからな。今もグラウンド15周走ったところだ」

グラウンド1周は200メートルなので総距離3キロだ。始まっ

たばかりの部活としてはかなりハードだと言える。
「ふ～ん。なんだかんだで部活頑張ってるんだ。まあ、いつまで続くかが問題だけどね。にしても、そんな疲れてて大丈夫なの？昼休みの話はアンタが持ちかけてきたものでしょ？」
フミエもそこはダイチの努力を認めるように言った。朝練は毎日あるわけじゃないが、遅刻魔のダイチには相当厳しいはずである。
「だから1・2限で寝て、体力を回復させるんだよ」
「まったく。それはとても褒められたものじゃないわね。前言撤回。まあとにかく、昼休みに文芸部部室ね。もしコイツが寝てたらハラケン、引っ張って来て」
「ああ。わかった」
ハラケンが笑むようにうなずいた。
「オレは今から更衣室で着替えてくるから。教室には先行っといてくれよハラケン」
「ああ。更衣室で眠らないようにね」
「そんな器用じゃねえよ」
そう言うとダイチは、よっこらとエナメルバッグを担いで更衣室に向かった。
今の話にも出たように、ダイチはハラケンと同じクラスで1年3組、部活はサッカー部だ。運動神経しか取り柄のないダイチはもちろん運動部と決めていたが、親父には卓球か柔道にしろと迫られていた。しかしダイチはそこで反骨精神を見せ、絶対その2つには入らんと宣言していた。そこで遊び程度にたしなんでいたサッカーを本格的に始めてみようと思い立ったのだ。
メンバー達はそこから階段をのぼって1年の教室が並ぶ3階を目指した。そうして昼休みのことだけ確認し合ってそれぞれの教室に散って行く。
フミエが2組の教室に入って授業の準備をしていると、出欠確認ギリギリの時間でガチャギリがやって来た。ガチャギリはこの通りフミエと同じ1年2組。部活はゲームクリエイトクラブなるものに

入ったらしい。そのクラブは実際外部からは何をやっているのかわからない点が多く、表向きはその名の通りコンピューターゲームを創作するクラブらしいのだが、裏ではかなりヤバいことに首を突っ込んでいるという噂も飛び交っている。小学校時代のメガネ遊びの延長線上にあるクラブとも言えるかもしれない。

フミエは一応ガチャギリにも今日の昼休みのことを確認することにした。ガチャギリの席はフミエの真後ろ。この席順はかなりしゃくだった。

「ガチャギリ。今日の昼の話はダイチから聞いてるわね？」

「ああ。場所は？」

「文芸部の部室でいいでしょ」

「わかった」

随分短い言葉しか返ってこないが、朝のガチャギリはこんなものだ。フミエも前に向き直して1限目の社会科の教科書を取り出す。

中学生になって勉強がついていけなくなるのではという不安は誰しもが抱えている。しかしフミエはまだ現時点ではついていけそうな気もした。それも努力を続けられればの話だ。しかし何がイヤかというと、何かにつけてテストテストと教師陣がプレッシャーをかけてくることだ。テストのための勉強など意味があるのか。フミエはそれを不満に思っている。しかしテストの点にどうしても縛られるだろうということも自分で分かっている。

中学生としての本分はもちろん果たさなければならない。ましてやフミエは皆の手本となるべき学級委員だ。小学校の時のようにただはしゃいでいるだけではダメなのだ。

そんなことを思いつつ、フミエはやはり金沢イベント事故のことで頭がいっぱいで、この日の授業には身が入らなかった。それは他のメンバー達も同様だった。

＃２０　幻の第三小学校　Ｐａｒｔ１（後書き）

作中で話題にのぼっている大黒メンバーの先週金曜日の会議の模様については、ブログの『電脳コイル　春』ショートストーリー最終話をご覧下さい

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ２

昼休み。メンバー達は指定の集合場所に集まっていた。文芸部の部室は1から3年生のクラスが並ぶ校舎とは別の第2校舎にあり、しかもいわゆる角部屋なのでもっとも辺鄙なところに位置していると言える。そのため部活以外の時間ならよっぽどのことでもないかぎりまず人は来ない。誰にも聞かれたくない会合を開くにはもってこいの場所だ。

「おまたせ。みんな集まってるね？」

文芸部の部員であるフミエは職員室から部室であるこの部屋の鍵を借りてきた。フミエはこの部室をいつでも使用していいと部長から認可されているのだ。この部屋は正確には第3会議室というらしいが、メンバー達の間では文芸部の部室で浸透している。

フミエは鍵を開けてメンバー達を中に促した。一般教室の半分程度しかない部室には長机が2台並んでいる。その一方の机を囲むようにメンバー達はパイプ椅子に腰掛けた。フミエが戸を閉めたところで、寝起きらしくどこかスッキリとしたダイチが始めた。

「よし。じゃあ早速始めようぜ。金沢イベント事故に関する調査報告会。議題は大きく2つだな。その事故で一体何が起こったのか。そしてもう1つは、我らがイサコはその事故にどう関わったのか」

メンバー達も確認するようにうなずく。報道では空間に黒い穴が開いたということぐらいしか流れていない。しかし空間に穴が開くこと自体が特に珍しいことでもなかった大黒市民にとっては、その程度の情報では事故の大きさを認識できないのだ。

「で、まずは何が起こったのかだけど、誰から報告を始める？」

フミエがメンバー達を見回しながら言う。

「それならまあ、ハラケンとヤサコからがいいんじゃねえか？オバちゃんとヤサコのおっちゃんは金沢市に出張していて、その事故の現場にもいたんだろう？1番詳しい話を聞けそうだからな」

ダイチはその2人の方を見ながら言った。それに異論はないということで皆も2人を注視するが、ハラケンとヤサコは少し困った顔になった。

「それはいいんだけど、みんなが期待しているほどの情報はないかもしれない。と言うのも、オバちゃんは今事件の後始末をしてるらしいんだけど、メガマス側も事故の原因をはっきり掴めてないらしいんだ。それにメガマス社員としての守秘義務もあるし、事故現場で起こったことも他言は禁じられてるって。それでもオバちゃんは少しだけ教えてくれたけど」

「私のお父さんも同じ。むしろオバちゃん以上に神経を尖らせてるみたいで、事故のことは何も話してくれなかったわ。ごめんなざい」

2人とも揃って申し訳なさそうに言うのでダイチがフォローした。

「いや、そういう事情なら仕方ねえよ。聞いてくれてありがとな。それならハラケン。オバちゃんが少しだけ教えてくれたことについて説明してくれ」

「うん。ニュースで報道されたようにメガネゲームのイベントの真っ最中に会場に黒い穴、オバちゃんはブラックホールって言ってたけど、それが開いた。ニュースでは突然みたいな言い方になっていたけど、オバちゃん曰く兆候はあったらしい。なんでも、ブラックホールの出現の少し前に地震のようなものを感じたとか。でも後で確認したところ、その時刻金沢市で地震は観測されていなかったらしい」

そのハラケンの説明にフミエは食いついた。

「地震?ちょっと待って。それってひと月前にちょうど私たちが果たし合いで体験したことと同じじゃない。しかもイベントでは『VRクエスト3』のトーナメントが開催されていたんでしょ?まるっきり状況が被ってるわ。どういうことなの?」

ちょうどこのメンバー、『コイル探偵局』対『黒客』で廃ビルに現れたメタバグの鉱脈の独占権を争った果たし合いの時、『コイル探偵局』側の敗因となったのはその地震だった。その時『黒客』側

は何も感じなかった点は疑問が残るが、金沢イベント事故とは何らかの関係があることは疑いようがないと思った。
「それは僕も思って、オバちゃんにもそう言った。するとオバちゃんも血相変えたのかどうかはわからないけど、多分そのくらいの勢いで言ったんだ。『絶対あの廃ビルには近づくな。その他にも怪しい場所にも近づかないように』って」
「金沢のイベント会場と、あの廃ビルと、何らかの共通点があるってわけね。もしくは『ＶＲクエスト３』が引き金になってるってことも」
「それはないな。だったらオレたちも果たし合いの時に地震を感じているはずだし、大黒でも他の都市でも同じ現象がもっと起きているはずだ。場所の問題で間違いないだろう」
冷静にガチャギリが言う。もっともな意見だったので皆が納得した。
「それにもう１つオバちゃんが言ってたのは、その例のブラックホールはかつての“あっち”とはまた別の世界につながっているらしいってこと。おそらくオバちゃんはもう少し詳しいことも知ってると思うんだけど、僕に話すことができるのはこのぐらいだったみたい」
「そうか。大黒では珍しくなかった空間不良で開いた穴が古い空間につながっていたり、今月の廃ビル事故でオレたちも見た鍵穴が“あっち”の世界につながっていたように、そのブラックホールもどこか異世界に通じてるってわけだな」
ダイチは身を乗り出していた。イベント事故のことを深刻に考えているというよりも、その言葉には異世界というミステリーに対する期待感のようなものが含まれていた。反対にうつむき加減になったのはヤサコだ。
「異世界……新しい空間……」
ぶつぶつとつぶやいているヤサコを隣にいたフミエは不審に思う。顔色も冴えないようだ。それに先週もこのメンバーで同じような会

議をしたのだが、その時もヤサコは様子がおかしかった。
「ねえヤサコ。なにか気になることでもあるの？」
フミエはその顔を覗き込みながら訊ねる。しかしヤサコはかぶりを振った。
「……ううん。べつに」
先週も確かこんな会話をしたような気がした。ヤサコの異変はとうに気付いていたフミエは、そこでこれ見よがしに大きくため息をつく。
「……なんでもないことないでしょ。アンタ、みんなに隠しごとしてるわよね？」
ほぼ断定的な言い方はヤサコを動揺させ、メンバー達全員の注意を引いた。
「なんだ？何かあるのかヤサコ？遠慮なく言っていいんだぞ。と言うより、秘密の独り占めは良くないな」
ダイチも心なしか柔らかい声色で言う。フミエ以外のメンバー達も少なからずヤサコの様子がおかしいことに気付いていたようだった。
「……」
それでもヤサコは言葉を発さずにじっと考え込んだ。熱でもあるのかと言いたくなるほど、額には汗が浮いている。
「どうやらヤサコが黙っていることを、イサコは知っているみたいよ」
フミエはさらにヤサコを追い込むように言った。案の定ヤサコの動揺の振り幅はさらに大きくなったように見えた。
「なんでイサコがそんなこと知ってる？そしてなんでそのことをお前が知ってる？」
不思議そうにダイチがフミエに訊ねた。
「なぜなら、私は先週の時点でヤサコが隠し事をしていることに気付いていたから。その内容をイサコが知っているかどうか確かめるために私はイサコに電話したから。そして、イサコにはヤサコの隠

し事に思い当たるものがあったらしいから。そう言えば分かってくれる？」

「お前だからわざわざイサコに電話する役を買って出たのか。それで？その内容は聞いたのか？」

「ところがよ。イサコの方もこうやってあれこれ悩んだあげく、自分の勘違いだったって取り消したの。でもね、あの感じだとその内容はわかっていたけど私たちには言わないってことだったんだと思うわ。つまり、イサコはヤサコの気持ちを汲み取って自分の口でそれは伝えなかったってこと。ヤサコ。遠く離れたイサコとは以心伝心しているみたいね。アンタ達の関係って、私たちが割って入る余地もないほど密接なんだ。私なんかずっとヤサコのそばにいるのに、全然ヤサコのこと知らなくて」

フミエは見せこともないような寂しげな表情で、ひょっとしたら泣いているのではないかと思えるほどのか細い声でヤサコに言った。フミエにしてはクサい芝居だなと周りは思ったが、良心の呵責もあってかヤサコには効果てきめんだったらしい。

「そ、そんなことないわフミエちゃん。今回のことは本当にたまたま。そう、たまたまそうなっただけなの。だいたい私は友達を選べない。フミエちゃんか天沢さんのどっちかを取るなんてできないよ」

ヤサコは必死に訴えた。本当に今回のことはたまたまなのだ。そう言い訳するしかなかった。なぜならこの悩みは自分とイサコの共通項、ミチコが原因であるからだ。

ヤサコは今月はじめの廃ビル事件で“あっち”の世界に連れて行かれた時に、ミチコに再会した。そこでミチコに恐ろしい未来を予言された。それを信じたくないあまり、そしてそれを忘れようとするあまりに、ヤサコはその再会のことを仲間に言い出せなかったのだ。ヤサコはあの出来事を、悪い夢かなにかだと思うようにした。ミチコが去年の夏の事件で消えてしまったのは疑いないことだと自分に言い聞かせていたのだ。

ところが、金沢で起きた一連の事故の様子を聞いていると、常に

その影にミチコの気配がしてならなかった。ヤサコは結局彼女のことを忘れることはできなかった。どうやらその存在を認めなくてはならないようだとヤサコは感じ始めていた。それをこの仲間達に打ち明けたとしたらどうなるか、ヤサコは想像していた。

おそらくこのメンバーなら、ミチコと決着をつけようと言うはずだ。プライドの高いこのメガネユーザー達が、またミチコのような存在に振り回されることは許さないだろう。そのミチコが新しい事件を起こしているとしたら、彼らはそれを黙って見過ごすはずがない。もちろんそこには、自分やイサコという仲間のためという意識もついてくるはずである。

しかし、ヤサコはそれを望んでいなかった。なぜならメンバー達はもうメガネのある生活を卒業しつつあるのだ。中学生として勉学に励むことや、それぞれの部活で自分の役目を全うすること。そのことで忙しい今の彼らを、再びメガネの世界に引き戻すのは忍びなかった。ましてやミチコは自分自身で生み出した怪物だ。ケリをつけるのもまた、自分自身でしかないと思っていた。

ただメンバーには確かにウソをついていることも事実だ。ずっと黙っているのはこれまで一緒に戦って来た仲間への裏切り行為でもある。それに耐えきれなかったヤサコはこう言った。

「……うん。ごめん。私が隠しごとをしてるっていうのは本当。でもそれは、ちょっとこの場では言えないかな。だからフミエちゃん。フミエちゃんだけにはそのことを話す。それをみんなにも伝えるかどうかは、フミエちゃんが判断して」

ヤサコの目をじっと見ながらそれを聞いたフミエは小さく息をついた。

「私はかまわないわ。みんながそれで納得してくれるなら」

フミエはメンバー達を見回した。

「そうか……複雑な事情があるなら仕方ないな。それでもいいぜ、オレは」

「僕も、フミエの判断に任せる」

「ま、秘密は誰にでもあるしな」
ダイチ、ハラケン、ガチャギリがうなずいたので、メンバー全員もそれで良いということにしてくれた。
「ありがとうみんな」
ヤサコは感謝というよりも、まだ申し訳ないという気持ちが残ったまま言った。
「さて、どこまで話したっけな」
「金沢の事故で現れたブラックホールは、異世界に通じているかもしれないって話でしょ？」
もう忘れたのかと言いたげな口調でフミエがダイチに言って話は再開する。
「そうだそうだ。で、オバちゃんの話はそこまでと。ただ大黒でも気をつけろってことだな。特に例の廃ビル付近では特に」
「おそらくその話の流れだと、その異空間は大黒市にも存在してるんでしょうね」
「そういや、昨日一昨日でサッチーやキューちゃんの数がやたら増えたような」
会話の流れの中でガチャギリが何となく思い出したように言うと、フミエがきょとんとした。
「え？そうなの？」
「あ？」
ガチャギリは同意してくれると思っていたらしく、返って来たリアクションを訝しんだ。
「そうなのって、そのくらい登下校でも気付くだろ」
「いや、最近登下校中でもメガネかけないからさ。メガネは家に帰ってメールとかが来てないかチェックするくらいだし」
「オレも同じだ。朝練で朝は早いし、夕方部活終わった後も疲れてるからメガネの電源を入れてる余裕がない」
ダイチもフミエに同意するように言った。
「それに何より、この前メガマスがメガネの不具合を公式に発表し

てから外でメガネを使うのを憚るようになったっていうのもあるかもしれない。最近小学生とかでもあんまり外でメガネ遊びに興じている子を見かけなくなったように思う」

　そのハラケンの見解は誰もがうなずけるものだった。中学生になったということもあって親からメガネの使用について口を出されることは少なくなったものの、皆無意識のうちに外を出歩く時にはメガネの使用を控え、額にかける程度にしていた。だからその他のメンバー達もサーチマトンの数が増えているのに気付いていなかったのだ。

「オレが異端なのか？まあいい。それなら今日の帰りにも確かめてみろ。明らかに管理室は投入数を増やしてる」

「じゃあそうしてみるわ。で、ハラケンの話は以上？」

「うん。僕が聞いたのはそれだけ」

　ハラケンがうなずくと、ほんの束の間の休憩タイムとなった。メンバー達も自然と肩に力が入っていたのだ。

「それなら今度はオレたちが報告させてもらうか。言ってもオレたちだってそんな大した情報を掴んだわけじゃない。とりあえず集めたのは、事故の時に現場にいたヤツの証言だ」

　しばらくしてダイチが自分の番だというようにパイプ椅子に座り直しながら言った。ガチャギリはその間に資料を全員のウインドウに表示させた。

「でまあ、どこから手をつければいいかわからないんだが、とりあえずオバちゃんの言うブラックホールに関してだな。こいつはどうもその画像が出回ったらしいんだが、どこの掲示板に上げられてもことごとく削除されたらしい。だからオレたちも現物を入手できなかった」

「おそらくは事故の噂がこれ以上大きくなるのを恐れているメガマスの仕業だろうな」

　ダイチの説明にガチャギリが補足するような形で話は進む。

「だからそのブラックホールの特徴については目撃証言を頼るしか

ない。まず大きさは色んな人間の証言を総合して直径3メートルってのが有力だな」

そこでフミエが驚いたように言った。

「それはかなりの大きさね。ダイチ2．4人分ってところ？」

またピンとこない例えを持って来たなと思いつつ、ダイチは自分の身長で割り算してみる。

「お前何気に正解出してくんなよ、恥ずかしいな。いやそれはともかく、かなりのでかさだってことだな。それからそいつはブラックホールの名のごとく上空に現れたらしい。これも証言をまとめると、建物の3階ぐらいの高さだっていう話だ」

「それは通路とは違うんだね。上空か。自分で入り込むことは難しそうだな」

ハラケンは夏の事件の時に通路に自ら飛び込んで行った時のことを思い出して言った。

「想像が物騒だぞハラケン。ああ、あとそれからそのブラックホールはキューちゃんの攻撃が効かなかったらしい」

「効かないってよりは、フォーマット光線が貫通してのれんに腕押し状態だったらしいな」

それはオバちゃんも焦っただろうなとハラケンは思う。

「他に何かあったかな？そうそう。その現場にいたヤツらは謎の声を聞いたらしい」

「謎の声？」

首を傾げながらフミエが聞き返した。

「どうやら女の声だったらしい。何て言ってるのかはイマイチ聞き取れなかったんだと。その言葉について議論されてる掲示板もあったが、くだらねえからそれは割愛した。まあただ、誰かを呼んでいたんじゃないかってのが有力だけどな」

「ふ〜ん」

腕を組んで考え込むフミエ。一方のヤサコは、それはミチコの声をじゃないかと思った。誰かを呼んだのだとしたら、それはイサコ

か、もしくは自分以外にあり得ない。
「まあ、大体こんなもんか？事件の核心に迫るものはなかった。さっきもガチャが言ってたが、メガマスが情報操作をしてるってのは十分考えられるからな。これ以上の情報を探すのは難しいかもしれん」
「わかったわ。忙しい中調べてくれてご苦労様」
フミエはダイチ達の労をねぎらった。限られた時間の中で多面的によく調べてくれた方だと思った。
「おう。んじゃ、最後に次の論題にも関わるところでフミエに説明してもらうか。まずはイサコとの電話で何がわかったのか。それと、イサコはこの事故に関わっていたのか」
「そうね。まずはイサコとの電話のことから話す。私がイサコに電話したのは土曜日。事故の前の日ね。なんで私たちがイサコに電話しようと決めたのか、それはみんな覚えてるわよね？」
確認するようにフミエがメンバーを見渡す。
「当たり前だ。金沢の掲示板でイサコに関するイヤな書き込みを見つけて、そのことで相談をもったのが金曜日の会議だった。オレたちはイサコがその書き込みのせいで、去年の大黒での事件の時みたいに周りからバッシングされてるんじゃないかと心配した。同時に、金沢において次から次へと起きている事故に対してイサコが関係しているのかどうかも気になった。だから本人に直接話を訊こうってことになった」
ダイチが皆を代表して言って、フミエはうなずいた。
「結構。まあ、単刀直入に言うとイサコはバッシングを受けたようなことを言っていたわ。それを包み隠さず私に打ち明けてくれた」
場の空気が沈み込むのがフミエにはわかった。
「天沢さんは大丈夫なの？」
一番に訊ねたのはやはりヤサコだった。
「本人は大丈夫だって言ってた。いや、もちろんそれがお約束の定形句だってことも思った。でも私は実際話してみて、多分大丈夫な

んだろうなとは感じたの。イサコには頼もしい仲間がいるっていうのは伝わって来たから。主にヤサコのいとこに関しての話になったけど」

「頼もしい仲間か。アイツも変わったんだな。そのヤサコのいとこってのは、イサコと同じクラスなんだろう？やっぱ通じ合うものがあんのかねえ。それならこっちが心配するに及ばないけどな」

ヤサコはいとこであるシュウイチがイサコと同じクラスであることを、入学して数日後にイサコ本人から聞いていた。それは面白い偶然だとメンバー達にも話した。今回の電話でのイサコの言葉が真実なら、シュウイチはイサコを気にかけてくれているんだなとヤサコは感謝したい気持ちになった。しばらく声を聞いてないが、シュウイチの面倒見のいい性格は知っている。

「そこから話はヤサコの秘密の方に流れた。その後に決定的な言葉があったわ。『おそらく小此木が悩んでいるのも、金沢の事故に関係のあることだろう。私はこれからオバちゃんとも協力して事故の真相を明らかにして、そして解決させる。あんた達は何も心配しなくていい。小此木にもそう伝えてくれ』、みたいなことをイサコは言ってたの。それから『私は私の戦いにケリをつけるだけだ』とも言ってた」

「……天沢さん」

その時なんとも言えない複雑な気持ちがヤサコの中で溢れていた。イサコはおそらく自分たちの罪であるミチコに対する決着を自分で1人でつけようとしているのだと、ヤサコは直感したのだ。

「よくそこまで細かく覚えてるな」

「記憶力は良い方だから」

ダイチとフミエのやり取りの間に、ハラケンは何やら考え込んでいた。

「でも、一昨日オバちゃんはイサコのことには触れてなかったけど。今の話を聞く限りイサコは何らかの形で事件に関わっているように思える。ということは、イサコのことは他言してはいけない事項の

中に含まれているんじゃないかな」
「……なるほど。あり得るな。で、事故の後にイサコに何か連絡はとったのか？」
　それなら今回のイベント事故の核心もイサコが握っているのではとダイチは思い、フミエに訊いてみた。
「もちろん。事故のことはその日の夕方のニュースで知って、夜に電話してみた」
「アイツはなんて？」
「『私は大丈夫だ。心配かけてすまなかった』。以上」
　簡単な言葉だったがそれもイサコらしいと思い、フミエはその時は一安心した。おそらくメンバー達も今同じことを思っているはずだった。
「その後は続けなかったのか？」
「うん。事故のこと詳しく訊こうと思ったんだけど、あっちが今日は疲れたからまた後日ってことになって。そこから連絡は取り合っていない」
「そうか、わかった。じゃあ以上を踏まえてまとめに入るか」
　ダイチは息をふうっと吐きながら椅子の背もたれに体を預けた。皆も緊張で疲れたというのが表情に出ていた。
「イサコについては謎が多少残るが、無事でいるんならオレたちとしてはとりあえず解決したんじゃねえか？例のバッシングでもイサコは耐えてみせた。アイツはオレたちが心配するようなヤワじゃないってことだろ」
　ガチャギリの言うように、それをもって解決とするしかないとメンバー達は思った。イサコの身に何が起きていても、金沢から遠く離れた大黒から自分たちにできることはない。そもそも自分たちはイサコの身を心配して相談を持っているのだ。イサコはとにかく無事。これ以上の答えは必要ないはずだった。
「私たちに直接関係があるっていう意味では、問題は最初の議題に出たことね。オバちゃんの言葉から考えても、大黒でそのブラック

ホールが現れる可能性は十分ある。そしてそれは異空間につながっているかもしれない。怪我したくなければ廃ビルとかに近づかない方が良いってことね」

「まあ、そうなるな。大黒でおかしな事故がまた起きないことだけを祈るしかねえ。メガマスが本腰入れて動いているところから察するに、それはオレたちが防げるレベルのことじゃない。オレたちにできるのはフミエの言うように気をつけることぐらいだな」

フミエとダイチがまとめてそれでこの会議の結論は出た。イサコに関しては心配に及ばないこと。そして、大黒でも同じ事故が起こるかもしれない可能性を考えて自分たちも注意を払うこと。この2点だ。

「そういうことで。じゃあみんな、連休中もその辺頭に入れて外でのメガネの使用は注意するように。それからヤサコはさっきのこと、夜でもいいから電話してちょうだい」

「うん」

ヤサコとしてもこの結論が出たのは良かったと思えた。こうして注意が喚起されれば、少なくとも今後このメンバーが事故に遭うようなことはない。そう思った。

今回の会議はそこでお開きになった。連休中はそれぞれ部活があるのでこのメンバー全員で集まるのはそれが明けてからになる、はずだった。

しかし今日話し合った金沢の事故は、彼らが迎える最後の事件の予兆に過ぎなかった。

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ３

大黒駅から一駅隣の弁天駅近くのとある喫茶店。そこは大通りから1本入った裏通りに面しており、あまり目立たない構えの隠れ家のような店だった。しかし、そこのマスターが入れるコーヒーは上質で味も良く香りが立ち、直樹のお気に入りの場所であった。さらに都合が良いのは、その店は直樹の恩師である小野隆に紹介されたものであり、大黒警察の関係者はほとんどやって来ないという点だ。

連休を目前に控え、警察関係者は逆に明日からは襲い来る事故の波に忙殺されることになる。だから交通事故再調査の報告会ができるチャンスはもうこの日しかなかった。しかし直樹と久美子は最後まで有力な情報を得られず、報告会の日程をずっと延期にしてもらっていたのだ。さすがにこれ以上待ってもらうのは共に事故調査をしている県警の野村交通課課長とその部下である杉本にも迷惑がかかるので、仕方なくこの日は報告会に出席し、芳しくない調査の進捗状況を正直に報告するつもりでいた。

報告会とは言っているが、野村達の調査の進展は逐一電話やメールでやりとりしていた。彼らの調査も決して順風満帆とは言えないが、旧幹部達の圧力を関知していない警察幹部への接触に成功したらしい。その警察幹部が動き出せば、交通事故の隠蔽についても糾弾できるかもしれないという点においては、かなりの前進と言えた。反面、何の成果も上がっていない直樹達は肩身の狭い思いをしていた。

時間は午後のティータイムにはちょうどいい時間だった。直樹は先に到着して久美子と2人浮かぬ顔してブラックをたしなんでいると、野村と杉本が遅れて到着した。そしてそこにはもう1人。今回の再調査を野村に持って来た張本人で、メガマスから直々の依頼を受けた事故再調査の責任者、桜井検事の姿があった。

「どうもどうも。遅くなりまして」

野村が手刀のような仕草を見せながら先に待っていた2人に言った。直樹は真っ先に立ち上がって頭を下げた。
「こ、こちらこそ何度も報告会の日程を延期してもらって本当に申し訳ありませんでした」
直樹のお辞儀はほぼ直角だった。久美子は狭いので立ち上がることはなかったが、久々に会う自分の実の上司に深い会釈をした。
「なるほど。野村さんの言う通り、誠実そうな若者だ」
野村の後ろで強面の桜井がうなずいていた。直樹も桜井のことは聞いていたが、会うのはこれが初めてだ。だから顔を上げてその目を見た時には背中がぞくっとした。
「どうも初めまして。大黒市警電脳犯罪対策係の竹下直樹です」
視線をはずすのも怖いのでそのまま桜井の目を見据えながら直樹が言う。
「彼は大学の教授をしている私の同級生の教え子なんだそうです。その同級生のお墨付なので安心して調査をお願いできました」
「同級生というのは小野先生のことですね。その点では野村さんにお願いして正解でしたよ。何せ今の大黒市警には信用できない輩が多い。そこで彼のような清潔な人間がいてくれて助かりました。で、そちらのお嬢様は？」
桜井は久美子に視線を移した。
「現在電脳犯罪係で竹下くんの調査の手伝いをしています、川畑久美子です」
今度は立ち上がって久美子が桜井に挨拶した。さすがに元やり手のキャリアウーマンだけあるのか、強面にまったく動じていない。
「検事の桜井仁です。では時間もあまりないことですし、手短に済ませましょう」
桜井は2人に簡単な挨拶を済ませ、野村、杉本とともに席につく。6人がけのボックス席で、店内には初老の男性がまばらにいるだけで話を人に聞かれる心配はなさそうだった。野村はウェイターに3人分のブラックコーヒーを注文し、出されたおしぼりで顔を思いっ

きりふいてから切り出した。
「今日は再調査の進捗を確かめるために集まったわけですが、そちら方はあまりはかどってないということですね」
「重ねてお詫び致します」
渋い表情で直樹が挟む。
「構いません。最初から困難な調査であることはわかっていましたので。とりあえずそちらの調査の進捗状況をお知らせおただければと思います」
杉本がフォローしてくれたので直樹も幾分話しやすい気分になった。というところで直樹はこれまでの調査内容と手に入れた事故の目撃証言について簡潔に報告を始めた。が、重要な情報を掴めていない分すぐにそれも終わった。
「そういうところですか。わかりました」
桜井は不満を表情には出さなかったが、やはり落胆したのだろうなと直樹は思う。難しい調査であったことは間違いないが、言い訳はできないなと直樹は反省した。同時にハラケンやカンナに対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
話が途切れたところで後から注文した3人分のコーヒーがやってきた。この店は豆を選べるが、それもとりあえず直樹のお気に入りのブレンドにしてもらっている。その引き立つ香りと深みのある味は尖った神経をほぐしてくれるような癒しを与えてくれた。
「うん、いいですね。さすがに竹下くんのイチオシだけあります」
「いやおっしゃる通りだ。これだけのコーヒーを出してくれる店はなかなかないですね」
野村と桜井がしみじみと味わっている間、直樹はあることを思い出していた。
「そう言えば先日メガマスがメガネの不具合に関して公式に発表した時に、中津交差点の事故にも言及していましたよね。あれはメガネの不具合によるものだったと公然と言い放っていましたが、あれで良かったんですか？」

その記者会見は直樹達も見ていた。あの時は旧幹部達の隠蔽の有無についてまで鋭い質問が飛んでいたのを記憶している。社長桝田はそれを彼らの隠蔽とは言い切らなかったものの、旧幹部達にとっては聞き捨てならなかった内容だったに違いない。

「現メガマス政権の公式な認識としてはそうなんですから間違ってはいないでしょう。あなたが問題にしているのは、その事実を立証する手段もないのにそんな大見栄を切って大丈夫なのかということと、その発言の責任を事故再調査を担当している自分たちに押し付けられないかということですか？」

直樹はそこまで思っていなかったが、桜井の鋭い目つきでぎろりと睨みつけられながら言われると、「はい、その通りです」と縮こまって返事するしかなかった。

「その点は心配いりません。少なくとも現社長の桝田章太郎は責任を転嫁するような男じゃありませんよ。見栄を切ったのも旧幹部を許さないという決意の表れでしょう。それに関して旧幹部の反発を買うのは当然ですが、彼らとてまだ動きません。今は様子見の段階です。旧幹部達を起訴するというところまでくれば、そこでようやく彼らによる現政権批判が展開されると私は踏んでいます。もちろん彼らの狙いは起訴されるまでに元の地位に返り咲くことです。今のメガマスの揺れ方を見ていますと、そのシナリオも現実的なものになるような気がしていますが」

桜井の言いたいことは簡単だった。もう時間がないということだ。メガネの不具合の公表後に起こった金沢の空間事故で、メガマスの信頼は落ちるところまで落ちたと表現してもいい。株主や銀行がこの事態を危惧すれば、首脳陣の刷新はあり得る話だ。

「ちなみにお訊ねしますが、あなた方の再調査を阻もうとする動きは、大黒市警の中にありましたか？」

そこで杉本が直樹達に確認してきた。

「そうですね。普段の聞き込みの時にはそういったものはなかったと思います。しかし猫目宗助の逮捕の時にはそれを強く感じました。

市警の刑事課の方達が頑なに猫目の身柄をこちらに引き渡すよう要求してきたんです。しかもその時は署長命令とまで通達してきました。それが本当かどうかはわかりませんが、僕は彼らの圧力に屈するしかありませんでした」

直樹はそのことを悔やんでいた。署長命令とまで言われて反発できる警官はいない。それにあの場面で反抗して処分されるようなことになれば、永遠に直樹は猫目に近づけなくなっていた。その点は仕方のないことだと野村達も思った。

「旧幹部達が考えているのは単純ですね。彼らにとっては猫目さえ押さえればいいということでしょう。事故の有力な目撃者など、あれから1年半も経っているのに見つかるはずがないとタカをくくっているんだと思います。起きた場所と時間を考えれば、確かに一部始終を見ていた人間は少ないと考えざるを得ません」

「その猫目の身柄は拘置所に移送されました。私達は彼との面会を申し込んでいるのですが、あちらは引き合わそうとしてくれません」

宗助は事故再調査への頼みの綱だが、それはもちろん旧幹部達もわかっているようで、久美子の言う通り会うことすらできない状態だった。

「それに彼の逮捕後の言動には不審な点が多いですよね。これは万が一のことも考えられます」

「万が一と言いますと？」

桜井がいぶかしげに直樹を見る。直樹は一瞬ためらったが、言い出したことなので一気に思っていることを吐き出すことにした。

「今は取り調べについても情報公開が求められていますよね。だから取り調べそのものには疑いの余地がない。とすれば彼の言動の不自然さを説明できません。となれば、あくまでこれは僕の想像ですが、彼は薬を投与されているんじゃないでしょうか？幻覚剤のようなものです」

「……なるほど、アナタが言いたいのはこうですね。交通事故の真実を知る唯一の大人、猫目宗助さえ潰せば再調査の成功の芽を摘む

ことができる。旧幹部達はそれを思いついて警察に指示し、薬を使って彼を廃人にしようとしている。彼から証言能力を抹消するために……まあ良く出来たシナリオですが、それはアナタの映画の見過ぎというヤツです。まず幻覚剤を投与されていたとすれば、ろれつが回らなかったりさらに意味不明な発言を繰り返すので、取り調べの録音データを聞けば一発でわかります。私が手に入れた録音データの解析では怪しい点はありませんでした。偽造の可能性もありません」

説明する桜井の目にはほんの少し呆れのようなものが宿っていた。直樹も少し恥ずかしい思いで体を席に引っ込める。

「猫目に会うことさえもできないのに、猫目の言動を心配しても仕方ないわ。ところで検事さん。私の考えている最終的な手段について確認させていただけますか？」

久美子が直樹をたしなめたところで、こちらも鋭いまなざしで桜井を見据えながら訊ねた。

「何ですか？」

桜井も直樹よりはまともな質問が来るだろうと思って顔を引き締める。

「このまま猫目の証言を得られなかったとして、天沢勇子さんの証言のみで事故の真実を立証し、起訴まで持ち込めますでしょうか？」

「天沢勇子さんというと、猫目の指示で空間を荒らし、通路が開くきっかけを作ってしまった張本人のことですよね。確か彼女は当時小学校5年生でしたか。その証言がどこまで法廷で通用するかと、そういうことですね？」

「ええ」

桜井はこめかみに右手の指を当て、眉間にしわを寄せて考え込む。直樹や久美子、野村と杉本も固唾を飲んでその答えを待った。猫目が使えないなら、天沢勇子だけが最後の望みなのだが。

「……できないことはないでしょう。子どもの証言とて軽視されてはいけませんし、当時小学5年生だったこと、彼女の事故との関わ

り方を考慮に入れると証言能力は認められるはずです」
「それなら」
道は開けたんじゃないかと顔をあげた久美子を遮るように桜井は続ける。
「だとしても、彼女を法廷にのぼらせることは避けた方がいいと思います」
「な、なぜですか？」
直樹がそれはないだろうという風に言った。しかし桜井の調子は変わらなかった。
「彼女とその交通事故の関係は御存知ですよね？彼女の心中を考えたことがありますか？自分が開けてしまった通路が原因で罪もない少女の命が奪われることになった。彼女の中には、その少女の命を奪ったのは自分であるという罪悪感が存在するはずです」
「……それは、僕たちも聞いていました」
力なく直樹が言った。でもつい先ほどまでそれを考えてはいなかった。
「法廷で交通事故について証言させる、となれば、彼女には嫌でも向き合わせることになるでしょう。自分がその少女の命を奪ってしまったという事実に。それはもちろん客観的に見れば彼女の責任ではありませんが、法廷というシビアな場所は彼女にナイフを突き立てるように事故発生時の詳しい話を求めてくるはずです。それをわかっていて、私には彼女に法廷で証言してほしいと言えません」
桜井はその強面には似合わない遠い哀しげな目をしていた。情の入り込む余地のない法廷を仕事場としている人でも、こんな顔をするのだなと直樹は思う。もちろん直樹自身も話を聞いてそんな目をしていた。確かにそんな事情があるなら、天沢勇子を再調査の切り札にすることはできないと思った。
しかし久美子はそうは思っていなかったようだ。
「検事さんは天沢さん本人とお会いしたことは？」
「いや。彼女は現在金沢市在住なので会ったことはありませんが」

どうしてそんなことを聞くのだろうという思いで桜井は答える。
「……もしも、天沢さん本人が法廷にのぼることを認めたなら？」
久美子の言葉は冷淡そのものに直樹には感じられた。しかしそれは甘いのかもしれないとも思う。直樹には天沢勇子がどんな人間かは資料でしかわからない。しかし、もしもそう頼まれた時に彼女はそれを認めるかもしれないと直樹は思った。一連の事件への罪悪を天沢勇子が未だ抱いているとすれば。
「……そうですね。そうなれば話は別かもしれませんが、メガマスとも打ち合わせをしないと何とも言えません。しかしそれには大きな問題が1つあります。今回の訴訟の原告となる原川研一君がそれを認めるかどうかという問題が」
そこで直樹もハラケンの顔を思い浮かべた。久美子が確認する。
「つまり、原川君が天沢さんの心の傷がえぐられることに目を瞑ってまで、故人である葦原カンナさんの名誉を取り戻したいと思うか。そういうことですね？」
「ええ。この2人の関係を私はよく知らないのですが、同じ小学校の知り合いであり、一連の事件に関わったという点でも深いつながりがあるのではと想像します。原川君についてはよく知っていますが、果たして彼がそれを認めるかどうか」
「確かに。私たちも原川君をよく知っていますが、それについてはためらうと思います。しかしこれが最後の手段なのだと知れば、彼がどう答えるかはわかりません」
久美子はその方向で可能性を模索しているようだった。現実的に考えればそれを検討するのは間違っていないと直樹も思った。
「それでは、近いうちにまず原川君にそのことを訊ねてみましょうか？彼が拒否すればこの話はなかったことに。彼がもし天沢さんと話し合いがしたいと言うなら、僕たちがその話し合いの場を設けます。それでいかがでしょうか？」
直樹はお互い気兼ねなく話せるハラケンに、そっとそのことを訊ねてみようと思い提案した。

「そうですね。私も天沢勇子さんの法廷証言を得る件についてはメガマスに相談しておきましょう。しかしその方向で決定というわけではありません。そちらには引き続き聞き込み調査を続けていただきたいと思います。天沢さんの件はどうしてもそれがうまく行かなかった時の最終手段としてお考えください」

「心得ています。今日はムリを言いまして本当に申し訳ありませんでした」

久美子が頭を下げたので直樹も続いて頭を下げる。この件をメガマスと折衝するのは桜井の役目だ。自分たちの成果が上がらない故に、彼に難題を押し付けてしまうことを久美子は本気で申し訳なく思っていた。

「それでは、そういうことでいいですね。聞き込みについては引き続き頑張ってください。久美子くんの研修が終わるのは連休明けということになっていますが、それはもう少し延ばしておきましょう。とにかく悔いのないようお願いします。あとそれからおいしいコーヒーのお店を紹介してくれて感謝します」

まとめるように野村が言いながら全員立ち上がった。そのコーヒーはいつの間にか全員が飲み干していた。

「いえいえ。僕達もなんとか有力な目撃証言を得られるように、より一層の努力をします」

「じゃあ直樹くん。今からまた中津交差点に直行しましょう。それでは今日はありがとうございました。失礼します」

そうして直樹と久美子は先に店を出た。できるなら天沢勇子の証言に頼ることのないようにしなければならない。2人はそう肝に銘じて車に乗り込み、中津交差点を目指した。

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ４

チャイムが鳴ると、一日のエネルギーを発散し終えたかのように学校は元の静かな空間へと戻り始めた。大黒中学校の最終下校時刻は午後６時で、今のチャイムはクラブ活動の終了を告げる５時半のものだ。運動部はグラウンドを整備しながら引き揚げ、文化部はみなのんびりと昇降口まで降りて来る。いつもなら一日の終わりのけだるい空気が漂うその場所も、明日から連休という浮かれたテンションによっていつもよりにぎやかだった。

「あ、フミエちゃん。ちょうどのタイミングだったね」

吹奏楽部の練習を終えて降りて来たヤサコは、そこでちょうどフミエと出くわした。帰る時も一緒の２人だが、いつもはフミエが先に待ってくれてることが多い。

「何言ってんのよ。アンタがクラブを終えて引き揚げて来る時間はもう把握したわ。その時間に合わせて、部室はけてきたのよ」

「そういうことか。今日は文芸部で何かしてたの？」

文芸部がものすごくヒマなクラブであることをヤサコは聞いていたので、この時間までフミエがいるということは何か活動していたということだと思って訊いてみた。

「今日は部長が持って来た生徒会の雑務の手伝いをしてたけど。連休明けに球技大会があるでしょ？その関係」

文芸部の部長は生徒会役員でもあった。将来的に生徒会にも入ろうと考えているフミエはその勉強もかねて、そんな雑用にも参加している。

「大変なんだね」

「まあこれも勉強のうちだから。そういうアンタはどうしたのそれ？」

フミエはヤサコが手に持っていた細長い革袋を見て訊ねる。

「フルートよ。私、パートがフルートに決まったの。連休中も何回

か練習日はあるけど、家でも自主練できるように学校のやつを先生が貸してくれたの」

ヤサコは楽器の演奏経験がないのでどのパートにしようか迷っていたが、横笛がかわいいんじゃないかと思ってフルートを希望していた。その希望が通ったのだ。

「ふーん。ヤサコがフルート。いや、普通に似合うと思うわ。演奏会があるんだったら招待してよね。どうせヒマな文芸部だし、毎回見に行くから」

「あ、ありがとう」

いくらヒマでも毎回見に来るとさすがに飽きるんじゃないかとヤサコは思った。しかしそう言ってもらえるのはありがたいことだ。いずれみんなを招待できるように、ヤサコは練習を一層頑張ろうと思った。

2人がそんな話をしながら靴を履き替えていると、クラブを終えたハラケンも昇降口に降りて来た。

「あ、2人とも今帰りなの?」

「そうよ。アンタも一緒に帰る?ロボケン」

ハラケンはロボット研究部に所属しているので、フミエがちゃかすようにそう呼んだ。

「何その呼び方?なんか僕がロボットみたいでやだな」

「そう?ぴったりだと思うんだけど、浸透しないかな?」

「正直流行らないと思うよ」

半分は笑いながらも、やれやれとハラケンは息をつきながら靴を履き替える。今になって本意ではないあだ名をつけられたイサコの気持ちがよくわかった。

「まあまあ。じゃあ久しぶりに一緒に帰ろう」

ヤサコは2人をとりなして言った。

「アイコはどうする?せっかくだし朝のいつものメンバーで帰ろっか?」

「そうだね。いつもテニス部は他の運動部より早く終わるみたいだ

し、正門辺りで待ってればすぐに来るんじゃないかな？」
　ハラケンの何気ない一言をフミエが不審に思った。
「なんでテニス部がいつも早く終わること知ってるのよ？」
「いや、部室の第２理科室からはグラウンドがよく見えるから」
　そんなこと言いながら、実はテニス部の練習を部活の先輩と一緒に鼻の下のばして見入っているんじゃなかろうなとヤサコは思った。ハラケンはそういう男ではないが、そういう風に染めようとしてくる男子はたくさんいる。
「やらしいわねえ」
　フミエがヤサコの心中を察したように耳打ちしてくる。
「ほんと！」
　ハラケンにはなんでヤサコが怒っているのか理解できなかった。

　結局その後３人は正門で待ち構えてテニス部の練習が終わったアイコと合流した。今日もまた連休中の予定など話し合いながらのんびりと帰る。その途中、中津交差点にさしかかった辺りでフミエが思い出すように言った。
「そういえばガチャが言ってたわね。最近サッチーやキューちゃんがやたら増えたって。ちょっとこの辺で確認してみよっか？オバちゃんが近づくなって言ってた廃ビルも近いことだし」
「そうだね」
　４人ともその時はメガネを装備していなかった。最近はメガネをはずして歩くという癖までついてしまっているようだった。
「やばっ！みんな違法ツールとかメガネに入れてないわね？」
　フミエが額にかけてあったメガネをゆっくり下ろした瞬間に叫び声を上げる。
「それは大丈夫だけど、そんなに驚くことなの？うわっ！」
　ヤサコもメガネをかけた途端、圧倒的な威圧感に気圧された。４人の目の前にはサッチーが立ちはだかっていたのだ。
「まっ、待て！」

ハラケンも条件反射的に叫んでいた。しかしサッチーは意に介すでもないように見事に4人をスルーして行った。
「ハラケン、ビビり過ぎ」
アイコがちゃかすように笑うと、ハラケンも赤面する。
「そのコマンドもとっくに解除されてること忘れてた」
「ま、今のはビビっても仕方ないないわね。それより空見てよ。あのキューちゃんの数。カラスなんかよりも多い気がするんだけど」
フミエにつられてヤサコ達も上空を仰ぐ。確かに気持ち悪いほどの数のキューちゃんが巡回しているのが見えた。去年の夏の事件の時の一斉フォーマットの時と同じぐらいの警戒ぶりだった。
「あ」
ヤサコはまた何かに気がつき、少々間の抜けた声を出した。
「何よ？」
「あれ」
フミエに示すようにヤサコはその対象物をゆっくりと指さした。しかしフミエはその異変に気付いていない。
「え？」
次にハラケンが気付いたようだった。フミエとアイコも同じ方向を見ているのだが、まだ2人はわかっていなかった。
「何かあるの？」
「いや、フミエちゃん。明らかにおかしいじゃないあれ」
何がおかしいのかさっぱりわからないフミエは、慎重にヤサコの指差す東の方向を辿る。その先にあるのは学校だ。自分達がかつて通っていた大黒市立第三小学校。
「私には学校が建っているだけにしか見えないけど……え？学校？」
「うわ！全然気付かなかった！そうよ。だって今あの敷地に学校は建ってないはずよ。もう取り壊しが終わって更地になってるはずだもん。あんまり馴染んでたから違和感なかったわ」
アイコの言う通り、フミエもその光景に最初は違和感を覚えなかった。何せ5年半通った自分の母校であり、そこにあるのが当たり

前という先入観が出来上がっていたからだ。その点ヤサコは1ヶ月ほどしか旧三小に通っていなかったこともあり、すぐに異変に気付いた。そういう意味ですぐに気付いたハラケンは注意深い。

「あれなんだと思う？キューちゃん達はまるで反応してないけど」

ヤサコが不安げに訊ねる。

「バグかなにか、だと思うけど。なんでキューちゃん達が反応しないんだろう？」

「普通に考えれば、古い空間てことになるんだろうね」

フミエ、ハラケンが考え込む。メガネをはずしてみると消えてしまったので、学校の建物が電脳体であるのは確認できた。

「ちょっと行って調べてみましょうか？」

「でもオバちゃんは危ない場所に近づくなって」

ヤサコはためらったものの、そこが危ない場所のようには見えなかった。むしろフミエ達にとっては懐かしい思い出がたくさん詰まった、今は亡き第三小でしかない。

「いや、ちょっとだけ。中も本物の第三小か確認する程度よ。ハラケンの言うように古い空間かどうかも知りたいし」

フミエは早足でもうその方向に歩き始めている。アイコもそれに続いた。そこには多少の好奇心もあるようだった。

「まあ、とりあえず行ってみようよ。危険な空間ならとっくに管理室が感知してるだろうし」

ハラケンもヤサコを促して歩き出す。それには異論はなかったが、この時ヤサコは、なぜあれだけ目立つ建物を近くにいる他の人達も気付いていないのだろうと思った。これだけサーチマトンがうようよしている時にメガネをかけて外出する人は少ないかもしれないし、フミエ達のようにその光景に違和感がなくて気付いていないだけかもしれない。いつからあれが出現しているのかはわからないが、自分たちが第一発見者であることをヤサコは不審に思った。

学校の敷地は工事用の鉄のフェンスで囲まれている。しかしそこに忍び込んで広大な敷地を贅沢に使って遊ぶ子どもがいるのだろう

か、意図的にこじ開けられたような隙間があった。４人はそこから敷地内に入る。出たのは第三小の正門前にあたる一角、銅像が建っていたところだ。そしてそこには今、しっかりとその像が建っていた。

「本物？みたいね。パッと見校舎の中の間取りも」

フミエはしげしげと校舎を眺めながら言った。できれば中にも入ってみたいのだが、建物自体が電脳体であるのでそれは叶わない。もし入りたいのであれば、電脳体分離を起こすしかないなとヤサコは思った。

そこから４人はぐるっと校舎の周りを一周してみた。しかし中に誰かがいるような気配はない。そのまま元の正門前に戻って来た。

「空間のバージョンは正常だ。ここが古い空間であることはないな」

逐一空間をチェックしていたハラケンが言った。

「ということは、やっぱり何かのバグ？」

「そうなんだろうね。一応、管理室には知らせといた方がいいんじゃないかな……ん？」

ヤサコの質問に答えてハラケンはふと地面を見る。足元が一瞬おぼつかない感触がしたのだ。

「まあ単なるバグなら面白くはないわね。こんなの聞いたことないけど、いいや。後は管理室に任せましょおおおお！？」

フミエが言い終わる直前に、足元でとんでもない揺れが起こった。ヤサコはあの時と同じだと思った。果たし合いの時に廃ビルで感じた地震と。

４人はすでに立っていられなかった。玉子の金沢での事故の話を聞いた限りでは、この揺れが何かの予兆であることは間違いない。それがわかっているので４人は地を這ってでもこの敷地から逃げなければと思った。しかしこの容赦ない揺れの中を動くことなどできるはずがない。ただ奇声を上げることしかできなかった。

ところが揺れを感じる一方でだんだんと意識が遠のいて行くのにヤサコは気付く。果たし合いの時は地面が割れて行くような錯覚の

中で意識を失ったが、今回はそうではない。むしろ廃ビル事件の時にイマーゴ消費の負担で倒れた時に似ていると思った。そんなヤサコは、フミエ、ハラケン、アイコを気遣っていられる余裕はなかった。それでも何かの気配を感じて、一瞬だけ上空を見る。どす黒い雲が自分たちの真上で立ちこめているようにヤサコは見えたが、雲であるはずがないと思った。もしかするとあれが玉子の言っていたブラックホールなのか。そう理解した直後から記憶は途切れた。

学校敷地内には、４人の黒ずんだ肉体が取り残されていた。

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ５

ヤサコ達が旧第三小の異変を調べている最中に意識を失ったのとほぼ同時刻、メガマス代表取締役の桝田章太郎は数人の幹部を集めて、金沢での空間事故に対する金沢支社への処分について話し合おうとしていた。この日集められたのは神崎前研究開発部部長の後を受けて幹部にのぼりつめた男、平松高雄研究開発部部長。メガマスが抱えるプログラマー集団のチーフ、吉川康弘。全国に存在する空間管理室及び空間設計室を統括する空間管理室本部長。そして相談役の形で招聘された電脳科学者、小野隆。そして金沢との連絡の取り次ぎを行っている大黒における一郎の相棒、香川昭大だ。

まず会議のはじめに、３日前に起こった金沢の空間事故について、出張中の一郎やイサコ達への事情聴取を行った桝田の側近がまとめた事故の報告書を香川が読み上げた。それが終わってから桝田が切り出した。

「話し合うべきポイントは多々ありますが。まずは金沢支社への処分について考えたいと思います」

「社長はそれについてどのようにお考えですか？」

叩き上げの苦労人、平松が訊ねる。その質問には、自分の義父である金沢支社長を適正に処分できるのかという疑問が含まれていた。

「金沢支社が事故に対する説明責任を果たさない以上、厳罰をもって望むしかないと思っています。金沢で進められているプロジェクトがどのようなものかわかりませんが、このような事故が起きた以上、その内容に関わらずその中断を要請します。そのために、金沢支社の研究施設及び本社の研究施設の研究資料の点検作業を行いたいと思います。今やどの研究部署でそのプロジェクトが進められているかわかりませんので」

「しかし、それではプロジェクトに無関係な部門の研究に支障が出ます。すべての研究の資料の点検にはかなりの時間を要すると思わ

れますし、その間の損益はバカにならないと思われますが」
　メガマスにはいくつもの研究部門があり、金沢と本社の研究施設はメガマス全体の中枢でもある。そこを徹底的に調べる間は機能が停止するので、海外の支社にまで影響が出ることが必至である。平松の言うようにその損益は甚大なものになると見込まれるのだ。金沢支社のプロジェクトチームはその巨大化し過ぎたメガマスの弱点を突いていた。どこで何の研究をしているかなど、首脳陣が細かく把握しているわけではない。神崎の前のポストは研究開発部部長であり、各研究部署の研究内容等の情報の改ざんはお手のものだったのだろう。どの研究部署が金沢支社のプロジェクトの片棒担いでいたのか、それを調べるには時間がかかりそうだった。
「それに、今更その処置をするのは効果も薄いと思いますよ」
　そこで唯一の外様である小野が口を開いた。小野は電脳科学の権威であることと同時に、桝田が学生時代に世話になったという縁もあってここに呼ばれた。
「と言いますと？」
「金沢支社はアプリコット社と手を組んでいますよね。その研究資料はすべてアプリコット社の研究施設に送られており、もうメガマスには存在していない可能性もありますよ」
「証拠隠滅ってことですね」
　チーフプログラマーの吉川が小野に確認する。
「ええ。私が貴社の経営に口を出すのはおこがましいことだと承知していますが、先ほど研究開発部部長からもありましたように、他の研究に支障を出してまで施設を点検するのはいかがなものかと思いますよ」
　小野の話し方はどことなくひょうひょうとしている。空間管理室本部長辺りはその軽い口調に少しムッとしたようだったが、むしろアドバイスとしては的を得ていた。
「それは私もそう思います。これまで尻尾を出さなかった金沢支社のことです。そのぐらいは予測しているのではないでしょうか。そ

の一斉点検が無駄骨に終わる可能性は高いと思います」
　吉川がチーフプログラマーという立場を踏まえて桝田に申し出た。
桝田もそれには再考せざるを得なかった。
「ちなみに金沢支社長を更迭したとしても事態は変わらないと思います。その場合はプロジェクトの主導権がアプリコット社に移るだけです。こちらの調査結果を見る限りにおいては、アプリコット社もこのプロジェクトに対しては資金や人材を出し惜しみしていません。金沢支社とは対等な同盟関係にあるように思えます」
　小野は本社が金沢支社のプロジェクトについて調べ上げた資料を見ながら言う。
「金沢支社への処分を考えるよりも、今後も起こりうる事故にどう備えるか、それを話し合った方が良さそうですね」
　平松の言葉にはその場にいた全員が納得した。金沢の事故を招いた新空間のプログラムがアプリコット社に存在したとしても、その確たる証拠を掴まなければメガマスがおいそれと向こうに口を出すことはできない。この事態は廃ビル事件で株式会社ＣＧＷが空間制御プログラムを暴走させていた時と似ている。
「プロジェクトの中断を強行できなければ、根本的に事故を防ぐことはできないと思うのですが」
　桝田は弱気だった。
「金沢支社も事故が立て続けに起こることを良しとはしないはずです。むしろ金沢のことは許し、金沢支社のプロジェクトを認めることを約束した方がいいのではないかと思いますけどねえ。そうすればメガマスが一致団結して事故に備えられます」
　小野のその言葉に空間管理室本部長は憤慨したようだった。
「部外者が何を言っている。金沢支社が勝手に始めたそのプロジェクトの尻拭いの手伝いをするために、我々にウソの報告をし続けた連中を許せと言うのか？なぜこちらがそんな下手に出なければいけないんだ」
「なぜって、それは事故を防ぐことを考えてのことですが」

「事故なら我々空間管理室が全力を傾けて防ぎに行く。そのために２．０を増援として大黒と金沢に配備した。少しでも異変が起きれば出動できるよう、電脳局にも通達してある。ミチコとやらが大黒での事故を予言したようだが、それは叶わぬ話だ」

空間管理室本部長は金沢支社との協調を嫌っている。そのためにかつてないほどの万全な布陣をこの両都市に敷こうとしていた。２．０の配備には色々と問題があるが、次なる事故が起こるよりはいいと桝田も認めていた。

「しかし本部長。金沢からの報告では、現れたブラックホールにサーチマトンの攻撃は効かなかったと」

そこで香川が付け足した。

「聞いている。しかし２．０のフォーマット能力を考えれば問題はない。それでも効かない場合には改良版として３．０の開発がすぐに行えるよう、平松部長には手配してもらっている」

「それについては抜かりなく進めてあります」

平松が管理室本部長に向かってうなずいた。管理室本部長は事故を防ぎにいくというよりも、金沢支社が開発したという新空間そのものを抹消しにいこうとしているようであった。

「この分だと、金沢支社の開発した新空間がどのようなものなのか、推理するのは無意味のようですね」

桝田は次のその話を小野の見解も交えて話し合おうと思っていたのだが、どうせそれを抹消するつもりである管理室本部長の前で行うのはムリだと判断した。２．０を含むサーチマトン軍団による力押しで新空間が現れ次第フォーマットすること。半ば強引にそれが本社の方針に決まった。

そんな時に情報取り次ぎ役の香川の携帯電話が鳴った。いそいそと彼は電話をつないで報告を受ける。その内容に慌てた様子でそばにいた桝田に取り次いだ。

「社長！たった今空間管理室からの報告で……」

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ６

目覚めはとても優しいものだった。毎朝そうであるように、まだ十分の眠気が脳に残った状態のままの身を引き起こすかのような気分がした。なんのことはない。ただ単に昨晩読み出した本が面白くてつい夜更かししてしまっただけだ。まるで意識を失った人間の覚醒の仕方ではないなとヤサコは思う。電脳体分離はこれで何度目かも覚えていない。まさか体がそれに馴染んでいるのではないだろうかと思った。

ただ朝の目覚めとは違うのは、自分の体が柔らかいベッドの上ではなく、それはそれは硬い床の上にあったことだ。材質はアンティークフローリングというのだろうか、平たく言えば板張りだ。そこでようやくヤサコは、床がそこにあることのおかしさに気がついた。

ヤサコが倒れていたのは教室のようだった。机は掃除をする時のように後ろに詰められていて、倒れていたのは教室の真ん中だった。どこの教室かはわからない。とりあえずヤサコは立ち上がってこれまでの流れを整理することにした。

自分たちは突然現れた旧第三小の校舎を外観から調べている時に、突然地震のようなものに襲われた。そこで気を失って目が覚めたら、今度は教室の中にいた。メガネをかけていないことから電脳体分離を起こしたのは間違いない。この状況をムリヤリ理解しようとするならこうなる。自分は旧第三小の電脳体の中に放り込まれたのだ。それが自分だけなのか、フミエやハラケン、アイコ達もそうなのかは現時点ではわからない。

確認のため廊下とは反対側の窓から外を窺う。見えたのはグラウンドで、高さから判断すれば３階だ。と言うことはこの教室は旧校舎の３階の教室であることがわかる。第三小は新校舎が正門側に面していて、旧校舎はグラウンドに面している。自分たちが意識を失う前にいたのは正門側、昇降口前だったので、もし電脳体分離を起

こしているとすれば取り残された肉体がそちらにあるはずだった。なのでまずヤサコは、新校舎に向かうことにした。そうすれば自分以外に誰が電脳体分離を起こしてこの校舎内にいるかがわかる。とにもかくにも、日は傾きかけている。暗くなってこんなところに取り残されるのはごめんだ。心持ち急ぎながらヤサコは教室の引き戸を開く。

しかしすぐにヤサコは、校舎内に放り込まれたのが自分だけじゃないと確認できた。廊下をざっと見渡したところに、アイコが倒れていたからだ。イマーゴ持ちの自分やハラケンならともかく、アイコがここにいるのは危険なのではないかとヤサコに不安がよぎるが、とにかく駆け寄って揺すり起こしてみる。

「アイコちゃん！返事をして！」

「う、うん？」

何度目かの呼びかけでアイコはようやく目覚めた。うつろな目をしているがヤサコの顔を見て、そしてそこが学校の廊下であることに気付いたのか驚いたような表情になる。

「ヤサコ？私、どうしたの？」

「落ち着いて聞いて。私もアイコちゃんも、電脳体分離を起こしてさっき姿を現していた旧三小の電脳体の中にいる。この分だと、フミエちゃんもハラケンも」

アイコは身を起こしてとりあえず周囲をぐるっと見渡す。そして首をかしげて眉間に皺を寄せて言った。

「えーと。それってまさか世に聞く電脳コイル現象ってヤツ？アンタの専売特許だった？」

どんな言い草だとヤサコは思った。

「そう、なるね」

「なんで私がそんなことに？それってイマーゴが関係してるんじゃないの？」

「わからないわ。ただ1つわかるのは、これは夢なんかじゃない。現実に起こっているってことだけ」

おかしな言い方だなとヤサコは自分で思う。この空間は現実から切り離された異空間であるのに、これが現実と言うのは矛盾だ。

「そんな。通常空間に戻る方法はあるんだよね？」

普段は怖いものなんかないという物腰のアイコの表情から、恐怖が溢れ出しているように見えた。

「それはもちろん考える。とにかく今は確認したいことがあるの。新校舎まで行くんだけど、アイコちゃんも一緒に来て」

「わかった。こうなったらヤサコだけが頼りだから」

アイコもなんとか立ち上がった。怖いのかヤサコの肩にそっと手を乗せる。

その時ヤサコは、これからどうするかふと考えてみた。先にフミエとハラケンと合流した方がいいか。それともまずは新校舎に行ってみるか。ここは2人で手分けして全フロアーを探してみるという手もあるが、このおぼつかないアイコを1人にするのはできない。やはりヤサコは先に新校舎に行くことに決めた。もしかしたらフミエとハラケンも同じ考えに至っているかもしれない。そう思ったからだ。

2人は新校舎の方にフミエかハラケンの姿がないか、窓を注意深くのぞき込みながら歩き始める。窓からは中庭を挟んで新校舎に並ぶ教室が見えた。おそらくフミエ達は教室にいることはないが、念のため影も見逃さないように目を凝らす。

しかし校舎の中は静かだった。教室の中も時々見るようにしているが本当に誰も見当たらない。でもそれはそれで良い。この場所はバグかなにかで現れたもので、そこに自分たち以外の人間がうろついているとなると話はややこしくなる。

「ヤサコ。なんで何も聞こえないんだろう？」

アイコはおそるおそるという風に訊ねた。

「誰もいないからじゃないかな？」

「でも、フミエやハラケンもここにいるはずなんでしょう？普通はぐれたら声を上げて仲間を探すもんじゃない？」

それはそうだ。しかしそれなら今まで息を殺すようにして歩いていた自分たちは何だったのだろうかとヤサコは思った。

「なんだか、声を上げづらい雰囲気でもあるんだよね。もしさ、声を上げて教室から誰かフミエちゃんやハラケン以外の人が出て来たらどうしようって、頭のどこかにあるのかもしれないけど」

「そうそれ！私も声を上げないといけないと思うんだけど、なんだかそれが怖くて。いないよね？誰も？」

「それはわからないけど。ひょっとしたら何も聞こえないのは、フミエちゃんは怖がりだから同じこと考えてるかも。でもハラケンは？」

「アイツは大声出して助けを求めるタイプじゃないよ。うん。でもちょっとぐらいは声出さないと向こうも気付かないかもしれないから、抑えめに声出しながら行こ」

アイコがそう言うので2人は少しだけ声を出しながらまた歩き出した。しかしすぐにその声のボリュームは絞られていく。先ほど自分が言ったことが、思った以上に自分を怖がらせているようにヤサコには思えた。何故かこの校舎には誰もいないのに、誰かがいそうな、もっと言えば何かがいそうな気がしてならないのだ。さらにヤサコの中ではこの景色がデジャブのように感じられた。どういうことなのだろうとヤサコは少し記憶を辿ってみる。そしてある答えに行き着いた。

「アイコちゃん」

「な、なに？」

段々とその怯え方が大きくなってきているようなアイコを見ると、それを口に出すのはどうだろうかと一瞬ヤサコ思った。

「怖い？」

「……正直怖い。でもなんで怖いのか自分でもイマイチ理解できてない」

やっぱりとヤサコは思った。なぜこんな静かな学校の校舎を2人して怖いと思うのか、それはその恐怖の根源が同じところからきて

いることを意味している。
「私はどうしてここが怖いのかわかった」
「なんでなんで？」
それを知ったらアイコは余計怖がることになるのか、それともこの恐怖は和らいでくれるのか。ヤサコは後者であってほしいと思いながら口を開く。
「去年の生物部の合宿、覚えてる？あの時、果たし合いの肝試しをする前に怪談話をして盛り上げたよね。ここが怖いのは、その時のハラケンの怪談話にすごく似ているからだと思う」
「あ」
アイコの中でもやもやした感情が晴れたようだった。
「確かに。っていうかもろあの話のまんまじゃない！なんだっけ？そう、ミチコさんは学校に来たのに誰もいなかった。どの教室をのぞいても誰もいない。しかも朝のはずなのに窓のからは夕陽が差していた。ミチコさんは怖くなって階段を降りて行く。なのに、降りても降りても1階につかない。それをミチコさんはメガネのせいだと思ったけど、メガネはかけていなかった。いつの間にか電脳の体だけになっていたから。ミチコさんは恐怖のあまり叫んだ……すると、無人だったはずの教室から生徒達の声が聞こえてきた。ミチコさんは夢から覚めたような気持ちで教室に向かう。でもそこには、人の形をした真っ黒い生き物がひしめいていた……ミチコさんもようやく気付いた。自分も真っ黒い生き物に変わっていることに」
アイコはもう勢いでその話のほとんどを思い返すようにしゃべっていた。頼んでもいないがそこまでされると、さすがにありがとうとでも言いたくなる。おかげでヤサコもすっかり鮮明にその情景が浮かぶようになっていた。
「……階段は降りてないけど、いつの間にか電脳の体になってるってところまでは同じだね」
ヤサコはつとめて明るく言った。そうしないとどうしようもない恐怖に駆られそうだったからだ。自分でこの話を切り出したことを

ヤサコは後悔していた。
「ねえ、私達もその話のミチコさんみたいに、黒い生き物になるなんてことないよね？」
　ヤサコには、アイコがそこを心配することは予測できた。
「それはないわ。だいたいその話も昔の都市伝説よ。実際にあった話じゃない。状況が重なり過ぎてるけど、それも偶然だと思う。ごめんね。こんな話私が持ち出さなかったらアイコちゃんをそんなに不安にさせることはなかったのに」
「ううん。とにかくそれは都市伝説なのよね。じゃあとりあえず、ここ、降りてみよっか？」
　アイコは目の前の下り階段を示しながら言った。話をするうちに2人は旧校舎の西階段まで辿り着いていた。
「そうね。じゃあ2階に降りられることを祈ろう」
　ヤサコははにかんでそう言うと、アイコより前に出て手すりを持ちながら1段1段慎重に降りて行く。踊り場に着いたところで、ヤサコは階下の廊下の窓から外を見てみた。そこで一安心する。そこから見えるのは間違いなく2階からの景色だ。あの怪談話の通りにはならなかった。
　そうして2階に降りたヤサコとアイコ。そのまま1階に降りてもいいが、1度旧校舎の2階のフロアーもざっと見ておこうと思って廊下に出た。するとヤサコはどこかから何かの気配を感じ取った。
「どうしたの？」
　アイコがヤサコの様子に気付いて訊ねる。
「誰かがいるような、そんな気がして」
「このフロアーに？まさか、あの黒い生き物が」
　悪い方に考えるんだなとヤサコは思った。フミエやハラケンである可能性もあるのに。
　そこから少し集中して耳を澄ませると、その気配は1階からのものだとわかった。しかもどうやら階段に足をかけたらしい。1歩1歩、こちらに近づいて来る。

とりあえずヤサコとアイコは1階に続く階段に顔をのぞかせて、その足音の主を確かめようとした。しかしその正体はすぐにわかった。

「……ヤサコ？アイコ？ハラケン？」

ほとんど息づかいのようなひそひそ声は間違いなくフミエのものだった。そうしてフミエが踊り場までのぼって来たところで、ヤサコ達は飛び出した。

「フミエちゃん！」

「ヤサコ！アイコ！」

フミエは2人を確認すると猛然と階段をかけのぼり、そのままヤサコの胸の中に飛び込んだ。

「もう！どこ行ってたのよ！怖かったんだから！」

そうまくしたてるとフミエは、ヤサコの体に顔をうずめながらそのまま泣き始めた。よほど怖かったんだろうとヤサコも思う。「頑張ったね」とフミエの頭を撫でてやった。

「よしよし。ところで、ハラケンは見なかったの？」

アイコもフミエをなだめながら訊ねた。

「……見てない。もし見つけたらアイツのことはぶっ飛ばす」

「なんで？」

「アイツの怪談話を思い出しちゃったからよ。あの話のおかげで、アンタらに会うまでにどれほど怖い思いをしたか」

やはりフミエもあの話とこの状況を重ねていた。あの話を聞いた時もフミエは尋常じゃない怖がり方をしていたので泣きじゃくるのはムリもないと思ったが、どうもまだ理由があるようだった。

「……でも、人影らしいものは見た」

フミエはヤサコから離れると涙を拭いながら言った。

「え？それってもしかして黒い生き物だった？」

アイコもより一層震えだす。

「ヌルじゃない。人の姿だった」

「それこそハラケンじゃないの？どこで見たの？」

「見たのは新校舎の方。私は旧校舎の1階にいたんだけど、そこから中庭を挟んで新校舎を見た時に同じ1階の教室を歩いてたの。でもあれはハラケンじゃなかった。あれはなんて言うのかしら。そう、白いカッターを着ていたから」

ヤサコ達も旧校舎の3階から新校舎の方を見ていたが、そんな人の姿は確認していない。おそらく1階まで目が届いていなかったのだ。

「白いカッターか。確かにハラケンは黒い詰め襟だもんね。上を脱いだのならわかるけど……顔は見てないの？」

「ハラケンじゃないってわかって時点で目をそらしたから、顔までは見てないわ」

それは少し厄介だなとヤサコは思う。この空間に自分たち以外の人間がいるとしたらその人は何者なのか。もし自分たちと同じように学校の敷地内に入り込んで電脳体分離を起こした人がいたとしても、そこには肉体が取り残されるはずだ。一応敷地内に入って来た時に確認した上ではそんなものはなかった。怖いが、確かめてみる必要があるんじゃないかとヤサコは判断する。

「フミエちゃん。私たちは今からその新校舎の1階に行くつもりだったんだけど」

「何言ってるの!?わざわざその人に会いに行くつもり？」

ひっくり返ったような声でフミエが抗議する。

「会いに行くわけじゃないけど。でも、私たちが意識を失ったのは新校舎の昇降口前よ。そこに行ってみて、私たちの肉体がそこにあるか確認しないといけないわ。元に戻る方法もそこから考える必要があるし……ちなみにフミエちゃん。自分が電脳体分離を起こしていることは気付いてる？」

「……それは、わかってるわ。最初は認めたくなかったけど。まさかイマーゴを持たない自分が電脳体分離だなんて。これがオバちゃんの言っていた新空間なのかもね。ほんと、みんなには謝らないといけないと思ってる。私が興味本位でここを覗いて行こうって言っ

たばかりに、こんなことになって」
　またフミエの目が潤み始めた。やはりみんなして元に戻れないことが一番の恐怖だ。
「それは言いっこなしよ。とにかく出る方法を考えましょう。それにハラケンも探さないといけない。そのためにまず新校舎の1階に行く。ハラケンも同じ考えに至ってそこにいるかもしれない」
「うん……わかった。そういうことなら行くしかないわね。でもごめんヤサコ。アンタの腕、ずっと抱えてるけどいい？」
「いいよ。私だって怖いから」
　フミエはお言葉に甘えてヤサコの右腕をがっしりと抱えた。アイコも相変わらずヤサコの肩に手を乗せているので、3人してほぼ密着した状態だ。そのままとりあえず階段を降りて1階に降りる。ゆっくりと歩を進めながら1度3人は外に出た。新校舎と旧校舎をつなぐ連絡通路下の中庭を横切り、新校舎への扉を開く。

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ７

静けさは新校舎もあまり変わらない。フミエが言うように１階に誰かがいたのなら足音ぐらいはするものと思っていたが、耳を澄ませても聞こえて来なかった。それでも先ほど以上にヤサコ達３人は慎重に進む。その人と鉢合わせというのがもっとも恐ろしいパターンだ。

しかし一方でハラケンの気配がないのはおかしいと思った。とりあえず旧校舎に関しては３階をヤサコとアイコが一通り見て、１階はフミエがいた場所で、２階についてはヤサコが廊下を見渡しても誰もいなかったので、ハラケンは新校舎のどこかにいるはずだと思っていた。ひょっとしたら新校舎でも上階にいるのかもしれない。そう思ってとりあえずそのまま３人は昇降口に向かった。

ようやく目的地に着いたが、昇降口の扉はいずれも閉められていた。ここの扉が閉められているのは内側からは初めて見る。ヤサコはそこで意識を失う前のことを思い出した。その時この昇降口の扉は開いていたような記憶がある。ということは誰かがやってきてこの扉を閉めたのか。

「見て」

フミエがその扉にへばり着くようにして外の様子を伺いながら言った。幸いガラス張りなので見通しは良い。しかし見えたのは自分たちが予想していた景色とは違っていた。

「どういうこと？私達はあの辺で倒れたはずなのに、何もない」

ヤサコはその場所に自分たちの肉体が取り残されているものだと思っていた。ところがその扉越しにできるかぎり見渡しても、それらしきものはない。４人で同じ場所に倒れたのだから、見落とすはずはなかった。

「私達の体、どこに行ったのかしら？ひとりでに動き出すなんてことないよね？」

アイコの質問にそれはないだろうなとヤサコは心の中で思う。しかし断言はできないので口には出さなかった。ひとりでに動き出すなんてことはなくても、誰かに運ばれたとかならまだ考えられると思ったが、そこで今度はフミエがある異変に気付いた。

「ねえ?やっぱりおかしいよ。正門が見えるもん。さっきあそこはフェンスに囲まれていて入れなかったじゃない」

「え?どうなってるの?」

アイコは今起きていることに対して理解が追いついていないようだった。自分たちは突如として現れた第三小の幻影とも呼べる電脳体の中に迷い込んだ。つまり学校から出ればそこには自分たちの肉体が残っているはず。それがこれまでの認識だ。しかしこうなってくると、また違う可能性も浮上してくる。

「この空間は現実世界別とはまったく接していない別の世界ということ、なのかもしれない」

2人から顔をそらしてヤサコは言う。フミエはその背中に向かって訊ねてきた。

「それは“あっち”と同じような空間っていうことね。オバちゃんが言っていた新空間がここなのかもしれないっていうのは、あながちはずれてもいなかったということね」

ヤサコは目を合わさずにこくりと頷いた。つまりそれが意味しているのは、帰る方法など見当もつかないということだ。とは言うものの、これまで電脳体分離で入り込んだ異空間においても、帰る方法が保証されていたわけではない。ヤサコはこの絶望に慣れつつあったと言うと語弊があるが、少なくともフミエやアイコより冷静でいられたのは確かだ。

「フミエちゃん。アイコちゃん。私達には2つやることがある。まずはハラケンを探すこと。そして帰る方法を考えること。その順序はどっちが先の方が良いと思う?」

振り返ったヤサコはあまりしんみりとしないように、しかし作り笑顔は見せずに訊ねた。

「まあ、仮に帰る方法が見つかったとして、そこにアイツがいなかったら身もふたもないことだわ。だから先にアイツと合流する。その後でアイツの知恵も借りながら帰る方法をなんとか見つける」

それは妥当な提案だとヤサコは思った。しかしヤサコの中にはある1つの可能性が浮かんでいた。そしてそれをヤサコは否定したかったが、考えておく必要もあることだと思った。

「それはそれでいいと思う。でも、ここが現実世界とは別世界だったとしたら、こんなこともあるかもしれない。ハラケンは1人、校舎の中以外の場所に飛ばされた」

「なんですって？」

先ほどまでは校舎の中という狭い範囲で考えていれば良かったのだが、この昇降口からの景色を見てその考えを改めさせられた。

「だってそうでしょう？私とアイコちゃんはそれほど離れていなかったけど、フミエちゃんとは1階と3階で結構離れた場所に放り出されたよね。それなら、ハラケンはこの学校の敷地外に飛ばされた可能性もあると思うの」

「それは、確かに考えられなくもないけど、じゃあどうやってアイツを探すのよ？それはつまりこの街に放り出されたってことでしょ？この空間の広さがどれほどのものかはわからないけど、それを探すのは無謀だわ……とは言っても、校舎の中をくまなく探して見つからない場合にはそうしなきゃいけないんだろうけどね。何にしても、まずは校舎の中をしらみつぶしにすることね」

それはその時になって考えればいいと思い、フミエはこの校舎の中を徹底的に歩き回る決意をする。

「3手に分かれた方がいいかな？」

「やめた方がいいんじゃない？怖いから言ってるわけじゃないけど、1人になったら何が起こっても対処できないし、他の2人もそれに気付かないかもしれない。だから3人で一緒に行動した方が時間はかかるけどトラブルが増えることはないと思うわ。とにかくアイツの身に何も起こってなければいいけど」

それはそうだとヤサコもアイコも納得する。とりあえずこの場を離れて、ハラケンを探すために再び校舎を探索することになった。とりあえず新校舎の1階からくまなく見ていくことにする。

その時ヤサコは、この空間に入ってフミエとも合流してからずっと考えていたことを言うべきだろうかと悩んでいた。ミチコの復活のことだ。フミエ達にはそのことを伝えていないが、今回のこともミチコが絡んでいないとは言い切れない。さすがにこの状況になってそのことをフミエ達に伝えないのは心苦しい気になったのだ。

「フミエちゃん。今日の昼休み、私と約束したこと覚えてる?」

思い切ってヤサコはフミエに訊ねてみた。

「アンタが私達に隠し事をしてるって話?それを今日にも私だけには教えてくれるんだったわね」

「そう。それを伝えようと思って」

「こんな時に教えてくれるってことは、少なくとも今のこの状況になんらかの関係があるってことなのね?」

ヤサコは声を出さずにうなずく。フミエも自分のせいでこうなってしまったと反省している折、そのことを怒ったりはしなかった。アイコもそれ相応の事情があるのだろうと察していたので同様だった。

「うん。実は今月の廃ビル事件の時に私、ミチコに会ったの。“あっち”の空間に入った時にね」

フミエもアイコも固唾を飲むように黙って聞いていたのでヤサコはそのまま続けた。

「ミチコは、新しい空間の中で新しい生を与えられて復活したって言ってた。それにまた新しい事故が起こるってことを予言したの」

「……なるほど。あの時うわごとでミチコがどうとか言ってたから、そんなことかもしれないと思ってたけどね。どうしてそれを黙っていようと思ったの?」

フミエはヤサコを責めるつもりはなかったが、単純に疑問に思って訊ねてみた。

「……怖かったの。私は、私が手に入れて来た真実を見失ってしまうっていう、ミチコのその言葉が……信じたくなかった。ミチコの復活も、ミチコとの再会も」

「だから、廃ビル事件が解決した時にすべてが終わったと思い込みたかったわけね。私たちはあの時、中学校生活に向けて目を輝かせていた。その私たちをまたメガネで縛り付けたくない。そんな思いがあったんでしょ？」

やはりフミエはそのことを見通していた。ただただヤサコは申し訳なくて俯く。フミエはそんなヤサコの様子に気がついて言った。

「アンタは私たちのことを考えてあえてそのことを隠してたんでしょう？それを責めるつもりはないわ。むしろその優しさには感謝してる。でもね、ヤサコ。アンタは名前の通り人への思いやりが強すぎるから、時々1人で悩みを抱え込んで自分を傷つけてしまうこともあるのよね。その辺はイサコと通じるところがあるかも」

「そうよヤサコ。フミエみたいに大荷物背負わせてもぐいぐいと突き進んでくれる友達がいるのに、そんな1人で悩むことはなかったよ」

そう言ってくれると救われるが、しかしヤサコはその言葉で少しずつ傷ついていた。人の優しさは時に刃となることもある。そして自分も、思いやりという刃をフミエ達にも向けていたのかなと思う。自分はフミエ達を信じていなかったから隠し事をしたのかもしれない。そして、事故は起きてしまった。

「ちょっとそれ褒めてるのアイコ？それじゃ私が猪突猛進に力バカみたいになってない？」

「それがアンタの魅力じゃない。もちろん褒めてるのよ」

フミエとアイコのやり合いに挟まれたヤサコは、涙を押しとどめられずにいた。一体自分が何に対して一番負い目を感じているのかがわからないままに、雫は頬を伝い落ちる。電脳体なのに目頭は熱くなるのだなあとヤサコは思った。その様子に気付いたフミエとアイコは急にしゅんとなった。

「……ごめん」
ヤサコの絞り出した言葉にどれほどの謝意が詰まっているのか。フミエはそれを思うともらい泣きしそうになったのでかぶりを振って返した。
「もう、私は遠慮しないから。今回のことにはミチコが絡んでる？はっ。だったらもう1度闇の中に消えていただくまでよ。私たちの大切なヤサコをこんな悲しませるヤツを、放っておけるわけないじゃない」
ヤサコは素直に嬉しかった。フミエがそれを言えば、自分の中で今まで以上の負い目ができるんじゃないかと想像していたが、そんな複雑な感情が湧いてくることはなかった。ヤサコは自分にウソをついていた。1人はやはり寂しかったのだ。
「まあ、無事にここを脱出できたらっていう話なんだけどさ」
意気込んだフミエがトーンダウンし、ヤサコも現実を直視することにした。泣いている場合などではない。とにかくハラケンを探してここを出なければ話は始まらないのだ。
「でも、いないよハラケン」
話している間に新校舎の1階も一通りは見てまわった。残るは職員室だけだった。3人が校舎の端に位置するその部屋の前を通りがかった時、アイコがふと気付く。
「ちょっと待って。ここ、人がいるんじゃない？」
職員室には廊下側に窓はない。前後にある引き戸の上部にスモークの入ったガラスがついているだけだ。フミエは背伸びしてそこから様子を窺うとアイコの言う通り人影らしいものが見えた。
「どうする？中、覗いてみる？」
フミエが緊張した面持ちで2人に訊ねる。
「……怖いけど、でもハラケンがいるかもしれないし」
「そう、だね」
ヤサコの意見を採用し、とりあえずフミエは職員室の前方の引き戸をほんの少しだけ開いてみた。

「ど、どうぞ」
しかしフミエは自分で覗く勇気はなかったらしい。そこでヤサコが代わって覗いてみた。
「えっ……なにこれ？」
ヤサコは想像もしていなかった光景を見た。それが少なくともおぞましいものではないと知ったフミエとアイコがその次に覗いてみる。
「……わからないわ」
3人が見た景色は時間が静止していた。中には自分たちもよく知る第三小の先生達がいる。しかし、その誰もが微動だにしないのだ。
「私たちが中に入ると動き出すとか？」
アイコの提案も一応試してみる。しかし3人が足を踏み入れても変化はなかった。気味が悪いので部屋から出て引き戸を閉める。
「見なかったことにしましょう」
これはさしものフミエの理解の範疇を越えていたらしく、もう考えるのを放棄した。
「でもハラケンはいなかったね」
ヤサコがぽつりと言う。イヤな予感は増すばかりだ。
「フミエさ、さっきアンタが見た人影ってこれのこと？」
「違うわ。だいたいこの部屋は旧校舎側から見えないでしょ。私が見た人影は確実に動いてたし」
フミエがアイコにそう答えた瞬間、考え込んでいた3人の背後から声がした。
「どうしたんですかみなさん？セーラー服など着込んで」
「うわあっ！」
真っ先に叫んで飛び退いたのは、やはりフミエだった。
「きょ、教頭先生！？」
続いてヤサコとアイコの声がきれいに揃った。声をかけてきたのは第三小時代にお世話になった教頭だ。そしておそらくフミエが先ほど見たというのもこの人だとわかった。教頭は今日も白いカッタ

ーシャツにネクタイを締めている。
「そう驚くことはないでしょう」
柔和な表情で教頭は言う。まずヤサコ達はなんでこの状況でそんな顔をしていられるのかと思った。そしてさりげなく職員室のガラスの向こうを確認する。しかし人影が動き出した気配はない。つまり、自分たちを除けばこの空間で教頭だけが動いているのだ。
「いや、驚きますよ！先生、どうやってここに入ってきたんですか？」
フミエの問いの意味がよくわからなかったのか、教頭は首を傾げる。
「それは私の言葉じゃないですか？君たち、もう最終下校時刻を過ぎているんだよ」
そして全然会話が噛み合わない。ヤサコ達は互いに顔を見合わせた。なぜか教頭はヤサコたちを第三小の生徒だと思い込んでいて、卒業生であることに気付いていないようだった。
「そうじゃなくてですね、先生はどうやってこの世界に入ってきたんですか？」
「こんな時になんですか？私の昔話はまた今度聞かせてあげますよ。とにかくこんな時間まで学校に残っているのは感心しませんね。昇降口の扉を開けてあげますから、今日はとにかく帰りなさい」
まったくダメだと言う風にフミエが首を振るのがわかった。教頭はなぜ自分が教育の世界に入ったのかを訊かれたと勘違いしたようだ。まるで教頭には自分たちの話が伝わる気がしなかった。
「ちょっと待ってください。先生、私たちですよ。先月大黒小学校を卒業した。もう私たちはここの生徒でもないですし、先生もこの学校がもう廃校になっていることぐらいわかっているでしょう？」
アイコはとにかく誤解を解くように主張した。教頭はこの学校が存在していることにさえ疑念を抱いていないように見える。
「そうでしたかね。まあ、確かにこの校舎はもうすぐ廃校になりますが。しかしそういうことなら君たちは部外者ということになりま

す。許可なく校舎の中に入るのは規則違反ですよ。中学生になったのならその辺りはちゃんとわきまえてください」

教頭の表情と声が急に険しくなった。自分たちのセーラー服をじっくりと見て、事情を飲み込んだように頷いている。

「それは重々承知しています。でももう少し待っていただけませんか？実はこの校舎で私たちの友達とはぐれてしまって、彼を探しているところなんです。彼を見つけたら、すぐに校舎から出ていきます」

今度はヤサコが教頭に話を合わせるように頼み込んだ。

「わかりませんね。君たちのお友達ということは、この学校の卒業生ですよね？はぐれてしまうも何もないんじゃないですか？」

やはりそう思うだろうなとヤサコは小さく息をつく。しかし教頭はまた表情を緩めて、

「そういうことなら私がそのお友達を探して、帰るように言っておきます。この学校が懐かしい気持ちもわかりますが、君たちはとにかく校舎を出なさい。わかりましたね？」

と、言うのでヤサコはフミエの顔をちらりと見た。さすがにこれ以上反抗するとさすがに本気で怒られるかもしれないので、フミエは教頭の言う通りにすることにした。幸いハラケンのことは探してくれると言っているので、そこまで粘る必要もない。

「わかりました。ご迷惑おかけしまして申し訳ありません」

学級委員となってお辞儀が得意になったフミエが頭を下げながら言う。ヤサコとアイコもそれに倣った。

「いえいえ。今度来る時は時間内に、許可を取って来てください」

そのまま3人は教頭について行く形で昇降口まで歩いていった。教頭はその扉を開けて、3人を外に促す。

「それじゃあ原川君のことはお願いします」

「はい、わかりました。気をつけて帰ってくださいね」

そう言うと教頭は内側から鍵をかけて校舎の中に戻っていった。

3人は銅像の前に佇んだ。

「あの人、何者かしら？」
ヤサコがぽつんとつぶやく。
「色々ツッコミどころは多かったけど、物腰は教頭先生そのものだったよね」
「うんうん。ニセ者なんかじゃないと思うよ」
フミエとアイコはそう信じていた。２人が低学年の時からあの教頭は第三小にいた。朝礼での挨拶を何度も聞いている２人は、間違いなくあの人は教頭だと思った。
「てことは、教頭先生もこの空間に入り込んでいるってことでしょ？自分が電脳体分離をしていることに気付いてないにしても、なんで第三小が存在していることに疑いを持ってないのかしら？」
「それは、正直わからないわ。それより当面の問題は教頭よりハラケンね。校舎の中に居てくれたら同じように教頭に追い出されてくると思うんだけど」
「ねえ、あれ何かしら？」
ヤサコとフミエがこれからのことを思案していたその時、アイコが上空を指差して言った。校舎の３階辺りの高さに、黒い円盤のような物が浮いている。
「あれ、もしかしてブラックホール？ということは、あれが帰り道！？」
フミエの声が一瞬弾んだように聞こえたが、ヤサコは冗談じゃないと思った。
「待って！ハラケンはどうするの？ここで私たちだけが帰ったら、ハラケンはこの世界に取り残されてしまうわ！」
しかしブラックホールはみるみるうちに巨大化し、今にも自分たちを飲み込もうとしていた。意識も立っていられないほど遠くなり始めている。最悪のシナリオが薄れ行く意識のなかで展開されるが、今のヤサコ達にはどう抗うこともできなかった。
「ハラケン！」
その叫びが声に出たのかさえもわからないままに、また３人は束

の間の眠りにつく。その電脳体は現実世界へと戻ろうとしていた。

#２０　幻の第三小学校　ｐａｒｔ８

無線が入ったのは直樹達がちょうど今日の聞き込みを切り上げて車に戻って来た時だった。事故再調査の成功のために、藁にもすがる思いで今日も中津交差点で聞き込みを続けていた直樹と久美子。最近のターゲットはもう大人ではなく、中津交差点を通る学生に絞っていたが、この日も空振りに終わり、ため息をつきながらシートベルトを締めていた時にその知らせは舞い込んだ。

内容は次のようなものだった。旧大黒市立第三小学校敷地内で４人の学生が意識を失って倒れているとの通報が入った。付近巡回中の捜査員は現場に急行せよ。

直樹はすぐにその無線に自分たちが向かう旨を返し、まるで彼自身にスイッチが入ったかのように一気にアクセルを入れた。中津交差点から旧三小の敷地は目と鼻の先、実際１分少しで直樹達は現場に到着した。そこには顔色を悪くした主婦と、まだ小学校低学年くらいの少年が待っていた。

「警察です。アナタが第一発見者の方ですか？」

その到着の早さに主婦は驚いてようだったが、すぐに気を取り直して説明に入る。

「ええ。鹿屋野神社の方からこの敷地内にこの子が遊んでいたボールが誤って入ってしまったみたいで、そこにある隙間から取りに入ろうとしたら、そこに人が倒れているのを見つけたそうなんです。この子はそれを私に知らせ、私もその隙間から覗いてみましたが、言う通り４人ほどの制服を着た学生さん達が倒れていました」

「なるほど、ここですね」

直樹は主婦に指差された鉄のフェンスの間に出来上がった隙間から、中の様子を覗いてみた。すると確かに４人地面に突っ伏して倒れているのが確認できた。そして直樹は倒れていたのがヤサコ達だったことに気付いて青ざめる。

「あの子達は……救急車は呼ばれましたか？」
「ええ。警察に通報する前に」
直樹は再び主婦から顔を背けると、今度は額にかけてあったメガネを通してその姿を見た。そして直樹は自分の読み通りの展開であることを確認した。
「川畑さん。空間管理室にも連絡お願いします」
「えっ？どういうこと？」
隣に立ってフェンスの隙間以外の出入り口を探していた久美子は首を傾げた。
「倒れている人は電脳体分離を起こしています。そのことだけでも伝えていただければ先方もわかるはずです」
「電脳体分離って、まさか葦原さんが事故の時に起こした」
「それだけではありません。廃ビル事件でも何人かが同じ目に遭いました。しかも向こうで倒れているのは、その時ビルの中にいた小此木さんや原川君達です！」
「何ですって！？わかったすぐに連絡するわ！」
久美子はすぐにメガネを立ち上げて電話をかける。その間に直樹は周囲を見回した。この隙間からは直樹の体格ではとても入れない。敷地は完全にフェンスで囲まれているわけではなく、資材の搬入用に鉄扉が設けられているが、そこにはもちろん鍵がかけられている。しかし今から工事関係者に連絡して鍵を持って来てもらうような悠長な選択肢を直樹は考えていなかった。
「ぼく。この中に入れる入り口はここだけなの？」
直樹は第一発見者の少年に訊ねてみる。
「うん。そこからみんな出たり入ったりしてる」
少年がうなずき、直樹は入るならここしかないかと思った。そこで手早く管理室にも連絡をまわした久美子に訊ねてみる。
「このフェンス、多少壊しても器物破損になりませんよね？」
「ちょっとだけならいいでしょ。パトカーが危急の時に赤信号でも通過できることを知ってるでしょ？」

「そうでした！」
直樹は許可を得たので思いっきりフェンスを蹴りつけた。何度もやっているうちに蹴りつけた部分がよじれ、隙間は広がった。直樹と久美子はそこからかろうじて身を滑り込ませる。すぐに倒れているヤサコ達の元に駆け寄った。
「これが、電脳コイル現象なのね……」
久美子もメガネを装着した。魂が抜けて黒ずんだその体を見ると、さすがに眉をひそめたくなる。しかし久美子はそれ以上の動揺は見せず、直樹に倣って彼らの呼吸を確認した。
「分離を起こしてからそう時間は経っていないようです。そう遠くには行ってないでしょう……彼を除けば」
直樹はまるで鑑識のように冷静に分析している。久美子はこれを意外に思うが、さすがに電脳犯罪の捜査官だなと納得した。
「彼って、原川君のこと？」
「ええ。他の3人と見比べてみても、明らかに彼の色は薄くなっています。電脳体が肉体を離れるに従って、こちらの色は薄くなっていきます」
直樹の表情は険しい。
「この子達は助かるの？」
久美子は電脳に関しては直樹より疎く、細かいことはわからない。ただ心配なのはそのことだけだった。
「それは、彼ら次第です。入り込んでしまった異空間の出口を彼ら自身が見つければ、助かるとは思います」
直樹は唇を噛むようにして言い、一面更地になっている敷地をぐるっと見回した。そしてかけていたメガネをはずしてもう1度、かけなおしてからまた1度とそれを繰り返す。しかし、直樹の目に止まるような変化はない。久美子もそれを試してみたが同様だった。
「すぐにこの子達が帰って来る保証はないのね。それまでこの子達はどうするの？卸したてのセーラー服や詰め襟が砂まみれでかわいそうよ」

「下手の動かすのは危険です。万が一メガネがはずれるようなことがあれば、その子は異空間から戻ってこられなくなります。救急車の到着までは待ちましょう」
「そう言えば、救急車が到着したとしても台車が入るところがないわ」
しまったという風に久美子は鉄扉の方を見た。
「工事関係者に事情を話してあそこの鉄扉を開けてもらうしかないですね。すぐに手配してもらいましょう」
直樹はすぐに市警に連絡し、工事関係者にその旨を伝えてもらえるようにした。その後2人は散乱していたヤサコ達の荷物を1カ所にまとめた。そこにはヤサコのフルートのケースや、アイコのテニスラケットも含まれている。始まったばかりの彼らの学校生活がこんなところで終わってしまうのではないか。久美子はそんなイヤな思いを一瞬抱いたが、それは足元に覚えた違和感に消し去られた。
「地震？」
久美子は隣にいた直樹に訊ねてみる。立っていられないほどではないが、確かに地面が揺らいでいるのは感じられる。
「……ですね。大きな規模のものではなくてよかったです」
直樹も周囲を見回す余裕を見せながら答える。ところが異変は起きていた。それは上空。まるでその気配を感じ得ないほど静かに、異空間への入り口は開いていた。先に気付いたのは久美子だった。
「竹下君！あれは！？」
久美子に指差されて直樹がそれを確認した時には、ブラックホールはかなりの大きさになっていた。そして次の刹那、その中からエメラルド色の光の奔流が放出された。
「うっ！」
直樹と久美子は思わず目を背ける。その光は自分たちに向かって来るのかと思いきや三筋に分かれ、ヤサコ、フミエ、アイコ、それぞれの肉体に浴びせられた。そしてみるみるうちに黒ずんでいた体が鮮明に色づけされていく。

「こ、こんなことが……」
直樹はそれ以上の声が出なかった。電脳体が元に戻ってくる場面を見るのは初めてではないが、コイルタグを使用していないのに戻ってきた事例は初めてだった。しかし直樹はすぐに気を取り直す。光の放出が終わるのを確認してヤサコ達の元に駆け寄り、リンクを調べるためにウインドウを開いた。そしてすぐに結果は出た。
「リンクを確認しました。この3人はもう大丈夫です。じきに意識を取り戻すでしょう」
「よかった。でも、原川くんは？」
久美子は不安を滲ませた目でハラケンの肉体を見る。さきほど以上にその色が薄くなっているように見えた。
「わかりません。おそらくこの子達は異空間で彼とはぐれたんでしょう」
そして直樹は上空を見上げる。願わくばもう一筋、光が降り注ぐことを期待したが、その時すでにブラックホールは閉じかけていた。ヤサコ達と一緒に戻って来るのは叶わなかったらしい。
「う、うん？」
そんな中、一番はじめに目を覚ましたのはヤサコだった。
「大丈夫ですか？小此木さん」
直樹はヤサコの髪についた砂を払い落としながら、上半身を抱きかかえるようにして起こした。ヤサコは男の人が優しくいたわってくれていることに驚いて声を上げた。
「直樹さん！どうして？それに川畑さんも」
「この敷地内で学生４人が倒れているという通報が入ってすぐに駆けつけたんだ。そしたら君たちがここで倒れていて。あ、ちょっと待ってね。この2人も気がついたようだから」
直樹は気がついたフミエをヤサコと同様に抱き起こした。アイコの方は久美子が。その間にヤサコはハラケンの安否を確認しようとした。しかしヤサコの目に飛び込んできたのは、未だ黒ずんだままのハラケンだった。

「ハラ・・・・・ケン？」
　呼びかけても当然返事はない。直樹はヤサコの方を向くと首を横に振った。
「彼は君たちとは一緒に戻ってこなかった。君たちが戻ってくる時には上空にブラックホールのようなものが現れて、そこから流れて来た光がそのまま君たちの体に宿った。そのまま彼の電脳体も戻ってくると思ったけど、ブラックホールはそこから閉じてしまった」
「そんな……」
　話を聞いたフミエがハラケンの元に駆け寄るために立ち上がろうとする。しかし体は言うことを聞かず、そのままバランスをくずしたのを直樹が受け止める。
「まだ電脳体が戻ってきて間もない。体も思うように動かないと思う。そのまま安静にして。もうすぐ救急車も到着する」
「でも、ハラケンは？」
　フミエが泣きそうな声で直樹に訊ねる。
「またブラックホールが開くかもしれない。君たちが戻ってこられたんだ。彼もきっと戻ってくる」
　柔らかく希望を持たせるような声で直樹が言うので、ヤサコ達３人はそう信じるしかないと思った。
「そう言えば校舎がなくなってる！」
　フミエはようやくそのことに気付いたように声を上げた。
「校舎？」
「はい。私たちがこの敷地に入ってきたのは、ここに第三小の校舎がそびえていたからです。もちろんそれは電脳体の幻だったんですけど。それを眺めている時に地震に遭って、そのまま気が遠くなって」
　直樹はヤサコの話をはっとしたように聞いていた。そして渋い顔つきになって何かを考え込んだ。
「とりあえず詳しい話はまた落ち着いた時に訊くことにする。３人とも念のために病院で診てもらおう。さっきも言ったようにもうす

ぐ救急車が到着するから、こんな砂まみれになるところで申し訳ないけどじっとしてて」

そう言うと直樹はこれからどうしたものかと立ち上がった。その時ふと自分たちが入ってきたフェンスの隙間の方を見ると、見知らぬ男性がそこに立っていた。その肩にはキューちゃんが浮いていたので、それが誰なのかはすぐにわかった。駆け寄ってみると、さらにその人物はこちらに聞こえてくるような音量で舌打ちするようにこう言った。

「どうしてドメインが切り替わってないんだ。管理外ドメインなら、いくらサーチマトンを飛ばしても異常を探知できないよな」

それを聞いて直樹はなぜこの場所で事故が起こったのかを理解する。ともあれ、とりあえずこの空間管理室の職員らしき、おそらく直樹と同年代の男に声をかけることにした。

「すみません。空間管理室の方ですよね。僕たちは通報によって駆けつけた警察です。随分を早いご到着で」

直樹はその人物に敬礼した。するとその管理室職員は直樹を一瞥すると陰鬱な笑みをたたえて鼻で笑うように言った。

「なんだ。こっちに連絡をよこした警察官ってのはお前か、竹下」

その言葉に直樹は首を傾げる。知り合いにこんな人がいたのか記憶を辿ってみるが思い当たらない。

「あの、大変失礼ですが以前どこかでお目にかかりましたっけ？」

「ああ。お前は知らないかもな。一応お前の先輩になるんだが」

「先輩？」

また直樹は思案顔になる。先輩と言われても中学、高校、大学で関わった人はたくさんいる。それを見かねた相手が口を開いた。

「国際情報通信技術大学、情報理工学部知能機械学科、電子制御システムコースＡクラス、通称“小野ゼミ”でお前の１年先輩の進藤だ。ＯＢ参加のゼミ懇親会でお前を見かけたことがある。お前は小野先生のお気に入りで、ゼミではエースと呼ばれていて目立っていたからな」

空間管理室で一度辞職した玉子の後任として選ばれたのがこの進藤だ。ひと月前の事件でのその仕事のやる気のなさは一郎の悩みの種でもあった。この2週間ほど一郎は出張で金沢いないため、彼が大黒の空間管理室を任されているということになる。

「そ、そうでしたか。それは失礼致しました。それに滅相もありません。僕なんかまったくの浅学で名誉ある“小野ゼミ”内ではついていくのがやっとでした」

小野ゼミとは小野隆が受け持っているゼミのことだ。この部門に関しては国内でも最高峰のレベルの秀才が集う。

「だろうな。お前はエースと呼ばれて奢ったばかりに、ろくな就職口を見つけられず“小野ゼミ”の品位を下げた戦犯。そのおかげでOBであるこっちも迷惑してんだよ」

人を蔑むような言い方に、いきなり毒を吐いてきたなと直樹は思った。確かに斜に構えたこんな陰気な先輩がいたような気もしたが、とりあえずお近づきになりたくないタイプなので直樹も意識して近づかなかったのかもしれない。しかしそう言われて黙っている筋合いはないので、直樹は毅然とした態度で返した。

「そんなことはないと思います。警察官だって立派な職業ですから」

「警察官自体を否定しているわけじゃない。お前のなんだ、電脳犯罪対策係？そんな生活安全課のおばちゃんでも務まるような閑職に、オレたちが誇りにしている“小野ゼミ”のOBがいるってだけで虫酸が走る。しかも小野先生を特別顧問として招いているなんて、どこまでお前は先生に迷惑かけたら気が済むんだよ。お前の同期にしても、みんなそれなりの進路を掴みとっただろ？あのゼミの出身者は、院の研究室に進むか、一流企業のエンジニアとして華々しいキャリアをスタートさせるかの2つしか許されてないんだよ」

進藤は随分と勝手な論理を押し付けてくるが、エリート街道を突っ走ってきたプライドの高い人間が集まる“小野ゼミ”には往々にしてこういう手合いは多い。相手にするのもバカらしいことだと思いつつも、しかし直樹は言い返さずにはいられなかった。

「先輩はどうなんです？空間管理室のそのような肉体労働が本意だったとでも？」
「オレはメガマス研究開発部のエンジニアとしてサーチマトンの設計に関わっている。破損したサーチマトンのメンテナンスができる人間が現場にいたほうが効率は上がるという理由で、一番若いオレがそっちにまわされただけの話だ。お前と一緒にするな」
最後の一言はやたらゆっくりはっきりと進藤は言い放った。しかし直樹は怒りをぐっと堪えて、今何をすべきかを思い出す。
「僕のことは別にいいでしょう。それよりもこの敷地内で何か異変は感知できますか？」
そう言うと進藤は何だコイツとでも言いわんばかりの鬱陶しそうな目を向けてきた。
「部外者には関係のないことだ」
どこか感情的な言葉に直樹は呆れてしまう。管理室職員としての一郎や玉子を恋しく思った。
「関係ないことはありません。現にこうして意識を失った子どもがいるんですよ！」
「お前は警察官としての責務を全うするだけでいい。それならさっさとあの子達を保護して安全な場所に連れて行け。空間がどうのこうのお前に伝える筋合いはない」
今の言葉はヤサコ達の方にも聞こえたらしい。先ほどからの穏やかならぬやりとりといい、フミエなどは進藤をいぶかしげに見つめていた。
「安全な場所に、ですか。ここは今からフォーマットする気ですね？」
「ふん。頭は悪いのに勘はいいんだな。そうだ。ここのサーバーにわずかながら乱れが観測されている。今は視覚的に問題は起きていないが、また何かが起きる可能性もある。すでに2．0がこちらに向かっているんだ。さっさと子ども達を退避させろ。子ども達は全員意識を取り戻したんだろ？」

直樹はかぶりを振り、ハラケンが進藤に見えるように立ち位置を変えた。
「彼だけは、まだ戻って来ていません」
「なに？」
進藤はハラケンの元に駆け寄って確かめてみた。それからしばらく何かを考え込んでから口を開いた。
「お前、この子達が戻ってくるところは見ていたのか？」
「ええ。上空にブラックホールが現れて、そこから彼らの電脳体が光の束となって戻ってきました。まだあのブラックホールが開くかもしれません。そうすれば、まだ戻ってきていない原川君は助かる可能性もあります。ここをフォーマットするのはもうしばらく待ってください」
直樹は必死に進藤に訴えかけた。情で動くような人間ではないとわかっていたが、そのままフォーマットを開始されてはハラケンの電脳体が戻って来られなくなる可能性が高い。その進藤はまた考えるような顔になって、今度はヤサコ達に訊ねてきた。
「君たちがここで意識を失った時、そのブラックホールっていうのは現れていたのか？」
「はい。私たちはここに校舎が建っているのを見て、不審に思って敷地内に入りました。でもそこで地震が起こって、同時に気が遠くなっていくのがわかりました。私はその最後の記憶の中に、ブラックホールを見ました」
「それに、向こうの世界から帰ってくる時もそのブラックホールは現れたわ！」
ヤサコとフミエが口々に訴え、進藤は頷きながら彼らに背を向けた。何をするのかと思えば、電話をかけている。おそらく管理室本部に指示の確認をするのだろうと直樹は思った。
「……ええ。……はい。そうです……いいんですか？では、しかるべく」
電話を切ると進藤はまた向き直り、広大な敷地を見回すようにし

た。
「フォーマットは待ってもらえそうですか？」
直樹はどこか媚を売るように訊ねていた。この方が進藤も気分がいいだろうという作戦だ。しかし進藤はそれを鼻であしらった。
「ふん。構わずにフォーマットしろとの指示だ」
そうすると上空から４機の黒いキューブが現れた。これには直樹をはじめとして久美子やヤサコ達も唖然とする。
「聞いてなかったんですか！？まだそのブラックホールが開いて原川君が助かる可能性だってあるんですよ！ここでフォーマットなんかしたら、彼は一生戻ってこれなくなるかもしれない！」
「オレも本部にはそう報告した。でも本部はそのままフォーマットを遂行しろと指示してきた。ブラックホールが開けば確かに彼の電脳体は戻ってくるかもしれない。だが、彼女達の言うようにそこからまた電脳体が異空間に吸い込まれる危険性もある。本部はまずその危険を取り除くことが最優先だと言ってきた」
進藤の言い方は自分が今から何をするのか、まるで自覚していないように機械的だった。
「その本部は何考えてるんですか？メガマス得意の隠蔽ですか？原川君を見殺しにするつもりですか？そんな指示なら聞かなければいいんです。頭の良い先輩ならただ指示に従うだけなんて愚かなことだと思うでしょう？その人達は現場で何が起こっているのか知らないだけだ」
「うるさい。本部の指示に逆らえるか。だいたいお前にそんなこと言われる筋合いねえから。聞いてるぞ。猫目逮捕の時に、ヤツを交通事故再調査の重要参考人としてマークしておきながら、署長命令だと言われてみすみす他の部署に身柄を押さえられたってな。そのことでメガマスの中では失望の声が上がってたぞ。やっぱり電脳犯罪対策係なんていう無能な部署に、そんな事故の再調査なんて大役は務まらなかったってな」
２．０は既に４機が合体してフォーマットの体勢に入っている。

後は進藤の指示待ちのようだったが、直樹はそれを許さなかった。こちらがどれだけ言っても聞くつもりがないことと、この期に及んでもなお自分を蔑むことによって自己正当化しようとする言葉に、直樹はとうとう我慢の限界を越えて進藤に掴みかかっていた。

「いい加減にしとけよ。僕を悪く言うのは勝手だ。でもアンタみたいな人に空間管理室の職員は務まらない。人の命をなんだと思ってるんだ！」

「ああ？どうしてオレが悪いみたいになってんだよ。全部本部の指示だ。文句なら本部に言え。ったく、頭の悪いヤツは何かにつけてこうして暴力を振るおうとする。そりゃあ大した職に就けないわけだぜ」

直樹に胸ぐらを掴まれている進藤は、言葉とは裏腹にうろたえているような表情を見せている。ヤサコ達は普段穏やかで優しい直樹のこんな姿は見たくなかったし、もちろんショックだったが、同時にこの進藤にフォーマットを遂行させてはならないことも強く感じていた。これが玉子なら有無を言わずに本部にたてついているところだ。今にも殴り合いに発展しそうな若い男性の罵り合いに気圧されて、誰もそれを口を出すことはできなかったが。

「ちょっとやめなさい竹下君！警察官がそう感情的になってどうするの！」

そこで見かねた久美子が止めに入った。直樹は我に帰って進藤を放したが、彼の罵倒は続いていた。

「そもそもお前が大学を卒業できたこと自体が疑わしいんだよ。読んだぜ、お前の卒論。なんだあれ？あの論文には子どもでもわかるような致命的欠陥があった。あんなものでも通ってしまうのが“小野ゼミ”の廃りを象徴している。小野先生の温情処理に感謝するんだな」

「関係ないだろ！早く2．0を止めろ！」

直樹の叫びをしかし進藤は完全に無視した。そして彼をにらむようにしていたヤサコ達の方を向いた。

「悪く思わないでくれ。これも事故がこれ以上起こらないようにするための処置なんだ。君たちの友達の電脳体はメガマスが責任を持って取り戻す。何も心配しなくていい」
台本でもあるのかと思えるお約束の言葉を、ただなぞっただけのように進藤は言った。もちろんヤサコ達がそれで納得するはずがなかったが、次に進藤は、
「フォーマットを開始しろ」
と2．0に指示を出し、そのまま背を向けて歩き始めた。
「どこへ行く!?早く今の指示を取り消せ!」
直樹は進藤の肩を掴んで引き止めた。しかし彼は大きく舌打ちをして半分だけ振り返って言い放った。
「お前と同じ空気を吸いたくない。それにもうフォーマットは止められない。終わった頃にもう1度様子を見に来るから、お前は子ども達を病院に送ってとっとと消えろ」
そしてぶっきらぼうに直樹の肩を振り払うと、フェンスの隙間から進藤は出て行った。憮然として立ち尽くす直樹の背後で、2．0によるフォーマットが開始される。それと同時にけたたましいサイレンを鳴らしながら数台の救急車がフェンスの外に到着したようだった。
「すみません!救急隊ですが警察の方ですか?ここで人が倒れているとの通報によりかけつけたのですが、出入り口はここしかないんでしょうか?」
直樹が平静でないのを気遣って久美子が救急隊の応対をした。
「ええ。もうすぐ工事関係者が向こうの鉄扉の鍵を開けてくれることになってます。それまで待っていてください」
その間に直樹はヤサコ達の元に歩み寄り、ただただ悔しそうな顔をして言った。
「……ごめん。僕が頼りないばかりに、原川君は……」
それはもう諦めなければならないということなのだろうか。ヤサコはそう思った。今まさに遂行されつつあるフォーマットによって、

ハラケンが帰って来られなくなるなんて思わなかった。あの事件の時だって、完全に出入り口を失ったの“あっち”からイサコは生還したのだ。

でも今回は何かが違うなと思った。そう、今の進藤と直樹のやり取りを見ていればわかる。ハラケンは見殺しにされるのではない。生け贄にされたのだ。これ以上事故が起きないために。

あの2．0達はハラケンと自分たちの繋がりを消し去ろうとしている。今こうしている間にも、ハラケンの体の色はまた薄くなっている。異空間で動き回っている証拠だ。なのに、今もなおどこかで生きているハラケンとは、もう2度会えないかもしれない。

夕闇に紛れてまたここでブラックホールが出現するのを祈っていたヤサコの気力も限界に達する。工事関係者が到着し、鉄扉が開かれて救急用の台車が滑り込んできた時には、ヤサコは再び意識を失っていた。

#20　幻の第三小学校　part9

事故の発生から3時間が過ぎ、街にはその余波が大きく広がることはなく静かに収拾されつつあった。事故現場には救急車のサイレンとともに人だかりができたものの、それがメガネの事故だとは悟られないままにメガマスは処理をした。ブラックホールを見たのはヤサコ達と直樹達だけ。もちろんメガネの事故だと勘ぐる声もないわけではなかったが、夕方の喧噪とともにそれは曖昧に消えていった。今もどこかの掲示板で事故の真相を推測するスレッドが立てられたとしても、メガマスの検閲により削除されるだろう。ネットさえ封じれば台風のような噂の伝播は避けられる。口コミで事故の噂が広がったとしても、比較的に時間はかかる。

メガマス本社の会議室で社長の桝田はふとそんなことを思っていた。彼は事故については真っ先に知らされ、対応のためにその時間に開かれていた幹部会議は一旦打ち止めとなった。事故発生から時間が経ってようやく落ち着いてきたところで、改めて今日の事故の概要を幹部に伝えるための緊急会議が開かれることになったのだ。そこには夕方に集まっていた幹部の他にも、メガマス本社にいるだけの幹部が集められた。たった1人、空間管理室本部長だけはまだ本部で指揮をとるために欠席している。

「遅くなりました。本日の事故について最終報告書が届きました」

情報取り次ぎ役の香川が部屋に入って来たところで、早速会議は始められた。

「では香川さん。その報告書を読み上げてください」

「はい。今回の事故の被害者は4名。当人達の証言によるといずれも電脳体分離を起こして異空間に入り込んだそうです。そしてその中で電脳体が戻って来たのは3名。残る1名、原川研一君の電脳体はまだ戻ってきておりません。彼についてはメガマス病院に収容されました。また、電脳体が戻ってきたうちの1人、小此木優子さん

は1度目を覚ましたものの、その後また意識を失いました。救急車でメガマス病院に運ばれて検査しましたところ、身体的異常はなく、精神的ショックが原因だと診断されています。彼女の電脳体は無事ですが、まだ意識を取り戻していないのでそのまま入院されています。意識を取り戻した残りの2人、橋本文恵さんと相原愛子さんは小此木さんとともに病院に運ばれましたが、こちらも身体的異常はなく、自力で歩けるようだったので親御さんの付き添いで自宅に戻って静養してもらっています」

香川はまず被害者4人の状態について簡潔に報告した。そこでの質問は後回しにされ、次いで香川は事故発生時の状況説明に入る。

「被害者の方達には後日改めて詳しく事情を訊くことになっていますが、とりあえず概要だけお伝えします。4人は本日の5時45分頃、旧大黒第三小敷地内に校舎がそびえているのを発見したそうです。これは電脳体の幻と考えられます。4人が敷地内に入ってそれを確認していたところ、そこで地震のようなものを感じたそうで、段々と気が遠くなっていき意識を失ったということです。また、小此木さんはその時ブラックホールのようなものを見たと証言されています」

そこで会議室が波のようにざわめいた。ここに集まっている幹部は全員、金沢イベント事故の概要も聞かされている。状況が似通っていることに動揺しているのだ。

「彼女達が目を覚ますと、そこは学校の中だったそうです。間取りも景色も完璧な旧第三小だったと。そこで電脳体が戻ってきた3人は合流できましたが、原川君だけは最後まで合流できず。3人が校舎の外に出たところで、もう1度あのブラックホールが出現し、今度はそれに飲み込まれていったそうです。気がつくと元の旧第三小敷地内に戻ってきており、その時は校舎の幻もきれいに消えてしまっていたと」

そして香川は手に持っていた紙資料をめくって付け加えた。

「被害者の方達の証言は以上ですが、現場に駆けつけていた市警の

電脳犯罪対策係の捜査員からも話を伺いました。彼らもブラックホールが開くところを目撃しています。上空に現れたブラックホールから光の奔流が押し寄せ、それがそのまま電脳体として3人の肉体に宿ったとのことです……最後に、なぜ原川君の電脳体が戻る前にフォーマットを執行したのか、そして彼の電脳体を取り戻す方法は用意してあるのか、メガマスに質問したいとのことでした」

説明を終えた香川が一礼する。場はその最後の一文によって重々しい空気が漂った。

「……そうですか。それではその議題から入りましょう。今回の事故の原因が、つい3日前の金沢イベント事故と同じなのは検討する間でもないことだと思います。被害者の方達が入り込んだのは金沢支社とアプリコット社が完成させた新空間で、金沢の事故の被害者の証言でそこが現実世界のパラレルワールドだということも明らかになっています。今回彼らが入り込んでしまった学校も、そのパラレルワールドにはまだ存在していたものだったとすれば説明はつきます。問題は、金沢での事故も含めてそこに入り込んだ子ども達の4／5は生還しているのに、なぜ原川君だけがそこに取り残されたのかということです。彼を救出する方法もそこから考える必要があるかと」

「その話は空間管理室本部長がこの場にいないとできないと思いますよ。原川君も生還する可能性があった。しかし本部長の一存でフォーマットは執行され、彼の出口は断たれてしまった」

桝田の隣で話を聞いていた唯一外様の小野が言った。小野は部外者として事故の処理を見守っていたのでその様子はよくわかっている。フォーマットの強行を指示したのは管理室本部長で、桝田はそれを事後報告で知らされた。

「確かに本部長の独断でそれを行うのは問題があったと思います。しかしあれはこれ以上被害者を出さないためという判断だった。時は一刻を争っていたので社長の考えを伺うという手間を省き、自ら決断を下さざるを得なかった。彼を一概に責めることはできないと

思います」

そう小野に反論したのは研究開発部部長の平松だ。小野の目から見ればこの平松と本部長は近しい関係にあるのは明白だったが、それは言わなかった。

「管理室本部長の責任追及をするために集まってもらったわけではありません。如何にして原川君の電脳体を取り戻すか、それを議論したいのです。もちろん管理室本部長の意見を伺うことは必要ですが、今は管理室を空けられないとのこと。なので私たちでまずはその方法を検討しましょう」

桝田が小野と平松をとりなすように言った。そして幹部の誰かが発言するのを待ったが、集まった幹部達は皆沈黙する。結局新空間についても大まかなことしかわかっていない現段階で、ハラケンの救出方法を考えろというのは無理難題であった。そうなるとフォーマットを強行した管理室本部長が責任を一身に背負うことになる。小野はそんな幹部達の様子を見て、仕方ないとため息をつくように手をあげた。

「まあ、私のような外様の意見でも参考になれば」

「では小野先生。お願いします」

桝田に指名された小野は1つ咳払いをして切り出した。

「夕方の会議でも言ったことなんですけどね。こうなった以上、金沢支社のそのプロジェクトというものをこちら側が認め、情報を共有することが必要だと思います。管理室本部長はそれを断固として反対したおられましたが、とうとう大黒でも事故が起きてしまったのです。もう金沢支社といがみ合っている場合ではないかと思います」

「しかしそれでは他の支社に対して示しがつかなくなる。金沢支社のプロジェクトを認めてしまえば、他の支社も本社に何の通達もなしに好き勝手を始めるでしょう。それに失敗したときの尻拭いさえ本社に任せればいいということになる。結果的にそれはメガマスグループの分裂を招きます」

小野に対する平松の反論はここに集まっている幹部達の総意でもあった。社長の桝田も今更金沢支社を認めるわけにはいかないと考えている。他の幹部達も平松に同調するように声を上げていた。

「そういう方向で話は進んでいきそうですね。わかりました。やはり私は外様。この場で貴社の経営方針の話にまで首を突っ込むつもりはありません。私はこれにて」

そう言うと小野は会議室を後にしようとした。この会議室の中ではやはり浮いたことを言っているというのはわかっており、居心地が良くなかったのも確かだ。何よりこの会議室からは何の答えも導きだせないことを察して、時間の無駄だと思ったのだ。

「あっ、先生！お待ちください」

桝田は小野を呼び止めた。今日小野をメガマスに呼び出したのは桝田だが、こんな追い出すような形になってしまったのを心苦しく思ったのだ。小野と桝田は会議室を出て扉を閉めてから向かい合った。

「申し訳ありません。先生の仰ることはよくわかるのですが、いかんせん社には派閥というものが存在します。本社の幹部は絶対に金沢支社を許すつもりはないようです。かく言う僕も、平松部長の言うように金沢支社を認めてしまえば他の支社に示しがつかないと考えています」

「ええ。私も会社経営が一筋縄でいかないことは承知しています。別に自分の意見が通らなかったことに腹を立てたわけではありません。問題なのは、本社の独力で原川君を救出できるかということです。もしその派閥争いが彼の救出の妨げとなるのなら、謝るべき対象は私ではなく彼や彼のご家族ですよ」

桝田もそれは重々わかっているつもりだった。しかしメガマスという大会社を動かすのに、たった1人の少年の命では釣り合いがとれていないという不条理が桝田の腹の中にはある。メガマスを存続させるためには、これ以上騒ぎを大きくするわけにはいかなかった。だからこれ以上の事故を防ぐためにフォーマットを強行した管理室

本部長の判断に抗議することはできなかった。むしろ桝田は、その責任を管理室本部長が一身に引き受けてくれたことに安堵感さえ覚えていた。今の桝田は自分のことを最低な大人だと思っている。

「必ず、彼は救い出してみせます」

アテもないのにそんな口当たりの良い言葉だけを並べる自分を桝田はまた嫌悪した。

「期待していますよ」

小野の方は何の感情も表情に出さずそう言うと、会議室を後にするように歩き始めた。桝田はその後ろ姿に深々と礼をしてまた会議に戻る。

フロアーには会議室以外に人の姿は見当たらない。小野はしばらく歩き、周囲を確認してトイレに入った。そこで携帯電話を取り出し発信する。

「どうも、小野です」

「ああ先生。どうしたんですか？会議はついさっき始まったばかりだと聞きましたが」

電話の相手の声は随分とご機嫌のように感じられた。小野は首をかしげたい気分になる。

「私の言葉を聞き入れてくれそうにないのではけてきました。そちらのご期待に添えなくて申し訳ない」

「いえいえ。いいんですよ。本社もそう簡単に折れるとは思っていませんから。驚いたのは、電脳体が1人分戻っていないのにも関わらずフォーマットを強行したことです。優柔不断な本社にしては大胆だった」

「あれは管理室本部長の独断だそうです。その子の電脳体が戻らなかった場合は金沢支社の責任にし、彼自身はとにかく忌まわしき新空間を抹消することに血道を上げるつもりでしょう」

「ああ、なるほど」

相手は深く納得したようだった。時々電話口の向こうからふーっ

と息を吹く音が聞こえるのは、葉巻かなと小野は思った。
「今日の事故についてお聞きしたいのですが、原因はなんですか？」
小野が訊ねる。
「ミチコの暴走ですよ。金沢の時と同じです」
「しかしミチコの意志は制御できるようになったはずです。暴走するはずが」
「そのミチコの意志の制御プログラム自体に細工がしてあったとしたら？」
やはりと小野は思った。これまでもそんな気がしないでもなかった。
「あの人の仕業ですね。目的は？」
「考えられるのは復讐。ですが、それにしてはやり方が幼稚ですし、解せぬことも多いですね」
「あの人も当然、例のシステムについては知っているはずですからね」
小野は考えこむが、狂人のすることを理解できるはずがないと思った。
「ところで、本社は原川君を救出できそうですか？」
そんな愚問を投げかけられたことに小野は少し驚く。
「本気でできると思ってお訊ねですか？彼らにできる道理がありませんよ」
「それは野暮なことを伺いました。では仕方ないですね。私たちが原川君を助けることにしましょう」
相手が楽しそうに話している理由が小野にはわかった。
「用意はできているんですか？」
「あと1、2日あれば準備は完了します。それについて最終確認をしておきましょう。弁天の研究施設でお待ちしています」
小野は腕時計を見やった。
「それなら30分後に伺います。詳しい話はお会いしてからにしましょう、神崎さん」

小野はそうして電話を切った。すぐにその場所に向かうためにトイレから出ようとした小野だったが、その時別の人物からメールが来ていたことに気がついた。

#20　幻の第三小学校　part10

メガマスの緊急幹部会とほぼ同時刻。ダイチをはじめとする黒客メンバーはある場所を訪れていた。メンバーの中でアキラは姉であるフミエのこともありここには顔を出していないが、集まったメンバー達の面持ちは一様に不安に満ちたものだった。

「おーい。メガばあ！」

すっかり店を畳んでしまったメガシ屋のガラス戸のもう1枚外にある木戸を叩きながらダイチは声を上げる。見る限りヤサコの住まいの方の明かりは消えているが、メガばあの住まいの方の明かりは確認できるのでメガばあは確実にいるはずだった。ここにはアポなしで来たのだが、それはどうしてもメガばあと話したいことがあったからだ。

何度目かのノックで中から物音がした。次いでガラス戸を引く音がして、最後に木戸が開かれた。立っていたのは京子だった。

「うひゃひゃ。ダイチ！」

京子は久しぶりに顔を合わせたダイチを指差して嬉しそうに叫んだ。しかし、かつてのように手もつけられないほど大騒ぎするわけでもない。夜であることをわきまえているのか、それとも。

「おう、久しぶりだな。元気してたか？小学校で友達いっぱいできたか？」

「うん！ダイチは？」

自分は心配されているのかとダイチは苦笑して答える。

「オレは友達ができたってより敵が増えたな。んなことはどうでもいいか。オバあちゃんいるか？」

「いるよ」

京子が家の中の方を振り返りながら言った。

「なんで出て来ないんだ？」

ガチャギリが訊ねる。

「ぎっくり腰！」
　また京子は嬉しそうに叫んだ。ダイチ達もそれには顔を見合わせてやれやれと笑ったが、中からメガばあの声が聞こえてきた。
「これ京子！ぎっくり腰ではない！腰の持病の再発じゃ！」
「どう違うんだよ」
　ガチャギリが静かにツッコみを入れる。続いてダイチは中で安静にしているはずのメガばあに向かって訊ねた。
「メガばあ！今日の事故のことは聞いてるよな？そのことでどうしても相談したいことがあって来た。あがっていいか？」
「ええぞ。じゃがワシはこんな状態じゃてな。茶の1杯も出してやれんがそれでもええかの？」
「大丈夫だ。メガばあが元気でもそんな気の利いたもんが出ることはねえ」
　ダイチはしっかり毒を吐きながら久しぶりのメガシ屋に上がり込む。他のメンバー達も次々に中に入り、戸を閉め直した京子が最後に続いた。
　寝込んでいるものだとダイチは思っていたが、電脳工房にいたメガばあは背中と尻のところにクッションを敷いた回転座椅子に座って待っていた。
「久しぶりじゃのう」
「ああ、会うのはな。でもなんかな。メガばあの存在感がでかいおかげでオレはあんまりご無沙汰な気がしないな。腰はいつやったんだよ？」
　ダイチはメガばあの正面にどっかり座り込んで訊ねた。その脇をガチャギリ、ナメッチ、デンパが固める。しばらく見ないうちにダイチ達も多少男っぽくなってきたなとメガばあは思った。
「先週の金曜じゃったかのう。ちと棚の上に置いてあった古い資料をとろうとしたら、このザマじゃよ。どうもワシが腰をいわすのは凶兆のようじゃ。その後、今日のも含めて立て続けに事故が起きよった」

「立て続け？金沢の事故についてもやっぱり何か知ってるんだな？」
「それを聞きに来たというわけじゃな？」
ダイチは大きく頷いた。
「ああ。今日起こった事故と無関係なはずがないっていう読みは当たったな。今日の事故のこととも絡めて相談したい」
早速話の本題に入ろうとしたところで、ダイチにはメガばあの横でちょこんと座った京子が目についた。これからする話を京子が聞くのはどうだろうかと思う。
「……ああ、メガばあ。そのチビの前でするような話じゃないと思うんだが」
ダイチは目配せしながら言った。メガばあも察したようだ。
「ああ、そうじゃのう。これ京子。ワシはコヤツらと大事な話があるでな。隣の居間でテレビでも見てるんじゃ。ワシの腰の世話はコヤツらにしてもらうでな」
「え～っ。京子もいる！」
京子は予想通り抗議の声を上げた。
「ホレ。今の時間ならテレビで惑星ココイルやってるんじゃねえか？」
「適当言うな。あれは土曜の夕方だ」
ウソのヘタクソなダイチに、ガチャギリは呆れて乗っかりもしなかった。しかし京子は席をはずしてほしいオーラを感じ取ったのか、
「いいもん！ココイルのビデオ見とくもん！」
と言って、すねたようだったがぐずることなく隣の居間に消えていった。
「随分聞き分けがよくなったもんだ。得意の『うんち』も出なかったしな」
感心したように京子を見送ってダイチが言った。
「小学校にあがって多少分別がついたようじゃ。ワシの腰のこともあろうて、気遣ってくれとるんじゃろ」
「今家にはメガばあと妹だけ？」

ガチャギリが訊ねる。
「今日の事故で優子が入院したのは知っておるな？優子の母はその見舞いに行っておるし、父の一郎は金沢へ出張中じゃ」
「そうか……ヤサコのおふくろは大変だな。家にはぎっくり腰のバアさんがいるのに、今度は娘が倒れるなんて」
それでヤサコ宅の明かりが点いていなかったのかとダイチは納得する。京子が普段よりしおらしいのも、ロクに動けないメガばあとの留守番で気が張っているからだったのかと思った。
「ところで、お主ら誰から今日の事故のことを聞いた？メガマスは例によって情報を遮断しておろう。関係者以外に事故のことを話すことはないはずじゃが？」
「ああ。直樹さんっていう警察官は知ってるか？廃ビル事件の時に世話になった人で、その前からオレたちはちょっとした知り合いだったんだ。その人は今日の事故の時に通報を受けてフミエ達の倒れている現場に一番早く駆けつけて、アイツらの電脳体が戻ってくるところを目撃したらしい。そのことをこっそりとオレたちにも教えてくれたんだ。ハラケンとオレたちが友達だってことも知ってたから」
ダイチが直樹から連絡を受けた時にはひっくり返りそうになった。あの４人が帰宅途中で電脳体分離を起こし、しかもハラケンの電脳体が戻る前に管理室によってフォーマットが執行されたというのだから当然だ。ダイチもその管理室の判断にはこの上ないほど腹を立てた。その後いてもたってもいられなくなり、すぐに黒客メンバーを招集して事情を話した。そしてメガばあと情報を整理しようと思い立って今に至る。
「そうかえ。まあいずれフミちゃん達からも聞くことになったじゃろうからな。それなら話が早いわい」
「メガばあは事故の概要は聞いたのか？」
「ああ。ワシの息子の一郎が空間管理室の室長をしてる関係もあって一報もらった。優子が倒れたというところまではメガマス側から

既に聞いておったし、優子の母もそれを聞いて病院に飛び出して行った。それからしばらくして管理室からその連絡が入った。内容からしてあの情報は本来秘匿されるべきものじゃったんじゃろうな。多分お主らがその警官から聞いた話と内容は同じじゃよ」

その管理室からの連絡は、フォーマットの指示をためらいなく執行した進藤ではなく、去年から一郎とともに空間管理室に勤めている中年の職員から届いた。被害に遭ったのが一郎の娘であるヤサコだったことと、そしてハラケンの件でも申し訳ないと思った職員は、箝口令が敷かれているにも関わらずメガばあにはそのことをそっと知らせたのだ。

「それから、さっきフミちゃんからも連絡があった」

「フミエから？アイツは無事なのか？」

ダイチが直樹から連絡を受けた時点ではフミエの容態まではわからなかった。とりあえず４人とも病院に運ばれたところまでは知っていたが。

「ああ。フミちゃんとアイちゃんは体に異常がなく、自力で歩けるそうじゃから家で安静にしているように言われたそうじゃ。おそらく2人は大丈夫じゃろう。ついでにさっき聞いたところによると、優子も体に異常はなかったそうじゃ。意識を失っているのは、精神的ショックが原因じゃと」

ヤサコの容態についてはつい先ほど静江の方から連絡が入った。まだ意識は回復していないらしいが、メガばあのこともあるので静江は家に戻って来るらしい。

「精神的ショック？電脳体分離の影響じゃないのか？」

「考えてみよ。優子については電脳体分離がこれが初めてじゃない。しかし初めてそれを起こしたフミちゃんとアイちゃんには異常はなかった。今回の事故がこれまでの、例えば去年の夏や今月の廃ビル事故と性質が違うのはわかるじゃろう？」

黒客メンバーは頷いた。廃ビル事件まで一緒に行動を共にしたシンヤは“あっち”に連れて行かれた1人であるが、その後もしばら

く入院しなければならなかったという。
「つまりヤサコの精神的ショックっていうのは……」
「ハラケンが帰ってこられなかったことが原因だろうね。しかも目の前でそのフォーマットが執行されたのならなおさらだよ」
ダイチの言葉を継いで哀しげに言ったのはデンパだった。フミエ達も相当なショックを受けているはずだ。そんな非情な判断を下した管理室をダイチは許せなかった。
「メガばあ！なんで管理室はフォーマットを強行したんだよ！それでハラケンが戻ってくる保証なんてあったのか！？」
「ワシに当たるでない。もし一郎や玉子が管理室にいれば、そんなことは断じてさせなかったと思う。しかしもう執行されてしまったのなら悔やんでも仕方ない。その2人もすぐに大黒に戻ってくるじゃろうて、なんとか手段は講じたいが」
そうしてメガばあは口ごもった。
「どうにもならないのかよ？」
メガばあは突き刺さるダイチの眼差しに、頼りなく首を左右に振ってから絞り出す。
「……今回ばかりはワシも何が起こっておるのかさっぱりわからん。玉子の話ではメガマス金沢支社が開発したという新空間なるものの存在が浮かんではおるが」
「新空間？それは“あっち”みたいなものか？」
「じゃろうな。それに、金沢の事故は聞くところによるとミチコの仕業らしいのじゃ。これがそもそもよくわからん」
「ミチコだって？」
声を上げたのはナメッチだ。
「おいメガばあ。ミチコは消えたんだろ？」
すかさずガチャギリが訊ねる。願望などは一切抜きにした、ただ事実だけを確認するような体温の低い声で。
「消えたのは確かじゃ。でも確実に存在しとるらしい。廃ビル事件で“あっち”に入り込んだ優子はミチコと再会したらしいんじゃ。

その時ミチコは、自分は新しい空間で復活したと言っておったそうじゃ。玉子の金沢の事故の話とも辻褄は合う」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。ヤサコはあの時ミチコに会ってたのか？そんな話はしてなかったし、そんな素振りもなかったぞ」

ダイチは言ってから自分の言葉が間違っていることに気付いた。それを正すようにガチャギリが言う。

「素振りはあったろ。それも今日の昼休みのことだ。ヤサコはオレたちに隠し事をしているって言っていた。それをフミエだけに打ち明けて、後はフミエの判断でオレたちにも伝えるかどうかを決めることになっていた」

「そ、そうだったな。確かあの時オレたちは金沢の事故の話をしてたよな。つまりヤサコの隠し事がミチコの復活だったとしたら、ヤサコは金沢の事故がミチコの仕業であることを薄々感じていたってことだな」

「だからあんなに顔色が冴えなかったんだね」

ダイチの話を聞いてデンパも腑に落ちたように言った。

「そしてこの流れだと、当然今日の事故もミチコの仕業ってことになる」

そのガチャギリの一言に、場には何とも言えない気まずいような空気が流れた。もし、今日の昼休みにヤサコがその隠し事をメンバー達に打ち明けていたら、果たして今日の事故は起こったのだろうか。今更それを言っても仕方ないことだとダイチは首を振る。

「優子もその時のミチコの言葉を恐がっていた。じゃからワシはそのことは忘れるように言ったのじゃ。もしもそのことをお主らに言えば、ミチコの存在を認めてしまうことになる。そう思ったんじゃろうて、今まで黙っていたんじゃろう。あまりそのことで優子を責めないでほしいのじゃ」

ヤサコの代わりに自分が謝ると言う風にメガばあが言った。

「いや、ヤサコを責めるつもりなんてさらさらねえよ。その気持ちは痛いほどわかる。ミチコがヤサコとイサコが生み出した怪物だっ

ていうのなら、これ以上オレたちを巻き込みたくないと思ったんだろう」

「ああ。それも今更言っても仕方ねえことだ。その話でイサコが金沢で事故に絡んでいる理由も大体読めた」

ダイチもしんみりとしかけたので、ガチャギリが場を仕切り直すように言った。

「そうだな。まあ結局のところオレたちが知りたいのはハラケンを救う方法だ。ミチコっていう原因が同じなら、金沢の事故にそのヒントがあるかもしれん。メガばあ、金沢の事故についてもう少し詳しく聞かせてくれねえか？」

ダイチは意気込んで訊ねたが、メガばあはそこで深く息をついた。

「お主ら、研一を救うと言うておるが具体的にどうするつもりなのじゃ？よもや研一の入り込んだ空間への入り口を開いて、連れ戻すとでもいうのではあるまいな？」

少し険しくなった声に、そう考えることはいけないことなのかとダイチは思う。実際ダイチはそうするつもりでいた。

「他に方法があるのかよ？ヤサコだって、夏の事件ではイサコを連れ戻しに行ったんだろ？」

「去年の事件と一緒にするでない。あの時は優子のジイさんの研究資料が残っていたから成せたのであって、さっきも言ったように今回ばかりは何が起こっとるのかワシにも見当がつかんのじゃ。下手に首を突っ込むとお主らも研一の二の舞になるぞ。それならまだしも、他の子どもも巻き添えにする可能性だってある」

それは至極真っ当な意見であるとダイチも認める。しかしそれで黙り込むつもりなら最初からここには来ていない。

「じゃあ何かよ？メガマスにすべて任せるってのか？ハラケンの帰り道を消し去ったのはアイツらなんだぞ！そんな超打算的な大人どもに期待しろってのかよ？廃ビル事件でもそうだったじゃねえか。あれはメガマスの開発した空間制御プログラムが原因だったんだろ？でもメガマスがそれを開発したことを認めなかったばかりに、あ

の夜の惨劇を招いた。信用できねえよ。オバちゃんやヤサコのおっちゃんのような人もいることは知ってるが、そんな一握りの正義感の強い人間だけで会社が動くことはないってわかってんだよ！」

今度はメガばあが唸る番だった。悲しいかなそれに反論できないのは、そういった汚い社会を次代に託したメガばあ世代の負い目でもあるからだ。

「そうだな。ダイチの言う通りだ。大人は卑怯だ」

ダイチの言葉で勢いを得たようにガチャギリも続いた。ガチャギリの家の事情も聞かされていた故に、その言葉には重みがあった。

「……そうじゃのう。こればかりはワシらに弁解の余地などないわい」

がっくりとうなだれたメガばあに、いつものしたたかさの面影もない。そこにつけ込むようにガチャギリが続ける。

「だからオレたちは自分たちでやるしかないって思ってるわけだがな。それにメガばあの考えは、メガマスがハラケンを救い出すのを待ってってことだろ？裏を返せば、メガマスにそんな手だてがあるのなら、仮にオレたちがハラケンみたく異空間に閉じ込められたとしても一緒に助かるってことだ。つまりオレたちが勝手に首を突っ込んで異空間に閉じ込められて自業自得になったとしても、さしたる問題じゃないってことだな」

「なるほど、確かにそうだ」

ダイチもそれは思いつかなかった。これで自分たちを止めさせる口実は使えなくなる。

「また滅茶苦茶な論理を持ち出しおって」

「だったらメガばあがメガマスに直訴して、絶対にハラケンを助けるように念を押してくれよ。メガマスが動かない場合は今回のことをマスコミに流すとでも脅してな」

ガチャギリの目は本気だった。メガばあもダイチもガチャギリならそれをやってしまうのではないかと少し身震いする。

「……ふむう」

もはやダイチ達を止めることはできないかもしれないとメガばあは思い始めた。さらにここに事故の被害者であるフミエが入ってきたら絶対にダイチに加勢するだろう。メガばあ自身もこの期に及んで大人を信じろなど言うつもりもない。

しかし、仮に本当にハラケンが戻って来れなかったとしたら、そしてこのダイチ達やフミエ、そしてヤサコも同様な目に遭ったとしたら。メガばあは一瞬だけそのことが頭によぎって離れなかった。それがメガばあを躊躇させていた。

まったく自分の考えがまとまらないことにうろたえかけたその時、メガばあのメガネに着信が入った。

「ちょっと待っとれ。もしもし？」

気まずい沈黙の中でメガばあは救われたような気持ちになりながら、ダイチ達に一声かけて応答する。

『メガばあ。私よ』

「玉子か。今日の事故のことは聞いておろうの？」

メガばあはダイチ達がそこで顔を見合わせているのを横目で確認した。

『聞いたわ。未だに信じられない。信じたくもない』

「ワシも同じ気持ちじゃてな。しかしお主の声を聞く限りでは冷静さを失ってはいないようじゃな？前は研一のこととなると見境がつかなくなっとったお主じゃったが、少しは成長したかの」

『案外そうでもないかもよ。私は今から予定を返上して大黒市に帰る。室長からは許可をもらったわ』

メガばあは時計を確認する。時刻は夜9時をまわっているので、到着するのはおそらく終電時刻だろう。

「そうかえ。こんな遅くにご苦労なこったの」

『ああ。実はイサコも一緒なんだ。彼女もこの連休に大黒に帰ると言っていたんだが、昨日ちょっとした出来事があってな。私は今イサコの監視役として四六時中行動を共にしなければならなくなった。だから、彼女も私と一緒に大黒へ』

「なるほど。一緒に帰ってくるわけじゃな。何があったのかはまたお主らがこっちに来てから聞くとするが、あまりアヤツを振り回さんようにな」

メガばあには玉子が意外に冷静でいる理由もわかった気がした。おそらくイサコがそばにいて玉子をなだめているのだろう。それを想像すると、どちらが監視役なのかわからないような気がした。

『まあ、こんな時間に連れ出すことになったのは悪いが、ヤサコも倒れたっていう話だからな。彼女も一刻も早く大黒に行きたいと言っていた』

「ふむ。とにかくムリはするでないぞ。それから今ワシは腰をいわしておるでな。悪いが話があるならメガシ屋まで来てくれい」

『また腰をやったの？肝心な時に限ってそうなるんだから』

「ワシも好きで痛めたわけじゃないわ」

『それはそうね。とにかくお大事に。ああそれから、室長も明日には帰られるそうよ。その時はシュウイチ君も一緒に大黒に行くって話だったわ』

「そう言えばアヤツだけ里帰りするという話じゃったな」

メガばあの孫であるシュウイチの田舎はこのメガシ屋ということになる。本来は家族一同で帰るべきところだが、今回は急に決まった上にそんなのんびりとした帰省になりそうにもないので、シュウイチだけがメガばあの住まいに泊まることになっていた。シュウイチの父である友和は本社の要請に従って金沢支社で新空間の調査を続け、シュウイチの母親と妹2人は金沢で留守番というわけだ。

『そういうこと。じゃあよろしく。私達は大黒に着いたらメガマス病院に直行するから』

それだけ伝えると玉子は電話を切った。そして今の電話でメガばあは心を決めることにした。このタイミングでイサコが帰って来るということは、ミチコと決着をつけるのは今しかないということになる。これが本当に最後の戦いだと、メガばあは自分に言い聞かせた。

「オバちゃん、金沢から帰って来るのか？」
メガばあの受け答えから察したのかダイチが訊ねてきた。
「ああ、そうじゃ。それに玉子と一緒にもう1人帰ってくる」
「もう1人？おい、それってまさか」
ダイチが身を乗り出した。夏の事件の終焉での思いがけない別れから、まだしばらくはお目にかかれないと思っていたあの凛とした立ち姿を、黒客メンバー全員が思い浮かべる。
「ああ、そうじゃ。黒客の元リーダーのお帰りというわけじゃな」
「スゲー引っかかる言い方だな」
ダイチが苦い顔になって言う。
「お主ら金沢での事故を知りたいと言っておったな。それなら当事者から聞けば良い。また後日、イサコにここでそれを語ってもらおうかの。じゃから今日のところはお開きということでどうじゃ？」
その言葉は、メガばあが先ほどの話を認めたと取っても良いのだろうかとダイチは思った。この場所でイサコから金沢の事故の話を聞け、ということは、その事故と必ずつながっているはずの今回の事故をイサコと一緒に調べよ、と言っているのと同じだと解釈する。ダイチは他のメンバーにも目配せして確認した。そしてガチャギリ、ナメッチ、デンパは力強く頷いた。
「約束だぞ、メガばあ」
「お主らこそ。絶対に研一を取り戻すのじゃぞ」
その覚悟を確認するように言ったメガばあに、ダイチは頼もしく微笑んだ。

#20　幻の第三小学校　part11

闇の中を彷徨っていると、いつしか鳥居が並んでいる階段の下にいた。薄い靄に包まれ、針が落ちる音でさえ聞き逃すことのないような静寂の中にそびえるその場所を、ヤサコはしっかりと覚えていた。頭でその状況を理解するよりに先に、衝動的に駆け始める。その鳥居の階段をただひたすら上へ。

辿り着いたその場所で待っていたのはハラケンだった。彩りのない不気味な世界を愛おしいように眺めながら、隣にいた黒い影と何やら楽しそうに話し込んでいる。

ヤサコは動けなかった。そのハラケンの後方にミチコが立っていたからではない。ハラケンの隣にいたのが、カンナだと気付いてしまったから。黒ずんでしまっているが、それはあの時ヤサコとも向かい合った正真正銘のカンナだった。そして、並んだブランコに腰掛けながら、今日の学校での出来事を話しているかのような自然な笑みをたたえるハラケンは、とても幸せそうに見えた。

この時ヤサコの胸の中にこみ上げてきた様々な感情の中で、もっとも大きかったのは悲しみだった。こんな幻影の世界で仮面を剥ぎ取ったような無垢な笑顔を見せているハラケンは、もしかすると異空間に閉じ込められたわけではないのではないか。あの時のイサコのように、自分からここで生きることを決めたのではないか。そう思うとヤサコはただ悲しかった。ハラケンの心の傷がまだ癒えていなかったのだと思えてならなかった。

「ハラケン！」

でもヤサコは叫ばずにはいられなかった。イサコの時もそうしたように、彼をここから絶対に連れ帰ることだけを思った。

「……ヤサコ？」

カンナとの談笑からこちらに気付いたハラケンは、ブランコから立ち上がって2、3歩前に進み出た。しばらくヤサコと視線を合わ

せた彼は、しかしツラいような顔をして首を横に振った。
「……ごめん、ヤサコ。僕には、この場所の方が合っているんだ。カンナのためとかじゃなくて、自分がただ、カンナと一緒にいたいだけなんだ」
「……そんな」
その時ハラケンの後ろでミチコが微笑むのが見えた。そして次の瞬間、目の前に深い亀裂が入る。地面はヤサコとハラケンを隔てるように分かれ、必死に伸ばした手も虚しく瞬く間にハラケンは遥か上方に消えた。ヤサコは崩れた足場とともに奈落の底に落ちたのだ。世界は再び闇に帰してゆく。

そうしてヤサコは悪夢から還った。

眠っていた時間はわからない。しかし脳はまだヤサコを眠りという牢獄から解放させるつもりはないのか、重いまぶたを開くことでさえかなりの労力を使う作業のように思えた。しかし目を閉じればまた闇の中に引きずりこまれそうな気がして、ヤサコはなんとか目を開けた。
「目覚めたか！？」
まだ半開きの瞳の中に映りこんできたのは玉子のようだった。窓側にいた彼女の後方からは燦々と光が降り注いでいる。太陽の位置で時間を予測するならば朝の9時をまわっているだろうか。最後の記憶が夕陽を背にした2．0のフォーマットだったことを考えると、かなりの時間眠っていたのだと実感する。
ヤサコはこの時、種々の疑問が降りてきて何から訊ねようか逡巡した。しかし玉子はヤサコから視線をはずして、ベッドを挟んだ反対側にいた誰かに目配せをしたようだった。まだ体を引き起こす気力もないところで、そのもう1人がヤサコの視界に顔をのぞかせた時、ヤサコはただただ固まってしまった。
「あ」

見覚えのあるデニムの上下にツインテールの髪、どこか憂いを帯びた瞳。その表情には疲れの色が見てとれる。
「大丈夫か？」
「う、うん」
彼女はごく自然な様子で訊ねてきたので、かえってヤサコは動揺する。でもヤサコには、彼女がここにいる理由は察しがついた。玉子がここにいる理由も同様に。
「……そうか。とにかく無事で良かった。アンタも目を覚まさなかったらどうしようかと思っていた」
彼女は疲労感を忘れたかのような安堵の表情を見せた。しかしヤサコはそれと裏腹に、苦い気持ちになっていた。彼女に心配をかけさせたのはもちろんのことだが、もっと別の理由で。つまり、ハラケンがまだ戻って来ていないことが彼女の口ぶりでわかってしまったのだ。
「……こんな形で再会することになるとは思わなかった。あの時と逆だな」
ヤサコは彼女にそう言われて、頷くこともできなかった。確かに彼女との最後の記憶は病室のベッドの上で、あの時寝かされていたのは彼女の方だった。しかし今のヤサコにはそんな数奇な運命を噛み締め、再会の喜びに浸ることはできなかった。こんな状況でなければ、この再会をどれほど嬉しく思っただろうか。
しかし彼女も、そんな感傷にふけって言ったわけではなかった。
「遅くなってすまなかった。ヤサコ」
その一言でヤサコの中の何かがはじけた。喜びとか、そんな言葉では表現できない気持ちがこみ上げてくる。同じ苦しみを持つ彼女がこんな時にそばにいてくれることで、自分がどれほど救われるか。これまで胸の奥に溜め込んできた不安や恐怖が、止めどない涙となって溢れ出してくる。
「……ごめん。イサコ」

ヤサコは、ベッドの上にのせられた彼女の手を強く強く握りしめた。

イサコは、そんな彼女を見つめることができず、ただ中空を見上げた。

#21　深層への道筋　part1（前書き）

2027年　4月29日（木）

#21　深層への道筋　part1

「そのプロジェクトは、最先端の医療技術と組み合わせて初めて完成すると噂されています」

曇天の金沢をひた走る1台の車は、呼吸を乱したかのような落ち着きの無い走行を繰り返していた。運転しているのは一郎。そして助手席にはその甥でありヤサコのいとこ、酒井修一が座っている。その運転を一郎は何度もシュウイチに謝っていたが、シュウイチの方は三半規管が強いのかその顔色はまったく変わらなかった。一郎に合わせてくれているかのような引き締まった表情を見せている。

その危険なドライブを終わらせたのは、とある交差点の信号待ちで、一郎のメガネにかかってきた一本の電話だった。

「……そうか。良かった。ありがとう。君はそのまま彼女と寮で休んでくれ。夕べは寝てないんだろう？僕は午後には本社に顔を出す……ああ。じゃあ気をつけて」

一郎が電話を切ったと同時に信号は青へと変わった。一郎は先ほどとは打って変わってゆっくりとアクセルを入れる。

「電話、玉子さんから？」

シュウイチが確認するように訊ねた。

「ああ。今しがた優子が目を覚ましたらしい」

「優子ちゃんが！？ああ、良かった。やっぱりイサコがそばにいたのが良かったのかな」

ヤサコは昨日の夕方からずっと気を失っていた。その話を聞いた一郎はもちろん気が気じゃなかったが、シュウイチもそれは同じだった。一郎の方は金沢支社で片付けなければならない仕事があったため、昨晩イサコとともに列車で大黒に戻った玉子に遅れて、これから大黒へと帰る。そのついでに先日から大黒へ戻る予定を立てていたシュウイチも拾ったのだ。時刻は午前9時をまわったところで

ある。

「そうかもしれないな……でも、優子は電脳体が戻ってきた後に意識を失ったという話だったから、いつかは目覚めるはずだった。問題はまだ電脳体が戻ってきていない彼の方だ」

「玉子さんの甥っ子さん。優子ちゃんの友達でもあるんですよね？」

「あ、ああ」

一郎は一瞬返答を躊躇した。ヤサコにとってはハラケンが単なる友達ではないことに薄々気付いていたからだ。ヤサコが昨日気を失ったのも、ハラケンの電脳体が戻らなかったことにショックを受けたからだとメガばあルートで聞いていた。

「この前のイサコも異空間から戻ってきたし、今月はじめの大黒の事故でも優子ちゃんは無事だったのに。どうして今回だけ……」

「まさに、僕たちが恐れていたことだ。今回も異空間に入った４人のうち優子を含めた３人は戻ってきているが、それでもいつかはこうなってしまうと思っていた。もっと大黒でも警備を強化するように指示しておくべきだった……しかも事故が起きてしまった後、あろうことか彼の電脳体が戻る前にフォーマットを強行するなんて」

一郎はこみ上げる怒りを噛み殺す。そうでもしないと右手をハンドルに思いっきり叩き付けてしまいそうだった。自分が大黒の管理室に居れば、たとえ本部長命令でもフォーマットを執行させなかった。玉子でもそれは同じはずだ。本部長はもしかするとたてつく者がいなかったからそんな指示を出したのかもしれない。とにかく本社に戻り次第、一郎はその件について詳しく説明を聞くつもりでいた。

しかし、そもそも今回の事故が起こってしまったこと自体、管理室に問題があった。事故が起こったのは旧第三小の敷地内。報告によると事故発生時にそこは管理外ドメインに切り替わっていたという。だから警備に出ていたキューちゃん達がその異変を探知できなかった。しかしとうにその場所は管理外ドメインからははずれているはずだった。つまり、誰かがドメインを切り替えたのだ。その誰

かとは今回の事件の首謀者だ。そして管理室はその確認を怠っていた。これまでその場所が管理外ドメインだったという先入観で誰も気がつかなかったらしい。人が倒れているという通報を直樹達が管理室に取り次ぎ、それを受けて現場に向かった進藤が初めてそのことに気付いたという話を聞いた時には、一郎は開いた口が塞がらなかった。

「イサコがこの前話していた、ミチコの予告した事件が幕を開けたんでしょうか？」

「可能性は高いけど、腑に落ちないことも多い。ミチコは今月に入って優子と天沢君と再会した。でもその時は2人をすんなりと帰している。なぜ今回だけ研一君は戻って来れなかったのか」

「ミチコがその彼に用があったからじゃないですか？」

「しかし昨日の事故の話を聞く限りでは、僕はどちらかというと無差別に誰かを連れ去ることが目的だったと思う。ミチコがじゃなくて、昨日の事故の首謀者にとってはね。天沢君の話によると、その首謀者というのはミチコを復活させた張本人で、なおかつメガマスへの復讐心を持っている」

一郎はこう考えていた。その首謀者の目的は誰でもいいから電脳体を連れ去り、意識を失わせること。やり方自体はかつて宗助が目論んでいたものと同じだ。今のところ犯行声明は届いていないらしいが、今後のメガマスの対応によってはまた新たなる事故が起きてしまうのではないかと危惧している。

「そう言えば昨日イサコから聞きました。そのミチコの生みの親というのも、サオリの家族かもしれないって」

「……ああ。彼女の失踪も、それと関係あるのかもしれない」

サオリの失踪はつい2日前のことだった。現在メガマス本社の調査隊が必死にその行方を探している。

「おじさん。サオリの家族構成ってどうなんですか？父親とは接触しているんですか？」

「……そうか、まだ話していなかったか。一応教えておくけど、他

所の家の事情だからね。ここだけの話にしてもらいたい」
「わかってます」
そう前置きするということは、事は単純じゃないんだなとシュウイチも察した。
「調べによると、彼女の両親は3年前に離婚している。どうやら母親の方に沙織さんも詩織さんも引き取られたらしい」
「そ、そうだったんですか。じゃあその父親の方は？」
「それが、居所が掴めなかった。戸籍が改ざんされているようでね。その人の名前、つまり彼女達の旧姓さえもわからないという始末だった」
シュウイチは驚いた。かなり黒いものがその背後に見え隠れするような気がする。
「それじゃあ、やっぱりミチコの生みの親はその父親ですか？正体を隠して金沢支社のプロジェクトに参加していたってことになりますよね？」
「そう考えるのが最も自然だね。メガマスへの復讐を考えているのなら、そしてその動機が去年の夏の黒井交差点の交通事故だったとしたら、辻褄は合う。その人はプロジェクトに協力するフリをして、完成間際に裏切ったんだ。戸籍はネットワーク管理のものだから、ミチコを生み出すぐらいの技術力を持った人なら、ハッキングでそれを書き換えるのもできなくはない。僕にもそれを可能にする暗号に心当たりがある」
現在、どんな厳重なセキュリティをも破ってしまうハッキング用の暗号、ＩＬコードなるものが出回っている。それも一郎の父、宏文の発見したものだと言うのだから因果なものだと思った。
「じゃあ、サオリに詩織さん以外の兄弟はいるんですか？」
「戸籍上はいないようだけど、それが改ざんされているのなら、その存在も否定できない。だから結局、沙織さんの家族については何もわからないと言っていい。今回の事故の首謀者についてもまったくその人物像は見えていないということになる」

そしてその唯一の手がかりであるサオリも姿を消した。シュウイチはふとそこであることが引っかかった。

「父親が見つからないということは、その交通事故からサオリは誰に扶養されていたんですか?母親も姉も意識を取り戻していないのに。親類か誰かですか?」

「それについては調べがついた。彼女はその事故の後、金沢市のメガマス病院の施設で暮らしていたそうだ。メガマスのプロジェクトチームの庇護の下でね」

なるほどとシュウイチは思った。

「そうだったんですか。そういう恩があるなら、サオリは余計にそのプロジェクトチームを裏切ることなんて出来なかったんでしょうね」

「ああ。あのイベント事故の時に、天沢君を守るために自分の正体を明かしたのは、彼女にとっては相当な勇気が必要だったはずだ。彼女の英断には感謝しなければならない」

しかし一郎が解せないのは、なぜサオリのような少女を工作員のようにプロジェクトチームが使っていたのかという点だ。

「じゃあ彼女が失踪したのは病院ということですか?」

「いや。病院の施設はあくまでプロジェクトチームの管理下にあった。彼らと対立する本社側としては、そんなところにプロジェクトチームを離れた彼女を置いておくことはできない。だから社員寮の一室を彼女に用意したんだ。寮と言っても、セキュリティは万全。彼女を四六時中監視下に置かなかったものの、夜は出歩かないように言い含めたし、両隣の部屋には監視役の人が泊まっていた。そして寮の入り口に守衛が詰めていたから彼女が外に出たらすぐにわかるはずだった」

「でも、夜の間にサオリはいなくなった。その話だと少なくとも誘拐ではなさそうですね」

サオリが消えたのに監視役が気付いたのが火曜日の早朝。イベント事故が起こった日曜日の夜にはその監視体勢を敷いており、月曜

日の夕方までは監視役も彼女をマークしていた。だから姿を消したのはその月曜日の夜となる。その警備体制で彼女をさらうことなどできないはずなので、導きだされる答えは1つしかなかった。

「ああ、だから僕はこう考えている。日曜日の夜は様子見で、寮の守衛が勤務交代する時間を彼女は測っていた。そして月曜日の夜に彼女は脱走を決行した。そうでなければあんなに綺麗に姿を消すことはできない。つまり彼女は最初から逃げるつもりでいた。もちろんメガマス病院にも戻っていない。彼女は果たしてプロジェクトチーム側についたのか、あるいは、彼女の家族である今回の事故の首謀者についたのか。それすらもわからない」

シュウイチの頬に少しイヤな汗が伝った。後者であった場合、サオリは今回の事故の首謀者とグルなのではないか。誘拐でないのならばプロジェクトチームを離れた彼女が再びそこに戻る道理もない。しかし考えたくないことだったので、シュウイチはその可能性だけは忘れることにした。

「……それ、イサコも知っているんでしょうか？」

「昨日の時点で僕が玉子君には話したから、おそらく彼女も知っているはずだ」

それなら今の話をイサコはどう受け取ったのだろうとシュウイチは思った。サオリのことをずっと気にかけていたイサコのことだ。自分よりもその話を重く受け止めたのは間違いないとシュウイチは思った。

「そのことがあったから、イサコには四六時中の監視が必要になったわけですね」

「そうだ。天沢君が急に姿を消すなんてことはないだろうが、本社の強い意志でそうなった。しかし彼女も見知らぬ職員に24時間ついてまわられるのは拒否した。そこで玉子君がその役を買ってくれたというわけだ」

「その玉子さんの甥っ子さんが大変なことになって、急遽2人は昨日の夜の間に大黒へ戻ることになった……そういうことだったんで

すね」

それがサオリ失踪事件から今に至るまでの流れである。シュウイチも大黒に着いてイサコに会った時に、今の話を確認しようと思った。

「事故の首謀者は大黒にいるはずだ。沙織さんがその人の近くにいるのなら、彼女も大黒にいることになる。なんにしても、僕はもうここで決着をつけたい」

そのために一刻も早く大黒へ。しかし一郎の焦りとは裏腹に、高速道路に乗ったところで前方には大渋滞が見えてきた。見事な曇天でそのような気はしないのだが、この日は大型連休の初日だった。

#21　深層への道筋　part2

メガマス病院でヤサコの覚醒を見届けたイサコと玉子は、その後ヤサコの母と入れ替わるように病院を後にした。昨夜は持って来た荷物も置かずに病院に直行したので、とりあえず荷物だけは置きに行こうという話になったのだ。

しかしメガマス本社はサオリの失踪を受けてイサコの動向にも神経を尖らせていた。だから玉子がイサコの監視役として片時たりとも離れないでいるわけだが、イサコが大黒滞在中に泊まる場所も、メガマスが用意した寮でなければならないという条件がついていた。それに逆らえば監視役としてついている玉子に迷惑がかかるのでイサコは黙って従っているが、しかし本社が過敏になり過ぎだという印象は拭えなかった。まず自分がサオリのように監視役を撒いて逃走する理由などない。

とにもかくにも、玉子の提案でまず2人は玉子の自宅へと徒歩で向かった。玉子はハラケンと住まいは違うが、大黒市の駅近くのマンションに家族で住んでいるので割と近い。玉子は一人暮らしをしているものだとイサコはずっと思っていたが、

「まだ私は高校生だ。一人暮らしなんかさせてもらえるか」

と言われた。しかし金沢に出張していた時には1人メガマス社員寮に泊まっていたらしいので、両親もほとんどそれを認めているのではないかとイサコは思った。

ともあれ、玉子が自宅に戻ったのは愛車のバイクを取りにきただけのことだった。イサコは実を言うと玉子の運転するバイクであまりいい思い出はない。しかし大黒滞在中の移動手段は必然的に玉子のバイクが中心となる。イサコが何度も安全運転を念押しした後、玉子はメガマス社員寮にバイクを走らせた。

寮はメガマス本社がそびえる大黒市北東部の丘の入り口付近にある。そのまま南に下ればヤサコの家とメガシ屋があるので場所は悪

くなかった。建物自体は3階建ての小振りなマンションで、玄関ホールに出入りする時と部屋の鍵を開ける時にはメガマス社員のＩＤカードが必要になるらしい。カードは玉子の1枚しかないので、イサコは玉子の同伴なしに建物に出入りできない。これもサオリの失踪を受けての処置ではあるが、ムダなところだけは徹底されているんだなとイサコはため息をついていた。

２人の部屋は3階の一室だった。間取りは２ＬＤＫで2人で使うには十分広いし、寝室は別々のようなのでそこはイサコも満足した。

「家電や家具も一応そろってるし、自由に使って」

「ああ、すまないな。良い部屋を用意してくれたみたいで」

イサコはとりあえず背負っていたリュックをリビングに置いた。玉子はカーテンを開けて景色を確かめる。南向きのベランダに面しているそこからは、まわりに高い建物はなく、大黒市の片田舎の風情を存分に見渡せた。

「何を言っている。本社が無理矢理アンタの宿泊場所を指定したんだ。このくらいの部屋を用意するのは当然だ。それにＩＤカードがなければここから出ることもできない。アンタを半ば軟禁することになるが、なんとか我慢してくれ。外に用がある時は遠慮なく言うんだぞ」

そこはもちろんイサコも遠慮するつもりはなかった。しかし今は疲れているのでしばらくここで休みたかった。昨日はヤサコが心配で眠れず、その傍らで夜を明かしたのだ。疲労感たっぷりのイサコはリビングのソファーに身を沈めた。

「休むか？昨日は徹夜したんだ。今日は一日ここで眠っていてもいいんだぞ」

「いや。こんな時に悠長に爆睡するつもりはない。とりあえず、正午過ぎまで仮眠をとる。アンタも昨日は寝てないんだし、今のうちに休んだらどうだ？」

壁掛け時計は午前１０時ちょうどを指している。ヤサコの検査も夕方までには終わるということらしいので、異常がなければ今日中

に彼女も退院できる。イサコはその時までにしておきたいこともあった。
「昼間はどこかに出かけるのか？」
「ああ。私用になって済まないが、大黒のおじさんとおばさんに顔を見せておきたい。元々大黒滞在中はおじさん達の家に泊まる予定だったし、どうして今回大黒に戻ってきたのか、一応報告しておこうと思って」
「それは大事な用事だ。私も保護者として挨拶しておく。他に行くところは？」
「とりあえず事故現場を見る」
それには玉子も首を傾げる。
「フォーマットは済んだんだ。何も出ないと思うけど」
「だからとりあえずと言ったんだ。現場を見ないことには調査も始まらない」
現時点で他に調べておきたい場所もあるわけではないので、考えてみればそれも妥当かと玉子は頷いた。
「そうそう。さっきメガばあからメールが来たわ。今日ヤサコが退院することになれば、メガシ屋でメンバーを集めて作戦会議をしたいそうだ。それには是非ともアンタに出てほしいって」
「メンバーっていうのは小此木達コイル探偵局と、黒客のことか？」
「それに室長と一緒にシュウイチ君も今日、メガシ屋に帰ってくるそうよ」
「ああ」
この遠い大黒市でシュウイチと合流するというのは、イサコは不思議な気分がした。
「じゃあ夕方はそんな感じで。とりあえず今は休みましょう。アンタの寝室は玄関から二番目のドアよ。私は玄関から一番近い部屋になるから」
「そこまで指定されているのか」
うんざりしたようにイサコは苦笑する。

「ごめんなさい。一応監視役の私が玄関の近くに居ろっていう指示だから。まあそのくらいバレるはずもないし、入れ替えてもいいけど」

「別に部屋の順番にそこまでこだわらないし、脱走するつもりもない」

イサコはそう言って立ち上がると、リュックを持って指定された寝室に向かうことにした。しかしそこで玉子に呼び止められた。

「待って」

「まだ何かあるのか？」

早くベッドに身を横たえたかったイサコはぶっきらぼうに返していた。玉子は少しだけ申し訳なさそうな顔になると、窓際からイサコに歩み寄って訊ねた。

「1つだけ聞いていい？さっき病院で、涙したヤサコがアンタの手を握った時、私にはアンタが心苦しいような顔をしているように見えたんだけど、それは私の気のせいだったのかと思って」

玉子にはヤサコが涙を流してイサコの手を握った気持ちは察せられた。しかしその時イサコの表情が曇っていたのは、どうもヤサコへの同情のためだけではないような気がしていたのだ。

するとイサコは見抜かれたのかというようにため息をつき、リュックを再び降ろすと玉子に向き直った。

「アンタの気のせいじゃない。実際私はあの時、胸が詰まるような思いがした」

「どうして？ヤサコを守る覚悟をしていたんじゃ」

「そのつもりだった。でも、今もその感触が残っている。小此木は私の手を、私が想像していた以上に強く握りしめていた」

イサコはその手でこぶしを作り、胸の辺りに持ってきた。

「私はそれを、重たいと思ってしまったんだ」

玉子も何となくその気持ちはわかるような気がした。

「ヤサコの恐れを、不安を、一身に預けられて、アンタはその重さに戸惑ってしまったのか」

「ああ。小此木があんな無防備な姿を見せたことはなかった。私は初めてアイツに頼られた。それに戸惑った。私はアイツを守ると大口を叩いたが、そんな弱り切った姿を見て、私ごときにそんな大役が務まるのかと思ってしまった」

「アンタ、ヤサコを何だと思ってるの？アンタと同じ中学1年生の女の子よ。時に弱さを人に見せることもあるし、人の力を借りないといけない時もある。アンタはヤサコを完璧超人とでも思っているようね。だから自分にはヤサコを支えるだけの力はないって」

俯いたイサコを玉子は叱咤するように言った。

「そこまで思ってはないが、アイツが私の中で憧れだったのは確かだ。私は小此木のような存在になりたかった。今の自分がそんなアイツを支えてやれるほど、あの時から成長したとも思えない」

「私には言い訳にしか聞こえないな。そうやって、これからまたヤサコが傷ついてしまった時の逃げ道を作っているようにしか思えない。所詮自分にはヤサコを支えるだけの力はなかった。そう片付けたら楽だからな」

「……」

図星をつかれたイサコは何も言い返せなかった。

「私はそうアンタが責任を背負うことはないと思う。ヤサコだってあの事件の時にアンタを助けた見返りが欲しくて、アンタの手を握ったわけじゃないだろう」

「……ああ」

イサコはもうわかっているようだったが、玉子は続けた。

「ヤサコはアンタに事件の解決を望んでいるわけじゃない。同じ悩み、苦しみを持つアンタにただ、そばで支えて欲しいと思っただけだ。そして今のアンタにはヤサコの気持ちを汲み取って支えてやれるだけの力がある」

「そう願いたいけど……でも、アンタにも言ってなかったかもしれない。私がミチコに言われたことを」

イサコがこのことで悩んでいるのはミチコのその言葉があったか

らだ。玉子はまだ聞いていなかったその話について訊ねる。
「何を言われた？」
「……あの時私がミチコを捨てて小此木の手を握ったのは、そこに私の幸福があったからだ。つまり、彼女が助けを求めている時には私が彼女を守らなければならない。それだけの勇気と力が私にあるのかどうか、ミチコは試してくるらしい。もし私に小此木を守るだけの力がないとすれば、やはり私の幸福はミチコの元にしかないと付け加えてきた」
　それを聞いた玉子は考え込むようにして言った。
「ミチコの魔の手からヤサコを守り通すには、やはりミチコ自身をもう1度消さなければいけないと思ったんだな？」
「そうだ。それを聞いた時に私は、ミチコがヤサコをさらおうとしているのだと思った。でもミチコは、あろうことか小此木にとって最も大切な人、原川をさらっていった。小此木は自分自身がミチコに連れ去られることに怯えていないが、自分の周りの大切な人がミチコの手にかけられることを怯えている。その小此木の怯えが現実になってしまうことが、私の怯えでもあった。ミチコは私と小此木が生み出した怪物だからな」
　なるほどと玉子は思った。イサコがヤサコを支える自信がないと言い、その責任を強く感じている理由もわかった。
　しかし玉子はそれ以前にイサコの言葉のある部分が気になっていた。
「知っていたのか？」
「何を？」
　唐突な質問にイサコが顔を上げた。
「ヤサコの気持ちだ。ヤサコがケンちゃんに思いを寄せていることを知っていたから、さっきケンちゃんをヤサコにとって最も大切な人と言ったんだろう？」
　玉子にとっては重要な話のつもりだったのだが、イサコの方はきょとんとしているようだった。深刻だった表情に穏やかさが戻って

きたイサコは訊ねた。
「ひょっとしてアンタ、私のこと鈍いと思っているのか？」
「……まあ、そっち方面の話題に関してはあまり興味がないのかなとは思っていたが」
訊いた玉子の方が答えづらそうに返す。イサコは気にするでもなく言った。
「それは間違ってはいないが、あの2人関してはさすがの私でもわかる。アンタと私が初めて対峙した日、通路が暴走した夜。電脳体分離を起こして“あっち”の世界に入り込んだ原川を、小此木は自らヌルの群れに飛び込み、電脳体を分離させて助けに行った。あのおぞましい極限状態で、ただの男友達を救うためにそこまでするとは思えなかった」
確かにあの時現場にいたイサコなら、ヤサコの気持ちを察せられただろうと玉子も納得する。
「そうか。それならヤサコの涙のワケもわかっていたんだな」
ヤサコが涙したのはそれだけが理由じゃないだろうと思ったが、イサコも実際、あの時のヤサコの気持ちは痛いほどわかった。前までの自分ならその気持ちはよくわからなかったかもしれない。しかしイサコがヤサコの立場になったとしたら、例えば現在大黒に向かっているというシュウイチが、自分との約束を果たさないままに異空間に閉じ込められたとしたら。それを思うと胸が疼いてしまう。それを逆に重たく受け止めてしまったところもあった。
「こうなった以上、私はアンタのためにも責任を負うことになる。ミチコが身勝手に私に課した試練のおかげで、原川は異空間に閉じ込められたんだ。小此木のために、アンタのために、私はミチコから原川を取り戻す。たとえ私の魂を引き換えにしても」
「自惚れないで。アンタにそこまで期待してるわけじゃない。それにアンタがまた1人で責任を背負い込んで、自分だけ犠牲になるとか言い出した時のために私はついているんだ。気負わなくてもいい。私達はケンちゃんを助けるために、私達のできることからはじめて

いくだけよ」
　また説教されてしまったなとイサコは苦笑した。癖なのか、いつもそんなことを口走る自分を戒めないといけないなとイサコは思う。それは諦めから出る言葉だ。とにかくこの状況を打開しないといけない。そのためには。
「まずは休むことだな」
　イサコはそう言うと今度こそリュックを持って寝室に向かった。玉子もそれを見届けると、自分もリビングで休むことにした。

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ３

この日の大黒の空は薄曇りだったが、午後に入ると日差しも出てきた。果てしなく広く感じられる旧三小の敷地の端でぼんやりと佇んでいた直樹は、祈るような目つきで上空を見上げる。端から見れば上の空とも言える表情で。

「そうやってのんびりと待っていれば彼が戻ってくるのかしら？」

呆れたように久美子が訊ねてきた。直樹はしばらく答えなかったが、やがてかぶりを振って、

「いえ。多分戻ってこないでしょうね」

と、諦めるように言った。

直樹と久美子は朝からこの場所にいた。ここで警察による昨日の事故の現場検証が行われたのだ。そこには、昨日ここで意識を失ったもののすぐに回復したフミエとアイコも参加していた。

とは言え、この手の電脳事故において警察の捜査など既に形骸化している。警察が動いているのは意識を失った子どもが出たからであって、これが傷害事件ではないという裏がとれれば、さっさと空間管理室に捜査を委任する流れになっている。さきの廃ビル事件の時もそうだった。

現行法では電脳空間の違法改造は罰せられるが、今回のようにそれが原因で意識不明者が出たとしても傷害事件とは認められない。もともと電脳体分離自体が公に認知されていなかったし、それ自体が特異なケースであるので電脳法の整備も遅れていた。

つまり、これ以上警察として動けないのだ。電脳空間の違法改造の取り締まりは空間管理室の職分であり、警察としてお呼びが掛かるのはせいぜい証拠が出そろった時に逮捕するのみ（そのケースでさえ未だ１つもない）。捜査の過程で管理室と電脳犯罪対策係はほとんど情報共有をすることもない。と言うよりも、メガマス側が警察との連携を拒否している。もちろんそれには後ろ暗い事情がある

のは明白だ。
　今回の一件もご多分に漏れず、その形になりそうだった。メガマスは管理室を使って勝手に事件を捜査する。直樹達対策係も別に事件のことを調べるのは構わないが、管理室は情報共有をするつもりはないので、そちらもどうぞご勝手に事件を調べてください、ということなのだ。もちろんメガマスの方が掴んでいる情報は多い。対策係が事件を調べたところで何になるのかと言われそうだ。
　直樹はそこで管理室の進藤のことを思い出した。管理室本部の指示でフォーマットの強行を躊躇わなかった彼は、今朝の実況見分にも参加していた。しかし直樹は昨日のこともあり、彼とは一言も言葉を交わさなかった。彼もどうやら直樹を軽蔑している節があるので、それは望むところだったのだろう。この先、今回の事故を調べるのなら彼とも顔を合わせる機会も多くなるはずだ。しかし彼なら「無能部署に解決できるような事件じゃないから消えろ」と、こちらを一蹴しそうなものだった。事件の捜査をするにあたって、彼の存在は障害の1つになりかねない。
　しかし、直樹達にはそれよりもまず話し合うべき事項があった。
「で、どうするのこれから?私達の再調査は、未だ意識が戻らない原川君の意志に基づいて行っているもの。私たちも彼の救出を最優先に考えるか、メガマスがなんとかするのをアテにして再調査を続けるか」
　久美子が質問したことは、直樹も先ほどから悩んでいることであった。
「昨日の事故が起きるつい2、3時間前に、僕たちは決めましたよね。うまくいかない再調査を成功させる最終手段として、天沢勇子さんに証言してもらうと。しかし法廷であの事故の話を彼女にさせるのは、彼女の精神的なケアを考えると決して良いことではない。どうしても彼女の証言を使うのなら、まずは彼女の知り合いであり原告の原川君の意見を聞く」
「ええ、そうね。現状でその条件を守るのなら、彼が目を覚まさな

い限り再調査の話は進まなくなる。彼を助けることを考える方が良いとは思うけど」

「野村課長はなんとおっしゃっていましたか？」

久美子は先ほど野村に連絡して指示を聞いていた。

「電脳犯罪対策係の責任者として、竹下直樹には最善と思う行動をとってほしいって。つまり、アナタの判断に任せるということ。そして私にはアナタの右腕として言われた通りに動けと」

野村もこんな状況を想定していたわけではない。まずは電脳犯罪対策係としての本分を果たせということだ。

「そうですか……」

直樹は眉間にしわを寄せて考え込む。

「ねえ竹下君。今回の一件、こうは考えられない？今回の事件の首謀者はメガマスの旧幹部達。目的は訴訟の成立の阻止。そのために原告となる原川君の意識を奪った」

確かにこの状況で旧幹部達がほくそ笑んでいるのは事実だろうと直樹は思う。訴訟が成立すれば彼らは法的に裁かれる可能性が高いのだ。しかし直樹は、事はそう単純ではないと思った。

「その可能性は低いと思います」

「どうして？」

「今回の訴訟の成立はメガマス現政権の望むところでもあります。万が一原川君が戻ってこなかったとしても、原告には葦原カンナさんのご両親を立てればいいだけです。メガマスの目的は原川君の意志の実現ではなく、現政権に邪魔な存在となった旧幹部を排除することですから」

あくまで客観的に考えて直樹はそう言った。

「つまり、原川君の意識を奪ったところで旧幹部達にとってそこまで有利に働かないということね。だからそんな危険を冒す必要はない」

「もっと言えば、再調査はまったくはかどっていません。ここで妨害することを彼らは考えないでしょう」

久美子もそれが一番説得力があるなと思った。
「そっか。もしメガマスがそう考えているのだとしたら、私達に対して、今回の事件に首を突っ込んでないで、さっさと再調査を進めろって言ってくるでしょうね」
直樹は静かに頷いて返す。
「じゃあ竹下君の考えは、私達は大人しく再調査を続けるべきということね？メガマスに忠実な犬として」
久美子は皮肉るように言った。しかしそれは即否定するように直樹はかぶりを振った。
「いえ、そのつもりはありません。僕はメガマスを信用していない。昨日、原川君の電脳体が戻ってくるのを待たずフォーマットを強行した人達の言葉など、誰が信じられますか」
「それならメガマスの意に逆らって今回の事件を追うの？」
久美子はホッとしたように確認した。しかし直樹はそれでも首を縦には振らなかった。
「いえ、それも違う気がします。事故の再調査を行っているのは僕たちだけではありません。僕たちが再調査を放棄するのは野村課長と杉本さんにも悪いですし、メガマスの要請で野村課長にこの話を持って来た桜井検事の立場をなくしてしまいます。やはり建前としては再調査を継続している風に装わないといけないと思います」
「建前ね……具体的にはどうするの？」
実は直樹はこの話になってからはこう言おうと決めていた。久美子に対して申し訳ない気持ちも抱きつつ口を開く。
「二手に分かれましょう。川畑さんは事故の再調査を引き続きお願いします。僕は」
「今回起きた事故について調べる」
久美子も結論を察したように直樹の言葉を引き継いだ。
「すみません。川畑さんも原川君の救出に燃えていましたよね」
「正直言えばね。でも竹下君の言うことは間違ってないし、事故の再調査も原川君の意志。やらなければいけないことだとはわかって

る」

さすがにこの人は大人だなと直樹は久美子のことを思った。ハラケンの魂がどこを彷徨っているかに関係なく、事故の再調査は彼の意志なのだ。そのことも考えず“建前”と言ってしまった自分を直樹は恥ずかしく思った。

「厄介な方を押し付けるようで悪いですが、そうしていただければありがたいです」

「どっちが厄介なんてあるの？どっちも同じよ。それにアナタは電脳犯罪の捜査官で、私は交通事故捜査官。どちらも本来の仕事をまっとうするだけのことよ」

その言葉に直樹も力強く頷いた。こうして直樹と久美子はハラケン救出まで別行動をとることになった。

「で、これからアナタはこれからどうするの？」

「そうですね……とりあえず調べておきたいことがあるので、僕は場所を移動します。川畑さんはまた聞き込みに向かいますか？」

「ええ、そうね。今日は人通りも多いだろうし、駅周辺をあたってみるわ」

「それではそこまでお送りします」

ここを去ることにした2人は、壊れたフェンスの修理をしていた工事関係者に一声かけることにした。そこを修理したら鉄扉の鍵も閉めて、ここはまた建築工事が始まるまで閉鎖することになっている。

「すみません。僕たちはこれで失礼します。昨日ここを壊してしまって申し訳ありませんでした」

直樹は休日出勤の作業員2人に頭を下げた。昨日直樹はここのフェンスを蹴りつけて自分たちの出入り口を広げたのだ。

「ああ、そうですか。それはかまいませんよ。事情は聞いていますから」

作業員の1人が気さくに言ってくれた。そうしてもう1度頭を下げて、直樹が正門側の鉄扉に踵を返そうとしたその時だった。

黒い大型バイクがその鉄扉をくぐって颯爽と現れたのだ。
「急ブレーキをかけるな！遠心力で振り落とされるところだったぞ！」
後ろに乗っていた少女が何やら運転手にわめいている。しかし直樹は、あの黒い大型バイクとライダースーツに見覚えがあった。
「なんなんですか一体？部外者は追い出さないといけませんね」
「いえ、あの人は関係者です」
訝しむ作業員を制し、直樹と久美子はバイクの元に歩み寄った。運転手もフルフェイスのヘルメットをとり、やはりと思って直樹は声をかけた。
「原川さん。大黒に戻られていたんですか？」
「ええ、お久しぶりです。竹下さん、川畑さん。その節はどうもお世話になりました」
玉子は直樹達の方を向いて軽く会釈して答える。
「いえいえ、こちらこそ」
「原川さん。その、昨日は本当に申し訳ありませんでした。私たちは現場にいたのですが、研一君の電脳体が戻ってくる前にメガマスがフォーマットを開始するのを制止できず、黙って見ていることしかできませんでした」
決して久美子が謝ることではないと玉子は思う。
「いえ。昨日のことは残念でしたが、おふたりに責任はありません。責任があるのはメガマスの方です。昨日の処置は、同じ空間管理室職員として適切だったとは思えません」
「やはりそのことで帰って来られたんですよね。金沢に出張されていたということは僕たちも聞いてしまいました。ところで彼女は？」
直樹は玉子の隣にいたイサコの方に目を向けた。
「天沢勇子といいます」
イサコ自ら名乗って会釈をすると、直樹は驚いたように声を上げた。
「あ、君があの天沢さんですか。ご噂はかねがね伺っていますよ」

直樹も久美子もイサコのことは話でしか聞いたことがなかった。実際会ってみると芯の強そうな印象を受ける。
「おい、オバちゃん。この人達は？」
イサコはそっと玉子に訊ねた。それが聞こえていた直樹は思い出したかのように敬礼する。
「申し遅れました。僕は大黒市警電脳犯罪対策係の竹下直樹といいます」
「彼の部下の川畑久美子です」
イサコは少しだけ首を傾げた。
「電脳犯罪対策係、ですか？」
「聞いたことないかな。電脳犯罪を取り締まる警察内部の部署なんだけど」
そのままだなとイサコは思う。自分が大黒にいた時にはほとんどマークしていなかった組織だ。常にイサコは管理室の動きを警戒していたので、警察の動きに気を配ったことはない。
「廃ビル事件の時にお世話になったんだ。宗助を逮捕したのもこの方達なのよ」
「そ、そうだったんですか」
玉子の紹介にはイサコも驚いた。確かに逮捕されたというからには警察が動いていたのは考えてみれば至極当然だ。
「それは、ご苦労さまでした」
イサコはうまい言葉が見つからず、直樹達をそうねぎらった。直樹も微笑んで返す。
「いえ、警察官としての務めを果たしたまでです。それより天沢さん、ちょうど良かった。少しだけ相談がありまして」
「なんでしょうか？」
直樹が切り出そうとしたが、それを久美子が止めて耳元でささやいた。
「会っていきなりお願いすることじゃないわ。今は原川君のこともあって彼女も混乱しているはず。この話はもう少しタイミングを見

計らってからにしましょう」
「そ、そうですね」
久美子の言うことはもっともだと思い、直樹は場を繕うようにして言った。
「すみません。君に話したいことがあるんですけど、今は少しタイミングが悪いかと思いますのでまた後日にさせてもらいます。大黒にはいつまで滞在予定ですか？」
「おそらく連休中はずっといると思いますが」
イサコは訝しみながら答えた。初対面の警察官が何を聞きたいのだろうかと思う。
「わかりました。それではまた折を見て原川さん経由で連絡させていただきます。原川さんも、今日は事故の調査でここへ？」
直樹は玉子に向き直った。
「ええ。と言いますか、ちょっとした事情がありまして、私は今彼女の警護をしているんです。今日ここに来たのも彼女が現場を見ておきたいというものですから」
今度は直樹達の方が首を傾げる。
「そうなんですか。ということは、原川さんは空間管理室とは別行動をとっているということですか？」
「そうなりますね。私にはサーチマトンの指揮権はもうありませんし、昨日フォーマットを強行したという管理室の指揮下に入るのは本意じゃありません。彼女を警護するという名目の上で、私達は一緒に事故を調査していくつもりです」
「なるほど。僕も今回の事故を調査することにしました。今後もご厄介になるかもしれません。くれぐれもその時はよろしくお願いします」
「いえ、こちらこそ」
電脳力のある直樹の協力があることは玉子にとって頼もしいことだった。そこで昨日の事故の詳しい話を聞こうと思ったが、直樹は忙しそうに、

「それでは、僕たちは行くところがありますので本日はこの辺にて失礼します」

と再び敬礼すると外に停めてあった車に戻って行った。

それを見送ったイサコと玉子は早速空間の調査を始めることにした。敷地は広大だが、ヤサコ達が倒れていたのが入り口の鉄扉の近くだと聞いていたのでその辺りから見てまわる。

「いつから警察とつるむようになったんだ？」

直樹達の車が出て行った音を確認してからイサコが訊ねた。

「最初は、そうそう。先月の話になるけど、ダイチが変な事件に巻き込まれてね。その時にお世話になったのがあの直樹さんだったの。それに、あの人達はカンナの事故の再調査をしている」

「あの事故の再調査を？それは言っていたあれか。原川が望んだ訴訟を起こすために？」

「そうよ。多分さっきアンタに訊ねようとしていたのも、その関係だと思うわ。アンタもあの事故を思い出したくはないかもしれないけど、少し協力してあげて。あまりその再調査もうまくいってないって聞くし」

玉子もあの事故の話をイサコにするのはどうかと思ったが、イサコの方は心配しているほど反応が悪いわけではなかった。

「ああ、私にできることがあるならなんでもするさ。それが亡くなったカンナさんの名誉を取り戻すことにつながるのならな。でも、今は肝心の原川がいない。なんとしても原川の電脳体を取り戻さないとその話も進まないだろう」

「そうね。あの人達がその話をためらったのも、そういう事情を考慮したんだと思う」

そうして玉子は直樹達がどんな人物かを説明した。直樹と出会うきっかけとなったダイチのメール事件の経緯も詳しく伝える。その話を聞きながらイサコも、せっせと自分の調べたいところを徹底的に洗っていた。

そうしてしばらく時間が経った頃だった。

「ちょっと、こっちに来てくれ」
イサコは何かに気付いたのか玉子を手招きした。
「どうした？」
「いや、思ってもない収穫があった」
イサコはそう言うと自分の足元を示した。
「暗号か！それも新型じゃないか？」
「ああ。サーバーの情報を偽装して隠してあった。そのやり口も金沢でサオリが使っていた手と同じだ。おそらく時間が経てば起動する仕組みになってるんだろう。既に５つ星形に並べられているようだ。これもサオリの時と同じ」
それを聞いた玉子はまさかと思う。
「それじゃあ、彼女はこの街に？昨日の事故も彼女が？」
「わからない。ただこの暗号はサオリが使っていたものとは違う。サオリの使っていた暗号は、新空間と通常空間のリンクを断絶するためのもの。でもここにあるのは、私達が組んだ暗号に構造が似ている。つまり、新空間と通常空間をリンクさせるためのものだ」
イサコは金沢イベント事故の時、サオリの暗号を無効化することを念頭に置いて暗号を組んだ。それが結果的には、新空間と通常空間をつなぐアクセスコードを含む暗号になってしまったのだ。
「じゃあこの暗号の主は？」
玉子は考え込む。サオリの線も消えたわけではない。それに暗号を使いこなせる人物は他にも思い当たる。
「オバちゃん。大黒に来てから、アイツと連絡をとったか？」
イサコも同じ事を考えていたようだ。
「大谷さんね」

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ４

昼下がり。高速道路の大渋滞で大黒への到着が大幅に遅れてしまった一郎は、まずはシュウイチをメガシ屋で降ろし、その後メガマス本社へと顔を出した。約２週間ぶりの復帰の一郎をロビーで出迎えたのは、大黒ではコンビを組んでいる香川だった。

「お疲れさまです小此木さん。昨日も徹夜して金沢での事故の報告書をまとめいたと聞きましたが」

「このぐらいで音を上げるわけにはいかないんだ。この報告書は早速社長の元に持っていってくれ」

「わかりました」

一郎は歩きながら鞄を開けて書類の入った封筒を香川に渡した。そこには金沢イベント事故の最終報告書が入っている。一郎が昨日中に金沢を離れられなかったのは、これを仕上げるためだった。

「それよりも昨日の事故のことで聞きたい。本社は結局どう対応するつもりなのか」

「その件につきましては昨日の夜、それから本日の朝も幹部会で議論されましたが、明確な答えは出ていません」

一郎はエレベーターを待ちながら香川の方を見やった。

「やっぱり本社の力で新空間から研一君を救い出すのはムリだということだな？」

その方法があれば揉めることはない。

「そう結論づけられつつありますね」

「じゃあどうして昨日本部長はフォーマットを強行させたんだ？最初から彼のことは見殺しにするつもりだったのか？」

一郎は語気を強めた。

「本部長の意見はこうです。すべては金沢支社の開発した新空間なるものが原因だ。今回の事件の責任も金沢支社が取るべきである。それに応じなかった場合は金沢支社の幹部を粛正すべきであると。

本社の幹部の中でもこの意見が多数派を占めつつあります」
「いかにも本部長の言いそうなことだ。それでフォーマットを強行の件もうやむやにしようとしているんじゃないか？」
滅多なことを言うもんじゃないと香川はうろたえて周囲を窺う。しかしエレベーターホールに一郎達以外の姿はない。そのまま到着した無人のエレベーターに搭乗する。
「そういう意図もあるかもしれません」
香川も安心したのか一郎に同調した。
「なんて無責任な。金沢支社に対して本社が強硬な姿勢を見せたとしても、それに応じるかどうかは怪しい。実際金沢支社はイベント事故の時に事故を防ぐ気がなかったようだ」
「その意見は会議の中でも出ていました。しかし今回の件で本社ができることと言えば金沢支社に圧力をかけることぐらいです。おそらく方針としてはそのように決まるのではないかと思われます」
一郎はため息をついて首を横に振った。それで何が解決するとも思えない。
「こうなった以上、本社も金沢支社のプロジェクトを認める必要があるんじゃないか。そうやって高圧的な態度をとるから毎度金沢もへそを曲げる。これ以上事故が起こるのを防ぎ、研一君を救出するためには金沢と協力し合うのが最善の策だと思うけど」
「それも昨日の会議の一番はじめに、相談役として出席していた小野隆先生がおっしゃっていました。しかしそれをしてしまえば他の支社に対する示しがつかないと、社長も賛同しませんでした」
やはり本社の幹部の総意はそうだろうなと一郎も思う。社長の桝田も人命を第一に考えるような人物だが、メガマスという巨大企業を動かすのにここで妥協はできないというのも理解できる。しかし体面を保つことを考えているわりには、今の本社はあまりに無力だ。
「小此木さんはこれからどうなさるおつもりですか？本部長は今、金沢支社への責任転嫁のために、昨日の事故と金沢支社との関係を必死に調べられています。小此木さんとしてはその指揮下に入るの

は本意じゃないですよね？」
　一郎には本部長の考えもわからなくはなかった。本社で解決できない以上、この件の解決には金沢支社の力を借りなければならない。その金沢支社を動かすためには、昨日の事故と金沢支社のプロジェクトの因果関係を明らかにすることがまず必要である。そのれを承知していても、一郎としては感情的になっていると思われる本部長の下で動くことはあまり考えたくなかった。
「上がどう指示してくるかわからないけど、僕は別の角度から今回の事故を調べていきたい。今からそれを本部長や社長に直談判してくる」
「別角度というと？何かアテがあるんですか？」
　不思議そうに香川が訊ねる。
「ああ。報告書にも書いたことなんだけど、どうやら金沢のプロジェクトチームには裏切り者がいるらしいんだ」
「裏切り者？どういうことですか？」
「ああ。情報のソースとしては少し頼りないところがあるんだけど、どうも聞き流せない話でね。金沢の事故でミチコに連れて行かれた天沢勇子君が証言していたことなんだが」
「ええ。これまでもよく話に出て来た少女のことですよね」
　夏の事件に深く関わったイサコの名前は、メガマス幹部なら誰もが耳にしたことがあった。
「その時彼女がミチコから聞いた話によると、その技師は新空間の設計にも関わっていて、ミチコの生みの親でもあるらしい。しかし何かの理由で技師はプロジェクトチームを裏切り、メガマスに対して復讐を果たそうとしているという。ミチコは自分の生みの親であるその技師の叛乱を予知していた」
　香川は首を傾げた。
「ミチコはどうしてその話を天沢さんに？」
「それはわかりかねるところだ。ただ天沢君曰く、ミチコは１つの人格へと成長しているらしい。つまりミチコは自分の考えで天沢君

を新空間に連れて行き、彼女に今の話をしたということになる」
とは言いつつ、一郎にもその話の意味するところはわからなかった。ミチコと直接話をしたことのない一郎にとって、彼女が自我を獲得して1つの人格を形成したと言われてもピンとは来ない。
「そのミチコは、今回は研一君をさらって新空間に閉じ込めた」
香川は眉間にしわを寄せ、考え込むようにしてつぶやいた。
「今回の一件。鍵を握っているのは先ほど話に出た裏切り者の技師だと僕は思う。それに彼は少なくともプロジェクトチームにとっての敵だ。ということはその人は今金沢にはいる可能性は低く、僕たちにとっては逆に近づきやすい存在かもしれない。なぜなら金沢のプロジェクトチームは本社と対立関係にある。その裏切り者が隠れるとするなら」
「本社の勢力圏であるこの大黒である可能性が高い。実際ここで事故が起こったことからも、それは裏付けられているということですね」
香川が確認すると、一郎は強く頷いた。
「ああ。それに、一昨日の早朝に金沢において本社がマークしていた1人の少女が失踪した。この事件の裏にも、なんとなくその技師が関わっているような気がしている。手がかりはいくつかあるから、そこからその技師の正体を追っていきたいと考えている」
「なるほど。わざわざ金沢支社のプロジェクトを暴かなくても、その技師の尻尾さえ捕まえれば事件解決の糸口になるかもしれないということですね」
香川も一郎の考えを納得したところで、エレベーターは管理室本部のある階に到着した。一郎は今の話を本部長に伝えるためにそこで降りる。香川は一郎から受け取った報告書を社長に届けるためにそのままエレベーターでさらなる上階に向かった。

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ５

フミエとアイコはこの日、朝から昨日の事故の現場検証に立ち会い、午後は駅ビルのメガマスの事務所で詳しい聴取を受けていた。そうして昨日のことはあらかた話し、メガマス職員にハラケンの救出を何度も念押しして駅ビルを後にする。そこから２人は、今日にも退院できることになったヤサコを迎えに病院に向かうことにした。

「フミエ。あの事、どう思う？」

駅前を歩きながらアイコが訊ねた。あの事とは、昨日からこの２人の間で合言葉のようになっており、今日も時間が空けばそれについて考え合っていた。

「病院で、ちょっと訊いてみる？」

フミエの提案にアイコは頼りない表情で頷いた。それで何か掴めるとはあまり思っていないようだ。フミエも一応念のためという意味で言ったつもりだった。

２人が考えているのは、昨日学校の中に迷い込んだ時に出会った教頭についてだ。

事故の後、この２人は意識がしっかりとしていて病院の検査でも異常はなかったので、家で静養することになっていた。しかし事故でハラケンが戻って来なかったことや、ヤサコがそのショックで意識を失ったことなど、２人にとっても精神的なダメージは相当なものだった。家に戻って１人になった時には、言いようのない不安が襲ってきた。

だから２人は電話で連絡を取り合い、事故のことを２人なりに振り返った。管理室の理不尽にも言いたいだけ文句を出し合った。ハラケンの帰還やヤサコの目覚めも信じ合った。

一通りの心配事を２人で共有し合ってふと思いついたのは、あの学校の中で出会った教頭は何者だったのか、ということだ。

あの空間は怪奇そのものだった。ヤサコ、フミエ、アイコで職員室の扉を開けてみれば、そこには静止して微動だにしない教師達の姿があった。それについては理解しようにも理解できない。何か新しい不可思議な現象が起きているとしか考えられなかった。しかし、教頭だけはあの空間の中で動いていた。それが意味するところは、考えようもあるかもしれない。それは、教頭も自分たちと同じような経緯でにあの空間に入りこんだという可能性だ。

そこでフミエは小学校時代の担任だったマイコに連絡を取ることにした。あの教頭は今年も大黒小に勤務しているということは聞いていた。その教頭に異変があるなら、マイコが知っているはずだとフミエは思ったのだ。幸いマイコの電話番号ならフミエは知っていた。

『もしもし？橋本さん？』

マイコは急にフミエから電話がかかってきて不思議そうな様子だった。この時マイコは、フミエ達が事故に巻き込まれたことは知らなかった。

「先生。夜分に申し訳ありません。少し訊きたいことがあるんですが」

『なあに？改まって』

一呼吸置いてフミエは切り出す。

「大黒小の教頭先生はお元気にしているのかなと思って」

するとマイコの声は急に張りつめたようなものになり、戸惑うように訊ねてきた。

『アナタ、教頭先生のご病気のことを知っているの？』

「ご病気？教頭先生、どうかされたんですか？」

フミエはやはりと思った。もしかすると教頭は今のハラケン状態にあるのではないかとフミエは想像する。しかしマイコから返ってきた答えはその推測を裏切るものだった。

『……脳梗塞よ。幸い命に別状はなかったみたいだけど。つい2週間ほど前に、勤務中に突然倒れられて』

「そ、そうだったんですか……」
フミエもそれは想像していなかった。まさか本当の病気とは思いもしなかったし、ましてや脳梗塞など。何も知らなかったとは言え「元気にしているかな」などと軽い聞き方をしたことを、フミエは後悔する。
そして、今の返答で明らかになったこともある。教頭は決して電脳体分離が原因で入院したわけではない。つまりハラケンと同じではないということだ。勤務中に倒れて運ばれたとなると、誰か目撃者がいたのだろう。仮にその原因が電脳体分離だったとしたら、それに気付く人間がいるはずだ。学校では授業や連絡用にもメガネが使われている。
『アナタ、教頭先生のことは誰かから聞いたの？アキラ君から？』
そう言えばアキラがいたとフミエはそこで気付く。教頭に異変があったなら大黒小の生徒である弟に聞けばいいだけだった。しかし教頭が倒れたのは2週間前だという。その間アキラからそのような類の話を聞いた覚えはなかった。
「いえ。話せば長くなるんですけど……しかしアキラはそんなこと一言も触れていませんでしたよ」
『うん、そうでしょうね。全校生徒には病気のことは伝わっていないから。ただ療養のために長期間教頭先生がお休みすることだけ全校集会でアナウンスされたの』
そこでは重篤ではないようなニュアンスで伝えられたのだろう。アキラがわざわざ話題にしなかったのも理解できる。
「それでその、教頭先生の容態はどうなんですか？先生はお見舞いに行かれました？」
『ううん。まだ意識が朦朧とされているらしくて、とても話ができる状態じゃないと病院から連絡があったから。他の先生達も心配されているけど、お見舞いには行けてないの』
「どこの病院ですか？」
『メガマス病院と聞いているけど』

フミエはそこで首をかしげた。メガマス病院は電脳医療の設備が整っている。イサコが電脳医療を受けたのも確かあの病院で、もしかしたら、もしかするかもしれないとも思う。しかしあの病院の情報は秘匿性が高い。行ったところで教頭がどんな治療を受けているのかは伏せられるのが関の山だ。

フミエは丁寧にマイコに礼をした後、その日の事故のことを伝えた。マイコは去年の事故や廃ビル事件のことを玉子や一郎から聞いて、それをイサコに伝達したこともあるように、最近メガネの事故に関して勉強に取り組んでいる。だから今回の事故の話を聞いた時には、その重大さを十分感じ取ったようだった。しかしマイコ自身は自分が何を手伝えるわけではない。とにかくハラケンの無事を祈り、近いうちに彼の見舞いに行くとフミエに伝えた。

フミエはその後すぐに再びアイコに電話をかけ、教頭の話を説明した。

ヤサコを迎えに行くついでに、それとなく病院に教頭のことも確認する。そのつもりでフミエとアイコは病院に向かっていた。病院が教頭のことを話してくれる見込みは薄いが、それならそれでフミエの考えている可能性は高まってくる。ただ仮に、教頭がかつてイサコと同じ電脳医療を受けていたとしても、その理由はまったく想像できなかった。

そんなことを無言で考えているうちに、2人は病院に到着した。するとそこで、フミエの思考を遮るかのように後方から激しいバイクのエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、そのバイクは2人の目の前で止まった。フミエはそのバイクの後部にいた少女に釘付けとなった。

「久しぶり」

少女はそう言うと軽やかにバイクから飛び降りた。玉子の運転にもだいぶ慣れてきたのだ。

「イサコ！」

ようやく声が出たフミエは、この時どうしたらいいかわからなかった。本当なら抱きついてでもこの再会を喜びたいところだが、そんな無邪気になっている場合ではない。しかし彼女に会いたかったというのは、偽らざる気持ちだった。

「もう！何やってたのよ！この前電話した時も『私は私の戦いにケリをつけるだけだ』とか、かっこいいこと言ってたけど、本当はあの後とんでもない事が起こったんでしょう！もしかして、金沢で起きたイベント事故に本格的に関わっていたりしたんじゃないの？」

被っていたヘルメットを玉子に渡しながら、イサコはフミエの言葉を聞いていた。

「その事故の後に電話した時も、『私は大丈夫だ。心配かけてすまなかった』って。やっぱり事故に巻き込まれたって考えるべきだったわ。もしかしてアンタ、変な空間に連れて行かれたりしたんじゃないの？」

久しぶりに会ったフミエの鋭さにイサコは驚いていた。そこまで察しているなら詳しい説明は必要ないだろうなと思う。

「……よくわかったな。すまなかった。本来ならそのことは真っ先に知らせるべきだった。まさか私もこんな早くにこっちで事故が起きるとは思わなかったんだ。それに、メガマスにも監視されていたしな」

「監視？」

訊ねたのはアイコだ。

「イサコは金沢での空間事故で、ある機密事項を見てしまった。そのおかげである勢力から狙われる可能性があったんだ。それから守る為に、イサコにはボディガードがつけられた。もちろんそれには、イサコ自身の行動を監視するという意味合いも含まれていた。ただそこからまた一騒動あって、私がイサコの見張り役に取って代わったの」

「だから私は大黒滞在中、四六時中オバちゃんに見張られることになっている」

フミエもアイコも、なぜそんなスパイ映画のようなことになっているのかと思った。イサコもそれを感じたので後で詳しく説明しようと思った。

「昨日の事故の話を聞く限り、アンタ達2人も、ヤサコもケンちゃんも、イサコと同じ機密を見た可能性が高い」

「じゃあその機密事項っていうのは」

玉子の言葉でフミエも悟った。

「新空間と呼ばれている。かつての“あっち”とはまるで性質の違う異空間だ。アンタ達が昨日迷い込み、原川は今もそこに閉じ込められている。そして、金沢の空間事故では私もそこに連れていかれた。ミチコとも再会した」

「じゃあ昨日の事故も、やっぱりミチコの仕業?」

イサコは頷こうと思ったがそこで躊躇った。

「後で私がミチコに連れて行かれた時のことも話すが、少しその解釈だと腑に落ちないこともあるんだ」

フミエとアイコは首を傾げるが、とにかく質問はイサコから詳しく話を聞いてからだと思った。次にフミエは玉子の方を向いた。

「ごめんなさい、オバちゃん。昨日あの学校の敷地に入ろうって言ったのは私だったの。金沢の事故を受けて、オバちゃんが危ない空間に近づくなって言ってるのはハラケンから聞いてた。でもそんな危ない空間にも見えなかったから私も軽い気持ちで」

玉子は小さく息をついて返す。

「その時旧三小の校舎が見えたんだろう?それは誰だって気になる。しかも昨日はキューちゃん達が飛び回っていたのに、そこには見向きもしなかった。違法性のある空間なら、すぐにキューちゃんに抹消されるはずだ。そう考えると、あの敷地内が危ないとは思えなかった。そんなところか」

フミエは俯いたまま頷く。

「過ぎたことを悔いても仕方ない。ケンちゃんを取り戻すために私とイサコは一連の事故の調査をしているんだ。良ければアンタ達に

も協力してもらいたい」
「それはもちろん！絶対にハラケンは私たちの手で取り戻す。あの時フォーマットを強行したメガマスなんかに任せるわけにはいかないわ」
アイコもそれに強く頷いた。
「とりあえず、ヤサコと合流したらメガシ屋に向かう。そこに黒客も呼んでメガばあと金沢での事故を経験したもう1人も加えて、色々と話し合いたい」
「了解」
そこで一応話はついたので4人は病院の中に入った。目指すはヤサコの病室だが、フミエはそこで思い出したように言った。
「あ、ごめん。少し受付で確認したいことがあるの。先に病室行ってて」
「ああ、構わないけど」
フミエは教頭のことを確認するために受付へと向かった。残ったイサコ、玉子、アイコでヤサコの病室へと向かう。

「ヤサコ。迎えに来たよ」
真っ先に病室に入ったアイコは、一日ぶりの再会を喜ぶようにその手を取った。病室には他にヤサコの母の静江がいた。
「ありがとう。心配かけてごめんね」
「ううん。昨日はあの空間の中でアンタが私達を引っ張ってくれたんだし、むしろ感謝してるぐらいよ。あの時ヤサコがいなかったらって思うと、ほんとにぞっとする」
アイコと少し言葉を交わした後、ヤサコはその後ろに立っていたイサコの方を向いた。
「天沢さん。朝は取り乱しちゃってごめん」
「構わないさ。私で良ければ、いつでも力になる。体の方はもういいのか？」
「うん、おかげさまで。天沢さんが一晩そばで祈ってくれていたの

が効いたのかな」
　ヤサコが笑みながら言うと、イサコは恥ずかしそうに目をそらす。そんなイサコに、静江が歩み寄って言った。
「初めまして、天沢さん。優子の母です。アナタの話はいつも優子から聞いてるのよ。やっと会えて私も嬉しいわ」
「いえ、こちらこそ。お祖母さんやお父さんにはお世話になりましたが、お母さんに挨拶が遅れてしまって恐縮です」
　しっかりとした受け答えに静江も微笑んだ。
「いいのよ。わざわざ金沢からこの子のお見舞いに来ていただいて。おかげでこの子もすっかり元気になったのよ」
「いえ、とんでもない」
　イサコが謙遜して答えると、次に静江は玉子の方を向いた。
「原川さんも大変でしたね。昨日の事故のことは聞いています。研一君は、必ず戻ってきますよね？」
「もちろん、そう信じています。というより、室長や私たちの力でケンちゃんを助け出してみせます。その時には優子さんのお力も借りるかと思いますが、決してムリはさせませんので」
　玉子がそう言うと静江の表情は少し曇ったようだった。
「そうは言っても、ムリをするなという言葉が通じない子ですからね。今月のはじめの事故の時もそうでしたし」
　今回でヤサコが倒れたのが何回目なのかわからないぐらい、いつも静江は心配ばかりしている。ヤサコも母親に心配をかけるのは心苦しく思っているが、自分の行動には悔いを残していない。今回も、ハラケンのためにやれるだけのことはやろうと考えていた。
「自分の体のことは自分でもわかってるわ。次にムリをしたらどうなるかも。私は、私のできる範囲の協力でハラケンを助け出す手伝いをしたいの」
　ヤサコは母に訴えた。母は自分がハラケンを思う気持ちに薄々気付いているのだろうとヤサコは感じている。だからこそ、ここで逃げたくはないという思いをぶつけた。

「彼女もイサコともども、私がしっかりと見張っておきます」
玉子もヤサコをフォローする。どこかで似た性質を持つこの2人を守るのが自分の仕事であると玉子も自覚していた。
「……あまり原川さんやお友達に迷惑をかけないようにね」
静江は最初から認めるつもりだったかのようにすんなりと認めた。
「うん。ありがとう、お母さん」
ヤサコも照れくさいように返したが、母への感謝は胸の中に満ちていた。事の成り行きを見届けて、玉子が切り出す。
「じゃあ早速メガシ屋で昨日のことについて話し合いたい。今から早速向かおう」
「家に帰るだけの話だけどね」
そして玉子はもう1度静江の方を向いた。
「彼女は私たちが家に送ります」
「それは助かります。私も買い物に行かなければならないので。それではお言葉に甘えてさせてもらっていいかしら」
「もちろん。じゃあ優子さんの荷物も持ちますね。イサコが」
「なんで私が荷物持ちなんだ？」
しかし玉子は、問答無用で静江から受け取ったヤサコの荷物をイサコに預けた。
「ごめんなさい天沢さん。重くはないよね？」
「別に重くはないし、病み上がりのアンタに持たせるのもなんだからいいんだが、いつの間にか私がアイツのパシリになっているのが気に入らないな」
イサコは玉子を睨みつけながら小さな声でぼやいた。その玉子は静江と丁寧に頭を下げ合っていてそれには気付いていない。いつからイサコがそんなに玉子と仲良しになったのだろうと、ヤサコは可笑しくなった。
そうして静江は病院の手続きに行き、ヤサコ達一行は病室を後にした。
「そう言えばフミエちゃんは？一緒じゃないの？」

「一緒だったけど、少しここの受付に聞きたいことがあるって」
アイコがその質問に答えると、イサコが反応した。
「何を聞きに行ったんだ?昨日の事故に関係のあることなんだろう?」
「うん。それがね……」
アイコが説明しようとした時、階段をのぼってきたところのフミエとばったり会った。
「あ、今行くところ?ちょうど良かった。ヤサコ、体はもう大丈夫?ってこれが何回目なのかもわからないけど」
「うん、大丈夫よ。ありがとう来てくれて」
そうしてヤサコとフミエのやり取りが済んだ後、イサコが訊ねた。
「橋本。何を聞きに行っていたんだ?」
「ああ。昨日のことで気になることがあって。歩きながら説明する」
「で、結果はどうだったの?」
この中で唯一事情を知るアイコは、結論だけをまずは訊ねた。
「それがね。この病院に教頭先生は入院してないって言われたんだけど」

#21　深層への道筋　part6

ヤサコを送る一行は病院を後にし、線路に沿って大黒駅の方に向かっていた。そろそろ日が陰り始める時間帯。空には昨日同様、キューちゃんの群れが夕陽のシルエットとしてカラス色に浮かんでいる。事故発生から丸一日が過ぎようとしていた。

「そうか、それで教頭があそこに入院しているかどうか確かめたのか」

歩きながらイサコと玉子はフミエからその話を聞かされていた。

「おかしいのよね。マイコ先生は、確かにメガマス病院に入院してるって言ってたんだけど」

フミエはそのことを確認してからずっと不審に思っていた。フミエは教頭に面会できるとは思っていなかったが、そこに入院すらしていないと言われるとも思ってなかった。

「もしかするとメガマス病院違いかもしれないな。メガマスの名のつく病院は全国にあるんだろう？」

イサコの質問にバイクを押して歩く玉子は頷いて答えた。

「そうね。最も可能性として高いのはやっぱり金沢のメガマス病院かしら。あそこはプロジェクトチームの勢力圏だし、教頭先生が新空間にいたというのなら辻褄は合うわね」

「サオリの家族も、金沢のメガマス病院に入院しているみたいだからな」

イサコや玉子の推理は、教頭は倒れて一度大黒市のメガマス病院に運ばれた後、金沢市のメガマス病院に搬送され何らかの電脳治療を受けているというものだった。

「金沢の事故について説明すれば、小此木達にも教頭の身に起きていることが理解できるかもしれないな」

「そうね。後でじっくりそのことについては説明するわ」

玉子の言葉にヤサコ達は頷く。いよいよ昨日の事故と金沢の事故

がリンクしていることを、ヤサコ達も思い知り始めた。

話し合ううちに一行は駅前ロータリーに辿り着く。イサコはそこであることを思い出したように玉子に訊ねた。

「なあ、さっき言っていたあれ、確認しに行かないか？」

その場で全員が立ち止まる。ヤサコ達は何の話だろうかと思った。

「でもメガシ屋まで遠回りすることになるわ。先にヤサコを送ってからでも」

「日があるうちに行った方がいいだろう？なんなら私たちだけでもバイクで行って、小此木は橋本達に送ってもらえば」

イサコと玉子だけで通じ合っているのも居心地が悪いので、フミエは思わず横から口を挟んだ。

「何の話よ？」

「ああ。少しばかり調べものをしたいと思って」

イサコの態度に、フミエは小さく息をつきながら言った。

「水臭いわね。これから一緒に事故について調査するのに、なんで2人だけで行こうとするの？」

「いや、ここからその場所は遠いらしいから。病み上がりの小此木を歩かせるのも悪いだろう」

「どこに行くつもりなの？」

「今月初めに惨劇の舞台になったっていう廃ビルなんだが」

先ほど事故現場で見つけた新暗号に関連することで、イサコはどうしてもあの廃ビルで確認したいことがあったのだ。

「それなら私達がいなくちゃ話にならないでしょ。アンタあの時いなかったんだから」

「それはそうなんだが、多少危険かもしれないし」

それでフミエは納得するはずがない。イサコは言ってからそのことに気がついた。半年ぶりに会う大黒市の仲間。その勘も鈍っているのかもしれない。

「アンタがいれば大丈夫なんでしょう？危険だからって避けてばか

りもいられないわ」
「天沢さん。私のことは気にしないで。病み上がりって言っても体は問題ないし、あのビルまで歩いて１０分と少しぐらいじゃない。みんなで調べに行きましょう」
　ヤサコに言われると今のイサコは弱い。本人が大丈夫だと言うのでこれ以上反論はできなかった。
「わかった。じゃあさっさと行って、さっさと終わらせよう」
　そして一行は向廃ビルのある中津交差点方向に向けて歩き出した。

　中津交差点に着くと、ヤサコ達は旧第三小学校の方を向いた。昨日はここから校舎が見えたのだが、もちろんそれはもう見えない。壊れていたフェンスも直され、今は学校の敷地に入ることすらできなくなっている。それでも諦めきれないヤサコ達は、そこから昨日のようにブラックホールが現れないか淡い希望を抱きながら眺めていた。
「あれはもう開かない」
　そんなヤサコ達に向かって、イサコは静かに言った。別に水を差しているわけではない。しかしそれは残酷な響きにも聞こえた。
「どうしてそんなこと言うのよ。ハラケンが戻って来るための唯一の出口じゃない」
　フミエが少し尖った声で言った。
「あのブラックホールは危険な代物だ。金沢ではあれが原因でメガネを壊された子どもがいるぐらいだ。それに、昨日アンタ達を異空間に飲み込んだのも」
「だけど、そこから戻って来られたのもあのブラックホールのおかげよ」
「なら確率は５０：５０か。原川が戻って来るのか、新たな犠牲者を生むのか」
　イサコの考えていることはヤサコ達もわかる気がした。それでもフミエは釈然としないようだった。

「アンタって、昨日私達の目の前でフォーマットを強行した管理室と同じ考えなのね」
「昨日現場にいたならこんなことは言えなかったかもしれないさ。でも私は今の話をしているんだ。それを願うのは間違っている」
イサコは言葉と、そして目でフミエを諭した。
「それなら、アンタはあれをもう1度出現させようと思ってないのね」
「あれはかつての通路と一緒だ。不確定要素が多すぎる。あんなものに私達の望みを託すわけにはいかない。だから調査を重ねてその方法を検討しようとしているんだ」
フミエはそこで口ごもった。自分が愚かなことを考えていたように思えてならなかったのだ。あの事故が起こったのは、ちょうどこの交差点だ。
「フミエちゃん。ハラケンを助ける方法は必ず他にあるはずよ。ここは天沢さんの言葉を信じて、慎重に道を探しましょう」
今回のことで一番ショックを受けているはずのヤサコにも言われて、フミエは少し泣きそうだった。まるで自分があの事件から成長していないように感じて。
「ごめん、イサコ。アンタの言う通りね」
「わかってくれればいい」
その後廃ビルに着くまで沈黙が降りた。

交差点から1本裏路地に入るだけで、ここまで光量が少なくなるのかとイサコは思う。通りには自分たち以外に人は見えないから余計にそう感じた。ヤサコ達もこの鬱屈とした空気がかなり久しぶりのように感じられ、あれだけ出入りしたビルも今は少し近寄りがたい気がした。ここには悪い思い出の方が多い。もう来ることもないだろうとヤサコ達は思っていたのだ。
「なるほど。ここが今月初めの事故現場ってわけだな」
ビルを見上げながらイサコが確認する。

「ええ。このビルの上階で大量のヌルに襲われたの。なんかいかにもって感じの雰囲気でしょ？」
「なんでこんな場所に出入りしていたんだ？アンタ達も黒客も」
「それは話せば長くなるんだけどさ。簡単に言うとメタバグの鉱脈が見つかったからよ」
フミエがイサコの質問に答えている間、ヤサコはこのビルに最初に訪れた時のことを思い出していた。あの時は、どこからともなく流れてくる冷気を辿っているうちにここを見つけたのだ。
「メタバグ？そんなものがまだ存在したのか？」
「ああ、なんかメガマスが開発した空間制御プログラムだったっけ？かつての“あっち”を再現するプログラムらしいんだけど、それを開発する過程でキラバグやメタバグが生まれたって。ね、オバちゃん？」
フミエは玉子に確認した。
「ええ。でも、それはおそらく違うわね。アンタ達がここで最初にメタバグを発見した時、空間制御プログラムは暴走していなかったはず。だから私たちもそれを不思議に思っていたわ。そのメタバグの鉱脈は何だったのかって。でも、今なら何となくわかる。この廃ビルは、例の新空間とも何らかの関係がある可能性が高い。アンタ達はここで地震を感じて気を失ったことがあるんだろう？」
玉子はヤサコの方を見て訊ねた。
「うん。ブラックホールは見なかったけど。ゲームの最中だったからかな」
「やっぱり何か出てきそうだな。早速調べよう。危なそうだし、病み上がりの小此木は入り口で待っているんだ。誰か来たら知らせてくれ」
ヤサコは少しだけ不満そうな顔をしたが、イサコの指示に従うことにした。
「じゃあ相原もここで小此木を見ててくれ」
「わかったわ」

そうしてヤサコとアイコをその場に残し、イサコとフミエと玉子は西側の入り口から中に入った。

ビルの中はわずかに夕陽が差し込む程度でかなり薄暗い。そこで玉子は装備に入れていたライトを点けてイサコに渡した。

「ねえイサコ。今ヤサコに誰かが来たら知らせてくれって言ってたけど」

隣にいたフミエがイサコの腕をつつく。

「ああ」

「誰かが来ると思ってるからそう言ったの？ここは見ての通り、人の出入りがある場所じゃないわ」

イサコは適当にライトをまわしていたが、やがて足元の1点だけを照らすようになった。

「アンタなかなか鋭いんだな」

「褒めてくれてありがとう。でもそんなことはどうでもいいの。じゃあ、アンタがそう思う理由は何？」

「ついさっき昨日の事故現場で暗号を見つけたんだ。私が金沢で見かけた新しい型の暗号だ」

その言葉にフミエは引っかかるものがあった。

「それってもしかして魔方陣みたいな形の？」

「見たことがあるのか？」

イサコはウインドウを開いて何やら作業を始めていたが、その時はフミエの方を向いた。

「直接はないけど、ヤサコが見たって言っていたから。それにこの前アンタの悪い噂が掲示板に流れた時に、そこに載せられてた画像にもそんな形の暗号が映っていたから」

「なるほど。小此木はどこで見たって？」

「駅向こうの廃工場よ。ほら、アンタとヤサコが閉じ込められた」

イヤな事を思い出せてくれるとイサコは苦笑した。

「余計なことを掘り返すな」

「いいじゃない。それに先月の話だけど、今度は私とヤサコが閉じ込められたのよね。ううっ。あの時のことは私も思い出したくない」
「おいフミエ。その話は聞いてないぞ」
そこで2人とは離れたところでビルの内部を調べていた玉子が食いついてきた。
「知りたいのならヤサコに聞いて」
フミエの返答にはイサコも玉子も首を傾げた。
「アンタがそう言うのならそうするが。それで、何の話だったっけ？」
「何でこのビルに誰か来ると思ったのって話よ」
話を戻すようにフミエが言った。
「ああ。だから端的に言うと、昨日の現場にその暗号を仕掛けた人物が、ここにも同じ暗号を仕掛けにくるかもしれないと思ったんだ。オバちゃんの話を聞く限り、大黒で新空間の匂いがするのはこの場所だったからな」
「じゃあその人が昨日の事件の犯人ってこと？」
「それはまだわからない。現時点では重要参考人ってところだ」
そう答えたところでイサコの作業する手が止まった。
「オバちゃん。ちょっと」
玉子を手招きする。
「見つけたのか？」
「ああ。ほら、これだろ？魔方陣型の暗号っていうのは」
イサコは足元にある暗号をライトで照らしてフミエと玉子に示した。
「確かに、画像で見たのはこんなだったわね。ヤサコにも見てもらおっか？」
「そうだな。まだ起動していないようだから安全だろう」
そうしてフミエは入り口で待機していたヤサコとアイコを中に連れて来た。
「ヤサコ。この暗号に見覚えある？」

「えっ？これって、この前廃工場で見つけたのと同じものだわ」
やはりなとイサコは納得する。おそらくヤサコが廃工場で見たものも、同じ人物が仕掛けたものだろうと思った。
しかしこの暗号は5つ揃ってはじめて効果をもたらす。イサコは残りの4つの場所も特定しようと暗い廃ビルの中を探しまわった。ところが奇妙なことがわかった。
「なあオバちゃん。おかしいんだ。ここには3つしか存在しない」
「ちゃんと探したのか？」
「探したさ。確かに3つだ」
それが意味するところをイサコは思案する。
「2Dじゃなくて3Dで星型に並んでいるパターンじゃないのか？」
イサコの通う中学校で暗号を見つけた時にはそんな並びだった。
「いや、見つかった3つの並び的にもこの1階のフロアーで星型になるはずなんだ」
「じゃあ、5つなくても起動できるとか」
それもイサコは釈然としなかった。
「事故現場で見つけたのも星型で5つだった。いきなり暗号の性能が変わるとは思えない」
「待って。ということは……」
玉子もようやくイサコの考えている可能性について思い至った。ヤサコ達はわかりあっている2人に置いていかれたように戸惑っていた。
「何なのよ。何がわかったの？」
思わずフミエが訊ねた。
「いや、簡単な話だ。本来5つ必要なはずの暗号を3つしか置かずに去ることは考えにくい。つまりこの暗号の主は3つしか置けなかったんだ」
「どうして？」
イサコはまだわからないかと息をつく。
「私たちが来たからだ」

それでようやくヤサコ達3人もイサコの言いたいことがわかったようだ。
「じゃあ、その人は私たちが来る少し前までここにいたってこと？」
「今もこのビルにいるはずだ。ここに来た時、ここの通りにはまったく人の姿はなかった。このビルには裏口もない。外に出るにはこのフロアーを通らないといけない。だから私たちが来たのに気付いて逃げることはできないんだ」
玉子はここでの事故の捜査を手伝った関係で、内部の構造は熟知していた。
「おそらく、その人は今も近くで聞き耳を立てているんだろう」
そうしてイサコはライトを東階段の方に向けた。一同は入り口に近い西階段の前に集まっている。隠れているのなら東階段しかない。
「もう観念して出て来たらどうですか？それともこちらからお名前を呼んだ方がいいですか？アナタがどなたなのか、もう見当はついていますよ」
次に玉子がその東階段の方に向かって呼びかける。しばらくした後、本当にそこから足音が聞こえてきた。非常に重たいような足取りで1歩1歩、時間をかけて階段を降りてくる。ヤサコやフミエは思わず身構える。イサコと玉子もさすがに緊張した。
「攻撃してくると思うか？」
イサコが小声で玉子に訊ねた。
「わからない。してくることはないと信じたいけど」
玉子が祈るような口調で言うと、ほの暗い通路の奥からその人物は姿を見せた。

#21　深層への道筋　part7

重く淀んだ空気がしんと凍り付き、廃ビルの内部には沈黙が降りる。ヤサコ、フミエ、アイコの3人は目の前に現れた人物を見て、イサコや玉子の推理は間違っているんじゃないかと思った。

東階段を降りて姿を見せたのは、竹下直樹だった。

「なんだ、直樹さんじゃない。何が新暗号の主よ。この人は警察官なんだから、このビルを巡回していても不思議はないじゃない」

フミエは少し安堵したように、そしてイサコに教えるようにそう言った。ヤサコ達3人は、イサコと直樹が昼間に顔を合わせたことを知らない。

「いや、この人が暗号を仕掛けた犯人だ。警察官であるかどうかなんて、この際関係ない」

しかしイサコは事実を糺すように返した。

「何言ってるの。この人は大黒で起きた一連の事故で私たちを守ってくれたし、昨日の事故でも真っ先に駆けつけてくれたのよ。その人を悪者扱いするなんて」

しかし今度はイサコもフミエの言うことを流した。何かを確かめるように、ただ直樹の目を見据えている。

「……オバちゃん」

不安になったヤサコが玉子の顔を覗き込む。玉子にイサコの推理を否定してほしかった。しかし玉子は、

「残念だけど、私もイサコと同じ推理をしていた。このビルや昨日の現場にあった新暗号は直樹さんが仕掛けたと見て間違いないわ。おそらく昨日の事故に何らかの形で絡んでいるはず」

と言いながらため息をついた。ようやく直樹は諦めたようにつぶやく。

「わかっていらしたんですね」

「私もつい先ほどまでアナタのことは微塵も疑っていませんでした。

この子の勘が働いて、昨日の現場で暗号をみつけるまでは」
玉子はイサコを示しながら言った。イサコはその時のやり取りを思い出していた。

イサコと玉子は昼間、昨日の事故現場で新暗号を見つけた。それがどういう意図で、いつ仕掛けられたものなのか。それを考えるために、イサコは大谷を呼ぶことにした。大谷も近く大黒入りすると話していたので、昨日の事故を知っていれば必ず現時点で大黒にいると踏んだのだ。そして案の定、電話に出た大谷は大黒にいることが判明した。イサコが事情を話すと、彼はレンタカーで飛んで来たのだ。

「よっ、ご無沙汰」
「ほんの3日ぶりだ」
イサコは冷静に返すが、確かにこの3日の間に様々なことがあったので久しぶりのような気がした。
「いや原川さん。昨日の事故に甥っ子さんが巻き込まれたそうで」
玉子には普段は見せない真摯な態度で大谷は声をかけた。
「よく御存知ですね」
「聞いてるでしょ？オレはメガマス本社とは協力関係にある。そのルートで昨日の事故については聞きましたから」
「と言うことは、持っている情報は私とそう変わらないということですね」
少し残念そうに玉子は言った。大谷独自の情報網をアテにしているところもあるのだ。
「これから調査を始めますよ。で、イサコ。暗号を見つけたんだって？」
「ああ、これだ」
イサコが足元を示すと、大谷はしゃがみ込んでしげしげとそれを観察した。
「確かに新型だ。新空間へのアクセスコードを含む暗号だな」

「サオリの物と似ているだろう？」
「ああ。と言っても、彼女はこれを使っていたわけじゃない。むしろこれと同じ暗号は君とオレで組んだ」
「わかっている。でもアンタが仕掛けたものじゃないことはすぐにわかった」
「なんで？」
「アンタの技術ならもっとうまく偽装できたはずだ。少なくとも私が見破れるような簡単なトリックを使うはずがない」
「そりゃもっともだ」
「で、どう思う？これが昨日の事故の原因だと思うんだが」
そこで大谷は空を見上げて唸った。
「うーん……それは違う」
「なぜそう言えるんだ？」
大谷は立ち上がって眉をひそめながら言った。
「しっかりしてくれよ。ここは昨日2．0によってフォーマットされたんだろう？アイツらの能力はハンパない。いくら偽装してあってもこんな暗号が生き残るわけないわな。つまりこれは、そのフォーマットが終わった後に仕掛けられたことになる」
それにはイサコと玉子も納得した。ではいつ仕掛けられたのか。
「今朝は早くからここで現場検証が行われていたのよね。それを考えると、昨日の夜の間かしら？」
玉子が直樹の言葉を思い出しながら言った。
「現場検証って管理室の職員も参加してやるんだろう。その時点で暗号が仕掛けられていたのならそいつらに見つかる可能性が高い。オレが犯人なら、わざわざ夜の間に忍び込んで証拠を残すようなマネはしないな」
「じゃあ、仕掛けられたのは現場検証の後か？」
最後の可能性をイサコが確認する。
「げんに現場検証で暗号が見つからなかったってことは、そう考えるしかないだろう」

「現場検証の後に誰が出入りしたのかが問題か」
「あの工事の人達に聞いてみれば?ずっとあそこで作業してんだろ?もっとも、あの人達が暗号の主っていうのなら話は別かもしれないが」
大谷はフェンスの修理をしている業者の2人を見ながら言った。さすがにあの作業員の仕業とは考えにくいので、イサコはためらわずに話を訊きに行った。そして、
「現場検証の後、私達以外にここに入った人間はいないそうだ。空間管理室の職員もそれが終わった後にすぐに帰っていったらしい。となると暗号を仕掛けられるのは」
「さっきまでここに残っていた直樹さん達しか考えられないってこと?まさか。あの人達がそんなことするはずが」
玉子がそれはないだろうと思いながら言った。大谷が訊ねてくる。
「それは何者なんだ?」
「大黒警察の電脳犯罪対策係だそうだ。さっき私達が来た時に2人だけ残っていた」
大谷は合点がいったような顔になった。
「それで当たりだろう。電脳犯罪対策係なら、それなりの電脳力を持っているはずだ。新暗号にも精通しているかもしれないぞ」
「そうだな、事情はわからないが……オバちゃん。男の人か女の人、どっちが怪しいと思う?」
玉子には心当たりがあったので、この時苦い気持ちになった。
「男の人、直樹さんは以前暗号に関する知識を披露してくれたことがあった。川畑さんは元々県警の交通課の所属だから電脳にはそれほど詳しくないって聞いてる」
「決まりだな。この暗号の主はその男だ」
大谷は几帳面にメモを取っていた。現役の警察官が事故の裏で糸を引いているとなればスクープになる。
「目的はなんだと思う?なぜ現場検証が終わった後にまた暗号を仕掛けた?」

「知らんがな」
後は本人に聞けと大谷は言い残した。この調子なら他の場所でも暗号を仕掛けているかもしれないとイサコに助言したのも彼だった。

#21　深層への道筋　part8

イサコは再びこの緊迫する場に意識を集中させた。こうなればもう、直樹がなぜ新暗号を仕掛けているのか問いつめるだけだ。
「どうしてアナタが新空間へのアクセスコードを持っているんですか？アナタは一体何者なんですか？」
未だ唖然とするヤサコ達を尻目に、玉子が詰問する。
「……もう、すべて打ち明けます。ここまで来て言い逃れするのは見苦しいでしょう」
直樹はそう前置きして切り出した。
「僕は、ある人からの要請でメガマス金沢支社とアプリコット社が共同で進めている“新空間計画”のお手伝いをしていました」
「ある人とは？」
「僕の恩師です。いずれアナタ方にもお目にかかる時が来るかと」
ヤサコ達は昨日の直樹と管理室の進藤とのやり取りを思い出した。2人の共通の恩師は、電脳科学者の小野隆である。さらにひと月ほど前にメガばあから聞いた話では、小野は祖父宏文の大学の後輩にあたるという。もしかして“新空間計画”とは、宏文と猫目技師の研究と何らかのつながりがあるものではないかと、ヤサコに予感させた。
「そのお手伝いとは？」
玉子が続けて訊ねる。
「主に観察です。新空間が通常空間に及ぼす影響についてのね……そのために君たちを利用していた」
直樹はそのことを悔いているかのように、ヤサコ達に申し訳なさそうに告げた。ヤサコ達は何のことだかさっぱりわからなかった。
するとその時、
「やっぱりな。オレのにらんだ通りだった」
直樹の背後、東階段の影から聞き覚えのある声がした。直樹を含

めた一同が驚いてそちらに目をやる。
　するとそこにはダイチとガチャギリがいた。
「アンタ達！なに？いつからいたの！？」
　フミエが目を丸くしながら訊ねた。
「いつからかは覚えてねえが、まあ、直樹さんがここに現れる前にはいたぜ。昨日の事故では地震が起こったって話を聞いて、やっぱ一番最初に調べんのはここかなって感じで。別に何が出て来るとか期待してなかったけど」
　ダイチの言葉をガチャギリが引き継ぐ。
「ところが、オレたちが3階辺りを調べている最中に誰かがビルの中に入って来る気配を感じた。1階の様子を見に行ったら、このお兄さんが神妙な面持ちで暗号を仕掛けていたってわけだ。あん時は正直ビビったけど」
「あれはオレでも声をかけられなかった」
　ヤサコ達が到着して直樹も身を隠した時は、ダイチ達も直樹の姿を見失わないところに隠れて様子を窺っていたのだ。
「そうか。まったく気付かなかったな」
「オレたちは電脳戦争のエキスパートっスよ。気配を消すぐらい」
　ダイチの余裕の表情に直樹は自嘲気味に笑っている。
「他のメンバーはどうしたの？」
「アイツらは別の場所に行った。デンパの勘を使って異空間の気配を探してもらってる。この場所は危険かもしれんから、アイツらは遠ざけたんだ。んで、よく見たらイサコがいるじゃねえか。よう、久しぶり」
　ダイチはご無沙汰していた元黒客リーダーに軽い感じで声をかけた。
「のんきに挨拶してる場合？その人は一応悪者みたいよ」
　呆れたようにイサコがダイチに返す。元々直樹も抵抗するつもりがないようなので安心してはいたが。
「そう。悪者なんスね、直樹さん。どういうことっスか？オレたち

を利用していたって」
　ダイチはいつにない冷たい目つきで直樹を見上げる。
「だから、前からオレは言ってただろ。こいつの善人ぶった態度は怪しいって」
　ガチャギリはさしてこの展開に驚いていないようだった。その辺りの勘の鋭さには直樹も渋面していた。
「コイツがそう言っても、オレはずっと信じてました。オレは直樹さんに憧れていたんですよ。こんな大人になれたらなあって思ってました。でも、結局その辺の汚い大人と同じだったんスね」
「……失望したかい」
「ええ。大いに！」
　気持ちいいほどきっぱりと言われ、直樹は苦笑した。
「言い訳はできないな。ただ、警察官がみんな僕のような人だと思わないでほしい」
「偉そうに言わないでくださいよ。そのくらいオレもわきまえてますから」
　直樹はもう何も言えず、自分の髪をただかきむしるだけだった。
「で、いつからオレたちを利用していたんスか？」
　哀れむように直樹を見ながら、ダイチは話を戻すように訊ねた。
　それに答えたのは玉子だった。
「ダイチ。おそらく、竹下さんとアンタとの出会いからすべて仕組まれていたのよ」
「出会い？この人との出会いってどんなだったっけ？」
　もう忘れたのかと玉子は呆れる。そうして直樹に確認するように訊ねた。
「ひと月前の架空請求メール事件。今になって思えば真相はそういうことだったんですね」
「……気付きましたか。そうです。このために随分まわりくどいことをしました」
　直樹は玉子の考えていることを見抜き、そのまま認めた。しかし

ダイチはまったく理解できなかったようだ。
「確かにあの架空請求メール事件をきっかけにオレは直樹さんと出会った。でもあの時オレたちが警察に出向いたのは偶然だ。出会いから仕組まれていたってのはどういうことだよ？」
その時フミエが「そっか！」という声を上げた。玉子は真相を理解したフミエにその答えを言わせることにした。
「確かにあの時、私たちがアンタを連れて警察に行ったのは偶然だった。でもよく思い出してみなさいよ。あの事件でアンタは、架空請求メールの犯人に仕立て上げられていた。私たちのフォローがなかったら、そのままアンタは容疑者として連行されるところだった」
ダイチもようやくひらめいた。
「そうか！どの道オレは警察に出向く算段になっていたのか」
「ええ。直樹さんの担当は電脳犯罪。アンタの事情聴取をするのは直樹さんだと決まっている」
「なるほど。だからその一件以来、架空請求事件の犯人からの接触がなかったわけか。つまり事件そのものが、ダイチを警察に引っ張りだすための壮大な作戦だったわけだな」
腑に落ちたようにガチャギリが言った。あの事件の時にダイチのメガネをハッキングし、ダイチの個人情報をかすめ取ったのも直樹ということになる。その情報を架空請求メールの偽装に使ったのだ。
「なぜそんな手の込んだマネをしてまでダイチを引っぱり出したんですか？」
玉子が訊ねる。
「理由は２つあります。１つは、ダイチ君達は大黒市では名の通った電脳クラブで、新空間の観察のためにちょうどいい存在だったから。そしてもう１つは、個人的な実験をしたかったから」
「その実験とは？」
「ＩＬコードの話は御存知ですか？相手に悟られずにメガネの中の情報をかすめ取れる暗号です。元々それも小此木先生が封印された研究資料に載っていたらしいんですけどね。メガマス金沢支社のプ

ロジェクトチームが、去年の事件でその資料を引き揚げたらしいのですが、その時偶然見つけたそうです。何かの役に立つだろうということでそれを小野先生からいただいたんです」

ヤサコはやはりと思った。直樹は祖父の宏文のことも知っている。

「なるほど。そいつの切れ味を試すためにオレのメガネをハッキングしたと」

「セキュリティも万全にしてあったみたいだからちょうどよかったんだ」

するとダイチは軽蔑するように直樹から顔を背けた。

「でもどうしてダイチを呼び出す必要があったんですか？」

「彼のメガネに細工をしたかったからです。先ほど言った観察のためには、まずは彼のメガネを新空間仕様にする必要がありました。新空間は通常のメガネではアクセスできません。だから彼のメガネにそのアクセスコードを仕込んだんです。覚えているかな。あのメール事件の後、メガネを受け取りに来てもらった時に、僕はダイチ君にセキュリティソフトを紹介したよね。それを媒介にしてお友達のメガネにもアクセスコードが伝染する仕組みになっていたんだ」

ダイチはその時のことを思い出す。今後も狙われる危険があるという理由で、ダイチはセキュリティソフトをインストールするように言われた。そしてそれを友達に紹介するようにも。

「新空間にアクセスできるってどういうことッスか？」

「文字通り新空間に干渉できるようになるってことだけど、一番わかりやすいところで言えばメタバグかな。君たちがこの場所で見つけた鉱脈。実は、あれは新空間のアクセスコードがなければ見つけられるものじゃなかった。新空間はそもそも普通のメガネとのバージョンが合わないから」

「つまり、オレたち以外の人間にあの鉱脈が見つからなかったのは必然だった。あの鉱脈は最初からオレたちが見つけるように仕組まれていたってことッスね」

「そう。その時ここに黒い電脳霧が立ちこめていただろう？あれも

君たちの気を引くビジュアル効果さ」
　あの時不思議に感じたすべての要素が一本の線につながっていくようだった。そこで玉子が訊ねる。
「先ほどの話にもありましたが、ダイチ達を新空間の観察に使うというのがピンと来ないのですが」
「そうですね。言ってみれば新空間の観察というよりテストですかね。新空間はかつての“あっち”と同じように違法にサーバーを占拠している存在なんです。巧妙に偽装されているので“あっち”よりは管理室に見つかりにくいですけどね。でも問題は耐久性だった。サーバーに負荷を与えるようなことが行われた場合、新空間にどんな影響が出るのかをテストする必要がありました」
「サーバーに負荷を与える行為？電脳戦争などのことですか？」
　イサコが確認し、直樹はそれに頷いた。
「そうか、だからオレたちが選ばれたってわけか。ここにメタバグの鉱脈を出しておけば、あとは勝手に戦争してくれると思ったわけだ。こいつが観察したかったのはそれが新空間に与える影響だ」
　合点がいったようにガチャギリが言った。
「その思惑通りになったのが情けねえ。ここで2回もでかいのかましたからな、オレたち。フミエ達との果たし合いと、シンヤの裏切りで画策されたこの場所の一斉攻撃。オレたちってどこまでも利用される運命なのか」
　ダイチは悔しかった。ここ最近の黒客は、常に誰かに利用されているだけの存在だった。去年黒客を乗っ取ったイサコや、黒客を出し抜いて大金を独占しようとしたシンヤもしかり。そしてあげくには憧れの存在でもあった直樹にも利用されていた。黒客リーダーとしてのプライドはボロボロだった。
「猫目宗助の襲撃とも重なった2回目の電脳戦争は想定外だったけど、1回目の君たちの仲間内での争いには一枚噛ませてもらったよ」
「ああ、果たし合いの前のあれか。メタバグはあれどもそれを加工してくれる業者がいない。オレたちがそうやって困り果てていた時、

アンタ颯爽と現れたな。するとあろうことか、タダでそのメタバグをツールにしてくれるなんて言った。正直オレは初対面のあん時からきな臭いと思ってだけどな。ま、ダイチが単純だから実験はうまくいきましたね」

皮肉っぽくガチャギリが言うと、ダイチは面白くないという顔をした。

「じゃあ、あの果たし合いの時私たちが感じた地震は？」

フミエが訊ねる。

「新空間が電脳戦争に反応して起こったものだった。でもあれは想定の範囲内だった。むしろ、電脳戦争に触発された新空間の暴走が君たちに与える影響の度合いもテストに含まれていたと言ってもいい。少なくともあの時点で、君たちが新空間に迷い込むような重大な事故が起きる可能性だけはなかったんだ。新空間は廃ビルの深層に埋まっていたからね。だから僕達も君たちが倒れた時点で駆けつけるようなことはしなかった」

ヤサコは直樹が「僕達」と言ったことに引っかかった。あの時ヤサコは何となくだが、誰かに監視されているような気がしていたのだ。それは直樹と、そしておそらくは直樹の先生である小野だったのではないかと思った。

「あの時フミエ達は意識を失ったが、オレたちは無事だった。それはどうしてなんスか？」

「原因はイマイチわからない。ただ、小此木さんや原川君のイマーゴがそれに影響したという可能性もあるね。金沢での事故の話を調べているうちにそんな気がしてきたよ」

イサコと玉子以外のメンバーは、今の直樹の言葉の意味を掴めなかった。しかし直樹は、金沢での一連の事故の原因がミチコにあることを知っているようだった。そしてあの果たし合いの時、この廃ビルの深層に存在する新空間から、ミチコが通常空間に干渉しようとしたのだと直樹は考えているのだ。

「じゃあ昨日の事故は一体なんだったんですか？わかるでしょう？

”新空間計画”に関わっていたというアナタなら、昨日の事故の真相が」

そこで玉子が詰め寄るように訊ねたが、そこで直樹はかぶりを振った。

「いえ。昨日の件に関しては僕は何も聞いていません。自分で調べようとしていたぐらいですから」

「どうしてですか？昨日の事故は明らかに新空間が原因のはずです。“新空間計画”に関わっていたのなら、何が起こっているのかなんて」

「僕の役目は今月初めにここで起こった事件で終わっているんです。猫目宗助が空間制御プログラムをこの場所で使ってくれたおかげで、観察は中止にせざるを得なくなりました。その時点で必要な結果は得られていたので続けることもありませんでした」

「じゃあ、あなたの恩師に聞いてください。その人も計画の中心にいるはずでしょう？」

「今はまだ教えられないと。末端の僕にはおいそれと情報を伝えることはできないそうです。ましてや僕はもう用なしの人間ですから」

その歯がゆそうな表情をしている直樹を見ていると、彼は本当に昨日の事故については知らないのだと察せられた。

「なら、代わりに教えてください。メガマス金沢支社の“新空間計画”とは何なのか？なぜ新しい空間を作ったのか……なぜミチコを復活させたのか」

イサコが一歩前に出る。この謎が明かされない限り前には進めないと思った。金沢での連続空間事故、ハラケンの電脳体の失踪。それらの元凶となった“新空間計画”とは一体どのようなものなのか。

「……それを話すのは構わない。でも、これは決して君たちにとって希望をもたらすような話じゃないかもしれない。それを知ったところで、何が変わるわけでもない」

するとヤサコ達は顔を見合わせた。直樹の言っている意味を量りかねたからだ。

「話してください。原川を救うために、少しで情報が欲しいんです」
しかしイサコは毅然として言った。直樹の顔に少しだけ戸惑いの色が見えたが、仕方がないという風にため息をついて切り出す。
「わかった。僕の知っているすべてを話すよ……」

#21　深層への道筋　part9

廃ビルの中は固唾を飲むような静けさに包まれていた。ヤサコ、イサコ、フミエ、アイコ、玉子、ダイチ、ガチャギリは聴衆となって直樹の口から真実が語られるのを待っている。その直樹は疲れたように壁によりかかると、スーツの胸ポケットの内側からタバコを1本取り出して火をつけた。これまでこの中の誰も直樹が吸っているところは見たことがない。既に仮面を剥ぎ取った直樹は、これ以上さわやかな警察官を演じるつもりはないというのか。ヤサコやダイチ達にとっては、その割り切ったような表情が何とも悲しかった。

「“新空間計画”の究極的な目的は、太古の昔から人類が描いてきた夢を実現することだ」

煙を吐き出しながら直樹は落ち着いた声で言った。

「太古からの人類の夢？随分大層なことを掲げたものですね。世界平和か何かですか？」

嘲笑を含んだような声でイサコが訊ねる。しかし直樹は調子を崩さずに続けた。

「それにも通じるものがあるけどね。でも君は、世界平和が人類の究極的な夢だと思っているのかい？」

「別にそうは思ってないですけど」

哲学的な話をしたいわけじゃないとイサコは首を振る。直樹もそれを察して本題に入った。

「“新空間計画”の最終的な目的は、永遠の命の実現だ」

ヤサコ達は話の脈絡を掴めなかったが、玉子は直樹の言いたいことをすぐに見抜いた。

「永遠の命……デジタル上の存在である電脳体を不変のものと捉えるということですね。デジタルは永遠に劣化しないし、ましてや死という概念が存在しない」

「その通りです。電脳体としてだけ生きられるなら、それは半永久

的な命の獲得と言い換えられませんか？」
　この時、それは机上の空論だと思ったのはイサコと玉子の2人だ。
「いや、現実的に考えてそれはムリでしょう」
「なぜ、そう思う？」
　直樹は量るような目つきでイサコを見返す。
「電脳体は肉体とは不可分な存在だからです。言い換えるなら、電脳体が存在しうる絶対条件として、肉体の生存が不可欠だからです」
「……さすがは電脳医療の最初の患者だけあるね。君の指摘はまったくもって正しいよ」
　直樹は恐れ入ったようにつぶやいた。しかし、今のやり取りはヤサコやダイチ達にはまったく理解できなかった。
「今のはどういう意味だよイサコ？オレたちにもわかるように説明してくれ」
　置いて行かれたことを悔しがるようにダイチが確認する。
「電脳体と肉体のうち、電脳体はデジタル上の存在だから意図して消さない限りそれは永遠に存在できる。それはわかるわね？」
「ああ。オレたちのメガネのデータと同じだろ」
「ええ。だから“新空間計画”を立ち上げた人達は、電脳体に魂を移した状態なら、人は永遠に生きられるんじゃないかって思ったのね」
「生きられるんだろ。良いか悪いかはともかくとして、スゲー技術革新じゃねえか」
「それはムリだって私は言いたいの。なぜなら、電脳体は肉体が死んでいては存在できないからよ」
「どうしてだ？」
「僕から説明するよ」
　灰を携帯用灰皿に落としながら直樹がイサコの後を引き継ぐ。
「電脳体分離で言われる魂や意識の分離。ダイチ君は、魂とは体のどこにあると信じている？」
　ダイチは一瞬胸の辺りを指しそうになったが、慌てて修正した。

「あ、頭だろ。つまり脳だ」
「変にオカルトを信じない人ならそう答えるね。もちろんそれで合ってる。じゃあ問題を出すね。電脳体分離で肉体と電脳体が離れてしまった状態の人がいるとする。この時、その人は電脳体のみを動かすことができるよね。じゃあ、その指令を出しているのは体のどの部分かな？」
ダイチは何を簡単なこと訊いてくるのだろうと思った。
「もちろん脳だろ」
「どっちの体の？」
「電脳体だ」
直樹はそこで間を置き、微笑むように言った。
「それは間違いだ」
「え？」
「ややこしい言い方になるけど、電脳体に“脳”は存在しないんだ。電脳体を動かす指令を出しているのは肉体の脳だからだ」
これにはヤサコ達もあんぐりとしていた。自分が何度も起こしたこともある電脳体分離だが、その仕組みは自分たちが想像していたものとまるで違っているらしい。
「ちなみに、デジタル上の存在である電脳体に“脳”が存在しているとすれば、それはいわゆる人工知能ＡＩにあたる。どれだけ自分と思考が似通っていようが、本質的に“自己”とはまた別の存在であると僕は考えている。まあ、こういった話になると難しくなるからそれは置いておこう」
「要するに、肉体と電脳体という2つの体が分たれたとしても、“脳”は1つしか存在しないってことッスね。そのたった1つの脳は肉体の一部であるから、肉体の死はすなわち電脳体の死ということになるんスね」
ガチャギリが整理してくれたおかげで、ヤサコ達やダイチも何となく話を理解することができた。
「そう。わかりやすくするために、電脳体分離の仕組みを詳しく説

明しようか。正常な状態では、人の脳からの指令は末梢神経を介して各筋肉に出力される。歩く、しゃべる、目を動かすなどのすべての動作において。ところが、メガネをかけて電脳体分離を起こすとその脳指令の流れが変わってしまうんだ」

「メガネの量子回路が原因ですね」

玉子がメガネを示しながら言った。

「そうです。君たちも聞いたことがあると思うけど、メガネに搭載されている量子回路は人の意識をキャッチする。電脳体分離を起こした時は、この量子回路は脳からの指令をそこで吸収してしまうんだ」

「吸収する？」

「うまい説明の仕方が思いつかないけど、要するに末梢神経を通って筋肉に送られるはずの脳指令が、量子回路に奪われてしまうということだね。奪われた指令は、当然肉体の筋肉には届かない。電脳体分離中に肉体の方を自由に動かせないのはこのためだ。まあ、呼吸のように肉体が生存する上で欠かせない動作に関する指令は、そのまま筋肉に送られるらしいんだけどね。この辺は電脳コイルシステムを完成させた猫目技師と小此木医師の調整があったんだろう。電脳体分離中の肉体は、睡眠中に近い状態であると思ってくれればいい」

「じゃあ、奪われた脳指令は？」

「量子回路によってデジタル変換されて、電脳体の方に反映される。電脳体分離中に電脳体のみを自由に動かせるようになるのはこのためだ。だから電脳体にも脳があるように錯覚するけど、実際はあれも肉体の脳の指令で動いている。つまり電脳体分離とは、脳指令の出力先が肉体から電脳体に切り替わることと言い換えられるね。分離を起こした肉体と電脳体は細い糸でつながっていると思ってくれればいいよ、もしくは、肉体の脳を電脳体というラジコンを動かすコントローラーと捉える方がわかりやすいかな」

その言葉にヤサコはあることを思い出した。

「それじゃあ、電脳体がズレている時にメガネをはずしてはいけないっていうのは……」

「そう。それもあながち都市伝説なんかじゃない。電脳体分離中に肉体の脳と電脳体を結んでいるのはメガネそのものだ。さっきも言ったようにこの2つの体は細い糸でつながっている。そこでメガネをはずすということは、その糸をはさみで切ってしまうのと同じだ」

「もしも、その糸が切れてしまったら？」

「……どうなるのか、厳密には誰にもわからない。もしかすると脳指令を奪っていた量子回路がはずされたことによって、元通り肉体を動かせるようになるのかもしれない。あるいは、脳指令の流れが滅茶苦茶になって脳に障害が残ったり、ひどければ死に至るかもしれない。実際これまで誰もそれを試したことはない。だから、その答えはまさに闇の中なんだ」

ヤサコはそれを聞いて背筋が凍り付くような思いがした。これまでは漠然と電脳体分離中にメガネをはずしてはいけないと考えていたが、理論的に説明されるとその危うさを思い知ったような気分になる。

「話を戻しましょう。これで肉体の脳と電脳体は不可分な存在であることが実証されましたよね。なら、永遠の命などというものが単なる幻想だということが明らかになったじゃないですか。肉体が死ねば電脳体も生きられないのですから」

これでようやく本題に入れると思いながらイサコが訊ねた。

「その疑問にはあまりに簡単に答えられるから拍子抜けするかもしれないけど、実質的な永遠の命は既に現代医学によって実現している」

「それはどういう意味ですか？」

「昔から生命維持装置の研究はなされてきた。体をチューブだらけにするような大掛かりな装置があれば、人は永遠に生きられるようにはなっている」

それはたまに映画やドラマでも題材にされてきた。そういった装

置があるということはこの中の誰もが知っている。
「問題はそれじゃないでしょう。確かに実質的な永遠の命は実現しているかもしれないですけど、でも、機械につながれてかろうじて生を保っている人の脳は何も感じていないはずですよね。それを果たして“生”と呼べるのか」
「そう。それはあくまで“生”のない生。肉体をいかに生き延びさせても、脳が働いていないのであれば、それは“死”と定義されるのではないか。研究者達は結局その問題にぶつかった。延命の研究は、脳を永遠に働かせるにはいかにするかという方向に転換していった」
「それが実現したんですか？」
「この1、2年でね。ただし、それは肉体の生存と両立はできなかった」
直樹はようやく吸い終えたタバコを携帯灰皿に押し込んだ。
「生々しい話になって申し訳ないけど、それをするには肉体から脳だけを取り出す必要があるんだ。手術で頭を開いて取り出した脳を、今度は微弱な電流が流れている培養液の中に浸す。最新の研究で完成した培養液は脳の老化を止め、電流が思考を刺激し、脳は永遠に生きられることが実証された」
フミエやアイコはその話を顔をしかめながら聞いていた。しかし、これでようやく直樹の言う永遠の命の真実が見えてきた。
「……なるほど。脳は肉体という器から取り出されて永遠を得た。しかし脳そのものを取り出したところで、それが永遠の命として認知されるはずがない。それは思考だけが残された闇で、“生”を実感しようもない。ただ、その取り出した脳を電脳体に接続させれば……」
どこか辟易したように言葉を紡ぐイサコに対し、直樹の目はどこか輝かせるように引き継いだ。
「真の永遠の命が完成する。電脳体ならビジュアルを作り替えるのも簡単だ。その人は自分が一番輝いていた時代に戻ることができる

し、さらに言えば別人として新しい人生を歩むこともできる。老いは存在しない。つまり、人生の絶頂期を永遠に謳歌することができるんだ」

この時、直樹とヤサコ達との間には温度差が存在していた。力説する直樹を、周りは少し痛い目で見ていたのだ。

「それが、アンタの理想なんですか」

ダイチが冷たい声で訊ねる。

「このシステムが完成すれば、必ず人々に求められるようになると思う。まあ、君たちのような若い子には理解できない話かもしれないけど」

しかし玉子はこの時妙な違和感を覚えた。直樹は確かに自分よりも年上だが、まだまだ青年の面影を残している。そんな彼にしては言っていることが年寄りくさい。あるいは、今のは人生に疲れている人の言葉だと玉子は思った。

「もしかして竹下さん。アナタは、その永遠の命の実現を目指した“新空間計画”の発案者じゃないですか？」

すると直樹は玉子の質問にうろたえたような声で返した。

「……どうして、わかったんですか？」

#21　深層への道筋　part10

ビルに差し込む陽光もいよいよやせ細り、互いの表情も判別できなくなってきた。大黒市のほぼ中央に位置するこのエリアは、角度の関係で周りのビルに陽が遮られてそこだけ闇が訪れるのが早い。鳥瞰すれば、夕焼けに染まる街の心臓部のみが黒く塗りだくられているように見えるだろう。

「私には、アナタはあくまで現実を実直に見つめて行動しているように思えます。でも、アンタの言う計画はともすれば現実逃避の手段となりかねません。アナタのような人がそんな夢物語に共鳴するのが想像できなくて」

玉子にはなぜ直樹が“新空間計画”を発案したのか理解できなかった。すると直樹は優しい口調でその理由を語ってくれた。

「……人には、他人の前では見せない一面が必ず存在するんですよ。僕がこの“新空間計画”の元になるアイデアを思いついたのは、僕自身の過去と関係しているんです」

彼はため息をついて続ける。

「自分で言うのもなんですが、僕は学生の頃、自分の所属する集団においては必ず頭角を現すような存在でした。県内屈指の進学校だった中学、高校でも、そして国内最高峰のエリートが集まる大学においても……その分、妬まれることも多かった。なんせ僕がいた集団というのは、みんな自分ができる人間だと思い込んでいるからプライドが高い。自分以上の存在を認められない人達ばかりです。僕に対する嫌がらせは絶えなかった」

ヤサコ達は昨日の直樹と管理室職員の進藤とのやり取りを思い出していた。あの時の言い合いを聞く限りにおいても、直樹が大学先輩だという進藤に妬まれていたことは容易に想像できた。

「でもまあ、一番ひどかったのは大学時代ですね。みんな分別のつく歳になるから、大学に行けばこういうこともなくなるかなと高校

時代は思っていましたが、まったく想像に反していました。それはすごかったですよ。なんせエンジニアの金の卵達がハッカーとなって攻めてくるわけですから、僕のプライバシーなんて保護されてないに等しかった。もちろん、それも一部の人たちの仕業なわけですけどね。僕はあの時、相当心が荒んでいたと思います。僕の愛する人にまで危害が及んだ時は、殺意すら覚えました。自分で命を絶たなかったのが不思議なくらいです」

「そこまで、ですか……」

今の直樹からは想像もできない過去だった。玉子以外は相づちを打つこともできないでいた。

「ただ幸いにして、僕も相当にプライドが高かった。こんなしょうもない連中に人生を壊されてたまるかという思いがあったからこそ、逆に燃えました。今思えば、僕も当時は相当イヤなヤツだったと思います。まあ、そのままエンジニアの道に進まなかったのは良かったかなと」

「では、そういった経験があったからこそ、警察官になろうと思われたんですか？」

「別に警察官にこだわっていたわけではありません。ただ、こんな連中が集まるような場所には行きたくないというのがありました。つまりビビってしまったんですよ。社会というのは大学とは比べ物にならないくらいの競争の世界。もしかしたら嫌がらせがもっとエスカレートするんじゃないかと。でも一方で、僕は誰かに媚を売るようなマネはしたくはなかった。あれこれ悩んだ末に、先生の紹介もあってこの道に入りました」

警察の中にあって、まだ整備が進んでいない電脳犯罪専門の部署をつくること。それが小野の提案だった。対策係の設立のために、小野は大黒市警にその必要性を訴えかけた。直樹にとって小野は、恩師という言葉では収まりきれないくらいの存在なのだ。

「そんなアナタが、“新空間計画”の発案者とは、ますますわかりません」

「あれはですね、エンジニアになることを断念した僕が、大学に於いて何か1つ功績を残そうと取り組んだ卒業論文が元になっているんです。“新空間”とは荒んでいた僕の理想を描いたに過ぎなかった。世の中には僕よりも理不尽な思いをしている人がいる。その人の為に、僕は逃避のための第二世界を作ろうと思った。永遠の命とは後づけです」

「アナタはその論文に取り組むことによって、現実から逃げないことへの充実感を得たんじゃないですか?それは皮肉なものですね」

イサコの言葉に直樹は苦笑いで返した。実際その通りだと直樹も自覚していた。しかし言い換えれば、自分の理想の実現のための方法を大学の論文レベルにまで組み立てることができる辺り、イサコは直樹の才能の高さがわかるような気がした。

「それは、猫目技師や小此木医師の研究を土台にして考えたものなんですか?」

玉子が訊ねる。

「いえ。当時おふたりの研究は一般的には認知されていませんでした。電脳体分離の存在も学生である僕たちには知り得ません。僕の場合、おふたりの研究の一端を知る小野先生の知恵を借りながら仕上げていったというところです」

「では、猫目技師と小此木医師の研究は去年の事件の時にはじめて知ったと?」

「ええ。あれには驚きました。おふたりの研究にではなくて、自分の研究が十分実現可能なものだと知ったからです。そこから歯車が狂いだしてしまうんですけどね」

「と言うと?」

「僕の卒業論文は結局、実現不可能ではあるが、将来的に一縷の可能性もあるとして合格ラインギリギリで通りました。それも3年前の話です。ところが、去年の事件で発見された資料によると、僕の研究は猫目技師と小此木医師の研究にかなり似通っていることが判明しました。いえ、さらに言えばそれを越えるものだと、今のメガ

マス金沢支社のプロジェクトチームの方が目をつけられました。その方は大学を通じて小野先生とコンタクトをとり、先生はあの卒論のアイデアをそのまま提供してくれないかと僕に依頼されたのです」

その言葉を聞いて玉子にはすべてわかった気がした。直樹がなぜダイチ達をだましてまで“新空間計画”の実験に加担していたのかも。

「ダメだと思っていた自分の研究が認められて、アナタはもう1度夢を見た。やはり自分は一流のエンジニアとして渡って行けるのではないかと。その思いから、アナタはアイデアの提供だけで引っ込まなかった。アナタが望んだのは、この功績をもってエンジニアとして迎えられることですね?」

直樹は頷いた。

「子どもの頃から描いた夢とは、なかなか捨てきれないものです。警察官になってからも、このままでいいのかと自問自答する日々が続きましたから」

「だから“新空間計画”の実験の片棒を担いだわけですね。この計画がうまくいけば、エンジニアとして迎え入れようと言いくるめられたんでしょう?そうしてアナタは体のいい工作員になった」

「どう受け止めてもらっても結構です。僕も決して正しい事だとは思っていませんでしたから」

直樹のその言葉にはダイチが黙っていなかった。

「正しくない方法で結果を得られて満足っスか?」

直樹は少しだけムッとしたように返す。

「大人と子どもでは住んでいる世界が違うんだよ。それは君もこれからイヤになるほどわかる」

「大人になれば、そうやって言い訳ばっか達者になるもんなんですかねえ」

すると直樹はもう反論することをやめた。この状況で自己正当化しようとすることこそが惨めだと思ったからだ。

「さっきの質問に戻ってもいいですか?永遠の命の実現という“新

空間計画”の目的や、アナタがその発案者であることはわかりました。でも、なぜ新しく空間を作る必要があったんですか？」

イサコが気まずい空気を取り繕うようにして訊ねた。

「猫目技師と小此木医師の研究は、あくまでイマーゴの子どもが一時的に暮らすことができる医療空間を作ることだった。そもそも大人が暮らすことができないのなら、その医療空間を再現したところで永遠の命という目的が達成されるはずがない。空間そのものを作りかえる必要があったのはそういうことなんだ」

「しかしそれが可能なら、そのおふたりが既に新空間と同じものを完成させていてもおかしくありませんか？患者をイマーゴの子どもに限定するのはあまりに適応範囲が狭いですよね」

「その通りです。現に、おふたりはその問題に着目して改良版の医療空間を完成させていて、それが新空間の原型になった。プラス僕が論文で提唱した技術を踏まえて、プロジェクトチームは新空間をプログラムしていった。そうして、年齢やイマーゴの有無に関係なく電脳体が永遠に生きられる空間が完成した」

どこかで聞いたことのある話だなと玉子は思っていたが、ここで思い出した。メガマスで空間制御システムの実験を行った日、一郎は猫目技師と宏文が目指したものについて説明していた。それは、イマーゴによる電脳医療を万人が受けられるようにするというものだった。そしてそれが現在、メガマス本社が進めている電脳医療補強プロジェクトとしてそのまま引き継がれている。しかし直樹の話によれば、すでにその技術は金沢支社が実現させているようだ。先ほどの話では、金沢支社は封印されていた猫目技師と宏文の研究資料を入手しているという。そこに新空間の原型となった改良版の医療空間のことが書かれていたのなら、金沢支社の技術のみでそれが完成したというのも辻褄が合う。

そこで玉子はある疑問が浮かんだ。

「なぜそのおふたりの改良版の研究は封印されていたのでしょうか？イサコの言うように、精神医療の対象がイマーゴの子どもだけと

いうのは、あまり有用な医療技術のようには思えません。おふたりも改良版を世に出すつもりだったはずです」

「そうですね。僕もそう思っています。実際のところ僕はその資料を直接見たわけではないのでなんとも言えませんが、想像するに改良版に不備があったんじゃないでしょうか。そのままの形でメガマスに回収されるのを嫌った猫目技師は、コイルドメインの深層に封印した」

直樹の説明には玉子はあまり釈然としなかった。他にもっと理由があるように思えてならなかったが、それを追及するのは今すべきことではないと思い直した。

「ミチコを、その新空間にミチコを存在させる理由ってなんなんですか？」

イサコは直樹を睨みつけるようにして訊ねていた。それこそが自分が今もっとも訊きたいことだと言わんばかりに。

「……ミチコについては、実は僕も知らなかったんだ。小此木さん。このビルで起こった通路の暴走事件の時、君は“あっち”の世界から戻って来てミチコのことを口にしたね。あの時からもしかしたらと思っていたけど、先生に訊いても答えは返ってこなかった。その存在を確信したのは、ついこの間の金沢での事件の噂をネットで見て、そして昨日の事件が起こったからだ」

「じゃあ、具体的にミチコが昨日の事件でどう関わったのかもわからないんですね」

ヤサコの質問に直樹は力なく頷いた。これまで自分の素性を偽ってきたことよりも、ミチコについての情報を持ち合わせていない事の方に罪悪を感じているかのようだった。

「結局、アナタが昨日の現場やここで仕掛けていた暗号は何のためのものだったんですか？話を聞いている限りでは、アナタは既にプロジェクトの蚊帳の外に置かれているようですが」

玉子は一番はじめの質問に戻した。

「原川君を助けるためですよ。その方法を先生に聞いても口を開い

てくれなかったので、自分でなんとかするしかないなと」
　直樹は昨日の事故の後、小野にコンタクトをとった。しかし小野からは今は動かないようにとの言葉しか返ってこなかったのだ。
「それで新空間とのアクセスコードを含んだ暗号を仕掛けていたんですか。例のブラックホールが再び現れることを期待して」
「それしか方法がないんです。メガマスの本社が原川君を救えるとも思えませんし、プロジェクトチームがそこで動くとも思えません。このままでは彼は永遠に眠ったままだ」
　ヤサコはその言葉にどきりとした。直樹の話したことが本当ならば、ハラケンは永遠にその空間で生きることとなり、現実世界に帰ってくることはない。そのことを改めて意識したのだ。
「バカな。ブラックホールが開けばまた新たな被害者が出るかもしれないんですよ。アンタのしていることはただのテロ行為だ。そのことにどうして気付いていないんですか！」
　イサコが強い口調で言った。それは先ほどフミエにも言ったことと同じだった。
「ならどうしろと？今のところこれが彼を救う唯一の方法だ。新空間は空間の深層に存在している。君はかつての“あっち”のように、キラバグのようなものでアクセスができるとは思っているようだけど、そう甘いものじゃない。おそらく新空間からの何らかの干渉がない限り、通常空間との間に道は通じない。ある程度の偶然に期待をかけるしかないんだ。僕が仕掛けているのはそのための条件を整えるための暗号だ。新たな被害者が出てしまっても、それは後で原川君と一緒に救い出せばいい話だ。そのためにまずは、新空間の反応を調べようとしていたんだ」
　直樹の言葉にダイチとガチャギリは閉口した。今の言葉は昨日自分たちがメガばあに言った言葉とまるっきり同じだ。自分たちが新たな被害者になったとしても、それがハラケンを救う事につながればいい。ダイチ達は昨日そう言った。しかし、この直樹のために自分たちが被害者になることはご免被りたかった。

「そんなこと考えていたんですか。やっぱりアンタに原川は救えません。この街で私が起こしてしまった事故のこと、アンタなら知っているはずですよね？」

イサコはとどめの一言を直樹に突き刺す。すると直樹は愕然とした表情になった。

「……君の言いたいことはわかる。そうか。だから君は暗号を解除していたのか」

「私も、あの暗号のおかげでひどい目を見ましたから」

イサコは金沢での事故を思い出して言った。直樹も何となく納得したような表情になると、しばらく沈思黙考した後、廃ビルを後にしようと歩き出した。

「待ってください。どこに行くおつもりですか？」

玉子が引き止めると直樹は振り返って言った。

「もう1カ所、暗号を仕掛けた場所があるのでそれを解除しに」

「昨日の現場の暗号なら既に解除しましたが」

「いえ。それはわかっています。僕が新空間の観察のためにモニターしていた場所は、実はもう一つあるんです」

「駅向こうの廃工場ですか？」

フミエが訊ねる。

「そう。君と小此木さんはあの場所でおかしな体験をしたようだね。その時の話はまたおいおい」

「待ってください。これからアナタはどうするおつもりですか？私達もケンちゃんを救おうと考えています。できれば、アナタのようなスキルのある方の協力がほしいのですが」

しかし直樹はため息をつくようにして答えた。

「できうればそうしたいですが、僕のようなクズの協力がどれほど役に立ちましょう。できるかぎりの調査は尽くしますが、あまり期待しないでください」

そうして今度こそ直樹は廃ビルを出て行った。

もう日は沈んだようだった。廃ビルには残された7人のシルエッ

トだけが浮かび上がっていた。

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ１１

ヤサコ達は重い足取りで廃ビルを後にしていた。直樹の暴露は全員が色々な意味でショックを受けていたが、もっとも影を落としたのは、“新空間計画”に関わっていた彼でさえ、ハラケン救出のためのまともな手段を有していなかったことである。最初から困難なことだとは覚悟していたが、改めて自分たちの手でハラケンを救い出すというのが無理難題であることが身にしみてわかった。

「さあ、アンタ達は今日はここで帰りなさい」

陽の落ちきった中津交差点にさしかかった時に、玉子はフミエやダイチ達に向かって言った。

「なんでだ?今日はこれからメガシ屋で作戦会議をするんじゃなかったのかよ?ナメやデンパにもそう伝えてあるんだが」

ダイチが異議を唱えるように返す。

「直樹さんの話で、一気に新しい情報が増えた。まずはメガばあに今日のことを含めてこれまでのことを話そうと思うの。室長にも直樹さんのことは報告しないといけない。アンタ達に何をしてもらうか決めるのは、まずは私達が事件のことを整理してからにする」

「またそうやって大人だけで決める気かよ」

「アンタ達も今日は勝手にあの廃ビルに乗り込んでたじゃない。直樹さんの仕掛けた暗号が起動していたら、アンタ達も危なかったのよ」

「それはアイツが悪いだけで、オレたちが反省しないといけないわけじゃないだろ」

玉子は小さくため息をついた。

「あのねえ。昨日起こったことは事故なんかじゃなくて、人為的な事件なの。つまりどこかに新空間への扉を開いた犯人がいるってことよ。それは直樹さんじゃなくてまた別の人の可能性が高い。こんな時に勝手にうろうろしてると、昨日のこの子達の二の舞になるこ

とぐらいわかるでしょう?」
　この時ヤサコ、フミエ、アイコの3人は、昨日のことを後悔しているような表情になった。ダイチもそれを見ると折れるしかなかった。
「……それはわかるけど。でもいてもたってもいられなくなったんだって。ハラケンはオレたちの親友だ。そのハラケンを連れ去られて、じっとしてるなんてできねえよ」
「気持ちはわかるけど、もう少し冷静になりなさい。ケンちゃんが帰ってくる前に、これ以上被害者を出すわけにはいかないの」
「わかったよ。頭は冷やす。それで、いつオレたちの作戦会議をやらせてくれるんだよ?」
「そうね。とりあえず今晩、メガばあと室長に相談するから、明日の朝にしましょう。それなりの人数になるから、鹿屋野神社辺りで」
　玉子は確認するようにダイチやフミエの顔を見た。ダイチはガチャギリの、フミエはアイコの顔を見てそれでいいか確認する。
「わかったわ。明日の朝ね」
　フミエとアイコが頷いた。
「じゃあ、親父に頼んで社務所使えるようにしとくわ」
　ダイチが言って、ガチャギリも帽子のひさしを下げて了解の合図を送る。
「すまないな。じゃあ、細かい時間はまたメールする。気をつけて帰るんだぞ」
　そうしてダイチとガチャギリ、アイコとはそこで別れた。メガシ屋への角を曲がるところでフミエとも方向が逆になるのでそこで別れる。帰り道はバイクを押す玉子とヤサコ、そして玉子と一緒に行動しなければならないイサコの3人だけとなった。
「小此木、体は大丈夫か?すまなかったな、ちょっとした寄り道のつもりであのビルに行ったが、あんなことになって。アンタが病み上がりってことを忘れていた」
　イサコがヤサコの体を気遣って声をかけた。

「平気よ。まあ、体はね……正直、あの人があんなことをしていたのはショックだったけど」
「そうだな、私もイサコからその推理を聞いた時は信じたくなかった」
玉子がヤサコに返す。
「あの人が私達に優しかったのは、私たちを騙しているっていう罪悪感があったから？それとも」
「わからない。ただ決して悪い人ではないんだろう。話を聞く限りでは、あの人も利用されていたクチだ。本当は“新空間計画”のことも口に出してはいけなかったんだろうけど、私たちには教えてくれた。昨日の事件で人一倍責任を感じているんだろうな」
「あの人、今後は期待できそうか？別れ際はかなりネガティブなことを言っていたが、“新空間計画”に関わっていて、スキルもあるのなら是非協力してもらいたいが」
直樹のことはイサコも気にかけていた。新空間へのアクセスコードを仕掛けるという危険な方法でも、ハラケンを救おうとしていたのは事実だ。
「そう、私もあの人と大谷さんが組めばかなり頼もしい助っ人になりそうな気がするんだけど」
「大谷さん、って誰？」
ヤサコがその名前に反応して訊ねた。
「ああ、説明してなかったな。多分近いうちにアンタ達にも紹介することになると思うが、まあ一言で言うと、やたら暗号スキルの高い雑誌記者だ」
「……？どうして雑誌記者さんが暗号を使えるの？」
「それが私達にもよくわからないんだ。雑誌記者の他にも何か別の顔があるんだと思うが、とにかく金沢で事件が起きた時からずっと私達に協力してくれたんだ。胡散臭い男だが、一応信頼はできる」
「天沢さんが言うのなら大丈夫そうね」
するとイサコは苦笑した。

「人を人間不信者みたいに言ってくれるな」
「そういう意味じゃなって」
ヤサコも少し頬をほころばせる。退院してからずっと気が張りっぱなしだったところでようやく笑顔が出て、イサコは安心した。

3人はヤサコの自宅、そしてメガシ屋に到着した。
「ただいま」
ヤサコが玄関の音声キーに呼びかけて扉が開く。そう言えば以前、ヤサコの声を盗んでモジョ達をここに忍び込ませたこともあったなあと、イサコは懐かしい気持ちになった。
「やあ、遅かったね。待ちくたびれたよ」
すると玄関にはシュウイチが出迎えに出て来た。その脇には嬉しそうに京子も引っ付いている。
「シュウイチ君。久しぶりじゃない。そっか、今日お父さんと一緒に来るって言ってたもんね」
「ああ。1年以上会ってなかったかな。体の方は大丈夫？入院してたんだろ？」
「平気よ。ごめんね、心配かけちゃって」
2人のやり取りをイサコは何となく眺めていたが、確かに見比べるといとこ同士だけあって雰囲気が近いなと感じた。
「で、イサコに玉子さん。だいぶお疲れみたいで」
「まあな。今日は本当に色々あったし、実際昨日から2、3時間しか寝てないしな」
「とりあえず、玄関で立ち話もなんだし上がって」
ヤサコはとりあえずイサコと玉子を中に促し、リビングへの扉を開けた。
「シュウ兄ちゃん！ゲームの続きやろ！」
京子がはしゃいでシュウイチの袖を引っ張った。
「うん？ああ、また後でゆっくり遊んであげる。でも今はちょっとお姉ちゃん達と大事な話があるんだ。京子ちゃんはお母さんのお手

伝いでもしようよ」
「随分なつかれてるな」
イサコが穏やかな声でシュウイチに訊ねた。前にシュウイチのことをヤサコから面倒見のいいお兄さんと聞かされていたが、その通りなんだなと思う。
「いつも会うとこんな感じだよ。でも、京子ちゃんも小学生になってしっかりしてきたね」
シュウイチが京子の頭を撫でる。その京子は若干戸惑ったような表情でイサコの方を見た。
「えーと、暗号のおねえちゃん？」
「そうよ京子。前に会ったことがあるでしょ？天沢さんよ」
京子は頷いたが他の人にそうするように無防備に近づくことはしなかった。京子もイサコからは別の人とは違うオーラを放っているように見えるのかとシュウイチは思う。イサコも前にここで京子に会った時のことを思い出した。あの時京子は、デンスケの異変を相談するためにおそるおそるイサコに声をかけてきたのだ。
「まあ、イサコねえちゃんでいいと思うよ」
シュウイチは京子にそう言い聞かせると、京子を母の手伝いに行かせた。母の静江はシュウイチが泊まる2階の部屋に掃除機をかけている最中らしかった。
「シュウ。メガばあは？電脳工房か？」
玉子が確認する。
「ええ。時間が結構あったんで、金沢での事故については大体説明しておきました」
「それなら話が早い。ちょっと今から話してくる。アンタ達はここで待っていてくれ」
「2人で話し合うんですか？そう言えば今日はもっと大人数が来るってオバあちゃんは言ってましたけど」
話が違うなと思いながらシュウイチが訊ねる。
「今日また事件に進展があったんだ。オバちゃんはそのことについ

てメガばあと相談することがあるらしい。それについては私や小此木からもアンタに説明することにする」
そこでイサコの言葉に、シュウイチは何となくわかったような表情になって頷く。
「わかった。オバあちゃんは今腰を痛めてるらしいので、いたわってあげてください」
「ああ、そう言えば昨日電話でそういうことを言っていたな。了解だ」
そう言うと玉子は廊下の奥の電脳工房に消えて行った。残った3人はリビングのソファーに身を沈めた。
「シュウイチ君、お父さんは？」
「昼頃ここに着いて僕を降ろした後、すぐにメガマスに向かったよ。それでまだ帰って来てない」
ヤサコは時計を確認する。時刻は午後7時前になろうとしていた。
「遅かったわね、優子。結局来たのは天沢さんと原川さんだけなのね？」
その時2階の掃除を終えた静江がリビングに戻って来た。部屋の片付けの残りは京子に任せたようだった。
「うん。ちょっとあの後、色々あって」
「そっか。今日は大人数って聞いていたから諦めてたけど、お客さんが2人しか増えてないんだったら全然いけそうね」
「なんの話？」
「晩ご飯よ。今日はシュウイチ君も来てくれたし、優子の退院も祝ってカレーを作ったのよ。たくさんあるから、天沢さんと原川さんも一緒にどう？お父さんは今日も遅くなるみたいだからいないけど」
静江は3人の元に来て訊ねた。
「え、ああ。そうですね……」
イサコは玉子のいないところで勝手に決めていいものか思案する。
「いいじゃない天沢さん。一緒に食べましょうよ」
「そうだよイサコ。どうせこれから玉子さんとファミレスでも行く

つもりだったんだろ?それならみんなで楽しく食べようよ。って、客である僕が厚かましいことを言ってすみません」

ヤサコが嬉しそうに誘い、シュウイチもまるで我が家にいるかのような口ぶりで言った。

「いいのよ。シュウイチ君は家族も同然じゃない。これから一週間、なんの遠慮もしなくていいからね」

「恐れ入ります」

シュウイチがいるだけで小此木家の雰囲気もだいぶ華やぐようにヤサコは感じた。イサコも張りつめていた気が和らぐような気持ちになり、このメンバーで是非食卓を囲みたいと思った。

「じゃあ、私たちの分もお願いします」

「わかったわ。今からまた煮込むから、もうしばらく待ってね」

と言うと、静江も楽しそうにキッチンに向かった。

「イサコ、玉子さんと泊まる寮っていうのはどの辺にあるの?」

シュウイチが確認する。

「ああ、ここからは近い。この家の前の道を北に10分ほど歩けば着く」

「そうか。じゃあ呼べばすぐにここには来れるんだね」

「私一人だけで寮は出入りできないけどな。鍵を握っているのはオバちゃんだ」

事情を詳しく知らないヤサコは、なんでそんな不便なことをイサコに強いるのだろうと思った。

「どうして天沢さんはオバちゃんに監視されてないといけないの?」

「あ、ああ。金沢の事件で私も新空間に入ったってことは後で詳しく説明するが、その新空間っていうのはそもそも金沢支社にとっての機密だったらしい。さっきの警官はさらっと暴露してくれたけど」

「警官?なんのこと?」

今度はシュウイチが訊ねた。

「それも後できちんとアンタに説明する。それで、金沢の事件でその機密を見てしまった私は、事件の関係者であるもう1人の少女と

ともに、金沢支社に狙われる危険があったらしい。だから最初はオバちゃんじゃなくて、メガマス本社の体つきのいいボディガードが私を見張っていた」

「あれは正直うっとうしかったね。見てるこっちも気の毒だったよ」

シュウイチの話も挟みながら、イサコはさらに続けた。

「ところが、私と同じように本社のボディガードに見張られていたそのもう1人の少女が、姿をくらませるという事件が起こったんだ。状況から、それは誘拐とかじゃなくて、その少女の脱走だった可能性が高いらしい」

「なに?その映画みたいな話」

「私にも真相はさっぱりわからない。でもそのおかげで、本社は私も逃げ出すんじゃないかと勘ぐったらしい。それで24時間体制の監視が必要になったんだが、私にもプライバシーがある。ワケのわからない男に付きまとわれるのはうんざりだったから、オバちゃんにその役を買って出てもらったんだ」

ヤサコは話が壮大過ぎると一瞬怖くなった。イサコは何も怯えてはいないようだが、誰かに狙われていると聞いただけでこちらが不安になる。しかしこれも他人事ではなく、自分たちも昨日新空間に入り込んだ。自分も含め、フミエやアイコ、そして意識の戻らないハラケンも狙われる可能性があるのだ。

「そうそう、イサコ。今朝車の中でおじさんから聞いたんだけど。サオリの家族のこと」

「何かわかったのか?」

イサコはシュウイチの方へ身を乗り出す。新空間やミチコの生みの親で、そしておそらくメガマスへの復讐として今回の事件を首謀したのは、サオリの家族であるとイサコは踏んでいた。

「うん。わかったのは、サオリの両親は3年前に離婚していること。サオリは母方に引き取られたこと」

「サオリの姉とともに例の交通事故に遭った人か……」

「父親の方は戸籍が改ざんされていて、居所は掴めなかったらしい。

同じ理由でサオリに他の兄弟がいた形跡もない。サオリの旧姓さえもわからないって」

ほとんど何もわからなかったんだなとイサコは頷く。

「サオリの旧姓、それはサオリの両親が結婚していた時の名字か。それもわからないとはな。結局手がかりは、桐野っていう名字だけ。それじゃあ彼女の父親のことは何も辿れないな」

イサコが諦めたようにうなだれたその時、ヤサコが何かを思い出したように反応した。

「ちょっと待って、桐野？」

「何？優子ちゃん」

シュウイチが何事かとヤサコを見る。

「さっきから名前が出てる、サオリっていう女の子。その子の名前は桐野サオリなの？」

「そうだけど……」

「どうかしたのか？小此木」

イサコも顔を上げて不思議そうにヤサコの方を向く。

「うん。聞いたことのある名前だなと思って」

するとイサコとシュウイチで顔を見合わせた。

「人違いじゃないのか？その少女は私たちと一緒に金沢にいた、さっき言った金沢での事件での関係者だ。聞いたことがあるのなら、アンタの父がそう言っていたのかも」

「でも、私は出張中にお父さんと話をした覚えはないわ。その名前もどこか違うところで聞いたような気が……」

ヤサコは懸命に記憶の糸を辿る。その間イサコとシュウイチは半信半疑でヤサコが思い出すのを待っていた。そしてヤサコは該当する人物を思い出したようだが、申し訳なさそうに切り出した。

「ああ、ごめん。それ人違いかも。私が聞いたのは桐野詩織ちゃんだった。似てる名前だったからつい」

ところがイサコとシュウイチは飛び上がるようにして驚いた。

「桐野詩織！？バカな！そんなはずがないだろう！」

「な、なになに!?急にどうしたの天沢さん?」
突然スイッチが入ったイサコに、ヤサコは怯えるように返した。
「ちょっとイサコ落ち着いて!単なる人違いっていう可能性もある。冷静に確認しよう……優子ちゃん。その桐野詩織さんとは会ったことがあるの?」
シュウイチがイサコをたしなめて座らせてから訊ねた。
「うん。名前は本人から聞いたの」
「その子の容姿は?何か特徴的な部分はあった?」
「そうねえ。ああ、髪が長かったわ。腰くらいまであったかも。目が細くてそんな髪型だから、ちょっと日本人形っぽく見えた」
シュウイチは聞いているうちに頭を抱えるような姿勢になった。
「イサコ。これヤバいよ。どうなってんの?」
「……私に聞かれても困る」
2人の反応の意味するところを測りかねてヤサコが訊ねる。
「何?その子とそのサオリさんが何か関係あるの?」
「ああ。大アリだ。落ち着いて聞いてくれ。私の聞いた話によると、桐野サオリの姉である詩織さんは、去年の夏に金沢で交通事故に遭って、今も意識不明の重体らしい」
イサコの言葉に対し、ヤサコはしばらく言葉が出なかった。やっとのことでのどの奥の方からかすれた声を絞り出す。
「意識不明?そんな、私の会った彼女は健康そのものだったよ。大体、それも同姓同名の別人かもしれないし」
「いや、さっきアンタのあげた容姿の特徴が、サオリにそっくりなんだ。つまりアンタの会った詩織さんは、間違いなくサオリの姉だと思う」
「サオリは姉としか言ってなかったけど、そこまで似てるってことは、もしかしてサオリと詩織さんは双子?」
「……名前からしてそうかもしれないな」
イサコとシュウイチはある点で納得し、ある点では未だ信じられずにいた。今までに聞いた話のどこまでが真実で、どこまでが虚構

なのかまったく掴めない。
「優子ちゃんの会った詩織さんは、実はサオリだったってことは？」
「なぜ初対面の小此木にそんなウソをつく必要がある。いや、そもそもわからないことだらけだ。もっとその時の状況を詳しく知る必要がある。小此木、その詩織さんといつどこで会ったのか話してくれないか？」
「……わかったわ」
ヤサコはこの後、先月廃工場で桐野詩織と出会ったときのこと、その時起こった怪奇現象についても詳しく2人に説明していった。

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ１２

ヤサコ達が家路についた時刻、メガマスでは昨日から続く緊急幹部会議の続きが開かれていた。相変わらず打つ手すら見いだせない中で、本社とは協力関係にある大谷がそこに招かれた。暗号に精通する彼なら、打開策を思いつくかもしれないという一郎の案だった。ところが、幹部達の興味関心は大谷の高い暗号スキルに向いた。幹部達の質問は、どこでそのスキルを磨いたのかなどに飛び火していた。

「オレ自身の話を聞く為にわざわざ呼びつけたんですか？それなら金沢でさんざん取り調べられましたけど、最終的にはオレの素性を詮索しない代わりに、オレもアンタ方に協力するという契約を交わしたはずなんですけどね」

話が違うじゃないかと大谷はそろそろご立腹のようだった。

「なぜそんな簡単な質問に答えられないんだ？これはお前の言葉をどれほど信用できるかどうかという問題に関わってくるんだぞ。それ以上の詮索はこちらもするつもりはない。ただお前の暗号の出所さえ教えてくれたらな」

空間管理室本部長が食い下がるように言った。猜疑心の塊のような彼は、風貌の悪い大谷をはじめから疑っているようだった。

「それも、そのスキルを与えてくれた方と契約しましてですね、言えないことになっているんですよ」

それ以上のヒントは出さないと言わんばかりに、大谷はため息をついた。

「それがそもそも怪しい。お前にスキルを与えてそれを明るみにしたくないと考えるのは、金沢支社のプロジェクトチームぐらいのものだろうが。お前さては連中の回し者だな」

「だったらノコノコとこんなところに出向くわけねえだろマヌケ。ちょっとは乏しい脳みそ使って考えろよ」

大谷は怒っているというより呆れたように返した。しかしその侮辱に対して本部長が黙っているはずがない。この場所に大谷を呼び寄せた一郎は、何ともまずいことになったなと頭を抱えていた。

「無礼者！目上の者に対して何たる口の聞き方だ！」

「目上も何も、オレはメガマス社員じゃない。年功序列を持ち出す前に、ハナからオレを疑っているアンタの方が失礼千万だ。それにな、オレは本来メガマスの悪口を書いてメシ食ってるんだぜ。これまでのアンタらの会議の内容を逐一記事にしたら、既に風前の灯火のごとき現政権は一日にしてぶっ飛ぶだろうな。アンタはそれがお望みで？」

挑発的な大谷の態度に、本部長は猛犬のように唸るだけだった。そして怒りの矛先は一郎へと向けられた。

「小此木！なぜこんな男をこの会議に連れて来た！あわよくばこの危機を抜けられても、この男にメガマスは一生揺すられ続けるぞ！」

「私は彼のスキルの高さを買っています。そんな彼に事件解決のためにお知恵を拝借しようと考えただけです。この際彼の暗号の出所には目を瞑りましょう。彼の言うように、彼がプロジェクトチームの人間なら単身ここに出向くはずはないと思われます」

「さすがに小此木さんはわかっていらっしゃる」

一郎は大谷のことを信用していた。会って話を聞く限り、彼も早急な事件解決を目指していることを感じられたからだ。

「甘い認識だな。神崎は大胆不敵な男だ。何せヤツが本社にいた時から、その新空間とやらは開発されていたんだからな。この男も神崎の一味に違いない。百歩譲ってそうでなくても、この男はメガマスにとって害悪な存在であることに違いない」

「オッサンオッサン。オレはな、アンタにだけはそう言われたくねえよ。だいたいなあ、メガマスが清廉潔白な企業ならオレだってこんな風にたかったりしねえって。アンタみたいなモラルの欠如した人間がいるから、オレもしつこく付きまとうんだよ。今回なんか、アンタのしでかしたことに対する尻拭いを手伝おうって言ってんだ

ぞ。こんなおいしい話、普通はあり得ないからな」
　そこで本部長は困り果てて桝田の方を見やった。一つ言えば十倍になって返って来るかのような大谷のトークにもう付き合っていられないという様子で、後は社長の桝田が大谷のことをどう判断するかにゆだねたようだ。
「……確かに彼に全幅の信頼を置くというのは難しいかもしれませんが、しかし話を聞くだけなら問題はないでしょう。彼の意見を聞いて、後は我々がどう判断するかです」
「さすが社長は器が大きいですね。心が寛大だ」
　にこりと桝田に微笑む大谷に対し、本部長は面白くないという風に鼻を鳴らした。その桝田も、大谷のチャらけた態度には好感を持っていないようだったが、今は手段を撰んではいられないというのが正直なところだった。
「じゃあ大谷さん。今回の事件の解決のために、我々は何をすべきとお考えですか？」
　場を仕切り直すように一郎が訊ねた。
「早急に答えを下すことはできないですね。とりあえず昨日の事件の資料をお見せ願いたい」
「ほらこれだ。どうせ我々の調査がどこまで進展したのか探りにきただけだろう。この男に資料を渡す必要はない」
「意見を求められた者として正当な要求をしただけだろ。そこにアンタのうす汚い所行がつぶさに記されてるのは百も承知だ。でも今のオレはアンタなんかに興味はない。あるのは、今も電脳体が戻って来ないという少年をいかにして救うかということだけだ」
　大谷は先ほどよりも強い口調でピシャリと言い放つと、会議室のざわめきも消えた。
「……それは構いません。小此木さん。彼に資料を渡してください」
　これは大谷に理があると桝田は思った。
「わかりました。早急に用意します」
　一郎はそう言うと、資料をまとめるために一度管理室本部に戻ろ

うと席を立った。その時だった。
「空間管理室からの緊急報告です！」
会議室のドアを蹴破るかのような勢いで情報取り次ぎの香川が飛び込んできた。
「なんですか香川さん？」
「それが、未知の暗号の使用者とおぼしき人物を管理室が特定したと」
その時幹部達の目は大谷に向けられた。
「この男のことじゃないのか？」
本部長が決めつけたかのうように確認する。
「いえ、違います。報告によるとその人物は」
「ちょっと待ってください。それってもしかして、警察関係者ですか？」
言いかけた香川を遮るようにして、大谷が訊ねた。
「え？ええ、その通りです。なぜアナタが御存知なんですか？」
香川は不思議そうな表情で返した。
「待て、香川。まずお前に確認する。未知の暗号は新暗号のことでいいな？その使用者が警察関係者とはどういうことだ？」
本部長が鋭い目つきで訊ねる。
「管理室の報告では、サーチマトンの撮影した画像にその人物が新暗号を仕掛けているところが映っていたと。その画像を解析した結果、その人物は大黒市警電脳犯罪対策係係長、竹下直樹であることが判明しました」
「竹下直樹だって？彼が新暗号を？」
香川の報告に真っ先に反応したのは一郎だった。
「知り合いなのか？小此木」
「え、ええ。例の廃ビル事件の時に電脳犯罪対策係と合同捜査を行った関係で。それに彼は、中津交差点の交通事故の再調査を担当していたはずです」
会議室はまた大きくざわめき始めた。

「そんな男が新暗号を……そして大谷。なぜ新暗号の使用者が警察関係者であると知っていた？」
「いや、昼間に個人的な調査をした時に、その新暗号を見つけましてね。状況からその暗号の主はその警察官である可能性が高いという推理をしていたんですよ」
「なぜそんな大事なことを黙っていた？」
「聞かれなかったからな。っつうか、アンタがしゃべらせてくれなかったんだろ」
本部長はまた鼻を鳴らしたが、今は大谷にかまっている場合ではないと思い直す。
「まあいい。とにかくその男を引っぱりだすよう手配しろ。新暗号を使えるということは、プロジェクトチームの一味である可能性が高い。抵抗された場合手段を選ばなくてもいい！」
「おいおい。相手は仮にも警察官だろ。そいつはまずいんじゃねえのか？」
大谷は釘を刺すように言ったが、本部長は聞く耳をもたなかった。
「やかましい！外野は黙ってろ！さっさと行け香川！」
「は、はい！」
香川はまたすぐに管理室本部に戻っていった。
「本部長。確か電脳犯罪対策係の特別顧問は、小野隆だったはずです。もしかすると彼も本件に絡んでいるのかもしれません」
本部長の隣にいた平松が耳打ちするように告げる
「なんだと！そうか、私もヤツは怪しいと思っていた。後でヤツのことも引っ張りだすよう手配しよう」
この報告で会議室は一気にヒートアップした。本部長などは、ついに新空間プロジェクトチームの人間を確保し、事件解決に一気に光明が見えて来たかのような浮かれようだった。
一郎は大谷に用意する資料をまとめるという口実のもと、その会議室をそっと抜け出していた。そして今の報告を伝えるために、玉子に電話をかけた。

「もしもし？小此木だ。今とんでもない情報が舞い込んで来た」
『室長？私の方もご報告することがありまして。今メガシ屋でメガばあと相談をしていました』
「君もか？じゃあとりあえず僕から先に言わせてくれ。管理室からの報告で、大黒市警の竹下直樹君が新暗号の使用者である可能性が高いことが判明した」
『え？』
電話の向こうで玉子はしばらく押し黙った。一郎はそのことにショックを受けているのだろうと思っていたが、そうではなかった。
『室長。実は私の報告もその件についてです。私は直樹さん本人からあの人自身が新空間計画に携わっていたことを聞きました』
「なんだって！？彼はやはりプロジェクトチームの人間だったのか？」
これには一郎の方が逆に驚かされた。
『ええ。早く室長にも報告しないといけないと思ったのですが、直樹さんから語られた情報が多過ぎて整理しておかないといけないと思いまして』
「そうだったのか……じゃあ管理室にそのことを報告したのは君なのか？」
『いえ。私ではありません。ああ、もしかすると大谷さんかもしれません。直樹さんを新暗号の使い手と推理したのはあの人です』
「いや、彼じゃないな。その報告を受けた時彼もここにいたが、そんな様子はなかった」
一郎は考え込んだ。これまで隠されてきた直樹の素性が、こうもあっさりと管理室の調査能力で割れたのが不思議だった。
『直樹さんはどうなるんですか？本社は動き出したはずですよね？』
玉子が少しだけ心配げな声で訊ねた。
「ああ。本部長は何が何でも彼をここに引きずりだそうと考えている。おそらくその取り調べも度を超したものになるに違いない」
『……そうですか。直樹さんにはこのこと、伝えた方がいいんでし

ょうか？』
　一郎にとっては意外な質問だった。
「まさか。彼がプロジェクトチームの一員であることは事実なんだろう？なら、僕達が彼をかばう必要はない。取り調べが行き過ぎないように僕が見張っていればいいだけだ」
『ですが、あの人は既にプロジェクトの蚊帳の外に置かれていると言っていました。昨日の事件については、本当に何も知らないと』
「まあ、詳しい話は後で聞こう。仮にそのことを彼に伝えたところで、本社の追っ手に彼が捕まるまでの時間が少しだけのびるぐらいだろう。余計なことはしない方がいい」
『わかりました。では後ほど』
　そうして玉子との電話は切れた。一郎は今になって、直樹が素性を隠していたことに対しての失望が湧いて来るようだった。

　その翌朝。直樹は出勤途中に本社の調査員に捕まり、本社に連れて行かれることとなった。

#２１　深層への道筋　ｐａｒｔ１２（後書き）

第２１話はここまでです。
次回第２２話もお楽しみに。

#22　出会いからのはじまり　Part1（前書き）

2027年　4月30日（金）大黒中学校創立記念日

#22　出会いからのはじまり　part1

「虚構が現実を浸食するというミチコの言葉は、私たちの知らないところで既に起こり始めていました」

　鹿屋野神社への集合時刻は朝の9時だった。イサコと玉子は昨晩、寮に帰ってからほとんどすぐに眠りにつき、その時刻に間に合うように7時には起床した。その後はそれぞれシャワーを浴び、昨晩の帰り道で寄ったコンビニで買ったパンで朝食とり、8時半に寮を出発。バイクで3分ほど走って小此木宅に着き、ヤサコとシュウイチと合流した。

「おはよう。よく眠れたか、小此木？」

「うん。なんだか疲れてたみたい。特に昨日は何もしなかったんだけど」

　苦笑いを浮かべるヤサコとは対象的に、若干疲れの表情を見せているのがシュウイチだ。

「アンタの方がお疲れに見えるぞ、シュウ」

　こちらは熟睡できてスッキリしているイサコが言った。

「いやあ。昨日は優子ちゃんが早めに寝ちゃったからさ、京子ちゃんの遊び相手は僕しかいなかったんだよ」

「あの子もまだ小学1年生だろ。そんな遅くまで遊んでいたのか？」

「遅くまでというより、怪獣やらされたりだとか、ままごと付き合ってあげたりだとかね。本当、元気だよ。相変わらず」

「ごめん。それは本気で謝る。今日からは京子より早く寝ないから」

　申し訳なさそうにヤサコは両手を合わせてシュウイチに頭を下げた。

「いいけどね。あれが毎日続かないだろうし。優子ちゃんはいつも京子ちゃんの相手をしてあげてすごいと思うよ。ウチの妹はやんちゃな盛りを過ぎたから」

「普段はもっとおとなしいんだけどね。久しぶりにシュウイチ君に会ったからはしゃいだのよ、きっと」

その京子は家で留守番する。今日の集まりにも行きたいと言っていたが、大事な話し合いなのだとシュウイチが言って聞かせた。その交換条件に、今夜もシュウイチは京子が寝るまで遊び相手になることになっている。

「じゃあ出発しよう。時間に遅れる」

「待って。フミエちゃんも私たちと一緒に行くって。あ、言ってたら来たわ」

ヤサコが手を振るとフミエは小走りになって来た。

「ういーっす。待った?」

「お前はダイチか」

軽い挨拶を交わしたフミエにイサコが思わず口を出した。

「あらやだ、イサコったらいつの間にツッコミなんか覚えたの?」

「金沢にも黒客っていうバカ3人組がいるおかげで、自然と身に付いた」

「バカ3人組はないだろイサコ。せめてレインとカズマのバカコンビにしてくれよ」

そんなイサコにシュウイチがツッコんだところで、フミエが彼に気付いた。

「あ、そちらは噂の金沢黒客の」

「酒井修一です。一応、優子ちゃんとはいとこ同士で、イサコとは金沢の事件からずっと一緒に行動しています。どうぞよろしく」

「あ、これは御丁寧にどうも。私はヤサコの親友で、同じコイル探偵局の橋本フミエです。いつもヤサコにはお世話になっています」

「そんな、とんでもないわフミエちゃん」

普段から礼儀正しい物腰のシュウイチと、学級委員となって挨拶がそつなくなったフミエとで頭を下げあっているところに、ヤサコも割り込んで言った。

「今から本家の黒客とも会うんですよね。いやあ、すごく楽しみで

す」

「いやいや。連中はバカという言葉を具現化したような存在だから。多分、色々と失望させられるところもあるかもしれないけど、まあ、私の顔に免じて許してやって」

「またまた。失望だなんてそれは恐れ多いですよ」

未だに間違った本家黒客像を抱いているシュウイチに、イサコは言ってやった。

「おい。この橋本の言っていることはほとんど真実だ。何も期待するな」

「そりゃあね、イサコに比べたら劣るのかもしれないけど、それでも黒客の名は全国区なんだから、期待するなっていうのがムリだよ」

ダメだこれはとイサコはかぶりを振った。

「ほら。早く行かないと時間に遅れるわよ」

すっかり井戸端会議になりかけていたところで、玉子は皆を促した。そうして一同はぞろぞろと鹿屋野神社に歩き出す。

「そうそう、フミエちゃん。先月の廃工場でのことなんだけどね」

「またその話？悪いけど、あの時の記憶は抹消してしまいたいの。私のいないところでしてくれない？」

フミエは辟易したようにヤサコに返した。しかしそこでイサコが割って入る。

「聞いてくれ、橋本。私たちはその時のことを昨日小此木から詳しく聞いた。私たちも驚いたんだが、その廃工場での出来事は、どうも金沢の事故と無関係でないようなんだ」

「なにそれ？どういうこと？」

フミエもそう言われると気になった。

「あの時に女の子と会ったじゃない。桐野詩織ちゃんって子。覚えてるよね？」

「ああ。あの気味の悪い子でしょ？私たちを助けてくれたのは感謝だけど、どうもああいう霊感の強そうな子は苦手なのよね。それでその子がどうしたの？」

次にイサコが説明する。
「私たちが通う金沢の中学校の同級生に、桐野沙織という子がいる。名前からもわかると思うが、その詩織さんとは姉妹なんだ」
「金沢の？それはとんだ偶然ね」
「ちなみに僕達の予想では二人は双子だけどね。サオリの姉が詩織さんらしい」
シュウイチの言葉にフミエは引っかかった。
「らしいってことは、イサコとシュウイチ君は詩織さんと会ったことはないのね？」
「ああ。会えるはずもないんだ。そのサオリの言葉によると、詩織さんは去年の夏に交通事故に遭って、今も意識は回復していないらしいから」
するとフミエの表情はフリーズした。たっぷり１０秒は頭の中を整理して、ようやく口を開く。
「それどういうことなの？それなら私たちが会ったのも詩織さんであるわけないわよね？」
「問題はそこなんだ。小此木がその子の名前を聞き間違えていないのなら、どこかにウソが混じっていることになる」
「でも聞き間違いじゃないはず。フミエちゃんも彼女の自己紹介は聞いていたよね？」
「……確かに桐野詩織って名乗っていた気がするけど」
そしてフミエは良からぬ想像をした。
「ねえ。やっぱりあの子、人じゃなかったんじゃないの？」
「私もなんかそんな気がする。記憶が曖昧だけど、確かあの子、メガネをかけてなかったような気がするの。でも、私たちを助けるには工場の電源パネルを操作しないといけなかったはずだし……メガネをかけないで電脳の世界を感じ取れるってことは」
「電脳体？確かに私たち、あの子に触れてないもんね」
ヤサコとフミエの会話は、しかしイサコに否定される。
「何を言っている。昨日のあの警官の話を思い出せ。電脳体を動か

す指令を出しているのも肉体の脳だ。でも詩織さんは今も意識不明状態にある。ということは、脳がまだ覚醒してもいないということだ。電脳体を動かしようもない」

「それじゃあ、あの子は生霊ということになるけど」

ヤサコがぽつりと言うとフミエは体を震わせた。なんとかその方向に話が流れないように理由付けを考えていたところもある。

「でもさ、その意識不明っていうのも曖昧じゃない？僕はよくわからないけど、交通事故から半年以上経っているのに、未だに意識が戻らないっていうのは長過ぎるんじゃないかな」

「まあ、そういう事例も少なからずあるとは思うけど、シュウの言いたいことはつまりこういうことね？詩織さんが今も意識不明なのはあくまで電脳体分離を起こしているからで、脳は覚醒している。つまり、詩織さんは今電脳体として生きている」

シュウイチの言葉を玉子が継いで整理する。それには皆うなずいた。

「確かに。詩織さんと母の恵さんは新空間で生きているということをサオリは言っていた。仮に小此木と橋本が会った少女が電脳体の詩織さんとして、なぜ通常空間にいたのか」

「直樹さんは昨日言ってたよね。あの人が観察実験をしていたのは、廃ビルとあの廃工場だって。つまり、あの廃工場は新空間に近い場所ってことになる」

「それに私はハラケンと次の日にあの廃工場にもう1度様子を見に行ったけど、その時魔方陣型の暗号を見つけたわ」

フミエとヤサコの言葉を元にして、イサコが推理を組み立てる。

「つまり、その暗号の影響で廃工場と新空間はつながり、そこから詩織さんの電脳体が通常空間に入り込んできた。そしてアンタ達と会った……今のところそう理解するのが一番腑に落ちそうだな」

「でもなんでそこに暗号が？」

素朴な疑問をシュウイチが投げかける。

「それは、あの空間を監視していた警官の直樹さんだったか？に聞

くのが早いだろう。オバちゃん。なんとかしてあの人と連絡を」
「ああ、それは叶わないと思うわ」
「どうしてだ?連絡先は知っているんだろう?」
玉子はそこで小さくため息をついた。
「今朝早く、直樹さんはメガマス本社の調査員に強制連行されたらしい。本社もあの人が新暗号の主だと掴んだんだ。その取り調べのために、今頃本社の一室に押し込められて尋問されているはずだ」
どうもそこで世にも恐ろしい取り調べが行われているかのような言い方に、ヤサコとフミエは顔をこわばらせた。
「オバちゃんが本社に報告したのか?」
「いいえ。私が室長にも報告する前に、本社は管理室を通じてそれを掴んだらしいの。どうもきな臭いのよね。今まで直樹さんは尻尾を出さずにプロジェクトチームの調査員として活動してきた。それがこんなタイミングで管理室に露見するなんて。話が出来過ぎている気がするけど」
「なるほど。どっちにしろ、あの人とは当分連絡をとれないということだな」
「ああ。室長は本社が行き過ぎた取り調べをしないように、直樹さんの近くで見張っているはずだ。後でその件は報告しておく」
「わかった」
そうして一行は鹿屋野神社に到着した。長い石段をのぼると、すでに黒客メンバーとアイコはベンチに腰掛けて待っていた。そしてそこには、ダイチ達が呼んだのかタケルの姿もあった。

#22　出会いからのはじまり　part2

「タケル君。来てくれたんだ」
ヤサコが黒客メンバーと共にいたタケルに真っ先に声をかけた。
「ああ。ダイチ達から話を聞いたんだ。ハラケンは今も僕にとっては大切な友達だから、僕もハラケンを救うのに協力できたらと思って」
「そうか、ありがとう。宗助の件も、まだキレイに片付いていないっていうのに」
玉子の言うように、宗助が首謀者だった廃ビル事件の処理はうやむやになったままだ。というのも、宗助は取り調べに対し本心から証言をしているかどうかが怪しく、未だに彼のバックグラウンドにあった組織についての明確な証言は得られていない。さらに宗助はカンナの事故の重要参考人であり、彼の言動にはメガマス旧幹部が目を光らせている。彼らの圧力があるために彼に面会することも困難となっているのだ。タケルも未だに対面を果たしてはいなかった。
「兄ちゃんのことは、色々と難しいことがあるんでしょう?だから、それはまた待ちたいと思ってます。そのことは置いといて、イサコ、久しぶり」
タケルは笑顔を作ってイサコの方を向いた。
「ああ。アンタとも半年ぶりかな」
「うん。半年前のことは、改めて謝る。あの時は本当にごめん」
「いや、もうそれは水に流そう。あの時もちゃんと謝ってくれたしな」
あの事件の後、タケルはイサコの病室を訪れて涙ながらに謝った。それを見てイサコも、タケルが本当は誠実な人間なのだと知り、もうひどい目に遭わされたことは忘れることにしたのだ。
「そういや、オレたちはイサコに謝ってなかったな」
ダイチが思い出したように言いながらベンチを立つ。他の黒客メ

ンバーもそれに続く。
「そうね。ここでみんなで謝りましょうか」
フミエはイサコに電話をかけた時にその話をしたが、改めて直接伝えたいと思った。
「何をだ?アンタ達が何を私に謝る必要がある?」
「いやまあ、お前が大黒小でバッシングされた時に、オレたちはお前のこと守ってやれなかったなあって。正直言うとお前を信じてやれなかったこと、後悔してんだよ。そのこと今更遅いが謝らせてくれ。本当に悪かった」
「そんなこと、もういいんだ。十分アンタ達の気持ちは伝わった」
「お前が良くてもこっちの気が済まねえんだよ。あの時はマジでごめん」
ダイチが男らしく謝ると、それを皮切りに黒客メンバーやフミエ、アイコも謝っていった。イサコはそれをされて戸惑うばかりだった。
「さあ、もう気が済んだか?」
終わったところでホッとしたようにイサコは訊ねた。
「ああ。これで半年前の宿題は片付いた。さあ、ハラケンの救出ってところだが、そちらさんは?」
ダイチはイサコの隣にいたシュウイチに目を向けた。
「金沢市黒客クラブの酒井修一といいます。勝手に名前を使わせていただいていますが、どうか以後お見知り置きください」
若干緊張気味にシュウイチが名乗る。
「そうか!話に聞いていたが、君が金沢黒客の!おお、そうかそうか。本家大黒黒客リーダーの沢口ダイチだ。これからよろしくな」
「光栄です!」
ダイチは右手を差し出し、シュウイチとがっちり握手をした。
「うわあ。やばいイサコ、どうしよう。本家黒客のリーダーと握手しちゃった!」
「ホントにおめでたい人間だ。アンタは」
半ば呆れながらイサコがつぶやく。

「おい。なんかスターになった気分だぞ。お前らも自己紹介しろ」
そうして黒客メンバーはシュウイチと互いに紹介し合った。ついでにタケルとアイコともシュウイチは声を掛け合い、持ち前の人当たりの良さですっかり打ち解けた。
「じゃあ、挨拶も済んだところで、作戦会議始めるか。ここじゃなんだから、社務所の中で」
ダイチがそう言ってメンバー達を促す。畳の広間に全員が着座したところで、フミエが切り出す。
「アンタ達は昨日の直樹さんのことをメンバー全員に話したのね？」
「ああ、タケルも含めて早めに集合かけて手短に済ませた。やっぱり話は時系列的に金沢の話をイサコから聞かせてもらうことにするか」
「いや、待って。それなら一番はじめに話を聞くべきはヤサコじゃない？」
「え？私？」
フミエの言葉にヤサコは戸惑い気味に反応した。
「廃ビル事件でアンタがミチコに会ったって話。まだその時の詳しい話は聞いてないわ」
「……そうだな。こう言ってはなんだが、金沢の事件もアンタとミチコの再会が引き金になっているみたいだった。私もまずその時の話を聞きたい」
イサコの言葉にはメンバーの中でもざわめきが起こった。ヤサコもその意味はイマイチわからなかったものの、自分がミチコと再会した時の話をここでするのは義務のように思われた。これがハラケンを救い出すための一歩だ。
「わかった。今まで黙っていてごめん。覚えている限りで、あの時のことを話すわ」
そしてヤサコは、これまで胸の中にしまって蓋をしていた記憶を引っぱりだし、できるだけ細かくメンバーに説明していった。
「……なるほど。私が会ったミチコとは、また随分印象が違うな」

「お前も金沢の事故でミチコに会ったんだな？」
ダイチが訊ねる。
「ああ。今の話を聞く限り、私の会ったミチコの方が親切に今起こりつつあることについて説明してくれた」
「それはどういうことなの？アンタが会ったのもミチコで間違いないわよね？ミチコがいきなりハートフルにでもなったって言うの？」
フミエの問いは、イサコもあながちはずれていないんじゃないかと思った。しかしハートフルとはまた意味が違うようにも思う。
「それはこれから説明する。少し長くなるかもしれないが、金沢の事故についてはじめから話そう」
そしてイサコは、時々シュウイチの話や玉子の話も挟みながら金沢の事故について説明していった。黒井交差点における第一の空間事故、学校における第二の空間事故、電脳ペットが一斉に故障した第三の事故、そしてイサコがミチコに連れて行かれたイベント会場での第四の事故。途中でサオリに関する話も入れながら、要点が伝わるように整理して話した甲斐もあって、メンバー達も複雑な金沢での一連の事故の概要は掴むことができた。
「なんつー話だよ、まったく。特に金沢イベント事故の部分はオレたちでもビビったぜ。イベントをぶち壊しにして１０００人もの子どもを避難させるって、ムチャクチャな作戦だぜ、金沢黒客」
ダイチは興奮を隠せないようにシュウイチに言った。それは正直なところ、うらやましかったのだ。
「確かに振り返るとメチャクチャな作戦だと思うけど、その時はこうするしか方法はないってところでアドレナリンが出まくっていたから。結果的にイサコがミチコに連れ去られたのは、本当に悔しかったし絶望したけどね。こうしてすんなり戻って来てくれて良かったよ」
シュウイチがそう言うと、メンバー達は妙に深く頷きながら黙ってしまった。おかしな空気が漂いはじめたところで、イサコは一つ咳払いをする。

「私が入り込んだのは新空間そのものだ。そしてミチコの口から、そこが現実世界のパラレルワールドであることが明かされた」
「これでわかったでしょう？一昨日アナタ達とケンちゃんが迷い込んだ空間というのは、大黒市のパラレルワールドなのよ」
イサコと玉子が説明したところでフミエが疑問をぶつけた。
「でも、パラレルワールドっていうけど、私達が迷い込んだのは、今は無い第三小なのよ」
「おそらく新空間は現実世界と時間軸が異なっている。私もイベント事故で迷いこんだ空間でイベントは開催されていなかったからおかしいと思った。第三小が取り壊され始めたのは半年前だろう？つまり、新空間の時間軸は少なくとも半年以上前ということになる」
イサコが答えると、続いてヤサコが言った。
「新空間では人が静止していたってところだけど」
「ああ」
「私達も同じ景色を見たわ。職員室で先生達全員が微動だにしなかったの」
「そうそう。これはどう説明つけるの？」
フミエがヤサコの言葉に乗じて訊ねたが、イサコはかぶりを振った。
「それは、未だに私にもわからない。だから正直、あの場所がパラレルワールドで、現実世界と同じ人々の生活が存在しているとは信じられない」
「でも、教頭先生だけはちゃんと動いてしゃべってたよね？」
アイコがヤサコとフミエの顔をのぞきこみながら言った。
「その教頭もアンタ達と同じく電脳体分離を起こしてその空間に入ったんだろう。しかも聞くところによると、教頭は今入院しているんだったな？」
「ええ。マイコ先生の話では脳梗塞って」
教頭の病気の件について黒客メンバーは初耳だった。ダイチ達はその病名を聞いてなんとも重苦しい気分になった。

「交通事故に遭ったっていう桐野沙織の家族も、教頭と同じように新空間で生活しているはずだ。ということは、新空間は決して削除されてはいけない存在ということになるな。去年の事件の“あっち”をフォーマットした時のような強硬手段はとれないということだ」

イサコはそう言うと玉子を見た。メガマス本社には新空間を忌み嫌い、その存在を抹消しようとしている人間がいる。玉子もわかっていると言う風に頷いた。

「室長に逐一報告を入れているから、管理室が強硬手段を用いることはないはずだ」

そこでダイチが質問した。

「なあイサコ。お前、ミチコの話によると今回の事件の首謀者はミチコ自身じゃないって言ったな」

「ああ。確かにそういう口ぶりだった。ミチコはおそらく利用されているんだ。自分の生みの親たるその首謀者に。そしてその首謀者は、サオリの家族である可能性が高い。メガマスの調査によると、サオリの両親は3年前に離婚し、サオリと詩織さんは母の恵さんに引き取られたらしい。そして、去年の夏に恵さんと詩織さんは交通事故に遭った。その事故そのものは、メガマスの不手際が原因にあったと言っていい。それを知った父親は、身分を偽ってメガマス金沢支社のプロジェクトに参加した。そして、機が熟したところで自分がプログラムしたミチコを使って誰かの電脳体をさらって人質にしようとした。それが原川だった……これが今のところの私達の推理だ」

「つまり、サオリって子の父親は元々一級のエンジニアだったと」

ガチャギリが確認すると、イサコも頷いて返した。

「でもなあ。ハラケンの電脳体は人質にされるために連れ去られたっていうけど、じゃあ身代金は？あるいは何らかの交換条件がメガマスに突きつけられていてもおかしくないだろ？そういう話は流れて来てないのかよ？」

「そうね。そこがおかしな点でもある。と言っても、私たちの推理

は去年の事件の宗助の行動原理を元にして考えているに過ぎない。タケル君はどう思う？」

玉子がその時のことをよく知るタケルに訊ねてみた。

「聞いている感じだと、ミチコのためにハラケンを送ったっていう線はなさそうだね」

「それは、去年の事件のイサコのように？」

「うん。ミチコが誰かを望んだというのなら、それは再会を果たしたヤサコかイサコを新空間に閉じ込めればいい話だし。ミチコがハラケンを望む理由なんて……」

一同は沈黙して考え込んだが、明確な答えが出てくるはずもなかった。問題はハラケンが連れ去られた理由よりも、いかにしてハラケンを救い出すかだ。

「まあ、それは置いておこう。アンタ達と合わせて４人が新空間に迷い込んだのに、原川だけが連れ去られたのは何か理由があるはずだが、それは救出のヒントにはならないだろう」

「メガマスはどうしてもその父親っていうのに辿り着けないのかよ？新空間計画は金沢でも本社でも進められていたっていうのなら、そいつは本社に出入りしていても怪しまれない立場の人間だろ？」

何を悠長にしているんだという風にガチャギリが訊ねる。

「確かにアンタの言う通りだけど、メガマス本社にはかなりの数の研究部門がある。今はどこの部門で新空間開発が行われていたのかさえもわからない状態だ。おそらく本社の中で証拠隠滅を行っている組織があるんだろう。そうなると、相手がボロを出さない限り、本社もその父親を特定することはできないだろうな」

「でもよ、その父親は金沢支社のプロジェクトチームの一員なんだろ？だったらそのプロジェクトチームの人間なら一発でその父親はわかるはずじゃねえか」

不思議そうにダイチが訊ねる。

「それが、本社の幹部達は断固としてプロジェクトチームを許すつもりがないらしくて、協力して今回の事故を解決しようという気が

ないの。プロジェクトチームの方も、今回の事故で痛い目を見るのは結局本社であることがわかっているから、まだ動いてない」
「ホント、子どもかっつーの。いい大人がこんな時に見苦しいケンカしちゃって」
フミエの言葉には誰もが共感した。だからこそ自分たちでなんとかしなければならないという思いを強くしている。
「父親が特定できる可能性にすがるよりも、大黒でサオリ本人を探した方が話は早いかもしれない」
「でも、それもどうかと思うけど。金沢で失踪したサオリが大黒にいるっていう保証はないじゃない」
イサコの提案にはシュウイチが疑問を抱いた。しかしそこでイサコはあることを思い出した。
「・・・・・・そう言えば、覚えているか?金沢でのイベント事故の時、大谷が撮ったサオリの写真から、網膜プログラムを抽出してサオリの現在位置を割り出したこと。あれを使えば、サオリが今どこにいるかわかるんじゃないか?」
「ああ!確かにそんなことしてたね」
今度はシュウイチも納得し、イサコは玉子を見た。
「ここに大谷も呼び出そうと思う。それでもいいか?」
「ああ。まあ、あの人は今後も頼ることになるだろうし、この子達にも紹介しておくか」
そうして玉子の許可が出たところで、イサコは大谷を鹿屋野神社に呼び出すことにした。

#22　出会いからのはじまり　part3

その朝、大黒市警の電脳犯罪対策係係長室では久美子が1人待っていた。久美子と直樹は昨日からそれぞれ別行動をとることになったが、朝一番にそれぞれの進捗状況を報告し合うということにしていたのだ。しかし出勤時間になっても直樹は現れず、連絡もつかなかった。まさか事件にでも巻き込まれているのだろうかと久美子は彼の身を案じていたが、真実はその時訪れた来客によって明かされることとなる。

「川畑さん。お客様が見えております」

同じ対策係の婦人警官が係長室に取り次ぎに来た。

「お客様？竹下さんはまだ出勤しておりませんが」

「いえ。川畑さんに御用があると」

「どうも」

その時係長室に顔を覗かせたのは検事の桜井だった。

「検事さん！こんな朝からどのような御用でしょうか？」

突然の来訪に戸惑いながら久美子はとりあえず桜井を部屋の中に入れ、ソファーに促した。すぐにお茶を入れる用意をする。

「実は竹下さんのことで、メガマスからの伝言を預かってきたんですよ」

「メガマスから……竹下さんは一体どうされたんですか？今朝は時間を過ぎても出勤されておらず、連絡もつかなくて心配していたのですが」

ポットのお湯が沸いていないのを確認してスイッチを入れ、久美子は桜井の向かいに腰掛けた。その質問に桜井は1つため息をついて切り出した。

「私も寝耳に水だったのですが、竹下さんは今朝方、メガマスの職員に本社まで連れて行かれたそうです」

久美子はまったくその言葉の意味を理解できなかった。

「連れて行かれた？一体どういうことですか？」
「メガマスが彼に用があったと」
桜井の煮え切らない言い回しに久美子は噛み付いた。
「それって連れ去られたんじゃないんですか？連絡がつかないんですよ！そもそもなぜメガマスが竹下さんを連れ去る必要があるんですか！」
「落ち着いてください。端的に言います。メガマスは独自の調査によって、彼が一昨日の空間事故に関わった可能性があることを掴み、重要参考人として取り調べを行うためにご同行を願ったと」
「一昨日の事故に関わったって、そんなの言いがかりもいいところです！彼は最後まで原川君を救うために管理室職員に食い下がったんですよ！なのにメガマスは、彼が空間事故の犯人だって言いたいんですか！？」
久美子は珍しく冷静さを失っていた。たった1ヶ月とは言え、苦楽を共にしたパートナーに対する信頼は揺るぎないものがあった。それに元々久美子はメガマスに対しては不信感を募らせていたのだ。
「頼みますから落ち着いてください。私も彼が犯人だと思っていませんし、あくまでメガマスは重要参考人として話を聞くために彼を連れていったと」
「しかし彼と連絡がつかないのはおかしくないですか？彼も同意の上でメガマスに行ったのなら、私に一報あるはずです」
すると桜井は困ったようにまた大きく息をついた。
「……私もその点気になりましたので確認をしましたが、どうやら竹下さんが抵抗したので、メガマスは半ば強制的に連行したそうです」
久美子はそこで一瞬困惑した。一般的に容疑者が抵抗する時は、それは本人に心当たりがあるからだ。その論法でいくと、直樹にも自分の知らない事情があるのかもしれないと久美子は思う。しかし仮にそうだとしても、久美子が気に入らなかったのはメガマスのやり方だ。

「しかしそれは罪に問うこともできます。メガマスに警察権などないんですよ！彼らは何を勘違いしているんですか？この街におけるすべての権限は、彼らの手中にあるとでも？」

「いや、まあそれはおっしゃる通りです。私も検事という立場上、彼らのやり方を肯定することはできません。しかし、今回は向こうにも言い分があります。容疑者が大黒市警唯一の電脳犯罪専門チームたる対策係の長であること。これは要するに、あなた方対策係が第三者的立場で公平な捜査を行うことが望めないということになる」

「だからと言って、彼らが勝手に容疑者を連行して取り調べを行うことを正当化する理由になりません。それはただの傲慢です。彼らの主張がまかり通るなら、例えば、ある事件での容疑者に警視総監が浮上した場合、警察は一切動く事ができず、民間の組織がすべての捜査を請け負うということさえ可能になります」

そう言うと久美子は出かける準備を始めた。桜井は驚いて訊ねる。

「どこに行くおつもりですか？」

「決まっています。メガマスに行って竹下さんを連れ戻します。こんなこと許されるはずがありません」

久美子は沸騰を告げるポットの電子音に脇目も振らず、桜井に頭を下げて部屋を出ようとした。

「待ってください！アナタもメガマスに取り調べられることをお望みですか？竹下さんからめぼしい情報が得られない場合、メガマスは彼の部下であるアナタに目をつけるはずです。彼と同じ運命を辿りたくないなら、ここで話を聞かせてください！」

すると久美子は桜井に向き直った。桜井がここに出向いた理由がわかったのだ。

「桜井さん。もしかしてアナタは、私の取り調べを行う為にわざわざ？」

「……そういうことです。私もアナタや竹下さんを疑っているわけではありません。しかし、今のメガマスは事件の動揺から暴走を始めています。依然として市の権力に絶大な影響力を持つ彼らに楯突

くのは得策ではありません。今回のことはのちに取り沙汰するつもりですが、まず重要なことは一昨日の事件を解決して原川君を助け出すことです。そのために、ご協力願えませんか？」

桜井は深々と頭を下げた。その申し出が決してメガマスのためではなく、久美子のため、そして意識の戻らないハラケンのためだということは察せられた。

「……わかりました。でも一つお願いがあります。メガマスの取り調べが済んだら、竹下さんに対する取り調べは私にさせてください」

「それはもちろんです。仮に彼が事件の首謀者だったとしても、メガマスに逮捕権はないのですから、必然的にこちらでも取り調べを行う必要がありますので」

桜井のその返答は当たり前のことだと久美子は思う。久美子が聞きたかったのはもっと別次元のことだ。

「そうじゃありません。私の杞憂ならいいのですが、メガマスの取り調べで彼が壊されてしまうことのないようにということです」

「……メガマスが薬を使うとでも？」

「非正規の取り調べの透明化など望むべくもないことですから、念のために」

桜井は苦笑いを浮かべた。

「さすがにその心配はありません。彼の取り調べには小此木さんがついて、行き過ぎがないように監視するとのことです。私もこの後、そこに出向くつもりです」

「そうですか。では、詳しくお聞かせ願えますか？なぜメガマスは竹下さんを容疑者とみなしたのか」

「わかりました」

そうして久美子は再びソファーに腰を下ろし、桜井の説明を聞いた。

「……ということは、彼がその新暗号の使用者であるから事件の関与していたのではないかと？」

「メガマスも現在、事件の調査については八方ふさがりのようです。

そこに来て新暗号の使用者を特定したのは、彼らにとっては大きな手がかりとなるところでしょう。ちなみにお聞きしたいのですが、アナタは彼が暗号を使っているところを目撃したことは？」

訊ねられて久美子も記憶を思い起こしてみるが、自分の前で暗号を使用しているような場面は思い当たらなかった。

「いえ。でも彼のスキルの高さは身をもって知っています。暗号にも精通しているというのも本人から聞いたような気がします」

「なるほど。しかしメガマスの話だと彼が使用していたのは既存の暗号とはまったく型が異なると。おそらく従来の型の暗号も使えたのだと思いますが、その使い分けに関してはアナタの関知するところではないということですね」

「はい」

桜井は紙にメモを取りながら次の質問に移る。

「わかりました。では、彼が突然1人になったり、不自然に別行動をとろうとしたことはありますか？」

「そうですね……なかったと言えばウソになるかもしれません。何度か理由も場所も告げずにどこかに消えることはありました。それも別件の調査かなとは思っていましたけど。竹下さんの場合、対策係の係長として抱える問題も多いのだろうと疑いはしていませんでした」

「そうですか……やはり彼に何らかの隠し事があったという可能性は捨てきれませんね」

桜井はそこでメモを置いて考え込んだ。彼としては少なくとも直樹と久美子が共犯関係にはなかったことを確認できたので収穫はあった。あとはメガマスの取り調べで直樹本人の口から何かが語られるのを待つだけだ。

「ところで、交通事故再調査の件ですが」

今度は久美子が切り出す。

「ええ」

「先日桜井さんとお会いしてから進展はしていません。何より原川

君の意識が戻らない限り、この調査の話も前に進まないと、昨日竹下さんと話していました」

「そうですね。この前は天沢さんに証言していただくかどうかというところまで話は進みましたかね。しかしそれについては原川君の意志も確認する必要があると。その数時間後ですか、彼が意識を失ったのは」

まさに事件の日に再調査チームは今後に向けて打ち合わせを行った。

「昨日の時点では私が交通事故の再調査を引き続き行い、竹下さんは一昨日の事件の捜査を行うと分担しました。竹下さんがそうなった以上、やはり私も原川君の救出に専念すべきでしょうか？」

「ええ。実は先ほど、野村課長にもその点を確認しておきました。アナタも電脳犯罪対策係の一員として、事件の解決に全力を尽くしてください。そう伝言するように頼まれました」

野村の気遣いに久美子は感謝した。目の前の事件を放っておくのも久美子は心残りがあった。自分もできるなら一昨日の事件の捜査に加わりたいと思っていたのだ。

「わかしました、と野村さんにお伝え願えますか？竹下さんの件も、本人に事情を聞いて報告します」

「了解です。それではまた、何かわかりましたらお伝えします。それでは私はこれから本社に」

「竹下さんにもよろしくお伝えください」

そうして久美子は桜井を見送る。しかし直樹に裏切られたという気持ちは今になって沸き上がってきた。久美子は疲れたようにソファーにもう一度腰を下ろし、しばらく中空を見つめていた。

#２２　出会いからのはじまり　ｐａｒｔ４

桜井の市警訪問と同時刻、弁天市のとあるホテルを一台の高級車が出発した。それには運転手の他に、後部座席に神崎と小野が乗車していた。

「聞きましたか先生？本社が竹下君を拉致も同然に連行したそうですよ」

神崎がふと思い出したように小野に訊ねた。

「ええ。朝食の時にアナタの部下から聞きました。竹下君には本当に悪いことをしました」

「彼はやはり、教え子の中ではもっとも思い入れの強い生徒ですか？」

「もちろんですよ。彼の才能は、ＥＬプロジェクトの元となった卒論で十二分にかいま見ることができるはずです」

「永遠の命（Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｌｉｆｅ）計画ですか。でもまあ、あの論文の綻びを彼自身は気付いていないですからね。その辺はまだまだ青いですな。あの計画はやはり夢物語だった」

小野はそのまま軽く頷いて返した。

「まあしかし、可能性を示したという点では評価できますよ。あれがなければ私の研究など生まれなかったわけですから」

「そのアナタの研究、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”については、彼には？」

「アナタに口酸っぱく口止めされていましたからね。当然話していませんよ」

「そうでしたね。ありがとうございました」

神崎は終始にこやかにしている。それもいつものことかと小野は窓の外を見やった。

「竹下君のことを本社にリークしたのはアナタですか？」

「いえ、とんでもない。彼は我々の同士じゃないですか。なぜそん

なことをする必要があるんですか」
「彼は1人で一昨日の事故について調べようとしていました。私にもメールをよこしてきましたよ。真相についてははぐらかしておきましたけどね。その彼の動きをうっとうしいと思われたんじゃないですか？彼は新暗号も仕掛けていたようですしね」
しばらくの沈黙の後、神崎は口を開いた。
「……確かに彼の動きは気になってはいました。それを好ましくないと思ったのも事実ですが、実際先に手を下したのは“桐野”技師ですよ」
「“桐野”技師って、あの人は桐野姓じゃないでしょう。それは彼の奥さんの旧姓のはずです。大黒ではまた別の偽名を使っているみたいですが」
「その偽名で呼んでも仕方ありませんし、実際彼の名前などどうでもいいんです。我々を裏切り、桐野恵と桐野詩織の敵討ちをしようとしている人間なんですから、“桐野”技師でいいじゃないですか」
それは話の筋に関係のないムダな議論だと思い、小野はそれでいいことにしておいた。
「……で、その“桐野”技師が竹下君の行動を察知して、邪魔だと思った。だから彼のことを管理室にリークしたと」
「実際我々が手を下していないんですから、そう考えるのが妥当だと思いますよ」
「じゃあ、竹下君の方法なら原川君は助かる可能性があった。だから竹下君を封じたと？」
「そんな単純な理由じゃないと思います。私も竹下君のやり方は逆効果で、被害者が増えるだけの気がしますしね」
小野はそれを聞いて考え込んだ。神崎の意見には概ね賛成だったからだ。
「その問題は、“桐野”技師の目的にも関わってきそうですね。ただ単に人質をとって脅しをかけるという、猫目宗助のような動機で原川君をさらったわけではないでしょうから」

「同感です。それならウチか本社にさっさと犯行声明が行っているはずですからね。まあ、なんともイヤな予感がします」
「そうお思いなら、彼を捕まえればいいじゃないですか」
神崎は小野の問いかけに驚いたような表情になる。
「お忘れですか？“桐野”技師は、ミチコを握っているんですよ。“桐野”技師を捕まえようものなら、ミチコはさらなる暴挙に出ることは必至。ミチコの機能を止めようものなら、新空間自体が崩壊し、プロジェクトは水の泡。すべては技師の計算通りの展開というわけですよ。ただし、彼のやろうとしていることが復讐になり得るかどうかは別の話。こちらも手をこまねいて待っているわけではありません」
「そうですねえ。技師も”ＳＰＲＩＮＧ”については知っているはずなのに……という話は前にもしましたね」
「ええ。だから余計に彼のことが読めないんですよ」
この時、神崎も首を傾げていた。小野はその表情にウソはないと読む。腹の中に何を抱えているのかわからない男だが、今度こそ神崎が予想だにしない事態が起こっているのだと小野は思った。
「相手の出方を待つしかないわけですね。私たちは私たちなりの解決策として、”ＳＰＲＩＮＧ”を起動すると」
「厳密に言うなら既に起動はしています。まあ、これからの事態に備えて手順の簡略化の実験という位置づけのなるのでしょう」
「これからの事態に備えて……」
小野は小さく唸るようにつぶやき、さらに続けた。
「私も、実際このような使い方をするのは好ましくはないと思っているのですがねえ」
「まあ、そうなんでしょうけど、事態が事態ですから」
神崎に小野の心中を慮るような素振りはなかった。口ではそう言いつつも、実際胸の内では、小野の抱いた甘い考えを切り捨てているに違いなかった。
「……今日の調整で準備は整います。そちらの用意はできているん

でしょうか？」
　小野は走り出したものは仕方ないと自分に言い聞かし、これからの段取りについて確認する。
「大丈夫ですよ。すでにメガマス病院の原川君の担当医はこちら側に買収していますからね。彼に任せれば問題はないでしょう。原川君は無事に目覚めるはずです」
「果たして“無事に”と言えるのかどうか……ともかくこの実験がうまくいけば、いよいよプロジェクトを本社にプレゼンするわけですね」
「それで2，3日様子を見ます。問題が起きなければ満を持して本社に乗り込みます」
「本社にプロジェクトを認めさせる勝算は？」
　そこで神崎は自信たっぷりの笑みをたたえた。
「なければここまでプロジェクトを引っ張っていません。今回の“桐野”技師の裏切りはむしろ好機と捉えるべきでしょう。あの若社長だけは最後までごねる可能性もありますが、実際問題、これを認めなければメガマスは破滅の道を行くことになります。本社は１００パーセント折れますよ」
「そういう筋書きですか。私は、アナタが“桐野”技師とグルではないことを祈りますよ」
「滅相もない。私とてプロジェクトの成就のために、１人の少年の魂をこの世界から抹消するという酷なことは考えませんよ」
　神崎の口ぶりからはその真偽を読み取ることはできない。小野はせめて自分がそんな狂人に協力していないことを願うばかりで、再び車外の景色に目を移した。
　するとその時、神崎の携帯電話が鳴り始めた。
「失礼します。もしもし？ああ、君かね。どうかしましたか？」
　応答の仕方から神崎の部下からだろうと小野は思った。
「……なるほど。彼女がいなくなったと……追う？いや、その必要はありません。彼女に証言能力はないですからね。もう適当に泳が

せとけばいいんじゃないですか？もしかすると、父親の元に戻ろうとしているのかもしれません。むしろ、彼女を追っているうちに君達が本社に目をつけられるという事態の方が厄介です……そうです。もう放っておきなさい。切りますよ」

そう言うと神崎は電話を切った。そして続けて小野にはこう告げた。

「サオリさんが行方をくらましたと」

小野はその知らせに驚愕はしなかったが、大きく目を見開いて訊ねた。

「どういうことですか？」

「さあ、理由はわかりません。むしろ先生の方がお詳しいのでは？」

しかし小野はかぶりを振った。

「心当たりはありません」

「そうですか。まあ、彼女についても我々が保護しておく理由はなくなりましたからね。後は彼女の好きなようにさせます」

「……冷たい人だ」

小野は神崎に聞こえるかどうかという小さな声でぽつりと言った。しかし神崎はそれをしっかり聞き届け、小野に微笑んで返した。神崎の頭の中では、既に利用価値のなくなったものなど眼中にないのだろうと小野は想像する。

やがて車は弁天市のはずれに位置するアプリコット社所有の研究施設に到着した。これから“彼ら”のハラケン救出作戦が始まろうとしていた。

#22　出会いからのはじまり　part5

鹿屋野神社での会議はイサコが呼び出した大谷待ちのため一時中断していた。しばらくしてようやく彼は神社に到着する。とりあえず玉子が石段の下まで降り、彼を案内することにした。

「こんなところで作戦会議ですか？」

近くの駐車場に車を止めてきた大谷が訊ねる。

「ええ、まあ。それなりに人数もいるので。それはそうと大谷さん。昨日アナタがおっしゃっていた通り、例の電脳犯罪対策係の方は新暗号の使い手でした。それも金沢支社のプロジェクトチームの関係者だと」

「ああ。それは昨日オレも本社にいたから知ってます」

２人は周りに人がいないか確認して、石段をのぼりながら細い声で話を進める。

「そうでしたね。室長が大谷さんを招いたと」

「ところが、本社の連中は始めっからオレを疑いの目で見ていた。胸くそ悪いから言いたいこと言ってはけてきましたけどね。小此木さんには申し訳ないことをしましたが、本社の連中もその警察官の話が飛び込んできてからはオレなんてアウトオブ眼中って感じだったし。やっぱり個人的に調査するのがオレの性に合ってます」

「それなら、私達の調査のお手伝いを願えませんか？」

玉子の申し出に大谷は何を水臭いという風に返す。

「そのつもりだからここに出向いたんですよ。まあ、情報交換とかならいつでも呼んでもらっていいッスよ。まあそれはそうと、さっきアンタ、例の警察官が金沢のプロジェクトチームの関係者だって言いましたね？」

「ええ」

「それについては初耳だったんですけど、取り調べで彼がそう自供したってことですか？」

「ああ、いえ。取り調べについてはまだ私には情報が入っていません。それを知ったのは昨日のことです。とある場所でその警察官の方にお会いしまして、すべて本人の口から聞きました。金沢支社が進めていたプロジェクトの概要など。後ほどそれも説明します」

　すると大谷は俄然盛り上がって来た。

「そうだったんですか。いやこれは面白い話が聞けそうだ」

　そうして2人は石段をのぼりきって社務所に向かう。戸を開いたところで中にいたメンバー達が一斉に大谷の方を向いた。

「ういっす、イサコ」

「……チャラあ」

　イサコに声をかけた大谷に対し、思わずつぶやいたのはフミエだ。

「言っただろ。見た目はイタイって。あんまり信用できないかもしれないが、スキルだけは高いんだ。皆も見た目のことは目を瞑ってくれ。大谷だ」

「……二十も年下の中学生にめちゃめちゃコケにされてるやん、オレ」

　大谷は随分と情けないような気分になりながらイサコの隣に腰をおろした。

「どうも、こんにちは」

　顔見知りのシュウイチもとりあえず声をかけた。

「おお。二番弟子のシュウじゃないか。そうかお前も大黒来るって言ってたもんな」

「え？シュウイチ君、この人に弟子入りしたの？」

　ヤサコが驚いて訊ねる。

「ううん。全然」

「コイツの言葉はほとんどスルーしていい。いちいち相手にするな」

「おうおう。随分と口が達者になったな一番弟子」

「うるさい。必要な時以外口を開くな」

　イサコにぴしゃりと言われると大谷もしゅんとなった。随分扱い慣れてるなとダイチ達は思った。

「えっと……まあ自己紹介はまたおいおいすればいいとして、何から話し合う？」
玉子が一つ咳払いをして、場を仕切り直すように言った。
「つーか、何の用でオレを呼んだの？」
「サオリの居所が知りたいんだ。イベント事故の時にアンタが使っていたあの違法なソフトウェアを使えば、たちどころにそれがわかると思って」
イサコがその理由を説明する。しかし大谷の反応はイマイチだった。
「わかるかなあ。あれで」
「この前はサオリの居所はおろか、その足跡さえも割り出したじゃないか。何が問題だ？」
「いや、君ならわかるはずだが、あれはオンロードドメインでしか有効じゃないわけ。彼女がホームドメインに長時間いる場合、その地域を限定することすら難しい」
「オンロードドメインにいることが条件か……確かにそれは考えてなかったな」
サオリが金沢で失踪した後、おいそれと外を出歩いているとは思えなかった。イサコ達以外にも、脱走を許した本社の職員が彼女を探しているからだ。
「まあ、一応やってみる。彼女の網膜パターンのプログラムを全国のサーバーの更新記録の中から検索するわけだから相当時間はかかるけどな。時間設定はいつにする？彼女の今の居所を知りたいのなら、この２４時間ぐらいが妥当だと思うが」
「じゃあ、とりあえずそれで検索をかけてみてくれ」
「合点承知」
そうして大谷は手際よく設定を済ませていく。ダイチ達はそれを憧憬のまなざしで見ていた。大谷はまるで本物のスパイのようで、容姿においても相手を油断させる一つの手段じゃないのかとさえ思えてくる。イサコが信頼を置いている理由もなんとなくわかる気が

した。
「オッケー。これで検索結果が出るまで待つだけだ。じゃあ時間も空くことだし、昨日のその警察官の話とやらをお聞かせ願おうか」
「ああ」
イサコ達は昨日の直樹の話をざっと説明した。大谷は終始メモを取りながら興味深くそれを聞いていた。
「なるほどね。そのお兄さんが“新空間計画”の基礎を作ったと。それが小此木先生や猫目先生の研究と組み合わさって、今の新空間が完成した」
「そういうことです。ちなみにこのお嬢さんが小此木先生のお孫さんで、あちらのタケル君は猫目先生のお子さんです」
玉子がヤサコとタケルを示しながら補足説明すると、大谷は驚いたような反応をした。
「え？君は猫目技師のお子さん？ということは、年齢から考えるに猫目宗助の弟ということかな？」
「はい。そうです」
大谷はヤサコよりもタケルに興味を示したようだった。そこでイサコが訊ねる。
「アンタ、宗助とは面識があるのか？」
「あるわけないだろう。去年の夏の事件はオレも追いきれなかったっていう話はしたよな……でも、そうか。君も原川君とは顔見知りなんだね？」
「顔見知りというより、大切な友達です」
「そうか……なるほど」
大谷の様子はどうもおかしかった。イサコもこんなあからさまに挙動不審な彼を見るのは初めてだったので、何かあるのだろうと直感的に思った。
「タケルが何か関係あるのか？さてはアンタ何か隠してるな？」
「いや……まあそれは否定しない。いずれそのことも洗いざらい話す。かわりにそれまでいらん詮索をするのはやめてくれるか？互い

の信頼関係がなくて、満足な調査なんて出来ないだろう。まあ、はっきり一つ言えることは、オレは君たちの味方だってことだ。その原川君は必ず助けてやるぞ」

イサコと玉子は顔を見合わせた。大谷がこれまで自分たちに隠し事をしてきたのは明白で、それでも彼を頼ってきたのはひとえにそのスキルの高さと、持ち込む情報に信憑性があるからだ。今ここでそのようなカミングアウトをされても、状況は変わらない。事実は、ハラケンを救うためには彼の協力が不可欠だということだ。

「わかった。アンタが何者でも、私達は信じているぞ」

「すまんな。じゃあ、さっきの話に戻すぞ。その竹下っていう警官は金沢支社の“新空間計画”の目的を、永遠の命の実現だと言ったんだな？」

大谷が身を乗り出して言ったので、メンバー達もぐっと姿勢を前にした。

「ああ。それが金沢支社の切り札だろう。それの実現のために、色々と実験が繰り返された。金沢での事故はその実験の失敗が原因にあったんだと思う。市民の日常生活の安全を引き換えにしてでも、金沢支社はどうしても計画を成就させようとしていた」

「それは間違ってないだろうな。でもオレは、永遠の命なんてくだらねえものを、金沢支社がメガマス再建の切り札に据えるとは思えん」

それには昨日直樹から直接話を聞いていたイサコや玉子、ヤサコ達やダイチ達も、少なからず頷ける気がした。昨日の話のすべては、直樹の誇大妄想のように思えて仕方がなかったのだ。

「私達もあの人の話には引っかかってる。理論上は可能だとしても、どうしてもそのシステム自体がうまく機能するとは思えないんだ。何て言えばいいんだろう。うまい言葉が見つからないが」

イサコや他のメンバー達は、直樹の話の矛盾を指摘することはできないが、それでもどこかでうまくはいかないだろうという漠然とした思いを抱いていた。

「オレが思うのは、実際問題“永遠”なんてムリに決まってんだろっていう根本的なことだけど」
「でも医学的には脳が永遠に活動することは可能だと。それを電脳体に接続させれば、永遠の命は実現できると彼は」
玉子にも大谷の言わんとしていることはわからなかった。大谷はそれを察し、丁寧に説明を始めた。
「じゃあオレの結論から言わせてもらう。永遠の命なんてものは実現不可能。せいぜい寿命は倍に延びる程度にとどまるだろうな」
「それはどういうことだ？」
思わぬ答えが出たような気がしてイサコが訊ねる。
「この問題のポイントは簡単だ。永遠の命を手に入れた人間の遺族がどれだけの医療費を払えるかにかかってくる」
「結局カネの問題なんだな」
その大谷の言葉にいち早くピンと来たのはガチャギリだった。
「そういうこと。その永遠の命を得るには、最先端の医学の力を駆使する必要があるってことだろ。それには膨大な医療費がかかるわけだ。将来的にはぐっと安くなるんだろうが、その人の脳と電脳体が生きている限り、つまり永遠にその医療費は発生する」
「なるほど。しかし電脳世界で電脳体として生きている人は、現実世界の労働力にはならない。お金というものを得る手だてがない。つまりその医療費を負担するのは、その人の遺族ということになりますね」
玉子もようやくそのシステムの矛盾に気付いた。
「それを世代毎に繰り返されてみ？例えばひ孫の代では3代分の医療費を負担することになって、とてもそいつは生活していけないだろう。だからそれが実現できたとしても、一般的な収入を考えるに寿命は倍に延ばす程度が限界だってことだ。つまり、永遠の命なんてよっぽどの富豪の道楽程度にしか広まらない。金沢支社がそれを切り札にするわけがない」
「つまり、金沢支社は永遠の命の実現以外の目論見を持っている。

竹下さんは自分の研究が基礎となっている永遠の命について強調したけど、あの人も実際プロジェクトからは蚊帳の外に置かれていたわけだし、その金沢支社の本当の目的は知らなかった」

玉子が整理するように言った。大谷の意見には誰も反論しなかったので、真相はおそらくそうなのだろうと全員が頷いた。

「……未だ全貌のわからない金沢支社のプロジェクト。その金沢支社を裏切った今回の事件の首謀者。何も情報を掴んでいない本社。今はこういう構図か」

「本社は竹下さんを取り調べているけど、今の話だとそれも徒労に終わる可能性は高いわね」

本社がアテにならないというのは今更わかったことではない。それを思い玉子はため息をつく。

また手がかりが失われかけたところだったが、その時サオリの居所探しの検索が終わった。早速確認作業に入る。

「おろ？意外な結果が出たぞ」

「見せてくれ」

イサコはおかしな反応を示した大谷からウインドウをかっさらった。

「おい！これは何時の更新記録だ？」

「これ？１０分ほど前だな」

「どうしたんだイサコ？何かわかったのか？」

呆然とするイサコにシュウイチが訊ねる。

「ああ。これによるとサオリは１０分前、大黒駅にいたようだ」

「本当に！？」

イサコはすぐに立ち上がる。そのまま飛び出そうとしてところでダイチが止めた。

「待て。その子を探しにいくんだな？」

「そうだ。サオリが何か握っている可能性は高い。なんとしてでも話を聞く必要がある」

「わかった、手伝うぜ。大黒駅のまわりを探したらいいんだな？写

真はないのか？オレたちはその子を見た事ねえからわかんねえぞ」
「ああ、写真ならあるぞ」
大谷は金沢のイベント事故の時に撮ったサオリの写真をウインドウに出してダイチに渡した。ダイチはすぐにその画像をメンバー達のメガネに一斉送信する。
「見つけたら声をかけずに私に連絡してくれ」
「わかった。じゃあ、とりあえず駅まで行くぜ」
その場にいた全員は社務所を飛び出し、大黒駅を目指した。

#22　出会いからのはじまり　part6

メガマス本社で朝早くから行われていた直樹への取り調べは、昼前になって終了した。取り調べでは空間管理室本部長が自ら出てきて激しい口調で直樹に迫ったりもしたが、しかしそれ以上の過激なことはなされなかった。取り調べで暴力的な手段に出なかったのは一郎がその場に同席して本部長を落ち着かせていたのと、直樹自身がすんなりと洗いざらい吐いたからだ。直樹に取り付けられた装置により、彼がウソをついているかどうかもすぐに見抜けるようになっている。本部長は取り調べの半ばで直樹が持っている情報に大した価値はないと見切りをつけたのか、後半は飽きたようにその話をほとんど聞き流していた。

だから直樹はすぐに解放された。今回メガマスに拉致されたことは彼らと交換条件を交わして他言できないことになっている。すなわち、直樹がメガマスのことを上に報告した場合、直樹が警察官という立場を利用して金沢支社のプロジェクトの実験に参加していたことがメガマスによって暴露される。そうなれば直樹は警察にはいられなくなるということだ。

しかしそんなことは直樹にとって大した問題ではなかった。問題は事件についてこれからどうするかである。そのことを思案していた彼は、しぼみかけた風船のような顔をして本社の休憩室のソファーにもたれかかってうつむいていた。一番はじめに頭に浮かんで来たのは、久美子に合わせる顔がないということだ。

「こんなところにいたんですか、竹下さん」

その休憩室に一郎と桜井がやって来た。取り調べ中は言葉を交わさなかったものの、直樹はこの2人もまた騙していたことを気まずく思って目も合わせずに答える。

「ちょっと、疲れたもので」

一郎と桜井は構わず直樹の隣に並ぶようにソファーに腰掛けた。

「……今日のことは本当に申し訳なく思っています。どんな事情があれ、こんな手段をとったのは明らかにメガマスに非があります。なんでしたら、警察の上層部に報告していただいてもかまいません」

一郎もソファーに座ったまま前方を見つめて言った。どうして自分をいたわるのだろうと直樹は思う。その気遣いが今の直樹にとっては重たかった。

「上層部に報告したところで、結局僕の罪も糾弾されることになります。メガマスはそれも計算に入れているんでしょう？まあ、僕もこのまま警察官で居続けるつもりもないんですが」

「君にはまだなすべきことがあるでしょう。交通事故の再調査、そしてそのためには研一君を救わなければならない」

桜井も決して直樹のことを許しているわけではないが、それでも彼を信じているような口ぶりで言った。

「……そうですね。もちろん、それについては務めを果たすつもりでいます」

直樹は意思表示として精一杯声を張った。桜井も安心したように頷く。

「やっぱりわかりませんね。君は再調査の件を持ちかけられた際、既に金沢支社の工作員として活動していた。取り調べを聞く限りでは、それを自分の中で決して肯定しているわけでもない。一方で再調査はメガマスの旧幹部達を弾劾するために行うものだった。自分に旧幹部達を裁く手助けなどできるのか、そういう自己矛盾が発生すると思うんですがね」

「確かに、自分が超打算的な人間だと嫌悪していたことは事実です。でもどちらも、僕の本能に従って意思決定をしたというのも真です」

「と言うと？」

「正義というのは自分勝手な押し付けがましい感情だと思うんです。僕は旧幹部達を許せなかった一方で、同じように周囲を騙していた自分に対してはその強い感情を抱きませんでした。言い換えるなら、本当の自己中だと自分で思います。エンジニアとなることも破れぬ

夢としてずっと引きずっていましたから、そこに向かうための手段を選ぶほどの理性はなかったんでしょう」

直樹は自嘲的に笑う。この仕草は取り調べの時も目立っていた。

「野村刑事に君を紹介したのは小野先生だった。その小野先生も君と同じで金沢支社のプロジェクトに参加していて、君をそこに引き込んだ張本人でもある。その小野先生が再調査の話を持ちかけられて君を紹介した真意というのは？」

桜井がさらに訊ねる。

「先生は電脳犯罪対策係の特別顧問でもありますし、身近な僕を紹介したという以外の理由は思いつきません。もしかすると、先生は僕がエンジニアになることに対して必ずしも賛成していないのかもしれません。そのために警察官としての重責を課した。対策係の旗揚げには先生の力もお借りしたので、当然と言えば当然ですけどね」

「その小野先生と現在連絡がつきません。先生がどこにいらっしゃるのか、心当たりはありませんか？」

メガマスは昨日から小野の行方も探っている。しかし直樹の時と違ってそう簡単に足取りを掴めないのだ。

「取り調べの時も申しましたが、僕はプロジェクトに関しては末端の扱いです。先生はおそらくプロジェクトチームの幹部とどこかの研究施設にいるはずですが、そこがどこにあるのかも僕は知らされていません」

「それなら、プロジェクトチームを裏切った技師に関しても知らないと？」

「それも取り調べで初めて聞いた話です。その人が今回の事件の首謀者である可能性が高いんですよね？」

裏切り者の技師に関する情報は、イサコがミチコと再会した時に聞いた話がソースとなっている。その曖昧な情報を本社は鵜呑みにしているわけではないが、数少ない手がかりの一つとして究明を急いでいる。

「天沢くんの話によれば。今回のことは技師の手によるメガマスに

対する復讐であると。竹下さんが論文で新空間の原型を提示したのだとしたら、それを実際に設計したというその技師と会ったことがあるのではないですか？」

「いえ。会ったことがあるのなら直ちに言っています。僕は基本的に先生と打ち合わせをしていたぐらいで、プロジェクトチームの方ともお会いしたことはほとんどありません。ああ、いや。1度だけその責任者の方とお会いしました。確か神崎さんとおっしゃっていた気がします」

辻褄は合っているなと、一郎は大きく頷いた。

「それはいつ頃のお話ですか？」

「去年の暮れの話です。まだプロジェクトが立ち上がって間もない時でした。その時に小此木医師や猫目技師の研究についても説明を受けました。それと僕の卒論で提唱した技術を加えることによって、新空間は完成すると。材料は揃っているので、設計はすべてプロジェクトチームが行うとも。ですので僕は新空間を設計した技師とは面識がありません」

そこで一郎は頭の中であることが引っかかった。

「材料が揃っていたのでプロジェクトチームは新空間を完成させられた、ということですよね。我々も本社の電脳医療補強プロジェクトで空間の設計を行っていたからわかるのですが、資料が揃っただけでそう簡単に完成まで持って行けるのでしょうか。仮にそれが可能だとしても、期間が短すぎる気がします。この半年で本社はかつての“古い空間”を再現するのがやっとでした。それよりも高度な空間を同じ期間で新たに作り出したというのが、私は信じられないのですが」

「いや、でもそれは金沢支社がアプリコット社などから優秀な技師達を借りてきたからなし得たんじゃないですか？」

桜井はそう言ったが、直樹は一郎の疑問は当然のものだと思った。

「僕は小此木さんと同じ意見です。その前に、桜井検事のおっしゃるアプリコット社についてですが、彼らは空間設計に関わっていな

いと思います」
「それはどういう？」
「空間設計はメガネのインフラを整備したメガマスの専売特許です。新空間の設計にアプリコット社の技師を投入する必要はないと思われます」
桜井は首を傾げた。
「ではなぜプロジェクトにはアプリコット社も参加しているのですか？」
「これは僕も早くに気付くべきでした。永遠の命の実現が最終目標なら、アプリコット社の支援など必要ありません。むしろ医療機器メーカーと契約を結ぶはずです。プロジェクトチームの目的は企画当初から別のところにあったのだと思われます」
「それが何かはわからないと」
一郎が訊ねると直樹は少し思案した後に静かに頷いた。
「……ええ。あの会社のどの部門に期待して提携したのか、僕ではちょっとわかりかねますね」
「とにかく、プロジェクトチームは永遠の命の実現よりも大掛かりな目的を持っていると考えた方がいいということですね」
一郎はアプリコット社についても調査の手を広げる必要があると思った。
「ではさっきの話に戻りますが、なぜプロジェクトチームは短期間に資料を見ただけで新空間を完成させられたのか。竹下さんはどうお考えですか？」
桜井が仕切り直すように訊ねた。
「あくまで僕の想像ですが、今回メガマスを裏切ったという主任技師は、もしかすると旧コイルス社の出身なんじゃないでしょうか？」
「コイルス社？どういう理由でそんなことが」
桜井とは裏腹に一郎は直樹の言いたいことを瞬時に理解した。それは自らも無関係ではない問題だった。
「……なるほど。その主任技師は、コイルス社の社員として私の父

と猫目技師の研究に参加していた。つまり新空間の原型にまつわる研究にも関わっていた。だからコイルスの空間の深くに封印されたその研究資料を見て、そこに足りなかった技術については竹下さんの論文を参照するだけで、こんな短期間で新空間を完成させられたと」

「そうなのだと思います。小此木さんは当時どこに？」

宏文がコイルス社の研究に参加していたのは7年以上前だ。一郎が３０代半ばの時である。

「その時は、メガマス金沢支社で電子辞書などの小型電脳機器の設計を。まだメガマスがメガネの利権を手に入れる前の話ですから。父のことは実は死後に初めて知らされました。父は仕事に厳しい人でしたから、メガマスと契約してコイルス社の技術を調査していたことは守秘義務によって僕にもは口を閉ざしていたようです。ですので僕はそのコイルス社の研究チームの方との接点はありません。僕の母なら、何かしら知っているかもしれませんが・・・・・その点は確認することにします」

「そうなんですか。そこから何かが掴めるといいですが」

話はいったんそこで途切れた。一郎も直樹も今後のことを考え込むように押し黙る。そうして一服しようと桜井がタバコに火をつけて吸い始めた時、香川が休憩室に飛び込んできた。

「小此木さん！ここにいたんですか」

「どうしたんだ？何か動きがあったのか？」

いつも通りの勢いの香川を落ち着かせるように一郎が言った。しかし香川はせき立てるように言った。

「あったんです！とりあえずこれからメガマス病院に向かいましょう！」

「病院に？一体何が？」

直樹と桜井も香川を注視する。香川は一瞬ためらったがそのまま言う事にした。

「原川君が……」

#22　出会いからのはじまり　part7

一郎から連絡が入ったのは、玉子とイサコがバイクで一足早く大黒駅に到着し、サオリを探して周辺を見回っていた時だった。
「もしもし？室長？」
『たった今メガマス病院から連絡があった。研一君が、目覚めたらしい』
その一瞬玉子は固まった。自分の中に沸き上がる感情が何であるのかさえもわからないような状態で玉子は聞き返す。
「本当ですか？目覚めたということは、電脳体も無事に戻ってきたんですか？」
『病院によるとそういうことらしい。急なことで僕も信じられないが……とにかく僕は今から病院に向かう。君も来るか？』
一郎の問いかけに玉子は一瞬迷ってイサコを探した。今の玉子はイサコから目を離してはいけないことになっている。そのイサコはサオリを探さなければならないので、自分だけ病院に行くことはできない。だからイサコの意志を確認する必要があった。玉子はちょうど駅の構内から出て来たイサコに手招きをした。
「どうした？」
「今室長から連絡があったんだけど、ケンちゃんの電脳体が戻ってきたらしいの」
玉子は指電話の電話口を押さえるようにして言った。
「なんだって!?それで、原川は目覚めたのか？」
「ええ。病院からそう連絡が来たって」
するとイサコは半信半疑の表情で考え込んだ。
「原川は病院から一歩も出ていないはずだ。ということは、病院内に例のブラックホールが現れたとでも言うのか？」
「わからない。病院に詳しく確認してみないと」
「そうか……アンタは病院に行きたいんだな？」

玉子の心中を察したようにイサコが訊ねる。そのイサコの気持ちも玉子は感じとった。

「アンタの方はこのままサオリを探すつもりだな？」

「ああ。近くにいることがわかっているのに、この機会を逃すわけにはいかない」

２人が駅前のロータリーで話し合っていると、鹿屋野神社から走って来たメンバー達と、狭い住宅街を車で縫いながらやって来た大谷が到着した。

「見つけたか？」

大谷が助手席の窓をあけて訊ねる。

「いや。それより重要な知らせが入った。原川の電脳体が戻って覚醒したらしい」

イサコの言葉を聞いたメンバー達のリアクションは、玉子が一郎からそれを聞かされた時と同じだった。

「ハラケンが！？本当に？」

ヤサコが詰め寄るようにして訊ねる。

「メガマス病院から本社に連絡が入ったって話だ。この目で見てみないとなんとも言えないけど」

「なるほど。妙な話ではあるが、目覚めたのならそれに越したことはないな」

大谷もイサコ同様にこの展開を訝しんだが、ともあれまずは確認が先だと思った。

「サオリの方はどうするんですか？原川君が目覚めたのなら、事件は解決したようなものだけど」

「いや、どうもまだ気にかかることもある。私は引き続きサオリを探す」

シュウイチの問いにはイサコが答えた。イサコはどうしてもサオリと話をしたいと思っていた。

「でもイサコは原川さんと離れるわけにはいかないんだろ？その原川さんは当然甥っ子さんの様子を見に行きたいと思ってるんでしょ

？」
「ええ、できれば」
大谷の質問に玉子は正直に頷いた。
「しゃーないッスね。イサコはオレが見ときますよ。原川さんは病院に行ってください」
「いやでも、それを本社に知られると、イサコに対する監視が厳しくなるかもしれません」
「そんなこと気にしなくてもいい。私がわがまま言ってるんだからな」
イサコは自分に付き合わせている玉子に対して申し訳なく思っていた。元々イサコが玉子を指名したということもある。
「オレも一応本社とは協力関係にあるんですから問題ないでしょ。さっさと行ってやりな」
「……わかりました。感謝します」
大谷にも言われ、玉子はありがたく病院に行かせてもらうことに決める。
「誰か一緒に病院に行く？」
玉子はメンバー達の方を見て訊ねた。そこで手をあげたのはヤサコ、フミエ、アイコの3人だった。
「ダイチ達はいいのね？」
「ああ。あんまり大勢で乗り込んでも仕方ねえしな。ここはハラケンと事故に巻きこまれたフミエ達が行けば十分だろ。オレたちはそのサオリって子を探すの手伝うわ」
ダイチの判断に黒客メンバーとタケルも納得した。こうしてメンバー達は2手に分かれることになった。
「じゃあ、サオリが見つかったらまた連絡して」
「わかってる。私たちも後でそっちに向かう」
イサコと言葉を交わした後、玉子はヤサコ達と共に病院に向かった。
「さあ、私たちはサオリを探しに行こう。とりあえず見たところ、

駅の構内やその近くにはいないみたいだ。大谷。その後のサオリの足取りを検索してくれるか？」

「あいよ」

大谷はソフトを立ち上げて検索に入る。結果はすぐに出た。

「駅から南に向かったようだな。こっちには何かあるのか？」

ウインドウを見ながら地元のダイチ達に向かって大谷が訊ねる。

「この足跡から考えると、あの廃工場を目指しているように見えるな」

「廃工場って、先月に小此木が詩織さんに会ったのもそこだったな？」

イサコが確認すると、ダイチ達も顔を見合わせて答えた。

「ああ、確かヤサコそんなこと言ってたな。でもあれなんだろ？詩織って子は入院中のはずで、ヤサコが会ったのはそのサオリって子のはずだって」

その話は鹿屋野神社に集まっていた時に空いた時間でイサコからダイチ達に説明していた。

「ああ。そのサオリが廃工場に向かったっていうのなら、あそこに何かあるはずだ。急ごう」

イサコは大谷の車に乗り込み、廃工場までの道案内をした。機動力に自信のあるダイチ達はそのまま駆け足で現場に向かう。工場近くは路地が入り組んでいるので到着したのはほぼ同時だった。

「ここがその廃工場か。なるほど、何かありそうな気配がするな」

車から降りた大谷はウインドウを操作して空間のプロパティ等を確認する。取り立てて異常な点は見当たらないが、何かが通常空間とは違うような空気は感じられた。

「ここは例の警察官が新空間の実験に使っていた場所だ。新空間に近いのは間違いないが、既にその実験は終了しているという話だった。それをそのまま放置したとも考えられない。本来ならもうここで何かが起こることは期待できないはずだ」

「でもここにサオリが入ったのは間違いない。随分寂れて、人の出

入りのなさそうな場所だからな。ここからはサーバーの情報を頼りにできない。自力で彼女を探すしかなさそうだぞ」
　サオリの足跡はこの入り口から途切れていた。逆に言えば追いつめることができたとも言える。
「大丈夫だ。ここはオレたちの庭みたいなもんだから。イサコも昔ここに来たことがあるしな」
「ああ。大体構造は覚えている。念のため、この入り口と裏門は誰かが張っておいた方がいいな」
「それならシュウイチはここに。タケルは裏口にまわってくれるか？」
「わかった」
　ダイチの指示に従い、タケルは裏口を見張るために入り口を後にし、この場所に初めてやって来たシュウイチはそこで待機ということになった。
「さあ、案内してくれ」
　大谷がイサコに言い、ダイチ達とは二手に分かれて工場内に入ることにした。

　ダイチとガチャギリとナメッチとデンパは建物の奥へと進む。サオリ以外には誰もいるはずのない工場内。にもかかわらず、妙な気配を3人ともに感じていた。もっと大勢の人の、工場が稼働していたときの喧噪にも似た気配を。
「オ、オヤビン」
　怖がりのナメッチはダイチの肩に手を置くようにして訊ねた。これが以前にフミエが話していた工場の怪奇現象だと確信する。
「ああ。オレもしっかりと人の気配を感じてるから安心しろ。デンパ。お前なら多分オレ達よりもこの気配を敏感に感じてるんじゃないか？」
「うん。その気配っていうのはわかるんだけど、それをダイチより感じ取ってるかどうかは微妙だよ。メタタグの音とからならもっと

はっきりと聞こえて来るから」
　デンパはしかし頼りない返事を返した。実際ダイチとデンパとで感じている気配の大きさに差はなかった。
「この現象もカラクリはわかってんだろ。すべてはパラレルワールドっていう新空間が原因だ。デンパの感覚が鈍ってるのも、それは新空間がイマーゴ保持者に干渉しないっていうイサコの話と辻褄が合う。先月フミエ達が体験したのも、これと同じだろう」
　ガチャギリは冷静に分析した。そのおかげでナメッチの恐怖心も薄れたが、それでも気味が悪いのは変わらない。こんなところに1人で入って行くサオリの気が知れないとナメッチは思った。
「待て。今度は生の人の気配だ」
　ダイチが急に声を細めてメンバー達を止めた。数々の電脳戦争をこなすうち、ダイチは人の発する気配には敏感になっていた。メンバー達もそれを知っているのでいよいよ尋ね人がいたのだと確信する。ダイチはゆっくりと歩を進め、先のフロアーをのぞき込む。そこには大谷からもらった写真に映っているのと同じ少女がいた。その場所は半地下となっていて、部屋の上部に取り付けられた窓からは陽が差し込んでいる。少女はその日差しの中に影を作り、まるで何かを祈るように立ち尽くしていた。
「アイツで間違いないな。一体何やってんだ？」
「わからん。とりあえずイサコに連絡だ」
　自分たちの出番はここまで。後はイサコに任せることにしようとガチャギリに言われ、ダイチは電話をかけることにした。少女にはまだ気付かれていないとダイチは安心していたが、その時、
「びやっくしょん！！」
　ナメッチがやらかしてしまった。
「お前！なんでこんな時に！」
「だって、ここホコリがすごいんだもん」
　ダイチは怒り心頭に発してナメッチを叱る。もちろん今の一発で少女はダイチ達の存在に気付いてしまった。

「おい！やってる場合か！アイツ逃げたぞ！」
その様子を見ていたガチャギリがダイチをせき立てる。
「なに？逃がすか！」
フロアーの奥に逃げ去って行った少女を追いかけ、颯爽とダイチが飛び出す。さすがにサッカー部に入るだけの脚力を持っているダイチはすぐに少女に追いついた。
「来ないで！」
少女はしかしダイチに暗号を投げつける。来るとは思ってなかったダイチにその暗号をもろに直撃した。
「のわあ！」
幸い暗号は軽いものらしく、ダイチのメガネは少しだけダメージを被っただけで済んだ。
「ああ！今追ってるところだ。ダイチが暗号の攻撃を受けたが、多分大丈夫だ」
ガチャギリはイサコに電話をかけながらダイチに追いついた。すでに場所は伝え、イサコはすぐにこっちに来ることになっている。少女は先のフロアーからさらなる攻撃を仕掛けてきたが、ガチャギリは攻撃を受けたショックで茫然とするダイチを引っ張って陰に隠れた。
「聞いてねえぞ。あんな暗号を使ってくるなんて」
「暗号使いなのは知ってただろ。それを無防備に突っ込むとは、だいぶ勘が鈍ってるなお前」
息切れするダイチにガチャギリが笑みながら言った。
「はっ。オレもヤキがまわったのかもな」
ダイチも苦笑しながら言うと、少女の様子を確かめるために陰から顔をのぞかせた。するとさらにフロアーの奥から人が走って来る音が聞こえた。イサコと大谷だ。少女も振り返ってそちらの方を向いた。
「サオリ！」
イサコは少女の前に立ちふさがった。それを見てダイチ達も飛び

出す。挟まれる格好となった少女はイサコとダイチ達を交互に見るように逡巡すると、今度はイサコの方に暗号を投げつけた。
「どいて！」
しかしイサコの前には物理結界が張られており、暗号は届かなかった。ここに来る前、念のために大谷が仕込んでおいたのだ。
「やめろサオリ！落ち着いてくれ。どうしてまた私を避けようとするんだ？」
イサコは本心から訴える。金沢の事故を乗り越えて少なからず互いを理解し合えたはずのサオリとまた争うなんて考えたくもない。
「どうして、その名前を？」
しかし少女の反応は意外なものだった。イサコは聞き間違いかと思った。
「アンタ、サオリなんだろう？ひょっとして、姉の詩織さんなのか？」
「……あなたは一体誰なんですか？どうして姉のことを知っているんですか？」
その時戸惑ったのは少女とイサコの両方だった。今の口ぶりからすると、目の前にいるのは妹のサオリで間違いない。しかし、それならイサコのことを知らないはずがない。
「どうも様子が変だな」
大谷も首を傾げる。
「ああ。とぼけている風にも見えないな。容姿からしてサオリで間違いないはずだが」
そう言うとイサコは、後方で今にも飛び出さんとしているダイチ達を目で制した。ダイチ達もそれに気付いてこの場はイサコに任せることにする。ところが、イサコが少女に目を戻した瞬間、彼女はその場に崩れ落ちるように倒れ込んでいた。
「サオリ！？」
何が起こったのか理解できないという一瞬の間を置いて、イサコは少女の元に駆け寄った。あまりの事態にダイチ達も、そして大谷

も瞬間的にその場を動けなかった。
「どうしたサオリ！しっかりしろ！まずい。すごい熱だ」
イサコは少女を揺すりながら額に手をやって気付いた。ようやく大谷もそばに駆け寄って確認する。
「こりゃ４０度近くあるぞ。仕方ない、すぐにこの子を病院に運ぼう」
大谷はそう言うと少女を抱き上げた。ダイチ達の案内で工場から出て、大谷は彼女を車の後部座席に乗せる。
「どうしたんだよサオリは？」
「私達の目の前で倒れたんだ。すぐに病院に行くぞ」
入り口で待っていたシュウイチも思わぬ展開に戸惑いを隠せなかった。とりあえず車にはイサコとシュウイチが乗り、大谷の運転で最寄りのメガマス病院に向かうこととなった。残ったダイチ達もダッシュで病院に向かうと約束し、車は先に出発していった。

#22　出会いからのはじまり　part8

一方、ハラケン目覚めるとの知らせを聞いてメガマス病院に飛んできた玉子とヤサコ達。入り口の自動扉が開く時間ももどかしく、すぐに受付に駆け込んだ。

「原川研一の身内の者です。面会よろしいですか？」

ハラケンは本社の監視下に置かれているので、病院に話を通さずに面会することはできない。受付の女性は既に話を聞いていたのか、事情を察したように返した。

「かしこまりました。すぐに担当医に連絡を取りますのでしばしお待ちください」

女性はすぐに内線電話を担当医につなぐ。ほどなくしてその医者は看護婦を連れて玉子達の元にやって来た。

「先生！研一が目覚めたというのは本当なんですか？」

担当医は一郎とほぼ同年代ぐらいの平凡な雰囲気をまとう人物だった。玉子はハラケンが入院した日に金沢から帰ってきた際、一度この医者と話をしたことがある。

「ええ。目覚めたのは目覚めたのですが、どうも」

医者はどこか奥歯にものが挟まったような言い方をした。それを聞いたヤサコが不安になって訊ねる。

「何かあったんですか？」

「……まあ、会ってもらえればすぐにわかると思います。どうぞこちらへ」

医者は自ら病室に案内した。ハラケンの病室は入り口から一番遠い建物の最上階に位置する。ハラケンの状態は親族以外には秘匿されているので、病室も隔離される必要があったからだ。

「電脳体もしっかりと戻って来ているんですよね？」

歩きながら玉子が訊ねる。

「はい。それも確認しました」

「電脳体が戻った瞬間には誰も立ち合わなかったのですか？」
それならば例のブラックホールを目撃した人がいることになる。
しかし、
「ええ。戻るところは誰も居合わせませんでした。電脳体が戻っていることに見回りに来た彼女が気付き、私に連絡をしてきたのです。急いで私が病室に向かい彼に呼びかけたところ、彼はそこで覚醒しました」
医者は隣にいた看護婦を指しながら少しだけ険しい顔つきで言った。彼にも何が起こったのかわからないとでも言わんばかりに。
「先生は事件についてメガマスから説明を受けていますよね？例のブラックホールがこの病院に開く可能性ってあったんですか？」
「いやあ。私は空間についての知識はないのでなんとも」
「では、今までに病院で空間のトラブルは？」
「聞いたことがありません。ただ、今回の場合は本社にも実態も掴めないという新空間が起因しているということなので、何が起こっても不思議はないんじゃないですか？」
確かに医者の言う通りだと玉子は頷く。しかし玉子は釈然とはしなかった。
「オバちゃん。ハラケンは帰って来たんだから、そういう細かいことは後でゆっくり考えればいいじゃない」
そこでフミエが落ち着けというように玉子に声をかける。どんな形であれ、ハラケンが戻って来たと聞いてフミエやアイコは安堵していた。先ほどの医者の言葉はずっと気にかかってはいたが。
「ここです」
病室に到着すると、医者は何となく重く息をつくようにパスワードを打ち込んで扉を開けた。１人部屋の病室ではハラケンがベッドから身を起こし、ぼんやりと窓から外の風景を眺めていた。
「ケンちゃん！」
「ハラケン！」
玉子は大きな声で呼びかけると、ベッドに駆け寄って人目を憚ら

ずハラケンを抱きしめた。ヤサコ、そしてフミエとアイコも涙を浮かべながらその名前を呼んでベッドを取り囲む。しかしハラケンはうつろな目に、ほんの少しの戸惑いの色を浮かべて何も言葉を発しなかった。

「原川さん」

その時、担当医が一つ咳払いをしてその帰還を歓喜する玉子に呼びかけた。

「なんなんですか？」

「いや、その。そういったスキンシップは本人が戸惑いますから避けていただきたいのです」

玉子は担当医の言っている意味がわからなかった。

「余計なお世話です。これはいつもしていることですから」

「そうじゃなくて。今の彼にとってアナタ方は見知らぬ人なんです」

何を寝ぼけたことを言うのかと玉子は思う。ヤサコ達も担当医の言うことを理解できなかったが、そこでハラケンの発したか細い声で夢から覚めた気分になった。

「ちょっと、やめてもらえませんか？」

すると彼は今の精一杯の力で玉子の腕を払いのけた。玉子はあまりのショックで茫然とする。

「ケンちゃん？」

「……アナタ達は一体誰なんですか？なんで、僕の名前を知ってるんですか？」

さらに追い打ちをかけるかのように、ハラケンはうつむき加減にそう言った。玉子とヤサコ達は、今のハラケンに降り掛かっている事態をようやく察する。

「まさか、これって」

「記憶喪失？」

思わず後じさりする玉子。そしてヤサコは首を横に振ってほしいという思いで担当医の顔を見る。その時ヤサコと目が合った彼は、ヤサコの願いとは裏腹にゆっくりと首を縦に振った。

「ええ。先ほど少しばかり質問をしたところ、彼は事故の時の記憶をなくしている上、両親や友達の名前、通っていた幼稚園や学校、すべて思い出せませんでした。ただ一つ、自分の名前だけははっきりと覚えていましたが」

担当医の口から突きつけられる冷たい現実。そこでフミエが声を上げる。

「そんなのウソよ！覚えてないはずがないわ！ねえ、ハラケン！私のこと覚えてるわよね！？コイル探偵局の会員ナンバー七の橋本フミエよ！この子はナンバー八のヤサコ！小此木優子！こっちは準会員の相原アイコよ！覚えてない！？」

しかしハラケンは力なくかぶりを振るばかりであった。思い出せないことを申し訳なく思っていると言うよりも、けだるいという風に見える。

「落ち着いて。彼も長い眠りから覚めたばかりで、まだ意識が朦朧としているのかもしれない。もう少し時間を置いてもう一度訊ねてみよう」

担当医はフミエを諭すように言った。

「時間を置いたら記憶も元に戻るんですか！？」

「……それは、わからないけど」

担当医とフミエのやり取りの間に、ヤサコはどんどん気分が悪くなっていた。事故の時にハラケンが戻って来られないと知った時もそうだった。絶望と共にこみ上げてくる急激な吐き気に襲われ、ヤサコは片方の手で口を押さえながら、もう片方の手で部屋の窓枠の下に取り付けられている手すりを掴み、そのまましゃがみ込んだ。

「ヤサコ！大丈夫か？」

人の心配をしていられないぐらい、こちらも気が動転している玉子が声をかける。

「ちょっと、気分が……」

「それはいけない。君。彼女をお手洗いまで」

「わかりました！」

担当医に指示された看護婦は、ヤサコに付き添うように病室を出て行った。そしてそれと入れ替わるように、一郎と香川と桜井と直樹が本社から到着した。

「今優子が顔を白くして出て行ったけど何かあったのか!?研一君は?」

一郎は玉子と担当医の両方を見て訊ねる。彼も本社で報告を受けてから平静ではなかった。

「それが」

担当医が一郎達に聞こえる程度の小さな声で、ハラケンの病状を伝えた。

「記憶をなくした?まさか、冗談でしょう?」

「本当です。原因は詳しく検査してみないとわかりませんが」

担当医はハラケンを見やりながら返した。一郎も玉子やフミエ達の顔を見て、自らハラケンに確認しなくてもそれが本当のことなのだと思い知らされる。

「じゃあ、優子が気分悪そうに病室を出て行ったのは」

「おそらく、そのことがショックだったのでしょう。また倒れたりしなければいいのですが」

玉子はヤサコのことを心配したが、一郎はその玉子も心配だった。

「彼の記憶が戻る見込みはあるんですか?」

「どうでしょう。これも検査してみないとわかりません。たいていこういう場合、精神的ショックが原因になっていたりしますので、彼が新空間の中にいた時の体験が関係しているのかもしれません」

担当医の話は最も可能性のあることだとそこにいた皆が思った。電脳体分離中も、すべての感覚を司るのは肉体の脳だという話もここで関わってくる。

「あの、しばらく1人にしてくれませんか?」

その時ハラケンが担当医に願い出るように言った。このような大人数の注目を浴びていると心が落ち着かないらしい。担当医もそれを悟って気を利かせた。

「ああ、すまなかったね。じゃあ私達は一旦出て行くよ。後で検査をするから、そのつもりで。用がある時はそこにあるナースコールのスイッチを押すんだよ」

そうして担当医は病室にいた全員を外に促した。玉子やフミエ達も心残りがあったが仕方なく指示に従う。

「まさか、こんなことになるなんて」

病室が並ぶ廊下に出たところで直樹が俯くように言った。

「・・・・・落ち込んでばかりもいられませんが、彼の記憶については先生の治療に期待するしかありません。私たちはとりあえず、この病院の空間を点検しましょう。なぜ彼の電脳体が戻って来られたのか気になります」

「そうですね。またブラックホールが開く可能性もあるわけですし。またケンちゃんと同じ目に遭う人が出てしまうのは絶対に避けなければいけません」

玉子も気丈に返した。怒りにも似たその感情は、事件の完全な解決ためだけに向けられている。

「大丈夫か玉子君？あまりムリはするな」

「いえ、私は大丈夫です」

その目に宿る力強さに、一郎は逆の不安も覚える。その一方であることに気がついた。

「そう言えば天沢君は？」

「ああ、イサコなら大谷さんに見てもらっています。彼女も人を探していて、今は別行動を」

玉子がイサコを見張っておくのは本社命令なので、あまり一郎はいい顔をしなかったが、一緒にいるのが大谷ならまだ大丈夫かと思った。一郎は大谷に対しては信頼を置いていた。

そこでちょうどそのイサコから玉子に着信が入った。

「ここは電話しても良いですよね？」

玉子は念のため担当医に確認をとる。彼が頷いたのでそのままつないだ。

「もしもしイサコ？どうした？彼女は見つかったのか？」
『ああ。見つけたんだが、サオリのやつ、私達の目の前で倒れたんだ。今は大谷の車に乗せてその病院に向かっているところだ』
　また思ってもない知らせに玉子は困惑する。
「倒れたってどういうことなの！？」
『どうもこうも、私達にも理由はわからない。サオリを見つけたのは廃工場の中だった。アイツ、ダイチ達にも暗号で攻撃を仕掛けてきたが、私たちで追いつめたところでいきなり気を失ったんだ。高熱も出てる』
　廃工場と聞いて、玉子は今朝のヤサコとイサコの会話を思い出した。やはりサオリは廃工場と何か関係があるのかと思う。
「そうか……とにかく気をつけて来い」
『ああ。ところで、原川の方はどうだった？元気そうか？』
　イサコの質問に玉子は言葉を詰まらせた。今から彼女達が駆けつけても、ハラケンは面会を拒否している。どのみちイサコ達にも自分の口から伝えなければいけないことだと思い、玉子は正直に打ち明ける。
「……ケンちゃんは目覚めたけど、記憶を失っていた。自分の名前以外、何も覚えていないらしい」
『なんだと！？記憶喪失ということか！？』
「先生にも原因はわからないって。これから検査を受けるらしい。アンタ達が来ても、ケンちゃんには面会できないと思う」
　すると今度はイサコにも束の間の沈黙があった。
『……そうか。実は、サオリにも似たような兆候が見られたんだ。私のことを見て、「あなたは一体誰なんですか？」って』
「なんですって？じゃあ、サオリも記憶を失ったってこと？」
　玉子が叫ぶように訊ねる。その時、玉子は誰かの鋭い視線を感じた気がした。驚いて一郎達のいる方を振り返ると、その玉子の声に驚いて皆がこちらの方を向いていた。感じた視線は一郎達のことだと思い、気をとりなおして玉子は電話に集中する。

『かもしれない。原川もそうだって言うのなら、偶然にしては出来過ぎている。今回の事件、まだまだ解決は遠そうだぞ』

「……ああ。また後でゆっくりと話合おう」

そこで一旦電話を切る。玉子は時間を止めて頭の中を一度きれいに整理したかった。自分たちのまわりで一体何が起こっているのか。何か途方もないような未曾有の事態の中に足を踏み入れたような、そんな思いがよぎった。

#22　出会いからのはじまり　Part8（後書き）

第22話はここまでです。
第23話もお楽しみに。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ０

今日も彼はやわらかな日差しに包まれて目を覚ます。その居心地の良さとは裏腹に、目覚めても夢の中にいるような気分でいる彼は、今でもその現実を信じてはいない。しかし、何もかもが整然としていて正しく動いている世界は、戸惑う彼を優しく迎え入れた。彼は受け止めるしかなかった。ささやかな抵抗を試みても、彼は自分の力ではどうしようもないことを思い知るだけ。その彼がどうしても受け入れられなかったのは、涙を流して再会を喜んでくれた彼女の存在だった。そんな冷たい自分に嫌悪する以外、この世界での彼はすべてにおいて満ち足りていた。かつては渇望した、彼女の愛でさえ。

しかし、現実を受容することは、この世界で生きていく上で必要なことでしかない。できるなら、この甘い悪夢から早く目覚めることを彼はずっと望んでいる。それは、自分がこの世界の住人でいることに満足することが怖かったからだ。とりわけ彼女と過ごす時間は、その恐怖との戦いだった。いつか彼女の愛を受け入れる日が来ることを、彼は必死で否定し続けた。実際、彼女は彼の知っている彼女とはほんのささいなところで違っていた。それは彼もまた、彼女を愛したからわかることだ。しかし、彼の本当の弱さは、その彼女を見捨てることができなかったことである。それがなぜだか、彼自身も答えを見つけ出せていない。

ミチコはそんな彼にささやいた。

「まだこの世界は未完成。そして彼女は永遠の欠陥品。アナタはそれに気付いている。だから彼女を受け入れないのね？」

彼はかぶりを振って、毅然とした態度で返した。

「違う。僕は、カンナとはさよならしたんだ」

「それはアナタの自己満足よ。なら、アナタは彼女に言えるの？今更自分の目の前に現れるなって」

「それは……」
彼は言葉を詰まらせる。
「事実は、彼女はアナタを愛し、そしてアナタの態度の豹変に傷ついているということ。そしてアナタも、彼女への愛を忘れてない」
「今のカンナにそんな感情があるはずない。だって彼女は」
「偽物だとでも言いたいの？なら、その偽物を今からアナタの目の前で消してみせましょうか？」
「くっ……」
彼はミチコに対して何も言えなかった。この世界でのミチコは、誰でも抹消できる力を持っている。そして、彼は彼女が消されるのは耐えられない。
「本物かどうかなんて問題じゃない。アナタの本心がそれを証明している。ただ受け入れるしかない。あの人もそう。アナタと同じでそれがわかってない」
「何の話だ？」
「この世界の創造者のこと。その人は、これからこの世界を完成させようとしている。さっきの言葉を使うなら、この世界がじきに“本物”になるの。アナタはそれをここから見届けるのよ」
「どういう意味だ？」
しかしミチコは彼の質問には答えずに消えてゆく。彼が気付くと窓からは心地よい5月の風が吹き込んでいた。まるで幻を見たかのような気分でベッドから身を起こした彼は、ミチコのある言葉が耳に焼き付いて離れなかった。
まだこの世界は未完成。そして、この世界こそが“本物”になる。

＃２３　現実と虚構のはざまで　Ｐａｒｔ１（前書き）

５月１日（土）

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ１

「金沢支社の本命プロジェクトは、この時点では順調に進行していたそうです」

ハラケンが目覚めた昨日、一郎の指導のもと、空間管理室総出でメガマス病院の空間調査が行われた。ハラケンが戻ってきたということは、そこに新空間への出入り口が開いたということになる。そこには新空間プロジェクトに関わっていた直樹も参加した。事故の責任は少なからず自分にあるという思いを抱く彼にとって、それは罪滅ぼしという意味もあった。

その調査の結果をふまえて、本社では朝一番に幹部への報告会が開かれた。

「原川君の意識、電脳体は無事戻りましたが、しかし彼は記憶を失っていました。それは昨日お伝えした通りです」

「医者はその原因をなんと言っていますか？」

桝田が報告者である一郎に訊ねる。

「検査の結果、彼の身体に外傷はありませんでした。彼の肉体はずっと病院のベッドに横たわっていましたし、事故発生日における検査でもそれは見られなかったので当然のことではあります。となると、原因はやはり精神的な部分にあるのではないかという可能性が残りますが、それは……」

「なるほど。彼は新空間でなんらかの異常体験をした。その結果、脳はその忌まわしい記憶を忘れようとし、それが記憶をなくす原因となった。しかし、新空間での出来事は誰も知りようがなく、彼がどんな体験をしたのかはわからない」

「ええ。一般的に記憶喪失患者の記憶を取り戻すためのカウンセリングを施すには、その原因となった体験を医師が把握することが必要となります。今回それが望めないとなれば、彼の治療もおのずと

困難になると」
　受け入れがたい検査結果を一郎は苦い思いで読み上げる。彼の記憶は2度と戻らないことも覚悟しなければならないと、医師は通達していた。
「だが、それが単なる記憶喪失ではない可能性もあるんだろう？昨日運ばれたっていう、金沢事件での関係者の少女については？」
　次に管理室本部長が訊ねる。
「はい。彼女は確かに金沢事件の関係者で、本社の監視下から脱走した桐野沙織で間違いありませんでした。彼女は高熱を出して意識を失っていますが、病気の疑いはなく、症状は風邪だそうです。ただ、今もって彼女の意識は戻らないと」
「彼女と最後に接触した天沢勇子は、彼女もまた記憶を失っていると言ったそうだが」
「ええ。天沢さんの証言では、彼女のことを桐野沙織は覚えていないようだったと」
「その証言、アテになるんだろうな？」
　子どもの証言なので本部長はその信憑性を疑っている。
「その時、大谷記者も居合わせてそれを聞いていたそうですから間違いないかと」
「フン。アイツか」
　本部長は鼻を鳴らした。あれ以来、大谷が本社を訪れることを彼は頑なに拒んでいる。よほど彼の言動が癪に障ったのだろう。
「しかし偶然なんでしょうか？一連の事故の関係者が同時に2人も記憶を失うなんて」
　桝田の疑問は、昨日から誰もが抱いているものだった。
「偶然と考えるには、話が出来過ぎています。ただ、我々にはそれを調べる術が今のところはないというのも事実です」
「メガマス病院の医師が診断した以上、そこに虚偽があるとも思えません。2人の共通項が今のところ見つからないのなら、単なる偶然なのでは？」

発言したのは本部長サイドの人間である平松部長だった。
「桐野沙織が失踪中に新空間にいた可能性は？」
「それは今も調査中です。彼女の失踪後の足取りを洗い出し、その電脳体が通常空間から消失した時間が存在すれば、その可能性は高いと言えますが、その検索には時間がかかりますので」
「なるほど……」
桝田は本部長と一郎のやり取りを聞きながら唸った。
「社長。ともあれ原川君が無事戻ってきたのですから、事件の幕は引いたようなものです。最近は金沢の事故や例の大谷のせいで、マスコミがにぎやかになってきているところですし、ここは事故調査チームの規模を縮小した方がいいのではないでしょうか？」
「本部長。まだ事件は解決したとは言えません。そのようなことは時期尚早ではないでしょうか？」
ハラケンの意識不明に関しては少なからず責任を問われていた本部長にしてみれば、何がともあれ一件落着という気分であった。後は事故や自らのミスをどうもみ消すかどうかで頭がいっぱいなのだ。
「だったらあの新空間プロジェクトの発案者と自称する警官に管理室を指導させればいいだけの話だ。暗号で新空間からの干渉を阻止できるんだろう？だったら、サーチマトンをそれ仕様に改造すればいいだけだ」
「そのやり方でもかつての“古い空間”は暴走したんですよ。もっと根本的な解決策が必要でしょう」
反論した一郎に本部長は息巻いた。
「根本的な解決策ってなんだ？金沢支社は一切こちらの指示を聞かない。たとえ金沢支社の幹部を更迭したとしても、新空間のプログラムがアプリコット社のコンピューターに移されているとしたら、こちらは手出しができない」
「それは金沢支社のプロジェクトの中核を担う小野隆がここで話したことですしね。彼はそれを我々に伝えて釘を刺すために、あの時本社に赴いたのでしょう」

平松部長の言うように、旧第三小敷地内で事故が起こったその日に、小野は本社での会議に呼ばれそのように意見した。しかし昨日の取り調べにおける直樹の証言から、彼もまたプロジェクトチームの人間であることが明らかになった。いっこうに小野と連絡がつかないこともそれを裏付けている。

「そうだとすると厄介ですね……そう言えば小此木さん。病院の空間に乱れは観測されたんですか？」

「いえ。不思議なことに、空間異常は見られませんでした」

それが昨日の調査における結果だった。

「旧第三小の事故の際には？」

「事故発生直後には大幅な乱れを観測したそうです。あの事故の時に管理室がすぐに感知できなかったのは、あの場所が管理外ドメインに切り替わっていたからです。もちろんそれは、犯人によって書き換えられていたわけですが」

「じゃあ、本当に昨日そこに新空間とのリンクがつながったのですか？」

話を聞くうちに桝田は怪しく思えてきた。

「我々の調査開始が遅れたからかもしれません。空間の乱れは、リンクがつながった直後なら観測できたのかもしれませんが」

「そもそも病院はオンロードドメインとは違う。そんなところにブラックホールが現れる可能性なんてあるのか？」

「金沢では中学校でブラックホールが現れたという話もありますし、ドメインはあまり関係ないかと。新空間に近い場所というのがあるのは間違いないと思いますが」

それには本部長も納得したように引き下がった。しかし、病院で何も観測されなかったというのは確かに不審な点でもある。新空間とのリンクがつながらなければ、ハラケンの意識も戻って来られなかったはずなのだ。

「原川君の記憶のこともありますし、まだまだ解明すべき点はたくさん残されていますね。本部長の言う規模の縮小はやはり時期尚早

だと思います」
「それならそれでも構いません。ただまあ、メガネが原因で子どもが記憶を失ったなんて、マスコミに嗅ぎ付けられなければいいですけどね」
「いつまでも隠し通すつもりもありません。時が来たなら、事件が解決しているかどうかに関わらず、それを世間に向けて公表します。こうなったのは、すべて私の責任ですから」
　桝田がその覚悟を見せたところで、朝の報告会は終了する。本部長は少しばかり不満そうな顔をして会議室を後にしていった。
「社長。少しお時間よろしいですか？」
「なんでしょう？」
　会議室にいたほとんどが出払ったところで、一郎は桝田を引き止めた。
「今回の事件の首謀者で、新空間の設計者である技師についてなんですが、竹下さんの話によると、旧コイルス社の出身である可能性が高いと」
「旧コイルス社？どうしてまた？」
　宏文と猫目技師の研究資料と、直樹の論文だけで新空間を短時間で完成させられたのは、その技師も宏文達の研究に参加していたからだと一郎と直樹は考えていた。後にコイルドメインの深くに封印されたその研究に参加できるのは、旧コイルス社の人間以外にあり得ない。一郎はそう桝田に説明した。
「なるほど。確かにそれは気がつきませんでしたね」
「そこで社長には、旧コイルス社買収当時の社員名簿を入手していただきたいのです」
　一郎が頭を下げる。そのようなことは本来社長に頼むべき用事ではない。しかし、社長でなければいけない理由があった。
「どうして私に？」
「その首謀者は、おそらく本社に関係のある人間だと僕は踏んでいます。でなければ、我が社の調査能力で未だにその正体を掴めてい

ないというのは不自然です。同じ理由で、社のデータベースもアテにならないですし」

「まあ確かに、社内にスパイがいることは間違いないでしょうね。だからスパイの可能性がなく、経歴を詐称しえない立場にいる私なんですね」

「社の人間を疑うようなことはしたくないのですが、そう言ってもいられない状況になってきましたので」

桝田は納得したように頷いた。

「わかりました。私の方でなんとかしてみます。先代が紙資料で保管していたはずなので、それでよろしければ」

「はい。それで構いません。よろしくお願いします」

一郎はもう一度頭を下げる。すると桝田は一つ息をついて言った。

「小此木さん。アナタはもう少し休んでください。働き過ぎです」

「いえ。私は一刻も早い事件の解決を目指しているので。それでは失礼します」

ふらふらと歩き出した彼の背中を、桝田は心配げな表情で見送った。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ２

この日はメガシ屋の電脳工房にイサコと玉子が訪れ、ヤサコとシュウイチ、そしてメガばあが昨日の出来事について話し合っていた。
「ねえ、おババ。記憶をなくすっていうのは、一体どんな気分なの？」
ハラケンのことを受けてヤサコが訊ねる。昨日はショックで体調を崩しかけたヤサコだったが、なんとか気を持ち直してあの後すぐに家に戻った。１人になって、涙がまたこぼれたが、それでもゆっくりと現実を受け止めようと努めた。今日はそのヤサコの様子を確かめるためにイサコと玉子はここに寄ったのだ。もちろん、ハラケンの記憶を取り戻す方法を模索するという目的もあった。
「そうじゃのう……ワシの場合は部分的な喪失じゃったから、研一とは比べられんかもしれんのう。ワシがぶっ倒れた原因となった一連の出来事はまったく覚えとりゃあせんかったが、それよりも昔のことは覚えておったし、近しい人の顔や名前も忘れんかった。なくした記憶をなんとかして思い出そうと歯がゆい思いもしたが、それは自力ではどうにもならんとわかってのう。そのことは自分に必要ない記憶だと割り切って生きることにしたが」
「そう……なら、それを思い出してきた時はどんな気分だったの？」
「知っての通り、ワシがなくした記憶を取り戻したのは、その時とまったく同じことが目の前で繰り広げられたからじゃ。つまり、玉子が記憶を失わせた原因を作り、イサコが記憶を取り戻す原因を作ったということじゃな」
くしくもその２人が目の前にいるが、メガばあはそのことを水に流している。そのイサコがつぶやいた。
「そんな奇跡が原川の身に起こることを期待することはできないな」
「そうね。ケンちゃんは何が原因で記憶をなくしたのかもわからないわけだし」

玉子も沈んだ声色でイサコに同意する。
「でも、サオリも同時に記憶を失ったんだよね？それがただの偶然とは思えない。2人とも、何かもっと電脳的なものが原因で記憶をなくしたんじゃないかな？」
「電脳的なものってなんだ？」
イサコがシュウイチに聞き返す。
「例えば、新空間の中でデジタル化された脳の中から、記憶データが何かのはずみで消えてしまったとか」
「前に説明しただろう。電脳体分離中も、電脳体を支配しているのは肉体の脳だって。肉体の脳の指令、そこに宿る感情は確かに新空間の中ではデジタル信号に置き換わるかもしれない。記憶もデジタル化されていて、もしそれが抹消されたとしても、それはあくまで新空間の中の電脳体にのみ反映されるだけだろう。つまり、シュウの言うようなことが仮に起こったとしても、新空間の中で生きる電脳体の原川が記憶を失うだけで、肉体の脳には何の損傷も与えられるはずがない。肉体として目覚めた原川が記憶を失った原因とは結びつけられないんだ」
イサコが頼むぞというようにシュウイチに説明した。シュウイチも何となくその話を理解するが、また別の疑問も浮かんだ。
「じゃあ、その原川君は本当に肉体だったの？それは確認した？」
「オバちゃんが目覚めたハラケンをしっかりと抱きしめたの。あのハラケンが単なる電脳体だった可能性もないと思う」
今度はヤサコが説明し、玉子もその通りだと頷いた。
「ついでにサオリも肉体だった。私は彼女の発熱を額に手を当てて確認したし、大谷も彼女を車まで運んだわけだからな」
シュウイチの推測を3人とも否定する。そこでメガばあも念のために確認した。
「電脳体の記憶が抹消された場合、本当に肉体の脳には何も影響がないと言えるんじゃな？肉体の脳と電脳体は1本の糸でつながっとるんじゃから、影響がまったくないとも思えんがの」

「それはイマーゴを想定して言ってるのか？確かに先生はイマーゴの不適合で命を落としてしまった。それは電脳体への悪影響を肉体の脳がもろに受けてしまったからに他ならないが」

イサコの言う先生とは宏文のことだ。そこで玉子が言葉を継ぐ。

「新空間においてイマーゴの有無はあまり問題じゃない。サオリもそう言ったらしい。それに直樹さんの話によると、新空間計画の元々のコンセプトは万人が永遠に電脳体として生きることができる空間だったわけだから、電脳体への悪影響が肉体の脳にも及ぶようなことはまずないと思う。肉体の脳の生存なくして、電脳体の生存もあり得ない。それを前提に新空間は設計されたはずだから」

「なるほどのう……やはり、新空間内での研一自身の体験が記憶喪失の原因か」

こちらもメガマス本社の幹部達と同じ結論に辿りついた。しかしそうすると、説明のつけにくい問題が浮かび上がる。

「じゃあ、なぜサオリも同時に記憶を失っていたんだ？」

イサコは独り言のようにつぶやく。

「ケンちゃんと原因が同じだと言うのなら、彼女自身も失踪中に新空間の中に入り込んだことになる。いや、必ずしもそうじゃなくてもいいわね。記憶を失うのは何も電脳体分離中と決まっているわけじゃない。サオリは失踪中によほどのトラウマになりそうな出来事を体験して、それが原因で記憶を失った」

「……どこか釈然しないな。それを言うなら、原川の記憶喪失の原因だってそれが真実とも思えないわけだが」

「サオリの場合は演技だった可能性はないの？」

彼女については医者が記憶喪失だと診断を下したわけではない。昨日倒れてからずっと意識を失ったままなのでそれを確かめようもないのだ。

「今更そんなウソをつく必要があるのか？サオリの場合、ウソをつくよりはずっと黙って秘密を隠し通すと思うが」

「そもそも記憶喪失のフリをするなんて見え透いた芝居で、こちら

を騙せるとは彼女だって思ってないだろう」
　イサコと玉子の反論にあって、シュウイチの推測はまた退けられる。
「でも、サオリが目覚めた時には色々と確認したいことがあるな。彼女がどこまでを記憶しているのかも気になる」
「そうだな。彼女の意識もいずれ戻るだろうし、何か手がかりになりそうなことを覚えている可能性もあるしな」
　サオリについてはそこで話はついた。高熱で寝込んでいる彼女の目覚めは、ハラケンの時よりもまだ希望が持てる。
「気になることはまだあるな。管理室の調査では、昨日病院で空間異常は見られなかったって話だ」
　イサコが思い出したように言う。玉子はイサコのこともあるのでその調査に参加しなかったものの、結果は一郎から聞かされていた。
「調査開始時には既に異常が収まっていたんじゃないかって室長はおっしゃっていたけど」
「それもどうも腑に落ちない。金沢イベント事故の時、私が病院に運ばれた後の話になるが、しばらくは新空間が口をあけた余波で会場の空間は乱れていたんじゃないか？」
　イサコがミチコに新空間で会い、電脳体が通常空間に戻ってきてからの話だ。サオリの話では新空間が開く時には相当なエネルギーが発生するらしい。そのためしばらくは空間が安定しないはずだとイサコは思っていた。
「その通りよ。あの時は確かに夕方まで空間の乱れが収まらなかったらしいわ」
「それなら、昨日病院で空間の乱れが観測されなかったというのは明らかにおかしいだろう。発生したエネルギー量の問題で片付けるのは納得がいかないな」
「でも、そう考えるしかないのよ。ケンちゃんのこともそうだけど、私達は考えられるうちで最も高い可能性を推測しているに過ぎない。それが真実と決めつけているわけじゃないわ」

「いや、それならもっと高い可能性があると思うよ。病院に新空間のリンクはつながらなかったっていう可能性が」
玉子の言葉を聞いたシュウイチが指摘した。イサコもそれに頷いて続ける。
「私もシュウの意見に賛成だ。状況証拠を踏まえるなら、そう考える方が自然じゃないか？」
「バカを言うな。それこそケンちゃんの意識と電脳体が戻ったっていう状況証拠を無視しているじゃない。そのためには、新空間のリンクが病院の空間につながることは絶対条件なんだぞ」
「それはアンタの先入観が入り過ぎている気がする。第一、原川が目覚めるまで新空間にいたっていう証拠があるのか？例えば、もっと前に原川の電脳体は通常空間に戻っていて、電脳体と肉体とのリンクがつながったのが昨日だっただけなのかもしれないぞ」
イサコと玉子の議論の中にメガばあも加わる。
「それはイサコの言う通りじゃ。それ以上病院の空間に固執するのは賢明じゃないかもしれんのう。今日もまた調査があるんじゃろう？」
「ええ。室長が出向いて指揮をとることになってる。病院の敷地内に、例の暗号があるかどうかを確認するって」
「まあ、その可能性もないわけじゃなかろうし、やるだけやるのは無意味ではないじゃろうが」
期待は薄いとメガばあやイサコは思った。このことには、もっと深い意味があるのではないかとイサコは考えた。
「一応、私は後でその調査の様子を見に行こうと思う。イサコは必然的に来なければならないわけだけど」
「それは構わないが・・・・・なあ、大谷に連絡して意見を聞いてみないか？アイツの知識があればこの意味するところがわかるかもしれない」
「それが、今日はあの人都合が悪いらしいのよ。私もこの集まりに来てもらって、意見を聞こうと思ったんだけど」

玉子が首を傾げながら言った。
「都合が悪いって、アイツも独自に調査しているんだろう。少しぐらい時間は取れるんじゃないのか？」
「そんなこと私に言われてもね。同じことを言ったんだけど、今日はなんか取りつく島もなかったわ」
大谷のことだから、「あ、わりい。今日は都合が悪いんだわ。じゃあ。ガチャ」で終わったのだろうとイサコは思ったが、どうも怪しい気がした。思い返せば昨日、彼はおかしな挙動をとったこともあった。
「なあ、今更だけど大谷をこのまま信用していていいと思うか？」
「ここまで協力してくれているのに、そう考える理由はある？確かに今日のことは怪しいところがあるし、昨日もタケル君に対して妙な言動があった。でも、あの人は真剣に事件の解決を望んでいるわ。何か秘密を隠しているとも言ってたけど、仮に私たちの敵だとしたら、公然とそんなこと口にしないはずよ」
それは彼が自分たちのことを信用している表れだと玉子は捉えていた。そして自分たちに対しての彼の言葉に裏はないとも思えるようになっていた。何より、彼の助言が何度も道を開いてきたのだ。この疑問はこれまで何度も浮かんだが、そのたびに彼の協力が必要だという結論に至ったのだ。
「やはりそう思うのは大谷に対して失礼か」
「あの人のことだから、自分が疑われていても何とも思わないでしょうけどね。とりあえず私は、あの人のことは信用しているわ」
「じゃあまた明日にでもアイツの話を聞こう」
とりあえず今日の議論で出た疑問点については、自分たちだけではどうにもならないとイサコは思った。彼の意見も聞いて整理しておきたいところだった。
「そうそう。ケンちゃんの意志次第になるけど、明日にでも一度退院して、日常生活を支障なく送れるかを確かめる必要があるって先生が言っていたわ。ケンちゃんは、きっと長い目で見守らないとい

けないと思う」

それにはヤサコと、そしてイサコが頷いた。ヤサコはどれだけ時間がかかろうと覚悟はできていた。彼の手助けをしながら、その記憶が戻るのを待てばいいと思った。

しかしハラケンの記憶が戻るかどうかを心配する一方でこんな不安も抱いていた。もしもハラケンがこのまま記憶が戻らないとしたら、彼に寄せるこの思いはどうなってしまうのだろうかと。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ３

「さて、じっくり話を聞かせてもらおうかしら？」
この日、何事もなかったかのように大黒市警に出勤してきた直樹は、係長室に到着するなり久美子に居直らせられた。久美子は彼が新空間プロジェクトに関わっていたことについて問いただそうとしていた。
「……本当に、申し訳なく思っております」
「それじゃあ全然わからない。最初から教えてもらえますかしら？どうしてアナタはプロジェクトに関わっていたのか。そうやって素性を隠しながら警察官としての職務を果たすのに、何の呵責もなかったのか」
久美子がわざと声を落ち着かせてゆっくりと訊ねてくる時は、それは本気で怒っている時だということを直樹は知っている。ここで適当なことを言ってごまかせばどんな仕打ちに遭うかわからない。それに元々、彼は包み隠すつもりなどなかった。いずれこうなる時が来るだろうと、彼は予想もしていたし覚悟もしていた。
「……結局、子どもの頃から憧れていたエンジニアへの夢を捨てきれなくて、大人しく彼らの言う通りに動いていたってことね？」
「強制されたわけではありません。あくまで僕は、僕の意志に従ってそう決断しただけです。悪いのはすべて僕です」
そんなこと、口に出す方が白々しかったかなと直樹は少し後悔する。久美子はソファーの向かい側で腕を組みながら彼の話を聞いていた。
「悪いことをしているとは思っていたのね？」
「ええ。それは皆さんに対して思っていましたが、もう、後には引けなくて」
すると久美子は何かを考えるように束の間沈黙して続けた。
「……私にしてみれば、自分の成すべきことを自分の中で明確にで

きないまま、仕事に取り組むなんて考えられないけどね。きちんとケジメはつけられなかったの？エンジニアになる夢はスッパリ諦めるか、あるいは、もう1度その夢を追いかけるために警察官を辞めるか。そんな中途半端な精神状態で、とても良い仕事なんてできないわ。それで今回の再調査に参加したっていうのも、おかしな話ね」

久美子は元キャリアウーマンで、その時の仕事にやりがいを見い出せず退社し、警察官へと転身した過去がある。直樹はそんな久美子の一面も知っており、久美子の言いたいことは痛いほど感じていた。

「僕は一方で罪悪を感じながら、交通事故の再調査を引き受けることによって罪滅ぼしをしようとしたのだと思います。それに、こんなちっぽけな自分に向き合わずに済むよう、僕には明確な“敵”が必要でした」

直樹は自分があまりに正直な気持ちをしゃべっていることに気がついた。昨日桜井に同じことを聞かれた時も、ここまで素直に打ち明けはしなかった。それは、卑怯な自分を晒けだすことによって、それを真摯に受け止めて新たな自分へと導いてくれるのがこの久美子でしかあり得ないという思いが、自分の心のどこかにあるからかもしれないと彼は思った。

「その“敵”を、交通事故の再調査で裁こうとしているメガマスの旧幹部達にしようとしたわけね。つまらない自己満足だわ。そんなあなたの安っぽい正義感を、見抜けなかった私にも問題はあるのだろうけど」

彼は真実を聞いているような気がした。そして、自分をもっと浄化してくれと心の中で願った。

「野村課長や、杉本さんにも本当に悪いことをしました」

「でも、その野村課長にアナタを紹介したのは小野先生なんでしょう？アナタが先生を慕っているのは知ってるけど、私はその先生もどうかと思う。市警に電脳犯罪対策係の必要性を訴え、そのおかげでこの部署が編成され、強く推されたアナタがリーダーとなった。

そして先生自身は特別顧問に就任した。そこまではいいわ。その先生が、今度はアナタをプロジェクトチームに引き込み、そうかと思えば再調査の話を持ちかけた。あの人がどういうつもりかは知らないけど、アナタは先生にいいように利用されていただけじゃない」

久美子も小野とは何度か会ったことがある。とても誠実そうな印象だっただけに、久美子は小野に対しても失望していた。

「わかっています。でも僕には先生しかいないんです」

「同じ対策係の人達はアナタの仲間だったはずよ。若いリーダーについて来てくれる、とても頼もしい先輩方が。それに気付いてもいないなんて、アナタはやっぱり孤独なのね。今聞かせてくれた過去のアナタとあまり変わってない。まるで子どもよ」

それも直樹の中では自覚があった。自分は対策係全員の信頼を裏切っている。しかしその信頼が本当にあるのかどうかさえ疑っていた。自分たちは仕事上の付き合いで、どれほど時間を共に過ごしても互いの距離を詰められてはいないような、そんな関係だと思っていた。すべて自分から逃げていただけにもかかわらず。

「……皆さんにはこのことを話されましたか？」

「いいえ。アナタが自分の口から打ち明けることだと思って黙っていたわ。もうこれ以上私に甘えるのはやめてくれる？後は自分でどうするべきか考えるのね。今後の身の振りかたとかも。私は、アナタがそんな人間だとわかっただけで結構です。もう、この話はこれで終わりにしましょう」

「そう、ですよね。すみません」

今の久美子の言葉は直樹にとって最もこたえた。彼女が自分を変えてくれるなんて思いはただの甘えでしかない。それとも、このひと月の間、彼女に叱り飛ばされながらも直樹は、その存在がかけがえのないものと思い始めていたのかもしれない。彼の孤独は彼女が埋めていたのは事実だった。そんな恋心にも似た思いを彼女に抱えているからこそ、ここで突き放されたことには困惑した。社会は、いちいち叱ってくれるほど甘くはないと心のどこかではわかってい

たはずだったが、しかし今の彼はそれを求めていた。久美子にはその直樹の見え透いた心が手に取るようにわかった。
「一つだけ聞かせてくれる？アナタは今何をなすべきだと考えているの？真っ先に辞表を提出する？」
直樹は顔を上げた。
「……いえ、事件の解決に尽力します。それまでは、警察官としての職務を全うします」
「弱い人間に市民は守れないわ。自分の将来で迷っているのなら、捜査に加わるのはやめたら？」
「この件に関して迷いはありません。僕にも責任があるんです」
「また自分の中の敵を作っているだけじゃないの？」
「違います！僕の過ちを清算するには、この事件を解決するしかない。いや、それ以上に、電脳犯罪対策係のリーダーとして、目の前で起こっている事件を見過ごすことはできないんです！」
ようやく警察官らしい顔つきになってきたなと久美子は思う。
「わかったわ。どのみち、アナタがいなければ私の知識ではどうにもならない問題なんだけどね。アナタが自分の成すべきことを明確にしたというなら、私はそれについていくだけよ」
「……ありがとうございます」
温情とかではなくて、久美子はあくまで自身の使命はなんであるのかを考えた上でそう言ったことは、直樹にもわかった。これからは“ただの”相棒になってしまうんだなと直樹は思う。再びそんな考えが頭をもたげないように、彼は久美子から目をそらした。
「じゃあ、まずは原川君についてだけど、記憶を失ったんですってね」
久美子はそのことを桜井から連絡を受けて聞いていた。
「はい。自分の名前以外は何も覚えていないらしいです」
「彼の電脳体は戻って来たけど、今のままじゃ再調査の話が進まないのは変わらないわ。アナタはどうするつもりだったの？」
「どうすると言われても、彼の記憶については医師の治療に期待す

るしかないという現状ではありますが」
もどかしそうな直樹を見て、久美子も状況が良くないことを理解する。
「彼の記憶は電脳的な手段で何とかなる見込みはないってことね？」
「いや……実は僕は医師の診断を懐疑的に見てはいます。医学の知識がないので根拠に乏しいわけですけど」
「じゃあなんでそう思ったの？」
「ただ単に釈然としないというのが大きな理由です。彼は新空間の中で何らかのトラウマになりそうな出来事を遭遇し、そのせいで脳は記憶を抹消しようとした……考えうる可能性の中では最も合理的なのはわかります。しかし、新空間でそんなことが起こるとは思えません」
あまり説明になっていないと久美子は思った。それを察した直樹も詳しく説明を付け足した。
「新空間のコンセプトを考えたのは他ならぬ僕です。あれは現実逃避というアイデアから生まれた空間で、現実世界では当たり前に存在する一切の憂いが取り除かれるように設定されています。いや、どんな問題からも逃げられるというのが正確ですかね。人の死さえも存在しないような空間で、そんなトラウマになることが起こるはずがないと思うんです」
「なるほどね。アナタが考えた世界だからなおさら腑に落ちないってことか。でも実際設計したのは」
「はい。僕ではありません。メガマス金沢支社が雇った技師です。その技師こそ、新空間を暴走させて今回の事件を引き起こしている犯人というわけですが」
発案者と設計者が別とは言え、空間の元々のコンセプトをメガマスが変えるとは直樹は思っていなかった。だから自身が設計に関わらなかったことは大きなことではないと思っている。
「アナタの見解を踏まえるなら、医師の診断そのものが間違っているのか」

「ええ。どうも気になります。管理室による病院の空間の調査で、一切の乱れを観測しなかったのも不自然ですし」
その調査には直樹も参加していた。その結果から直樹は、病院に新空間のリンクはつながらなかったものだと判断した。
「不審な点は数々あると。事件の解決のために、まずその辺りから調べる必要があるってことね？」
「はい。今日も管理室が病院で調査をしています。先方には煙たがれるかもしれませんが、病院で聞き込みを行う必要もあるかと思います。僕は病院自体が何かを隠している可能性もあると思っているので」
「なるほど。わかったわ。今から行きましょう」
こうして2人はメガマス病院に向かうことになった。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ４

病院では一郎の指揮のもと、管理室による空間調査が再開されていた。今日は病院の敷地内をくまなく調べ、新暗号の痕跡がどこかにないかどうかを確認する。

「室長。お疲れさまです」

病院の中庭に一郎がいると聞いた玉子とイサコはそこを訪れた。

「君たちか。今日は２人で来たのか？」

「ええ。大谷さんも呼びたかったのですが、今日は都合が悪いらしくて」

一郎も都合が悪いとはどういうことなのだろうかと首を傾げたが、深くは追及しなかった。

「優子達は？」

「彼女は体調が万全ではありませんし、シュウイチ君と家にいます。他の子ども達も今日は招集をかけていません。あまり昨日のように大人数で押し掛けると、調査の邪魔になるかもしれないので」

納得したように一郎は頷く。そして目の前にウインドウを開いて各員の報告を聞きながら、玉子に訊ねた。

「君たちも手伝いに来てくれたのか？」

「ええ。新暗号探しなら私達の方が経験はありますので」

「それはありがたい。正直、この調査は早いところ終わらせなければならないと思っているところだったから」

その言葉からは、一郎もこの調査で何か手がかりが出てくると思っていないことが察せられた。

「おじさん。昨日この場所に新空間のリンクがつながったという話を私は疑っているのですが、どう考えられているんでしょうか？」

訊ねたのはイサコだった。このことについて玉子とイサコは意見が分かれている。

「そうか、君はそう考えているのか。確かに空間調査からは今の時

点で新空間の痕跡は発見されていない。今日の調査で新暗号も見つからなかった場合、その可能性も十分視野に入れて考えなければならないと僕は考えている」

「仮にそうだった場合、ケンちゃんがどのようにして戻って来たのか、それを突き止めることは可能でしょうか？」

今度は玉子が訊ねる。

「はっきり言って、別のルートで戻ってきたのだとしたら、僕達にそれを突き止めることはできないと思う。問題はそのルートを突き止めることが、研一君の記憶を取り戻すことにつながるのかどうかわからないということだ。僕達はその淡い希望をたぐり寄せるためにこうして調査を行っている」

今は藁にもすがる思いで調査を続けていくしか方法がない。そのルートが確定しなければ、なぜハラケンが記憶を失ったのかを考えることも難しい。

「小此木さん。警察関係者の方がお見えですが」

その時、管理室の職員が一郎の元に来て告げた。その後ろで直樹と久美子が頭を下げる。

「ああ、竹下さん。昨日はご協力ありがとうございました。今日はどうされましたか？」

「今日もここで調査が行われていると聞きましたので、様子を見に来たんです。原川さんと天沢さんは？」

直樹は2人の方を向いた。2人とも昨日病院で直樹とは居合わせたが、なんとなくギクシャクとして、どうもわだかまりが横たわっているような気がしていた。

「私たちも同じです。少し気になることがありまして、調査のお手伝いのついでに室長とお話を」

「そうなんですか。ちなみに、その気になることとは？」

「本当にこの病院に新空間のリンクがつながったのか、ということです」

イサコが直樹の問いに答えた。すると直樹も頷きながら返す。

「やはりそう思われましたか。僕も何となくそんな気がしていたのですが」
「でも、新空間がつながらなければ、ケンちゃんが戻って来ることはできませんでした。室長は他のルートの可能性もあるとおっしゃられているのですが」
玉子が一郎を見たので、直樹もそちらを向いた。
「可能性の一つとしては、もっと別の場所で新空間のリンクが開き、研一君の電脳体は自力で病室まで戻ってきたというのが考えられます。他には、彼は新空間ではなくさらに別の空間、それは通常空間でもいいわけですが、ずっとそこにいたという可能性もなくはないと思います。そうすればこの病院で新空間の痕跡が見つからないのも辻褄が合いますので」
一郎の推測を聞いた直樹は、しかし首を傾げた。
「そうですね……どちらの説も突き詰めて考えれば可能性は低いのではないでしょうか。前者は、彼の電脳体が彼の肉体に戻る前に通常空間に存在した時間があるということですよね。その間に彼は誰にも目撃されなかったのか。病院では彼が出歩いていればそれに気付く人はたくさんいたはずですよね。本社も厳重にここを監視していたはずですから」
「まあ、確かにそうですね」
「後者の場合、通常空間と新空間の他にも別の空間が存在する可能性はないとして、それだと彼の電脳体はずっと通常空間にいたということになりますよね。それならリンクを辿ればすぐに発見できたはずです。リンクが断絶した時点で、彼の電脳体は異空間にあるのだと判断するところですから」
直樹は一郎のどちらの説も可能性はないと思った。一郎も新空間計画の関係者である直樹の言う通りだと思ったが、それ以外の可能性は考えつかなかった。やはりこの病院にブラックホールが現れた可能性が最も妥当ではないかと思う。
「直樹さんは他の可能性もあると思われますか？アナタもここに新

空間のリンクがつながったということは懐疑的に考えていられるんですよね？」

そこまで言うのなら何か意見があるのだろうと玉子が訊ねる。

「あるにはあるんですけど、おそらくすぐに否定されると思います」

「その可能性も低いと考えられているからですか？」

「いえ。なんと言いますか、一見あり得ない話のように聞こえると思いますので。僕はこれが最も可能性が高いと踏んでいるのですが」

「話してください。それは一体どのようなものですか？」

一郎が渋る直樹を促した。そこにいた全員に注目され、直樹は仕方ないという風に切り出す。

「現時点ではあくまで僕の憶測に過ぎないことを頭にとどめて聞いてください。僕は、原川君がまだ戻ってきていないのではないかと思うのです」

「戻ってきていない？それは、電脳体がですか？」

思いもしなかった直樹の推理に一郎は面食らった。

「ええ。電脳体も彼の意識も」

「そんなことあるはずがないでしょう。ケンちゃんのリンクがつながっていることはしっかりと確認したんですよ」

「しかし、電脳的な情報はいくらでも偽装ができます。もしかして、リンクが戻っているというデータが仕込まれていたんじゃないですか？あの病室の彼はただの映像だったということも考えられます」

それはシュウイチが言っていたことと同じだとイサコは思った。すぐに玉子がそれを否定する。

「私はケンちゃんの体を抱きしめたんです。しっかりと感触がありましたし、体温も感じました。あのケンちゃんがただの映像だという可能性はありません」

「でも、原川さん。こうも考えられませんか？アナタが彼を抱きしめた時、アナタ自身も電脳体分離を起こしていた」

肉体から分離した電脳体同士が触れ合った場合、脳はさも感触があるように錯覚する。電脳体は電脳世界の中でなら通常空間に生き

る肉体と遜色ないほどに五感が備わるようになっているからだ。
「まさかそんなこと。それなら私も含めて昨日病室に入ってこられた方は全員電脳体分離を起こしたはずです」
「ええ。だから僕も小此木さんも子ども達もみんなが電脳体分離をしていたのかもしれないんですよ。そしていつの間にか元に戻っていた」
　そんなバカな話があるわけないと玉子は思ったが、イサコはむしろその考えに納得していた。
「確かに、それが一番辻褄は合うかもしれないですね。私はかつて、この病院で安っぽい仕掛けに翻弄されて兄がずっと入院していると思っていました。同じようなことで、もっと大掛かりなことをこの病院はしたのかもしれない」
「本気で言ってるのかイサコ？それなら誰かが気付いたはずだ。知らないうちに電脳体が分離していたなんてことが」
「あり得ない話じゃないだろう。プロジェクトチームが何を開発したのかわからない。ひょっとしたら、気付かないうちに電脳体が分離するなんてとんでもない装置を開発したのかも」
「あの人達ならやりかねませんね。もし昨日僕達が見た原川君がただの幻だったとするなら、本物の彼の電脳体は新空間のどこかに彷徨っていることになります。まあ、僕達が今立っているこの場所さえも新空間である可能性だってあるのですが」
　天地がひっくり返ったような話だったが、もしそうだとしても不思議ではないと玉子は心のどこかで思ってしまった。新空間がパラレルワールドだということも、その話に真実味を与えている。
「竹下さん。その話が本当かどうかを検討する前に１つ良いですか？アナタの考えなら、研一君の担当医は私達にウソを言っているということになります。昨日のすべては、病院側が仕組んだ策略ということですか？」
　一郎が鋭いまなざしで訊ねた。この病院は本社の管理下に置かれているはずで、本社の人間を騙すはずがない。しかし直樹は首を縦

に振った。
「僕はそう考えています。この病院が本社を欺くとは考えにくいですが、少なくともあの医師が真実を言っているとは思えないですね。実は、僕達はその調査のためにここへ」
「そうですか……今の話ですが、本社に報告してもさすがに取り合ってもらえないかもしれません」
「それは理解できます。あまりに突拍子もない発想ですからね」
最悪自分たちだけでウラが取れればいいと直樹は思っていた。一方の一郎は先ほど以上に困惑した表情で考え込む。その時だった。
「随分興味深いお話をされていますね」
ハラケンの担当医が、ハラケンを伴って中庭に降りて来た。ハラケンは若干おぼつかない足取りだったが、医師の手を借りずに自力で歩いてきて、一郎達に頭を下げた。
「昨日はすみません。ちょっと、戸惑ったもので」
彼は真っ先に玉子に頭を下げた。昨日あの後、彼は担当医から自分の置かれた境遇を説明され、愕然としながらもその現実を受け止めたのだ。今は担当医の指示で、日常生活を問題なく送れるかどうかという観察が行われている。
「今の話、聞いていらしたのですか？」
しまったという風に直樹が訊ねた。
「盗み聞きをするつもりはなかったのですが、あまりに勘違いをされているようなのでつい」
担当医はハラケンを中庭のベンチに座らせて直樹の方を向く。
「……まあ、それなら話は早いですね。率直に言います。僕は状況的な証拠も踏まえて、アナタの話の信憑性を疑っています。少しここでお話させてもらってもよろしいですか？」
「構いませんよ。じゃあこちらの方で」
ハラケンに聞かれてもまずいので、担当医はベンチから離れようとした。直樹はそれを制する。
「いえ。まずは彼が本当に肉体なのかどうかを調べさせてください」

「彼が映像とでも?そんなおかしな話はありませんよ」
担当医は嘲笑するかのように言ったが、直樹は真剣だった。彼が映像であるかどうかを確かめるもっとも簡単な方法は、自分のメガネをはずすことだ。
「……確かに、映像ではなさそうですね」
直樹に倣って一郎や玉子、イサコも自分のメガネをはずして確認してみる。しかし彼が消えることはなかった。目の前にいる彼は肉体を伴っていることは間違いない。
「ちょっとごめんね」
直樹は念のためにハラケンの腕や頬の辺りを触ってみた。もちろん触感はある。
「満足されましたか?」
「……ええ。やはり僕の考えが浅はかだったようです」
諦めたように言った直樹に久美子がささやいた。
「アナタさっき言ってたじゃない。私達自身が電脳体分離を起こしている場合、例え彼が電脳体の映像でも本物のように感触があるって」
「でも、仮にここが電脳空間で、私達が電脳体のみの存在なら、こうしてメガネをかけていることが矛盾しています」
イサコが久美子に言った。しかしそれは問題じゃないと直樹はかぶりを振る。
「いや。ここが新空間だとしたら、メガネが存在してもおかしくありません。知っての通り新空間はパラレルワールドです。現実世界にあれほど浸透しているメガネを欠いてはそれが成立しません。僕は新空間の中で生きていてもメガネを使っているように錯覚するプログラミングを生み出しました。だから新空間でも生のペットと電脳ペットの区別は存在します」
「じゃあ、私たちが現実世界にいるのか、新空間にいるのか、それをはっきりさせる方法はないのですか?」
焦ったように訊ねたのは玉子だった。

「実は、それが最も難しいことでもあるんです。なぜなら、新空間の中でも五感のすべては現実世界と同じように備わるからです。ずっと眠らなければ睡魔に襲われますし、ずっと食べなければ空腹感を覚えます。その設定を変えることもできるんですけどね。もし、人間の生体活動を完璧に再現した設定が反映されているとすれば、電脳体は排泄も行いますし、汗も血も流れます。唯一、決定的な違いは前にも言いました、“死”が存在しないことに尽きます」

「“死”が存在しない……」

「もし、今この場所が新空間か現実世界かを立証したいなら、方法はひとつ。拳銃で頭を撃ち抜くことです。その人が死ねば現実世界、生きていれば新空間ということになります」

「でも、そんなロシアンルーレットみたいなマネはできないわ。実質的に私たちがそれを確かめる方法はないのね」

もどかしそうな表情で久美子が確認する。

「いや、でも新空間なら現実世界との違いは必ず存在します。例えば、現実世界で死んだはずの人が生きていたり」

その言葉にハッとしたのはイサコだった。

「なぜですか!?それはイマーゴを通じて、その人の願うものが形になるというものですか?」

「いや、それは君がかつて入った精神治療空間のことだね。新空間はもっと直接的なんだ。例えば、奥さんに先立たれたある老人が永遠の命を得るために電脳体を分離させるとする。その時、その人は先に亡くなってしまった奥さんを新空間で再現したほしいと依頼することができる。プロジェクトチームはその老人の記憶や周りの人の聞き込みからデータを作成し、亡くなってしまったその奥さんの容姿や思考をプログラミングして人工知能としてそれを再現する。その老人は永遠にその奥さんと新空間で暮らすことができる」

それは直樹が聞かされていたプロジェクトの概要でもあった。ＥＬ（Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｌｉｆｅ）プロジェクトと名付けられたそれを実現するために空間んの観察実験が必要なのだと、直樹はずっと

信じ込まされていたのだ。
「だから、既に亡くなった方が平然と生きているのを見かけたら、ここは新空間ってこと？」
「理論上はそうなりますね。幽霊とかじゃない限り」
直樹が説明し終わると医師は声を上げて笑い始めた。
「ハッハッハッ。なかなか面白いお話でしたよ。アナタは新空間の開発に関わっていらしたのですか？」
「概ねそんなところです。ですが御心配なく。僕は末端なのでプロジェクトの本質については聞かされておりませんし、昨日メガマス本社にてたっぷりと取り調べを受けました。今はこの小此木さんに協力する立場です」
「そうですか。なかなか頭が切れると言いますか、想像力のある方だなと思いました。しかしそれは考え過ぎというヤツですよ。アナタは、自らの足で迷宮に踏み込もうとしていらっしゃる」
「そうですか？」
お互いがお互いを測るような会話が、医師と直樹の間で続く。
「現に、アナタはここが新空間であるという可能性はどれほど信じられていますか？」
「まあ、５％ほどですね。知らぬ間に電脳体が分離していたなんて、誰かがおかしいと気付くはずですから。これだけの人数を騙すことはムリでしょう」
「そうですよね。仮にそれができたとしても、実際そこまでして私達がアナタ方を騙すメリットもありません。もっと現実的な可能性を考えた方が懸命だと思いますよ」
「おっしゃる通りです。お疑いして本当に申し訳ありませんでした」
直樹はそこで頭を下げた。
「いえいえ。こちらもはっきりとした診断を下せなかったのが、誤解を招いたのかもしれません。もう少し検査を重ねて、詳しいご報告ができればと思います」
すると担当医は腕時計を見やって続けた。

「長く話し過ぎましたね。それでは私たちはこれにて失礼します。原川君についてですが、日常生活を送るという点に関しては問題がないようなので、明日にでも退院していただけると思います」
「わかりました。ありがとうございます」
玉子が礼を言って、一郎やイサコも軽く頭を下げた。
「さあ、行こうか原川くん」
「はい」
ハラケンもベンチから立ち上がると、玉子達に会釈して担当医と共に建物に戻っていった。
「どうも胡散臭いですね。あの人」
しっかりと見えなくなったところで玉子が正直な感想を漏らした。
「おそらく何か隠されているのは間違いありません。それがわかっただけでも収穫でした」
「竹下さん。アナタはここが新空間である可能性は5%ほどと言われましたが、それは本心なんでしょうか?」
一郎が訊ねる。さすがに一郎もその可能性が高いとは思っていなかったが、決してあり得ない話ではないと思った。
「ええ。現実的に考えてもその程度の可能性しかないと思います。でも、あの医師の反応を見る限り、僕の意見も当たらずとも遠からずという気もします。もしかすると、まだ僕達が思いついてもいないようなことが真実なのかもしれません」
「まだ思いついてもいないことですか……一体なんでしょう?」
「僕もこれから情報を整理して考えたいと思います。とりあえずあの医師は、本社の方できちんと調べられた方がよろしいのではないでしょうか?」
「ああ、そうですね。報告しておきます」
とりあえずそこで一連の議論は一段落した。新たな可能性や医師の不穏な態度など、手がかりになりそうな事柄がいくつか出たので、また各々で自分の考えをまとめることになる。
「それでは、僕達はもう少し病院関係者の話を聞いてまわりたいと

思います」
「わかりました。ご苦労様です」
そうして直樹と久美子はその場を立ち去った。
「じゃあ、僕達の方は早いところこの調査を終わらせよう。その後で、今の話を整理することにしようか」
「そうですね」
玉子とイサコはこの後、一郎の調査を手伝った。結局調査では一つの新暗号も発見できなかったが、それはある意味想定の範囲内でもあった。
その後は特に何事もなく、一郎と玉子とイサコは今後の調査方針を話し合って、そのまま日が暮れていった。

＃２３　現実と虚構のはざまで　Ｐａｒｔ５（前書き）

５月２日（日）

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ５

翌日の正午過ぎ、ハラケンは一時的に退院することになり、玉子にもその知らせが入った。玉子はイサコと共に、まずはメガシ屋に行ってヤサコとシュウイチと合流する。その後、フミエとアイコも加わった。

「ダイチ達は来ないの？」

「アイツらは後から病院に来るって。ハラケンの記憶を取り戻すために、なんか思い出の品々を持って来るそうよ」

フミエが玉子に返した。ダイチ達は小学校時代の写真や、ハラケンと一緒に遊んだ時に使っていた電脳グッズなどを持参するらしい。ハラケンの記憶を取り戻すには、そういったシンプルな方法を使ってみようと話になっていたのだ。

「オバちゃん。今日大谷は？」

「連絡したから来るはずよ。っていうかあそこで待ってるじゃない」

鹿屋野神社に通りがかったところで、鳥居の下で待っていた彼を見つける。

「よう。昨日は済まなんだな」

大して悪びれる様子もなく、大谷から声をかけて来た。

「何をしていたんだ？こんな時に都合が悪いって」

「大人の事情」

「まじめに答えろ。私たちの知らないところで、何をこそこそと動いてるんだ？」

少しイサコの口調が尖った。大谷が何かを隠していることは認めているが、それを適当にごまかされるのは嫌だった。

「あんまり詮索しないようにって言ったはずだ。近いうちに必ずオレの素性は明かす。それまではノータッチにしておいてくれ」

「何か良くないことでもあったんですか？昨日一日潰れたってことは、何かを調べるのに掛かりっきりになっていたってことでしょう

？」

そんな大谷の様子も見ながら玉子が訊ねる。今日はどことなく彼が落ち着きを欠いてるように見えるのは気のせいなのかと思った。

「ん……まあ、はずれてもないかもしれないな。なんというか、予兆を感じるんスよ」

「予兆？」

「そう。また新たな事件が起こりそうな、そんなね」

一同の視線は大谷に集まった。彼の言葉の意味はなんなのかという思いが、全員の頭によぎる。

「そんな予兆があるのか？だったらそれを管理室に報告しないと」

「管理室がオレの言うことに耳を貸してくれるのならな。あそこの本部長にオレはえらい嫌われたからな。おそらく動かんだろう。何より、その予兆ってのも根拠に乏しい。どこで事故が起こるのかも予測できない」

「でも、事故は起こるかもしれないんですね？」

玉子が詰めよるようにして訊ねた。

「……その可能性は高いと思う。もとより、記憶を失ったとはいえ原川君が帰還したことで事件解決とは思えない。新空間もミチコも生きてるわけだし、同じことが起こってもなんら不思議じゃないだろう？」

それはその通りだとイサコが頷く。夏の事件が“古い空間”とミチコの消滅で収束したように、今回も“新空間”とミチコをどうにかしないかぎり解決とは言えない。

「管理室ではサッチーに新空間制御暗号発射装置を取り付け、新空間の出現をムリヤリ押さえ込もうとしている動きもありますが」

「バカを言うな。夏の事件から何も学んでいないのか？そんなことをしても、同じ過ちが繰り返されるだけだ。それに、新空間に閉じ込められている人は果たして原川君だけだったのか？」

玉子の話を大谷も少しあきれた様子で否定した。その管理室本部長の案は現段階では社長の桝田も認めていないが、本社が根本的解

決を放棄した時にはその措置がとられる可能性もある。もちろん、玉子もそれには反対だ。

「私たち、あの空間の中で見ました。私達の小学校時代の教頭先生がいるのを。他の先生達は静止していたけど、教頭先生だけ私たちと同じように動いていたってことは、教頭先生はあの空間の中で生きているってことだと思います」

大谷の言葉に対して反応したのはヤサコだった。あれは閉じ込められているという風でもなかったが、しかし新空間が空間の深部に封じ込められるということは、教頭も現実世界へと戻ることはできなくなることを意味する。直樹の言う永遠の命と教頭が関係あるのだとしても、それは間違っているとヤサコは思う。

「そうか……やっぱり、永遠の命とかいうくだらんもののための実地試験が既に行われているのかもしれないな。もちろん、その人達だって連れ戻す必要があるわけだが……」

大谷はそこで言葉を切った。

「どうした？」

「いや。仮に永遠の命というものがあって、そしてその教頭が被験者として新空間の中にいるのだとしたら、現実世界に連れ戻すのは必ずしも本人の意志に沿うわけでもないんじゃないかと思ってな」

現実世界には当然死がある。もしも教頭が永遠の命を欲して実験に協力したのだとしたら、連れ戻すという行為が必ずしも正しいとは言えない。

「教頭先生は脳梗塞で倒れたって。意識が戻ったのかどうかは知らないけど、もし覚醒していないまま新空間に意識が移ったのだとしたら」

フミエはマイコ先生の話を思い出して言った。

「なるほど。永遠の命計画の実験への参加は、遺族の意志に基づくものかもしれないってことだな。現実世界では脳梗塞の後遺症で五体満足な生活が送れないかもしれないと医者に診断されたら、新空間で電脳体として生きさせることを選択肢として遺族が考えてもお

かしくはない」
「しかし、電脳体に指令を出しているのも肉体の脳だとするなら、電脳体になったところで脳梗塞の後遺症が残るのは変わらないんじゃないですか？」
　脳梗塞とは脳組織の一部が壊死すること指し、人によっては後遺症で失語したり、腕を動かせなくなったり、体のどこかの運動機能が損なわれることがある。それはすべて脳組織の壊死が起因しているので、電脳体を動かしているのが肉体の脳という事実に即すならば、電脳体の運動機能も肉体同様に損なわれるのではないかと玉子は思ったのだ。
「何の処置も施さなかったらそうだ。でも、電脳体だったら何とかなる。あれはデジタル体だからな。その人が何らかの後遺症を持っていたとしても、その失われた機能はＡＩによって補完することができる」
「ＡＩ？電脳ペットとかにも搭載されているあの？」
　訊ねたのはヤサコだった。
「そうだ。もし、自分とまったく瓜二つの思考を持つＡＩが存在したとする。そして、そのＡＩに脳梗塞で失われた脳組織の役割だけを与える。脳組織が損なわれていない部分はそのままの状態を保つ。そしたらどうなる？その人は脳梗塞で倒れる前と、まったく同じように電脳体を動かすことができるようになるはずだ」
「まさか、そんなことが……」
「可能なんだ。そもそも新空間がパラレルワールドってところでピンと来なかったか？その世界では、オレらのコピーが生活している。ウラを返せば、オレらの思考のコピーなんて容易に出来る技術を金沢支社は持ってるってことだ」
　その大谷の話が本当だとしたら、教頭が新空間にいる理由も彼の推測通りではないだろうかとイサコや玉子は思った。そして、その実験の被験者はもっと数多く存在しているはずだということも。
「じゃあ、一体どうすれば事件の根本的な解決になる？その話が真

実だとすると、新空間そのものはコイルドメインの時のように崩壊させるわけにはいかない」

「問題はそこだよな。新空間ってのは、うまく使えば凄まじく医療が進歩する可能性を秘めている。永遠の命はどうでもいいにせよ、今言ったみたいな脳梗塞患者や、事故などで四肢を失った人が電脳体として不自由なく生きられるなら、これは研究を発展させる価値はあると思う」

「ただし、新空間という作り物の世界に、現実世界と同じような人との触れ合いが存在するなら、ということになるでしょうね」

現実世界に生きる人間にとって、新空間での暮らしはどのようなものなのかは想像しがたい。新空間で生きる人々は、ほとんどが人工知能ＡＩということになる。そんな中に放り込まれて、なんの違和感もなく溶け込んでゆけるのか。ハラケンが記憶を取り戻したなら、その話も聞いてみようと玉子は思った。

「その辺は道徳的な意味も含めて、どう世間が判断するかだろうけどな。オレとしては、事件解決というのは新空間の暴走を止めることで実現すると思っているが」

「つまりミチコだな。アイツが新空間を支配している」

「そのミチコを支配しているのは、新空間の設計者なんだろ？ソイツを捕まえて、ミチコの暴走を止めさせることが一番の近道だろうな。残る問題は、原川君とサオリの記憶が戻るかどうかってところか」

この２つの問題は別次元で考える必要があるのではないかと大谷は思っていた。ミチコの暴走を止めたところで、ハラケンとサオリの記憶が戻るとは思えない。

「そのことについてですが、昨日室長や竹下さんと意見を交換しました。その時に竹下さんが言われていたことが、妙に頭に残っているのですが」

「竹下っていうのは新空間プロジェクトの原案を論文で提示した例の警察官だな？その人がなんと？」

玉子は昨日の病院でのことを大まかに説明した。ハラケンの電脳体や意識は戻って来ているわけではなく、自分たちは病院に幻を見せられただけだったのではないか。ただしその幻のハラケンに触れても感触がしっかりとあったのは、自分達自身が電脳体分離を起こしていたから。つまり自分たちは、知らないうちに現実世界と新空間を行き来している。もしくは、既に世界は新空間に取り込まれているのかもしれない。そして本物のハラケンの電脳体は、未だ新空間のどこかで彷徨っているのではないか、というのが直樹の話だった。ついでに玉子は、病院の空間調査で新空間の痕跡が一切発見できなかったことも補足した。

「なるほど。誇大妄想とも思えるし、一理あるとも言える。ただまあ、今自分たちが立っているここが既に新空間っていうのは信じられないな。ただ竹下の話にもあるように、それを確かめるロクな方法がないっていうのが、その話を完全に否定できない障壁になっているな」

「本当にそんなことが可能なの？私たち全員が気付かないうちに新空間に入り込んでいるなんて。私たちが事故に遭った時は、地震を感じたりブラックホールを見たり、明らかに異変が起こっているってわかったけど」

「それは私が金沢のイベント事故で新空間に入り込んだ時も同じだ。サオリも新空間が開く時には膨大なエネルギーが発生するって言っていたから、そういった異変が起こるのは避けられないんだろうな。それを踏まえるなら、やっぱり気付かないうちに新空間にいるなんてことはあり得ないな」

フミエとイサコの会話で、大谷や玉子もある程度は納得した。やはりその可能性は低い。

「だが、状況証拠からは新空間の入り口が病院に開いたという可能性も低いわけだ。まあ、それも考慮すると、原川君の電脳体や意識が戻ってきてはいないっていう意見も気になるところではあるんだよな。彼が無事に帰還したのならこんな疑いは持たないわけだが、

いかんせん記憶を失っているっていうのが、どうしても腑に落ちない」

「それをサオリに当てはめて考えるならどうなる？」

イサコは独り言のようにつぶやいて考え込んだ。

「彼女に関しても電脳体や意識が戻っていないって仮定するってことか。オレらが彼女を見つけたのは廃工場の中だった。あの時、オレは倒れたあの子を抱き上げて車に乗せたし、君も彼女の熱を確かめるために額に触れたのだから感触があったのは確認済みだな？」

「ああ」

「つまり、サオリを幻とするなら、オレらは廃工場に入ってから病院に送るまでずっと電脳体分離を起こしていたことになる。つまり廃工場から病院までが少なくとも新空間の中だったわけだな」

「……やはりムリがある。廃工場も病院も現実世界のものだったし、サオリも幻なんかじゃなかった。サオリの肉体と電脳体はしっかりと重なっていたはずだ。ただ、記憶だけが欠けていた」

話がまた元の位置に戻って来たようなもどかしさをイサコは感じる。何をどう考えても、どこかで釈然としないものが残る。

「答えを焦ることはない。今から原川君が退院するのなら、彼と話す機会も多くなる。その中で何かわかることもあるかもしれないぞ」

大谷がそうイサコに言い聞かせたところで、一同の目の前にはメガマス病院が見え始めていた。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ６

病院に到着した一行のうち、大谷とシュウイチはロビーで待ち、残るヤサコ、イサコ、フミエ、アイコ、玉子でハラケンの病室に向かうことになった。病室では担当医と看護婦、そしてハラケンの母親が今後について話し合っている最中だった。それを見てまずは玉子が中に入る。

「姉さん……」

ハラケンの母は玉子の姉にあたる。ハラケンが倒れた日、そして一昨日覚醒した時、玉子はハラケンの母と顔を合わせて事件の経緯について説明していた。そのためイサコもハラケンの母とは面識がある。ヤサコやフミエ達は元々顔見知りだ。

「玉子。たった今、研一が“お母さん”って呼んでくれたの。だいぶムリをしてる感じだったけど」

玉子に聞こえるような細い声で、そして少し複雑そうな表情でハラケンの母は言った。

「記憶が戻るまで、彼には慣れていってもらうしかないでしょう。日常生活に馴染んできた頃、家族の記憶が蘇ることはよくあります。記憶喪失に関しては、周りの人が根気よく付き合ってあげることが重要です」

「わかりました。ありがとうございました。先生」

そこでハラケンの母とともに玉子も頭を下げた。ハラケンもそれに倣うように医師に会釈する。

「研一。この人はアナタの叔母の玉子さんよ。いつもかわいがってもらっていたんだけどね。それにアナタは、この人のことを“オバちゃん”って呼んでいたわ」

「オバちゃん？こんな若い人が僕の？」

目を丸くしてハラケンは玉子の方を見た。息が詰まるほど愛おしいのに触れてはいけない、玉子もそんな複雑な感情に苛まれ、ただ

それに頷いてみせるのが精一杯だった。
「よろしくね。ケンちゃん」
つい癖でそう呼んでしまうと、今度はハラケンの方が戸惑ったような顔になった。
「その呼び方は恥ずかしいのかもしれないわね。それは倒れる前から恥ずかしがっていたようだったけど」
ハラケンの母が少しだけ頬をほころばせながら言った。
「そうだったの？気に入ってくれてるものだと思ってた」
玉子は軽いショックを受ける。
「じゃあ、研一。記憶が戻るまではそう呼ぶことにする。そのかわり記憶が戻ったら、どれだけ嫌がろうが“ケンちゃん”って呼ばせて」
そのように訊ねられると、ハラケンも笑みを見せてコクリと頷いた。そして彼は、病室の外で心配げに見つめるヤサコ達を見つけた。
「研一。お友達が迎えに来てくれるの。玉子オバちゃんと一緒に、あの子達のところに行きなさい。今日は研一の好物だったグラタンを作って待ってるわ」
事情を察したように彼の母はハラケンを促した。まずは友達との時間を優先させようと思ったのだ。
「ありがとう姉さん。今は片時でも離れたくはないはずなのに」
「いいの。この子をああして心配してくれている友達といる方が、研一もリラックスできると思う。後をよろしくね」
「わかったわ。夕飯の時間にはちゃんと家まで送るわ。じゃあ研一、あそこで待ってる友達に元気な顔を見せてあげて」
「うん」
そうして玉子もハラケンをヤサコ達の元に行くように言った。ハラケンは不安そうな顔で病室を出る。
「ハラケン。いや、そうか。まだハラケンって呼ばれていたことも覚えてないんだっけ？」
フミエがうっかりしていたように頭を掻いた。しかしハラケン以

外の呼び方は違和感があり過ぎてなんともしっくりこないように思えた。
「ハラケン？僕の名前、原川研一だから？」
「そうよ。だからみんなにハラケンって呼ばれていたの。この呼び方、いや？」
アイコがどこか悲しそうな表情で訊ねた。
「ううん。全然構わないよ。僕の方こそごめん。そんなに親しくしてもらっていたっていうのに、君たちのことを覚えてなくて」
「それは言いっこなしよ。これから覚えればいいだけの話だから」
しょんぼりとしかけたハラケンにフミエが力強く言った。そしてそこにいた４人について紹介を始めた。
「この子は小此木優子。“ゆうこ”の“ゆう”は優しいって書くから、ヤサコね」
「よろしく、ハラケン」
つとめて明るくヤサコが言った。
「よろしく、ヤサコ」
初めて彼と出会った時とは好対照な爽やかな笑顔でハラケンは返した。ヤサコは涙が出そうになったが、それを必死でこらえていた。
「で、こっちは天沢勇子。同じ“ゆうこ”だけど、この子は勇ましい子って書くからイサコね。ちょっとツンデレだけど仲良くしてあげて」
「ツンデレは余計だ。よろしくな、ハ、ハラケン」
イサコは“ハラケン”と呼ぶ方が慣れない。しかしここで名字で呼ぶと、微妙な距離感を生んでしまいそうな気がしたので、イサコも意識的にそう言った。ハラケンはヤサコの時と同様に「よろしく、イサコ」と返した。
「それから、この子は相原アイコ。通称アイアイ」
「そんなサルみたいな呼ばれ方してないわよ！アイコでいいわ。よろしくね、ハラケン」
「よろしく」

「で、私がアナタの所属していたコイル探偵局っていうクラブのリーダー、橋本フミエよ」
「アンタいつからリーダーになったのよ？」
アイコが小さな声でフミエにツッコむ。
「いいじゃない。実質そうなんだしさ。まあ、細かいことは気にしないで、今から私たちのホームに行きましょ」
「ホームっていうのは？っていうか、コイル探偵局ってなんなの？」
純粋な疑問のようにハラケンが訊ねる。
「コイル探偵局は、電脳トラブルの解決を活動の軸に展開してる一種のボランティア団体ね。その総帥が住んでいるのがメガシ屋で、そこが私たちのホームってわけ」
「僕もその一員だったの？」
「そ。会員ナンバー5番。本当は私より先輩になるんだけどね。これからその活動について教えてあげるから」
「ありがとう。是非これから僕も活動に参加させてくれないか？」
どこか嬉しそうにハラケンが言うので、フミエの方が戸惑い気味だった。
「まあ、いい覚悟ね。じゃあ、早速向かいましょ」
と言って病室を後にしながら、フミエはハラケンに聞こえない声でささやいた。
「キャラが変わり過ぎてない？記憶をなくすと、みんなあんな風になるのかしら？」
「いや。わからないか？アイツもだいぶムリをしてるはずだ。私たちに心配をかけないようにするのと、昔の自分がどんなことをしていたのかを必死に辿ろうとして、ああして気丈に振る舞っているんだろう」
イサコが彼の心中を察して言った。
「前の自分がどんなキャラで、どんな友達がいて、どんな人が好きだったのか。それがわからないって歯がゆいだろうね」
「自分を取り戻すことに努力するっていうのはどうなんだろう？今

のアイツにとって、前の自分は果たしてなりたい自分なのか……」
　アイコの言葉が引っかかり、イサコはふと考え込んだ。
「そんなの、なりたいに決まってるじゃない。私だったら絶対そうよ」
「違う。自己嫌悪とかそういう話じゃない。今のアイツは、前の人格とは違うはずだ。もし私たちが話して聞かせる前の人格が、今のアイツのなりたい自分と食い違っているなら、努力してまでその人格を取り戻したいと思うかどうか、それが引っかかったんだ」
　イサコはちらっと後ろのハラケンを見た。彼はこちらの話を聞いておらず、玉子と別の話をしている。
「そんなことってあるの？記憶をなくすと人格って変わるものなの？」
「そんな事例もないわけではないみたいだ。昨日少しばかりネット上で検索して記憶喪失の症状について調べていたんだ」
「どうしてそんな話をするの？私たちの努力は意味がないとでも言いたいわけ？」
　少しだけフミエが尖った口調でイサコに言った。
「いや、そういうわけじゃないんだが……なぜだかそんなことが頭に浮かんだ。すまない。忘れてくれ」
　そこでイサコは素直に謝った。楽観的なフミエ達を斜に構えて皮肉ったつもりでもなんでもない。イサコだって、できるなら前の彼が戻ってくることを願っている。
「ねえ、ヤサコ」
「なに？」
　今度はずっと黙っているヤサコにアイコがおそるおそるという風に声をかけた。
「もし、もしもだよ。ハラケンの記憶がこのまま戻らなくて、ハラケンがまったく別の性格になっちゃったら、それでも好きでいられると思う？」
「……実はそれ、昨日考えていたの。ちょっとだけツラかったけど」

アイコは俯くヤサコの顔を見やった。
「だよね……考えたくもないよね、そんなこと」
「でも、記憶が戻らない可能性もあるわけだし、もちろん諦めてるわけじゃないけど、そういうことも考えないと今のハラケンに接していけない気がしたの。今のハラケンだって苦しくてもがいてるのだろうし、天沢さんの言ったようなこともあるかもしれない。なのに、私が前のハラケンが戻ってくることばかり願うのって、違うんじゃないかと思って」
「……なるほど。今のハラケンだって、ハラケンには違いないんだもんね。人を好きになるきっかけって、思い返すと何だったかわからないこともあるし、時には容姿ってこともあるんだろうけど、ひとたび人を好きになれば、その人のすべてが愛おしくなるからね。今のヤサコの気持ち、痛いほどわかる」
アイコが今にも泣きそうな顔をしているので、逆にヤサコの張りつめていた気持ちがやわらいだ。するとその話を聞いていたイサコがヤサコに訊ねた。
「……私にはそういう気持ちはイマイチわからないけど、でもよくそんな風に思えるな。普通なら前の人格が戻ってくることだけを願うんじゃないか？今の人格を否定することが申し訳ないって、小此木が言いたいのはそういうことだろう？」
「それわね、イサコ。本当に好きな人がいればわかることよ」
アイコがその質問に返した。
「本当に好きなら、その人の内面が違っていることが受け入れられないんじゃないか？」
「そう思うのがアンタの経験が不足しているところよ。ある人の内面に惚れたとして、でもその人が必ずしも自分の理想通りの人間だったっていうのはほんとに稀。誰しもが他人には見せない一面を持ってるんだからね。アンタもそうでしょう？」
「あ、ああ。そうかもしれないな」
「でも好きになった人なら、まあよっぽどの場合は別として、どん

なに自分の思っていたのと違う一面があったとしても、それは受け入れられるものよ。その人なら何だって構わないの。だって好きになるのは、その人の存在なんだもん」

「存在？」

これほどまで熱く恋愛論を語られるとは思っていなかったイサコは、困惑しながらアイコの話を聞いていた。

「言葉で表現するのは難しいわ。でもニュアンス的にはそんな感じ。その人の存在こそが自分のすべてになる。その人がいなければ、自分の人生の意味もなくなってしまうんじゃないかって思うくらい」

「じゃあ、小此木は」

イサコはヤサコを見たが、しかしアイコがその気持ちを代弁した。

「ヤサコには今の人格も前の人格も関係ない。まあそりゃ前の人格が戻ってくるにこしたことはないけど、どんな運命でも受け入れられる準備はできている。だって、ヤサコはハラケンという存在を愛しているから」

それでもイマイチその気持ちがあまりできないイサコの前に、その時シュウイチが現れた。階段を降りて1階に向かう途中、シュウイチはなぜか3階の廊下をそわそわしながら眺めていた。

「何してるんだ？ロビーで待っているんじゃなかったのか？」

「ああ、イサコ。実は大谷さんに頼まれて」

「大谷？」

彼の姿は見えない。また1人でふらふらとどこかに行ったのかとイサコは考える。

「あの人はどこに行ったの？」

玉子が訊ねると、シュウイチは“関係者以外立ち入り禁止”と立てかけられた看板の先の廊下を指差した。

「あっちの方に調べものに行くって。誰かが来た時のために僕が見張っているんです」

「おいおい。このフロアーは病室じゃなくて備品倉庫が並んでいるんだぞ。薬とかも置いてあるから警備は相当厳重なはずじゃ」

するとその倉庫の1つから大谷が出て来た。こちらに気付いて手を振りながら歩いて来る。
「多少のセキュリティも、あの人なら破れるのかもしれないわね」
「そんなことをしてるとじきに捕まるぞ」
呆れたようにイサコがつぶやくと、聞こえていたのか大谷が返してきた。
「大丈夫だ。薬が置いてある部屋には踏み込んでない。そこのセキュリティはさすがのオレでも破れないからな」
「それなら何を調べていたんだ?」
「ああ。使われなくなった電脳医療機器とかな」
その部屋にはその手の機器が山のように保管されていた。ほとんどが廃品なので、セキュリティも甘いのだ。
「何のために?」
「さっきの話。病院が空間を操作して、特定の病室だけを新空間に置き換えていたっていう可能性があるのなら、それに使った装置がどこかにあるかなと思ってな。あるとしたらそれなりにかさばるものだと予想できるから、隠すとしたら廃品が山積みされてるあの倉庫が怪しいと思っただけだ」
「なるほど。結局らしいものは見つからなかったんだな?」
「見つけたならもっと嬉しい顔をしてるって。この病院については、昨日と一昨日であらかたガサ入れはしたんでしょ?」
大谷は玉子の方を見て訊ねた。
「一応。私はそこまで参加はしませんでしたが、管理室本部の指示で室長の指導のもと、この病院の設備等に不審な点がないかどうかは調べられたそうです」
「でも空間調査の時と同じで、何も出て来なかったってわけか。あの医者については?」
昨日の直樹とハラケンの担当医の会話を聞く限り、担当医は何か秘密を握っていそうな感じがしていた。先ほどハラケンの母や玉子に忠告をしていた彼はその後取り調べを受けたのかどうか、イサコ

は疑問に思った。
「本社の人に事情を聞かれたらしいわ。でも、怪しいところは特にないって。だから今日もケンちゃんをあの人が診察していたのよ」
「そうか……どこか思わせぶりな態度だったが」
「私もあまり信用はしてないわ。本社はメガマス病院の医師を最初から疑ってはいなかったのでしょうね」
玉子はハラケンには聞こえないように声を細めた。
「でもまあ、元気そうじゃないか、彼。初めて会ったけど」
大谷がハラケンの方を見る。ハラケンは「誰?」と近くにいたフミエに訊ねた。
「うーんと、オバちゃんの知り合いの人。一緒に事件を調べてるんだって。それと、こちらは酒井シュウイチ君。ヤサコのいとこ」
「初めまして。今後ともよろしくお願いします」
「初めましてなんでしょうか?とにかくこちらこそお願いします」
ハラケンがシュウイチとも挨拶し合うと、一同はとりあえずその場を去り、ロビーに向かった。積もる話はまた、メガシ屋に戻ってからゆっくりすればいいと思いながら。

そうしてロビーまで降りてきたところで、玉子のメガネが着信した。発信者は一郎のようだった。
「室長から?どうしたのかしら。もしもし?」
『玉子君!今どこに?』
かなり切羽詰まった声だった。一瞬にしてただ事じゃないと玉子も思った。
「今は病院に研一の迎えに来たところですが、何かあったんですか?」
突然玉子の声のトーンが変わったので、イサコやヤサコ達も思わず振り返って玉子の方を注視した。
『ああ。最悪の事態だ。新たな被害者が出てしまった』
「被害者?まさか、また誰かの電脳体が連れ去られたとか!?」

『そのまさかだ。あのブラックホールが開いてしまった可能性がある』
「一体どこで？」
『大黒中学校だ』
「大黒中学校！？」
玉子が叫ぶように言うと、すぐさまフミエが反応した。
「なに！？オバちゃん！大黒中で何かあったの！？」
「あ、ああ。どうやらアンタ達の時と同じことが起こったらしい」
「嘘……」
ヤサコは言葉を失った。またハラケンの時と同じことが繰り返されてしまったのかと思うと、頭が真っ白になりそうだった。
『被害者は7名。いずれも屋外で自主練習をしていた吹奏楽部の部員らしい。詳しいことは会って話したい。君も来られるなら来てくれ！』
「わ、わかりました。あ、でも、研一やお嬢さんたちは？」
玉子は躊躇うように彼らを見た。今もそこに空間の乱れがあるなら、連れて行くのは危険だが。
『できれば連れて来てくれ。前の事故の経験者なら、現場を見て何かわかることがあるかもしれないからな。僕を含め管理室が彼らの安全は確保するから』
「了解しました！すぐに向かいます！」
玉子は電話を切った。そしてヤサコ達を見た。
「行くのね？大黒中に？」
「当然だ」
「私たちは？行ってもいいの？」
「むしろ連れてこいって。前の事故の経験者として、現場を見て何かがわかるかもしれないから」
「それなら急ぎましょうよ！」
フミエは先頭を切って病院を出ようとした。するとそこで遅れて合流することになったダイチ達黒客メンバーとタケルが姿を見せた。

「おお、ハラケン。血色良さそうじゃねえか。これ、退院祝いの粗品な」

ダイチがのんきにハラケンに声をかけるが、とても空気がそんな和やかではないことを察する。

「なんかあったのか？」

フミエはそんなダイチ達に手短に状況を説明した。

「おい、それマジか！？」

「マジだからこんな焦ってるのよ！みんなで行くわよ！今から大黒中に」

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ７

ヤサコ達が大黒中学校に到着した時、既に校門は警察によって封鎖されており、その周りには人だかりができていた。
「空間管理室の関係者です！中に入れさせてください！」
玉子が校門の脇に立つ警察の元に駆け寄ってメガマスのＩＤカードを見せて言った。
「わかりました。その子ども達は？」
「大黒中学校の生徒です。一緒に中に入っても構いませんよね？」
するとその警官は難色を示した。
「いや、ここの生徒であれ子どもを中に入れてはいけないとの指示です。特にメガネをかけた子ども達にこの場所は危険だと。ですので彼らにはここで待っていただくしか」
「いえ、その子達も中に入れてあげてください」
校門の中から声がして一同がそちらの方を向くと、直樹が駆け寄ってくるところだった。
「いいんですか？管理室からは子どもを近づけないようにと釘を刺されているんですよ」
「その管理室の責任者の方の許可が出ています。その子達は、先日の旧第三小学校での事故の関係者です」
すると校門を張っていた警官は納得したように頷いた。
「わかりました。ではどうぞ君たちも中に」
「ありがとうございます」
フミエが代表して頭を下げ、子ども達も全員校内に入った。しれっとした顔でそこに大谷も紛れ込んで入る。
「竹下さん。室長は？」
「先ほど到着されて、空間調査を始められています。すぐにお呼びします」
直樹は一郎を呼びに走った。久美子は他の警官とともに、救急隊

と何やら話し込んでいる。
事故の現場は正門をくぐってから真っすぐ、グランドに平行してのびている並木道である。そこには倒れた生徒男女7名が、それぞれ救急車の台車に横たえられている。メガネを通して見れば黒ずんでしまっている彼らは、しかしすぐに病院に搬送されるわけではない。ヤサコ達の時のように、再び同じ場所に電脳体が戻って来る可能性が考慮され、しばらくはそのまま様子を見るという判断が一郎によって下されたのだ。教師や救急隊、警察や管理室職員が台車の周りをめまぐるしく動き回るその光景は、さながら野戦病院のようだった。
「先輩！」
台車に横たえられている彼らに駆け寄ったのはヤサコだった。意識を失ったのはいずれも吹奏楽部の部員で、ヤサコの先輩達である。なぜ自分に近しい人がこんなことになってしまうのか、その不条理に対する怒りや悲しみに苛まれつつも、今のヤサコには彼らの帰還を祈ることしかできなかった。
「これもミチコの仕業か？」
そんなヤサコにイサコが声をかける。
「……わかんない。でも、私に近しい人が狙われているのなら、そうかもしれない」
「そう言えばアンタ、吹奏楽部に入ったって言っていたな。先輩っていうのはそういうことか」
イサコはミチコの言葉を思い出した。「アナタは彼女が助けを求めている時には彼女を守らなければいけない。アナタにそれほどの勇気と力があるのかを試すの」。ハラケンの時といい、これまでイサコはヤサコのために何一つ役に立てていないような気がした。悲しむヤサコを目の前に、イサコの中ではミチコに対する憎悪と無力な自分に対する嫌悪が沸き上がっていた。
「ひどいわ。私たちの時といい、何だってこんなことをするのよ。ミチコは何が目的なのよ」

怒りをかみ殺しているのはフミエも同様だった。
「ミチコだけじゃない。首謀者はミチコを生み出した技師だ。そいつはかつて宗助が考えていたように、誰かの電脳体を電脳空間に閉じ込めてメガマスを脅すつもりなのかもしれない。その技師の指示に従いつつ、誰をさらうかを考えているのはおそらくミチコだ。小此木に近い人達ばかりが狙われているのは偶然とは思えない」
「ヤサコを苦しめようとしてるのね？」
「おそらく私も含まれている。小此木が苦しんでいることに、私が耐えられないこともミチコは見通しているんだろう。ミチコを生んで、そして1度闇に葬ったのは私たちだ。その恨みがあるのかもしれない」
「そんな……」
しかし腑に落ちないこともイサコにはあった。金沢の事故でイサコがミチコと再会した時、果たしてミチコが自分に憎悪をむき出しにしていたかと思い返すと、決してそうではなかった。ミチコは生みの親に対する愛おしさも同時に抱いているとも言っていた。だからこそこれまでの事故から見える、ミチコの行動原理がイサコには理解できなかった。
しかし、そんな推論をどこまで重ねても意味はない。できるならイサコは、ミチコにもう1度会い、暴走を止めようと考えている。ハラケンの帰還でうやむやになりかけたその課題がはっきりと見えた。しかし、ミチコへの道筋はまったくわからない。今回の事故で倒れた生徒達のように連れ去られたところで、果たしてミチコに会えるのかどうかは疑問である。ヤサコとフミエとアイコは、新空間でミチコに会わぬままに帰還したからだ。唯一ミチコと会ったかもしれないハラケンは、記憶をなくしてしまっている。
「すまないな。わざわざ来てもらって」
一同が立ち尽くすうちに、直樹に呼ばれた一郎がこちらに気付いて駆け寄ってきた。一緒に吹奏楽部の顧問の女性教師、緑川もそこに来た。

「一体どのような経緯でこの子達の電脳体は連れ去られたのでしょうか？」
「はい。それについては僕から説明します」
玉子が訊ねると、直樹は警察手帳を取り出した。事故が起きてからはすぐに救急車が呼ばれ、続いて警察にも通報されたのだが、直樹が駆けつけて調べたところ倒れている生徒達が電脳体分離を起こしていたので、今度は直樹が空間管理室に連絡したのだ。事故発生時の状況は、管理室の職員よりも先に聞き込みを行っていた直樹の方が詳しい。
「事故発生は13時半過ぎ。はじめに異変に気付いたのはグラウンドで練習をしていた野球部の部員だったそうです。この時間、グラウンドでは野球部しか活動していなかったようで、吹奏楽部の部員が倒れるところは彼らしか見ていないと」
「つまり、野球部の部員はメガネをかけていなかったから助かった。逆に言えば、例のブラックホールを見た人は誰もいないということになるのでしょうか？」
「そうですね。倒れた吹奏楽部の部員は、今日部活に参加していた全員だったそうですから、メガネを通した目撃者は不在ですね。その野球部も、吹奏楽部の部員達が何やら騒いでいることに気付き、その直後に倒れてしまったと証言しています。はじめに消防に連絡したのはグラウンドにいた野球部の顧問の先生だったそうです」
「なるほど。しかし参加が7名というのは、吹奏楽部にしては少ないですね？」
吹奏楽部の顧問の緑川に訊ねたのは一郎だった。
「今日は全体練習を入れてなかったのですが、自主練習をしたい人のために音楽準備室を解放して、楽器は好きなように取り出せるようにしていました。私はその時準備室にいたので」
その時の状況は自分にもわからないという風に緑川はかぶりを振った。
「そうだったんですか。ですが、なぜ吹奏楽部の部員の方は皆メガ

ネを?演奏中もかけるものなんですか?」
「課題曲の楽譜はメガネに入ってるの。管楽器は基本的に両手が塞がるから、楽譜をめくる時には演奏を止めないといけないけど、メガネに楽譜を入れておけば、例えば右足で地面を踏むとページがめくれるようになってるわ。だからほとんどの人が部活の時にはメガネをかけてるの」
一郎に説明したのはヤサコだった。緑川も「彼女の言う通りです」と、頷いている。
「なるほど。音だしは普通屋外でするものだから、吹奏楽部の部員達は必然的に事故に遭う可能性は高かった」
「私がもう少しメガネの扱いについて指導しておくべきでした。先日は金沢でも空間事故が起きたばかりですし、私の認識が甘かったのかもしれません」
緑川は部の顧問として責任を感じていたが、それはどう注意を払っても仕方がないことだと一郎は思った。
「いえ、先生の責任ではありません。実はつい4日ほど前に、この子達が同様の事故に遭いました。しかし、メガマスは事故の真相を突き止めるまでその事故の概要を伏せていました。このことを世間に公表していれば、まだ未然に防ぐ余地があったかもしれません。次の事故は防ぐことができるとタカをくくっていた本社の判断ミスです。責任は我々メガマスにあります」
「室長。この中学校はもちろん管理外ドメインですよね。キュウちゃんだけなら空間異常を探知することは叶わなかったかもしれませんが、2．0を巡回させていなかったのでしょうか?」
玉子がふと疑問に思って訊ねた。ヤサコ達の時の事故を教訓とするなら、事件が解決するまで2．0も常時投入されていないといけないところである。
「ああ、言いにくいことだが、2．0の出動は昨日の時点で中断された」
「どうしてですか?」

すると一郎は玉子の元に歩み寄って声を細めて言った。
「本部長の指示だ。あの人、昨日の時点でこれ以上事件を大きくすることを嫌ったらしい。緊急時にしか投入できないことになっている2．0を継続的に出動させることは、マスコミ的にも、そしてメガネ使用者にもイメージが悪い。研一君帰還の報告を受けて、本部長はこのまま事件をなかったことにしようとしていた。聞いただろう?サーチマトンを新空間制御暗号発射装置に改造して、ムリヤリ新空間の出現を押さえ込もうとしていることは」
「ええ。それで今日は2．0が飛んでいなかったんですか?でもおかしいでしょう?本社の関係者に一連の事件の首謀者がいるとすれば、その情報も筒抜けのはずです。それは次の事故を誘発しているだけじゃないですか」
どこまで無能なんだろうかと玉子は本部長に対して憤っていた。
「その通りではあるんだけど、電脳局からもいい加減にしてくれとクレームがきていたみたいだった」
「・・・・・・これまでの事故でメガマスの信頼も地に堕ちて、政治力を発揮できなくなっているってことですね」
「ああ、必然の流れではある。このままではメガネの使用が禁止される日が来るのも、あり得ない話ではなくなってきた。その矢先でのこの事故だ」
「これが首謀者の狙いなのかもしれませんね。メガマスの凋落を、メガマス内部から見届けることが」
それにしても、未だ犯行声明は送られてきていない。そのような愉快犯的な手段でじわじわとメガマスを追いつめようとしているのなら、あってしかるべきだと一郎は思っていた。金銭の要求すらないのは不自然のようにも思える。
「本社の建て直しは僕達が考えるべき問題じゃない。考えるべきは」
「彼らの電脳体をどう連れ戻すか、ですね」
倒れている生徒達を見やり、玉子がつぶやいた。こうしてため息をついていても仕方がないので、一郎は何とかできることから始め

ようと動き出す。
「どうかな?事故発生時の話を聞いて現場を見る限りで、君たちの時と同じ、あるいはどこか違っている点があったらどんどん言ってほしい」
ヤサコ、フミエ、アイコに一郎は訊ねた。
「野球部の人達が吹奏楽部の部員達が騒いでいるのに気付いたっていう話。その時おそらく、吹奏楽部の人達は地震を感じていたのだと思います」
「うん。あれは立っていられないほどの揺れだから、たぶん悲鳴も上がったと思う」
フミエとヤサコが答えた。それは直樹も聞き込みをしながらおそらくそういうことだろうと考えていたことでもある。
「他には?」
「学校の敷地内で倒れたんなら、新空間でも学校の敷地内に飛ばされたのだと思います。ただ、だからってここから何ができるってわけでもないですが」
「そうだ、電話は!?」
ヤサコが思いついたように言った。
「そうよ!分離した電脳体に電話をかけたら出るかもしれないわ!もっとも、それは夏に京子ちゃんが古い空間に迷い込んだ時に使えただけで、新空間ではどうかわからないけど」
フミエもそれなら希望があるのではないかと思い、直樹の方を見た。新空間の原案を作った彼の意見を聞くために。
「残念ながらそれはできない。新空間は恒常的に暮らすための空間で、言わば現実世界を捨てた人のためのもの。そこで暮らしている人に、通常空間から電話でアクセスできるとなれば本末転倒だ。その人は現実世界の縛りから解放されなくなる。だから僕の理論ではここから新空間にいる人に直接連絡を取る手段はない」
彼はかぶりを振って返した。まったく厄介なものを生み出してくれたなと、フミエは直樹に向かって鼻を鳴らして睨みつけた。

「現実的な手段としては、やはり待つしかないのですか？」
今度は一郎が直樹に訊ねた。
「今のように空間が不安定な時に暗号で誘発しようとすると、かえって危険です。やはり空間の乱れが収まるまでは彼女達の時と同じことが起こるのを待ち、乱れが収まっても帰ってこない場合は」
「病院に搬送して様子を見ながら、次の手を考えるというところですか」
今回はこれだけの人員が集まっているのに、何も打つ手がないとはなんとも歯がゆかった。そろそろ倒れた生徒の家族が駆けつけ始め、台車に横たえられた彼らに何度も呼びかけている姿を見ると、なんとも心苦しかった。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ８

「なにしてるんだ？そんなところで」
イサコがふと目をグラウンドにやると、大谷が一人で何か調べものをしているのに気付いた。ほとんどの人が校舎側の通路に集まっているので、誰も彼を気に止めていない。
「みんなあっちの通路側ばかりに目が行ってるものだから、こっちも調べといた方がいいんじゃねえかと思ってな」
「暗号でも探してるのか？でも人が倒れたのはもっと向こうの校舎側だぞ。ほとんどそこは野球部のグラウンドに入ってるじゃないか」
イサコが校舎を振り返りながら言った。
「だからって、あっち側にブラックホールが出たとは限らんだろ。メガネをかけた目撃者はいないんだからな」
「それもそうだな。私も探してみる」
イサコは大谷とともにグラウンドの空間を調べ始めた。
「なあ、今回の一件。アンタはどう見てる？」
「どう見てるって聞かれてもなあ。まあ、事故が起きたこと自体は想定できたことだけどな。メガマスの対応が悪いのが最大の事故原因だろう」
「それはさっきも言っていたな。事故の予兆を感じたって」
それは何だったのかと、イサコは言外ににおわせた。大谷もそれを汲み取ったのか説明を始める。
「単純な話だ。新空間は違法にサーバーを占拠しているんだろう。新空間に動きがあった時、通常空間の電脳制御のものに少なからず影響が出る。信号の誤作動とかな」
「それはかつての古い空間と同じか。メガマスはそれを掴んでいなかったのか？」
「把握はしていても、騒ぎを広げたくない一心で２．０を出し渋ったんだろう。もしくは、その報告をもみ消して上申しなかった人間

がいるのかもしれんな」
「首謀者の仲間が本社に紛れているということか」
いくらなんでも本社はいいようにやられ過ぎだとイサコは思う。
「いずれにせよ本社の過失であることには変わりない。この一件で幹部連中がどう出るかどうかは見物だな。ああそれと、今回の事故で明らかになったことが1つあるぞ」
「なんだ？」
「ここは新空間なんかじゃないということだ。電脳体のみの体が電脳体分離を起こすわけねえからな。もちろん、新空間ではそんなことも起こりうるっていうのなら話は別だが、それは考案者のあの竹下っていう警官に聞けば一発でわかる」
新空間にもメガネは存在し、生のペットと電脳ペットの違いがあるというのは昨日の直樹の話だ。しかし、さすがにその中で人間が電脳体分離を起こすことはないだろうとイサコは思う。
「確かにそうだな。でも、それはかなり可能性としては低い仮説だった。大きく前進したとは言えないな」
「おいイサコ。さっきからなにしてんだ？」
その時ダイチ達黒客メンバーもこちらに気付いて歩み寄ってきた。ヤサコ達は自分たちが遭った事故の時のことを思い出しながら現場を観察しているが、こちらは手持ち無沙汰といった感じだ。
「暗号を探してるんだ。新空間へのリンクをつなぐ暗号をな。手伝ってくれるか？やり方は教える」
「ああ、任せてくれ。オレたちも何か協力してないと来た意味がねえからな」
イサコはダイチ達にサーバーの偽装で隠された暗号の探し方をレクチャーする。黒客メンバーの飲み込みも早かった。
「わかった。じゃあ、オレたちはあっちのサッカーゴールの方を見てくるわ」
「ああ、ちょっと待てくれ。イサコ、少し気になることがある」
行こうとしたダイチと戻ろうとしたイサコを引き止めたのはガチ

ヤギリだった。
「なんだ？気になることって？」
「新空間への出入り口っていうブラックホールは、暗号がないと開かないものなのか？」
一連の事故の話を聞いてきたガチャギリは、そこを疑問に思っていた。
「そうだな。正直、なくても開く時はある。ただ、あった方が開く可能性は高まるというところか」
これまでの事故の中で、現場に暗号が存在していたのが確実なのは金沢のイベント事故だけである。しかもあの時はイサコ達が自らその暗号が新空間へのアクセスプログラムとは知らずに仕掛けたものだ。それ以外の事故では現場で暗号が見つかったわけではない。最もはじめの事故である黒井地区での空間事故、金沢の夕日寺中学校でのブラックホールの出現、事故発生直後に2．0によってフォーマットが強行された旧第三小学校敷地内での事故。ハラケンの電脳体が帰還した病院で暗号が見つからなかったことを含めると、基本的に暗号が見つからなかったパターンの方が多い。今回の一件でも、こうして調査して暗号が出て来る可能性は低いと言えた。
「暗号がないのにも関わらず、なんで新空間の入り口は開くんだ？」
「おそらく新空間が通常空間とつながるかどうかは、ミチコのさじ加減1つだ。暗号があれば、その時に必要なエネルギー量が軽減されるってところだろう。サオリの話では、新空間が開く時には膨大なエネルギーが発生するということだったからな」
そこで大谷が説明した。黒井地区での事故で多くの人のメガネが破壊されたのは、そのエネルギーの暴発の結果だったと言える。対してイベント事故の際にメガネが破壊された子どもがいなかったのは、イサコ達の仕掛けた暗号が、エネルギーの暴発を抑えたからだと考えられた。
「すべてミチコの意志次第か。じゃあどうしてハラケンは戻って来られたんだ？」

その話を聞いたダイチが素朴な疑問をぶつけた。
「そうッスよね。さっきイサコ言ってたよな？ミチコがこんなことをするのは、生みの親であるヤサコやイサコを苦しめるためだって」
「ああ、私がミチコに会った時のことを考えるとそうだと思う」
イサコにはダイチやナメッチの言わんとしていることがわかった。
「つまりアンタ達が言いたいのはこうだろう？ミチコは唯一、通常空間と新空間の出入り口の出現を操作できる。原川が帰還したのは、ミチコがアイツを新空間から逃がそうとした結果である可能性が高い。ところが、原川が戻ってきた矢先のこの事故だ」
「それなんだよ。だったらハラケンをずっと閉じ込めておけばよくね？ハラケンを帰して、また新しくヤサコの先輩達の電脳体をさらうのって二度手間だろ。そのハラケンが記憶を失ったっていうのも、スゲー引っかかる」
「ヤサコの周りの人をみんな記憶喪失にしようってミチコは考えてるんじゃないんスか？」
「それは違うはずだ。電脳体であるミチコに、肉体の脳の記憶を抹消することなどできるはずがない」
「ふむう」
ダイチ達はどういうことなのだろうかと考え込むが、イサコはこれらの事実が一本の線につながる1つの仮説を持っていた。
「これは昨日竹下さんが言っていた意見なんだけど、原川の電脳体はまだ戻ってきていないんじゃないかっていう」
「帰ってきてない？どういうことだよ？」
イサコはダイチ達に手短に説明した。もしもここが新空間なら、今この場所にいるハラケンが必ずしも本物でなくても自分たちには判別ができないということを。
「しかし、今回の事故でここが新空間である可能性はほぼなくなった」
さっきイサコと大谷が話していたことも、簡単に伝える。
「じゃあ、あのハラケンは一体誰だ？他人のそら似か？」

「そんなわけないだろう。だったらアイツの家族やオバちゃんが気付いているはずだ」

しかし、ハラケンは戻って来ていないという仮説は、彼が間違いなく“原川研一”として存在していることが既に打ち消している。イサコもこの仮説に固執してもしょうがないと思い始めていた。

「もしかして、ハラケンの精巧なアンドロイドとか？」

「だったらアイツの体のどこかにネジがないか探してこい」

「おお！任せろ」

あんな忠実なコピーのアンドロイドがいてたまるかという思いでイサコはダイチに言ったが、ダイチは本気でハラケンの体を調べに彼の元に走って行った。

「やれやれ。バカなのは相変わらずらしいな」

「大目に見てやれよ。オメーの話を聞いてると、アイツがそう考えるのもムリねえって」

ガチャギリは苦笑してそう言うと、残ったメンバーを集めて暗号探しのために場所を移動した。

ヤサコ達とハラケンは事故現場の近くで状況を見守っているところだった。一郎や玉子がウインドウを開いて空間の異常を観察しているが、先ほどから動きがないらしい。

「おい、ハラケン」

ダイチがそう声をかけると、ハラケンと一緒にヤサコ達も振り向いた。

「えーと？沢口くん？だったよね」

「ダイチでいいぞ。それよりさ、気になることがあんだよ。その服脱いでくれねえか？」

「はあ！？」

一斉に声を上げたのはヤサコ、フミエ、アイコの女性陣だった。

「この変態！こんな時に何を言い出すのかと思えば！」

「うわあ。ダイチってそういう趣味があったのね」

「どういうことなのダイチ君？」
フミエ、アイコ、ヤサコの順でいずれも非難の目を向けながらダイチに迫った。さすがにダイチも、このハラケンはアンドロイドだ、などと本人を目の前にして主張するのは気が引けた。
「うっせーな。調べもんだよ、調べもん。上半身だけでいい。ちょっと見せてくれハラケン」
「う、うん。少しだけだよ」
ハラケンもなぜか嫌がろうとはしなかった。記憶を失ってからは性格がおおらかになっている。
「だから何を調べてるのよ？」
「ハラケンの胸板の厚さだよ。いいからご婦人方はあっち向いてろ」
ダイチに言われるがままハラケンはジャケットを脱ぎ、Ｔシャツも脱ごうとしたところでヤサコとフミエは顔を真っ赤にして後ろを向いた。ただ1人、アイコはダイチが何をしでかすのか興味津々な様子で、後ろを向きながら首だけそちらを向いてガン見していた。
「うーん。ないなあ」
「胸板が？」
上半身裸のハラケンがダイチの言葉に反応して返す。ハラケンが華奢なのは変わっていない。
「いや違う違う。ちょっと叩かせてもうらうぞ」
ダイチはネジが見つからなかったので、胸のところなどを叩いてみた。アンドロイドなら中に鉄でも入っているだろうと思ったからだ。
「ぶふっ。ちょっと、なんだかわからないけどやり過ぎだよ」
ハラケンもさすがに困った表情で言った。ダイチもそこで冷静になって考えてみる。今時のアンドロイドが鉄でできているはずがない。人工筋肉なども開発されているこの時代、人間の質感を再現することなど容易なことで、あからさまにネジで組み立てられているはずがないと思った。つまり、こんなことをしても無意味だ。
「ああ、悪かったハラケン。オレの勘違いだったみたいだ。もう服

を着てくれてもいいぞ」
「そうかい？」
ダイチは別の手を考えた。本当にアンドロイドなら、どこかでエネルギーの補給をするはずである。それに機械が人様と同じ食べ物をエネルギー源とするとは思えない。どこかで充電か給油でもするはずだとダイチは考えた。その現場を押さえるのだ。
「なあハラケン。今晩退院祝いにメシでも食いに行かねえか？」
「うん？あ、いやごめん。今日は家で食べることになってるんだ。僕の好物だったらしいグラタンを作ってくれるって」
好物だったらしいという言い方が、なんとも切ないなとダイチは思った。
「そうか、残念だな。ま、近いうち行こうぜ。うん？」
ダイチはハラケンの肩に手を置いて言った。すると彼の首筋の辺り、長い髪に隠れてしまっているが何かが貼られているのに気がつく。
「おいハラケン。なんだこれ？」
ダイチはハラケンの髪を上げて確認した。それは円形の絆創膏のようで、肩こりの人が血流を良くするために使うものによく似ていた。
「あ、いや、これは」
するとハラケンはダイチから急いで離れてその絆創膏を手で隠すように覆った。その様子が少し妙だとダイチは感じた。
「オメー、もしかして肩こりなの？」
「あ、ああ。そうなんだ。前はどうだったのか知らないけど、目が覚めてからは妙に肩がダルくて」
「ふーん」
やはり彼はアンドロイドじゃないとダイチは思い始める。肩こりのアンドロイドなど聞いたことがないからだ。
「ダイチ！さっきからなに研一にちょっかい出してんの！」
するとこちらの様子に気付いた玉子がものすごい形相で怒鳴りつ

けてきた。ダイチは驚いて身を退く。
「なんだよ。なんもしてねえよ！」
「嘘よ。さっきは上半身裸にさせて体触ってたし、今はハラケンの襟足のところに見とれてたもの」
そこでアイコが玉子に告げ口した。玉子はさらにヒートアップしている。
「相原！何しれっと一部始終見てんだよ！それに言葉がいかがわしいぞ！」
「本当なのね！？事件が解決したらお前、タダじゃ済ませないぞ！」
「ひい！なんでそうなるんだよ！」
ダイチは恐ろしくなってそこから逃げ出した。フミエやヤサコも、こんな時に最低なヤツだとダイチを見損なっていた。

「おいイサコ。あのボウズ、ペケポンマーク出してるぞ。彼はアンドロイドじゃなかったらしいな」
大谷が頭の上で大きく×マークを出して駆けていくダイチを見つけて言った。
「それは残念だ」
イサコも呆れたようにため息をつくと、引き続き暗号探しに取りかかった。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ９

夕闇に紛れて黒い一台の車が弁天市内を駆け抜ける。本来ならば本社にその動きを尾けられているはずのその車は、既に追っ手を振りまき、大黒市境にほど近い山あいに佇む研究施設に到着した。今は敵の本拠地たる大黒市の目と鼻の先に拠点を構えたのも、本社のウラをかくためである。もとよりそのようなかく乱をしなくても、未だに神崎の手の者が本社の情報部に紛れているので、プロジェクトチームの動きが掴まれる心配はなかった。だから堂々とまだ日の残る時間帯にこの施設に赴くこともできるのだ。

その研究施設を覆い隠す山々をゆっくりと眺めながらその車から降り立ったのは、金沢支社長だった。

「ご苦労様です支社長。予定より早かったですね」

その彼を直々に出迎えたのは神崎だ。

「ああ。今日の昼間の事故について、いち早く詳細が聞きたかったのでな」

「それはそれは。私もこのタイミングで来るとは思いませんでしたよ。では予定を返上されてこちらへ？」

「いや。大した用はなかったから、残りは部下に任せた。早速話を聞かせてもらうぞ。先日起きた、大黒市の小学校跡地の事故の件も詳しくな」

支社長は神崎の責任を問うように、鋭い視線を向けて言った。大黒市で立て続けに起きた2件の事故について、果たして神崎に落ち度はなかったのか。

「わかっています。ではこちらの方へ。研究室で小野先生もお待ちです」

悪びれる様子のない神崎はとりあえず支社長を施設の中に案内した。とある研究室の自動扉が開くと、そこには何かの波長を示している医療機器のようなディスプレイが並んでおり、それをつぶさに

観察している小野と複数の研究員が詰めていた。
「やあ、先生。しばらく」
「どうも、お久しぶりです支社長。少しお痩せになられましたか？」
白衣をまとった小野は観察を研究員に任せ、支社長の元に歩み寄った。
「こう気苦労が多いとそうなってしまう。先月からこのプロジェクトに関わる事故、事故、事故だ。かろうじてプロジェクトがまだ形を保っているのが不思議なくらいだ」
「支社長は何も心配をなさらなくてもいいと日頃申し上げているのですがねえ」
神崎は苦笑するように言った。プロジェクトの責任者は支社長だが、総指揮を取っているのは神崎だ。
「彼がそう言うほどに私は頭が痛くなるんだよ。もちろん信頼はしているし、本社や世間の目を欺いているという点では事故の処理もうまくしている。しかし、本当のところで何を企んでいるのかわからんからな。たまに私に黙って余計な計画を進めているし」
「お気持ちお察しします。神崎さんの要求に応えるのは、私どもも大変です」
本人を目の前にして支社長と小野は神崎への不平を言い合う。支社長が神崎を買っているのはひとえに能力の高さで、与えた仕事以上のことをこなすところで信頼を置いている。しかし与えられた仕事以上のことをこなすという点では、彼は度を超すところがあるのだ。
「そう褒めないでください」
神崎が苦笑したままに返した。
「今のをどう捉えれば褒め言葉になるんだ？まあいい。では神崎から報告してもらおうか。例の技師の裏切りについて」
「我々がつけたコードネームでは、彼は“桐野”技師です。本名は細川さんというらしいですけどね」
支社長の言葉を訂正するように神崎は言った。桐野とはサオリの

母の結婚前の姓である。問題の技師はサオリの父であるが、既に離婚しており、神崎の調査によると本名は既に割れている。しかしその名前を知ることに意味などなく、桐野家の復讐を果たそうとしているところから神崎はそのように呼んでいるのだ。

「わかったわかった。で、お前はいつから“桐野”の裏切りを予想していた?」

「大黒市の第三小跡地の事故が起こるまで、私は味方だと信じていましたよ」

手近にあった椅子に腰掛けた支社長はそれを聞いてため息をついた。

「……嘘をつくな。あの技師を主任に据える時に素性を調べたはずだろう?去年の金沢市の黒井交差点で事故に遭った桐野恵の元夫ということはわかっていたはずだな?」

「それはもちろん。彼は元々アプリコット社の人間ですから、つぶさにその素性は調べ上げましたよ。彼の経歴を知ったからこそ、主任に据えたという経緯もありますから」

「そうだな。ヤツは旧コイルス社の出身で、天才猫目技師の右腕とも呼ばれた男だったらしいな。小野先生と一緒にヤツを引き抜いてきたお前の腕を、あの時は見事なものだと思っていたが……」

新空間計画が立ち上がる去年の10月頃の話だ。

「わかっていたならなおさらだ。ヤツがこちらに近づいてきたのは、黒井交差点の事故を隠蔽した我々に復讐するためだと思わなかったのか?」

支社長は身を乗り出して訊ねていた。

「もちろん、はじめは勘ぐりましたよ。それでも彼は、我々の要求通りに空間を設計していってくれました。ですよね?小野先生?」

その技師と共に研究に参加した小野に神崎は視線を向ける。

「ええ。神崎さんに言われて、彼が怪しげなプログラムを混入しないかどうか見張ってもいました。しかしその素振りはなかった。今

にして思えば、その時から巧妙な伏線が張られていたようにも思えます」

「どういうことだ？」

「彼は残された猫目技師の資料を元に空間を設計していきました。しかし、それで昔のコイルドメインとも似た欠陥を持つ空間生むことになった。彼は意図してその欠陥を再現したんですよ。そして我々もそれに気付かなかった。修正しようと思えばいくらでもできたはずだったのに」

後悔しているような表情で小野は言った。彼の監視役に指名された小野にしては、あまりに注意力が散漫だった。

「なんだその欠陥というのは？」

「一言で言えば不安定ということです。最終的にあれはふとしたことで変質するような空間になりました。完成した時には、それを一から修正する時間もなかった。神崎さんは出来上がった空間を見て不満に思ったはずですよね？」

「そうでしたね。これじゃとても実用化はムリだと思いました。ただ、幸か不幸か私はその欠陥を解消する術を思いついてしまった」

そこまで言えばわかるだろうと、神崎は支社長の方を向いた。支社長もこれまでのプロジェクトの経緯から神崎の言わんとしていることを察した。

「なるほど。ミチコか」

「ええ。“桐野”技師は最初からミチコをあの空間で復活させることを企図していたのだと思います。機転の利く神崎さんの発想力をも逆手にとった作戦で、決起の準備をしていたのでしょう」

「ヤツの術中にはまったわけだな。お前にしては珍しい」

支社長もこのことで神崎を責めるつもりはなかった。小野も気付かなかったほどの“桐野”技師の作戦が見事だっただけの話だと思った。

「まさかそこまで考えていたとは夢にも思いませんよ」

「お前も『新空間の神の誕生だ。人間には具現化した神が必要だ』

と、はしゃいでいたものな」

からかうように支社長が神崎に言った。当の神崎も、世界の守り神を誕生させることによってどう新空間が揺れ動くのかを、興味本位で見てみようとしていたのだ。

「ミチコの誕生まではまだ良かった。ミチコについては私と彼で念入りにプログラミングしていきましたから、その時点でこのような暴走を起こすはずがなかった。問題なのは、彼がミチコを刺激したことです」

「刺激？」

「先月の初めの猫目宗助による廃ビル襲撃。あの時にミチコは本当の生みの親である小此木優子、空間管理室の小此木一郎の娘さんと再会を果たしました。私もあれは単なるバグかと思っていましたが、それも彼の仕業だったのだと思います。考えてみれば、空間制御プログラムで現出した古い空間の中に、新空間の住民であるミチコが現れるはずがありませんから」

ヤサコとミチコの再会も、“桐野”技師が仕組んだものである小野は考えていた。その再会によってミチコの中で発生する化学反応も、彼女をプログラムした小野や“桐野”技師にとっては想定できるものだった。

「こうして刺激を受けたミチコは、金沢で天沢勇子を探すことになった。金沢での一連の事件はそれに起因しています」

すべては“桐野”技師の思惑通りに運んだわけだと支社長は思った。暴走を始めたミチコを制御するため、“桐野”技師は彼女の意志を操作するプログラムの開発を神崎に指示された。その時、小野はこの研究施設でプロジェクト完成のための詰めの作業を行っていたため、この予定外の仕事は“桐野”技師に一任されることになった。かくして彼は、ミチコを支配することに成功したのだ。

「思えばあの廃ビル事件の筋書きもお前が考えたものだろう？またお前は“桐野”に一杯食わされたってことだな？」

「いやはや。私は彼を信頼し過ぎていたようです」

神崎は珍しく渋い表情になったが、いくらなんでも迂闊過ぎるのではないかと支社長は思った。
「同じ質問になるが、なんだってヤツにそこまで気を許したんだ？素性を知っていれば、毛ほどの油断もならないヤツだとわかっていただろう」
「彼が復讐などという幼稚なことを考えるなんて思わなかったからですよ。それも、あの猫目宗助と同じ方法で。我々のプロジェクトを持ってすれば、電脳体を異空間に連れ去ることなど無意味なことなんですよ。脅しの材料には使えません。それは原川君がきちんと退院したところからも明らかです。彼もそのくらいわかっています」
「ふむう」
毅然とした態度で答えた神崎に対し、支社長は腕を組んで唸るだけだった。
「結局そこです。彼の動機と言いますか、目的がわからないのです」
小野も神崎の意見に賛同した。
「交通事故の真相の公表でも、金でもない。にも関わらず執拗に新空間に電脳体を連れ去って行く……」
沈黙が降りかけたところで、小野が考えを述べた。
「第三小跡地での事故はこちらの出方を窺うために仕掛けたものだと私は思います。だから適当な1人を選んで電脳体を連れ去った」
「残る3人を返したのは？」
「帰還を果たした彼らを使って、本社の出足を鈍らせたかったのではないでしょうか？意識を失った4人のうち3人がすぐに帰還したとなれば、本社には4人目の帰還も時間の問題かもしれないという希望的観測が生まれます。同時に、新空間の強制フォーマットを躊躇させることもできる。4人全員の電脳体が連れ去られていたなら、得意の隠蔽で新空間をフォーマットし、事故そのものをうやむやにして4人は全員揃って行方不明扱いにするということも、彼らは考えたはずです」
「本社は事故の証言者を得て、独力で事件の解決に動き出した。お

かげで我々に目が向かなくなった。我々の出方を窺うのが“桐野”技師の目的だったのなら、まさに絶好のシチュエーションを作り出したと言えるでしょうね。事故の証言者を残しておいた彼の目論見は当たったわけです」

神崎も概ね小野の言う通りだと思った。本社はまるで“桐野”技師の手のひらで踊らされている。それを間近で見ていた彼は、さぞかし愉快だったろうなと支社長は思った。

「じゃあ今回は？聞いたところによると、電脳体を連れ去られた7名はいずれも戻って来ず、病院に運ばれたそうだが？」

「今度は原川君の覚醒が伏線になります。やはりまだ彼らが帰って来る可能性が残っており、本社は新空間の強制フォーマットに踏み切ることができなくなります。どうしても彼にとっては、新空間を抹消されるわけにはいかないのでしょう。無論、我々にとってもそれは言えますが」

支社長の問いに小野が推測を交えて答える。大黒中学校での被害者は、すべてハラケンと同じ処置がとられることになった。病院に入院させて、その電脳体の帰還を待つしか本社にはできない。そのためには、新空間を抹消することも、深部に封じ込めることもできない。

「……なるほど。原川君を退院させた我々をまた利用したというわけか。我々が今回の7名を原川君と同様に退院させたとしても、すぐに新たな被害者が出るだけだな」

まるで無限ループのようだった。いつまでも“桐野”技師とのいたちごっこを続けるわけにはいかない。

「そこで支社長に提案があります。すでに原川君が健康に退院した通り、我々のプロジェクトにも一応の成果が上がりました。満を持して本社に乗り込み、プロジェクトのプレゼンを行おうと思うのですが」

「本社にも真実をすべて打ち明けるのか。まあ、今後“桐野”との決着をつけるには、本社とは協力関係にあった方が都合がいいから

な。本社にプロジェクトを認めさせるにしても、この騒ぎのどさくさに紛れるというのはタイミング的にも良い」

本社といがみ合っている今の状態ではプロジェクトチームも大黒では動きにくい。事故の拡大を防ぐためには本社と協力する方が良いということは、こちらの方がよくわかっている。

「おそらく政府関係者にも歓迎されるんじゃないですか？」

小野の言うように、一連の事故で焦っているのはメガマスだけではなく国も同様である。この国の経済はメガネを中心とした電脳産業に支えられている。相次ぐ事故でメガネの信用が落ちていることは、政府にとっても打撃なのだ。プロジェクトの実現でメガネの信用を回復する、言い換えるならメガネの存在価値を世間に再認識させることは、メガマスにも、そして政府にも喜ばしいことのはずである。

「では、明日にでも乗り込もうと思うのですが」

「明日か。わかった。章太郎には私が連絡をとろう」

「よろしくお願いします」

そういうことになり、プロジェクトチーム幹部の密会はそこでお開きということになった。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ１０

日が暮れたところで開かれた本社の幹部に向けたこの日の事故の報告会は、まるでお通夜のような沈んだ空気で覆われていた。今日の事故で新たな被害者が出てしまった以上に幹部達が気にしていたのは、これで一連の事故の隠蔽が出来なくなってしまったことだ。

第三小跡地の時は、ヤサコやハラケンなど被害者がメガマス関係者に近しかったのでその話も大きく広まらずに済んだ。しかし今回は話が違う。被害者の家族は一連の事件について何も知らされていない上に、ほとんどが先月のメガネの不具合の公表でメガマスに対し不信感を抱いていた。その矢先のこの事故だ。一郎の口からもメガネによる事故の可能性が高いと聞かされた家族達は、ただちにメガマスに抗議した。それはマスコミを通じて全国に知らされることになったのである。

「まったく。こちらの許可もなくベラベラとしゃべりおって」

その一郎の対応にご立腹だったのは管理室本部長だ。彼は誰よりも一連の事故の情報を隠蔽したがっていた。

「電脳体分離という現象も世間に認知された今、あの現場で事実を隠し通すことはできませんでした。それこそマスコミに嗅ぎ付けられれば、我が社は一斉に叩かれることになったでしょうから」

自分の対応は間違っていなかったと一郎は主張する。このところ本部長に楯突くこともある一郎にはバックに強力な理解者がいた。

「小此木さんの言う通りですよ。今回は先月の廃ビル事故以上に被害者が多かったのです。隠蔽などできるはずがありません」

その桝田が一郎をかばうように言った。

「では、社長は即刻すべてを公表するおつもりですか？事件も未解決のままでそんなことをすれば」

「みなまで言わなくてもわかっています。メガネ排斥の動きが加速することでしょう。我が社としても、事件の解決まではメガネの使

用を控えるように通達するべきです。ブラックホールの出現にオンロードドメインもホームドメインも関係ないのなら、メガネの使用自体が危険なのですから」

しかしそれは桝田の一存で決められるものではない。メガネの無期限使用禁止は、メガマスグループの解体と直結する。銀行、株主、各支社の代表、ＯＢ、そして政府関係者との協議が必要となるが、それが実現する可能性は低い。この国の電子産業をリードしたメガマスが喪失すれば大量の失業者を生むだけでなく、国内はもちろん世界経済に大きな空洞をあけることになる。それ以上に問題なのは、

「もはや世界は、メガネに搭載されている量子回路によってもたらされた高速通信インフラなしには機能しなくなっています。メガネの使用を禁止すれば、世界中のあらゆる機能が麻痺し、それによってもたらされる混乱は計り知れません。それでも社長はメガネを禁止するべきだとお考えになりますか？」

本部長はメガネの使用禁止がもたらす世界の混乱と、今日の事故の被害者の魂を秤にかけるような口ぶりだった。

「先ほどから政府関係者や情報機関の調査員からひっきりなしに電話がかかってきているそうです。彼らは今回の事故の公表さえも阻止するつもりだと思います。メガネの不具合の公表の際にも、彼らからは相当釘を刺されたと聞いておりますが」

「……ええ。再びこのようなことがあれば、首脳陣の刷新を強行すると」

平松部長の言葉に桝田は素直に頷いた。銀行などよりよほど抵抗ができないのは国からの干渉である。彼らにとっては、一経営者の理念と少数の被害者のために社会を混乱に陥れることなど言語道断といったところだろう。国はメガマスに治外法権を与えるなど、数々の恩恵を与える代わりに、電脳インフラの世界的整備という形で稀に見る好景気を創出し、この国を世界屈指の経済大国の地位に返り咲かせた。立派な理想と引き換えに、再びこの国の経済を奈落の底に落とそうとしている桝田は、彼らにとって危険な存在でしかな

い。桝田によってメガマスを追われた旧幹部達は、この状況を見て笑いが止まらないだろう。

しかし事情に精通する有識者から見れば、そもそも原理すらわからない量子回路をコイルス社が商品化したことがそもそもの間違いであって、そこに飛びついたメガマス、さらにそれを盲目的に支援した国にも当然責任はあった。好景気など長くは続かない。ついにメガネバブルの崩壊が訪れただけの話だと言えばおしまいである。桝田もそのことを強く意識していた。メガマスの破滅とこの国の経済的困窮が時勢によって必然的にもたらされるのだとしたら、犠牲を出してまで抗うよりも、それを受け入れる代わりに最後まで人として守り抜くべき大切なことがあるのではないかと桝田は考えている。

「では実質的に事故の公表はできないということですよね？それに歯向かうのなら社長の命が危ないですよ。お国も自分たちの体面を守るのに必死なんですから」

本部長の言葉には、社長に対する脅しとともに、政府が自分と同じ考えを持っていることに対しての自信のようなものが感じられた。そして桝田も、社を超越した権力には太刀打ちできないことを痛感していた。巨大化し過ぎたメガマスを本当の意味で生まれ変わらせるなど、所詮は誇大妄想だったのだ。

「ここは前向きに考えませんか？政府の情報機関も動き出しているとなれば、マスコミへのカバーストーリーも彼らが考えてくれますよ。我々は事件解決に集中できます」

1人しゃべっている本部長も悠長な構えだと思ったのは、この会議室の中で桝田だけではなかった。政府の言うことに従っていれば今の地位を保証されるわけではない。遅かれ早かれ、本部長のような自己の保身しか考えないような人間は首脳陣刷新で切られるのが関の山だ。そもそもメガマスはメガネと共に心中しようと考えているが、政府がそう思っているはずがない。体よくメガマスからメガネに関する権利だけを、他の企業やもしくは国自体に移し、メガマ

スはすべての責任をなすりつけられて潰されるというのが最も現実的なストーリーである。どちらにせよメガマスに明日はない。

「まずは現実的な対応を考えませんか？被害者の電脳体の奪還も重要ですが、事故の拡大を防ぐというのもまずは必要になってきます」

議論の流れの中で提案したのは平松だった。桝田もまずはそこから考えることに頭を切り替えることにした。

「それに関しては準備があります。サーチマトンを、新空間出現を阻止する暗号の発射装置に改造するというものです」

それは昨日も本部長は提案していた。新空間の出現をとにかく抑えることがこの期に及んでは最大の予防となる。被害者の電脳体の奪還よりも、次の被害者を出さないことの方が今は重要だ。一度はその案を退けた桝田も、一時的な処置としては確かにそれは有効な手段かもしれないと思い始めていた。

「それをしたとして、メガマス病院に運び込まれた7名の電脳体は戻ってくる可能性は残るのですか？」

「病院周辺を索敵の範囲外にすればいいんじゃないですか？もっとも、調査ではあの病院に新空間が現れた証拠が見つからなかったみたいですがね」

その状況証拠こそが本部長を強制フォーマットに駆り立てていた。彼は新空間の入り口が開くことはなくても、電脳体が帰還できると考えている。

「すぐに取りかかる事ができるんですね？」

「新空間計画に関わっていたという例の警官から暗号の手ほどきさえ受ければ、2、3日以内には投入できます」

サッチー改造を執り行うのは研究開発部となる。その部長である平松は本部長の指示で既に準備にかかっていた。

「竹下さんからも、要請があればすぐにでも協力していただけるとの返事をいただいております」

一郎は昼間に行われた現場検証の時に直樹ともそのことについて相談していたのだ。

「なら、今からでもヤツをここに呼び出すんだ。ヤツも電脳犯罪対策係とかいうままごと部署の責任者として事件を探っているのかもしれんが、どうせ大した成果も上げられんだろう。それならこっちの手伝いをさせた方が、はるかにヤツにとっても罪滅ぼしになるというものだ」

本部長の無神経な発言には一郎もよほど言い返したくなったが、ここで彼と言い合う気力はなかった。直樹や久美子はそれこそ不眠不休で事件の調査を行っている。上層部の指示に従わなければいけない管理室よりも、彼らの方がはるかに自由で効率の良く調査をしているのも事実だ。事件のもみ消ししか頭にない人に現場の苦しみなどわかるはずもないと、一郎はため息をつくばかりだった。

「では、早急にかかってください。その間は2．0を総動員して何とか持ちこたえるように努力しましょう」

桝田はそう言ったが、やはり根本的な解決ができないことに行き詰まりを感じていた。そんな時にある社員が会議室に飛び込んできた。

「社長！お電話です！」

「どなたからですか？今は会議中で席をはずせないと返してくれませんか？」

こんな時に気の利かない社員だなと桝田は思った。今は自分宛の電話も山のように鳴っているはずだ。

「それが、金沢支社長から。急用があるのでどうしても取り次いで欲しいとのことです」

「なんだと！？」

立ち上がったのは管理室本部長だ。金沢のプロジェクトチーム側からのコンタクトは、大黒市で事故が起こってから初めてだった。

「……わかりました。こちらにつないでください」

「はい！」

するとその社員は電話番に連絡を取り、会議室につながせた。桝田も幹部達も、このタイミングで連絡をとってきた金沢支社長の真

意を測りながら固唾を飲む。
「もしもし？」
　桝田は報告に来た社員が持ち込んだワイヤレスの受話器を取った。向こう側の声は会議室全体に響くようになっている。
『私だ。お忙しい中申し訳ないが、少しばかり君に話があってな』
　金沢支社長は桝田の義父にあたる。役職の上では桝田の方が上にあたるが、電話など2人で話す時にはくだけた口調になる。もちろん、支社長も今自分の声が大勢に聞かれているのは承知しているが。
「話というのは何ですか？既にそちらにも伝わっているかもしれませんが、今こちらは大変なことになっているのです。これまで起こってしまった事故の数々、それは支社長にも責任があると思いますが」
　苛立ちを抑えられないように桝田は迫った。
『そう邪険にしないでくれたまえ。確かにここのところ立て続けに起こる事故は、私達金沢支社にも責任があるかもしれない』
「認めるのですか？それならこちらと情報を共有し、協力し合いながら事件解決を目指すべきなのではないですか？なぜ今までこちらの問いかけに一切応じなかったのですか？」
『私たちも事故の原因について調査をしていた。情報を公開しなかったのは、こちらもはっきりとした事実を掴んでもいないのに、曖昧な情報をそちらに提供するとかえって混乱を招くと考慮したからに過ぎん』
「……よくそれだけ見え透いた嘘をベラベラしゃべれるな」
　本部長が1人つぶやいた。
「ではこれからは情報を提供してくださるのですね？」
『そのつもりだ。もっとも、そちらが知りたいのは事故の原因などではなく、プロジェクトのことではないかね？』
「……それについても、ようやく真実を明かしてくださるというのですね？」
　金沢支社のプロジェクトについては、これまで本社にはデタラメ

の報告しかなされていなかった。桝田が支社に赴いて説明を求めた時も、それについてははぐらかされている。本社はプロジェクトの本当の目的を探り続けていたが、ここまでその成果は直樹の暴露以上のものは上がっていない。

『いいだろう。我々のプロジェクトを持ってすれば、一連の事故を一気に解決させることができる。きっとそちらの期待に沿えるはずだ』

「はじめから期待はしていません。しかし一連の事故を解決できるというのは一体どういうことなんですか？」

『それはプレゼンの時に詳しく説明するつもりだ。明日の午前１０時。そちらに出向く。それまでは気楽に構えておいてくれたまえ。では明日を楽しみにしているよ』

そうして支社長は一方的に電話を切った。会議室全体に不通音だけが鳴り響き、桝田は受話器を眺めるようにして通話を切った。

「どういう風の吹き回しだ。あれだけ情報を隠し通してきたヤツらから真実を明かすなんて」

本部長と同じことを、幹部達も皆思っていた。

「あちらにも何か動きがあったのでしょう。しかし気になるのは、彼らのプロジェクトによって事件を解決することができるという点ですが」

「金沢支社の自作自演じゃないですか？我々にプロジェクトを認めさせるために、壮大な芝居を打ったとか」

「そのためにここまでメガマスを追いつめたというのですか？とにかく、明日支社長の方から詳しく話を聞いてみないことには」

はじめは金沢支社のことを許すことはできないという気風が醸成されていた会議室も、この窮地にあってはわらにもすがるような思いで誰もそのことを叫ばなかった。自分たちにこの局面を打開できる自信がなかったのだ。

「念のため、先ほど話しましたサーチマトンの改造の方は至急かからせていただきます」

「ああ、そうですね。お願いします。それでは1度ここで解散とします。必要な方は各部署に戻って指揮をとってください。私も金沢支社の件についてOB方とも相談を持ちます」

桝田の一声で会議は一旦打ち止めとなった。管理室本部長や平松研究開発部部長は、サーチマトンの改造のために会議室を後にする。他の幹部達も席を立っていく中、一郎は桝田に呼ばれた。

「小此木さん。昨日おっしゃっていたコイルス社買収当時の社員名簿、入手しました」

一郎はファイルに挟まれた紙資料を手渡される。すぐにぱらぱらとめくって見ると、ある人物の名前に目が止まった。

「ありがとうございました。ところで、この蛍光ペンで線が引かれている人物は？」

「それはですね、我々が探している技師と思われる人物です。その方は交通事故に遭った桐野恵さんの元夫ですよね。桐野恵さんの両親はすでに亡くなられていまして、他には遠い親戚の方しかいなくて調査には時間がかかったのですが、どうやら桐野さんが結婚されていた時の姓はそこにある“細川”だったようです。コイルス社の社員名簿に“細川”という姓はその人しかいなかったので」

本社の情報機関もようやく詩織やサオリの旧姓に辿り着いた。通っていた学校さえもわからない状態だったので、それを導き出すのには時間がかかってしまった。

「細川亮成……これが犯人の本名ですね」

「肩書きはエンジニアで、猫目技師が主任となっているのに対し、この人は副主任となっています。まさに猫目技師の右腕ですよね。この人で間違いないと思います」

桝田は自信を持って言った。しかし、本名がわかったからといってすぐに犯人が割り出せるわけではない。犯人は偽名を使い経歴を詐称しているので、ここからたぐり寄せるのは困難だ。

「わかりました。この人が副主任なら、父ともなんらかの関わりがあったのかもしれません。もしかすると、母が何か覚えている可能

性もあります。家に帰った時にそれを確認します」
「それならお疲れでしょうから今から帰っていただいても構わないんですよ」
「そう言ってもいられません。今日の事故について詳しく報告書をまとめないといけないですし、被害者の様子を見に病院にも行くつもりです」
すべての仕事が片付くのは朝になりそうだった。最近はずっとこのような生活なのでほぼ慣れてしまっているが。
「あまりムリはしないでくださいね」
「お心遣い感謝いたします。それでは失礼します」
一郎はファイルを持って会議室を後にし、市役所の管理室に戻るつもりだった。その途中ふとエレベーターで犯人の“細川亮成”の項目を見ていた彼は、その人物の生年月日は自分よりも若いことに気がついた。この年で副主任を任されるだけあって、才能があるのだろうと一郎は思いを馳せる。同時に、そのような人物がこのような事件を起こしていることがなんとも悲しいなと思った。

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ１１

『なに現場検証の途中でいなくなってるんですか。探したんですよ』
「いやあ、オレの出る幕はねえかなって。イサコにその旨伝えておいたんだからいいでしょ？」
　すっかり日が沈んで事件の混乱も落ち着いた時間帯。大谷はとある市内のホテルの一室で玉子からの電話を受けていた。
『事件について大谷さんにも意見を聞こうと思っていたのですが』
「いや、コメントは特になし。原川君達が倒れた第一の事件と大して状況は変わらないと思いますよ。結局暗号も見つからなかったしね」
　結局あの後も暗号を探したものの、１つとして見つからなかった。ブラックホールはミチコが独力でこじ開けた可能性が高いと、それで結論づけたのだ。
『じゃあ、被害者の生徒達は』
「まあ、現時点ではどうしようもないわな。原川君の時みたく、入院中に帰って来ることを期待するしか」
　言葉とは裏腹に、大谷は再び調査に動き出していた。現場検証の途中でしれっとはけたのもそのためだった。
『そうですか……実はたった今室長から連絡があったのですが』
「うん」
『つい先ほど、金沢支社長から本社にコンタクトがあったそうです。明日午前１０時。金沢支社がプロジェクトのプレゼンテーションを行うと』
　その知らせのは大谷も驚いた。
「なんだと！このタイミングでか？」
『ええ。なんでも支社長の話では、そのプロジェクトを持ってすれば今回の事件も一気に解決まで持っていけると。本社の誰一人、その意味を理解した人はいなかったようですが』

「……わかった。君もその時には本社に行くつもりだろう？」
『もちろんです』
「オレもそこにもぐってやる。金沢支社のプロジェクトが如何ようなものか、果たして連中は一連の事件の真実を明らかにするのか。見物だな」
『……そうですね。では明日１０時に本社で』
そこで大谷は電話を切ると、同室にいた男の方を向いた。男は窓際の椅子に腰を下ろして、大黒市の夜景を眺めていた。
「お聞きになった通りです。プロジェクトチームがいよいよ動き出しました」
大谷の電話の音声をその男は拾っていた。それを見越して大谷は説明を省いた。
「……大谷君。このタイミングで来るとは、彼らがどのような状況にあると読むかね？」
男は背もたれに体を預けるようにして言った。大谷もテーブルを挟んだ向かいの椅子に腰掛ける。
「さあ。いい加減本社と協力して、犯人を包囲しようとしているとかじゃないんですか？」
「それもなくはないだろうな。でも私は、彼らの計画は万事順調に運んでいるのだと読むよ。その計画を本社に認めさせることこそが、彼らの狙いでもあるのだから。未完成の段階で、それを本社に売り込むとは思えないね」
それはそうだと大谷は頷く。気になるのはやはり、そのプロジェクトを持ってすれば、一連の事件を一気に解決に持って行けるという点である。大谷もプロジェクトの中身について考えているが、その言葉の意味を理解することはかなわなかった。
「なにかわかったんですか？今の電話で」
「……ああ。今までの君の報告と今の電話をふまえて、なんとなくプロジェクトの内容が見えてきた気がする」
男が思わせぶりに言うので、大谷は身を乗り出していた。

「教えてください。それは一体どのようなものですか?明日連中が真実を明かすとも限りません」
「ああ、あくまで私の推測の域を出ないがな」
そう前置きすると、男は大谷にこう訊ねた。
「君は、逆流理論という言葉を知っているか?」
「逆流理論?それって確か、イマーゴの」
大谷もその理論については聞いたことがあった。しかし、その理論自体は大谷とって忘却の彼方にあったもので、今起きていることと何の関係性があるのか疑問に思った。
「そうだ。イマーゴ発見当初にコイルスで行われた実験。頭の中のイメージを電脳空間上に反映することを出力とするなら、逆流理論はその名の通りイメージの逆流、入力と置き換えられる。かいつまんで言えば、洗脳が電脳的に行えるかもしれないという可能性の模索が行われていたのだよ。きれいごとを並べれば、それは医療目的という大義名分があったわけだけどね」
「それについては聞いています。しかし逆流理論は机上の空論に終わったはずです」
「そう。肉体の脳をコンピューターのように電脳的に書き換えられるなんて、科学者のとんだ妄想に過ぎなかったわけだ。実験では被験者が意識を失っただけで、失敗に終わった」
その話を聞いた大谷はふと思い当たることがあった。
「でも待ってください。原川君や桐野サオリさんは記憶を失いましたが、もしかするとそれと関係が?その実験で記憶を失った被験者はいたのですか?」
「いや、記憶を失うほどの脳への悪影響はなかった。もとより逆流理論は完全に可能性としては否定されたのだ。同じことが行われる可能性は低い。仮にその実験と同様のことが行われたのだと考えるとしても、原川君の場合はメガマス病院から1歩も出ていないだろう?設備もないのに実験を行うなど根本的に無理だ。病院からそのような設備が見つかったとも聞いていないしね」

確かにそうだったと大谷は浮かせていた腰をおろした。しかし真相に近づいてきているような気はする。問題は男の言う通り、ハラケンの場合は病院から一歩も外に出ていないということだ。大掛かりなことができるはずはない。

「じゃあ一体連中は原川君に何をしたのでしょうか？本社の監視をかいくぐって、彼の体に何か細工をするのには限界があります」

「それはわからないな。ただ私は話を聞いていて、支社のプロジェクトと逆流理論がどうしても無関係なようには思えなかったのだよ。逆流理論なら、彼の脳を外から操作することができる。つまり、彼自身の意識が電脳空間にあっても、通常空間で肉体を伴って生きることが可能なのだ。彼らが事件を解決に持っていけると言ったのは、そういうことなのだろう」

「つまり、支社のプロジェクトにとって、逆流理論を応用した技術こそが肝ということになるわけですね」

大谷はここで頭を整理することにした。直樹の話では、プロジェクトの当初の目的は永遠の命の実現にあったという。それ自体は、直樹の提唱した技術とコイルス社の封印された研究が合わさって生まれた新空間と、浸すだけで肉体から切り離された脳が永遠に活動できるという培養液が現代医療の進歩で開発されたことで、実現は可能となった。

しかし大谷はそのプロジェクトの欠点を見抜いた。培養液の中に保存された脳を維持するだけでも医療費がかかってしまう。その脳の持ち主の遺族や子孫が永遠にその維持費を払い続けることなど、よほどの富豪でないと不可能である。永遠の命もまた、直樹の理想に過ぎなかったのだ。

金沢支社がその欠点に気付かなかったはずがない。彼らは永遠の命計画から完全に他の計画へシフトしたのか、または永遠の命計画から派生した、新空間を利用した別の計画の実現を目論んでいるのか、そのどちらかだ。彼らがせっかく生み出した新空間を捨てて他の計画に移行するとも思えない。そういう意味では大谷は、後者の

可能性の方が高いと考える。
　そんなところで男の口から出た逆流理論。人間の脳を電脳的に書き換えるというその理論が使われた可能性は、ハラケンの記憶が失われたことを考えると高いように思える。しかし逆流理論そのものは机上の空論であり、実現の可能性はあり得ないと男は断言している。それなら、プロジェクトチームが開発したという技術は逆流理論に近しいものだが、技術的にはまったくの別のものであるというのが、話の流れから行き着く答えだった。
「プロジェクトの主任技術者は小野隆ということだな？」
　頭をこねくりまわしている最中の大谷に男は訊ねた。
「ええ。あの人元々はアプリコット社の関係者らしいですね」
「真の天才は彼だよ。彼はメガネに使われている電脳的技術のほぼすべてに精通していると言ってもいい。電脳科学の権威。その筋においては世界屈指の存在だ。彼の考えていることは、私にも理解が追いつかない」
　やけに褒めるんだなと大谷は思う。
「そんな。アナタにそこまで賞賛されることはないと思いますよ。どれほどの技術を生み出そうとも、それが正しい使われた方をするかどうかが問題なんですから」
「そうかね？」
　男は自嘲的に笑ってみせた。大谷も今のはちょっと微妙な言葉だったかもしれないと少し反省する。
「それに小野さんは小此木先生の系譜じゃないですか。あの人だって、小此木先生から吸収したものも多いはずです。結局すべては、コイルス社の研究に端を発しているんじゃないですか？」
「そうなるかもしれないが……そう言えば大谷君。小此木先生のお宅にはお邪魔したのかね？」
　男は何かを思い付いたかのうように訊ねた。
「いえ。近くまでは行っていますが。それが？」
「今の新空間の原型となった空間。かつてのコイルドメインとも性

質を異にした空間が、コイルス社買収の直前まで研究されていたことは話したね？」

「ええ。ただそれはメガマスの買収にあたって、コイルドメインの奥深くに資料が封印されたんですよね？それをプロジェクトチームの幹部が掘り出して、竹下直樹の論文も参照されて今の新空間があると」

「ああ。その最末期の研究にも小此木医師は携わっていた。しかも彼はそれを、契約していたメガマスにも報告はしていなかった」

「そりゃあそうでしょうね。小此木先生が報告していたなら、プロジェクトチームの人間が必死でコイルドメインから資料を引っ張り出す必要もない」

そこで大谷は男の言いたいことがわかった気がした。

「その資料が今も小此木宅にあると？しかしそれを今更手に入れたとしても、あまり役に立たないんじゃないですか？書いてあるのは新空間に関する技術についてで、先ほどの逆流理論は」

「いや。実はメガマスによるコイルスの買収と、小此木医師の逝去の間には3ヶ月ほどの空白がある。その間あの人はイマーゴによる天沢勇子の治療を行っていた。しかし、イマーゴによる治療に限界を感じていた彼は、同時に今の新空間の原型となった空間の研究も平行しておこなっていたという話をちらりと耳にしたことがある。それはもちろん、メガマスに報告はされなかったとのだろう。旧コイルス社の実験施設で、イマーゴの実験という名目で本社を欺いていたに違いない」

「……なるほど。小此木先生が決死の覚悟で天沢勇子助けに行く直前、その研究資料は先生のプライベートエリアのどこかに封印された可能性があると。最も可能性が高いのは、小此木宅」

もしそのような資料が存在しているとしたら、まだそこに残されている可能性は高い。夏の事件で宏文の資料はあらかたフォーマットされてしまったという話を大谷は一郎から聞いていたが、それはコイルスの古い空間にあったものだ。新空間の原型となった空間は

まったく別のもので、それはまだ呼び起こせば起動する可能性がある。
「このパスワードが役に立つかもしれない」
「これは？」
男は胸元から取り出した手帳にアルファベットの羅列をメモし、大谷に渡した。
「かなり以前に人づてで聞いたものだ。小此木医師の死後の話だが、どうやら彼と関係のあるパスワードのようでね。念のため持っていくといい」
「わかりました。しかし問題は、コイルスの研究からたった3ヶ月しか時間が経っていないということです。いくら小此木先生とはいえ、極秘裏に進めていた研究ですし、進展があったかどうかは微妙じゃないですか？我々が掴んでいない情報が手に入る可能性は」
「もちろん君の言う通りだ。しかし可能性としては捨てたものじゃない。小野隆は小此木医師の後輩にあたるそうじゃないか。小此木医師が資料を封印する直前、それを小野に託したという可能性もある。もしかすると、小野隆がプロジェクトの中で生み出した技術の着想は、小此木医師の研究がヒントになっているかもしれない」
「そんな都合良く残ってくれてますでしょうか」
「それを確かめること自体は大した労力じゃないだろう？明日、本社に出向く前に調べに行ってくれないか？」
本社にプロジェクトチームの人間が出向くのは明日の午前１０時。それまでに軽く調べに行くぐらいなら構わない。あまり期待を持たずに行こうと大谷は思った。
「わかりました。明日行ってみます」
「頼んだよ」
大谷は立ち上がり男に頭を下げると、部屋を後にして自分の泊まるホテルに車を走らせた。

#２３　現実と虚構のはざまで　Ｐａｒｔ１２（前書き）

５月３日（月）

#２３　現実と虚構のはざまで　ｐａｒｔ１２

午前８時半。ヤサコの家には大人数が集まっていた。リビングにいるのはヤサコ、フミエ、アイコ、ダイチ、そしてハラケン。彼らは失われたハラケンの記憶を呼び起こすために、思い出の品々を持ち寄って彼に見せているところだった。昨日の事故により、外でメガネを使うのは危険だと一郎から言いつけられたヤサコ達は、どんな小さなことであれ事件の解決に寄与することはできないかと考えた結果、こうすることを選んだのだ。昨日事件が発生しなければ、メガシ屋で同じことをするつもりだったというのもある。

「ねえ。この写真、見せても大丈夫かな？」

メガネの中に保存されたアルバムをウインドウにだしてめくっていたフミエが、隣のソファーに座るダイチに小声で訊ねた。

「カンナ、か」

ダイチはそれを見せられて少し渋い表情を作った。フミエが示した写真は、生物部で活動していた頃に部員で撮ったものだ。撮ったのは５年生の時の春なので、カンナの死の４ヶ月ほど前ということになる。あんな悲しい事件が起こるとは知る由もない部員達、ハラケン、カンナ、フミエ、ダイチ、ガチャギリ、ナメッチ、デンパ、そして先輩達とマイコ先生は、画像の中で一様に無邪気だった。

「そんな写真、あったんだ」

横からアイコが顔をのぞかせる。元々シャイなハラケンの精一杯の笑顔と、カンナの自然で上品な笑顔が並ぶその写真に、今更ながら心が痛んでしまう。

その時ハラケンと話していたヤサコに、アイコはそっと耳打ちしてその写真のことを伝えた。ヤサコもまたうつむき加減になり、その写真は見せない方がいいかもしれないと、フミエ達にかぶりを振って返した。

「やっぱやめといた方がいいかもな」

ダイチはヤサコの表情を見てフミエに言った。
「そうね。ハラケンがカンナを忘れるなんて信じられないけど」
「正直、他のどんな写真を見せるより、その写真を見せる方が記憶が蘇る可能性はあるだろうな。でも、聞きたくねえよ。アイツの口から、『この子は誰?』なんて」
ダイチはその時のヤサコの気持ちを代弁していた。ヤサコがかぶりを振った一番の理由はそれだ。
ハラケンにとってもカンナの交通事故はイヤな記憶のはずである。それをきっかけに記憶を呼び覚まそうなんて、ショック療法のような手段は取りたくないのが偽らざる気持ちではあるが、しかしハラケンの記憶が戻るというのなら、そのやり方も考えただろう。彼はカンナの事故のショックを乗り越えるため、それと向き合っていたからだ。
しかし、その写真をハラケンに見せないのは他ならぬカンナのためだ。カンナはもう、ハラケンの記憶の中でしか生きられない。誰よりも彼女のことを思っていたのはハラケンだ。そのハラケンがカンナのことを忘れれば、彼女はどれほど悲しい気持ちになるだろう。それを思い、ヤサコはカンナのことを口にするのが億劫になった。仮に今のハラケンにカンナの記憶がなかったとしても、それを彼が口に出すまではまだ自分たちは信じていられる。彼の中でカンナがまだ生きていることを。
「ほれ。こういう写真を見せたらいいんじゃねえか?」
ダイチはフミエのアルバムの中から一枚を選んで、ハラケンにウインドウを渡した。

一方、電脳工房にはイサコ、シュウイチ、玉子、メガばあの4人がいた。昨日の事件についての相談と、本社で10時から行われるという金沢支社のプロジェクトのプレゼンについて、意見を交わすためだ。
「限界じゃろう。メガマスはもう終わりじゃな」

メガばあは大きくため息をつく。昨日の事件は玉子から電話で聞いていたし、ニュースでも大々的に報道されていた。メガネの不具合の公表直後の事故の数々。メガネの信用が問われるレベルではなくなってきているというのが、キャスター達の言葉だった。

「ええ。でも、終わる前にやらなくちゃいけないことがある。新空間にいる人、すべてを通常空間に連れ戻すこと」

「しかしそれも八方塞がりではないか？研一が戻って来たのも何かの偶然じゃったのかもしれん。これまで、新空間から誰かを連れ戻すことができたというのはないじゃろう」

「唯一の希望は、新空間を生み出した金沢支社のプロジェクトの内容だけだ。昨日支社長はこう言ったそうじゃないか。『そのプロジェクトを持ってすれば、事件を一気に解決に持っていける』って」

イサコは確認するように玉子に訊ねた。

「そればかりをアテにするわけにいかないわ。金沢支社は、これまで何度なく本社を欺いてきたんだから」

「でもなんで今頃？これまで隠してきたのに、このタイミングでそれを明かすなんて」

不思議そうにシュウイチがつぶやく。金沢支社のプロジェクトについては、イサコとシュウイチが金沢にいた時から調べていることだ。

「おそらくプロジェクトが形になったから、だと思う。事件を一気に解決できるってことは、少なくとも被害者達を通常空間に連れ戻すことができるということになるはずだ。ケンちゃんの帰還も、もしかするとプロジェクトチームの何かの細工があったのかもしれない」

「新空間を設計したのはそのプロジェクトチームなら、連れ去られた電脳体を戻すこともそれほど難しいことではないんじゃないかえ？」

「いや。そう単純じゃないはずだ。新空間を支配しているのはミチコだ。そのミチコはプロジェクトチームを裏切った技師が操ってい

て、おそらく彼らにも手出しはできないんだろう」
　その3勢力が存在していることが事態をややこしくしている。本社と金沢支社は相容れない関係にあり、また金沢支社を裏切った技師は、メガマス自体に恨みを持っているのだからその両方と敵対している。今回の金沢支社の動きは、本社に歩み寄って同盟し、協力しあって技師の動きを封じようという狙いがあるはずだとイサコや玉子は考えていた。
「その技師の身柄さえ押さえれば、まだ道は切り開くことができる。たとえ彼の復讐の心がミチコに託されているのだとしても、彼の目的さえわかれば手段は講じられる。彼を説得して、こんな馬鹿げたことをやめさせればいいわけだからな」
「室長？」
　その時電脳工房に一郎が現れた。昨晩から徹夜で管理室に詰めていた彼は、ようやく昨日の事件に関する情報の整理を終えて朝帰りしたのだ。
「プロジェクトチームはその技師が誰なのかは知っているんですよね？彼らも事件の収束を考えているのなら、なぜ今まで技師を放っておいたのですか？」
　イサコが訊ねる。技師は本社の関係者であり、プロジェクトチーム側の人間なら彼が裏切ったことを知っているはずである。つまりプロジェクトチームがその気になれば、裏切り者の技師はいつでもその身柄を押さえることができたはずなのだ。
「その答えは簡単だ。プロジェクトチームにとって、新空間は切り札。ミチコを操る技師の身を押さえれば、当然技師は新空間をそのままにしておかないだろう。おそらく、ミチコを使って崩壊させるはずだ。プロジェクトチームはそれを恐れたんだろう」
「大谷さん！どうしてここに？それに室長と一緒なんですか？」
　呼んでないのに彼がこの家に来たということは、何らかの目的があるのだろうと玉子は思いながら訊いた。彼とは今日は本社で落ち合うことになっていたのだ。

「今朝彼から連絡を受けたんだ。少しばかりこの家を調べさせてほしいって。僕もおふくろに確認したいことがあったから、彼の車で戻って来た」

「この家を？何者なんじゃ、お主？」

メガシ屋の主であるメガばあが不思議そうに大谷を見やった。大谷のことは玉子達から聞いていたが、顔を合わせるのはこれが初めてだ。

「ある人の依頼で事件について調べている、探偵ってところかな」

「どうしたんだ？今までそんな風に自分のことを名乗っていなかっただろう？」

大谷が興味本位ではなく何かの目的があって事件を調べているのは、イサコ達はすでに本人からも聞いていた。その目的については聞かない約束だったが、彼の言う通り探偵であるはずがない。いや、しかし今までの素振りからすると、それが一番近いのかもしれないとイサコは考え直した。

「んで？その探偵がこの家に何の用じゃ？」

「ここに一連の事件の謎を解くヒントがあるんじゃないかと思ってね。小此木宏文医師の自宅である、このおかしなたたずまいの屋敷に」

次の彼の言葉はイサコや玉子からすると思わぬものだった。

「どういうことなんですか？アナタの言う通り、ここは小此木先生の家ですが、何が残っているって言うんです？事件の謎を解くヒントなんてここにあるはずがありません。そもそも、新空間は小此木先生とはまったく関係のないものですし」

「関係なくはない。アンタは聞いてなかったか？小此木先生は、最後にコイルドメインとはまた別の、今の新空間の原型となる空間の研究を行っていたことを」

それは玉子達も直樹の口から聞いていることだった。しかし、所詮はその原型なのであって、直樹の話以上の手がかりは得られないと思っていた。

「それは聞いていますが、その資料がここにある可能性は低いですし、そもそもそれが大きな手がかりになるとは思えません」
「いや。資料自体は残されている可能性がある。去年の事件でフォーマットされたのは、あくまでコイルドメインに残されていた資料だ。新空間の原型なら、この家の中にもまだ残っているかもしれないからな。その資料が使えるかどうかは、見つけてから考えればいいことだ」
「やけに乗せられておるではないか」
メガばあが少し冷めたように一郎に言った。それはこの家のことは自分が一番わかっているという風にも聞こえた。まだ怪しいものがあれば、とっくに自分が気付いているはずだと言いたいのだろう。
「彼の話は、信憑性がある」
「何を根拠に？その見るからに怪しい若者の話を鵜呑みにするとは、お前も随分と切羽詰まっておるな」
メガばあがそう言うので、一郎は後ろにいた大谷の方を振り返って小さく訊ねた。
「おふくろには言ってもいいですか？」
「……まあ、小此木先生の奥さんだし、構いませんよ」
イサコにはその会話が聞こえた。もしかすると大谷は、一郎には自分の秘密とやらを暴露したのかもしれないとイサコは思った。一郎の真剣な目つきが、それを物語っている。
「なんじゃと？それは本当なのか？」
一郎がその内容を耳打ちすると、メガばあは驚いたように目を見開いた。
「これがその証拠だ」
続いて大谷がメガばあの目の前にウインドウを出して見せた。メガばあは食い入るようにそれを眺め、そして納得したように頷いた。
「確かに嘘ではないようじゃの。しかし今更どういうつもりなんじゃ？事件を調べて、お主らに何の意味がある？」
「……過ちを繰り返させないための抵抗だ。そう言えばわかるだろ

う？」
　大谷はじっとメガばあの目を見据えて言った。
「……わかった。好きにするがええ。それを過ちとするなら、ワシらにも責任があるからの」
「ありがとよ。バアさん」
　メガばあは大谷の頼みを了解した。一郎も頷いているが、玉子やイサコ、シュウイチには何を話し込んでいるのかさっぱりわからなかった。
「私たちには、アナタの依頼者について打ち明けてくれないんですか？」
　玉子が訊ねた。
「すまんな。オレの依頼者は名前を出されるのを嫌っているんだ。小此木さん達にそれを明かしたのも理由がある。まあ、いずれわかることさ」
　大谷がそれで納得してくれという風に返した。続いて、今度は一郎がメガばあに切り出した。
「もう1つあるんだおふくろ。おふくろは親父がコイルス社の研究に参加していたことについては聞かされていたんだよな？」
「それを聞かされたのはメガマスによるコイルス買収後じゃ。オジジは仕事に厳しい人じゃったから、ワシにも自分の仕事の内容は明かさなんだ。しかし、メガマスによる買収があまりに強引なやり方じゃったことに腹を立て、同時にそれに加担した自分への嫌悪からすべて話してくれたんじゃよ。果たして自分は正しいことをしたのか、とな。その3ヶ月後じゃ。イサコを助けるために電脳体分離を起こして帰らぬ人となったのは」
　それでは望みは薄いかと思いつつ、一郎は話を続けることにした。
「実は、今回の事件の首謀者はコイルスの技師である可能性が高いんだ。主任である猫目技師の右腕と呼ばれた技師、名前は細川亮成」
「細川亮成？はて、聞いた事のあるようなないような」
　メガばあの反応は意外なことに手応えがあった。メガばあがコイ

ルス社の研究について聞かされたのがメガマス買収後なら、その時はコイルスの研究チームも散り散りになっているはずである。メガばあと細川が面識があるとは思えない。
「どこで聞いたんだ？思い出してくれ」
「簡単に言ってくれるな。ただでさえ年寄りの曖昧な記憶の上、ワシは一度すべてを忘れておるんじゃぞ」
「頼む！」
一郎に迫られてメガばあも必死にそれを思い出そうとした。宏文の亡くなった7年前の出来事を頭の片隅から引っぱりだし、心当たりがないか思案する。そして、宏文の最後の言葉に思い当たるものがあることを思い出した。
「そうじゃ！オジジが電脳体分離を起こす間際、それはもうほとんど遺言のような言葉と写真を残したんじゃが、そこにヒントがあるかもしれん」
「写真だって？その時のことを詳しく話してくれないか？」
「ああ。あの時、自分は死地に赴くとオジジは言い出したんじゃ。イサコの治療の経緯は、なんとなくじゃがワシにも話しておったんじゃが、それが急に不具合を起こして、彼女を助けにいかなければならないことになった。ワシは覚悟を決めたオジジを止めることはできんかった。代わりにオジジはワシに1枚の写真を託した。もし自分の死後、この写真に映っている人物がこの家を訪ねて来たら、自分の書斎に通してほしいと。自分の研究を受け継いでくれる人がいるとしたら、彼らかあるいはもう1人」
「彼らかもう1人？親父がメガマスに不信感を持っていたっていう話を踏まえると、自分の研究を託せる“彼ら”っていうのはおそらく、コイルスの研究チームのことだろうけど、そのもう1人っていうのは？」
「小野隆じゃ」
「……なるほど。そこでつながるわけか」
大谷は納得したような顔つきになる。小野は宏文の後輩で、当時

から既に電脳科学者としては名の通った存在だった。
「その小野先生が、今は金沢支社のプロジェクトチームの一員として研究を行っている……小野先生は親父の死後にここを訪れたのか？」
「いんや。誰一人、オジジの言うような人は来なかった。ワシの記憶が曖昧なのかもしれんが、それならきちんと覚えているはずじゃて」
「なら、親父がおふくろに託した写真を見せてくれないか？その写真の中に、細川が映っている可能性がある」
「どこにしまったかの。おジジの遺品の中にしまってあるはずじゃが、ワシはこの通り腰が悪いからの」
自分では探せないとメガ婆は一郎の方を見た。
「小此木さん。今の話からすると、小此木先生の書斎が怪しいですね。案内してくれますか？」
「ええ、そうですね。時間もありませんし。写真探しは、子ども達に手伝ってもらいましょうか」
「じゃあ、僕がリビングにいる優子ちゃん達を呼んできます」
シュウイチはそう言うと、人手を集めるためにリビングに向かった。
「すまないな。じゃあ、僕達は書斎へ」
「行ってみましょう」
一郎、大谷、玉子、イサコは宏文の書斎へ向かうために奥の階段をのぼった。電脳工房ではヤサコ、フミエ、ダイチ、アイコ、ハラケン、シュウイチがメガばあの指示で写真探しを始める。
一郎は宏文の書斎に入り、まずは灯りをつけた。淡い黄色で照らし出された室内は、今も宏文の残したカルテや医療関係の本が積み上げられている。夏の事件でのフォーマットで室内の古い空間が消されてしまってからは、ほとんど出入りしていなかった。
「この部屋のどこかに資料、あるいは異空間がまだ眠っているって

ことですね。まさか紙資料ということはないと思いますが」
「それならおふくろが気付いているはずです。しかし、どこが異空間につながっているのかなど闇雲に探せないですね」
「念のため、もう1度コイルドメインにアクセスしてみましょうか？2．0にフォーマットされたとはいえ、まだあの時の断片は残っているかもしれません」
「ああ、頼む」
一郎はイサコの提案を聞き入れた。夏の事件でこの室内の古い空間を見つけたのは、イサコがアクセスパスワードを知っていたからだ。あれはおそらく、宏文と共同研究していたコイルスの技師からコイルスの社員へ、そのコイルスの社員がメガマス内で旧コイルス一派を形成して宗助へ、そして宗助からイサコに流れ着いたものだろうと一郎は想像している。
「出ました」
イサコの言葉と同時に、2．0の攻撃で使い物にならなくなったコイルスのデバイスが室内に現れた。
「なるほど、これがコイルスの。しかしここにあるものは関係ないわけですね」
「ええ。この空間に残っていた資料には、コイルス社のイマーゴのことしか書いてありませんでした。父が託そうとしたのは、イマーゴの研究ではなかったはずです。それなら、死の直前にわざわざおふくろにコイルスの研究員の写真を残したりしなかったはずですから。おそらく、違うアクセスパスワードが必要ではないかと」
「アクセスパスワード……」
一郎の言葉を聞いてイサコは考え込むが、さすがにそれは宗助からも聞いた覚えはなかった。宗助も新空間の原型の研究については知らなかったのだろう。
「イサコ。ちょっともう1度パスワード認証画面に戻ってくれないか？」
「ああ。それはいいけど」

イサコはウインドウを元に戻して認証画面に切り替え、大谷に手渡した。彼が何か知っていそうだと、イサコも感じ取ったのだ。

「このパスワードならどうだ……通った！」

大谷がメモを取り出してそこに書かれてあったパスワードを打ち込むと同時に、コイルスのデバイスは消え失せた。代わりに金庫のような形をしたデバイスが１つ、部屋の中心に現れる。

「これは？アナタ今何をしたんですか？」

玉子が不思議がって訊ねる。

「……まさかな。ここはさっき言ってた、新空間の原型となった空間に切り替わってる。プロパティを調べればわかるさ。通常空間でも、コイルドメインでもない。かと言って新空間のように、電脳体が分離していないと入れない空間というわけでもなさそうだ。残る可能性は、小此木先生が研究していたというその空間だけだろ」

「本当だ。でもなんでアンタがその空間へのアクセスパスワードを？私も宗助からこんな空間があるとは聞いていなかった」

「パスワードを知っていたのは、調査の賜物だよ」

イサコが訊ねても大谷はそのようにはぐらかすだけだった。一方で一郎は半分事情がわかったような顔をしていた。

「なら、この金庫の中に親父の最後の研究資料が？しかし妙ですね。この金庫、鍵がかかってない」

一郎は小さな本棚ほどの金庫の扉をゆっくりと開いていく。

「今のアクセスパスワードが金庫の鍵に？……いや、それならそもそも金庫型のデバイスに資料を保管しなくてもいいですね。ということは……」

大谷はある可能性を頭に浮かべていた。それも金庫の中身を見ればわかることと、思考を中断して一郎とともに覗き込む。しかしそこには、金庫のサイズの割に資料の類はほとんど残されていなかった。１冊だけ、古いノートのような電脳物質がぽつねんと置かれているだけだ。

「『研究日誌２０２１』？資料ではなさそうですね」

一郎はそのノートを手に取ってウインドウ上にページを開いた。びっしりと文字で埋められたそれは、どうやら宏文の研究の日記のようなものらしい。

「２０２１年と言えば、メガマスによるコイルス買収があって、小此木先生が亡くなった年ですよね？その日誌なら、先生の最後の研究について触れられているんじゃないですか？」

「ああ、そのようだ。僕もこれは初めて見る。しかし、なぜこれしか残ってないんだ。日誌があるなら、当然それに付随する資料が保管されているはず……」

ぱらぱらとメージをめくっていた一郎は首を傾げた。金庫に鍵がかかっていなかったことを考えると、封印後に誰かがこれを開けたとしか考えられない。しかしメガばあの話では、宏文の資料目当てにここに来た客はいなかったという。

「だいたい読めましたよ、小此木さん。なぜ金庫の鍵が開いていたのか。その資料を持っていったのは誰か」

「本当ですか？」

そんなところで大谷はある一つの答えを導き出したようだった。

一郎、イサコ、玉子が一斉に彼の方を向く。

「オレの推理を手短に説明します。この金庫を開けて資料を持ち去ったのはおそらく、金沢支社のプロジェクトチームを組織した人間です」

「彼らが？しかし、おふくろはそんなことは一切触れていませんでした。そもそもいつ頃の話だと考えられているんですか？」

大谷の推理通りだとしたら、それは金沢支社長か神崎となる。しかしこの家にそれらしい人物（仮に彼らが部下を派遣したのだとしても）が来て、この金庫を開いたとは到底思えなかった。

「去年の夏。コイルドメインの暴走の時に」

その言葉でイサコ、玉子は廃ビルでの、一郎は、取り調べにおいての直樹の言葉を思い出した。

「……確かに、プロジェクトチームはそのどさくさに紛れてコイル

ドメインから研究資料を引き揚げ、それがプロジェクトの土台となったといいますね……てっきり僕はコイルドメインにその資料が封印されていたものだと思っていました。でも、まさかこの部屋がハッキングに遭っていたとは」

「おそらく、小此木先生はコイルドメインの最深部にこの新空間の原型空間を埋め込んだ。その最深部こそがこの部屋の空間だったんですよ。今調べてみたんですが、オレがパスワード1つで現出させたように見えるこの空間も、コイルドメインからしか接続ができないようです。パスワードは最深部へのショートカットの役割を果たしたようです」

「つまり、私のパスワードでコイルドメインが現出していたから、アンタのパスワードでもう1つ奥にあったこの空間が現れたってことか。パスワードは2つ必要だったわけだな」

イサコも納得したように言った。その通りだと大谷は頷く。

「正確に言えば金庫の番号も含めて3つのパスが必要だったことになる。それだけ厳重に小此木先生は資料を封印したんだ。おそらく、その3つのパスは誰かに託されたんだろうが、金沢支社はそれを知り得なかった。ところが幸運にも、連中はあの夏の事件の時にコイルドメインの深部からこの原型空間への侵入に成功した、そこでこの金庫を見つけた。金庫の番号はおそらく連中がハッキングで破ったんでしょう。金庫のダイヤルの履歴を見るに、結構多くの数字が試されています。番号を知っていた人間の犯行ではありません」

「小此木先生の資料が手に入って大収穫。かくして彼らのプロジェクトが正式に立ち上がったということですね」

玉子が確認するように訊ねると、大谷も頷いた。

「資料が残ってない以上、連中のプロジェクトの詳細もわかりません。しかし我々には幸いなことに先生の研究日誌が残されている。ここにその手がかりがあるかもしれません。小此木さん、それ読ませていただいてもいいですか？」

「ええ、構いませんよ」

「じゃあ、私たちにも見させてください」
一郎のメガネと管理共有して、大谷、玉子、イサコは食い入るように日誌に目を通し始めた。特に興味深かったのは、メガマスによるコイルスの買収から宏文が1人で研究を始めるところ、宏文が事故に遭ったイサコの治療を開始したこと、そして、宏文が死を覚悟してイサコを助けに行く直前の部分だった。そこには、宏文の偽らざる気持ちがつまびらかに記されてあった。
「おじさん！写真、見つかりました！」
その時、1階からシュウイチが階段を駆け上がってきた。
「おお！ありがとう、これかな？」
一郎は日誌を読むのをやめて、すぐにシュウイチから写真を受け取った。宏文の日誌も重要だが、事件の首謀者である細川についても考えなければならない。
「さっき思い出したみたいなんですが、おばあちゃんはおじいちゃんからその写真でコイルスの研究チームを紹介されたそうで、その時に名前も聞いたそうです。その記憶によると細川さんというのは、この方だそうです」
シュウイチは写真の右端に映る人物を指差した。玉子や大谷も一緒にその写真を覗き込んだ。
「えっ？この人ってまさか？」
「ああ、なんか僕も見ましたよこの人。ちょっと顔の印象が違うのは多少整形しているからなんでしょうが、間違いない」
それは玉子にも大谷にも見覚えのある人物。そして、一郎にとっては。
「……なんてことだ。なんでこんな簡単なこと、今まで見落としていたんだ」
自分の鈍感さに腹が立ち、写真を持つ一郎の手は震えていた。
「すぐに本社に向かう！君たちも後で……」
「待ってください！」
一郎を呼び止めたのはイサコだった。イサコは写真のことで騒が

しい中、何かに取り憑かれたように宏文の日誌を読んでいた。そして、あるところで突然体に電気が走ったような衝撃を覚えたのだ。その瞬間、イサコの中で何もかもが1本の線でつながった。数々の不自然な出来事に説明をつけることができる、唯一の真実をイサコは見つけたのだ。

「どうしたんだ天沢くん?」

「わかったんです。この日誌を読んで、金沢支社のプロジェクトチームの本当の目的が」

「なんだと!?この日誌を読んだだけでか?天才か君は?」

大谷が驚いているように、日誌にはあまり今回の事件に関する直接的な手がかりとなる記述は見当たらなかった。

「そうじゃない。これまでの出来事が偶然に呼び起こされ、この日誌を見て突然ひらめいたに過ぎない。ただ、話としては簡単に信じられるような話ではないと思う。とりあえずアイツに確認しよう」

するとイサコは書斎を出て階段を駆け下りた。急いでそこにいた全員が後を追う。

「イサコどういうことだ?誰に何を確認する!?」

イサコのすぐ後ろから玉子が訊ねる。

「原川だ!アイツが一番の鍵を握っている!」

「ケンちゃん!?記憶を失ってるのに、なにを聞くというんだ?」

「記憶を失った原因をはっきりさせるのさ」

「はあ?どういうこと?」

イサコは階段を駆け下りると、電脳工房に向かった。そこには例の写真を探すべく狩り出されたヤサコ、フミエ、ダイチ、アイコ、ハラケンが、引っぱり出した荷物を元の場所に戻す作業をしていた。部屋の真ん中にはメガばあがいる。

「どうしたのイサコ?えらく血相変えて。写真役に立った?」

フミエの言葉に反応せず、イサコはまっすぐにハラケンの元に歩み寄った。

「なに?」

ハラケンはイサコに睨みつけられて、少し引きつった表情で彼女を見る。
「なあ、アンタには正直に答えてほしい」
「もちろん、覚えていることなら何でも答えるけど」
するとイサコは、周りで何事かと見守るヤサコ達に1度目をやった。
「アンタらもよく聞いていてくれ」
「なんだよ?もったいぶるなよイサコ」
ダイチが急かすのでイサコは、一つ息を大きく吐いてからハラケンの目を見据えてこう訊ねた。
「原川研一。アンタまさか、人工知能ＡＩか?」

#２３　現実と虚構のはざまで　Ｐａｒｔ１２（後書き）

第２３話はここで終わりです。
いよいよ物語も佳境。次の第２４話もお楽しみに。

#24　プロジェクト"SPRING"　part0（前

『研究日誌2021』

#24　プロジェクト"SPRING"　part0

7月16日

猫目君との連絡が取れなくなってしまってから3日が経った。

後悔してもどうしようもないことだが、彼には本当に申し訳ないことをしてしまった。私もあの時はメガマス側の話を鵜呑みにしてしまったが、こうなることは容易に想像できたはずだ。なのに、なぜあの時の私はよく考えもせず契約書にサインしてしまったのだろうか。自分は浅はかだった。

ただ、今にして思うと、あの時に自分が描いていた理想は概ね実現できているのだ。メガマスの紹介がなければ私とコイルスが接触する機会も得られなかっただろう。運命は皮肉だ。結局、自分が正しい事をしたと思えないのが虚しい。今日はバアさんにもその事で散々に愚痴をぶちまけてしまった。今になってそんなことを暴露して、バアさんも戸惑っただろうに。

メガマスに聞いたところによると、コイルスの技師でメガマスに移る者はほとんどいないらしい。これはどう捉えるべきか。悪い言い方をしてしまえば、彼らを飼い殺しにした方がメガマスとしても口封じの手段としては最も簡単で手取り早い。それをするなら、メガマスが真っ先に確保すべきは猫目君ということになるだろう。

猫目君が何度かメガマスとの交渉の席についていたことは私も知っていた。今から2ヶ月ほど前の話になるだろうか。他の技師達にメガマスが接触したのが1ヶ月前の話だから、メガマスの真意は推測した通りで間違いない。しかし、猫目君はメガマスへの移籍を拒み続けた。猫目君なりにその理由はあったのかもしれないが、私が想像しうる限り少なくとも2つ思い浮かぶ。

第一はメガマスへの不信感。メガマスがコイルスの技術を手に入れたということは、当然その技術を内部から流出した者がいるということになる。他ならぬ私のことだが、彼はその卑劣な手段に対する怒りの矛先を、私にではなく私の雇い主に向けたのだ。

実際、私はメガマスからその話を持ちかけられた時に、それを拒否できる立場ではなかった。長らく勤めてきた大黒市立病院には、同市に本社を構えるメガマスからも資金提供が行われている。近い将来、この病院が完全にメガマスのものになるのは間違いないだろう。私にはこの病院の充実した環境の中で仕事をさせてもらえた恩があったし、私の息子もまた、メガマス社員でもある（もちろんそれは息子の努力が実った結果ではあるが）。それに、コイルスの新技術に大いに興味を惹かれたのも事実だ。

猫目君は、もしかしたらかなり早い時期に私の正体を見破っていたのかもしれない。それでも彼が私をコイルスの研究チームにいさせてくれたのは、自惚れながら電脳医療技術の確立には私の力が必要だったからだと思う。何より、私たちは理想を一つにした親友でもあった。そんな彼にこんな結末を味合わせてしまった自分が、身を引き裂きたいほどに腹立たしい。

彼がメガマスへの移籍を蹴った第二の理由は、メガマスの商業主義的姿勢への嫌悪だろう。メガマスの体質を嫌ったという意味では、第一の理由とさして変わらないかもしれない。資本主義経済においてこのような言葉を使うのはナンセンスかもしれないが、しかしあえてそう表現しておこう。メガマスは私たちの研究を、医療目的ではなく娯楽目的で応用しようとしていたのだから。

コイルドメインのような異空間は、言い換えれば第二世界ということになる。その意味ではイマーゴを使ったあの空間は、幻であれ己の欲するものがすべて手に入る天国だ。私たちはその使用をあくまで医療目的に制限しようと考えていた。そんな世界に入り浸っていると、単純に人間が荒廃していくだけだと考えたからだ。

しかしこのような倫理を持ち出す自分たちは、彼らから見ると変人に映るらしい。それは、将来の資源の枯渇を憂いて、せっかく掘り当てた油田を元通りに埋め直すようなものだと、メガマスの誰かから言われたことがある。そんな下手な例よりも、今直面している問題のほうが未来の人間の真っ暗な行く末がはっきり見える気がするのだが。

とにかく、猫目君にとってはそれが気に入らなかったのだろう。彼はメガマスへの移籍をきっぱりと拒んだ。そして3日前から連絡がつかなくなってしまったというわけだ。

他のコイルスの技師達がメガマスへの移籍を拒んでいる理由も察しがつく。彼らのリーダーたる猫目君を差し置いて、自分だけメガマスに尻尾を振ることはできないというところだろう。それほど猫目君は魅力的な人間であり、人格者だった。彼の失踪にメガマスが絡んでいないはずはないが、それはもしかすると見せしめだったのかもしれない。もしそうだとしたら、それは逆効果になるだけだ。彼らは、メガマスが猫目君に対して行った仕打ちを許すはずがない。明日も、彼らのうち何人が姿を消すだろうか。

ただ、それも他人事ではない。私は猫目君以上にメガマスの内情を知り尽くしている。私が彼らに歯向かうなら、猫目君と同じ運命を辿ることになるだろう。それを猫目君は喜ぶだろうか。未だ完成したとは言えない電脳医療の研究を放り投げることを、良しとはしないだろうな。だからと言って、メガマスの言いなりになることも考えてはいない。しばらくはメガマスが編成したエンジニアチームの手も借りずに、1人で研究を続けていきたいところだ。とりあえずその手段を考えることにしよう。

近いうちに、メガマスによるコイルス社買収が正式に発表されるはずである。

？中略？

８月２９日

ここのところ、自分の行く末ばかりが気になり、悶々として研究がどうもはかどらない日が続いたが、午後に入ってメガマスから驚くべき知らせが届いた。

イマーゴによる電脳治療が可能な被験者が見つかったというのだ。どうやら先日市内で起きた交通事故絡みの患者のようで、はじめは電脳医療の対象ではないのではと勘ぐったが、聞くところによると概要はこうだった。

患者番号４４２３・天沢勇子は、その兄である患者番号４４２２・天沢信彦と、５日前に中津交差点で起きた交通事故に巻き込まれたという。ニュースで聞くところによると、その事故は２人を轢いたトラック運転手の脇見が原因だったようだ。どうやら２人は大黒市に越して来たばかりで、これから自分達の住む街を探検していた時に事故に遭遇してしまったらしい。そして兄の天沢信彦は、昨日息を引き取ったという。天沢勇子はどうにか生命がつながっているものの、予断を許さない状態にあった。

なんとも痛ましい事故が起きてしまうものだ。残された天沢勇子は、奇しくも私の孫である優子とは同じ歳、そして同じ名前だ。自分の孫がこんな不条理な事故に巻き込まれてしまったら、自分はどうなってしまうだろうか。少なくとも正気ではいられないだろう。実際、彼女の唯一の家族となってしまった彼女の母は、今日お邪魔した病室で愛娘の回復を祈りながらも弱り切っていた。老い先短い人生の行く末をうじうじと考えていた自分が、そのとき本当にくだらない人間だと思えた。

話を聞きながら自己嫌悪に陥る私に、メガマス社員の説明は続けられた。天沢勇子は今朝方目を覚ましたらしい。事故で負った外傷からするとそれは奇跡的なことらしかったが、しかし、目覚めた彼

女は真っ先に兄の安否を母親に問い、母は正直に事実を伝えたところ、彼女は号泣したあげく再び意識を失ってしまったという。

事故の外傷よりも、そちらの方が彼女にとってはよほど問題だった。再び愛娘が意識を失って今にも崩れ落ちそうな彼女の母親に、家族間の関係を訊ねることはできなかったが、概ね事情は察しがついた。天沢勇子にとって、兄の存在は相当に大きかったのだろう。メガマス社員に訊いたところ、彼女の父は既に亡くなっているそうなので、彼女にとって兄がどのような存在だったかは想像に難くない。その兄を失って、彼女は希望を失ったのだ。

確かに、これは電脳医療を用いるべき症状だと思えた。後は彼女の脳がイマーゴに適合するかどうかが問題だが、すでにメガマスはそれを確認済みだったようだ。メガマス社員から受け取った資料に記載されていた脳波測定の結果や、ＭＲＩ写真がそれを証明していた。「ようやく手頃な被験者が見つかりましたね」という彼の無神経な言葉には、よほど殴りつけてやろうかと思ったが。

ともあれ、治療の場所は大黒病院ということになるだろう。既にコイルスの研究施設から治療に必要な機材はこの病院に運び込まれている。私もそれらの扱いは心得ているが、やはり心細さは拭いきれない。どこか運命めいた巡り合わせとなった彼女を救いたいという思いだけが、私を支えているようなものだ。

ああ、もう１ヶ月以上も音沙汰なく、足取りさえも掴めない猫目君がそばにいればどれほど心強いか。しかし、彼がこの街に戻って来ることはないのだろう。彼の残された家族には何らかの償いをしたいものだが、メガマスによって彼らに接触することは叶いそうにない。自分ができることと言えば、いつかどこかで彼と言葉を交わす機会を得た時に、君の開発した電脳医療システムで１人の少女の心を救うことができたと報告できるよう、彼女の治療に全力を傾けることぐらいだ。

?中略?

９月２０日

４４２３・天沢勇子の回復は順調だった。

ここのところ、ベッドに横たわる彼女の表情は段々と穏やかなものになってきた。はじめのうちは本当に苦しそうな顔をしていて、私も顔を直視するのを躊躇ったものだが、よく持ち直してくれた。この子は元々、芯の強い子かもしれない。治療空間内での兄とのお別れの期日も、はっきりと決めなければなるまい。

しかし、それはそれで私が寂しくなるな。彼女と兄のお別れの期日を設定することは、彼女と私のお別れの日を決めるのと同じこと。恥ずかしいが正直な話、彼女は私にとって孫のような存在になっていた。毎朝出勤して、日に日に柔らかくなる彼女の表情を眺めるのが楽しみで仕方がない。治療空間内の様子を異常がないかモニターすることもあるが、そこで彼女が見せる兄への屈託ない微笑みには私が癒されている。金沢にいる孫への寂しささえも、この時は忘れられる。そして、自分が正しいことをしたのだと勘違いすることができる。

しかし嬉しいことばかり続いているわけではない。ここのところ不快なのは、メガマスの社員がビデオカメラを片手に治療室に出入りすることだ。どうやら、電脳医療による最初の患者の闘病をドキュメンタリーにして、電脳医療の正式発表の際のイメージアップをメガマスは目論んでいるらしい。彼らは担当医である私にも茶番な質問をぶつけ、私もその時は我を殺してまじめに答えてやっている。そして発表の際には、私は開発に携わった１人として祭り上げられ、メガマスの功績としてそれは認められるだろう。そして、猫目君達コイルス社の努力は闇に葬られる。こんな醜い話はない。天沢勇子のことはもちろん救いたいが、この忌々しいコマーシャルを阻止する方法はないものか。

また、天沢勇子の治療にもだいぶ余裕ができてきたので、私は最近、もう一方の空間の研究にも再び取り組み始めた。天沢勇子のように、イマーゴに適合する子どもはやはりごく少数だ。しかもイマーゴは成長するごとに適合しなくなってくる。治療できるギリギリのラインは小学生までとなるだろう。これではとても実用化はムリだ。万人に体の負担がなく電脳体分離を起こさせ、さらに電脳空間での長期間の滞在を可能することが最終的な目標ではある。猫目君との研究の終盤でもこのことについて話し合っていたが、私たちは大きな壁にぶつかってしまった。空間を改良すれば良いというところまでは話が進んだものの、そのためには根本的に技術を再構築する必要がある。まだまだ時間はかかるだろう。

もっとも、この研究はメガマスには一切報告していない。だからイマーゴ技術を使った研究のように完成を急かされることもない。この研究が形になればいずれ報告しなければならないが、どうしても彼らへの信用が回復しなければ他の企業にそれを売り込むことも辞さないつもりだ。私たちの研究を娯楽目的で応用しようとしているメガマスにとって、この改良は願ってもないことだろう。想像するに、この改良版電脳空間の完成は娯楽目的の枠を越えて、思わぬ使われ方をされるかもしれない。私や猫目君の理想とは完全に乖離した未来が待ち受けているような気がしてならないのだ。それを思い、この研究をそのまま続けていいものかと心が揺らぐこともある。

?中略?

9月27日

どうやら彼女は犬にそこまで愛着がないらしい。

つい先日、私は孫におもちゃを買ってやるような気持ちで、治療空間に1匹の子犬を送ることにした。名はデンスケ。デザインは知

り合いに頼んで描いてもらって自分でプログラミングしたが、なかなか愛らしくなったと思う。

彼女はずっと兄と2人っきりで、もちろん楽しそうに遊んでいるのだが、もう少し他の刺激もあった方がいいだろうと思ってそうした。しかしあまり彼女の食いつきは良くなかった。容姿が好みでなかったのか、それとも犬が苦手なのか。とにかく兄と共にいることこそが彼女にとっては最上の幸福で、他には何もいらないということなのだろう。これではデンスケの方が少し不憫だ。

仕方あるまい。デンスケは彼女達の元から去って行ったことにして、私の孫である優子に授けよう。来月に誕生日を迎えることだしちょうどいい。優子は昔から動物が好きだったから、きっと喜んでくれるだろう。デンスケの方は、通常空間仕様にしておかなければならないな。

一方の改良版電脳空間の研究は、問題点の洗い出しまでは終了した。しかしこの先へは自分1人で進むことはできないだろう。自分は元々技術者ではない。猫目君のような才能を持ったエンジニアがいてくれたからこそ自分のアイデアも形になったが、いまやそのような人物はそばにいない。しかし希望もないわけではない。メガマスの平松君が私のために人材を探してくれるというのだ。

彼はメガマスの社員の中でも信用できる数少ないうちの1人だ。息子の直属の上司にあたる彼に、コイルスの買収後から私は世話になりっぱなしである。コイルスの研究施設の一部を私の研究用に押さえてくれたし、そこで行っている改良版電脳空間の研究についても機密を守れるように根回ししてくれている。私は彼に、メガマスには内緒である研究を行っているとしか伝えていないが、それ以上を訊ねてくることもない。そんな彼のおかげで、私は安心して改良版空間の研究に没頭することができる。

さらに彼は散り散りになったコイルス社の技術者達ともコネクシ

ョンを持っているらしい。人材探しに一役買ってくれたのもそういう理由があるのだろう。私も連絡先を知っている者には接触を試みようと考えてはいるが、やはりメガマスの監視が厳しいのでそう安易には動けない。それもあって彼は、なんとなればメガマスの若い技術者をまわしてくれるとも言っている。ありがたいことだが、なぜ彼はメガマスを裏切ろうとしている私にここまで良くしてくれるのだろうか。彼ほど一本気でまじめな男も最近では珍しいし、かなりの努力家であるから、近い将来それが認められてそれなりのポストがまわってくるだろうと思う。そんな彼が私の手助けをしても、何の得にもならないはずだ。まあ確かに、コイルス買収の時には、そのやり口にかなりの不満を持っていたみたいだが。

とにかく、私の身の周りのことは彼を信用するより他ない。若い技術者というのが、くれぐれも息子でないことを願うばかりだ。

さて、改良版電脳空間の完成に向けて洗い出した問題点を、一応ここにも記しておこうと思う。問題は大きく2つある。

1つは、空間のプログラミングの方法を根本的に変える必要があるということ。先日もここに同じようなことを記した気がするが、とにかく、コイルドメインの時のような空間の組み方では、電脳体を送った時にどうしても体の負担になってしまうのだ。失踪直前の猫目君とも意見を交換したが、彼でも良案を出すことはできなかった。ましてや専門外でアイデアに乏しい私が独力で解決できる問題ではない。しかしあるいは、コイルスの研究にも関わらなかった一切の先入観を持たない技術者なら、ゼロからそれを構築できる可能性もあるかもしれない。その意味では、平松君が連れてくるメガマスの技術者に少しは期待していいだろうか。まあ、あまり大きくは望まないことだな。

そしてもう1つの問題点。こちらの方は身体に害のない改良版電脳空間が完成してから考えればいいことで、あまり差し迫ってもい

ないが念のため記しておこう。それは電脳体分離を起こした肉体の抜け殻をどうするか、という問題である。

天沢勇子の治療を通して感じることだが、治療のためとはいえ患者が寝たきりにならざるを得ないのはどうかと思う。これが意識不明患者なら仕方のないことだが、肉体は健常なのに心の治療だけでこのような状態になることは、あまり良いことではないと思うのだ。彼女の場合は交通事故の外傷もまだ完治していないので当てはまらないが、点滴の打ちっぱなしで、かなりの長期間に及ぶ治療で体も鈍ってしまうことも考慮すると、精神治療が終わっても肉体のリハビリを行う必要が出てくる。これは今後、精神治療のみを受ける患者にとっては経済的にも負担になるし、非効率そのものだと思う。特に費用面は切実な問題になってくるだろう。この技術が実用化されても、精神治療の相場から考えれば膨大な医療費がかかってしまうと思われる。カウンセリング感覚ではまず利用できない。そうなってしまうと、この技術が必要となる場面はごく限られてくる。

私はこの技術を万人のものとするからには、もう少し手軽に利用できるようにしたいと思っている。そのためにこの問題をどう片付ければいいか。要するに、健常な体を寝たきりにさせなければいいのだ。治療の対象は脳だとすれば、肉体そのものは入院してベッドに横たえる必要はない。そうすれば、労働者なら仕事に従事しながらにして治療も平行して行える。とはいえ脳と肉体を切り離せばいいわけではなく、そのような手術を施すなら医療費の面では本末転倒だ。そのように大げさに考えなくてもいい。猫目君の発見がここでも応用できるのではないかと私は思う。つまり、人間の脳が電脳体を操作できるようになったということは、電脳的に肉体を操作することも可能ではないかと思うのだ。

この概念は猫目君の言うところの逆流理論に当てはまる。その逆流理論自体は猫目君が実現の可能性を否定した。しかし私が描いているのは少し違う。猫目君の実験はあくまで脳の記憶を書き換えることで、そんなことは脳科学的に不可能であるとは私も感じた。彼

は脳の操作にこだわり過ぎていたし、私もその固定概念をずっと振り払えないでいた。しかし、デンスケをプログラミングする仮定であることをふと思い付いたのだ。肉体を電脳的に操作するのに、その指令は必ずしも脳を経由する必要はないのではないか、と。ただそうなると、脳はもう1つ用意しなければならないのだが。

まあ、これも技術的には空想に過ぎないのかもしれない。こんなSF小説顔負けの技術が実現したとしても、倫理的に世間でかなりの波紋を呼ぶことになるだろう。考えている自分でもぞっとしない未来が訪れる気がする。このことは、学者の妄想として胸にしまっておくべきなのだろう。もう少しまともな解決方法があるはずなのだ。まあ、今後ゆっくりと考えることにすればいい。

?中略?

10月10日

予期せぬことが起こった。悠長に日記をつけている場合ではないのだが、あまりのことに頭が混乱してしまっているので、落ち着いてこれからなすべきことを考えるために、1つ1つ状況を整理しながらここにメモをとることにする。

しかし、なぜこのようなことが起こってしまったのだろう。彼女の治療は順調に進んでいたのに。あと半月もすれば、彼女は兄ときちんとお別れすることができたのに。

再起動は何度も試みたが、やはり叶わなかった。

とにかく今は原因の究明をしている時ではない。電脳空間に取り残された彼女を連れ戻さなければならないのだ。このままでは、出口を知らない彼女は精神死してしまう。そんなことはあってはならない。これ以上、若い命が失われることなどあってはならないのだ。

彼女を救うには方法は1つ。自分自身が電脳コイルシステムで電脳体を分離させて、出口まで彼女を導くのだ。しかし、成功率は極めて低い。あの空間に長時間居られるのは子どもの中でもイマーゴを持つ子だけだ。私のような老人が入ったならば、またたく間に脳に負荷がかかってぽっくり逝ってしまうだろう。

だからと言って、他の人間に頼めるはずがない。そもそも成人がイマーゴに適合しないのであって、可能性が残るとすれば子どもだけだ。しかし天沢勇子の命の危険が迫っている危険な空間に、子どもの電脳体を送るなど考えられない。ならどうすればいい。自分で行ったとしても成功の可能性は低い。ただの犬死にになるだけだ。だからと言って。

ああ、彼女の母にはなんとお詫びすればいいのだろうか。彼女はあの凄惨な交通事故から帰還したのだ。彼女の“生きたい”という気持ちが奇跡を起こしたのだ。私は、そんな彼女の大いなる未来を摘み取ってしまうのだ。なんと愚かなのだろう。どれほどの人間を裏切れば、私は気が済むのだろうか。いや、人を救いたいという思いは、どこまで裏切られてしまうのだろうか。

この期に及んで私は、自分の運命を呪おうとしていた。

世界に神がもしいるのなら、私の人生の最後の願いを1つ聞いてほしい。私は医者として不自由ない生活を送り、家族にも恵まれた。その一方で多くの人の思いを裏切って、自分の理想ばかりを追いかけた。こんな私に何かを願う権利が与えられているとは思わないが、この生涯最後のわがままだけは聞いてほしい。来世をそれと引き換えにしても構わない。どうか、私の安い命と引き換えに、あの子の命を助けてほしい。

冷静に考えれば、これも逃避ではある。死んでしまえば、彼女が助からなかった場合でもその命が消え入る瞬間に立ち合わなくて済む。彼女の家族に顔を合わせることもない。

いや。もうくだらないことは考えないようにしよう。

こうなれば、私は自分自身の手で奇跡を起こすしかない。交通事故で深い傷を負った彼女がそうしたように、私は、彼女を死なせるわけにはいかないという情熱で奇跡を起こすのだ。自分も生きて帰るなど、微塵も考えていない。

そう覚悟を決めたからには、身の回りの整理をしておかなければなるまい。考えるべきは、私の研究を誰かに託すべきか否かということだ。

と言っても、これは私一人の研究ではない。失踪してしまったが、間違いなくこの研究の功績は猫目君のものだ。イマーゴを使った治療は、寸前のところで不具合を起こしてしまったが、まだ改良の余地はあるだろう。これは残して伝えるべきだと思う。

ただ聞くところによると、イマーゴの研究資料についてはコイルドメインのどこかに隠されたらしい。それも猫目君の意志だったとすれば、私がその資料をメガマスの手が届くところに残すのはまずいだろうな。もっとも、このような事態を受けてイマーゴの研究をメガマスが続けたいと思うかどうかは疑問ではある。彼らは適合範囲の狭いイマーゴによる治療の研究など非生産的だと考えていた節があるからだ。

そしてもう1つ、改良版電脳空間の研究について。メガマスにも報告せずに続けていたこの研究の資料の方が、彼らにとっては必要なものだろう。ただし私もこの研究についてはメガマスに譲るつもりはない。誰か信用できる人間に託したいと思う。

真っ先に思い浮かぶのは猫目君だが、私の死後、彼がこの大黒市に戻って来る保証はない。おそらく彼の動向はメガマスも監視しているだろうし、何より彼に私の遺言を伝える手段などないのだ。現実的ではないだろう。

他のコイルスの技師では細川君に可能性があると思うが、彼も猫目君と状況は変わらない。ただし彼の場合は平松君とも親しい関係にあったから、そのラインが残っていればもしかすると連絡をとってくれるかもしれない。ただ、平松君に私の研究をすべて打ち明けるのは、少し勇気のいることだ。彼には悪いが、やはり彼はメガマスの幹部候補の1人に違いはない。私との信義を押し付けて、今後の彼の行動を縛ってしまうのは申し訳ない。彼に秘密を託すのは、二重の意味で気が引けてしまう。

やはりここはメガマスにもコイルスにも属さない第三者に託すのが最良なのだろう。そうなると小野君がベストだと思う。マルチな才能を発揮して多忙な彼に、私のこのような研究を押し付けるのは迷惑かもしれないが、実現してくれるとしたら彼しか思い浮かばない。明日連絡をとることにしよう。とりあえず研究の概要だけでも伝えるのだ。その研究を受け継いでくれるかどうかは、彼の意志にゆだねるしかない。

資料の隠し場所はこの前私が試作した改良版電脳空間の中がいいだろう。私の書斎をモデルにした狭い空間だが、資料を保管するだけなら十分だ。コイルドメインとの互換性もあるから、もっともバージョンの古い部分を借りて、そこにそのまま埋め込むことにしよう。それならメガマスも気付くまい。あと、パスワードを用意して、それを知る者ならすぐにアクセスできるようにしよう。小野君が了解してくれれば彼にそのパスワードを渡せばいい。それから平松君にはそれとなくヒントを残しておこう。彼からコイルスの技師達にその話が伝われば、私の家に彼らが訪ねてくるかもしれない。その時はバアさんに案内してもらうことにしよう。つまりパスワードは、コイルスの社員だけには見当のつくものを採用した方がいいな。バアさんにもそのヒントを託しておかなければなるまい。あと、コイルスの技師達の顔と名前も覚えといてもらおう。

研究資料についてはこれで大丈夫だろうか。一応この日誌もそこ

に残しておこう。私の遺志もこれを通して伝えられればいい。

さて、これで書き残すべきことはないな。そう悲観することではない。死は誰にも訪れる。十分に人生を全うしたとは思わないが、このような結末も案外冷静に受け止めている。

苦悩の日々もこれで仕舞だ。やはり私は自分の行く末を自分の手で決めることはできなかった。これで私が英雄として祭り上げられることはなくなったが、猫目君を英雄にすることも叶わなかった。彼の家族への贖罪ができないのは、やはり心苦しい。

そして気がかりなことはもう1つある。天沢勇子のことだ。彼女を救い出すということは、彼女を現実世界に引き戻すということ。彼女はまだ、兄ときちんとお別れができていない。果たして彼女はまた意識を閉ざしてしまうだろうか。そうなってしまえば、もう治療の方法はない。

あるいは、もう1つの可能性があるとすれば、現実世界にまだ兄が生きているのだと思い込んでしまうかもしれない。彼女自身の自己防衛としてそれが働くなら、前者よりも結果は良いとは言える。ある程度心が成熟してからなら、兄の死も受け止めることができると思う。それもあくまで一般論に過ぎないのだが、彼女の強さがあればきっと大丈夫だと思う。

いくら願っても死に行く者に未来を制御できない。彼女と彼女の母の今後のカウンセリングも、信用できる者に頼むことにしよう。そして彼女の未来は、天国から見守ることにしよう。その前に、私が天国に行けるかどうかが微妙ではあるが。

最後に、私の孫の優子。あと少しで7歳になる優子。せめて彼女の誕生日までは生きたかった。彼女への誕生日プレゼント、デンスケを受け取って喜ぶ顔が見たかった。その妹の京子。そして修一。その妹の奈美、遥。みんな生まれて来てくれてありがとう。オジジは、本当に幸せだった。彼らの成長を見られないのは残念ではある

が、そんなことを思い浮かべていれば、また生への執着が頭をもたげてしまう。私は、1人の少女の未来を、幸せを守らなければならないのだ。どうかみんな、人への思いやりを忘れない優しい人間になってほしい。誰かの幸せを守ることは、命を引き換えにするほど難しいことではないはずなのだ。

さあ、ケリをつけに行こう。

#24　プロジェクト"SPRING"　part1

「コンピューターにどこまで自分の記憶や思考を再現すればそれは自己足り得るのか。しばしばそれはＳＦ小説などでも題材にされてきたそうです」

２０２７年5月3日。午前１０時きっかりに彼らはメガマス本社の大会議室に登場した。金沢支社プロジェクトチームの幹部、支社長、神崎、そして小野。一方、細長いコの字型のデスクを囲む本社の幹部達は、彼らの口から真実が語られるのを静かに待っていた。また、金沢支社プロジェクトの噂を聞きつけた政府関係者も、電話回線を通じてその様子をモニターしている。メガマスを生かすも殺すもこのプレゼン次第。崩壊寸前のメガマスに、今後もなお世界の電子産業の舵取りを任せるか否か、政府関係者はその品定めを行うつもりでいるのだ。

「お久しぶりですね、皆さん。研究開発部相談役の神崎信明です。今日はお忙しい中お集りいただいて感謝いたします」

ピンマイクを仕込んだ神崎は会議室前方にある巨大ディスプレイの前に立ち、普段と変わらない物腰で挨拶を述べた。彼から見て左側のデスクには小野が自分のメガネと機器を接続し、ディスプレイにパワーポイントが映るように設定している。その脇で金沢支社長は椅子に腰掛けながら会議室の様子を眺めていた。

「さて、以前から引き延ばしておりました金沢支社プロジェクトの概要の説明を始めさせていただくわけですが、ほんの少し注意点をここで述べさせていただきます。これまで本社の幹部の皆様は、あの手この手で我々のプロジェクトの内容を掴もうとされていましたね。私どもは決して情報の秘匿などしておりませんし、プロジェクトの中身はあなた方が思われているほどいかがわしいものではありません。まずはその先入観を排除していただきたい」

空間管理室本部長などは茶番な前置きだと思ってそれを聞いていた。しかし今日ばかりは彼らもおとなしく真実を公表すると宣言しているので、ある程度までは口を挟まないと決めていたのだ。

「そして現在、我がメガマスの信用を揺るがす空間の不具合が立て続けに発生しておりますが、遺憾ながらその原因の１つは、私どもの開発した新空間にあるという調査結果が出ました。これにより本社、及びメガマスグループ全体に多大なる損害を与えたことを深く反省し、現在その解決方法を模索しております。その事故原因についても後ほど詳しく説明いたしますが、解決に向けては皆様の力をお借りしたいと考えています。私どもの開発した技術を使えば問題の解決に近づきますが、設備等の関係で本社の協力がなければそれはなし得ません。何卒前向きに考えていただければと思います」

そこで神崎は１度言葉を切り、幹部達の反応を確かめるようになめるように会議室を見回した。じれったいような表情をした社長桝田と目が合ったところで、再び彼は言葉を紡ぎ出す。

「さて、それでは我々のプロジェクトの概要の説明に入らせていただきます。我々の開発した技術についてですが、まずは皆さん、彼のことは御存知でしょうか？」

神崎が後ろを振り返ると、照明が落とされて小野からディスプレイに映像が送られた。映されたのはつい昨日退院したばかりハラケンだった。その一瞬、会議室にざわめきが起こった。

「彼は原川研一。１２歳。大黒中学校に通うごく普通の中学生です。皆さんの中には彼のことを、一昨年の交通事故で他界した葦原カンナの友人であり、当該事件における旧幹部の隠蔽工作を裁く訴訟の原告として認知されている方も多いでしょう。しかし我々が彼を引き合いに出したこととそのことは無関係です。重要なのは、彼は先月２８日の空間事故で意識と電脳体を失いながら、その２日後に覚醒したにも関わらず記憶を喪失したという事実。そして、記憶が戻らぬまま昨日ひとまず退院したことです」

ディスプレイの映像がそこで切り替わる。次に映されたのは資料

のようだった。
「これは彼のカルテです。勝手ながら私どもが入手したものですが、これを読むに、入院した彼の症状は電脳体分離における意識の乖離。その意識の行き先こそが我々の開発した新空間であったわけですが、結論から申し上げます。彼の意識を戻したのは我々です。それを可能にした新技術こそ、このプロジェクトの肝となる代物です」
「待ってください」
　桝田が手をあげて神崎の説明を制止する。
「なんでしょうか？」
「なぜ我々に断りもなく原川君の体に実験を？」
　神崎は少しだけ視線を泳がせて、
「我々が申請すれば許可していただけたのでしょうか？」
「実験の内容もお伝えしていただければ、それが適切でリスクがないかどうかを吟味して許可を出すことも考えたでしょう」
「実験では聞こえがあまり良くありません。あくまでそれは治療と捉えていただければと思います」
「わかりました。それが治療と呼べるものであったとして話を進めます。治療と一口には言っても、適切な方法を選ばなければならないことは自明の理です。なぜアナタ方は勝手に不確定要素の多い新しい技術で治療を施したのですか？」
「医師の承諾は得ました」
「その医師もアナタ方が取り込んだのでしょう？」
　すると神崎は両の眉をつり上げたような表情で1度支社長の方に目をやった。その彼が頷くのを確認してから、彼はその質問に答える。
「……取り込んだとは言え、彼が医師免許を持つ立派な医師であることには変わりありません。その彼が許可したのです。彼の治療を行うのにアナタ方の許可を取る必要がどこにありますか？彼の体は本社のものとでも？」
「そんな話はしていません。ただ、そちらが私達に知られないよう

にコソコソとウラで彼の治療を進めているのが、おかしな話だと申し上げているのです。彼は本社のものではありませんが、そちらのものでもありません」

　桝田の口調にも苛立ちが混じり始める。

「それはおっしゃる通りです。しかし、本社に治療の内容を通達し、長い長い会議を経て許可が下りるのを待てるほど、彼に時間的な余裕はなかったのです。通達を出しておきながら許可を待たずに治療を行おうとするなら、当然アナタ方の妨害が入ったでしょうからね。こうせざるを得なかったんですよ」

「では、彼には早急な措置が必要だったということですか？そもそもアナタ方はいつ、彼の治療を行ったというのです？」

「彼が覚醒するその日。事故発生から2日経った朝ということになりますね。あまり意識が乖離したまま放置すると、本当に戻って来られなくなる可能性もありますので、我々の処置でもギリギリだったと思います」

　桝田はそこで冷静になって考えてみた。病院には本社から監視員を送って、ハラケンに接触しようとする怪しい人物がいないかを見張らせていた。結果的に彼の担当医は神崎達に買収されたようだが、彼1人なら大それたことはできないはずだ。もちろん、担当医がハラケンに大掛かりな治療を施したという報告も監視員からは上がっていない。監視員も買収された可能性を考慮に入れても、ハラケンには彼の家族がつきっきりだった。担当医が怪しげな処置を施したわけではないというのは覆りそうにない。

　神崎の話を事実だと仮定すれば、ハラケンは4月30日の朝にその治療を施され、その日の午後には覚醒したということになる。これらのことから、彼らの言う治療というのが、かなり簡易なものであったということが想像できる。

「……わかりました。アナタ方の行為の是非を問うのは後からでも遅くはないでしょう。それでは、アナタ方が本社にはあえて通達しなかった治療法というのはどのようなものなんですか？なぜ彼は記

憶を失うことになってしまったのですか?」
「それは今からご説明しましょう。小野さん?」
「はい。では技術的な説明は私の方からさせていただきます」
小野はマイクを片手に、デスクの上の機器とメガネを操作しながら話し始め、ディスプレイの画面はまた切り替わった。映しだされたのは上半身のみの人体模型で、頭部は脳が透けるように見えており、そこから二本の線が下に伸びていた。
「まずは先にお知らせしておきます。原川君の“本物”の電脳体は今も新空間の中に彷徨っています。我々が開発したのは、その状態から彼の意識をこちらに呼び戻し、肉体に宿す技術です」
いきなりの暴露に幹部達は再びざわめいたが、そこで束の間言葉を切った小野は構わずプレゼンを進める。ディスプレイには先ほどの場面に新たな情報が付け加えられた。人体模型の脳の部分から伸びる二本の直線の一方に“交感神経”、もう一方に“副交感神経”と表示されたのだ。
「電脳体分離において肉体の脳ではどのような現象が起こっているのか。幹部の皆さんであればそれは御存知かと思いますので、その説明は割愛させていただきます。問題は、メガネに搭載された量子回路が、脳の指令をすべて吸収してしまうことにありますが、電脳体を連れ戻して肉体と接合しない限り、その現象は止みません。それでは、電脳体が分離している限り永遠に脳指令は肉体に届かないことになってしまいますが、しかしそれを制限する方法があります。ここに出しました、“交感神経”と“副交感神経”のスイッチを利用する方法です。
この“交感神経”と“副交感神経”ですが、周知の通り、前者は覚醒時の人間の生体活動に大きく関わり、逆に後者は睡眠時の生体活動に大きく関わっていることが判明しています。そして、電脳体分離の時においても両者の役割ははっきり分かれます。
これはすでに7年前に旧コイルス社の猫目技師が発見しておりましたが、ここでそれを簡単に説明させていただくと、電脳体分離に

おいて、量子回路が吸収するのは“交感神経”を介する脳指令のみです。言い換えれば“副交感神経”を介する脳指令は、量子回路から一切の影響を受けずに肉体の各器官に送られるのです。電脳体分離の時、その人は眠りについたのと同じ状態になるのはこのような理由からです。

分離の最中、その人は呼吸を止めることはありませんし、各臓器も緩やかながらその活動を続けている。量子回路が“副交感神経”に干渉しないという特徴を持っていなければ、電脳体分離を起こした人間はものの数分で死に至ることになったでしょう。この量子回路とはつくづく不思議な代物です」

大学で講義を持つこともある小野は、癖で一旦話を切り、聴衆の反応を確かめた。幹部の中でもディスプレイに真剣な眼差しを向けている者もいれば、さっぱりわからないという表情の者もいる。それでも桝田や空間管理室本部長などには伝わっているようなので、反復せずに話を進めることにした。

「私はこれを逆手に取ろうと考えました。人間の生体活動において、覚醒時と睡眠時で“交感神経”と“副交感神経”とが自然と切り替わるように、覚醒時には“副交感神経”を介する脳指令を、そして睡眠時には“交感神経”を介する脳指令を量子回路には吸収させることで問題は解決するはずなのです。

それではわかりにくいと思いますので、具体的に説明しましょう。電脳体分離の際、従来は量子回路が常に“交感神経”の脳指令を吸収していました。だから肉体はずっと睡眠状態にならざるを得なかった。逆に言えば、電脳体は常に覚醒状態にあったということになります。そこでまず、量子回路の働きを逆転させます。量子回路には、“副交感神経”を介する脳指令だけを吸収させるのです。するとどうなるか。

これまで量子回路によって阻害されてきた“交感神経”を介する脳指令は、肉体の各器官に行き届くことになりました。つまり、電脳体分離を起こしていない正常な覚醒時と全く同じ状態になります。

今現在の原川君の状態がそれです。こうして彼は、電脳体が分離しているにも関わらず、その肉体を自由に動かすことができるようになったのです。

あ、彼の電脳体に関してですが、今現在彼の肉体とシンクロしているものはコピーです。肉体と違って実体を持たない電脳体は複製が可能なので、メガネを通した時の彼の外見を考えてそのような処置を施しました。ちなみに彼の本当の電脳体は、先ほどの話を踏まえると今現在は電脳空間の中で睡眠状態にあるということになります」

小野の理論を要約すると、量子回路の働きを逆転させることによって、電脳体分離で意識が異空間に飛ばされている状態でも肉体が動かせるようになった、ということになる。

「さて。こうして人は電脳体分離を起こしている状態でも、現実世界で生活することが可能になりました。しかし皆さん、ここで1つの問題点が浮かぶことにお気づきでしょうか？ヒントは、“交感神経”は“副交感神経”と違って連続的な活動ができない。そのことについて少しばかりお話をします。

人間とは不眠で活動できる時間に限界があります。不眠のギネス記録は２４０時間を越えるとか。おそらくその人は頭のつくりが人とはどこか違うのでしょうが、どんな人間でも寝ないで生きることはできません。

ところが、睡眠状態は半永久的に続くことがあります。意識不明患者などがその極端な例です。つまり、人間というのは寝ないと生きてはいけないですが、寝続けるなら生きていけるのです。言い換えれば、“交感神経”には休憩が必要であるが、“副交感神経”にはその必要がないということになります。

従来の電脳体分離では、“交感神経”を介する脳指令のみが電脳体に反映されていました。その出力先が電脳体とはいえ、“交感神経”を使っていることには変わりなく、いずれ休憩が必要になります。その時は肉体の中で、“交感神経”と“副交感神経”のスイッ

チの切り替えが行われているはずなのです。
しかし量子回路の特性上、“副交感神経”を介する脳指令は電脳体に届くことはありません。つまり、電脳体は睡眠状態に入ると呼吸もしなくなるし、脈も止まるのです。それでも問題はありませんね。なにせ電脳体は不死の身だからです。
ところが、私は量子回路の働きを逆転させました。改造量子回路は“副交感神経”を介する指令をすべて電脳体に送ってしまいます。そんな状態で“交感神経”が睡眠という休憩に入って“副交感神経”とのスイッチが行われるとどうなるか。もう皆さんお気づきですね。その人の肉体は呼吸が出来なくなって死にます。
それでは困るので私はもう一工夫しました。量子回路の働きも、肉体の覚醒と睡眠に合わせてスイッチするようにしたのです。先ほど『覚醒時には“副交感神経”を介する脳指令を、睡眠時には“交感神経”を介する脳指令を量子回路には吸収させる』と申し上げたのはそのためです。
この量子回路の改造で、覚醒時には肉体の方に意識が宿り、睡眠時には電脳体の方に意識が宿ることになります。しかし睡眠とは脳そのものの活動が緩やかになっている状態であり、電脳体に意識が宿ることは大した意味がないようにも一見思えます。
ところがですね、人間は睡眠時でも脳を働かせているんですよ。夢の中で」
小野はそこを強調するように倒置法を交えながら話す。これがプロジェクトの目的とも言わんばかりに。
「皆さん、夢を見ている時のことを思い出してください。夢の中でいつもアナタは、受け身ですか？周りに流されるままに生きていますか？……違いますよね。時にはそういうこともありますが、夢の中でも自分の意志に基づいて行動していますよね。どんな突拍子もない展開の連続でも。
つまり脳は睡眠時でも考えているんですよ。それが行動に現れないのは、睡眠状態では“副交感神経”が肉体を制御しているからに

他なりません。つまり、睡眠状態の肉体に“交感神経”と接続した量子回路を組み合わせると、電脳体の体験が夢の中の体験と同じになるのです。

私が何を強調したいのかと言うと、この新技術は電脳体分離中の人の肉体に意識を呼び戻すだけでなく、夢を自由に制御することも可能にしたのです。人は映画を見るような感覚で、好きな夢を見ることができるようになったのです。

まず、この技術を使って電脳体を連れ去られてしまった人の意識を呼び戻しましょう。事件が落ち着いた後、夢を自由に見られるこの技術を発表すれば、今のメガマスの逆境を跳ね返すことができるのではと思います」

小野が説明を終えてマイクを置こうとしたので、慌てて桝田は質問した。

「待ってください。今の説明の中に原川君の治療法はありましたか？新技術で可能になったことしか今はご説明されませんでしたよね？」

「あ、失礼。すっかり失念していました。

我々が彼に施した処置は非常にシンプルです。ただし注意すべき点がありまして、しっかりと手順を踏まなければなりません。それについて説明致します。

電脳体分離中に最も注意しなければならない点、それはメガネをはずしてはならないことです。これは皆さんも耳にしたことがあると思います。量子回路が脳指令を吸収している状態において、その量子回路をムリヤリはずしてしまうと脳にどんな影響が及ぼされるのか。これは今もって明らかではありませんが、非常に危険な行為であることは確かです。

ただし、肉体が覚醒したら四六時中メガネをかけているわけにもいきません。それではお風呂も入れませんし、寝るときも非常に邪魔です。ただし常に電脳体分離を起こしながら生活しなければならないので、量子回路をはずすことはできません。つまり、量子回路

そのものを体のどこかに埋め込めばいい話です。ナノテクノロジーで開発されたこの極小の量子回路ならば、人体にも影響はありません。

我々は原川君の襟足にこの量子回路を貼付けました。ちょうど、肩こり解消のための血流を良くする絆創膏のようにそれは見えます。その後、彼のメガネの電源を切って、量子回路の役割は貼付けたものと切り替えました。これでメガネをはずしても電脳体分離が続くというわけです。もちろん、彼にはその絆創膏は絶対にはずさないようにと言い含めています。

実は治療というのはただそれだけのことなのです。これなら簡単に短時間で意識を連れ戻すことができます。昨日の事件の被害者の方にも、是非この治療を受けさせてあげたいと思います」

桝田は納得するように頷いた。確かにその程度のことなら本社の監視の目をかいくぐって、担当医1人でも行える。小野の話の通りなら、今の状況にあってこの新技術はまさに救いの手ではあるが、彼はまだその治療の許可を躊躇した。

「原川君の記憶喪失について、それはどう説明なさるおつもりですか?その原因は、アナタ方の治療にあったんじゃ」

「説明しました通り、私たちの新技術はあくまで神経系の操作にあり、脳への直接の影響はないのです。記憶喪失とは脳そのものの疾患であり、これが私たちの治療が原因と言われても、その可能性を否定することしかできません。ただ1つ考えられるとしたら、神経系の切り替えがうまくいかず、脳に悪影響が出てしまったということろですが、あまり可能性としては高いとは思えません。もちろん、その原因はこちらでも調査中です」

「つまり、彼の記憶喪失はアナタ方の過失ではないと?」

「あくまで、私たちの治療に原因はない可能性が高いと申し上げているのです。いずれにせよ、記憶が蘇る可能性は十分に残されていると私は思います」

またはぐらかしにかかったなと桝田は思う。これまでこと細かく

技術的な説明をしておいて、都合の悪い話になると言葉少なになるのはどうも煮え切らない。ため息をついて、桝田が次の質問を考えようとしたその時だった。

「茶番はそろそろ飽きたぞ」

会議室の前方の扉が突然開かれ、照明を落とされた暗い室内に目が痛いほどの光が差し込む。その逆光の中に立ち、その言葉を放ったのは大谷だった。

「なんだね君達は？」

ディスプレイの脇に控えていた神崎が目を細めながら訊ねる。そこにいたのは大谷だけではない。一郎、イサコ、玉子、そして直樹、久美子の姿もあった。

「アンタらのプロジェクトをずっと追っていた人間だ。アンタらの今日の欺瞞に満ちたプレゼンを止めにきた」

「なにを言い出すかと思えば。小此木君までこんな集団に加わって、ふざけたことを」

神崎は鼻であしらおうとしたが、一郎は室内に踏み込んで訴えかけるように言った。

「ふざけているのはそちらの方でしょう。アナタ方のプロジェクトが、夢を制御できるなどというロマンチックなものであるはずがない。すべては偽装です。今までの話は、本社や世間を欺くための巧妙なカバーストーリーだったんです」

「カバーストーリー……確かによくできた話ではありましたが、いくつか腑に落ちない点もありました。その点、釈明されるつもりですか？神崎さん？」

他の幹部達はともかく、桝田はこれまでの説明がすべて真実だとは思わず、どこか疑いの目を向けて話を聞いていた。彼が信じるとしたら、一郎の方だった。

「釈明などと。あんな連中のくだらない妄言を真に受けるとは、困ったものです。アナタ達に今の話を否定できる根拠はあるんですか？」

「根拠ならいくつかありますよ」
神崎が挑発的に訊ねてきたところで、前に進み出たのは直樹だった。かつてはプロジェクトチームの末端として彼らに協力し、それを今は悔いている彼は、小野の説明においていくつかの点が破綻していることに気付いていた。
「まず技術的な説明が矛盾していることです。睡眠時に“交感神経”を量子回路に接続したところで、電脳空間での体験そのものが夢に置き換わるなんてあり得ません。夢は脳の中で再生されるもので、神経系はおよそ関係しない。夢の制御などまさに夢物語です。小野先生、今の説明は導入から破綻していましたよ。僕のような人間でもすぐに見抜けたんです。世間にもその説明で通ると本当に思っていらしたんですか？」
教え子の挑戦に、小野も受けて立つという風にマイクをとった。
「君の見解は脳科学においては古い学説に基づいています。最新の研究を踏まえれば、夢は決して脳だけの現象ではないのは明らかです。例えば、寝言はどう説明するんですか？たまにいますよね。夢の中の内容の寝言をしゃべる人が」
「寝言が夢の内容に即しているなんて誰も証明できませんよ。夢の中身は他人には見えません。夢を見ている本人は、自分が寝言をつぶやいているのかどうかも認識していません。
ですが、脳科学で論をぶつけ合ったところで、浅学の僕が先生にかなうはずがありません。どこかでそれらしい説明をつけられれば、知識に乏しい僕が論破することはできないでしょう。理屈と膏薬はどこにでもくっつくと言いますから。
だから僕は、技術的なことではなく今の説明の根本的な矛盾を指摘します。今の説明によると、プロジェクトの最終的な目標は夢を制御すること、ですよね。映画を見るかのように夢を再生する。こんなことが、果たしてメガマス再建の切り札になるんですか？」
直樹は自信を持って言い放った。
「別にそれだけを推しているわけではありません。電脳体が分離し

た状態でも肉体に意識を宿すことができる。むしろ今重要なのはそちらです」

「話の焦点をズラさないでください。ではお尋ねしますが、夢の制御と電脳体分離を起こした意識不明患者の治療。プロジェクトチームが最初に目指したのはどちらですか？」

「それは……」

小野はここで口ごもった。間違ったことを言えば、たちまち直樹にその矛盾を指摘されるのがわかったからだ。

「前者のはずですよね。今でこそ大問題となっていますが、電脳体分離というイレギュラーな事態の対処法を確立しなければならないという必要に迫られたはずがありませんし、それがメガマス再建の切り札にもなり得ません。

ですが、結局夢の制御の方も同じことが言えます。好きな夢なんて見られなくてもいいじゃないですか。幻を見たいなら、このご時世、メガネゲームやら何やらが氾濫しています。必ずしも逃避の手段が夢でなくてもいいですよね？」

「わかってないですね。夢が映画やゲームとは決定的に違うのは、これが現実だと疑わないところにあります。夢の中でこれは夢じゃなかろうかと思うのはごく稀ですよね。悪夢ならそこで目が覚める時もありますが、むしろ、とても良い夢を見た時に同じことを思っても、不思議なことにそこで夢から醒めることってあまりないんですよ。人間は都合の良い生き物ですから。毎晩束の間の幻に酔うことができるのは、かなり魅力的なことだと思いますけどね」

「その分、目覚めの喪失感も大きい。ただでさえ朝は憂鬱なのに、それに追い打ちをかけてどうするんですか。それが仮に実現できたとしても、一瞬の話題を振りまくだけで、とても世間に受け入れられるとは思いませんね。まだ僕の永遠の命計画の方が可能性があるように思えます。

その計画はいつの間にかアナタ方に却下されていました。しかし、方向性を変えたとは思えません。僕が当初考えていた通り、新空間

は現実逃避のために利用するのが、世間の需要に応えるには最良の選択のはずです。ところが、その方法が夢とはおかしな話です。現実を逃避するなら一生。アナタ方の言う計画では、毎日のように夢から現実に引き戻される暗澹たる気分を味あわされるだけで、むしろ世間の需要とは逆行しています。アナタ達のプロジェクトは、その欠陥すら克服したものですよね？すぐに見破れる嘘ばかりを並べていないで、いい加減白状してください」

　すると黙って話を聞いていた神崎がふっと笑った。

「面白いことを言います。そこまで言うなら、最後まで聞かせてもらえますか？アナタ方が考える、プロジェクトの真の目的とは？」

「ああ、望むところだ。よし、いったれイサコ」

　神崎の挑発に受けて立った大谷は、隣にいたイサコにゴーサインを出した。

「私がか？」

「君がいち早くあれに気付いたんだ。手柄は君のものだからな」

「まったく……どう説明すればいいんだ？」

　会議室の幹部達から一身に視線を浴びて、イサコは戸惑っていた。

「竹下さんの話の続きからお願いできますか？新空間は現実逃避のための空間で、しかし夢を見る時だけそこに出入りできたとしても意味はない。その欠陥を克服する方法を」

　そこで桝田がフォローするように言葉をかけた。イサコもその話から始めることにする。

「じゃあ、簡単に説明します。新空間が現実逃避のための空間であることは間違いありません。そのコンセプトを打ち出したのは他ならぬ竹下さんで、先ほどの話にあったように、それを変更する理由もありませんから。このプロジェクトチームの人達は、新空間の中で人が一生を全うできるようにしたはずです。この際竹下さんの永遠の命計画については忘れてください。あれは新空間の中でセカンドライフを楽しむという発想に基づいています。私が話しているのは、あくまで人としての一生を電脳空間の中で生きられるかどうか

という問題です。それが夢という手段では意味がないというのは、先ほどの竹下さんの説明にあった通りです」

「そうでしたね。アナタの言う通り、人が電脳空間の中で一生を全うするとしたら、まず問題になるのは取り残される肉体ですよね。肉体には一生点滴でも打っておけば生きられるでしょうけど、それでもその医療費はバカになりませんよね。その医療費も、誰が負担するのかという話にもなります。現実を逃避した人間に、お金をかけることははっきり言ってムダなことですから」

　桝田はしっかりと問題の本質を見抜いていた。説明する手間が省けたという思いでイサコは続ける。

「そこです。プロジェクトチームの人達は、その問題を驚きの方法で克服しました。取り残された肉体に、人工知能ＡＩを埋め込むという方法で」

「人工知能ＡＩ？」

「はい。電脳体分離をした状態になると、電脳体と肉体の脳の意識が電脳空間に移ります。一方で取り残された健常な肉体からは脳という中枢がすっぽり抜けることになる。それなら新しく脳を用意すればいい。そんなシンプルな発想が出発点でした。プロジェクトチームの真の目的は、電脳体分離を起こした人間の肉体に人工知能ＡＩを埋め込み、その人間の動きを操作することです」

　桝田、そして幹部達もそれには言葉を失った。まるでフィクションの世界での話のようだが、冷静に考えてみると最早それが実現できてもおかしくはないだけの技術がメガマスにはある。肉体の脳が電脳体を操作できるのなら、”電脳”が肉体を操作できても不思議ではない。そして、それにいち早く気付いたイサコと同様、桝田の中ではこれまでの事件の不自然な点が、その真実をして一本の線につながったような気がした。

「じゃあ、原川君の記憶喪失は？」

「彼は、その技術を実用化するための実験に利用されたんです。彼の意識は、この人達の治療によって戻ったと説明されていましたが、

あれはまったくのデタラメです。彼の意識は、電脳空間から帰って来ていません。今の原川研一の肉体を支配しているのは、自分が“原川研一”であるという意識だけを持たされたＡＩです。彼が記憶喪失になったのは、精神的ショックなどが理由じゃない。記憶を持たないＡＩを埋め込まれたから、白紙の脳を移植されたからに他なりません」

驚きから大きく見開かれた目に囲まれ、イサコはほんの１時間前も同じような状況にあったことを思い出す。あらゆる真相が次々と明らかになった、濃密なこの短時間の出来事をイサコは振り返った。

#24　プロジェクト"SPRING"　part2

1時間前の電脳工房。宏文の残した日誌からある真実を見抜いたイサコは、そこにいたハラケンに訊ねた。「アンタまさか、人工知能ＡＩか?」と。その言葉に真っ先に反応したのはフミエだった。

「はあ?どういうこと?ハラケンがＡＩ?」

「ああ。今のコイツの肉体に指令を出している脳はＡＩだ。原川自身の脳じゃない。おそらく、プロジェクトチームの仕業だ」

イサコが返すとフミエは、そんなバカな話はないという風にぎこちなく首を傾げて息を吐いた。続いてダイチが訊ねる。

「じゃあ、昨日ハラケンはアンドロイドかもしれないって言ってたが、それは本当だったんだな?」

「それを言うなら半分正解ってことになる。肉体は原川自身のものだ。人造人間なんてことはない。脳だけが機械だったということだ」

ダイチはそれではあまりピンとこないらしい。腕を組んで唸っている。しかし誰よりも、玉子よりもその真実を受け入れられないでいたのはヤサコだった。

「天沢さん……その話は、天沢さんの推理なんだよね?」

「何が言いたいんだ?」

「間違ってる可能性もあるんだよね?それが真実と決まったわけじゃないんだよね?」

ヤサコの気持ちをイサコもそこで理解する。

「ああ……もちろん確証があるわけじゃない。でも、これまでの事件の不自然な点に説明をつけるとしたら、この可能性しか残らない気がした。だから私も勢いでそう言ったんだ」

そしてイサコはハラケンの方を向いた。一番はじめの質問に、彼はまだ答えていない。

「なんとか言ったらどうなんだ?その沈黙は肯定のしるしか?」

「……いや、突然そんなことを言われて、戸惑っただけだよ。はは。

僕がＡＩだって？そんなことあるはずないじゃない。僕は人間なんだ。なんでそんなことを言われなきゃいけないのさ？」

ハラケンの言葉をイサコは注意深く聞いていたが、少なくともとぼけているような白々しさはなかった。むしろ、心底不快に思っているような口調のように感じられた。

「なるほど。自覚はないわけか」

どうしたものかとイサコは思った。本人が認めてくれれば最も手っ取り早いが、彼自身は自分が正真正銘の人間だと信じて疑っていない。

「天沢くん。いきなりあんなことを言い出したけど、本当にその可能性が高いというのか？確かにそれでいくつかの不審な点に説明をつけることはできるかもしれないけど、決定的根拠はあるのかい？それを提示しなければ、その謎解きは本人や周りの人間を傷つけて混乱させるだけだよ」

一郎がイサコの耳元でささやいた。その通り、周囲を納得させる根拠を示さなければ、何万回と同じことを主張しても取り合ってもらえないようなことをイサコは言っている。それは彼女自身もわかっていた。そこでイサコは、１つの不自然な例をあげることにした。

「彼がＡＩであることを示している事項の１つに、名前があります」

「名前？」

「記憶喪失になったにも関わらず、原川は自分の名前だけは正確に記憶していた。それはよくよく考えてみればおかしなことじゃないですか？両親や友達、通っていた学校の名前も覚えていないほどの記憶喪失患者が、自分の名前だけ覚えているなんて。私はその点はずっと気になっていました」

問われた一郎はしばし考えてみる。

「……確かに奇妙ではあるけど、それは決してあり得ないことではないんじゃないのかい？自分の名前ならまだわかる気がする。自分の名前は忘れているのに、誰か１人の名前だけ覚えているというのなら話は別だけど。そもそも、そのことがどうして彼がＡＩである

ことを示唆していると言えるんだ？」

「コンピューターのプロジェクトを立ち上げる際には、まず名前をつける必要がありますよね。名前をつけていないと、それをもう１度開く時に、どのファイルを呼び出したいのかコンピューターが認識できなくなるからですが、もし彼の頭脳がＡＩだとしたら同じことが言えるんじゃないかと思って。それぞれのＡＩのＩＤ番号は、その人の名前に置き換えられて登録されているんだと思います。そしてそれを、彼のＡＩ自身に記憶させる。この処理をしないと、彼のＡＩは自分のことを呼ばれていると認識できなくなりますから」

「なるほど。電脳ペットでも同じことが言えるな。電脳ペットを購入する時、飼い主は既に名前が付けられているペットを購入するか、事前にこの名前をつけると申請しないといけない。芸は後天的に覚えさせることができても、名前は別。この手続きを踏まないと、イサコの言う通りそのペットは自分の名前を呼ばれていることを認識できない。今の技術で作られたＡＩなら、この問題は解消できていないだろうからな」

大谷はイサコの言わんとしていることを理解し、その言い分は的を得ていると思った。

「おそらくいくつかのパターンで呼ばれたとしても、認識するようにはなっているとは思う。原川の場合なら、原川、研一、原川研一、それにハラケンというのも認識できるようになっているはずだ。その辺りは、原川のことを少しでも調べたらわかることだからな」

「それで自分の名前だけははっきり記憶していたというわけか……しかし、仮に彼の頭脳をＡＩと仮定しよう。ではなぜ、彼は彼の記憶を持っていないんだ？」

一郎の疑問はもっともだとイサコは思う。ＡＩをハラケンになりすませるのが目的なら、なおさら彼の記憶は持たせた方がいい。そして、記憶を流し込む技術ならおそらくプロジェクトチームが開発しているはずだ。そうでないとパラレルワールドを生み出すことなどできない。

「そこまでは……その処置を施した人間に聞かないとわかりません」
しかしイサコにも、込み入った事情までわかるわけがなかった。
「それはそうか。しかし、疑問はまだ残る。彼に人工知能を移植するなんて大掛かりな処置を、果たしてプロジェクトチームが施す時間があったのか。研一君は、運ばれてからあの病室を出た形跡がない」
「それは心当たりがあります。ダイチ」
「ほへっ!?」
いきなりイサコに話を振られたダイチは間の抜けた声を出した。
「昨日の話だが、原川がアンドロイドかもしれないっていう話を真に受けて、お前は原川の体を観察したな?」
「お、おう。でも別に怪しいところはなかったぜ。そもそもお前の話だと、ハラケンは生身の人間なんだろ。頭脳がＡＩって、そんなもん外見で判断できるかよ」
「違う。お前、それを私に報告した時に変なことを言ってなかったか?肩こりの絆創膏がどうとか」
ハラケンがアンドロイドかもしれないと大まじめに考えたダイチを、イサコは真性のバカだと思っていたので、後でダイチがそのことを報告しに来たときもほとんど聞き流していたのだ。
「ああ、あれか。言ったぜ。ハラケンのヤツ、目が覚めてから妙に肩がダルいらしい。だから血行を良くするための円い絆創膏を貼ってたんだと。ハラケン、今日も貼ってるのか?」
ダイチはハラケンの方を見る。するとイサコは問答無用でハラケンの襟首を掴んで確認する。
「ちょっと見せてみろ!」
「なにするんだ!」
「イサコ!」
乱暴な扱いにハラケンと玉子は声を上げたが、イサコは聞いていなかった。抵抗するハラケンをダイチに押さえつけさせて、それを見つける。

「やっぱり。これだと思います」
「これが？」
一郎や大谷ものぞきこんで確認する。確かに男子としては長めの後ろ髪に隠れて、円い絆創膏が貼ってあるのが見えた。
「これは本当に血行を良くするためのものなんだな？」
「……そうだよ。いいじゃないか別に。見せるものじゃないよ」
ハラケンは憮然としてダイチを押しのけ襟をただす。
「それなら、剥がしても大丈夫だな。お前が自分はＡＩではないと言い切れるなら、今ここでそれを剥がしてみろ」
「なんだって？」
「それが肩こり解消の絆創膏なら、問題はないだろ。さあ、早く」
イサコはハラケンの前に片膝をついて迫った。先ほどは怒りをあらわにしたハラケンも、その勢いに気圧された。
「……ダメだよ。これは先生が絶対に剥がすなって言ってたものだから」
「先生・・・・・・ってあの医者のことか？どうしてだ？たかだか肩こりじゃないか。絶対に剥がせない他の理由があるのか？」
「知らないよ！僕だって、そんなことは知らない。ただ、この絆創膏だけは絶対に剥がすなって言われただけだ。そんなに僕を機械人間にしたいんだったら、今ここで剥がしてそうじゃないことを証明してやるよ。付き合ってられないよ」
するとハラケンは自らその絆創膏に手をかけた。一気に引き剥がそうと力を込めようとしたところで、しかしイサコにその腕を掴まれた。
「やめておけ。私の考えていることが事実なら、それを剥がした瞬間にお前は死ぬぞ」
「死ぬ？」
バカにしたような目つきでハラケンがイサコを見返す。
「死ぬって……天沢さん？」
成り行きを見守っていたヤサコは、涙目になりながらイサコに声

をかけた。今の発言はさすがに行き過ぎだったなと、イサコは反省する。ヤサコの方も、今の話を聞いていてハラケンの何が死んでしまうのかがわからなかった。もちろん、それを理解するつもりもなかったが。

「あの絆創膏の中に、君の言うＡＩが埋め込まれているのか？」

「いや。いくらなんでもＡＩがあんなに小さいはずがない。おそらくあれは受信機だ。多分メガネに使われている量子回路に近いものだと思う」

「……そうか。電脳ペットと原理は同じだな。どこかに母艦となるコンピューターがあって、彼の頭脳はそこに収められている。そのＡＩからの信号を、サーバーを介して、この絆創膏の中にある量子回路がキャッチするという仕組みか。今度はその量子回路が、電脳の信号を脳指令と同じ神経伝達物質に変換すると」

「それに、メガネに搭載されているものと同じ量子回路も合わせて埋め込まれているはずだ。原川の本物の電脳体は未だに電脳空間に彷徨っているはずで、その状態でメガネをはずすことはできない。でも、普通に生活する上で必ずいつかはメガネをはずさなければいけない時が来る」

「そうだな。つまり、この絆創膏の中には出力と入力、それぞれの役割を持った2つの量子回路が埋められているということになる。出力の方は彼の脳の指令を電脳空間に飛ばし、入力の方はＡＩからの指令を肉体の各器官に送信する神経伝達物質に変える。なんてこった。まさかそんな技術を連中が開発していたなんて」

大谷は技術的にも可能だと思った。そして、昨夜彼の依頼主から聞いた逆流理論の応用の話もここでつながった。

「待ってイサコ。話を整理するわね」

「ああ」

フミエがそこで話を一旦止めさせる。この場ですべてを理解しているのは、イサコ、大谷、一郎ぐらいだった。

「ハラケンの頭脳はＡＩってことで間違いはない？」

「ああ。そう考えるとすべての辻褄が合う」
「で、本物のハラケンの意識は今もまだ新空間の中。そしてそれは、連れ去られてから1度も帰って来てない？」
「そうだろうと思う。私たちが今見ている原川の電脳体は、おそらくコピーされたものだ。オリジナルの電脳体と意識はまだ新空間の中にあるはずだ」
「じゃあ、一番重要なこと。それなら、ここにいるハラケンは一体何者？」
　フミエはハラケンを見ながらイサコに訊ねた。気に入らないようにハラケンの方はうつむけた顔を背ける。
「何者って、説明しただろう。ＡＩだ。造られた頭脳だ」
「それはわかってるわ。でも、ハラケンは自分のことを少なくともそうは思ってないんでしょう？」
　すると彼は顔をうつむけたままにこくりと頷いた。それを確認してフミエは再びイサコに向き直る。
「イサコ。あんたが同じ事を他人に言われたらどう思う？」
「どう思うって……すぐには信じないだろうが、現実は受け止めるしかないと思うだろうな」
「想像力に乏しいわね。わかってんのアンタ？本物のハラケンは別の場所にいて、今のハラケンは偽物だって私達は言ってるのよ。それだけでも不快なはずなのに、この話の流れからすると、きっと私達はこう言い出すはずよね。『本物のハラケンを救い出そう』って。それの意味するところを、アンタはちゃんと考えた？」
　フミエの強い言葉にイサコはハッとした。確かに真実をついに探り当てた自分に酔っていたのか、イサコはそのことを一切思い浮かべずにしゃべってしまっていた。
「それは、今の原川の頭脳を抹消することと同じか……」
「そうよ。私たちにそれを言う資格ってあるの？私達は今、遠回しに今のハラケンに死刑宣告を下そうとしているのよ。そのことを少しでも考えた？ＡＩだって同じよ。電脳ペットだって生きてるの。

私達はその生き死にに本気で涙を流すのよ。こんなの……残酷すぎるわよ」

まるでイサコは、真実を言い当てたことを責められているような気分になった。だからと言って、泣き寝入りを決め込むわけにはいけない。イサコの中にはフミエの方こそ大事なことから目をそらしているのではないかという反発が生まれていた。

「じゃあ、アンタはこのまま新空間の中にいる原川が戻ってこなくなってもいいというのか？」

「そんなこと言ってないでしょ！私はもう少し冷静になれって言ってるのよ。人の気持ちも考えないで、勢いだけでしゃべってさ」

「なら、冷静なアンタはどうすべきだと考えてるんだ？確かに私は原川の気持ちに思いが至らなかった。でも、元の通りに戻すならそうするしか方法はないだろ。同じ2人の人間が、同じ場所で生きられるはずはないんだ」

「だったら、ハラケンのＡＩは電脳空間で生きてもらうことにすればいいじゃない。元々新空間はパラレルワールドなんだから、それが本来の形でしょ」

「アンタはこれから一生電脳空間で生きろって言われたらホイホイ従うっていうのか？それが理不尽なことだと思い至らないのか？電脳空間の中に、アンタが今まで築いていきた友人関係があるとは限らない。それを今の原川に強いるつもりか？」

「でも今のハラケンは！」

「目覚めてからほんの3日しか経ってないから友人関係も何も構築されてないとでも？それはアンタの勝手な言い分じゃないか！えらそうに私に説教したアンタも、結局原川の気持ちを汲んでいないだろ！」

「もうやめて！」

今にもイサコとフミエがつかみ合いになりそうだったところを、ヤサコの悲鳴が止めさせた。ヤサコはとても聞いていられなかった。大切な友達が激しく言い争うところを、そして、ハラケンをどうす

るのかという議論を。
「もうやめて……ハラケンはハラケンだよね？記憶はなくなったけど、変わらないハラケンのままだよね？」
ヤサコは嗚咽を漏らしながら訊ねていた。
「……ここまで言われて、自信を持ってそう断言できるはずない。僕だって、何ひとつ思い出せないんだ。必死に思い出そうとしてるのに、みんな必死に思い出させようとしてくれているのに。やっぱり僕は、みんなの知ってる原川研一じゃないのかもしれない」
ハラケンの口からも本音がこぼれた。今の会話が、彼の心を深くえぐってしまったことをイサコは今更ながら後悔する。
「……冷静になるべきはお主らじゃぞ。まったく。本人を目の前にしてあんな直接的な物言いをするヤツがおるか」
「そうだな。悪かった」
「私も反省してる」
ずっと黙っていたメガばあに短い言葉で諭されて、イサコとフミエはそろって俯いた。
「悪いのはプロジェクトチームの人間だ。わかりきったことだろ。とりあえず、今の話が真実なのかどうか、ウラをとらないとな」
大谷がイサコの肩に手を置いて言った。「そうだな」とイサコは顔を上げずに言う。この問題も向き合わなければならないが、とにかく今は事実を確認することが先決だ。
「１０時から始まるっていうプロジェクトのプレゼンの際に、連中が今の話に触れるかどうかですね。触れればもちろんそこでやり込めますが、もし連中がしょうもないウソをつこうとするなら」
「僕達が今の話を暴露する、ということですね。うまくいくかどうかわかりませんが、やってみましょう」
大谷の意図を読み取った一郎は時計を見やる。時刻は９時半。
「竹下さんにも、本社に向かう前に今の話を聞いてもらいましょうか？」
「彼もプレゼンに来るんですか？」

「ええ。小野先生がプロジェクトチーム側の人間として来る可能性もありますから」
「なるほど。彼が小野先生の教え子だった関係で」
「彼自身プロジェクトに関わっていましたから、今の話を聞いてもらって意見をうかがいましょう」
すぐに一郎は直樹に連絡をとった。直樹は一郎から小此木宅の住所を聞くと、久美子とともに１０分ほどで警察署から到着した。
「プロジェクトの真実を掴んだというのは本当ですか？」
車から降りた直樹と久美子は、迎えに出た一郎に開口一番訊ねる。
「ええ。先ほど僕の父の残した研究日誌を見つけまして、それを読んだ天沢くんが真相を掴みました」
「彼女がですか？その日誌、後で拝見させていただいてもよろしいですか？」
「もちろんです。とにかくお上がりください」
一郎は２人をヤサコ達が集まっている電脳工房に通し、手短にことの真相を直樹達に説明した。ハラケンがＡＩだと聞かされて、直樹達も驚かなかったはずがない。
「そんな……確かに僕は彼が帰還したことを懐疑的に見ていましたが、まさか人格がＡＩにすり替わっていたなんて」
「……ひどい話ね」
久美子は嫌気がさしたように息をつく。
「まだそうと決まったわけではありませんが、可能性としては高いかと。１０時から始まるプロジェクトのプレゼンで確認しようと思うのですが、その前に竹下さんにも意見をうかがおうかと」
「なるほど。少し、彼の体を調べさせていただいてもいいですか？」
「……ええ」
直樹は玉子に訊ねたが、先ほどから顔色のさえない彼女は力をなくした声で返した。先ほどからずっと黙り込んでいるのは、あまりのことに頭の中が真っ白になっているからだった。
「……これが天沢さんの言う、量子回路が貼付けられた絆創膏か。

なるほど確かに、ちょっとやそっとじゃ剥がれないようになってはいますね」

ハラケンの体を簡単に調べた直樹は立ち上がった。フミエがそこで訊ねる。

「どうなんですか？」

「ああ。天沢さんの推理をふまえると、すべての出来事を1本の線でつなぐことができる。おそらく、それが真実だ。プロジェクトの趣旨から考えてもね」

「プロジェクトの趣旨？」

「廃ビルで僕がやり込められた時に話したと思うけど、新空間は条件さえ整えば人が半永久的に生きられる空間だ。僕が構想した時に考えたのは、そこを現実逃避のための場所にすることだった。それには当時の僕の荒んだ心境が反映されている。さすがに実現は難しいと思ったから、セカンドライフを生きるための空間として永遠の命計画を立案したんだけどね」

「それも医療費の問題から断念せざるを得なかった。でも、電脳体分離で取り残された肉体にＡＩを埋め込むという、この技術が完成すれば」

「ああ。僕が当初描いていた理想が出来上がる。肉体の脳は電脳空間の中に現実逃避すればいい。取り残された肉体はＡＩによって支配され、そのまま労働力になることができる。ＡＩなら細工次第で仕事に対するモチベーションを保つことは容易だからね。その辺は脳とは違うわけだ。そうなれば医療費の問題もクリアできる。まさに、夢の技術だ」

直樹が皮肉を込めたのか本気で言っているのかは判断できなかったが、少なくともその場にいた全員にはそれが魅力的なものだとは思えなかった。社会的不適合者を電脳空間に追放し、かわりにＡＩがその人にかわって労働力となる。生産的ではあるのだろうが、そうなってしまえば人間は終わってしまうだろうと誰もが思った。

「そんなひどい世界に住みたくはありません。誰がＡＩで誰が生の

脳を持っているかわからない世界なんて」
　フミエがつぶやいた。
「……その意見に賛同する資格は僕にない。逆に僕は、その違和感は時間が解消してくれると思う。そう、電脳ペットが登場した時も世間の反応は賛否分かれたんだ。でも今じゃ生のペットと電脳ペットが共存していることに誰も違和感を覚えない。もしもこの技術が実用化されたら、人間はそんな風に適応していくんじゃないかな」
　それはそうかもしれないとフミエは思った。フミエは先ほど、今のハラケンの気持ちを考えないで話を進めるイサコに腹を立てた。それはハラケンの気持ちを思えばこそで、頭脳がＡＩだろうがそこに命が宿っていることに変わりはないと思っていた。フミエも昔、かわいがっていた電脳ペットを亡くして悲しい思いをしたことがある。その感情は、紛れもなく本物だった。
「アンタの言うことは一理ある。が、それが実現できるかどうかは置いといて、その実験のために罪のない少年の体を使ったことに問題がある。オレは連中を許せない」
　大谷が直樹に言った。
「そうですね。それは僕も同感です。そこに自分の恩師が関わっていたことは、大変残念でなりません」
「だったら行くぜ。人工知能をおもちゃにして、生身の人間をモルモット程度にしか思っていないクズどもの思惑を止めにな」
「そうですね。急ぎましょう」
「じゃあ、どうしようか。プレゼンでどんな話が飛び出すかわからない。優子や研一くんはここで待機した方がいいかもしれない」
　一郎が本社に行くのは誰かを確認する。
「それならワシがここで留守番しながら面倒見といてやるわい」
「私とアイコは、ここでヤサコやハラケンの様子を見ときます」
「オレとシュウイチも残ります。ハラケン達が心配だし」
　フミエとダイチがそれぞれ一郎に告げた。
「そうか、わかった。じゃあ、玉子くんと天沢くんはバイクで。竹

下さんと川畑さん、僕と大谷さんはそれぞれ車で向かいましょう」
「わかりました！」
直樹と久美子はすぐに部屋から出て行った。
「玉子くん、大丈夫かい？」
「ええ。大丈夫です」
一郎は玉子の様子に気付いて声をかけたが、相変わらず彼女の顔色はさえなかった。
「ムリはするなよ」
「ここでムリしなくてどうするのよ。行くわよ、イサコ」
心配したイサコをよそに、玉子はバイクを出しに部屋を出て行く。
「小此木さん。細川さんの件は……」
「わかっています。もちろん本社で報告するつもりです。さあ、僕達も行きましょう」
一郎と大谷も部屋を出た。最後に残ってもう1度ハラケンを見やったイサコに、ダイチが声をかける。
「イサコ。そのプロジェクトチームの人間がふざけたことを言ったら、マジでぶん殴ってこい」
「……ああ。殴って解決できるのならな」

本社に向かった一行が到着した時、既にプレゼンは始まっていた。一郎の指示で、まずは彼らからどのような説明があるのか会議室の外からそれを聞いていたのだが、案の定デタラメを並べ立てたので、我慢ならなくなった大谷が会議室のドアを開けたのだ。
イサコがこの1時間の出来事を回顧している間に、一郎の方から宏文の研究日誌についての説明があった。もう言い逃れは出来ないと思ったのか、神崎はそこで大きく笑い始めた。
「ハッハッハ。その資料も見つけたわけですか。予想外ですね……アナタ方にならごまかしきれるかなと思ったのですが、どうやら甘く見ていたようです。まあそこまで掴まれているのに言い逃れをするのはそれこそ茶番。もう、いいですか支社長？」

神崎は支社長を見やる。彼は仕方ないという風に息をついて「あ
あ」と返した。
「じゃあ今から本当のプレゼンを始めさせていただきますよ。我々
の切り札、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”について」

「一体、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ“とはどういう意味ですか？」
すべての真実を打ち明けると宣言した神崎に桝田が訊ねた。
「ｔｈｅ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｐｌａｙｓ　Ｒｏｌｅ　ｏｆ　Ｉｎｄｉｖｉｄｕａｌ　Ｎｅｕｒｏｎｔｒａｎｓｍｉｓｓｉｏｎの頭文字をとって”ＳＰＲＩＮＧ”。“春”の名に相応しい、人間の新生活を応援するためのプロジェクトというわけです」
「……直訳するなら、“個人の神経伝達の役割を演じるシステム”ってところですか？」
神崎が口にした英文を桝田は訳して確認する。
「何が新生活応援プロジェクトだ。ものは言いようだな。気取った意味不明の横文字使いやがって。それに”ＳＰＲＩＮＧ”にしたいなら、最後の”Ｇ”が足りないぞ」
指摘したのは大谷だった。
「酔ったときの思いつきですよ。”Ｇ”に相当する単語が見つからなかったのは惜しかったですけどね。あえて当てはめるとしたら、幻影、”Ｇｈｏｓｔ”というところですかね」
「何が幻影なのか、オレには理解できないがな」
「本物の自分の意識は、肉体という実体から離れて電脳体という幻影に乗り移る。そして、これまで幻影に過ぎなかったＡＩが肉体という実体に乗り移る。”Ｇｈｏｓｔ”には、その二重の意味がありますよ」
大谷はその答えに呆れたように鼻を鳴らした。どこまでもふざけたヤツだと思う。次に一郎が神崎に訊ねた。
「プロジェクトの内容自体は、先ほど私たちが披露した推理通りで間違いはありませんね？」
「ほぼ正解というところです。社長に訳していただいた英文の通り、私たちは肉体の各器官に送信される脳指令、言い換えれば神経伝達

を電脳的に司ることのできるシステムを構築しました。そしてそれを人工知能ＡＩに接続し、肉体に機械脳を移植することに成功したのです」

「逆流理論の応用だな？」

大谷が確認すると、神崎は少し驚いたように小野の方を見た。質問には小野が答える。

「応用というより、技術的にはまったくの別物ですけどね。まあ発想は似ていますが」

「なんですか？その逆流理論とは」

桝田にとってその言葉は初めて耳にするものだった。

「コイルス社の猫目技師の研究の１つです。イマーゴを逆流させて、脳の中の記憶を電脳的に操作することができるかどうかというものだったのですが、その理論自体は机上の空論に終わったそうです」

「……なるほど。その話は聞いたことがあります。それを逆流理論というのですね……ということは、待ってください。アナタ方プロジェクトチームの研究は、コイルス社の猫目技師の研究に近しいものだった。つまり、このとんでもない計画の着想は、そのコイルス社の研究から得ていたわけですね？」

一郎の説明を聞いて桝田も理解した。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の原型は猫目技師の遺産。そして、

「ついでに説明しておきますと、新空間計画の原型も猫目技師と小此木医師の研究が元になってますよ。この人達は”ＳＰＲＩＮＧ”を立案する前に、まず新空間計画を立ち上げた。この２つは当初は別々のプロジェクトだったんですよ。万人が電脳体として半永久的に生きられる新空間というものが完成しなければ、そもそも”ＳＰＲＩＮＧ”のような発想は生まれなかったわけですから。その辺は、オレたちが見つけた小此木医師の日誌にも記されていましたけどね」

「確かに、言われてみればそうなりますよね」

大谷からも説明を受けて桝田は深く考え込み、それぞれの出来事の関係を頭の中でつなぎ合わせようとした。しかし、この場にいる

ほとんどが真相に関して混乱していると言ってもいい。多くの情報を掴んだ今、一郎はここで過去からのすべての出来事を整理しようと考えた。

「神崎さん。ここではっきりさせてもよろしいですか？メガマスのコイルス買収直後から、アナタ方のプロジェクトが完成に至るまでの経緯を。細川技師の裏切りも絡めて」

「……構いませんよ。アナタのお父上の研究も関係しているわけですから、真相を知りたい気持ちはわかります。それに一連の事件の発端を本社の方々に説明するには、最初から話す必要があるでしょうからね。ちょうどこの場には説明に必要な主要人物が揃っているようです。細川君自身を除いてはね」

「そのようですね」

一郎は会議室全体を見渡すが、残念ながら細川の姿は見当たらなかった。この場にいてもおかしくはないが、おそらく彼自身がこの展開を予想していたのだろうと一郎は思った。

「例の細川技師を突き止めたのですか！？」

「はい。僕の母が残していた写真を見て一目でわかりました。今回の事件の首謀者である細川亮成は、メガマス研究開発部で“香川昭大”を名乗っていた男です」

桝田に訪ねられた一郎がそう言うと、会議室にこの日一番のどよめきが起こった。

「香川さんが？それは、本当ですか？」

「この写真を見ていただければわかると思います。父が他界する直前に母に残した写真です。自分の死後、もしコイルスの技師が家に訪ねて来たときのことを考えて、父は母に写真の人物達の顔と名前を記憶させていました。その母によると、細川技師は右端の男だそうです」

一郎は桝田にその写真を手渡して確認させた。他の幹部達も桝田の元に寄ってのぞき込む。

「……確かに、少し雰囲気が今と違いますが、彼で間違いないです

ね。神崎さん！アナタ達は彼の正体については知っていたんですよね？なぜ今まで黙っていたんですか？彼のおかげで、何人の子ども達が犠牲に！」

「それは、今からご説明しますよ。こちらにも事情というものがございましてね」

「くっ。この場にいないということは、どこかに身を隠したということですね。急いで彼の居所を特定しましょう！早急に手配を！」

と、桝田が指示を出してもすぐに誰も動かなかった。今まで上層部の指示を下の部署に伝えていたのは、他ならぬ“香川昭大”だったからだ。

「誰でも構いません！早く！」

「は、はい」

するどい形相の桝田と目が合った幹部の１人が結局行くことになった。

「見つけたところでどうにかなる相手じゃないんですがね。まあ、捜索頑張ってください」

その幹部が会議室を出て行くところを見送り、神崎がしれっと言い放つ。

「まるで他人事ですね！アナタ達にも事故に対して責任があるでしょう！」

「責任はとるつもりですよ。げんに原川君は覚醒したじゃないですか」

「ふざけるな！人格をＡＩとすり替えておいて何が元通りだというんだ！」

「落ち着いてください社長！」

激昂する桝田を宥めたのは近くの席にいた平松だった。

「このプロジェクトの是非は、彼らの説明が終わった後にじっくりと話し合いましょう。どのみち、我々に連れ去られた子ども達の電脳体を救う手だてはないのですから」

「……だからと言って、これを認めるわけには」

平松に現実を突きつけられ、桝田もどうすればいいかわからなくなっていた。確かに神崎達の言う通りにすれば、表面上事件は解決できる。それも都合の悪いことに、この会議室での出来事はどんな形であれ混乱が拡大する前に事件の解決を望む政府関係者にモニターされているのだ。メガマスの命運、そして舵取りは、もはや政府という黒幕にゆだねられているにも等しい。ここで一人抗うことは無意味なのだ。

「……平松部長。教えていただけませんか？香川、いえ、細川技師がこの事件を起こした動機を。そして可能なら、彼の暴走を止めてもらえませんか？」

その時、束の間降りた沈黙を破って一郎が平松に訊ねた。彼は一郎が金沢支社にいた時の直属の上司であり、互いに親密な関係を築いていた。彼が自分にそうしてくれた理由は、宏文の日誌を読んで一郎は理解していた。

「どういうことですか？小此木さん。平松さんと細川技師に一体何の関係が」

目を点にして桝田が訊ねる。

「平松部長は、本社において細川技師の工作をもみ消していた協力者の１人でほぼ間違いありません」

「そうですね。いくら本社が無能とはいえ、細川君があれだけ自由に動いていたからには、幹部の中に彼の協力者がいるのだろうと考えていましたが。それが彼と旧知のアナタでは意外性も何もないですね」

一郎が言うと、神崎が平松に対して親しげに、そしてどこか残念そうに言った。

「本当なのか？平松？」

怒濤の展開にほとんど置いてきぼりにされていた管理室本部長が、平松の方を見て訊ねた。本部長にとって平松は右腕のような存在だったが。

「疑いもしていなかったとは呆れたものです。これまでアナタが打

って出た作戦は、ことごとく裏目に出ていたでしょうに。いくらなんでも、近しい人物を疑うのが普通ですよ」

「やかましいわ神崎。私はお前のように猜疑心の塊ではない」

「おやおや。あれだけ手を尽くして我々のプロジェクトを探っていた人のセリフとは思えません。その無能で我々に諜報合戦を挑むとは笑止です。先月の金沢の件については、後でおいおい話し合いましょう」

「それまで黙ってろ。時間のムダだ口を挟むな素人が」

神崎に笑われ、大谷に罵倒され、本部長の怒りは一瞬にして沸点に到達したが、彼を見る周りの視線はしらけたものだった。そもそも空間管理室の本部長は夏の事件の収束とともに存在意義を失いかけた窓際ポストで、幹部の総入れ替えでたまたま残った枠に消去法的に彼が選ばれただけの話なのだ。半年後にこんな事態になるとわかっていたら、桝田も彼を指名することはなかっただろう。

「平松さん。どうなんですか？」

話を戻すように一郎が再度訊ねる。

「……嫌気がさしたんですよ。こんな不道徳なプロジェクトを進める神崎さんに協力している自分に。こうなるはずではなかったんです。私はただ、小此木先生と猫目技師の理想を実現したかっただけなんです」

「小此木先生と猫目技師の理想？その２人の研究者がいなくなった当時、既に金沢支社研究開発部のチーフだったあなたが？」

意外そうな顔を桝田は平松に向けた。

「いやいや。すべての鍵を握っているのは実は平松部長なんですよ、社長。我々のプロジェクト、旧コイルス一派、猫目宗助、４年前の古い空間の暴走、一昨年の交通死亡事故、去年の夏の事件……すべての出来事は、平松部長が小此木先生の遺言を聞き届けたことに端を発します」

桝田の心中を察した神崎は、昔話の語り部のように、小気味よく話し始めた。

「コイルス社の買収後、小此木医師が亡くなった頃でしたか、メガマス研究開発部の元締めを務めていた私はあることについて調べていました。買収により、コイルス社製量子回路搭載メガネの製造に必要な資料は揃っていたものの、しかし残っていた研究資料は予想に反して圧倒的に少なかった。メガマスと契約してコイルスの技術を調べていた小此木医師の報告資料を逐一点検するに、この資料の少なさはどうも腑に落ちない。さてはまだコイルスには隠された技術があるはずだと踏み、調べを進めるとどうやら資料の隠蔽には我がメガマス社員が関わっていることが判明したのです。その社員こそ平松部長でした。

当時は私の方が役職は上。取り調べをさせていただいたところ、平松さんはそれをお認めになりました。平松さんはどうやら以前からコイルスの技師数名と小此木医師と関わりがあったようで、資料隠蔽の動機はメガマスのやり方への不満と、彼ら研究者達への義理立てだったと」

神崎はそこで平松の方を見て話を止めた。桝田は「本当なのか？」と問いたげな視線を平松に送った。

「……ええ。神崎さんに知られるまで、私の中にはメガマスに対する反発がありました。小此木先生の遺言を守り、資料を封印を完了させることでコイルスの技師の方達への義理も果たしたと思いました。と言っても、私が彼らに協力したのはあくまでメガマスへの情報の遮断。彼らがどのように資料を封印したのかは、私も詳しくは知りませんでした。

しかし、取り調べで神崎さんと話すうちに、私の中の考えは変わっていきます。それではあまりに受け身になり過ぎてはいないかと。小此木先生や猫目技師が、研究をメガマスなどに託したくはないと思った気持ちは理解できます。しかし、現実的に考えてあの方達の

研究を完成させられる技術を有しているのは、あの時点でメガマス以外になかった……自社の技術を誇る気持ちから、私はそう思うようになりました。だから、私はそこで小此木医師の遺言を破り、その遺志は私自身が実現しようと考えたんです。そのためには、封印された資料が必要になった。資料の封印に協力したのは他ならぬ自分ですが、やはりそれを掘り起こそうと考えたのです」

「なるほど。父の日誌には、イマーゴや改良版電脳空間の研究の詳細についてはアナタに知らせていないとありました。つまり、アナタがそれを探し出したのは父の死後ということですね？」

事情を呑み込んだ一郎の言葉に、平松は頷いてみせた。

「その通りだ小此木君。先生の研究の詳細を知らなかった私には焦りもあった。先生が遺言でメガマスに所属しない研究者に資料を託していたとすれば、我が社にとっては不利益になりかねない。だから私と神崎さんは必死で、その研究がどのようなものかを調べていた。コイルスの関係者を辿ってようやく私達が手に入れたのはイマーゴに関する研究のみで、新空間の原型となった改良版電脳空間の研究はほとんど詳細を掴めず探索は打ち切りになったんだ。最後の手がかりは、先生の遺言にあったコイルドメインの深部というキーワードと、解読不能な暗号化されたパスワード。私はそのコイルドメインの深部にこそ、改良版電脳空間の研究資料が封印されたのだと悟ったが、どのようにアクセスすればいいか皆目わからなかった。コイルドメインに関する資料もまた、コイルドメインに封印されていたのだからね。今にして思えば、それが一連の事件引き起こすきっかけとなった」

しかし一郎はあることが引っかかった。

「待ってください。父は小野先生にも遺言を残したんじゃないんですか？日誌を読む限り、父は小野先生には研究の詳細を伝えたはずです。小野先生はその時どうされたんですか？」

「私は小此木先生の遺言を聞いていません」

「え？」

あまりにさらっと小野が言うので、一郎は間の抜けた声が出てしまった。

「折悪く、その時私は海外にいたんです。遺言ならメールかなにかで送信することもできたはずなのですが、小此木先生は形として残ってしまうことを嫌ったのだと思います。本当は電話か、あるいは直接会って私と話をしようとされたのだと思いますが、どうもすぐにはつかまらなかったようです。これも運命の歯車が狂ってしまった一因なのでしょうね」

意味深な小野の言葉を説明するかのように平松が言葉を継ぐ。

「私は小此木先生と小野先生が親しい関係にあると知りませんでした。もちろん、小此木先生が遺言を小野先生に託そうとされていたことも。だから、小野先生は本当に去年までプロジェクトについてはご存知なかったのです」

「去年まで……つまり、あの日誌を見つけるまでということですか？」

「ああ」

つまり、あの日誌を見たから神崎は小野に声をかけたのだ。それまで小野は、宏文の研究に関してはあまり詳しくなかったのだろう。

「去年の事件で、コイルドメインの深部から例の日誌と改良版電脳空間に関する資料を掘り当てるまで。それまでが非常に長かったですねえ。しかしそれが完成した今となっては、苦労した甲斐があったというものです」

神崎はそこでしみじみと言って再び説明を始めた。

「平松さんは自らの手で小此木医師の遺志を実現しようと考えられた。そこで私は彼に協力することにした。どうにか、コイルドメインなる空間を探し当て、資料を引き揚げなければ始まらない。しかし、コイルドメインとは一体何か？どうすればそこにアクセスできるか？

先ほどの平松さんのお話とも重なりますが、まず私たちは情報収集から始めました。メガマスには旧コイルス社から移籍した者も多

い。残念ながらそこに技術者はいなかったわけですが、しかし首尾は上々。平松さんが元々コイルス社の人間ともコネを持っていたことも手伝って、とりあえず彼らから基本的な情報を集めることはできました。イマーゴや暗号技術などもそこに含まれます。

ところが、そこで私は妙な噂を耳にします。どうやら彼ら旧コイルス一派は、イマーゴの不具合を軸にメガマスを脅すつもりでいる。そのためには、コイルドメインに封印されたコイルスの資料が必要である。

つまり、彼ら自身もコイルドメインへのアクセス方法を模索していたのです。しかも、彼らの手先として現場で動き回っていたのは、誰あろう猫目技師の息子、宗助君だった。彼は父の無念を晴らすべく、我がメガマスに復讐を果たそうとしていた。その揺るぎない原動力を、私は利用しない手はないと思った。我々が苦労して集めたイマーゴの研究資料を彼らに小出しにし、反乱を煽ったんです。

そんなまわりくどいことをした理由は2つ。1つは、コイルドメインへの道を開かせるため。どうやらコイルドメインを開く鍵はイマーゴを持つ子どものようで、そのためには宗助君のような少年の方が任務遂行はしやすいと踏みました。実際彼はよくやってくれましたよ。

理由の2つ目は、旧コイルス一派を掃討するため。彼らはメガマスに服従したとはいえ、社に内在する火種には変わりない。反乱が成功する見込みが高まれば、それに靡く者もあぶり出せる。彼らをギリギリまで泳がせて最後にひねり潰す。そういう作戦だったんです」

予想外の話が飛び出し、これまでずっと黙っていた玉子は思わず声を上げた。

「つまり、宗助を影で動かしていたのは、元を辿っていけばアナタだったということですか！？宗助が私をけしかけた時も、イサコをけしかけた時も。すべては、アナタ方がコイルドメインの深部に直結した改良版電脳空間から資料を引き揚げるため」

「私は細かい指示など出していません。彼を動かしたというより、私は彼を利用していたに過ぎない。彼が絡んで起きてしまった事故など、私が関知するところではありません。すべては彼の意志のもとに起きてしまった悲劇です。私を非難するのは筋違いというものですよ」

その時の余裕たっぷりの神崎の顔に、玉子はつばをかけてやりたいような気分になった。子どもの集団失神が起こってしまった自分の時も大変な事態となったが、一連の事故の中ではカンナが亡くなり、イサコが傷つき、ヤサコは消されそうになった。確かにそれらは神崎にとって自分の知るところではないかもしれない。しかし彼の野望は一連の事故と密接につながっている。その男が一連の事故に対して責任を負う素振りも見せない。ハラケンの人格をＡＩとすり替えたことといい、この男は人の心を持たないのだろうと、玉子は怒りを通り越して憐れみすら覚えた。

「ふざけるな！イマーゴのが原因で人が一人亡くなってしまったんだぞ！そんな昔からイマーゴについて把握していたのなら、すぐに公表しようと思わなかったのか！？隠したところで、どのみち使い道のない技術であると思ってたんだろ！？」

しかしイサコは純粋だった。玉子が人じゃないと思った神崎に対して、涙ながらに訴えかける。むしろそれで苦い顔つきになったのは平松の方だ。

「……それはアナタの言う通りです。むしろ、私はアナタ側の立場だった」

それに対する神崎の返答は意外なものだった。

「なんだと？」

「４年前、原川玉子さんが起こしてしまった事故で子ども達が集団失神した時、私はすぐにその原因をイマーゴと突き止めました。アナタの言う通り、この技術は隠しても仕方ないと思いましたし、まだあの時点なら不具合を公表してもメガマスが被るダメージは小さかった。だから、私はイマーゴについては世間に公表しても良いか

と考えていました。
　ところが、今は排除されてしまった旧幹部のおバカさん達は、頑なにメガネの不具合を隠し通そうとしました。その時点で私は彼らとは袂を分ちましたよ。その後、ついにイマーゴで死亡事故が起こってしまい、彼らはとうとう退くに退けなくなった。交通事故の隠蔽工作は、そんな彼らの哀れな抵抗だったわけです。不都合というのは、いつかは露見するもの。つまり、秘密というものは保持することよりも、暴露するタイミングを見極めることこそが大切というわけですね。これ、私の持論です」
　だから、旧幹部の中で唯一神崎だけは交通事故の隠蔽工作との関連を見いだせなかった。その理由を一郎は理解した。
「すべての事故はアナタのあずかり知らぬところで起こってしまったもの。だから、アナタはこれらの件について一切の責任を取るつもりはない？」
「それは先ほど申した通りです。我々が改良版電脳空間の資料を引き揚げるために行った一連の工作が、それらの事故の原因に帰結していることは疑いようもありませんが、それならそれで、我々が責任をもって“ＳＰＲＩＮＧ”を完成させることがせめてもの罪滅ぼしになると思っています。それに、旧コイルス一派掃討作戦もうまくいきましたからね。その時は小此木さん、アナタの功績にもなったのだから文句はないでしょう？」
　確かに一郎は夏の事件が収束する半年ほど前から、内部監査として旧コイルス一派の動向を探っていた。そして、一連の事件と彼らの関係を見いだしたことで、彼らは処分されることとなった。一郎が本社に取り立てられるようになったのは、その成果が認められたところが大きい。しかし、そのすべてが神崎の描いた筋書き通りのものだったとしたら、一郎も神崎に利用されていたに過ぎない。さらに彼が一郎に手柄を取らせたことで恩を売ろうとしているのだとしたら、これほど不愉快な話もない。
「旧コイルス一派の動向には、我々も随分と心を砕いたんですよ。

その作戦のために、我々も欺く必要があったのですか？」
「あったからそうしたんです。敵をだますにはまず味方からですよ。狡猾な彼らをあぶり出すために、私こそ心を砕いたのです。結果、社には平和が訪れた。感謝されこそすれ、責められる筋合いなどありません」
訊ねた桝田も、そして一郎達も、神崎の言うことでいちいち腹を立てなくなっていた。それはこの男と対するにあたって、ムダな感情な浪費としか思えなくなっていたからだ。
「アンタらがどんな経緯で改良版電脳空間の資料を引き揚げたのかは理解した。次の段階に話を進めようじゃないか。その後、アンタらはプロジェクトをどんな風に完成させていったんだ？小野先生、そして細川技師がここから絡んでくるはずだよな？」
大谷が前に進み出て言った。
「そうですね。ここからがもっとも重要なところです。アナタ達もおそらくは知らない、あの実験についても説明しましょう」
「あの実験？」
すると神崎はもったいぶるように間を置き、自分の胸ポケットを探った。何をするかと思えば、本社の幹部達の急かすような視線も意に介せず、彼は取り出した葉巻に火をつけて一服をし始めた。

「去年の夏の事件で口を開けたコイルドメインに潜り込み、アナタ方は父の封印した改良版電脳空間についての資料と、日誌を見つけたんですよね？」

　葉巻を吸いながらなかなか話を切り出そうとしない神崎に、一郎が確認する。

「ええ。資料と日誌、両方を入手しました。日誌の方は平松さんの強い希望で、コピーをとって原本は残しておきましたけどね。いつか小此木先生の家族が見つけるかもしれないとおっしゃるものですから。本当に見つけるとは、私も思いませんでしたがね」

　一郎達があの空間にアクセスできたのはかなり幸運だと言えた。コイルドメインへのアクセスパスワードを知るイサコと、その深部へのアクセスパスワードを持っていた大谷がその場にいなければ、おそらく見つけられなかっただろう。

「そしてアナタ方は小野先生にコンタクトをとった。日誌を読んだところ、父が小野先生に何らかの資料を渡していた可能性が高いと踏んで。しかし先ほどの話によれば、小野先生はその時初めて父の研究について知った。そこまでの流れは間違いないですね？」

「その通りです。苦労して引き揚げた小此木先生の資料には、改良版電脳空間の完成に向けての具体的な方法が示されていませんでした。そもそも小此木先生が描いた改良版電脳空間など、本当に実現するのかとその時は思ったものです。事態が好転したのは、私が小野先生とお会いした時です。そう、小野先生は偶然にも、改良版電脳空間に近い空間を完成させる技術を論文で目にしたことがあった」

「その論文とは、僕の卒論だったわけですね」

　直樹がそう言った時、やはりそうだったのかとイサコは思った。

宏文の日誌にはこのようにあった。“（改良版電脳空間について）コイルスの研究にも関わらなかった一切の先入観を持たない技術者

なら、ゼロからそれを構築できる可能性もあるかもしれない”、と。つまり直樹ははからずも、宏文の予感を的中させることになったのだ。

小野は頷いて答えた。

「奇妙な巡り合わせだと思いました。私は君の論文を見た時はこのように評価しましたね。“実現不可能ではあるが、将来的に一縷の可能性もある”と。あれが3年前の話ですか。あの時私が猫目技師と小此木先生の研究を知っていれば、君の進路は大きく変わっていたかもしれません。今更ですが、君をプロジェクトの末端として扱い、そのまま捨ててしまったことは本当に申し訳なく思っています」

「いいんです。自業自得だと思っています。先生が原川君の体を使って実験を行ったことは、失望しましたけどね」

「……それはそうでしょうね」

そこで俯いた小野には、神崎と違って罪悪感というものはあるらしい。それに少し安堵した直樹は続けて訊ねた。

「先生はやはり猫目技師と小此木医師の研究を詳しくは知らなかったのですね。しかし、僕が卒論の相談に行った時は……」

「アナタへのアドバイスは、既存の空間技術を元にしたものに過ぎません。実現する見込みのないまったく新しい空間技術を提唱したアナタに、私は当時失望しなかったと言えば嘘になります。しかし今思うと、やはりアナタの才能はたぐいまれなものがあったということでしょうね。だからこそ私はアナタをねたみ、突き放した。この研究を、自分のだけのものにするために、ね」

直樹は言葉を失ったようだった。穏やかな物腰であるこの研究者でさえも、そのように野心を持つんだなとイサコはその時思った。誰しもが自分を認められたい。直樹が彼らに従っていた理由もそれだ。そのためには、人のアイデアをも平気で奪ってしまう。昔、メガマスがそうしたように。

小野と直樹のやり取りが終わったのを見て、神崎が再び説明を始める。

「その論文と猫目技師と小此木医師の研究資料、その2つが揃ってようやく“新空間計画”は動き出すはずだった。しかし、万全を期すために私たちはもう1手打つことにした。旧コイルス社のエンジニアで猫目技師の右腕とも呼ばれた男、偽名は“香川昭大”、本名“細川亮成”の招聘です。

“香川”君はその時、アプリコット社のとある研究施設にいました。おそらくコイルス買収後、メガマスの監視から逃れるために名前を変えて全国を転々しながら、外資系企業の庇護下に潜り込んだというところでしょう。国内に敵なしのメガマスの圧力に耐えられるのは、それは外資しかないですからね。

しかし、彼を引き入れるために、我々はアプリコット社を脅したわけではありません。これも偶然ながら、小野先生がアプリコット社のエンジニアの技術指導を行っていた関係で、“香川”君のことも知っていらしたのですから」

「アプリコット社のエンジニアの中で最も優秀な人物を神崎さんに紹介したまでです。私も彼については詳しく知りませんでしたが、気になって彼の素性を調べた神崎さんの報告を聞いて驚きました。それもそのはず。彼は旧コイルス社に君臨した天才の右腕だったのですから」

「それが判明してからは即断でした。例によって、メガマス社の旧コイルスの火種は完全に消えましたからね。彼が連中と結びついておかしなことをやらかす心配はないと思ったんです。何より、間近で天才ふたりの研究を見届けた人物なら、必ず新空間設計に貢献してくれると思いましたので」

神崎はため息のようにそこで大きく煙を吐いた。

「その彼が、アナタ方を裏切って今回の事件を起こした。しかし、猫目技師の右腕だったという彼がメガマスに協力する理由は？まさか、その時から家族の復讐を？」

桝田はそこで思い出した。一連の事件の犯人は、桐野沙織の父親。その沙織は去年交通事故に遭った詩織の妹で、恵の娘である。既に

離婚しているとはいえ、元妻と娘が巻き込まれた事故の真相を知っていたとしたら、その復讐を目論んでもおかしくはない。

「そうです。最初は我々への協力をかなり渋っていたんですけどね。何度目かの交渉でようやく折れてくれましたよ。あれも今思えば演技だったんでしょうね。初めから彼は、我々を嵌めるつもりでプロジェクトに協力したんです」

「その細川さんは、金沢での交通事故の真相を知っていたんですか？メガマスの内部でも、一部の人しか知らないような秘密だったと思うんですけど」

訊ねたのはイサコだった。あの交通事故に関しては、当事者であるはずの金沢支社空間設計室にいた酒井友和にさえ事実は伏せられていたのだ。外部の人間が知り得る話ではない。

「彼が真相を知っているはずがありません。しかし、あの事故に関して我々メガマスに落ち度があったのだと彼が思い込んでもおかしくはありません。あの事故はまだイマーゴを旧幹部達がひた隠しにしていた頃に起こったものです。その時は全国的に電脳ナビ搭載車の事故が相次いでいましたが、世間的にはその原因は不明とされており、せいぜいはねられた側の不注意で片付けられていましたからね。ところが細川君は、一連の事故の真相に気付いていたんですよ」

「なるほど。彼は元コイルスの技師。その原因がイマーゴであることは即座にわかったはずだし、その存在をメガマスがひた隠しにしていることも知っていた。しかし身の安全を考えると、声を大にしてそれを主張することも叶わなかった。それは他のコイルスの技師達にも言えることですよね。そして彼は、自分の家族が電脳ナビ搭載車にはねられたことを知った」

一郎の言う通りだろうと神崎は頷いてみせる。そこで桝田が当時の細川の心中を思うように言った。

「彼は身を引き裂くような思いをしたことでしょう。それをわかっていながら、アナタ方は彼にプロジェクトへの協力を要請した。無神経にもほどがあります」

「いやいや。彼は我々を裏切りましたが、さりとて新空間プロジェクト自体に嫌悪はしていなかったでしょう。私が見ている限り、彼はかなりの情熱を持って取り組んでいました。ね？小野先生」
「……まあ、その情熱がどこに向けられていたのかよくわかりませんが、確かにそうでしたね。要は、彼は事故に遭った詩織さんのために新空間を設計したのだと神崎さんはお思いなのでしょう？だからこそ、彼が我々を裏切らないとアナタは踏んでいた」
小野の言葉を聞いて、イサコはあることを思い出した。それはヤサコが廃ビル事件でミチコに会った時、新空間のことを“ある少女のために生み出された空間”とミチコが言っていたという話だ。イサコがミチコに会った時は、自身が再び生まれた理由を“詩織とこの世界を守るため”とも言っていた。これらは、細川技師がなぜプロジェクトに協力し、そしてなぜ彼らを裏切ったのかという話に密接につながってくるのだろうとイサコは思った。
「そうです。彼の行動のすべては詩織さんのためだと思っていました。詩織さんをずっと電脳空間で暮らさせてあげること。それが彼の望みだと」
「なんでそうなる？詩織さんが事故に遭った時のことはよくわからんが、細川は彼女に昔のイサコの時のような治療を受けさせてやるつもりだったんじゃないのか？一生を電脳空間で過ごさせるなんて、実の親が考えることじゃないだろ」
「さあ。彼の考えていたことはわかりかねます。ただ、彼女の母である恵さんが助かる見込みはないとのことです。それも大きな理由の1つなんじゃないですか？」
「……恵さんは脳死状態にあるんですよね？」
イサコがそこで訊ねると、神崎は驚いたような表情を作った。
「どうしてそれを？」
「ミチコから聞きました」
神崎は口の中で「ミチコ」と反芻すると、そこで鼻で笑うように言った。

「そうですか。なんでミチコがそんなことを知っているんでしょうかねえ。まあ、その通りですよ。恵さんは、延命装置がかろうじて命をつないでいる状態です。詩織さんが母と一緒に暮らせる日は、現実世界では来ないと思います」

「だから細川技師は新空間で恵さんの幻影を作りだし、詩織さんはそこで母と一生暮らさせることにした……おかしいでしょう？詩織さんの体は回復しているんですよね？それなら、彼女は現実世界で生きるべきなんじゃないですか？たとえ母がいなくても、その死を乗り越えるべきなんじゃないですか？」

「私に言われても。細川君自身が判断したことですから」

困ったように返す神崎に、イサコはさらに詰め寄る。

「それに、現実世界には妹のサオリが取り残されています。彼女を置いて詩織さんを電脳空間で生きさせるなんて……サオリは、姉と母の帰りを待っています。母の恵さんはダメかもしれませんが、せめて、姉である詩織さんとは再会させてあげたいんです」

金沢でのサオリの健気な行動を見ていたイサコは、その話を聞いてあんまりだと思っていた。サオリは母と姉と再会するために神崎の言いなりになって、自分の感情を押し殺して忠実に任務をこなしていた。なのに、その2人が帰ってこないと知ったら、サオリはどう思うだろうか。今は泣くこともできないサオリのその気持ちを思うと、イサコは流れる涙を押しとどめることができなかった。

「……ムリですよ」

「え？」

イサコは一瞬、その言葉が誰のものなのかわからなかった。

「詩織さんと沙織さんを再会させることは不可能です。なぜなら……」

次に声を発したのが小野だったので、今の言葉も小野のものだったのだとイサコは理解する。しかし、そこで神崎が彼をさえぎった。

「小野先生。ここで言ってしまうのですか？順序よく説明した方がいいと思いますけど」

「……忍びないんですよ。これ以上、このお嬢さんの純粋な気持ちをもてあそびたくない。引っ張るだけ引っ張ってじらそうとする、アナタとは違って」
「人のことを悪趣味みたいにおっしゃいますね」
「事実そうでしょう」
何やらプロジェクトチーム同士で内輪揉めが始まったかと思うと、それまでずっと椅子に座って腕を組み、黙り込んでいた金沢支社長が口を開いた。
「もういい神崎。私からそのことについて説明する」
桝田や幹部達が一斉にそちらを向く。
「わざわざ支社長にお手間を取らせるわけにはいきませんよ。わかりました。その件についても私から」
「いいと言ってるだろう。お前が説明すると余計な恨みを買ってしまう。プロジェクトの責任者は私だ。これ以上心証を悪くするな」
支社長に言われた神崎はため息をつくようにして笑うと、大人しく立ち位置を支社長に譲った。代わってイサコ達の前に立った支社長は、低い静かな声で告げた。
「落ち着いて聞いてほしい。桐野沙織という人間は、本当は存在しないんだ。だから、彼女を詩織さんと会わせることはできない」
イサコには彼の言っている意味がわからなかった。

「なに、言ってるんですか？サオリは私の友達、になれたのかどうかはわかりませんが、共に金沢で戦った仲間です。冗談はやめてください」

イサコが言葉を震わせながら言ったが、それでも支社長の神妙な表情は揺るがない。その時、イサコの隣にいた大谷は支社長の言葉の意味がわかってしまった。

「おい。まさかアンタ、サオリもＡＩだったって言いたいのか？」

「サオリが、ＡＩ？それは彼女も記憶を失ったから？」

こちらもサオリと共に戦った玉子が大谷の方を見る。答えたのは支社長だった。

「いや。沙織というＡＩを起動したのは４月初旬の話だ。彼女が記憶を失ったのは、こちらの操作でデータを抹消したからだ」

「あり得ない。サオリは血の通った人間だった。あらゆる葛藤を抱えながらも任務をこなして、最後には私を救う為にすべてを打ち明けた心優しい少女だ。そのサオリがＡＩなはずがない……だったら、本物のサオリはどこにいるんですか？彼女もまた新空間の中にいるんですか？」

「言っているように、桐野沙織という人間は存在しない。君が沙織と思い込んでいる人物の肉体は、実は詩織さんのものなんだ。そう、桐野恵さんに子どもは１人しかいない。詩織さんは元々ひとりっ子だ」

支社長の言葉の意味を徐々に噛み砕くうちに、イサコは言葉を失いつつあった。ただ茫然と、そして小さく首を振るわせる。

「てめえら、それはどういうことだ？もう温厚なこのオレもさすがにぶち切れたぞ。一体何人の罪のない子ども達の体を実験台にしやがんだ！それだけじゃない！その沙織と関わった人間の心も踏みにじりやがって。どう落とし前つけるつもりだ！」

堪忍袋の緒が切れた大谷は、今にも支社長に掴み掛かりそうな勢いだった。それを直樹と久美子の警察コンビが食い止める。
「お怒りになるのはもっともだが、話を聞いてもらいたい。これはプロジェクトの完成のために必要な実験だった。そして、君たちの反応を見るかぎり、我々は狙い通りの結果を得られたのだとわかった」
「んだと！」
「落ち着いてください！」
直樹は大谷を必死に押さえながら支社長の方を向いた。
「つまりあれですか。その沙織さんという方はＡＩでしたが、彼女に関わった人は彼女を人間と信じて疑わなかった。この結果によって、人の人格をＡＩと入れ替えるというプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”は実現に向けて大きく前進したということですね。これからは、誰が生身の脳で、誰が機械脳なのか判別できない時代が来るということですか？」
「……そういうことだ」
「ではなぜ、原川君のＡＩに彼の記憶を書き込まなかったのですか？ＡＩと本人が入れ替わっても、それが周りの人に気付かれないことは証明されていたんですよね？」
「原川君と桐野詩織さんは境遇が違います」
直樹の質問に答えたのは神崎だった。
「出て来るなと言ったはずだ」
「真摯にお答えするつもりです。支社長はこの件に関して詳しくは御存知ないでしょう。実験を主導したのはこの私なんですから」
支社長は神崎をじろりと見やったが、彼に少しは反省の色が見えたのでそのまま説明させることにした。
「境遇が違うとは？」
「ええ。まず原川君の方ですが、彼を取り巻く環境は色々と複雑でね。幼なじみを事故で亡くしたり、去年の事件に巻き込まれたりと、ＡＩで再現するには何とも難しい人格だったんですよ。いっそのこ

と、記憶喪失にした方がボロは出ないかなと思ったんです。彼にはアナタ達のような電脳に精通する取り巻きが多かったですしね。

一方で桐野詩織さんの場合、彼女の関わりのある人間が周りに少なかったんですよ。母は脳死状態、父は表面上行方知れずで身よりもなく、彼女自身あまり友達も多くはないようでしたからね。ちなみに細川君自身は、彼女の父親であることは隠していました。だから表立って彼女と接触することはありませんでした。

つまり、彼女の人格を入れ替えたとしても、それに気付く人はまずいなかったんですよ。それはＡＩの実験をするのには最適でした。私たちは詩織さんの体を使って、様々な実験を繰り返しました」

その後の話を聞きたくないとイサコは顔を背けるが、真実に向き合わなくてはならないという思いもあった。神崎とは目を合わさず、イサコは耳だけを彼の話に傾けた。

「まず我々は、桐野詩織さん本人の記憶を流し込んだＡＩを埋め込みました。詩織さんの肉体に詩織さんの人工知能を搭載したというわけです。無論、詩織さん自身の意識は新空間の中へ送り込んで。

その実験はうまくはいったものの、詩織さんは勘の鋭い子で、どうやら本当の自分の意識がある新空間の気配が察知できたようです。そこには母の幻影もあるわけですから、彼女のＡＩは必然的にその気配のする場所にいることを好みました」

「それはいつの話ですか？」

「３月末頃の話です」

訊ねた直樹は神崎の返答に納得したように頷いた。

「なるほど。つまり、その時点で彼女は大黒市にいた。折しも、その時はこの僕が新空間の実験をしていて、市内には二カ所、新空間に近い場所が存在した。一方が４月１日の事件の舞台となった廃ビルで、もう一方は駅向こうにある廃工場」

ヤサコが廃工場で桐野詩織に会ったという話をイサコは思い出した。ヤサコとフミエが彼女に会ったというのはその時だ。

「そう。アナタにはこのことについて話してしませんでしたから、

気づかれる前に彼女は遠ざけましたけどね」
「おかしいと思ったんです。いつも同じ子が廃工場の周りをうろうろしていたものですから」
直樹は詩織の存在には気付いていたようだった。もちろん、空間の実験を影で行っていた立場上、彼女に干渉したりはしなかった。
神崎が説明を再開する。
「その次に我々が考えたのは、まるっきり別人のＡＩを搭載すればどうなるかというものでした。桐野詩織のものとはまったく別の記憶を流しこめば、彼女はどのような行動をとるかを観察するために。ただ、いきなり赤の他人では飛躍し過ぎかなと思いまして、存在しない姉妹、つまり双子の妹という設定にしてはどうかと思ったんです。そこで生まれたのが桐野沙織という人格です。
我々は彼女の戸籍を偽造し、責任を持って金沢の中学校に通わせようとしていました。桐野詩織本人のＡＩでも良かったのですが、まあ、彼女は学校の近くの黒井交差点で車にはねられたわけですからね。そのことをクラスメートが知れば、ちょっとした騒ぎになるかなと思いまして、彼女に静かな学園生活を送らせてあげるために、あえてその詩織さんの双子の妹の沙織として彼女を入学させたのです。ただ、入学式の数日前にちょっとした事件があって、計画は加筆修正を迫られたのですが」
「ちょっとした事件？入学式の少し前ということは、そうか、黒井地区での空間事故か」
大谷が思い出したように確認する。神崎もそれに頷いてみせた。
「ええ。あの事故の原因はミチコでして、空間の安定をはかるためには新暗号の設置が必要になったんです。しかし、あの時点ではプロジェクトについてまだ表沙汰にしてはいけませんでした。どうにか、アナタ方本社に悟られない方法で、空間事故を収束させなければならなかったのです。その時私が思い付いたのは、沙織さんを利用する方法でした。
沙織さんには新空間制御の暗号を与えて、新空間の入り口の出現

を防ぐために反応のある場所でそれを設置してもらうことにしたのです。同時にその行動は、プロジェクトの内容を必死に掴もうとする本社の目くらましになったわけです。アナタ方は最初、彼女の行動をかつての天沢さんに重ねたはずですよね？」

神崎に訊ねられた一郎と玉子は、その通りだと頷くしかなかった。イサコや大谷も含めて、完全に彼に踊らされたわけだ。

「しかし、ＡＩ沙織さんにしてみれば我々の指示に従う義理などない。彼女を従わせるためには、彼女の記憶を少しいじる必要がありました。そう、事故に遭ったという自分の母と姉の身は我々の手中にある。我々の言うことを聞く事が、彼女達を救うことにつながる、とね……その時参考にしたのは、天沢さん。他ならぬアナタでした。意味はわかりますね？」

神崎はイサコを見据えた。

「……私はかつて、兄が生きていると信じ込まされて、宗助の言うことに盲目的に従っていた。サオリをアンタらの手駒にするために、彼女を私と同じような状況に追い込んだのか」

「クズが」

イサコも大谷も神崎に食って掛かる気力はなかった。あまりにサオリが哀れ過ぎて、イサコは流す涙も枯れていた。彼女が救おうとしていたのは脳死状態で助かる見込みのない母、そして、詩織という本来の自分自身だったのだ。

「しかし、サオリさんは最後にすべてを天沢くんに打ち明けた。イベント事故の後、彼女は我々本社の庇護のもとから脱走しましたが、それはアナタ方の仕業だったわけですか？」

「そうです。彼女にぺらぺらしゃべられるのはまずいですからね。ＡＩには機密事項をしゃべらせないようにし、折を見て逃げ出すように設定したのです。後は我々が保護したのですが、彼女にはもう利用価値はありませんでしたからね。すべての記憶を抹消し、身柄は弁天の我々が使っている研究所に置いておきました。ところが、再び彼女は脱走した。その直後、例の廃工場でアナタ方に保護され

たというわけですよ」
「記憶を抹消しただと？だから、サオリも記憶を失っていたのか……」
イサコはとうとうその場にへたり込んでしまった。サオリの記憶がすべて抹消されたということは、イサコとの間で築き上げた絆が消失してしまったということだ。金沢での苦難を共に乗り越えて、事件を終わらせた後は改めて友達としてサオリと歩んでいこうと思っていたイサコは、もうこれ以上真実と向き合うことに耐えきれなくなっていた。
「イサコ！しっかりしろ！おい！サオリの記憶は復旧できるのか！？」
玉子がイサコを介抱しながらするどい形相で神崎をにらみつける。
「……できないこともないですが、それは桐野詩織という人格を引き換えにすることになりますよ。詩織さんを一生電脳空間にいさせてもいいなら、そのくらいはしてもいいですが」
神崎は意外そうな顔で、そして彼なりに真剣な表情で答えた。玉子はそれに言葉が詰まってしまう。本当なら、桐野詩織を現実世界で生きさせるべきだ。しかし、そのためにはサオリという人格とはもう会えないということになる。
「彼女がアンタらの元からも脱走したのはなぜだ？」
そこで大谷が訊ねた。
「それはわからないですね。おそらく細川君が何らかの手を打ったのだと思います。我々の手元に詩織さんの肉体を置いておくぐらいなら、自分の元に来させようとしたんじゃないですかね。その途中で彼女はアナタ方に発見されて病院に運ばれた。そうして細川君も彼女に手が出せなくなった、というのが私の推理です」
彼らにわからないことは、おそらくわからないのだろうと大谷は引き下がった。そのこと自体はあまり問題ではない。それよりも、子ども達の体を使って好き放題に実験をした、プロジェクトチームをどうにか裁けないものかと大谷は考えていた。

「おい、電脳犯罪対策係。こいつらを何らかの罪で立件できないのか？あまりにやってることが非人道的だろ」
「僕もそうしたいのですが、おそらく現行法でこの方達を罪に問うことはできないと思います」
直樹は力なく首を横に振り、久美子は歯がゆそうな表情を見せる。電脳法自体の整備が遅れている今、この特殊な事態で彼らの所行を立件することはほぼ不可能なのだ。
「ついでに、もう1つの実験についてもお話します。このことはサオリさんの実験にも少し絡んできます」
「”ついでに”ってなんだ！他にも人格をＡＩとすり替えた人間がいるのか！」
怒りを通り越して呆れ、それを通り越して再び怒りに回帰したように大谷は叫んだ。
「言い方が悪かったですね。今のは訂正します。我々がＡＩによるすり替えの実験を行った被験者は3名です。原川君と桐野詩織さんは説明した通り。このうち、原川君の実験は時期的に最も遅く、またその趣旨は前の2件とは違うものでした」
「趣旨が違う？」
「ええ。ＡＩが現実の人間社会に飛び込んでも当面気付かれる心配はないというのは、詩織さんの実験と、それと同時並行で行ったもう一方の実験の結果によって導かれた結論です。原川君の場合はその手順の簡略化の実験、つまり、量子回路を体内に埋め込むのではなく、表皮に貼付けるだけで、遜色なくシステムが起動できるかというものでした。詩織さんともう一方は、手術をして体内に量子回路を埋め込んでありました。しかしそれでは手順として面倒なので、量子回路は表皮に貼付けるだけでも機能するように調整したんですよ。アナタ方も気付いたかもしれませんが、原川君の首筋にはその量子回路が絆創膏によって貼付けられています」
確かにそれはイサコが発見し、一郎達も確認した。手順の簡略化と言いながら、それは応急的な処置のつもりなのだろうと大谷など

は考えた。その人間を一生ＡＩとして生きさせるなら、量子回路は体内に埋め込んだ方が安定するはずである。そして詩織は既にその手術が施されたのだという。

「じゃあ、そのもう一方っていうのは誰だ？」

「もう少し話しを聞いてください。我々はＡＩを生身の人体に埋め込むことに成功しました。そしてそれは必然的に、ある可能性を我々に模索させることになったのです。それが何かわかりますか？」

「知らん。とっとと話を進めろ」

再び神崎のじらしが始まったので大谷は苛立たしげに先を促す。

「つれないですね。つまり、その人間の意志をコントロールすることが可能になったということです。これを体系的に完成させれば、日常生活で役立つのはもちろんのこと、軍事的な利用価値が生まれてくることになるのです。

では、ＡＩの行動をこちらの思うままに操るにはどうすればいいか。我々は２つの方法を考えました。１つは、直接ＡＩにその人間の行動をプログラミングすること。これはゲームで使われるＡＩに近いやり方ですね。ＲＰＧなどの敵キャラに、主人公を攻撃して倒しなさいとプログラミングするようなものです。

もう１つはもっと人間的な方法で、ＡＩにあるシチュエーションを背負わせて、その行動をとらざるを得ないように追い込むというものです。そう、我々はこの後者の方法で、沙織さんを意のままに操ったわけです」

神崎の言わんとしていることはイサコでもなんとなく理解できた。サオリは、事故に遭った母と姉が生きていて、その身が神崎の手中にあると思い込まされたからこそ彼に従っていた。プロジェクトチームは、その仮想のシチュエーションをプログラミングで沙織というＡＩに流し込んだのだ。

神崎は話を進める。

「しかし、両方のやり方とも一長一短ありましてね。

まず沙織さんの場合の後者ですが、ご存知の通り彼女は最後の最

後に私の言いつけを破り、天沢さんに真実を打ち明けました。つまり、このやり方で絶対的な服従をＡＩに強いることはできないということです。これは彼女のＡＩが非常に人間らしく出来上がった裏返しとして喜んでもいいのですが、私の目指していたものとは違ったので少し残念ではありました。

次に前者ですが、今度は命令に絶対服従過ぎて融通が利かないんです。それの何が都合が悪いのかと言うと、そのＡＩの言動があまりに不自然になりすぎるんですよ。

そう、このやり方で私達はある人物を操っていました。その人こそ3人目のＡＩです。そして、そのある人物は見事に私の思惑通りの働きをしてくれました。が、やはり言動がおかしいという報告が上がってきています。元々言動がおかしい人でしたから、彼がＡＩと気付いた人はいませんがね」

「元々言動のおかしい人間？彼？」

神崎がこぼした言葉から大谷がその3人目の人物を推理する。

「アナタ方もよく知っている方ですよ。彼を知っている方なら、『前までの彼なら絶対にこんなことは言わないのに』と思ったでしょうね。色々思い出してくださいよ。先月の事件とか」

すると神崎はイサコや玉子の方を見やって、心なしか表情を緩めた。ヒントを出して、解答者を正解に導こうとする出題者の顔だった。

「言動のおかしい人物？誰でしょう？」

なんとなく直樹は大谷の顔を見た。もちろん彼は否定する。

「んなわけねえだろ」

「言動がおかしいのは間違いないけどね」

久美子も大谷のことを怪しい人間だと思っていたが、彼ではないと思う。そもそも、ここにいる全員彼の素性をよく知らない。

全員が長考する沈黙の中、玉子がふと声を上げた。

「まさか……」

神崎はその玉子の表情を見て今度こそにやりとする。そのことに

気付くのは、彼女がもっとも早いだろうと予期していたかのように。
「わかったのか、玉子君？」
一郎を含め、その場の全員の視線が玉子に集まる。玉子はまだ信じられないというような表情で、息づかいのような静かな声で言った。
「……宗助」

「正解です。3人目のＡＩは、猫目宗助君です」

神崎がそう言うと、会議室に再び大きなざわめきが起こった。

「どういうことなんですか?彼はメガマスとは敵対関係にあったはず。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”が形になった時には、既に例の廃ビル事件の準備を進めていたのではないですか?」

「そうです。宗助君の人格をＡＩにすり替えたのは、彼が決起の準備のために大黒入りした時です。その後はすべて神崎さんが用意した筋書き通りに事件は展開したんですよ」

直樹の質問に小野が答えるも、真相は誰にも想像できなかった。それを見越したように、神崎が説明を始める。

「去年の夏の事件で、彼が失踪したところから始めた方がわかりやすいでしょう。

彼は大黒市から姿を消した後、新東京に本社を構える株式会社サイバーゲートウェイ（ＣＧＷ）に流れ着きました。皆さんも御存知の通り、あの企業は我が社とはライバル関係にあり、国内では数少ない電子産業における対抗馬とも言えます。そして、旧コイルスの技師達の多くがその庇護のもとにあったのです。彼らが我が社を憎んでいたとすれば、そのライバル会社を頼ったというのは必然的なことですよね。

宗助君が彼らに拾われたのは偶然ではなく、そんな彼らの手引きがあったのです。偉大なる彼の父に対する尊敬と、メガマスを潰そうと目論んだ彼自身への賞賛をもって、ＣＧＷの旧コイルス残党は彼をかくまったのでしょう。メガマスに追われる身であり、厄介者であるはずの宗助君をＣＧＷの上層部が迎え入れたのも、ひとえに彼を利用して我が社になんらかの攻撃を仕掛けようと画策したからだと思います。

私は各所に配していた諜報員によって、彼のその後の動向把握し

ていました。折しも、我々はメガマス内部に存在したコイルス一派を掃討したところで、一息ついていた時です。彼がまたＣＧＷのコイルス残党と結びついたのは難儀なことでした。もう１度彼を使ってその火種を消すことはできないものかと私は考えたのです。そこで一役買ってくれたのが細川君です」

ここでも彼が絡んで来るのかと一同は思った。

「彼もまた旧コイルスの技師。そのこと自体は彼も認めていました。そこで宗助君のことを相談したところ、力を貸してくれると言ってくれたのです。

彼はうまいことＣＧＷのコイルス残党と連絡をとり、こう言いました。『自分は素性を偽ってメガマスの懐に潜り込むことに成功した。メガマスの動向は逐一そちらに報告する』とね。ＣＧＷ側は彼の協力に泣いて喜んだことでしょう。まさか猫目技師の右腕だった彼が、スパイとして自分たちに協力してくれるとは思わなかったでしょうからね。細川技師というだけで、向こうは彼のことをすっかり信用してくれました。私は彼を通じてＣＧＷの動きを操っていたのです」

「しかし、それは細川技師にとっては旧友に対する裏切り。なぜ彼は旧コイルスではなく、アナタ方に協力を？」

桝田は純粋に疑問に思った。

「細川君が我が社への復讐を考えていたのだとしたら、単純に成功する見込みの高い道を選んだのだと思います。彼にとっては、新空間計画を完成させる方が都合が良かったのでしょう。ＣＧＷのコイルス残党は、新空間計画への障害になりかねない。だから細川君は、進んで彼らを潰すのに協力してくれたのだと思います」

「しかし、細川技師にも猫目技師への尊敬があったはずです。その息子である宗助君を利用して旧コイルス一派を潰そうとしたなんて」

「父を尊敬していたと言っても、その息子というだけで同じ感情を抱くわけではありません。事実細川君は、夏の事件における宗助君のやり方を“幼稚”と非難していましたからね。だからこそ、宗助

君と同じ方法で彼が我が社への復讐を目論むと私は思わなかったのです。まあ、その時の彼の言葉が本心から出たものかどうかはわかりませんがね」

少なくとも、細川技師は宗助にいい感情を持っていないことはその話からも想像できた。猫目技師を本当に尊敬していたなら、宗助がやろうとしたことを認めるはずがない。だからこそ、彼が今回の事件の首謀者であることが理解できないところなのだ。

「で、細川技師を使って猫目宗助を利用して、具体的にどうやってCGWのコイルス残党を潰そうとしたんだ？」

大谷が訊ねる。

「魚を釣るにはえさが必要です。彼らCGWを釣るえさは、本社が電脳医療補強プロジェクトで無意味に開発した、空間制御プログラムでした」

「そうか……あのプログラムをCGWに流したのは“香川”君、いや細川技師だったわけですね」

一郎は1ヶ月ほど前の本社での騒ぎを思い出す。セキュリティが万全だった本社のコンピューターから、あの膨大なデータがハッキングされたのは、内部にスパイがいるからだろうという結論に至った。それは誰あろう、そのことを一郎に真っ先に報告しに来た彼だったのだ。

「あの時は、アナタとはまあいろいろありましたね」

ハッキングの件が明らかになった直後、幹部会議で神崎は一郎の責任を追及し、本社のプロジェクトの責任者から降ろして空間管理室に戻すということもあった。一郎は神崎に散々利用されていたのだ。

「彼らCGWの計画は、空間制御プログラムを暴走させて我が社の信頼を貶めること。細川君からの情報を頼りに、宗助君が主導してその計画は進められたようです。彼らの計画もそこまでは順調だった。制御プログラムのハッキングに成功したCGWは、満を持して宗助君を実行犯として大黒に送り込んできたのです。そして我々は

彼が大黒入りしたところで、細川君経由で彼の居場所を突き止めて弁天の研究所に拉致し、彼の意識と電脳体を分離させ、かわりに量子回路を体内に埋め込んで人格をＡＩとすり替えたというわけです」

「拉致ですって？」

さすがにその言葉には警察官である直樹が黙っていなかった。

「あ、いや。言葉のあやですよ。我々は彼をお誘いし、本人の同意の上で電脳体を分離させたのです」

神崎は苦し紛れに訂正する。しかし誰もその言葉を信じてはいない。ただ、宗助本人の意識が電脳空間にあるのなら、それを確認することは叶わない上、おそらく彼らは宗助の電脳体と意識を元に戻すつもりもないはずである。

それはもはや宗助を人間として扱っていないような実験だなと誰もが思った。事故に遭って以来、意識が電脳空間にある詩織や、こちらも電脳体を連れ去られたハラケンとは違い、宗助は拉致された上に実験のためにムリヤリ電脳体分離を強いられたのだ。まさに彼は人体実験のために捕獲されたようなものだった。

ただ、詩織やハラケンとは違い、宗助自身は大きな罪を背負っている。今回もメガマスへの復讐のために大黒に戻って来たのは確かのようで、そういう意味では自業自得とも言えた。会議室の中で彼に同情する者は数少なかった。

「どうしてわざわざそんなことを？ＣＧＷの目論見を潰すのが目的なら、彼をＡＩとすり替える必要はないでしょう？」

「ありますよ。まず、彼には必ず失敗してもらわなければならなかった。そして、ＣＧＷの反乱の芽を摘むためには、彼をまた逃がすわけにもいかなかった。そう、夏の事件の所行も含めて罪を償ってもらうために、彼のことは警察に逮捕させるのが望ましかったのです。

しかし、彼は我が社の裏事情に精通し過ぎています。空間制御プログラムは元々我が社の開発した代物で、彼の口からその真実が語られれば、我が社も揺らぐことになる。つまり、すべてを彼の罪へ

となすりつける必要があったわけです。だから彼のＡＩには、空間制御プログラムの開発と、それを暴走させたのは自分自身だと言わせるようにしたんですよ。そこだけ切り取れば彼のそれ以前の発言との齟齬が生じてきます。彼のＡＩが非人間的に仕上がったのはそのためです」

元々宗助の思考が非人間的であったからそれがなし得たのだと、神崎は言いたいようだった。彼を逮捕した時の現場にいた直樹は、彼の妙な発言に対しては納得する。

「なるほど。猫目宗助をギリギリまで泳がせて、廃ビルで実際の被害まで出させたのは、我々警察を動かすためだったわけですね」

「その通りです。古い空間に連れ去られた子ども達は、細川君が制御プログラムを操作してすぐに逃がしました。あの事件では、子ども達が意識を失ったという事実を作ればそれで良かったんですよ。そうすれば宗助君の罪は確かなものとなりますからね」

「猫目宗助には共犯者がいましたよね？彼もやはり人格をＡＩに？」

「彼には何もしていません。共犯とはいえ、彼らは準備段階では別行動をとることが多かったようですし。おかげで宗助君を拉致してＡＩとすり替えても、彼は気付きませんでしたよ。さっきも言ったように、宗助君は普段から言動のおかしな人でしたからね。

ちなみにあの共犯者の福森という青年ですが、宗助君が万が一失敗した時、ＣＧＷは彼を宗助君の身代わりとして警察に突き出すつもりだったようです。取り調べで余計なことをしゃべらせないために彼は、なんの予備知識も与えられていませんでした。だから彼をＡＩとすり替える必要はなかったのですよ。

ちなみに、宗助君の身柄はアナタ方電脳犯罪対策係から刑事課に引き渡されましたよね。あれを仕組んだのは私です。アナタ方は葦原カンナの交通事故と絡めて旧幹部達の仕業ではないかと思っていたようですが」

なるほどと直樹は思う。宗助にはどれだけ上層部とかけあっても取り調べをさせてもらえなかった。その理由を直樹達は、カンナの

交通事故の真相を知る彼に交通事故再調査班が接触するのを、旧幹部達が嫌ったからではないかと踏んでいた。しかし、あれは神崎の仕業だったというのだ。

「つまり、猫目宗助がＡＩだと露見するのを恐れたんですね？」

「あの時点ではね。アナタはプロジェクトチームの末端にいて、しかも電脳に精通している。アナタが彼を取り調べれば、そのことに気付いてしまうのではないかと思ったわけです」

宗助の取り調べを刑事課で行うようにはからった神崎も、幹部時代に築いたネットワークが残っていたのだろう。警察を動かすこともできたのだ。

「しかしどうして、猫目宗助さんにすべての罪を？ＣＧＷの動きを危惧していたのなら、彼とＣＧＷの関係を明らかにすれば良かったんじゃないですか？」

「甘いですねえ社長。宗助君から芋づる式でＣＧＷに捜査の手が及んでいたとしたらどうなっていたとお思いですか？ＣＧＷが潰れるのはもちろんですが、彼らもただで倒れるよりは、我々を道連れにしようと考えたでしょう。彼らが真実を話した時、空間制御プログラムを開発した我が社も無傷では済まなかったはずですよ。しかも我々はあの廃ビル事件の日、制御プログラムそのものはどこかのハッカーが作ったものだと世間向けに発表していたのですから」

そうだったと桝田はその時のことを思い出した。こんな話を聞かされると、あの時に理想と現実のはざまで悩んでいたことがバカらしく思えてくる。

「では、アナタは最初からＣＧＷを潰すつもりはなかったと？」

「ありません。私の目的は、彼らに”貸し“を作ることでしたから。あの事件の後、私はこっそりとＣＧＷに連絡したんですよ。警察に指示してすべての罪を宗助君になすりつけるかわりに、この件についてはお互い水に流そうと。もちろん、そちらが再びメガマスに牙を剥くようなことがあれば、今回の真相をすべて公表するとね」

かくしてＣＧＷはメガマスに手が出せなくなった。彼らはコイル

ス残党が暴走しないように釘も刺したはずである。すべては神崎の思惑通りになったのだ。

そこで付け足すように金沢支社長が説明を始める。

「あの事件の時、メガマスの信用が落ちたのも我々の狙い通りだった。本社は電脳医療補強プロジェクトをメガマス再建の切り札に据えようとしていたようだが、あの廃ビル事件の影響でその方針も変えなければならなくなったはずだからな。そうなれば、我々のプロジェクトがメガマスの中心プロジェクトとして取って代わるだろうと計算していたんだ。

それにもうひとつ。電脳ナビシステムの停止も我々の望むところだった。廃ビル事件でメガネの不具合が露見しかかり、４月中頃に君は開き直るようにすべての不具合の公表に踏み切った。そうなればイマーゴという不確定要素を排除できない以上、電脳ナビシステムの方を停止にせざるを得ない。

実は新空間計画において電脳ナビシステムの存在は障害だったのだ。知っているかもしれないが、新空間は現実世界のパラレルワールドだ。現実世界に精巧に似せて作った電脳世界。その世界のすべてでナビシステムのような電脳制御がなされている。

ところが、容量等の問題で新空間を存在させるには通常空間とサーバーを共有しなければならなかった。すると新空間で何か誤作動が起こった時に、現実世界の電脳ナビシステムにも影響が出てしまうことが判明したのだ。実は金沢でも、それが原因で電脳ナビシステム搭載車による事故が起こった」

「オレの事故か！？」

大谷が声を上げた。彼の愛車は４月に金沢で空間事故が相次いでいた頃に、電脳ナビ搭載車にカマを掘られてテールランプが破損してしまったのだ。折しも、その事故の日にメガマスはメガネの不具合と電脳ナビシステムの停止を公表しており、軽い事故だったにも関わらず騒ぎは大きくなった。大谷は金沢での一連の事故について真相を把握しており、そんなことじゃないだろうかと思っていたの

だ。

「君の事故なのかどうか知らないが、シルバーのスポーツセダンが巻き込まれたという話は聞いた。まあ、大きな事故にならなかったのは幸いだった」

「おい！そのスポーツセダンこそ我が愛車ＨＩＤＥＯ2号のことだ。やっぱアンタらの仕業だったんだな。修理代よこせ！」

「こんな時に何言ってるんですか？もっとまじめにしてください！」

大谷は久美子にたしなめられてしまった。彼にとっては大いにまじめな話なのだが、確かに今は車の修理代の話を持ち出す空気ではなかった。

「電脳ナビシステムの停止に関しては、以前からメガマス全体や交通局、電脳局、警察局とも慎重に協議して決定したことでしたが、そこにもアナタ方の思惑が入っていたということですか？」

「元々社長である君が賛成にまわっていたじゃないか。それを煽ったのは間違いないが、そもそも君と我々は同じことを望んだのだ。その思惑が違っただけのこと」

桝田は電脳ナビシステム停止を協議した会議のことを思い出す。そこに出席していた支社長は確かに桝田を支持していたのだ。ことごとく金沢支社のプロジェクトに利用されてしまった桝田は、情けなくて自嘲していた。

「以上でこれまでの流れは整理できましたかね。まあ、我々が言いたいことはただ一つ。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”はメガマスの、ひいては全世界の輝かしい未来を切り開くに非常に有用なものだということです。宗助君や沙織さんを利用したＡＩの実地試験でもそれなりの結果を得、原川君の実験でその手順の簡略化にも成功しました。メガマスの現実の苦境を鑑みれば、ここで反対のための反対はできないはずですよ」

余裕の笑みをたたえて神崎はとどめの一言を言い放つ。今日の会議の趣旨は、金沢支社のプロジェクトのプレゼンテーションだ。これまでの話が、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の有用性を証明した

と彼は自負している。そしてこれが、今起こっている電脳体連れ去り事件を解決するための最良の方法ということも。

「んなもん誰が認めるか！今の話はすべてオレが録音しておいた。こいつを世間に流せば、アンタらの野望はあっけなく潰えるだろうな！」

誰よりも先に大谷が声を上げたのと同時に、会議室に用意してあった一本のワイヤレス電話が着信した。この会議をモニターしている政府関係者から直通で連絡があった時のために、あらかじめ用意していたものだ。桝田はこの電話が鳴ってしまうことを恐れていた。今、この電話が鳴ったということは、彼らも何らかの決断をしたのだろう。その決断が、桝田にとっての朗報とは到底思えなかった。

「……もしもし？」

重たい気分で桝田は電話を受けた。拡声機能で相手方の声は会議室中に響き渡る。

「見事なプレゼンテーションだった。前々からそのプロジェクトについては報告を受けていたが、そこまで仕上がっているとは思わなかった」

相手は名乗りもせずに、プロジェクトチームに向けてそう言った。今の言葉で、支社長がこの政府筋と何らかのコンタクトをとっていたことが窺い知れる。

「それでは、政府から支持していただけるということですね？」

神崎がピンマイクを通して相手方に確認する。どうやら彼のピンマイクは電話とつながるようにセットされていたらしい。

「もちろんだ。”ＳＰＲＩＮＧ”を各国政府に売り込めば、折からのメガネ不況は打開され、再び好景気を創出できる。その上、働く意欲のない者をＡＩとすり替えれば、必然的に生産性も向上する。これでそちらの事件を解決できるとなれば言うことはない。メガマス現政権退陣の筋書きは間もなく完成しつつある。今後のメガマスは、君たちプロジェクトチームを中心に舵を取っていただきたい」

「仰せのままに」

「既に情報部の者をそちらのビルに手配した。そこでプレゼンを聞いていた現幹部の諸君や関係者は、ムダな抵抗をせず我々の指示にしたがってほしい。それは警察官も例外ではない。このプロジェクトで開発された技術を普及させることは国家のため、住み良い国を作るためということを肝に銘じていただきたい」

言っていることが滅茶苦茶すぎると誰もが思ったが、抵抗できないことはすぐに思い知らされた。会議室の扉が突然開かれたかと思うと、数体つきのいい黒尽くめのスーツをまとった男達数人がその場を囲んだのだ。

「くそっ。マジかこいつら」

大谷がその男達を見回しながら舌打ちをする。政府直属の情報機関の人間なら、当然殺傷能力のある武器を携帯しているはずである。もはや神崎に掴み掛かることすら出来ない状況だ。

「さて、錦の御旗を得たことですし、我々は早速準備に取りかかりましょうか。とりあえず、昨日電脳体を連れ去られた子ども達の分のＡＩを用意しましょう」

神崎は支社長や小野に声をかけると、今度は微動だにできずにいる桝田や幹部達を見やった。

「アナタ方も、我々側につくというのなら拾ってあげますよ。まあ、どっちにしろ肩書き上アナタ方が幹部でいられるのもあと数日のことです。我々につくつもりがなければ、せいぜい残り少ない幹部人生を謳歌するんですね」

言いたいこと言った神崎は踵を返そうとしたが、そこである事に気付いた。

「あれ？平松さん。来られないんですか？」

平松はそこでかぶりを振る。

「裏切り者の協力者である私に何か用があると？どうせ後でこの男達に私の取り調べをさせるつもりなんでしょう？」

「しませんよ、そんなこと。”ＳＰＲＩＮＧ”を使えば、細川君の反乱がなんだって言うんです？彼を止めることなど考えていません。

少なくとも、彼の目的がわかるまではね。アナタがそれを知っていたとしても、私は、彼の口からそれを聞きたいのです。

それに、アナタと私はコイルス買収の時から共にメガマスの明るい未来を夢見た仲間じゃないですか。今でこそその志は違えましたが、プロジェクトを完成させられたのも、アナタのおかげだと思っています。そんなアナタにむごい仕打ちはしませんよ。アナタが我々についていけないというのなら、私はアナタの静かな平穏なる余生を保証するまでです。

ではみなさん。自分の今後の進路についてよくよく考えるんですね。できうれば、多くの皆さんにプロジェクトのお手伝いをしてもらいたいものです」

神崎はそう言い残すと、支社長や小野と共に黒服の男達に警護されて会議室を後にした。

「……腐ってやがる」

そう毒づいた大谷はそのすぐ後、黒服の1人に隠し持っていたレコーダーを回収された。

神崎達が本社を去った後、集まっていた幹部達も一旦解散となった。電話をかけてきた政府関係者によると、現幹部達は事件について何も対策を考えなくてもいいらしい。つまり、事件の処理はプロジェクトチームに任せろということだ。すなわち桝田を含めた現幹部達は、座して処分を待つだけの身となった。下手に動こうとするなら、本社を監視してまわっている政府直属の情報機関の黒服達に取り押さえられる。プロジェクトの真相をマスコミに公表しようにも、彼らによってメディア操作がなされる可能性が高く、またネット上に情報を掲載することも、検閲がなされているとすれば叶わないことだ。プロジェクトの真実を世間に知らしめる唯一の手段は口コミぐらいのもので、さすがに彼らもそこまで手を回してはいないが、あの奇想天外な話が信じられ噂が広がっていくとはそうそう思えない。

八方手が塞がった一郎達は、社長の桝田とともに、プロジェクトチームと袂を分かった平松の話を聞くことにした。会議室を後にした彼らは、社長室近くにあるリラクゼーションルームでほとんど脱力した体を休めながら平松の話を聞くことにする。そこにいるのは、一郎、桝田の他に、イサコ、玉子、大谷、直樹、久美子の面々だった。

「本当に申し訳ありませんでした。社長」

平松はテーブルを挟んだソファーで向かい合う桝田に深々と頭を下げた。桝田の横には一郎。それ以外は少し離れたソファーに腰を下ろし、事の成り行きを見守っていた。

「平松さん……確かに私は、アナタが神崎さんや支社長の計画の片棒を担いでいたことにはショックを隠せませんでした。しかし、アナタには相応の動機と、あの人達とはまた違う夢があったのですよね？誰よりもまじめで一本気なアナタのことです。おそらくその志

は最初からなんら変わっていないのでしょう。ただ、思わぬ方向に事態が流れてしまっただけのことで」

「それも、私の力のなさゆえです。支社長のバックアップを取り付けた神崎さんを、私は止めることができませんでした。去年の夏以降、私は役職であの方を上回ったというのに」

事のはじまりの頃は、平松は自分よりもずっと役職が上の神崎の協力をありがたく思っていた。彼に不信感が芽生えたのは、彼が宗助達コイルス一派を使ってコイルドメインの入り口を開かせようとした時だ。神崎は時に苛烈で、無慈悲になる。あの男に、宏文の遺志を託して良いのかどうかと思い始めた頃には遅かった。

「私に一言相談してくだされば。そもそも、アナタも含め、プロジェクトチームが頑なに情報の公開を渋ったのはなぜですか？」

「社長が思っておられる以上に、我が社の支社間の対立は根深いものがあるのです。特に本社と金沢支社の研究開発部では、お互いに産業スパイを使って技術を奪い合っている有り様なんですよ」

「どうして、身内同士でそんな争いを？」

訊ねたのは玉子だった。

「一言で言うなら権力闘争です。これを言ってはなんですが、金沢では支社長に絶大な支持が寄せられているんですよ。あの人が支社長に就任したのは、社長が就任したのとほぼ同時期。２年前ですよね」

「そうでしたね」

「元敏腕経営コンサルタントの看板はダテではなく、あの人は圧倒的なカリスマと人心掌握術で金沢支社の社員を束ねていきました。そして、１年もしないうちにあの人こそメガマス社長にふさわしいのではないかという声が聞かれ始めたのです。社長を前にしてこんな話をするのはなんですが」

つい１年前まで金沢支社にいた一郎も、その時のことをよく覚えていた。確かに、金沢支社にいた頃は一郎も支社長に対して良い印象を持っていたのだ。

「その頃と言えば、本社では旧幹部達が若い社長をないがしろにして好き放題をしていた時です。彼らにとって支社長は目障りな存在だったのでしょう。彼らは自らのポストを守り抜くために、金沢支社を貶めようと考えた。これがスパイ合戦の始まりです。

時は流れ、旧幹部がいなくなった後は私が研究開発部の元締めを任されました。もちろん私は内部紛争をやめさせようとしたのですが、今度は新しく幹部になった方々が保身に走ってしまいまして、また足の引っ張り合いが始まったのです。神崎さんが本社の電脳医療補強プロジェクトで開発された空間制御プログラムをＣＧＷに流したのも、本社の幹部を貶めるつもりもあったからでしょう。小此木君は、それに巻き込まれてしまったということだな。

そんな中、金沢のプロジェクトチームにとって新空間計画は絶対に完成させなければならないものでした。そのためには、完成の目処が立つまで本社の妨害は絶対に阻止しなければならない。プロジェクトチームが本社に情報を公開しなかったのはそのためです。私も、自分の理想を実現させるには新空間計画が必要だったので、社長にさえそのことでご相談することはできなかったのです」

「そう、でしたか」

その話を聞いて桝田はいたく反省していた。本社と金沢の権力闘争を生んでしまったのは、ひとえに自分の指導力のなさゆえだ。そして桝田自身にも、義父である金沢支社長に対する劣等感やコンプレックスがなかったといえば嘘になる。無意識のうちに桝田は彼を遠ざけ、その亀裂を深めていたのも事実だろう。そして、とうとう支社長はその手で本社の乗っ取りに成功したのだ。桝田は自分が情けなく思えて仕方がなかった。

「平松さんは父の遺志を継ごうとされたんですよね。そのために新空間計画に関わっていらっしゃった。その後に生まれたプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”には参加されなかったのですか？」

「企画を聞かされた時から、私はあれには反対していた。あんなものが小此木先生の目指したものだとは思えない。例の研究日誌でも

先生はあれに近いものを構想されていたが、それを実現すべきかどうかについてはすぐに否定されている。

実はプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”のウラで、私は別の計画を進めていたのだ。それが小此木先生の目指したものに近いと確信しながらね。その計画には、これといった名前をつけていないが」

「その計画とは？」

「単純だ。事故などで身体に障害を持つことになった人に、新空間の中で五体満足な生活を送ってもらうというものだ。それはある意味で竹下君の言う現実逃避にあたるかもしれないが、でも、健常で何不自由ない生活をしている人間に、それを非難することはできないだろう？まあそれも、高額な医療費を払い続けられる一部の人のものにしかならないだろうがね。そういう意味では、私も”ＳＰＲＩＮＧ”の必要を感じたこともあった。

実は、私の計画でも”ＳＰＲＩＮＧ”の技術を一部流用させてもらっているんだ。私はこの医療プロジェクトを事故などで身体に障害を持つ人のためのものだと言った。それに付け加えて、脳梗塞で後遺症が残ってしまった患者にも同様の処置を施そうと考えたのだ」

その話を聞いて玉子が声を上げた。

「まさか、教頭先生にもその治療を？」

「教頭？」

「先日脳梗塞で倒れられたという大黒小学校の教頭先生です。この前の事故で室長の娘さん達が新空間に入りこんだ時、彼女達は教頭先生に会ったと。それもおかしなことに、新空間の中にいた他の教師達は微動だにしなかったのに、教頭先生だけは彼女達と同様に動き、話をしたそうです」

平松は合点がいった表情になった。

「ああ。確かに私が手がけた被験者の中にそんな方がいましたね。あの方は脳梗塞の後遺症で、右足を思うように動かせなくなったのですよ。そこで私はあることを思いつきました。機能しなくなってしまったその脳の一部の働きを、ＡＩで補完することはできないか

と。
　私は神崎さんに頼んで、あの方とまったく同じ思考を持つＡＩを用意してもらいました。そのＡＩに右足の動きだけを補完するように設定し、新空間にあの方の電脳体を送ったのです。もちろん、ご家族の同意のもとで」
　それについては昨日、大谷も似たような推理をしていた。彼も納得したように平松の話を聞いていた。
「なるほど。そういうことだったんですね。他にも同様の治療を施された方はいるのですか？」
「脳梗塞患者や交通事故、スポーツ事故患者を含めると１０人前後でしょうか。彼らには金沢のメガマス病院に入院してもらっています。神崎さんも、私がこの計画を進めていることには反対されていなかったので」
　その話を聞くと、平松の計画は真っ当なもので、そして”ＳＰＲＩＮＧ”自体も使い方によっては医療機器として利用できることに気付かされた。桝田も一郎も、その場にいた他の面々も、平松の計画には素直に支持したいと思った。
「そうだったんですか。私に力があれば、そのプロジェクトを中心に据えてメガマスの建て直しをはかりたかったのですが、今やそれも叶わなくなってしまいましたね。なんとか、”ＳＰＲＩＮＧ”の普及を阻止したいのですが、政府という後ろ盾を得た彼らに抵抗することは」
　顔の前で手を組み合わせながら、うなだれるように桝田が言う。このままでは昨日の事件で連れ去られた子ども達や、ハラケン、詩織、宗助の電脳体が戻ってくることは望めない。一郎としても、家で待機しているヤサコ達にこの事態をなんと説明すればいいのかと思っていた。
「ちなみに、教頭先生以外の教師達がフリーズしていたという件についてですが、それにも理由があります。新空間はパラレルワールドで、現実世界と全く同じ人々が生活しています。その中に、現実

世界の人間がきちんとした手順を踏まないで入り込んでしまうと、新空間の中では同一人物が2人存在することになります。そうすると、新空間にパラドックスが発生し、誤作動の原因となるのです。

それを防ぐために、神崎さんは1つ手を打ちました。誰かが新空間に入り込んでしまった場合、新空間の中にいるＡＩをすべてフリーズさせるというものです。

そうすると、新空間の中に同一人物が2人存在することになっても、動作しているのは入り込んでしまった生身の脳を持つ電脳体だけになります。小此木君の娘さん達が見たのは、その時にフリーズしたＡＩだったのでしょう。

しかし、教頭先生は正規の手順で新空間の中に入り込んでいます。そして、新空間に教頭先生は1人しかいないのです。それはどういうことかと言いますと、教頭先生の電脳体を送り込む時に、新空間の教頭先生のＡＩは存在を消されるのです」

「存在を消される。新空間の中でパラドックスを起こさないために……」

世界に同じ人間は2人存在してはいけないという摂理に基づき、その片方は消されるということになる。そしてその犠牲として選ばれるのは、ＡＩが優先されるというのだ。

「じゃあ、今ケンちゃんが新空間の中に長期間入り込んでいますが、元々新空間の中にいたケンちゃんのＡＩは？」

「もちろん、ミチコによって消されたでしょう。それを司るのはミチコの役目ですから。原川君のＡＩはその後、記憶を抹消されて生身の原川君の肉体に移植されることになりましたが」

「なるほど……」

ようやくイサコもその話に合点がいったような気がした。イサコ自身も、金沢の事故で新空間に入り込んだ時に、人々がフリーズした光景を目にしていた。ヤサコ達が会ったという教頭が静止していなかったのは、それは彼が生身の脳を持っていたからだ。

「ＡＩはおもちゃじゃねえんだ。アイツらの開発したＡＩは、もは

やゲームの中で使われるようなＡＩという認識は当てはまらない。それこそ、人間の命と同じだろう。それをこっちの都合で消したり復活させたり、それは人殺しと同罪じゃねえのか？」

大谷が平松に問う。

「その通りだ。新空間計画は支持していた私も、そのことに気付いた時には遅かった。神崎さんは、新空間を完全なパラレルワールドとして完成させてしまった。その世界と現実世界に互換性を持たせるために、あの人はプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”を完成させようとしていた」

「互換性とは・・・・・・」

生身の脳とＡＩを等価と捉えるなら、そのような表現ができてしまうことに一郎は寒気すら覚えた。新空間計画とプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”は、現実世界とデジタル世界の境界線を限りなく曖昧にしてしまうだろう。その未来は果たして実現せらるべきものなのか。否、と一郎は思う。

「平松さんが細川技師の裏切りに加担していたのは、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”に嫌気がさしたからだとおっしゃっていましたよね？」

「ああ」

「つまり細川技師と平松さんは、プロジェクトを潰そうとしていたのですか？」

「当初の計画では、私もそう考えていた。細川君も”ＳＰＲＩＮＧ”には賛同していないものだと思っていた」

「過去形ですね」

「ああ。実を言うと、彼は私を出し抜いて、自分だけの計画を進めているようなんだ。一連の事件のシナリオが、私に聞かせてくれたものと違っているんだ」

一郎と桝田は首を傾げ、他の面々も訝しげな視線を平松に向けた。

「では、当初描いていた計画のシナリオとは？」

「神崎さんの電脳体を連れ去り、ＡＩとすり替えるというものだ」

一同に緊張が走る。一郎などは、休憩室の周囲に人がいないか確認したぐらいだ。

「……プロジェクトの責任者であるあの人さえいなくなれば、プロジェクトは頓挫するという思惑があったのですか？」

「そう。”ＳＰＲＩＮＧ”を強引に押し進めていたのは神崎さんだ。支社長は”ＳＰＲＩＮＧ”の実現がメガマスの建て直しに余あるほどの経済効果を生むという計算のもと、小野さんは電脳科学の世界に革新をもたらそうという夢のもと、神崎さんの話に乗っかったに過ぎない。そして、支社長と小野先生は”ＳＰＲＩＮＧ”の実現がもたらす未来を多少なりとも危惧していた節すらあった。にも関わらずプロジェクトを進めているのは、もう手を汚してしまったことへの開き直りと、ここまで来たからにはもう後には引けないという思いがあるのかもしれない。

でも、神崎さんは違う。あの人は自分の野望のためにプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”を完成させようとしている。それは神崎さんの人となりを見ればわかるだろう」

一郎は思わず頷いてしまう。プレゼンでの神崎の言動には、もはや人の心を持っている人間の言葉とは思えないものもあった。

「あの人が何を望んでいるかはわからない。でも、あの人を止めれば支社長は考えなおすのではないかという希望もあった。だから私は細川君と画策して、神崎さんの電脳体を新空間に連れ去ろうとした。私達があの人と同じ穴のむじなだということに目を瞑って」

「でも、そんな都合良く神崎さんだけを狙えるのですか？」

「問題はそこだった。細川君は、誰か決まった人の電脳体を連れ去るための試行が必要だと言った。神崎さんを狙って失敗に終われば、以降は警戒されてしまうだろう。チャンスは1度しかない。

細川君は近々その試行をすると言っていた。その直後に原川君の電脳体が連れ去られた。私はすぐに、それが成功だったのかを訊ねた。そして、その確認が終わったのなら早く彼の電脳体を戻すように指示した。

しかし、彼はこう言った。『まずは神崎さんの出方を窺う必要があります。おそらく神崎さんは原川君をＡＩとすり替えるでしょう。それを確認してから、次の手を打ちます』と。結局、彼の試行が成功だったのか失敗だったのか、なぜ神崎さんの出方を窺う必要があるのかよくわからないまま、私は彼を信用してそのまま計画を進めることにした。

案の定、原川君はＡＩとすり替えられて退院した。私は彼に早く次の手を打つように指示した。そして、彼は次の手を打った。それが昨日の大黒中学校での事件だ」

「つまり、彼は神崎さんの連れ去りに失敗して、子ども達の電脳体を連れ去ってしまった？」

「いや。彼は神崎さんを連れ去るつもりなどなかったんだ。おそらく、昨日の事故は彼の思惑通りのものだ。私がそれに気付いたのは昨日の夜。どういうことなのか彼に事情を訊こうとしたのだが、まったく連絡が取れなくなっていた」

一郎や大谷はその話を聞いてうなり声を上げる。結局、細川技師の意図がよくわからない。”ＳＰＲＩＮＧ”について知っていたという彼なら、何人の電脳体を連れ去ったとしても、それがプロジェクトチームを引っ掻き回すことにはならないとわかっていたはずだ。平松と手を組んだのは、おそらく神崎達や本社に自分の動きを悟られないようにカバーしてもらうためだったのだろうが、手段にはまったくの疑問が残る。神崎が彼の裏切りの真意を測りかねていたのも何となく理解できた。

「じゃあ、彼に協力していた平松さんにも、今の彼の居所はわからないということですか？」

「見当をつけられなくもないが、おそらく細川君も私の知るところにはいないだろう」

確かに平松がすぐ思い付くような場所に姿を消してもあまり意味がない。それでも、神崎達と協力すれば探せないこともない。プロジェクトに関係する施設や彼の本来の所属先であるアプリコット社

の施設なら、神崎達が把握しているだろう。神崎達に細川を追うつもりはないようだが。

「社長。何はともあれ我々は、彼を見つけ出すべきではないでしょうか？彼を説得し、事件を収束させ、子ども達の電脳体を元に戻す。そうすれば、緊急的に”ＳＰＲＩＮＧ“が必要な状況ではなくなります」

「確かに……事件さえ解決させれば政府側も急いで”ＳＰＲＩＮＧ”を完成させる理由はなくなりますね。おそらく、”ＳＰＲＩＮＧ”の普及に向けてもっと細かい部分を詰めるように指示を出すでしょう。そうなれば、とりあえず時間は稼げますね。その間になんとか”ＳＰＲＩＮＧ”の普及を阻止する作戦を考えればいい……今できることと言えば、それしかないですね」

桝田も、そしてその場にいた一同も、今自分たちにできることはそれしかないと思った。細川技師を止めない限り、新たなる被害者がまた出てしまう可能性もある。そして彼を説得すれば、ハラケンや詩織、宗助、昨日さらわれた子ども達の電脳体が戻ってくるかもしれないのだ。そうすれば神崎達も急いで”ＳＰＲＩＮＧ”普及のためのインフラを整備しなくなるだろう。その隙に、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”を中止させるための破壊工作を仕掛ければいい。

「平松さん。アナタは細川技師とは彼がコイルスにいた時からの仲なのだそうですね。良ければ、彼がどんな人物なのか教えていただけますか？我々の調査を進めるにあたって、参考になることもあるかもしれないので」

桝田の願い出に平松も頷いて了承する。こうなった以上平松も、細川技師の暴走を止めることを考えていた。昨日のように無下に子ども達が犠牲になることは、彼にとってはもちろん望むところではない。

「わかりました。私の知っている限りでお話します」

平松はまず、細川が失踪した時のことから話を始めた。

「メガマスの買収でコイルスの技師達は散り散りになった後、私と連絡がついたのはほんの数人です。そこには細川君は入っていませんでした。

小此木先生の死後に、私があの方の遺志を実現しようと考えたことは先ほどお話した通りです。その時には、何度も彼と連絡を取ろうとしたのですが、どうしてもつかまりませんでした。

実は、私は彼の奥さんとも面識がありまして、恵さんにも事情を聞いたのですが、まったく彼からは音沙汰がないと」

「去年交通事故に遭った恵さんともお知り合いだったのですね」

「ええ。私は彼女に深くは詮索しませんでした。もしかすると細川君の居場所を彼女は知っていて、私には言わなかったのかもしれません。どのみち、彼がメガマスに協力してくれるとはなかなか考えづらかったので、その時は諦めましたけどね。

月日は流れて、去年の夏。恵さんと詩織さんが交通事故に遭ったことを私は知りました。私は詩織さんとはお会いしたことはありませんでしたが、細川君の1人娘であることは知っており、なんともいたたまれない気持ちになりました。真相がどうあれ、電脳ナビ搭載車による事故はメガマスに過失がありますからね。しかし、細川君の居所が掴めない以上、私にはあの家族にできることはありませんでした。せめて、メガマス病院で最高の治療を受けていただくぐらいしか、ね。

そして、去年の秋。奇縁が私と細川君を結び、彼はメガマスに協力することになった。それが決まって私は真っ先に彼と話をした。恵さんと詩織さんの交通事故の過失はメガマスにある。そんなメガマスに、君が手を貸す必要はない、と。

しかし彼はこう返しました。『事故の原因を作ったメガマスは許

せない。でも、それで僕がメガマスを憎んだとしても、詩織が事故に遭ったことや、恵が助かる見込みのない事実は覆らない。そう、詩織が母親を失ってしまったことが何より僕はツラい。そんな詩織のために、僕は新空間を完成させる。唯一の家族である恵と、ずっと暮らすことができる世界を。僕がメガマスに協力した理由はそれです』と」

一同は沈黙のまま細川技師の言葉の意味を考える。それはそのまま額面通り受け取ってもいいのか。彼が平松に対しては心を開いていたという根拠はない。しかしそう考えるのは平松に対して失礼なような気がした。彼と平松は旧知で、彼の失踪中も平松はずっと気にかけていたという。そんな人に、久しぶりの再会でいきなり嘘をつくようなことはあるのかと思う。むしろ、

「細川技師は、本当は家族思いな人だったのではないですか？その言葉は、彼の本心であると解釈してもいいですよね？」

一郎の意見にはその場の誰にも反論はなかった。

「その通りだよ小此木君。私はその時、彼らしい理由だと思った。メガマスへの憎悪を胸にしまい込んで、彼はただ詩織さんのために新空間計画に参加した」

「でも、待ってください。細川技師は3年前に恵さんとは離婚したのですよね？もちろん、離婚したとはいえ自分の子どもがかわいくないわけないですが、それならなおさら疑問に思います。なぜ彼は恵さんと離婚したのですか？」

桝田が質問すると、平松はやるせないように一つため息をついた。

「……家族を思えばこそですよ。彼は失踪後、アプリコット社に辿りつくまで各地を転々としていました。その間、家族には会えなかったそうです。メガマスも彼の行方は追っていましたからね。

しかし、彼が離婚する1年ほど前、事態はさらに悪化しました。メガネが原因で子ども達の集団失神事件が起こったのがきっかけとなって」

「3年前の離婚からさらに1年前ということは、私が原因を作った

事故ですね」
　玉子が確認する。
「そう。それ以来、メガマスの旧幹部達はメガネの不具合が発覚するのを恐れ始めました。そして、イマーゴの存在を知る旧コイルスの技師達を徹底的に追うようになったのです。
　もちろん、その手は細川君にも及んだ。そんな事情から、旧幹部達の目が家族である恵さんと詩織さんに向けられる前に、彼は彼女達を無関係者にしようとしたんです」
「だから離婚を？妻や娘を思う故の決断だったわけですか？」
　苦々しい表情で、平松は頷く。
「彼の逃亡生活に終わりは見えなかったですからね。恵さんは彼をずっと待っていたようですが、涙を飲んで彼の決断に同意したそうです」
「詩織さんは？詩織さんにはそのことは？」
「伝わっていなかったと思います。おそらく詩織さんは、自分の父親は家庭を捨てて出て行ったのだと思っているでしょう。それは細川君自身が悔いるように言っていました。『自分は父親らしいことを詩織にしてやれなかった。だから、自分はなんとしても新空間を完成させなければならない』と、闘志を燃やしていたぐらいです」
　一同はそれを聞いてますます唸るばかりだった。平松の話を聞く限り、細川技師はメガマスへの復讐のために、子ども達の電脳体を無差別に連れ去ろうとするような血も涙もない人間のようには思えない。彼の行動のすべては詩織への罪滅ぼしをするためのようであり、それ以上の野心は窺い知れない。
「小此木さんは？半年の間彼とはずっと行動を共にしていましたよね。いくら彼が素性を隠していたとはいえ、その人となりに思うところはあったんじゃないですか？」
　桝田が一郎に訊ねた。
「そうですね……彼は結婚していて、子どもがいるという話は直接聞きましたが、それ以外に彼が家族のことを話したことはなかった

と思います。ただ、いくら工作員めいたことをしていたとはいえ、彼は本当に心配りのできる人でした」

それだけはハッキリと言えると一郎は思う。そしておそらく正義感も強い人だろうと思っていた。カンナの交通事故の再調査のための準備に、彼は一郎の補佐役として尽力してくれていたのだ。それは一郎の望む以上の働きだったといえる。

「なるほど……まあしかし、それだけ娘さん思いだったということを考えれば、彼は激しく神崎さんを憎んでいるはずですよね。あの人は、詩織さんの体を使ってＡＩの実験を行った」

桝田の言葉には、イサコの心がチクリと痛んだ。本当はこの世界のどこにも存在しないというサオリのことを考えると、これから自分が何をすべきなのかという問いに答えられる気がしない。未だにイサコは、その話が悪い冗談だと思い込みたかった。そして、ハラケンのことで涙したヤサコと同じ気持ちになっていた。

「ええ。憎んだでしょうね、彼は。直接的な言葉で私にその気持ちを打ち明けたことはありませんでしたが」

「しかし、彼と平松さんの当初の計画は、神崎さんの電脳体を連れ去ることだったのではないのですか？」

「そう。それが彼の答えだと思っていた。彼の気持ちを考えると、いかにそれが人の道を踏み外すようなことであったとしても、私は協力せずにはいられなかった。猫目技師、小此木先生の目指した未来の形を壊そうとし、細川君の娘を思う気持ちを踏みにじった神崎さんを私は許せなかった。彼は当然、詩織さんが細川君の娘であることを知っていた。それどころか、彼がどれほど娘さんのことを思っているかも気付いていたはずだ。にも関わらず、あの人は詩織さんの体を使って実験を……私にそれを言う資格はないが、あの人は人間らしさを失っている。まるで、彼がこよなく愛するＡＩのように」

イサコには平松の言葉で一つ同意できないものがある。仮にサオリという人格がＡＩだったとすれば、彼女の持つ優しさ、悩み、勇

気は紛れもなく人間の持つそれと変わらない。その彼女、人工知能ＡＩを神崎と同列にすることさえイサコには許せなかった。

「ＡＩだって、生身の人間と何も変わりません。サオリは、人間としてあらゆる葛藤を抱えながら、ちゃんと生きていました……あの神崎という人と同じとするのは納得できません。それは原川にも、そして宗助にも言えるはずです」

はっきりとイサコは平松の言葉に抗議した。

「そうか……君がそう言うのならそうなのだろう。悪かった。今の言葉は訂正する」

平松も軽はずみな発言を悔いるようにイサコに謝る。それにはイサコも安心した。

「ところが、細川技師の思惑は違っていたということですね。彼は最初から、神崎さんの電脳体を連れ去ることなど考えてはいなかった。では、一体彼は何の目的で研一君や大黒中の生徒達の電脳体を連れ去っているのか、見当はつきますか？」

話を戻すように桝田が訊ねる。

「いえ……残念ながら」

「細川技師もミチコを制御しきれていないという可能性も考えられませんか？」

「それもゼロではないかもしれないが、ミチコが彼に背くとは思えないな。ミチコの意志は、彼が組んだプログラムによって制御されている。そのプログラムに不具合があったという可能性も捨てきれないが、ミチコが自分の意志で彼に背くことはない。ＡＩは命令に絶対服従させようと思えばそれが可能だからな。

……まあ、そのミチコというのもある意味では不憫な存在だ。ＡＩとして再生した彼女は、桐野沙織のように１つの人格として成り立っている。でも彼女は、神崎や細川技師の思惑に振り回されている。実際のところミチコの本心はわからないが、彼らの命令に服従しなければならないことを、果たして良しと思っているのか……」

それはミチコもツラい心境なのだろうとイサコは思う。イサコが

彼女に会った時、彼女は必ずしも生みの親であるという細川技師のメガマスへの復讐に対して肯定的ではない口ぶりで話していた。そう、ミチコの生みの親は詩織の父、つまり細川技師であることをイサコは今思い出した。そして、ミチコが再び生まれた理由について、イサコはまだ聞かされていなかった。

「どうして細川技師はミチコを再生したのですか?」

「ああ。元は神崎さんの要望だったんだ。完成した新空間はひどく安定しないものでね。それを改善するにはミチコの力が必要だと神崎さんは言ったんだ。そこで去年の事件やイマーゴの関係資料を集めて、小野先生と細川技師がミチコを再生させた。その後、金沢での一連の事件のどさくさで、細川技師は彼女の意志をコントロールするプログラムを完成させた。それこそ、ミチコを細川君の命令に従わせるためのものだったわけだが」

「つまり元々ミチコは、新空間を安定させるために再生された?」

「そういうことだ」

そんなシンプルな理由だったのかとイサコは思う。ミチコも自身の使命を、「この空間と詩織を守るため」と言っていた。そこに嘘はなかったのだ。

そしてミチコは細川技師に、誰でもいいから電脳体を1人連れ去ってこいとでも指示されたのだろう。細川技師は元々神崎の電脳体を連れ去るつもりもなかったようなので、第三小での一件は誰か特定の人物を狙うための実験ではなかったと思われる。つまりあの事件において細川技師が狙ったターゲットはいない。そこで連れ去られたのが一連の事件に関係の深いハラケンだったことを考えると、それが単なる偶然とは思えない。これらのことから、ミチコは自らの意志でハラケンを狙ったという結論が導かれる。そしてそれは、イサコがにらんでいた通りでもある。おそらくミチコはヤサコを苦しめようとしており、それは同時にイサコ自身を苦しめることにもなった。昨日の事件で狙われたのもヤサコの部活の先輩だったことは、その推論を裏付けている。

イサコは確認するように平松に訊ねる。
「ミチコの意志をコントロールするプログラムをミチコのＡＩに流しこんだのはいつですか？金沢のイベント事故の直後ですか？」
「その通りだ」
やはりとイサコは思った。ミチコは金沢での事故の時点で、細川技師の復讐劇に加担するのを嫌がっていた。しかし、そのプログラムの完成によって、彼の命令に従わざるを得なくなる日が近いことも気付いていた。だからあの時のミチコには、まるで自分の運命を呪うような雰囲気が漂っていたのだ。
そしてミチコは、誰かにそのことを伝えようとした。彼女が選んだのはイサコだった。だからミチコは、金沢で執拗にイサコを追った。そう、あの再会でのミチコの言葉は忠告だった。つまり、ミチコの心の奥底にある感情は、決してイサコやヤサコに対する憎悪だけではないはずなのだ。そうだとしたら、まだ彼女の暴走を止められる余地はある。
「平松さん！私を新空間に連れて行ってください！」
「なに？」
立ち上がったイサコを一同が目を向ける。
「平松さんは、教頭先生の治療実験に関わっていたんですよね。なら、正規の手順で新空間に私を送ることもできるということですよね」
「おいイサコ。さてはミチコに会いに行くつもりだな？危険すぎるだろ。まずは細川技師の身柄を押さえることが先決だ」
大谷が止めようとするが、イサコは聞く耳を持たなかった。
「いや。どちらが先とかはない。事件を解決するなら、ミチコの暴走を止めないと」
「残念だが、今は新空間の出入りはできない」
イサコの頭を冷やしたのは、平松の言葉だった。
「どうしてですか？」
「おそらく細川君が手を打っているはずだ。ミチコを止めるとすれ

ば、それは新空間内部に入り込まないと叶わないからな。彼は周到にその芽を摘んでいるはずだ。それをするなら、昨日の子ども達のように電脳体を連れ去られるしか方法はないが」

それには運が絡んでくる。それにどんな方法であれ新空間に潜り込めたとしても、ミチコに会えるかどうかはわからない。

「君の電脳体を新空間に送るというのも1つの手かもしれない。でも今は、もう少し他の方法を検討してみよう。大谷君の言う通り、細川技師の身柄を押さえることが最上の解決方法だ」

一郎が諭すように言うので、イサコは仕方がないと再び腰をおろす。

平松と一郎達の間で細川技師の居所の捜索方法について議論が交わされる中でも、イサコはどうにか新空間に入りこむ方法を考えていた。事故を誘発して、無関係者を巻き込まないような方法がいいが、果たしてそんなことが可能なのか。

その思案顔を見ていた大谷は、何かを決意したように小さく息をついた。

#24　プロジェクト"SPRING"　part10

神崎達は午後には弁天にある研究施設に戻っていた。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”に対する支援を政府に取り付けたことで、プレゼンテーションとしては大成功である。あとは事件の経過を見ながら、”ＳＰＲＩＮＧ”普及に向けての準備を進めようという状態だ。

その神崎、金沢支社長、小野はようやく自分たちの仕事も一段落したというように、研究施設の休憩室でくつろいでいた。

「まさかねえ。バレていたとは思いませんでしたねえ」

いつもの葉巻の煙で輪っかを作りながら神崎はにやけて言う。

「あれは計算外だったな。本来なら小野君の説明で本社を騙して、体よく細川技師確保に向けての駒に加えるつもりだったが」

「まあさすがに、向こうも必死になって事件や我々のプロジェクトを追っていただけありますね」

神崎達にとって、一郎達がプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の概要を言い当てたことは想定外のことだった。そして、ネタが上がっているのに言い逃れをするのは見苦しいと、開き直ってプロジェクトのすべてを打ち明けたのだ。その話はもともと、政府関係者には別の場所で行う予定があったが、彼らがその光景をモニターしていたこともあって話は早くなった。結局のところ、プロジェクトに政府の支援を取り付けるというのは支社長の提案で、最初から思惑通りに事が運んだのだ。

「しかし私にはわかりません。なぜ小此木さん達がプロジェクトの真相に行き着いたのか。いえ、なぜ彼らが小此木医師の研究日誌を手に入れることができたのか」

小野が不思議そうにコーヒーをすすりながら言う。

「確かに不自然ではありますね。研究日誌を手に入れるには、小此木先生の組んだ空間に入らなければならない。その空間は、今はほとんど残っていないＣドメインの深部。まあ、Ｃドメイン自体は小

此木先生の家に残っていたでしょうが、そこからまたパスワードが必要ですしね。そのパスワードなぞは、私達でも知り得なかったものなのに」

「小此木医師が死の直前に奥さんに残していたんじゃないのか？」

「それならもっと早くに彼らは研究日誌を見つけていたとはずです。あの様子だと、ついさっき見つけたという感じでしたね」

支社長はそれを聞いて、案外それは重要な問題ではないかと思った。

「なら、パスワードの出所はどこだ？小此木君達と一緒にいた中で事情に精通しているのは、竹下直樹ぐらいじゃ」

「でも彼がそのパスワードを知っていたなんてことはあり得ません。私が知らなかったものを彼が知り得る道理はありませんから」

「それはそうだ。ところで、小此木君達と一緒にいて、やたらでしゃばっていたあの茶髪の胡散臭い男は何者だ？知っているか神崎？」

「知ってますよ。支社長にもご報告しなかったでしょうか？雑誌記者の」

すると支社長も思い出したように頷いた。

「ああ、前に言っていたな。今時反メガマスを標榜する、気骨のある記者のことか」

「それも旧幹部の治世の話ですけどね。最近では金沢での桐野さんの交通事故の真相暴露記事を書いています。私がこっそり情報を流して書かせたんですけどね。空間設計室の動きを押さえ込むために」

「そうだったな。しかし、その男がなぜ小此木君達と行動を共にしている？」

「わかりませんが……気になりますか？」

「ああ。消去法的に、パスワードの出所はあの男しか考えられないじゃないか。まさか原川玉子や天沢勇子なはずがないし、警察官の2人もあり得ないとすれば」

パスワードを一郎に与えたのは、あの大谷しか残らなくなると支社長は考えた。

「あの記者、ああ見えて重要人物と何らかの繋がりがあるんじゃないですか？」
「重要人物……」
小野の言葉に神崎はいつになく真剣な表情で考えこんだ。そこで支社長も訊ねる。
「そもそも、小此木医師は誰にパスワードを残したんだ？」
元々宏文は小野にパスワードを託すつもりだったみたいだが、その時小野とは連絡がつかなかった。宏文と親しかったという平松にも、宏文の妻であるメガばあにもパスワード自体は伝えていなかったようだが。
「まあ、あの日誌の記述からすると、コイルスの技師やメガマス関係者ではない、第三者に伝えたと考えるべきでしょう。小野先生と連絡がつかなかったのなら、その候補の中で他の人物に託したのだと思います。それが誰なのかは追いきれないでしょうけどね。小此木先生は高名な医師で、広い人脈を持っていらっしゃったようですから」
「そうか。そのパスワードがまわりまわってあの記者の元に辿りついたと。まあ、あまり詳しい経緯を考えることに意味はなさそうだな」
「そうですとも。たとえあの記者が何者であったとしても、我々のプロジェクトが揺らぐことはありませんよ」
「しかし念のためだ。もう少しあの記者について調べさせておけ。まだ我々のプロジェクトを潰しにかかろうとしている勢力が存在するのかもしれん」
「用心深いことです」
それでも神崎は支社長の言う通りに部下に指示を出しておいた。大谷の対人関係を調べれば、何か面白いことがわかるかもしれないという予感も神崎にはあったのだ。
「問題は細川君です。神崎さんは細川君を捕らえるために、本社に協力を要請するつもりじゃなかったのですか？」

確かに神崎は細川技師のことはもはや眼中にないという口ぶりだった。小野にとってみれば、態度が一貫していないなと不審に思っていたのだ。

「それは、我々が用意した偽のプロジェクトの内容を本社が信じてくれていればの話ですよ。さっきも言ったように、”ＳＰＲＩＮＧ”の概要が彼らに割れた以上、私は隠し通すつもりはありませんでした。あの時点で作戦は変更せざるを得なかったんですよ」

「じゃあ、神崎さんは細川技師の動向をまだ気にかけていると？」

「当たり前じゃないですか。彼はミチコを握っているんですよ。彼のさじ加減一つで、我々が苦心して作り上げた新空間は容易く崩壊してしまうのです。このような状況下でプロジェクトを進めるのは正直気が気ではありません。我々は根本的な事件の解決のために、ミチコを取り返さねばならないのです」

柄にもなく神崎はムキになっていた。この状況に、さすがの彼も焦り始めているのかもしれないと小野は感じた。

「それなら、どうしてアナタは細川技師など眼中にないように言ったのですか？本社に協力を要請すればいいじゃないですか」

「小野さん。”ＳＰＲＩＮＧ”のプレゼンの時、あちら方の反応を見ていましたか？我々への反発心がありありと出ていたじゃないですか。そこへ細川技師捜索の協力を要請したところで、あちらもこちらの手をすんなり取ろうとしたとは思えなかったんですよ。それじゃあまりにも都合が良すぎるじゃないですか」

それは半分ほどアンタの軽口が原因じゃないかと小野は思ったが、口には出さなかった。

「だから我々には事件を解決させるつもりなどないと、本社側に思わせたわけですね。責任感の強い桝田社長なら、自分たちの手だけで事件を解決しようと考える。我々はそれを利用すると」

「その通りです。幸いにも、細川君と親しい平松さんが本社側に残りましたからね。細川君を見つけ出すのは時間の問題でしょう。彼らがそうやって細川君の目を引きつけている間に、我々はどうにか

ミチコを奪い返すのです。彼女の精神制御プログラムをハッキングするのが、最良の方法でしょう」

なるほどと小野は思った。本社側の一郎達の動きを陽動にして、どうにかミチコのコントロールプログラムをハッキングするというのが神崎の狙いらしい。そのハッキングというのは自分の仕事だろうなと小野は気付いた。

「まあ、悪い作戦ではないな。つまりお前が細川技師の身柄を取り押さえようとは思ってないのは事実なんだな。押さえるべきはミチコと」

「そういうことです」

納得するように支社長は頷く。今後の自分たちの方針としてはそれで様子を見てみようと彼は思った。

神崎の携帯電話が着信したのは、話が終わって場の空気が緩んだその時だった。

「誰ですか一体?ん?」

神崎は電話を取り出すと、発信者の表示を見るなり眉を寄せて固まった。

「どうした?さっさと出ないか」

神崎の様子に気付いた支社長が訝しげに促す。すると神崎は慌てて葉巻を消した。

「それが、問題の細川技師から」

「なに!?」

小野や支社長が腰を浮かしかけたところで、神崎は通話ボタンを押した。

「はい。神崎です……アナタですか。まったく、我々はアナタを探してるんですよ。今どこにいるんですか……答えられない?そりゃそうでしょうね。まあ別に私もアナタを捕まえる気などさらさらありませんので御心配なく……嘘じゃありませんよ。私が知りたいのは、居場所よりも事件を起こした動機です。要求があるのなら聞きますよ。そのために電話をよこしたんじゃないんですか……は?要

求ではない？じゃあなんだと言うんです……ふむ。ふむ。忠告？私達に？それはどういう意味ですか……ほう？」

#24　プロジェクト"SPRING"　part10

第24話はこれにて終了です。
残すところあと2話（予定）。お見逃しなく。

#２５　世界のすべては彼女のために　ｐａｒｔ０

○　原川研一

彼はその世界で生きて行く覚悟を決めた。

出口など見つかるはずもなく、救いの手がさしのべられる気配もない。ミチコの言葉通り、この世界を彼にとっての本物としなければならなくなっていた。

ここには、以前と変わらないメンバー、ヤサコ、フミエ、アイコ、ダイチ達大黒黒客、タケル、イサコがいて、そして、カンナがいる。もしもあの事故が起きていなかったら、というｉｆを体現したようなこの世界の居心地が良かったのは、彼にとって偽らざる事実だった。一方で、この世界と手をつないで生きることを決めた自分への弱さへの嫌悪も確かにあった。しかしそれ以上に、今の状況を変えられないことに対する諦めが彼の心を支配したのだ。そうすることで、この現実を受け入れることに彼は引け目を感じなくなった。

驚いたことに、この世界において交通事故に遭ったのは彼自身ということらしい。実際、彼がこの世界で初めて目にした光景は病室の蛍光灯と、彼を心配そうに覗き込むカンナの顔だった。話によれば、彼は数日の間昏睡状態にあったそうだが、奇跡的に回復したということだった。彼の目覚めを、カンナや仲間達は涙して喜んでいた。

さらに彼にとって奇妙なのは、まだ自分が小学生であるらしいことだった。日めくりカレンダーによると、今は卒業を半年後に控えた１０月の初旬らしい。彼ははじめのうち、それこそ何が起こったのかをさっぱり理解できなかった。それゆえ彼には、交通事故のショックによる軽い記憶錯乱状態にあるという診断が下された。

彼は以前自分がいた空間？現実世界？での出来事をカンナ達に説明した。自分はもう中学生であること。去年メガネにまつわる事件

に巻き込まれたこと。そして、カンナは事故で亡くなっていること。

カンナ達はそれを笑い飛ばした。それはきっと、昏睡状態にある中で見た夢でしかないと彼女は言った。それは違うと彼は即座に心の中で否定した。この世界こそが夢、幻であって、自分はこの世界にいてはいけないことを自覚していた。

しかし、自分がこの世界の住民であることを認めなければならないと思い始めた時、彼はこう考えるようになった。すべての記憶は自分が昏睡状態にある中で見た夢というのは、真実なのではないだろうか、この世界こそが、自分にとって本物なのではないだろうか、と。

彼はそういう思いが頭をもたげるたびに、すぐにそれをかき消した。ところが無意識のうちでは、その考えが彼の頭の中を占めるようになっていった。だから彼は、この世界で生きる覚悟ができたのだ。

その彼を現実へと引き戻すもの。それは他ならぬカンナだった。カンナはためらうことなく彼自身への想いを告げた。彼は戸惑い、それを受け取ることはできなかったが、そのことで彼女は傷ついた。もちろん彼女も、記憶錯乱状態にあると診断された彼の豹変を、あるところで仕方のないことだと思っている節もあった。しかし、彼にそのような態度をとられることこそが、彼女には耐えられないらしい。

彼もやがて、この世界で生きることを覚悟したからには、彼女の思いを受け取らなければならないと思い始めた。かつては自分も彼女のことを愛した。その思いを受け取らない理由などない。

しかし、カンナは彼の知っている彼女とは微妙に違っていた。それは生きていた頃のカンナと比べて、どこかで見劣りのするような類の違いではない。むしろその逆で、目の前にいるカンナは、容姿、いたわり、仕草、そのすべてがあまりに完璧すぎるのだ。彼女はまるで影の差すところがない、太陽のような存在に彼の目には映った。確かに彼女は彼にとっての理想像だった。そしてそれは非人間的で、

カンナが本当のカンナでないことを彼に嫌というほど突きつけた。
ところが、他の仲間との関わりあいの中で、彼がそのように思うことはあまりなかった。ところどころでらしからぬ言動もなくはないが、それでもカンナに感じたような違和感を覚えることはなかった。それは、やはり自分の中でカンナという存在がどれほど特別だったかを彼に痛感させることになった。
しかし、本当にそれだけなのか？
彼は自問自答の日々の中で、どうにか彼女の手を取れるよう、自分の気持ちを整理することに努めていた。

○　桐野詩織

彼女は父のことを憎んでいた。
5年ほど前の夏の日。彼女の父は海外出張という事情で、彼女の元からいなくなった。その具体的な期間は彼女に告げられなかった。ひょっとすると何年間か戻って来られないかもしれないとだけ聞かされた幼き日の彼女は、もしかすると父とは2度と会えないかもしれないという淡い不安を抱いた。そしてその不安は現実のものとなった。
その話が嘘だということに、彼女は3年前に気付いた。それは彼女の名字が、ある日、細川から桐野に変わったからではない。その2年の間、父が彼女の元に帰らなかったからだ。いくら海外出張とはいえ、一度も帰国しないというのは不自然だと、幼いながらに彼女は感じていた。そして母が名字を変えた時、父は母にも同じ嘘をついて、2人を捨てたのだと彼女は思ったのだ。
テレビでよく耳にした“離婚”という言葉に、彼女はそれまで恐怖めいた印象を抱いていたが、この時母の口から出たその言葉は意外とすんなり飲み込めた。そんな父親ならいらない。自分には優しい母が1人いれば十分だ。2人だけの生活というのにも慣れている。

そのことで何が不自由になるわけではないと、その時の彼女は思っていた。

しかし6年生に進級すると、彼女のその気持ちは揺らぎ始めた。彼女は学校での成績は良く、私立の中学校への進学を希望していた。それは別に勉強がしたいというわけではなく、近くの私立中学校の制服に憧れていたという、他愛もない理由からだった。それに、彼女自身あまり小学校に親しい友達はいなかった。私立の中学校に行けば、その人間関係をリセットできるかもしれないという思いも少しだけあった。

しかし、彼女が私立中学校へと通うことは叶わなかった。この時桐野家の家計を支えていたのは母の恵である。しかし恵はあまり体が丈夫でなく、仕事と家事の両立がうまくできず、この時はパートタイムで稼ぎを得ていた。そこに毎月父からも少なからぬ振込がなされていたようだが、経済的に決して楽な暮らしはできなかった。私立中学校に進学するなど望むべくもないことを、彼女はよくわかっていたのだ。パートタイムでの仕事で比較的負担がないとはいえ、恵の健康が緩やかに悪化していたことにも彼女は気付いていた。

この時から、彼女の父親への憎悪はいっそう強くなった。そう、父が自分たちを捨てなければ、母も体調を崩すこともなく、自分も私立中学校に進学できただろうと彼女は思うようになったのだ。しかし父親からの毎月の振込も白々しい罪滅ぼしだと思う一方で、それがなければ自分と母は暮らしていけないとわかっていた彼女は、彼に対する反発心を胸の奥にしまい込むしかなかった。母の前で、父のことを悪く言ったりもしなかった。

この6年生の夏。彼女は一生忘れられないかもしれない悪夢を見た。自分と母親が車にはねられる夢。一瞬の出来事だったはずなのに、そのシーンはやけに脳裏に焼きついた。そこで目が覚めれば良かったものの、まだその夢は続いた。病院に運ばれた自分と母。自分は何とか一命を取り留めたが、母は……

彼女がその悪夢から還ると、目の前に母の顔があった。どうやらかなりうなされていたらしい。彼女の目尻から頬へと涙が伝っていた。「大丈夫？」と訊ねた母に、彼女は「変な夢を見ただけ」と返した。日付は、眠りについた時から1日しか変わっていなかった。2026年8月1日。

彼女はその夢のシーンを一刻も早く頭の中から消し去ろうとした。するとどういうわけかその日を境に、母の様子が変わった。それは彼女にとって嬉しい変化だった。どうやら体調が良くなってきたらしい。仕事の後も疲れた表情を見せることはなくなった。それに伴って、母に笑顔も増えてきた。もしかすると、あれは逆夢だったのではないかと彼女は思うようになった。

ただ、同時に彼女はそれに違和感を覚えつつあった。父親がいなくなってから、明るさが失われた母は、体調を悪化させる前でもここまで笑顔の多い人ではなかった。だから彼女は、母の笑顔を見るために、家の中ではおどけたように明るく振る舞った。同時に、母も彼女に対してそんな思いを抱いていたのだろう。2人は共に支え合って生きてきた。

だから、底抜けに明るくなったような母に、彼女はなんだか取り残されたような気分にすらなった。体調が良くなったのはもちろん喜ばしいことだ。しかし、それだけではない。母の笑顔が戻った理由は他にもあると彼女は思った。そしてその理由は、彼女には見当もつかなかった。ただ、彼女の目の前には、彼女の知らない母がいるだけなのだ。

それでも、彼女は満ち足りていた。もしあの夢が現実のものとなったら、と考えるだけで、彼女は慄然とし、背中に浮かぶ冷や汗を止めることができなかった。

○　猫目宗助

彼の願いは叶った。

２０２６年９月。メガマスはメガネに関する不具合を認め、同時に、コイルス社の猫目技師の研究を発表し、かの技師の電脳医療システム構築に対する多大なる寄与を世間に知らしめた。これによりメガマスの評判は地に堕ち、猫目技師の名誉は回復、そして病床にあった彼の母の体調もまた、快方に向かった。

それだけではない。コイルス社買収以降、失踪という形でメガマスの影響の外に身を隠していた猫目技師が、彼の家族の元へと帰ってきたのだ。

メガマスは失墜したイメージを回復させるために、猫目技師を招聘し、電脳医療による精神治療システムの完成を目指すと発表した。マスコミはこれを見え透いたコマーシャルだと非難したが、技師はそのメガマスの申し出を快諾した。これにより猫目技師に対する世間の評価はまた高まったのだが、技師にはそのようなイメージ戦略や打算はなく、ただ自分の使命を果たすのみという思いからメガマスの手をとったのだ。技師の思いを汲んだ彼は、かつては自らの手で潰そうとしたメガマスに、尊敬する父が協力することに反対はしなかった。

事は彼の思っている以上にうまくいった。彼のメガマスへの執拗な脅迫とコイルドメインの発見。そのすべてをもみ消そうとしたメガマスの動きを封じて彼はその戦いに勝利し、自らの手で彼の家族を救ったのだ。

しかし彼は、長い間自分が何か悪い夢を見ていたような気がしてならなかった。計画のすべてが破綻し、弟の手によって望みが絶たれてしまうという最後。絶望を膨張させた大都市の喧噪と孤独。破滅と向き合う中で、ただ憎悪だけを増幅させて生きる希望を再燃させた夜。再起の機会を与えてくれた企業との接触。そして、復讐への悲壮な決意を胸に再び訪れた大黒、その北東にそびえる本社ビル

を目に捉えた際の高揚感。

幻と呼ぶにふさわしくはないほどの確かな感情の塊が、彼の胸の奥には堆積していた。彼はうすうす感づいていた。あの日々が決して虚構ではなかったことに。そして、この世界が自らの心が生み出した理想を体現したものに過ぎないことに。かつて、天沢勇子の心の弱さを利用し、時にそれを鼻で笑っていた彼は、この現状に満足する己を自嘲していた。

だが、それが何だと言うのだろう。ここには、日々生気を取り戻す母のぬくもりや、歳の離れた兄を敬愛する弟の頼りない表情や、人の心を何より大切にする父の、時に柔らかい、時に厳しいまなざしがある。手元にある時には何とも思わない、しかし、ひとたび失ってしまえば、その目映さを痛いほど思い知る平穏が、再び彼の元に訪れた。彼も、それは2度と手に入らないかもしれないと覚悟していたのだ。

なおさら、彼にはこの世界を否定する理由などはない。その意識は、この世界こそが正解であると彼に思い込ませた。自分はこの世界で一生を全うする。偉大なる父の背中を追って、自分も技術者の道を目指そうと彼は考えている。まだ始まったばかりの人生の前途は明るい。

彼は時々ミチコの幻を見ることがある。そして彼はミチコに感謝する。天沢勇子がそうしたように、自分もどこかで、ミチコに願いをかけていたのかもしれない。その願いが叶った今、これにはミチコの力もあるのではないかと彼は思うようになった。そしてミチコの幻は、決まってどこかもの憂げな顔をして彼の元から去って行くのだ。

#２５　世界のすべては彼女のために　ｐａｒｔ１

「桐野詩織さんは、大黒市で生まれ、金沢市で育ったのだそうです。そして、開発された新空間がパラレルワールドとして再現しているのも、この両都市でした」

５月３日夕刻。メガマス本社から戻ってきた玉子は、メガシ屋の電脳工房にメンバーを集め、プロジェクトの真相についての説明をした。この時、ハラケンは場にいなかった。今朝、彼はイサコに自分自身が人工知能ＡＩであることを指摘され、その後も動転していたらしい。落ち着くために彼はヤサコとフミエの付き添いで一旦彼の家に戻ったのだ。ヤサコとフミエも、彼がＡＩであることなど信じてはいなかった。

だから玉子がプロジェクトの説明をした際、彼女達は改めて衝撃を受けた。もちろん、その話をした玉子でさえ平静を保っていたとは言いがたく、その場には無言の怒りが満ちていた。

また、玉子は桐野沙織が実在しないことや、この街に戻って来た宗助もＡＩと人格がすり替えられていたことも玉子は説明した。そこにはシュウイチ、そしてタケルもいたが、それを聞いて２人とも言葉を失った。

シュウイチはサオリという少女ともう会えないことを悲しみ、そしてその実験のために肉体を使われた詩織のことも哀れに思った。そして、誰よりサオリのことを思っていたイサコの心中を察するとやるせない気持ちになった。玉子と共に戻ってきたイサコは、電脳工房にはおらず、庭に面した縁側で１人俯き座っていた。泣いているのかとシュウイチは心配したが、玉子曰く、涙も枯れているだろうということだった。イサコは人形のようにじっと固まり、ただ無表情に地面を見つめているだけだった。

そしてタケルは、宗助のことをただ心配していた。タケル自身、

去年の夏の事件が収束してから、宗助ともう1度会えるかどうかは微妙だと思っていたが、もちろん宗助との再会を望み、そして彼には事件の際に犯した罪を償ってもらいたいと思っていた。その宗助自身の意識は、今は新空間の中にあるという。タケルの願いは、その彼の意識が現実世界へと戻ってくることだ。ＡＩにすり替わった今の彼が、牢獄の中でどれほどの後悔や反省をしても意味がない。いつか彼がそこから出て来た時に、その再会を喜ぶこともできない。今の宗助は、プロジェクトチームがその計画を実現するためだけに作りだした人格なのだ。それを、宗助自身の意識と同じとは捉えられない。

　話を聞いたそれぞれが、今回の件で思うところはあった。自分の中の気持ちを整理するため、その場には長い沈黙が降りていた。それを破ったのは、いてもたってもいられなくなったダイチだ。

「おい。みんなこのまま大人しく引き下がるつもりはないだろうな？」

　顔を上げたメンバーの中で、すぐにその言葉に反応したのはやはりフミエだった。

「当たり前でしょ！何をわかりきったことを言ってるの！ヤサコのおじさん達が、ミチコを生み出したっていう技師の人を何とか探し出すって言っても、それだけで全面的に事件が解決するかどうかはわからないわ。そのプロジェクトチームの思惑だって阻止しないと、そんなの私達だけの問題じゃなくなるのよ。人とＡＩが共存している世界とか、弱い人はいつでも現実から逃げられる世界とか、私は絶対にイヤ」

「それはオレも同じだ。っていうか、そのプロジェクトチームのクソ野郎どもをぶん殴らないと、オレの気持ちが収まらん。それに、ハラケンや詩織さん、タケルの兄ちゃん、昨日連れ去られた大黒中の先輩方だって助けださないと」

「水を差すようで悪いんだがな」

　正義感に駆られるダイチに、いつになく控えめに抗議するように

ガチャギリが遮った。
「実際問題、この一件でオレたちに何ができる？ハラケン達をＡＩにすり替えたっていうプロジェクトチームは、政府からの支援を得てるんだろ。オレたちがハラケン達を連れ戻そうっていうんなら、それは国家の意志に背くことで、どんな圧力がかけられるかわからんぞ」
「それはどうだろう」
ガチャギリの意見に反論があるのはシュウイチだった。
「僕らは言ってもまだ中学１年の子どもだからね。国家の意志に背くとか、そういう次元で考える問題じゃないんじゃないかな。そもそも、一郎おじさん達がそのプロジェクトチームに楯突くならともかく、僕ら子どもが何かを起こそうとしても、政府なんて気にも止めないんじゃないか？むしろアクションを起こしやすい立場にあるのは僕達だと思うけど」
「いいぞシュウ。さすが金沢イベント事故をぶち壊してまでイサコを助けようとしただけあるな。考えてることがでかい」
感心するようにダイチが言う。それでも現実的ではないとガチャギリは思った。
「もし、オレたちがプロジェクトチームの思惑を突き崩せるところまでいったとしよう。そうなったら連中にとって相手が子どもだろうがなんだろうが関係ないだろ。プロジェクトの障害となる存在は抹消されるだけだ。オレたちの意識も新空間に閉じ込められて、肉体はＡＩに支配されて、まわりはそうとは気付かずに、そのＡＩをオレと疑わずに接していくことになる。そのくらいの覚悟ができるのか？」
できる、とダイチも返したかった。しかしそこで考え込む。自分の存在は消されているのに、周りはそれに気づきもしないとは、どれほど虚しいことだろう。いや、むしろ問題はそういうことではないとダイチは気付いた。
「ＡＩって自分の記憶をデータとして流されて再現されるんでしょ

？ってことは、僕達がこれまで体験したり経験してきたことが単なるデジタルデータに置き換えられるってことだよね。それだけで、“僕”っていう人間が再現できて、しかもそれが周りに気付かれないなんて悲しいよ。僕は自分の人生が波乱に満ちていたなんて思わないけど、でも、僕が体験してきたことって、他人に偽造できるようなそんな単純なことなの？例えば、昔、いじめられていた僕に差し伸べられたダイチの手の温かみを、ＡＩの僕は知っているっていうの？絶対にそんなことないよ。あの時、ダイチの温もりを僕自身が肌で感じたから、今の僕があるんだ。みんなだって、自分の胸の中にある大切な思い出を偽造されて、その記憶を流し込まれたＡＩを自分自身と取り違えられるなんて、耐えられないでしょ？」

　デンパはダイチが抱いた気持ちを代弁してくれた。それには皆頷くばかりだった。ヤサコは去年の事件でイサコの手をとったことを思い出したし、デンパの言葉が聞こえていたイサコも、あの時のことを思い出していた。誰しもが今の自分を支えている出来事の記憶を抱えている。今のデンパの言葉が、メンバー達を結束に導いた。

「デンパの言う通りよ。そんなバカらしい偽物の世界が実現されたらたまらないわ。そりゃ確かに、私達がプロジェクトチームに楯突いたら、ガチャギリの言うように私達も新空間に閉じ込められたハラケンのようにされてしまうかもしれない。でも、それって早いか遅いかの違いじゃない。もしプロジェクトが完成したら、現実と虚構が入り交じった世界になってしまうのよ。自分がどうこうとかじゃなく、そんな世界に私は生きたくないわ。だったら、ここでプロジェクトチームに抵抗することに賭ける方がよっぽどいいでしょ」

　その場には玉子の他にメガばあもいたが、フミエを制止するような言葉はかけられなかった。プロジェクトの完成を阻止することが、どれほど危険なことなのかは承知しているだけに、彼らをこれ以上巻き込みたくないというのが玉子やメガばあの望みだ。しかしフミエの言う通り、プロジェクトが完成してしまえば、何を信じればいいのかわからないような未来が訪れる。そして、ハラケン達とも２

度と会えないかもしれない。
「フミエ。アンタの気持ちはわかったんだけど、じゃあ、今のハラケンはどうするの？今朝、イサコと言い争っていたよね？今のハラケンだって、ＡＩかもしれないけど生きているには違いないって。新空間にいるっていうハラケンを連れ戻すと、今のハラケンの居場所がなくなるんでしょ？」
　訊ねたのはアイコだった。１人縁側で俯いていたイサコも、それを聞いて顔をこちらに向ける。
「そう、よね。それって私たちが決めるような問題じゃないんだろうけど、でも、そう考えるのは逃げてるよね。あのハラケンがＡＩだとわかった以上、やっぱり新空間の中で生きてもらうのが現実的な選択肢なんだろうけど」
「それを今のハラケンには言えないわ。記憶をなくしたかもしれないけど、あのハラケンだってこの世界で生きていきたいと思ってるはずだもの」
　ヤサコが小さく言った。
「……アイツの意志を確認するしかないんじゃないか？アンタの居るべき場所はここじゃない。アンタには、アンタの居場所がある。そこに戻るつもりはないか、って」
「押し付けがましい言い方だが、それしか方法はないのかもな。じゃないと、本物のハラケンの意識が戻ってこれないからな」
　イサコの意見の他に解決方法は思い浮かばなかった。そもそも、好き勝手に実験を繰り返したプロジェクトチームがこの責任をとるべきで、自分たちが罪悪感を抱くようなことはないと誰しもが思うのだが、かと言ってそれではハラケンの友達として冷た過ぎるのではないかと考えてしまうのだ。
「あまりいい方法じゃないかもしれんが、もしくは、もう１度ＡＩのハラケンの記憶を消して、その間にアイツには新空間に戻ってもらうっていうのも考えられる」
　提案したのはガチャギリだった。否、その場の何人かの頭の中に

はそれも浮かんではいたのだが、言葉にできたのが彼だったという方が正しかった。

「アイツのためを思うなら、それもナシではないのか。でもそれじゃあ」

「わかってる。アイツのＡＩを作っておきながら、コンピューターのデータみたいにその記憶を消した、プロジェクトチームのやり方に乗っかったみたいでイヤだって言うんだろ。でも、この現実世界での記憶を持たせたまま新空間に帰すのは、アイツにとって苦しいことだと思うぜ。

それに、何もＡＩであるハラケンの記憶を全部消そうっていうわけじゃない。今、新空間の方にいる本物のハラケンが向こうで体験していること。もしアイツが現実世界に戻ってきたとしたら、それを語らせればいい。そしてそれをＡＩのハラケンの記憶として流し込めば、記憶のギャップは埋められる。まあこれは、自分自身で体験したことこそが本物で、その記憶を偽造したところでそれが本物にはなり得ないっていう、さっきのデンパの話を完全に無視してしまっているけどな」

ガチャギリの言いたいことは皆痛いほどわかった。彼は何より、ＡＩのハラケンのことを思ってそう言っているのだ。

しかし、それではプロジェクトチームと同じ穴のムジナではないかという葛藤を皆が抱く。自分たちの都合で（もちろん彼のためを思ってのことだが）、その人の記憶を好き勝手にいじっていいものなのか。ツラい記憶は抹消しなければならないのか。

それが生身の人間であるなら、絶対にノーと言えるだろう。しかしそれが、機械脳ＡＩであるなら？

「答えを急ぐ必要はない。まずは、ケンちゃん達を連れ戻す方法を検討する必要があるけど、今はそれを考えていられるほどの余裕もないだろう。とりあえず一晩おのおの気持ちを整理しよう。こっちも、室長達の動きと連動しないといけないから、あちらの進捗具合を見ながら考える必要がある。今日はこれで解散にしよう。明日の

朝、またここに」
「わかった。皆、自分の考えをまとめといてくれよな」
疲れたような表情のダイチが言うと、一同もそれに頷く。この日は、ここで解散ということになった。

#25　世界のすべては彼女のために　part2

『……なんだよその話。本当なのかよ』
電話口の向こうでレインは、大きくため息をつくように言った。
「ああ。オバちゃんがそう言ってた」
『サオリがＡＩだったって？んなわけないだろ。きっと連中のデタラメだ』
誰だってこの話を聞けばそう思うだろうとシュウイチは思った。本当は自分の中でもこのことに関して気持ちを整理しきれていなかったが、それでも金沢でサオリと共に戦ったレイン達には、このことを知らせなければいけないと思って彼は電話したのだ。
「プロジェクトチームに、そんなデタラメを並べ立てる理由はないよ。きっとその技術は実現してるんだ。現実として受け入れたくない気持ちはわかるけど、でも、それが現実なんだ」
『やけに冷静に受け止めてるんだな』
「まさか。僕だってそれを嘘だと思いたいさ。でも、僕がそんな気持ちでいてはいけないんだ」
『イサコか。大丈夫なのか？』
「そばにはいるんだけどね。ずっと1人で考え事をしてる。イサコはプロジェクトチームの人から直でその話を聞いたんだ。その時にもう、自分の中の感情を全部浪費したみたいで、ほとんどうわの空だよ」
『よっぽど堪えたんだろうな。立ち直れる兆しはあるのか？』
「立ち直らないといけないとは思ってるはずだよ。こっちのメンバーは、みんなプロジェクトの完成を阻止しようと結束してる。これはイサコとサオリの問題だけじゃなくて、オバちゃんの甥っ子さんとかを新空間から救出できるかどうかっていう問題にもなってる。なにより、そのプロジェクトが完成した後の世界になんか住みたくないと、みんな思ってる」

『同感だ。オレだってそんな世界は認めねえ』
しかしレインには気がかりなことがあった。
『でも、プロジェクト完成の阻止に動くって危険なことなんだろ。お前ら、身の安全は大丈夫なんだろうな?』
「正直言うと、それは保障されてないよ。もしかすると僕やイサコだって、電脳体を新空間に閉じ込められてしまうかもしれない」
『そんなことをさらっと言うんじゃねえ。お前はイサコと一緒ならいいかもしれないけどな、取り残されるこっちの身にもなってみろ。カズマやユイやアサミだって、大黒市での立て続けの事故でかなり心配してるんだぞ』
シュウイチはそれに苦笑しながら返す。
「誰がイサコと一緒ならいいと思ってるって?そんなわけないだろ。お前らのいない世界なんて考えられないよ。ユイやアサミにしても、イサコの無事を祈ってるんだ。絶対にそんなことにはならないようにするさ」
『本当はオレもそっちで一緒に戦いたいんだけどな。まあ、言っても仕方ねえ。本家大黒黒客の足を引っ張るようなマネだけはしないでくれよ』
「ああ、努力するよ」
『ユイ達には今の話はした方がいいか?』
その問いにシュウイチは考え込む。ユイもサオリのことをずっと気にかけていたし、これからも友達でいたいと思っていた。そのサオリが存在しないと話したらどうなるだろうか。イサコと同じで純粋で、イサコと違って大切なものを失ったことがない彼女に、その事実を打ち明けるのは酷かもしれない。いずれ話さなければならないことだが、それはまた、この先どうなるかが見えてきてから考えることにしようとシュウイチは思った。
「今はまだやめておこう。ユイにはショックが大きすぎると思う。真相を話すかどうかも含めて、おいおい考えることにするよ。とりあえず、カズマにはこれまでの話と経緯を伝えといてくれ」

『了解だ。ああそう言えば、あのオッサンどうしてる?そっちにいるんだろ?』
「大谷さん?ああ、僕達と一緒に行動してるよ。今ここにはいないけどね」
『役に立ってるか?』
「活躍してるよ。なんでも、あの人がおばあちゃん家に封印されていた資料を見つけて、それを見たイサコが真相に気付いたらしいんだけど」
レインに一瞬考え込むような間があった。
『なんでアイツがお前のばあちゃん家の秘密を知ってるんだ?』
「それはわからない。あの人、なにか隠しているのは間違いないけど、少なくとも僕達の味方であることは疑いないわけだから。今はあの人頼みのところがあるし」
『そうか。まあ、それじゃよろしく言っといてくれ。オレ達もオッサンを応援してるってな』
「ああ、伝えとくよ」
『じゃあ、ムリだけはするなよ。絶対に無事に帰ってこい。事件が解決した後の祝宴の話、忘れてねえだろうな?』
「ちゃんと覚えてるよ」
『イサコとのデートの話も』
「忘れるわけねえだろ」
『それならいい。健闘を祈ってるぜ』
シュウイチはそこで電話を切った。今は一緒に戦うことはできないが、アイツらのためにも絶対に事件の解決に尽力しようと、シュウイチも吹っ切れたような気分になった。

日も落ちかけた空の下、シュウイチは閉店したメガシ屋の店の前で通話していた。電脳工房では玉子とメガばあが眉間に皺を寄せて色々と小難しい話をしており、イサコは相変わらず縁側で1人座っている。ヤサコと、集まっていたメンバーの中で1人残っているフ

ミエは、イサコをそっとしておこうとリビングの方にいた。
メガシ屋の入り口は閉め切られているので、シュウイチはその脇から庭に入って家の中に戻ろうとした。その時、縁側にいたイサコから声をかけられた。
「レインと電話してたのか？」
シュウイチは少し驚いた表情になった。イサコは意気消沈して、こちらの電話の声など耳に入っていないだろうと思っていたのだ。
「聞こえてたの？」
「盗み聞きするつもりはなかったけど……サオリのこと、アイツに話したんだな」
「ああ」
「何か言ってたか？」
「『本当なのかよ？』って」
シュウイチはイサコの隣に腰をおろす。イサコはシュウイチに向けていた目を俯けて言った。
「私もここでずっとそう考えていた。結局、プロジェクトチームがそう言ってただけで、それが事実とは裏付けられていないからな」
「それがイサコの答え？」
不思議そうにシュウイチは訊ねる。
「願望じゃない。私も、その話を事実だと仮定して考えた。自分にできることはなにか、もう私達はサオリと会えないのか。その上で、あの話が嘘だったという可能性を冷静に検討するのは的外れじゃないだろう」
「確かにね。でも、意外とイサコが打ちのめされてなくて良かったよ。さっきはとても声をかけられる様子じゃなかったし」
「本社であの話を聞いてから、ずっと自分の気持ちを保とうとするのに必死だったからな。それに、今は願望じゃないって言ったけど、まだそのわずかな希望にすがりついているような自分がいるのかもしれない。どちらにせよ、私達は原川達の救出も考えないといけない。このことで、自分だけが沈んでいる場合じゃない」

おそらく、サオリのことはこれからじわじわ悲しみとしてこみ上げてくるのではないかとイサコは思う。彼女と2度と会えないことを思い知れば、その時は今日以上に涙を流すかもしれない。

「ちなみに聞きたいんだけど、サオリがＡＩだったとして、新空間にいる詩織さんはどうするべきだとイサコは思う？」

「決まっている。詩織さんの生きるべき世界は、電脳空間じゃない。彼女も、原川と同じように現実世界に連れ戻すべきだ」

「即答なんだね」

シュウイチはもう少しイサコが迷うものだと思っていた。脳死状態で助かる見込みのない母がいる詩織にとって、現実世界に戻ってくることはツラいことでしかない。

「なあ、シュウ。金沢での一連の事故の時、私にはサオリのことがかつての私と重なって見えたってっていう話はしたな」

「ああ。イサコは、サオリの行動を阻止すべきかどうか、自分にその資格があるかどうか迷っていた」

あの時イサコのそばにいながら、その葛藤に何も手助けできず歯がゆい思いをしていたシュウイチはよく覚えていた。

「そうだ。結局あれは私の取り越し苦労で、サオリは実際、ミチコによる事故を防ごうとしただけだったけどな」

「そうだったね。まあ、あの時は知らなかったことなんだから」

自分たちの勘違いのおかげで、イベント事故の時はえらい目に遭ったと冗談めかしてシュウイチは苦笑した。

「でも、なんで今その話を？」

「ああ。あの時、私がサオリを止めるべきかどうか迷ったのは、彼女の心中が痛いほどよくわかったからだ。そして、私と同じような境遇にある詩織さんの気持ちも、私には少なからず汲み取ることができると思ってる」

「大切な人と交通事故に巻き込まれ、その大切な人は亡くなってしまった。まあ、詩織さんのお母さんはまだ亡くなったわけじゃないから、その言い方は適当じゃないかもしれないけどね。生き残った

詩織さんは、母の幻影がある電脳空間の中に入った」
「それは彼女自身の意志じゃない。話を聞く限り、彼女の父である細川技師が彼女の心が傷つかないようにそうしたようだ。技師は、詩織さんを一生電脳空間の中にいさせるつもりらしい。そもそも技師は、ただ詩織さんのため新空間計画に協力したみたいだからな」
「それは、父親として間違っていると？」
イサコは強く頷いた。
「そう思わないか？愛する娘を、虚構の世界で一生暮らさせるなんて。確かにそこには母親の幻影があるかもしれない。でも、それもＡＩじゃないか。まわりの人間もほとんどがＡＩだ。実体験でもない記憶を流し込まされた幻影だ」
「でも、イサコもその幻影と一緒に」
「ああ。お兄ちゃんも幻影だったさ。でも私は、お兄ちゃんとはさよならをするつもりだったんだ。去年の事件でもそうだ。私はツラいことしか待っていないかもしれない現実に戻ってきたんだ。小此木優子が差し伸べてくれた手に引っ張られて」
「そうか。だから詩織さんを現実世界に連れ戻すことに迷いはないんだね。詩織さんも、ツラい現実を受け止めないといけない。その受け止め方を、イサコは知ってる」
もちろん、イサコと詩織の間に面識はないし、それは押し付けがましいことだという自覚もイサコにはある。しかし、去年の事件を乗り越えた自分だからこそ、詩織を新空間から連れ戻すことができるという思いがあった。
「ところでイサコは、幻には価値がないと思ってる？」
イサコはシュウイチの声色が変わったような気がした。
「価値がないとは思わない。電脳医療を受けた時のお兄ちゃんとの思い出も大切だし、詩織さんにとって母親の存在がどれほど大きいかは察せられる。でも、いつまでもそれに依存してはいけないとは思う。だから私は、彼女は現実世界で生きるべきだと思ってる」
「……強いね、イサコは。もし、サオリがＡＩだったとしたら、結

局彼女は幻影だったんだから、いつかは離ればなれにならざるを得なかったって割り切れるのかな？」

そのように問われると、イサコはまた違うような気がした。中身がどうだったのであれ、サオリを幻影だとは思えない。しかし、それはかなり都合のいい解釈のような気がする。自分とサオリとの関係が特別だったのか。それとも。

「なるほど。アンタの言いたいこともなんとなくわかる。本物か偽物かなんていうのは、所詮自分の物差しで判断しているに過ぎないってことか。ＡＩだから幻影だの、生身の脳だから本物だの、そんな単純なことじゃない。結局、自分の信じたものが本物になり得るわけだからな」

「まあ、１つの考え方だと思うけどね。こう考えると、余計に迷宮に踏み込むようなことになるかもしれないし、プロジェクトを認めることになりそうで怖いけど。もちろん僕も立場としては、イサコのように詩織さんを連れ戻す方に入ると思う。でも、僕はイサコのようにそれを即答はできないかな」

詩織にすべてを打ち明けたとして、彼女がそれでも新空間の中で母とともにいることを望むのであれば、彼女の意志を尊重するかもしれないとシュウイチは思っていた。対してイサコは、そんなシュウイチの考えも理解できたが、やはり去年の事件の体験から、彼女もやはり現実で生きるべきだという思いはブレなかった。詩織をサオリの代わりに、というわけではないが、イサコは現実世界に戻ってきた詩織をサポートし、友達になりたいと思っている。

「難しい話をしてるのね」

そう声をかけられてイサコとシュウイチは振り返ると、そこにヤサコとフミエが立っていた。２人はシュウイチの隣に腰をおろし、縁側には４人が並ぶかたちになった。

「詩織さんのことは、私達が考えなければならない問題だ。うぬぼれかもしれないが、彼女の命運は私達次第だからな」

「そうね。新空間の中に助けに行くことができればだけど」

「アンタ達の方はどうなんだ？原川のことで、気持ちの整理はできたか？」
　その問いにヤサコは俯き気味に、フミエは肩をすくめるようにして首を横に振った。
「簡単に決断はできないわ。アンタは知らないかもしれないけど、アンタが本社に向かった後にハラケンを家に送った時、ハラケンは怯えていたのよ。自分にはこの世界に居場所はないのか。自分は消されてしまうだけなのかって」
「……そうか。アイツには本当に悪いことをしてしまった。私も、今朝は謎が解けたことで舞い上がってしまったからな」
　今更ながらハラケンに事実を突きつけてしまったことをイサコは悔やんでいた。
「でも、やっぱりあのハラケンにはこの世界に居場所はないのよね。私達がしようとしていることって、今のハラケンを否定するようなものだから」
「ＡＩと手をつないで生きるのか。やっぱり手を取り合って生きるべきは人と人であると考えるのか。どっちがきれいごとなのか、わからなくなっちゃったわ」
　ヤサコはそれでも現実を見つめ、フミエも苦渋の決断を下すしかないと思っていた。ただし、それが絶対的な正解でないと2人とも感じていた。
「新空間にいる原川のことを思うと、ＡＩの方は電脳空間に帰すしかないと私も思う。問題はその手段だ。さっき話にも出ていたな。原川のＡＩはそのまま新空間に帰すか、それとも、この現実世界での記憶をすべてリセットし、さもアイツが新空間の中でずっと生きていたかのような記憶を偽造してから帰すか」
「怯えていたっていう話をふまえるなら、後者の方が良いんじゃないかと思うけど」
　その方がＡＩのハラケンに傷を残さずに済むとシュウイチは思った。それはヤサコ達も同じだったが、

「でもね。ＡＩと脳を等価と考えると、それはやってはいけないことのように思えるのよ。生身の実体験の記憶を偽造するのはギリギリまだわかる。でも、体験してもいない記憶を偽造するのは、それこそ洗脳よ」

フミエの言葉にはイサコも大きく頷いた。サオリのＡＩは、交通事故に遭った母と姉が入院しているという仮想の状況を流しこまれたことで、神崎の指示に従わざるを得なかったという。目的の違いはあれ、やろうとしていることは同じである。

「オバちゃんは答えを急ぐ必要はないって言ってたけど」

「一晩頭を冷やしたぐらいで、答えが出るとは思えないのよね」

しかし、時間が残されているとは言えない。イサコを含め、ヤサコもフミエもＡＩの記憶の抹消や偽造をしたくはないと思っている。それなら、答えは１つしか残っていない。

「やっぱり、ＡＩの原川もそのまま帰すべきだろう」

ヤサコとフミエが顔を上げる。何か言いたげなフミエを制してイサコは続けた。

「私は、詩織さんを現実世界に連れ戻そうと考えている。詩織さん自身は生身の脳だ。新空間の中での記憶を消したりすることはできない。それと同じと考えるなら、ＡＩの原川もそのまま新空間に帰すべきだと思う。それはアイツにとって怖いことかもしれないし、ツラいことかもしれない。でも、こうなった以上、誰も痛みから逃れることはできないと思う。それは、その決断を下す私達にとっても」

誰のせいでこうなってしまったとか、そういう問題ではないし、それを考えるのは無意味なことだ。結局、誰もが痛みを受け入れられるかという問題なのだとイサコは思った。そしてその言葉は、迷いのあったヤサコやフミエにとって道しるべとなった。

「……そうね。アンタの言う通りかもしれない。誰も傷つかないことは望めない。なら、その痛みはみんなで共有すればいい、か」

フミエがイサコの気持ちを言葉にしてくれたことで、イサコもど

こか吹っ切れたような気がした。サオリには2度と会えないという痛みを受け入れ、詩織が現実世界に連れ戻す。自分や彼女が傷ついたとしても、それは大きな前進だとイサコは思う。

「……天沢さん。私も、なんとなく答えが見つかった気がする」

ヤサコもイサコのおかげで気持ちの整理がついた。ハラケンと訣別するという痛みを自分が受け入れることで、ヤサコは胸のうちにある本当の気持ちに、素直になれるような気がした。

「ああ、それなら良かった。でも、問題はここからだ。果たして、詩織さんや原川をどう連れ戻すか、だな」

そう言ってイサコが見上げた夜空には、薄い雲に隠れたおぼろげな月が浮かんでいた。

#25　世界のすべては彼女のために　part3

「……以上が、プロジェクトの全容です」
大谷は一郎達と別れた後、大黒市内のホテルで彼の依頼人である男と面会し、今日一日の動きやプロジェクトの真相を報告していた。
「そうか。ご苦労だった」
疲れたようにため息をついたのは、報告を受けた男の方だった。窓際に置かれた椅子に深く腰掛け、大黒の市街を一瞥する。
「もっと驚かれたり、お怒りになるものだと思いましたが」
「プロジェクトについては、予想していたものに近かったからな。人格をＡＩとすり替えるか……逆流理論とはまた違う方法での洗脳。メガマスが考えつきそうなことだ」
「そうですね。しかし、それも一部の人間の仕業です。それより、オレはもっと別のところでアナタが反応すると思っていましたが」
「宗助のことか？」
「ええ。もちろん彼もですが、原川研一君、桐野詩織さんが人体実験に使われたこともオレは頭にきました。なぜ、そんな冷静にいられるのですか？猫目宗助は」
どこか感情的な大谷の言葉を男は遮った。
「大谷君。君から去年までの一連の事件について聞かされた時、私は妙な違和感を覚えたんだ」
「と言うと？」
「イマーゴなどのメガネの不具合の暴露をちらつかせて、宗助はメガマスを揺すろうとしていた。その計画は寸前のところで弟のタケルに食い止められたものの、メガマスを追いつめるところまでは行った。だが、私はそれでもうまく行き過ぎだと思ったよ。メガマスなら、もっと早くに宗助の動きを封じることができたんじゃないかと思えてならなかった」
「つまり、宗助がメガマスに泳がされていただけじゃないかと思っ

たわけですね。プロジェクトチームの指揮官である神崎は、確かに彼を利用していたようでした」

男はそれに頷いてから続ける。

「宗助はまだ幼い。世界の何も知らないのに、自分には力があると思い込んでしまっている。そんな人間は、得てして誰かに嵌められてしまうものだ。だから先月の大黒市での空間事故に宗助が絡んでいたと聞いた時は、アイツは同じことを繰り返しているだけじゃないかと思ったんだ」

「その予感は的中。宗助は人格をＡＩとすり替えられ、神崎の意のままの行動をとってしまった。監獄の中にいる今も」

「誰かの操り人形でいる以上、その中身がＡＩだろうがなんだろうが大差はない。結局、自業自得だったと言ってしまえばアイツは何も言い返せないだろう」

まるで同情がないような言い方に、大谷は厳しい人だと思った。

「彼のことはもういいんですか？」

「このままでいいわけはない。それは原川君にしても、詩織ちゃんにしても、昨日の事故の被害者達にしても同じだ」

「宗助への特別な感情があるわけではないのですか？」

「ないと言えば嘘になる。そもそも、アイツを凶行に走らせた責任の半分以上は私にあるからな。アイツが、私の意志を汲み取ってくれなかったのは残念でならなかったが。

しかし問題は宗助じゃなく、もっと根本的なところにある。大谷君。話を聞く限り、今回のプロジェクトのすべては、コイルス社の研究から始まっている。私が目を背けるわけにはいかないだろう」

確かに事実はそうだ。しかし、それでこの人がすべてを背負いこむ必要はないと大谷は考える。

「表舞台にお戻りになるつもりですか？」

「こうなった以上、そうせざるを得ないだろう」

「はっきり申し上げますが、アナタが出るのは危険であり、事態がさらに複雑になる可能性もあります。なんのためにこれまでオレが

アナタの代わりとして駆け回ってきたかわからないじゃないですか」
「君には感謝しきれないほどだ。これまでよく難しい役を務めてくれた。あ、いや。もちろんこれからも君には頑張ってもらうつもりだが」
それは大谷にとって光栄な言葉だ。しかし、まだ自分だけでもやれると大谷は思った。
「オレのことはいいんです。アナタにはもう少し慎重になっていただきたい。アナタは、まだ自分にどれほどの求心力があるのか理解しておられない」
「買い被りはよしてくれ。今の私にそんな力は」
「あります。少なくともプロジェクトチームは、アナタの登場を喜ばないでしょう。アナタが彼らに協力するつもりがないのならなおさら。宗助と同じ運命をたどることになるかもしれません」
「細川君の問題もあるのだぞ」
途端に大谷は言葉に詰まった。
「……彼を止められるのは、確かにアナタしかいない」
「そう自惚れてはいないが、私も個人的に彼とは話がしたい。彼の真の目的や動機を、彼の口から話してもらいたい」
男はかつて細川技師と近しい関係にあった。彼がこのような事故を起こしていることに、男も心を痛めているのだろうと大谷は思う。
「そうですか……彼の企んでいることは、平松氏にも掴めないという話です。一体何が目的なんでしょう。予測を立てるのも難しいですか？」
「いくつか手がかりになりそうなことはある。１つ目。平松さんの話にもあったそうだが、彼の行動のすべてが一人娘である詩織ちゃんのためだろうというのは、私もそう思う」
この人は彼女と面識があるのかと大谷は思った。まるで彼女と会ったことがあるような呼び方だ。
「しかし、新空間が完成した時点で、彼女に与えられるものはすべて与えたようなものです。ともすれば、新空間は自分の望んだもの

が何でも手に入るような世界なんですから」
「見かけ上はな。でも、その新空間でも手に入らないものもあるだろう」
「はあ」
訊ねた大谷にも、男の言わんとしていることはなんとなくわかった。新空間はすべてが虚構に過ぎない。ただ、男がどういう含みをもってそう言ったのかまでは大谷にもわからなかった。
「それに手がかりの2つ目。彼の起こした事故は2件しかないから、あまり参考にならないかもしれないが、しかし、その規模はだんだん大きくなっているように見える」
第三小跡地での事故は被害者が4人で、うちハラケンは電脳体を連れ去られてしまった。昨日の事故の被害者は7人で、全員の電脳体が連れ去られた。確かに規模は大きくなっている。
「じゃあ、今後事故はどんどん大規模化してくるということですか？」
「仮にそんな法則があるのならな。この2つの手がかりに仮説を立ててみると、彼の目的はなんとなく予測ができる。が、私でもそれはまさかとは思う」
すると大谷は腰を浮かせ、正面に座る男の顔を見据えた。
「なんとなくでも読めているんじゃないですか！聞かせてください。アナタの考える彼の目的とは」
「あまり、真に受けないでくれよ」
そう前置きして、男は大谷に自分の考えを述べた。そして大谷は、血の気が引くような思いをした。
「……まさか。そのために、あの人は……」
「あくまで仮説に過ぎない。が、詩織さんへの異常な愛情の行き着く果てに、彼がそんなことを考えても不思議じゃない。私も久しく彼とは会っていないが、彼の娘さんへの想いの強さは知っている」
「いや、それはまずいですよ。もちろん、今までも十分まずかったわけですが、そうなると原川君や詩織さん、宗助を助けるどころの

話じゃなくなります！」
　大谷はついに席を立って、部屋から出ようと駆け出した。
「どこに行く気だね？」
「今の話を、メガマスにいる小此木さん達の耳にも入れておきます」
「言ったろう。仮説に過ぎないって。まだそう決まったわけじゃないんだよ」
「しかし、あの人達に知らせておいてもいいじゃないですか。時間的に、どれほど残されているのかもわかりませんし」
　慌てふためく大谷に対し、男は冷静だった。
「落ち着きなさい。この話を彼らの耳に入れたらどうなると思う？余計な混乱を招くだけだ。タダでさえ今のメガマスは、プロジェクトチームに乗っ取られて指揮系統が混乱しているというのに。メガマスの動揺は、やがてこの街の市民にも及ぶ」
「じゃあ、細川技師の目的が明らかになるまで黙っていろと？」
「ああ。いずれにせよ、今メガマスを動かせるのはプロジェクトチームの人間だ。彼らにはこのことを黙っていた方がいいと思う。小此木君達に今の話をしたところで、どこからそれがプロジェクトチームに流れてしまうかわからないからな」
　大谷は男の懸念していることが理解できた。とにかく、まだ男の仮説が正しいと決まったわけではないと彼は思い直した。
「では、様子見というわけですね」
「平松さんがいるなら、彼らが細川君の居所を掴むのも時間の問題だろう。それまで、もう少し動静を見守るのが最善だと思う」
　しかし、男は既に覚悟を決めているようだった。だからこそ、慎重に事を運ぼうとしているのだろうということに大谷は気付いた。

#25　世界のすべては彼女のために　Part4（前書き）

5月4日（火）

#25　世界のすべては彼女のために　part4

プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の真相が暴露された日の夜。ヤサコ達に送られるように家に戻ったハラケンは体調不良を訴えた。彼の母から事情を聞いた玉子は、イサコを小此木家に預け、彼の家に駆けつけた。その時、玉子はハラケンと2人で話がしたいと言い、彼の母には部屋を出てもらった。まだ真相を知らない彼の母には、この会話はどうしても聞かれたくなかったからだ。

「やっぱり、僕はＡＩだったんですか？」

発熱しているらしく、ハラケンはかすれた声でベッドに横たわったまま玉子に訊ねた。彼の喉が枯れているのは風邪が原因ではなく、もしかすると家に戻ってから泣いていたのではないかと玉子は思い、胸が締め付けられるようだった。

「結論は、まだ出てないわ」

玉子はそう返すのが精一杯だったが、それは決して嘘ではなかった。それが事実であるという確証が、今の時点であるわけではない。

「でも、その可能性は高いんですよね。そうじゃないなら、そんな言い方はしない。僕自身、自分が原川研一であるっていう自信もないですから」

「そんなことは言わないで。私はアナタからそんな言葉は聞きたくない。私はアナタがケンちゃんであることを信じてるの。たとえこの世にケンちゃんが2人いるとしても、そのどちらかが本物で、どちらかが偽物だなんてことはない。私にとって、アナタはかけがえのない存在なのよ」

するとハラケンはその言葉をどう受け取ったのか、少し頬を緩めながら黙って天井を見上げた。時々咳を出す彼は、決して偽物などではない。こうして体調を崩してしまうのは、ひとえに彼が悩みに悩んでいるからだ。心と体は対をなす。彼の感情が溢れ、涙となって流れ落ち、それでも気持ちを整理できず、やがて喉は枯れ、心は

疲れ果て、ついには熱が出た。どこに彼を人間以外のものと見る余地があるのだろうと玉子は思い、彼女の感情も雫となってこぼれ落ちた。

「姉さん、あ、いや。アナタのお母さんに、そのことは言ってないでしょうね？」

ハラケンには見えないように目尻を拭って玉子は訊ねた。

「言ってません。多分、それを言うとあの人が一番ショックを受けるんじゃないかと思ったのと、もしかすると、僕が本物の息子ではないと知ったら、僕に冷たくするんじゃないかと思って」

「アナタのお母さんは決してそんな人じゃない。でも、一番ショックを受けるだろうっていうのは間違ってない。でもね、多分そんな話は信じないと思う」

色々な意味で彼の母がその話を受け入れることはできないだろうと玉子は思った。もちろん、第一の理由は信じたくないことだから。そして第二は、ＡＩが肉体を支配するという技術そのものの存在を疑うはずだから。

しかし、そんなことを考えても仕方がない。ハラケン自身も玉子も、家族にその話をする意志を持っていないのだ。

「問題はアナタの体調ね。アナタの体調不良が単純な理由によるものでないと仮定して、念のためにちゃんとした施設でちゃんとした人に診てもらう必要があると思うの」

「……まわりくどい言い方をしなくてもいいですよ。僕の脳であるＡＩと肉体との間でなんらかの不一致があって、それが原因で僕が体調を崩したかもしれないとアナタは言いたいんですよね？」

そこまで見通しているのかと、玉子はため息をつきたい思いだった。

「アナタとほぼ時を同じくして記憶を失った少女がいる。そしてその少女は高熱を出したまま意識が戻っていない。それを考えてのことだ」

「……僕の他にもいるんですね」

そのことで詮索されると、余計彼が落ち込む材料が増えそうな気がしたので、玉子は強引に話を進めることにした。
「とにかく。アナタにはもう1度病院に戻ってもらおうと思ってるの。明日の朝も熱が引かないようなら、そのつもりでいて」
「わかりました」

そうして次の朝。体調が元に戻らなかったハラケンはもう1度メガマス病院に行くことになった。玉子は彼の母にそれらしい理由を話し、初夏を感じさせる蒸し暑さの下、玉子とハラケンは徒歩で病院に向かう。ヤサコとイサコとシュウイチ、フミエとアイコがそれに同伴した。
『メガマス病院には信頼の置ける医師を手配しておいた。父の後輩で僕とも親交のある精神科医だ。念のために本社のＡＩ技術者も何人かそちらに派遣している』
「何から何まで申し訳ありません」
一郎と通話中の玉子は感謝してもしきれないと思った。ハラケンの治療のために、一郎が周到に準備をしてくれているのだ。
『プロジェクトチームの関係者に診てもらうわけにはいかないだろう。本当は彼らが干渉してくる心配のないところで診てあげたいが、まあ、どのみち同じことだろう。彼らだって研一君の動向は把握している』
「ケンちゃんの身柄を引き渡すつもりはありません」
『そうだな。もちろん、彼らだって研一君の不調を傍観しているわけにはいかないはずだ。彼らが力を握っている以上、ある程度彼らの干渉があるのはやむを得ないと思う』
「つまり、プロジェクトチームに治療は任せないが、彼らの言うことにも耳を貸せということですね？室長が手配してくださった医師や技術者は、彼らの監視役ということになるんでしょうか」
『ああ。でも仕方のないことだ。彼の体調不良が”ＳＰＲＩＮＧ”の不具合によるものだとしたら、その対処法を講じられるのはやは

りプロジェクトチームの人間ということになるからな』
　その理屈はわかるが、玉子は何とも複雑な心境だった。プロジェクトチーム側としては、ハラケンをＡＩのまま維持しようとしていることだろう。玉子はそれを望んではいない。が、たった１つしかない肉体が不調を起こしているのを黙って見ていることもできない。
「それは承知しました。話は変わりますが、細川技師の捜索の進展は？」
『昨日は夜を徹して可能性のある場所を洗っていった。しかしそれでもまだ居所を掴めていない』
「どこかの研究施設にいるわけではないと？」
『そうなんだ。彼が事故の首謀者であることを考えれば、なんらかの設備がある場所にいる可能性が高い。しかし、昨日の時点でそれらはあらかた調べ終わった。こうなると、難しいな』
　つまり、捜索範囲をかなり広げなければならないということだ。また、彼が設備の整った場所にいないということは、彼のテロは、もはや彼の手持ちのコンピューターから仕掛けられるということになる。今の彼はミチコの意志を遠隔で操作できるのだろうと玉子は思った。
「大黒市の近辺にもいない可能性があるんですよね。じゃあ、これから捜索はどうなさるおつもりですか？」
『社長や平松部長と相談を持っているところだ。竹下君達、電脳犯罪対策係も総出で聞き込みにあたってくれているが、どうだろう。解決の糸口は見えていない状況だ』
　一郎の声にも明らかに疲れの色が感じられる。ハラケンを病院に送り届けたら、すぐに自分も動かなければと玉子は思った。
「プロジェクトチームに細川技師を捜索する意志はないんですか？彼らの方が技師の動向を読みやすいでしょう」
『あれから一切のコンタクトをとっていない。彼らに何かを期待することが間違っているような気がするよ。とにかく、今はこんな状況だ。進展があればまた連絡する』

そうして一郎の方が通話を切った。玉子はこのままで果たして事件は解決するのだろうかと天を仰いだ。

「技師の居所は掴めていないか」

玉子のやり取りを聞いていたイサコは察したように言った。

「かなり手詰まりのようだった。状況は良くない」

「私たちにできることは？」

訊ねたのはフミエだった。

「そうだな。できるだけ友達にメガネの使用を控えるように注意を促してくれ。次の事故がいつどこで起こってもおかしくない状況だ。前の大黒中での事故で、今はかなりメガネ自粛の動きもあるが、念のため」

「予防しかできないってことね」

歯がゆいようにフミエは息をつく。それでも、言われた通りにフミエはメールをまわすことにした。本当は大黒市民や近隣都市の住民にも大々的に注意を促したいが、メガマスのトップに君臨するプロジェクトチームやそれを支援する政府関係者は、これ以上騒ぎが大きくなるのを望んでいない。だからそれは叶わないだろうと玉子は思った。

話をしている間に一行はメガマス病院に到着した。玄関ロビーに入ったところで、待っていたかのように1人の医師と数人の技術者のような人物達が一行を迎える。彼らは一郎からの要請を受けたと言ったので、とりあえずプロジェクトチームの人間ではないことに玉子は安心した。

「ではとりあえず、彼には内科で診察を受けていただきます。その間に詳しいお話を伺ってもよろしいですか？」

医師がそう言うので、玉子とヤサコ達は病院内の会議室に向かうことになった。そこでイサコが玉子に訊ねた。

「なあオバちゃん。私とシュウはサオリ、いや詩織さんのお見舞いに行こうと思うんだが、行ってもいいか？」

「ああ。彼女もここに入院しているんだったわね。受付で話を通して、会えるようなら会ってらっしゃい。私も後で覗きに行く」
玉子の許可がでたので、イサコとシュウイチは受付に向かった。
「桐野沙織さんのお見舞いをしたいのですが、面会できますでしょうか？」
「桐野さんですか？少々お待ち下さい」
受付の女性は医師に連絡を取り次いでいるようだった。
「なあイサコ。サオリを診てる医者っていうのは」
「ああ。退院前の原川を診ていた胡散臭いヤツだ。どうなんだろう。まだあの医者が詩織さんを診ているのか。だとすると私達が面会を申し込んでも拒否されるかもしれない」
「昨日プロジェクトの真相が割れたんだから、隠そうとはしないんじゃない？」
そんな推測をお互いに交わしていると、取り次ぎが終わったように受付の女性が２人を向いた。
「先生の許可が取れました。桐野さんはまだ意識が戻られていないようですが、それでも構わなければ少しだけ面会しても大丈夫とのことです」
イサコとっては意外な返答だった。しかし、会わせてくれるというのならありがたく会わせてもらおうと思った。
「ありがとうございます。先生の立ち会いなしで大丈夫なんですね？」
「ええ。ちょうど今、桐野さんのお知り合いの方も面会にいらしておりますが、それでもお構いなければどうぞ。特別棟の４４１０号室です」
「わかりました。ありがとうございました」
シュウイチと２人、頭を下げながらイサコは特別棟に向かう。

「なんだ。医者の立ち会いなしで心おぎなく詩織さんに会えると思ったら、やっぱり監視付きか」
「プロジェクトチームの人間だろうな。担当医がはずしている間は、その面会人が詩織さんを見張っているんだろう。どうりですんなり受付も通すわけだ」
「それでも面会を許すって変じゃない？プロジェクトチームにとって詩織さんのことって、まだ世間的に知られちゃまずいんだろ？ガード甘過ぎやしないか？」
「確かに。まさかまた映像を見せられるとかじゃないだろうな」
イサコはイヤなことを思い出した。あの病室もこの特別棟の４階にある。
「まあ、さすがに２度目はないよ」
そう言っている間に２人は件の病室の前に到着した。１つ息を小さく吐いてからイサコはドアをノックする。
「桐野詩織さんの知り合いの者です。お見舞いに来ました」
「……」
しかし返事はない。中には誰か詰めているものだと思ったが、出て来る気配もない。イサコはドアのロックがかかっていないことを確認すると、スライド式のドアを開いた。
「お邪魔します」
部屋は広めの１２畳ほど。真ん中には詩織が眠るベッドがあり、その脇の椅子に中年男性が猫背気味に座っていた。詩織の顔を覗き込むようにこちらに背を向けているその男性の顔は確認できない。
「あの。詩織さんのお見舞いに来たのですが」
イサコはその男性に声をかける。シュウイチも部屋の中に入り、ドアを閉めたタイミングで男はイサコを振り返り立ち上がった。
その時、イサコの心臓は跳ね上がり、息が止まるような思いをした。
「アナタは！」
イサコのすぐそばにいたシュウイチはイサコが何をうろたえてい

るのか一瞬わからなかったが、すぐに彼も思い出した。目の前にいるのは昨日メガシ屋で見つけた宏文の遺品の写真に映っていた男。整形で顔は変わっていても、包み込むような優しさを宿す目は変わっていない。偽名は香川昭大で桐野詩織の父、細川亮成。

「……天沢勇子？」

その細川も目が点になっていた。中背で無精髭をたくわえた顔。とても今、メガマスはおろか政府をもおびやかしているサイバーテロリストのものではないようにイサコには見えた。その瞳が湖畔のように揺れているのは、そこに涙がたまっているからなのか。

「イサコ！」

しかしシュウイチは彼の表情が見えていないのか、警戒してイサコの前に立ちはだかり、細川を睨みつけた。

「早く玉子さんを呼んで来てくれ！細川技師が見つかったって！」

「待ってくれ！」

細川はその言葉にうろたえ、一瞬のうちにキーボードを出すと、それを操作してドアのロックをかけた。ガチリという音が聞こえ、シュウイチは思わず舌打ちをする。

「僕達をここに閉じ込めてどうするつもりだ？イサコには指1本触れさせないからな」

「違うんだ。君たちに危害を加えるつもりはない。まだ、騒ぎを大きくしてほしくないだけだ」

「……どういうことですか？」

前に立つシュウイチの肩を2、3回たたき、落ち着けと合図してからイサコが訊ねた。細川は2人を威圧しないよう、先ほど座っていた椅子に腰をおろして返す。

「これが僕と詩織と会える最後の機会なんだ。もう少し僕にこの瞬間を味あわせてくれないか？」

「最後の機会？」

色々と彼には訊ねたいことがある。しかし彼の言葉には何とも悲壮感が漂っていた。まずは彼の本懐を遂げさせることが先決のよう

にイサコには思えた。この様子なら、本当にこちらに危害を加えるようなこともなさそうだ。

「わかりました。アナタが満足するまで待ちます。その代わり、すべてを話してください。アナタが今回の事件を起こした動機や目的を含めて」

「イサコ」

シュウイチが驚いたようにイサコを見たが、イサコは言う通りにしてくれと目で訴えかけた。

「……わかった。もう僕も潮時だと思っていたところだ。詩織のお見舞いに来てくれた君達には、話さなければならないな」

細川は諦めたような表情で言ったが、その声色からは感謝の意が感じられた。

「じゃあ、満足されたら言ってください。私達は部屋の隅でおとなしくしています」

「いや。君たちも詩織の肌に触れてやってくれ……もう、目覚めることはない彼女と、お別れをしてやってくれ」

まるで彼女が死ぬような言い方にはイサコは頷かなかったが、イサコは彼女の顔を見、その肌に触れることにした。

イサコは決してお別れをするつもりはなかった。驚くほど熱を帯びた詩織の手を自らの両手で包み込み、心の中で唱えたのは誓いの言葉。かつて、ヤサコがイサコに対して誓ったのと同じものだった。

シュウイチも詩織の肌に触れてその寝顔を見やるが、誰も言葉を発さず、ただ時計の針の音だけが病室に響いていた。どれほどその音が刻まれただろうか、詩織の顔をじっと見つめていた細川は小さく息をついてうなだれた。

「君達の気持ちは嬉しい。詩織のことを、これからもよろしく頼む」

技師の言葉はイサコの心の中の誓いを見透かしているようなものだった。しかし、それは先ほどの言葉と矛盾していることにイサコは気付いた。

「さあ、どういうことなのか説明してください」

顔を俯けたままの細川に、イサコは決然と言った。

#25　世界のすべては彼女のために　part5

すべてが終わってしまったかのような表情の細川は、まずメガネのキーボードを操作して病室のドアのロックを解除した。
「連れがいるんだろう？呼んで来なさい。もう僕は逃げも隠れもしない」
彼が真相を白状するつもりでいることを確認したイサコは、シュウイチの顔を見る。
「この部屋で電話は使えない。廊下に出てオバちゃんにかけてくれないか？」
「いや、僕がここに残る。まだ油断はできないよ。イサコが玉子さんに電話してくれ」
細川に聞こえないように小声で言葉を交わし、イサコはシュウイチの言う通りにすることにした。
「すぐ戻る」
イサコが病室を出たのを確認した後、細川と向き合ったシュウイチは緊張した面持ちで訊ねた。
「どうして僕達が入ってきた時に病室のドアが開いていたんですか？詩織さんとのお別れは誰にも邪魔されたくはなかったんじゃ」
「ああ。誰か来るとは思わなかったから、かけるのを忘れてしまっていた」
随分のんきだなとシュウイチは思う。
「つかぬ事をお聞きしますが、アナタはお尋ね者なんですよね？どうしてそんな油断しきっているんですか？この病院にいること自体、追われる身であるアナタからすれば危険なはず」
「なに。プロジェクトチームの上層部の人間とかけあって、この時間に安全に侵入できるよう取りはからってもらっただけだ。どうも詩織の担当医には、そのことが伝わってなかったようだ。おかげで君たちに見つかってしまった」

シュウイチにはまったく話が見えなかった。そもそもこの人はプロジェクトチームを裏切ったのではなかったか。なのになぜ、彼らに詩織さんに会えるよう取りはからってもらえるのか。

「一体どういうことなんですか？」

「後で人が集まってから話す。なんにせよ、僕自身はこうして詩織と対面できただけでも満足だ。ここで君たちに見つかってしまったのも運の尽きだろう。あとは本社のどんな取り調べも受けるつもりだ」

また聞き返しそうになったが、彼は人が集まってから話すと言っているので、シュウイチはこれ以上詮索することをやめた。なんとも気まずいような沈黙が降りてしばらく経ったところで、廊下からイサコが戻って来た。

玉子達がこの部屋になだれ込んできたのは、それから1分も立たないうちだった。一番に部屋に飛び込んできた玉子は、息を切らしながらも細川を確認すると、恐ろしい勢いで彼に詰め寄った。

「アンタよくもケンちゃんを！」

直感的にまずいと思ったイサコは間に入り、それに反応したシュウイチも玉子を後ろから羽交い締めにした。

「離せ！この人だけは絶対に許さないわ！早く、早くケンちゃんを元に戻しなさい！」

「落ち着け！この人はもう逃げるつもりはない。話を聞き出したら、原川の救出方法も聞けばいいだろ！」

続いてヤサコ、フミエ、アイコ達が部屋に入って来て、ハラケンを診ることになっていた医師も追ってきた。

「とにかく、一郎おじさんにも連絡をとろう」

「いや、この部屋にそう大人数は入れない。本社にテレビ電話をつなぎたいが、ここの病室からはムリか」

「いや、特別回線を使えばつなげられる。私が手配しよう」

イサコとシュウイチのやり取りを聞いていた医師は、連れていた

技術者に事情を説明し、準備を整えるように指示した。その間、玉子はようやく落ち着きを取り戻し、詩織の方を見やっていた。
「詩織さん……アナタは詩織さんとお別れするために今日ここに？」
「ああ。そのつもりだった」
「アナタも人の親ならわかるでしょう？かわいい我が子を失ってしまうことへの恐怖を。ここで捕まる覚悟で見舞いに来るほど娘さんを大事にしているのに、どうして平気で人の子を連れ去ったりできるんですか！？」
玉子はこれまで電脳体を連れ去られた子の親の分の怒りも細川にぶつけた。細川は玉子と視線を合わさず、ただ床を見るように俯いて返す。
「……仕方がなかった。詩織のことを思えばこうするしかないんだ」
「詩織さんのため？やっぱり、アナタのサイバーテロは彼女のために起こしたことなんですね？」
イサコが確認すると、細川は小さく「ああ」と頷いた。
「詩織さんの意識は電脳空間にあって、ついこの前まで詩織さんの肉体を支配していた人格「サオリ」はＡＩだったという話は、真実なんですか？」
「……連中から聞かされたのか。そうだ。桐野沙織という人間はこの世に存在しない。連中がこの詩織の肉体を使って現出させた幻だ」
細川がどういう感情を持ってそのことを告げているのかはわからない。が、イサコはそれを耳にして一縷の希望すらも打ち砕かれたような気分になった。彼女を愛する父親が認めたのだ。もはや“サオリ”という人格が幻に過ぎなかったことを疑う余地はない。
細川の言葉を受けて玉子が訊ねた。
「アナタは、その実験について知っていたんですよね？」
「ああ」
「その件で協力はしたんですか？プロジェクトチームに」
「したくはなかった。君が僕の立場なら協力しようと思うかい？心は電脳空間にあるとはいえ、肉体そのものは詩織のものだ。その肉

体にまた別人の人格を宿すなんて、どうかしてる。それで誰が喜ぶっていうんだ。君たちも、それを聞いた時に騙されたという気分になっただろ」

騙されたとはまた違う感情だとイサコは思う。あれはもっと容赦のない、残酷な通告だった。

「でも、アナタは協力せざるを得なかった」

「立場上、神崎の指示に背くことはできなかった。それをしてしまえば、僕がこれまで詩織のためにしてきたことがすべて水の泡になる。当然、神崎もそれは知っていたはずだ。実験体に詩織を使うと言い出したのは、おそらく僕の忠誠心を試すためだ」

「そういう人なんですね、あの人は。私も昨日それをイヤほど思い知りました」

玉子はそこは細川に同情的だった。その時の細川の心中は察するに余ある。

「アナタが詩織さんのために行動を起こしているのだろうということは、平松さんもおっしゃっていました」

「なるほど……あの人にも嘘をついてしまったが、それはその通りだよ」

細川は事故に遭った詩織さんの心を癒すために、新空間計画に協力した。それならそれだけでいいじゃないかと玉子は思う。かつてのイサコのように、彼女が立ち直れるまでそこに居させてあげながら、傷が癒えたら現実世界に戻らせるべきではないか。それが親としてのつとめではないか。

しかし細川の描いたシナリオは違っていた。それこそ彼が今回の事件を起こした動機と直結しているのではないかというのが、玉子の考えだった。

その時、本社への特別回線をつなぐために出払っていた医師と技師達が戻ってきた。

「つながりました。今映像を出します」

既に一郎とは連絡がついているらしい。必死になって細川を捜索

していた彼らにとって、細川発見のニュースは寝耳に水だっただろう。それも場所がメガマス病院という身近な場所だったことも彼らを驚かせた。さすがに逃亡中の技師が入院している詩織のところにやってくるなんて、誰も思いもしなかったのだ。

モニターは細川の目の前に表示された。そこに映っていたのは一郎だった。

「小此木さん……」

申し訳ないという表情で細川はつぶやく。一郎は厳しい表情を崩すことなく返した。

『香川君。いや、細川技師。ようやくアナタに辿り着けました』

行動を共にしたこの半年分の思いをこめた言葉だった。一郎と相棒になった時、既に細川はプロジェクトチームの一員として動いていた。ウラの顔を隠すため、彼は一郎のためによく働いた。一方で、空間制御プログラムハッキング事件のＣＧＷ側の内通者であった彼の働きで、一郎がプロジェクトの責任者を追われるということもあった。その後に起こった廃ビル空間事故の際も、彼は情報を操作して一郎を思うままに利用した。

一郎はそれらのことを責めるつもりはない。そもそもは騙される自分も悪かったと割り切るしかないと思っている。しかし、今回の事件。未だ動機不明とはいえ、子ども達の電脳体を連れ去り、新空間に閉じ込めるという彼の凶行を、一郎は許すつもりはなかった。

『残念だ。僕は君という人間を信頼していた。新空間計画に協力したのも、娘さんのためだというならいい。あのプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”に、君が賛成していたとも思えない。君は僕達を騙していたが、それも致し方のなかったことだと思う。君が本当は誠実な人間なのだと僕は信じている。

だから、僕は失望している。君がミチコを利用して、今回の事件を起こしていることに』

「許してもらえるとは思っていません。僕はただ、詩織のためだけを思って計画を進めてきたんです。どんな非難も甘んじて受けまし

ょう。詩織が幸せであるならそれでいい」
それが彼の言動において誰もが理解できない点であった。玉子はその核心をつくように訊ねた。
「わかりません。どうしてケンちゃんや大黒中の生徒達の電脳体を連れ去ることが詩織さんのためになるのですか？彼女は望んだものは何でも手に入る新空間という理想郷にいるんですよね？私たちにしてみれば、実の娘さんをそんなところに放り込んでしまう親の気持ちも理解しかねますが、でもアナタはそれが彼女にとって最上の幸福だと思った。冷たい言い方になるかもしれませんが、それならそれでいいじゃないですか。どうして無関係な子ども達が巻き込まれないといけないんですか？」
細川は辟易したように鼻で笑った。
「ふん。理想郷……確かにコンセプトはそうだった。でも僕は、あの空間をそんなに高くは買っていない。まだあの空間は未完成だ。そして、これまでの事故はあの空間を完成させるためのプロセスに過ぎない」
その言葉の意味を誰も掴めなかった。未完成というのはどういうことなのか。彼の“新空間計画”は何を持って完成となるのか。
「では、アナタの言う新空間の完成とは一体？」
玉子がそう訊ねた時、突然細川の目の前のモニターにノイズが入った。それは本社にいる一郎が見ていたモニターも同様で、第三者からの通信が割り込まれて起きたものだった。
『誰だ？』
一郎は確認を急がせる。が、その必要もなくなった。3分割になったモニターの3つ目に映りこんできたのは大谷だった。
『お久しぶりです。細川技師』
呼びかけられた細川はイマイチピンとこない表情をしていた。それをモニター越しに悟った大谷はさらに続けて訊ねた。
『覚えてないですかねえ、オレのこと。ちょくちょく顔を合わせたことがあると思うんですが』

「いや……悪いが記憶にない」
『そうですか。まあ、ムリもないですね。失踪してからアナタも大変だったでしょうから』
大谷の返答から考えると、どうやら自分がコイルスにいた時に顔を合わせたことがあるようだが、細川はその時のことはあまり覚えていなかった。当時はとにかく猫目技師の研究の補佐で忙殺されていたのだ。
「ちょっと大谷さん。いきなり通信に割り込んできてなんなんですか？今どこにいるんですか？」
『今はね、小此木医師の家。通称なんつったっけ？メガシ屋っていうのか？』
大谷はそばにいた誰かに確認したようだった。
『そうだ』
「その声は、ダイチ！アンタもいるのね？」
玉子が問いかけると本人がフレームインした。
『ハラケンを病院に送りに行ったら作戦会議をする予定だったんじゃねえのか？だから黒客メンバーでここに待機してたんだよ。そしたらそこに大谷さん達がやって来たんだ』
今、ダイチが複数形で言ったことをイサコは疑問に思った。
「こんな時にどうして通信に割り込んできたんですか？」
『こっちも細川技師に話があったんでね、勝手にお邪魔させてもらいました。細川技師発見の一報は、小此木さんの部下の方からこちらのおばあさんの方に来ていたんで』
それには納得したが、もっと重要なことがある。イサコが訊ねた。
「おい。それよりもアンタ、細川技師と面識があるのか？」
『あるよ。君に出会った時にもう話したはずなんだがな』
「何をだ？アンタはいつも正体をはぐらかしてきただろう？」
『そうだが、オレが君と初めて接触した日に語ったことは、概ね真実だ。オレは前の雑誌社で、科学雑誌を書いていた。その関係で、ウェアラブルコンピューター業界で急成長を遂げたコイルス社にも

取材に行った。その時に細川技師からも話を聞いたんだ』
　その話はイサコしか聞いていない。しかしイサコは、雨降る金沢の公園で彼がそのような話をしていたことは確かに記憶していた。
「あの時の記者か。いや、僕もそれは覚えている。取材の時の態度や電脳に対する知識の深さから大した記者だと思っていた。すっかり印象が変わってしまっていてわからなかった」
『顔を変えたアンタに言われたくないが、まあ、キャラを変えなきゃいけない必要に迫られたっていうのは、共通してるな』
「そうか。君も苦労してきたようだな」
　細川は昔の彼のことを思い出したようだが、イサコ達にしてみれば大谷がそんな好印象をもたれるのが想像できなかった。
『話を戻そうじゃないか、細川技師。アンタと話をしたがっているのは、オレだけじゃない』
　大谷は急に張りつめたような表情になって言った。
「誰だ？そこは小此木先生の家だって？ということは、先生の奥さんか？」
『いや。もっとアンタに関係の深い人だ。その人はアンタのサイバーテロの本当の目的を見抜いていらっしゃる。そしてオレは、アンタを止められるのはこの人しかいないと思ってる』
「なに？おい、大谷君。まさか」
『お願いします！』
　大谷はそう言うと自分はフレームアウトした。続いてモニターに映りこんだ人物を見て細川は絶句し、懐かしさ、そして、諦めにも似た笑みが自然とこぼれた。
「……猫目、先生」

#25　世界のすべては彼女のために　part6

ヤサコ達がハラケンを病院に送りに出た直後、入れ違いになるようにしてダイチ達黒客メンバーとタケルはメガシ屋を訪れていた。ヤサコ達の帰りを待つ間にメンバー達とメガばあは、昨日の話を振り返るとともに、今回の事件について自分達の気持ちを整理しようとしていたのだ。

大谷がメガシ屋を訪ねてきたのはその時だった。

「ごめん。誰かいないか？」

電脳工房にいたメガばあとダイチ達はそれが大谷の声であることに気付く。

「今日もまた来たようじゃ。すまんが、ここに通して来てくれぬか？」

「へいへい」

ぎっくり腰で動けないメガばあの代わりにダイチが立ち上がり、メガシ屋の店先まで応対に出た。

「よっ。ボウズ達も来てたのか」

「ああ。今オバちゃんやイサコ達は出てるけど」

「聞いてる。原川君が体調を崩したんだって？」

大谷は基本的にイサコや玉子とつるんでいるので、その2人の留守を知っていてここを訪ねてきた理由をダイチは訝しんだ。

「そうみたいッスね。本当、どっちのハラケンも気の毒でならないッスよ。それより、今日はイサコやオバちゃんと行動を共にしなくてもいいんスか？」

「ちょっとここに用事があったんでな。寄らせてもらった」

「またこの家の空間を調査するんスか？」

「いや違う。小此木先生の奥さんに会わせたい人がいるんだ」

「会わせたい人？もしかしてそちらのおじさん？」

「ああ」

ダイチはようやく大谷の3歩ほど後ろで控えめに立っている中年男性の存在に気付いた。背格好は低い方。うっすらとヒゲをたくわえているが、印象的なのはメガネの奥の灰色の瞳だった。たたずまいとしては柔らかく、ダイチはどこかで見たことのあるような雰囲気の人だなと思った。

「どういう関係の人なんですか？」

「それは後で説明する。小此木先生の奥さんに会ってもらえばわかる」

「ふーん」

何となく怪しい口ぶりだが、イサコからは大谷のことは信用していいと言われているので、ダイチはとりあえず2人を中に通すことにした。その時、

「ダイチ。メガばあが近くのコンビニまでお茶を買ってきてくれって。今ヤサコのお母さんも買い物に出てるらしくてさ。一緒に行こう」

メガばあからお遣いを命じられたタケルが上がり框からおりて出て来た。

「あ。タ、タケル君」

大谷が驚いたような表情になる。そしてタケルは大谷の後ろにいた男の存在に気付き、男も時が止まったかのようにタケルの顔を見てフリーズした。時間にすれば一瞬だったかもしれないが、この時に2人の中で沸き上がった感情は、とてもその時間で理解するには重く、そして数年分の思いが濃縮された得体の知れないものだった。

ダイチが何事かと2人を見比べる間に、タケルの方の感情が先に溢れこぼれた。

「父ちゃん！」

この人に向けてこの言葉を発したのはいつ以来かわからない。ただ、タケルにとっては、目の前にいる人はその時と何ら変わらず、まるでその数年の空白がなかったかのようにさえ思えた。

「タケル……大きくなったな」

しかし、父にとっては月日の流れをこれほど身にしみて感じることはなかった。自分がタケルの前から姿を消した時、彼はとても体が小さくて泣き虫の小学校1年生だった。それが今はどうだ。タケル自身も去年の事件を通じてたくましくなり、入学してまだひと月ながら、たたずまいは堂々とした中学生そのものだ。ただ一点。瞬く間に赤く腫れ上がったその瞳には、昔の彼の面影が残っていた。それを見ると、再会への喜びとはまた別の新たな感情が溢れ、父親の目頭もつい熱くなってしまった。

どちらからともなく詰め寄った親子は、数年間の空白を埋めるように強く抱擁し合った。

「あの、これどういうこと？」

戸惑ったようにダイチが大谷に近づいて訊ねた。

「見てただろ。この方はタケル君のお父さんで、6年ぶりに再会を果たしたんだよ」

「タケルの父ちゃんってあれだよな。電脳メガネに搭載されてる量子回路の発見者で、その後にCドメインとか、ヤサコのおじいちゃんとコイルシステムを完成させた」

「そうだ。今のメガマスのエンジニアやプロジェクトチームの参加者、電脳科学の権威と謳われる小野隆すらも足元にも及ばない人物だ。それゆえ、コイルス買収後には数々の危険に身をさらされた。本来ならこうして白昼堂々街をうろつくのでさえ避けなければいけないんだが」

猫目技師本人が、自分が表舞台に戻らなければいけないと強く主張した。その前に、どうしてもこの場所を訪れたいと彼は大谷に頼みこんだのだ。

「タケル。積もる話もあるが、それはまたじっくりとしよう。父さんはもうどこにも逃げはしない……やるべきことがあるからな」

「……わかった」

猫目技師はタケルとの抱擁を終えると、メガシ屋の建物をぐるりと見渡した。

「なるほど。小此木先生がおっしゃっていた通り、奥さんはかなり個性的な方のようだ」
そしてダイチを見て言った。
「中へ案内してもらえるかな？」
ダイチは背筋を伸ばして「はい」と頷き、彼と大谷を中に招き入れた。

電脳工房に猫目技師が入った瞬間のメガばあの反応は、先ほどのタケルと似たようなものだった。彼とはもちろん初対面ではあるが、宏文の残した写真でその容姿は知っていたのだ。
「どうも、初めまして」
ぽかんと口をあけて茫然とするメガばあに、猫目技師が頭を下げる。この時、メガばあの胸の中にも様々な感情が生まれた。自分の夫が彼の人生を狂わせてしまった罪悪感もあれば、頻発していたメガネの事故を尻目に彼が身を隠していたことへの怒りもあった。
「この街に来ているとは聞いておったが、ようやく腰を上げたということかの」
メガばあは視線を下げる。メガばあにとっては、彼がこの一連の事故を傍観し続けていたことへの不満が最も大きかった。メガばあは昨日、大谷の口から彼の依頼主が猫目技師であることを聞いていた。それなら自ら現場に戻らないのかとメガばあは不審に思っていたのだ。
「勘違いしないでくれバアさん。この方が表舞台に戻ることに最後まで反対していたのはオレなんだ。猫目先生がずっと1人逃げていたなんて思わないでくれ」
メガばあの心中を察して大谷がフォローした。
「いや。小此木さんのおっしゃる通りだ。私はずっと逃げ隠れしていた。今回の一連の事件でも、大谷君ばかりに調査を任せて、自分は安全なところから様子を窺っていた。本当に今まで黙っていて申し訳ありませんでした」

「……ワシに謝られても困る。ワシの夫にはお主の人生を狂わせてしまったままポックリ逝ってしまったという罪がある。ワシは夫に代わってお主に詫びねばならぬのじゃ。真にお主が詫びねばならぬのはタケル、宗助、そして今回の事故に巻き込まれた子ども達に対してではないか」

「おっしゃる通りです。ただ、小此木先生に罪があるというのは違います。先生はただただ電脳精神治療システムの完成に尽力してくださったのです。おそらくコイルス社とメガマスの間の板挟みで相当お悩みになったのでしょう。それは昨日大谷君が私に見せてくれた先生の研究日誌からも読み取れます。私が嫌ったのは、上に歯向かえない先生の立場を利用したメガマスです。そこは先生も見抜いていらしたようですが」

メガマスからの移籍交渉を断固拒否した猫目技師は、身の危険を感じて自ら姿をくらませた。

「小此木先生の訃報を聞いた時には、本当に残念でなりませんでした。天沢勇子への治療の不具合も、私がいれば起こりえなかったことです。それを思えば、私が先生を死なせてしまったようなものです。大人しくメガマスに移籍していれば、あんなことは起こらなかった」

「……過ぎたことじゃ。悔やんでも仕方なかろう。人間の過去は変えられん」

ため息をつくようにメガばあが言った。

「そんなことを言いにここまで来たのかえ？」

「どうしても、先生の奥さんには謝罪しなければと思いまして」

猫目技師は宏文の仏壇を見やった。こちらに向けても深く頭を下げなければと思ってやって来たのだ。

「バカ者。相当の覚悟で現場に戻って来た人間が仏壇を拝んどる場合ではなかろう。この男に聞いとるはずじゃな。一連の事件の首謀者はかつてのお主の部下なんじゃろう。さっさとソヤツを止めに行くのじゃ」

「無茶言うなし。小此木室長が全力でその行方を探してるっていうのに、いっこうに細川は見つからねえんだ。オレたちが動いたところでどうにもならねえだろ」

と、大谷が言ったところでメガばあのメガネが着信した。メガばあは構わず応答する。

「もしもし？なんじゃ、せがれの部下か……なに！？見つかったじゃと！オオッ！！？」

メガばあは思わず腰を浮かしかけたが電撃が走ったような激痛に襲われて顔を歪めた。

「おいバアさん！見つかったって細川のことか？」

「そのようじゃ！」

痛いのをこらえてメガばあは大谷に頷いた。

「ふむ……ふむ。メガマス病院にいた？なぜじゃ？……わからん？役に立たんのう……なんと！見つけたのは天沢勇子！？」

「お～！イサコが細川技師を見つけたのか。やっぱりアイツは何か持ってるな」

ダイチが感心する。

「……モニターをつなぐかって？当たり前のことを訊くな。さっさと手配せい！」

そう言ってメガばあは通話を切った。これで細川技師と一郎達の会話の様子を拾うことができる。

「そうか、ついに見つかったか。大谷君。私たちも病院に向かおう」

「待ってください。細川技師と話をするおつもりでしょう？それならわざわざ出向かなくても、モニターに割って入ればいいだけのことです」

「しかしそれでは小此木君に迷惑が」

「せがれの迷惑を考えんでもいい。せがれが細川技師と話すことよりも、お主と話すことの方が大事じゃ」

メガばあの許可ももらったので、大谷はすぐに準備にかかった。

間もなく電脳工房に現れたモニターには、細川技師と一郎が映りこ

んでいた。

その後、大谷がこの通信をハッキングし、自分たちも3つ目のモニターとして割って入った。そして大谷が細川の様子を窺うように少し話した後、猫目技師がフレームインしたのだ。

『……猫目、先生』

一瞬懐かしいような表情をした後、細川はすぐにうなだれた。親に自分の悪さが露見した子どものようだった。

「細川君……僕は君に、いや、コイルスの技師全員に悪いことをしたと思っている。その罪を許してもらおうとは思っていない。ただ、君がこんなサイバーテロを企てていることには、正直、失望したよ」

細川は顔を上げない。モニター越しとはいえ、目線を合わせるのも怖かった。彼は猫目技師にはすべてを見抜かれていると思った。そして、猫目技師は彼の不安を的中させるように、真実を言い当てた。

「君が詩織ちゃんのことを愛しているのは知っている。知っているが、君のやろうとしていることはあまりにも馬鹿げている。新空間のすべての住民のＡＩと、現実世界の人間とを入れ替えるなんて……」

#25　世界のすべては彼女のために　part7

猫目技師の発言は、周囲を凍りかせた。モニター越しにそれを聞いた一郎、桝田、平松、細川と病室にいるイサコ、玉子、ヤサコ達、技師と電脳工房にいるメガばあやダイチ達。その誰一人彼の発言の意味を完全に理解することはできなかったが、途方もないような危機がすぐそばに迫って来ているというのだけは皆が感じ取った。そして細川の表情は、唇を真一文字に結びながらも、完全に図星を突かれたというのがありありと出ており、彼はもはや小さく笑ってさえいた。

『猫目技師……今のはどういう意味でしょうか？』

こんな形で彼と話すことになろうとは一郎も思っていなかった。大谷は猫目技師と共に行動していることを一郎とメガばあには打ち明けていたが、なにもこのタイミングで登場するとは思わなかった。

それは猫目技師の方も思っていたらしい。本当なら宏文の息子である一郎とはきちんと挨拶を交わしてから話をしたかったが、この状況でそんな悠長なことはしていられない。技師はせめて自分の謝意が一郎にも伝わるようにモニター前で軽く頭を下げてから説明を始めた。

『時間がないので手短に私の推理を言います。そこにいる細川技師が娘さん思いなのは、おそらく平松さんからも聞いていると思いますが、私も今回の事件の動機は詩織ちゃんに関係していると踏んでいました。ちなみに、私の代わりにこれまでの事件について調べてくれていたのが、今私の隣にいる大谷君です』

「ええっ？」

イサコや玉子などはそれを聞いて声を上げるほど驚いた。これまで自分たちに協力してくれながらも素性を明かさなかった彼は、実は失踪していた猫目技師の依頼で事件を調べていた。そもそも猫目技師の生死すらも把握できていなかったイサコ達からすると、技師

がこうして出て来たことも衝撃ではあったが、そこに大谷が絡んでいたというのはまったく予想もしていなかったことだ。それでも、言われてみれば腑に落ちることもある。彼の脅威の暗号スキルにしても、それを仕込んだのが暗号技術の生みの親である猫目技師であるなら納得できる。

イサコ達は大谷と詳しく話をしたかったが、ともかく今は猫目技師の推理を聞くのが先だった。

『詩織ちゃんはずっと新空間の中で暮らさせるらしい、という彼の報告を聞いた時、私はどこか引っかかるものがあったんです。電脳空間に再現されるものは幻想に過ぎない。新空間をプログラミングした本人ならそれを一番感じているはずです。しかも、詩織ちゃんは交通事故に遭ったとはいえ、体に大きな外傷もなく、後遺症も残っていない。にも関わらず、彼女を新空間で一生を暮らさせる理由は何か。

それは彼女を母の恵さんといさせるためでしょう。残念ながら、恵さんは交通事故によって脳死状態にあると聞きました。現代医療でも回復を難しいとなれば、亡くなったも同然。詩織ちゃんをそんな母と会わせることはできない。それは彼女を苦しませることになる。

そう考えた細川君は、新空間には恵さんの電脳体を作り出し、メガネに残っていた彼女の記憶の断片をつなぎ合わせて彼女の思考を再現したＡＩを完成させた。彼女をよく知る細川君なら、そのくらいはできたはずです。

本来ならそれで細川君の計画は完成したと言ってもよかったでしょう。しかし、彼はそれでは足りないと思った』

猫目技師は一旦言葉を切って細川の様子を見た。すると細川は、これまでの推理で寸分の違いもないことを1度だけ頷いて彼に伝えた。

「なにが、足りないと言うのですか？」

玉子が先を促すように訊ねる。猫目技師はため息をつくように言

った。
『それは、人だ。新空間に人はいない』
拍子抜けするようなだった。
「当たり前じゃないですか！新空間の住民はほとんどがＡＩですから。今はケンちゃんや大黒中の生徒さん達が閉じ込められていますから、全員がそうというわけではありませんが」
『だから細川君は全員を“そう”するつもりなんだ。新空間の住民全員を、原川研一君達と同じ、電脳体分離を起こした“人間”とすり替える』
「なんのために！？」
玉子はヒステリーのような声を上げたかたわらで、イサコがその目的に気付いた。
「……新空間を現実に近づけるため」
「現実？」
フミエが訝しげな目をイサコに向ける。
「細川技師。アナタは新空間の住民のＡＩを、人間の劣化コピーと考えているんじゃないですか？そこに人と人とのつながりなんてあったものじゃないって思われているんじゃないですか？」
イサコの問いかけに、今度は無表情のまま細川は返す。
「……ああ。その通りだ。僕が自分の手で作り上げた新空間に不満を抱いていたのはその点だ。自分が望んだものが手に入る？不老不死？現実逃避の場所？現実世界と変わらない景色？そんなものに大した価値はない。人が人として生きられる環境でないかぎりな」
『つまり、新空間は“人の形をした人とは違う無数の何かが人として生活しようとしている”空間に過ぎないと思っているんだな。そんな中に、正真正銘の人間である詩織ちゃんを生きさせるのは、彼女のためにならない。だから、新空間の住民は全員人間とすり替える。原川君やこの前の大黒中の生徒達と同じ方法で』
大谷の説明でほとんどが細川の目的については理解した。と同時に、それぞれの中でえも言われぬ怒りが沸き上がってきた。

そもそも詩織を新空間にいさせるのは、現実では彼女の母親が脳死状態にあるからだ。しかし、本来であれば詩織はそれを現実として受け止め、悲しみにくれてもまた日常という怒濤の川の流れの中に足を踏み入れなければならない。それを細川は、彼女の意志とは関係なく彼女を逃避させた。さらにその逃避させた空間を“現実”に近づけるため、今度は現実世界の人間を新空間に引きずり込もうとしている。まるで人間の1人1人に小さな日常があることなど考えない、自分勝手で、精神異常者ならぬ愛情異常者の発想としか思えなかった。

『じゃあ、これまでの事件はアナタの描くシナリオのプロローグに過ぎなかったということですか？研一君や大黒中の生徒の電脳体をさらったのは、本社を脅すための手段ではなかった。人間の電脳体を連れ去ること、それこそがアナタの目的だった……』

唖然としながら一郎が確認する。細川の沈黙が肯定の意思表示だった。

『なんてことを……細川君。君はなんてことを考えていたんだ！そのために私をも利用したのか？』

大きな失望と怒りを露にしながら声を上げたのは平松だった。彼は細川の娘を思う気持ちに同調して彼に協力してきた。細川のその動機はブレてはいない。しかし彼の野望は、平松の考えていたものとはかけ離れた非道なものだった。

「申し訳ありません、平松さん。私のこの計画は、誰にも明かす事はできませんでした。嘘をついてまで平松さんを利用していたのは謝罪します」

『私への謝罪などどうでもいい！君がそこにいるということは、すでに君の計画のすべてはミチコに託されているんだろう？早く彼女を止めるんだ！』

「……いえ。たとえこの身を裂かれても、ミチコを止めはしません。ここまで来たからにはもう後には退けないですから」

細川の無気力は、彼をなんとかして説得しようという一郎や玉子

の思いを挫いた。彼は自らの罪を認め、どんな裁きでも受けるつもりでいる。そんな彼を説得することなどもはや不可能のように思えた。彼はただ、隣で末永い眠りについている詩織のためしか思っていない。もはや自分を含めた詩織以外のすべての人間の未来に無関心でいる。

『細川君……君はこんなことをするために、コイルス時代から研究に励んできたのか？私はそんな人の心を軽視するような人間と、ひととき夢を見ていたのか？この空白の6年の間に、君が何か大切なものを失ったというなら、それを取り戻せばいい。恵さんはいないかもしれない。それなら、君が詩織ちゃんを支えてあげればいいじゃないか。父親の資格がないなどと自暴自棄になる前に、きちんとそのことを真剣に考えたことはないのか？』

自分にこんな説教をする資格もないなと思いながらも、猫目技師は細川に諭した。細川はそれに対し目を閉じて黙っていたが、もしかすると猫目技師の言葉だけは聞くまいと努めているのかもしれないと一同は思った。細川にとって猫目技師がどれほど大きな存在なのかは想像できる。それだけに、後に退けないと考えている細川は、彼の言葉で自分の考えが揺らぐのを恐れているのだろう。

『説得はムダだと思います』

その時、モニターの方から第四の声がした。聞き覚えのある声に一同はハッと頭をあげて画面を注視する。三分割から四分割へと切り替わったモニターの4つ目、乱れが整った画面の向こうに映っていたのは神崎だった。

『やっぱり出てきやがったな』

猫目技師の映っていたモニターに、再び大谷がフレームインする。一同もこんな時にややこしいのが絡んできたなと思った。

『細川技師が見つかってしまったという知らせが入りましたので、フォローしにきたんです。申し訳ありません細川技師。詩織さんの病室の人払いが不十分だったのは我々の不手際です。せっかくの再会に水を差してしまう形になったことをお詫びします』

「……かまいません。十分に詩織との時間は味わいました。取りはからっていただいてありがとうございました」

神崎と細川の間で何らかの密約があったらしいことに、一郎達は困惑した。詩織の体をＡＩの実験に利用した神崎のことを細川は激しく恨んでいるという話を、平松から聞いていたからだ。その意味では、この状況を最も理解できなかったのは平松だったかもしれない。

『どういうことだ細川君？君はいつ、どういう目的で神崎さんと連絡をとった？』

『私が彼から連絡を受けたのは昨日、本社でのプレゼンが終わってからです。その目的は……私の口から説明してもいいのですか？』

神崎が細川に確認する。

「ええ、どうぞ」

もはや細かい事情を説明する気もないという風に、細川は神崎に説明を任せた。すると神崎は嬉々として話を始めた。

『私も昨日、細川技師から連絡をいだたいた時は驚きました。今更我々に何らかの要求を突きつけてくるのかと思いきや、我々に忠告があると彼は言ったのです。それを言う代わりに、ひとときでいいので自分が詩織さんと病室で2人になれるように取りはからってほしいと彼は言いました。そのくらいの条件なら問題はなかったので、我々は時間を指定し、彼が堂々と病院に入ってこられるように人員を配置したのです。元々詩織さんの病室に見舞いに来る人はいませんでしたので、天沢さん達が来たのは予想外でしたけど』

『んで？その条件と交換に細川技師はなんと忠告してきたんだ？』

神崎のペースで話させると長くなるので大谷が先を促す。

『明日、大黒市に住むメガネユーザー全員の電脳体を連れ去るので、できるだけ大黒市からは離れるように。そして、大黒市の機能を麻痺させたくなければ、早急に大黒市民全員分の”ＳＰＲＩＮＧ”を起動せよ……まったく。ムチャクチャな話ですよ』

神崎はまるで他人事のように笑みながら説明したが、一同にとっ

ては何が面白いのかがわからない。つまり細川は今日、大黒市民全員を新空間に連れ込むつもりだというのだ。

「バカバカしい！そんなことができるはずないじゃないですか！」

玉子が怒り狂って猛反発する。

『いや、彼ができると言ったらできると考えるべきでしょう。脅すつもりもないのに、我々にそんなことを打ち明けるということは、彼の準備は整っていて誰にもそれは止められないという自信があるからでしょう』

「しかし、一度に大黒市民を新空間に連れ込めるはずが」

『細川君は、既に大黒市全体を囲むように例の５つの新暗号の設置を完了させたそうです。新空間からの干渉を断絶する暗号ではなく、新空間へのアクセスパスワードとなる暗号を。それだけの準備があれば、大黒市民全員をあのブラックホールの中に引きずり込むのは可能でしょう。巧妙に偽装されたそれは、我々が血眼になって探しても今日中に発見することはできないとのことです。探すのはそちらの勝手ですがね』

仮にそれが可能だとしても、重要な点を神崎は見落としていると一郎は思った。

『待ってください。それはメガネをかけていればの話ですよね？今はこれまでの事故の影響から、メガネを自粛する動きが出ています。誰も彼もがメガネをかけているという状況ではありません』

『メガネをかけていないなら、メガネをかけさせればいい。そうじゃないですか？例えば、夜、大黒市中が停電してしまったら……テレビがつかず、バッテリー式のパソコンが手元にない場合、多くの人はメガネを起動して情報を確認するはずですよね？』

『では、細川技師は電力会社にもサイバーテロを！？』

そこまで考えているとは思えなかった一郎は、背筋が凍るような思いだった。

『すでに電力会社のシステムにウイルスを混入したようです。まあ、猫目技師の暗号由来の究極のハッキングツール“ＩＬコード”があ

るので、そんな不可能と思える芸当もこなせるんでしょうね』
　猫目技師の良心を逆撫でするように神崎は言った。それにカッときた玉子が叫ぶ。
「それだけ知っていながら、どうしてアンタ達は止めようとしないんだ！？アンタ達がその気になれば暗号の解除も、電力会社へのサイバーテロも防げるはずだろう！」
『まあ、私たちが本気になって、なおかつ本社側と協力し合えば不可能ではないかもしれませんが、何より時間がありません。それにですね、私にも詩織さんの体を実験に利用したことへの罪悪感はあるんですよ。その罪滅ぼしになるのなら、細川君の本懐を遂げさせてあげるべきなのかなと』
『見え透いたウソをつくな！お前らの目的は”ＳＰＲＩＮＧ”の有用性を示すためのデモンストレーションだろ？一つの街の住民を電脳空間に引きずり込み、代わってその肉体にＡＩを埋め込む。たった一晩でそれができれば、軍事的には目を見張るような結果を得られるわけだ。
　地方都市である大黒市の人口はおよそ２０万。その８割を電脳空間に引きずりこめるとして、およそ１６万人か。１０００人規模の特殊部隊がいれば、例の量子回路を気絶した住民に貼付けるのに一晩かからないな。電力が停止しているから、住民がどこにいようとセキュリティを破れる。それを政府関係者に報告して、特殊部隊を要請したんだろ？』
　大谷には手に取るように神崎の考えていることがわかった。驚いたように目を見開いた彼は感嘆の声を上げた。
『いや素晴らしい。さすがは猫目技師の分身として動いていただけのことはあります。まあそういうことになりますが、幸いなことにアナタ方は彼の計画を知ることができた。日が暮れるまでに大黒市から離れればアナタ方は助かります。ちなみに我々の拠点は弁天市にあるので安全です』
「そういうわけにはいかないだろ！細川技師の計画が止められない

なら、大黒市民に避難するように通達しろ！」

『言えるわけないでしょう。今日アナタの電脳体が連れ去られる恐れがあるので、大黒市から避難してくださいなんて。我々もこれ以上メガネの評判を落とすわけにはいかないんですよ。我々の計画もありますし、政府にはそのように報告してしまいましたので方針の変更はできません。もちろん、本社は勝手に動かないでくださいね。わかっていますか社長？そちらにはアナタ方の監視役を送り込んでいることをお忘れなく』

一郎の映る画面の向こうで、桝田が唸るような声を上げるのが聞こえた。こんな時に社が神崎達に乗っ取られているとは、悪夢としかいいようがなかった。桝田としては、神崎が細川と組んでいるとしか思えないようなタイミングの良さだ。そこで彼は、細川はこの期を狙っていたのかもしれないと気付く。一昨日の大黒中での事故は、細川が神崎達に危機感を与えるために起こしたものとも考えられる。

『ああ、そうそう。これ、１つだけ回避の方法もなくはないですが』

神崎が言い忘れたように告げる。一同は藁にもすがる思いで彼のモニターに集中する。代表して一郎が訊ねた。

『それは？』

『詩織さんを現実世界に連れ戻します。そして現在は脳死状態にある母の恵さんの”ＳＰＲＩＮＧ”を起動します。するとどうです。詩織さんは現実世界に戻る。母はそこにいる。市民が新空間に引きずり込まれる理由もなくなる。すべてが丸くおさまるというわけです』

『いや、しかしそれは』

ためらうように一郎は考え込んだ。そうしてしまえば、”ＳＰＲＩＮＧ”の存在価値を本社が公然と認めてしまうことになる。プロジェクトの推進を了承せざるを得なくなり、実用化に向けて拍車がかかることになってしまうだろう。

『アナタ方の考えていることはわかります。でも、どちらにしても

同じことですよ。細川技師のテロが実行されるということは、我々も市民の”ＳＰＲＩＮＧ”を起動するということですからね。ただ細川技師は、恵さんを現実世界で復活させるのは反対ですよね？』

神崎が訊ねると、細川は力なく頷くだけだった。神崎の質問に肯定したのだろうが、それがなぜなのか理由を語ることはなかった。自分の愛する人の肉体を利用されるのはもう御免だというところだろうかと一同は想像する。

『まあ、技師がそのように考えている以上、その妥協案も現実的ではありませんね。皆さんは今夜までにどうするか考えとくことですな。我々は”ＳＰＲＩＮＧ”起動準備で忙しいのでこれで』

神崎は通信から離脱しようとしたが、そこでまた言い忘れたことがあるようだった。

『ああ、猫目技師。挨拶が遅れました。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”を仕切る神崎です。アナタが戻ってこられたのは実に意外ですが、残念ながらアナタになびくような旧コイルス派の人間はあらかた掃除しましたのであしからず。アナタともゆっくりお話をしたいのですが、お聞きになった通り我々は忙しいので本日はこれにて失礼します。いずれアナタとも一緒に仕事ができたらなと思っています』

言うだけ言うと猫目技師の反応を待たず、神崎は通信を切った。そして身じろぎもしない細川技師を一同は見た。彼は何も語らない。もはや生きて死んでいるようにさえ見える。半ば廃人と化した彼に、もう１度人の心を宿すのは途方もなく難しいことのように思えた。

#25　世界のすべては彼女のために　part8

一郎達本社の人間は、まるで人形のように口を開かなくなった細川の処遇を手短に話し合い、直樹達電脳犯罪対策係に引き渡すことにした。これまでの細川や神崎の話を事実と仮定すると、自分たちも早急に対策を練らなければならない。しかし、首謀者である細川がその状態では、とても解決方法を本人の口から聞き出せるとは思えなかった。それを踏まえて、事情に精通している直樹に彼の取り調べを行ってもらうのが最上だと彼らは判断したのだ。そもそも電脳空間法に触れた細川の逮捕権は直樹達警察にしかなく、これが必然的な手続きでもあった。

通報を受けた直樹は、病院に向かう車中で一郎との通信でこれまでの話の概要を説明された。本社側の判断を妥当と判断した直樹と久美子は、任意同行という形で細川を警察まで連行することにした。

「細川さんの取り調べはお任せください。できうれば早急に容疑者のサイバーテロ計画の詳細を聞き出したいところですが、あの様子ですと難しいかもしれません」

細川は久美子に連れられて病室を出る。直樹は居合わせた玉子達と今後について打ち合わせておく必要があると思って残っていた。

「そうですね……しかし、なんとしてでもあの人の計画を止めなければなりません。大黒市民すべてが新空間に引きずり込まれるなど」

「細川さんがそのような壮大な計画を進めていたとは、にわかに信じられませんが……新空間が存在している限り、理論的には可能と言わざるを得ないでしょう。規模というのはあまり問題ではありません。ましてや大黒市を囲むように新空間の活動を誘発する暗号が仕掛けられているとなれば……それに、もはやこれは大黒市だけの問題でもなくなってきます」

「と言うと？」

「新空間で再現されたのは大黒市と金沢市の2都市です。大黒市民

がすべて新空間に引きずり込まれるとなれば、必然的に金沢市民も狙われることになるでしょう。それに、細川さんの動機は詩織さんに帰結している。詩織さんが事故前に住んでいたのが金沢市ということを踏まえると、どちらかと言うと細川さんの本命は金沢市にあると思います。大黒市で行うのは、それを確実にするための予行練習という位置づけになるのではないでしょうか。細川さんをこうして拘束した以上、あの人の計画はすべてミチコに託されたようなものです。そのミチコにしても、1度にこれほどの人数を連れ去ったことはないでしょうから」

直樹の言うことはもっともだと一同は思った。金沢市の新空間にいるはずの詩織のために、大黒市民を連れ去るというのは細川の意図に合わない。彼にとっては大黒市など実験の舞台に過ぎないのだ。

「ちなみに質問なんですが、仮に今夜、私たち大黒にいる人間の電脳体が新空間に連れ去られるとしますよね。その後、誰かが新空間の支配権をミチコから奪い返したとして、私たちの電脳体は元通り肉体に戻ることはできるのでしょうか？」

訊ねたのはイサコだった。

「……可能だとは思う。有能な誰かが、ミチコとのサイバー戦争に勝利して新空間を解放できれば」

その言葉で一同にほんのかすかな希望が生まれた。もし今夜そのテロ行為が防げなかったとしても、猫目技師のような優秀な技師を大黒市の外に避難させれば、まだ挽回のチャンスはあるということだ。

『いや。それは考えない方がいいな』

その時議論に入って来たのはモニター越しの大谷だった。彼は神崎が去った後、電脳工房の中で何やら調べものをしていたらしい。

「どうしてだ？」

『敵が細川に洗脳されたミチコだけならその手も使えた。でもな、オレたちにはもう一方の敵も存在する』

「神崎さん率いるプロジェクトチームですね」

直樹が確認する。

『そうだ。アイツらは細川のこのテロに便乗して、”ＳＰＲＩＮＧ”の大規模な実地演習をすると言っていたな。電脳体を連れ去られた大黒市民に、例の量子回路を貼付けてＡＩを移植すると。今調べていたんだがコイツが厄介でな。仮にミチコを倒して新空間を解放し、連れ去られた電脳体が肉体に帰したとしても、その量子回路が起動している限り、あくまで肉体の支配権を持つのはＡＩの方だということが判明した』

大谷が焦ったように早口で言うので、玉子達にはそれがどういうことなのかイマイチ理解できなかった。

「それは、どういうことを引き起こすんだ？」

『恐ろしいことになるぞ。自分の意識の上では五感のうち視覚、聴覚、嗅覚、味覚が元に戻る。ところが、自分の意志で自分の肉体が動かせないんだ。わかるか？自分の肉体なのに、足を動かしたいと思っても動かない。自分がこうしゃべりたいと思っても別のことをしゃべる。自分が食べたいとも思わない料理を口にする。自分が気に入ってもいない相手とデートする、なんてことが起こり得るんだ。自分の意識は、頭部という牢獄の中に閉じ込められるに等しい。後の人生は、まるで他人の人生を自分の目線で追っていくだけという、まるで拷問のようなものになる』

一同の背筋は凍りついた。それは、電脳工房で直接大谷の口からそれを聞いたダイチ達も同様だっただろう。

「それは、あのプロジェクトチームを止めることができれば元に戻りますよね？彼らの切り札である”ＳＰＲＩＮＧ”をシャットダウンすれば、肉体の支配権は自分の脳に戻りますよね？」

『ああ。ただ、政府からの支援も取り付けて、国際的にその技術をプレゼンしようとする連中を止められればの話だがな。もはやオレたちレベルでどうにかなるような問題じゃなくなってきてる。国際的には、この”ＳＰＲＩＮＧ”は革新的な軍事技術として捉えられているはずだ。あまり考えても仕方のないことだが、これが各国に

採用されれば戦争の形が変わるだろうな。これからは、いかに相手方の要人の電脳体を連れ去り、ＡＩとすり替えるかが戦争の鍵になってくるだろう。紛争やデモ、革命で血が流れることが減ることにもつながるかもしれんが、果たしてこれを手放しで喜べるのかどうか』

　神崎はそこまで考えていたのかと一同は思った。世界の戦争を変えるほどの技術。それさえ握っていれば、メガマスは世界的軍事企業に変貌を遂げ、メガネインフラの権利とも合わせてその地位を不動のものとするだろう。

「あの、１ついいですか？」

　フミエには大谷に訊きたいことがあるようだった。

『なんだ？』

「さっきの話ですが、自分の意識が肉体に戻っているにも関わらず、肉体は自分のコピーであるＡＩが支配するということですよね？」

『ああ、そうだ』

「そのＡＩというのが、自分の思考をまったくコピーしているのなら、それはあまり問題にはならないんじゃないですか？だって、自分が右手を動かそうと思った時、ＡＩの方も同じことを考えるはずじゃないですか。そのＡＩは“私”なんですから。ハラケンみたいに記憶を消されているなら話は別ですが」

　フミエの考えもなるほどと一同は思う。そのＡＩというのが完全な自分の思考のコピーだとしたら、すべての考え、すべての動作が自分の意識とＡＩでシンクロするはずだ。理論上は、大谷の言うような恐ろしい状態にはならないはずだが、

『あんまりそれを期待しない方がいいぞ。まず問題の１つ目は、自分たちの思考を完全に再現できるほどＡＩ技術が進んでいるかどうか、というところだ。もしそうだと仮定するなら、細川が今回のサイバーテロを起こす理由なんてないじゃないか。新空間の中に自分達の完全なコピーが存在しているなら、現実世界の人間の電脳体を連れ去っても同じことだ。細川は開発者として、人間とＡＩのギャ

ップを肌で感じているからこそ、今回のサイバーテロを起こすんだろう』

大谷の言葉には気持ち悪いくらいに説得力があった。フミエは自分の考えが短絡的だったことを悟ったが、彼はさらなる反証を持ってその考えを打ち砕いた。

『仮に、自分の思考の完全なるコピーが可能だったとしよう。でもそれは、ＡＩが完成した時点での話だ。神崎の話だと、そのＡＩ達は新空間の中で生活しているということだったな。新空間は現実世界と時間軸がずれている上に、死が存在しないなどの条件の違いがある。異なる環境に同一の人格が置かれたとしたら、時間が経過するほどにその行動のシンクロ率は下がっていくはずだな？発案者』

「ええ。僕達のコピーが僕達と同じ行動を取ってきたという保証はないですね」

どうやら大谷と直樹の間では通じ合っているようだが、他のメンバーには２人の会話の意味がわからなかった。

「えっと、どういうことなんですか？」

『ああ、悪い。大事なところを説明してなかったな。要は経験の違いだ。ＡＩが誕生した時点では自分と瓜二つの人格が出来ていた。が、神崎の話からすると、ＡＩが生まれたのは少なくとも２ヶ月は前のようだった。つまりこの２ヶ月の間、自分は現実世界で、ＡＩは新空間で、まったく別の経験をしてきたということになる。それが自分とＡＩの思考の違いを生むと言っているんだ。２ヶ月と言ってもバカにならんぜ。ある日自分の歩いた道が１本違うだけで、その人格の形成にも大きな違いが出て来るはずだ。その上、君らはまだ多感な思春期のまっただ中。なおさらこの２ヶ月というのがいかにギャップを生むに足る期間というのがわかるだろう』

その経験の違いで、人生のベクトルは微妙に変わる。それが修正できないままだと、年月を経るにつれて自分とＡＩの思考の乖離は大きくなっていくはずだ。これまでの人生で経験した選択肢の数をかけ算していくと、天文学的な数の“なりうる自分”というものが

存在する。今の自分もその1つと考えるなら、思考のコピーなどいかに無意味なことかがわかる。大谷の言っていることを一同もなんとなく理解した。

「結論としては、今夜決行されるサイバーテロをなんとしても食い止めなければならないということですね。大黒市民が新空間に引きずり込まれた時点で、もう後の人生は向こうで過ごさざるを得ないということですから」

それがうまくいかなかった時のことばかりを考えるのは効率的な時間の使い方ではないと玉子は思った。時刻はもうすぐ昼時。新空間のブラックホールが開くのはいつなのか。

『ああ。そうなると残り時間を意識する必要があるな。細川は電力会社のシステムの侵入して停電を起こさせるようにウイルスを注入した。停電そのものは、市民にメガネを使わせるための一手。メガネインフラについては別電力で供給されているから、その目論見は明らかだ。それらを考えると停電は完全に日が暮れてからになるな。闇の中にあっては、メガネをかけて情報を確認しないと心もとないからな』

「それに考慮すべきは、今日という日の特殊性ですね。5月4日、大型連休終了2日前。ニュースでは今日がUターンラッシュのピークだそうです。より多くの市民を狙うなら、家を空けて旅行に行っていた家族が戻ってくる頃合いを見計らうことでしょう。今日の高速道路の渋滞は夜遅くまで続くそうですから、どちらかと言うと遅い時間を狙うのではないでしょうか」

直樹に言われるまで、今日という日がゴールデンウィーク終了2日前ということは一同もすっかり忘れていた。

「しかし、市民が寝静まる時間になっては停電を起こしても大きな混乱は起きません。それらを踏まえると、停電自体は午後9~10時頃と考えるべきではないですか？」

『異論はない。となると、タイムリミットまで残り9時間から10時間か。それまでになんとかしねえといけないが……』

問題はここからだ。自分たちにこの局面を打開することはできるのか。本社はプロジェクトチームの監視下にあり思うように動けない。頼みの綱は戻ってきた猫目技師であるが、設備が整っていないことには彼の力を発揮しようがない。

『竹下さん、でしたよね？新空間計画の発案者は。初めまして猫目です』

大谷と場所を変わってもらって猫目技師がモニター越しに直樹に訊ねた。自分と宏文の研究を知らないにも関わらず、その問題点を克服した研究論文を完成させた奇才に、猫目技師はある種の希望を抱いていた。

「は、はい。猫目……ということは、まさか、宗助の父でコイルスの元主任技師である猫目さんですよね？こんなところでお目にかかれるとは。というより、一体どういう経緯でそちらに？」

『この大谷君は私が雇った調査員です。これまで私は表舞台から姿を消していましたが、こうなった以上、自分がケリをつけなければと思いまして出てきました。おそらく、アナタの心中にも同様のものがあると思います』

猫目技師はすべての根源は自分にあるという罪悪感、直樹は新空間の発案者としての責任をそれぞれ抱いていた。

「そ、そうだったんですか。いや、まったくその通りです。今回の件、僕にも大いに責任があります。猫目先生のお力になれるのであれば、どんなことでもいたしますが」

『では、質問があります。アナタが監視していた新空間に近い空間、私の愚息が狙いをつけた旧大黒ビジネスホテルのことですが、そこに古い空間を現出させた場合、新空間も反応を示しますか？』

その質問にはヤサコがハッとした。直樹も同様に驚愕の表情で訊ね返す。

「まさか先生は、あの夜を再現するおつもりですか！？」

#２５　世界のすべては彼女のために　ｐａｒｔ９

「本気でそんなことが可能だと思っているのか？街一つの住民がすべて神隠しに遭うようなものだぞ。それを他の都市に気付かれないよう、一晩でどう復興するというんだ？大停電が起こるとは言え、住民が全員メガネをかけるわけじゃない。メガネをかけた人間がことごとく気を失うとなると、メガネをかけなかった人間にとってそれは未曾有の事態だ。今夜起こることは、必ずどこかから漏れてしまうだろう。それをなかったことにするなど無謀だ」

支社長は納得できない様子で神崎に詰め寄った。

「手配した約１０００名の特殊部隊には、救急隊に偽装してもらいます。例えば４人家族の家庭があったとして、３人がメガネをかけたため電脳体が分離して気を失い、残った１人がそれを受けて救急隊を呼ぶとしますよね。部隊は速やかに気を失った３人にＡＩ移植用の量子回路を取り付け、その目撃者となる最後の１人も気絶させた後、電脳体を分離させて同様の処置を施します。お年寄りの方が住む家には見回りという名目で侵入、以下同文」

彼は、ブラックホール出現時にメガネをかけていなかったために助かった人間でさえ、政府に出動を要請した特殊部隊の手によってその電脳体を新空間に強制送還するつもりらしい。もはやそれは、細川のテロに加担するということを意味する。

「外にいる人間はどうする？もとより、そんな恐ろしい事が起これば大黒市から逃げようとする人間も出て来るはずだし、何も知らずに中に入って来る人間もいるはずだ」

「大黒から近隣都市へと通じる主要道路は、停電の後１０分ほどですべて封鎖します。大黒市では停電のために電脳ナビシステムがダウンしたとすれば理屈は立つでしょう。大黒市から車で逃げようとする人間をそこで止め、先ほど説明した処置を施します。目撃者は断じて大黒市から逃がしません。もちろん、停電で電車は運転を見

合わせるでしょうから、停電時に市内にいた人間が今夜、逃げ仰せることは不可能です。一般電話回線とインターネット回線はもちろん不通。メガネ電話をかけようとメガネをかけた瞬間に電脳体分離は分離し、ブラックホールに吸い込まれるでしょうから、情報が漏れる心配はほとんどありません」

そのためにどれほどの人員を必要とするのか。いくら政府関係者がバックアップしているとはいえ、これほどの規模の作戦を極秘裏に進めるのはやはりムリがあるように思える。そもそも、そこまでして”ＳＰＲＩＮＧ”の実験を行う必要はあるのか。

「プロジェクトの総責任者が私であることは忘れてないだろうな？」

「もちろんですとも。ただ、支社長には迷いがおありのようなので、私が勝手に手配を進めていますが」

「もう少し慎重になって考えてもみろ。ここで細川のテロに乗じる形で、焦って”ＳＰＲＩＮＧ”のデモンストレーションをする必要などないだろう」

急いては事を為損じるだろうと支社長は考える。ここで失敗を犯して、各国が”ＳＰＲＩＮＧ”の有用性に対して疑問を抱くことだけは避けたかった。

「私もこの際だからついでに”ＳＰＲＩＮＧ”の実験をしようと考えて準備を進めているわけではありません。いいですか支社長。これは細川のテロが実行された時の保険です。私も実験とかデモンストレーションを主題にしているわけではありません」

神崎にいつもの笑みはない。これはあくまで私情ではなく、シビアな計算によってはじき出された行動だということがその表情からわかる。

「保険……細川のテロを未然に防ぎきれなかった時のためのか」

「そうです。おそらく、テロが実行されても市民の２割ほどは生き残るでしょう。それでも８割の人間が意識を失うという未曾有の事態。放っておけば終世語り継がれる歴史的電脳事故となるはずです。そうなれば、メガネそのものへの信用は消えてなくなってしまいま

す。ただでさえ相次ぐ事故でメガネに対する不信感が世間に渦巻いているのですから、それがメガマスの倒産の引き金になることは間違いありません。そうなれば政府も慌てて我々に背信するでしょう。申し上げなくてもおわかりになると思いますが、それで“アナタのメガマス”が破滅するのですよ」

神崎に言われて支社長は慄然とする。自らが率いるプロジェクトチームが本社を乗っ取った以上、現時点での最高責任者は自分自身である。自分には、メガマスの全社員を食べていかせる義務がある。思えば、これまでの事故はプロジェクト絡みのものがほとんどで、今のメガマスの凋落を招いたのも自分自身であることを彼はよくわかっている。それは彼の計算のもとで、メガマスがさらなる成長を遂げるために目を瞑ってきたことだったが、たった1人の少女のために行動を起こしたために、その目算が狂ってしまったのだ。

「メガマスを存続させるために、大黒市民を生け贄にするか。なんたる皮肉だ。大黒市民の多くはメガマス関係者で占められているというのに」

「メガマスグループは全世界で10万人近くの従業員を抱えています。下請け工場なども合わせるとその何倍になるか想像もつきません。大黒市におけるメガマス関係者はせいぜい住民全体の1割から2割。数で秤にかけるのは適当ではないかもしれませんが、守るのはメガマスグループの方だと思います。それに、”SPRING”がうまく起動すれば大黒市在住の社員は今まで通りに出社します。これまで本社に尽くしてくれた社員には、新空間で穏やかな余生を送っていただくほかありません」

そう言ってしまえば聞こえがいい。果たして大黒市に住んでいた社員は、新空間でのバカンスを楽しんでくれるのか。支社長はそんなことを思った。

「では、細川のテロの阻止に向けて何か手を打っているのか?」

「……残念ながら、そちらの方には手を回せていません」

その答えに支社長は衝動的な怒りを覚えた。
「それは本末転倒ではないか！お前は保険の準備のために、事故を未然に防ぐ努力をしないのか！？」
「言い訳になりますが、手が回せない状態なのです。とにかく、今夜中に大黒市民２０万人のＡＩの用意と”ＳＰＲＩＮＧ”起動の準備をしなくてはいけないので」
それは確かに準備に手間取るのはわかる。しかし、それでは事故が起こってしまうのを待っているようなものではないかと支社長は思った。
「本当に何も手はないのか？」
「私達が直接手を下すという意味では、残念ながらありません。ただ、間接的にという意味では先ほど手を打っておきました」
「何？」
「本社の社長や小此木君達を使います。驚いたことに、彼らには強力な助っ人が加わったようです」
「助っ人？誰のことだ？」
「元コイルス社の猫目技師」
「なんだと！？」
先ほど神崎が一郎や細川との通信に割り込んだ時、支社長は席をはずしていた。その時の様子を支社長は知らなかったのだ。
「どうも例の大谷記者と彼との間に接点があったようですね。大谷記者が一連の事故に首を突っ込んでいたのは、おそらく猫目技師の足となって彼に事故の詳細を報告するためでしょう」
「そういうことだったのか……しかし、猫目技師は今の今まで決起しなかった。本当に事件の詳細を追っていただけなのか？彼の好奇心を満足させるためだけに、あの大谷という記者は暗躍していたのか？」
「それは……わかりかねますが。とにかく、彼らの側に猫目技師がついたというのは、細川のテロを阻止するという点では好都合なのですよ」

「でも神崎さん。先ほどの通信では、本社には勝手に動かないようにと釘を刺していたじゃないですか。本社も我々の監視下にあるとわかっている以上、その動きは鈍ると思うのですが」
　その時会話に入ってきたのは小野だった。彼は今”ＳＰＲＩＮＧ”の起動準備に忙殺されているが、神崎の言動に腑に落ちない点があったのでそれを確認したのだ。
「その程度の脅しに屈するような人達なら最初からアテにしませんよ。私達にテロを阻止する気がないことをアピールすれば、当然あちら側はどんな処分も覚悟で行動に出るはず。その心理的な駆け引きが奏功すればいいですけどね」
「その本社についてご報告したいことが」
　今度は神崎の部下が走り寄ってきた。
「どうしました？」
「はい。本社から桝田社長、小此木一郎らを乗せた車が市街に向け出発しました。現在追跡を続けていますが、彼らの会話の盗聴記録から判断すると行き先はここになるかと」
　報告者はモニターに市内の地図を出す。そして一郎達の予想目的地には赤いマークが点滅していた。
「そこは……」
「さらに、平松部長は本社ビル地下にある第七研究室、通称管制室に入り、エンジニア達を集めています」
　神崎は完全に本社側の意図を読み切ったように何度も頷いた。そこまで説明されれば、支社長や小野でも彼らの作戦は想像できた。
「制止しますか？このままでは、彼らはあのプログラムを再起動することになりますが」
「いや、それでいいのです。引き続き監視を続けるよう指示を出しておきなさい」
「はっ」
　すると神崎は支社長と小野の方を見やった。
「面白い作戦ですね。まさか、あの夜と同じことを起こそうなんて。

おそらく、事件をずっと追って来た猫目技師のアイデアかと思いますが」

「うまくいくと思うか？」

支社長が鋭い視線のまま訊ねる。

「……どうでしょう。新空間に入るまでが第一関門ですね。いかんせん旧式の空間では、イマーゴ保持者に負担がかかってしまいますから。おそらく行くのは小此木優子、天沢勇子の２人。２人ともそれぞれ最近の事件で入院を経験していますから、体力的には不安が残ります。それがうまくいったとしても、第二関門は、うまくミチコを誘い込めるか」

「古い空間に入ることには意味はない。ただ、異空間という共通の特徴から、新空間は通常空間よりもＣドメインの方が入り口を開ける可能性が高い。それに期待した作戦ですね。ただし、あくまで新空間の入り口が開くのは、ミチコの意志が働いた時。ミチコに彼女ら２人に会う意志がなければ、さきの事件のように彼女らが新空間に侵入することは叶わないということになりますね」

新空間への道のりは遠いと３人は思う。しかし、今夜その中に大量の人間の電脳体が引きずりこまれてからでは遅いのだ。ミチコを止めるのはそれが実行に移される前、今しかない。

「小野さん。新空間への道を彼らがこじ開けたあかつきには、どうにかミチコの精神制御プログラムをハッキングしていただけないですかね？」

神崎が小野に向き直ってひょうひょうと訊ねた。

「無茶言わないでください。おそらく細川はミチコの精神防御を完璧にしたはずです。いくら新空間への入り口が開き、彼女へとつながる道が開けても、精神内部からプログラムを書き換えようなんて不可能に近いと思います」

「そのくらいわかっています。しかし、小此木優子、天沢勇子はおそらくミチコの心を揺さぶる作戦に出ると思います。その時、ＡＩであるミチコの精神にほんの小さな綻びが生まれれば、付け入るス

キはあるのではないですか？」
「それなら、いっそのこと彼女達に賭けるのが最良かと」
　すると神崎は大きくため息をついた。
「ミチコが彼女らに懐柔されれば、新空間の支配権も彼女達にゆだねられるようなものです。それは本社側にしてみれば願ってもないことでしょう。新空間の支配権を握った本社に、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”中止を要請されれば我々の失脚は免れないでしょう。どんな手段を使ってもいいのです。我々は新空間の神、ミチコを手中に収めなければならないのです」
　小野もそれには一瞬言葉が詰まる。神崎の狙いは細川のテロの阻止とミチコの奪還。その理屈はわかるが、小野の中にはためらいに似た感情が生まれていた。それはヤサコ達への遠慮ではなく、もっと根本的な問題に起因している。つまり、彼女らがミチコを説得し、その心の動揺のスキをついて自分が彼女の心の内部からＡＩの精神制御プログラムをハッキングするという行為には、リスクがあると小野は考えているのだ。
「・・・・・・それで、ミチコの気が狂ったとしてもいいのですね？」
「なんですって？」
　神崎は驚いたような表情で小野を見返す。
「ＡＩと言えど心を持っています。小此木さん達による言葉の外部刺激と、私がプログラムレベルで彼女の精神を書き換えるという内部刺激が同時になされた場合、ミチコの心がどのような反応を示すのかまったく予想できません。万が一ミチコが発狂した場合、今夜のテロを含め、新空間がどのように暴走し始めるのかわからないのですよ」
「それは非常に危険だな。我々がミチコを奪えるかどうかは二の次にして、彼女達の説得でミチコの暴走が止まるのを期待した方がいい気がするが」
　支社長は小野の意見に同意した。ミチコがさらなる暴走に出た場

合、自分たちが新空間を失うだけでなく、至る所で人間の電脳体が連れ去られるという惨劇が引き起こされる可能性がある。

「支社長まで何をおっしゃるのですか。我々のプロジェクトは、もう完成の域にさしかかっているのですよ。今更そんなリスクを犯すぐらいどうってことないじゃないですか。傍観していればすべてが水泡に帰すのですから！」

珍しく声を荒らげる神崎に、先ほどの報告者は言いづらそうに付け加えた。

「それからこれも一応ご報告しておきますが、空間管理室本部長が本社を抜け出し、大黒市役所にある空間管理室に入ったと」

「そんなことはどうでもいいわ！あんなザコに何が出来る？くだらないことをいちいち私の耳に入れてくれるな！」

支社長と小野が自分の考えに従わないことに、神崎はかなり立腹しているようだった。いらだたしげに報告者を追い出すと、自分もここにはいられないと出口に向かって歩き出す。

「とにかく、ミチコの件は私の言う通りにしてくださいよ、小野さん。私は、プロジェクトチームのため、メガマスのために言っているのですからね」

吐き捨てるように言うと、早足で神崎は部屋を後にした。

「どうしましょう支社長？」

小野が困ったように訊ねると、支社長はサバサバと返した。

「小野先生の思うようにすればいい。あれは少し焦り過ぎだ。あの分だと大きな失敗をしかねないが、それはそれであれを除く理由ができる。私はあれと心中するつもりはない」

#２５　世界のすべては彼女のために　ｐａｒｔ１０

猫目技師が考えた細川のサイバーテロ阻止の方法は、ミチコの生みの親であるヤサコとイサコを新空間に送り、細川の意志が宿る彼女を説得するというものだった。しかし、現時点ではミチコが自らの意志で新空間の出入り口であるブラックホールを開かない限り、そこに侵入する手段はない。テロが実行されれば大黒市民は問答無用でそこに引きずり込まれてしまうことになるのだが、それでは手遅れなのだ。

しかし猫目技師にはヤサコ達を新空間へと送る秘策、もとより最終手段があった。４月１日に旧大黒ビジネスホテル起こった電脳事故。それを再現するというものだ。

あの事故の時、廃ビルの中にいたヤサコはヌルに襲われて空間制御プログラムにより現出した古い空間の中に連れて行かれた。そしてその中でミチコと再会した。

猫目技師はその話を記憶していて、もしかしたらという淡い希望を抱いたのだ。つまり、ミチコがその時古い空間にいたということは、新空間と古い空間をつなぐ道があるということになる。しかも、新空間はかつての古い空間であるＣドメインの開発に関わった細川技師が設計している。そこに互換性があるならば、新空間の入り口が開く確率は通常空間よりそちらの方が高いはずだ。

手短に自分の考えを説明した猫目技師に対し、本社の一郎や桝田、そして病室にいた玉子からも異論は出なかった。異空間に侵入し、ミチコを説得するという大任を受けることになるヤサコとイサコも、自らの体の危険を顧みずそれを了承した。２人にしてみれば、いずれこうなるだろうという気はしていたのだ。大人達からしてみれば、古い空間に再び潜り込む２人のイマーゴ能力だけが気がかりだったが、他に手段がない以上、そこに賭けるしかないという判断だった。

時間がない中、その作戦が採用されるや各自すぐに準備にかかっ

た。まず、あの廃ビルの一件以来お呼びがかからなかった空間制御プログラムを起動する必要がある。その指揮には平松が向かった。一方の一郎と桝田は、作戦決行の舞台である廃ビルへと出発した。神崎の言うように、プロジェクトチームに加担する人間の監視がついているはずだったが、こうなった以上、彼らの妨害が入っても必ず作戦を遂げてみせるという覚悟はできていた。

電脳工房にいた猫目技師と大谷、そして大黒黒客メンバーもすぐに動いた。全員が一路廃ビルへと向かう準備をする。そんな中、腰を痛めて歩くことすらままならないメガばあも現場に行くと言い出した。

「ばあさん、事態は急を要するんだ。そんな体の状態でついて来られても困る」

大谷はメガばあの申し出に困惑するように言った。

「やかましい。ワシとてそんな作戦を認めたくはない。優子は先月の事件の時にイマーゴの限界を露呈しておるし、それはイサコとて変わらぬはずじゃ。しかし優子らは自分が行くと言ってワシの言うことなど聞かぬじゃろう。それにこれが最終手段というのなら、どのみちミチコを良く知る2人に賭けるしかない。じゃから、2人の体に異変が起きた時、それを助けられる人間がいないとお主らも困るじゃろう」

「それなら猫目先生がついてる」

「いや。是非小此木さんにも来ていただきたい」

大谷がメガばあを諭そうとした時、猫目技師が彼を制した。

「ですが、先生には暗号技術が」

「暗号では優子さん達を支えるのに不十分だ。小此木さんの開発されたメタタグ。あれは実に素晴らしい効力を持っていると思います。そんな高度な技術を持つ小此木さんにそばにいていただければ、私も心強い」

メガばあは猫目技師の言葉に小さく息をつく。そのため息の意味

は誰にもわからなかったが、ダイチには何となくメガばあの気持ちがわかるような気がした。メガばあがこれまでメタタグをどんな思いで練ってきたのか。メガばあが倒れる要因となった玉子の事件以来、メタタグの精度が上がっていったのは、事故がもう起きてほしくないという願いからではないか。それを外から傍観し続けていた猫目技師に、その性能に対して知ったような口をきいてほしくない。メガばあのそんな風に思ったのかもしれないとダイチは感じた。

「お主ら。メガシ屋に残ってるだけのメタタグを持って来るのじゃ。それから、先月の事件の時に一郎や玉子に集めさせたメタタグもわずかながらある。それも全部とって来るのじゃ！」

「了解！」

メガばあに指示を飛ばされた黒客メンバーは、すぐにメガシ屋に向かう。

「じゃあ、バアさんはオレが車までおぶっていく。病院からは車いすの1つでも手配して、例のビルにまわさせておこう」

そうしてメガばあは大谷におぶられ、彼の車に乗り込んだ。その後すぐに、メタタグを回収していたダイチ達にも声をかけた。

「これで店にあったもん全部か？」

「ああ。あんまり残ってなかったが」

「かまわん。お前らもすぐに例のビルに来い。必要なら、お前らの手も借りることになるからな」

「わかってるって。すぐに向かう」

ダイチはそう言うと、大谷達の乗った車を見送った。その後メンバーも急いで廃ビルへと向かった。

その頃、病院にいたヤサコはどうしてもしなければならないことがあると、ある部屋を目指していた。既に細川は連行され、直樹は彼を久美子に任し、先に廃ビルへと向かっている。自分たちもすぐに廃ビルへと向かわなければならなかったが、

「……なるほど。原川とお別れを」

ヤサコの言う“しなければならないこと”とは何かを聞いたイサコは、納得するように頷いた。

ＡＩである今のハラケンは、元々新空間の住民であり、そこに帰すべきだとヤサコは思っていた。そしてもちろん、現在新空間にいるオリジナルのハラケンを通常空間に連れ戻さなければならないとも。

ヤサコとイサコはこれから新空間に潜る。そして、ミチコの説得に失敗すれば今夜のテロは実行され、他の大黒市民共々一生新空間にいなければならない。また、ミチコの説得に成功し、その力でオリジナルのハラケンの電脳体が肉体に戻れば、このＡＩのハラケンは新空間に戻らなければならない（そのためには、プロジェクトチームが”ＳＰＲＩＮＧ”を操作して、彼のＡＩを新空間に送り返すという手順を踏まなければならないが）。つまり、事態がどのように転んだとしても、ヤサコとＡＩのハラケンが会うことができる機会はもうないのだ。そこでヤサコは、自分の決断と、彼を新空間に送り返すことに対しての謝意を告げるつもりでいた。それを聞いたフミエ、アイコ、イサコ、シュウイチ、そして玉子も彼と最後の挨拶を交わすことにした。

「ハラケン。入るね」

体の検査を受けていたハラケンは、控え室で医師に待つように言われていた。中に入ったヤサコ達は他には誰にもいないことを確かめ、彼に切り出した。

「体は大丈夫？」

「うん。多少熱っぽいけど、大したことはないと思う。それより、みんなどこに行ってたの？随分慌ただしく出て行ったけど」

するとヤサコはイサコや玉子の方を見た。先ほどまでの出来事を彼に説明するか。それほど時間はないと判断した玉子は、静かに首を横に振る。ヤサコはそれを受け、単刀直入に本題に入る覚悟を決めた。

「ちょっと、色々ね。それでハラケン。私達、アナタの生まれた場

所に行く事にしたの」
　彼は一瞬何のことかわからないような戸惑った表情を見せたが、すぐに納得したらしい。
「……そうか。電脳空間に連れ去られたオリジナルの僕を連れ戻しに行くんだね」
「それもあるけど、私達には大切な使命があるから。アナタには、それを伝えとかないといけないと思って」
「僕に気を遣わなくてもいいのに。やっぱりこの世界に僕の居場所はない。むしろ、オリジナルの僕の方と入れ違いに戻るべき場所に戻るだけの話さ」
　彼には決心ができているようだった。そう言ってくれると気が楽になるが、その健気さにためらいも沸き上がってくる。彼の表情からは、言葉とは裏腹に自分の知らない世界に行かされることに対する不安がにじみ出ていた。
「……うん。本当はそうあるべきだと私も思う。世界が変わることで、アナタともう1人のハラケンの心が落ち着くのなら。でも、私はこうも思うの。アナタが自分自身のことを世界にたった1人の原川研一だと思えないなら、どの世界にいてもアナタはツラい思いをするだけよ」
　ヤサコからはっきりそう口にされ、ハラケンは少し俯いて閉口した。彼にしてみればもう少し遠回しな言い方を期待していたのかもしれないが、ヤサコは曖昧な言葉でお茶を濁すようなことはしたくなかったのだ。
「ヤサコの言う通りよ。アンタは世界にたった1人の原川研一。どの世界に生きようと、もう一つの影を気にして卑屈になっていたらアンタが不幸になるだけ。何故か世界は2つになって、そのそれぞれに自分が存在するようになったけど、それがなんだっていうの？私だって自分がもう1人存在してるのよ。でも、そのもう1人を意識はしないわ。どのみち、どちらか一方の世界に2人の自分が存在することはあり得ないんだから」

フミエの言葉に再びハラケンは顔を上げた。
「それは君が生身の脳を持ってるから言えるんじゃないか。僕は、その劣化コピーに過ぎないんだ。オリジナルを意識しないなんて僕には無理だよ」
「劣化コピーって。アナタは人間と変わらないポテンシャルを秘めているはずよ。どうしてそう信じないの」
「慰めてるつもりなのかもしれないけど、やっぱり僕には人間の高見からの言葉にしか聞こえないよ」
あまりに彼がネガティブになっているので、フミエはもう我慢しないことにした。
「記憶をなくしたくせに、そのうじうじしたところは前とあんまり変わんないわね。生身もＡＩも関係ないわ。アンタには何のプログラミングも施されてない、文字通り真っ白な脳があるだけ。そんなアンタが、未来をどんなものにするかなんて決まってない。もちろん、もう1人のハラケンを越えることだって十分にできる。結局はアンタの努力次第よ」
沙織や宗助のＡＩと違い、ハラケンのＡＩには記憶がないかわりに何のプログラムも混入されていない。後は人間の脳と同じように、様々な経験を積んで成長し続けていくだけだ。
「私も、橋本の言う通りだと思う。運命が決まっていると思って生きるほど、くだらないことはない。自分の存在を否定するな。自分が変われば未来は変わるし、そうして本当に大切なものを見つけることができるはずだ。
そう思うから私達はこれから新空間に行く。私達自身の未来を変えるために。その可能性がどれほど小さくてもな」
イサコが悲壮な覚悟を見せたことにハラケンは話の脈絡を掴めていないようだったが、そのワケを説明をしているヒマはない。今どのような状況にあるのかは、医師の口から彼に告げられることになるだろう。
「別れがツラいのはみんな同じ。私達とアナタは、事態がどう転ん

でも2度と会えないことになる。だから、私達はアナタにあえて厳しいことを言ってる。それを高見の人間からの言葉だなんて受け止めないでほしいの。アナタには、アナタの人生を送ってほしい。みんなが願っているのはそれだけよ」

再びヤサコが彼に言葉をかける。先ほどから一言も発しないでそれぞれの言葉を聞いていた彼は、静かに首を振った。

「……僕は、また忘れるかもしれない。みんなが僕のことを思ってそう言ってくれるのは本当にありがたいと思うし、ついさっき悩んでいた自分から変われるような気がする。でも、僕がＡＩというのはどうやっても抗えない事実だ。確かに運命は決まってないかもしれない。だけど、僕の頭の中はまるで黒板のように次から次へと書かれては消されていってしまうんだ。そして、前に書かれていたことはどうしても思い出せないんだ」

こんな信じられないような状況に苦悩する日々さえも彼には愛おしいのかもしれないとヤサコ達は思う。彼の体験したまったくの「無」とはどれほど心細い状況なのか、それを想像することすら叶わない。しかも、彼には今後もそれが繰り返される可能性すらある。そんな人生の虚しさを痛感したのか、彼の目から涙が溢れていた。

そんな彼を、玉子は抱き寄せてささやいた。

「聞いて、ケンちゃん。確かに、自分の都合だけでＡＩの記憶をいじくりまわす人がいる。でも、そんな人を私たちは許さない。今から、私達は大切なものを取り戻すために戦いに行く。そこで私達が勝ったなら、もうアナタ達の記憶を改変するような愚かなことはさせない。それは絶対に約束する。

だからね、ケンちゃん。アナタが元の世界に戻った時、私たちのことを忘れていなかったら、今のこの子達の言葉は胸の中に大切にしまっておいてほしいの。今回のことはアナタにとってツラい出来事だったかもしれない。けど、これはきっとアナタにとって糧になるはずだから。この子達との出会いを、忘れないように……」

ハラケンの嗚咽が耳に入り、玉子も思わず言葉を詰まらせた。も

う2度とは会えない彼との時間を玉子ももう少し噛み締めていたかったが、その余裕は残されていなかった。

「……さあ、そろそろ行こう」

時計を見てイサコが促すように言う。それに頷いた一同は、燃えたぎるような想いを胸に秘めて部屋を後にする。

「絶対に」

ハラケンが彼らの後ろ姿に呼びかけた。

「絶対に、彼を連れもどして。そして、僕に君たちのことを忘れさせないでくれ……」

振り返ったヤサコは、恥じらうように微笑んで返した。

「……ええ。私もアナタのことは絶対に忘れない。アナタは、私にとって特別な人だから」

#25　世界のすべては彼女のために　part11

「……これまで黙っていて済まなかったな。いずれは君達にも話さなければならないことだと思っていたが」

午前中から続く曇り空。光源のない廃ビルは薄暗く、向かい合う相手の表情もよく見えない。しかし、ヤサコ達が初めて直に対面する猫目技師が、なんとも申し訳なさそうな顔をしているのは見て取れた。

「一体、アナタと猫目技師の間にどういうつながりがあったのですか？」

玉子が大谷に訊ねる。

「さっきの病室でのやり取りでも話したかもしれんが、オレは元々科学雑誌を書いていた関係でコイルス社にも取材に行っていた。その時に猫目先生や細川技師とも知り合った」

「しかし、猫目さんの失踪後は」

「ああ。もちろん、オレも連絡は取れなかったよ。と言うより、そこまで親密な関係というわけではなかった。猫目先生が失踪されて、コイルスがメガマスに買収されたのはショックだったが、オレに何ができるわけじゃなかったんだ。オレはその時、まだイマーゴについては知らなかったし、だからこそ、その真相を探るためにメガネに関わる一連の事件を追っていたわけだけどな」

辻褄は合っているとイサコは思った。大谷のような記者がそれらのメガネの不具合を知っていたなら、メガマスがコイルス社を買収した時点で声高にそれを主張していたはずだ。

「じゃあ、いつから猫目さんと」

「今年に入ってからすぐだった。まったくの偶然だった。なにせ再会した地がアメリカのコロラドだったんだから、オレ自身目を疑ったよ。お化けかドッペルゲンガーじゃないかと思ったぐらいだ」

「なぜそんなところに？」

その場にいた桝田が猫目技師に問いかけた。
「私が姿を消した後、すぐにある企業の関係者から接触受けたのです。どうやら、コイルス社にいた時から私を調査していたようで、私も身を隠すためにはいいかもしれないと彼らの誘いを受諾しました。彼らはアメリカへの入国やビザの取得など、あらゆる面で私をサポートしてくれました。もちろん非合法な手段を使いましたが、しかしおかげで、メガマスからの追っ手を見事にまくことができたのです」
「なるほど。その企業というのがコロラドを拠点にしていたと。確かに州都のデンバーなどは経済状態が良く、最新の科学技術産業が集中している。その環境から多くのＩＴ関連ベンチャー企業が芽吹いているとも聞きますね」
「まさに。私を受け入れたのは、メガネのアプリケーションを開発する新進気鋭の企業でした。私はそこでの研究開発に携わっていました」
納得するように桝田は頷いた。彼が失踪した当時、コイルス社の量子回路を搭載したメガネは大きく普及はしていなかった。爆発的にヒットしたのはメガマスが販売権を持ってからだが、彼を手に入れることができた企業は、その新しいメガネの機能に対応したアプリケーションの開発競争において優位に立てる。引く手数多の存在である彼を迎え入れることができたのは、よほどその企業の動き出しが早かったのだろうと思う。
「しかし、日本に家族を残して海外ですか」
玉子がぽつりと言った。黒客メンバーと一緒にいたタケルは、何も言わずに父の言葉を待っている。
「……仕方がない、と言ってはあまりにも家族に申し訳ないのですが、あの時の私にしてみれば、それが最善の選択のように思えたのです」
「なぜですか？」
「国内にいれば、メガマスの追っ手にいずれ捕まります。メガネの

不具合をすべて把握していた私です。彼らが放っておいてくれるという可能性はまずありません。

つまり、私にはメガネに関わる権利に興味などないということを彼らに見せるのが身を守る上で最良の方法だったのです。彼らは私の開発した量子回路の使用権さえあればそれでいいわけですし、彼らがそれを我が者顔でばらまこうとも、私自身がそれを自分の開発だと口を滑らせさえしなければ、少なくとも危害が及ぶことはない。

それに、もし彼らが業を煮やして家族を人質にとろうとしても、私と連絡がつかないのであれば意味はない。私が海外に逃亡したことを知った彼らは、私の追跡を諦め、そのかわり私の研究を横取りした。私の名誉などどうでもいい。ただ皆が無事でいるのであれば。そう思っていました」

すべては家族のことを思っての判断だった。残された猫目家の家計は、旧コイルス一派からの資金援助でなんとかやりくりされていたが、それは決して楽なものだったとは言えない。それによって、宗助は彼らの手先として縛り付けられていたという側面もある。

「じゃあ、アナタがアメリカにいた間にこちらで起こった出来事は」

「ほとんど把握していませんでした。私をその企業に誘った在日の調査員が、色々と報告してくれましたが、彼もその調査をメインに活動していたわけではないですから。その詳細を聞いたのは、大谷君と再会した時です」

一同の視線は再び大谷に向けられる。

「去年の秋でメガネに関わる一連の事件にカタがついたと思ったオレは、その後のメガマスの動向を追う一方で、新しい取材を始めることにした。その関係で今年の初めの１ヶ月、コロラドに滞在していたんだ。その取材の中で、偶然にも猫目先生と再会した。先生はオレのことを覚えていてくださって、この空白の５年について酒を飲みながら語りあった。そこでオレは一連の事件における自分の調査結果を先生に報告した。先生は心底驚かれたようだった」

「言葉も紡げませんでした。自分の息子の愚行が、１人の少女の命

を奪い、1人の少女の人生を翻弄したというのですから。しかも、その動機が他ならぬ私だった。私はようやく5年前の自分の判断が間違いだったことに気付いたのです。そもそも、事件の原因さえもこの私が作ったのですから、それを放置して逃亡したのは自分でも大罪だと思います」

彼は何も知らなかった。それはそうだろうと一同は想像する。彼を迎え入れた企業からしてみれば、日本で起こっていることを彼が知ってしまえば、彼は帰国すると言い出すかもしれない。それを望まない彼らは、その子細を把握していながらあえて猫目技師には伝えなかったのだろう。それを言い訳にはできないが、しかし猫目技師の苦しい立場を考えれば一概に彼を責めることもできないと一同は思う。

「まあ、それで先生は失踪した宗助のことを不安に思った。平たく言えば、彼がもう1度決起するかもしれないと思われた。自分が帰国して姿を現せばそれを防げるかもしれないと先生は思われたんだが、それはオレが全力で止めたんだ」

「なぜですか？メガマスは新体制になったのです。我々は猫目技師の功績と、5年前のコイルス買収の真相を公表するつもりだったのですよ。猫目技師が帰国されるには、いいタイミングだったと思いますが」

一郎がそう言うと、大谷は少し言いづらそうに返した。

「小此木さん。メガマス内部にいたアナタからすれば、そう言われるのは当然かもしれません。しかし、オレみたいに外部から見張っている立場の人間には、その中身はわからないんですよ。新体制は果たして信用するに値するのか。それに旧幹部達の排除も終わってない以上、彼らが息を吹き返す可能性もありますし、新体制内部にも神崎のような過激派がまだ残っているかもしれない。彼らにしてみれば、やはり猫目技師の存在は邪魔でしかない。それらを考慮しても、猫目先生が表舞台に戻るタイミングだったとは思えなかったんです」

確かにその通りだったかもしれないと一郎や桝田は思った。現に神崎達に本社を乗っ取られた自分達がそれを否定するなど滑稽でしかない。

「その時彼は、私のために日本で調査を続けると言ってくれました。その言葉に甘えて、私は彼に宗助の動向を追ってもらうことにしたんです」

彼は大谷にそれなりの報酬を払うつもりでいた。いくら彼の善意とはいえ、危険な調査であるし、彼の本業への妨げにもなるかもしれないと思ったからだ。こうして2人の間には依頼人と探偵という契約が成立した。

「日本に戻ったオレは引き続きメガマスを調べながら、何か異変がないかと大黒市で様子を窺っていた。そうして訪れた4月1日、古い空間が大発生。すぐさまオレは大黒市に向かった。当然、そこには宗助が絡んでいるだろうと踏んで。しかしその夜、まさにここで子ども達が失神するという事故が起こり、翌日には宗助が逮捕された。オレにしてみれば、事態が急転しすぎて、何が何やらわからないまま収束していったって感じだったがな。ただまあ、なんか都合良く物事が運ばれてるような違和感はあった。だから、これで終わらないだろうなとも。その矢先、金沢市黒井交差点で事故起きた」

「なるほど。アンタは金沢に飛んだ。そして、私と接触した」

今思えば、あの時の大谷の言葉に嘘はなかったのだなとイサコは思った。しかし、なぜ大谷は自分と接触してきたのか。彼の調査能力からすれば、自分の協力は必ずしも必要なかったのではと思うが、

「それは、君を守るためだ」

イサコの心を見透かしたように大谷は言う。言葉だけをとって見ればただのナルシストのように聞こえ、シュウイチなどはどきりとしたが、彼はひょうひょうと続けた。

「金沢での事件におけるキーパーソン、桐野沙織はすぐにオレも目をつけた。そしてそこにいるシュウイチの金沢黒客も彼女に気付き、イサコも彼女に気付いた。そしてオレはそこで、イサコに気付いた。

あ、大黒市の事件に絡んでいた少女だ、ってな。
　その時、先生は既に帰国されていたから、それについて相談したんだ。『例の天沢勇子が同じ事故を調査しているようですが、どういたしましょうか？』ってな。すると先生は、『彼女を守ってあげなさい』とおっしゃった」
　イサコは猫目技師の方を見る。理由の方はなんとなく見当がついたが、彼はそれを説明した。
「天沢さんは、宗助が大変な迷惑かけてしまった1人です。その天沢さんに、もしものことがあってはならない。私にはアナタを守る義務があると、自惚れながら思ったのです」
「でも、大谷は初めから私に協力させるつもりのようでした。私を守るというなら、私に警告するのが手っ取り早かったんじゃないですか？」
　そのイサコの問いには大谷が答える。
「ああ。オレは最初から君と協力体制をとるつもりだった。警告して遠ざけるという手も確かにあった。でもな、人間好奇心を原動力とする生き物だからな。それは自分がそうだから言えるんだが、結局、オレが警告したら君はあの調査をやめていたか？」
　イサコはじっと考えてみる。沙織は暗号を使って何かをやろうとしていた。しかもその数日前に黒井地区で電脳事故があった。空間設計室は管理体制を強化して金沢でもキュウちゃんを飛ばし始めた。その状況で、自分は初対面の男に警告されたぐらいであっさり手を引いただろうか。
「いや、それはなかっただろうな」
「そうだろ。予備知識もなしに下手に動きまわるのが、一番事故に遭いやすい。だからオレはあの時、君にできる限りの情報を提供した。実際、オレも君と協力関係にあった方が調査もはかどると思ったし。いつも行動を共にしていれば、本当に危ない時に君を逃がすことができる。オレも暗号スキルには自信があったからな。なにせ、それを仕込んでくれたのは暗号技術の生みの親、猫目先生だ。沙織

の暗号がどんな奇抜なものであれ、それに対応できたのはその根本の性質を理解していたからだ」

確かに、イサコ達がずっと訝っていた大谷のスキルの高さもこれで合点がいく。しかし、

「イサコを守るために行動を共にしていたのに、イベント事故の時は全然守れてなかったじゃないですか」

シュウイチの一言がぐさりと大谷の胸に突き刺さった。

「いやあれはだな、オレも暗号を読み違えてしまってだな、まさか真相があんなだったとは思いもしなくてだな」

あたふたする彼に玉子がとどめを刺す。

「しかも、最後にはイサコの暗号炉を起動させる暗号を与え、彼女の体に負担をかけた。その上、その甲斐もなくイサコはミチコに連れ去られた」

「いやだって、イベント会場には子どもが１０００人もいたんだ。１０００人だぞ。それを守るために手段を選んでいられる状況じゃなかったのは、アンタらも知ってるだろ。

……まあ、それについては後から猫目先生にめっちゃ怒られたけどな。泣きたいぐらい怒られた」

しょぼんとする大谷。しかし、そのことで彼を責めることはできない。これから自分たちは、イサコを再び古い空間に送ろうとしているのだから。

「なるほど。そこから沙織が失踪して、ほどなく大黒で事故があり、今に至ると。アンタが自分の正体を明かせなかった理由もわかった。私達も、そのせいで全面的にアンタを信用できないでいた。これで、お互いにスッキリしたな。これまで私をサポートしてくれてありがとう」

「いや、礼を言うにはまだ早い。君たちには最後の仕事が残っているからな。それを完遂させて、今度こそ事件を終わらせようじゃないか」

大谷がそう言うと、桝田の携帯報告が入った。

「空間制御プログラムの起動準備ができたとのことです。間もなく、このビルの2階に通路が開くと」

一同は一階のフロアーに集まっていた。フミエ達やダイチ達もそこにはいたが、ヤサコとイサコを見送るだけではなく、彼らには彼らの役目もあった。それについては直樹から説明がある。

「確認します。古い空間の中に入るのは、小此木さんと天沢さんの2人です。通路が開き次第、2人には2階にのぼってもらってヌルと接触し、電脳体を分離させてその中にもぐってもらいます。小此木さん達にはこの暗号をお渡しします」

そう言うと直樹はヤサコとイサコに暗号を転送した。

「これは、新空間への通路が開くのを誘発する暗号ですね」

「ああ。原川君の事件の後、僕が事故現場やここに仕掛けていたものだ。古い空間に潜ったら、まずはその暗号を適当な場所に置いてもらいたい。それは5つが1セットになっている。設置する時は星形の五角形に」

「わかっています。金沢の事件では散々その形を見てきましたので」

話が早いと直樹は頷いた。そのまま説明を続ける。

「わかっていると思うけど、それを設置したからと言って新空間への通路が必ず開いてくれるという保証はない。暗号はその確率をほんの少し高める程度の効果しかない。結局のところ、ミチコが君たちを新空間に招待してくれるかどうかにかかっているからね」

「ええ。でも、ミチコは私達を連れて行こうとすると思います」

イサコはそれを確信しているようだったが、一同にはその根拠がわからなかった。ヤサコでさえその時はイサコの顔をのぞきこんだほどだ。

「そうなることを願おう。じゃあ、次に君たちが新空間に潜り込むことに成功した後について説明する。

新空間にいる限りはイマーゴ能力に関係なく、人体への悪影響はない。つまり、新空間なら僕達でも入り込むことはできるということだ。

だから君たちには、まず最初に新空間とこの廃ビルの空間をつないでもらいたい。そのための暗号がこれになる」

直樹は先ほどとはまた別の暗号を2人のメガネに転送した。

「これは僕の持っている暗号とはセットになっている。新空間への通路が通常空間に現れるには、新空間側からの干渉が必要となることは知っての通りだ。その暗号は、新空間を内側から刺激することによって、その現象が起こりやすくなるようにするためのものだ。そして、通路となるブラックホールの出現場所を、僕の持っている暗号でコントロールする。つまり、君たちがこの暗号を新空間内部に仕掛け、僕がこの廃ビルに仕掛けることによって、新空間の通路をこの場所にダイレクトに開くことができるというわけだ」

「それは確実に開くものなんですか？」

「理論上は開くはずだけど、まだ1度も試したことはない。ここは新空間計画の発案者である僕を信じてくれ。

この暗号は他の新暗号と同じで5つで1セットだ。そして、これは電脳体を新空間に転送させる役目も持っている。1つの暗号につき1人分。つまり、新空間に転送できるのは1度に5人までとなる。

ただし、何度も通路を開くのは不安定な新空間にどんな影響を及ぼすかわからないから、できればその回数を少なくしたい。通路の開閉を最小回数におさえるためには、新空間の中に入るのは小此木さんと天沢さんも含めて5人が望ましい。小此木さんと天沢さんにはミチコを説得するという使命があるけど、その残り3人には原川君のように新空間に閉じ込められた人達を連れ戻すという使命がある。閉じ込められているのは原川君、桐野詩織さん、猫目宗助、そして一昨日連れ去られた大黒中学校の生徒7名の計10名。その人達をこちらに転送するために2回、小此木さん達5人が戻って来るのに1回、最初の1回も含めて、通路を4回は開閉しないといけない計算になる。正直、新空間が持ちこたえるか不安な数字ではあるけど、背に腹はかえられない」

そこでヤサコは疑問に思うことがあった。

「ミチコを説得すれば、彼女の力でその人達は通常空間に戻ることができると思うんですが」
「ああ。それも可能だろうけど、確実な方法をとろう。もとより、ミチコを説得しないと彼らを連れ帰っても今夜のテロでまた新空間に引きずり込まれる。小此木さんと天沢さんの最優先任務はミチコの説得であることは忘れないでほしい」
「教頭先生は連れ戻さなくてもいいんですか？」
それには一郎が答えた。
「教頭先生は治療目的で新空間にいる。それを管理しているのは平松部長なんだ。だから、教頭先生の電脳体は平松部長の操作でこちらに戻って来ることができる。それは心配しなくてもいい」
ヤサコはそれを了解した。できればハラケンは自分が連れ戻したいと思ったが、しかし大黒市民の命運は自分の手にかかっている。私情にとらわれるわけにはいかない。
「じゃあ誰か3人、新空間に入ってくれる人は」
直樹が子ども達を見回す。新空間に入るのにイマーゴの有無は関係ないので、大人の誰かが行ってもいいが、おそらく今回の事件、思うところは子ども達の方が強いだろうと直樹は思ったのだ。それには一郎や桝田も口を挟まなかった。
「できれば、僕が兄ちゃんを連れ戻したい」
はじめに手をあげたのはタケルだった。その理由は誰もが納得するところだった。
「うん。じゃあタケル君に行ってもらおう。他には？」
「桐野詩織さん以外は大黒中の関係者だろ。だったらオレが行こう。一昨日の事故で連れ去られた先輩の中にも、オレの知ってる人がいたし。ハラケンもオレが連れ帰るぜ」
「私と親しい先輩も連れ去られているの。できれば、私も行きたい」
続いて手をあげたのはダイチとフミエだった。この2人に行ってもらうのは悪くはないが、
「誰が詩織さんを連れ戻すかだね。詩織さんは新空間の完成からむ

こう、ずっとそこにいるんだよね。つまり、この中に顔見知りはいないということになる」

直樹はその点心配したが、固い決意を胸に手をあげたのはイサコだった。

「私が詩織さんと話をします。詩織さんと私は似た境遇にあるので、話はしやすいと思います」

「しかし、天沢さんにはミチコに会ってもらわないと」

「忘れたんですか。ミチコは細川技師の意志によってテロを企てている。それは他ならぬ詩織さんのためです。ミチコは詩織さんをこちらに連れ戻すことは絶対に許さないはずです。つまり、ミチコを説得することが先で、詩織さんと話をするのはその後である必要があると思うんです」

一同はイサコの言う通りだと思った。詩織を連れ戻すこととミチコを説得することは不可分である。

「なるほど。じゃあ、そうしてもらおう。新空間の中に行くのは小此木さん、天沢さん、タケル君、ダイチ君、橋本さんでいいね？」

直樹が確認すると、メンバー達もそれで異存はないようだった。

「このような段取りになりましたが、よろしいでしょうか？」

直樹は一郎に確認する。

「ええ。作戦に異論はありません。ですが、1つだけ。優子と天沢さんを古い空間に送った時、そこで新空間の方から反応がなければどの程度で2人を帰せばよいでしょうか？」

「そう、ですね。イマーゴのことを考えると、あまり長くは望めませんね。ここでヒットしなかった場合、廃工場でも同様の手順を試してみるというのも1つの手です。それを考えた場合、ここでおふたりに負担をかけすぎてもいけません」

すると猫目技師が直樹に言った。

「取り残された肉体をよく見ていれば、体力の限界もおのずと見えてきます。新空間の通路が開かなかった場合は、その様子を見ながら判断するというのは」

「なるほど、ではそうしましょう。引き揚げのタイミングは、先生のご判断にお任せします」
猫目技師がこの場にいてくれて心強いと直樹は思う。彼を筆頭に、メガばあや一郎、大谷と、ここには電脳のエキスパートが集結した。新空間の中に入る子ども達のサポートは万全の体制だ。
「ワシからも1ついいか？」
その時、病院から運ばれた車いすに座るメガばあが切り出した。
「優子、イサコ、それにフミちゃん、ダイチ、タケル。お主ら、くれぐれも無事に帰ってくるんじゃぞ。たとえ研一達が帰り、今日のミチコのテロを阻止したとて、お主らが帰って来ぬならそれは事件を解決したことにならん」
「何言ってんだよメガばあ。んなこと言われなくてもわかってるって」
ダイチがいつものように返すが、フミエはその手を掴んで首を静かに横に振った。
「帰って来るのが当たり前じゃないのよ……メガばあにとってはね」
言われた瞬間にダイチはハッとする。なぜそんな当然のことをメガばあは伝えようとしたのか。誰もがその理由を察していた。
「特に優子、イサコ。お主らは多分、大黒市民を救うという使命に駆られておるじゃろう。でもそれは、お主らが背負いこむことではない。いいか、お主らは自らを犠牲にしてはならんのじゃ。そんなことをするくらいなら、ワシら共々、大黒市民共々新空間の中に引き込まれる方がええ」
「おババ……」
メガばあの言葉は自分勝手な考えではないか。ある意味ではそうかもしれない。しかし、メガばあはそれで大切な人を失った。その人の言葉を軽んじることができるだろうか。葛藤はヤサコの頭の中を駆け巡った。そんな時、メガばあに言葉を返したのはイサコだった。
「そんな妥協をするくらいなら、はじめから私はこの役を買ってな

い。私たちは全員でこの世界に戻って来る。それしか考えていない。私にとって大切な人を悲しませるわけにはいかないからな」

シュウイチは、その時イサコが一瞬こちらに視線を向けたような気がした。いや、もちろんそれが自分だけに向けられた言葉でないことは知っている。とにかく、イサコはあの時とは違うと彼は思った。金沢イベント事故の時、自分だけが犠牲になると言ってきかなかったイサコとは。

「……よかろう。どうやら優子よりもイサコの方が地に足がついとるわい。お主らならきっと大丈夫じゃろう」

イサコがしっかりしているし、新空間にはフミエとダイチとタケルも同行する。いざという時、彼らの強い意志がきっとヤサコを助けてくれるだろうとメガばあは思った。

「では、そろそろ2階に移動しましょう」

再び報告を受けた桝田が一同を促した。一郎に先導されて東階段から2階へと上がる。すると2階の西側フロアーに鍵穴の通路が開きかけているのを見えた。

「西側フロアーと東側フロアーの境界に物理結界の暗号を張っています。そろそろヌル達が現れるはずですが、彼らはこちらの東側には入ってこれません。優子と天沢さんには今から西側に移動してもらって、電脳体が分離した後、我々の手でこちらの安全な場所に肉体を運びます」

一郎が説明する。ヤサコ達をヌルの群れの中に立たせるという残酷な場面を作らなければならないが、今更ためらいはない。ヤサコ達もその覚悟はできているので、あとはそれを見る側が心の準備だけが必要な状態だ。

「本当に申し訳ない。小此木さん、天沢さん。我々メガマスの醜態で、君たちをこんな危険な目に遭わせなければいけないなんて。でも、こうなった以上僕も君たちの成功を祈るしかない。どうか無事で帰ってきてほしい」

桝田の言葉に強く頷いたヤサコとイサコは、フロアーの西側に移

動した。天井まで膨らみきった鍵穴の向こうから夕陽が差し込む。その直後、それをさえぎるように黒い影が現れる。

「ヤサコ。ひとつ約束をしてくれないか」

ヌルを正面に見据えたまま切り出すイサコ。

「なに？」

「さっきはああ言ったが、お互い、ミチコに会えばまた迷いが生じるかもしれない。どちらかの心が揺れ動いた時、もう一方は相手の手を握って、その迷いを断ち切るようにしよう。こんな風に」

イサコは自分からヤサコの手を握った。そしてヤサコとの再会がフラッシュバックのように蘇る。病室のベッドの上で強く握りしめられた彼女の手に、戸惑いを隠せなかったイサコ。しかし、今はその時と同じぐらいの強さで彼女の手を握る。

「イサコ……アナタは勇ましい子。こんな風に、私に勇気をくれる。絶対に折れることのない意志。アナタとなら、私はどんな壁でも乗り越えられる気がする」

絶望を知るイサコの心は、どんなことがあってもくじけないだろうとヤサコは思う。きっと今の言葉も、本当は自分だけに向けて発せられたものだとも。この状況で支えられているのは自分であることをヤサコは自覚していた。

「私は、ミチコが怖い」

だから、ヤサコは正直な心境を吐露した。ハラケンが連れ去られ、大切な先輩も連れ去られ、次に彼女が自分から何を奪うのか。本当は、彼女に会いたくない。彼女から語られるおそろしい予言が現実のものとなる瞬間を味わいたくはない。

「その気持ちはわかる。私も怖くないと言えば嘘になる。

でも、これだけは言える。ミチコは神なんかじゃない。アンタから大切なものを奪うことなんて、アイツにはできない」

イサコは何か、ミチコに対してゆるがない気持ちを抱いているらしい。少なくとも、イサコ自身は自分の元からいなくなることはないだろうとだけヤサコは思う。しかしそれだけで、ヤサコ抱える不

安はかなり取り除かれた。
「絶対に皆を連れ戻そう」
「ええ。絶対に」
いつの間にかヌル達は2人を取り囲んでいた。ほんの一瞬だけ体を支配する浮遊感。膝から崩れ落ちる肉体を目端に捉え、自分の電脳体がしっかりと地に足をつけているのを確認する。手を握りしめたまま、ヌルにいざなわれるように通路の奥へと2人の電脳体は足を踏み入れた。

数機の2．0が廃ビルに向けて飛び立ったのは、それと同時刻だった。

#25　世界のすべては彼女のために　Part11（後書き）

第25話は以上です。
本当にお待たせ致しました。次回が『電脳コイル　春』最終話です。
どうぞ最後までお楽しみください。

#26　さよならユウコ　part0

ミチコが現れる時には予兆がある。自分の周りの空気が世界と分離され、しんと冷気が降りてくるような、そんな気配。

ハラケンはこの時、大黒中学校の正門前にいた。

どう探しても見つからない出口に、彼はこの異空間を自分の居場所とする覚悟をした。この場所を訪れたのは、最後の試行をするためだ。

この空間に引きずり込まれた日。彼は自分がどのようなルートを辿ったのかを思い出してみる。大黒中から中津交差点を抜けて第三小学校へ。その道筋が、ひょっとするとパスワードとして空間と空間をつないだのではないか。それを再現すれば、もう1度この世界と元の世界をつなぐ通路が現れるのではないか。

もちろん、彼自身それは淡い希望であることを自覚していた。しかし今は藁にもすがる思いでそれを試してみるしかない。これでダメなら、自ら出口を探すことは無意味だということを受け入れなければならない。それが、これまで散々歩き回った彼が行き着いた答えだ。

ところが、最後の希望すら打ち砕かれることへの不安が彼の足を硬直させていた時、世界が停止した。この異空間の特徴。それは、自分のためだけに時間が切り取られることがあること。この世界の都市伝説によると、それは多くの場合至福の時と捉えられているが、彼には悪魔との対面の時間でしかなかった。

自分だけが孤独な呼吸を許されているにも関わらず息は詰まる。彼女はいつの間にか背後に立っていた。

「アナタは、元の世界に帰りたいの？」

彼の気持ちを見透かしたように彼女は問う。

「当たり前だ」

正面を見据えたまま彼は決然と返す。

「カンナを置いてでも？」
「あれはカンナじゃない。そんな幻で僕を縛り付けようなんて」
「前にも言ったはずよ。私は彼女を消すことができる。アナタがこの世界から消えたなら、私は彼女を消す。それがアナタを愛してやまない彼女のため」
　すると彼は1つため息をついた。
「……僕だって、カンナの手が取れるように気持ちを整理しようとしていた。けど、それを思ってカンナと接するたびに突きつけられたんだ。あれは、僕の知っているカンナとはまったくの別人だということを。僕の理想を体現したに過ぎないということを」
「だから彼女は消されてもいいと？」
「僕は気付いたんだ。カンナ以外の皆は、決してそうじゃない。なんて言えばいいか、皆それぞれ芯があるというか、接していて付き合いがいがあるというか。でも、カンナと接している時はそれを感じない」
　彼女は沈黙していた。彼が真実を言い当てるかどうか試しているかのように。
「カンナは僕の理想のカンナに染まってゆく。カンナには実体がない。まるでカンナはこの世界そのものだ」
「何が言いたいの？」
　そこでハラケンは初めて振り返って彼女を見た。
「カンナは、死んでしまったんだ」
　この世界にいて肌身に感じたこと。それは、彼女は幻を作り得ないほどに形を失ったこと。
「偶然ではないはずだ。他の皆がほぼそのままでいるのに、なぜカンナだけあんな風に変わった？そこにこの世界の幻に関わる秘密があると思う。実際に生きている人は、幻も活き活きとしているよ。まるでその人という存在をコピーしたかのように。
　でも、カンナは違った。あのカンナは、僕の記憶の中で最も鮮やかな部分だけを切り貼りして作り上げた偶像のようだった……そし

て勝手なことに、僕はその彼女を愛せなかった。僕はカンナという存在を愛していたんだと思う。影も含めて。

僕は気付いたとさっきは言った。それは、キミにカンナを消すことなどできないということに対してだ。なぜなら、あのカンナはキミが作り上げた幻だから」

「それ以外の人はそうじゃないと言うの？」

「この世界ではミチコが願いを叶えてくれるという。そして、この世界で僕の意のままに変わったのは少なくともカンナだけだった。キミが他の人間の心を支配しているわけではないということは想像できる。

なぜ君はカンナの心を操作できたのか。それは、カンナは君の半身だったからだ。そのカンナを君が抹消できるはずはない」

ミチコの灰色の瞳の奥にかすかな動揺が見て取れる。彼はカンナのために考えた。考え抜いた先に行き着いた答えがそれだった。

「……私は、アナタのことを見誤っていたわ。彼女の存在が、アナタをここに居させるのに十分な理由になると思っていた」

「そう思おうとするほどに、僕の彼女への思慕は薄れていった。君の幻もお粗末なものさ。何より、僕はカンナのすべてを胸の奥に刻む事ができたのかもしれないと思う。だからこそ、あの幻は許せなかった」

彼はカンナに言うつもりだった。僕は君と一緒にいることはできないと。それでカンナがどれほど悲しんだとしても。

「アナタはどうやら、優子のほうに想いが傾いているみたいね」

彼は言葉に詰まる。まだその気持ちははっきりと形づくられていない。でも今、カンナではなく、まっさきに浮かぶ異性はヤサコであることを彼も気付き始めていた。カンナのことを完全には整理しきれていなかった彼を、いつもそばで支えていたのはヤサコだった。

「健気な優子は、アナタ達を助けにこの世界にやって来る」

「ヤサコが！？」

喜びを隠せない彼の声はうわずった。

「もう1人。天沢勇子もね」
「イサコ……こっちに帰っていたのか」
自分ではどうしても抜け出すことのできなかったこの世界。あるいはあの2人なら、現実世界への道を開いてくれるかもしれないと彼は期待した。
「さあ。新しいゲームを始めましょう」
「新しいゲーム？」
不敵に微笑む彼女の顔を彼は射すくめる。彼女はそれを意にも介さず続けた。
「アナタが元の世界に帰りたいと言うのなら、帰してもいいわ。そのかわり、アナタの代わりに小此木優子か天沢勇子をここに残すという条件で」
「なんだと？」
「アナタがそれに耐えられないなら、3人ともこの世界に残してあげる。心配しなくてもいいわ。今日、現実世界の大黒市の住民、アナタの家族、友達、先生達をまとめてこの世界に引きずりこむことになっている。アナタが望まないなら、カンナはアナタの目の前からいなくしてもいいわ。これで、住む世界が変わっただけで、後はアナタがここに来る前となんら変わらない生活を送ることができる」
「待て！どうしてそんなことをする？何の目的があって大黒市の住民をここに引きずり込むんだ？」
彼にとっては理解のできない話だった。彼がここにいる間、現実世界で何が起こったのかは知り得ない。大黒中の先輩がここに引きずり込まれたことも彼は気付かないでいた。
「前にも言ったはずよ。私は、この世界を“本物”にするの。現実と分離した理想郷に現実を築く。それが詩織のためなのよ」
「シオリ？」
それが誰なのかを訊ねたハラケンの質問に彼女は答えなかった。
「研一。私はね、彼女のことを守るために存在している。でも、本当はそれだけじゃない。私は、できることなら、小此木優子と天沢

勇子を引き裂いてやりたい。私を生んでおいて闇に葬ったあの2人を、私が許せるはずがないじゃない」

「2人を引き裂いて何になるっていうんだ？」

「気付かせるのよ。本当の幸福は私のそばにしか落ちていないことをね。特に、私の手を離した天沢勇子には」

ミチコの存在の理由は、元々はイサコの幸福を守るためというところに集約されていた。ハラケンもそれを思い出す。

「つまり、ヤサコをこの世界に閉じ込め、イサコは現実世界に帰すということか。イサコは、ヤサコに特別な感情を抱いているはず。イサコにとってヤサコは、普通の友達じゃない」

「そうね。イサコをここに閉じ込め、ヤサコを現実世界に戻してもいい。じゃあ、ゲームのルールはこうしましょう。

アナタが大黒市民を救いたいというなら、天沢勇子をこちらに閉じ込める。天沢勇子は詩織に対しても特別な感情を抱いているはず。彼女がそばにいるのなら、たとえ大黒市民を引きずりこまなくても、詩織は満足するはずだから。

この時、アナタには小此木優子の命運を選択させてあげる。もしアナタが優子と一緒にいたいと言うのなら、アナタは優子や他の人達と一緒に元の世界に帰してあげる。素晴らしい提案でしょ。ここに残るのは天沢勇子と詩織だけよ。

それでもアナタが2人のユウコのことを思うなら、小此木優子もここに閉じ込め、アナタは元の世界に戻す。その時、ここに残るのは小此木優子、天沢勇子、詩織の3人だけ。

今の2つが飲めないというなら、私は大黒市民をここに引きずり込む。アナタも元の世界に帰さないけど、小此木優子と天沢勇子も含めて、皆でこの世界で暮らすのよ。これも悪くないと思わない？」

どれも受け入れられない条件だとハラケンは思う。突き詰めて考えるなら、自分が残るという選択をした時点で大黒市民がここに引きずりこまれるのは決まってしまう。つまり自分を犠牲にすることは許されないのだ。

それなら自分が帰るというのが大黒市民を救う唯一の方法となるが、それを選択した場合には自分とヤサコ、もしくはヤサコとイサコの間が引き裂かれてしまうことになる。

「くだらない遊びだ。僕がどれかを選択する筋合いはない」

「逃げることはできないわ。選択はもう、アナタの手にゆだねたの。2人が来るまでには時間があるわ。それまでに考えておくことね」

そう告げるとミチコは消えていった。同時に、静止していた時が動き出す。

ハラケンは目を閉じて深いため息をついた。悲しいかな、この世界では彼女の言うことは真実になってしまう。本当に自分が選ばなければならないのか。

と言うより、詩織とは誰なのか。

ミチコの挙げた選択肢において、いずれも詩織という人物はここに残らなければならないということに彼は気付く。つまりゲーム成立の条件は、詩織がこの世界にとどまることだ。

すると彼はまるで取り憑かれたように駆け出していた。ミチコのくだらないゲームを終わらせる方法。それは、詩織という人間を元の世界に戻すこと。

見つけ出さなければと彼は思った。

#26　さよならユウコ　part1

「『運命が決まっていると思って生きるほど、くだらないことはない』。天沢勇子はこう言いました。だけど、世界にたった1人だけ。自分の運命に抗えない、孤独な人がいました」

振り返った時、既に自分たちを見送る仲間達の姿は見えなくなっていた。

鍵穴は輪郭がはっきり定まってはいないものの、まだその場所に残っている。ヤサコとイサコの体力がもたないと判断された場合、彼女達の電脳体はすぐにでも元の世界に戻らなければならない。その時のために備えて、通路は極力開いたままにされているのだ。

降り立った場所は夕陽に染まる山沿いの田舎道。

2人はそこをはっきりと覚えていた。ヤサコにとっては幼い頃デンスケと共に迷い込んだ道。そして、先月の事故で古い空間に入った時にも通った道。イサコにとっては、信彦の幻影と束の間過ごした思い出の道。

そして目の前に現れたのは、2人が初めて手と手を取り合った鳥居の階段。

「ヤサコ。先月の事故でミチコと再会した場所、覚えているか？」

「ええ。この鳥居の階段の上。のぼりきって少し行ったところに拝殿があるんだけど、そこにミチコが待ってた」

話を聞いて、イサコがもう1度階段を見上げる。

「新空間との通路がつながるとしたらそこだな。例の暗号を仕掛けるのはそこにしよう」

「そうね。急ぎましょう」

なぜあの時ミチコがそこにいたのかはわからない。しかし、どこが新空間と近い場所なのか手がかりもない。この空間もどこまでの広さがあるのか2人はわからない以上、その場所に賭けるしかない。

2人は急ぎ足で階段をのぼる。その途中、ヤサコはずっと気にかかっていたことをイサコに訊ねた。
「イサコ」
「なんだ?」
「どうしてミチコが私達を新空間に連れて行くと確信してるの?確かに、この短い間に私達はそれぞれミチコとの再会を果たした。だからって、サイバーテロが起こる前にミチコがもう1度私達に会おうとするかはわからないじゃない。もちろん、そうなってくれないと私たちも困るんだけど」
1歩先をのぼるイサコは、それを聞いて思案顔になった。自分の気持ちをどう説明すればよいかという風にしばらく考え込む。長い階段の半ばを過ぎた時、イサコはその質問に答えた。
「1番の理由は、アイツが私の前にもう1度現れることをほのめかしたこと。ヤサコの時もそんなことを言ったんだろう?」
ヤサコは、先日までは忘れようと努力していたあの時のミチコの言葉を思い出す。
「ええ。私がかけがえのない真実を見失った時。その時にミチコは私の前に現れるって」
それを聞いたイサコは独り言のように反芻する。一体、どういう意味で彼女はそう言ったのか。
「どうもそれだけじゃわからないな。ヤサコが失ったかけがえのない真実……それは、原川や先輩達のことかな?」
「そういう風にもとれるし、もっと気持ち的な部分のようにも思う」
「気持ち……アンタが手に入れたかけがえのない気持ちが失われるというのか。そんなものまでアイツは奪おうとしているのだとしたら、それは単なる驕りだ。それを真に受けることはない」
その気持ちとは、イサコに対して抱いた気持ちであることにヤサコは気付いていた。そしておそらく、イサコもそれはわかっているのだろうとヤサコは思う。わざわざ口にしないのは、イサコが謙虚になって言っているからだろう。

確かに、大切な人の手を離すなんてことは考えられない。なのにミチコは、その気持ちを奪おうとしている。自分から大切な人を奪い取った彼女には、その力があるかもしれない。

ヤサコが恐れているのは、彼を使われることだった。

「うん。そのことは極力考えないことにする。そうじゃないと、とてもミチコと話ができそうにないもの」

2人は鳥居の階段をのぼりきった。

「本当に大丈夫か？気が進まないなら、ミチコと話をつけるのは私だけでもいいんだ」

「いえ。私が逃げるわけにはいかないじゃない。ダメね、はじめからこんなんじゃ。さっきイサコからあんなに勇気をもらったっていうのに」

ヤサコは顔を上げなければいけないと思った。その胸中に浮かんだのは、この役目を負った以上、イサコだけを行かせて逃げてはいけないという使命感が半分。そしてもう半分が不安。イサコを1人で行かせた場合、イサコは果たして戻って来るだろうかというものだった。

イサコは絶対に全員で戻って来ると誓った。その決意と覚悟たるや、ヤサコでさえもはかりしれない。しかし、そのイサコでさえミチコの言葉で気持ちが揺らぐかもしれないと思ってしまう。ミチコの元には、イサコが絶対に救わなければならないと考えている桐野詩織がいる。自分とイサコの置かれている状況というのは似通っているとヤサコは思った。だからこそ、自分の不安をイサコにも投影してしまうのだ。

「しっかりしてくれよ。本当のところ、私もヤサコがいてくれないと心細いんだから」

少しだけ照れたようにイサコが言う。今はお互いがお互いを支え合わなければならない状況であることを、ヤサコは強く意識する。

「ごめんなさい。とにかく、私がミチコとの再会の時に言われたのはそんなこと。イサコの時は？」

「私の時はシンプルだった。ミチコの生みの親である技師、細川技師のことだが、あの人の復讐が大黒市で決行される時、また私の目の前に現れると言った。まあ、実際のところ細川の目的はメガマスへの復讐ではなかったわけだから、ミチコもあの人の真意を把握していなかったということだろうが。その時、ヤサコの身にも不幸が訪れるなんてことも言っていた。私は、かつて私を救ってくれたヤサコを守ることができるかどうかをアイツに試されてるらしい」

イサコはそれで責任を感じていた。ヤサコの身に降り掛かる不幸。それがハラケンやヤサコの先輩達の身に起こったことだったとしたら、根本的な原因は自分にある。自分のために、彼らは連れ去られたようなものだとさえイサコは思っていた。

「そんな……」

「だけど、正直ミチコの本当の気持ちはわからなかった。それを伝えるために、わざわざ私を新空間に引きずり込んだのだと思えなかった」

それはイサコにとってずっと気にかかっていたことだった。ヤサコが彼女と再会した時の話を聞いて、その疑念はさらに強くなった。

「どういうことなの？」

「なぜ私に細川技師のテロを予告したのか。少なくとも、細川技師が指示したものとは思えない。ミチコは個人的な感情があったからこそ、私との再会を画策した」

「それがわからないのは、私も同じだけど」

「ヤサコの場合は、色々な要素が重なり合って再会の条件が整った部分があるから、それはアイツの気まぐれとも考えられる。ミチコは自分の生みの親に対する愛しさと、自分を捨てたことに対する憎しみを抱いたと言っていたが、おそらくその感情がミチコの中で生まれたのはヤサコと再会した時だろう。アイツがヤサコと会おうと思った理由自体は、あまり深いものではないかもしれない。

問題は私の場合だと思う。ヤサコとの再会で、ミチコには自我が生まれた。さっきも言ったように、ミチコは彼女自身の意志で私を

新空間に引きずり込もうとしていた。それを阻止しようとするプロジェクトチームとの攻防で起こったのが金沢での一連の空間事故だ。よほどミチコに強い意志がなければ、自分を支配する者達の意志に背こうとは思わないだろう」

つまり、ミチコにはよほど強い動機があったのだ。ヤサコの時とはまったく事情が異なっていたのだろうとイサコは確信している。

「それは単にイサコに警告するためじゃない。ミチコはイサコに、もっと別の何かを伝えようとしていた」

「そうなるんだ。でもミチコはそれをはっきりとは口にできなかった。自分にどんな感情があれ、彼女が絶対的に守らなければならないのは細川技師の命令。自分の勝手な行動が、細川技師のテロに支障をきたしてはいけないと思っていたんだろう」

「じゃあ、それは一体なんだったの？」

「ミチコが何を伝えようとしたのか。それについては大体アタリをつけている。これまでの出来事を整理していくと、ほぼそれしか考えられない」

「教えて。それは？」

「その前に」

イサコは拝殿の方を向いた。話に熱中するあまり、2人は階段をのぼりきったところで立ち止まっていたのだ。

「暗号を設置しよう。私の読みが正しければ、必ず新空間への扉は開く」

ヤサコも頷いて再び急ぎ足で2人は拝殿へと向かう。大小の並んだ岩や、滑り台やブランコには脇目もふらず、ただ前を向いて走る。イサコもヤサコと話していた時からこれらの存在に気付いてはいたが、あえて目をそらした。ここは幻影の兄との思い出の地。それらの遊具で兄と遊んだ日々が胸に去来しそうになるが、今は感傷に浸っている時ではない。そもそもこの場所でさえ、2度と足を踏み入れることはないだろうと思っていたのだ。兄とはまたいつか、夢の中のこの場所で再会できればいいとイサコは思う。

2人は拝殿に辿り着いた。思ったよりも小振りな建物。扉は開いてないが、異界への通路となるには絶好のポイントのようにも見えた。

「ちょうどいい。この拝殿を中心にして五角形に暗号を設置しよう」

すぐに2人手分けして暗号の設置を完了させた。あとは待機するしかないとイサコは思う。新空間の方から干渉があった場合には、暗号にも何らかの反応があるはずだ。

「イサコ。さっきの話の続きは」

その間に、ヤサコが促すように言った。

「ああ、そうだな。実は、私の会ったミチコは、なんというか自分の運命を呪っているような節があったんだ」

「運命？」

「自分はやがて死神になるとも言っていた。はじめはその意味もわからなかったが、今はなんとなくわかる。

ミチコは新空間を支配する神であることには違いない。じゃあ、なぜ死神なのか。それは、新空間に生きる人々の生死はミチコの手にゆだねられているからだ。平松部長もそう言っていた」

「ミチコは、必要とあれば新空間の中で生きている人を消すことができる？」

「ああ。同じ空間に同一人物が存在してはいけないという法則があるらしい。例えば、私たちは今から新空間に入ろうとしている。私たちが新空間に入れば、新空間には2人の小此木優子と天沢勇子が存在することになる。それを防ぐために、ミチコはＡＩの方の私達を消さなければいけないんだ。まさに、死神だ」

ミチコはこうも言っていた。「あの人（細川技師）は、現実世界を破壊しようとしている。それが新空間をも破壊することになると気付いていない」と。つまり、今夜行われるテロとはそういうことなのだ。現実世界の大黒市から人がいなくなり、同時に、新空間でこれまで生活していた人々も同時にその存在を消され、現実世界に引きずり込まれる。

「ミチコは、そうなることを嫌っていたってこと？」
「ああ。おそらくミチコは、私に会うまでは理性を保とうとしていたんだ。本当はミチコも、こんなことをしようとは思ってなかったんだと思う」
「でも、そう思ってるのなら今からでもやめればいいじゃない」
「それができるなら、ミチコは私に会おうと思わなかっただろう。ミチコは私と再会を果たした後、細川技師にあるプログラムを流し込まれた。技師の命令に絶対的に服従しなければならないプログラムを」
それも平松が言っていたことだ。金沢の一連の事故でプロジェクトチームがミチコを御しきれていなかったのは、そのプログラムが未完成だったからだ。
「そんな身勝手な。ミチコだって1つの人格なわけでしょう？」
「プロジェクトチームはそれを平気でやってのける。サオリもそうだし、宗助もそう。とにかく、ミチコは自分が細川技師の操り人形になってしまうことを予期していたんだ。そして細川技師が何を企んでいるのかも知っていた。しかし自分の力ではどうにもならないこともわかっていた。だから私に会ってそれを打ち明けたんだ」
「じゃあ、ミチコが天沢さんに会ったのは警告するためじゃなく」
ヤサコにもようやくミチコの気持ちがわかった。あまりにもわかりにくい、彼女の感情表現。
「ああ。ミチコが私に伝えたかったのはSOSだ。まったく、平松部長から話を聞いていなかったら私もそれに気付かなかった。ひねくれ者のアイツは、その後に私を試す云々と言った。ヤサコに言った言葉も意図は同じで、アイツはそうやって自分の存在を私達に刻み付けたんだ。そしていざという時、私たちが会いに来るように仕向けた。アイツには私たちへの憎悪があるのは間違いないだろうが、それよりももっとはっきりとした感情がある。それは、私達への甘えだ」
「甘え……」

まるで、娘が母親に抱く感情のようだとヤサコは思った。

「今のミチコにその感情が一片でも残っているなら、必ずアイツは私達と会おうとするだろう。だから私は確信していた。ミチコは、今夜のテロが決行される前に私達と会おうとするだろうって。アイツは、本心では私達に自分の暴走を止めてほしいと思っている」

イサコが言ったその瞬間、目の前に設置していた暗号が突然青白く光り出した。その直後、足元の揺れを実感した。2人そろって何度か経験したこの揺れは、しかしこれまで体験したものと比べると規模は小さい。おそらく暗号がきちんと機能しているからだろうとイサコは思った。

「来たわ！イサコ」

「ああ。この古い空間の中に入るというのも、今思えば合理的な選択だったのかもしれない。この空間に入ることができるのはイマーゴを持つ私達2人。ミチコが私達だけと会おうとしているなら、こちらにいる時の方が通路く可能性は高い」

拝殿の上空にはあのブラックホールも出現していた。揺れが激しくなっても2人はしっかりと踏ん張ってその場に立ち続ける。

「これで第一関門は突破だ。作戦通り、新空間の中に入ったら暗号で現実世界との通路をつなごう。まさかミチコも、その暗号を私たちが持っているとは思わないだろうからな」

「ええ。それよりイサコ。くれぐれもこの手を離さないで。私はハラケンと一緒にこのブラックホールに引きずり込まれた。でも、飛ばされた場所は違っていた。私達もここで離ればなれになるわけにはいかないの」

ヤサコの電脳体はしっかりとイサコの手を握った。その気持ちを汲み取ったイサコも、強く握り返す。

「わかった。そろそろ来るぞ」

イサコが言ったその瞬間、ブラックホールから放たれた光の奔流は2人の電脳体を新空間へとさらっていった。

#26　さよならユウコ　part2

「新空間の反応が来ています。うまくいったのではないでしょうか」
モニターを注視していた直樹がそう言った瞬間、廃ビルに集まっていた一同も足元の揺れを感じた。幸い大きな揺れではなかったので誰にも怪我はない。それよりも、直樹の言葉に対する安堵感の方が広がっていた。
「じゃあ、優子達は新空間の方に侵入できたということですか？」
「おそらく。新空間に入ってしまいますと、こちらの空間とは連絡手段がありません。その意味では、彼女達から何の連絡もないことが新空間への侵入が完了した合図ととらえることができます」
かつての古い空間と新空間にはいくつか特徴の違いがあるが、新空間は通常空間との連絡がつかないという点で古い空間とは異なっている。古い空間の場合、そこに入り込んだ電脳体と通常空間から連絡を取り合うことは可能で、昨年の夏の事故の際に、ヌルに連れて行かれた京子を救う為にヤサコ達はその手段を用いた。
新空間でそれができないのは、その発案者である直樹の、通常空間とは一切の連絡を断絶すべきであるというコンセプトが採用されたからだ。元々現実逃避のために開発されたその空間に、現実世界からの干渉はあってはならないと彼は考えていたのだ。
「あとは彼女達が新空間への通路をこちらに開いてくれるのを待つだけです。こちらの方の暗号は、先ほど設置し終わりましたし」
さらにしばらく待つと、直樹の仕掛けた暗号が起動し始めた。新空間が通常空間へと干渉しているのだ。
「成功です！すぐに空間制御プログラムの起動を解除してください。古い空間と干渉してしまうと危険ですので」
直樹はすぐさま一郎に指示を出す。一郎は本社の管制室に電話をかけ、制御プログラムの解除をさせた。
廃ビルの2階。先ほどまでは古い空間への通路が開いていた位置

に、今度はブラックホールが出現する。
「天沢です！通路はそちらに開いていますか？」
その中からイサコの声がする。姿を認めることはできないが、この通路がイサコ達の手によって開いたものだと確かめるには十分だった。
「ああ！うまくいった！これからあとの3人をそちらに送る。後はもう君たちにすべてを任せることになる」
直樹が言うように、これからは通常空間で待っている大人達は、新空間の中にいる人間に声も届けられない。本当に難しいのはここからだ。
「さあ、頼むよ。絶対全員無事に戻ってきてくれ」
フミエとダイチとタケルを暗号の位置に移動するように直樹は促す。通常空間に残る面々に見送られるように、彼らは固い表情で歩を進める。
その時、ダイチが直樹の方を振り返った。
「直樹さん。オレはまだアンタのことを許してない」
こんな時に何を言い出すのかとフミエが驚いた表情でダイチを見る。他のメンバーもそれは同様だった。直樹も渋い表情になる。
「……それは、弁解の余地がないことだと僕も思っている。僕は君たちを裏切ったばかりか、一連の事件の元凶を発案した。これで君に許してもらおうなんて虫が良すぎるからね」
「オレは、アンタが警察官という職業に泥を塗ったのが一番頭にきてる。アンタがこの事件を解決してポイントを稼いで、また電脳犯罪対策係に居座るのだけは絶対に認めない。オレはアンタのために新空間に行くんじゃない」
直樹は思わず苦笑した。まさかここにきてそういう風に見られているとは思わなかったからだ。自分の罪深さを改めて思い知ったところで、ダイチの目を見据えて言った。
「当たり前だ。僕も君も、連れ去られた人達、そして大黒市民のために行動している。僕の罪の精算なんてくだらないことだ。心配し

なくていい。僕はこの事件を片付けたら、きちんとけじめをつけるつもりでいる。約束しよう」

直樹の偽りのない眼差しをダイチは真摯に受け止めた。黙って頷くと、彼も暗号の位置に移動する。

「そんな約束をしてもいいのですか？アナタはまだ十分にやり直せると思いますが」

心配そうな声で一郎が訊ねる。警察官になるのも一筋縄の努力ではいかない。これだけ本人が反省しているのなら、一郎は彼が警察官を辞する必要はないと考えていた。

「いいんです。それは川畑さんにも叱られました。何か他のことに気を取られている限り、良い仕事はできないと。僕もこの件で、本当に自分がやりたいことを再認識しました」

そう言うと直樹は顔を上げた。視線の先には暗号の位置についたダイチ達がいる。

「でも、この事件を解決するまでは警察官としての職務を果たします。それが自分自身の使命でもありますから。その僕の願いは彼らに託しますが、それは彼らが僕よりも大切なことをわかっているからです。僕も、信じてみようと思います」

その間に設置した暗号は激しく点滅しだし、その中に立つダイチ達の輪郭はだんだんとぼやけ始めた。電脳体が分離しようとしているのだ。

「これが、新空間に入るための正規の手順です……ん？」

直樹がそうつぶやいた時、一同は廃ビルの中で異変が起こっていることに気がついた。1階のフロアーが何やら騒がしい。一同が集まっているのは2階で、1階にはメガマスの幹部が数人で周囲を見張っているはずだったが。

「なにかあったのでしょうか？」

気になった一郎が確認しようと東階段を降りようとしたところで、1階にいた幹部の1人が青ざめた顔で階段を上がってきた。

「大変です！2．0が、2．0が暴走しています！」

「2．0？そんな。出動命令を出した覚えはありませんよ」
こんな時になんのうわごとかと一郎は思う。ところが、次の瞬間にその幹部の言葉が真実であることを思い知らされた。廃ビルの2階のガラスのない窓から2機の2．0が侵入してきたのだ。
「まずい！誰かアイツらの注意をそらして！」
とっさに叫んだのは玉子だった。今電脳体を分離させているダイチ達が撃たれた瞬間、その魂ごと消し去られてしまう。
「くそっ！」
すぐに動いたのはガチャギリ以下黒客メンバー、そしてシュウイチだった。彼らは仕込んであったメガビーを2．0に向けて発射する。
しかし2．0はそれを意に介していないようにダイチ達に近づいていく。ダイチ達もこれには全身の血の引くような思いだったが、体は金縛りにあったように動かない。もとより、分離の途中においては肉体も電脳体も動かすことはできないのだ。
「あれは自動運転じゃない！誰かが操縦しているわ！」
ガチャギリ達のメガビーを無視したことで、玉子はそれに気がついた。あの2．0は明確な意図をもって行動している。
「だったら破壊するしかねえだろ！」
ガチャギリは先ほどメガシ屋から取って来たメタタグから、メガビーの威力を増幅させるメタタグを探した。玉子はそれを制する。
「やめろ！威力を上げてもメガビーじゃ2．0に致命的なダメージは与えられない。それより、3人に当たった時のリスクが高い！」
「ダイチ達が撃たれてもいいのかよ！」
ガチャギリも冷静さを失って怒鳴り返す。しかし、幸いにも2．0はダイチ達に対して攻撃の素振りは見せない。何かを探すように西側フロアーを飛び回っている。ダイチ達は、部屋に入って来た蜂をやり過ごすかのような思いでそれらを注視する。
「まさか。あの2．0は」
直樹が2機の目的に気付いた時には遅かった。2機は5つある暗

号の残り2つの中心に陣取る。その瞬間にそれぞれの暗号は天井に突き刺さるような強烈な光を発し、ダイチ達の電脳体をブラックホール送り込んだ。そして、直前に暗号に侵入した2機の2．0もブラックホールの中に吸い込まれていった。

それからしばらく、廃ビルの中に残った人間の間には沈黙が降りた。何が起こったのかを飲み込めないような、それでいて、とんでもないことになったと心のどこかで自覚しているような、そんな居心地の悪い空気が一同を包む。

「一体誰が……こんなことを」

沈黙を破った一郎の顔は真っ青どころではなく真っ白だった。新空間の中に送られた5人、ヤサコ、イサコ、フミエ、ダイチ、タケルは2．0にはほぼ無抵抗の獲物だ。もしあの2機が彼女達を狙ったとしたら、生存は望めない。それを考えてしまい、一郎は強い吐き気をもよおした。頭を抱え、先ほど報告をしに来た幹部に体を支えられる。

「竹下……すぐに同じ暗号を仕掛けろ」

冷静に指示を出したのは大谷だった。すでに先ほど設置した暗号は役目を終えて消え失せている。直樹もすぐにその意図を察した。だが、

「5人が1度元に戻ったとして、再度新空間に侵入できるかどうかはわかりません。特に、古い空間を経由する方法は小此木さん達の体力を考えても」

「つべこべ言わずに設置しやがれ！あの子達が2．0に消されたんじゃ、ミチコどころじゃねえ。というより最悪だ。たとえミチコに新空間に引きずり込まれても命は残る。でもこのままじゃ……」

大谷はその先を言えなかった。

「2．0を止める方法は？」

こちらも顔色を悪くしている猫目技師が訊ねた。中には彼の息子のタケルもいる。

「電脳局に要請すればもちろん止まります。でもあの様子を見ると、

あの2．0、おそらくハッキングされています」
　玉子が言った。
「ハッキングで奪い返すには、まずその犯人を突き止める必要があるな」
「プロジェクトチームの仕業ではないのですか？彼らは、今夜のテロが決行されるのをむしろ望んでいるようでした。それを阻止しようとする我々の動きを封じるために、新空間に入り込んだ5人を……」
　さすがに逮捕された細川技師の仕業ではないと直樹は思う。しかし、大谷はそれに納得しなかった。
「それならイサコ達が古い空間に入った時点でやりゃあいいことだ。こちらの作戦を知っていたなら、わざわざ新空間で5人を相手にする必要はない」
「じゃあ、つまり」
「あの2．0。おそらく新空間に侵入する機会をうかがっていたんだ」
　大谷は窓の外を見やる。廃ビルの面している通りに怪しいものは見当たらないが、2．0を遠隔操作しているなら、その誰かは近くにいるはずだった。
「じゃあ、プロジェクトチームの仕業という可能性は低そうですね。彼らが新空間に2．0を侵入させる理由はない。あれには破壊しかできませんから、新空間を切り札にしている彼らがすることじゃない」
　考え込んでいた桝田が言った。その瞬間、一郎が何かをひらめいた。
「……そういうことか。社長、空間管理室に連絡してもらってもよろしいですか？」
「管理室？ええ。でもどうして？」
「2．0を動かしているのはおそらく本部長です。あの人、中から新空間を破壊するつもりなんです」

「なんですって!?」
愕然とする桝田。一郎の推理を聞いた直樹もその瞬間、彼の脳裏にも悪い予感がよぎった。
「大谷さん!この暗号、お渡ししますので設置しておいてください!」
「ああ?おい竹下!どこ行く!?」
直樹は電光石火のように東階段を駆け下り、廃ビルの外に出た。
1、2度通りを見回して彼は中津交差点方面に向かう。
彼の予感は当たった。中津交差点より少し北、廃ビルの建物の裏が見える場所に一台の軽自動車が停まっている。その運転席にはスモーク入りのガラス越しにも確認できるほど陰鬱な笑みを浮かべている青年がいる。
直樹は車に駆け寄って運転席側の窓をノックする。こちらに気付いた青年は窓を開けるなり鼻で笑って言い放った。
「壊してやるよ。お前の妄想が生んだという罪深い世界をな」
全身をほとばしる猛烈な嫌悪感。狂気に歪んだ顔面に一発お見舞いしてやりたい衝動を必死に抑えて、直樹は彼を睨みつけた。
「進藤……ちょっと表に出ろ」

#26　さよならユウコ　part3

ヤサコとイサコの2人は廃ビルにいた。新空間と現実世界はどうやら場所もシンクロしているらしい。通常空間の廃ビルから古い空間を経由して新空間に侵入した2人が降り立った場所もまたここだった。思い出してみれば、金沢のイベント事故の時もイサコはイベント会場であるメガマスの広場に降り立ったのだし、ヤサコが第三小の敷地で事故に遭った時もまた同じ敷地に出たのだ。

とにかく新空間への侵入に成功した2人は、すぐに直樹に言われていた通りに暗号を設置した。しばらくしてリンクがつながったことを確認し、再び現れたブラックホール越しに通常空間の直樹と声をかけあった。

これからダイチ達がこちらに来る手はずになっているが、しかし、それを待っていたヤサコはどうも様子がおかしいことに気付いた。

「ねえイサコ。なんか向こう、騒がしくない？」

ブラックホールの中を見つめながらイサコに訊ねる。向こう側の様子はもちろん確認できない。

「……確かに。何かあったのかもしれないな」

しかしこちらからは待つことしかできない。既に仕掛けた暗号は点滅を始めている。2人はダイチ達3人が無事にこちらに来られることを祈った。

その直後にブラックホールから激しい光の奔流がこちら側に押し寄せてきた。光は5つの暗号にそれぞれ分散し、それがそのまま電脳体として足元から形作られる。それを見るに電脳体の転送はうまくいっているものだとイサコは思ったが、根本的なところで異変が起きていることに気付いた。

「なぜ5つの暗号に光が流れ込んでいるんだ。こちら側に来るのは3人だけじゃないのか」

すでに3人の電脳体は腰の辺りまで完成している。しかし残り2

つは光が流れてきているものの、まだその実体は姿を現さない。
ダイチ、フミエ、タケルの電脳体の転送はまもなく完了した。そしてその直後、残り2つの暗号で転送されたもの、彼らの頭の上の高さで浮遊していた2．0の転送も終わった。
ヤサコとイサコはその2機を認めると息を呑んだ。
「なぜこんなものが？」
イサコが茫然として言った瞬間にダイチ達の電脳体のフリーズが解かれた。
「ぶはっ！うまくいったのか？おお！ヤサコにイサコ！」
前につんのめるようにダイチが暗号から出てきた。フミエとタケルも大きく息をついてホッとした顔をしている。
「あいさつしてる場合じゃない！あれはアンタらが連れて来たものなのか！？」
同時に2．0も封印が解かれたようにキューブの頂点を赤く点滅させ始めた。それを確認したフミエが叫ぶ。
「違うわ！あれは私達がこっちに送られてくる時に乱入してきたの！」
「乱入だと！？まさかプロジェクトチームか！？」
「わからない！ヤサコとイサコはとにかく逃げて！」
フミエは2．0に対して2人の盾になるように立ちはだかった。ダイチとタケルも反射的に2人を守るように立ちはだかる。
「おい！逃げるのなら一緒に逃げるぞ！」
すぐ後ろには西階段がある。ここから降りれば、ビルの出入り口はすぐそこにある。
「バカね！あの2．0がアンタ達2人を狙っているとしたらどうするの！私たちが囮になるから、今のうちに遠くへ逃げて！」
「フミエちゃん！今電脳体を消されてしまえば死んじゃうのよ！無茶なマネはやめて！」
ヤサコは泣き叫ぶようだった。
「だから言ってるのよ！アンタ達にはミチコを止めるっていう使命

がある。アンタ達の身に何かあったら世界はおしまいよ！こんな時のために私たちがいるのよ！」

それでもヤサコとイサコが逃げようとはしないので、5人は身を寄せ合う形になっている。2．0は互いに信号を送っているのか、ランプを点滅させてはいるがその場を動かない。

「なにか、攻撃に使える暗号は……」

イサコがウインドウを確認する。ほとんど新空間に対応した新暗号しか持ち合わせていないが、大谷やメガばあから出発まえに旧式の暗号をいくつかもらっていた。2．0に対しては気休めにしかならないが、少しでも隙を作れば5人で西階段を降りる時間は稼げる。

イサコはその暗号を電脳体の手で握る。しかしその瞬間、

「やめるんだ！」

タケルが彼女を制止した。

「やらないとこちらがやられるのを待つだけだ！」

タケルの真意がわからず、イサコはそのまま暗号を投げつけようとする。しかしタケルはその腕を掴んでまでイサコを止めた。

「落ち着けイサコ！まだあの2．0はこちらを敵として認めていない」

2．0は相変わらずその場で待機しているようだった。しかし、こちらが動き出せばいきなりスイッチが入りそうな気がして5人はなかなか1歩を踏み出せない。

「敵として認めていないって、アイツら私達を消す為にここに来たんじゃないのか？」

「君たちを消しにきたのかどうかはわからないけど、あの2機の一番の目的は新空間に侵入することだと思う。あの2機が乱入してきた時、電脳体を分離させていた僕達を撃とうと思えば撃つことができたはずだ。でもそうはしなかったんだ」

「おそらく、私達の電脳体を撃って、それが起動中の暗号に当たってしまうのを恐れたからでしょうね」

「新空間で何をするつもりかは知らん。でも、アイツらの目的がヤ

サコとイサコを消すことだったとしたら、ここで攻撃しようがしまいがオレたちに勝ち目はねえし、逃げ切れる可能性も低いだろう。だったら、そうじゃない方に賭けるしかない」

確かにダイチの言う通りだとイサコは思った。５人はロクな武器を持ってないし、この電脳世界において２．０との鬼ごっこになれば悲惨な結末を迎えることは目に見えている。つまり、２．０が自分たちをスルーしてくれること以外にこの局面を乗り切る手段はないということだ。下手な攻撃はしない方がいいというタケルの言い分もよくわかった。

意思統一ができたところで、５人は息をひそめるように２．０の出方を待った。しばらく息が詰まるかのような時が流れる。すると１機は点滅させている頂点をふいにこちらに向けた。

「……来るか？」

ダイチは身構えた。しかし、こちらには興味がないという風にその１機は再び相方のほうに向くと、点滅信号でやり取りをした後、別々の窓から天空へと飛び立っていった。

５人はようやく緊張から一気に解放された。

「はあ、やれやれ。いきなりゲームオーバーかと思ったぜ」

ダイチが額の冷や汗を拭いながら言う。フミエは一応、窓から顔を出してまだ２．０が近くにいないか確認する。

「どこか飛んで行ったわね。ああ、びっくりした。心臓飛び出るかと思った」

危機を乗り越えて緩んだ空気がその場に流れるが、眉間にしわを寄せてそこで大きく息をついたのはイサコだった。

「なんのマネだ？」

「ああ？」

全員がイサコの方を向く。

「もし２．０が攻撃してきたなら、アンタらの命はなかったんだぞ！電脳戦争をしているかのように私達の盾になったりして、本当に自分の置かれている立場をわかってるのか！？」

「ちょっとイサコ」
ダイチ達を怒鳴りつけるイサコをヤサコはなだめようとする。しかしヤサコも、やはり同様のことを思っていた。
「……うん、ごめん。つい反射的に」
フミエは心底申し訳なさそうにしたが、ダイチは違った。
「何言ってるんだよ。この2人を置いて逃げたらオレたちがここに来た意味がねえだろ。大体お前も言ってたじゃねえか。ミチコを止められるのはヤサコとイサコしかいないって。オレたちがその2人を守るのは当然だろ」
「そりゃそうなんだけどさ。犠牲になるのと守るのは違うわ。私達はさっき、犠牲になろうとした。それでイサコは怒ってるのよ」
「犠牲になんかなるかよ。囮になったとしても時間を稼いで逃げ切る見込みがあったから前に立った。それじゃダメかイサコ？」
ダイチにもダイチのプライドがある。しかし、いくら彼がこれまで修羅場をくぐり抜けてきたとはいえ、命に関わるような事態はこれが初めてなのだ。
「ダイチ君。イサコも言ったけど、これは電脳戦争じゃない。ダイチ君にどれほどの自信があっても、ちょっとした誤りで命を落とすかもしれないのよ。だから、もう少し慎重になって」
ヤサコが懇願するように言った。
「まあ、多分大丈夫よヤサコ。今のコイツの言葉、単なる強がりだし。いくらダイチがバカでも、自分の命の重さぐらいわかってるはずだから。今のはいい薬になったわ。私も含めてね。これからは軽卒な行動を慎むこと。いいわねダイチ？」
さすがにフミエはダイチの心を見通しているようだった。ヤサコに注意されたのも彼には効いた。
「また同じような状況になったら？」
「一番冷静な人の指示に従う。タケル君とかね」
「タケルも一緒になってヤサコの前に立ってたぞ」
ダイチはタケルの方を見ると彼は若干うろたえ気味に返した。

「いや、まあ、僕も冷静さを失ってたんだ。その僕の指示に従うのはまずいと思う」
「でも、2．0に手を出すなって言ったのはタケル君じゃない。状況をちゃんと把握してた」
「とにかく」
イサコがそこで割り込んで話をまとめる。
「これからは囮になるとかそんな作戦はとらない。ピンチの時は落ち着いて状況を確認して次の行動を考える。それを守ってくれ。これ以上、私のために誰かが犠牲になるのは……」
最後は独り言のようにイサコは俯いてつぶやいたのだが、4人にも伝わっていた。イサコが背負ってしまったものの重みを、ダイチやフミエも改めて感じた。
「そうね。全員で生きて戻りましょう」
反省しきりのフミエが言って、議論は仕切り直しとなった。
「しかし、まずいことになったぞ。今の局面は乗り切れたが、2．0がこの空間に侵入した。あの力を持ってすれば、この街全体を抹消するのにそう時間はかからないだろう。そうなれば、私たちもこの空間と同じ運命を辿ることになる。ミチコどころじゃなくなってきた」
イサコは窓から2．0の飛び立った方向を見て言った。空は鉛色だった現実世界と違って太陽が出ている。しかし風は現実世界よりも少し冷たい感じがする。
「でもどうして2．0が中に？」
「さあ。私たちの電脳体が分離するところでいきなり乱入してきたからわからないわ。多分今頃、ヤサコのお父さん達が必死になって調べてるはずよ」
それよりも自分たちの安否が気がかりでそれどころではないのではないかとヤサコは思う。
「プロジェクトチームはこの新空間を切り札にしているって言ってたな。だったらヤツらの仕業じゃねえってことだろ？イサコ」

「そうなってくるな。まあ正直、私たちがそれを議論することは無意味だと思う。問題は、2．0をこの世界から排除することができるかどうか」

「排除って言っても、私たちに対抗手段は」

先ほどはやり過ごすだけで精一杯だった。それでどう2．0を排除できるのかとフミエは思う。

「手段を講じればできなくはなさそうだが、例えば、現実世界とのリンクをつなぐ暗号を仕掛け、2．0をおびき寄せて現実世界に送り返すとか」

「それは難しいし、何より危険だね。あの2．0が何の目的を持っているか知らないけど、僕達がアイツらを現実世界に送り返そうとしたら、僕達を敵とみなして真っ先に狙ってくると思う」

それはタケルの言う通りだとイサコを含めた全員が思った。

「そうだな。電脳体である私達が2．0を相手にするのは危険すぎる。ヤツらの排除は現実世界に残っている人達を信じよう」

「オレたちは2．0が行動を起こす前に、連れ去られた人達を連れて来るということだな?それが終わったら、ミチコは2．0にフォーマットさせてもいいんじゃないか?結局アイツがいなかったら今夜のテロは成立しないだろ?」

ダイチは楽観的に言ったが、それは即座に否定された。

「それはダメだ!私はミチコと直接話がしたい。2．0に抹消されては、私の過去を精算したことにならない」

「それにミチコが消されれば、この空間を維持する力が失われて崩落するって話、聞いたでしょ?そうなればこの世界の住民が全員犠牲になってしまう。記憶をなくしたハラケンの帰る場所もなくなってしまう」

確かにそれでは解決にならないとダイチは思う。自分たちにできることは、当初の作戦通りに動くことだ。

「じゃあ2．0はなかったものとして、オレたちは最初に決めた通りに行動するってことでいいな?」

「そうだな。アンタ達は、これからどうする？」
イサコが訊ねた。
「私は先輩達を助けに大黒中に行くわ。多分何人かはそこでつかまると思う」
「オレはハラケンを助けに行く。ハラケンの家か、いなかったら第三小だな」
「僕は兄ちゃんに会いに行く。僕の家にいなかったら、兄ちゃんの行きそうなところを当たってみる」
3人それぞれ行き先は決まっていた。
「お前らはどうするんだ？ミチコの居場所、わかるのか？」
「私達も2人で心当たりを探してみる。この空間に私達を招待したのはミチコだから、おそらく向こうから接触があると思うが」
ミチコに関してはヤサコとイサコに任せるしかない。ミチコと関係の深い詩織もまた2人に託すしかない。
5人の行き先は決まったが、しかし今全員がこの場所を離れるのはまずいとフミエは思った。
「待って。2．0が侵入したことで、通常空間に残った人は私達の安否を心配していると思うの。この場所に残ってもう1度通路を開くのを待って、5人の無事の報告と向こうの指示を仰ぐ役の人がいるんじゃない？」
「確かに、それは必要だな。直樹さんは通路の開閉は最低限にしたいと言っていたが、向こうもこちらの状況を知りたいと思っているはずだし、一応予備の暗号もあるから、通路を開くのは問題ない」
「私がここに残ってもいいけど。向こうから指示をもらったらみんなに連絡するわ。その後私は中学校に向かう」
フミエが言ったが、その提案には問題があった。
「でも連絡手段はどうする？」
ダイチに訊かれ、イサコはそこではたと困った。この世界では現実世界からのメガネ電話は使えない。つまり、現実世界に肉体を残してきた自分たちがここで連絡を取り合う手段はないのだ。

「この世界で使われている端末からアクセスできるホームページ。そうだな。『大黒市電脳メガネ都市伝説』で検索して1番上にヒットしたページの掲示板を使うっていうのはどうだろう？そこに各々の状況を書き込んでいけば、メールの代わりになると思う」

直樹が言っていたように、現実世界のパラレルワールドであるこの世界にも電脳メガネは存在する。

「さすがタケル！頭いいな」

「つまり、端末は自分たちで調達するということか。まあ、一応知り合いと呼べる人はいることになってるから、その人のメガネなり携帯なりを借りればいい。それでいこう」

連絡手段についても片付いた。これからは別行動となるが、それぞれ仲間を信じて自分の使命を果たすしかない。

「じゃあ、まめに掲示板はチェックするように。くれぐれも2．0には気をつけるんだぞ」

「おう。頼むぜ。大黒市民を救ってくれよ」

「プレッシャーになるようなこと言うんじゃないわよ」

ダイチはフミエに小突かれる。もちろんそれは重圧ではあるが、あまり気負い過ぎても仕方がない。イサコは、ミチコとの決着を自分の過去にケリをつけるだけだと考えるようにしていた。

フミエをその場に残し、後の４人はそろって西階段を降りる。廃ビルを出て、秋を思わせるようなうろこ雲が一面に浮かぶ空のもと、彼らは現実とは少しだけ違う世界を駆け出した。

#26　さよならユウコ　part4

「2．0が新空間に侵入……まさかあの無能本部長がここで牙を向いてこうようとは」
　神崎はおだやかな口調でそう言ったが目は血走っていた。
「内部から破壊する気か。中には現実世界から連れ去られた人間が残っているというのに」
「彼には関係のないことでしょう。新空間を開発した我々や細川にすべての責任をなすりつけ、自分は今夜のテロを阻止するために最終手段を行使したまでと主張する」
　そこまでして幹部の椅子にすがりつきたいのかと支社長は思った。新空間さえ破壊してしまえば、再び本社に主導権が戻ると本部長は信じているらしい。
「今や新空間計画は国家的プロジェクト。それに対する破壊工作は国家反逆罪にほかならない。それをわかってないんですよ、あの人は」
　そして神崎は部下を呼んだ。
「政府情報局に連絡して空間管理室本部長を拘束してもらってください」
「はっ」
　部下は彼の指示を抱えて部屋を飛び出して行った。
「抵抗した場合“生死を問わず”と付け足した方が良かったでしょうかね。あの男に何の存在価値もないですから」
「我々は戦争をしているわけではない」
　支社長は神崎への不快感を露にしていた。先ほどから不測の事態の連発で、神崎の言動は普段よりも過激さを増している。
「大体本部長を拘束してどうなる？2．0を操作しているのは彼の部下だろうし、それを拘束しても2．0は自動操縦ができる。そもそも2．0は電脳局の持ち物じゃないか」

「もちろん電脳局にも釘を刺しますよ。というより先に手を打っておくべきでしたね。国家プロジェクトを進めるのに際して、あまりにも意思統一ができていませんでした」

　すると神崎は立ち上がって別室に向かった。電脳局に対しては自分から連絡するということなのだろう。

　支社長はそこで大きくため息をついた。プロジェクト完成への筋書きも、もはや収拾がつかないほどに脱線している。今夜の細川技師のテロが実行された時点で、プロジェクトも詰んでしまうのではないかと支社長は考えていた。いきなり全大黒市民をＡＩと入れ替えるなど不可能に近い芸当だ。神崎はやるつもりでいるが、正直それが動静を見守っている各国政府に対するコマーシャルとして成功する可能性は低い。必ずどこかでボロが出るのではないかと支社長は思う。なにせ、準備期間があまりにも短かすぎるのだ。

「支社長。病院から報告が」

　その時、別の部下が部屋に入って来た。

「病院からだと？」

　支社長は部下から報告事項の記載された書類を受け取る。そこから彼は、その書類の隅から隅まで目を通すまで微動だにしなかった。

　たっぷり5分は書面を睨みつけていただろう。

「こんな時に厄介な報告を上げてくれる」

　独り言のようにつぶやくと、彼は部下の方を下がらせた。脱力したように腰を下ろし、せわしなく動く研究員達をぼんやりと眺めながら、この報告で増えてしまった厄介事をどう片付けようかと思案する。

　誰かに相談を持つべきか。しかし、今の神崎は何を言っても耳に入らない状態だ。この知らせを伝えても仕方ないと支社長は判断する。

　では小野に相談するしかないかと支社長は思ったが、そこで疑念を持つ。小野は果たしてこの報告書にある不測の事態を予期していなかったのか。もし、予期していていながらこちらに報告をしてい

なかったのだとしたら、彼もまた別の目的を持ってこちらに取り入っていた可能性が浮上する。

報告書に記載されていたのは、”ＳＰＲＩＮＧ”における致命的な欠陥の存在を示唆する桐野詩織のカルテだった。

小野を頼れないとなれば、自分の独断でこの問題は処理しなければならない。

しかし考えてみれば、あくまで現時点では欠陥が存在する可能性があるというだけに過ぎない。”ＳＰＲＩＮＧ”起動に向けて後戻りのできないこの状況で、それを疑い始めるというのはあまりにも遅すぎる。下手に現場を混乱させるより、もはや看過した方が結果的には良い目が出るかもしれない。

しかし、この局面を乗り切ることができても、後々不具合が見つかれば事態はさらに深刻化するかもしれない。特に、今夜のテロが決行されて、市民全員がＡＩと入れ替わったとしたら、この欠陥はさらなる未曾有の危機をもたらす可能性がある。

もちろんそうなると”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化は断念せざるを得ない。それどころか、全大黒市民の命を危険に晒した凶悪犯として政府には責任をなすりつけられ、自分は闇に葬られることになるだろう。

やはり疑いの芽は摘んでおいた方がいい。万が一事実であったなら、プロジェクト自体にムリがあったことを見抜けなかった自分の無能を呪うだけだと彼は割り切った。猫目技師と小此木宏文の研究成果を奪い、甘い汁を吸い付くし、一方で彼らの遺産に踊らされ続けた世界的企業の最後の幕を下ろすというのも、それはそれで大役ではないかと彼は自嘲する。

とにかく確認することが先決だ。彼は研究員達が詰めるメインコンピュータールームを抜け出すと、階段をのぼり、誰もいない屋上へ出た。今にも泣き出しそうな曇天のもと、彼は携帯電話を取り出して、ためらうことなく目的の相手に発信した。

『支社長？』

廃ビルにいた桝田は疑うような声色で電話口に出た。
「ああ、私だ。細川のテロの阻止に向けて奮闘しているようだな」
『そうですが、テロを阻止する気のないそちらが一体何の用ですか？』
「いつから義父に対してそのような食って掛かるような態度をとれるようになったんだ？」
苛立ちを露にした桝田を突き放すように支社長は返した。
『そうですね。では、義父上は説教をするためにわざわざ電話をかけてきたのですか？すでに御存知かもしれませんが、管理室の暴走で２．０が新空間に侵入しています。新空間を切り札にしているそちらとしては、さぞ大騒ぎになっていることでしょうね』
「まあな」
それについては神崎が奔走していることだろうが、すぐに解決するだろうと支社長は踏んでいた。ところが事態はそう楽観視できるようなものではないらしい。
『どうやら管理室は電脳局から許可を得て出動させた２．０をハッキングし、“新空間抹消プログラム”なるものを流し込んだようです。現在その２機は自動操縦中で、まもなく新空間のフォーマットが開始されると』
「そんなものすぐにハッキングし返せばよかろう」
『聞いてないんですか？厳重なプロテクトがかけられた２．０を、手作業で破るには数時間かかると猫目技師が見ています。このままではハッキングできる前に新空間が破壊されてしまいます』
「なんだと！？」
厄介事がまだあったのかと支社長は愕然とする。新空間がフォーマットされてしまえば、すべては水泡に帰す。
「ＩＬコードを使っても破れないのか？」
『できるならやっています。２．０にプロテクトをかけたのは空間管理室の職員、進藤陽平。竹下直樹と同じ小野ゼミ出身のエリートである彼は、メガマスにおいて管理室の現場仕事に追いやられてい

ることを不満に思っていたようです。そこをつついた本部長に命じられて、新空間を抹消するためのプログラムを彼は組み上げたと』

まさかそんな人物が本部長の下にいたとは支社長は思ってもみなかった。本来小野隆を尊敬しているはずの彼のゼミの出身者が、小野が開発に携わった新空間を葬ろうとしている。それには深い事情がありそうだが、それを追及しているヒマはない。

「なす術もないのか？」

『いえ。今、猫目技師と小此木医師の奥さん、それから大谷記者がプロテクトを破る方法を思案されているところです。断っておきますが、我々は新空間を守るために可能性を模索しているしているわけではありません。新空間に連れ去られた人達、その方達を助けに行った子ども達、そして、新空間で生活をしているすべてのＡＩの方達のためです』

なぜＡＩのためなどという言葉が出るのかが支社長にはわからなかったが、彼らがそう思って動いてくれているのは都合が良かった。支社長とて、生身の人間の魂がフォーマットされてしまうのは避けたいと思っている。

「新空間がフォーマットされてはまずい。今の新空間は通常空間との微妙な均衡で成り立っている。新空間で異変があれば、通常空間にもどんな影響があるかわからない」

『それは私たちを利用するための詭弁ですね、わかります。申し上げた通り、別にそちらの意図とは関係なく、２．０の動きはこちらが全力で止めに行きますので心配なさらなくても良いですよ』

猫目技師を擁するあちら側にどうも優位に立たれているように支社長は感じる。というより、小野ともども桝田方と協力した方が事態の収拾に向けていいのではないかと支社長は思い始めた。神崎がそれを認めるとは思えないが、もう一つの厄介事の件もある。

「章太郎。取引をしないか？」

『なんですか急に？取引とは相手が対等な立場にあって初めて成立するものです』

「今、我々と君たちは対等ではないか？君たちの力がなくては、我々は切り札である新空間を守れない」

『私たちに正式な協力を要請すると？怪しいですね。こちらに見返りは用意していただけるのですか？』

支社長は一瞬だけ空を仰いで交換条件を考えたが、１つ良いアイデアが浮かんだ。

「神崎を排除しよう」

『はい？』

「プロジェクト急進派の神崎信明を追放する。ヤツは私にも無断で桐野沙織というＡＩの実験をし、今回も私に断りもなく政府に特殊部隊を要請した。ヤツがいなければ、ここまで事態が重くはならなかったと思う。ヤツを排除した後、プロジェクトの今後の方針もメガマスグループ全体で協議しなおすことも約束しよう。それでどうだ？」

口先三寸と思われても仕方のない条件だが、実際神崎がいなければ本社側に対しても歩み寄れると淡い期待を支社長は抱いていた。プロジェクトの負のイメージを一身に背負っているのは神崎だ。

桝田は相当迷っているようだったが、ある決断を下した。

『電話では支社長のお話の真偽がわかりません。本当に我々と協力する気がおありなら、今からすぐ、おひとりでこちらの廃ビルまで出てきていただいてもかまいませんか？詳しくはそこでお話したいと存じますが』

なるほど冷静だと支社長は思う。桝田のことだ。自分を人質にとってプロジェクトチームに圧力をかけるようなマネはしないだろう。

「わかった。すぐそちらに向かう」

『時は一刻を争います。なるべく早くお願いします』

桝田との電話を切ると、支社長は身を翻して屋上を後にし、階段を降りる。メインコンピュータールームに寄って先ほど目を通した報告書を小脇に抱えると、支社長は誰にも呼び止められることなく研究施設を後にした。

#26　さよならユウコ　part5

「支社長が今からここに来られます」
電話を切った桝田は、頭を付き合わせて2．0への対処法を考えていた猫目技師達に向かって言った。思ってもみない知らせに、全員驚いたように顔を上げる。
「先方は何しに来るんですか？」
怪訝そうに大谷が訊ねた。
「2．0の件で、我々と協力体制をとりたいと。その話し合いに」
「随分都合がいいもんだ」
「でもそれは向こうでも対策は考えているはずですよね？どうしてわざわざ私たちと協力しようと思ったのでしょうか？」
猫目技師と同様のことを桝田自身も思っていた。
「わかりません。確かに本部長の執念が込められたあの2．0を止めるのは容易ではありませんから、猫目技師を擁する我々の力も借りようという魂胆は見えますが」
「買い被りは困りますね。しかし2．0の件は、我々にもプロジェクトチーム側にも差し迫った問題となっているのですね」
「そうですね……支社長の件は私が考えますので、皆さんは引き続き2．0の阻止の方法を話し合いください」
桝田がそう促すと、西側フロアーに設置してあった暗号が発光し始めるのが見えた。ダイチ達と2．0が新空間に入り込んだ後に改めて設置したものだ。
「新空間からの反応……どうやらヤサコ達の誰かが向こうからも暗号を仕掛けたようですね」
希望の光を見つけたように玉子が言った。誰かがいるなら、これで向こうの状況もわかる。
玉子は再び口を開けたブラックホールに向かって呼びかけた。
「聞こえてる!?誰かそこにいるなら返事して！」

するとかなり遠くから聞こえるような声が返ってきた。
「聞こえてるわ！こっちは全員無事よ！」
「フミエか！本当に全員無事なんだな？」
その様子を見守っていた一同からも大きな安堵のため息がもれる。
その場に残っていた黒客メンバーやアイコ、シュウイチなどは全身から力が抜けていくような気分だった。
「ええ！２．０は、私達を無視してどこかに飛んで行った」
「やはりな。その２．０の目的は新空間の破壊だ。アンタ達を狙っているわけじゃない」
しかし、長い時間新空間にいるのならば、中に入った５人も安全ではない。もちろんフミエもそれをわかっていた。
「それならはやくアイツらを止めてよ！大黒市民を助けるどころの話じゃないわ！」
「わかっている！でも、包み隠さず言うなら、すぐにアイツらを止めることはムリだ。あの２．０は空間管理室によってハッキングされている」
どういうことか飲み込めないというような一瞬の間をおいてフミエが返してきた。
「管理室ってどういうこと！？オバちゃんも管理室の職員だし、ヤサコのおじさんもそうでしょ？」
「考えられないことだが、管理室のトップである本部長は、新空間計画を潰すために新空間そのものを抹殺するつもりでいる。そのためには、新空間の中に連れ去られた人の魂が消えることも厭わないらしい」
「うそでしょ？なんなのソイツ！そんなヤツの命令に従ってるの！？」
「もちろん、私達は２．０を止める方法を考えている。本部長に従う義務はない。とにかく、こちらでも簡単にはアイツらを止められないんだ。ただ、２．０のフォーマットはすぐには始まらないはずだ。おそらくあの２機の最優先目標はミチコだろうからな」

それは先ほどまで猫目技師や大谷、メガばあと話し合っているうちに行き着いた推論だった。

「ミチコを？」

「ええ。新空間の安定を維持しているのはひとえにミチコの力だ。そのミチコをまず抹消して、新空間のもろい部分を徹底して破壊する。そうすれば、広い新空間全体をフォーマットするよりはるかに簡単に空間を崩壊させることができる」

「そんな。アイツらがミチコを狙ってるんだったら、ヤサコとイサコが危ないわ。あの2人はミチコの居場所を探しに行ったから」

フミエの声はか細くなった。

「1度アンタ達5人をこちらに戻すというのも手の1つだ。こちらが2．0を止めてから、改めて新空間に入る方が安全だ」

「2．0を止めるのに手をこまねいていたら、ハラケンを含めた新空間にいる人達は……だったら、私達が逃げようが逃げまいが同じことよ。誰かが犠牲になるなんて、そんなの」

玉子の胸の内にももちろんそれはある。だから必死になって2．0を止める方法を考えている。しかし、ハラケンが助けられなくて、そして中に入った5人も一緒に犠牲になることは絶対にあってはならないと玉子は思う。

「私としたら、アンタ達を犠牲にはしたくない。やはり、安全になるまでアンタ達はこちらに避難した方がいい」

「私達だって覚悟してここに来たのよ。5人全員が通常空間に戻って、もう1度通路が開く保証はないんでしょ？そのアイデアはこっちに来た誰も賛同はしないでしょうね」

玉子には強制的に5人を通常空間に戻すことはできない。こちらに戻るかどうかは、彼らの意志次第だ。

「私の指示に逆らうんだな？」

「悪いけど。2．0のことを考えたら、余計戻ってる場合じゃないし。最低でもフォーマットが開始されるまでにハラケン達を連れ戻す必要があるから」

「なるほど。私の命令に逆らうのなら、１つこちらも条件を出す」
「なによ？」
「誰か１人はそこに待機していろ。本気で危なくなった時はなんと言おうと５人全員を連れ戻す」
そんな判断が自分にできる自信など玉子にはなかった。しかし、それを覚悟しておかなければ、中に入った５人も犠牲になってしまう。
「私もすぐに行くところがあるの。せめて、１時間くれない？それがムリなら、ダイチあたりに３０分後にここに来させるから」
ダイチはハラケンを探しに行った。うまくいけば一番最初に連れ戻すことができる可能性がある。フミエはこれから、大黒中に先輩達を助けに行かなければならない。
「仕方ないわね。じゃあそうして。その中での連絡手段はあるんでしょうね？」
「ちゃんと考えてある。今の話も全員に伝えておくわ」
「了解した。２．０はこちらで必ず止める」
それ以降の返事はなかった。フミエがその場を去ったのか、リンクが途絶えたのか。どちらにせよ、状況を確認し合っただけで、各々の使命は変わらない。
「しかし、２．０のハッキングはかなり難しそうだぞ」
新空間とのリンクが切れたのを確認してから大谷が玉子に言った。今の言葉はさすがにフミエには聞かせられない。
「なんとかならないんですか？」
「２．０をハッキングした管理室の職員を締め上げる以外には方法はなさそうだが」
「要は２．０を止められればいいのです。ハッキング以外にも手はあります」
猫目技師だった。彼には何らかの作戦があるらしい。
「本当ですか？それはどのような？」
「そのことは竹下さんと相談したいと思います。支社長がここに来

られるというなら、あの人にも話を聞いてもらいましょう」
「わかりました。竹下さんを呼んできます」
猫目技師は新空間計画に関わった直樹と話し合いたいことがあるらしい。玉子はそれを受けて、直樹を呼びにいくことにした。

一方その頃一郎は、廃ビルの外に飛び出して行った直樹を追い、中津交差点の近くの路肩で険悪なムードで対峙し合っている彼と進藤の仲裁に入っていた。進藤は一郎が市役所の管理室に詰めていた時の部下で、彼こそが2．0を新空間に侵入させた張本人だ。外部からハッキングされないよう、2．0に幾重にもプロテクトをかけたこと、2．0には新空間を崩壊させるようにプログラミングしたことも彼はあっさりと自供した。一郎は電話でそのことを廃ビルの中にいる桝田に伝えたのだ。
「2．0を止めてくれ。新空間には、電脳体を連れ去られた人達と、それを助けに行った子ども達がいる。このままだと、彼らの命もろともに消えてしまう」
自分の娘がその中に含まれていることは言わなかったが、一郎は真摯な態度で部下である進藤の説得を試みていた。進藤はけだるそうにガードレールに腰を下ろしてそれを聞いている。
「これは本部長命令ですから。僕に言われても困ります」
「なら、これは社長命令だ。先ほど社長にも報告をして、なんとしても2．0を止めるようにとの指示が出された」
しかし進藤は意に介していなかった。
「社長って、今は実権を握ってないんですよね？本部長から聞きましたよ。社長の指示を聞く必要はないって。むしろ新空間を破壊することは、本社の復権につながると本部長は」
彼はメガマスがプロジェクトチームに乗っ取られたことを知っているようだった。しかし、彼はその言い分をただの大義名分として振りかざしているに過ぎないことを、一郎も直樹も察していた。
「……何が目的だ？君自身に本社の復権など興味もないことだろう

？本部長の指示に素直に従っているのも解せない。元々君はオートマトンの開発、整備を専門とする技術者だったな？その君を現場にまわしたのは本部長だった。君は当然その異動に不満を持っていた。君の仕事ぶりを見ていればわかる。まあ、だからこそその本部長に尻尾を振って開発に戻るのが目的か、あるいは、本部長の的外れな指示を忠実にこなすことで事態を悪化させ、本部長の名誉を地に落とすのが目的か」

少しだけ進藤の表情に影がさすのが見えた。後者が図星だろうと一郎は思う。

「でも、この人の一番の動機は嫉妬だと思います。新空間計画の土台を同じゼミの出身で後輩でもある僕が築いたことに対する」

「同じゼミの出身なのか？ということは、進藤君も小野先生の教え子なのか？」

「ええ」

一郎はそれを初めて知った。第三小跡地でハラケンの電脳体が連れ去られた時、直樹と進藤の間に一悶着あったことも当然知らなかった。

「新空間は確かに竹下君のアイデアで生まれたものだ。しかし、その設計の大部分は小野先生がされたそうだ。それを壊すことは、先生に対する恩を仇で返すことにもなるぞ」

「……先生も大したことない。よりによってこんなヤツのアイデアを自分のものにするなんて」

進藤は下を向いて笑っているようだった。無精に伸びた髪に隠れて表情は見えない。

「ただ自分が目立ちたいだけのくだらないデモンストレーションですよ。実際、この人は全責任を本部長に押し付けようとしています。だから新空間にいる人の命なんてなんとも思ってないんですよ。最低な人間です」

直樹は心底彼のことを不快に思っていた。自分の力を認めさせるために影でこそこそ、そのくせ自分のしていることは誇れないし、

その行動がもたらす意味を考えようともしない。ただ虚栄心を満足させるために生きる器の小さい人間。まるっきり、直樹は少し前までの自分を見ているようだった。

「あまり感情的になるな竹下君」

２．０を止められるのは、それをハッキングして操作していた進藤しかいない。その進藤につむじを曲げられても状況が不利になるだけだと一郎は思い、直樹を諫めた。しかしこの調子では彼を改心させるのは難しい。

「仕方ない。彼を廃ビルに連れて行こう」

「連れて行ってどうするんですか？」

「今あそこで戦っている人の姿を見せて、心が入れ替わるのを期待するしかない」

「そんな方法が通用するとは思えません。この人は原川君が連れ去られた時も、彼の電脳体が帰って来る可能性もあったのに、それを待たずにフォーマットを強行したんです。自分以外の人に憎しみという感情以外を抱かない人間です」

今度は直樹も進藤には聞こえないように耳打ちで一郎に言った。

「そうする以外に手はない。言葉でどれほど言い聞かせても説得できないのなら、せめて、誰かのために命を賭けて戦っている人間の姿勢を見せよう。彼が人間であるなら、多分その心には憎しみ以外の感情が沸き上がるはずだ」

直樹にそう言って一郎は進藤を立たせようとした。ところが、彼の様子がおかしい。にわかに呼吸が速くなり、手で胸の辺りを押さえている。

「おい、どうした！？」

異変に気付いた一郎が彼の顔を覗き込む。彼の細い目を大きく見開かれ、大量の汗が頬から滴り落ちている。

「ぐおおおおおっ」

進藤は最後に大型のは虫類が出すような叫びを上げて路上に倒れこみ、そのまま気を失ったようだった。

一郎と直樹もその様子をただ見ていることしかできなかった。
「小此木さん……」
顔を真っ青にして直樹が一郎の顔を見る。彼の体を心配しているわけではない。２．０を止められる唯一の人物が卒倒したことに対して動揺したのだ。
「これは、まさか……」
一郎は急いで彼の長い髪をかき上げて首筋の辺りを確認した。そして、ハラケンの時と同じように、そこに丸い絆創膏が貼られているのを見つけた。
「……この人も？」
直樹も信じられないという表情になる。先ほどまでの冷酷で陰湿な態度をとっていた彼は、ＡＩだったというのか。
「まずいな。これは詩織さんの時と同じかもしれない」
目を覚まさないか、一郎は彼を揺すってみる。しかし反応はない。仕方なく一郎は彼を病院に運ぶことを考えた。幸い目の前には彼の乗っていた車がある。
「竹下さん！猫目技師が呼んでいます。って、これはどうしたんですか！？」
その時、直樹を呼びに玉子がやって来た。彼女はそこに倒れている進藤を見て声を上げた。
「たった今目の前で倒れたんです。首筋を見てください。この人にも原川君と同じ絆創膏が」
「ほ、本当ですね。ということは、この人も？」
「おそらくそのようです」
「とにかく、彼は病院に運ぼう。竹下君は猫目さんが呼んでいるということなので、廃ビルに戻ってこの状況を説明するとともに、幹部の方１人を呼んでもらってもいいですか。その後に猫目技師とお話を。僕と玉子君で彼をこの車の後部座席に乗せます。病院へは幹部の方に運んでもらいましょう」
「わかりました」

一郎も直樹もそれぞれの役目があるので廃ビルの近くを離れることはできない。直樹はすぐに廃ビルに戻って運転手を幹部の1人に頼み、その時に桝田達にも状況を報告した。

進藤を後部座席に押し込んだ一郎と玉子は、廃ビルから駆けつけた幹部に後を任せ、進藤を乗せた車を見送る。

車が中津交差点を越えたのを確認して、2人も急いで廃ビルに戻った。

それからしばらくして、支社長の運転する車が廃ビルに到着した。

#26　さよならユウコ　part6

ハラケンは詩織を探していた。彼女はミチコが提案したゲームの鍵を握る人物、ハラケンはそう考えていた。その詩織と接触することができれば、ミチコの暴走も止めさせることができるかもしれない。

しかし、漠然と探すといっても、この新空間は少なくとも大黒市と同等の広さがあり、その上彼は人相も知らないので不可能に近いことではある。ある程度探す場所を絞り込まなければ厳しい。

そのために、彼はまず考えるべきことを頭の中で整理した。詩織という人物が知り合いにいた覚えはない。第三小の同級生の中にそんな名前の女子がいた記憶もない。やはり自分とは面識のない人物だろうというところまでは絞り込める。それはまた、捜索範囲を第三小校区内から広げなければならないことを意味しているので、彼にとっては都合が悪かった。

しかし、よくよく考えてみれば、ミチコの提案したゲームのルールに詩織が組み込まれたということは、少なくとも彼女はゲームに関係のある人物、つまるところ自分、ヤサコ、イサコの誰かとつながりがある人物である可能性が高い。自分ではないのでヤサコかイサコだ。

しかしそれでは見当もつかない。ヤサコとイサコはいずれも小学校時代のほとんどは金沢で過ごしていた。自分の知らない彼女達の知り合いもたくさんいるだろう。もはやこの大黒市にいない可能性すらある。

ところがそうハラケンが考えた瞬間、彼は妙な感覚にとらわれた。違う。自分はその名前をどこかで耳にしたことがある。それも最近。ヤサコが何度もその名前を出していたような気がする。

それはいつ、どこで、どんな状況だったか。思い出せそうで思い出せない気持ちの悪い時間がしばらく続いた。ヤサコが「シオリち

ゃん」と呼びかける姿が浮かび上がる。そして、海馬が唸り声を上げ、断絶していたニューロンが次々とつながるような瞬間が訪れた。

廃工場だ。ヤサコとフミエがあの場所で心霊体験をした日、2人はそこで見慣れぬ少女に出会ったと言っていた。桐野詩織。日本人形のような長い髪に細い目という、あまりに特徴的な容姿。見た事もない彼女を、ハラケンははっきりとイメージしていた。

ゆかりの場所と容姿についての情報がそれだけあるなら十分だろう。ハラケンは早速廃工場へと駆け出した。

思い出してみれば、あの廃工場で見つけた魔方陣型の暗号。あれがヒントになっていた。この世界のいたるところには、あれと同様の暗号が存在する。この世界の住民は、あの暗号はこの世界と異界とを結ぶものだと信じている。それはほぼ間違いない。仕掛けているのはおそらくミチコだろう。通常空間から引きずり込まれた人間は、あの暗号のある場所に導かれるのだ。逆にこちらの世界の住民が通常空間に出て行くこともあるだろう。ヤサコとフミエの体験した心霊現象も、ある程度はそれで理解できる。

そして、魔方陣型の暗号はイサコにも関係していた。金沢イベント事故の前、金沢のメガネに関する都市伝説の掲示板に、イサコがその暗号を仕掛けているように見える画像が掲載されたことがあった。大黒のメンバーで、その画像について話し合ったりもした。廃工場での話を聞く限り、ヤサコは桐野詩織と深いつながりがあるわけではない。つまり、イサコの方が彼女と関係が深い可能性が高い。掲示板の画像はそれを示唆している。

ハラケンはそう考えを巡らせながら、ほぼ全力疾走で廃工場へと辿り着いた。

もちろん、その場所に詩織がいるとは限らない。でもハラケンにはこの場所以外に行くアテがなかった。広い工場の敷地内。とりあえず建物には入らずにぐるっとまわってみようと彼は思った。

しかしその必要はなかった。彼はすぐに背中まで伸びた長いの小柄な少女を発見したのだ。こんなところに1人でいるということは、

ほぼ間違いないだろう。彼はこれほどまでにあっさり見つかるとは思わなかったが、幸運と思うことにした。とにかく彼女の話を聞くために、工場の建物を見渡している風な後ろ姿に声をかけた。

「もしもし？ひょっとして、桐野詩織さん？」

少女は驚いたように振り向いた。こんなところで声をかけられるなんて思ってなかったのだろう。

「アナタは？」

「僕は原川研一。ワケあって桐野詩織さんという人を探してるんだけど、君の容姿が聞いていた詩織さんの姿にそっくりだったものだから。ええと、詩織さんだよね？」

少女の細い目には戸惑いの色が浮かんでいるが、やがてその目を伏せて首を横に振った。

「……それは姉です」

「姉？じゃあ、君は？」

本人ではないらしく、ハラケンは少し力が抜けたが、近しい人であるのは違いないのでまだ希望は残っていた。

「私は詩織の妹の沙織です。双子なので容姿は似ているのですが」

「双子なんだ。じゃあ、お姉さんがどこにいるかはわかるよね？」

しかし沙織は再びかぶりを振った。

「いえ。実は、私も姉を探しているんです」

「君も？お姉さんはどうしていなくなったの？」

何か特別な事情がありそうなので、いきなり不躾な質問をしてしまったことをハラケンは自覚したが、それでも聞かずにはいられなかった。なにかミチコと詩織との関係のヒントが聞けるかもしれない。しかし沙織の返答は、彼の期待を裏切るものだった。

「それが、覚えていないんです。私はいつから姉と離ればなれになったのか。いや。私という人間がどこから来たのか、どうしてここにいるのかがわからない、と言った方が正確かもしれません。ただ、私には姉いて、その姉にどうしても会わなければならない。その想いだけが心の中にあって」

なんなのだろう、この少女は。ハラケンは合相づちを打つことすらできなかった。確かにこの空間に自分がいる理由がわからないのは理解できる。が、この沙織はそもそもここがどんな場所なのかも知らないようで、今の話では彼女が現実世界でもどのように生きていたのか想像することもかなわない。彼女が確かに抱いているのは、ただ姉に会いたいという衝動だけ。

「ごめんなさい。いきなり変な話をしてしまって。アナタはどうして姉を？」

今度は沙織の方から訊ねてきた。この少女について考えを巡らせていたハラケンは、その言葉で我にかえったように返した。

「ああ。どこから話そうかな……君はミチコっていう存在は知ってる？」

「ミチコ……」

沙織はきょとんした顔つきになった。

「はっきり言うと、この世界は現実世界とはまた別の異世界なんだ。そこを支配している神のような存在がミチコ。そのミチコが今、おそろしいことを企んでいる。僕はそれをなんとしても阻止したい」

「それが姉とどういう関係が？」

「ミチコと君のお姉さんは、なんらかのつながりがあると思うんだ。僕にも、詳しいことはわからない。でも、ミチコの企んでいることを阻止するためには、君のお姉さんの協力がどうしても必要な気がするんだ」

自分も大した情報を持ち合わせていない。今の話を妹である沙織がどこまで信じてくれるかはわからなかった。

「ミチコって、あのミチコですよね？」

「もちろんあのミチコのことだ」

果たして通じ合っているのかとハラケンは疑問に思う。しかし、沙織は同じミチコをイメージしていたようだ。

「私、ミチコのこともなんとなく覚えています。私も、ミチコとなんらかの関わりがあったはずなんですが」

記憶錯乱状態なのか。ハラケンはその疑念を抱いた。先ほどの話を聞いているとその可能性もありそうだが、すぐに思い出してくれるだろうか。

ハラケンはそこで彼女の記憶を呼び覚ませないかと考える。自分が持っている情報といえば、

「そう言えば君はイサコ、あ、いや、天沢勇子については知ってるかな?その子も、お姉さんと関係があると思うんだけど」

すると沙織が顔を上げた。

「天沢さん、そう、天沢さんです!私は天沢さんと一緒にミチコと戦いました。天沢さんはミチコにさらわれましたが、すぐに戻って来て。その後は……」

「思い出したんだね!?」

これで詩織の居場所の手がかりも掴めるとハラケンは思った。しかし、イサコは沙織と一緒に戦っていたという。どうやら想像していたのとは違うらしい。イサコはこの沙織の知り合いで、考えるに彼女と一緒に詩織を探していたのではないだろうか。

そうハラケンが思い至った瞬間、彼は背筋が凍り付くような思いがした。周囲の空気が世界と分離したかのように冷気が降りる。まずい。これは、ミチコが降臨する前兆。

ミチコが現れれば自分と彼女以外の人間はすべて停止する。ハラケンはすがるような思いで沙織を見た。しかし、沙織はこの空気の異変に気付いたように周囲を見回している。なぜ彼女はフリーズしないのか。

「時間よ研一。ユウコ達もこの空間にやってきた。彼女達の前でアナタに最後の決断をしてもらう。どうするのか、もう決まっているわね?」

いつの間にか目の前にいたミチコは、冷たく笑うように言った。

「決めるつもりはない!それより、桐野詩織さんと話がしたい!お前の近くにいるんだろう?」

ハラケンは先ほどの沙織とのやり取りの中でそう直感していた。

ミチコのそばに、詩織はいる。
「させない。詩織の幸せは外の世界にはないもの」
ミチコの横にはかつての通路のような鍵穴が開いている。どこにつながっているかわからないが、引きずりこまれれば自分に自由はないようにハラケンは思った。すでに体は金縛りにあったように動かない。
とっさにハラケンは後ろにいた沙織の方を見た。ミチコが現れてもフリーズしない謎の少女。後を託せるのはもはや彼女しかいない。
ミチコも沙織の存在にようやく気付いたようだった。
「アナタは……」
ほんのわずかにミチコは動揺したようだった。そこを突いたように沙織が叫ぶ。
「やめてミチコ！その人を放して！お姉ちゃんを返して！」
すべて思い出したんだなとハラケンは思う。これでまだ、ミチコを追う人間は残る。無力な自分には何もできない。あとは沙織の姉を思う心を信じるだけだ。
次の瞬間に、ハラケンとミチコは鍵穴の向こうへ消えていった。
沙織はその場に取り残され、世界は再び動き始めた。

#26　さよならユウコ　part7

ハラケンを探して通常空間に連れ帰るという使命を帯びたダイチ。まず攻めるべきはハラケンの家だと思い、廃ビルで他のメンバーと分かれてからはまっすぐ彼の家にやって来た。どうやらこの新空間の中も今日は休日のようで、昼間だというのに道端でメガネで遊んでいる子ども達がちらほら見受けられる。そのことを踏まえて彼の家を第一に選んだのだ。

しかしそれは空振りに終わった。インターホンを鳴らして応対に出たハラケンの母は、彼は朝から出かけたと言う。どこに行ったのかは聞いていないということだった。

そこでダイチは、ハラケンの行きそうな場所を考えた。行き先も告げずにどこかに出かけたということは、やはり彼は通常空間との通路を探しているのだろう。そうなると最も彼が行きそうな場所は、第三小。自分が連れ去られた場所を探すのが普通だろうとダイチは思った。

第三小の存在は廃ビルからハラケンの家に向かう道のりで既に確認済みだった。どうやらこの世界では第三小は取り壊されずに済んでいるらしい。どういう事情なのかわからないが、それは今考えることじゃない。

正門に辿り着いたものの、校門は閉めきられていた。休みの日らしいのでそれは仕方ないが、ここからどうしようかとダイチは考える。ハラケンが校内をうろついていることに賭けて、自分も踏み込むか。それにしてもこの正門から忍び込もうとするなら、監視カメラに引っかかって警備員が飛んでくる。つまみ出されてサヨナラだ。

仕方ないのでダイチは隣接する鹿屋野神社の裏の林のフェンスの隙間から侵入することにした。ぐるっとまわって神社の方へと向かう。

その鹿屋野神社で、ダイチは見慣れた顔を見つけた。石段の最上

段、鳥居の下にどっかりと腰を下ろしているのはガチャギリ。他にもナメッチ、デンパ、アキラがそこにはいるようだった。黒客メンバーでの集まりがあるらしい。ということは、

「よう。遅かったなダイチ」

いつものけだるげな調子でガチャギリが声をかけてきた。多分、ヒマなんだろうと思う。用事があって待ち合わせした時に遅刻すれば、彼はもう少し棘のある言い方になる。その辺りが妙にリアルで、ダイチは彼らが本人ではないことが信じがたかった。

「今日は何の用だっけ？」

ダイチはここでなぜ集まっているのかわからなかったのでカマをかけてみた。そう言えば、この世界の自分は何をしているのだろうか。

「全員特にやることがないから集まってんだろ。大体お前が遊ばねえかって提案したんじゃねえか」

「そうだったっけ？わりわり。ところで、ハラケン見なかった？」

もしハラケンが小学校に行ったのなら、ここでたむろしていた彼らならその姿を見ているかもしれないと思った。しかし、

「いや、今日は見てねえな。ハラケンになんか用があんのか？」

「まあ、ちょっとな。ところで、今日は何曜日だっけ？」

「はあ？」

ガチャギリは、さっきから何を寝ぼけているのかと言いたげな様子だ。

「今日は日曜日ッスよ。オヤビン」

「日曜か。一昨日は学校だったな？」

「え？ああ、そうッスね」

ナメッチもいよいよダイチの言動を訝しんでいる。

「お前ら、第三小に通ってるんだよな？」

第三小がまだ存在しているので、おそらくそうじゃないかとダイチは思って訊ねた。しかし、ダイチの質問には、場が凍り付いたような間ができた。

「お前さっきからどうしたの？ハラケンと同じで、記憶が錯乱しちまったか？」
「ハラケンもそうなのか？」
お手上げだと言う風にガチャギリは手のひらを返して首を横に振っている。それでも、ハラケンは今の自分と同じ状況だったのだろうとダイチは思った。このシチュエーションなら、誰でもそうなるだろう。
「ってか、質問に答えろよ。オレたちは第三小の生徒だよな？」
「そ、そうッスね」
ナメッチが困ったように返してきた。
つまり、まだこの世界では自分たちは小学生だということだ。一昨日も学校があったらしいので、ハラケンは第三小の校内をくまなく調べる時間は十分にあったということになる。彼が休みの日に忍び込んでいる可能性は低くなったとダイチは思う。
「どこ探すかな……他のメンバーにも探してもらうか」
そこでダイチは思い出した。まだ自分はこの世界での連絡手段を確保していない。ハラケンもそうだが、他の４人がどんな状況なのかも気になる。幸い、ここにちょうどよくメガネをかけている黒客メンバーがいる。その時デンパと目が合った。
「なあデンパ。しばらくメガネ貸してくれねえか？オレのヤツ壊れちまってよ」
「え？珍しいね。ダイチがメガネを持ってないなんて」
「まあな。すぐ返すからよ。頼むぜ」
「いいよ。はい」
デンパは快く貸してくれた。サイズがかなり緩めだが仕方ない。
「自分のメガネも持たずに外に出るとは、さてはお前、ダイチじゃないな」
ガチャギリが半分冗談のように訊ねてきた。しかしタイムリーな質問だ。自分こそ正真正銘のダイチだと言い張りたいところだが、真相を話す時間もないし、彼らは信じもしないだろう。

「うっせーな。とにかくオレはハラケンを探さなきゃならねえんだ。お前らも見かけたらデンパのメガネに連絡くれ」
「ういうい。気が済んだら戻ってこいよ」
ガチャギリが見送るように手を振ってくれている。それを背に、ダイチは鹿屋野神社の石段を下りた。
お互いの連絡手段は、ネットで『大黒市　電脳メガネ都市伝説』で検索し、一番上にヒットしたページの掲示板を利用するというものだった。既に誰かの報告があるかもしれないと思い、ダイチは早速ページにアクセスして掲示板を覗いてみた。つい先ほどの書き込みが見つかった。
「2．0の狙いはミチコ。Wユウコは注意されたし。それからダから始まるチビスケは、30分後に例のビルに行き、通常空間とアクセスして、オバちゃんの指示を仰ぐように。ちなみに私はA．Aのメガネを使用中……ハンドルネームは、COILNo．7か」
随分暗号めいた書き込みだが、BBSに個人名をそのまま晒すのはまずいだろうという配慮が見える。前半部分の意味はよくわからないが、ハンドルネームを解読すると、コイル探偵局の会員ナンバー7というところからフミエだ。A．Aのメガネを使用中とあるが、これはイニシャルと判断すべきだろう。珍しいこのイニシャルを持つのは、自分たちの周りでは相原愛子しかいない。つまり、フミエはこの世界のアイコからメガネを借りているということになる。
それなら都合がいい。おそらくデンパのメガネにもアイコの番号は登録されているはずだ。これで不明瞭な前半部分の意味も本人から聞ける。すぐにダイチは電話をかけた。
『もしもし？相原愛子は今席をはずしています』
やはり応答したのはフミエだった。
「ダから始まるチビスケってのはオレのことか？」
『デンパのメガネを借りたのね？そうよ。他に誰かいると思ったの？』
「おう。あやうく別の誰かだと思ってスッポかすところだったぞ」

『自分のサイズを自覚することね』
「うるせー。お前に言われたくねえよ。それより指示の内容がわからん。オレは３０分後に廃ビルに行かなきゃいけねえのかよ？」
『そうよ』
フミエの息が切れているのが聞き取れる。おそらく中学校まで走っているのだろう。
「なんでだ？」
『さっきオバちゃんに言われたのよ。誰か連絡役を廃ビルに残せって。私はこれから中学校に行って先輩達を連れ戻さなきゃいけないでしょ。アンタが一番早く終わりそうだから、ハラケン連れて３０分以内に廃ビルに戻っといてよ』
「何勝手に決めてんだよ。それはオレが困る。ハラケンが見つからねえんだ」
『見つからない？ちゃんと探したの？家や第三小は？』
「家にはいなかった。第三小は閉まっている。忍びこんだっていう可能性もあるが、ハラケンには授業のあった一昨日以前に通路を探す時間はあった。今日は学校には行ってないと思う」
するとフミエはしばらく考えてから返してきた。
『メガシ屋は行ってないの？』
「ああ、あそこがあったか。とりあえず行ってみるわ！」
『しょうがないわね。私の方でも探しとく。メガシ屋行っていなかったら、とりあえず廃ビルに戻っといて。私も先輩達を集めたらすぐに戻るから』
「先輩は７人いるんだろ？すぐに集められるか？」
『大勢いるし互いに顔見知りだろうから、１人で街をさまよっているであろう誰かさんよりはつかまりやすいはずよ』
それもそうだとダイチも納得する。
「それから、２．０の狙いはミチコってのは確かか？」
『オバちゃんはそう言ってた。この空間の安定を維持してるのはミチコだから、まずはそこを潰すつもりだろうって。そうなると、ヤ

サコ達が危険なのよね。２．０の方はオバちゃん達をアテにするしかないんだけど。あの２人がミチコに接触する前になんとか片付けてもらいたいわね』

「アイツらが早くあの書き込みに気付いてくれるかどうか」

『そういうことね。アンタも２．０を見かけたら注意するのよ』

「お前もな」

そこで電話は一旦切った。とにかくフミエが先輩達を集めるまでは１人でハラケンを探すしかない。

それより、デンパのメガネから直接ハラケンにかけたら速いんじゃないかということに気付き、ダイチはそっちにもかけてみたが、そう甘くはなかった。何回コールしても応答する気配がない。

仕方ないので掲示板には『生物部部長見つからず。ハンドルネーム：ダから始まるナイスガイ』と書き込んで、ダイチはメガシ屋へと向かった。

ダイチとの電話を切ったフミエは大黒中に到着した。この日は休日のようで、もしかしたら先輩達は学校に来ていないかもしれないという不安もあったが、とりあえずここを探すほかない。連れ去られた先輩達の細かい住所は一応資料としてもらっているが、一件一件まわっていてはとても時間がないのだ。

フミエは私服だったので、正門をくぐってからはあちこちの生徒に怪訝そうな視線を浴びたが気にしない。クラブ活動は盛んに行われているようで、思っていたよりも人は多かった。

そんな中、この時間に吹奏楽部の個人練習も屋外で行われていたのは幸運だった。フミエは連れ去られた先輩の１人で、大黒三小時代に交流のあった女子生徒を見つけた。他の吹奏楽部員はそれぞれの楽器の練習に勤しんでいるが、その女子生徒だけはまるで身が入っていない。俯き加減で茫然と立ち尽くしているという風だった。

「先輩！」

息を切らしながら駆け寄ってフミエは声をかけた。

「橋本さん?どうしてそんな格好でこんなところに?」
女子生徒は驚いていた。
「先輩達を助けに来たんです。先輩達は一昨日の練習中、同じ場所で意識を失いましたよね?そのまま、このおかしな世界に入り込んだ」
「そう、そうよ!信じられなかった。まさか、自分たちが都市伝説に聞くような異空間に連れ去られるなんて。しかも、ここには前の世界と同じ風景があって、同じ人が生きていて、なぜだか私達は中1に戻っていた。なのに、私達がおかしな黒い穴に飲み込まれたことを誰もわかってくれないの!」
彼女の言葉は少し支離滅裂だったが、言いたいことはわかった。
「なるほど。全部で7名が連れ去られたはずですよね?他の人達は?」
「今日学校に来てるのは私ともう1人。こんな時に練習って気分じゃないけど、ここに元の世界に戻るヒントがあるかもしれないと思って」
「じゃあ、今日学校に来ていない他の5人に連絡を取ることはできますか?私は先輩達を元の世界に導くためにやって来たんです」
「本当に!ちゃんと私たちを帰してくれるの!?」
その表情に一気に光が射したようだった。
「約束します。ただ、この世界と現実世界の入り口は今のところ一つしかなくて、中津交差点の近くなんですが」
「そこにみんなを集めればいいのね?」
「連絡が取れるなら大至急お願いします」
「わかったわ!部室にいるもう1人を呼んで来るから、ちょっと待ってて!」
そうして彼女はその場にトロンボーンや楽譜を放置して校舎の方に駆けていった。フミエは待っている間にそれらを整理して、近くにいた他の吹奏楽部員に預けておいた。
ともあれ、こちらの救出は思いのほか早く済みそうだ。その間に

フミエは、ハラケンがどこに行ったかを思案していた。

#26　さよならユウコ　part8

支社長は桝田との約束通り、単身で廃ビルにやって来た。入り口を張っていた幹部に案内され、一同の集う2階へと階段をのぼる。フロアーに入るなり、桝田と目が合った。

「来られましたか。本当にお一人で来られたんですね？」

桝田は支社長を案内した幹部に目配せする。幹部は頷いて返し、本当に彼がここに1人で来た事を伝えた。

「支社長のお話を聞く前に、質問したいことがあります」

「なんだ？」

「支社長はたった今到着されたところですから御存知ないでしょう。先ほど、2．0を操っていた管理室職員、進藤陽平が事情を聞いている最中に意識を失って卒倒しました」

「なんだと？」

支社長はまたしても驚愕の知らせを受け、大きく目を見開いた。その時現場にいた一郎と直樹も、頷くように桝田の話を肯定した。

「それは本当なんだろうな？」

「確認していただければすぐにわかると思います。進藤は病院に搬送しました」

ここで桝田が嘘をつくことはないだろうと支社長は思う。しかしそれが真実なら、事態はさらに深刻になった。

「その男は2．0を止められる唯一の人間ではないのか？それが意識を失ったと？」

「そうです。私と竹下君がその一部始終を見ていました。彼は胸を押さえるようにして、その場に倒れ込みました」

一郎が説明する。直樹が続きを引き継いだ。

「あの人の首筋には原川君と同じ、丸い絆創膏が貼られていました。どういうことかは察していただけますよね？」

「その男も、ＡＩだったというのか？」

「そうとしか考えられません。意識を失うのも、これ以上ないタイミングです。誰かがあの人をＡＩにすり替え、誘導していたんじゃないですか？用済みになったところで、意識をシャットダウンさせる。２．０はもう自動操縦に切り替わっています。これで外からあれを止めるのは、かなり困難なことになりました」

進藤をＡＩにすり替えて、新空間を内部から破壊させるよう誘導する。そんなことができるのは、

「２．０の暴走は管理室本部長ではなく、プロジェクトチーム内部の人間の意志によるものだというのか？もしくは内部に管理室本部長の協力者がいるか」

”ＳＰＲＩＮＧ”を操作できるのは、当然プロジェクトチームの人間のみですよね？」

それは直樹の言う通りだ。外から”ＳＰＲＩＮＧ”を操作されることなどセキュリティ上あり得ない。しかし、

「プロジェクトチームの内部の人間が、新空間を破壊しようとは考えないだろう」

「細川技師の他にも裏切り者がいるんじゃないですか？」

そんなことはあるはずがないと断言できないのが支社長は歯がゆかった。プロジェクトチームの幹部のうち、新空間にすべてを賭けている神崎はその容疑者から除外される。しかし小野隆は、

「身内を疑い始めてもキリがない。裏切り者がプロジェクトチーム内にいるとして、その者をあぶり出すよりも、２．０を止める方法を模索する方が賢明だ」

「時間的な猶予も考えると、そうですね。では支社長。我々と協力してくださるということでよろしいですね？」

桝田が落ち着いた声色で訊ねてくる。なぜ、こんなに余裕があるのだろうか。２．０が新空間で暴れて困るのはお互い様だ。しかし支社長は、自分だけがみっともないほど焦っているような気がした。つまるところ、自分にはこの状況を打破する策が尽きているからだ。それに対し、桝田や一郎、猫目技師の目はまったく死んでいない。

「策はあるんだな？」
「あることはあります。しかし、それを成功させるには、そちらの協力が絶対必要になるのです」
猫目技師が言った。彼が言うと説得力がある。自分を陥れるためのでまかせには聞こえない。
「その方法を聞かせてくれないか？どうやって２．０をハッキングする？」
「ハッキングはしない」
答えたのは大谷だった。
「どういうことだ？」
「進藤の組み上げたプロテクトが完璧だからだ。外部からハッキングを狙うとしたら、どれほどの時間を食うかわからん。だからそれは下策だ」
「ではどうやって２．０を止める？」
支社長に彼らの考えは読めなかった。
「こうなれば、単純に２．０を攻撃して破壊するしか手は残っていません。最も確実な方法は、こちらも２．０を使ってさきの２機を撃ち落とす方法。そのために、まずは電脳局に残りの２．０を出撃させられないか訊いたのですが、予備の２．０はすべて故障しているとのことでした。おそらく、進藤がその手を封じたのだと思います」
ハッキングが困難なら、直接２．０を破壊するしかない。猫目技師の提案だった。そこで玉子は考えたのは、こちらが操作する２．０を新空間に送って、暴走している２機を力づくでも抑えようというものだったが、進藤は先手を打っていたのだ。
「後は誰かが大量の武器を手に新空間に乗り込み、２．０を破壊するしか手は残っていないように見えます。しかし、電脳体のみの身で２．０に戦いを挑むのは自殺行為です。その方法も使えません」
「だったら、２．０を破壊する手は残っていないじゃないか」
直樹の話を聞くと、決死隊でも編成しない限り２．０を止めるこ

とができないように思われる。
「いや。最終手段があります。新空間と通常空間をつなぎ合わせるのです」
「なに？」
支社長にはその意味がわからなかった。
「新空間と通常空間を断絶するように考えたのは僕です。新空間は現実逃避のための空間という性質上、通常空間からの干渉はあってはならなかった。そのために両者からの干渉がないかぎり、この２つの空間がつながり合うことはありませんでした。それを、一方からのアクセスでつながるように調整します」
先ほど猫目技師が直樹と相談を持ったのは、このことを話し合うためだった。
「つまり、こちらの空間から一方的に新空間に干渉できるようにしたいということだな？しかしそれをすれば、新空間そのものの存在意義が」
「破壊されるよりもマシでしょう！多少の仕様変更で、中にいる何人もの命が救える可能性が残るのですよ」
新空間計画の発案者、直樹が言うならそれも仕方のないことだと支社長は思う。確かに破壊されて無に帰すよりは何倍もマシだ。
「しかし、それでどうやって２．０を？」
「ショートカットを御存知ですか？空間の不具合を利用して、電脳的に離れた場所と場所とをつなぎ合わせる技です。このショートカットのトンネルは、通常空間からのミサイルやレーザーなどの電脳的な攻撃を新空間に届けることができます」
通常空間に居ながらにして、新空間にいる２．０に攻撃できる唯一の方法だ。
「そんな子どもの遊びみたいな方法で、本当に止められるのか？」
「遊びじゃなくて戦いです。彼らにとっては」
直樹はガチャギリ達、残された黒客メンバーを見た。この方法し

かないという結論に至った時点で、その2．0破壊という大役を彼らに任せることは一同の了承を得て決定していた。
「長い間サーチマトンを相手にしてきたプロに任せろよ。支社長」
ガチャギリは親指を立てて笑っていた。ダイチ達の戦いを傍観しているだけだったメンバーは、自分たちも彼らの手助けができると意気込んでいた。
「方法はそれしかないのか。そのためには、まず新空間のプログラムを変更しなければならない、か。そのために、我々の研究施設へ出向くというんだな？」
支社長は猫目技師を見て訊ねたが、大谷が答えた。
「そうだ。アンタらの研究施設はオレたちがジャックする。それもこれも、新空間の中にいる人の命を救うためだ。もちろん、新空間そのものは残すつもりでいる。ミチコを止めに中に入った子ども達がうまくやってくれれば、すべてが丸く収まる」
もちろんそんなことは神崎が死んでも許さないだろう。しかし、桝田達本社側がプロジェクトチーム側に協力するための交換条件として、神崎を排除することを支社長は提案した。彼を追放するという前提で考えるなら、それは心配しなくてもいい。
「……わかった。正式に君たちに協力を要請しよう」
「神崎氏の追放、ならびに、今回の細川技師のテロの阻止に成功したあかつきには、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”、新空間計画の見直しをグループ全体で協議することをお約束ください」
「ああ。約束しよう」
今の支社長の言葉はしっかりと大谷が録音した。気休めではあるが、支社長が約束を違えた時にやり込める材料になる。
「それから、ひとつ調べてもらいたいことがある」
「なんですか？」
支社長は改まって切り出した。彼はもう1つ厄介事を抱えており、桝田達との協力を考えたのはその問題について共に考えたいと思ったからでもあった。

「原川研一が、今日病院に検査を受けに行ったはずだな。その担当医は、君たちが用意したんだろう？」
「ええ、信頼のできる人に頼みましたが」
一郎が怪訝そうに答える。
「彼のカルテがほしい。こちらには桐野詩織のカルテがある。その両者を見比べたい」
「なぜですか？」
「このカルテを見ると、妙なことが記載されてあった。現在、彼女の体は高熱を出し続け、体力は著しく低下している。その原因が、”ＳＰＲＩＮＧ”にあるらしいというものだ」
支社長は持って来たカルテを桝田に手渡した。
「”ＳＰＲＩＮＧ”？つまり、原川君の体調不良もそれに起因しているかもしれないってことだな？」
「そういうことになる」
支社長は大谷に頷いて返した。
「それは、”ＳＰＲＩＮＧ”というシステムそのものに致命的な欠陥があるかもしれないということですね。その有無を確かめ、もしそれが存在していたとすれば？」
猫目技師が鋭い視線を向けて訊ねてきた。
「当然、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”は白紙に戻さないといけないだろう。ＡＩの宿主の肉体が病気になるということは、当然、入れ替わって新空間に入った当人の意識も長くは生きられないということになる」
「かなり根本的な欠陥ですね。なぜそんなことにも気付かなかったのですか？」
桝田に言われるまでもなく、支社長はプロジェクトについては慎重に進めてきたつもりでいた。それでも欠陥が見つからなかったというのはやはり不自然だ。
「やはり内部に裏切り者がいるのかもしれないな」
支社長は小野の顔を思い浮かべて言った。

「そうですか……もし、欠陥が存在していたとして、支社長は”ＳＰＲＩＮＧ”を捨てられるのですか？政府は、”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化を期待しているはずですよね？」

プロジェクトチームが政府を後ろ盾につけたということは、言い換えれば”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化を政府に義務づけられたということになる。それが実現不可能だと政府が知ったなら、当然彼らは手のひらを返したようにメガマスを扱うだろう。

「捨てるも何も、その欠陥が本当に存在するなら、我々には破滅しか残されていない。政府の支援なしで、今のメガマスを立て直すことなどできないだろうからな」

桝田は表情こそ変えなかったものの、その動揺は支社長にも伝わった。このままではどう転んでもメガマスは崩壊を免れない。その責任は、当然自分にもあると桝田は感じている。しかし今はそれを考えないように、桝田は話を進めた。

「急進派の神崎さんは、そのことについてどう言っているのですか？」

「あの男には話していない。神崎の場合、欠陥があったとしても実用化をためらわないだろう。かつて不具合があると知りながら、それをひた隠しにして我が社がメガネをばらまいたように。だから私はヤツを排除しようと決めたんだ」

「なるほど、しかしあの人はプロジェクトの功労者では」

「確かにあの男は功労者だ。しかし、実現が近づくにつれ過激な思想に傾倒していった。あれがいては、余計に混乱が深まるばかりだ」

「それは賢明な判断だが、結局はアンタも非人道的な実験に手を染めた。アイツだけをトカゲの尻尾のように切り落とすというのは、納得いかねえな」

大谷だった。彼の言いたいことも支社長にはよくわかった。

「そうだな。私も責任を取らなければならないだろう。どのみち、政府にはメガネの事故の全責任を背負わされて捨てられることになるんだ」

「ご決断なされましたか。支社長」
その時、突然違う声がしたので一同は階段の方を振り向いた。
そこには小野が立っていた。

#26　さよならユウコ　part9

「どうしてここにいる？」
驚きを隠せない表情で小野を見据えながら支社長が訊ねる。
「支社長が研究施設を出られたというので、こんな時にどこに向かうのだろうかと、車の目的地を割り出したところ、この廃ビルだったもので。気になって後をついてきたのです」
「割り出した？」
「胸ポケットを調べてください」
小野に言われて支社長は自分のスーツの胸ポケットを探った。すると米粒ほどの小さな機械が出てきた。
「これは？」
「発信器兼盗聴器です。今の会話も自分の車の中で聞かせていただきました」
完全に迂闊だったとしか言いようがない。自分にこんなものが仕込まれているとは、支社長は思いもしなかった。
「やはりお前は細川と同じで裏切り者だったか」
「いいえ。支社長が思われているようなスパイではありません。これも自分たちの利益を守るためにしていたことです」
「自分たち？」
「私は研究者ですが、同時にアプリコット社に籍を置いています。私にはメガマスと心中する義理はないことをお忘れのようですね」
確かに彼はアプリコット社の人間だ。そのアプリコット社はプロジェクトチームと提携しており、人材や資金の多くはそこから流れている。
「アプリコット社の指示で私を監視していたのか？」
「神崎さんも監視対象です。アナタ方2人は、いつプロジェクトの成果を政府に売って、そこで得た莫大な報酬を独り占めするかわからない存在でしたから。提携しているアプリコット社は、アナタと

神崎さんの言動には常に注意を払っていたのです」
そう疑われても仕方ない力をその2人は持っている。アプリコット社の不安も理解できるものだった。
「アプリコット社は最初から我々を裏切るつもりだったのか？」
「まさか。細川技師じゃないのですから、そんな遠大な計画を立てるわけがありません」
「では、”ＳＰＲＩＮＧ”の欠陥について報告がなかったのはなぜだ？」
小野はその質問にわざとらしくため息をついてみせた。
「嘘の報告をしていたのは、神崎さんの方です」
「なに？」
「先ほど支社長もおっしゃっていましたが、神崎さんは是が非でも”ＳＰＲＩＮＧ”を実用化しようと必死になっていました。桐野詩織さんの体調不良が”ＳＰＲＩＮＧ”に起因するかもしれないという報告も、何日か前には手に入れていたようです」
神崎ならしかねないと支社長は思う。
「そして、私は神崎さんも監視していましたが、そこで不審に思う言動があったんですよね。まあもともと、桐野詩織さんに関する報告もどこか嘘くさいなとは思っていたのですが。そこで私なりに詩織さんの体調については調べさせました。その結果報告が、支社長のところにも届いたカルテです」
「なるほど。このカルテは、小野先生の指示で調べられたものなんですね」
桝田が手に持っていたカルテを見て納得したように言う。
「しかし、プロジェクトを進めるにあたって、こんな欠陥が生じる可能性も考えられただろう？」
「もちろん、可能性はありました。しかしですね、その有無を確かめるのが実験の目的じゃないですか。人類の歴史を塗り替えるかもしれないほどの革新的な技術です。どの実験に関しても、もっと長い期間をかけるべきだったんです。たった1、2ヶ月の実験結果で、

急いで実用化を迫られたことが、すべての敗因ではないでしょうか」
　それはその通りだ。当初はこんなスケジュールではなかった。度重なる事故、神崎の暴走、そして細川技師の裏切りで、実用化を急がなければならなくなってしまったのだ。しかしどう言い訳しても、自分の舵取りがまずかったのだと支社長は思う。
「しかし、どうして詩織さんや研一君は体調不良を起こしたのでしょうか？先生は何か見当をつけられていますか？」
　直樹が訊ねた。
「推論に過ぎませんが、１つ考えられることがあります。
　人が病気にかかった場合、ウイルスが体内に侵入した場合と言い換えてもいいでしょう、肉体は自然治癒を始めます。その時の自然治癒力を構成するのは、免疫系、内分泌系、そして、脳と言われています。人間の体は非常にデリケートにできており、この３者のバランスがとれていないと自然治癒力はうまく発揮されません。
　免疫系、内分泌系は肉体そのものに付随するものですから、詩織さんのケースにおいては関係ないと考えます。問題は脳。詩織さんの生身の脳は、詩織さんの肉体と直結していません。それが自然治癒力を発揮するのに妨げとなっていると考えられるのです」
「・・・・・・なるほど。肉体と脳は、本来は切ってもきれない存在。肉体の異変を感じた時、脳は必ずその問題を解決しようとする。肉体からの情報を読み取り、脳は適切な処置を施すように肉体の各器官に指令を出す。体内にウイルスが侵入した時には、体温を上げてそれらを殺そうとするように……しかし詩織さんや原川君の脳は、肉体とは直接につながっていないＡＩ」
　直樹には小野の言わんとしていることがわかった。肉体と脳を切り離すことは、肉体の免疫力の低下を招くことになるかもしれないというのだ。
「もちろん、彼女達のＡＩには肉体からの情報も送られます。しかし、ＡＩがそれを適切に処置できるのかどうかは別問題のようです。かなり根本的な問題で、私もその点については慎重にシステムを構

築したつもりでした。しかし、実際はそう甘くはなかったようです」
「待ってください。それは従来の電脳体分離に置いても同じことが言えませんか？肉体と脳が切り離されることが問題の原因になっているのですから」
　桝田の疑問には猫目技師が答えた。
「その通りです。電脳体分離をしていても、そういった免疫系の機能の一部は生身の脳にも残るように調整はしました。しかし、免疫力の低下は避けられませんでした。
　そもそも電脳体分離は精神治療のためだけに用いるものと限定していたのです。精神治療患者の肉体は、本来は設備が整った施設で逐一その体調を観察しなければなりません」
「天沢君の時も……」
「ええ。小此木医師がつきっきりで彼女の体調を管理していたのだと思います。それほど肉体と脳の分離とは難しいものなんです。だからこそ小此木医師は、治療の手間とコストを抑える方法を模索されたのかもしれませんが、やはり技術的には不可能だったようです」
”ＳＰＲＩＮＧ”は、小此木医師が研究日誌に残された彼の一文から着想を得ている。電脳体分離をしている患者に別の脳を移植し、治療の間も変わらぬ生活を送らせられれば、治療費のコストは抑えられる。宏文はそう考えていた。
「やはり猫目技師。アナタの力を借りないでこのような計画を立てたのがそもそもの間違いだったようです。アナタでも解決できなかった問題を、私のような凡才が乗り越えられるはずがなかった」
　小野は研究者としての無力に打ちひしがれているようだった。
「見通しが甘かったということか。愚かだな。こんな誇大妄想を抱いて、我々は本気でメガマスを救い、世界を変えられると信じていた」
「その計画を止めることができなかった私達も、ですね」
　支社長と桝田。メガマスを引っ張る彼らもその終焉をはっきりと意識した。

「先ほどのお話の続きをします、支社長。メガマスはこのまま一連の事故の責任を取らされる形で政府に潰されることになるでしょう」
「わかっている」
「しかしアプリコット社はメガマスの道連れにされるつもりはさらさらありません」
「手を切るということだな？」
「ええ。そもそもアプリコット社はメガマスに人材の派遣と資金の援助をしていたに過ぎません。ここでメガマスが倒れたとして、我々はそれほど大きなダメージを負うことにはならないのです」
「メガマスだけ泥沼に突き落としてさようならするだけじゃないだろう？」
大谷が小野に訊ねる。
「そうですね。アプリコット社は今回の事件の一部始終を把握しています。政府がプロジェクトに関与していたこと。それは政府にとっては公にはされたくない情報です」
「メガマスはこれで破滅するが、そこにできた空洞、未だに世界を動かせるだけのメガネの権利に食いつくのはどこか。当然、そのアドバンテージは政府の弱みを握るアプリコット社にある」
「よくできたシナリオだ」
息をつくように支社長。
「状況に応じた方針の変更です。アプリコット社とてはじめからメガマスを裏切るつもりなどなかったのです」
「わかった、もういい。メガマスがなくなった後の話には興味はない」
支社長はもう辟易したように言った。
「先生はその後も、新空間、ならびに”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化に向けてアプリコット社に残るおつもりですか？」
「いや、私もアプリコット社には捨てられる身ですよ。”ＳＰＲＩＮＧ”の欠陥が生まれたのも、私の能力のなさが原因ですからね。アプリコット社が真に欲しているのはアナタです。猫目技師」

小野は猫目技師の方を見た。しかし彼はかぶりを振る。
「今は将来のことを考えている時ではありません」
「その通りです、小野先生。メガマスが破滅するのは避けられないかもしれませんが、そんなことよりも大切なことがあります。新空間にいる人達の救出に、協力してくださいますね？」
　桝田が言った。支社長の会話を盗聴していたのなら、これから自分たちがプロジェクトチームの研究施設に向かい、新空間のプログラムを変えようとしていることは知っているはずだ。
「そうですね。これ以上、人として大切なものを失うわけにはいきませんね」
「早速我々はその研究施設に向かいましょう。おふくろと玉子君と子ども達は、引き続きここに残って新空間との連絡を頼む」
「わかりました」
　一郎が指示を出した。その他の人間は、弁天の研究施設に向けて出発した。

#26　さよならユウコ　part10

廃ビルを出た後のヤサコとイサコには、他のメンバーと違って明確な目的地がなかった。ミチコとの接触が目標だが、まさか彼女が平然と道を歩いているとは考えられない。自分たちをこの空間に招いたのがミチコだったとしたら、いずれ彼女は自分達の前に現れるであろうと2人は考えていた。

「まあ、私達とミチコにとってゆかりのある場所に行ってみるのも手だが、それよりもまずフミエ達との連絡手段の確保が先だな」

ヤサコもイサコの意見に異論はなかった。

「どうするの？知り合いのメガネか携帯電話を借りるのが一番早いと思うけど」

「そうだな」

「私の家まで来てくれるなら、京子やお母さんのメガネを借りることも出来ると思う。行くところがあるなら寄り道になるけど」

それが最も確実かなとイサコは思う。

「いや、大丈夫だ。そうしよう。行くアテがないわけじゃないが、それで絶対にミチコに会えるわけじゃないしな」

そうして2人はまずヤサコの家に向かうことにした。中津交差点から第三小の方向に歩く。まだ第三小が立地しているところを見るに、ここが異空間であることを実感する。ヤサコは数日前の事故で、まさにあの校舎の中を彷徨った。

小走りでその正門前を通りがかった時に、ふとイサコは足を止めた。

「どうしたの？」

「いや。人影が見えた気がしたから」

「人影？どこに？」

「屋上だ」

イサコは第三小の屋上を見上げて言った。しかし2人が目を凝ら

しても、誰も姿を現さない。
「誰もいないみたいだけど」
「気のせいだったか。校門が閉まっていて生徒の姿もないところからすると、この日は休日らしいな」
「そうね」
「ただ、なんというか。この空間だけどこか異質な感じがする」
イサコに言われてヤサコは校舎全体を見回した。確かにイサコの言おうとしていることはわからなくもなかった。口では説明しにくいが、どこか周囲と切り離されているような、この敷地内は別の空気が流れているような、そんな気配がする。
「ここは、私やフミエちゃんやアイコちゃんが迷いこんだ場所だから、もしかすると特別な場所なのかも」
「あるいは、現実世界には既に存在しない建物だからか……少し調べてみたい気がするな」
「じゃあ、メガネを取ってきたら、もう1回ここに来てみる？」
「そうしよう」
とにかく連絡手段の確保が先決だ。2人はこの不気味に佇む校舎を後にして、再び走り出す。
ほどなく2人はメガシ屋に到着した。
「じゃあ、ちょっと借りてくるから、ここで待ってて」
「ああ」
ヤサコはイサコを玄関で待たせて家の中に上がった。
リビングには誰もいない。どうやら母の静江は買い物に出ているようだ。休日のようだったが、父の一郎の姿もない。ヤサコは子供部屋に入った。
「あれ？姉ちゃん？」
きょとんとした顔で京子が座っていた。
「ああ、京子。悪いけど、メガネ貸してくれない？」
「つかってるからや～だ。だいたいお姉ちゃんメガネ忘れていったじゃん！」

「え？」
　ヤサコが机を見ると、そこにはぽつねんと自分のメガネが置かれていた。この世界の自分は、どうやらメガネをかけずに外出したらしい。あまり自分でもそういうことはないと思うのだが、とりあえずそれはラッキーだった。しかしイサコの分がないと、後々はぐれてしまっては不便だ。
「ねえ、京子。どうしてももう1つメガネが必要なんだけど、どうしてもダメ？」
「ダ～メ。今デンスケのさんぱつしてるもん」
「デンスケ！？」
　ヤサコは反射的にメガネをかけた。
　しかしそれで目の前の景色は一変した。部屋全体が黒く塗りだくられ、銀河の星屑のような光が散り散りに輝いている。まるでまた異空間に入り込んでしまったようだった。京子は消えて、もちろんデンスケもいない。
　すると背後から肩に手が置かれたようだった。エメラルド色に光る手に、自分の身に起こっていることをヤサコは理解する。ミチコが現れた。
「行きましょう。ユウコ」
　ミチコが耳元でささやく。ヤサコは首を振った。このまま彼女に召されるままにどこかに行けば、イサコと会えなくなるような気がした。
「私はアナタを止めに来たの！イサコもアナタと話をしたがってる！私をどこかに連れて行くならイサコも呼ぶわよ！」
「私の意志は、アナタ達には変えられない。私はすべてを彼に託したの」
　するとミチコがヤサコの前方を指差した。そこだけ視界が晴れた先にいた人物を見て、ヤサコは言葉を失った。
　ハラケンだった。彼は学校で使う椅子に縛り付けられたように固定されているようで、身をよじり、虚しい抵抗を続けている。する

と彼もこちらに気付いたようだ。
「ヤサコ！」
こんな形で再会するとは思っていなかった。ヤサコは歯を食いしばっている彼の顔から視線を動かすことができず、茫然として声を上げることすら出来なかった。
「ハラケン……」
ヤサコが一番恐れていたことだった。ミチコがハラケンを人質にとるなら、自分はこの世界で正しい判断ができる自信がない。
「これはゲームよ。ユウコ」
ヤサコの動揺を見透かすようにミチコは切り出した。
「アナタ達には3つの選択肢がある。その選択権は、研一にある。
1つ目は、天沢勇子をこちらに閉じ込めるかわりに、詩織以外のここに連れ去った人達を解放し、今夜、全大黒市民を連れ去ることをやめる。
2つ目は、天沢勇子と一緒にアナタもここに閉じ込め、研一は元の世界に戻す。あとは1つ目と同じ。
3つ目。全大黒市民をここに引きずり込む。アナタ達も含めた皆でこの世界で暮らす。
研一にはこのどれかを選ぶように言ってある。決められない場合は、3つ目。私は今夜、全大黒市民をこの空間に引きずり込む」
「そんな……」
信じられないという思いが強かった。ミチコは本当に、そんな決断をハラケンに迫っているのか。どれにしても、ハラケンが苦しむような選択肢しかない。
「さあ、研一。選びなさい」
「するわけがない！そんなことで、僕達を引き裂こうとするなんて」
ミチコは哀れむように微笑する。
「アナタが決断しなければ、大黒市民全員が犠牲になるのよ。もっとも、それが最良の決断ではあるけどね」
「ダメよハラケン！それだけは絶対に！プロジェクトチームは、電

脳体が分離した肉体に、ＡＩを搭載する技術を開発した。ハラケンの肉体にもＡＩが乗り移って、私達は最初、それをアナタだと疑っていなかった」

「そんなものが……」

ハラケンはそこで現実世界で起こっていることを初めて理解した。まさか自分の肉体を自分のＡＩが操作し、自分に成り済ましているとは。

「大黒市民が引きずりこまれれば、皆ハラケンの肉体と同じことをされる。そんなこと絶対に許したらダメ！」

「じゃあ、どうすればいいんだ！？」

ヤサコとイサコを見捨てるつもりなどハラケンにはない。しかし、このまま決断できなければ、最悪の結末に。

その時だった。

「悩むことはないだろう。私が１人犠牲になればいい話だ」

「イサコ！」

いつの間にか彼女がその空間にいた。ヤサコとミチコ、そしてハラケンの間に立ちはだかって彼女は続けた。

「１つ目を選べ、原川。天秤にかけたらわかることだろう？１つ目を選べば、私１人がここに残るだけですべてが丸く収まる。お前はヤサコを連れて現実世界に帰れ」

「何を言ってるんだイサコ？君は半年前、ヤサコに手を引かれてミチコの元から帰って来たんじゃないか！そんなあっさりとヤサコの手を離して、また闇に戻ろうっていうのか？」

ヤサコは言葉すら発せずに２人のやり取りをただ見ているだけだった。

「結局は、こうなる運命だったのさ。私は、やはりミチコとともに生きていかなければならないらしい。大したことじゃない。現実世界からたった１人の人間が消えるだけだ。それで、大黒市民何十万人、そしてヤサコやアンタの運命を変えることができるなら、安いもんだろう？」

「イサコ！」
　ハラケンは怒りすら孕んだような目つきで叫んだ。
「どうしてヤサコの気持ちを考えてやらないんだ！？去年、どういう思いでヤサコが君を助けにいったのか、それをわかってないのか！？」
「うるさい！そんなことを話していても答えを決められない。確かにあの時私はうれしかった。でも、所詮他人には運命なんか変えられないんだ。つながり合えた、わかり合えた。そんなものは幻想でしかないんだ。人を本当の闇から救えるなんて、思い上がりだろう。どうにも抗えない運命の前に、人の絆なんて脆い。あるいは、一方からすれば重荷でしかない。それをアンタ達が引きずるっていうのなら、私から手を離すまでさ」
　そしてイサコはヤサコの方を見やった。
「悪く思わないでくれ。アンタ達や大黒市民を、私と一緒に闇に引きずりこまれるわけにはいかないんだ」
「ヤサコ……」
　ハラケンは助けを求めるようにヤサコを見ていた。ヤサコは、俯いて、
「・・・・・・わかった。アナタには悪いけど・・・・・・」

　ダイチは急ぎ足でメガシ屋に到着した。ハラケンがここにいないなら、とりあえず廃ビルに戻って玉子の指示を仰がなければならない。あまり期待はしていなかったが、可能性のあるところから調べるほかないのだ。
「おおい！メガばあ！オレだ。開けてくれ」
　メガシ屋の入り口は閉まっているようだった。これでハラケンがここに来ている可能性はまた下がったが、ここまで来たからにはちゃんと確認していこうとダイチは思った。
「いねえのかよメガばあ？」
　木戸をノックしても中から反応はない。今日が休日なら、メガば

あは間違いなく店を開けているはずだが、あるいは、こちらの世界ではとうに閉店しているのかもしれない。

仕方なくダイチはヤサコの家の玄関にまわった。ハラケンが来ているかどうかは、家人に訊ねれば済む話だ。

玄関脇のチャイムを鳴らす。しかし応答はない。

これでハラケンがここにはいないことを確認したダイチは、また廃ビルに戻ることにした。ところが、小此木宅から背を向けて歩き出そうとした時、ダイチは中で物音がするのを聞き逃さなかった。

「あれ？誰かいるのか？」

音のした方は、ヤサコと京子の部屋のようだった。ダイチはもしかしたらと思い、玄関に手をかける。鍵はしまっていなかった。

「なんだよ。不用心だな。んと、これは？」

ダイチはそこにある靴に目をやった。乱暴に脱ぎ捨てられていたのは見慣れた茶色のブーツに、黒のハイカットのスニーカー。

どうやらヤサコとイサコはここにいるようだ。チャイムに応答しなかったのは引っかかるが、ここにいるなら、ハラケンのことを相談しておこうとダイチは思った。

「おっじゃましまーす」

上がり込んだダイチはリビングに誰もいないことを確認し廊下に出る。子供部屋の前に立って、一旦中の様子を探るように耳をすませた。

「……コ！……か！？」

どういうわけか随分と遠くの方から声が聞こえて来るようだったが、ダイチはまさかと思った。今のはハラケンの声ではなかったか。

「ハラケン！」

ダイチはとっさにドアを開けた。そこに広がっていた光景は、息をのむものだった。

真っ黒い空間に、椅子に縛り付けられたようなハラケン、そしてヤサコとイサコ、その後ろにいる光る物体は。

「ミチコか！？」

ダイチは初めてその姿を見た。
たまらず自分もそこになだれ込もうとした。しかし、ドアには結界が張られているらしく、ものすごい勢いで頭を打った。自分が今電脳体であることを実感させられる。
朦朧とする中、ダイチの耳には彼らのやりとりが入って来た。
「悪く思わないでくれ。アンタ達や大黒市民を、私と一緒に闇に引きずりこまれるわけにはいかないんだ」
「ヤサコ……」
イサコが諦めたような口調で言って、ハラケンはすがるような目つきでヤサコを見ている。まさか、イサコは自分1人が犠牲になるつもりじゃないのか。どういう話の流れなのかはわからないが、ダイチはそのことだけは直感した。
「・・・・・わかった。アナタには悪いけど、消えてもらった方がいいかもね」
冗談かと思った。しかしヤサコは真顔でイサコにそう言った。
「おい！ヤサコ！」
ダイチは必死に呼びかけた。ここに来てそれはないんじゃないかと思う。しかし、こちらの声はあちらに届いていないらしい。ヤサコは気付いてないように続けた。
「アナタは偽者なんでしょう？今のイサコが、そんなことを言うはずがないもの」
ヤサコの言葉と同時にどこからかビームが放たれ、イサコの姿は消滅した。ダイチは唖然としてその光景を見ていた。本当にヤサコの言う通り、今のイサコは偽者だったようだ。
「お粗末な幻だったな。さっきまでの私とまるで逆のことを言っていた」
今度は闇の奥から本物のイサコらしい人物が現れた。偽者のイサコを撃ったのは彼女だろう。しかしどこから入ったのか。できればこっちにも教えてほしい。
「目の力が違ったの。今のイサコは、一点の曇りもないような澄ん

だ目をしているから」
　安堵したような表情でヤサコが言う。
「そ、そうか？いやまあ、ついこの前までの私なら、さっきの幻と同じことを言ったかもしれなかった。少なくとも、金沢の事故までの私は……あれから考えることは多かった。シュウイチ達からも、自分が1人じゃないことを教えられた。でも、今の私があるのはお前のおかげだ。ミチコ」
　エメラルドの色の光がろうそくの光のようにわずかに揺れた。それはミチコの動揺なのか。
「あの時お前は言った。天沢勇子が、小此木優子を守れるかどうかを試す。
　大黒に戻った時に、ヤサコと交わした握手で私は億劫になった。果たして私はヤサコを守ることなんてできるのか。
　でも、そうじゃない。できるかどうかじゃなくて、やるしかなかったんだ。今回の事件におけるヤサコの心の傷は深かった。私も、無意識にその傷をえぐってしまったかもしれない。そのことは、ヤサコにきちんと謝りたい。
　だからこそ、今度は私が引っ張らなければならなかった。
　そんな私が、お前の脅しで自分を犠牲にするなんてあり得ない。ヤサコの望まない結末を選ぶわけがない。私は皆と一緒に元の世界に帰る。それしか考えていない」
「イサコ……」
　ハラケンがつぶやいた。ダイチも、彼女の勇ましい立ち姿に見惚れてしまいそうだった。
「……あの時の試験には合格ってところね。だからと言って、状況は変わらないわ」
　ミチコが淡々と言った。するとダイチから見ていたドアの向こうの空間が、次第に遠ざかっていくように小さくなり始めた。ここからどこか違う場所に行くつもりなのか。
「おい！待て！ハラケンはこっちに返せ！」

聞こえないかもしれないが腹の底からダイチは声を出した。ヤサコとイサコはミチコに接触するという目的を果たした。しかし、ハラケンはこちらに返してもらわなければならない。

「ダイチか!?」

するとハラケンが自分の声に反応した。どうやらこちらは見えていないようで、彼は視線を彷徨わせている。

「逃げられないのか!?」

「悪いけど、できそうにない」

ダイチは再び怒鳴り声で訊ねると、ハラケンは悔しそうな表情で返してきた。

「これからどこに行くんだ!?」

「わからない!ああ!ダイチ!」

「なんだ!?」

「廃工場に行って……と会って……いか?」

段々声も聞こえづらくなってきており、肝心なところが聞き取れなかった。

「なんだって!?」

しかし、その答えが返ってくる前に彼らのいる空間ごと消えてしまったようだった。ドアの向こうは、完全なる無の世界に変わっている。

「くそっ!」

ダイチはドアを閉めた。もう1度開いてみると、その向こうは子供部屋に変わっていた。

ハラケンはヤサコ達と一緒にいる。それならミチコを説き伏せることができたら、彼も帰ることはできるだろう。フミエが先輩達を、タケルが宗助を連れ帰れば、自分達の役目は果たされることになる。

しかしハラケンは廃工場に行って、誰かに会えと言った。

一体誰に会えと言うのか。

「とりあえず、報告しなきゃな」

どうしようもなく、ダイチは廃ビルに戻ることにした。

#26　さよならユウコ　part11

大黒市警の取り調べ室では、逮捕された細川と久美子の2人が向かい合っていた。細川を連行してくる際、彼は魂の抜けたような状態だったが、久美子が辛抱強く語りかけたこともあり、ぽつぽつと事件について打ち明け始めていた。

「どうしても、今夜のミチコのテロを阻止するおつもりはないのですね？」

「……僕は、すべてを捨てる覚悟で計画を進めていました。何度も言っているように、もう後戻りはできないんですよ。今からミチコの精神プログラムを書き換えるなんて不可能なんです。私は彼女のＡＩへのアクセス手段を断ち切りました。ミチコにすべては委ねられているんですよ」

ヤサコとイサコがそのミチコを説得しに行ったことは久美子は聞いていたが、細川にはまだ話していない。その話が本当なら、ヤサコとイサコにしか今夜のテロを阻止できないということになるが、久美子もそのわずかな可能性に賭けていた。

その時、彼女のメガネ電話ではなく携帯電話が着信した。

「はい。川畑」

『竹下です。細川は何か話しましたか？』

電話の向こうからはエンジン音が聞こえてくる。車で移動中なのだろうと久美子は思った。

「有力な情報なら、被疑者はミチコの精神プログラムへの外部からのアクセス手段を断ち切ったと」

『なるほど。しかし、小此木さんと天沢さんの説得次第では、まだミチコを止められる可能性は残っているということですね』

「そういうことね。そっちは進展があったの？車の音が聞こえるけど、どこかに移動中？」

『ええ。手短にお話しますと、プロジェクトチームの責任者である

金沢支社長がこちら側に協力してくれることになりました』
「えっ！？」
久美子もどういうことなのか理解ができなかった。
『時間がありませんので、詳しい経緯は割愛させていただきます。それより、細川に大事な話があるのですが、代わってもらうことはできますでしょうか？』
「ええ。それは構わないけど」
すると久美子は細川の方を向いた。
「今メガマス本社の首脳陣や猫目技師と帯同している係長が、アナタにお話があるそうです」
細川は怪訝そうな顔をしたが、それに頷いて応じた。久美子は拡声機能を起動し、細川の目の前に机の上に電話を置いた。
『もしもし？細川さんですか？』
「はい」
『簡潔にお話します。電脳体分離に際して、取り残された肉体は免疫力が著しく低下するという事実を、アナタは御存知でしたか？』
いきなりなんの話だろうと細川は眉間にしわを寄せる。傍らで聞いている久美子も、話の脈絡がわからなかった。
「一応、その可能性があることは頭には入れておりましたが。そんなに深刻なものだったんですか？」
『御存知の通り、詩織さんの肉体の不調が長引いていることからも察せられるかと思います。そのことを調べられていた小野先生は、”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化は難しいとの見解を示しています』
「そうですか」
細川はそのことには淡々としていた。
『詩織さんの精神はこれからずっと新空間の中にいさせるつもりだったんですよね？では細川さんは、詩織さんの肉体をどうなさるおつもりだったんですか？再び”ＳＰＲＩＮＧ”を移植するつもりだったとか』
「いや。詩織の肉体は病院でプロジェクトチームの人に診てもらう

つもりでした。詩織に何かがあれば、ミチコが新空間を崩壊させるということを脅しに使って」

『なるほど。つまり細川さんは、詩織さんの体調管理をすべてプロジェクトチームの方に任せるおつもりだったんですね』

「本当は、私の知り合いの医師に任せるつもりでした。詩織の肉体がメガマス病院に運ばれた日。実は、私はあの廃工場で詩織を回収するつもりでした。その時肉体に指令を出していた沙織のＡＩには、最後にあの廃工場に行くようにプログラムしていたのです。あそこは人目につきませんから」

『そうだったんですか。あの日、アナタが詩織さんを回収する前に天沢さん達が彼女を見つけ、メガマス病院に運ばれた。その後彼女の肉体は、プロジェクトチームの管理下にあったわけですね。仕方なくアナタは、プロジェクトチームに彼女の体調管理を任せることにした。今回のテロで自らが裏切った相手に』

「それしか方法がなかったんですよ」

細川にとっては、直樹のいちいち確かめてくるような口調が不気味だった。

『アナタにとっては悪い知らせになるかもしれませんが、よく聞いてください。”ＳＰＲＩＮＧ”の実用化が困難だと知らされた支社長は、プロジェクト自体を中止とすることを決断されました。小野先生もそれを承諾しております』

「なんだって！？ということは、メガマスは」

『はい。メガマス社長も覚悟をされたようです。政府の支援を取り付けてまで進めていたプロジェクトが中止になる。そして、今のメガマスを取り巻く状況は最悪。必然的にメガマスは解体されることになるでしょう。当然、プロジェクトチームも同様に』

急転直下の事態に、細川も久美子も茫然とした。

「支社長が、それを受け入れたというのか？」

『そのおつもりのようです。細川さん、重要なのはここからです。詩織さんの身柄は、事情を把握している我々警察が保護します。し

かし詩織さんの精神は、どうなってしまうのかわかりません。メガマスが解体される以上、新空間自体が今後も残されるという保証はできないのです』

「なにを……」

明らかに細川は動揺していた。

『脅しで言っているのではありません。新空間も結局は一企業の思惑によって誕生した異物に過ぎないのです。しかもそれは、非常に脆い。実は今も新空間を破壊しようとする2．0が侵入し、こちらも対処に苦労しているところです。そんなところに、大切な娘さんの命を預けていてもいいのですか？』

「だからって、もうどうすることも」

『できないですか！？ミチコを止めなければ、何十万人という人が犠牲になる。アナタの娘さんもそのうちの1人として扱われることになるんですよ！既に体調に異変を来している彼女を、誰かが守ってくれるとお思いなんですか！？』

「もうミチコを止めるのは不可能だ！なんで、こんなことに……」

細川は机の上に両手の拳を叩き付け、肩を震わせていた。

「竹下君。できないことはできないわ。これ以上、細川さんを問いつめても仕方ない」

久美子は諭すように言った。直樹も電話口の向こうで歯がゆいように声を出しているが、もう細川は後戻りができないのだと久美子は思う。彼は自らの手で、退路を断ったのだ。

その時だった。

「沙織に」

「えっ？」

久美子が細川の顔を覗き込む。

「新空間にいる沙織にすべてを打ち明けてください」

細川の声は直樹にも届いたようだった。

『待ってください。沙織さんはもう存在しないはずです』

「細川沙織という存在は、確かに13年前に消えてしまいました。

でも、沙織の魂は、今も残っています」
「１３年前……？まさか、沙織さんというのは？」
久美子は細川の顔を覗き込んだ。
「はい。生まれてすぐに心臓の病で亡くなってしまった、詩織の双子の妹です」
『そんな……でも、戸籍には沙織さんは……』
「記載されていません。医師には死産としてもらったからです。支社長や神崎さん、平松さんは詩織を一人っ子と思っていたはずです」
確かに支社長は詩織のことを一人っ子だと言っていた。実際には、本当に短い間、彼女には妹がいたのだ。
「じゃあ、沙織さんというＡＩは」
「僕がプログラミングしました。詩織はもう、この現実世界で生きられないこと、そして”ＳＰＲＩＮＧ”が実現したこと。それらを考えて私は、詩織の代わりに沙織を現実世界で生きさせようと思いました」
『しかし、彼女は神崎さんに利用された』
いたたまれないような気持ちで直樹が訊ねた。
「ええ。私がプログラムした沙織に、勝手に手を加えて自分の手駒としたのです。この時にはもう、”ＳＰＲＩＮＧ”に対しては見切りをつけていました。沙織もいつか、新空間に送ってあげようと思っていました」
『なるほど。肉体が廃工場で保護された後、ＡＩの沙織さんもアナタの手によって新空間に送られた。しかし、神崎さんは彼女の記憶は消去したと』
「沙織の記憶は常にバックアップをとっていました。沙織は１度すべてを忘れましたが、もう１度自分の使命を思い出して、詩織に会おうとしているはずです」
「アナタは２人を引き合わせるつもりだったんですね。１３年ぶりに姉妹の再会を」
久美子は細川の心中を察して言った。

「恵は、詩織にも沙織のことを話していたようですから。新空間で母と妹と、幸せに暮らさせてやるつもりでした」
『すべてを沙織さんに打ち明けてくれとおっしゃいましたよね？つまり』
「詩織を現実に連れ帰るように、どうにか沙織に伝えてください。詩織がこちらに戻ってくれば、ミチコが今夜のテロを決行する理由はなくなります。沙織は自分が既に亡くなった人間であること、ＡＩであることを知りません。それもすべて伝えてもらってもかまいません」
詩織を守るため、細川は決断を下した。
『沙織さんに、１３年前と同じ思いをさせてもよろしいんですね』
「……はい。沙織は、気弱な詩織を支えるような存在になる。そんな未来を私は描いていました。沙織は、きっと詩織のことを……自分の孤独と引き換えにしても」
「２人がそれぞれの世界で強く生きていくことを願いましょう」
久美子が細川の肩に手を置いて言った。細川は俯き、しばらく言葉を発せずにいた。
「聞いたわね竹下君？後はそっちに任せたわよ」
『はい、必ず』
そうして直樹との電話は切れた。

#26　さよならユウコ　part12

弁天の研究施設に向かい、ひた走る2台の車。支社長の運転する方には桝田、一郎と幹部の1人が、小野の運転する方には猫目技師、大谷、直樹がそれぞれ乗り込んでいる。この2台は通信でつながっており、相互で会話ができるようになっていた。時間がないので、これからの段取りをスムーズに話し合えるようにするためだ。

「1つ聞いていいか?」

支社長は小野に向かって訊ねたようだった。

『なんでしょう?』

「2．0を操作していた空間管理室職員が意識を失って倒れたという話は聞いているな?」

小野は支社長の会話を盗聴していたのでそのことについても把握しているはずだった。

『ええ。進藤君のことですね』

「ヤツはＡＩだったらしい。アンタが操っていたんじゃないのか?」

『何のために?私には新空間を破壊する理由などありません』

「だからこそ聞いているんだ。”ＳＰＲＩＮＧ”を起動できるポジションにいる人間の中で、可能性があるとすればアンタしかいない。神崎の仕業であるはずがないし、細川も同様だ」

プロジェクトチーム内でも、今挙げた人間しか”ＳＰＲＩＮＧ”の起動はできないことになっている。神崎と細川はいずれも新空間が消滅すれば困る人間だ。

『私でないのは事実です。そうでなければ、2．0を阻止するために、こうして協力するはずがないじゃないですか』

「じゃあ一体誰だ?誰がＡＩを」

『おい、まさか』

小野の車に乗っている大谷がある可能性に気がついたようだった。

「なんだ?」

『進藤に一杯食わされたんじゃないか?アイツは、ＡＩに支配されているフリをした』

支社長ほか、桝田、現場にいた一郎もそれには頭を殴られたような衝撃を受けた。

「……可能性は、あるな」

『なるほど。そうして時間を稼ぐつもりだったんですね。プロジェクトチームが本気を出せば、彼を捕らえるのは容易い。だからあえて、自ら廃ビルの近くに飛び込んだ。そして小此木さん達の目の前で倒れてみせ、自分はＡＩだったという印象を与えた。病院に運ばれることによって彼は包囲網を突破し、あとは２．０が新空間を破壊してくれるのを待つだけ』

『そしてあわよくば、自分も罪から逃れようとした。すべてＡＩがやったことだと言い逃れをして』

大谷の言葉は的を得ていると一郎は思った。進藤ならやりそうなことだ。おそらくこれには直樹も同調するだろうが、彼はこの時、久美子に電話をかけていて話を聞いていなかった。

「なぜ近くにいてそれが芝居だと気付かなかったんだ?」

支社長は問いつめるように後部座席の一郎に訊ねた。

「しかし、彼は明らかに体に異常をきたしていました。尋常じゃないほど発汗し、呼吸も速く、体温も下がっていたようですし」

『おそらく、そういう症状が出る薬を隠し持っていたんでしょう。意識を失ったというのも、あながち演技ではないかもしれません。そうしてまで彼は新空間を破壊しようとした。まあ、意識を閉ざしてその責任から目を瞑ろうとしたのかもしれませんが』

小野もかつての教え子である進藤のことはよくわかっていた。

「だとすれば今から病院に人を遣ってもムダか」

『やはり、猫目技師の作戦をとるしか２．０を止める方法はないようですね』

その時、直樹は久美子との電話を切ったところだった。

『皆さん。お話があります』

直樹は今の電話の内容、細川から聞かされた話をかいつまんで全員に伝えた。

「沙織さんは、１３年前に亡くなった詩織さんの実の妹……細川技師は、彼女の無念を汲んで、ＡＩとして復活させた……」

「そういうことだったのか……神崎もそれは知らなかっただろうな。まあ、知っていたとしても、ヤツは同じことをしたかもしれないが」

『私もなぜ細川君が詩織さんの肉体を別人のＡＩに支配させようと思ったのか、あの時は理解に苦しみましたが、なるほど。そういうことだったんですか』

小野がつぶやいた。詩織の肉体に沙織のＡＩを移植するというのは、神崎と細川と小野の間での密約で、支社長はその件については金沢のイベント事故が起こるまで神崎から聞かされていなかった。細川の希望を実現することは、プロジェクトにおいて必ずしも不可欠な要素ではない。神崎が勝手にそれを認めたのも、支社長が反対するとも思ったからだろう。その後神崎は、勝手に沙織のＡＩを操作して彼女を自分の操り人形にした。それには、金沢におけるミチコの暴走を止めるという必要に迫られた部分があったが、細川の心中は穏やかではなかっただろうと一同は思った。

『でも、新空間に沙織がいるというのはこちらにとっては都合がいい。沙織とイサコは金沢の一件で深く結びついた。その２人なら、詩織さんをこちらに連れ戻せるはずだからな。細川も、ようやく自分の過ちを認めたようだな』

大谷の言葉に直樹も頷いた。

『そうですね。天沢さんには、まずは沙織さんと接触するように伝えましょう。そのためにも』

「通常空間と新空間をつなぎ合わせる」

支社長だった。今まさに自分たちが彼女達のためになさねばならぬことだ。

間もなく車は研究施設に到着した。全員が車を降り玄関をくぐる。

そこで狂気に歪んだような表情の神崎と鉢合わせになった。その脇には体つきのいいスーツ姿の男達が控えている。政府が寄越した情報機関の工作員だ。彼らは”ＳＰＲＩＮＧ”の実現への障害となる者を押さえ込むためにいる。その彼らが神崎と一緒にいる理由も、大体察しはついた。

「神崎。空間管理室本部長のところに行く気だったな？」

神崎は怪訝そうな表情で支社長の後ろにいる桝田や猫目技師達を見て返した。

「ええ。ウチの無能どもや電脳局にはどうしても２．０を止められないということで、直々に本部長を締め上げに行くんですよ。支社長こそ、これは何のマネですか？」

「本部長のところに行く必要はない。ヤツにも２．０を止められない。唯一止められる人物は、自らの手でその意識を閉ざした」

支社長は神崎の問いには答えなかった。

「なんですかそれは？」

「とにかく。２．０を止めるには彼らの協力が必要だ。小野もそれを認めている」

「ほう？では、桝田社長や猫目技師も、我々に協力してくださるのですね？」

醜くこちらに微笑んだ神崎に大谷は反吐が出そうだった。

「お前みたいな廃人に誰が協力するか。支社長がこちらに協力を申し込んできたんだよ。勘違い野郎」

「なに？」

脇いた男達が大谷を組み伏せようと前に出たが、支社長がそれを制止させる。

「本当だ。この研究施設は、これから彼らに預ける。ご苦労だったな神崎。お前には休暇を与える」

「支社長。自分が何をおっしゃっているのかわかっているのですか？彼らにこの研究施設を預ける？すなわちそれは、プロジェクトの成果のすべてを、彼らに委ねるということになるんですよ？」

とても笑える話ではないはずなのに、神崎の顔の筋肉は緩みきっているらしく、その陰湿な笑みを崩さない。
「はっきり言おう。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”はすべて白紙に戻す。とても今のまま進めても、実用化できる見込みはない」
「あん？」
「お前、桐野詩織の偽のカルテを私に提出しただろう？実際には彼女の肉体は長らくＡＩに支配されていた影響で著しく免疫力が低下している。ほんの数日前にＡＩと入れ替わった原川研一にも同じ兆候が見られる。これで今夜、ミチコによるサイバーテロが実行されても、とても”ＳＰＲＩＮＧ”によって市民を復活させることは許可できない」
その言葉には神崎はもちろん、情報機関の工作員も困惑しているようだった。
「桐野詩織や原川研一の体が弱かっただけかもしれません。たったそれだけのことで、これまでの成果を捨てようなど愚の骨頂」
「猫目宗助はどうなんだ？お前のことだ。ヤツに体調の異変があっても、こちらには報告が上がらないようにしていただろう？」
「そんなこと」
神崎の目が一瞬泳いだのを支社長は見逃さなかった。
「図星か。これで３／３じゃないか。こんな致命的な欠陥に目を瞑って、実用化することこそが愚の骨頂だ」
すると神崎は開き直ったように反撃を開始した。
「たかが３人中３人がそうであったとして、データとして信頼のおけるものではありませんよ。仮に欠陥が存在したとして、”ＳＰＲＩＮＧ”が招く被害がどれほどのものであったとしても、”ＳＰＲＩＮＧ”を捨てることによってメガマスが崩壊するという筋書きに比べれば、些細なことじゃないですか。今夜のテロのこともあります」
「些細だ？」
「メガマスこそが世界のすべてです。メガマスが崩壊することによ

り、世界経済に生まれる空洞の方がよほど恐ろしいですよ。支社長は、私が私欲や野望のためにプロジェクトを進めていたとお思いのようですね」

「違うのか？」

「とんでもない。私は誰よりメガマスのことを思って常に最善を尽くしてきたつもりです。今回のプロジェクトにしても、メガマス再建の切り札として位置づけているからこそ、私は計画の推進を強行しているのです。それを支社長は、あっさりと諦めると？所詮外様の発想ですよね」

神崎は支社長をあざ笑うかのようだった。

「バカな。メガマスはメガネに不具合があることを隠し通し、数々の事故でそれが世間に知られて今の窮地に追い込まれた。お前は”ＳＰＲＩＮＧ”の欠陥には目を瞑って実用化を急ぎたいようだが、それは同じ過ちを繰り返すことになるだけだ。虚構をつぎはぎに縫い付けてお茶を濁し続け、いつかまた疑惑の目が向けられる。そんな延命処置に、何の意味がある？」

「メガマスを生かし続けることに意味があるのです。世界経済の中心、その象徴たる我が社は、どんな形であれ存在し続けるべきなのです」

そこで大谷が遮った。

「つまらんゴタクを並べんじゃねえ。お前はメガマスなんかより人権についてもっと考えるんだな。企業のため、国家のためとか謳って、何でも許されると思うなよ」

「なにを」

「政府には私から伝える。今夜テロが実行された場合、特殊部隊には市民のレスキューをしてもらう。明日大黒から人がいなくなったとしても、被害者の電脳体が戻るまで彼らの体調管理もできるよう、医師団の要請も」

市民の電脳体が連れ去られた場合に備えて、極秘裏に被害者の体に量子回路を取り付けて”ＳＰＲＩＮＧ”を起動させる準備を神崎

は進めていた。政府から要請したその実行部隊には救急活動を行ってもらおうと支社長は考えていた。

「それこそバカな話ですよ。政府がそれを認めるはずが」

「全責任を私が負うつもりだ。メガマス金沢支社のプロジェクトチームが設計した空間が暴走した結果、多くの大黒市民が異空間に連れ去られた。マスコミにはそう報道させる。プロジェクトに政府が関与したことは、もちろんもみ消されるだろう。だがそれでいい。政府は史上最悪の電脳事故の後始末をするだけだ。私にどんな罪が着せられようと、かまわない」

「きれいごとです。メガマスグループ全体も当然責任をとらされて、解体されることは確実。そうして生まれたメガネの利権の空洞が、さらなる混迷を生むかもしれないんですよ。世界経済規模でその悪影響を考えたら、全大黒市民の命どころの話ではなくなります」

「いや。もうメガマスの後任は決まっています。アプリコット社です」

そこで小野が神崎の前に進み出た。

「先生……まさか、我々を裏切ったんですか？」

「いえ。失敗に終わったプロジェクトに投じた資金を回収するのです。プロジェクトの実現が確実なものだったとすれば、アプリコット社はいつまでもアナタ達の味方だったでしょう」

「なんと狡猾な……」

神崎の笑みはついに消えた。底なしの沼に落ちるメガマスから手を切り、あわよくばその後釜を狙うアプリコット社。これまで自分が愛してやまなかったメガマスに対するその仕打ちに、神崎の中に激しい憎悪が沸き上がる。

「すでに真実はアプリコット社へ。アプリコット社から政府に伝えられているはずです。アプリコット社は今回の騒動の裏事情をすべて把握しています。その意向に、政府が逆らうことはまずないでしょう」

するとタイミング良く工作員達のイヤホンに情報機関本部からの

指示が飛ばされたようだった。彼らは支社長から神崎の側にその体を向け直した。

「そんな……」

「責任を追及されるのは、あくまでメガマスの上層部、つまり私達です。アプリコット社とてこれからの電脳システム再構築に向けて、そのノウハウを知るメガマス全体を潰したりはしないでしょう。社員のほとんどは、今すぐ路頭に迷うことはないはずです」

桝田が神崎に言った。果たして神崎が愛していたのは、メガマスの社員だったのか、それともメガマス社そのものだったのかはわからない。いずれにせよ、アプリコット社に買収されることによって、多くの社員は守られるはずだ。もちろん、自分を含めた幹部達が切られるのは避けられない。

「世間を知らないボンボンが。簡単に言ってくれる」

「地に堕ちて、私も勉強しなければなりません。そこから這い上がるのは決して簡単なことではないでしょう。でもいいんです。今回のことは私にも責任がありますから。よりよい未来を作る為に、メガマスを解体させます」

「先代はきっと泣かれるでしょうなあ」

「お前も獄中で泣いてろ」

大谷が吐き捨てた。すると力なくへたりこんだ神崎は、工作員に両腕を抱えられて立ち上がらされた。

「すべてが終わるまでどこかに幽閉しておけ」

支社長が指示すると、神崎は彼らに連行されるように研究施設の奥に消えていった。

「すまない。茶番が長くなった」

「いえ。それより、早く新空間の管理室へ案内してください」

猫目技師が言って、すぐに支社長と小野はその施設に案内した。本社の地下にある管制室のような、無数のコンピューターが並ぶ部屋だった。

「すぐに設定変更のプログラムを立ち上げます。設定の仕方などは、

竹下さんの方でわかりますか？」
　この施設の主である小野が確認した。
「大丈夫です。猫目先生や大谷さんにも手伝いしていただきます」
　新空間計画の発案者である直樹を中心にして、彼らは設定変更プログラムの作成に取りかかった。

#26　さよならユウコ　part13

兄である宗助を現実世界に連れ戻すためにヤサコ達と共に新空間へと入ったタケルは、まっすぐにかつて兄弟で住んでいたマンションへとやって来た。

鍵はかかっていなかった。タケルはそこに宗助がいるのだろうと思い、そのまま上がり込む。しかしそこにいたのは宗助ではなかった。

「あら、どうしたのタケル？」

「か、かあちゃん……」

タケルは目を丸くした。リビングのソファーに座り読み物をしていたのは、現実世界では病気で入院中の母だった。

タケルの母は入院生活が長く、とてもすぐに退院はできないはずだった。現実世界では、今も普通の生活を送れるほどに回復はしていない。そんな母が、この世界ではこうして兄弟と一緒に暮らしているらしい。兄はその暮らしをどう感じているのだろうとタケルは思った。

「兄ちゃんどこに行ったか知ってる？」

「仕事でしょ？管理室の」

確かに宗助はあの夏の頃は嘱託として管理室に務めていた。その立場を利用して、裏工作をしながら古い空間の通路を開こうとしていた。

「市役所に行ったら会えるんだよね？」

「それはアナタの方がよく知ってるでしょ？」

母の柔和な顔に、タケルの胸は痛んだ。現実世界の母は、長い入院生活の疲れや宗助のことがあるからか、最近はお見舞いに行っても笑顔を見せることは少なかった。

もう1度、母のこの顔を見ることはできるのだろうか。そう思うと、タケルは涙が出そうになった。もしかしたらこの世界にいる宗

助も、同じ気持ちになったかもしれない。
　でも、だからこそ宗助は連れ戻さなければならない。いつまでも彼が幻想の中に逃げ込んでいる限り、いつかの家族の平穏は2度と手に入らない。
　たとえ宗助が戻ってきたとしても、それには長い時間がかかるだろう。しかし、大切なことは目を背けないことだ。父も、そうして戻ってきた。自分の中にある願いを信じている限り、そこへとつながる道は途切れないだろうとタケルは思っている。
「兄ちゃんに大切な話があるんだ。ちょっと、会いに行ってくる」
「今すぐじゃないとダメなの？お仕事の邪魔をしないようにね」
「うん。あ、そうだ。ちょっと僕のメガネが壊れちゃって。母ちゃんの貸してくれない？」
　タケルはヤサコ達との連絡手段のことを思い出した。
「壊れちゃったの？仕方ない子ね。そこのテーブルに乗ってるから、持っていきなさい」
「ありがとう。ねえ、母ちゃん」
「まだ何かあるの？」
　タケルは言おうか言うまいか迷った。しかし、この母とはこれでお別れするしかない。
「体、大切にしてね」
「……変なこと言うのね。わかってる。もうアナタ達に心配はかけないから」
　タケルは頷いて返した。これが自分たち兄弟の描く未来だと強く思った。

　マンションを後にし、タケルはすぐに市役所へと向かった。途中、母から借りたメガネを使って、他のメンバー達の報告も確認した。フミエの書き込みによれば、２．０の狙いはミチコにあるようだが、この世界に長くは居られないというのは変わらない。
　そうしてタケルが市役所に辿りついた時、タイミングよく宗助が

建物から出て来た。これから愛車に乗って外出という様子の彼に、タケルは声をかけた。
「兄ちゃん！」
「おお、タケル。どうしたんだ？」
タケルが宗助と直接顔を合わせるのは実に半年以上ぶりだった。先月の廃ビルの空間事故の後にも、タケルは警察に逮捕された宗助に対面できなかった。もっとも、その宗助は本物ではなくＡＩであるが。
しかし、こちらの宗助にとっては久しぶりの再会ではない。彼はこちらの世界のタケルとずっと一緒に暮らしているので、顔は毎日合わせているはずだった。この再会に特別な感慨がないようなのも納得はできるが、タケルにはそれがやりきれなかった。
「兄ちゃん。話があるんだ」
「なんだ改まって？話なら仕事が終わってから家でゆっくり聞く」
宗助は素っ気なかったが、タケルは構わず続けた。
「僕は、兄ちゃんを連れ戻しにきたんだ！」
宗助はきょとんとした表情になった。
「なんだって？」
「兄ちゃんを連れ戻しに来た。兄ちゃん知ってる？ここは、電脳空間なんだよ。この世界は、全部幻なんだよ」
「いきなりどうしたんだタケル？熱でもあるのか？」
心配そうに宗助はタケルの顔を覗き込んだ。それがタケルには耐えられなかった。宗助は現実世界での出来事を忘れてしまっているのか。それとも、これは現実から目を背けているだけの演技なのか。それが見抜けない自分にもタケルには歯がゆい思いをした。
「僕だよ、兄ちゃん。わからないのかよ。僕は、幻なんかじゃない。兄ちゃんの、たった１人の弟だ」
「それはわかっているつもりだが」
タケルには自分という存在を説明する言葉が見つからなかった。
宗助は首を傾げるばかりだ。

「とにかく、兄ちゃんはこれから本社に行かなきゃならない。話は後で」
そうして宗助が愛車のドアに手をかけたところだった。
「僕は、兄ちゃんの希望の灯を消した。覚えてるだろ?兄ちゃんの計画を最後に潰したのは、この僕だ」
宗助の動き、表情はそこで固まった。何かを思い出しているような、沈黙の間。
「オレの計画は……うまくいった」
「何言ってるんだ?失敗に終わったじゃないか。世界中のイマーゴの子どもを意識不明にして、父ちゃんの研究成果をメガマスに公表させる。僕はそれを許せなかった」
すると宗助はドアから手を離し、タケルの方に向いた。
「そうか、タケル。お前は本当の……」
ようやくわかってくれたかとタケルは思った。
「ここじゃなんだから、そこの公園で話を聞こう」
宗助は市役所の向かいにある公園を指して言った。

公園のベンチに並んで腰をかけた2人。子ども達がメガネで遊んでいるようだが、こちらの話が聞こえる距離ではない。それを眺めながら、宗助は切り出した。
「イヤなことを、思い出させてくれた」
タケルは息を呑んだ。
「僕のことを恨んでる?」
「あれからだいぶ時が経つ。ましてやオレはあの出来事を胸の奥底にずっとしまいこんでいた。意識して忘れようとしていたというよりは、もっと無意識のうちに。最近は、あのことを夢の中の出来事と思うようになっていた。今更恨んでなんかはいない。多分、その時は腹を立てただろうが」
「この世界を、リアルと思おうとしたんだね……」
だからさきほど宗助はタケルの言葉に反応しなかった。この空間

が幻想の世界であることを、宗助は自覚していなかったのだ。
「さっきは胸にガラス片が突き刺さったような気分だった。現実と虚構が頭の中でひっくり返った」
「うん。僕は、兄ちゃんをその現実世界に連れ戻しに来た」
　すると宗助は頭を掻くようにして訊ねた。
「オレは確か、メガマスに復讐するために大黒市に乗り込んだ。そこまでは覚えているが、あとはおぼろげでな……オレの肉体は、今どうなってるんだ?」
　タケルは少し躊躇したが、事実は告げなければならないと思った。
「兄ちゃんは逮捕された」
「なに?」
「兄ちゃん。信じられないかもしれないけど、兄ちゃんがこの世界にいる間に起こったことを説明する」
　タケルは一連の出来事を簡潔に宗助に伝えた。宗助の体は、ＡＩの実験のために使われた。そのＡＩは宗助になりかわって行動し、警察に逮捕されて勾留されている。宗助自身にはとても信じがたい話だったが、やがてそのことへの興味は醒めていったようだった。
「そんな、酷い状況になっているのか……」
　すると宗助は疲れたように立ち上がった。
「兄ちゃん?」
「タケル。オレはそんな世界に戻るつもりはない。悪いが、お前１人で現実世界に戻ってくれ」
　行こうとした宗助の腕をタケルは掴んで言った。
「待ってよ!僕は、兄ちゃんに戻ってきてほしいんだ!」
「バカ言うな。お前がオレの立場だったらどうする?覚えのない罪で獄に入ろうなんて思うか?」
「兄ちゃんだって罪はあるだろ!去年の事件で、兄ちゃんはヤサコやイサコを消そうとしたじゃないか!それに兄ちゃんが大黒に戻ってきたのも、メガマスに復讐するためだった」
　宗助は苦い表情を見せたが、タケルの腕を振りほどいて言った。

「ああ、オレにも罪はある！でもすべて家族のためにしたことだ。この世界では、そのオレの苦労が報われたんだ。家族は、この世界の中にいる」

「幻だろ！？そんなもので満足できるのかよ！兄ちゃんはイサコがお兄さんの幻を追いかけていることを鼻で笑っていたじゃないか！」

「だまれ！お前にオレの何がわかる！以前は勇子のことをあざ笑っていたかもしれない。でもいざ自分のこととなると、楽な道を選んでしまうのも仕方ないと思えた。それは人それぞれだ。オレのことを弱い人間と思いたいなら、そう思えばいい」

「僕はそう思いたくないんだ！」

タケルの目には涙が溢れていた。

「兄ちゃんは、弱くはない。やり方は間違っていたけど、でも、兄ちゃんは家族を取り戻すために必死だったじゃないか」

「……この期に及んでおだててもムダだ」

宗助はつい顔を背けてしまう。

「兄ちゃんが戻ってくれれば、いつかくるはずなんだ。僕達本当の家族が、また一緒に笑いあえる未来が」

「何を根拠に」

「……父ちゃんが、戻ってきたんだ」

宗助は体中に電気が走ったような気がした。

「……まさか、父さんが？今までどこに？」

「アメリカのある企業に拾われたって。僕らの前に戻って来なかったのは、僕達の安全を確保するためだって」

「本当なんだな？」

「こんな嘘をついてまで兄ちゃんを引き戻すつもりはないよ」

自分の中に沸き上がる感情が宗助にはわからなかった。生きているかどうかもわからなかった父は、自分たちのために海外に身を隠していた。しかしそのために、自分がどれほどの思いをしてきたか。連絡を寄越すことすらも叶わなかったのか。喜びや怒りが混ざり合わさったような言いようのない気持ちが胸の中を支配する。

ただ、その中にもう1度会いたいという気持ちがあるのは偽らざる事実だった。

「そうか……父さんのことを、メガマスはどう考えている？」

「メガマスは、父さんの研究の成果を公表するつもりだった。でも、そのメガマスも今は内部分裂してるからどうなるかはわからない。父さんだって戦うために戻ってきたんだ」

「その戦いの果てには、お前の言う、本当の家族がまた一緒に笑える未来がくる？」

宗助は揺れ始めていた。この世界の幻に本当に満足しているのかどうか、自問してみる。確かにこの世界には、自分の知っている本当の家族はいない気がする。みんな、どこかで違っている。

「実際、この空間は安全じゃないんだ。今だって、２．０がこの空間を抹消しようと侵入してる。僕もあやうく撃たれかけたんだ」

「なに？２．０だと？」

「この空間を消そうとしている人もいるんだ。兄ちゃんがいるのは、そんな不安定な世界なんだ」

確かに電脳空間など、所詮現実世界の意志によってその運命は左右される。宗助もそれはよくわかっていた。死は現実世界よりも身近にあるのかもしれない。

しかし、死にたくはないと宗助は思った。去年の事件の直後の絶望の中ですら、復讐という希望を燃やしてまで自分は生きながらえた。

今の自分はもう、未練の塊であることを宗助は自覚していた。この世界で手に入れた幸福は、たとえまがいものであったとしても、ひととき彼の心を満たしたのだ。その虚構に身をうずめて、いつ訪れるかわからない死に怯えるよりも、現実世界で、自分の罪を見つめ直し、そして、ゼロから自分の望む未来を創りあげていく方が、よほど魅力的だった。それが楽な道とは思わない。しかし、その先に本当の幸福があるのなら、自分の心にムチを打つことはできると宗助は思った。

「……わかった。タケル。オレは現実へと戻る」
「に、兄ちゃん」
涙でボロボロになった顔を上げたタケルを見て、宗助は苦笑した。
「オレは自分だけが満ち足りていればいいと思っていた。でも、やっぱりお前にも満ち足りていてほしいと思う。そんな顔して目の前で泣かれたらたまらない」
「そんなにひどい顔かな」
「ああ、ひどい。でも、こっちのタケルはそんな顔して泣くことはない。たとえ弟でも、こんなオレにそうして泣いてくれる人がいてくれて、嬉しいよ」
自分の本当の居場所は、この弟のいる場所だと宗助は思った。
「まだまだやり直せるよ。兄ちゃん」

「……というわけで、ハラケンと詩織さん以外のミチコに連れ去られた人達は、ここに集まったというわけね」
フミエ、ダイチ、タケルは廃ビルに戻って話し合っていた。大黒中の先輩達も互いに連絡を取り合って、全員がこの場所に集まっていた。
「じゃあ、2回にわけて現実世界に戻ってもらおう。タケルは、アニキと一緒に帰ってもいいんだぜ？」
ダイチがどうするつもりか問うように訊ねる。
「でも、ハラケンや詩織さんがいるし」
「ダイチの話じゃ、ハラケンはヤサコとイサコとミチコとどこかの得体の知れない場所に行ったって言うし、詩織さんも多分ミチコのそばにいるはずだからね。とりあえず私達の成すべきことは達成できたわ」
「じゃあ君たちも」
「ミチコに連れて行かれたヤサコとイサコとハラケンがどうしても心配だってダイチが言うからさ、私たちはもう少し残ってヤサコ達の居場所を探してみる。それに付き合うことはないのよ」

ダイチは目の前でヤサコ達が消えてしまったことを悔やんでいた。
その彼の失敗の挽回に、フミエも付き合うという話になったのだ。
「でもまだ2．0は片付いてないし、2人を置いて僕だけ帰るのは」
「心配しなくてもいいわ。2．0なんかにやられるつもりはない」
「タケルはこの世界の状況を、向こうにいるオバちゃん達に伝えてくれねえか。向こうと連絡するのに、いちいち通路を開閉していたんじゃ空間が不安定になるしな」
ダイチとフミエが説得で、タケルはしぶしぶ折れた。
「わかった。そうするよ。なんとか、ヤサコ達を見つけ出してくれ」
「ああ。ぜってー見つけて一緒に帰ってくるから心配するなって」
話はそれでまとまった。まずは大黒中の先輩達から5人。その後で残りの2人とタケルと宗助が現実世界に戻ることになった。

#２６　さよならユウコ　ｐａｒｔ１４

『小此木さんからの伝言です。平松部長の医療プロジェクトで新空間内にいた患者、大黒小の教頭先生含む１１名の電脳体は、こちらの施設からの操作で現実世界への帰還を果たしたとのことです』

研究施設にいる直樹から廃ビルで待機中の玉子への電話だった。

「わかりました。新空間のプログラム変更の状況は？」

『間もなく完了します。そちらに動きはありましたか？』

「いえ。皆さんが出て行かれてからは何も」

と、玉子が報告した。フミエとは定期的に連絡を取るように言いつけたが、その時間をまわっている。何をしているんだと玉子はいらだっているところだった。

『そうですか……それから、大事なお話があります。新空間の中の子と連絡が取れましたら、お伝えしてもらえますか？』

「は、はい。なんでしょうか？」

直樹はそこから、細川から聞いた沙織の話を玉子に伝えた。その内容は、メガばあやガチャギリ達も音声を拾って聞いていた。

「沙織が、新空間の中にいる？」

驚いたのはシュウイチだった。彼はもう、金沢で共に戦った沙織とは会えないものだと思っていたのだ。

「しかも、沙織は１３年前に亡くなった詩織さんの実の妹さんを、ＡＩで甦らせた人格だった……」

玉子もおかしいと思っていた。なぜ細川は詩織の肉体が実験に使われることに異議を唱えなかったのか。立場上逆らえなかったとは言うが、玉子にはそれがずっと理解できなかったのだ。しかし、やはり細川には理由があったのだ。

『はい。その沙織さんは、今も新空間の中で詩織さんを探しているようです。できれば、彼女と合流して詩織さんに会ってもらうように、彼らに伝えてもらえませんか？』

「つまり、詩織さんと沙織の再会を果たさせると」
それは細川の最後の望みだった。
『その際、沙織さんにはすべて打ち明けてください。沙織さんも、詩織さんのことを思っているはずです。詩織さんが電脳空間で生きることを、沙織さんは望まないでしょう』
「沙織にすべてを伝える……残酷ではないですか？彼女は人の手によって生み出されたＡＩです。ケンちゃんのＡＩと同じ思いをさせるのは」
『お気持ちはわかります。もちろん、沙織さんがどう思われるかはわかりません。ですが、詩織さんを救うことを考えれば』
自分勝手な話だと玉子は思う。しかし、誰もが望むようにならないことはわかっている。ＡＩのハラケンが、電脳空間に戻ることを余儀なくされたように。もはや、自分達が最善と思う策を打つしかないのだ。
「……わかりました。中と連絡が取れたらそう伝えます」
『よろしくお願いします』
玉子が直樹との電話を切ろうとしたその時だった。
「お、おい。暗号が反応してるぞ」
ガチャギリが気付いた。廃ビルのフロアーに仕掛けた暗号がまた起動している。つまり、新空間とのリンクがつながるということだ。
「本当か！？竹下さん。こちらの暗号が反応しています。内部で動きがあったようです。詳しい報告は後ほど」
『わ、わかりました！』
玉子は電話を切って暗号を確かめた。しばらくしてブラックホールが出現し、中からエメラルド色の光線が５つの暗号のそれぞれに放たれた。
「誰か来るようじゃぞ！」
メガばあが叫ぶ。玉子は暗号から離れ、一同は固唾を呑んでその様子を見守った。
電脳体の転送が完了したのは、５名の少年、少女だった。

「先輩達よ！」
その姿を見てアイコが叫んだ。その瞬間、中にいるフミエ達がしっかり役目を果たしたのだと一同は思った。
彼らの電脳体はしばらくフリーズしていたが、やがて気がついたように元に戻った。
「ここは？うまくいったの？」
少女の1人が辺りを見回して言う。そこに玉子が歩み寄って訊ねた。
「アナタ達、一昨日大黒中で事故に遭った吹奏楽部の部員ね？」
「は、はい、そうです。あの、ここは」
不安そうな少女に、玉子はふっと微笑んで言った。
「安心しなさい。ここは現実世界よ。アナタ達は、戻って来たの」
「ほ、ほんとうですか！」
すると少女はまた別の少女と抱き合って歓喜し、少年達も大きく安堵のため息をついた。
「とりあえず状況を聞かせてくれる？吹奏楽部の部員はあと2人いるはずよね？」
「はい。向こうにいる橋本さんの話では、2回にわけて私達を転送するって。次に残りの2人と、あともう1人男の子と、ちょっと年上の男の人が転送されてくるはずです」
「男の子、年上の男の人……わかったわ。じゃあ危ないから、アナタ達はこっちに来てくれる？」
玉子は彼らを東側のフロアーに連れて行った。続いて西側のフロアーにガチャギリがまた新しく暗号を設置する。しばらくするとその暗号も起動し始めた。
一同は再び新空間から電脳体の転送が完了するのを待った。こちらに到着したのは少女2名、タケル、そして、
「宗助……」
その姿を見て玉子の中に言いようのない感情が生まれた。玉子も本物の宗助とは実に半年ぶりの再会だ。色々な意味で、この時を待

っていたのだと玉子は思う。でもやはり、自分の中にある彼に対する感情の中で、最も強いのは怒りだった。

転送が完了してしばらくして彼らも気がついた。宗助は、玉子やメガばあが待っていたことに驚いているようだった。

「久方ぶりじゃの。宗助」

メガばあが車いすのまま彼に近寄る。玉子もそれに続いた。その間に吹奏楽部の少女2名は、先に到着していた仲間の元に駆け寄っていった。

「……ああ。あの事件以来か。というより、アンタとはあの時も顔を合わせたわけじゃない」

宗助は何とも気まずそうだった。

「ふん。どうじゃ、現実世界の空気は？」

「居心地が悪い」

「相変わらずのようじゃの」

メガばあは苦笑した。玉子が続いて訊ねる。

「アンタ、罪を償うために戻ってきたんでしょうね？」

「……罪か。自分自身の犯した範囲でなら、悔いを改めるつもりだ」

彼の言いたいことはわかった。自分に成り代わっていたＡＩが犯した罪まで被るつもりはないということだ。

「アンタの罪は、これから色々と調べが入ってから確定するでしょうね。それを反省する気にはなったのね」

「自分自身と家族のためだ。あの電脳空間の中で、色々と未練ができてしまったからな」

玉子とメガばあは顔を見合わせる。タケルが訳知り顔だったので、そのことは後からタケルに聞こうと思った。

「まあええ。お主がそう思っとるんなら、ワシらはこれ以上口は出さん。タケルのためにも、己と真摯に向き合うのじゃな。過去の積もる話は、お主が刑務所から出て来てからじゃ」

「それまで生きてるんだなバアさん」

「まだ５０年は生きるつもりじゃ。さすがにお主もその間には出所

できるじゃろうて」
「執念深いな」
時間がないので宗助との話は止めて、玉子はタケルに中の状況を確認することにした。
「ケンちゃんは？どうして一緒に戻らなかった？」
するとタケルは言いづらそうにして返した。
「ダイチの話だと、ハラケンは今、ミチコに囚われているって。同じ場所にヤサコとイサコもいて、皆揃って空間ごとどこかに行ってしまったって言ってたけど」
「空間ごとどこかに行った？どういうことだ？新空間の中にまだ異空間があるのか？」
「それはないじゃろう。あるならあの警察官が何か言い残しとるはずじゃ」
メガばあが落ち着けと言う風に玉子に言った。
「じゃあ、ミチコは新空間の中を自由に行き来しているということか。それなら好都合だ。ミチコを狙っている２．０をそれで翻弄できる。ヤサコとイサコが既にミチコの元にいるのなら、ケンちゃんと詩織さんと一緒に帰って来ることも期待できる」
「そうなってくれるといいんじゃが、２．０がミチコを捉えるのも時間の問題じゃと思うぞ」
大黒市の広さしかない新空間だ。ミチコがどれだけ居場所をくらまそうとしても、２．０の索敵能力があれば十分に捉えられる可能性はある。
「で、フミエとダイチは？」
「ミチコの居場所を探るって。ダイチはヤサコ達のいる空間が消えていくのを目の前で見ていたらしいんだ。それを責任に感じて」
玉子はため息をついた。ダイチとフミエの役目はタケルとともに終わっている。にも関わらず危険極まりない新空間に残るとは何事だ。
しかし、玉子はそこで直樹との話を思い出した。

「まだダイチ達は通路の近くにいるはずだな？」
「た、たぶん」
そして玉子は消えかかっているブラックホールに向かって声を上げた。
「ダイチ！フミエ！聞こえる！？」
かなり遠くなっているが、それでは向こうの声も返ってきた。
「ああ！聞こえるぜ！」
「アンタ達、そこに残るつもりなのね？」
「言っとくけど、説得されてもそっちに帰るつもりはねえからな。オレたちは連れて行かれたハラケン達の居場所を探すんだ」
「タケルから聞いたわ！アンタ達を止めるつもりはない。ただ、１つだけこっちの指示を聞いて」
「指示？」
だいぶダイチの声が小さくなってきた。リンクが切れかけているのだ。玉子は早口で指示を伝えることにした。
「そっちに桐野沙織さんがいるはずなんだ。ミチコの居場所を探すなら、まずは彼女と合流してくれ。できるなら、彼女を詩織さんに会わせてやってくれ」
「さ、沙織？おい、どういうこ……」
ダイチが聞き返そうとしたところで会話は途切れてしまった。これで向こうにちゃんと伝わったかどうかは怪しい。
玉子はすぐに新しい暗号を設置して、もう１度通路を開こうとした。しかし、さきほどとは違っていつまで経っても起動する気配がない。
「こんな時に」
当然、ダイチも先ほどの指示では何をすればいいかわからないはずで、もう１度指示を仰ぐに違いなかった。向こうで暗号を設置していないはずがない。
そこで玉子は直樹に電話をかけて訊ねることにした。

一方新空間に残ったダイチとフミエ。
「おかしいな。暗号が起動する気配がないぞ」
こちらも暗号を再度セットし、玉子からの聞き取れなかった指示をもう1度確かめようとしていた。
「それにしても、オバちゃんが沙織って口にしたのは何だったのかしらね」
「沙織って、桐野沙織さんのことだろ、多分」
「でも沙織さんはＡＩで、今は記憶を失っているって話じゃなかった？沙織さんが宿っているのは詩織さんの肉体で、その詩織さんはずっと入院したままのはずよ」
「わっけわからんなあ」
事態がどういう風に動いているのか見当がつかない。せめてもう1度玉子と話が出来たらと思うが、暗号はどうも反応を示さない。現実世界とリンクが途切れてから5分以上が経過している。
「どうするよ？このままだと埒があかんぞ」
「って言うより、私達が帰ることができるたった1つの道が塞がったのかもしれないわ」
ダイチはぞっとした。
「怖いこと言うなよ」
「その可能性もあるのよ。もうちょっと後先の事考えてから行動しなさいよね」
ここに残るという選択をしたのはダイチで、フミエはそれがほっとけなくて共に残ったのだ。
「……悪かった。オレが残るなんて言わなかったら、お前も付き合わなかったのにな」
「やめなさいよ。私も覚悟を決めて残ったのよ。ヤサコ達だって心配だし。アンタに謝られることはないわ」
フミエはため息をついて言った。ダイチらしくない。先ほどまでの威勢は一体どこにいってしまったのか。
「いや、やっぱりお前を帰すべきだった。オレとタケルでヤサコ達

の居場所を探るべきだったな」
「なに？私が足手まといとでも言いたいわけ？」
心底申し訳なさそうにするダイチの顔にフミエは腹が立った。はっきり言いたければ言えばいい。今まで自分たちは相手を傷つけ合って高め合ってきたのだ。
「違う！それは違う。オレにとってお前は、そうだな、捨てられない荷物っていうか」
フミエは吹き出してしまった。
「なにそれ？結局お荷物だって言いたいんでしょ？」
「え？あ、いや。違うんだっての！」
「何が違うのよ？」
ダイチはほとんどしどろもどろだ。しかしフミエはなぜか、このダイチを見ていらいらとした気分が消えていった。少なくとも、自分のことを低く見てそう言っているわけではないというのはわかる。
じゃあこの動揺は一体何なのか。フミエはダイチの言葉を待つことにした。
「……本当は、ここにお前を来させたくはなかったんだ。ここは危ない。お前に何かあったらと思うと、オレは気が気じゃなくなる。
でも、やっぱりお前にはお前の意志があった。オレにはお前が止められなかった。いや、お前の側にオレから止められる筋合いがなかったと言う方が正しいか。
だから、通路が開く気配のない今、オレは気が気じゃない。オレのせいでお前を巻き込んだと思うとな。
でも今、お前がこうしてそばにいるから、オレはかろうじて踏みとどまってるんだと思う。もし、お前がいなかったら、こんな胸が張り裂けそうな思いをしなくて済む。でもお前がいなかったら、オレは1人で歩いていけないと思う」
フミエは言葉が出なかった。一体どこでこんなセリフを覚えたのだろう。今はただ、驚きしか心の中にはない。でも、今の言葉が咄嗟に出て来たものだったとしたら、自分こそダイチを見誤っていた

ということになる。
そう言えば、自分はダイチを見上げていないか。小学校まではほぼ同じ身長だったはずだ。なのに、少し顔を上げないとダイチと視線が合わない。あんな恥ずかしい言葉を言った後で、顔を背けたいのはこちらの方だ。しかしダイチは、真っすぐにこちらを見据えている。
フミエはなぜか、身長のことが頭に来なかった。そして、この目を背けてはいけないと思えた。
「ずっと前から言おうと思ってた。フミエ。オレはお前のことを……」

『はい、竹下』
玉子からのコールですぐに直樹は電話に出た。
「原川です。まずは報告事項。大黒中で事故に遭った吹奏楽部員全員と猫目宗助の電脳体が帰還。猫目タケルの電脳体もこちらに戻ってきました」
『そうですか、うまくいったんですね。彼らの電脳体については、メガマスの方が病院に、猫目宗助の電脳体についてはうちの係の者と桜井検事が拘置所に移送する手はずになっています。彼らはもうしばらくそこに待機させてください』
「わかりました。それから、先ほどから新空間とのリンクがつながる気配がないのですが、どうしたんでしょうか。まだ中にいるダイチとフミエに指示を出さなければならないのですが」
『ああ、それはですね、先ほど新空間のプログラム変更が完了した関係で、それが反映されるまでしばらく新空間にアクセスできない状態なんですよ。もう少しすると、こちらからの一方的なアクセスが可能になるのですが』
直樹達は、通常空間から新空間への一方からのアクセスでリンクがつながるように設定を変更した。すなわち、ダイチ達とはいつでも連絡がとれるようになるということだ。

「タケル。向こうの世界で、ダイチ達はメガネを手に入れたの？」
「うん。確かダイチはデンパの、フミエは相原さんのを借りたって言ってたけど」
それを聞いて頷き、玉子は直樹との会話に戻った。
「竹下さん。プログラム変更が完了したら、こちらから新空間にいるダイチ達に電話をかけることは可能ですか？」
『向こう側の電話番号はわかりますか？』
「ええ。現実世界と同じ番号であれば」
『同じはずです。新空間は去年の夏の辺りの現実世界を忠実に再現したところから時間軸がスタートしています。そのメガネ所有者がこの半年の間に番号を変えていなければ』
そこで玉子はデンパとアイコに最近メガネ番号を変えたかどうか確認した。２人ともメガネを買ってから変えていないと返した。また、新空間の時間軸がスタートしてまだ２ヶ月も経っていない。向こう側のデンパやアイコが番号を変えている可能性も低い。
『それなら可能です。直接この電話を、ダイチ君達につないでみましょう』
「お願いします！」

「ずっと前から言おうと思ってた。フミエ。オレはお前のことを……」
言い切る前に、ダイチのかけていたメガネが着信音を鳴らした。この時に全身全霊をかけていたダイチは完全に心が挫かれた。フミエの顔を覗き込むが、またバツが悪そうだ。なんとも気まずいこの空気を振り払うために、ダイチはこの憎らしい電話を取らなければならなかった。
「もしもし？」
『私だ。聞こえているか？』
玉子の声だった。なるほど、玉子はこの世界でも空気が読めないらしい。

「今取り込み中なんだ。後にしてくれよ」
『なんだ取り込み中って？って言うより、私だぞダイチ。これは現実世界からの電話だ』
　確かにデンパのメガネに玉子から至急の電話がかかってくるとは考えにくい。ようやくダイチの頭の中に、今の状況が蘇った。
「現実世界？どうやったんだよ！？直樹さんの話じゃ、新空間から現実世界には電話をかけることはできないんだろ？」
『その直樹さん達が、プロジェクトチームの本拠地に乗り込んで新空間のプログラムを変更したんだ。これからは通路を開閉しなくても、お前達に指示が出せる。そちらのメガネのＩＤもわかっているから、これからアンタ達の動きもモニターできるそうだ』
　それは便利にはなったが、ずっと監視されているようで心が休まらない。今の瞬間も見られてなかっただろうかとダイチは不安になった。
「ねえ、さっきから通路が開かないのはどうしてよ？」
　フミエが訊ねる。
『プログラムの変更が反映される間、一時的に新空間とのアクセスが不通になっただけだ。今はまた暗号を使えばリンクはつながるようになってる。アンタ達の帰り道がなくなったわけじゃない。安心しろ』
　それにはダイチもフミエも胸をなで下ろした。
「んで、追加の指示はなんだったんだ？沙織がどうとか言ってただろ？」
『ああ、手短に話す』
　玉子は沙織が新空間の中で姉を探しているかもしれないことを２人伝えた。彼女と詩織を再会させるのが、細川の望みであり、それが詩織を現実世界に帰すことにもつながると。
「そんなことになってたの。とにかく、私達はすぐに沙織さん探しに行く。どこにいるかわかるの？」
『位置は割り出せない。その新空間の中というのだけは確かだ』

「それで探し出せるはずが」
フミエが嘆いたその時、ダイチがひらめいた。
「いや待て。実はハラケンが別れ際に言ってたんだ。廃工場に行けって」
「駅向こうの廃工場？なんでアイツがそんなこと？」
「ハラケンも誰かに会えって言っていたんだ。それが誰なのか聞き取れなかったけどな」
なぜハラケンがそんなことを言ったのは定かではない。しかし、
「でも、そうね。廃工場って言ったら」
「ああ。沙織さんが倒れた時にいた場所だった」
黒客メンバーとイサコ、大谷で沙織を追っていた時の話だ。
「脈絡がないことはないのね。ハラケンがなんでそんなことを言ったのかはわからないけど、まずはじめに探すとしたらそこね」
２人の間では話がついた。
「聞いた通りだオバちゃん。オレたちは今から廃工場に行く」
ダイチとフミエは早速廃ビルを飛び出し、廃工場へと向かうことにした。

#26　さよならユウコ　part15

ダイチとフミエが廃工場に移動するまでの間に、玉子は電話で沙織にまつわる話の詳細を伝え、指示を出していた。
『沙織と接触できたら、すべてを彼女に話してくれ』
「すべて？」
『沙織自身がＡＩであること。詩織が現実世界に戻ってくるためには、彼女はその空間に残らなければならないことをだ』
信号に引っかかったところで、ダイチはフミエと顔を見合わせた。
「いいのかよ？そんなハラケンの時みたいなことを言って」
『仕方ない。彼女達の親である細川技師がそう言っているんだ。それに現実的に考えても、事実を告げるしかないだろう。沙織も、自分だけがその世界にとどまらないといけない理由を知る必要がある』
「イヤな役目を押し付けるのね」
フミエが言った。ハラケンの時にしても、あれが本当に正しい判断だったかどうか自信がない。いつも、考えうる中で最善の道を選択しているという風に自分に言い訳をしているような気がしてならないのだ。
『不満なら私が電話で彼女に伝えてもいい。金沢のイベント事故から、私と沙織は顔見知りだからな』
「それは面倒だ。オレたちが何とか説得する。誰がそれを伝えようと同じことだ」
もう時間もあまり残されていないのだ。夜までになんとかミチコを止めなければならない。ダイチが見たミチコの様子だと、ヤサコとイサコだけでそれが果たせるかどうかは微妙だ。そのミチコの冷徹な心を揺さぶる鍵は、沙織にあるのではないかとダイチは直感していた。
２人は間もなく廃工場に到着する。そして、敷地内で茫然と佇む少女を発見した。

「ハラケンの言った通りだったな。ということは、ミチコに捕まる前にハラケンは沙織に会っていたのかもしれないな」
ダイチが安堵したように言う。ここに沙織がいなければ、完全に手詰まりになるところだった。
「あの、沙織さんよね？」
フミエが声をかけた。すると少女はすがるような目で振り向いた。
「私を知っているんですか？」
「ええ。初対面でこう言っては気味が悪いかもしれないけど、私達はアナタのことを知ってる。私達は、アナタをお姉さんである詩織さんに会わせるためにここに来たの。私は橋本フミエ。こっちはダイチ」
フミエが素早く自己紹介をする。沙織の表情からは地獄で仏に出会ったような驚きが読み取れた。
「姉に会わせてくれるんですね！？」
「あ、いや。まあオレたちも詩織さんの居所を知らないんだ。ミチコの近くにいると思うんだが、ミチコは知ってるよな？」
「ミチコを知っているんですか！？ついさっき、ミチコは私の目の前に現れたんです。その時、一緒にいた男の子がミチコに連れて行かれて、なのに私は何もできなくて……」
沙織は自分を責めるように俯いた。ダイチはしかし、質問を続けた。
「男の子って、名前はわからないか？容姿はどんな感じだった？背の高い、ちょっと気だるげな男前じゃなかったか？」
「そんな感じの人でした。名前は、原川さんって」
「やっぱりな……」
ダイチもフミエも納得した。ハラケンはなぜか自分達より先に沙織に会っている。しかしそれがなければ彼女が廃工場にいることなど見当もつかなかったので、奇跡のような巡り合わせにこれからの可能性を感じることができた。
「お知り合いの方だったんですか？」

「マブダチなんだ。ここに沙織さんがいることをオレに知らせたのはアイツだ。オレも、ミチコに囚われたアイツを見た」
「そうだったんですか……ごめんなさい。私がミチコを止められなかったばかりに」
「沙織さんのせいじゃないわ。それより、ミチコの居場所はわかるかな？」
彼女は力なく首を横に振った。
「ごめんなさい。わからないんです」
「じゃあ、どうしてここに？」
「……気付いたらここにいて。でも知らない場所なんです。この街に来たのも、多分初めてで」
ダイチとフミエは首を傾げた。そこに会話を聞いていた玉子からダイチとフミエの耳だけに入るように補足があった。
『細川技師は詩織さんの肉体を廃工場で回収するつもりだった。記憶を消された沙織のＡＩには、最後にはその廃工場に行くように仕向けるため、言わば本能的な部分のプログラミングがなされていたらしい。そこに彼女がいるのは、その影響かもしれない。ただ、今の沙織はバックアップされていた記憶データが流し込まれているから、彼女が倒れる以前の記憶もほとんど取り戻している。イサコのこととかも聞いてみろ』
およそ目の前にいる少女がＡＩとは思えないが、玉子の言う通りなのだろう。２人は言う通りに確認してみた。
「質問を変えるわね。アナタは天沢勇子を知ってるわね？」
「はい。私を救ってくれた人で、一緒にミチコと戦ってくれました。天沢さんもお知り合いなんですか？」
イサコの名前を出すと、沙織の声も心持ちうわずったようだった。
「ああ、アイツも大切な仲間なんだ。実はイサコ、天沢勇子もこの世界に来ている。今、ミチコと戦っているところだと思う」
「天沢さんが……あの、１つ訊いていいですか？原川さんも言っていましたが、この世界って異世界なんですか？私、なんでそんなと

ころに自分がいるのかわからなくて。姉がいるのも多分ここなんだろうっていうだけで、確かな根拠がないんです」

やはり沙織は自分の置かれている状況を理解していないようだ。玉子から聞いた話を今こそ打ち明ける時だ。その前に、フミエは彼女の意志を確認した。

「うん。沙織さんの疑問に、私達は答えられる。でも、真実はアナタにとってかなり残酷なものだと思う。アナタが聞きたくないなら聞く必要はない。それでも詩織さんを救うということを考えるなら、アナタは、その真実を知らなければならないわ」

沙織は、それでも頷いて返した。

「自分には、しばらくの間の記憶がありません。なぜだかわかりませんが、多分、単純じゃない事情があるのだと思います。真実を知るのは、確かに怖い気もします。でも姉を救うためだとアナタが言うのなら、私は、その真実と向き合うことから逃げるつもりはありません」

「わかった。落ち着いて聞いてくれ」

ダイチがそう言うと、フミエが説明を始めた。フミエは自らこの役を買って出たのだ。自分達の苦渋の決断から目をそらさないために。

「１３年前、細川亮成さんと恵さんの間に双子の女の子が誕生した。それが、詩織さんと沙織さん。

ところが沙織さんは、生まれてから間もなく病気にかかって亡くなったの。細川さん夫婦の間には、詩織さんだけが残った。だけど、その１０年後、亮成さんと恵さんは離婚をした。詩織さんは恵さんに引き取られた。

そこから2年後、つまり去年。その恵さんと詩織さんが交通事故に遭った。残念ながら、母の恵さんは脳死状態で、助かる見込みはなかった。詩織さんは、そのことにショックを受け、心を閉ざした。

この世界は、電脳の技術者である亮成さんが、詩織さんのために構築した幻の世界。そう、ここには詩織さんの望むもの、元気な母

の恵さんが存在する。詩織さんは電脳体だけを分離させて、そこに乗り移った魂とともにこの世界に閉じこもった。

そして、亮成さんにはもう１つ考えがあった。それは、電脳体が分離した詩織さんの肉体に、１３年前に亡くなった沙織さんの魂を宿らせるというものだった……桐野沙織さんは、ＡＩとして復活した。そのＡＩこそが、私達の目の前にいるアナタなの。

ところが、アナタは亮成さんの所属する研究チームの上司に利用された。その人はＡＩの記憶データを書き換えて、アナタを意のままに操ろうとしたの。アナタは、お母さんやお姉さんの身柄が“彼ら”に押さえられていたから、“彼ら”に逆らうことはできなかったんでしょう？その半分は真実で、半分は嘘・・・・・・アナタの母は助かる見込みはなかったし、お姉さんも現実世界に戻って来るはずはなかった。

亮成さんは、アナタを利用した“彼ら”に反発した。“彼ら”の魔の手から逃がすために、アナタをお姉さんと同じ空間へと送ったの。だからアナタはここにいる。１度アナタはすべての記憶を抹消されたんだけど、亮成さんが取っていたバックアップの記憶をもう１度流し込まれているの。

信じられない話の連続だったかもしれない。でも、最後に私達は、私達の真実をアナタに言わなければならない。……私達の目的は、詩織さんを現実世界に連れ帰ること。それはつまり、詩織さんの肉体に宿っていたアナタの帰る場所がなくなるということ。私達は、アナタをこの世界にとどめ、お姉さんとの間を引き裂かないといけないの……」

長い話の間、沙織はずっと黙って聞いてくれた。どう受け止めているのかは、わからない。しかし１度話し始めたことだ。フミエは話を止めなかった。

こうして話してみて、改めて自分たちが沙織に強いろうとしていることの残酷さをフミエは痛感した。途中、何度か言葉がつまりそうになった。しかし最後まで伝えるべきは伝えた。そして、フミエ

は涙を堪えることができなくなった。
　人の運命を決める権利など誰が持っているのか。それはＡＩも同じだと思う。いや、こうして目の前に存在している人間を、ＡＩと呼ぶことさえおこがましい。
　ただただフミエは沙織を哀れに思い、自分たちの傲慢さを恥じる。免罪符にもならない涙を止められない自分に嫌悪する。
「泣くなって。お前が悪いわけじゃないだろ」
　ダイチは困惑気味に震えるフミエの肩に手を置いた。フミエがそこまで背負い込むことではないとダイチは思う。
「泣かないでください、フミエさん。ダイチさんの言う通り、アナタは何も悪くないんでしょう？」
　戸惑っているのは沙織も同じだった。しかしそれはフミエを心配してのことらしい。
「意外に冷静でいるけど、やっぱりこんな話、すぐには飲み込めないか……」
「……はい。実感がないと言えば嘘になります。でも、アナタ達が嘘を言っているようには思いません。私もたくさんの記憶が飛んでいるんです。自分がＡＩだと言われれば、そうなのかもしれないと思います」
　誰も自分がＡＩだと思いたくはないだろう。しかし、それを否定する決定的な根拠など見つけることはできないのだ。ＡＩのハラケンも、自分が何者なのかがわからなくなってしまった果てに、自分のことをＡＩだと認めた。
「天沢さんも、そのことを知っているのですか？」
「ああ。沙織さんがＡＩで、しかもすべての記憶を抹消されたって聞いた時はアイツ、泣き崩れたらしい。金沢の事件を通して心を開いてくれた沙織さんとの関係が無に帰したことを、アイツはしばらく受け入れられなかったみたいだ」
「天沢さん……」
　沙織は涙が出そうになった。彼女に心配されていることは嬉しい

が、しかし、自分が彼女の想いを裏切ってしまったことに対して呵責を感じていた。
「でも、イサコはアナタがこの世界にいることは知らないはず。アナタに会えば、イサコも喜ぶと思う」
フミエが言った。しかし、それを疑問に思ったダイチは、耳打ちするようにフミエにささやいた。
「確かに喜ぶかもしれねえけど、イサコにとってもツラいことになるかもしれねえぞ。詩織さんを連れ戻すには、どうしても沙織さんとお別れをしないといけないからな」
「だからって、引き合わせないのはイサコに申し訳ないわ。イサコだって覚悟を決めているのよ。ならせめて、もう1度沙織さんと会わせてあげるべきでしょう?」
確かにフミエの言う通りだと思い、ダイチは「そうだな」と、頷いた。
「とにかく、詩織さんもイサコもミチコの側にいるはずなの。一緒に探してくれる?」
「はい。でも一体どこを探すんですか?」
そう訊ねられると答えようがない。まったく探すアテなどないのだ。せめてヤサコかイサコと連絡が取れればと思ったその時だった。
「しっ。ダイチ。聞き慣れた電子音が聞こえない?」
フミエが人差し指を口元に当てて言うと、ダイチも耳を澄ませた。
「ああ。確かに聞こえるな」
ダイチは上空を探し、そして見つけた。2機の2.0が南から北へ、スピードを上げながら向かっている。
「いたぞ!あの様子だと、ターゲットを見つけたんじゃないか?」
2.0のターゲットはミチコのはずであると玉子達は推測していた。
「方向的には第三小?あそこにいるのかもしれないわね。行きましょう!」
「はい!」

早速フミエは沙織の手を引いて駆け出す。ダイチはそのことを玉子に報告することにした。
「2．0を見つけた。2機とも、第三小に向かって飛んでいる」
『本当か!?索敵状態じゃないんだな?』
「迷いなく飛んで行きやがる。あれはどう見ても目標を発見している状態だ」
2．0はみるみるうちに離れて行く。
『わかった、アイツらはこちらでなんとかする。2．0の行く場所にはミチコがいるはずだ。お前達もくれぐれも気をつけて第三小に行ってくれ』
「んなことわかってるっての。それより、本当になんとかしてくれるんだろうな?」
『ショートカットから黒客メンバーに駆逐してもらう』
「アイツらに?」
『そうよ。アンタも安心して背中を預けられるでしょう?』
「いつになく粋な計らいだな」
『絶対にアンタ達を生きて帰す。それがみんなの願いでもあるし、そのための最善の策だ』
「わかった。頼むぜ!」
ダイチはそこで電話を切り、フミエと沙織と、全力で第三小に向かって駆けた。

「聞かれましたか?2．0は第三小付近に向かったようです」
玉子は直樹に呼びかけた。ダイチ達と玉子の会話は、すべて研究施設にいる直樹もモニターしていたのだ。
『ええ。たった今、電脳局の2．0管理用レーダーと、新空間のマップの同期が完了したところです。確かに2．0は第三小方面に向かっているのが確認できます』
新空間の中にいる2．0の位置がわかるように、猫目技師らが管理用レーダーを改造したのだ。直樹はすぐにそのレーダーを玉子の

ウインドウでも見られるように送信した。
「具体的にどのように2．0を撃破すればいいでしょうか？」
『まず、皆さんは旧第三小跡地へと移動してください』
「私達も現地に行くんですか？」
『ええ。2．0を駆逐する作戦は先ほど打ち合わせた通り、ショートカットを用いたいと思います。ただし、ショートカットを新空間へとつなぐのはそちらの子ども達でも手間取るかと思いまして、こちらであらかじめ準備をしておきました。
子ども達は従来通り、通常空間と通常空間をつなぐようにショートカットを出現させるだけで構いません。その出口に当たる方は、新空間の中の全く同じ位置に現れるように調整してあります』
これらの説明はガチャギリ達、黒客メンバーにも届いていた。
「つまり、新空間と通常空間は寸分の狂いなく重なっている状態になっているってわけだな？」
『その通りだ。新空間には第三小の校舎が残っているけどね』
「でも、この2Dのレーダーだけじゃ、2．0の位置をオレたちには正確には把握できないぞ」
今表示されているのは2．0の大まかな位置しかわからないレーダーだ。2．0をショートカットで捉えようとするなら、3Dレベルで位置の把握できるレーダーが必要になる。
『わかってる。そのための3Dの学校敷地内のレーダーも今用意しているところだ。ただし、それがあったからと言って激しく動き回る2．0を点で捉えるのは至難の業であることはわかるね？』
フィールドの範囲は学校の敷地面積×2．0の進路の限界高度となる。その広さから考えると、2．0という対象がいかに小さいかがわかる。それが縦横無尽に飛び回っているのだから、捕捉するのは並大抵のことではない。
「最初っからショートカットをいくつか開いて、2．0がそこを通りがかった時に攻撃するってのはダメなのか？」
『2．0はショートカットを違法物質とみなして攻撃する。罠を張

って待ち伏せしていても、それが離れたところから彼らに攻撃されれば意味がない』

「じゃあ、オレたちは2．0の進路を読み切った上で、正確な位置にショートカットを開く必要があるのか？」

『できれば、こちらのからの攻撃がダイチ君達に命中しないよう、鉄壁などでカバーをする必要があると思う。つまり、攻撃時は2人1組が望ましい』

確かにそれは神業的な技量を要することだとガチャギリは思った。

「よくそんな作戦で2．0を倒せると思ったな。アンタ、かなりこっちのハードル上げてるぞ」

『だからこの作戦には君たちが必要不可欠なんだ。君たち以上にショートカットを使いこなせる人間はいないだろう？敵の動きを読む洞察力、的確な攻撃位置を割り出す分析力、正確な場所にショートカットを開く空間認識能力。どれをとっても、君たちがこれまで数多の電脳戦争をくぐり抜けて培った力じゃないか。僕は君たち以上の電脳クラブを知らない。君たちなら、できると信じている』

そこまで言われると面映いような気がして、メンバー達は互いの顔を見合わせた。自分たちにそれほどの力があるのか。しかもこれは、リーダーであるダイチを抜いての戦いだ。

「おだてているが、常にうまくいくとは限らねえんだぞ。オレたちだって何度も敗戦を経験した」

『わかってる。責任はこの作戦を言い出した僕が一身に背負う。君たちは、何も気負わなくてもいいんだ』

「いやいや、気負うもんは気負うだろ。オレたちは自分たちが失敗したからといって、自分を責めはしない。こんな状況を作ったヤツが悪いんだからな。

でも、オレたちの手には中にいる仲間達の命運がかかっているんだぞ。責任がどうこういう次元の話じゃねえ。アイツらを失うかもしれないってことこそが、オレたちのプレッシャーなんだ。それぐらいわかるだろ？」

『……君たちにとっては、傍観することこそが一番苦痛だと思った。だから、この作戦を立てた。余計なお世話だったかな？』

直樹はガチャギリの心情をはかりかねていた。確かに仲間達の命運を握るのは重荷だ。彼らの友情を取り違えて、自分はまた勝手に事を進めてしまったのかと直樹は思った。しかし、

「いや。やるしかねえんだから、オレたちはオレたちで全力を尽くす。その前に現実問題として、成功する確率を上げる必要があるだろ？アンタの言う作戦はあまりに無理難題なんだから」

『それは、悪かった。でもどうやって確率を上げるって言うんだ？』

直樹はこれが最善の方法だと思っていた。言い換えるなら、最も安全な方法だ。

「ダイチとフミエにも手伝わせたい。アイツら、ロクな武器を持って行ってない代わりに、暗号を持って行っただろ？その中にフリーズ暗号っていうのがあったはずだ。金沢の事件で沙織って子が使っていたっていう」

それに詳しい大谷が直樹に代わった。

『確かにそれは持たせた。だが、あれでも２．０を完全にはフリーズさせられんぞ』

「どのくらい効果はある？」

『そうだな。２．０のリカバリー能力なら、フリーズしても５秒で復活するな』

「５秒の間に２．０の位置を把握してショートカットを開き攻撃する。ほら、飛び回っているのを撃沈するよりも確率は上がっただろ」

ガチャギリは直樹に言い聞かせたようだった。

『でも、そのフリーズ暗号を２．０に命中させる役はダイチ君と橋本さんしかいない。もし２．０が彼らを敵とみなして真っ先に排除しようとしたら、どれほど危険なのかわかって言ってるのかい？』

再び相手が直樹に切り替わる。

「百も承知だ。でも、アンタの言う戦い方よりも確実だ」

『許可できるわけがないだろ！ダイチ君と橋本さんに万が一のこと

があったら』
「アンタはダイチ達に、オレたちの戦いを安全な場所で眺めてろって言うつもりだろ。アンタの言葉を借りると、それはダイチ達にとって傍観だ。うちのリーダーは、自分の身ぐらい自分で守るって言うだろうな」
『命の危険があるんだぞ！仮に彼らがそう言ったとしても、断じて認めるわけにはいかないよ！』
直樹は声を荒らげた。彼にはガチャギリが本気でダイチ達を心配しているのかどうかわからなかった。
「アンタ、オレたちを過大評価するわりに肝心なところ見誤ってるな。オレたちが電脳で大黒の頂点に立てたのは、個々の戦闘力があったからじゃなくて連携力があったからだ。こと仲間を守るってことに対しては、絶対の自信がある。その方が、アドレナリンも出るしな」
『……いや、百歩譲っても、橋本さんにも同じことをさせるわけには』
「フミエだって黒客の呼吸はわかってる。アイツほど黒客を色々な意味で知るヤツはいない。運動神経もいい」
フミエは敵でありすぎた故に、逆に黒客と完全に息が合っている。先の果たし合いを見ても、それは明らかだった。この2人なら、絶対に大丈夫だとガチャギリは思っていた。
『……仕方ない。最初は僕の言った作戦に従ってもらう。それで事態が好転しないなら、最終手段として考えておこう』
「消極的だが、立場もあるだろうしそれでいいことにしてやるよ」
ガチャギリは満足していた。直樹にも彼らの好きなようにさせてやりたいという思いが心のどこかにあったのだ。だから最終的には折れてしまった。
『時間がない。速やかに移動を』
「了解」
直樹の指示通り、黒客メンバーとシュウイチ、アイコは廃ビルを

出て第三小跡地へと向かった。玉子とメガばあもそれに続いて、メガマス幹部の運転する車で現地に向かった。

#26　さよならユウコ　part16

闇が晴れたらそこは第三小学校の屋上だった。イサコはふいに懐かしくなった。目の前にはかつて自分が玉座のように君臨した椅子の山がある。空はいつのまにか鮮やかなオレンジ。時刻もちょうどあの時と同じようだ。思えば、あれがこの街における本当の戦いの始まりだった気がする。

もちろん、イサコは今の状況を忘れてはいなかった。目の前には、エメラルド色に発光して、その正体を隠しているようなミチコ。その脇には椅子に固定されたハラケン。そして自分の隣にはヤサコ。小此木家から離れる際に、ダイチの声も聞こえたような気がしたが、ここには姿が見えない。おそらくミチコの支配する空間に侵入できなかったのだ。

イサコがあの空間に入ることができたのも偶然だった。小此木家に到着して、ヤサコがメガネを取りに行った時、イサコは玄関の外で待機していた。

その時、得も言わぬ悪い予感があったのだ。寒気のようなものも感じた。自信はなかったが、ミチコが近くにいるのではないかという気がしたのだ。

イサコは導かれるようにメガシ屋の脇を抜けて庭に入った。窓の鍵はかけられていなくて、そこから電脳工房に入ることができた。そこでイサコはメガネを見つけた。おそらくメガばあのものだ。

イサコはこの妙な気配の正体を確かめるためにそのメガネをかけてみた。すると、ヤサコと京子の部屋の電脳工房側の壁に大きな黒い通路が開いていたのだ。

その時にイサコは、子供部屋の異変に気がついた。メガネをかけたまま、その通路をくぐった。今にして思えば、メガネをかけていなくても通路には入れたのだ。自分は今電脳体であり、メガネの映像は見せかけの幻ではなく、隠された真実だ。

果たしてイサコは、ミチコ操る自分の幻の茶番劇を見届けた。ヤサコが見抜いてくれるだろうと思って、そこはあえて止めなかった。そしてヤサコは、イサコの思った通りにそれが幻だと気付いた。そこでようやくイサコはミチコの前に姿を見せた。

ミチコはああしてヤサコを試すことで、自分を試していたのだろうとイサコは思う。ハラケンは見事に引っかかっていたが、ヤサコはあれが自分ではないと見抜いてくれた。自分達の中に、もう迷いはない。ハラケンを人質にとられているが、ミチコのどんな脅しにも屈しないだけの信念があった。

なのにミチコは、まだこのくだらないゲームを続けるつもりらしい。先ほどまでヤサコとイサコがかけていたメガネも、今は消え失せている。外部との通信手段を断ち切るためだろうとイサコは思った。

「お前の目的は一体なんだ?私を試すのはもう終わっただろう。私は、とても一人前とは言えないが、少なくともお前と離ればなれになったあの時とは違う。アンタの庇護は必要ない」

「……そうね、勇子。アナタは変わった。アナタに幻は必要ないわ」

発光体であるミチコの表情はわからない。しかし、その言葉には彼女の安堵のようなものが感じ取れた。未だに保護者ぶっていたのかとイサコは思う。ヤサコを苦しめたミチコの所行は、イサコを強くするためとは、ありがた迷惑な話だ。

「今のアンタは、桐野詩織さんのために存在している。今夜のサイバーテロも、詩織さんのためか」

「そうよ」

「なら、なぜ原川に選択を強いるんだ?詩織さんと原川は関係ない。言ってみれば、私たちにも関係ないことだ。詩織さんのためを思うなら、有無を言わず凶行に走ればいいじゃないか」

それは横で聞いていたヤサコも思っていたことだった。なぜハラケンに苦渋の決断を強いるのか。

「そう、詩織とアナタ達は関係ない。私はただ、研一を苦しめたい

だけ。これは研一への罰よ」
「原川がなぜ罰を受けないといけないんだ？原川になんの罪が」
するとミチコは視線をそらすように夕焼け空を振り仰いだ。
「カンナを忘れようとしたから」
「なに？」
ハラケンは驚いたようにミチコを見やった。
「僕が、カンナを忘れようとした？なんだよそれは。僕は今でもカンナのことを忘れていないし、一生忘れるはずがない」
「そう？なら、どうしてメガネからの卒業を機会に、カンナの事故の責任者を裁こうとしたの？」
ミチコは交通事故の再調査のことを言っているようだった。カンナの事故の真相を隠蔽したメガマス旧幹部達を法的に裁くこと。それがハラケンの望みだ。
「それは、カンナの名誉を取り戻すため」
「お気楽なことね。名誉を取り戻したからって、死んでしまったカンナの想いが晴れるとでも思ったの？それは自己満足よ。アナタはカンナの死に対する形ある罪滅ぼしをして、それを代価にカンナのことをきれいさっぱり忘れようとしている。そして、小此木優子の手を取ろうとしている」
「え？」
ヤサコは戸惑いの声を上げた。ミチコはヤサコの方に視線を移す。
「研一の心の重荷はカンナ。研一がアナタの自分に対する好意を知りながら見てみぬフリをしているのは、カンナへの罪悪感があるからよ。だから、交通事故の再調査でカンナに対するケジメをつけようとしているの。そんな研一にカンナの気持ちは理解できない」
「うるさい！君に何がわかるっていうんだ？僕のすべてを知ったような口をきくな！」
ハラケンは怒り狂ったように椅子の上でもがいた。しかしその体は呪縛から解き放たれることはない。
「事実でしょう？現にアナタは、この世界でもカンナの手を取らな

かった。よほど彼女のことを忘れたがっているようね」
「バカ言うな！あのカンナは、僕の知っているカンナじゃなかった。僕だって、この世界で一生を暮らさなければならないと感じた時から、この現実を受け入れようと努力した。でも、カンナだけはダメだった。もう、カンナの死は僕の中で絶対だった。2度とカンナには会えないと頭ではわかっていたんだ」
　それほど単純なことを、どうしてそんな曲解されないといけないのかとハラケンは思う。そして悔しかった。涙が溢れた。カンナに謝りたかった。しかし、なぜ悔しいのか、なぜ涙が止まらないのか、何を謝らなければならないか。それもわからなくなっていた。
　その時、沈黙していたイサコが口を開いた。
「私には、それが原川の罪になる理由がわからない。原川は苦しい思いをしながら、カンナのことを自分の中で整理しようとしているだけだ。きれいさっぱり忘れようとしているわけじゃない。むしろ、カンナのことで罰を受けるべきは私なんじゃないか？」
「勇子。だからこそアナタはカンナを忘れない。自分の“今”の下に彼女の死が横たわっていることを、アナタは自覚している」
「確かに、カンナの死という出来事があったからこそ、今の私は生きようと思っている。彼女の分までとか、おこがましいことは言わないが、それが生かされている者の使命だと思うから。
　でもそれは決して正の感情じゃない。人の死を背負うことは、どちらかと言うと負の感情だと私は思う。原川にしても、それが心の重荷だと言うのなら早く取り払った方がいい。それは前向きに生きていくために必要なことだ。なぜそれを罪だと言うんだ？」
　イサコはカンナのことを一生背負わなければならないと思っている。それを重荷に感じたことはないというか、そんな弱音を吐く資格すらないと思っている。しかし、ハラケンに同じことを強いるのは違う。
「心の中に傷が残っていない限り、人は人を忘れる。ましてや死んでしまった人は、その人を記憶している人から忘れられたら、その

存在は消えてしまうの。死んでしまった人は、それを最も悲しむのよ」

「原川がカンナのことを完全に忘れるはずがないだろう！お前は“その人”を忘れないことと、“その人”に囚われることを混合しているだけだ」

「それを囚われるというのなら、それでもいい。死んだ人が『私のことは忘れて』と言い残すというのは、生きている者の都合のいい妄想でしかない。本当は誰もが大切な人の心の中でずっと生きていたいはずよ」

「お前に死んだ人の気持ちがわかるのか？」

「私も、1度は消え去ったのよ」

イサコはそこで言葉に詰まった。確かにミチコは闇に葬られた。自分とヤサコの手によって。

「あの時の私の気持ち、アナタに理解できる？」

「……私達に、自分のことを忘れないでほしい……か？」

「そう。私のことを記憶してくれている人なんて、アナタ達しかいないから」

するとイサコにはこれまでのミチコの行動の意味のすべてが見えたような気がした。

「ヤサコとの再会……あの時アンタは、ヤサコに爪痕を残そうとした。自分を忘れさせないために」

「そんな……」

ヤサコはミチコの顔を見た。

「あの時の言葉は、未来の予告であり、ヤサコにミチコという存在を刻み付けるためのものだったんだ」

「確かに、私はアナタを忘れかけていた。自分が生み出しといて、それは本当に身勝手だったかもしれない。でも、そんな風に人の心に残ったからといって……」

それでミチコ本人が満足しているのか。そう言いかけたところでヤサコは口をつぐんだ。

「カンナにしても、こうして原川を苦しんでいることを知ったら悲しむんじゃないか？アンタは結局、自分の考えを押し付けようとしているだけだ」

「アナタ達は何もわかってない。私達のような幻は、いつ消えてしまうかわからないし、2度と会いたい人と会えないかもしれないし、その運命すら変えられない。それは死んでしまったカンナも同じ。どんな形であれ、その存在を焼き付ける必要がある。生きている者達の心の中に」

「カンナさんが、そんなことを思っているはずがないわ！」

ヤサコは叫んでいた。かつてハラケンが“あっち”の世界でカンナと再会した時、ヤサコはカンナにハラケンのことを託された。それがカンナの意志なのだと思いたかった。

「それに、問題はアンタだミチコ。私達をここまで連れてきておいて、よくそんなことが言えるな」

イサコは正面からミチコを見据えた。

「アンタは自分の存在を私達の心の中に残そうとしただけじゃなかった。実際、私達をこの空間まで招待した。

一連の出来事を振り返ってみて、私はアンタが私達に助けを求めているんだと思った。本当は、アンタだって今回のテロの実行を不本意に思っていたんじゃないか？現実世界、そして新空間に生きる人達の命を司ることは、アンタにとって重荷だったはずだ。アンタは私との再会の時に、自分の運命すら呪っていた。覚えていないかもしれないけどな。

でも、こうして私たちをここまで連れてきたということは、アンタにもまだ迷いが残っているからだと思う。だからアンタが考えを変えてくれる可能性はあると踏んでいる。

原川の罪のことはもういいだろう。原川がカンナを忘れるなんてあり得ないんだ。原川がこの世界の幻のカンナの手をとらなかったというのも、死んでしまったカンナへの誠実さ故だろう。お前がそれを理解できていないだけの話だ。頼む。原川を解放してくれ」

イサコはミチコの顔を見据えながら、1歩2歩踏み出して言った。
いくらか近づいたところで、ようやく彼女の顔がかすかに見えた。
しかしその時、上空に気配を察した。
「あの音は・・・・・・」
そこにいた全員が同じ方向を向く。聞き慣れた電子音を鳴らしながら、一直線に2機の2．0はこちらに向かってきていた。

#26　さよならユウコ　part17

「やべえ。完全に出遅れたな」
息を整えるように一旦足を止めてダイチは言った。フミエと沙織と、ここまで全力で駆けてきたが、2．0ははるか先に学校に到着しているはずだった。
「ガチャ達も間に合えばいいけど」
黒客が2．0を駆逐するという話は、ダイチからフミエにも伝わっていた。
「すぐに準備はできないだろう。なんとかイサコ達には粘ってほしいが」
ふとそこでダイチはあることに気付いた。
「おい。なんか周りの様子が変だと思ったら、世界がフリーズしてねえか？」
「え？」
フミエも周囲を見回した。場所は大黒駅の少し南の工場地帯で人通りは少ないが、確かにおかしかった。通行人は凍ったように動いていないし、道を走っているはずの車も停止している。
「どういうこと？沙織さんわかる？」
「なんか、時々あるんです。ダイチさんも言ったように世界がフリーズするような瞬間が。初めは錯覚かと思ったんですが、これが何度もあって」
ダイチとフミエは顔を見合わせて首を傾げた。
「ミチコの仕業か？それしか考えられねえな」
「私達が何ともないのは、元々この世界の住人じゃないからかしら？」
「わかりませんが……」
自分たちを取り巻く状況のすべてを理解することは必要ない。自分達が動ける限り、周囲のことは関係ないとダイチは思った。

「とにかく、ミチコも何かアクションを起こしたってことだろ。急いで学校の状況を確認しようぜ」
「沙織さん、走れる？」
「ええ、大丈夫です」
再び3人は全力で駆け出した。

そこから5分ほどで第三小の校舎を目で捉える位置まで来た。気になる2．0は、その敷地の外側の上空を旋回している。
「なんとか間に合った。まだ2．0は攻撃を始めてない」
ダイチはそのことを玉子に報告した。しかしフミエは、その動きを不審に思った。
「なんで攻撃を始めないの？ミチコはいないのかしら？」
その時だった。2機の2．0は学校の校舎に向かって光線を発射した。ところが、それは学校の敷地を取り囲むように張られた薄青色の壁に阻まれた。
「結界か？そう言えば、ヤサコの家の時も結界のおかげでオレは蚊帳の外に置かれた」
「ミチコもただでは通さないってことね」
そうこう言っているうちにダイチ達も正門の前までやって来た。2．0はその上空を彷徨っているが、こちらには見向きもしない。とりあえずダイチは、閉じられた正門の上によじのぼり、結界の存在を確認した。
「やっぱりだ。電脳体であるオレたちも入れないようになってる」
「ヤサコ達は中にいる？」
ダイチは門の上から敷地の中を見渡した。
「いや、ここからは見えねえ。いるとしたらグラウンド側か、校舎の中か」
一旦門から飛び降りる。そこで玉子に指示を仰ぐことにした。
「結界が張られてて中には入れない。それは2．0も同じだ。正門側からは、ヤサコ達がいるかどうかは確認できない」

『念のため、グラウンド側からも確認してみれくれ』
「鹿屋野神社からウラにまわれってか。２．０はこの結界を破れるのか？」
『わからない。あの２．０が何を装備しているのか。標準装備だと、新空間のバージョンに適合しないからほぼ攻撃能力はないけど』
あの２．０は進藤が新空間を破壊するために送り込んだものだ。
標準装備であるはずがないと玉子は思う。
『とにかく、まだこちらも準備が整っていない。アンタ達は鹿屋野神社側にまわって。２．０が違う攻撃をし始めたらすぐに知らせて』
「了解だ」

玉子とメガばあは第三小の跡地に到着した。すでに黒客メンバー達はスタンバイができている。工事関係者には話がついているらしく、鉄扉は開け放たれて広大な敷地に足を踏み入れることができた。
「竹下さん。よく考えてみれば標準装備の２．０では新空間を破壊できません。なんらかの改造が施されているはずですよね。しかし進藤は新空間の情報にアクセスできるような人間ではありません。彼はどのように新空間の情報を」
『情けない話ではありますが、僕自身のコンピューターをハッキングしていた可能性があります。ここのところはずっと慌ただしかったので、そこにつけ込まれたのかもしれません。あの人もある意味ではプロ級のハッカーですから』
「だとすると、まずいですね……」
話し合っていたまさにその時だった。
『オバちゃん！やっぱりだ。２．０がまた違う種類のレーザーを撃ち出してきやがった。結界にはヒビが入り始めてるぞ』
「落ち着いて！アンタ達はとりあえず、結界が破れても中には踏み込まないで」
『わかった。とにかくヤサコ達がどこにいるのかだけ確認する』
そこでまたダイチとの通信を切った。

「こちらはスタンバイができています。後はそちらのレーダー待ちです」

玉子は直樹に呼びかけた。すると４つのウインドウが玉子の目の前に現れた。表示されているのは第三小の校舎を含む敷地を立体的に東西南北から鳥瞰したものだ。

『これが作戦に使うレーダーです。今は対象である２．０が敷地内に入っていない状態なので何も反応していませんが、結界が破られるとそこに赤いマーク映りこんでくると思います』

「できれば、この敷地の中にいるヤサコ達の位置も示してほしいのですが」

『彼らの位置情報もこちらで総力をあげて調べていますが、どうしても捕まらないのです。もしかするとその結界が、位置情報の送信を妨害しているのかもしれません』

つまり結界の中は完全にミチコのフィールドというわけだ。実は直樹達は先ほどからヤサコとイサコと連絡がつかないか試しているが、いっこうにつかまる気配がない。

玉子はその間に黒客メンバーとも相談して、自分はメガばあと手分けしてレーダーの解析をすることにした。つまるところ２．０にも行動パターンはある。管理室にいた時の勘を頼りに、次の瞬間に２．０が取りそうな進路の予想し、黒客メンバーのレーダーに表示するというのが仕事だ。

黒客メンバーは２人１組に分かれて攻撃とカバーを行う。攻撃手のすぐ脇にはショートカットの入り口が常に口を開いており、ボタン１つでそこに強力なミサイルが発射されるように設定されている。

問題はショートカットの出口、すなわち攻撃位置の設定と発射のタイミングだ。攻撃位置は電脳空間を極限まで細分化した座標の数字の並びで決定される。つまり、縦、横、高さに当てはめられた英数字を打ち込むことにより、ショートカットの出現位置を設定するのだ。正確な攻撃位置を判断するのは決して簡単なことではないが、それは黒客がいつも電脳戦争でしていることだ。直樹達の調整によ

り、新空間という未知のフィールドであれ、黒客は普段の電脳戦争と同じように戦える。

黒客の攻撃手は玉子達の分析した予想進路から、最も可能性の高い進路を選び、攻撃位置を設定。２．０がその進路をとった場合にのみ、ショートカットを開いてそこから攻撃する。この時、２人１組のもう一方は、攻撃がはずれた場合にそれが校舎やダイチ達を直撃しないように、鉄壁でそれらを食い止める。

すなわち、カバー担当は攻撃手の攻撃位置を確認した後、その発射角度からミサイルの弾道計算をし、カバー位置を割り出してショートカットを出現させる必要がある。そこに鉄壁を出現させて誤爆を食い止めるのだ。

こんな芸当ができるのは黒客以外においてはいない。それはそれと諦め、リーダー代行のガチャギリは担当を割り振った。ただ、満足にショートカットを使えるのはここにはガチャギリ、ナメッチ、アキラの３人しかいない。基本的にデンパは電脳戦争に参加しないのでそのスキルは磨いていないし、アイコなどは言うまでもない。

そこで最後の１人はシュウイチとなった。金沢黒客のシュウイチはショートカットを使ったことはないものの、電脳スキルという点では申し分ない。ガチャギリはシュウイチと組みアドバイスを与えながら２．０を撃破しようと考えた。ナメッチとアキラは、連携面では心配していない。

この作戦でも手間取るなら、最後にはダイチとフミエに手伝ってもらうという最終手段もある。このメンツなら必ずうまくいくはずだとガチャギリは思っていた。

そんな時にダイチから連絡が入った。

『今、野槌神社の裏手にいるが、第三小の新校舎の屋上にいくつか人影が見える。多分あれがヤサコ達だ』

「わかった！屋上だな！」

玉子が返事をしたその時だった。

『あっ！』

「どうした!?」
『結界が割れた!2．0が屋上に向かっていく!』
玉子がすぐにレーダーを確認すると、赤いマーカーが確かに出現した。同時に、ダイチの言う通り新校舎の屋上にいくつか人の姿が表示されている。
「応戦準備!」
「おう!」
玉子の号令で黒客メンバーは一斉に臨戦体制に入った。

#26　さよならユウコ　part18

2．0が校舎に飛来した時はイサコも一瞬パニックになった。ほとんど丸腰状態の今、2．0に襲われたらひとたまりもない。校舎ごと消されてしまう可能性もある。

ところが、その2．0は結界によってはじかれ、学校の敷地内には入ってこれないようだった。イサコは安心するとともに、この世界でのミチコの力を改めて思い知る。

「邪魔はさせないわ」

彼女には怒りが宿っているようだった。この世界を破壊することなど、彼女が許すはずがない。

しかし、2．0も負けてはいなかった。標準装備のレーザーが結界には通じないと見るや、今度はまた違う種類のレーザーを撃ち始めた。たちまち結界にはヒビが入り、ミチコを動揺させた。

「そんな……」

確かにミチコは新空間の神のような存在かもしれない。しかし、外からの侵入者を制御する力は持ち合わせていないはずだった。

「ミチコ！ここは危ない！さっさと逃げるぞ！さっきやったように、空間ごと移動することはできないのか！？」

イサコが叫ぶように訊ねた。ミチコは力なく首を横に振る。

「すぐにはムリ。短時間で空間を歪め続けると崩壊してしまう」

小此木家からこの校舎の屋上に一同が移動したのは、彼女が空間を歪めたからしい。

「じゃあ、この校舎を脱出して逃げるぞ！」

「ダメよ！私たちが街の中に逃げ込めば、アイツらも追って来るはず。そんなところで暴れられたら、街の人が消されてしまう」

ミチコはどうしてもここを離れるつもりはないらしい。

「だからって、ここで消されるのを待つだけなのか？他に手だてはないのか？」

イサコの問いには答えず、ミチコは空を仰いだ。その仕草の意味するところはわからない。

みるみるうちに結界の亀裂は大きくなっていく。しかしこの状況では自分たちだけで逃げることもできない。それではわざわざミチコに会いに来た意味がなくなる。なりよりミチコが2．0に消されれば新空間は瞬く間に崩壊してしまうだろう。

イサコが思案に暮れているうちに、ついに2．0は結界を破って学校敷地内に侵入した。一直線にこちらに向かって来るが、ミチコはそれを茫然と眺めている。そばには椅子に固定されたハラケンもおり、もはやイサコも正常な判断力を失いつつあった。

「何をしてる！ミチコ！」

2．0の狙いは明らかにミチコだった。しかし彼女はすくんだようにその場から動かなかった。

1機は遠距離からこちらに向かってレーザーを発射した。その一瞬前にイサコは床を蹴った。

「伏せろ！」

イサコはミチコをかばうようにその上から倒れ込んだ。幸いレーザーはイサコのギリギリ上を通過して屋上のコンクリートを破壊した。

「イサコ！」

ヤサコも叫びながら駆け寄ろうとした。しかしイサコはそれを制した。

「近づくな！アンタは原川を守れ！」

しかしイサコの体勢が整う前に、もう1機がレーザーを放った。狙いはミチコにあるが、その上に覆いかぶさっているイサコはとっさに動くことができなかった。

「くっ」

こんなところで死ぬのかとイサコは思った。その一瞬で走馬灯を見たような気がした。申し訳ないという想いで胸がいっぱいになった。

自分は誰に一番謝りたいだろう。
そんなことが頭に浮かんだ刹那、イサコは視界を失った。前が見えなくなった。
直後に耳をつんざくような、コンクリートに穴を開ける削岩機のような音が鳴り響いた。
「イサコ……」
魂の抜けたようなヤサコの声がした。何がなんだかわからないが、どうやら自分はまだ生きているようだ。
自分の目の前を塞いでいるものに触ってみる。
「鉄壁？」
イサコは立ち上がった。上空の2．0はどうやら次の行動を計算中のようで、すぐに攻撃してくる気配はない。
「ヤサコが守ってくれたのか？」
しかし彼女はかぶりを振った。
「違う。鉄壁なんて持って来てないもの」
「じゃあ誰が」
イサコは回り込んで鉄壁を確認してみた。出現したのは1枚だけだと思っていたが、実は3枚重ねられており、うちレーザーが直撃した側から2枚は見事に貫通していた。レーザーが通った細い穴からは煙が上がっている。凄まじい威力だと改めて思った。
「ショートカットが」
「え？」
ハラケンだった。
「ショートカットが現れて、そこから鉄壁が投げ込まれたようだった」
「でも、新空間でショートカットなんて使えるのか？」
半信半疑でハラケンに返したイサコの前に、その黄色い円盤が現れた。
「イサコ？」
壊れたスピーカーのように、その中からかすかに声が聞こえてく

る。しかし、イサコは相手がすぐにわかった。
「シュウ？アンタが守ってくれたのか？」
色々なものがイサコの頭を駆け回っているおかげで、すぐに感謝の言葉が出て来なかった。
「良かった……間に合って」
対して、心から安堵したようなシュウイチの声が聞こえてきた。
「シュウ？」
再度イサコは呼びかける。
「聞こえてるよ。それよりイサコ。また約束を破ろうとしただろ」
「……いや、そんなつもりは」
自分も必死だったので何もかもが頭から吹き飛んでいた。言い訳のしようがないが、ただ申し訳なかった。
「全員で生きて帰ってくるって言ってただろ」
「……もう、言葉も出て来ない。アンタにはいつもいつも心配ばかりかけて」
シュウイチはたま息をついたようだった。
「帰ってきたら説教だな。これまた約束の1つに加えとくから」
「……優しいな。それで許してくれるのか」
「それなら、ジュースでもおごってもらう」
そして仕切り直すように咳払いをしてシュウイチは続けた。
「とにかく、色々あってこっちからも新空間にショートカットが開けるようになったんだ。2．0の駆逐は黒客に任せてくれ」
「黒客？」
すると上空を浮遊している2．0のすぐ脇に別のショートカットホールが開いた。その直後に2．0に向かって数発のミサイルが撃ち込まれた。本物の爆撃よろしく、爆風がこちらまで届く。思わずイサコは顔を手でかばった。
「かってえなおい！あのミサイルでもこんなダメージにしかならないのかよ。さすがは2．0の装甲だな」
今度はそこからガチャギリの嘆き声が聞こえてきた。イサコも大

体状況はわかった。
「了解した！こちらはロクな武器がない。アンタ達だけが頼りだ！」
「絶対助ける。上空の動きには注意していてくれよ」
会話用のショートカットは閉じた。２．０達もいよいよという風に、ランプの明滅が激しくなってきている。屋上にいる一同は、その戦いを見守ることにした。

「初めてショートカットを扱ったとは思えねえ手さばきだな。鉄壁の３枚重ねも見事だった。アンタ、なかなかやるよな」
シュウイチの隣でガチャギリが親指を立てる。あくまで視線はウインドウに集中している。
「そんな、たまたまだよ」
「愛の力ってやつか？」
茶化すガチャギリだったが、シュウイチはまんざらでもなかった。
「かもしれないな。イサコに何かあれば、僕も生きていけないだろうから」
聞いたガチャギリの方が恥ずかしくなるような言葉だった。
「ませてやがるな。金沢黒客は」
「そうかな？」
「でも、これからが本番だ。２．０も覚醒モードに入ったら手がつけられないからな」
「わかってる。足を引っ張らないようにするよ」
シュウイチもウインドウに集中した。２．０は１度校舎から離れて様子を窺ってるようだ。
「２．０はどう出ると思う？オバちゃん」
「今は索敵しているところだと思う。まさか２．０もショートカットから狙われているとは認識してないだろう」
「見えない敵を探してるってことか」
このままの状態が続けば、少なくとも２．０がまたミチコに向かうことはない。

「アイツらをこっちに釘付けにする必要がある。オバちゃん。もう1発かましていいか？予想進路を出してくれ」
「わかった」
玉子はすぐに2．0の次の行動を計算し、予想される進路をレーダーに表示させた。
「じゃあ、このポイントを狙う。カバー頼む」
「了解」
すぐにガチャギリとシュウイチは攻撃位置とカバー位置を設定した。そしてそのポイントに2．0がさしかかった時に、一気に攻撃に出た。
「発射だ！」
レーダー上にミサイルが出現する。ところが、2．0はそれをいとも容易く回避した。はずれたミサイルは、シュウイチの出現させた鉄壁に食い止められて爆発する。
「今の、位置もタイミングも悪くなかったと思うが」
がっくりしたようにガチャギリが玉子に言った。
「そうね。索敵状態にある2．0は、攻撃された時の反応が異常に速いから」
「さっき攻撃が当たったのは、アイツらが目標を見つけて攻撃態勢に入っていたからか。ちくしょう。これじゃまったくの膠着状態だ」
確かにメガばあのサポートするナメッチ、アキラコンビも、もう一方の2．0を釘付けにはしているが、こちらの攻撃も当たっていないという状況だった。
「このままだと日が暮れるまでに始末できねえぞ。ミサイルだって数に限りがあるわけだし」
「作戦の変更を提案してるの？」
「わかるだろ。2．0がまたミチコに狙いをつけるのを待てばこっちにも攻撃のチャンスが生まれるが、さっきみたいな綱渡りは何度も成功しない。あんな狭い屋上じゃ、イサコ達も逃げづらいだろ。他に囮がいる」

ガチャギリの言いたいことは玉子も理解した。本意ではないが、このまま戦いを長引かせるのもまずい。
「直樹さん。作戦を変更したいのですが」
『やはり今のままでは難しいですか』
彼もその申し出を予想していたのだろう、険しい声が返ってきた。
「ええ。このまま膠着すれば、こちらの神経が消耗されて不利になるだけです。相手が機械であることを考えれば、短期戦にしか勝機を見いだせません」
『仕方ありませんね。ダイチ君と電話をつなぎます』

ダイチ、フミエ、沙織の3人は鹿屋野神社の裏手の茂みから校舎の様子を見守っていた。1度屋上に2．0が攻撃した時は肝を冷やしたが、どうやら全員無事のようだった。その後も、なかなか2．0に攻撃が当たらないところを歯がゆい思いで見ていた。
「厳しいよな。あれだけの反射神経を誇る2．0を、ショートカットで攻撃するなんて」
「長期戦になるとまずいわね。今だって誤爆を防ぐように鉄壁でカバーしながらやってるけど、あの連携がいつ乱れるかわからないし」
ダイチ、フミエ揃って心配な目で戦況を見つめていた。再び電話が鳴ったのはそんな時だった。
「はい。ダイチ」
『よう、オレだ』
「ガチャか！なかなか苦戦してるみたいだな」
『ああ。さすがに手強くてな』
懐かしい会話だと思った。電脳戦争をしながら大黒市を走り回っていた時代が思い出される。
「手伝ってほしいのか？」
『わかるか？』
「お前がわざわざ電話して弱音を吐くぐらいだからな。オレの力が必要なんだろ？」

『ぶっちゃけ言うとな』
「アンタ達、ホント通じ合ってるわね」
聞いていたフミエが呆れたように言った。
「まったく世話が焼けるぜ。やっぱり黒客はオレがいねえとダメだな。で、何をすればいいんだ？」
『ああ、危険な仕事なんだが……』
ガチャギリは珍しく言い淀んだ。
「遠慮せずに言えよ水臭い。大方、２．０を引きつけてくれとか、そんなところだろ？」
『ああ、そうだ。お前、フリーズ暗号っていうヤツを大谷のオッサンからもらっただろ。あれを２．０にぶつけてもらいたい。当たれば何秒かアイツらを足止めすることができる』
「そんなんもらってたか？」
ダイチはフミエを見た。フミエはもらったいくつかの暗号の中からそれを探す。
「これじゃない？」
フミエは暗号を焼き付けた手を差し出して言った。
「これなのか？」
「はい。これがフリーズ暗号です」
答えたのは意外にも沙織だった。
「知ってるのか？」
「私も使っていましたから」
ダイチとフミエはまた顔を見合わせたが、彼女がプロジェクトチームの手先として動いていたことを思い出した。知っていても不思議はないと思う。
「これをアイツらにぶつければいいんだな？」
『ああ。やってくれるか？』
「簡単な仕事だ。正直、ここで戦況を眺めてるのも飽きたからな」
ガチャギリに負い目を感じさせないために軽く振る舞っているが、もちろん、ダイチも危険は承知だった。それでも、自分たちがやら

ないと屋上にいるイサコ達が危ないという思いが強かった。
『それで、フミエ』
「わかってるわよ。2．0は2機あるし、ダイチだけじゃ危険だから私にもやれって言うんでしょ？」
『お前も話が早いな。まあ、そういうことだ。正直、お前を巻き込むのは後ろめたさもあるが』
「まだ敵とか味方とか言ってるんじゃないでしょうね？」
『いや、まあ。黒客の至らなさ故の不始末を、いつもお前に処理させてきたような気がするからな。今度もお前の力を頼るのもなんか』
昔、黒客がピンチに陥った時にフミエの力を借りたことがあった。先月の廃ビル事件にしても、黒客がフミエ達を巻き込んでしまったという自覚もある。普段はおくびにも出さないが、ガチャギリもそのことでフミエに申し訳なく思っているらしい。
「大人になりなさいよ。そんな次元の話じゃないでしょ。私たちは電脳クラブで隔てられる以前の、かけがえのない仲間のために戦ってるんだから。今はみんなで1つのチームよ。そのために私は自分ができることをやるだけよ」
『さすが学級委員長の言葉は重みが違うな』
「それにさ、ダイチが、なんか私に言いたいことがあるみたいなのよね。それを聞かずに、ダイチに死なれても寝覚めが悪くなるから」
フミエがダイチを見ながらそう言うと、ダイチは気まずいように視線をそらした。
『……なるほど。まあとにかく、2人ともくれぐれも死なないでくれよ』
「言われなくても」
そして切り際にガチャギリはダイチにささやいた。
『黒客も、これで終わりかもしれねえなあ』
「どういう意味だよ」
『へっ』
ダイチは聞き返すが、ガチャギリは一つ苦笑してそのまま電話を

切った。
「なんだアイツ？」
「とにかく、私たちは行きましょう。沙織さんはここで待っていて」
「でも、私だけ見ているだけなんて。それに危険です」
沙織は心配したが、ダイチ達は笑って言い聞かせた。
「大丈夫だ。オレたちはこれでも電脳戦争には慣れてるから」
「うまくいくよう、ここで祈っていて。絶対にグラウンドには入らないようにね」
そして2人はフェンスに穴が開いているポイントに移動した。ここから忍びこんで、グラウンドで2．0との対決だ。
「……フミエ。さっき言いかけたことだけど」
フィールドに入る前に、昂る気持ちを沈めながら、ダイチは低い声で言いかけた。しかしフミエはそれを制した。
「それは、生きて帰ったら聞くことにする」
ダイチは気持ちを見透かされているような気分だった。どちらにせよ、生きて帰らなければここで思いを伝えても意味はない。
「……そうだな。死なないでくれよ」
「アンタこそ」
2人はフリーズ暗号をしっかり装備して、フェンスをくぐった。

#26　さよならユウコ　part19

ダイチとフミエが敷地内に侵入したと見るや、2．0は直ちに2人を最優先目標に設定した。おそらく、先ほどのショートカットからの一撃も2人によるものと認識しているらしい。2機が揃って2人の元へ急降下してくる。

「きたきた。フミエ！お前はこっちのバックネット側に逃げろ。オレは校舎側に逃げる」

「オッケー！」

1人が1機を受け持つ方が攻撃は避けやすい。そのために2人はグラウンドを真ん中から北と南分け、それぞれのフィールドから出ないように逃げ回ることにした。今回の戦いはあくまで逃げまわって2．0を引きつけることが主眼にあって、暗号での攻撃は隙を見て行うことにしている。

一方、新校舎の屋上から2．0の様子を窺っていたイサコは、グラウンドに2人の姿が現れるのを見ていた。

「アイツら、まさか囮になるつもりか……」

イサコはフェンスを掴んだまま表情をしかめた。気になったヤサコもイサコと並んでグラウンドを覗き込む。

「フミエちゃん！ダイチ君！」

するとダイチがこちらを見上げて手を振ってきた。イサコは思わず叫んだ。

「やめろ！危険だ！囮になるようなマネはしないってさっき約束しただろ！」

「さっきとは状況が違う！勝ち目があるからオレはこの役を引き受けたんだ！こうでもしなきゃ、誰がお前らを守るんだよ！」

ダイチは言いながらもしっかりと2．0の動きにも気を配っていた。

「自分だけカッコつけるな！」

「お前もさっきミチコを助けようと体張ったじゃねえか！人に説教できんのかよ！」
　見られていたのかとイサコは思った。それを言われれば返す言葉がない。切羽詰まった状況だと、考えるより体が先に動いてしまうのは同じのようだ。
「真下だ！」
「ああ？」
　突然のイサコの言葉の意味がわからないようにダイチは声を上げた。
「２．０の真下に入れ！２．０は真下にはレーザーを撃ち出せない！」
「こっちから懐に入れって言うのか！？」
「たとえお前に当たらなくても、レーザーがグラウンドに直撃するのも危険だ。その場に亀裂が入ると、お前が逃げづらくなるんだぞ！ここが電脳空間であることを忘れるな！」
　実際、先ほどミチコを狙って放たれたレーザーは屋上のコンクリートさえも穿った。
「それは、正直想定してなかったぜ！つまり、レーザーすらも撃たせるなってことか！」
「そうだ！ただ、２．０と距離を詰める時は気をつけろ！その時が一番危険だ！」
「鬼！」
「お前が自ら飛び込んできたんだろ！ヒーロー気取って登場しただけだっていうなら、さっさとそこから逃げろ！」
　しかしダイチはイサコの言う通りに果敢に２．０に向かって行った。イサコは自分でアドバイスしたとはいえ、恐ろしくて正視するのも躊躇った。しかし、目を背けるわけにはいかない。あの２人は、自分たちのために戦っているのだ。
　２．０はダイチが近づいてくると見るや、今度は同じように後方に向かって移動し始めた。やはり２．０はある程度敵と距離を取り

たいらしい。
しかしその間に2．0は機体中心部に光を集めている。レーザーを撃ち出す前兆だ。ダイチは咄嗟に地面を蹴った。身を低くして、頭から2．0の下に飛び込む。レーザーはダイチのすれすれを通って、グラウンドに巨大な穴を開けた。
「うりゃあ！」
寸前のところで回避したダイチは、ダイビングした勢いで転がりながら、真上にいる2．0めがけて暗号を投げ、見事命中させた。
『伏せろ！』
直後に声がしたかと思うと、ダイチはそのまま頭を手でかばった。その直後に頭の数十センチ上でミサイルの爆発音が轟いた。ガチャギリの開いたショートカットからの攻撃が命中したのだ。
『大丈夫か？』
現実世界との通信はずっと残っているようだった。爆音を間近で聞いておかしくなっている耳でも、その問いかけはしっかり届く。
「ああ。まだ生きてる。これが本当の戦争なんだな」
『オレはとてもじゃないが行く気はしないな』
ダイチはそこから飛び起きて2．0の様子を窺った。当の2．0は、遥か上空まで一旦退避していた。また仕切り直しかとダイチは思った。
ダメージを受けた2．0は、ちょうどイサコ達からよく狙えるところまで逃げてきた。
「ダイチの使ったあの暗号、確か私も……」
イサコは自分の装備にもフリーズ暗号が入っていたことを思い出した。早速それを準備する。
「くらえ！」
イサコは完全にこちらが見えていなかった2．0に向かってフリーズ暗号を投げ、命中させた。直後にショートカットが開き、ミサイルが撃ち出される。こちらは打ち合わせたわけではないが、しっかりと攻撃のタイミングを逃さない辺りさすがだとイサコは思った。

『イサコの援護射撃があった。これでお前が相手してる方はだいぶダメージを与えられた』
ダイチにガチャギリが報告した。
「フミエの方は？って、あっちのグラウンド穴だらけじゃねえか！」
ダイチはしまったと思った。イサコからのアドバイスをフミエに伝えられていなかった。本人はまだ逃げているが、あのグラウンド状態ではいつ捕まるかわからない。
『フミエの方の２．０はまだピンピンしている。ただ、グラウンドがどんどんえぐれているこの状況で、このまま戦況を長引かせたくはない』
「なんか大ダメージを与える策があるのか？」
『あるにはあるんだが、それにはお前ともう１機の２．０を利用する必要がある』
「ああっ？」

フミエはどんどん追いつめられていた。レーザーが撃ち出されるたびにフィールドが逃げづらく変形する。その上、フリーズ暗号を投げてもかわされてしまうのだ。短時間でもこれだけの神経戦をしていると息が上がってくる。
「どうやったら暗号が当たるのよ！」
フミエは半ばヤケくそになって叫んだ。通信相手はメガばあだった。
『ダイチの方は、２．０の懐にうまく潜り込んで命中させたぞ』
「懐？」
『２．０の真下はレーザーが当たらないのじゃ。レーザーを撃ち出した後の２．０は若干の隙が生まれるて、そこをヤツは狙ったのじゃ』
ダイチのくせにそんな大胆な作戦で事態を打開したのかと思う。しかし、今は２．０ともある程度の距離があるので同じことはできそうになかった。

と言うより、今は防戦一方だ。また2．0がレーザーを放ち、フミエは真横に飛び退く。しかし立っていられるスペースも無くなってきている。逃げ回るにしても、レーザーによって地面に開いた穴や亀裂に足を取られれば命取りになる。フミエはこれまで幾多の電脳戦争を経験しているが、この時ほどヤバいと思ったことはなかった。

その時、

「オラあ！こっちだ！」

ダイチがこちら側に向かって走り来るのが見えた。しかもその背後に、ダイチが相手をしている2．0もくっついて来ている。

「バカ！作戦を忘れたの！？」

フミエは驚いたように止めようとしたが、ダイチは足を止めない。

「これでもくらえ！」

ダイチはそのまま遠投をするかのようなフォームで、フミエ側の2．0に暗号を投げつけた。その瞬間にフミエはダイチの意図を察した。すぐに自分も同じ2．0に暗号を投げつける。

ダイチの投げた1投目はもちろん2．0も余裕の動きでかわした。しかし、間髪入れず飛んで来たフミエの2投目はさすがによけきれなかった。

「あ、当たった！」

フミエは2．0がどの方向に避けるかを読み切ったわけではなく、実はダイチが投げた1投目の軌道が2．0の若干上に逸れるように見え、それで2．0は下に動いて避けるとわかったのだ。おそらくこれはダイチも意図してそう投げたのだろう。こんな場面で自分でもびっくりするほど呼吸が合ったとフミエは思った。

しかし、問題はダイチを追ってきていたもう1機だった。既にレーザーを撃つ態勢に入っている。後ろが見えていないダイチはそれがわかっているのか。

「よけて！」

フミエが叫んだ瞬間にダイチは真左に飛び退いた。すると今度は、

レーザーを放った2．0の前にショートカットが現れた。
「えっ？」
反射的に今度はフリーズしている2．0の方をフミエは向いた。
そこはとんでもない状況になっていた。フリーズした2．0の脇から開いたショートカットから薄青色のレーザーが放たれている。直撃した2．0は瞬く間に黒煙を吹き上げ始め、そしてついに爆発した。
『よっしゃあ！作戦成功だ！』
耳元でガチャギリ達がバカ騒ぎしているのが聞こえる。フミエはその間に、ダイチの元へと駆け寄った。
「大丈夫なの！？」
土にまみれたダイチを引き起こす。
「ああ。アイツらこの期に及んでこんな無謀な賭けに出やがって」
今は恨み言の1つも言っていいとフミエは思う。黒客の立てた作戦は、一方の2．0にレーザーを撃たせて、それをショートカットで吸収した後、もう一方の2．0に同じくショートカットからそのレーザーを直撃させるというものだった。この場で最も強力な攻撃は2．0のレーザーだ。同士討ちをさせることによって一機を破壊させるというのは、いかにも黒客らしい戦術だ。そのためにダイチは寸前のところで背後から撃たれるところだった。もちろん、ダイチもガチャギリを信頼しているからこそ、その作戦に乗ったのだろうが。
「って言うか、あの残りの1機の動きがおかしいぞ」
確かにダイチを追ってきた2．0は先ほどから左右に震えているように見える。自分に仲間を撃たせたことを怒ったのか。さすがにそれはないだろうが、蓄積ダメージの影響かもしれないとダイチは思う。
その時だった。光が機体の一点に集まったかと思うと、四方八方に、デタラメにレーザーを撃ち始めたのだ。
「やべえ！」

そのうちの1発が、フミエの方に放たれるような気がした。この距離で実際に放たれれば逃げようがない。ダイチは咄嗟にフミエの体を抱きかかえるように掴み、近くに開いていた直径2メートルほどの穴に共に倒れ込んだ。

「ううっ！」

ダイチに覆いかぶさられて穴の中に叩きつけられ、フミエも声を上げた。しかし、2．0の放ったレーザーがフミエの立っていた場所を通過していくのが見えた。フミエは全身の血の気が引いていくような気がした。

「あっぶねえ。なんだアイツはよ！」

ダイチはガチャギリを呼ぼうとした。

「ガチャ！残りの1機が暴走し始めた！あの分だと防御機構がうまく作動しないはずだ！一気に潰してくれ！ん？おい！応答しろ！」

しかし向こうからの応答はない。今の衝撃で、かけているメガネが故障したのかもしれない。

ダイチは穴の中から2．0を見上げた。すると、暴走している2．0の斜め上にショートカットが開くのが見えた。

『このお！これは、今までオレに厳しく、時に優しく接してくれた、オヤビンの分だ！』

なんとナメッチの咆哮が聞こえる。直後に2．0に向かって連続でミサイルが撃ち出された。まだ通信は残っているようだが、こちらの声は届いていないのか。

「おおい。オレ達は無事だぞ」

ダイチが報告するが返答はない。すると今度はアキラの声が聞こえてきた。

『そしてこれは、僕の憧れであり、もう永遠に越えられない存在となってしまった、ダイチさんの分です！』

そして再びミサイル連続射出。2．0は警報を鳴らしながら、なんとか宙に浮いているという状態だった。

「だからオレ達は無事……」

「ほら！お前もダイチの仇をとってやれ！」
ガチャギリが急かす声が聞こえる。今度はデンパの声が聞こえてきた。
『なんで、ダイチを……許さない。これは、僕の最初の友達になってくれた、ダイチの……うわあああ！』
三たびミサイル射出。デンパがそのスイッチを押すとは、ダイチは思わなかった。
「デ、デンパ。オレは生きてるから泣くなよ！」
しかし相変わらず応答はなし。そして、もはやフラフラの状態となった２．０にトドメをさしたのはガチャギリだった。
『おのれ！これはな、志半ばではかなく散った、オレのダチであり、大黒黒客の頼れるリーダーであり、そして最大のライバルだった、ダイチの分だあああ！』
最後に余ったミサイルが全部射出され、２．０はついに墜落して爆発した。
「お前ら！だからオレは生きてるっての！でもでかした！さすが我が黒客だ！」
ダイチはガッツポーズを作った。ついに、あの忌まわしき２．０をこの新空間から葬ることができた。それだけで自分たちの命が救われたことを実感する。
『ほれダイチ。お前には沙織さんをイサコのところまで届けるっていう役目があんだろ。さっさと行ってこい』
と、急に先ほどまでのテンションとは打って変わった冷めたガチャギリの声が聞こえてきた。
「ん？あれ？オレのこと死んだと思ってたんじゃねえのかよ？」
『お前がそんな簡単に死ぬなんて誰も思ってねえよ』
「はあ？じゃあオレが何度も呼びかけてたのは」
『もちろん聞こえてた』
メガネが故障したわけではなかった。向こうはダイチの呼びかけを無視していただけらしい。

「おい！それじゃなんだ今の茶番劇は！」
『盛り上げようと思って』
「誰得だよ！」
「ダイチ……」
するとダイチに押し倒されたままのフミエのうめき声が下から聞こえて来た。
「ああ！わりいわりい！怪我はねえか？」
ダイチは立ち上がってフミエを引き起こした。
「怪我は別にないけどね。土まみれ」
「電脳体なんだから気にすんなよ」
対してダイチも傷だらけだった。全くそれを気にしていない素振りが、フミエはおかしかった。
「あんな中、よく生き延びたよね」
「確かに、この有り様を見ると、今になってどんだけ無茶なことしたのかがわかるな」
２人は穴から上がってグラウンド一面を眺めた。全面に渡ってクレーターや亀裂が入っており、爆撃機でも来たのかと思うほどだった。
「ありがと。アンタに助けられなかったら、私は撃たれてたかもしれないわね」
「だから、オレはお前がいなくなったら困るんだよ。守るのは当……」
そこでダイチは先ほどフミエと交わした言葉を思い出した。
「これは帰ってからっていう約束だったな」
フミエは照れたように頷く。
「私たちには、まだやることがあるわ」
フミエはそのまま鹿屋野神社の方に駆け出した。ダイチもそれを後ろから追う。
「沙織さん！片付いたわ！イサコのところに行きましょう！」
「よく、無事でしたね」

彼女も今の戦いを心臓が止まりそうな思いで見守っていたのだ。
「沙織さんの祈りが通じたんだよ。ありがとな。さあ、行こうぜ」
ダイチに促され、フミエも沙織の手を引いて駆け出した。
「新校舎の屋上だな。どこかから中に入れるかな？」
「正面玄関は？」
３人は正門からまっすぐに入ったところにある玄関を目指した。
しかし、
「おい、鍵かかってるぞ」
「誰か中にいないの？」
「さっきの見なかったのかよ。街中の人がフリーズしていたんだ。ここに人がいたとしても、中で固まってるんじゃないか？」
確かにそうかもしれないとフミエは思った。それなら、鍵の開いている入り口を探すまでだ。
そこでダイチとフミエは手分けして入り口を探すことにした。通い慣れた学校。どのルートを使えば新校舎の屋上に出られるかは熟知している。しかしそれでも、
「あったか？」
「ううん、どこも開いてない。そっちも空振りだったのね？」
３人は中庭の新校舎と旧校舎の連絡通路下にいた。目の前にある新校舎の扉も開かないことは確認済みだ。
「ここまで来て蚊帳の外とか勘弁だろ」
ダイチはどこか開いている窓がないか確認し始めた。すると横で同じように調べていたフミエが新校舎４階の教室を指差した。
「あ！ダイチ！あれ！」
「ん？ああ、開いてるな」
確かにその教室の窓の１つが開け放たれていることは確認できた。しかし４階だ。それでは意味がないとダイチは思った。
「『ん？ああ、開いてるな』じゃないでしょ！これで校内に入れるわ！あそこから侵入して、新校舎の扉の鍵を開けてきて！」
「バカ言うな。どうやってあそこまでのぼるんだよ」

「あれを見なさいよ」
フミエはその横を指差した。どうやら4階から1階まで伸びている配管のことを言っているらしい。確かに開いている窓の下には、コンクリートが突き出している部分があってちょうど足場にはなる。配管をよじのぼってその足場に辿り着くことができれば、校内に侵入することは可能だ。
しかしそれはあくまで可能であるということを確認したに過ぎない。正直、あんな配管を4階までよじのぼる勇気はダイチにない。
「却下だ」
「なんでよ！」
フミエが抗議の声を上げる。
「何が『なんでよ！』だ！他人事だと思って言ってるだろ。あんな高さからもし落っこちたら命はねえぞ」
「死にはしないわよ」
フミエはきっぱりと言い放った。少々それにはダイチもムッとした。
「何を根拠に言ってんだよ！」
「忘れたの？この新空間に、“死”は存在しないのよ。直樹さんが言ってたでしょ。この空間の中で電脳体が死ぬ可能性は、それこそ2．0にフォーマットされるぐらいしかないわ」
ダイチはそのことをすっかり忘れていた。確かにフミエの言う通りではある。
「いや、でも、痛覚はちゃんとあるぞ。さっきの戦いで擦りむいたところがまだイテえもん」
「でも、死なない限り大丈夫のはずよ。だいたい、落ちなきゃいい話だし。木登りは得意でしょ？」
フミエにこんなプレッシャーをかけられるのは初めてだった。こんな滅茶苦茶なことを言うヤツだったかなあとダイチは思う。しかし告白を控えている手前、ダイチはあまり不格好な姿を晒したくはなかった。

「ダイチさん……」
あの遠慮がちだった沙織の瞳でさえ、ダイチにすがっているように見えた。これではさすがに逃げられない。ダイチは1つ大きくため息をつき、覚悟を決めた。
「しゃーねえ！行ってやらあ！」
ダイチは果敢に配管をよじのぼり始めた。

#26　さよならユウコ　part20

2．0はいずれも消滅した。ヤサコとイサコはそれを見届け、大きく安堵の息をついた。ダイチとフミエも危ないところだったが、なんとか無事のようだ。あの2人や、現実世界から戦ってくれた黒客には感謝してもしきれない。

そして、今度は自分達の番だと思った。再びヤサコとイサコはミチコの方を向いた。

「さあ、仕切り直しだ、ミチコ。話の続きをしよう」

「その前に、ハラケンを解放して！ハラケンが罰を受ける理由はないんだから！」

ヤサコは懇願するように言った。ミチコがハラケンをさらったのは自分を苦しめるだけではなく、ハラケンにも苦しみを与えようとしたからだ。しかし、カンナがその心の中にずっと生きている限り、彼には何の罪もないはずだ。

「……もう、残された道は1つね。大黒市の人達を今夜ここに引きずりこむ」

ミチコがそう言うと、椅子に縛り付けられていたハラケンの呪縛が解かれた。

「だから、僕を解放しても同じだと言うのか」

ハラケンは立ち上がってミチコを見据えた。

「最初からこうするつもりだった。詩織のために私は……」

結局のところ、ミチコが今夜サイバーテロを起こすことは揺るがない。ハラケンに選択を迫っていたのは、彼を苦しめたかったからに他ならなかったのだ。

「聞け！ミチコ！アンタは、私が前に会った時のアンタは、そうすることを望んでいなかった。あの時アンタは助けを求めていたんだと思う。その気持ちを思い出せ！アンタは死神になってしまうんだぞ！」

「すべて、詩織のためにすることよ。私の意志なんか関係ないの」
ミチコはにべもなかった。もはや自分の中にある感情をすべて排除しようと努めているようにさえ見える。
「ねえ、イサコ」
その時ヤサコが耳打ちした。
「なんだ？」
「その詩織さんはどこにいるのかな？ずっとミチコのそばにいると思ってたけど、そんな様子もないし。詩織さんがそのことをどう思っているのか、聞いてみたいのに」
実は、そのことについてイサコひとつ考えていたことがあった。
「なあ、ヤサコがミチコと再会した時、アイツはあんな風に発光していたか？」
「え？いや、私が会った時は全身灰色だったはず」
「やっぱりな。私が金沢で会った時もそうだった」
それが何を意味するのか、ヤサコはイマイチわからなかった。しかし、イサコはミチコに向かってこう言った。
「ミチコ。正体を現してくれ。お前がそうやって発光しているのは、私達に本当の姿を見られたくないからだろう」
「本当の姿？」
ハラケンがイサコに問いかける。
「そうだ。これはミチコ本来の姿じゃない。私もずっと気がつかなかった。詩織さんは、この屋上にいる」
「えっ？」
ヤサコが驚いてミチコの方を見た。すると観念したのか、ミチコも笑った。
「アナタの目はごまかせないわね」
その瞬間にミチコから直視できないほどの光が放たれた。思わず3人は目を背ける。
発光が終わると、そこには2つの人影があった。1つは灰色の、そしてもう1つは、金沢で共に戦った沙織とまったく容姿が同じ少

女。もちろん、沙織という人格は詩織の肉体に宿っていたのだから、その容姿が同じなのは当然のことだった。
「どうしてアンタが詩織さんと一体になっていた？」
本来の姿に戻ったミチコにイサコは訊ねた。
「詩織は金沢の新空間にいた。そこに今みたいな2．0が侵入してくるとまずいから」
「それならこちらの空間に連れて来るだけでいいじゃないか」
「ええ。本当は、詩織の本当の望みを知るためにこうしたの……」
「そうか。アンタは詩織さんと1つになることで、詩織さんの意志を読み取り、その望みのすべて実現しようとした。同時に、自分が望まない行動の大義名分を詩織さんのためと自分に言い聞かせ、その罪から目をそらそうとした。違うか？」
ミチコは沈黙した。図星と見ていいだろうとイサコは思った。
「アンタをコントロールしていたのは細川技師だった。細川技師によってアンタは詩織さんに対する感情を制御されていたんだと思う。アンタがテロを強行しようとしたのも、細川技師に逆らえなかったのはそのためだろう？」
「……わからない」
精神制御されていた当の本人に自覚はないはずだった。
「でもアンタの中にも自我はあった。テロを起こしたくはないというのは、アンタの本心なのかもしれない。でもそれは詩織さんのためを思えば叶わないことだった。だからこそ、アンタは詩織と一体となった。すべては詩織の手で行われるものだと割り切れば楽だからな」
「でもイサコ。本当に詩織さんは今夜のテロを望んでいるの？詩織さんは自分が置かれている立場もわかっているの？」
ヤサコが訊ねた。確かに詩織は先ほどからの話をほとんど理解しているようには見えない。詩織がこの場所を電脳空間と自覚していないと見る方が妥当だ。
「どうなんだ？詩織さんは今夜のテロのことを知っているのか？」

ミチコにささやき声でイサコは訊ねた。
「知らないわ。詩織は何も知らない」
「じゃあどうして今夜のテロで大黒市民を引きずりこみ、この世界を“本物”にしようとする？それが詩織さんの意志じゃないとしたら」
「理由は２つある」
ミチコはイサコを遮って訥々と話し始めた。
「詩織は確かに、世界の偽物と本物を理解していない。この世界を“本物”にすべきだと言ったのは細川さん。私はそれに従っていた。でも、詩織さんは確かにお母さんとずっと暮らしたがっている。詩織さんと心をつないで、それだけはよくわかったの。だから、この世界だけはどうしても失ってはならない。
だけど、今後現実世界で何かが起こったら、詩織さんしかいないこの電脳空間の安全は保障されない。絶対にこの空間を潰してはいけないという理由が欲しかった」
「それが、全大黒市民の魂を閉じ込めることだというのか。要するに、この世界を潰させないだけの人質の数を確保しておきたかったということか」
わからないでもないような理由だとイサコは思った。生身の人間の魂がたった１つしか存在しない空間なら、勢いでフォーマットしようとする人間は現れるかもしれない。しかしそこに全大黒市民の魂があったなら、話は変わってくる。
「２つ目の理由は？」
「……私は、全大黒市民を引きずり込むなんて望んでいないはずだった。でも、寂しかったの……」
「寂しかった？じゃあ、アンタ個人の理由でそんなマネを」
やはりミチコにもそんな感情があったのかとイサコは思った。くどいほどに詩織のためと言い訳をしているのは、そんな自分の弱さから目を背けるためなのか。
「アナタに私の気持ちがわかるはずがないわ。私は、この世界の神

として産み落とされた。そうよ。私はここに住んでいるＡＩの住民達の運命を握っているの。新空間に“死”は存在しないなんて、よく言ったものね。それはここにやって来る生身の人間の魂がそうであるだけ。その人がやってくることで、ここに元々生活していたその人は消されなければならないのよ」

「アンタはそれを司っていた。まさに死神か……アンタがその生死を自由に操作できたのは、ＡＩの住民だけだったのか？」

「そうよ。だから私は細川さんの計画をどこかで魅力的だと感じていたの。ここに住むすべての人間が私の意のままにならない、生身の精神を抱えていたなら。そして、ここに住むすべてのＡＩの住民を、私の手の及ばない現実世界へ送ってあげることができたら、私は神でなくなる。それが、どれほどいいか……」

神は絶対的孤独な存在であると、イサコはどこかで聞いたことがある。確かにミチコが背負わされた運命は過酷だ。本来は誰にも接触してはいけないはずの身。彼女が人の心の中に爪痕としてでも存在したがっている理由がわかる気がした。その気持ちとテロを行ってはいけないという気持ちが、彼女の中でせめぎあっていたのだ。どちらにせよ、人の運命を司ることにはなってしまう。

そんな時にイサコの目の前にショートカットが開いた。現実世界からこちらに話したいことがあるらしい。

「イサコ。ちょっと耳に入れておきたいことがある。今までの会話はこっちでもモニタリングしていたんだけど」

相手はシュウイチだった。

「ああ、なんだ？」

「実は、イサコ達がそっちに行ってから色々あって、プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”はすべて白紙に戻ったんだ。だから、たとえ今夜全大黒市民の電脳体が新空間に引きずりこまれたとしても、ミチコの望むように、新空間の住民であるＡＩ達を現実世界に送ることはできない」

「なんだって？」

ミチコにも今の話は聞こえていたらしい。表情が固まっている。
「本当なのか？」
「ああ。ダイチ君達に詳しい話はすべて伝えてある」
「わかった。後でその話も聞いておく」
そこでショートカットは消えた。しかし急展開だなとイサコは思った。プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”が中止になったとなれば、大きく事態が変わってくる。
「聞いた通りだ。もしアンタが今夜テロを起こすなら、大黒市は完全に人の消えた廃墟になる。アンタもそこまで望まないだろう。電脳体は生身の体が健常であるからこそ存在できる。全大黒市民が意識を失うことになれば、誰が詩織さんの体を診てくれると言うんだ。もう終わりにしよう、ミチコ」
「そんなの嘘よ……嘘に決まってる」
「私も確認しようがない。ただ、生身の体にＡＩを移植するなんて技術が実現してしまうことに問題があったと思う。そのおかげで、どれだけの人の心が踏みにじられたか……」
プロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の中止というニュースを、イサコは好意的に受け止めていた。あとは、ミチコを思いとどまらせるだけだ。
「私は、詩織さんを現実世界に連れて帰りたい。詩織さんが戻れば、アンタがテロを起こす理由はなくなる。この空間の安全は絶対に保障するし、アンタの孤独を埋める方法も考える」
「そんな、詩織を連れ帰ることは許さないわ」
「私達はそのためにこの空間まで来たんだ。詩織さんに事実を告げて、何とか説得してみせる」
イサコは詩織の方に向き直ろうとした。しかしミチコは、その肩を強く掴んだ。
「やめて！今の詩織にとって、母の存在がどれほど大きいか。いきなり事実を告げたら、彼女が心を閉ざすかもしれないのよ！」
「だからと言って、いつまでもこの世界の幻の中で生きさせるわけ

にはいかないだろう！大切なことは、現実から目を背けないことなんだ。どんなに現実がツラいことで溢れていようと、そこへ踏み出す勇気が必要なんだ。

私は、ヤサコに手を引かれて現実に戻って、本当に良かったと思っている。壁を乗り越えたことによって、少しだけ自分も成長したと思えた。見える景色がほんの少し変わった。そんな些細なことで、自分が好きになれたんだ。そうしたら、周りの人のことも好きになれた……大切なものを失ったとしても、希望の種はいくらでもあるように思う。誰しもが自分が変われるチャンスを、逃してはいけないはずなんだ」

ヤサコはあの時のことを思い出していた。あれが本当にイサコ人生を変えたのだとしたら、これほど嬉しい事はない。そしてまた、イサコはあの時の自分のように、1人の少女を救おうとしている。どうかうまくいってほしい。そう願いながら、ヤサコは黙って見守っていた。

「それが、詩織のため？」

「ああ。信じてくれないか？」

ミチコにも迷いが生じているようだった。すべて自分が正しいとは、彼女も思えなくなっているのだ。

「なら、詩織の意志を確かめて」

「ありがとう」

イサコは笑顔で頷いて詩織の方に向き直った。

「桐野詩織さん……申し遅れてすまなかった。私は天沢勇子。アナタとは同じ歳で、金沢に住んでいる」

「は、はい」

イサコに呼びかけられても、詩織は視線を一点に定めることができないでいた。今までの話も、自分のことを話していたようなのに、その内容がまったく理解できないでいたのだ。

「突然初対面の人間に名前を呼ばれて、戸惑っていると思う。でも、少しだけ私の話を聞いてくれないか」

「ええ……なんでしょうか」
人見知りする性格なのだろうか、詩織は俯き加減だ。そこでイサコは、はじめに簡単な質問をした。
「詩織さんは、電脳空間というものを知っているかな？」
「ええ、一応。“あっち”などと呼ばれる空間のことですか？」
「そう。実は“あっち”ではないけど、今私達が立っているこの空間も電脳空間なんだ」
「ど、どういうことですか？」
詩織は視線を上げた。さすがに飲み込めなかったらしい。
「詩織さんは、ある事故がきっかけで心に深い傷を負った。その傷を癒し、心を埋めるものが必要になった。そこで、ある人が電脳空間上にそれを再現したんだ。その電脳空間こそが今私達がいるこの空間なんだ」
「ある人っていうのは？」
「……詩織さんのお父さん。細川亮成さん」
これは言うべきかどうか迷った。しかし詩織にとって見れば自分は赤の他人。少なくとも詩織の知っている人と関わりがあることを言っておかなければ、信用されないかもしれないとイサコは思ったのだ。
「……父を、知っているのですか？」
「ああ。私の知っている技術者のまた知り合いというところかな」
「そうですか……でも、さっきの話は違うと思います。父が私のために何かをするなんて……父は、ずっと前に私と母を捨てたのです。本当はもう、父でもありません」
静かな詩織の口調の中に、憎しみのようなものがそこはかとなく感じられる。
「それも、私は聞いている。でも、これは詩織さんにとっては信じられないかもしれないけど、聞いてほしい。アナタのお父さんは、アナタやお母さんを捨てたわけじゃない。どうしようもない理由があって、アナタ達の元に帰れなかったんだ。今でもお父さんは、ア

ナタのことを愛していると言っていた。だからこそ、アナタのための電脳空間を組み上げたんだ」

詩織は再び俯いて、しばらく沈黙した。今の話が本当なのかどうか考えているのか。これだけは自分が言葉を並べても仕方がないことかもしれないとイサコは思う。細川技師と詩織の間の問題だ。

「……わかりました。ですが、私が心に傷を負ったというのはどういうことですか？そのきっかけとなったある事故というのは？」

「ああ。ここからが本題なんだ。私は今から、詩織さんが心の奥底に沈めている触れられたくない記憶を呼び覚ましてしまうかもしれない。でもどうか、そこから逃げないで聞いてほしいんだ」

すると詩織の表情が引き締まった。自分を知りたいと思う気持ちが、イサコの真摯な姿勢によって芽生えたのだ。

「私は、自分の置かれている状況を知りたいです」

「わかった……去年の夏、詩織さんは母の恵さんと交通事故に遭ってしまったんだ」

「こ、交通事故？」

詩織は胸を刺されるほどの衝撃を受けた。黒井交差点の交通事故は、自分の頭から離れることがなかった、夏の夜に見た悪夢と同じだったからだ。

「まさか、覚えているのか？」

「……覚えているというか、そういう夢を見たんです。あれは一生忘れないと思います。それほど、鮮明だった……」

なるほどとイサコは思う。詩織はあの出来事を夢と思うことで、自分の心を守った。そばに同じ事故に遭ったはずの母の姿があればなおさらだ。

しかし詩織は体を震わせていた。夢と思い込んでいた出来事を思い出すだけでもそれほどの苦痛なのであれば、真実を告げれば彼女はどうなってしまうだろうとイサコは不安になる。それでも自分はこれを告げにきたのだと言い聞かせる。詩織に恨まれてもかまわないと思った。

「それは、本当に起こったことなんだ。詩織さんはそれを夢だと信じていた。ここが電脳空間だからだ。アナタがその悪夢から目覚めた時から、真実と虚構は入れ替わっていた」

「……そんな」

目に涙が一気に溢れ、顔中に汗が吹き出す。そんな詩織からミチコは目を背けていた。それでもイサコはその残酷な真実を突きつけなければならなかった。

「その事故で、詩織さんは一命を取り留めた。でも……」

「母は!?母はどうなったのですか!?」

詩織はイサコを遮るように叫んだ。彼女の夢の中で母は大手術を受けていた。その結果を、彼女は知らない。

「……脳死状態と聞いている」

イサコは予断を挟まなかった。その事実だけを伝えるのでイサコは精一杯だった。

「お母さん……嘘よ。お母さんは生きてる」

「そのお母さんこそが、幻だった。アナタのお父さんが、アナタを傷つけさせないように作り出した幻」

「そんなことって……」

詩織は膝を折って、両手で顔を覆った。でも、その涙こそが必要なのだとイサコは思う。涙を流すのは、それを現実として受け入れようと努力しているからだ。イサコは泣かせてあげようと思った。心が落ち着いてから、詩織の意志を確認すればいい。それが自分たちの望むものと同じであることを祈るばかりだった。

「これで、良かったの?」

まだ詩織を注視できずにいるミチコが訊ねた。

「幻想を信じているよりは、私はいいと思っている。幻のお母さんのことをずっと本物と思い込むのは、本当のお母さんが悲しむと思うから」

詩織のためであり、詩織の母のため。おこがましいことだとは思いつつも、イサコはそう信じていた。

やがて詩織が落ち着いた頃合いを見計らって、イサコは切り出した。

「これまでの話を、信じてくれたのか？」

「……実は、母は私がその悪夢を見た時から変わってしまったのです。どこか、私の知らないような顔を見せるようになって……私には、それがわからなくて。ただただ、あの悪夢を見てからは母と共にいられることこそが幸せと思っていました。でも、アナタの話を聞くと、本当のことなのかなって……母が変わってしまったのは、それが幻だからかなって」

詩織の涙は止まっていなかった。それでも彼女はしっかりと答えてくれた。

「そう……実は私たちがここに来たのは、詩織さんを現実世界に連れて帰るためなんだ」

「連れて帰る？どうして……」

「私も前に詩織さんと同じ体験をしたんだ。私の場合は兄だったが、私も電脳空間で幻の兄とずっと一緒にいたいと思っていた。でも、現実から目をそらしてはいけない。痛みと向き合うことから逃げてはいけない……その時、私はそう教えられたんだ。ここにいるヤサコに」

ヤサコは詩織と目を合わせた。しかし軽く頷いただけで何も言わないでおいた。

「私がしようとしていることは、ただの押しつけであることはわかっている。詩織さんの気持ちが理解できるなんて思い上がりであることも自覚している。でも、私は放っておけないんだ。どうしても。自分と同じ境遇にあるアナタを」

詩織はそれを聞き届けた後、ふっと頬をほころばせた。

「……知らなかった。こうして私のことを思ってくれる人がいたなんて。私は、自分が1人だとずっと思っていました」

「詩織さん……」

しかし彼女は再び視線を下げた。

「それでも、私は母がいないと生きていけないと思うんです。たとえ幻であったとしても、私の中にある気持ちは本物だと思います。今の私が、母に支えられているというのは揺るぎない事実です」

「幻の中でも本当の気持ちに気付くことはある。でも、その本当の気持ちというものの半分は自分の弱さの表れだと思う。自分の理想に辿り着きたいという気持ちと、そこに到るまでに苦しい思いをしたくないという気持ちは、相反するようでいて、どちらも真実のはずなんだ。詩織さんは、母のいない現実世界での理想を描けないだけなんだと思う」

イサコの言う通りかもしれないと詩織は思った。母のいない現実世界に何の希望もないのだ。

「アナタが壁を乗り越えられたのは、きっとアナタが強かったからだと思います。だからアナタは、現実世界に希望を持てた」

イサコはかぶりを振った。

「誰しもが自分のことを弱い人間だと思う。でも、それは自分の中に眠っている強さに気付いていないだけなんだ。時としてそれは、誰かに教えられて気付くことがある。人に支えられるって、そういうことなんだと思う。

自分の強さに気付いた人は、やがて1人で生きていくことに挑戦する。その歩みのうちに、自分の理想が見えてくるのだと思う。

漠然として見えないかもしれないけど、出口は必ず、痛みを感じる方向に進めばあるはずなんだ。そして、誰しもがそこに向かって歩けるだけの強さを持っていると思うし、向かわなければならないのだと思う。そのスピードはゆっくりでもいい。

私が言いたいのは、痛みから決して逃げないでほしいということなんだ」

イサコは自分の経験から感じたその想いを率直に伝えた。詩織はその言葉の意味を深く考えるように沈黙する。

詩織は自分のことを本当に弱い人間だと思っていた。今まで自分で何かを成し遂げたこともなかった。ただただ周りに流され、しか

しクラスとは馴染めず、その状況を変えようともしなかった。父がいなくなってからの詩織にとって、唯一心が開ける相手が母だった。その母を失ったとなれば、本当の孤独しか待ち受けていないと詩織は思う。

ただ漠然と痛みを感じる方向に歩くことなど、自分にできるのか。その先に出口が本当にあるのか。自分と同じ体験をしたというこの天沢勇子という少女の目には、その時何が見えていたのか。

あらゆることが詩織の脳裏によぎっていたその時だった。

「お姉ちゃん！」

勢いよく開け放たれた屋上から階段に通じる扉。そこに現れた姿を見て、イサコはしばし放心した。

「……サオリ？」

信じられないという表情のまま、イサコは沙織を見つめた。そしてあることに気付く。そっくりだが、それは自分が知っている沙織の顔ではなかった。自分の知っている沙織の顔はここにいる詩織と同のはずだった。なぜなら現実世界の沙織は、詩織の肉体を借りていたのだから。

今目の前にいる沙織は詩織とは似ているが、鼻の形や髪の分け目が違う。だからこそイサコはそれが沙織だと確信した。

「……ごめんなさい。天沢さん」

沙織は目に涙を溜めて謝った。イサコには謝られる理由以前に、沙織がここにいることが飲み込めないでいた。

「どういうこと、なんだ？」

その時、サオリに続いてフミエと、なぜか顔を真っ青にして息切れしているダイチが現れた。

「イサコ。沙織さんは、細川技師によってこの空間に送られていたの。あの人は、姉妹を再会させてあげようと考えていた」

「姉妹？詩織さんはサオリのことを知らないはずじゃ」

フミエはそれに一呼吸置いてから答えた。

「……本当はね、詩織さんと沙織さんは双子として生まれたのよ。

でも、沙織さんは生まれてすぐに病気で亡くなったの。細川さんは詩織さんを新空間に送ってから、その肉体に亡くなった沙織さんの魂を宿して生きさせようとしたのよ。でも沙織さんは、プロジェクトチームによって利用されてしまった。細川さんはそれに心を痛めて、姉妹で暮らさせてあげようと考えた。だから1度は消されてしまった記憶を元に戻して、沙織さんもこの空間へ」

イサコはあまりのことに言葉が出なかった。じっくりとそのことを噛み砕いてから、イサコはゆっくりと沙織の方に向き直る。

「サオリ……それを知っているのか。自分が、ＡＩであることを」

「……さっき、フミエさんとダイチさんから聞いたんです。はじめは、信じられなかったけど」

「そうか……」

悲しい思いをしたのだと思う。自分は1度死んでしまっているなんて、記憶を勝手に操作されてしまうようなＡＩであるなんて、とても受け入れられることじゃない。

「どうして、さっき私に謝ったんだ？」

「だって、私は天沢さんの思いを裏切ったから。アナタの前から姿を消して、1度はアナタを忘れてしまったから」

「そんなこと……」

共に事件を乗り越えて、いつか一緒に笑い合えるようになりたいと思っていた。彼女がＡＩで、記憶を消されてしまったと聞いた時は、心がズタズタに引き裂かれるような思いをした。2度と会えないと思っていた。

「謝らないでくれ……サオリが謝ることは1つもない。こうして会いに来てくれたことへの感謝しかない……」

「天沢さん……」

どちらからともなく歩み寄って、2人は肩を抱き合った。涙は、お互いに止められなかった。

「……どうして、アンタ達がサオリと？」

イサコはそのままに姿勢でダイチとフミエを見た。それにはダイ

チが答えた。
「沙織さんがこの空間にいることは、オバちゃんから聞いた。向こうの話によると、細川技師が沙織さんと詩織さんを引き合わせてほしいと望んだって。でも、それは細川技師がはじめに考えていた形、2人をここで一緒に暮らさせるためじゃない。詩織さんを、現実世界に帰すためだって」
「細川技師がそう言ったのか？」
「ああ。”ＳＰＲＩＮＧ”に欠陥が見つかって、詩織さんの意識を連れ戻さないと体力的に危険かもしれないと判断されたらしい」
先ほどシュウイチもプロジェクト”ＳＰＲＩＮＧ”の中止について言及していた。そういうことであれば、どうしても詩織を連れ帰らなければならない。しかし、
「ということは、サオリは」
「ああ。沙織さんはこの空間にとどまらないといけない。そのためには、沙織さんに真実を告げないといけなかった。沙織さんは、詩織さんのためを思ってそれを受け入れた」
再びイサコは沙織を見た。
「それで良かったのか？サオリはここで詩織さんと暮らしたいと思わないのか？自分だけがここに残るなんて」
「……いいんです。私は、お姉ちゃんの影。お姉ちゃんを生きさせるために、私は生まれたから」
「そんな……」
「天沢さんの思いをまた裏切ることになるかもしれないですが、すべて、お姉ちゃんのためです」
イサコは自分の気持ちがわからなかった。できることなら、沙織とも一緒にいたい。未練は確かにある。沙織も同じなのだと思いたい。でも沙織は、イサコを気遣いながら、姉のために自分の望みを捨てているように見える。健気で、そして自分よりもずっと強いとイサコは思った。
「詩織さんはお母さんのことで傷ついている。現実世界に戻すこと

が、必ずしもお姉さんのためにはならないかもしれない」
「でも、天沢さんは現実世界で生きるべきだと思っているんでしょう？」
　イサコの迷いを断ち切らせるように、沙織は微笑んで見せた。
「私が正しいとは限らない。サオリがどう思っているのか知りたい」
「私は、天沢さんと同じです。その方がお姉ちゃんのためだと思います」
「どうして」
「天沢さん自身が答えです。私は天沢さんが体験したことすべてを聞きました。お兄さんのこと、ミチコのこと。その体験を通じて今のアナタがいる。アナタは決して後悔はしてない。だからこそ、アナタは私のことが放っておけなかった」
　金沢での日々を通して、沙織はイサコの強さを知った。いつも傷つけてばかりだったのに、イサコは辛抱強く自分に話しかけてくれた。
「アナタは、私の憧れでもあるんです。こんな風に生きていければと、本当に思っていました」
「そんな」
「嘘じゃありません。だからお姉ちゃんには乗り越えてほしいんです。痛みから逃げないことで、アナタのように凛とした人になれるのなら。それは今自分自身にも言い聞かせています。アナタとの別れは、避けられそうにありませんから」
　イサコは嬉しさと悲しさが混ざり合ったような気分だった。でも、そばで聞いていたヤサコは、沙織の言っていることがよくわかる気がした。
「私は、そんなに強いわけじゃない。自分の弱さを叱咤しているだけなんだ。私には沙織のようにこの別れをすんなりと受け入れられそうにない」
「イサコ」
　気弱になりかけた時にヤサコが声をかけた。

「沙織さんは、多分今、イサコ以上に自分の心を叱咤してそう言っているはずよ。沙織さんにとっては、イサコが道しるべなの。そんなアナタが迷ってはいけないわ」
「ヤサコ」
そうだった。自分を救いに来てくれたヤサコに、迷いなどなかった。自分の憧れはヤサコ。彼女のように生きたいとイサコは思っていた。
「悪かった。サオリは相当な覚悟をしたんだと思う。だから私も、覚悟を決める」
「ごめんなさい。本当に」
「だから謝らなくてもいい。それより、お姉さんと話すといい。そのために来たんだろう？」
沙織はこくりと頷いて、詩織の元に歩み寄った。
「お姉ちゃん。初めまして、と言ったほうがいいのかな。いきなり現れたりしてごめんなさい」
詩織はイサコと沙織の会話を聞いていた。それでも戸惑いの色は隠せないでいた。
「沙織、なのね……」
「私のこと知っているの？」
「お母さんから聞いたの。お墓参りもした。でも、こうして会いに来てくれるなんて……」
こんな奇跡があるのだと詩織は思った。
「どんな妹だったのだろうと思ってた。もし、お母さんと3人で暮らせたら、どんなにいいか。そんなことも思ってた」
「ありがとう。でも、お姉ちゃん。そのお母さんのことだけど」
「わかってる……天沢さんから聞いた」
詩織はまた俯いた。
「お姉ちゃん……」
「私は、できることなら、この世界でお母さんと、そしてアナタと一緒にいたい」

沙織はかぶりを振った。
「それじゃいけない。お母さんを失う怖さもわかる。でも、逃げてはダメ。アナタが逃げて悲しい思いをするのはお母さんであり、私なのよ」
詩織はハッと顔を上げる。目の前にいるのは、1度は命を落とした妹。幻でしか生きられない彼女を見ると、自分は生かされているのだということを痛感する。
しかし、どうしても自分の弱さを克服することはできないと思った。
「私は、1人で生きていく自信がないの」
すると沙織は詩織の両腕をそっと掴んで言った。
「お姉ちゃんは1人なんかじゃない。きっと、自分1人で歩けるようになるまで、天沢さんがそばで支えていてくれるはず」
「……アナタはどうして天沢さんと？」
「私は、お姉ちゃんの体を借りて少しの間現実世界で生きていたの。でも、そこで私は孤独だった。そんな私を天沢さんは気にかけてくれた。私の境遇を知って、天沢さんはずっと私に声をかけてくれた。事情があって、私はそれを拒み続けるしかなかったけど、嬉しかった。こんな自分をここまで気にしてくれる人がいるなんて、と思った」
金沢での一連の出来事が走馬灯のようにイサコの頭の中を巡っていた。沙織がそう話してくれるのは、素直に嬉しかった。
「天沢さんは、お姉ちゃんとまったく同じ体験をした。きっと、お姉ちゃんの中にある恐怖とかも、天沢さんはわかってくれていると思う。それで天沢さんは、こんな電脳空間にまでお姉ちゃんを迎えに来てくれたの。
それに、私に真実を打ち明けてここまで連れて来てくれたフミエさんやダイチさん。廃工場で私に声をかけてくれたケンイチさん。そして、かつてイサコを救ったっていうヤサコさん。金沢にも、天沢さんのお友達でいい人はたくさんいる。みんな、お姉ちゃんのこ

とを心配してくれている。だから、決してお姉ちゃんは1人じゃないの……」

自分達はそんな大したことはしてないと思い、ヤサコ達は少し面映かったが、詩織のことを心配しているのは事実だった。だから笑顔を見せて、詩織に向かって頷いた。

「皆さん……」

詩織は再び目に涙を溜めて言った。

「……ありがとう。沙織。アナタのおかげで、こんなに素敵な人達に巡り会えた。ホントに、ありがとう。そして、ごめんなさい。アナタをあの方達から引き離してしまうなんて」

「いいの。お姉ちゃんが、幸せでいてくれるなら、それで」

詩織は沙織のことを抱きしめた。涙を流して、ひたすら妹との別れを惜しんだ。

「・・・・・天沢さん、それから皆さん。私は、現実世界に戻ります。これからもご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

そして、涙を拭いて詩織が頭を下げた。イサコの胸の中にも温かいものがこみ上げてきた。今はもう、本当によかったとしか自分の気持ちを表現できない。

「こちらこそ。でも、大変なのはこれからだと思う。ツラい時はいつでも呼んでほしい」

「はい」

その光景を見て、ダイチは大泣きしていた。

「よかった。マジでよかった……」

本人達以上に泣いている彼にまわりはぎょっとしたが、気持ちはわからなくもなかった。

「ちょっと、アンタがそんなに泣くことないじゃないの！私も我慢してたのよ！」

と、言いつつフミエも一緒に泣き始めた。それをヤサコは微笑ましく眺めていた。しかし、いつもより2人の立ち位置が随分近いよ

うに見えるのは気のせいなのか。
「サオリ」
そして、イサコは詩織の隣にいる沙織の方を向いた。
「ありがとう。お姉さんを説得してくれて」
「ううん。私は、私のありのままの気持ちを伝えただけ。こちらこそ本当にありがとう、イサコ。アナタと会えていなかったら、きっと私の現実世界での人生はツラいことしかなかったと思う。アナタのおかげで、私も現実から逃げないで生きていこうと思える」
沙織の表情は頼もしかった。最初に出会った時とは違う。きっと、この世界でもしっかりと生きていってくれるとイサコは思う。
「私も、サオリのことを考えるようになって、人の気持ちを理解することの難しさを知った。私を助けてくれた時のヤサコの気持ちも……絶対にアナタのことは忘れない。私もあの日々があったから強くなったと思える。ツラいことがあったら、サオリのことを思い出すと思う」
「それは私もよ。イサコ」
イサコも沙織も涙を拭いて、清々しい顔をしていた。痛切な悲しみを胸に秘め、お互いの記憶の中に最高の笑顔を刻み込んだ。
「ミチコ……アンタともこれでお別れだな」
イサコは寂しげな表情をしていたミチコの方を向いた。
「私は……」
彼女もここにとどまらなければならない。しかし守るべき存在だった詩織が現実に帰ることによって、彼女は存在理由を失ったと思っていた。
「アンタも、普通の少女として過ごしてみないか？」
「え？」
きょとんとした顔でミチコはイサコを見た。
「アンタは新空間の安定を維持する力を持ったために、神として住民と一線を画された。これからも残されるであろう新空間を別の方法できちんと安定させれば、アンタもその役目を背負うことはなく

なる」
「でも……」
「新空間の管理者達に言うつもりだ。ミチコを、ただの少女にしてほしいって」
ミチコはかぶりを振った。
「そんなの！私は今まで1人で生きて来たのよ。いきなりそんな普通の女の子にされたって」
「だからっていつまでも私やヤサコのことを追いかけまわさないでくれ。アンタは私たちの保護者のように振る舞っていたが、本当は私達に依存していただけなんだ。私達はアンタの生みの親だ。アンタを運命から解放して、自由に生きさせたい」
ミチコは細川に利用される中で2人に助けを求めた。自分の存在を2人に刻み付けることによって、テロを起こしてしまう前に2人に会うことができた。本来なら、運命は自分で変えなければならないものだ。でもミチコにはそれができなかった。そのミチコを解放させることが、親としての最後の務めだとイサコは思った。
「イサコの言う通りだと思う。アナタの心の叫びに気付いてやれなかった私達にも責任はある。私も大人達にお願いする。アナタを、自由にさせてほしいって」
ヤサコもイサコの言葉でそのことに気付いた。自分達がミチコにできることは、それだけだと思う。
「自由なんて……」
「誰だって最初は不安なんだ。でも、私はアンタの人生を見つけてほしいと思っている。誰かのための人生じゃなく、自分のための人生を」
ミチコはこれまで誰かのためにしか存在し得なかった。イサコが望むのは彼女自身の人生を歩むことだ。
「誰も私のことを知らないのに、どうやって生きていけばいいかわからないわ」
「少なくともサオリはアンタを知っている。それにこの世界にも私

達がいるはずだ。甘えていないで、1度は世間に飛び込んでみればいい。親として言えることは、それだけだ」

ミチコは悲しげな目で沈黙した。しかし、もう別れは避けられないということも彼女は知っている。彼女も自分が変わらなければと思っているのだ。

今夜のテロを起こすかどうかで悩んでいた時は、本当に自分自身でもツラかった。これからは、自分の意志に従って生きることができる。現実から逃げ出さないという、ヤサコやイサコの生き方こそが、自分の歩むべき道筋ではないかとミチコは思った。知らないうちに自分は、親の背中を見ていたのだと気付く。

「……わかったわ。私は、アナタ達がいなくても立派に生きてみせる」

「ああ。アンタが幸せになることを私達も願っている」

すると、真っ赤な夕陽に染まる屋上の一角に、白い光のトンネルが現れた。

「ここから、現実世界に戻れるわ」

「ありがとう、ミチコ。アンタのことも、絶対に忘れない」

「元気でね」

イサコとヤサコがミチコに声をかけると、彼女は照れたように俯いた。

「サオリも、どうか幸せになってくれよ」

「はい。お姉さんのこと、頼みました」

イサコはしっかりと詩織の手を握った。

「ああ、任せてくれ。もしよかったら、そうだな。また私の夢の中にでも遊びに来てくれ」

「はい」

沙織は頬をほころばせた。イサコも優しい笑顔を返して光の中を見た。

「さあ、帰ろう」

「ええ」

詩織がしっかりと頷く。ダイチ、フミエ、ハラケン、ヤサコと続き、最後にイサコと詩織が入っていく。もう2人は振り返らない。

ミチコと沙織は、光の中のその背中が見えなくなるまでじっと見つめていた。

「さよなら、ユウコ」

心地よい風が、屋上を吹き抜けていった。

#26　さよならユウコ　Part20（後書き）

第三部完結。
エピローグに続きます。

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　去りゆく春の日に（前書き）

5月9日（日）

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　去りゆく春の日に

事件の収束から5日が過ぎた、日曜日の午前。一連の事件の関係者の一部で、宗助の収監されている拘置所を訪れていた。

集まったのは電脳犯罪対策係から直樹と久美子。メガマスを代表して一郎。検事の桜井。そして、宗助の父。

今日、宗助の面会に来たのには様々な理由がある。が、宗助の体も長らくＡＩに支配されていたせいで、詩織と同様に体力的な問題があった。あまり長い時間話すことは叶わない。まずは、宗助の父との対面を最優先にと一同は考えていた。

拘置所では同時に面会できるのは3人という規定がある。今日会うのは父、直樹、桜井ということになった。

面会室に案内され、しばらくすると、ガラスで仕切られた向こう側に、係の者に連れられて宗助が入ってきた。

「宗助……」

父は数年ぶりに会う我が子に、どのような表情を見せればいいか戸惑った。

「久しぶりです。父さん」

宗助の方も意図せず他人行儀な挨拶になってしまう。

「ああ、久しぶりだ。見違えたな」

顔は大人になったが、どうにも疲れているように見える。この環境では仕方ないと思うが、親としては少し心配になった。

「6年も会わなければそうなるさ」

「そうだな……私のことは、もう聞いているんだな？」

「ああ。タケルの手紙を読んだ」

父がコイルス社を追われてからどのように過ごしていたのか。それを説明する手紙だった。父や大谷の話を、タケルは事細かく記した。

「そうか……悪かった。私がいなくなったおかげでお前は」

「仕方なかったんだろう。連絡を取らなかったのは、家族を守るためだった。本当のところ、もう死んでいるんじゃないかと思っていたんだ。生きていてくれただけでも十分だ。怒りも忘れたよ」

宗助の表情は穏やかだった。

「本当にすまなかった。だが、私のいない間にお前が起こしたことを聞いた時は、残念でならなかった。色々な意味でな」

「怒るなら怒ってくれ。自分の罪には向き合わなければならないと思ってる」

悔いを改めるというのは自分で選んだ道だ。こうして冷たい監獄の中にいると、それと嫌でも向き合うことになる。むしろ今なら、どんな説教でも聞きたいような気分だった。

「お前は私や家族のためを思って罪を犯したと聞いた。そんなお前に、私が説教をする資格なんてない。これから警察の取り調べや裁判で、お前は自分の罪を噛み締めることになるだろう。私がお前に言いたいことはたった1つ。人の心を軽く扱ってはいけないということだ」

短い言葉だったが、いかにも父らしいと宗助は思う。どんな説教より、自分の罪深さが感じられるような気がした。

「……オレは、父さんが成し遂げたかったことを取り違えていた。タケルの方が、それをよくわかっていたよ」

「そうか……お前がそう思っているのなら、私は心配していない。よく戻って来たな、宗助。家族で、お前の帰りを待っているぞ」

いつになろうとも、その時を心の中で描いていれば、ここでの生活にも耐えられると宗助は思う。

「……ああ。1つ聞いていいか？父さんはこの後、どうするつもりなんだ」

その問いに父はしばらく考え込んだ。

「新聞は読んでいるか？」

「ああ。紙の新聞なんてそれこそ何年かぶりに手に取った」

「メガマスのことは知っているな？」

「昨日の朝刊の一面を飾っていたな。『アプリコット社、メガマスを吸収合併』」
　こんなにも早く発表がされるとは事件の関係者でも思っていなかった。どうやらアプリコット社は前々からメガマスを手に入れようと画策していた節がある。今回の事件が、彼らにきっかけを与えたのだろう。
「父さんも、アプリコット社へ？」
「打診はされている。今私が勤めているアメリカのアプリケーション開発会社ともよく話し合った上で、今後のことは決めたい。私の希望は、また日本で働くことだがな」
「そうか……オレも、その背中を追いたいな」
　父は驚いた。宗助がそんな希望を口にするのは初めてだった。もっとも、父子が離ればなれになって6年。当時中学生だった宗助が将来就きたい職業を具体的に明かしたことはなかったのだ。
「望むのであれば、参考資料をこれから差し入れに持ってこよう。もちろん、技術者への道は長く険しいぞ。ここにいるお前にはハンデもある」
「わかってる」
「だが、努力することはムダじゃない。いつかお前と仕事が出来ることを願っているよ」
　十分に自分の気持ちを伝えたと父は思う。そこで直樹と代わることにした。
「すみません。時間もあまり取れないというのに長々と」
「いえ。もう宗助さんに伝えることはありませんか？」
「大丈夫です。時間を作っていただいてありがとうございました」
　すると宗助は訝しげに直樹を見やった。
「こちらは？」
　父に向かって訊ねる。宗助は新空間から帰還した日に桜井に拘置所まで送られたので知っていたが、直樹とは初めてだった。
「電脳犯罪対策係の竹下さん」

「なるほど」
宗助は眉をひそめた。早速取り調べをするつもりなのかと思ったが、
「いや、猫目さん。本日我々はアナタの事情聴取をするために来たのではありません」
先に桜井がフォローした。宗助はますます意味が飲み込めなかった。
「では？」
「猫目さん。今日は今後の流れの確認と、一つお話があって来ました。まずは簡単にこれからについて説明させていただきます」
直樹が宗助の正面に座って切り出した。
「アナタがこの拘置所にいるのは、電脳法２条２項違反により、４月１日に起きた電脳事故の原因を作った疑いがかけられ逮捕されたからです。ですが、これは猫目さんにとって身に覚えのない罪状でしょう」
確かにその時点で宗助はＡＩとすり替えられていた。４月１日の電脳事故と言われてもピンとこない。
「でもオレは、ＣＧＷの計画のために電脳事故を起こそうとした……」
「ええ。計画したのは猫目さんで、実行したのは猫目さんのＡＩということですね。もちろん、この前代未聞の案件にどう裁判所が判決を下すかはわかりません。ですが、事件の内幕を知る我々電脳犯罪対策係は、ＡＩの犯した罪をアナタが償うべきだとは考えておりません。つまり、今ここにいるアナタは１度釈放されることにと思います」
「でも、そのすぐ後に再逮捕というわけか」
「ええ。アナタの罪は去年の夏以前にまでさかのぼります。電脳犯罪対策係で慎重に捜査を行い、アナタの罪状を決定します。もちろん、アナタとＣＧＷの関係も調べさせていただきます」
長い道のりになると直樹は思う。宗助を拉致したというメガマス

のプロジェクトチームに対しても捜査を行った後、逮捕する方針だ。加えてCGWの関係者もあぶり出すとなると、とても今の電脳犯罪対策係の規模では捜査が追いつかない。
「なら、検事さんはオレの事件を担当すると」
「いや、そうじゃありません。私がここに来たのはあるお願いをするためです」
「お願い？」
檻の中にいる自分に何を言い出すのかと思う。
「アナタも知っていたでしょう？メガマスが原川研一君を原告に立てて、旧幹部達の隠蔽を裁こうとしていることは」
「ああ。葦原カンナの」
まさかそれも自分の罪に加えると言い出すのではないかと宗助は思った。しかし桜井は先読みにしたように言った。
「その事件にアナタの刑事責任を問うことはしません。あくまであれは、交通ナビシステムの管理側に責任があったと思います。事故の原因を隠蔽した旧幹部こそ、あの罪を償うべきだと我々は考えています。そこで猫目さんには、あの事故で起こった一部始終を証言してほしいのです」
「それで、旧幹部達を裁けると？」
「ええ。その証言が、猫目さんを被告とする公判に一切影響することはありません。どうか旧幹部を裁くために、ご協力願えませんか」
それなら考えるまでもないことだと宗助は思う。
「そういうことなら、協力しない理由はありません。旧幹部達には父の件でも色々と世話になりましたからね。そんな彼らが、裁かれないのでは寝覚めが悪い」
「助かります。そのことでもまた、事情聴取をすることがあると思いますので、その時はよろしくお願いします」
直樹はようやっと視界が開けたような思いだった。一連の事件でそれどころではなかったが、交通事故再調査の行き詰まりも気がかりだったのだ。これで原告であるハラケンにも良い報告ができると

思う。
「では、本日はこれにて失礼します。猫目さんの体力が回復してから、詳しい聴取に入っていきます」
「わかりました」
宗助は頷いて、また係の者に連れられて出て行った。３人も面会室を退出した。

「……そう。ようやく目処が立ったということね」
直樹からの報告を受けて久美子も安堵の表情を浮かべた。
「再調査の件は優先的に進めていこうと思います。他にも宗助さんを拉致したプロジェクトチームの問題、ＣＧＷの問題とやることは山積みですし、これらは時間をかけないと事実関係を整理するのは難しいでしょうから」
一同は拘置所を後にした。外に出ると本当に汗ばむような陽気だ。
「ねえ、竹下君。電脳犯罪係はこれを機に規模を拡大すべきじゃないかしら。今の規模だと、今回の件を処理するのにも何年もかかってしまいそうよ」
「そうですね」
それは直樹も感じていたことだった。上層部がどう判断するかわからないが、掛け合ってみようと彼は考えていた。
「政府もこの一件には懲りたようですからね。今回はメガマスに全責任を押し付けるという形で収束したものの、これからは電脳犯罪に対して考えを変える可能性もあります。私もこれからの時代、電脳犯罪係の意義が見直されるようになると思います」
「ええ。そのような潮流になればいいのですが」
桜井もその必要性を大いに感じていた。もし電脳犯罪対策係が大規模で組織されていれば、今回のようなことも起こらなかったのではないかと思う。
「でも、再調査の成功と旧幹部の起訴を見届けたら、警察官を辞めるというのは変わらないのね？」

「ええ。けじめはつけるつもりです」
直樹のその決断を久美子はとやかく言うつもりはなかった。彼は昔の夢を捨てて警察官として生きる未来を描けなかったのだ。今回の件に責任をとる意味でも、身を退くのが最善だと判断した。
「なら、それまでに電脳犯罪対策のノウハウを教えてね。組織が大きくなった時のためにも、初代係長のアナタの考えは残すべきだと思うから」
「待ってください。川畑さんは再調査が終わり次第、県警の交通課に戻られるのではないんですか？」
直樹が戸惑ったように訊ねた。
「配属希望を出そうと思う。県警からの異動になっても、やりがいは多分、対策係の方があると思う。桜井さんのおっしゃるように、将来的にその意義も見直されるはずだから」
「では、僕の代わりに残ってくださると」
久美子が残るのなら自分もやっぱり残ろうかなとわずかに直樹の心は揺れたが、さすがにそういうわけにもいかない。
「対策係には先輩方がいる。係長を引き継ぐつもりはないけど、いずれはと思っている。今回みたいな事が、もう起きてほしくないしね」
「……わかりました。僕が辞めるまでに、川畑さんを一人前の電脳犯罪捜査官に育ててみせます」
県警の野村課長は悲しむだろうなと思う。久美子のような優秀な警察官は、どこの部署も欲しいと思うだろう。その人が自分のいなくなる対策係に入ってくれるというのは、願ってもない話だ。
「今後と言えば、小此木さんはアプリコット社の主要ポストに取り立てられるかもしれないという小耳にはさみましたが」
桜井は一郎に話を振った。
「確かにそういう話はいただいていますが、少し複雑ですね。メガマスが無くなってしまったので」
結局、全大黒市民の電脳体が連れ去られるという最悪の事態は子

ども達の活躍で回避したものの、メガネの不具合やそれまでの電脳事故の責任を取らされる形でメガマスは崩壊した。アプリコット社の買収によってその骨組みは残されたものの、これからどのような改革が行われるかはまだ未知数だ。

「小此木さんの事件に対する真摯な対応が認められたのだと思います。空間管理室の本部長に就任されるのですよね？」

直樹の言うように、一郎の次のポストは管理室本部長というところで間違いなさそうだった。それもこれも、前の本部長が事件の最後で2．0を暴走させるという凶行に走ったのが大きい。メガマス本社の幹部も何人かは一郎のように打診を受けているが、彼はその罪で逮捕されたので解雇されたどころの話ではないのだ。ちなみに実行犯である管理室職員、進藤陽平も後日直樹の手で逮捕されている。

「対策係と共に、これからも電脳世界の治安を守れるように頑張ってください」

管理室と対策係の連携強化というのも今後の課題だ。桜井もその点は気にかけていた。

「はい。もちろんです。竹下さん、川畑さん。これからもよろしくお願いします」

「いえ。こちらこそ」

一郎達は3人で頭を下げ合った。警察と民間では難しいところは多々あると思うが、なんとかそれは乗り越えなければならないことだ。

「猫目さんは、やはりアプリコット社に？」

次に桜井は猫目技師に話を振った。

「ええ。その方向で考えています」

「そう言えばこれも聞いた話ですが、吸収合併した後の新社名に“コイルス”という言葉が入るというのは本当ですか？」

直樹が猫目技師や一郎に訊ねる。関係者がしきりにそう口にしているのだ。

「正式発表があるまでなんとも言えませんが、そのような話もありますね」
「皮肉っていますよね。電脳メガネが元々コイルス社の製品であることをこうも大々的に告知しようとは」
それはアプリコット社が脱メガマスを宣言したのだと捉えることもできる。とはいえ、一郎が幹部に昇進するのだから、コイルスやメガマスの垣根を越えた人事がなされるはずだった。
「しかし猫目技師。メガネに代わるウェアラブルコンピューターの開発についてはどうなんですか？」
問題の多い電脳メガネの販売停止や電脳インフラの再整備というのは既定路線だが、それにとって代わるものがないというのも事実だ。とりあえずアプリコット社は、得意分野である携帯端末やタブレット型で時間を稼ぐのではないかと言われている。新型ウェアラブルコンピューターの開発に公算があるのかどうか、それが最大の焦点だった。
「どこの企業でも常に新しいものを生み出そうとしています。アプリコット社も、例外ではないでしょう」
「なるほど」
訊ねた桜井は質問の答えをはぐらかされたような気分だった。しかし、
「ああ、そうだ。竹下さんにお渡ししたいものが」
そう言うと猫目技師はメガネを操作してあるファイルを取り出し、直樹に手渡した。
「これは？」
「私が注目している電脳科学者の論文です。その中で彼は、次世代のウェアラブルコンピューターの可能性を提示しています。竹下さんもこれから技術者を目指されるのであれば、是非この分野にも視野を広げておくといいかと」
直樹はファイルを開いてざっと眺めてみた。執筆者はアメリカ人のようで、全編英語で書かれているが、こういったものは大学時代

から読み慣れている。
「『脳内ナノマシンによる大脳第一次視覚野への視覚情報付加？ディスプレイ不要のウェアラブルコンピューターの可能性？』ですか……えらい論題ですね」
自分なりにタイトルを訳して猫目技師に確認する。
「海の向こうではしきりに議論されているテーマです。アプリコット社が目指すのは、おそらくそのようなものになるのではないでしょうか」
技師はアメリカで電脳業界の動向も見守っており、この議論に可能性を感じていた。メガマスの主導によってメガネ至上主義の蔓延る日本においては、次世代のウェアラブルコンピューターの議論は遅れているというのが実情でもある。
「わかりました。参考にさせていただきます。ご教示ありがとうございました」
「いえいえ。アナタの大学時代の論文も読ませていただきましたが、なるほど、大いなる才能を確かにお持ちなのだと思いました。これからまた勉強し直せば、きっといい技術者になれると思います」
「そ、そんな。恐縮です」
猫目技師にそこまで褒められるとは思わなかった。直樹も将来について自信を深めた。
「ですが、才能を間違った方向に使ってはいけません。今回の”ＳＰＲＩＮＧ”のような技術が本気で実現されそうになったことは、大いに考えさせられます。もっと良い方法で、暮らしをより便利に、安全に、豊かにすることができるはずなのです。また我々も、今回の反省も踏まえて歩き出さなければなりません。そして、アナタのような若者に、希望を抱いてもらえるような社会を築かなければなりません」
猫目技師の言葉は直樹にとっても重たかった。この一件で、教訓にすべきことはたくさんあった。
「ここからが、本当のはじまりですね」

直樹の見上げた空は、青すぎるぐらい青かった。

○

「ここの店だ」
「ふ〜ん。結構おしゃれでクールな雰囲気だね。普段からこういうところに来るの？」
「いや、全然。この前たまたま立ち寄っただけだけど、その時に気に入ったんだ」
金沢市の郊外にあるカフェを訪れたイサコとシュウイチ。ちょうどイサコがひと月前に来た時には表通りの並木道に桜の花びらが舞っていたが、今は新緑の木々に彩られている。今日は天気が良く、絶好のお出かけ日和だった。
2人は店に入り、窓際のテーブルに案内される。日曜日の午後。店の中には男女2人で向かい合っている客も少なくなかった。
「ご注文をお伺いします」
水を運んできた大学生ぐらいのウエイトレスが訊ねた。2人を見るその目つきにもの珍しさというか、好奇心のようなものが感じられるが、別に不快ではない。むしろ柔和な印象で、優しく見守ってくれているような気がする。
「いい？それぞれが注文するものをおごるんだからね」
シュウイチが念を押す。
「わかっている。じゃあ、スペシャルメロンパフェで」
「はい。スペシャルメロンパフェですね」
「ぐっ！」
シュウイチがメニューを見て唸るのがわかった。
「じゃあ僕は、ミックスジュースを」
「ミックスジュースですね。以上でよろしいでしょうか」
「大丈夫です」

「はい。少々お待ちください」
ウエイトレスは変わらない表情のまま下がっていった。
「やってくれるね、イサコ」
「アンタもジュースの中で一番高いヤツを選んだじゃないか」
そもそもスペシャルメロンパフェは前々から予告していたものだ。
これを食べるために電車に乗ってわざわざ足を運んだというのもある。
「まあ、いいよ。誘ったのは僕だしね」
「ああ」
そして沈黙。こうして2人で向かい合うというのは普段はなく、しきりにイサコは水を口に運んでいるし、シュウイチも窓の外の景色ばかりを見ていた。得も言わぬ緊張感が2人の間に横たわっている。しかし、さすがにそれではまずいだろうと思ってシュウイチは話題を探す。
「イサコ、その服。普段着の時はあんまり見なかったけど」
「ん？」
何気ない反応を装いつつも、イサコはその話題になることを待っていた。
イサコは今日、これまでの人生の中で一番オシャレをしてきた。
実はシュウイチとのデートを聞きつけたユイとアサミが、イサコにけしかけたのだ。
「ちょっとイサコ！着ていく服は決まっているの！？」
しかしその時イサコはかぶりを振った。
「いや、まあいつもの感じになると思うけど」
「ダメダメダメ！初デートでしょ！？別に普段のセンスを否定しているわけじゃないけど、その時はちゃんとオシャレをして行かなきゃ！」
「でも、そんな服は持ってない……」
「わかったわ！アサミ。土曜日にイサコの服を一緒に買いに行ってあげましょう！」

「了解よ、ユイ！」
「おい……」
　という具合に昨日、イサコは2人に連れ出されて一日ショッピングモールをまわって服を選んだのだ。母からはそのためのお小遣いをもらったものの、今までの自分の金銭感覚からすると安くはない額をつぎ込んだ。それでも、自分でも見違えるようになったとは思う。着慣れないせいか、ビシっと決まっているとはいえそうになかったが。
「おろしたての服なんだ。どうかな？」
　かなり不安な面持ちでイサコは訊ねる。
「うん。とても似合ってるね。全然普段のイサコとイメージが変わってて、でもそれで違和感がないんだからすごいよ」
「あ、ありがとう」
　イサコは安心よりも照れの方が上回った。お返しにシュウイチにもどこか褒めなければいけないと思うが、彼は普段から割と自分の個性を引き立たせるような服を選んでいるように見える。というより自分の好きなスタイルというのがあるのだろう。中学生にしてそのセンスは卓越していると言ったのはアサミで、普段からそんな風な彼の服装を、ここで褒めそやすのはどうにもお返し感がありそうで避けたかった。
「シュウは普段から結構オシャレだと思うけど、やっぱりそういうセンスを磨くのに努力してるのか？」
「オシャレとかじゃないと思うよ。ギターをやってるって話はしたよね。言ってみたら、あこがれのバンドのスタイルをマネしているだけさ」
「ロックっていうのはそんな風なのか？」
　シュウイチは今日はモノトーンできめている。あまりイサコの想像するミュージシャン像とは結びつかない。
「ブリティッシュロックなんかは、こんな感じかな。僕の好きなのがそっち方面だから」

「ん～。悪いが全くピンと来ない」
この歳で好きな音楽を確立していることがすごいとイサコは思う。服装のセンスも彼のそんなこだわりからきているのだろう。
「お待たせいたしました。スペシャルメロンパフェのお客さま？」
「あ、はい」
そこで先ほどのウエイトレスが注文していたものを運んできた。
「こちらはミックスジュースです。どうぞごゆっくり」
「ありがとうございます」
彼女が下がったところで、シュウイチはあることに気付く。
「そのパフェ、結構ボリュームがあるけど、スプーンが2本ささっているね」
イサコは目を丸くしてそれを見つめた。前にこれを食べた時、スプーンは1本しかなかったはずだ。あの時もマイコ先生と2人で来ていたのだから、それがデフォルトだと思っていた。
「気を遣ってくれたのかな。あの人」
シュウイチが先ほどのウエイトレスを見た。彼女も何気なくこちらを気にしているように見える。イサコは一つ咳払いをして、シュウイチを射すくめながら低いトーンで言った。
「……やらないからな」
「やっぱり？まあいいよ。じゃあいただこうか。ホント、事件のまっただ中にいた時には、こうして約束が果たされるとは思わなかったけどね」
シュウイチが仕切り直すように言った。
「いろいろ無茶もしたからな。本当に、アンタには何度となく助けられた。感謝してもしきれない」
「それは何回も聞いたよ。こうして僕の誘いに乗ってくれただけで十分さ。ミックスジュースいただきます」
そうして感謝されるのは嬉しいが、そういう他人行儀な関係でシュウイチは終わりたくはないのだ。
「ああ。スペシャルメロンパフェいただきます」

「事件の解決を祝して」
ささやかながら、これは祝宴でもあった。本当のところ、レイン達とも事件の解決の折に宴会をしようという話もあったが、それはなくなった。その参加者には沙織も入るはずだったからだ。
事件解決の次の日に金沢に戻った2人は、ユイ、アサミ、レイン、カズマに大黒市で起こったすべてを話した。沙織の話を聞いて、ユイは涙に暮れていたのだが、それでも避けられない別れだったことをイサコはこんこんと話し、彼女もなんとかその現実を受け止めてくれた。それに、代わって詩織が夕日寺中学校に通うことは決まっている。彼女が登校するようになったら、そのメンバーで迎えてあげようという話もしていた。
「でも、あれだね。詩織はいつぐらいに学校に来られるかな」
「体調は戻りつつあると聞いている。そんなに時間はかからないだろう」
詩織は長い間電脳体を分離させており、肉体は体調も崩していた。普段通りの生活ができるようになるまで、軽いリハビリも必要らしい。
「そう言えば、詩織は誰と一緒に暮らすの？お父さんである亮成さんも逮捕されて、他に身寄りもなかったんじゃ」
「亮成さんが戻るまで、メガマスを退社した平松さんが引き取るらしい。平松さんも元々は金沢の人だった。今後は知り合いの経営する金沢の町工場に再就職するって」
「なるほど……平松さんは、お父さんや一郎おじさんの元上司でもあるし、アプリコット社に残れば良かったのに」
それはイサコも同様のことを思っていたが、平松はやはり自分もプロジェクトに関わっていた責任を感じているらしい。もっとも、彼は支社長や神崎のように宗助を拉致するような悪事を働いておらず、純粋に医療目的でプロジェクトを完成させようとしていた。責任をとるようなことは何もないと思う。
「でも、これは理想になるけど、平松さんが進めていたプロジェク

トが完成すれば、詩織のお母さんの容態は回復しないものなのかな？」

平松の進めていたプロジェクトでは、人の肉体にＡＩを宿すという”ＳＰＲＩＮＧ”を応用した技術を使われていた。彼が考えていたのは、あくまで脳梗塞などの後遺症で脳のほんの一部の機能が働かなくなった患者の、失われた機能をＡＩに補完させるというものだった。脳死という状態も、脳の一部が壊死したことによって起こる。同じ技術で治療はできないかとシュウイチは考えていた。

「その問題にはまず、道徳的な価値観を見直して取り組む必要があると思う。私達は”ＳＰＲＩＮＧ”を否定した。それは、どれだけ人格を似せようと生身の脳とＡＩがまったくの別物であるという認識があるからだ。外部の人間に記憶の消去や注入が可能なＡＩを、生身の脳と同じだとは到底思うことはできない。

でも、脳の機能の一部をＡＩに担わせるとなると、それは認めてもいいんじゃないかと思える。ところがそれを認めると、脳全体のどれほどの割り合いの機能をＡＩが担うかを考えた時に、ある程度の高さの割り合いまでいくとその人格は本人じゃなくてＡＩではないかということになってくる」

「確かにね……」

「私には、脳死という状態がよくわからない。一体脳の何％が働かなくなればそうなるのか、どの部分が働かなくなればそうなるのか。ただ私は、脳死によって生身の人が“死”とほぼ同じ状態になるということは、それをＡＩの力を使って蘇生させたとしても、その人は別人になってしまうんじゃないかと思うんだ」

あくまでもイサコの個人的な意見だった。同じことを詩織に言うことはできないし、詩織がその技術を知ってそれを望んだとしても、止めるつもりはない。

「イサコの言うことは正しいと思う。やっぱり、”ＳＰＲＩＮＧ”は医療の歴史を変えるような技術にはなりそうにないね」

「ああ。と言っても、今の話は平松さんのプロジェクトが完成した

らという前提で考えたことに過ぎない。人格のＡＩへのコピーについては、事件の後に大谷がこんなことを言っていた」

イサコは彼の言葉を思い出す。

「オレもこういう分野の雑誌を書いている職業柄、ＳＦ作品は好きな方だ。特に人工知能ＡＩを扱った作品は、興味深い解釈で描かれているものも多くて読み応えがある。そんなオレの私見でよければ、今後のＡＩ技術について展望してみようか。

結論から言うと、オレは人格の完全なコピーなんて不可能だと思う。プロジェクトチームは、メガネの量子回路に集積される人間の意識や思考をＡＩに流し込んだということだったが、オレから言わせれば、まずそんな方法で人格の完コピができるはずがない。

なぜなら、そこにその人の過去のすべては投影されていないからだ。１人の人間にも歴史と同じで、この世に生まれ落ちてから現在に到るまでの過去の積み重ねがある。先天的な特徴と絡み合って、それで今の人格があると言っていい。だから今を理解したからといって、歴史を理解したことにはならない。だが歴史を理解しないと、今を理解することはできない。つまり、今の人格を完全にコピーしたと考えるのは単なる驕りだ。現に詩織は、新空間にいる母の様子が以前と違うことに気付いていた。詩織には悪いが、人を脳死という状態からＡＩの力で蘇生することはできないと思う。

もし完全な人格のコピーを完成させるには方法は１つしかないはずなんだ。残酷な話になってすまないが、生まれた赤ん坊の頭の中に、機械脳を埋め込むんだ。その機械脳には、生身の脳が感じたことを電気信号で送り続ける。生まれてからすべての体験を機械脳と共有する。それはやがて人工知能となり、理屈ではそれで９９％のコピーの人格が出来上がるはずだ。

残りの１％は何なのかって？それはだな、２つの脳が常に体験を共有していたとして、ほんの些細なところでオリジナルとＡＩの判断が分かれる可能性だ。

身近な例で言えばジャンケンだ。ジャンケンをする時に、君は常

に次に出す手を熟考しているか？

例えば、今オレとジャンケンをして、君がパーを出したとする。この時、もしも君と全く同じ人生を歩んで来たコピーＡＩがいたとしたら、そのＡＩは今のジャンケンで必ずパーを出したはずだと言えるか？

出すとは言い切れない？そうだな。人間は割となんとなく、深い理由もなしに物事を決めることがあるからな。

ところが、そこで食い違った時点でオリジナルの人格とＡＩの思考は乖離する。そこからまた元通りに重なり合うことは、まず考えられんことだ。

つまり、将来的に今言った技術が実現したとしても、やはりどうしても人格の完全コピーはできない。要は９９％の偽の人格を本人と見なすかどうかということだが、まあ、ない技術について議論しても仕方がない。

今話した理由からか、脳の機能の一部をＡＩに補完させるという平松さんのプロジェクトも、やはりいい結果を得られていなかったみたいだ。人工知能と医療というのは、本質的に相性の悪い組み合わせなのかもしれないな」

大谷はいつになく熱く語ってくれたが、言っていることは何となく理解できた。イサコは大体の内容をシュウイチにも伝えた。

「説得力があるなあ。やっぱり、色々な意味でＡＩっていうのは難しいものなんだね」

「理論で考えるから小難しくなるという部分もある。サオリという少女が私にくれた温かみは、まっすぐに私の心の中に染み込んでいった。もっと感覚的に捉えてもいいと思う。奇跡は理論を超越したところで起こるということを、私は身をもって知った」

それもなるほどとシュウイチは思う。

「音楽理論と同じってことだ」

「いや、その例えも私にはよくわからないが」

イサコは苦笑した。シュウイチは本気で音楽が好きなんだなと思

う。これからはシュウイチのそういった部分をもっとのぞいていきたいとイサコは思った。

「ところで、その大谷さんは？」

「風のように去って行ったな。『オレの仕事は終わった。いつかどこかで会おう』なんて言い残して」

連絡先は知っているので、声を聞こうと思えばいつでも聞けるとは思う。あえて聞こうとは思わないが。

「かっこいい」

「どこがだ。アイツはうまく立ち回って、アプリコット社からかなりの口止め料をせしめたらしいぞ」

事件の真実を知る関係者は少ないが、その中で唯一のマスコミである大谷はとにかくアプリコット社からは危険視される存在だった。しかしその大谷はアプリコット社が欲しがっている猫目技師とのつながりが強い。猫目技師がアプリコット社と契約する条件に、大谷の安全の保障という項目もつけられているらしく、それを盾に彼はアプリコット社に口止め料を要求したという。彼にとっては予想外の法外な報酬というわけだ。

「せ、せこい……」

「それにアイツは、アンタにも謝っていたぞ。アンタのお父さんの件で」

詩織の交通事故の原因はシュウイチの父、友和のいる空間設計室に責任があると記事にしたのは大谷だった。それは設計室の動きを封じるための神崎の工作で、彼は大谷に偽情報をリークしたのだ。そもそも事故の真相を知りながら隠滅したのも神崎だった。

「そういうこともあったね。父さんのことなのに、すっかり忘却の彼方だったよ」

「あの神崎に利用されたことは、『大谷英夫一生の不覚』だそうだ。まあ、そのことは反省してもらいたいが、アイツには今後も電脳に対して批判的な見地から記事を書いていってもらわないとな。これからの電脳界のためにも」

なんだかんだで、イサコは大谷のことを認めていた。悪いのは外見だけで、中身は正義感に溢れるジャーナリストそのものであることは、事件を通じて感じた。イサコは彼の今後の活躍を心から祈っている。

「つーかよ。せっかくの初デートで、なんであんな小難しい話や大谷の話なんかしてんだよ。この2人は」

「ん？」

今のはシュウイチではない。どこからともなく聞こえてきた。

「おい。今誰かの小言が聞こえなかったか？」

「小言？」

シュウイチは気付かなかったらしい。どうも、イサコの背後の席からのようだ。イサコは訝しみながら、後ろを覗き込んでみる。

「やべ！顔を隠せ」

「おい」

イサコは呆れかえりながら声をかけた。顔を伏せてもバレバレだ。後ろの4人がけのテーブルには、レイン、カズマ、ユイ、アサミの4人がいた。

「よ、よう、イサコ。こんなところで会うとは奇遇だな」

振り向いたレインはしれっとしていた。

「なるほど、アンタ達もここのメロンパフェの噂を聞きつけて来たのか。って、違うだろ！」

「おおっ。イサコいつの間にノリツッコミなんか覚えたんだ」

カズマが驚いたように言う。この2人はイサコと背中を合わせたように座っていた。彼らと向かいあって座っていたユイとアサミは、帽子やら太ぶちメガネやらで変装を決め込んでいた。

「シュウもその席からコイツらの存在には気付いただろう」

「いや、ごめん。まったく気付いてなかった」

シュウイチから見えるのは変装をしたユイとアサミだった。正直な話、本当にわからなかったのだ。

「やっぱりな。まわりが見えないほど緊張してんだコイツ」

「ほっとけよ。大体なんでいるんだよ？」
「お前達が心配でな」
「余計なお世話だよ。冷やかしに来たなら帰れって」
シュウイチは顔から火が出るほど恥ずかしかった。心のどこかで、コイツらならやりかねんとは思っていたが。
「ごめん、シュウイチ君。私もどうしてもイサコが心配で」
ハンチング帽のユイが謝る。
「まったく。私は、シュウイチと2人で話がしたかった。昨日もそれを言っただろ」
「おーっ、おーっ！」
「うるさいゴリラ」
イサコはカズマの腹にパンチを見舞う。
「まじめな話、オレたちは2人にはうまくやってもらいたいから、こうして様子を見に来たんだよ。後でさりげなくアドバイスができればと思ってな」
「だったら直接乗りんでこなくても、電脳ペットを使って偵察すればいいだけの話だろう。なんのためのスキルなんだ金沢黒客」
「しまった！その手があったのか」
レインのリアクションによると、本当にそのことには気付いていなかったらしい。つくづくバカな連中だとイサコは思う。
「もういい。わかったら御退出願えるか？」
さっさと追い出して2人の時間をイサコは楽しみたいと思った。確かにレインがぼやいたように、こんな時にまじめな話をしすぎるのはもったいないという気がしたのだ。
「出ます出ます。その前にイサコ。これだけは聞きたいんだが」
レインはイサコの耳元でささやいた。
「なんだ？」
「これまでに好きな人っていたことがあるのか？」
なんとデリカシーのない質問だとイサコは思う。しかしいつになくレインの目が真剣なので、イサコはまじめに答えてしまった。

「正直に言うといなかった。そもそも人を好きになるってことがよくわからないんだ。自分でもどんな風になるのか」
「例えば、一緒にいると胸がチクチクと痛くなったり？」
「そうそう。でもそれはイヤじゃない。ただ、相手に対して自分のつまらなさを思い知って」
「相手が本当に楽しんでくれているのか不安になる？」
「そんなところだ」
聞き出したレインは小さく笑った。
「十分わかってるじゃねえか。それを恋っていうんだよ」
イサコはそれを聞いて顔を真っ赤にした。
「私は……」
「自分の気持ちに戸惑っているだけなんだと思う。無意識的に、今日はシュウとは友達として遊びに来たって思い込んでるのかもな。だからなんとか会話はできるけど、互いに踏み込んだ話題にならないんじゃないか」
「……そうかもしれない。こんな私なんかじゃ全然」
「オレも含めて、いざとなるとみんなそんなもんだと思うぞ。背伸びしなくてもいいから、とりあえず自分らしさだけ忘れなかったらいいと思うぜ。イサコはシュウが惹き付けられる何かを持ってるんだから」
「……わかった」
レインは納得したように頷くと、今度はシュウイチのところへ行ってささやいた。
「焦るなよ、シュウ。まだ4・5ゲーム差ぐらいの距離があるけど、まずは足場をしっかり固めてから勝負に出るんだぞ。じきに向こうも落ちてくるからな」
「……野球で例えるなよ」
呆れたようにシュウは返した。とはいえ、そのアドバイスは参考にすることにする。まだ中学校生活は始まったばかりなのだ。
そうして嵐のような4人は店を出て行った。

イサコはふとパフェが溶けかけていることに気付き、口に運ぶペースを速める。本当においしいものを食べている時は、あまり余計なことが頭に飛来しないので気が楽だ。

イサコは食べるのに夢中になるうちに、シュウイチに言われた。

「幸せそうな顔して食べるよね」

「そ、そうか？」

しかしこの生クリームとメロンの相性が抜群にいい。

また次は夏休み。メロンの旬の季節にまた2人で食べにきたいなとイサコは思った。

○

ハラケンからのメールを受け取った時から、ヤサコの張り裂けそうなほどの胸の鼓動はおさまらなかった。

『ちょっと、伝えたいことがあるんだ。5時に、鹿屋野神社に出て来れるかな？』

コイル探偵局の活動などの招集メールは、メンバーに向けて一斉送信されるのが普通だ。メールの宛先が自分だけなのを知ったヤサコは、ハラケンに個人的に呼び出されたことを悟り、震えるような手で『大丈夫よ（絵文字）』とだけ返信した。

新空間からの帰還後、ハラケンも詩織同様入院することになったが、めでたく昨日退院することができた。その時にはコイル探偵局のメンバーで病院まで迎えに行き、その後は事件についてだべり合ったりした。すべてが終わった今となっては、本当に楽な気持ちで一連の出来事を振り返ることができた。

そんなハラケンがわざわざ呼び出したのは、また事件について気になることを話し合うためでもないだろう。そうなると、自分の思い描くような理由からかもしれないとヤサコは思い、とても落ち着いていられなかった。

もしそうでなくても、話の流れ次第では自分から、ということも思う。とにかくこうして2人っきりになれる機会を作るのは難しい。今日は勝負の日とすることをヤサコは決心する。着ていく服は、まあ、今からでは新しいのは用意できない。いつもの上下黄色で行くことにした。

約束の時間の通りに鹿屋野神社に着くと、ハラケンは鳥居の下で考え事をしているように佇んでいた。夕陽を正面に受けて後ろにのびる影。こんな姿は初めて見るような気がする。なぜだか、このように考え事をしている時はどこか遠い感じがした彼が、今日は近くにいるような気がした。

ハラケンはヤサコが来るのに気付くと口元を緩めた。

「わざわざ呼び出してごめん。ヤサコ」

「ううん。全然」

ヤサコは石段をのぼりながら、伏し目がちに返した。

「ヤサコにはどうしても伝えたいことがあって」

「うん。なに？」

ヤサコはのぼりきり、思い切ってハラケンの瞳を見た。すると今度は彼が目を伏せて言った。

「まずは向こうに行かない？ここじゃちょっと目立つし」

「うん」

2人は拝殿の方向に向かって歩き出した。他に人はおらず、風に揺れる木々のざわめきだけが2人を包む。

「さっき、直樹さんから連絡があったんだ。カンナの事故について、猫目さんがすべてを証言してくれることになったって」

ハラケンは突然切り出した。ヤサコは顔を上げて、彼の横顔をのぞき込む。

「ホントに？じゃあ、交通事故の再調査は」

「うん。これでメガマス旧幹部の隠蔽について間違いなく立件できるだろうって。メガマス自体がなくなったから、もう警察への圧力もなくなるはずで、手続きもはかどるはずだって直樹さんが」

「そうなんだ。よかったね、ハラケン」
心からそう思う。カンナの死が誤解され、本当の原因を作った人達が裁かれないことに、ハラケンがどれほど悲しい思いをしたかヤサコはわかっている。
「ヤサコやみんなの協力があったからだと思う。本当にありがとう」
するとハラケンはそこで立ち止まった。
「ハラケン？」
「ヤサコ。僕は、ヤサコに謝らないといけないことがある」
思い詰めたような表情。ヤサコは困惑して訊ねた。
「事件のこと？」
「少し違うかな。もちろん、あの空間まで助けに来てくれたことは感謝してるし、申し訳ないと思ってる。ただ、それとも関係あるけど、今日ヤサコを呼び出したのはそのことを言うためじゃないんだ」
「じゃあ……」
ヤサコはますますわからなかった。ハラケンは言いづらそうにして続ける。
「……去年の夏の事件で、僕が“あっち”の世界でカンナに会いに行ったときのこと。あの時、ヤサコは、その。僕のことを好きだと言ってくれたよね」
ヤサコの心臓は跳ね上がった。そのことについてハラケンは触れたことがなかったのだ。それだけに、あの言葉は伝わっていなかったのだとヤサコは思っていた。
「……うん。確かにそう言った」
「あの言葉は、夢の中で聞いたように曖昧なまま頭に残っていた。なのに僕は、それをヤサコに確かめもしなかった」
それが何を意味するのか。ヤサコはそれを考えると、心に小さなとげが刺さっていくような気分になった。
ハラケンは、その気持ちを受け取れなかったのだ。
当然のことだと思う。あの時ハラケンは、カンナのことで頭がいっぱいだった。あの再会で吹っ切れたとはいえ、そこに自分の想い

が入り込む余地などなかった。彼があの告白に戸惑った気持ちはわかる。今は自分の勝手さの方が恥ずかしい気がした。

「それは、仕方ないことだと思う。私の方こそ、あのままにしていたのがまずかったのかも。だから……」

「待って。僕も、本当は、ヤサコが好きなんだ」

時間が止まったような気がした。夕焼け空を流れる雲も、風にあおられる木々も、何もかもが静止し、時間が2人だけのために切り取られたようだった。

「でも、僕はずっと、その気持ちにふたをしていた。時間は十分に過ぎていないなんて、自分に言い訳をして」

なんのことを言っているのかはすぐにわかった。

「カンナのことね」

「……うん」

ハラケンはゆっくり頷いた。

「新空間でミチコは、ほとんど僕の本音を言い当てていたと思う。僕はカンナのことがどうしても頭から離れなくて、ヤサコへの気持ちから目をそらした。それがどうしてもツラくて、僕はカンナの無念を晴らすことで、その代わりにカンナに許しを求めようとしたのかもしれない」

「そんな……」

「でも、そう思うのは過去に囚われ過ぎだし、カンナにも失礼なことだ。カンナの無念を晴らしたいという願いに、それ以上の意味を付け加えることはない。ただ純粋に、僕はカンナのことを忘れないと思う。一生」

どこか自分でも言い訳めいているような気がしながらも、彼は口に出して言った。そうして自分が変わるしかない。写真の中のカンナ、自分の心の中のカンナは、笑顔のままずっと変わらないのだから。

「ハラケンのそういうところが素敵だと思う。一途に人を想うことができて」

「自分ではそれが良いことなのかわからない。ただ、僕はやっぱり自分のことばかりを考えてしまっているんだと思う。だから、ヤサコの気持ちを知ろうとしなかった」

カンナのことばかり考えていたのは、そうしているのが一番楽だったからかもしれない。カンナが悲しむかもしれないことをすると考えると、彼は最も気が重くなった。

「僕は、だからヤサコに惹かれるんだと思う。いつだって人の気持ちを考えて、そのために全力で駆け抜けて。あの夏の事件でイサコを助け出した時から、こんな人が自分には必要なんじゃないかと」

「私は、そんな」

ヤサコはかぶりを振ったが、ハラケンは続けた。

「今回僕がミチコに連れ去られて罰を受けたのも、そうして自分のことばかりを考えていたからだと今は思う。だからこそミチコの誤解を生んだ。

でもそんな僕を、ヤサコは助けに来てくれた。すごく嬉しかったし、情けなくもあった。ヤサコが僕にしてくれたことを、僕はどうヤサコに返せるかどうかわからない。僕にとって、ヤサコは釣り合わない存在なのかもしれない」

「そんなこと……」

「でも、ヤサコが今でも同じ気持ちでいてくれているのなら、僕は、そばにいてほしいと思ってる。今度は僕がヤサコを守ってみせる。絶対に。頼りない男かもしれないけど、どうか、この手を、とってくれないかな？」

ハラケンはヤサコの前に右手を差し出した。ヤサコは頭の中が真っ白になっていた。なぜだか涙が頬を伝っていた。

でも、これは夢や幻などではない。ヤサコは、迷わずその手を両手で包み込んだ。

「ありがと。こんなに嬉しいことは、初めてかも」

「じゃあ……」

そしてヤサコは、唇を結んで小さく頷いた。その瞬間、ハラケン

の表情が花開くのがわかった。
「これからよろしく。ヤサコ」
「うん」
ヤサコは握りしめたその手を、ずっと離したくないと思った。

そんな鹿屋野神社の茂みの中では。
「いや～。ホントに良かったわ。こうしてヤサコとハラケンが引っ付いてくれて。これで私の肩の荷も降りるってもんよ」
「アンタが2人の何を背負ってたっていうのよ?」
一部始終を目撃したアイコとフミエはヤサコ達に聞こえないように小さな声で話し合っていた。
元々ここでハラケンを見つけたのはフミエだった。フミエはまた別の用事でここに来ていて帰るところだったのだが、いつもと様子の違うハラケンを見つけたので観察していた。
そんなところでタイミングよくアイコから電話が入り、状況を伝えると彼女は飛んできたのだ。
「私は去年の夏からヤサコの気持ちに気付いてたのよ。やっぱり、親しい友達の恋愛はうまくいってほしいものじゃん」
「そりゃあヤサコが好きな人と両想いになって良かったけど、アンタあの2人に干渉でもしてたの?」
「アンタは疎いから気付いてなかったかもしれないけど、結構これでも橋渡ししたつもりよ」
「ふ～ん」
そうなのかとフミエは思う。アイコが人の恋愛を見守るのを趣味としているのは気付いていたが、実際に骨を折っているとは知らなかった。
「それよりさ、あれを見てうらやましいとは思わないわけ?ダイチの何がいけなかったのよ?」
アイコはフミエに問いつめるようだった。
「私はダイチをフッたわけじゃないわ」

誤解を正すようにフミエは言った。実はこの1時間ほど前、ちょうど同じ場所でフミエはダイチに告白されたのだ。

ダイチが自分に大事な話があるというのは新空間の中で知った。フミエもその雰囲気から、まさかとは思ったが、話の続きは生きて現実世界に帰れたらという約束をかわした。

そうして今日、ダイチからの呼び出しを受けるまで、フミエは自分の中の答えを考えていた。そしてそのままのことをダイチに伝えたのだ。

「『今は受けられない』って、私にはそうやって断る気持ちがわからないわ」

アイコがフミエに電話をかけてきたのも、その結果を聞くためだった。なぜかアイコはダイチの大事な話の噂を聞きつけていたのだ。おそらく黒客方から漏れたのだろう。

「私は、ダイチのことは嫌いじゃない」

「好きでもなかった？」

「自分がアイツをどう思っているのかわからなかった。でも、今まであーだこーだとけなしてきたけど、嫌いじゃないっていうことだけは確実だったの」

それはフミエの照れだとアイコは思っていた。今までダイチの気持ちに気付いていなかったように、自分の気持ちにも気付いていなかったのだろう。

「でも、フミエにはダイチ以外の男は考えられないけど」

「私は、そのダイチのことでさえ電脳という枠内でしか見ていなかったの。だからダイチが私をライバルじゃなくて、好きな女の子として見てくれていたっていうのは驚きだったし」

「まんざらでもなかったんでしょ？」

「……確かに、不思議とすんなり受け止められたわ」

アイコは大きくため息をつく。

「だったらさあ」

「でも、電脳世界っていう枠を取り払った時のアイツを私はほとん

ど知らない。メガネを通してアイツは色んな表情を見せてきたとは思う。それは多分アイツの本性だったんだろうとも思う」

「アンタは知り過ぎっていうぐらいダイチのことを知ってるはずよ。それでもっとアイツのことを知りたいって何事よ。それじゃダイチがかわいそうよ」

「そうかもしれないけど、私には同じフィールドで戦っていた時のイメージしか残ってないのよ。私にとってアイツはライバルで、戦友以上の存在ではなかった。それで、いきなり恋愛関係になる未来が想像できなかった」

まったくダイチも悲運な男だとアイコは思った。ダイチがメガネを始めたのはフミエと張り合ってその気を引くためだ。それを互いに切磋琢磨するうちにそんな関係になってしまったのだから、もはや哀れとしか言いようがない。

「電脳から離れたところでアイツを見てみたい。その間に、自分の気持ちも整理したいってことね？」

「まあ、そんな風なことを言った。私もダイチのことを認めてる。バガだけど良いヤツよ、アイツは。だからこそ、少し遠くからアイツを見てみたいの。そしたら、その存在が憧れになる日が来るかもしれない。ライバルや仲間とかじゃなくて、男として」

「ダイチはなんて？」

するとフミエは、向かい側の茂みを見つめ、穏やかな表情で言った。

「『それなら、オレはサッカー部で結果を出す。もしオレがレギュラーを奪い取ったら、その時にもう1度告白してもいいか？』って」

「それに頷いたってわけね」

フミエは肯定のしるしに恥ずかしそうに俯いた。アイコも向かいの茂みの方を見やる。そこには先ほどは破れたダイチの、ハラケンとヤサコを見つめている姿があった。その表情には固い決意が窺える。もはや自分がこの2人に介入することはないだろうとアイコは思った。

「アンタも後先考えようよ。もし他に好きな男の子ができたらどうするのよ？」
フミエはかぶりを振って返した。
「私は、ダイチ以上の男を知らないし、多分これからは、ダイチのことしか見えないだろうから大丈夫よ」
「やっぱりわからないわ」
つくづくアイコにはフミエの気持ちが理解できなかった。

そして向かいの茂みの中では。
「お前ら。オレは、黒客を脱退する」
共にヤサコとハラケンを眺めていたメンバー、ガチャギリ、ナメッチ、デンパ、アキラにダイチは告げた。
「ああ。止めねえよ」
彼らも理由はわかっていた。黒客メンバーは、ダイチの告白を見守っていたのだ。
それはガチャギリ達が勝手に覗きにきたからじゃなく、ダイチはフミエに告白することをメンバーには伝えていたのだ。これまで敵方として戦ってきたフミエに想いを告げるのは、メンバーに対する裏切り。ダイチはリーダーとして、ケジメをつける必要があると思ったのだ。
もしフミエにフラれていれば、黒客に残ったかもしれない。しかし、あのような約束をかわした以上、ダイチはこれからサッカーに全力を尽くそうと考えていた。
「お疲れさまッス。オヤびん」
メンバーに肩を叩かれるうちに、ダイチは涙が溢れてきた。自分の都合でクラブを投げ出すというのに、メンバー達は優しかった。このメンバーと共に過ごせて、本当に幸せだったとダイチは噛み締める。
「……お前ら、オレがいなくなっても黒客を続けるのか？」
「いや。ダイチ抜きの黒客は考えられんし、そろそろ、前を向く時

じゃないかと思う。今回の事件の解決に一役買うことができて、自分のメガネ人生に悔いはない」

「メガネからの卒業か」

「そうだな」

メンバーの誰もが新しい日々を描いていた。それぞれ行く道は違うが、友達であることは一生変わらない。黒客がなくなっても、いつもと同じように互いに笑っていられれば十分だ。

「大黒市黒客クラブは、今日をもって解散とする」

ダイチが見渡したメンバー達の表情には、一片の曇りもなかった。

「うん？」

ハラケンがふいに周囲を見回した。

「どうしたの？」

「茂みが動いたような気がして」

ヤサコもハラケンと同じ方を見たが、特に怪しい様子はない。茂みの中に誰かいたなら、今の恥ずかしい場面を目撃されたことになるが、さすがに知っている人がそこにいるはずはないだろうとヤサコは思った。ハラケンは、自分だけをここに呼び出したのだから。

「きっと風で葉が揺れたのよ」

「そうか。それにしても、季節が過ぎるのは早いね。この間みんなで、ここでお花見をしたところだったのに」

「そうね」

その時はここの桜も満開だった。今はもう、風薫る5月の緑が色濃く神社を染めている。

春はもうおしまいだ。肌で感じる熱気、夕暮れのながさに、もう夏の兆しが感じられる。

でも、自分達の“春”は訪れたばかりかもしれない。

そんなことを思い、ヤサコはハラケンに見えないように顔を俯け、頬を赤らめた。

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　去りゆく春の日に（後書き）

『電脳コイル　春』（完）

完結までお付き合いくださり、ありがとうございました。
ブログにあとがきを掲載しています。そちらの方も是非、ご覧下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8928h/

電脳コイル 春

2011年9月9日10時48分発行